呪印の女剣士

はーみっと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
呪印の女剣士

【Ｎコード】
Ｎ１１０５Ｏ

【作者名】
はーみっと

【あらすじ】
彼女は追われた。生まれ故郷を、住む場所を、人としての存在意義を。だが彼女に救いの手が差し伸べられた。それから数年が立ち――彼女はまた１人になった。美しく成長した彼女は今旅に出る。一度は自分を拒絶した世界を知るために。そして彼女が旅に出てから一年半が経過しようとしていた・・・。
女剣士を主人公とした、彼女の成長を追う物語です。登場人物は多く、群像作品ともいえます。最近意外に王道ものが少ないな、ということで書き始めてみました。ちなみに主人公は最近流行りのチ

ートではありません（一見そう見えるかもしれませんが）。むしろ敵がチートです。主人公は割と等身大な人間として表現したいです。

日常パートはライトタッチで描きますが、ダークな部分も多々あります。苦手な方はご注意を。作品のテーマは・・・友情かな？

２０１１年７月６日、ついにＰＶ１００万突破！＆８／９には１０万ユニーク達成できました！　応援してくださる皆さんに、この場を借りてお礼の言葉を。ツイッターもブログも使わない私の密かな挑戦。

プロローグ（前書き）

人間の歴史はまだ浅く、魔物や魔王が存在するような世界を冒険する女戦士の物語です。徐々に盛り上がるように書いて行こうと思っています。全体的にはシリアスになるように作りますが、要所要所に笑い、恋愛、感動が入ればいいなと思っています。処女作につき、拙い箇所も多々あるとは思いますが、もしよかったら一読していただければと思います。

プロローグ

かつて大陸は魔王と呼ばれる魔物達に席巻されていた。大陸には何百と言う魔王が存在し、彼らは大陸の覇権をめぐって日々闘争を繰り返していた。エルフ、巨人、妖精といった人間よりはるかに強い力を持った種族もいたが、彼らでさえその脅威に怯え、隠れて暮らしていた。特に何の力も持たない人間などは、魔王・魔物を避けるように大陸の隅で細々と暮らすのみであった。

だが人間達は徐々に反撃に転じる。『協力』という概念により、種族間の垣根を越えてエルフや巨人と手を携えた人間達は、何百年という歳月をかけて魔王達を大陸から駆逐した。完全に人間と魔物の立場を逆転させることに成功した人間達は、大陸の覇権を握ることとなる。

だが大陸の覇者となった人間達は今度は同族同士での止むことなき争いを始めた。エルフや巨人などの元来人間達に協力的だった亜人種・精霊などはその様子を見て呆れ果て、歴史の裏へと姿を消していった。そして魔王達が駆逐されてからいくばくもしないうちに、今度は大陸中を巻き込んだ人間同士の戦争が何百年と続くこととなる。

時は経ち、その長きにわたる戦争も終結を迎えることとなる。もちろん小競り合いまでは収まることが無く、小さな戦いはいたる場所で起きてはいるものの、大陸中を巻き込むような大戦争は既になく、大陸中の多くの国が参加する平和会議が開催されるようになり、はや２０年。現在は平和な時代を迎えているといえるだろう。たとえ平和がかりそめであるとしても、人間達はその幸せを堪能しよう

としていた。

この時代を歴史学者達は黎明期と呼んでいる。この物語は、この一見平和な時期に1人で旅を続ける女剣士アルフィリースについて綴ったもの。彼女の旅が一体どこに行きつくのか、一体何を世界に残すのか。それではその足跡を辿ってみよう・・・

＊＊＊

「ん、う～ん・・・」

ふと眼をさますと木々の間から気持ちの良い木漏れ日が差している。春の到来を告げるモーイ鳥が見られるようになってから一カ月もたっただろうか。中原やや南にあるここファルテの森は非常にいい陽気に包まれている。まあそうでなければさすがに些事にこだわらない彼女と言えど、もう少し泊まる場所にも気を使ったかもしれない。

「あ、ごめんね。枕代わりにしちゃって」

下でやや眠そうな黒い瞳をこちらに向けているのは、この森に棲む森オオカミである。

「こんなことしてたって言ったら、シスター・アノルンあたりに爆笑されかねないわね・・・」

シスターとはしょっちゅう宿場町で出会ううちに、すっかり顔馴染みになってしまった。どうやら向かう先が同じらしく、一直線に東に向かいつつも途中の町で祈りを捧げつつ進むシスターと、思い

つきで枝を転がして今日の行く道を進むアルフィリースは、どうも進度が同じくらいになるらしい。

3日前にもティドの町を出るとき、枝を転がすと全く街道とは違う方向を指したため、

「やめた方がいいわよ～？　アンタ、方向音痴なんだから！」

とシスターに言われながらも、ニヤニヤするシスターを尻目に半分意地になって森の中に突っ込み、案の定迷ったアルフィリースである。このあたりは街道も整備されており、魔物討伐も行き届いているため余程深く分け入らないと人命にかかわるような危険な魔物や魔獣は出ないものの、やはりそこは人の生活圏からははずれている土地であった。

「やっぱ川のそばにほら穴とか、いかにも魔物の巣よね・・・」

と思いつつも、そこは年頃の女の子。水浴びの誘惑には勝てず、一応ほら穴の中には何もいないことを確かめてから、3日ぶりの水浴びをし、そのまま携帯食を少し腹に入れるとほら穴で寝こけてしまったのである。その後獣の唸り声で目を覚ますと、体長3ｍくらいの森オオカミが目の前にいた、と。

「まったくオオカミが単体でよかったわ。複数いるとさすがにまずかったし、師匠に魔物との交渉術を教わってなかったら、新しい寝床を探して今頃森の中をまたうろついてるのよね・・・全く師匠サマサマね」

昨日、激闘の末森オオカミを打ち倒し、傷の手当てをしてやる代わりに一晩の寝床を要求したのである。森林に棲むような魔物、特

に獣系の魔物は自分より強いものには従順で、しかも恩を忘れないようなものまでいる。また森オオカミは魔物にしては温厚で、縄張りを極端に荒らさない限りは人間に襲いかからない。まあそのオオカミを怒らせたのは、彼女の不用心ゆえだろう。

ともあれ魔物との交渉の技法として、力を見せつけ同時に治療や餌で恩を売るのは、魔物と接することの多い民族には割と知られたことである。この森オオカミは治療した後、こっちをいかにも人懐こそうな目でじっと見るものだから、ついついふかふかの毛並みの誘惑に負けて、こともあろうに魔物を枕に寝てしまったのだ。

「寝心地はよかったんだけど、ね・・・どうも魔物に好かれるのかしら、私。それともこの子が人慣れしてるだけかな。人間の男はロクなのが寄ってこないのに」

ふと以前山賊にさらわれかけたことや、軽薄な傭兵仲間が頭に浮かんで思わずため息が出る。それを怪訝そうに見つめる森オオカミを見て、

「人間よりアンタの方がよっぽどマシかも」

とか冗談を言いつつも、身支度を整えていく。

「じゃあそろそろ行くわ。一晩騒がせてごめんなさいね」

と言いつつ、オオカミの喉をなでてやる。その時彼女が見せる優しげな表情は、人間の男が見たら１０人中９人は美しいと思うようなものであったろうが、魔物にそれがわかるはずもなく、ただ喉をなでられて気持ちよさそうにしているだけである。

「さてと。一番近いのはイズの町だったかな？　そろそろ真面目に

町にいかないと・・・最近道草ばっかりだし」

と言い、歩み始めたアルフィリースの顔は、もはや冒険者そのものである。

そう、アルフィリースは女性の身でありながら剣を携え旅をする冒険者である。魔物が跋扈（ばっこ）するこの世の中において、剣でたつきを立てる女性が全くいないわけではなかったが、非常に珍しいと言わなければならない。また剣を振う女性は、たいてい通常騎士団に所属する女騎士か、女の傭兵であった。彼女の恰好は一見では騎士に近いものだが、やっていることは傭兵そのものである。宿場で用心棒的なことをしたり、ギルドに頼んで隊商警護や魔物討伐をして金を稼ぎながら旅を続けている。

この時世において女傭兵と言えば基本的に野卑な職業と考えられ、金や仕事がなければ娼婦まがいのことをしている者も多かったが、彼女は決して自分を貶めるような真似はしなかった。なぜならアルフィリースの師匠が彼女に堅く約束させたことでもあるし、そうでなくとも本人の誇りが許さなかっただろう。また彼女の騎士風の恰好や、知的で端正な顔立ち、意志の強そうな瞳を見れば、男の側からしてもおいそれと下世話な誘いをかけづらかったのである。

もっとも中にはアルフィリースの風体だけを見て誘いをかける者もいたが、彼女が全く相手にしなかったし（最初は世間知らず過ぎて何の誘いかもわかってなかったが）、しつこく声をかける者には一年間馬の体をふき続けた雑巾の方がマシではないか、というくらいの悲惨な結末が待っていた。

そんなこんなでアルフィリースが既に旅を始めてから一年半近くたつが、いまだに目的地には達していない。

「師匠は『普通に旅すれば半年くらいだ』とか言ってたのに・・・師匠の嘘つき！」

とかひとりごちてみるが、自分が地図も読めず、道草癖があるのはすっかり棚にあげられている。なにせ「東は太陽が昇る方向だ」くらいの感覚で目的地を目指しているのである。しかも師匠の述べた所要時間は馬を使ってのことである。まさかアルフィリースが大陸西部から東の端まで歩いていくとは師匠も想像していなかったであろう。

一方でそれもしょうのないこととも言えるかもしれない。彼女は師匠に１０歳で預けられてからおよそ七年、山の中で世間と隔離されて暮らしていた。旅の途中で親切な人たちの助けがなかったら、旅立って一週間とたたずターラムあたりの娼婦街に売り飛ばされていてもおかしくないくらいの世間知らずである。そんな彼女の上にそういった不幸が訪れていないのは、彼女の仁徳ゆえか。はたまたおせっかいな酔いどれシスターのおかげか。

「まあ間違いなくアルフィってば、ここイズに来るわね。今回は何回迷ったあげくモンスターと戦ったかしら？　散々からかい倒してあげなきゃ」

などと考えながら、酒場で火酒を片手にくだを巻いているシスター・アノルンにアルフィリースが一晩中からかわれるのは、もう一度迷ってモンスターに追い回され、町に着くころには口論する気力もなくした5日後のことである・・・

続く

プロローグ（後書き）

しばらくは一日一話のペースでアップできるかと思います。よろしければまた読んでくださいませ。感想・アドバイスなどありましたらお待ちしております。

イズの酒場にて、その1～金の髪のシスター～（前書き）

魔物達から逃れ、ほうほうのていでイズの町までたどりついたアルフィリース。だがそこには馴染みのシスターが待ち構えていて・・・？

イズの酒場にて、その1～金の髪のシスター～

「ふ～ん、じゃあ森オオカミと別れた後、河水馬（ケルピー）にさらわれそうになって、寝床に木のうろを選んだら、その木がまた魔物だった、と？　アンタどんだけ間抜けなのよ？？」

「うるさいな～。私だって好きでやってるわけじゃないのよ？」

ここはイズの町の酒場である。イズの町はティドとミーシアといった大きな町の中間にあり、ティド～ミーシア間は馬で駆ければ半日程度で到着する距離である。そのためイズは宿場としてはあまり用をなさないが、ここから南に少し下れば炭鉱や鉱石採取の場があり、そういった職業に従事している者の拠点となっている。

とはいえ、全盛期を誇ったのは既に３０年以上も前であり、レアメタルや一攫千金を狙うような者は既にこの土地から離れている。残っているのは土着の人間や、ここから出る気概の無い者が主であり、そういった者ばかりが集まれば自然と土地柄というものは悪くなる。ややはずれているとはいえ東西を結ぶ主要な街道の一つにある宿場町なのに、ここは珍しく治安が良くなかった。

そろそろ日が沈んでから1刻もたっただろうか。小さな町とはいえそれだけに娯楽も少なく、逆に盛り場であるこの酒場にはそれなりに人が集まってきている。そんな中に年頃の女性が二人いれば酔っ払いに声をかけられそうなものだが、皆彼女達をちらちらと見るばかりで声をかけてこない。しかもなぜか目に怯えの色が見えるような気がアルフィリースにはした。

「（何かやらかしたのね、このシスター・・・）」

このシスターは普段はフードで顔を隠しているが、結構、いや相当な美人である。青い瞳に透けるような金髪であり、大都市の貴族

階級に多い風貌をしている。このようなシスターかつ美人ともなれば様々な危険を伴うため、巡礼するシスターには神殿騎士などの護衛がついているのが普通だが、このシスターは一人旅をしていた。いかに世間知らずなアルフィリースでも、さすがにこれは危険ではないかと考えたが、このシスターはアルフィリースよりも頭一つ小さいくせして、剣を振う彼女と腕力が同程度あるのだった。以前このシスターが深酒していた時に絡んできた男の顛末など、哀れ過ぎて語る気にもならない。一人旅をするには、それなりの実力や理由があるということだろう。

ともあれ、アルフィリースがほうほうの体で魔物から逃れて辿り着いたこの街で、半ば彼女の予想通りこのシスターが待ち構えていた。アルフィリースが辿り着いたその日に散々からかわれ、さらに倍増した疲れから目を覚ましたのが翌昼過ぎ。それから町を出るのも面倒なような気がしたため、彼女はこの街にもう一泊して休息を取ることにしたのだった。幸いにも路銀にはまだ困っていない。

本当は柄の悪い土地での連泊など避けたかったが、体調が悪い状態で旅をするよりは幾分かましだと判断したのだ。そのせいで連日アルフィリースはこのシスターにからかわれているわけだが・・・その時、ふとシスターの目が真剣になる。

「にしても、河水馬（ケルピー）なんて通常大きな河にしか出没しないのよね。しかも氾濫後とかに限るわ。植物系の魔物にしろ、多分トレントとかだと思うんだけど、出没地域は通常もっと南だし。これは大きな町に着いたら、騎士団か教会に調査を依頼した方がいいかもしれないわね」

「どうゆうこと？」

カラカラと氷の入った手元のグラスを回しながら、シスターが答える。

「いい？　通常、魔物の知能は低いし、生息範囲を自ら広げに来ることはまずないわ。元の生息範囲を取り戻しにくることはあってもね。それでもそういった縄張りを広げるような行動は、森オオカミやゴブリンの群れとか、そういった単一種族が起こすことよ。今回みたいに複数の魔物の生息範囲が変わる時は、強力な指導者が存在してる可能性が高いわ」
「強力な指導者？」
「一般に魔王と呼ばれるような魔物が出現した可能性がある、ということよ」
「魔王って言うと、昔世界を滅ぼしかけたとかいうアレ？」

アルフィリースが半信半疑な様子で問いかける。彼女は、魔王などという存在は伝説の中だけの事と思っていた。既に魔王は人間が駆逐したとばかり思っていたが、そういえばギルドにある依頼の張り紙に「魔王討伐！」と書いた紙を見たことがあるような気がする。

「それは極端ね。だいたい大陸は昔、魔物の方が占拠していたんだし。人間の勢力が大きくなってからも実際にいくつかの国は滅ぼした魔王はいるけど、現在そこまでの魔王は存在しないわ。ただ種族を超えた魔物を統括できるような魔物を、魔王と呼ぶことになっているのよ。だから魔王と言ってもその強さはピンキリ。ちなみにアタシが知っているだけでも、最低４体は現存しているはず」
「そんなにいるんだ」
「実際はもっといるでしょ。賢い奴ほど隠れ棲むしね。人間の社会で噂になるのはたいしたことがないか、よっぽどの大物よ」
「ふぅん、じゃあその４体なら私にもなんとかなるかしら？」
「いや、アンタじゃ無理だから」
「なんでよ～」

アルフィリースが不満を垂れるが、シスターは表情を変えない。

「歴史上の分析から、通常魔王討伐には最低一個師団、つまり３０００人が必要だわ。魔王はある程度以上統率された軍勢を持つしね。安全に行くなら野話だから、実際にはもうちょっと少ない人数で討伐に行くことも多いけど。さらに、世の中には数人のパーティーで魔王討伐をするような勇者サマもいるとは聞いたけど、まぁ世界に何人もいないわね」
「そうなんだ・・・」
「ちなみにアンタ、傭兵ギルドでの階級章とかもらってないの？」
「なんかこんなのもらってるわ」

アルフィリースは腰から階級章を出して、シスターに見せた。

「ん～それはランクＥの階級章ね。まだまだ駆け出しじゃない。魔王討伐に傭兵が雇われることもあるけど、雑兵扱いでも最低Ｃランクからよ。まずはせっせと傭兵として仕事をこなして、ランクを上げることね」
「それはそうだけど、師匠の言いつけどおりにまずは東にいかないと」
「・・・永久にそこに行きつかない気がするのは、アタシだけ？」
「失礼ね！」

さすがに子供扱いされた気がしたのでアルフィリースはぐっと火酒を煽ったが、案の定むせてしまった。そんな彼女の様子を見て、またしてもシスターがニヤニヤしている。

「ほらほら、成人したとは言ってもまだ２０にもならないお子様なんだから、一気飲みはやめなさい。旅をするなら酒は情報収集の時にも必要だけど、酒は飲んでも飲まれるなってね」
「シスター、説教くさいわ」

「そりゃシスターですもの。アタシたちは説教してナンボよ」

そう言って快活に笑うシスター。

「まったく・・・にしてもシスター物識りよね。巡礼をいったいいつからやってるのよ」

「以前世話になった僧院を出てから１０年は経ってるかしらね～」

「え、じゃあそろそろ３・・・」

「何か言った??」

酒をアルフィリースの盃にどくどく注ぎながら、シスターの目が全く笑ってない。これ以上の追及は生命の危険にかかわりかねないと、アルフィリースの直感が告げている。アルフィリースはあわてて話題をそらしにかかった。

「と、ところでシスターは次はどこに向かうのかしら?」

「特に目的なしよ。魔物の件もあるからミーシアには最低行くわ」

「私もミーシアにはいく予定だし・・・じゃそこまでは最低一緒ね」

「そうね。アタシはかよわいシスターだから、傭兵さんにしっかり守ってもらわないとね」

ウィンクするアノルンに対し、「どこがかよわいんだ」というセリフはぐっと我慢するアルフィリース。その突っ込みを入れると、一晩中酒の相手をさせられるだろう。

「でも、シスターがそんなことを言っても騎士たちは聞いてくれるの?」

「あら?　アタシ、こんなはかなげな風貌だけど、教会本部でもアタシより立場が上な人って数人しかいないのよ??　そのくらい地位が高ければ、うちの宗派の国の騎士団をいくらかは独断で動かす

ことも可能よ」
「ほ、本当に？」

信じがたいという目を向けるアルフィリースだが、シスターが何の自慢にもならないと言った表情で応える。

「まあ気付けばこんな立場だったってのが正直なところね。地位には興味がなかったんだけど、一人でこうやって巡礼してるのが本部ではとても評価されているみたい。『まさに聖女のごとき苦行だ！』ってね。聖女が苦行するもんでもないでしょうに。本部のお偉いさんも変わった人が多いから」
「シスターが偉い人なんて、なんだか世の中間違ってる気がしてきたわ・・・」
「なんでさ！　まあアタシとしては地位があっても弟子とかまっぴらごめんなんだけどね。希望者は山のようにいたんだけど、めんどくさいから本部で一回演説したら皆辞退したわ」
「・・・念のため聞いておくけど、何について話したの？」

おそるおそる尋ねるアルフィリースを見て、シスターがニヤリとする。

「旅先における、酒と男のあしらい方について」
「・・・信じられない」
「もう大司教の青ざめっぷりが傑作でね！　シスターたちはアタシの演説の素晴らしさに次々気絶するし、なかなか素敵な時間だったわ」
「私、頭が痛くなってきたよ・・・」

こんなことを天使のような風貌で話すのである。だれが見た目でこのシスターの本質を見抜けようか。

「ところでアタシのことばっかりじゃない。たまにはあなたのことも話しなさいよ」
「私のことなんかつまらないわよ？」
「そうでもないわ。7年間も山籠りなんて普通じゃないし、あなた最初に出会ったときは夏でも長いインナーを来てたわよね？　あのクソ暑い日にそんな恰好だったから、アタシの目を引いたのよ？　まあ男並みの長身で、美人で、しかも黒髪ってのもあるけどね」
「シスターが『クソ』とかいうもんじゃないわよ」
「話を逸らさないでよね。まあ冒険者が着込むのは、色々下に隠すためでもあるから不思議じゃないけど、それでもローブやマントでよくない？　あなた絶対に人に肌を見せようとしないし・・・悪い事して懺悔するならシスターの前がいいわよ？　いまなら格安で聞いてあげるわ」

そこまで言って、シスターがグラスの酒をグビリと飲み干す。酔っ払った状態で懺悔を聞くつもりなのだろうか。

「お金取るの？　まあ懺悔するようなことは何も・・・してないってわけじゃないわね・・・」
「人に言えることなら言った方が楽よ。一応アタシもシスターですからね、懺悔の内容について他人に漏らすことはないわ」
「うん・・・ありがと。でもこれも師匠の言いつけでね、あんまり人に話すようなことじゃないんだ。でも万一それでシスターに関係がでてくるようなら、きっちり話すから」
「そう、ならアタシも深くは追求しないわ。でも夏場にその恰好は否応なしに目立つわよ。多少は事情が知れれば、知恵だけでも貸せるとは思うわ」
「それは・・・」

このシスターになら少しだけ話してもいいかもしれないと、アルフィリースが思った矢先である。

「オヤジー、酒だ！　さっさとしろ！」

突然でかい声と共に、いかにもタチのわるそうな連中が入ってきた。ここの酒場にたむろしている者もお世辞にも上品とはいえないが、今入ってきた連中は段違いの人相の悪さである。みかけで人を判断するのは良くないが、日ごろの行いは外見に現われる。旅をして長くはないアルフィリースだが、何度も危険な目にあったせいで、それなりに人物を見る目と危険性については身についた。今入ってきた連中の人相は、まさに人殺しを楽しめる種類のそれだろう。

よしんばそういった危険性がわからなかったとしても、他の客にはそそくさと酒場を離れるものや、明らかに目を合わせまいとする仕草が見て取れた。かなりヤバい連中なのかもしれない。

「めんどくさいことにならなきゃいいけど」

さっきまで大量に酒を飲んで、やや目がトロンとしていたシスターの目に鋭さが戻っている。やっぱりこのシスターは侮れないと、アルフィリースは感じた。

「部屋に戻ったほうがいいかしら」

「あいつらが座った席の隣を通って？　逆にここは端だし、目立たなければ見えないわよ」

「いや、シスターの恰好が目立つわよ」

「それもそうね・・・おい、そこの！？」

シスターが目の前の男たちを呼びつける。すると、

「へぇ、なんでしょう、アネゴ」
「シスターと呼びな。ガタイがでかいの何人か集めて、あの柄の悪そうな間抜けヅラどもを私の目の届かないようにするんだよ。酒がまずくってしょうがない」
「わ、わかりやした」

大の男どもがすごすごということを聞いて動く。

「（私が到着する前に本当に何をやらかしたのか、このシスターは）」

などとアルフィリースが考えるのも無理はない。

「アネゴって何よ？」
「そこは流しといてよ。ともかくこれでいいでしょ。あの手合いは関わらないのが一番よ」
「シスターに関わったら、向こうの方が運のツキかもしれないけどね」
「人聞きの悪い」
「事実よ」

そのようなやり取りを2人が続けるうち、そのタチの悪い連中から明らかな脅し文句が聞こえるまで、そう時間はかからなかった。

続く

イズの酒場にて、その1～金の髪のシスター～（後書き）

まだ導入のどの字にもなりません。明日も昼にアップ予定です。

イズの酒場にて、その2～大暴れ～（前書き）

イズの酒場にて旅の馴染みであるシスター・アノルンと酒を酌み交わすアルフィリース。その時酒場に柄の悪い連中に乱入されて・・・？

イズの酒場にて、その2～大暴れ～

「おいおいそこの若造、今何つった、あぁ!?」
「何も言ってねぇよ」
「こっちをジロジロ見てやがったろうが?」
「絡むんじゃねぇよゴクツブシ共」
「誰がゴクツブシだと!?」

先ほど無視を決め込んだばかりのアルフィリースとアノルンが、どちらともなく目を合わせる。周囲の男達がひそひそと囁き合っているが、先程酒場に入ってきたのはどうやらかなりタチが悪いので有名な連中らしい。その男たちに若い男性が絡まれているのだ。

まあ若いと言ってもアルフィリースよりは年上なのかもしれないが、まだ血気盛んな年ごろには違いない。絡まれても相手にしなければ連中も引いたかもしれないが、正面から言い返している。その様子はアルフィリースとアノルンからは一部しか見えないが、どうにも嫌な空気が漂っているのは2人にもわかる。

「あの子、まずいね」
「相手の危険性を測れない奴は、戦場でもそうじゃなくても早死にするわ」
「そんな身もふたもないことを。若い子は血気盛んなぐらいが普通でしょうよ。だいたいあいつらは何人いるのさ?」
「入ってきたときは6人。露骨に獲物をぶら下げてるのが2人。今絡んでるネズミみたいな顔の男と、馬のできそこないみたいな顔の奴は、懐に小刀を隠し持ってるわ。後の2人はブーツにナイフかな。そんなのに難癖つけられるようなマネするほうも問題よ」

いったいいつ確認したのか、アルフィリースがさらりと答える。

アルフィリースの様子をアノルンはずっと見ていたが、奴らに目線を置いたのは入店してきたとき、せいぜい2秒程度だった。あの一瞬でそこまで確認できるものなのかとアノルンは訝(いぶか)むも、

「（アタシはこの子をちょっと馬鹿にしすぎかな？）」

と、彼女は自分の考えを改めた。先ほどは笑い話で済ませたが、よく考えれば森オオカミの話だって――

「ちょっと助けてくる」

「ふぇ？」

アノルンが物思いに耽ろうとした瞬間、アルフィリースが立ちあがりつかつかと揉め事の中心に歩いて行く。突然のことにアノルンは随分間の抜けた返事をしてしまったが、そういう間にも既にアルフィリースはすたすたと荒くれ者どもの方に歩いていく。

「ちょっと！　もう、仕方ないわね」

いざとなったら援護くらいはしてやるかと考え、アノルンは後をついていく。もっとも後をついて行った方が面白そうだ、というくらいに考えていたのが本音だったのかもしれない。

「あなた達、そろそろやめときなさいよ」

「なんだてめぇは？」

「誰でもいいでしょ、他の客に迷惑だわ」

「何よりアタシに迷惑だ」

またシスターが余計な合いの手を入れる、とアルフィリースは思いつつもネズミ顔の男から目は離さない。だがすぐに割って入って

正解だったようだ。この男は懐の小刀をまさに抜く寸前だった。絡まれていた若い男は、全くそんなことに気が付いていないのだろう。抜かれていたら簡単には収まらない事態になっていたに違いない。

「こいつぁよ、俺たちのことをゴクツブシって言いやがったんだ。その分の落とし前をつけさせるだけだ。関係ねえ野郎はすっ込んでな。おっと、野郎じゃなくてあばずれか」

へへへ、と仲間たちから下品な声が聞こえてくる。アルフィリースを挑発しようとしてるのだろうが、こんなことで我を忘れるほど彼女は愚かではない。

「酒の席での出来事でしょ。どっちも酔ってるんだから売り言葉に買い言葉で喧嘩なんて、大の男がみっともないわ。それより私が両方におごったげるから、ここはどっちも引いて楽しく飲みましょう」

「なんだ話のわかる姉ちゃんだな。それなら別にいいぜ～？　ただしアンタが酌してくれるんならよ・・・ケケ」

「私みたいな大女の酌じゃ酒もおいしくないでしょ。ちょっと良い酒出すように店主に言うから、それで満足なさい」

確かにアルフィリースは背が高く、並の男くらいはある。いわゆる大女でも美人は美人なのだが、彼女は自分が美人だという自覚がないうえ、ある出来事がきっかけで身長が高いのが完全にコンプレックスとなってしまっていた。

「じゃあ代わりにそこのシスターに酌をさせるさ。おいシスター、こっちにきな！」

「いや、そのシスターはやめた方がいいと思う。本当に、真剣に」

「あれもダメ、これもダメってよう、さっきからお前は何様だ？こんな機嫌の悪さが手酌の酒なんかで治るもんかよ！」

アルフィリースは知ったことかと考えるが、酔っ払いにはまともな理屈は通用しない。それにしてもなんだか事態がどんどん悪化していくようだ。

「（むしろなんでシスターついてきてるの？　余計事態が悪化してるし！）」

などと考えても、既に状況はアルフィリースの描いた青写真とは違う方向に動いている。このタチの悪い連中が酌だけで済ますはずもないが、それ以上にこのシスターが大人しく酌なんてするはずがない。そう考えた矢先、どこからともなく猫なで声が聞こえてきた。

「あ～ら、少しお待ちくださいましね。お酒をお持ちしますから」
「シスターは話がわかってるじゃねぇか」
「（え、今の声はシスターなの！？）」

今までアルフィリースが聞いたことのないようなシスターの愛想よい声、いや、作りすぎともいえる声だった。こんな場面でなければ間違いなく吹き出していただろう。シスターの様子を見ると満面の笑顔でニコニコしているが、目が・・・目が全く笑っていない。先ほど絡まれていた男もシスターの表情からなんとなく次の展開が読めたらしく、じりじりと後ずさっている。まさか自分が来る前も同じような展開があったのかと、アルフィリースは想像してしまう。そして、ネズミ顔のこの男は何も気付かないのかとアルフィリースは表情を窺うが、どうやらこのシスターにどのようなことをするか卑猥な妄想で頭がいっぱいのようだ。

「（これだから酔っ払いは・・・どうなっても知らないわよ？）」

そんなアルフィリースの心配もよそに、いかにも看板娘が常連客の相手をするかのように愛想を振りまくシスターアノルン。

「あ、お酒が出てまいりましたわ。私のおごりということでよろしいですか？」

「いやいや、むしろ俺がおごってやるからよ、そのかわり俺に酒をついでくれや」

このシスターの思わぬ美しさに、男はもうすっかり機嫌を良くしているのだろう。たなぼたぐらいの気持ちなのかもしれないが、とんだ爆弾が落ちてきていることに気が付いていない。

「それでは注いで差し上げるので、こちらにいらしてくださいな」

「よしよし、わかったわかった」

「コップをお忘れになってはだめですよ？」

「おっとっと、そりゃそうだ」

「で、少し頭を低くしていただけるとやりやすいです」

「頭を低くな・・・ところでシスターは足もきれいだなぁ。で、なんで頭を低くするんだ？」

「そりゃあ、こうするからに決まってんだろが！？」

ゴシャッ！

成り行きを心配そうに見守っていた周囲が思わず息をのむ。いや、アルフィリースもだ。このシスター、こともあろうに酒瓶で男の頭をカチ割ったのだ。完全に不意打ちをくらい、ネズミ顔の男が床でビクビクと痙攣をしている。

「てめぇ！　なにしやがる！！」

「あーん？　酒瓶で頭をカチ割ったんだよ、見てわかんねぇか？？」

「そ、そういうことじゃねぇ。シスターがそんなことしていいのかって話だよ！」

「てめえらみたいなゲス共に、アタシのありがたーい説法なんざもったいない。こうやって頭カチ割ってやりゃ、どんなクズでも『主は来ませり』ってな。てめぇらみたいなゲス共にも、等しく神様を呼んでやろうっていうアタシのせめてもの慈悲なんだが、わかんねぇかな？」

ははん！　とシスターが鼻で笑う。

「こ、こいつ。とんでもねぇシスターだ！」

「何言ってやがる！　てめえらみたいな粗末な×××した××野郎にこのアタシの相手がつとまるかっての！　そこいらの羽虫の方が、まだアタシが気にするってもんさ。さっさと帰って仲間同士でカマ掘りあって寝やがれ、この×××共！！」

とてもシスターとは思えない暴言を吐きながら、アノルンは相手に向かって中指を突き出している。もはや完全にアルフィリース達の方が荒くれ者の様相を呈してきた。このシスターは完全にケンカ慣れしている。

「い、い、言いやがったな。人が気にしてることを！！」

そっちも気にしてるのか！？　とかアルフィリースが考えていると、連中の一人が掴みかかろうと襲いかかってきた。なんとか収まる感じだったのに、絶対このシスターに後で文句を言ってやるんだとアルフィリースはぶつぶつと口の中で唱えながらも、既に体は対応を始めている。

掴みかかる相手に足払いをかけ、バランスを崩した男の首へ組んだ拳を叩き下ろす。そして振りかえるよりも速く相手に向かって机

を蹴りあげると、机をかわした一人がブーツからナイフを抜こうとするところだった。その男がナイフを抜きながら目線をこちらに上げようとする瞬間、男から悲鳴がほとばしった。

「ぐ、ぎゃあぁぁ～！」

男が目線を上げる直前、アルフィリースが体重をかけてナイフの柄を上から踏んづけたのだ。ナイフはそのまま男の足を貫き、地面に固定してしまった。

「こ、この女？」

かなりできるとふんだのか、それぞれに距離をとって獲物を抜いた。周囲の人間もあたふたしており、さすがにシスターもアルフィリースに心配そうな目線を投げるが、当の彼女は落ち着き払っている。

「やめた方がいいわ、3人程度じゃ相手にならない。今の内にけが人を連れて帰ることね」

「こっちは剣抜いてんだぞ、そっちは丸腰だろうが！？」

「あら。その丸腰の女に大の男が武器を持って3人がかりなんて、かなり恥ずかしい状況よ？」

「うるせぇ。こんだけやられて今さらひけるか！」

ふー、と大きくため息をややわざとらしくつき、アルフィリースは言い放つ。

「なら、試してみなさい！」

瞬間、うおっ！　という掛け声とともに一人目が切りかかってき

た。ワンステップで後ろに飛びのいて剣をかわしざま、酒瓶を横面に叩きつける。顔を押さえて転がる男を飛び越えるようにナイフを持った男が襲ってくるが、これに近くにあった椅子を叩きつけて吹き飛ばすと、間髪入れず剣を持った男が上段から斬りおろしてくる。今度はこちらもバランスを崩しているが、体をひねってよけると上から下ろす腕に逆に手を添えるようにして加速をつけてやる。すると剣は止まらず、逆に男の内腿を切り上げた。

「ぐひっ？」

情けない声をあげる男にさらに追いうちをかけるようにみぞおちを蹴り上げると、男は悶絶して食べた物を吐き出しながらへたりこんでしまった。

「これでわかったかしら、さっさと帰ることをお勧めするわ。これ以上は手加減する自信がないわよ？」

「く、くそっ」

「ああ、けが人はちゃんと連れて帰ってね？」

傍から見ていればまさに一瞬の出来事だった。あまりにも鮮やかだったので、実は加勢の機会を狙っていた者も何もできず、ただただ呆気にとられている。シスター・アノルンも酒瓶を振り上げて（さっきより明らかに大きい）いるものの、振りおろす場所を失い、決まりが悪そうである。援護でもするつもりだったのだろうか。

「おい、しっかりしろ」

「出直してくるぜ、てめえら」

「これよりひどい目にあいたければどうぞ？」

すたこらと男達は仲間同士で支えながら、ほうほうの体で逃げだ

していく。既に周囲は笑いがこらえきれない様子で、くくく、という忍び笑いが聞こえてくる。

「おい、忘れもんだぁ！」
「ぎゃっ！」

と、何が起こったのかと思えば、シスターがやり場をなくした酒瓶を店から出ていく荒くれどもに投げつけていた。しかもまたしても頭に直撃したのだ。

「や、やりすぎよシスター」
「むしろアタシはあんたが甘いと思ったけどね。全員再起不能でもよかったよ。あの手の連中は逆恨み甚だしいし、何よりしつこいわよ？」
「私は無駄な殺生、暴力はしないわ。だいたいあんなことになったのは誰のせいだと・・・」

という言葉を言い終わらないうちに、わっと駆けよってくる酒場の男たちに囲まれる。

「姉ちゃんすげえぜ」
「久しぶりにスカッとしたよ！」
「俺のせいでごめんな」
「俺の酒をうけちゃくれねぇか？」
「ワシもスカッとしたからな。酒代も宿代もタダでいいよ！」

てんやわんやで、もみくちゃにされるアルフィリース。

「ち、ちょっと皆、落ち着いてよ。シスター！　なんとかして！？」
「アタシしーらない」

薄情なシスターはすたすたと二階に上がっていく。一階ではアルフィリースが大勢の男に囲まれて困っている。

「逆恨みを考えると、明日の朝一番でこの町を離れるべきね・・・まぁ少ししたら助けにいきますか。にしても」

アノルンがアルフィリースと知り合って一年になるが、彼女が戦っているのは初めて見た。最初に見たときから強いだろうとは思っていたが、一瞬であの人数をあしらうとは。しかも素手で。

「でもよく考えると当然かも。あの子自分がどのくらい強いのかも分かってるのかな？」

そう、アルフィリースは何の気なしに３ｍの森オオカミを倒したと言ったが、森オオカミは通常、大きめの個体でも成人男性程度である。また群れのボスクラスでもせいぜい一回り大きい程度で、２ｍはいかない。それが群れでもなく、しかも３ｍともなればおそらくはその一帯の主だったのだろう。それを殺さずほぼ無傷で叩き伏せ、しかも交渉して枕代わりにしたとまで彼女は言った。

「ギルドに申請していれば間違いなくＢランク以上ね、もったいない。それに加えて黒髪、か。魔法も使えるってことなのよね、きっと」

この時代、平均的な民衆の髪色は栗毛である。貴族階級には金髪が多く、これは昔神ないし神に使い種族と交流があり、子を成すことに成功したからだと彼らは主張しているが、真実は定かでない。また魔法を使う者はその操る性質により髪色に変化が現れることがある。たとえば炎であれば赤、といった具合である。もちろん全員

がそうなるわけではなく、力の強い者にのみそういった変化が起こる。

魔術師としては名誉なことだが、通常魔術は一人一系統であり、戦闘を行うものには自分の弱点をさらけ出すのと同様なので、髪色を染めて変えてしまう者の方が多い。そして染料は一般に黒が手に入りやすく普及している。そのため黒髪の者は高位の魔術師、ないしは闇の魔法に親和性を示す者の証明である。

「あの剣技に加え、魔法が使えるとすれば要注意かしらね・・・闇魔術ではないと思うけども、師匠の名前は念のため聞いておいた方がいいかも」

ちらりとアルフィリースの様子を二階から窺いながら、思索にふけるアノルンであった。彼女を世間知らずで愛らしいと思う一方で、彼女の本当の仕事の性質上、どうしてもアルフィリースに詳しく聞いておかねばならないと考え始めていた。

「全く嫌な女になったわ、アタシ。アタシだって沢山隠し事してるのにね」

今のアノルンを見たらアルフィリースは驚いただろう。この口の悪い暴力シスターとは思えない様な悲しそうな表情を浮かべて、彼女はアルフィリースを見つめていた。

続く

イズの酒場にて、その2～大暴れ～（後書き）

次話も明日昼投稿予定です。感想・メッセージ・評価お待ちしています。

あらくれ者の仕返し（前書き）

～あらすじ～

酒場でからまれていた男性を助けるためにあらくれ者をねじ伏せたアルフィリース。だがしかし逆恨みをかってしまい・・・

あらくれ者の仕返し

「アルフィ、起きな！」
「ま、まだ太陽出てないわよ・・・」
「昨日早く町を出た方がいいって話をしたろ？　さっさと起きる！」
「う～、飲みすぎたぁ・・・」

昨日例の荒くれどもを撃退したせいですっかり人気者になってしまったアルフィリースは、酒場の男どもに取り囲まれ、しこたま飲まされてしまった。最初は断ろうと必死だったが、世間知らずのアルフィリースに、酔っ払った上でご機嫌な男達を大量にあしらうような術は身についていない。

アノルンが半刻程後に1階に様子を見に行った時には、へべれけ状態で「もっにょ酒をもっへこ～い！」などと言うアルフィリースを見つけてしまった。さすがのアノルンもこれはまずいと思い、なんとかアルフィリースを助け出して無理矢理二階の部屋まで連れて行きベッドに寝かせたのだが、既に酔いざましを飲ませることができる状態ですらなかった。

「もう風呂はないから、体を拭く用の水だけ汲んできといたわよ？　酔い覚ましと強壮剤の薬も用意しといたから、先に飲んどきなさい。あと食料と馬も手配しといたから取ってくる。アンタは準備でき次第、東側の門に行っておきなさい、いいわね？」
「わかった～」

まだアルフィリースは自分でも寝ぼけているのがわかるが、シスターの言うとおり早くこの街は離れた方がいいだろう、というくらいの判断をする気力は戻ってきていた。それになんだかんだでアノルンのこの手際の良さや親切心は、彼女がシスターなんだなぁとし

みじみアルフィリースに思わせるには十分だった。

「回復魔法は使えないのにね」

「聞こえてるわよ！？」

「きゃああ！？」

アルフィリースは今まさに服を代えようとするところだったので、慌てて体を隠す。

「女同士で減るもんでもないでしょうに？」

「ちょっと、馬を取りに行ったんじゃなかったの？　気配がなかったわよ？」

「気配ぐらい消せるわよ」

「どこで覚えたのよ！」

「１／４刻で準備できなかったら置いていくからね！？」

今度は本当に馬を取りに行ったようだ。ずかずかと足音が遠ざかっていく。

「見られてないわよね？　この刻印・・・」

アルフィリースが彼女の師匠にこの刻印を施された時、決して人には見せるなと言われた。その理由が最初はどうしてか明確には彼女にはわからなかったが、自分の身のことである。勉強もするにつれ、なんとなくは納得できた。その後様々なことを教わったり経験するに従って、明確な理由として、他人に見せてはいけないものだと認識している。もしうかつにもこの刻印を見られてしまえば、自分は抹殺対象になるかもしれないとも。

「なんでこんなことになっちゃったかしらね・・・」

思わず自分の不幸を恨んでしまうアルフィリースだが、それでも彼女は師匠に巡り会えただけ運がいいと思っている。今こうして生きて通常の生活ができているのが、もはや奇跡に近いことも分かっている。普通なら１０歳で師匠に出会った段階で処分されていてもおかしくなかった。自分の生命の安全だけを考えれば、あのまま山籠りを続けているのが正解なのだ。それでも世の中のことをもっと知りたいと思う気持ちは止められない。一人前に恋愛とかいうものも経験してみたい。１８にもなったばかりの彼女の魂は非常に若々しく生命力に満ち溢れ、自由だった。

＊＊＊

一方、アノルンは準備をしながら考え事をしていた。

「ちゃんと薬飲んだかな、あの子」

意外にずぼらなところのあるアルフィリースをアノルンは思いやりながら、馬屋に向かう。彼女はシスターでありながら回復魔法が使えない。その代わり薬草の知識にかけては教会内でも当代随一と言っていいくらいであったし、それが彼女の誇りでもあった。また修行により、対魔・対アンデッドなどの魔法はかなり図抜けている。何気に護身術も身につけているし、冒険者としての能力はかなり高いと自負しているので、回復魔法を使えないことを後悔したことはない。ただ一度を除いては。

「まあもともと私はシスターじゃないしね。はいはいお馬さん、イイ子イイ子。」

アノルンが二人分の馬を引きながら馬屋を出て行くと、後ろから

声をかけられる。

「うごくんじゃねぇよ、このクソッタレシスター」

＊＊＊

その頃、さっさと準備を終えたアルフィリースは、既に門の付近でシスターを待っていた。夜も明けてきており、もうじき町の門も開くだろう。にしてもやはりシスターの薬は効き目が抜群だ。もうすっかり体調が通常の状態に戻ってきている。

「おう、お嬢さん。昨日は痛快だったね」

「門衛さん、私のこと知ってるの？」

「ワシも昨日酒場に行ったんだがね。現場は見ちゃいないが、何せあの盛り上がりだろう？　何があったのか聞いたら、旅の美人剣士があのゴクツブシどもをノしちまったと言うじゃないかね。奴らはこの町の出身なんだけどさ、ガキのころから素行が悪くてね。まともに働きもせずに夜盗まがいのことまでするし、噂には人殺しもしてる奴が混じってると聞いてね。どうにかならないかと思ってたんだよ」

「この街に自警団みたいなのはないの？」

「あるにゃあるが、奴らの方が人数が多いんだよ。ちなみに・・・」

「２０人ってとこかしら？」

「そんぐらいかのう。て、なんでそれを・・・あ、わわ」

門衛の老人は思わずあとずさり、いち早く逃げ出した。その話に出てきた噂の連中が門の付近に集まってきていたのだ。しかも今度は全員きっちりと武装している。

「昨日はこいつらが世話になったらしいな」

ひときわ大柄な男が声を発する。

「あら、そんな何人も男を世話するほど甲斐甲斐しくはないわ、私」

「余裕じゃねえか。１０人を超える男に囲まれて全く怯まねぇとはな」

「で、何の用かしら？　私、そろそろ町を出ようと思ってたんだけど？」

「まあまあ、そういうな。昨日のこいつらが礼をしたいんだってよ」

「つまらないお礼なら突き返すわよ？」

「心配すんな、しっかり楽しませてやるよ。俺の腰の上でな、ひひひ」

そういう間にもじりじりと男たちが詰め寄ってくる。今度は１４人くらいはいるか。結局はこういう展開なのかと、アルフィリースはため息をつかざるをえなかった。

＊＊＊

「動くなっつってんだろう！」

男の声もむなしく、シスターはすたすたと全く足を止める気配がない。

「無視すんじゃねぇよ、このアマ！」

男はその辺にあった木切れをつかんで投げてきたが、シスターは後ろを見もせずにひょいとよけてしまった。

「危ないわね。アタシの大切なお馬ちゃんに当たったらどうしてく

れるつもり？」
「馬より自分の心配をしやがれ！」
「昨日アタシに一発でノされた男を前に、何を心配しろっての？」
「昨日は油断したからだ！　今日は仲間もいるし、昨日みたいにはいかねぇぞ」

アノルンがよく見ると、どうやら昨日のネズミ顔の男だ。彼女はこの男に全く興味がなかったので、既にその顔を忘れかけていた。確かに今日は五人ほど仲間がいる。しかも全員武装済みだ。

「いや、既に昨日以下じゃない？」
「どういうことだ？」
「だって、こんなか弱いシスターを大の男が６人がかりで武器をもって取り囲んでるのよ？　もう既に男のやることじゃないわよ。××野郎ね。あ、男じゃないから××オカマか。なんかもうオカマにも失礼だけど」
「く、くそ、このクソアマ！」
「あら、このクソ尼ですって。上手いこと言うじゃない。でも残念だけど、出家はしてないの、アタシ」
「黙りやがれ！！」

ネズミ顔の男が顔を真っ赤にしながら斬りかかってきた。アノルンの方はいかにも涼しい顔で右手を腰にあてたまま、突っ込んでくる男を見ている。男が振り下ろす剣がシスターに当たるかと思われたその時、キン！　というひときわ高い金属音と共に男の剣が止まる。男の剣はシスターの左腕を斬り落としたかに見えた。いや、少なくとも男はそのつもりだったろう。

「な・・・」

何かを男が言いかけた瞬間、バキッ！　という何かが折れるような鈍い音と共に、ネズミ顔の男の体が宙に舞う。いや、完全に宙を吹っ飛んでいた。そのまま馬小屋の壁を一部突き破り、つきあたりの壁まで吹っ飛んだ男の体は、もはやピクリとも動かない。

「あちゃー、やりすぎた??」

「な、な、な・・・」

残った男どもは顔面蒼白である。とても現実の光景とは思えない。大の男の体が、お世辞にも大柄とはいえないシスターの一撃で馬何頭分もの距離を吹っ飛んだ。シスターに目線を戻すと、いつのまにか両手には棍棒のようなメイスが握られている。

「アタシね、今でこそシスターだけど、以前は違ったのよ。事情があって名前も職業も変えちゃったけど。でもシスターって思ったより便利だわ。服がひらひらしてるから武器を隠すにはもってこいだし、相手も油断するしね。なにより、清楚さ3割増しってカンジ？」

などとウィンクしながら軽口を叩いているが、このシスターは、男どもにはもはや恐怖の対象でしかない。

「まあ一応シスターだし、殺しはしないわよ。それにやりすぎちゃうと最高教主（マスタービショップ）の折檻が怖いしね。でも××××潰れちゃって、男として不能になっちゃったらごめんなさい♪」

「ひぃっ！」

楽しそうに男達を追い詰めるシスター・アノルンと、完全に武装しているにもかかわらず剣を持つ手が小刻みに震える男達5人。もはや狩る側と狩られる側が完全に逆転していた。

＊＊＊

そして門周辺では・・・

「ぎゃあっ！」

先にアルフィリースに掴みかかろうとした二人の男の、剣を持っていた手首から上が吹っ飛ぶ。全員が呆気にとられる中、ヒュン！と音がしてアルフィリースが右手のムチを構えなおす。

「て、てめぇ。剣士じゃねぇのか？」

「別に剣士だと名乗った覚えはないわ。主に剣を使うってだけで、旅をしていれば多対一や中距離での戦闘を強いられる場面も多いから。これはそのための対応策ってところよ」

いいながら構えるアルフィリースの構えには無駄がない。ムチが熟練の腕前であることは素人目にも見て取れた。

「てめえら囲め！　ムチも多方向には同時に振れねぇ。囲んで同時に襲いかかれ！」

男たちがバラバラと周りを囲む。

「（なるほど。あのリーダーはさすがに場慣れしてるわね）」

油断なく周囲を警戒しながらアルフィリースは相手を観察する。囲まれれば確かに不利だが、まとめて倒す時には便利であった。

「いけっ！」

掛け声とともに周囲を囲んだ連中が一斉に襲いかかってきた。それでもアルフィリースは冷静にムチを振い、ムチの腹で正面の４人の顔面を打ちすえる。一般にムチの殺傷能力は先端数１０ｃｍにしかないが、熟練すれば人間の首をすっ飛ばすくらいはできるようになる。だがムチの腹でも顔面に命中させられれば、とても無視できた痛みではない。案の定顔面を打ちすえられた連中は全員うずくまってしまった。

だが他の連中は止まらない。間髪いれず背後には連中に懐から取り出した粉をばらまく。後ろから飛びかかろうとしていた男たちはまともにこれをかぶり、悲鳴と共にその場にうずくまってしまった。特定の植物から採れる、眼潰し用の花粉である。そこに残る二人の剣がアルフィリースに向けて振りおろされたが、彼女はなんなく左手の手甲でこの剣を受け止める。男二人が受け止められることに気付くが早いか、手甲から隠し刃が出現し二人の男の顔面を切り裂く。噴き出す血と共に男たちがもんどりうち、アルフィリースも返り血をいくらか浴びるものの、瞬き一つなく、全く動じていない。

「な、なんだと？」

残った連中は驚きの色を隠せない。ものの１分も無く大の男８人が女一人にしてやられたのだ。

「（こんな使い手、見たことねぇ・・・）」

「こ、こりゃダメだ・・・」

リーダーらしき男以外が背後を向けて逃げ出そうとした瞬間ヒュッ！　と何かが風を切った。

「あ、あ・・・」

そして倒れる男たち。見ると背中にダガーのようなものが刺さっている。

「心配しないで、しびれ薬よ。丸1日は動けないでしょうけど。誰も死んでいないわ。まあ無事とも言い難いけど、自業自得よね」

「てめぇ、何者だ!?」

「別にしがない旅のものよ。取り立てて何者ってほどのこともないわ」

「お前みたいな使い手、見たことねぇぞ?」

「褒め言葉として受け取っておきましょう。それでどうするの、まだやる? それとも大人しく自警隊に捕まる?」

「女相手に引けるかよっ。剣で勝負しやがれ!」

リーダーは構え直して斬りかかってくる。

「仕方ないわね」

アルフィリースも剣を抜き放つ。男が放つ横切りを後ろに跳んでよける。さらに突っ込みながら放たれる上段切りを体を半身にしてよけながら、剣の柄でしこたま顔面を打ちすえた。

「ぐっ!?」

男の後退に合わせ、今度は自分から斬りかかる。

「(上かっ)」

男がアルフィリースの上段切りを剣で防ごうと差し出した瞬間――

「(け、剣の軌道が??)」

アルフィリースの剣が、防ごうとした剣をよけるように軌道変化し、袈裟がけに男を斬りおろした。

「なんで・・・」

「殺すつもりの勢いで振る剣でこんな器用なことはできないけどね。それに戦場ならともかく、一対一なら剣を剣で受けるような真似は自分の剣を潰すことになるからまずやらないわ。覚えておきなさい（と言っても、師匠の受け売りだけどね…）」

「く、クソッタレ」

男が落とした剣を足で蹴飛ばすと、自警隊らしき人影がバラバラとやってくる。

「大丈夫かね、お嬢さん!?」

「あら、門衛さん。助けを呼びに行ってくれてたの？」

「当たり前じゃないかね」

「でもせっかくだけど全部終わったわ。皆生きてるはずだから、しっかり連行してあげて」

「なんとまぁ・・・」

事態が飲み込みきれない町の住人を尻目に、アルフィリースは自分が使った武器の回収をしながら何事もなかったようにつぶやく。

「シスター遅いなぁ・・・何やってんだろ」

続く

あらくれ者の仕返し（後書き）

明日も昼に更新予定です。感想・評価感激です。

前回余計な文が入っておりました、もうしわけございません。修正してあります。

呪印の秘密とアルフィリースの過去、その1～友情～（前書き）

～あらすじ～

あらくれ者を無事撃退したアルフィリース達だったが、そのアルフィリースの強さを不審抱くアノルン。ついにアルフィリースに問いただすことにするが・・・？

「出るタイミングを逃したわね・・・」

その件（くだん）のシスターは自分の敵をとっとと片づけ、事の成り行きを見守っていた。ちなみに彼女に襲いかかった連中は、顔の原型がわからない程度にはボコボコにされ、全員馬小屋の肥溜めに放り込まれている。

「目には目を、歯には歯を、クソッタレにはクソッタレってか」

そんな教義は、アノルンが属する教会にはもちろんない。

「にしても、あそこまでの使い手なのね。うちの神殿騎士団の大隊長くらいには強いんじゃない？？　それに・・・」

投げたダガーの不自然な飛距離と威力。２０m近い距離をあんな風には飛ばないだろうとアノルンが考えていると、

「あ、シスターいた！」

「わ」

不意にアルフィリースに声をかけられ、驚くアノルン。

「シスター、皆に色々聞かれる前にもう行かない？　また持ち上げられるのは嫌だよ、私・・・」

「そ、そうね。じゃあ行きましょう」

やや面喰いつつも、アノルンは馬を連れてくる。そしてさっそく

馬に乗り、そそくさと町を後にしようとする2人。だがその時、門衛の老人に声をかけられた。

「お前さんたち」

「何？　門衛さん」

「何か急がれるみたいじゃからもう引きとめんがの。ミーシアには寄るんじゃろう？　あそこではワシの息子が宿屋をやっておる。もし泊まるんならこのジジィの手紙を見せるとええ。タダで泊めるように一言書いてある」

「ホント？　ありがとう、おじいさん！」

「何の何の、これでこの町もしばらく平和じゃろうからな。そのお礼にしては安すぎるくらいじゃ」

「じゃああありがたく使わせてもらうわね。え～と、おじいさんの名前は？」

「ビスじゃよ」

「ありがとうビスさん、私はアルフィリースよ。じゃあまた縁があったら会いましょう！」

「おうよ」

門衛のビスは、笑顔で手を振って送り出してくれている。アルフィリースも人に親切にされてすっかりご機嫌のようであった。

＊＊＊

その後、イズの町を後にしてしばらく進んでいたが、シスターの口数がいやに少ない。アルフィリースはアノルン訝しみ、やや心配そうに彼女の方を見る。

「どうしたの、シスター？」

「ん、いや何でもない」

「何でもなくはないでしょう、体調が悪いんじゃないの？　休憩しましょうか？」
「いいよ・・・いや、やっぱり休憩しよう」

意を決したようにシスターがアルフィリースの方を向いた。いつになく真面目な表情に、何事かとアルフィリースも構えなおす。

「そこの岩のとこに行こう」

このあたりは草原が多い。大陸の中ほどに位置するため昔から開けており、通る人影もかなりの数だ。前にも後ろにも隊商が見られるし、馬のいななきも多い。このような状況で道端で腰を下ろすわけにもいかず、2人は少し街道をはずれ、人気のない岩の上に腰かけた。

「アルフィ、アンタには答えにくい話題かもしれないけどさ。聞いてもいいかな？」
「私に答えられる範囲で良ければ」

アルフィリースも話題の重要性を感じ取ったのだろう。表情は真剣である。

「今日朝ね、悪いとは思ったけどアンタの体の刻印を一部だけど見たのよ」
「やっぱりそうなのね。それで？」
「あんたのは普通の刻印じゃない。民族の儀式や、あるいは罪人の証で刻印を入れることはある。ほかにも、魔術とかでね」
「・・・」
「私も専門家じゃないから詳しくはわからないけど、あんたのは呪印の類いだった気がする。しかも魔術を封印する、封呪の類いだ」

「・・・で？」
「封呪の印ってのは、体に施す刻印としては最も強い種類だ。本人にもかなりの負担を強いるが、その分効果は高い。それをアンタ、両腕のほぼ全面に掘ってるね？」
「・・・背中と胸の一部にもよ」
「それだけアンタの魔力が強大ってことだ。通常腕を一列で一周する程度で、並の魔術師ならば半永久的に魔法が使えなくなる。そんなものをそれだけ広範囲で封印しながら、アンタはなおかつ魔術を用いた」
「なんでそう思うの？」
「飛んだダガーの飛距離よ。投げ方に対して、あんなに飛ぶはずがない。風の魔術か何かを用いたのね？」
「そこまでわかるんだ。で、どうする？　私を始末する？」
「アンタ次第だ」

シスターの目線が一層鋭くなる。

「アンタ、本当は何をしたい？　それほどの力があればだいたい何でもできるだろ？　王宮に士官するもよし、魔術協会に属するもよし。どうやっても引く手数多になる。なんだったら魔王みたいな君臨の仕方もある」
「・・・私はね」

アルフィリースがふと遠い目をする。

「自分が何をしたいのか、何をすべきなのか・・・まるでわかってない」

彼女はポツリポツリと話し始めた。

「私の生まれは農家よ。貧しくはなかったけど、その日のご飯にも困らない程度のごくごく普通の家で育ったわ。でも私には普通じゃない力があった。小さい頃は、その力を自分のために使うことが悪いとも思わなかったわ」

アノルンは真剣な面持ちでアルフィリースをという人物を測るかのようにじっと見ている。

「自分で制御しきれないってこともあったけど、それで遂に人を死に至らしめたわ。私たちの村に落ちのびてきた戦争の敗残兵だった。村人に乱暴しようとしたところを見逃せなくて・・・でもそれがまずかったみたい。ほどなくして私は多数の魔術士に囲まれたわ」

アルフィリースの生きる世界ではそれが当然だった。昔は魔術士は魔物や魔王に対抗する力として重宝されたが、過去に国を操り、世界中に戦争をしかけようとした魔術士がいた。その魔術士は征伐されたが、多大な犠牲を出したその事件以降、人々は魔術の危険性を認識し、魔術士は一般の人々から不当な扱いを受けることが多くなる。

遂には弾圧にまで発展するほど一般人と魔術士の対立の溝は深まったが、魔術士達は自分たちで管理を徹底することにより、人々の信頼を取り戻そうとした。そのために作られたのが魔術協会であり、強い魔力を持つ者はより厳しく自分を律し、かつ管理されなければならないというのが現在の常識である。

そのため魔術の力を悪用しようとする者には、魔術教会が例外なく自分たちで制裁を行うことにしている。魔術教会には魔術士狩りを専門に行う部署まであるくらいだ。

だが一方で、力の大小はあるとはいえ、本来魔術の力は誰でも持っている。普通は専門の知識を学び、然るべき修行をすることでしか発現しないが、たまに生まれつき魔術が使用できるような素質に

恵まれる者もいる。それほどの才能ある者は、たいていは占星術や予知を駆使して存在を察知され、生後間もなく然るべき場所に引きとられる。人を死に追いやるほどの力の持ち主が放置されるなど通常はありえないのだが、そういった意味ではアルフィリースは例外だった。才能に恵まれることが常に幸せとは限らない。

そうやってアノルンが考える間にも、アルフィリースは淡々と話し続ける。

「魔術師１０人くらいだったかしら。それでも私の魔力の方が断然強くって、あっという間に倒してしまったの。ああ、殺してはいないわよ？　そんな必要が無いほど、私の方が強かった。そこに通りがかったのが私の師匠」

「ちなみに師匠の名前は？」

「アルドリュース」

「まさかアルドリュース＝セルク＝レゼルワーク！？」

「そうよ」

世界に名だたる魔術師は沢山いるが、アルドリュースという魔術師は特殊であった。彼は若くして凄まじい力を発現させたが、２０にして魔術の修行を放棄。魔術教会を脱退した後、そのままとある国の騎士団へと入隊し、今度は武術で将軍職の一歩手前である千人長にまで上り詰めた。

さらに文官としても力を発揮し、特に内政の分野における治水工事・都市計画などにおいて、いまだに彼の提唱した案が世界中で参考とされている。宮廷にも民衆にも人気があり、国王にも評価され伯爵号まで与えられたが、なぜか３０台半ばにて全ての地位を返上して出奔。そのまま野に姿を消した。

何を考えていたかわからないという点で異端であるが、半ば伝説的な人物である。まさかそんな人物にアルフィリースが育てられているとは、アノルンの想像を大幅に超えていた。いや、むしろそれ

ほどの人物がアルフィリースを育てる必要があったのかもしれない。

「私、師匠にはあっさりやられちゃってね。魔術師のくせに格闘術まで超一流なんだもん、反則みたいな強さだったわ。で、それから師匠預かりになって、人里離れて暮らすってことを条件に処分は免れたわ。他にも色々事情はあったみたいだけど、師匠は話してくれなかった。その時に、この封呪を師匠から施されたの」

そういってアルフィリースはぐいっと袖をまくってみせる。だがアノルンが見たところ、右と左で文様の形式が違うように見える。

「右と左で違うのがわかる？　左は師匠の施した呪印。右は私が自分で施したものよ」

「自分で？　そんなことができるの？？　それ以上に正気の沙汰じゃないわよ！」

呪印は施す者にも受ける者にも大きな代償を求める。施す者には何らかの機能廃絶、たとえば味覚の消失や寿命の短縮である。そして受ける側には消えることのない多大な苦痛である。ゆえに呪印は魔王や強大な魔物の封印や、罪人への最高の刑罰として用いられるのが通例だ。それを、自分で自分にかけるなんて正気の沙汰とはいえない。

「機能廃絶はなかったんだけどね。その代わり、呪印で封じられた分の魔力を使おうとするたびに呪印の侵蝕が強まるようになったわ」

「それは」

「そう、本来の魔力を使うたびに苦痛が強くなるということ」

あっさりいえるような内容ではない。アルフィリースの抱える苦痛はいかほどかと想像し、アノルンは身を震わせた。

「そんな心配そうな顔しないで、今は大した苦痛じゃないから大丈夫。長いこと魔術も使わなければ痛みは段々なくなっていくし、ここ数年は使ってないから痛みは全くないわ。ときたまズキズキするくらいよ」

アルフィリースはかすかに微笑んでアノルンに説明した。

「でも私に呪印を施したせいで、師匠の寿命は短くなったわ。師匠は私のことを本気で気にかけてくれた初めての人間。でも私が殺したのも同然なの」

「・・・」

「その師匠の遺言よ。『自分の心の趣くままに生きなさい』だって。恨みごとの一つでも言ってくれればよかったと何度も思ったけど。でも師匠は私を本当の娘みたいに扱ってくれて・・・私にとっては実の親以上だったわ。後で知ったんだけど、私のことを魔術教会に報告したのは実の親だったみたいだしね。だから自分で施した呪印は、師匠に対する誓いのようなもの。決してあの人が私にしてくれたことを忘れないように、と」

「アルフィ、あなた・・・」

アノルンが悲しそうな瞳をアルフィリースに向けるが、アルフィリースは全く気がつかない。

「だから私は師匠がしてくれたように、他人にするつもりなの。この力は誰かのために使おうって。この力があれば誰か救える人がいるかもしれない。それが何か分からないけど、探してみようかなと思ってる。自分のために使うつもりはないの。たとえ今あなたにここで殺されるとしてもね」

「なんでアタシがアルフィを殺さないとならないのさ?」

「でもやろうと思えばできるよね？　シスターって私より強いもの。それにシスターの本業って、そういったことじゃないの？」

アルフィリースがアノルンを真っ直ぐに見つめている。

「（この子はどこまで・・・アタシのことに気がついてるんだろう？）」

アノルンにもわからない。ただ彼女が想像していたよりも、アルフィリースははるかに鋭いようだ。そんなアノルンに構わず話を続けるアルフィリース。

「シスターって物腰が完全に戦士のものだもの。そういうのは見る人が見たらわかると思うわ。シスターは私を初めて見たとき非常に気になったって言ったけど、私もそれは同じだったのよ？　だって一目見てなぜか勝てる気がしない相手が、シスターの恰好をして人助けをしていたのだから。旅をしていて初めてだったわ、私が全力を出しても勝てそうにない相手って」

「そうなの・・・やっぱりアナタ只者じゃなかったわね。でもそれは買い被りよ、アタシはそんなに強くないわ。それよりそういう事情で髪も黒いわけね？」

「そうかなぁ、私の勘って結構当たるんだけどなぁ。ちなみに髪は、染めてるわ」

「ちなみに元の色は何色なの？」

アノルンの純粋な興味本位の問いかけに、アルフィリースは少し困った顔をする。

「それは・・・答えてもいいけど、シスターのこともちょっとは話してよ？」

「アタシ？　いいけど、答えられないことも多いわよ、仕事の都合上」
「じゃあね・・・ホントにシスターなの？」
「それは本当よ。れっきとした身分証もあるわ、ホラ」
「本当だ。しかも司教？　司教の上って・・・」
「大司教補佐、大司教、最高教主だけよ」

少しアノルンは自慢気に胸を張って見せる。

「本当に偉い人なんだ」
「敬ってへつらいなさい！」
「い　や　よ　！」

アルフィリースにアノルンに向かって、おもいっきり「イー」をした。年齢に比して幼い仕草にちょっとアノルンは面喰ったが、まだ２０にもならない女の子で、しかも一番遊びたい盛りの年ごろを山でこもって同世代の友達もなく暮らしたのだから、こういった掛け合いを全くしてきていないのだろう。

正直アノルンはアルフィリースと戦うつもりはあまりなかったが、必要ならばやむなし、と考えていた。必要とあればいくらでも冷徹になれる、また冷徹にならなければいけないことも彼女は充分に承知していた。それはアノルンが、長らく戦う者として得た経験でもあった。

実際、アノルンは巡礼の仕事として魔物討伐を請け負うこともあり、増援が間に合わないときは単独で討伐任務を行うときもあった。だがこういった自分に打ち解けたアルフィの仕草を見ていると、彼女は仮に自分がアルフィリースを殺そうとしても、彼女は本当に呪印を使うことはしないだろうと確信でき、アノルンはますます戦う気力を無くしていた。アノルンはこの随分と年下の、少女といっても差し支えないほどの女剣士を友人として考えるようになっていた

のだ。

続く

呪印の秘密とアルフィリースの過去、その1～友情～（後書き）

今回は長くなるので2回に分割します。明日は夕方8時頃に投稿します。

感想・評価・お気に入り登録、感謝しております。

呪印の秘密とアルフィリースの過去、その2～最高教主の使い魔～（前書き）

～あらすじ～

自分の秘密を語るアルフィリース。その秘密を聞いたアノルンの決定とは？

「で、どうするの。やる？　やらない？」
「え、そうね・・・」

逆にアルフィリースから戦うかどうかと話を持ちかけられ、アノルンは困ってしまった。

「アタシがやるって言ったら、アルフィはどうする？」
「うーん。私も死にたくはないから抵抗はするけど、シスターを斬るなんて考えたくもないわ」
「アタシも同じよ。アンタを殺すなんて考えたくもない」
「なんで？　それが仕事じゃないの？」
「失礼ね。アタシの仕事は確かに通常のシスターとは違うわ。普通のシスターは決められた教区ごとに派遣いされて、１つの修道院や教会で祈りを捧げたり、孤児院や病院で奉仕活動を行うことが仕事だけど。アタシの場合はもっと危険な仕事を請け負うだけよ」
「例えば？」

アルフィリースの問いかけに、アノルンは手を顎にやり、少し悩む仕草を見せる。

「そうね・・・まだアタシの教会の影響下にない地域に赴いて布教や奉仕の可能性を検討したり、荒れ果てた土地に行っての原因調査。必要があれば都市や国との折衝も行うわ。それに、教会の影響下にある地域で、正しく我々の活動が行われているかどうかを調査するわ。残念ながら私たちのような組織ですら、私利私欲に走る連中がいるのよ。私の場合、さらに魔物の動向の調査なんてものまでやるわ。まあ言ってしまえば、監査官ってところかしらね」

「で、それを何年くらいやってるのかしら？」
「それはそろそろ十数年・・・」
「やっぱりそろそろ3・・・」
「な　に　か　言　っ　た　？」
「な、なんでもない。私ちょっと用を足してくるね！」

アノルンの額に青筋が走るのを見て、アルフィリースがすたこらと森の方に走っていく。

「あんまり遠くにいっちゃだめよー？　ってアタシは保護者か」

はぁ、とため息をつくアノルン。なんだかアルフィリースに上手く話を逸らされたような気もするが、まぁこれはこれで良しとしておくことにした。正直なところ、アノルンは個人的にはかなりアルフィリースを気に入っており、もう少し様子を見てみようと思っている。

「危険はないと個人的には思うんだけどねー、上はそう判断しないかな。本当はああいう人物がいるって報告だけでもするべきなんだろうけど、知られるだけでもあの子の行動にかなり制限かかりそうね。大司教とか、ハゲのくせに頭は堅いし」
「ハゲと頭の固さは関係ないじゃろうが」
「そういやそうか・・・って、誰？」

きょろきょろとあたりを見回すが、だれもいない。だが、いつの間にかアノルンの隣に小鳥が止まっている。

「貴様、自分の主の声を忘れたか？」
「ってだから誰よ？　ってかどこよ？？」
「貴様の目の前におろうが」

なんだか小鳥がじっとアノルンを見ている。小鳥のくせに、嫌に目線が鋭い。小鳥なのに、妙に貫禄がある。その目つきにもどこか見覚えがあるなと、アノルンは思うのだ。

「ま、まさか・・・」
「そう、そのまさかじゃ」
「アタシおかしくなったのー!?」
「いや、貴様はもともとちょっとおかしい・・・って違―う!」

ついに小鳥がアノルンに飛びかかり、彼女をくちばしでつつき始めた。

「何よこの鳥!　丸焼きにして食っちゃうぞ!?」
「貴様、それがシスターのセリフか?　折檻せねばわからぬか??」
「その物言いは・・・・・・・・ま、まさか最高教主(マスタービショップ)!?」
「やっと気付きおったかこのたわけめ!」

アノルンが気付いたことで得意げにでもなったのか、小鳥がふんぞり返り始めた。ちょっとかわいいかもと思うアノルンだったが、小鳥の中身は悪魔そのものだということを忘れてもいない。

「で、いつからいたんですか?」
「一ヶ月前位からちょいちょい観察しておったわい。鳥の体を使ってな」
「暇人ですか??」
「暇じゃないわ!　というか、9カ月ほど貴様からの報告が全くないからじゃろが。3か月おきには報告せいよと、申しつけておったはずじゃがなぁ。どうなっとるんじゃ!?」
「そ、それは～。てへ」

「てへ、とか言うとる場合か！　いうとくが、ごまかしはきかんぞ？　ワシはかな～り頭に来ておる」

鳥の目つきが鋭くなる。手のひらサイズの小鳥に、なぜか威圧感を感じるアノルン。

「ちなみにワシは今、ミーシアまで来ておる」

「げっ！」

「日が沈むまでには町に到着せい。貴様から報告も受けねばならぬが、次に申しつける案件もある」

「報告すべきことでしたら、早急な件が」

アノルンが、瞬間真面目な表情に切り変わる。

「わかっておる。魔王出没の可能性についての件じゃろ？」

「！　既に御存じでしたか」

「ワシを誰じゃと思っておる、その辺中に目や口があるわい。なんなら昨日の夜、貴様が酒場でタンカ切った××の内容をここで再生してやろうか？？」

「そ、そんなことできるわけ」

「できるわい。なんなら、今日の貴様がはいておる下着の色形まで言ってやろうか？」

「セクハラですか！？」

「なーにがセクハラじゃ、シスターの分際であんな破廉恥なもん履きよってからに。貴様の携行物の内容見たら、うちの教会の信用がた落ちじゃわい」

「やーめーてー！！」

どうも昔からアノルンは最高教主を苦手としていた。舌戦しても勝てる気が全くしないのだ。まあ仕方ないといえば仕方ない。なぜ

なら、彼女はこの最高教主がいなければ明日をもしれない身であったのだから。昔拾われた恩を忘れるアノルンではない。
そして予想通りと言えば予想通りに、アルフィリースのことについて言及を始める最高教主。

「ちなみに貴様の連れのことじゃがな」
「は、はい！」

アノルンがかしこまる。

「（気付かれて当然か、私と一緒にいたんだから。こと異端や、平穏を乱す者に厳しいこの人だ。何事もないはずがない。でもこの人に睨まれたら、世界中どこに行っても安全ではないだろう。あの子を追いつめたら私のせいだ・・・）」

アノルンの背中をつつ、と流れる嫌な汗。だが予想外なことに、最高教主の言葉は実にあっさりとしていた。

「とりあえず保留にしておいてやろう」
「へぇ？」
「間の抜けた声をだすでない。ワシは危険は少ないと判断した」
「なんで・・・」
「不服か？」
「い、いえ」

あわててアノルンは否定する。

「ちなみにアルドリュースとワシは交流があっての。あれの育てた者ならまず間違いは起こすまい。少なくとも本人からはな。それに我が教会の教義を忘れたか？　慈愛はその一つに入っておるぞ？」

「それはそうですが、あの子は異端では？」

びくびくしながらアノルンは最高教主に尋ねる。だが最高教主の声は穏やかそのものだ。

「事件はまだ起こしておらぬし、事件を起こしそうにもない。貴様らの話をずっと聞いておったが、貴様に語った内容に嘘偽りは塵ほどもなかったよ。そんな者まで処罰しておったら、世の中罪人だらけじゃわい。それに仮に闇魔術の使い手だとして、闇が悪というのは違うからな。それよりも、慈愛の精神を持って正しき方向に導くことも我らが務め。違うか？」

「は・・・寛大なご処置、感謝いたします」

ふぅ、と安心するアノルンだが、教主が鋭い指摘を入れる。

「まぁ貴様も気に入っておるようじゃしな、アレの行く末は貴様が見届けよ。一緒におれるうちな。じゃが、貴様はあの子に嘘をつきよったな？」

「何をでしょう？」

「何が十数年じゃ、数十年の間違いじゃろうが？　貴様が現在の任務に就いてから、既に１００年は経過しておるはずじゃ」

「それは・・・そのことを正直に伝えても、彼女は受け入れてくれないでしょう・・・」

アノルンがうなだれるのを見て、最高教主は声の調子を柔らかくする。

「ワシはそうでもないと思うがな。あの子は『なぜか勝てる気がしない』と言った。本能で貴様が不老不死であることを見抜いたのかもしれん」

「そうでしょうか・・・」
「まあ言う、言わんは貴様の自由じゃ。じゃが、真に友でありたいと願うなら言った方がええ。少なくともワシのようにはなるな」
「マスター・・・」
「っと、おしゃべりが過ぎた。アルフィリースが戻ってくるようじゃ。ちゃんと忘れず、日が沈むまでに町に到着するようにの。ちなみに間に合わなかったら、恥ずかしい折檻じゃ！」

その言葉にアノルンが跳び上がる。

「恥ずかしい折檻って、ま、まさか??」
「ククク、例のあれじゃ。昔、貴様にやった時はひんひん良い顔で泣いたのう・・・今から楽しみじゃわい。ワシとしては間に合わんでも一向に構わんぞ？　間に合わんでもな。ククク・・・」

不敵な言葉と共に、小鳥がニヤッとする。鳥に笑う筋肉はついてないはずなのだが・・・アノルンはとても嫌な光景を見た気がした。今夜は夢に見るかもしれない。

「では待っておるぞ！」

言いたいこと散々言って、あっという間に行ってしまった最高教主。

「偉い人のくせに、なんて騒々しい・・・ん？　そういえば・・・マスター！　合流場所、町のどこですか??　あんな大きい町でマスターを探せっての？　間に合うはずないし！　ふ、不幸だわ」
「ただいま〜って、どうしたのシスター？」
「早く付いてきなさい、アルフィ！　私の貞操がピンチだわ！！」
「いや、全くわけがわからないんだけど」

といいつつも、２人して町に馬を走らせんと急ぐ。この慌てぶりまで含めて、最高教主が２人の様子を観察していたのは言うまでもない。

続く

呪印の秘密とアルフィリースの過去、その2～最高教主の使い魔～（後書き）

明日も夕方8時頃投降します。

いつも見てくださっている方、ありがとうございます。

何か要望、感想ある方お気軽にメッセージから。全て反映できるとは限りませんが、色々参考にさせていただきたいと思います。

次回から場面が変わり、話が大きく動き始めます。新キャラも登場しますのでお楽しみに。

ミーシアの町にて（前書き）

～あらすじ～

アノルンは上司にせかされ、アルフィリースと共に一路ミーシアを全力で目指す。そこで2人が出会うのは・・・？

ミーシアの町にて

「ハァ…ハァ…ハァ…」
「とりあえず、この町の教会に顔出してくる！　アルフィは荷物を持って例の宿屋に行っておいて！」

言うが早いか駆けだしていくシスター・アノルン。山三つ程度駆けまわっても平気な体力のアルフィリースでも相当に疲弊しているのだが、いったいどういう体力をしているのだろうか。

ちなみにここはミーシアの町の西門である。もう3刻ほども前のことだろうが、アルフィリースが自分の呪印について語った後、用を足して帰ってくると、何かを叫びながら真っ青になっているアノルンが立っていた。声をかけると血走った眼をしたシスターに引きずられるように馬に乗せられ、無茶苦茶なペースでここまで馬を駆けてきて今に至る。

途中、何よりかわいそうなのは、あまりの飛ばしっぷりに馬が助けを求めるような目線を2人に送っていたのだが、アノルンの鬼の様な形相を前に休憩などと言い出せるような雰囲気ではなかったので、

「（ごめんね、お馬さん…あとでおいしい飼い葉いっぱいあげるから…）」

と、心の中でアルフィリースは言い訳しながらここまで来てしまった。馬も止まればシスターに殺されかねないと思ったのか、無茶苦茶なペースにも必死で走り続けてくれた。

そのせいで馬もついに限界を超えたらしく、天下の往来にもかかわらず寝そべって動こうとしない。なぜこんな天下の往来で、通りがかる全員に注目されなければいけないのか。恥ずかしくて死にそ

うなアルフィリースだったが、とりあえずなんとか馬を起こし、水を飲ませてから門衛のビスに紹介してもらった宿屋を探す。

「広いわね、この町・・・」

アルフィリースはようやく落ち着いて周囲を見渡したが、町に入るための城壁も高く、町が雇う警備兵の数も、ちょっとした軍隊並だ。話にこそ聞くものの、ここミーシアの町は現在アルフィリースがいる大陸の中でも１０指に入る大都市である。北の主街道こそ合流しないが、東・南の主街道はこの町につながっており、人通りがとにかく多い。人口は確か８０万を超えるとアルフィリースは聞いている。東の国家群からつながる３街道の中でも一番大きく、かつ安全な街道につながっているのだから無理もない。

ミーシアが属している国家、フルグンド王国がもっと交易に精を出す国であれば、さらに栄えていてもおかしくない。残念ながらフルグンドは商業に力を入れていないため、ミーシアの発展もイマイチである。それでも、ミーシアはアルフィリースが見た中では最大の都市である。その都市の街路に並ぶ露店の品々に、思わず年相応な歓声を上げるアルフィリース。

「わぁ、きれい」

南の国家群から運ばれてくる宝石、食物、繊維製品。色とりどりの物品がアルフィリースの心を奪ってゆく。この通りの店を見て回るだけで３日はかかるだろう。こんな通りがあと４本はあり、まさにミーシアは大都市といえる。

「ああ、だめね。とりあえず馬をゆっくりさせてあげないと」

アルフィリースは後ろ髪を引かれつつも、露店は後回しにしよう

と思い直し、宿を探してきょろきょろしながら歩いていると、突然背後から声をかけられた。

「お嬢さん、宿をお探しかい？　ウチなら安くしておくよ。一晩馬屋付きで５０ペントだ！　どうだい？」

声をかけてきたのは陽気な獣人の青年だった。獣人とは、人と獣の中間の様な生き物と考えられていたが、現在では完全に独立した種族だと考えられている。容姿は人間に近しいが、毛並みは深いものが多く、種族によっては尻尾を持っていたり、翼を持っている者も多いそうだ。彼らは主に南方に国家を形成しているのだが、南からの街道が合流するこのミーシアでは、獣人もそう珍しくないのだろう。

「あいにくだけどもう当てがあるの。それよりあなた、獣人族？」

「お？　お嬢さんは獣人が珍しいかい？　ちなみに俺っちはハーフだがね」

なるほど、確かに見た目が話に聞く獣人よりもさらに人間に近いなと思うアルフィリースだった。耳や尻尾がなければ、ちょっと毛深い人間くらいのものだ。

「あんまり獣人っぽくないものね。話には聞いていたけど、堂々と町中にいる人は初めて見るわ。私は田舎の出身だから」

「そうかい。こういった大都市はいいが、商業が発展してない地域は偏見が強くて俺たちには危険だからな。俺っちも、ここと南のビーティムくらいしか行ったことがないよ」

「気分を悪くしたのならごめんなさい、深い意味があって言ったのではないの。この都市に来て初めて話した人が獣人だったから、少し驚いたのよ」

「そうか、そんだけきょろきょろしてれば、確かに到着したばっかりっぽいもんな。でも獣人である俺っちに素直に謝れるあんたはイイ人だよ。それじゃこれも何かの縁だ、お探しの宿の場所を教えてあげよう」

獣人の青年は親切にも宿の場所を教えてくれるらしい。普通ならそんな申し出は受けないアルフィリースだが、この獣人の青年は信じても大丈夫そうな気がしたので、相談してみることにした。方向感覚に自信のないアルフィリースが、自力で宿を探そうと思ったらそれこそ日が暮れても無理かも知れなかったからだ。アルフィリースは門衛のビスから預かった地図を見せる。

「ここなんだけど、わかるかしら？」

「この町のことなら俺っちにおまかせだ。どれどれ・・・ああ、ここなら2本先の通りを右に行って3本目の通りを左だ。静かな通りだけど、宿屋が多くてね。確か紅い看板にスコップのマークが目印のはずだ」

「わかったわ。どうもありがとう」

「ちなみに俺っちの店は晩御飯だけでも大丈夫だ！　南部の食べ物をいっぱいそろえてるから、その気があったら寄ってくれよな！緑にビールの看板が目印だぜ！？」

「うん、連れと相談してみるわ」

アルフィリースは笑顔を返してその場を後にする。獣人の青年は、まだ笑顔でアルフィリースに手を振ってくれている。非常に人懐っこい獣人だ。だが、この町で最初に出会った人物があのようであるのは幸先が良いと、アルフィリースは上機嫌になる。

この時代、獣人は差別の対象である。それは長らく獣人の間に統一国家がなく、また力で上下関係を決める種族が多いため、人間よりも魔王側の味方をする獣人が非常に多かった。さらに獣人の戦闘

力の高さから人間側は戦場において度々煮え湯を飲まされており、親交を深めるというよりは敵対対象でしかなかった。そのためオークやゴブリンといった純然たる魔王側の魔物と同一視され、亜人種（デミ・ヒューマン）として迫害対象となっていった。

ところが約１００年前に獣人側に統一国家が現れた。厳密には複数現れたのだが、そのうちの最大勢力であるグルーザルドが突如人間に対して敵対しないことを宣言。これに呼応するように人間側にもグルーザルドと交流を深めたいとする者が現れ、現在のような交流がなされるようになった。だが大都市群ではともかく、地方ではいまだ獣人に対する古い偏見が残っているのが現状である。まぁ、純粋な魔物とも交流できるアルフィリースに、そのような偏見は関係ないだろうが。

＊＊＊

そうして目的地に無事着いたアルフィリース。ビスの息子は事情を話すと厚く彼女にお礼を言い、確かにタダで止めるように手配してくれた。食事も昼以外は配膳してくれるらしい。いたれりつくせりだ。

シスター・アノルンには宿屋で待っているように言われたアルフィリースだが、このような大都市の繁栄ぶりを初めて目の前にした彼女に待っていろというのは酷なものであり、宿屋の受け付けにアノルンが万一入れ違いになった時のため、言付けを残してアルフィリースは出かけることにした。そして・・・

「うわー、すごい、この剣！」
「お。お嬢さん目が高いね！」

そこでアルフィリースが真っ先に武器屋に行くのが、なんとも色気のない話である。

＊＊＊

だがさすがに剣だけを見ているのもつまらないので、先ほどのきれいな宝石店でも見に行ってみようと外に出るアルフィリース。

「（あら…？）」

その瞬間、通りを歩く2人組に彼女は目がとまった。小さなシスターと騎士の組み合わせである。通りには大勢の人通りがあるのに、不思議なことだ。

小さなシスターは服装がシスター・アノルンと同じであり、おそらく同じ教会の所属であろう。アノルンと同じく肩くらいまでの金色の髪に、くりっとして大きい瞳の色は緑だ。歳は１０ぐらいか？

だが何というか、アルフィリースには上手く表現できなかったが、まとうオーラが常人と違うとでも言えばいいのか。見た目に何かしら違和感を残す子だ。

一方騎士の方も同じく金色の髪に緑の瞳をしている。けっして大柄ではないが、背は男子としても高いほうになるだろう。鎧はつけておらず旅の衣装をしているが、背中にはシスターの背丈ほどもある大刀を背負い、明らかに強い者の雰囲気を醸している。

「（すごい使い手ね・・・私よりもだいぶ強いかしら？）」

端正で気品があり、優男にも見える顔と、戦士として纏う鋭い雰囲気にギャップがある。そこまで大男というわけではないが、体もさぞかし鍛え抜かれた筋肉に覆われていることだろう。こちらも第一印象から違和感がある人物だ。

「（まっすぐこっちに来る？）」

その奇妙でありながらも雰囲気のある二人組は、まるで人混みがないかのようにまっすぐアルフィリースに向かって歩いてくる。そしてアルフィリースの目の前に来ると、小さなシスターはとても愛くるしい笑顔を彼女に向けた。

続く

ミーシアの町にて（後書き）

次回は１０／１１　２０：００に投稿します。

感想・メッセージ・評価お待ちしております。評価をくださるみなさん、ありがとうございます。

幼きシスターと神殿騎士（前書き）

～あらすじ～

ミーシアの町でアルフィリースはシスターと騎士に出会う。彼らの正体は？

「初めまして。アルフィリース様で間違いないでしょうか？」

小さなシスターは、とても丁寧かつ優雅な仕草でアルフィリースに挨拶をしてきた。

「え、ええ。そうだけど、貴女は？」

「これは申し遅れました。私はアルネリア教会所属、シスター・ミリィと申します。背後に控えますは神殿騎士アルベルト＝ファイデリティ＝ラザールと申します。以後お見知りおきを」

背後の騎士も、簡単ではあるが丁寧な礼をする。

「なぜ私を知っているの？」

「シスター・アノルンから連絡をいただいております。彼女とは火急の要件にて、ここミーシアで落ち合う手筈となっております。ご一緒でないということは、彼女は教会に向ったのでしょうか？」

「ええ、そのはずだけども」

「そうですか、では行き違いでしたね。そういうことであれば私はこれから教会に向かいますが、アルフィリース様はどうされますか？」

「私も教会に行こうかな、行き違いは嫌だし。ああ、それで『様』付けはくすぐったいから、どうぞ呼び捨てにしてください」

「ではアルフィリース、と。私のことはミリィとお呼びくださいませ。よろしければ御一緒させていただいても？」

「もちろんよ」

笑顔でアルフィリースに微笑んだシスター・ミリィは、アルフィ

リースを誘導するように先に歩きだした。神殿騎士のアルベルトは、彼女に目で先に行くように促している。仕方がないのでアルフィリースはミリィに並んで歩きだす。

「（にしても隙がないわ、この騎士）」

後ろについて歩き出した騎士が周囲に警戒心を振りまいているのがわかる。おそらく半径１０m以内に害意をもって近づいた者は、瞬きする暇もなく斬り捨てられるだろう。アルフィリースがこのシスターに何かしようとしてもきっと同様だ。

「（それでいて嫌な気持ちはしない・・・こういう周囲警戒のしかたがあるなんてね）」

機会があれば後ろを歩く騎士に一度手合わせを願いたいものだ、もし手合わせするとしたらどうなるか、アルフィリースがあれこれ考えながら歩いていると、

「ふふ、アルベルトのことが気になりますか？」
「あ、ごめんなさい。すごい腕前の騎士だなと思ったから」
「アルフィリースも剣士ですものね。確かに、アルベルトほど腕の立つ騎士は神殿騎士団内にもあまりおりませんわ」
「そうなんだ。少なくとも私が今まで見た剣士の中では、一番かもしれない」
「まぁ、そうなのですか」

ミリィは楽しそうに笑っている。それほどの騎士が守るからには、彼女は教会にとって重要なのかもしれない。それからも他愛のない会話を交わしているうちに、この少女の知性に驚かされるアルフィリース。言葉づかいが大人びているのは育ちにもよるからまあわか

るとしても、都市情勢、国家情勢、商業の流通から露店に並ぶ宝石やら、挙句にはどうでもよさそうな変な格好の人形にまで詳しい。

「ミリィは随分と色んな事に詳しいのね」

「私もシスター・アノルンと同じく、巡礼の任務を負う者ですから」

「（シスターはお酒やら俗語やら、そういうことにばかり詳しかったような・・・人間の差か。ん、そういえば、なんで私がいる場所がミリィにはわかったんだろう？）」

聞いてみようとアルフィリースがミリィに向き直ると、

「着きました」

とミリィが穏やかに言う。気がつけば、ちょうど教会の目の前に到達していたのだ。

「とりあえず中に入ってみましょう」

すたすたとミリィが中に入っていき、アルフィリースもそれに続く。

「祈りを捧げているシスターがいますね・・・」

扉を開けて中をそっと覗いてみると、夕日が天窓から差し込む中、扉を開けたアルフィリース達に振り向くこともなく一心に祈りを捧げるシスターがいる。教会創設者といわれる聖女アルネリアの像を前に、両膝をついて両手を組み、祈りの言葉をつぶやきながら微動だにせず祈りを捧げている。純白のシスターローブに夕日がキラキラと反射して、まるで高名な一枚絵をみているようだ。

そうしてアルフィリース達が時間を忘れたように立ちつくしてい

ると、祈りが終わったらしく、シスターが立ち上がりこちらを向く。祈りのことなどアルフィリースにはさっぱりだが、素人目にもこれだけ敬虔な祈りを捧げるシスターには興味があった。が、振りかえったシスターは・・・

「ア、アノルン？」

普段の彼女のイメージとかけ離れすぎており、すっかりその可能性を失念していたため、アルフィリースは思わず素っ頓狂な声をだしてしまった。

「あらアルフィ。宿で待っててよかったのに」
「お姉さま！」

アノルンが反応しきる前に、ミリィがアノルンに抱きついた。

「お姉さま！　もうずっと連絡いただけないから、ミリィとても寂しかったんですのよ？」
「え、あ・・・ミ、ミリィ？」
「もう！　私の顔を忘れたんですか！？　私、お姉さまとずっとお話したかったんですのよ？　教会からも火急の要件を承っておりますし、まずはこの教会の一室を借り受けましょう！　それではアルフィリース、一端失礼してシスター・アノルンをお借りします。アルベルト、アルフィリースに失礼なきように！　では後ほど」

言うが早いかミリィはアノルンの手をぐいぐいと引いて、ドアの向こうに消えてしまった。後にはぽつんとアルフィリースとアルベルトのみが残されている。

「・・・・・・」

「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「（・・・・・・・・・・間が持たない、どうしよう）」

沈黙が続く。男性と話す機会などないアルフィリースには、酷な状況だったかもしれない。

＊＊＊

「ちょ、ちょっと！」

ミリィはずんずんとアノルンの手を引いて進んでいる。

「どこ行くのよ！」
「あそこの部屋なら誰も来ないでしょうから」
「とりあえず手を離してよ！」

手を振りほどこうとアノルンが力をこめるが、まるで離れる気配がない。

「（この子！？）」

大の男を吹き飛ばすアノルンの腕力である。今度はかなり力をいれて振りほどこうと試みるが、万力のような力で締め上げられた。

「ツッ！」

あまりの力に、アノルンが思わずうめき声を出す。

「（――なんて腕力。これは普通の人間のものではないわ）」

アノルンの顔が青ざめる。
そのまま部屋に投げ込まれるように連れ込まれると、ようやくミリィがアノルンの手を離した。そしてミリィが一瞥すると、後ろで鍵がガチャリ！　と自動的に締まる。

「くっ、あなた何者？　騎士を連れて巡礼をするようなシスターに、ミリィなんて人間はいないはずよ！？　だいたいこの任務に、あなたみたいな若いシスターはつけないわ！」

するとややうつむいているミリィから、くっくっくっ・・・と忍び笑いのようなものが聞こえてきた。

「ようやく会えたな、シスター・アノルン？」

顔を上げたシスター・ミリィの顔は、先ほどまでの愛くるしい笑顔が嘘のように、口の端をニヤリと吊り上げて笑っていた。

続く

幼きシスターと神殿騎士（後書き）

いつも閲覧してくださっている方ありがとうございます。閲覧・評価・ブクマ嬉しいです。感想・レビューなんかも書いてくださる方がいたら歓迎しております。

次回は平日ですが、１０／１２（火）２０：００に投稿します。まだアップし始めなので、お試しの意味も込めて色々な時間に投稿してしまって申し訳ありません。どの時間帯が一番良いか確定したら、一定時間の投稿になると思います。

シスター・ミリィの正体（前書き）

～あらすじ～

一見知的で愛くるしいシスター・ミリィ。だがその様子が突然変貌し・・・？

私が書いていて最も楽しいキャラの一人です。

シスター・ミリィの正体

「だから誰なのよ、アナタ!?」
「まだわからんのか?」

アルフィリースに微笑んでいた時の天使のような表情が嘘であるかのように、邪に口元を歪めた表情でミリィはアノルンを見ている。

「さっぱりよ!」
「ワシじゃよ、ワシ」
「何それ、新手の詐欺のつもり?」
「いや、どっちかというともう使い古されておる・・・って違うわー!」

ミリィがイライラしているのか、地面をダン! と踏みしめる。

「お主、本っ当にわからんのか?」
「アタシは幼女に知り合いはいないわよ」
「くっ、貴様がここまでニブかったとは。どうやら折檻せんとわからんようじゃのう?」
「折檻って・・・ま、まさかマスタービショップ??」
「ワシのイメージは折檻だけか!?」

ついにミリィが地団駄を踏み始めた。その仕草をちょっと可愛らしいと思ってしまうアノルン。

「っていうかわかりませんよ。前に会った時はオバサンくらいの外見でしたよね? 声まで違うし。なんでまた幼女の恰好なんですか

？」
「事情は色々あるのじゃがな。ともあれどうじゃ？　似合っておろう？」

くるんと一回転して、フフン！　と、得意げな顔をしているミリィ。

「この恰好で下町にお忍びでいくとな、便利なんじゃよ、色々」
「・・・例えば？」
「そうさな、店じまい半刻前を狙って下町の焼き菓子の店で『おじちゃーん、遊びにきたヨ！』なんていうと、余ったお菓子を高い確率でもらえるぞ？」
「な、なんてみみっちい・・・」
「先週なんぞは下町の孤児どもと、缶蹴りで遊んだのう・・・なかなかよい運動になった！」
「いや、自分の歳考えて？　ババア、無理すんな」
「言うに事欠いてそれか！？　貴様だって大概な歳じゃろうが！」
「まだアンタの半分もいってないはずです。使い古した×××ひっさげて何言ってんだか・・・」
「まだまだ全然いけるわい！　貴様こそ男の前でばかり猫なで声しよってからに、この×××の分際で！」
「くっ、それを言うか？　アンタの×××な××言いふらすわよ？」
「やってみぃ！？　貴様の恥ずかしい×××を教会中に勅令で伝達するぞ？」
「言ったわねぇ！？　この×××××―！」
「やかましゃあ、この×××―！」

この表現するに耐えない言い合いが、この後長きにわたって繰り広げられることになる。外で待たされているアルフィリースとアル

ベルトのことは、完全に2人の頭からは消えていたのであった。

＊＊＊

「ハァ、ハァ・・・このパワハラ上司！」

「フゥ、フゥ、権力は濫用してナンボじゃ！　ちっとは目上を敬わんかい」

全力で言い争うこと20分。さすがに両者の体力が切れたらしい。

「一端休止じゃ。さすがに疲れたわい」

ふー、と言ってどかっとその辺の椅子にミリィは腰をおろしている。いやミリィではないく、正確にはアルネリア教会最高権力者、ミリアザール最高教主である。この大陸に187の教会、974の関連施設、総勢300000を超える神殿騎士と、500000以上のシスター・僧侶を抱え、他の業務への従事者も加えれば数十万を数えるアルネリア教会の最高権力者、最高教主（マスタービショップ）ミリアザールその人である。教会の歴史は800年にも及び、各国の王、都市の首脳陣で、その影響を逃れられる者はいないとまで言われる組織である。

直接各国の政治に口を出すことは禁じている一方で、魔物征伐や貧民救済には力を注いでおり、そういった点では各国に協力体制、時には戦争停止までを求めることができ、この教会の協力要請を無視することは、以後どのような状況においても教会の手助けを必要としないという意志表明になってしまう。そのため、必ずしもこの教会に好意を持っておらずとも、協力せざるをえないというのがこの世界の暗黙の了解である。

獣人の国であるグルーザルドもいち早くこの姿勢に協力し、既にグルーザルドにもいくつか関連施設が設立されている。その最高教主は滅多に人前に出ることはなく、たいていを教会奥の神殿で暮ら

している。その姿を直接見たことがあるのは、三人の大司教、直属の親衛隊、あとは身の回りの世話をする女官ぐらいである。アノルンはその中でも例外と言ってよい。

「で、何の用ですかマスター。わざわざ出向かれるからには、相当に火急の要件なんでしょう？」

やれやれと思いながらも、少し真面目な雰囲気に戻ってアノルンが質問する。

「まあ火急半分、遊び半分じゃな。貴様が本部におらぬと退屈でしょうがない。最近の奴らは真面目すぎてのう。ワシの護衛もとんだ堅物じゃしの」

「護衛・・・ちらりとしか見てませんが、あれが今代のラザールで？」

「そうじゃ。ラザールの名は貴様にも懐かしかろ？」

ミリアザールはいたずらっぽくアノルンに問いかける。

「懐かしすぎて反吐がでます」

「そう言うてやるな、貴様と唯一対等に口をきいた家系の者じゃ。貴様が現在の任務につく前じゃから、１００年以上も前のことか」

「あの時は最悪でした」

「ワシにとっても最悪じゃったな！　もう五代も前のラザールになる。あ奴め、ワシの側仕えの侍従を片っ端から手籠めにしよってからに。まさか侍従を三年で全員入れ替える羽目になるとは思わなかったわい」

「私も手籠めにされかけました」

「嘘つけ！　あやつが貴様を口説きに行くたびに、奴の悲鳴が聞こえてきたがな？　教会中の名物行事じゃったわい」

「こっちはとんだ大迷惑でしたけど。あれで神殿騎士団中で一番腕が立ったんだから、驚きです」

「現在のラザールも同じじゃ。この前2、4、7番隊の隊長を三人まとめてあしらいよったわ。強さだけなら歴代一じゃろうな。また純粋な剣の能力であれより強い者は、大陸中探してもそうおるまい」

ちょっとだけミリアザールは得意げだ。アノルンが直接関わったラザール家の者は五代前の人間だけなので、ラザール家といえば自然とその人物が思い出される。

「（初対面でいきなりアタシの尻を鷲掴みにしながら、『やぁ、美人ちゃん！』とか言ってヘラヘラしていたあいつ。その時１００発ぐらい殴り飛ばしたのに、翌日にはアタシの胸を鷲掴みにしながら同じことを言ってきた。あんなくじけない阿呆は後にも先にもあいつだけだったわ。しかもあれだけ人に『君だけだ・・・』とかいいながら、ちゃっちゃと違う女と結婚しやがって・・・。教会律の守護者とかいう大層お堅い役職だったくせに、なんて適当な奴だと当時はむかっ腹が立つだけだったけど、今ではそれすら懐かしい記憶だわ。永遠に生きていれば、いずれ全ての記憶をただ懐かしいと感じられるようになるのかしら？）」

そのアノルンの回想は、ミリアザールの言葉によって中断される。

「ともあれ、あやつのおかげで貴様は人間らしさを取り戻した。感謝はしておけよ？」

「・・・」

「まぁ、ワシにとっても奴は忘れられぬ男の一人じゃ。死に様まで含めてな」

「・・・それで、要件とは？」

「おおいかんいかん。やはり歳かの、話がそれてしまう」

ミリアザールは居住いを正して向き直る。今度の表情は真剣そのものだ。

「まずは貴様の現在の任務についてからじゃ」

「はい」

もはやアノルンにも茶化す様子はない。

「貴様が巡礼についてから１００年余り。我が教会の版図は広がり、不正も随分正された。また魔物の活動や、国家間の戦争もかなり少なくなったと言える。これは貴様の功績じゃ」

「ありがたきお言葉」

アノルンは頭を垂れる。

「貴様が行った行動を手本として、現在同じような任務に就いている者がシスター７８人、神殿騎士３５４人。もはや巡礼の業務は軌道に乗ったと思うて差し支えなかろう。現時点をもって貴様の巡礼の任務を解く。長い間大義であった」

「御意にございます。で、新しい任務とは？」

「そう急くな」

ミリアザールは一度目を伏せる。

「今回出現した魔王のことじゃ。どうも出現の仕方が不自然でな・・・下手な者を向かわせたくなかったのじゃ。それで貴様が適任じゃろうと思うてな」

「魔王の出現は確実なので？」

「先ほど確認を取ったが、間違いない。ここより北西に7日ほど分

け入った森の中じゃ」
「まさか！？　近すぎます」
「ワシもそう思う」
「（何の兆候もなく、魔王の出現？　いやそれよりも、このあたりは近年大きな戦乱もなく、教会による浄化もしっかり行われている。魔物にとっては非常に暮らしにくく、毒気を抜かれるような場になっているはずだ。元戦地や、闇に属する土地というのは魔物にとって成長に適した場となる。そのようなことが数百年前に分かってからは、教会に限らず、各国が協力して土地の浄化を行ってきた。このような大都市が近くにある場所は特に浄化が進んでいて（浄化が進んでいるからこそ、大都市化しているともいえるが）、魔王となる魔物が育つような余地はないはずだ。それなのに・・・）」

　アノルンの思考がめまぐるしく回転する。だがどう考えても手持ちの情報では答えは出ない。

「誰かの手によるものだと？」
「わからん。そのようなことをして誰の得になるのか・・・そういったことも含めてお主に調査・討伐を依頼したい」
「マスターの命令とあらば、いかようにでも。では私一人で？」
「いや、アルフィリースを連れていけ。アルベルトも貸してやろう」
「！　マスター、彼女の事情を知った上でアルフィリースを利用するつもりですか！？」
「そう凄まじい剣幕をするな・・・そうではないよ。お主もそろそろ乗り越えてもよいじゃろう？　アルベルトもアルフィリースも、簡単には死にはせぬよ」
「ですが、しかし」

　アノルンにしては珍しく歯切れの悪い、戸惑ったような表情をした。

「貴様がそんな顔をするようになるとはな。むしろ、じゃからこそアルフィリースを連れていくべきじゃ。お主があの子の真の友人たらんとするならば、絶対にそうするべきじゃ」
「ですがアルフィは・・・」
「お主にとっての試練は今からじゃが、あの子にとっての試練はもっと先に訪れる。おそらく一人では乗り越えれぬだろう・・・あの子を直接見て確信できたわ。あの子はお主が思うておる以上の人間じゃよ、アノルン。いや、二人の時はミランダ、と呼ぶか？」

アノルンは反論しようとしたが、ミリアザールの瞳に満ちる色は慈愛の眼差しそのものである。ミリアザールは本気でアノルンを心配しているのだ。本名で呼ばれるのは二度とごめんこうむりたかったが、確かにアルフィリースに嘘をつき続けるのも心苦しい。あの子になら言える・・・いや、言うべきだと。アノルンはそう思い始めていた。

「アルフィリースが壁に突き当たった時、真の友の助けが必要になるじゃろう。お主はそれとも、あの子がどうなってもよいか？」
「いえ・・・いいえ！」

アノルンははっきりと答える。

「ふむ、では今回の依頼、受けてくれるな？」
「御意にございます、マスター」

アノルンは片膝をついて正規の礼をする。

「だからそう堅苦しくしてくれるな。ワシにとっても、お主は対等に話せる数少ない友の一人じゃと思うておる。公式の場ではともか

く、二人の時は気楽にやってくれぃ」
「じゃ、遠慮なく。ヤってくるぜ、ババア！」
「遠慮しなさすぎじゃ！！」

そして口論の最初に戻るのであった。

＊＊＊

一方、外で待っているアルフィリースとアルベルト。中でこれだけぎゃあぎゃあと騒がしくやってるのに比べ、外の二人は全く会話がなかった。

「え～と、ラザールさん？」
「アルベルトで結構です」
「き、今日は良い天気ですね？」
「そうですね」
「アルベルトさんは騎士の家系なんですか？」
「そうですね」
「だいぶ強いとお見受けしたんですが？」
「そうですね」
「あっさり肯定するんだ！？　あ、声にだしちゃった・・・」
「・・・・・フ」
「（こ、この人、カッコイイけど何か変！）」

どこかの昼時にかわされるような内容の会話になっていた。アルフィリースが普段一緒にいるのがかしましいアノルンだけに、こういう無口なタイプ、しかも男とは会話が全く成立しない。厳しい鍛錬にも滅多に弱音をはかないアルフィリースだが、べそをかきたくなってきていた。

「（こ、これなら素振り千本とかの方が楽だわ・・・アノルン、早く帰ってきて！）」

その時――

「アルフィ、お待たせ」

「アノルン～」

あまりにもちょうど良い時にアノルンが顔を出したため、アルフィリースは思わず泣きそうな声になってしまった。それを聞いてアルベルトがアルフィリースに何かしたと勘違いしたのか、

「てめぇ、アタシのアルフィに何をしやがった！　これだからラザールの奴らは信用できねぇ！！　あれか、貴様はむっつりスケベタイプか！？」

「お姉さま～（静かにせんかこのビッチシスターめが！）」

という裏の意味を含めた、無駄に殺気を孕んだ猫なで声がアノルンの後ろから聞こえて来る。得意のメイスをシスター服の袖から取り出しかけたアノルンの動きが、ぴたりと止まる。

「それではお姉さま。依頼の件、確かにお伝えしました。アルベルト、打ち合わせ通りシスター・アノルンに同行するように。私は他の用事を済ませてから、教会本部に戻ります。アルベルト、よろしいでしょうか？」

「了解しました」

自分に殴りかかろうとしたアノルンも全く意にかけないように、アルベルトはミリィに向かって返事をする。

「それでは私は忙しい身にてこれで失礼いたしますが、アルフィリースには別途報酬のお話をいたします。成果に応じた報酬となりますが、教会本部のあるアルネリアにお寄りの際は、いつでも私のところまでお申し付けください。とりあえず、先に必要と考えられる経費はお渡ししておきます」

てきぱきと指示をして、あっという間に話を進めるミリィことミリアザール。

「それでは皆様失礼します。アルフィリース？」
「は、はい！」

急に声をかけられ、思わず先生に怒られた生徒のようになるアルフィリース。

「（なんだかこの子、威厳あるわよねぇ・・・）」
「困った時は隣にいる者を頼りなさい、きっと助けになってくれます。くれぐれも私の言葉、お忘れなきよう」
「え、あ、はい」

アルフィリースが不思議そうな顔をしていると、ミリィはかすかに微笑んでその場を後にした。その少し寂しそうな笑顔が、アルフィリースには随分と印象的だった。

「で・・・どうしよっか？？」
「宿に一度戻らない？」
「えーと、アルベルトでいいんだっけ？　アンタはどうする？」
「お二人の指示通りに。ただ依頼をこなすならば、最低あと一人は仲間が欲しいかもしれません。準備も必要でしょう」
「うーん、仲間ねぇ。ぶっちゃけアタシ一人でも何とかなるような・

・・下手なのは足手まといにしかなりそうにもないけど、使えそうなのがいるなら一応探してみるか。あ、でももうすぐ日が暮れるし・・・武器や食料の調達は明日にしよう。今日はとりあえず晩飯も兼ねて、ギルドに行かないか？　夕方なら人も多いだろうし、仲間を探すならもってこいだ」

「それはともかく、依頼って何なの？」

「魔王討伐」

「そっか・・・って、ええぇ！？」

アルフィリースはかなりパニックだったが、アノルンが落ち着いて説明をすると渋々納得したようだった。最終的には、

「アタシ、魔王討伐の経験あるから大丈夫だって。それにいざとなったらこの朴念仁を囮にして、アタシたちはトンズラだ！」

で無理やり納得させられた。

「（魔王討伐の経験とかしれっとすごいこと言ってるけど、大丈夫かな・・・）」

と不安を隠せないアルフィリースだった。

続く

シスター・ミリィの正体（後書き）

閲覧・評価・ブクマをくださる方ありがとうございます。

感想などおまちしております。

次回は１０／１３（水）２０：００投稿予定です。

桃色の髪の少女（前書き）

～あらすじ～

シスター・ミリィこと最高教主（マスタービショップ）ミリアザールから魔王討伐を依頼されたアルフィリース達。仲間探しをするためミーシアの酒場に赴いたアルフィリースが出会うのは・・・？

＊＊＊

場所は変わってミーシアのギルドである。大きい町のギルドらしく、かなりの人でごった返している。その中にある酒場でアルフィリース、アノルルン、アルベルトの3人は相談をしていた。

こういったギルドは酒場や食事処と併設されていることが多い。情報を得たかったら酒場に行くのは旅人の常識であり、傭兵も各国の情報をいち早く得るために、こういった所にたむろすることが多い。ここで晩御飯がてら、めぼしい人間を探そうというわけだ。

「でも、なんでもう1人なの？」
「古来より、魔王討伐のパーティーは4人と決まっている」
「別に3人の時もあったと思うけどねぇ」
「確か最初は1人だったな・・・」
「？？　な、何の話？？」

二人の話に全く付いていけないアルフィリース。

「いや、確か他のシリーズでは5人だった」
「それは流動的よ。なんなら12人で1人をボコるようなのもあったわ」
「それをいうなら50人くらいなのもなかったか？」
「30人とかじゃなかった？　アタシその辺は詳しく知らないけど」
「お願いだから私にわかる話をして！　それとも世間知らずな私が悪いの！？」

そういう問題でもないだろう。

「でも実際問題として、この3人は全員前衛よりだ。サポート役が1人いると便利だよ」

「え、シスターって後衛なんじゃ・・・」

「まあそうなんだけど、現時点でアルフィよりは前衛できるかな？」

「そ、そんな・・・」

その言葉に、アルフィリースが可哀想なくらい項垂れてしまった。

「でも、勧誘はどうするの？」

「アタシに任せて」

つつ、とアノルンが酒場にいる全員から見える場所に出る。その瞬間、彼女に当たっている照明以外が全部消えた。

「（なんで！？）」

アルフィリースの疑問も仕方ないが、ともあれその場の全員が何事かと喧騒も止み、シスターに注目する。

「みなさん・・・私は今、とても困っています」

シスターが潤んだ目で皆に訴えかける。今、目薬を袖に隠したような気がするが。

「私はアルネリア教会所属のシスターですが、このたび旅の共の一人が倒れてしまいました・・・しかし、教会の命令で旅を続けなければいけません。そこで私を守っていただける屈強なお方を探しているのですが、中々見つからなくて・・・もしよろしければ、この

中のどなたか、私を守っていただけないでしょうか？」

そこで涙を流して見せる。このシスター、人生で何の修行をしてきたのやら。アルフィリースからすれば「うわぁ・・・なんて猿芝居」という印象だが、酒場にいる男達に効果は絶大だった。

「シスター！　おれが守ってやるよ！！」
「何言ってやがる、てめぇじゃ無理だ！！　俺にまかせとけよ、シスター！」
「いえ、そういうことでしたらワタクシが！」
「てめぇみてえな貧相なやつじゃ守れねえよ！　恥かく前にやめときな！」
「あなたみたいな無骨者では、この繊細なシスターを傷つけるだけですよ。自重なさい！」
「なんだと、てめぇ！」

あっという間にケンカが始まった。酒場の中は大乱闘である。

「（世の中の男、こんなんばっかりなのかな・・・師匠、私１８にして彼氏を諦められそうです・・・）」

喧騒の中、アルフィリースは密かに人生の絶望にその身を落としていた。だがいつまでもそうしてはいられない。乱闘の間をぬうようにアノルンの元にかけつける。

「（でも実際どうするの？）」
「（いっそこの連中にバトルロワイヤルさせて生き残った奴つれてくか？）」
「（そんなことできるわけないでしょう？）」
「（簡単よ。『今から君たちには殺し合いをしてもらいます！』で

バッチリ！）」

「（詐欺の上に殺人教唆？　シスターの発想じゃないわよ！）」

もうギルドの中は無茶苦茶になっている。受付のお姉さんが泡を吹いて気絶しそうになっていた。

「（このシスター自分で宗教作ったほうがいいんじゃない？　世界を席巻しそうだわ）」

などとアルフィリースが妄想している時、現実では本当に殺し合いになりそうな雰囲気が漂ってきていた。そんな時、くいくいとアルフィリースの袖を引く者がいる。

「誰？　今忙しいの」

「あんな単細胞どもでは、どちらにしても貴方達の足手まといです。連れていくなら私にしなさい？」

振りかえるとそこに立っていたのは１４、１５くらいの少女であったが、アルフィリースは見るなり目を見張ってしまった。陶磁器のような白い肌に、人形のような整った顔。美しいともちろん言えるのだが、整いすぎるその容姿が逆に人間味を感じさせない。少女は実際無表情だった。加えて何より腰まである髪の色が特徴的だ。噂によれば東方には春に咲く、チェリーブロッサムという木が薄いピンクの花びらをつけるというが、彼女の髪の色をそういう風に言うのではないのか。さらに白い杖を持っているところをみると、盲目だろう。だが一番アルフィリースが感じたのは・・・

「（なんだろう・・・この子の周囲だけ空間が切り取られたみたい）」

周囲の喧騒を無視するかのように、彼女の周りだけ静かなのだ。まるで一枚絵にかかれた肖像画から抜け出して、こちらを向いているような・・・

「あ！　危ない！！」

彼女に向かってどこからともなく酒瓶がとんできた。アルフィリースは空中で取ろうとするが、とても間に合いそうにない。

「（ぶ、ぶつかる・・・！）」

アルフィリースが走って駆け寄ろうとすると、ぱしっと少女が酒瓶をキャッチした。そのままグビグビと飲んで・・・

「え、飲んでる??」

「ディア果汁でしたか・・・ククス果汁を期待してたのですが、咄嗟のことでわからないとは。まだまだですね、私」

アルフィリースがよく見ると、確かに果汁の瓶だ。なぜわかったのかとアルフィリースがいぶかしんだのが表情に出ていたのか、少女がずばり反論してくる。

「貴女、まさか私が酒を飲んだと？　ヤレヤレですね。１６にもならないのに、酒なんて飲むはずないじゃないですか。あなた、実はバカですね？」

そしてアルフィリースの方に向かって、無表情のまま「はんっ！」と、いかにも呆れたような仕草をしてみせる。

「（アノルンと違って口汚くはないけど、この子はとっても口が悪

いんですけど・・・）」
「なるほど。貴女、探知者（センサー）ね？」

ぐいとアノルンが乗り出してきた。

「はい。わかりますか？」
「そりゃ盲目の子がそんな見事なキャッチしたらね。ギルドでランクもらってる？」
「一応」

チャリ、と少女は胸元から首にかけた階級章を取り出す。

「なるほど、ランクC＋か。アルフィ、アンタより上だよ」
「う、嘘。ショック・・・」

またしてもアルフィリースが項垂れる。なんだかミーシアに来てから彼女は項垂れっぱなしかもしれない。

「センサーで、かつその年でランクC＋か・・・」
「依頼の内容は知りませんが、センサーのレベルとしては十分ではないでしょうか？」
「確かにね」
「このギルドにも腕の立つ者は確かにいますが、折悪く皆出払っています。ここにいるダッサイ男たちより、私の方がはるかにイケているのは間違いないでしょう」
「それはそうね。じゃあ貴女に決めたわ！」
「貴女とは話が合いそうです、シスター。仲良くやりましょう。ああ、そこの無駄にデッカイ女剣士、アナタは違います。アナタの場合、私に敬語を使いなさい！」

びしっと指を少女にさされるアルフィリース。

「な、なんで？」
「口答えは許しません」
「決定事項なんだ・・・」
「で、あなたの名前は？」

アノルンが何もなかったかのように話しかける。

「これは私としたことが失礼いたしました。私、リサ＝ファンドランドと申します。『リサちゃん』、とお呼び下さい」
「リサちゃんね、わかったわ。私はシスター・アノルンよ」
「よろしくお願いいたします」

リサと名乗る少女は、アノルンに丁寧な礼をしてみせた。アルフィリースもリサに手を差し出す。

「私もよろしくね、リサちゃん。私はアルフィリースよ」
「なんですか、この手は。馴れ馴れしいにもほどがあります。アナタの場合は『リサ様』、と呼びなさい。それ以外は認めません、このデカ女」
「・・・・・フ」
「なんで私だけー？　そしてそこだけ反応するこの男もイラッとくる！」

アルフィリースのストレスは頂点に達しかけていたが、ともあれ４人目の仲間が決まったのだった。

続く

桃色の髪の少女（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。筆者が泣いて喜びます。

次回は１０／１４（木）１２：００投稿予定。

登場人物紹介、その1～アルフィリース、アノルン、ミリィ、アルベルト、リサ

１話から１０話までの主な登場人物を紹介します。読んでも読まなくても本編は楽しめるように作ったつもりですが、読めばより楽しめるかもしれません。

多少ネタバレは含みますが、同時にこの段階では明かせない情報もあります。

登場人物紹介、その1～アルフィリース、アノルン、ミリィ、アルベルト、リサ

名前：アルフィリース（名字は捨てている）
年齢：１８
身長／体重／スリーサイズ：１７４ｃｍ／６４ｋｇ／９０／６２／９４、肩口より少し長いくらいの黒髪・茶色の瞳
職業：女剣士（正確には魔術剣士）
好きなモノ：肉、ふかふかしたもの、ひなたぼっこしながら寝ること
嫌いなモノ：足がいっぱいついている昆虫
一人称：私
プロフィール：

本作の主人公。幼いころ自分の力を恐れた村の住人（後でわかったことだが、連絡したのは実の親だった）により魔術教会に告発され、危うく命を奪われるところを、後に彼女の師匠となるアルドリュースに救われた。以降自分の力を封印するために、師匠と自分の力で体に呪印を施した。呪印は体に相当な負担を強いるものだが、彼女の鉄の自制心と我慢強さにて何事もないかのようにふるまっている。山籠りが長かったせいで世間知らずだが良識は備えており、個性的なパーティーのツッコミ兼良心となっている

並の成人男性程度の体躯を誇る鍛え抜かれた体をしているが、同時に意志の強い瞳と顔立ちをしており、なかなかの美人である。他人から自分がどう見えるかなど大して気にしていないため、自分が美人な自覚があまりない。加えて、背が高い事を昔傭兵仲間に散々からかわれたせいでコンプレックスになってしまった。そのため余計に自分の容姿に自信がない。得意武器は剣だが、師匠から一通り仕込まれているため、槍・斧・弓・ムチ・格闘・投擲術、はては鉄球や双剣などまで一通り一定以上の技量を誇る。

また魔術もある程度は扱える。呪印で封印してあるのに魔術が行使可能なのは実は驚くべきことなのだが、そのことについてあまり

詳しい知識を本人はもっていない。だが自分が魔力を全開で解放したらどのような惨事が起こるかは、なんとなく想像がついている。また色々な生物に好かれる傾向があり、そのせいでよくアノルンにからかわれている。

本作品は彼女をはじめとする、人々の成長を追う物語である。

名前：アノルン（ミランダ）
年齢：？（見た目は２０代半ば）
身長／体重／スリーサイズ：１６１ｃｍ／４９ｋｇ／８５／５９／８７、肩ぐらいまでの金髪・青眼
職業：シスター（昔は戦士）
好きなモノ：酒、イケメン、アルフィリースをいじって遊ぶこと
嫌いなモノ：自分の上司、うねうねしたもの
一人称：アタシ
プロフィール：

現在ではアルネリア教会所属のシスターだが、回復魔術は一切使えない。ただし、破邪・防御の魔法はなかなかの使い手である。回復魔術が一切使えない代わりに、薬師としては相当な腕前で、簡単な医者のまねごともできる。

見た目は儚げな印象の相当な美人だが、口は相当汚く、ドＳで傍若無人でしかも腹黒い。腕力も相当あり、アルフィリースは自分と同じ程度の力かと思っているが、実は大の男を片手で締め上げるくらいはできてしまうほどの力の持ち主。

どうやら普通の人間よりはるかに長く生きているようで、詳しい経歴は不明。魔王討伐の経験もあるなど、どうやら相当の経歴の持ち主のようだが・・・？

名前：ミリィ（ミリアザール）
年齢：？（見た目は１０歳程度）

身長／体重：１３４ｃｍ／３８ｋｇ、金髪・緑眼
職業：最高教主（マスタービショップ）
好きなモノ：最近は下町の焼き菓子、子供、マイブームは缶蹴り
嫌いなモノ：口うるさい大司教（本人は三バカと呼んでいる）、犬（昔散々追い回されて以来ダメ）、お化け（むしろそれを調伏する立場のような・・・）、キャロット（昔食べ過ぎて苦手になった）
一人称：ワシ
プロフィール：
　見た目は１０歳程度の少女だが、実際に何歳かは不明。自身の言葉からは数百年は生きていると思われる。どうやら姿も自在に変えることができるようだ。アノルンが唯一頭の上がらない相手でもある。
　彼女の魔力は並のシスター１０００人分に匹敵すると言われており、ほとんど死んでいる程の重傷でも一瞬で治療が可能であるし、束縛の魔法を使えばドラゴンを絞め殺し、浄化を行えばあたり一面を光に包むとまで言われるほどの神聖魔術の使い手である。
　アノルンよりもさらにドSだが、本人は戦いに積極的でないため力の行使は滅多に行わない。また回復魔術も滅多に使わず、「死にゆく運命を無理に変更するものではない」と考えている。教会の長として非常に冷徹な判断も下すが、基本的は慈愛にあふれる性格。結構な寂しがり屋でもある。

名前：アルベルト＝ファイデリティ＝ラザール
年齢：２３
身長／体重：１８４ｃｍ／８１ｋｇ、短い直毛の金髪・緑眼
職業：神殿騎士団親衛隊隊長
好きなモノ：鍛錬、真面目な者
嫌いなモノ：酒、粗野な者
一人称：私

プロフィール：

ミリアザールの護衛にして、神殿騎士団親衛隊長。相当に女性受けのよい顔をしているが、本人は無関心。暇さえあれば鍛錬しているため、ミリアザールには「この脳筋が！」といわれている。実はツッコミが好き。

なおラザール家の人間としては３１代目にあたるが、全員が神殿騎士団の親衛隊隊長であった。親衛隊の隊長は代々武芸による一騎打ちで決まるため、彼らは全員自分の父親を一騎打ちで負かしてきたことになる。

五代前のラザールは２３歳で隊長となり天才ともてはやされたが、アルベルトは２０歳で隊長となり、あっさりこの記録を抜いてしまった。なお神殿騎士団は僧侶も兼ねるため、彼も神聖系の魔術の使い手としては司祭に近い力がある。

名前：リサ＝ファンドランド
年齢：１４
身長／体重／スリーサイズ：１５４ｃｍ／４５ｋｇ／７８／５３／８０、腰ぐらいまでの桃色の髪・茶色の瞳（盲目）
職業：探知者（センサー）
好きなモノ：ククス果汁、ネコ
嫌いなモノ：気配の薄い者、雨
一人称：リサは、
プロフィール：

ギルドでアルフィリース達に声をかけてきた少女。口調は丁寧だが、口は悪い。

センサーかつこの歳にしてギルドでランクＣ＋であり、これは異例といえる。なぜなら直接魔物を狩ったり、要人警護などを請け負う仕事はランクも上がりやすいが、それは前衛を務める職業であることが多い。センサーの本領発揮は辺境開拓や資源探知であるが、

平和な中原においてセンサーの仕事は人・物を探すことであることが多く、報酬も微々たるものである。その中でこの若年のリサがランク他者と比べて上位なのは、一つには6歳のときには既に仕事を始めていたことと、仕事が迅速かつその達成率が実に９０％を超えているからである。

ミーシアでリサのことを知らない者はいないほどの有名人で、「リサで探せなかったら一生諦めろ」と言われるくらいの腕前である。だが彼女の私生活については謎が多く、どこに住んでいるかもよくわかっていない。また友人らしき者もおらず、自分から余計な話をすることもないため、ギルドでも神秘的かつ近寄りがたい存在として扱われている。

そのためなぜ彼女が今回アルフィリース達に自分から売り込みに来たかは不明。なお口癖は「アナタ、バカですね？」「お黙りなさい、下郎」「さいてー」など、毒を吐くことが中心である。その矛先はやがてアルフィリースに向くことになるのだが・・・

登場人物紹介、その1～アルフィリース、アノルン、ミリィ、アルベルト、リサ

これだけではアップが寂しいかと思うので、本日１０／１４（木）の２０：００に本編の続きをアップします。

ほかにも知りたい情報とかあれば感想やメッセージなどでどうぞ。

討伐準備、その1～シスターの横暴～（前書き）

～あらすじ～
魔王討伐を行うことになったアルフィリース達。新たな仲間リサを加え、討伐準備を行うのだった。

今回はそんなに話が進みません。ですがその分全員の関係性が描かれます。後々この関係性がどのように変化していくかを見守ってください。

討伐準備、その1～シスターの横暴～

「アルフィリース、目を覚ましなさい」
「ま、まだ早くない・・・？」
「それ以上デカく育ってどうするのですか？　嫁の貰い手がなくなりますよ？」
「ん、もぅ。人が気にしていることを！」

宿屋でリサに起こされるアルフィリース。まだ日が昇ってから大して経っていないようだが、リサは実に早起きである。

「リサ、朝ご飯は？」
「とうに済ませました。アナタと違ってリサは働き者ですから」
「私が怠け者みたいにいわないでよ」
「リサに言わせればぐうたらです。将来、アナタのような大人にならないようにだけは気をつけるとしましょう」
「ぐっ・・・（黙ってればかわいいのに・・・）」

無表情な目でリサに見つめられるアルフィリース。不思議な圧迫感と威圧感を備えた少女である。なぜか反論しにくいとアルフィリースは思ってしまう。

「ちょっとは年上を敬ってよね」
「あら、尊敬はしていますよ？　反面教師として」
「（・・・本っ当口の減らない・・・）」

どうやら口喧嘩ではアルフィリースに分はなさそうである。やむをえずベッドから起きるアルフィリース。しかし思い起こせば昨日は大変だった。

＊＊＊

リサを仲間にした後、酒場の乱闘騒ぎを放っておくわけにもいかなかったので、どうしたものかとアルフィリース達は思案に暮れていた。

「リサは放っておくことをオススメします。こいつらはダッサイですが、殺し合うほどバカでもありません。それに騒ぎ過ぎれば自警隊も来ますし」

「シスター、どうするの？」

「うーん、じゃあ放っておくか？」

「ちょっと！　それでも神に仕える身なの？」

「いやー、アタシ神様って嫌いなの。だいたいアルネリア教に神を信仰する教義は無いわよ」

「ありえない、このシスター・・・」

アルフィリースが理不尽さにわなわな震えているのを見て、アノルンはさすがにまずいと思ったのか、

「そこまでいうなら止めてくる。リサちゃん、ちょっとおいで」

アノルンはリサを連れてつかつかと全員の中央付近に歩いて行った。途中、乱闘に巻き込まれそうになるが、ぶつかりかけた男達は全員もれなく吹っ飛んだ。不思議なことに、誰もシスターが男達を吹っ飛ばしていることに気付かない。全員がそれなりに酔っ払っているので、まさか目の前の一見儚げなシスターが大の男をちぎっては投げていることなど、目の錯覚程度にしか思っていないのだろう。

そしてシスターが中心に行くと、また彼女に当たる照明以外が全て消える。

「（だからどうやってるの？？）」
「皆さん、聞いてください！」
はたと乱闘が治まり、シスターに視線が集まる。
「今回はこのリサちゃんにメンバーを決定しました！　だからもう、私のために争わないで！」
くぅっ！　と嗚咽して見せる。まだやるかこのシスター。
「と、いうわけで皆さんお疲れさまでした。とっととケンカを止めやがりください、このバカヤロウども」
というリサのひどい文句と、深々とする丁寧な礼が全く一致していない。
「そ、そりゃないぜシスター！」
「そうです、誰のために争っていると？」
「シスターが俺たちの誰かを連れてってくれるまで、やめねぇぜ！？」
「そうだそうだ！」
男どもがぎゃあぎゃあ騒いで収まりがつかない。最初はシスターもうるうるした瞳でじっと全員の文句を聞いていたのだが、段々面倒くさくなってきたのだろう。徐々に普段の顔に戻ってきている。
「（ま、まずくない、これ？？）」
アルフィリースの頭の中に嫌な予感がよぎる頃、ついに一人の男

が、

「シスター、俺を連れてってくれよ？」

とシスターの肩をぐいと掴んだ。その瞬間シスターの顔が悪鬼のような形相になる。

「誰が触っていいっつった、コラ！？」

シスターが男の手をねじり上げると男が声にならない悲鳴を上げる。そのまま男を机に叩きつけると、酒場の全員が固まってしまった。しんと静まり返った中でシスターが声を荒げる。

「同じことを二回言わせるんじゃねぇよ、もうメンバー決まったっつったろが？　おまえらの頭の中身はすっからかんか、あぁん！？　さっさと帰ってクソして寝やがれ、この不細工ども。そして顔を洗った後、二度とアタシの前に現れるな！　行くぞ、リサ！」

「は、はい、お姉さま！」

いつの間にか、リサがキラキラした羨望の眼差しをシスターに向けるている。「お姉さま」とか言ってるあたり、なんだか間違った目標を見つけたかもしれない。にしてもアルネリア教会の名前を出してるのだが、こんなことをしてもいいのだろうか・・・

ところが男達は、言葉を失い、ひどい悪夢を見ているような顔で彫像のようにただ固まっており、それどころではないようだ。それはそうだろう、自分達の淡い夢が一瞬にして砕け散ったのだから。アノルンの豹変ぶりは始めて見たら誰でもびっくりするであろうが、なぜかアルベルトは微動だにしなかった。一体どこまで冷静だというのか。まあ傭兵の連中は、少なくとも半刻は動けないだろう。

「アルフィもアルベルトもぽかんとしてんな！　行くぞ？」

ふと我に返るアルフィリースだが、このシスターの連れだとは思われたくなかった。彼女はこのギルドにはもう二度とこれない気がしていた。

＊＊＊

「それでは私は一度家に帰りますが、明日の打ち合わせは？」
「朝になったらアタシ達の宿屋に来てくれない？　えーと、盲目のリサになんて説明したらいいかな？」
「いえ、構いません。貴方達の気配覚えたので、センサー能力で探せますのから、だいたいどちらかを教えていただければ」
「そこまでわかるの？　じゃあ確かここから二本通りを向うに行った、赤い看板にスコップの目印が・・・」
「なるほど、サウザさんの宿屋ですね。了解しました。報酬の件はその時に」
「その時でもいいけど、今じゃなくていいの？」
「構いません、報酬をケチるような方たちには見えませんし、正規のギルドを通した依頼でない分、額には逆に期待させていただきます。むしろ私も即座に金が入用なので、そちらの方が助かります。長期にわたる依頼であれば前金だけいただきますが」

リサは交渉をやりなれた感じである。さすがこの歳で高ランクの称号を得ているだけはあると、アノルンは内心で感心する。

「いや、こういうのは先にやっておこう。報酬は４等分だ。センサーだからってケチることはしない。それでどうだい？」
「十分です」

と、アルベルトが手を上げる。

「いや、私の場合は任務だから私の分は必要ない。私の分は除いて3等分にしてくれていい」

「じゃあそれでいこう。意見がある人は？」

アノルンの言葉に、誰も異論はないようだ。

「決まりだね。この町に用事がある人がいなければ明日、準備まで含めて昼には町を出発したい。皆そのつもりで」

「私の剣を研ぎに出してるんだけど、間に合うかな？」

「あんたがおっぱいのひとつでも見せてやれば、光にも近い速さで研いでくれるだろうよ」

「・・・そういったことをする人なのですね、さいてーです」

「ちょ、違うって！　シスター、誤解を招くようなことをいわないでよ？」

アノルンとリサの言葉にアルフィリースが目に見えておろおろし始めたので、アルベルトが真面目にフォローを入れる。

「・・・少し握らせてやれば昼までには研いでくれるだろう。私はその前に移動手段を確保しておこう。心当たりがあるのでな」

「何を握るのよ！？」

「いや、そこはチップの話でしょう。何を想像したのですか？　いやらしい」

「まぁその辺にしたげてよ、この子世間知らずなんだから。それとアルフィもリサのことは普通に呼び捨てにしときなさいよ。戦場で遠慮なんかする仲間関係だと死にかねないからね。リサもいいわね？」

「お姉さまがそうおっしゃるなら」

なんとかこれでやっていけるかなとアルフィリースが思った矢先に、「・・・チッ！」というリサの舌打ちを聞いた気がした。非常に先行き不安になるアルフィリースであった。

＊＊＊

宿に帰ると既に満席で、アルベルトの部屋が確保できなかった。どうしようかとアルフィリースとアノルンで思案した所、

「ドアの外で寝ている。何かあったら起こしてくれ」
「それじゃ疲れが取れないよ。せめてソファーで・・・」
「婦女子の部屋で、それはできん」

と、にべもなく断られた。やっぱり騎士なんだなと感心するアルフィリースだが、アノルンは面白くなさそうだった。

「男女ひとつ屋根の下とか楽しいのに～。アルベルトの前でアルフィをひんむいたときに、あの朴念仁がどんな顔するか楽しみだったのに～！」
「人の体をなんだと思ってるのよ!?　だいたいみられて『・・・・・フ』とか言われたら、私もう立ち直れないから！」
「言いかねないから怖いわね。ラザール家恐るべし」
「それよりシスターだって思ったより冷静じゃない？　イケメン見た時いつもなら、『あら、男前ね♪　私とイイコトしない？』とか言って粉かけるのにさ」
「人聞き悪いね！　私は痴女か？」
「同じようなものだと思ってたわ」

ここぞとばかりにアルフィリースは反撃する。

「まあ顔がイケてるのは認めるけどね、ラザール家の奴らはご免だよ。ああ、思い出すだけでも寒気がする！」

シスターに鳥肌が立っている。傍若無人な暴力シスターでも、苦手なものがあるらしい。何を思い出したのかは引っかかる所だが、どうせ追求してもはぐらかされるだけだろう。このシスターはそういうところだけはずるいと、いつもアルフィリースは思うのだ。

そんな取りとめもない会話をしながら寝てしまったアルフィリース達。やっぱりシスターと話をするのは楽しいと感じるアルフィリースだった。

続く

討伐準備、その1～シスターの横暴～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。作者の励みになっております。

次は明日１０／１５、１２：００に投稿します。

討伐準備、その2～リサの能力～（前書き）

～あらすじ～

新たに仲間になったリサの毒舌に翻弄されるアルフィリース。そんな彼女と行動を共にすることになり、アルフィリースは彼女の一端を垣間見ることになり・・・？

今回も会話メインです。リサの腹黒さをお楽しみください。

討伐準備、その2～リサの能力～

＊＊＊

それが昨日の出来事である。どうもアルフィリースは寝起きが悪いらしく、寝ぼけてるうちにもアノルンは既に支度を整えていた。

「あ、あれ？　シスターどうしたの？」
「ん？　何って魔王討伐用の準備だけど？」

シスターがしている恰好はいつものひらひらしたシスター服ではなく、体にぴたっとした軽装であった。髪は後ろで束ねてくくり、両手に小手・肩当てまでつけて、腰に沢山の小物を入れる革のポシェットをつけている。それに見たこともないような薬を出しながら次々に詰めて準備をしている。そしてどこから取り出したか、巨大なハンマーみたいなメイスを壁に立てかけている。

「シスター、その恰好は・・・」
「ああ、アンタには言ってなったか。私は昔戦士でね、主に前衛担当だったんだよ。これはその時の装備。教会がご丁寧に宿に届けてくれてたのさ」

と言いながらてきぱきと用意をしていく。道理で腕っ節が強いはずだとアルフィリースは納得した。

「でね、アルフィ。アンタ弓も使えるんだっけ？」
「一応は。でも実践ではあんまり使ったことないわよ？」
「前にダガーを使った要領で、魔術で飛距離・正確性を伸ばせるだ

ろ？　何発くらいいける？」
「ん～だいたい４０、５０くらいかな。最近試してないから、正確にはわかんない」
「じゃあ４０と思っておくよ。今回前衛はアタシとアルベルトだ。アルフィはリサの護衛かつ援護ね」
「それはいいけど・・・私も前衛じゃだめなの？」

不満そうなアルフィリースに、アノルンが説明する。

「・・・私は今までに五回、魔王討伐の経験がある。その経験上、前衛としてアンタはまだ力不足だ。それにリサの護衛は必ず必要。魔王が単独でいることなんてまずなくて、大抵は部下を率いているからね」
「なんかいまいち納得できないけど、経験者には従うわ」
「素直でよろしい！」

アノルンはニカッと笑ってアルフィリースを見る。確かにアノルンにはこの戦士のイメージの方が合っており、元々こういう雰囲気だったのだろう。

「でも魔物討伐やったことあるってすごいよね。シスターもギルドに登録してたの？」
「ん～まあね」
「ちなみにランクは？」
「・・・Ｂ＋」
「す、すごっ！　それって町によってはトップなんじゃない？」
「そんなすごくないわよ。はいはい、つまらない話は終わりだ、さっさと準備しな。アタシも食料の買い出しがあるから、先に出るよ。準備でき次第、西門で集合だってアルベルトが言ってた。ちなみにもうシスターの恰好してないから、『シスター』でなく『アノルン』

って呼ぶこと。間違ったらアルベルトの前でひん？くからね！」

言うが早いか、アノルンは出て行ってしまった。

「な、なによ、もう」

むくれながらも着替えていくアルフィリース。

「・・・・・ノロマ」

リサが扉の隙間から覗きながら声をかけてきた。

「くっ、やりにくい・・・」

目は見えないはずなので呪印を見られる心配は無いが、妙にやりにくさを感じるアルフィリースだった。

＊＊＊

食事を宿で簡単に済ませ剣を受け取りにいくと、やはりまだ研げてなかったのでチップを渡そうかとアルフィリースは考えたが、世間知らずの彼女にはどのくらいが相場なのかわからない。

「（ここはやはりシスターの言ったとおりに・・・ダメダメ、まだ男の人と手をつないだこともないのに。いや、つないだことがあってもダメだけど・・・あれ？　じゃあどこからならいいんだっけ？？）」

などと一人でアルフィリースが悶えていると、業を煮やしたリサが何やら店主に耳打ちする。すると店主があたふたとアルフィリー

スの剣を持ち出して、それこそ光の速さで研いでくれた。

「（まあ私は助かったけど、何を言ったんだろう？）」

ついでに弓矢を調達しようとすると、なぜか店主はサービスしてくれた。

「（あれ、日ごろの行いがよかったかな？　のわりに店主の顔色が悪かったような？　・・・リサがニヤリと笑ったのは見なかったことにしよう・・・）」

そしてアルフィリースがリサを残して店から先に出ると、店内からは店主の悲鳴が聞こえてきた。一体どんなやりとりが2人の間で行われているのかは、既にアルフィリースの想像を超えていた。

＊＊＊

そして西門である。

「お、早かったね」

アノルンが既に食料やら必需品やらを買ってきて、飛竜に積み込んで・・・

「な、何それ？？」

「何って、飛竜」

「どこから？」

「大きな町では急ぎの物流輸送のために飛竜が用いられる。覚えておくといい」

アルベルトが説明し、アノルンが付け加える。

「こいつなら低い山はひとっ飛びだしね。大きな荷物も運べるから便利だよ？　まだ全然朝だし、これなら夕方には目的の森の近くに行って、宿まで探せるね」

「宿の心配は必要ない、既に手配を済ませている。今回も飛竜は一頭の予定だったのだが、４人乗りほどの大きいのは流石に出払っていて。２人乗り２騎になったが許してほしい」

アルベルトが全員にぺこりと頭を下げた。騎士と言えば結構偉そうにする者も多いが、このアルベルトは腰も低い。

「大丈夫だよ。飛竜の運転なら私もやったことあるしね。最近のはよく調教されてるのが多いから簡単さ」

「アノルンは運転したことあるんだ・・・私は初めてだな」

「リサもです」

感心しながらアルフィリースが飛竜を見ていると、なぜかアノルンが後ろにいる。

「アノルン、何してるの？」

「ちっ、ちゃんと私を名前で呼んでるね。できてなかったらこの天下の往来でストリップだったのに」

「残念です。お金が稼げたかもしれなかったのに」

二人して「やれやれ」という仕草をしているが、どうやら本気だったらしい。さすがにアルフィリースが呆れるやら腹が立つやらでアノルンに向き直ると、横から飛竜にベロンと頬を舐められた。

「ひゃあっ？」

「お、飛竜にまで好かれるなんてねー。アンタ、それはもう才能だよ。アンタ、ビーストテイマーどころか、ドラゴンテイマーになれるかもね？」
「そ、それはいいから助けて～」
２騎の竜に舐められたり、擦り寄られたりでもみくちゃである。
「だ、ダメだって、そんなに舐めたら・・・や、ァん！」
「朝っぱらから天下の往来でドロドロになって、何嬌声をあげているんですか、破廉恥な」
「す、好きでやってるんじゃ・・・や、やめっててばぁ～ひゃうん！」
本人は自覚がないだろうが、相当に扇情的な光景である。声がわざとらしくないのもイイ、などとアノルンは思うわけだ。
「（う～ん。助けようと思ったけど、もう少し見学してもいいか？）」
などとアノルンが邪な事を考えていると、気がつけば通りゆく人が皆足を止めてこの光景に見入っている。ちょっとした人だかりができ始めていた。その時――
「騒がしいな。何の騒ぎだ」
「ありゃ、西門の番兵か。また面倒くさい」
番兵らしき男が人込みを押しのけるように出てきたことに、アノルンがしまったという顔をする。
「貴様ら、ここをどこだと思っている。怪しい奴だな、取り調べる

からこっちに来い！」

脂ぎった顔をした、いかにも好色そうな男である。身体検査とか言って、いかにもいかがわしいことをしそうなタイプだ。

「（面倒だね、ここで番兵殴って問題を起こすわけにもいかないし・・・）」

アノルンがどうしようかと考えると、リサが「大丈夫だ」という風にこちらを向きながらその男に近づいていく。

「私たちは怪しいものではありません。これから仕事で北西のカラムに向かうところです。すぐに出立いたしますので、番兵さんの手を煩わすほどのことはないかと」

「なんだと？　その慌てよう、ますます怪しいな！　これは是が非でも調べねばなるまい！！」

いやらしい笑みを浮かべながら、番兵がリサをつかもうと手を伸ばしてくる。と、リサが無表情を保ったままぎろりと番兵を睨む。

「よいのですか？」

「何がだ？」

反射的に番兵の手が止まる。そこにすかさず番兵にリサが近寄り、耳打ちした。

「あなたロンさんでしょう？　この前、番兵同士の宴会で、酔ったどさくさに上司の奥さんにキスしましたよね？　アナタの奥さんと上司にこのことがバレたら、とっても楽しい光景が見られそうです」

リサはくすくす笑っているが、男の顔からは血の気が一瞬で引いていく。

「お、お前。なんでそのことを・・・」

「リサを誰だと思っていますか？　探すのは物や人だけでなく、噂の類いも入っているのですよ？」

「ひっ！　ど、どうか妻や上司には言わないでくれ！」

「さあてどうしましょう・・・と言いたいところですが、以後リサ達が西門で何をしようと見逃す、という条件で黙っておいて差し上げましょう。よろしいですか？」

「わ、分かった・・・」

自業自得とはいえ、哀れな門番はふらふらしながら戻って行った。さっきの武器屋にどういう類(たぐい)のことを言ったかアルフィリースにはわかったが、詳しい内容は知りたくないかもしれない。

「た、助かったわ」

「朝から数えて2回目です。全く手間のかかる女ですね」

「だからありがとうって言って・・・」

「お礼の言葉など、何の生活の足しにもなりません。本当であれば素っ裸で土下座してもらうところなのですが、それは一瞬楽しいだけですし、アナタを素っ裸にするならもっと効果的な場面がありますし。ということで、これはツケということにしておくので、いずれきっちり払ってもらいましょう。覚えておきなさい」

そう言ってリサはすたすたと飛竜に行ってしまった。どうも非常に怖いことを言われたような気がする。

「これから魔王討伐に行くのに、ちゃんとやっていけるのかなぁ・・・」

どうにも緊張感と連携が無いことに、アルフィリースは心配を覚える。だがそれは仕方がなかったのかもしれない。アノルン以外は魔王の知識などは書籍程度のモノしかなかったし、カラムで待ち受けている魔王が、今までアルフィリースが知っているような魔物とはかけ離れた存在だということなど、この時点では誰にも想像しようもなかったのだから。

続く

討伐準備、その2～リサの能力～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

次話では魔王討伐に出発します。何気ない会話に様々な伏線があります。

次話は１０／１６（日）１２：００に投稿します。

竜とアルフィリース、その1～飛竜～（前書き）

～あらすじ～

魔王討伐に向かうアルフィリース一行。移動時間短縮のため飛竜を使うことになったが、初めての飛竜でアルフィリース見せた行動とは・・・？

竜とアルフィリース、その1～飛竜～

ともあれ、飛竜を飛ばすことになった一行である。

「リサはお姉さまと乗りたいです。そっちのデッカイ痴女と一緒に乗ると、変態が感染りそうなので」

「誰が変態よ！？」

「しょうがないね～。アルベルト、アルフィを頼めるかい？」

「承知した」

アノルンに慰められるように肩をたたかれ、渋々納得するアルフィリース。本当はアノルンと乗りたかった彼女であったが、やむをえずアルベルトの竜に向かう。

別にアルベルトを差別するわけではないのだが、アルフィリースはどうも男性は得意ではない。別に戦闘の時にはよいのだが、日常で接するのは慣れていないせいだろう。アルベルトが端正な顔立ちをしているから、なおさらである。

「あ、あの。不束者ですが、よろしくお願いします」

「それで三つ指ついたら完璧だけどね」

くっくっく、とアノルンが笑う。アルフィリースが鞍に足をかけて飛竜に飛び乗ると、相当目線が高くなる。飛竜自身が体長９ｍくらいあり、目線の高さは４ｍほどにもなる。その上に乗るのだから、家の２階にいるようなものだ。

「しっかりつかまっておくように。落ちたら助けられないし、乗り手が不安定だと飛竜はスピードを出せない」

「は、はい」

アルベルトの背中をギュッとつかむアルフィリース。

「それではだめだ。最初に飛ぶ時は特に揺れるから、慣れるまでは私の前にしっかり手を回すように」

「ご、ごめんなさい（うわー、こんなに男の人にくっつくの、私初めてかも・・・！）」

「アルフィリース殿、舌を噛まないように。アノルン殿、先に行きます」

「あいよ」

心臓が跳ねまわる程内心で動揺しているアルフィリースの心など露知らず、アルベルトはさっさと飛竜を発進させた。

「（すごい揺れる！　馬とは大きさが違うから当然か・・・）」

ドシッ、ドシッ、と飛竜が地響きにも近い足音を鳴らしながら助走をつけていく。体の小さい飛竜ならば助走なしにその場の羽ばたきで上昇できるらしいが、大きな飛竜に関してはそうはいかないらしい。ドン、ドン、ドン、と段々揺れが早く小さくなっていき、最後にドン！　と一つ大きく踏み切ると、胃が持ち上がるような浮遊感が伝わる。

「うわぁ！　す、すごーい！」

「このまま上空５００ｍくらいまでは上がります！」

「た、高くない？」

「ですから落ちたら死にますよ！」

「わ、わかりました！」

アルフィリースはアルベルトにぎゅっとしがみつく。

「（大きな背中・・・すごく鍛えてあるのがよくわかる。師匠とは違うな・・・って何考えてるのよ、私！）」

アルフィリースは少し師匠（アルドリュース）を思い出していた。彼に連れられて生活するようになって半年くらいの間、彼女はよく悪夢にうなされていた。中には夢遊病のようになって暴れることもあった。そんなときには師匠が抱きしめて寝てくれた。当時は師匠のことを強くたくましく感じたものだが、実際には今の自分とほとんど体格は変わらなかったことを彼女は思い出す。

それに彼は徹底して彼女に保護者代わりとして接しており、男女として意識させることは一切なかった。そのせいか師匠の前ではアルフィリースも遠慮のない態度を取っていたため、よく師匠には「もう少し女性として慎みを持ちなさい」と言われていたが。

「（でも師匠には本当に感謝してる。今から考えれば、私は彼に何をされても文句は言えない立場だったんだから・・・師匠は安らかに眠っているかしら？　私は今から魔王討伐とか大変なことをしようとしているけど、きっと無事で帰るから心配しないで・・・！）」

決意と共に、思わずギュッと手に力がこもる。

「アルフィリース殿、もうそんなに力を入れなくても大丈夫です」

「え・・・あ、ごめんなさい。・・・うーわー！　すごい景色！！」

はるか眼下に人の行き交いが見える。まるで米粒みたいな大きさだ。それに既に次の町を飛び越えようとしている。

地上を歩いているとわからないが、こんなに下の道は曲がりくねっているものなのかとアルフィリースは感心する。

さらに周囲を見渡すと、はるか彼方まで見渡せる。向こうの方が

自分が暮らしていた山なのだろうか、などとアルフィリースは感慨に耽る。さらに北には、大陸一高い山々であるピレボス山脈がかすかに見える。東南の方向には海が見えるはずだが、この高度では無理なようだ。

「どうだい、すごいだろう、アルフィ！」

追いついてきたアノルンが語りかける。

「うん！　とても素敵ね！」

「だろう？　私は空っていうのは好きだね。人間がどれほど強くても、所詮ちっぽけだって言うのを教えてくれるからさ！　この中では王様も奴隷も、その差なんて微々たるもんさ」

「私は人間よりも世界を強く感じるわ！　なんていうか・・・世界が私に語りかけてくるみたい！」

「世界を感じるか・・・アンタらしいのな」

「その意見にはリサも賛成です」

今まで静かにしていたリサが反応する。ローブに収めていたいた長い髪を外に出し、風に任せてたなびかせている。

「おそらくアルフィの感じ方とは違うでしょうが。この空ではリサの場合、人間の存在を私達しか感じませんので、とても静かです。そうですね、リサの場合は体というか、心が軽くなるといえば良いのですか。これが世界なのかと思います。上手く口にはできない感情ですね」

リサにしては饒舌だったが、それだけ気持ち良いのだろう。目を瞑って風に体を預けている。そしてふと眼をあけると二コリと微笑んだ。毒舌にまぎれているが、こんな素敵な笑顔ができるなどと、

むしろこっちが彼女の本当の顔なのかもしれないとアルフィリースは思う。

「やっぱセンサー能力がそれだけ強いと、都会は大変でしょ？　特に盲目とか難聴なんかの五感障害があると、センサー系は能力が強くなるっていうしね。ちなみに戦闘の参考にもなるから聞いておきたいんだけど、どのぐらいの範囲で気配を探知できる？」

「とはいえ都会でないと、リサの場合依頼がありませんので。範囲の方ですが、通常であれば、半径２００ｍ。気合を入れれば半径５００ｍというところですか。なお５００ｍの探知維持を半日やれば私は倒れます。そして一方向に絞るなら、最長で２ｋｍはいくかと」

その能力にアノルンが素直に感心する。

「十分すぎるね。探知できるのは気配だけかい？」

「生物であればもれなく。小さい者や、悪霊・鉱物生命体の類いは難しいですが、『こちらにいくと嫌な感じがする』という危険に対しても勘が強いので、おおまかな判断はできます。また半径２０ｍ前後に入れば生物でなくとも感知できます。都市暮らしが長かったせいか、私は対生物感知に能力が偏ってますね」

「そっか、それだけ能力が強いと都会暮らしは落ち着かないだろう？」

「確かにそうですが、私はあの都市を離れられません」

「なんでさ？」

「そこまで話す義務はないと考えますが？」

リサが態度を硬化させた。その態度になんだか引っかかるものがあるのはアルフィリースもアノルンも同じのようだが、こうなったらリサは意地でも口を開かないだろう。昨日今日の付き合いでもそれぐらいは２人にも理解できた。

アルベルトだけは何も聞いてないかのように、普段通りの飄々とした無表情を崩していなかった。

＊＊＊

一度地上に降りて昼休憩を挟み、アルフィリースは飛竜を操らせてもらった。最初はおっかなびっくり地面を走らせるところから初めた彼女だが、ものの数分であっという間に竜を飛ばせるまでに至る。

「私よりうまいですね」

と、アルベルトが素直に称賛の言葉をアルフィリースにかけた。その言葉に彼女の方は手を振りながら竜を操っている。

「このまま世界のどこにでも飛んで行けそうね。空が合ってるみたいだし、竜騎手になろうかな、私」

アルフィリースはこの上ないほど上機嫌だが、その様子をアノルンがじっと見つめている。

「竜ってあんなに早く扱えるもんなの？」

「竜の調教程度、性格にもよりますが、あの竜は実はそんなに扱いやすくないと思います。ちなみに私も竜の騎乗訓練をしましたが、きっちり調教された大人しい竜ですら走らせるのに1週間。空を飛ぶとなると1カ月でしたね。とてもあんな乗り方はできません」

「だよねえ・・・アタシなんかその三倍はかかってるよ。それでも早いって言われたしね。ってゆーかあの子、回転とかしてるんだけど！？」

「・・・正規の竜騎兵（ドラゴンライダー）、いや、竜騎士（ドラゴンナイト）クラスの腕前かもしれません

ね」
「ちょっと修行したら、最高位竜騎士（ドラゴンマスター）とかいう身分にもなれるかもね」

ちなみに竜騎兵はピレボス山脈の麓にあるローマンズランドという北の大国が大軍団を抱えている。その戦力は3万を超えるとも言われており、一般兵を竜騎兵（ドラゴンライダー）、親衛隊や部隊長クラスを竜騎士（ドラゴンナイト）、師団長クラスを最高位竜騎士（ドラゴンマスター）と呼ぶことになっている。

なお女性の身で最高位竜騎士（ドラゴンマスター）にまで到達できた者はほとんどいない。ローマンズランドの第2皇女が、開国以来何人目かになる女性のドラゴンマスターになることに成功したとアノルンはちらりと聞いたが、定かではない。だが彼女が知る範囲での竜騎兵に、あそこまで竜を自在に乗りこなす者はいなかった。

そんなことは露知らず、間断なくアルフィリースの楽しそうな笑い声が空から聞こえてくる。出発時間が来るまで、その笑い声が止むことはなかった。

＊＊＊

アルフィリースが竜を扱ってからは驚くほど速いスピードで竜は進み、しかも竜に疲れた様子が全くなかった。アノルンはそのペースに全く付いていけなかったので、アノルンの操る竜が自らアルフィリースの竜の後ろにつき、風よけにして進んでいた。アルフィリースの竜もそれに気付いて「このスピードでいいのか？」という意味の目線をアルフィリースに送ってきたので、アルフィリースはそれに気付いて手綱を緩める始末だった。

「（竜は乗り手次第で疲れ方や、出す速度が変わるとは聞くがこれほどとは。しかも竜とコミュニケーションを取っている。飼い飛竜といえどプライドは人間より高いはずで、それゆえに乗り手の技量

を察知して自分で様々な調節をするのだが・・・竜が自分から人間に意見を求めて、しかも素直に従うとは）」

アルフィリースの後ろで様々な思索にふけるアルベルトだったが、なにせもともと仏頂面なので、普段と変わらないように見える。アルフィリースにいたっては、

「（腰につかまられるとくすぐったいな）」

くらいにしか考えてない。そのまま予定よりやや早く、日が落ちる前にカラム地方まで来ることができた。ここよりさらに西北西に向かうことになるが、一泊してから向かうのが妥当なので、アルネリア教会を通して手配をしてある。

ロートの村。人口２０００人程度の小さな村だがアルネリア教会関連の修道院があり、ここに先見の調査隊が来ているはずである。彼らから報告を受け、そのまま修道院に一泊し討伐に向かう予定であった。

＊＊＊

その晩御飯の席でのこと。

「査定者（レベルチェッカー）をギルドから呼ばなくてよいのですか、お姉さま？　ギルドからの報酬や認定が出ませんが」

「今回はギルドを通さず秘密裏に処理したいわ。そのための少数精鋭のつもりなんだけど。その分教会からの報酬ははずむつもりよ」

「やはりそうでしたか。理由は聞かない方がよいですね」

リサが晩御飯の肉を切り分けながら答える。

「リサになら話してもいいけどね。だって魔王討伐だっていっても平然としてたし、大方想像はついてるんじゃない？」
「まあだいたいは。そもそもこんな人里近くに魔王が出現すること自体がおかしいのですが、ギルドにいると冒険者たちが情報を沢山持ち寄るので想像はつきます。なおこういったことは既に各地で起こっているようです」
「・・・マジ？」

リサのセリフが余程意外だったのか、アノルンがぎょっとする。そしてアノルンの言葉遣いに、思わずリサもつられる。

「マジです。既に南方のレーライやベレンスでもそういうことがあったようですね。どちらもたまたま大事になる前に討伐したようですが」
「じゃあこっちも軍隊派遣してもらえばよかったかな～。でも軍隊動かすと世間が騒然とするしね。まだ世間に発表するタイミングじゃないか。でも誰がやったの、魔王討伐？」

それほど腕が立つ人間がそういるとは、アノルンには思えないのだが。リサは自分が聞いたまま、義務的に答えた。

「レーライでは勇者認定を受けているゼムスと、そのパーティーがたまたま近くにいたみたいです。ベレンスでは通りすがりの名も知らない魔術師だったとか。噂では女だったようです」
「ゼムスか・・・勇者のくせにあまりイイ噂を聞かないわよね。また魔術士の方は女で、かつ単独で魔王を狩るとかとんでもないわ。そんなレベルの魔術師なんて限られると思うんだけど、誰だろ？」
「それは知りませんが、噂では相当イイ女だったと。まあ所詮噂ですが」
「私も美人シスターって有名だしね！」

「・・・ソウデスネ」
「棒読みじゃん！」
「（最終的には暴力シスターの名が轟く気がするけどね・・・）」
などとアルフィリースが考えていると、アルベルトが修道長室からでてきた。
「どうだった、アルベルト。調査隊はなんて？」
「いえ、それが・・・誰も帰ってきていないようです」
「なんだって？　何人派遣してたのさ？？」
思わずアノルンが席をがたりと立った。
「調査なので１０人程度なのですが、５日前には一度全員無事に帰還しています。それで日数に余裕がありそうだからもう一度調査に行く、といったまま帰ってこないそうです」
「アタシ達が早く着き過ぎたか？」
「それもなさそうです。ここのシスターによれば、一昨日には帰還予定にしていたそうですから。また早ければ我々が今日到着予定なのは、彼らにも伝わっていたようです」
「じゃあまさか・・・」
「おそらくは全滅した可能性が高いかと」
沈黙が部屋を包む。調査隊の目的から考えると、たとえ全滅しそうでも一人でも帰還できれば目的は達せられるため、最低でも一人は残す行動をとるはずなのだが。それもできなかったということだろう。
「実は、さっきからあの森をセンサーで探っていますが・・・」

リサが口を開いた。

「探知が一定以上向こうに届きません。竜で森の入口付近を通った時にも方向限定で探ろうとしたのですが、８００ｍくらいで止まってしまいました」

「それはどういうこと？」

「気配を探ることを阻害する何かがあります」

「まさか城を既に築いているとでもいうの！？」

「城って何？　アノルン？」

「城っていうのはね・・・」

城とは高度な結界を意味し、必ずしも物理的な城を意味しない。防御魔術を高度にすれば結界となり、さらに高度になると城と呼ぶと考えてよいだろう。城ともなれば現実の存在や法則に影響を与え始め、平たく言えば、魔王や高位の魔術士などが自分に都合のいい空間を作るために用いられる。

城の大抵がなんらかの属性への力場変化（フィールドチェンジ）だが、中には空間そのものを捻じ曲げて、異世界への入口を作ってしまうようなものまである。

「・・・ということよ」

「それってすごくやばいんじゃ？」

「まあ城もまずいけど、まだ多分結界のレベルだわ。もし城だったら森に近いこの村にも何らかの影響が出ているはずだし、アルネリア教会だけでなく他の組織も動いているはずよ。それに城の形成には最低でも数年はかかるわ。でも魔王が確認されたのは一カ月前って言ったわよね、アルベルト？」

「それは間違いないです。その時にはまだ結界の痕跡もなさそうだったと報告されています」

「じゃあ城ではなく、まず結界だわ。歴史上確認された城の形成は

最短3年。もし一カ月で城を組み上げるような化け物が相手なら、世界破滅の危機よ」

アノルンが厳しい面持ちで答える。

「まあ世界滅亡の最初のくじをひいたって可能性もあるけどね」

「ちょっと、怖いこと言わないでよ！」

「だーいじょーうぶだって、そんなことまずないから！」

アハハとアノルンが軽く笑い飛ばすと、彼女はもういつもの明るい顔に戻っている。

「じゃあ今日は寝ましょ、明日早朝に出発するわ。はいはい、寝る準備にいったいった」

その場で解散になり、全員がそれぞれ散っていく。その時、

「アノルン様、よろしいですか？」

「なーによ、アルベルト？　様付けはやめなさいって言ったでしょ？」

「そういうわけにはいきません。私は既に妥協しているのですから」

「どこが妥協してんのよ」

「本来ならミランダ様とお呼びしたいところです」

瞬間アノルンの顔が険しくなる。

「アンタ・・・どこでそれを？」

「ここではアルフィリース殿に聞かれます。一角の部屋を借りてますので、そこで。リサにも聞かれないように防音の結界を張っています」

「わかった、すぐ行く」

アノルンが滅多に見せない険しい顔をする。下手なことを言えばアルベルトを殺しかねない程の表情だ。２人は足早に部屋に入り、鍵をかけて向かい合う。

続く

竜とアルフィリース、その1～飛竜～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。徐々にアクセスも伸びてきており、こういうのって素直に嬉しいです。

次話は１０／１７（日）１２：００更新です。

討伐前夜（前書き）

～あらすじ～

討伐前夜に明かされる事実。その事を知ったアノルンは・・・？

討伐前夜

＊＊＊

「・・・で、誰に聞いたの？」

敵を見るような眼でアノルンがアルベルトを睨む。

「五代前の私の先祖から」

「あのセクハラ野郎か！　手だけじゃなく、口まで軽かったとはね！！　とんだ神殿騎士もいたものだわ」

「お怒りもごもっともですが、その前に私の話を聞いていただけますか？」

努めて冷静な声でアルベルトが対応する。

「いいとも！　それ次第じゃあんたの首を引っこ抜いてやるわよ？」

「どうぞ随意に・・・私たちラザール家の存在理由を知っていますでしょうか？」

「当然よ、最高教主を守ることでしょ？　その命にかけてもね」

「確かにそうですが、少しミランダ様がお思いの意味とは違います」

瞬間、ミランダがアルベルトの襟をつかんで壁に叩きつける。

「誰がその名前で呼んでいいっつった！　その名前でアタシのことを呼んでいいのは最高教主だけだ！」

「申し訳ありません・・・話の続きをよろしいでしょうか？」

「ちっ！　続けな！」

乱暴にアルベルトをはなし、きまり悪そうに離れるアノルン。

「我々の存在意義は最高教主様を守ること。ただしお守りするのは命だけではなく、ラザールは全ての世代において、あの方の全てを守るように言い含められています」

「全て？　どういうことだ？」

「なんと言えばよいのか・・・これは私たちの家系が神殿騎士団長となった時の初代の言いつけらしく、出来ぬものはラザールの名前を名乗る資格がなくなります。同時にそれはラザールを離れる者はアルネリア教会に所属しなくても良いということにもなりますが。正確な理由については今は申せませんが、ただ『最高教主様を決して一人にしないこと』というのが正確な所でしょうか」

「？　ますますわからない」

アノルンは小首を傾げた。

「・・・実は最高教主様は８００年以上、生きておいでです」

「それは知って・・・待て、８００年だと？　じゃあ」

「アルネリア教を作ったのは、現在の最高教主様です。ご自身の正確な年齢は自分でも不明だとおっしゃっていました。１０００年はゆうに生きているのか、それとも８００そこそこなのかもわからないと・・・」

「そうだったのか。なんとなく想像はついていたけど・・・」

８００年。実に気が遠くなる年月である。アノルンは実に３００年は生きているのだが、その彼女でさえ３００年は嫌になるほど長かった。

「（不老不死になったあの時から、もう気の遠くなる年月が経った。３００年でもうんざりするほどなのに、８００年とは・・・）」

「あの方は寂しい方です」

アルベルトは続ける。

「あなたもおわかりでしょうが、自分が不老不死だということも誰にも告げることはできず、公式行事のために十数年周期では姿形を変えて別人として振る舞います。最高教主の姿がずっと変わらなくては不審を招きますからね。以前の自分は死んだことにするか、それとも単にアルネリアを離れたことにするか・・・ですが、どちらにしろそのたびに知り合いを全てなくしていることになります」

「それは・・・アタシもわかるよ」

「そのために初代が残した口伝です。せめて我々だけはあの方が寂しくないよう、側にいるようにと。そのように我々は理解しております」

「それはわかるけど、なんでアンタ達でないといけないのさ?」

アノルンのその言葉に、アルベルトが少し憂いを帯びた緑の瞳をアノルンに向ける。

「・・・我々を見て何か気付きませんか?」

「・・・・・まさか!?」

「そういうことです・・・」

アルベルトが珍しく悲しそうな表情をした。

「もちろんその使命に納得できなかった者もいましたが、大抵はあのお方の事情を知れば、何らかの形でアルネリア教に残っています。ですが五代前のリヒャルド様がラザール家の使命に付け加えをなさいました」

「・・・なんて?」

「『我々の第一になすべきことは最高教主様がその命尽きるまで側にお仕えすること。そのためには何より血の存続が優先される』そして『我々の第二にすべきことはミランダ様をお守りすること。これは個々人の考え方によるが、騎士としてお仕えするに十分な方、また決して失ってはならない方だ。あの方の存在は我々の命よりはるかに重い』と」

アノルンは完全に面喰った。

「え・・・リヒャルドの奴、アタシにはそんなこと一言も・・・」

アノルンの記憶に、リヒャルドの軽薄な態度が思い出される。

「（人の胸やら尻やら散々好き勝手触ってくれたが・・・眼差しだけはいつも優しかった。最初にアタシがマスターに拾われた時、全ての生きる気力を失くしていたアタシは廃人同然だった。死人同然なアタシを見て、誰も声かけてこなかったものさ。でもそういえば、最初に声をかけてきたのはリヒャルドで――アタシが1人で落ち込んでるときには、アイツがいつも声をかけてきた――そうか、アイツはアタシを心配してくれていたのか――だったらもっとわかりやすい態度をしろっての・・・）」

アノルンは長年の疑問が解けると同時に、リヒャルドの心遣いに感謝した。散々セクハラされたことだけはどうしてもむかっ腹がたったが。

「でもそれならそうと、なぜ素直に私に言わなかったのさ？　アイツがアタシを気遣ってくれたことは嬉しいけど、同時に散々な目にも遭わされてるんだけどね。どうも行動が矛盾しているよ」

「・・・五代目の手記がここにあります。その答えはこの中にある

かと。自分の死後、自分の妻と愛妾達が全員死んだときに開封するようにとの遺言でした。お読みになりますか？」

「貸してくれ」

アノルンはアルベルトから借りた手記をパラパラとめくっていた。最初は何の気なしにその手記を読んでいたアノルンだったが、次第にその顔が驚きの表情へと変わり、蒼白になっていったかと思うと、やがてカタカタと震えだし、遂に大粒の涙をこぼし始めた。

「そ、そんな・・・そんな！　アタシは・・・アタシはなんてひどいことをしてたんだろう。アイツのこと、リヒャルドのこと、何にもわかってなかったんだ。アイツはいつもアタシを見て、心配して・・・傍にいようとしてくれてたのに！！」

アノルンの目からこぼれおちる涙が一向に止まる気配を見せない。泣き濡れてぐしゃぐしゃになった顔を隠そうともせずに、アノルンはアルベルトにつかみかかった。

「アタシは・・・アタシはどうしたらいい！？　アイツにどうしたら報いてやれる？？」

「私にはわかりません・・・ですが私も同じ手記を読んで思ったことは、おそらく彼はあなたにただ普通に生きて欲しかったのだと思います」

「普通に・・・生きる・・・」

「はい。おそらくは普通に生きて、友人を作り、ふざけあい、笑いあい、恋人を作って・・・」

「そんなの・・・今さら無理だよ・・・」

アノルンはうつむいてしまった。沈黙が二人を包む。

「・・・これは私個人の意見ですが、生きている限り遅すぎることはないのかと」
「生きて・・・いる限り？」
「はい。貴女には無限にも等しい時間があります。いつかはまた考え方が変わるかもしれませんが、今から取り戻しにいって、時間が足らないことはないかと」
「そうかな・・・そうなのかな？」
「私にはおそらくとしか言えませんが」

アルベルトは騎士が主人に跪くようにして続ける。

「その答えを知るためにも貴女は明日の戦い、生き残ってください。何としてもアルフィリース、リサと共に無事に帰還するのです。あの2人を決して失ってはなりません。そのためなら私の命をご自由にお使いください・・・我が名誉と誇りと剣にかけて、この約定果たさんことをここに誓う。我が約定違えしと剣の主が思召す時は、いついかなるときにおいても我が命、我が魂をこの剣にて天に還したまえ」

おもむろにアルベルトは剣を抜いて自らの指先を斬り、血を剣につけて剣の柄をアノルンに捧げる。正式な騎士の誓約であり、普通は忠誠を捧げる主人にしか行わない。

アノルン、いやミランダはどうすべきかしばし目を閉じて考え込んでいたが、

「アルベルト＝ファイディリティ＝ラザール、汝が剣を受けよう。わが名はミランダ＝レイベンワース。汝の剣の主にして汝の命と魂を預かるものなり。誓おう、汝が剣を捧げるに値する人間であるよう、我は全身全霊をもってあらゆる困難に臨まんことを！」

アノルンは同じように剣の血の付いた部分で自分の指を斬ると、剣の柄にキスをしアルベルトの頭上に掲げる。そうして3秒、剣を引き、アルベルトに剣を返す。

「・・・これでアタシはリヒャルドに報いられるのかな?」
「貴女次第だと」
「！　ずけずけいうところは、奴と変わらないわね・・・」
「面目ない」

アノルンは力なく笑った。それは彼女の抱える寂しさを象徴するかのようだった。だが同時にアルベルトは、自分の代で彼女に出会えたことを非常に嬉しく思っていた。

正直幼少時に自分の使命、ラザール家の使命を教えられた時、アルベルトはそれがどういうことなのかわかっていなかった。幼少より剣を振うためだけに鍛えられた自分の全人生。どうして全ての楽しみを捨ててまで自分がそこまでせねばならないのか。また訓練で得た力を使う相手が自分が生まれる前より決められている事も、彼は納得がいってなかった。

１４の時、最高教主の親衛隊の任を受けた。当時は隊長ではなかったが、ミリアザールに仕えるうち、自分が使えるべき人物というものを実感できた。そしてミリアザールの人となりを知るうち、彼女は自分の剣を捧げるに値する人物なのだと納得した。騎士にとって、自分の人生を賭ける相手に出会えるのは幸運である。それからは一層剣の修練に励んだが、それでもなぜか気持ちは満足しないままだった。

だがアルベルトは才能に恵まれていた。やがて１６で成人となり、自分の父よりリヒャルドの手記を託された時、自分が剣を振う意味はさらに重くなった。守るべき相手は2人いたのだ。先祖の手記には似顔絵が描いてあった。当時のミリアザールと、若い女性が微笑み合っている様子。それを見た時「ああ、私はこの光景を守るため

に生まれ、剣を鍛えているのだ」と理解できた。

それからのアルベルトの鍛錬はさらに苛烈を極めた。それは、ラザール家の者をしてアルベルトは気が触れたのではないかと心配するくらいの厳しさだった。だがアルベルトは満足していた。あの光景を守るためなら、自分の苦痛など惜しくもなんともなかった。自分が何をすべきなのか生涯出会わず、漫然とその生を終える者が多いことを考えれば、自分はなんと幸せなのかと思うこともできた。

そして今現在彼女を目の当たりにし、命を賭けるに値するものが2人いることがより強く実感できる。さらに彼女は自分の祖先のために真剣に涙を流してくれた。

「（きっと私は手記がなくても、この女性を守ることをためらうまい）」

それがアルベルトの偽らざる本心だった。さらに手記を見たとき思ったことはもう一つあったのだが、それも含め今はそっと自分の心の奥底にしまっておくことにした。

「まさかアタシが騎士の誓いを受ける日が来るとはね」
「人生とは流れる水のごとしといいますから」
「アンタがいうか？」
「面目ない」

アノルンはフッと笑う。その笑顔を見てアルベルトは自分のしたことが間違いではないと確信できた。

「じゃあお前の主として最初の命令だ」
「何なりと」
「私は４人で帰ることを望む。お前も死ぬな！」

「御意」
「後は二人の時はミランダって呼んでいい。本名を呼んでくれる人間がいないのはやっぱり寂しい」
「御意」
「じゃあもう一個！　三回まわってワン！って言ってみろ！」
「御意」

アルベルトは剣を置いて回る準備を始める。

「ちょ、ちょっと待て！　最後のは冗談だ！」
「一度声に出した言葉は決して取り消せない言います。騎士としては主の言葉を実行するのみ」
「なんでそういうとこまで頑固なんだ！」
「騎士は忠誠を誓った相手に死ねと言われれば、その場で何の疑問もい抱かず死ぬものです。特に私は不器用ですから」
「お、お前、わかっててやってるだろう！？　騎士ボケとかめんどくさいから、やめてくれよ！」

二人でぎゃあぎゃあと騒ぐこの感じ、リヒャルドとふざけ合った日々みたいだ――とアノルン、いや今はミランダとして――彼女はそう思った。
だが防音の魔術はいつのまにか切れており、リサはしっかりこのふざけ合いを聞いていた。そして翌日、

「昨夜（ゆうべ）はお楽しみでしたね」

とリサにアノルンは散々からかわれる事になる。アルフィリースには何のことやらさっぱりわからなかったのだが。
そうする間にも夜は更けていく。明日に控える激闘を彼らはまだ知らない。

続く

討伐前夜（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

そんな次話は１０／１８（月）１２：００に投稿します。

ルキアの森の魔王戦、その1～魔王の軍勢～（前書き）

～あらすじ～

魔王討伐に赴いたアルフィリース達。ルキアの森という、さして深くもなく、人里に近い森で魔王との戦いが始まろうとしていた・・・。

ルキアの森の魔王戦、その1～魔王の軍勢～

ザクッ、ザクッ

森の中を歩く4人の足音が聞こえてくる。ここはカラム地方にあるルキアの森。ロートの村の目と鼻の先にある森であり、同時に魔王の存在が確認された森でもある。森としては若いほうで大木もあまりないが、人が立ち入ることも少なく、雑草まみれの獣道のみである。まあ人跡未踏、とまではいかないが、整地された地面はなく、背丈が膝くらいの草が生い茂っている。

「日差しはそこそこに入ってくるね・・・視界はボチボチ良好か。リサ、どのくらい感知できる？」

「気合を入れた状態でも半径５０ｍに届きません。もっとも多少その半径も前後しますが。現在まで敵らしき気配はありませんが、慎重に進むことをオススメします」

「うん。アルフィ、リサと背後は任せたから」

「わかってるわ」

ルキアの森に入ってから既に1刻近く。森は徐々に深くなるが、敵の気配は全くない。早朝に村を出たから徐々に日は高くなってくるはずなのだが、薄暗い感じがする。

「イイ感じはしないわね・・・」

「おそらく、闇の属性のモンスターによる結界ではないかと。森もたいして深くないのに、日が強くあたりません」

「わかってるわよ、アルベルト。いっそ歌でも歌ったら向こうから出てきてくれないかな？」

「やってみたら？　止めないわよ、アノルン」

アノルンの軽口に、調子を合わせるアルフィリース。

「アタシが歌うと敵が皆聞き惚れて戦闘が起こりゃしない。アルフィが歌った方がイイね」

「なんでよ？」

「だってさあ、アンタ覚えてないの？　アタシ達が2回目に会ったとき、アンタをアタシがしこたま飲ませて潰したでしょう？　あの時アンタは寝てるって思ったら、いきなりむくっと起きてさ。でかい声で酒場中に聞こえるように『もりのオオカミさん』歌ってたんだよ？　覚えてないんでしょ」

「・・・ウソ？」

「本当さ。しかも替え歌もご丁寧に」

「替え歌ってっていうと・・・」

「そう、下ネタ満載の、×××が歌詞にいっぱいのアレさ」

「も、もう私お嫁にいけない・・・」

アルフィリースが半べそになる。替え歌は実はウソだが、あまりにも大きい声だったのに加え音痴だったのでさすがに周りが止めようとしたのだが、こともあろうにアルフィリースが片っ端からぶん投げたのだ。

結局アルフィリースが再び眠りにつくまで歌は収まらず、店主が悲壮な顔をしながら働いていたのを覚えている。アノルンもたまらず耳栓をしたうえで、アルフィリースが酔い潰れて寝るまで酒場でちびちびやりながら待っていた。

アノルンにしたらとても傑作な話だが、ここでわざわざその話を出したのは、経験不足なアルフィリースが緊張しているのではないかと案じてのことだったが、その心配は必要なかったのかもしれない。アルフィリースは鈍いのか肝が据わっているのか、普段と同じ態度である。アノルンとしては頼もしい限りだったが、アルフィリ

ースが普通に振舞えるだけの根拠を何か持っているのかと気になった。そんな風に世間話をしながら歩くうち、空気がふと変わったような気がした。

「・・・皆さん、おかしいです」

リサがささやく。

「・・・ああ、静かすぎるね」

「先ほどから小動物や、鳥すらいなくなりました」

「来る、か？」

「どこからでも・・・こいってね」

全員の顔から遊びの表情が消える。それぞれ武器を構えながらアルベルトは右に、アノルンは左に展開し、アルフィリースとリサはやや下がる。アノルンは何かを咥えているようだ。

「アノルン、なにそれ？」

「マウスピース。アタシこれつけてないと、踏ん張りすぎて歯が割れちまうんだ」

何か言おうとしたアルフィリースだが、その余裕はもはやない。

「リサ、敵の気配は？」

「まだありません・・・でも視線は」

「ん。私もびんびん感じてるよ」

「気をつけなさい、アルフィ・・・背面以外の全方位から来ると思います・・・」

アルフィリースは矢をいつでも放てるように構えている。対応を

早くするように、呼吸がやや早く、浅くなる。自分の心臓の音が1段階早くなったのがアルフィリースにもわかる。

「アルフィ！　下です！！」

リサが叫んだ。が、それとどちらが早いか、アルフィリースは弓を投げ捨て様剣を抜き、地面から出てこようとしていた巨大ミミズのような魔物に突き立てる。

「土虫（アースワーム）だ！」

言うが早いか四方八方から敵が襲い来る。アルベルトの頭上からはゴブリンが、アノルンの周囲からは土虫が同じく襲いかかる。さらに左右からはオークたちが奇声をあげながら襲いかかってくる。モンスターの種類が実に多種多様だ。

「これが魔王の軍勢・・・！」

「フンッ、ザコが！」

アノルンがメイスを一振りすると周囲の土虫が一瞬で薙ぎ払われる。そのままオークに向き直り、

「せー、の！！！」

アルフィリースの元までバリバリと歯を食いしばる音が聞こえそうだ。その勢いでハンマーみたいなメイスをオークのどてっぱら目がけて振り回すアノルン。オークも手持ちの棍棒で受けようとするが、

ボンッ！

という音と共に、先頭のオークの上半身が完全に吹っ飛び、なくなってしまった。それどころかそのオークが持っていたハンマーが後ろに吹っ飛び、後ろのオークたちをなぎ倒している。やや遅れて、吹っ飛んだオークの上空に舞い上がった残骸と血が雨のように降って来る。そこまでしてからやっとのことでオークたちは我に返り恐慌状態になったが、時、既に遅し。

「おせぇ！」

アノルンがメイスを振うたび、オークの頭が、腕が、防ごうとした武器をお構いなしに吹き飛ばしていく。

オークという生物は人間より標準が大柄で、力が強い代わり知能がかなり低い。頭の中には戦闘か、睡眠か、生殖行為しかないと言われており、一度戦闘に入れば興奮状態のあまり我を忘れて死ぬまで敵に突進すると言われているが、そのオークが逃げ出し始めていた。知能が低いだけに本能は発達しているらしい、自分たちの目の前にいる女が半端な相手でないことがわかったのだろう。オークたちの返り血を浴びながら突進していくアノルンの方が、よっぽど魔物に見える。その時、突進するアノルンが突然何かに躓く。

「危ない！」

トレント（木の魔物）の根にアノルンが躓いたのだ。そのままトレントの枝がアノルンに巻きつこうとする。

「こりゃやっかい、だ・け・ど！　アルフィに出没してるって聞いてるからね、対策はしてるよ？」

アノルンが何かの小瓶を投げつける。その瞬間トレントが急に苦

しみ始めた。

「除草剤さ。ただし、大木も枯らすほど強力だけどね！」

そのままメイスを持ち直してトレントに一撃。メリメリという音が聞こえ、縦にひびがはいる。

「もう、いっぱぁぁぁつ！」

さらに勢いをつけて渾身の一撃をお見舞いすると、トレントは粉々になってしまった。

「アノルンすっごぉぉい！　・・・は、アルベルトは！？」

向き直ったアルフィリースが見たのは、さらに驚愕の光景だった。

ヒュンッ！

アルベルトが剣の血糊を振り払う。その足元には数えるのがおっくうになるほどのゴブリンの死体の山。ゆうに３０は超えているだろう。

さらにゴブリンが数十はいるかと思われるが、どれもアルベルトに飛びかかるのを躊躇している。それを素早く見てとると、間髪いれずゴブリンの動きを待たずしてアルベルトが斬りかかる。そこからは凄まじい戦い。いや、虐殺にも近い光景だった。

アルベルトの一振りでゴブリンが３～４体ずつ倒れ、いや消し飛んでいく。ゴブリンは人間よりやや小柄なくらいだが、それでも戦うために生まれたような種族なので平均的な人間より俊敏で力も強い。なかでも驚愕だったのは、木の陰に隠れようとしたゴブリンを木ごと切断した時だった。アルフィリースが抱きついても半分にま

で手が回らないくらいは太い木だったようだが、とんでもない剣士だ。

こちらも大勢は決しており、ゴブリンが逃げ出し始める。その時、一体のゴブリンが何かに頭をつかまれ握りつぶされた。

「あれは一目巨人（サイクロプス）！？」

「いや、それの上位種のギガンテスだね。サイクロプスは馬鹿すぎて武器が使えないが、あれはちゃんとハンマーを持ってるだろう？」

既に左側を片づけたアノルンが戻ってきている。

「加勢しなきゃ」

「いらないと思うよ？　ラザール家は伊達じゃない」

「で、でもあんなに体格が違うよ？」

ギガンテスの体格はゆうに3mを超えている。手に持つハンマーが既にアルベルトより大きい。

「まあ見てなって。ラザールの奴らはどれも普通じゃない。なんせ初代は単独で魔王の軍勢を全滅させて、魔王まで狩ったって剣士だからね」

「本当？」

「まあ多少は誇張かもしんないけど、奴隷上がりの剣士が神殿騎士団の近衛隊長になったんだよ？　しかもほとんど満場一致の採決だったそうだ。あの頭の固い連中を動かしたんだから、そのぐらいは本当にやってても驚かないね」

「・・・」

「しかも、アルベルトはその歴代の中で最強の呼び声が高いんだそうだ。今回私たちが近くにいなかったら、単独でこの任務をこなしたかもしれない。だから心配無用だよ」

そのアノルンの話が切れた瞬間、２体が動く。どちらも上段から獲物を振り下ろし、互いの獲物が交差する――が、アルベルトが振り下ろした剣はギガンテスのハンマーの柄の部分を完全にへしゃげさせ、そのままギガンテスの腰のあたりを切り裂く。たまらずギガンテスが膝をついたその一瞬に飛びこみ、下から上に切り返す剣でギガンテスの首と胴を切り離した。

「体重を乗せてない剣であんなことができるなんて・・・」

「お見事だね！」

だが、まだアルベルトは気を抜いていない。その様子を見てふと他の面子も警戒心を引き戻す。瞬間、アルフィリース達は同時に飛びのいた。

派手な爆発音と爆風と共に、アルフィリース達がいた場所に火の手が上がる。火系の魔術だ。どこから撃ってきたのか。だが考えるより早く、アルフィリースが矢を番(つが)えながら敵の位置を探る。

「そこぉ！」

アルフィリースが魔法で強化した矢を放つ。目標は５０ｍほど先にいた。頭に角を生やした悪魔のような格好のモンスター。どうやら指揮官の役割をしているのだろう。魔物は木の陰に隠れてアルフィリースの矢をやり過ごそうとする。この時代の平均的な矢の殺傷能力は２０ｍ程度だし、直線的にしか飛ばないので普通はこんな遠距離から当たらないが、アルフィリースの矢は風の魔法で強化してある。

空中で矢がクン、とありえない方向に曲がり魔物に襲いかかる。魔物は面喰ったようだが、さすがに鋭い反応を見せ、腕を盾代わりにし致命傷を避ける。

「やっぱこの距離だと、一発じゃダメか」

だがアルフィリースがそう言う間にも、アノルン・アルベルトが既に魔物に向かって距離を詰めていた。魔物もアルベルトに向けて構えなおそうとしたその瞬間、

ズンッ！

という肉を裂くような音と共に、魔物の頭に新しい角が生えてきた。いや、よく見れば木の陰から出た刃物のようだ。

「誰が・・・え、リサ？？」

「おいしいところ、イタダキです」

魔物の背後にはいつの間にかリサが立っていた。アルフィリースがその事実に気付くのと、ドサッと魔物が倒れるのは同時だった。

どうやらリサの盲目を示す白い杖に刃物が仕込んであったようだ。だが彼女はいつの間に背後に回り込んだのか？

リサが血糊を葉で拭きながらアルフィリース達の元に帰って来る。

「アルフィリース、私を見失っては困ります」

「え、でも、さっきまで私の後ろに・・・」

「センサー能力の応用だね？」

アノルンが感心したような顔でリサを見る。リサは小さく頷くと、

「はい。気配察知ができるなら逆もまたしかり。感覚を飛ばすのと逆に感覚を押さえこみ、極端に見つかりにくくしました」

と答える。アルベルトも納得したような顔だったが、アルフィリースはセンサーのことなど今まで何も知らなかったので、目を丸くしていた。

「そんなことができるの？」

「最初から指揮官がいると読んでいたんだね？」

「はい。魔物の襲い方があまりに統一されていたので、土虫が出てきた段階で最初に探って、こっそり後ろに回り込みました」

「大したもんだ」

「お褒めに与り光栄です、お姉さま」

アノルンにぺこりとお辞儀をして見せるが、アルフィリースには、あかんべーとやってきた。

「か、かわいくない・・・」

「この絶世の美少女であるリサをつかまえてなんですか、その言い草は」

「なんで私にはそんななのよぅ」

「さっき火球が飛んできたとき、アナタ、リサの位置を確認せずにかわしましたね？」

「そ、それはそのう・・・」

その通りなので、アルフィリースは決まりが悪そうだ。だがそんなアルフィリースの様子を見て、さらにリサが追い打ちをかける。

「リサが本当にただのか弱い女の子で、アナタにしがみついていたら2人まとめて今頃黒コゲです。デカい女が色々鈍いって本当だったのですね。ヤレヤレです」

「ぐぅっ・・・」

「とはいえ矢を放つのはナイスタイミングで、狙いもよかったので

今回は貸し借り無しということにしておきましょう。あの矢が無いとさすがに後ろからブスリとはいけまんせんでしたから。寛大なリサに感謝なさい」

「なんで感謝しなきゃいけないのかなぁ・・・」

はぁ～とアルフィリースがため息をついていると、

「気を抜くな。この程度は前哨戦だ」

「そういうこと。この程度の相手だったら調査隊は一人ぐらい帰ってくるだろうし、ボスは結構な大物かもよ」

と、アルベルトとアノルンの2人が険しい顔をしている。

「・・・そのようです。大きいのが、来ます。方位1時、距離70m」

「大将のおでましかい！　腕が鳴るね」

「アルフィリース殿は下がって。どうやら、かなり大きい」

「わかった。リサ、距離をとろう」

アルベルトとアノルンを前衛に残し、アルフィリースとリサは少し後ろに下がる。いくらもしないうちに、バキバキ、という木をなぎ倒す音が聞こえ始めた。何かが・・・大木をなぎ倒すほどの何かが、アルフィリース達に向かって前進してくる。

嫌が応になく全員の緊張感が高まるが、アルフィリースの直感は、今までで最大級の危険が迫ってることを察知していた。全身の毛が逆立ったまま治まらない。武者震いも多少は入っているのだろうか。

そして、それはアルフィリース達の前に姿を現した。

続く

ルキアの森の魔王戦、その1～魔王の軍勢～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

次回ももちろん魔王戦でございます。ついに魔王がその正体を現します。

次回投稿は１０／１９（火）１２：００です。

ルキアの森の魔王戦、その2～魔王出現～（前書き）

～あらすじ～

魔王との軍勢との戦いが始まる。緒戦は順調だったアルフィリース達だが、そこに姿を現した魔王は想像以上の化け物だった・・・。

ルキアの森の魔王戦、その2～魔王出現～

「な、何よ、アレ！？」
「こりゃあ・・・随分と醜悪なのが出てきたね」
「こんな魔物の記載は見たことがありません。悪霊か、悪魔か、鉱物生命体か判別がつきかねる」
「そのどれもってことがありうるよ。なんせ魔王ってのはわけがわからないのが多いから」
「リサもなんとなくどんな姿かは感知できますが、これは確かに分類に困りますね」

アルフィリースは混乱したが、それは他の全員が同様だった。それもそうだろう。なにせまず、目の前の魔物は手で歩いてる。どうやら脚の代わりに腕が１０本くらい付いているようだ。しかも形状は人間の腕に似ているのだが、長さ・太さはバラバラで統一感がない。太い腕はギガンテスの胴体くらいある。

そして体は、いや頭との判別もないが、黒曜石のような黒光りする柱のような形状をしているのだ。太さはさっきのトレントほどもあるか。その付け根に手がまとめて１０本、いや、１１本ついている。奇数とは非対称極まりない。そして体といえばいいのか顔といえばいいのか、とりあえず胴体と表現する場所に目や口が不規則にくっついている。一体目や口がいくつあるのか見当もつかず、大きさもまたバラバラだ。

体長はどのぐらいあるのだろうか。さきほどのギガンテスよりはかなり大きい。とりあえず胴回りは５ｍくらいありそうだ。その醜悪さよりもアルフィリース達が顔をしかめたのは、何よりその魔物が発する臭いだった。

「なんですか、この匂い。リサは不快です」

「何食ったんだろうね。口が臭いったらありゃしない」
「これはそんなレベルじゃないわよ」
「これが魔王で間違いないのでしょうか？」
「わかりゃしないさ。アタシが出会ってきたのはもう少し生き物くさい連中だった。少なくとも、こんな人間の悪夢を現実に引っ張り出したようなのはいなかったよ」

アルフィリース達がじりじりと下がりながら距離を取ると、この魔物がギガンテスの死体を踏んづけた。すると胴体の目が一斉にそちらを向く。そしてギガンテスを手でつまみあげると、不思議そうにそれを眺める。何事かとアルフィリース達がいぶかしんだその直後、

「ひっ！？」

アルフィリースは思わず悲鳴をあげてしまった。鉱石のような胴体部分がバキバキと二つに割れ大きな口となり、ギガンテスをおもむろに食べ始めたのだ。

バキバキ、ゴキン！　ボリッボリッ・・・

アルフィリース達は何もできず、魔物がギガンテスを咀嚼する光景を見守っていた。ギガンテスの血や肉が周囲に飛び散っている。なんて凄惨でひどい光景だろうか。誰も一言も発しない、いや、発することができない。この魔物はもはや彼女達の想像を完全に超えていた。

魔物がギガンテスを食べ終わると閉じていた目が一斉にカッ！と開き、血の涙を流し始めた。それと同時に体各所の小さな口が開き始め、ケヒャヒャヒャ、と奇怪に笑い始める。この魔王は喜んでいる――あまりの想像を超える異常な光景に、アルフィリースは眩(めまい)

暈がしていた。

「・・・くるよ」

「え？」

そしてひとしきり魔王が笑い終えると――目が一斉にアルフィリース達の方を向いた。

「動け！」

アノルンの声を合図に全員が飛ぶように散開する。魔王が形容しがたい奇声と共に襲いかかってきた。

先ほどと同様にアノルン・アルベルトは左右に展開し、アルフィリースとリサは後退して距離を取る。魔王の目がめまぐるしく動き、彼女達４人をそれぞれとらえる。

「全ての目で見ているっていうの？」

アルフィリースは後退しながら矢を番え、目に向けて放つ。３本放ったうちの１本が見事に魔王の目を射抜くが、当たった瞬間にこの魔王はまたしてもケヒャヒャヒャ、と実に楽しそうに笑ったのだ。そして今まで目がなかったところに、目が新しく１つ開く。

「なにこいつ！　効いてないっての？」

「目が弱点じゃないのか！」

「アルフィリース、時間を稼ぎなさい。リサの力でこのブサイクの弱点を探ります！」

「了解！」

リサが集中できるように、アルフィリースはリサを守るようにし

ながら矢を放つ。そしてアルベルトがアノルンに先行して斬りこんでいく。アルベルトが魔物を横薙ぎにしようと斬撃を放つが、

ダン！

と一際大きな音がし、魔王の巨体が・・・跳んだ。

「なんだって！？」

「あの巨体で跳べるの？」

周囲の木々より高く跳んでいる。そのまま落ちてくるかと思いきや、なんと手を使って器用に木の上の方にへばりつく。

「くっ、器用だね！」

「これでは剣が届かぬ」

「！　よけて！」

アルフィリースの一言と共に、それぞれがその場から跳んで後ずさる。同時に音もなく何かが降ってきた。そして、びちゃびちゃと何かが落ちてきた後からジュウジュウと煙が立つ。

「酸か！？」

「どおりで口が臭いわけさ。胃液出過ぎだろ？」

「冗談言ってる場合じゃないわよ？」

全員で魔物の唾液を避け続ける。いや、アルベルトだけは避けながらも向かっていた。そして魔王が足場にしている木を一刀のもとに一斉に斬り倒していく。凄まじい技と力だ。

魔王もさすがにバランスを崩して落ちてきた。そこにすかさずアルベルトが斬りかかっていくのを、魔王が手を差し出して止めよう

とする。いや、止めようとしたのではない、反撃だ。一瞬他の手が萎み、反撃に使おうとしていた手の太さが倍増した。

「！」

腕を斬り落としにかかっていたアルベルトが、反射的に前に転びながら避けた。

バキッ！　バキッ！

振り回された腕は、そのまま当たりの木々をまとめてへし折る。とんでもない一撃だ。

だが、アルベルトの反射も負けていない。前に一回転した後はその反動でさらに前に突進し、一斉に萎んだ腕をまとめて三本斬り飛ばした。

「チャンス！」

アノルンも続こうと突貫するが、魔王の口がいくつかがばっと開き、黒い霧のようなものが噴射される。

「ブレスか！」

「ちっ」

2人がいち早く避けると、周囲の木が一斉にグズグズに腐っていく。腐食の吐息だ。魔王が出現してからそこまで、およそ1分にも満たない攻防だったろう。だがまるで何刻も戦っているほどにも感じられる濃密な命のやりとり。これほどの戦いは、アルフィリースにはもちろん経験が無い。

「（とんでもない戦いだわ。確かに私では力不足ね）」

アルフィリースは矢を放つのも忘れ、やや見入ってしまった。その後ろでリサがつぶやく。

「そんな・・・？」

「どうしたの、リサ？」

「あの魔物、弱点らしきものが見つかりません」

「どういうこと？」

「普通、生き物であればどんな者でも弱い部分があります。体や気配、あるいは気といってもいいかもしれませんが、その流れや、また体のかばい方で私は察知するのですが・・・あの魔物の中身は常に動いており、決定的な弱点とかいうものがないのです」

「なんですって！？」

リサが動揺している。どうやら目の前にいる魔物は想像以上の化け物らしい。だがさっきアルベルトが腕を三本斬り飛ばしたのだ、死なないわけじゃないだろう。が、

【召喚（サモン）】

不気味な声が響いたかと思うと、魔物の周囲に魔法陣らしきものが浮かび上がる。すると、そこからゴブリンやオークが召喚されてくる。こんなことができるとは、まぎれもなく目の前の魔物が魔王なのだろう。

「なるほど、こうやって手下を召喚してるんだね」

「感心してる場合じゃないわよ、他の魔物なんて相手にする余裕はないわ！」

「いや、ザコは問題な・・・なんだって？」

アノルンが驚愕の声を上げる。なんと、この魔王は召喚した魔物を戦力として使うのではなく、こともあろうに掴みあげ、頭から食べ始めたのだ。さすがのアルベルトも唖然とするが、さらに驚いたのは食べた分だけ、斬り落とした腕が再生していくではないか。

召喚されたばかりで動きの鈍い魔物共も、この異常な事態に悲鳴を発しながら逃げていくが、魔王は一体も逃す気が無いのか、次々と食い散らかしていく。アルフィリース達のことは放っておいて、自分で召喚した魔物を食べることに興味が向いてしまっているようだ。

思わず戦うことを忘れ、その光景を呆然と眺めるアルフィリース達。

「・・・調査隊が誰も帰ってこないはずだよ。こんなのに追いかけられたら、生きて帰れっこない」

「ね、ねえ。魔王ってこんな生物なの？」

「いや、アタシが相手してきたのにゲス野郎はいたが、こんな醜悪なのは初めてだ。正直、アタシも辟易してるよ」

「弱点はなさそうです。どうしますか？　逃げるのも選択肢に考慮する状況だと思いますが」

さすがのリサもやや不安げだ。だがアノルンはしばしの逡巡の後、返答した。

「・・・手はあるよ。危ないけどね」

「それに逃げ切れるかどうかも微妙です。さっきから目が一つだけ常にこちらを向いています。逃げ始めたら一気にこちらに向かってくるでしょう。どうやら知能はそれなりに高いようだ」

隙を見て斬りかかろうとしていたアルベルトが、一端アルフィリ

ース達の所まで引いてくる。そして指さす先をアルフィリースが見ると、確かにゴブリン達を追いかけてめまぐるしく動く目とは別に、瞬きすらせず、自分達を見ている目が一つあることに気がつく。

「じゃあ食べ終わったら一気に来るわね」

「だね。じゃあとりあえず戦う方向でいこう。リサ、アイツの気を引くのはセンサー能力でできるかい？」

「それは出来ますが・・・リサに囮をやれと？」

信じられないといった顔をするリサだが、アノルンの表情は真剣そのものだった。

「悪いけどそういうことだ。その代わりアルフィを護衛に着けてやるよ。ここから３００m程度後退したところにやや開けたところがあったろう。そこまであいつを誘導してくれないか？」

「デカ女が護衛では心ともないことこの上ないですが・・・仕方がありません、やりましょう」

「よし。そこまで引き込んだら私が何としても奴の足を止めてみせる。アルベルトは奴の胴体を真っ二つにすることだけ考えてくれ。それでも生きてたり、足止めができないようなら一回退却だ。依存は？」

依存はないと全員が目で返事する。

「じゃあリサ、３０秒後にやってくれ。アタシとアルベルトは先にその地点まで行くけど、全員武運を！」

全員で頷き合うのを確認すると、２人は先に駆けだしていく。

「しっかりやってくださいよ、アルフィ？」

「任せて！　・・・とは言わないけど、精一杯リサのことを守ってみるわ」
「自信満々よりもその言葉の方が信頼できます。満点をアルフィにあげましょう」
「あら、珍しい」

リサはギルドでアノルンでもなく、アルベルトでもなく目の前の女剣士の手を引いたことを思い出していた。圧倒的に強いと感じたのはその2人のはずなのに、自分の直感はこの女剣士が最も頼りになるといっていたのだ。そもそもなぜ依頼の内容も聞かず、目の前の女剣士に話しかけて依頼を受けようとしたのか。リサには自分の行動を納得しかねる節があった。

だが、後で一端別れてからやはり思いなおそうとしたものの、理性ではこの依頼は危険性が高い事を認識しつつも、本能では行きたくてしょうがなかった。本能で依頼を受けるような博打など一度もしたことがないリサだが、今回だけはなぜかそうすべきだと思ったのだ。

そして依頼を受けて見て、まだこのアルフィリースと一緒にいる時間は一日と少しなわけだが、確信めいたものがリサにはあった。きっと自分はこの女剣士と、これからも深く関わるのだろうと。その自分がこんな所で死ぬはずはないと。それ以前に、何としてもリサはミーシアに帰らなければならない事情がある。そしてリサは決意を固めた。

「冗談はここまでです、いきますよアルフィ」
「オーケー、リサ！」

リサが感覚をソナーのように飛ばして魔王の注意を引きつけると、瞬間的に魔王の目が一斉にアルフィイリースとリサの方を向いた。ここからは、命がけの鬼ごっこだ。

続く

ルキアの森の魔王戦、その2～魔王出現～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。ますます筆者が絶好調になります。

まだまだ魔王との戦いは続きます。

次回投稿は１０／２０（水）１２：００です。

ルキアの森の魔王戦、その3～呪印解放～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリース達が遭遇した魔王は常識をはるかに凌駕する生物だった。真っ向勝負ではらちがあかないと判断したアルフィリース達は、一計を案じるのだった・・・。

ルキアの森の魔王戦、その3～呪印解放～

「くっ、ふっ！」

魔王の突き出す手をかいくぐりながら、必死に間合を取るアルフィリース。彼女はリサとは別々の方向に逃げながら矢を射かけている。リサは身軽とはいえやはり盲目なので、あまり切羽詰まった状況で逃がすのは危ないとアルフィリースが判断した上での行動だ。

そのためリサには目的地まで一直線に走るように指示しておいて、アルフィリースはジグザグに走りながら魔王の注意を引いている。そしてアルフィリースが危機に陥りそうになるたびに、リサが気配を飛ばして注意を引くと言った作戦だ。

魔王には目が沢山あるゆえか、リサが気配を飛ばす度に反応して目を向けるため、アルフィリースへの注意が一瞬それる。それを利用して距離を保ち続けていた。

「（よし、このまま…）」

やや開けた目的の場所が見えてきている。後５０ｍもないくらいか。リサは既にその手前まで到達している。と、その時魔王の目が一斉にリサの方に向き直った。

「な、なんで？」

魔王もこのままでは埒（らち）があかないと考えたのか。先にリサをなんとかするために、アルフィリースを無視してリサの方に全力で駆けだした。

「リサ、逃げて！」

魔王が跳びながら前方に突進してゆく。そして空中でリサに向かって酸を吐き出した。

リサの方もその動きを察知したのか、既に広場に向かって走り出しており、前に飛びこむようにして転げまわって逃げた。酸はぎりぎり回避したが、足を取られて立ち上がるに時間がかかる。その間わずか数秒だったのだが、リサが立ちあがったときにはほんの１０ｍもないくらいの位置にまで魔王に追いつかれていた。

「目的地まで残り１０ｍもないのに・・・リサッ！」

アルフィリースは矢を射ようとするが、リサが手を上げてアルフィリースを制する。自分でどうにかする気なのだろう。

確かに魔王の背後にいるアルフィリースに魔王が再度突進してきたら、彼女はそれこそ危機に陥り、誘導も台無しになる可能性がある。

「だからって！」

そんなアルフィリースの心配をよそに、リサは冷静だった。魔王と面と向かっているのに呼吸もほとんど乱れていない。大した肝の据わりっぷりである。魔王もじりじりと距離を詰めるが、一気には仕掛けない。リサも魔王の動きに合わせてじりじりと下がる。あと８ｍ、７ｍ・・・５ｍ。

ここで魔王が動いた。手を使ってリサを捕まえに行くが、リサはひらりとかわす。だがかわした方向には木があり、さらに魔王もこの動きを予測したか、リサが跳んだ方向に酸を吐き出す。それでもリサは冷静だ。

「感知済みです」

と言って、自分のローブを使って酸を防ぐと同時に、一瞬魔王の視界から自分を隠す。さらにローブを脱ぎ捨て、木を上手く蹴って一気に距離を稼いだ。苛立った魔王が奇声と共に突進してくる。そして広場にリサと魔王が入った瞬間――

「リサ！　横に跳べっ！」

アノルンの鋭い声と共に当たり一面が光に包まれた！

「こ、これは？　光爆弾？」

爆発の代わりに閃光を発生させることで、相手の視界を奪うためのものだ。主に相手を生け捕りにしたいときに用いられるが、ここまで光の強いものはアルフィリースは知らなかった。アノルンの特製だろうか、アルフィリースも何も見えない。

そして虚をつかれた魔王の動きが一瞬止まる。その隙を利用してアノルンが対魔系の神聖魔術を行使する。

【我、光の主に仕える従順なる僕にして、主の法の執行者なり。今まさに悪しき魂を捕えて、主の御手に委ねんとす。ここに汝が奇跡の片鱗を示さん】

《光縛牢（ブレイズプリズン）》！

光が捕縛網のようになって魔王を絡めていく。アルフィリースは初めて見たが、結構な高位魔法のはずだ。やはりアノルンが高位の司祭であることには間違いがないらしい。

自由を失った魔王が光の網の中でもがきまわるが、簡単にははずれない。

「いけぇ、アルベルト！」
「ォオオ！」

間髪いれずアルベルトが斬りかかる。最初の一撃で魔王の片側の手を一斉に斬り払った。そして出来た空間を利用しながら回転し、バランスを失って倒れてくる魔王を渾身の一撃で斬り上げる。

「ムン！」

そのまま見事に胴体を輪切りにした　流石の魔王もなすすべなく真っ二つになり、ズズン、と音を立てながら倒れこんだ。魔王が倒れ込むと同時に切り口からは血が噴き出し、そして開いていた口や目が徐々に閉じていき、手も溶けるように腐り落ちて行った。
その光景を見届けたアルフィリースはリサに駆け寄る。

「リサ！　平気！？」
「大丈夫ですアルフィ。ちょっと擦りむいたくらいです」
「ごめんね、引きつけきれなくて・・・」
「お気になさらず、ほぼ３００ｍのうち、９５％を引き受けてくれたのです。状況によっては５０ｍくらいはリサがやることを覚悟していました。まあ、どうやらリサでは５０ｍも逃げ切ることは無理だったでしょうね。デカ女にしては上出来です」
「もう、口の減らない子ね」

アルフィリースはリサの頭をコツンとやろうとするが、リサはひょいっ、とよける。もう一発やろうとしたが、また避ける。今度はフェイント込みの連続で繰り出してみたが、全部避けられた。

「・・・か、可愛くない！」
「感知済みです」

リサがふふっ、と微笑む。

「（ちょっとは打ち解けた、かな）」

それでもこの一連の戦いを通して、アルフィリースは少しリサとの距離が縮まったような気がしていた。

＊＊＊

「やったのでしょうか」

「どうだろう？　でも大ダメージではあるかな。とっとと跡形もなく燃やした方がいい」

「ではその準備を」

アノルンとアルベルトが、動かなくなった魔王の体を見ている。体を真っ二つにしたからといって死とばかりは限らないが、少なくとも今は動く気配が無い。ならば今のうちに完全に燃やしたほうがいいと、アノルンがアルベルトとアルフィリースに指示をする。アルネリア教会はゾンビを相手にすることもあるため、彼らは火葬用にある程度の燃料や聖水を持ち歩く。今回ももちろん準備はしていた。

アルベルトが斬りかかるのに邪魔であった荷物は、木陰に置いてある。アルベルトとアルフィリースがその中にある燃料を取りに行こうと、魔王に背を向けたその時。

「！　まだです！　ボケっとしないで、アルフィ！！」

魔王の死骸があるはずの方向から矢のようなものがアルフィリース目がけて何本も飛んでくる。アルフィリースは完全に虚を突かれ

ており、振り返る前に避けるという反応ができなかった。
リサが彼女をかばおうと抱きついてきたが、軽量なリサではアルフィリースを押し倒すのが間に合わない。そして――

ドン！　ドドン！　ドン！！

明らかに肉体を貫く音が響き渡る。

「（私、死んだのかな・・・？）」

だがアルフィリースに痛みはなかった。おそるおそる彼女が目を開けると――

「う・・・ウソ・・・」

目の前にはアノルンがアルフィリース達をかばうように彼女達の方を向いて立っていた。その体中から何かが突き出ている。

「・・・アノルンって、こんな装備付けてたっけ？」
「・・・怪我してない、アンタ達？」
「アノルン！」

リサの一言で我に帰るアルフィリース。ぐらりと倒れかかるアノルンを抱えるが、アノルンの口から血が吹き出ている。

「ド、ジったぁ・・・うぶっ」

さらに大量の血をアノルンは吐き出している。

「アノルン、アノルン！　な、なんてこと、血が止まりません。ア

ルフィ、何をぼやっとしてるんです！　血止めを！！」
「なんで・・・アノルンの胸からこんなのが突き出てるの？？」

体を何本かの矢のようなものが貫いているが、心臓の位置からも矢が突き出ている。これでは・・・助からない。まるで現実感のない光景をアルフィリースは頭のどこかで冷静に分析しているが、リサは完全にパニック状態だ。

「なんでもいいから血を止めるものを早く！」
「これって・・・致命傷、だよね・・・？」
「アルフィー！！」
「なんで・・・あんなに強いアノルンが・・・なんで・・・」
「脈が・・・脈が急激に弱くなってる・・・こ、これでは・・・」

リサが懸命にアノルンに呼び掛けてるが、遠い世界の出来事のように声が遠ざかり、アルフィリースの目の前が真っ暗になっていった。アルベルトが剣を構えなおした姿がぼうっと見えるが、まるで夢の中の出来事のようだ。

「（アルベルト・・・一体何に剣を向けてるの？？）」

そのアルベルトの剣が向いた先では――
魔王が再生を始めていた。いや、正確には違う。輪切りにした二つの柱から、中身である何か肉のようなモノが這いずり出てきていた。そして人型に変形していく。
片方は顔らしき部分に大きい一つの目が。もう片方は全身に小さい目が浮き出てきている。そして共通するのは体の正中に大きな口が縦に開いていること。さらに手がそれぞれ5本と6本。手の先に指はなく、爪のようなものが不規則に生えている。そしてそれらの目がアルフィリース達を認識すると、ケタケタと笑い始めた。

「アルフィリース殿、一度撤退を！　シスターを連れて早く！　ここは私が時間を稼ぎます」
「・・・どいてよ、アルベルト」
「アルフィリース殿！」
「私は、どけと言った！！」

瞬間、凄まじい殺気をアルベルトは自分の背後から感じ、思わず身がすくんだ。彼は剣を握っておよそ２０年、戦場に出てから既に１０年。恐怖や冷や汗を感じることはあっても、圧力で身がすくんで動けなくなったことなど一度もない。そのアルベルトが一歩も動くどころか、振り返ることもできずにいた。そしてその横をアルフィリースが悠然と歩いて前に出る。

「お前達が、アノルンをやったのか？」

女性とは思えない程低く威圧的な声で発するその問いに、答えることなくケタケタと笑い続ける魔王達。

「・・・その鬱陶（うっとう）しい笑いを止めろっ！」

アルフィリースが叫ぶと、一帯の大気がざわりと震えた。流石の魔王達も驚いたのか、笑いが止む。

「真っ二つにしても死なないのね・・・わかったわ、跡形もなく消し飛ばしてあげる」

聞いたこともないような暗く深い声をアルフィリースが発する。そしてアルフィリースが右腕の袖を引きちぎるとそし下の呪印が姿を表す。その当の呪印はまるで生き物のように蠢（うごめ）いており、何か黒

い液体が滲み出てきて、彼女の足元に小さな水たまりを作っていた。血かとも見えるが、それにしては色が黒すぎる。

アルフィリースの、女性の体にそのような黒いモノ（呪印）が蠢いているのは、見ているアルベルトに生理的な嫌悪感をもよおした。だが一向にアルフィリースは気にかけていない。もはや怒りでそれどころではないのだろう。

【解呪（リリース）】

その一言で右腕の文字が空中に浮き出てくる。

【我と誓約を結びし古の封印よ、我が血肉を代償にさらなる力を我に授けん。汝が誓約の主はアルフィリース。その因果と律により、我が敵の全てを貪（むさぼ）れ！】

そして空中で組み換わり、再びアルフィリースの右腕に戻っていく。するとアルフィリースの体から、可視化出来るほどの魔力がほとばしり始めた。

続く

ルキアの森の魔王戦、その3～呪印解放～（後書き）

閲覧・評価・ブクマ・感想ありがとうございます。筆者のやる気につながっております。

次回投稿は１０／２１（木）２０：００です。よろしくお願いします。

ルキアの森の魔王戦、その4～怒るアルフィリース～（前書き）

～あらすじ～

魔王の凶刃に倒れるアノルン。その時、怒りに我を忘れたアルフィリースが呪印を解放する！

ルキアの森の魔王戦、その4～怒るアルフィリース～

アルフィリースの体からは気体の様なオーラが噴出され続けている。魔術の研鑽をつんだ者が魔力を全力で解放すると、その者の性質に応じたオーラが見えることはある。色はそれぞれの使う魔術の属性や、あるいは使用者の性質を示す。そして形は、大抵が使用者の回りに張られる膜のように見える。量が多い物はまるで液体かゼリーを体に張り付けたかのように見える事もあるのだが、アルフィリースのそれはいずれとも違う。

放出する量が多すぎるがゆえに、まるで空気を彼女が全身から噴出し続けているようだった。また色も一定ではなく、光の加減や何かで、7色、あるいはさらに多くの色に輝いて見える。量も、質も、あまりに異質。

そのアルフィリースの様子を見て、さすがに魔王達も危険を感じたのか。2体ともじりじりと後ずさりを始めるが、

「逃げられると思ってる？《大樹封（フォレストバインド）》」

アルフィリースの一声と共に周囲の木々があっという間に伸びてきて、魔王達を絡め取った。魔王達は逃れようともがいて爪で木々を切断するが、後から後から伸びる木々がそれを許さない。

その驚愕の光景をアルベルトもリサもただ呆然と見守るのみだ。

そして・・・

「再生なんてできないくらい、ズタズタにしてあげる」

くくっ、とアルフィリースが不敵に微笑むと、彼女からザワザワとさらに強い風が発生し始めた。アルフィリースを中心として、放射状に草がなぎ倒されていく。

【我、風の神、ティフォエウスに伏して願い奉る】

一段と強い風がアルフィリースの周囲に集まる！

【我が掌に集いし風の精霊に汝の加護を与え給え。其が力を用いて我が眼前の者共を大気の獄中に掌握せしめん】

《巨人（マウンテン）の風掌（ブロウ）！》

瞬間、風で構成された人間大の巨大な手が浮き上がってきた。しかも一つではなく、次々と周囲に同様の大きさの手が浮き上がってくる。そしてそれらの手が四方八方から魔王達に襲いかかっていく。

「ギィアァァァァァァ」

魔王達が巨大な風の塊に握り潰されるように体をひしゃげさせる。メキメキと嫌な音が響き渡り肉の塊から血のような何かが噴き出すが、圧倒的な風の奔流が魔王の絶叫をかき消すと同時に、その血も風の牢獄に巻き込んで行く。が、魔王達はその中ですら体をまだ再生させようとしている。これでも致命傷ではないのか。そのようにアルベルトとリサが考えた時、

【我が血を喰らえ火の精霊】

アルフィリースが次の魔術詠唱に入っていた。自分の掌を軽く斬り裂き、血を地面に滴らせている。するとその血からが沸騰するようにゴボゴボと泡立ち始め、一面に広がっていき、そこから何体もの獣が出てきた。鳥、オオカミ、馬、熊――のような者たちが次々と湧き出てくる。

【集いし精霊を分けて分けて虚ろなる器に収めて舞い遊ばす。我、舞いし精霊にさらなる贄を捧げん】
《炎獣の狂想曲（フレイム カプリッツィオ）！》

その一言と共に舞い出た獣たちが一斉に魔王達に襲いかかった。そして周囲にある風の魔術の影響を受けて、まるで炎の竜巻のようになっていく。詠唱名の通り、まさに狂った宴そのものだ。必死に炎を振り払おうとする魔王達だが、振り払った火の粉までもが再び魔王に襲いかかる。そう、アルフィリースが詠唱したのはただの魔術ではなく、暗黒魔術の類いであった。

魔術には属性による系統と、使用方法による系統がある。属性であれば火・水といった具合だが、使用方法による系統はやや複雑だ。いくつか紹介しておくと、純粋な信仰による精霊魔術、演算による理魔術、契約による召喚魔術などがある。ちなみに今アルフィリースが使ったのは、使用者に何らかの代償や贄を要求する暗黒魔術である。暗黒魔術は代償も大きい代わりに威力も大きいが、使い続ければ本人の属性すら闇に染まるといわれる危険な種類の魔術である。

ともあれ、アルフィリースが放ったのは対象を焼き尽くすまで消えることのない、暗黒系統の火の魔術である。さすがの魔王達も火と風に飲まれて、もはや絶叫すら聞こえてこない。その光景をアルフィリースはただ何の感情もなく、瞬きすらせずに見つめていた。

そして火が収まり、後には文字通り塵すら残らなかった。敵を倒したことを確認したアルフィリースが、アノルンの方向をゆっくりと振り返る。

「あ・・・」

振りかえったアルフィリースは別人のようだった。いつも明るいはずの彼女の表情は無表情だったが、凄絶な何かを感じさせた。目

の見えないリサでさえ、アルフィリースが今までと違うただならぬ表情をしていることがよくわかった。表情はなくても、目は悲しみに満ちていたのだ。そして体から放出される殺気は、まるで治まるところを知らない。

リサが何か声を発しようとするが声にならない。あまりのアルフィリースの魔術と殺気に圧倒されて、腕にアノルンを抱きかかえてるいることすら忘れてしまっていた。

「（凄まじい魔力・・・これだけの魔術はかなり高位の魔術師でも何かしらの準備や触媒を必要とするはず。それをたかが少量の血程度で連発し、あげく最初の一つは詠唱すらしなかった。やはり私が最初にアルフィリースの袖を引いたのは間違いじゃなかった！）」

「アルフィリース殿？」

アルベルトが声をかけるが反応がない。どうもアルフィリースの足取りがおぼつかない。

「アノルン・・・助けられなくて・・・ごめん、ね」

呟きながらアルフィリースはその場で気を失ってしまった。

＊＊＊

アルフィリースは夢を見ていた。かつて彼女の師匠、アルドリュースと行った会話の一端。

「ねえねえ、師匠。もし私が呪印を解放したらどうなるの？」

「そうだな。使っている時はよいかもしれないが、使い終わった後の疲労がすごいだろうな。また、うかつに開放すれば呪印の侵蝕は進む。そうすると苦痛が強くなるな」

「それでも使い続けたら？」
「アルフィがアルフィでなくなり、呪印がお前となるだろう」
「そ、それは嫌だよぉ。じゃあ私、呪印は絶対使わない！」

アルフィリースは怯えたように潤んだ目でアルドリュースを見上げる。そんなアルフィリースに優しく微笑みかけるアルドリュース。

「そうだ、それがいい。でもお前が死んでは元も子もないし、どうしても使わないといけない時があるかもしれない。その時、場所、場合はお前が慎重に見定めるんだよ？」
「うーん、わかったような、わからないような？」

アルフィリースは腕を組んで首を傾げ、そんな様子をにこやかに見つめるアルドリュース。

「今はそれでいい。たとえばお前に大切な友達ができて、その友達を助けるときとかなら――使ってもいいかもしれないな」
「うん、じゃあそうするよ師匠！」

元気のいい返事に、アルフィリースの頭をアルドリュースは撫でてやる。

「よし、いい子だ。呪印は強い負の感情によっても解放されることがあるから気をつけるんだよ？　それでは今からいざというときの呪印を解放する方法について教えておこう――」

そしてアルドリュースはアルフィリースに呪印を解放する時の方法を伝えていく。あの頃はアルフィリースは、呪印を解放するということがどういうことなのか、まだよくわかっていなかった。

「（・・・そうだ。友達を守るためには呪印を解放していいって、あの時決めたんだった。最初から解放していればアノルンは死なずに済んだのに・・・ごめんね、ごめんね。アノルン――）」

アルフィリースの意識が光を掴むように覚醒していく。

「アノルン！！」

「ん、なんだい？」

うなされてアルフィリースが飛び起きるとそこはベッドの上だった。そして目の前には何もなかったようにアノルンが座っている。どうやら果物をナイフで剥いてくれているらしい。中々華麗なナイフ捌きだ。

「上手いわね・・・じゃ、なくて！　あれ、でもアノルンって死んだんじゃ・・・」

「アタシを勝手に殺すな！　ぴんぴんしてるよ？」

「え、だって、アノルンは心臓を貫かれて・・・私、夢でも見てた？」

「うんにゃ。貫かれたよ、ほれ」

確かに服はいたるところが破けており、アルフィリースが見た貫かれた場所と一致する。では夢ではなかったのだ。しかしアノルンには傷一つない。

「な、なんで傷一つないの？」

「ん・・・・・騙すつもりじゃなかったんだけどね・・・私、何しても死なないんだ」

アノルンがきまり悪そうに話す。

「生まれつきこういうわけじゃなかったんだけどさ。とりあえず今は何されても死なない。八つ裂きにされたこともあるけど死ななかったしね」
「・・・」
「あ、でも首を落とされたら流石に動けないよ？　それに痛くないってわけでもないし。心臓刺されるとか痛すぎて動けないから」
「・・・」
「気持ち悪いでしょ、こんな人間？　もう人間ですらないかもしれないけどね。アルフィも無理しなくっていいよ。もうアタシ、アンタの目の前から消えるからさ。こんな気持ち悪いのと一緒に旅とか、無理だもんね・・・」
「アノルン！！」
「は、はいっ！」

突然大きな声で名前を呼ばれ、思わず畏まってしまうアノルン。

「そんなことより前に、私に言うことないの？」
「そ、そんなことって。アタシだって結構一大決心で言ったのに・・・」
「アーノールーン？」

なんだかアノルンにはよくわからないが、アルフィリースの目が真剣に怒っている。

「（こんな剣幕でじっと見られたことなんか、この子と旅していて一度もなかったわね・・・どんなにからかっても決して怒らなかったのに）」

そうとうに決まりが悪いが、ごまかしがきく雰囲気じゃないこと

くらいはアノルンにもわかる。

「あー、うー、・・・・・ごめんなさい」

「よろしい。じゃあ許したげる」

そう言ってアルフィリースがアノルンを抱きしめた。

「私の方こそごめんなさい・・・私が最初から呪印の力を解き放っておけばアノルンは、大切な友達は死なずに済んだのにって夢に見てたのよ！　でも、でも・・・生きててよかった・・・本当に！」

アルフィリースの肩が小さく震えている。そのアルフィリースをそっと抱き返しながら、アノルンは思う。

「（泣いてるんだ。この子は私のために泣いてくれるんだ。私のことを不死身だと知っても変わらず接してくれたのは、これで・・・三人目だ）」

アノルンの胸の内にも熱い思いがこみ上げてくる。

「私のこと、友達だって思ってくれるの？」

「当り前じゃない！　何言ってんのよ！？」

「でも、私不死身だよ？　もう３００年は生きてるよ？？」

「関係ないよ！　アノルンはアノルンでしょう？」

アノルンの目をアルフィリースは真っ直ぐに見つめている。そういえば、昔同じことがあったなと、アノルンは思い出す。

『不死身？　それは重要なことか？？』

『不死身？　それじゃ永遠に美人のまま？　最高だね！』

そう言ってアノルンのことをまっすぐ見つめた2人の顔が思い出される。

「（そうか。マスターの言った前に進むって意味がちょっとわかった気がする。私はこのままじゃいけないんだ）」

アノルンは覚悟を決めた。今が・・・今こそがきっと自分にとっての試練の時なのだと腹をくくる。

「・・・ねぇ、アルフィ。アンタだから言うけどさ。アタシの昔話、聞いてくれる？」

「・・・私でよければ」

アルフィリースが優しく微笑む。ああ、この子なら大丈夫だとアノルンは安堵し、彼女はポツリポツリと自分の過去を話し始めた・・・

続く

ルキアの森の魔王戦、その４～怒るアルフィリース～（後書き）

閲覧・評価・ブクマ・感想ありがとうございます！　筆者の励みになっております。

アルフィリースは結構なチートでは？　という質問も出ましたが、決して彼女はチートではありません。それは話が進むとわかると思います。また話は徐々にシリアスになっていきます。コメディタッチももちろんですが。

投稿は１０／２２（金）１２：００に行います。

アノルンの告白、その1（前書き）

～あらすじ～

魔王戦の後、不死身であることをアルフィリースに告げるアノルン。

彼女の口からその過去が今語られる・・・。

アノルンの告白、その1

「アタシね、山間の薬師の村に生まれたんだ」

アノルンがふと遠い目をする。

「族長の孫でね。村じゃ『お嬢様』なんて呼ばれてた。アタシがだよ？」

はは、と乾いた笑いを漏らすアノルン。どこか自嘲的だ。

「うちの村では色んな薬を開発してた。回復に使うものが中心だったけど、他にも爆弾みたいなものを作る奴もいたし、毒薬なんてのもいたな・・・一番有名なのがエリクサーかな」

「エリクサーってあの、死人も甦らせるってやつ？」

「流石に死人は無理だけど。でもどんな重態でもほぼ一発で回復だったね。あれで治らない病の方が珍しかった」

「確かすごい希少価値の高い薬よね？　エリクサーを求めようと思ったら、小さな町が一つ買えるって聞いたわ」

「今はそのぐらいするらしいね。まあ作り方を知ってるのは、もう世界でアタシだけでしょうよ」

「アノルン、作れるの！？」

「ちっとはアタシのすごさが分かったかい？」

そんなものを作れなくてもアノルンを色々な意味で凄いと思ってるアルフィリースだったが、それは口にしないでおいた。

「ただ材料がもう揃わないさ。アレは材料を取ってくる奴らがいての話だからね。と、話がそれたか」

アノルンが頭をぽりぽりとかいて話を続ける。

「で、アタシの村では薬を開発してナンボだからね。アタシも7歳で自分の工房を与えられ、色々と研究してた。んで13の時かな？　ばあちゃんが倒れてね。ばあちゃんは寿命だって言ってたんだけど、アタシは納得できなくて・・・馬鹿なことに寿命を延ばす研究なんてのを始めたんだ。まさに子供の発想だろう？」

「そんなこと・・・」

何かを言いかけるアルフィリースをアノルンは手で制する。

「いいのよ。それでアタシは工房に何カ月も引きこもってた。それで不思議なもんでね、寿命がちょっと伸びる薬が本当にできちまったんだよ。こんなアタシでも薬作りの才能だけはあったのかな。アタシは嬉しくって、すぐばあちゃんに飲ませようと薬を持って外に出た。そしたらね・・・」

アノルンがふと暗い目をした。

「みんな・・・殺されてたんだ」

「な、なんで!?　誰に？」

「わかんない」

アノルンが首を振った。

「アタシ達の薬は金の成る木だった。そりゃ敵が多いのも知ってたけど、多すぎてわかんなかった。アタシはまだ子供扱いされてて詳しい話は知らなかったし。お笑い草さ。寿命を延ばす薬を研究してるその上で、皆殺されてたんだから。皆が殺されて怒りもしたけど、

それ以上にアタシは怖くなっちまってね。助けを求めようにも世界中が敵に思えて・・・恥ずかしいことに工房に引きこもっちまったんだ」

「工房に？」

「うん。工房は自給自足ができるほどには広かったし、アタシの工房は地中深くて見つからなかったし、唯一安全なように思えたのさ。それでさらに『みんな生き返らせればいいんだ』って思い始めてた。どこかおかしくなってたんだろうね・・・」

淡々とアノルンは語り続ける。

「それからどんくらい時間がたったかもわかんなかった。色んな薬を作っては、自分で試してね。時に毒薬みたいなのも作っちゃって死にかけた時もあったな・・・そのまま死ねればって思ったけど、アタシ案外しぶとくてね。ある時、材料の植物を取りに別の部屋にいったらさ、植物が枯れてたんだ。確か寿命が３０年くらいの奴。それで『アタシいつの間にかおばちゃんだぁ』って思って鏡を覗いてみたんだ。そういや工房にこもって誰とも会わないし、一回も自分の顔を見てないと思いだしてね。さぞかしひどい顔になっただろうから、爆笑できるかと思ったんだけど、アタシの顔はどうみても２０代のものだった」

アルフィリースは言葉もない。

「最初はわけがわかんなくてね。アタシって４０代でもこんな顔してんだって思ったけど、しわの一つもないのは変だなって思ったくらいで、その時はなんとも思わなかった。ところが、ある日間違えて爆発物に引火しちゃってね。しかも目の前で。アタシは粉々になって吹き飛んだ・・・はずだった」

「・・・」

「ああ、死んだ。これで家族や皆の所に逝けるって。アタシの人生つまんなかったなってくらいだった。ところが、しばらくするとアタシは傷一つ無い状態で目が覚めた。服はぼろきれ状態で、工房の中もめちゃくちゃなのに。それで気がついたんだ。アタシは不老不死になってたんだっってね」

「どうして・・・」

「アタシもわかんない。色んな薬片っ端から試したからどれか一つがそうだったのか、順番が大事だったのか。なんせ爆発のせいで研究成果も燃えちゃったからどうともできなくて。あ、でも不老不死っていってもアンデッドじゃないから首が切れたら機能的に動けなくなるし、飢餓状態でもダメ。エネルギーを自分で無限に作り出せるわけじゃないから。凍っても動けないから同じかな。アタシの不老不死は、『元に戻る』っていうのが正しいのかもしれない。

それにお腹も人並みに空くし、睡眠もとらないと力が出ない。でも不老不死なんてまっぴらごめんだと思ってとりあえず色々やって死のうとしたけど、燃焼性の爆弾飲み込んでの自殺が無理だった時点で死ぬのは諦めた」

「そんなことまで・・・」

アルフィリースは悲しそうな顔をした。明るいアノルン――少なくともアルフィリースはそう思っているが――がそこまでやるとは、余程人生に絶望していたのだろう。

「他にも色々やろうと思えばできたけど・・・あんまり自分をいたぶるのは趣味じゃないし、もうこれは天に『生きろ』って言われてるのと同じなんだって思うことにしたわ。ちょっと外の世界にも興味があったし、元々ネアカではあったからね。で、村で使えそうなものを引っ掻き集めて旅に出たのさ。もう何十年も経ってたから、さすがにアタシがあの村の生き残りだなんてばれないと思ってね」

「・・・」

「んで、傭兵を始めたのさ。護身術くらいは身につけてたからなんとかなるかってくらいの軽い気持ちでね。不死身になって気も大きくなってたし、実力の伴わない不老不死の恐ろしさその時はわからなかった。まあ完全に人生を舐めてたけど・・・最初のころのアンタと同じさ、アルフィ」

「？　同じ？」

首をかしげるアルフィリースに、アノルンがちょっと小馬鹿にしたように話す。

「カモがネギしょって歩いてるってやつさ」

「ひどい！」

「ま、でも実際そのとおりさね。女一人の冒険者のくせして、町に入っていきなり『一晩泊れるところはどこですか？』なんて通りすがりの男に聞いちまうんだから。・・・その後アタシがどんな目に遭ったか、わかるだろ？」

「・・・それは」

アノルンはあえて語らなかったが、どういう意味かはアルフィリースには容易に想像がついた。アルフィリースも同じである。

冒険を始めて、最初に訪れた村でのこと。次の村の場所を確認するためにその辺の男性に声をかけた。実に奇妙なほどに親切にしてくれたその男性は仲間と一緒に晩御飯までおごってくれ、ご丁寧に酒まで出してきた。アルフィリースはその時酒など飲んだことがなく、どの程度が自分の適量かもわからず勧められるままに飲んでしまった。そして意識が朦朧とする中、男性達が交わしていた言葉をおぼろげに覚えている。

（おい、また旅の女をかどわかすのかよ・・・いつか天罰が当たるぜ、お前ら？）

（へへへ・・・当たるならとっくに当たってるさ。全く女って奴はバカばっかりだな、女の一人旅でノコノコと男について来て酒を飲むなんてよ）
（そうそう、悪いのはこの女が無知だからだぜ。俺達は親切に世の中の厳しさを教えてやろうとだな・・・）
（ったくゲスどもが。一回地獄をめぐってきやがれ）
（とかいいつつ、酒にしびれ薬を混ぜてる店主はなんなんだよ・・・どうせ俺達が帰った後にゆっくりご相伴にあずかろうてな腹積もりだろうが、このタヌキ親父め）
（俺は宿の部屋を貸すんだからな。その代金分頂いているだけさ）
（そんな言い訳あるかよ・・・いいから奥を借りるぜ）
（あっちの連中も見てるぜ、いいのかよ）
（なあに、口封じに後でこの女の相手させてやればいいさ。この辺じゃ滅多に見ねぇ上玉だからな、アイツらもちろちろ見てたじゃねぇか）
（でも黒髪だぜ・・・魔術師じゃねぇのか？）
（知るかよ、こうなったらもう抵抗できねぇさ）
（それもそうか・・・じゃあやっちまうか？）
（ああ）
（待ちな！）

そこからアルフィリースの記憶はぼんやりとしている。ただおぼろげに男たちの悲鳴と、建物が崩壊していく音を聞いた気はする。
目が覚めると、金髪の美しいシスターが心配そうな顔をして自分の顔を覗き込んでいた。その後、二日酔いの状態で何時間もたっぷり説教をされたのは記憶に鮮明だ。あとボロボロになった男たちと、宿屋の残骸も。
そう、自分はアノルンに間一髪助けられたが、きっとアノルンは誰の助けも来なかったのだろうとアルフィリースは想像した。

「だから最初にアンタを見た時他人の気がしなかったのさ。最初の頃のアタシそのまんまだと思ってね。アタシは痛い目をいっぱい見て、いっぱい色んな事を知ったけど、良い経験とはお世辞にもいえなかった。アンタには同じ経験をしてほしくなかったんだ、年頃の女としてはね」

「アノルン・・・」

「んな辛気臭い顔するなよ。おかげでアタシは強くなった。鍛錬も一杯したし、する気になった。汚いことも一杯やった。人を騙しても平気になった。人間は利用し利用されるもんだってね。利用される奴は馬鹿なんだって本気で思ってた。もちろんイイ奴らもいっぱいいたよ？　アタシに良くしてくれて、すごく平穏に過ごせた場所もあったけど、それでも一か所には長く留まれなかった。アタシは老いもしないし、死にもしない。何年も姿形が変わらないと、段々周りに不気味がられてね。化け物呼ばわりされたこともあったな・・・そんな時ある人たちに会ったのさ」

アノルンの目が急に優しくなった。

「もう１５０年近く前かな？　当時はまだ魔王みたいな連中が沢山いてね。沢山って言ってもほとんど征伐されてたから大戦期ほどじゃないんだろうけど、人間達の争いで色々手も回らないことも多かったから、その間を縫うように勢力を広げてきた魔王が何体もいた。歴史的には小物なのかもしれないけど、一時的に魔王が勢力を取り戻しかけた時期で、世の中も荒んでた。

そんな中で魔物討伐を無償で引き受けてる連中がいたのさ。俗に言う勇者様御一行ってやつだ。勇者、格闘家、シスター、魔術師の組み合わせでね、ベッタベタだろ？　最初は『バッカじゃないの？』って思ってつっかかった。アタシも既に今くらい強かったしね。その辺にいたアタシの子分をけしかけて、戦うように仕向けたのさ」

「・・・それで？」

「見事にコテンパンにされたよ。４人とも化け物みたいに強くてね。特に勇者の強さは別格だった。アタシなんか片手でひねられちゃったよ。さすがに勇者認定されるだけのことはあったようだね」
「ウソ？」

オークの群れを無傷で追い返すアノルンを片手でひねるとは、いったいどれほどの戦士なのか。アルフィリースには想像もできなかったが、きっとアルベルトともいい勝負ができるのではないだろうか。もっともその領域に到達していないアルフィリースには、比べるべくもない。アノルンもまた自分でも信じられなかった事を表すように、肩をすくめておどけてみせた。

「嘘みたいな本当の話さ。アタシ自身が一番信じられなかったけど、一番信じられなかったのはその後さ。勇者の奴、なんてアタシに言ったと思う？」
「なんて言ったの？」
「『私の仲間になってください、私には貴女の力が必要です。一緒に世界を救いましょう！』ってね。なんて阿呆で暑苦しくて鬱陶しい奴だって思ったさ。そんだけ強かったら別にアタシの力もいらないだろうにってね。でも他にやることもなかったし、どこで化けの皮が剥がれるか見てみたくて、付いて行くことにした」

アルフィリースがふふっ、と笑う。

「なによぉ？」
「だってアノルン、ひねくれてるなって」
「しょうがないでしょ、本当のことなんだから。でね、色んな所に行って色んな冒険をしたの」

アノルンは楽しそうに語りだす。今までの様子とはうって変わっ

た。

「あの頃は本当に楽しかった。最初は馬鹿にしてたアタシだけど、その勇者は本当に聖人みたいな奴だった。誰にも見返りを求めずに戦い続け、そしてどんな苦境でも常に乗り越えて見せた。なのに全然威張らなくてね。子供のケンカを止めに行って、自分が殴られて帰ってくるような男だった。でも本当に強い男はこういう奴なんだって思ったわ。・・・そのうち、アタシは知らないうちにアイツのことを好きになってた」

「・・・」

「どんなにアプローチしても全く気付く素振りもないから、ある日ね、寝室に夜這いをかけに行ったわ」

「・・・どうなったか、聞いてもいいのかしら」

「ええ。ベッドで寝てる彼の目の前に、布切れ一枚纏わず立って誘惑してやったわ。そしたら彼、なんて言ったと思う？『い、いけません！　私と貴女は恋人同士ではありませんから、そういうことはいけないと思います！　は、早く服を着てくださいっ！』ってね。アタシ我慢できなくて爆笑しちゃった！」

「それはいくらなんでもひどくない？　自分から仕掛けといて」

良い話を期待していたアルフィリースは少し呆れかえる。

「だっていい年した大人のくせに、あんまりにも顔を真っ赤にして、女の子の裸を初めてみた少年みたいな反応なんだもん！　思わず『じゃあ、アタシが恋人だったらいいの？』って聞いちゃった。そしたらしばらく固まった後、『私みたいなとるにたらない人間が、貴女のような美しい魂の方の傍にいてもよいのであれば・・・』って言ったのよ！　容姿を褒められたことは何度もあったけど、心を見てくれたのは彼が初めてだったかもしれない。その時、一生ついて行こうって思ったわ」

アノルンが少女のように顔を赤くしながら話す。本当に彼のことを好きだったことが、痛いくらいアルフィリースには伝わってきた。

続く

アノルンの告白、その１（後書き）

閲覧・評価・ブクマ感謝しております。活動報告でも述べましたが、投稿から１５日目で無事ＰＶ１００００突破いたしました。この場を借りて読者のみなさんに感謝の意を述べさせていただきます。これからもより楽しい物語にできるように精進してまいります。

次回も続きますが、その後場面が写ります。

次回は１０／２３（土）１２：００に投稿です。

アノルンの告白、その2（前書き）

～あらすじ～

アノルンの告白は続く。それは彼女の楽しくも悲しい記憶。そしてそれを心配そうに見守る姿が１つ。

アノルンの告白、その2

「それからちゃんと恋人になって・・・色々あったけど、しばらくして彼が『私と結婚してくれませんか?』ってプロポーズしてきたわ。でもアタシは断ってしまった。なんて言ったって不老不死だしね。結婚すれば、いずれそれがわかってしまう。不老不死がばれると、今の関係が壊れてしまいそうで怖くて真実を言えなかった。アタシは今の幸せを壊したくなかったんだろうね。それがそもそもの間違いだったんだけど。

でも、彼は非常に我慢強かったわ。アタシはてっきり振られると思ったんだけど、『結婚が嫌なら無理にとはいいません。でも私は貴女とずっと一緒にいたい』なんて言うの。『じゃあ勇者の仕事を辞められる!?』なんて駄々こねたのに、即答で『貴女がそう望むのなら』って言われたわ・・・」

「・・・」

「そこまで言われたらアタシも断れなくて。っていうより純粋に嬉しかったな。それから半年くらい二人っきりで暮らしたかな。辺境の、彼を勇者だと知らない様な場所で。彼は近くの村で教師の真似事を始めて、私は田畑を耕しながら彼の帰りを毎日待った。週に一回は休みを取って二人で色んな所に出かけて、毎日沢山愛してもらった・・・アタシの人生で最高のひと時。でも同時に深い絶望もあった。アタシは、自分が子供を産めない体なのに気が付いてしまった」

アノルンの瞳が曇っていく。

「本当は結婚を受け入れるつもりだったわ。でも結婚するより先にそのことに気が付いてしまって・・・不老不死の代償のようなものでしょうね。アタシは半年経っても真実を告げることができなかっ

た。それでも彼はいつでも微笑んでいて、それが逆に段々つらくなっていった。そんなと時よ、久しぶりに魔王討伐の依頼が来たのは。最初は難色を示したけど、仲間たちも押し寄せてきてね。どうやら相当強力な奴だったらしく、既にいくつかの王国が滅ぼされ、近隣一帯で最強と言われた騎士団が敗北していたわ。それで残党を集めて反攻作戦を行うから、それに参加してほしいって言われたの」

「行ったの？」

「ええ、彼は断りきれなかった。だって生まれ故郷のことだったからね。でもそれが既に魔王の罠だった。結果的に私達は、自分達のパーティーメンバーだけで魔王の本拠地に突っ込むことになったわ」

「そんな無茶な！」

アルフィリースは思わず叫んだが、アノルンは目を閉じて動じない。当時の彼女は、アルフィリースと同じセリフを叫んだ事を思い出す。

「そうね、普通に考えれば無茶だけど、私達は負けるつもりなんて微塵もなかったわ。中では数えるのもおっくうなくらいの魔物が待ち構えていたけど、私達は次々と撃破していった。魔王にとっても私達の強さは誤算だったでしょうね。でも私達も魔王を舐めていた。まさか魔王が複数いるなんて考えてもいなかったから」

「魔王が・・・複数？」

「ええ、全部で6体。どれもさっきやった気色悪いやつより強かった。その時は勇者のあまりの強さに、一部の魔王達が危険を感じて一時的に手を結んでいたみたい。それでも魔王達を次々倒したけども、仲間達も次々と倒れていったわ。そして最後はアタシと彼と、魔王2体との戦いになった」

「・・・」

「アタシは完全に足手まといになるくらいのレベルの戦いだったわ。だから1対2のはずなのに、それでも彼は優勢に戦いを進めていた。

その時、魔王が卑怯な手を使ってきてアタシ達は不意をつかれたわ。アタシは彼をかばおうとしたけど、一瞬、自分の不死を知られたくないという気持ちがアタシの動きを邪魔したの」

アノルンの瞳が一層暗く、深く沈んでいく。

「でも彼は・・・彼はなんの躊躇もなくアタシをかばって死んだわ。しかも、今際の言葉が『貴女を最後まで守れなくてすみません』よ!?　アタシは守られなくても死ぬことはないし、アタシの方が彼を守るべきだったのに！」

アルフィリースはかける言葉がみつからない。アノルンが目に涙を浮かべ始めた。

「その魔王はきっちりアタシが仕留めたわ。跡形もなく、ね。原型も残らないほど、生きたまま粉々にしてやった。でも空しかっただけ。その後私はヤケになって、魔物を片っ端から狩って回ったわ。そのうち、別の魔王を狩ったときかしら。戦いの後で力を使いはたして全く動けないときに、今の教会の最高教主に拾われたわ。でもその後も無気力で、何もやる気が起きなかった。自分で死のうとしたし、自暴自棄なことも色々しようとしたけど、教主が許してくれなかった。もう人生がどうでもよかったし、いっそ出家でもしようかと思ったときに、教会でラザール家のあいつに会った」

「・・・」

「勇者とはうってかわって軽薄な奴でね。会うなり尻を触られたのを覚えているわ。手加減なくひっぱたいて、いえ、ボコボコにしてやったけど、翌日何もなかったようにまたセクハラしてきたわ。そのくせ平気で他の女にちょっかいだすし・・・鬱陶しいばっかりで、顔を見るたび腹が立ったわ。

でも、不思議なのよ。いなけりゃいないでなんだか物足りなかっ

た。アタシのことを好きなのかな？　くらいに思ってたけど、でもある日突然他の女と結婚したわ。その時アイツ、なんてアタシに行ったと思う？『いやー、ゴメン！　君に飽きちゃった！！』って言ったのよ？　全力で殴り飛ばして、前から話が来ていた巡礼の任務にそのまま就いたわ。旅の中でもアイツのことを思い出すたび腹が立って、イライラしたわ。でもなぜか巡礼の任務を行う１１８年もの間、一度たりともその顔を忘れることはなかった・・・理由はさっきわかったけどね」

アルフィリースはアノルンをみつめながら話を聞いている。ふと、アノルンがカタカタと震え始めた。

「さっきアルベルトに彼の手記を見せてもらったわ・・・彼の手記には『我が人生でただ一人、心から愛するシスターに捧ぐ』と書かれていたわ。一目見た時からアタシに心奪われたこと。アタシの姿が助けを求めているように見えたこと。どれほど戦場で死にかけても、アタシの顔を思い出すたびに生きる気力が湧いたこと。アタシが寂しそうな顔をするたびに、何もできない自分に腹が立ったこと。アタシが寂しい顔をしないように、自分は嫌われてでも、いつもアタシの気を紛らわそうとしていたこと。自分は子孫を残すために、最後までアタシの傍にいれないことを悔いていること。そして自分の妻や愛妾達に、心から愛していると言えなかったことを詫びていた――アタシは、アタシは――」

ついにアノルンの瞳から大粒の涙がこぼれ始めた。

「アタシは何もわかってなかった！　彼の心遣いも、彼の苦しみも、アタシが本当は彼を愛しく思っていたことすら！！　彼の顔を思い出すと、いつも、いつも、笑顔なの！　アタシの前ではどんなに自分が苦しくても、どんな傷を負っていても、常に一番にアタシを案

じて、苦しい素振りすら見せなかった！　なのに・・・なのにアタシは、2年近くも顔を突き合わせていて、彼に優しい言葉一つもかけずに、挙句の果てに『お前の顔なんか2度と見たくない！』って言ったのよ!?　な、なんて、なんてひど・・・い・・・ひどいこと・・・」

アノルンの頬を伝う涙が止まらない。さぞかし自分はひどい顔をしていることだろうとアノルンは思うが、涙が止まらない、止める気にもならない。

「（今彼が死んだことが、初めて心から悲しい。ずっとアタシは周りにも自分にも嘘をついて・・・そしてこんなひどい人間のアタシを、アルフィは軽蔑するだろうな。でも、しょうがないよね・・・）」

と、ふわりとアルフィリースがアノルンを抱きしめてきた。

「アル・・・フィ・・？」

アルフィリースがアノルンを抱きしめる手に力を込めてくる。

「もう、我慢しなくていいんだよ・・・ね、アノルン？」
「私、我慢しなくて・・・いいの？」
「人間はこういうときくらい泣いてもいいんじゃないかな？」
「私人間じゃ・・・」
「人間だし、私の友達だよ？」
「・・・う・・・うわあああぁぁん！」

もう自分の顔がどうなってるかとか、何を叫んでるのかもアノルンにはわからなかったが――でも気が済むまで彼女は泣きたかった。

今はただ、こうやって傍にいてくれる友達の前で――。こんな風に泣いたのは、一体いつ以来だったろうか・・・

＊＊＊

どのくらいたったのか、まだアノルンの涙は止まらない。今も悲しいし、多分これからも彼女は後悔はするのだろう。だが、目の前にいるアルフィリースと一緒に色々なものを見てみたいと思う自分もまたいる。今見るアルフィリースの顔はとても穏やかで・・・

「（そうだ、アタシが愛した人たちはみんなこういう表情をしていた・・・。そんなアルフィをみていると、アタシからも自然と優しい気持ちが溢れてくるよ・・・）」

アノルンは涙を手でふき取り、アルフィリースの方に向き直る。

「ごめんね、アルフィ。いっぱい泣いちゃって」
「いいよ。私だってたまにはアノルンを支えたいわ。いつも支えてもらってばかりだったから」
「迷惑の間違いなんじゃないの？」
「そうとも言うわね」
「こいつ！」

アノルンがアルフィリースを小突く。

「あっ、痛いわね～。馬鹿力なんだから、もっと手加減してよね！」
「それがか弱い乙女に向かって言う言葉？」
「・・・普段の調子に戻ってきたじゃない！？」
「！」

アノルンは一瞬、呆気にとられた。

「（これじゃどっちが年上やらわかりゃしない。この子、本当に18だろうな・・・？）」

ちょっと不審げにジト目でアルフィリースを見つめるアノルンだが、当のアルフィリースはそんなアノルンを見て頭に「？」が浮かんでいる。

「全く・・・今日はアタシの負けでいいわ。それとね、アタシのこと、貴女には本名で呼んでほしいわ」

「みんなの前で呼んでもいいの？」

「構いやしないわ。そうね・・・もう偽名を使う必要もないわね！　私が自分の名前を呼ばれたくないからつけてもらった偽名だし。由来知ってる？　古代語での『見知らぬもの＝アンノウン』をもじったんだって。もじりきれてないし、適当よねまったく。でもこれからは本名で行くわ！　でもフルネームだけはあなたにこっそり教えてあげる」

「へぇ、乙女の秘密ってやつかしら？」

「ってわけでもないけどね、いい？　私のフルネームはね・・・」

アノルン、いやミランダがアルフィリースに自分の名前を囁く。そしてついでにアルフィリースの耳に息を吹きかけ、彼女が悲鳴を上げたのを見てミランダが爆笑する。それを皮切りに、しばらく彼女達の笑が止むことはなかった。

そして・・・

「やれやれ、あのアホウめ、やっと乗り越えよったか！　まったく心配をかけよる。手間のかかる妹か娘を持つとこんな心境かのぅ」

その様子をきっちりと使い魔を通して見ていたのは、ミリィことアルネリア教最高教主ミリアザールである。

「アルフィリースが生きている限り、もはや心配あるまい。いや、あの分ならアルフィリースがおらんようになっても大丈夫かの？」

うんうん、と1人で納得してみるミリアザール。

「なんせ奴には・・・まあこれはとらぬ狸のなんとやらか。まずはこちらの用事を片づけるとしよう。今日こそは釣れると良いんじゃがなぁ～」

と1人ごちながら、日が暮れて黄金色に染まりつつあるミーシアの街をミリアザールは1人歩きだす。遠くを見ながらふぅ、と一つため息をつく彼女の心の内を知る者は、誰もいなかった。

続く

アノルンの告白、その2（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます！

ミランダとアルフィリースはここから親友と呼べる関係になっていきます。1話目からここまでは正直ミランダの物語と言い換えてもいいかもしれません。これからも彼女は主要な人物となりますから・・・。

また人の一生をどのように簡潔に表現しようかで悩んだ部分です。不幸自慢にもしたくないし、一度書いてだいたい消した記憶があります。しかし反響が一番あったのもこの回・・・

次回がは場面が代わり、ミリアザールのターンとなります。もうしばらくミーシアでの出来事を追うことになります。

次回投稿は10／24（日）12：00です。

アルネリア教会の最高教主（前書き）

～あらすじ～

アノルンは無事心の内をアルフィリースに告白できた。それを見届けたミリアザールは自分の仕事を行うため、１人夜のミーシアを歩く。

アルネリア教会の最高教主

建物の間から感じる風が温かい。時期は春から夏にさしかかろうという頃合いである。この時期は日が長くまだ空はうっすらと明るいが、既に白の月は天高く昇り、ミーシアの町並みは夜の賑わいを見せ始めている。

ミーシアは大都市らしく、夜でも人の波が切れない。店には煌々と明かりが燈り、露店は旅の用具や日用食品を売る店から、買い食いや酒を一杯ひっかける店へと変貌を遂げていく。通りには売り子や客引きが我先と通行人に声をかけ、広場の噴水付近では待ち合わせる友人や恋人達を多く見かける。さながら平和な中原における象徴ともいえる光景に目を細めながらも、喧騒から遠ざかるように一人歩くのはミリアザールである。

「人々の営みは何百年経とうとも変わらぬ・・・だがしかし、大戦期よりは確かに笑顔を見かける機会は増えたか」

ミリアザールはふと昔を思い出す。まだアルネリア教としての母体が確立しておらず、自分が巡礼のように各地を巡っていた頃、人間の生活圏などこの大陸の中で微々たるものであった。人々は魔物の存在に怯え、旅や移住もままならず、村や町が魔物の群れに襲われて壊滅するなど、珍しい話でもなかった。人口も、現在の１／１０もいなかったかもしれない。

また魔王と呼ばれる存在も、現在よりはるかに沢山いた。中でも６体、凄まじく強大な魔王がおり、国家すら脅かす能力を持っていた。その強大な魔王達は『大魔王』と呼称され、彼らとの戦いは実に３００年にも及び、一連の戦争が続いた時期を大戦期と言う。大戦期が終結したのはおよそ３５０年前。それからは人間同士の戦争

や争いが多くなり、現在の各国の平和維持体制に入るまでを黎明期と呼んでいる。黎明期が終結したのは、およそ２０年程前であった。

ミリアザールが巡礼を始めたのは大戦期に入る以前の出来事である。いや、彼女の存在自体が大戦期を引き起こす一因となったのは疑いようもない。彼女は各地を回るうち、魔物討伐を自然と行うことが多く、そのうち彼女と行動を共にする者が多く現れ、１０年経つ頃には一大勢力となっていた。そのため、ミリアザール率いる勢力が魔王反抗の旗印の１つとなっていったのだ。これがアルネリア教の母体となった組織である。

むろん同時期には他にも伝説に語られるような英雄的存在が多数存在し、人々を率いて魔王達に立ち向かったことも忘れてはなるまい。国境に縛られず動けるアルネリア教は、彼らほど小回りはきかなかったものの、国よりははるかに動きやすかった。

ともかく、ミリアザールは病や怪我に苦しむ人を助け、村や町どうしが連絡を取り合えるようにし、安全な人の行き交いを可能にした。そして魔物の土地を切り開き、人間達の生活範囲を広げていった。そしていつしか、彼女は聖女や最高教主と呼ばれるようになった。回復魔法は元々人助けをより効率よく行うために素養ある者達に彼女が教えたのだが、結果としてシスターや神官、司祭の能力を開花させるものが多くなり、人間達は以前よりはるかに死ににくくなった。その中で自分に命を捧げると言い、生死を問わず付いてきた多くの部下達。そうやってアルネリア教は出来上がった。

彼らの献身と、多くの犠牲をもって現在のアルネリア教はある。今でこそアルネリア教の活動の多くは困窮する人々の救済となったが、昔は魔物討伐が主たる内容だった。さらにその中で大魔王討伐に多くの力を割いたこともあるし、ミリアザール自身も魔物達と戦った。多くの人間を犠牲にしたが、それ以上の人間が恩恵に与（あずか）った。人間の命を数勘定で天秤にかけて成果を誇るわけではないが、また

戦いがミリアザールの目的であったわけでもないが、自分がやってきたことにミリアザールは後悔を感じたことはない。後悔すればそれは自分のしたことに対し、夢や希望、その人生をすら賭けた者達に対する侮辱に他ならないと彼女は考えている。が、しかし。

「自分のしたことが正しいかどうかは、わからなくなるな・・・」

魔物の勢力が薄れ人間の生活範囲が広がるに従い、今度は人間同士で争いを繰り広げるようになった。ミリアザールを中心とするアルネリア教は人間どうしの戦争には基本中立を保ったが、各国と連携しての魔物の討伐が疎かになったせいで、アルネリア教単独での魔王討伐が長きに渡り続いた。その中で実に多くの騎士やシスター・僧侶が死んでいった。そのことを批判され、内部分裂が起こりかけたことも幾度となくある。

また拡大する教会の権力を利用して悪事を働く者も多い。慈愛・救済をその活動理念としている集団にも関わらず、である。最初にアルネリア教の門を叩いた時にはそのような邪念を持っていたわけではなく、ほとんどが崇高な理想を持って業務に励んでいたはずなのに。時には内紛を自分の手で始末してきたミリアザールは、いつも悲しみに囚われていた。といって手抜きや半端な慈悲をかける性分ではなかったのも確かである。

アルネリア教は大きくなるにつれて、その中に闇を孕むようになってきたことは否めない。それは取りも直さず、自分自身がそのような人物だからだろうとミリアザールは自嘲気味に笑う。

物思いにミリアザールが耽るうち、既に繁華街は終わり、暗がりが多い通りに入っている。ここはミーシアの中でもかなり治安が悪い通りであり、娼館や賭博場、闇市が立ち並ぶ通りである。通りにはいかがわしい恰好をした娼婦や、目つきの悪いゴロツキがたむろしている。酔いつぶれて道端で寝転ぶ者から財布を抜き取ったり、

少し細い路地からは喧嘩の怒声が絶えないなど、無法地帯にも等しい。だが現在では、どういった町に行ってもこういった光景が見られる。かの有名なターラムの裏通りほどではないものの、こういった光景を見て思わず自分の胸がムカムカするのをミリアザールは抑えられない。

「ワシはこういった者達まで救おうとしたわけではない。日々努力を怠らず、生きるために懸命で、それでもつまらぬことで命を落とす。そういった出来事を見過ごしたくなかっただけなのじゃ。だが救う人間は選べん・・・」

昔、自分に良くしてくれた村人達を思いだす。彼らは生きるのに懸命で、毎日遅くまで働くことに文句も言わず、それでも裕福ではなかったのに、困っている者を見捨てるようなこともしなかった。それでもただ一度の魔物の群れの襲来で、全てが灰になった。身寄りのない自分を招いて晩御飯を出してくれた老夫婦も、種まきをいっしょにやった仲のよい大家族も、野山を一緒に駆けまわった親友の双子も、もういない。そして、いつも自分に語りかけてくれたあのシスターも。その時、ふと服の裾をつかむものがいる。おそらく乞食の類いだろう、身なりの汚い男だ。

「アンタ、シスターだろ。もう三日も何も食ってねぇんだ・・・頼むよ、俺に神の慈悲を」

「・・・いいでしょう」

先ほど露店で買っておいた菓子を取りだす。形が星みたいで、後でこっそり食べようと楽しみにしていたのだが、さすがにこれをケチっては教会の信念のなんたるかを説く資格をなくすだろうと、ミリアザールは思ってしまった。

「今はこのようなものしかありませんが」
「っ！　なんだ。駄菓子じゃねぇかよ！？　俺が卑しいからって馬鹿にしてんのか？」
「あいにく手持ちはそれしかありません」
「じゃあ金をよこせ！　それで酒を買うからよぉ。俺は酒さえありゃ生きていけるんだ」
「あいにく金も持ち合わせがありません。恵みたいのは山々なのですが」
「ふざけんな！！」

男がミリアザールの胸倉をつかんできた。

「この手をお話しなさい。アルネリア教のシスターに狼藉を働く者には、相応の罰が下りますよ？」
「・・・ちっ」

男にも元はそれなりに信心があったのか、シスターに狼藉を働くことに罪悪感があったのか。思ったよりも彼はあっさり引き下がり、悪態をつきながら路地裏に消えていった。もちろんそれ以上を何かしようとすれば、天罰よりもまず先にミリアザールが罰を与えていただろう。

「自ら働きもせんくせに、人には一人前にたかりよる・・・ダメ人間の典型よな。昔はあんな者は生き残れなんだ」

佇（たたず）まいを直しながら一人呟く。

「ワシには、どうしてもあのような奴らにまで愛情を注ぐことはできん。まぁ窮地であれば助けはするじゃろうがな。だが、お主ならあのような者にまで何のためらいもなく愛情を注ぐのだろうな・・・

のう、アルネリア・・・」

昔、自分を拾ってくれたシスターの顔を思い出す。あまりにも昔のことすぎて、彼女の顔の描写はもはやおぼろげなイメージでしかない。だがその残した言葉を、一言一句たりとも忘れることはないのだ。

「ワシは聖女などではない、教主もふさわしゅうない。ただそなたの真似ごとをしておるだけじゃ」

はみ出し者であった自分をかばい、面倒を見てくれた。自分が村に住めるよう、村人も説得してくれた。自分が熱を出せば、治るまで寝ずにでも看病をしてくれた。村人が怪我をすれば飛んで行って助け、食べるものがない家があれば、自分の食べるものを削ってでも食事を分け与えた。彼女の優しさにほだされた村人達は、同じように自分達も行動することにした。魔物がはびこる時代において、あれほど平和であった村は当時世界になかっただろう。思い返すたび胸に温かいものがこみ上げる。

「あのような光景を・・・また見たいのぅ」

そんな回想にひたっていると、はた、と人通りがなくなっている。かなり裏通りの奥深くまで来ているとはいえ、逆に誰もいないとはおかしい。

「ふむ・・・その辺におるじゃろう、でてこい」

と、影がすぅ、すぅ、と姿を現す。全部で5つは出てきたが、まだ潜んでいるかもしれない。

「待ちわびたぞ？　どこの手の者か聞いておこうか」
「・・・」
「だんまりか。それでは面白くな・・・」

ミリアザールが言い終わらないうちに先頭の者が合図をし、音もなく他の者が動き始めた。全員が懐から刃物を取り出す。

「いきなりか！」

迫りくる者達を左右にひらひらと避けるミリアザール。その身のこなしの軽さはとてもシスターとは思えない。そしてそのうちの一人の手をつかみ、しこたま壁に叩きつけてやった。
ゴキッ、と相当鈍い音がしたが、その男は悲鳴一つあげずすぐに体勢を立て直す。かなり訓練された者のようだ。

「悪いが、しばらく動けないようにしておくぞ？」

ミリアザールは簡単な捕縛の魔術を行使しようとして、魔術が使えないことに気がついた。

「何！？」

瞬間、何かが自分目がけて飛んでくるのを上に跳んでかわすミリアザール。そのまま建物の壁を蹴って、４階まである建物の屋上に駆け上がった。

「なるほど。人払いの魔術と魔術封じを同時に実行するとは・・・主ら、上忍か」

間髪いれず、五人が屋上まで駆け上がってきた。忍者とは東にあ

る別の大陸の人間であり、暗殺者の名称である。東の大陸は今現在自分達がいる大陸の半分程度の大きさしかないが、魔物は平均的にこちらよりも強く、また未開の土地も多いため、その分戦いの機会が多い。さらに資源が乏しいため、４００年程前に海を越えた国交が開かれてからは、西の大陸から食料・衣料品を援助する代わりに、東の大陸からは武器・人材を派遣してきた。そのうちの一つが忍者である。

彼らの得意技は暗殺であり、またこちらの大陸とは系統の異なる魔術（方術や忍術と呼ばれている）を使用できる。直接的な攻撃魔術も使えるようだが、主に秘密裏の仕事を請け負うため、間接的な効果を及ぼす魔術を中心に使用してくる。今回ミリアザールの魔術を封印しているのも、その系統であろう。

「（加えて時刻は夜で、季節も神聖魔術に相性がよくない。ワシの魔術を封じるくらいじゃから強力にしてある分、効果は短いじゃろうが。なんせ系統がわからんと解呪もできんの。とすると肉弾戦か・・・）」

ミリアザールはじりじりと仕掛ける機会を窺うが、流石に隙がない。しかもいつの間にか男達はそれぞれが何かを手に持っている。

「（あれは・・・符か？　ということは、召喚ないし式神か）」

東方の術式はこの大陸よりもかなり種類が多く、全員が異なる様式で自分の下僕達を呼びだしていた。符がそのまま大きくなり、下僕が這いずり出てくるもの。地面に魔法陣のようなものを描くもの。符そのものが下僕に変化するもの。実に様々である。

「（妖怪、式鬼、式虫・・・実に多様じゃな）」

忍者達が呼び出した下僕は全部で２０体にも及んでいる。魔術が使えないミリアザールにはかなり危険な状況であるかもしれない。忍者達もかなり自分達の有利を確信したのか、初めて口を開いた。

「・・・御覚悟を、最高教主どの」

「なんじゃ、喋れたのか。それよりワシをワシと知って仕掛けてくるとは、お主達は自分が誰に雇われたか知っておりそうじゃのう？」

全く平静な態度で話すミリアザールに、一瞬忍者達の動きが止まる。

「・・・」

「まただんまりか。まぁよい。もしお主達が雇い主の情報を教えてくれるなら、現在の報酬の2倍払ってもよいが、どうじゃな？」

「・・・いけ」

だが忍者達はなんの反応も見せず、襲いかかってきた。

「本当につまらん奴らじゃ。せっかく生きながらえる機会を与えたのに、命は大事にするべきじゃぞ？」

ミリアザールは腰に両手をあて、「やれやれ」とため息をついているが、その間にも２ｍはあるかという式鬼が殴りかかってくる。だがミリアザールはその拳をひょいとかわすと、式鬼の顔面をひっつかむ。その直後――

グシャッ！

まるで手のひらサイズの果実を握り潰すかのように、ミリアザールは自分の掌の５倍以上の大きさがある式鬼の頭を握り潰してしま

った。その手からは鮮血が滴り落ちる。

「・・・！」

襲いかかりかけた式鬼達だけでなく、上忍たちも思わず息をのむ。

「式鬼とはいえ殺生するのは実に何年ぶりかの。さて、と。ワシに手を上げたからには、もはや交渉の余地はない。それに、たまには戦っておかんと戦い方を忘れそうになる。済まぬがワシの肩慣らしに付き合ってもらおう、命を賭けてな」

「・・・囲め」

ミリアザールの顔つきが段々と戦闘態勢に入っていく。忍者達も相手が一部の油断もならない相手だとわかったらしい。だが、この段階で既に彼らは間違えていた。この時点で式神を全て囮にして自分達は逃げるべきだったのだが、気付くのが１０秒遅かった。もっとも気が付いていても逃げ切れたかどうかはわからないが。

続く

アルネリア教会の最高教主（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。ブクマが日々増えていくのを見ると嬉しい・・・。感想も気軽に書いてくださいね。

次回もミリアザールのターン。そしてこの物語における重要な人物たちが登場します。

次回は１０／２５（月）２０：００に投稿します。

忍び寄る影（前書き）

～あらすじ～

ミリアザールは自らを囮に敵を釣りだす。さらにアルフィリース達が魔王と戦ったルキアの森に異変が・・・？

忍び寄る影

＊＊＊

――そして３０秒後にはリーダーらしき忍者の首を締め上げるミリアザールがいた。月に照らされた彼女の姿は、人間ではない様な美しさを放っていた。いや、実際に人間の姿をしていなかった。彼女の髪や目の色こそそのままだが、口は耳近くまで裂け、耳は天を衝かんばかりの大きさに尖っていた。手足には黄金の毛並みが逆立ち、彼女の後ろには豊かな太さの５本の尾が生えていた。なぜか一本だけは短かったが。

そしてもはや忍者は抵抗しようにも、どうしようもない。なぜなら、彼の両手両足はミリアザールが引きちぎってしまった。彼女の周りは既に赤い海と化しており、彼女自身も深紅に染まっている。それでもその表情は全く崩れず、むしろ穏やかに忍者に話しかけた。

「なぜワシがこんなにも長い間生きていると思う？　それはワシが強すぎて、誰もワシを殺せなかったからじゃ。大魔王のバカたれどもはワシといい勝負ができたが・・・まぁワシも最初からここまで強かったわけではないし、運もあるがの。それにワシは自ら好んで戦いに赴いたことはほとんどない。暗殺は何度もされかかっとるがな」

忍者の口からなにかひゅー、ひゅー、と音が漏れる。何か言おうとしているらしい。

「ん、なんじゃ？　遺言があるなら聞いてやろう」

「・・・ば・・・ばけ・・・もの・・」

「なんじゃそんなことか。今さらじゃわい。だいたい実際、人間で

はないしの」

全くショックを受ける様子もなく、答え返すミリアザール。

「さて、お主が死ぬ前にもう少し付き合ってもらおう。お主の雇い主を調べんといかん。きちんと手順をふまぬと相手の脳を壊しかねん危険な魔術じゃが、死にゆくお主には関係あるまい。詫びといってはなんじゃが、お主の名前もついでに調べて覚えておこうぞ」

「！」

瞬間忍者の体がガクガクと痙攣し始め、口から泡を吹き始めた。そのまま5秒ほどして、痙攣が一層激しいものへと変わり、今度は完全に動かなくなってしまった。

「ふむぅ・・・有益な情報はなしか。釣れるには釣れたが、まさに雑魚じゃったな。どうも釣りは苦手じゃ」

ミリアザールは「あーあ」という顔をして、自分に襲いかかってきた刺客に全ての興味を失ったようであった。そのまま忍者の亡骸をぽいっと放り捨て、自分の思索に耽る。

「まあでも今回の敵はしぶとそうじゃ。ワシにここまでさせておいて大した情報も得られんからの。さて誰が黒幕か・・・また手を考えねばなるまいな。全く人間はワシを飽きさせんわい、そんなに最高教主の権力が魅力的に見えるのかのぅ」

彼女が自分の命を狙われたのは何度目かもはや覚えていない。３０回目くらいまでは数えていたが、もはや面倒臭くなって数えるのを辞めたのは５００年前か、４００年前かすら定かでない。敵対する勢力の時もあったし、魔物の時もあった。自分の腹心の時もあっ

た。その全てを叩き潰して、彼女は今ここにいる。極力犠牲が出ない方法を取ってきたつもりではあったが、どれほど上手くやったつもりでも、どうしても犠牲が出てしまう。そのたびに自問自答を繰り返してきた。

「（アルネリアならどうするか・・・いや、まずアレならば戦うという選択肢がないのであろうな）」

答えはいつも明白である。アルネリアならば敵と戦わない、いや、敵と言う認識すらしないのであろう。もはやアルネリアの真似ごともできなくなっている自分の状況がミリアザールは腹立たしいが、今さら自分のしていることを辞めるわけにもいかない。自分がいなくなれば、空いた権力の座を巡りさらなる混乱が起こるのは明白である。自分ではいかほどに考えても良い答えは出ないが、考えるのを止めればそれこそ自分はただの化け物になってしまうとも思っていた。そんな考えに耽っていると、ふと後ろでぱしゃりと水音、いや血音とでも言うべきものがした。

「・・・梔子（くちなし）か」

「申し訳ありません、そろそろ防音の魔術が切れるかと思いまして。差し出がましくも、お声をかけねばと」

「いや、よい」

返事をしたのは黒装束に身を包んだ女忍者である。顔を仮面で隠しているため表情はわからないが、静かな凛とした声であった。背恰好も普通の女性と変わらない程度だが、体つきだけでなく仕草にまで一切無駄がない。かなりの使い手であることは明白である。

それもそのはず、彼女は「口無し」と呼ばれる、教主ミリアザールが個人的に抱える暗殺部隊の長である。その存在はラザール家の者ですら知らない。教会本部からほとんど出ることのない教主の目

となり耳となり、各地で諜報活動を行うのが主な任務であるが、何人かは女官にまぎれて自分の身の回りの世話をしている。使い魔を同時に沢山扱うことはミリアザールは不得手としているため、このような者をもう何百年も傍に置いている。今回も刺客の上忍にすら気付かれず、いつの間にか防音の魔術を張っていた。もっとも屋上まで刺客達をおびき出したのは、予め決めた作戦通りなのだが。

「すまぬが後始末は任せる」
「は」
「で、今ミーシアに何人来ておる？」
「私を含めて即座に動かせるのが７人。予備に４人。ミーシアに元々潜伏しているのが１４人おります」
「明日の夕方にはミランダ達が帰ってくるだろう。ワシは一度奴らの顔を見てから、アルベルトを連れてアルネリアに戻る。一つやっておきたいこともあるしの。念のためワシの手元に３人残せ。後の連中には探ってもらいたいことがある。潜伏中の連中は現状維持でよい」
「御意に」

てきぱきと指示をするミリアザールに、梔子が礼をする。

「ワシは宿に帰る。何か新しい報告があれば今聞いておこう」
「は、では。まず一週間ほど前に、西方オリュンパス教会の中で何らかの動きがあった模様です。具体的には一両日中には報告ができるかと」
「オリュンパスか、めんどくさそうじゃの。報告が上がり次第、夜でもいいから起こせ。他には？」
「この大陸各地で新たに確認された魔王ですが、このひと月で既に７体を超えました。内５体まではラザール殿達が狩った者も含め、征伐が確認されております。後の２体は未確認ですが、片方は大魔

王級の可能性があるとの報告が先ほどありました。その出現地点、西方連合諸国の国々から、我々に支援を求める動きが見られます」
「・・・戦争になるか？」
「高い確率で」

梔子の澱みない返答に、ミリアザールが目を伏せる。

「わかった。ここに潜伏中の連中を使い、各地区の教会に遠征軍の可能性を伝達。詳細は追って伝えると言え。あと東方の大陸に使いを出す。状況によってはワシが直接出向こう」
「御意に」
「念のため魔術教会にも連絡しておくかな・・・まあ、あ奴らなら既に知っておろうが」
「他に御用は」
「もうよい、行け・・・あ、そうじゃ。先ほど菓子を食い損ねてな。その辺の駄菓子屋で適当なものを買って、ワシの寝室まで届けておいてくれ」
「・・・夜のお菓子は太ります、虫歯になります。ちゃんと歯を磨いてから寝るように、ミリアザール様」
「ほっとけ！　ってもうおらんがな！！」

足音もなく梔子は消えた。入れ替わりに他のくの一達がやってきて後始末を始める。

「なんでワシの周りはミランダといい、代々のラザール家といい・・・ワシはお子ちゃまか？」

ミリアザールの嗜好と容姿はお子様なのだが・・・ともあれ、彼女がややむくれながら部屋に戻ると既に駄菓子が置いてある。仕事だけは早い女だ。

「って綿菓子か！　飴くらいでよかったのじゃが。というか綿菓子はやめいと言うておるのに・・・」

事情を知る初代の梔子であれば、決してこのようなことはしなかったであろう。瞬間ミリアザールの顔が暗く翳(かげ)る。

「ミランダ、ワシはそなたが羨ましい・・・・・・」

大粒の涙が一筋、彼女の頬を伝う。だが彼女が流す涙の真の意味を知る者は、もはやこの世に誰一人として生きてはいない。

＊＊＊

場所は代わり、ここはアルフィリース達が魔王と戦った森である。

魔王が死んだ今、ここには本来の生態系を脅かすものはなく、土地の属性もあるべき状態に戻るはずであった。だが、森には生命が徐々に満ちてくるはずなのに、その様子が全くなかった。相変わらず土地の全てが死んだように静かである。いや、命あるものがその場所を嫌ったといえばいいのか。

さらに勘の強い者や、修練を積んだものであれば気付いたであろう、まだこの土地の結界が消えてないことに。いや、今この場所にのみ、新たに結界が張られたと言えばよいのか。またはその者達が現れたから、結界が出現したのか。ともあれ、見る者が見ればこんな場所にはいたくないと述べたであろう。ここには、先の魔王など比べ物にならないほどの不吉で邪悪なモノが満ちていた。そして風も無いのに木が、草が、いやここにある全てのモノ達がざわめき始めている。

その中に木の葉のすれ合う音に混じり、囁くように聞こえる声。

かすかに聞こえるその会話は――

「見たか・・・？」
「ええ」
「あの魔王を一ひねりとは・・・なかなかだ」
「しかもまだ余裕があるでしょう」
「もったいないね、あの魔王には名前を考えていたのに」
「なにせ生まれたてのレベル1だったもんね」
「・・・お気に入りだったの・・・？」
「だって・・・かっこよかったよね、あいつ」
「趣味悪いんじゃない・・・？」
「・・・でも・・・あれが町に現れていたら・・・楽しかったかな・・・」
「それは同意見だね」
「楽しい光景が見れたかもしれないね」
「静かに・・・」

ざわめいていた木々達がぴたりと止まる。

「現状をもう少しの間維持する。各々プランはあるな？」
「御意にございます」
「任せてよ」
「良い素材をみつけております」
「・・・あの女剣士は放っておいていいの？・・・」
「今はまだよい。待つことも必要だ・・・」
「了解で～す」
「ここに来てない奴もいるけど・・・いいんですか？」
「ほうっておけ。やることをやっておればそれでいい」
「もしやってなかったら・・・『折檻じゃ！』どう？　似てる？」
「・・・きみは・・・センスが無い・・・」

「寒いな」
「ちぇ」

誰かの舌打ちと共に、木々が争うように大きく揺れた。

「次は三回目に月が満ちた時に集まることとする。忘れるな」
「御意」
「忘れそう」
「おまえは寝坊するなよ」
「・・・君こそ女遊びが過ぎないようにね・・・」
「ボクの女遊びなんて、アイツの遊び方よりよっぽどマシさ」
「・・・うふふ・・・違いない・・・」
「ここに来ていない者には私が連絡をしておく。それぞれ聞いておきたいこともあるしな」
「わかりました」
「では諸君、我ら『世界の真実の解放のために』」
「「「「『世界の真実の解放のために』」」」」

そしてぴたりと全てが止んだ。精霊が、虫達が、夜の闇を動くモンスター達が、色々な生命が森に戻ってくる。だが、先ほどまで聞こえていた声が何かなど、気にするものは何一ついなかった。

続く

忍び寄る影（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

さて、ここから徐々に色々な状況が動き始めます。アルフィリースの旅はどこにむかうのでしょうか？

次回は１０／２６（火）１２：００に投稿です。

世界観紹介その1～歴史編～（前書き）

今回は世界観紹介です。初めから決めていた設定ですが、最初に型式をはめ込んで、読み手に思考を制限させるというのが嫌いな作者です。やっぱり読者には自由に読んで妄想を膨らませて欲しいな、と。それでこのタイミングです。

また詳細は述べてないこともありますが、だいたいわざとな一方で単純に間違っていることも（汗）どうしても気になる方は感想から質問をどうぞ。

世界観紹介その1～歴史編～

○歴史

人間の歴史が史実として残っているのはおよそ１５００年くらい前からとなる。それ以前にも人間は存在したが、自分達の記録を残す習慣がほとんどなく、また生存領域も非常に限られており、現在主人公達がいる大陸では東西の海岸沿いと、中原の一部でしかなかった。なお現在見つかっている大きな大陸は３つであり、東の大陸には文化を異にする人間族が発見されたが、南の大陸では人間族が生活していた根拠をほとんど見かけることができない。

１５００年前は主に魔王達が大陸の派遣を握っており、彼ら同士の覇権争いが主であった。なおその時代に存在していた魔王は実に数百ともいわれる。ちなみに魔王とは、広義には種族を越えた魔物を統一する魔物と考えられているが、狭義には多数の魔物を従える者、また単体ではあるが並はずれて強大な力を持つ者なども魔王として考えられていた。

その時代に少数派であった人間、エルフ、妖精や一部の巨人族は協力し合い、その時に人間に製紙法や記録術が伝わったとされる。また人間族が他の種族より優れていた点として、生き延びること・学ぶことに非常に貪欲で、他種族の長所を次々に取り込んだことであるとされる。エルフからは魔術や言語、フェアリーからは薬草術・自然学、ドワーフからは製鉄・建造、巨人族からは格闘術・戦闘術などといった具合である。さらに人間は個体差が大きく、生まれてくる人間によって様々な属性や特徴を備えていたため非常に多様性に富み、環境の変化に強かったことも大きな長所となった。たとえば水の属性を持つ精霊は水場を追われればあっけなく絶滅したが、人間は井戸を掘り、水を引いて生きながらえたのである。

そして人間達が反撃に転じたのはおよそ１２００年前が最初であ

るとされる。巨人族と親交の深かったダヤダーンという若者が、初めて魔王を征伐することに成功したのである。この事実は妖精の情報網を通じていち早く大陸中に連絡され、魔王は不死身などではなく、人間が倒せる存在だと認識させた。魔王達はこの段階ではまだ人間達を見くびっており、また魔王同士が協力し合うと言う意識自体が皆無だったため、歴史上を振り返れば魔王達は後手に回った結果となる。

さらに１０００年前ほどになると人間達の中にも国家と言う概念が設立され、魔王と徒党を組んで戦うような国が形成され始める。魔王達はここにおいて事態のまずさに気がついたが、対策を講じようとする者と、魔王間の覇権争いに従事する者が半々程度であった。人間達はこの隙をつき、エルフ族の王であったシグムンドと、巨人族の王であったファードの協力を得て、人間達の脅威を認識しているような魔王から優先して討伐していった。この時代には伝説にも語られる英雄王グラハム、剣帝ティタニア、勇者ゼーベイアなど、英傑達が続々と登場した時代でもある。

そして７００年ほど前では人間達は生活版図を随分と広げており、大陸の約半分を制覇するに至っている。またアルネリア教会、魔術協会など、国家をまたぐような団体も登場し、積極的に国家間の仲立ちをする行動が見られた。ここにおいて魔王の数はおよそ１００程度にまで減らされていたが、残った者は強者が多く、特に強力な魔王６体を「大魔王」と呼称し、彼らと戦った歴史上の６５０年前からおよそ３００年間を「大戦期」と呼んでいる。

この戦いは大魔王達を全滅させた人間達の全面勝利で終わるが、逆に精霊達や巨人たちは相次ぐ戦いで疲弊し、歴史の表舞台から徐々に姿を消していくこととなる。なお生き延びた魔王達は人間達に見つからないよう隠れ棲むようになったものが多く、ここにおいて人間と魔物・魔王達の勢力図は完全に逆転したのである。ただ魔王

が人間達と違う点は、彼らは他種族を従えても協力することを知らないため、戦争は自然と「自分達対、その他全て」という構図になり、もはや立場の逆転が不可能ということである。

だが大戦期が終了したことを示す最後の大魔王討伐を皮切りに、今度は人間の国家間で争いが生じた。この時代では国家や集団間の協力関係もうすれ、アルネリア教会や魔術教会は中立を保つこととなる。この中において西方にオリュンパス教会が樹立され、東のアルネリア教会と以後対立を深めてゆくこととなる。また魔術教会も様々な分派が設立され、監督が行き届かなくなってくる。

この時代では乱立した数百の小国国家群が統一され、現在の数十の国家に収まるまでを「黎明期」と呼んでいる。黎明期の終結はおよそ２０年ほど前と言われ、ごくごく近年のことである。黎明期終結のきっかけとなったのは、人間の中に大魔王のような存在が出現し、複数国家を巻き込んだ大戦が乱発したせいである。簒奪王ブラムセルの戦役、魔術師ヘルハルドの禁断戦争、大盗賊ヤプーの乱、奴隷剣闘士ザザームントの反乱などがこれにあたる。また獣人達が自分達の国家を主張するようになったのもこの時期である。ともかく、これらの戦争などを経て各国は疲弊し、厭戦気分が高まった。そこにアルネリア教会や魔術教会が仲立ちをして、各国が平和協定を結ぶに至る。

こういった流れを経て今現在は「泰平期」と呼ばれる時代であり、各国が代表を出して一年に一度、和平会議を開いている。だがこの時代がいつまで続くかを知る者は誰もおらず、薄氷の上を歩くように脆いのではないかと指摘す者も多い。歴史学者達もこの２０年を「静かすぎる」と評価する始末である。

世界観紹介その1～歴史編～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

今回は短め。何回か世界観紹介はやりますが、本編が進まないのは悲しい、ということで本編は本日１９：００にアップします。

帰路（前書き）

～あらすじ～

アノルンの告白を聞いたアルフィリース。２人は堅い友情で結ばる。

戦いを終えた一行はミーシアに引き返し、お祝いをすることを決定するのだった。

帰路

「えー・・・と。なにしてたんだっけ？」

アルフィリースが目を覚ますと朝だった。昨日アノルンの告白を聞いた後、しこたま２人はふざけ合い、笑い疲れてそのまま寝たのだった。どうやら色んな事を話したことで、アノルンは随分気が楽になったらしく、やりたい放題に近いくらいアルフィリースにワガママを言っていたのを思い出す。

「アルフィ～、肩揉んでよ～」
「私だって疲れてるのよ？」
「いーやーだー！　揉んでくれなきゃ暴れちゃうぞ？」
「はいはい・・・どっちが年上なんだか・・・」

しょうもなしにアルフィリースが揉んであげると、そのままアノルンはすやすやと眠ってしまった。

「ちゃんと自分の部屋に戻ってよ～」

とアルフィリースが言っても何の反応も見られず、アルフィリースの方も限界が来ていたので、そのまま折り重なるように同じベッドで寝てしまった。そしてアルフィリースが目を覚ました今も全く気付く様子もなく、アノルンはすやすやと眠っている。

アルフィリースの考えはそこまで及んでいるかどうかは定かではないが、アノルンにしてみれば自分の良人が死んでからおよそ１００年ぶりの安眠であった。深い眠りなのも無理はない。

「こうやって寝顔を見てると天使みたいね・・・酒場にいるときか

らは想像もつかない。うふふ、いたずらしちゃおっかな～」
「・・・そういう趣味だったのですね、さいてーです」
「きゃっ！？」

アルフィリースは突然後ろから声をかけられて跳び上がる。いつの間にかリサが後ろに立っていた。

「リ、リサ！　いつからそこに？」
「アナタが起きる前からです。リサにしては珍しく、起こすには忍びないと気をつかってそこの椅子に腰かけてました」
「全然気付かなかったよ？」
「だからニブチンだといわれるのです、デカ女。まあ気配を完全に消してましたが」
「タチ悪いよ！　それにニブチンとか初めて言われたよわよ！」
「それより、婦女子の寝込みを襲うとはどういう了見ですか？　恥を知りなさい、恥を」

じゃあリサが今隠した、右手に持っているペンみたいな物で私に何をするつもりだったんだと反論したいアルフィリースだが、矢継ぎ早にリサがまくし立ててくる。

「いくらデカくてモテないからって、そちらの趣味は人間性を疑わざるを得ないのですが？　・・・ま、まさか？　既に昨日シスターを無理やり手籠めに・・・」
「ち、違うわよ！　ちゃんとアノルンが起きたら説明してくれるんだから！」

そのとき、う、う～ん、とアノルンが寝がえりをうつ。起きるのかと思いきや。

「うー、アルフィ・・・揉み方上手いね。気持ちいい・・・」

どうやら寝言で昨日のマッサージのことを言っているらしい。どれだけ間が悪いのかアルフィリースはめまいがする思いだったが、変な誤解をされてないだろうなとリサの方を見ると、案の定と言わんばかりにリサがカタカタと震えだした。

「冗談のつもりだったのに・・・け、けがらわしい！　不潔！　もうさいてー！！」

「ち、ちがぁう！！　ちゃんと話を聞きなさい！」

「聞く耳もちません。そんなにしがみつこうとして、朝っぱらからリサに何をするつもりですか？？　リサに触らないでっ！」

リサが魔王から逃げるときよりも速く、全力で逃げていく。アルフィリースも即座に追いかけるが運悪く修道院のシスターに見つかり、

「なんですか？　朝から騒々しい。しかも夜着で外にでるなど・・・これはお説教が必要なようですね！？」

と言われ、アルフィリースは正座で1時間ほど説教をされた。

「なんで私だけ・・・」

と思うアルフィリースがふとシスターの後ろを見ると、壁の影からあかんべーとするリサがいる。アルフィリースは朝からストレスが溜まる一方だった。

＊＊＊

実のところ、リサは昨日の会話を全て聞いていたらしい。と、いうより聞こえてしまったと言った方が正しいだろう。

「センサーは感覚が鋭敏ですから。私の場合は気配を感知することに主に特化していますが、それでも周囲数十mの音は自動的に拾ってしまいます。まぁリサの能力が全体的に高いせいもありますけど。話を盗み聞いたようで申し訳ありませんが、そのことで貴方達に対するリサの評価は変わりませんので、御心配なきよう」

だ、そうだ。アノルンが不死身だとかなんとか言ったら、普通もっと驚きそうなものだが。

そしてアルフィリース達は朝ご飯を取り、出立の用意をした。ミーシアに帰還してリサを送り届けないといけない。

＊＊＊

「そうか～。私アルフィに襲われかけたのか～」
「もう、やめてよ！」

荷物を竜に積み込みながら、アノルンが呟く。

「でも、アルフィならいいかなって・・・冗談だけどね。ちょっと、なんで皆私から遠ざかるのさ？」
「お姉さまがそちら側の人だったとは・・・お姉さまと呼ぶのを今日限りで辞めさせていただきます」

アルフィにいたっては、無言で後ずさっていく。

「ふむふむ、なるほど。アノルン殿は男性より女性の方が・・・と」

「ちょっと、アルベルト。何書いてんの？」
「教会に提出する書類ですが」
「んなこと書かなくていいっつーの！」
「余すところなく報告するようにとの厳命ですので」
「ぐっ。融通ぐらい利かせなよ」
「いえ、騎士の務めですから」
「アタシがコイツにそんなことするわけないだろ？　・・・って、アルフィ？　どこいくのさ？」
「いやぁっ、私に触らないで！」
「んなっ！　アンタまで！」
「・・・ちなみにリサに触れば・・・斬ります」
「何仕込み刀抜いてんのさ！」

てんやわんやの大騒ぎである。

「（このメンバーの居心地は悪くない・・・でもこのメンバーで旅するのもミーシアに帰るまで、か。アノルンとの二人旅もいいけど、旅の道連れは多くてもイイかも。リサもなんだかんだでいい子だし）」

と、ふと思うアルフィリース。だがアルフィリースがそんな感慨に浸る瞬間、追いかけてくるアノルンに向かってリサがアルフィリースを蹴り飛ばした。

「・・・前言撤回！　待ちなさい、リサ！」
「ぼーっとしている方が悪いのですよ、デカ女」
「このーっ」
「ははは、アルフィ捕まえた！」

その後アノルンに捕まったアルフィリースは、腹筋が限界を迎え

るまでくすぐられたのだった。

＊＊＊

そしてミーシアに着いた一行。まだ日が暮れておらず、町も夜の顔を見せていない。

帰り道はアルフィリースが竜を駆って進んだせいでさらに進度が速かった。縦列を組んでさらにスピードを出すコツをつかんだようで、後ろの竜の手綱を握っているミランダがちょっとチビってしまいそうなくらいの速度で進行したのだった。ご飯も簡単に竜の上で済ませたし、６刻とかからなかっただろう。これは驚異的な速さだった。

そんな皆の驚きをよそに、アルフィリースはしきりに竜とコミュニケーションを取っており、竜と「ク？」「ククァ！」と声真似をしながら言いあっている。一体何をしているのか・・・

そして、「今日の夜は祝勝会も兼ねてパーっといこう」というアノルンの提案により、食事を皆ですることになった。

「では、リサは一度家に帰ってきます。夕刻の７点鐘までにはここに戻るつもりですので」

「私は一度シスター・ミリィに報告をしてきます」

リサとアルベルトの２人が去っていくと、アルフィリース達にはやることがない。

「どうしよっか、アノルン」

「・・・」

「アノルン？」

「・・・・・・」
「アノ・・・ミランダ？」
「はぁ～い～？」

とてもいい笑顔で振り返るアノルン、いや、ミランダ。

「ちゃんと本名で呼んでよね！」
「だって～ここ何日かで呼び方がコロコロ変わってるんだもん。混乱しちゃうよ」
「むー。まあ確かにそうかもね。私にも責任はあるから、恥ずかしい罰ゲームは勘弁してあげる」
「（まだやる気だったの・・・）」

やや呆れるアルフィリース。そんな彼女を心配そうにのぞきこむミランダ。

「でさ、アルフィ。あんた右手は大丈夫？」
「・・・やっぱわかってた？」
「皆気付いてたと思うけどね。右手、明らかにかばってるし。やっぱり呪印の・・・」
「うん、反動だと思う。日常生活くらいなら大丈夫かもしれないけど、剣は2、3日振れないかも」
「それは結構痛いね。旅をするうえでそんなことになるのなら危険も高いし、呪印はやっぱ滅多なことで使うべきじゃないね。使う前にアタシにちゃんと相談しなよ？」
「ありがと・・・その、ミランダ？」
「うん！　素直でよろしい！」

ミランダがニカッと笑う。ミランダに心配をかけたくないアルフィリースは、呪印の侵蝕がちょっと進んだのは黙っておくことにし

た。

「で、どうするの？　ミランダ」

「とりあえず騒げるところ探そうか。さすがにギルドの酒場はダメだろうし・・・」

「意外と常識あるのね？」

「いや、アタシはむしろアタシ達が行くことで全員がどんな反応するのか見てみたいけどね。それよりリサがかわいそうでしょ。これからもこの町で生きていくんだから」

「そっか・・・リサって私達と来てくれないのかな？」

「アタシもそれは同感だけどね。でもあの子は頑固だから、一回言いだすと聞かないと思うな」

「事情が何かあるみたいだけど、私達じゃ力になれないのかな？」

「こればっかりはね。リサが自分から何か言ってくれないと。根掘り葉掘り聞いても、逆効果だと思うよ？」

うーん、と2人で考え出すが、そもそも問題点がわからないのにどうしようもない。

「・・・先にご飯食べる所探すか。アルフィ、なんかあてはないの？」

「そんなこと言われても・・・あ！　あるかも」

ミーシアに着いた時、自分に声をかけてきた獣人の男性を思い出すアルフィリース。せっかくだし、様子を見に行ってみることにした。

＊＊＊

「帰ったか、アルベルト」

「はい、ただいま戻りました、ミリアザール様」

こちらはミリアザールの宿である。ミリアザールがなにやら忙しく書簡をしたためている。

「どうであった？」

「どうせ使い魔でご覧になっていたのでは？」

「ある程度はの。聞きたいのはお主から見て、アルフィリースはどうか？　ということじゃ」

「どう？　とは」

アルベルトが聞きかえすが、どうもミリアザールにはうさんくさく映ったようだ。

「とぼけるな。なぜお主1人で倒せる魔王を相手に、足手まといの連中をくっつけたと思ってるのじゃ。アルフィリースが暴走した時に、お主が仕留められるかどうか見極めるためじゃろうが」

「私1人で魔王を仕留められたかどうかはわかりませんが」

「謙遜じゃな。調査隊の連中もボンクラではない。ワシの所にも報告はあったし、お主の所にも報告くらいは届いておったろうよ。実際向うでも一次報告は来ておったろう？　その上でお主がそのままアルフィリース達を連れて討伐に行ったということなら、最悪自分1人でもなんとかなると考えてのことじゃろうが。魔王の討伐が何と言っても最優先なのは、事実なのじゃからな」

「それは確かに。ただミランダ様に手傷を負わせるつもりはありませんでした」

アルベルトが目を伏せる。ミリアザールはどう声をかけたものか一瞬躊躇ったが、

「気に病むな。お主にとっても初めての魔王戦であったことは事実じゃ。全てが上手くいくわけではない」
「は。ですが、私はそれでは困ります。それに、ミランダ様のことはお気にならないので？」
「それは気になるが・・・ワシこそ本来一介のシスターに気を揉める立場ではない。まあそなたも反省点があるなら次に生かせ。それより話を元に戻そう。アルフィリースはお主の目から見てどうじゃ？」

ミリアザールが鋭い目をする。真剣に可能性を聞いているようだ。

「・・・今すぐやれば、私が負けることはないでしょう。ただしアルフィリース殿が私を全力で殺しに来れば、私など一ひねりであるかと」
「そこまでか？」
「なにせ剣と魔法ですから。あの魔力は尋常ではない。マスターもご覧になったのでは？」
「いや、それがアルフィが呪印の力を解放した時に思念が乱れての。どうやって倒したかは見ておらん」
「魔王が抵抗する暇も無いほどの魔術の三連撃でした。私は魔術に詳しくありませんが、かなり上位の魔術を用いたのではないかと」
「ふーむ、まあアルドリュースが呪印で封印するくらいじゃからそのくらいはやるか。んで、ワシが仮にアルフィリースと戦うとしたらどう思う？？」

ミリアザールはやや意地の悪い質問をした。だがアルベルト真剣に考え、そして・・・

「アルフィリース殿の方が強いかもしれません」
「なんと？」

この返答にはミリアザールが驚いた。ミリアザールは内心、その可能性もあるかもしれないと思いつつも、それを他人から言われるとドキリとする。

「なぜそう思う？」

「魔王を一ひねりにしたとき、それでもまだ全力ではないようでした。あの時使える全力はあれだったのかもしれませんが、もし彼女が周りのことも自分の後先も考えず大暴れしたら、単体で彼女を止められる者が世界に存在するかは疑問かもしれません。その代償として彼女は命を落とすかもしれませんが」

「そこまでヌシに言わせるか・・・」

「特に普通ではないのがあの殺気。昔ミリアザール様の全力を見せてもらいましたが、戦闘の経験値は貴女が上でも、出力は彼女が上かもしれません。正直、呪印を解放したアルフィリース殿に私は足が震えました」

「なるほど」

ミリアザールは思わず腕を組んで、むむ、と考え始めた。

「（なぜあれほどの力を持つ者が、生まれつきから目も付けられず放置されていたのか・・・詳しく調べる必要があるかもしれんな。いけすかん奴だが、魔術教会の代表に会っておく必要が出てくるか）」

ミリアザールは魔術教会の代表の顔を思い浮かべる。どうにも苦手な人間だが、とりあえず自分に敵対する人間でないことがわかっているだけ、まだいい。アルフィリースの件は、放置できない問題に発展するかもしれないと考えるミリアザール。あるいは既に手遅れなのかもしれない。

「ミリアザール様、彼女は放置されるので？」
「なんじゃ？　お主、あ奴を斬ったほうがよいとか考えておるのか？」
「個人的にそういうことは好みません。が、貴女の命令は全てに優先しますので」
「そのような不服そうな顔をされてもな。ワシはそんな無茶な命令はせんよ。ただ、あらゆる事を想定しておいた方がいいと思っただけじゃ。たとえばミランダとアルフィリースが戦う、とかの」
「それはそうかもしれませんが・・・」

口では従いつつも、かなり不満そうな顔を前面に押し出すアルベルトを見て、ミリアザールはニヤニヤする。どうやらアルベルトもアルフィリースを気に入っているらしい。

「それより、お主達がうかれて騒ぐ前に行っておきたいところがある。付いてこい」
「御意」

ミリアザールはアルベルトを伴い、外に出て行くのだった。

続く

帰路（後書き）

閲覧・評価・お気に入りありがとうございます。

今回は幕間です。こういった所、日常は盛り上げには欠けるものの、物語の波を考えると、こういった場面の書き方が一番大事なのかなとも思います。難しい・・・。

次回は１０／２７（水）１２：００投稿です

世界観紹介その2～生物編～（前書き）

今日の世界観紹介は生物・種族です。おおまかな説明なんで、軽く聞き流しておいてください。もちろんここに表記していない生き物もやがて出てきます。

世界観紹介その2～生物編～

この世界には人間だけでなく、精霊、妖精、亜人種、幻獣、魔獣、魔物といった者達が存在する。とはいえ、それらの区切りは人間が中心となって決めたものであり、その境界や認識は種によって異なる。

たとえばアルフィリース達の世界には我々の世界と同じ犬、猫、馬などがいるが、同一の外見をしていてもそれより明らかに大きい動物もいる。人間達はその中で人間に害をなさない種を「幻獣」と呼び、人間を襲う者を「魔獣」と呼ぶことにしている。

もちろん彼らの生活状況や時・場所・場合によって行動は異なるため、魔獣と認識されていても人間を襲わないものや、幻獣でも人間を襲う時もあるだろう。それは亜人種や妖精でも同じだが、魔物だけは明らかに人間に敵対行動を取ると認識してほぼ間違いはない。というより、魔物は人間に限らず、状況によっては同族ですら平気で殺し合いをする。

しかし人間も国家間で戦争をすることを考えれば、我々が「魔物」と呼ぶ存在たちにとって、私たちこそが「魔物」に見えるのかもしれない。

○種族

（1）精霊

精霊とは魔法種別名にもある通り、元素をつかさどる存在であるとされる。この世界の基本元素思考に基づけば、火、風、土、水、金、光、闇、分類不能と区別される。

それぞれに支配精霊がいるとされ、火のサラマンデルや、水のウンディネなどが代表的であるが、彼らが可視化することはごくまれにしかないとされる。また一つの属性につき精霊は非常に様々で、

中には「神」として扱われる者もいるが、土地によってその名称などは様々で、同一魔術でも詠唱が異なる場合がある。そのためなのか、魔術の系統としては、精霊と交渉して力を借りようとする精霊魔術と、元素を直接操る理魔術などが存在する。前者は信心深い者、後者は形態としての魔術を追求する者が使用することが多い。

（2）妖精

精霊の御使いなどとされるが、れっきとした生態系を構成する一つの種である。中には実際に精霊となる種族もあるらしい。人間に比較的友好的なフェアリーなどの種族もいるが、ニンフなどは概して排他的な妖精である。またゴブリンやエルフも広義では妖精の一種とされるが、世間において妖精とは掌に近いサイズの種をさすことが多く、ゴブリンやエルフは亜人種として認識されることが多い。

（3）亜人種

エルフに代表され、人間に近い外見をもちながら、決定的に人間と違う種である。エルフを例にとれば、彼らは尖った耳を持ち、人間の約3倍の寿命を持つとされる。また魔力も平均して人間よりかなり強い分、肉体的な強さはやや劣る。彼らは人間に味方したこともある種族だが、基本的には中立を保ち、感情などに乏しい種族と考えられている。また肌の色が褐色のエルフもおり、見た目から人間がダークエルフと名付けたが、彼らにしてみればはた迷惑な話であり、彼らの中にも多くの種族が存在している。

さらに獣人と呼ばれる種族もいるが、これらは人間が家畜として永く扱う犬・猫・馬と人間の中間のような外見をしていることが多い。が、彼らはれっきとしたそれらの家畜とは別の種であり、猫族などとは人間が勝手につけた名前であり、彼らにはそれぞれ別の名称が元々存在する。人間は自分達の家畜に彼らが似ていることと、彼らが生産的な行動が苦手（田畑を耕す習慣などがない）なことや好戦的な性格をしているため自分達より下に見がちだが、身体能力

は人間よりかなり高く、寿命も人間よりやや長めである。ちなみに体の構造は人間よりで、エルフと同様に人間と結ばれて子孫を残すことも可能である。

一方でゴブリンやオーク、巨人族の一部と言った、多くが人間に敵対行動を取る種族がある。彼らは後述する魔王に協力的であることが多く、また好んで自分達以外の種族を襲う。知能は獣人よりもさらに低く、三大欲求である睡眠欲・食欲・性欲に非常に忠実である。

（4）幻獣・魔獣

外見は様々であるが、森オオカミのような通常のオオカミと外見が似ており大きさだけが違うようなものから、ヌエやグリフィンのように複数の動物の特徴を示す種もいる。人間に親しみの多い種族としては天馬や竜がいる。なお飛竜と異なり人語を解する竜もいるが、現存しているのはわずか数体と一般的には言われている。

（5）魔物

概して自分達以外の全てに敵対するような種を指す。広義ではゴブリンやオークもここに分類されるが、ゴブリンやオークと違い、魔物は全般的に知能が高く、魔術を行使する者も珍しくない。その中で傑出した能力を示し、他種族をまとめる能力を持つ者を「魔王」「大魔王」と呼び、人間に限らず全種族にとって恐怖の対象となっている。なお、魔物の中にも人間によく似た外見を持つ者もいる。

世界観紹介その2～生物編～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

明日は国家以外の勢力を紹介しようと思います。「こんなこと知りたい！」っていうのがあれば感想まで。

本編は本日１９：００更新です。

リサの事情（前書き）

～あらすじ～

ミーシアに着いた一行は後で合う約束をしてそれぞれの用事を片づけに向かう。その中でリサは自分の家に戻るが・・・。

リサの事情

＊＊＊

「ただいま」
「あ、リサねーちゃんだ」
「「「おかえり～！！！」」」
「元気にしていましたか、このチビども？」
「トーマスがおもらしして大変だったんだよ～」
「じぇいくがとーますをいじめるからいけないんでしょ？」
「ちょっとこずいただけだろ～」
「ふああ～ん！　ネリィが私のお人形取った～！！」
「ちょっと借りただけじゃない！」

リサの家は凄まじい騒ぎである。いや、正確にはリサの家ではない。その辺の空き家を勝手に拝借しているだけなのだ。近隣の住人や、土地の持ち主はあらかじめリサがしっかり弱みを握っているため、誰も文句は言わない。迷惑がられているのだけはリサの耳にもちょくちょく入って来るが、どうしようもないことも事実である。

ここには孤児ばかりが９人ほど暮らしており、誰も大人はいない。子ども達は全員がリサより年下であり、リサの次に年長のジェイクが１０歳、一番年下のトーマスにいたってはまだ４歳だ。なにせ、そもそもリサ自身が孤児なのだから、やむをえない。

リサが必死で依頼をこなすのは彼ら全員を養う必要があるからである。最初はジェイクを拾ったのだが、歳を重ねるごとに人数は増えて行った。そのため、徐々に自分の収入では稼ぎが追いつかなくなってくる。今回リサがアルフィリース達に声をかけたのも、大口の依頼の可能性があったからである。

「とりあえず食べる物を買っておきました。今夜もリサは遅くなりそうなので、ジェイク？　チビ共をよろしく頼みます」
「またリサ姉遅いの？」
「報酬をきっちり受け取らないといけませんので。今回は良い仕事ができたので、収入も大きいでしょう」
リサのその言葉に、子ども達の顔が華やぐ。
「じゃあさ、新しい服買えるかな？」
「生地を買って作ったほうが安くできるよ！」
「そろそろ雨漏りも大きくなってるから、そっちが優先だよ」
「扉もそろそろガタが来てるよ」
「わたしのお人形は～？」
「そんなもの我慢しなさい！」
「うわーん！　新しいお人形欲しい～！！」
「・・・わかりました。ミルチェの人形が買えるようにふんだくってきましょう」
「・・・リサ姉、ホント？」
とても１０歳にも満たない子どもたちが交わす会話ではない。本当は子ども達には何不自由なく育ってほしいと願うリサだったが、自分のセンサーランクではそうもいかない。しかも人探し、物探しの依頼だけでは、中々高収入は得られない。
本当は今回のように町を出る依頼を受ければ高額の収入が得られるのだが、幼い子ども達を何日も放っておくのは心配だった。また自分が盲目の女、しかもどうやら見た目はそんなに悪くない、いや、下手をすればかなり好まれる容姿なのだと気が付いてからは、男と組むような依頼は全て断っていた。自分の身が男であれば、と何度呪ったかしれないリサである。だが子ども達を見捨てるような選択肢もまた、リサには絶対にありえなかった。

そして、ミルチェがリサの言葉に期待を膨らませて、返事を待っている。リサとしてはこういった子ども達の期待を裏切る人間にだけはなりたくなかった。

「リサが嘘を言ったことがありますか？」

「ううん」

ミルチェがふるふると首を横に振る。

「では良い子にして待っていなさい？　明日は休みを取ってあります。久しぶりに皆で過ごしましょう」

「リサ姉おうちにいるの！？　やったー！」

「リサ姉にお本読んでもらうの～」

「リサ姉、僕とでーとしようよ！」

「どこでルースはそんな言葉を覚えたの？　そういうの、『１０年早い』っていうんだよ？」

「ルースがふりょうになっちゃった」

きゃっきゃっと子供たちがはしゃぐ。その光景を感じとり、リサは思わず微笑んだ。これがリサが町を出られない理由だった。だが今回、かなり生活が切羽詰まって高額の報酬を受けたかったとはいえ、なぜ魔王討伐などの危険な任務を受けたのかは、リサにも不思議であった。気づけばアルフィリースの裾を引いていた自分がいたのだ。自分の行動、感情が理解できないのはリサにも初めての経験だった。

そして子ども達の笑顔を見る度に、なぜか胸の奥がもやもやするリサ。どうしてなのかリサは自分にもわからない。気のせいと胸の奥に押しこむには、大きすぎる不快感だった。

その時、不意に背後から声がかかる。

「ほ～う、それがヌシが働く理由か」
「・・・どちらさまで？」
「リサ殿、突然の訪問をお詫びします」

いつの間にか、ドアのところにアルベルトがシスターを連れて立っていた。いや、アルベルトがシスターに連れられているのか。

「（リサがこんな近くに接近されるまで気付かないとは。何者？）」
「突然の訪問は詫びよう。じゃがおぬしに言っておきたいことがある。無理にでも失礼いたすぞ」
「ここではなんです、奥の部屋へどうぞ。ジェイク、リサはこのシスターと話があります。すぐ済むので、皆とご飯を食べていなさい」
「わかった」

ジェイクと呼ばれた少年が子ども達を連れて移動しようとするのを見て、ミリアザールもアルベルトを促す。

「アルベルト、子供の面倒をみてやれ」
「わかりました」

不安そうに見守る子供達の頭をなでてやり、食事を食べる部屋にリサは促す。そして自分はシスターと共に奥の部屋へ向かった。

「で、どちらさまです？」
「これは失礼をした。ワシはシスター・ミリィ。おぬしに頼みたいことがあって参った。突然の訪問を許されよ」
「正規の依頼ならばギルドを通してほしいのですが？」
「正規の依頼として扱ってほしいが、ギルドは通せぬ。その分報酬ははずむつもりじゃ」
「なるほど、魔王討伐はあなたの依頼でしたか」

「さすがに鈍くはないのう」
「当然です」

2人は腹の内を探るように互いを見る。

「で、依頼とは？」
「簡単じゃ。アルフィリースとミランダに以後も同行してほしい。半永久的にの。報酬はここのチビ達の面倒をワシが一生見ること」
「・・・体のよい人質ですね。依頼というより脅迫ですか？」

リサが目つきを強めてミリアザールの方を向く。実際に見えているわけではないが、目が見えていた時の癖で思わずそうしてしまうのだ。

「これ、そのように物事を斜めに受けとるでない。これはそなたには破格の条件だと思うがな？」
「なぜです？」
「親もおらず、下手をすれば戸籍もないお主たちがこれからどうやって暮らす？　子供達はまだ増えるかもしれぬ。それでも養いきれるかのう？　また貴様が家におらぬときに火事でも起きたら？　強盗が入ったら？　またお主が依頼先で死んだら？？」

ミリアザールが指摘するその可能性は、リサも考えなかったではない。だが解決策もなく、できるだけ都合の悪いことは考えないようにしてきた。そういう点ではいくら大人びて見えようが、リサもまだまだ子どもだったのだろう。

「・・・嫌なことばかりいいますね」
「じゃが一家の長なら考えて然るべきことじゃ。今は良いかもしれぬ。じゃが学も戸籍も技能も何もなければ、まっとうに働くことは

かなわぬ。子ども達が成長し、行動範囲が大きくなるに従って世間を知る、欲も出る、自分を試してみたくなる。じゃが日の目を見れないあの子達は、間もなく犯罪に手を染めるじゃろう。窃盗、恐喝、売春・・・殺人もあるやもしれぬ」

「随分と言いたい放題ですね。そんなことはリサがさせません！」

「いや、防げんな」

「貴女に何がわかりますか！？」

珍しくリサが声を荒げる。

「大人など信用できません！　自分達の都合で子供を捨てる、虐待する。そんな光景はもうたくさん！　リサがあの子達を育てきって見せます！」

「じゃがこのままではそれはできんな。今は大きな問題も起こっておらぬようじゃが、一つ問題が起きればこのような生活はすぐに破綻する。むしろ今まで破綻しておらぬのが奇跡じゃわい」

「ならばどうしろと！？」

「じゃからワシが預かると言うておろうが。ワシは親がいない子供達がどうなるか腐るほど見てきた。それはもう、イヤと言うほどにな。だいたいが野垂れ死に。よくて奴隷として買われて変態の慰み物、あるいは魔物や野良の家畜に襲われる・・・ロクなもんではない」

「・・・貴女はいったい何者ですか？」

「想像はついておるんじゃないかの？」

ミリアザール不敵な笑みを浮かべる。リサは言葉にすべきかどうか躊躇ったが、沈黙は無駄だと判断した。

「・・・少なくとも、アルネリア教の司教以上。おそらくは最高教主・・・」

「なぜそう思う？　ワシはこのような幼い恰好じゃが」
「アルベルトは『ミランダ様』と言っていました。それは彼が司教以上の身分に敬語を使う立場であることを示します。ですが行動するときの立ち位置や、仕草からはそれほど身分的な違いはないようでした。それが、先ほどの彼は忠実な番犬のように貴女の命令をただ待っていた。それは貴女の立場が司教より高いことを意味します」
「ふむ、で？」
「貴女の持つ気・・・これほどの魔力を兼ね備えるのがただの大司教程度だとしたら、魔王や魔物など既にこの世から廃絶されていてしかるべきかと。もっとも、最高教主が魔物だとはさすがの私も想像してませんでしたが」
「そこまでわかるか。素晴らしい！」

パチパチとミリアザールは素直に讃嘆の拍手をした。だがリサは先ほどから、だらだらと脂汗をかき始めていた。それはそうかもしれない。最初は分からなかったが、今やリサはミリアザールがどのくらい強いかわかってしまっている。このようなレベルの魔物が存在すること自体が既にリサの想像をはるかに超えており、またそんな危険な存在をうかうかと自分の家に上げたことを心底後悔していた。

「（な、なんて・・・なんて魔力と気の量！　昨日やりあった魔王なんて、目の前の存在に比べたら子供みたいなもの・・・このような存在がリサ達を敵視したら、どうやっても生き残るのは無理です。なんとかしてチビ達だけでも逃がさないといけないけど・・・アルベルトがこいつに忠実な騎士だとしたら、もう打つ手が無い）」

リサの頭の中で思考がめまぐるしく回転する。が、どう考えても対策がみつからない。そんなリサの内心をよそに、ミリアザールが言葉をつなぐ。

「そこまでわかっとる者に遠慮は無用じゃな、貴様にもワシの真の姿をみせてやろう。これを見せるのはアルベルトに続いて、貴様が生きている者では2人目じゃ。ミランダにも見せたことはない。喜べ、普通は殺す者にしか見せん」

だがその言葉も、もはやリサには聞こえていなかった。膨れ上がるミリアザールの気を直に察知してしまったのである。なんとか震える足を踏ん張ろうとしたが、遂にこらえきれず、リサはその場にへたりこんでしまった。

「あ・・・あ・・・」

ミリアザールに姿が変形していく。体には金の毛並みを纏い、尾が生えてくる。今回は人相が変わるほどの変身をしてはいなかったが、その姿は明らかに人とは異なっていた。

そしてゆっくり近づいてくるミリアザールが、あまりの気に圧倒されて朦朧とするリサには非常に遠い出来事のように感じられる。やがてリサの目の前まで来たミリアザールから、尾が延びてリサに巻きついてきた。リサは微動だに出来ない。その心中に去来する感情は、成すすべもなくただ怯えることしかできず、子ども達を守ることもできない自分の無力さへの絶望だった。

「（リサは・・・こんなところで死ぬのですか・・・）」

圧倒的な力の前に思考が停止し、何も考えられない。あるのはただ死への恐怖だけ。死に怯えるちっぽけな自分を自覚できるのに、現実感がない。死ぬ時はこんなものなのかもしれない。リサがそう思ったとき、

ふわり・・・

と頭をなでられた。リサが何が起こったかわからず、きょとんとする。

「む、ワシの尻尾は気持ち良くないかのう？　結構自慢なのじゃが」

「・・・は？」

「おぬし、ワシに何をされると思うておったのじゃ？」

「・・・紛らわしいです、コンチクショウ」

リサがはぁ～、とため息をつく。

「てっきり殺されるかと」

「その気なら挨拶ぬきでやっとるわい」

「それもそうですね。ところで、なぜ尻尾ですか？」

「おぬし、頭をなでてくれるような人物はおるかの？」

「いや、貴女の言ってる意味がリサには不明です」

「子ども達はお主に甘えれば良い。じゃがお主は誰に甘える？　まだ誰かに甘えてもよい年頃じゃろう」

リサの目が大きく見開かれる。そのように言われたことは今まで一度もなかった。誰かに甘えてよいなどと考えたこともない。実の親ですら、そうさせてくれなかった。リサの目に熱いものがこみ上げてくる。

「な・・・ぜ・・・」

「んー？　いや、使い魔を通してお主を見ておって心配になってな。昔ワシがつらい時に、こうやって頭をなでてくれる者がいた。ワシにとってはとても幸せな記憶であり、その者がおらねば今頃ワシは魔王と呼ばれる立場になっていたじゃろう。ずっとその者の傍にお

れればよかったのかもしれんが、あいにくとそのような時間は長くなかった。ま、こういうのは順番なのじゃろう。だからお主にも自分を見守る者がおることを知って欲しかったのだよ。このままでは子ども達よりお主の方が早くダメになる。もっとお主は好きに生きてよいのではないか？」

「もっと自由に・・・」

リサがその言葉を噛みしめるように繰り返した。

「それにやがては子ども達もお主の手を離れていく。育てる者は、そのことを踏まえて育てねばならん。子ども達がきちんと自立できるようにな。ワシらの役目は、子どもが自らの未来を掴めるように選択肢を用意してやることじゃよ。そのためにはまずお主が自分の人生を掴みとらんとな」

「そう・・・ですか・・・」

「ところでワシの尻尾は気持ち良いかの？」

「はい、とても・・・」

「そうじゃろう、そうじゃろう」

ミリアザールがふっふっふっ、と自慢げに笑う。リサはしばらくなでられるがままにしていたが、疑問があったので聞いてみようと思った。

「聞きたいことがあるのですが、よいですか？」

「うん？　まあモノによるが」

「なぜ魔物が教会の教主などに？」

魔物は人間とは相いれないとリサは思っていた。それは全世界共通の認識であろう。まさか人間の最大勢力の一つの長が魔物などと、信じることができない。

「話せば長いが・・・まあ、隠すほどのことでもない。ワシは非常に希少な種じゃ。今ではワシ以外の仲間は死に絶えた。ワシらの毛皮や尻尾は非常に貴重じゃとされてのう。また魔物としても大した力を持っておらんかったため、人間からも魔物からも狙われ続けた」

昔を思いだすミリアザール。彼女が生まれたころには、既に種は滅びに瀕していた。

「もう随分前のことじゃが・・・そんな中でもワシはさらにはみ出し者でな。尻尾の数がワシらは普通４本なのじゃが、ワシだけ５本あった。それだけの理由でワシは同族からも迫害対象になったよ。もはや総勢１００体もおらぬほどに少なくなっておったのにな。実につまらんことよ。人間も魔物もどこの世界も同じじゃ。人とは違う者を恐れ、蔑む」

「・・・」

「仲間に追われ、魔物に追われ、人間に追われ・・・気がつくとワシは人間の村に迷い込んでおった。そこでも散々追い回されて力つきてな。ここまでかと覚悟を決めた時に１人の女性にかばってもらった」

「人間に？」

リサの言葉にミリアザールはしっかりと頷いた。

「そうじゃ。その女は、当時まだ魔術という概念が普及していないにもかかわらず、回復魔術を使いこなしておってな。村人からは非常に大切にされておった。まぁそれ以上に、人柄が素晴らしかったのじゃが。ともあれワシは彼女に助けられ、とても大切にされた。よく彼女の膝の上に乗っかって頭をなでてもらったよ。そのうち村人もワシに良くしてくれるようになってな。ワシは初めて自分の居

場所を得られた気分じゃった」

「・・・」

「そんな折、その女に花を摘んでやろうと思い、森に半日ほど入っておった。そして帰ると、村は魔物に襲われて全滅しておった。魔物が憎かったが、いかんせんワシは当時弱かった。何もできず逃げ出し・・・そしてなんとか生き延びたワシは修行を積み、数十年後、その魔物達をこの世から種族ごと根絶やしにした。じゃが・・・」

ミリアザールが一間おく。

「すべて終えてむなしいだけじゃった。村人達がかえってくるわけでなし、当時の生活が戻るわけでもなし。人生の目的も無くし、１人になったワシは本当にやることもなくなり、そこかしこを放浪するうちに行き倒れの人間を助けてな。それがワシに非常に感謝しよるのじゃ。魔物のワシになぜ？　と思ったが、ワシは自分の姿をよく見ると、いつの間にか人間と同じになっておった。ずっと村人の仇を討つことばかり考えておったからか。理由はわからんがの」

「自在に？」

「ほぼ、な。さすがに骨格を変えるのはかなり力を要するから気安くはできんが。顔形はワシを助けた女がどうやら元になっておるようじゃ。ともあれ、ワシはそれから人助けをして回るようになった。その男もワシに付いてくるようになってな。初めての部下じゃった。それからワシと行動を共にするものは次々と増えていき、紆余曲折を経て今のアルネリア教になった」

ここまでの話を聞いて、リサは納得がいった。成り行きで作られた気もするが、やっていること自体は間違ってはいないだろうとリサは思う。

「なるほど」

「じゃからワシにとって孤児を助けるなぞ、日常茶飯事なのじゃよ。心配はせんでええ。孤児でもきちんと教育を施し、機会を与えれば立派に成長する。アルネリア教に仕えんでも、他の国でも士官の口はある。孤児から騎士になった者、町を作った者、なんなら国を興した者までおったな。ラザール家の初代も孤児じゃしの」

リサは言葉がなかった。ミリアザールは気の遠くなるような年月、人間の守り手であり続けたのだ。そしてこれからもそうだろう。彼女なら信頼できるかもしれない。初めて信頼する目上の者が魔物とは、実に皮肉なものだが。いや、既にアルフィリースも信頼しているか、自分は。

「で、ワシのことはしゃべったが、自分のことはどうじゃの？　どうせ誰にも話したことがあるまい。話すなら今がよい機会じゃとは思うがな」

「聞きたいですか？」

「まぁ、実のところどっちでもええんじゃが。しかし話さんと、お主の心がバランスを失う気がするよ。どうやらお主の過去は重荷になっており、自分で処理しきれておらんようだからの。自分では気づいておらん、いや、わざと意識しておらんのか」

「貴女、センサーですか？」

「年の功じゃよ！　カッカッカッ」

快活に笑う魔物。でも彼女ならば誰よりも信頼できるかもしれない。それにきっと自分は彼女に似ているんだ。リサはそう思い自分の過去を思い出す。中原に珍しく、しんしんと降る雪の中で独りぼっちだった自分。そうか。もう私の心をあの場所から解放してやるべきなのかもしれない、とリサは思うのだ。

「つまらないリサの過去でよければ、ぜひとも聞いてください」

「よかろう。ゆるりと聞こうぞ」

自分より小さいミリアザールに頭をなでられる。

そうして、リサは自分の一番古い記憶を思い出していた・・・

続く

リサの事情（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

なお評価と作者のテンションは正比例です。押すごとにイイコトがあるかもしれないとか言ってみる・・・。

次回更新は１０／２８（木）１２：００です。

世界観紹介その3～国家以外の勢力～（前書き）

今回はミリアザールが属するアルネリア教会をはじめとした、国家以外の勢力。他にも小さな物はいくつかありますが、今回は主なものってことで。

世界観紹介その3～国家以外の勢力～

○アルネリア教会

聖女アルネリアが設立したとされる宗派。本部はアルネリアという都市にあり、ここに聖女も眠るとされる。宗教として戒律が厳しいわけではなく、組織化された巨大な慈善団体という見方が強い。教会の最高権力者として、およそ１５年程度をめどに聖女（最高教主）が各地の教会いずれかから認定される。その周期は不定期で、前任者が死亡した場合もあれば、単に引退した場合もある。なお組織図としては、最高教主の下に３人の大司教、６人の大司教補佐、およそ１００人の司教と続く。聖女認定は大司教と大司教補佐とで選出される。その勢力範囲は大陸の東側２／３におよび、教会関係の人間を合計すると５０万を超えるともいわれ、大陸最大の勢力となっている。

発端は各地を巡礼する聖女アルネリアに共感した者達の集まりであり、そこから発展して魔王討伐の補助、戦争での難民救済となった。また戦闘能力をもたない僧侶・シスター（特に女性であるシスター）は、敵だけでなく味方からも危険な目に遭うことが多く、彼らの保護団体としての機能を現在は果たしている。

もしアルネリア教会関係者に不当な暴力が働かれた場合、その関係国家および団体はいかなる状況においてもアルネリア教の援助を受けられないことを誓約させられている。その代わりアルネリア教の協力を受ける国家は飢饉や疫病、魔物討伐においてアルネリア教の援助を優先的に受けられることとなり、損よりも益の方が多いのが現状である。

泰平期における主な教会の活動は、地区教会の設立による貧民救済や、福祉施設・医療施設の充実である。また一定の教区を設け、

それぞれに司祭を派遣して各地区を監督させている。

なおアルネリア教会は神殿騎士団というおよそ3万の武装組織を独自に抱え、アルネリア教会派閥の国家内であれば、その国の騎士団と同等の権力・行動を認められる。だが司祭の役目がシスター・僧侶・その他施設従事者の監督であるのに対し、神殿騎士団は魔物討伐を請け負うことが多い。また土地柄の悪い場所でのシスター・僧侶の警護に当たるために設立されたという側面もある。中には聖女と同様に、シスターと巡礼の苦行に出る者もいる。

○魔術教会

アルネリア教会よりやや若い程度の団体であるが、その前身の発足は人間の歴史とほぼ同等とされている。一説にはエルフに魔術を教わる前からその研究は勧められていたともされるが、諸説あるので定かではない。

過去においては魔王討伐のため、各国に積極的に協力していたが、黎明期に入ってからは戦争への介入を教会としては禁じた。だが魔術師の中には自分達の能力をいかんなく発揮したいと考える者も多く、そういった者達は教会を離れ、個人的に戦争に加担していった。教会はそういった者達に処罰もなく寛大であった（悪く言えば魔術師には研究者肌の人間が多く、政治色が薄くて面倒くさかった）ため、様々な分派や、個人的に魔術を研究する者が増えてしまった。

ところが魔術師ヘルハルドの禁断戦争をきっかけに、大陸中の非難が魔術師たちに集中し、なかには魔女裁判や、いわれのない魔術師への迫害が行われるようになった。ここに至って事態の重大さに気がついた教会は、処罰を厳しくし、魔術師を厳しく監督することを大陸中に宣言。占星術や占いを駆使し、生まれついての魔力を持つ者を教会が引き取り一括管理することにした。

また自分から魔術師教会への参加を申し出たものには恩賞を与えることとし、教会の許可なく魔術を行使して一般人に危害を出した場合は征伐されてもやむなしとの処置を取っている。

そのため一時期に比べると魔術師の活動は随分大人しくなったが、その全てを教会が監督できているわけではないことは暗黙の了解となっている。ただ征伐を行う実戦部隊の実力は相当なもので、征伐が決定されると逃れることはまず無理と言われている。そのため好んで一般人に危害を加える魔術師は表面上まず存在しない。

なお魔術教会の長の選定は5年に一回行われる魔術議長会議にて行われ、前回の議長選定から4年の間にもっとも教会の利益になる研究発表した者が選ばれることになっている。そのため研究結果いかんでは、たとえ10歳でも教会の長となることが可能である。

さらに魔術の系統であるが、8属性による縦割りと、使用方法による横割りがある。使用方法の種別としては、精霊魔術、理魔術、召喚術、暗黒魔術などである。さらに魔術は基本一人一系統の属性であり、使用方法は後天的にいくつか学ぶことができる。なお一属性を強力に発現させた場合、元素によって髪色が変化することがあり、さらに強い者は瞳の色まで変化すると言われる。

そのため、髪色の変化は魔術師にとっては栄誉であると共に、魔術戦においては敵に知られて非常なハンデとなるため、染髪をする者が多い。中には複数系統の魔術を操る者もいるが、歴史上の最高は6系統だと言われている。

ちなみに「魔法」と「魔術」は別物とされており、「魔法」という認定が下される魔術は使用が禁忌とされ、教会に封印される。ちなみに魔法とは、その使用により歴史・土地・人物に不可逆的かつ恒久的な影響を与える魔術とされており、使用者の恣意的な影響が世界に出てしまうため、禁忌となるのである。ちなみにこれまで魔

法と認定された魔術の例としては、「永続的な土地の属性変化」などがあり、これの使用によりその土地で暮らす者や育つ食物の形態が変化してしまった、などの事例が確認されている。

○オリュンパス教会

大陸西部１／３を支配する、ここ２００、３００年で出現した教会。アルネリア教会と異なり、オリュンパス１０神といわれる神の言が教義となっており、偶像崇拝を行う。アルネリア教も信仰の祈り・懺悔の対象として聖女アルネリアの像を置いてはいるが、聖女≠神である点でオリュンパス教会とは異なる。

オリュンパス教会において、１０であれば信仰する神を選ぶことは自由だが、それぞれにおいて教義・戒律はかなり厳しい。またオリュンパス教義圏において無神論は許可されず、戒律を破ったと同罪として異端扱いを受ける。なお異端に対する扱いは非常に厳しく、一度異端という決が下されると覆ることはまずなく、処分は大抵処刑である。そのため異端という決が下った者は逃げ出す者がほとんどだが、彼らには「異端審問官」という非常に厳しい追撃者が放たれ、彼らに審問されるぐらいなら火あぶりの方がマシだと言われるくらいである。

教会の運営は、１０神それぞれの信仰における最高権力者同士の会議で決められ、「１０権分立」ともいえる方法を取っている。なお運営内容はアルネリア教会と似たようなものだが、歴史が浅い分アルネリア教ほど徹底しておらず、また下層部では信仰する神の違いによるいがみ合いも存在するため、概して東より西の方が土地は荒れていることが多い。

○対魔協会

東の大陸に存在する協会。だがその目的は西にある各教会とは異なり、魔物のせん滅を目的とした純然たる戦闘集団である。

そもそも東の大陸は西の大陸にくらべ魔物の数・強さ共に遙かに

上であり、いまだに人間の勢力圏は大陸の半分に至っていない。

東の大陸では人間が魔物の家畜同然に扱われた時期があり、魔物と人間の確執は西よりも余程強い。そのため対魔協会には魔物との融和などは頭になく、「即滅」を信条としている。

対魔協会は魔物せん滅に功を成した有力ないくつかの血統で構成されており、その中から民主主義的に代表（筆頭）を決め、何年かおきに交代することでその力の均衡を保っている。

現在の筆頭は相当に強く、任期の５年で人間の勢力図を３０％増やしたと言われている。そのため筆頭になってから１１年経つ今もいまだに筆頭を務めている。

だがその実情は謎に包まれており、いくらか西の大陸と交渉はあるようだが、詳しいことを知っているものはほとんどいないとされている。

世界観紹介その3～国家以外の勢力～（後書き）

閲覧・評価・コメントありがとうございます。

世界観紹介はいったん終わりますが、何か希望があれば感想に書いてくださいな。とりあえずこれだけあれば当座は色んなことがわかると思います。わかんなくなったら身に来てくださいね。

本編は本日１９：００に更新します。

リサの記憶（前書き）

～あらすじ～

リサの元を訪れたミリアザール。ミリアザールはリサの重荷を共に背負うように申し出る。リサが語る過去とは・・・？

リサの記憶

「どこから話せばよいのでしょうか・・・」

リサは戸惑いを隠せない。なにせ彼女は自分の事情を人に話したことなど無いのだ。それはリサのプライドが許さなかったし、自分の弱みを見せることなど、決して世の中でしてはならぬことだと思っていた。一方でアルフィリースをからかうのであれば、立て板に水を流すかの如く彼女は言葉を紡ぐ自身があるのだが。

口ごもるリサを見かねて、ミリアザールが助け船を出す。

「お主は最初から孤児だったのか？」

「いえ、ごく普通の家庭に生まれて両親との三人暮らしでした。裕福でも貧しくもなく、ごくごく普通の家庭だったと思われます」

「ではそこから話すとよかろう」

ミリアザールに促される。そう、確かに普通の家庭だった。

リサの父親は彼女のおぼろげな記憶によると、元々地方からこのミーシアに出稼ぎに出てきていた青年で、よく仲間たちとたむろしていた酒場の看板娘であった母親と結ばれたと言っていた。父親もなかなかの好青年だったらしいが、母親はそれは美しい女性で、彼女目当てに来る客で店は繁盛していたらしい。そして結婚してリサが生まれる頃には、父親は仕事ぶりが見込まれ、出稼ぎ扱いではなく正規の人員として雇われた。まさに父親にとって人生の絶頂期と言ってもよい時期だっただろう。

母親も酒場は夜が遅いという理由で花屋に転職したが、自分が働き始めてから売り上げが3倍になったとよく自慢話をリサにしていた。自分が扱う花の種類や名前をリサに教えるのが、母の日課とな

っていたし、リサも毎新しい花の名前を教えてもらえるのは楽しみだった。母が一輪ずつ持ち帰る色とりどりの花、かぐわしい匂い、花の名前、その意味。花を一つ知るごとに、世界が一つ広がるようだった。

「とても幸せな家庭でした。週に1度は必ず休みを家族で取って、3人でハイキングをしました。私の髪の色は少し不思議な色でしたが・・・両親は『とてもきれいな色だわ。リサを見ていると、優しい気持ちになれるの』といつも褒めてくれました。そう、とても上手くいっているはずだったのです。リサがあの一言を発するまでは」

幸せな家族。人間は自分が幸せであると中々自覚は出来ないものだが、それでもリサは実感していた。しかし、リサにはどうしても不思議に思うことがあった。そう、なぜか・・・なぜか、父の首に女がいつもしがみついているのだ。

「首に女が？」

ミリアザールが尋ねる。

「はい、美しい人でした。特に害意があるというわけでもなさそうで、母と父を寂しげな、羨ましげな目で見ているのです。話すことはできず、私のことは見えていないようでした」

「何かおかしいとは思わんかったのか？」

「今ではそう思いますが、当時は他の人にも色々なものが見えたので、人間とはそのようなものだろうと特に疑問も持たなかったのですが」

「なるほど、お主の目は魔眼の一種か」

魔眼――生まれつき、ないしは後天的な修行により獲得する、特

殊な能力を持つ目のことである。大抵は生まれつきである。有名な魔眼と言えば、千里眼、石化の魔眼、発火の魔眼などがある。リサの場合は霊視の魔眼だったのかもしれない。

「と、いうより。リサの盲目は生まれつきではないのか？」
「生まれた時は見えていました・・・自分で潰したのです」
「痛々しいことをするの。理由は想像がつくがな」
「・・・話を続けましょう」

別に言おうが言わまいが違いはなさそうなことだったので口にはださなかったが、日に日にリサの疑問は募っていった。この年頃はそうでなくとも「なぜ」「どうして」を大人に聞きたがる年頃である。リサの疑問も尤もであろう。その彼女が口に出さなかったのは、なぜか良くない予感がしたからだった。

だがついに限界を迎えたリサの疑問は、彼女に禁断の言葉を口にさせた。そして彼女は6歳の誕生日、ついに両親に尋ねてしまったのだ。

「おとうさん。どうしていつも女の人をせおっているの？」

その一言でリサは両親が凍りついたのを覚えている。普通なら「何を言っているんだい？」と笑ってすますところのはずだが、彼女の両親には心当たりがあったのだ。

「その夜です。私は生まれて初めて両親が罵り合うのを聞きました。私は居間で行われるその光景を、ドアの隙間からじっと覗いていた記憶があります。そして――」

翌朝、父親は家から出て行った。リサは理由を母親に尋ねたが、母親は答えてくれなった。

「その日から徐々に母はおかしくなり始めました。仕事を休みがちになり、一日中寝ていることもありました。リサは一日中何も食べられず、自分で家に置いてあるパンをかじっていた記憶があります」

「・・・」

そんな生活が何カ月か続いた後のこと。久しぶりに母親が居間に出てきた。リサは食事を作ってくれるのかと期待し、母親に無邪気に話しかけた。が、

「母は完全に気がふれていました。落ち込んだ、くまをつくった眼。痩せこけた頬、乾ききって艶のない唇。とてもミーシアでも有数の美人と評判だった面影はなく、まるで死人のような顔をしていたのを覚えています」

「・・・それで?」

「そして私を見るなりこういいました。『お前が生まれたからいけないんだ! お前があんなことを言わなければ、あの女さえいなければ・・・あの人はずっと私のものだったのに!』。そう言ってリサの首を絞めてきたのです」

「今さらじゃが、実の親のやることではないの」

「リサもそう思います。ですから全力で抵抗しました」

一瞬何が起こったかわからなかったが、リサの生存本能は思考よりも早く働いた。テーブルの上にあったフォークで母親の手を刺し、怯んだ母親に思いっきり噛みついたのだ。6歳の子供の反撃では大したダメージも無かったはずだが、それ以上に母親は精神的にショックだったらしい。

「『リサ、あなたまで私を裏切るの?』と、言われた記憶があります。リサは非常に悪いことをした気分になりそのままそこに立ちつ

くしたのですが、ふらりと母が歩き出したかと思うと、鼻歌を歌いながらその辺中に油をぶちまけ始めました」

「・・・で？」

「もはやリサのことも見えていなかったのでしょう。リサの位置も確認せずに家に火を放ちました。私はなんとか火を消し止めようと考えたのですが、幼いながらも火の勢いが強すぎてどうしようも無いことを知りました」

そのままリサが怯えて縮こまることなく家を飛び出したのは、生存本能以外の何物でもなかっただろう。彼女が振り返ると狂ったように笑う母の声だけが聞こえてきた。周囲は大騒ぎとなったが、リサにはもはや何も耳に入ってこなかった。

そしてリサは逃げ出すようにその場を離れ、気が付けば母親が働く花屋の前だった。

「母の花屋にはしょっちゅう遊びに行っていたので、顔見知りばかりでした。ですが、リサを見る目は冷たいものでした。後で知ったことですが、おかしくなった母がそこかしこで私のことを『あの子は化け物だ』と吹聴していたようです。もともとこのような髪色ですし、リサと関わりたくないというのが周囲の本音だったようです」

リサはその時の光景を思い出す。まるで世界に自分一人だけになったかのような・・・その時、彼女は母親が花屋でよく使っていた草枯らしの薬品を目にした。一回手にとって遊ぼうとすると、ひどく母親に怒られた記憶がある品物だ。

「もうリサはこの世界を何も見たくありませんでした。信じた物はあっけなく崩れ去り、幸せは二度と帰ってこない・・・それで確信があったわけでもないのですが、その薬を目にぶちまけたのです。周囲からは悲鳴が上がりましたが、リサは満足でした。実際、何も

見えなくなりましたから」

「・・・」

「でもおかしなものです。死にたいとは考えていなかったのか、その薬を飲もうとは思いつきもしませんでした。そのことに気付くと、リサの絶望はより深くなりました。まさか、自分に命を絶つだけの度胸も備わっていないとは思っていなかったので。この目では死ぬこともままならず、何をどうすればいいのかと。そして目が見えなくなって一人どこにも知れずさまよい・・・どのくらい時間が経ったのでしょうか、中原のミーシアには珍しく雪が降りました」

目が見えこそしなかったが、かなりの雪が降っていることは容易に想像がついた。リサは以前一度だけ母親の里帰りの時に雪が降るのを見たが、とても幻想的な光景で、まるで空が自分を祝福してくれているように感じたことを覚えている。

飢えと寒さでもう雪が止むまでは自分の命が持ちそうにない事を感じとり、美しい雪の中で死ぬならまた悪くないともリサは思ったのだが、彼女は自分の意識がなくなる前に、どこからともなく聞こえてくる泣き声に気がついた。

「小さな子の泣き声が聞こえたのです。それがジェイクでした。リサがジェイクのところにいくと、その子は泣き叫びながらも私にしがみついてきました。リサは既に死ぬ気だったのですが、その子まで巻き添えにしては父や母と同じではないか、と。自分より立場の弱い者に対して、無責任なことだけはしたくありませんでした」

「センサーとしてはいつ覚醒した？」

「その時です。生きる気力が沸々と戻ってきたときに、センサーとしての能力が覚醒しました。そこから後は知っての通りです」

リサが飄々（ひょうひょう）とかえすが、とても生半な人生ではない。もちろん長く生きてきたミリアザールにとっては、これ以上

に悲惨な人生などいくらでも知っているが。にしても、である。
だがミリアザールは辛辣とも取れる一言を発した。リサの性格を考慮に入れた上でのことではあるが、慰めるばかりが優しさではないことをミリアザールは知っている。

「先に言っておくが、同情はせん」
「貴女ならそう言うと思いました。リサも同情はまっぴらです」
「が、ワシにできることがあれば力になろう。そのくらいの度量と情はある」
「心遣いは嬉しいです。ですが、既に先ほど甘えさせてもらったので」
「ふん、プライドの高い女よの。まぁよい。また甘えたくなったら、いつでもよいから甘えるがよい」
「・・・そうさせてもらいましょう」

リサがやや照れくさそうに答える。その様子を見て、ミリアザールは尻尾でリサの頭を再び撫でてやった。

続く

リサの記憶（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます！

最近閲覧・ブクマが急激に増えてきて、とても作者は嬉しいです！
もっと話はこれからも盛り上がっていくので、よろしくお願いします。

ちなみに１０／２７でＰＶ２００００、ユニーク３０００突破いたしました！

次回の投稿は１０／２９（金）１１：００です。

祝勝会（前書き）

～あらすじ～

リサとミリアザールのもとで交わされる約束。そして祝勝会は何事も無く終わるはずが・・・？

今回はライトな感じでお届けします。肩の力を抜いてお楽しみくださいませ。

祝勝会

「で、元の話にそろそろ戻るが。依頼は受けてくれるかの？」
「・・・いいでしょう。確かに貴女の言う事にも理はあります。貴女を信じてみることにします。ですが、リサの期待を裏切れば・・・」
「どうする？　殺しに来るか？？」
「それは実力的に難しいので、死んだ方がマシ！　というくらい恥ずかしい噂をばらまいて、社会的に抹殺してあげましょう」
「そっちの方がよっぽど怖いわ！　１４とかの人間の発想じゃないぞ？」
「ふふふ、これでも修羅場はいくつもくぐってきてるので」

リサが無表情のまま、不敵な笑い声を出す。ミリアザールが約束を違えたら、本気で彼女はやるだろう。ミリアザールは柄にもなく、ちょっと背中にうすら寒いものを感じてしまった。

「では、リサからも一つ質問です」
「いいぞ？　じゃがスリーサイズとかは無しじゃ」
「だれが幼女のぺったんスリーサイズなんぞ気にかけますか。それよりも、どうしてそこまであの二人を気にかけるのです？」
「そんな事とは大層な言い草じゃな！　お主があの二人を気にかけるのと大して変わらんと思うぞ～？」

ミリアザールとしては茶目っ気たっぷりに言ったつもりだったが、リサはいらっとしたようだ。

「茶化さないでください」
「ふん、つまらん奴め・・・ミランダが不死身なのは聞いたな？」

「ええ」
「『死なない』うちはよい。でも『死ねない』のはつらい。以前恋人を失ったあやつを見ていた時は、本当に痛々しかった。人生に絶望しても死ねないのは、主らが思う以上に最悪じゃ」
ミリアザールが目を細め、以前ミランダを拾った時のことを思い出す。
魔物の帰り血で全身を赤く染め上げ暴れまわる女がいるとの評判が立ち、ギルドでも問題になっていた。その女に近づこうとした人間は好悪の感情に関わらず例外なく再起不能にされていたが、その程度なら何もミリアザールは出張るつもりはなかった。
だが人間を襲わないと約束させた魔獣・魔物や、比較的人間に友好的であった獣人にまで手を出した時にミリアザールは動いた。最初は自分の暗部である口無しを送り込んだが、仕留めたという報告が上がっても、しばらくすればまた生存が確認される始末。捕獲したその女がどんなことをしても死なないという報告を受けて、最後はミリアザールが自ら出向いたのだ。
その時に見たミランダの目。既に人のものとは思えぬ、異様な光を放っていた。歴戦のミリアザールですら怖気(おぞけ)を感じる圧力を、ただの人間のはずの女が備えていた。
だが同時に、ミリアザールは悲しい気持にもなったことを覚えている。そこまでの目をするようになるまでに、一体女の人生に何があったのか。その事を考えるだけでも、ミリアザールの胸は痛んだ。
紆余曲折を経てミランダを自分の手元に置くことにしたミリアザールだが、監視が目的と周囲には言いながら、彼女の心中ではミランダを案じる気持ちで一杯だった。自分の寿命ですらいい加減人生に飽きてきていたが、目の前にいる不老不死の女がこれからどのような人生を歩むかと思うと、ミリアザールは胸が押しつぶされるよ

うな思いにとらわれていたのだ。

「人間に死ぬ運命が待ち受けておるのは、むしろ幸福じゃと言ってもええ。ワシらのような存在からすればな。じゃが、ワシは残念ながら不死身ではない。この身は既に全盛期を通り過ぎており、ワシは後１０００年も生きんじゃろう」

「充分長いと思いますが」

「貴様らにはそうでも、ミランダには違う。お前も３００年程生きればわかるかも知れんが、ミランダは後何年生きるか想像もつかん。この大地が終わるまでは最低生きるじゃろう。もしかすると、この大地が終わっても生きておるかもしれん」

「・・・」

自分の寿命がどうやら同じ種族より長いと判明した時、ミリアザールは自らの命を絶つことを本気で考えていた。当時は成立したばかりではあったものの、正直アルネリア教などどうでもよかったし、他人の救済を旨とした集団であるにもかかわらず、何かにつけて仲間で争おうとする人間に愛想が尽きそうにもなっていた。

それでも教主でありつづけたのは、アルネリアの姿が忘れられなかった事と、理由はもう1つ。芯から信頼に足る人間に再び出会えたこと。ミリアザールにとって、2回目の幸福な時間だった。

その時からは以前のような虚無感はミリアザールにはなくなった。もっとも完全に消えたわけでもない。

「ワシも長寿じゃが、まだワシには長らく仕えてくれる者がおる。また沢山の人間や仲間に愛されたよ。不幸な死に方をした者も沢山おったが、幸せな人生を送った者も多く見てきた。だがミランダは自分に良くしてくれた者を、ほとんど全て不幸な方法で失くしておる。そのような記憶ばかりでは、人間の心は死んでしまう」

「・・・それは確かに」

「不老もそうじゃし、不死も問題じゃ。バラバラにされても決して死なん。じゃが活動停止には追い込める。バラバラにされたまま、磔とかにされてみい。死にもできず、再生もできず、永遠にそのままじゃ。それがどれほど恐ろしい想像か、わかるかの？」

「リサなら絶対、御免こうむりますね」

リサは思わず震えた。不覚にもそういった光景を想像し、その時にミランダがどういう顔をするか思い浮かべてしまった。もし自分がそうなら？　想像することすらおぞましい。

「あれはまた外見が美しいからの。そして残念ながら、人間や魔物の中には我々では想像もできんような残酷な真似が出来る奴らがおる」

「それは、なんとなくわかります」

争い事は避けてきたリサでも、ギルドにいれば戦場の悲惨さは耳にする。また自分が日常扱う事件ですら、耳をそむけたくなるような事例はいくつかあった。

「またアルフィリースも心配じゃ。本当は山奥で隠遁生活するのが一番じゃろうが、それはやはり可愛そうじゃしの。ワシが一緒に旅をできればよいのじゃが、残念ながらそういうわけにもいかん」

「それでリサを、と。リサでは役者不足では？」

「実力的にワシを上回る者など、どっちにしても大しておりはせん。それにワシもまた万能ではないしな。だいたい旅とは気を許せる者同士がよい。ワシではあの二人が子供にしか見えんでの・・・まぁ、そなたには迷惑だったもしれんがな」

「いえ、思ったほど嫌ではありません。むしろチビ共のことさえなかったら、私から申し出たかもしれません」

リサが即答する。この反応はミリアザールにもちょっと意外であった。

「ほう・・・なぜ？」

「なんというか・・・あの二人は気になります。それに一緒にいて、今までで一番気持ちのよい人間達でした。センサー風に言うと、雑音が少ないとでもいうのでしょうか。なんというか、年下の私が言うのもおかしいのですが、あの二人、特にアルフィリースは守ってあげないといけない気がします」

なぜリサは自分がそう思うのかわからない。センサーは基本的に非力な生き物だし、戦闘では不意を突かない限り、自分がほとんど役に立たないことも知っている。アルフィリースに守られる立場の自分が、アルフィリースを守りたいと思うのは変な話なのだが。

「ふぅむ。まぁ、ミランダが傍におるのも同じような理由かもしれんな。確かに、不思議と保護欲をかきたてられる人間ではあるし、センサーであるお主が言うと信憑性も上がる」

「まぁ、変なのもイッパイ寄ってくるでしょうが」

「変なの・・・ね」

ミリアザールは思わず噴き出してしまった。なぜかその光景が容易に想像がつくから恐ろしい。

「ですが変な虫はリサが背後からグッサリやっちゃいますので、御心配なく」

「ん、まあ、ほどほどにな・・・くくく」

リサが背後からグサリとやる真似をしたので、その仕草が可愛らしくてミリアザールは声を立てて笑ってしまった。

「（これも死なせるにはもったいない人間。こっそりワシの暗部を護衛につけておくかの・・・？）」

などと考えていた。

＊＊＊

それからミリアザールとリサは無事に交渉を済ませ、アルフィリース達と合流した。

どうやらミリィも一緒に祝勝会をしたいと言う。それにリサが二人の旅に同行したいと言い出した。最初は驚いたアルフィリース達だったが、旅の仲間が増えるのは歓迎だったので快く了解した。

祝勝会はアルフィリースの提案で、ミーシアの町で最初に彼女に声をかけた獣人の店で行うことになった。訪れた店で、彼は2つ返事で席を確保してくれる。出会った時の、愛想のいいままの彼だった。彼は犬の獣人と人間のハーフで、ウルドと名乗った。

「いやー、お姉さんが俺っちのことを覚えてくれてるなんて感激だなぁ！」

「あら、私は人に受けた恩は忘れないわよ？」

「こいつは嬉しいことを言ってくれるね。どう、お姉さん今度俺とデートしない？」

「アタシのアルフィを何口説いてんだ？　このチャラ男！」

「さっそく変な虫がつきましたか」

ミランダとリサが手に獲物を構える。

「とっとと、こりゃあおっかねぇ！　それにお姉さんがそっちの趣

味だったとは」
「ち、違うわよ！　私はれっきとした男好き・・・あれ？」
「こんなところで淫乱発言ですか？　いくら夜でも言っていいことと、悪いことがあるのでは？　教育上、よろしくありません」
「アルフィ・・・フォローはしないわよ？」
「フォローしてよ！」
「なるほど・・・アルフィ殿は男好き、と」
「アルベルト、絶対それネタだよね？」

まだ酒は大して入ってないのだが、ぎゃあぎゃあとかしましい一団である。その様子を狼の獣人である店主がほほえましく見ている。

「ウルド、元気なお客さんだな」
「でしょ？　しかも美人揃い。目の保養になりまさぁ」
「そうだな。かなりの美人揃いといって差し支えないだろう。が、それ以上に凄い使い手達だ」
「そうなんですか？　俺っちはその辺よくわからないから」
「ふん、やかましいだけだ」

悪態をついたのはネコの獣人の女性である。店主の前で一人でちびちびやっている。

「なんかいいことあったんじゃねぇか？　そう言ってやるなよ、ニア」
「落ち着きがないにもほどがある。戦士は冷静でなくてはいかん」
「お前のとこの戦士長は、落ち着きなんかと無縁だろうが？」
「だから肌が合わん！　なのに実績は一級だという・・・私には理解できん」
「まあアイツは特殊だったからな。でもあそこの連中も、お前のとこの戦士長くらいには強いかもよ？」

「ふん、大したことなどないさ」
「とか言って気になるんじゃないか？」
「気になってなどいない！」

ニアと呼ばれたネコの獣人はダン！　とコップを勢いよくテーブルについた。が、ミミや尻尾がピコピコと動いており、彼女達に興味津々なのは傍から見ても明らかである。

「（わかりやすい奴だな・・・）」
「（わかりやすいですよね・・・）」

ウルドと店長は顔を見合わせて苦笑したが、頑固なニアは決して認めないので放っておくことにした。

「で、なんでお前は酒場で牛乳を飲んでるんだ？」
「・・・酒は体に悪い」
「いやいや、少し程度なら体にいいんですよ？　ニアさんもう成人でしょ？」
「今さら身長を伸ばしたいのか？」
「ほっとけ！」

確かに小柄が多いネコ族でもちょっと、いや戦士としてはニアはかなり小さめではある。もう年齢的に背はのびないのでは、というのは禁句であろう。そんな折、さらにアルフィリース達の席がヒートアップする。

「アルベルト～、さっきから全然飲んでないじゃん！」
「私は下戸です。酒は飲めません」
「え、じゃあ何飲んでんのさ？」
「ククス果汁です」

「あんたはお子様か！？」
「・・・さっきからククス果汁がこっちに全然来ないと思っていたら、貴方が原因でしたか、アルベルト」
「・・・フ、果汁は渡さん。ウルド、こっちにククス果汁もう2瓶追加だ」
「チ・・・ウルド！　こっちは3です！」
「・・・4だ」
「5！」

なんだか変な戦いが始まったようだ。リサＶＳアルベルトとは、まさかの組み合わせである。

「っていうか果実酒の一気飲み対決って、何？」

とアルフィリースは茶々を入れたが、止めようにも火花が散り合っている・・・放っておくことにした。
で、一方ミリィとミランダはというと・・・

「お姉さま～（ついに真実を述べたようじゃのう。やっとオシメが取れたか、ひよっこめ）」
「ミリィ～（あ～ら、そっちはそろそろ年齢的にオシメが必要なんじゃありません？）」
「お姉さま～（バカ者め、あと１０００年はイケるわい！）」
「ミリィ～（無理すンなって、そろそろトイレが近いだろ？）」
「お姉さま～！（貴様こそ、そろそろユルイんじゃないのか？）」
「ミリィ～！（アンタみたいにカビるよりましだ！）」

さっきから名前しか呼び合ってないはずの2人なのだが、なぜだかどんどん雰囲気が険悪になっている。なぜだろうと思うアルフィリースの疑問に、答える者は誰もいない。

「（さっきからシスター・ミリィが酒をグビグビ飲んでいる気がするんだけど・・・いいのかな？）」

酒は一般的に成人の１６歳を迎えるまでダメなはずだけで、祝い事用の酒ならば一応許可はされている。もっともそのようなしきたりは守られない方が一般的である。だが、今ミリィが飲んでいるのは酒場でもかなり強い酒だった。以前、アルフィリースは同じ酒をコップ一杯飲んだだけで足腰が立たなくなったのだが。シスター２人は、既に瓶でのラッパ飲みが始まっている。

「カビてないわー！（お姉さま～）」
「じゃあ見せてみろー！（ミリィ～）」
「ちょっと、本音と建前、逆になってない？」

２人がなぜか脱ごうとし始める。こんなところでシスター２人のストリップなど、さすがに洒落にならない。助けをアルベルトに求めるが、そちらはそちらで、いつの間にかクス果汁の瓶が１５本くらい空いている。そしてリサとアルベルトの目が完全に据わり、怪しい光を放ち始めていた。

「（どうして果汁であんなことになるの？　だ、誰か助けて～！）」

ミリィとミランダの２人を押さえようとするアルフィリースだが、逆に簡単にねじ伏せられた。実力的に順当かもしれない。

と、その時酒場の入口からどよめきが起きた。アルフィリースは自分の心の叫びが通じたのかと思ったが、どうやら事態はそう言った呑気な雰囲気ではないようだ。先ほどまで様子のおかしかったメンバーも、既に正気に戻っている。

続く

祝勝会（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます！

今回は気になる引っ張りにしてみました。

でも次回は１０／３０（土）１３：００に投稿です。

ダークエルフの少女（前書き）

～あらすじ～

祝勝会を獣人の店で行うアルフィリース達。その時、店の入り口で騒ぎが起きたのであった。

新たな展開が始まります、どうぞお楽しみあれ。本格的に冒険が始まります。

ダークエルフの少女

「ど、どなたか助けを・・・」

入ってきた人物を見てアルフィリースは目を疑った。褐色の肌、尖った耳、海を思わせる青色の瞳、そして流れるような銀の長髪。

「（ダークエルフ？）」

エルフというのは森の民の別称で、人間より精霊に近い種族とされている。人間に比して長命な者が多く、非常に穏やかな種族である（感情に乏しいという説もある）。また魔術に特に秀で、魔術に関してはエルフが人間に教えたとの説もあるくらいだ。

彼らは自然が多い所に住居を構え、自然が豊富な北の森林地帯に主に住んでいると言われている。外見としては尖った長い耳が特徴的であり、白い肌を持つエルフは人間に協力的だが、褐色の肌を持つダークエルフは魔王に協力した種族として、人間だけでなくエルフとも敵対関係にあるとアルフィリースは聞いたことがある。人間に協力的なエルフでさえ都市部では滅多に見かけないのに、ましてダークエルフが都市にくれば真っ先に殺されかねない。

そのダークエルフが今目の前にいるのだが、噂ほどの邪悪な気配を感じない。見た目は可憐な少女そのもので、むしろ気品さえ窺える。いや、それより彼女は血まみれで瀕死なのではないだろうか？

気がつけば、そのエルフがぐらりと倒れかかる所だった。あれこれ考える前に、アルフィリースは既にその子のもとに走って彼女を抱きとめていた。

「誰か、手当を！」

「アルフィ、どいて！」

ミランダがかけつけてくる。が、少女の怪我はかなり深く、腹からは血がとめどなく溢れてきている。腹を押さえる手にも既に力が余り入っておらず、褐色の肌にも関わらず全身が真っ青になってきているようだ。

「これは・・・アタシじゃもうどうしようもない・・・」

「そんな?」

大きな血管がやられているし、内臓にも損傷があるようだ。むしろよく生きていると言えるかもしれない。どうやっても、ダークエルフは一刻もつかどうかというところだった。

「でも・・・」

ミランダがミリアザールの方をちらりと見る。大陸一ともいわれる彼女の回復魔術なら、あるいは。だがそんなミランダの助けを求める目に、渋い顔をするミリアザール。

「個人的には勧めんな、普通なら死んでおる運命じゃ。助ければ面倒事に巻き込まれるぞ?」

「ここに貴女が居合わせるのは、この子を助けろという運命では?」

ミランダがすがるような目でミリアザールを見る。アルフィリースはなんのことやらわからなくて、口調の変わったミリィにも戸惑い、おろおろしているだけだ。

「ミランダよ、そんな目で見るな・・・助けてもよいが、後のことは知らんぞ?」

「構いません、お願いします」

ミランダまで口調が変わったことをアルフィリースは疑問に思ったが、今はそれどころではない。ミリアザールが悠然と歩いてい来ると、ダークエルフの傷を調べている。

「ふん、ちょっと見せてみろ・・・ふむ、これなら余裕で大丈夫じゃわい。魔術を使うから下がっておれ、特にミランダはな。ワシ魔術の影響を受けたら、浄化のしすぎでお主から邪気が抜けて面白くないわ」

「冗談言ってる場合ですか！」

「そう急くな・・・おいダークエルフ。助けてやるから後で理由を話してもらうぞ？」

「・・・」

少女はどうやら返事をするのもきついようだが、こくり、となんとか頷いてみせた。

「よし、すぐに楽になるぞ」

ミリアザールが手で印を組むと、瞬間、周囲の空気が静止したような気がした。そのあとに神秘的で、かつ温かな気が周りを包み込む。まるで彼女を中心として、光が流れ込んでくるようだ。その様子は店の外からでも確認できるほどだった。

ミランダとアルベルト以外の人間は知る由もないが、これが「聖女の奇跡」として大陸中に鳴り響いたミリアザールの回復魔術である。通常のシスター・司祭では手に光を集めるのが限界であるが、彼女の場合自分の全身を覆い尽くすように光を集める。さらに広範囲の回復魔術を用いるときには半径１０ｍ程度を半球状に覆うほど光を集める。実際にはミリアザールは神聖系の攻撃魔術の方が得意なのだが、立場上大暴れするわけにもいかず、それこそ使ったのは

何十年前かというところである。
そしてミリアザールが詠唱を始めた。

【地に潜み、風に踊る慈悲深き癒しの精霊よ。汝らの恵みを我に貸し与え、哀れな我らを助け給え。汝が血肉を今精霊の御名のもとに取り戻さん】
《回復魔法陣（ヒーリングサークル）》

そして一帯が光に包まれ、あまりの眩しさにその場にいた全員が思わず目を塞ぐ。そしてややあって、再び全員がゆっくりと目を開いてみると、そこには光で描かれた半径５ｍほどの方陣が地面に描かれており、周囲からは邪なものが抜けきってしまったように空気が澄んでいた。そしてダークエルフの女性は目をぱちくりとさせて、自分に何が起きたのかもよくわからない顔でその場に起き上がっていたのだった。

「これで生命の心配はいらん。だが一気に完全回復とはいかんから、しばらくその魔法陣からは出るなよ？　なに、一刻はその方陣の効果は持つ。それで一晩寝ればすっかり元通りじゃわい」

ふふん、とミリアザールは得意げに笑って見せる。エルフの女性は驚きながらも、ぺこりとかわいらしいお辞儀をしてみせた。

「では事情を話してもらおうと思うのじゃが、人払いをした方がいいかの？」
「そうですね、できればその方がよいかと思います」
「済まぬが店主、店じまいを頼めるか？」

様子を見ていた店長が頷いて見せた。ウルドの方は呆気にとられているが、なかなかどうして店長の方は鉄火場に慣れているのか、

動じた様子が全くない。

「そうだな、さすがにこれじゃ営業どころじゃなくなるだろう。人だかりも店の外にまでできてるしな。そら、おまえら行った行った！　今日はタダにしといてやるよ！」

「店主、恩に着る」

「いいってことよ。ただし、俺も事情は聞かせてもらうぜ？」

「しょうがあるまい」

飯や酒の途中であった客達は口々に文句を行ったが、ここの店主は腕っ節には自信がある。2、3人ひっ捕まえて放りだすと、全員すごすごと出て行かざるを得なかった。

「これでいいかよ？」

「十分じゃ。さ、話してもらおう」

「はい。申し遅れましたが、私はフェンナ＝シュミット＝ローゼンワークスと申す者です」

「ローゼンワークス？」

ミリアザールの顔色が変わる。

「ダークエルフの王家の血筋ではないのか！？」

「はい、私は分家の末席に当たりますが、確かに王家の血に連なる者です。また誤解の無いよう先に述べておきますが、『ダークエルフ』とは肌の色からつけられた、貴方がた人間の呼び名。我々は自分達のことを『探究者（シーカー）』と呼びます。また魔物に協力した種族は、外見上我々と似ていますが、彼らは『貶める者（スコナー）』と呼ばれ、我々からは袂を分かっている者達です。御理解いただきますよう」

「む・・・それは失礼した」

ミリアザールがきまり悪そうに謝る。フェンナは軽く一礼すると続ける。

「我々の集落は非常に小さなもので、人口も１００人程度。ダルカスの森の奥深くでひっそりと暮らしておりました。ですが先日、人間達の急襲を受けて里は滅びました・・・」

「人間の？」

素っ頓狂な声を上げたのはミランダである。

「ダルカスの森に一番近いのはクルムス公国だけどさ、あそこは平和主義の国じゃなかった？　戦争自体もう何十年もやってないはずだよ？」

「私は比較的年若いので、人間の世界について詳しいことはわかりません。急襲してきたのがそのクルムスかどうかも」

「でもさ、ダーク・・・いや、シーカーなら魔力は私達の何倍もあるだろ？　一体、何人がかりで攻め込んできたのさ？」

「１００人もいなかったと思います」

これにはミランダだけではなく、ミリアザールも驚いた。だが他のメンバーはまるで理由がわからない。

「ねぇ、そんなにありえないことなの？　数の上では同じくらいだけど・・・」

「そっか、アルフィはわからないよね。ちなみにエルフ平均魔力は人間の１０倍って言われていてさ。王族にもなると１００倍はゆうに上回るっていわれる。だから１００人もエルフが集まれば、国同士の戦争の戦局が傾くって言われるほどでね」

「そんなにすごいの？」

「そうだね。だからエルフって数はとても少ないけど、地上から淘

汰されずに存続してるのさ。自分達からは戦争なんてしない温厚な種族だし、エルフを攻めて滅ぼすなんて、メリットもなければ危険が大きすぎる」

「それをたった１００人で全滅とはのう・・・何があった？」

ミリアザールが言葉を継ぎ足した。フェンナは続ける。

「魔術が・・・魔術がほとんど効かない兵士がいました。それでも私達には武器をとって戦える者もいたのですが、先頭にいたたった４人の人間に３０人余りが一瞬で斬り伏せられました。余りの事態に私は逃げるように父と母に言われ、母の転移魔術で逃げようとしたのですがそこに兵士が斬りこんできて・・・母は私の目の前で斬り殺されました。私も手傷を負わされ、魔術の起動時間すらほとんどない状態でしたので、転移先の座標も狂い、同族に助けを求めるはずが・・・この町に飛ばされていました」

フェンナの目に涙が浮かぶ。彼女は目の前で母を失ったばかりなのだ。おそらくは一族も。

「お願いします・・・私を連れてダルカスの森まで戻っていただけませんか？　近くの町まででよいのです。私の里まで同行してくれとはいいません」

「アルフィ、どうする？」

フェンナが懇願するようにアルフィリース達を見まわした。彼女にしても、他に頼るものが無いのだろう。エルフは基本、森から出ない。まして年若いともなれば、今いるミーシアがどのような場所で、どうやって森に帰るかどうかも分からないに違いない。また、世間的にダークエルフと言われる者が人間の世界を一人でうろうろするのも危険極まりない。

そのくらいの事情は全員が瞬時に理解できたことだが、正直フェンナを引き受けるのは誰が考えてもリスクが大きい。そのことを承知の上で、ミランダがアルフィリースに問いかけてくる。

「私が決めていいの？」

「まあリーダーはアンタだしね。アタシは所詮同行者さ、今は特にこれをしなきゃいけないってこともないし。だけど個人的な意見を言わせてもらうと、オススメはできない。だが、アタシはあんたについてくつもりだよ」

「リサも同意見です。イイ予感はしませんが、アルフィの心のままに動くのが最も後悔が無いと思います」

「私は・・・」

フェンナの様子を窺う。助けを求めるような、でも申し訳もたたないような、期待と不安の入り混じった青い目がアルフィリースを見つめている。

「（・・・この子を放り出して自分の旅を気楽に続ける？　考えられない）」

アルフィリースの決断は早かった。

「彼女を助けるわ。きちんと彼女を里まで送り届けましょう！」

「！　あ、ありがとうございます・・・」

「でも貴女の一族は・・・」

「わかっています。一族の生存を確認しにいくわけではないのです。ただ一族に伝わる秘術の封印を確認しに行くだけです」

「秘術？」

てっきり一族の安否を確認したいとばかり、アルフィリースは思

っていたのだが。

「申し訳ないのですが、内容は申し上げれません。ですが、封印の状況次第で私の今後の行動が変わりますから」

「わかったわ、内容については聞かないことにする。それじゃあこれからよろしくね。私はアルフィリースよ。で、こっちの年長で口の汚いのがミランダで、年少で口の悪いのがリサよ」

「あぁん！　誰の口が汚いって！？」

「全くです、デカ女の分際で生意気な」

・・・いや、的を得ているようだが。

「でもそこまでどうすんだい？　結構遠いし、その辺は地形も結構複雑だよ？　ちなみにアタシはその辺にはほとんど行ったことが無いんだ」

「だれか案内を頼むのが妥当ですね」

「フェンナは詳しくないの？」

「私は森から一歩も出たことがないので・・・森をある程度分け入ればわかるのですが」

「私が案内をしよう」

突然の申し出に全員が振り向いた先には、猫の獣人がいつの間にか立っていた。背はリサよりも小さいか。だが気の強そうな顔と、引き締まった体をしている。どうやら旅慣れしており、戦いの経験もあるような雰囲気を醸し出している。

「私はニアという。グルーザルドの軍人だが、現在は武者修行のため一人旅をしている。私はそのあたりに詳しいのだが、案内としてどうかな？」

「案内はありがたいけど・・・なんでその気になったの？」

「困ったものを見捨てるのは、グルーザルドの軍人として恥だからな」

ふん！　とニアは顔をそらすが、後ろでくっくっくっ、と店長が笑っている。

「虚勢はるなよニア。貴方達がなんだか気になるから同行させてくださいって、素直に言っちまえよ」

「べ、別に私は気になってなど、いない！」

腕を組んでぷいと横を向いてしまったが、耳と尻尾がせわしなく動き始めた。これは・・・

「わかりやすいな」

「ええ、わかりやすいですね」

「私にもわかるわ」

「なるほどのぅ、これがツンデレというやつか」

その場の全員が「うんうん」とうなずく。フェンナにはなんのことやらわからないようだが。

「つんでれ？　つんでれとはなんだ？？」

「ツンデレとは褒め言葉です。人間の世界ではこう呼ばれることは最高の名誉だと言われています。ちなみに、使い方としては、自己紹介の時などに用い『こんにちは。ツンデレのニアです』などという用例があります」

リサがすかさず説明するが、嘘八百もいいところである。いや、まぁ言われて喜ぶ人もいるかもしれないが。他のメンツは面白くてたまらないという顔で、噴き出すのを必死で堪えている。アルフィ

リースはそっとリサに耳打ちをするが、

「（リサ、いくらなんでもそれはまずいんじゃ・・・）」

「（こんな面白い逸材を逃す手はありません。もしネタをばらしたら、あなたが淫乱という情報を私のネットワークでミーシア中に流します。私はそれでも相当に面白くなりそうなので、一向に構いませんが）」

無茶苦茶な脅し文句だが、リサなら本当にやりかねないのでアルフィリースは強く反対できなかった。

「（ご、ごめんなさいニア。でもニアもさすがに嘘に気付くよね？）」

などとアルフィリースは心の中で言い訳をしてみる。が、ぶつぶつと「そうか、そうなのか・・・」と呟くニアを見てしまった。ちなみにニアがこの誤解を解くまでに相当の時間を要することになる。

ともあれ次の目的地は決まったようだ。フェンナを心配する一方で、新しい冒険にどこかワクワクする自分を隠せないアルフィリースだった。

続く

ダークエルフの少女（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。感想も気軽に書いてもいいんですよ？

さて、これから色んな人物たちが登場します。物語の中核をなす人間達が登場するので、期待しておいてください。あ、ハードル上げちゃった・・・

次回は１０／３１（日）１２：００投稿です。

プロポーズ（前書き）

～あらすじ～

シーカーのフェンナを助けることにしたアルフィリース達。だが一方で子どもたちと離れなければいけないリサの気は重かった・・・

プロポーズ

「チビ共になんて言ったらいいでしょうか・・・」

フェンナを里まで送り届けることが決まった後、リサは一人頭を悩ませていた。本当であれば子ども達と一日ゆっくりと過ごしてからお別れをしたいところであるが、フェンナの事情を考えると一刻も早く出発すべきなのは明白だったのだ。フェンナの体調が思わしくなければもう1泊できるかとも思ったが、ミリアザールの回復魔法は素晴らしく、彼女の言う通り本当に瀕死の傷がほとんど完治していた。明日朝にはフェンナの体力もきっと回復しているだろう。

「優秀すぎるのも困りものですね」

「なんか言ったかの？」

ミリアザールにそのまま子ども達を引き渡すため、2人でリサの家に戻るところである。

「チビ達になんて言うか悩んでいました。リサは、チビ達にだけは嘘をつかないように気を使っていたつもりだったのですが」

「仕方があるまい、遅かれ早かれ別れは訪れた。彼らが成長しても同じじゃろ。ま、突然すぎたかもしれんがの」

「リサはそれでよいとしても、チビ達はそれが理解できる歳ではありません」

「そうじゃな・・・」

結局2人で考えても結論は出ないまま家に着いてしまった。たとえ借りもののおんぼろな家とはいえ、この家の扉を開けるときは常に心が和んだのだが、今、リサの気は暗鬱に沈んだままである。

「ただいま・・・まぁ皆寝ていますか。夜遅いですからね」
「ん・・・リサ姉、お帰り・・・」

だがリサが家に入ると、台所からジェイクが眠そうな目をこすりながら出てきたのだった。リサの帰りを一人待っていたのだろう。

「ジェイク、まだ起きていたとは悪い子です」
「え、とね。他の奴らが寝ている時に、ちゃんとリサ姉に言っておきたいことがあってね・・・」

ジェイクが何やら戸棚からごそごそと取り出す。袋に入った何かは、じゃらじゃらと音を鳴らしていた。

「リサ姉、これがなんだかわかる?」
「これは・・・お金ですね。しかもこの重さということは、かなりの金額では? ジェイク、一体どうやってこのお金を集めましたか? まさか!?」

リサの頭にミリアザールに言われたことが思い浮かぶ。子どもがこれほどの金を貯めるとは、一体何をやったというのか。悪い予感がリサの頭に浮かぶ。

だがジェイクはそんなリサの意図を察したのか、いち早く頭を振って否定した。

「リサ姉に心配かけることはしてないよ、俺が働いたんだ。郵便物や軽い荷物の配達してさ。靴磨きとかもやったかな。まあ頼むのも大変だったけどね」
「なぜです? リサの収入では足りませんでしたか?」

リサが珍しく声を荒げる。彼女にしてみれば、自分の身を削ってお金を稼いでいるのだ。やりくりもしっかり決めているため、足りないはずはないのだ。せめて子ども達が成長するまでは何とかしたいと、必死であったのに、どこで計算を間違えたと言うのか。

自分の不甲斐なさに腹を立てたリサを前に、ジェイクはいたって冷静だった。

「んーん、十分だったよ？」

「ではなぜ？　ジェイクはまだ働くような歳ではありません！」

「だってリサ姉、６歳から働いてたでしょ？　俺、もう１０歳だぜ？　俺だって働けらぁ！」

「！」

言われてみればもっともかもしれない。自分が目覚めた力をなんとか金に変えようとリサがギルドに訪れたのは、ジェイクを拾った翌日だった。正直、センサーの能力を使って悪事を働く考えがリサの頭の中に浮かばなかったわけではない。だが自分より幼い者のためにも、リサは悪事は行いたくなかった。またそれ以上に悪事で稼いだ金で自分が育ったと知ったら、一体子ども達がどう思うのかリサには怖かったのだ。

もっとも６歳のリサがギルドで働くことを許可されるためには、多少ずるい手も使ったことは否定しない。

そんなリサの思いを知ってか知らずか、ジェイクは自分で何度も考えたであろう言葉を一気にまくしたて始めた。

「俺達はさ、リサ姉が稼ぐお金で食べていけてるよ？　屋根がある家にも住める。確かに父さんも母さんもいないし、学校にも行けてないし、遊ぶようなおもちゃも滅多に手に入らないけど、それはきっとすごい恵まれてるんだ。でも、リサ姉はどうなの？」

「どう、とは？」

リサは質問の意味がわからず、聞き返した。

「リサ姉はいっつも働いてばかりだ。この前休み取ったのいつか覚えてる？　俺リサ姉が働いている日を数えてたんだけどさ、っていうか９９より大きな数とか知らないけどさ、その数をもう随分前に超えちゃってるんだよ？」

「・・・」

「だからこれは俺からのお礼だ。これだけあればリサ姉一週間くらい休めるだろ？　ちょっとは休みなよ。今の俺は半年かかってこのくらいしか稼げないけどさ、いつか沢山お金稼げるようになって、リサ姉に楽させてやろうと思ってるんだ！　なんてったって、俺は男だからな！」

「ジェイク・・・」

特に学や技能のない孤児にしか過ぎない少年が、ギルドで上位にランクインするリサ以上にどうやって稼ごうというのか。まったくもって子供じみた幻想にしか過ぎない。だが自分がこういう幻想を最後に描いたのはいつの日だったか、リサには既に思い出せなかった。日々の生活に追われ、いつしか自分の将来について全く考える事を辞めていた現実に、リサは今気付かされた。

自分が夢を持っていたのはいつだったろうと、リサは思い出してみる。両親と何一つ不安なく過ごしたあの日々ではなかったか？その中で、自分も幸せな家庭を築いてみたいと思ったことはなかっただろうか？

ジェイクが夢を持てるということは、今自分は彼らにとって、心の拠り所足りえているのだろうか？　ジェイクの心遣いもそうだが、自分がしてきたことが報われたような気がして、リサの心の内は温かいもので満ちてゆく。

そして、リサは知らず知らず泣いていた。父が出て行った時も、

母が自殺した時も彼女の目からは涙が出なかったのに。リサは、自分は涙など流せない人間だと思っていた。少なくとも泣ける立場にはないと。だが今、自分のために無償で何かをしようとしてくれる存在がいる。これほど嬉しいことは彼女にとってなかったのだ。

「（そうか、これは嬉し涙なのですね。身を粉にして働いたことも無駄ではなかった・・・）」

そんなリサの感動などどこ吹く風のジェイクは自分の話に懸命で、リサの様子に気付いていない。

「だからさ・・・その、もし・・・もしもだよ？　俺がさイッパイお金稼げるようになってリサ姉を守れるようになったらさ・・・リサ姉、俺と結婚してくれないかな？？」

「・・・・・・・・・え？」

突然の言葉にリサの嬉し涙は思わず止まり、思わず無防備な驚く顔をジェイクに向けてしまった。とてもではないが、アルフィリース達の前ではできない表情だろう。

「（・・・今、リサはなんと言われましたか？　この子は、結婚してくれと言いませんでしたか？？）」

いやいやまさか、とリサがふるふると頭を横に振りもう一度確認してみる。リサは、どうせジェイクのいつもの冗談だろう、くらいにしか考えてない。

「ジェイク、今なんと？　リサをあまりからかうものではありません」

「に、二回言わせるなよ！　・・・そ、その、俺と結婚してほしい

んだよ！！」
「・・・・・・はぁ」
「な、なんだよ！その返事！！」

予想外の返事だったのか、ジェイクがおろおろし始めた。いや、リサも表面上何も感じてないかのように取り繕っているが、内心ではパニックを起こしている。どうやらジェイクは本気のようだ。好きだとか、付き合うとかをすっ飛ばかして、いきなりプロポーズされるとはリサにもさすがに思ったことはない。しかも、ちょっと前までおねしょしてたような子に。全く実感が湧かないリサの頭の中は、真っ白になっていた。

後ろではミリアザールが腹筋をねじ切らんばかりの勢いの笑いを、必死でこらえている。我慢が過ぎるのか、変な汗をかいて小刻みに震えていることがリサには感知されていた。

「ジェイク、あなた、結婚の意味を知っていますか？」
「知ってるよ！　互いに永遠の愛を誓い合って、死ぬまでずっと一緒にいるんだろ？」
「どこでそんな言葉を覚えたのやら・・・なぜリサなのです？」
「俺はリサ姉以上にイイ女見たことないもん！　働きながら色んな人を見たけどさ、みんな上辺ばっかりだ！　『ぼうや、イイ子ね』『ぼうや、頑張ってね』なんて言うけど、本気で俺のこと心配してくれている人なんていやしない！　でもリサ姉は違う。何にも関係ない俺のことを拾って、育てて、そのために自分がしたいこととか我慢してさ！　それでも俺たちに見返りを求めたことは無いし、美人で、優しくて、強くて、ええとそれから、それから・・・」

ジェイクがはあはあと息を切らしながら、リサのことを褒め立てる。少々美化しすぎな気もするが、これだけ純粋に褒められるとさすがにリサも悪い気がしない。

「ジェイク、でもリサは目が見えませんよ？」
「いいよ、俺がリサ姉の目になる！」
「リサは実の両親に化け物呼ばわりされましたが」
「そんなの関係ない！　リサ姉はリサ姉だ！」
「今はリサが良いかもしれませんが、あなたが大きくなる頃にはリサより素敵な女性を見つけているかもしれません」
「そうかもしれないけど・・・もう俺はリサ姉を一生守るって決めたんだ！」

どうやらジェイクは一歩も引く気は無いらしいが、子供の駄々に聞こえなくもない。じゃあこちらも無茶を言ってやろうと、リサは考えた。これならジェイクも諦めるだろうと。

「・・・いいですか、ジェイク。リサと結婚したいなら、約束してもらいたいことがあります」
「何？」
「リサはイイ男としか結婚したくありません。お金を稼ぐと言うなら、この町で一番高台にある家を、高台ごと買い取るくらい稼いでもらいます。できますか？」
「うん！」
「金だけあってもいけません。リサは強い男が好きです。例え魔王が攻めてきても、一人でリサを守れるくらいの男でないとリサは嫌です。魔王の軍勢が攻めてきて全ての人間が逃げても、リサを守るために戦って勝つと約束できますか？」
「もちろんだ！」
「あと見てくれも重要です。身長は１８０ｃｍ以上はないと嫌です。また筋肉ムキムキは嫌いです。しなやかでいて、かつスマートである必要があります。どうでしょう？」
「リサ姉がそう望むなら、なってみせるよ」

「まだです。権力も重要です。私達は孤児ですから、地位がないと誰も認めてくれません。あなたはどこかの王国で騎士になり、将軍になるのです」

「将軍なんてケチくさいこというなよ！　リサ姉のためなら王国だって作ってやるさ！」

この言葉にリサは困ってしまった。もう言い訳が思いつかない。ここまで一直線に思われ、しかも無理難題に全て即答するのである。特にリサ的にも、最後のは心にぐっときたようだ。子供だから現実の手段などは何も考えていないだろうが、それでも自分1人のために国まで用意してみせると言ってくれた少年を目の前にし、リサは感無量だった。

「（リサは目が見えませんが、さぞかしジェイクは真剣な眼差しで私を見ているのでしょうね。たとえ10歳であろうと、その目を見てしまえば思わず女性が魅かれずにはおれないような、まっすぐで真摯な眼差しを・・・今初めて、自分の目が見えないことを後悔したかもしれません）」

リサは目を閉じ俯いていたが、何かを決心したかのように面を上げた。

「ではジェイク、私を見なさい？」

「見てるよ！　今までも、今も、これからも！」

「そうですか・・・ではこれがリサからの返事です。目を閉じなさい。私がイイと言うまで、開けてはいけません」

「？」

ジェイクが目を閉じたのを確認してジェイクの顔に手を添え、そっと唇にキスしてやる。ジェイクが瞬間、石化したように硬直した

のがよくわかる。多分自分の顔も真っ赤だろうと、リサも容易に想像できた。何しろこんなに頬が熱い。リサとしては、こんな顔をさすがにジェイクに見られたくはなかったのだ。

１０秒ほども唇を重ねただろうか？　まるで一晩中そうしていたように感じるが、それはきっと心の希望で、実際には一瞬だったのだろう。どうやらリサも頭の一部が痺れているようだった。茫とした表情で唇を離すと、ジェイクを優しく抱きしめてやる。

「いいですか、ジェイク・・・リサはこれから旅に出ます。あなた達の面倒はこれから後ろにいるシスターが見てくれます。ちょっとペッタンコで、体の凹凸と色気に欠けるシスターですが、人間として信頼できます・・・彼女の下で学びなさい。そしてイイ男になって、私を迎えに来てください。その時、今と同じことをしましょう。今度はただのキスではなく、誓いのキスを・・・」

「うん・・・・・うん！」

ジェイクが力強く返事をした。

「（全く子供は単純ですね・・・と、リサも子供ですか。でも人を好きだと思う感情なんて、単純なくらいでいいのかもしれないです）」

リサには自然と笑顔がこぼれていた。だが同時に申し訳なくもある。こんな時に自分は子ども達の元を離れなくてはいけない。

「あなた達を置いて旅に出るリサを許してください・・・本当は、ちゃんともっと前に言うべきだったのですが」

「いいよ、今度は俺の番だから。ちゃんとあいつらの面倒見るよ。だから何も心配しないで」

人の成長は早い。リサが子どもだと思っていたジェイクは、いつの間にか大人になろうとしていた。もっともまだまだリサも含めて当人たちは子どもなのだが、ジェイクにトイレのしつけまでしたリサとしては感激もひとしおだった。

「（これは期待できそうですね・・・１０年もすれば、本当に素晴らしい男になってリサを迎えにくるかもしれません。もっともそれとは関係なく、リサはこの子のプロポーズを受けるでしょうが。ですが、それまでリサもイイ女になる努力をしないといけませんね）」

むしろ自分の方がジェイクにふさわしいかどうかわからないとリサはやや不安になったが、自分を磨くと決心することで自分を納得させた。何せ時間はまだまだあるのだ。

「ジェイク・・・ありがとう」
「いいってことよ」
「何も聞かなくて平気ですか？　心配はしませんか？」
「時々手紙でも書いてくれれば、それでいいよ。それより、俺以外の男と浮気すんなよ？」
「・・・調子に乗りすぎです、ジェイク」

頭を両手の拳で挟んでグリグリしてやる。どうやら、ジェイクはプロポーズが成功したことで相当に浮ついているようだ。もっともリサも内心は同じだったのだが。

「いてて、いてて！　リサ姉やめてって」
「まぁ、このくらいにしておきましょうか。しかし、他の子にはなんて説明したらいいでしょう」
「大丈夫だよ。いざというときのことは、ちゃんと皆に説明してあるから。『リサ姉がやりたいことが見つかった時は、引き留めない

ぞ』ってね。まあミルチェはぐずるかもしれないけどさ。ちなみに俺がいなくなればネリィが。ネリィがいなくなれば、次はルースが仕切ることになってるんだ」

「そこまで考えていましたか・・・」

どうやら子ども達は、リサが思っているより遙かにしっかりしているようだ。もはや自分がいなくても、しっかり支え合っていけるだろうということはリサには確信できた。もちろん実生活上の手段は別だが。

その時、眠そうな眼をこすりながらミルチェがぺたぺたと歩いてきた。

「ん～、りさねぇにじぇいく・・・なにしてるの・・・？」

「ミルチェ、起きちゃったか。ほら、大丈夫だからあっちで寝よう、な？」

「りさねぇにだっこしてもらわなきゃやだ～」

「あとでちゃんと行きますから・・・ジェイク、先にミルチェを連れて行ってください」

「ん。後でちゃんと抱っこしてあげてよ？」

「ええ、必ず」

ジェイクがミルチェを連れて寝室に向かう。そして2人になると、ミリアザールがついに我慢の限界を超えたように盛大に笑い始めた。

続く

プロポーズ（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます！

今回はかなり甘々な感じで書きました。いかがだったでしょうか？

次回投稿は本日１０／３１（日）１８：００です。一気に２話いってしまいましょう。

竜とアルフィリースその2～竜との会話～（前書き）

～あらすじ～

ジェイクにプロポーズされたリサ。リサは受け入れ、ひとときの幸せに浸る。そして次の冒険がアルフィリース達を待ち受けていた。

竜とアルフィリースその2～竜との会話～

「ぶくくく・・・ハハハハハ！　お、お主・・・よかったのう、可愛らしい彼氏ができて！」
「黙りやがれです、このペチャパイ」

ついに我慢の限界を迎えたミリアザールが大爆笑を始めた。その横で顔を真っ赤にしながら悪態をつくリサ。そのリサの肩を、腹を抱えながらぽんとミリアザールは叩く。

「まぁ、実際ああいうのはイイ男になるぞ？　ワシがしっかりプロデュースしてやろう」
「あなたに任せておくと、とんでもない方向に成長しそうですが」
「いや、その辺はしっかりやるわい。それでも、お主の要求全てを満たすのは無理かもしれんが」
「あれは口実です。まさか全てに即答して、上乗せまでされるとは思いませんでしたが。凄まじくデカイ賭けに勝った気分です」
「賭けた物は人生・・・というところかの？」
「まあそうですね。でも予想以上の結果が返ってきましたね」

そう語るリサの顔はとても幸せそうだ。ミリアザールもそんなリサの表情に満足だった。

「（・・・いつみても、人間のこういう顔は良い。ワシは人のこういう顔を沢山見たいのだ。どうやら、まだワシの心は錆びついておらぬらしい）」

ミリアザールも笑顔になる。だが、リサはそんなミリアザールを放っておいて幸せに浸っていた。リサにとって彼女の両親がいなく

なってから、実に8年ぶりに感じる心からの幸せだった。

＊＊＊

そして翌朝、リサがいなくなるということを聞きやはりミルチェが少しぐずったが、子ども達が皆して慰めてやっていた。子ども達はそれぞれ悲しそうな顔をするものの、誰も文句は言わなかった。ジェイクの言う通り、可能性の一つとして考えていたことなのだろう。そしてリサが1人1人に別れを告げる。

「それではシスター、皆を頼みます」
「任せるがよい。確かに預かった」
「皆もちゃんとシスターに挨拶なさい？」

リサに促されて子ども達が一列に並び、揃ってお辞儀をする。

「「「「「よろしくお願いします、ペッタンコシスター！」」」」」

リサと子ども達がニヤリとする。

「リ、リサ・・・やりよったな！」
「フフフ、その子たちの世話は大変ですよ。それはもう、とてもね」
「・・・フ」
「他人ごとか、アルベルト！？」

そうやってリサが旅立っていった。まぁ湿っぽいのよりは余程いいだろうと、ミリアザールは納得することにした。子ども達はリサが通りを曲がり、その姿が見えなくなるまで手を振り続けていた。

一方こちらはアルフィリース達。結局竜でフェンナの森の近くま

で行くことになった。ウマなどを使ってフェンナを人目にさらすより余程良いのでは、とミランダが提案したのだ。幸いミリアザールが報酬に色をつけてくれたおかげで、随分金銭的には余裕がある。5人で乗れる大型の竜も幸いなことに確保できたので、貸し竜屋が準備をしてくれている所だ。

アルフィリースはその竜と早速コミュニケーションを取っている。というより、散々舐め回されていると言った方がいいかもしれない。

「そういえばニアってほとんど荷物ないね。戦う時はどうするのさ？」

「私は武器は使わん、素手でやる。まぁ戦場では手甲やすね当てくらいは装備するがな」

「素手って・・・危なくない？」

「武器の方が私には危ない。だいたい刃物は敵を斬れば欠ける、折れる。ましてや鎧を着た人間を2～3人切れば、並の剣はダメになる。圧倒的な剣速を持って斬れば脂や血糊もつかないというが、そんな使い手はめったにいまい」

「うーん、そうかも」

アルベルトならそうかもしれないが、確かにあれほどの使い手はそうそういないだろうと、ミランダも納得する。

「でも、拳で相手を仕留めるのは難しいんじゃ？」

「いや、私は軍人だからな。戦争において、相手を一撃で仕留めることができればそれは良いが、むしろ重症にして、相手を戦闘不能に追い込む方が重要だ。明らかに死んだ者は見捨てられるが、瀕死の者は周囲の者が助けようとする。そうすれば一人を助けるのに5人の手を必要とする。そうすれば一撃で6人を撤退させるのと同じ効果を持つ」

「なるほど・・・」

「もっと言えば、戦場において一般の兵士はわざと切れ味の鈍い剣を使うこともある。肥溜めの中に刃先を一日浸しておくと、即席の毒の剣の出来上がりだ。これで敵を傷つけるとほぼ確実に熱を出す。そうすれば敵陣に帰った後で、多くの者の手を煩わすだろう」

「そう言われればそうね・・・」

ミランダは自分では経験豊富なつもりでいたが、良く考えれば自分は魔物相手の戦争に参加したことはあっても、人間同士の戦争には参加したことがない。ニアの話を聞いていると、人間同士の戦争の方が対魔物よりも残酷なのではないかと思えてきた。「う～ん、なるほど」とミランダが唸っていると、くいくいとフェンナがミランダの裾を引いてくる。

「あの～、アルフィリースさんを放っておいていいんですか・・・？」

「へ？　そういえばアルフィどうなって・・・って、アルフィが半分くらい竜の口の中に収まってるんですけど―？」

アルフィリースの上半身が竜の口の中にすっぽり収まり、小刻みな痙攣を繰り返していた。慌てて助けだすミランダ達。まさかの危機であった。

＊＊＊

「もう、信じられない！　傷になったらどう責任とってくれるのよ！？」

「グ、グアッ！」

「ごまかそうったって、そうはいかないんだからね！」

「ググ・・・」

そして既にダルカスに向かう空の上である。あの後アルフィを引っ張りだすのに一同はおおわらわだった。少しアルフィリースは死にかけていたようで、綺麗なお城かお花畑が見えたと言っていた。

竜にしてみればアルフィリースが気に入ったようで親愛の情を示す甘噛みだったのだろうが、大人数を乗せる１５ｍクラスの竜の甘噛みである。犬や猫とはわけが違うのだ。それでもう竜に乗ってから2刻くらい、アルフィリースがぷりぷりと竜に怒って文句を言っている、というわけだ。

飼い慣らされた竜が人間に自ら好意を示すことなどあまりないはずなのだが、余程アルフィリースは竜と相性がいいようだ。そんなアルフィリースが不思議なのか、竜の背中に備え付けられた座席からフェンナがアルフィリースに声をかける。

「アルフィリースさん、竜と話せるんですか？」

「え？　うん、言ってることはだいたいわかるよ。シーカーってわからないの？　人間とかよりよっぽど竜に近いと思うんだけど」

「森の属性を持つ樹竜とかならあるいは大丈夫かもしれませんが、アルフィリースさんは飛竜の言葉がわかるのですか？」

フェンナが余計に不思議だといった顔をした。アルフィリースの方はさも当然のことのように話を続ける。

「飛竜の言葉がわかるようになったのは2日ほど前だよ？　以前私が住んでた山の近くに人間の言葉を話せる竜がいたから、その竜に言葉を教えてもらったの。一応竜にも共通言語みたいなのがあるんだって。それがわかったら、後は種族による方言みたいなものだから、とりあえずコミュニケーションには困らないぞって言われたことはあるよ」

「それは初耳です。と、いうより人間の言葉を話すなら、相当に立派な竜では？」

「あー・・・言ってもいいかな？　確か名前はグウェンドルフって言ってた」

その名前を聞いてフェンナがぽかーんとしている。そんなにすごいことなのだろうか。翼事情の飲み込めないミランダがフェンナの袖を引いた。

「ねぇ、それってすごい竜なのかい？」

「すごいもなにも、エルフの中ですら伝説に謳われるような竜です。おとぎ話だとばかり私も思っていましたが、本当に存在したなんて・・・」

「そんなにすごかったの？」

「ええ、魔術の使い方をエルフに教えた竜とさえ言われます。元々魔術は竜が固有に使うものだったとか」

その言葉にアルフィリースが反応した。自分でもそこまですごい竜と接していたとは思っていなかったらしい。

「う～ん。いっつも『グウェンおじちゃん』って呼んでたからな・・・よく頭の上に乗って遊んでたし。まずかったかな？」

「ふう・・・恐れ多くて、私にはとてもできません」

気のせいか、アルフィリースはフェンナに尊敬の眼差しで見られているような感じを受けた。

「そういえばアルフィの小手って最初に見た時から傷一つなく変わらないけど、まさかその竜にもらったとか言わないよね？」

「え、もらったよ？　お守り代わりだって。師匠に加工・細工はしてもらってるけど」

今度は全員のあいた口がふさがらない。そして全員でひそひそ話を始めた。

「（リサさ、あれって売ったらどのくらいすると思う？）」

「（通常の飛竜の爪や鱗の加工でも１５００００ペントくらいします。武器を一本仕上げるとなれば飼い竜の素材でも最低５００００からかかります。ですがそれほどの竜なら間違いなく伝説の防具級の加護があるでしょうから、鑑定がついたら下手したら小さな町一個買えるかもしれません。リサならまず売ろうとすら思いませんが）」

「（私に譲って欲しいくらいだ。１００年は欠けも錆びもしないと言われる防具だぞ？　魔術耐性を持つとも言われるし）」

「（というか、持ってるだけでも相当な加護があると私は思いますけど）」

全員が陰でひそひそと話すのをそっちのけに、まだアルフィリースは竜に文句を言っている。

「（アタシはすごい子と友達になったんだろうか？）」

ミランダが腕組みをして考え込むのも無理はなかった。

＊＊＊

今回はさすがに一日で行けるような距離ではないので、一行は途中で野宿をした。町に泊らなかったのはこれほど大きな竜を休ませる設備が町の中に滅多にないのと、やはりフェンナを気遣ってのことだった。フェンナは申し訳なさそうにしていたが、別に一日程度の野宿に文句を言うようなメンツではない。リサに至っては野宿など経験が無いらしく、興奮して珍しく饒舌になっていた。寝る前にニアに素手で稽古をつけてもらおうとアルフィリースやミランダは

挑んでみたが、一歩踏み込む前に体が宙に飛んでいた。ニアいわく、初動が一番仕掛けやすいのだそうだ。

「だからというわけではないのだが、人間達がネコ族と呼ぶ我々は初動、瞬発力に優れた種属でな。特に２０ｍまでの動きならどの種にもひけをとらん。だから刀や武器を構えればそれだけ無駄が大きくなり、私達の長所が生かされないんだよ。わかるか？」

「確かに・・・それだけ目の前で早く動かれたら対応できないかも」

「まぁ逆に持久戦は苦手だし、腕力は人間のそれと大差ないがな。そこは技術で補うことにしている」

「そっか、ちなみにニアってグルーザルドでは隊長とかなの？」

「いいや、ただの平隊員だ」

このレベルで平隊員なら、どうやって人間は獣人と戦争をしていたのか。獣人と戦争するような時代に生まれなくて、心底よかったと思うアルフィリース達であった。

「フェンナは何か武芸が出来るの？」

「私は主に土系統の魔術使いですが・・・私の魔術はちょっと特殊なので。武器でしたら弓ができます。武芸と呼べるレベルかどうかわかりませんが」

「じゃあこれ射ってみてよ」

不意にミランダがククスの実をぽいっと空中に投げる。瞬間、フェンナは地面に置いていた弓矢を手に取り射かける。見事にククスの実を空中で射抜いた。

「充分すごいよね・・・」

「いえ、私は戦士ではありませんので・・・弓も人間の物ですし、精度がまだまだです。２０ｍ以内で誤差が５ｃｍも発生してしまい

ます」

それは十分達人級と、世間一般では通じるだろう。

「エルフの弓を使えば４０ｍで誤差２ｃｍまではいけると思うのですが・・・私ではその程度です」

「いやいや、普通弓って２０ｍくらいしか殺傷能力ないはずだよ」

「エルフの弓ですと、男性が射れば６０ｍまでは殺傷能力が保てます。当てるだけなら１００ｍは大丈夫ですが。以前誰が弓が一番うまいか集落で比べた時に、１００ｍ先の的に当て続けて、一度でも外れたら失格にするルールでやったのですが、１刻経過して５人が当て続けたので、皆飽きて辞めてしまいました」

「ちなみに的の大きさは？」

「最初はククスの実から初めて、あまりにも皆外さないので、最後は親指の先くらいの木の実になりました」

「・・・エルフともケンカできないわね、これは」

アルフィリースの感想も尤もである。

そして尽きない話をしながら夜は更けていく。リサがネコじゃらしでニアをからかっていたが、アルフィリースは放ってくことにした。まさか翌日、２人とも寝不足になるほど熱中したとは想像だにしなかったが。

＊＊＊

翌日の昼過ぎにはダルカスの森の玄関口に着いた。普通の人間が竜を駆るより倍以上早いペースである。

ダーヴの町。人口３万人くらいの町だが、そこそこに活気はる。ダルカス自体が辺境にあるものの、森の資源（材木、木の実、薬草

など）が豊富であるため、人口は辺境の割に多い方だ。
　また森からの魔物が頻発し、森を挟んで４つの国が隣接する地帯のため、クルムスの国境警備の兵や傭兵の姿がここかしこに見える。そういった武装した連中が多い割には辺境で自然が多いせいか、ほのぼのした雰囲気が町全体に漂う。兵士たちも堅苦しい恰好はしておらず、そのあたりで野菜売りの露店の店主と座って話しこんだりしている。平和なクルムスの人の気質なのかもしれない。とてもエルフの里に攻め込むような人間達には見えなかった。
　とりあえず情報収集のため、アルフィリース達は町に来ている。一応フェンナにもフードかぶせて同行させているが、町にもものものしい雰囲気はなさそうだ。特にクルムスが兵士を動かしたような気配はない。

「クルムスではなかったか？」
「しかし可能性は一番高いと思います。他の三国からシーカーの里に入るのは、地形の関係でかなり難しいですから。ダルカスを資源として利用しているのがそもそもクルムスだけだと聞いていますし」
「もう少し探ってみましょう」

　ニア、フェンナ、ミランダが色々話し合っている。その辺の軍事事情に疎いアルフィリースとリサは、いまいち話についていけない。

「もうちょっと私も、色んな国や土地について情報を集めないとダメね・・・」

　アルフィリースがそんな考えに耽っていると、横の通りに人だかりができているのが見えた。

「ねぇ、何かしらあれ？」
「さぁ？　行ってみましょうか」

「厄介事の気がそこはかとなくするのは、リサだけでしょうか」

ともあれ全員で近づいてみると、どうやら人が倒れているようだ。男のようだが、顔は見えない。なぜか、ミランダがいやに顔を輝かせている。

続く

竜とアルフィリースその2～竜との会話～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます！

１１月もこの調子で連載を続けてまいりますので、これからも御愛顧よろしくお願いいたします。

次回投稿は１１／１（月）１２：００です。

謎の男女（前書き）

～あらすじ～

フェンナを送り届けるために寄ったダーヴの町でアルフィリース達が出会う人物とは？

謎の男女

顔を輝かせたミランダの様子を訝しみ、アルフィリースがミランダを肘で小突く。

「ねぇ、なんで嬉しそうなの？？」

「だって、イケメンの匂いがするから」

「とんだスケベシスターですね。まぁ人助けする分には止めませんが、助けられてからが彼の本当の災難の始まりなのは間違いないでしょう」

「人聞きが悪いね！」

などと言いつつも、アルフィリースとミランダが真面目に助けに行った。リサは「神よ、哀れな通行人を助けたまえ・・・あのシスターに天罰を、デカ女にはおいしいイベントを・・・」などと呟いている。

「もし、男の方。どうされましたか？　どこかお加減でも？」

返事がない。どうやら、ただのしかばねのようだ。と、その時。

「・・・お・・・・・・・」

「お？」

「お・・・おっぱい・・・・・・・」

間違えた、ただのへんたいのようだ。その瞬間、グシャッという音と共に男の頭が地面にめり込んだ。

「あー・・・この人手遅れだったわ。もう、なんか色々、人として」
「いや、今ミランダがとどめ刺したよね？」
「人として手遅れなのは貴女も同じです、お姉さま」
「ちょっとリサ、アルフィだけじゃなくて最近アタシにもなんかひどくない？」

いつもの展開に慣れておらず、呆気にとられるニアとフェンナを尻目にぎゃあぎゃあ３人が言い合っていると、死んだかに思われた男がむくっと起き上がってきた。そして・・・

「あーねーさーんー！」
「きゃあああぁ！？」

男が意味不明な言葉を発しながら、アルフィリースの胸に飛び込んで行ったのである。

「な、何するのー！」
「いやー姉さん冷たいなぁ！　いつものようにやってくださいよぉ！！」
「いつものようにって、何をよー！？」

あまりの展開に、通行人で含めて全員が真っ白である。いち早く正気に戻ったのはミランダだった。

「・・・は！　ちょっとこの変態、アルフィから離れな！」
「・・・またしても変な虫ですか。アルフィ、変な虫を寄せ付けるフェロモンでも出しているのではないですか？」
「どーでもいいから、この人ひっぺがしてぇ！」

だが三人がかりでも、男は離れる気配が一向に無い。

「今までで最大級の変な虫ですね。これは・・・駆除するしかありませんか？」
「仕方ないね・・・殺るか！？」

リサとミランダが物騒な事を言いながら顔を見合わせた瞬間――

「・・・おい、レクサス。何をしている？」
「へ？」

今まで何をしてもアルフィリースから離れようとしなかった男が、突然振り向いた。その瞬間、

ゴンッ！

という衝撃音と共に、男の頭に漬物石がぶつけられた。会心の一撃だったのだろう、男が再び気を失う。もういっそ起きなくてもいいかもしれないというのが、アルフィリース達の感想だった。
そして今度こそ動かなくなった男を踏みつけながら、話しかけてくる者がいる。

「ワタシの連れが無礼をした。許せ」
「は・・・いえ」

目の前にいたのはアルフィリースと同程度の体躯を持つ男性、いや女性か。しっかりとした豊満な胸が性別を物語るが、それがなければ男性と見まがえてもしょうがないような端正な外見である。鋭い眼光に、整った顔立ち。リサやミランダも整っているが、それとはまた違う。柔らかな雰囲気を全て取り払い、戦士としての特徴だけを残したような整いようだ。荒っぽくて、それでいて隙のないよ

うな雰囲気。だがきちんとした格好をすればかなりの美人として通用しそうだ。全くそのような格好には無縁そうではあるが。

そういえば、髪が黒くて長い。首の少し上で一つに束ねているが、ほどけば腰の近くまであるか？　しかし黒髪を見たのは珍しい。どうやら周囲もそれは同じらしく、魔術師だろうか・・・などとぼうっとアルフィリースが見惚れていると、女性は既に立ち去ろうとしていた。

「それでは失礼する。急ぎの身ゆえ大した詫びもできんが、また会った折には何らかの形で返そう」

「あ、いえ、そんな・・・な、名前を伺ってもよろしいですか？」

なぜか反射的にアルフィリースは女性の名前を聞いてしまった。女性は少し不思議そうな顔をしたが、特に嫌そうな顔もせず答える。

「ルイだ。事情があって名字は捨てているがね。そっちは？」

「あ、私はアルフィリースと言います。私も名字は捨てています・・・」

「まあお互いこのような髪だ、色々あるだろう。では縁があればまた会おう」

その言葉だけを残し、そっけなく女性は行ってしまった。変態はきちんと連れて・・・いや、足を持って引きずっている。うつぶせなのであれだと顔面がひどいことになりそうだ、とアルフィリースが心配する傍で、ミランダが頭を抱えている。

「どうしましたか、ミランダ。イケメンをゲットし損ねた悔しさですか？」

「いや、あんな変態御免こうむる・・・っていうより、アイツの名前がね・・・」

「確かレクサスとか言ってたわね。知り合い？」
「いや、知り合いじゃないだろうけど。どっかで聞いたような・・・」
＊＊＊
「・・・起きろレクサス。目は覚ましているだろう？　自分で歩け」
「・・・ばれてました？」

引きずられていた男がむくりと起き上がる。

「ワタシがあと数秒遅れていたら、どうするつもりだった？」
「うーん、とりあえずあの美人三人を昏倒させて、エルフを連れ去っていたと思いますよ？」
「結構な使い手だったぞ、後ろの獣人も含めてな」
「でもまだまだ青い感じが抜けてないですけどね。オレなら問題なく倒せます」
「あの連中が油断していればな。だが今回はそれが仕事ではない」
「まあそうですけど。ゼルヴァーに恩を売っておいて損はないかと思ったんで」

レクサスはへへへ、と軽薄な笑いを浮かべながら答える。だがルイの表情は変わらない。

「放っとけ、ゼルヴァーがへましただけだ。別に尻ぬぐいの必要はない」
「姐さんがそう言うなら。で、どうします？」
「決まっている、先を急ぐぞ。とりあえず宿にコートを忘れた」
「またヴァルサスさんに怒られますよー？」
「だから取りに行くんだろうが。だいたい貴様も着てないくせに」

そして2人は宿に帰り、部屋に無造作に置いてある揃いのコートを羽織る。黒いコートに金のボタン。左胸に同じく金で鷹を示す紋章が刺繍として入れてある。その上からルイは背中に大剣を、レクサスは左右の腰に剣を身につける。

「姐さん、ちゃんとコートの前合わせましょうよ」
「暑い。ヴァルサスの言うとおり羽織っているだけマシだと思え」
「うーん、ベッツの爺さんが見たらなんて言うか・・・」
「あれは口うるさく言うのが仕事だ。ワタシが真面目になったら、ベッツの仕事がなくなってボケが早く進行するだろうが」
「・・・あの爺さん、後５０年くらいはボケそうにないですけどね」
「軽口はそこまでだ。行くぞ」
「ああっ、待ってくださいよー。あーねーさーんー！」

颯爽と宿を出ていくルイの後に、慌ただしくレクサスが続く。二人の進行方向に見えるのは・・・ダルカスの森。

＊＊＊

「あ“――――っ！」
「・・・っ！　なによミランダ、大きな声出して」

こちらはアルフィリース達である。森に入る準備をするために、今日はこのダーヴで一泊することになった。買い出しに出る前に宿を手配し、部屋に荷物を置きに来た瞬間にこの大声である。ニアやフェンナも耳を押さえている。

「落ち着きのないシスターですね・・・どうしましたか」
「レクサス・・・思い出したのよ！」

「ずっと悩んでいたのか」

全員で怪訝そうな顔をするが、ミランダの顔は真剣そのものである。

「イメージと全然違うからわからなかった・・・アタシ達は運が良かったかもしれない」

「なんで？」

「レクサス・・・間違ってなかったら、西方諸国で『死神レクサス』『百人斬りのレクサス』って言われた傭兵よ、彼は」

「そんなに有名な奴だったのか？」

ニアがまだ信じられないと言った顔をする。

「アタシも噂だけだけど。でも同じ噂を何度も聞いたから、かなり信憑性は高いわ」

「どんな？」

「アタシが聞いたのはとある国の戦争に奴が参加したとき・・・奴の部隊は２０００人を超える敵の追撃を命じられたそうよ。ところが追撃しようにも大雨でね。しかも河向うの中州みたいなところに敵兵は陣を張っていたらしいわ。河は氾濫してるし、敵部隊もどうせ動けないから様子を見るって彼の部隊長は判断したらしいの。まぁ妥当ね」

「・・・」

「そしたら若い剣士がね『もしこの雨の中で、敵の首を打ってきたら報酬はどのくらいくれる？』って言ったらしい。皆は冗談だと思ったのね。大雨で氾濫した河を渡って奇襲をかけて帰ってくるなんて正気じゃないから。だから『１００人で１０万ペントでどうだ？』って返したらしいわ。そして彼は『いいだろう』って言って出て行った」

ミランダは淡々と語る。

「そして朝になって隊長の前に現れた彼は『１００人殺してきた。確認は雨があがったらしてくれ』って言ったのね。隊長は冗談の好きな奴だな、くらいに思って『よし、いいだろう』って言ったらしいわ。そしたら『今日もまた行ってくる。二日目だ。数えておけ』って言って消えた。そして日が経ち・・・雨は一向に止まなかったわ。実に１０日間。１１日目に雨が上がった時、彼の部隊の物見が見たのは驚愕の光景だった」

「・・・」

「まだ河の氾濫は治まってなかったんだけど、遠眼鏡で敵の陣地を観察していた兵士が悲鳴を上げたの。『向うにあの小僧がいる！』って。そしてさらに驚愕だったのは、たった一人でレクサスは相手の陣地をかく乱してた。そして完全に向うは逃げ惑って、いえ、レクサスに怯えて抵抗する気力すらなかったのね。まあ十日間に渡って孤立無援の状態で逃げることもできず、半数の１０００人を殺されてたんだから。なのに彼は命乞いする相手を片っ端から斬り伏せたと思ったら、突然殺しを止めて帰ってきた。そして自分の陣に帰るなり『また１００人殺してきた。今度は確認していただろう？』って」

段々と全員の顔色が青ざめてくる。

「次の日の朝になり、ついに敵はまだ氾濫が治まらない河を渡って逃げ始めた。それほどレクサスが怖かったのね。逃げる途中で大半が溺れて沈んだらしいわ。でも敵の将軍は生き残って大きな砦に逃げ込んだらしい。その段階で追撃は失敗だったんだけど、また奴は言ったの。『たしか敵の大将首は５０万ペントだったな』って。そして奴は2、3日消えたと思ったら、敵の大将首を持って帰ってき

たわ。敵の砦に潜入して、一人でやりとげたのよ」
「・・・うそ」
「でも報酬は支払われなかった。そりゃ大将首のことはともかく、後の話は皆冗談のつもりだったからね。そのことを追撃部隊の隊長が言った瞬間、隊長の首は胴体を離れたわ。その場にいた中隊長、小隊長、近侍お構いなくね。そして彼は追われる身となり、あだ名がついた。『１００人斬り』『死神』とね。もし噂が本物だとして、あの場で彼がその気だったら、私達全員がかりでどうなったか・・・」
「あの女は、そのレクサスとやらを部下のように扱っていたな・・・」

ニアがぼそっと呟く。

「だとしたらあの女、どのくらい強い？」
「・・・考えたくもないわね。とりあえず戦場で出会ったとき、敵でないことを祈るのみよ」

全員が黙ってしまった。また彼らと会うだろうか？　いや、すぐ会うに違いない。なぜかアルフィリースには確信があった。そしてそのレクサスよりも、ルイと名乗ったあの女性の方がアルフィリースには気になってしょうがなかった。

続く

謎の男女（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます！

次回は１１／２（火）１２：００投稿です。

混乱の兆し（前書き）

～あらすじ～

ダルカスの森を進むアルフィリース達。その頃彼女達が知らない所では陰謀が進みつつあった・・・

混乱の兆し

コツ、コツ、コツ…

人気のない宮殿を悠然と歩く足音が聞こえる。時刻は既に深夜だ。にもかかわらず、この人物は仕事場である宮殿を歩いている。彼はもう何日も自分の邸宅に帰っていない。正確な日数は忘れてしまったが、まだまだやることは山積みで、体を休ませる暇などない。もっとも、その必要ももうすぐなくなるのだが。

ガチャリとドアを開き、彼が自分の執務室に入ると当直の小姓が出てくる。

「ご主人様、何かお申し付けはありますでしょうか？」

「いや何も要らないよ、ありがとう。もう遅いから君も休むといい」

「いえ、ご主人様が働いているのにそのような・・・」

「君が倒れたら他の小姓にしわ寄せが行くのだよ？　私が執務室に連続で詰めているせいとはいえ、君はもう４日連続で夜勤だろう？まだ成長期なのだから、体をいたわりたまえ」

「は、私のようなものにもったいないお言葉。それでは下がらせていただきますが、ご主人様もくれぐれも御自愛くださいませ」

「うん、そうするよ」

小姓の少年は一礼して部屋を出ていく。それを優しい笑顔で見守る青年がいる。が、この小姓が出ていき気配がなくなると、その表情からはまるで能面のように感情が抜け落ちていった。

そしてどこからともなく青年に語りかける声が聞こえる。その声は無邪気な調子にも関わらず、どこかしら暗く重い。先ほどの小姓がいれば、不気味さに腰を抜かしたかもしれない。

「ご主人様、ねぇ・・・」
「来ていたのか」
「随分と優しいね、兄弟子様？」
「ふん、今の内にせいぜい夢を見させておくさ。なにせ、あの小姓にはちゃんと役目があるからな」
「ははぁ・・・さすが兄弟子様だ。随分とえげつないことを考え付くよね～」

クスクス、と部屋の中からどこからともなく笑い声がこだまする。

「貴様ほどではない。見え透いた世辞はやめろ」
「いえいえ、僕は本当に貴方を尊敬しているよ。なんたってこの僕が貴方を殺さずに、こうして言葉を交わしているんだからね・・・ククク」

聞こえる笑い声が段々と不快なものへと変わっていく。だがこの青年は気にかける風もない。いつものことなのだ、声の主の口の悪さは。ただし、気を抜けばいつでも本当に殺しには来るだろう。もちろん尊敬など、カケラもしてはいまい。

「・・・で、何の用だ？」
「僕の求める素材がダルカスの森にあるんだ。と、いうわけで兵士を貸してくれないかな？　一応この辺はアンタの担当だしね。勝手に動いて後でペナルティとかつまらないし。兄弟子ってことで、ちゃんと顔を立てに来た僕を褒めてくれよ？　なんたって他の連中じゃこうはいかないだろうからね」

話が本題に入り、もはや尊敬の念など微塵も感じられない。これが声の主の本来の会話の仕方なのだろう。だが、青年は声を荒立たせる様子もない。いちいちこの程度で苛立ちをあらわにしていては

身がもたないことを知っている。それに声の主は、こちらが苛立つほどに楽しげになっていくのだから。

「いいだろう。まだダルカスの森を捜索させている連中がいる。好きに使え」

「普通の人間も使っていいの？」

「構わん。だが後始末だけはきっちりしろよ？」

「もちろん。感謝してますよ、兄弟子様」

声が明るく、かつひょうきんに答える。

「・・・で、アンタはいつまでこの国にいるつもり？」

「貴様の知ったことではない」

「あ、僕にそんな口を聞いていいのかな～？　・・・殺しちゃうよ？？」

先ほどの明るい声が嘘のように、部屋の空気が一瞬で張り詰める。この場に先ほどの小姓がいれば、この圧力だけで気を失うことだろう。それほど尋常ではない量の殺気だった。

「・・・試してみるか？」

「・・・冗談だって！　もう、本気にしないでほしいな。こっちは今手持ちの駒が無いのに、やるわけないでしょ？」

「（手札が揃っていればやるということか。相変わらず危ない奴だ）」

自分の後輩でこそあるが、一目見た時から青年は声の主が気に入らなかった。師匠がどこから彼を連れてきたのか知らないが、こいつがいなければどれほどやりやすいかと何度思ったことか。もっともこんな奴は一人ではない。自分も含めて、どいつもこいつも一癖

ある連中だということは、彼もまた重々承知していた。だがしかし、声の主がいるおかげで計画の進みが早いのも事実だ。

「・・・まあいい。とりあえずこの国でやるべきことはやった。蒔いた種が芽吹くには時間がかかるかもしれんが、中々良い花を咲かせるだろう。楽しみにしておくがいい」

ここで初めて青年がニヤリと笑う。それは先ほどまでの優しい笑顔などを微塵も感じさせることのない、凄まじく邪悪な笑みだった。

「ふ～ん、まあアンタがそういうなら間違いないね。アンタは確かに仕事は正確で、美的センスもイケてると思うからさ。ただ方法がまどろっこしくて、僕には合わないけどね」

「貴様のような刹那的な快楽主義者と一緒にするな」

「へいへい。じゃあ一応仕事が済んだら報告に来ますよ。それまではその体を保っておいてよ？」

「さぁな、なにせ相当ガタが来ている。保証はせんが、耐えて・・・」

青年のセリフが終わらないうちに、声の主は行ってしまった。青年は内心はらわたが煮える思いだが、今の段階では仕方ない。仲間内で耐えるような行動をとれるのが、青年しかいないのだから。まだ奴らを始末するわけにはいかない。

そう思い直し机に向かうと、青年は書簡をしたためていく。彼が書いているのは、グルーザルドの同盟国であるザムウェドへの宣戦布告と、国境警備隊に対するザムウェドへの進軍命令書だった。

＊＊＊

そして場所は代わり、ここはダルカスの森の中である。アルフィ

リース達がダルカスの森に入ってから、半日が経過していた。前回魔王討伐のために向かったルキアの森とは、また様子が違う森である。ルキアが比較的若い森で木々も細く、下草が多かったのに対し、ここダルカスはかなり年季の入った森である。木々は高く太く、日が差し込みにくい。

また日が届かないせいで地面は下草よりも背の低い草やコケが生えており、足場はかなり悪い。おまけに湿気も強く、不快指数はかなり高い。日中はそこそこの気温になるが、夜はかなり冷え込む。なのに、今回の行動は秘密裏にしたいため、火も使えないのだ。

「火を使ったら、山一つ向うからでも見えちゃうからね」

「それに、ここの魔物は火を恐れん。むしろ寄ってくる可能性もある」

それがミランダと二アの判断である。ただフェンナにとっては庭のようなものらしく、危険があれば森が教えてくれると言った。なんでも土の魔術の一種なんだそうだ。それにセンサーのリサもいる。ニアも夜目が利くし、火が使えなくても警護の心配はない。ただ食事の準備に火を使えないのは痛い。保存がきく干し肉、パンを中心としていかなければならず、長く続けると栄養が不足しそうだった。

「皆、そろそろ寝床の確保の準備だ」

「え、まだ日が傾きかけたくらいじゃないの？」

「いや、森が深いからすぐに何も見えなくなる。今から寝床を確保しておいて、休憩を長くとる方がいい。それに魔物が夜の方が活発だと考えたら、寝床でも本当に休憩できるかどうかはわからない」

「ニアに賛成だ」

ミランダがうなずく。そしてフェンナが適当に水場の近くを探し、テントを張れるだけの場所を確保するために、木を切ったり草を刈

ったりしていると、半刻もしないうちに真っ暗になった。そのおかげで、晩御飯は手探りで食べる羽目になってしまった。

「フェンナ、目的地まではどのくらい？」
「後２日というところです」
「思ったより近いな。エルフの里はもっと森の奥深くかと思っていたよ」

月明かりがわずかだが射してきた。その中でニアが意外そうな顔をする。

「森の中心部は魔獣の巣窟です。私達の一族は移住者ですから、中央に陣取るようなあつかましい真似はしません」
「移住者？」
「はい、ほんの５００年ほど前に南から移ってきたそうです。なぜ移ってきたのか、私は教えられていませんが」
「５００年くらいなら、まだその当時から生きているエルフもいるだろ？」
「いえ、そのような長寿なエルフはハイエルフ、ないしはオールドエルフの一族だけです。私達シーカーの寿命は人間と大して変わらず、せいぜい１５０年です。ただ若く見える期間が人間より長いかもしれません。２０前後で成人するのは人間と同じくらいですが、１００歳くらいまではほとんど外見に変化がありませんから」
「・・・それはとても羨ましいですね」

リサが何やら考え込み始めた。嫉妬や羨望とは無縁の人間だと、アルフィリースは考えていたのだが。そんなアルフィリースの目線にも気付かず、一人ぶつぶつと呟くリサ。

「（やっぱり男の子は外見的には若い方がいいのでしょうか？　ま

あリサが外見的にベストな年ごろを迎えるのは１０年後くらいでしょうが・・・ジェイクがロリコンという可能性も考えられます。成長したリサを見て『老けた』『ババア』などと言われたら、さすがの私も立ち直れません）」

「・・・リサ？」

「（ですが体が成長しないのもいただけませんね・・・アルフィほど背はいりませんが、あの胸と尻は欲しい。）」

「おーい、リサー？」

「（いや、でもミリアザールのような体形が好みだったらどうしたものか・・・は！　もしそうなら、ミリアザールに預けたのは失敗ですか！？　今頃、夜な夜ないかがわしいことを教えられて・・・はは、まさかジェイクに限って・・・意外とそういう趣味だったらどうしよぅ・・・）」

「リサってば！」

なんだか一人で頭を抱えて唸り始めたリサを、アルフィリースは揺すってみる。

「邪魔をしないでください、アルフィ！　今真剣に『小さい胸は需要があるのか？』ということについて考え中です。ええ、どうせ貴女には無縁な話でしょうよ！」

「？？　言ってる意味がさっぱりわからないよ？？」

なぜかニアまでちょっと自分の体形を気にし始めた。フェンナは・・・あれだけスタイルよがかったら無縁な悩みなのか、小首をかしげている。ただの世間知らずとも考えられるが。

フェンナは長い直毛の銀髪に銀眼である。エルフは総じて長身といわれるが、フェンナはそうでもない。ほぼミランダと同じ背丈である。ただ頭はさらに一回り小さく見え、腰などはやたら細いくせに出る所は出ているという、完ぺきなスタイルだ。こういうのを「

人間離れしている」と、いうのだろう。
　ニアは身長こそ低いが、自分ではまだ人間に換算しても１５くらいだと言っていた。確か獣人の成長期は遅く、そのぐらいの歳から体格が変わる者も多いと聞いた。まだ勝気で幼い印象があるが、落ち着いた雰囲気を出したら結構かわいいって表現できるのでは？などとアルフィリースは考えてみる。軍人らしく口調こそ強めだが、仕草はかなり可愛らしい。何かあるたび、すぐ尻尾がピコピコとせわしなく動いている。
　ちなみにニアはブルーとグレーの中間色のような毛並みと瞳である。そして毛並みの肌触りがとてもいい。とても柔らかい毛であり、まさに「猫っ毛」である。なお頭を触ると怒るが、喉だと照れる。
「やめろ！」から「や、やめて」に口調が変化する。全くわかりやすい性格だ。毎日リサが寝る前にニアをからかうのも、無理からぬことだろう。
　そういえばいつもは話の中心にいるはずのミランダが、話に何も絡んでこない。

「ミランダ、何してるの？」
「んー？　爆弾作ってる」
「ちょっと！　危ないから離れた所でやってよね」

　アルフィリースは思わず一歩下がる。そんなアルフィリースを見て、ミランダがくすりと笑う。

「大丈夫だって。火薬の調合じゃなくて、爆弾に効果付加したり、特殊弾作ってるだけだから。ねぇ、フェンナ～。これがチコの葉っぱだっけ？」
「いえ、それはムスカの葉です。チコはそちらの・・・」
「あ、そっか。じゃあこれをこうして・・・どうだろ、これで？」
「ええ、良くできてると思います、ミランダさん」

「薬とかの調合には自信があるからね。それよりフェンナ、ちゃんと呼び捨てにしろって言ったろ？」
「ご、ごめんなさい・・・。え・・・と、ミ、ミラン・・・ダ？」
「声が小さい！　はい、もう一回！！」
「ごめんなさい！！」
「そっちかい！」

どうにもフェンナが王族などという気がさっぱりしない一行である。なんというか、彼女は妙に謝り慣れてるような。謝り慣れている王女などいるのだろうか？

「でも、なんで爆弾なんて作ってるの？」
「アタシじゃ実力が足りないからね。こういうので補うのさ」
「またまた。ミランダ十分強いじゃない」

これはアルフィリースの素直な感想だったが、ミランダは彼女をじろりときつい目で睨み据えた。

「アルフィ。アンタ、今のセリフ本気で言ってるかい？」
「え、ええ。嘘は言ってないつもりよ」
「・・・やっぱりアンタは世間知らずだね・・・」

ミランダがため息を深くつく。

続く

混乱の兆し（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます！　最近イイ感じでブクマが伸びてて嬉しいです！

次回投稿は１１／３（水）１５：００です。ちょっと変わった時間に投稿してみる。おやつのお伴にでも。

ダルカスの森にて（前書き）

～あらすじ～

ダルカスの森を進む一行。アルフィリースの認識の甘さを、ミランダが指摘する。

「いいかい？　アタシなんか戦士としてはせいぜい二流だ。ちなみにアンタは三流以下」
「ちょっと、それはいくらなんでもひどくない？」
「いいや、むしろ甘いくらいさ。アタシの中だと、アルベルトでぎりぎり一流ってとこかな。超一流はもっとすごい」
「随分と厳しいわね」

アルベルトの剣技はアルフィリースには衝撃的だった。彼より強い者が世の中にそんなにいるとは、アルフィリースには思えないのだ。

なおもミランダは続ける。

「確かに純粋な剣技を取れば、アルベルトは大陸でも有数かもしれない。でも武器には相性もあるし、剣技が有数なら戦闘力も有数かと言われると、そうでもない。特に真っ向からの戦闘よりも殺し合いになると、一番有利なのは後ろから音もなく忍びよって、一撃で相手を殺せる技術を持つ奴だ」
「それは卑怯って言わないの？」
「卑怯でもなんでも、戦場では生き残った奴が勝ちなんだ。アンタも傭兵やるなら覚えておくといい。実際、リサがアンタを本気で殺しに来たら、防げるかい？」
「・・・それは」

アルフィリースは、先の戦いの最中にリサの気配を見失った事を思い出す。確かにあの技術は暗殺に用いる事も可能だろう。

「真っ向勝負でリサとやりあったら、ほぼ１００％くらいの確率で

アルフィが勝つだろうね。でも、アルフィが油断してたら？　寝てる時は？　トイレの時は？　食べ物に毒を混ぜられたら？」

「・・・」

「戦いってのはそういうことさ。ま、アルベルトには経験が足りないだけで、さらに上り詰めていく資質は備えてると思うけどね。それらを全て乗り越えて、初めて超一流ってんだ。超一流は大陸に何人もいないって前提の話だけどね」

「じゃあミランダの思う超一流というのは、どういった連中のことを指すんだ？」

ニアが話に加わってきた。やはり戦士としての血が騒ぐのだろう。

「それは・・・」

ミランダの目がふと遠くなる。おそらくは自分の良人のことを思い出しているのだろう。確かに魔王６体の軍勢とたった５人で戦ったのだ。それはアルフィリースの及びもつかない、凄まじい戦士だったということだ。

「？　どうした、ミランダは諸国を旅して色々詳しいのだろう？　私は旅をして余り間がないので、参考にしたいのだ」

ニアにはミランダの過去のことなどわかるはずもなく、純粋に興味本位からの質問だった。一瞬ミランダの表情が翳（かげ）るが、すぐに彼女は気を取り直す。

「アタシも見たわけじゃないけど、グルーザルドの王様とかそうなんじゃないの？　ニアの方が詳しいと思うけど」

「私も国王が戦う所は見たことがない。だが私がまだほんの子供の時、なまった腕の解消がてらに現在の将軍たちをまとめて吹っ飛ば

したと聞いた。今の将軍達は一騎当千の強者揃いだが、それを全員まとめて叩くなど、私では想像もつかないな」
「確かに。後は勇者ゼムスとかもそうかもね。もっとも彼はパーティー含めてのことだと思うけど。あとは何とかっていう傭兵団の・・・なんだっけ？」

ミランダど忘れしたと言わんばかりに、全員の方を見る。その目線に、ニアがいち早く反応した。

「それは私も聞いたことがあるな。『狂獣』の異名をとる剣士だろう？　しかもグルーザルド、我が国の国王と一騎打ちして生きている唯一の人間だとか。確か率いる傭兵団も化け物揃いと聞いたが」
「５０人いないくらいの規模なのに、この大陸で一番強いと言われる傭兵団なのよね、たしか」
「皆、静かに！」

盛り上がる会話の途中、突然リサが声を上げる。また考え事かと一瞬疑ったが、今度はどうやら真剣なようだ。

「リサ、どうした？」
「いえ・・・何かが動いたはずなのですが、気配がなくて・・・おかしいですね」
「疲れてるんじゃない？　私達も交代で寝ましょう」
「そんなはずはないのですが・・・まぁ、でも確かに何も感じませんね。私のセンサー能力にかからないとか、ありえませんから」

リサはため息をついて緊張を解くのだった。

＊＊＊

「どこに行っていた？」
「いやぁ、３ｋｍほど先に人の気配を感じたもんでね、もしかしたらゼルヴァー達かと思ったんですが」
「違ったのか？」
「さっきの美人ちゃんたちでした」
「ほう・・・」

ルイが少し嘆息する。この女剣士が他人に興味を示すのは珍しい。戦場で誰を斬ろうが気にかけず、味方が倒れてすら一瞥もしない。そしてついたあだ名が『氷刃のルイ』。レクサスは彼女が別に残酷だとは思わないが、言い得て妙だとも思う。それは・・・

「で、どうしたんだ？」
「え？」
「何をボケている。まさか殺したのか？」
「いやいや、俺は金にならない殺しはしないですから」
「ふん、守銭奴め」

ルイが吐き捨てるように言った。ルイとレクサスとの付き合いは意外と短い。まだ2年にもならないくらいだ。ヴァルサスに「お前は突っ走るから、こいつを連れていけ」と言われて、ルイはこの変な男を押し付けられた。変態で守銭奴で、だらしがない。が、腕は凄まじい。それに、センサーでもないくせに異常に気配に敏感なのだ。以前は５ｋｍ後ろからの追手に気がついたこともある。確かに役には立つ。だが。

「あーねーさーん！　今日も頭なでてくださいよ～」
「・・・一度もなでたことはないがな」
「じゃあ、いつものやつで！」
「・・・殴ればいいのか？」

今日もこんなやりとりが二人の間に繰り広げられる。男のくせに、とにかくやかましい。これだけはなんとかならないものかと悩むルイだった。

＊＊＊

そしてもう一日太陽が空を巡り、次の太陽が頂点にかかるころ、フェンナが声をあげた。

「皆さん、もうすぐ私の里です」
「一回も魔物に会わなかったね」
「アルフィにしては珍しい」
「なによそれ～」
「アルフィが歩けば魔物と変態に当たる」
「ひどい～！」

アルフィリースがミランダに抗議する。

「エルフの里が近いからか、センサー能力が上手く働きません。これは結界ですね？」
「ええ、中に入れば問題ないと思います。けどおかしいです・・・」
「なにがだ？」

ニアがフェンナに問いかける。フェンナは木に手を当てて何か調べている。

「いえ・・・やはり結界が全て作動しています。そんなはずは・・・」
「それは妙だな」

「ええ」
「何が？」

アルフィリースが会話に入ってくる。

「結界が全て作動しているということは、敵はどこから入ってきたと思います？　アルフィリース」
「そういわれれば・・・」
「転送魔術とかいうやつじゃないの？」

ミランダも会話に入ってきた。

「いえ、それは無いと思います」
「なんで？」
「転送魔術というのは発動がかなり複雑で、本来なら1人の移動を正確に行うためには、エルフの魔術をもってしてもかなりの労力と時間を必要とします」
「そんなものなの」
「ええ。なぜなら特に転移先の指定が重要で、下手をしたら壁の中に転移してしまう可能性もありますから。エルフの場合は各里を結ぶ転送円を準備しているので、かなり略式かつ安全に転送ができますが、それでも5人がかりで１０分はかかると。本来ならここからミーシアまでの距離を転移するには、１０人がかりの魔術で３０分はかかります。それが転送魔術が便利でありながら、戦争で利用されない理由です」
「それならばこの里を落とした戦力が、仮に全員転移で飛んできたとしたら、どのくらいの労力がいる？」

ニアの質問はいつも実践向けだ。やはり軍人気質なのだろう。

「まずありえませんが・・・距離にもよりますし、起動時間によって必要魔力も変わります。もし、森の外周部で転送したとして、途中にある結界まで破ることも考えれば、人間の並の魔術師２０００人がかりで半日作業かと。これは転送先に何も補助が無ければという仮定での、大雑把な数字ですが」
「それは現実的な手段ではないな」
「今それを検証しても仕方がないんじゃない？　とりあえず、最大警戒で里に入りましょう」
「退路の確保も忘れずに」

アルフィリースとリサの言うことも尤もだと一同は納得し、とりあえずここからは戦闘状態だと考えて進むことにする。そして、エルフの里が見えてきた。

「皆さん、ここが私達シーカーの里です」

視界が開けてくると、そこに広がる光景はかなり幻想的だった。暗い森の中でこの集落だけ日が射しており、ジメジメとしたイメージがなく温かな春を連想させる。そもそも生えている植物自体が違う。森の中はどこかおどろおどろしい感じだったが、里の植物は生命に満ち溢れ、また彩りも鮮やかだ。
普通の動物である鳥や小動物までもおり、とても穏やかだ。この光景を見れば、ダークエルフが邪悪だとはだれも思わないだろう。
また木を無駄に切ったり排するのではなく、上手く必要な分だけを整え、景観に生かしている。それに家が大きな木でできている。どうやら木をくりぬいたり、うまくつなぎ合わせたりして家に使っているようだ。特に中心にある家は、集合住宅とでもいえばいいくらいの大きな木である。またそれ以外の家々と、枝をより合わせるようにして足場に使っているらしい。大きな家を中心にして、ほぼ全ての家がつながっている。家によっては実をつけている木まであ

る。

「きれいだわ」

「ああ」

アルフィリースとミランダは美しさに魅かれ、警戒心も忘れたように、その集落に足を踏み入れて行った。

続く

ダルカスの森にて（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

次回投稿は１１／４（木）１８：００です。

シーカーの里の戦闘、その1～封印奪取～（前書き）

～あらすじ～

ニアとフェンナの誘導でシーカーの里に到着したアルフィリース達。

そこは思わず彼らが目的を忘れるほど美しい場所だったが、待ち受けるのは過酷な戦いだった。

シーカーの里の戦闘、その1～封印奪取～

「！　皆、隠れます！　こっちへ」

里に入って間もなく、突如リサが小声ながらも鋭い声を上げて、全員を木陰に促す。

「リサ、敵？」

「おそらく。感知上は人間のようですが、会話も拾ってみます。少々お待ちを」

一番外周部にある木の陰に全員で身を潜め、リサが聴覚に集中し始める。

（やることねぇな・・・）

（なんか面白いことねぇのかよ）

（ダークエルフの娘でもいりゃ楽しめるのによ。あの体型見たか？　まるで男を喜ばすために生まれてきたようなイヤラシイ体つきしてたぜ）

（いやらしいのはお前の顔だけで十分だ）

（（（ハッハハ・・・））））

（でも全員連れてどこかにいったんだよな？　一人ぐらい残してくれてもいいだろうによ）

（全員って言っても、３０人くらいだろ？　ま、あの傭兵どもが住民の半分くらい斬っちまったからな。本当はもう少し生け捕りにしたかったみたいだぜ？）

（雇った王子様も、まさかあいつらがあそこまで強いとは思わなかったんだろうな。実際俺達はほとんど何もしてないしよ）

（そうだな。おまえなんか、あの特殊兵の後ろにずっといなかった

か？）
（しょうがねぇだろ。あんな雨みたいな矢と魔術の中、突貫なんて自殺行為だ）
（なのに、あいつら平然と斬りかかっていったよな・・・特にあの女。ダークエルフどもを笑いながら殺してたぜ）
（なかなか美人じゃないかと思ったんだが、ありゃイカレてるな）
（ちげぇねぇ）
（おい、聞かれるぞ！？）

一瞬全員が間をおく。

（・・・聞かれたら俺達も殺されかねん）
（確かにな）
（で、いつまで俺らはここにいりゃいいんだ？）
（さぁ？　なんか王子様は焦ってたよな）
（そりゃ国に内緒でこんなことしてりゃな・・・）
（肝心の成果は出てないってことか？）
（なんでも、何かの封印を探しているらしいぜ）
（そんなの魔術師がいないと無理だろ。あの王子、やっぱり頭足りないんじゃねぇのか？）
（おいおい、それじゃそいつにつき合わされてる俺達はなんなんだって話だよ）
（外に封印探索に行った連中は、当てもなくやらされてんだろうな。同情するぜ）
（というか、次は俺達の番だろうよ）
（ちなみに傭兵の中に魔術師がいただろうが。あいつは探せないのか？）
（あのジジイは探索するのは依頼外だとか言って、バカみたいな値段ふっかけたらしいぜ。で、王子が報酬をケチったんだろ？）
（・・・本気で頭ワリィな。確か転送魔術とやらで、一人逃げたエ

ルフがいたろ？　そいつが援軍呼んできたらどうすんだ？）
（んなこと考えちゃいないだろうよ。封印のありかを知ってる族長夫婦は揃って自決したしな。自分がきちんと持ち物検(あらた)めしないのが悪いくせに、地団駄踏んで悔しがった挙句、死体を蹴り飛ばしてたじゃねえか。全く、とんだ男だぜ。ああいうのは絶対ロクな死に方はしねぇ）
（もうそれ以上言うのよそうぜ。そんなのに仕えてる俺らが悲しくなってくらぁ・・・）
（そうだな・・・）

兵士達の会話が一通りきりのいい所でリサは集中をほどき、ゆっくりと目を開ける。

「リサ、どうだった？」
「・・・まず、言いにくい報告からしましょうか」

アルフィの問いに、リサがきまり悪そうに答えた。

「フェンナ、あなたの父君、母君はどうやら自決なされたようです」
「・・・覚悟はしていました」
「フェンナ・・・」

フェンナは涙を見せまいと懸命にこらえているが、内心穏やかではないだろう。拳を強く握りしめ、体を小さく緊張させている。こころなしか震えているようだ。

「フェンナ、大丈夫？」
「・・・大丈夫です、アルフィリースさん。報告を続けてください、リサさん」

フェンナが強い眼差しでリサを促す。アルフィリースは知らずしらず、フェンナの肩を抱いてやった。そしてリサが頷き、続ける。

「どうやら敵はどこかの国の正規軍。私見ですが、可能性としてはクルムス公国が最も高いかと。もっとも国には内緒で隠密行動をしているようですが。しかも率いているのは王族の様です」

「そいつはまずいね、国際問題に発展しかねないわ」

「いや、既に国際問題だ」

ミランダの疑問に、ニアが答える。

「どうして？」

「わからんか？　既にシーカーの王族であるフェンナが事情を知ってしまった。まだ確認を取ったわけではなく、また確認を取れるかどうかわからん。が、証拠は必ずあるだろうし、フェンナが魔術なりなんなりで裏をとることもできるだろう。隠密部隊でも言い訳にならん。エルフ達がどう動くかは別問題だが、この場合、シーカーとはいえ報復行動は各国から支持される可能性が高いな」

「クルムスの領土が欲しい利権なんかも絡むでしょうね。西方諸国もきな臭いのに、中原まで怪しくなってきたわね」

「報告を続けます」

唸るニアとミランダを尻目に、リサが続ける。

「死亡したシーカーは半数以上。生き残った者は３０人程度ですがここにはおらず、どこかに連れ去られたようです。また敵の目的はシーカーの生け捕りと、封印の探索のようです」

「なぜ人間が私達の封印のことを？？」

フェンナが訝しむ。この里の封印は、当然ながら部外秘。シーカ

ー以外に知りうるはずがないのだが。

「それはわからないけど、封印ってのは持ち運びできるタイプかい？」

「一つはできます」

「複数あるの？」

「はい。もう一つは土地にくくりつけてある封印なので、どうしようもありません。様子を見る限りでは発見できてはいないようですが」

「なぜわかるのさ？」

「いえ、封印は二つとも私の家の中にありますから」

フェンナが大きな木を指さす。

「・・・なんで気付かないんだろうね？」

「兵士達の話だと、指揮官の王子は相当ボンクラなようです。魔術師無しで封印を探索しているとか」

「それは正真正銘の馬鹿だな。軍人として馬鹿な上官を持つほど苦しいことはない」

リサの言葉に、ニアが珍しくため息をつく。

割と常識的な事なのだが、魔術で施された封印は何かしらの物理的媒体を使うことが多い。たとえば置物のようなものに封印することもあるし、魔法陣を描くこともある。そういった魔術的根拠を残す物は、探索系の魔術が使えるものなら封印解除ができるかどうかは別として、発見だけならすぐにできる。

だが封印を施す方も見つかっては意味がないので、隠し部屋に置いたり、地形の中に隠したり、だまし絵のように隠すこともある。またトラップを仕掛けることもあるので、魔術師無しの封印探索など無駄が多い事この上ないのだ。

封印の探索を想定して攻め込んできたのなら、準備をしていないのはボンクラ以外の何者でもないだろうと全員が思うのも無理はない。

「じゃあとりあえず、封印の確認を出来る限り穏便にやって、その後退却。御両親の遺骸を確認したいだろうけど・・・リサ、敵の数は？」

「大きな家の中に5、東の家に4、北側の家に5、集落には以上です。後は外に探索に行っているかと」

「じゃあかなりの確率で無理だね。おそらくはここを急襲した連中がそのまま残っているんだ。エルフ１００人がかりでも全滅なのに、私達ではとても無理だ。フェンナ、納得できるかい？」

「・・・はい、いたしかたありません。今の私にとって優先すべきは封印の確認。その次に他の集落への連絡ですから・・・連れ去られた皆も気になりますし・・・」

唇をかむフェンナの様子が痛々しい。明らかに無理をしているのが全員に感じられた。

「フェンナ。絶対生き残って、やることをやったら、帰ってきてちゃんと御両親と皆を埋葬しようね」

「アルフィリースさん・・・ありがとう」

フェンナが二コリとしたが、さびしげな笑い方だった。アルフィリースに限らず全員の内心として、フェンナをこんなにした連中をまとめてブッ飛ばしたいところだが、今回はそうもいかない。ここは冷静に行かなくては。感情と命は交換できない。

「作戦は？　ミランダ」

「アルフィのしびれ薬と、アタシの眠り薬でぐっすりやっとこう。

仕掛ける扉の位置から考えて、まずは北側を全滅させる。それから中央。東は無視だ」

「「「「了解」」」」

まずは全員で身を隠しながら北側に行く。5人とも部屋の中にいたので、まずニアがドアをノックする。すると1人が「なんだ～？」とボヤキながらでてきたので、素早くミランダが引きずり倒して、首を締め上げ昏倒させる。そしてミランダが兵士をひきずり倒した瞬間に、アルフィリースとフェンナで、左右の窓から（といってもシーカーの家の造りは簡素なので、ガラスや簀（すのこ）のような遮蔽物は何もないが）、しびれ薬と眠り薬をたっぷり仕込んだダガーと矢を射かける。念のため後詰でニアが飛びこんだが、全員うめき声すらたいして上げる暇もなく昏倒した。彼らはすっかり気を抜いていたのか、鎧すらつけていなかったのだ。

次は真ん中だが、これも同様に簡単に落とせた。敵は完全に緩み切っており、こちらも鎧を着けていない。今度は窓が1つしかなかったので部屋の外から一時に昏倒させるのは無理なのでやむなくニアが突撃したが、残り2人も悲鳴を上げる暇もなくニアがみぞおちを打って悶絶させた。その瞬間にフェンナの矢が2人の肩を射抜く。ここも音を立てることなく、あっさり制圧したのだ。せめて彼らが鎧をつけていたら、これほど簡単にはいかなかったろう。

「フェンナ、急いで封印の確認を」

「はい。見てきます」

アルフィリースに促されて、フェンナが上の階に行く。

「特に何事もなく終わるかな？」

「だといいけど」

「気は抜かないことだな。まだ東の連中は起きている」

「ここで大きな音でくしゃみとか、ベタベタなんでやめてくださいね」

リサが軽口を叩くが、表情は気を抜いていない。しばらくしてフェンナが下りてきた。手に魔道書を持っている。

「それが封印なの？」
「はい、これは無事でした。ですが・・・」
「ですが？」
「もう一つの封印があまりよくない状態です。沢山のシーカーの血を吸ったからかもしれませんが、現在の私にはどうしようもありません。一度ここを離れ、援軍を呼ぶのが得策かと」
「了解だ。皆、退却だ」

一番ドア近くにいたニアが外にでようとドアに手をかけたその時、ニアに当たる日を遮る影が出現した。

続く

シーカーの里の戦闘、その1～封印奪取～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

感想も遠慮なく書いてくださいね。

次回投稿は１１／５（金）１９：００です。

シーカーの里の戦闘、その2～強敵～（前書き）

～あらすじ～

シーカーの里で封印を確認するアルフィリース達。無事に封印を持ち出したかと思ったその時・・・？

シーカーの里の戦闘、その2～強敵～

「ニアさん！」

いち早く気付いたフェンナが叫ぶより早く、ニアが跳んで部屋の中に回避してくる。さすが獣人の反射神経である。さきほどニアがいた場所には、大きな剣が降りおろされていた。

「なんだこいつは？　どこから湧いた？？」
「わかりません。リサのセンサーには引っかかりませんでした。これは・・・」

不審に思ったリサが、詳しく探ろうとさらに集中する。

「全身鎧づくめ。これで足音も立てずに、よく動けるわね」
「それはそうでしょう。こいつには中身がありません、鎧だけです」
「どういうことだ？」

ミランダが尋ねる。

「動く鎧（リビングアーマー）とかいうやつでは。魔術で動かす類いのものです。同時に足音を消すような工夫も施されているのかも」
「こいつです！　こいつには魔術が効きませんでした！」

フェンナが里を急襲した時の事を思い出す。そしてアルフィリースも思わず舌打ちをした。

「なるほど、それは厄介ね・・・剣が通じるかしら？」

その鎧がメキメキという音と共に、扉を無理やり引っぺがして入ってこようとする。鎧の体格では、ここにはそうしないと入れないのだ。そして、その後ろにさらに2体。

「こんな奴らとやりあう必要はない。動きは鈍重だし、無視だ！皆、窓から行きな」

ミランダを殿(しんがり)に、全員窓から飛び出す。そしてミランダが念のため煙幕を張って脱出してくる。もっとも、鎧にめくらましが効くかどうかは定かではないが。そして来た通り、南の森に脱出しようとしたその時――

「アンタ達、そんなに急がなくってもいいじゃないか？」

先頭を走るニアに、突然頭上から斬りかかる者がいた。ニアは横っ跳びであわててかわすが、完全に全員の足を止められてしまった。そしてアルフィリース達の行く手に立ち塞がる女。両手に曲刀を持ち、ほとんど下着のようなやたら露出の高い格好をしているが、全身に傷が無数にあることから歴戦の戦士なのだろう。また髪は肩程度の長さに切りそろえてあるが、片方の目が隠れるほど前髪が長い。大柄ではないが、発する殺気のせいで，彼女の体が実際以上に大きく見える。

「厄介そうね」

「リサ、接近に気付かなかったの？」

「いえ、気付いていましたが速すぎます。こちらに向かって動いた事にリサが気付いた時には、既にニアに斬りかかって来ていました」

フェンナがぎゅっと魔道書をかき抱く。それをちらりとみやって女剣士がニヤリと笑った。

「へぇ・・・それが封印ってやつなのかい？」
「さぁ、どうかしら？」

ミランダがフェンナの代わりに答える。

「まぁ奪ってから考えるか・・・と！」

会話を中断するようにニアが女に蹴りかかる。上半身を蹴ると刀があるため、下半身を狙うローキックだ。が、女は逆にヒットポイントをずらすように前に踏み込んで、ニアの蹴りを足で受け止める。そのまま柄でニアの顔面を殴ろうとするが、ニアはそれをくぐるようにかわして、次は肘を打ちこもうとする。

そこからは速すぎて、全員の目が追いつかない攻防となった。とりあえずどちらも有効打がないようだが、５秒程度の攻防の後、ニアが自ら距離を取った。見ると女には有効打がないようだが、ニアはそこかしこから血が出ている。まさか獣人のニアより速いというのだろか、あの女は。

「あらあら、ネコちゃんすばしっこいのね～」
「貴様こそ、なんだそのデタラメなスピードは」
「私が速い？　ぷっ、アハハハハ！」

女が大きな声で笑い始めた。どうやら、何かがかなりツボだったらしい。

「確かにまあ私も速い方だけどね・・・それ以前にアンタが遅すぎよぉ、ネコちゃん！？」
「なんだと？」

血相の変わるニアと、へらへらしている女が対照的だ。

「で、時間稼ぎはもういいかい？　ベルノー」

「充分じゃ」

「！　しまった！」

《炎の障壁（ファイアーウォール）》

魔術を詠唱する声と共に、脱出路を炎の壁が塞いでしまった。かなり広域かつ高さのある炎の壁である。これでは、もはや南には脱出できない。

アルフィリースもミランダも、ニアの戦いに見入った事を悔いたが、もう遅い。

「お主たちはそのネコ娘を囮にして脱出すべきじゃった。判断ミスじゃな」

「ち、じゃあ後ろに・・・」

「・・・多分無理だと思います、ミランダ」

「ゴフー！」

いつの間にか背後には手に大きな斧を持った、全身鎧づくめの巨漢が仁王立ちしている。

「リサ、これも接近が速すぎたの？」

「いえ・・・リサのセンサー能力が上手く働かない？　なぜ・・・」

「ワシが魔術で邪魔しておるからのう」

魔術士風の、おそらくは初老であろう男が答える。フードですっぽり顔と全身を覆っており、詳しい様子や表情は見られないが。だが、ミランダの判断は早かった。

「アルフィ、あの魔術士をやりな。そうすれば炎の壁も消えるはずだ。アタシは後ろを片づける」
「オーケー！」

言うと同時に二人は斬りかかっていくが、

「妥当な判断じゃが、作戦は相手の力量を見て立てることじゃな」
「？」
「お前の相手は俺だ」

横から飛び出した黒い塊に、アルフィリースはとっさに剣で防ぐ態勢に入った。通常なら斬り払うのだが、本能が守れと告げていた。

ギィィィン！

鈍い音が響いたかと思うと、アルフィリースは奇妙な浮遊感を覚えた。それもそのはず、体が後ろに吹っ飛ばされたのだ。そのまま５ｍ程後ろの壁に叩きつけられる。

「ぐっ！？」

受け身をとる暇もなく壁に叩きつけられ、衝撃で一瞬呼吸ができなかった。が、それでも目線は反射的に自分に斬りつけてきた黒い塊に向く。戦場で敵から目を離せば斬ってくれと言っているのと同じことぐらい、アルフィリースも理解している。だが視界に入ったのは悠然と大剣を構えなおし、全く仕掛けてくる気配のない男であった。かなり大柄な剣士であり、きちんとした黒い鎧に身を包んでいる。どこかの騎士ではなかろうかとも思える風体だ。

「ほう？　女だてらに俺の剣を受けきるとは」
「なんで追撃してこないの？」
「その必要はあるまい。お前と俺では力量に差がありすぎる。それがわかる程度には強いだろう？」
「馬鹿にしてるの！？」
「さあ、どうかな」

アルフィリースにしては珍しく激昂した。完全に舐められたと思ったのだ。これほど屈辱的な扱いは、旅を始めてから初めてだった。アルフィリースは、元々がそれほど気が長いともいえない性格である。呪印を解放して吹き飛ばしたいと思う気持ちを制止するので精一杯だ。

一方、この男が斬りかからなかった事にもわけがあった。確かに舐めてもいたのだが、戦いが不意打ち一発で終わっては面白くないとも思っていたし、加えて何かがこの女に対して剣を打ちこむことをためらわせた。おかしな話だが、打ちこみにいけば死ぬのは自分のような気がしたのだ。圧倒的優位なのは自分であり、目の前の女は手が痺れて剣もろくに握れない状態だろうことは、容易に想像できたのだが。

「（たかが女に臆病風でもあるまいに・・・ふん、面白い！）」

戦争に長らく携わる物として、特有の勘のようなものがある。本能がこの女の危険を告げるも、理性では全く危険だと判断できない。こういった経験が無いでもなかったが、ここまではっきり本能と理性が分かれたのは初めてであり、それが瞬間的にこの男の剣を鈍らせた。が、

「（戦えばわかること。死ねば自分はそれまでの存在だったというまでよ！）」

そのくらいでは、生粋の戦闘狂であるこの男の剣を収めさせるには至らない。男が剣を構えなおす。

「では、続けようか」

「・・・」

まずい。それがアルフィリースの内心であった。手のしびれがとれる気配を一向に見せず、武器がろくに使えない。それに呪印を起動させるにも、ある程度時間は必要だ。そんな時間的余裕を与えてくれるこの男ではあるまい。はっきり言って、手段がない。

アルベルトも大概な化け物だったが、味方であり、殺意を持って自分の前に来ることが想像しにくかった。眼前の男の技量がどの程度なのかはわからないが、自分と明らかな技量差があることくらいは、アルフィリースにも一瞬でわかった。打ち合えば１０秒とたたず真っ二つにされるだろう。そんな考えがぐるぐると頭の中を回り、他の仲間が援護に来てくれないものかと視線を移す。

ニアは先ほどの女剣士とやりあっているが、もはやはっきりとわかるくらいの劣勢になっている。息一つ切らさない女に対し、ニアは息が上がってきているのだ。さらに体のいたるところから血が出ている。彼女達の間にも、かなりの技量差があるのだろう。

そしてフェンナは封印を抱いたまま固まっている。いくら弓の達人でも、実戦が初めてだとあの反応が普通だ。アルフィリースにも、ゴロツキが相手ですら、最初はまともに動けなかった記憶がある。鍛錬と実戦は別物。ましてこのレベルの相手ではどうしようもないだろう。リサはそんなフェンナをかばうようにしているが、魔術士の動きに気を遣うので精いっぱいの様だ。魔術士に戦う気配がないのが、まだ幸いだった。

ミランダならと期待を込めるが、彼女もまた先ほどから手一杯だ

った。

「こんの！」

「グフー！」

凄まじい音をさせながらメイスと斧がぶつかり合っている。信じられないが、ミランダの腕力と互角らしい。が、技量はミランダの方が上のようだ。振り下ろされる斧を体をねじってかわし、ガラ空き胴体にメイスを打ちこんだ。さしもの巨漢が数m後退するが、間髪いれず何事もなかったのかのように突進する。

「なんだこいつ？」

ミランダが何発打っても同じだった。全く意に介していない。鎧は変形しているので、きっとダメージはあるのだろうが。それならばと顔面に打ち込んだが、やはり大して意に介していないようだ。だが、兜ははずれ、その下の顔が見えた。

「オークだって！？」

「グフー！」

鎧の下の体はオークだった。かなりの体躯から巨人族ではと思っていたが・・・オークも巨漢が多いとはいえ、明らかに標準的なオークより、2回りほど大きい。それに、なんというかほっそりとしている。おそらくは、相当に鍛えこんでいるのだろう。だが、オークが鍛錬をするなどありえるのか。それよりも、オークが人間と共闘している事自体が通常では考えられない。

「オークが人間に従ってるなんてね・・・」

「た、隊長強い。オデ、隊長に従う」

「まともにしゃべった？」

ミランダの驚きも無理はない。オークが人間に理解可能な言語をしゃべることなど、それこそ聞いたことがない。

「お、お前・・・強い。つ、強い戦士、す、好き。もっとオデと、戦う！」

「ちっ」

「そ、それに、お前女！　お、女は・・・戦った後も、楽し、楽しみ二倍。強い女、ほど、負けた時イイか、顔する！」

オークがニヤリと笑う。

「アタシもアルフィのことは言えないね・・・化け物にラブコールされるなんざ！」

「い、行く、ぞ！」

再び激しい打ち合いが始まった。あれではアルフィリースの手助けどころではあるまい。いったいどうしたものか。そんなことを彼女が考えていると、

「アルフィ、来ますよ！？」

「気がそれているぞ、女」

リサが声をかけてくれた。が、同時に男の大剣が目の前に迫っている。

「（まずい）」

咄嗟（とっさ）にアルフィリースは反射的に痺れた腕で剣を握り、大剣を防

ごうとするが、果たして受け切れるかどうかは自信が無かった。

ギン！

金属音が響き渡る。アルフィリースは剣ごと斬られたかと目を瞑ってしまったが、剣に重みがかかっていない。おそるおそる目を開けると、大剣を横から遮るもう一つの剣が見える。そして不意にどこかで聞いたような声がした。

「また会ったな、アルフィリース」

「・・・ルイ、さん？」

男の大剣を横から差し止めていたのは、ダーヴの町で出会った、黒髪の女性だった。

続く

シーカーの里の戦闘、その2～強敵～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

次回投稿は１１／６（土）２０：００です。

何時に投稿するのが一番いいのか・・・

ダルカスの森の惨劇（前書き）

～あらすじ～
アルフィリース達がダルカスの森を訪れる数日前・・・そこで起こった惨劇とは？

今回はちょっときつい話しかもしれません。苦手な人は心してください。

ダルカスの森の惨劇

＊＊＊

時間は数日前に遡る。

「で、このエルフ達はどこに連れて行ったらいいんだ？」
「さあ？　とりあえず、赤い紐がついてる木を目指して進めってよ」
「とか言って、もう3刻ぐらい歩いてるぞ？　日が中天を過ぎちまってる」
「しかもなんだか森の中心部に向かってないか？」

森を歩く鎧姿の男達が、不平不満を口々に言う。

「ボヤくな、紐が段々短くなってる。もう少しなんだろ」
「なんで赤なんだよ、見づらいじゃねえか」
「俺が知るか」

先頭を行く男がなだめようと一瞬したのだが、すぐに口論に巻き込まれる。

「喧嘩するな。エルフを届けたら帰っていいんだし。それよりあのアホ王子の顔を見なくて済むかと思うと、せいせいすらぁ」
「ひでえ言い様だな、俺達一応親衛隊だぜ？」
「くじで決まったようなもんだ。第一王子か、第二王子がよかったよなぁ。あのアホ王子は宮廷じゃ相手にされてねぇじゃねえか」
「だから必死なんだろうよ。ちょっとでも功を上げようってな」

兵士が唾を吐きながら、それに付き合わされる自分達の身にもな

れ、と呟く。その男の肩を、別の男が叩いた。

「あのおつむのできじゃ無理だろうよ。まだワラが詰まってる方がマシってもんだ。今回のことだって、誰の差し金かわかったもんじゃねえ」

「例の貴族じゃないのか？　ほら、最近出世してきたっていう」

「あー、ここ2年くらいで宰相補佐になったってやつか。しかしなんでまたそこまで出世したのに、あのアホ王子に親切にするかね？」

「さあな。でもあのアホに限らず、全員に親切だぜ？　俺もよく声をかけてもらうしな。気取らなくて感じがイイ奴ではあるぞ」

「貴族なのに珍しいな」

ががやと話をしながらダルカスの森を進む兵士の一団。５０人くらいだろうか。彼らはシーカーの森を急襲した後、生き残りのシーカーを連れて指示された場所を目指して進んでいる。エルフは全員後ろ手に縛られ、さるぐつわをされている。魔術の詠唱と印を結ぶ手を封じられては、さすがのシーカーでもどうにもできない。腕力はもともと余りないし、鍛えてある人間の兵士の方が強いだろう。非常に無念な思いにそれぞれが顔を歪めながら、兵士たちに連行されている。

「まだかよー」

「いや、もう紐が相当短い・・・って」

紐を確認していた先頭の兵士が何もしないのに、紐がするりとほどけた。それを見ていた兵士達の動きが一瞬静止する。と、不意に彼らは声をかけられた。

「・・・やっときたね・・・」

兵士達が声の方を振り向く。そこには１０歳程度の子供が立っていた。黒い髪をしており、なかなか整った美少年である。ただ表情に乏しく、とても冷たい感じがする。いつの間にここに現れたのか。だがそんな兵士達の疑問をよそに、子供はゆっくり彼らに歩み寄ってくる。

「おい、小僧。こんなところで何してる？」
「まさか、お前がエルフを引き取るってのか？」

だが兵士の質問に全く答えるそぶりもなく、子供はシーカー達の品定めを始めた。その様子をただ見守るしかない兵士達。

「・・・確かにシーカー・・・品質も良い・・・これなら・・・」
「おい、ガキ！　俺達の質問に答えやがれ」

兵士の一人が子供の肩をぐいとつかむ。が、

「あれ？」

その兵士は目の前の光景が理解できなかった。自分の手が子供の体を通り抜けている、いや、埋まっている？　兵士には痛みも何もないが、とりあえず引き抜こうとするがびくともしない。それどころか、自分の手が子供に向かって沈んでいく。

「お、おい！　どうなってんだ、これ」
「おい、皆。ザムの体を引っ張れ！」
「よしきた！」

兵士たちは数人がかりでザムと呼ばれた兵士の体を引っ張るが、全く引き戻せない。それどころかますます沈んでいく。

「な、なんだこりゃあ？」
「おいガキ！　やめねぇか！」
「くそっ！」

たまりかねた兵士の一人が、ついに槍で子供の体を刺した。が、槍が少年の胸を貫いているのに、彼には全く動じた様子がない。そして、不思議な事に傷口から血すら流れない。それどころか、兵士を引きずったままシーカーの物色を続けている。

「・・・うん、合格だ・・・君もそう思うだろ？・・・」
「イイんじゃな～い？　美人がいっぱいだし、楽しめそうだよ～」
「・・・君はいつも女のことばかりだな・・・」

どこからともなく、子供がもう一人現れた。見た目では同じくらいの年ごろか。今度もやはり髪が黒いが、こちらは随分表情が動く少年である。こちらは快活な外見をしている。無口な子供と、やたら口調が軽い子供。まるで周囲の兵士達がいないかのように、２人は勝手に振舞っている。

「１匹くらいボクにくれるんでしょ？」
「・・・それはやってみないとわからないな・・・」
「えー、じゃあ下手したらボクは働き損？」
「・・・そうならないよう善処するよ・・・」
「ほんとに１匹も回ってこなかったらどうする？」
「・・・その時は次の君の仕事に手を貸すよ・・・」
「おー、それはいいねー。で、この余り者達はどうする？」
「・・・忘れてた・・・」
「ひどいなー。既に１人、キミにほとんど埋まってるんだけど？」
「・・・どうでもいいよ・・・」

どうやら無口な方の子供は、完全に兵士達の存在が目に入っていなかったようである。その間にもザムと呼ばれた兵士はどんどん埋まってゆく。ザムを助けようと手を引く者、子供に槍を突き刺す者もいたが、少年は頭を刺されてもまるで気にかけている様子がない。

「た、助け・・・！」

そしてついにザムの頭が埋まっていった。ザムは必至でもがいていたが、全く状況は好転しない。頭が埋まってからは声は聞こえなかったが、その体が全て沈むまで必死にもがいているのがよくわかった。途中から周りの兵士達はこの光景に愕然とし、なすすべなく見守るだけとなった。シーカー達も余りの現実離れした光景に目を見開いている。いち早く危険を感じたシーカーは自分達を解放するよう兵士達に口を封じられながらも何とか訴えようと必死だが、兵士達は呆然自失でそれどころではなかった。

そんな全員が言葉を失くし静まり返る中、明るい方の少年は楽しそうに静かな少年に語りかけている。

「キミがどうでもいいなら、この人間達ボクがもらってイイ？」

「・・・好きにすれば・・・」

「やったー♪　じゃあどうしよっかなぁ・・・君達はどうしたい？」

くるりと振り返った子供が兵士達の顔を覗き込むように見回す。余りの異常な状況に全員の理解が追いついていなかったが、その内1人がはっと我に返り、反論しようと口を開く。

「ふざけ・・・」

ゴキッ！

だがその兵士が反論することは永久になかった。なぜなら子どもが手をかざすと、彼の首は言葉の途中で突然１８０度反対を向いてしまったから・・・。

「あー、ダメダメ！　質問は一切認めませーん！」

自分から意見を求めておいて、なんとも無茶苦茶な対応である。だがあくまで少年は明るく、軽妙に振舞っている。そして真っ青になっていく兵士達を尻目にしばらく頭をひねって考え込むと、何かを思いついたようにポンと手を叩いた。

「んー、ただ全員殺しても面白くないから・・・それじゃあ君達には最後の一人になるまで殺し合ってもらおうかな？　ただし最後の一人は生かしてあげるよ。どう、これなら希望があるでしょ？」

「な・・・」

全員が息をのむ。目の前の子どもは、とんでもないことを「おにごっこしようよ！？」くらいの感覚で言ってのけたのだ。あまりの状況に兵士たちは声も出ない。が、そのうち何人かはじりじりと後ずさりを始めており、ついに一人が「うわぁ！」という声と共にその場を逃げ出した、いや逃げ出そうとした。が、

ゴキュッ！

その兵士も先ほどの兵士と同じ末路を辿った。

「んー、それもダメ！　逃げるのも一切認めませ～ん！」

子どもは手でバッテンを作り、首を横に振っている。ついに異常

事態に精神がついていかなくなったのか、兵士達の中にその場にへたへたと座り込む者が出てきた。その様子を見て、子どもは実に楽しそうにニコニコしている。

「じゃあ、そろそろ始めたいと思うけど、皆準備はいいかなー？このゲームに対して意見がある人は今だけ質問を受け付けまーす！１０、９、めんどいから０！　・・・でも誰も質問はないみたいだね。じゃあ次にボクが手を叩いたらゲームを始めるけど、ゲームは本気でやらないとつまらないから、やる気のない人には問答無用で退場してもらいます。例えばこんな風に！」

そしてへたりこんでいた兵士の一人の四肢がねじれ始めた。

「ぎゃあああああ！」

絶叫と、骨が砕ける嫌な音と共に絶命する兵士。その様子を見て、兵士達が悲鳴をあげ始めた。恐慌状態である。

「うわあああああ！」
「助けてくれー！」
「い、嫌だぁぁぁ」
「あー、うるさいなぁ！　静かに！」

さらに何人かが捻じれて絶命する。それを見て騒ぐことすら許されないと悟ったのか、兵士達がぴたりと静かになり、子どもの次の発言を待つ。その中で放つ子どもの声は、兵士達の頭の中に直接響くような韻律を奏でる。無邪気なのに暗く、明るいのに深い、とでも表現すればいいのか。その声色には、不思議な強制力と誘惑がある。

「大丈夫だよ、隣の友達を殺したら助かるんだから。簡単でしょ？　じゃあ皆、用意はいいかな？」

その声を合図に、恐怖に濁っていた兵士達の眼が血走り始める。もはや彼らに選択肢は用意されていない。そして1人が剣を抜くのをきっかけに全員が抜剣を開始し、先ほどまで愚痴を言い合っていた同じ親衛隊の仲間達に向き直った。

「いやー、全員参加なんてボク感動だよ！　じゃあ、よーい・・・ぱん！」

子どもが手を叩くと同時に森の中が阿鼻叫喚の渦に包まれた。友人同士が真剣な殺し合いを演じ、血飛沫が飛び交うその戦争より悲惨な光景を、シーカー達はなすすべもなく見守っていた。いや。というより、なぜか先ほどから目が逸らせない。それどころか、眼を閉じることすらできなかった。それもまた明るい少年が仕掛けたことなのだが、彼らにそれがわかったとて状況が変わるわけでもない。

そしてしばらくの後。そこらじゅうが赤で塗りつぶされた森の中に兵士が一人生き残っていた。剣を地面に刺し、支えにして言葉もなく肩で息をしている。その様子を見て子どもがパチパチと拍手をしている。

「いやー、おめでとう。キミが勝者です！　感想はあるかな？」

だが、その兵士はガクガクと震えるばかりで、言葉を発することができるような状態ではない。むしろよく発狂してないといえる。彼は自分がやったことを理解すらしていないのかもしれない。だが、彼が悪夢を本当に見るのはこれからだった。

「そうかー、言葉にならないほど嬉しいんだね？　やっぱり生かし

てあげてよかったなぁ・・・あ、そうだ！　キミにはご褒美をあげないとね！」

子どもがパチン！　と指を鳴らすと、周りから囁き声のようなものが聞こえ始める。どうやら声が徐々に大きくなっていくようだ。

「やっぱり友達って一緒じゃないといけないよね。ボクは親切だから取り計らってあげるよ、永遠にね」

最初は全員が言葉の意味をつかみかねたが、周囲の囁き声がはっきり聞こえ始めると、意味が理解できた。いや、結果から言うと理解できなかった方がよかったのかもしれない。そしてざわめきがだんだんと明瞭な意味をなす。

（どうして殺した・・・）
（お前が新米の頃からかわいがってやったのに・・・）
（俺達同期じゃないか・・・あんなに一緒につらい訓練を乗り越えたのに・・・）
（どうして俺を斬ったんですか？　先輩・・・）
（ここはどこだ？俺はどうなった・・・？）

「ひ・・・」
「どう、キミに死んだ友人達の声が聞こえるようにしてあげたよ？彼らは一生キミの傍にいてくれるから、これでもう寂しくないよね！？」

（故郷に帰ったら結婚する予定だったのに・・・）
（ごめんな、父ちゃん帰れないよ・・・）
（どうしてこんなことに・・・）
（お前！　よくも俺を！　殺してやる、殺してやる！！）

（一人は嫌だよ・・・）
（お前もこっちに・・・！）

「う、うわぁぁぁぁあああああああ！！」

そしてついに生き残った兵士も正気を手放した。そして周囲の血だまりが動いたかと思うと、ゆっくりとその兵士を取り込んでいく。そしてそのまま地面に沈んでゆき・・・後には血の跡すら残らなかった。その余りにもむごい結末を仕掛けた当の少年は、心底楽しそうである。

「・・・面白い・・・？」
「いやー、面白いね！　だって、どこの場所でやっても人間の反応は同じで、すぐに壊れちゃうからさ！」
「・・・だったら飽きない・・・？」
「そうでもないよ、同じようでも微細に違うしさ。その違いがなぜ起こるか検討するのが楽しいんだよ！」
「・・・どうせ検討なんてしてないくせに・・・」
「あっは！　ばれちゃった？」

もう一人の少年はこれまた心底興味がないようだった。その光景とやりとりを見ていたシーカー達は嫌悪感や憎悪を通りすぎて、もはやカタカタと震えるだけである。中には既に気絶している者も多い。そのシーカー達を振り返り、少年が明るく語り始めた。

「あー、ごめんね。びっくりしたよね？　でも安心してね、次はキミたちの番だから。やっぱりこういうのは、順番だもんね？」

もはやそのセリフを聞いてもシーカー達には逃げる気力すら湧かない。涙を眼に浮かべて首を横に振り、助けを請うばかりである。

だがそんなシーカー達の様子を無視して、さらに少年は続ける。

「それに彼らを憐れむ必要はないんだよ？　・・・ここだけの話、あの無口な彼のセンスはボクなんかじゃとても追いつかなくてね。今から君達の身に起こることは、こんな光景がそれこそ子どもだましに見えるくらいすごいと思うよ？　まあボクは実際子どもなんだけどね！！　ともあれ、なんせ彼はキミ達を生きているとか、感情があるとか認識してないから。次に眼が覚めた時に期待しておいて。それじゃあ素敵な悪夢を。アハハハハ・・・」

声にならない言葉を発しようとするシーカー達に気を使う様子もなく、子どもが手をかざすとシーカー達は全員眠りに落ちた。その後、彼らを見た者はいない。

続く

ダルカスの森の惨劇（後書き）

閲覧・評価・ブクマ・感想ありがとうございます。

少年２人の異常性が描けていればいいなと思います。

次回投稿は１１／７（日）９：００です

シーカーの里の戦闘、その3～黒い傭兵団～（前書き）

～あらすじ～

圧倒的な力でアルフィリース達を追い詰める謎の集団。その時アルフィリースの目の前に現れたのは町で出会ったあの女性だった。

シーカーの里の戦闘、その3～黒い傭兵団～

そして時は今のダルカスの森。

「・・・なんのつもりだ、ルイ？」
「ヴァルサスからの伝令だ。『全員西の都サードイドに緊急集合』だ、そうだ」
「・・・ち。全員戦闘停止だ」

男が大剣を収める。それを見て女剣士、魔術師、オーク、そしてルイも剣を収める。

「レクサス、お前もだ」
「へーい」

リサはぎょっとした。自分のすぐ背後から声がしたのだ。気がつくと、自分の喉元にレクサスの短剣が付き付けられていた。嫌な汗がリサの背中を流れる。

「いつの間に・・・」
「んー？　キミが『アルフィリース』って叫んだ時から」
「そ、そんな・・・」

数秒は自分の背後にいたことになる。背後で木の葉が落ちる衝撃すら感知できる自分が気付かないとは、リサには衝撃の出来事だった。

そんなリサの頭を、レクサスはぐりぐりと撫でる。

「そんな顔しなくても。いっとくけど暗殺者とかはこれくらいみん

なやるよ？　だってセンサーに気取られるようじゃ、彼らの商売あがったりだからね。君はセンサーとしてまだ甘いし、自分の能力を過信しない方がいい。世の中にはセンサーの能力を潰せる魔術師やセンサーもいるしね」

「・・・」

リサは悔しそうに歯がみしている。その一方で大剣を持っていた男達は、既にアルフィリース達に興味を失くしたようにルイと語り始めた。

「ルイ、お前が伝令役とはな。どういう風の吹きまわしだ？」

「別に。たまたまさ」

「たまたまでこんな深い森の中まで来るか？」

「もー、姐さんたらー。素直にヴァルサスさんが苦手だって言いましょうよ！？　一緒にいると息苦しかったんでしょ？」

バキッ！

イイ音と共にレクサスが吹っ飛んでいく。

「・・・たまたまだ」

「う、うむ」

ルイの冷たい目線に、大剣の男が無理やり自分を納得させた。そして、一つ咳払いをすると、男がルイに質問をする。

「で、何があったんだ？」

「４番隊が全滅したそうだ」

「ヴィラトの隊が！？」

「５番隊だったら気に病む必要もなかったんだがな」

「それは・・・同意せざるをえないな」

これには今まで戦っていた相手が、全員驚いた表情を見せた。

「誰がやった？」

「魔王だそうだ。しかも相当強力で、どうも伝説の大魔王級という噂もある」

「・・・で、それでもヴァルサスは掟通りに報復を？」

「それはそうだ。ワタシ達の唯一といってもいい掟だろう？」

「では全ての部隊が集合するのか」

「さらに昔引退した人間まで召集するらしい。それで人出が足りないから、ワタシまでがこんな真似をしている」

「なるほど・・・腕が鳴るな」

「ああ、それは同意見だな」

ルイと大剣の男がニヤリと笑う。それを合図に、他の連中も一斉に口の端を歪める。彼らはまぎれもなく戦闘狂なのだ。それに良く見ると全員揃いのコートを着ているようだが。

「黒いコートに、金の刺繍の鷹・・・貴方達、まさか『ヴァルサス率いる黒い鷹の傭兵隊』？」

放っておかれたミランダが、たまりかねたように疑問を投げかける。その質問に反応するコートの人間達。

「その通りだ。とりあえずは戦うこともないだろうし、名乗っておこうか。俺は『ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク』の３番隊隊長ゼルヴァーだ」

「残念ながら副隊長はいないけどね。私が副隊長代行のドロシー。んでそこのオークがダンダ、魔術師のおっさんがベルノー。んでそ

この無愛想な女が・・・」

「2番隊隊長のルイ姐貴です。んで俺が副隊長のレクサス。っていっても、2番隊は俺達2人だけなんですけどね」

「・・・アタシ達が今生きていることは奇跡かもしれないね・・・」

ミランダがため息をつく。それもそのはず、目の前にいる傭兵隊は大陸でも1、2を争う有名な傭兵団だ。大陸に名をはせる傭兵団として、フリーデリンデの天馬騎士団、カラツェル騎兵隊、ミュラーの鉄鋼兵などがあるが、特に戦場における先陣を切る者達として、『ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク』の右に出る傭兵団はないとされる。

彼らは総勢５０人に満たないとされる傭兵団だが、隊長の条件は「単独で１００人切りを達成すること」らしい。そのため『狂獣』の異名をとるヴァルサスが全体を率いるとき、その戦力は一個師団にも匹敵すると言われており、戦場で彼らを見たらドラゴンでも裸足で逃げると言われたほどである。ドラゴンは元々裸足だろうが！

というツッコミはさておき。だが団長のヴァルサスが単独で魔王を狩ったというのは、かなり信憑性の高い話だった。

「とりあえず、アンタ達はアタシ達ともう戦う気が無いってことでオーケー？」

「ああ、『緊急集合』は全てに優先される。現在の依頼を投げだすことになったとしてもな。この傭兵団における唯一の掟のようなものだ」

「だそうだ、アルフィ。助かったね」

「うん・・・あの！」

ミランダがゼルヴァーに確認を取った。だが、アルフィリースの顔はすっきりしない。ニアもやられっぱなしで苛立ちが治まらないようだ。

「ルイさん、ありがとうございました。助けていただいた形になって・・・」
「別にお前を助けたわけではない」
ルイにの返事はあくまでそっけない。アルフィリースの戸惑う様子を多少かわいそうと思ったのか、ルイの方から言葉をつなぐ。これは実に珍しいことだったのだが。
「それに、打ちこんでいたら死んだのは案外ゼルヴァーの方かもな」
「そんなこと！」
「ちょっと、ルイ！　いくらアンタでも聞き捨てならないよ！？」
「まあまあ、抑えてドロシー」
ルイに喰ってかかるドロシーを後ろから抑えるレクサス。いつの間に後ろに回り込んだのか。軽い言動とは裏腹に、全く油断がならない男だ。
「ド、ドロシー。短気、だ、ダメ」
「オークのお前にゃ言われたくないよ、ダンダ！」
「怒ると、し、シワが増える、と、聞いた・・・」
「こいつっ！」
「ほっほっほ。ダンダの勝ちじゃわ、ドロシー。それに実力でもルイとお主では雲泥の差じゃよ」
「わかってるよ！」
どうやらなんだかんだで結構仲が良い傭兵隊なのか、わいわいやっている。さっきまで戦っていた相手とは思えない。さっきは全員が死神のようにアルフィリース達には見えたのだが、今では等身大のただの人間だ。もっとも1人はオークなのだが。

そんなきりのない言い争いともじゃれつきともとれない騒ぎを、ゼルヴァーが制する。

「いつまで馬鹿をやっている。この森にはもう用がないだろう、いくぞ」

「そうだな・・・が、一応雇い主に一言詫びた方が、後々面倒ではないと思うが」

「その雇い主はいつ帰ってくるんだ？」

「噂をすれば、ほれ」

ベルノーが指差す方向に、３０人くらいの兵士と、先頭にやたら派手な格好をしたこの森に似つかわしくない人間が見える。あれが王子なのだろう。なるほど、こう言ってはなんだが、誰が見てもいかにも頭が足りなさそうな面構えだ。目は離れ、焦点がいまいち定まらない目つき。しかも小男の肥満体型であり、威厳とはいかにも無関係だった。王家というより、道化と言った方が似合うだろう。

しかもこの森を探索するのにあんなひらひらしたものをつければ、そこらじゅうで引っかかってボロボロになるに違いない。全く探索に適していないことも理解できていないのだろうか。いかにも・・・と言う感じでアルフィリース達が見ていると、その視線に気付いたのか王子が彼女達を認識する。

「む、そなたらは何者じゃ？　何をしておる？　わしらの味方か？」

そこらじゅう焼けているし、どうみても戦ってたと思うのだが。しかも隠密行動している王子に対して、援軍がいきなり来るわけはないだろう。フェンナとてシーカーの外見を隠していないのに。どうやら兵士達の言う事も、強ち（あなが）はずれてもいないのだろう。

そんな彼にも傭兵としての矜持（きょうじ）がそうさせるのか、ゼルヴァーは律義に告げる。

「雇い主よ！　すまんが俺達はここで抜ける。緊急の用件が入ったのでな。賃金はちゃんと日割りにしてお返ししよう！」
「何！？　そんなことをこの第三王子たるムスターが認めると思うのか？　貴様は頭が足りんのか？」

いや、頭が足りないのはどっちだよと言う顔をブラックホークの面子やアルフィリース達だけでなく、王子側の兵士もしている。せっかくゼルヴァーが気を使って身分を伏せたのに、王子は自分から名乗ってしまった。隠密行動の意味をわかっていないのではないだろうか。

「ゼルヴァー、もう無視してもいいか？」
「ああ・・・あそこまでバカだとは思わんかった。すまん、ルイ。手間を取らせた」
「アルフィ、アタシ達もずらからない？　なんか、馬鹿の相手とかする必要ないと思う。もう封印はゲットしたしね」
「ミランダもそう思う？　私もそういう気がしてきた・・・」

既にアルフィリース達もブラックホークの面々も全員ぐったりしてきている。だが、この光景を空から見守る者達がいたのだ。

続く

シーカーの里の戦闘、その3～黒い傭兵団～（後書き）

閲覧・評価・ブクマ・感想ありがとうございます。

戦いはは続きます。次回投稿は本日１１／７（日）２１：００です。

シーカーの里の戦闘、その４～復讐心～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースを助けた女性はルイと名乗った。大陸最強の傭兵団の隊長の一人である。戦闘も一度収まり一息つけると思ったそんな時、調査に出ていた兵士達が里に帰って来て……？

シーカーの里の戦闘、その4～復讐心～

「あれー？　君、なにしてんの？」
「いやいや、キミこそ」

ダルカスの森の上空、アルフィリース達が戦っているその真上で交わされるどこか場違いな空気の会話がある。
だが姿は見えず、声だけが聞こえてくるのだ。もちろん彼らはアルフィリース達に見つからないように、姿を魔術で隠しているのである。気配や声も同様だ。一定空間にのみ聞こえるように、防音の魔術空間を固定して張っている。

「僕は素材の調達さ。ちゃんと兄弟子様には断ってるよ？　なんせ一番忙しいのは僕なんだしね。君はどうせ断りいれてないんでしょ？」

声の一つが軽妙に語る。アルフィリース達が知らぬところで暗躍していた、あの声の持ち主である。そして、もう一つの声もその調子に応ずるかのように、軽薄な語り口だ。

「まぁね～。シーカーで遊び飽きちゃったから、こっちを見にきたの。所詮シーカーっていってもダメだね。何が誇り高い民族なんだか」
「何やったのさ」

声は疑問を投げかける。

「三人女の子が余ったから玩具にもらったんだけどさ、一人を他の二人の目の前で壊したのね。それで『次はどっちがいい？』って聞

いたら『自分は嫌だ、隣の奴にしろって』罵り合いを始めちゃってさ。それじゃ人間と変わりないじゃん？　なんか興味なくなっちゃったから、オークとゴブリンにくれてやった。今頃楽しんでんじゃない？」
「いや、君の壊し方見たら、普通はそうだと思うよ？？」
「えー？　今回は軽めにやったつもりなのにな」

明らかに不満そうな声の主。だが、彼の感覚が他人にとってどれほど恐ろしい結末を産むか、彼もまた自覚しながらやっているのだ。

「で、後始末は・・・って、まさか。僕の実験房に放置か？？」
「もち。３番に入れとくように言っておいた。あの子なら雑食だから大丈夫でしょ？」
「んー、まぁそうだけどさ・・・２、５、１１番あたりは繊細だからやめてくれよ？」

もう片方の声の主も、決してシーカーを憐れみはしない。彼の興味は自分の実験だけ。自分の実験を行うためなら、一つの街を消しさることすら躊躇わないだろう。その残虐性において、彼は他方の声の主を上回る程の残虐さの持ち主だった。

「わかってるって～。で、素材って何？」
「それはね・・・」

声の一つが姿を現す。誰も知る由は無いだろうが、先日ザムウェドへの進軍命令書を書いていた青年の部屋に出現した声の主である。その声だけは少年のようであるが、現れたのは醜い老人だった。顔はまるで潰れたヒキガエル、いや、もっとひどい。カエルならば顔がまだ左右対称であるが、この老人は目の位置が左右対称ですらない。

左目だけがやたら下の方にあり、しかも斜めになっている。鼻は大きくゆがみ、半ば腐り落ちている。口は大きく横に歪み、唇はめくれ上がり、顎が割れていた。髪は右だけにちぢれた毛が残っているが、左は全面禿げあがっている。しかもひどい吹き出物が出ていて、ところどころ膿が溢れてきている。匂いもひどく、普通の嗅覚の持ち主なら鼻を押さえずには我慢できないだろう。とても正視に耐えれるものではない。

「相変わらずひどい顔」
「そういうなよ・・・これはこれで便利なんだから」
「どういう風に？」

もう一つの声の主は、その理由がわからなかった。素直な疑問を老人のような少年に、いや、少年のような老人に投げかける。

「この顔で近付くとね、最初は男でも女でも嫌悪感で逃げるのさ。そして恐怖が限界を超えると反撃してくる。そうしたら僕は思いっきり殴ったり蹴ったりしてもらえるんだ・・・想像するだけでイキそうだよ！　どう、最高だろう？？」
「・・・ボクが言ってもあれだけど、キミはボク達の中でも最高、いや最低の変態だね」
「そうかなぁ？　どっちにしても褒め言葉にしかならないけどね！　それはともかく、今は下だよ」

そしてその老人がちょいちょい、と下を指さす。

「まさか・・・あの封印って？」
「そう、意外でしょ？」

良い玩具（おもちゃ）を見つけたように、老人がほくそえむ。

「うーん、それは気付かなかった」
「でもなんか一杯人間がいるね。でも今は僕達が直接手を出すのは禁止されてるし・・・どうしよう？」
「じゃあ彼を連れて来ていてよかったね。ちょうど仕事が空いてたみたいでさ、合流していたんだ」

活発な少年の後ろでゆらり、と陽炎のように空気がゆらめく。そこから出てきたのは、今度は先の老人とは対照的な、凄まじい美男子であった。金の流れるような長髪を腰のあたりで一つに束ねている。まつ毛も長く、少し切れ目ではあるが、決して冷たい印象ではなく、どちらかというと全体的に朗らかな顔立ちだ。この柔らかな雰囲気の中で、切れ目が逆にアクセントとなり、利発そうな印象を醸し出す。女装すれば絶世の美女で通じるだろう。少年と老人と同じように黒いローブに身をくるんではいるが、どことなく気品すら漂わせる。少なくとも、下にいる王子よりは王族に見えるだろう。

「なるほど、あの鎧達は君の作品か。ところで久しぶりだね、３年は姿を見なかったような」
「正確には３年と４カ月ぶりです。お２人ともお元気なようで」

そして優雅に一礼してみせる青年。

「相変わらずバカ丁寧だな～。キミ、本当に僕達の仲間？」
「一応そのように自負しております」
「まあまあ。彼も僕達に負けじ劣らじ変態なのさ、きっと」
「ふ～ん・・・まぁいいや。ところでキミの作った人形って、魔術を解呪できるんだっけ？」

いまだ姿を隠したままの声の主が、青年に尋ねる。

「ええ、今回あの場にいるのは。で、あの封印を解呪すればいいのですか？」
「賢い人は話が早くて助かるよ。じゃあ早速やっちゃって！」
「ち、ちょっと待ってよ！　先に僕に素材を回収させてくれないのかい？」

老人が慌てふためく。彼はいそがしい中を縫ってここに出向いているのだ。そんな彼の苦労も知らず、へらへらと声の主は楽しそうに語るのだ。

「あー、まぁ後でもいいんじゃない？　どっちにしても封印は解かないと回収できないでしょ？　それに簡単にやられちゃうような素材なら、役に立たないんじゃない？」
「いや、そういう問題じゃなくてね・・・」
「口論が長引くと思うので、とりあえず解呪するように命令しておきました」
「「はやっ！」」

青年は口論に時間を割くのが面倒だと思ったのか、二人を無視してフェンナの残した封印に鎧の兵士を差し向けたのだった。

＊＊＊

ヒュンッ！

一方、下では状況が変わっていた。フェンナが問答無用でムスター王子に矢を射かけたのである。矢は王子の足元を凄まじい速度で射抜き、まだ矢の尾が震えている。
その行為に王子は激怒する。

「クルムス第3王子たるワシに向かってなんのつもりだ、ダークエルフ！」
「質問は私がいたします」
「こいつ！」
「動くなっ！！！」

さすがに王子を取り巻く兵が色めき立つが、フェンナが普段からは想像できない様な大声で一括する。あまりの気迫に兵士達だけでなく、アルフィリース達も少し身がすくんでしまった。

「王子と私の距離はおよそ３０ｍ。この距離であれば、私程度の腕前では一撃で王子にとどめを刺せず、苦しませてしまうかもしれません。無用な苦しみを味わいたくなければ、速やかな返答を。質問、沈黙は許しません」
「ダークエルフ風情がふざけ・・・」

ヒュンッ！　という風切り音と共に、何かがぽとりと王子から落ちた。

「は・・・は、はぁぁ！？」
「すみません、手元が狂ってしまいました」

王子が耳を押さえてうずくまるり、フェンナは無感動な一言を投げかけた。

「わ、わ、ワシの耳が・・・！」
「言ったはずです、私程度の腕前では王子にとどめはさせない、と。次は手元がくるって膝を射抜くかもしれません。次は肩。次は腿。とても軽く私の手元は狂うので、ご注意ください」

フェンナの銀の眼が暗い輝きを帯びている。ここ何日か一緒にいたことで、アルフィリース達はフェンナは大人しくて引っ込み思案な性格だとばかり思っていた。いや確かにそうなのかもしれないが、ただ無用な争いを避けたかっただけで、彼女は一族の仇を目の前にして黙っているほど大人しい性格ではなかった。ただただ、ずっと我慢をしていただけなのだ。そして仇を目の前にして今や我慢の限界を越えたのか、フェンナは鬼気迫る表情で王子を見据えている。

「速やかに答えるかどうか、返答はいかに？　私としては、答えなくてもいっこうに構いませんが」

「わ、わかった！　何でも答える！！」

もう既に王子は反抗する気力をすっかりなくしたようだった。当然といえば当然だが、あまりにも「打たないでくれ」とうろたえる姿が滑稽で、なんとも無様な印象を全員に与えた。彼は王子といっても現クルムス王は在位が長く、第３王子であれど４０歳前の結構な年齢である。おまけに背が低く肥満で、頭も半分以上禿げあがっているのだから、余計その卑屈な姿に拍車をかける。容姿はともかく、こんな情けない気質の者が王族では、さぞかし領民も迷惑することだろう。

そんな彼の様子も手伝ってか、酷薄な目をしたフェンナが王子に質問する。

「では・・・まず、私の里の者をどこへ？　全員死んだわけではないようですが」

「そ、それは知らない」

ガッ！

王子の返答と共に、フェンナの矢が王子の膝を射抜いていた。一瞬何が起こったかわからない王子は、自分の膝を確認するとともに悲鳴を上げる。

「ぎゃあ！」

「どうやら貴方に耳は必要ないようですね。それとも、その嘘をつく口から射抜いておけばよかったですか？」

「ほ、本当に知らないんだぁ・・・ワシは何人か生かして捕えろと頼まれただけで・・・」

「誰に？」

フェンナが弓をさらに引き絞る。

「最近ワシの近侍になった者だ！」

「名は？」

「ゼルバドス。そう、ゼルバドスだ」

ゼルバドス。その名前をフェンナは口の中で刻み込むように呟くと、さらに質問を続ける。

「私の里を襲うように言ったのもその男ですか？」

「いや、その男はこの里の秘術を教えてくれただけだ・・・」

その質問にフェンナは疑問を覚える。なぜ自分の里の秘術を、外の人間が知っているのか。

「そのゼルバドスとやらは何の秘術だと？」

「練金の秘術だと聞いた。お前達ダークエルフは、錬金術で金を好きなだけ作れるのだろう？」

王伯父の質問に、フェンナがふるふると首を横に振る。

「そんな馬鹿な・・・それはありえません」

「な、なんだと!?」

「考えてもごらんなさい。どうして金は貴重なのです?」

「それはキラキラしてきれいだから・・・」

その答えに、フェンナは呆れ果てた。

「・・・どうやら貴方は何も知らないようですね。いいですか、光るだけなら他の金属でもよいのです。美しいだけなら宝石など、金より余程きれいな物は多数存在しますし、何が美しいかは個々の価値感によっても違います。その中で金が希少価値を持つのは酸化されない、つまり錆びることのない永久不滅の象徴として扱われることと、絶対量が少ないゆえなのです。もし錬金術などが存在し、金が自由に産出されればその価値は相対的に下がってしまう。それゆえ錬金術で自由に金を作りだせたとしても、無意味なのです」

「な、なんだと?」

王子は心底意外そうな顔をした。そんなことは考えたこともなかったのだろう。フェンナはさらに言葉で追い打ちをかける。

「そんなことにも気がつかないとは・・・しかも人に言われるままに兵を繰り出して争いをするなど、このような愚か者、馬鹿者のために私の家族は・・・友人は・・・」

フェンナがうつむいて唇をかみしめている。が、

「ワシがバカだと!?　ふざけるな!　ワシはバカなどではない!」

王子が突然激昂した。フェンナが流れる涙も隠さず吠え返す。

「貴方がバカでなくてなんなのだ!?　私欲のために兵を出し、他の者を死に追いやるなど為政者のすることではない！」

「私欲ではない！　ワシは我が国の民のため、よかれと思ってやったのだ！」

「そのためなら私の仲間は死んでも良いのか！」

フェンナが一層声を張り上げる。引き絞った弓を今にも放たんばかりの勢いだ。その瞬間王子の命は終わるのだが、そんなことを彼は忘れているかのように話し続ける。

「ダークエルフなど汚らわしい一族だ！　ちゃんとそう本に書いてあったぞ？　貴様たちは魔王に手を貸して追放された一族なのだろう？　つまりワシは正義だ、正義のワシが宮廷で認めてもらうために死ねるのだ。光栄に思いこそすれ、恨まれるいわれなどない！」

「な・・・」

フェンナが絶句する。誤解もあるとはいえ、とんだ暴論である。いい加減ニアやミランダだけでなく、ブラックホークの面々や、果ては王子を護る兵士にまで嫌悪感を示している者がいる。もはやフェンナは怒りが限界を通り越して、言葉も出ない。それを自分が言い負かしていると勘違いしたのか、さらに王子が言葉を紡ぐ。

「ワシは宮廷で認められなければならないのだ。ちょっと兄君達が優秀なだけで皆、皆ワシをバカにした・・・！　ちょっと背が低くて太っているくらいなんなのだ。馬に乗れないくらいなんなのだ。勉学ができなかったからなんなのだ。王族はなんでも人より優れていなければならないのか？　それをあいつらは愚図だ、ちびデブだ、ノロマだ、ハゲだと陰口を叩きおって。それを八つ当たりするため

に庭園の枝を折ったり、ちょっと近侍に当たりちらせば、やれ暴君だのなんだのと・・・それでもワシは皆に認めて欲しかったんだよ！　そのために役にも立たない、汚らわしいダークエルフを殺して何が悪い！？　おとぎ話ではつねに正義が悪を滅ぼして終わりだろう！　貴様らダークエルフなどは、ワシという正義のために死ねばよいのだ」

　怒り狂った顔で王子が激白する。多少同情すべき点もあるかもしれないが、それがいかに独善的であるかには全く思考が及んでいないようだ。むしろそうだったからこそ、宮廷で嫌われたであろうことに全く気が付いていないのではないか。たとえ人として特別優れておらずとも、その仁徳や人柄で名君の名を残した王や諸侯は沢山いる。彼の本当の不幸は、為政者として何が必要なのかを説く人物が周りにいなかったことであろう。

　だが、フェンナの怒りはそれでは治まらない。静かに森の中で暮らしていた自分の一族を、たったそれだけの、一人の見栄という理由でほとんど皆殺しにされたのだ。しかもおとぎ話と同レベルで自分の仲間達の命を語られた。既に怒りが限界を通り越し、弓矢を持つ手がガタガタと震えている。顔は怒りで完全に上気し眼は見開かれ、さしもの美しい顔も台無しに近く、まさに鬼のような形相だ。

「姐さん。金にはならんスけど、あいつ殺していいですか？　なんか本気で腹立ってきたんですが」

「・・・この変態に同意するのは癪だが、同じだよ。ゼルヴァー隊長、あのバカ王子殺っていいかい？　証拠なんか残さないくらい、徹底的にやるからさ」

　真っ先に同意したのはドロシーである。既に自慢の曲刀は鞘から抜き放たれていた。

「その女と同意見なのは腹がたつが、私も参加していいか、アルフィリース？」
「心配しないでニア。私も止める自信はないから」
「リサはフェンナの傍にいますが、リサの分まで思いっきりお願いします」
アルフィリース達とブラックホークが全員が殺気立ち始める。リサまで同じ気持ちのようだ。だが意外なことにミランダが全員に釘を刺した。
「もーなんか国際問題とか、どうでもよくなってきたね・・・アタシも立場的にまずいけど、もういいや。ただし、フェンナの我慢の限界が来てからだよ、皆。フェンナより先にアタシ達がいっちゃだめだ。あの子はまだ我慢してる」
確かにあの王子を殺したことが発覚すれば、ここにいる者は全員容疑者として永久にクルムスに追撃されるだろう。そのことがわかっているから、フェンナもまだ矢を放っていない。だが、それも時間の問題といえる。
さすがにブラックホークの隊長2人はまだ冷静であるが、
「本来俺は止める立場なんだろうがな。止めるかどうか悩むな」
「ワタシは止めない。が、空気が変だ。全員周囲に気をつけた方がいい」
ルイの一言に全員がはっとする。
「・・・確かに。姐さん、これ何スかね。殺気とかは感じないのに」
「リサにもわかりませんが、何かしら危険ということだけ・・・」
「・・・封印が解けかけてるのよ。あの家だわ。皆、あの家と距離

を取った方がいい。ゆっくりと離れましょう」

皆がぎょっとした目でアルフィリースを見る。アルフィリースは真剣な面持ちで家の方をじっと見ている。

「どういうこと？　アルフィ」

「私にはリサみたいなセンサー能力は無くて、言われて気が付いたけど、違和感には昔から敏感なの。それに声が聞こえなくなった。さっきまでは少しは聞こえてたのに・・・これは怒り？　いえ悲しみと、それになんだか不自然に怒りを注入されているような・・・」

「アルフィ？　声とか、何を言っているのですか？　リサには何も聞こえないし、感じませんが」

リサが首をかしげたが、ルイもまたアルフィリースと同じ方向を見つめている。

「いや、アルフィリースの言うとおりだ。今ワタシにもはっきりわかったが、アレはやばい。全員離れろ。そのエルフの娘も守ってやれ」

「そういや鎧の奴らもいないもんね・・・いかに鈍重でも、私達の加勢に来ててもよさそうなものなのに」

ドロシーの指摘に3番隊の人間達がそういえば、という顔をする。もともと鎧の特殊兵は目の前の愚鈍な王子が彼らに預けたものだが、侵入者がいれば少なくともこの里の中にいる限り、自動的に追いかけるはずなのだ。

ブラックホークの面々が様子がおかしいことに気がつき、周囲に警戒心を巻き散らす。その様子を上空から見つめる三人。

「まさか、彼らは気付いたの？」

「どうやら、そのようですね」
「ふっふーん。だがもう遅い。今回は出血大サービスでボクのアレンジも付け加えちゃうもんね！」

そういう声の方向からは、何も無い空間から黒い粘性の物体が、どろどろとだらしなくこぼれていた。最初は数滴程度だったそれらも、やがて漏れる口が壊れたかのようにごぼごぼと流れ落ち始める。そして空中で反転し、人間ほどの黒い塊となると、それはふと形を消した。

「良い見世物になるといいのですが・・・」
「君の演出ってイマイチだからね」
「ほっとけ！」

上空ではそのような会話がかわされていることを、アルフィリース達が知ろうはずもない。そしてフェンナが我慢の限界からついに矢を放とうとした瞬間――

続く

シーカーの里の戦闘、その４～復讐心～（後書き）

閲覧・評価・ブクマ・感想ありがとうございます。

次回投稿は１１／８（月）９：００です

シーカーの里の戦闘、その5～封印の魔物～（前書き）

～あらすじ～

仇を目の前に怒りが限界を超えるフェンナ。だがその時異変が・・・？

シーカーの里の戦闘、その5～封印の魔物～

ズズン・・・！

地面が大きくグラグラと揺れた。それと同時に地割れが発生し、大きな集合住宅である木のあった場所が隆起する。いや、その表現は正確ではない。家そのものが起きているのだ。

アルフィリース達は徐々に距離を取っていたおかげで間一髪地面の隆起からは逃れ、反応の遅れたフェンナも、レクサスが抱えて地割れを回避する。一方で何も気が付いていなかった王子の周りにいた兵士達は、何人かが地割れに飲まれてしまった。と思った途端、今度は突然地割れから飛び出してきた。飛び出たというよりは、吊りあげられたという方が正しいか。彼らの体にはに木の枝が巻き付き、締め上げていたのだ。

何が起こったのかわからない兵士達は、完全に恐慌状態だった。

「た、助けてくれー！」

「う、うわぁ！なんだこいつ、俺から何か吸い取って・・・」

「ぎ、ぎゃあああ」

どうやらその家は兵士達から血を吸い取っているようだった。血を抜かれ、あっという間に干からびる兵士達。同時に血の色に染まっていく家。それに呼応するように、木の幹が徐々に生き物のように脈打ち始めた。

その様子を呆気にとられながら見守るアルフィリースとブラックホークの面々。

「なんだありゃあ。トレントにしてはでかすぎでしょ！？」

「しかも吸血種。聞いたことはあるけど、植物の吸血種なんて、そ

んなの南の大陸にしかいないんじゃなかった？」
「い、いくらな、なんでもで、デカすぎ、ないか？」

ダンダの指摘通り、ゆっくりと地中から家が起き上がってきた。どうやら地上にあったのはほんの一部のようだ。大樹ほど根が深いと言うが、まさにその通り。地上部分だけでも数十ｍはあったろうに、根の部分も合わせれば既に１００ｍは超えているかもしれない。そして体が起きてくるに従って地形は完全に変形してしまい、もはや王子とその兵士達は反対側に退却したせいもあって、姿も見えない。ただ悲鳴だけは確実に聞こえるので、ロクな事にはなってないだろう。

しかもソレが他の家まで巻き込みながら、体の一部として取り込んでいる。今や木の枝一本一本が脈打ち、まるで生き物の様相を呈していた。加えて、根の部分は木が寄り合わさって塊のようになっているのだが、どうやら顔の形にみえなくもない。

そんな木とも生き物とも魔物ともつかない生物を前に、フェンナがゆっくりとレクサスから離れ呟いた。

「あれが私達が封印していたものです」

フェンナが突然語り始めた。全員が反射的にフェンナの話に耳を傾ける。

「シーカーの起源はかなり南方に由来します。その時大暴れしていた大樹をこの地にて封印し、その封印を預かったのが私の先祖だと聞いています」
「どうやってこんなデカイのを封印したのさ」
「それはわかりませんが、伝承ではここまで大きくはないはずです。それに吸血種の類いではなかったかと。先ほど見た時は、封印も後何年かは大丈夫だったはずなのに・・・」

フェンナが大樹の魔物を見上げる。つられて全員が見上げるが、ゼルヴァーが実際的な事を口にした。

「そんなことより、どうやって倒す？」

「木ならば燃やせばよかろう」

ベルノーが言うが早いか、既に魔術の詠唱を始めていた。

【我に仕えし火の眷族よ。湧きて寄りてこの腕の内、巡りて巡りて塊と成し、眼前の敵を撃ち抜け】

《炎の塊撃（フレイムキャノン）！》

人間の倍はあろうかという巨大な炎塊が木の魔物向かって発射される。これなら結構なダメージになるのではと全員が期待したが、

《舞葉の防御壁（リーフシールド）》

木から落ちてきた葉が何重にもなり、炎を大樹の本体手前でせき止めてしまった。こともあろうに木の魔物が魔術を使用したのだ。

「ウッソ・・・トレント系の魔物が魔術使うなんて聞いたことないよ？？」

「ならばこれならどうじゃ？」

ドロシーの驚愕もよそに次の詠唱を始めるベルノー。今度は詠唱だけではなく、手での印も使用している。さらに高位の魔術を行使するつもりだ。

ベルノーの前の宙に、複雑な紋様で円形の魔法陣が描かれる。

【我に仕えし炎の眷族よ・・・湧きて湧きて泉となりて天にたゆらに舞え…我が命に従いて、地上に怒りの雨を降らせよ】

今度の魔術はかなり大きい。炎が上空高くに集まっていき、まるで空に現れた炎の海のように漂っている。どうやらこのベルノーという魔術師、かなりの使い手のようだ。

《炎の豪雨（フレイム シャワー）》！

ベルノーの叫び声と共に、空中に集まった炎が無数に分かれて雨のように広範に降り注ぐ。木の魔物は魔術で防ごうとするが、あまりにも火の降り注ぐ範囲が広すぎて防げない。そして各所で葉や枝に引火して。大樹は燃え盛り始めた。

「ワシの持っておる中でもっとも効果範囲が広い魔術の一つじゃ。これなら防ぎようがなかろう。一度火が付けば、木では止める術がない」

「さっすがベルノー。ただのジジイじゃないやね」

「いや、どうかな・・・？」

やや得意げなベルノーと、はしゃぐドロシーを尻目にルイがつぶやく。

「はー？　ルイ何言ってんのさ。むっちゃ燃えてるよ？」

「俺はそんなドロシーちゃんに、むっちゃ萌えてます！」

その瞬間、果実を潰すようなぐしゃり、という嫌な音とともに、ルイ、ドロシー、そしてなぜかミランダの拳骨によるツッコミがレクサスに入る。そして吹っ飛んだレクサスに、ちゃんとリサがとどめを刺しに行った。

「ウザいんだよ、レクサス！」
「非常に同じ気持ちだ。ここで森の肥やしになるがいい」
「つい、手が」
「死ねばよいと思います」
「（師匠、やっぱり私が出会う男性にまともな人が少ないです・・・」

ルイ達だけでなく、アルフィリースの嘆きも無理からぬ。だが一方で、彼女の思考は冷静そのものだった。

「・・・でもルイさんの言うとおり。ほとんど効いてないわ」
「またひよっこが何言って・・・って、えええ！？」

ドロシーが素っ頓狂な声を上げたが、それも無理はない。なぜなら木のいたるところが膨れたかと思うと、膨れた部分からはじけるように樹液を放出し始めたのだ。それは血のように真っ赤な樹液であった。あるいは本当に血だったのかもしれない。さらに焼け焦げた範囲を新しく木が覆って補っていく。再生能力も以前倒した魔王ほど急激ではないものの、かなり高い。

「火が消えていく・・・」
「決まりだな。撤退だ」

ゼルヴァーが身をひるがえす。

「ちょっと・・・逃げるの？」
「そうだ」
「アンタ、それでも男なの？」

ミランダが挑発するが、ゼルヴァーはいたって冷静だ。

「あんな魔物とやりあう理由がない。それに今は団長の最優先命令が出ている。そのため任務すら放棄しているのだからな」

「ちっ、冷静だね・・・」

だが、彼の言うとおりである。火の魔術が効かない段階で一度撤退して態勢を整え直すべきだろう。それはアルフィリース達も同様だ。隊長に促され、ブラックホーク3番隊の面々は撤退準備を始める。ルイとレクサスも同じく撤退するようだ。

それを見て、ミランダもまた撤退する事を決める。

「アルフィ、私達も一度退こう。なんの準備も無しじゃ、あれは無理よ」

「私の力を使えば・・・」

アルフィリースが右手の呪印をチラリと見る。そのアルフィリースの右腕を、ミランダがつかむ。

「ダメ！　そんなホイホイ使う物じゃないことくらい、わかってるだろう??」

「でも・・・」

「私は退きません。皆さんはどうぞ撤退を」

突然、フェンナがぐいと前に出た。弓を携え、大樹の魔物に向かおうとする。

「ちょっと待ちなフェンナ。あんた一人でどうにかなる相手じゃないでしょう?」

「どうにもならなくてもやります。あれが止めるのは私達一族の責

任。もはや私しか一族はこの場にいませんから。皆様、ここまで私を連れてきてくださってありがとうございました。報酬を払えないことをお詫びしなければなりませんが・・・」

フェンナがそう言おうとした時、リサが杖でフェンナの頭をぽかりと叩いた。

「フェンナ、何一人で完結しようとしていますか」
「そうだな。このまま死なれては寝ざめが悪い」
「ニア、そこは素直に『フェンナが心配だ』って言ったらどうですか？」
「わ、私は別に心配などしていない！」

ニアの尻尾がせわしなくパタパタし始めた。全くわかりやすい事だ。

「でも皆さんを私のわがままに付き合わせるわけには・・・」
「今さらそんなこと言いっこなしよ、フェンナ。ここまで来たんだから、最後まで付き合うわ」
「アルフィがそういうんならしょうがない、アタシもやるよ」
「ご、ごめんなさい・・・」
「フェンナ、そこは謝っちゃだめよ。『ありがとう』がいいと思うわ」
「アルフィ・・・ありがとう！」

アルフィリースの言葉に、フェンナの眼が潤む。今度は悔しさや悲しみではなく、嬉し涙だった。

「で、作戦は？」
「んー、ミランダが何かあの魔物に効く薬をポケットから出すとか」

「おいおい、アタシはどこの便利屋だい？　んな都合よくいかないよ」
「作戦かどうかわかりませんが、リサに提案があります」
え？　といった目でアルフィリース達がリサを見る。
「ちょっとそこの変態とその相方！」
「はいはーい！」
「・・・誰が相方だ・・・」
なぜか元気いっぱいに返事をするレクサスと、ややイラついた顔で反応するルイ。とりあえずレクサスが変態というのは認めるらしい。
「何を言われても手伝わんぞ」
「いえ、貴女はリサ達を手伝わざるを得ません」
「ほう？　なぜだ」
ルイが不敵に笑む。
「貴女は自分の発言に責任を持っていないのですか？　以前貴女は確かにこう言いました。『急ぎの身ゆえ大した詫びもできんが、また会った折には何らかの形で返そう』と。ということは今が詫びを返す時だとリサは思うのですが？　まぁ自分で言ったことに責任を持てない人ならしょうがないですね・・・もう少ししっかり人だと思いましたが、うちのデカ女と違って」
なぜそこで私を攻撃するのかとアルフィリースは思ったが、挑発の仕方は上手い。ルイもしばし考えていたが、ふぅ、と一つため息をついてこちらに引き返してくる。

「まったく・・・宙に吐いたセリフは消せないな。仕方あるまい、やってやろう。それで貸し借り無しでいいか？」
「ええ、もちろんです」
「レクサス、お前はどうする？」
「姐さんがやるなら俺もやりますよ」
「そうか」

二人が戦闘態勢に入る。それを遠巻きに3番隊の面々も見ている。が、手を貸す様子はない。

「で、何か作戦はありますか？」
「そうだな。ワタシとレクサスの二人でやるから、お前達は下がっていろ」
「は？」

今度はリサが面喰う。まさかそんな危険を冒すことまで要求してない。

「それはいくらなんでも危険では？」
「わからないか？　お前達程度では足手まといだ」
「そうは・・・」
「いえ、下がりましょう」

リサがさらに何か言いかけるが、アルフィリースが止める。どうやらアルフィリースは何か感じたようだ。

「大人しく従うわ。援護か何か必要なら遠慮なく言って」
「援護はこの変態で十分だ。強いて言うならあと１０ｍ下がれ。多少被害が及ぶかもしれん。割と派手にやるからな。レクサス、準備

は？」
「いつでもどうぞ」

レクサスが一歩ルイの前に出る。もはや彼にも先ほどのふざけた様子は全くない。と、いうより同一人物かと疑うほどの殺気を放っていた。どうやら死神という通称は本物の様だ。

そしてルイも大剣を抜き放つ。そして同時にざわざわと周囲の空気が揺れ始める。アルフィリース達はこの時は知らないが、彼女の通称は『氷刃のルイ』。それは彼女の戦いぶりだけでなく、彼女の能力そのものを示す。それは・・・

続く

シーカーの里の戦闘、その5～封印の魔物～（後書き）

閲覧・評価・ブクマ・感想ありがとうございます。

次回投稿は１１／９（火）１０：００です。

シーカーの里の戦闘、その6～氷の剣士～（前書き）

～あらすじ～

里に突如現れた巨大な魔物。なすすべなく暴れまわる魔物にリサが一計を案じ、ルイをけしかける。その時彼女の実力が明らかにされる……

シーカーの里の戦闘、その6～氷の剣士～

【地獄の底にて魔を封じせし氷の獄鎖よ、氷の験（しるし）をわが剣に宿らせたまえ】
《呪氷剣（コキュートスセイバー）》

ルイの剣が薄い氷に包まれていく。通常の粗い氷ではなく非常にきめ細かい氷であり、無駄に刀剣を厚く覆うこともない。刀剣が光を反射して、白く輝くような氷の剣だ。さらに剣の変化と共に、ルイの髪の色が白にも近い青へと変化していく。

そう、彼女もアルフィリース同様魔法剣士である。ただアルフィリースと違うのは、アルフィリースは魔術を詠唱による放出形式で使うのに対し、ルイの場合は直接武器や防具に魔術効果を付加する形式で用いるのだ。もちろんルイも放出して使うこともできるが、あまり得意とはしていない。ちなみに氷の属性は水の上位属性であり、かなりの高位術者であることを示す。それは染めてあるはずの髪色があっという間に染まっていったことからもわかる（通常は髪色の変化は魔素が浸透して変わるものなので、時間がかかる。なので高位の術者ほど変化が早い）。しかも使っている魔法剣も通常の物ではなく、暗黒魔術の系統である。

魔術に詳しいアルフィリース、フェンナ、それに経験豊富なミランダはそれがわかったが、リサやニアにはわからない。だが、ルイが並でないことはすぐに理解できた。そして援護など必要ないことも。

「レクサス、露払いはまかせる」
「了解」

軽く地面を蹴って走り出すレクサスの後にルイが続く。それを認

識したのか、木の魔物が何本もの枝を槍のように二人に伸ばしてくる。二人が串刺しになるかと思われたその瞬間、

「甘いなぁ」

レクサスが不敵な笑みを浮かべながら、一瞬で自分とルイに向かってくる枝を斬り落とした。彼自身が意識して使っているわけでないのだが、それは二刀の居合いとでもいうべき剣速だった。その後ろからルイが袈裟がけに斬り下ろす構えをとる。だが対象までは、まだ随分と距離があるはずだが。

「剣閃！」

ルイの叫び声と共に、剣から放たれた氷の刃が風を切り裂く。一刀のもとに、魔物の左手ともいうべき家であった部分を切断する。魔物もその衝撃に悶えるような暴れ方をする。

「凄まじいわね・・・」

ミランダが思わず呟いた。

「なるほど・・・確かにあれで私達は足手まといだな」
「ですが再生するのでは？」
「それはないわよ」

ニアとリサの疑問に、アルフィリースがあっさり言いきったので全員が驚いた。

「なんでそう言い切れるのさ、アルフィ。木の魔物なら、火系の魔術の方がダメージは大きいんじゃないかい？」

もっともなミランダの質問に、アルフィリースはしかし首を振った。

「いいえ。あの剣は斬った表面を凍らせるから、解凍してからじゃないとくっつかないわ。火だと炭化して崩れ落ちるから、再生そのものはしやすいの。どちらにしても、氷の方が再生しにくいことは確かよ。しかも暗黒魔術の系統だし余計だわ。確かに、突き詰めると火は分子の加速運動で、水や氷は分子の停止運動。だから上限温度がない火系の方が絶対零度が存在する氷系より強いと思われがちだけど、威力の大きさは『どのくらい早く分子運動に干渉するか』で決まるから、一概にどちらが強いということはないわ」

アルフィリースがぺらぺらと話す理論に、全員の頭がついていかなかった。特に分子運動のくだりなど、魔術教会で専門的に魔術を習った人間以外はさっぱりわからないだろう。これはアルドリュースが教えたからこその理論なのだが、アルフィリースにはそんな事を世間一般の人が知らないということを、知らない。

「・・・リサにはさっぱりです」
「心配するな、私にもわからん」
「私はなんとか・・・」

全員がそれぞれ感想を口にする。そして、最後はミランダ。

「アルフィ、アンタ意外とインテリかい？」
「意外とって何よ！」

その言葉にちょっとむくれたアルフィリースだったが、師匠の地獄のような授業を回想し、思わず身震いしてしまった。でも無駄な

ことは教えない師匠に、やはり感謝する彼女である。魔術を扱う者にとって、知識は宝と同義なのだ。

だがそうこう言う間に既に大勢は決していた。ルイとレクサスの2人は段違いの強さだった。既に魔物の各所は凍らされ斬りおとされ、既に元の大きさの半分近くになっている。そして、今まさにルイが魔物の頭らしき部分を踏みつけ、とどめの一撃を加える所であった。

魔物も最後の抵抗として、あらゆる方位から葉を刃のように飛ばして反撃するが、ルイの後ろに控えるレクサスに涼しい顔をして全て斬り落とされた。レクサスのその行動を分かっていたのか、ルイは周囲を見ようとすらしない。普段はどうあれ、この2人は互いの戦闘力を信頼しきっているのだ。

「・・・細胞の一欠片に至るまで凍りつかせてやろう」

ルイがぞっとするような低い声で大剣を魔物の頭部に突き刺し、そこを中心に木が凍りついてゆく。魔物は枝を伸ばして増殖しようとするが、明らかに凍りつく方が速い。そしてパキパキという凍りつく音と共に、ついに魔物の全体が凍てついた。巨大な樹氷の完成である。

魔物の抵抗が無い事を認めると、ルイは剣を一振りして鞘に収め、ルイとレクサスが引き返してくる。そしてフェンナの方に歩み寄る。

「とどめはエルフ、お前に譲ろう」

「・・・え？」

「決別の意をこめてな。嫌なら私がやるが、どうする？」

ルイはフェンナをまっすぐ見据えている。フェンナもやや間をおいて、

「・・・わかりました。御配慮感謝します」

そしてゆっくりとフェンナは弓矢を構え、矢を放った。その一撃で既に樹氷と化していた凍った木の魔物が崩れ落ちていく。細やかな氷の粒子となって崩れ落ちるその様は、切なく、儚く、そして美しかった。

「・・・さようなら、父様、母様・・・」

そのままフェンナは下を向き項垂(うなだ)れている。アルフィリース達はかける言葉も見つからない。これでフェンナは故郷の全てを失ったことになるのだ。どうやら死んだ者達は形だけでもクルムスの兵士達が最低限の礼儀として埋葬してくれていたようだが、地面は魔物の根で掘り返され、その墓すらも跡形もない。そしてフェンナが育った家は、全て魔物へと変化した。今やシーカーの里だった場所は、ただの大きな窪地としてしかわからない。アルフィリース達が最初に足を踏み入れた時の光景など、見る影もなかった。

そして、アルフィリースはフェンナに何か声をかけようとそっと歩み寄る。

「フェンナ・・・」

「・・・木にね、印をつけてたんです」

「え？」

フェンナがうつむいたままで呟く。

「私の里は、エルフには珍しく若いシーカーが多くて。皆、年頃も似ていました。それで色んなことを比べたり、競ったり、話あったり・・・よく背比べをね、してたんです。私はエルフにしては背が低い方で、よく皆からちびっこと言われてました。歳も一番下だっ

たからしょうがなかったのですが。でもそれが幼い私には悔しくて、月が一つ空を巡るたびに身長をはかって木に石で印をつけてました・・・」

「そう・・・なんだ」

「他にも初めて矢を飛ばしたのはどこだったとか、ぶつかって扉を壊した後とか、木の枝にツタでブランコを作ったり・・・この里には思い出がいっぱいあった。でも、でも、もう何も無い・・・無くなってしまった」

「・・・」

「でも、おかしいんです。悲しいはずなのに、涙が出ないんです・・・どうしてかわかりますか、アルフィリース？」

フェンナがくるりとアルフィリースの方を振り向く。とても悲しい表情だが、同時に心底自分の感情が理解できないという顔をしている。

「・・・それは多分ね、心が出来事に追いついてないんだよ」

「心が？」

「うん、人間は1人じゃ泣けない時があるって師匠が言ってた。1人だと、自分が悲しいことすらに気が付かないんだって。だから、生き物は友達を作るんだって。師匠はそれで失敗したって言ってた。自分には友と呼ぶべき存在がいなかったから、泣くべき時に泣けなかったって。いつの間にか、泣き方すら忘れたって。私も子どもの頃、そうだったと思う。でも私には師匠がいてくれた。だからフェンナは・・・今じゃなくても、私達の前でならいつでも泣いていいんだよ。なんだか、上手く言えないけど・・・」

その時、フェンナの銀の瞳から一筋の涙が零(こぼ)れ落ちた。

「そう、なんだ・・・ありがとう、アルフィリー、ス・・・う・・・

ぐっ・・・ひっく・・・・」

フェンナが顔を手で覆って泣き始めた。そのフェンナをそっとアルフィリースが抱きしめてやる。

「私、しばらく・・・泣き虫でもいいでしょうか・・・？」
「・・・いいと思うよ」
「・・・ごめんなさい」
「だから、ごめんなさいじゃないでしょ？」
「うん・・・ありがとう・・・」

しばらくの間、アルフィリースとフェンナはそのまま抱き合っていた。

そんな2人を見てかすかに微笑み、ルイとレクサスはその場を後にしようとする。その場を黙って去ろうとする2人を見て、ミランダが声をかけた。

「随分大きく返してもらっちゃったね」
「そうでもないさ。ワタシ達が戦うのに相性がいい魔物だった。それだけだ」
「こっちが借りたみたいで気分がすっきりしないわ」
「そうか？　じゃあいつかまた出会ったら酒でもおごってくれ」
「出会ったときに敵でないことを祈るわよ」

ミランダの言葉にルイは何も言わず、後ろ姿のまま手をひらひらと振って答える。レクサスは軽く手で敬礼の真似ごとをして去って行った。

少しアルフィリース達と距離を離すと、レクサスがルイに話しかける。

「気が利きますね、姐さん！　に、しても姐さんが誰かを気にかけるなんて珍しい。初めて見たような気がするんですけど」
「・・・かもな。だがあのエルフではなく、不思議とアルフィリースという子が気になった。なぜかな」
「また会えますかね？」

レクサスが珍しく期待感を込めた言葉を発する。アルフィリース達の事を気に入ったのは、ルイだけではないようだ。

「おそらく。そうだな、あの子は強くなる。そうなったら意地でも出会うさ。敵か、味方かは別として」
「その前に俺達も死なないようにしましょう。当面は魔王が相手の様ですから」
「当り前だ」

ルイは鼻で笑った。この女剣士に、自分が敗北する姿など想像もつかないのだろう。そんな普段通りの彼女を見て、レクサスもまた元の軽い性格に戻る。

「で、さっき頑張ったご褒美に、姐さんの胸に飛び込んでいいですか？？」
「・・・どうやら貴様は今ここで死にそうだな」

ルイがすらりと大剣を抜き放つ。

「いやいや、冗談ですって！　って、なんで魔法剣使ってるんですか！？　ち、ちょっと、危ないー！」

悲鳴を上げながらレクサスが逃げていく。どうやらこの2人は当分死にそうにもない・・・。

＊＊＊

そしてこちらは上空である。この結果が面白くないのは上空にいた3人だ。

「なんか三文芝居みたいになっちゃったね」
「そうですね。良いショウとは言い難い」
「くっそ！　なんだ、あのバグキャラみたいな強さの女は！　あんな魔法剣アリか！？」

荒れた声が、結界の中にこだまする。

「やっぱり君の演出だとイマイチだったね」
「うるさいな！」

皮肉を言われ、空中で地団駄を踏んでるのは、今や姿を隠そうともしていない活発そうな少年である。彼はひとしきり地団駄を踏むと、突然冷静に戻る。

「でも確かにね・・・あの女は強い。というか、あの傭兵隊はあんなのばっかりなの？」
「そういえば貴方達2人は直接見たことが無かったのですね。あの傭兵団はあんなものです。そしてあの傭兵団の部隊番号はそのまま強さを示します」
「それはつまり、1番隊はもっと強いってこと？」

活発そうな少年が驚愕の声を上げる。

「あくまで隊として、ですが。個人の戦闘能力では団長の次くらい

にあの女は強いかもしれません」
「ちっ・・・師匠が手を出す許可さえくれていれば、あんなやつら1分でミンチにしてやるのに！」
「残念だけど、今はその時期じゃない。我慢だよ」
「わかってるよ！！」

吐き捨てるような言葉と共に、少年の形相が凄まじいことになっている。目だけで呪い殺しかねない勢いだ。

「で、その隊長ってのはどのぐらい強いの？」
「間違いなく大陸最強の一人でしょう。西側から連絡が入りましたが、どうやら隊員が揃うのが待ち切れず、隊長は1人で既に2体魔王を狩っています」
「おいおい。そんな化け物、対抗手段はどうするの？」

老人が呆れたように青年を見る。

「師匠がアレを起こしに行っています。アレなら相性がいいかと」
「アレか。確かにそうかもしれないけど、制御できるの？」
「やり方次第ですね。一歩間違えればこちらに牙をむきかねない」
「でも、アレに勝てる人間とかいないんじゃない？　・・・バカだけど」
「さしずめバケモノとバカモノの対決ってところかな？」
「何上手いこと言おうとしてるのさ。で、そろそろ引き上げない？もうどっちらけ・・・ん？」

活発な少年が、下で這いずる何かに気付いた。3人は他に動く者がいないことを確認すると、ふわりと地面に降り立つ。
地面で芋虫のように這いずるのは、ムスター王子だった。彼の両足は膝から下がなかったが、それでも生への執着は捨てきれないの

か、地面を手で這うようにして進んでいる。だが、その出血量からも長くないだろう。既に彼の意識は混濁を始めていた。

そんな彼の目の前に立ちふさがり、活発な少年は呆れたように声をかける。

「なんだ、王子サマ生きてたの？？　悪運だけは一人前だな」

「わ、ワシが死ぬはずはない・・・ワシは正義だ、ワシは正しいのだ。最後はワシが勝つのだ・・・」

「・・・愚かなのもここまでいくと、才能だね」

「ええ、醜すぎて逆に美しいかと」

「なぜワシに皆かしずかぬ・・・なぜ兄上と同じようにして、ワシだけ軽蔑される・・・なぜだ、なぜだ・・・」

実際、この王子には大切なモノが欠落していた。彼は違いが全く分かってないのだが、彼が枝をやつあたりで折ったのは、これから他国の大使達を迎えて会食をする会場の木だったのだ。しかも折ったのは一本どころではなく、何本も枝を折られたことで完全に景観は損なわれていた。その会場に大使達を案内して、国王一同クルムス側が大恥をかいたのは言うまでもない。

また彼は兄をまねて召使にお仕置きを与えたつもりでいるのだが、事情が全く違う。兄の方は盗みを働いた召使いに対し、ムチ打ちを背中に２０発打っただけだ。本来なら法に照らし合わせて打ち首のところを、王子自らが行ったということで裁判を免れたのである。これは温情ある行為と言っても良かった。

が、この第３王子は違う。彼は単純に粗相で飲み物をこぼしたメイドの顔面をムチで打ちすえた。結果としてこのメイドの右目は光を失っている。このような仕打ちは残忍以外の何物でもないのだが、この王子にはその違いがわからない。彼は頭の出来がどうこうという以前に、人として何か大切なものが欠けていたのである。それは大多数の人間が当り前のように備えすぎていることだから、抜け落

ちていることに逆に気がつかないのである。
　そのような者が平民であれば、早い段階で犯罪や何かで裁かれる機会もあったろうが、不幸なことに彼は王族であった。その欠落に気づかれないまま、そして裁かれないままここまで生きてしまった。これは周囲のみならず、本人にとっても悲劇である。歪むのもあるいは致し方ないのかもしれない。だからといって彼の責任が消えるわけではないことは、付け加えておかねばなるまい。
　そして意識を失いかけるムスターを見下ろす3人。

「どうする？」
「そうだね・・・まさか兄弟子様はここまで見込んでこの王子を焚きつけたのかな？　だとしたら、ちょっと尊敬しちゃうな」
「我々が思うより兄弟子殿は思慮深い。力は我々より下かもしれませんがね」

　青年が感慨深げに言葉を発した。活発な少年は興味が無いとでも言いたげに、ムスターを足蹴にしながら語る。

「で、どうすんの？　この王子、キミが使うの？　ボクはいい魔王の素材になると思うんだけどな、魔王制作者（サタンメーカー）さん？？」

　活発な少年は、そう言いながら老人の方を振り向いた。老人は即答する。

「うん、もちろん持ち帰るよ。口封じも兼ねてね」
「まさか各国首脳陣も、各地で暴れる魔王が制作されているなどとは、思いもつかないでしょうね」

　青年が楽しそうに微笑む。だが、老人は楽しそうに否定するのだ。まだまだ彼の楽しみはこれからだとでも、言いたげに。

「いやいや、最終目標はそこじゃないよ」
「ちなみに今、何体くらいストックがあるのさ？」

活発な少年が、老人に尋ねた。その言葉を待っていたといわんばかりに、老人が得意げに答えるのだ。

「現時点で１００体は即時稼働させられるけどね、まだ研究段階だよ。西側の魔王達の成果が出たら、もっと具体的に制作の方向性を定められる。それまで君達には色々実験してもらわないといけない」
「へいへい」
「私達が直接手を出せれば、こんな大陸などあっという間に火の海ですけどね・・・」

くすくす、と青年が笑う。その笑みが本当に楽しそうだったので、他の２人もまた一瞬びくりとするのだ。そして、見た目はどうあれ、彼もまた自分達と同類であることをしっかり認識する。

「ふふ、意外と君も好戦的だな・・・けど思ったより時期は早く来るかもよ？」
「楽しみにしておきましょう」
「早く大暴れしたいな～楽しみ！」

そうやって３人は不敵に笑いあい、ムスター王子と共に消えていった。そしてその数日後、中原に戦争の火の手が上がることとなるが、それがこれから始まる大きな戦争の発端に過ぎないことに気がついている者は、まだ誰もいなかった。

続く

シーカーの里の戦闘、その6～氷の剣士～（後書き）

閲覧・評価・ブクマ・感想ありがとうございます。

シーカーの里編はここまで。次回は少し番外のような話を挟みながら本編に移行します。

次回投稿は本日１１／９（火）１８：００です。

登場人物人物紹介その2～ニア・フェンナ～（前書き）

今回は人物紹介。ニアとフェンナの話です。本編では語られていない彼女達の素顔もあります。

登場人物人物紹介その2～ニア・フェンナ～

名前：ニア（獣人に名字は通常無い）
年齢：２７（人間でいえば１６歳相当）、女性
外見：１４９ｃｍ／４６ｋｇ／７５／５２／７８、ブルーとグレーの中間のような短髪と瞳・少し癖っ毛で猫っ毛
職種：ネコ族の格闘家（コマンダー）
好き・得意なモノ：牛乳、日光浴、丸い物、毛づくろい、鍛錬
嫌い・苦手なモノ：マタタビ、自分の戦士長、軽薄な人物
一人称：私

〈プロフィール〉

獣人の国家グルーザルドの軍籍に所属している猫族の女性（猫族というのは人間が猫に似ているから勝手につけた名称であり、彼ら自身は自分達の事を別の名称で呼ぶ）。現在は武者修行のため傭兵の真似ごとをしながら、中原を中心に旅をしている。

性格はいたって真面目で曲がったことが大嫌いだが、熱血というよりは本人はクールなつもりでいる。が、周囲に言わせればクールとは程遠くむしろかなり可愛いといえ、典型的なツンデレでありクールになりきるには１０年早いとか（ｂｙリサ）。ちなみにマタタビは本来大好きであるが、匂いをかいだだけでも記憶がほとんど飛んで暴れてしまい、そのたびに周囲には「二度とやるな」と言われるため自粛している。リサも一度試したらしいが「危うく人の道を踏み外す所でした・・・」というセリフと共に二度と使わないことを誓っている。

彼女の父も母も軍人だったが、父は任務での重傷を契機に退役している。母はニアが６歳の時に病で他界。なお父はその６年後に後妻を娶り、後妻との間にも一子をもうけている。そのためニアには腹違いの妹がいることになるが、ニアは１２の時に軍に入隊してお

り、その後帰省を一度もしていないため妹の存在を手紙でしか知らない。ちなみにニアと後妻とは面識があり、ニアは別に嫌いではないがなんとなく素直に甘えるのも苦手。

　ニアは軍人としてはかなり優秀であり、現在平隊員であるものの既に十人長などの話はだいぶ前から持ちかけられている。だが現在所属する部隊の戦士長（百人長）が反対するため、いまだに平隊員である。そのことでよく戦士長とは諍(いさか)いを起こしており（人間的にも苦手なのだが）、今回の武者修業後に一騎打ちで戦士長に勝てば、一気に百人長へ昇進することを条件に旅に出ている。

　なお彼女は獣人としては非力な猫族かつ女性であるため腕力では人間のと大差が無いが、初動の速さは並の人間で追えるスピードではなく、出入りの激しい動きによる急所攻撃、掌打による内臓破壊技、立った状態での関節技を得意とする。端的に言えばアウトボクシングのできる柔術家のようなイメージだろうか。ちなみに尻尾もかなり器用に使いこなし、人間の平手打ちぐらいの威力はある。

名前：フェンナ＝シュミット＝ローゼンワークス
年齢：３２（外見上は人間での２０歳相当）、女性
外見：１６０ｃｍ／４８ｋｇ／８７／５６／８４、銀の直毛の長髪・銀の瞳
職種：魔術弓兵
好きなモノ：小動物と遊ぶこと、きれいな宝石、自然、草笛
嫌いなモノ：いかつい男の人、怒りっぽい人、お化け
一人称・口癖：「私」、「ごめんなさい！」
〈プロフィール〉
　シーカー（人間はダークエルフと呼ぶが、実際には色々な種族がいる）の王族の一人。シーカーの中心となる現王家からはかなり血縁が遠く、本人も王族としての自覚はありつつもほぼ平民と同じ私

生活を送っていた。
　フェンナの家系にはある特殊な魔術が伝わっており、４１話段階では公表されてないが錬金術というのもあながち関係無い話ではない。その魔力の危険性、またヒュージトレント（４２話登場）の封印の管理と合わせて、あえて彼女達は小規模の集落でひっそりと暮らしていた。

　フェンナ自身は集落の中では一番の年下であり、同世代のシーカー達にしょっちゅうからかわれていた。またエルフの中では背が小さい（女性でも平均１７０ｃｍ程度はある）ことを非常に気にかけており、少しおどおどした性格に育ってしまった。そのせいで王族なのに妙に謝り慣れている。また争いを好まない性格なため、王族である自分が真っ先に頭を下げれば大きな争いにならないとも思っている。が、決して弱気なわけではなく、割と言いたいことははっきり言える方である。
　そんな彼女は性格も大人しいとは言い難く、むしろエルフにしては好奇心旺盛で色んな事に興味津々。そしてアルフィリース以上に世間知らずであり、宝石好きということもあいまってパーティーを度々金欠というピンチに陥らせる。ちなみに兄弟はいない。
　本人に自覚がないが清楚なお嬢様容姿をしており、スタイルもミランダ、アルフィリース、リサいわく「完璧すぎる」とのこと。比較的南部出身のニアもショートパンツなどのラフな格好を好むが（戦闘手段が格闘ということもある）、森の民であるフェンナはもっとラフであり、人間の感覚でいくとほとんど裸に近い恰好が通常である。そのためフェンナが外を歩く時には、常にリサかニアがお目付け役についている。そうでないとすぐに娼婦と間違われるような格好をしかねないのだ。
　さらに弓の腕前も達人級で、アルフィリースと違い風の魔術で補助してないことを考えると、脅威的な技術である。全体的に弓を扱

うことの多いエルフではそれでも下手な部類だというから、なお恐ろしい。ちなみに何度か登場しているが、この時代の弓の殺傷能力は平均２０ｍであり、エルフの弓は特殊な加工により４０ｍでの殺傷能力を可能にしている。

この理由はエルフが近接戦闘を苦手としており、弓の技術に秀でざるを得なかったこと。森の中で生活すると、弓を作る事に適した素材が手に入りやすいことなどが挙げられる。

一方人間は基本的に平野の民であり、弓の素材に関する研究が進む以前に魔術の発達により遠距離攻撃が可能になったこと。敵対する魔獣や魔物の生命力が強く、弓は役に立たない場面が多かったことなどが、弓という武器があまり重要視されていない理由としてあげられる。

続く

登場人物人物紹介その2～ニア・フェンナ～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

次回投稿は１１／１０（水）１２：００です。

ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク、その1～獣人の部隊～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリース達が後にしたミーシアの町は今日も平和である。そんな中自分の店でくつろぐウルドの元に訪れたのは・・・？

ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク、その1～獣人の部隊～

カランカラン・・・

店への来訪を告げる呼び鈴がなる。だが日は天に高く、この酒場が営業するにはまだ早い。最近はランチもやってみようかなどと店長は考えているようだが、なにせ人手が自分と店長、厨房のデントしかない。「これ以上働かされたら絶対過労死だよな～」と、ちょうどウルドが考えていた矢先のことだった。

「お客さん～すみません、まだ営業してないんですよ」

ウルドには珍しく、ややだらけ気味の返事である。それがいけなかったのか。

「ああ？　飯じゃねぇよ！」
「なんだこの犬っころ。喰っちまうか！？」
「どけや小僧」
「ひ、ひぇぇ？」

ウルドに向けられたのは殺気だった返事。店に入ってきたのは相当に柄の悪い獣人達であった。全員いたるところに傷がある。しかも実に種族が多様な獣人達だ。狼、熊、虎、亀、他にも多種多様。さっき俺っちを喰うとか言ったのは、同じヒュンド（人間が呼ぶ所の犬族の事）じゃないかとウルドが怯えている。共食いとか最低の死に方だな、などと一瞬考え、そのせいでウルドは怯えながらもそのまま突っ立っていたらしい。先頭付近にいた虎に胸倉をつかまれる。

「邪魔だってんだ！　どきな小僧！！」
「ひいぃ！　すみません旦那、ただいま！」
「あたしゃ、女だ！」
「えぇっ、紛らわしい！」
「んだと！？」

虎の獣人がぐわっと口を開く。それだけ筋肉隆々だったら男か女かなどわからないのが普通だとウルドは思うのだが、とりあえず本音がでる自分の口を、今本気で恨んだ彼である。

「この犬っころ、言いやがるぜ」
「だがミーニャにそれを言ったら死亡確定だな」

口々に獣人達が囃し立てるが、ウルドはその言葉を聞いているうちに、どうしても言いたくなった一言がつい口から漏れる。

「なんで名前だけそんな可愛いんスか！　外見と合ってないし」
「こいつ、まだ言うか！」

どうやら今のセリフはミーニャ以外の獣人にはツボだったらしく周囲は大爆笑となるが、当のミーニャはカンカンだ。真っ赤になって青筋を浮かべるミーニャを前に、「辞世の句とか考えておけばよかったな、さらば俺の人生」などとつまらない考えがウルドの頭をよぎる。だがその時、一筋の鋭い声が店内に響いた。

「やめねぇか、てめえら！」

その一言でぴたりと獣人達が止まる。声を出したのはこの中にあってかなり小柄な栗鼠（リス）の獣人だった。戦いとは無縁なウルドよりも、さらに頭一つは小さいか。栗鼠（リス）族はかなり温厚で戦いを嫌う種族の

はずだが、この男は片目に大きな刀傷があり、顔も一片の油断も無く引き締まっている。彼が一歩前に出ようとすると自然と獣人達が道を作ることからも、彼がこの中のボスなのだろう。そして彼が先頭に来てミーニャをじろりと睨みつけると、ミーニャが怯えたように手を離した。

「まったくミーニャ、てめぇはよ。だから男女なんて言われるんだろうが？」

「す、すみませんラッシャさん・・・」

ミーニャは怯えたように手を離し、ラッシャと呼ばれた栗鼠の獣人に詫びる。

「詫びるんなら俺じゃねぇだろうが。若いの、すまねぇな。うちの衆は喧嘩っ早いのが多くてよ。この通りだ」

ラッシャと呼ばれた小柄な獣人は深々と頭を下げてくる。そんな彼に、ウルドは慌てて手を横に振る。

「そ、そんな！　俺こそお客様に生意気言ってすいません」

「む、その事だが俺達は客じゃないんだ」

「ではどういった御用件で？」

ラッシャがぽりぽりと頭を掻く。何か決まりの悪い事でもあるのだろうか。

「ああ、オオカミのおやっさん・・・ゼルドスさんに用があってな。ゼルドスさんはいるかい？」

「ゼルドスは確かにうちの店長ですが、お先に用件だけでも伺えますか？　どこのどなたかわからないうちは、大切なうちのマスター

に会わせるわけにはいかないんで」

そのセリフを聞いて後ろの獣人達がまた何か文句を言おうとするが、ラッシャは鋭い目で彼らを睨み、制する。ラッシャは内心感心していた。この目の前の若い獣人は武術の心得があるわけではないだろうが、それでもこれだけの面子を前に引き下がらない。先ほどまで怯えていた様子が嘘のようだった。単純に力があるから肝が太いと勘違いする奴、いつも無鉄砲で肝が太く見える奴は沢山いるが、肝の据えどころを知ってる若者はそうそういない。

ラッシャは態度だけではなく、考え方も改めた。

「これはもっとも。リス族のラッシャが来たと言っていただければ大丈夫です。要件はここでは軽々しく言えるようなことではないので」

「わかりました。すぐに取り次ぎますので、少々お待ちを」

「その必要はねぇ、ウルド」

厨房からのっそりと店長のゼルドスが姿を現した。その瞬間獣人全員が片膝をつく。その仕草でウルドはわかったが、彼らは柄こそ悪いが全員軍人なのだ。

「こりゃまた懐かしい面々だが、昔を語らいに来たってわけでもなさそうだな」

「残念ながら。今お時間いただけますか、隊長」

「それも懐かしい呼び名だな・・・いいだろ」

「おい、お前らは少々待っときな」

全員が無言で頷いたが、ウルドだけは助けを目線で求めてくる。この連中の中に一人残すのはかわいそうかとゼルドスは思ったが、他にどうしようもないのでほったらかしておいた。まさか店を空け

させるわけにもいくまい。そして、ラッシャを促してゼルドスは奥の個室に行く。

「で、何の用だラッシャ」

「現４番隊が全滅しました。ヴァルサスからの召集で、ブラックホークに戻って来てくれないかと」

その報告に、ゼルドスは全滅した隊を思いやるのではなく、やれやれとため息をついた。

「おいおい、俺は１０年前に引退した身だぜ？　今さら鈍って戦えねぇよ」

「俺にはそうは見えませんがね・・・」

ちらり、とラッシャがゼルドスの体つきをみる。確かに歳は以前よりとっているが、体の衰えはあまりあるようには見えない。密かに鍛えてはいるのだろう。

そんなラッシャの目線に気付きながらも、ゼルドスはいかにも気だるそうに話を続ける。

「確かに部隊の全滅は珍しいが、昔から全くなかったってわけでもねぇ。傭兵やってりゃ一度や二度は経験するこった。今さら騒ぐほどのことか？」

「確かに。彼我戦力差を聞きましたが、それなら現行の団員全員で十分すぎるほど戦えます。ですが・・・」

「ですが？」

「ヴァルサスがね、『不安だ』って言ったんですよ。あの狂獣がですよ？　戦場を血みどろになりながらかけずり回った俺達が凍りつくほどの戦いをして見せるアイツがね。それが何を意味するか」

「・・・それは確かに一大事かもしれんな」

その言葉に、ゼルドスは指でテーブルを叩きながら考え込んだ。
ゼルドスがブラックホークの前身であった傭兵団を引退したのは、そもそもヴァルサスの実力が自分よりも遥かに上に到達したからである。ゼルドスは自分がすることは何も無いと思い、新天地を求めて各地を回ったのだ。
ラッシャはなおも続ける。

「アイツは何かを感じてるんです。昔からあの男はそうだった。俺達とは何かが違う。どれほど混乱した戦場でも、アイツの指示に従っていれば安全な場所に行けた、生き延びれた。２０年前に一度傭兵団は解散しましたが、その時の面子を再び集めるなんて普通じゃない。それに俺達は全員アイツに恩があります」
「ふむ」

ゼルドスは腕を組んでしばらく考えていたが、ややあって考えをまとめたようだ。

「まあ約束だからな・・・だが、約束を反故にするわけじゃねぇが、俺達程度で役に立つのか？　さっき見たら、元の俺の部隊の人数だって減ってたようだが」
「俺達に要求してる物は武力ではないかもしれません。それに１０年前に比べて獣人達の人数は死亡、病気、行方不明で確かに減りましたが、新しくスカウトもしてるんで。それに俺達はともかく、ゼルドス隊長は確実に右腕でしょうよ。なんせグルーザルドのドライアン国王と一騎打ちして生き残ってる、数少ない一人なんだから」

そう語るラッシャの口はどこか自慢げだったが、ゼルドスにとってはどうでもいいことらしい。

「いつの話だよ。今じゃ俺はただの酒屋のおやじだ。それにブラックホークにはベッツもいるだろうが」
「さすがにベッツは歳だと思いますけどね」

ラッシャが苦笑いをする。

「んで、今の一番隊は誰なんだ？」
「マックスです」
「あんのスケコマシのガキが！？　世も末だな」
「まあ俺らが知ってる頃はただのひよっこでしたが・・・今じゃなかなかの男に育ちましたよ」
「つっても、もうオッサンだろうよ」
「まあ本当にヘタレてたら、ぶちのめしたらいいだけでしょう」
「それもそうだ。で、なんかあいつら騒がしくないか？」

ゼルドスが部屋の外を気にする。何やら外が騒がしい。

「あのイヌの若いの，大丈夫ですかね？　肝っ玉はなかなかでしたが」
「心配すンな、ウルドは肝っ玉だけじゃねぇよ」

二人が話を終えて店の方に戻ると、どうやら全員酒が入ってるようだ。さっきまでの険悪な様子が嘘のように、ウルドが話の中心に入って話し込んでいる。中には肩まで組んでる奴もいる。

「こりゃあ驚きましたね。あの連中と和んでやがる」
「ウルドの才能さ。アイツは誰とでも仲良くなれる。んで一度聞いた名前は二度と忘れないっていう。俺じゃこうはいかんからな。俺の店にアイツは欠かせん」
「やっぱゼルドス隊長の人を見る目は確かですね」

二人はしばらくこの光景を眺めていたが、盛り上がる一方でまったく収まり気配がないので、割って入って話をした。ゼルドスが店を離れることにウルドは猛反発したが、ゼルドスの決意が固いことを感じると、渋々と納得したようだった。ただゼルドスがいない間、臨時の従業員を雇ってもいいかとかなり深刻に交渉していた。

そしてあらかた話が終わると、ゼルドスが獣人達に声をかけた。

「じゃあ全員このまま出発だ。緊急招集ってことだから、出来る限り速くサードイドに行く」

ゼルドスの声に獣人達が一斉に動き始めるが、何人かが動かない。どうやら納得のいかない者がいたようだ。

「ちょっと待てよ！　なんでアンタがしきってんだ？」

全員が、おお？　と言う目で声の主を見る。どうやら最近入った新入りの熊の獣人らしい。

「やめろ、オールー」

「ラッシャさん、俺達はアンタに口説かれてこの部隊に入ったんだ。こんな酒屋でたるんだおっさんが元アンタの上司かなんか知らないが、こいつの命令を聞く義理は俺達にはねぇ」

若い連中がそうだそうだ、と唱和する。

「ち、ガキが・・・」

「活きがよくていいじゃねぇかラッシャ。えーと、オールーだったか？　ならどうやったら俺を認められる？」

ゼルドスがラッシャを押しのけるように前に出、オールーもそれに応えるように前に出た。体格だけなら、オールーの方が二回りほどゼルドスより大きい。

「俺達と勝負しな！　俺達に勝ったら認めてやる」
「殴り合いでいいのか？」
「ああ。言っとくが、俺はかなり強いぞ？」

確かにオールーは獣人達の中でも1、2を争う大きさであった。だが、ゼルドスは子どもを前にするように笑うと、肩をゴキゴキと鳴らす。

「じゃあやるか。ああ、一つ忠告しておくぞ」
「なんだよ」
「くれぐれも、撫でただけで死んでくれるなよ？」
「？」

オールーは一瞬なんのことかわからなかったが、自分がとんでもない相手に喧嘩を打っていることに気が付くまでにそう時間はかからなかった。ゼルドスと対峙した瞬間、オールーの全身の毛が自動的に逆立ったのだ。そして少し離れた所にに立っていたゼルドスの体が急激に大きくなったかと思うと、また遠くなり、そして彼は気を失った。オールーは自分が掌打一発で吹き飛ばされたことにすら、気がつかなかったのだ。

その光景が一番衝撃的だったのはウルドである。自分のところの店長が腕っぷし自慢だとは思っていたが、２ｍ以上の獣人をまさかみぞおちへの掌打一発で２０ｍそこら吹っ飛ばすとは思っていなかった。しかもあの巨体で一瞬で間を詰める速度。喧嘩を吹っ掛けたオールーとかいう獣人は扉を突き破って反対側の建物まで吹っ飛び、そこの壁を多少変形させて気絶したようだ。あれでは3日は飯が食

べれないだろう。

「ありゃ？　思ったより飛んだな～。さてと・・・まだやるかい、若い衆？」

オールーに加担していた連中は既に顔面蒼白となり、無言で懸命に首を横に振っている。それを見てニヤリとしたゼルドス。だがこの光景は馴染みの連中には見慣れたものであるのか、全員がゲラゲラと笑っている。多くの者が昔こうやってゼルドスに立てつき、そして同じように吹き飛ばされたのだ。

「そういやミーニャも昔吹っ飛ばされたよな？」

「言うんじゃないよ！」

「そういやそうだったな。悪い、俺もお前が男だと思っていて、全く加減しなかった」

「た、隊長まで・・・」

「「ギャハハハ！」」

全員が笑い転げている。どうやら一連の行為は、新人への洗礼というところか。

「だれかオールーの面倒を見てやれ。よし、じゃあウルド。店のことは頼むぜ！　くれぐれも潰すなよ？」

「おやっさん・・・」

「ん、なんだ？　俺がいないと寂しいか？？」

ゼルドスがウルドの頭を、ぽんぽんと撫でる。

「扉と、向かいの店の壁の修理代はおやっさんの給料から引いときます」

その瞬間ゼルドスが石のように固まり、真っ白になった。それを聞いて他の連中はさらに笑い転げているが、一番強いのは実はこのウルドとかいう小僧なんじゃないかと思うラッシャだった。

続く

ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク、その1～獣人の部隊～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

これから物語に大きく関わるブラックホークとヴァルサスの話です。
もっとも出番はかなり先かもしれませんが・・・。

次回投稿は本日１１／１０（水）２０：００です。

登場人物紹介その3～ルイ、レクサス、アルドリュース～（前書き）

今回はブラックホークの2人と、アルフィリースのお師匠アルドリュースの話です。

登場人物紹介その3～ルイ、レクサス、アルドリュース～

名前：ルイ（名字は隊長以外は知らない）
年齢：２３、女性
外見：１７５ｃｍ／６６ｋｇ／９４／６３／９５、黒髪長髪、黒い茶色の瞳
職種：魔法剣士（氷属性）
好きなモノ：強い奴、「雄弁は銀、沈黙は金」
嫌いなモノ：弱い奴、軟弱・軽薄な奴、団長
一人称：ワタシ
〈プロフィール〉
　もとはとある国の有名な名門武家の出自。三人姉妹の次女である。父は男子を望み、やっと四人目に男子を設けたが体が弱く、とても騎士としては出世が望むべくもなかった。そのためせめて孫の代で強い子を残そうと姉妹を全て強い騎士に嫁がせようと画策し、絵にかいたような令嬢だった３つ上の姉は文句もなく嫁いでいった。

　なお武家の生まれとしてある程度の武芸は知らねばならないとの父の方針から、三姉妹共にそれなりに武芸を仕込まれたが、次女であったルイは天賦の才を発揮。家庭教師をしていた武芸の先生（元は騎士団の大隊長）から１０歳の時に一本を取ることに成功。１２の時には完全に互角の戦いを出来るようになっており、父の反対を受けるも家庭教師と周囲の推薦で騎士団に入隊した。
　入隊後、彼女はいかん無く能力を開花させ始め、個人的な技能だけでなく戦術面でも才能を発揮。模擬戦でも全戦全勝を治め、１５歳にて伍長（４人の部下を任された）に抜擢。これは男子を含めても異例の出世速度であった。だがこの出世をねたまれ、他の部隊に絡まれた時に部下が誤って転落し再起不能となる。その折に激怒したルイは魔法剣士としての才能に目覚め、部下を追い込んだ４人を

全員その場で再起不能にし、止めに来た大隊長を含む３０人余りの兵士をまとめて吹き飛ばしてしまう。この時「氷刃」のあだ名がついた。

色々なかばいだてもあり処分は謹慎となったが、騎士団内での評判はむしろ上がり、３ヶ月後中隊長に抜擢。地方反乱、国境の小競り合い、魔物討伐と全てに勝利し、常勝の名をほしいままにすると、また身分の上下を問わない人気から２０の時に師団長（千人の部下を持つ）に任命。女性初の軍団長の呼び声も高かったが、自分の出世を兄弟はともかく両親が喜んでおらず、父がまだ自分の結婚を諦めていないこと。そのせいで妹と父の折り合いが悪くなっていること。また自分の出世に伴い、末の弟の立場がますますなくなることを危惧し、全てに嫌気がさした彼女は２１を待たずして国を出奔。

そのまま各地を放浪していたが、ある日耳にしたブラックホークのヴァルサスに一騎打ちを挑み、魔法剣を使った上で完膚なきまでに叩きつぶされる。その時同時にスカウトされ「いつ何時も一騎打ちを挑んでよい」ことを条件に入隊した。が、現在まで２０戦２０敗という結果に終わっている。

彼女自身は無口、というよりは無駄口を叩かない性格であり、戦いの時に全く容赦ないことから冷酷だと勘違いされがちだが、本来はかなり周囲・部下思いな性格。また非常に公明正大でもある。良い意味で非常に騎士らしいといえる。

名前：レクサス＝オーレヴ
年齢：２７、男性
外見：１７８ｃｍ／７５ｋｇ、ブラウンの髪・瞳、短髪で比較的直毛
職種：剣士（二刀流）
好きなモノ：金、ルイ、巨乳、子ども

嫌いなモノ：身の程知らず、偽善、貴族・金持ち
一人称：俺
〈プロフィール〉
西方諸国のとある寒村の出。彼が生まれた周辺は土地がやせていたわけではないが、何カ国かの国境に近く、度々小競り合いが起きる土地であった。そのため土地の者は自衛のため武器を取る者が多く、女性であっても一定以上戦える者が多い。レクサスも農民でありながら、また例外ではなかった。

土地からは傭兵も多く出、出稼ぎに行く者が沢山いた。レクサスの父親もそうであったが、レクサスが9歳の時に戦死したとの連絡が届いた。ただ遠い戦地での出来事なので、死体は確認できてはいない。母親はその翌年の小競り合いに巻き込まれ死亡し、兄弟のいない彼は10歳で天涯孤独となる。これは特に珍しいことでもなく、彼の土地にはそういった者が多かったので別段彼に孤独感は無かった。それから彼は自分が生活する手段として、戦場で死体から追剥などをして過ごすようになる。

その後彼には同い年で同じ境遇の親しい友人ができたが、12歳の時に親友が重病にかかった。治療費が膨大になるため貧民救済院では面倒が見れないことは明白であり、親友は救済院を無理矢理追い出された（この村はアルネリア教会の影響下に無かったのである）。彼の面倒を見るためには戦場荒らしの収入では追い付かず、金を稼ぐためレクサスは12歳にして前線専門の傭兵として活動することを決意。それは報酬が高いものの、常に特攻兵としての役割をこなすことから、3年生き残る者はいないとまでいわれる過酷な仕事だった。

だがその仕事を何年もレクサスは五体満足で行うことに成功する。それは彼の動物的勘の良さと、剣技の冴えがあってこその事だっただろう。彼はなんとか親友の病状を食い止めることには成功してい

たが、ある日完治方法があるとの話を聞き、さらに高額な報酬を得ようとさらに危険な戦場を渡り歩くようになる。そしてある戦場にて高額報酬の約束を取り付けたが、それが言葉のあやだったことが発覚。逆上したレクサスはその場で隊長格を斬り殺し、お尋ね者になった。

その後追手を巻きながら故郷に戻ると、逃亡中に仕送りがなかったこともあり既に親友は死亡。やることのなくなったレクサスは追跡の手を逃れながら各地を放浪したが、ついにブラックホークのヴァルサスが追跡者となった。ヴァルサスに追い詰められたレクサスは死を覚悟したが、斬られる間際に名前を聞かれ答えたところ「・・・名前の語尾が同じ奴を斬るのは縁起が悪いな」の一言で見逃された。

さらに様々な出来事を経てブラックホークとして活動することになったレクサスは後にルイと出会うが、最初の印象は互いに最悪で、ルイが貴族で女だったということもあり、彼らは一度全力の殺し合いをしている。その時は僅差でルイが勝ったということで、ルイを隊長として2番隊が発足した。もちろん2人にコンビを組ませたのはヴァルサスである。今ではレクサスがルイをからかい、ルイがレクサスに冗談半分で斬りかかる程には仲が良い。

本来の性格は明るく面倒見の良い青年。ちなみに女・子どもが大好き。だが戦場で剣を握ればたとえ女子どもでも容赦は一切なく、戦場の厳しさを良く知ってもいる。基本は双剣使いだが、生粋の戦場上がりのため武器は一通り結構な腕前を誇る。そして長らく逃亡生活が続いたせいか特に周囲の気配に異常に敏感で、センサーや野生の獣以上の勘の良さを発揮する。なお魔術は一切使えない。

名前：アルドリュース＝セルク＝レゼルワーク
年齢：４５（死亡時）、男性
外見：１７２ｃｍ／６６ｋｇ、黒の短い直毛の髪・黒の瞳
職種：マイティーマスター
好きなモノ：？
嫌いなモノ：？
一人称：私
〈プロフィール〉
　アルフィリースの師匠にして、大陸で数少ない『マイティーマスター』の称号を得た人物。
　この大陸では比較的大きな戦争が人間の間で起きなくなってから、代替戦争とも言える国家間の統一武芸大会が何年かに一度開催されるようになった。合間に魔術大会、学問大会、芸術大会などが行われることを考えると、ほぼ毎年何かが行われている。
　アルドリュースはそれらほとんどに出場し、しかもどの部門でも好成績を治めるなど万能の天才の名を欲しいままにした。そして彼のようなあらゆる分野にわたり活躍するものとして『マイティーマスター』の称号が与えられる（最低魔術と武芸で優秀な成績を治めることが条件）が、彼は歴史上１０人目の受賞となり、大陸の騎士たちが知らぬ者が無いほどの有名人。ちなみに称号を持っており存命しているのは現在２人だけである。

　アルドリュースは生まれてまもなく魔術教会に引き取られており、実の両親を知らない。他系統の魔術、特に封印術で非凡な才能を発揮した彼は、ゆくゆくは魔術教会で一つの派閥を形成するだろうと言われていたが、２０歳であっさりと教会を出奔。その後しばし世界を放浪し、２２歳でとある国に士官している。
　基本的な武芸は魔術教会でもある程度治めていたのだが、出生や魔術教会の経歴を全て隠した状態で彼は一兵卒から挑戦。最初は文官として知識を発揮したが、その後内政の仕事に携わりながら兵所

で一兵卒に交じり訓練にいそしんでいた。やがては戦術における武官としてだけでなく、純粋に兵士としても師団内で１０指に入るほどの高い戦闘能力を得る。

その後３２の時には師団長にまで出世。その間にマイティマスターの称号も獲得している。王からは伯爵号まで与えられ、王女とのラブロマンスを経て時期国王との呼び声まであったが、彼は３５で突然全ての地位を捨てまたしても国を出奔した。その後さらに様々な国を放浪。ミリアザールと面識を持ったのもこの時期ではないかと思われる。そして３８の時にたまたま通りかかった村でアルフィリースと魔術教会の戦闘場面に出くわし、自分の魔術成果の無条件提出と、アルフィリースに呪印を施すこと、僻地での隠遁生活を条件に彼女の身柄を確保した。

アルフィリースに呪印を施した結果彼の残り寿命は半減し、その後４５で死ぬまでアルフィリースと共に暮らしているが、彼の内心を示した手記は何もない。また多くの友人に囲まれていたものの、親友と呼べるほど彼と親しく付き合っていた人間は皆無であり、また恋人もいなかった（王女とも噂が盛り上がっただけで、特に約束も男女の関係もなかった）。なぜ彼がこのような人生を送ったのかは、全てが謎である。

続く

登場人物紹介その3～ルイ、レクサス、アルドリュース～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

本編で述べられないことはこういう部分を使って述べていこうかと思います。

次回投稿は１１／１１（木）１２：００です。

ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク、その2～集結～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースをダルカスの森で助けたルイは、レクサスと2人で集合場所へ向かうべく旅を進めているが・・・？

ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク、その2～集結～

＊＊＊

「あーねーさーんー！　もう一歩も歩きたくないっす！」
「・・・貴様は3日前からそればかりだな」
「4日前っす！」
「・・・」

ブラックホークの2番隊であるルイとレクサスは、ヴァルサスの命じた集合場所へとひたすら歩を進める。サードイドには直接集まらず、その前にサードイド近くの山中に集まるように命じられているのだ。その途中で行われる、いつもの二人のやりとりである。事情を知らぬ者が見れば駄々をこねる母子のような内容だ。あるいは痴話喧嘩か。

「もー疲れた～。だるいよー、めんどくさいよー、姐さんが冷たいよ～」
「ワタシはお前の疲れを取る方法を知っている」
「ま、まさか！　ついにその豊満なおっぱいに飛び込んでもいいと!?　・・・アレ」

ルイが薄笑いと共に剣を抜き放っていた。しかも、なんだか剣が白く輝いているように見えなくもない。

「呪氷剣（コキュートスセイバー）？　あ、姐さん！　それは本気で洒落になりませんって！」
「ワタシは冗談は嫌いだ」
「ほ、本気ー！!!?」

レクサスがイヤイヤしながら後ずさるが、ルイも色々我慢の限界の様だ。戦闘の時に近いルイの殺気を前に、レクサスにやや走馬灯がよぎり始めたその時、

「はっはっはぁ！　相変わらずだな、ルイ、レクサス！」
「はぁい、ルイちゃんお久し～」
「相変わらず怒ってばかりだと、そのきれいなお顔にシワができちゃうわよん♪」
「レクサスぼうや、やっぱり可愛いわねぇん」
「あ、マックスさんとお姉さま方！」
「・・・フン」

姿を現したのは片目に眼帯をした大柄な男と、その男にしなだれかかるようにしてこちらを妖艶な表情でみつめる女性達。ブラックホークの1番隊隊長マックス＝オブライエンとその取り巻き達、通称『恋人達（ラバーズ）』の面々である。

一番隊はこの大男と、女4人で構成されている。うらやまし・・・もとい、この女性達は妖艶なだけでなくそれぞれがかなりの使い手との評判であり、戦場ではマックスと相当に息のあった連携を見せるため『恋人達』と言われるようになったそうだ。さらにこの1番隊は戦場での仕事だけではなく、団の金策なども行うため貢献度では団内一である。それゆえの1番隊だが、もちろん戦闘能力も相当高い。もっとも団長のヴァルサス以外は、1番隊が全員そろった時の戦闘力を見たことはない。

「どうだ、ルイ！　お前もうちのラバーズに入らねぇか？」

見た目だけはいかつい大男が、軽薄な調子でルイの肩を叩く。

「だめですよ、マックスさん！　姐さんのおっぱいは俺のなんで！

！」

「・・・まとめて死ぬか??」

そしてレクサスがその間に割って入ったのだが、ルイにとってはどちらも同じようなものだ。鬱陶しいことに変わりはないのだ。

「あ～ん、ルイちゃんこわ～い！」

「レクサスぼうやを斬ってもいいけど、その前に一晩アタシに貸してぇん」

「うひょー！　死ぬ前にめくるめく幸せの予感？　でも一人お姉さんが足らないような??」

軽薄な調子の中にも、観察と質問は欠かさない。それがレクサス。ルイもそれを知っているから、いまいちとどめをさそうにも、躊躇われる時がある。

「リムフェラは先に偵察に出している。俺が無策で集合するなんて、んなことするわけないだろ」

マックスもまたその事はよく承知しているので、素直に答える。レクサスは不審な点があれば、仲間でも刃を向ける事を躊躇わない男だ。以前適当にレクサスをあしらおうとして、殺し合い一歩手前にまで発展したことがある。

そして体は大きく筋肉質だが、このマックスは見た目によらずかなりの策士である。周りの女達も普段こそ軽薄でだらしない感じだが、全員かなり頭が回る。ブラックホークの中では比較的親しみやすい面々だが、色んな意味で油断ができない隊でもある。

そこへ今度は下卑た笑いが聞こえてきた。

「ケケケケ、マックスこそ俺に一晩そいつら貸せよ？　俺好みに仕

込んでやるからよ、ケケケ」
「あらあらまあまあ。それを言うなら調教の方がいいかもしれませんわ」

さらに姿を現したのは赤髪・細面でいかにも神経質で執念深そうな男と、対照的に貴族的な金髪をみつあみにした、上品かつおおらかな印象を与える女性だった。

「ゲルゲダにファンデーヌか・・・めんどくさいのが来たな」
「聞こえてるぞ～？　マックスぅ」

軽く舌打ちしたマックスの呟きが聞こえたのか、ゲルゲダが地面にぺっと唾を吐く。

「あらあら、私をこんな人と一緒にしないでほしいですわ」
「んだと、このアマ！？　この場でひん？いて犯してやろうか？」
「あらあら、おできになるならどうぞ。もっともわたくしのかわいいこの子たちに嫌われなければよいのですが・・・」

そういうとファンデーヌの服からちょろりと蛇が顔をのぞかせる。これは毒蛇の類いで、人間なら噛まれれば1刻持たずに昇天できる毒を持っている。ファンデーヌはゲルゲダに微笑んでいるが、蛇の方は敵意むき出しである。ゲルゲダの舌打ちをする音が聞こえてくるようだ。

このゲルゲダという男はブラックホーク5番隊隊長であり、残忍非道で通っている。依頼とあれば女、子供、老人でも容赦しない。むしろ依頼でなくとも腹いせ程度で殺しをする人間である。ブラックホークに悪評がたつ時は、全てこのゲルゲダが元凶と言ってもいいくらいだ。そのため汚れ仕事を請け負う反面、仲間内でも嫌われている。腕は確かなのだが。

一方ファンデーヌは6番隊の隊長だが、この隊はファンデーヌ1人である。それがなぜ隊として機能するかというと、彼女が魔獣使い（ビーストマスター）であることに由来するだろう。通常のビーストマスターは従えても数体だが、このファンデーヌは同時に数十を扱うとされる。それゆえに1人で部隊が成立しているのだ。

「そういやゼルヴァーの奴が見えねぇな」
「アイツは別行動してた副隊長達と合流してから来るんだそうだ」

ゲルゲダが周りを見渡しながら誰となくぼやく。マックスがその疑問に取り合ってやると、ゲルゲダは下品な目線をラバーズに向ける。

「で、どうするんだマックスよ？　女どもを俺に貸すのか貸さねぇのか」
「あん？　しつけぇ奴だな。てめぇみてぇなゲス野郎に、なんで俺の可愛い女どもを貸さなきゃならねぇんだ？」
「いうじゃねぇか。じゃあ力づくならいいんだろ？」
「やれるもんならやってみな」
「いやーん、マックスかっこいい～！！」
「あんな下品な男やっちゃってぇん！」

マックスとゲルゲダが一触即発の状態になる。それを止める様子もなくルイとファンデーヌが見守る。互いにそれぞれの獲物を抜こうとしたその時、

「皆様、争いはいけません。こういう時こそ種の慈悲を、〇ーメン」
「・・・でやがったよ、セクハラ神父」
「・・・まったく、やる気がなくなるったらありゃしねぇ」

下品な言葉を聞かされたせいでやる気をそがれ、げんなりするマックスとゲルゲダの間に姿を現したのは、黒い神父服に身を包んだ丸眼鏡の若い男であった。かなりの長身でにこやかな笑顔を皆に向けており、また端正なマスクをしている。この容姿で甘い言葉を囁かれれば、普通の女性であれば悪い気はしないだろう。だが残念ながら彼の口からはそのような甘い言葉は出てこなかった。

「世の中は愛と平和が一番です。強いて言うならばラブ&ピース！　それには女性の協力が欠かせない。さあ、そこの女性達、私と共に××××に励みませんか！？」

「あーん、どうしようかしらぁ？」

「・・・ワタシは斬りたくてうずうずしているんだが？」

「あらあら、あたしもよ？」

神父のとても口にするにも耐えない直接的に下品な言葉に、ラバーズ以外の女性は全員武器を手に持ち始めた。どうやら全く愛と平和は訪れそうにない。ラバーズだけは彼の上手なあしらい方を心得ているのだが、そこは人生経験の違いか。

「おお、なんと嘆かわしい！　こんなにも私は争いを嫌っているというのに・・・種よ、愛の行為より争いを好む哀れな女性達にあなたの恵みを」

「貴様がいなくなれば全て丸くいきそうだがな」

「あらあら、ここはルイに賛成ですわ」

「んで、なんでヴァルサス直下の神父サンがここに？」

いつもは話を茶化すレクサスが冷静に質問する。結果、上手く話をそらした格好になった。

「そうそう、皆さんの案内をヴァルサスに頼まれましてね。それで

は急ぎ参りましょうか、思いのほか時間を取られてしまいましたので」

それは誰のせいだと全員が思いつつも、一行は新たな集合場所に足を運ぶ。

＊＊＊

ここはサードイドにある酒場の一角。まだ時間が早いということもあってか人気はあまりない。何人かはいるようだが、全員が静かに時を過ごしている。いや、一人だけ騒がしい者がいる。

「ねーねー、団長～。早く魔王をやっつけにいこうよ～。待つのは飽きたよ～」

騒いでいるのは長い耳に華奢ですらりとした体躯のウサギ族の獣人の女性。いや、まだ女の子と言うべきか。体つきは成人を思わせるが、口調は１０歳程度の女の子のものだ。夏が近いとはいえ非常に軽装であり、下はショートパンツ、上は下着のようなシャツ一枚であり、場末の娼婦のような格好だ。これで腹筋が見事に割れているなど、体つきが戦士を連想させる体型でなかったら、娼婦と勘違いされても文句は言えないかもしれない。

「ねーってばぁ～。団長さっきから本読んでばっかじゃん～、ちょっとはワタシと遊んでよぉ～」

「うるさいね、ミレイユ。ちったぁ静かにしな」

「じゃあグレイスが遊んで～」

「お断りだね。アンタと遊び始めたら朝がきちまう」

そういってぷいと横を向いたのは巨人族の女戦士だった。身長が

実に成人男性の1．5倍はあるだろう。傍に立てかけてある剣の大きさが既に並の人間より大きい。ミレイユは文句を言い足りない感じだが、グレイスを始め、もはやだれも相手にしてない。文句を言うのにミレイユが飽きかけたころ、壁を背にして立っていた男が何かにピクリと反応した。

「心配するなミレイユ、すぐに全員そろうさ」
「本当？　カナートが言うなら間違いないね」
「ああ、だからイイ子にしてな。そら、アマリナが帰ってきた」

カナートが言うが早いか、酒場の外から竜のいななきが聞こえてきた。そして一陣の風が吹いたかと思うと、酒場の開き戸を押し、甲冑姿でツインテールの女性が入ってくる。

「ヴァルサス団長、全員の姿を空から確認しました。まもなく足並みが揃うと思います」
「・・・わかった、揃い次第全員を酒場に入れてくれ」

一番奥に据わっている男がそう言うと、アマリナと呼ばれた女竜騎士は無言で頷き踵を返して再び外に出ていく。もはやミレイユにも文句を言うそぶりはない。徐々に緊張感が酒場を包み始める。
そしていくらもしないうちに各所から集合したブラックホークの面々が次々と酒場に入ってくる。

「姐さん、すごいっすね。全滅した4番隊を除く1～6番隊の面々だけじゃなく、隊長直下の0番隊の面子まで揃ってますよ」
「・・・黙ってろ。ヴァルサスの雰囲気を見てみろ、あれは相当キレてる。うかつな軽口叩くと、とばっちりをくらうぞ」
「・・・ですね」

確かに周囲は異常にピリピリしている。あれほど軽口を叩いていた神父も、陰険で絡み屋なゲルゲダも言葉を発する様子すらない。この緊張感を作っているのは、全て酒場の奥に座っているヴァルサスという男一人によるものだ。無言で暗がりに座っているが、それでもここにいる全員を黙らすくらいの圧力を発している。普段は『狂獣』という呼び名はなんなんだと思えるほど物静かであり、不用意に周囲を圧迫するような男ではないので、ルイの言うとおり相当に怒っているのだろう。

それもこれも４番隊が全滅したせいだ。そもそもブラックホークという傭兵隊は変わっていて、普段はバラバラに行動してもよいことになっている。大抵は隊の単位で動くが、アルフィリース達が出会った３番隊が半分の人数しかいなかったように、隊内ですら行動は比較的自由だ。依頼もそれぞれが個別に受けてよく、入隊・除隊も各部隊の隊長が認めればそれでよい。一応行動や現在場所は団長に報告するしきたりだが、守られていないことも多い。それでもなぜか居場所は団長に筒抜けで、今回みたいな全員集合では正確に連絡が回ってくるのだ。

そんな自由な傭兵団にも一つだけ鉄の掟がある。それは「仲間が不当な理由でやられたら全員で報復すべし」だ。傭兵という職業は軍人とは違い、どこに勝つかではなく、如何に生き延びるかが重要である。国と血縁・名誉・土地で契約する騎士に敵前逃亡は許されないが、金銭で契約する傭兵は分が悪ければ逃げだすこともあり得る。実際に敵前逃亡は傭兵としての信頼を失くすためあまり行われないが、１００％負ける戦に付き合う必要もない。そのため傭兵を信頼していない軍の将校や国も多く、傭兵は使い捨て程度に扱われることもしばしばである。たとえば雇われた軍に嘘の情報を与えられた状態で戦場に赴けば、全滅することもあるのだ。

そういった不当な扱いを受けることを回避するため、ブラックホークが設けた掟が報復行動である。それはブラックホークの前身と

もいえる傭兵団で実際に起こった悲劇を基にして作られた。雇われるときには報復行動込みで雇ってもらう。ブラックホークとして全員集合をかけるのは実に3度目だが、7年前に全員集合をかけた時は、自分達に偽の情報を与えて魔物の群れに向かわせた司令官の砦を逆に急襲。およそ５００人を１５人程度で全滅させた。それ以来ブラックホークを不当に扱う者達はいなくなった。ましてや現在、人数はその時の三倍以上いる。報復行動の威力たるや、もはや語らずとも想像がつくだろう。そしてその全員が揃っているはずだが、ヴァルサスは一向に何も話す気配がない。少しずつ訝(いぶか)しむ連中が出始めたころ、酒場の扉が勢いよく開いた。

続く

ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク、その２～集結～（後書き）

次回でブラックホークの話は最後です。人数多くて把握しきらないと思いますが、とりあえずルイ・レクサス・ヴァルサス・ベッツ・ゼルドスあたりを押さえてくれていればいいです。他のメンバーもその都度出番がくるかとは思いますが。

次回は１１／１２（金）１２：００投稿です。

ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク、その3～憂慮～（前書き）

～あらすじ～
全員がサードイドに集合したブラックホーク。ヴァルサスの心配事とは・・・？

ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク、その3～憂慮～

「いよう！　ヴァルサスの小僧、元気か！？」

全員が思わず耳をふさぐほど大きな声と共に入ってきたのは獣人の一団。ほぼ全員が何事かと思うが、何人かは心当たりがあるようだ。

真っ先に素っ頓狂な声を上げたのはマックス。

「げ、ゼルドスのとっつぁん！？」

「おー！　マックスのぼうやじゃねぇか？　なんだおまえ眼帯なんぞしやがって。威厳を出してるつもりか、ションベン小僧が」

「だれがションベン小僧だ」

マックスはむっすりとしたが、すかさずラバーズにからかわれる。

「えー、マックスってションベン小僧なのー？　ださーい」

「っていうか、このナイスミドルなオオカミさんだれー？」

「お前らに名乗る名はねぇ！」

「いや、名乗りましょうよ隊長・・・」

「あはは、このおじさん面白―い！」

ラッシャが横で頭を痛めているようだが、奔放なラバーズ達はゼルドスの返事に笑い転げていた。その横でマックスは意外な人物の登場に泡を食っているようだ。他の面子も最近入隊した者が多いためか、事情がよく呑み込めていない。そんな連中をさておいて、ゼルドスはさらに知己を見つける。

「おお！？　そこの白髪はベッツか？　いやー、老けたな、お前」

「貴様のような獣人とは寿命が違うんだよ」

副団長であるベッツが、こちらも眉をひそめてむすっとした。そんなベッツの背中をばんばんと乱暴に叩くゼルドス。

「ハッハッハ、お前いくつになったのよ？　そろそろ７０だっけ？」
「馬鹿言え、まだまだ５８だ」
「じゃあなんで白髪なんだよ」
「・・・こいつらを率いてみろ。苦労が絶えんわ」

ベッツが団員達をじろりと睨む。そんなベッツの肩に腕を回して抱え込むようにし、ニヤニヤするゼルドス。

「よく言うぜ。若い頃はお前が一番苦労かけてたんじゃねぇの？」
「何を馬鹿な事を」
「じゃあゼムダ砦守ってる時に、給仕の姉ちゃんとしけこんでたせいで、相手の夜襲時にも一人だけ服着る暇もなく、パンツ一枚で戦って尻に矢を受けたの誰だっけ？」
「！　貴様！　それは言わん約束だろうが！？」

突然の暴露に、ベッツが顔を真っ赤にする。

「いやー、あの時は笑った笑った。あの後防衛戦で、俺達の目覚ましい活躍の褒賞に伯爵様が晩餐に招待してくれたってのに、お前は尻の傷が痛くて参加できず、しかも給仕の姉ちゃんと庭園の世話をする姉ちゃんに二股かけてたことが発覚して、両頬に手形作ってきたよなぁ？　あんなに笑った戦場もあんまりねぇよ。あ、そういや他にもベセダ湿原では・・・」
「貴様ぁ、そこになおれ！　ぶった切ってやる！」

つらつらとベッツの過去を暴露するゼルドスに、ついにベッツの堪忍袋の緒が切れた。そして、腰の剣を抜き放つベッツ。

そんな彼を見ても、ゼルドスはニヤニヤしたままだった。彼にとっては昔から繰り返された、懐かしの光景である。ゼルドスがベッツを怒らせ、周囲が止める。だが、戦場でもっとも連携がいいのもこの二人の特徴である。

「へっへへ、まだまだ気持ちは若いみてぇだが、無理すんなよ？ぎっくり腰になったら、今の歳じゃ寝たきりになるぜ？」

「まだ言うか！」

「・・・その辺にしておけ、ベッツ、ゼルドス」

今まさに喧嘩に入ろうとした二人を、静かな声が制する。

「ベッツ、お前は止める立場だろう。お前が一番に熱くなってどうする」

「あ、はい。すみません団長・・・」

年下ではあるがヴァルサスに尤もな事を言われ、しょぼくれるように剣を収めるベッツ。

「わかればいい。それよりゼルドス、よく来てくれた。歓迎するよ」

「フン、久しぶりだなヴァルサス。１２年ぶりくらいか？」

ゼルドスが久しぶりに会うヴァルサスをじろじろと観察する。ゼルドスの中ではヴァルサスもどことなく青い雰囲気が抜けなかった青年だったが、今では随分と貫禄を備えるようになっていた。暗がりにいてもわかるその雰囲気は、昔見られたような隙はもはや見受けられない。そこには人として経験をさらに積んだ、頼もしい男が座っていたのだった。

「そうだな、そのくらいだ。ゼルドスは相変わらずで何よりだ」
「お前さんはちいと老けたか。外見上は若者でもいけそうだが、まあそろそろ中年だよな。今いくつになった？」
「今年で３５だ」
ヴァルサスが暗がりから静かに答える。
「まだそんなもんか。そういや俺とお前が最初にあった時、お前はまだ１０歳くらいだっけ」
「懐かしいな」
ヴァルサスが席を立ち、ゆっくりと全員がいる方に歩いてくる。明るみに出たその顔は、かすかに笑っている。こうして笑い方や仕草をみていると、なるほど落ち着きも威厳もあるのだが、見た目の年齢はレクサスと大して変わらない。むしろレクサスの方が痩身な分、並んで見るとヴァルサスの方が若く見える可能性もある。
この見た目が普通の好青年のような印象を受ける男が、大陸有数の傭兵団『ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク』を率いる団長のヴァルサスである。背丈も容姿も普通であり、日常生活において特に強そうな印象を受けるわけではないが、一度でも戦場で戦う彼を見たことがあるものはその恐ろしさを生涯忘れられないだろう。人が森に立ちいるときに枝葉や草を払うように、戦場で人を斬る。単騎で５０００人に突っ込んで大将首を取ったとか、１人で砦を１カ月守り抜いたとか戦場での伝説には事欠かない。
その彼は味方からも畏怖の念でもって見られており、普段ならともかくこうやって彼の機嫌が悪い時に何の遠慮もなく話しかけられるのは副長のベッツと、怖いもの知らずのミレイユくらいだと皆思っていたので、この獣人の出現に皆驚いていた。別にヴァルサスが自分の機嫌程度で理不尽なことをしないのは皆よくわかっているの

だが、怖いことには違いない。その当の2人はしばらく全員をほったらかして思い出話に花を咲かせていたが、しばらくしてヴァルサスがゼルドスを全員に紹介した。

「皆すまない、紹介が遅れた。こいつはゼルドス。見た目の通りの獣人で、俺がブラックホークを立ちあげる前からの付き合いだ。言っておくが、現在のメンバーにもこのゼルドスに勝てる奴はそうはいまい。引退していたんだが、無理言って今回復帰してもらった」

「ってことだ。よろしくたのまぁ」

ゼルドスが片手をあげて簡単に挨拶する。全員がそれで納得できたわけではなったが、ヴァルサスの言うこととあれば聞かざるをえない。だがミレイユは遠慮がなかった。

「団長～？　今回は４番隊をやった魔王達が相手でしょ～？　なんか魔王も複数いるっぽいけど、なんでも人質取られて４番隊はやられたって話だし、ぶっちゃけ０番隊だけでもなんとかなる相手だと思うよ。そんなおっさん呼ぶ必要あるの？　なんかワタシ達信用されてない感じ？」

「おっさ・・・」

ラッシャがあまりの言葉に目をぱちくりさせているが、ミレイユの意見は自分達の強さに自信のある現行のメンバーには尤もであり、全員がヴァルサスを見る。その様子にヴァルサスは面喰う様子もなく、軽く微笑んで答えた。

「なるほど、ミレイユの言うことも尤もだな。でも俺はお前達を信用してないわけじゃないことは最初に言っておこう」

「じゃあなんで～？」

「人間の世の中では俺達の名前は轟いている。そのせいで、もうこ

のブラックホークに余計なちょっかいかける連中はいなくなった。俺はそれでいいと思っていた・・・が、魔物の世界ではまた別だったようだ。どうやら俺の考えが甘かった。許せ、皆」

突然ヴァルサスが深々と頭を皆に下げる。その行動に全員が驚くが、さらに続けるヴァルサスの言葉にさらに驚いた。

「・・・今度はさらに徹底的にやろう。魔物の世界でも俺達の名前が轟くように。ブラックホークの名前を、この黒いコートを見たら、魔物達が恥も外聞もかなぐり捨てて逃げ出すように。そのために余すところなく人数を集めた。いいか、繰り返す。徹底的にだ。俺達に喧嘩を売った魔物を一体残らず狩りつくせ。命乞いも投降も受け付けない。魔王だろうが大魔王だろうが知ったことか。完全にこの地上から奴らを消しされ。その存在した痕跡すら残すな。お前達、最近全力で暴れてないだろう？　俺が暴れる場所を与えてやる。俺が許す、全力で暴れろ。人間相手じゃ、中々こうはいかないからな」

全員が最初は黙っていたが、やがてだれともなく剣を抜き始め歓声をあげ始めた。ヴァルサスが許可して「暴れろ」と言うのは珍しい。確かに人間達の戦争では色々と制約も多いため、存分に戦えない事も彼らほどの実力を持つとありうるのだ。

店から聞こえる歓声に周囲からは何事かと仰天する住民がいたが、先ほど強面の連中が入って行ってるのを見ているので、とても覗きに来る程度胸のある人間はいない。

そしてしばらくすると景気づけの宴会が始まった。その中でカウンターで2人話し込むゼルドスとヴァルサス。

「でもよおヴァルサス、こいつらそんなに使えんのか？　マックスが1番隊とか言う時点で俺は不安なんだが」

「心配するな、俺達の後を金魚のフンみたいにくっついてきていた

アイツとは違う。もう十分一人前さ」
「マジかよ。あのウサギの娘といい、やっぱり何か不安だがな」
「そういうおっさんこそ使えるのか～？　歳とかブランクとか、言い訳にならないかんね」

隣のテーブルからミレイユが会話に加わってくる。泡酒のジョッキを片手に2人を見据えるミレイユ。ゼルドスはミレイユに向き直って話しかけるが、ヴァルサスはそのままだ。

「じゃあこんなのはどうだ？」

ゼルドスがミレイユの持っているジョッキに向けて掌をクン、と小さく突き出す。するとミレイユが持っているジョッキが何もしていないのにピキピキとひび割れていった。周りがおお、とため息を漏らす。

「遠当てってやつか・・・おっさん、やるね」
「全力でやれば、２０m先の人間の息の根を止めるだろうよ。お前の番だ、お嬢ちゃん」
「いいよ～」

ミレイユが割れかけたジョッキをテーブルに置いた刹那、ミレイユの姿がふと消えた。そしていつの間にかゼルドスの座っているカウンターの上であぐらをかいている。その直後、ミレイユの持っていたジョッキが完全に割れた。

「ひーふーみー。おっさんしけてんなぁ」
「俺の財布・・・いつの間に」

ゼルドスが懐に入れておいた財布を抜き取って、その中身をミレ

イユが数えていた。いくら敵意や殺気が無かったからといって自分が全く反応出来ないとは、ゼルドスには未体験の出来事だった。

「やるな、お嬢ちゃん」

「おっさんこそね。おっさんに酒が入ってなかったらこんな芸当はできそうにないよ。それにワタシの攻撃じゃ一発で倒せそうにもないし、スピードがばれたらワタシが不利かな？」

「よく言うぜ」

二人は見合ってニヤリと笑う。どうやら実力は互いに認め合ったようだ。ちょっとした余興に皆はさらに盛り上がったらしく、気分をよくしたミレイユは再び皆の輪に戻って行く。再びゼルドスはヴァルサスに向き直り、気になっていた質問をぶつけてみた。

「で、ヴァルサス。肝心の話だけどよ」

「ああ」

「こんなことをお前に聞くのも変な気がするんだが、お前・・・何を心配している？」

ゼルドスの真剣な質問に、ヴァルサスはかぶりを振った。

「それが俺にもわからん」

「おいおい、なんだそりゃ・・・だが気にかかることはあるんだな？」

「ああ」

ヴァルサスが火酒を置いて少し思いつめたような表情をする。

「根拠はあるのか？」

「ゼルドス。お前だから言うが、実はここ3カ月ほど俺は一人で行

動していてな。その間に魔王とおぼしき魔物を実に7体近く斬っている」
「何！？」

ゼルドスが大きな声を上げかけるのを、ヴァルサスが制する。

「7体だと？　いくらなんでも多すぎないか？　ギルドに報告は？」
「していない。最初は報告するつもりだったが・・・実はここ数年で魔王を狩るペースが異常に上がっている。しかもほとんどがギルドに報告されていないケースだ」
「ギルドは定期的に色んな土地を傭兵達に巡回させてるのに、んなことあるのか？」

ゼルドスが空になった酒の代わりを頼むのも忘れて、そのままさらに飲もうとしてやっとジョッキが空になっていることに気がついた。それほど動転していたのだろう。

「だが現実だ。考えられるのは魔王がここ数年で急激に発生しているということ」
「それこそありえないだろ。浄化は西でも東でもかなり頻繁に行われている。西では小国家群が小競り合いを続けているから魔王が育ちやすい土壌が多いとはいえ、そのペースは考えられんぜ」
「いや、こうは考えられないか？　魔王が発生しているのではなく、意図的に発生させられているとしたら・・・？」

ヴァルサスの言葉に、ゼルドスが目を見開く。

「それこそバカな話だ」
「いや、それにも根拠はあるんだ。以前は魔王と言えばなんらかの魔物が変異や老成をきたしたパターンが多く、魔物図鑑などで類種

を探したり、あるいはそのままの場合もあった。だが最近の魔王はなんというか、人の暗黒面を前面に押し出したような姿をしていると言えばいいのか。生理的に嫌悪感をもよおすんだ。強さはまださほどでもないんだがな」

「・・・そういやこの前うちの店で飲んでた連中がどうやら魔王を狩ったみたいな話をしてたが、どんな奴だったか聞いたら、相当気色悪い奴だったらしいな。もしかすると同類かもな」

「それが事実だとすると、俺の予感は当たるかもしれん」

ヴァルサスがグビリと火酒を飲み干す。

「どんな予感だよ？」

「これが手始めに過ぎんということさ。西方だけでなく中原でも同じようなことが起こるなら、いずれ南、東、北でも同じことが起こるだろう。いや、人通りが活発な南や東と違って、北では既に何らかの変化が起きているかもな。そうすれば再び大陸中を巻き込んだ戦争が起きる。今度は人対人の戦争ではなく、人と魔物の戦争だ。大戦期の再現だな」

「・・・やめてくれよ。お前の勘は当たるからな」

「知っていれば備えられる。と、言っても俺にはどうしようもないんだが。せいぜい団の皆に注意を促すくらいか」

ヴァルサスが空中をじっと見つめている。ゼルドスにはどうすればいいのかよくわからないが、ヴァルサスの予感が良く当たることだけは知っていた。

「お前の名前で国やギルドに注意を促せないのか？」

「俺には戦士としての名声はあっても、人を導く立場ではないからな。誰か俺の話を聞いてくれる、しかるべき人間がいればよいのだが。今となっては戦いばかりしていた自分の人生が恨めしいな」

ヴァルサスの懸念を深刻だと感じとったゼルドスは、苦肉の策を思いつく。

「・・・グルーザルドのドライアンにかけ合ってやろうか？」
「それもいいが、ドライアンに会う前に将軍達と喧嘩になるだろう？　元グルーザルド軍事顧問殿」
「それを言うなといいたいが、ちげえねぇ」

グハハと豪快に笑うゼルドスに、かすかに笑うヴァルサス。

「んじゃあどうすんだ？」
「とりあえずは報復をする。その時どんな奴らが出てくるかで、さらに確証をつかめるだろう。それ次第だが、とりあえずはできるだけ団の連中で固まって、国単位での依頼を受けようかと思っている。各国高官とのつながりが欲しい。いざというときのためにな」
「なるほど、妥当だろうな」
「ただ危惧しているのは、その行動が既に遅いのではないかということだ。まあそんなことを考えても仕方ないのかも知れんがな」
「そうか。まだ俺にもグルーザルドの軍部に知り合いがいるから、それとなく調べてもらうようにするよ」
「助かる」

ヴァルサスが真剣に悩んでいるのを見て、ゼルドスは彼の肩を拳で小突いた。

「まあシケた話はこんくらいにしようや？　今は久しぶりの再会を楽しもうぜ！」
「ふふ、そうだな。そういえばさっきのベッツの話は本当か？」
「おお、あたぼうよ！　他にも面白い話があってだな・・・」

そうやってブラックホークの夜は更けていく。こののち、彼らの勇名はヴァルサスの言うとおり鳴り響くこととなる。狩った魔王の数、1週間で実に8体。うち1体は大魔王に近いレベルの魔物であったという。

だが西方での魔王出現はブラックホークの活躍後も頻繁に聞かれるようになり、ヴァルサスの懸念は一足飛びに悪い方向で実現しようとしていた。

続く

ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク、その3～憂慮～（後書き）

次回はまた場面が変わります。違った視点からの話になるので、物語の主要人物たちが出揃うかな。

次回投稿は１１／１３（土）１２：００です。

暗躍、その1～黒の魔術士たち～（前書き）

～あらすじ～
ここは大陸のとある場所。ここに集合する者達とは・・・？

暗躍、その1～黒の魔術士たち～

「前回は森で、今回は廃虚ねぇ。うちの師匠は絶対陰気だね。なんでこんなにコソコソするかな」
「・・・しょうがないさ、世間一般常識から見たら僕達は悪だからね・・・」
「ですがしかし、我々は真にこの世界を憂えている」
「それならもっとイイ所で集合したらいいのに。どっかの宿場を貸し切るとか、一流料亭を貸し切るとかさ」
「静かに、師匠様のお出ましだよ」

ひそひそ話を続けていた少年3人、――いや一人の容貌は老人だが――と、紅顔の美少年はたたずまいを直す。そう、アルフィリース達は直接会ってはいないが、ダルカスの森に出向いていたあの4人である。

そしてその場に青年を伴い、音もなく入ってくる老人。青年はやせこけたと言ってもいいほどの頬のくぼみに加え、ギラギラした目つきをしている。高い知性を窺わせる容貌の一方、まるでなにかの中毒患者が依存物を切らせたように目が血走っていた。

そして老人は全員がまとうローブに加えフードを深くかぶり、表情が窺い知れない。だが彼の威厳はローブの上からでも十分感じることができる。身にまとう魔力からも、彼がこの集団の長であることは魔術士なら想像にやすいだろう。

と、後ろに控えた青年が4人に向けて質問を投げかけた。

「お前達4人だけか？」
「つーか、ボクは仲間が何人いるか知らないんですけど？」
「・・・女の人達がいないね・・・」
「そういえば三人ともいないね」

「ここにいますよ」

暗がりからすう、と大剣を2本背中に背負った長身の女性が姿を現す。彼女だけはローブではなく、男性が旅の時に身につけるような服装、いや襟つきの細身の服に加え、整っているがきちりとしたズボンをはいていることを見れば、さしずめ男装の令嬢といったところか。あまりの足音と気配のなさに全員が少し驚くが、彼女はいつもこうなので驚くことまで含めて慣れたものだ。

「師匠、集合に遅れたことを深くお詫びいたします」
「うむ。回収に手間取ったのか？」
「はい、ですが首尾は上々。まだ目標にはほど遠いことは重ねてお詫びせねばなりませんが・・・」
「よい、励めよ」
「ありがたきお言葉」

女性は一礼して下がり控える。下がる時に黒く長い髪がふわりとたなびき、なんとも見目麗しい女性だ。地面にも届くほどの長髪を、中ほどで赤いリボンを使い一つにくくっている。ドレスに身をつつめばどこぞの貴族令嬢と言われても何の違和感もないだろう。

「お久しぶり、『おネェ』。相変わらずお綺麗で」
「私はその呼び名をあまり好んではいないのですが」

明るい少年に『おネェ』と呼ばれた黒髪の女性が、ややむっとした表情で反論する。表情に乏しい彼女は、むっとすると言っても、せいぜい眉がぴくりと動く程度のものだ。

「そう言うなよ。うかつに俺達は名前を呼べないんだからさ。っていうか名前とか互いに知らない奴らの方が多いしね。だから特徴を

呼ぶしかないじゃん」
「他の二人は『姫』と『お嬢』と呼んでいましたか？　その『姫』からは言付けを受け取っていますが、お師匠様の元に届いているでしょうか？」
「いや、聞いておらん」

師匠はうっそりと答えた。その反応に何か思いついたのか、明るい少年が意地の悪い質問をする。

「へー、姫はなんて？　あ、ちゃんと正確に再現してよ？」
「・・・『仕事が忙しくっていけませぇん、お師匠様♪　お許しぉん』・・・だそうだ」

言った後でおネェと呼ばれた女性は顔を赤くする。気真面目と言うかなんというか。おそらく姫と呼ばれた女性も、この展開を読んでわざとそのような伝言にしたのだろう。活発な少年と老人顔の少年は腹を抱えて笑っているが、静かな少年に師匠や青年組は笑っていない。この黒髪の女性の実力を良く知る者なら、決してこんなからかい方をしようとは思うまい。
一方で師匠の後ろに控える青年は、額に青筋を浮かべていた。そして彼はおもむろに怒り始める。

「まったく、あの女はこの集まりをなんだと心得ているのだ！」
「よせ、ヒドゥン。あれは一番大きな仕事をしており、確かに手が離せん。後でワシが出向くことにしよう」
「お師匠が自ら出向かずとも・・・」
「よい、久しぶりに顔も見ておきたいしな」
「つーか、兄弟子様の名前って『ヒドゥン』なんだ？　初めて知ったよ」
「僕もだよ」

「私もです」
「・・・ボクは付き合いが長いから知ってたけど・・・それでも久しぶりに聞いたな・・・」

周りは兄弟子の名前を知ったことに関心を示しているが、当のヒドゥンは苛立ちが治まってないようである。その時、さらに彼を苛立たせる要因が高笑いと共に部屋に入ってきた。

「キャハハハ！　遅れま～したー！　ごぉめんなさぁい、お、し、しょうサマ～。キャハハハ！」
「げぇ、『お嬢』だ」
「・・・あの子は苦手だ・・・」
「得意な人などいないと思いますが」
「兄弟子様、血管切れるんじゃないの？」

彼らの心配通りヒドゥンの青筋がさらに浮き出るが、このお嬢と呼ばれた少女――外見上は少年達よりさらに年齢が小さく見え、金髪の縦ロールに、ローブではなくいやにひらひら・ゴテゴテした華美な服を着ている――は、到着するなりヒドゥンの周りを観察するようにくるくる回りながら、さらに致命的な一言を発した。

「ねーねーヒドゥン～、ちょっと髪が薄くなった？」
「げっ」
「・・・ああいうの、『空気が読めない』って言うんだっけ？・・・」
「いくら僕でも、あそこまでやれない」
「フ、フフフフ・・・」

周囲が嫌な予感にじりじりと後ずさりを始める中、ヒドゥンが一人変な笑い方を始めた。その周囲では、さらにお嬢が彼の苛立つ様

子を楽しむかのようにくるくると彼の周りを回る。このままでは、遠からずヒドゥンは憤死するだろう。そこで、あたふたと他のメンバーが話題を変える。

「そ、そういえばあのデカブツはいないの？」

明るい少年が、ぽんと手を叩いて話題を変える。

「えーと、『バカ』だっけ？」

「・・・ひどい呼び名だな・・・」

「彼なら来る時様子を見てきましたが、寝てましたよ？」

「・・・それは本物のバカだね・・・」

静かな少年が呆れたようにため息を一つついた。そんなおかしなやりとりを見ながらも、師匠と呼ばれた男は冷静に言葉を紡ぐ。

「よい、奴は後で起こしに行くことにしよう。奴にはやってもらいたい仕事があるからな。報告があるものは受けるが、皆いかがか？」

「それじゃあ～、ア・タ・シ☆からぁ～」

『お嬢』と呼ばれた少女は間延びしつつも、実に調子のよい口調で答える。

「お師匠様のいいつけ通り、この大陸での拠点作りは終了しました～。予定より2カ月以上早いですけど～、良かったですかぁ？」

「うむ、早いに越したことはない」

「大変だったんですよお～？　部下はこき使いすぎて過労死するし～、関わった奴らは口封じのため皆殺しにしなきゃいけないし～。御褒美としてぇ～、余った時間はバカンスしたいんですけどぉ～、行ってもいいですかぁ？」

「・・・まあよいだろう。許可する」
「やっっっっったぁぁぁぁぁ～お師匠さま太っ腹～！　お腹はでてないけど～！」
「あの子、いつも一言多いな」
「・・・めんどくさい・・・」

お嬢は師匠の周りをまとわりつくように跳ねまわっている。余程バカンスが嬉しいのか。だが、そのバカンスがろくでもない内容なのはここにいる全員が知っている。どうせ血の雨を降らせるバカンスとなるのだろう。彼女が遊びに来る地域の生物にはたまったものではない。
お嬢がけらけらと笑う声が室内に響くが、彼女を無視するかのように静かな少年が口を開く。

「・・・そういえばお師匠様、質問が・・・」
「なんだ」
「・・・最近ボク達くらいの歳に見える子が仲間に入ったと聞きましたが？・・・」
「うむ。まだわし以外は会ったことがないはずだな。一度連れてこねばとは思っているのだが」
「新米なんだから先輩達に挨拶ぐらいしろってーの」

明るい少年が地面を蹴りながら文句を言った。

「今までは貴方が一番後輩でしたものね」
「君は先輩風をむやみに吹かせそうだな」
「はん！　否定はしないね。せいぜいこき使ってやるさ」
「貴方に使われるほど間抜けではない」

今度は全員が虚を突かれ、はっと息をのむ。ここにいる全員が、

その存在を感知していなかったのだ。そして何もないはずの部屋の隅の暗がりから、少年が姿を現した。黒髪、黒いローブ、黒い瞳。インナーまで黒だ。真正の暗黒魔術士を思わせる装いに対し、いやに優しげで貴族的な整った顔立ちが逆に不気味さを醸し出す。

少年は黒い瞳を全員に向け、彼らを一通り観察すると、興味は失せたとでもいいたげに顔をそらした。その態度が気に食わなかったのか、明るい少年が喰ってかかる。

「おい、いつからそこにいた？」

「最初から。さすがにいつまでも挨拶しないと、師匠殿の面子を潰しっぱなしになってもまずいと思ったもので。だがしかし私が一番に来ていたけども、誰も私に気づかないとはね。多少たるんでるんじゃありませんか、皆様？」

「こいつ・・・！」

にわかに活発な方の少年が殺気立つ。だが新しく現れた少年は相手にする様子もない。

「やめよ」

師匠が一喝すると活発な少年はしぶしぶ殺気をひっこめるが、表情は今にも飛びかかりそうな程苛立っていた。

そんな彼を気にする様子もなく、純正の黒の少年は師匠と呼ばれる男に向き直る。

「では師匠殿、もう顔見せも済んだので私はこれで。やることが山積みですから」

師匠の返事を待たずして闇の中に姿を消す少年。このメンバーをして、彼の態度には全員が呆気にとられている。

「なんだアイツ」
「失礼千万な新米ですね」
「ムカつくよね～子どものくせにさぁ！？　キャハハハ」
「・・・お嬢がそれを言うか・・・」
「お師匠様、よろしいので？」

ヒドゥンが師匠に尋ねるが、師匠の方は別に何の感情も抱いてない様子だ。が、ふぅ、と一つため息を小さく漏らした後で全員に向き直る。

「・・・全員聞け。あやつが加入したことでこれ以上メンバーが増えることはあるまい。これを持って計画を次の段階に移す。アノーマリー、現在の魔王の制作状況を述べよ」
「はい」

進み出たのは醜い老人。魔王制作者（サタンメーカー）と呼ばれた彼である。

「現在僕の工房にて、すぐにでも稼働できる魔王の数は１４０を超えております。制作中の個体を考えれば１０００体はあるかと。ただ」
「ただ？」
「いくらか問題もあります。まず魔王に多様な嗜好性を持たせることに成功した反面、行動パターンにばらつきがあります。よって個体の能力に関係なく、成果に関してはかなり誤差がでるのではないかということ。それを補うためには我々のような指揮官が必要でしょう。またスペックがどのように高くとも、誕生時はレベル１。運用までに戦闘経験をいくらか積ませる必要があるでしょう。それに」
「まだあるのか？」
「残念ながら。仮に１０００体同時に運用する場合、その配下とな

る魔物が足りません。ゴブリン・オークなどを積極的にとらえてはいますが、それぞれに１００体部下として配備するにしても１０万を超えます。とてもその数を捕獲・管理しておくのは場所的にも資産的にも厳しいかと。ただこれに関しては代案を既に考えております。実験が必要ではありますが、なんとか形にできそうかと」

「ふむ・・・」

山積みの問題に師匠は少し頭を悩ませたが、彼は頭がめまぐるしく回転し、すぐに対応策を考え付いてゆく。むしろ、彼の中ではもう何年も考えつくした計画である。実に様々な局面、状況を考え抜いているのだ。

「その代案にかかる期間は？」

「実験の進み具合にもよりますが、１年は最低みてほしいかと。あくまで完成品が出来上がるまでの時間、ということでですが」

「よかろう。ちなみにアノーマリーよ、お前が意図した嗜好性を魔王に持たせることは可能か？」

その質問に、待ってましたと言わんばかりに老人がニヤリとする。

「まだ魔王制作の法則の理解が完璧とは言えませんし、それは無理でしょう。ですがかなり法則はわかってきているので、およそ８０％は意図通りのことができるかと」

「ならば、そろそろ相手方の戦力を正確に把握しておきたいな。加えて万全を期して、魔王２０００体まで生産をしよう。工房の確保は・・・」

「はいはーい！　それはア・タ・シ、の仕事～キャハハハ！」

「それでは資金・資材の調達は私が」

「・・・素材の調達は僕が・・・」

次々と各自が仕事を申し出る。

「よかろう。ヒドゥンには別にやってもらうことがある、よいな？」
「はい。と、おネェの方はいかがいたします？」
「お前は引き続き自分の仕事を行うがよい」
「御意」

黒髪の女剣士は優雅に一礼する。

「ドゥーム、貴様にもやってもらうことがある。私に同行せよ。ヒドゥンもな」
「あいよ」
「はい」

ドゥームと呼ばれた活発な容姿の少年とヒドゥンが返事をする。

「ではこれで一度解散とする。ドゥームとヒドゥンは残れ。後の者は定期的に進捗状況を私に報告すること。では皆、『世界の真実の解放のために』」
「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

その言葉を合図にそれぞれ次々と部屋から姿を消していく。そして残る師匠、ヒドゥン、ドゥームの3人。

「で、お師匠様。どうするの？」
「まずはあのバカ者、『百獣王（ビーストマスター）』を起こしに行く」

その言葉と同時に3人の姿がゆらめき、そして部屋から消えた。

続く

暗躍、その1～黒の魔術士たち～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

なろうは一話ごとに評価や感想が打てないのがしんどいところですよね。話の途中でも感想があれば筆者としては嬉しい限りなんですが。

次回投稿は１１／１４（日）９：００です。

暗躍、その2～眠れる獅子～（前書き）

～あらすじ～

誰にも知られず策を練る魔術士達。彼らが起こそうとしている百獣王とは・・・？

暗躍、その2～眠れる獅子～

＊＊＊

「ぐごー。んごー」

ここはどこかの洞穴の中。かなり奥深く、暗くてジメジメした場所であり、魔物・魔獣や奇妙な虫などが出没する場所である。ここはかなり危険な場所とされ、人間はおろか亜人種や獣人の姿・集落も近辺にはない。そんな洞穴で大いびきをかきながら寝ている大柄な男。髪の毛やひげも伸び放題で、まさに獅子のような風体だ。その無防備な姿は恰好の獲物にしか見えないが、なぜか魔物や虫が彼に近寄る気配はない。そんな彼の近くに、何の前触れもなく3人の姿が突如として現れた。

「うわー、本当に爆睡してるわ」
「まったくだらしのない」
「・・・起きろ、百獣王。ドラグレオよ」
「ぐごごごご」

師匠と呼ばれる男の言葉にも、ドラグレオと呼ばれた男は一向に起きる気配がない。むしろいびきが大きくなっており、実に気持ちよさそうに寝ているのだった。

「こいつ大丈夫か？」
「師匠、少々手荒になってもよろしいでしょうか？」
「いいだろう」

するとヒドゥンはおもむろに何か魔術を唱え始め、突然目の前に

火球を打ち出した。下級が炸裂する轟音と共に、目の前で燃え盛る炎。視界が爆発の煙で全くきかない。

「兄弟子様、それ無茶苦茶じゃない！？　死ぬでしょー？」
「・・・この程度で起きてくれれば苦労はいらないのだがな」
「え？」

ドゥームが目を凝らすと、徐々に薄くなった煙からドラグレオの姿が見える。どうやら彼は無事のようだ。というより、この至近距離で何の防御もなく魔術を喰らって無事なのは、おかしいんじゃないかとドゥームは思うのだが。しかしさらに驚愕だったのは。

「ごー、ごー」
「ウッソォ、まだ寝てる」
「ちっ、このぐうたらめ」
「もう、これをぐうたらと呼んでいいのかどうかもわからないけどね」

ドゥームが呆れたように寝続けるドラグレオを見る。

「・・・2人とも構わん、もっと派手に、殺すつもりでやれ。命令だ」

ドゥームとヒドゥンは思わず師匠を見たが、命令と言われれば仕方がない。

「じゃあ、この洞穴ごとブッ飛ばすつもりでやってみるよ」
「お師匠様の命令とあれば」

そして2人は魔術を連続で使い始めた。凄まじい爆音や衝撃が当

たりに響き、洞穴にいた魔物や魔獣が慌てふためいて逃げ出していく。まさに洞穴を崩壊させる勢いだ。というより、実際に崩壊が始まっていた。だが崩れ落ちる岩盤もお構いなく魔術を連発していく2人。そしてヒドゥンの放った特大の一発が、ついに洞窟を反対側に突き破り、空いた穴からは陽光が射してくる。

「ハァハァ・・・」
「ゼェゼェ・・・どうだ？」
「・・・」

その様子をじっと見守っていた師匠と呼ばれる男が煙を注意深く見つめると、むくりと起き上がる人影がある。

「くぁ～～～～、よく寝たな。おお、今日もいい天気だ」

ドラグレオは何事もなかったかのように起きていた。そして爽やかな朝を迎えたかのように、背伸びをしている。その様子にぐったりとするドゥームとヒドゥン。

「なんだアレ。あれだけ魔術を受けてダメージ無いっての？」
「相変わらずのタフさだな」

呆れる二人を尻目にひとしきり背伸びを終えた後、なぜか再び横たわるドラグレオ。まさかの二度寝である。

「寝るなー！！！！」

これにはさすがに怒ったドゥームが巨大な氷の塊をドラグレオに向けて発射するが、ドラグレオは背を向けたままそれを鷲掴みにする。

「んなっ？」
「なんだ騒がしい・・・む！？」
ドラグレオがようやく彼らに気付いたようだ。ようやく気付いたかと全員が安堵するが、その口から発せられた言葉は、さらに意外なものであった。
「全身が・・・いてぇよぉおぉぉぉぉ〜！？」
あまりのドラグレオの反応に、ドゥームが思わず滑っていた。
「いや、遅いだろ！？　このバカが！」
「オレはバカじゃねぇぇぇぇ！」
ドラグレオがドゥームを睨む。そのほとばしる殺気に思わず身構えるが、
「オレは・・・アホだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
凄まじい咆哮が当たりに響き渡り、その衝撃で洞穴の外にある木々がたなびいている。鳥や動物が一目散に逃げていくのがわかるが、凄まじく無駄な咆哮な気がする。ドゥームはなんだかもうどうでよくなってきていた。魔術を連発した疲労が倍になって襲ってくる気がする。隣のヒドゥンの青筋もまた増えていることだろう。だがそんなドゥームを気にかけず、師匠と呼ばれる男は淡々とドラグレオに問いかけた。
「久しいな、ドラグレオ」

「!?　これは!」

ドラグレオがなぜかその場で正座をする。これで全てが円滑に進むのかと、ヒドゥンが安心した瞬間。

「えーと・・・誰だ?」

今度はヒドゥンが滑っていた。だが、師匠と呼ばれる男はかすかにローブから見える口元に笑みを浮かべただけである。

「本当に相変わらずだ。わしはお主と誓約を結んだ魔術士だ。貴様も魔術士なら覚えているだろう?」

「・・・・・・・・おお!　お師匠様ですな!?　ですが久しいというのは違うでしょう、昨日会ったばかりではないですか」

「前回貴様が寝てから、既に5年は経っているのだが?」

「・・・はっはっは!　まあ細かいことは気になさりませんよう!」

ドラグレオが多少気まずそうなのを笑ってごまかした。全然細かくないだろうとドゥームは思ったのだが、「考えるだけ疲れるからやめておけ」とヒドゥンに目で諭されたので、ここは素直に忠告を受け取ることにした。その間にも2人の会話は続いている。

「貴様にやってもらいたい仕事がある」

「力仕事ならお任せあれ!」

「むしろ力仕事しかできんだろうが」

「うわはははは!　これは師匠に一本取られましたな!」

ここにおいてドゥームは一つ理解した。この男にいちいち突っ込んでいたら自分の身が持たないことを。

「（兄弟子様、俺達は一応魔術士の集団のはずなんだけど、あの脳筋にも魔術は使えるの？）」
「（らしいな。私もどんなものかは知らないがな）」
「（全く使えそうにないけど）」
「（だが実力は確かだ）」
「（そうなの？）」
「ドゥーム」
「へぇ？」

どうやらいつの間にかドラグレオには説明が終わったらしい。ヒドゥンとのひそひそ話に熱中していたドゥームは思わず変な声を出してしまった。

「何を間の抜けた声を上げている。次は貴様に仕事を伝える」
「あ、はいはい！」
「まずは封印の回収だ。これは回収後、貴様が自由に使ってよい。むしろ貴様にしか使えないだろうしな」
「？　いいけど」

不思議な内容の仕事に、ドゥームは首をかしげる。

「その後、貴様にはある勢力の戦力を確認してきてほしい。今回はあくまで確認であり、危ないと思ったら退くこと。どこまでやるかは貴様の判断に任せる」
「・・・ということは、相手次第では全滅させてもいいんだ？」

ドゥームが陰惨な笑みを浮かべた。師匠と呼ばれる男も、挑戦的に笑みを作る。

「できるものならな」

「で、標的は？」
「アルネリア教会とその教主ミリアザールだ」
続く

暗躍、その2～眠れる獅子～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

次回投稿は本日１１／１４（日）１４：００です。

深緑宮の日常（前書き）

～あらすじ～

アルフィリース達が冒険を続ける間、ミリアザールと、彼女に預けられたチビ達はどうしていたかというと・・・？

深緑宮の日常

チ、チ、チ・・・

モーイ鳥がさえずる音が聞こえる。渡り鳥であるモーイ鳥は晩秋から初春にかけて南の方へ移動し、本格的な春が訪れると大陸中央に帰ってくる。そしてつがいのいる個体はこの時期に子どもを産み育て、いないものは春には自分のつがいを決める。夏にさしかかる今の季節は既に卵からかえった雛が餌をひっきりなしに要求し、忙しく親鳥が飛びまわる時期である。そのためせわしなくモーイ鳥がさえずり、連絡を取り合っている。

ここ聖都アルネリアにあり、アルネリア教会奥の宮殿である深緑宮は、その名の通り緑をふんだんに取り入れた構造をしている。緑は中庭の噴水や各所の柱といった色合いとしてだけではなく、実際の自然も多く取り入れており、その木々を鳥が巣とすることも多い。またアルネリア教のお膝元ということもあり、浄化が世界で最も行われている場所でもある。そのため安全性も非常に高く、大人しい動物達が好んで集まってくる。またここまで浄化が進んでいると、攻撃性自体が多少なりとも治まるとも言われるのだ。

そのような美しい場所で聞こえてくるのは、なぜかミリアザールの悶絶の声であった。

「ミリアザール様、こちらの書類にも決をお願いします」
「市長が面会を求めておりますが」
「ねーねー、ぺったんこ～遊ぼうよ～」
「いっぺんに言うなぁぁぁぁぁ！」

アルフィリース達と別れた後、ミリアザールは陸路にてジェイク達を連れて帰った。本当は転移魔法を使って帰った方が早かったの

だが、子ども達の人数が多すぎてミリアザールが1人で運ぶには定員オーバーであり、またお忍びである自分が各教区の司祭達の力を借りるわけにもいかない。それに多くの司祭は彼女が最高教主であることすら知らないのだ。

そのため彼女はやむなく陸路で帰ったのだが、かなり急いだにも関わらず、ほぼ東の沿岸にあるアルネリアまでは1カ月以上がゆうに経過していた。

幼い子を連れて帰るのはミリアザールにとっても久しぶりで楽しい半面、途中でルースが迷子になったり、ミルチェが熱を出したりと大変であった。そんなこんなでくたくたになって帰ってきたミリアザールを迎えたのは、机の上に高くそびえる仕事の山。公式には彼女は病気ということにしてあったが、積み重なる仕事の量は当然のごとく変わらない。一ヶ月間たまりにたまった仕事が、彼女の悶絶の原因であった。

元が魔物のミリアザールはあまり眠らなくても平気なのだが、旅の最中に子ども達が一緒に寝てくれとせがむもので、すっかり睡眠リズムが子ども寄りになってしまい、夜が眠くて仕方ない。さらに昼間は主にミルチェやルースあたりが遊んでくれとまとわりついてくるので（ジェイクやネリィは忙しいのを察しているようで遠慮するが）、おかげで仕事のはかどりもイマイチである。

そういった理由で、このところ頭を抱えて悶絶するミリアザールの尻をひっぱたいて仕事をさせるのが、普段は女官として傍に仕える栂子の仕事となっていた。

「ぐぅぅぅ～。仕事の量が多すぎるぞぉ～」

「自業自得です」

「とはいえこれだけの量を、なぜそんなに急いで片づけねばならんのじゃ」

あまりの仕事量に、ミリアザールが手を動かしながら文句を垂れる。

「ミリアザール様が東とも魔術教会とも連絡を取りたいと、贅沢を言ったからでしょう。関係資料を収集した結果、そうなっているのです。また今回は聖都アルネリアが現在の場所に移されてから４００周年。そのための記念式典がこの秋に行われますので、その準備が差し迫っているのです。各国の王族・公爵にも連絡を取らねばなりませんし」

「誰がそんなめんどくさいことを取り決めた？」

「１３年前に、あなたが大司教達との会食の席で呟いたではありませんか。それをマナディル大司教が形にされたのですよ。まあ要は貴方が発端です」

「あんの３バカめ・・・そういうところだけはしっかりしておる」

頭の禿げた頑固大司教マナディルが脳裏に浮かぶ。マナディルが大司教になる前、将来を嘱望されたイケメン僧侶として既に名前の上がることが多かったマナディルをミリアザールは見に行ったことがある。まだ当時の彼は司祭にもなっていなかったが、多少からかってやろうといういたずら心もあり、当時若い姿をしていた自分は夜にこっそり部屋に忍び込んだのだ、しかも少し男の情欲をそそる格好をして。

マナディルはその時なにかしら勉強をしていたようだが、自分の姿をみるなり顔を真っ赤にしてあたふたしていた記憶がある。確かに精悍な顔つきをしており、またその姿があまりにも可愛かったので思わず自分の身分をばらしたが、それを聞くなり今度は別の意味で顔を真っ赤にして怒りだした。なぜか最高教主である自分が正座をさせられて説教されたのだ。それが今や口うるさい頑固ハゲであるから、何かいたたまれないものを感じるミリアザールであった。まあ自分に遠慮なく物を言う彼は嬉しくもあり、鬱陶しい時もある

のだが。

「（そういえば今の大司教達は全て若いころに会っておるな・・・反応も三者三様であった。ドライドとはそのままアルネリア教のあり方について夜を徹して語り明かしたし、ミーナスの奴はこともあろうにワシの造形になぞ興味がないとぬかしおった。だがワシと出会ってから、全員急激に頭角を出し始めたな）」

本人は全く気が付いていないが、ミリアザールと少し話せば彼女がいかに社会全体のことを考えているのかが自然と知れるのである。自分達の集団だけでなく、社会全体を考えるさらに大きな視点、かつそこに属する者達一人一人のことも気遣う小さな視点。そういった者が自分の属する集団の長にいるというのは、非常に下に仕える者をやる気にさせる。しかもミリアザールは完璧なようでいて、どこかすっとぼけたところもあるので、余計に下の者が支える気にさせるのだ。要は指導者向きの性格なのである。本人に自覚はないが、それがまたよいのかもしれない。

ミリアザールが少し物思いにふけろうとした瞬間、ダン！　と新たな書類が目の前に積まれる。

「さあさ、物思いにふける暇などありません！」

「トイレくらいは行ってもよかろう？」

「ダメです。トイレは一日三回まで」

梔子が指をゆっくりとミリアザールの目の前で横に振る。

「貴様は鬼か！？　膀胱炎になるわ！」

「我慢できないようでしたらオシメをつけて仕事をしてください。仕事の忙しい医師などはそういう人もいるようです」

「ほとんど都市伝説じゃろうが！」

「ぺったんこ、オシメしてるの??」

悪意のない目で質問をするのは、ミリアザールの部屋で遊んでいるミルチェである。

「おもらしとかまじでださいよ~。そういうの、『百年の恋も冷める』っていうんだぜ?」
「なぜションベンくさい貴様らに、そんなことを言われねばならんのじゃ?」
「子どもに汚い言葉づかいはやめてください」
「それにもうすぐションベンくさくなるのはそっちだろ?」

栂子の一言に、合いの手を打つように部屋に入ってきたのはジェイクであった。手には練習用の木剣を携えている。

「誰が漏らすかぁ!」
「んなことよりもさ、アルベルト借りていい?」
「自分から振っといて無視か!? まあ別に構わんが、また稽古か」
「ああ、リサ姉に約束したからな。まずはアルベルトから一本取れるようになってやる!」

その一言にミリアザールと栂子が顔を見合わせる。まずは、が最終目標にも近い気がするが、それは言わないでおく。アルベルトもジェイクには見所がありそうだと言っていたし、どうやら魔術も使えるようになりそうらしい。

「ところで、貴様の愛しのリサ達から手紙が届いているが、読むか?」
「・・・まだ難しい字はあまり読めない・・・」
「愛しのは否定せんのか。まあ仕方ない、ではワシが読んでやろう」

まわりのお付きの女官達はやれやれといった顔で見ているが、さすがに目をキラキラさせて楽しみにしている子ども達を止めるわけにもいかず、諦めている。いつの間にか他の子ども達もアルベルトも集まってきていた。

「では読もうかの。なになに、『拝啓、ぺったんこババアへ』・・・キーッ！！！！」

「・・・フ」

「落ち着いてください、そこまでぺったんこではないですから」

「ババアはいいんかい！」

そのやりとりを聞きながら、子ども達は転げまわって笑っていた。ミリアザールの周りは最近ずっとこんな調子だった。

手紙には、アルフィリースからは様々な手配に対する簡単な礼と、ミランダからの近況を伝える内容、そしてリサからは子ども達一人一人に対してメッセージがしたためてあった。リサは目が見えないから、ミランダが代筆したようだ。

最近の彼女達は、どうやらフェンナの依頼を果たした後、進路を中央街道に向けている。手紙によれば、フェンナをシーカーの一番大きな里まで送り届けるらしい。詳しい場所については言及されてないが、手紙に書くことに危険を感じたのかもしれない。ただ、その後アルネリアにも寄るつもりではいるらしいので、詳しくはその時に話すつもりとのことだった。まあ、実は口無しにこっそり見張らせているので、ミリアザールは彼女達がどこでどうしているなど、全て知っているのだが。

その時、ミリアザールはぴくりと気配を感じた。敵かと一瞬緊張を高めるが、深緑宮奥深くまで誰にも気づかれず潜入することなどありえない。敵意のない所を察するに使い魔のようだが、この宮殿にめぐらしてある結界を抜けて使い魔を出してくるとなると、自ず

と使用者は限られる。

「アルベルト、ジェイクと剣の稽古に付き合ってやれ。ジェイク、チビ共を連れて行って来い。ワシは仕事があるでな、ちと集中したい」

「ああわかった。大丈夫なの？」

ジェイクが意味深な目をこちらに向ける。彼はセンサーではないのだが、長らくリサの傍にいたせいかかなり勘が強い。時々まだ１０歳とは思えないような冴えを見せる。

「心配はいらん」

「ん。皆いくぞ、ぺったんこの邪魔しちゃだめだ」

「えー」

「ミルチェ、贅沢言わないの」

「タッドも今日は遊んでもらうっていってたのに～」

「クエスだってそうだよ～」

「ほら行くよ！」

最後はネリィに促されて全員出て行った。残ったのはミリアザールと梔子だけである。

「・・・もうよいぞ、入ってこい」

「久しぶりだね、ミリアザール」

入ってきたのは喋る小さな青い鳥であった。ミリアザールの察する通り、使い魔なのだろう。

「使い魔で結界を抜けてこんでも、他にも色々連絡の仕方はあるじゃろう？」

「最近は君のところ以上に僕の部下も信用できなくてね。苦肉の策さ」
「魔術教会の長も楽ではないか、テトラスティン」
テトラスティンとミリアザールが名前を呼ぶと、自嘲気味に笑う声が鳥から聞こえたような気がした。
「そういうことさ。僕からも連絡したかったんだけど、なかなかね。でもそうも言ってられなそうだからちょっと無理してるのさ。でもやはりこちらは身動きが取れないし、出来れば君が僕の所まで来てくれると嬉しいな」
「確かにワシらの教会にヌシが来るのはまずいかもな。では近々ワシが行くとしよう。まずはこの書類をあらかた片付けてからじゃがな」
「君も大変だ。本当は今話をしてしまいたいけど、どこに目や耳があるかわかったもんじゃないし、久しぶりに君に直に逢いたいな。おいしいお茶と菓子を用意して待ってるよ」
「ワシは菓子はともかく茶にはうるさいぞ？」
「はは、わかったよ」
そういって鳥はざぁ、と姿を崩し何かの粉に戻る。だがその粉に戻った場所がまずかった。先ほどミリアザールが文章を書いて捺印した書類の上だったのだ。
「あああ、書類が粉まみれに。元に戻るのも場所を考えいよ、まったく。じゃが、どうやらさらに忙しくなりそうじゃな・・・ふぅ」
と、一つため息をついたミリアザールであった。

続く

深緑宮の日常（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

間話ということでもう１つ今日中にいってみましょう。

とういうわけで次回投稿は本日１１／１４（日）２０：００です。

旅の間に（前書き）

～あらすじ～

ダルカスの森を離れたアルフィリース達は、フェンナをシーカー最大の集落に連れていくため画策するも、それは果てしない道のりだった。それに災難も重なって・・・？

旅の間に

＊＊＊

その頃、アルフィリース達は何をしていたかと言うと・・・

一文無しになり、酒場で働いていた。

アルフィリース・リサはギルドで仕事を受けることができたが、ニア・フェンナ・ミランダは立場上ギルドに属するわけにもいかず、泊っていた宿で下働きをしていた。なぜこんなことになったかというと、数日前のことである。

その日、アルフィリース達はフェンナをシーカーの他の仲間に送り届けるため、大草原を目指していた。大草原というのは、東に向かうための中央街道と北の街道の間に広がる広大な草原のことである。むしろこの草原を避けるために、２つの街道が発達したと言った方がよかったかもしれない。

馬で急いで抜けても最短でゆうに一カ月はかかるといわれるこの土地は、従来魔王達が好んで占領地としていた。広いだけではなく森も深く、また不思議な磁場があるのか草原でありながらも迷いやすく、また魔獣や魔物も異常に強く、まさに草原でありながらも魔境と化していた。魔王達が滅んだ後もこの土地は国家間の緩衝地帯として機能し、また少数民族や国を追われた犯罪者が逃げ込む場所の１つとなっており、占領しても魔物やそういった民族の襲撃が相次ぎ、土地の維持が割りに合わないとのことからいつしか放置されるようになった。

だが逆にこういった所からは様々な珍しい素材が採れることも多く、また魔物・魔獣も実に多種多様に出現するため、ギルドの依頼

や腕試しのため大草原に入る者は絶えない。噂では草原には主と呼ばれる魔物や、旅人を助ける風の精霊がいるらしいが、誰も生きてその姿を見た物はいないとされる。それだけ神秘的だともいえる場所である。その中の一角にフェンナの仲間達は一大拠点を構えているのだそうだ。そこにはフェンナはまだ目通りをしたことはないらしいが、５０００を超えるシーカーが暮らしているらしい。

話を元に戻すと、アルフィリース達は大草原に入る手前で買い出しをするため、町で色々な品物を物色していた所、ミランダやリサは各所で日用品を値切るのに必死で、アルフィリースは武器の調達、ニアは食料の見積もりに出かけてた。そしてフェンナは、やはり彼女の容姿を考えると人目につかせにくいとのことから、宿で荷物と一緒に留守番させたのがまずかった。どうやら宿に流れの商人が泊っていたらしく、フェンナは上手いこと騙されて、実に色々な物を買わされていた。余分なお金もフェンナに管理させていたため、まさに商人にとってはカモがネギをしょって歩いている状態だったのである。

フェンナがしっかりして見えるためついついアルフィリース達は忘れていのだが、よく考えるとフェンナは一度もシーカーの里を出たことが無く、超がつくほどの世間知らずである。金銭感覚などあろうはずもない。しかもフェンナは無類の宝石・光り物好きであり、アルフィリース達が揃って宿に帰った時、最高の笑顔と共に「皆さん見てください、とてもきれいでしょう！？」と宝石を見せびらかされた時は全員が思わず荷物を落としてしまった。まさか５人分×２カ月の旅行費用を一瞬で全て使われるとは。

なお悪いことに、その宝石は全てイミテーションであった。フェンナに目利きができないわけではないのだが、彼女はは変わった材質の宝石だくらいにしか思っておらず、どのくらいの価値があるのかはわかっていなかったのだ。だが、アルフィリース達大方の予想通りに宝石は質屋でも二束三文の値段しか付かなかったため、その

日の宿代すら払えなくなったアルフィリース達は、宿の主に頼んで働き口をもらっている、というわけである。

「う〝ぁ一！　なんでアタシがこんなことしてるんだー！？」
「いや、この窓を拭く動作は中々修行になる」
「何の修行方法だ！」
「でもこの『メイド服』というものは、私はかなりお気に入りです。服はできるだけ着たくないのですが、これはひらひらしていてかわいいですし」
「なんで店長はあんなにノリノリかな・・・」

働き口を申し出た時にすっかりミランダを気に行った店長は、「せっかくだから」ということで女性用の衣装を新調していた。どうやら昔、自分の嫁がさる貴族の家にメイドとして奉公していた時に着ていた服らしく、その服を着て働く彼女を見て当時の店長は一目惚れし、結婚を申し込んだとかこまないとか。いやにスカートが短い気もするし、なぜメイド服が3着もあってそれぞれにサイズがぴったりなのかが不思議だが、「死んだ妻にそっくりだ・・・」などと店長に目を潤ませられれば断りづらかった。無理を言っているのはアルフィリース達も承知の上だったので、余計に贅沢は言えなかった。

そしてニアやフェンナにメイド服なるものを着せてみると、これまた似合う。ニアは種族的に猫耳なわけだし、フェンナは一般的にはダークエルフとはいえ、抜群のスタイルの持ち主だ。その状態で1階の外の客が来る食堂でも働くわけだが、受け入れられるのは意外に早かった。ただ、客が時々「萌えー！」とかよくわからない言語を発しているのが気になるミランダだった。

その中でニアが一番ノっている。どうやら女性としてちやほやされるのに慣れていないらしく、

「ニアさーん！　こっちも早く注文ー！」
「待て、今行く」
「ニアさんって、可愛いですよね～」
「わ、わ、私なんかがそんなに可愛いわけないだろう！」

などと言って真っ赤になっているが、その反応がもう十分可愛らしい。客も要領を得ているらしく、仕事が終わるころには、おだてられすぎて高熱を発してるんじゃないかというくらい火照りきったニアを見ることができる。

フェンナの方は裁縫が得意なのか、勝手に自分で服をアレンジし始めた。やたらスカートが短くなってるし、胸元が開いて露出も増えてるような。そういえばエルフは元来あまり服をつけるのを好まず、薄着一枚の種族も多いとアルフィリースは聞いたことがある。フェンナも最初の頃は、風呂上りにそのままローブ一枚で人前に出ようとして、慌てて皆で止めたものだ。彼女には羞恥心から教えるべきかもしれない。

どちらにしろ、「この2人を引き連れて店を出したらバカ売れしそうだな」とか、くだらないことをミランダが考えているその頃、アルフィリースとリサはギルドで仕事を探していた。

「どうリサ、そっちの稼ぎは？」
「人口5万程度の町では大した依頼もありません。もともと貴族階級などとは無縁の町ですから。センサーとしての依頼も少ないですね。大草原周辺部の町なら多少様子も違うでしょうが・・・」
「私もよ。ここも安全な街だし中継地点だから、ほとんどが輸送とか護衛の依頼ね。大きな依頼もないし、ここに留まったままできる依頼も少ないわ」
「アルフィのランクが低いからでは？」
「ぐっ、それに関しては反論できないわね」
「とはいえ、無い物ねだりをしても仕方がないですね。ヤレヤレ、

魔王を狩ることのできるEランクなど聞いたこともないですが」
「そんなこといわれても～」

二人で頭を悩ませているとそれを見かねたのか、ひげにパイプをくわえたいかにも人のよさそうなギルドの主人が声をかけてくれた。

「お前さん達、お金がないのかい？」
「うん、実は・・・」

アルフィリースは、かくかくしかじかの理由を話す。

「うーん、それならこんな依頼があるんだけどな。俺は眉唾だと思ってわざと掲示してないんだ。なんだか怪しくてな」
「どんなやつ？」
「これなんだけどな」

ギルドの主人が紙を開いて見せてくれた。

「どれどれ・・・『ダンジョン探索人員公募。１人報酬５００ペント／日、ランク規定なし、移動費・食費・武器代も請求してください、報酬の２割まで請求可』・・・無茶苦茶待遇よくない？」
「でも思いっきり怪しいですね・・・話がうま過ぎます」

アルフィリース達にとって願ったりの依頼だが、それにしても話しがうますぎる。ちなみに、贅沢をしなければ、宿代は一部屋一食付きでおよそ１０ペント。人数が増えるごとに、一人５ペントずつ加算されるのが相場だ。剣を研ぎに出してもせいぜい５ペントだし、旅装備を裸から一式揃えたとして、１００ペントもあればなんとかなる。

ちなみに先ほどアルフィリースが見た荷物輸送の依頼など、５０

ペント／日がほとんどである。ギルドの主人が怪しく思うのも無理はない。

「だろう？　場所も聞いたから余計にな」

「ちなみに場所は？」

「ダルカスの森を東から入って１日もないくらいの遺跡なんだよ。あれは随分浅い位置にあるし、ダンジョン自体が大きくない。３刻もあれば隅々歩けるくらいなのさ。俺も昔探索をしたから覚えてる。通称『初心者用のダンジョン』ってくらいだからな」

ギルドの主人はパイプで煙を吹かせながら目を細める。

「ふーん。これを出した依頼主は誰なんだろう？」

「さあな、なんせ他の町の出来事でな。ただ、どこかの金持ちの道楽としか思えん。参加人数にも制限がないしな。もし１０００人とか依頼が来たら報酬払えるのかって話になるし、払えなかったら信用問題になるからな。それで俺は何か裏があると踏んで、おおっぴらに掲示してないんだよ」

「尤もな考えですね。アルフィ、どうしますか？　ちなみに私の予感ではイイ感じはしませんが、条件自体はそれほど悪くないかとも思います」

「そうね・・・」

アルフィリースは少し考えた。おいしい話には裏があるわけだが、今の状態をいち早く打開するには稼ぎの良い仕事がしたいのも事実。稼ぎのよい仕事は魔物・魔獣討伐や探索系が主となるが、準備・食事などは大抵が自腹である。一方で護衛や輸送の仕事は準備も大して必要なく、賄いもつくことが多いが、報酬はあまりよくないし何より時間がかかる。

もし危なくてもこれだけの面子なら大丈夫かとアルフィリースは

思いつつも、前回戦ったブラックホークの面々が思い出される。あの時は生きた心地がしなかった。もしあのレベルの敵に出くわしたら？　自分の決断が皆の生命を左右する。さてどうするか。

「おじさん、わかる範囲でいいんだけど、その掲示が出回っているギルドはどのくらいある？」
「そうさな・・・この辺は人口１万あればギルドがあるから、代替２０はあるだろう」
「応募の数は？」
「確か隣町のミタでは、人口２万の町で２０人くらい応募があったとか聞いたかな」
「わかったわ、受けましょう」

リサがちょっと驚いているが、アルフィリースはいち早く申し込みにサインをした。ギルドのおじさんも心配そうだが、アルフィリースは危険性を感じつつも生命を奪われるほどではないと考えている。

「リサは少し驚きました」
「何を？」
「受けるとは思いましたが、決断の早さにです。ちなみに決定打はなんだったのですか？」
「この周辺の人口総数を考えたのよ。周辺２０都市でだいたい１５０万くらいの人口になるから、比率からいって申し込みしたのはおよそ１５０人はいるかな？　ってね」

アルフィリースはやや得意げにくるくると指を回してみせる。リサの顔は珍しいことに、少しキョトンとしているのだ。

「そんなに早く計算を？　前も思ったのですが、アルフィは意外と

インテリですか？」
「意外とってのが引っかかるけど、勉強は師匠に叩きこまれたからね。まあ比較対象がいないから、どのくらい勉強ができるとかはわからないけど。ただ今回の依頼に関しては、１５０人くらいいれば全滅は考えにくいと思うわ。最悪他人を囮にしたら、私達だけでも逃げ出せるかなって」

その言葉に、リサは少し表情を歪める。

「・・・腹黒いですね。もっと貴女は正義感にあふれた人間だと思ってましたが」
「残念ながら私は正義の味方ではないわ。もちろん助けられる人間は助けるし、無用な殺生もしない。でも、何でも助けられると思えるほど私が強くないのは、この前の戦いでよくわかったから。私が正義の味方になるのは、もっと強くなって、もっともっと先のことよ」
「もう既に、結構正義の味方くさいとは思いますけどね。ここに来るまでに、何回道端で困った人を助けたことやら」
「そうだっけ？」
「そうです」

ここにくるまでに実際行き倒れにご飯を分け与えたり、溝にはまった馬車を助けたり、一日一善ペースでなにかしら善行をしていたアルフィリースである。リサの感覚で言えばお人好しもいいところだったが、そこが実にアルフィリースらしく、リサが彼女を好ましいと思う点の一つであった。この時代でこんなお人好しは珍しい。また、ただのお人好しではないことも知ってはいたが、彼女はどうしても人助けに走ってしまう。口ではこんなことを言っていても、いざというときには出来る限り多くを助けようとするのだろう。

「（まあいざとなれば、汚れ役はリサやミランダでやりましょう）」

リサはため息をつきつつも決意を固めているが、そんなことをアルフィリースは露知らず、気持ちは既に別の所に飛んでいた。

実際にはダンジョン探索が楽しみというのもあったのだが、それは皆に内緒にしておくことにした。その日帰って事情を話すと全員が了解してくれたが、夜にやることがなくなったアルフィリースとリサもなぜか宿の1階で働かされた。なぜ2人の仕事着まであるのかは謎である。

「（短いスカートとか、恥ずかしくて困るんだけど。特に他のメンバーが細いから・・・）」

と、もじもじするアルフィリースがいる。ミランダにこっそりその内心を相談したが、

「今出さないで、いつ出すんだ!?　出せるうちに出さなきゃ、一生出せないぞ?」

というよくわからない理論で論破された。でもノリノリで働くニアが見れたから良しとしようと、アルフィリースは無理矢理自分を納得させる。リサがニアとフェンナの2人に「萌え」について語っていたし、ミランダの周りでは、なぜか全員が地べたに座ってミランダを崇めてたのが印象的だ。これがいつもの光景・・・だとまずいかもしれない。閉店時にマスターにこのままこの店で働いてくれとせがまれるが、そこはあっさり断った。ニアが少し、いやかなり残念そうな表情をしたが、見なかったことにするアルフィリースである。

翌朝、非常に気持ちのいい天気と共に出発する。風も気持ち良いし、アルフィリースの気分は上々だ。ここからは馬も併用して、ダ

ンジョンまでおよそ3日といった距離である。この天気はこれからしばらく続くわけだが、この空を数日後には同じ気持ちで見上げられない自分がいるとは、この時のアルフィリースには想像もつかなかった。

続く

旅の間に（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

次回は短編のような話を１つ挟み、それから新しい場面（シリーズ）です。

次回投稿は１１／１５（月）１８：００です。

ある少女の末路（前書き）

～あらすじ～

今回はちょっとＲ－１８Ｇな表現があるかもしれません。苦手な方はご注意を。もし苦手なら無理に読まなくても、本編にはさほど影響ない・・・とも言いきれないか。

一応何人かに確認したところ、Ｒ－１５ならよいのではないかということで載せています。良い子は見ちゃだめですよ？　いや、作者としては見てほしいんだけど、倫理的にね・・・。

ある少女の末路

少女はお腹がすいていた。もう随分長いこと何も食べていない。世の中が平和になったと言ったのは誰だったか。皆が豊かになったと言ったのは誰だったのか。だが少女の暮らしはちっともよくならなかった。

＊＊＊

少女が生まれる前には『家』というものが彼女にもあったらしい。一緒に残飯をあさっていた、少女の手を握ってくれている人が教えてくれた。そしてあそこで死んでいるのが僕達のお母さんだよ、と。どうやら彼が少女の『兄』というものらしい。『母』や『死』が何かはわからないが、とりあえず『兄』がどういうものかは、少女には理解できた。お腹が膨れる方法を教えてくれる人だ。とりあえず『兄』と一緒にいるとご飯が食べれる。それだけで少女には十分だった。

――最近は暑い日が多い。

最初は何人かでご飯を分け合っていた。でも最近はご飯が上手く手に入らない。段々少女に回ってくるご飯が減ってきていた。だけど少女はこの中で体が一番小さいからしょうがないと言われた。だが少女には何のことか、意味がわからない。『小さい』とはなんだろうか？　とりあえず、少女のお腹は膨れない。

「市長は浮浪者を町から追い出すつもりらしい」

ある日誰かがそういうことを言っていた。残飯の処理をしっかりして、衛生面を強化。そうすれば食べ物がなくなった浮浪者達は自然と数を減らす、と。だが少女には何のことか意味がわからない。隣でご飯の心配を『兄』がしている。少女はお腹がふくれないのは嫌だった。

だけど『兄』は少ないご飯を少女に分けた。『兄』は日に日に元気がなくなる。でも、少女のお腹は膨れなかった。

「妹を守るのが僕の役目だ」

『兄』は胸を叩いて少女にいつも言っていた。多分『妹』とは自分のことだろうと少女は考える。もっともそれ以外のことは少女にはよくわからない。『守る』『役目』とは何だろう？　相変わらず少女のお腹は膨れない。

＊＊＊

――最近は涼しい日が多くなった。

「浮浪者を積極的に追い出すらしい」

また誰かが言っていた。必要があればその場で処罰を与えても構わないらしい、と。『追い出す』とは何なのか。少女には意味がわからないが、少女が見た『兄』の顔色はいつもより非常に悪かった。

ある日ご飯を食べに行くと、棒を持った人が追いかけてきた。『兄』はとっさに少女を抱え込んだが、おかまいなしに全員が棒で彼女達を何度も叩いた。少女はあまり痛くなかったが、赤いモノをい

っぱい流した『兄』はその日からあまり動かなくなった。

「痛い、痛い・・・妹よ、医者を呼んでくれ・・・」

『兄』がそう言った。でも何のことか少女にはわからなかった。

『医者』『呼ぶ』とはなんだろう?

しばらくすると、『兄』は動かなくなった。少女がゆすっても叩いても殴っても動かない。少女はどうしたらよいかわからなかった。だって何をするかはいつも『兄』が決めていたから。だから少女が考えれること、できることは1つだけ。

「・・・食べれるのかな?」

しばらくすると悲鳴が周りから聞こえてきた。少女はそのまま引きずられ、外に放り出された。

「貴様、自分の兄になんてことしやがる!」

「それでも人間か!?」

「狂ってやがるそ、こいつ!!」

「気持ちの悪いガキめ、二度と近寄るな!」

でも何のことか少女にはわからない。

「(動かないモノを××××だけなのに。私にはそれだけしかできないのに。)」

やっぱり少女のお腹は膨れなかった。

「なんで皆、私の邪魔をするんだろう?」

少女には理解ができなかった。そして少女は『兄』だったモノから離れて行った。

――最近は寒い日ばかり。

少女は最近コツを得た。何かで一番上の部分――彼女に言葉があれば頭、と表現できるはずだったのだが――を叩き続けると、動いていた者が動かなくなる。

「（堅いのでやるとすぐ動かなくなる。動かなければ×××もいいんだよね。それだけは知ってる。）」

なぜならいつも『兄』がやるのを少女は見ていたから。でも『兄』は小さいモノしか仕留めなかった。

「（どうしてだろう？　大きいとそれだけでお腹が膨れるのに・・・）」

兄は小さな小動物を仕留めていたのである。だが、少女の空くことなき欲求と、彼女の単純な思考により、対象はより大きなものへ、大きなものへと移って行った。ほどなくして彼女の対象が人間に移る事までに、さしたる時間はかからなかった。

少女には理解できなかった。それに外は寒いから、赤い液体が温かくて気持ちいいと彼女は思っていた。頭からかぶるとそれだけで幸せな気持ちになれた。『兄』がいた時にはそういった温かさがあったような気がする。

でも最近は皆少女の姿を見ると逃げだしていた。少女は既に町中

に有名になり始めていた。最初は耳を疑った大人たちも、目撃者が増えるに従い警告が町中に出され始めていた。だが少女がそのようなことを知ろうはずもない。

「（いつも追いかけられている気がする。なぜだろう？）」

少女は悩むが理由はわからない。だが通りすぎる家の鏡に映る彼女の姿は、頭の先からつま先まで返り血で真っ赤に染まり、赤でない部分を探す方が難しかった。本当は血が乾いて黒く変色しているはずなのだが、先ほどとても喉が渇いた彼女はしこたま喉笛に噛みついたばかりだったのだ。そのため体は深紅に染まり、赤い足跡が延々と地面に描かれていた。

「あのバケモノはどっちに逃げた？」
「子どもの姿だからって容赦するな」
「見つけたら即座に斬ってもいいそうだ」
「この前なんか墓場で――」
「隣のゼラの子どもなんか生まれて1年経ってなかったんだぞ――」
「この前は花屋の番犬を――」

それでも少女には追いかけられる理由はわからなかった。

「（お腹が膨れるほどには×××ないのに・・・）」

少女には理由がわからなかった。悩んだ結果、自分だけがごちそうにありついているから皆が怒るのだと思い、仕留めた獲物を×××途中で他の人に差し出したが、その場にいた全員が一斉に悲鳴をあげて逃げ出した。だがどうしてそうなったのか、少女にはわからなかった。

＊＊＊

ある日少女は後ろから突然殴られた。頭が痛いし、なんだか赤いモノがいっぱい流れてくる。それに段々少女を叩く人が増えていた。少女はせいいっぱいの悲鳴を上げたが、彼女がぴくりとも動かなくなるまで誰もやめてはくれなかった。

「これであの子の仇を・・・」
「これからは落ち着いて寝られるな」
「全くとんでもないガキだ！」
「いや、悪魔だよ。まさか人間を×××なんて信じられない・・・」
「こんな子どもがどうして・・・」

街の住人にはわからなかった。だが少女にも理由は分かっていなかった。誰も、何も少女に教えることはついになかったからだ。彼女は倫理、モラルというものは、ついに死ぬまで教えられなかった。ただ彼女は一つの要求に従って動いただけ。『食欲』という。

＊＊＊

その日から少女は自由に動き回れるようになった。よく自分を見ると、ふわふわと空中を飛んでいる。壁もすり抜けられる。でも誰も少女に気付かないし、彼女もまた誰にも触れることができない。

「（こんなにお腹が空いているのに・・・）」

どうやったら少女のお腹は満たされるのか。少女にはもう何もわからなかった。

――――そのうち暖かい日が来て、やがて暑くなり、また寒くなる。
それを何回繰り返しただろう。

相変わらず少女のお腹は空いている。それでも誰にも触れない。
どうしたらいいのか、少女にはまだわからない。そんなある日。

「へー、キミ、そんなガキで悪霊になるなんて大したもんだ。悪霊としての力はまだまだ無いみたいだけどね」

少女を見てニヤニヤ笑う少年。『兄』よりも大きい。少女に話しかけることができた存在は初めてだった。

「キミは何かしたいことあるか？　ボクでよければ手伝うけど」

少女は少し考えたが、どうせ考えることは一つしかないことに気が付いた。

「・・・・・・・・・お腹いっぱい食べたい・・・・・・・・・」

その言葉を聞くなり、ニヤリと少年は歪んだ笑みを浮かべた。

「なら、それができそうな奴の所へ連れてってやる！」

＊＊＊

それからどのくらい経ったのかわからないが、少女が気が付くと元の場所に戻っていた。少女はもう飛んだり壁をすり抜けたりはできないけど、今度は色んなものに触れるようになっていた。

少女の視界の端にふと人をみかけたので近寄ったが、いやに人が小さく見える。あれは『大人』っていうものなので、自分より大きなはずなのにと少女は不思議がり、さらに近寄ろうとするとくるりとその人が振り向いた。その瞬間、

「ひっ・・・いやぁぁぁぁー！」
「な、なんだ！？　バケモノだー！」
「うわ～！　助けてくれ～」
「誰か自警団を呼んで来い！」

なぜか小さい人達が逃げ惑う。だが少女にはよくわからない。とりあえず一人捕まえようとするが、少し触ると吹き飛んでピクリとも動かなくなってしまった。よくわからないが本能に従い、ソレを×××してみる。

「な、なんだあのバケモノ・・・人間を××××ぞ！」
「に、逃げろー」

ちっともお腹が膨れない。どうしてだろう？

「あ、そうか。私が小さいから、量が足りないんだ」

少女は手当たり次第に人を捕まえ、××る。しばらくすると剣や槍を持った人たちが少女に斬りかかってきたが、今度は全然痛くなかった。それに少女が少しなでると、小石を転がすようにみんな吹き飛ぶ。少女はとても面白かったが、少女に勝てないとわかると皆さっさと逃げ出してしまった。
後には動かなくなったモノがいっぱいある。

「もう終わり？　つまらない・・・でもとりあえずいっぱい×××

してもいいのかな??」

動かなくなったモノを次々と×××みる。今度は誰も止める人がいない。どれだけ×××しても怒られない、殴られない、遠慮をしなくていい・・・なんて楽しいんだろう!?

少女は手当たり次第に動かなくなったモノ、いや動いていようがお構いなく××始める。そして周囲が血と悲鳴で満たされていく惨状を楽しそうにみつめる少年。

「どう？　満足したかい？」

その少年は興味深そうに尋ねる。少女は少し考えて正直に答えてみた。

「・・・・・全然足りない・・・・・・」

その答えを聞いて少年は最初目を丸くしたが、しばらくして腹を抱えて笑い始めた。

「プッ、ククク・・・アハハハハハ！　キミは面白いなぁ！」

ひとしきり笑い終えて少年は続ける。

「あー、面白かった。キミを気にいったからボクの部下にしてあげるよ。ボクは女の子は好きだしね！　まあガリガリなのがなんだけど・・・女ってのは容姿よりも、一緒にいて面白いかどうかが重要だ。ちなみに名前はあるかい？」

少女はふるふると首を横に振った。そういえば誰も少女に名前をつけてくれなかったのだ。

「そうか。じゃあ『マンイーター』でどうだ？」
「よくわからないけど、沢山たべていい？？」
「いいとも！　満足いくまで、ね・・・ククク、アーハハハハ！」
「・・・あなたの名前は？」
「うん、ボクかい？　ボクはドゥームっていうんだ！」

そして少女はその少年についていくことになった。きっとこの人が新しい『兄』というものなのだろう。
それよりも。もう我慢しなくていい、お腹が満たされるかもしれない。少女にはそう考えられるだけで十分だった。

続く

ある少女の末路（後書き）

毎回ありがとうございます。これを予約している段階でかなりお気に入りが増えているので嬉しい限りです。

今回は筆者の嗜好性が向かない話だったのでかなり苦労しました。きつい表現だと思った方は、御容赦ください。

次回投稿は１１／１６（火）１２：００です。

初心者のダンジョンにて、その1～平穏な旅路～（前書き）

～あらすじ～

先立つものを稼ぐために、多少怪しいと承知でギルドの募集に応募したアルフィリース達。その依頼で彼女達を待ち受けるものとは・・・？

初心者のダンジョンにて、その1～平穏な旅路～

依頼の期日は何日かに分かれていたが、アルフィリース達は最後の日程に合わせることにした。昨日まで泊っていた宿のある町から目的の洞窟までの日数を確認すると、ゆっくり向かっておよそ7日というところだ。そのペースでちょうど依頼の期日ぴったりくらいになるので、今回の旅はとてものんびりしている。またダルカスの森も東側から目的の遺跡まで入る分にはかなり安全らしく、森の入口までも街道がしっかり続いているから安心できる。宿場もそこかしこにあるし、宿代節約のため野宿している人たちの明かりもあちこちに見える。魔物も出ないし、アルフィリースが旅を始めてから最も安全な道のりだと言ってもよいだろう。

また昼に限らず夜半でも、中央街道はそれぞれの国が自分の領地の範囲を巡回している。宿場にもそれぞれ詰め所があり、酒場で住民と盛り上がっている騎士や警備兵をみかける。国境沿いの酒場では、2つの国の兵士が肩を組んで騒いでいる姿を見ることがある。元はれっきとした国家間の懇親会が催されていたのだが、中原に平和が成立してから何十年も経った今、そんな堅苦しいことをせずとも既に全員が顔馴染みなのである。中には、互いの子ども同士を結婚させようなどという話も飛び出すくらいだ。このおかげで西方ではありがちな国境での小競り合いが、中原では行われない。

もともとこの一連のシステムを考え出したのはミリアザールだが、そのことは各国首脳陣しか知らないことである。彼らにはその恩恵のみが伝わっていれば十分なのだとミリアザールは考え、アドバイスのみをはるか昔に行った。だがこの中央街道に溢れる笑顔を見る限り、ミリアザールの目論見は成功していると言ってよいだろう。

もちろん盛り場らしく酔っ払い同士のケンカもしょっちゅう行われるが、恒例行事といった程度の争いなのでちょっとした祭りのよ

うなものだ。ケンカが始まるとどちらが勝つかで賭けが始まるなど、殺し合いには間違えても発展しそうにない。そのケンカを肴に全員が飲んでいる。なぜかミランダも時々ケンカに混じって大暴れしているが、

「シスター服は着てないから大丈夫！」

なのだそうだ。そういえばミランダは昔、山賊まがいのこともしてたとアルフィリースは聞いている。酒場で暴れるのはもはや習慣なのだろう。そしてだいたい『勝者ミランダ』で終わり、その晩の酒場代は男達に払わせて、ミランダは好きなだけ飲んでいる。あのシスターは絶対ロクな死に方をしない、あ、不死身だったっけ、とかつまらないことをアルフィリースは考えているが、実際なんともなのどかな風景といえる。例外があるとすれば、ミランダの椅子代わりに這いつくばっている男くらいか。だが時々幸せそうな表情を浮かべる男もいるのは、まだアルフィリースにはわからない話だった。

そして朝も毎日ややのんびり目に出発し、早朝と夕食前には訓練をするのがアルフィリース達にとって日課になっている。ブラックホークの3番隊にボロボロにされてから、誰とは言わず全員が自主的に訓練をする雰囲気になった。前回はたまたま助かったが、あそこでアルフィリース達は全滅していても全くおかしくなかったのである。

とはいえ具体的にどうすればよいかも大きな指針が立つわけではなく、簡単な手合わせや、緊急時の戦闘隊形などの確認である。いざというときにどうするかを決めておくのは、コンマ何秒かの判断を要求される戦場では生死を分ける重要な要素だ。地味なようだが重要な打ち合わせである。実際に戦場では烏合の衆の1万を、訓練された千の兵が打ち破ることなど珍しくもない。

アルフィリース達の中で、純粋な近接戦闘では突出してニアが強い。ミランダはほぼ我流で鍛えた戦士であり、結構力任せな所がある。それに彼女の全力での戦い方は、本来の薬師としての能力を発揮して、薬品・爆薬などを使用しての戦いになる。その点で最も『殺し合い』で強いのはミランダかもしれないが、こと武芸比べではニアはおろか、アルドリュースにきちんとした武芸を習ったアルフィリースの方がミランダよりかなり強い。

ニアとアルフィリースの手合わせではアルフィリースが様々な武器を使ってニアの動きのバリエーションを増やそうとしているが、いかんせん獣人でもトップクラスに速い猫族の動きをとらえるのはアルフィリースですら至難の業だった。ニアは人間との戦闘経験が少ないから役立つと言ってくれるが、実際役に立っている気がアルフィリースにはあまりしない。このままで訓練を続けても、ニアがあのドロシーとやり合えば前回と同じく手玉に取られるだろうことは容易に想像がつく。

参考までに、大戦期にはどうやって獣人と人間が戦争をしていたのかニアに聞いてみたが、

「魔術、戦術で対抗された。獣人は魔術が使えない者がほとんどで、魔術に対する耐性も低い。そのため直接的な攻撃魔術も防御しにくいが、間接的な魅惑・幻惑・睡眠・麻痺・毒といった魔術にきわめてかかりやすい。それに戦闘に入ると興奮状態で我を忘れる者が多いから、『緩兵の計』などでわざと敗戦を装われても、何の疑いもなく深追いして罠にかかる。もっとも、その罠すら打ち破る突破力を発揮する時もあるのが獣人だがな」

だ、そうだ。だがこれだけ身体機能に差があるのに、どうやってドロシーがその差を埋めていたのかが気になる。あの時ドロシーに聞いておけばよかったと後悔するが、それはニアも同じようだ。ニアの印象としては、

「動きがそれほど速いわけではなかった。いや、人間としてはかなり速いが、獣人としては遅いくらいだ。だがこちらの攻撃は当たる気配がなく、向うの攻撃は的確に私を捉えていた。私の動きに癖でもあるのか、アルフィ？」

と言われても、実際これだけ速いニアの動きを対峙してとらえようにも、『目の前で消える』と表現するのが正確であり、とても癖どころではない。アルフィリースは自分とドロシーとの俊敏性に雲泥の差があるせいだと考えていたが、実のところアルフィリースとドロシーの反応速度にはそんなに差があるわけではない。一口に言えば戦闘経験の差なのだが、彼女達がそれに気付くのはもう少し先の話である。

リサにはアルフィリースが剣の型を教えているし、フェンナはアルフィリースに弓のコツを教えている。また巡回している騎士団などに練習相手を頼めることもあり、そうやって修行するのがアルフィリース達の旅のルーティンワークとなりつつあった。

幸いなことに街道のおおらかな雰囲気も手伝うのか、アルフィリース達の申し込みを、巡回中にもかかわらず、士団の面々は大抵が快く引き受けてくれた。なかには彼女達が女性のみのパーティーなのを確認すると、訓練にかこつけていかがわしい行為に及ぼうとする者もいたが、そういった者はすべからくアルフィリース達に返り討ちにあった。彼女達は気が付いていないが、女性でありながらその実力は1対1の戦闘においては職業軍人といえど街道警備兵程度では相手にならず、各国生え抜きの親衛隊と比べても強い部類に入っていた。そのため手合わせは物足りなく終わることが多かったものの、アルフィリースは国によって剣の型に違いがあることを面白がっており、またこういった騎士団の面々と手合わせしたことが、後に意外な福利を彼女達にもたらすことになる。

＊＊＊

そんなこんなで日々は過ぎ、既に『初心者用ダンジョン』の目の前である。さすがに多少のんびりしすぎたのか、遺跡の前は既に人だかりができている。ざっと見積もっても１００人はいるだろうか。人種・職業も様々で、獣人はもちろんのこと、珍しいことにエルフやドワーフもいるし、剣士・弓使い・槍使い・格闘家・魔術士など職業も様々だ。さらに珍しいことに、巨人や子どもまでいる。子どもの年齢はリサより小さいくらいだろうか。ローブをまとうところから魔術師の類いだろうが、アルフィリースは思わず子どもをじっと見てしまった。

その視線に気付いたのか子どもがこちらを振り向き、そして二コリと可愛らしい笑みを返してきた。世長けてもいるし、利発そうでなかなか可愛らしい。思わアルフィリースも笑顔で返し、手まで振ってしまった。その様子に気付いたミランダとリサがアルフィリースをいじめ出す。

「へぇ、アルフィはあーいうのがいいんだ？」

「・・・どさくさに紛れて子どもに色目使わないでください、このショタコン」

「そんなんじゃないわよ！」

「まあ自分好みに育てるのもいいけどさ・・・」

「アルフィではせいぜい調教されて、貢がされて、ポイされるだけでしょう」

「何よその三段論法は？」

「いや、子どもはなかなかいいぞ？」

え？　と思わず三人がニアを見る。ニアは無意識だったのか、はっとしてうろたえ始めた。

「な、なんだ？　何がおかしい？？」
「ニア・・・そういう趣味だったのか」
「変態がこのパーティーにもう１人いたとは・・・リサの不覚です」
「リサ、最初の１人はまさか私のこと？」
「あらアルフィ、他に誰か候補者がいますか？」
「アルフィさんはいいとして、ニアさんが言いたいのはですね・・・」

フェンナ、私はいいのか？　とアルフィリース言いたかった。最近はアルフィリースに対するフェンナのツッコミが厳しい。ミランダやリサが余計な世間常識を教えているのか、フェンナの口調が段々俗っぽくなってきている。大丈夫かな、フェンナは仮にも王女様なんだけどと、そんなアルフィリースの心配もよそにフェンナが続ける。

「ニアさんが言いたいのは、獣人は逆ハーレムを作る習慣があると言うことですよ。エルフも種族によってはやりますし。寿命が長いと、男性が女性の２０歳年下の夫婦とかよく見ます。若い容姿が長く続く種属では、将来性がありそうな子どもに目をつけておいて、自分好みに育てることはよくありますよ？　私の両親がそうでした。もっとも私の両親の場合は、父が母を育てたのですが」
「そうなのかい？」
「ええ。ですから昔の癖からか、時々母は父のことを『お兄様』と言っていました」
「なんて羨ましい・・・」

リサが思わずため息をつくが、ミリアザールがここにいれば間違いなく「自分はどうなのじゃ？」と突っ込んだであろう。幸か不幸か、ここにはリサとジェイクの関係を知る者は１人もいないのだが。

そんなどうでもいい話で女性達が盛り上がっている間に、今回の主催者らしき人物が登場してきた。わざわざ全員から見やすいように高い台を設けて、なんとも芝居がかっている。

続く

初心者のダンジョンにて、その1～平穏な旅路～（後書き）

御愛顧ありがとうございます。

今回は幕間的な何か。中原の情勢は後々重要になってきます。何もないようで伏線があるかも。でも本当に何も無かったりするのが筆者クオリティｗｗ

真面目な話をすると、日常的な風景も大切だと思う筆者です。本当はもっと日常会話を書きたいんですが、あまりやると本当に進まなくなるので・・・

次回更新は１１／１７（水）１４：００です。

初心者のダンジョンにて、その2～アルフィリースの天敵～（前書き）

～あらすじ～

初心者のダンジョンに辿りついたアルフィリース達。思いのほか大勢の傭兵が集まる中、アルフィリースの天敵が現れる・・・。

「えー、皆さま。本日はお日柄も・・・」
「どうでもいいから早く始めろ！」
「「そうだそうだ！」」
「ぐすん・・・」
「ご主人様、お気を確かに！」

主催者はお決まりの挨拶もさせてもらえなかった。かわいそうに。

「え、えー。気を取り直しまして・・・それでは！　私は今回の企画を考え付いたロメオと申す者ですが」
「ぷっ！　あの顔で色男（ロメオ）だってよ？」
「ミランダ、それはあんまりよ・・・」

確かにうだつの多少、いや大分上がらな・・・・・全然上がらない男でいいか？　まあそんな男ではあるが、身につけている衣装を見る限り、かなりの金持ちであることには間違いない。どうやら、ギルドのおじさんの言っていたことに間違いはなさそうだ。

「今回、このダンジョンにはどうやら隠された秘法がありそうだという古文書を発見しました！　前回・前々回と色々な方に挑戦頂きましたが、秘法を探し当てるには至らず・・・今回が最後の挑戦ですので、ぜひともお願い致したい！　見つけた方には、特別ボーナスとして５０万ペンド差し上げます。皆さま、どうでしょうか！？」

その瞬間、全員の眼の色が変わる。５０万ペンドと言えばミーシアの住宅街でも一番の一等地に大豪邸を構えられる金額だ。何か商売を始めるに元手にしてもよいし、それなりの豪遊をしながらでも

一生遊んで暮らせそうだ。全員小遣い稼ぎのつもりできたはずだが、これを聞いて俄然やる気が出たらしい。

「それでは探索についての説明を・・・あ、あれ？」

「「「「うおおおおお！！！！！」」」」

そして開始の合図を待たずしてほぼ全員が突っ込んで行った。さらになぜか、

「雑魚共どけぇぇぇぇぇ！」

という掛け声と共に、あたかも大安売りの八百屋に群がる主婦のように突進していくミランダ。なぜかフェンナもそれに続いている。今回はアルネリア教のシスター服なんだからそれはまずいんじゃ、という忠告すらアルフィリースにはする暇がなかった。

だが一方で冷静な面々は残っており、主催者がやろうとした説明を聞いている。もちろんアルフィリース、リサ、ニアもそれを聞く。

ロメオいわく、今回の探索範囲は主に地下3階のようだ。このダンジョン、というより遺跡だが――は全部で地下3階ということらしいが、この主催者のロメオが手に入れた古文書を見せてもらうと、どうやら地下4階まではあるらしい。ただ入口の部分がどこにあるのかがわからず、それを探してほしいということだった。

説明を聞いてダンジョンに挑んでいく残りの面々。アルフィリースもダンジョンに向けて進もうとした瞬間、ニアに袖をひかれた。

「どうしたの、ニア？」

「ああ、実はさっきから気になっていたんだが・・・」

ニアが、アルフィリースとリサにしか聞こえないように声を落とす。

「今は関係ないことかもしれないが、この周辺には獣人が住んでいたんじゃないかと思うんだが」
「なんで？　昔は獣人の方が領地も多かったし、それは不思議ではないと思うけど」
「確かにそうなんだが。ここに来る途中にいやにほら穴みたいなのが多くてな・・・と、いうよりここを中心に天然の要塞を築いていた、と言った方が正しいか。いたるところに窪地や縦穴を作って兵が伏せやすいようにしていたからな。これは昔から獣人が使っていた方法だ。まるで何かを守っていたような・・・」
「ニアの言うことは正しいと思います。さらに言うなら、ここは大昔にちょっとした集落だったのでは？　リサはこんな目ですから土地の起伏なんかには余計に敏感なのですが、地面がただの森に比べて整地されていて歩きやすいです」
「言われてみれば・・・」

二人の言うことは尤もだ。木々を見ても、遺跡に近いほど背丈が低く、胴周りも細い若い木が多い。比較的最近生えたのだろう。それに比べてここに来る途中では樹齢数百年はあろうかという大木が多かった気がする。

「そうなると人間も住んでいただろうな」
「なんで？」
「いや、自慢じゃないが獣人は整地などめんどくさいことはまずしない。都心部では別だが。まあ国家といった枠組みを持つ意識ができたのが、そもそも最近だしな。昔に人間と獣人が共存していたなど、とても信じられないが」
「ふぅん・・・」
「そういうことでしたら、エルフも住んでいたかもしれません」

いつの間にかフェンナが引きあげてきている。ミランダも遺跡から出てきた。

「あれ、2人ともダンジョンに突っ込んだんじゃ？」
「ダメダメ、地下一階は開けてるんだけど、地下2階からは迷路でさ。リサがいた方が能率いいことに気が付いて引き返してきた。それに、一階で面白いことに気が付いてね」
「私は不思議なことに気が付いたので、相談してみたいな、と」
「え、何に気が付いたの？」
「それは・・・」

フェンナが何か話そうとしたその時、リサがピクリと何かに反応する。その反応にアルフィリースも気がつく。

「リサ、敵？」
「いえ、人間が・・・2人のようです。東からここに近づいてきます。もう間もなく見えるかと」
「おおかた遅刻した奴だろうよ」

ミランダの言ったとおり、はたしてその2人が見えてきた。1人は傭兵風の男。何かイマイチ冴えないというか、だらしがない。服もなんだかそこかしこが破れているし、髪も髭も伸びっぱなしだ。髪も標準的な茶色。身長は多少アルフィリースより高いくらいか。もっさりした外見のせいで、歳がいくつなのかよくわからない。多分若いのだろうということしか言えない。

もう一人は背が低く、まだ少年の面影を残している。大きな眼鏡に、いかにも学者風ないでたちだ。戦闘は、あの様子では無理だろう。リサと小競り合いしたらリサが勝ちかねない体格だ。

だがその傭兵風の男がアルフィリースに気付くなり、駆け寄ってきた。

「おお、もしかしてアルフィか!?」
「・・・げっ、アンタは!」

アルフィリースが心底嫌そうな、見たくない者を見たような顔をしている。ミランダもびっくりしたが、それはアルフィリースが「アンタ」などと他人を呼んだことに対してだ。いつもはなんだかんだで、他人には丁寧なアルフィリースなのだが。

「ははは。こんなところで出会うなんて、やっぱり俺達は運命の糸でつながってるな!」
「・・・どちら様で?」

アルフィリースがジト目で嫌悪感を丸出しにする。できればどころか、一切関わりたくないというのを全面に出した対応だ。だが男は全く気にしていない。

「おいおい、俺のことを忘れたのか!? あれほどアツい夜に絡みあったと言うのに!」
「えー、アルフィってこういうのが趣味なの?」
「・・・あまり良い趣味ではないとリサは思います」
「あんまり強くなさそうだな・・・」
「というより、アルフィは男性経験豊富なんですね」

めいめいが好き勝手言うせいで、アルフィリースのフラストレーションがあっという間に溜まっていくのが表情でわかる。

「ちょっと、肝心な部分をちゃんと発音してくれないと誤解を招くでしょ!? まず暑い夜の間違いね! それにアンタが勝手に山の中で猟師の仕掛けた罠に引っ掛かって、絡み合ったっていうか、網

に絡まってたんじゃない！」
「それでその俺を助けようとして自分も網に絡まった、と。ほら、絡まってるのは合ってるだろ？　だから俺達はアツい夜に絡み合ってるって」
「そんな言い方あるかー！！！」

アルフィリースがかなり凄い勢いで絶叫した。これだけ声を荒げるアルフィリースは珍しい。この中では一番付き合いの長いミランダでもこんなアルフィリースは初めて見たようで、目を丸くしている。

それもそのはず、アルフィリースにとってこの男は天敵である。男の名はライン。アルフィリースが旅を始めて間もないころ彼女に何かとつきまとい、身長がデカイやら何やら散々バカにしたせいで、アルフィリースが自分の身長にコンプレックスを持つ原因を作った男である。

苛々感を全面に押し出すアルフィリースと対照的に、アルフィリースを茶化すラインと、それを目を丸くして見守る他の仲間であった。

続く

初心者のダンジョンにて、その2～アルフィリースの天敵～（後書き）

いつも御愛顧ありがとうございます。

よかったら評価点もぽちっとしてくれるとさらに嬉しかったりする作者です。

呪印始まって以来のまともな男キャラ登場かもしれません。彼がどのように物語に絡んでいくかはお楽しみに！

次回投稿は１１／１８（木）１６：００です。

初心者のダンジョンにて、その3～学者と傭兵～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースの目の前現れた軽薄な傭兵と、眼鏡をかけた少年。
彼らがもたらす出来事とは・・・？

初心者のダンジョンにて、その3～学者と傭兵～

「・・・で、この遺跡に何の用？　探索なら早くしないと終わっちゃうわよ？」
「いやー遺跡はどっちでもよくて、アルフィに会いに来たって言うかなんと言うか」
「・・・キモイ」

アルフィリースが心底嫌そうな顔をして遺跡に向かって踵を返した。ミランダ達は一瞬事態が飲み込めなかったが、我に返り慌ててアルフィリースの後を追う。

「嫌われちゃったかぁ」
「そりゃラインさんが悪いですよ。詳しい経緯は知らないですけど、あの女の人はとても誠実そうな人でした。遊郭や酒場の女ならともかくとして、ああいう真面目な女性にあの対応はないと思いますけどね」
「・・・しごくまっとうな意見をどうも、カザス先生」

お説教は鬱陶しいとでも言わんばかりに、舌を出しながら「あーあ」といった表情でラインがぐったりする。普通ならばこの表情にイライラもするだろうが、カザスはこの数日でこの男の扱いに慣れていた。
実はこの2人、出会ったのは数日前である。カザスは少年のような風体だが、年齢は実はアルフィリースと同じである。その年齢にして東の都心部では遺跡・考古学者として有名で、他にも地学・地理学・天文学・物理学などで学位を取得し、各所学問所で引っ張りだこの今をときめく学者の1人である。そんなカザスには放浪癖があり、時々こうやってふらりと一人旅をする。結構危険な地域にも

分け入るのだが、そこは見た目によらず慣れたもので、どうすれば危険を回避できるかよく知っている。

そんなカザスが今回小耳にはさんだ遺跡、通称『初心者用ダンジョン』――正式には『廃都ゼア』――の噂を聞いて、探索のため雇ったのがラインである。文献上に度々出てくる廃都ゼアは、ニアやリサが睨んだ通り他種族が共同で暮らす土地として実在したと言われている。ゼアは人口こそ１０００人にも満たない小都市だったらしいが、その独特の文化・生活習慣から考古学会ではゼアの謎を解明できれば最高の名誉の１つとも言われている。というのもゼアの場所が不明なこと、原因不明の理由にて住民が全員姿を消したこと、またその都市のありようがあまりにも現在の常識とかけはなれているため、いつしか伝説上の存在として書物にしか記されなくなってしまったことにも起因している。実際にはそこまで昔の都市というわけでもないのだが。

まさかそれが『初心者用ダンジョン』として有名になっているとは、灯台もと暗しもいいところである。まあカザスにしても、地方に派遣して測量・地質・自然調査をさせている技師からの報告書に目を通していて偶然気が付いたのだが。

なおラインを雇った理由については、カザスお得意の直感と、話した時の印象である。一見軽薄に見えるこの男、実に油断なく合理的に物事を判断できるのだとカザスは考えた。その理由は彼の通り名が示している。

「さ、いきますよ『依頼達成率１００％の傭兵』さん」

「それ、呼びにくくないか？　『ライン』って呼べよ。あと、俺は俺で目的があるからな」

「承知してますって。形式上私が雇ったことになってますが、私達は対等な関係だと思ってますよラインさん」

「それならいいけどな。んじゃま、行ってみようか」

カザスとラインの2人は連れだって遺跡に向かっていった。

＊＊＊

そして入口に残されたのはロメオとその取り巻き達。だがミランダが冗談で言ったことは的をはずしてもいなかった。

（ぷっ！　あの顔で色男（ロメオ）だってよ？）

なぜなら彼はロメオという名前などではなかった。そう、彼は名前もよくわからない浮浪者なのだ。さらに言うなら、浮浪者だった、というべきか。

全員が遺跡に入ったのを確認すると、ロメオとその取り巻き達はドサドサとその場に崩れ落ちた。そして現れる2つの影。

「これでよかったのですか？」

「・・・充分だよ・・・」

「ドゥームの仕事にかこつけて素材集めも行うとはいい考えですね」

「・・・ただ今回は派手にやったからね・・・気付いた奴もいるだろうし、流石に不審がられる・・・同じ手口はしばらく使えないかな・・・」

「でも一斉に手に入る数としては十分では？　アノーマリーも喜ぶでしょう」

「・・・そうだね・・・」

「それでは私は引き揚げますが、貴方は？」

「・・・僕はドゥームの監視をするよ・・・彼は目を離すとすぐ暴走するからね・・・」

「全く・・・まるで子どもだ。わざわざ貴方の手を煩わすとは」
「・・・実際、子どもだと思うけどね・・・」
「貴方も大変だ。ではまた会いましょう」
「・・・ああ・・・」

そして背が高く美しい影と、無口な少年の影は消えた。その時にはロメオとその取り巻き達が存在した痕跡は、もはや何一つ見当たらなかった。

＊＊＊

その頃遺跡の地下1階でアルフィリース達はミランダの説明を受けていた。地下1階はかなり広く、大きな空洞のようなスペースになっている。壁にはたいまつが沢山灯っており、どうやら天然の洞窟に人の手を加えているようだ。中央には少し高台があり、地下2階に続く階段は突き当たりに見える。

「この場所がアルネリア教会由来？」
「正確にはちょっと違うかな」

ミランダが壁の埃を取っ払いながら説明する。出てきた紋章は確かにアルネリア教会の物に似ている。ミランダが自分の教会章と比較しながら説明してくれた。

「正確には分家筋、といったところかな。アルネリア教会は偶像崇拝を教義上禁止しているけど、祈る時には明確な対象があったほうがやりやすいってことで聖女アルネリアの像を各教会に置いてる。ただし各家庭でアルネリア像を置くことは禁止しているけどね。教会に置いているのは聖女アルネリアに自分の行いを報告して、反省する機会を作るって意味合いが強いんだそうだ。だけど中には聖女

アルネリアを神なんかと同一視して崇めたかった連中もいた。随分昔に破門されたって話だけど」

「私からすると、別にアルネリアを神と崇めても構わないと思うのだけど？」

「普通ならそうだけど、とかく強すぎる信仰はもはや狂信といってもいいからね。狂信が純粋に祈りのみに向いていればいいけど、権力とか、他の信仰との比較とかに目が向いて一歩間違えると反乱・分裂や内部崩壊につながりかねない。やっぱり当時はアルネリア教もそこまで集団としての基盤が強くなかったからか、そういった連中はできるだけ締め出しておきたかったみたい。西部オリュンパス教会の派閥争いを見てると、それは正しかったんだなって思えるよ。まあアルネリア教って、宗教というより慈善団体だしね」

「そういえばミランダも巡礼の任務は不正を正すこと、とか言ってたもんね」

「そゆこと。名称こそ巡礼だけど、やってることは査察だからね。悲しいことにアタシ達のような仕事ですら、汚いことをしている奴らは後を絶たないのさ」

ミランダが酒場で暴れたり博打をするのはいいのかと言いたくなるが、そこは我慢するアルフィリースだった。実際彼女はそういうことにはだらしないが、けが人や迷子を見ると全くほっとけない性質だからだ。その辺はなんともシスターらしい。アルフィリースがしばらく思いにふけるうち、フェンナが話に入ってくる。

「ではミランダはこの場所が何に使われていたかわかりますか？」

「うーん、それはわかんないな。でもニアやリサの話を聞く限りではここで他種族が暮らしてた可能性もあるわけだろ？　人数的にはぎりぎり１０００人近く入るスペースがありそうだし・・・集会場ではあったかもね。何のかはわからないけど、さしあたってはみ出し者の集まりってとこかな」

「その話は興味がありますね」

入ってきたのは先ほどの少年と傭兵である。

「いくらか話は聞かせていただきましたが、確かに貴方達の発想は当たっています。この一帯の名称は正式には『廃都ゼア』。書籍のみに語られ、いつ頃出来たか、またいつ頃滅んだのかは定かではありません。ただ人間・エルフ・獣人・ドワーフ・幻獣・巨人といった他種族が共に暮らす理想郷だったとだけ、伝説として残っています。まあ伝説と言っても３００年ほど前なだけで、おそらくは記録があまりにも少なかったため伝説みたいな扱いになっただけでしょうが」

「・・・アンタは誰さ？」

ミランダが不快感を示す。彼女は学者風のひょろい男が嫌いだし、おしゃべりはもっときらいだ。この少年、いや、しゃべり口から察するに少年ではないだろうが、彼はミランダのど真ん中で嫌いなタイプの人間だろう。よく考えるとミランダも元々学者みたいなものなのだが。同族嫌悪にも近い感情なのかもしれない。それとも昔の何もできない自分を連想させるのが嫌なのか。

だがミランダの露骨に嫌悪感を表す表情も気にかけず、少年は少々大仰に礼と返事をする。

「これは失礼しました。僕の名前はカザス＝ロウ＝トーレンティスクと申します。東にある学術の都メイヤーにあるトリアッデ大学にて考古学・地理学の教授を務めております。どうぞお見知りおきを。こちらは傭兵のライン。今回ゼアの探索に当たって協力してもらっています。」

丁寧に一礼するカザスと、なぜかぶすっとしたままのライン。ア

ルフィリースがラインを見ないようにしているのは間違いないが、ミランダもカザスの名前を聞くやいなやさらに機嫌が悪くなった。

「トリアッデ大のカザスだって!?」

「おや、恰好から察するにアルネリア教のシスターの様ですが、僕をご存知ですか?」

「よっく存じ上げてるよ!」

ミランダが丁寧なつもりの言葉と裏腹に、憎々しげな目でカザスを見る。

「数年前にお前のせいでどれだけアルネリア教会が迷惑を被ったか」

「おや、僕が何かしましたか?」

「大アリだ! お前を始めとするトリアッデの連中が『アルネリア教は団体として行動を制限すべき』なんて論文を各所に発表したから、どれだけアタシ達が迷惑したか! 中にはそのせいで閉鎖された救護施設もあるんだぞ? そこで締め出された孤児や病人、老人の面倒をお前達は見るつもりだったのか、ええ!?」

「・・・シスターでその汚い口調は感心しませんね。貴女は本当にシスターですか?」

「なんだと?」

今にもミランダが飛びかかりそうなので、アルフィリースは体をミランダとカザスの間に半分乗り出す。

「まず誤解があるようなので言っておきますが・・・論文は別に大学として発表したわけではなく、それぞれ別の内容です。どれもアルネリア教を批判してはいますがね。私が書いたのは『アルネリア教の書籍解放について』です。アルネリア教はこの大陸最大・最古の勢力の1つですから、その蔵書にいたるや素晴らしい本がそれこ

そ山のようにあるのです。僕の様に学問を志す人間にとってはそれこそ宝の山ですよ。なのにアルネリア教は書籍を一般開放していない。神聖系の治療・浄化の方法や魔術に付いてもほとんど秘匿とし、独占している。もちろんアルネリア教会に協力、ないし所属すれば学べますが。これはこの社会にとって大きな損失であり、その事を批判しただけです。まあ他の論文と含めて、その一部だけを悪用した連中がいるのは事実でしょうが」

「よく回る口だな・・・自分のせいではないにしろ、お前達が発端で起きたんだろうが？　多少なりとも責任取る気はあるのかよ」

「いえ、全く」

「なんだと！？」

「自分が書いたものに対する直接的な影響はともかく、その余波まで考えていたら何も発表なんてできませんよ。そういったことは後から考えればいい。そうしないと学問なんて進歩しませんからね」

いけしゃあしゃあと答えるカザス。表情を見る限り、あれが彼の本音だろう。全く悪びれている様子がない。対するミランダは額に青筋がピクピクしている。

「・・・てめえ、一発殴らせろ」

「殴られるいわれがありません」

「こんの！」

「だめよ、ミランダ」

「止めるな、アルフィ」

「いえ、この手の頭でっかちは殴ったら余計態度を硬化させるわ」

「貴女までそういうことを言うのですか、女剣士さん？」

「聞きなさい、学者先生」

アルフィリースがミランダを押さえながら、いたって冷静な表情でカザスに向き直る。

続く

初心者のダンジョンにて、その3～学者と傭兵～（後書き）

いつも応援ありがとうございます。

次回投稿は１１／１９（金）１７：００です。

初心者のダンジョンにて、その４～口論と疑惑と～（前書き）

～あらすじ～

カザスの人も無げな言動に激昂するミランダだったが、アルフィリースは以外にも・・・？

初心者のダンジョンにて、その4～口論と疑惑と～

アルフィリースがミランダを押さえながら、いたって冷静な表情でカザスに向き直る。

「貴方の言うことは正しくもあり、間違いでもある」

「ほう、そのこころは？」

「私も学問を学んだ身。学問の進歩のためには倫理なんて置き去りにされがちなことはよくわかる。だってその方が進歩がスムーズだもの。でもその中で先生に教えられたことがあるわ。それは『言葉は時に剣や魔法よりも強い』ということ」

「その言葉は私も知っていますよ。２００年前の学者、ローランの言葉ですね」

「誰の言葉かまでは知らないけど。でも貴方はその意味を全くわかってない。貴方はとても賢いのかもしれないけど、残念ながら貴方はある点では４歳の子どもにも及ばないほど愚かなのよ」

「・・・５つの学位を持ち１４歳で教授になった僕に、ただの傭兵が説教ですか。面白い」

カザスは腹を立てるよりも興味をそそられた様だ。感情の反応まで学者風である。アルフィリースはひるむことなく続ける。

「極端な例を挙げれば、王様が『戦争だ』と言えば、戦争が起こりうるわ。たとえそれが私怨であったとしてもね」

「現在では王にそこまでの中央集権がなされることは少ないですが・・・まあそういうケースもあるでしょうね。私は王様ではありませんから当てはまりませんが」

「・・・それが貴方の悪い所よ。貴方は自分のことを知らなさすぎるわ」

「今あったばかりの貴方が私のことを理解できると？」
「貴方のことは無理だけど、もっと一般的なこと。学者の言葉は時として王様よりもタチが悪いわ。だって、王様の言葉はせいぜい国内にしか広がらないけど、学者とか国家の枠組みに縛られない人間の言葉は、その個人の知名度によっては大陸中に広がるわ」
「ふむ、確かに。私は大陸東部では名前もそこそこ知れてきていますしね」
「貴方は有名な学者の様だから、自分の言葉にもっと責任を持つべきよ。自分の言葉で起きる余波についてね。全てとは言わなくても、少なくとも考え付く範囲では検討し、防波堤となりうる対策を考えておく必要がある。それもできないなら、正直何も発言しない方がいい。社会的に迷惑を被る人間が多いだけでなく、貴方の寿命を縮めることにもなるでしょうから」
「僕の命が？」
カザスもそれは考えていなかったようで、驚きの表情をする。
「ええ。貴方の一言をきっかけにして仮に戦争が起こったとしましょう。戦争を仕掛けた方が一方的に勝てばよいけど、戦争を仕掛けた方が結果的に負けた時に、責任を追及されるのは間違いなく貴方よ。人間なんてそんなものじゃない？　魔女裁判が起きた時代を書籍で読んでいるでしょう？」
「・・・確かに、思い当たる節がありますね」
魔女というのは魔術教会とはまた別に存在する集団であり、魔術教会よりも古くから各土地に根差しているのではないかと言われている。魔女と呼ばれる人種は元来魔術が使える、使えないに限らず無知な市民に生活の知恵を授ける学者・医師・教師のような存在だった。だが住民の及ばない力や知識を行使する彼女達は、その土地で悪いことが起きると責任を押し付けられることになった。発言力

があったからこそ、その言葉に従い何か悪いことが起きると民衆は魔女のせいにしたがった。またその事情に魔術教会の権力拡大の陰謀が多少なりとも見え隠れしたのも事実である。

　挙句の果てに魔女裁判なるもの――裁判と言えば聞こえがいいが、ほとんどが魔女の言い分も聞かず一方的に処刑するようなものだった――が行われ、大陸から次々と魔女は姿を消していった。その結果として土地は荒れ、魔物がはびこるようになって初めて魔女の存在意義が人々には知られたが、既に時は遅かった。生き残った魔女達は多くが人間に愛想をつかし、隠れ棲むようになったのである。

　その後魔女の役割は魔術教会とアルネリア教会が分担して行うことになったのだが、魔女たちがいずこにて何をしているのかは彼らも知らない。

　カザスにしろその時代のことは書籍上では知っているし、その時の感想としては民衆の愚かさに呆れ、魔女の1人で責任をおっかぶされるようなやり方をするから上手くないと思っていたのだが、まさか自分にも当てはまる出来事だとは意外だった。思わずその指摘に唸ってしまう。

「・・・全面的でないにしろ、どうやら貴女の言葉に一理あることを認めないといけないようだ」

「わかってくれれば嬉しいわ」

　アルフィリースはにこりと微笑む。ミランダは振り上げた拳のやりどころに困っているようで、おろおろしている。しかしそのやりとりを見ていたリサの方は、内心思うことがあった。

「（ギルドでのやりとりもそうだったですが・・・アルフィリースはとても純粋な一方で、同時に非常に冷めた部分がある。いずれあれが彼女の命取りにならなければいいのですが。一体彼女は何を見てきたというのでしょう。）」

しかしそんなリサの心配をよそに、どうやらカザスは納得したというよりはアルフィリースに興味を覚えたようだ。

「しかし傭兵でありながら貴女は中々学問にも精通しているようだ。会話の中で師匠という言葉が出てきましたが、どちらの方に師事されたのです？」

「アルドリュース＝セルク＝レゼルワークって知ってる？」

「！　当然ですよ！　私の尊敬する方の１人です！！！」

カザスが目をキラキラさせながらアルフィリースに詰め寄ってきた。そしておもむろに彼女の手を握り締める。

「あの方もその史実が謎に包まれた人だ。あれほど万能の天才でありながら、全ての権力を放棄して消息をくらませた人。その人の顛末が知れるとは・・・僕はなんて幸運なんだろう！」

「はあ・・・」

「もしよかったら彼の話を聞かせて欲しいのですが！！」

「ま、まあいいけど・・・」

「それでは早速！　まず彼のひととなりからですね・・・」

「（なんで私の周り変な人ばかり寄って来るのー？）」

アルフィリースが心の悲鳴を上げる中、意外なところから救いの手が差し延べられる。

「先生よぅ、そろそろ先に行かないか？　アンタはゆっくりでよくても、俺は結構急ぐんだよ」

「おっと、そうでしたね。まあ彼女の宿・部屋など調べればすぐですから、今夜や明日にでも伺うことにしましょう」

「（まさかストーカー誕生の瞬間！？）」

アルフィリースがそのような被害妄想に囚われた瞬間、フェンナがラインとカザスに忠告した。

「先に行かれるなら注意した方がいいでしょう」

「なんでだ、ダークエルフのねぇちゃん」

ラインが不躾に尋ねる。だがフェンナももはやいちいち気にしていない。

「先ほど確認したのですが、地下2階以降とこの地下1階では明らかに建造物の年季が違います。迷宮は明らかに後で作られた物です。そして建造物を迷宮にする理由はただ1つ。」

「・・・侵入者対策か」

ラインが答える。ラインが考え込む様子が不思議でならないアルフィリース。

「ダンジョンなら迷宮で当然じゃないの？」

「アルフィリース・・・お前アホだろ？」

「な、何よ！　アンタにアホとか言われたくないから！」

「いーや、アホだね。よく考えてみろ、迷宮を作る目的は侵入者を防ぐためだな。じゃあなぜ侵入者を防ぎたいんだ？」

「・・・見られたくないものがあるから？」

「そうだ。それが宝だったり、あるいは単純に要塞でも迷路のような構造はするがな。だが宝ならわざわざダンジョンを新たに作成しなくてもいい。何せダンジョンの作成自体に凄まじい金と労力がかかるし、『ここにお宝があります』って自分からばらすようなものだからな。と、すると考えられる可能性としては」

「・・・何よ？」

「可能性の中の1つだが、何かを封印したとかな。だがそっちの方がかなり信憑性はある」
「根拠があるのか？」

今度はさすがにもう冷静に戻っているミランダが加わってきた。ラインがミランダの言葉にこくりとうなずく。

「ああ、この依頼は実はこれが3回目の募集だが・・・今までの連中はだれ一人帰って来ていない」
「なんだって！？」
「最近俺はこの周辺で稼いでいてな・・・その中で親しくなったやつがいたんだが、1週間前の最初の時に集められていた。俺は怪しいから辞めたがね。だが、そいつがいつまでたっても帰ってきやしない」
「そのままどこかへ言った可能性は？」

今度はニアが尋ねる。

「彼女へのプロポーズをほったらかしてか？」
「それは・・・」
「めでたい席になりそうだから俺もサプライズを準備してたんだが・・・怪しいと思った俺は独自に調査を開始した。そいつの嫁になるはずだった女にも頼まれたしな。そしたら確認が取れただけでも10人は帰って来ていない」
「それでもたかが10人では、確証というほどではないだろう？」
「確率の問題だ。調べた10人中全員だぞ？　ギルドでもちょっとした噂になってるよ。それに、どうにもきな臭い話がここのところ多くてな」
「他にもあるのか？」
「こどもが突然消えただの、森の魔物が急にいなくなっただの、死

者がよみがえるのだの、そりゃもう色々な。その程度はよくあるよもやま話だが、この前はクルムスとザムウェドが戦争状態に入ったそうだしな」

「なんですって！？」

今度はフェンナが驚いた。それはそうだろう。間接的だが、クルムスはフェンナにとって仇である。だがそんな事情を知らないラインは続ける。

「その過程においておかしい点はいくつもある。まず第2王子が小姓に刺殺されたこと。そして第1王子は突然の病で死んだそうだ。またあいつぐ王子の逝去に、国王は心労がたたり倒れたそうだ。それらの事情を受けてか、しばらく消息の知れなかった第3王子が突然国王代理を名乗り出た。もはや国王では国を率いる力が無いから、自分が王に代わって国を率いるとな。だがあの王子はバカで有名だったから当然重臣たちは反対した。すると・・・」

「・・・」

「その場で反対した全員を斬り殺したんだそうだ。中には武官として名を馳せたような奴らもいたらしいが、まるで魔王のような強さだったと生き残った連中は口をそろえて言っている。だがともあれその王子のおかげでザムウェドとの戦線は持ち直したそうだ。むしろ押しているとも言われている」

フェンナは開いた口がふさがらない。それはそうだ、自分の仇が生きていたのだから。あの木の魔物を倒した後で一応確認したのだが、兵士は全員死んでいた。いや、まさに欠片としてしか確認できなかったから死体の判別など出来なかったのだが。当然手傷を負わせたあの王子が逃げれるはずなどなかったのだが・・・。絶句したフェンナを尻目に、リサが質問を続ける。

「ゼルバドスという男がどうなったかわかりますか？」
「いや、知らないな・・・その男がどうかしたか？」
「少し気になっただけです。もしかすると大きく関わっているかもしれませんので」
「ふぅん・・・お前たちも何か知ってそうだな」

リサの質問に興味を示すライン。だが、

「ええまあ。ただし今は先を急いだいいかもしれません。地下3階で動体反応が次々消えています。」
「何！？」
「全てが人間かどうかは残念ながらわかりませんが・・・どうしますか、アルフィ？」
「聞かれるまでもないわよ、先を急ぎましょう！」

その言葉を皮切りに歩みを進める一行。既に全員の意識は他の連中の救出に傾いていたが、フェンナだけは複雑な感情を抱えたままだった。

続く

初心者のダンジョンにて、その４～口論と疑惑と～（後書き）

読者の皆様ありがとうございます。

次回投稿は１１／２０（土）１８：００です。

初心者のダンジョンにて、その5～封印の間～（前書き）

～あらすじ～

ダンジョンで姿を消していく傭兵達。だが誰もその話を信用せず・・・？

「そっちはどうだった、ニア？」
「ダメだな、誰も耳を貸そうとしない」
「まあ、そりゃそうだろうな」

ラインがさも当然のような顔をする。センサーであるリサが次々に人が消えていると言ったのを元に、アルフィリース達は傭兵達にダンジョンを一度でるよう呼びかけたのだが、誰も同意はしてくれなかった。リサいわく、既に１０人以上が姿を消しているのではないかということだったが。アルフィリースには傭兵達の行動が納得できない。

「何よ、自分の命より金が大切だっていうの？」
「そんなバカはいなくても、これがお前達の作戦だと疑う奴もいるだろう。自分達だけ金を独占するつもりだとな。俺達に他意が無いことなんざ証明しようがないさ。人間なんて汚い奴らがほとんどだしよ」
「もちろんこちらの意見に同調する者もいるだろうが、少数だろうな」
「と、いうことは他に彼らが飛び付くようなエサがあればいいんですよね？」

カザスが提案する。

「問題はそのエサを何にするか、だな」
「アルフィの裸でいいんじゃない？」
「なんでいつもそういう話になるの？」
「そりゃあんたの裸が一番迫力あるからね。裸の１つや２つ惜しむ

んじゃないわよ」
「惜しむわよ！」
「じゃあフェンナでいっとくか？」
「私でよければ頑張ります！」

ミランダの無茶ぶりに非常に意気込んでるフェンナ。彼女なら本当にやりかねない。

「ちょっと、裸から離れないか？」
「あら、ニアでもいいんじゃない？」
「わ、私なんかが脱いでも誰も見てくれないさ・・・」

なんかニアが指先を合わせて、もじもじし始めた。

「そういうミランダが脱げばよくない？」
「シスターが脱いだら洒落にならないっつーの。アルネリア教の評判を落とすわけにはいかないよ、司祭としてね」
「普段の素行がもう充分ひどいと思うけど・・・」
「何か言ったかい、ア　ル　フ　ィ？」
「何下世話な話をしてますか、このスットコドッコイ共」

リサが戻ってきた。

「用は隠し階段がわかれば一番早いのでしょう？　間違いなく全員喰いつきます」
「そんなに簡単にわかれば苦労ないっての」
「いえ、既にわかりました」
「「「「「「ええええええ！？」」」」」」

全員が驚愕の声を上げる中、飄々としているリサ。

「長いこと見つからないわけですね。ダンジョン探索にはセンサーの同行が常識ですが、なぜ隠し階段ごとき見つからないのか不思議だったのです。全体にセンサー封じがしてあるダンジョンというわけでもなし。でもここが初心者用のダンジョンということを考えれば当然かもしれませんね。私でもなんとかわかる範囲の隠し扉の隙間を見つけました。初心者のセンサーではこれの発見は無理でしょう。しかも隠してある位置が何とも言えず性格が悪い。何せ地下2階にあるのですから」

「地下3階じゃないの？」

「ええ、違います。3階はダミーで、2階から直接降りるのでしょうね。これは見つからないでしょう」

リサの解説を元にその場所にたどりつく。だがしかし・・・

「どうやったら開くの、リサ？」

「さあ？」

「さあって・・・」

「リサは万能ではありません。何私に頼り切ってますか、アルフィ。胸にばっかり栄養を送ってないで、ちょっとは頭にも栄養を回したらどうですか？」

「好きで大きくなったんじゃないわよ！」

「まあそんな話は夜にでもゆっくりやるとして、この開け方ならわかると思いますよ」

カザスが発言する。っていうか、夜やるの？

「へえ、先生にわかるの？」

「私は遺跡のプロですからね。建築様式を見ればだいたいは。時代によって流行りの仕掛けとかもありましたから」

「で、ここの仕掛けは？」
「構造から察するに、およそ３００年前のドワーフの様式・・・だとすると、１つだけ質量の違う石があって、それを押すと開くと思いますが・・・」
「１つって・・・この中から？」

このダンジョンの壁自体が手のひらサイズの石を組み上げて出来ている遺跡である。その中から一つを探すなど、それこそ日が暮れる。

「時間がかかりそうだね・・・」
「でもやるしかないわ」
「皆さん、ちょっと待ってください・・・」

フェンナが壁に手を当てて何か呟いている。しばらくしてすたすたと歩いたフェンナは

「これですね」

とおもむろに１つの石を押した。するといくつかの石が反対に飛びだし、

ゴゴゴ・・・

という音と共に壁が２つに割れていく。

「フェンナ、どうしてわかったの？」
「私は土の魔術師ですから・・・このくらいなら」
「よし、俺は下に言って傭兵どもに声をかけてくる。アルフィリース達は先に降りて安全を確認していてくれ」

言うが早いか走り去るライン。

「僕は史跡の調査を優先させてもらいましょう。大人数に来られると調査どころではなくなりそうですからね」

そしてさっさと階段を下りるカザス。

「・・・私達も下りましょう」

カザスに続いてアルフィリース達も階段を下りる。

＊＊＊

階段は非常に長かった。まるで地の底に行くのかと一行は思ったが、リサいわく、せいぜい１００ｍも下りてないそうだ。地下というのは時間の感覚が無くなって行く。酸素も当然薄くなり、いかに自分達が普段暮らす地上が恵まれているのかをアルフィリースは痛感する。

そして地下に付くとそこは随分ひらけていた。地下1階の広間より大きい。ここは天然の洞穴なんじゃないだろうか？　今までと明らかに造りが違う。そしてその前にそびえる人工の赤い扉、というより門の大きさだ。そしてその前には白骨がいくつも横たわっている。なんだか見ている者に不安を抱かせる光景だ。この扉は開けてはいけないのでは・・・

だがそんなアルフィリースの心配をよそに、扉を熱心に調べるカザス。

「どうやらこの空間を目指して掘ったようですね・・・なぜこんな所に空間があるのかはさておき、この扉の様式は不思議だ。色々な

建築様式が混ざっている・・・おや、こんなところに文字が」

カザスが扉の汚れを慎重にふき取り、読もうとする。

「・・・だめだ、私では読めませんね。現在使われている文字じゃない。誰か読めませんか？」

カザスがアルフィリース達に声をかける。真っ先に反応したのはミランダ。

「どれどれ・・・これは一部は教会文字だね。アルネリア教会が外部に情報を漏らしたくないときに使うやつだ。司祭以上にしか読めないやつだけど、なんでこんなとこに？」

「獣人の文字もあるぞ」

「エルフの文字もです」

「こっちの文字は・・・なんだこれ？」

「それは呪印を刻むときに使う古代語の１つと、竜言語文字よ」

アルフィリースが答えたので一同はびっくりした。特に驚きが大きかったのはカザス。

「竜言語文字ですか・・・書籍では見ましたが、実際の物を見たのは初めてです。ということは、ここには竜も関わっている？」

「とは限らないわ。竜人の可能性もあるし。高位の竜が人の姿を取る時に使う文字の様だけど、竜人でもある程度以上知識があれば使えるそうよ」

「・・・それなら読めないかもしれませんね。教会文字と同じで、竜人の秘匿でしょうから。古代語も僕は読めませんし」

「私は全部読めるわよ」

アルフィリースがしれっと言ったことに、さらに全員が驚いた。

「やっぱりアルフィって頭いい？」

「頭いいかどうかはわかんないけど、魔術を使う上で言語なんかも必須だからね。前言ったみたいに竜とも親交はあったし。ただ嫌な予感しかしないけど。どれどれ・・・・・・・・・・・これは・・・・・」

目で字を追うごとにアルフィリースの顔が暗くなる。そして読み終えた彼女ははっきりと言いきった。

「引き返しましょう」

「な、なぜですか？」

「これは・・・人間の、いえ、地上の生物の手に余るものかもしれない」

「なんて書いてあるのさ？」

「それは・・・」

その時階段の方から大勢の声が聞こえてきた。どうやらラインが傭兵を連れてきたらしい。何とも間の悪い、とアルフィリースは内心思ったが、もはや手遅れだ。

「おお、開けたぞ」

「先客がいるようだな」

「げっ、なんだこの白骨は」

「あの扉がお宝への道か！」

傭兵たちががやがやと叫び出した。どうしたものかとミランダやニアはうろたえたが、アルフィリースの行動は早かった。

「全員聞きなさい！」

凛とした声でその場を一喝する。よく通る張りのある声に、思わずその場の全員が動きを止めてしまった。

「この扉は開けてはいけないものです。この奥には宝などありません！」

「おいおい、俺達を煙に巻こうたってそうはいかねぇぞ？」

「どうせ宝を一人占めにするつもりなんだろ？」

「そうだそうだ！」

逆に大騒ぎとなり、全員が文句を言いだした。すぐにでも暴動がおこりそうな雰囲気である。だがアルフィリースは一歩も引かないどころか、逆に剣をすらりと抜き放った。その行動に思わずどよめく傭兵達。ラインだけは「ヒュウ～♪」と感心した様子で口笛を吹いていたが。

「どうしてもというなら・・・私が相手になります！　宝が欲しいなら私を斬って行きなさい！！」

「ちょっと、アルフィ！？」

「何を言い出すのです？？」

ミランダやリサが止めにくるが、アルフィリースはどこ吹く風だ。顔にはかなりの決意が見てとれる。その様子にさすがに傭兵達も気が付いたのか、騒ぎがどよめきに代わって来ていた。傭兵達もバカではない。彼らに学のある者は少なかったが、金次第でどんなことでも請け負うことがある彼らは汚い人間など腐るように見てきている。今現在彼らの目の前で剣を抜いて立ちはだかる女剣士が、金に汚い人物には全く見えなかったのだ。

それに彼らは自分の身の危険にも敏感だ。アルフィリースの様子

を見て、自分達が取り返しのつかないことをしようとしていること
を直感で悟った者も少なくなかった。

「どうする？」
「そこまで言うのなら本当にヤバい物かもな・・・あの女が嘘をつ
いているようには見えん」
「むしろ本気で俺達を心配しているかもな」
「では、せめてこの扉を開けてはいけない理由だけでも教えていた
だけますか？」

どよめきの中からひときわ通る声を発したのは、アルフィリース
と集合時に目の合った少年であった。

続く

初心者のダンジョンにて、その5～封印の間～（後書き）

いつも閲覧ありがとうございます。

次回投稿は１１／２１（日）１０：００です。

初心者のダンジョンにて、その6～闇との邂逅～（前書き）

～あらすじ～

ダンジョンの封印に辿りついたアルフィリース達であったが、それは人の手に余るものだった。封印を開けないことを決定したアルフィリースだったが・・・？

「理由？」
「ええ。貴女がそう判断した理由です」
「・・・この扉にはこう書いてあるわ。『この扉を永久に閉ざすことにより、邪鬼を封ず。なんびとたりともこの扉を開けることなかれ。再びこの扉開かれたる時、融和と信仰の土地ゼアと同じ命運を辿らん』とね。察するにこの扉の奥にいる何者かによりこのゼアは滅びたようね。まあこんな強力な封印術、普通の人間に破ることは不可能だからまず扉を開けることは不可能だけどね」
「その封印術というのは、この白骨から察するに呪印の一種ですよね。どうやら自らの命と引き換えに施したようだ。扉の赤い色は彼らの血なのでしょう。それほどする必要があった、と」
「・・・随分詳しいわね」
「それはそうですよ、呪印のアルフィリースさん？」
「！　なぜ私の名前を！？」

アルフィリースは瞬間的に身構える。この少年はいたってにこやかな笑顔を崩さないが、段々その笑顔が歪んできている。

「だって、暗黒系統の魔術はボクが最も得意とするところだから。それに貴女のことはよく見てるんだよ？　前回はボクのお気に入りの魔王を殺されたしね」
「あなた何者！？」
「その前に一仕事。どうせいるんだろ？　出ておいでよ！」
「・・・妙に鋭いね、君は・・・」

壁の中からもう一人少年が出てくる。

「あの結界さ、どのくらいで無効化できそう？」
「・・・そうだね、２分もあれば十分かな・・・」
「なんですって！？」

この結界はここにある白骨が自己の生命を引き換えに封印したものだろう。数にしておよそ３０余り。それをたった２分で無効化とは、どれほどの魔力だというのか。

「あなた、自分が何をしようとしているのかわかってるの？　とんでもないモノを起こそうとしているのよ！？」
「いやー、むしろそれが狙いですけど」
「ここにいる人間が死んでもいいと言うの？」
「え、それは何か問題なの？」
「・・・なんですって？」

もはや少年の笑みはにこやかなものから、陰惨なものに変貌していた。口の端は歪み、アルフィリースが驚き怒る様子を楽しんでいるのは明らかだ。ここで初めてアルフィリースは背筋を冷たい汗が伝っていることに気が付いた。なぜ自分がこの少年に目が止まったのか。そのことをもっとあの段階で考えておくべきだったと。目の前にいる存在、それは、

「み、皆・・・逃げて・・・」

リサが真っ青な顔をしてガタガタと震えだしている。

「どうした、リサ！？」

ニアがその様子に気が付いてリサにかけよる。

「ど、どうしてリサは今まで気が付かなかったの・・・こんな・・・こんな存在は人間、いいえ、魔物とさえ呼べない」
「へえ？　ボクのことがわかるの？」
　少年の姿がゆらいだかと思うと、一瞬でリサの正面に現れる。ニアは反射的に殴ろうとしたが、拳を振り上げた段階で、拳を止めてしまった。いや、殴りかかるなど土台無理な話だった。
「（なぜ拳が動かない？　まさか、怯えていると言うのか、こんな少年に？　だが、今動いたら・・・確実に死ぬ・・・）」
　そのようなニアの様子を気に欠ける様子もなく、少年は言葉を続ける。
「ボクのこと・・・どう見える？」
「あなたは・・・人間、いえ、生物ですらない」
「どうして？」
「たとえ魔物でも憐れみや慈しみといった感情を抱くことが普通。なぜなら魔物でも子孫は残すのだから、同族に対する愛情表現はあるのです。でもあなたの本質は・・・憎悪、快楽、破壊だけ。それだけしか・・・それだけしかない。生き物ならそんなことはありえない」
「アッハ！？　いいね～キミはボクを理解できるんだ。気にいったよ！　ボクのお嫁さんにしてあげようかな！？」
　少年の瞳に狂気が宿る。瞳には暗く、しかし爛々とした明りがともっている。
「おことわ――げほっ、うぇぇ――」

その瞳に宿る感情を正面から感知してしまったリサが思わず吐いてしまう。

「（道理でセンサーが働かないはず、それは私の防衛本能だったのですね。こんな相手と正面から向き合ってたら、それだけで発狂してしまう。ジェイク、助けて――）」

「吐いちゃうなんてかわいいね～ボクの傍に置いたら何日で発狂するかな？　試してみよう♪」

少年がリサに手を伸ばそうとした時、アルフィリースが少年を斬りつけてきた！　だが背後から斬りつけたにも関わらず、ひらりと鮮やかにかわす少年。

「リサに触れるな！」

「ひどいなお姉さん。こんないたいけな子どもに後ろから斬りつけるなんて」

「もはやあなたを子どもとは思わない。一体何者なの？」

「ああ、これは失礼しました」

少年は大仰にお辞儀をしてみせる。

「ボクの名前はドゥーム。まあただの魔術師だよ。ちなみにそこの無口なのは・・・ねぇねぇ、キミの名前ってなんだっけ？」

「・・・どうでもよくない？・・・それよりもうすぐ解呪が終わるけど・・・」

「え！？」

いつの間にかもう1人の少年が扉の前で解呪を行っている。本当にあと1分もなく封印は解けるだろう。

「すぐにやめなさい！」

フェンナがいち早く矢を少年に向ける。

「・・・聞けない相談だね・・・」

「ならば！」

フェンナが矢を射る。矢は見事肩口に命中するが、まるで少年は気にかける様子もない。フェンナは内心動揺するが、既に次の矢を構えている。

「・・・急所をはずすなんて優しいね・・・」

「・・・次は頭に当てます」

「・・・どうぞ？・・・」

フェンナも本来の気性は穏やかとはいえ、戦場において躊躇はしない。すぐさま解き放たれた矢は見事少年の頭を命中するが、それでも少年は気にかける様子がない。

「そんなバカな！？」

フェンナは次々と矢を繰り出すが、何発頭に命中させようとも少年はびくともしない。その異様な光景にフェンナは完全に怯えていた。怯えていたからこそ次々と矢を放ったのかもしれない。少年の頭がハリネズミのようになったところで、やっと少年が振り向いた。

「・・・いくらなんでも遠慮しなさすぎでしょ？・・・見えにくいったらありゃしない・・・」

「ひっ！」

フェンナが思わず弓矢を落とし、手で口を覆っている。それもそのはず、矢の何本かは少年の顔面に突き抜けていた。一つは目を突いている。なのに血が一滴も出ていない。それは異常な光景だった。

「・・・ところで君はシーカーの王女様だったね・・・」

「そ、そうです」

震える声を押し殺して、フェンナが必死に応答する。

「・・・君の仲間ね、まだ生きてるよ？・・・」

「えっ？」

それは意外な発言だったので、フェンナは思わず相手が敵であることを忘れてしまった。

「・・・僕と来れば会わせてあげてもいい・・・どうする？・・・」

「そんな・・・私・・・」

「フェンナ、聞くな！」

フェンナの迷いを遮るように、どこから出したか少年目がけて振り下ろされるミランダの巨大メイス。巨体のオークすら粉微塵にする一撃だ。少年では受け止める術もないように思われたが、ぱしっ、といとも簡単に片手で受け止められてしまった。

「んな？」

ミランダは驚いたが、さらに彼女が驚いたのは今度は少年がそのメイスを握力で握りつぶし始めたことだった。鋼鉄製のメイスを、である。

「は、離せ！」
「・・・いいよ？・・・・」

少年はミランダの言うとおり、メイスを放した。正確にはミランダごと天井に向けて、だが。

「ぐあっ！？」

激しい激突音と共に、１０ｍの高さにはあるであろう天井にぶつかるミランダ。そしてそのまま落下してくるが、ニアが間髪受け止めに入る。

「・・・で、そうしてるうちに解呪終わったけど？・・・」

ギイイ～、と重苦しい音を立てて扉が開いて行く。本当に2分もかからず解呪してしまった。

「えー、俺はリサちゃんと遊びたーい！」
「・・・それはダメ・・・仕事が先だよ・・・」
「ぶー！　じゃあ終わったらたっぷり遊ぼうね、リサちゃん。何日間でも夜通し付き合ってあげるから、フフフ・・・」

怯えるアルフィリース達を尻目に、扉の向こうに向かうドゥーム達。もはや気力的にまっとうに立ち向かえそうなのはアルフィリースだけだったが、彼女も追う気にはなれなかった。むしろ早くこの場を立ち去りたくて仕方がなかった。だがそんな彼女たちに無情な現実が付き付けられる。

ガラガラガラ・・・

突然階段の入口に上から石の扉が下りてきて締まったのだ。おそらくは赤い扉が開いたときに発動するトラップだったのだろう。あるいは封印されている者を出すまいとする予防措置。

ここにきて事の成り行きをただ呆然と見守るだけだった傭兵達も、現実に引き戻された。何人かが出口に殺到する。

「くっそ、開かないぞ!?」

「これは・・・魔術で補強されてる?」

「ここから出せー!」

扉の周囲で騒ぐ者、事の成り行きをさらに見守る者、冷静に対処しようとする者など様々な様子だったが、ドゥームの行動はさらに追い打ちをかけた。慌てふためく傭兵達を面白そうに眺めている。

「ねえねえ、もう予定の人数は集まったから、後は好きにしてもいいんだっけ?」

「・・・いいんじゃない・・・」

「そーゆーことなら。おいで、マンイーター!」

【召喚(サモン)】

地上に魔法陣が描き出され、何かが召喚されてくる。全員がこれに気付き、怯えながらも戦闘態勢をとる。

「ボクが戻ってくるまでこの子相手に生き残れたら、命だけは助けてあげてもイイよ? そう、命だけはね・・・まあこの子は最近何も食べてないから相当に気が立ってると思うけど。アハハハハハ!」

高笑いと共に扉の向こうに消える少年二人。そして魔法陣から現れたのは・・・ガリガリにやせこけた小さな子供であった。

続く

初心者のダンジョンにて、その6～闇との邂逅～（後書き）

支援ありがとうございます。

次回投稿は本日１１／２１（日）２０：００です。

初心者のダンジョンにて、その7～封印されしもの～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリース達の目の前姿を現したマンイーター。今傭兵達とマンイーターの戦いが始まる・・・！

「しかしここにあの女剣士達が来るなんてね。すごい偶然だよ。まさか狙ってたの？」

「・・・そこまで考えたなかったさ・・・だが結果は上出来だ。・・・実際あのリサとかいう子がいなかったらここは見つけられなかった・・・彼女達が来なかったら誰か他に応援を要請しないといけなかったね・・・」

「そういうこと。ボク達が無能みたいでそれはしたくなかったけどね。ああ神様！　この巡り合わせに感謝します！！」

「・・・僕達に感謝されたら神様も迷惑さ・・・」

アルフィリース達の相手をマンイーターに任せ先に進む少年2人。扉の奥はまだ先に長く、段々と通路が細くなり圧迫感を醸し出す。進むごとに空気が淀み、腐っていくのをこの2人も感じていた。並の人間なら息苦しくて先に進むこともままならないだろうが、この2人は違う。

「んー、いいねぇ。ビンビンキテるじゃん？」

「・・・確かに、これは大物だね・・・君に制御できるの？・・・」

「さあ～？　まあできなかったらできなかったで、ボクってその程度っていうか、それはそれで楽しいかな？　なんてね」

「・・・自分の死すら快楽か・・・でも君のそういうところが好ましいから手を貸してるんだけどね・・・」

「おっと、告白はもっとムードのあるところでしてくれよ？」

ドゥームがウィンクしてみせる。その仕草に対し、無口な少年が珍しく口元をほころばす。

「・・・僕にその趣味はない・・・」
「アハハ、俺も女以外は無理。男なんか、部下でも嫌だね！　それよりその頭に刺さったままの矢、なんとかしたら？」
「・・・忘れてた・・・」

　無口な少年は本当に失念していたようだ。頭に無数の矢が刺さろうとも、まるでダメージがないのだろう。ドゥームは少し呆れたが、どうやってもこの無口な少年を殺すイメージが彼にはつかなかった。だからこそ彼と対等に話が成立しているのだが。もしこの無口な少年がこれでダメージを受けるような存在だったら、ドゥームは面白半分で彼を殺しにかかっていただろう。一般常識のある人間からは考えられない関係性だが、彼ら同士には不思議な一種の信頼関係のようなものがあった。もっともそれがいつ覆るかは、本人達の気分次第であったのだろうが。
　そして無口な少年に刺さった矢が全て彼の体に沈み終わるころ、小さな部屋に彼らは辿り着いた。そこには台座の上に小さな小瓶と、地面には一振りの剣が刺さっている。どちらも見る者に負の感情を抱かせる様相を呈している。暗いモノは人を魅了するというが、まともな人間なら本能が触るなと警告を発する一方で、思わず手に取ってしまう。そんな感じだ。

「・・・どっちがそうなの？・・・」
「たしか小瓶の方だね。剣は後回しか」
「・・・というか剣は何さ？・・・」
「なんでも封印された魔剣なんだとか。ここに封印されたってことは、かなりタチの悪い代物なんだろうよ。まあとりあえずは瓶を・・・ん？」

　ドゥームが無造作に瓶に手をかけると、瓶の中からゴポリ、と黒い液体が流れ出てきた。

「なんだこりゃ？」
「・・・気をつけるといい・・・封印は作動してるが、どうやら中の怨念がそれをはるかに上回ってるようだ・・・」
「おいおい、赤い扉の１０倍以上は強力そうな封印だぜ？　さらに封印って確か中から破るには、外から破る労力の何倍か必要なんじゃなかったっけ。どんな奴が中にいるんだよ」
「・・・！　気をつけろ、普通じゃないぞ？・・・」
「あん？」

無口な少年の方を向いて話していたドゥームが手元に目をやると、小瓶からは既に湧き水のように黒い液体があふれ出ており、しかも自分の意志があるがごとく彼の手を登って来ていた。

「うぉい！　なんじゃこら？」
「・・・相当よくないモノだ・・・その在りようは好ましくはあるけど、君も喰われかねないね・・・」
「ちっ！　俺を取り込もうんなんざ、とんだじゃじゃ馬じゃねーか！？」

ドゥームが自身の魔力を解放する。彼の場合、魔力とはちょっと違うのでそう述べていいかどうかは疑問なのだが。強いて言えば邪念、のようなモノと表現するのがより近いか。そして小瓶の侵食と自身の魔力を拮抗させる。

「・・・大丈夫？・・・」
「なんとかね・・・だが拮抗させとくのが手一杯だな。単純に吹き飛ばすならまだしも、消滅させないようにひっぺがすのは無理か。どうやら中身の方は何百年も殺せてないから気が立ってるみたいだな」

「・・・どうする？・・・・」
「ちょっと暴れさせてやるといいだろ。とはいえそこの傭兵達にけしかけたらマンイーターがむくれるし・・・おそらく数も足りないな。どっかの村ででも解放して暴れさせてやるか」
「・・・意外と部下思いなんだね・・・じゃあ転移で向かおう・・・」
「すまないけど村まで頼むよ、とても転移を使うような余裕はない」
「・・・マンイーターはどうする？・・・」
「マンイーターならほっといていいんじゃない？　これしきで死ぬような奴に興味ないね」
「・・・前言撤回、やっぱりひどい奴だ・・・」
「俺と一緒に遊べないような女はいらないよ。それよりちゃっちゃと頼むぜ」
「・・・はいはい・・・」

そうして二人の少年と小瓶は廃都ゼアから姿を消した。後には剣が地面に刺さったまま残されていた・・・。

＊＊＊

一方目の前に召喚された子どもを前に、アルフィリース達を含む傭兵の面々はどうしてよいか戸惑っていた。あのような連中が召喚したからにはただの子どもであろうはずがないが、その姿はあまりに幼すぎる。また殺気を感じるわけでもなく、ただじっとうつろな目で周りを見渡している。そしてやせ細り骨と皮だけの体にボロボロの布切れといった戦争孤児のような格好が余計に憐憫（れんびん）の情を駆り立て、彼らに剣を振り下ろさせる覚悟を鈍らせていた。１００近い武装した傭兵達と、そのようなボロボロの子どもの睨みあいといった異様な対立に耐えきれなくなったのか、ついに一人の傭兵が口を開く。

「おい、お前は敵か・・・？」

その言葉にピクリとマンイーターは反応し、ゆっくりとそちらを振り向く。そして何事か口を動かし始めた。

「・・・が・・・・・・たの」
「なんだって？」
「おなかがすいたの」

その言葉の意味を測りかねる傭兵は、ありのままを答えた。

「・・・あいにくと飯は持っていない。地上に出れば食料ぐらい取れるだろうが」
「？　目の前にいっぱいごはんあるよ？」
「何を言って・・・」

傭兵が最後まで言葉を言い終える前にマンイーターが動く。そして目にもとまらぬ速さで傭兵に飛びかかった。そして彼女の頭だけが成人男性ほどの異様な大きさに一瞬で膨れ上がったかと思うと、口が上下に大きく開き・・・頭から傭兵にかぶりついた！

バキッ、ゴキィ！　バリバリ・・・ボキリ、ムシャムシャムシャ・・・ゴクン。

そして元の大きさにあっという間に戻るマンイーターの頭。先ほどの傭兵がいたあとには・・・彼の膝から下だけが立っていた。具足も剣もおかまいなしだ。そして真っ赤に染まった口を隠そうともせず、マンイーターが手を伸ばしながらその隣にいた傭兵に近づいて行く。

「・・・・・もっと・・・」
「ひ、ひ、ひぃぃ！」

よく目の前の事態をよく理解できないまま、やみくもに剣をマンイーターに向けて振り下ろす傭兵。だがそんな剣を彼女はあっさり歯で受け止め・・・そのまま噛み切った！

バキン！

鉄製の剣がなんのためらいもなく折れる。そのまま剣をバキバキと食べるマンイーター。

「あ、あああ・・・」
「・・・あんまりおいしくない」

そしてその傭兵に飛びかかろうと、マンイーターの体が宙に浮いた瞬間――ニアの飛び蹴りが彼女の腹にめり込んだ！　そしてそのまま２０ｍ先の壁まで吹き飛び、叩きつけられるマンイーター。

「動け貴様らぁ！」

そのニアの一喝ではっ、と我にかえる傭兵達。アルフィリース達も我にかえる。

「ニア！」
「全員気をつけろ。あいつ、堅いぞ！」
「・・・どうして、じゃまするの・・・？」

ゆらり、とマンイーターが立ちあがる。リサがその様子を探知し

ているようだ。

「皆さん、気をつけて！　アレは見かけどおりの生物ではありません。もはや生きてなどいない・・・おそらくは何十年も経た悪霊の類いです！」

「・・・ワタシは、おなかガすいテルだけナのにぃぃィいイイいい！」

子どもとは思えないほど低く、そして獰猛な声を上げて子どもの姿が変貌していく。あっという間に大人達の身長を超え、なおも体を巨大に変貌させる。胴体は岩のような外表をし、横に開く大きな口を持つ。歯はまるでサメのようなノコギリ歯だ。そして足は蜘蛛のように毛むくじゃらで6本あり、長い尾の先にも口がついている。そして両手の代わりの大きなハサミがついており、胴体から先ほどの子どもが胸から上だけ出ている。

「なんなの、この生物は・・・」

「これは・・・色んな生物が合体してる?」

「蜘蛛とカニが結婚でもしましたか?」

「リサ、気色悪いこと言わないでよ」

「アルフィ、ここは任せた！」

「ええ!?」

ラインがその場を後にする。

「あいつ、戦いを止めたわ!?」

「ほっとけ！　くるぞ!?」

「おなかガすイたよオおおオおぉぉォォ！」

「グオオオオオ！」

「ゲヒャヒャヒャ！」

マンイーターと胴体の口、尻尾の口がそれぞれ別々に吠える。そして胴体の口が吠えた時に、口の中に血走って真っ赤な目をした人間の顔が沢山あるのが見えてしまった。どれもこれも生者を羨む悪霊の目だ。前戦った魔王に比べればまだ生物に近い、などと考えた自分の浅はかさに舌打ちするアルフィリース。目の前にいるこれはもはや子どもでも、生物ですらない。

「全員で囲むように戦って！」

アルフィリースが反射的に支持を飛ばす。傭兵達も誰となくその指示に従い、戦いが始まった。

続く

初心者のダンジョンにて、その7～封印されしもの～（後書き）

閲覧・評価ありがとうございます。

次回投稿は１１／２２（月）１２：００です。

初心者のダンジョンにて、その8～封印解けて～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリース達とマンイーターの戦いが始まる中、逃げたと思われたラインが取った行動とは・・・？

＊＊＊

一方こちらは逃げ出したと思われたライン。アルフィリースは反射的に逃げたと表現したが、出口を塞がれたこの地下から逃げ場などない。アルフィリースがそのことを失念したわけでなかったが、そう表現したのもやむを得ない。彼女は仕事で何回かラインと同行しているのだが、彼がまともに戦ってるのを一度も見たことが無い。いつも戦闘が始まると姿を消し、終わったころにひょっこりと現れる。時には大将首など、おいしいとこだけ持っていったりする。そのためアルフィリースは彼を臆病で卑怯な男と思っていたが、実際にはそういうわけでもなかった。

彼はいついかなる時も冷静沈着で、幾多の戦場をくぐったミランダでさえ遠く及ばないほどだった。そして今現在の最優先事項は、「いかに生き延びるか」ということ。だがそれは自分の命に対する執着はではなく、どうにも他人が目の前で死ぬのは苦手だということ。彼はなんとかして一人でも多くを合理的に救うため、少数の犠牲を出してもやむを得ないとするタイプの人間だった。命を数で勘定するわけではないが、救えるなら一人でも多いほうがいい。彼が長年戦場にいる者としての1つの決論だった。だがそれが正しいとはいまだに確信できるほど彼も歳を経てはいないのだが。特に最近その信念が揺れる。

その原因はアルフィリースだった。ラインにとって女など別に一時の気まぐれ程度、自分の欲求不満を晴らす程度の存在でしかないというのに。女は面倒くさいから深入りはしないことにしている。昔一人だけ本気で惚れた女がいたが、あの時の出来事は今でも自分の心に影を落としている。いまだに忘れられないあの女の涙を流す顔。アルフィリースが似ているとも思わないが・・・

「（キャラが全く違うしよ。だいたいアルフィみたいなドジじゃねぇしな・・・だがなぜだ？　なぜアルフィが気になる？　まさか惚れてるとでもいうかよ！　あんなションベンくせえガキによ・・・）」

そんなことを戦場でラインが考えるのは珍しい。その考えと共に今彼が向かっているのは、先ほどあの少年達が向かった扉の向こう。出口がもしかしたらあるかもしれないという希望と、失踪した傭兵達の手掛かりを何としても探し出すため。それにあの魔物だけなら今戦っている面子で何とかできるかもしれないが、あの少年のうちどちらか片方でも戻ってきたら確実に全滅することが彼にはわかっていた。どちらかが戻ってきそうだったら、自分が何としても足止めをするつもりだったのだ。そういった意味ではここが一番重要な戦局なのかもしれないことを、いち早くラインだけが気が付いていた。

そして道が部屋に出そうなのを感じると足音を殺し、そっと中の様子を窺う。

「（気配がしない・・・？）」

無口な方はともかく、ドゥームとか名乗った方は気配を消しそうなタイプではなかった。思い切って中を覗くと、そこには剣が一本刺さっているだけだった。

「どこにいったんだ・・・？」

キョロキョロと中を探すが、中には隠れるような空間はない。まず隠れるような必要もないだろう。

「で、なんだこのボロイ剣は？」

足でゴンと蹴る。

「出口もないし、なんだか意気込んだのがバカみたいだな。戻って手助けするか」

「おい・・・」

「いや、もう少ししてから戻るか？　いっそカッコよくヒーロー的な演出をだな・・・」

「おい・・・」

「そうしたら処女なんかイチコロで落とせ・・・だが処女は後がめんどくさいんだよな・・・」

「おい・・・！」

「なんだぁ！？　今俺が素敵に自分をプロデュース計画をだな」

「多少人の話を聞け・・・！」

剣の方から声がする。まだボケるには早いと自分でも思うので、空耳と言うことにしておこう。

「まさか疲れているのか？　空耳が聞こえるな・・・」

「空耳ではない・・・」

「あー、もう戻ろうっと」

「待たないか・・・」

だがスタスタと戻るライン。まさかのフラグ全無視を決めそうになったその時、

「そこの短小包茎男、待て・・・！」

「誰が早漏だぁ！」

ラインが怒声と共に戻って来て、剣に蹴りをくれた。

「誰も早漏などといっておらん！」
「聞く耳もたん！」
「いや、そこは聞くところだろう？」
「問答無用！」

剣に連続で蹴りをくれるライン。その内剣が抜けてしまった。

「バカな！？　蹴りで我の封印を破るとは・・・！」
「誰が早漏だぁ！？」
「まだ言うか？　しつこいぞ！」
「ああ、しつこいさ！　だから何度でも蹴ってやる！」
「や、止めろ！　我の顔が・・・」
「剣に顔なんぞあるかぁ！」

剣と人間が真剣にケンカしている。このシーンにリサを引き合わせてみたいものだ。はたしてなんとツッコミをいれるやら。

そしてややあって・・・

「・・・飽きた」
「貴様！　散々我を足蹴にしておいて言うセリフがそれか？　昔は我を巡って数多の人間が戦争まで起こして争ったというのに」
「いや、どーでもいいからそんな剣の過去話。番外編でやってくれ。今度こそ帰る」
「・・・そなた、『空気が読めない男はキライ』とよく女に言われるだろう？」
「ギクッ」
「・・・図星なのか・・・」

剣のため息が聞こえてきそうだった。剣だから息もなにもあったものじゃないわけだが。

「ところで貴様」

「ラインだ。むしろ様をつけろ。剣の分際で偉そうにするんじゃねぇ」

「ぐっ、だが名乗られたからには名乗り返さなければなるまい。私の名は・・・」

「いや、別に聞きたくない」

「名乗るくらい自由にさせろ！」

「じゃあ俺が帰ったあとでやってくれ。一人で延々と自分の名前を呟くがいいさ、はんっ！」

ラインが悪党成分を全開にしている。こんな場所に封印されているくらいだから相当によくない剣だということはラインにもわかっているのだが、どうしてこんなに強気になれるのか。だが剣も負けていない。

「・・・そこまで言うなら勝手にするがよい。だがしかしこのままでは傭兵達は全滅だがな。この前遺跡に来た奴らの様に」

「なんだと！？」

ラインの顔つきが変わる。

「前にここに来た傭兵達がどうなったか知っているのか？」

「まあな。さっき来たガキ共も自力ではここは見つけられなかった様だったが、私自身がセンサーみたいなものだからな。たとえこの封印された部屋からでもこの遺跡程度の範囲ならお手の物だ。だから上で何が起こってたかは、ここに封印されてからずっと探っていたのさ」

「で、どうだった？」
「タダで教えると思うか？」

剣がやや意地がわるそうな声を発する。ラインは内心で舌打ちしながらも問いかける。

「・・・条件は？」
「話が早い奴は好きだよ。私をここから出してくれ。さすがにこの暗い部屋はもう飽きてな」
「・・・そのくらいならいいだろう。話せ」
「約束だぞ？」

剣は念を押した上で話し始めた。

「この前に集団で来た連中は既に全員ここにはいない・・・適当に殺して、余った連中を連れていく感じだった。いや奴らにしたら遊んでいるのにも等しいのだろうがな」
「何人ぐらい連れて行った？」
「探し人でもいるのか」
「まあな」
「殺したのはせいぜい１０人だ。探し人が生き残ってる可能性は高いだろう」
「なるほど・・・それでもどちらにしろもうだめか」
「ほう・・・」

剣は少しこの男に興味をそそられた。人間と言うのはとかく正義感を振りかざしたり、善人ぶるのが上手い種族だとこの剣は思っている。そういった連中が極限状態で悪魔に変貌したり、守っていた者にいともたやすく刃を向ける場面をこの剣は何人も見てきた。だが逆に自分の限界を正確に見極め、自分のできることだけをする人

間はこの剣には好印象だった。そういった人間の方が信頼ができる。

「まだ生きている可能性のある者を助けない、と？」

「できればそうしてやるさ。だがやつらの本拠もわからないし、対抗できそうな戦力もない。ここにもういないのなら、それこそ手がかりもないしどうしようもない。それに・・・」

「それに？」

「奴らはヤバい、本格的にヤバい。あいつらは人間の恰好をしてはいるが、人間を同格の生物とみなしていない。そう、俺達が普段歩くときに足元の蟻を踏み潰しても気にかけないように、奴らにとって俺達はその程度だ。・・・いや、もっとひどいか。奴らは足元にいるアリの数を計算して、最も効率よく踏み潰しに来るタイプだ。数々の戦場を巡ったが、あんな得体の知れない連中を見たのは初めてだ。俺は今後一切かかわりたくない。あいつらにかかわれば地獄に百回落ちたほうがマシと言える死に方をするだろうよ」

「なるほど、そうかもしれんな」

「あと出口はここの部屋にあるか？」

「いや、ないだろうな」

「ここで行き止まり・・・なら何とかしてあの石の扉を開けないと・・・」

「よし、これで我の知っている情報は話した。約束通り我を連れていってもらおうか？」

「ん？　ああ、断る」

何の躊躇も無しに言いきったライン。剣もその可能性を考慮してなかったわけではないが、あまりにも即答ではっきり言われたので面喰った。いや、剣に顔は無いのだが。

「貴様、たった今約束したではないか！？」

「ああそうだな。・・・だが俺は約束を破らないなどとは一言も言

ってないがな？」
「そんな詐欺師の様な弁論を・・・」
「それにこんなところに封じ込められているお前はロクなもんじゃないんだろう？　このままここに封印されてた方が世の中のためだ。じゃあな」
「ま、待て。待たんか・・・！」

何か叫ぶ剣を背にし、足早に部屋を立ち去るライン。彼の頭の中にはもはやこの情報を如何に依頼主に知らせるか、いかにこの場所を脱出するかしかなかった。そして出来る限り多くを助けられるのか・・・。自分の命はもちろんのこと、できれば自分より年若い連中や、あの女剣士の連れは何とかしてやりたかった。自分では酷薄なつもりでも、なんのかんので情に厚いところがあることを彼が自覚してはいなかったかもしれないが、これからの計画を立てながら足早にアルフィリース達の所に戻るラインだった。

続く

初心者のダンジョンにて、その8～封印解けて～（後書き）

閲覧・評価・感想ありがとうございます。

次回投稿は１１／２３（火）１２：００です。

初心者のダンジョンにて、その9～秘術発動～（前書き）

～あらすじ～

閉じ込められた空間内でマンイーターと戦うアルフィリース達。だがマンイーターは彼女達の予想を大きく上回る生物で・・・？

初心者のダンジョンにて、その9～秘術発動～

散々剣に悪態をついたラインがアルフィリース達が戦っているであろう部屋に戻った時、戦況は劣勢だった。既に１０を超える傭兵達の死体が転がっている。前衛をアルフィリースとニア、シスター服を脱ぎ捨てたミランダ、それに何人かの腕にそれなりの覚えのある傭兵が務めていたが、どうやらマンイーターに剣が全く通らないようだ。

「この！」
「固いにも程があるでしょ！？」
「胴体だけじゃなく足も堅いぞ？」
「そういうときには・・・」

ミランダが後ろに控える連中をチラリと見る。

「全員回避！」

ミランダの声を合図に全員が飛びのくと同時に、何人かの魔術士が攻撃魔法を一斉に放つ。即席の連中でよくここまで連携をとれるものだとラインは感心する。よほどあのシスターは修羅場をくぐってきたことがラインにも容易に想像できた。
そんなラインの思考とどちらが早いか、派手な衝撃音と共に魔術が次々と命中する。あまり効き目はないようだが、それでもマンイーターは苛ついたのか、地面を踏みならし吠える。

「オオオオオン！」
「そいつを待ってた」

マンイーターが吠えた瞬間を狙い、ミランダがその口に爆弾を投げ入れる。虚をつかれたマンイーターは反射的にそれを飲み込んでしまった。

「外が硬い奴ほど中は柔らかいってね！」

轟音と共に爆弾が爆発すればマンイーターも木端微塵になるはず・・・だったのだが。音は中途半端にしか聞こえなかった。いや、音が聞こえたからにはマンイーターの体内でしっかり爆発しているはずなのだが。だがマンイーターの動きはいくらか止まったものの、からだの隙間から煙を出すばかりで大きなダメージは無いようであった。

「・・・中まで固いみたいだな・・・」
「くっそ、めんどくさい」
「どうしよう。やっぱり私が呪印を」
「それはダメだ！」

アルフィリースがミランダに一喝される。

「じゃあどうするの？」
「今考える！」
「そんな暇はなさそうです、もう動きます」

リサの言うとおり、既に爆発の衝撃からは回復しつつある。再び構えなおすときにアルフィリースが視線の端にラインの姿をとらえる。

「ライン！　あなたも手伝いなさい！！」
「やなこった」

「ちょっと、あなたそれでも男なの？」
「ベッドの上で確かめてみるか！？」
「さっ、最低だわ！」
「そんなことより」

赤面しながら激昂するアルフィリースの頭を押しのけるようにしてミランダに駆け寄るライン。

「おいシスター。さっきの爆薬いくつ残ってる？」
「あん？　残り3つだ。それがどうした？」
「3つか・・・俺のをいれて5つ。いけるか？」
「？　何を考えてる？」
「逃げる算段だ」
「ライン！　あなたまたそんなこと言って」
「いや、アルフィ・・・ここはこいつの言うことが正しいかもしれない。爆弾をあんたに預けるとして、アタシ達は足止めでいいのか？」
「話しが早いな。愛してるぜ、シスター」
「それは平素の時に言ってほしいもんだね」
「へ。3分でいい、食い止めれるか？」
「どうかな」
「私が食い止めましょう」

名乗りを上げたのはフェンナ。

「フェンナ、あんたの弓じゃ効かないでしょ」
「いえ、魔術を使います」
「そんなのできるなら早くやれって話だよ」
「単純に威力が大きくて、こんな狭い空間で使ったら遺跡が崩壊しかねないので使わなかったのですが」

「おいおい、俺達が生き埋めにならないように頼むぜ？」
「努力します」
「よし・・・カザス！　ちょっとこっちに来い！」
「なんですか、ラインさん」

ラインがカザスを連れて階段の方に歩いて行く。一方でマンイーターも既に態勢を整え直している。

「フェンナ、任せていいの？」
「大丈夫ですよ、アルフィ。まあ見ててください」

フェンナが弓を背にかけ、手で印を結ぶ。

【我、大地の精霊グノーム座して願う。汝が力、地脈を通じて我に伝えよ。伝えて寄りて拳に宿し、汝が怒りの波動をを我が敵を払うために現さん】
《地津波（アースウェイブ）》！

魔術名と共にフェンナが地面を右手で殴る。すると細腕のはずのフェンナの拳が地面にめり込み、そこを起点として地面がマンイーターに向けて放射状に波打ち始めた。そして急激に地面が隆起し、メキメキという音と共に高さ数mの津波となってマンイーターに襲いかかる！

「！？」

マンイーターが気付いた時には既に時遅く、もともと鈍重な身であるからそれこそ回避の暇もなく津波に飲み込まれ、そのまま奥の壁に叩き付けられた。そして盛り上がった岩がそのままマンイーターの動きを封じる。その様子を見て感嘆するアルフィリースとミラ

ンダ。

「フェンナ凄い！」
「やっぱりシーカーは魔力量が違うな・・・」
「・・・いえ、どうでしょうか？」
「冷静ですね、フェンナ。まだアレは動きますよ？」
「ブオオオン！」

リサの言うとおり、マンイーターが大きな口を開いて自分の動きを封じる地面を食べ始めた。ほどなくして体の自由を取り戻すだろう。

「地面まで食べるかよ！　どんな悪喰（あくじき）だ」
「剣を食べてたもんね」
「だが魔術を連発しようにも・・・」

ニアが天井を見渡した。天井に軽くひびが入っている。先ほどのフェンナの魔術の影響だろう。無理もない、大地を隆起させるような魔術なのだ。この空間に影響が無い方がおかしいといえるが、このままでは崩落でマンイーターと共に生き埋めだろう。それはフェンナもよくわかっているはず。いったいどうするのか？

「・・・仕方がありません。秘術を使います」
「え、秘術ってシーカーの里から持ち出した？」
「ええ。本来は許可なく私が使うことは許されないですし、他人に見せてはいけないのですが。・・・事態が事態です。仕方がないでしょう」

フェンナが腰のポシェットから魔術書を取りだす。そしてフェンナがなにかしらのエルフの言葉をつぶやくと、魔術書に施されてた

止め具が自動的にはずれた。すると魔術書が自動的に開き、中から魔法陣が空中に浮かびあがる。地面に垂直に浮かび上がったその魔法陣にフェンナが両腕を浸し取りだすと、フェンナの両腕にはなにがしかの文様が描かれていた。それに両手に白銀に輝く腕輪が装着されている。

「我が一族に伝わる秘術をお見せします。練成魔術――」

フェンナの一族のミドルネームは「シュミット」。それは「鍛冶屋」を意味する言葉であり、その能力を示すことからつけられた名称である。

練成魔術とは材質の変化をもたらす魔術であり、「錬金術」とは材質変化で金に変化させることができる練成魔術を端的に表現したものである。そしてフェンナの一族が操る練成魔術は――

【我わ落とし子を包む大地よ。今、汝の恩寵を忘れし者に、その御力を示し刻まんとす】

《大地の封縛（アースバインド）》

「重ねて――」

【ローゼンワークスの名において命ずる。汝の姿を鍛え描く我が意に従え。元素変性、金剛石（ダイヤ）】！

マンイーターの動きを封じていた地面が形を変え、マンイーターに絡みつく。そしてフェンナが地面に触れると、地面が次々とダイヤに変換されていった。ついにマンイーターを縛りつけた土もダイヤに変換され、完全にマンイーターの動きを封じることに成功した。

マンイーターはなんとか脱出しようと口を開き目の前の土を食べようとするが、いち早く察したフェンナがアースウェイブの重ねが

けでマンイーターの口に思いっきり土を叩きこみ、さらにダイヤに変換させてしまった。さすがに最高硬度に等しいダイヤを噛み切ることもできず、また自慢の歯も折られ、まさに開いた口がふさがらない状態のマンイーター。

それでも反撃を諦めきれないのか、尻尾が変形を始めた。アルフィリース達の所に届くように長く変形している。このままでは尻尾だけが噛みつきに来るだろう。

「アルフィリース、剣を！」

フェンナの叫びに合わせ、反射的にフェンナの方に剣をかざすアルフィリース。

【我の加護をこの者に分け与えよ】
《金剛石（ダイヤ）の剣（セイバー）》

見る間にアルフィリースの剣がダイヤでコーティングされていく。しかもアルフィリースには軽くなったような感じさえ受けた。その瞬間、変形を終えたマンイーターの尻尾が笑い声と共に、アルフィリースに伸びて襲いかかってきた。

「ゲギャギャギャ」
「しつっこい！」

アルフィリースが上段から斬りおろす剣を歯で受け止めようとした尻尾だが、どうやらフェンナの魔術を甘く見ていたようだ。歯ごとアルフィリースの剣に叩き斬られる。

「はあああ！」
「今！」

アルフィリースが尻尾を切り裂くのと同時に、フェンナがさらにアースバインドで尻尾も完全に封じ込める。

「よぅし！　これで総入れ歯だ、ざまぁみやがれ！」

「そういう問題でもないと思いますが・・・」

ミランダの歓声に冷静にツッコミをいれるリサ。

「でもこれで動けないのではないか？　当面の危機は去ったな」

「ですが私の練成魔術は完璧ではありません。もってせいぜい5分かと」

「短いわね」

「す、すみません。それにもう一度使う魔力はあまり残ってなくて・・・」

「ううん、フェンナはよくやったよ」

よく見るとフェンナの額には大粒の汗が浮かんでいる。魔術をかなりの速度で連発したのだ、かなり当人には負担がかかっているだろう。これでは確かにもう一度マンイーターを押さえつけるのは無理なことは想像にやすい。

「ラインの方は？」

アルフィリースははっと思いだし、意識をマンイーターから一度そらした。だが彼女達はマンイーターの執念を甘く見ていた。あのドゥームが部下にするほどの悪霊になることができた執念を・・・。マンイーターの斬られた尾から流れ出る液体が黒いタールのようになっていくことに注目している者は、その時誰もいなかった。

続く

初心者のダンジョンにて、その9～秘術発動～（後書き）

ブクマ・閲覧・評価、ありがとうございます。

次回投稿は１１／２４（水）１５：００です。

初心者のダンジョンにて、その１０～傭兵の意地～（前書き）

～あらすじ～
フェンナの秘術を用いてマンイーターの動きを封じたアルフィリース達。だがほっとしたのもつかの間・・・？

＊＊＊

そして一方ラインとカザス。ラインがカザスを呼んだのはちゃんと考えあってのことだ。瞬間的な思考能力においては経験的なこともあってか、ラインはカザスよりも余程回転が速い。

「ラインさん、爆薬なんて持って何を考えているんです。石の扉には効きませんよ、魔力で補強されてるんですから。魔術も無理でしたし」

「先生は思ったより頭が回らんな！　なにも扉を狙わなくてもいいだろうが？」

「では何を？」

「壁が下りてきてるんだ。その分だけ上の壁は薄くなってると思わんか？　特に継ぎ目の当たりとかはな！」

「なるほど！　それはいい考えかもしれません」

「で、お前さんは物理学の学位があるとか言ってたろ？　もっとも効率的な爆弾の仕掛け方とか知っているかと思ってな」

「専門ではないですが、善処しましょう」

「そうしてくれ！」

そうして駆けるラインを見てカザスはラインをさらに見直すと同時に、自分の直感が正しかったことを感謝した。そしてすぐに爆弾を仕掛け、周囲の人間を退避させる。そして点火するが・・・

ドォン！

かなりの爆音にも関わらず、完全に崩壊させるとはいかなかった。

だが

「階段が見えたぞぉ！」

石の扉は倒れこそしなかったが、扉の上の部分が崩れて、なんとか人間１人が通れそうなくらいの隙間ができている。

「よし！　今から脱出するが、年若い者、怪我をしている者から順番に逃がしてやれよ？」

こう言うときには傭兵達の団結は早い。戦場でいらない口論などをすれば互いに命がなくなることぐらいわかっているし、ラインのセリフは大陸中の傭兵達の共通認識だ。「全滅しそうなときは若い者から逃がす――」それが軍隊と違い共通の規律のない傭兵達のルールであり、プライドだった。それに加えて、ラインの口調にも有無を言わせないところがあった。ここにおいて、戦場経験のあるニアとミランダは内心同じようなことを考える。

「（あの男はただの傭兵じゃなさそうだな・・・元はどこかの軍人かなにかだったんじゃないのか？）」

冷静であればアルフィリースも同じようなことを考えたろうが、ラインのこととなると先にイライラが立ってしまう。それはアルフィリースがどうこうというより、大半がラインの今までの行動のせいだったろう。

ともあれ扉付近では互いに上に押し上げることで、なんとか小さな隙間から逃げ出そうとしているが、隙間は狭く、中々一人が通過しない。それに生き残りはまだ８０人近くはいる。全員が脱出するには２０分はかかるだろう。ラインはそのような計算を頭の中でし

ていた。そのことは段々と他の傭兵達にも考えられ始めてきていた。

「おい、ダークエルフの姉さん・・・あの魔術はどのくらいもつ？」

「あと・・・3分程度かと」

「そうか。いいか、先にお前達は脱出しろ。もう十分足止め役はやってくれた」

「それはアルフィリースに言ってください。私達のリーダーはアルフィリースですから」

「あれは妙に正義感が強いから最後まで残ろうとするだろう。引きずってでも連れて行け」

「貴方は？」

「こういうのは好かんが、リーダーみたいなことをやっちまった。言いだしっぺが最初に逃げたら恰好つかんだろうよ」

そんなやり取りをするうちにもう１０人は逃げただろうか。まだ１０人、というべきなのかもしれないが。カザスは非戦闘員ということで早々に離脱し、現在はけが人を押し出してる状況だ。次に僧侶やシスターといった非力な者達の順番になるだろう。が、その時、

「うおおおっ！？」

突然傭兵達の後ろから叫び声が聞こえた。はっとして振り返る傭兵達。皆が振り返るとそこには黒いスライムのようなものに襲われている小兵の男がいた。それによく見ると、いつの間にか現在出口に殺到している人間達を囲むようにスライムが包囲網を敷いている。そしてその集団の一番外側では同じようなことが次々と起こっている。

「なんだこいつは！？」

ラインの驚きも無理はない。襲われている傭兵も今すぐ命がどうこうされるというわけでもなさそうだが、一度捕まれば逃げられもしないらしい。スライムの出どころを見ると、先ほどアルフィリースが二つに割いた尾からドボドボ噴水のように流れてきている。血・・・ではなさそうだ。量が多すぎる。

「くそっ、助けるぞ！」

「手が開いてる奴はこっちにこい！」

その声を聞いて何人もの傭兵が飛び出していく。アルフィリースも同様に飛び出そうとするが、ラインとミランダが同時にアルフィリースの腕を掴んで止めた。

「どうして止めるの？　助けなきゃ！」

「だめだ」

「ライン・・・だっけ？　今から階段部分を守護するように防御結界を張る。まだ大丈夫そうな奴をこの結界の内側に集めてくれ」

「わかった」

「二人ともどうしたの？　あの人たちを助けないと！」

「・・・残念ながら無理です、アルフィ。よく周囲を見てください」

リサが周囲を指さす。そこに見えるのは、仲間を助けに言って次々とスライムに絡め取られていく傭兵達。スライムは傭兵達の顔にへばりつき、窒息させていく。傭兵達がどれほどもがいても全く取れる気配がない。

「あれはただのスライムではありません・・・悪霊の類いです。神聖系の魔術でしか退治できないでしょう。そしてあれを退治することのできる神聖系の魔術の使い手は、今ここにミランダだけ。これがどういうことかわかりますね？」

「・・・わかるけど、でも！」

つまり諦めろと言われているのだ。いくらなんでもミランダ一人で相手をするには量が多すぎる。目の前で死にゆく人間達を目の前にして、なすすべのないアルフィリース。この依頼が始まる前にはいざとなれば周囲の傭兵達を犠牲にしてでもとか言っていたが、やはり心根が優しいアルフィリースでは自分の仲間のために効率よく他人を見捨てるなど出来なかった。リサはそういうアルフィリースだからこそ一緒に旅をしているといえる。歯噛みして耐えるアルフィリースにリサは言うべき言葉を見つけられないが、代わりにラインがとどめともいえる一言を発した。

「アルフィリース、よっく見とけ。力がなければこういう結末は何度でも見るぞ？　お前みたいに正義感が強ければ余計にな。それが嫌なら無駄な正義感は捨てるか、全員を助けれるくらい強くなるしかないな」

「・・・それでアンタは逃げ出したってわけね、この臆病者！」

「アルフィ、言い過ぎだ。ここはラインの判断が正しい。納得はできないとしてもな」

ニアが思わずアルフィリースを止めに入る。イラつきを言葉に変えてアルフィリースはラインにぶつけたため、思わずひどいセリフを吐いてしまった。アルフィリースはラインがいつものように何か言い返してくるかと思い身構えるが、ラインは寂しそうな顔をしただけだった。

「・・・ああ、その通りだ。俺は臆病者さ。俺には力が足りないんだ・・・」

「何よ・・・」

これでは私が悪者ではないかとアルフィリースは思ったが、素直に謝る気にもなぜかなれなかった。なぜだかラインには頭を下げるのがいつも躊躇われる。無用な争いを避けるため、比較的素直に謝れるアルフィリースだったが、彼とだけはいつも口論が絶えなかった。

「（どうしてかな・・・？）」

その理由にアルフィリースが気付くのはずっと先のことである。そんな言いあいをしているうちにミランダが結界を張り終えるが、外は既に助けられそうな者は一人もいなかった。

「さて・・・これでスライムは入ってこれないけど、あの本体が動けるようになったらこんな結界は一瞬だからね。今のうちに脱出だ」
「よし。おい！　今何人通った！？」
「ちょうど２２人だ！」
「くそ、まだ２２人か」
「まだ残り４０人以上はいるね・・・」
「もうすぐ本体が動きます」
「覚悟を決めるか」

結界の外はひどい状況になっていた。スライムが結界の中に入ろうとすぐ外で大量に蠢（うごめ）いている。そしてやがて最初の子どもの形となったスライムが１・・・２・・・３・・・と次々に増えていき、ついには２０を超える数で結界をバンバンと手で叩き始めた。

「あけてよぉ」
「おなかがすいたよお」
「たべさせてよぉぉぉぉ」
「なんつう光景だ・・・夢に見そうだな」

誰となく呟いた言葉だが、子ども型のスライムの数はまだまだ増えていく。それは人間であれば恐怖を抱かざるを得ない異様な光景であった。アルフィリース達全員が武器を取ろうとしたその時、傭兵内で一番年配であろう人物が大きい声を出した。

「おいてめぇら！　このお嬢さんと小僧を先に出してやってくんな！」

「おじいさん、何言ってるの？」

「てめえみてえな小娘こそ何一人前の口きいてやがる！　ガキは帰ってとっとと寝やがれ！！」

「そんなことできるわけ・・・むぎゅ！」

さらに言い返そうとするアルフィリースの口を顔ごとラインが鷲掴みにし、代わりに返答する。

「アンタ達の好意に感謝する！　何か俺にできることはあるか？」

「じゃあ万一に備えてこれを持っていてもらおうか」

その年配の傭兵は自分のギルド階級章をラインに手渡す。周囲の傭兵もそれにならう。軍人では戦死の時に身元判別をするため全員が身元証明をもっているが、傭兵の場合階級章の裏に簡単に名前だけ彫ってある。それでだいたいの死亡を確認できるのだ。ただ軍人と違い、それらが家族やギルドに無事帰ることは少なかった。

「後で返せよ？」

「ああ・・・必ず」

「へっ」

全員がわかっている、もはや助かる者はほとんどいないということ

とを。ただアルフィリース達とラインがいなかったら、傭兵達はどのみち全滅していた。それを何人か助かっただけでも御の字だと彼らは考えていたのだ。また戦うときにもアルフィリース達が先頭に立ち、指揮して戦っていた。多くの傭兵達は自分の妹、下手をすれば娘のような年頃の女に先陣を切らせたことを恥じていたのだ。彼らも傭兵という金次第でなんでも請け負う仕事に身をやつしたものの、人間としてのプライドまで捨てている者は少なかった。

加えてアルフィリースは仲間でもなんでもない傭兵を後先省みず助けに行こうとしたことを、ここにいる全員が見ていた。傭兵は軍隊に雇われて戦争をすると、大抵捨て駒的扱いを受ける。だからこそ傭兵達は仲間意識が強い。だがアルフィリースのように自分のパーティメンバー以外を、何の見返りも無く助けに向かうような者は珍しい。傭兵は金さえ受け取ればゆすり、誘拐、果ては暗殺まで請け負う者もいる。その中に置いてアルフィリースの行動が非常に彼らの心を打つ種類の行動であったことを彼女は知らない。ラインにはなんとなく想像はついていたとしてもである。だがアルフィリースの一連の行動がなければ、傭兵達は順番を譲ってくれなかったろう。

そうするうちにアルフィリース達が扉の上から脱出し、ラインが続こうとしたところで、

「ブオオオン！」

というマンイーター本体のいななきと共に結界が破られた。ラインはあわてて脱出し、次に出てこようとした傭兵の手をつかむが、その傭兵は後ろからスライムにでも引っ張られたのか、絶叫と共に引き戻されてしまった。

助けられないとラインが判断するや、すぐに階段を全速力で駆け上がる。５０段ほど上がったところでちらりと後ろを見たが、既にスライムが石の扉を乗り越えこちらに入って来ていた。

「ちっ、簡単には逃がしてくれないか！」

もはや後ろを振り返る余裕もない。アルフィリース達に続き、全速力で階段を駆け上がるライン。そして後ろからは石の扉にマンイーターが体当たりする音が聞こえていた。

続く

初心者のダンジョンにて、その１０～傭兵の意地～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます！

もしこの作品を見ておられる作家さんがいたら、レビュー交換なんてしてみませんか？　活動報告なんかでも募集していると思います。興味のある方は気軽にメッセージなんかを下さいね。

次回投稿は１１／２５（木）１７：００です。

初心者のダンジョンにて、その１１～脱出～（前書き）

～あらすじ～
ダンジョンから脱出するアルフィリース達。その後ろにはマンイーターが迫る・・・！

初心者のダンジョンにて、その11～脱出～

「ハア、ハア・・・」
「この階段、こんなに長かった？」
「しゃべってる場合か！　もうアイツは登って来てるぞ？」

階段を全速力で駆け上がるアルフィリース達。その背後にマンイーターの体から出てきたスライムが迫る。本体はさぐがにその巨体から登ってこられないようだ。ただスライムの動きは比較的緩慢とはいえ、なにせ人間と違い疲れることをおそらくは知らないであろう生物である。いずれは追いつめられるのは決定的だ。ラインも必死に対応策を考えているが、ああいった化け物との邂逅は彼にとっては初めての経験だったため、あまりにも手札が少なすぎた。むしろ先ほどの脱出だけでもよくやったと言えるだろう。

「ハア、ハア・・・ミランダ」
「ゼイ・・・何？　アルフィ」
「もし地上に出てもアイツが追っ掛けてきたら・・・フゥ・・・使うからね！」
「ゼイ・・・わかったわよ・・・」

アルフィリースの提案にうなずかざるをえないミランダ。まさか逃げるために森を一日駆け通すわけにもいかないから、遺跡を出た段階でまだ追いかけられるようなら対決もやむなしと考えていた。ただ勝てる保証が全くない。さきほどのフェンナの魔術を使えば刃は通るだろうが、斬った端からあんなスライムが出てくるのでは手に負えない。それに並の魔術では傷一つ負わなかった。初心者とはいえ、先ほど傭兵の仲間にいたエルフの魔術でも駄目だったのだ。おそらくは神聖系の魔法でしか有効なダメージを与えられないのだ

ろう。アルフィリースのケタ外れの魔力ならもしかしたら、と考えてしまうミランダだったが、そこは何とも言えない。

戦場では直感は重要だ。先ほどマンイーターの動きを封じた段階で、誰もとどめを刺しに行かなかったのはきっと正解だったのだろう。もっともフェンナの魔術でしっかり絡めとられていたから、武器を通す隙間もロクになかったこともあるが。だがもし近づいていれば、傷口から噴き出すあのスライムに取り込まれていたことだろう。

さらにミランダは数多の経験から、戦場で博打を打つ者は早死にすることを知っていた。偶然の要素もあるものの、勝利を導くにはより綿密な思考と計算が重要である。物語のようにご都合主義の助けは来ないのだから。

「（そう、アタシが旅の最初に乱暴された時も、不老不死がバレて村を追い出された時も、あの人が死んだ時も・・・誰も助けてはくれなかった。それでアタシは人生に絶望して・・・）」

過去に思いをはせかけて、ミランダがその思いを振り払う。

「（そんなこと考えてる場合じゃない！　今は出来ることを少しでもやらないと）」

「アルフィ！」

「何？」

「アンタ、魔術の系統はいくつ使える？」

「えーと、神聖系以外なら全部！」

「そうか、神聖系以外なら・・・って、ええ！？」

「あと無属性の魔術を細分化して、召喚魔術とかも１つとして数えたら、１０は超えるはず」

「１０って・・・」

ミランダとフェンナが目を丸くしている。それはそうだろう、２種類以上の魔術を使うことすら一般的には珍しいのだ。しかも史実から確認されている、個人で使える最高の系統数は６だ。アルフィリースの使用系統数は歴史を塗り替えることになる。

「そんなのアリ？」

「お、驚きです・・・」

どんな性質を持って生まれたらそうなるのか。思わずミランダの気が一瞬それるが、ラインの言葉がただちに引き戻す。

「でも肝心の神聖系以外は大したダメージを与えられないんだろ？」

「リサもその意見に賛成です。あれの正体を探ってみましたが、単純な『食欲』しか存在しまい悪霊です。多分自分が生きているか死んでいるかさえどうでもいいのでしょう。皆さんも知っているかもしれませんが、フェンナの魔術でさえ大したダメージがなかったように、霊体には物理攻撃・神聖系以外の魔術が極端に効きにくくなります。その代わり神聖系の攻撃魔術は絶大な効果を及ぼしますが。また悪霊ゆえか、あの体が本体ではないようです」

「どういうこと？」

「リサの推測ですが・・・体を徹底的に破壊すれば動きは止まります。ですが本体である霊魂部分には何のダメージも無いということです。おそらくはああいった体をした生物に憑依しているのではないかと。つまり非常に固い生物に憑依しながら、霊体でもあるがゆえにさらに攻撃が効きにくくなっているのでは？」

「しかもダメージを与えた部分からはあのスライムが出てくると・・・やっかいだな」

「とはいえやることには変わりがないんじゃ？」

「それはそうですが・・・」

「大丈夫よ、リサ」

アルフィリースがリサの頭をぽん、と撫でる。

「私がやっつけちゃうんだから」

「（リサが心配しているのはあの魔物を倒せるかどうかではなくて、貴女の体です、アルフィ）」

リサはその言葉をぐっと飲み込んだ。どちらにしてもアルフィリースに任せるしかないからだ。それならば余計なことは言わない方がよい――。リサは少しでもアルフィリースの決意を鈍らせないため、そう考えることにした。アルフィリース本人が一番わかっているはずのことだからだ。そんなリサの心配をよそに、アルフィリース達の先頭を走るニアが叫ぶ。

「地下2階にでるぞ！」

「そこからはリサが先頭をいきます。万が一にも道順を間違えるとオシマイですから！」

「よし・・・って、あれ？」

階段を上がりきった場所でカザスと傭兵達が何かをしている。扉を開けた時に出てきた出っ張りを引っ張っているようだ。

「先生、何やってるんだ？　逃げないとアイツが追ってくるぞ？」

「さっき石の扉が下りてきたのを見てひらめいたんですが」

ラインの問いにカザスが額の汗をぬぐいながら答える。

「ダンジョンって侵入者対策のためのトラップが多いですよね。それはダンジョンへ入らせたくない場合ですが。では逆にダンジョン

に何かを封印して、外に出したくない場合に仕掛ける物といえばなんでしょう？」

「謎かけはいいから早く言ってくれ」

「せっかちですね。ダンジョンの中には持ち出されたくないものが動いたら部屋が崩壊、ひどければダンジョンごと崩壊させる物があります。わざわざこのでっぱりが出たということは、これがスイッチではないかと。地下3階がわざわざ設置されたのも、このためではないかと仮説を立ててみました。古文書でこういった仕掛けが流行った時期があるのを見たことがありますし、これを全て引き抜けば地下3階以下が崩壊すると思われます。まあ仮説ですけどね」

「なるほど。で抜こうとしているが抜けない、と」

「そうですね。そうとう馬鹿力でやらないとだめです、大の男3人がかりで無理でしたから。おそらくこれを抜くような機材があったのに、宝物と勘違いして持ち出した連中がいるのでしょう。でっぱりの大きさ的に言って、人間1人でしか持てない様なサイズにしては堅すぎますから」

カザスがコンコンと叩いたでっぱりには確かに何かをひっかけるような部分がついている。今となってはそれがなにやらわからない。だが大の男3人がかりでびくともしないなら、どちらにしても無理ではないのか。全員がそう考えた瞬間、ミランダがずいと前に出た。

「アタシがやろう」

「ええ？」

「おいおい・・・ブン回してた武器を見れば普通の人間よりは確かに力がありそうだが、いくらなんでもこれは」

「それは結果をごろうじろってね。アルフィ、これやったらアタシは動けなくなるかもしれないから、その時はよろしく」

「？　よくわからないけど、わかった！」

「よし・・・2つでいけるか？」

ミランダが腰の革袋から何か取り出し、口に入れる。するとミランダの全身が徐々に火照るように赤く染まりあがり、湯気が出始めた。地下だから多少気温が低いとはいえ、現在は夏前の気温にもかかわらず、である。

「ミランダ、それは？」

「アタシが昔傭兵やってた頃のあだ名は『赤鬼』って呼ばれててね・・・これを使って戦った時の様子を言ってたんだと思うけど。強制的に体の代謝や血流を上げて、さらにアドレナリンとかの脳内麻薬を強制的に分泌させることで常時火事場の馬鹿力を発動させる。ただ脳内のアドレナリンってのは通常体に猛毒だし、普通の人間がやれば筋肉も断裂しかねないからアタシ以外は使えないけど。まあよくわかんないだろうから細かい説明はおいておこう。とにかくこれがアタシの体格に比べて馬鹿力を発揮できる理由ってわけ。ある程度は薬がなくても自分の体で調節するコツを覚えたからね」

「うーん、私も薬学にはそんなに詳しくないから」

「ふふ、こう見えても元は研究者だからね。アタシも部分的にはインテリなのさ。それでこれがその結果、だ！」

ミランダが石に手をかけ引っ張ると、いままでびくともしなかった石がいとも簡単に引きずりだされた。石を引っ張りだすと、何かが動いてカチリ！　という音がする。そのまま次々と石を引きずり出していくミランダ。すると階段が徐々に崩れる気配を見せだした。

「これでラストぉ！」

「すぐに脱出です。リサについてきてください」

万一に備えて走り出すアルフィリース達。リサの指示に従い脱出する。

「左です」
「よし」
「次は右」
「あいよ」
「上上下下右左右左」
「なんのコマンドだ！」
「これで無敵です！」
「自爆するかもしれないから！」
「ふざけてる場合か！？」

ニアのツッコミと同時に、後ろから階下が崩壊する音が聞こえる。だが思ったよりダンジョンがしっかり作ってあったのか、地下2階以上に衝撃は伝わるものの、崩れそうな気配はあまりなかった。これならさすがのマンイーターも追ってこれないだろう。

リサがふざけたのは脱出のめどが立ち安堵もあった一方、高すぎる緊張感は一度ほどかないと、切れてしまう。そういう意味ではリサの毒舌は狙ってやっている部分もあった。彼女がチビ達の前では至って愛情溢れる姉役を務め、子どもたちも彼女に懐いていることを思えば、それは納得いく事実だったろう。もっとも、単純にアルフィリースをいじめて憂さ晴らしをしたい気持ちもまたあったことは否定しない。半分は姉に甘えるような気持も入っていたのかもしれないが。

そしてその後は何事も無く無事地上に戻ってきたアルフィリース達。既に時刻は陽が傾こうとしていた。

続く

初心者のダンジョンにて、その１１～脱出～（後書き）

最近昇り調子で好調な作者です。次回でダンジョン編は一端終わり。
そして新しい場面へと動いて行きます。

次回投稿は１１／２６（金）１９：００です。

初心者のダンジョンにて、その１２～謎の女～（前書き）

～あらすじ～
無事にダンジョンを脱出したアルフィリース達。その後彼女達が取る行動とは・・・？

「なんだか太陽を見るのは久しぶりな気がするわ」
「生きた心地がしなかったからな・・・」
「ええ、本当に。あの少年２人が戻ってきたらと思うとぞっとするね」

周囲の傭兵達も含めニアでさえほっとした様子を見せていたが、フェンナの一言に全員がはっとした。安全になったと思い笑顔が戻ったはずの全員に、再び不安の色が差す。

「・・・すぐにここを離れよう。ここにいるのはなんだか気持ちが悪いよ。いいかい、アルフィ？」
「ええ、賛成よ。森を夜に突っ切ることになったとしても、その方がいいわ」
「ところで皆さんはどちらへ？」

カザスがアルフィリース達に問う。

「一番近いのはミレノだったかな。とりあえずそこへ。その後のことは町に着いてからよ」
「わかりました。よければ私も同行させてほしいのですが」
「それは構わないわ。むしろ生き残った傭兵たちとも同行するつもり」
「感謝します。ラインさんも行きますよね？　・・・あれ、ラインさん？」
「ん？　ああ、俺か・・・」

ラインが真剣な面持ちで何か考え込んでいた。アルフィリースが

目線で「来るな～」と訴えているが、状況を考えれば同行するのが妥当だろうと思われた。だがラインの返事は意外なものだった。

「いや、俺は同行しない。ちょっと考えたいことがあるから、先に行ってくれ」

「えーと、報酬をお渡ししようかと思ったのですが・・・」

「証文を作って、金と共にミーシアの傭兵ギルドに送っておいてくれ。どちらにしろ近々あそこには行く予定だった」

「それは構いませんが・・・残るのは危険では？」

「大丈夫だって。気にするな、じゃあな」

そう言い残すとラインはさっさと離れて行った。以前は何かとアルフィリースにまとわりついてきただけに、アルフィリースにとってはラインの行動は意外だった。ミランダがそっとアルフィリースに囁く。

「アルフィ、いいのかい？　単独行動させて」

「本人がいいって言ってるんだから、いいんじゃない？」

「けどさ」

「いいの！　行きましょ」

アルフィリースがラインと反対の方向に行くように歩き出す。ミランダはラインの行動が気にかかったが、追うわけにもいかずアルフィリースについて行く。そしてほどなくしてアルフィリース達は去って行った。彼女達の胸には死んだ傭兵達の事が去来していたが、まだ気が抜ける状況ではない。死を悼むのは町に着いてからでもいいだろうと、全員が同じ思いで歩いていた。

一方ラインは適当に石の台のようなものを見つけて、傭兵達から預かった階級章を出している。それを1つ1つ裏返し、それぞれが

どこの出身だったかを確認している。

「ちゃんと届けてやらないとな・・・」

ラインは現在２６歳だが、年の割には戦場経験が多い。１９歳までは軍属だったし、傭兵となってからは特に自ら志願して戦場に出向くことが多かった。その中で彼にとって一番つらかったのは戦場で敵を斬ることではなく、戦死の報告を家族に届けることだった。自分の友人の戦死報告をしたことも何度もあり、そのたびに泣き崩れる家族を見た。この２０年は黎明期と言われる平和な時代とはいえ、戦争が全くないわけではない。大きな戦こそないが、むしろ小競り合いは多かった。そのため軍では小競り合いによる死傷者が定期的に発生していた。

その中でもっとも悲惨だったのは生死不明状態になることだった。大きな戦争では珍しくも無いが、残された者はたまったものではない。まだ軍に所属し始めの頃、自分の夫の帰りを２０年以上も待ち続けている婦人を見たこともある。戦争に向かう直前に結婚し身ごもっていたのだそうだが、夫を心配するあまり子どもは流れてしまい、そのまま気が少しふれた女性だった。受け答えは普通にできるのだが、２０年経った今も自分は新婚当初のままのつもりでいたのだ。あんな光景を見たくなかったラインは、傭兵となってからも仲間の戦死報告は出来る限り積極的に行っていた。

だが今回は戦死がかなり多い。

「くそ、あんなに死ぬなんてな。戦争じゃあるまいし、もうちょっと何とか出来なかったのか・・・」

こういう所で悩むのはアルフィリースもラインもそっくりなのだが、２人とも全く気が付いていないのだろう。２人の仲が悪いのは一種の同族嫌悪というやつなのだが、２人とも気がついてはいない。

「これがスタフィーの町で、これがミルトレで・・・さて、どこから回るか。・・・で、そこにいる奴、出てこい」

ラインが横に置いた剣に手をかける。そしてラインの背後にある木の影から出てくる、黒いウェーブがかった肩より少し長い程度の髪に黒い瞳の女性。身長もそこそこ高い方である。ドレスを着ているが、いやに肌の露出が多く胸元は相当開いていて豊満な胸元があらわになっているし、スリットは足の付け根付近まではいっている。あそこまで開いていて下着が見えないということは、下には何もはいていないのだろう。背中も大幅に開いているし、ほとんど裸に近い恰好だ。場末で客を取る娼婦でさえ、外では中々ここまではやらない。娼婦でこの美人具合ならば相当な人気者となるだろうが、ラインもこのような状況でそのような思考に及ぶほど色ボケているわけではなかった。

「何者だ？　まさかこんな所で娼婦が客を取るわけでもないだろう」
「さあ・・・」
「はぐらかすのはよせ、この状況で冗談を言うほどバカじゃない。返答次第では女といえど斬るぞ」
「ふふ・・・怖い怖い」

剣に構えるラインを見て、クスクスと笑う女性。その仕草も妖艶だ。あわや一触即発かと思ったが、ラインがため息を１つつき、剣を収めた。

「おや、斬らないと？」
「丸腰の女を斬る趣味は無い」
「魔術士かもしれないが」
「そんな気配があればわかる。それに俺とお前の距離は５．４ｍだ。

お前が何かしら魔術を俺に放とうとして手をこちらに向ける前に、首と胴が別れてる」
「ふぅん・・・」

実際ラインにそれが可能かどうかはこの女にはわからなかったが、ラインが警戒を解いていないところを見ると、本当にやれてもおかしくはなかった。そんなラインの様子を興味津々にまじまじと観察する女。ラインは訝しそうに女に尋ねる。

「何ジロジロ見てる。何の用だ、俺に惚れでもしたのか」
「そのようなものだ。ただ自分の主人になる者を観察していただけでね」
「ぶっ」

ラインは思わず噴き出した。まさか彼もこんな破廉恥な恰好をした女に仕えられるとは思わなかったようだ。まさか俺が主人と言うことは、夜な夜なあんなことやこんなこと――などという妄想が年頃のラインの脳裏によぎるが、慌てて頭を振い正気を取り戻す。

「な、なんで俺に仕えるんだ?」
「何を言う。貴様が我の封印を解いたのだ。あいにくと封印を解いた者が我の主人となるのでな。もっとも我も主人は選ぶが、そなたは我が主にふさわしそうだ」
「封印?? いつだ?」
「貴様、我にあれだけ蹴りをくれたのを最早忘れたか?」
「・・・まさか」
「そのまさかだ。我は地下にいた魔剣だよ」

女がニヤリとする。さすがのラインも呆気にとられるが、女はそんなラインのそんな様子を見てしてやったりとでも思ったか。そし

て優雅に一礼する女、いや魔剣か。

「改めて自己紹介させていただこう。我の名前はダンススレイブ。以後お見知りおきを、我が主人（マイ・マスター）」

続く

初心者のダンジョンにて、その１２～謎の女～（後書き）

ちょっと短かったでしょうか？　次回もこの２人の話です。Ｓ男とＭ女（？）のやり取りにご期待を。こんなことといいつつも、基本シリアスな話です。作者は結構ゆるい人間なのですが・・・。

次回投稿は１１／２７（土）１２：００です。

ラインと魔剣（前書き）

～あらすじ～

ラインの前に現れた魔剣を名乗る女性。彼らの出会いがもたらすものとは？

ラインと魔剣

「魔剣・・・だと？」
「そう、かつて我の所有権を巡って幾多の人間が止むことなき争いを・・・」
「いや、そんなのはどうでもいいから、お前が魔剣だという証拠をみせろ」
「く、人の話を聞かない奴だ・・・いいだろう」

ダンススレイブが目を閉じ集中すると、その体が自分の影に吸い込まれ、代わりに剣が浮上してくる。その形状はたしかにダンジョンの地下で見たあの剣だった。

「なるほど、確かに」
「我の言葉を信じるか？」
「ああ・・・だが」
「ぐぁ！？」

またしてもラインが突然ダンススレイブに蹴りかかった。

「その姿に戻ればこっちのもんだ！」
「貴様、我が女の姿をしたのを承知で蹴るのか？」
「剣に性別なぞあるか！　だいたいだーれーがご主人様だぁ？　魔剣の分際で勝手に決めるな！」
「そこは普通泣いて喜ぶ所だぞ？　魔剣の主とかカッコイイだろう？」
「俺をそこらへんのパンピーと一緒にするんじゃねぇ」
「貴様・・・さてはアブノーマルか？」
「誤解を招くような言い方をするなぁ！」

真剣と人間が真剣に争っております。しばらくおまちください。

・・・・・・・・・・・・・・・

「くそっ、俺は呪われた剣などの世話にはならん」
「そういうな、我は便利だぞ？　別に使わずとも、その知識だけを利用してもよい。なにせ５００年はゆうに生きているからな」
「とかなんとか上手いこと言って俺を呪う気だな？　お前なんか海に捨ててやる！　塩水でゆっくりと錆びていくがいいさ」
「ふん、海水で錆びるぐらいなら魔剣と呼ばれんさ」
「じゃあ火山のマグマにぶちこんでやる」
「それは・・・溶けるな」
「よし、決まりだ！」

ラインが剣に手をかけると、途端に剣が騒ぎだす。

「き、貴様！　どこを触っておるか！？」
「あんだよ、顔か？」
「胸を鷲掴みにするな！」
「知るか！！」

こんなめんどくさい魔剣があってたまるかとラインは思いつつも、何かの気配にピクリと反応し、体は自然と木の影に隠れた。

「・・・なんだ？　何の気配だ？」
「さすがマスター。人間にしては敏感だ」
「マスターじゃねぇ。が、これはどこから・・・遺跡か！」

ラインが遺跡に目をやると遺跡の入口が壊れ、中から出てきたの

は・・・マンイーター。

「おなかが・・・すいたよぉおおおぉおおお！」
「またアイツか！　しつこいにもほどがあるぞ？」
「確かにしつこいが、悪霊などあんなものだ。たいていは未練、恨み、つらみといった負の感情の塊だからな」
「ち、頼むからこっちに気がつくなよ・・・」

ラインは息をひそめていたが、どうやらマンイーターはこちらに気が付く気配はない。その代わり、なにかしらしきりに匂いを嗅いでいる。そして向かった方向は・・・

「おいおい、アルフィリース達の後を追いかけていくぞ？」
「そうなのか。まあより沢山食べれる方に行ったのだな。好都合だ、今のうちに逃げることをオススメするぞ？」
「もっともだ。だがな」

ラインが立ちあがり剣を抜き始める。

「なんとなくわかるが・・・どうするつもりだ？」
「あれを倒す。あいつらの元へはいかせない」
「そんな正義の味方みたいな真似は似合わないんじゃないのか」
「そうだな。だが似合う似合わないは別の話だ」
「勝てないぞ」
「それも別の問題だ」
「やれやれ」

ダンススレイブがため息をついた。

「そんな正義感のある人間だとは思わなかったがな。惚れた娘でも

いるのか？」
「さぁな。自分でも惚れているのかどうか、よくわからんよ」
「ふ・・・どうしてもやるというのなら、我を使え」
「言ったろ、魔剣の世話にはならん。だいたい魔剣は使用者に代償を求めると聞くしな。力の代わりに人間性や魂を捨てるなんて御免こうむるぜ」
「別に我が代償を求めているわけではないのだがな。それに何も魂を捧げろとは言わん。正確には反動がくるだけだ」
「反動？　お前、何の魔剣だ？　能力は？」
「よく聞け人間、我の能力はな――――だ」
「なるほど、それで反動か。お前、危ない奴だな」
「やっぱりお前は賢いよ、理解が早いしその危険性もわかってる」
「で、勝てるのか？」
「我を使って勝てないことはありえない。後は貴様の技量次第だ」
「言うじゃねぇか。使いこなしてみせるぜ、魔剣！」
「ちゃんと名前で呼べ」
「アイツに勝てたらな」

ラインが魔剣を握り、マンイーターに向かって吠える。

「こっちだバケモノ！」

さすがにその声に反応したのか、マンイーターがラインに向き直る。

「おなかがすいたよおおおぉおお」
「お前はそれしかねぇのな。じゃあ腹いっぱい俺の斬撃を喰らわせてやるよ！」

ラインが魔剣を構えてマンイーターに突進する。リサのセンサー

領域からも既にはずれており、アルフィリース達の援護が無い状態で、ライン一人の戦いが始まっていた。

＊＊＊

そして１０分も経っただろうか。戦いの勝者は――――ライン。地面には完全にバラバラにされたマンイーターの死体、いや残骸が転がっていた。完全にコマ切れ状態で、もはやどこがどの部分かわからない。これがパズルだとしたら、最高難度だといわざるを得ないだろう。

その傍らで剣を支えにようやく立っているライン。

「これは・・・確かにきついな」

「だがその程度の反動で終わらせると我も意外だよ。技量も大したものだ。どうやら貴様は余程鍛えこんでいるようだな」

「見た目よりはそうかもしれんな。だがお前のいうことが理解できたよ。確かにこんな力があるなら、お前を巡って戦争が起きてもおかしくない」

「ようやく我の偉大さが理解できたか」

「危険性もな。やっぱりマグマに・・・」

「やめろぉ！」

「冗談だ」

そんなやり取りの最中、マンイーターの霊魂が子どもの姿で出てきた。

「まだやるのか！？」

「いや、この子に霊体でどうこうするような力はない」

「わたしはおなかがすいてるだけなのに・・・どうしてじゃまをするの？」

「さぁな」
「マスター、我々では霊魂にとどめはさせない。放っておいたほうがよいだろう」
「ああ・・・」

そのまま剣を収めて立ち去るライン。後にはマンイーターの霊魂だけが残された。

「さて・・・魔剣はここに捨てて、と」
「貴様、まだ言うか？」
「だから冗談だ」
「ぐ、くぅっ」

やりこめられたダンススレイブが悶絶している。どうもラインの方がSらしい。いや、そういう問題でも無いか。とりあえずからかいがいのある魔剣ではある。

「どっちにしても人間の体になれるなら、俺についてくる気だろ？だったらしょうがないから一緒に行ってやるよ。ただ背負うのはめんどくさいから、人間の姿で歩いてこいよ」
「・・・仕方がない」

ダンススレイブが女性の形に変身する。

「フフフ、中々美人だろう？」
「・・・まあ否定はしない。これで人間だったら即座に押し倒してやるけどな。だがなんで女なんだ？」
「それは知らん」
「自分のことだろうが」
「それはそうだが、剣によってその姿は色々だ。男、老人、子ども・

・・中には獣なんてのもありうる。我も気が付いたらこの姿だったし、その前の記憶などは無い。なにせ元が剣だしな」
「まあいいさ。とりあえず気になることがあるから調べに行く。ついてこい」
「何を気にしている？」
「この依頼の出どころから初めて、最近各地で不審な動きが多い。クルムスの戦争も気になるし・・・その辺からかな。まずはこの形見の階級章をギルドに届けるが」

ラインがじゃらり、と袋の中身を鳴らしてみせる。

「律儀なことだ。だがその前に一つ――マスターの本名を聞いていいか？」
「本名だと？」
「偽名だろう。ラインが本名なら、先ほど我を使用した時にもっと力を発揮したはずだからな。魔剣との契約において言霊的にも本名は重要なんだよ」
「そうなのか、偽名ってほどでもないんだがな。・・・まあいいか、俺の本名は――だ」
「ほう、良い名ではないか。なぜ本名で通さない？」
「故郷ではお尋ね者なんだよ。まあその辺は旅先でおいおい話そうぜ。あと俺のことはマスターとか貴様はなしだ。ちゃんとラインって呼べよ、ダンススレイブ」
「ふふ、了解だライン。我の呼び名もダンサーでよい」
「わかったよ。とりあえずお前の服を調達するか。目立ってかなわん」
「男はこういうのが好みなんだろう？　ほれほれ、つけてないし、はいてないぞ？」
「いちいち見せんでいい！」

そして2人、いや、1人と剣は森の中を歩いて行った。彼らの活躍により自身の身が救われたことをアルフィリース達が知るすべはない。

続く

ラインと魔剣（後書き）

この魔剣の話を周囲にしたとき、「○○っぽいね」と言われましたが、私はその作品を知りませんでした。書いているのは今でも、思いついたのは１５年くらい前か・・・？　でも長い歴史の中で、同じようなことを考える人はいたようで。セリフはちょいちょいパクってるんで、思い当たる節があったらニヤリとしてください。え、そんな古いネタ知らないって？？

次回投稿は本日（明日ですが）０：００にしてみようかと思います。この時間帯に意外と閲覧される方が多いみたいなので。そんなに長くはありませんが・・・が！

ゼアの悪霊（前書き）

～あらすじ～

ドゥームの手によって解放される悪霊。悪霊は一体何を彼にもたらすのか。

ゼアの悪霊

＊＊＊

廃都ゼアに1人取り残されたマンイーター。夜半になったころ、無口な少年が転移魔法でやってきた。

「・・・あれ・・・まさかやられたの？・・・・」
「うん・・・ごめんなさい」

マンイーターはきまり悪そうにもじもじするが、無口な少年に特に咎める様子はみられない。

「・・・僕には君を怒る権利はないけどね・・・しかし頑丈な君の体をここまでするとは・・・どうやってやられた？・・・・」
「えーとね、けんでおとこのひとがびゅってやって、びゅっびゅってやったらこうなったの」
「・・・済まない・・・聞いた僕が悪かった・・・魔剣もなさそうだし参ったな・・・これじゃ『おネェ』に怒られる・・・」
「・・・わたしのせい？」
「・・・いや、今回は仕方ないだろう・・・でもそれ以上の収穫はあったかも・・・」
「ねえねえ、どぅーむは？」
「・・・ああ・・・今頃は彼も大変だろうね・・・連れて行ってあげるよ・・・」

そして闇に消える2人。後には崩壊した遺跡だけが残っていた。

＊＊＊

その少し前。遺跡から脱出したドゥームと無口な少年が何をしていたかというと・・・。

「・・・この村でどうだろう?・・・」
「手ごろだね。人口は・・・２０００人ってところか。孤立していて他の村や町とも連絡が付きにくそうだし」
「・・・本当は別件の候補だったんだが・・・仕方ない・・・アノーマリーには後で詫びを入れておきなよ?・・・」
「わかってるって!」

空中に転移した状態から、嬉々として村に降りていくドゥーム。最初村人は空から少年が降りてくるなど何事かと思い悲鳴を上げて逃げ惑ったが、同時に興味も引かれたためそれなりに距離を取ったり、物陰や家の窓からドゥームの様子を窺っている。もしここに魔術の心得がある者が1人でもいたら、ドゥームに絡みつく怨念を見て我先に逃げ出していただろう。

「よしよし、封印を解いてやるよ」

ドゥームが何事か呟くと、今までどうやっても開かなかったはずの小瓶の蓋がいとも簡単に開いた。そのまま瓶を村の名物にもなっている中央の噴水に投げ入れて、さっさと姿を消すドゥーム。村人たちはなんだったのかと不思議そうに噴水に近寄っていく。

が、それよりも早く噴水には異変が起きていた。美しく、美味いとして有名だったはずの水が黒く濁り、凄まじい勢いで噴水から溢れてきている。まるで小さい津波のようだ。村人は反射的に噴水から逃げ出そうとしたが、何人かが遅れて水に足を浸してしまった。

すると――

「ぎゃあああ」
「と、溶ける！」
「た、助けてくれぇ！」

煙を上げながら溶け始める村人達。そして水が手の形になったかと思うと、逃げるのが間に合わなかった人たちに絡みついて一斉に噴水に引きずり込んだ。小さな噴水に対して引きずり込んだ人数は５０を軽く超えていたため明らかに人数オーバーなのだが、どうやって収まっているのか。バキバキと音がすることを考えれば答えは簡単だったが、そのような光景が現実に起こるなどとは、ここの善良の村人たちの想像の範疇をはるかに超えていたのだろう。

そして黒と赤が混じり合った噴水から出てきたのは、真っ赤なシスター服に身を包んだちょうどドゥームと同じ年頃の女の子だった。漆黒の黒い髪を伸ばし放題にしており、顔は能面をはりつけたように無表情だ。笑えば年相応の可愛らしさを見せそうなものだが。

噴水から出るとキョロキョロと周りを見回し、一番近くにいた若い女性に目を止める。そして少女が地面を滑るように移動すると、女性は恐怖のあまりへなへなと座り込んで固まってしまった。そして少女はその女性の頭や顔を愛しい者でも触るかのようにゆっくりと撫でまわし、それはとてもとても可愛らしい笑顔で囁いた。

「ネエ、ワタシトアソンデ？」

その瞬間女性の体がガクガクと激しい痙攣ををしたかと思うと、目・口・耳といった全身のあらゆる穴という穴から激しく血を流してをしてばたりと倒れてしまった。それを合図にしたのか、夜でもないのに村が暗く覆われ人々の不安を駆り立てる。そして建物の扉は急激にバタンと閉じ鍵が自動的にかけられ、中央の噴水からは黒い靄（もや）が出て視界を遮った。さらに動物達は狂ったように吠えいななき、何人かの人間達は正気をなくして村人たちに襲いかかり始めて

いる。村の出口に近かった人間達は村から出ようとするが、何か見えない壁にぶつかり前に進めない。それでも何とかしようと壁をダンダンと叩いていると、今度は手がドロドロと溶け始め、絶叫を上げる村人達。阿鼻叫喚の渦とはこういう光景を指すのだろう。

その様子を上空から見守る少年2人。

「これは・・・『城』を形成したのか？」

「・・・範囲がかなり限定的で効果も一時的だろうけど・・・まあ城の一種だね・・・どうりで何の前触れも無くゼアが滅びるはずさ・・・これじゃ誰も出られない・・・」

「すごいな。城を作るってことは、彼女は大魔王クラスなのかい？」

「・・・それはなんとも言えないが・・・元々相当に強い魔力・心霊力を備えていたんだろうね・・・それが死後悪霊化してああなったと・・・」

「確か生前にそういった素質があると強い悪霊になりやすいんだっけ？」

「・・・ああ・・・」

「なるほどね～」

村のはるか空中で交わされる2人の会話はいたってのんきだが、眼下ではまともな人間なら正視に耐えない惨劇が展開されていた。

「うわ、うわっ！　あれ見なよ！　窯で焼いた石を食べさせてるよ？　おままごとのつもりかな？」

「・・・さあ・・・」

「今度は若いカップルの男を別の男が刺した！　で・・・うわ！　その傍らで女の方を襲うんだ！？　鬼畜ぅ」

「・・・・・」

「こっちはイヌやウマが若い女性を・・・あれは死ぬよね～、特にウマだと人間が持たない。ボク、リアルでアレ見たのは初めてだよ。

教育上よくないねぇ」
「・・・だけど君は心底楽しそうだ・・・さすがの僕でも胸が悪くなるような光景なんだけど・・・」
「いやー、ここまで何の慈悲も無いと楽しいね！　まあ彼女にしたら遊んでるだけなんだろうけどさ。それに君が胸が悪くなるなんてそれこそ悪い冗談さ。さらってきたシーカーであんなもの作っといて良く言うよ」
「・・・ふう・・・」

確かにそうかもしれないが、眼下で展開される光景は今ドゥームが述べたものなど序の口なのだ。もっとも無口な少年とは嗜好性が違うだけ、どちらも残酷な事にかわりはない。ただドゥームには自覚があり、無口な少年には自覚がないだけである。ただ1つ確かなのは、まともな人間に言わせればどちらの少年も「イカれている」ということである。

「・・・時間がかかりそうだから僕は先に用事を済ませてくる・・・マンイーターを回収して『おネェ』に魔剣を渡してくるよ・・・」
「じゃあボクはのんびりここで観察してるよ。たまには人のプレイを見てボクも勉強しないとね。どう、謙虚でしょ？　アハハハハ！」
「・・・また後で・・・」

そして無口な少年はマンイーターを迎えに行った。

＊＊＊

そして時間は今に戻る。マンイーターを引き連れて戻ってきた無口な少年。

「あれマンイーター、体をなくしたの？」

「・・・ごめんなさい」
「アハハハ、何謝ってるのさ！　また新しい体をもらえばいい、そうだろう？」
「うん・・・！」
「・・・それをするのは誰だと思ってるんだ・・・」

無口な少年がため息をついた。気付いてかどうなのか、マンイーターを膝の上に載せて頭をなでるドゥーム。

「・・・で、どうなってるの・・・」
「もうすぐ全滅かな」

眼下を見下ろすと累々と積み重なる死体の山。どのような死に方をしたのか想像したくもないものばかりだ。ただ共通しているのは、どれも顔を恐怖で歪ませたまま死んでいるということ。

「・・・早かったね・・・」
「いやいや、全滅させるだけなら1時間もかからないし、大分遊んだんじゃない？　あの殺しのバリエーションの豊富さはこっちも参考になったよ。もうあの子に惚れちゃいそう！」
「ほれる？　なにそれおいしいの？」
「・・・はいはい・・・」

ドゥームが女の子を抱きしめてキスする真似をする。それを見て指をくわえるマンイーターと、あきれる無口な少年。その時、村に張ってあった『城』が解けた。

「おっと、終わったか」
「・・・アレを配下にするの？・・・できる？・・・」
「まあやってみよう。マンイーターを見ててくれるか？」

「・・・了解だ・・・」

ドゥームはマンイーターを無口な少年に預け、下に降りていく。するとそれに呼応するかのように少女が眼前に現れた。

「初めましてお嬢さん――ボクと遊んでくれないかな？」

「？？」

遊びに誘われるのは慣れてないのか、少女が首をかしげる。だがドゥームは間髪いれずに次の行動を起こした。

「沈黙はイエスってことね」

ドゥームはいきなり手をかざし、鈍い音とともに少女の首を１８０度反転させた。

「・・・殺してどうする・・・」

「はん！　この程度で死ぬタマかよ」

ドゥームの言うとおり、少女は首を反転させたままドゥームと同じように手をかざすと、今度はドゥームの右手が鈍い音と共にねじれる。

「やるじゃん！」

ドゥームは右手を、少女は首をひねり戻しながら対峙する。その時ふとドゥームが上空の少年に向かって叫ぶ。

「ねーねー、この辺一帯吹きとばすくらい暴れてもイイ？」

「・・・できる限り広域で消音と認識阻害の結界を張ってみよう・・

・」

「半径２ｋｍもあれば足りると思うからよろしく～」

「・・・やれやれ・・・早めに終わらせてくれよ・・・」

「どぅーむたのしそう」

全開で力を解放していくドゥームと少女。無口な少年の心配をよそに、それから彼らの戦いは3日3晩にも及ぶこととなる。

続く

ゼアの悪霊（後書き）

深夜にこんな話を投稿してすみません。ホラーというよりは多少猟奇ですね。では皆さん、よい夢を・・・見れませんよね。

次回投稿は本日１１／２８（日）１８：００です。

悪霊の婚姻（前書き）

～あらすじ～

封印されていた悪霊と激突するドゥーム。その結果は・・・？

悪霊の婚姻

――そして3日後――

「キャーハハハ！　連絡がとれないと思ったら、こんなところにいたのぉ、ライフレス☆」

「・・・ちょっと『お嬢』・・・本名で呼ぶのはやめてくれないか・・・しかも名前に☆がついているみたいじゃないか・・・」

「世の中にはそういう人もいるわよぉ？」

「・・・誰の話だか・・・」

ニコニコするお嬢に、ため息をつく無口な少年改めライフレス。

「下はひどい有様ねぇ。よくもこれだけやらかして誰も気づかないもんだわ」

「・・・3日3晩結界を張り続けた僕の身にもなってくれ・・・」

「ごっめぇん！　気付かなかったわ、キャハハハ」

お嬢の指摘通り、周囲は森に囲まれた村だったはずなのだが、もはや村など残骸でしかなく、森も形を変えてしまっている。美しいことで知られた森だったのだが、もはや見る影もない。しかも下の2人が暴れたことで、土地はかなり汚染されている。浄化をよほどしっかりしない限り、悪霊によって汚れた土地は再び森になることはないだろう。

また、ライフレスが認識阻害の魔術を使っているのに、何の関係も無く結界の中に踏み込んできたお嬢。お嬢とライフレスはかなり昔からの付き合いなのだが、今さらながら全く恐ろしい女だとライフレスは再認識する。そんなライフレスの心情など知ったことではないのだろうが、お嬢はどこ吹く風で質問を続ける。

「で、どっちが勝ったの？」
「・・・見ての通り・・・」
「まあそれはそうよね～♪」

眼下では少女の右半身部分が消し飛んでおり、地面に突っ伏している。大してドゥームは無傷どころか、息一つ切らしていない。丸３日かけてついにドゥームは少女を自分の足元に這いつくばらせることに成功した。実力差はあったのだが、３日もかかったのはドゥームが完全に遊んだからだろう。そんな勝者の余裕を持って少女に問いかけるドゥーム。

「どう、遊び足りたかな？？」
「・・・全然足りない」
「ふ、フフフ、アハハハハ！！」

ドゥームの質問に即答する少女。それは彼女の偽らざる気持ちだったのだが、逆にそれがわかったからこそドゥームは腹の底から笑えた。

「いいね、イイね！　キミは最高の女性だ！！」
「あらら、ドゥームちゃんってばおかしくなっちゃったかしら？」
「・・・もともとおかしいけど・・・行ってみよう・・・」

お嬢とライフレスも下に降りる。ドゥームは笑いが止まらないようだ。

「・・・どうしたの・・・」
「聞いてくれよ！　ボクは人生の伴侶を見つけた気分だ！！　こんなに嬉しいことはない。フフフ、アーハハハハハハ！！」

「本格的におかしくなっちゃった？」
「ああ、お嬢じゃないか！？　だってさ、この子はこれだけ森や村、人を壊しておいて全然足りないって言うんだよ？　ボクは自分がイカれてる自覚はあるんだ。だから世の中のイカれた連中といっぱい遊んでみたんだけど、彼らはいつもちょっと殺しただけですぐに満足しちゃうんだ。だけどボクはいっっっつもどれだけ壊しても足りないと思っていた。もうそれはそれは、壊したくて壊したくて壊したくて壊したくて壊したくて壊したくて壊したくて壊したくて壊したくて――――たまらなかったんだ！　だから今この子に会えて嬉しいんだよ、ボクの趣味に最後まで付き合える女の子は諦めかけてたんだけどね！」

腹と顔面に手を当てて狂ったように笑うドゥーム。そして突然ぴたりと笑いやむと、倒れて再生中の少女に歩み寄り、非常に紳士的に手を差し伸べた。

「お嬢さん、よろしければボクと結婚していただけませんか！？」
「きゃあ～プロポーズしちゃったぁ！　ス・テ・キ？」
「・・・手順も何もあったもんじゃない・・・さっきまで殺し合ってたのに・・・」

目をキラキラさせるドゥームと、呆れかえるライフレス。だがドゥームの方はいたって真剣であり、口元に笑みをうかべ、歯がキラリと光りそうな勢いだ。だが少女の返事は、

「・・・イヤ」
「キャーハハハ！　ふられちゃったぁ！！」
「・・・それはそうだ・・・」

今度はお嬢が爆笑しており、ライフレスはうんうんと納得してい

るが、ドゥームの返答はさらに彼らの予想の斜め上を行くものだった。

「うーん、結婚式と新婚旅行はどうしたらいいのかなぁ・・・だいたい結婚式って誰に仲人頼もう？　それに子ども最低3人は欲しいし、そうすると新居の問題もあるな。大きいほうがいいけど、すぐにまとまった収入があるわけでもなし、とりあえず賃貸か？　敷金礼金をとりあえず稼がないと・・・だが夢は丘の上の一軒家だ！」

「ドゥームちゃんってば全く人の話を聞いてなーい！　お、面白すぎよ～キャハハハ！」

「・・・そして意外と家庭的で小市民だな・・・」

既に人生プランを悩み始めたドゥーム。お嬢は抱腹絶倒の状態で、ライフレスでさえクスクスと笑っている。そしてドゥームは考えがまとまったのか、まだ半身を再生しきってない少女を抱え起こし囁く。

「さってと・・・花嫁さん、ボク達の新婚生活にお望みはありますか？」

「・・・イヤ、もっと遊びたい」

そしてあらん限りの力でドゥームの体をねじ切りにかかる。だがいかほどに力を込めてもドゥームがダメージを受けている様子はない。

「もう、おてんば娘だなぁ！　でもこのままじゃ見栄えが悪いからまずは体を治して、と」

「！」

瞬間少女の体が再生する。消滅しかけていたのだが、力が瞬間的

に戻りさすがに驚きを隠せない少女。

「心配しなくても沢山遊ばせてあげるよ？　むしろ結婚前よりもっとね。ボクは花嫁さんを家に閉じ込めたりしない。むしろ二人で色んな所に遊びにでかけないか？　ただその遊びにボクも参加させてほしいし、ボクの遊びにも付き合ってほしいわけさ。それならどうかな？」

「・・・遊べるの？」

「今までよりもっと沢山。そして派手に」

「なら・・・いいわ」

「やったね！」

「キャハハ、感動的な瞬間♪」

「・・・ここだけ聞いていればね・・・」

ドゥームは喜びのあまり、少女を抱きしめてくるくると踊っている。それをお嬢は拍手で祝福し、ライフレスは腕を組んで見守っている。

「・・・話がまとまったところでそろそろ仕事に行って欲しいんだけど・・・」

「わかってるって！　おいで、インソムニア、リビードゥ」

ドゥームの後ろに現れる2人の影。インソムニアと呼ばれた一人は長い髪を伸び放題にした女。余りにも長い黒髪で顔は見えないが、何かしらをずっと呟いている。陰湿そうで、絶対に関わりたくない印象を与える。

もう一人、リビードゥはやはり黒髪だが、こちらは妖艶・淫乱を絵にかいたような女で、美人は美人だがまっとうな目をしていない。まさに色欲狂といった雰囲気が素人でもわかるだろう。服の素材も全て透けたネグリジェのようなものを一枚着ているだけで全て見え

ており、裸と何ら変わりない。真っ赤な口紅と濃いメイクもまた印象的だ。

「・・・その二人は？・・・」

「ボクが本気で暴れるときの部下さ。食欲、睡眠欲、性欲は人間の三大欲求だろう？　マンイーターも含め、彼女達はそれを象徴するような悪霊でね。マンイーターと違って普段は好き勝手させてるんだが、この3日のうちに呼び寄せておいた。ただぼやっと戦ってたわけじゃないんだよ、ボクもね」

ちちち、と指を左右に振って見せるドゥーム。

「さてと、これでようやくミリアザールの所にイケるよ。これが婚前旅行ってことでよいかな？　えーと・・・キミの名前はなんだっけ？」

「・・・オシリア」

「確か南方における死の女神の名前だったか？　死の女神と同じ名前なんて、とても素敵だ！　ますますボクの奥様にふさわしい」

さらに上機嫌になるドゥーム。そしてくるりとライフレスを振り返り質問する。

「で、もしできるならそのままアルネリア教を潰してもいいんだっけ？」

「・・・できるならね・・・ところでリサちゃんはどうするんだい・・・」

「あー、リサちゃんね！　もちろん覚えてますとも！　確かあの子が大切にしている子どもたちが今ミリアザールの所にいるんだよね？　あの子たちの首を順番に彼女の前に並べたら、リサちゃんはどういう顔をすると思う・・・？」

ニタリと陰惨な笑みを浮かべるドゥーム。その彼の意図を理解したのか、彼の部下の女たちやオシリアまでクスクスと笑い始める。

「すごく・・・すごく楽しみだよ、ククク・・・」

「・・・それは見ものだな・・・やる時は僕にも声をかけておくれ・・・」

「了解だ。じゃあちょっと行ってくるよ！」

まるでピクニックにでも行くかのような軽い雰囲気で姿を消し、戦いの場に赴くドゥームとその配下達。それを手を振って送り出した後、残されたライフレスとお嬢。

「ほほ、とんだ餓鬼よな。あんなのに目をつけられた人間など、運がない事この上ない」

「・・・その口調は・・・いいのかい、お嬢・・・」

「そちこそ、その間延びした口調でなくてもよい。ここには妾達しかおらぬし、昔通りでよいぞよ？」

「・・・ふう。ならそうさせてもらおう」

口調だけではなく、纏う雰囲気まで変わる二人。これが本来のこの2人の姿である。

続く

悪霊の婚姻（後書き）

裏話：この悪霊達のイメージは割と早く固まっていました。ただどのタイミングで登場させるか、どのように関連付けるかで悩んだ記憶はあります。ドゥーム達にはこの後も大暴れしてもらう予定です。

次回投稿は１１／２９（月）１２：００です

暗躍、その3～本性～（前書き）

～あらすじ～
これは誰にも聞かれない2人の会話。2人の仲間達ですら知らない、
彼らの本性が晒される。

暗躍、その3～本性～

「本名で呼んでも構わないかい？」
「もちろんである。そちと妾の仲であろうが、ライフレス？」
「それでは遠慮なく、ブラディマリア。ドゥームをほったらかしていいのかな？」
「どういうことかの？」
「万が一にもドゥームがそのままミリアザールを討ってしまったら・・・貴女はミリアザールに個人的な恨みがあるはずだ」
「そのようなことを言えば、妾はそちにも恨みがあるのう、ライフレス」
「・・・確かにその通りだ」

一本取られたと言う顔で自嘲気味に笑むライフレス。ブラディマリアはそんな彼を楽しそうに、しかし瞳の奥には彼に対する怒りを隠しもせず話を続ける。

「確かに妾の目的はミリアザールが一番である。だがドゥーム程度になんとかなるようならば、ミリアザールは１０００年も生きておるまい。ミリアザールはその戦闘能力と言うよりは、指揮官能力と用意周到さで戦うタイプであろう。それが自分の本拠地にいる状態でドゥーム達は飛びこむのであるぞ？　しかもミリアザールはドゥームにとって相性が最悪の相手でもある。ドゥームに勝てる要素はあるまい。まあかなりの打撃は与えるかもしれんがな。むしろ向かわせるのがなぜドゥームなのか、という方が問題じゃ」
「ふむ・・・１つにはドゥームは戦闘経験が少ない。自分以上の敵と戦ったことはないだろうから、彼に経験を積ませたいと言うのがある。またアルネリア教の現在の戦力をある程度把握したいというのもそうだ。もう１つは、ドゥームは――――だからね」

「ほほう・・・それは面白い事実よのう。そちが考えたのか？」
「発案は僕とアノーマリーだね」
「なるほど、やはりそちは隅におけんな。そちと決着をつけるのはミリアザールの後になりそうじゃのう」
「僕としては君と戦うのは勘弁願いたいな、ブラディマリア。君は強すぎる」

両手を上げて降参のポーズをとるライフレス。そんな彼を見て忍び笑いをするブラディマリア。

「冗談が上手くなったの、ライフレス。そなたがかつて大魔王を一騎打ちで破ったのは、一体なんじゃったのかの？」
「また古い話を・・・それに一騎打ちなら『オネエ』の独壇場だろう？　あれに一騎打ちで勝てる奴がいたら見てみたいよ。特に僕のような魔術士タイプは相性が悪い」
「だが負けもしない・・・といったところか？」
「・・・まぁね」
「この狸め」

二人してククク、と笑う。一見仲が良いと思えるかもしれないが、実際には過去には敵対関係にあった2人であり、今回同士として集まっていなければ即座に殺し合いを始めていてもおかしくないのだ。

「だがそなたの言うことにも一理ある。配下には監視させておくかの。ユーウェイン、おるか？」
「イエス、マドモアゼル」

ブラディマリアの背後に現れた一人の男性。ライフレスでさえ思わず唸る美男子だ。

「ドゥームと共にアルネリア教に潜入し、見張れ。ただし本人には気取られるなよ？　まずはないと思うが、万一ドゥームが優勢になるようならば・・・部下ごと殺せ。妾はアルネリアにて高みの見物と洒落込むことにするでの」
「御意にございます」
そして音も無く消える男。

「初めて見たけど・・・あれが君の部下か。ドゥームを殺れるほど強いのかい？」
「妾に仕える執事（バトラー）達じゃよ。またドゥームより強いかどうかは問題ではない。まあ相当な手練（てだれ）ではあるがな。だが肝心なのは妾のために何のためらいも無く死ねるかどうかということ。だいたい代わりなんぞいくらでもおるでな」
「おお怖い」
「自分が生き残るために仲間を盾にするような奴に言われとうない」
「残念ながら生まれてこのかた、僕に仲間なんて1人もいたためしがない」
「ふ、言いよるわ。ところでドゥームの戦いを見物にいかんかの？　妾も興味があるでな」
「それは僕も同様だ。特に今は仕事もないし・・・おネェへの詫びも後でいいだろう。では行きましょうか、マドモアゼル？」
「うむ」

そうして姿を消す2人。そして消音と認識阻害の結界が消え、この森の惨状を間もなく周囲の村や町が知ることになるが、その原因はゼアと同じく謎に包まれたままだった。

続く

暗躍、その3～本性～（後書き）

ちょっと短いかもしれませんが、たまにはいい・・・か？

裏話：なお今回の2人のイメージは早期に固まっていました。特にライフレスの方は最も早く細部まで決めたキャラです。逆にブラディマリアは細部が決まらなくて困りました。特に容姿。『おネェ』がいますし、未登場ですが『姫』もいる。じゃあもう1人は？　ってことで黒ゴスロリになりました。某ネコをイメージしたわけでは決してない。ちなみに原作の方は見てませんが、アニメは見ております。想像よりはるかに面白いのですが、中々周囲にお勧めしずらいのが悩み。周りに理解のある友人が少ない・・・ふぅ。ちなみに筆者は甲殻機動隊なんかも好きです。

次回投稿は１１／３０（火）１３：００です。

首脳会談、その1（前書き）

～あらすじ～

様々な場所で蠢く陰謀、人間。一方こちらは2人の教会の長の話・・・

首脳会談、その1

＊＊＊

その頃、当のミリアザールはというと・・・のんきにお茶をすすっていた。彼女がいるのは魔術教会の長であるテトラスティンの私室である。魔術書が山のように本棚に並び、また床に散乱してもいる。魔術教会の長らしく自身は豪奢な机に座っているが、ミリアザールにもなかなか質の良いソファーを当てがっている。

「ふぅ～生き返るわい。さすがに魔術教会の長だけあっていいお茶を取り揃えておるの、テトラスティン」

「お褒めに与り光栄だよミリアザール。もっともこれを淹れてくれたのはそこにいるリシーだけどね」

「恐れ入ります」

ぺこりとお辞儀をするリシー。赤く長い髪を後ろで一つにくくっており、まだ可愛らしさを残している容貌だ。と、いっても年齢は17、18くらいだろうか？　目線は伏せがちで決して自己主張をしない。うちの失礼な女官どもに比べて、なんとメイドの手本かと思うミリアザール。床に散乱する本を器用によけながら、なおかつ優雅な仕草をそこなわない。だが・・・

「なぜにあんなピタピタのミニスカで仕事をさせる？　確か最近流行っておる『スーツ』とか言うやつか？　しかも教育ママ的眼鏡を付加とするとか・・・」

「え、僕の趣味だけど？」

「お主・・・見事な変態になりよったな」

「人の性癖について細かいことは言いっこなしだよ。今日はたまた

まあの服装なだけで、日によってはちゃんと服を着せてる日もあるよ？」

「・・・ちょっと待て、『着せてる日もある』？」

「ああ、まあ日によって服装変えるから。メイドだったり、紐水着だったり、バニーだったり・・・」

「なんじゃそれは？」

「僕の趣味です！」

「なぜ自信満々で言いきりよるか！？　なんでこんな変態が魔術教会の長かのぅ・・・」

目の前にいるのは魔術教会の長テトラスティンである。彼は既に４０年以上もその地位に付いている。魔術教会は５年周期で理事長選挙をやるため、既に８期連続ということになる。魔術教会の内部が多様な派閥で形成されている現在において非常に珍しいことだったが、そこには様々な思惑が絡んでいる。もちろん彼自身が相当に優秀なのは間違いないが、諸々の事情についてはまた語ることにしよう。

ただその長い任期に比べ、見た目はまるで少年のようだ。背格好もミリアザール程度であるが、その年齢は不明である。一説には１００歳をこえているといわれるが、彼が魔術教会に所属して少なくとも６０年が経過していることしかわかっていない。ただ出自が不明であるのは魔術教会では珍しくも何ともないので、そんな彼でも長になることはできるのだが。むしろどこぞの貴族関係の出自だと教会の政治色が強くなり、逆に社会的に都合が悪い可能性の方が多々ある。

ともあれ誰もこの２人がそれぞれの教会の長などとは思うまい。端から見ればちょっといい育ちの子ども２人がお茶とお菓子を食べながら談笑している、くらいの光景である。その会話内容たるやとても子どもが話すものとはいえないが・・・。

「で、そろそろ真面目な話をしようかミリアザール。僕の私室とはいえ、教会内では誰に見られるとも限らない。君も面が割れるとまずいだろう？　魔術教会でも君の正体を知っている者は片手に収まるくらいだからね」
「だったら外で会った方がよかったのではないか？」
「外だと必ず護衛をつけないといけなくてね・・・君と違ってラザールみたいな専属の護衛などいないからさ。護衛なのに信頼できる者とは限らないんだよ。それにどこに使い魔や遠見の魔術があるともしれない。まだ僕の私室の方が結界も張れるし、安心できるってもんさ」
「お主も苦労するのう」
「それはお互い様さ。で、相談したいことって？」

優雅に紅茶をすすりながら悠然と構えるテトラスティン。少年のくせにその貫禄だけは十分だ。

「まずは最近の魔王の異常な発生頻度について。何かつかんでおるかの？」
「そういうときにはまず自分の手札から披露したらどうかな？」
「ふん、まあよいわ。確かにいらぬ駆け引きをしとる場合でもないしの。先程うちのラザールに魔王を討伐させたところ、見たこともない種類の魔王じゃった。なんでも鉱石・悪霊・人間が混じったような生物じゃったと聞いておる。ワシも１０００年生きておってそのような種類の魔物を見たことがない。となると考えられるのは・・・」
「南方の大陸出身とか」
「その可能性もある。ワシとて南方の大陸にはほとんど分け入ったことが無いし、未発見のあのような生物がいてもおかしくはない。だが疑問点が２つ。まずはなぜ中原に突然出現したのかということ。そして西側でその魔王に似て、完全に非なる生物が確認された」

「前者の疑問は酔狂な誰かさんが転送魔術で送り込んだとも考えられるね。だが後者はどういうことだい？」
「胴大部分は同様じゃったと聞いておる。だが足は馬やらなんやら多様じゃったそうじゃ。そう、まるで色々な生物をかけ合わせた様じゃった、と」
「合成生物（キメラ）ってやつか・・・」
「それについて何か知っていることはないか？」
「ふむ」

カチャリとティーカップをテーブルに置き、手を膝の上に組み直す。

「僕が直接知っているわけではなく記録上の話だが・・・確かに昔そういったキメラの研究をしていた魔術士はいたらしい。だがあまりにも生命を冒涜するような研究であったため、魔術師は魔術教会によって征伐されており、死亡もきちんと確認されている。誰かがその研究を引きついで魔王を作っているとでも？」
「ワシはそうにらんでおる」

ミリアザールが身を乗り出す。

「そうであれば魔王が様々な場所に、多種多様な形で出没するのも頷（うなず）ける。だがもしそうだとするとこの出現頻度から考えて・・・」
「既に大きな生産場所が存在するだろうね」

やれやれと言った感じでテトラスティンが指をこめかみに当て答える。

「全く・・・ただでさえ最近教会内の勢力争いが激化してるっていうのに。うちと袂を分かった連中も何やら怪しい動きを見せてるし・

・・平和になったらすぐこれだ。全く業突張りの暇人どもめ！」
「なにやら大変そうじゃのう」
「君の教会が全くもって羨ましい。もっと命令系統を一本化しておくべきだったよ。背後権力のない僕が長になるために色々譲歩した結果、こういった体制になってしまった。全くもって失策と言わざるをえないな」
「それは結果論じゃろう？　ワシはお主が教会の長でよかったと思うておる」
「じゃあ僕と結婚してくれる？」

テトラスティンが真剣な眼差しをミリアザールに向ける。だがミリアザールは一向に動じない。

「なぜにそういう話になる・・・」
「いや、僕はいまだに待ってるんだけどね」
「５０年前にきっぱり断ったはずじゃが？」
「やっぱり君ほどイイ女を諦めきれないからね」
「ワシの事情を知っておってそう言うのか？」
「年上で魔物でバツイチってこと？　関係ないね。だいたい年上女房は金の草鞋をはいてでも探せっていうし」
「ワシがバツイチということまで知っておってそのセリフか・・・まあ女としては嬉しい申し出ではある。だが今はそんな気分にはなれんな」
「昔の旦那に操を立ててるのかい？」
「それもある。確かにあれほど他人を愛することはもうあるまい。じゃが・・・」

ふとミランダのことを考える。ミランダに先に進めと言っておきながら、自分はどうなのかと思いをはせる。自分の良人の顔を思い出すが、彼ならばどう言うか・・・。自分の幸せを第一に考えろと

か言うに違いないとミリアザールは想像するも、ちょっと彼に嫉妬して欲しくもある。

「（乙女心・・・というにはワシは歳をくっとると思うがな。まだそんな感情がワシにもあるようじゃぞ、ランディ・・・そなたに会いたい）」

少し昔を思いだそうとする。それはミリアザールにとって2回目の幸せな記憶。だが今のまま昔を思い出せば人前で泣いてしまいそうで、ぐっと堪えた。

「とりあえず返事は保留と言うことにさせてもらおう。申し出は嬉しいが今はそういう気分にならん」

「じゃあ魔王頻発の問題が片付いたら前向きに考えてくれる？」

「ふむ・・・もう1つ問題はあるが、それも同時期に片付くじゃろうしな・・・まあよかろう。・・・なんじゃ、鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしよってからに」

「いや、ここまで色よい返事がもらえると思ってなかったから・・・」

「不服か？」

「いや、５０年も待ったんだからその程度、何の問題もないね。で、相談事はそれだけ？」

「もう1つ」

今度はミリアザールがティーカップをテーブルに置く。

「アルフィリースという娘を知っておるか？」

「ああ、アルドリュースが預かった子だよね。あの事件は衝撃的だったから覚えている。アルドリュースも僕が目をかけていた子だったから。いずれは僕の右腕に、と思っていたんだけど」

「それ以前の話じゃ。なぜアルフィリースは教会で保護されていない？　あれほどの力を持った者が教会が感知できぬはずはないじゃろう？」
「そのことだが・・・」
テトラスティンが厳しい表情になる。
続く

首脳会談、その１（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

裏話：こんなチビっ子同士が教会長だったら面白いな、というコンセプトでテトラスティンは描いています。彼についてもいずれ話の主軸に絡んでくるとは思いますが、それはまだだいぶ先の話。リシーについても、いずれ、ね。

次回投稿は１２／１（水）１４：００時です。

首脳会談、その2（前書き）

～あらすじ～

話し合いを続けるミリアザールとテトラスティン。その話の内容は・・・？

首脳会談、その2

「この事は内密にしてほしい。教会でも何人かしか知らないし、当人にも話さないように。実はアルフィリースの誕生前後で占星術や何やらがおかしくてね」
「おかしい？」
「ああ、実は彼女の誕生した年月の前後で不思議な占星術が多発している。最初に出た占星術は『この地に祝福されし子が生まれる』だった。別に魔術的な要素は示されておらず、最初は偉人の誕生を示すような予言だった。だがそれからしばらくしてその予言は変わり・・・『この世を闇に閉ざす魔王が誕生する』になっていた」
「なんじゃそれは？　占星術が変化するなどありうるのか？」
「わからない。そもそも予言が同一人物を指しているとも限らないし、そもそもそれがアルフィリースのことだったのかという確証は何もない。調査はさせたが何も分からずじまいだった。で、しばらくしてアルフィリースの存在が報告された。最初はあの子を滅びの魔王と関連付ける説もあったんだ」
「なんじゃと？」
「何の訓練もされてない１０歳の女の子が、征伐部隊の精鋭１０人をいとも簡単に退ければそれはねぇ・・・。教会としてもさらなる戦力をだすことはできたけど、その前にアルドリュースが助けに来た。彼の名前を知らない者は魔術教会にもいなかったし、彼の特性も相まって教会は納得したのさ」
「たしかあやつは・・・封印魔術が専門じゃったか？」
「そうだね、しかも歴代でも有数だった。だから皆納得したのさ。アルドリュースが監督するならって。だけど・・・」
「奴は死んだ」
「そう。それでその問題を蒸し返す奴らがいる。アルフィリースを放置するのは危険なんじゃないかって。過激な連中は今のうちに彼

女を暗殺してはどうか、という者までいる」
「そんなバカな話があるかっ！」
「確かにそうだが、さらにバカな話がある。彼女がアルネリアのシスター・・・アノルンだったか？　と共に行動しているのを見て、アルネリア教がアルフィリースを抱き込んで何か企んでいるとする者までいるくらいだ」
「・・・暴論も極みじゃのう」
「僕も同意見だ。心配しなくてもその意見はまだごく一部。ただなんにせよ統率がとれているとは言い難い集団だ。警戒するにこしたことはないし、彼女たちにもそれとなく伝えておくといいだろう。こんな世の中の状況で魔術教会とアルネリア教会が真っ向対立、なんてまっぴらごめんだからね」
「わかった・・・特にお主が教会の長を外される、なんてことにはなるなよ？」
「それはわかってる。だが彼女がもしうちの教会の者を手にかけでもしたら・・・僕の権力では抑えられない行動が起きるかもしれない。その行動にうかつに反発すれば僕自身が今の権力の座から追われかねない。その点だけは承知しておいてくれ」
「いいだろう」
「で、だ。君とはこれからも頻繁に連絡を取りたい。それで僕の信頼できる部下を連絡に使いたい。エレオノール、ニックス、出てこい」

そして音も無く出てくる、青いマントとフードをすっぽりとかぶった2人。男女1人ずつだろう。

「この2人を連絡役に使う。以後彼らへの連絡方法は2人それぞれから聞いてくれ。2人とも連絡方法は違うだろうからね」
「えらく準備がいいことじゃな」
「これぐらいじゃないとこっちの教会ではやっていけないんだよ」

その時リシーがドアをノックする。

「ご主人様、召喚士派閥のエスメラルダ様がお見えになっております。お取り次ぎなさいますか？」

「5分待てと伝えろ」

「ではそのように」

「だ、そうだ。短い時間しか確保できなくて済まないね、ミリアザール」

「いや、有意義であった。こちらこそ礼を言う」

「今度はゆっくり晩御飯でも食べたいところだ」

「それはこちらも構わんが・・・なにせ互いに自由な時間がないでの」

「全くだ。ではまた会おう」

そういって書斎の本をテトラスティンががたんと動かすと、机の下に隠し階段が出現する。

「既に転送魔術は起動させてある。即座にアルネリア教会の自室までで帰れるはずさ」

「よく座標設定ができたのう」

「この前使い魔で部屋まで行ったろう？　その時にちょっとね」

「油断も隙もないの・・・転送魔術で夜這いなんぞかけにくるなよ？」

「それは来て欲しいっていうネタフリかい？」

「違うわ！」

悪態をつきながらミリアザールが部屋を後にする。その姿を笑顔で見送った後、威圧感さえ感じる真剣な表情に戻るテトラスティン。彼はミリアザールの前でこそこんなくだけたキャラだが、魔術教会

内では屈指の武闘派として知られており、恐怖と力でもって下を押さえつけている。自分に面と向かって逆らい、魔術教会の結束を乱そうとした物を全員の前で粛清したこともある。そんな側面は愛しい人には見せたくないものだと考えるテトラスティンだった。

＊＊＊

「ふあ～あ、眠いなぁオーディス」
「しっ！　ラファティ様に見つかったら罰として都市外周とかになるぞ、ランドー？」
「だってよお・・・こんなアルネリア教会本部の正門の守衛なんて暇じゃないか？　誰が攻めてくるわけでもなし、偉い人の対応は別の取り次ぎ役がやるわけだし」
「確かにそうだが・・・」
「ちょっとくらい気を抜いたって罰はあたらないよ」
「そうとはいえ・・・お、おい」
「だいたいラファティ様は確かに強いけど、まだまだ２０になったばかりの若造じゃん？　そんなにビビらなくてもいいっての」
「ランドー、う、う、後ろ・・・」
「後ろが何・・・ひぇっ！？」

後ろにニコニコしながら立っているのは彼らにラファティと呼ばれた青年。とても優しそうな風貌に、まだどこか少年の雰囲気を残す好青年。それがニコニコしながら愛想よく立っている。だがその通称は『微笑みの悪魔』と言われる青年である。

「なかなか面白そうな話をしているね」
「いえ、あの、その・・・」
「な、なんでもありません！」
「うん、それならいいんだ。１つだけ間違ってるところがあるから

訂正してもいいかな？」
「「何なりと！！」」
「外周は1周じゃなくて、5周だよ。はい、すぐに行ってきなさい」
「えーと・・・確か一周１０ｋｍはあるから・・・５０ｋｍ？？」
「そ、そんな無茶な・・・」
「おっと、言い忘れてた・・・もちろんフル装備で走るんだよ？」
「う、うへぇ！」
「私が悪うございました！」
「早く行かないと行軍装備もつくけど・・・」
「「行かせていただきます！！」」

ダッシュでいなくなるオーディスとランドー。その2人に笑顔で手を振るラファティ。周囲はその様子をガタガタふるえながら見守っていた。

ラファティ。フルネームをラファティ＝ファイディリティ＝ラザール。アルベルトの弟で、3人兄弟の次男である。彼は２０歳という若者ながら、既に結婚して1子をもうけている。現在の立場はアルベルトの副官補佐。もちろん武勇の程は神殿騎士団内中に知られる豪傑の1人である。獲物はアルベルトと異なり、双剣ではあるが。いつも笑顔を絶やさないが、部下にも自分にも人一倍厳しい人物として知られ、神殿騎士団内ではアルベルト以上に恐怖の対象である。そしてあのあだ名がついたと。そんな彼が目にとめたのは1人の少年。

「やあ、ジェイク」
「げっ！　ラファティ！！」
「目上には『さん』をつけなさい？」
「な、何のようでしょうかラファティ『さん』」
「うん、時間が空いたから君に稽古をつけてあげようと思ってね」
「慎んで遠慮させていただきます！」

「ははは、慣れない丁寧な言葉づかいをするもんじゃないよ。そこは『はい』でいいんだよ？」
「い、いやだー！」
「ははは、可愛い子だ。そんなに遠慮しなくてもいいのに」
「ダレカタスケテー」

だが全員がジェイクに向かって合掌をしている。ラファティにしてみればジェイクはいつも兄のアルベルトにまとわりついているので、少しでも兄の時間的負担を減らそうとジェイクの相手を買って出ているのだが、それがジェイクにとってはただの拷問であった。ただ数年後にはジェイクはこの拷問に感謝することになるのだが。

＊＊＊

そしてこちらは外周を走るため外に向かおうとするオーディスとランドー。

「２０ｋｇの装備を背負って５０ｋｍ走れって？　死んじまうよ・・・」
「昔それで死んだ奴いたよな・・・フルマラソンの発祥だっけ？」
「いや、それより長いじゃん」
「これは・・・死ぬな」
「トホホ・・・」

そんなうなだれた２人が外に出ようとすると、正面にフードを深くかぶった少年が立っている。

「おや、坊や。何かアルネリア教会に用事かな？」
「ええ、アルネリア教会の本部へはこちらでいいのですか？」
「そうだよ。でも通常の参拝や祈りはここから５００ｍ程向うに行

った門だけど。本部に用がある人は予約か紹介がないとだめだけど、何かあるかい？」

「いえいえ、そんなものはありません。だって・・・それじゃ面白くないじゃありませんか？」

「！　いかんランドー、離れ・・・」

ゴキィ！

ランドーは剣を抜く暇さえなく首をへし折られた。その様子を見もせず、オーディスは非常用の笛を吹く。

ピイィィィー！

高い音が一瞬にして響き渡り、アルネリア教会の空気が一瞬で緊張するのがわかった。

「やるね・・・剣を抜くより早く警笛とは。自分の身より教会を優先ね。よく訓練されていて、やるべきことがわかってる。さすが、と褒めておくべきかな」

「何者だ小僧！　魔物の類いか？」

「さあ・・・どうでしょう？」

「ふざけるな！」

剣を抜くと同時に少年に斬りかかるオーディス。一般兵士にしては見事な判断、剣速、身のこなし。が・・・

「相手が悪いね」

手を捻じ曲げ、自分の剣で喉元を突き刺すように仕向けた少年。その剣が喉を貫通し、ガクガクと痙攣しながら断末魔すらあげるこ

となく倒れるオーディス。
だがそれと同時に門からはバラバラと他の守衛達がかけつけてくるのが見える。

「フフフ・・・対応が流石に早い。これは楽しめそうだね」

フードを外しその中から出てきたのは、もちろんドゥーム。

「さあ、ショウ・タイムだ!!　あらん限り楽しもうぜ、ボクの女神達!」

そして姿を現した４人の女達。いままさにドゥームとアルネリア教の戦いが始まろうとしていた。

続く

首脳会談、その２（後書き）

裏話：さて、この流れを受けて魔術教会がどう動くのか・・・。まだ先のことですが、いずれはアルフィリース達とも縁がない話ではなくなってくるでしょう。

次回投稿は１２／２（木）１５：００です。

登場人物紹介その４～テトラスティン、リシー～（前書き）

今回は魔術教会で少し出てきた人物の紹介を。

登場人物紹介その４～テトラスティン、リシー～

名前：テトラスティン
年齢：??、見た目上１２～１３歳
外見：１５０ｃｍ／４２ｋｇ／黒髪・黒眼（他系統魔術者のため、髪は染め、瞳の色も隠している）
職種：魔術教会長、大魔導師（マジックマスター）
好き・得意なモノ：休憩のお茶、遠乗り、魔術研究、リシーの着せ替え
嫌い・苦手なモノ：リシーの小言、堅苦しい人間、子ども
一人称：僕、
〈プロフィール〉
年齢、出自の一切が不明。魔術教会に現れてから６０年、会長に就任してから既に４０年以上が経過しているが、その姿形は一切変わっていない。一説には１００歳を超えているのではないかといわれるが、突き合いの長いミリアザールですら真実は知らない。
傍にはリシーが常に付き添っており、彼女もまた６０年以上の間姿が変わらない。彼女はテトラスティンの使い魔とも、疑似生命体（ホムンクルス）とも、自動傀儡（ゴーレム）とも言われているが、もちろん彼女の真実についても誰も知らない。

魔術教会は多数の派閥から形成される集団であり、常に勢力争いで内部抗争を起こしている状態である。また自分の研究を秘匿するために、魔術教会を後にするものも多い。そのため魔術教会に関して、人の出入りを完全に把握することは不可能であり、テトラスティンの出自が問われないのもそういった特殊性があってのことである。
また多数の派閥が争う魔術教会において誰が教会長を務めるのかということは常に争点となっていたのだが、背後関係の無いテトラ

スティンの出現は彼らにとっても好都合であった。そのためテトラスティンは祭り上げられる恰好で教会長に就任したのだが、彼が教会長になってからは恐怖政治とも言える体制を敷いており、逆らう者には容赦の無い制裁が加えられる。

テトラスティンは会長に就任するまでは自身の戦闘力を隠しており、ひたすら派閥の戦力把握や弱みを見つけることに心血を注いでいた。そのことを利用して教会長就任の時に自身に反抗した者を直接的、あるいは間接的に処分しており、現在の地位を確保したのである。

もっとも各派閥としてもただで従っているわけではなく、テトラスティンには様々な制約・拘束がついている。そのためミリアザールの敷くアルネリアの体制が非常に羨ましく、最初は将来を見据えてミリアザールに色々な話を聞く、あるいは弱みを握るため近づいたのだが、現在では本当に彼女に惚れてしまったようだ。

テトラスティンが魔術教会の長として何がやりたいのかは不明である。これから物語にどのように関わって来るのか注目したい。

名前：リシー
年齢：??、見た目上は17、18歳
外見：160cm／52kg／83・58・84／赤髪で背中にかかる程のロング、茶色の瞳
職種：秘書、剣士
好き・得意なモノ：植木の世話、着せ替え、お菓子のつまみ食い
嫌い・苦手なモノ：テトラスティンの世話、地味な格好
一人称：私
〈プロフィール〉
テトラスティンに影のように付き添う女性。その正体は謎であり、人間ではないとさえ言われる。テトラスティンの身の回りの世話を

甲斐甲斐しくしているようだが、別に好きでやっているわけではない。単にテトラスティンの命令には絶対服従であるから従っているだけである。ちなみに仕事が終わると2人の仲は非常に悪いが、一緒に暮らしている。

ほとんどを魔術教会内の執務室で生活する彼らだが、一応魔術研究室付きの私宅も持っており、帰った時にはテトラスティンが家事全般を1人で行うこととなり、リシーはのほほんとしている。

無駄口をきかない性格であるが、秘書としては非常に有能であり、殺人的に忙しいテトラスティンの仕事を1人で補佐している。

また剣士としても一級であり、全力の彼女の戦闘力は教会の征伐部隊100人分とも言われる。彼女が剣を抜くときは確実に相手を殺す時だけであるため、その戦闘場面を見たことがあるものはほとんどいない。

続く

登場人物紹介その４～テトラスティン、リシー～（後書き）

これだけでは面白くないと思うので、本編を本日１９：００に行います。

アルネリア教会襲撃、その1～外周部～（前書き）

～あらすじ～

アルネリア教会にたった5体で殴りこみを駆けてきたドゥーム。その無謀とも思える行動は果たして・・・？

アルネリア教会襲撃、その1～外周部～

「さすがに対応が早いね・・・」

アルネリア教の敷地内に踏み込んだドゥームを待ち受けていたのは、５０人以上の装備を整えた騎士たちだった。

「（まだ近衛の聖騎士じゃないか・・・せいぜい一般騎士ってところかな？）」

「どうするの、どぅーむ？」

「んー？　まあもうちょっと人数が集まった方がいいかなぁ？」

「余裕ね？」

「そりゃ花火は大きいほうがいいでしょ？」

リビードゥの問いにヘラヘラしながら答えるドゥーム。そうするうちにも次々と騎士たちが集まり、隊列を組んで弓を構える。

「そろそろかな・・・」

「そこのガキ共止まれ！」

よく通る声で小隊長らしき中年の男が叫ぶ。言われなくても止まっているけどね、とドゥームは考えるが、それよりも彼の頭を巡っているのはここからミリアザールがいるとおぼしき深緑宮までの道のりだった。

アルネリアという都市は物理的防御・魔術的防御、共にかなり固い。まず都市部の周囲にしっかりとした城門が築かれ、それを起点としたドーム状の結界が空中に張り巡らせてある。ただ門の方には結界が無いため、堂々と入る分には何も影響はない。なのでドゥームは知らないが、ライフレスとブラディマリアは都市部の外から見

物していることになる。
　教会本部も同様で、一番外の部分は参拝・来賓の人間のことも考え、領地を示すための簡単な柵と、通る人間をチェックするための検問だけである。そこからおよそ５００ｍ程奥に行くと、今度は騎士団の生活領域になる。そこから先はアルネリア教関連者しか入れないため、チェックも厳しく、聖水で満たした外堀を含めた城壁で防御してある。結界も門まできっちり張ってあり、たとえ見た目上門が開いていても、魔物や悪霊など負の属性を持つ者は入り難い作りになっている。
　騎士団の生活領域の中に入ると騎士たちが生活する兵舎や、練兵場まであるためかなり広い敷地となる。さらにミリアザールの居城である深緑宮まではもう一つ門があり、そこまでは１ｋｍ近くあるのだ。深緑宮を守る門はそこまで大きくないが、堀はさらに深く、弓を射かけたりする穴や投石機を設置する台があるなど、完全に戦争を想定して作られていた。中に入れば優美な景観が待ち受ける半径５００ｍ程の深緑宮と言えども、決められたルート以外は主に対魔物用のトラップだらけであった。なお深緑宮には近衛でも一部の人間しか入ることが許されていない。自由に出入りが許可されているのは三大司教とアルベルトぐらいであった。

「（完全にここが戦場になることを想定して作られているね・・・思った以上に油断がならない。それにこの兵の練度。一番下っ端でこれだもんな。下調べ段階では、今日ここに在中している騎士だけでも１万を超えている。こんな中にこれだけの人数で突っ込めなんて、こりゃ相当骨が折れそうだ）」
「聞いているのか！？　手を上げて降伏の意志を示せ！　なお５秒以内に警告に従えない場合は、子どもと言えど容赦せずに撃つ！」
「（まともにやりあえば、下手したら１つ目の門を突破するだけで手一杯になるな・・・。と、なれば一点突破で足止めを使いながら、ボクだけ深緑宮まで行くか。まずはミリアザールとやり合うのが目

標だし・・・確かに全滅を狙うのは難しいか？）」
「5、4、3・・・」
「（1つ目の門はボクが開けて・・・2つ目はインソムニアでいけるか・・・？　まあ結局出たとこ勝負だな）」

ドゥームの結論は、結局行きあったりばったりであった。実際見てみないとわからない部分も多かったし、今回ドゥームは知らずとも、彼の師匠の狙いにはアルネリア教の準備状態を調べ、戦力を確認することも入っていた。その意味でほぼ何の知識も与えられていないドゥームだが、彼が戦闘経験豊富であればもう少し研究と下準備をしてから殴りこんだであろう。そうこう考える間にも、小隊長のカウントは進んでいる。

「2、1・・・」
「つーかおっさん、さっきからうるさくない？」

ヒュン、とドゥームが小隊長の正面に転移し、その首をいつものようにへし折った。隊員達が驚いてドゥームに向き直る間には、リビードゥの手が変形した刃物と、オシリアの念動力で全員が絶命していたが。

「なんだ。さすがに一般兵は聖なる加護はないのね。ボクの力も効き放題」
「つまらない・・・」
「弱いわねぇ」

一瞬で50人を血祭りに上げたドゥーム達。その様子を200mほど離れた門の衛兵が遠眼鏡で見ている。

「なんだあれは・・・」

「どうした？　外で何が起こっている？」
「いえ、子どものような連中が来ているのですが・・・信じられませんが、最初に行く手を阻んだ５０人程が一瞬で全滅しました」
「なんだと！？　貸せ！」

物見の兵士が見ていた遠眼鏡で確認する中隊長。たしかに最初に対応した兵士たちはもはやピクリとも動かない。見られていることに気が付いたのか、ドゥームがこちらに笑顔で手を振っている。

「ぐぬぬ・・・なんだあやつは！？」
「わかりません！　ただ内部の聖騎士団に連絡をした方がよくありませんか？」
「バカな、この門が突破されると言うのか？　中の連中なんぞの手を借りんでも、ここで食い止めねば恥だ！」
「ち、中隊長・・・」
「相手はたかが数人だぞ？　しかも子どもが率いている。これを止められねば聖騎士どもに無能呼ばわりされるのがわからんのか！？」
「中隊長！」
「なんだ！？」
「デカイのが、来ます！」
「何！？」

中隊長が見ると１００ｍ程先だろうか。ここからでもはっきり見えるほどの大きさの印を描く魔術が発動しようとしていた。

【闇を好み、死の谷に住まいし風の眷族よ。生ある者を妬みし死の眷族よ。来たりて集え負の連鎖。大地を犯し、風を汚し、肉を腐らせ、我が敵を粉砕せよ】
《死風暴発（デッド・エクスプロージョン）》

ドゥームの前方に大量に集まっていた黒い風が解き放たれる。そして前方に向かって黒い風が突き進み、第二陣としてドゥーム達の行く手を阻もうとしていた騎士たちを飲み込んだまま、第一の門に直撃した。

ドォォォォォン！！

「うわあぁぁぁぁ！」

中隊長が思わず悲鳴を上げたのも無理からぬ、それほどの衝撃だった。中には暴風のあおりを喰らって城壁から吹っ飛ばされた者もいる。おそるおそる中隊長が目を開けると、門があった部分には、既に城壁すらなかった。門ごと城壁まで吹っ飛ばしたのである。巻き添えを食らった第二陣およそ７０名も全滅状態であり、城門付近にいた兵士も含めれば、たった一撃でおよそ１００人の命が失われてしまった。呆然とする中隊長をチラリと見て、ひらひらと手を振り、余裕さえ見せて第一の城門を通って行くドゥーム。だが内心は、

「（あんまデカイ魔術、そう何発も使えねーっての。発動にも時間がかかるし）」

と、いうものだった。だが門を乗り越えた先には、

「ここから先は通さん！」

ドゥームを待ち受けていたのは完全装備の聖騎士２００人と僧兵３００人であった。

続く

アルネリア教会襲撃、その1～外周部～（後書き）

今回から全力バトルで話は進行していきます。かなり筆の進みは早かったのですが、どんなものやら。

次回投稿は、１２／３（金）１６：００です。

アルネリア教会襲撃、その2～緊迫する教会～（前書き）

～あらすじ～

次々とアルネリア教の守りを突破するドゥーム。そのころミリアザールやジェイクは・・・？

アルネリア教会襲撃、その2～緊迫する教会～

＊＊＊

その頃深緑宮では・・・

「む、無理・・・」

「どうした、ジェイク？　まだ5分ほどしか経ってないぞ？」

ラファティに稽古をつけてもらっていたジェイクであったが、その5分でいったい何回打ち据えられたことか。稽古というより、ラファティのストレス解消にしか思えないジェイクだった。

「さあ、立ちなさい。君はこの教会に来るなり『俺はここで一番強くなってやる！』なんて練兵場で叫んだんだからね。言ったからには実行してもらわないと、君は二度と大手を振って表を歩けないよ？」

「言われなくても！」

寝転がっていたジェイクががばっと起き上がり向かってくる。ラファティは彼と打ち合いながらいつも考えることがある。

「（子どもはいい。強くなりたいという単純な理由で戦う気概が湧いてくる。義務で剣を取り、言われるがままに強くなった自分と比べ、なんとこの少年の眩しいことか・・・）」

そしてラファティがジェイクと剣を交え始めて数カ月が経つが、ジェイクの剣は日増しに鋭くなる。最初は子どものチャンバラ程度だったが、騎士剣の型をちゃんと教えるとあっという間にモノにし

ていく。５００回素振りをしておけと言えば１０００回素振りをする。ジェイクはそういう子だった。手加減しているとはいえ、時にラファティでも驚くほど深く踏み込まれるときがある。ジェイクの剣撃が正確に彼の間隙や呼吸の切れ間を突いてくるのだ。これは戦う上で全てに通じる手法であり、得難い資質であった。

「（何年で私と互角に戦うようになるかな・・・現在近衛の主な地位はラザール家の者で全て占めているが、遠からず彼はそこに食い込んでくるだろう）」

ラファティにも既に長男が生まれているが、この子のように育ってほしい者だと思う。もしかすると自分の子どもに指導をするのはジェイクかもしれないと考えると、ラファティは不思議な感慨に包まれた。

「（ふ・・・既に年寄りの発想だな。まだ私も２０だというのに・・・ん？）」

ジェイクがぴたりと剣を止めて外に意識を集中している。

「どうしたジェイク？」

「いや・・・何か外が変だ。ラファティ、気付かない？」

「だから『さん』をつけろと・・・そう言われれば、何か変か？」

二人とも剣を止めた瞬間にバタバタと兵士が走ってくる音が聞こえる。

「申し上げます！」

「何だ！」

「正体不明の敵が敷地内に侵入！　既に犠牲者が出ている模様です」

「それなら第一の門で食い止めろ。敵は何人だ？」
「それが・・・」
「申し上げます！」

慌てて次の兵士が入ってくる。

「敵は既に第一の門を突破！　既に騎士団領域内で聖騎士隊中隊と交戦しておりますが、旗色が悪いです。現在２番大隊ノーヴ様と、３番大隊ブルネル様の隊が出撃準備に入っています。ほどなくして僧兵２０００も準備を終えます！」
「待て、敵はそんなに多いのか！？」
「いえ、それが・・・」
「はっきり言え！」
「確認できた敵は５人！　うち３人は子どもです、大人２人も女のようです！」
「なんだと・・・？」

ここにきてラファティの顔色が初めて変わる。一瞬蒼白になりかけた顔は、だがしかしすぐに引き締め直された。

「わかった。だがこれが陽動とも限らない。さらに５番隊に出撃準備を急がせろ。足並みが揃い次第、私が陣頭指揮を執る。１、４、７は第一種出撃態勢で待機。６番隊は連絡要員として第二種出撃態勢で待機。近衛はこのまま深緑宮にて警戒態勢を取れ。伝令頼む」
「はっ！」
「後は兄上に連絡をつけろ」
「その必要はない」

深緑宮の奥から既に戦闘態勢で姿を現すアルベルト。

「既に御存じでしたか」
「あれだけ外で暴れられれば嫌でも気配でな。ラファティ、お前が気付かないとは少したるんでいるのではないか？」
「・・・申し訳ありません」
「まあいい、外は任せる。私はこのまま深緑宮に残るが、敵をここに踏み込ませるなよ？」
「御意。で、ミリアザール様は？」
「まだお戻りになられぬ。こんな大失態をみせるわけにもいかんがな」
「ごもっともで。では私は出撃しますが、ジェイクをよろしく頼みます」
「ラファティによろしくされなくても、ちゃんとチビ達の面倒見て大人しくしているさ。・・・俺じゃまだ足手まとい以外の何でもないだろうからな」
「そうだな、大人しくしていろ。終わったらまた稽古をつけてやる」
「ああ、頼むからよ・・・ケガすんなよ？」

ジェイクが拳をすっと突き出してくる。

「戦いだからそれはなんとも言えないが・・・無事で戻ってくると約束しよう」

ラファティも拳を出し、ジェイクと拳同士を突き合わせると身をひるがえし出ていく。ジェイクはその後ろ姿を見送ることしかできない自分が歯がゆかった。

＊＊＊

そして深緑宮のさらに奥、ミリアザールの私室。突然その中央に転送魔術の魔法陣が浮かぶ。そして現れるミリアザール。

「ただいまー、っと。なんじゃ、誰もおらんのか？　・・・いや、何か変じゃの」
「おかえりなさいませご主人様」

梔子が音も無く現れる。普段はアルベルトにも気取られぬように、足音や口調も努めて普通の人間と代われぬように振舞う彼女であるが、その様子からしてどうやら緊迫する事情があるようだ。

「何かあったのか？」
「はい、侵入者が」
「どっかのバカが乱痴気騒ぎでもやっておるのか」
「その程度で済めばよいのですが、残念ながら第一の門を突破され、死者が既に２００を超えております」
「負傷者ではなく、死者が？」
「はい、間違いないかと・・・どうした？」

もう一人侍女が入ってくる。彼女も「口無し」のメンバーだが、何か梔子に耳打ちする。

「・・・報告します。第一の門を突破された後、対応に出た聖騎士３００・僧兵２００が突破され、死傷者・負傷者多数。敵は既に第二の門に接近しております」
「おいおい・・・速すぎじゃろう。うちの騎士団の警備はザルか？　それとも敵がそれほどの手練か？」
「後者かと。第一の門は大魔術で一撃で破壊されております。そのため手筈通り中隊で足止めする間に大隊が出撃準備をしておりましたが、その中隊の足止めすらままならない状況で」
「にしてもじゃな・・・ちょっと最近訓練の仕方が甘かったかの？　で、敵は何人じゃ？」

「それが5人です」
「はぁ!?」

ミリアザールは思わず素っ頓狂な声を上げた。さすがの彼女も意外だったようだ。

「5人でうちの教会にケンカを売ってきたのか？　自殺志願以外の何物でもなかろうが」
「ですが現に攻め込まれております」
「ふむ・・・確かに神殿騎士たちの対応マニュアルは対軍隊を想定しているからな。そのような少人数を想定して作っておらん。軍隊という大きい単位を動かすことを考えれば対応できんでも当然か。逆に相手を褒めるべきかの？」

その時再び侍女が駆け込み、梔子に耳打ちする。

「悠長なことを言っている時ではないかもしれません・・・敵が増えました」
「・・・で、どんな奴らだ？」
「数はおよそ１０。どれもこれも・・・魔王級の魔物の様です」
「ほっほ～う。向うから仕掛けて来よったか・・・ワシにケンカを売るとはええ度胸じゃ。最悪そなたにも戦ってもらわんといかんかもしれん、準備しておけよ」
「御意」
「それと、空から見物しとるバカどもに注意せえ。ワシの勘が正しかったら、今攻め込んで来とる奴らよりそっちのほうがはるかに厄介じゃ」
「御意」
「あ、ぺったんこだ！　おかえり～」

その時ミルチェがトコトコと部屋に入ってきた。

「おお、ミルチェか。ただいま帰ったぞ」
「ねえねえ、おみやげは～？」
「済まんが今日は無しじゃ」
「え～、つまんな～い」
「仕事じゃったからの・・・その代わり明日、下町にこっそり焼き菓子を買いに行こうな」
「ほんとー？　わーい、さすがぺったんこ、はなせる～！」
「・・・お目付け役の前で堂々と仕事をさぼる算段をしないでいただけますか？」

栀子がふぅとため息をつくと、その時ジェイクが他の子ども達を連れて入ってきた。

「・・・ここまで来そうか？」
「多分な・・・敵がその気になったら来ることは可能じゃろう。最悪ここが戦場になる」
「わかってる。だから皆を集めてきた」
「相変わらず勘の良い奴じゃ・・・子ども達を任せる。東からの客人と一緒に安全な場所に誘導させるゆえ、そこで隠れておれ」
「ああ」

そして侍女の一人が彼らを誘導して出て行った。入れ違いにアルベルトが入ってくる。

「外の様子は？」
「ラファティが大隊の指揮を執る予定でしたが、彼が外に出る前に敵に門に接近されてしまいました。そのため大隊の出撃は間に合ったものの、2、3番隊がそれぞれ各自の判断で戦っている状況です。

魔物の軍勢と現状は互角。もうじき5番隊が出撃するため、そちらは優位に展開できるかと。第二の門の守備はわが父とラファティが担当しております」

「まったく・・・たかが数体に戦争状態じゃの。一般民衆に対する対応は？」

「既に広報担当の者が市長の元に向かったようです。急遽軍事演習をすることになったということで通すつもりかと」

「わかった、口裏を合わせるように各部署に連絡を。死体は一般人に見られていまいな？」

「幸いにも。ただ壊された門だけはどうしようもないかと思います・・・あの位置では外からも見えてしまうので」

「改修中に見せかけるように手配しろ。一般市民に余計な心配をかけさせるな。１刻以内に全て終わらせるつもりでやれと、全員に伝達しろ」

「御意」

「３バカ大司教はどこにおる？」

「マナディル様はこちらに向かっています。今頃は第二の門にいるかと。ドライド様はただいま教会にて説法の時間であり、普段と変わらぬ様子を見せるため、そのまま説法を行っております。ただ情報は伝わっているため、招集をかければ１０分もなくこちらまでこれるかと。ミーナス様は所在不明です。探しますか？」

「だいたい予想通りじゃが、ミーナスは放っておけ。あれはワシの命令で動かすより勝手にやらせた方がいい働きをする。で、だ。最悪ワシも戦う。また深緑宮内部の兵士は全員１～３区画に集めよ、中庭以降には兵士はいらん。ワシが戦うことになったらその姿を見せるわけにはいかんでな」

「御意。では１の区画の最終砦は私が務めます」

「頼むぞ。そなたが突破されるような敵でないとよいがな」

「努力しましょう」

アルベルトが部屋を出ていく。その後ミリアザールはシスター服を脱ぎ捨て、自分が戦うとき用の服に着替える。ノースリーブのピタリとしたシャツに、少しゆとりがある長いズボン。足首でぴたりと裾が締まっており、格闘戦をやりやすい服装となっている。髪を一つに束ね、結いあげる。髪を止めるときに使うのは、自分の良人の形見の1つである髪飾りである。もちろんそれは誰も知らない。

「ふふ・・・この恰好をするのは大戦期以来か。こんな時であるのに血が滾(たぎ)るとは、ワシもイケナイ子じゃの・・・クク」

ニヤリと不敵に微笑み、自分の執務用の椅子に深く足を組んで腰かけ、腕組みを自分の出番を静かに待つ。そのミリアザールの大胆不敵な態度は、自分の戦う瞬間が楽しみでしょうがないといった印象を感じさせずにはいなかった。

続く

アルネリア教会襲撃、その2～緊迫する教会～（後書き）

さて、色んな人に小僧扱いされたジェイクですが、結構個人的には気に入っています。彼の人気もでるといいな。

次回投稿は、１２／４（土）１７：００です。

アルネリア教会襲撃、その3～悪霊の横行～（前書き）

～あらすじ～

アルネリア教会本部への進行を開始したドゥーム。神殿騎士団本体と、ドゥーム達の戦いが始まる。

アルネリア教会襲撃、その3～悪霊の横行～

「うーん、さすがにめんどくさいかなぁ？」

なんとか聖騎士の中隊を蹴散らしたドゥームであるが、結構消耗していることは否定できない。なにせ聖騎士達には彼の力が効きにくい。それに武器にまで聖別が施されていおり、悪霊達にとっては致命的になりかねないのだ。

「（こちらの攻撃は効きにくくて、向うの攻撃はよく効く。ずるいなぁ・・・思うように殺せないじゃないか！）」

実際に足止めをした聖騎士達は１００も死んではいないだろう。彼らは適当なところで負傷者をまとめて撤退していった。その様子を見ながら、物足りなさと共に、ふと面白いことに気がついたドゥーム。

「なるほど。単純に目標以外を相手にする時は、殺しきるより半殺しにしたほうが能率がいいか。メインディッシュの前の前菜と考えればいいんだな。これは勉強になるね」

「で、どうするの坊や？　そろそろ次が出てきそうだけど、今度はかなり多いわ。ざっと聖騎士だけで１０００をゆうに上回ってるわね」

「そんなに相手にはしていられないな・・・と、いうか飽きた！やっぱり殺すなら女の子をゆっくりじっくり殺す方がいいな」

「あら、そんなに楽しみたかったら帰って私がじっくり相手してアゲルわよ♪」

「えー、リビードゥでは一通り遊んだからなぁ。だって、キミって殺しても気持ちよさそうにするんだもん。やっぱ嫌がってくれない

と燃えないよ！」
「たまには相手してよぉん。だって、貴方ってば全然遠慮なくて最高なんだもォん！」
「今のボクには奥様がいるんですけど。彼女の面前で堂々と浮気を勧めないでくれるかな」
「いやぁん、ドゥームちゃんってばそんなに愛妻家だったかしらん？」
「だって、ボクから結婚してくれって言ったしね」
「私は別に気にしないけど・・・」

オシリアが呟く。だが目線はこちらに向ける様子も無い。

「あら～新妻の許可が出たわよ、だ・ん・な・さ・ま」
「・・・ボクって愛されてないのかな・・・」
「ねぇねぇ、どぅーむ。次が来るよ？」

左手から聖騎士隊の新手が来る。今度は大隊だろうか、かなり数が多い。

「あらら、やっぱり相当訓練されてるね。リビードゥ、ここは任せるよ」
「いくらなんでも私1人じゃきついんだけど？」
「大丈夫、預かってる連中を呼ぶから」

【召喚（サモン）】

ドゥームの周囲に魔法陣が次々と浮かぶ。そこから出てきたのは数々の合成獣（キメラ）。一般に魔王として認知されている魔物である。その形は多様であり、海生生物、獣、植物、鉱物・・・どれともつかない生物たち。最初にアルフィリース達が戦った魔王に似ている個体

もいる。

「これだけあればなんとかなるでしょ？」
「ええ。でも全滅、とはいかないかもね」
「構わないよ、３０分も足止めてくれればいい。その間に終わらせてくる」
「はいはーい♪」

魔王たちと共に騎士団に立ちはだかるリビードゥ。その前に群がる聖騎士達。

「ふふ、沢山来たわね・・・人間達、私をいっぱい逝かせてね♪」

自分が沢山の騎士たちに貫かれる様を想像しながら、恍惚（こうこつ）とした表情で騎士達に向かっていくリビードゥであった。

＊＊＊

「で、この門を突破する方法だけど」

ドゥームが立っているのは第二の門の目の前である。今度は先ほどと異なり、守るのは聖騎士達。しかも完全武装であり、門の頑丈さ、防護結界の強力さも第一の門とは段違いである。先ほどのように魔術で一気に吹き飛ばす、というわけにはいくまい。守る騎士たちも殺気立っていて、必死なのがよくわかる。

「これは無理だね、諦めよう・・・なーんてね。よろしく、インソムニア」
「・・・」

インソムニアが一歩前に出るとその長い髪がざわざわと揺らめき、そして一斉に伸び始めた。その髪が結界の隙間を縫うように侵食していく。

「（やっぱりそうか。これだけ強力な結界を全周性に維持するなんて能率悪いもんね。これはおそらく地中に結界の起点があって、いくつかの結界の集まりなんだ。だからその隙間を人間は通れなくても、髪の毛とかなら通れるんだよね。だいたいインソムニアの髪に、たいていの結界は効かないんだけどさ。ククク・・・）」

その間にもずるずると伸びるインソムニアの髪。そして門に到達すると門の隙間から中に侵入していき、門の閂（かんぬき）に絡みつこうとする。

「あの髪を切れ！」
「本体を矢で貫くんだ」
「聖属性の攻撃魔術を使え」

インソムニアの髪を騎士達が切ろうとするが、聖別を施した鋼の剣が全く通用しない。切れたとしても次々と髪が伸びてきて切りがない。また本体に射かけた矢は全てオシリアが叩き落とし、魔術もドゥームが全て防いでいる。そうこうするうちにインソムニアの髪が閂をはずし、門を開けてしまった。

「御開帳、っと」

そしてドゥームが中に入ろうとすると、大量の聖騎士や僧兵たちに行く手を阻まれた。

「ククク、ボクとやろうってのか？　お前たちみたいな貧弱な連中が？」

ドゥームは挑発してみるが、無言で騎士たちは距離を詰めてくる。

「挑発にも乗らないか・・・なら仕方がない！」

ドゥームが一度左目を閉じ、すぐにぎょろりと眼球を見開く。すると彼の左目は血を垂らしたような深紅に染まっており、その目を見た騎士たちは悲鳴をあげ、崩れ落ちたり、仲間に襲いかかる者までいた。

「ぎゃあっ！」
「うわあああ！」
「ひいいいいい」
「やめろお前達！　何をする？」
「俺達は味方だぞ？」

ドゥームが使ったのは発狂の魔眼。効果は一定ではなく、すぐに発狂する者、気を失う者、効果が無い者など様々であるが、何割かは発狂してくれるので高い確率で相手をパニックに陥れられる。戦闘において非常に便利ではあるが、いつでも使えるわけではなく使用回数・条件に制限があるのは難点ではあるが。

「よし、今のうちに」
「待て！」

混乱した兵たちを押しのけるようにして現れたのは、ラファティとその父であるモルダードである。

続く

アルネリア教会襲撃、その3～悪霊の横行～（後書き）

敵がチート、と言ってもよいのでしょうか？　次回もバトル全開です。

次回投稿は１２／５（日）１０：００です。

アルネリア教会襲撃、その４～深緑宮の護衛～（前書き）

～あらすじ～

次々とアルネリア教の守備網を突破するドゥーム達。遂に神殿騎士団隊長格である、ラザール家が目の前に現れる。

アルネリア教会襲撃、その4～深緑宮の護衛～

「うわぁ、強そうなのがきたぁ」
「ここから先に入れると思うなよ、魔物ども」
「我らが命に代えてもここは通さん」
「暑っ苦しいな」

ドゥームが悪態をつきながらも一触即発の状態になろうとしたその瞬間、突然ドゥーム達の周囲を光の結界が包む。その圧力にたまらず膝をつくドゥーム達。

「っとお。なんだこれ？」
「・・・重い」
「即席とはいえ並の悪霊なら一瞬で消しされるのだが、大したものだ」

騎士達が自然と道を開け、そこから出てきたのは・・・

「なんだハゲか」
「誰がハゲか！　これは剃っているのだ！」
「ハゲに限ってそう言うんだよね。おおかた部分的にハゲて、それを隠すために全面剃っているとか言いふらすパターンでしょ、どうせ。全員知ってるっつの」
「ぬぐぐ・・・」

指摘された僧侶は、実は内心図星なのだが、まさか認めるわけにもいかない。しかもドゥームの指摘通り、その事を周囲は全員知っているわけだが、本人は気付かれていないと思っていた。

「で、誰なわけ？」
「ワシはマナディルという。このアルネリア教の三大司教の１人だ。ここから先には一歩も通さんぞ、小僧！」
「ハゲの上に暑苦しいか、最悪だ。うわっ！？」

突然さらに結界の圧力が増した。

「なるほど、言うだけのことはあるおっさんだね。ボクでもまともに動きづらいほどの圧力とは」
「その減らず口ごと、このまま消滅させてくれようぞ」
「アハハ、そう簡単にはいかないよ。マンイーター！」
「はーい」

ドゥームの声と共にマンイーターが変形を始める。その姿はアルフィリース達が戦った時とはかなり異なっており、まるでタコのような足の上に、大きな食虫植物が乗っかったような形をしている。体躯もかなり大きく、１０ｍはあるだろうか。マナディルが張った結界も実体を持つマンイーターには効き目が薄く、あっさりと破られた。

「なんと！？」
「ふー、危ない危ない。じゃあここはマンイーターとインソムニアに任せまして、ボク達は先に行こうか、オシリア」
「私、あのおじさんと遊びたい・・・」

オシリアがマナディルを指さす。

「えー、キミってああいうのが好み？」
「・・・いいかしら？」
「しょうがない、自由にやっていいって言ったからね。さっさと片

付けてボクの後を追って来てくれよ、奥様」
「・・・」
だがそんなドゥームの言葉に返事もせず、さっさとマナディルの方に向かうオシリア。
「新婚なのに、もう夫婦仲が冷えてる！？」
ドゥームが離婚の危機を心配しながら、それでも奥に進もうとする。それを引きとめようとマナディル、モルダード、ラファティだが、行く手をインソムニアの髪とオシリアが遮った。
「・・・貴方達の、相手は、こっち」
「おじさん・・・私と遊んで？」
「く、いかん！」
「いえ、中には兄上がいます。大司教、私達はこちらに全力を注ぎましょう！」
「・・・止むをえんか」
そして3体の悪霊に向かって構え直す3人であった。
＊＊＊
門をくぐればすぐに深緑宮というわけではない。１００m程の回廊を歩き、そこから本格的な宮殿となる。渡り廊下の左右は池となっており、三段階に仕切られている。外の池は聖水で満たしており、真ん中の池は回復用の霊水、中の池は観賞用に魚や植物を放っている。そこを悠然と歩くドゥーム。
「（おかしいな、追撃してこない？　ということは中に余程信頼で

きる連中がいるのか。で、外の池は聖水で満たしてあるのね。普通に考えれば美しいんだろうけど、闇魔術士のボクにとっては脅威以外の何物でのないね）」

そのような状況でさすがのドゥームにも油断はない。周囲を警戒しながら歩いている。

「（なるほど、これは流石のボクでも油断ができないね。魔力も大分使ってるし・・・あれ？）」

何かが池ではねた。なんだろうと訝しがるドゥームが池を見ると、津波がこちらに・・・

「・・・津波！？」

流れなど無いはずの池から、高さ３ｍ程度の津波が押し寄せてくる。もちろん聖水であるため、くらえばたとえドゥームでもそれなりのダメージは受けるだろう。

「ちょ・・・ちょっと、ちょっとちょっと！？」

慌てて全力で走るドゥーム。そして滑り込みでなんとか津波をかわし、水浸しになった回廊を振り返る。

「一体なんだったんだ・・・何？」

後ろから水の矢が飛んできた。反射的に魔術障壁でガードしたドゥームだが、一本が障壁を貫いて固定されている。かなり強力な魔術だったのだろう。ふと目線を深緑宮側に戻すと、水の球体が宙に浮いており、その上に乗っているのは下半身が魚、上半身が人間の

人魚（マーメイド）。青く透き通るような髪をしており、人間で言うと１０代後半くらいか。そしてその傍には女エルフの剣士が控えている。長身に長い耳、ややきつめの目、金髪に金の目をした典型的なエルフの外見だ。

「なんでまたマーメイドとエルフがこんなところに？」
「私達はこの深緑宮の守護者ってところかしらね」
「ここから先は貴様のような者が通ってよいところではない。下がれ、下郎」
「はっ、下郎と来たか！　生意気なエルフだ。女はしとやかにするもんだぜ、生娘」
「何ィ！？」
「落ち着きなさいロクサーヌちゃん」

マーメイドが髪を片手でかき上げながらエルフをたしなめる。

「『ちゃん』をつけるなといっているだろう、ベリアーチェ！」
「・・・まだマーメイドの方が話ができそうだ。ベリアーチェでいいのかな？」
「年下の初対面にいきなり呼び捨てにされる覚えはなくてよ、坊や」
「これは失礼。ボクはドゥーム、以後お見知りおきを、レディ」
「これはご丁寧にどうも。私はベリアーチェ、こちらのエルフがロクサーヌ。でも以後見知りおく必要はないわ。貴方にはここで死んでいただきます」
「それは困る、せっかく美人と知り合えたのに。ボクと遊んでくれない？」
「イヤよ、貴方みたいな明らかにまっとうじゃない人間と遊んだら、何されるかわかったものじゃないもの」
「いやいや、大したことはしないよ？　ちょーっと生きたまま解剖してみるだけだから。ちゃんとあっさり死なないように工夫するか

ら、頑張ったら1カ月は生きられるよ？」
「・・・やっぱり貴方、正気じゃないわ」
「下郎は訂正だ。貴様はゲスだ！」
「いやーもう照れるなぁ、そんなに褒めないでよ？」

笑うドゥームに、予告なくベリアーチェの魔術による水の矢が飛んでくる。マーメイドは水の魔術に長けた種族なので、簡単な魔術ならば無詠唱で行使できる。その簡単な魔術が相当な威力のなのだが。一方ドゥームもひらひらとその魔術をかわす。だがその隙をついて不可避の一撃をロクサーヌが放つ。

続く

アルネリア教会襲撃、その４～深緑宮の護衛～（後書き）

いいとこで話を切っています。引きを重視・・・ダメ？

次回投稿は本日１２／５（日）１８：００です。日曜なんで、２話いっときましょう。いつまでやれるかわかりませんが・・・

アルネリア教会襲撃、その5～ドゥーム進行～（前書き）

～あらすじ～

ついに深緑宮に進行してきたドゥーム。目の前に立ちはだかるのは、深緑宮の門番、ベリアーチェとロクサーヌだったが・・・？

アルネリア教会襲撃、その5～ドゥーム進行～

「何！？」
「惜しい♪」

黒い霧のような姿に変化しロクサーヌの剣をかわすと、直後、背後に現身するドゥーム。

「心身変換（メタモルフォーゼ）の魔術だと！？」

心身変換の魔術は昔は比較的一般に普及していた無属性系統の魔術だが、現在ではまず使用者がいない。主な使用方法としては羽を形成して高い所に向かうなどするが、変形させた部分にわずかでも欠損が出ると、変形させた部分が上手く元に戻らなくなる。そのため危険性が非常に高いとされ、一回限りの使い捨ての突撃兵士などに様々な変形を施した上で昔は使用されたが、現在ではその残虐性から国際的に魔術教会が使用を禁止した。

なお非生命を疑似生命に変化させる、あるいはその逆の魔術もあるが、かなりの高等魔術であり、使用魔力も相当量を消費するため現在は使用する人間がほとんどいない。それよりはミリアザールやテトラスティンが使う『使い魔』の魔術の方がよほどコストパフォーマンスがよいのだ。

それをたやすく使うドゥームの能力に、ロクサーヌは驚きを隠せないと同時に恐怖を覚えた。

「正確にはメタモルフォーゼじゃないんだけど・・・まあいいや、キミはおしまい！」

ドゥームがロクサーヌに向けて闇魔術を行使しようとしたその刹

那――

「いえ、おしまいなのは貴方です」

２０本をゆうに超える水の矢がドゥームを取り囲んでおり、ベリアーチェが「放て！」と叫ぶと一斉にドゥーム目がけて飛んでいく。だが完璧なはずのそのタイミングはまたしても不発に終わる。

「だからボクには当たらないんだって♪」

「それはどうでしょうか？」

靄になってかわすドゥームだが、かわしたはずの矢が転移先に正確に飛んできた。

「自動追尾（ホーミング）？」

「メタモルフォーゼも連続使用はできないでしょう。かわして御覧なさい！」

今度こそ避けられない。そうベリアーチェとロクサーヌが確信したが、またしてもその期待は裏切られた。

「な・・・」

「矢が届かない？」

「だから当たらないんだって、その程度じゃ」

空中で矢は静止し、ふとかき消えた。得心のいかないこの状況に焦りを覚える２人。

「このままやってもボクが勝つけど・・・時間もないし仕方ない。特別にボクの本気を見せてあげよう」

その言葉と共に、ドゥームの周りに黒い靄（もや）のようなモノが浮かんでくる。最初は何なのかわからなかったベリアーチェとロクサーヌだったが、それらの形がはっきりしてくるに従い、顔が真っ青になっていく。

「な、なんだって・・・」

「なんておぞましい・・・」

オオオオオオォォォォォォォ・・・

ドゥームの周りに現れたのは無念のうめき声を上げる悪霊の集団。それも１０や２０ではきかない数だ。何百はいるだろう。先ほどの攻撃はこの悪霊達が防いだのだ。

「アハハ、この子たちかわいいでしょ？　そうだねぇ、ボクに職業とかをつけるとしたら悪霊使い（レイスマスター）ってところかな？　この子たちは便利だよ。頼みもしないのに自動的にボクを守るから不意打ちは通用しないし、もちろん意識して使うこともできる。だから何の魔力もなしにこの悪霊を絡みつかせることで人をねじ切ったり、場合によっては悪霊を憑依させることもできる。発狂の魔眼はこれを不特定多数に同時に使ってるだけだよ。ちなみに今回連れてきているこの周りにいる悪霊たちは、全部ボクが殺した連中だ。ボクに恨みを抱いてるはずなのにボクを守るなんて、滑稽でしょ？」

「最悪の発想だわ・・・」

「ゲス野郎すら生ぬるいな。もうこいつを表現する言葉を、私はもっていない」

「心配しなくてもキミ達もボクのコレクションに加えてあげるよ。ボクと一緒に楽しもうぜ♪」

その瞬間ドゥームの周りの悪霊達がざわざわと騒ぎだす。

「いやぁ、ここはどこ・・・」
「おかあさーん、あついよぉ」
「コロスコロスコロス」
「タスケ、テ・・・」
「あなたー！　逃げてぇー！！」

ベリアーチェとロクサーヌがカタカタと震えだす。戦う者としてそれなり以上に経験を積んだ2人だが、目の前にいる存在は自分たちにとって荷が勝ちすぎる相手だとわかってしまった。なにせ負けた場合ただ死ぬだけではなく、永遠にこの少年に囚われたまま魂の髄までしゃぶりつくされるのだ。まともな死に方も、名誉の戦死もあったものではない。

「さぁ・・・どこからいこうか。手？　足？　あ、でもマーメイドに足は無いから、そのきれいな胸からいっちゃう？」
「ひっ」
「バケモノめ！」
「もう、だから褒めすぎだってばぁ！」

その瞬間悪霊達が渦となってベリアーチェとロクサーヌに襲いかかる。二人はドゥームという存在に飲まれたのか、かわすこともせず、丸まったようにしてその直撃をうけてしまった。

「きゃあああ！」
「うわぁ！」

回廊を吹っ飛ばされ、深緑宮まで転がり回る2人。第1区画と呼ばれる入口部の部屋の壁に突き当たってようやく止まった。ベリア

ーチェはかろうじて動けるが、ロクサーヌがピクリともしない。

「ろ、ロクサーヌ・・・無事ですか・・・」

「・・・」

ロクサーヌが口から血を流して倒れているが、返事がない。そこかしこに他の近衛の気配はあるが、ここでの最優先事項は最高教主の護衛。その前では各兵士の命など、米粒程度の価値しかない。それを徹底されている兵士たちは内心がどうあれ、この2人がここでなぶり殺しにされようが命令があるまで決して動かない。ベリアーチェやロクサーヌも亜人でありながらこの深緑宮の近衛を務める身。その事情はわきまえている。助かりたければ自分達だけで味方のところまで撤退するか、援護の命令があるまで粘るか、どうにかするしかない。それにドゥームを倒すことだけを考えれば、彼が自分達をいたぶることに夢中になったところを四方八方から攻撃した方が確率的には高いだろう。

だがドゥームは深緑宮の入口までくると足を止め、無慈悲にも遠距離から2人を嬲り殺しにするつもりであった。

「どうしました・・・怖じ気づきましたか?」

「その手には乗らないよ。こんなトラップだらけの場所にうかうかと乗り込むもんか。ここからキミ達を適度に嬲り殺しにした後、左右に潜んでいる兵士を片づけるさ。余裕があったらキミ達を連れて帰って解剖してあげるよ。エルフはこの前シーカーで試したけど、マーメイドはまだでね。キミ達は自分の意志で下半身を人間にすることもできるそうだけど、それをどうやって変えるのか気になるなぁ・・・」

「語るな!　汚らわしい!」

「アハハ、嫌われちゃった。でも処女のマーメイドなんてボクとしては楽しみなんだけどね!」

「バカにしてるの!?　ちゃんと私には夫がいます！　・・・あ・・・」

言ってからしまったと思ったベリアーチェ。ドゥームの顔が楽しげに、そして醜く歪む。

「へぇ・・・そういえば人妻は試したことなかったな。それは楽しみが2倍に増えたよ」

「寄るな！　貴様に体を汚されるくらいなら舌を噛んで死んでやる！」

「まあいいけどさ、キミが舌を噛んで死ぬより早くボクがそれを止める、ないしはキミを殺す方が速い。ちなみに死ぬとボクの悪霊に加わるんだけど、ボクの仲間には死体保存と反魂術の得意な奴がいてね。反魂術の効果は期限付きだけどボクが魂をとらえている限り何回でも使用できるから、それらのコンボがあるとどういうことになるのかわかるでしょ？　ネクロフィリアが平気な奴らなんて何人でもいるし」

ベアトリーチェの顔から、色が引いて行く。なんとおぞましい発想を、目の前の存在はするのか。基本的に善良なベアトリーチェには信じられなかった。

「な、なんておぞましいことを」

「だからそういうのはボクを喜ばすだけなんだって。キミ、マーメイドのくせにそのかっとしやすい性格とかどうにかした方がいいんじゃない？」

「余計なお世話よ！」

「だからそれだって言ってるのに人の話を聞かない子だな。まあいいさ、キミの旦那の首を横に置いてやれば少しは大人しく・・・何!?」

上空から影が飛んでくる。迎え撃つつもりだったドゥームだが、本能が危険を察知し、危険を承知で中に飛びのいた。だが飛んできた影は一切の容赦なく間を詰めてくる。影から振りかざされる剣をドゥームは思いっきり後方に飛んでかわし、一つ内側の部屋の中ほどにまで入り込んでしまった。その急襲に、ドゥームは足元に転がっていたベリアーチェとロクサーヌを人質にする暇すらなかった。

「ボクに反撃の暇も与えずに、一気に３０m程後退させるなんてね。やるじゃん」

だがそんなドゥームの賛辞とも取れる言葉は聞いていないかのように、ベリアーチェとロクサーヌの２人とドゥームの間に身を置き、そこで初めて２人に声をかける影。

「シスター、２人を診てやってくれ。無事か、ベリアーチェ、ロクサーヌ」

「アルベルト様！　私は無事ですが、ロクサーヌが重症です」

影の正体はアルベルト。２人を助けつつ、ドゥームを中へ誘導する隙を狙っていたのだ。足場の少ない回廊でやり合うより、こちらに有利なトラップの多い深緑宮内でやり合う方が地の利があると踏んだのだろう。

「よくやってくれた、後は私が引き受けよう。下がってゆっくり休むといい」

「いえ、私も・・・」

「キミに何かあると私が弟に怒られてしまうよ。まだジャスティンも生まれて３カ月だ、無理をするんじゃない」

「はい、義兄様。ご武運を」

「ああ。他の兵も即時撤退！　ここは私が引き受ける。命令があるまで深緑宮の回廊で待機！」
「「「はっ！」」」

アルベルトの号令一科、訓練された兵たちは2人を救出し、撤退していく。それが完了するまで大人しく様子を見守るドゥーム。残されたのはアルベルトとドゥームの2人だけ。

「いいのかい？　他の兵士を撤退させちゃって」
「構わない。むしろ我々の戦いには邪魔だろう」
「ふーん。ところで彼女は君の義理の妹にあたるんだね」
「そうだ」
「ならキミと旦那と・・・生まれたばかりの子どもの死体を目の前に並べられたら、彼女はどんな顔をするかなぁ？」

ドゥームが残酷な笑みを浮かべる。だがアルベルトは一向に動じない。

「それは永遠に謎のままだ」
「なんでさ？」
「貴様は今ここで私に斬られて死ぬ・・・」
「言うじゃないか。だが調子に乗るなよ、騎士風情が！」
「貴様こそな！」

深緑宮内でアルベルトとドゥームの激闘が、今まさに始まろうとしていた。

続く

アルネリア教会襲撃、その5～ドゥーム進行～（後書き）

まだまだバトルで参ります。

次回投稿は１２／６（月）１２：００です。

さて、話は変わるのですが、年末・年始の投稿はどうしましょうか？　正月からでも読みたい人がいれば投稿しますし、実家に帰る方なんかはネット環境が無い方も多いのでは？　と思います。かくいう私もありません。忙しい方も多いかもしれませんしね。

幸い「なろう」では予約投稿もできるので、もし希望が多ければ正月も投稿しますし、なければ１２／３１～１／３は投稿をお休みしてもいいかなと思っています。

意見がある方は感想にでも書いていただければと思います。多い意見を反映させようかと思っているので、遠慮なくどうぞ。

アルネリア教会襲撃、その6～一騎打ち～（前書き）

～あらすじ～

深緑宮内で対峙するドゥームとアルベルト。激闘が、今。

アルネリア教会襲撃、その6～一騎打ち～

教会内の最深部にある深緑宮で対峙するアルベルトとドゥーム。ドゥームの周りには悪霊が渦巻き、それが大蛇のようなうねりを見せる。もし蛇であれば、１５ｍはあるであろう大蛇になるが、まだ大蛇の方がよっぽどマシだ。どうお世辞を言ったとしても、見る物に恐怖や絶望を抱かせるだけの何人もの苦悶の表情が浮かぶ様子は取り繕えそうもない。だがアルベルトは動じない。元々動じない性格ではあるが、先だっての魔王戦が彼をさらに精神的に成長させていた。

じりじりと緊張した面持ちで距離を詰めようとするアルベルトと、距離を離したがるドゥーム。と、ドゥームがニヤリと笑い両手を宙にかざすと、蛇のような形を取っていた悪霊の塊がふいに渦を描き壁のように変形する。

「潰れやがれ！　アハハハハ！」

そのまま両手を下ろすと、巨大な壁に変形した悪霊がアルベルト目がけて襲いかかる。これなら逃げ場はないと踏んだドゥームだったが、アルベルトは逆に踏みこらえて受け止めようとする。

「無理だっての！　サイクロプスもへしゃげる圧力だぜ！？」

バァン！

ドゥームの目論見通り直撃するが、音がどうもおかしい。もっと何かが潰れるような音がしなければと思うドゥームだったが、何か壁にぶつかったような音がした。理由はすぐにわかったが。

「魔術で光の壁を作ったか・・・」

アルベルトは魔術で光属性の防御壁を作り、悪霊の渦を防いでいた。

「（この至近距離であの詠唱速度、あの強度・・・槍状にして悪霊の密度をさらに上げるか、もっと至近距離から叩きこまざるをえないか・・・？）」

「意識が逸れているぞ」

「！？」

１０ｍ以上は離れていたはずだが、３歩で踏み込んできた。聖騎士としてのほぼフル装備、およそ１５ｋｇ前後の重量、にもかかわらずである。

「（速い！）」

すんでの所でかわすドゥーム。だが反撃の暇がないほどアルベルトの連撃が止まらない。

「（くそ、手をかざす暇もない！　しかもご丁寧に剣に聖属性を付加してやがる。さしもの俺もダメージくらうぞアレは！）」

ドゥームが操る悪霊は防御こそ自動に行うが、攻撃時は彼が手を動かし指示する必要がある。だがアルベルトの猛攻はドゥームが手を彼に向けて動かすことすら許さなかった。

「（だがこれほどの猛攻、無酸素運動でなければ続かないだろう。３０秒ほどで息が上がる。その時に至近距離から叩きこんでやる！）」

ドゥームの考えは実に正論だった。そう考え、避けることに専念するドゥーム。だが何かおかしいことに気がつくのにさして時間はかからなかった。

「（・・・？　何だ？）」

徐々にかわし続けるのが難しくなってくる。

「（まさか・・・剣速がどんどん増している！？）」

避けるドゥームの顔色が必死なものに変貌していく。だがアルベルトの猛攻は止まるどころかさらに激しさを増していく。

「（一体こいつはどうなってるんだ！？　とっくに３０秒は経ってるだろうが！）」

ドゥームは知らない。ラザールの名を継ぐことの重さを、その意味を。生まれた時から歴代最強であれと望まれ、そうなるべく覚悟を決めた人間の執念を。アルベルトの鍛錬は他人が見れば、完全に常軌を逸していると言われるほど厳しいものだった。

彼の弟ラファティは鍛錬風景を特に隠さないが、それでも常人が知れば「あいつは異常だ」と揶揄されたのである。またラファティは厳しい訓練に対して何一つ文句を言わないことで我慢強い男として有名だったが、彼にしてみれば幼少のころから兄を見て育ったので、自分や神殿騎士団の訓練など子どものままごとにしか見えなかったのだ。

ともあれドゥームは完全に計算が狂ったことにより、ちょっとした恐慌状態だった。なおアルベルトは無酸素状態で実に3分は攻め続けることが可能だった。

「（やばいやばい！　何か遮蔽物を・・・あれだ！）」

ドゥームは思わず柱に身を隠そうとするが無駄なこと。

ゴガッ！

アルベルトは柱など無いかの如く斬撃を放つ。柱ごときで怯む彼ではない。先の魔王戦で大木ごと魔物を切り伏せていたのをドゥームは完全に忘れていた。そしてアルベルトの剣が届くかと思われた瞬間――

「クソッ、無茶苦茶な奴だ！」

黒い靄に姿を変え、少し距離を取ることに成功するドゥーム。

「だが、今度はこっちのば・・・」

「逃さん！」

「うおお！？」

アルベルトが地面を強く蹴り一瞬で間を詰める。一瞬できた隙を生かせなかったドゥーム。慌てて壁沿いを走って逃げるが、アルベルトはお構いなしだ。

ゴガガガガガ・・・

「（壁ごとぶった斬りながら追ってきやがる！？）」

そうすることで剣に負荷がかかり、剣を抜いたときに剣先が加速することをアルベルトは知っている。壁を使った居合いとでもいうの

だろうか。後ろに迫る様子にドゥームが気を取られ、ふと正面を見るとそこは行き止まりだった。アルベルトは無茶苦茶に攻め立てるふりをして、きちんと袋小路に誘導していたのだ。

「やりやがったなこの野郎！」

「ムン！」

振り返ったドゥームを唐竹割りにしようと、大上段から剣を振り下ろすアルベルト。

「なめんな！」

ドゥームも一か八か、アルベルトの大剣を受けとめるため自分が今行使できる悪霊を全て守備に回す。

「止まれえぇぇぇぇ！」

「！！」

アルベルトの渾身の一撃が振り下ろされる！　だが・・・

「と、止まった・・・」

ドゥームの数ｃｍ上でアルベルトの剣は止まっていた。彼が一度に行使できる悪霊１０００体分の防御壁である。これを突破されては立つ瀬がない。さしものドゥームも思わずほっとする。そしてほくそ笑むと

「どうだこの・・・」

「ぬあああああ！」

アルベルトがさらに剣に力を込め始めると徐々に剣が沈み・・・

「ちょ、ちょっと待て――」

「オオオォオオ!!」

止めていたはずの剣がそのまま悪霊ごとドゥームを一刀両断した!

「そ、そんな・・・」

真っ二つになり、大量に血を噴き出しながらそのまま地面に倒れるドゥーム。その様を何の感慨もなく見下ろすアルベルト。やがてドゥームの目からは完全に光が消えた・・・。

続く

アルネリア教会襲撃、その６～一騎打ち～（後書き）

本当はもう少し長く投稿したかったのですが、あまりにも切れ目が悪いので今回は少し短めです。申し訳ない。

次回投稿は１２／７（火）１２：００です。

アルネリア教会襲撃、その7～アルネリアの猛者達～（前書き）

～あらすじ～

深緑宮内での戦いはアルベルトが勝利する。その一方、外での戦闘の行方は・・・

アルネリア教会襲撃、その7～アルネリアの猛者達～

＊＊＊

一方こちらは深緑宮の外である。

「なかなかやるわね、人間達・・・もう結構逝かせてもらったんだけど？」

一番外周で足止めをしていたリビードゥであるが、既に他の魔王達は倒されている。神殿騎士団は見事な連携を見せ、最初こそ苦戦したもののあっという間に魔王達を倒していった。

アルネリアの神殿騎士団は元々守備に優れた騎士団である。彼らが全力で守備に回ったらその牙城を崩すのは容易に出来ることでない。歴史上神殿騎士団は戦場において援護を主な目的として派遣されてきたため、その性質・得意な戦法は守備寄りに特化していた。何隊かの小隊でかく乱し、相手の意識が分散したところへ攻撃に特化したメンバーを送り込む。これが彼らの得意戦法であった。

その突撃を行う能力を持つ者が隊長格になって行くわけだが、特に各大隊の中隊長以上の活躍は目覚ましく、一撃で確実に深手を負わせていっていた。それを分散して行い、2、4、5番隊の面々は大きな痛手も無く魔王を上手く仕留めていった。

その様子を見ていたのは上空の2人、ライフレスとブラディマリア。この2人はドゥームがアルネリアに潜入した時からずっと様子を窺っている。その2人があーでもない、こーでもないと勝手な感想を述べながら高みの見物をしていた。

「魔王との戦闘経験があるわけでもなく、平和な世の中の軍隊にしてはよく鍛えられてるおるの」

「ああ。だけど本当に強いのは1~7の各大隊と深緑宮勤めの連中だけ。およそ8000ってところか。あとの一般兵は雑魚だね」
「あのようなレベルの兵士が一般兵ならば、魔王が何体いても足りぬじゃろうよ。この神殿騎士団を全滅させるのに必要な魔王は、そなたの判断ではおよそ何体じゃ？」
「そんなの指揮官や戦闘条件にもよるし、一概にこうとは言えないよ」
「ではそなたが指揮官で、何の障害物もない平地ならばどうじゃ？」
「・・・500もいれば確実にやれる」
「では妾達のお師匠が目標としてる戦力はかなり正確なのじゃろうな。ここを潰せば東など瓦解しよう？」
「連携は取れなくなるね。だけど多分ここを潰すのはだいぶ先だよ？」
「なぜに？」
「ここを潰してもミリアザールが存命なら意味がない。もし教会を潰せばあの女は地下に潜って各地のシスターや神殿騎士を引っ掻きあつめ、また各国と密かに連絡を取り合うようにするだろう。あの女には身動きのとりづらいアルネリアの大教主でいてもらった方がいい」
「なるほどの・・・まどろっこしいと言わねばならんが。妾に任せればちょちょいのちょい、で終わらせるのじゃが」
「その代わり大陸の東は焼け野原だろうよ。繰り返し言っておくけど、僕達の目的は人間の全滅じゃない。だから君やドラグレオの運用は非常に難しいのさ」
「わかっておる。こういうときにはヒドゥンなどの方が使い勝手がよかろう。妾はゆるりと出番を待つとするよ」
「順調にいけばそんなに遠くないかもしれないけどね・・・お、下をみなよ。リビードゥが撤退しようとしているぜ」
「おお、思ったよりもたなかったの」

２人が下に目をやると、リビードゥが他のメンバーに合流しようとしている。だが彼女が目にしたものは・・・

「なんですって・・・」

リビードゥは思わず立ちつくした。彼女が見たのは既に倒されたマンイーター、インソムニアであった。マンイーターは相当何度も大剣を打ちこまれたのだろう。体がほとんどバラバラであり、その傍らにはモルダードが立っている。マンイーターが最後の抵抗を試みるが、モルダードは何の慈悲もなくその剣をマンイーターの頭に突き立てる。

インソムニアも髪を根こそぎ切り取られ、胴体を両肩から斜めに切りおろされていた。やったのはラファティ。息一つ切らしておらず、あたかも当然であるようにインソムニアが消えゆく様を見下ろしている。

そしてオシリアもマナディルの神聖魔法に完全に捕縛されており、消滅は時間の問題のようだ。

「く・・・ならば私だけでも」

「そうはいかん」

はっと声のした方をリビードゥが振り向きかけるが、声の主を確かめる暇もなく彼女は神聖魔法に焼き尽くされた

「ギャアアアア」

「雑魚めが」

リビードゥを焼き尽くし悠然と姿を現した僧侶に騎士達が跪く。

「これはドライド大司教！」

「教会で説法の時間だったのでは？」
「戦闘中により礼は略してよし！　説法などやっとる場合ではあるまいが！　マナディル！」
「なんじゃ」
「いつまでそのような輩にてこずっているか！　さっさと片付けろ」
「人ごとじゃと思って・・・この娘こう見えてかなりしぶとい・・・ん？」
「皆やられちゃった・・・？」

先ほどまでマナディルの神聖魔法で身動き一つ取れなかったオシリアが、キョロキョロと周囲を見渡し始める。

「なんじゃと・・・？」
「この遊び方・・・飽きた」

そして何事も無かったかのように神聖魔術から歩いて出ていこうとする。

「行かせん！」

だがマナディルがさらに魔力を強めるとさすがに効いたのか、動きが鈍る。だがオシリアはマナディルの方を見るとニヤリと口の端を歪め、手をマナディルの方にかざした。

「ぐ！？」
「マナディル様、御免！」

ラファティが寸でのところでマナディルを突き飛ばす。だがラファティはオシリアの放った波動の余波を受け、吹っ飛ばされた。

「ぐお！」
「ラファティ様！」

騎士やシスター達が駆け寄っていく。残った者達は全員でオシリアを取り囲む。

「マナディルよ、これは・・・」
「うむ、元は高位の霊能力者じゃろうな・・・ワシらの魔術が大して効かぬ。それに念動力の使い手じゃ」
「となると・・・」
「肉弾戦じゃな。うむ、久々にやりがいがある」

互いに顔を見合わせニヤッとする2人。この2人は元来魔術を連発するような僧侶タイプではない。若かりし頃僧兵の中で1、2を争う武闘派として馴らし、神殿騎士団の隊長格と互角に渡り合った豪の者である。

「やりすぎてぎっくり腰になるなよ、マナディル」
「貴様こそ五十肩が悪化するんじゃないのか？　昔と違って若くないのじゃぞ？」
「ぬかせ！」
「おじさん達・・・遊んでくれるの？」

オシリアが天を指さすと、周囲に転がる剣・槍・矢といった武具が空中に浮かび始める。そしてオシリアが手を握りこんだ瞬間、それらの武器が四方に凄い勢いで弾丸のように発射された！

異様感じとった周囲の兵士たちは盾や自分の武器でガードするが、一瞬で負傷者を多数出してしまう。だがマナディルとドライドは弾丸のような武器を何するものぞと、オシリアに向かって突っ込んで行く。オシリアが念動力を放つがマナディルが魔術で防御し、ドラ

イドは地面に刺さった槍を抜いて聖別を施し、そのままオシリアに斬りかかる。

だがオシリアも器用に避け念動力で反撃するが、それこそがドライドの狙いだった。

「かかったな！」

念動力を防御魔術の応用で反射し、逆にオシリアのバランスを崩す。そしてドライドの陰にいたマナディィルがオシリアの鳩尾に全力の拳を叩きこむ。

「ぬぅん！」

もちろん拳にはありたけの聖の力を込めている。流石にこれを喰らってオシリアも吹っ飛び、はるか後方の壁にぶつかった。

続く

アルネリア教会襲撃、その7～アルネリアの猛者達～（後書き）

なんだか今回も中途な終わりだ・・・申し訳ない。

次回投稿は１２／８（水）１２：００です。

アルネリア教会襲撃、その8～子ども達～（前書き）

～あらすじ～

外の戦闘もあらかた決着がつくなか、オシリアが取った行動とは？

アルネリア教会襲撃、その8～子ども達～

「やったか？」
「いや・・・当たる直前念動力でガードされた。あやうく拳を潰される所じゃったわい。ほぼ自分で後ろに飛んでいるから、大したダメージはあるまい」
「ぬう、しつこいな」

だが実際にオシリアはすぐさまむくりと起き上がり、何事も無かったのように立ちつくす。そしてふと深緑宮の方に目を移すと、そちらに向かって歩き出した。

「行かせるか！」
「・・・邪魔」

オシリアが地面をダン！　と踏みならすと、地面が渦を巻き、その負荷に耐えられなくなった地面がベキベキと陥没・隆起を始めた。

「おおお！？」
「念動力で地面を捻じ曲げておるのか？」

とんでもない力だとマナディルが考えるが、気付けばオシリアの姿は既にない。同時に、深緑宮の手前にオシリアが現れる。そこでも同じように地面を踏みならすと、今度は地面が隆起し、まるで壁のようになる。高さは５ｍ程もあるだろうか。

「これで時間が稼げる・・・打ち合わせ通り・・・」

オシリアはニヤリとして、その姿を再び消した・・・。

＊＊＊

ドォォォォン・・・ガァァァァン・・・

遠くで戦いの音が響いていたが、どうもその音が近くなっているようだ。ここは深緑宮でも最も奥まった場所のはずなのだが、戦闘の音がどんどん近付いている。その音を聞いてミルチェやトーマスなど幼い子供達は怯えている。慰めるのは専らネリィやルースの役目である。ジェイクは外の様子を見てくると言って、侍女が止めるのも聞かず出て行ってしまった。

「あのおと、なに？」
「だんだんちかづいてきているよ？」
「心配しないで。ジェイクが大丈夫だって言ったでしょ？」
「でも・・・こわいよ～ふあああああん！」

ついにトーマスが泣きだしてしまった。その声を聞いて連鎖的に泣きだす子どもたち。ネリィやルースはなんとかなだめようとするが、自分たちだって泣きたいのだ。２人とも涙目になるが、その時ふわりと頭をなでてくれる女の人がいた。この部屋に避難した時に一緒になった女の人である。ネリィが見たこともないような不思議な服を着た人だなとは思っていたが、一緒にいる人たちも同じような服を着ている。周りの人に守られるように座っていたから、きっと偉い人なんだろうとネリィは考えていた。

今その女の人がとても優しい表情で自分の頭をなでてくれている。漆黒のとても長い髪に光が当たって輝いており、ネリィは思わずぼーっと見惚れてしまった。

「お姉さん誰・・・？」

「私は詩乃と申します。貴方は？」
「ネリィ・・・」
「そう・・・ネリィは良い子ですね、皆の面倒を見てくれて」
「うん、だって私がこの中では一番年上だから」
「そうですか。でも後は私にお任せなさい・・・」

そういって泣いている子どもたちを一人ずつ慰めながら、子守唄を歌っていく。するとぴたりと子どもたちは泣きやむが・・・

「そのうたしらない～」
「お姉さん歌が下手だね」
「リサねえとちがって・・・おおきい・・・」
「す、すみません・・・」

一転してんで勝手なことを言い始め、トーマスに至っては指で詩乃の胸をつついている。詩乃は子どもたちの容赦のない突っ込みとトーマスの行動に、真っ赤になりながら両手を頬に当てている。

「トーマス！　失礼だろ？」
「かっこつけるなよルース。自分だってやりたいくせに」
「ば、ばか！　そんな・・・まぁ、ちょっとは・・・」
「ルースの変態！」
「まだなにもしてないだろ！？」
「ぼくたちはこどもだから、たしょうオイタしてもいいんだよ」
「トーマス！　どこでそんな言葉覚えたの！」
「とジェイクがいっていたことにしておこう」
「トーマス！　待ちなさい！」
「ああ、詩乃にはどうしようもありません・・・」
「し、詩乃様・・・」

あのリサが育てた子どもたちである。ミリアザールにすら手に負えない子どもたちの面倒を見るには、この詩乃という女性にはちょっと荷が重すぎたようだ。子どもたちは詩乃の膝に座ったり、長い髪を引っ張ったりして自由気ままに遊んでいる。詩乃のお付きもあまりの出来事におろおろしている。子どもたちが暴れ始めると、深緑宮の侍女達の手にも負えないようだ。男を手玉に取るくのいちも形無しである。だが子どもたちが泣きやんだのは、この詩乃の仁徳であろうことは間違いなかったが。

＊＊＊

その頃部屋を抜け出したジェイクは深緑宮を小走りに進んでいた。子ども達を任されたジェイクであり、自分が出て行っても何もできないことはよくわかっていたのだが、何か嫌な予感がしたのだ。こういうときには素直にジェイクは自分の直感に従うことにしている。だが一体自分が何をすべきかわからないまま走っていたが、剣が空気を切り裂く音に彼は思わず身を隠した。誰かが戦っている。

「（あれは・・・アルベルト？）」

廊下の向うからアルベルトが子どもらしき人物を追いたててくるのが見えた。だが普通の子どもではないだろう、周囲におかしな顔のようなものがいっぱい浮き出た黒い渦が見える。ジェイクは「なんて気持ち悪い」と思ったが、戦いはアルベルトが優勢なようだ。

「（それにしてもアルベルト・・・凄い！　あれがアルベルトの全力か！）」

柱や壁すら構わず破壊するアルベルトの剛剣に、思わずジェイクの手に力が入る。そしてアルベルトが少年を両断すると、ジェイク

は隠れたまま小さくガッツポーズをする。だが・・・何か変だ。アルベルトはそのまま少年を見下ろしているが・・・いけない！

「まだだ、アルベルト！」

思わずジェイクは叫んでいた。

＊＊＊

「！」

誰かが叫ぶ声がアルベルトに聞こえた。油断こそしていなかったが、反射的に防御姿勢をとる。だがそれで正解だった。剣に何か強い衝撃を覚え、数m程後退させられる。防御姿勢を取っていなかったら吹っ飛ばされていただろう。

「ちぇ・・・真っ二つになったら多少油断するかと思ったんだけど。誰だ、余計なことを叫んだのは・・・」

真っ二つになったはずのドゥームから声が聞こえる。そのまま真っ二つになった体がゆらりと起き上がり、周囲に飛び散ったはずの血までが元に戻って行く。

「飛び散る血まで演出したのに・・・迫真の名演技だったはずなんだけどな」

「貴様・・・不死身か？」

「どうだろうね～？　まあ真っ二つ程度で死なないのは確かだよ。それにしても君は大した剣士だ、素直に認めるよ・・・その上で飛びきり残酷に殺してあげよう♪」

「やってみろ・・・真っ二つで駄目なら、コマ切れにするまでだ」

「できるかな・・・と、その前に」

ドゥームが横目でちらりとジェイクの方を見る。ジェイクは思わず身を乗り出してしまっており、目線がドゥームと交差する。

「キミの名前は？」

「・・・名乗る必要あんのか？」

「フフフ、慎重だね。それでいい。だがよくボクが死んでないってわかったね。どうしてだい？」

「なんとなくだ」

「なんとなくか・・・フフフ、アーッハハハ！」

ドゥームが高らかに笑いだす。ジェイクはその様子を不審げな顔で見、アルベルトは剣を構え斬りかかる隙を窺っているが、ドゥームはジェイクと話しているにも関わらず隙が見当たらない。

「何笑ってんだ、気色悪ぃ」

「遠慮のないガキだね。面白いけど・・・万死に値するよ！」

ドゥームが手をジェイクの方にかざすと悪霊達の形が渦のようになり、ジェイクの方に飛んでいく。その厚みこそあまりないが、スピードは先ほどアルベルトに放ったものよりはるかに速い。

「！」

「ジェイク！」

アルベルトの叫びも間に合わないほどのスピードで、悪霊の塊がジェイクの立っていた場所を直撃した。

続く

アルネリア教会襲撃、その8～子ども達～（後書き）

今回は引きがいい・・・はず！

次回投稿は１２／９（木）１２：００です。

アルネリア教会襲撃、その9～ミリアザール出撃～（前書き）

～あらすじ～

ジェイクはドゥームとアルベルトの戦いに思わず叫んでしまう。そしてドゥームの操る悪霊がジェイクを襲う・・・。

「ハッハー、どんな死体（オブジェ）になったかなぁ？　潰れたトマトかひき肉か・・・」
「どっちでもないわい」

ドゥームとアルベルトが声をする方を見ると、ジェイクを小脇に抱えたミリアザールがふわりと地面に着地するところだった。そのままアルベルトの方に歩いてくると、ジェイクをぽいっと投げ捨てた。受け身を取れず、腰を打ちつけるジェイク。

「いってぇ！　なにすんだ、ぺったんこの分際で！」
「それはこっちのセリフじゃあ、ドアホウが！！！」

ミリアザールがくわっと怒りの表情に変わる。

「出てくるなと言うたろうが！　死にたいんか！？」
「嫌な予感がしたんだよ！」
「貴様なんぞに心配されるほどワシらは落ちぶれとらんわ！」
「なにおう！」
「やるかー！？」

うー、と唸り声を上げながら額をすり合わせて睨みあう二人。まさに一触即発の状態である。もっとも勝敗は明らかだろうが、見た目は子どものケンカだ。

「おい・・・こっちは無視か！？」

だがその隙をついて、ドゥームが槍状に変形させた悪霊を突き出

してくる。

「ミリィ、よけろ！」
「フン！」

叫ぶジェイクだが、あっさりと片手で受け止めるミリアザール。

「なんだと？」
「ショボイ攻撃じゃのう・・・お主、殺る気あるのか？」

そのまま片手で悪霊をぐしゃりと握りつぶすミリアザール。驚愕するジェイクとドゥームだが、アルベルトには慣れたものだ。

「んな・・・」
「この感触・・・うわっ、気色悪っ！」
「ミリアザール様、ここは私が戦います」
「いやお主は下がっておれ、ワシがやろう。お主が暴れると宮殿が崩壊するわ」
「これは・・・」

ミリアザールがちらりと周りを見渡すと柱や壁があちこち壊れている。改修にはかなり時間と金銭がかかりそうだ。

「お主はジェイクの面倒を見ておけ。ワシの教会に上等くれた者がどういう目に合うのか、このクソチビに思い知らせてやる」
「はん、お前みたいなドチビにでき・・・」
「黙れ」

ミリアザールの姿がふと消えたかと思うとドゥームの側面に現れ、肩をポンと叩く。そして拳にはー、と息を吹きかけている。

「は・・・？」
「吹っ飛べ」

グシャッ！　っという炸裂音と共にドゥームが錐揉み状に吹き飛んでいく。そのまま壁を貫通しながらはるか向こうまで吹き飛んで行った。ドゥームが靄になる暇も悪霊がガードする暇もないほどの速く、重い一撃。

「うむ、絶好調！」
「すっげ・・・」
「ミリアザール様・・・余計に宮殿が壊れていますが・・・」
「む、いかん。つい」

ぺん、と頭を叩き「しまった」というリアクションをミリアザールがするが、もちろん全く反省してないだろう。だがアルベルトもこんなミリアザールには慣れたものだ。同時にミリアザールがこういうおどけたリアクションをやる時には、かなり頭にきていることは彼も承知しているので、強くは諫めない。

「まあ壊しついでだ、東側の宮殿は全部壊すつもりで暴れる。誰も配置はしておらんな？」
「御意」
「ジェイクよ」
「な、なんだよ・・・」

ジェイクはミリアザールが只者ではないのはなんとなく気付いてはいたが、まさかこんな人間離れしているとは思わなかった。アルベルトでも相当凄まじいと思ったのに、それよりはるかに上の強さだということぐらいは彼にもわかる。

「お主は強くなりたいんじゃったな？」
「ああ」
「では今からやるワシの戦いをよく見ておけ。まあ何かしらの参考にはなるじゃろう。ワシも全盛期は過ぎておるとはいえ、まあ大陸で１０傑にはまだ入るじゃろうからな！」
「このや・・・」

バキィ！

戻ってきかけたドゥームの顔面に飛び蹴りを喰らわせ、そのまま彼が吹き飛ぶよりも速く追いつき、頭を鷲掴みにして地面に叩きつける。凄まじい轟音と共に床が変形し、宮殿自体が揺れている。さらに地面にめり込んだドゥームの頭をまるでサッカーボールでのごとく蹴り抜き、先ほど開いた穴とは別の穴を開けながら吹っ飛ばした。その様子をジェイクが見ているが、開いた口がふさがらない。

「ウッソォ・・・」
「・・・ミリアザール様、参考になりません・・・」

そんな2人に背を向け、ドゥームが開けた穴を通り後を追うミリアザール。その表情は2人からは確認できなかったが、彼女は鬼の様な形相をしていた。ここまで教会を荒らされ、一番怒り心頭なのは他ならぬ彼女だったのである。そしてドゥームが横たわっている部屋まで来ると、ドゥームはまだ立てないでいた。

「クソ、とんだバケモノだな」
「当然じゃ、三下が。だがそれにしても不思議な手ごたえを感じる。其方、人間ではないな？」
「さあ、どうだろうね」

「ワシの推測じゃが人間と悪霊が半々ずつ・・・いや、1：3というところか？　それなら貴様の不死身っぷりや、悪霊を自由に操れることも納得がいく」
「・・・」
「じゃが、問題はどうやれば其方を消滅させられるかということだが」

ミリアザールが小首をかしげて悩んでいる様子を取る。

「・・・とりあえず手当たり次第殴ってみるか？」
「ふん、芸がないね。この暴力女！」
「まあ否定はせん。そうじゃな、我々の犠牲者が３４８人と聞いておるから、とりあえず１１２１発程いっとくか？」
「どういう計算・・・だあっ！？」

ドゥームが何か言う暇もなく、ミリアザールの拳がヒットする。そのまま渾身の連打を続けるミリアザール。まるでドゥームの体がルーレットに入れた玉のように跳ねまわる。それにともない部屋が、宮殿が崩壊していく。

「おおおおお！」
「ぐぶあぁあああああ」

ドゥームが壁にめり込み、東の一角が崩れ落ちた所で一度攻撃が止む。舞い上がる埃の中、ふらふらと起き上がるドゥーム。

「お、おま・・・げふっ。なんで、守備が・・・間に合わ・・・ない」
「単純にお前の悪霊が反応するより、ワシの攻撃の方が速い。それにその程度の悪霊の密度ではワシの攻撃を防ぐことはできんの。さ

てはお主、戦闘経験が乏しいな？」
「げ、げほっ・・・なんでそう、思う、の・・・さ」
「ワシがお主じゃったらその程度のレベルでここに突っ込んで来んからじゃよ。捨て駒か、あるいは馬鹿か。それにワシがお主なら、もっと能力を上手く使うからな」
「な、なるほど・・・ね・・・」
「で、そろそろ休憩は終わりでよいかの・・・ところで何発殴られたか覚えておるか？」
「知るわけ・・・ないだろ」
「５６４発までは数えておったが、実はワシも忘れた・・・ということで悪いが、もう一回最初からやり直しじゃ」
「く、くそっ・・・なんて理不尽、な・・・」
「世の中そんなもんじゃ・・・行くぞ！」
「く、くそおおお！」

ドゥームの絶叫が深緑宮に響き渡る。ミリアザールは一向にその手を緩めない。だがミリアザールは怒りにまかせてドゥームを殴りつける一方で、非常に冷静な部分を保っていた。

「（おかしい・・・確かに手加減はしておる、こやつには聞きたいことがしこたまあるからな。だが多少弱らせてから聞きだすつもりであったが、あまり弱っておるように見えん。それに上空の２人も気になる。こいつではワシに勝てんことがわかっておるのに、なぜ助けに来ない？　あるいはなぜ一緒に突撃してこんかった？　やはりこやつは捨て駒か・・・にしても捨て駒ならワシのところまで一直線に来た理由がわからん。アルネリア教会を標的にするならば施設の破壊を徹底的にするなり、一般兵に被害をもっと与えるなり、結界を潰すなり、いくらでもやりようがあるだろうに。ワシらの防御の程度を知りたいのか？　だがこの経験を踏まえてさらに防御は強化される。むしろやりにくくなるから逆効果じゃろうが。あるい

は単純にワシが標的じゃとして、ここからどうするつもりじゃ？こやつ程度ではワシの力量なぞわかるまいよ。・・・目的がわからんのは気味が悪いの）」

思考を続けながらもドゥームへの手は休まらない。鳩尾に強烈な一撃をお見舞いし、ドゥームが吹き飛ぶ。派手に吹き飛んだせいで、またアルベルトとジェイクがいる部屋まで戻ってしまった。なんとか立ちあがるドゥームだが大分足に来ているのか、足がガクガクしている。ゆっくりと歩いてドゥームとの距離を縮めるミリアザール。

「耐久力だけは一級品じゃ、褒めてやろう」
「そりゃどうも・・・アンタ、強すぎるよ」
「当然じゃ。ワシがどれだけ生きておると思う？」
「確か１０００年くらいだっけ？　そりゃ俺程度じゃ、せいぜい一撃入れるのが精一杯かな？」
「・・・その情報、誰に聞いた？」
「さあ・・・誰でしょう？」
「・・・まあよい。嫌でもしゃべりたくなるようにしてくれるわ。つい殺しても恨むなよ？」

ミリアザールが構えを取る。そしてドゥームに飛びかかろうとすると、何かに躓(つまづ)いた。いや、足が動かない？　バランスを崩して転びながらも不審に思ったミリアザールが足元を見ると、

「何！？」

地面からオシリアが顔をのぞかせていた。念動力を使ってミリアザールの体を固定したのだ。本当は握りつぶす勢いでやったのだが、ミリアザールの体を握りつぶすにはオシリアの念動力では力不足だった。だがそれでも瞬間的な足止めには十分だった。

「言ったろぉ？　一撃入れるのが精一杯だってな！」
「！」
「ミリアザール様！」

すかさずドゥームがミリアザールの顔面目がけて槍状、いやもっと圧縮した針状の悪霊を飛ばしてくる。さしものミリアザールもガードができない状態でこれをくらえば無事では済まない。察したアルベルトが助けに入ろうとするが、オシリアが素早く念動力で吹き飛ばす。

「（間に合わん！）」
「くはは、死ね！」

ミリアザールは直撃を覚悟した。

続く

アルネリア教会襲撃、その9～ミリアザール出撃～（後書き）

閲覧・評価・ブクマありがとうございます。

あとがきはあった方がいいのかどうなのか・・・。

次回投稿は１２／１０（金）１２：００です。

アルネリア教会襲撃、その１０～討魔の巫女～（前書き）

～あらすじ～

人質にとられたミルチェ。ドゥームの魔の手がミリアザールに迫る。

アルネリア教会襲撃、その１０～討魔の巫女～

＊＊＊

その頃ミルチェは、詩乃の髪を引っ張って遊ぶのにも飽きていた。詩乃以外の人間は上手く甘えさせてくれるわけでもなし、やることがなくなって退屈なミルチェ。ルースやネリィはトーマスのいたずらを止めることに必死になっている。

「（こういうときリサねえはあたしのところにくるのよね・・・リサねえといるとぜったいにひとりにならないのにな）」

それは目が見えないリサだからこその芸当。誰が誰と話していて、誰が満足し、誰が退屈しており、誰が疲れたり体調が悪いかを瞬時に判断できる。だからミルチェが退屈していると必ずリサが傍に来たし、ミルチェが風邪を引きそうなときや、体調が悪くなりそうだと必ず「今日は大人しくしていなさい」と言われる。一回その言いつけを守らなかったらひどい熱を出した。以後ミルチェはリサの言うことに無条件服従である。

「（あ～あ、つまんない）」

ミルチェがふと外を見ると、誰かが笑顔で手招きをしている。良く見ると、それはリサだった。冷静に考えればこんなところにリサがいるはずはないのだが、まだ６歳のミルチェにはそのような判断はできない。お仕事でちょっと長くいない、くらいの認識なのだ。だからまた帰ってきたんだ、くらいに思っていた。

「（リサねえだ！　わぁい、遊んでもらおうっと！）」

ミルチェは出るなと言われているにも関わらず、思わず外にかけ出してしまった。だがミルチェが近づくに従い、リサは遠ざかる。だが手招きは止めすに、ミルチェにこっちにおいでと呼び寄せている。

「リサねえ～どこにいくの～？　まってよ～」

そういいながらミルチェが部屋の外に出て言ったことに、なぜか誰も気付かなかった・・・。

＊＊＊

ガッ！

場面は戻り、ミリアザール達の部屋に何かが当たる音が響き渡る。ミリアザールは直撃を覚悟していたが・・・衝撃は無い。音がしたはずだが？

ポタリ、ポタリ・・・

血が滴る音がする。誰の血が流れる音かと全員が思ったが、

「あ・・・？」

血を流していたのはドゥームだった。打ちこんだのは・・・ジェイク。オシリアもジェイクの動きには全く気を払っていなかった。いや、この場の全員がそうだった。

ジェイクの年齢では真剣を持つには筋力不足だったので、まだ練習用の木剣しか持っていない。それをドゥームの頭めがけて全力で

叩き下ろしたのだ。アルベルトなどの一撃に比べれば稚拙極まりない一撃だったが、ドゥームは全く気を払っていなかった。いや、正確には視界にはかすめたのだが、気にも留めなかったのだ。アルベルトが一刀両断しても大したダメージを負わないのだから、当然と言えば当然だが。

だからこの結果は全員にとって意外だった。だが事情が全て呑み込めていないジェイクだけは当然の結果だと認識していた。木剣であろうと全力で頭を叩いたり、喉に付きを入れれば充分に人を死に至らしめることが可能である。だから頭を叩けば血が流れるのは当然。ジェイクの認識はその程度だった。

だがこの場にいる他の全員が事情を呑み込めない。もっとも一番飲み込めないのはドゥームだろう。

「おいガキ・・・ボクに、何をした？」

「殴った！」

「・・・そういうことを言ってるんじゃねぇ！」

ドゥームから殺気が噴き出す。思わずアルベルトも目を背けたくなるほどの邪気が部屋を覆う。だがジェイクは木剣を構え、ドゥームを見据えている。同時にドゥームの顔つきが明らかに変化する。もはや薄笑いを浮かべたような表情や、無駄に明るい雰囲気はない。目が血走り、完全に本気になっている。

「もういいや・・・小僧、死ねよ！」

「目を見るな、ジェイク！」

ミリアザールが叫ぶが既に遅い。ドゥームの深紅に輝く発狂の魔眼を正面から見据えてしまうジェイク。だがミリアザールに最悪の想像が浮かぶより早く、ジェイクが動き出す。

「なんだお前、気持ち悪い真っ赤な目なんかしやがって。睡眠不足か？」
「・・・は！？」
「くらえ！」

バキッ！

再びジェイクの木剣がドゥームの横っ面をヒットする。決してかわせないスピードではないのだが、ドゥームは魔眼の効果が無いことが意外すぎたのか、「よける」という行動概念が全く抜け落ちていた。そして鼻が折れたのか、鼻血を大量に出しうずくまるドゥーム。

「い、痛い・・・ボクが、痛い？」
「殴られりゃ痛いのは当然だ！」
「・・・おい、いつまでワシを掴んでおるか？」
「！？」

我に返ったミリアザールがオシリアの念動力を引きちぎる。そしてオシリアの両手を瞬間的に吹き飛ばし、ドゥームもまた殴り飛ばす。

「ジェイク！　怪我はないか？」
「それよりも！」

ジェイクが一段強い声を放つ。今までにない鋭さだ。思わずジェイクの顔を見るミリアザール。

「そこを殴ってもあまり効いてないぞ、ミリィ」
「・・・どういうことじゃ？」

「そこは本体じゃないと思う。なんて言うか、その、上手く言えないけどさ・・・」
「ふむ・・・」

ミリアザールにもよくわからないが、いくつか思い当たることがある。だが今それを検証する暇はない。確かにドゥームがすぐに起き上がってくるところをみると、ミリアザールの拳よりジェイクの木剣の方が効果がありそうだ。

「ぐあああああ！　こんのクソガキィィィィ！！」
「完全にキレよったか。ジェイクよ、ワシが隙を作るからその木剣でしこたまアイツを殴ってやれ。できるか？」
「・・・やるしかないんだろ？」
「やるしかないこともないがな。とりあえずこのままではきりが無いからの。心配せんでもお前に攻撃が届くような凡ミスはせん。お前はその木剣をあのクソッタレに叩きこむことだけ考えとけ」
「了解。だけど、口が汚いぜミリィ」
「こいつ、生意気言いよる・・・それにその名前でワシを呼んでいいのは世の中に2人だけじゃ」
「へーへー」
「ぐっ・・・アルベルト！　お前はそっちの娘をやれい」
「御意」

アルベルトがオシリアに剣を構える。オシリアは両手をミリアザールにもがれ、再生が上手く出来ていない。いくら悪霊でもしこたま聖の力を込めたミリアザールの一撃を受ければ再生がままならない。むしろミリアザールの拳を喰らってあそこまで動くドゥームが異常なのだ。オシリアは不利を悟ったのか、じりじりと後退する。地面に潜ろうにも、アルベルトの剣は地面ごとオシリアを両断しにかかるだろう。

そしてミリアザールがドゥームに殴りかかろうとしたその時――

「・・・この手はさすがにダサいから使いたくなかったんだけどね・・・アレを見な」

ドゥームが指さした方に現れたのは・・・。

「あれー？　リサねえは？？」

「ミルチェ？」

「バカな！？　侍女どもは何をしておるか！」

「護衛の責任じゃないさ、悪霊の誘惑ってのは強いんだぜ。人の意識の間を突くのが上手い奴が俺の悪霊の中にいるんだよ。さて・・・ボクの言いたいことはわかるな？」

「ぐ、く・・・」

ミルチェの周囲に悪霊が蠢（うごめ）いている。ミルチェにもどうやら見えているらしく、悪霊の一体と目が合うと気を失ってしまった。

「ワシにどうしろと？」

「そうだな～本来ならストリップでもお願いするところだけど・・・その貧相な体じゃねぇ・・・」

「やかましいわ！」

「まあ冗談はおいといて、腕の一本でも貰おうか」

「ほう・・・殺さんでいいのか？」

「キミを殺すとお嬢にボクが殺されかねないからね。ボクはこのうっぷんを晴らすため、リサちゃんで遊ぶとするさ」

その言葉に、ジェイクが顔を真っ赤にして反応する。

「何ぃ！？」

「はっは、怒るなよジェイク君、ちゃんとキミも連れて行ってあげるから。その目で彼女がどういうことをされるか、見届けるがいいさ！」
「このやろ・・・！」
「いいえ、貴方は何もできません」

凛とした声が深緑宮に響き渡る。お付きを伴い姿を現したのは詩乃である。ネリィは表現方法を持たなかったが、彼女が来ているのは巫女服という。後ろの2人は女侍のいでたちと、薙刀（なぎなた）を持った巫女だ。

「これはこれは・・・わざわざボクにやられにでてきたのかな？ところでどちら様で？」
「その前にその子を放していただけるとありがたいのですが」
「それは出来ない相談だね」
「穏便に済ませるためにお願いしているのですが・・・仕方がありません、強制的に放していただきましょう。？（オン）」

詩乃が片手で印を結ぶと、ミルチェの周りの悪霊が吹き飛ぶ。驚くのはドゥーム。

「なんだと？」
「ミルチェ、こちらにおいでなさい」
「あ、うたのへたなおねえちゃんだ！」
「そ、そうですよ～・・・しくしく」
「詩乃様、お気を確かに」

お付きの2人に慰められる詩乃。ミルチェが詩乃の方に駆け寄ると、薙刀を持った女性にミルチェを預け下がらせる。それを見てドゥームが飛びかかりかけるが、

「いかせるか！・・・なんだ、動かない？」
「方術で固定させていただきました。殿方を縛りあげて遊ぶ趣味はこちらの東雲（しののめ）の趣味であり、私ではないのですが、貴方は危険な方なのでご了承くださいませ」
「いや、詩乃様。私にそんな趣味はないですから！」
「そうですよ詩乃様～それは私の趣味ですぅ！」

女侍は必死で否定し、薙刀を持った巫女は嬉しそうに肯定する。

「あら、また間違えてしまいました・・・時々貴方達がどちらがどっちなのか、よくわからなくなる時があるもので」
「ひどい・・・」
「詩乃様、まだボケるような年齢じゃないですよ～」
「なんだ、お前達は。コントをやるために出てきたのか！？」

ついにドゥームが苛々した口調で質問する。それを聞いて詩乃がぽん、と手を叩きニコニコしながら答える。

「すみません、すっかり失念しておりました。私２つ以上同時に物事を考えるのが苦手なもので」
「ふざけるな！」
「いえいえ、大真面目に苦手なんですよ。ちなみに自己紹介をしておくと、私は東の大陸にある討魔協会筆頭代理、清条詩乃（きよじょうしの）と申します。こちらはまあお伴ＡとＢくらいに思っていただければよいかと」
「詩乃様ひどい・・・」
「討魔協会筆頭代理だと・・・？」
「はい、ですから悪霊の貴方は疾（と）く消滅していただけると助かります。あ、でも完全に悪霊と言うわけでもなさそうなので、とりあえず悪霊成分をしっかり抜いてしまいますね。ちょっと苦しいかと思

いますけど我慢してください。ちなみに本当に苦しかったら右手を上げて意思表示してくださいね。ではいきます！」
「ふざけ・・・あぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃ！！？」

詩乃がぱん！　と手を合わせると、ドゥームが変形するほど強力な方術が彼を拘束する。

「（ふざけろ、右手なんか上げれるかぁ！）」
「苦しいですか～？」
「（当然だぁ、この女！）」

見動きすらとれず、もはや声を上げる余力すらないドゥームは目線でなんとか訴えようとするが、詩乃はあくまでにこやかに、穏やかに話す。

「大丈夫です！　もうすぐ消滅しますから、そうしたら痛みも全部なくなりますからね～」
「（じ、冗談じゃない！　この威力、本当に消滅してしまう！！）」

ドゥームが何か手を打とうにも、指一本、口先一つ動かせないのではどうしようもない。彼は本当の危機に直面していた。

＊＊＊

その様子を上空から見守っていたライフレスとブラディマリア。

「討魔協会の筆頭代理だと・・・？」
「それは凄いのか？」
「ああ、戦乱づくし、魔物だらけの東の大陸において、魔物の討伐のためのみに活動する組織だ。アルネリア教会のように慈善事業は

ほとんどしないが、とかく魔物討伐に熱心でね。魔物討伐を主義にした戦闘集団さ。戦うだけならアルネリア教会や魔術教会なんかより、よっぽどやっかいだ。そんなのがここにいるなんて、ドゥームは余程日ごろの行いが悪いんだね」

「ふぅむ。で、どうする？　このままだとドゥームは本当に消滅すると思うが」

「・・・まだあいつを失うわけにはいかない。助けるとしよう。ブラディマリア、あの結界を破れるかい？」

「愚問じゃの」

「じゃあ行きますか。全く世話の焼ける・・・あ、口調は直しとこう、お互いにね」

「もちろんよお～キャハハハ！」

「・・・すごい切り替え方だね・・・」

そして深緑宮に向けて、一気に下降を始める2人であった。

続く

アルネリア教会襲撃、その１０～討魔の巫女～（後書き）

さてはて、詩乃が訪れているのはなんとなくほのめかしていたのですが、一体何人の方が気づいていたでしょうか？

次回投稿は１２／１１（土）１２：００です。

アルネリア教会襲撃、その１１～不本意な戦闘終結～（前書き）

～あらすじ～
討魔協会の詩乃の力も借りてドゥームを追い詰めるミリアザール達。
だがそこにライフレスとブラディマリアが乱入してきて・・・？

アルネリア教会襲撃、その１１～不本意な戦闘終結～

＊＊＊

再び深緑宮内――アルベルトはオシリアとにらみ合ったままである。どうやらドゥームの処分を優先的に行うようだ。オシリアはその後で良いと判断したのか、アルベルトはとりあえず2人を合流させないことだけに気をつかい、斬りかかる気配はない。オシリアも両手が無い状態で突破はできないと踏んだのか、にらみ合いに応じている。

ミリアザールはその様子を油断なく眺めている。詩乃に手を貸そうにも術式の違う魔術では他方を阻害する恐れがあるし、オシリアを倒そうと下手に暴れたらそれだけで詩乃の邪魔をしかねない。ここにきてミリアザールにはやることがなくなった。

「清条の、すまん。客人の手を煩わすつもりはなかったんじゃが・・・」

「水臭いですよ、ミリアザール。私と貴方の仲じゃないですか」

「そう言うてくれると救われる」

ズズン・・・

その時遠くで何かが揺れるような音がした。一瞬何事かわからなかったミリアザール。

「なんじゃ、地震か・・・？」

ズズズン・・・！

今度は近い。その時ミリアザールは何事が起きているのか、はっきりと理解した。

「まさか、結界が破られておるのか！？」

バキバキバキ！！！！

ミリアザールの叫びと、深緑宮の結界が破れるのは同時だった。そして何者かが深緑宮内に入ってくる。

「詩乃様、危ない！」

「え！？」

東雲が詩乃を抱きかかえるように飛ぶ。その直後、そこに落下してくる黒い魔術の塊。暗黒魔術の類いだろうが、地面をえぐり、その場で消滅する。同時にドゥームを拘束していた方術も消えるが、ふらふらで動けないドゥームを抱えるように現れる少年と少女、２人の影。言うまでもなくライフレスとブラディマリアだ。突然の２人の登場に、ドゥームまで含めたその場にいる全員が唖然とする。

「いったぁ～さすがに両手が火傷状態よ。乙女の玉の肌に傷がついちゃったじゃない・・・責任取ってよね、ドゥームちゃん！」

「責任ね・・・とりあえず、感謝したらいいのかな。にしても持つべきものは友達ってね」

「・・・今、君に死なれては困るだけだ・・・」

「（我がの教会の防御結界を、この短時間でこじ開けた！？）」

驚愕のミリアザール。大魔王の軍団が攻めてきても１枚で数日は大丈夫なように想定したはずの防御結界を、手の火傷程度で３つとも突破された。結界が完全に消滅したわけではないが、これはミリ

アザールにとっては想定外以外の何物でもなかった。ミリアザールがドゥームとの戦闘中よりも真剣な顔つきを一瞬するが、すぐに自分を戒め、冷静な装いを取り戻す。だがドゥームはさておき、ライフレスとブラディマリアはその一瞬の動揺を見逃さなかった。

「ワシの教会に土足で上がりこむとは・・・覚悟はできとるか？お主ら」

「・・・強がるのはよせ、ミリアザール・・・」

「そうよお～ん、今アタシ達に暴れられたら困るはそちらでしょおん？　ねえ、バ・バ・ア☆」

ピキッ

一言多いブラディマリアが地雷を踏んだのが明らかにわかるが、ミリアザールは踏みとどまる。

「ほ、ほぉ・・・？　どうワシが困るというのかの」

「いやーん、歳のくせにバカって始末に負えないわぁん！　見た目ロリなのにババアでバカって、キャラとして中途は・ん・ぱ♪　キャハハハ！」

ピキピキィ！

ミリアザールの額の青筋が明らかに増えるが、まだなんとか耐えている。ミリアザールの隣にいるジェイクの心情はは、噴火前の火山の傍に無理矢理立たされた、というところだったのだが。

「あらあら、青筋浮かべちゃって。年なんだから血管が・・・」

「・・・よせ、ブラディマリア・・・」

「ごめんなさ～い、ライフレス。キスするから許してぇん」

「・・・いらない・・・ところでミリアザール、交渉だ・・・」
「ほう」

ミリアザールの顔が冷静そのものに戻る。

「で、条件は？」
「・・・僕達はこのまま大人しく引き下がる・・・だから黙って見逃せ・・・」
「なんだと!?」

気色ばんだのはアルベルトだったが、それを手を上げて制するミリアザール。

「・・・よかろう、１０秒以内に立ち去れ。それでだめなら始末する」
「・・・充分だ・・・行くよ2人とも・・・」
「やれやれ、しょうがない・・・オシリア、おいで。ぺったんこ教主、また遊ぼうね」
「2度と来るな!」

ドゥームがオシリアの肩を抱きながら冗談まぎれに投げキスをミリアザールにするが、ミリアザールはわざわざ結界を張って防御する姿勢を取った。だがドゥームがジェイクを見る目には、冗談など入っていなかった。

「おいガキ・・・貴様の顔、覚えたぞ!?」
「はん！　おととといきやがれ!!」

ジェイクがドゥームに向かって中指を突きだす。それを見て暗く笑うドゥーム。

「ククク・・・楽しみが増えたよ。貴様がどんな顔をしてボクに這いつくばって許しを請うのか、非常に楽しみだ・・・」
「誰が！」
「いや、貴様はボクに這いつくばるのさ、這いつくばらざるを得なくなるんだよ。必ずな・・・ククク」

そうこうするうちにライフレスが転送円を開き移動する準備をする。こんな短時間で転送円を開くこと自体脅威だが、抜け目ないライフレスは上空で見物している間に、きっちり空中に転送円の起点を仕掛けておいたのである。距離にして数１００m程度なら、大した魔力も必要ない。といっても、並の魔道士１０人分の魔力程度は消費するのだが。先にライフレスとドゥームが入るが、ブラディマリアは入りかけてピタリと足を止め、ミリアザールの方に振り返った。

「なんじゃ、何か用か」
「・・・アタシのこと、貴女は知っているかしら？」
「いや、知らんな。貴様みたいな特徴のある恰好した奴、一度見たら忘れんわい」
「そうね、お互い顔を合わせるのは初めてだわ～・・・でもね、アタシはよーく貴女の事を知っているのよ？」
「まあワシは有名人じゃからの。サインでも欲しいか？」

ミリアザールがニヤリと笑う。軽く挑発したつもりだったが、ミリアザールは瞬く間に後悔した。ブラディマリアがその殺気をミリアザールにしかわからないように開放する。

「調子に乗るなよ・・・この」
「・・・調子に乗っているのは君の方だ、ブラディマリア・・・こ

こは引け・・・」
「・・・わかってるわよ～ライフレス～」

ライフレスが手をブラディマリアの肩に置くと、くるりと彼女は笑顔で振り向き元の口調に戻る。

「じゃあまた会いましょうね～ミリアザール。貂（テン）の最後の生き残りの女の子♪」
「！」

そう言って消えた3人の子どもたち。だがミリアザールの胸に去来するのは、なんとも得体のしれないもやもや感だった。

「（あやつ、なぜワシの種族名を知っておる？　１０００年前の当時ですら、ワシらのその呼び名を呼べる者は少なかった。一体何者なのか・・・。それに気のせいでなければ、奴はワシより強い。さっき奴らに暴れられたら一体どうなっていたのか。くそ、課題は山積みか！　ワシの見積もりが甘かったというのか・・・）」

ミリアザールの体が、襲撃者と自分に対する怒りで熱を帯びると同時に、背中を冷たい汗が流れる。冷静になるため空を見上げるが、空模様はあいにくと彼女の心情を表すかのように曇天になろうとしていた。

＊＊＊

こちらはライフレスの転送魔術を連続使用し、とりあえずの拠点まで引き返す3人組。開口一番はやはり口数の多いドゥームだった。

「うは～、さすがに危なかった。キミ達の助けがなかったら、かな

り危ないことになっていたかも。素直に感謝するよ」
「・・・さすがに東部教会の筆頭代行までは考えてなかったからね・・・完全にこちらの計算外だ・・・」
「そうそう、まだドゥームちゃんを死なせるわけにはいかないのよ～」
「ところでキミ達の名前ってライフレスとブラディマリアなんだって？　初めて聞いたよ」
「そうだっけ～？」
「・・・それよりかなりの痛手だろう・・・その子以外の手駒を失ったんじゃないか？・・・」
「・・・ホントにそう思ってる？」

ドゥームがニヤリとすると、パチンと指を鳴らす。そうするとドゥームの影から死んだはずのマンイーター、インソムニア、リビードゥが現れる。

「あらあら、どうして～？」
「本物使ってあの程度のはずないじゃないか。今回使ったのはオシリアを除いて彼女達の分身さ。まあ彼女達の本体分割して使ってることに違いはないから、失った分を元の実力まで再生させるには時間がかかるね・・・また沢山ごちそうをあげないと」

ドゥームがぺろりと舌舐めずりをする。

「・・・これは・・・君に対する評価を改めないといけないね・・・」
「そりゃどーも。ボクも捨て駒にされるのだけはまっぴらごめんだったから、一応対策はしておいたわけさ。実力がキミ達に対して足りてないのは勘づいていたからね・・・ボクも今回は学んだことは多いよ」

「いやに殊勝ね～何企んでるの？？」

ブラディマリアが不審げな目でドゥームをジロジロ見る。ドゥームは大人しく下をうつむいていたが、何かを堪え切れなくなったようにプルプルと震え始め、ついには大笑いを始めた。

「ク、クックク・・・アハハハハ！　だめだ、こんなキャラはやっぱ合わないな～！」

「・・・やっぱりね・・・」

「だけど学んだことが多いのは本当さぁ！　確かに今のボクは弱い。だけど強くなれるってことでしょ？　ボクが強くなってキミ達を足元に這いつくばらせたら、どんなにか楽しいだろうってね～アハハハハハ！」

「うわ～趣味悪～い」

「それにさ、あのジェイクとかいうガキ！　いじめがいがありそうじゃないか！！　リサちゃんを嬲る時に楽しみが増えたってもんさ。あのガキの目の前であらん限りの拷問をリサちゃんにしたら・・・愛しい人がこの世ならざる悲鳴を上げる様を聞いたらどんな顔をするかな、あのクソガキ・・・もう楽しみで楽しみで楽しみで楽しみで楽しみで楽しみでしょうがないんだけど！　フーハハハハハハハハ！！！」

ドゥームが大笑いを始めた。しばらくは止まりそうにないので、ドゥームをほったらかしてその場を離れる2人。ドゥームに聞こえないようにひそひそ話を始める。

「で、実際どうなの～？　あの子悪霊でしょ。悪霊って成長とかしないんじゃないの～？」

「・・・1／4は人間だからね・・・成長はすると思うけど・・・どうかな・・・」

「ふ～ん、まあいいけど。でもアタシが思うのは、あの子はいつかアタシ達の手に負えなくなるわよ～」
「・・・そんなに強くなると？・・・」
「アタシより強く～？　冗談じゃないわよぅ、そんなことはありえないしー。そうじゃなくて、アタシ達の手に余る行動をするようになるってことよ」
「・・・そうなれば僕が消すさ・・・それよりも君・・・さっきミリアザールの方が手を出せばいいと思ったろ？・・・下手な挑発までして・・・彼女が乗らなかったから良かったけど、彼女が乗って来ていたらどうするつもりだった？・・・」
「さあ～なるようになるんじゃないの～？　だって、アタシはミリアザールに復讐するためにここに参加しているんだから～」

全く悪びれる様子の無いブラディマリアを、ライフレスが睨みつける。

「・・・君こそ覚えておくんだ・・・僕達の目的は人間の全滅じゃない・・・まだミリアザールの力は必要なんだ・・・彼女が不要になれば師匠が判断を下す・・・君の出番はその時さ・・・」
「あ～はいはい。『世界の真実の解放のために』って奴ね・・・アタシもわかってるわよ～」
「・・・ならいい・・・とりあえずあそこで馬鹿笑いしている彼を連れて引き揚げますか・・・次の指示を仰がないと・・・」
「はいは～い☆」

そうして3人は、また魔法陣の中にふと姿を消していった。

続く

アルネリア教会襲撃、その１１～不本意な戦闘終結～（後書き）

さて、そろそろ襲撃編もおしまいです。

次回投稿は１２／１２（日）１２：００です。

アルネリア教会襲撃、その１２～戦い終わって～（前書き）

～あらすじ～

ドゥーム達は去った。ミリアザールは驚異の去った教会内で何を思う・・・？

アルネリア教会襲撃、その１２～戦い終わって～

＊＊＊

場面は深緑宮に戻る。３人が撤退した後すぐにミリアザールは全体指揮に戻り、戦死・けが人の報告、配置の変更、復旧作業、市への対外処置などてきぱきと業務をこなしていった。さすがのサボリ魔ミリアザールも、こういうときには素晴らしいリーダーシップを発揮する。

もっとも大司教と決められた近衛以外には顔を見せることのない彼女であったから、指示はおおよそアルベルト、マナディル、ドライドを通して伝えられる。その様子を見ていたジェイクはいつもと違うミリアザールにとまどいを覚えた。ジェイクにとってのミリアザールは世話になる恩のある相手であると同時に、からかいがいのある遊び相手くらいの認識だったのだ。

一方こちらは負傷したベリアーチェを見舞いにきたラファティ。仕事の合間にこっそり抜け出してきているのだ。ロクサーヌの方はかなりの重症だったのでシスター達がかなり強い回復魔術を使い、現在は容体が落ち着いている。

一方、比較的軽症だったベリアーチェはそのまま経過を見ることになった。アルネリア教では、無駄に回復魔術は使わないことになっている。体の治癒機能を強制的に亢進させる回復魔術は、過ぎれば体に毒になることが長年の研究で証明されたせいである。ともあれベリアーチェは簡単な回復魔術だけで、後は数日安静にしておけば元通りだろうということだった。

まあようは大したことはないのだが、ラファティは愛妻家として有名であり、ベリアーチェの容体は関係なく、本心を語ってしまうと自分の妻の顔が見たいだけだった。

「あなた・・・よくぞ御無事で」
「君こそ。大事なくてよかった」
「まあ、当然ですわ。ラザール家の次男、ラファティの妻ですのよ？　そんなにやわな鍛え方はしておりません！」
「全く、君は昔からこれだな。子どもができれば少しは大人しくなるかと思ったが、ますます強くなったんじゃないか？」
「当然ですわ。『母は強し』ですのよ？　でも・・・」
「でも？」
「あなたの前では・・・一人の女性でいさせてください」
「ベリアーチェ・・・」
「ラファティ・・・」

２人がぎゅっと手をつなぎ見つめ合う。隣には看病をしているシスターがいたのだが、いたたまれなくなって赤面しながらぱたぱたと走って逃げて行った。だがそんなシスターの行動にもおかまいなくいちゃつく２人。

「あなた・・・お願いがあるの」
「君の頼みなら何でも」
「まあ！　ではピレボスの山頂にしか生えないといわれる、オルネカの花が欲しいと言ったらどうするの？」
「いますぐ取って来て、君の頭に飾って見せよう」
「ふふふ、嬉しいわ。でもそんな難しいお願いじゃなくてね・・・私もう１人子どもが欲しいの」
「ジャスティンは生まれたばかりだけど？」
「だからなの。ジャスティンを見てたらもう１人欲しくなって・・・ダメ？」
「駄目じゃないさ。実は僕も同じことを考えていた。やはり僕達はそういう星の元に生まれた２人らしい。いつも一緒に、死ぬまで仲

睦まじく過ごす運命なのさ」
「ああ、あなた・・・」
「愛しの君よ・・・」
「『なーにが愛しの君よ』じゃあ！　仕事せんかい！！」

ぱかーん！　とラファティの頭を下履きで叩く快音が部屋に響き渡り、ラファティがミリアザールに引きずられていく。だがそれでもめげない2人はお互いに見つめ合いながら手を振っている。ミリアザールはそんな2人を見ながらイライラして、吐き捨てるように言い放つ。

「こんのバカップル共め！　貴様、ワシの近衛になった時に立てた誓いを忘れたか？」
「さあ・・・」
「『私は恋などいたしません、人生の全ては剣に捧げました』じゃぞ？　その下の根も乾かないうちに、1年以内にはベリアーチェといちゃつきよってからに・・・見とるこっちが恥ずかしくなるわ！」
「それもまた運命」
「何かっこよさげにまとめようとしておるか、ちゃんと先に仕事しとったらここまで言わんわ！　貴様らが最初に出会った時になんと言ってケンカしたか忘れたか？　『この魚！』と『何よ、ちんちくりん！』じゃぞ！？」
「そのようなことは私達の愛の前ではささいなこと」
「ひいい・・・この天然カッコマンが、変なさぶいぼが出るわ！
貴様は深緑宮の外で大隊長共の報告を聞いてこい！！」

げしっと外にラファティを蹴りだし、深緑宮内の私室に戻るミリアザール。戦争処理は彼女にとって慣れた物で、彼女が本気で仕事をすれば一瞬で片付いてしまう。とういうことで襲撃から1時間も経たず一通りやることを終え、後は報告を待つのみとなっている。

その状態で椅子に深く腰掛け一見リラックスして見えるミリアザール。だがその目は緊張しており、唐突にくるりと横を振り向くと、何も無い空間に向かって話しかける。

「おるのじゃろう、ミナール。報告を聞こう」

「は・・・」

何も無い空間から男が姿を現す。３人の大司教最後の一人であるミナール本人だ。痩身の小男でお世辞にも美男子とは言えず、むしろ特徴のない普通の容姿である。特に威厳があるわけでもなく、纏う雰囲気さえその辺の市民と変わらない。だがむしろ彼はそうあるように努力しているのであり、それこそが彼の望んでいる自分の姿であった。

彼はマナディルやドライドとは違い、日陰者であることを好んだ。時には市民や下級僧侶の恰好に扮し、下の者の生の声を聞くため潜伏したりもする。いわゆる隠密業務が彼の仕事であるのだが、そんな彼を大司教に抜擢したのは他ならぬミリアザールであり、彼に一定以上の権限を与えることでミナールの仕事をやりやすくしたのだった。だが知力では他の２人をゆうに凌ぐミナールであり、実際に彼の魔術試験は歴代でも最高クラスの結果を残している。加えて彼の知識欲はアルネリア教会内にとどまらず、魔術教会にもおよび、いくらかの魔術をも治めている。それはアルネリア教では違反行為であったが、そうと知りつつミリアザールは黙認した。彼に代わる役目を果たせる者がいなかったからである。

そのようなミナールに権力を与えることは危険なことでもあったが、同時に彼の働きで余計なもめごとが事前に察知できたのは１度や２度ではない。ミリアザールの武の右腕がアルベルトなら、ミナールは知の右腕と言ってもいい存在であった。もっともその事を知っている者はほとんどおらず、多くの者がなぜミナールが大司教な

のかわかっていなかった。

「お主、その姿を消してワシの私室に入ってくるのは遠慮せいよ。ワシが着替え中じゃったらどうするんじゃ？」

「心配無用です。女性としての貴女にはまるで興味がない」

「それはそれでどうなんじゃ・・・まあよい。貴様のことじゃ、どうせ何か仕掛けたんじゃろう？　あそこまで奴らに好き勝手されて、反撃の手札を仕掛けない貴様ではないからの」

ミリアザールがニヤリとするが、ミナールはいたって平静かつ無表情を保つ。

「はい。奴らに追跡用の仕掛けをいくつか施しました。今度はこちらから奴らの本拠地を急襲してやればよいかと」

「なるほど。だがどうやって追跡する？　奴らは転送魔術で消えておるが」

「心配無用です。追跡専門の私の子飼いの部下がおります。あれから逃げ切れることはありえません」

「いいだろう、任せる。それと貴様の意見を聞いてみたいのだが・・・奴らをどう見た？」

「どう、とは？」

ミナールがミリアザールの腹を探るように質問を返す。

「強さ、数、目的といったところか」

「ではまず強さから。最初の少年はともかく、後2人の強さは明らかに貴女より上でしょう。特に少女の方の強さは異常です。彼らが全力で暴れた場合、この都市は確実に壊滅していたでしょう。生き残るの大司教の中ではおそらく私だけ。他には貴女にアルベルト、梔子、清条詩乃、後はせいぜいラファティを含めた近衛数人が限界

かと。むしろそう判断したから、貴女もあのような屈辱的な条件を飲んだのでは？」

「その通りだ。あそこで戦っていてはワシらはほぼ全滅だったろう。それは手としてうまくない」

「次に数ですが、それは調べないと何とも言えません。ただあの少女は明らかに貴女と戦いたがっていたのに、我慢しました。それは彼女に何かしらの命令を下せる立場の者がいるということ。もしあの３人が斥候の役目をしていたとすると、同様の力を持つ者が少なくとも倍はおりましょう。兵法書にある様子見をするときの戦力配分を参考にしておれば、の話ですが」

「あれより強い存在か・・・考えたくもないわ。あれクラスが何人もおるだけでも充分驚異的じゃしの。貴様にじゃからこそはっきり言うが、アレは昔存在した大魔王よりおそらく強い。まあワシも大魔王全員を見たわけではないが、少なくともワシがやりあった大魔王よりは強いな。戦力の想定を大幅に間違えていたことは素直に認めねばならんよ」

「・・・最後に目的ですが、少なくともこの教会の全滅ではないでしょう。もし全滅を狙うなら、もっとうまい方法がありました。たとえば市街で暴れて騎士団を分散するとか。それをこの本部だけわざわざ急襲したのは、我々が情報封鎖するところまで見越して、その存在をまだ公にしたくはないのでは？」

「なんのために？」

「１つはまだ彼らの戦力が整っていない。また、公にするならもっと効果的な方法と場所がある。そういうことでしょう」

「もっともらしく聞こえるが、証拠は何もないな」

「ですが根拠はあります。１つは魔王の出現地域が西方に極端に多く、アルネリア教の勢力範囲外であるということ。現段階では我々にできる限り察知はされたくないのでしょう。ですが中原にクルムス公国とザムウェドが不自然な戦争状態に入ったとろから、東部地域でもこれから不審な動きが増える物と思われます。これから各国

に密偵を増やしますが、巡礼を行っている者達を出来る限り東部に集めておくのがよいかもしれません」
「なるほど・・・これから忙しくなるかもしれんな。記念式典にかこつけて各国代表に平和協定の確認をしておくか。ちなみに花火が上がるとして、貴様はどこが最適だと考える？」
「そうですね・・・私なら北方の大国ローマンズランドですか」
「ローマンズランドか・・・あそこなら我々の勢力も薄いし、何よりあの国が崩壊すれば北方は壊滅状態じゃ。それは可能性として大きいな」
「・・・とにかく私は影の部分で色々動いてみます、ではまた何か報告があれば」
「ああ頼む」

一礼して姿を再び消すミナール。入れ替わりに梔子が現れる。

「梔子よ、我々の方でも独自に調べる。口無しの連中を使って情報収集をさせよ。最近不穏な動きが無いか各国、都市、村・・・なんでもよいから情報を上げさせろ。特にローマンズランドの情報収集を最優先にしろ」
「御意」
「で、等閑（なおざり）になってしまったが、清条のとこの姫はどうしておる？」
「何も無いとこで滑って転んで池にはまり、お付きの2人助けられて現在着替え中です」
「・・・相変わらず天然アイドルドジっ子体質じゃの。後で会って同盟の話し合いをせねばならぬ。そのように伝えておけ」
「御意」

そして梔子も姿を消す。ミリアザールはこれからの事を考えると山積みな問題に頭痛がし、思わず眉間を押さえないわけにはいかなかった。

続く

アルネリア教会襲撃、その１２～戦い終わって～（後書き）

さあ、日曜恒例の二回投稿行きましょう。

次回は本日２０：００更新です。

さらにこの小説の累計ポイントが５００に達しました！　この場を借りて読者の皆様にお礼を申し上げます＞ｍ（＿＿）ｍ＜これからももっと面白く出来るように頑張っていきます！

襲撃の後始末、その1（前書き）

～あらすじ～

脅威の去ったアルネリア教会では反撃のための計画が練られていた・・・。

襲撃の後始末、その1

＊＊＊

ここは深緑宮から少し離れ、教会内の施設の一角である。深緑宮は主にミリアザールの住まいであり、大司教以下、比較的身分の高い司祭は騎士団の施設の続きに自分の仕事場を持っている。神殿騎士団は孤児出身の者・アルネリア出身の者が非常に多く、騎士団内の宿舎をそのまま自分の住居としている者も珍しくはない。とはいえある程度身分が高くなれば自分の住居を市内に構える者が多かったが、大司教であるミナールは不思議なことにいつまでも宿舎に住んでいた。

ただ彼は生活のほとんどを自分の仕事場で寝泊まりすることが多く、宿舎には帰ることが滅多になかった。そんな彼を生来の貧乏性と揶揄する者も多かったが、全く偉ぶらず、自分達と苦労を分かち合ってくれると支持する者も沢山いた。しかし彼はそんな理由のために宿舎にいたわけではなく、単に仕事がやりやすいという理由だけだったのだが。

そんなミナールが自分の仕事場に帰ると、彼付きである大司教補佐のエスピスとリネラが姿を現す。どちらもフードを深くかぶっているが、どうやらエスピスが男でリネラが女というのは僧服とシスター服の違いでわかる。そんな2人にミナールが指示を出す。

「エスピス、リネラ。貴様たちにやってもらいたいことがある。エスピスは手勢を2手にわけ、西方諸国連合とローマンズランドへ。リネラはおなじく手勢を2手に分け、クルムス公国と東側の諸国を探ってもらう。動員できる手勢は全て使って構わん。国王、王妃、大使、皇女、宰相、公爵といった主な重鎮におかしな様子がないか、特に重点的に探ってほしい」

「重鎮を、でございますか？」
「そうだ」
「よろしければ理由をお教えいただければ」
「理由がなければ働けないか？」
「いえ、そういうわけではないのですが、重鎮ともなると警護も厳しいです。目的がわかっていれば、それなりに調べもつけやすいかと」
「・・・いいだろう。今回の襲撃で、もしかすると各国首脳陣に何かしらの不穏な動きがあるのではないかと私は踏んでいる。私が仮に国崩しをやるならば、重鎮を洗脳するのが一番早い。戦争を他国に仕掛ける、国庫を無駄に消費する、内政をまともに行わない・・・暗殺もいいが、すぐに事が明るみになる。狙うなら一撃で国が大打撃を被るような人物にしなくてはならんが、中々そこまで効率的な人物はいない。国が1人の人物に寄りかかっていることなどまずないからな。すると恐ろしい話だが・・・集団で洗脳されている可能性もある」
「それはまた・・・では、どのようなことを重点的に探ればよろしいですか？」
「探って欲しいのは、後ろめたいことがある人間だ。特に浪費家、賭けごと好き、夫婦仲が冷めている、異常性癖者などなど。そういう者は、とかく弱みを持ちやすい。つけ狙われるならそういった者たちだろうな。そしてその弱みは全て押さえておけ・・・どのみちいずれ我々に有利に働く」
「わかりました。優先順位はいかがいたしますか？」
「ローマンズランドとクルムスをそれぞれ優先的に諜報活動を行う。他に質問が無ければ行くがよい。代わりに『犬』をここに呼んでおけ」
「御意」

そして音も無く部屋を出ていくエスピスとリネラ。彼らはミナー

ルと仕事をして長いため、彼が一切無駄なことをしたがらないのはよく知っている。そのため無駄口を叩かず速やかに出て行った。そしてしばらくすると窓をコンコンと叩く音が聞こえる。ミナールはその方を見もせずに話し始める。

「『犬』よ、仕事をしてもらう。これと同じ魔力反応を出す者を追え。見つけたら余計なことはせずに、その都度伝令を飛ばせ。そして私からの指示があるまでその場で待機だ。よいな」

　すると返事も無く窓がキイ・・・と開き、手だけがすっと出てくる。その手に何やらミナールが握りこませると、手は引っ込み、犬と呼ばれた者の気配も消えた。そしてミナールもまた姿を消す。ミナールが部屋に戻ってから全ての段取りを整えるまで、１０分も経っていなかった。

＊＊＊

　そのころミリアザールと清条詩乃は会見を行っていた。ミリアザール自身は東方の大陸に渡った時に清条の家とは親交があり、実際に親密であったのも８代前の清条当主だったのだが、詩乃自身にも彼女が小さいころに会ったことがある。その後詩乃はアルネリア教会にも一時期留学していたことがあり、よくミリアザールが面倒を見ていた。本来討魔協会とあまり交流の無いミリアザールとしては、とりあえずコンタクトを取れればよいと思って会見を持ちかけたのだが、まさかいきなり筆頭代行を務めることもある清条家が出向いてくるとは思わなかった。思わぬ重鎮のお出ましである。最初はこちらから出向くつもりであったため、手間が省けて楽ではあったが。

　だがそんな思いよりも、ミリアザールは純粋に詩乃との再会を懐かしんでいた。１０歳までアルネリアにいた詩乃と再会するのは実に７年ぶり。その方術の上達ぶりにも目を見張ったが、それ以上に

実の母娘のように接した二人である。栀子もその様子は見ていたし、詩乃のお伴の2人もその様子は何度も聞かされた。さぞかし感慨深い再会だろうと周囲は期待するが、ミリアザールの一言であっさりぶち壊しになる。

「しかし詩乃よ大きくなったのう・・・特に胸が。サイズはいくつじゃ？」

「えーと・・・1年前は９６だったんですけど・・・」

「な、何い！？　くそ、１０歳のころからその徴候はあると思っておったが・・・おのれ！」

「ミリアザールは変わりませんね、全く」

「キーッ！」

「教主様、色々ぶち壊しです・・・」

後ろでため息をつく栀子。敗北感に打ちひしがれるミリアザールをよそに、詩乃は両手でその豊満な胸をことさら強調するようなポーズをとる。もちろん意識しているわけではない。

「最近また大きくなったみたいで・・・どうしましょう。肩は凝るし、大変なんですよね」

「ちょっとまて・・・今一体ソレはいくつあるんじゃ？」

「さあ？　私は上に何もつけてないので全く分かりません」

「ちょっと待て、つけておらんのか？」

「はい、巫女の正装は何も付けないのが基本ですから。特に方術を使用したり、清めの儀式が多い私はつけないことが多いですね。ちなみに下もはいておりません」

「・・・男が聞いたら鼻血で出血死ものの発言じゃのう。そのムチムチっぷりで、その容姿で、その恰好で、その頭のユルさじゃからのう」

「えへへ～それほどでも～」

「いや、詩乃様、褒められてませんって」

東雲が突っ込むが、詩乃は顔を赤らめてキャッ、とかいいながら照れている。もう一人の薙刀を持った巫女、どうも式部というらしいが、そちらはいたって平然としている。東雲はわかりやすい性格だが、ミリアザールはいまいちキャラのつかめない式部の人物像をつかもうと話しかけてみる。

「ところで式部殿も巫女のようだが・・・やはり下はその・・・」
「はい、何も」
「東方は皆そのような習慣なのか？」
「残念ながらそんな助平な世界ではありません。詩乃様は本家におられるときは儀式や修行の関係上、朝のお清めから始まりそのまま瞑想に入られるため、そういったものを装着する時間が少ないので、つけてないのが習慣となっただけの話。まあ単純に詩乃様がしょっちゅううっかり履き忘れただけ、という話もありますが」
「しょっちゅうかい！」
「ちなみにだいたい私がひっぺがしております」
「いやお主、仮にも主人に何をしとるんじゃ？　で、貴様はなんではいておらん？」
「趣味です」
「いつの時代の健康法じゃ？」
「健康法ではなく、露出趣味です」
「言い直さんでよい！」

ミリアザールはまた頭痛が再発した気がした。

「詩乃、お主も苦労するのう」
「いえ、どちらかというと私が式部に迷惑をかけているというか」
「その通りです。帰ったらお仕置きですよ、詩乃様」

なぜか茶々を入れてくる式部。

「は、はい・・・」

「お主ら、どっちが主人じゃ？　そしてなぜ詩乃は顔を赤らめる？」

「お子様は知らなくてよいことです」

「いや、ワシより年上とかいないから。ワシがわからん事情って」

「大人の事情です」

「どこの世界の話じゃ！」

「あなたの知らない世界」

式部がニヤリとする。その時ミリアザールはこの女が自分の天敵となることを確信した――。

「と、まあふざけるのはここまでにしましょう」

詩乃が話を元に戻す。

「ワシ、なんか疲れたわ・・・。じゃが、会見は別じゃ。詩乃、そなたがここに出向いたということは」

「はい、それがそのまま討魔協会の返事と考えていただいて結構です」

ぺこりと詩乃が例をした。その様子に安心したように息を漏らすミリアザール。

「ありがたいことじゃ。じゃが討魔協会がそんなに命令系統が一本じゃったとは意外じゃな。だからこそ今回はお主に助けられたわけじゃが。礼を言うぞ」

「いえ、そんな・・・ただ今の当主は剛毅な方ですから。しかし反発する動きが多いのも確か。決定事項には一応全員が従わなければなりませんが・・・」
「本当に『一応』ということも考えられるということじゃな」
「残念ながら」

詩乃は申し訳なさそうにするが、ミリアザールにしてみれば妥当であった。自分が同じ立場でもそうしたかもしれない。ただ事情が切迫していることを知れば、多少は変わるかもしれないのだが。

「詩乃、東の大陸では最近魔王、お前達の言い方でだと『大鬼』か？　は出ておらんのか？」
「最近は特に」
「戦乱の気配は？」
「ここ何十年か、変化はありません」
「ふむ・・・」

ミリアザールは思わず腕組みをして考え込んだ。

「（詩乃の言うことが事実だとすると、奴らの狙いはこの大陸だけなのか？　それとも単にまだ東には手が回っていないだけなのか・・・最悪なパターンとしては、やることは既にやり終えているとも考えられるな。さて・・・どこまでこの詩乃を信じたものか。こちらでも独自に調べたいが、東方は事情がこちらと違うからな。こちらの大陸では諜報活動はあまり重きを置かれていないからワシの口無しだけでなんとかなるが、東方の大陸はあまりにも諜報活動が発達しておって、ワシの子飼いの連中では返り討ちが関の山じゃ。それゆえ向うの事情がわからんわけだが・・・とりあえず後で考えるか）」

先に片づける問題はいくらでもあるはずだとミリアザールは考え直す。だがこの時、討魔協会との関係はもっと見直しておくべきだったと、彼女は後で後悔することになる。といっても、どうしようもない出来事だったのかもしれないのだが。

「詩乃よ、どのレベルで協定を結ぶかじゃが・・・そちらは同盟の準備はあるのか？」

「いえ、そこまでは。私はまずは共闘が妥当ではないかと思います」

「ワシもそうじゃ、何せ大陸をまたいでおるからな。互いの大陸では勝手も違うじゃろうし、まずは共闘関係で人材交流を行い、それぞれの事情を確かめるのが一番かの」

「私もそのように考えます」

「ではどういった手筈でいくかを細かく考えていこうかの」

「はい！」

ここから2人は細かな話し合いに移って行く。ともあれミリアザールの目論見より早くアルネリア教会、魔術教会、討魔協会の協力関係が結ばれた。だがその内容はミリアザールの理想とすべき状態とはまだまだ程遠い物であることに、この時彼女は気が付いていなかった。

続く

襲撃の後始末、その１（後書き）

次回投稿は１２／１３（月）１１：００です。

感想・ご指摘なぞありましたら、遠慮なくどうぞ。

襲撃の後始末、その2（前書き）

～あらすじ～

ドゥームにダメージを与える、ジェイクの秘密とは・・・？

襲撃の後始末、その２

＊＊＊

数日後――

深緑宮の改修も始まり、破られた外壁も見かけ上は取り繕われた。深緑宮はミリアザールにしてみれば広過ぎたのでちょうどいいと主張したのだが、最初に建てた時も同じ問答をして、「教主たるもの、これぐらいの場所に住まなくてどうしますか！」と言いくるめられた気がする。彼女を崇める立場にある者としては、自分達の主が威厳がある方がよく、ミリアザールを普段拝めない分、建物だけでも威厳ある物にしたいというのが周囲の考えだった。ミリアザールも最初は嫌がったが、予算の許す範囲でならということで渋々承諾させられた。無駄遣いをほとんどしないミリアザールだから、予算など毎年余っていたのでその繰越金を使えばいくらでもお釣りはきたのだが。

だが今回の襲撃で出たのは建物的な被害よりも、やはり人的被害が多きい。最終的な死者数３７８名――これはここ何十年かのアルネリア教が出した死者数で最も多いものであった。アルネリア教は前に述べたとおり孤児出身が多いものの、それらは死者のうち１００も数えず、また孤児であっても現在家庭を築いている者も多かったから、人が死ねばどうしてもその報告をせざるを得なかった。表向きは何もなかったことにしたかったミリアザールであったが、何も無く済ませるには少し事件が大きすぎた。どこからともなく少しずつ噂は広まり・・・やがてそれは各国にも知れることとなる。

ミリアザールもその事は覚悟してはいたが、アルネリアの市民が今回の事件にかこつけて教会を非難するようなことが無いのは救いだった。アルネリアの市民もよく教会の気持ちは分かっていたのだ。

これも普段の善政と、死者に報告をした者達の対応によるものだろう。優れた集団と言うのはすべからく中間層に良い人材が多くいる。直接ミリアザールが指示を飛ばさずとも、その意をくんで上手く立ちまわれるものは非常に多いことがアルネリア教会の真の強みなのかもしれない。

そういった事後処理もほぼ終了し、通常業務にミリアザールが戻れるようになるころ、ジェイクは彼女に呼び出された。

「何か用か、ぺったんこ」
「ああ。真面目な話じゃ」

ミリアザールがからかうのに応じない。またその表情で真剣な話だとジェイクもすぐ気付いた。

「・・・何の話？」
「奴らが最後に残したセリフ、覚えておるか？」
「ああ、何か俺に恨みを持ったみたいだったね。それにリサ姉のことも知ってるみたいだった」
「実はリサ達にはこっそり護衛をワシがつけてある。それゆえ大抵のことは大丈夫だし、またリサの周りにいる奴らも相当強い。あの小僧程度なら彼女達は当座心配いらないかもしれないが・・・」
「要は俺は完全に標的ってことだよな？　で、俺がリサ姉の足かせになるかもと」
「言いにくいがその通りじゃ」
「だよな・・・俺はどうしたらいい？」
「うむ・・・」

ミリアザールはジェイクの切り替えの早さに感嘆するとともに、少し言い出しにくくもあった。いずれはしようと思った話ではあっ

たのだが、いくらなんでも１０歳の少年にとって早いのではないかと考えていたのだ。

「ジェイクお主・・・神殿騎士団に入れ」
「わかった」
「いや、いきなり決断しろとは言わないから・・・って、いいのか！？」
「今でもやってることあんまり変わらないだろ？　ならいいよ」
「だがしかし騎士団に入れば生活は拘束される。少年らしい自由はなくなってしまう。ワシはそれを心配してじゃな・・・」
「かまやしないさ。俺は人生全てリサ姉のために使うって決めたんだ。男だったら自分の言ったことを曲げたら駄目だろ？」
「こいつ・・・口だけは一人前じゃ」
「当り前だっての・・・いてっ！」

ミリアザールがこつんとジェイクの頭を殴る。ミリアザールはこういった気概ある若者を沢山見てきたが、彼らの成長は彼女の楽しみでもあった。

「では今日中にでも手続きをしておこう。まずは外周部の部隊に所属させる。そのため深緑宮には自由な出入りはできなくなる。だが守衛には話は通しておくから、手続きが必要にこそなるものの出入りは出来るようにしておく。チビ達にはきちんと話はしておけよ？」
「わかった」
「またラファティないしアルベルトとは、必ず鍛錬の時間をもうけさせる。少なくともあ奴らに近い実力を身につけんと、リサを守るなど不可能じゃからな」
「どのくらいであそこまでいける？」
「先を急ぐなと言いたいが、全てお前次第じゃ・・・まあ１年後にどのくらい強くなっているかじゃな」

「そっか・・・やってみないとわからないか」
「こればっかりはな」
「話はそれだけか？」
「ああ、とりあえずはな」
「じゃあネリィとかに説明してくるよ。また戻って来る！」
「うむ」

ジェイクは小走りに部屋の外に出ていき、それを見てからミリアザールはアルベルトとラファティを呼ぶ。

「お呼びで？」
「うむ、ジェイクは今日から神殿騎士団団員じゃ。じゃが奴には魔術訓練・戦闘訓練・勉学を優先させよ。お主たちとの訓練も優先して毎日行わせる」
「それは・・・大変ですね」
「ああ、色んな意味でな。肉体的にも限界に近い毎日が続くじゃろうが、それよりも精神的にきつくなるだろう。周囲には理解されずやっかまれ、同世代には敵視される危険もある。かつてお主たちがそうだったようにな」
「・・・そう、ですね」
「じゃがそれは奴が選んだ道じゃ。そこまでわかっておるかと言う気はするがな・・・だがジェイクは鋭い。言葉では表現できずとも、なんとなくはわかっているかもしれん」
「その可能性は高いかと」
「じゃがどれほど大人びていても所詮は子ども。お主らだけでもちゃんと見守ってやれよ？」
「「御意」」
「それでも間に合わんとは思うがな・・・奴らは早ければ今にでもやってくる。ジェイクが強くなるまでなど、待ってはくれんじゃろうな・・・」

「ミリアザール様、１つ質問が」

アルベルトが尋ねる。

「なんじゃ？」

「ジェイクのあの能力・・・あの少年にダメージを負わせたあの能力はなんでしょうか？　聖別をほどこした我が剣や、ミリアザール様の拳より有効だったように思えたのですが」

「ワシも確証はない。だがなんとなく推測はついておる」

ミリアザールは手を顎に当てながら話す。

「それはどのような・・・」

「お主ら、聖騎士の発祥は知っておるか？」

「発祥・・・ですか？」

アルベルトとラファティは顔を見合わせる。

「うむ。まだ大戦期といわれる時代、大魔王が存在していた時代のことじゃ。魔王の中に死霊・悪霊の軍団で構成されておる奴らがおっての。当時はアルネリア教もまだ軍隊としては用を成しておらず、神殿騎士という概念も無かった。そのため通常の武器が効かない死霊・悪霊の類いを倒すためにはシスター・僧侶が前衛に立たなくてはいかんくての・・・多くの死者を出した」

「・・・」

「そんな折、とある若者が召し出された。彼は何の練成や聖別も施しておらんなまくらの銅の剣で、悪霊の群れを次々切り刻んでおった。もちろん彼の真似ができる者など誰もおらんかったが、彼の戦い方を見て現在の神殿騎士の概念が出来たと言ってもよい。それから死霊や悪霊を倒せる騎士・剣士を指して『聖騎士』という概念が

発足したというわけじゃ」
「ではジェイクは聖騎士の能力を?」
「それはわからん。ワシもその聖騎士の戦いを見たのは数回じゃ。同じ戦線におりながら別の方面を受け持つことが多かったでの。じゃがジェイクに関してはその可能性が一番高いのではないかと思っておるよ。だからこそお主達に鍛えて欲しい。もしかするとあのドゥームと呼ばれる存在に対する切り札になるかもしれん。もっとも護衛の意味も含めてはおるが」
「「御意にございます」」
「しっかり頼むぞ・・・全く、何をするにしても時間が足りんのぅ・・・」

ミリアザールは思わず天を見上げた。最初は有り余る力で色々なものを守り始めたミリアザールだが、そのたび守るべきもの、守りたいものは増えていき、その都度必要とされる力を求めていく・・・この連鎖を繰り返しながら過ごしてきた。そして繋がりは増え、今では守りたい者が多すぎるくらい存在する。ラザール家、ミランダ、アルフィリース、リサとチビ達、アルネリア教会に属する人間達・・・。その全てをこの戦いを通して守りきれるだろうかと思い悩まざるをえないミリアザールだった。

続く

襲撃の後始末、その２（後書き）

さて、次は閑話休題、というわけでもないですが、ややサイドストーリー。

次回投稿は１２／１４（火）１２：００です。

討魔協会の長（前書き）

～あらすじ～

東の大陸に帰還した詩乃。彼女を出迎えたのは・・・？

討魔協会の長

＊＊＊

さらに時間は経過する。清条詩乃は報告のために討魔協会に戻っていた。

「清条詩乃とその部下2名、ただいま戻りましてございます」
「うむ、詩乃のみ入るがよい」

部屋の中から強い声が聞こえる。詩乃は東雲、式部の2人を振り返ることなく襖を開け、部屋にしずしずと入り、襖を閉める。

「失礼いたします」
「役目御苦労。長旅のところ疲れもあろうが済まぬな」
「いえ、これも役目にござりますれば」

詩乃の前でゆったりと胡坐（あぐら）を組んで構えるのはひげを蓄えた壮年の男性。４０を少し上回ったぐらいであろうか。やや長い髪を後ろで1つにくくり、威厳こそあるものの年齢の割に好戦的な容姿をしている。彼がこの討魔協会の筆頭である、浄儀白楽（じょうぎはくらく）である。

討魔協会は魔術教会やアルネリア教会と違い、家柄を重んじる集団である。その主軸には名家４家が存在し、筆頭は大抵そのどれかが持ち回りで務める。だがこの浄儀白楽はどの家の出自でもなく、実力で――といえば聞こえは良いが、言ってしまえば力づくで筆頭の座をもぎ取った人間であった。だがその実力は確かなものであり、またとびきりの野心家でもある。彼が筆頭となってから討魔協会は確実にその勢力を伸ばしており、またうまい汁は部下にも惜しみなく与えるため、彼に反発を持ちつつも誰も逆らえないのが討魔協会

の現状である。
　この状態を堕落の始まりと懸念する声も多いが、協会全体としての結束力は歴代で最高でもある。その中で清条家は中立の立場を取っており、余計な権力争いには加わらないことを決めていた。清条家の一員である詩乃もその方針に賛成ではあるが、今回アルネリア教との交渉に当たり白羽の矢を立てられてことで他の家にやっかまれており、彼女は無用な権力争いに巻き込まれることを最も気に病んでいた。
　そんな彼女の様子を品定めでもするかのようにゆっくりと見る浄儀白楽。だがもったいぶった問答が嫌いな彼は単刀直入に用件に入る。

「前置きはよい。交渉は予定通り進んだか？」
「はい。筆頭の目論見通り同盟ではなく、人材交換からの共闘関係となりました」
「ふむ、まあここまでは妥当か。どの程度の策士かと思ったが・・・１０００年生きる魔物と言えど、並のおつむの程度か。いや、まだそう判断するには早いか。のう、詩乃？」
「はい、ここでどのような人物をこちらに送り込んでくるかで決まると思います」
「ふぅむ、まずそうじゃろう。こちらからいきなり詩乃を送り込んでくるとは予想外だったろうからな。先手はこちらが取れた。次は向うの手番というわけか、まずはお手並み拝見といこう。だがもし俺があの魔物の立場だったらば・・・」
「ならば？」
「お前を自分の味方に抱き込むな」
「！　御冗談を・・・」

　白楽の意地の悪い問いに、詩乃の背中に冷たいものが流れる。

「違うのか？　貴様がそうすると面白いと思って使者に立てたのだがな」
「お戯れを・・・私の忠誠は討魔協会に捧げましてございます」
「それはいうなれば俺への忠誠と考えてもいいのか？」
「もちろんでございます」
「俺の命令は絶対だな？」
「はい」

白楽の問いに即答する詩乃。その瞬間、白楽はニヤリと口の端を歪めた。

「では命令する。今ここで俺に抱かれろ」
「！　それは・・・」
「どうした？　貴様の言葉は偽りか？　たった今俺の命令は絶対だと自分で言ったぞ？」
「ですがしかし・・・」
「お前は既に間者の容疑をかけられている。元々貴様がミリアザールに師事していたことは周知の事実であるし、これは俺に限らず他の3家からも同様の意見が出ている。その潔白を証明する機会をやろうと言っているのだ。巫女である貴様は、純潔でなくなれば力が落ちる。野心無しと訴えるには、俺にその身を捧げるのは手っ取り早い手段だと思うがな・・・」
「・・・・・わかりました」

詩乃が立ちあがり、その衣服に手をかけていく。帯を外し、袴と白衣を脱ぐと襦袢一枚を羽織るのみとなる。その下には彼女の生まれたままの姿しかない。だが襦袢にかける手にも詩乃には一切のためらいがなかった。一気に脱ぎかけたその時、

「そこまで！」

白楽の鋭い声が響き、ピタリと詩乃の手が止まる。

「くく、相変わらず見かけに似合わぬ女丈夫よ・・・だからこそ貴様はよい」

「お試しでございましたか」

「半ば本気ではあった。貴様が瞬間たりとも躊躇しておったらそのまま組み伏せていたな。・・・もう服を来てもいいぞ」

「・・・承知いたしました」

あくまで詩乃は表情を崩さなかった。そんな詩乃を楽しげに見る白楽。

「だが女にとってはその体も交渉材料・・・特に貴様のような男がそそられる肢体を持つ者にとってはな。これだけはワシも真似できん。上手く使えば清条の家は昔のような勢力を取り戻せよう。もっともそのためには貴様が俺の愛人になるのが一番早いとは思うがな」

「・・・以上で御用件はお済でしょうか?」

「くく、そう急くな。あと2つだけある。アルネリア教会は乗っ取れそうか?」

「・・・戦力は高いです。個々の兵も士気高く、よく鍛錬されています。我々と互角程度の戦力は有するかと。ですが計略を練る人材が我々に比べ少ないようです。正面きっての戦争よりは、計略・交渉を絡めた戦略が有効かと。徐々に向うの勢力を削れましょう」

「なるほど、ではもう1つ。もしミリアザールを討ち取れという命令を俺が出せば・・・貴様はどうする?」

「命令とあらば討ち取るまで」

「即答か」

「まだ私の忠誠をお疑いとあれば、ここで式神や式獣とでも契って見せましょうか?」

「ふん、そのような下世話にくれるには惜しい女よ。女の武器は使いどころを間違えるな・・・もう用は無い。下がれ」
「失礼いたします」

一礼して下がる詩乃。感情を一切表に出すことはないが、わずかにその手や膝は震えている。その様子をさも愉快そうに眺める白楽。
外に出た詩乃を迎えたのは心配そうな顔をした2人だが、彼女は2人に合図することも無く、そのまま自分の控室に戻る。その瞬間、彼女はへたへたとその場に座り込んでしまった。心配した2人は詩乃に擦り寄るが、彼女は半ば放心状態であり、その体が小さく震えている。

「詩乃様、お加減は大丈夫ですか?」
「あんのエロおやじ・・・ゆ　る　さ　ん　!」
「よいのです。清条家の立場を考えればやむなきこと・・・私が耐えればそれでよいのです」

体をかき抱くようにし、自分の震えを押さえようとする詩乃。だが中々その震えは止まるものではない。

「(ミリアザール・・・私はどうするのが一番良いのでしょう?清条家を潰したくない、でも貴女の敵にもなりたくない・・・私はどうすればいいの??)」

小さい頃ミリアザールに師事した日々を思い出す。彼女は魔術、学問、教養、戦闘技術、果ては下町のおいしい焼き菓子屋まで教えてくれた。詩乃と背丈こそ変わらなかったが、彼女にとっては第2の母といっても良い存在だった。だが状況次第では彼女は敵になる。わずらわしいことなど何もなかった幼い頃を偲ぶ詩乃であった。

続く

討魔協会の長（後書き）

彼らが物語に絡んでくるのはもう少し先のことになるかと。ここでは顔見せ程度です。

次回投稿は１２／１５（水）１２：００です。

登場人物紹介～アルネリア教会編～（前書き）

今回は新キャラ沢山出てきたので、一度まとめを。ここにしかない情報もあり。伏線だったり、そうでもなかったり。また本文中でも多少はふれられることがほとんどだとは思います。

登場人物紹介～アルネリア教会編～

名前：ジェイク（名字は彼も覚えていない）
年齢：１０
身長／体重／容姿：：１４０ｃｍ、４３ｋｇ、標準的な栗毛・短髪に茶色の瞳
職業：神殿騎士見習い
好きなモノ：リサ、肉、強くなること
嫌いなモノ：リサにちょっかいをだすもの、緑の野菜、うっとうしい奴、勉強
一人称：俺
プロフィール：
　リサに拾われた孤児であり、作中の紹介の通りである。今までは特に目標も無く、その日暮らしをしていたが、リサにプロポーズをしてからは一心不乱に立派な男になるために鍛錬をしている。
　現在はミリアザールの元でアルベルトやラファティに鍛えられながら、文字を練習中。読み書きができるようになったら、学校に通うらしい。
　なお本人は気づいていないが、既に一般の兵士とはそこそこ打ち合えるくらいの腕前になっている。

名前：梔子（くちなし）
年齢：３２
身長／体重／スリーサイズ／容姿：１６５ｃｍ、５２ｋｇ、８２／５７／８３、標準よりはやや濃い茶色の短髪・茶色の瞳
職業：ミリアザールの直下、口無しの現頭首であるくの一。普段は女官としてミリアザールの補佐をする。
好きなモノ：仕事、後輩教育、整理整頓

嫌いなモノ：だらしない者、怠惰な者、言い訳する者（ようはミリアザールに当てはまる）
一人称：私
プロフィール：
　ミリアザールが直接使役する暗殺集団である、口無しの現頭首である。普段は女官としてミリアザールの傍に仕えるが、その戦闘能力はラザール家の者と比べても何の遜色もないと言われる。一応ラザール家にもその存在は秘密だが、身のこなしが普通ではないし、アルベルトやモルダードはなにかしら気づきつつも（だいたいミリアザールが普通の人間を傍に置くはずがない）、あえて何も聞いていない。
　梔子とは代々の頭首に与えられる呼称であり、元は別の名前があった。彼女自身は純粋な口無しの出であるが、その役目自体には昔から懐疑的であった。ゆえに何かにつけてミリアザールに意見をするが、だからこそミリアザールが傍においているのである。
　性格はけっこうきつめであり、自分にも部下にも容赦ない。整然とした美人であり、実は騎士達からもそこそこ人気があるのだが、本人は全く相手にしていない。だが昔任務で男を籠絡した時に自分も身籠ってしまい、一児を出産したことはある。
　口無しという組織だが、ミリアザールがアルネリア教としての前身を作った時に既に発想はあった。最初は純粋な情報組織だったのだが、４００年ほど前、初代の梔子を雇い入れた時に戦闘部門も発足した。各都市に数人～数十人の口無しが潜伏しているとされ、何かおかしな動きや情報を掴めば、全てミリアザールの元に届くようになっている。彼らは普段は普通の生活を営んでおり、結婚している者も少なくない。だが彼らが口無しであることは、たとえ伴侶であっても決して知ることはない。
　戦闘担当の口無しは現在でも数百人はいるとされ、男もいるが、頭首は代々女が務めることになっている。また養成所はミリアザールが買い上げた私領地にて養成されており、数千人の者が暮らして

いると言われる。外見上、見た目には普通の都市となっている。

名前：ラファティ＝ファイディリティ＝ラザール
年齢：２０
身長／体重／容姿：１７７ｃｍ、６８ｋｇ、短い金髪・緑眼
職業：神殿騎士（二刀流）
好きなモノ：ベリアーチェ、ジャスティン、鍛錬、読書
嫌いなモノ：魚（昔は）、ベリアーチェとの仲を邪魔するもの
一人称：私
プロフィール：

ラザール家の二男で、アルベルトの弟。既に人魚のベリアーチェと結婚して、一児をもうけている。ベリアーチェとのなれそめは、また番外編にて詳しく。

そのベリアーチェとの仲は非常に熱く、ミリアザールに限らず「深緑宮のバカップル」として認識されている。だが本人は戦闘を担当するアルベルトの副官であり、訓練の時には部下から恐れられる恐怖の戦士である。またいつも笑みを絶やさないことから、『微笑みの悪魔』と呼ばれている。

アルベルトがあまりに強いゆえに目立たないが、既に父モルダードを越える程の腕前は有しており、双剣使いとして、大陸でもかなりの上位に入る。

ちなみに魚介類が苦手だったが、ベリアーチェの料理には毎日何かしら並ぶため、無理矢理好きにさせられた。

名前：ベリアーチェ（人魚に名字はない）
年齢：２２
身長／体重／スリーサイズ／容姿：１６０ｃｍ、５０ｋｇ、８５／６０／８６、蒼く腰まである髪に蒼い瞳
職業：深緑宮の護衛、人魚

好きなモノ：ラファティ、ジャスティン、泳ぐこと、魚料理
嫌いなモノ：ラファティとの仲を邪魔する者
一人称：私
プロフィール：
詳しくは番外にて述べるが、人魚であり群れとはぐれて遊んでいるところを人間に捕まえられた。そのままオークションに売り出されたところを、たまたまその話を耳にしたミリアザールに買い上げられた。
そして深緑宮に住まうことになったベリアーチェは、やがてラファティと恋に落ちる。彼がラザール家として背負う者を全て理解したうえで、彼女はラファティと結婚することを受け入れた。現在は一児をもうけ、幸せの絶頂期である。
そんな彼女は普段深緑宮の女官であり、ミリアザールの世話をしている。ミリアザールに借金があるため、恨み事を言いつつも、懸命に働いている。
唯一の悩みはジャスティンを産んだことで、体型が以前ほどスリムではなくなり、ロクサーヌに負けているのではないかと気にしている。
なお怒らせると無言で水の矢を連発してくるため、結構周りの騎士達は気を使っている。

名前：ロクサーヌ（名字は事情により捨てている）
年齢：３６（見た目は２０）
身長／体重／スリーサイズ／容姿：１７２ｃｍ、５５ｋｇ、８４／５６／８３、肩までの金髪・グレーの瞳
職業：エルフの剣士
好きなモノ：剣の鍛錬、ベリアーチェとのおしゃべり
嫌いなモノ：軟弱な男、エルフ、猫
一人称：私

プロフィール：

何かにつけて弱腰・ひきこもりがちなエルフに嫌気がさし、里を飛び出した変わり種のエルフ。また魔術よりも剣が得意なことも変わっている。性格は正義感が強い半面、思い込みが強く猪突猛進型。また情が本来はかなり深いタイプ。

傭兵をしながら各地を転々としていたが、ある時アルベルトが任務で戦う姿を偶然目にし、その剣技に惚れこんで深緑宮まで押しかけ、そのまま護衛にまでなってしまった。そしてアルベルトに剣の稽古をつけてもらううちに、ついに彼本人にまで惚れこんでしまった。

だが告白の結果、見事に玉砕。既にアルベルトには心に決めた人がいるのではと知りつつも、いまだに彼の事が好きである。

緑の多い深緑宮での生活は彼女も気にいっており、また深緑宮には強い騎士も多いため鍛錬には事欠かない。ベリアーチェと言う親友も得、現在の生活には満足しているようだ。最近はジェイクの鍛錬に付き合うこともしばしば。

名前：マナディル＝オードビル
年齢：５８
身長／体重／容姿：１７５ｃｍ、７０ｋｇ、本来は金髪だが、現在は残念なことに。なお瞳は茶色
職業：大司教
好きなモノ：説法（説教ともいう）、鍛錬、仕事、妻
嫌いなモノ：サボる最高教主、だらける最高教主、すぐに駄々こねる最高教主
一人称：私
プロフィール：

アルネリア三大教主の一人。若き頃よりその将来を嘱望され、なるべくして大司教の座に就いた英才。その人格・実力は申し分なく、

ミリアザールも口うるさい奴と思いつつも、かなりの信頼を置いている。そのため、あまり表に出ないミリアザールに代わり、実質的な教会の対外行事を取り仕切る役目を負う。

若かりし頃は才能もそうだが、その飛びぬけて美麗な容貌から有名であった。あまりにも女官が騒ぐので（口無しのメンバーですら何かにつけて褒めていた）、ミリアザールはからかいがてらマナディルの寝室に忍び込んだ事がある。だがあまりにうろたえるマナディルがいたたまれず、彼女が自分の身分を明かすと、「最高教主がなんたる体たらく！」と、正座で一晩中説教された。二人はその時からの腐れ縁である。ちなみに現在はその美麗な容貌、特に頭が残念なことに・・・と言っているのも教会中の全員である。本人もちょっと気にしている。

なおマナディルはミリアザールが魔物であることを一目で見抜いたわけだが、彼女の人柄に触れるにつれ、より一層の忠誠を誓うようになった。よく堅物の代名詞と語られる彼だが、信念は固いが発想自体は柔軟である。

得意な戦い方はミリアザールと同じく、魔術を拳に纏わせての格闘戦だが、純粋に破壊の力を使うミリアザールと異なり、マナディルは魔術も多用するし、拳に付加する魔術の効果は様々である。そのため戦い方の多様性はミリアザールよりも応用が効く。

名前：ドライド＝ノークティア
年齢：５６
身長／体重／容姿：１７７ｃｍ、６８ｋｇ、白髪（本来は茶色）、茶色の瞳
職業：大司教
好きなモノ：仕事後の一杯、語り合い、勉学、遠乗り
嫌いなモノ：マナディル、変化の無い体制、貴族
一人称：私（昔は俺。現在の地位に就いてからは『私』）だが、マナディルと二人になると戻る）

プロフィール：
　アルネリア三大教主の一人。彼は元より将来を嘱望されたわけはなかったが、何かにつけて反抗的な若者がいるとして有名だった。だが口無しの調査ではかなり勤勉な若者であると報告され、興味を持ったミリアザールが自ら彼の元に赴いた。
　最初は身分を隠そうとしたが、彼もまたマナディル同様彼女を一目で魔物と見抜き、退治しようとまでした。だがミリアザールの知性・考え方に触れるにつけ彼女を尊敬するようになり、やがて彼はラザール家も顔負けの努力にて大司教の座にまで上り詰めた。
　その過程で基本的にまじめ一辺倒のマナディルとはぶつかり合うことが多く、互いにいがみ合いながらも、火急時は誰よりも息が合うという、親友と書いて好敵手と読むような関係を続けている。
　彼は心からミリアザールを尊敬する一方で、批判家として非常に厳しい意見を述べることも多く、ミリアザールも彼には一目置いている。マナディルとは違い、彼は主に教会内部の懸案を担当する。

名前：ミナール＝ルーベンス
年齢：４８
身長／体重／容姿：１６５ｃｍ、５７ｋｇ、茶色の髪・瞳
職業：大司教
好きなモノ：仕事
嫌いなモノ：失敗
一人称：私
プロフィール：
　三大司教の一人。彼を抜擢したのはミリアザール本人であり、これは長いアルネリア教の歴史の中でもかなり異例の出来事である。
　この時ミリアザールは前身の大司教が退任したことでかなり人事に困っており、誰かいい人材を探しているところであった。だがマナディルやドライドに比べると誰も適正な人物がおらず、困ったミ

リアザールが目を付けたのがミナールであった。
彼は幼少より教会に在籍しているにも関わらず、一度もミリアザールがその名前を聞いたことも無く、また役職も平の僧兵のままであった。だが彼が絡んだ任務はほとんど死傷者が出ておらず、また負傷者も極端に少ないことに注目したミリアザールが直に会いに行くと、「やっと私の所に来たか。数百年生きる魔物も、結構間抜けと見える」と言われた。その言葉はミリアザールの注目を引くのに充分であった。
彼は自力でミリアザールの経歴を調べたのであり、その調査力・頭の回転に目を付けたミリアザールがミナールを大司教に抜擢した。その時わずか３４歳。歴代最年少の大司教として彼は名を残すこととなる。
一般的な実務では彼は何をしているのかはかなり不明になっているが、実際には教会の裏の仕事を口無しの面々と協力して行っていることが多く、マナディルやドライドよりも忙しい。部下その仕事の特殊性から孤立していることが多いので、謎で地味な大司教として彼は教会の人間には認知されている。

名前：モルダード＝ファイディリティ＝ラザール
年齢：４７
身長／体重／容姿：１８０ｃｍ、７５ｋｇ、金髪・緑眼
職業：神殿騎士（大剣使い）
好きなモノ：鍛錬
嫌いなモノ：酒
一人称：儂
プロフィール：
アルベルト、ラファティの父であり、前神殿騎士団隊長。現在は副長として息子のアルベルトを補佐する。彼もまた相当な腕前だったのだが、アルベルトという才能あふれる息子に敗れる結果となっ

た。

なお彼には三人の息子がおり、ラファティの６つ下にもう一人息子がいる。

登場人物紹介～アルネリア教会編～（後書き）

これだけでは物足りないでしょうから、本日１２／１５、１５：００にさらに投稿します。

登場人物紹介～討魔協会編～（前書き）

引き続き人物紹介。しばらく出てきませんが、一応ここで

登場人物紹介～討魔協会編～

名前：清条詩乃（きよじょうしの）
年齢：２０
身長／体重／スリーサイズ／容姿：１６１ｃｍ、５５ｋｇ、９８／６０／８６、黒の腰までの長い髪・黒い瞳
職業：討魔協会四大名家、清条家筆頭。巫女
好きなモノ：縁側でのお茶、昼寝、お菓子のつまみ食い（ミリアザールに教えられた）
嫌いなモノ：怖い話、いかつい男の人、毛虫
一人称：私
プロフィール：
　東の大陸にある討魔四家の内、清条家の筆頭を務める女傑。その法力（アルフィリース達の大陸で言うところの魔力）・方術の威力は東の大陸でも随一と言われている。だが本人は非常に大人しい性格であり、また清条家が現在そこまでの隆盛を誇っていないことからも、討魔協会内での彼女の肩身は少し狭い。だがそのことを彼女自身は苦に思ってはいない。むしろそのような権力闘争を行うことこそを忌み嫌っている。
　彼女は幼少の頃ミリアザールの元に留学していた経歴を持ち、ゆえに彼女とも仲が良い。その時にミリアザールに最高峰の教育を施されたため、本人の能力も相まって同時代の女性としてはかなり博識である。だが本人がミリアザールいわく『天然アイドルドジっ子体質』であるため、その事はあまり他人に認識されない。また人の名前を覚えられないと言った欠点のせいでもある。
　またミリアザールが羨むほどの胸の持ち主であり、割と本人がぼうっとしているせいで無防備な体勢をとることも少なくないため、お付きの東雲の気苦労が絶えない。式部の方はむしろ喜んでいるのだが。

彼女もまた討魔協会の義務のため、望まぬ戦いに身を費やしていくこととなる。

名前：東雲桜花（しののめおうか）
年齢：２７
身長／体重／スリーサイズ／容姿：１６８ｃｍ、５８ｋｇ、８４／５９／８６、長い黒髪を一つに束ねている・黒い瞳
職業：侍
好きなモノ：詩乃、温泉、滝行、料理
嫌いなモノ：辛い食べ物、蜘蛛
一人称：私
プロフィール：
詩乃が幼少の頃より仕える侍。彼女の一族は代々清条の家に仕えるのが使命である。年こそ少し違うが、詩乃のことを主人と思いつつも、妹のように、親友のように接する侍である。だがいまだに式部と間違われるのを少し悲しんでいる。
詩乃が戦うことを好まないため滅多に剣も振るわないが、戦えばかなりの腕前である。詩乃がのんびりした性格でしょっちゅうお茶に付き合わされるため、自分の体が鈍りそうなことをいつも心配している。

名前：式部都（しきぶみやこ）
年齢：　２６
身長／体重／スリーサイズ／容姿：１５８ｃｍ、５３ｋｇ、８０／５５／８２、黒の比較的短い髪に・黒い瞳、眼鏡
職業：武者巫女
好きなモノ：詩乃（ちょっと別の意味で）、詩乃をいじめること、詩乃で遊ぶこと、女全般、戦い

嫌いなモノ：詩乃が自分以外に弄ばれること、男、生意気な子供
一人称：私
プロフィール：
　東雲より遅れること一年くらいから詩乃に仕える女性。巫女と侍の中間のような性質を持つ武芸者である。ちなみに性格はドSだと思われがちだが、本人によればどちらでもいけるらしい。
　ミリアザールも気づいた通りちょっと危険な性格と嗜好をしており、東雲の気苦労は絶えない。だが詩乃の命令には忠実で、命令とあれば１００の魔物の群れに単騎で突撃することも厭わない。
　ちなみに彼女が詩乃に行うお仕置きの内容は、秘密である。

名前：浄儀白楽（じょうぎはくらく）
年齢：４５
身長／体重／容姿：１７５ｃｍ、６５ｋｇ、黒い短髪（元の色が違うため染めている）・黒い瞳
職業：討魔協会筆頭、対魔師
好きなモノ：女、酒、戦い、権力
嫌いなモノ：軟弱な者、甘い菓子
一人称：俺
プロフィール：
　討魔協会筆頭。名家四家の出でないにもかかわらず彼が筆頭に収まったのには、彼の圧倒的な戦闘能力がある。討魔の歴史上最高とも言われるその戦闘能力は、討魔の四家の現筆頭をまとめて相手にできるほど。実際彼が筆頭になってから、東では人間の生活領域がかなり広がっている。
　だがその性格は傲慢にして不遜。横暴を絵にかいたような人物である。そして極めつけはかなり頭の回転も速く、西の大陸に付いてもかなりの知識を持ち合わせており、あわよくば西の大陸に進出しようとしている。

正式に妻を娶ってはいるが、愛人を何人も抱え、隙あらば詩乃も、と考えている。だが詩乃については、彼自身も女としてのみでなく、その能力や人格も気に入っているので、今のところは粉をかける程度である。なお周囲は既に愛人だと思っているので、誰も詩乃には寄りつけないようになっている。

だが彼が成し遂げた協会の成果だけ見れば相当なものであり、東の諸国に対する外交上も当たりは良い。そんな彼が何を目指しているかは、今のところ不明。

登場人物紹介～討魔協会編～（後書き）

もちろん本編も更新します。本日２１：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その1～風読み～（前書き）

～あらすじ～

大草原に向かうことになったアルフィリース達だが、前途多難な問題が発生し・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その1～風読み～

「ねえミランダ～、どうしよう～」
「何を甘ったれた声を・・・でもどうしようね、ほんとに」

廃都ゼアを去ってから報酬を受け取るためにギルドに来たアルフィリース達。同時に大草原に入るための『風読み』といわれる特殊な人間を雇おうと思ったが、既に全員といってもよいくらいの人員が出払っていた。

「すまないね、お嬢さんたち。この時期は収穫時期だから、大草原に入る人間達が多いんだよ。めぼしい奴らは既に予約が入ってるね」
「残ってる人はいないの？」
「いるにはいるが・・・粗悪なのか、優秀すぎて報酬が払えないかどっちかだがね。それでも会ってみるかい？」
「うーん、ちょっと考えてみる」
「そうするがいいさ」

ギルドの窓口係に挨拶をし、仲間のところに戻るアルフィリースとミランダ。たいていのギルドは、受け付けと食堂・酒場が併設されている。この方が仲間を誘いやすいためだ。

「どうだった？」
「ダメ、もうイイ人はいないみたい」
「困りましたね・・・大草原ではセンサーも役に立たないとか言いますから」

ニアは腕組みをし考え込み、リサはお手上げのポーズをする。フェンナは祈るようなポーズで事の成り行きを見守っている。その様

子をじっと見ているカザス。

「って、先生よ。なんであんたがここにいるのさ」

話がうまくいかず虫の居所が悪いのも手伝い、ミランダがカザスに突っかかる。

「いえ、貴方達が面白いのでもう少し様子を見ていたいなと。それに私も大草原には行ってみようと考えてるので」

「来なくっていいよ」

「私がどこに行こうと自由です」

ミランダがカザスを睨みつけるが、明らかに難癖をつけているのはミランダなので、ぷいと他所を向いてカザスを無視することに決めたようだ。どうもこの2人は相性が悪い。

ため息をつくアルフィリースに、ニアが話しかける。

「ところでアルフィ、報酬は出たのか？」

「前金だけね・・・」

「やはりそうか・・・」

ギルドからの報酬は多くが前金と成功報酬の分割形式で払われる。成功報酬のみにすると依頼人が報酬を払わなかったり、前金だけにすると傭兵側が持ち逃げすることがある。依頼人と傭兵側のトラブルを避けるために前金と成功報酬の分割払いにすることが多く、その比率は依頼によって様々である。また前金で装備、準備などを整えたりできるので、多くの依頼がこの形式だ。

それで今回の依頼だが、前金と成功報酬の割合は1：4だった。つまりアルフィリース達にほとんど金は入って来ていない。相変わらずの貧乏状態が続いている。

「またメイドのバイトすっかな～」
「そんな時間はありませんよ、ミランダ。秋になれば大草原の気候は荒れに荒れ、人間では立ち入ることすら不可能となると聞きました。リサは大草原に立ちいるなら強引にでも行くことを提案します」
「とはいってもね。磁石とかもおかしくなるし、方角もよくわからないんじゃ危険極まりないよ」
「では良い案がありますか、アルフィ」
「それがね～お金もないしね～」
「お金は私が出しましょう」

カザスの提案に皆驚く。

「えっと・・・なんで？」
「まあ私は戦力にはならない人間ですからね。その私がついていくと言ったわけですから、何かしら戦闘以外の部分でリスクを負わないと、皆さんと対等とは言えないでしょう。幸い金銭的にはかなり恵まれた人間なので、２カ月程度ならなんとでもなると思います」
「へえ・・・学者先生、ちょっとは見直したよ」
「どうも、ミランダさん」

ミランダとカザスが互いにやや皮肉を込めて呼び合うも、先ほどよりは雰囲気が軟化している。

「じゃあこれで金銭面はいいとしても」

だがしかし大草原への案内人の話は何も進展していない。すると隣のテーブルから男が声をかけてきた。

「お前達・・・大草原に行きたいのか・・・」

顔に布を巻き、茶色のレンズの眼鏡をした男だ。口には何か覆いのようなものを巻きつけており、表情が全く見えない。席の横には自分の体格はあろうかという荷物と、杖が置いてある。不思議な感じがするが、これが風読みと言われる職業の一般的な衣装だった。

「貴方は風読みね？」
「いかにも」
「もしかして手が空いてるの？」

アルフィリースが一縷の望みを駆けて質問するが、男は首を横に振る。

「いや、残念だが私も予約済みだ・・・だがお嬢さんたちが困っているのを見かねてな。どうせ依頼主を待ってる間は退屈だし、暇つぶしがてらアドバイスといったところだよ。老婆心というやつさ」
「それは嬉しいけど、えーと」
「ザザだ」
「ザザさんは何を教えてくれるの？」
「その前に・・・そこのお嬢さんはシーカーか？」
「あ、はい！」

フェンナが突然呼ばれて跳ね上がる。

「よくその呼び名を知ってますね」
「何、傭兵として経歴が長い・・・それだけだ。だがシーカーということは、お前たちは大草原の北側に行くつもりだな？」
「そうです」
「悪いことは言わん、止めておけ」

フェンナの返事に、首を横に振るザザ。

「どうしてですか？」

「大草原は北と南では全く別物だ。南はいい。まだ風も読みやすく、魔物も大人しい。だが北は危険極まりない。風は生物を狩るために容赦なく吹きすさび、魔物はこれ以上ないくらい強力だ。命がいくつあっても足らんよ」

「例えば？」

「・・・俺達風読みでも北に入って3日間生き残れるものは、１０人に1人だと言われる。それもC以上のランクでな。ちなみに俺なんぞ若いころに間違えて北に入ってしまったのだが、奇跡的に3週間生き延びることに成功した。全く運だとしかいいようがなかったさ。それでギルドに帰ると突然Bランクにまで抜擢された。それほどのことなんだよ、北に入って生き残るってのはな。ちなみに北の魔物もどれでもいいから一体倒して持ち帰れたら、即座にBランクに抜擢されると言われている」

「そんなに・・・」

「で、貴方はどうやって生き残ったのですか」

リサが鋭く突っ込む。

「言ったろ、俺は運が良かったって・・・北に住んでいる原住民に拾われたんだよ」

「原住民？」

「ああ、まっとうな人間だったが・・・色々な機能が人間とは違う奴らだった。北の魔物と平然と戦うし、風読みの技術も明らかにかなり上だった。俺の技術は彼らの一部を頂戴したものだ。それだけでこの風読みとして、上位２０人には入るレベルだと言われたよ」

「じゃあ彼らを雇えば・・・」

「無理だな。外界との接触は基本持たない奴らだ。俺は例外だよ」

「ではどうしろというのです」
「今年は諦めろってことだ・・・来年でよければ俺がついて行ってやる。もっとも北の手前までだが」

そう言って席を立つザザ。アルフィリース達は言葉も無く立ちつくす。その陰鬱としたようすにザザも悪いことをしたと思ったのか、ギルドを出る直前にピタリと足を止め、アルフィリース達の方を振り返った。

「もし方法があるとしたら・・・フェアリーだな」
「フェアリー？」
「ああ、この辺で見かける妖精は大抵が大草原出身だ。奴らなら北側の風も理解できるだろう。だがこの俺でも見かけるのは１０年に１度・・・とにかく警戒心の強い一族だからな。それに人間嫌いだ。可能性は無いに等しい」
「それでも何も希望が無いよりましだわ。ありがとう、ザザさん！」

素直に礼を言うアルフィリースに少し驚いたのかザザがその動きを止めるが、すぐにくるりと背を向け、手を上げながらその場を後にする。

「道具屋のところに行って俺の名前を出してみな・・・何か聞けるかもしれん。奴は何か面白い物を大草原帰りの人間から仕入れたと言っていたからな。お前たちに風のご加護を・・・」

そしてザザが去った後、アルフィリース達は彼の助言に従い道具屋を訪れてみることにした。

＊＊＊

「はあ～どうするかな・・・」

一人ため息をつく道具屋の主人。彼は自分が仕入れた物の後処理に困っていた。

「安く売るっていうから思わず買ったが、もっと疑うべきだったか。まさかあんなのだなんてな・・・ハァ」

「ごめんくださーい」

その道具屋を訪れてきたのはアルフィリース達。

「ああ、いらっしゃい」

「ザザさんの紹介で来たんだけど・・・」

「ザザの？　珍しいな、あの偏屈野郎が誰かを紹介するなんて。ということは大草原関連の商品が欲しいのか？」

「ええ、何か珍しいものを大草原帰りの人から仕入れたと聞いたから」

「そういや奴には話したっけか・・・まあ珍しいと言えば珍しいな。だが本当に見たいか？」

「・・・見たらまずいの？」

アルフィリースが怪訝そうな顔をする。それほど危険な商品だというのだろうか。

「まずかないが、げんなりするぞ。今の俺みたいにな」

「どうしよう？」

「見てみないと始まらないと、リサは思います。今さら躊躇とか、どんくさいですね、デカ女。道具屋さんも、もったいぶらずにさっさと持ってきてください」

「口の悪い嬢ちゃんだな・・・よく似てらあ。ちょっと待ってろ」

リサに促されて奥に行く主人。

「何に似てるんだろ？」

「さあ？　リサみたいな完璧美人が他にいるとは思いませんが」

「よくそこまで言いきるな・・・」

ニアの突っ込みをさらりと受け流すリサ。ほどなく奥から騒がしい声が聞こえてくる。

「うわっ！　こいつ、大人しくしやがれ！」

「・・・何それ？」

道具屋が持ってきたのは大きなサイズの鳥籠らしきもの。全面を分厚い覆いで囲ってあり中身は見えない。だがガタンガタンと揺れ動き、中からは何やら人の叫び声が聞こえるが・・・？

「出せー！　このツルっパゲー！！」

「はげてねぇ！　くそっ、相変わらず口の悪い！」

「えーと・・・それ何？」

「百聞は一見にしかずだ。まあ見るといいさ」

道具屋が覆いを取ると、中には・・・

続く

大草原の妖精と巨獣達、その1～風読み～（後書き）

さて、今回から新しいシリーズです。結構長いですが、お付き合いいただければと。「冒険しようぜっ！」ってな感じでお送りできればと思います。

次回投稿は、翌日１２／１６（木）１４：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その2～水の妖精～（前書き）

～あらすじ～

風読みに紹介された道具屋で、アルフィリース達が出会うのは・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その2～水の妖精～

「これは・・・妖精？」
「ニンフ・・・いえ、フェアリーですね」
「珍しい・・・本の上では知っていましたが、これは何とも美しい生き物ですね」

カザスの感想もさもあらん。目の前にいるフェアリーは青く長いウェーブのかかった髪を腰まで伸ばしており、目はくりっとしていて大きく、とても愛嬌のある顔だ。整ってはいるが、まだ可愛らしいと言った方が良いかもしれない。また４枚の羽根の邪魔にならないように、銀と白を基調にした布地を首の後ろから体に巻き付け、体の横で固定させている。

魔物や飛竜なんかも十分におとぎ話のような存在だが、このフェアリーはそれだけでなく、そこに存在するだけで周囲を幻想に包むような雰囲気を出している。アルフィリースは自分がおとぎ話に迷い込んだような錯覚を覚えまじまじとフェアリーを見たが、その妖精がジト目でこっちを見つめていることに気がついた。

「な、何・・・」
「それはこっちのセリフよ、デカ女！」
「デカ・・・」
「ワタシのことじっくりねっとり絡みつくような視線で見つめちゃって、いやらしい。こっちみんな！　ブッ飛ばすわよ！！？」

そう言って鳥籠をガツンと蹴り飛ばすフェアリー。アルフィリースが抱いた幻想的なイメージが、ガラガラと音を立てて崩れていく。

その横で道具屋の主人がお手上げのポーズをしている。

「まあこういう奴なわけだ。格安で仕入れたはいいが、これを売りつけた奴も辟易してたんだろうな。俺もこいつがいるとうるさくって仕事にならん。夜中も所構わず騒ぎ立てるし、もらってくれるとありがたいんだが」

「・・・こっちも御免こうむりますね」

リサが仕草で「却下」というのを示す。だがその様子を見てさらにフェアリーはヒートアップする。

「ちょっとそこのピンク髪のアナタ！　なに人のことをいらない子扱いしているのよ！」

「実際いらないと思いますが。この暴れん坊フェアリーが旅の役に立つとは思えません」

「ぬわんですってぇ！？　あんたみたいな淫乱ピンクより、この可憐でキュートでセクシーなワタシの方が１００倍役に立つってぇの！」

なぜかセクシーポーズでウィンクするフェアリー。その言動にカチンときたのか、リサが舌戦モードに入る。

「リサのどこが淫乱ですか！？　きちんと理解できるように３０字以内で的確に述べなさい！」

「昔からピンクはエッチな子だとフェアリーの伝説にある！」

「ぴったり３０字で切り返すとは・・・やりますね。それはどんな伝説ですか！？」

「言ってもいいけど完全にＲ－１８よ？　やってもいいの？　語ってもイイの？？　ほらほらぁ！」

「くっ、全部伏字にせざるをえませんね・・・」

「でしょう？　だから納得しなさい！」

無茶苦茶な理論だが、勢いでリサがやり込められた。ある意味凄いことだ。だがリサもまけじと切り返す。

「ですがリサが役にたたないというのはどう言うことです？　あなたみたいなちみっこいのより、センサーである私の方が大分役に立つと思うのですが！」

「ふん、ちみっこいとは言ってくれるわね！　言っておくけど私はフェアリーの中では最もセクシーな女として引く手数多（あまた）なのよ！？　見なさい、この抜群のスタイルを！」

またしてもセクシーポーズをとるフェアリー。確かに身長こそ３０ｃｍくらいだが、バランスはかなり良い。人間にしたら相当なプロポーションとなるだろう。リサが思わず言葉に詰まる。

「むむ」

「わかったかしら、このぺちゃぱい」

「ぺちゃ・・・」

「あーら御免遊ばせ、図星だったかしらホホホ！」

「そんなことはありません！　貧乳はステータスです！」

「まあそこにいるうしちちよりしとやかなのは、認めてもいいけどね！」

フェアリーがアルフィリースの方をビッと指さす。

「うしちち・・・」

「あら、ごめんなさい？　『ちちうし』の間違いでしたわ」

「言い直さなくてもいいわよ！」

「リサもそれに関しては同意しますが」

「同意しないで！　うわーん」

べそをかき始めたアルフィリースを、よしよしとなだめるミランダ。その間にもフェアリーの口はさらに回転を上げていく。

「貧乳がステータスとか胸が無い子の言い訳よ！　それともアナタの思い人はその胸がいいと断言したのかしら？」

「そ、それは・・・」

「あら、確認してないのかしら？　もしアナタの思い人が巨乳好きだったら、そこのちちうしに寝取られるわよ？　ＮＴＲよ、ＮＴＲ！　もうどろっどろの昼ドラよぉ！」

「あ、あああ・・・」

最後の方はよく意味がわからなかったが、リサが目に見えて落ち込み始めた。まさかリサが言い負かされるとは・・・恐るべしフェアリー。リサとミランダを足して2で割らなかったらこういう子になるのかもしれない。勝ち誇ったように高笑いをするフェアリー。しばらくしてよろよろとリサが立ちあがると、仕込み刀を抜きながらアルフィリースに向かってきた。

「ちょ、ちょっとリサ。何する気!?」

「・・・大したことではありません。ちょっとそのうしちちを、リサにもわけていただこうかと」

「む、無理無理無理！」

「・・・大丈夫です、出来る限り痛くないようにしますから」

リサがアルフィリースにじりじりとにじり寄って来る。

「いやー、やめてー！」

「アルフィ、観念しなさい！」

「俺の店を壊すなぁ！」

リサがアルフィリースを店内所狭しと追い回し始めた。おろおろする道具屋と他のメンバー達。そしてしばらくして全員が落ち着くと、フェアリーの方もとりあえず満足したのか、真面目な話を始める。

「で、本気で大草原に行きたいの？」
「ええ、このフェンナを送り届けないと」
「ふ～ん、シーカーか。なら北側に行くのね」
「そうみたいね」
「確かにそれじゃ並の『風読み』程度じゃ無理ね。中には北側に入って来る風読みもいるけど、一般の冒険者が知り合えるようなランクじゃないでしょう・・・仕方がないから、案内してあげてもいいわよ」
「本当！？」

アルフィリースが喜びの声を上げると、めんどくさそうにフェアリーがうなずく。結局このフェアリーの存在に道具屋はうんざりしていたので、タダ同然の値段を支払うだけで済んだ。

＊＊＊

そして鳥籠から解放されて周辺を飛び回るフェアリー。

「んんん～！　やっぱりシャバはいいわね～♪」
「シャバって・・・」
「でもどうして私達に協力を？」
「そりゃあの鳥籠も飽き飽きしてたしね、いい加減出たかったのよ。

それであの店主に嫌がらせしてたわけだし」
「そうじゃなくて、なんで今逃げないのかってことよ」
「え？」

アルフィリースの鋭い指摘に思わずびっくりするフェアリー。

「（この子・・・もっとぼやっとしているかと思ったけど、案外鋭いわね。もっともな指摘だけど、南の魔物はともかくとして、北側の魔物は私達フェアリーでもおかまいなく襲ってくるからね。囮は多いほうがいいのよ・・・なんて言うわけにもいかないし、適当にごまかすか。あまり人間の里をうろうろするのも得策じゃないしね）」

などとフェアリーが腹黒いことを考えている間にも、アルフィリースはじっとフェアリーの方を見ている。

「まあ・・・シーカーとはそれなりに交流があるからね、恩返しよ。ワタシはシーカーの里からなら安全に自分の故郷に帰れるし、物のついでよ、ついで」
「ふーん、まあそういうことにしといてあげる。でも私達をだましてたら、スープのダシにしちゃうからね」

アルフィリースがにっこりとほほ笑むと、なぜかフェアリーには悪寒が走った。結構本気でダシにしそうな雰囲気だったのである。

「それで、貴女の名前は？」
「ワタシはユーティ。水の精霊ウンディネの眷族にして、水を司るフェアリーよ。よろしくお願いするわ」
「私はアルフィリース。名字ははわけあって名乗れないわ。それでこっちは」

順番に紹介をするアルフィリース。その中でリサが再び質問をする。

「それでユーティに聞いておきたいことがあるのですが」

「何？」

「センサーが大草原では役に立たないとのことですが、どういった理由ですか？」

「詳しい理由はワタシも分からないわよ。ただ昔から大草原は磁場が歪んでいると言われてて、センサー能力ですらまともに効かなくなるらしいわ。それに効いても無駄、という理由が大きいわね」

「無駄、とは？」

リサが首をかしげながら質問する。

「魔物が強すぎて感知してからでは遅いのよ。ちなみにアナタのセンサー半径は？」

「通常で１ｋｍはいけます。集中すれば２ｋｍは」

「かなりやるわね。でもそれでも無駄よ。北の魔物には２ｋｍ程度なら１分で走るようなやつらも多いわよ」

「・・・信じられませんね」

「別に信じなくてもいいわよ、そのくらい強力だってこと。見つかったら最後、まず生き延びられない。認識阻害の魔術もダメ。魔術そのものに反応する魔物がいるから、かえって呼び寄せてしまう。普通の常識が通用しない場所なのよ」

「じゃあ竜で空からいけば・・・」

アルフィリースの提案にも、ユーティは首を横に振る。

「それもダメ。空の魔物も相当強くて、それこそ飛竜程度なら餌に

されるわ。だいたい竜だって夜は休むでしょ？　それに飛んでいる所を見られたら地上の魔物は永遠に追って来て、休んだところをガブリとやられるのがオチよ」
「ではユーティはどうやって正しい道順を知り、私達を安全に案内するのですか？」
リサの質問も、もっともである。
「私は精霊だからね。草木や風に話を聞けばいいのよ」
「そんなことができるの？」
「正確には徴候を読むのよ。上位のフェアリーは精霊そのものに近くなるから、本当に声を聞くらしいけどね。残念ながらワタシはフェアリーとしてはそこまでではないけど」
「なるほどね」
アルフィリースが素直に感心している。少し得意げなユーティだ。
「で、行くなら早い方がいいわ。シーカーの里まで、馬を使っても最低1カ月はかかるわ。そのくらいには大草原は嵐の季節になる。嵐の季節はヤバいわよ。大草原の魔物ですら、大人しく自分の巣穴に帰るものね。だから今は嵐の季節に備えて色んな生き物が外にいるから、冒険者も色々狩りがいがあって入って来るのでしょう。ただ一つ宣告しておくと、北側ではワタシの案内も完璧じゃない。時には魔物に見つかることがあるのも覚悟しておいてね」
「できれば出会いたくないわね」
「ワタシだってそうよ。でも人間だって北側に住んでる奴らがいるくらいだから、まあ何とかなるでしょう」
「どのくらいいるのさ？」
ミランダが質問する。

「ええ、少数だけどね。昔から住んでるから、生き延び方を知っているみたい。あ！　それで思い出したけど・・・北側でもし安全に生き延びたいなら、『案内人』を見つけることね」
「案内人？」
「詳しくはワタシもしらないけど、なんでも時々北側に紛れこんだ人間を助けているみたいよ。本人も人間だとか。なのに北側のだいたいの魔物よりも強いと聞いたわ。何者なのかしらね」
「人間か・・・」

一行は顔を見合わせる。そんな強力な人間がいるものだろうか。だがユーティは自分の説明をさらに続ける。

「あと絶対やっちゃいけないこと！　『炎獣』にだけは出会ったらダメ。炎獣は北部中央付近の岩場に住んでいるんだけど、大草原で1、2を争う魔物よ。出会ったら確実に終了だわ」
「じゃあそこは避ければいいのね」
「まあそういうこと。じゃあ時間も惜しいことだし、さっそく行きましょうか？」

そして新たな仲間、妖精のユーティに先導されて大草原に向かうアルフィリース達。時期は夏のただなかに入ろうとしていた。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その2～水の妖精～（後書き）

次回投稿は１２／１７（金）１３：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その3～大草原南部～（前書き）

～あらすじ～

妖精のユーティを仲間にし、いよいよ大草原に足を踏み入れたアルフィリース達。彼女達が見る者とは、果たして・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その3～大草原南部～

＊＊＊

「風が――変わった」

大草原の半ばに佇む少女が1人呟く。傍には愛馬を従え、そのたてがみをなでてやっている。馬の方も主人の様子の変化を感じ取ったのか、普段は撫でるに任せるその馬も、主人の方を心配そうに見つめる。

「心配しなくていい――と、言いたいが。あいにくと我も不安なのだ。こんな風は初めて・・・いったいこの大草原に何が起きるというのだろうか」

「心配なのか・・・？」

少女の独り言ともとれる疑問に、どこからともなく聞こえる低い声が応える。少女は一瞬返事を躊躇ったようだが、凛とした声ではっきりと返答する。

「ええ、少し」

「この風をどう感じる？」

「なんだか全てを押し流すような・・・とても激しく、でも優しくもある風。正直よく――わかりません」

「お前がそういうとはな。原因はわかるか？」

声もまた、少し心配そうに尋ねる。

「それもまだ。ですが我々もまた無関係ではいられないでしょう」

「そうだろうな。だがしかし・・・」
「ええ、全ては大草原の意志に委ねればいい・・・」

そういって緑の美しく長い髪を風にたなびくに任せる少女。夏も最中であるにも関わらず、既に嵐の季節の到来を告げるかのような強い風が吹き付けていた。

＊＊＊

「あ、暑いよ～ミランダ～」
「アルフィが長袖なんか着てるからでしょ。だから前に言ったのに・・・見てるこっちも暑くなるから、もう脱いじゃいなさい」
「調子に乗って全部脱がないように、アルフィ？」
「私は痴女か？」
「大差ありません」
「ひ、ひどい・・・」

リサのひどい突っ込みを受けながら馬に乗って進むアルフィリース一行。

「アルフィリースさん、脱ぐのはフェンナさんだけにしておいてください。僕の目のやり場が無くなるので」
「私の恰好に何か問題が、カザスさん？　シーカーといえば夏場はこのような恰好です」
「いや、獣人も大概薄着だが、それはさすがにどうかと思うぞフェンナ・・・」

ニアの突っ込みもしょうがない。フェンナは既に暑いからという理由で、大草原に入ってからは人目もたいして無いのを良いことにかなり薄着に着替えていた。通常街中で着ていたやや姫然とした長

めのワンピースのような恰好から、ミニスカート・タンクトップのような服に変えている。しかもかなり生地が薄くぴたりとしている。真夏でも呪印を隠すために長袖でいるアルフィリースとは対照的だ。もっともこの大草原は比較的大陸の北寄りであり、風が良く吹くのでそこまで暑さが厳しくないのはアルフィリースには幸いだったといえる。

ところで森の民であるフェンナに下着をつける習慣は無かったわけだが、さすがにニアとリサが説得をして下だけはなんとかはかせている。女だけの旅なら多少構わなかったもしれないが、今回はカザスが同行しているのだ。だがフェンナは堂々とカザスの前で着替えをするので、カザスの鼻血が止まらないやら、ミランダが強制的に回れ右をさせようとしてカザスの首が変な方向に向くやら、大草原に入った当初は大変だった。フェンナ本人には至って悪気はなく、ユーティがその様子を見て、腹筋がねじ切れんばかりの大笑いをしていたぐらいのものである。

「だからこのパーティーに男を入れるのは嫌だったんだ・・・まあこんな軟弱なチビに、アタシ達をどうこうできるとは思わないけどさ」

「大丈夫です、僕はちゃんと襲うときは宣言してから襲います。みくびらないでいただきたい」

「それもどうかと思うけどね」

どうもミランダとカザスはいまいちウマが合わない。既に大草原に入ってから一週間が経過してるのだが、ずっとこの調子である。さすがに前ほど悪態を付き合うことはなくなったが、どうもギスギスしている。そんな折、斥候に出ていたユーティが帰って来る。

「どうだった、ユーティ」

「大丈夫よ～ワタシの睨んだ通り、当分魔物の気配はないわ。むし

ろ魔物・魔獣を避けすぎて、食料が底をつくかもね。北側に入る前に何かしら大物を仕留めて、肉を補充しておきたいかも」
「そうね・・・確かにそろそろ持ちこんだ食料がそこを尽くかしら」
「食料はあと3日分というところか。水は余裕がある」

ニアが食料を確認する。

「ユーティ、大草原で食料にできそうな動物はいるの？」
「イノシシ系の魔獣を狩れば大丈夫じゃない？　森の中に多いと思うけど、ちょうどここから1日くらいで手頃な森があるわ」
「そこで私の出番だな。追跡なら任せろ」

ニアが得意げに胸を張る。尻尾の動きも絶好調だ。一方でリサはこころなしかしょんぼりして見える。

「リサがお役に立てないのが残念です・・・本当にここではセンサーが役に立たないのですね」
「いや～貴女が単純にレベルが低いだけじゃない？」
「失礼な！」
「本当よぉ。だってセンサー能力をここでも使える人間はそこそこいるわよ？　もっともそれでも場所に寄るんでしょうけど。あなたみたいに大草原全体でダメとか、初心者センサーのセリフね・・・」
「・・・悔しいですが、リサには返す言葉もありません」
「あら素直ね、でもその方がいいわ。まずは自分の欠点を素直に認めないと、進歩も何もあったもんじゃないからね」

ユーティはニヤニヤしているが、リサは悔しげな顔をする一方で真剣にどうすればよいかを考えていた。

「（そういえば・・・レクサスでしたか？　あの男にも甘いと言わ

れましたね・・・まだリサの知らないセンサー能力の使い方があるということですね、きっと。我流にも限界があるということなのでしょうが、どうやれば上達するのか。誰か師匠のような人がリサにもいればよいのですが・・・）」

リサは大草原に入ってからのここ何日か、ずっと自分の能力向上の方法について思い悩んでいた。センサーが全く使えない状況では彼女はただの盲目の少女であり、戦闘を行うどころか私生活もままならない。また魔術でもセンサー能力を封印できることがわかった以上、リサにとって自分の能力を上げることは必須の課題であった。

「（ここ大草原では完全にアルフィリース達のお荷物ですね・・・いかに自分が井の中の蛙だったのか思い知らされます。彼女たちに迷惑だけはかけたくない・・・盲目だからと侮られたり、気遣われるのはごめんです。だいたいこのままではアルフィリースをからかえないではないですか！）」

リサの悩みは同時にアルフィリース達と友人として対等でいたいという気持ちの表れでもあったのだろうが、そのことに本人は気づいていなかった。そこまで自分の感情に敏感になれるほど、リサも精神的に成熟してはいなかったのだろう。また周囲・他人の情況に敏感なセンサーだからこそ、自分に鈍感だと言えるのかもしれないが。

＊＊＊

だがリサの悩みもよそに時間は過ぎる。結局森の中ではイノシシ型の魔獣を仕留め、その解体・腑分け作業にアルフィリース、リサ、ニアが取りかかり、森の中の植物採取や水の確保には残りのメンバーで向かうことになった。植物に詳しいフェンナ・ユーティがいる

ため時間もさほどかからず、ミランダは主にキャンプへの荷物運び、カザスがその番をやっている。

「まったく・・・か弱い乙女にこんな重労働させるなっての」

ぶつぶつ文句を言いながらもゆうに３０ｋｇはあるであろう水を一斉に運ぶミランダ。今日はこの水を使って即席の風呂を作るつもりである。適当な深さの穴を掘り、周囲を特殊な樹皮を塗りつけた木の板で囲み水漏れを防ぐ。そうして水を流し込み、焼けた石などで温めればできあがりという寸法である。別に水浴びでもよかったのだが、大草原の夜が思ったより冷え込んでおりさすがに昼でないと水浴びは厳しかったのと、その水場には昼には大量に魔獣や魔物が集結するらしく、様々な生物の足跡がかなり多くあった。だが水浴びは我慢できないとの全員の意見の一致により、なんとかしようと考えたのが風呂の作成である。

こういうとき軍隊勤めのニアの存在はありがたい。軍人として最初に仕込まれるのは人間・獣人に関わらず、たいていは行軍の方法だからである。行軍は食料調達の方法や斥候の仕方などもそうだが、寝床の確保なども重要となるからだ。風呂の作成もニアは実にてきぱきと行ってくれた。

「まあでも風呂は楽しみね。『温泉ドッキリ大作戦！』で裸のアルフィをカザスの目の前に突き出したら、どのくらい鼻血出すかしら？　楽しみだわ、キャッ♪」

などとミランダがよからぬ企みを考えていると、ふとミランダの耳に届く音がなくなる。一転ミランダが真剣な表情に戻り、周囲に警戒すべく荷物を全て地面に置く。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その3～大草原南部～（後書き）

次回投稿は、１２／１８（土）１２：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その４～伝令～（前書き）

～あらすじ～

大草原で夜営の準備中、ミランダの前に現れたのは・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その４～伝令～

「いきなり結界の中に招待するとは失礼ね。姿を見せなさい」
「アルネリア教巡礼任務についておられるシスター・アノルン、巡礼番号は０００１でお間違いないでしょうか？」
「姿も見せない相手に『はいそうです』と答えると思うのかしら？」
「これは失礼しました・・・姿を現した瞬間、その袖に隠した棍棒で殴られそうだったもので。今姿を現します」

その言葉と共にすぅ、と姿を現すフードを目深にかぶるローブ姿の２人。そのうち１人がローブを取りはらう。

「何者だ！　・・・と言いたいけど、その姿を見る限りでは同業者のようね」
「はい、私も巡礼任務についているシスター・エルザでございます。以後お見知りおきを」
「以後見知りおいているかどうかは知らないけど、よく私の仕込みに気がついたわね。それだけは褒めてあげるわ」
「それはありがとうございます」

ミランダのやや皮肉交じりのセリフにも笑顔で答えるシスター。このシスターはミランダと同じく金髪に青眼をしており背格好も似ているが、ミランダと違うところは髪が長く、派手な美人ではないが、よりおっとりして見えるというところくらいか。だがエルザの瞳に宿る輝きは、彼女がただのシスターでないことを知らせるには十分な輝きを放っていた。もっとも巡礼の任務に就く段階でただのシスターのはずがないのだが。
そしてミランダがもう１人の人物に目線を移す。

「それでそっちの怪しい人物は紹介してもらえないの？」
「また手厳しい言葉を・・・イライザ、自己紹介なさい」

イライザと呼ばれた人物がフードを取りマントを脱ぐ。中から出てきたのはこれは身目麗しい美少女だった。ただしその恰好は騎士そのものであり、しかもアルネリア教会の神殿騎士団の正装である金の鎧に身を包んでいる。金の髪に緑色の瞳をしており、髪は短く首の周辺で切り揃えてある。髪を伸ばしてドレスを着ればどんなにか、とミランダは内心思うが、この引き締まった表情を見れば舞踏会に来るような並一般の軟弱な男では、きっと逃げ出してしまうだろう。

「初めましてシスター・アノルン。私はイライザ＝ファイディリティ＝ラザールと申します」
「ラザールって・・・アルベルトは三人兄弟だと聞いたけど？」
「私はアルベルトのいとこにあたります。正確にはアルベルトの父モルダードの弟が、私の父ブランツになります」
「ふぅん。で、貴女はいくつになるの？」
「今年で１６になり、無事成人と相成りました」
「弱冠１６歳で単独で巡礼の護衛任務か・・・とんでもない腕ききだわね」

ミランダは純粋に褒めたのだが、イライザは黙って一礼を返すのみである。その様子を見て、アルベルトと同じタイプで無駄・余計なこと一切話さないタイプだと見てとったミランダは、話す相手はエルザに絞ることを即決した。

「で、アタシに何の用？　まさか通りすがりの巡礼ってわけでもないでしょう」
「はい。ミリアザール最高教主からの伝言を預かっております」

「マスタービショップの？」

最高教主からの伝言を直接預かるということは、エルザが巡礼の任務に就く者の中でもかなりの実力者だということがわかる。またミリアザールの信頼も厚いのだろう。もっともラザール家の人間が傍にいる段階で、それは想像に安いわけだが。

「それでマスタービショップはなんと？」

「『アルネリアの近くに寄ることがあれば必ず顔を出すように』とのことです。できれば即座にこちらに向かってほしいと付け加えていました」

「今の依頼を終えたら特に用事は無いからそれは構わないけど・・・教会本部で何があった？」

「なぜそう思われます？」

「わざわざそんなことを伝えるために、忙しい巡礼のシスターを大草原までよこすわけはないでしょう。まあここならたいていの者は盗み聞きできないから、密談にはもってこいだけども。逆にいえば大草原で密談をしなければいけないほど、マスターの周囲は信頼のできる者が少なく緊迫しているともいえるわね。それで要は信頼できる手駒が欲しいから、至急アルネリアまでできるだけ内密に顔を出しなさい、とそういうわけね？」

エルザは内心非常に驚いた。以前ミランダが教会本部にて「酒と男のあしらいかたについて」演説を行ったときに彼女はその場にいて聞いていたのだが、このときのミランダの印象は豪快かつ洒落な人間だった。もちろん優秀なことは窺えたが、もっと大雑把な人間だと思っていた。何年も教会に帰ってないと聞いていたが、まさかそこまで内情を察する鋭さも兼ね備えているとは。

だがそのようなエルザの動揺は一瞬だったはずなのだが、ミランダはそれすらも見逃さなかった。

「そんなに驚かなくてもいいわよ、だいたいあなたの予想通り、アタシは本来細かしいのが性に合わない鈍い人間さ。だけど数々の経験からそれだけでは生きていけないことも知っている。いつもはほったらかしのアタシに声がかかるなんざ、切羽詰まってる証拠ってだけよ。むしろ貴女も召集を受けた口なんじゃないの？」

「・・・これは失礼しました。お察しの通りです」

「で。本部で何があったの？」

「何、とは」

「とぼけなくてもいいわ。本部でなにかしら抜き差しならない事態があったから焦ってるんでしょう、マスターは。もちろん話せないならそれでも構わないけど」

「いえ・・・・・お話しましょう」

話の間にしてはやや長い程度の時間、だが沈黙と呼ぶには短い時間でエルザが返事をする。一瞬後ろに控えるイライザが何かを言いかけるが、それをエルザが目で制し、ミランダにアルネリア教会襲撃の様子を話し始めた。黙って話を聞いているミランダだったが、エルザが話し終えてからもしばらく何かを考え込んでいた。だがミランダがおもむろに口を開いた時、さらにエルザは驚くこととなる。

「それは、遊ばれたんだね」

「！　どういうことです？」

「まあ襲われた当人達からしてみたら認めたくないかもしれないけどさ、襲撃をもっと効率よくかけようとしたら夜襲ないし、最後に出てきた2人が同時に来るだろう？　もしそいつらに来られてたら、今頃教会はこの世になかったかもね」

「御冗談を・・・」

「冗談でも何でもないさ。エルザがマスターの性格を知ってるかどうかわからないけど、あの人は自分にケンカをふっかけた人間に容

赦するほど甘い性格じゃない。そのマスターがみすみす見逃したということは、その段階でやりあって勝率が5割以下だとふんだということ。そこから考えると、アタシ達の教会は奴らにとって体のいい遊び相手・・・ないしは実験相手」

「実験。何の実験でしょうか？」

「最初に仕掛けてきた少年の実験と、魔王の実験といったところかしら？　実際本部に出た魔王は全て形が違ったのでしょう？」

「はい」

「なら高い確率で当たってるかもね。実は私達もアルベルトと別れてから2回ほど魔王らしきものと戦っているけど、形が全く違ったわ。それによくよく考えると、この魔王ってのはどうも色んな生物が合体してる気がする。そこから推察するに、おそらく奴らは魔王を作っているんじゃないかな。そして何かを企んでいる。だけど、その目的がわからない」

「我々はどうすべきでしょうか？」

エルザが真剣な表情で質問する。こういう質問に答えるのは嫌いな性分のミランダだが、この時ばかりは素直に口が動いてしまった。

「まず魔王の生産を止めないとね。ある程度の数が揃えば嫌でも大きな動きがあるでしょう。そのために奴らの拠点を探さないと。そしてもう奇襲は無いと思うけど、この経験を生かした騎士団作りが・・・まてよ」

「？」

ミランダは腕を組んで考え始めたが、その顔が青ざめていく。そして悪夢を振り払うかのように頭を左右にふるふると振った。

「シスター・アノルン、どうされましたか？」

「いや、まさかね。あまりにも突拍子もない考えが浮かんだんだけ

ど、さすがにね・・・」
「お聞きしても？」
「・・・もし奴らの目的が、私達を強くすることだったら？」
「そんなことをしても、彼らには何の得もないかと思いますが」
「だよねぇ・・・辻褄は合うような気がするけど、さすがに荒唐無稽すぎるか。まあ後は調べた方が早いだろうね、どうせマスターなら何らかの手は打ってるんだろうし。確率は低いけど、アタシ達も何か掴んだら連絡入れるよ」
「わかりました、ではそのように連絡しておきます」
「まだ何か用事ある？　なかったらそろそろ解放してほしいな、戻らないと皆が心配しちゃうしね」
「いえ、用件は済みました。それではアノルン様に聖女アルネリアの加護があらんことを」
「お互い様にね」

シスター・エルザが防音と人避けの結界を解くと、何事も無かったかのように去っていくアノルン。

その様子を見届けた後、エルザとイライザは本来の目的地に向かうため歩き出す。２人きりになってほどなくしてイライザがエルザに話しかけた。

「気は済みましたか、エルザ様」
「ええ、やはり無理にでも会いに来てよかった。収穫はあったわ」

微笑みをイライザに向けるエルザ。イライザの方はあくまで冷静な表情のままだ。

「しかし本部での出来事は内密に、とのことでしたが」
「ああ、かたいこと言わないの。そのくらいは聖女様も、お目こぼ

しをくれるわよ」
「・・・」
「ところでイライザ、貴女はシスター・アノルンをどう見たかしら？」
「どう、とは？」
「将来の私達の上司としてふさわしいかどうかよ。なんといってもミナール様の代わりの大司教候補ですからね、シスター・アノルンは」

やはりエルザは微笑みを崩さない。イライザはやや黙考してから返事を返す。

「・・・一族の話を聞く限りでは、正直もっとがさつな方だと思っていました。鋭いのは経験でしょうが、ああいった方が上司なら働き甲斐もあるかと」
「あら、ラザール家は盲目的にアルネリア教に忠実なのかと思っていたけど？」
「それは本家の話。私は自分で自分の主人を見極めたい」
「それもまた騎士道なのかしら？　それとも今の主人、ミリアザール様に不満があるということかしら？」
「そんなまさか。ただあの方はなんでも出来過ぎて、私ごときでは何の力にもなれないのではないかと思う時があります。直接の補佐である本家の人間達も十分すぎるほどに優秀ですし」
「信頼されてなければ、今回の命令は回ってこないと思うのは私だけかしら？」

エルザがイライザに優しく微笑みかける。だがイライザは目を伏せたままである。

「まあいいわ。早いところ『犬』と合流しましょう」

「御意」
「全く、ミリアザール様も無茶を言うわ。私達だけで敵の本拠地の下調べをしてこいだなんて」
「・・・」
「まあ仕事と言われればやりますけどね。本拠地が変な所でなければいいわね、お肌が荒れちゃうから」
「御意」
「ふふ、あなたもお肌には気を使ってるものね。誰か意中の殿方でもいるのかしら？」
「お戯れを・・・」

表情は冷静そのものを保つイライザだが、少し頬が紅潮し声もやや上ずっている。感情がたやすく外に出てしまうあたり、やはり彼女もまだ少女なのだとエルザは実感する。

「ではさっさと終わらせて教会に帰還しましょう。飛ぶからつかまりなさい」
「御意」

イライザがエルザにつかまると同時に転移の魔法陣が地面に描かれ、光が2人を包む。そして光が消えた後に2人の姿は既になかった・・・。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その４～伝令～（後書き）

次回投稿は１２／１９（日）１１：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その5～ギガノトサウルス～（前書き）

～あらすじ～

大草原突き進み、ついに北部に入ったアルフィリース達。そこで彼女達が出会う魔獣とは・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その5～ギガノトサウルス～

お風呂で一息入れ、森で食料を補充したアルフィリース一行はさらに大草原を突き進む。なお、ミランダの計略は未遂で終わった。代わりにフェンナが体を張ったのは、あえてく詳しく語るまい。

今日も穏やかな行程は続き、和やかな会話が交わされる。

「ところでユーティって、どうして人間につかまってたの？」

「・・・罠を仕掛けられたのよ」

「ほう、それはどんな罠でしょうか？」

リサが興味津々に尋ねる。

「そんなこと教える必要はないわ」

「リサが当てて見せましょう。どうせおいしそうな食べ物、特に肉の匂いにつられてふらふらと人間のキャンプに迷い込み、お腹一杯になるほど盗み食いをしたうえ、そのままそこで寝てしまって捕まった、と」

「げ、なんでわかるのよ！」

「当たってるんだ・・・」

アルフィリースが呆れかえる。またアルフィリースの、妖精に対する幻想的なイメージが壊れていく。

「それはいつもの肉へのがっつきっぷりを見てればそのくらい想像はつきますよ、この食いしん坊妖精め！」

「何よ、この腹黒ピンク！」

「2人とも、ケンカはだめよ」

「「黙ってなさい、このデカ女！」」

「はい・・・（くすん）」

旅の様子ものんびりしたものである。大草原南部では魔獣・魔物も大して強くはないため、何度か遭遇したものの、大した問題も無く対処できた。まだ南部では他の冒険者もちらほらその姿を見ることができるため、何度かは出会ったパーティーと食料や情報、戦利品の交換などを行い先に進む。大草原は見晴らしも良く、自然が好きな人物が多いこのパーティーのメンバーは予想と違うこともあって、非常に気分のいい旅を行っていた。ただ1人、ユーティを除いては。

「（おかしいなぁ・・・ワタシが誘導しておいて、毎日2～3回も魔物に襲われるなんてありえない。せいぜい1週間に1度くらいのはずなのに、アルフィリースがよっぽど運が悪いのか。いえ、違うわね・・・風の強さも例年より強いし、空も曇天寄りのことが多い。もしかすると、嵐の時期がいつもより早く来るのかもしれない。それなら魔物達が活発に餌を求めて動き回っているから、これだけ遭遇するのも納得できる。このままシーカーの里まで天候がもてばいいんだけど、もし嵐が先に来たら全滅もありうるわよね。そうなったらワタシだけでも逃げて・・・でも人間に受けた恩を妖精であるワタシがないがしろにするのもね・・・はあ～どうしよう）」

とユーティがアルフィリースの肩に座りながらため息をつく。ユーティは飛び疲れるとアルフィリースの頭や肩、胸の上で小休止をするような習慣がついている。本人いわく「ソファーに最適」だそうだ。最初は色々と文句を言ったアルフィリースだが、最近は諦めた。なんせリサとミランダを足して2で割らないくらい口達者なユーティが相手なのだ。アルフィリースでは口論でかなうべくもなかった。

「ユーティ、どうしたの？　心配事？」
「・・・大したことじゃないわ」
「ウソ、ここ2～3日元気ないじゃない」
「あんたは自分の嫁の貰い手でも心配しておきなさい」
「うっ」

アルフィリースが露骨に落ち込んだ。アルフィリースが18にしていまだに彼氏の1人も作っていないことを聞いてからは、ユーティは彼女をさんざんこのネタでからかっている。

「さ、冗談もここら辺にしておいて、森を抜ければ大草原の北側よ。ここからは真剣に気合を入れないと危ないからね」
「あ、崖みたいなところに出た」

一行は再び森を抜けていたのだが、森が切れた所でちょうど崖になっていた。眼下30m程下に再び大草原が見える。

「ずっとなだらかな上り坂だったのよ、気付かなかったでしょ？」
「確かに・・・」
「でもここから降りるの？」
「ええ、そうよ。もう少し行くとなんとか馬一頭ぐらいが降りれる場所があるから、そこから行くわ。ここから中央付近の岩場の北側にかすめるように行くと、一番危険な連中と出会う確率が低いの。他の所からこの大草原北部に入ろうとすると、危険な魔物や魔獣が罠を張って待ってるのよ」
「でも中央の岩場って・・・」
「ええ、この大草原の主『炎獣ファランクス』の住処よ。まあ滅多に会わないから大丈夫でしょう」
「甘い、甘いよ、ユーティ・・・」

ミランダが首を振っている。

「何よ、他にいい案があるっての？」

「いや、アルフィリースの変態の寄せっぷりを知らないって言ってるのよ。『アルフィが歩けば変態と魔物に当たる』と言われるくらいの確率でこの子は色んな厄介事に遭遇するんだから」

「それ言った人は、ミランダだけなんだけど？」

「リサも同意です」

「私もだ」

「え～と、私も・・・」

「ニアやフェンナまで？？」

アルフィリースがおろおろし始めた。最近はニアやフェンナまで突っ込みが厳しい。ひとえにアルフィリースが優しいゆえにそういった扱いを受けるということもあるのだが・・・それにしてもやや不憫である。そして当のアルフィリースはまたしても半べそをかいていた。

「（この子たち余裕あるわねえ・・・それともただのお馬鹿なのか）」

そんなユーティの半ば呆れながらも感心している心の内など、露ほども気づかないアルフィリース。

「カザス？　カザスは味方してくれるよね？」

「そうしたいと思ってましたが・・・撤回させていただきましょう」

「なんで！？」

「いや、あれ・・・」

カザスが指さした方向を見ると、ほんの５ｍ先に大きな目が２つ、

こちらをじっと見ている。図らずして、全員の時が止まったように凍りつく。その目の主と見つめ合うこと数秒・・・。

「え・・・と。ここって下から３０ｍくらいはあるよね？」
「だって、目の前に広がる光景を見ればそれくらいはありそうよね」
「なんで目の前にこんな魔物の頭が？」
「それは・・・この魔物が３０ｍくらいはあるってことよね？」
「ギ、ギガノトサウルス・・・」

ユーティがぼそりと呟く。ギガノトサウルスはこの大草原でも最も強力な魔獣に分類される魔獣であり、前足を上げて二足歩行をする巨大爬虫類である。馬を一飲みにするほどの口の大きさであり、外皮は並の剣など通しはしない。書籍などではその存在が語られるが、半ば妄想上の魔獣とされていた。ギガノトサウルスの姿を見て生きて帰った者がほとんどいないためである。カザスが嘆息をつく。

「これがギガノトサウルス・・・生きてこれを見た学者は僕が初めてかもしれませんね」
「いや、生きて帰れるかどうかが問題よ」
「ど、どこから出たのよ」
「多分、崖の下で身を伏せていたんだろうな」
「それより・・・逃げませんか？」
「ゆ、ゆっくりとね・・・」

アルフィリース達はゆっくりと馬を進めるが、それを横目で見ながらついてくるギガノトサウルス。アルフィリース達が止まると同じく止まる。

「ど、どうしよう・・・」
「アルフィのせいですね」

「また私？」
「このルートは安全なはずなのに、いきなりこんなバケモノクラスの魔獣と出くわすなんて・・・言っておくけど、こいつはそんじょそこらの魔王よりかなり強いわよ？」
「そんな・・・」
「一回森の中に入ってやりすごしたらどうだ？」
「こいつのブレスから逃げられたらね。こいつのヒートブレスは数百度よ？　射程もかなり広いわ。逃げ出そうとした瞬間、高い確率でブレスを浴びせられるわね」
「じゃあどうしろと・・・」
「じきに下に降りる道があるけど、これは難しいかも・・・」

そんな緊張感に苛まされる一行とはうらはらに、ギガノトサウルスはしきりにあくびをしている。どうやら寝起きらしい。いまだに目が覚めていないのか、まぶたもどことなくうろんげだ。

「寝起きか・・・それならこれをくらわせてやる」

ミランダが大あくびをするギガノトサウルスに向けて何か袋を投げつけた。それが鼻先にぶつかると粉が舞い散り、思わずギガノトサウルスはくしゃみをするが、それを合図に姿がゆっくりと下に消えていく。ニアが下をおそるおそる覗きこむと、地面で横になって寝ているギガノトサウルスが見えた。

「ミランダ、今のは眠り薬？」
「ああ、手持ちの半分くらい使ったけどね。効いてよかった」
「役に立つじゃない、シスター。馬鹿力だけじゃなかったのね？」
「当然だろ、ユーティ。今のうちに下に降りよう」

そうして下に降りる一行。下ではギガノトサウルスが大いびきを

かいて寝ている。

「ここから大草原北部なのね・・・」

「まだ道程は半分も来てないわよ。ここは北側の一番西に近い所だから、北東にあるシーカーの里までは馬で駆けて最低2週間はかかるわ。何事もなかったとしてもね」

「遠いわね・・・」

「途中で食料を確保したりすることを考えると、3週間は見た方がいいのかも。そうなると天候が心配よ。上を見なさい」

ユーティに促され、空を見る。空には雲が多いが、まあ晴れといって差し支えない。

「雲が多いでしょ？　普通夏の大草原は連日雲ひとつない快晴なのよ。雲が増え始めると嵐の季節が近い証拠。もし嵐の季節が来たら何をおいても森に入らないと危険際まりないわ」

「いや、嵐くらいだったら別に大丈夫なんじゃ」

「・・・大草原の嵐を知らないわね。このギガノトサウルスが全力で逃げる嵐よ？　人間じゃ助からないわ」

「そ、そんなに？」

どうやらアルフィリースが想像している嵐とは、大分訳が違うようだ。ユーティがその事を伝えるように話を続ける。

「しかも嵐の季節は一カ月くらい続く。その時期だけは大草原から生命が消え去るわ。その後、冬に備えて動物は喰いだめの時期に入るから、気性が荒くなってさらに危険。逆に冬は比較的安全なんだけどね。不定期に降り注ぐ雹をかわしながら歩けるのならだけど」

「なるほど、それで夏が来る前に皆大草原に入りたがるのか・・・なんとなくわかるな」

「春は冬眠する連中が起きるから大変とか、そういう感じか？」
「それだけじゃなくてね、春は・・・」
「え～と、皆さん？？」

フェンナが会話に割ってはいる。ユーティが話の腰を折られてや
や不機嫌そうにするが、フェンナが何かを訴えたがっているので聞
いてみた。

「何よ、フェンナ？」
「いえ、あの・・・逃げなくていいのかな？　と」
「え？」

続く

大草原の妖精と巨獣達、その5～ギガノトサウルス～（後書き）

恒例の日曜一挙二話掲載行きましょう。

本日１８：００投稿です

大草原の妖精と巨獣達、その6～大草原北部の魔獣達～（前書き）

～あらすじ～

大草原北部に入るなり、いきなり危険な魔獣と遭遇したアルフィリース達。だが、彼女達の困難はそれだけでは終わらない・・・

大草原の妖精と巨獣達、その6～大草原北部の魔獣達～

フェンナが指さす方向には・・・ニワトリらしき生物の大群。だが明らかにアルフィリース達が認識している鶏より大きい。どのくらい大きいかと言うと、それはもう馬の2倍くらい。後ろにひよこらしきものがいるが、既にそれが人間くらいの大きさがある。しかも気が立っているのか、顔には青筋が浮かんで見える。

「何アレ・・・」
「クックドゥーという巨大な鶏の魔獣よ。ちなみに性格は超好戦的」
「何の素よ！」
「それは言わないお約束」
「あの青筋を見れば好戦的なのはわかるけど・・・とりあえず、逃げる方向でいいかな？」

ミランダの提案に全員がうなずく。それはそうだろう、クックドゥーの数は次々増えている。既に１００体はいるだろう。

「ところであのひよこ・・・まったくかわいくないのですが」
「リサ、わかるの？」
「今は比較的調子がいいので。それより、あのニワトリ達が動きだしますよ？」
「逃げましょう、皆さん！」
「フェンナ、そういうことは早く言いなさいよ！」
「ご、ごめんなさいぃ！」

アルフィリース達とニワトリが動き出すのがどちらが早かったか。全力で逃げだすアルフィリース達を奇声を上げながら追うニワトリの大群。その距離が徐々に縮まって来る。

「「コケー！！」」
「あのニワトリ、足が速過ぎない！？」
「お姉さま、何か便利な道具を早くその袋から！」
「こういうときに袋の中身を整頓をしておけばよかったと思うのは、きっと私だけじゃないはず！」
「冗談言ってる場合か！」
「どっちにしてもあんな大群を止めるようなものはない！」
「ここは私が止めます！」

フェンナが手で魔術の印を結ぶ。

【大地に住まう荒ぶる精霊よ。汝らの怒りを持ちて大地を歪ませ、我らが敵をその裂け目に飲みこまん】
《大地の鳴動（アースショック）》

フェンナが背後を振り返り魔術を発動すると、ちょうどニワトリ達の先頭の大地が揺れ始め、地割れを起こし始めた。その中に呑まれるニワトリたちと、その中に止まることなく後ろから突っ込んで来るニワトリ達。仲間を踏み潰す形になり、怒り狂ったニワトリ達は仲間同士での同士討ちが始まっている。

「コケー！」
「コッコッコ！」
「コケッコー！！」
「こけた！」
「何便乗して上手いこと言おうとしていますか、ミランダ」
「今のうちに逃げよう！」

アルフィリースの号令一科、その場を離れるアルフィリース達。

だがそこからが本番だった。

その後数日の間で転がって追いかけてくるアルマジロのような巨大生物に追いかけられ、なぜか地面を跳ねながら追いかけてくる植物につかまりそうになり、２０ｍを越える鳥に餌にされかけ、あげく見た目だけはかわいらしい小さい2足歩行の恐竜に昨日は一晩中追い回された。つまり今日は一睡もできていない状態である。８回以上逃走が続いているので、そろそろ会心の一撃を連発できるかもしれない。

そして――

「危ない、フェンナ！」

「きゃあっ！」

地面に突然できる大きな穴。砂漠だったら流砂と呼ぶはずだ。その中に落ちかけたフェンナの手をいちはやくムチで引き揚げるアルフィリース。

「ソウゲンジゴクね・・・リサが警告してくれなかったら、ワタシでもわからなかったわ」

「ユーティも万能ではないのですね」

「ワタシは水の妖精だからね。地面の中のことはわかりにくいわ」

「それより・・・」

リサが叫ぶが早いか地面に穴ができたわけだが、各自馬から飛びのくのが精一杯で、馬のことや食料・水にまで気を使うのは無理だった。

「馬が・・・」

「移動手段もそうだけど、食料や水のほとんどがやられたわね」

「どうするんだ、アルフィ」
「そうね・・・とりあえず水はなんといっても必要だから、手持ちがなくならないうちに水場まで行きましょう。他の移動手段に当ては誰もないでしょうし、ユーティ、案内をお願い」

ニアの質問に即答するアルフィリース。こういうときにアルフィリースの決断は早い。だが不眠不休状態でのこの行程はきつかった。ほどなくして疲労の色が隠せなくなる一行。もっとも早く体力的にきつくなったのはフェンナだった。

「アルフィ、休憩しませんか」
「そうね・・・ユーティ、水場までの距離はわかる？」
「私が知ってる場所だと、不眠不休で歩いて1日くらいね」
「遠いですね」
「そこにいくころには手持ちの食料も尽きるぞ」
「うーん。引き揚げることも考慮に入れないと」
「とりあえずワタシがちょっと斥候してくるから、貴方達は休憩してなさい」
「お願いするわ」

ユーティが斥候に行く間、腰をおろして休憩するアルフィリース達。誰も口にこそ出さないが、全員が不安を感じていた。水・食料もそうだが、移動手段が自分の足しかない状況では大草原の魔物に出会った段階で逃げるのは不可能である。この状況でギガノトサウルスみたいな魔物に遭遇すれば死亡確定である。

「さてと、どうしたものかしら」
「リサは引き揚げることを提案します。この状況では前になど進めないでしょう。まだ南部を出てからそう経っていません」
「でも既に南部を出てから6日経っている。馬での6日は歩くと下

手をしたらひと月かかるぞ？」
「それでもこのまま食料の無い状況で大草原を横断するよりは余程マシだと思いますが、ニア？」
「臆病な考え方だな、大して変わらないさ。それなら進んだ方がいい」
「猪突猛進とはご立派な考えですね、さすが獣人」
「何だと！？」
「おあいこでしょう？」
「２人ともやめなさい！」

アルフィリースの一喝で黙るリサとニア。

「２人とも疲れて気が立っているのよ。まずは水場までは行くこと。その間に食べ物も確保できるかもしれないし、引き揚げるか進むかの結論は水を確保してからよ。それまで各自自分の考えをまとめておきましょう。いいわね？」
「わかった・・・」
「・・・いいでしょう」

全員かなりストレスがたまっている。それはアルフィリースも同様だったが、リーダーとして自分が先に根を上げるわけにはいかないという自覚はあったし、忍耐強いという性格もあったろう。だが彼女としてもこれからの旅に不安を覚えているのは同様であった。個人的にはアルフィリースも撤退を考えていたのだが、ここ数日でさらに雲の多くなっている大草原を思うと、引き返しても間に合わない可能性は大いにあった。何より既に周囲には大きな岩がちらほらと見られ始めており、中央の岩場が近いのではないかとアルフィリースは考えていた。

全員がのんびりと休憩し、フェンナやリサなどは軽く寝息を立て始めたころユーティが慌てた様子で帰って来る。

「全員逃げなさい！　すぐに！！」
「！」

寝ていた2人もすぐに飛び起きるが、既に時は遅かった。別にユーティの連絡が遅れたわけでも、アルフィリース達が油断していたわけでもなかった。単純に彼らが速かった。

「あれは・・・？」
「騎馬民族？」

ミランダの言うとおり、アルフィリース達を囲むように現れたのは魔物や魔獣ではなく人間達だった。顔をローブのようなもので覆い、背中には弓矢を、腰には剣を装備している。アルフィリース達が扱うような馬よりも1回り以上大きな馬にまたがり、殺気だった目でこちらを見ている。人数は３０人くらいだろうか。彼らを見てユーティが全員に囁く。

「この大草原に住んでいる原住民の１つよ。この大草原の森の中に拠点はあるらしいけど、詳しいことはわからないわ。彼らは遠征して魔物を狩る部隊。全員が戦闘の達人よ」
「でも３０人程度ならなんとか・・・」
「バカ言わないで！　１０人いたらギガノトサウルスも標的にするような連中よ？　それが３０人もいるんじゃ相手にもならないわよ！」
「じゃあどうしたらいいの・・・？」
「知らないわよ。ただあいつらは動く生き物なら全部食べられると思ってる連中だからね。捕まったらロクなことにならないのは確かよ」
「リサはあんな奴らにつかまるのはまっぴらごめんです」

「・・・私がやるわ」

アルフィリースが前に出る。

「アルフィ！」

「止めないでミランダ、これは四の五の言ってられる場面ではないわ！」

「来るよ！」

馬にまたがった彼らが突撃してくるのと同時に、自分の呪印の解除に入るアルフィリース。だが大きな誤算が彼女たちにはあった。

「は、速い！？」

彼らとの距離は１００ｍ程度。馬であればその距離を詰めるのに１０秒はかかると踏んでいたアルフィリースだったが、実際には３秒と立たず半ばまでその距離を縮められた。その上何かが飛んでくるのが彼女の目に入る。

「！？」

それは両側に石のついた縄であった。単純に投石武器としても使えるのだが、勢いのついたそれはアルフィリースを後ろに押し倒すのに充分であった。

「あっ！」

思ったより重量のある投石武器にアルフィリースがバランスを崩し、即座に起き上がろうとするも既に敵は目の前であった。馬から飛び降り、アルフィリースの喉元に剣を突き付ける騎馬民族達。他

の仲間も抵抗らしい抵抗も出来ないまま同様に捕獲される。

「な、何を・・・うーっ、うーっ！」

アルフィリースが魔術を使うことを察したのか全員を後ろ手にするだけでなく、さるぐつわを噛まされた。これではアルフィリースにはなすすべがない。

獲物を上手く捕まえたことに満足したのか、互いを見て頷き合う騎馬民族達。そのままアルフィリース達を軽々と持ち上げ、馬に乗せようとする。一言も話さない様子がひどく不気味で、アルフィリースはこれから自分がどうなるのかを思い浮かべ、蒼白になった。

「（そんな、こんなところで・・・何とかして脱出する方法を考えないと、もし彼らの集落まで連れていかれたら！　でもこんな屈強な連中を３０人も相手にできるかしら・・・魔術を詠唱する時間すらないんじゃ、勝ち目は非常に薄いわ）」

実際に動きは速く、訓練されたアルフィリースが反応する暇さえない様な連中である。それにそう大柄なわけでもないのに、腕力も凄まじい。結構な重量もあるはずのアルフィリースを軽々と小脇に抱えているのである。

その男はアルフィリースを馬に軽々と乗せると、自分も飛び乗ろうとする。だがその男は馬に乗ることに失敗した。アルフィリースは馬に腹を支点にして乗せられているため何が起こっているのかよくわからなかったが、地面が真っ赤に染まっていくのは見えた。そして全員がざわめきだす。どうやら彼らもアルフィリース達を同じ言葉を話せるらしい。

「守人だ！」

「守人がきたぞ！」

アルフィリースはその様子を見ることはできなかったが、ユーティが助けに来て囁いてくれた。どうやら難を逃れていたらしい。

「大丈夫かしら、アルフィ。今縄をほどいてあげるからね！」
「むー、うー」
「あ、先にさるぐつわか」
「ん・・・ぷはぁ！　何が起こってるの、ユーティ」
「守人――外の人間は『案内人』と呼ぶけど。彼女が来たのよ」
「彼女？」

自由になったアルフィーリースが顔を起こすと、少し高い丘の上に緑の髪を風になびかせた少女が馬に乗ってこちらを見下ろしていた。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その6～大草原北部の魔獣達～（後書き）

次回投稿は１２／２０（月）１２：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その7～大草原の守人～（前書き）

～あらすじ～

大草原北部を旅するアルフィリース達。だが行く手を阻むのは彼女達が抗するべくもない強力な魔物達ばかりで・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その7～大草原の守人～

アルフィリースの目の前に現れた緑の髪の少女。といっても身長はミランダくらいはあるはずだし、歳もリサよりは上だろうか。しかし確実なのは人間の少女ということであろう。

長く緑の直毛をそのまま背中に垂らし、太陽を背中に受けて透き通るような輝きを見せる。目は少しきつく、鋭い雰囲気の美しさだと考えていいだろう。その雰囲気からは女性的な空気よりも、戦士としてのオーラが漂っている。そしてその艶やかな唇から発せられる言葉に、一同が威圧された。

「外部からの人間に対し、こちらからは手は出さないのが掟。言葉のわからぬ魔獣ならともかく、そなたたちが掟を破るとはな」

少女は大声を張り上げているわけではない。だがその声は誰よりもよく響く。いや、澄み渡るといったほうが正しいか。だが騎馬民族達も黙ってはいない。

「仲間を殺すとは！　まだ我々が掟を破ったと決まったわけではない！」

「ではその女子(おなご)達をどうしようというのだ」

「我々の里に連れ帰り、歓待する！」

「歓待する者を縛りあげるのか？　随分と荒い歓待の仕方だな」

「我々の流儀にまで口を出されるいわれは無い！」

「外の人間のような言い訳をする・・・では我にその歓待の内容を説明して見せよ！」

少女が一段と声を張り上げる。だが騎馬民族達は答えない。

「どうした！　我に説明できないのか？」
「・・・最近我々の里では女があまり生まれない。女の人数が足りないのだ」
「それで外から来た人間をかどわかすと？　なぜ事情を話して同意を求めないのか」
「そんな悠長なことをしている時間はないのだ！」
「愚か者め、だから貴様らは蛮族などと言われるのだ！　その行為自体が自分達の首をさらに絞めると、なぜ気付かぬ！」
「うるさい！　この大草原の掟は、強い者に弱い者が従うことが大原則のはずだ。この女達は我々の襲撃を防げなかった。よってこの女達は我々の物だ！」
「その原則を否定はせぬが、外の人間に言わせればとんだ暴論だな。それにその原則を出すならば、貴様たちは我の命令に従わねばならぬだろうな」

ぎらりと男達を睨みつける少女。その迫力に思わず屈強の男たちが後ずさる。アルフィリース達も彼女の殺気に思わずびくりとする。だが騎馬民族の隊長らしき人間がまけじと一歩前に出る。

「黙れ、炎獣の威をかる女狐め！　貴様が現れる前までは我々は自由にやっていたのだ。それに我々が貴様より弱いと決まったわけではない。やってしまえ、この女さえ殺せば我々は自由なのだ！」
「・・・それは明確な反抗と受け取って問題ないな？」

騎馬民族達が武器をそれぞれ構えるのを見て、少女も緊張感を上げる。そして隊長らしき人間が馬の腹を蹴ったのを合図に、騎馬民族達が一斉に少女に襲い掛かり始めた。

「やむをえん」

少女が自分にしか聞こえないように小声で呟くのと、背中の投擲用の手裏剣（いわゆる曲刀なので刃渡りは５０ｃｍ程度はある）を投げるのはほぼ同時だった。その動作が余りに素早く、また手裏剣の勢いも凄まじかった。馬ごと３人程度が両断され、刃がカザスの横の地面に刺さって止まる。

「ひ、ひえっ！」

カザスが悲鳴を上げても彼を非難することはできないだろう。少女が動いたと思った瞬間には自分の横に手裏剣が刺さっていたのだ。だがそのような状況でもひるむことなく斬りかかる勇猛な騎馬民族達。それを見て少女は自分の馬の横腹を軽く蹴り、騎馬民族から離れるように横に走り出す。ほどなくして騎馬民族達が少女を追いかける格好になった。

一方既に放置されているアルフィリース達。ユーティによって自由になったアルフィリースが次々と全員を解放していく。

「あの子に加勢しないと！」
「ああ、いくらなんでも多勢に無勢だ」
「必要ないわ」
「え？」

加勢に行こうとするアルフィリース達を、ユーティがあっさり否定する。

「で、でも・・・」
「必要ないって言ってるのよ。彼女が噂通りの腕前なら、３０人程度、あっという間に蹴散らすでしょう」
「ええ？」
「まあ見てなさい。いい物が見れるかもしれないわ」

そう言い放つユーティの顔はなぜか少しワクワクしている。そして目線を少女に戻すと、少女と騎馬民族との差はみるみる開いている。騎馬民族は必死で馬に鞭を入れたり腹を蹴っているが、少女はまだ馬の腹すら蹴っておらず、涼しい顔をして馬に自由に走らせている。どうやら馬の性能が大幅に違うらしい。そして後方が追いついてこないのを確認すると、くるりと馬に後ろ向きにのった。そのまま馬に備え付けてある弓を手にする。

「馬に後ろ向きに乗ってる？」

「手綱を離して馬を操るとは、なんて器用なことを」

「しかも矢を3本同時に構えてますよ？」

フェンナが驚くのも無理はない。少女は3本の矢を同時に番(つが)えて放つ。隊長を含め集団の先頭はこれを避けるが、後続はかわしきれなかった。そしてその矢を反射的に剣で叩き落とそうとした騎馬民族が剣ごと、いや剣ごと人馬も吹き飛ばし、貫通した矢はさらに後続も吹き飛ばす。結果、3本の矢で5人程度を仕留めてしまった。さながら大砲並の破壊力の矢である。

「なんだあれは！？」

「まさかアルフィと同じく、風の魔術で補強を？」

「ええ、けど私とは威力がケタ違い。すごいわ」

アルフィリース達の驚愕はそれだけに終わらない。固まるのは不利と見た騎馬民族達は3方に展開し、2方から追い立て、1隊が進路をふさぐ戦法に出た。

その様子を見た少女は弓矢から手裏剣に再び武器を戻すが、背中に刺した手裏剣は後5本しかない。効率的に使うはずと誰もが考えたが、少女は口元にかすかにほころばせ、

「フ・・・」

と笑った。まるで彼らの考えは全てわかっているとでもいいたげに。少なくともそのように追っている騎馬民族からは見えたのだ。

そしてまずは追手の1隊に的を絞り、残った手裏剣の4本を少女は惜しげもなく投げる。2本は騎馬民族の方へ飛んだが、もう2本はあらぬ方向に飛んで行った。1人がかわしきれず重傷を負うものの、今度は大半がうまくかわす。だがかわしたところにヒュン、と空気を切り裂く音と共に、あらぬ方向から手裏剣がまた飛んできた。

追い立てていたうちの一隊はその手裏剣で全滅した。死んだ騎馬民族は自分が死んだことすら理解してはいないだろう。用は少女はブーメランの要領で手裏剣を使ったのだ。もちろん風の魔術で強化してはあるのだが。

さらに手元に戻ってきた手裏剣を3本回収し、残り4本。まずいと思ったのか、追いたてる残りの一隊は急速に距離を詰めようとするが、馬の性能が違いすぎる。そして容赦なく放たれる残り4本の手裏剣。今度は全てがあらぬ方向に飛んでいる。騎馬民族全員がその手裏剣の行方を思わず目で追ってしまうが、それこそが少女の罠であり、一瞬彼らが気を取られた瞬間を狙い、手裏剣を刺してあった盾代わりにも使える丸い円盤を投げつける。その周囲は刃物のように磨いてあり、これ自身も投擲武器として活用できるように工夫されているのだ。その円盤が手裏剣で自然とほぼ1列に誘導されてしまった騎馬民族の追手に襲い掛かる。

その一撃を剣で防ごうとした者は容赦なく剣ごと首を切断された。かろうじてかわした者も既に重傷であり、しかもそこに四方から手裏剣が襲いかかる。あっと言う間に追手の2隊16名は命を落とした。

その様子を見て言葉もないアルフィリース達。

「うっそお」
「す、凄過ぎ・・・」
「あんな戦い方が・・・」
「（そりゃこの大草原の管理人ですもんね。大概の魔獣よりは強いって他のフェアリーが言ってたけど、どうせ話が大きくなっただけだと思ってた。でもこれは本当に強いわ。この強さがただの人間なのかしら？）」

ユーティの思考もよそに、残るは先回りした１隊１０人のみである。だが今度は投擲武器は少女の手元に無い。少女は背中に差してある槍を取りだし構え、馬を反転させるとそのまま正面から隊に突っ込む少女。騎馬民族の隊長も迎え撃つべく馬を駆るが、激突の手前で少女が馬の方向をずらして接触を避けた。やむなく隊は馬の向きを変更すべく減速するが、そこに一閃の光が走る。と、同時に隊の一人が首から血飛沫（ちしぶき）を上げて馬から落ちた。

一瞬何が起こったかわからない騎馬民族達だが、傍から見ていた者には一目瞭然だった。何のことはない、少女が背後から追いついて切り捨てただけだ。ただ少女が方向転換をするときにほとんど減速をしなくてよいのは、騎馬民族にとってすらかなりの常識離れだった。乗り手の技術もそうだが、馬の性能が違いすぎることの意味を、騎馬民族達は理解していなかった。

さらに同様にしてもう１人を倒す。それを見て動いては不利と悟った騎馬民族は、互いを背にして円を組み、少女を迎え撃とうとするが今度は少女がそれを見て手に印を結んでいる。隊長がその動作に気付いた時には既に手遅れだった。

【大気に住まう精霊よ、来たりて集いて弾となれ、弾を寄せて玉となれ、大気、その玉の通り道とならん。彼らの頭上に精霊の御力示

し給え】
《風塊砲（エアロキャノン）》

可視化できるほど圧縮された風の塊が円形になった騎馬民族に襲い掛かる。騎馬民族達も魔術は使えるらしく、全員が防御魔術でそれを防ぐが、何人かは致命傷を負い、また生き残った連中も圧縮された風の塊にバランスを崩し、視界を奪われる。

「ぐあああ！」
「うおお！」

騎馬民族達の叫び声が上がる中、少女の馬の蹄（ひづめ）の音が近づいてくる。隊長はさしたるもので、舞い上がる土煙りの中少女の馬の影を視界にとらえ斬ろうとしたが、馬の上に少女の姿は無かった。そのことに隊長が気がつくと同時に、彼は自分の背中に走る熱い痛みと、部下の断末魔の悲鳴を聞いた。

そして馬から落ちるとすぐに起き上がって何があったのか確かめようとする隊長。だが仰向けになった瞬間、彼の喉には少女の槍が刺さっていた。もはや体を動かすこともできず、部下の行方を確認することはおろか自分の反撃もままならない。それでも左手を動かし、倒れるときに手に持った短刀を投げようとするが、少女の馬に容赦なく左手を踏みぬかれた。そして容赦なく横に引き抜かれる少女の槍。血飛沫が舞い、少女にもいくらかの血が顔まで届くが、少女は瞬きすらしなかった。

そのまま隊長の瞳がぐるりと反転して白目を剥き、もはや反撃するようなことが無いことを少女が悟ると、自分の馬に乗り悠然とアルフィリース達の方に歩いてくる。その光景をまるで芝居の役者を見るような心境で見つめるアルフィリース達。

「（なんて・・・きれいなんだろう）」

それがアルフィリースの偽らざる感想であった。おそらくは自慢であろう緑の髪も返り血で赤く染まっている部分がある。人間の血だから乾けばそれなりに固まってしまい髪が風になびきにくくなるのだが、まるで気にかける様子もなく、顔についた血すらぬぐおうとせずに悠然とこちらに馬を歩かせる少女を、アルフィリースは美しいと思ってしまったのだ。恐ろしい光景を見過ぎると感性が麻痺し、美しいとすら感じることもあるというが、それにも近い感覚だったのかもしれない。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その7～大草原の守人～（後書き）

次回投稿は１２／２１（火）１４：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その8～巨獣と少女～（前書き）

～あらすじ～

緑の髪の少女に助けられたアルフィリース達が次に取った行動とは・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その8～巨獣と少女～

「怪我は無いか、外の者たちよ」

少女が目の前に来て馬上から声をかけるまで茫としていたアルフィリース。少女がその気なら今ここで首をはねられても何の抵抗もできなかっただろう。それにしても風に殷々と響く声である。決して声を張っているわけではないのだが。

「あ・・・は、はい！　怪我はどこにもありませんだったり！」

不意をつかれて慌てたのもあり、年下の少女に思わず敬語を使い、しかも変な言葉を発してしまうアルフィリース。その様子を見て仲間は苦そうな顔をするが、当の少女は別段表情が変わらない。

「そうか、それは何よりだ。ところでそなたたちを我が家に招待したいと思うのだが、受けてはくれないかな？」

「・・・」

「どうするの、アルフィ？」

ミランダの一言で我に帰るアルフィリース。まだ不思議な感覚から現実に戻ってこれていないようだ。

「え、と・・・それは嬉しいけどなぜ？」

「見た所、水も食料もないようだ。それでは困るのではないかと思ってな。私はこの大草原に迷い込んだ者を守る役目を帯びている。希望があるならその場所に送り届けるのは吝かではない。帰るもよし、進むもよし。ただ迷惑でなければ、同じ草原に住まう者がかけた失礼の詫びをさせて欲しいのだがな」

「詫びだなんてそんな・・・私達こそ助けてくれてありがとう。お礼を先に言えなくてごめんなさい。思わず貴女に見惚れてしまって」
「我にか・・・？」

今度は少女は意外そうな顔をした。その顔がアルフィリースの言葉に呆気にとられる顔に変わる。その様子を見て少女は年相応の感情があることにアルフィリースは気づき、安心した。

「我に見惚れるとは・・・そなたはさては外の世界で流行っておるとか言う『百合』とかいうやつか？」
「『百合』？　って、何？」

アルフィリースは思わずリサの方を見る。その瞬間リサの目がきらりと光る。

「アルフィ、『百合』とは美的感覚に優れた人間を差す時に使う褒め言葉です。特に女性が女性の美しさを認めるときに使うことが多く、褒められていると考えてよいでしょう。相手から『そなたは百合だな』と言われたら、認めないと相手の褒め言葉をけなしたことになり、悪感情を招いてしまいますよ？」
「そうなの？　・・・な～んか納得できないけど、まあいいか」

そして少女に向き直ると改めて言い直す。

「え～と・・・私、多分百合なのかな？」
「ふむ、そうか・・・まあ嗜好は個人によって様々だからな。そのことについてとやかくは言わないが、我は遠慮させてもらうぞ」
「・・・何のこと？」
「プ、ククク・・・」

後ろでリサとユーティが笑いを必死でこらえていた。このあと少女の誤解が解けるのに多大な時間を要するのだが、そんなこととは露知らないアルフィリースだった。

その時少女が空を見て顔色を変える。そしてやや急いだような口調でアルフィリース達に話しかける。

「ところでもうここに用が無ければ、彼らの馬を使って我の住処(すみか)までそなた達を案内したい。急いだ方がよいと思う」

「増援でも来るの？」

「もっとタチが悪い。直に竜巻が来るだろう、急いでくれ」

「わかったわ、貴女について行く」

「そのまましばらく我の住処にいることになると思う。嵐の季節がそのまま来そうだからな」

「え、もう？」

驚いたのはユーティである。そんなユーティの様子を見て、冷静に少女が返す。

「ああ、我も意外だがな。例年より月のめぐり半分は早い・・・我も初めてだよ」

「それなら是非もなくお世話になるわ！」

「そうしてくれ。準備を早く頼む」

「ええ。ところで私はアルフィリースっていうんだけど、貴女は？」

「我の名前はエアリアルだ」

少女はやはりよく澄み渡る声で言い放った。その名前と声の響きが不思議な旋律を奏で、アルフィリースの心に沁(し)み込んで行くようだった。

＊＊＊

エアリアルに案内されること数刻。既に日はほぼ傾いている。だが騎馬民族の馬を使ったせいでかなりの距離を移動できた。そのときエアリアルが振り返って全員に声をかける。

「後ろを見るといい」

全員が何事かと後ろを見るが、そこにあったのは天高く聳(そび)え立つ黒い柱だった。

「何だアレは!?」
「なんと不吉な光景だ・・・」
「何もかも吸い込んでしまいそう・・・」
「確かあれは・・・竜巻って言うんだっけ?」
「そうだ」

アルフィリースの問いに答えるエアリアル。竜巻は先ほどアルフィリース達が襲われていたであろう場所に発生している。その太さ・大きさは異常なほどであり、小さい町なら一飲みにするだろう。あの竜巻に飲み込まれていたらと思うとぞっとしないアルフィリース達だった。

「嵐の時期になるとああいった竜巻が大草原北部全体に乱発する。ひどい時は視界に１０数本の竜巻を収めることもある。あの竜巻に巻き込まれて生き残れる生物は、この大草原にいない」
「なるほど・・・じゃあ私達は間一髪だったのね」
「そういうことだ。そなたたちは非常に運がいい」

ニッ、と破顔するエアリアル。こうやって笑っていると美人なのだがとアルフィリースは思うが、同時に美辞麗句を並べたてられて

も喜ぶような性格はしていないだろうととも思う。ニアも戦士のオーラは纏うが、そこはやはり文明国の出身であり、軍属でもあるため他人との関係も円滑に行わなくてはならないから、多少なりとも接しやすくはある性格だ。

だがこのエアリアルはニアと同じような戦士の雰囲気も漂わせながらも、同時に排他的――良く言えば孤高な戦士といった所だ。見るからに野生の匂いを漂わせ、それが逆に化粧っ気のない彼女をより美しく見せているのだろう。他人がおいそれと話しかけられるような空気は纏っておらず、まるで見えない刃を装備しているかのようだ。その雰囲気は他の仲間にも感じられるのか、人見知りをほとんどしないアルフィリースの仲間たちでさえどことなく話しかけにくそうだ。

そういった印象を与えるエアリアルだが、アルフィリースは一向に気にした様子もない。むしろお構いなくどんどんと話しかけている。エアリアルもアルフィリースの態度が嫌というわけでもなさそうで、基本的に無表情であるものの、時々表情をほころばせている。傍目からすれば仲の良い友人に見えるだろう。その会話に時々ユーティが混ざっていく。ユーティも直接エアリアルを見るのは初めてらしく、興味津々だ。

「ところで今はどこに向かっているの？　なんだか岩ばっかりになってきたんだけど」

ユーティの指摘通り周囲を見ると足元にはほとんど草が見られなくなっており、ごつごつした岩が多くなっている。背の高い岩も増えてきており、草原であるはずなのに視界が狭くなっている。

「もうすぐ我が家だ。ここからもう少しで洞窟が見えるだろう」

「この辺には炎獣っていう凄い魔獣が出るって聞いたんだけど・・・大丈夫なの？」

「炎獣？？　ああ、大丈夫だよ。炎獣は我々を襲わない」
「そうなの？　ふ～ん」

なんとなく合点がいかないユーティだが、アルフィリースは大して気にした様子もない。もっとも気にしたところでエアリアルの誘導に任せるしかないというのが現実なのだが。

「着いたぞ」

エアリアルが指さしたのは岩場の頂上付近にある大きな洞窟だった。入り口の高さだけでアルフィリース3人分くらいはある。奥にも広そうであり、生活するには十分だろう。珍しそうに周囲を眺めるアルフィリース達に構わず、すたすたと中に入るエアリアル。

「そういえばエアリアルに家族はいるの？」
「ああ、父上との2人暮らしだ」
「お父さんがいるんだ。じゃあご挨拶しないとね」
「アルフィ、お父様にごあいさつとは時期尚早とリサは考えます」
「・・・お前の所には嫁にはいかんぞ」
「？？」

百合の意味がわかっていないアルフィリースには、全くリサとエアリアルの言っている意味がわからなかった。

「それでお父さんはどこに？」
「中にいるはずだが・・・父上！　エアリアルです、ただいま戻りました！」

洞窟の入り口付近から声をかけるエアリアル。ほどなくして奥から返事があった。まるで地の底から響くような深い声である。

「・・・帰ったか、エアリアル・・・そちらは客人か？」
「ええ、サディカの民に襲われているところを助けました。どうやら大草原は嵐の時期に入るらしく、嵐の時期が終わるまではこちらに住まわせたいと思うのですが、よろしいでしょうか？」
「ここで断ったらワシが悪者だろうな・・・いいだろう」
「ありがとうございます」
「ではワシも挨拶せねばなるまいな。やれやれ・・・人前に姿をさらすなど、いつ振りだろうな」

声が途切れると同時に、ズシン・・・ズシン・・・と大きな音が響き、巨大な何かがこちらに歩いてきている。その瞬間リサがアルフィリースにしがみつき、ニアは全身の毛が逆立って警戒態勢を取る。ミランダもただ事ではないとわかったのか表情が引き締まり、フェンナとカザスを反射的に後ろに寄せる。だがアルフィリースだけは不思議と飄々としていた。

「（これは・・・以前ミリアザールを目の前にしたときと同じような感覚です。相当ヤバいのでは？）」
「（全身の毛が逆立つ・・・何か凄いのが、凄いのが来る！）」
「（魔王・・・いや、もっと強いか？）」
「（なんで皆警戒してるんだろう。別に怖くないのに）」
「（この気配はもしかして・・・）」

思いは様々である。ほどなくして足音の主が姿を現す。

岩陰からぬっと姿を現したのは実に巨大な獣だった。炎にも見える全身にたなびく赤い鬣（たてがみ）。見た目は獅子だが、手足は８本あり尾は三又に分かれている。その見た目よりも、放つ生命力・滾るオーラが尋常ではない。威圧感だけで全員が押しつぶされろうになる。傲

岸不遜なユーティでさえ涙目であり、いまにももらさんばかりの勢いでカタカタと震えている。涼しい顔をしているのはアルフィリースとエアリアルだけである。
そのユーティがカタカタと震えながらもなんとか口を開く。

「え、え、えええええ炎獣・・・フ、ファラン・・・クス」
「ふむ、人はワシのことを炎獣と呼ぶな・・・名前はファランクスで合っているのだが」

低い声で答えるファランクス。そしてエアリアルが片膝をつき、ファランクスに挨拶する。

「ただいま戻りました、父上」
「うむ」
「え、エアリアルのお父さんって、この人？」

人かどうかはさておき・・・アルフィリースは目の前の巨獣を見上げる。そこには目を細めてエアリアルをみつめるファランクスがいた。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その8～巨獣と少女～（後書き）

次回投稿は１２／２２（水）１６：００です。

暗躍、その４（前書き）

～あらすじ～

炎獣ファランクスの元に案内されたアルフィリース達。一方その頃・・・？

暗躍、その４

＊＊＊

「・・・アノーマリー・・・アノーマリー・・・」
「ここだよ～。どうしたのさ、ライフレス」

ここはアノーマリーの魔王生産工房。周囲には実験房やよくらからない液体の瓶、チューブ、様々大きさの容器が立ち並ぶ。独房や鎖に様々な魔物、魔獣、動物が繋がれており、中には台に寝かされている者もいる。ただ共通しているのは、どの生物もぎゃんぎゃんと騒ぎ立てていることくらいだ。

「・・・騒がしいな・・・」
「さっきまで解剖してたからね。血の匂いで興奮しているのさ」
「なるほど・・・でもあれはまだ生きているんじゃ？」
「ああ、どのくらい生きていられるのか実験している」

ライフレスがちらりと他の台の上に目をやると、確かにそのような様子が見受けられる。まだ血の跡が新しく、生臭い匂いもたちこめている。中にはまだ生きているのだろうか、ビクビクと脈打つ者もいる。ここまで原形をとどめないほどにされていて、よく生きていられるものだとライフレスは内心感心する。アノーマリーには医学の心得もあるとライフレスは聞いていたが、なるほど納得できる。

血煙りが立ちかねないほどの血生臭い光景は並の人間ならその場で吐くほどの悪臭を伴うのだが、２人は実に平然とその間をぬって歩く。靴につく血も気にとめない。

「足元が滑りやすいから気をつけて」
「・・・それはいいが・・・もうちょっと静かにさせられないか・・・」
「確かにちょっと騒がしいね・・・・・・・・・・黙れ」

アノーマリーの口調が軽薄な物から、一気に重く低いものへと変わる。その瞬間あれほど騒ぎ立てていた者達がぴたりと静かになり、後に残るは静寂のみとなる。

「・・・さすが・・・」
「まあこいつらも僕の怖さは十分わかって・・・ん？」

全て沈黙したはずの房が、１つだけ騒がしい。

「お願い！　ここから出してよぉ！」
「出してくれ、頼む！　出してくれたらなんでも褒美をやるぞ！？」
「・・・あれは？・・・」
「どっかの国の偉い人とその娘らしいよ。詳しくはあのイケメン君に聞いてくれ」

イケメンとは彼らの仲間の美男子を指すのだろう。
房にいる2人はそんなことはわかるはずもなく、格子をガシャガシャとゆらしている。その様子を見て心底あきれたような顔をするアノーマリー。

「まったく・・・野良犬でももうちょっと頭が回ると思うんだけどね。ここで騒いだところで僕の機嫌を損ねるだけだと、どうしてわからないかな？　これだから人間はめんどくさい・・・おい、ダグラ、ドグラ！」
「へい、ご主人様お呼びで？」

姿を現したのはオーク。いや、体はオークだが、頭にはそれぞれイノシシと牛に挿げ替えられている。それを示すかのように首には派手な手術痕がある。

「あの躾けのなっていないメスブタを黙らせろ」
「男の方はいいんで？」
「目の前で娘が泣きわめく様を見れば、多少静かになるだろうさ」
「了解いたしましただ。ところで手段はどうしますだ？」
「任せる。ただし壊すなよ、まだ利用価値があるかもしれん」
「そりゃあもう。生かさず殺さずが、きーぽいんとでごぜえますもんね」

ダグラが口元をニヤリと歪める。そのダグラの肩をドグラがとんとん、と叩く。

「ダグラよぉ、犬っころ達もつれてきていいか？　最近どうも盛っちまってよお、おとなしくゆうこと聞いてくれねぇんだ」
「ドグラよぉ、もちろんだんべ。だが俺達と犬っころだけお楽しみはだめだべ。せっかくだから、あの父親の方にも楽しませてやんべ」
「んだんだ。目の前でなんにもできねぇんじゃ、生殺しだかんな。きちんと参加させてやんべ」
「オラ達は親切だなぁ」
「まるで天使のようだべ」

2体がニヤニヤと笑っている。こんな低俗な笑みを浮かべる天使もいないとは思うが、そんな理屈は彼らにはどうでもいいのだろう。だが彼らがどのような異常な行為に及ぼうとしているかは、世間知らずで正常な父娘には想像が及ばなかった。

「ほら、娘っ子。こっちにくるだ」
「いや、いや！　助けてお父様！」
「心配すンな、すぐに楽しくなるだよ。お父様の出番はもうちょっと後だぁ」
「娘に、娘に触れるな！」
「お前頭悪いのかぁ？　もう触れてるだよ。これから触れるどころじゃ済まないべ。もっと仲良くするんだからよ」
「ひ、ひいぃぃぃぃ！」

下劣なやりとりをそこまで見届けると、アノーマリーとライフレスはさらに奥に進んだ。ほどなくして娘の凄まじい絶叫と父親の断末魔にも等しい悲鳴が聞こえてきたが、ライフレスは無感動でやり過ごし、アノーマリーはいたって楽しそうだ。

「・・・で、僕が頼んだブツは出来ているの？・・・」
「もちろん！　かなり気合いを入れて作ったよ！」
「・・・あとここにドゥームとドラグレオもいるって聞いたけど・・・」
「ああ、あの2人なら修行中。もっとも、一方的ないじめかもしれないけど」
「・・・先に様子を見てもいいだろうか・・・」
「ああ、それならこっちだよ」

2人は行き先を変える。そこにはかなり広い空間があり、外壁は何かの生物のように血管のようなものが一面に走り脈打っていた。なんともおぞましい光景である。

「・・・この壁は？・・・」
「僕が開発したやつなんだけど、いちいち壁を壊されたらたまらないからね。こいつは衝撃を吸収すると同時に、自己再生能力も兼ね

備えた優れモノさ。特許を申請したいくらいだね」
「・・・売れるとは思えないけどね・・・」
「むー、便利なんだけどなぁ」
「ぐあああああ！」

そのとき突然聞こえる悲鳴。その悲鳴と同時に衝撃が伝わってくる。2人が部屋の中に入ると、壁にめり込んだドゥームと寝転がるドラグレオの姿があった。

「・・・・・・」
「ぐおー！　ぐおーっ！」

見るとドゥームは壁にめり込んだ上半身を抜こうともがき、ドラグレオは寝ている。

「・・・何があった・・・」
「ドラグレオの寝がえりで壁まで吹っ飛んだんじゃない？」
「・・・寝返りって・・・」
「まあドラグレオの強さは別格だからね。ドゥームなんかじゃ相手にならないでしょ」
「・・・ふむ・・・」

ライフレスがドゥームを壁から片手で引っこ抜いてやる。ドゥームはぺっぺっと口の中に入った何かを吐きだし、居住いを正した。

「なんだ、ライフレスか」
「・・・なんだとは御挨拶だな・・・」
「あはは。でも助かったよ、ありがとう」
「・・・素直なのもなんだか気持が悪い・・・」
「おいおい、じゃあどうしろって言うんだよ？」

「・・・それより修行の方はどうだ？・・・」

ドゥームはミリアザールとの戦闘で自分の未熟さを知ったのか、最近は謙虚に修行をしている。だが他のメンバーは忙しいため、大抵は寝転がるドラグレオにかかっていくのだが、寝転がっているドラグレオにも引けを取る状態だった。

「だめだ、まだ一回も起こせない。なんだか殴られに来ているような感じだよ」

「あのバカはめっちゃくちゃ強いからね」

「・・・フラストレーションがたまっているところ悪いんだが、ドラグレオを借りないといけない・・・仕事だ・・・」

「へえ～何の？」

「・・・計画は次の段階に進む・・・大草原を実験場にするため大掃除するらしい・・・差し当たって原住民の方はあのイケメンが手を打つらしいが、厄介なのは炎獣の方だ・・・あれをドラグレオに始末してもらう」

「あの寝てばっかりのバカにできるの？」

「・・・大丈夫だ・・・ドラグレオは強い奴に反応する・・・炎獣が噂通りの奴なら、ドラグレオも起きるさ・・・」

「え、じゃあボクは・・・」

「・・・まだまだってことだね・・・」

「そんな～」

がっくりとうなだれるドゥーム。

「でもボクはそうしたら暇になるんだけど？　当座仕事も大してないし、皆は忙しいみたいだし、どうやって修行したらいいわけ？」

「・・・そういうと思って、おネェを呼んでおいた・・・」

「げっ！」

カツン、カツンという足音と共に、長い黒髪の女剣士が入ってくる。

「しばらくぶりです、皆さん」
「うげっ・・・おネェだ・・・」
「その反応はなんですか、せっかくあなたのために出向いているというのに・・・心外極まりない」
「あ、あうあう・・・」
「・・・それではドゥームをよろしく頼むよ・・・」
「ええ、任されました」
「えーっと、ボクトイレ・・・」

こそこそと逃げ出そうとするドゥームの襟首をむんずとつかむおネェ。

「だめです、思い立ったが吉日。すぐに修行を開始しましょう。時は待ってはくれません」
「ちょ、ちょっと！　鬼！　悪魔！！」
「私を愚弄するのですか？　せめて一刀両断くらいに手加減しようかと思っていましたが、これは八つ裂きにしないといけないようですね？」
「どっちにしろ、怖ぇ！」
「うふふ、大丈夫です。消滅しない程度には手加減しますので」
「ダレカタスケテー！」

後にはドゥームの悲鳴だけがこだましていた・・・。

そんな2人を後に残し、とりあえず寝ているドラグレオは置いておき、工房に戻るライフレスとアノーマリー。その一角にアノーマ

リーはライフレスを誘う。

「これが例のブツだ」

「・・・へぇ・・・」

そこにある『物』を満足そうに見つめる2人。

「・・・これは・・・素晴らしい・・・」

「だろ？　僕の最近のデザインの中でも傑作の1つだね。でも本当にこれと君だけでシーカーの里を落とすのか？　今度は数千人のシーカーがいるんだろ？」

「・・・僕の手勢も何体かは連れて行くさ・・・それに僕の実力なら充分だね・・・」

「まったく働き者だね」

「・・・それは違う・・・こう見えても僕は僕達の中でも一番の戦闘狂でね・・・しばらくぶりに全力で暴れてみたいのさ・・・」

ライフレスが低い笑い声を出すのを見て、思わずアノーマリーも背中に嫌な物が走るのを感じた。

「（皆はドゥームが一番危ない奴と感じているけど、ライフレスの方がよっぽど危ないんじゃないのか？）」

「・・・危ない奴だと思っているんだろう？・・・心配しなくても暴走はしないさ・・・シーカーを全滅させるような真似はしない・・・」

内心を当てられ、動揺を隠せないアノーマリー。

「君は・・・危険な奴だな」

「・・・お互い様さ、僕達は全員ね・・・」

ククク、と笑うライフレスの笑い声がいつまでもアノーマリーの工房に響いていた。

続く

暗躍、その４（後書き）

最近また閲覧が伸び始めていて、とても嬉しいです。

次回投稿は１２／２３（木）１８：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その9～エアリアル～（前書き）

～あらすじ～

ファランクスの元で嵐が過ぎるまで生活することにしたアルフィリース達。その時各自が抱く思いとは・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その9～エアリアル～

＊＊＊

「外はすごいことになっているな・・・竜巻はここにはこないのか？」
「ああ、不思議なことにな」
「でも他の魔獣が竜巻を避けてここに来るんじゃ？」
「父上がいるここにか？　竜巻の方がよっぽど安全だよ」
「どんだけ～」

ユーティが妙な言葉を発した。どうもこの妖精は普通の人間より世長(よた)けている。俗語にもミランダ以上に詳しいし、変な妖精だとアルフィリースは思っている。
アルフィリース達がファランクスの住処に厄介になってから3日が経過している。その間様々な話をファランクスとエアリアルに求められ、アルフィリース達は外界の話を沢山していた。
どうやらファランクスは５００年は生きているらしく、その知識の幅には驚かされる。魔術にもある程度精通しており、魔獣と言うより幻獣といってもよいだろう。正しく彼が世間に理解されていれば、崇め奉られてもいいくらいの存在だ。性格も非常に穏やかで、好感が持てる。中でも一番ファランクスと仲良くしているのはアルフィリースであり、もはや友人と言っても良いくらいの仲の良さである。昨夜などはファランクスを枕にして寝てしまっていた。

「ほほう、グウェンドルフはそこにいるのか」
「ええそうよ。ファランクスってグウェンとも知り合いなの？」
「面識はあるよ。あやつはああみえて結構色々な所に出没するから

な」
「ふーん、やっぱり有名人なんだ」
「それはそうだ、人語を介す竜はこの大陸で最も古い生き物だからな。奴も数千年は生きておるはずだよ」
「げっ・・・」
「む、どうした？」
「そのグウェンの頭の上で散々昔遊んだわ・・・頭の上に乗るなって一回言われたけど、『いいじゃん、ケチケチすんなー！』って言って遊んだあげく、鱗を一枚引っぺがして師匠へのお土産にしたような。師匠は真っ青になってたわ」
「グウェンドルフの頭の上で・・・ククク、ハハハハハ！」

ファランクスが大声で笑い始めた。

「や、やっぱりまずかった？」
「そうではない・・・実に痛快な娘だと思ってな！　竜と会話しただけでも自慢する生き物は多いのだが、その頭の上で遊ぶなど・・・しかもあまつさえ気に入られ竜の小手まで託されておるのに、全く鼻にかけぬそなたが面白いのだよ・・・ハハハハハ！」
「そんなもんかな・・・？」

アルフィリースはよくわからないといった感じだ。

「ワシもそなたが気に入った！　ワシに出来ることがあれば何なりと申せ。どのみち嵐の季節が過ぎるまでは共に暮らさないといけないのだ」
「う～ん・・・じゃあ修行に付き合ってもらおうかな？　この大草原で一番強いなら色々参考になると思うしね」
「ふむ、それは構わんがまずエアリアルの方が修行になると思うぞ？　特に武器を扱うのであればな。まずはあの子に教えてもらえ、

それで不足ならばワシが相手をしよう。だがあの桃色の髪の娘・・・」
「リサのこと？」
「うむ。あの子はセンサーだな？」
「ええ」
「何か悩んでおるようだ。ワシの所に連れてくるとよい」
「わかった、呼んでくるわ」

アルフィリースがリサを呼びに行くと、ほどなくしてリサが現れた。

「何か用ですか、ファランクス」
「うむ、まあ座れ」

ファランクスに促されるまま、ちょうどよい高さの石を台座代わりに腰かけるリサ。

「リサ、と言ったか？　そなたはセンサーだな？」
「そうですが」
「上手くこの大草原ではセンサーが働かなくて困っているのではないか？」
「その通りです」
「他にもワシの存在が感知できなかったり、急に背後に立たれたことはないか？」
「！　なぜそれを？」
「やはりな・・・そなたのセンサーは完全に我流だな。誰かに師事したことはあるまい？」
「はい。このような体ですから、この能力は失明した時に得た物です」
「我流でそこまで至るとは天性の才能はあるが、それだけだな。セ

ンサーの上級能力については知らないのだな」
「センサーにはやはり応用能力があるのですか？？　もしよければ私に教えてはいただけないでしょうか！」

リサの表情が気色ばむ。表情は真剣そのものだ。だがファランクスは至って穏やかである。

「そう急くな・・・物事には順序というものがある。その様子ではそなたは甘え下手のようだな」
「・・・」
「では問おう。何故さらなる力を求める？　そなたの力はセンサーとしては相当なレベルに既に位置しておる。これ以上は過分な領域に入りかねんぞ？」
「・・・その力が無くては守れない人たちがいます」

リサが自分のスカートをぎゅっとつかむ。

「リサは自分の能力に絶対の自信を持っていました。ですがそれがどれほど自惚れだったかを旅を始めて2カ月程のわずかな間に知ってしまったのです。今生きているのは運が良いだけ。リサはこのままではお荷物になってしまう」
「ふむ・・・」
「リサにとって家族以外の人間は利用する物でしかありませんでした。でも初めて対等でいたいと思った人間達がいます。彼女たちと一緒にいて笑っていたい、色々な物を感じてみたい。彼女たちとこれから先も一緒にいるためには、彼女達を守るためにはこのままではいけないのです！」
「彼女達とは、アルフィリース達のことだな・・・？」

リサは無言で頷き、口元を真一文字に結んでいる。ファランクス

はじっとリサを見つめるが、リサの表情は崩れることなく、盲目なはずの目でファランクスの方をじっと見ている。光の無いその目に、強い意志という光をファランクスは見た気がした。

「お願いします・・・リサに力を・・・」
「・・・いいだろう」
「！　ありがとうございます！」
「ただし！」

ファランクスの語気が強まる。

「強い力はさらなる強い力を引き寄せる、良し悪しに関係なくな。それだけは心得ておけよ？」
「肝に銘じておきましょう」
「うむ・・・ではまずソナーの走らせ方から教えよう」

こうしてリサの特訓は始まったのだった。

＊＊＊

「エアリアル、ちょっと特訓に付き合って」
「それはいいが・・・今は風がちと強すぎるのではないか？」

アルフィリースがエアリアルを伴って外に出る。相変わらずの外は暴風だが、今のところ雨は無い。だが視界には何本もの竜巻を収めることができ、近くの物は何ｋｍも離れていないのではないかと思われる。

岩陰にいるうちはいいが、少し顔を岩陰から出したアルフィリースは凄まじい突風にバランスを崩しそうになり、慌ててエアリアルがその体を支えた。

「大丈夫か、アルフィリース」
「うん、ありがとう。ところで私のことアルフィリースって呼ぶのは、呼びにくくない？」
「だがアルフィリースはアルフィリースだろう？　他にどう呼べば？」
「皆はアルフィって呼ぶかな」
「アルフィ・・・アルフィか・・・それはいいな」

エアリアルが反芻するようにその言葉を口の中で呟く。

「だがそれでは対等ではないな、我のことも何か略すがよい」
「ええー？　そんなこと言われても・・・」
「いや、友人とは対等な存在であると聞いているぞ？　我だけその呼び名を使うのは何か気が乗らん」
「う～ん・・・じゃあね、エアリーっていうのはどうだろう？」
「エアリー、エアリーか・・・悪くはないな」

エアリアルがうんうんと頷いている。どうやら気に入ったらしい。

「その呼び名でいい？」
「ああ、悪くない」
「よかったぁ。『エアリン』とどっちにするか悩んだんだけど、エアリーが良かったのね？」
「・・・いや、エアリンにならなくて良かったと我は思う。色んな意味で」
「え、そう？」

アルフィリースの内心ではエアリンが大分優勢だったのだが、エアリーの方を引き合いに出してエアリンを選ばせたかったとは今更

言い出せなかった。

「ではその呼び名で我を呼んでみてくれないか？　慣れないと不便そうだからな」

「いいよ。エアリー」

「・・・もう一度」

「エアリー」

「・・・もう一声」

「エアリー」

「・・・もういっちょ」

「何回でも。エアリー、エアリー、エアリー」

「・・・あう」

エアリアルが顔を真っ赤にしてボン！　とオーバーヒートした。そのままふにゃふにゃと崩れ落ち、慌ててアルフィリースが支える。

「ど、どうしたのエアリー？」

「いや、その、なんだ・・・なぜか照れてしまってな・・・」

「照れ？」

「その恥ずかしい話なんだが・・・笑わないか？」

顔を真っ赤にしてエアリアルが、上目遣いでアルフィリースを見る。その仕草がたまらなく可愛く、思わずアルフィリースはエアリアルを抱きしめそうになった。

「笑わないよ、話してみて」

「実はな、我は同世代の友達がいなくて・・・話し相手といえば父上くらいなんだ。だからなのか、ときたま他の民族の子どもたちが遊んでいるのを見ると、無性に羨ましくなってしまってな。だからなのか、我の夢というものは、こうやって同じ年頃の友達と愛称で

呼び合ってみることだったんだ。その・・・おかしいだろう？」

手を後ろに組み、すごくもじもじしながらエアリアルが話している。騎馬民族の豪傑達を瞬きもせずに、血の雨を降らせながら切り捨てた彼女とはまるで別人だ。思わずアルフィリースは彼女をぼーっと見つめてしまった。

「な、なんだ・・・何か言ってくれないのか？　それともおかしくて言葉も出ないのか？」

「エアリーって今いくつ？」

「先月１６になった。外の世界では成人だろう？　もう大人なのに、こんな幼稚なことをいう我はおかしいと思うんだが・・・」

「ううん、そんなことないよ。エアリーはとても可愛いわ」

「わ、私は可愛いのか・・・わぷっ」

アルフィリースは我慢できなくなり、思わずエアリアルを抱きしめて頬ずりをしていた。彼女はなんだか友達と妹を一片に手に入れた気分になっていた。

「（うーん、妹がいたらこんな感じかなぁ？）」

「あ、アルフィリース。何をする？」

「ちゃんと愛称で呼ばなきゃだーめ」

「あ、アルフィ・・・は、放して・・・息が・・・」

「ダメ、お姉ちゃん、もしくはお姉様と呼びなさい」

「・・・・・・」

「（お、沈黙は了解なのかな？　照れちゃって可愛いなぁ、もぅ♪）」

いや、単純にアルフィリースが相当な力で抱きしめているため、息ができていないだけなのだが。傍から見たらエアリアルが手をバ

タバタさせるのがわかったのだろうが、目を瞑ってエアリアルを抱きしめるアルフィリースにはとんと見えていない。エアリアルの方もエアリーと呼ばれて照れるやら、アルフィリースの豊満な胸に圧殺されて赤面するやら、酸欠で脳がまともに働かないやらで、さしもの大草原の屈強な戦士も正常な対応ができずにいた。エアリアルが放されるのは、エアリアルがぐったりして体中の力が抜けたと同時に魂も抜けかけていることにアルフィリースが気づいてからだった。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その9～エアリアル～（後書き）

次回投稿は１２／２４（金）２０：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その１０～炎獣との出会い～（前書き）

～あらすじ～

ファランクスの元で修行を続けるアルフィリース達。そんな中、エアリアルがファランクスとの出会いを語る。

大草原の妖精と巨獣達、その１０～炎獣との出会い～

「し、死ぬかと思った・・・」
「ご、ごめんなさい、エアリー・・・」

あれから急に反応のなくなったエアリアルに気付いたアルフィリースは相当におろおろし、彼女をゆさぶるやら、ひっぱたくやら、心臓マッサージをするやらでようやく蘇生させた。あやうくアルフィリースが大草原の平穏を壊すところであった。

「だ、大丈夫だアルフィ・・・ちょっと天国の父様と母様が見えただけだから・・・」
「それは大丈夫じゃない！・・・あれ？」

アルフィリースは首をかしげる。

「ファランクスが父さんなんじゃ・・・」
「まさか。どこも似てはいないだろう？」
「え、じゃあ」
「ファランクス父上は育ての父親だ、もちろん人間の両親がいるぞ。私は人間だからな」
「本来のご両親は？」
「死んだよ、ファランクス父上の手にかかってな」
「！」

アルフィリースは絶句した。それではエアリアルは自分の両親の仇と暮らしていることになる。

「ご、ごめんなさい・・・私、余計なことを聞いたかしら？」

「いや、友人とはなんでも共有するものだろう？　別にアルフィに隠すようなことでもないよ」
「聞いてもいいの？」
「つまらない話でよければ」
アルフィリースはこくりと頷き、エアリアルは淡々と語り始める。
＊＊＊
どうやらエアリアルの両親はとある部族で一番強い戦士だったらしい。その部族は代々炎獣に敵対している一族で、毎年部族で一番強い戦士が炎獣に挑む儀式があった。だが１００年近く続く儀式の中、帰ってきた物はわずか数人。それもファランクスの情けにより助かった者達だった。
だが帰って来た者に部族は容赦なかった。神聖な儀式を汚した者として、そのまま処刑されて儀式の生贄とされた。だが並の人間が単独で炎獣に勝てるはずもない。つまり部族で一番強い者は、自動的に死ぬ運命にあった。
そんな折、ある男女が部族の中で愛し合う。男女ともに優れた戦士であり、彼らは一子をもうけた。だがほどなくして男には部族一の戦士の称号が与えられ、彼は炎獣との戦いに赴き、帰ってこなかった。
時間は経ち娘が５歳になるころ、今度は母親に白羽の矢が立ち、彼女は炎獣との戦いに赴くこととなった。幼い娘はそれを誇らしそうに見ていたが、母親はこの儀式が歪んでいることに気が付いていた。向かえば必ず死に、幼い娘は１人残される・・・だが自分が無事に帰れば娘共々生贄になるであろうことは容易に予想がついた。

また部族の行く末がそう長くないことも彼女は察していた。なにせ毎年部族で最強の戦士が死んでいるのである。賢い者は鍛錬をサボり、自分を弱く見せることで生命を長らえることばかりを考えていた。また他の部族にもその事情はなんとなく伝わっており、虎視眈眈と自分達の部族は狙われる立場に会ったのである。気づいていないのは伝統と体面ばかりを考える長老たちだけ・・・

そこで彼女は一計を案じていた。いずれ使命が自分に下されることは予想がついたので、娘にひたすら炎獣を憎むように仕向け、自分が帰ってこなかったら部族に指名される前に仇を討ちにいくようにと刷り込んだ。素直で気性の強かったエアリアルはその話をよく覚えていた。そして母親は炎獣との戦いの最中、自分の娘の事を炎獣に託して、戦死した。

それからわずか3年。炎獣の前には8歳のエアリアルが立っていた。エアリアルは執拗にファランクスの命をつけ狙うが、部族が１００年かかってもどうにもできない大草原最強の生物を、８歳の女の子が仕留められるはずもない。エアリアルは倒れてはファランクスに助けられる生活を1年近く続けた。そんな折、元の部族の集落を通る。だがエアリアルがそこで見た物は、とうの昔に滅びた集落の残骸だった。焼けた跡から察するに、既に半年は経過していた。エアリアルは帰る場所すら失くしたのである。

それでもエアリアルはファランクスを狙うことをやめなかった。ファランクスが何も話さなかったこともあるが、もはやファランクスを仕留める以外に残された物が何もなかったのが主な理由であろう。だがそんな中エアリアルは魔獣に囲まれたところをファランクスに助けられる。自分はその隙をぬってファランクスに一撃を入れたのだが、ファランクスは反撃すらしなかった。

それからなんとなくエアリアルはやることがなくなった。ファランクスにもはや刃を向ける気も起こらず、さりとて自決は大草原の民が最も嫌うことであった。ついに生きる気力がなくなったエアリアルは自分を殺すことをファランクスに請うが、それは彼女の両親の遺言によりできないと説明された。そこにおいて彼女は初めて両親の真の意図を知るに至ったのだ。

それからエアリアルはファランクスと生活を共にしている。彼を父上と呼ぶのは、彼女の本当の父親がそう望んだらしい。自分はもう帰れないから、娘がファランクスを討ちに来ることがあったら、自分の代わりを務めてはくれないか、と。ファランクスには父というものがどういうものかは全く分かっていなかったが、それはエアリアルも同じだったので、不思議な、どことなくぎこちなくも彼らは信頼関係を築いていったのである。

と、そこまで話すとアルフィリースが涙ぐんでいる。

「どうした、アルフィ」
「だって・・・悲しくってさぁ・・・エアリーはつらい目に合ってきたんだね」
「我のために泣いてくれるのか・・・」

エアリアルは胸の中に熱くなる物を感じ、今度は知らず知らずのうちに自分からアルフィリースに抱きついていた。

「我なら大丈夫・・・ファランクスはいい父上だし、今はアルフィという友人もいるし・・・我は幸せだ」
「本当？　ならいいけど・・・何かつらいことがあったら私に相談してね？」
「ああ、きっとそうするさ」

2人は笑顔で笑い合っていた。この時は自然と互いの口から紡がれた言葉、だが本心からの言葉。しかしエアリアルがこの言葉の意味を真に理解できるようになるのは随分先の話である。

「で、でも我はお前の嫁には・・・いや、でもアルフィリースなら・・・いや、我は何を言っているんだ・・・」

「え、何か言った、エアリー？」

「な、な、何でもない！」

このエアリアルの悶々とする自問自答が解決されるのも随分先である。

＊＊＊

それからはリサはファランクスと主に修行に励み、他のメンバーは主にエアリアルと（時にはファランクスと）組み手をすることが多かった。日々ファランクスに鍛えられたエアリアルの動きは凄まじく、既に人間の能力を大幅に逸脱していた。まさに野生の獣である。ニアのスピードを持ってしてもたやすく捕えられ、ミランダの怪力もいなされ、アルフィリース・フェンナの技術も通用しない。これほどの技量を誇ってさえ、

「我は何かに乗っている時が一番戦いやすいのだがな・・・どうも降りると落ち着かない」

と言うのだから始末に負えなかった。またそれに加え、乗り物であれば何でも乗りこなせるらしい。本人いわく竜も乗れるが、別にクックドゥーやギガノトサウルスでも問題ないそうだ。ファランクス自身もそれがエアリアルの真に素晴らしい才能だと述べていたが、

実際その通りであったろう。

だがその技術・特性はともかく、風の魔術の威力は大草原特有のものらしい。大草原を出れば騎馬民族を手玉に取ったような風の魔術の使い方はできないだろうとエアリアルは述べた。もっとも大草原から一歩も出たことのない彼女であるから、かなり確信に近い推測といった所らしいが。

そんな自分についてまだまだ満足のいっていないエアリアルだが、そのような姿をみるとアルフィリース達は少し嫉妬しながらも精進をしなければという気持ちにさせられた。

そんなエアリアルは基本的な指導の仕方が上手く、ニアとはよく戦闘の手段について話し合いをしている。

「ニアは攻撃が速い半面、単調だな」

「そ、そうなのか？」

「ああ、速いが全て読みやすいから簡単に逆をつける。防御でもカウンターでも問題なく行える。スピードだけなら我よりもはるかに上なのに、我に一撃も当たらないのはそういうことだよ。今まで誰にも指摘されなかったか？　軍隊とかにいたんだろう」

「あ、う～・・・指摘してくれる奴はいたんだが、腹が立ちすぎて言うことを聞かなかった。それに具体的じゃなかったし・・・私はどうしたらいいんだ？」

「まずは全ての攻撃を当てようとしている。攻撃なんて1撃の当て方で敵を倒せるんだ。問題はその1撃をどのように入れるかということだが、フェイントをだな・・・」

ニアがふんふん、と頷きながらその話を聞いている。ある程度話終わるとニアは壁に向かって様々な型の練習を始めていた。時にはミランダと型を合わせて練習している。

アルフィリースがエアリアルと訓練する時は主に武器の使い方である。エアリアルの武器は主に投擲、弓、槍のため、それらの使い方と対応を練習している。

アルフィリースがエアリアルと訓練して分かったことは、実は身体能力的には2人に大差はないことだった。腕力は体格の分だけアルフィリースが強く、逆に身軽さではエアリアルに分があると言ったところか。

その2人の差とは・・・。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その１０～炎獣との出会い～（後書き）

記念すべき百話目です。ここまで読んでくださる皆さん、ありがとうございます。そしてクリスマスイブに読んでくださる皆さんもありがとうございます。まだまだアルフィリースの冒険は続きますよ～。

次回投稿は１２／２５（土）１２：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その１１～修行風景～（前書き）

～あらすじ～

修行を続けるアルフィリース達。その様子は・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その１１～修行風景～

「私とエアリーってどこが違うの？　凄く戦闘能力には差があるように感じるんだけど？」
「３つ程あるな。１つは経験。私は生まれてからずっと大草原で暮らしてる。だから大草原の生物に対する戦い方は心得ている。その点アルフィリースは全てが初めてだから上手く出来なくて当然。人間は初めて戦う相手の前ではその力は半分も出せないと思ってもいい。実際に私も外の人間や魔物と上手く戦えるかどうかは疑問だ」
「なるほど・・・それであんなに流れるように戦えるんだ」
「２つ目は、アルフィリースは体に力が入りすぎ。もっと体も心もゆったり構えて、引かれては押し、押されては引く。そして隙を見つけて倒す」
「う、う～ん？？」
「どんな生物にも独特の間、行動、隙がある。一見なさそうに見えても、何か仕掛ければ必ず隙はできる。だから必要なのは『決める』一撃の多さではなく、『崩す』一撃の種類の多さ。わかるか？」
「なんとなく、は」
「３つ目は、我は戦うときに風の魔術で自身を強化している。武器を魔術で強化できるなら、自分の体だってできるだろう？」
「その発想は聞いたことあるけど・・・かなり難しいよ？」
「もちろん強制的に外の力を使って体を働かせるわけだから、１つ間違えれば自分の体を壊しかねない。だから強化するといっても、ほんのちょっと瞬間的に強化するだけ。そういう意味で風の魔術はかなり戦闘向き。なぜなら自分移動速度そのものを上げることができるから」
「そうか、それなら私にもできるかも」
「ああ、風の使い方を練習するといい。我が手伝おう」

そうしてアルフィリースの新しい技術の実験台になるのはミランダだった。ミランダは実際あまり器用ではなく、エアリアルが教えることも基本的な体術意外にあまりなかった。彼女自身がいつぞやアルフィリースに語ったように、戦士としての腕前は確かに一流とは言いにくいのかもしれない。

だがこれはミランダの身ならず他のメンバーも気づいてはいることだが、何でもありの殺し合いでは一番強いのはミランダの可能性が高かった。ミランダの薬品技術は幅が広く、爆薬、毒薬、麻痺薬、眠り薬・・・なんでもありに近かった。一度風上さえ取ってしまえば、知らないうちに毒をかがされてもわからないだろう。加えて神聖魔術も行使できる不死身の彼女は、生半(なまなか)なことでは負けはしないだろうことは安易に予想がついた。

＊＊＊

そしてリサはファランクスにセンサーとしての応用技術を教わっていた。

「では昨日のおさらいだ・・・地表の形沿ってにセンサーは張り巡らせてみろ」

「はい・・・」

リサが目を閉じ、集中してセンサーを張り巡らせる。地表の形を感知し、じりじりとそのセンサーの影響範囲を広めていく。壁に到達すれば同じことをし、壁に添わせるようにセンサーの範囲を広げ、遂には天井に至り１５ｍ四方×高さ７ｍ程度の部屋を覆うようにセンサーを張り巡らせる。

今までリサが行っていた探知は、ソナーのように気を自分を中心

とした放射線状に飛ばすことだけだった。方位を絞れば負担も減る分それだけ飛距離も伸びるが、ソナーは感知速度が速い分、細かな探知はできないという欠点があった。

　また周囲の地形と比べて不自然な物体を感じたり、動くものを感知することはできたが、その生物の特徴――例えばおおまかな外表の形は判断できても、硬さまではわからなかった。だから「人間らしきもの」はわかるが、細かく確認するには何度もソナーを飛ばし、それが自分の知っている者かどうかを確認する必要があった。レクサスはその様子を指して「素人」と言ったのである。

　もちろんリサの周囲には常にある程度のセンサーによる結界のような者が張り巡らされているが、それもまた波動だったのである。一定周期で２０ｍ程度に波動を巡らせ、その中に引っ掛かったものをリサが知ることができるようにしてあった。だが波動であればその波動の切れ間に一気にリサに近づけば感知されることもないし、またよしんば波動に当たったとしても波動と同調させてしまえば近づくことは簡単だった。もちろんそういった技術はレクサスだからこそ可能だったのだが、ブラックホークには同様のことができる者が１０人前後はいる。またセンサーの警戒をかいくぐるのは暗殺者では必須の習得技術であったので、かれらにとってもリサの警戒の仕方は実に稚拙に見えたことだろう。

　現在リサが行っているのは暗殺者のようなものでさえ感知するような警戒の方法であった。つまり部屋事態を自分の延長線上と考えて気を張り巡らせる。気を張り巡らせる分精度は高く触れる者全てを感知できるが、同時にかなりの精神的疲労を伴い、持続時間も短めである。

「うむ・・・では現在部屋に我々以外の生物、特に昆虫の類いが何匹いるか答えてみよ」

「・・・地面に7、壁に・・・25、天井に8」
「ワシの背後の壁には？」
「1」
「その形は？」
「ムカデのような多足類かと」
「よかろう、合格だ」

リサが集中を解く。だが合格をもらったにもかかわらず、どこか不満気だ。

「どうした？　合格だと言ったはずだが」
「・・・2週間かかってやっとです。リサは自分のでき無さ加減に呆れているのです」
「そうか・・・」

ファランクスは軽く肯定しただけだったが、実はこの訓練はリサと同じCランクのセンサーなら早くて通常1年はかかる訓練だった。彼にしろここにいる間にコツを得られればいいなと思っていたくらいだった。

「（早すぎる・・・野生の魔獣は比較的自然とやっておる者もいるが、ワシでさえ生まれてから100年くらいは天井にまで気を張り巡らせるのは無理だった。またワシではこの部屋が精一杯。これ以上の範囲は無理だ・・・だがこの娘はワシの1／10も体躯がないくせして、いとも簡単にこの部屋に気を巡らせおる。少し慣れれば100m四方でも張れるようになるかもしれんな・・・）」

内心驚愕するファランクス。無理もない、彼は知らないが、既にリサのセンサー能力はギルドの基準ではBランクの上位に達しようとしていた。ちなみにAランク以上のセンサーは大陸には100人

いないとされている。リサは一カ月を待たずして、世界のトップクラスに仲間入りを果たそうとしていた。気づかぬは本人ばかりである。

「ファランクス、次の段階へ行きましょう」
「うむ・・・では次は空気に沿わせるようにセンサーを巡らせる。難易度は先ほどまでとは比較にならんぞ・・・」
「ふふ、あっという間にクリアして見せましょう」

リサの不敵な笑いと共に訓練は次の段階に移る。そしてリサは言葉通り、わずかな間でこの修行を形にするのであった・・・。

＊＊＊

「・・・よし、ついたぞ・・・」
「ぐごー、ぐごー！」
「・・・起きろ・・・ドラグレオ・・・」

ライフレスはドラグレオを伴って大草原に来ていた。もちろん計画のためであるが、ドラグレオに取って睡眠以上に大切な物などないようだ。

「・・・まいったな・・・嵐の季節ならファランクスも自分の住処に確実にいるだろうに・・・肝心のドラグレオがこれでは・・・」

ファランクスの住処は見当がついているものの、ファランクスが神出鬼没なためわざわざ嵐の時期に大草原に訪れたのだが、ドラグレオはいまだに寝ていた。ライフレスは直接ファランクスの住処の近くに転移することも考えたが、大草原の中は磁場が歪んでおり、下手をすると転移魔術自体が失敗しかねなかった。地面の中深くに

転移して行方不明、なんて不名誉な事態だけはライフレスは避けたかったのだ。それにファランクスはドラグレオが倒さないと意味が無いらしい。その理由をライフレスは知らないが、師匠の言いつけである。

そう思ってわざわざ大草原の周辺領域に転移したのだが・・・よほど日が悪いのか、目の前数１００ｍに巨大竜巻が接近していた。

「・・・まあ竜巻のど真ん中に転移するよりましだけどさ・・・どうしよう・・・」

ライフレスは少し考えるが、竜巻の接近速度というものはかなり速い。

「・・・仕方ない・・・ドラグレオは置いて行くか・・・」

あまりといえばあまりな結論にライフレスは達すると、ドラグレオをそのままに自分はさっさとその場を離れる。そしてほどなくしてドラグレオが竜巻に飲み込まれ、天高く舞い上がったのを見届けると、自分は転移の準備を始める。

「・・・ま、まあ、あのくらいなら死なないだろう・・・それに死ぬならそこまでのこと・・・代わりに僕がファランクスとやってあげるよ・・・実はちょっとそれも楽しそうだしね・・・フフフ・・・」

ライフレスは少し楽しそうに笑うと、その場を後にした。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その１１～修行風景～（後書き）

こんにちわ、はーみっとです。百話記念とクリスマスなんで、何かしようかと考えたんですが、今日とりあえず二話掲載やるとして、他になにしよう・・・？　と、いうわけで、何か質問やバトンなんぞあれば回していただけるといいなと思います。

次回投稿は本日１２／２５（土）１９：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その１２～炎獣の憧憬～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリース達とファランクスの生活は続く。同じような日常の中に、新たな発見が・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その１２～炎獣の憧憬～

＊＊＊

嵐の季節が始まってから１６日目の晩こと。アルフィリースが何気ない疑問をファランクスにぶつけたことが会話の始まりだった。

「そういえばファランクスってさ、どうして人間に親切なの？　ファランクスみたいな強い魔獣にとって、人間なんて適当なエサみたいなものだと思ってたわ」

「ふむ・・・」

ファランクスは少し言葉を探しているようだが、エアリアルとアルフィリース以外のその他全員は凍りついていた。それは全員が一度は考えつつも、流していた疑問である。わざわざ蒸し返すことで、「ではやはり食うか」とファランクスが思い直せば、アルフィリース達に抵抗するすべは無い。

ミランダはアルフィリースに目配せをするが、アルフィリースは気づきながらも無視してファランクスの返事を待っている。

「そうだな・・・弱肉強食の掟に従えば、ワシの行動はおかしな話だ」

「そうよね、だからずっと引っかかってたの。エアリアルの話を聞く限りでは人間を襲ったことはほとんどないんでしょう？」

「そうだ。この大草原の秩序を過剰に乱す場合を除いてな」

「でも他の魔獣は餌にするのよね」

「そうだな」

「なぜ？」

ファランクスとアルフィリースはじっと見つめ合う。他のメンバーははらはらしながら見ているが、ふっとファランクスがミランダの方を突然見て微笑した。

「昔・・・ワシは人間に助けられたことがある。そう、そこのミランダのようなシスターにな」

「え、アタシ？」

ミランダは突然話を振られたのでびっくりしている

「そうだ・・・あれはまだワシが生まれて間もないくらいの頃、この大草原においてワシは捕食される立場だった。群れの仲間も全滅し、ワシの命も風前の灯という状況で、そのシスターは突然ワシと敵の前に現れた」

「・・・」

「そして一瞬で魔獣を神聖魔術で捕縛し、内臓が飛び出るほどの重傷だったワシを瞬間的に治癒した。ワシは心底驚いたよ・・・」

「そのシスターの名前は？」

アルフィリースが問いかける。だがファランクスは首を横に振るだけだった。

「残念ながらわからん、ワシはその時人語が解せなかったからな。ただそのシスターはかなり身分の高いものだったらしく、周囲には騎士やら僧侶やら沢山の人間が従っていた。それだけで只者でないことはわかったよ。そしてワシはそのシスターに拾われ、傷が完治するまで面倒を見てもらった。まさにワシにとって母代りだったともいえる」

「それで人間を襲わないの？」

「ああ、そのシスターの周囲の人間も良い者ばかりでな。よく一緒

に遊んでもらったよ・・・草原をかけたり、一緒に寝たり・・・ワシが言葉をわからないと知っていても、懸命に話しかけてくれた。その経験を経てワシは人間の言葉が知りたくなった。せめて彼らに一言お礼を言いたかったのだ。だがそれはかなわず、彼らは大草原を去って行った・・・それから可能な限り人間を助けるようにし、なんとか人間と触れる機会を多く作って言葉を覚えるように努力した。実に２００年はかかったがな」

「そっか・・・」

「もはやあのシスターは生きてはいまい。ワシの人生において、ただそのことだけが心残り・・・」

「・・・そのシスターの外見は覚えてる？」

ミランダが話に入ってきた。全員が意外な様子でミランダを見るが、リサはその意図を感じ取ったようだ。

「確か・・・金の髪に緑の瞳だった。美しい・・・非常に美しい女性だった。魔獣であるワシが人間の外見を褒めそやすのも不思議な話だがな。だがそう思ったのだ・・・まるで人間ではないかのような美しさだった。聖女とはああいった者を指すのだろうな。だがそれがどうかしたか？」

「いや・・・（きっとマスターだ・・・！）」

その事に思い至るのはミランダとリサだけだったろう。そしてその時はそのまま何事も話さなかったが、晩御飯が終わり、寝静まった頃に再びミランダはファランクスの元を訪れた。

＊＊＊

「ファランクス」

「やはり来たか・・・」

「話しがあるんだけど、勘づいてた？」
「ああ、何か知ってそうではあったからな」
「そう・・・多分アンタの話のシスターは、まだ生きてる」

ファランクスの目が驚きの色に染まる。思わず身を乗り出しかけるが、思いとどまり、ややあって落ち着きの色を取り戻した。

「それはなぜ・・・いや、話せる事情ならあの場で話しているな。聞かぬ方がよいのか」
「アンタは本当に賢いね。心配しなくても、アンタの存在を伝えたら向うから来るかもしれない」
「それは非常に朗報だ。感謝するぞ、娘」
「ああ、ファランクスには世話になってるから、それだけは言いたくてね。・・・アンタ、寿命があんまり長くないんじゃないのか？」

またしてもファランクスの目が驚きの色を帯びるが、今度はすぐに元に戻る。

「・・・鋭い娘だ」
「エアリアルはそれを知って？」
「ワシから直接言ってはいないが、気づいてはいるだろう。賢い娘だからな・・・もうワシも寿命が近いのだよ」
「そうか・・・例のシスターに何か伝言でもあるなら伝えてもいいけど？」
「そうだな・・・だが礼は自ら言いたいから、そのうちそちらに伺うと伝えてくれ。何、まだ後十数年は生きるさ」
「アンタが町に来たら大騒ぎだ」
「ククク、それもそうか。人生とはままならんな・・・」
「ああ、そうだね・・・何か他には？」
「１つだけ・・・そのシスターの名前はなんという？」

「本名かどうかは知らないが・・・ミリアザールという」
「ミリアザールか・・・良い名前だな。力強く、そして優しい」
「ああ、そういう人物さ」
「そうか・・・」

そのままファランクスは目を閉じた。ミランダは彼の睡眠を邪魔しないようにそっとその場を離れる。今夜はきっと良い夢をファランクスは見ることだろう・・・。

＊＊＊

翌日。最近カザスとユーティは暇だった。全員が訓練に明け暮れているせいで、彼らにはやることがなかったのだ。ファランクスの話もだいたい聞き終え、本格的に2人にはやることが無くなってしまった。訓練を見るだけの毎日など、身体的にも精神的にも不健康だと言わざるをえなかった。

そういうことで、彼らはファランクスの住処の探険をすることにした。もちろんファランクスには許可をもらってある。なにせこの住処はかなり広く、馬で駆けても全く問題が無いだろう。実際カザスは馬を出しており、エアリアルの愛馬シルフィードではないが、彼女の副え馬の1頭である。

「さて、こちらには何があるのでしょうか?」
「にしても広いよね～。どこまで続いているんだろ?」
「さあ。でもそれを想像するだけでもワクワクしますね。僕は別に1時間程度で行き止まりでも構いませんよ」
「そうそう!　このワクワク感が大事だよね?」
「気が合いますね、ユーティ」
「いやいや。カザスが気があるのは、ニアでしょう?」

意地わるそうにユーティが笑う。だがカザスは動揺を見せず、堂々と対応した。

「ええ、僕はニアさんのことが好きです」
「まっ・・・臆面も無く、よくそういうこと言うわね～」
「事実ですから」
「・・・からかい甲斐のない男！　皆に言ってやろうと思ったのに」
「それはどうも。言ってもいいですけど、その場合ユーティがファランクスを初めて見た時、驚きのあまりちょっとチビったこともばらしますよ？」
「うげっ、なぜそのことを・・・」

そんなとりとめもない話をしながら馬を進めるカザス達である。意外とこの2人はプライベートでも気が合った。非戦闘員という連帯感もあったのかもしれないが、妖精（フェアリー）としてのユーティの知識はカザスにとっては斬新で、カザスの知識もユーティには興味深かった。

だが恋愛話が大好きなやたら人間臭いユーティの話にはカザスは興味は無かったのだが、それでも黙って話を聞いていた。彼は大学に戻ればとっつきにくい変人教授ばかりの中で、まだ親しみがある人間として人気がある部類に入っていたのである。ミランダあたりが聞いたら真っ向から反発しそうな事実ではあるが。

「・・・で、ニアのどこが好きなのよ～？」
「全てです」
「そんな答え面白くないわ。特にどこがイイのよ？」
「いや、仕草とかが女性らしくて可愛らしいですよ。性格もまっすぐだし。それに僕には無い物を沢山持っています」
「ふ～ん、じゃあミランダはどうしてダメなの？」
「彼女は美しいですし根は優しいけど、気が強いし口が悪いので、

僕とは毎日ケンカになるでしょうね」
「今でもしてるけどね・・・フェンナは？」
「お嬢様は僕には合わないですよ。なんせ僕は結構貧しい平民出身ですから」
「それならアルフィリースとかはどうなの？」
「彼女も素敵な女性ですが、僕では彼女の邪魔をしかねないですよ」
「それはどうゆう・・・」
「それより」

ユーティの疑問はカザスの強い言葉によって遮られた。ユーティがカザスを見ると、表情が険しく変化している。そして馬から飛び降りたカザスは壁を調べ始めた。

「どうしたの、カザス？」
「変だと思いませんか、ユーティ。もう僕達は2時間も歩いているのですよ？」
「え、そんなに？」
「ええ、測ってましたから。なのに洞窟は全く狭くならず、むしろ分岐がどんどん出てきている・・・これは予想以上の大洞窟なんじゃないでしょうか？　下手をすると大草原全体に広がるような・・・」
「まっさかぁ！？」

ユーティが信じられないといった表情をするが、カザスは腕組みをし、真剣に考えている。

「確かに細かいことはわかりませんが・・・もしそうだとすると、これは天然の洞穴ではない」
「じゃあなんなの？」
「遺跡の類いですね」

「こんなデカイ遺跡、誰が作るってのよ!?」
「それは・・・ん?」
その時壁を探っていたカザスが何かに気付いたのだった・・・。
続く

大草原の妖精と巨獣達、その１２～炎獣の憧憬～（後書き）

皆さま、クリスマスはいかがお過ごしだったでしょうか？　誰かと過ごされた方も、私の小説を読んでくださった方も良い日であればいいと思います。べ、別に貴方のために二話投稿したわけじゃないんだからねっ！

・・・失礼しました。

次回投稿は１２／２６（日）９：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その１３～大草原の秘密～（前書き）

～あらすじ～

大草原でカザスが気づいたこと。それは・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その１３～大草原の秘密～

＊＊＊

それからしばらくカザスは単独でも洞窟を探検するようになった。朝起きてご飯を食べると、昼食を持って出かけていく。そして夜は遅く戻り、時には帰ってこないこともあった。

その様子を全員心配したが、ミランダだけは

「研究者としての顔が出たんだろ。ほっときな、研究者ってのはそういうもんだ。熱中したら周りの声は耳に入らないのさ」

とそっけなかった。ミランダ自身も研究者だから、彼の心境がわかるのかもしれない。

そうして何日かが過ぎたある日、カザスが何事かファランクスと話していた。そしてその後全員を呼びだした。

「皆さん、少しお時間よろしいでしょうか？」

カザスの表情は見たことも無いくらい真剣だった。その表情にただ事ではないなにかを感じ、全員がカザスに促されるままに誘導される。

＊＊＊

そして馬を駆けておよそ１０分ほど。アルフィリース達はここに至ってこの洞穴の広さに驚いたが、カザスとユーティには今さらであった。そしてある場所で止まると、カザスが壁の一部を示す。

「ここです」

カザスが示したのは壁が崩れた場所、いや、カザスが崩したのだろう。土や木の根、さらには岩盤まで崩したような跡がある。そこからは乳白色、いや、銀色のような淡いか輝きを発する壁が見えていた。そのややもすれば妖しい光景に、真っ先に質問を投げかけたのはミランダだった。

「カザス、これは？」
「さあ？」

だがカザスは質問を疑問で返した。

「おいおい、自分でも何かわかってないモノを私達に見せようってのか？」
「わからないから、というのもありますが、これがわからないことでわかったことがあります」
「なぞなぞか？」
「いえ・・・少しフェンナさんにも調べて欲しくて」
「私ですか？」

フェンナが自分を指さして不思議そうにしている。

「ええ。ただなんとなく結果はわかっているのですが、確認のために。この壁の分析をお願いできますか？　土・金属の魔術を操るフェンナさんならできるかと思いまして」
「分かりました」

そういうことならとフェンナが壁に手を当てて何か調べ始めた。

そうすること数分。徐々にフェンナの顔が険しくなり、額に汗が出始めている。さらに数分して、ふぅ、と一つため息をついて調べ終えたフェンナが振り返る。

「どうでしたか？　何の金属か、わかりましたか？」
「いえ・・・何の金属かさっぱりです。こんなことは初めてです」
「やはりそうですか・・・」
「この結果をカザスは想定できたのですか？」
「ええ。何せ火薬でも焦げ跡１つつかない金属でしたから」

いけしゃあしゃあとカザスはとんでもない告白をするが、思わずミランダが突っ込んだ。

「ちょ、洞窟で火薬とか、なんて危ないことを・・・」
「ちゃんと量は考えてありますよ」
「ねえねえ、どういうこと？」

たまりかねたアルフィリースが尋ねる。その質問にはフェンナが答えた。

「いいですかアルフィ、私は鉱石の魔術を操る一族です。シーカーの王族はもとよりそういった練成術に長けたものが多く、私も含め鉱石には非常に詳しいのです。ところがその私が解析できない金属がここにあります」
「ちなみにこれと同じものがここ数日で調べた８か所全てで見つかっています。方向・距離はどれもばらばら。すなわち、高い確率でこの洞穴全体がこの金属で覆われていると考えてよいでしょう」

カザスが続ける。ミランダはなんとなく話の内容を察したようだが、他のメンバーにはさっぱりだった。

「ですがここから先は語ってよいものかどうか・・・ファランクス、よろしいですか？」
「・・・いいだろう。いつかは明るみに出るものだろうからな。この人間達になら話しても構うまい」
「恐れ入ります」

カザスが一間おく。表情には期待と緊張の色が隠せない。

「僕の専門は考古学です・・・その最大の命題は『生命の起源を解き明かすこと』だと僕は考えています。まず僕が学問突き詰める上で不思議だったのは、遺跡の中には誰が作ったのか不明な物が時に見られる、といったことでした」
「不明？」
「ええ。ドワーフ、エルフ、巨人・・・人間より古い種族である彼らも遺跡は作りますが、その建築様式は種俗ごとに似通ったもので、それぞれ特徴的なのでわかりやすいのです。ですが調べるうち、彼らでさえより古い物として崇め奉る神殿、神剣・魔剣の類いがあることがわかりました」
「・・・そうなの？」
「はい。となると彼らより古い種族としては竜種しか現在では確認されてないため、そういった類の物は竜によるものだと考えられていたのですが・・・」
「違うってのか？」

ミランダが真剣な表情になっている。これは彼女にとっても興味深い話題なのだろう。

「違うでしょうね」
「根拠は？」

「この遺跡は大きすぎます。先ほどファランクスに聞いたところ、この道は東西に２００ｋｍ、南北に１００ｋｍはあるそうです。しかも僕は確認してないのですが、おそらくは地下もかなり深くまであるのではないかと疑っています」

「実際にカザスの言うとおり地下はあるが、ワシが封印した。なんせワシの爪も炎も効かぬ者達がいたでな。余りの危険さゆえに封印したのだ」

「ならば余計にそうですね。人語を解す竜と言うのは現在では１０頭も世界に残っていないとされています。労働力的に、１０頭でこの遺跡を作るのは無理があるのではないでしょうか？」

カザスの仮説は大胆で、学会などでは荒唐無稽な話として一笑にふされるだろう。だが３００年という時を生き、一般的な学者より『世界』というものに接してきたミランダには、カザスの仮説は妙に説得力があるように聞こえた。

「なんてこと・・・でも一説には現在の飛竜は竜が退化したもので、以前は全ての竜が人語を解したとされているじゃないか？　もしその通りなら、竜が総出でやればなんとかなるんじゃ・・・」

「確かにその可能性は否定できませんが、他にも説があって、現在の人語を解す竜と、飛竜など人間が行使する竜は生物として全く別の種だという説もあります。これは生物学的に人語を解する竜の標本がないので、なんとも言えませんが。確かに有力なのはミランダさんが言った説なのですが、学説として信憑性が高いのは後者だと僕は考えているのです。もし後者が正しいとして仮説をさらに立てると・・・かつて神と呼ばれるような生物がこの大陸にいたのではないかと私は考えます」

「神って・・・」

大きくなった話に全員がぽかんとしている。だがファランクスは

その答えをなんとなく予想していたようだ。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その１３～大草原の秘密～（後書き）

恒例の日曜二話投稿。本日１７：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その１４～迫る脅威？～（前書き）

～あらすじ～

カザスが語る内容、その大きさに驚く一行。その一方で不吉な影が・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その１４～迫る脅威？～

「また話が大きいね・・・」
「そうですか？　私はちなみに神などいないと思っている人間ですが、万能ではなくともそれに近い生物がいたことには賛成です。竜がどこから来たのかと考えると、竜より上位の生物がいたことは想像が及びますよ」
「そうすると卵が先か、ニワトリが先かっていう論議になりそうだけどね」
「もっともです」
「で、結局カザスは何が言いたいの・・・？」

アルフィリースが疑問をぶつける。どうやらアルフィリースもなんとか頭はついてきているようだ。

「その前にもう少し・・・この岩場に竜巻が来ないのはおかしいと思いませんか？」
「言われてみれば・・・」
「これも仮説ですが、竜巻そのものをこの遺跡の地下にある何かが発生させているのではないかと、僕は考えています」
「まさか」
「ですがそれならとりあえず納得がいく。竜巻は防御装置なのですよ、この北側だけ異常に強い魔獣も含めて。ファランクスはここに外界の生物が寄ってはまずいから住処にしているのではないですか？」
「最初は違ったが・・・ここの危険性には途中で気がついた。ワシはここに近づけない、と言うよりはこの中にいる物を外に出さない、といった方が主な目的だ。だが少なくともこの遺跡の存在が外部に

出回ったら、人間達が大挙して押し寄せてくるだろうな。そうなれば大草原は戦火に包まれるだろう」

ファランクスが答える。なるほど、彼としては故郷であるこの大草原が戦火に包まれるなど、そんなことは考えたくもないだろう。

「そこで僕が考えたのは・・・現在では推論の域を出ないこの仮説も、皆さんなら解決できるかもしれないと考えたからです。特にアルフィリースは人語を解する竜に知り合いがいるようですし」

「それはそうだけど・・・」

「アンタは興味本位でこの大草原を危機にさらそうってのか？」

ミランダとエアリアルが険しい顔をする。だがカザスは全く動じない。

「いえ・・・私だって人間ですから、助けられたファランクスやエアリアルに恩があります。竜以上の生物がいたとして、なぜ現在はいないのか？滅びたとしたら、その理由は？　知らなければ同じ運命を人間も歩むのではないのか？　そういった学術的な疑問に始まり、現実的な問題としてアルフィリースやミランダの言っていることが気にかかったのですよ」

「私達の？」

「魔王がこの世界に頻繁に出現するということです。直接の原因はあの廃都ゼアで出会った連中だとしても、彼らの目的やら存在やらの手掛かりの一端にならないかという可能性を追求しています」

「その可能性は・・・否定できないね。判断材料が少なすぎるってのもあるけど」

「はい。僕は正義漢ではありませんが、あの連中をそのままにしておいては危険極まりなくらいはわかりますよ。でも僕には剣を取っ

て直接戦うことはできませんから・・・これは僕なりの戦いなんです。何か手掛かりがあるなら、１つでもいいからすがっていきたい」
「なるほど」

ミランダは納得した。最初はカザスをもっと利己的でいけすかない奴だと思っていたミランダだったが、旅を続けるうち彼にも少し変化があったのかもしれない。少しはカザスを見直してもいいかと思うミランダだった。

「で、話ってのはそれだけ？」
「ええ、それでこの後のことを相談したかったのです。私の人脈は主に学者連中ですから、お恥ずかしい話、自分の名声を高めることにしか興味のない連中、学問の大成にしか興味がない連中というのは多いのですよ。そのため信頼できる人物が非常に少ない・・・そこでミランダ、フェンナには信頼できる人間の召集を。アルフィリースには竜とのつながりを紹介してほしくて」
「アタシの方は教主に相談してみないとな・・・でも多分オッケーが出ると思う」
「私も別にグウェンに相談するのはいいけど・・・いつになるやら。あの人結構気まぐれで、ふらっといなくなるから」
「グウェンドルフの方は出会ったらでいいのです。どちらにしても調査隊を選抜するだけで時間はかなりかかりますから。案外空に向かって叫んだらグウェンは来てくれるのではないですか？」
「金〇雲じゃないんだから！」
「じゃあ太鼓で」
「フラ〇ーでもないわよ！」
「じゃあ笛」
「竜巻で飛んだ先に土管はないわよ！？」

いつの間にか話は冗談に紛れていったが、この話が相当に重要な

内容であったことは全員が認識していた。この話はいずれ解決しなければならない、グウェンドルフに聞いてみないと・・・そう考えるアルフィリースだった。

＊＊＊

場所は外――いまだに大草原には竜巻がひしめき合っている。あれほどアルフィリース達が苦戦した魔獣達も息をひそめ、ただ竜巻が通りすぎるのを待っているのみだ。さすがに竜巻にケンカを売るバカは・・・1匹、いや1人いるかもしれない。

その時ひゅるる～という降下音と共に天から降ってくる黒い影。そして派手な音と共に影は地面に激突した。影は粉微塵になったかと思われたが・・・

「・・・いてぇよおおおぉぉぉおお！？」

影はむくりと起き上がり、頭を押さえている。

「誰だぁ？　俺を殴ったのは～！？」

この大地です。むしろ雲の上から落ちてきたら普通死んでいるのだが。竜巻に巻き上がられて落ちてくるとか、どこの魔法使いなのやら。

「くっそおおお、いてえええええ！　腹が減ったぁあああああ！ここはどこだあああああ！？」

話に全くまとまりがない。もちろんその声の主はドラグレオである。だがそんな彼の目の前に現れる巨大な影。

「グルルルル」
「ゴフッ、ゴフッ」

巨大な顎に鋭い歯。腹が減っているのか涎をぼとぼとたらし、ドラグレオを取り囲みに入るギガノトサウルスの群れである。ドラグレオが落下したのは、なんとギガノトサウルス達の避難場所であった。周囲を高い壁に阻まれた谷のような場所である。

「あーん？　俺になんか文句でもあるのか？」

ドラグレオに焦りはない。至って悠然と座ったままである。だがかなりギガノトサウルスの方は気が立っているのか、有無を言わさずドラグレオに噛みついた！

そのまま上から押しつぶすように体重をかけ、ドラグレオを噛みちぎろうと左右に首を振りまわす。だが・・・

「・・・何すんだ、このトカゲがぁあああ！」

噛みつかれたままのドラグレオが足を下顎にかけ、腕を上顎にかけフン！　と力を入れると、鈍い音と共にギガノトサウルスの顎が外れた。

外れた顎にショックを受けたのか、涎を撒き散らしながらギガノトサウルスが暴れ始める。

「う、る、せぇぇぇぇぇぇ！」

咆哮と共にドラグレオが暴れるギガノトサウルスのどてっ腹に拳をお見舞いする。その衝撃に血を口から噴き出しながら壁に激突し、めり込むギガノトサウルス。

そのまま白目を剥いて昏倒し、ビクビクと嫌な痙攣をしている。
その様子を見て仲間をやられたと思った他のギガノトサウルスが興奮するが、数秒後には逃げ出すことになる。なぜならドラグレオが取った行動とは――

「ぬうううううぅりゃあああああ！」

バキバキッ！

谷に響き渡る何かが裂ける音。ドラグレオが気絶したギガノトサウルスの顎に手をかけ、そのまま引き裂いた音であった。凄まじい血しぶきに、谷がみるみる赤に染まっていく。

「ハーハハハハッハ！」

そして血の噴水を浴びるドラグレオの高笑いが響き渡る。
その光景を目の当たりにした他のギガノトサウルスは恐慌状態に陥り、逃げ惑って互いにぶつかるやら壁に激突するやらで無茶苦茶になっていた。
だがそのギガノトサウルスを見たドラグレオの感想は一言。

「・・・騒がしいぞコラァアアアア！？」

ここに他のメンバーがいれば「騒がしいのはお前だ」と確実に突っ込んだであろう。だが誰もドラグレオを止める者のいない谷では、人間による恐竜の凄惨な虐殺が行われ、みるみる内に谷は血の海と化していった。

――そして数時間後――

後にはギガノトサウルスの骨しか残らなかった。全てドラグレオが腹ごなしに食べたのである。どう考えても自分の体積の何倍も食べている。

「よし、いい具合に腹も膨れたし行くか！　・・・で、どこにいきゃいいんだったかな？」

ドラグレオは腕を組み首をかしげる。そなまままつこと数十分・・・何かを思いついたようで、ひょいと谷の上に飛んだ。実に谷の深さは５０ｍはあったはずなのだが、実に簡単に上まで登った。野生の恐竜以上の身体能力だ。

上に出たドラグレオは大草原を見渡す。そしてその視界にとらえたのは・・・

「あの岩場・・・強い奴がいるな・・・」

ドラグレオが目を止めたのは、はるか先――１００ｋｍはゆうに離れているであろう岩場だった。彼の超人的な視力は何ｋｍ先でも標的を逃さない。

もちろんその岩場にはアルフィリース達とファランクスがいる。

「よし、あそこに行くか！　ふはははははは、腕が鳴るぜぇ！！」

勢いよく谷を飛び出したドラグレオだったが、その足がふと空中に舞う。

「む、な、なんじゃこらあぁぁぁ！？」

喜び勇む余り、目の前の竜巻が全く視界に入ってなかったようだ。そのまま徐々に竜巻によって天高く巻き上げられるドラグレオ。

「ぬうううう！　何のこれしきいいいいい！」

だが腕力でどうにかなる話ではなかった。

「くそおおおぉぉぉぉぉ！　おぼえてろおおおおぉぉぉぉぉぉ・・・」

徐々に絶叫もかき消され、遂には聞こえなくなった。そして誰も覚えてはいないだろう・・・後にはドラグレオが食い散らかした残骸が残るのみであった。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その１４～迫る脅威？～（後書き）

個人的にドラグレオは書いていて一番楽しいキャラです。何がしたいのか、時々本人もわかってないのでしょう（笑）

大草原編も長くなっていますが、そろそろクライマックスが近いですね。

次回投稿は１２／２７（月）１２：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その１４～優しい気持ち～（前書き）

～あらすじ～

嵐の時期は終わりを迎えようとしていた。その中で各自の胸に去来する思いとは・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その１４～優しい気持ち～

＊＊＊

風にたなびく緑の髪の少女は、草原の護り人であると同時に、人によっては大草原の妖精とも称えられる。

エアリアルは岩場の外で風を読んでいた。アルフィリース達と共に暮らすようになってから既に１カ月程度が経過しようとしている。例年であれば嵐の季節は１カ月程度で終わるのだが、今年は例外であり、一体いつ終わるのかを知るためである。もっともそれでなくとも彼女は時間さえあれば風に身を任せ、岩場の上で大草原を見つめるのが好きだった。一見何の変哲もなくとも、そうすることで自然が自分に語りかけてくるような、大草原の力を得られるような気がしていたのだ。

視界には相変わらず黒い竜巻が見えるが、本数は減ってきており規模も目に見えて小さくなってきていた。嵐の季節はまだ１週間は続くだろうが、終わりに近づいてきているのかもしれない。

と、同時にアルフィリース達との別れも近づいていることを示す。大草原と、愛馬のシルフィードと、ファランクス。これだけあれば自分には何も要らないとおもっていたはずのエアリアルだが、アルフィリース達のことを思うと、なぜか胸に穴があいたような虚無感に囚われるエアリアルであった。

「全ては風の導くままに生きればよい――そう思っていたはずなのに・・・」

エアリアルは自身の寂しさを紛らわすかのように、両腕で自分の体をかき抱いていた。

＊＊＊

「もう形にしたのか・・・」

「はい、なんといってもリサは天才ですから」

リサの修行は最終段階に入っていた。もちろんファランクスが教えられる範囲で、という意味なのだが。空気の流れにもセンサーを沿わせることに成功したリサは、自分なりの『エリア』と呼ばれるものの作成に入っていた。その中に入ればどんなものでも感知せずにはおかない――リサにとっての結界のようなものである。

エリアはセンサーによってどのような形をとるかは性格や経験が関与する。もちろん一定空間内を覆うようなイメージに形づくるので、ある程度その形は限られるわけだが。代表的な物で言えば半球型だが、多数の円の場合もあるし、中には手のような形の場合もある。

これはセンサーの一つの極致と言われ、行使できる者はセンサーとして無条件でＡ＋が与えられる。リサはわずか１カ月程度でそこまで達したことになり、これにはファランクスも舌を巻いて唸るのみであった。

「まだまだ形は甘いのですが・・・」

「いや、見事の一言だ。そして何より・・・美しいな」

ファランクスの前には実に優雅な光景が広がっていた。これで未完成なら、完成すれば一体どれほど芸術的であるか・・・ファランクスも思わず意識を夢想の中に集中させる。

「それはどうも。リサは見ることはできませんが、その言葉を信じることにしましょう」

リサがスカートのすそをすまんで優雅に一礼してみせた。

「これ以上はワシに教えることはないな」

「だからリサを甘く見ると火傷するっていったんだぜ、ベイビー」

「・・・いまなんと？」

「すみません、一回言ってみたかっただけです」

どうやらリサが冗談を言ったらしいとファランクスは気付くと、思わずククク・・・と忍び笑いを漏らした。

「（こやつらが来てからワシは1日1回は笑っておるな・・・実に楽しき日々よ。この日々もあとわずかと思うと名残惜しいな・・・）」

そこにミランダやエアリアルが入って来る。

「ご飯できたよ～」

「今行きます」

「アルフィは？」

「アルフィはおトイレだそうです」

フェンナ、カザス、ニア、ユーティも入って来た。

「トイレ遠いからね・・・ご飯が冷めちゃうよ」

「アルフィリース以外は全員いるか・・・ちょうどいい」

ファランクスが身を起こす。

「実はアルフィリースの事で話がある・・・」

「父上、どうしました？」
「ワシはあの子が心配だ・・・」

ファランクスがアルフィリースが近くにいないことを確認し、言葉を続ける。

「アルフィリースは最初にワシを見ても全く驚かなかった。ワシはわざと周囲を威圧したにも関わらずな。そんなワシの意図に気付いたにしろなんにしろ、これは普通ではない。そこのニアやリサでさえ怯え、多くの経験をしたはずのミランダでさえ表情は強張ったままだった・・・なのにアルフィリースは・・・」
「まったく驚いていなかったね。まるで怖いという感情が麻痺しているか、だからどうしたという感じだった」

ミランダが言葉を繋いだ。ミランダもファランクスと同じ懸念を抱いていたのだ。

「アルフィリースは基本的に情にもろい人間のくせに、時々びっくりするくらい冷たい発言や態度を取る時がある。アタシでさえ・・・時にどちらが本当のアルフィリースか疑わしくなるよ」
「それはリサも感じていました」

こんどはリサが続いた。

「確信したのは大草原に入ってからでしたが、アルフィリースは魔獣の息の根を確実に止めにいっている時があります。なんでしょう、一度スイッチが入ると止まらないとでもいうのでしょうか？　普段は出来る限り戦いを避ける用に物事の流れを持っていこうとするのに、いざ一端戦闘に入ると何の容赦も無いというか・・・やり過ぎということはないけども、豹変ぶりに驚かされます」

「私もそれは思う」

ニアも同意する。

「私はよくアルフィと組み手をするんだが、組み手が長引くほどにアルフィリースの顔が生き生きとしてくるんだ。そのせいでついつい訓練をやりすぎかける時がある。私の方が先にやめようと言わないといつまでもやりかねないからな・・・少し戦闘狂のきらいがあるのかもしれない」

「それは北側で魔物に追われている時もそうでしたよね？　あれほど呪印は危険だって自分で言っていたくせに、魔物に追われるようになってからしきりに呪印を使うことを主張して・・・。確かに呪印を使えば倒せたのかもしれませんが、基本的に避けられる戦いは避ければいいのに、まるで呪印を使って戦いたがっているようでした・・・」

フェンナが心配そうに語る。

「ファランクス、何か心当たりは？」

カザスが問いかける。だがファランクスは首を横に振った。

「ワシにもわからん。だいたいアルフィリースの力が何らかによって封印されておることはわかるが、それ以上のことはワシの知力は及ぶべくもない。それはやはり魔術師などの専門家に聞くのが一番いいだろうよ。だがワシの心配は無駄に終わりそうだ」

ニッ、とファランクスが笑った。

「それはまたなぜ？」

「それはそうだろう・・・これだけアルフィリースの事を心配する人物が傍にいるのだ。彼女が道を過つことはないだろう」
「もちろんだ。道を間違えたらひっぱたいてでも元に戻すさ」
「ええ。間違えたら裸にひん？いて、中央街道横断の刑だと脅しておけば大丈夫でしょう」

リサの目がきらりと光る。まず間違いなく本気で彼女はやるだろう。だがファランクスはその様子を見て安心したようだ。

「ククク・・・ワシの取り越し苦労なようだな。だが封印するほどの力だ、あまり使わない方が良いことも確かだぞ？」
「重々承知の上さ。その辺はアタシが見張るよ」
「頼むぞ・・・」
「あれー？　皆、ご飯はー？　もう私お腹が空いて限界だよ～」

その時アルフィリースの平和な声が外から聞こえた。そして全員顔を見合わせてクスリと笑い、アルフィリースの元に駆けていくのだった。

＊＊＊

昼食を全員で取り終え、各自がめいめい散っていく中でカザスがニアを呼びとめた。

「ニアさん、ちょっとお時間よろしいですか？」
「別に構わないが、なんだ」
「こちらに少し。あまり他人には聞かれたくないので・・・」
「？」

ニアは首をかしげながらカザスに言われるがままについてくる。

そして少し皆とは離れた場所に来た。

「長い用か？　アルフィリースと組み手の約束があるんだが・・・」
「いえ、お時間はとらせませんので単刀直入に。ニアさん、私とお付き合いしてください」
「・・・・・・は？」
「ですからお付き合いをお願いしたいと申しています」
「えーと・・・『つきあい』というと、アレか？」

ニアがぐっと拳を構える。

「それは『突き合い』ですね。ちなみに僕がそれをニアさんとやると、かなり高確率で死ぬと思います」
「そうだよな・・・」
「というか、かなり私は真剣に言っているんですが、信じてもらえないのでしょうか？」

カザスには珍しく、かなり落ち込んだようにうなだれる。ニアにもそれは痛いように分かった。

「それとも既に意中の方がおられるから、僕とはお付き合いできないでしょうか？　それともこんなちんちくりんのガリ勉はお嫌でしょうか？」
「いや、そうではなくてだな・・・その、なんだ？　私は男性にそんなことを言われたことがなくてだな・・・どうしていいやら・・・」

ニアがもごもごと口ごもる。実際それはその通りであり、軍にいたニアにも恋愛機会はあったのだろうが、『恋愛は自己向上の妨げになる』との信念からあまりそういった感情を気にとめないように

していた。
　また幸か不幸か、ニアの周囲には彼女が好むような男性はいなかったし、それに彼女が所属する小隊長が何かにつけて彼女をからかったため、それが隊員全員に伝播してニアはよくかわかられる立場にあった。プライドの高い彼女はからかわれる度に苛立ち、そのことがニアが修行の旅のきっかけの1つになったことは彼女自身も否定しない。

　だがそんな彼女だからこそからかい甲斐があると余計に囃し立てられたし、短気なニアの性格を指摘したかった小隊長の意地の悪い配慮だったのだが、年若いニアにそんなことは理解不可能だった。
　ともあれそんな状況に置いて、酒の席でニアにからむ連中がいたとしてもカザスのように真っ向から告白してくる男性など彼女の人生において皆無であったので、ニアは対応に困っていたというのが正しい理解であろう。ニアとしてはカザスに対して悪感情を持っていたわけではないのだが。

「僕の方もこんなことを女性に対していうのは初めてですよ・・・自分でも驚きなんです」
「そ、そ、そうなのか？」
「はい。僕は一生を学問に捧げる気でしたから。まあ一緒にいて僕の学問の邪魔をしない女性であれば、あるいは考えるつもりでしたが・・・まさか自分から獣人の女性のことを好きになるとは思いませんでした。あ、別に差別的発言で獣人と言ったわけではなくてですね、何と言うか、自分でも意外すぎて・・・くそ、上手く言えないな。学会でも発言に詰まったことは1度もないのに・・・凄く色んなパターンも考えたのに、自分の感情がこんなに複雑だとは・・・全く恋愛感情って奴は・・・」
「・・・ふふふ」
「な、何かおかしいでしょうか？　それともやっぱり僕では不満で

しょうか??」

カザスの慌てる様子を見て、ニアは思わず笑ってしまっていた。ニアのカザスに対する印象は、外見や頭の良さではなく、その肝の据わり具合が一番印象的だった。

カザスは育ちや身のこなしも完全に一般人と変わりなかったが、その肝の据わり具合だけは一級品だった。アルフィリース達が慌てるようなピンチであっても全く騒ぎ立てず、実に忠実に彼女達の指示に従う。悪条件で野宿しようが文句1つ言わない。合理的な性格をしているといえばそれまでだが、好戦的な性格をしている獣人でさえ、初陣や負け戦では動揺する者が多い。

身体の能力的に劣るカザスでは内心の不安は獣人以上だろうが、それをおくびにも出さないところがニアは気に入っていた。最初は鈍いのかとも思ったが、今現在自分の目の前で慌てるカザスを見ていると、彼が想像以上に自制心が強いだけだったことがはっきりわかった。

カザスとしては学問の徒として自分の理想に殉じる覚悟を決めているだけであり、研究の途上で死ぬなら本望と思っているだけなのだが、その点をニアが気に入っているとは思いもしない。そのあたり、彼もまた恋愛初心者なのだろう。

ともあれ、彼のうろたえぶりが逆にニアには好印象だったようだ。

「ああ、やっぱり僕じゃダメか・・・」

「いや、私でよければ付き合うぞ」

「ですよね、所詮僕みたいなチビじゃだめですよね、ふぅ～・・・あれ、今なんと?」

「だから私はカザスの恋人になってもいいと言ったんだ」

ニアは腕を組んで胸を張っている。彼女としては精一杯虚勢を張ったつもりだが、顔は赤面して目線が横を向いてしまっている。それに尻尾も照れた感情を示すかのように、下に垂れて振り子のように触れている。彼女が本当に威勢のいい時は尻尾は上に向いて左右に早く動くので、その内心は一目瞭然であり、知らぬは本人ばかりである。

「ぼ、僕なんかで本当にいいんですか？」
「ああ・・・私は嘘は言わない。むしろカザスこそ、私なんかでいいのか？」
「とは？」
「私は料理も大してできんし、裁縫なんかもってのほかだ。生まれてから大して時間も経たない間に家を飛び出すように軍に入り、そのまま戦闘訓練だけをずっとしているような獣人だ。学もないし、話も面白くない。見た目だってそんな美人ではないし・・・私なんかで、満足か？」
「確かにそういったステータス的な点ではニアさんのおっしゃる通りかもしれませんが・・・」

カザスがうーんと唸る。

「でも僕はそんな貴女が好きなんです。もちろん理由を探せば様々浮かぶんですが、本当のところは自分でもよくわからないんです。学者としては失格ですね」
「いや、よくわからんが・・・私はそれでもいいと思うんだ。でも私はグルーザルドの軍人だ、そのうちグルーザルドに帰らないといけない。だから、その・・・長く一緒にいれるかどうかは・・・」
「なんだ、そんなことなら僕がグルーザルドに行きますよ」
「え？」

その言葉はニアにはとても意外な物だったが、カザスは平然と言い放った。

「いや、それは・・・」

「学問なんかどこでもできますよ、僕が教授を辞めればいいだけなんで。あ、でもさすがに退官の手続きには少々かかるので、それからでもよければニアさんを追いかけてグルーザルドにいきます。どうでしょう？」

「でもそこまでさせては」

「僕がしたくてするんですから、ニアさんにどうこう言わせませんよ？」

「強引だな。でも・・・嬉しい・・・」

ニアが嬉しそうにうつむく。だがその言葉は小さく、カザスに聞こえたかどうか・・・

「ではこれから恋人同士ですね、よろしくお願いします」

「ああ・・・こちらこそよろしく頼む」

どちらかもともなく手を差し出し握手する2人。その顔はどこかともなく気恥ずかしそうだったが、これから来るであろう多くの幸せを同時に期待してもいた。

そんなときである、外からアルフィリースの悲鳴が聞こえたのは・・・

続く

大草原の妖精と巨獣達、その１４～優しい気持ち～（後書き）

次回投稿は１２／２８（火）１２：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その１５～迫る脅威～（前書き）

～あらすじ～

嵐の時期も終わろうかと今、アルフィリース達の元に脅威が来襲する。

大草原の妖精と巨獣達、その１５～迫る脅威～

＊＊＊

一方昼ごはんも終わり、それぞれが部屋を後にする中、エアリアルとファランクスだけが残っていた。

「何か用があるのか、エアリアル・・・」
「父上、アルフィリース達をここにつれてくる契機となったサディカの民のことですが」
「ああ、完全な掟違反だな。残念なことだが、彼らには何らかの形で制裁を加えなければなるまい」
「そうですね・・・」

エアリアルがうつむく。その表情は暗く、元から明るいとは言えない彼女ではあるものの、その雰囲気は暗鬱にすぎるようだ。

「どうした、エアリアルよ。問題はそのことではあるまい」

察しのいいファランクスである。長年共に暮らしたエアリアルの様子がただ事ではないことに気がついたようだ。

思い切りのいいエアリアルには珍しいことだが、何かを躊躇(ためら)っている。だが意を決したように表を上げる。その表情には強い決意が込められている。

「父上、実は折り入って相談したいことが」
「それは構わんが・・・エアリアルよ、外の竜巻はもう止んだのか

？」
「は？　いえ、まだのはずですが」
「ここに接近してくる者がいるぞ」
「なんと！？」

エアリアルは相談事も頭の隅に追いやり、飛ぶように外に出て気配を探りながら目を凝らす。彼女の目は常人の何倍もよい。その視界の端に、確かにこちらに向かってくる何物かをとらえる。

「あれはなんだ・・・？　竜巻の方から歩いてくるだと？」

その男・・・いや、全身をローブにくるみ男かどうかは定かではないが、遠目にもかなりの大柄で筋肉質なのでまず男とみて間違いないだろう。その男の歩いてくる方角は、まるで竜巻から突き抜けて歩いてきているかのようだったのだ。

実際にそんなことはなかったのだが、この竜巻が乱発する中を悠然と歩いているだけでも相当な狂人である。自らの命を全くいとわない行動に、エアリアルは腹の底から何かがせり上がるような嫌な感じを覚えた。

「エアリー、何かあったの？」

いつの間にかアルフィリースがエアリアルの傍に来ている。

「何かが・・・こちらに向かって真っすぐ歩いてきている」
「この竜巻の中を！？」
「ああ・・・何かはわからんが、とても嫌な感じがする。まだ５ｋｍは離れているが、全員に迎え撃つ準備を・・・何？」

エアリアルが驚愕の表情に包まれたかと思うと、アルフィリース

を無言で押し倒し、その場を転げまわるように離れた。アルフィリースは何が起きたかわからなかったが、気がつけば目の前に凄まじい巨漢が立っていた。

身長はゆうに２ｍはあるだろう。漆黒のローブをまとってはいるが既にかなりボロボロであり、そこかしこから体が見えている。その体は異常なまでに鍛え抜かれており、上半身・下半身共に凄まじい筋肉が・・・え、あのズボンからはみ出しているのは・・・

「・・・ちょ、いやあああ！　この人変態だー！？」
「誰が変態だぁあああああ！？」
「貴方よー！！」
「どこが変態だぁあああああ！？」
「下半身隠しなさいよー！！」
「隠し事など、男がやることではない！」
「それとこれとは話が別よぉおお！！」

アルフィリースが顔面を真っ赤にしながら反論しているが、エアリアルの方はそれどころではない。

「（バカな・・・先ほどまで確かに５ｋｍは離れていた。それを一瞬で詰めたのか？　一体どれほどの脚力をしているというのだ。それにあの存在感、圧迫感・・・大草原で一番大きいブロキオサウルスよりも大きく感じるなんて。・・・コイツは危険だ）」

エアリアルは冷や汗が止まらない。だがそんなエアリアルをよそに、アルフィリースとドラグレオは言い合っている。

「くそ、娘。俺が変態ではないことを証明してやる！」
「い、いやぁああ、こっちにこないでぇえええ！」

顔を真っ赤にしたアルフィリースがイヤイヤをしている。完全にパニック状態で、戦うという選択肢は頭の中から消えているようだ。そんなアルフィリースに近づこうとするドラグレオ。

そこに近づく足音がいくつか。

「てんめぇえええ！　ハミ××でアタシのアルフィに何しようとしてんだー！」

「くらえ！」

ニアが空中で2段跳び蹴りをドラグレオの顔面と喉にお見舞いし、態勢を崩した所にミランダが全開でメイスを顔面に叩きこむ。さすがのドラグレオも吹っ飛んでいった。

「大丈夫か、アルフィリース？」

「なんだあの猥褻物陳列変態男は？　誰か警察呼んでこい！」

「わ、わ、わた私・・・初めて見ちゃったよぅ・・・あううう」

アルフィリースが精神的なダメージで完全に涙目になっている。とりあえずしばらくは使い物にならなそうなので、フェンナに任せて後方に下げ、ニア・ミランダ・エアリアルの3人で対応することにした。

「仕留めたのか、ミランダ？」

「さあ？　手ごたえは十分だったけど・・・」

「・・・あれじゃ無理だ」

エアリアルの言葉に思わず彼女の方を見たミランダとニアだったが、なるほど言葉通り何事もなかったかのようにドラグレオが起き上がる。

そこで初めてミランダとニアは男が漆黒のローブをまとっている

ことに気がついた。

「ミランダ、あのローブ・・・」
「ええ、あのゼアで会った少年たちの物に似てるわね・・・」
「以前出会ったとかいうとんでもない連中のことか？」

エアリアルも話には聞いていたので思い当たる部分はある。2人にエアリアルが聞くと無言で2人は頷いた。

「だとしたら・・・まずいかもね」
「ああ、私達に倒せるのか？」
「我の感だと・・・無理だ」

エアリアルが弱気の発言をするのを初めて聞いた2人は驚いた。だがエアリアルの表情は蒼白を越して土気色に変化し始めていた。
そしてドラグレオがゆっくりと口を開く。

「力とは・・・なんぞや？」
「は？」
「何を言ってる？」
「・・・」

3人とも答えない。いや、むしろそれどころではない。ドラグレオの雰囲気が先ほどまでとは明らかに違う。どうやら戦闘モードに入ったようだ。

「力とは・・・」
「「「（ゴクリ）」」」
「パワーだぁあああああああああ！」
「まんまじゃない！！」

後ろにいたアルフィリースはツッコミを入れるが、前衛の3人は異常なまでのプレッシャーにさらされ、それどころではない。

「うるあぁぁぁぁぁ！」

そして雄たけびを上げ、絶叫と共に突っ込んでくるドラグレオ。その雄たけびだけで全員が身がすくんでしまう。ドラグレオの体から発する殺気が一層膨れ上がり、その姿が見た目以上に大きく見える。

そのままドラグレオは右手をニアに向けて振り上げる。ドラグレオは何の変哲も無く握りこんだ全力の右ストレートを放とうとしているだけなのだが、標的にされたニアはあまりの圧力に動けずにいた。

「あ・・・」

迫るドラグレオの拳が非常にゆっくりに見える。

「（これは・・・まずい）」

死ぬ直前は光景がゆっくり見えると言うが、ニアがそう思うよりも早く、エアリアルはニアに抱きつくように横っ跳びしていた。もしエアリアルが最初から反撃に転じる気でいれば、ニアの命は無かっただろう。

そしてミランダはカウンターを入れるべくメイスで再び顔面を狙う。そして見事絶妙なタイミングで顔面を直撃したのだが・・・

「我慢だぁあああああ！」

「何!?」

絶叫と共に顔面に受けたメイスを押し返しながらドラグレオは突貫してくる。その力に押し負け、地面に転がるミランダ。

そして――

「くらえええぇぇぇぇぇ!」

「!」

ミランダに向けてドラグレオの拳が振り下ろされる。その握り込む力が余りに激しく、メシメシという音だけでなく、まるで周囲の空気まで一緒に握り込んでいるようだ。

「（やられる!?）」

ミランダが内心では無駄だと感じつつも、本能からとっさに防御の姿勢を取ろうとした瞬間、頭上を赤い何かが疾走した。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その１５～迫る脅威～（後書き）

次回投稿は１２／２９（水）１２：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その１６～二体の獣～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリース達に圧倒的な力で迫るドラグレオ。なすすべなく追い込まれた彼女達命運は・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その１６～二体の獣～

一面に轟音が響き渡る。ミランダは死を覚悟――いや、彼女は不死身だから死なないわけだが、それでなくとも肉体が粉々になったことは覚悟していた。だが肉体に痛みは訪れず、当たりは間もなく静寂に包まれた。女でなくとも生物であれば本能的に目を閉じているところを、ミランダは戦士としての経験からなんとかドラグレオの直撃を受ける瞬間まで目を開けていようとしたのだが、頭上で起きた出来事に、肝心の頭の方が付いて行かなかったようだ。

ほどなくしてアルフィリースがミランダを助け起こす。ミランダはまだぼんやりしているようだ。

「今何が・・・」

「ファランクスよ」

見ればドラグレオのいた場所には、ファランクスが戦闘態勢で仁王立ちしている。当のドラグレオは見当たらない。

「奴は？」

「遙か彼方に吹っ飛んだわ」

「ざっと小山一つ分は飛んだか」

エアリアルが指さす方向を見ると、何かが確かに一直線に吹き飛んだように岩が削られたような跡がある。

「死んだ？」

「いや、まともにダメージすらあるまい」

苦い顔をするファランクスの答えに一同は驚くが、認めたくない

現実はドラグレオの哄笑と共に訪れる。

「ハーハッハッハッハァ！　目が覚めたぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

「チ・・・」

ファランクスが舌打ちした。それもそのはず、ファランクスはドラグレオの不意を突いて入れた一撃だ。しかも加減無し。これが効かないとなると、打つ手が後いかほどあるのか。ここにおいてエアリアルが不安げな様子を見せ始める。

「父上、手加減を？」

「まさか。粉々にするつもりで殴ったのだが。効いていないようだな」

「そんなことが。ベヘモスを一撃で殺す父上の一撃で？」

「奴はそんなに生易しい存在ではない様だぞ」

そうこうするうちにドラグレオが走って向かってくる。信じられない速度だ。

「俺と・・・戦えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

「少し離れていろ、派手にやるぞ！？」

迎え撃つべくファランクスも地面を後ろ足で蹴る。２人がぶつかると思われた瞬間ファランクスがドラグレオを横殴りにするが、今度は左腕でしっかりガードしている。それでも３回転は回るほど横に吹っ飛ばされるが、お構いなしに突進を繰り返すドラグレオ。

そこからは凄まじい殴り合いだった。いや、リーチがケタ違いな分ファランクスが一方的に殴っている。一撃毎に轟音と衝撃派が展

開されるほどの打撃だが、ドラグレオもきっちりとガードをしているようだ。もちろん一発ごとにドラグレオは後退させられるのだが、徐々に後退幅が少なくなってきている。そして踏み込む足がどんどん力強くなる。まるで殴られるたびに力が湧いてきているようだ。

ファランクスの方も最初は的確に一撃ずつ放り込んでいたのだが、徐々に一方的に殴る展開から、必死でドラグレオを遠ざける展開へと向かっているようだ。その表情にも徐々に焦りと苛立ちが見え始める。

そしてついにドラグレオがファランクスの一撃を堪え切った。

「!?」

「フウウウウ・・・オラァ!」

ドラグレオの渾身の一撃がファランクスの横っ腹を捕えるが、一撃で下がる大草原の主ではない。そのままカウンターをドラグレオに入れるもこちらも堪え切った。そのまま一撃の交換し合いに発展する。

爆発にも等しい一撃をノーガードで打ち込み合う両者。汗、唾液、血が飛び散り、その外表が見る見るうちに赤く、または黒く染まっていくがどちらも全く退く気はない。

その凄まじい戦いを見守るしかないアルフィリース達だったが、突然ファランクスがバランスを崩した。

「チャァァアンス!」

間髪いれずドラグレオがファランクスに深々とボディーブローを喰らわせる。思わず口から鮮血を吐き出し、後ろの壁まで吹き飛ばされるファランクス。５ｍを越える巨獣を人間が殴り飛ばすなんて全く非常識な光景だが、さらにドラグレオの行動は非常識極まりな

かった。
　ファランクスの後ろに回り込み、尻尾を両手で抱え込む。ファランクスは一瞬ドラグレオを見失っていたようで、対応が遅れた。

「んんん・・・ファイトォォォォォォ」

　そのまま自分を中心にしてファランクスを円形に振り回す。そのスピードが徐々に上がり、ふとファランクスの体が円の軌道を離れ上に現れる。

「死ねぇえええ！」

　ふわりと時が止まったようにファランクスが空中で静止したように見えたのもつかの間、その直後には凄まじい勢いで地面に叩きつけられ、アルフィリース達の鼓膜が破れるのではないかと思うほどの轟音と衝撃派が一面に響き渡る。
　アルフィリース達はその凄まじい衝撃派に吹き飛ばされたが、ファランクスが叩きつけられた場所を見ると、小規模なクレーターが出来ていた。ドラグレオの凄まじい膂力（りょりょく）が伺える。ファランクスはぴくりともせず、そのままドラグレオがファランクスにとどめを刺そうと近づく。その時エアリアルが飛び出しかけたのを、アルフィリースが抱きついて止めた。

「放せ、アルフィ！」
「エアリー、まだよ！」

　そんなやりとりにも全く気を取られないドラグレオ。既にアルフィリース達など眼中にないのだろう。今はファランクスという最上級の獲物に完全に意識が向いてしまっている。もっともファランクスの一撃を耐えきる化け物に、エアリアルがいかほどの事ができる

のか、という話でもあるのだが。
　ファランクスにドラグレオが近づくと、その目は白目を向いて―
―とドラグレオが認識しようとした瞬間、ファランクスの赤い瞳がギロリとドラグレオを捕え、その頭を鷲掴みにした。

「ぬおおお!?」
「土を舐めたのは久しぶりだぞ、小僧・・・」

　ファランクスが万力以上の力でドラグレオを締め上げ、口に入った砂利を血と一緒に吐き出しながらゆっくりと起き上がる。ドラグレオもなんとか両手で振りほどこうとしたが、つかまえるファランクスの手は6本。両手も絞り上げ、全くドラグレオは身動きが出来なくなった。こうなってしまってはドラグレオにはなすすべがない。
　そのままどうするのかと思いきや、ぱっと全ての手をファランクスは放してしまった。ドラグレオは空中に放り出された形になり呆気にとられたが、目線を上にやるとファランクスが2本の手を組み合わせているのが見える。その腕には血管が浮き上がり、メキメキと筋肉が隆起している。

「ちょっとま・・・」
「待たん!」

　そのまま振り下ろされるファランクスの腕。ドラグレオも空中では姿勢を変えようがない。先ほどのドラグレオと同じく凄まじい衝撃派が周囲を襲う。いや、先ほどよりも余程強い衝撃派に、今度はアルフィリース達が完全に吹っ飛んでしまった。
　ドラグレオもクレーターを形成しながら地面に腰までめり込むが、さらにドラグレオの側面に向けてやはり両手を組んだ強烈な一撃を放つ。
　そして糸の切れた人形のように彼方まで吹き飛ぶドラグレオだが、

今度はファランクスも追撃の手を緩めない。

「ヒュウウウウ・・・カッ！」

ファランクスが深呼吸をしたかと思うと、口から大火球がドラグレオ目がけて放たれる。そして着弾と共に、凄まじい光量と熱に周囲が包まれた。まるで真夏の最も暑い日のような熱波。着弾したのははるか彼方離れているはずなのだが。推測の域をでないが、着弾地点はこの熱の比ではあるまい。

「これならさすがに・・・」

「父上っ！」

アルフィリースの手が緩んだ瞬間、放たれた矢のようにファランクスの元に駆け寄るエアリアル。その様子は両手胸の前で組み、年相応に家族の無事を心配をする少女のようだ。

「エアリアルか・・・ワシも年だな。もう息が上がってきよるわ」

「何をおっしゃいますか、さすがという他ありません。これなら奴は」

「言ったはずだぞ。奴はそんな生易しい存在ではない」

「・・・は？」

まさかという表情でドラグレオの落下地点を見つめるエアリアル。はるか彼方ではあるが、並の人間よりはるかに目のいいエアリアルは、そこに何か動こうとする人間らしきものを確認した。

「そんなバカな！？」

「ふぅ。エアリアルよ、緊急避難用の道筋を覚えているか？」

「それはもちろん。まさか我に逃げろと言われますか？」

「その通りだ。もちろんアルフィリース達を連れてな。ワシがあらん限りの力で足止めをしてやる」
「・・・・・わかりました」

エアリアルはくるりと踵(きびす)を返し、アルフィリースの手をつかむと洞窟の方に案内する。

「荷物をまとめてくれ、アルフィ。すぐにここを離れる」
「ちょ、ちょっと!?　もう倒したんじゃないの？」
「それはない。すぐにでも奴は戻って来る」
「そんな!?　何なのよ、アイツ！」
「あの業火の中、生きていると？」

ニアもまた驚きを隠せない。先頭においてはこと冷静なニアが、ややうろたえていた。

「ああ、私の目でも確認した。それに父上は『足止めをする』と言った。アイツを倒すのは・・・きっと無理なんだ」
「!?」

アルフィリース達は絶句した。大草原で最強の魔獣が倒すのが不可能な人間が果たしているものだろうか？　いや、むしろあの大男は人間なのだろうか？　だが今はそんな疑問を考察する時間は無い。

「・・・わかった。エアリー、いいのね？」
「ああ」
「用を足してから、昼食を食べた場所に行くわ」
「・・・ありがとう」

本当は用を足す余裕などあるはずがない。アルフィリースは要は

別れをファランクスに告げて来いと言っているのだ。アルフィリース達が走って用意に向かったのを見ると、エアリアルも全速力でファランクスの元に走った。

「父上、父上！」
「どうした、エアリアル」
「我は・・・エアリアルは、父上と離れたくありません！」
「・・・」

是非もなく飛びついて来たエアリアルに、ファランクスが困った顔をする。エアリアルは今にも泣きださんばかりの顔だった。

「なぜそのような顔をする・・・ワシはお前の親の仇だ、むしろいなくなればせいせいするだろうが。お前に殺されてやれんのが心残りといえば心残り」
「そんなこと！　・・・そんなことはありません。貴方は我に取って実の親以上の・・・」

エアリアルはファランクスの背中に顔をうずめ、小刻みに震えている。ファランクスはそっとエアリアルの頭をなでてやった。

「それ以上言うな・・・お前の実の両親が悲しむ」
「そんなことはありません。きっと我の両親はわかってくれます」
「・・・もう行け。これからはお前を縛るものは何もない。風の導くまま、心の赴くままに暮せ」
「父上・・・・・・・・・わかりました」

顔を上げたエアリアルの顔に既に涙は無い。彼女には十分に泣く時間すら許されていなかった。

「父上、ご武運を」
「うむ」

その一言だけをかわし、既に2人は互いを見ることは無かった。
エアリアルは脱出の経路を頭の中で思い描き、ファランクスの目は高笑いをしながらこちらに悠然と向かってくるドラグレオの姿をはっきりとらえていた。

「炎の海の中を悠然と歩くか、化け物め」

ファランクスが歯ぎしりをしている。

「果たしてどれほどやれるかな・・・」

そして示し合わせたように、ファランクスとドラグレオが同時に地面を蹴った。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その１６～二体の獣～（後書き）

次回投稿は１２／３０（木）１２：００です。

大草原の妖精と巨獣達、その17～業火の中に～（前書き）

～あらすじ～

圧倒的なドラグレオの戦闘力に、ファランクスでさえ倒れ行く。その時アルフィリース達とファランクスがとった行動は・・・？

大草原の妖精と巨獣達、その17～業火の中に～

＊＊＊

「アルフィ、準備は！？」
「出来てる！」
「カザス、馬は！？」
「引いてきている！」
「ではすぐに行くぞ！　全力でここを離れるから、我に着いてこい！　向かうのはこの洞窟の東の果てだ。およそ６００ｋｍはあるが、一日で駆ける。そのつもりでいろ！」

エアリアルが飼っている馬は並の馬ではなく、大草原特有の馬のためその姿は大きく、速度も持久力も大草原以外の馬とは比較にならない。６００ｋｍでも一日で駆けることは不可能ではないだろうが、乗り手も合わせて強行軍であることには変わりがない。だが誰１人異論は唱えなかった。

「エアリー、ファランクスのことは・・・」
「今は言うな！」

エアリアルが大きな声でアルフィリースの言葉を遮った。いつも冷静なエアリアルには珍しいことだ。

「今は言うな・・・頼むから言わないでくれ」
「・・・ごめんなさい」

その言葉を最後に誰も何一言発することは無く、一ヶ月間暮らした――エアリアルにとっては7年以上を暮らしたその場を後にした。

＊＊＊

それから数時間後――

ドラグレオとファランクスが戦っていた岩場は形を変えていた。一面が炎に包まれ、岩盤は飴細工のように溶け、また二人の衝突で地面の形は変わり、クレーターのような穴がいくつもあいていることが凄まじい激突を連想させる。

周囲は既に暗くなり始めており、天には嵐の季節にもかからわず満天の星空が見えていた。これで周囲が炎で燃え盛っていなければ、もっと素晴らしい星空を見ることができただろう。だがそれはかなわない。

燃え盛る炎の中心に立つ影が2つ。言うまでも無くファランクスとドラグレオだ。2人の周囲だけ炎が鎮火している。どうやら大量の血が火を消してしまったようだ。そして地面に転がる腕が・・・5本。

「フ。年はとりたくないものだな・・・もう体力の限界、か」

ドラグレオの腕がファランクスの体内にめり込んでいる。そのまま中の臓器を引っ張りだした。大量の血を吐きながら崩れ落ちるファランクス。

「フウウゥゥゥゥオオオオオオ！　俺が強い、俺が最強だ、俺が王者だあああああぁぁぁ！　うらあああああああああああああ！」

勝利の雄たけびを上げるドラグレオをかすむ目で見つめるファラ

ンクス。その目からは光が徐々に失われていく。

「（まさか自分の命を奪う者が人間とはな・・・これも何かの宿縁か。大草原から一歩も出たことのない自分にとって、何かと人生に影響を及ぼしたのは人間だった・・・シスターしかり、この男しかり・・・そして）」

ファランクスの脳裏に緑の髪の少女が浮かぶ。出会った時、少女はわずか8歳だった。最初は憎しみに燃えた目で自分を見つめてきた幼い瞳。もちろん幼子に負けるようなファランクスではなく何度も返り討ちにしたが、少女は諦めることなく自分を追撃してきた。少女の体力が尽きて倒れると、看病してやったことがある。その寝顔はまさに天使のようで、その少女を見ているとどこかしら心がやすらぐ自分がいたのを覚えている。

だが自分が少女の仇である以上、決して自分はその子に優しい目で見られることはないとも思っていた。事実目が覚めた少女は体力を取り戻す度に目に復讐の炎を宿し、自分に刃を向けた。

少女と1年ほど追いつ追われつの不思議な生活を過ごした後、偶然に少女の里に辿りついた。そこで見たのは既に死に絶えた少女の仲間。少女はその場で崩れ落ちるように泣いたのを覚えている。ファランクスにあれほど胸が痛んだ時も無い。

それから少女は自分の跡を付いてくるものの、あまり自分を殺しに来なくなった。少女の目には既に憎しみの炎もなかったが、生者としての光も失われ、まるで死人のようになっていた。だが全ての物事は風の導くまま――そう思っていたファランクスは少女に特別何もしなかった。

その年の冬は格別冷えた。また餌も少なかった。普段は冬までにある程度獲物を狩り、蓄えを作って冬を過ごすのだが、その年は真

冬でも狩りをしなければならなかった。巨漢のファランクスでも芯にひびく寒さに、人間の少女は凍えながらも付いて来ていた。

その自分、餌が少ないため、草原の魔物たちは気が立っていた。狩りは激烈を極め、少女はそれに巻き込まれて大怪我をした。風の導くまま、弱い者は死ぬ運命――そうファランクスは思っていたはずだったのに、彼が取っていた行動は全くの別物だった。

ファランクスは少女をくわえ、妖精たちが住む集落まで全速力で駆けた。全盛期の彼の脚力でさえゆうに半日はかかる道のりを、彼はわずか数刻で駆けた。どうやったのかは自分でもわからない。だがその甲斐あって少女は一命を取り留めた。

それから少女の体力が戻るまで、ファランクスは自分の懐で少女を温め続けた。戦いしか知らない獣であり、少女の仇である自分がこうして何になるのかはさっぱりわからなかったが、彼に躊躇いも後悔もなかった。

1週間近く死線を彷徨った少女だが、妖精たちの治療もあり、無事に生きながらえた。少女の髪色はより鮮やかな緑に変化しており、妖精たちの影響を色濃く受けたことがわかった。

そして少女は自分の緑の長い髪を見ると気に入ったのか、ニコリとファランクスにむかって微笑んだのだ。その笑顔がまるで大草原そのものに微笑みかけられたようで、ファランクスは一生その瞬間を忘れないだろうことを本能で理解した。

それからエアリアルの両親の遺言をファランクスは彼女に告げ、その時から2人は親子となった。ファランクスは戸惑いながらも、日々が満ち足りていくことに気付いていた。

獲物の取り方、大草原の歩き方、木の実のなっている場所、戦闘訓練。少女に教えることは山ほどあり、日々は矢のように過ぎて行った。ファランクスにとって当然のようにできることでも、人間の

少女にできないことは山ほどある。正直そのギャップにファランクスは歯がゆさを覚えつつも、決して嫌だとは思わない自分もいたのだ。なぜならば、上手く出来た時にエアリアルが魅せる笑顔は、彼の気持ちを天にも昇らせたのだから。

そこまで走馬灯がよぎった瞬間、バラバラになって消えかけていたファランクスの意識が再び1つに集まり始める。

「（そうだ・・・ワシはあの笑顔を守らねばならん。こんな所で寝ている場合ではない！）」

ファランクスの瞳から失われかけた光が徐々に戻り始める。

「（動け、ワシの体・・・まだできることがあるだろう！？）」

昔自分を狩りに来た戦士たちの顔が思い浮かべられる。彼らは種属としては貧弱なはずなのに、実にすばらしい戦いを自分と繰り広げたことを思い出す。ファランクスは最初は鬱陶しいと思っていた彼らにいつしか敬意を払うようになり、かれらとの戦いを心待ちにしている自分がいることに気がついた。

特にエアリアルの両親は格別に強かった。真っ向勝負でファランクスと一晩中戦い続けることができたのは、大草原の他の生物も含め、後にも先にもあの2人だけだった。その最高の2人が死に際に望んだことはたった1つ。

「娘を守ってくれ」

死に際に自分の事より人の事かと、ファランクスには不思議だった。だが今ならその気持ちがわかる。

「オオオ！」

叫び声と共にファランクスは立った。だが腕は既に1本しかなく、出血は限界を超えている。内臓もはみ出しているし、骨もそこらじゅうが折れている。なぜ立てたのか、自分でも不思議だった。

「フウウウゥー！」

ファランクスが残りの体力をかき集め、ドラグレオを威嚇する。だがその威嚇の前に既にドラグレオはファランクスが起き上がったことに気が付いていた。ファランクスが起き上がったことに、心底うれしそうなドラグレオ。

「ハーハッハッハッハァ！　お前、最高だ！　最高の獲物だぜ！！」
「お前こそ・・・ワシが戦った中では最強だ。ワシが一番強い時にやってみたかったな。・・・名前を聞いておこうか」
「名前？　名前なんぞ重要じゃねぇ、重要なのはそこじゃねぇンだよ！　重要なのはな、今、どっちが強いのか、どっちが生き残るのか・・・それだけが万物が生まれてから唯一変わらない自然の摂理ってもんだろうがぁ！！？」

ドラグレオが吼える。その咆哮による衝撃派で脆くなった周囲の岩盤が崩れる。

「随分穿った物の見方だが・・・獣はそれでいいのかもしれんな。全く、獣のワシより獣らしい人間とはな・・・」
「ウオオオオオオオ！　勝負だぁ！！！！」
「来い・・・」

ドラグレオの突進を悠然と待ち受けるファランクス。いや、待ち

受けるしかなかった。もはや動く体力などなかったのだ。
そのままドラグレオの右拳が、ファランクスの心臓を貫いた瞬間、全力を残った1本の腕に込めてドラグレオを抱え込むファランクス。

「むぅ!?」
「最後に戦う敵の名前も知ることができんとはな・・・余程ワシは前世での行いが悪かったらしい。だが、地獄には付き合ってもらうぞ!」

【災厄の火、憤怒の火、贖罪の火、地獄に逆巻く大罪の火よ。神を焼き常世に終焉を告げる奈落の業火よ。我の魂を代償に我が敵を焼き尽くせ】

「ぬおおおお!?」

ファランクスの詠唱にドラグレオが危険を察知したのか全力で脱出しようともがくが、ファランクスの1本しかない腕はびくともしない。
ファランクスが始めた詠唱はただの魔術ではなく、魔法の類いである。使えば永続的に土地に影響を及ぼすのが魔法。ファランクスがつかおうとしているのは火系の魔法だが、使えば向う何百年間もこの一帯は草木一本生えない土地になるだろう。

大草原で生まれ育ったファランクスにとっては最後の禁じ手であり、自らが死のうとも使うつもりはなかったのだが、彼は大草原全てよりもエアリアル1人が大切なことに気が付いてしまった。この男を娘の元にはなんとしても行かせない。それだけが彼の行動を支配していた。

【我が身灰燼となりて、巻きて寄りて流となせ。流となりて道を造

れ】

「放せえぇえええ！」

ドラグレオの叫びをかき消すかのように、周囲に燃え盛る炎が寄り集まり、一筋の炎となって2人の周りを回転し始める。その様子はさながら巨大な炎の大蛇が2人を締め上げるようとも、炎の竜巻が2人を巻きこむようにも見える。

【道を通りて来たれる業火に焼かれし亡者達の歓喜を持ちて、我、現世を煉獄と化す】

《炉心融解（メルトダウン）》！

ドラグレオが何かを叫ぼうとしたが、その声は周囲に届くことはなかった。そしてファランクス自身も燃え始め、その身が炎、いやマグマのようになっていく。同時に2人の立っていた地面もマグマと化し、周囲の炎が集まるに合わせ、一面の大地がまるで熱したバターのように溶けて行くではないか。

ドラグレオは逃げ出そうともがくが、マグマと化した大地が意志を持つように2人に襲い掛かり、マグマの地面の中に押し込もうとする。マグマの質量は凄まじい。あとからあとから切れない嵐の大波のように押しよせるマグマに、さしものドラグレオもなすすべなく飲まれてゆく。

ドラグレオが完全にマグマの海に沈むのを見届けたファランクスだが、その身も既に炎に包まれており、もはや死は避けられないだろう。その意識が途切れる直前、ファランクスの脳裏に浮かんだのは、エアリアルの――自分の娘の笑顔だった。

「（エアリアルよ、ワシの大事な娘よ・・・ワシはろくな父親ではなかったな・・・何1つ父親らしいことをしてやれなかった。ワシ

が人間でさえあればよかったと、お前に出会ってからいつも思っていたのだ。だがこんなワシでも・・・お前が幸せになるよう心から願っているよ・・・）」

そう考えて微笑むと、ファランクスの意識は炎の中に消えていった。

続く

大草原の妖精と巨獣達、その１７～業火の中に～（後書き）

さて、明日も投稿・・・といきたいところですが、年末・年始は忙しい方も多いかと思います。また最新話まで追いついていない方もおられると思うので、三か月連続投稿といきたかったところですが～１／３までお休みして、１／４、１２：００からの再開といたします。毎日最新話までついて来てくださる方、まことにお待たせいたして申し訳ありません。

よろしければ今のうちに感想・評価なんかもお願いいたします。筆者、非常に嬉しいです。来年はさらに良い文章を書けるように精進してまいります。読者の皆様に来年もよい出来事がありますように。それではみなさん、よいお年を＞ｍ（＿＿）ｍ＜

妖精の涙（前書き）

～あらすじ～

ファランクスが時間を稼いでいる間に逃げ出したアルフィリース達。

彼女達の胸に去来する感情は・・・？

妖精の涙

アルフィリース達は無我夢中で馬を走らせた。その距離実に６００ｋｍ。馬のスピード・持久力が並々ならぬほどあるとはいえ、休ませる必要があることには変わりなく、結局６００ｋｍをかけて洞穴の東に出る頃には、既に丸一日以上が経過していた。

だが大草原は終息に向かっているとはいえ、いまだに嵐の時期であり、出口周辺で休憩も兼ねて嵐の様子を見ることになった一行である。めいめいが交代で仮眠を取るが、エアリアルの姿が見えないことにアルフィリースが気付く。

「ニア、エアリーは？」
「いや、見ていない」
「外かしら？」

アルフィリースは外の岩場に向かう。時刻は既に夜であるが、不思議な事に妙に明るい。

しばらくエアリアルの姿を求めて散策したアルフィリースであったが、岩場の高台にエアリアルの姿を見つけそこまで登って行った。だがエアリアルがアルフィリースの方を振り向く様子は無く、アルフィリースも声をかけあぐねていた。

ふとアルフィリースが大草原の景色に目をやると、西の空が明るい、いや、赤い。

「空が・・・赤い？」
「父上の火だ」

エアリアルが西の空を見つめたまま答える。アルフィリースはおずおずとエアリアルの傍に腰をかけ、彼女の様子をそっと覗きこむと、エアリアルの目からは涙がとめどなく流れていた。

「エアリー・・・大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

だがエアリアルが頬を伝う涙をぬぐうことは無く、その瞳は西の空に釘付けになっている。アルフィリースは言葉を探りながら、共に空を見つめた。

「あの火が・・・ファランクスの？」

「ああ、父上は炎獣だからな。炎の精霊と昔懇意にしたせいか、魔術を行使することができるといっていた。だが簡単な魔術はほとんど使えず、使えるとしても魔法級の威力のものだけ。それも行使する代償は自分の命だそうだ。なんとも不便なものだと笑っていたよ」

「・・・ということは」

「ああ、父上は死んだ」

「・・・・・・そう」

エアリアルはあっさりと言い放つ。だが言い放つ瞬間こそ淡白に聞こえたが、その言葉をひねりだすまでに様々な葛藤を経ていることがアルフィリースには分かっていたので、あえて彼女は何も言わなかった。

そのまま次のエアリアルの言葉を待つアルフィリース。だがエアリアルの言葉は無く、相変わらず彼女の涙は止まらない。アルフィリースは何か言うべきか迷ったが、その様子を察したのか、エアリアルの方が先に言葉を発した。

「済まないアルフィ、心配をかけてるな」
「ううん、私こそ・・・何もできなくて」
「いや、アルフィが我の傍にいてくれることが嬉しい」

エアリアルがにこりと微笑んだ。その笑顔は寂しそうではあったものの、大草原に流れる風のような爽やかさは一向に失われていない。涙は相変わらず流れているのだが。

「父上がな・・・」
「うん？」
「父上がいずれは自分は死ぬと告げていた。自分に限らず生命ある者は必ず死ぬと、死んだら風に還るのだと・・・弱肉強食のこの世界では死など非常に身近なものに違いないし、だいたい父上はもうすぐ寿命だったろう」
「気づいていたの・・・」
「ああ、我も鈍くはないからな。当の昔に気付いていた」

ファランクスの予想通りである。実の親子でないとはいえ、彼らの間にはやはり深いつながりがあったようだ。

「父上の死が近いとわかって我は考えた。自分は仇を討ちたいのか、それとも父上に死んでほしくないのか・・・おかしなものだ、あれほど憎んでいたのにな。だが不思議なことに母上も、ファランクス父上も同じことを言っていたことを思い出した・・・」
「・・・何て？」
「『全ては風の流れるままに』だそうだ・・・いずれは全てが風に還っていくと。命、名誉、怒り、悲しみ・・・きっと涙も還るのだろう。だから我は今止めることなく泣いているのだが・・・不思議なことに還したくないものがある」

アルフィリースがはっとする。エアリアルがぎりりと唇を、血が流れるほどに噛みしめているのだ。

「エアリー・・・何を還したくないの？」

「・・・怒りを」

「・・・何に対する？」

「・・・あの男だ・・・」

「え？　でも・・・」

「奴は生きている・・・」

エアリアルの唇から血がつぅ、と流れた。だがアルフィリースも流れる血を気遣うよりも、疑問が先に立ってしまった。

「そんな・・・あれほどの規模の魔法を使って？　どうしてわかるの？」

「風が教えてくれた・・・奴はきっと生きている。父上を殺したアイツが」

「そんな馬鹿な話が・・・」

「あるようだな・・・一体父上がアイツに何をしたというのだ。父上はそれは獣として生きるため多くの命を糧にした。大草原の秩序を守るため、見せしめに里を襲ったこともある。だがアイツに何をしたというのだ？　父上の望みはもう静かに自分の生を終えることだけだったのに・・・我は納得できない。アイツが憎い、今すぐこの手で殺しに行きたい。でも・・・」

エアリアルが自分の手をじっとみつめる。その手がわなわなとふるえている。

「我は怖いんだ・・・父上ですらどうにもできなかったような奴を、我が倒せるのかと。殺されるのが怖いわけじゃない、何もできない

のが怖い」
「エアリー」
「アイツの前に出ることを考えるだけで手が震えるんだ・・・なんて我は憶病なんだ。自分がこんなに弱いなんて思わなかった。全く持って情けない・・・これが大草原の主である炎獣の娘とは・・・」
「・・・」
「それに・・・涙も止まらないんだ。あとからあとから溢れて来て・・・本当にこの悲しみは癒えるのだろうか。教えてくれ、アルフィリース」
「私は・・・」

アルフィリースは自分の事を考えてみた。師匠を失った悲しみは完全に癒えたわけではない。故郷を追われた事実を恨んでないわけでもない。でもそれでも自分は笑うことができる。それはきっと自分を支えてくれる色んな人のおかげなのだろうと彼女は考えている。もしリサやミランダいなかったらと考えると、ぞっとしない。

「私は・・・色んな人がいるから人間は生きていけるんだと思う。1人じゃ無理なことも、家族がいたり、友達がいたり、恋人がいたり・・・私には恋人はいないけど、友達はこの旅で沢山できたから。だからエアリーも、もっと私達を頼ってもいいんじゃないかな？1人で泣くのもいいけど、私達に愚痴ったり、八つ当たりしてもいいんじゃないかって思うな・・・こんなので上手く伝えられているのか自信ないけど」
「人を・・・頼る・・・」

アルフィリースがぽりぽりと頭をかいている。そんなアルフィリースをエアリアルはしばらく無表情で見つめていたが・・・やがて少し微笑むと、すっと立ち上がった。

「なら・・・1つ我の希望を聞いてくれないか・・・？」
「いいけど・・・どうするの？」
「いや、そのままでいてくれればいい・・・こっちを決して振り向かないでくれ。ここで私が言うことも誰にも言わないでほしい。アルフィの胸の中にだけしまっておいてくれ」
「？　・・・いいわよ」
「・・・ありがとう」

そういうとエアリアルはアルフィリースの背中にコツンと額を当ててきた。そして背中をギュッとつかむと、その手が小刻みに震えている。

「父上・・・父上・・・どうして、どうして我を置いて・・・皆勝手だ！　本当の父上も母上も、里の皆も・・・ファランクス父上も皆我を置いて行ってしまう・・・お願いだから我を1人にしないで・・・1人は嫌だ・・・1人はイヤ・・・我はそんなに強くなんか、強くなんか・・・」
「エアリー・・・・・・」
「我は・・・どんな形でもいいから父上に生きていて欲しかった・・・結局両親の仇を憎み切れるほど我の心は強くなかった・・・それどころか仇にほだされ、実の家族として情を傾け・・・だが一緒に死ぬこともできず、アイツに怯えて・・・どうしたら、我はどうしたら・・・う、ぐ・・・うああ・・・」

エアリアルは決して大きな声は上げなかったが、アルフィリースの背中を掴むように泣いていた。正直エアリアルがかなり力を入れていたため、アルフィリースは背中に痛みを感じていたが、とてもそれを口に出す気にはなれなかった。

続く

妖精の涙（後書き）

あけましておめでとうございます、はーみっとです。え、名前なんて忘れてたって？　い、いいもんねｗｗ

さて、重大なお知らせが。作者私用にて、二ヶ月間ほど忙しくなります。四月には転職が決まったので、もしかしたら三月も忙しいかもしれません。

で、考えたのですが呪印のストックはまだあるのですが、毎日投稿して更新が長いこと止まるより、隔日で投稿していこうかなと思います。ですので、これより隔日投稿になると思いますが、どうかご容赦くださいませ。

新しい仕事もかなり忙しそうではありますが、週に2～3回は最低投稿していきたいなぁとか考えています。きっちり完結させるつもりではいるので、ご安心を。

では今年も『呪印の女剣士』をよろしくお願いいたします＞ｍ＜

次回投稿は１／６（木）１２：００なんだからねっ！

涙、尽きて（前書き）

～あらすじ～

ファランクスが死んだことはエアリアルを初めとする、各自の心に深い傷を残す。そして彼女達は・・・

涙、尽きて

＊＊＊

どのくらい時間が経過したか。気がつけばリサがアルフィリースの傍に立っていた。

「リサ・・・」
「エアリーは？」
「泣き疲れて寝たわ」

アルフィリースの背中で泣き疲れたエアリアルはそのまま眠ってしまった。アルフィリースはそんな彼女にマントをかけてやったが、全く起きる気配がない。気配を消していないリサの接近にも、全く反応がなかった。羽虫が近づいただけでも目を覚ますエアリアルなのだが、今だけは完全に無防備だった。それだけ目一杯泣いたということだったのだろう。

以前ミランダがアルフィリースの前で泣いた時にはかなり激しくむせび泣いたものだが、同じ泣き方でも随分違うものだとアルフィリースは考えていた。果たして自分はどうだろうか？

「何を考えているのですか、アルフィ」
「うん・・・ちょっとね」
「・・・貴方も相当疲れているはずです、眠りなさい」
「ありがとう・・・でもなんだか眠れそうにないわ・・・」
「あのバカっぽい男が生きているからですか？」
「！　リサ、貴方まさか話を聞いて・・・」
「いえ、ただの勘です。何だか殺しても死ななそうな奴だったでは

ないですか。貴方達の話はさすがのリサも聞いたらまずいと思ったので、センサーとしての能力を封じていました。もう終わったかと思って一瞬探ったのですが、どうやらエアリアルが寝ているようだったので上がってきたのです」

「そう・・・」

アルフィリースがエアリアルの様子を見る。彼女は涙を流しながら眠っていた。リサもその様子を確認すると、悲しそうな顔をした。

「ですが現実的な問題として、あの男が追撃してくるとしたらここから逃げないといけませんが、エアリアルがいなくてはどうにもなりません。ですからせめて彼女が起きるまで、一緒に貴方も眠っておいでなさい」

「そうね・・・正直追いつかれた時のことを考えると、ロクでもない話だけど・・・」

「正直追いつかれたら何をしても全滅でしょう。もっともその可能性は無いかもしれませんが」

「なぜ？」

「私達を殺すつもりならあの場で皆殺しでしょう。こういえば貴方は気分を害するかもしれませんが、あの男はファランクス以外は歯牙にもかけていないようでした。そんな取るにも足らない存在を追いかけてくるでしょうか、あの本能だけで動くような男が」

「・・・それはそうかもしれないけど」

「それにファランクスがあそこまですれば、死んでないまでも、さすがに動けないかもしれません。ですから眠っておいでなさい。もちろん確証はありませんが、リサが歩哨をしていれば一番早く気がつくでしょうから」

「わかったわ。じゃあ言葉に甘えて寝てくるわね」

「どうぞゆっくりと・・・」

アルフィリースはエアリアルを抱えて風を避けれる場所まで戻って行った。抱え起こしてもエアリアルが目覚めることは無かった。
2人が帰って行ったことを確認して、リサはぼそりと呟いた。

「ああは言いましたが・・・正直リサのセンサーに引っ掛かる頃にはもう逃げられない状況でしょうね。あんな化け物がいるなんて、正直想像をはるかに超える事態です。しかもアルフィリースはともかくとして、リサはあの気持ち悪い少年に完全に目をつけられています。生きた心地がしないのはリサも同じです・・・ジェイク・・・こういうときに女の子の傍にいないとダメですよ・・・早くリサを守りに来てください・・・」

リサは誰に聞こえるわけでもない声で一人ごちると、俯いて岩場の上に佇んでいた。

＊＊＊

アルフィリースが皆の場所に戻り、エアリアルをそっと寝かせると少し目が覚めたようだ。

「アルフィ・・・」
「なぁに？」
「ううん、なんでもない・・・」

アルフィリースは笑顔で応え、剣を置こうと自分の荷物の場所まで行こうとするが、その服をエアリアルが引っ張っていかせまいとする。

「どこに行くの、アルフィ・・・」
「荷物を置いてくるだけよ」

「イヤ、いかないで・・・」
「そんなこと言われても・・・」
「お願いだから・・・」

エアリアルが目を潤ませながらカタカタを震えている。アルフィリースにとってエアリアルは強い女性というイメージだったが、先ほど岩場の上で泣いた時のことを考えれば、彼女が本当は寂しがり屋なのは想像に難くない。
今はきっと離れてはいけないだろうとアルフィリースは思い、その場所に剣を置いて寝ることにした。平らとはいえ岩の上に簡単な敷物を敷いただけなので寝にくいことには変わりないが、体が欲する睡眠の強さから関係なく寝ることができそうだった。
アルフィリースはふぅ、と1つため息をつきエアリアルの横に寝転がる。そしてわざと明るめの口調にした。

「しょうがないわね～。今日だけよ？」
「うん・・・」
「ホントに手のかかる妹みたい」
「ごめんなさい・・・」
「謝らなくていいわよ。じゃあ一緒に寝ましょう」
「うん・・・」

そういってアルフィリースが横に寝転がると、エアリアルが傍にくっついてきた。ちょっとアルフィリースは照れ臭かったが、既にエアリアルは寝息を立てており、先ほどよりはだいぶ安らかな調子になっているようだ。それに安心したか、アルフィリースの方も速やかに深い眠りに落ちて行った・・・。

＊＊＊

エアリアルは夢を見ていた――

最初は両親の夢。自分は幼い頃に戻っており、顔も知らない実の父と、母が2人で手を引いてくれている。優しい2人に愛されてエアリアルはとても幸せだった。

だが突然襲ってきた大きな獣に2人は殺され、自分は憎しみにかられ獣を追いかけ始めた。だが獣の前に立ちこそしたものの、足がすくんで動けない。そんな獣に自分も殺されると怯えたが、獣は自分は殺さず、逆に自分を守り始めた。

そんな獣との生活は悪くなかった。憎しみが消えたわけではないものの、1人でいるときよりも寂しくはなかった。幸せとは少し違ったかもしれないが、大きな何かに守られてエアリアルは安心を得ていた。

だがまたしても幸せは長く続かない。大きな獣はさらに大きな獣に殺され、怯えきったエアリアルはついにその場を逃げ出してしまった。

自分では成長して強くなったつもりだったが、以前自分は幼い姿のままだった。実の両親を殺された頃と、何一つ変わっていなかった。

泣いて逃げた先でエアリアルは今度は少女に出会う。少女は以前のように自分を包み込む存在ではなかったが、大きく温かく、なのにどこか寂しそうだった。だからこそ彼女は気がついた。幸せは与えられるものではなく、自分が守るものなのだと。

今度こそ、この幸せを守って見せる。自分の手で――そう決意したエアリアルの姿は、元の成長した彼女に戻っていた。

＊＊＊

エアリアルが目を覚ますと、そこはアルフィリースの腕の中だった。アルフィリースは静かに寝息を立てているが、何かに呻(うめ)いているようでもある。その声は小さく、まるで囁くような寝言のため、おそらくはアルフィリースと寝床を共にでもしない限り気づくことはないだろう。エアリアルがそっと耳を澄ましてみると、

「・・・どうして・・・皆・・・私を・・・避け・・・」

そしてアルフィリースの目には涙がにじんでいた。その時エアリアルはハッとした。アルフィリースは普段はにこやかだし、底抜けに明るい性格で悩みなどないと思っていたが、それは大きな間違いだとエアリアルは気がつかされた。

「（そうだ、皆何かと戦っているんだ・・・我だけじゃない！　だから今度は我が・・・我が自分の大切な者を守るんだ。我はそのために武器を取ろう）」

そう考えたエアリアルの瞳には、再び力強さが戻って来ていた。

続く

涙、尽きて（後書き）

次回投稿は１／８（土）１２：００です。

火の海にて（前書き）

～あらすじ～

ファランクスが魔法を使った後に飛来する影が二つ。彼らは何をしに来たのか・・・

火の海にて

＊＊＊

アルフィリース達が悲しみに包まれている頃、こちらはファランクスが魔法を使った、その中心部である。

「死んだかな、ドラグレオ？」
「・・・どうかな・・・バカは死なないっていうし・・・」
「そんな諺あったっけ？」

浮遊の魔術を使い、空からドラグレオを探すドゥームとライフレス。それもそのはず、地面にはマグマが煮え滾り、とてもではないが歩けたものではない。しかもその範囲は見渡す限り、一面がマグマの海である。大草原は今や炎の海と化していた。

「あちち、あち！　こんなに離れていても熱いんだけど」
「・・・これは魔法だ・・・さしもの君も、この中に入れば死んでしまうかもしれない・・・気をつけることだ・・・」

飛び散ったマグマに慌てるドゥームに、ライフレスが無表情で警告する。

「なるほどね、せいぜい気をつけよう。でもマグマの海か・・・浸かってみたくはあるな」
「・・・別に止めてるわけじゃない・・・好きにするといいさ・・・」
「ちょっとは止めてくれないかな～」

器用にくるくると回りながら空を浮遊し、文句をライフレスに言うドゥーム。だがいつものように、ライフレスは決して本気でドゥームを相手にしない。

「・・・ところで・・・今日は君のとりまきの女たちは？・・・」
「ああ、流石にこの前の戦いで消耗したからね。好きにやらせて英気を養わせているよ。まあ2～3カ月もあれば元通りなんじゃないかな？」
「・・・そうか・・・」

前回のアルネリア教襲撃でオシリア以外を失ったはずのドゥームであったが、何日か後には全員を引き連れて戻ってきた。どうやらライフレスですら把握できていないドゥームの能力があるようだ。

「（・・・ドゥームは思ったより油断が無い・・・もっと簡単にくたばるタイプだと思っていたが・・・さすがはお師匠が仲間に引き入れたというところか・・・）」

ライフレスは少しドゥームの評価を改めると同時に、警戒心も上げていた。ブラディマリアの言葉を思い出す。

「（いずれ手に負えなくなるわよ・・・）」

実力でやりあって自分が負けるとはライフレスには考え難かったが、ブラディマリアは無意味な冗談を言うタイプではない。何かしらの手を打っておく必要がある・・・そんな思考をライフレスが巡らせていると、視界の端に何かを捉えた。

「・・・いた・・・」
「マジ？　生きてんの？」

２人が氷の魔術で身を守りながらマグマの近くまで降りると、そこには腕を組み、まるで温泉にでも入っているかのようにマグマに胸まで浸かっているドラグレオがいた。だがその表情は不機嫌極まりない。

「本当に生きてるよ・・・」

ドゥームが驚くのも無理は無い。ドラグレオは魔法でできたマグマに浸かっても、火傷すらしていない。ただのマグマなら無理矢理でもまだ納得できるが、魔法でできたマグマには魔術属性まで付加されるので、連続で火系の大魔術を浴びせられ続けるのと同義なのである。

驚くドゥームを尻目に、ライフレスはこの結果がある程度予想できていたのか、冷静にドラグレオに忠告する。

「・・・そろそろ上がったらどうだ・・・いくらお前でも厳しいだろう・・・」

「ライフレスか・・・そうだな」

ドゥームが目を丸くする。ドゥームはドラグレオがまともな会話をしたのを初めて聞いたのだ。だがドラグレオはお構いなしに勢いよくマグマから飛び出ると、適当に残った岩場の上に飛び乗る。しかしまだ腕を組んだまま仁王立ちの姿勢を取り、考え事をしているようだ。

「・・・どうした・・・らしくないな・・・」

「・・・まあそうなんだが、１つわかんねぇことがあってな」

「・・・？・・・」

ドラグレオは真剣な様子でライフレスに質問する。

「なんで奴は自分を犠牲にした？」

「・・・娘に対する愛情ってやつじゃないのか・・・僕には縁のない言葉だが・・・」

「俺もだ。愛情ね」

ライフレスもドラグレオに一応監視の使い魔はつけておいたから、事情はなんとなく呑み込めている。ただドラグレオは途中で竜巻に巻き込まれたり、地割れに飲み込まれたり、草原ジゴクに喰われたりするものだから、使い魔を何体無駄にしたか知れない。

表情にこそださないものの、ライフレスも心労がたまっていたことには違いが無かった。そんな事情など露知らず、ドラグレオがぱぁんと拳を掌で受け止める。

「よし！　わかった！！」

「・・・何が・・・」

「あれだ、あの獣は馬鹿だな！」

「・・・おいおい・・・」

「ひでぇ」

「あの獣」とは、もちろんファランクスのことを指しているのであろうが。それにしてもドラグレオにバカ呼ばわりされるとは、炎獣も報われないだろうよと思ったのはライフレスもドゥームでさえも同じだった。

だが口に出すか否かで2人の違いはあったのだが。

「あの炎獣だって、お前みたいな馬鹿に馬鹿だって言われたくないだろうよ」

「お前も馬鹿か？」

「ぐっ、何だと!?」

ドラグレオに馬鹿呼ばわりされキレかけるドゥームを、ライフレスが制する。

「・・・理由を聞こうか・・・」

「当然だろうが、自分が死んで何になるんだ。愛情？　くだらん！　全ては自分の命あってのことだろうが。本当に助けたいなら、守りたいなら、目の前の敵ぐらいなんとしてでも倒して見せるのが男ってもんだ。死んで何が残るんだ？　だいたい死ぬのはそいつが弱いからだろうが。なんでそんな奴の命に対して責任を負わなきゃならん」

「・・・それは人によるだろうよ・・・だが、守ろうとすることで本来の実力以上を発揮する人間もいる・・・覚えておくといい・・・」

「俺には難しいことはよくわからん」

「・・・まあ戦いたい奴が現れたら人質でもとって見るんだな・・・だいたい人間はムキになって戦いを挑んでくる・・・中々楽しめるぞ・・・」

「そんなもんか」

「・・・そんなものだ・・・」

またドラグレオは考え込んでしまった。そこにドゥームが茶々を入れる。

「まあ炎獣も所詮馬鹿だったってことか。娘を守って死ぬなんざ、甘ちゃんもいいところ・・・ぶげっ!?」

ドゥームを突然ドラグレオが殴り飛ばす。凄まじい勢いでマグマの中に吹っ飛んでいくドゥーム。まるで水切りの石のような勢いで、

マグマの上を転げまわっている。

「てめぇが馬鹿にすんじゃねぇ！　アイツは強かった。それだけは間違いねぇ」

「・・・実際、君にも休息が必要なんじゃないのか？・・・」

「そうだな、またしばらく寝ることになりそうだ。じゃあよろしく頼むわ」

「・・・頼まれてもな・・・」

肩をすくめてみせるライフレス。転がって行ったドゥームなどまるで気にかけてもいない。

「おう、そういえば」

ドラグレオがパチンと指を鳴らす。

「・・・何？・・・」

「あの師匠のことだがな・・・気をつけた方がいいぞ？」

「・・・どういうことだ？・・・」

今度はライフレスが真剣にドラグレオに尋ねる。

「だってよお・・・」

「まだドラグレオを回収してないのか？」

背後上空から声がふいにかかる。完全に気配を感知できていなかったライフレスは、がばっと後ろを振り向くが、そこにはいつぞや廃虚で集合した時に一度顔を見ただけの少年がいた。新入りのくせに、全員に不遜な態度をとったあの少年である。

「・・・君は・・・いつの間に・・・」
「そんなことはどうでもいい。それよりその間延びした口調をやめたらどうだ？　話しにくいだろう」
「！？」

ライフレスが警戒心を上げる。ブラディマリアと師匠以外は自分の本性を知らないはず・・・様々な思考がライフレスの考えを巡るが、目の前の少年の言葉にその思考を中断させられる。

「それに大草原をこのまま炎上させておくわけにもいかないんじゃないのか？　ここは魔王の放牧場にする話だったし、このままでは影響が出る。それにあまりに炎上したままにしておくとさすがに近隣の国も気づいて介入してくるぞ。魔法の影響だから、下手をしたらまだ何カ月もこのままだしな」
「・・・あ、ああ・・・」
「まだその口調でいくのか・・・まあいいさ。ここはサービスで私がなんとかしておこう。貴方はそこで寝ているデカブツを連れて一端引き返すとい。シーカーの集落――ミュートリオ、だったか？を襲撃するのは、そこまで急がないんだろう？」
「・・・それはそうだが・・・だがどうやってこの火を消す？」
「簡単だ。魔法には魔法」
「・・・なんだと・・・」

少年が何かブツブツ唱えると、手の中に銀色に淡く光り輝く、六角形の結晶が形成される。それを下のマグマの中に落下させると、明らかに周囲の気温が下がり始めた。すると地面は見る間に冷えて、マグマが固まっていく。

「これでいい。さすがにすぐに火は消えないが・・・まあ3～4日で完全に消えるだろう」

「なっ」

その言葉にライフレスは思わず本来の口調に戻り絶句した。大草原最強と言われる魔獣が命を代償に放った魔法を、いとも簡単に打ち消した目の前の少年。同じ魔術を行使する者として、受け入れがたいことだった。

「何者だ、お前・・・」

「口調が元に戻っていますよ、先輩」

少年を睨みつけるライフレスに対し、少年が無表情でライフレスを見返す。

「では私はこれで。まだまだ仕事が山積みなので」

「待て！」

だが少年はそのまま転移魔術で姿を消してしまった。後に残されたライフレス。

「何だったんだ・・・どう思う、ドラグレオ？」

「んごー。ぐごー」

「・・・ダメな奴・・・」

ライフレスはため息をついたが、自分にもこの後やることが控えている。今は構っていられる時ではなさそうだ。

「・・・仕方ない・・・あいつのことは後にすることにして、とりあえず自分の用事を片づけるか・・・はて、何か忘れているような？・・・まあいいか」

ライフレスがドラグレオを連れてそのまま転移魔術で姿を消す。
後には何も残らず、マグマが冷えて固まった場所から不毛の大地が広がるばかりだった。

なおマグマの中に忘れられたドゥームが、冷えて固まった大地から自力で脱出するのは一週間後のことである。

続く

火の海にて（後書き）

次回投稿は１／９（日）１２：００です。日曜だから、投稿しておきましょう。

登場人物紹介、その5～ライン、ダンススレイブ、カザス～（前書き）

さて、今回は幕間的に人物紹介。

登場人物紹介、その5～ライン、ダンススレイブ、カザス～

名前：ライン（本名ではない）
年齢：２６
身長／体重／容姿：１８２ｃｍ、７８ｋｇ、茶色の髪に茶色の瞳
職業：剣士
好きなモノ：イイ女、酒、ぐうたらすること
嫌いなモノ：説教くさい女、ガキ、面倒くさいこと
一人称：俺
プロフィール：
　彼は元々は職業軍人である。とある事情により国を追われる身となり、出奔。そのまま傭兵となった。髪や髭を伸ばし割と小汚い身なりをしていると思われているが、実は変装も兼ねている。

　傭兵もその日暮らしができればいいと考えているため、あまり本気でやっていない。有名になればむしろ困ることになる。本来はかなりの腕前のようだが、その事に気が付いている者はほとんどおらず、それはアルフィリースも例外ではない。だが彼が絡んだ依頼は成功率が高く、またほとんど誰も死なないということで実は傭兵仲間からは信頼されており、ギルドからも重宝されているため傭兵界隈ではちょっとは名が通った存在となっている。もっとも彼としては困ったことなので、あまり名前が売れすぎないように各地を転々とするように依頼を受けるようにしている。

　アルフィリースとはとある山賊征伐の依頼で知り合ったのだが、どうにも危なっかしいアルフィリースを放っておけず、それとなく注意して見ているようにしていた。それは何もアルフィリースに限ったことではなく、新人の様子はそれとなく見るようにしていたのだが、アルフィリースに変態と勘違いされてしまい今に至る（もっ

ともラインにも責任はある）。
　それからアルフィリースとは顔を合わせるたびに悪態をつく仲になってしまったが、ラインも見た目よりは幼い部分を持ち合わせていたりするので、傭兵仲間達からは同レベルの若者として仲が良いとみなされている。
　見た目よりも鋭く、また情にもろかったり正義感が強い部分を持ち合わせている彼は、諸国を放浪する中で自分では知らず知らずのうちに物事の核心に近づき、そのせいで色々な面倒事に巻き込まれていくこととなる。

名前：ダンススレイブ（ダンサー）
年齢：およそ８００歳
身長／体重／スリーサイズ／容姿：１６８ｃｍ、５５ｋｇ、８８／５６／８６、肩と腰の中間くらいの黒髪・黒い瞳。服装は踊り子か娼婦に近いようなかなり際どい恰好をしている。ちなみにもともと「はいてない」が、ラインに言われてからは気をつけている。
職業：魔剣
好きなモノ：人と話すこと、子ども、酒、踊り
嫌いなモノ：無責任な人間、意志の弱い者
一人称：我
プロフィール：
　かつて魔剣として恐れられた存在。その危険性を恐れた魔術師に転移魔法で強制転移させられた先が、たまたまオシリアと同じ空間だった。たまたまと表現するにはあまりの確率だが、当時のダンススレイブは非常に悪意や殺気の塊であり、オシリアと波長があったのではないかとみられている。

　元はさる刀鍛冶によってつくられた剣に意志が宿ったもの。なぜ人化できるようになったのかは本人もわかっていないが、刀鍛冶が

代々非常に大切に扱ったため、九十九神のように意志が宿ったのではないかと考えられている。

彼女が目覚めた時、周囲は非常に驚いたが、時の刀鍛冶は子どもに恵まれていなかったため彼女を実の娘のように育てた。そして優しい家族に恵まれたダンススレイブは、心穏やかな日々を送っていた。

だが刀鍛冶の工房が魔物に襲われた時に、彼女は魔剣としての力を覚醒させる。その力をもって魔物を撃退したものの、彼女の有用性に気がついた刀鍛冶は自らが剣を取り、魔物を倒すことを決意する。

ダンススレイブは正直反対だったが、自分を育ててくれた手前、刀鍛冶に強く言えなかった。またその刀鍛冶が武器を鍛える理由は、少しでも多くの人間に生き延びるすべを伝えたいからであり、自分に力があるのならば、自らが魔物を倒して回りたいというのが刀鍛冶の願いであった。そして諸国を回ることで彼とその妻は勇者としての英名を馳せたが、彼女の想像通り元が一般人である彼らでは限界があった。ほどなくして彼らは魔物との戦いの最中死んでしまい、一人になったダンススレイブは街中で人に紛れて暮らすこととなる。

だがミランダと同じく、彼女もまた容姿が変わることはなく、食事すら必要としない彼女は、人間の中での居場所を徐々に失っていく。そして彼女は森の中で誰にも見つからないように隠れ棲むようになった。

そして年月が経ち、2番目の所有者である女性と出会う。女性は流浪の女剣士であり、かなりの腕前だった。女性はダンススレイブと無二の親友となるが、女性は自分の復讐のためダンススイブを振い、最終的に目的を果たすものの、ダンススレイブを使いすぎた反動でぼろぼろになり、若くしてその命を散らせる。そしてダンススレイブはまた1人になってしまった。

さらに年月が経ち、今度の所有者は男であった。この男は格別腕の立つ男だったが、同時に非常に残忍であり、ダンススレイブに剣であると同時に女であることも要求した。マスターの命令には絶対服従であるのが魔剣としての運命であるため、彼女は心底嫌がりながらも男の命令に従わざるを得なかった。

その男は功績を立て勇者として名をはせたが、同時に戦いの最中は人が変わったように残虐であることを非難されていた。だが彼はそのことをダンススレイブのせいにし、彼女を魔剣と呼ぶことで全ての責任を押し付けた。

だがその男の態度は徐々に隠しきれぬほどに横柄になっていき、やがて人々に恨まれ、ダンススレイブを奪った人間の手によって殺されることとなる。

そこからの出来事はダンススレイブもよく覚えていない。何人もの人間が彼女を振い、敵を倒し、自分も死に、その度彼女の悪名は高まっていった。「魔剣」「呪われた剣」「持ち主に破滅をもたらす剣」。どれ一つとして彼女に責任は無かったのだが、周囲はそう取らなかった。

そんな中で彼女は思考を止めてしまった。人間と語らうことが、どうでもいいと思えてしまえたのだ。ましてダンススレイブは何かを切る時、その肉の感触を全身で感じていることになる。剣でありながらも根が心優しくなるよう育てられた彼女には、戦いは苦痛以外の何物でもなかった。

そして封印されて数百年――思考を止めて過ごすにはあまりにも長い年月。やることもない漫然と流れる時間は再び彼女に思考の機会を与えた。そんな時、目の前に現れたのはラインだった。また人間は自分を魔剣として振うのかと絶望しかけた彼女だったが、「お前なんかいらない」といったラインに興味を覚え、彼について行くことにする。

彼との冒険がどこに向かうのかは誰も知らない。

名前：カザス＝ロウ＝トーレンティスク
年齢：１８
身長／体重／容姿：１６２ｃｍ、５６ｋｇ、茶色の短髪（割と坊ちゃん刈り）・瞳に眼鏡
職業：学者（考古学、地学、地理学、天文学、物理学など）
好きなモノ：旅、学問、賢い者
嫌いなモノ：無駄、頭の悪い者、努力しない者
一人称：僕
プロフィール：

彼は貧しい家庭の出身である。彼の父は役人だったが、汚職事件の首謀者に仕立て上げられ、彼が９歳の時に自殺した。母はその時に心を病んでしまいアルネリア教会の養護施設の世話になっていたが、彼が１４の時に流行り病で死亡している。以来兄弟のいない彼は天涯孤独であり、一人で全ての生計を立てて暮らしている。

本来は学問所に通えるような身分ではなく、奨学金を利用して学問をしていた。彼は腕力には自信がなかったので父に勧められるまま学問をしたのだが、既に父が亡くなる前には一般教育課程を終えており（普通は１３～１５歳で終了する）、飛び級で専修課程を学ぶ身分となっていた。

だが奨学金を確保し続けるためにはその成績は常に首席でなくてはならず、また彼は自分でいち早く金を稼げる身分になるため、寝る間も惜しんで学問に没頭し論文を発表し続けた。そんな生活は彼から心の余裕を奪い、若者らしい感性をなくさせた。しかしその甲斐あってか、彼は１４歳で教授の役職を与えられ、研究成果を元にした出版物の印税も相まって、もう働かなくてもそれなりの生活ができるくらいの安定した収入を得るに至っている。

だが逆に人生の目標を半分失くした彼は、旅と称して遺跡の実地調査に赴くようになった。それは自分の中に足りないものを補いに行くようでもあり、心の隙間を彼は旅で埋めようとしていたのかもしれない。その過程でカザスはアルフィリース達に出会うわけだが、この出会いは彼にとっても大きな意味を持つようになっていくだろう。

なお学問と同程度以上に今は、ニアに興味津々のようだ。ユーティのインタビューによると、「戦場で戦う女性がなぜあのように可愛らしい性格を保てるのか、その謎を解き明かしたい」ということらしい。

続く

登場人物紹介、その5～ライン、ダンススレイブ、カザス～（後書き）

さて、これだけでは面白くないので、明日１／１０（月）１２：００に次話投稿します。次回からまた新しい場面です。

中原の戦火、その1～不審な戦争～（前書き）

～あらすじ～

時間はアルフィリースがファランクスの元から逃げだした頃。遠く離れた中原では、別の出来事が起ころうとしていた。

中原の戦火、その1～不審な戦争～

＊＊＊

大草原でそんなやりとりが行われている頃、ラインとダンススレイブが何をしていたのか。

「ライン、何か情報はつかめたのか？」
「ああ、収穫はあったぜ。やっぱりロメオなんて奴は存在しねぇようだ。ギルドに登録してあった住所を当たってみたんだが、廃虚だけだったよ。何か嫌な感じがしたんで、中には入ってないがな」
「ふむ。では例の依頼を組んだ奴は何者だったのだろうな」
「さあ・・・だがロクでもない奴なことは確かだろうよ。問題はこの情報をどうするかだな。一応ギルドに報告はしておいたが」
「誰か権力者に知り合いはいないのか？」
「・・・・・そんな繋がりはないな」

妙な間に違和感を覚えたダンススレイブだが、どうせラインにのらりくらりとかわされることは容易に想像がついたので、追求はしないでおいた。

今ライン達がいるのはクルムス公国国境付近の町、トリメドの酒場である。ゼアで死んだ傭兵達の戦死報告をギルドに行い、住所や出自が明らかな者はラインが自ら足を運んだ。本来はギルドが戦死報告をするシステムがあるのだが、自分の家族の死に対して手紙一枚で報告をされる制度に、ラインは納得がいかなかった。そのため自ら戦死を報告しに自ら足を運び、最後に辿りついたのがトリメドだったのである。

二人はそれぞれが情報収集をし、晩飯がてら互いが得た情報のす

り合わせをしているのだ。目の前には適当な酒と、軽食が二人分用意されている。

なお現在クルムスとザムウェドは戦争状態だが、戦争地帯とはクルムスの首都セイムリッドをはさんで反対側にあるトリメドでは、まだ平和である。

トリメドは自由都市の雰囲気が強く、ミーシアなどの他国の大都市とも積極的に連携を取っているため、クルムス領でありながらもその経済状況にあまり影響を受けない。一方で他のクルムス領の町では、度重なる戦争での徴収で町は疲弊し、治安は乱れに乱れている。戦争が起きている国境付近では、それは惨たるあり様らしい。

トリメドはそういった状況を受けて、他の町からの難民の受け入れを積極的に行っていた。もちろん自力でトリメドまで辿りついた者だけに限るが、町の外周部にテントなどを貸し出し、受け入れを拒否してはいない。少なくとも今のところは。

だがラインが得た情報では既に難民の数は万を超えており、また戦争のための特別徴収を受けているのはトリメドも同じなため、間もなく受け入れの限界を迎えるということだった。それでもトリメドを訪れる難民は後を絶たない。昨日も５００人以上の難民が、トリメドに辿りついたらしいということだった。

「これは普通の戦争じゃねぇな・・・」
「ああ、明らかにおかしいな」
「ダンサーもそう思うか？」
「無論だ。我も情報収集はしているからな」

この２人は旅賃を稼ぐためにラインは適当な仕事をギルドで見つけ、ダンススレイブは楽士や吟遊詩人を見つけてはその音に合わせ、踊りを披露するという形で踊り子として旅賃を稼いでいた。

ダンススレイブが踊るのは酒場であることが多いため、情報にはことかかない。また吟遊詩人という職業も旅を伴侶とする職業のため、情報通な者が多かった。まあガセネタが多いのも事実だったので、情報の選別が出来るだけの見識が必要ではあったが。そんな中、ダンススレイブが選別をした情報をラインに話している。

「今回の戦争ではクルムスが押しているのは事実らしい。現にザムウェドでの都市がいくつか陥落している。だが・・・」

「だが？」

「どうやらクルムスは奪った都市を治める気が無いらしい。誰にも管理させず、占領した後に残している兵もほとんどいない。それどころか落とした都市の住人を虐殺して回っているそうだ。そのためザムウェドの各都市の反抗はますます頑強になり、戦争は激化する一方だとか」

「そこまでやったらザムウェドの同盟国も黙っていないだろうな」

「ああ、実際既にグルーザルドは出兵を決定したらしい。しかも１２獣将とかいうトップが乗り出してくるそうだ。そうなればクルムスの負けは決定的だろうと噂されている」

「確かに。クルムスに同盟国はないからな」

そもそもこの戦争は発端からしておかしかった。戦争の発端はザムウェドの兵士がクルムスの住人を殺害したことに対する報復行動だということだったが、そもそも獣人と人間の国の国境は警備が厳しく、アリの子一匹通れないというほどである。クルムスは交易の都合上、比較的緩い警戒態勢を敷いているとはいえ、それでも国境破りをさせるほど甘くは無い。ましてザムウェドの兵士がクルムス領内に入り込むなど考え難く、ザムウェドも当初は反論しようとしたのだが、有無を言わさず宣戦布告もないまま戦争状態に入ったクルムスの姿勢に、やむをえず戦争となった。

不審な点はまだある。ザムウェドの非が事実なら、周辺諸国に対して声明文を飛ばし、戦争の正当性を主張するのが通常である。そうすることで他国の介入を防ぐことができるし、一番重要なのはグルーザルドの援軍を防げることだろう。現在グルーザルドと真っ向勝負が単独でできる国は、北の大国ローマンズランドぐらいだと言われているのだ。

それに戦争というものは国を滅ぼすほど戦うことはあまりなく、せいぜいいつくかの砦を落とし、占領地の所有権や賠償金を和平条約で主張して終わりだ。国を滅ぼす程戦えば、勝った方も無事では済まない。そこを他の国に狙われればひとたまりもないからだ。また勝ちすぎても恨みが残るし、占領しても内政が立ちゆかない。

つまるところ、クルムスの戦い方は破滅に向かって一直線に進んでいることに何の違いも無いのである。そんな戦争を国王が容認していることも、おかしな話だった。

「なぜクルムスの王は、こんなことを容認しているのだ?」

ダンススレイブの疑問も尤もである。

「それが王の方は、心労がたたって倒れたそうだぜ。で、実権を握っているのが第3王子ということだ。戦争を主導しているのは、こいつだな」

「第3? 1と2はどうした」

「1は病死、2は殺された」

「この時期にか? うさんくさいことこの上ないな」

「ああ。それに第3王子ってのは愚物で有名だったんだが、どうなってんだかな。クルムス自体が平和な国で、ザムウェドと戦って勝てるような国じゃないはずなんだが」

ラインの疑問もいたしかたない。それに主たる武官・文官は第３王子が粛清をしているはずなのだ。既に軍が軍として動けるような体をなしていないはずなのだが・・・

「気になるな」

「まあそれは気になるが、なぜラインがそんなことを探っているんだ。関係のない話だろう？」

ダンススレイブがずばり指摘する。確かに一介の傭兵であるラインには関係のない話だろう。

「馬鹿言え。傭兵にとって戦場ってのは一番の稼ぎ場だ。安全に稼げる戦場なら参加するし、ヤバそうなら離れる。負けそうな国についても死ぬだけだしな。情報に精通するのは傭兵の基本だぜ」

「それはそうだが」

ダンススレイブは不審気な目でラインを見た。確かに正論に聞こえるが、ここまで詳しい必要があるのかどうかは疑問だ。だがそんなダンススレイブを気にかける様子も無く、ラインは続ける。

「気になる点はもう１つ」

「なんだ？」

「この戦争で主力になっているのは『ヘカトンケイル』っていう傭兵団らしい。それが勇猛果敢な働きでザムウェドの獣人達を押しているんだとか」

「それがどうかしたのか？」

「そんな傭兵団、聞いたことがないんだよ」

ラインが目の前の酒をぐびりと飲みほした。

「獣人を押し負かすような傭兵団なら、あるにはある。ブラックホークもそうだし、他にもいくつかな。だがどれもこれも、傭兵をしている者ならその名前を知らない者がいないほど有名だ。無名の傭兵団が突然ぽっと出てくるなんぞ、ありえねぇ」
「ふぅむ・・・まあ我の活動していた時代とは違うようだからな。そんなものか」

これはダンススレイブにはわからないことだった。ダンススレイブが活動していたころにはまだ人間の勢力は今ほどではなかったし、情報の流通はもっと限定的だった。そのため英雄と言われるような者や、人間の国が各地に突然現れることもままあったのだ。

ダンススレイブが考えることをしている間にも、ラインはがつがつと晩御飯を口にかきこんでいる。ダンススレイブも食物を食べることはできるが、生命活動にはあまり影響が無い。ただ長らく人間の真似ごとをしていると、どうしても「食べる」という行動が必要になったり、また人間が食べる者にも興味があったため、食欲というよりは興味の範囲で食事はとる。だが酒だけはおいしいと彼女は思うのだ。もっとも酔うことは決してないのだが。

「食事も終わったし、行くか」
「寝ないのか？」
「まだ夜早いからな、ちょっくら博打でもしてくるわ。その後娼館で適当に遊んでくる」
「我という女がありながら、堂々と娼館に行く宣言をするとはな。なんなら我がすっきりさせてやろうか？　いたっ！」

ダンススレイブが艶っぽい仕草と表情をして見せたが、その頭をぱしんと引っ叩くライン。

「剣が気色悪いこと言うんじゃねぇ。寒気がすらぁ」

「こんな美女を前にして・・・貴様、衆道じゃあるまいな」
「俺にそっちの気はねえ！　だが剣を抱いて眠るよりは、まだ男娼の方がましだろうよ」
「そこまで言うのか」

少しダンススレイブは自分のプライドを傷つけられたような気がしてうなだれた。彼女は正直自分の容姿にはかなり自身があったのだが、まるで見向きもしない男というのは初めてだった。だがそんな男の気をちょっと引いてみたいと思う当たり、彼女は随分人間らしいといえるのかもしれない。
ちょっと言い合いをしながら酒場を後にするラインとダンススレイブ。本人たちにその気はないのだが、他の者には恋人達の痴話喧嘩にしか見えない。そんなことをラインが聞いたら、怒り狂うことは必定だろう。

町にはまだ明りが多く灯っている。通りにも人通りは多く、にぎわいを見せている。通りには出店が並び、そこかしこでおいしそうな匂いが立ち込める。ミーシアほどではないにしろ、トリメドも人口は５０万を数え、活気がある町に違いは無い。
と、その中で人込みをかき分けるように走ってくる少年がいる。余程急いでいるのか、全く前を見ていないようで、後ろばかり気にしているせいで人にぶつかっては怒られている。ラインにもぶつかったのだが、謝る様子も無く走り去って行った。

「なんだ、あのガキ」
「・・・追われているんじゃないのか？」

確かにローブに身をまとった怪しい集団が、人込みを縫うように駆けていく。人数は５～６人と行ったところか。

「助けないのか？」
「お前、俺を正義の味方かなんかだと思ってないか？　君子危うきに近寄らず、ってな」
「鬼畜め・・・でもアルフィリースが同じ立場だったら？」
「なんでそこでアルフィリースを引き合いに出すんだ」

ラインは心底呆れたようにダンススレイブを見たが、彼女はニヤニヤしているだけである。

「まあラインにその気が無いなら、我だけで助けるがな。だが」
「？」
「アルフィリースに、ラインが幼い子供を見捨てましたと告げ口したら・・・もう口も聞いてくれないかもな」

そこまで言うと、ラインに口応えの機会も与えずその場を去るダンススレイブ。だがラインは、

「・・・勝手にしろ」

と吐き捨てるように言って、その場を後にした。

続く

中原の戦火、その1～不審な戦争～（後書き）

ここから新しいシリーズです。次回投稿は、１／１２（水）１２：００です。

中原の戦火、その2～少年と騎士と～（前書き）

～あらすじ～

町中で追われる少年。彼を助けようとするダンススレイブと、放っておこうとするラインだったが・・・？

中原の戦火、その2～少年と騎士と～

＊＊＊

ダンススレイブが少年を助けに行く一方、ラインは彼女と反対方向に歩き始めていた。だが特に目的があるわけではなく、彼の足取りは重い。賭博にも娼館にも、いく気が失せてしまった。単純に意地を張っていたという部分が大きく、うしろめたいせいだろう。

ラインは元々正義感が非常に強い人間である。彼は正義感から面倒事に首を突っ込みつづけ、最後には自分にとって一番大切なことが何かを見失ってしまった。そのことを今さら悔やんでも悔やみきれるものではない。だから彼は正義感から面倒事に首を突っ込むのを止めることにし、今度こそ本当に大切なことを見極めようと、彼は軍を辞めて国を飛び出した。

だが国を出たことで、彼は逆にやることを見失ってしまった。世の中に本当に大切な事などそうそう見つかるわけもなく、彼はこの数年を無為に過ごしている。

「何やってんだ俺は・・・」

騎士を辞めて国を飛び出しても相変わらず振っているのは剣であり、そして今もダンススレイブの言葉が気になって後ろ髪をひかれている。本当なら剣を捨てる道もあったはずなのだが、騎士道を捨てたことに未練があることすら、彼は気づけていない。そして剣を振い、弱い物を助けることこそ自分の本質であろうことにも。

だが結局のところ何一つ変わっていないのではないか、ということを認めたくない自分がいるだけなのだということには、ラインは気づき始めていた。そして自分が追われる身になった原因である出来事が頭をちらつく。

――お前は良い男だよ――私にはもったいないくらいな――

国を出れば忘れられるかとも思ったのだが、むしろ後悔は強まるばかり。いまだに失くした女を思い、何度悪夢で飛び起き、眠れぬ夜を過ごしたか。

「・・・くそっ！　今回だけだぞ！？」

誰に言い訳するでもなく声を張ると、ラインはくるりと逆向きに走り出したのだった。

＊＊＊

一方追いかけられていた少年は・・・

年の頃は１０歳より少し上くらいなのだろうか。ローブで顔を隠しているのでその表情は覗えないが、背格好から判断してそのくらいの少年である。少なくとも、そう見える。相当長い距離を走っているのか、顎は上がり息が切れ、足はもつれている。もう長くは走れないだろう。案の定路地を曲がろうとして、置いてあった木箱に足を取られ派手に転げまわる。

だが健気にもすぐに起き上がり走ろうとするが、足をひねったのかその場にうずくまってしまった。背後には追いかけてきていた男どもが、小刀を抜きながら迫ってくる。

少年はなんとか逃げようと手を使ってじりじりと後ずさるが、もはや逃げ切れないのは明白であった。と、その時少年の目の前に頭上から落下してくる黒い塊が一つ。塊は落下と同時に追手の頭にかかと落としを喰らわせ、そのまま少年と追手の間に割って入った。

「感心しないな、大人が集団で子どもをいたぶるのは」

少年の前に立ちはだかったのは、黒髪の踊り子風の女。もちろんダンススレイブである。少年も追手も何が起こったのか一瞬理解が追いつかなかったが、ダンススレイブが素手あることを見てとると、追手は無言で襲い掛かる。

「ふん」

だがダンススレイブも躊躇うことなく反撃に出た。男は5人。素手の女で相手をするのは本来難しい所だが、路地は狭くせいぜい2人を相手にすればよかった。それにダンススレイブも伊達に長年を生きてはいない。人間の状態でもある程度は戦えるように、格闘術を身につけているのだ。

それでも相手は訓練を積んだ獲物持ちの集団である。達人でもないダンススレイブが一方的に倒すというわけにはいかず、追手の剣がダンススレイブに迫る。頭部目がけて刺し出された剣に対し、ダンススレイブはためらうことなく腕で剣を払いにいった。普通ならかなりの深手を負うはずだが、

キン！

という金属音と共に、追手の剣は傷一つダンススレイブに与えることなくはじかれた。驚く男の顎に掌底をくらわせ昏倒させ、もう一人の土手っ腹に蹴りをお見舞いする。元が剣なダンススレイブには、生半可な金属では傷一つつけられないのだ。

ダンススレイブが普通でないことを見てとった男たちは慎重に間合をとり、仕掛けてくる様子がない。その様子をダンススレイブは訝(いぶか)しむ。

「（おかしい・・・裏路地とはいえ長居をすれば人が来るはず。強引にでも仕掛けるのが好手だと思うが？　まあいっこうに我は構わんが、さてどうしたものか・・・）」

ダンススレイブが思案を巡らせていると、路地の反対側から足音が複数聞こえた。

「しまった！　他にもいたのか」

反対側からも男たちが5人迫って来ている。それほどこの少年が重要だということになるが、今は何とかしてこの場面を切り抜ける方が先である。しかしダンススレイブにいい手は思いつかない。ダンススレイブが舌打ちをし、少年に駆け寄ろうとするが、その時背後から叫ぶ声があった。

「ダンサー、しゃがめ！」

考えるより早くその場でしゃがむダンススレイブ。同時に彼女が相手にしていた男達を一瞬でなぎ倒し、ダンススレイブの上を飛び越えるライン。

そのまま反対側の5人に斬りかかり、４人を一合と交えることなく切り捨てる。最後の1人はすれ違いざま足をかけバランスを崩し、後頭部に一撃を加えて昏倒させた。まさに一瞬の出来事だった。

「（強いのは分かっていたが、相変わらず鮮やかだな）」

ダンススレイブは旅をする中でラインが剣を振うのを何度か見たが、彼は実に無駄なく最小限の動きで相手を仕留める。その剣捌きはダンススレイブが長年見た剣士の中でも、一級の美しさを持っていた。

「（我流ではなく、正規の騎士剣。それもかなり上位の腕前でありながら、戦場での研鑽も怠っていないというところか。派手ではないが、堅実だな。ずぼらな性格と違って）」

ダンススレイブの評価は皮肉交じりだが、正確なものであったろう。実際追手は結構な使い手だった。それを感じさせないラインの実力は、大した領域なのだ。

とその時、ラインが最初になぎ倒した男の１人が逃げ出した。だがラインは追わない。全員を殺すことが目的ではないのだから。

しかし男が路地から抜けようと目線をライン達から通りに向けた瞬間、彼の胸には剣が深々と突きたてられていた。同時に口を押さえられ、断末魔すら上げられず絶命する男。

ラインが気がつくと、路地は既に両方が塞がれていた。前後で合わせて２０人はいるか。今度の連中はフードをつけておらず全員が顔をさらしているが、腰に剣を佩き、具足こそつけていないものの明らかに騎士だとわかる精悍な面構えをしている。

その内の何人かが路地に入って来たのを見て、ラインは剣を収めて両手を上げ、抵抗の意志が無いことを示す。真っ先に男達の中から１人が少年にかけより無事を確かめ、他の何人かは追手の生死を確認する。そしてまだ息のある者には無慈悲にとどめを刺していった。

ラインとダンススレイブのことはとりあえず後回しなのか、放置されている。だが少年の面倒を見ていた男がうなずくと、路地に入ってきた他の男達３人が剣をラインに向けた。少年はその様子を見て止めようとしているようだが、男は聞き入れない。

「何者か知らんが、済まぬがここで死んでもらう」

「おいおい、俺はそのガキを助けた人間だぞ。いくらなんでもそれは無いんじゃないのか？」
「尤もな意見だが、ここで見られたことをその辺でペラペラと話されては困るんだよ。見た所傭兵だ。傭兵という奴らは、金次第で何でもやる人種だからな。信用できん」
「そりゃそうだ。だがお前ら騎士って人種は、主人のためなら何でもやるだろうが。傭兵と変わらんどころか、大義名分をかさに来て殺人も正当化するお前らの方が、よっぽどタチが悪いや」
「騎士を愚弄するか？」
「傭兵だからって馬鹿にされるいわれはねぇな！」

ラインも色めき立つ。ラインを取り囲む男達がじりじりと距離を詰めるが、ラインはどこ吹く風だ。そしてしばしの沈黙の後、１人が動いたのをきっかけに全員が仕掛けてくる。
だがラインの対応は冷静だった。最初に動いた騎士の剣の柄を、手ごと掴んで引っ張ると、足払いをかけてバランスを崩し、他の１人に叩きつけ、余った一人の懐に飛び込み、鳩尾に拳を入れて昏倒させる。そしてまとめて吹き飛ばしたうち、上の男が起き上がりかけた瞬間に顔面を殴りつけると、そのまま喉元に剣を突き付ける。もう１人は殴られた男の下敷きになり、思うように動きが取れない。

「まだやるか？」

ラインの一瞬の早業に、路地を塞ぐ者達からもどよめきが起きる。だが少年の様子を見ていた男が立ちあがると、何かしら合図をし、少年を代わりに守る者を呼び寄せる。少年は男を止めようとしているようだが、やはり男は聞き入れる様子は無かった。

「私が相手だ」
「しつけえな」

ラインは悪態をつくが、今度は油断できる相手ではないと踏んだのか剣を構える。そのまま互いに円を描くように動きながら、距離をじりじりと詰める。

が、突然何を思ったのかラインがニヤリとすると、無造作に間合いを詰めた。男は一瞬呆気にとられるが、はっとすると気を取り直して気合と共に切りかかる。それを見たラインは、

「全然だな。戦い方がお上品すぎるぜ」

と吐き捨て、足元の土を男の顔面に向かって蹴りあげる。男は思わずのけぞり、前を向きなおした瞬間には既にラインの剣が男の喉元に突きつけられていた。

「剣を捨てろ」

「卑怯な！」

「戦いに卑怯もクソもあるかよ、何甘っちょれぇことぬかしてやがる。だからそこのガキが危険な目にあってんだろうが」

「な」

男は痛いところを突かれたのか、剣を落として絶句した。だがラインも勝ったはいいが、ここからどうしたものかと思案する。男を人質にこの場を逃れたとしても、追跡される可能性はかなり高い。また先ほど倒した男たちが暗殺者の類いだとすると、ことの成り行きはどこからか見られていてもおかしくない。要は二重に追跡される可能性があるということである。

だから面倒くさいのは嫌なんだとラインは考えつつも、自分から首を突っ込んだのではいたしかたない。決定的な案が思い浮かばないまま時間が過ぎるが、ふと少年がおぼつかない足取りで立って、こちらに近づいてくるではないか。それを止めようとした者の手を

払いのけるようにして。

「剣を収めてはいただけないでしょうか？」

少年の口から発せられた言葉には力があった。大きくはないが、力のある響き。先ほどまでは怯えていた様にも見えたが、今は微塵も感じさせない。しかも丁寧な言葉遣いに、ラインはおそらく少年は貴族だろうと想像をつけた。

「嫌だね。収めた瞬間、よってたかってバッサリされない保障がどこにある？」

「ご心配なく。私の名前において命令を出します」

「なら名前を名乗りな。どこの誰とも知らないガキに、そんな権力があるとは思えん」

「いいでしょう。私は・・・」

「いけません！」

「黙りな！」

少年の名乗りを止めようとする男の胸倉を、さらに捻り上げるライン。男は苦しさに顔をしかめるが、目は少年を向いたままだ。その男に軽く頷き、少年は名乗りを上げた。

「私の名前はレイファン。レイファン＝クルムス＝ランカスター。クルムス公国第二王位継承権を持つ、第一皇女です」

続く

中原の戦火、その2～少年と騎士と～（後書き）

次回投稿は、１／１４（金）１２：００です。

中原の戦火、その3～クルムスの皇女～（前書き）

～あらすじ～

ラインが助けた少年は、実はクルムスの皇女殿下で・・・？

中原の戦火、その3～クルムスの皇女～

＊＊＊

そしてラインは今、馬車の上である。事情を知ってしまったことでラインはその場を離れるわけにもいかなくなり、とりあえずレイファン達に同行することにした。

「まっさか女だったとはな」
「ああ、我も驚いた。まあまだ男としての特徴も出ない年頃だろうから、男だと言われても何の不思議も無いがな」
「まあな」
「騙したようですみません・・・」
「姫が謝る必要など！」

男、どうやらレイファンの護衛でラスティというらしいが、彼が必死でレイファンの弁護をしようとするのを、ラインは白々しい目で眺めていた。

馬車に揺られる間、ラインがレイファンやラスティから聞いた話によると、どうやら事情はこうらしい。

クルムスではリヴァル第一王子、ウェイン第二王子が死ぬと間もなく王は心労から倒れ、ムスター第三王子が実権を握ったのだが、どうやらもう一人皇女がいたらしい。王が歳をとってから妾に出来た皇女のなので、王位継承とも無縁として、今までは比較的表舞台には出ずに自由に育てられていたようだ。

だがムスターが実権を握ったことで焦った貴族たちも多い。ムスターが無能だと思われていたこともあるが、それ以上にいままで貴

族や宮廷の役人はムスターにろくな敬意も払ってこなかった者も多かった。また第一王子、第二王子の死亡はムスターが仕組んだと考える人間が宮廷内にはほとんどで、証拠こそないものの、それは共通の認識だった。ムスターが実権を握った時に宮廷では粛清が行われたことで、貴族は表だって反発することは無かったものの、裏では反抗のために密かに様々な工作をしていたのである。

そのため本来は王位継承の位をもたないレイファンを担ぎ出し、王位継承権が付与されることを主張したのだ。もしムスターがいなくなれば、クルムスでは現国王の兄弟や姻戚関係の男児の王位継承権が優先される。だが彼らはムスターの粛清を恐れ王位継承権を破棄し、年端もいかないレイファンに王位を継がせた後、彼女を裏から操ってやろうという魂胆なのだろうとラインは判断した。レイファンならムスターもさすがに手をださないと踏んだのだろうか。実の兄たちは殺されたと認識している癖に、実に身勝手な事だと、ラインは反吐が出る思いだった。

しかしムスターは全員が思っているよりもさらに抜け目がなく、レイファンにしっかりと見張りをつけていた。そしてレイファンの誘拐を目論んだのだが、すんでのところで未遂に終わった、と。

誘拐未遂も既に何度も起こっており、今回は4回目になるそうだ。最初は首都セイムリッドにいた時に、レイファンが軟禁状態にあることを危惧した宮廷の貴族により保養地に逃されたのだが、そこから何度も怪しい連中に襲われるようになった。今回は難民に紛れてトリメドまでたどり着いたのだが、またしても居場所がばれたらしい。ラインとしては内通者の存在を疑っているのだが、それは全員がわかっていることであろうし、今ここでは伏せておいた。

ここまではラインが思うによくあるお家騒動の話だったのだが、腑に落ちない点がある。

「そんなにムスターってのは準備がいい人物なのか？　聞いた話じ

ゃ、稀に見る愚物だって話だが。おっと、アンタの兄貴を悪く言うようですまんがな」
「いえ、お気になさらず」

レイファンが少し複雑な顔をするが、すました表情は崩さない。だが答えにくいレイファンの代わりに、ラスティが説明した。

「愚物かどうかはさておき、確かにムスター王子はこんなに手の込んだことができる人間ではなかった。少なくとも我々の知る限りではな。ところがある日から、まるで人が変わったように様々な事を行い始めた」
「で、そのほとんどが国のためにならないことだと」
「恥ずかしい話だが、その通りだ」

ラスティはきまりが悪そうに言った。レイファンも落ち込んでいるが、ラインにとっては知ったことではないのか、一瞥すらくれず話を進める。

「具体的に証拠はあるのか？　誘拐ないしは暗殺の証拠があれば、王に申し出て、ムスターから王位継承権の剥奪ってこともありえるだろ？」
「証拠はない。先ほど貴公が生かして捕えた者から、何か聞き出せればと思うのだが」
「そういや一人だけ生かしていたな。だがどうかな。多分奴らは暗殺ギルドの者だ。口は固いし、本当に知らない可能性が高い。だが状況証拠だけでも、王に言えばいいんじゃないのか？」
「それが・・・王の姿をもう何ヶ月も誰も見ていないのだ」
「何だと？」

さすがのラインも驚いた。王は単純に病床で伏せっているとばか

り思っていたからだ。

「なら今のクルムスは・・・」

「ああ、ムスター王子の私物に近い。反抗する者は粛清し、残った武官の大半を連れザムウェドとの戦争に赴いてはいるが、こちらにも王子の手下が沢山残っているようだ。王の寝所には見たこともないような兵士が詰めており、御典医以外は近づけん。いつあのような者達を配下にしたのか・・・また御典医の話では王は無事のようだが、思ったよりも病状が重いらしくてな」

「それは無事とは言わんぜ、体のいい軟禁だ。その典医とやらも、抱きこまれているんじゃねぇのか」

「そうかもな。我々もなんとか王を助けたいのだが、王子直筆の勅令書があるため寝所に近づけん。許可なく近づけば切り捨てることもためらわんそうだ。これに対抗するには王直々の勅令がいるのだが」

「王様が軟禁状態じゃな。しかし、そこまで第三王子が手回しのいい人間だとはな」

ラインがむすっとして腕を組んでいる。別に彼としてはクルムスなどどうでもよかったのだが、徐々に事情が変わってきていた。おかしな動きをする貴族が数人いるだけで、国を揺るがす大事件に発展しかねないことがある。ラインが以前身をもって知ったことである。ましてや王子が乱心となると、それは国家崩壊の危機となる。

国家が崩壊してもラインとは縁もゆかりもない話なのだが、クルムスは少し事情が違っていた。

クルムスは獣人の国と隣接する国家であり、よくいえば防衛線の役目を果たしている。クルムスの西にザムウェド、南でトラガスロン、東でクライア、北でフルグンドに接しており、４カ国の緩衝地帯として成立した国家である。

元々は多数の有力者が争う戦争地帯だったのだが、周囲の４カ国が正式に国家として成立すると、このままでは滅びを待つばかりとして、当時最も力があったランカスター家を中心に、クルムスが国家として機能したのが１００年と少し前。ランカスター家は最も西に領地を持っており、獣人とは比較的良好な関係を築いていたため、国家としてもザムウェドが真っ先に承認したくらいである。そのためザムウェドとクルムスは隣接しながらも小競り合いすらほとんど起きておらず、クルムス領を占領して獣人と戦争になるよりはと、他の３ヶ国もクルムスを緩衝地帯として睨みあいを続けている。実際に南のトラガスロンとザムウェドの仲は険悪で、しょっちゅう戦争状態になっているのだ。その度にクルムスが仲裁役を買って出ていた。

もしこのクルムスが崩壊するとなると、間違いなくクルムス領地を巡って戦争が起きる。トラガスロンとザムウェドの仲裁をする国もなくなるし、クライアは元々盗賊が作った国とされており、油断も隙もない国家だ。またフルグンドも、裕福なトリメドを領地にしたくてしょうがないのは周知の事実である。

「大戦争になるな・・・」

ぽつりとラインが呟いたことがレイファンにも聞こえたらしく、びくりと身を震わせた。ダンススレイブが気が利かない男だといわんばかりの目でラインを睨むが、ラインは自分の思考に没頭しており気が付いていなかった。

だがしばらくしてラインは考えがまとまったのか、ずけずけとレイファンに質問を始めた。

「いくつか聞きたいことがあるんだが。さっき俺を殺そうとした詫び代わりにでも、答えてくれるか？」

「・・・どうぞ」

「クルムスが保有する戦力は、総数でどのくらいだ？」
「そんな国家の機密を、傭兵ごときに教えられるわけはないだろう！」
「いいのです、ラスティ」
激昂するラスティを制止し、レイファンが答える。ラインはラスティなど気にも留めていない。
「首都に常駐する兵士が４万、クルムス５公爵家がそれぞれ保有する兵力が２万ずつの総計１０万、国境警備には首都から派遣している兵士が、４方合計でだいたい４万。後は街道警備や予備兵役の者が３万以上はいるとして、かき集めれば２０万はいるのではと」
「そのうちザムウェドと戦争をしている兵力は？」
「首都からすぐ動かせる兵士のみを連れて行ったと聞きました。その数がだいたい２万で、国境警備の兵士と合わせておよそ３万の兵士で戦争をしているのかと」
「・・・正気の沙汰じゃねぇな」
「どういうことです？」
レイファンは戦争にどうやら疎いらしい。もっとも、１０歳少しの女の子が戦争に詳しいというのも悲しい話だと、さすがのラインも思うのだが。
「いいか、レイファン」
「貴様、姫に向かって呼び捨てとはなんたる・・・」
「外野はすっこめ」
「なんだと！？」
「お黙りなさいラスティ。・・・ラインさん、続けて」
席をがたりと立ちかけるラスティだが、レイファンに制止され、

すごすごと座った。

「ああ。獣人と人間が平野で戦争するなら、だいたい倍の兵力が必要だって言われる。ザムウェドは領土のほとんどが平野だし、だからこそあの国は黎明期を生き残った。獣人が戦争をしやすいからな。それに、ザムウェドがトラガスロンとの国境に配置している警備兵の総数を知ってるか？」

「いえ」

「俺も聞いた話なんだが、だいたい５万はいるんだそうだ。残りのザムウェドの周囲は獣人の国家ばかりで、ほとんど人数を割かなくていいからな。主にトラガスロンだけを警戒してればいいって寸法だ。それに、トラガスロンはザムウェドとの戦争のたびに１０万は兵士を集めるらしいからな。クルムス方面は、その関係が良好だとして、半分くらいの人数しか国境に配備されてないとしても・・・」

「２万５千。つまり戦争をすれば負ける、と？」

「それが一般的な見方なわけだが、勝ってるんだろ？」

「はい。私が１カ月前にセイムリッドを脱出する直前に聞いた話だと、ザムウェドの国境警備兵を打ち破ったとの報告がありました」

ラインはまた考え込んだ。どうも納得がいかない。軍隊という者は率いる将が誰かで機能が大幅に変わる。もちろんムスターが凄まじく優れているとの可能性もあるが、だとしても今まで実戦経験が無い者が率いて戦って、兵士の士気が上がるものなのか。また自分が鍛えた軍隊なら動かすのもたやすいだろうが、他人の鍛えた軍隊なら自分用に馴らすまでにも時間がかかる。

だが聞いた話では王子は実権を握るやいなや、ザムウェドに進行している。もっともザムウェドとは王子が実権を握る前から戦争状態になっており、それを誰が指示したかということが一番の問題ではないかと思うのだ。

まだある。クルムスは緩衝地帯とはいえ長らく平和で、兵士もそ

れほど熟練していない。それが獣人と戦って勝つなど考えられない。獣人との戦争に、傭兵として参加したことのあるラインだからわかる。獣人を前にして戦うのは、戦慣れしたラインでさえ恐怖を感じたのだ。職業軍人ならともかく、農民から徴兵されたような国境警備兵でどうして戦争などできようか。

「これは詳しく調べる必要があるな」

ラインは密かに決意を固め始めていた。

続く

中原の戦火、その3～クルムスの皇女～（後書き）

次回投稿は１／１５（土）１２：００です。土日は投稿しますからね

中原の戦火、その４～皇女誘拐～（前書き）

～あらすじ～

隠れ家に連れて行かれたラインとダンススレイブだが、その時彼が取った行動は・・・？

中原の戦火、その4～皇女誘拐～

そうこうするうちに隠れ家に着いたようだ。少し郊外にある一軒家、元は貴族の保養所か何かだろうか。逆に見つかりやすいのではないかと思うラインだったが、とりあえずそれは言わないでおいた。

とにかくこんなところまで来てしまった以上、自分も無関係ではいられないことはラインにも分かっていたが、何も知らないその他大勢でいることで、ある日突然一方的に被害を被るよりも、まだ騒動の渦中にいた方がマシだと彼は思える性格だった。

「着いたぞ、降りろ」
「ああ」
「念のため言っておくが、逃げようなんて思うなよ」
「まあ逃げようなんて思っちゃいないがな。だがもし逃げた場合、俺にあれだけやられた分際で止められるのか？」
「何！？」
「飽きない連中だな・・・」

いがみ合うラインとラスティに、ダンススレイブが呆れている。ラスティはまだかなり若い騎士のようで、ラインよりもかなり年下なのかもしれない。なにせ自分の主人が足を挫いていることすら忘れてしまっているのだから。

そんな様子にレイファンもため息をつき、諦めたように何とか1人で馬車から降りて歩こうとするが、それはやはり無理があった。あっ、という声と共にバランスを崩しかけるレイファンを、ひょいとラインが抱きかかえる。

「きゃあっ！」
「姫様に何をする！？」

「何って・・・お前が気が利かないから、俺が助け起こしたんだが」
「その汚い手を放せ！」
「ひでえ言い草だな。放したら姫様が落ちるぞ、ほれほれ」

腕の中でレイファンをほいほいと、まるで遊具のように扱うライン。失礼極まりない行為なのだが、あまりに失礼すぎて、お付きの騎士たちも全員どうしていいのかわからない。ダンススレイブだけは頭を抱えていたが、半分は面白がっているので止める様子もない。

「ならば絶対放すな！」
「放せって言ったり放すなって言ったり、忙しい奴だな。結局俺はレイファンをどうしたらいいんだ？」
「また呼び捨てに！」
「さっきから怒ってばっかりだな、お前。ちゃんと魚と牛乳、採ってるか？」
「やかましい！」

顔を真っ赤にして怒るラスティを相手にするのは面倒くさいといわんばかりに、ラインはレイファンを抱えたまま、すたすたと隠れ家の方に歩き始めた。その様子を呆然と見守る他の騎士たち。ラインに抱きかかえられているレイファンは、顔を真っ赤にしている。

「あの、あの！」
「なんだぁ？」
「お、降ろしてください。恥ずかしくて・・・」
「1人で歩けるのか？」
「それは・・・無理です」
「じゃあ大人しくしてろ。んで、お前の部屋はどこだ？」
「そ、そんな。皇女の私室に男性を入れるなど！　恥を知りなさい！！」

「いや、俺は傭兵だからそんなの関係ねぇ」
「や、いやぁ・・・」
「諦めた方がいいだろう、皇女様。こいつは悪い男だから」

顔を真っ赤にして涙ぐむレイファンを見て、助け舟にもならない茶々をいれるダンススレイブ。ダンススレイブが抱えていけば万事うまく収まる気がするが、気が付いていても提案しない彼女である。なんのかんのでこの状況を楽しんでいるダンススレイブが、一番タチが悪いのかもしれない。

ラインの方はそんなことには関係なく、単純に自分が抱えた方が手っ取り早いというくらいの気持ちだったのだ。気が利くのか、気が利かないのか。

結局そのままレイファンを部屋まで連れて行くと、ラインがそのまま足の手当てまでしてしまった。レイファンは抗議を何度もしたがラインは聞く耳持たず、侍女もおらず、一人で手当てもできないレイファンはされるがままだった。その様子を楽しそうにダンススレイブが見ていたのは、いまさら言うまでも無い。

「身の回りの世話をする侍女とかはいないのか？」
「・・・脱出には、女は足手まといと言われたので」
「じゃあ大変だろう。あんな気の利かない連中ばかりじゃ、着る物もまともな物は準備してくれないだろうからな。女物の下着とか」
「！　破廉恥な！」
「やめ、やめろって。いてて」

レイファンがそのあたりの物を手当たり次第に投げつけてきたので、ラインは慌てて防戦したがそのうち1つがラインの顔面を直撃した。その様子を見てダンススレイブが笑っている。

「ぐわっ！」
「天罰覿面（てんばつてきめん）だな、ラインよ」
「俺のせいか？」
「他に誰がいるというんです！？」

レイファンが顔を真っ赤にし、頬を膨らませて怒っている。この表情にさすがのラインもまずいと思ったのか、部屋から一目散に退散する。

だが部屋から出た瞬間、ラインの顔が引き締まった。

「ダンサー、ちょっと頼まれてくれるか？」
「我の主人はラインだ。命令すればいいだろう」
「俺はそういうのは嫌いだ」
「・・・まあいい。で？」
「何とか理由をつけてここを抜け出し、町で竜の手配をしてきてほしい。明日には前線の様子を見に行きたい。それと、ギルドで帽子をかぶってパイプをくわえた白髪のオッサンにこれを渡してくれ」

ラインが何か動物の牙のようなものを取り出し、ダンススレイブに預ける。

「それはいいが、お前はどうする？」
「俺は他にやることがある。じゃあ頼んだぞ」

それだけ言うとラインは騎士達の方に歩いて行った。その後ダンススレイブはこっそりと隠れ家を抜け出し、用事を済ませることに成功した。だがダンススレイブが隠れ家に帰ると、どうも隠れ家が騒がしい。

「何だ？　何が起きている？」

どうやら火事のようだ。隠れ家で火事なと、隠れる意味も何もあったのもではない。だが今帰れば自分が抜け出したことがばれてしまうため、どうしようかとダンススレイブが木の陰で思案していると、後ろから肩を叩く存在がいる。

「ダンサー、こっちだ」
「ラインか。何をしている?」

ラインの手には大きな袋が抱きかかえられていた。だがどうやら人が入っているのか、もごもごと動いている。

「んー！　んー！」
「おい、まさか・・・」
「ああ、王女をかどわかした」
「な、何をやってるんだお前は・・・」

さしものダンススレイブも頭痛を覚えた。剣である彼女に頭痛などという概念はないはずなのだが。それでもラインに従うのがダンススレイブの役目である。気を取り直してどうするかを聞くことにした。

「で、どうするんだ・・・」
「それよりちゃんとアレを渡したか?」
「ああ、それは問題ない」
「ならいい。それが渡ってなかったら、本当にただの誘拐犯だからな。いくぞ」
「どこへだ?」
「ついてくればわかる」

そしてラインは、ダンススレイブと共にレイファンを抱えて走り始めた。後には火事を消し止めようと必死になる騎士達の怒声が飛び交っていた。

＊＊＊

「おう、爺さん。久しぶりだな」
「ほっほほ。久しぶりじゃな、ラインよ」
「あー、ホントにラインだぁ！　久しぶりぃ～。皆～、ラインが来たわよ～」
「えー、どこどこー？」
「キャー！　ホントだ～」
「あ～ん、まさか遊びにきてくれたのぉ？」

ここは同じトリメドの娼館である。ダンススレイブがラインに頼まれて牙を手渡したのは、この娼館の経営主であり、この娼館の娼婦は全員がラインと顔馴染みであった。この娼館は昔堅気の娼館で、悪質な同業者に嫌がらせをされているところを昔ラインが助けたことがある。以来ラインはここを好きに使ってよい事になっているのだ。

ライン達を出迎えたのは全員見目も艶やかな娼婦達であったが、ラインは愛想よく適当に返事をすると経営主に近寄る。

「すまねぇな、遊ぶのはちょっと後だ。先に用事を済ませたい。爺さん、頼みごとがあるんだが引き受けてくれるか？」
「ほっほほ、お主の頼みを引き受けないことがあろうかね。遠慮なく何でも言うが良い。娼館を貸し切って遊ぶかの？」
「それもいいが、残念ながら結構真面目な話だ。俺とアンタだけで話したい。いいか？」
「よかろう。少し席をはずしなさい、お前たち」

「えー！　つまんなーい」
「後でちゃんと顔だしてよね～ライン！」
「わかったわかった」

なんとか娼婦たちをなだめすかしながら外に出す。ダンススレイブと、娼婦長だけはその場に残したが、この場には４人と袋に入ったレイファンだけである。そしてその袋をおもむろにはずしてレイファンを解放すると、ラインはいきなり本題に入った。

続く

中原の戦火、その４～皇女誘拐～（後書き）

次回投稿は１／１６（日）１２：００です。

中原の戦火、その5～異常な爪跡～（前書き）

～あらすじ～

レイファン皇女をかどわかして娼館に連れ込んだライン。一体彼の目的は・・・？

中原の戦火、その5～異常な爪跡～

「話って言うのは他でもねぇ、この女の子を預かって欲しい」
「ほっほほ、これはまた可愛らしいお嬢さんじゃの」
「ライン、あんた・・・ついにそういう方向に」
「どういう方向だ！」

媚婦長の揶揄に怒るラインだが、またしてもダンススレイブが悪ノリをする。

「そうなんだ、我がいくら誘惑しても見向きもせず、夜な夜なこのいたいけな少女を・・・」
「ダンサー、黙ってろ」

ラインに睨まれてダンサーはやれやれといったポーズをして黙っている。レイファンはいきなり淫靡な内装の部屋に連れて来られ、目を白黒させている。まあそれも仕方ない。部屋の内装はピンクや赤などのいかにも男を煽る色の壁紙を使っているし、壁には裸婦画がそこかしこにある。また目の前の媚婦長も服こそ着ているものの、その生地は極薄であり、乳房は完全に透けてしまっているのだ。

そんな中に突然放り込まれ眩暈を覚えるレイファンをよそに、ラインは事情を説明した。

「ふむ。では内通者が近くにいるから、とりあえずワシらの所でその皇女様を匿ってほしいと？」
「要約するとそうだな。内通者をいぶり出せればそれが一番いいんだが、そんな時間はなかった。下手をしたら今夜にでも奇襲を受けていただろう。あんなみえみえの隠れ家じゃな」
「アンタはつけられてないのかい？」

「さすがに離れの一軒家を見張っている連中がいたら、俺が気づくっての。それに町に入ってからは、かなり複雑な道順を通ったからな。大丈夫なはずだ」
「話はわかったが、娼館は皇女様にはちときついのではないのかの？」
「まあそりゃそうだが。いい人生勉強になるだろ」
「とんだ人生勉強になりそうだね」

娼婦長が呆れている。

「ラインが帰って来た時に、皇女様がどうなっててもしらないよ？」
「お手柔らかにやってくれよ。まかり間違えても変な教育はしてくれるな」
「さぁてねぇ～」
「おい」
「冗談だよ。責任もってちゃんと預かるから安心しな」
「頼む。さて、と」

空とぼけようとする娼婦長に確認を取ると、ラインはレイファンのさるぐつわを取り、彼女と向きあった。

「あ、あなた！　私にこんなことをしてただで済むと・・・むぐっ」

レイファンの口を手で押さえるライン。目で抗議の意思を示そうとするレイファンだが、ラインの表情は真剣そのものだった。

「めんどくさいことは言いっこなしだ、レイファン。こうするのが一番お前にとって安全だろう。ラスティは多分信用できるからいずれちゃんと連絡を取ってやるが、今はダメだ。アイツは嘘をつくのが上手くない。ここを教えると、アイツからぼろが出る可能性があ

る。わかったら頷きな」

レイファンはラインの様子から事態を感じとったのか、コクリと素直に頷いた。その様子を見てニヤッとするライン。手をそっと口から放してやる。

「物分りのいい女は好きだぜ、レイファン。俺が帰るまでイイ子にしてな」

「どこかへいかれるのですか？」

「ああ、戦場の様子を見てくる。ついでに首都の様子もな。どっちにしてもいつまでも逃亡生活は出来ないだろう？　いずれは王様の所に行かないとラチがあかない」

「それは理解できますが、なぜ私のためにここまで？」

レイファンがじっとラインをみつめる。その様子に適当なごまかしはできないと思ったのか気まずくなったのか、ラインが頭をかきながら答えた。

「詳しい理由は自分でもわかってないんだが・・・俺はこう見えて損な性格でな。どうも困った人間は見逃せない性質らしい。まあ報酬はきっちりいただくがな」

「そうですか・・・」

レイファンは納得したような、納得できなかったような顔をしている。それも当然のこと、ラインとしても自分の感情が１００％理解できているわけではない。ただこうするのが正解だという気がしてならないだけなのだ。

「じゃあ俺は行く。レイファンを頼むぜ、爺さん」

「ほっほほ、任せておきなさい」

「アタシ好みに仕立てておくから」
「だからお前はそれをやめろと。じゃあな、レイファン」

ラインはレイファンに背を向けながら手をひらひらと振ったが、何かを思い出したようにくるりと振り返る。

「そうだ、1つ聞いておきたいことがあるんだが」
「なんでしょうか」
「ゼルバドスという名前に心当たりは？」

それはアルフィリースと会話をしたときにリサが口に出した名前だった。それ以上は聞く機会を逃したが、彼はしっかり覚えていたのだ。

レイファンも心当たりがあるらしく、すぐに答えてくれた。

「確か最近急激に出世した男で、ムスター兄上の補佐になっていたと思います。ですがある日、自殺したとか」
「自殺？」
「ええ、それはひどい有様だったようで。なんでも部屋は天井まで血で真っ赤だったとか」
「どういう自殺の仕方だ、そりゃあ。他には？」
「いえ、私は面識がなかったので・・・ラスティは話したことがあるとか言っていましたが」
「そうか・・・ならいい」

ラインはうなったが今はどうしようもない。そのまま今度こそダンススレイブと共にその場を後にした。レイファンとしてはラインが戻らなかったらどうすればいいのか不安であったが、だが今その疑問を投げかけた所でどうなるわけでもなく、彼女はただ彼の帰りを大人しく待つしかなかった。

＊＊＊

「いいのか、ライン」
「何がだ」
「むろん皇女様のことだ。あそこに1人では心細いだろう。あの騎士達が見つける可能性もあるしな」
「あんな頭カッチカチの人間どもに、娼館を捜索しようなんて発想は起こらないだろ。よしんば来たとして、上手いことはぐらかされて腰砕けにされ、追い返されるのがいい所だ。それにあそこの娼婦たちは、なんのかんので良い連中ばっかりだ。寂しがることはないだろうよ」
「それならいいが・・・」

実際に娼館で働く女性という者はほとんどが借金のかたに売られるか、戦争孤児などの天涯孤独の者である。そのため彼女達は連帯意識が非常に強く、特に社会的弱者に対して非常に温かい。たとえ皇女でも、困っていれば助ける種類の人間の集まりだった。
それにクルムスは娼婦達に対して特に弾圧などはしていないため、王家に対して悪感情はないはずだ。むろん全ての娼婦がそうではないが、レイファン自身も嫌みの無い人間だし、少なくともあの娼館の人間達は信頼できるとラインは踏んでいた。

「に、してもだ。詳しいな、ラインよ」
「そりゃな。俺の行きつけでもあるしな」
「・・・アルフィリースにしっかり伝えておこう」
「だから、なんでそこでアルフィリースを引き合いに出すんだ？」

ラインはぶつぶつ文句を言うが、ダンススレイブは素知らぬ顔でその文句を聞き流していた。

＊＊＊

ラインはダンススレイブに竜の手配をさせる一方で、自分はギルドに来ていた。ゼルバドスに関して情報を得るためである。だがむやみに聞き込みをするのは危険だと感じたのか、すぐに受け付けへ向かう。受付には感じが良く、美人とまではいかないが愛嬌のある容姿をした若い女性が座っていた。

「いらっしゃいませ。御用件は？」

「調べたい人物がいる。何でもいいから情報を集めて欲しいんだが、誰か情報屋に空きはいるか？」

「はい、手配できると思います。何人ほど雇われますか？」

「3・・・いや5人がいいな。それぞれ情報交換を無しにして別個に依頼してくれ。情報の比較は俺がやりたい」

「承知いたしました。では以下のリストの中から人物をお選びくださいませ。また調べる人物に詳細、調べる内容、期間、報酬についてもどうぞ」

受付の女性に渡された用紙に慣れた手つきで記入していくライン。そして記入し終わると、前金を置いてその場を後にする。

「じゃあ任せたぜ、綺麗な姉ちゃんよ」

ラインは精一杯の愛想でウィンクしてみせるが、ぼさぼさの髪で無精髭まみれでは恰好はつかない。でもそれなりに愛嬌はあったので、女性も営業用とはいえ笑顔で返してくれた。

だがラインが去った後、用紙の内容を見て女性の笑顔が消える。そしてカウンターの後ろにいる、もう1人の女性に機械的な音声で声をかける。

「依頼です。情報収集につき、以下のリストに印がある人に連絡が通るようにしてください」
「了解です」
「もう１つ。調査対象はゼルバドス。コードｃ７７１。あの方に連絡が通るようにしてください」
「復唱します、コードｃ７７１、あの方に連絡をとります。ちなみに調査を依頼した人物の名前と特徴をどうぞ」
「名前はライン。身長は１８０ｃｍ、中肉中背、髪色・瞳の色は標準的、髪はみだれており無精髭の多い、一見すると乞食に見えなくもありませんが、立ち振舞いから腕の立つ傭兵と推測されます」
「了解しました。ラインという人物について調査したのち、あの方への連絡を行います」

ここまで言い終えると、受付の２人のかわしていた機械的な会話が嘘のように元に戻り、そのまま愛想のいい受付嬢へと再び戻るのだった。

＊＊＊

そしてその後すぐに竜を駆り、戦場近くまで飛んできたラインとダンススレイブ。そこで彼らが見たのは想像だにしなかった光景だった。

「こりゃあ・・・」
「・・・ひどいな」

２人は二の句が継げなかった。それもそのはず、現在彼らが立っているのはクルムス国境を越えた、砦も兼ねたザムウェド側の町なのだが、どうやらここで一戦交えたらしい。だが既に町とは言えな

いほどひどい光景が、彼らの目の前に広がっていた。
町は既に廃虚だった。いや、廃虚とすら言っていいものかどうか。建物は焼かれ、崩され、なぎ倒され、その辺中に死体が転がっている。町は余すところなく一面火に包まれたのだろう、焼けていない死体がない。もっともまだ戦闘からそれほど時間が経ってないはずであるから、もし焼けていなければ今頃蛆が湧いてとんでもないことになっているであろうが。
だが死体は完全に打ち捨てられたままであり、戦場慣れをしているつもりだったラインですら、思わず吐き気を催さずにはいかなかった。

「ひでぇ・・・」
「ああ、我も長いこと戦場を巡ったがこれほどひどいのは珍しいな。特に・・・」
「特に？」
「自軍の死体すら放置とは一体どういうことだ？」
「なんだと？」

焼け崩れた街を歩く2人だが、ダンサーの指摘通り鎧兜姿の兵士もいるため、どうやらクルムス側の死体もそのままのようだ。普通は戦死者の遺体は回収され、遺族の元に送り届けられるのが戦場の掟だ。それが無理なら、識別証だけでも持って帰るのが義務である。だが目の前の死体を見る限りでは、そのような配慮は一切された様子が無い。それどころか占領地であるはずの、この町を統治する部隊が一切いないのもまた不可思議な話である。

「どうやら人っ子一人いないようだな」
「そのようだ。だがそれもまたおかしな話だ。普通は町が戦場になりそうなら、非戦闘員は疎開させるはずだから、もうそろそろ難民が戻って来てもよさそうなものだが？」

「そんな暇すらなかったってことか。いや・・・どうやら違うようだぞ?」
「何?　これは・・・そんな、まさか・・・」

ダンススレイブは思わず両手で口を覆っていた。ラインも苦虫をかみつぶしたような顔をしている。2人が見ているのはザムウェド内地に向かう方向の町の外だが、その辺中に死体が転がっていた。野生の獣や魔物に荒らされてひどいことになってはいるが、間違いなくこの町の住人だろう。女、子ども、老人・・・おかまいなしの虐殺だ。

「逃げようとしたんだ・・・それを片っ端から」
「殺したというのか。バカな、狂っている!」
「実際狂っているんだろうな。これは人間のやり口じゃない、魔物でもここまではやらんだろ」
「じゃあなんだと?」
「さあな。だが答えは先にあるだろう・・・行くぞ」

ラインに促され、再び2人は先に向かう。この段階でラインの思惑は既に外れていた。国境警備兵を蹴散らしたのも戦力ぎりぎりのことで、どうせこのあたりの町でクルムス軍が足止めをくらっているだろうと思っていたのだ。だがそこから竜を駆けること2日。眼下に滅びた町こそ見かけるものの、クルムス軍の姿はいまだ見えなかった。

「おかしいな・・・これ以上深入りしたらザムウェドの首都にいっちまう。後はザムウェド最大の砦ランバウールと、首都ゲッダハルドしかないんだが」
「ここまでクルムスはおろか、ザムウェドの軍隊すら見なかったな」
「ああ、残骸はあったがな」

「ザムウェドのばかりだったな」

２人は黙ってしまった。ここまで見たザムウェド軍の敗北後はひどかった。既に１０万近い軍隊を失っているのではないかと思わせる。ラインはもはやクルムス軍が普通の軍隊でないことは分かっており、これ以上の深入りは彼の本能が危険だと警鐘を鳴らす一方で、是が非でも知っておかなければならないこともまた分かっていた。

だが少し進んだところで、黒い煙を出して炎上する砦を彼らは見た。ザムウェド最大のランバウール砦である。

「そんな・・・落ちたのかよ。一体どうなってる?」

「我が知るか」

「そりゃそうだな。だがまだ火がくすぶっているところを見ると、落ちてからそう時間は経っていないだろう。生き残りがいないかどうか探そう」

「わかった」

２人は頷き合うと砦の近くに竜を降ろし、打ち壊された正門から中に入っていった。

続く

中原の戦火、その5～異常な爪跡～（後書き）

今回、あらすじを後で読み返すと、とんでもないことをラインがしてそうに思えましたｗｗまぁ実際トンデモないことしてるんですけどね（笑）

次回投稿は１／１８（火）１２：００です。

中原の戦火、その6～陥落した砦にて～（前書き）

～あらすじ～

ザムウェド領内へと進路を取るラインとダンススレイブ。そこで彼らが見た物は・・・？

中原の戦火、その6～陥落した砦にて～

＊＊＊

ラインとダンススレイブが降り立った砦は地獄絵図だった。おそらく戦いが終わってから一日も経っていないのだろう、そこらじゅうから建物やら獣人達の肉が焦げる臭いが立ち込め、まだ燃えている建物もある。火の中で天に手を差し伸べるように墨となった獣人、壁に槍で串刺しにされた者など、それは直視に堪えない光景だった。

もはや生きている獣人達はいないようだ。死んでいる獣人達の死骸を見ると、何度も剣や斧で頭を執拗にめった刺し、あるいは砕いたような跡が見られる。とても人間がやったとは思えない残酷さだ。

このランバウール砦は他の獣人達の砦と違って、堀は深く外壁は高い。獣人達は平野の戦いを好むので大抵は城から打って出ることになり、人間のように砦は用向きをなさないのだが、その中でもこのランバウールはかなりしっかりと作られている。もっとも獣人達は弓矢などの細かい武器の扱いはほとんどできないので、城壁から落とすのは、主に石や煮え湯なわけだ。

それでも城壁が高いだけでも砦はかなり落ちにくくなる。その砦をこうまで完膚なきまでに潰すとは、普通ではない。それに生存者がいないとは、一体どういうことなのか、ラインには不可解極まりなかった。

しかもまた殲滅戦を行い、統治する様子が全く見受けられない。火がまだ燃えている所を見ると、落としてすぐ、休憩もなしに全軍をまとめて首都に向かったと推測できる。これはクルムス軍の自殺行為以外の何物でもない。ラインはそのことばかりを考えながら、砦の様子を見て回っていた。

とその時、うめき声を聞いた気がしてラインは耳をすませる。そして油断なく抜剣すると、ダンススレイブに注意を促しながら声のする方角を探っていった。

「こっちか・・・」

「ライン、あの獣人は生きてるぞ！」

ダンススレイブが倒れた柱をどかせると、下からくるしそうなうめき声をだしている獣人が見つかった。どうやら柱の下敷きになったことでクルムスの手を逃れたようだ。だが下半身が完全に潰れており、また内臓もはみ出すような重傷だ。むしろ柱の下敷きになり血流が阻害されたことで出血多量を免れ、加えて獣人の生命力だからこそ生きているのだろう。人間なら間違いなくとうに死んでいるほどの重傷だ。

身分はそれなりに高いのか、着ている物が比較的上等だし、勲章も沢山付いている。おそらくは指揮官なのだろう。その獣人の頬を何度か張り、意識があるかどうかラインが確認する。

「おい！　意識はあるか！？」

「う、ああ・・・ああ」

「ライン、すぐに治療するものを我が持ってくる！」

「やめとけダンサー、もうこいつは助からん。それより何か言い残したいことがあるかどうか聞いてやるべきだ」

ラインは他の場所に行きかけたダンススレイブを制した。その言葉に、獣人がゆっくり反応する。

「俺は・・・助からんか」

「ああ、無理だな。下半身が潰れている。わからないのか？」

「もう感覚が無い・・・目も見えん・・・皆はどうなった？」

ラインは一瞬真実を言うかどうか逡巡したが、真実を告げてやることにした。どのみち答えにくいことも聞くつもりだったのだ。

「悪いが、まだお前以外に生きている者を見ていない。おそらく全滅だ」

「そうか・・・この砦には5万近い軍勢がいたのだがな。まさか全滅とは・・・」

獣人の目から涙がこぼれる。死んだ者に対する悲しみ、任務を果たせない自分への憤り。その理由は様々だろう。元軍人のラインには容易に感じとれる。だがその感情を押し殺しても、この獣人には聞いておかねばならないことがある。

「すまんが、お前が死ぬ前に聞いておきたいことがいくつかある。いいか？」

「俺にわかる範囲ならな・・・ところでお前は人間か？」

「そうだ。クルムスの軍隊がヤバそうなんで、その実態を掴むために追っ掛けてきた。このまま放置しておくには危険すぎる連中だ。よかったら知っていることを話してくれ」

「人間にも・・・奴らの危険さに気付いている者がいるのか・・・頼む、奴らを止めてくれ。これはザムウェドとか獣人とか軍人などということとは関係なく・・・この大地に生きる者としての俺の願いだ・・・」

「いいだろう。しかと聞くぞ」

獣人が力を振り絞って挙げた手を、ラインは力強く握ってやった。すると獣人は少し安心したのか微笑み、クルムス軍の様子を話し始めた。

「あのクルムスの連中は・・・俺達の爪や牙が通らない金属の鎧を着けていた。だからなのか、非常に勇猛で残虐で・・・降伏を申し出ても殺し、一般市民でも関係なく手当たり次第に殺し回っていた・・・」

「全員がその鎧をつけてたのか？」

「そうだ。特に先頭にいた連中は化け物のように強かった・・・いや、本当に化け物だったのかもしれん・・・」

「どういうことだ？」

「俺達が石をぶつけてはしごから落ちてもすぐに立ち上がり、熱湯をぶちまけてもひるみもせず・・・この城壁に奴らがとりついてから1刻も経たないうちに城壁は破られた。挙句に・・・ううう」

獣人が苦しそうにうめく。だがラインは今さら慰めの言葉などかけない。

「おい、まだ死ぬな。続きを語れ」

「あ、ああ・・・せめて武器がなければと腕を封じたんだが、奴らは武器がなくても素手で俺達を引き裂いた。あんなのは人間じゃない・・・」

「なんだと？　素手でか」

「ああ、そうだ・・・武器を落とした連中は素手で俺達を殺していった・・・」

ラインはここに来るまでにいくつかの変わったものを見ていた。レンガの壁にめり込むように死んでいる獣人、大地に入った異常に大きなひび割れ。最初は何かわからなかったが、巨人のような怪力自慢が大勢で暴れたと考えれば納得はできる。もっとも巨人の連中よりは、さらに腕力が強いかもしれない。

だが獣人の告白はそれでは止まらなかった。

「決定的だったのは・・・奴らは俺達の砦に潜入する前に逃げ道を全て塞いでいた。どの門も戦が始まると同時に外側に防壁を敷かれ・・・脱出が不可能だった」

「４方から塞ぐだと？　なら少ない兵力をさらに分けていたというのか？」

「そうだろう・・・なぜなら正面から来たのは３０００にも満たない数の連中だった。ここを陥落させるよりも、誰一人逃がさないことを目的にしてるような・・・いや、違うな・・・」

獣人の息が荒くなってきている。もう長くはないだろう。

「奴らは殺戮を楽しんでいるのだ・・・少なくともあの指揮官は。アイツはそれこそ化け物のように強かった・・・我が軍の精鋭を１人で何十人も蹴散らして・・・見た目はお世辞にも強そうではなかったのにな・・・」

「ハゲたチビか？」

「くくく・・・口が悪いがその通りだ。お世辞にも強そうではないだろう？・・・ははは、ぐ、げほっげほっ」

獣人が咳をすると血を吐いた。

「だがそんな奴に我々は完膚なきまでに負けたのだ・・・なんと情けないことか・・・」

「んなこたねぇよ、必死で戦ったんだろう？　無念なことには違いないかもしれないが、お前達の犠牲は俺が無駄にはしねぇよ」

「ふ・・・粋な事を言うな、人間よ・・・名前は？」

「俺の名前はライン・・・いや、本名を名乗ろうか」

ラインは獣人の耳元で、彼にだけ聞こえるように自分の本名を告げてやった。ダンススレイブはラインの本名を知っているわけだが、

普通に言わなかったのは、彼自身が本名を名乗ることに抵抗があったのだろうか。
だがそんなラインの内心とは裏腹に、獣人はラインの名前を聞くと白い歯をこぼした。

「・・・良い名前ではないか・・・」
「あんがとよ。お前さんの名前は」
「ガルス・・・ランバウールのガルスだ・・・ここの指揮官だった・・・」
「そうか。とどめが欲しいか？」
「ああ・・・頼む・・・」

ラインが獣人を抱きかかえていた手を放し獣人を床に横たえ立ちあがると、剣をすらりと抜き放つ。

「その前に1つ・・・」
「なんだ？」
「あの指揮官に気をつけろ・・・奴は魔物を召喚して使用していた。その魔物がまたとてつもなく強かったんだ」
「魔物・・・どんな奴だ？」
「見たことも無い。俺は南の大森林にも行ったことがあるが・・・そこでも見ないような連中だった。あれはいったい何だったのか・・・悪夢を見ていたとしか思えない・・・」
「・・・他に言い残すことは？」

ガルスの目から徐々に光が無くなっていくのを見て、これ以上はもたないと踏んだのか。ラインは今わの際の言葉を聞いた。

「いや、特に・・・俺の妻や息子も死んだろうな・・・」
「・・・」

「頼む人間よ・・・俺らの無念を晴らせとはいわないが・・・これからを生きる者達のために、奴らを倒してくれ・・・」
「ああ、しかと引き受けた。だから安心して眠れ」

その言葉を聞いて安心したのか。ガルスは死に際とは思えないほど穏やかに微笑むと、目を閉じた。そこに振り下ろされるラインの剣。ガルスと呼ばれた獣人はその生を終えた――。

＊＊＊

「よかったのか？」
「何が」
「あんな安請け合いのような事を言って。獣人５万をあっさり撃破するような軍勢だぞ？　お前にどうできるのだ」
「だがあの場で他に言うことがあったか？　それに気持ちは本物だ」
「ほう」

ダンススレイブはラインの表情を見たが、一見何も変わらなそうに見える。だが彼の内心には煮えたマグマのような怒りが渦巻いているのだろう。自分が思うよりは熱い男なのかもしれないと、ダンススレイブはラインを見ながら思った。

「なんだ、人の顔をじろじろと・・・気持ち悪いな」
「別に。お前の顔が面白かっただけだ」
「失礼な奴だ。この美男子の顔のどこが面白いんだ」
「乞食にしか見えんがな」
「何を！？」

ラインが喰ってかかりかけたが、流石にこの死体の山の前にしてそこまでふざける気持ちにもならず、やめたようだ。ダンススレイ

ブもそれは同じなので、さすがにからかうのもこのくらいにしておいた。

「で、どうするんだ？」

「決まっている。乗りかかった船だ、首都まで見に行くぞ。直に見なきゃわからん」

「それはいいが・・・くれぐれも巻き込まれてくれるなよ。お前が帰らなかったら、途方に暮れてレイファンが泣くぞ？」

「わかってる。女は泣かせたくないからな」

「何を恰好のいいことを・・・」

「おら、行くぞ」

そして2人は進路を首都ゲッダハルドに向けたのだった。

続き

中原の戦火、その６～陥落した砦にて～（後書き）

次回投稿は１／２０（木）１２：００です。

閲覧・感想・ブクマ・評価、いつもありがとうございます。

中原の戦火、その7～滅亡～（前書き）

～あらすじ～

ついにザムウェドの首都ゲッダハルドまで来てしまったライン。だが彼らが目にするさらなる驚愕の光景とは・・・？

中原の戦火、その7～滅亡～

＊＊＊

２人が首都近郊に着くと、既に戦闘は開始されていた。どうやらグルーザルドの援軍は間に合わなかったらしい。近くに寄るわけにもいかず、遠眼鏡でその様子を見ようとするライン。だがさすがに遠すぎたのか、よく見えなかった。

「くそっ！　ケチらずにもっと良い遠眼鏡を購入しときゃよかった。細かいところが見えやしねぇ。かといってこれ以上近づくのも・・・」

「心配するな、我が見ている」

「ダンサー、お前、見えるのか？」

「まぁな。我は目が良い」

剣に視力もへったくれもないだろうがというツッコミはさておき、ラインも詳しい状況は知りたかったので、大人しく細かくダンスレイブに聞くことにする。

「どんな状況だ？」

「もうすぐ・・・城壁が破られるな」

「何だと！？　早過ぎるだろ」

「そうかな。ランバウールが半日前に落ちたとして、ランバウールからここまで馬で６時間。ランバウールを落としてから走りながら隊列をまとめ、ここに襲い掛かるのは理論的には無理な話ではないだろう」

「そりゃそうだが」

「そうこう言っているうちに一角が突破されたぞ。あれは・・・も

うダメだな」

ダンススレイブが見たのは、城壁の一画に登り切った兵士が、一瞬で城壁の兵士を蹴散らす場面。素人でもその実力の違いはわかっただろう。結局ガルスが言った通りの光景が展開されていた。そしてダンススレイブが目線を外し、ため息をつく。

「どういうことだ？」

「どうもこうもガルスの言った通りということだ。先頭で城攻めをしている連中は実際化け物だ。城壁に上がったとたん、５人まとめて獣人の首をすっ飛ばしたよ」

「それはわかってる。そういうのが何人いるか数えてくれ」

「わかった」

ダンススレイブはじっとしばらく目を凝らしていたが、どうにか数えたられたようだ。

「およそ１００～１５０人というところか。思ったより多くないな。後は一般の普通の兵士のようだった」

「チビハゲはいるか？」

「ひどい言い草だな。だが先頭集団と共に切り込んで行った中に、そんなのがいたな」

「先陣を切ってるってのか？」

ラインが目を丸くする。

「そういうことだ。剣技は無茶苦茶だったが、とにかく強かった」

「ますますありえんな、そいつが多分ムスター王子なんだろうが・・・中に入ってからの様子はわかるか？」

「いや、ここからではちょうど遮蔽物が多くて無理だ。中央の王城

まで戦闘が及べば分かるようになるかもしれん」
「どのみちそこまで戦火が及んだら、もうどうしようもないな。もっとも時間の問題だろうがな」

2人はそのままじっと同じ場所に佇(たたず)んで、ザムウェドが滅んでいく様子を見ていた。首都ゲッダハルドのあちこちからは火の手が上がり、煙は雨雲のごとく空を覆い、住民や兵士の叫び声やうめき声が不気味な唸り声のようにこだまし、遠く離れた2人の所まで聞こえてくるかのようだった。

そしてラインが到着してからおよそ数刻、ゲッダハルドは陥落した――。

＊＊＊

「ライン、もう戻らないか。奴らに見つかっては厄介だ」
「ああ。だがこの後、連中がどうするのかまで見届ける」
「・・・わかった」

そのまま2人はその場にじっとしていたが、どうやら首都が陥落した後もクルムス軍は出てくる様子が無い。どうなっているのかと訝しんでいる間に夜も更け、その場で2人は夜を明かした。だが夜が明けると同時にクルムス軍がその姿を現した。どうやら兵をまとめてクルムスに凱旋するようだ。だが・・・

「・・・数が少ないな」
「ああ。1万いないんじゃないか？」
「どういうことだ？」
「我に聞くな」

ダンススレイブの反論も尤もだ。ラインも様々ん可能性を検討し

てみたが、どうも昨日の段階ではクルムス軍はまだ2万はゆうにいたようだった。ガルスいわく、獣人相手ではほとんどクルムスに戦死者は出ないはずなのだが、数はそれでも減っているようだった。だがこの減り方は異常かもしれない。

ラインとダンススレイブはその場に隠れたままクルムス軍が完全に撤退するのを見届け、その後こっそりとゲッダハルドに入って行った。だがそこで見たものは、またしても彼らを驚愕させた。ザムウェドに入ってからこっち、かなり衝撃の事実を突きつけられ続けているので、もう大抵のことでは驚かないだろうと思っていたのだが、どうやら現実とは想像を超えるものであるらしい。

「おいおいおい、ここまでやるか・・・？」

「さしもの我も胸が悪くなってきた・・・こういうときには吐けた方が楽なのかもしれないな・・・」

2人が見たのは虐殺されたゲッダハルド市民もそうだが、同様に、いやよりひどくクルムス兵達が殺されていた。ある者は首を吊るされ、ある者は磔にされ、ある者は馬車につながれ車裂きにされたようだ。

「ゲッダハルドを占拠した後、同士討ちでもしたというのか？　ありえん！」

「もう俺は何が起こっても驚かねぇよ。それに同士討ちっていうか・・・虐殺だろ、これは」

「では大将の命令で、兵士が同胞を虐殺したというのか？」

「そうなんじゃねえの？　問題は何がそれをさせたか、だが」

ラインは仮説を立ててみる。仮にダンススレイブが見た１５０人程の異常に強い兵士たちが全て第三王子の命令に完全に従うとして・・・いくらなんでもその他2万を一方的に殺すことは無理だ。もし

そうなればいくら君命でも抵抗するだろうし、よしんば勝てないとしても逃げ出すことくらいはできるだろう。問題は2万のうち半分が黙って殺されたという事実だ。

ラインがちらりと建物に目をやると、おかしな場所に不思議な傷がある。二階の壁に爪跡があったり、屋根に何かが当たったように崩れた後があったり。今までも多少は見たが、ラインはそれほど気にとめてはいなかった。だが今回は明らかに跡が多い。

「何か巨大な生物でも暴れたのか・・・？　ダンサー、何か巨大な生物を見たか？」

「いや、ひどい煙と埃で途中からはほとんど見えなかったからな。正直城壁が破られてしばらくすると、大して何も見えなくなった。昨日言ったではないか」

「ちっ、役にたたねぇな」

「使えん遠眼鏡を持ってきた貴様が言うな」

「んだと？」

「我に突っかかる暇があるなら、生き残りを探したらどうだ？」

「わかってる！」

ラインもかなりイライラしているらしい。この光景に胸が悪いのは彼も同じなのだろう。だが生存者は期待できないかもしれない。家屋によっては非難目的に限らず食糧貯蔵のための地下室があるが、ご丁寧にどこもしっかり開け放たれて火を放たれる、あるいは引きずりだされて殺されていた。

それでもこのゲッダハルドの住民は３０万はゆうにいたはずである。全員をたかだか2万の軍勢が一晩で皆殺しにできるとは考えがたいのだが。

「誰も生き残りはいないのか！？　誰かいたら返事をしろー！」

「大声はやめろ。クルムス兵が残っていたらどうするんだ」

「知るか！　ガルスの分も含めてブッ飛ばしてやる！」
「やれやれ」

ラインは妙に正義感が強い所が先行することがあるから困る、とダンススレイブが嘆息する。普段が非常に冷静な反面、一度頭に血が上ると後先を省みないところがあるのがラインの欠点だと、ダンススレイブは常々思っていた。だが大概の事態には冷静に対処するラインなので、その欠点もいつもならまず問題にならないのだが。

こういう時にはダンススレイブの方が冷静なので、なんのかんのいって2人はいいコンビなのだろう。ラインが荒れて適当に足元の物を蹴飛ばしながら大声を張り上げる間、ダンススレイブは何か違和感を感じたので城壁の外が見渡せそうな場所を探し、駆け上がってゆく。そこで彼女は外の光景を確認すると、慌ててラインの元に戻ってきた。

「ライン、急いでここを離れるぞ！」
「なんだぁ？　何があった？」
「グルーザルド軍の先発部隊だ！　半刻もなくここまで到達するぞ、急げ！」
「そりゃ見つかると厄介だな。くそっ、肝心な事は何もつかめないままか！」

だがグルーザルド軍に捕まれば無事には済むまい。同盟国を侵略されかなり怒り狂っているはずであるから、たとえ無実だとしても、その場で言いがかりをつけられ殺されても不思議ではない。もともと獣人は気性が荒い者が多いのだ。

慌ててその場を離れる2人。だがこの2人の睨んだ通り、ゲッダハルドの住人は全滅したわけではなかった。ごく少数ではあるが、この惨劇を生き延びた者もいたのだ。ただ彼らは早々に隠れたため何も見てはいなかったし、一時的に都市を離れた者も同様であった。

その点では生き残りを探せたとしても、ラインが得られる情報は何もなかったかもしれない。

そして全てを見ていた者もいるにはいた。それは空を飛ぶことの可能な獣人達。グルーザルドが斥候として放っていた面々である。彼らが緊急を伝えたからこそ、グルーザルドは準備不足ながらも全速力で先発隊を派遣したのである。

だが第三王子ムスターが伝令すら出させない完璧な包囲でもって各都市を落としたことと、自軍すら省みない速度で進軍したことで、油断が無かったはずのグルーザルドでさえ後手に回らざるを得なかった。とはいえ自軍が最終的に2／3を失ったことを考えれば、ムスターの指揮は決して褒められたものではなかった。

しかし課程はどうあれ、ザムウェドは滅びた。それはムスター王子が参戦してから実に18日目の出来事であった。クルムス軍が通過した後は本当に草一本残さないかのごとく焼き尽くされ、人々の無念のうめき声が聞こえるかの如き惨状を呈していた。

続く

中原の戦火、その7～滅亡～（後書き）

次回投稿は１／２２（土）１２：００です。

別に読了してなくても、気軽に感想があればどうぞ。

中原の戦火、その8～獣将二人～（前書き）

～あらすじ～

ゲッダハルドに到着したグルーザルドの獣人達。その惨たる有様を見て、彼らは何を思うのか。

中原の戦火、その8～獣将二人～

＊＊＊

「間に合わなかったか・・・」

それから数刻後のゲッダハルド。家屋は崩れ、まだそこかしこから火の手が上がり、煙で視界が遮られるゲッダハルドの城下町を、部下を従えて歩きながら項垂(うなだ)れる豹の獣人が1人。グルーザルドが誇る十二獣将の一人、『神速』の異名をとるロッハである。

彼はゲッダハルドにつくなり既にクルムス軍がいないことを悟ると、まずは生存者の救出を優先した。またここで後陣が追い付くのを待ちながら、同時に斥候を放ちクルムス軍の行方を追っている。斥候が帰ってこないとなんとも言えないが、ここまでザムウェドを徹底的に追い込んだクルムスに対して、たった５０００の兵士で追撃をかけるほどロッハは無謀な男ではない。内心がどうあれ、である。

それにクルムス軍は全く無視したことだが、通常は負傷者や怪我人の手当てをしながら軍は進むため、その進軍速度はかなり遅い。これが正常な軍の対応なのである。だが救出活動が進むにつれ生存者の数が異常に少ない報告を受け始めると、ロッハの顔はどんどん暗いものになっていった。

「せめてあと一日早ければ・・・」

「申し上げます！」

「なんだ」

ロッハが後悔の念に沈む中、若い獣人の兵士が報告に来た。

「王城の様子を見て参りましたが、現時点では生存者は0。また王・王妃・第1～5王子までの遺体は確認できました」
「それではザムウェドの男子の家系は全滅か。なんということだ・・・王女の方は？」
「王女の方は確認がまだ取れておりません。・・・何せ女は全て顔がぐちゃぐちゃです、確認には時間がかかるかと」
「狙ってやったのだろうな。なんともむごいことをする」

ロッハもその部下も、思わず言葉をなくす。その様子を見た伝令が、おそるおそる報告を続ける。

「一般市民の方は何人か生存が確認できましたが・・・いかがなさいますか？」
「まずは手厚い保護を。話ができそうな者から順次、私が直に話を聞く」
「承知いたしました！」

報告を終えた獣人が身を翻して走り去っていく。その後にどかどかと背後から足音を響かせながら歩いてくる者が1人。

「ロッハ！　全滅だと！？」
「ヴァーゴか。そのようだ」

ロッハに近づいた虎の獣人はそのままロッハの胸倉をつかみ、凄まじい形相で吼える。

「そのようだ、じゃねぇ！　貴様がもっと急いでいりゃあ誰か助かったかもしれないだろうが！　なんのための『神速』だ！」
「それは俺個人の異名だ、軍としてじゃない。それに仮に俺1人が

先行したところで、せいぜい千程度しか相手にできん。万を超える軍相手じゃ何もできんよ」

「何を弱気な事を！　時間稼ぎくらいはできたかも知れんだろうが！」

「それはもっともな意見だが、誰がランバウールとゲッダハルドが2日で落ちると想像できる？　貴様だって出陣前には『クルムスなんぞ楽勝だ』とかほざいていただろうが」

「それはそうだが！」

「全て結果論だ。今回はクルムスが上だった。それだけのことだ」

ヴァーゴと呼ばれた獣人は力なく手を放した。『剛破』のヴァーゴ。グルーザルド十二獣将の中でも、最も突破力に長けた部隊を率いる、超戦闘型の武将である。激昂しやすい半面情にも厚く、個人的にザムウェドの王族と交流もあった。そのため今回の事態が誰より許せないのも彼なのだろう。その心情がわかるからこそ、ロッハも胸倉を掴まれようが、何も異論を唱えなかった。

「だからってよお・・・こんなのはねぇだろ」

「第三王子とお前は面識があったんだったな」

「ああ、アイツは俺の弟子だった。へっぴり腰のぼっちゃんだったがよぉ・・・誰よりも懸命に鍛錬して、『いつか貴方のように強くなりたい』とかぬかしやがって。まったくもってかわいいやつだった。最初は見込みなんぞないと思ってたが、最後は中々強くなりやがった。仮にも俺に一撃打ち込んだからな」

「それは大したもんだ」

「ああ、俺はガキがいねぇから自分の子どものようにかわいがったさ。それを・・・人間どもが！」

「・・・」

「許さねぇぞ、クルムスの連中は。俺の目が黒いうちは絶対に許さねぇ！　俺は誓うぜ。あの国の連中も同じように、のべつまくなし

血祭りに上げてやる！！」
「落ち付け、それを決めるのはドライアン様だ」
「知るか！　ドライアンの野郎が反対するなら俺1人でもやるぞ！」
「ふぅ、これだから・・・」

吼えるヴァーゴに悩むロッハ。ロッハとて気が長い方でもない。むしろ若い頃は最もキレやすい獣将として、ヴァーゴよりも危険人物視されていたこともある。軍を率いるという責任ある立場になってからは、がらりと性格が変わったが。

だがロッハも内心はヴァーゴと同じで、相当はらわたが煮えくりかえっている。彼もまた即座にクルムスに乗り込んで報復行動を行いたい所であったが、いくつか腑に落ちない点があることで彼の理性は保たれていた。

ロッハは軍を率いる立場になってから、斥候という役目に重点を置いていた。今回ザムウェドに斥候を出したのも彼の判断である。自分1人なら戦いはどうとでもなるが、軍を率いるとなると自分の判断で若い連中が多く死ぬ。それは自分が死ぬ以上に、ロッハには我慢がならないことだった。

そのため彼は平時でも部下に商人を装わせ、各国に派遣をしていた。各都市、各国の内情を密に探るためである。その中の情報では、クルムスがザムウェドといい勝負をできそうな様子は、つい数ヶ月前までなかったのだ。

「（理由がわからん。戦力もそうだが、戦争をする理由も。ザムウェドを追い込めば我々グルーザルドが出てくるのは自明の理。我々と真っ向勝負で戦争ができるなど、西方の国を全統一するか、東方の大国が全て同盟を結ぶか、あるいは北のローマンズランドくらいだろうに。まさかローマンズランドが背後にいるのか？　だがクルムスとでは距離がありすぎるし、同盟を結ぶ意味がない。俺の頭で

は理解不能だな・・・宰相のロンか、ゴーラ爺さんに聞くか）」

ロッハがこの後のことに思いを馳せる。

「（どのみち今から追撃しようにも、補給も心配だし、情報が少なすぎる。軍の強みとは行動に厚みを持ってこそ。今回のクルムスのような作戦は、後先顧みない特攻以外の何物でもない。だからこそ上手くいったことも否定はせんが、正常な指揮官が率いる軍なら絶対にやらない戦法だ。しかもこの様子を見る限りじゃ、ここで内乱が起きたんじゃないのか？　自軍の不満や被害も顧みないなど、どんなバカ面が率いているのか見てみたいものだ。まあ見た瞬間、俺がそっ首切り落としてやるがな）」

吼えるヴァーゴに唸るロッハ。一騎当千の2人の獣将が殺気立つだけでそこは異常な雰囲気に包まれる。彼らについている兵士が心中穏やかでない所へ、さらに慌てて獣人の伝令が飛び込んできた。

「将軍、大変です！」
「なんだ、クルムスが引き返してきたのか？」
「いえ、それが！」

伝令がロッハに耳打ちをすると、今度はロッハがヴァーゴ以上の大声を上げた。

「何だとぉ！！？」
「おおぅ？」

ロッハがそこまで大声を張り上げるのは珍しかったため、ヴァーゴも思わずどきりとした。それは近くで作業をしていた獣人達も同様で、思わず足や作業の手を止めてしまう。

「どうしたロッハ」
「・・・トラガスロンの奴らが攻めてきやがった」
「はぁ！？　このタイミングでか？」

今度はヴァーゴが大声を上げる。周囲の獣人達もただ事ではないことに気が付き、近くに寄ってきた。

「とりあえず一次報告だけだが、先発隊が2万、その後に本体が5万。既に国境線は破られ、こちらに一直線に向かって来ているんだとか。途中のザムウェド軍は首都が陥落したのと、クルムスを食い止めるために戦力を割かれて、抵抗らしい抵抗はできないらしい」
「おいおい、その数は俺達で相手できるギリギリの数だぞ」
「それより数が半端だ。今までトラガスロンは必ず１０万以上の軍を使ってきた。なのに今回は7万・・・確証は無いが、俺はこれを第一陣と見る」
「て、ことは」
「ああ、第二陣、第三陣と続くだろう。クルムスなんかに構っている暇は無い、トラガスロンとの大戦争になるぞ」
「おもしれぇ、むしゃくしゃしてたんだ。思いっきり暴れてやろうぜ、てめぇら！」
「「「おお！」」」

ヴァーゴの檄に周囲の連中が吼えるが、事態はそう単純ではないのではないかとロッハは考える。

「（このタイミングで仕掛けてくるとなると、クルムスとトラガスロンの間に密約があったに違いない。まさかクルムスの司令官はここまで読んでいたのか？　俺達とトラガスロンに全面戦争をさせたかったと？　ありえん、全てのタイミングが良すぎる・・・もし全

て目論見通りだとすると、クルムスの手の者はトラガスロンどころか、ザムウェド、果ては俺達の国にまで入っていることになるのではないか。そういえば今回の遠征に際して、食料の集まりを初めとして、物資の集まりが妙に手間取った。くそっ、何が起きているんだ？）」

だがロッハのわだかまりもよそに事態は進む。とりあえ現状でずグルーザルドがやらなければならないことは、トラガスロンを迎え撃つことだった。本来はザムウェドが滅びた以上一度撤退する手もあるのだが、ヴァーゴが納得しないだろうし、いまだに王族全員の死亡が確認できたわけではない。そうなると同盟を無視するわけにもいかず、グルーザルドは遠征軍2万でトラガスロン7万を迎え撃たざるをえなかった。

中原の戦火の幕は、まだ切って落とされたばかりなのである。

続く

中原の戦火、その8～獣将二人～（後書き）

次回投稿は１／２３（日）１２：００です。土日だから連続投稿でする。

中原の戦火、その9～狂人の語らい～（前書き）

～あらすじ～

トラガスロンとグルーザルドが交戦状態に入らんとする時、一路引き揚げるクルムスの陣中では・・・？

中原の戦火、その9~狂人の語らい~

＊＊＊

ロッハと同様にラインの中にもわだかまりはあった。2人はクルムスに引き上げる途中、トラガスロンの軍隊を見てしまった。どうやって国境線を突破して来たのかは謎だが、目の前の事実は動かせない。ともかくこれでトラガスロンとグルーザルドの激突は免れないのではないかという考えがラインに浮かび、ますますもってこの中原はひどい様相を呈することが容易に想像できた。

そしてラインにはまだ解決されない疑問がいくつかある。

「ダンサーよ」

「なんだ?」

「クルムス軍の武器防具・・・どこから来たと思う?」

「獣人の爪を通さないとかいう防具か? さあ・・・封印されていた我に言われてもな」

「お前の時代にそういう類いの防具はあったか?」

「それはあるにはあるが、どれも希少価値のある金属ばかりだ。大量に生成・加工はできなかったと思うぞ。現在では知らんがな」

「いや、現在でもないはずなんだがな。だからこそ人間の国家を打ち倒して、獣人の国家なんてものが出来たわけだし。うーん・・・」

ラインにはその辺の事情はわからない。だがわかることもある。それは軍が装備するなら輸入、ないしは生産経路があるということ。しかも大規模に。その経路を発見すれば、何かしら分かるかもしれないとも思う。

「(とりあえず帰ったらゼルバドスの情報があるはずだから聞いて・

・・そのあとレイファンのとこにいってラスティと連絡を取り・・・その後はなるようになるか）」

かなり大雑把な計画かもしれないが、ラインの今の手持ち材料ではそこまでしか考えられない。クルムスに帰って来た第三王子が、どのような行動に出るかもわからないのだ。とりあえず今はいち早くトリメドに戻る。なんだかんだでレイファンも心配だったし、ラインの頭の中は今はそのことでいっぱいだった。

＊＊＊

その夜のこと。引き揚げるクルムス軍の中、第三王子ムスターの天幕である。ムスターは絶好調であった。体が軽く、頭もこれ以上ないくらいに冴えている。今なら誰と戦っても負ける気がしないし、実際負けなかった。ヘカトンケイルが１０００人もいれば、そのまま世界征服にのりだせそうな気分すらしてしまう。ザムウェドにも大勝したし、彼にとって戦勝の酒は非常に気分が良かった。

だが自国の兵士を虐殺しておいて酒盛りをするムスターの様子を見て、兵士達は全員ムスターをいますぐにでも殺したいほど憎んではいたが、とても恐ろしくて口には出せなかった。実際戦場で鬼神のごとき働きを見せるムスターを、彼らは目の当たりにした者も多かったのだから。

そんな兵士たちの不満には何一つ気付かずムスターが楽しそうに１人で酒盛りをしていると、何かにピクリと反応した彼は小姓を呼んだ。

「誰かおるか」

「は、はい・・・ここに」

入ってきた小姓は怯えきっている。それもやむなく、先日返事が遅かったと言うだけで、戦場がえりで気分が高揚していたムスターに首をへし折られた同僚を見ているのだ。口のきき方が成っていないと言うだけで首を切られた同僚もいる。一体何がムスターの機嫌を損なうかもわからず、小姓は怯えきっていた。

「もう戦争は終わった、とりあえずはな。だからお前達も今日はもう休んでよい。疲れが溜まっているだろう？」

「は？」

余りに意外な言葉をかけられたので、小姓は思わず聞き返してしまった。そしてそのことがムスターの機嫌を損ねるのではないかと思いなおし、すぐさま顔面蒼白になったのだが。

「聞こえなかったのか？　今日はもう休んでよいと言ったのだ。ここに危険はあるまい、そう見張りにも伝えておけ。それとも嬉しくないのか？」

「いえ、嬉しゅうございます。それではそのように！」

その言葉は小姓の本心からの言葉であったので、彼は飛び出すように天幕を後にした。そしてその言葉を見張りや他の小姓に伝えると、彼らは全員飛び上がるように喜んで自分達の天幕に帰って行った。

そして人気が無くなったのを確認すると、ムスターは自分の影に向かって話しかける。

「もう誰もいないぞ、アノーマリー様」

「ククク、元気そうだね、ムスター」

影からずるりと這い出してきたのは醜い老人のアノーマリー。そ

してムスターはアノーマリーにも酒を進める。

「飲むか？」

「いや、まだ仕事があるからやめておこう。それより絶好調のようだね？」

「それはもう！　アノーマリー様に頂いた力は最高だ。このまま世界征服にも乗り出せそうな勢いだ！」

「世界の王にでもなるつもり？」

「・・・それはいい考えだ。ワシが世界の王に・・・ふふふ、くくく」

ムスターはいいことを聞いたと言わんばかりに含み笑いを始めた。今頃世界征服のための具体的な手段が伴わない思考をムスターが展開しているであろうことをアノーマリーは想像し、ムスターとは別の意味で笑っている。

「（心底バカな奴だ・・・今回の計略だって元は僕が考えたもの。ヘカトンケイルだって僕が貸した連中だし、あの連中だって・・・。それをいつの間にか自分の物のように考えて、自分の力と勘違いしている。本当におめでたいね、ククク。だいたい世界の王になるつもりなら、僕らを様付けで呼んだらダメだろうよ。まあその呼ぶように躾けたのは僕らなんだけど）」

だが決してその事をアノーマリーは告げない。まだまだムスターには踊ってもらわないと困るからだ。そしてひとしきり内心で馬鹿にした後、アノーマリーは本題に入る。

「ところでどう？　ヘカトンケイルの連中は」

「ああ、奴らは使えるよ。１人で１００人分は働いてくれる」

「そうか。命令にはきちんと従う？」

「問題なく。ワシに非常に忠実だ」
「そうか（・・・こんな馬鹿にも従うなら、誰でも大丈夫だな）」

アノーマリーの計画。それは数を確保できないゴブリンやオークの代わりになる兵士を量産すること。そのための実験の一環が、ヘカトンケイルという傭兵団だった。

ヘカトンケイルの中身は人間ではない。素材こそ人間であるが、様々な魔獣や魔物と合成されたそれはもはや人間と呼べない。テトラスティンが危惧していた合成獣（キメラ）、つまり魔王と同様の生物である。

ただ魔王と違う点は、ヘカトンケイルはかなり知能が低く、命令されない限りは自分からは何もできない。彼らは人間と同じく食事が必要なわけだが、その最低限の行動すら自分の意志で行えない。その代わり痛み、憐憫の情、躊躇、恐怖といったおよそ戦闘に不必要な感情や機能は全て廃絶されているため、戦闘においてはかなり有用だとアノーマリーは考えている。実際に試したところ、腕が落ちようが下半身がとれようが関係なく敵に喰らいついていった。

またコストが低いのも利点だ。魔王の制作には最低成人の人間が5人は必要だが、ヘカトンケイルなら1人でもなんとかなる。これは素材不足に悩むアノーマリーには大きな恵みであった。最近工房を拡張し、生産能率が上がったのはいいものの、今度は素材の調達に困っていたのだ。ライフレスが主に素材の調達を行うわけだが、既に彼一人では手が足りなくなってきていた。

「（ライフレスは寝なくてもいい奴だから、それこそ年中無休で働いてくれるけど・・・彼は沢山の部下を持つタイプじゃないからな。僕が何人かいればいいんだけどね・・・あ、そうか）」

アノーマリーはパチンと指を鳴らす。

「（なーんだ、なんでこんな簡単なことに気がつかなかったんだろ。僕が複数いればいいんじゃないか！　全く僕もムスターのことは言えないな、こんなことも思いつかないなんて。工房に帰ったら早速試してみよう）」

自分の複製――普通は誰も思いつかない。いや、思いついてもやらない。それを何のためらいもなく、お菓子を作るかのような感覚で行おうとするアノーマリー。彼はその自分的には素晴らしい思い付きに胸を高鳴らせ、思わず鼻歌を歌い始める。その様子をムスターはちょっとびっくりしたように見たが、何やら彼も真似をして２人で鼻歌を奏で始めた。お世辞にも見目麗しくない２人が鼻歌の輪奏を行うなど、奇妙を通り越しておぞましい。

だがアノーマリーは他の用事も思い出したので鼻歌を止め、ムスターに質問する。

「そういえば、この後はどうするのかわかってる？」

「もちろん。このまま隙を見てトラガスロンに進行するのだろう？」

「そうそう。トラガスロンは順調に行くと第三陣まで総計２０万の大軍を出発させるはずだから、第三陣がグルーザルドと戦い始めたくらいのタイミングで攻め込んでくれるとありがたい。もっともグルーザルドの頑張り次第なわけだけど、まあ僕達の見立てではトラガスロンでは相手にならないかな」

「せいぜいグルーザルドをいくらか削ってくれれば、というところか？」

「そうそう、よくわかってるね」

「当然だ、なにせワシは王になるべき人間だからな！　ハハハハハ！」

「ハハ・・・」

豪快に笑うムスターに対し、アノーマリーは引き笑いだった。

実はアノーマリーはムスターを回収して改造する時に、適当に脳をいじった。元からムスターに自我を残すつもりは無かったのだが、結果として元より大分出来る人間になってしまった。これぱかりはアノーマリーも人体の神秘を感じざるは得なかったが、結果良しとして素直に受け取ることとした。もっとも歪んだ部分はちゃんと残っているので、結果としてはもっとも望ましい。

「（うーん、人間はよくわからん。よっぽど元がひどかったのか？　まあいっか）」

だが一方でムスターがクルムス軍を虐殺したのは、完全に命令違反である。ムスターが勝手なことはできないように、深層意識に刷り込んであるはずなのだが。

「で、君はクルムス軍を虐殺したみたいだけど、なんで？　そんな指示は出してないはずだけど？」

「ああ、そんなつまらないことを気にしているのか？」

「いや、つまらなくはないでしょ。手勢がいくらなんでも足りないんじゃない？　トラガスロンは結構な軍事国家だ。１万で突っ込むのは、いくらヘカトンケイルの力を借りても無理がある。今度は人間の国家が相手だから、獣人のように単純にはいかないよ」

「とはいえ、ワシの命令を聞かない軍隊はいらないだろう？　ワシのいうことを聞かない兵士はいざという時あてにならん。たかだか２週間程度、ほとんど休みなしで戦い続けたくらいでへこたれおって、全く情けない。あんな奴らに今までバカにされていたのかと思うと、腹が立って腹が立って腹が立って・・・ヒヒヒヒヒ」

「（大丈夫か、こいつ・・・）」

嫌な忍び笑いを繰り返すムスターに、さすがのアノーマリーも不気味さを禁じ得ない。だが突然笑いを止め、ムスターは真面目な表

情で語る。

「奴らはこぞってワシの命令に逆らおうとした。そんな奴らは必要なかったが、さすがに後のことを考えて、逆らった奴を2人1組で殺し合いをさせて生き残った方は許すことにした」

「そりゃ職業軍人でも普通は虐殺の命令なんか聞かないけどね・・・だけど、どうやってそこまで持ちこんだのさ?」

「簡単だ、適当に指揮官を10人ほど血祭りに上げた」

「それじゃ軍隊は機能しなくないか?」

「だから機能するように、指揮官を減らした分だけ兵士も減らしたんだ。どうせ使い捨てにする連中だ。代わりもいくらでもいるしな。どうだ、賢いやり方だろう?」

「・・・」

ムスターが胸を張っている。さすがのアノーマリーも絶句したが、彼の落胆の理由は別だった。

「(どうせ殺すんなら材料として回収したいんだけどな・・・そこまでこの馬鹿には欲求できないか・・・でもまあ計画の範囲を出ない行動だし、いいか)」

ふう、とため息をつくアノーマリーがもう1つ確認事項を問う。

「で、これから後は? まだトラガスロンとグルーザルドが本格的に戦うまで時間がある。その間はどうするのさ」

「国境に兵士を配置して、その間に一度首都セイムリッドに戻る。兵士の補充も必要だから行わねばならんし、そろそろおかしい動きを見せる貴族もいるだろう。また適当に正義の鉄槌を食らわせてやらんとな」

「ほどほどにしなよ?」

「わかっている。それに妹のことも心配だ」
「その妹を誘拐しようとしたみたいだけど？」
「ああ、それはそうだ。あんな愚物共の傍にかわいい妹をおいてはおけん！　どうせ奴らは全員殺すんだし、妹が巻き添えをくったらどうするつもりだ？」
「いや、知らないよ」
「あの儚げでかわいい妹・・・ワシの事を唯一まともに人間として扱った心優しい子・・・誰にも渡さん。あの子はワシのものだ、ワシの手元に置いて一日中離すものか・・・昼も夜も・・・」

ムスターが何やらぶつぶつ言い始めた。その様子に鬼気迫るものがある。アノーマリーとしては、その後の方策を聞く限りではなんとか自分の思惑通りに動きそうなのでとりあえずは安心し、その場を離れようとすると、突然ムスターが振り返る。
その顔には先ほどまでの鬼気迫る表情も何も無い。突然人格か記憶が切り替わったか、そんな様子である。

「どうしたアノーマリー、飲まないのか？　今日は実に愉快な日だぞ、ワシの人生初の大勝だからな。フハハハハ！」
「いや、僕は仕事があるからもう行くよ。じゃあまたね・・・この調子じゃ、どのみち長くはもちそうにないね、君は」

アノーマリーの最後の呟きは、ムスターには聞こえていないほどの小声だった。そうして自分の兵士を虐殺しておいてさも自慢げに高笑うムスターの声が、いつまでも天幕に響いていた。

続く

中原の戦火、その9～狂人の語らい～（後書き）

次回投稿は１／２５（火）１２：００です。

中原の戦火、その１０～監視の目～（前書き）

～あらすじ～

無事トリメドへと帰ったラインだが、肝心な事は何もわからなくて・・・？

中原の戦火、その１０～監視の目～

＊＊＊

一方こちらは無事トリメドに帰ったライン達。思わぬ時間を喰ったため、とりあえず一度レイファンの元に顔を出し、無事を確認してから首都セイムリッドの様子を見に行くことにした。ザムウェドで費やした時間の分、既にゼルバドスの情報も集まっているだろうとラインは考え、その足をギルドに向ける。ゼルバドスの情報を掴んでからセイムリッドに行った方が有効だと判断したのである。

そしてギルドに来たライン達。受付を見ると、以前の受付嬢が今日も座っている。

「おーい、姉ちゃん。情報は集まってるか？」

「えーと・・・」

「ラインだよ。覚えてねぇか？」

「あ、はいはい。ただいま問い合わせてみるので、少々お待ちくださいませ」

そうして受付の女性は奥の人間に声をかけると、これ以上ないくらいの笑顔で彼女はラインに愛想を振りまいている。だが不思議なことに、当のラインは女性のことなどどこ吹く風で店の様子を見まわしているだけだ。ダンススレイブが見ても、いや、子どもが見ても受け付けの女性がラインに客以上としての愛想を振りまいているのはわかるのだが、そのことをラインが気が付いていないのがダンススレイブには不思議だった。いや、あえて気づかないようにしているのかもしれない。

ダンススレイブと２人で旅をしている間、外見上は女性に見えるダンススレイブが傍にいるにも関わらず女性とみれば声をかけ、見

事な間男っぷりすら発揮するラインをダンススレイブは何度も見ている。そのため彼女はラインを完全な助平男と思っていたのだが、どうも様子がおかしい。

一方で受付の奥ではもう1人の女性が何かを探しながら、同時に奥にいる男性に声をかける。

「あの男が例のラインという傭兵です」

その事実だけ告げると、何事も無かったかのように女性はいそいそとラインの依頼に関する資料を集めていく。

「ふむ・・・」

「彼がそうなの、サイレンス？」

「だ、そうだよアノーマリー」

「ふぅん・・・」

サイレンスと呼ばれたのは、いつもドゥームやアノーマリーと行動を共にしていた紅顔の美青年。ダルカスの森ではアルフィリース達の戦いを上空から見守っていた彼である。サイレンスはゼルバドスについて探っている者がいるとの連絡を受けてこちらに赴いたのだが、たまたま用事があってこちらの近くに来ていたアノーマリーと合流したのである。

「本来ヒドゥンの仕事なのに、サイレンスもご苦労な事だよ」

「まあそれは仕方ないでしょう。兄弟子様は私達と違ってそんなに自由のきく身ではありませんから。それより名前をあまり連呼しないでいただけますか？　あまり好きな本名ではないのです」

「じゃあどう呼べばいいのさ？　イケメンとか？」

「それも嫌です。好きでこんな顔をしているのではありません」

「贅沢な悩みだね。僕の顔を見ろっての」

「貴方は好きでその顔をしているのでしょう？」
「それは言いっこなし。でも職業名で呼ぶと、君の場合、全部ばれちゃうよね？」
「そうですね・・・やはり名前で呼んでください」
「最初からそうすればいいのに・・・」

くどくど言い合いながらも、2人はラインの様子を物陰から見ている。資料上では女好きとの報告を受けていた2人だが、目の前の受付嬢には目もくれていない。受付嬢が少し胸を強調するようなポーズをしながら気さくに話しかけても、どこか上の空だ。

「で、あの傭兵どうするの？　殺しとく？」
「いえ、とりあえず様子を見ましょう。彼はもしかすると我々の役に立つかもしれませんよ？」
「そうかなぁ・・・そんな間抜けには見えないけどなぁ・・・」

アノーマリーが腕を組み、首をひねる。

「まあ殺すのはいつでもできるでしょう。それよりも泳がせる方が面白い。彼が我々に牙を突きたてられる存在かどうか、ゆっくり判断しようじゃありませんか」
「そういうことならいいけど。油断しすぎないようにね、人間もバカばっかりじゃない」
「それはもう」

そして2人はクスクスと笑うとその場から姿を消した。2人の立ち位置はラインから見えるはずがないのだが、ラインはなぜかその方向を目の端で確認していた。

＊＊＊

「どうだった情報は？」
「ああ、結構集まったぜ。どうするかはおよそもう決めた。まだ会ってない情報屋もいるから、最終的には明日の昼に決めようかとも思うんだが。だがまあ3人の情報を聞く限りではどいつも似たようなことを言っていたから、新しい展開はないだろうがな」

依頼に関しては滞りなく終了しており、様々な情報をラインは得ることができたが、一言でゼルバドスのことを表現するなら『謎』だった。

実際に謎だらけだったわけではない。出身は南のトラガスロンとの国境付近にあるフェッテという寒村であり、身長は１７５ｃｍ前後、中肉中背で特に美男子でもなく、外見上はぱっとしない男。だが誰にでも人当たりは良く、身分の高い貴族の機嫌をとるのも上手かったが、下々の使用人や宮廷に出入りをするような配達人にまでちょっとした挨拶や気遣いを欠かさない男。そのためゼルバドスの事を悪く言う者は誰一人おらず、彼が死亡した時は葬儀に貴賤の別なく、３０００人もの人間が出席したのだとか。

他にも彼の食事の好き嫌いから好きな服装、果ては女性の好みまで調べ上げられたが、彼には恋人はおろか個人的に親しかった者すら皆無だった。しかもほとんど同じ報告を3人ともラインに行ったのだ。ラインはそれぞれ別の内容を調べるように指示した、にもかからわずである。

「（ますます怪しい奴だ・・・『自分はこういう人間だ』と予め決めてあったかのように。こいつはもう少し詳しく時間を取って調べる必要があるな。手遅れじゃなきゃいいが・・・）」

だがそんなラインの物思いはダンススレイブには伝わらない。彼女は覗きこむようにラインに聞いてくる。

「では今後の予定は？」
「いや、顔が近い、近いって！」
「なんだ、面喰いよってからに。我に欲情でもしたか？」
「するか！」

ふふ、と艶にダンススレイブが微笑んで見せる。ラインがけっ、と悪態をついて見せるが、かなり色々な事を考えていた時の不意打ちだったため、思わず赤面をしてしまった。なにせうっかりダンススレイブの魅惑的な谷間に、目が思わず止まってしまったからだ。

普段はラインは考えないようにしているが、ダンススレイブがかなりセクシーかつ美しいことはラインも内心認めてはいる。ラインが見てきた中でも、彼女が少なくとも5指には入る美女であることには間違いがない。ダンススレイブが魔剣でなければ・・・とラインが思ったのは一度や二度ではなかったのだ。

だがさすがに魔剣を押し倒すのはぞっとしなかったし、最中に彼女が剣に戻ったらなどと考えると、縮み上がる物があったのは否定できない。それに彼女をいざというときは剣として振う者として、剣先が瞬間たりとも鈍るような関係にはなりたくなかった。剣先の迷いが死につながることはもちろんなのだが、彼は普段がどうあれ剣士としては非常に誠実な男だったのだ。

真面目な思考を崩されたラインが、やや面倒くさそうに説明をダンススレイブにする。

「それはここで話すよりもレイファンもいる場所で相談する。とりあえずレイファンの所に戻ろう。あの娼婦どもが何をしているかわかったもんじゃない」
「それは誰のせいなんだ？」
「やかましい」

ラインにいつもの調子が戻りつつあった。当座の危険を離れてほっとしたのだろう。口ではなんのかんの言いつつも、ダンススレイブはここ何日か口数の少ないラインを心配していたので、彼に普段の調子が戻ってきて何よりだと思っていた。

それもあってラインを茶化すダンススレイブ。

「ところでラインには珍しかったな」

「何がだ？」

「あの受付嬢のことだ。お前に色目を使っていただろう？　まさか気づいていなかったわけでもないだろうに、いやにそっけなかったな」

「ああ、それはな・・・」

ラインが妙にニヤニヤしながら急にダンススレイブの方を見る。その目に妙な光が宿っているのを、ダンススレイブは気がついた。

「ところでダンサー」

「うん？」

「俺、急にムラムラして来たんだが・・・ちょっとすっきりさせてくれないか？」

「は？　突然何を言って・・・お、おい！」

そうしてラインは急にダンススレイブの手を引っ張り、その辺にある連れ込み宿にかけ込む。もとが娼館に向かっていたため、周辺は既にそういったいかがわしい店で一杯だ。そして宿に入ると受付の男に金貨を一枚投げながら、

「１０４号の部屋は満員か？」

「１人だけ空いてるよ」

「そうか」

とだけやり取りすると、ずかずかと奥の部屋に進んで行く。そしてダンサーを無理矢理部屋に押し込むと、そこはベッドが1つ置いてあるだけで、ほとんど余分な空間の無い異常に狭い部屋だった。ベッドの周辺をかろうじて歩きまわれるくらいのスペースがあるくらいで、横には小さな引き出し付きのサイドテーブルが1つあるだけだ。部屋に対してベッドが妙に大きく、せめて1人用の小さいベッドにすればもう少し空いた空間が使えそうなものなのだが。

そのベッドの上に、ダンサーをぽいとラインは放り投げる。そしてダンサーの上に、ラインは遠慮なく覆いかぶさってきた。

「な、な、な・・・我に何をするつもりだ！」
「すっきりしたいっていったろうが。黙って咥えな」
「んなっ・・・むーっ！」

とラインがダンススレイブの口を手で塞ぐ。ダンススレイブは足をじたばたさせて抵抗しようとするが、ラインはそんな彼女をいとも簡単に組み伏せた。そしてラインの顔がダンススレイブの顔に近づいてくる。

続く

中原の戦火、その１０～監視の目～（後書き）

え、こんな引きは無しだって？

でも、次回投稿は、１／２７（木）１２：００です。

次回、まさかの・・・？

中原の戦火、その１１～仕掛け～（前書き）

～あらすじ～

突然ダンススレイブを押し倒したライン。その目的と、胸中に渦巻く思いは・・・？

中原の戦火、その１１～仕掛け～

「（ま、また人間は我を欲望のはけ口にするのか・・・こいつは多少マシな奴だと思っていたのに！　やっぱり人間の男はどいつもこいつも同じことを考えているな！）」
「大人しくしろっての、頼むから」
「（断る！　どうしても我を言うことを聞かせたいなら命令すればいいんだ。そうすれば我の性質上、従わざるをえないんだからな！）」

ダンススレイブはラインの下でじたばた暴れるが、ラインが何もしてこないことに気がつくと、そっと目を開け、ラインの様子をおそるおそる覗う。するとラインはダンススレイブの方など見ておらず、全力で外に注意を向けているようだ。まるで戦場にでもいるかのような緊張感である。
その様を見て、ダンススレイブは抵抗をやめ大人しくする。するとラインも悟ったのか、ダンススレイブの手を放し耳打ちをした。

「適当にあえぎ声でも上げてろ」
「は？」
「演技だ」
「・・・わかった。・・・ん・・・はぁう・・・」

そうしてダンススレイブに適当に声を出させると、ラインは忍び足で入口の扉に近づき、耳を当てる。そしてしばらくそのままに２０秒ほどもしていただろうか。おもむろにラインは耳を放すと緊張を解く。

「もういいぞダンサー。すまなかったな」
「・・・どういうことだったんだ？」
「つけられてた」
「何！？　いつから」
「ギルドからだ。お前、受付の女に手を出すの出さないの話をしたろ？　もっともなことだよ、結構な上玉だと思ってたんだが。残念ながらあれは女暗殺者か、それに近い類いの奴だ」
「・・・なぜわかる」

ダンススレイブは全く気が付いていなかった。どうもラインの態度が普段と違うなと思ったくらいである。

「初めて行った時と、今日行った時で全く態度が違う。前回は普通の客としての対応なのに、今日に限って急に色目だぜ？　俺がこんな汚い恰好してるってのによ。こんなのに色目使う女なんざ変態だな、変態」
「そこまで言うか、自分のことだろ」
「まあでも暗殺者の類いならもっと上手くや誘うわな・・・なんだろうな、あれは。もっと無機質な感じがした。何ていえばいいのか・・・」

ラインが唸り始めた。どうやらラインはダンススレイブが思っているよりも、はるかに鋭い男のようだ。ダンススレイブはラインと旅を始めてから驚きっぱなしである。ダンススレイブの記憶の中には、これほど鋭い男はいなかった。

「（我は結構凄い男を主人にしているのかもな。剣としては本望だが）」

しかしダンススレイブも素直な感動は口にしない。口にすればラ

インが調子に乗るのもまた目に見えているからだ。そこで黙っているものの、ラインは一度自分の思考に沈み始めると周りが目に入らなくなる時がある。こういうときは唸るラインに任せていても事態は進展しない。

それにいかがわしい宿のベッドの上で男女が2人きりで座っているという状況も、ダンススレイブは何か落ち付かなかった。このあたりは魔剣でありながら、非常に人間らしい思考回路をしているダンススレイブである。

「ところでこれからどうする？　外にはまだ尾行している奴らがいるのだろう？」

「ああ、そんなことか。ちょっとそのベッドからどきな」

「？」

ダンススレイブが大人しくどけると、ラインはよっ、と言いながらベッドマットをおもむろにひっくり返す。するとベッドには横板が張っておらず、床には一部分だけ埃があまり積もっていない個所があった。

「ここをこうして・・・よっと！」

「隠し扉か・・・」

ラインが板の一部を叩くとその部分だけが沈み、そこを取っ手にして板を引き上げる。これは知っている者でなければすぐには気付かないだろう。板の裏は鉄板で補強されており、壊すには時間がかかるはずだ。

「こんなところにこんなものが・・・」

「こんなの、普通に生きてたら知らないだろ？」

「ラインはなぜ知っているんだ」

「日ごろの行いがいいから」
「・・・それは突っ込めばいいのか？」
「とりあえず出てからな。ああ、ベッドを元に戻すのを忘れるなよ」

そしてラインベッドの傍にある小さなサイドテーブルの引き出しからロウソクを取り出し、火をつけて下に降りていく。ダンススレイブも言われた通りベッドマットを元に戻しながら後に続く。

ベッドの下は軽く洞穴になっており、じめじめしているものの2人が通るくらいならなんの問題もなさそうだった。少し頭をかがめながらではあるが、洞穴を慎重に歩く2人。

「それにしてもよくこの扉の存在に気付いたな」
「まぁな。前にこの宿を使った時に、1つだけ妙に狭い部屋があるのに気づいてな。テーブルの引き出しにはロウソクが入ってるし、なんのプレイ用の部屋かと思ったが」
「おい」

ダンススレイブが肘でラインを小突く。

「冗談だよ・・・まあその時にこの扉の存在に気付いてな。それで黙っといてやるから、俺の緊急時にはここを使わせろって言ったんだよ。どうやら昔はヤバい仕事に使われていた建物らしくて、その時の名残らしいんだが。まあ受付の男が変わってなくて何よりだったな」
「それではあの言葉は」
「ああ、暗号みたいなもんだ」

ダンススレイブが驚きに目を丸くする。ラインは至って普通に受け答えするのだが。

「こういう仕込みをいくつも？」
「訪れた町や村ではだいたい仕掛けておく。単純に人助けの時もあるし、必要があれば女もたらしこむな。ちなみにここがダメでも、あといくつかは案があった」

人をだますこともいとわないと、いけしゃあしゃあと答えるラインに多少ダンススレイブも呆れるが、そのおかげで助かっているわけだから余り文句は言えなかった。何もラインに言い返せないのはどうにも癪なダンススレイブだが、ここは大人しく黙っておいた。

そのまま通路を進むと墓地の一画に出た。

「脱出先が墓地とか・・・ベタベタなんだよな、この道は」
「だが隠し道を作りやすくはある。地面を掘っていてもあまり不審には思われないからな。我は理にかなっていると思うが？」
「だな。さあ、帰るか」

そうして機嫌よさそうに歩き出すライン。ダンススレイブも後に続く。今度こそ緊張が解けたのか、ラインが軽口を叩き始めた。

「しかし、あれだな・・・」
「なんだ？」
「ダンサーよ、お前妙に色っぽい声を出すな」
「！」
「今度本当に一発・・・ぐえっ！」

ゴン！　という音と共にダンススレイブのゲンコツがラインの頭にヒットした。ダンススレイブが自分の主人に手を上げたのは冗談でもこれが初めてだったが、なぜか躊躇うことなく手が出てしまった。魔剣としてはあるまじき行為だったかもしれない。

「今・・・なんと?」
「だから今度は本当にやらないか、と。・・・ちょ、お前、それは倫理的にいかんだろう?」

ダンススレイブが墓石を持ち上げてラインに向かって投げつけようとしている。名前が彫っていないところをみると、どうやらまだ誰も眠っていない新しい墓石のようだが。

「心配するな・・・ちゃんと石に名前は刻んでやる」
「うおお、マジか!?」
「一回死んでこい!」
「やめろー!」

そうして墓地での追いかけっこが始まった。

「(こんな奴を一瞬でも信用しかけた我が馬鹿だった。これだから男というやつは!)」

だが同時にダンススレイブは非常に楽しくもあった。彼女がこれほど感情をむき出しに出来たのは、最初に彼女が意識を持った後に鍛冶屋の元で暮らした時以来だったかもしれない。ただその時と違い、抱いた感情が安らぎとは違うのはまた何ともいえなかったが、少しばかり幸福感があるのはダンススレイブには否定できないところだった。

続く

中原の戦火、その１１～仕掛け～（後書き）

前回と含めたこの内容を「こんな内容で大丈夫か？」と相談したところ、「セウト」「アウフ」と回答されました。どっちやねん！（笑）

確か一般的には直接的な表現が無い限り、１８禁にはならなかったような・・・R指定無い小説でも、もっと過激なのはありますしね。

一応Ｒ－１５ならいいのではということでした。

次回投稿は１／２８（金）１２：００です。

登場人物紹介、その6～ユーティ、エアリアル、ファランクス～（前書き）

今回はこの人たちのプロフィールです。ファランクスでは短編一本書けそうですな。ちなみに、必要に応じて本人達の過去編をやろうかなとは考えています。まだだいぶ先のことだとは思いますが・・・。

登場人物紹介、その6～ユーティ、エアリアル、ファランクス～

名前：ユーティ（妖精に名字はない）
年齢：妖精に年齢という概念はないが、生まれてからおよそ７０年は経っている。フェアリーにしては若い方
身長／体重／スリーサイズ／容姿：およそ３０ｃｍ、体重・スリーサイズは内緒とのこと、蒼髪・蒼眼
職業：水の妖精
好きなモノ：人の弱みを握ること、宝石収集、人の頭の上で寝ること、広い所、水場、肉、（できればレア）
嫌いなモノ：人に弱みを握られること、汚いもの、狭い所、火、野菜
一人称：ワタシ
プロフィール：

大草原の中にある妖精の集落の出自。なお妖精の集落は世界に各所点在するが、人間が見つけることはほとんどできない場所にある。妖精の集落に入るためには妖精の道案内が必要とされ、害意を持って無理に集落に入ろうとする者は永遠に集落の近くを彷徨う羽目になるのだとか。

大草原の集落はおおよそ風の精霊で構成されるが、ユーティはかなり珍しく水の精霊である。そのためイマイチ集落の仲間とは気が合わず、集団行動を好む妖精たちにあって単独行動を好むようになった。

また水の精霊というものは大人しく慈愛にあふれた気性を特徴とするのだが、彼女はかなり活発かつ、辛口を容赦なく発する性格である。また人間にも興味津々で、ご飯につられて人間に近づいた所を捕獲されてしまった。もっともユーティと、捕獲した人間のどちらに災難だったかはわからないが。

今回は大草原を単独で渡って自分で集落に戻るという選択肢がか

なり困難なこと、また妖精として受けた恩は返さなければならないこと（あまり徳の低い行いばかりしていると、妖精の羽がなくなり飛べなくなるとの伝承が妖精にはあり、ユーティもそれは信じている）、そして個人的にアルフィリースに興味があることで行動を共にしている。

なお妖精とは精霊の一種（格としては下位であるが）であり、徳を最大限まで継ぐと、完全な上位精霊として別の存在に昇華すると言われている。妖精の集落の長は例外なく上位精霊に昇華した存在であり、ユーティも口にこそ出さないが、いずれは自分も上位精霊になりたいと考えている。

ただ一般的な妖精の業務とされている、自然の循環をよくするために草木の頼みごとを聞いたりすることや、菜食主義なんかは苦手である。ちなみに大の肉好き。

名前：エアリアル（彼女の出自に名字をつける習慣はない）
年齢：１６
身長／体重／スリーサイズ／容姿　１６４ｃｍ／５３ｋｇ／８３・５５・８５／緑の長髪、緑眼
職業：遊牧民
好きなモノ：草原、アルフィリース、植物を育てること、草笛、静かな場所、動物
嫌いなモノ：人込み、五月蠅い場所
一人称：我
プロフィール：

大草原のとある部族の出身。彼女の両親は部族で有数の戦士であったが、それゆえに儀式としてファランクスに挑み続ける彼らの一族の掟により両親は死亡する。父も知らず、母の顔もおぼろげにしか覚えていない彼女は時間の大半をファランクスを打倒するための訓練に費やすがそれはかなわず、ついには部族全員を失った彼女は

逆にファランクスと生活を共にするようになる。その時初めて彼女は両親の遺言を知ることとなる。

ファランクスに鍛えられた彼女は並の人間をはるかに凌駕する身体機能を身につけており、獣人であるニアとも速度で勝負ができるほどである。もっとも大草原の人間達は生活すべてが体を鍛えるような状況であることと、食べ物も大草原以外よりはるかに良いせいだとも言われている。また槍、剣、弓、投擲武器など様々な武器を使いこなすのは彼女の部族の伝統である。

さらに大草原の人間は馬の扱いに優れているが、彼女の場合は乗る動物を選ばない。竜はおろか、大草原の動物であればギガノトサウルスまで乗りこなしてしまう。これは彼女特有の能力である。

ちなみに彼女の武器や衣服は大草原に迷い込んだ人間から買い付けているものを加工したり、縫ったりして使っている。もちろん大草原の部族から物々交換などでも手に入れたりする。

ファランクスの方針から彼女は大草原に迷い込んだ人間を無事に外まで送り届けたりする役目を務めており、「案内人」というあだ名もそこからついた。またその姿から彼女のことを大草原の精霊と勘違いする人間も多かった。

そんな彼女の望みは「友人を得ること」である。ファランクスと一緒とは言え、同年代の人間の友人に飢えていた彼女はアルフィリースと友達になりたいと願う。また一見クールに見える彼女の本質は、結構な寂しがりである。彼女はアルフィリース達と今後どのような行動に出るのか・・・いまだに彼女は決めかねている。

名前：ファランクス
年齢：??（数百年は生きていると思われる）

身長／体重／容姿　５ｍ／１．２ｔ／燃えるような体毛と髪、瞳。
腕は計８本。外見は巨大な獅子のようでもある。
職業：大草原の守護者
好きなモノ：娘（エアリアル）、人間をはじめとする大草原の生物なら全て、花畑での昼寝
嫌いなモノ：大草原を荒らす者、娘に危害を加えるモノ
一人称：ワシ
プロフィール：

大草原最強と呼ばれる生物にして、大草原の管理を行う、通称『炎獣』と呼ばれる存在である。実際には最強というわけではなく、他にも強い生物はいるとされるが、彼らは滅多なことでは他の生物の前に姿を現さない。だが人語・魔術も操る知性も含めると、ファランクスが大草原の代表と述べても過言ではない。

彼は大草原でも非常に希少種であり、もとは群れで暮らしていたようだが、群れが襲われた時に彼を除いて全滅してしまった。運よく生き延びたファランクスは深手を負うが、たまたま大草原の視察に来ていたミリアザール一行に拾われ事なきを得る。

その頃のファランクスはまだ幼生であり、ミリアザールの腕に抱えられる程度の大きさだった。そのため人間達には「チビ」としてよく遊び相手になってもらっており、幼いファランクスもよく彼らに懐いていた。その時からファランクスは人間に好意を抱いており、彼が自分のことを「ワシ」と呼ぶのもミリアザールの影響である。

やがてミリアザール達は大草原を去り、ファランクスは大草原に残った。だがファランクスはミリアザールの事が忘れられず、彼女の真似をして困っている動物や、大草原に迷い込んだ人間を助けるようになる。その行動を持って彼は大草原の動物達に主として認められるようになり、同時に様々な争いごとを解決してく過程で、彼は種属としては例外的に強くなった。

また人間を助ける過程で彼は人間達の言葉を徐々に覚えていき、同時に大草原の北部には余り近寄らない様との警告も発した。

彼が大草原の主となってから多くの時間が経過した。大草原で暮らす人間が増えるに従い徐々に彼を大草原の主と崇める人間は少なくなり、むしろ彼に挑みかかるような部族もあらわれた。それは人間が好きなファランクスにとってはつらい出来事で、時には死なせぬように手加減をしたものの、結果として生贄に捧げられることを知り、せめて戦士として死なせようと彼は戦うようになった。

そんなある日、彼の目の前に現れた男は格別に強かった。ファランクス自身も手傷をかなり負わされ、危うく目を潰されかけた。戦いは三日三晩におよんだが、結果は当然のごとくファランクスの勝利で終わる。だが男のあまりの正々堂々とした戦いぶりに感動したファランクスは、男をこのまま死なすには惜しいと願い1つを聞いてやることにした。その時男が願ったことは、

「いずれ自分の妻も戦いに来るだろう。戦士として戦う以上手加減は無用だが、妻も死ねば生まれたばかりの娘が1人で取り残される。それだけが不憫だ」

と。ファランクスはしばし悩んだがよい結論はでず、男にどうしたらよいかを問うた。そこで男が語ったのは

「では娘がお前の前に現れたら、自分の娘として育ててはくれまいか?」

というものだった。獣である自分に無理だとは言ったが、男は既に事切れていた。

ほどなくして自分の前に立ちはだかる女が現れる。ファランクス

は直感でそれがいつぞの男の妻だと悟ったが、運命が変わるわけでもなく戦うこととなる。

彼女は男と違い、罠や不意打ちを多用して戦うタイプだった。ファランクスはそのような戦いは好まなかったが、女からはなんとしても生きて帰るという強い意志が見て取れ、ファランクスはあえて真っ向から罠を打ち破りに行った。

結果はやはりファランクスの勝利で終わるが、同じように彼は女の遺言を聞いた。すると不思議なことに、

「娘のことをお願いしたい」

と頼まれた。ファランクスはやはり断ろうとしたが、女の強い瞳に押され、やむをえず承諾した。

さらに時間は経つが、ファランクスはまんじりともしない日々だった。獣の自分に人間をどう育てればよいのかわからない。そのうち目の前に復讐に目を燃やした少女が現れるが、見るなりファランクスはいつぞやの話の娘だと気付いた。

だが幼い娘の攻撃はファランクスを脅かすほどではなく、ファランクスは適当にあしらうのみで、どうしようもなかった。また娘の方もファランクスの話を聞く様子も無かったので、ファランクスは適当に娘を叩きのめすとその場を去った。

だが娘は決して諦めることなく、毎日毎日ファランクスに喰いさがった。時には思わぬ深手を与えてしまうこともあり、その度娘にそっと治療を施し食物を傍に置いておいたが、全て娘には逆効果にしか受け取られず、より一層の憎しみをかきたてただけだった。

しばらくして娘の一族が全滅している事実が発覚し、娘はそれからあまり戦いを挑んで来なくなったが、いまだにファランクスの後

をついてきていた。だがファランクスにどうできるわけでもなくそのまま流れに任せていた。

やがて娘が死にかける事件が起きるが、ファランクスはあらん限りの力を振り絞って娘を助けてしまう。なぜそのような行動をとったかファランクスにも不思議であったが、それを契機として娘とファランクスの奇妙な親子生活が始まった。娘の名前はエアリアルといった。

最初は互いに違和感を覚えたが、ファランクスに出来ることと言えば大草原に関するあらゆる知識を教え込むことくらいであり、娘も瞬く間にその知識を吸収していった。時に自分の寝どこにもぐりこんでくる娘のことを、彼が愛しく思わなかったと言ったら嘘になるだろう。

やがて成長した娘は、ファランクスの仕事を彼以上に上手くこなすようになる。子どもを育てるとはこのような心境であるかとファランクスは満足したが、同時に娘を大草原に縛りつけている気がしているのも事実であった。彼が願うのは娘の幸せのみであったのである。

そしてアルフィリース達が目の前に現れた時、彼は何を思ったのであろうか・・・。

続く

登場人物紹介、その6～ユーティ、エアリアル、ファランクス～（後書き）

さて、次回投稿は１／２９（土）１４：００です。

恋は力ずく？（前書き）

～あらすじ～

エアリアルがひとしきり泣いたその翌日、アルフィリース達はこれからどうするかを相談していた・・・

恋は力ずく？

揺蕩(たゆた)う意識が闇から引き戻され、アルフィリースはゆっくりと覚醒する。何か非常に嫌な夢を見ていた気がするが、思い出せない。彼女は誰にも言わなかったが、夢見の良い夜など、魔術の才能に目覚めてからはアルフィリースにはほとんどなかった。彼女が茫とする意識と視線をまとめると、目の前にはエアリアルの心配そうな顔があった。

「ん・・・どうしたの、エアリー？」
「いや、アルフィがうなされていたようだから・・・」
「・・・私、何か口走ってた？」
「いや、何も」
「そう・・・ならいいわ」

アルフィリースがため息交じりにゆっくりと体を起こす。実は寝言を言っていたのだが、エアリアルにはあまりよく聞き取れなかったし、また意味もよくわからなかった。エアリアルは彼女なりに気を使い、アルフィリースが自分から話すまで触れないことを決め、自分の胸の中にとどめておくことにした。

「うわ・・・寝汗がひどい」
「我もだ。ここは風通しがあまり良くないし、今は夏だからな。大草原は涼しいから忘れがちだが」
「ちょっと着替えるわ」
「我もそうする」

2人は荷物から着替えを取り出し服を脱ぎ始めるが、アルフィリ

ースはエアリアルの体を見てぎょっとした。彼女の体は凄まじく傷だらけで、まるで５０年も戦場をかけた歴戦の勇者のような体だった。

「エアリー・・・その傷は」
「ああ、これはファランクス父上に昔戦いを挑んだ時についたものだ。訓練や、その他の戦いでついたものも多いがな」
「女の子の体なのに・・・」
「女かどうかが関係あるのか？」

痛々しそうにエアリアルの体を見るアルフィリースに、エアリアルは不思議そうな顔をする。戦士であるエアリアルに傷は勲章でありこそすれ、その他の意味はなかった。

「ええ、一般的には関係あるわよ。嫁入り前には女の子の体には、傷がついてない方がいいのよ」
「そうなのか？　だが我は戦士だからな。毎日が戦いだったし、そんなことに気を使う余裕はなかった。それに・・・」
「それに？」
「今やこの傷が父上の唯一の形見だ」

エアリアルは泣きそうな表情で体をかき抱いた。その様子を見て思わず背後からエアリアルを引き寄せて抱くアルフィリース。

「そんな悲しいこと言わないでよ」
「だが事実だ・・・これから我は１人でこの大草原を守らなくてはいけない。アルフィは行ってしまうのだろう？」
「ええ、フェンナを送り届けたら、行かないといけないところがあるわ」
「そうか・・・」

エアリアルはそれから黙ってしまい、アルフィリースもまた言葉を失くしていた。だがアルフィリースがゆっくりとエアリアルに囁く。

「ファランクスが残したものはその傷だけじゃないよ」
「え・・・？」

エアリアルはその言葉が余程意外だったのか、くるりとアルフィリースの腕の中で振り返る。

「父上は・・・何を残してくれたの？」
「エアリー自身もそうだし、私達も彼に生かされたわ。色んな事も教えてもらったし・・・大草原自体も彼が残した物なんじゃないかな？」
「大草原全部が父上の形見・・・」
「それに月並みな言葉かもしれないけど、思い出はいつまでも死なないわ。物としては残らなくても、心にはいつまでもファランクスが残してくれたものがあるはずよ。違う？」
「それは・・・」

エアリアルはファランクスとの出会いから思い出していた。確かにこの何年間はファランクスとの思い出ばかりだ。それら全てがファランクスの残したもの。簡単には納得できはしなかったが、エアリアルは少し癒された気がした。

「確かに・・・そうかもしれないな」
「でしょう？　だから元気出しなさいって」
「うん・・・アルフィはなんだか我の姉みたいだな」
「だったら『お姉さま』って呼んでもいいのよ？」

「ふふふ」

アルフィリースが悪戯っぽくウィンクしてみせたので、エアリアルは思わず笑ってしまった。２人はそのまま体を放すと着替えを終えたが、エアリアルは気になったことをアルフィリースに質問してみた。

「ところでアルフィ」
「なあに？」
「嫁入り前の女性は体に傷があると結婚できないのか？」
「そんなことはないけど・・・気にする人はいるかもね。私だってよく知らなくて、通説がそうなだけよ」
「そうか・・・それは困るな」
「どうして？」
「いや、我は外の世界の基準に照らし合わせれば大人だし・・・我の母上も１７で結婚し、１９で私を産んだと言っていた。だから我もそろそろ旦那になるべき男を探さないといけないと思ってな」
「え？」

思いのほか真剣に悩むエアリアルを不思議そうに見つめるアルフィリース。

「そりゃ貴族とかはそういうのもあるらしいけど・・・エアリーにはまだ早いんじゃない？」
「そうか？　我の一族は女が成人になると、子どもを産まないといけないからな。その年の強い戦士何人かに引き合わされる」
「それで？」
「まあ一番強い戦士から順に引き合わされるんだが・・・大抵はその場で抱かれるな」
「ぶっ！」

アルフィリースは思わず吹き出してしまった。エアリアルが余りにも平然と語った内容がアルフィリースの予想の斜め上をゆうに超えたせいだ。ちゃんと告白してからお付き合いし、手をつなぐところから始めようと思っているアルフィリースには刺激の強い内容だった。

「えーっと」

「何か変か？　部族では強い男の種を皆欲しがる。強い子孫を残さないと部族が滅びるからな。だから強い戦士はその気なら部族中の女を自分のものにできる。だがそこまですると他の男の恨みを買うし、本人の体力もあるから実際は多くても囲う女は5人というところか。我の本当の父上は珍しい人物で、母上のみしか傍におかなかったそうだ。もっとも2人は成人前から言い交わした仲だったようだが」

「そ、そう・・・」

エアリアルの思わぬ言葉に、アルフィリースはどう答えてよいのかわからない。

「まあそんな例は珍しいから、大抵は女は成人を迎えると何人かの男の元を巡ることになる。それで男に気に入られれば、その手元に置かれるのが通常だ」

「それって、余りにも女の子の気持ちを無視してない？」

「そうでもないぞ。女でも部族で強ければ、自分より弱い男の誘いは断れる。母上はだから鍛錬したと言っていたな。なんでも、当時部族で一番強い男が凄まじくひどい奴だったとかなんとか。父上も母上を守るために必死で強くなったんだそうだ。まあわかりやすいルールではあるな」

「うーん・・・」

アルフィリースが考えたことも無い世界の話だったので、同意しにくかった。仮に自分が部族の女で、ダンダみたいなのが一番強かったとすると、自分はどうするのだろうかと考える。そこで負けた時のことを考えると、アルフィリースは思わず身震いしてしまった。もっともダンダには失礼なことではあったろうが。

＊＊＊

「と、言うわけでカザス、我を抱かないか？」

「ぶふっ！」

その場にいた全員が噴き出した。全員で簡単な朝食を取っていたのだが、突然カザスに自分を抱けと切り出したのである。

これはさすがのユーティやミランダにも刺激が強かったようで、2人とも喉に干し肉を詰まらせ胸を叩いている。リサでさえ、口に含んだ水を吹いてしまった。いわんやカザスをや。ニアにいたっては後ろにひっくり返っている。平然としているのはエアリアルただ1人。

「どうした？　我では不満か？」

「いや、そういう問題ではなくてですね」

「ならどういう問題だ？」

「え、えと、私なんかちんちくりんだと、よく女の子にも馬鹿にされるような男ですよ？　エアリアルさんの方が不満なのではないのですか？」

「全く問題ない。むしろそいつらは見る目が無いのだろう。たしかに肉体的な強さとしては、カザスには見所は無いが」

「はあ・・・」

大草原育ちのエアリアルは、言葉を飾るということを知らない。さしものカザスも勢いに押し切られる。

「その分カザスは頭がいい。それに努力家で学ぶことに貪欲だ。肉体的な強さは我が補うとして、これからは強いだけでは生きていけないからな。やはり頭脳の良さも必要だ」

「はあ・・・まあ理由は分かりましたが、こ、こんなところで」

カザスが慌てふためいているなど、非常に珍しい光景かもしれない。そのせいで、ニアがどんどん真っ青になっていくのは誰の目にも入っていない。

「別に我は人目など気にしない。なんならこの場で抱かれてもいいぞ？」

「僕が気にします！」

「そうなのか？　都会の人間は面倒くさいな・・・草原では隠れるようなところはないから、気分が盛り上がればその場で皆始めるが」

「な、な・・・」

何がおかしいのかと言いたげに首をかしげるエアリアルに、顔まで真っ赤にするカザス。さらに真っ青になるニア。あまりの展開に全く頭がついていかない他のメンバー。その中でゆっくりとエアリアルが立ちあがり、カザスに近づきつつと傍に寄る。

「これ以上の言葉は不要だ・・・とりあえず文句は後で聞くことにしよう」

「え、え、え・・・ええ～！？」

「残念だが異論は認められない。草原では力関係が全てだからな・・・どうしても嫌なら、我を力づくでどかしてみるがいい」

エアリアルが甘い吐息をカザスにかけながら、全員の前で押し倒そうとする。まさかここで本当に始める気なのだろうか。カザスは完全に思考が停止してしまったのか、魂が口からはみ出ているようだ。だがそこに突然悲鳴が上がった。

続く

恋は力ずく？（後書き）

次回投稿は、１／３０（日）１５：００です。

不可侵の領域（前書き）

～あらすじ～

カザスを巡って争うエアリアルとニア。一方で大草原に訪れる者は？

「だ、だ、ダメ～！！！！」

ニアが電光石火の速度で2人の間に割って入る。そしてエアリアルからカザスをひったくると、カザスを守るように抱いて、ううう、とエアリアルを威嚇し始めた。それを見てきょとんとするエアリアル。

「どうしたんだ、ニア」
「だめだだめだ！　それはダメだ！」
「なぜだ？」
「カザスは私のだ！　お前にはやらん！！」
「ほう、ニアはカザスの恋人なのか？」
「そうだ！　・・・・・・あ」

言ってからニアは我に帰ったようで、周りを見渡すと全員がニヤニヤしていた。

「へ～、ニアがカザスと・・・ねぇ」
「それはリサも知らなかったのです。意外と手が早いのですね」
「先を越されたわね、アルフィ？　ぷぷぷ・・・」
「変な事言わないでよ、ユーティ」
「末長くお幸せに、2人とも・・・」

フェンナが締めくくると、やっと恥ずかしさを取り戻したニアが

真っ赤になって俯いてしまった。尻尾もぺたりと地面に着いてしまっている。
だがエアリアルは一向にひるまない。
「我は別にニアが本妻で、我が愛人でも一向にかまわん」
「私がダメなんだ！」
「ニアがどうかは関係ない。カザスに決めさせろ」
「ど、どうなんだ？　カザス！」

2人の女性に詰め寄られ、これ以上ないくらいうろたえるカザス。人生でこんな経験はそうないだろう。カザスも今までの人生と違いすぎるのか、とっさの応対が出来ていない。そんな様子をミランダ、ユーティ、リサは心底楽しそうに見ている。

「え、えーっと・・・・・・・・私が好きなのはニアさんなので、エアリアルさんは遠慮していただけると」
「カ、カザス」
「カザスがそういうなら仕方ないな・・・さすがにこうまできっぱり断られると、力ずくというのもな」

嬉しそうに目を潤ませるニアと、獲物を逃したように残念そうな顔をするエアリアルが対照的だ。よくこの状況で理性的な判断をしたものだと全員が内心感心しているが、カザスにしても精一杯の理性を振り絞った発言だったようだ。

「まあいつでも我が欲しくなれば言うといい。なんなら寝込みを襲ってもよいし、ニアに黙っておいてもいいからな」
「エアリー！」
「そう目くじらをたてるなニア。どうしてもそれが嫌ならしっかりカザスを捕まえておくんだな」

力関係が全てを決定するような草原で育ったエアリアルにしてみれば、この場を引いたこと自体がかなりの譲歩なのだろう。だがこれ以上は強く言わず、大人しく座って食事を続けるエアリアル。どうやら一件落着のようだが、一番ショックだったのはカザスだったのかもしれない。まだ真っ白である。

「カザス、大丈夫か？」
「え、ええ・・・なんとか大丈夫です、ニアさん」
「その呼び方は他人行儀で私は好かん。皆にもばれたし・・・私のことは呼び捨てにしてほしいぞ」
「では・・・二、ニア？」
「なんだ、カザス・・・」
「照れくさいです、ニア・・・」
「ごほんごほん！」
「何堂々と全員の前でいちゃついているんだよ、バカップル。そういうのは夜にやりなさいっての」

リサがわざとらしく咳ばらいをし、ユーティが2人の間に割って入り、ぐいと顔を引き離す。ニアはカザスをひったくった状態だったので、そのまま今度はニアがカザスを押し倒しかねない勢いだったからだ。
2人はやっとその恥ずかしい状況に気付いたのか、慌てて離れて居住いを正す。

「若いっていいね」
「おばさんくさいよ、ミランダ」
「なんだってぇ？」
「な、何でもない！」
「アルフィ、ＫＹですね」

フェンナが突っ込みを入れてくる。どこでそんな言葉を覚えたのか・・・どんどん俗っぽくなる彼女が心配なアルフィリースだった。

「で。真面目な話、これからどうするんだアルフィ達は」

エアリアルが食事を終えたのか、腕を組み真面目な表情で聞いている。だがそれは全員が同じ疑問だったので、アルフィリースの方を向き直る。

「そうね・・・あのデカブツの追撃が無いならいいんだけど、希望的観測でしかないわね。ならばやることは１つ」

「この草原を突っ切るか」

全員が外を見る。勢いは衰えたとはいえ、まだ外には何本かの竜巻が見られるのだ。この中を突っ切るのは自殺行為にも見えたが、留まることもまた自殺行為に等しいのだ。だがアルフィリースにも全く目算が無いわけではない。

「エアリーなら突っ切れるんじゃない？」

「ああ、それは可能だ。だがシーカーの森までは本来ならここから直線距離で３００ｋｍくらいだが、途中に危険な地帯があったりで、なんだかんだと2日は通常かかる。それに竜巻を考慮すると、５日は見てほしいな」

「おいおい、じゃあ竜巻の中寝泊まりするのかい？」

「まさか。ちゃんと父上と我が作った避難所がある。そこを使うさ」

「じゃあ決まりね。食事がすんだら荷物をまとめてすぐに出発するわ。皆、準備を」

アルフィリースの決断と共に、全員が準備をする。既に準備を終

えていたアルフィリースはいち早く外に出るが、そこにミランダがやってくる。

「どしたのさ、アルフィ」
「ううん、なんでもない・・・」
「なんでもなくはないだろう。そんな顔をして」
「え？」

アルフィリースは気が付いていなかったが、あまり良い顔色をしているとはいえなかったのだ。

「何を心配しているのさ」
「うん・・・もうすぐフェンナやエアリーとお別れなのかなとか思っちゃって」
「そうか、そうだね・・・まあ心配しなくていいわよ。私はずっと傍にいるわよ」
「リサもですよ」

後ろからリサが出てくる。

「リサ」
「まあ永遠に、とは言いませんが、当分の間は大丈夫です。それに死ぬわけじゃありません。いつでも会いに来れますよ」
「と、いうことだ」
「そうよね・・・」

だがアルフィリースは何かしら不安を禁じ得なかった。本当に別れてまた会えるのだろうか。そんな得体のしれない不安がアルフィリースの心中に渦巻いていた。

＊＊＊

そして一方でファランクスが魔法を使った現場である。魔術師の少年が魔法を打ち消したと言っていたが、果たしてその通り、既に大地は冷えて固まっていた。だが元々の土地は変形し、ファランクスが住んでいた岩山のような場所も、もはや溶けて原形をとどめていない。その場所に降り立つのは、魔法を使ってファランクスの炎を打ち消した少年本人である。

「よし、無事冷えて固まったか。思ったより速かったな。もっとも周辺部にまでは、まだ魔法も行き届いていないようだが」

少年はふわりと大地に降り立つと、周囲に誰もいないことを確認する。実際彼の言うとおり、ファランクスが魔法を使った中心部では既に冷えて固まっているわけだが、まだ周辺部では炎上が続いていた。だがその事はあまり重要ではないのか、少年が気にかける様子はない。

「今のところ誰もいない、か。まあ炎があのまま燃えているのもまずかったからな。あのぶんじゃ地面を溶かして遺跡がむき出しになるところだった。まだこの遺跡を人目にさらすわけにはいかない・・・本来は１０００年早い。だが、そうも言っていられないのが現状か」

誰に語るでもなく、少年は呟く。

「さて、中はどうなっているかな」

少年の姿が地面に沈む。地面の中では圧力もかかり、呼吸もできないはずだが少年が気にする様子は全くない。しばらくすると少年

は地下にある洞穴にでる。ファランクスが封印したと言った、あの洞穴である。

「ここは・・・Ｂ４くらいか？　まだ普通の洞穴だが・・・ん？」

地響きと共に何かが少年の元に歩いてくる。しかも前後同時である。相当巨大な何かが歩いてくるようだが、少年は一向に動じない。

「守護者（ガーディアン）か。まだこの遺跡を守っているとはご苦労なことだ」

少年の目の前に現れたのは、体を銀白色に輝かせる竜。大きさはファランクスの倍もあろうか。鋭そうな爪に、尖った牙。人間では対抗できないほどの生物であるのは一目瞭然である。また背後から姿を現したのは、巨大な全身鎧づくめの巨人。これもまたギガンテスよりも大きい。両手には少年の倍をゆうに超すであろう刀身の大剣を持ち、その表情は覗えない。殺気すらも定かではないが、剣を既に抜き放っているところをみると、もはや戦闘態勢なのであろう。

その２体が少年から一定の距離を取って止まる。戦闘態勢に入ったのは間違いないだろう。その距離がじりじりと詰まる。

しかし少年は不敵に微笑み悠然と竜の方に歩くと、竜が口を開きブレスを吐こうとする。だが少年は少しも慌てる様子が無く、ゆっくりと竜に語りかけた。

「心配するな。私は敵ではない」

そして少年が掌をかざすと竜は敵対行動を止め、少年をそのまま通した。

「ふむ、まだ命令を聞くのか。さすがに優秀だな」

少年は竜に一瞥をくれると、スタスタとその場を後にする。だがやがて歩くのは面倒だと思ったのか、またしても地面に潜り地下に向かうが、何層か潜ったところでそれ以上潜れなくなった。

「ここからはズルができないのか。大人しく封印を探すか」

そして少年は探索を開始する。手を胸の前で合わせ、ゆっくりと離すとその間に光の塊ができる。その塊が泡立つようにいくつかの小さな塊に分かれ、少年の周りをゆっくりと回り始めた。

「よし・・・行け」

少年の言葉と同時に、光が散っていく。その後しばらく少年はそのまま立ち止まっていたが、やがて、

「見つけたか・・・」

と一人ごちると、浮遊の魔術を使って高速で動き始めた。そのまま何ｋｍ移動したのか。少年はギガンテスでも通るのかといわんばかりの、巨大な扉の前に立っていた。しばらく扉を調べていた少年だが、開けても問題ないと判断したのか、自分の3倍はありそうな扉を軽々と押し開ける。

扉が開かれた先の間は、これまでの洞窟とは全く様相が異なっており、土に見える壁から一気に水晶の壁へと変わっていた。水晶は少年の姿を反射する鏡のようだが、どこからか光が発せられているのか、部屋全体が明るかった。

地面まで水晶のその部屋を、ゆっくりと歩む少年。彼が部屋の中ほどまで進むと、突然どこからともなく声がした。

「侵入者を確認。この部屋を隔離後、排除します」
「1番から3番までの召喚陣を起動」

突然水晶の壁が一部引き下がり、現れた空間に召喚陣が浮き上がる。そこから出てこようとしている魔物は、異常に強力であることが素人でも分かるほどの殺気。だが少年が

「停まれ」

と一喝しただけで、魔法陣は一斉に起動を止めてしまった。そして奥にある扉まで一気に突き進む少年。

「無駄な戦いはしないですんだか。私は戦いが嫌いだからな、何よりだ」

少年は扉を見上げる。そこには見たこともないような複雑な魔法陣が描かれている。そして扉がある壁の水晶は様相が他の壁と異なっており、透き通ってむこうが見えている。少年が壁に触れようとすると、ばちりとその手が弾かれた。

「ここの封印は順調に起動、と。ここから先は封印を解かないと先に進めないが、この向うにいる魔物を解放するのはまずいな・・・」

扉の向こうには何体もの魔物が徘徊している。種属はそれぞれバラバラなのだが、争う様子は一切ない。その姿は不気味極まりなく、頭がいくつもある巨人、天井を這いずる巨大なナメクジのような軟体生物、体全てが金属のような蜘蛛のような生き物など、一般には知られていない生物ばかりである。
だが向こうからはこちらが見えないのか、全く少年を気にかける様子は無い。

「ふむ、どうするか・・・中に入りたいのは山々だが、まだそこまでしなくともよいか。だがここに人間が近づかないようにする措置は必要だな。仕方ない、地上に戻るか」

少年はそれだけ言うとあっさりと身をひるがえし、その場を後にする。部屋は再び静寂に包まれ、ただ徘徊する魔物を水槽の中の出来事のように映す水晶が残るのみだった。

続く

不可侵の領域（後書き）

次回投稿は２／１（火）１８：００です。

草原に集う者達（前書き）

～あらすじ～

炎上しただいそうげんに訪れる者は、少年だけではなく・・・？

草原に集う者達

＊＊＊

焼け野原と化した大草原に、地中から少年が姿を現した。彼は姿を現すと懐からなにやら種のような物を取り出し、その辺中に巻き始めた。あらかた巻き終わると今度は地面に片手をついて、ぶつぶつと長い詠唱を呟いている。

そのまま数分ほども経っただろうか。少年は手を放すと、

「これでいいか」

と呟き、その場を後にしようとする。だがふとその足が止まり彼が何かを唱えると、姿が透明になった。認識阻害の魔術の一種で、視覚を避ける魔術である。平たく言えば姿を消したわけだ。

少年が姿を消した後、少し離れた場所に3人の少女が姿を現す。どうやら大草原を歩いて来たようであり、焼け野原と化した大草原の端近くまで来ると、そのうち1人が悲鳴を上げた。

「うっひょー！　こりゃすげえな。ほんとに焼け野原だぜ、リアシエッド」

「やかましいですわよ、セローグレイス。全く品の無い・・・いつも優雅に振舞いなさいとお姉さまに言われているでしょう、ねえハムネット？」

「・・・どっちでも。それより、早く仕事する、帰る」

3人の少女は全員が優雅なドレスを身につけており、その生地・装飾・仕立てから相当の一級品だということが見て取れた。だが不

思議なことにそれぞれがそのドレスに似つかわしくない物を背中にしょっている。それを調理器具といえばいいのか。だがサイズが全く見合わない。

セローグレイスと呼ばれた少女は緑を基調としたデザインのロングドレスに、なぜか背中には大きなすり鉢。しかも鋼鉄製なのですり鉢というよりは、金棒と言った方がいいのかもしれない。見た目は3人の中で一番お嬢様風であり長い緑髪をツインテールにしているのだが、口調は汚く、事あるごとにその辺に唾を吐いている。その度にリアシェッドが顔をしかめるのも無理はなく、なんとも品も素行も悪い。

そのリアシェッドは腰に2本の長い包丁を差している。包丁の刃渡りはおよそ５０ｃｍにも及び、さしずめ包丁二刀流というところだろうか。リアシェッドは青髪のおかっぱ頭であり、青を基調としたドレスであるが、裾は短く膝上であり胸元も大きく空いている。口調や丁寧な言葉づかいとは裏腹に、露出度は高めだ。

最後のハムネットは赤いロングドレスなのだが、ほとんどの部分がニット使用になっておりほとんどが透けている。当然下着まで見えてしまうわけだが、凹凸にかける体格のせいで扇情的には全く見えない。そして背中にはおおきなフライパンと、体中には至るところにベルトを巻きつけナイフのように包丁が仕込んであり、料理人というよりは殺し屋と言った方が適切だ。髪は個性的な天然の巻き毛であり、セットのやりようがないのか寝ぐせの様にも見える。眠たそうな目をしているから余計だろう。そして鳥の巣と勘違いしているのか、その頭には鳥が一羽止まって、囀（さえず）っている。

野生の獣が跋扈するこの大草原において、一見狂人にも近いような3人の個性的な少女は、めいめい勝手にやかましく騒ぎ立てる。

「全くよぉ、お姉さまが『炎獣を食べてみたい』なんて言うから、狩りに来たらこれだよ。何があったんだ？」

「これは魔法でしょうね。察するに炎獣がやったのだと考えるのが妥当・・・しかし、炎獣がこれほどのことをしないといけなかった相手という方が、私には気になりますわ」
「確かに、僕も興味、ある」
「へぇ～、ハムネットが興味を示すなんて珍しいな。しかしどうするよ。炎獣を食べれないなんて知ったら、お姉さまはカンカンだぞ？」
「仕方ないんじゃありませんのこと？　まあ炎獣は死んだと考えるのが妥当でしょうけど、もういないものはどうしようもないでしょう。それより前回はお姉さまの気まぐれで、海に住むかどうかもわからない伝説上のクラーケンを狩ってこいと言われて、狩るまでに何年かかったと思いますの？」
「確か２３、年」
「それでお姉さまの一言目が『まずい』だもんな・・・全くやってられないっての」
「仕方ありませんわ、お姉さまは屋敷から動けませんもの。だからこそ私達がこうやって世界中に赴いているのではなくて？　私達はまあ監視付きとはいえ、自由にやれていると思いますわ」
「うん、でも、ギガノトサウルス程度、じゃ、歯ごたえない」

ハムネットの意見に他の２人も同意する。

「だよな～ちょっとこの棒でこづいたら死ぬんだもんよ。全く歯ごたえなかったぜ」
「地面が変形するほど殴るのは『ちょっと』とは言いませんわ」
「こまけぇことはいいんだよ。ああ、暴れたりねー」
「でも、もう期限、近い。帰らない、と怒られ、る」
「ですわね。とりあえず先ほど見かけたクックドゥーの群れ２００体ほどを全滅させて持ち帰る、というのはどうでしょうか？」
「いいね、焼き鳥か。だけどお姉さまがなんて言うか」

「どうせお姉さまは悪喰ですわ、腹が膨れればいいんですのよ。１００体も食べれば満足して再びお眠りになるでしょう」
「じゃあ、早く、行こう。ここ、は、あまりよくない」
「何かあるのか、ハムネット？」

セローグレイスが尋ねる。

「いっぱい、色んな奴らが、きてる。監視もそうだし、他にも、視線、いっぱい感じる」
「あら、いいじゃありませんの。殿方に見つめられるなんてゾクゾクしますわ」
「馬鹿言ってんじゃねぇよリアシェッド。俺らの姿を見られたらまずいだろうが。一応屋敷から出られないことになってんだからよ」
「まあセローグレイスは肝が小さいこと。そんなことは建前だと、少し頭が回る連中ならわかってますわよ。それでも私達のことは黙認するしかない。でしょう？」
「はっ、普段は従順なふりしてこれかよ、この淫売が。俺の口調を指摘する前に、その娼婦以下の服装を何とかしろってんだ」
「・・・なんですって？」

リアシェッドがずらりと包丁を抜き放つ。

「取り消しなさい、セローグレイス。今なら土下座して私の靴を舐めれば、許して差し上げますわ」
「やなこった。てめえに謝るくらいなら、ギガノトサウルスのケツに頭突っ込んだ方がマシだね！」
「・・・よくぞ言いました。では死になさい！」
「やってみな！」

リアシェッドとセローグレイスが俄かに殺気立ち、２人の武器が

交差すると思われたその瞬間――2人の喉元に包丁を突き付けるハムネットが間に立つ。

「僕達同士、の、争いは、不毛。やめる」

「ちっ！」

「・・・仕方ありませんわね」

おとなしく武器を治める3人。そしてそれぞれがお互いを見やり、ため息をつく。

「で、クックドゥーを狩るんだっけ？」

「ええ、そうですわね」

「なら、あっち」

ハムネットが指さす方向にくるりと向きを変える3人。そして3人はまたしてもめいめい勝手に愚痴を言いながらその場を去って行った。

＊＊＊

その光景を、姿を消した少年は比較的間近で見ていたのだが、遠方から見ていた人物達もいた。

「今のが『スピアーズの4姉妹』ですか？」

「ああ、そうだろうね。私も見るのは初めてだが」

「へぇ・・・私達とどちらが強いでしょうか？」

「はっはぁ！　俺達より強いのがいるかよ！？」

「またまたすぐそういうことを言う。まあ僕達より強いのなんてそういないとは思いますが、あの4姉妹は別格ですよ。戦わないにこしたことはない。ですよね、ゼムス様？」

だがゼムスと呼ばれた若者はにこりとするだけで、何も言わなかった。

「まあ討伐命令が下れば狩るのみ・・・ですわね」
「今回のファランクスもそうだな」
「そうですね。せっかく意気込んできたのに戦えなかったのは残念ですが。どこかで適当な部族でも憂さ晴らしに滅ぼしますか？」
「何年か前に、大草原に来た時みてぇにか？」
「ええ。ここなら派手に暴れても誰も見てませんからね。どうでしょう、ゼムス様？」
「そうだね・・・」

ゼムスは少し考え込んだようだが、やがてゆっくりと頷いた。

「ひゃっほう！　ゼムスのお許しがでたぜ～」
「ふふ、楽しみですわね」
「思う存分やりましょうね、皆さん？」
「勘違いをしないでほしいのだが・・・」

ゼムスがゆっくりと語る。彼の口調はあくまで静かに、穏やかに。だがとびきり残酷に。

「ただ殺すのでは面白くない・・・男は動けなくして、女は男どもの目の前で壊してやれ。子どもは生かしてやろう」
「子どもに情けをかけるとは慈悲深いじゃねぇか。普段なら皆殺しなのによ」
「いえいえ、その方が残酷ですよ。だってこんな大草原に子どもが放置されてどのくらい生き残れると思います？」
「・・・それもそうか。糞餓鬼どもが大草原の獣を前に、おたおた

するのを見るのは面白ぇな」
「今回は期日が長いですものね。まだ2週間ほどは余裕がありますわ」
「じゃあ長いこと楽しめるな！」
「しかしゼムス様もお好きですね～。さっきアイアンヘッジの群れを全滅させたばかりなのに、まだ血が見足りないのですか？」

魔術師風の若者が呆れたようにゼムスを見る。だがゼムスはやはりにこやかにほほ笑み、

「ああ、私もストレスがたまっているんだよ。こういうところで発散しておかないと、都市に帰った時にぼろが出る」
「まあ世界が期待する『勇者様』だもんな、お前は」

ガハハと品の無い戦士風の男が笑う。だが今度はゼムスは薄く微笑んだだけで何も言わず、その場を立ち去ろうとする。それを見て仲間たちもゼムスに続く。と、仲間の僧侶風の女が振り向き、1人戻る。

続く

草原に集う者達（後書き）

次回投稿は２／３（木）２０：００です。

次回はちょっと危険な話かもしれません。一応セーフらしいですが・・・

無残（前書き）

～あらすじ～

大草原に集まる猛者達。その中で勇者一行が行うことは・・・？

ちょっと今回表現きつめです。苦手な方はご注意を。

無残

「あらあら、聞いちゃったのね、今の話」
「むー、むー！」

その場には手足を縛られて地面に放置された男女が1組。男の全身はズタズタにされており、息があるのが不思議なくらいだ。女は裸にされ、随分と乱暴された後がある。足には5を示す数字がいくつも刻まれており、内股には血がついていた。彼らはゼムス一行が旅をするうえでの「暇つぶし」であり、その辺の部族からさらってきた男女だ。2人が集落から離れて愛を囁いているところを、捕まえたのである。

「さあて・・・どうしましょう。どうしてほしい？」

女僧侶は縛られた女のさるぐつわを外してやる。まだあどけなさを残す外見だ。その女が涙を目にいっぱいに浮かべて助けを請う。

「お願い・・・アタシ達を返して。お願い・・・」
「それは聞けない頼みです。貴方達にはここで死んでいただきます。我々の事をぺらぺらと話されては迷惑ですから」
「そんな・・・誰にも話さないわ！」
「信用できませんね。それにどのみち男はもう助かりません。あなたとて、そこまで汚されてどうするのです？　もう女として使い物にならないでしょう。何せ昨日は魔獣に・・・ですものね」
「誰のせいで・・・う、ぐっ・・・」

女が声にならない嗚咽を上げ始めた。その様子を目を細め、悲しそうに見る僧侶。だがその口から発せたれるのは決して穏やかな言

葉ではない。

「あの程度で壊れてしまうんですから、まあ貴方はきっとその程度なんですよ。神に恵まれなかったと思って、諦めなさい」

「そんな、ひどい・・・」

「本来ならひと思いにとどめを刺すのですが・・・」

女僧侶はちらりと周囲を見る。すると血まみれの男の匂いを嗅いだのか、周囲には魔物が集まって来ていた。しかも、先頭にいるのは緑毛猿（ベルベトエイプ）と呼ばれる魔獣である。それをみて良いことを思いついたのか、僧侶はおもむろに服を脱ぎ始め裸になると、死にかけの男の服を脱がせ、腰の上にまたがる。

「何を・・・」

「どうせ死ぬなら、せめて私の役に立ってもらいましょう」

そして足が変色するくらいきつくしばり上げ、魔術で強制的に男の血流を操作する。そして男の首を締めながら、腰を振り始めた。

「ふふ、いいですね・・・やはり人間は死にかけるその瞬間が、一番良く魂を輝かせる」

「やめて！　お願いだからやめてっ！」

「どうですか、愛しの男が目の前で汚され死んでいく様を見るのは・・・興奮しませんか？」

僧侶が妖しい笑みを浮かべ、女を見下ろす。その目を、怯えながらも女はこれ以上ないくらいの憎しみでもって見返した。

「お前は、お前は・・・なんて汚らわしい。１００回でも呪われるがいい！」

「残念ながら私は僧侶なので呪いは効かないのです。神の加護がありますから」
「なぜ神がお前みたいな人間を選ぶんだ・・・」
「あら、神とは誰にでも平等ではありません。特に私の神はそうです。そんなことも知らないのですか？」

くす、と笑顔で答える女僧侶。その顔を見て、目だけで殺しかねない勢いで見返す女。だがその目線がより女僧侶を楽しませるだけだということを、彼女は知らない。

「いいわね、昂ぶりますわ・・・どうかそのまま私のことを見ていてくださいませ・・・お猿さん達と一緒にね。ああ、目を放してはいけませんよ、そうすればすぐにこの男は殺します」
「ぐ、くく・・・」

そして女僧侶の非道で悲惨な行為はじっくり、ゆっくり、ねっとりと長きにわたって続けられた。下の男は死にかけるたび回復魔術で生命をつながれ、女僧侶を愉しませるためだけに生かされた。だがやがて彼は痙攣すらできなくなり、事切れる。すると僧侶はいっぺんに興味を失ったように立ち上がり、身支度を整えその場を離れようとする。

その様子を見て、女が叫ぶ。

「私も殺せっ！」
「お断りします。もう貴女に興味はありませんので」
「何だと？」
「それにすぐ男の後は追えますわ。すぐそこまでベルベトエイプが来てますから」
「え・・・」

女は激昂したのもつかの間、背後を見ると視界に大量の猿が入り、一瞬で顔が青ざめる。この後僧侶が何を考えているのか想像がついた彼女は、ガタガタと震え始めた。

「お、お前と言う人間はどこまで・・・」

「ああ、そういえば」

女僧侶は手をぱんと叩く。

「ベルベトエイプは人間の女性を犯しながら殺すんでしたわね。それも何晩もかけて。早く楽になりたいなら正気は失くした方がよろしいかと思います。これは忠告ですわ。あ、でも貴方は適当に壊れてらっしゃるから、逆に長持ちしてしまうかもしれませんわね」

「そんなことされるくらいなら！」

女は舌を噛もうとしたが、一瞬早く女僧侶は女の口に詰め物をする。そしてご丁寧に、

「ああ、いけません！　自殺は大罪ですから、死後安らぎを得られませんわ」

「むー！　むー！！」

「では私はこれで去りますが・・・どうか貴方に安らかな死が訪れますよう、神に祈っておきますわ」

女僧侶は胸のアクセサリを握って祈ると、もはや見向きもせずにその場を離れた。女は地面をのたうちまわるが、拘束はきつく、外れる様子は全く無い。

そして女僧侶がその場を離れてしばらくすると、ひときわ大きい悶絶の声が聞こえた気がしたが、すぐに猿達の咆哮によってかき消された。

その後しばらくしてゼムス達に合流する女僧侶。

「遅かったな」
「ええ、楽しんできましたから」
「全く、とんだ女だよお前は」
「たまには僕たちとも楽しみませんか？」

仲間達の言葉に笑顔で答える女僧侶。とてもいままで残酷なことを行っていたとは思えない。

「別に私はいつでもいいですわよ？」
「やめとけ、こいつを襲うのは命がけだ。おれの体力でさえ死にかけた。お前じゃもたんよ」
「ええ～」
「ふふふ。私とまぐわって平気なのはゼムス様だけ。ね、勇者様？」

だがゼムスは、やはりにこりとするだけで何も言わなかった。
その晩のこと。とある集落から悲鳴が上がり始め、その悲鳴は１週間以上途切れることがなかった。そして悲鳴が消えた後、その集落には人間が存在した痕跡すら残らなかったという。

続く

無残（後書き）

次回投稿は２／５（土）１２：００です。

今回があまりにも救いの無い話だったので、次回はちょっとライトタッチに。

次回から新シリーズの一話目です。第一部もクライマックスが近くなって参りました。

死を呼ぶ名前、その1～お調子者～（前書き）

～あらすじ～

大草原を一路北東へ向かうアルフィリース。その中のある一コマ。

死を呼ぶ名前、その1～お調子者～

＊＊＊

それら一連の出来事を全て見ていた少年は姿を現した。眼下には、緑色の猿達に襲われる女性がいる。女僧侶の言った通り、女性はなまじ壊れていたせいで中々正気を手放せないでいた。

「むごいことをする。あんな者が勇者としてもてはやされているとはな」

少年は呟く。彼はドゥームなどとは違い、残酷な思想は持ち合わせていない。だがその目は決して女から離れることも無い。そしてその目が猿に襲われる女と一瞬交わる。女は気づいて助けを求めるように手を天空に突き出すが、少年は何も態度を変えることはなかった。

「・・・悪いが、私にはこの場をどうすることもできない。本来なら楽にしてやりたいのだが、許せ」

誰に向けた言葉であったか。あるいは少年の良心の呵責から出た言葉なのか。それだけ呟くと、少年はその場を後にした。後には猿の群れと、名前も知らない女だけが取り残されていた。

＊＊＊

先ほどの場所を離れた少年は、空を魔術で浮遊しながら辺り一帯にセンサーをかける。先ほどの姉妹、勇者一行、他にも実は気配がいくつもあった。

「どうやら色々な集団がそれぞれの部下を派遣しているのか。思ったよりも人間達は敏感だな、もうここを嗅ぎつけるとは。本来ならやりたくないが・・・仕方ない」

少年は焼けた大地に向かい、長呪詠唱を行う。その言語は通常この大陸の人間が聞き慣れないものだったが、徐々に地面から先ほど巻いた種が芽吹いてくる。そしてありえない速度で植物が成長を始めると、あっという間に小さな森になっていく。

少年が詠唱を止めた後も植物は成長を続け、もはや大森林のような様相を呈していた。だがその様子を見届ける少年には、なぜか落胆の色が見えた。

「出来れば魔法は使いたくないんだがな、結果的には怪しまれてしまう。だがこれでここ一帯に人間が侵入することはできまい。よしんばできたとして森が迎撃するし、私の命が続く限りは効果も続くだろう。・・・にしても、このままでは」

少年は東の方向を見る。おそらくはアルフィリース達がいるであろう方向だ。

「今のままでは奴とアルフィリースがぶつかるのか・・・果たして彼女は生き残ることができるだろうか。だがもし生き残れば、その時こそ私の出番が来るだろう」

そして今度こそ少年はその場から姿を消し、後には成長を続ける森だけが残っていた。

＊＊＊

その頃、アルフィリース達は一路シーカーの集落を目指す。まさかファランクスが死んだ場所でそのような事が起こっているだろうとはエアリアルすら露知らず、彼女達の全精力は竜巻を避けながら一刻も早くシーカーの里に到着することに注がれていた。

今晩休憩する場所が決まり、エアリアル、ニア、カザス、ミランダはご飯の準備を。アルフィリース、リサ、フェンナ、ユーティは近場で燃えそうな薪などを集めたり、簡単な食材調達の係をしている。その道すがら、アルフィリースとフェンナが話している。

「ねえ、今から向かうシーカーの里は昔からあるの？」
「いえ、比較的最近、といっても３００年以上は前ですが」
「じゃあいつか言ってたみたいに、移民ってやつなのね？」
「ええ、シーカーは元は南のもっと暖かい所に住んでいましたから。お恥ずかしながらシーカーの中にも色々ありまして、南にはシーカーの中でも保守派の一族が。移民したのは比較的革新派の一族です」
「そうなんだ」
「何で揉めたんです？」

リサが会話に加わってくる。どうやらセンサーという職業の性質上、リサは情報収集をしておきたいらしい。

「他種族との関わりについてです。保守派の一族は他種族とは一切の関わりを断つのがよいとし、移民した一族は他種族と関わりたいと主張しました。その意見の食い違いから、北に民族移動をしたと聞きます」
「にしては噂を聞きませんね。リサの情報網を持ってしても、シーカーが大草原にいることすら聞かなかったのです。大草原に入る前、この周辺のギルドを回った時にそれとなく聞いてみましたが、同じ答えでした」
「・・・恥ずかしながらリサの言うとおりです。いくつかの苦難が

ありつつも移民を無事終えたのはいいのですが、他の種族と接触を取ろうとしたところで争いが起きたようです。一般的な人間は元よりシーカーをダークエルフと呼んで蔑(さげず)んでましたし、時代は黎明期にあり、人間達の暮らしは大戦期よりもある意味荒んでました。

人間と交流を持とうとしたこと自体は正しかったのでしょうが、人間の世界で何が起きているかを知ろうとせずに、一方的に交流を持とうとしたことも浅はかだったのです。そう主張するシーカーもいたのですが、恥ずかしながら結局移民したシーカー達も大草原で引きこもってしまったのです。最初の接触が失敗に終わったことで自信を失くしたのでしょうね。それでも一部の部族とは交流を持っているようですが、大草原以外の人間とはとても・・・」

「難しいのですね」

「ええ。世の中正しい事、合理的な事ばかりがまかり通るわけでもないものね」

思わず3人は考え込んでしまうが、いつまでもそうしてもいられない。なんだか暗い気持ちになるのを振り払うようにアルフィリースが話を変える。

「そういえばフェンナはこっちに知り合いがいるの？」

「ええ、何人かは。何年か前に交換交流ということで、こちらの集落から私の里に何人かシーカーが来ました。ですので名前は互いに覚えています」

「ちなみに名前は？」

「ウィラム・・・ウィラム＝オールドレイトと」

「ほほー、その人がフェンナの恋人か～」

突然ユーティが割り込んできた。フェンナの周りをイタズラっ子のような顔をしながら飛び回る。

「なっ！　恋人だなんて、違います！！」
「じゃあチミは遊びでキスをするのかね？　以前言ってたキスの相手はその人ではないのかね、うりうり」

妖精くせに恋の話が大好きなユーティは、事あるごとに人の恋愛話を聞きだそうとしていた。ミランダやリサは上手く逃げるのだが、フェンナやアルフィリースは格好の餌食になっていたのだ。そのせいでフェンナは以前自分の里に来た若者とのくだりを、ほとんど全部暴露させられていた。

「そ、それは・・・確かに互いにいいな、とは思いましたが・・・」
「やっぱりキスしてんじゃん～」
「やりますね、フェンナ」
「ううん、なんだか置いて行かれた気分・・・」

リサの目がユーティと同じくきらりと光る。一方でアルフィリースは1人で落ち込んでいた。

「（み、皆大人だわ・・・ミランダはあの通り男の扱いには慣れてるし、リサも以前恋人がいるような話をしたし、ニアはカザスと付き合っているし。エアリアルは思っていたより男性に積極的で、あの様子じゃあっという間に恋人ができるわ・・・せめてフェンナはまだだと思っていたのに、よく考えたら年齢だけなら私の倍近いのよね。ついつい忘れちゃうけど）」

アルフィリースはよくよく自分と同じ年代の男性を思い浮かべようとして見るが、考えてみると彼女は同年代の男性と親しく話したことなど一度も無かった。アルベルトはどこか遠い人のような感じだったし、ふとラインの事が頭に浮かぶが、思わず頭を振って彼の顔を打ち消す。

「（なんてこと、私って同世代の男の友人がいないわ！　せいぜいあの変なもっさりした男だけ・・・そりゃ恋人出来ないわよね。なんとかしないと、行き遅れちゃうかも！？）」

それはアルフィリースに限らず、女性の深刻な悩みだったかもしれない。貴族の女性は生まれつき許嫁がいたりもするし、そうでなくとも成人になった時に誰も言い交わした人間がいなければ、結婚を前提とした交際ができるような男性を紹介されることはままあった。農村部にいたっては娯楽も少ないので、成人を待たずして結婚することも少なくない。アルフィリースの二軒隣の家の女の人は、１４で子どもができたことがわかったので、お腹の父親とそのまま結婚したと言っていた。

国によっては成人の定義が１８の場合や、逆に１５の場合もあるので土地によって多少婚期にずれが出るのは分かったが、特に仕事を持たない女性は一般的に２０までに結婚するのが普通であった。アルフィリースのように１８になっても恋人の１人も持ったことが無いのは珍しい事であり、まして彼女は美人であったからなおさら稀であったろう。本人が多少鈍いことが、より拍車をかけたことは否めないが。

そんなアルフィリースが落ち込む一方で、、ユーティはフェンナをからかい続けている。

「フェンナは大人、フェンナはスケベ、フェンナはいん・・・ぐぇっ！」

そのユーティをフェンナが鷲掴みにした。フェンナの表情が笑顔だけに一層怖い。ユーティもやりすぎたことを悟ったが、時既に遅し。

「フェ、フェンナ・・・？」
「ユーティ？　今晩の鍋のダシが決まりました」
「な、鍋の内容を聞いてもいいかしら？」
「ええ・・・今夜は妖精鍋です♪」
「ひ、ひぃぃぃぃぃ！？」

ユーティが縮み上がる。その様子を見て、リサが非常に楽しそうだ。

「それはさぞかしオイシイですね、色んな意味で。ぷくく・・・」
「リサ！　助けなさい！？」
「たまにはユーティも痛い目を見るといいのですよ」
「ひゃあああ？　アルフィ、アルフィー！！」

ユーティが必死で助けをアルフィリースに求めるが、自分が行き遅れるかどうか真剣に悩むアルフィリースは、ユーティのことはそっちのけである。

「え？　私、今それどころじゃないから」
「ぎえええええ！？　まさかの死亡フラグ？」

ユーティがもがくが、フェンナはこんなに力が強かったのかというくらいの握力でユーティを締め上げていた。そして折悪く、

「おーい、湯がわいたぞ～」
「何か採れたか？」
「ええ、良いダシが出そうなものが」
「ぎょえええええ。ダレカタスケテー」

どこかで聞いたようなセリフをユーティが発したが、フェンナは

お構いなくユーティを鷲掴みにしたまま宿泊場所に入って行ったのだった。

続く

死を呼ぶ名前、その1～お調子者～（後書き）

次回投稿は２／６（日）１２：００です。

死を呼ぶ名前、その2～ニアの悩み～（前書き）

～あらすじ～

竜巻が立ち上る大草原に飛びだしたアルフィリース達。休憩所にて休むアルフィリース達だったが・・・？

死を呼ぶ名前、その2～ニアの悩み～

＊＊＊

その晩、宿泊場所でのこと。食事も終わり、鍋はきれいに空になっている。その後にはユーティの残骸が・・・あるわけがない。鍋の横でがっくりと膝まづいて、息を切らせるユーティ。

「はー、はー・・・死ぬかと思った」
「ユーティが悪いのですよ」
「どうしてギリギリまで助けてくれないのよ、リサ」
「まさか本気だとはリサも思っていなかったので。これからはフェンナを本気で怒らせないように、リサも気をつけるとしましょう」
「ワタシもそうするわ・・・」

さしものユーティも、熱湯の中で煮られかけて反省しているようだった。普段穏やかな者ほど怒らせると怖い。ユーティが大切な事を1つ学んだ日だった。

宿泊場所は地面をくりぬき、簡易な洞穴にしてある。元々はファランクスが自分用の避難場所として作ったものであり、しっかりと彼の匂いや痕跡が付いているため、ここをねぐらとして使用する獣は皆無である。また簡易とは言え竜巻で吹き飛ばされるような代物でもないため、とりあえず中にいる限り竜巻が真上を通過しても大丈夫だ。

その中でアルフィリースとニアが出口に近い所で番をしている。

「風が強いわね」
「ああ」
「嵐が去る前のひと吹き、というところかしら」

「そうかもな」
「夏とは思えないほど涼しいわね」
「ああ」
「ニア・・・1＋1は？」
「そうかもな」
「これは駄目ね・・・」

ニアは完全に上の空だった。2人は隣り合って座っているのだが、アルフィリースが近づいても何の反応も無い。普段ならニアに近づくと、間違いなく尻尾が反応する。そこでアルフィリースはニアの尻尾を不意打ちで思いっきり握ってみた。普段なら不意打ちでも触ることすらかなわないのだが。

「えいっ！」
「ふぁあああ！？　何するんだ、アルフィ！！」
「だって、何も反応ないから・・・」
「だからって尻尾を鷲掴みにする奴があるか！　尻を鷲掴みにされるより恥ずかしいんだぞ？」
「いいじゃない、お尻くらい。それともカザスにしか触らせたくないとでも言うの？」
「そ、そ、そんなわけは無いだろう！？」
「（図星なのね・・・）」

ニアの尻尾がピコピコと動く。全く分かりやすいことだ。アルフィリースはわざとらしいほど大きくため息をつく。

「な、なんだ。そんな大きなため息をついて」
「困るわよ、ニア。恋愛は自由だと思うけど、そんな見張りもできなくなるほど熱中するのはどうかと思うわ。戦士なら頭の中を切り替えないと」

「す、済まない。だがカザスの事を考えていたわけではなくて・・・」
「じゃあ何を考えていたの？」
「うん・・・」

ニアにしては珍しく歯切れが悪い。ニアは話そうかどうか迷っていたみたいだが、このままではどうしようもないのを悟ったのか、重い口を開き始めた。

「実は・・・そろそろ旅の期限なんだ」
「そういえば武者修行の旅だったのよね」
「ああ。それで色んな事を考えてしまってな」
「例えば？」
「元々旅をしようと思ったきっかけはうちの隊長なんだが・・・私は何かと肌が合わなくてな。私には随分前から１００人長の話が来ていたんだが、うちの隊長が首を縦に振ってくれなくて、いつも話が流れていた。それで、隊長から一本取れたら１００人長に昇進するって約束で国を出たんだが・・・」
「勝てそうにないと」
「はっきり言うんだな。だが悔しいがその通りだ」
「そんなに強いの？」

アルフィリースには意外だった。ここ何カ月か手合わせをしていて、ニアの強さは格段に上がっていた。特にエアリアルと手合わせをするようになってからは目覚ましい。エアリアルやファランクスも、ニアの実力は相当なものだと太鼓判を押していた。だがいまだに勝つ自信が出ないとは、どれほど強い隊長なのか。

「強いなんてもんじゃない。実力だけなら１０００人長はおろか、将軍クラスだと先輩から聞いたことがある。だが権力が極端に嫌い

で、１００人長にとどまっているんだとか。変わり者だが実力は確かだ。なんせ私なんかは足技だけであしらわれるからな」
「そんなに強いの？」
「うちの隊長に限らず、グルーザルドの軍人は化け物揃いだ。将軍クラスは本当に一騎当千だとか言うからな。実際に遠征先で軍規を破って住民に狼藉した一隊を懲らしめるのに、将軍が自ら叩きのめしに出て行って、頭に血が上った将軍を止めるのに大隊２００人が壊滅しかけたそうだ。人間の戦力に換算したら１０００人くらいだろうな」
「・・・グルザールドとの戦争にだけは加わらないようにするわ」
「それがいい。だが心配なのはその事だけではなくてな」

今度はニアがふぅ、とため息をつく。

「ザムウェドが戦争状態になった話は聞いたな？」
「ええ、グルーザルドの同盟国だったかしら？」
「ああ、それでザムウェドは私が所属する軍団の将軍であるヴァーゴが懇意にしていてな。おそらくは頼まれなくても威嚇の意味で出陣することになりそうなんだ。今までがそうだった」
「勝ち戦でも？」

この時既にザムウェドが滅びているのだが、そのような事をずっと大草原にいるニアやアルフィリースが知ろうはずも無い。

「ああ、今回はクルムスが相手だが、だからこそ余計にな。クルムスの南にあるトラガスロンはしょっちゅう小競り合いをザムウェドと起こしているから、今回はトラガスロンに睨みをきかせる意味で出陣するだろう。結構な長い遠征になるかもしれん」
「それで？」
「そうすると非常にまずいんだ・・・笑わないで聞いてくれるか？」

「？　いいわよ」

ニアがごくりと唾を飲み込んでいる。尻尾がへこたれているところを見ると、相当に深刻な話なのかもしれない。アルフィリースが身構えていると、

「実は、私はもうすぐ発情期なんだ・・・」

「・・・は？」

アルフィリースにはニアの言葉の意味が掴めなかった。発情期が何なのかを、まずアルフィリースは知らない。

「発情期って・・・何？」

「ああ、知らないのか。獣人はウサギの連中を除いて一定の時期にしか発情しない。個人差もあるが、私は歳も若いからだいたい一年周期ってところか。それで人間やウサギなんかは年中いつでも、その、なんだ・・・恋人と、す、するだろう？」

「えー・・・うん、多分・・・」

内容が内容だけにニアもアルフィリースもしどろもどろだ。女の子同士でもここまであけすけな話をするのは珍しい。もっともミランダはなら酒が入れば自分からするだろうが。ミランダもそういう話をあけっぴろげにできる仲間がいないから普段しないだけで、その辺は気を使っているのだろうとアルフィリースは考えている。

だからこそこういう時にミランダがいれば多少話も円滑か、と思っても今更呼ぶこともできない。ニアも大切な話なので、顔を真っ赤にしながらも続ける。

「でだ。私達は発情期以外では全くその気にならない分、発情期に入ると抑えがきかない。ちゃんと自制心を保っておかないと、誰で

もよくなってしまうくらいだ」
「じゃあ、もしかして、ニアって・・・」
「私はまだ何もしてない！！　私がそんなふしだらな女に見えるのか、アルフィ！？」
「わ、わかったから落ち付いて・・・」

ニアが思わず爪を出したので、アルフィリースは慌てて訂正した。ニアの爪は、その気になったら革製品程度なら簡単に裂いてしまうからだ。

「それで、なんだっけ」
「ああ。それで大抵は発情期が来たときにパートナーがいないと、運動とか訓練で代替するんだ。今までに3回、私の場合は発情期を迎えたわけだが、訓練に明け暮れることでなんとか我慢できた。だけど今回は戦争だから・・・自信が無い」
「どういうこと？」

アルフィリースが質問する。戦争とどう結びつくのか、彼女は知らない。アルフィリースはまだ戦争には赴いたことがないのである。

「アルフィは戦争に行ったことはないのか？」
「ええ、ないわ」
「それなら知らなくても無理はないな。戦争って言うのは、アルフィが思う以上に悲惨だ。特に女性兵士にとってはな」
「襲われる・・・ということかしら」

アルフィリースがしかめつらをする。ニアはどう返答すべきか少し悩んだが、言葉を慎重に選びながら話を続けた。

「それもあるが・・・極限状態というのを女が経験すると、種の保

存の方向に意識が働く。これは獣人に限らず人間の軍隊でもよく起こることで、戦場に向かった女性兵士の一割近くは妊娠するって言う通説があるくらいだ」

「通説でしょう？」

「だがグルーザルドの場合事実なんだ。グルーザルドでは男女で大して布陣の分けも無いから余計なんだろうが、そんな中に発情期の女を放り込んだらどうなるか」

「なるほど・・・男の獣人が発情期ってこともあるもんね」

「ああ、実際にグルーザルドでは女性兵士の地位は低い。１００人長以上の地位にいる者など１０人程度しかいない。それはとりもなおさず戦場でそういうことになるからさ。またグルーザルドの女はそういうこともある程度覚悟の上で軍に入るし、お腹の子どもの父親が誰かわからんことなどしょっちゅうだ。軍内でそういうことが起こっても黙認されてしまうしな。私も軍人である以上、いずれそういうことになるかもしれないことは覚悟はあった。だが・・・」

「今はカザスがいるものね」

「ああ」

ニアが目を伏せる。

「獣人では一夫多妻だのその逆なんぞ日常茶飯事で、結婚になどこだわらない者も多い。私の考え方もやれ堅物とか、人間臭いとか散々言われたが・・・私はカザス以外はイヤだ」

「でも軍人ではありたいんでしょ？」

「そのことも・・・今はよくわからなくなった」

「え？」

その言葉はアルフィリースも予想してなかったので、思わず身を乗り出した。ニアはてっきり根っこから軍人気質だとばかり思っていたのだが。

続く

死を呼ぶ名前、その2～ニアの悩み～（後書き）

次回投稿は、２／８（日）１２：００です。

死を呼ぶ名前、その3～侵攻～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースに悩みを打ち明けるニア。一方、その中でアルフィリースは大草原の異変に気付き・・・？

「だって、ニアはいつもグルーザルドの自慢をよくしてたと思うけど」

「ああ、確かに祖国は誇りだが、私個人の誇りではなかったような気がする。よく考えると・・・私は両親が軍人だったから、昔から軍には憧れていた。いつか自分も軍に入って両親のように活躍したい、国のために尽くしたい、と。その気持ちに偽りはない。だが軍に入るのはもっと後だと思っていたのだが、父が再婚したことでなんだか家に居づらくなってしまってな」

「継母と仲が悪かったの？」

「いや、むしろ仲はよかった。継母は御近所のお姉さんだった人で、幼いころはよく遊んでもらったし、むしろ好きだったんだと思う。でも、なぜだろうな・・・母が亡くなってからすぐに再婚した父に納得がいかなくて。もう母さんのことを忘れたのか、母さんが生きている時から互いにそんな感情を抱いていたのかとか考えると、どうにもやりきれなくなったんだ。それで家にいづらくなって、家を飛び出る形で軍に入った」

アルフィリースが抱いた事のない感情である。アルフィリースにニアの思いは想像もつかないが、複雑な心境になりそうなことは想像がついた。沈黙するアルフィリースの隣で、ニアはさらに続ける。

「最初は何の疑問も抱かなかったし、それでよかったんだ。だがアルフィ達と一緒に旅をするようになって、友達がいたらこういう感じだろうか、私は今まで友達も作らず何をしていたんだろう、本当は何がしたいんだろうと考えるとな・・・私は、軍にいるのは間違っているんじゃないかと思い始めているんだ」

「そっかぁ・・・」

ニアが膝を抱えて小さくなっている。彼女自身も、今まで抱いた事のない自分の感情に戸惑っているのだろう。

「じゃあニアはどうしたいの？」

「わからない・・・でもこのまま軍に戻るのは違う気がする」

「じゃあ辞める？　それなら私と一緒に旅してみることもできるし、カザスと一緒に暮らしてみるのもいいわ」

「もし私がそうしたいって言ったら、アルフィは歓迎してくれるか？」

おそるおそる尋ねるニアに、アルフィリースは顔を輝かせて首肯した。

「もちろんよ！　私もフェンナやエアリアル、ユーティと別れるとか考えると、ちょっと寂しかったのよ。これ以上ニアもなんて・・・それは嫌よ」

「アルフィは意外と寂しがり屋だな」

「あ、私を何だと思っているのかしら？」

むくれるアルフィリースの顔を見て、ニアが笑う。

「ふふ、すまない。だがカザスは私が押しかけたら迷惑にならないかな・・・？」

「その辺は大丈夫じゃない？　意外とカザスは懐が深いと思うわよ」

「確かにな・・・最初に告白された時はどうかと思ったが、話してみると存外話しやすい。話は中々面白いし、私の話もよく聞いてくれる。無駄に威張り散らしたりもしないしな」

「確かにね。最初が最初だったから嫌なやつかと思っていたけど、

一度知り合うと結構話せるわ。ただカザスは非常に合理的に出来ているってだけで、悪い人間ではないものね。まあ偏屈だからわかりにくいと思うけど」

「それに意外と優しいぞ？　この前なんか・・・」

「あら、惚気はやめてよね」

「ち、違う！」

ニアが顔を真っ赤にして慌てて否定するが、その様子がおかしくて思わずアルフィリースは噴き出した。つられてニアも笑う。

「ふふふ・・・」

「ぷっ、あはは」

思わず笑い出した2人だったが、ニアはまだ胸に引っ掛かるものがあった。確かにグルーザルドに戻るのは違う気がしたのだが、今のままアルフィリースやカザスについて行くのも違う気がするのだ。ではどうしたいのかといわれると非常に困るのだが、どうにもニアには説明がつかなかった。自分がこんな複雑な感情を抱く生き物だとは、ニア自身も思っていなかった。

それはきっとニアの軍人としての人生と、初めて感じた友情と、その心に芽生えた淡い恋心との葛藤だったのだろうが、ニアにとっても初めての気持ちを上手く説明できるほど彼女は弁に長けてはいなかったし、経験も足りなかった。

そんなもやもやした気持ちにニアがまだ戸惑う中、ふとアルフィリースが険しい顔をしている。何かに気付いたように、外に意識を集中しているようだ。

「アルフィ、どうした」

「何か・・・感じない？」

「いや、私は何も・・・」

「・・・・・おかしいわ。ニアはここにいて」

そう言ってアルフィリースは外に歩いて行く。ニアが心配そうにその後ろ姿を見送るが、アルフィリースは注意を払いながらもとりあえず外に出る。

「（なんだろう・・・胸騒ぎがする）」

だが外には竜巻が数本見えるばかり。どれも遠く、影響は無い。空には雲がほとんどないが、星もあまり見えない。

「星があまり見えないのね・・・え、見えないですって!?」

明かり一つない大草原で、星が見えないのはおかしな話だ。いつもファランクスの元にいた時はかなりはっきりと見えていたのに。そういえば、いやに外が明るくはないだろうか。

アルフィリースは地面に掘ってある洞穴から飛び出し、自分の背面にあたる方角を見た。その顔がみるみる青ざめる。

「どうしたアルフィ、何があった」

奥から心配したニアが声をかける。

「ニア！　皆を叩き起こして!!」

「何だ、何があった!?」

「森が燃えているのよ!」

アルフィリースの視界に映る光景。それはこれから向かうはずのシーカーの集落がある方向の森が炎上する光景だった・・・

＊＊＊

ちょうど同じ頃。シーカーの集落は悲鳴と絶叫に包まれていた。シーカーの集落、住人達はミュートリオと呼ぶその集落は、ほんの数刻前まで平和そのものであった。

ここ何カ月かは魔獣の襲撃も無く、大草原に住む人間達との関係も良好のままであり、またシーカーには珍しく、毎月のように新しい生命が誕生していた。これは良い予兆だと、集落全体が盛り上がっていた矢先だったのである。

その集落に四方八方から突然攻めてきた者がある。最初は人間だとシーカー達は考えたのだが、腕を吹き飛ばしても前進を止めないもの、魔術が全く効かないもの、巨大な生物とも何とも説明のつかないもの、さらにはオークやゴブリンなどが多数来襲し、シーカー達が今まで組み上げている外敵用の戦術が効かない者ばかりだった。いまや集落は完全に混乱のるつぼと化していた。

「うわー！　なんだこいつらは！？」
「魔術も弓も効かないぞ！？」
「誰か、誰か！　私の坊やがまだ中に」
「誰かこっちを手伝ってくれ！　下敷きになってる奴がいる！！」
「北側は塞がれている！　脱出口を探せ！！」
「西もダメだ！」
「あの巨大な化け物はなんだ！？　見たことも無いぞ」
「誰か王に連絡をしろー！」
「落ち付け、皆の物！」

絶叫に包まれる集落に、凛とした声が周囲に響き渡る。何人かの屈強な若者を従え姿を現したのは、身分の高そうなシーカーだった。色彩鮮やかな衣服に身を包み、腰には剣を佩いている。彼はこの土地を統べる王族の１人であり、戦う者を指揮する立場にあった。

「これはチェザーリ様！」
「敬礼も挨拶もいらん！　状況を報告しろ。敵の規模は、攻めてきている方向は？」
「わかりません。とにかく数が多く、全方位から攻めてきているとしか」
「馬鹿な、どこから現れたのだ」
「・・・転移で運んで来たんだよ・・・」

全員がその声にはっとする。声の主を確認してまたシーカー達は驚いた。炎上する家屋を背後に立っているのは幼い少年だったのだから。

「馬鹿な、転移だと？　これだけの数をか」
「・・・まあこの数を運ぶのはさすがに力を使ったけどね・・・手伝ってもらったし・・・ただ近くから転移すれば魔力は節約できる・・・だから何回か転移は使用したし・・・こういう方法もある・・・」

【召喚（サモン）】

その声と共に少年――もちろんライフレスである――の周囲には多数の魔法陣が展開され、そこから巨大な生物が何体も現れてきた。その光景を目の前にし、武器や魔術を準備するシーカー達。

「何者だ！」
「・・・その前に一つ聞きたいんだけど・・・」
「？」
「・・・君達は・・・自分の家畜を殺す時に名乗るのか？・・・」

瞬間、シーカー達の顔が怒りの色に染まる。だがライフレスは平然と、いや、ライフレスには珍しくその顔が楽しそうに歪んでいく。

「あれを子どもだと思うな！　殺せ！」

「・・・やってみな・・・」

互いのその声をきっかけに、激しい戦闘が開始された。ミュートリオが炎で、血で、赤に染まっていく。

＊＊＊

「急いで、皆！」

「待て、アルフィ。あまり急いでは危ない！」

「エアリー、そんなこと行っている場合じゃないの！　早く行かないと、全てが手遅れになるわ！」

「エアリー、私からもお願いします！」

真っ青なフェンナがエアリアルに懇願する。フェンナにしてみれば、またしても自分の故郷となるべき場所が焼かれようとしてる。もうこれ以上の仕打ちに、フェンナは耐える自信がなかった。集落に着いた時にもし全員死んでいたら。嫌な考えばかりがフェンナの頭に浮かぶ。

一方で比較的冷静なエアリアルの脳裏に浮かぶのは、この火災の原因。大草原に火を使う魔獣がいないわけではないが、余程のことにならない限り、森の中で火を使う馬鹿な獣はいない。自分達の生活場所を焼くような野生の獣はいないのだ。そんな馬鹿な事をするのは人間くらいだとエアリアルは思っていたが、まさかどこかの部族がシーカーの集落を襲っているのではと考えたが、シーカーの里を襲撃するなどどう考えても無謀である。また火の勢い、大きさが普通ではない。

「（魔術、か？　にしてもシーカー達が自らここまでやるはずはなし、一体誰が）」

エアリアルにも明確な答えは無く、ただ得体の知れない疑問と不安だけが心中に渦巻いていた。

ほどなく集落近くに到着するアルフィリース達。不思議な事に逃げ惑う動物、魔獣、シーカーにすらでくわさない。さらに不可解なのは、集落には南西の方向から近づいたが、南にはあまり火の手が無く、北と西に火の手が強かった。外から集落に近づいた外敵があれば、最も大草原に近い南西が燃えているのが普通なのだ。とはいえ火の手があることには変わりなく、火を避けるように南から東へぐるりとまわりこもうとするアルフィリース達。

「フェンナ、入口は？」
「結界さえなければ、どこからでも入れるはずです！」
「結界は無事に作動してるよ！？」
「え？」

アルフィリースの一言にフェンナが驚く。このミュートリオの結界は、フェンナの里の１０倍は強力な結界で守られている。また１つが消えても他の結界が補修するため、効果は半永続的である。事実この結界が完成してからは、ミュートリオは一度も外敵の進行を許していない。だからこそシーカーが安心して引きこもってしまうのかもしれないが、今そのことを非難してもどうなるものでもあるまい。

だがフェンナはミュートリオが炎上していることで結界は消えているものとばかり思っていたのだが、結界が消えていないとすれば、考えられる可能性は・・・

「これは・・・もしかすると?」
「フェンナの里の状況と似てるな・・・」
「中に入りましょう!」
「あ、待って! フェンナ!」

フェンナは叫ぶが早いか、馬から転がり落ちるように結界に走って行った。止める暇も無かったので、やむなく全員がフェンナの後に続いた。そしてフェンナが何かしら結界の近くで呟くと、結界が一部開く。

「皆さん、早く!」
「いえ、もう少し状況を見てから・・・」
「なら私だけでも行きます!!」
「あっ、たくもう!」

勇んで結界の中に飛び込むフェンナを止める術も無く、全員がミュートリオの中にかけ込んで行った。

続く

死を呼ぶ名前、その3～侵攻～（後書き）

次回投稿は２／１０（木）１２：００です。

よろしければ、評価をぽちっ押してやってください。

死を呼ぶ名前、その４～一瞬の再会～（前書き）

～あらすじ～

炎上するミュートリオに駆けこむフェンナと、続く一行。彼女達が見た光景は・・・？

死を呼ぶ名前、その4～一瞬の再会～

＊＊＊

「誰か、誰かいないの！？」
「おーい！　生きていたら誰か返事をしろー！」

半狂乱に近い状態で集落の中をかけずり回るフェンナと、その後に続くアルフィリース達。家屋代わりの木は燃え、畑であったろう場所も無茶苦茶である。だがシーカーは誰もおらず、死体もまた見当たらない。

理解しがたいこの状況に、逆にアルフィリースは冷静になるが、フェンナはそれどころではない。

「皆、皆・・・どこなの！？」
「落ち着いて、フェンナ」
「落ち着く？　落ち着けるわけないでしょう！？　私の仲間のことなのよ？　アルフィには人ごとかもしれないけど」

フェンナはそこまで言ってからアルフィリースの悲しそうな顔に気がついた。アルフィリースとてフェンナほど親身ではないにしろ、人ごとだとも思っていない。フェンナとは、彼女を里に送り届けるときからずっと一緒だったのだから。

「ごめんなさい、アルフィ・・・私、ひどいことを言いました」
「いいのよ、フェンナ。それよりも皆を探さないとね」
「ええ、ありがとう・・・」

フェンナが気を取り直し向き直るのと、彼女達の目の前に黒い影が現れたのは同時だった。

「そこにいるのは誰だ！」

「貴様たちこそ誰だ！」

いち早い反応を見せたエアリアルと、黒い影――シーカーの一団だったが――が互いに弓を構える。弓を構えるシーカーの内、1人が荒々しい声でアルフィリース達を問いただす。

「人間だと？　人間達が何をしている！」

「待って、私達は傭兵よ。大草原を突破してこの集落にシーカーを送り届けてきただけ。貴方達に敵対する気はないわ！」

「嘘をつけ！　大草原を突っ切れる人間など、ざらにいるものか！　だいたいシーカーと人間が仲良くできるはずがない。お前達も奴らの仲間だな？」

「奴ら・・・？」

「待ってください！」

フェンナがアルフィリースの前に出る。その姿を見て、シーカー達は驚くが、抗戦の構えは崩さない。

「私はダルカスの森の、ローゼンワークス家のフェンナです。はるばるここまで旅をして参りました。どなたか責任者の方に会わせてください！」

「ローゼンワークス・・・？　馬鹿な、あそこの里は全滅したはずだ！　最近確認した者がいるぞ？」

「ですから、私一人が生き残ったのです」

「俄かには信じれんな。証拠は？」

「証拠はありませんが、それは誰か王族の方に会わせていただけれ

ば・・・」
「それはできん！」

全く持って頭の固い連中、とシーカー達を批判もできない。今は戦闘中。その中に何の触れも無く現れ、王族に会わせろという連中を、たとえ同族でも会わせるわけにはいかない。またシーカーにも多種族いるとはいえ、種属によっては見分けもつかないものが多く、ミュートリオの王家に敵対するような勢力もいるのだ。おいそれと警戒を解くわけにもいかないのが、一般兵士の現状である。また彼らの身分ではダルカスの森で細々と暮らすフェンナ達に会いに行けるわけもない。彼らがフェンナの顔を知らないのも無理からぬことであった。

またフェンナの方も証拠といわれても秘術を見せるわけにもいかず、また魔術の詠唱などしようものなら敵対行動と見られ、問答無用で弓を射かけられても文句は言えない。身につけるもの、といっても元が裸に近いような恰好のシーカーだし、ローゼンワークスの一族には刺青をいれる習慣も無い。刺青はワイルドエルフやスコナーなど、好戦的な種族に多かった。

どうしたものかとフェンナが考え込み、兵士達もローゼンワークスの名前が出たからには問答無用で殺害するわけにもいかず、互いにどうにもならぬ膠着状態になったところ、指揮官らしき男がかけつける。

「何をしている！　生存者は見つかったのか？」
「あ、ウィラム隊長！」
「ウィラム？」

思わず声をあげたフェンナと、その声に反応したウィラムと呼ばれたシーカーが見つめ合う。

「フェンナ、貴方なのか・・・？」
「ああ、ウィラム！　貴方なのね？　よかった、やっと知っている人に会えた・・・」

安堵からか、フェンナの目から思わず涙がこぼれる。矢を構えられていることも忘れフェンナが駆け出し、ウィラムは部下に矢を下ろすように促してからフェンナに駆け寄る。そして2人は手を握り合うと、懐かしむような、愛しい者を見るような、そんな目で互いを見た。

「フェンナ、どうしてここに」
「はるかな道のりを旅してきたのよ・・・彼女達と一緒にね」

フェンナがアルフィリース達の方を促す。アルフィリース達は軽く会釈をし、ウィラムは礼儀正しく礼をした。

「これは我らの姫君がお世話になりました・・・現在は火急の事態にて、丁寧な挨拶・礼はまた後ほど」
「ええ、お気になさらず」
「かたじけない。フェンナ、私は君が死んだものとばかり」
「・・・皆が自分を犠牲にして助けてくれたのよ。お父様とお母様もね。無事に秘術も回収したわ。それよりこの事態は何？　状況を報告して」

フェンナが王女然とした態度に戻る。ついアルフィリース達は忘れそうになるが、フェンナはれっきとした王族のシーカーであり、本来は人を指導する立場にある。彼女自身が飾らない性格なので気にならないが、自分が指示すべき相手を前にして、本来の王族としてのフェンナが現れた。
だが当のウィラムにも状況は分かっておらず、弱々しく首を横に

振るだけだった。

「私にもわかりません。急にあちこちから何者かが現れ、気がつけばこの惨状。私は敵の姿を見ておりませんが、第5王子が一隊を率いて戦闘中です。私は部下を連れて、まだ残っている者がいないかどうかを探していたところです」

「長は・・・オルバストフ様は無事？」

「はい、むしろまだあまり被害はありません。北や西ではかなりの死者が出ていますが、それでも最初のことだけで、急襲にしてはまだそこまでの数ではないかと。王族は無事ですし、態勢を整えながら現在は東へと避難を始めております。ただ敵の得体は知れず、あちこちから次々と現れるため、一度態勢を整えるためにも東に脱出を、とのことです」

そこまで聞いてフェンナはやや考え込むが、すぐに考えをまとめる。

「わかりました。では私をオルバストフ様の所に案内してください。まずは長に会わねばなりません」

「承知いたしました。後ろの方々も？」

「もちろんです。彼女達は私の大切な友人ですから」

「なるほど。ではオーリ」

「はい」

オーリと呼ばれた若いシーカーが返事をする。

「お前はフェンナ様達を連れて、先に長にこのことを報告しろ。私はもう少し見回りをしてから向かう」

「承知いたしました。ではフェンナ様、こちらへ」

「ウィラム！」

指示を出してその場を去ろうとするウィラムに、フェンナが思わず駆け寄ろうとするが、ウィラムの手を再び握ろうとして、思いとどまった。

「どうしましたか、フェンナ様」
「いえ・・・貴方が無事でよかったです」
「私も同じです。すぐに私も合流しますので、先に長の元へ行ってください。・・・落ち着いたら、また貴女とゆっくり話がしたい」
「それは私もです。では後ほど」
「ええ・・・」

と、その時ウィラムが何かにピクリと反応し、彼がフェンナを叫びながら突き飛ばすのと、エアリアルがフェンナを引き倒すのはほぼ同時だった。

《圧搾大気（ディープ・プレス）》
「「危ない！」」
「え・・・？」

何が起きたのかわからず、なすがままにされるフェンナ。引き倒されるのはゆっくりに感じたのに、フェンナの目の前の光景が真横にスライドするように暴風が駆け抜けたのは一瞬。そして聞こえる、大きな果実が潰れるような鈍い音。

あまりに一瞬だったため、エアリアルに引きずり倒されたフェンナは、何が起きたのかわからない様子だった。呆然自失のフェンナが、目線を暴風が駆け抜けた先に移そうとするが、

「フェンナ、見るな！」

エアリアルがその目をいち早く塞いだ。決してフェンナ見せたくないその光景、それは先ほどまでフェンナと話していたウィラムの見るも無残な姿。彼らは凄まじい勢いの大きな鉄板で叩かれたかのように、住居でもある大木に叩きつけられていた。家は倒壊するのでなく潰れて変形し、ウィラムをはじめとするシーカー達は、熟れたククスの実がその重量に耐えきれず地面に落ちたかのような無残な姿を晒していた。確か１０人前後はいたはずだが、あまりにも粉々になりすぎてもはや人数を数える方法は無い。もちろんウィラムの姿を求めるべくもなかった。

「何が・・・一体何が・・・？」

フェンナは頭ではおぼろげに理解しつつも、心は事実を認めたくない。エアリアルの手を振り払うこともせず、ただのろのろと問いかけるのみである。

「フェンナ、もうウィラムは・・・」
「イヤ！　聞きたくない！！」
「フェンナ・・・」
「・・・ふふ、危ない危ない・・・どうも久しぶりの戦いは興奮していけないな・・・力加減ができなくて困る・・・肝心の王女様を潰してしまうところだった・・・」

半狂乱になりかけるフェンナをエアリアルがなだめる暇も無く、姿をゆっくりと現したのはライフレス。肩には何か黒い袋を担いでいる。その姿に真っ先に反応したのはリサだった。

続く

死を呼ぶ名前、その４～一瞬の再会～（後書き）

次回投稿は２／１２（土）１２：００です。

死を呼ぶ名前、その5～最悪の敵～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリース達の目の前に現れたのはライフレスと、そして・・・？

死を呼ぶ名前、その5～最悪の敵～

「あなたは確か、初心者のダンジョンで・・・」
「・・・覚えていてくれるとは光栄だ・・・そういえば自己紹介がまだだったか・・・僕の名前はライフレス、以後お見知りおきを・・・特にアルフィリース、ミランダ、君達とはね・・・」
「「なんですって？」」

意外な指名に、思わず声が重複するアルフィリースとミランダ。その様子を見てライフレスは珍しく口元を少し歪めるようにほころばせ、今度はフェンナに話しかける。

「・・・久しぶりだね、シーカーの王女様・・・僕のことは覚えているかい？・・・」
「あなたは・・・確か」

呆然としていたフェンナがゆっくりとライフレスの方を振り返る。その目はうつろでどことなく光が無い。だが状況は飲み込めている。

「あなたが・・・ウィラムを？」
「・・・ウィラム？・・・知らないな・・・今殺した奴らのことか？・・・」
「なぜ、こんなことを・・・どうして？　ウィラムがあなたに何をしたっていうの？」
「・・・なぜ？・・・フ、フフフ・・・ハハハハハハハ・・・」

ライフレスは静かな声にもかかわらず高らかに笑い始めた。その行動に一同は全員驚くが、ドゥーム達がいたらもっと驚くことだろ

う。ライフレスが人前で声を出して笑うことなど、滅多にあるものではない。

「・・・理由が知りたいのか？・・・」
「・・・ええ」
「・・・残念だが・・・理由はない・・・」
「なんですって？」

瞬間、フェンナの目に驚きの色が戻る。これはフェンナにとって予想外の答えであった。フェンナのような心優しい人間にはまず他人を害することは考え難いし、復讐というのならまだしも理解はできる。また世の中には快楽殺人者という存在があることもフェンナは旅の中で知っていたので、彼女がそういった者の心情を理解することは全く不可能だったにしても、最も残酷な答えとしては考えられる可能性だったのである。

だがライフレスは理由が無いと言った。それは完全にフェンナの思考外の答えであった。

「理由が、ない？」
「・・・そうだ・・・お前達が呼吸をするのと同じように、僕にとって殺しは日常・・・ごくごく当たり前のことで、特に誰が死のうと興味が無い・・・せいぜい興味があるのは『強かったかどうか』の一点だけ・・・それに・・・」
「それに？」
「・・・これはさっき戦った奴らにも似たような事を言ったが・・・お前達は自分が森の中を歩くときに、足で踏み潰した虫を数えながら歩くのか？・・・」
「なん、ですって！？」

フェンナの周囲の大気が震える。フェンナの美しい髪がほとばし

る魔力を受けて波立ち、その迫力にエアリアルが思わず一歩後ずさる。だがその様子を見てすらライフレスは何の感慨も浮かべない。

「ウィラムを、私の大切な人を『虫』ですって!?」

「・・・いや・・・虫は例えだ・・・」

「?」

「・・・こんなに手ごたえがないのでは・・・虫以下だな・・・」

「貴様!」

フェンナが魔術の詠唱に入ろうとする瞬間、ライフレスが担いでいた黒い袋を地面に引き落とす。

「・・・戦うのは勝手だが、これが犠牲になってもいいのか?・・・」

そう言ってライフレスは黒い袋の一部をぐいと外に引きずり出す。そこから出てきたのは血の気の全くないシーカーの顔だった。その顔色につられるわけではないが、フェンナの怒りに染まりかけた顔色が、再び蒼白に引き戻される。

「・・・チェザーリ様?」

フェンナの声に、オーリがふらふらと前に出る。アルフィリースを案内するために一人別行動を取ろうとしたオーリは生き残っていたのだ。だがオーリの呼びかけにチェザーリは答えない。そのため、なおも前に出ようとしたオーリをリサが引き留めた。

「これ以上近づいては駄目です」

「放せ、人間」

「いいえ、貴方を無駄死にさせるわけにはいかない」

「何だと！」
「・・・へえ・・・」

ライフレスは挑発にてっきり全員でつっかかってくるかと踏んでいたのだが、リサが見事に引き留めた。

「オーリとかいう人、あの袋をよく見なさい」
「なんだと！？」
「あの袋は、人間が一人収まるほどの大きさですか？」

リサの指摘は尤もなことであり、袋の大きさは子ども1人分程度しかない。それに大人が収まっているということは・・・

「・・・よく見ている・・・袋のサイズに適当なのがなかったものでね・・・袋に収まるようにちょっとこう、手足をね・・・」

ライフレスが、くいっと手で捻る動作をしてみせる。おもちゃを扱うように離すライフレスの言葉に、全員が絶句した。

「なんてことを」
「・・・まあ実際抵抗が激しかったから、そうするしかなかったのさ・・・おかげでやっと大人しくなった・・・あ、ちなみに殺してはいない・・・持ち帰ってくれって五月蠅い奴が僕の仲間にいてね・・・まあ面倒くさいんだが、この程度の奴ならば殺さずに沈黙させるのに１０分もあれば事足りる・・・」
「～～～～！」

オーリが声にできない怒りと共に突進しようとした瞬間、リサが杖を足にかけて転ばせる。そしてそのままオーリを押さえつけるふりをして、耳打ちをした。

「（だから死んでもらっては困るといったでしょう？）」
「私は放せと言っている！」
「（いえ、死んでも放しません。あなたが唯一の希望かもしれないのです）」
「？」
「（いいですか、私達が今目の前にしているあのライフレスという奴は、タチが悪いどころのレベルの敵ではありません。まるで底なし沼を見るような、それほど正体も力の底も見えないのです。実際あのシーカーが相当の魔力の持ち主なのはリサでも分かりますが、そのシーカーを子ども扱いしたのです。その力量は推して知るべし・・・もしあれが本気で暴れたら、この集落など簡単に滅びてしまうかもしれません）」
「なん・・・」

何かを言いかけるオーリの頭を強引に地面に叩きつけ、リサが言葉を続ける。リサも相当に焦っていたのだ。それほどライフレスを危険視していたのである。

「（黙って聞きなさい！　いいですか、今からあなたには助けを求めに走ってもらいます。嫌とは言わせません、こちらにはシーカーの王族であるフェンナがいるのですから。ええ、人質と罵るならどうぞ。リサにはフェンナが王族かどうか関係なく、全員の命が大事ですから。ですからあなたは最低限、フェンナを逃がせるだけの戦力を連れて戻って来てもらいます。それに私達も便乗して逃がしてもらいますから）」
「・・・」
「（もって１０分・・・それまでに何とか戻ってきなさい。それができなければ、地獄の底から呪ってやるのですよ。理解したらリサを突き飛ばして、ここから逃げなさい）」

しばしの間をおいたが、オーリは合理的なリサの判断に納得したのか、リサを突き飛ばして逃げて行った。だがいくらリサが小声で話そうとも、アルフィリース達も、ライフレスもまたリサの言ったことに想像はついた。だからアルフィリースはオーリを止めなかったのだが、またライフレスも何もしなかった。

「よいのですか、ライフレス様」
「・・・エルリッチか・・・」

ライフレスの背後に靄が湧き立ち、形を成す。出てきたのは、黒いローブに身を包んだ骸骨。いや、正確には骸骨のように骨と皮だけになった男。一部は本当に骨が見えていたが。

「ご命令があればあのシーカー、殺しますが・・・」
「・・・構わん、行かせてやれ・・・これは賭けだ・・・」
「賭け、でございますか？」
「・・・ああ、僕の悪い癖でね・・・昂ぶって来ると賭けをしたくなる・・・エルリッチ、賭けないか？・・・僕が彼女達を屈服させるのと、あのシーカーが仲間連れて戻るのと・・・どちらが早いか・・・僕はもちろん屈服させる方に賭ける・・・」
「私もそちらに」
「・・・おいおい、それでは賭けにならない・・・」
「元より賭けになる勝負ではございませぬな」
「・・・ククク・・・それもそうか・・・」

2人が楽しそうに笑う。その姿をアルフィリース達は眺めるのみだったが、ミランダがかたかたと震えていることにアルフィリースは気がついた。

「どうしたの、ミランダ？」
「そんな・・・馬鹿な・・・」
「ミランダ？」

アルフィリースがミランダに触れようとした瞬間、ミランダが突然大声を出した。

「おい！　そこの骸骨！」
「なんだ？」
「お前、今エルリッチと言ったか？」
「そうだが何か用か、小娘」
「エルリッチ・・・だと？　貴様・・・アタシの顔に見覚えが無いか！？」
「誰が貴様の様な小娘に・・・いや、待てよ・・・見覚えがあるぞ？　そうだ、あれは確か・・・あの勇者と戦った時に・・・」
「チキショウ、やっぱそうなのか・・・」
「どういうこと、ミランダ？」

歯ぎしりするミランダに、溜まりかねたアルフィリースが問いかける。

「あいつは・・・あの骸骨野郎は、昔アタシのあの人が・・・オードが自らの命を引き換えに倒した魔王だ！」
「なんですって？」
「そうか、貴様はあの時戦いにも参加できず怯えていた小娘か。覚えているぞ、か弱きものよ。貴様は仲間が次々倒れていく中、何もできず泣きじゃくるだけだったなぁ？」
「貴様ぁ―！！！」

とびかかりかけるミランダを全員がかりでおさえこんだ。それで

も全員をひきずったまま前進しようとするミランダ。
「はなせーっ！　あの野郎だけはアタシが殺す！！」
「落ち着いてミランダ、今は駄目よ」
「アルフィリースの言うとおりだ。冷静になれ」
「冷静に！？　無理だ！！」

その一言と共に、ミランダが全員を振り飛ばす。

「きゃあっ」
「うわっ」
「死ねぇ！」
「ふむ」

愛用のメイスを構え跳びかかるミランダと、冷静に構えるエルリッチ。ミランダのメイスが振り下ろされようとする瞬間、ミランダは地面に容赦なく叩きつけられた。

「ぐ！？」
「・・・まあ落ち着け・・・エルリッチ、貴様がこの女を見たのはいつだ？・・・」
「そうですね、ゆうに１００年は前のことかと」
「・・・ふむ・・・ではこの女は不老不死なのか・・・以前魔王に心臓を刺されたのを見たが、死んでいなかった・・・その時は見間違いか、何かしらの魔術かと思ったが・・・さて・・・」

ミランダを押さえつけながら、ライフレスがじっと興味深げにミランダを見つめる。

「はなせっ！」

「・・・女、名はなんという？・・・・」
「誰が貴様なんぞに・・・・」

ズンッ！

だがミランダの声は、途中で腹の違和感と共に途切れた。

「え・・・あ・・・？」
「・・・名前は？・・・・」
「う、うわあああ！？」

ライフレスの手が、直にミランダの内臓を握っていた。そのままミランダを吊し上げ、腹をかき回すように手を動かすライフレス。

「ぎっ、ひっ・・・あああああ」
「・・・名前は？・・・・」
「い、言うもんか・・・・」
「・・・ふむ・・・強情だ・・・・」
《風弾（エアロ・シュート）》

ライフレスの短呪と共に、ミランダが腹から血を撒き散らせながらアルフィリース達の元まで吹き飛ぶ。ちょうどミランダを助けようと飛び出しかけたアルフィリース達の動きを止める格好にもなった。そのまま腹を押さえるようにうずくまるミランダ。

「う、ううう」
「ミランダ、しっかり！」
「これはひどい・・・」

だが全員の心配もつかの間、背中まで突き抜けたミランダの傷は

みるみるうちに治っていく。全員ミランダが不死身だとは既に聞いていたが、治るシーンを見るのはリサ以外は初めてだった。むろんライフレスもその様子を見ている。そしてよろよろとではあるが、なんとか立ちあがるミランダ。

「・・・ほう・・・本当に不死身か・・・」

ライフレスが目を見開く。どうやら大変な興味をそそられた様だ。

「・・・エルリッチ・・・計画を一部変更する・・・僕はあの女を連れて帰る・・・シーカー達はお前が適当に追い込め・・・」

「ご命令とあれば」

「・・・ヘカトンケイル・魔術無効化兵（キャンセラー）を数体と、一部のオークやゴブリンをこっちに回せ・・・あと例の奴もな・・・」

「あれを呼ぶのでございますね？」

「・・・ああ・・・元々はあのシーカーの王女に見せたかったものだ・・・」

「分かりました」

そう言ってエルリッチが消えると同時に、周囲の建物の影から魔物たちが現れ、アルフィリース達を取り囲む。

「アルフィ、囲まれてます」

「わかってる！　ミランダ、いける？」

「ああ、やられっぱなしじゃ気が済まない」

「４０はいるぞ？」

「数よりも、あの鎧の連中がやばそうだ。特に小柄な連中のほうが」

エアリアルがヘカトンケイルの方を示す。直感でその危険性を認識したのだろう。

「来るわよ！」

燃え盛る森の中、アルフィリース達の戦いが始まった。

続く

死を呼ぶ名前、その5～最悪の敵～（後書き）

次回投稿は２／１３（日）１２：００です。

死を呼ぶ名前、その6～集団戦～（前書き）

～あらすじ～
姿を現したライフレスの軍隊と戦うアルフィリース達。各自の修行の成果とは・・・？

死を呼ぶ名前、その6～集団戦～

戦いが始まるやいなや、エアリアルが手持ちの手裏剣を投げ一画を崩す。その一角にアルフィリースが飛び込み、一気にゴブリンを蹴散らした。フェンナに接近戦は向かないし、リサも不意をつけない戦いは向いてない。カザスに至っては非戦闘員であるため、戦闘ではまず彼らを後衛に下げる作業が優先される。その役は主にアルフィリースが引き受けるのは、予め旅の中で打ち合わせたことである。

と、同時にニアとミランダがコンビで敵に斬り込む。ニアは相手が人型サイズのゴブリンならともかく、オーク以上の巨体だとどうしても一撃が軽い。ミランダは逆に一撃が大き過ぎ、正面きっての戦いならともかく、四方を囲まれた状態では隙を突かれて危険である。そのため、ニアが崩してミランダがとどめを刺す、というパターンでの戦いが最も効率が良いと彼女達は考えていた。

「ニア、ミランダ、オークと大きい鎧は任せるぞ。私はあの小さめの鎧を引き受けた！」

「「了解！」」

言うが早いか、ニアが疾風のようにオーク達の間を駆け抜け、的確に膝や顔面に一撃を喰らわせバランスを崩す。そしてめぼしい相手にミランダが次々と止めを刺していく。

エアリアルは立ちはだかるゴブリンを一瞬で片づけると、ヘカトンケイル４体を一手に引き受ける。ヘカトンケイルも決して俊敏ではないが、全身に硬い鎧を着込み、その膂力はエアリアルをゆうに凌いでいる。もし一撃でも喰らえば、槍ごとエアリアルは両断されるだろう。

「手ごわい」

エアリアルが交錯した感想を思わず漏らす。またヘカトンケイルがそれぞれ持つ武器も様々で、剣、鉄球、槍、斧である。多様かつ間合の違う武器を同時に相手にするのは、エアリアル程の技量の持ち主でも難しい。また硬度的にエアリアルの槍はヘカトンケイルの鎧を通らないため、エアリアルは正面から打ち合うのは諦め、ヘカトンケイル達のバランスを崩すことに専念した。

だが戦ううちにエアリアルはヘカトンケイル達の動きがおかしなことに気がつく。ヘカトンケイル達は互いの体が自分の武器の軌道上にあろうが、お構いなしに武器を振うのだ。同士討ちのような格好で傷ついてゆくヘカトンケイル達。

「なんだこいつらは？」

ためしに鉄球の軌道上に来るよう1体を誘導してみると、お構いなしにその頭を撃ち抜いた。鎧が頑丈だから頭は無事だが、さすがの鎧も変形してしまっている。

「なるほど・・・そういうことなら戦いようはある！」

エアリアルは思いきって4体の中心に飛びこんで行き、その中央で戦い始めた。

＊＊＊

一方で大方のゴブリンとオークを片づけたニアとミランダ。

「ニア、残りは任せる。アタシはデカブツをやる！」

「わかった！」

ニアが膝裏を打ち抜いて片膝をついたオークの首をへし折りながら答える。ミランダが向かうのは魔術無効化兵（キャンセラー）3体。魔術が効かないことはミランダは知らないわけだが、動きが鈍重で巨体なため、ミランダにとってはもってこいな相手だった。

「うらぁ！」

相当に虫の居所が悪いミランダの渾身の一撃。2mを越す巨体のキャンセラーも、足を狙われ宙に舞う。そのまま頭に一撃を喰らわせると、次のキャンセラーに向かおうとするが、ミランダは足を掴まれバランスを崩した。

「何？」

足を掴んだのは頭を潰したはずのキャンセラー。完全に変形しているのだが、全く怯む様子はない。ミランダは力ずくで掴まれた足をふりほどいたが、その隙は大きく、既に別のキャンセラーの大剣が眼前に迫っていた。

「！」

「危ない！」

金属音と共に、アルフィリースが渾身の一撃でキャンセラーの件を叩き落とす。その隙を利用して、距離をとる2人。

「助かった、アルフィ」

「あの大きい鎧も厄介ね」

「全くだ。粉々にするしかないのか？」

「いえ、その必要はありません」

リサが後方から声をかける。目を閉じ、センサーに集中しているようだ。

「鎧の中身は空――魔術で動かしているのでしょう。ちょうど腹の裏辺りに起動式の中心があるようです。腹を狙って！」

「なるほどね」

「じゃあいくわよ！？」

ミランダとアルフィリースは同時に勢いよく地面を蹴った。

＊＊＊

アルフィリース達が戦う様子を後方から見物するライフレス。気になるのはアルフィリース達ではなく、ヘカトンケイルやキャンセラーがどの程度戦えるのかを確認するためである。正直アルフィリース程度なら、自分一人でどうとでもできるとライフレスは考えている。

そのライフレスの目の前でキャンセラーは順にミランダにとどめを刺され、ゴブリン・オークの残りはニアに倒されていく。そしてヘカトンケイルはエアリアルによって次々と動きを鈍らされ、まとまったところにフェンナが魔術で一掃した。残りのゴブリンとオークを掃討したら、間もなくライフレスにかかって来るだろう。

「・・・ふん、所詮は紛い物の命・・・命令された以上のことはできないか・・・思考も単純だし、同士討ちをするようでは・・・まだまだ改良の余地があるな・・・」

ヘカトンケイルはザムウェドとの戦争でこそ功を奏したが、開発

者のアノーマリーが自分で指摘したのは、獣人のように正面から勝手に突っ込んでくる相手には強いが、罠や混戦には弱いのではないかということだった。やはり生産コストのせいなのか、知能に関しては偶発的に高い個体が生まれるくらいで、全体的にかなり低く、特に細かい動きは望むべくもなかった。

今回シーカーと戦わせてみて、動きも鈍く、魔術耐性も低いヘカトンケイルはシーカーとの相性が悪い。先ほどのシーカーの一団との戦いでも、実に１０体以上のヘカトンケイルを失っていた。

「・・・ヘカトンケイルも今のままでは獣人の相手にしか使えないな・・・いや、グルーザルドは軍として戦術を用いるし、どっちにしても今のままではもう出番は望めない・・・早急に改良が必要か・・・またアノーマリーが頭を悩まし悶えるのだろうな・・・いや、奴はそういうのが好きなのか？・・・くく、しょうがない奴だ・・・」

ライフレスが難題に悶えるアノーマリーの様子を想像して笑っていると、突然体に連続で3本の矢が刺さる。射たのはエアリアルであり、どうやら既にライフレス以外は全滅したようだ。集中し始めると周りが気にならなくなるのは自分の悪い癖だと、ライフレスはため息をつく。もっとも油断したところで、負けるはずが無いほどの自身がライフレスにあるのも事実である。

周囲で木々が燃え盛る中、アルフィリース達がゆっくりとライフレスに近づく。彼女達の表情に油断は無く、同時に怒りに満ちている。紅い光に照らされて、さながら悪鬼に見えるのは彼女達の方だった。

「なるほど、確かにアルフィリースの言うとおり、効かないな」

「ええ、でも魔術ならどうかしら？」

アルフィリース、ミランダ、フェンナ、エアリアルがそれぞれ詠唱に入ろうとする。そんな彼女を見て、また薄く笑うライフレス。

「何が可笑しいの？」

「・・・いや・・・君たちが余りに必死だから、おかしくてね・・・」

「いつまでも笑ってな。死ぬのはお前だ」

「・・・くくく・・・これだから物を知らないガキは嫌いなんだが・・・」

「まだ言いますか！？」

「・・・そうやって今まで数多の人間、時には魔獣や魔物までもが僕の前に立ちはだかり・・・そして誰も僕を殺せなかった・・・実に８００年の間ね・・・」

「８００年、だと？」

思わず全員が詠唱を忘れるほど驚く。だがライフレスはそんなアルフィリース達の反応すらどうでもよさそうだ。その時である。ライフレスの背後から何か大きな生物の足音が聞こえてきたのは。

続く

死を呼ぶ名前、その６～集団戦～（後書き）

次回投稿は２／１４（月）１２：００です。

決してバレンタインとかのせいではない。バレンタインなんて妄想だ、しくしく・・・

死を呼ぶ名前、その7～修行の成果～（前書き）

～あらすじ～

軍勢を一掃するアルフィリース達。その眼の前に巨大な魔王が現れる。

死を呼ぶ名前、その7～修行の成果～

「・・・さて・・・僕が相手をしてあげてもいいんだけど、君たちに見せたいものがあってね・・・こいつを無事倒せたら僕が直々に相手をしてあげよう・・・そうだ・・・」

ライフレスがくるりとフェンナの方を向く。

「・・・以前・・・君に持ちかけた話を覚えているかい？・・・・」

「え？」

ライフレスはにやりとする。

「・・・僕と一緒に来れば、君の仲間に会わせてあげると言っただろう？・・・」

「・・・それが、何か？」

「・・・君が来てくれないからしびれを切らしてね・・・連れてきてしまったよ・・・フフフ・・・」

「何を言って・・・」

その瞬間、周囲で燃え盛っていた木をなぎ倒すようにして巨大な生物が現れた。二足歩行のその生物は、ギガンテスをはるかに上回る巨体であり、４ｍをゆうに超えていた。手が異常に長く、両手を広げれば体よりも長いだろう。頭は無く、頭があるべき部分に大きな口がついており、そこからイソギンチャクの様な触手が涎を撒き散らしながら這いずり出してくる。おかしなことに、目はどこにも見当たらなかった。その魔物がどうやってアルフィリース達を認識するのか、だがしかしアルフィリース達を正面に据えると、頭が割れるような甲高い声で叫んだ。

「キシャアアアア！」
「ぐっ！？」
「頭が・・・割れそうです」
「・・・こいつの名前はダンタリオン・・・僕は魔王に名前をつける趣味は無いんだが・・・そういうのが好きな奴がいてね・・・」
「魔王ですって？」
「どういうことだ？」

アルフィリース達は恐ろしさよりも、驚愕の視線でもって目の前の怪物を見上げた。

「・・・知らなかったのか？・・・魔王は僕達が作っている・・・」
「なんだって！？」
「魔王を・・・作る？」
「・・・そう・・・だがこいつらは以前から大陸を席巻していた魔王とは違う・・・以前から大陸にいた魔王は、純粋に魔物や魔獣が力をつけて徒党を組んだもの・・・こいつらは僕達が作り出した合成生物（キメラ）だ・・・それをオークやゴブリンと無理矢理契約させて魔王に仕立て上げている・・・そういうことさ・・・」
「ペラペラとよく喋るじゃないか。いいのか、アタシ達にそんなことを話して」

ミランダが怪訝そうな顔をする。だが尤もな疑問である。

「・・・別に構わないさ・・・既にこいつらの生産は順調すぎるほどのペースで進行している・・・もはや誰にも止められない・・・生産は次の段階に入っているしな・・・」
「まさか、こんなのが何十体もいるってのか？」
「・・・違うぞ、獣人の娘・・・何十ではなく、何千だ・・・」

「！！？」

ライフレスの一言に全員が動揺する。あまりにも規模が大きい話に、一瞬思考が追いつかなかったアルフィリース達。

「・・・いずれこいつらが大地を縦横無尽に駆け回る・・・果たして人間達に魔王の群れを止められるかな？・・・たといミリアザールでも何千ものこいつらを同時に相手はできないだろうよ・・・」

「そんなの」

「私が止めるわ！」

アルフィリースがぐいと前に出る。その姿を見て嘲(あざけ)るライフレス。

「・・・止める？・・・脆弱な人間風情が？・・・面白いことをいう・・・」

「止めて見せる！　今ここで、あなたを倒して！！」

「・・・面白い冗談だ・・・やってみな・・・」

ライフレスがパチン、と指を鳴らすとダンタリオンが前進を再開した。

「・・・ダンタリオン・・・基本生け捕りだ・・・特に先頭の背の高い女と、巨大メイスを持った女は殺すな・・・後は最悪処分していい・・・」

「ギルルルルル」

ダンタリオンが涎を撒き散らしながら一歩踏み出してくる。そんなダンタリオンに負けじと、アルフィリースも一歩前に出る。

「お前が直接来い、ライフレス！」

「・・・そう急くな・・・ボスの出番は後と相場が決まっている・・・」
「アルフィ、とりあえずこいつに集中だ！」

ミランダの一言で全員がダンタリオンに構えなおす。どうやらライフレスは傍観に徹するようだ。アルフィリース達は全員が怒り心頭だったのだが、冷静さを欠いているわけではない。当の挑発したアルフィリースでさえ、彼がかかってこないことに関しては内心安堵していた。戦うなら一体ずつ。その方が楽な事には違いない。

近づくダンタリオンに合わせてアルフィリース達が散開しかけるが、かなりの長距離からダンタリオンが丸太のような腕を振りかぶった。

「まさか？」
「皆、飛んで！」

リサの一声で全員が跳躍する。ニアやエアリアルは身体能力的に問題ないが、ミランダは自分のメイスを使って棒高跳びの要領で。アルフィリースは風の短呪を使い、跳躍を補助している。その下をダンタリオンの腕が地面ごと薙ぎ払っていった。

「なんて一撃だ」

ニアが思わず驚愕の声を上げる。ダンタリオンの一撃は完全に地面をえぐっていた。そして空中で身動きがとれないアルフィリース達を確認すると、ダンタリオンの体の各所に口ががばりと開く。

「な？」
「しまった！」

ダンタリオンが何かを吐き出そうとした瞬間、その口の一つに何かが投げ入れられ、同時に爆発を起こす。

「そいつは前の魔王でも見たわよ。馬鹿の一つ覚えね！」

「ナイス、ミランダ！」

ダンタリオンが口が開くと同時に、ミランダが爆弾を投げ入れたのだ。魔王の行動パターンを読んでいたのだろう。多数の経験を誇るミランダならではの判断だ。

そして着地と同時に、エアリアルとアルフィリースが切り込む。

「はああ！」

「喰らえ！」

アルフィリースが大剣でダンタリオンを斬り、エアリアルは槍でダンタリオンを一直線に突く。エアリアルの一撃は回転も加えているため、ダンタリオンの肉ごと体を削り取ったが、アルフィリースの剣はダンタリオンの厚い筋肉に遮られた。だが、

「魔術付加――爆炎（ボム）！」

「ギャオオオ！！」

アルフィリースの剣が爆炎を纏い、ダンタリオンの体を切り刻む。肉片と共に鮮血が飛び散り、たまらず悲鳴を上げるダンタリオン。

これがアルフィリースがファランクスの元で修行した成果である。肉体的な強度には人間は限界がある。ファランクスいわく、『気』というものの操作ができれば普通以上の力が発揮できるらしいのだが、修行には多くの日数が必要だし、元の体の強度も重要なので、女の身であるアルフィリースには気の扱い方を修めても限度が知れ

てしまう。
　そこでファランクスが提示したのが、魔術付加を使った戦闘能力の向上である。先ほどの跳躍もそうだが、多系統の魔術を使えるアルフィリースにはこの方法は非常に応用が利く。動きは風系統で補助できるし、強度は土や金の系統で補助できる。火や氷を使えば殺傷能力を上げることも可能である。普段から矢などは風の魔術で補強していたのに、なぜこの方法を思いつかなかったのか、むしろアルフィリースにはその方が不思議であった。
　だがもちろん欠点や注意点もある。体そのものを補強するわけではないので、たとえば風の魔術を使って高速で動いても、肉体はその速度で動くように作られていないため、必要以上に負担をかけてしまう。また爆発で剣の動きを加速させるのはいいが、腕にかかる負担は相当だし、もちろん剣自体の傷みも激しい。回復魔術が使用できないアルフィリースには、一歩間違えれば戦闘不能になる危険な方法でもあるのだった。
　だが、それだけに効果も大きい。事実ダンタリオンは大ダメージを受けていた。

「よし、フェンナ！」
「はい！」

　フェンナが魔術詠唱に入っている。得意の《地津波（アースウェイブ）》だ。その魔術をまさにフェンナが発動させようとする。

「いけ！」
「フ、フェンナ・・・」
「！？」

　どこからともなく聞こえた声に、全員の動きが止まる。フェンナも魔術を発動直前にした状態で様子を窺う。

続く

死を呼ぶ名前、その7～修行の成果～（後書き）

次回投稿は２／１６（水）１２：００です。

特にバレンタインのために何も用意してませんが……この日は幻としか思えない。この時期が一番忙しい私にはｗｗ

よろしければそんな私に励ましの言葉でも下さいませ。

死を呼ぶ名前、その8～悪魔の発想～（前書き）

～あらすじ～

ファランクスに鍛えられたアルフィリース達はダンタリオンと呼ばれる魔王を簡単に追い詰めるが・・・？

死を呼ぶ名前、その8～悪魔の発想～

「誰？」
「フェンナ・・・僕だ・・・そこにいるのかい・・・？」
「・・・オルニス？」

幼馴染の名前を思わずフェンナが口にする。そのフェンナの声に、声もまた反応した。

「フェンナ、やっぱり君なのか・・・ここはどこだ？　何も見えない・・・」
「オルニス、オルニス？　どこなの？」
「僕は・・・」

その時、ダンタリオンの表面がボコボコと盛り上がり、人型の何かが浮き出して来る。そしてはっきりと人型だと認識できるようになると、ちゃんとしたの顔が浮かび上がってきた。そしてその口がゆっくりと、しかしはっきりと動く。

「まさか」
「フェンナ・・・苦しい・・・」
「・・・オルニス・・・そんな・・・」
「・・・フフフ・・・アハハハハハ！・・・」

そこにおいてライフレスがこれ以上ないほどの高笑いを始めた。

「・・・言ったろ、友達を連れてきたって！・・・君の望みどおりさ・・・アハッハハハ！・・・」
「なんてことを！」

「この腐れ外道が！」
「思いつく限り、最低のクソ野郎ですね」
「・・・なんとでも・・・ちなみに、ダンタリオンに仕込んだのは一体じゃないよ・・・」

アルフィリースとミランダ、リサが思わずライフレスを罵るが、彼は素知らぬ顔である。ライフレスの言うとおり、ダンタリオンの腕に、腹に、背中に、膝に、次々と浮かび上がるシーカー達。

「フェンナ・・・痛いよ・・・」
「どこだここは・・・」
「ねえ、フェンナ。どこなの・・・」
「あ、あ、あ・・・」

ついにフェンナが魔術詠唱を放棄して、へたへたとその場に座り込んでしまった。

「マリオン、ミシア、ドローチェ・・・そんな」
「フェンナ、フェンナ！　しっかりしてください！」
「・・・あ、ちなみに・・・」

ライフレスがぴっと一本指を立てる。

「・・・彼らはダンタリオンに組み込んではいるものの・・・臓器は一通り無事だ・・・だからうまいこと切り離せれば、助かるかもね・・・ダンタリオンだけにダメージを与えれば良いだろうし・・・だけど・・・」

ライフレスがニヤニヤしている。

「・・・彼らは全員と痛覚を共有している・・・もちろんダンタリオンともだ・・・よほど上手いことやらないと、痛みでショック死しちゃうよ・・・こんな風に・・・」

ライフレスが簡単な魔術をダンタリオンにぶつける。

「ぎゃあああ」
「痛い、痛い、痛い～」
「あああああ」
「やめて、やめて・・・もうやめてー！！」

フェンナが泣き叫び始める。

「どうしてこんなことするの！？　私達があなたに何をしたの？ねえ！」
「・・・どうしてこんなことをするかって？・・・そんなこともわからないのか・・・」

ライフレスが失望感をあらわにする。

「・・・退屈だからに決まっているだろう？・・・」
「な・・・」
「・・・君たちも何百年も生きてみるといい・・・最初は修行や戦闘に明け暮れこそしたが・・・自分の能力を極めるのは思ったより時間がかからなくてね・・・そして自分に勝てる者がいないと知った時、僕はやることがなくなった・・・」

ライフレスがふと遠い目をする。

「・・・目標も希望も戦う相手も無い世界は退屈極まりない・・・

それでも僕は永遠に生き続けなくてはならない・・・これは思っていた以上の苦痛でね・・・そんな僕の無聊を慰めるのは、地べたを這いずるお前達の義務だと思わないか？・・・」

「なんだと！」

「貴様ぁ、人間を、この大地に生きる命をなんだと思っている！？」

「・・・頭が悪いな、獣人の娘・・・言っただろ・・・退屈しのぎの、ただの道具だ・・・いや・・・悲鳴を上げてくれる分、道具よりはましだと思っているよ・・・」

「お、お、お前は――！！！」

フェンナが強引に発動させた《地津波（アースウェイブ）》をライフレスに放つが、その前にダンタリオンが身を呈して立ちはだかる。地面から隆起する岩が、容赦なくダンタリオンの体を貫くが、ダンタリオンに致命傷を与えるには至らない。だが大ダメージにはなっているのだが、

「うわあああ」

「フェンナ、やめてくれぇ」

「痛いよぅ～」

「・・・ひどい子だな・・・友達に魔術をぶつけるなんて・・・」

「そ、そんな・・・」

逆にフェンナの友人を苦しめただけだった。そしてダンタリオンの傷はみるみるふさがり、フェンナの顔が絶望に彩られていく。

「・・・ちなみに・・・ダンタリオンが無事な限り、彼らは永遠に再生する・・・まあ正気かどうかまでは知らないけどね・・・どうだ、これは芸術品だとは思わないか？・・・」

「この・・・このクソッタレをなんて表現していいか、アタシには言葉が思いつかないよ」

「ご心配なく。リサの毒舌をもってしても同様です」

「こいつだけはなんとしても殺すべきだな」
「無駄な殺生は大草原では御法度だが・・・こいつならば掟破りにはなるまい」
「皆、やっちゃいなよ！　こんなやつ倒しても、精霊は見離しはしないから！」

ユーティの声を皮きりに全員がじりじりと間を詰める中、その行く手を塞いだのはフェンナだった。

「皆、止めて・・・」
「フェンナ、どきなさい。あれは倒さなければいけない存在です」
「でも、でも、そうしたら私の友達を倒さないといけなくなるわ・・・そんなの、私はできない」
「フェンナ！」
「友達なのよ！」

フェンナの目からついに大粒の涙がこぼれ始めた。

「皆一緒に育ったの！　皆私のかけがえのない友達だわ。一緒にご飯を食べて、狩りの練習をして、川まで行って泳いだし、木登りもしたし、それから、それから・・・」
「フェンナ・・・」
「お願い、私の友達を殺さないで・・・」
「フェンナ、どきなさい」

泣きじゃくるフェンナを押しのけるようにアルフィリースが前に出る。フェンナはアルフィリースの腕を掴むが、ほとばしる魔力に手が弾かれた。

「痛っ！」

「アルフィ、あんたは・・・」
「ごめんなさい、フェンナ。私を怨んでくれていいわ」

アルフィリースは既に呪印を解放していた。その体からほとばしる魔力と殺気。アルフィリースが呪印を解放したところを見たことがないフェンナ、ニア、カザス、ユーティ、果てはエアリアルまでもが彼女の迫力に思わず後ずさる。

「アルフィ・・・」
「大丈夫よ、ミランダ。私が勝つから。リサ、あのデカブツの核、みたいなものはあるかしら？」
「え、ええ。ちょうど中心にそれらしきものが」
「と、なるとあのでかい口に一発ブチ込むのがよさそうね。どの系統がいいかしら」

アルフィリースがぶつぶつと何やら考え込み始める。だがその考察も一瞬。
「よし・・・フェンナ、全員助けるのは無理だけど、出来る限り殺すのは最低限にとどめるよう努力するわ。それで我慢して」
「アルフィ・・・」

何の躊躇いもなくフェンナの友人を殺すと言ったアルフィリースに青ざめるフェンナの顔を見て、アルフィリースが露骨に嫌な顔をした。

「何、不満なの？　なら他に良い案を出して見なさい。それともあのお友達と一緒にあなたも死ぬとでも？　残念だけど、そんな選択肢は許可できないわ」
「そういうわけでは・・・」
「なら黙って見てなさい、これが最良の選択肢よ。全員助かるハッ

ピーエンドなんて、現実にそんなものありはしないわ。力ない者は死んでいくのよ、この世の中ではね。何人か助かるだけでも、御の字のはずよ」

ぴしゃりと言いきったアルフィリースに、ライフレスがゆっくりと拍手する。

「・・・その意見には賛成だね・・・」
「あら、気が合うじゃない、ライフレス。でも残念だけど、貴方も死ぬのよ。デカブツを片づけたらすぐに相手してあげるわ」
「・・・ふふふ・・・怖い怖い・・・」
「おしゃべりはここまでよ、始めましょう。皆は下がっていなさい」

アルフィリースがすたすたと前に歩き出す。その様子を見ていたエアリアルが思わず呟いた。

「あれは・・・本当にアルフィリースなのか？」

だがその問いに答えられる者は、その場には誰もいなかった。

続く

死を呼ぶ名前、その8～悪魔の発想～（後書き）

次回投稿は2／18（金）12：00です。

死を呼ぶ名前、その9～惨劇～（前書き）

～あらすじ～

ついに呪印の力を解放するアルフィリース。だが結果は・・・？

死を呼ぶ名前、その9～惨劇～

そして正面から対峙するアルフィリースとダンタリオン。

「ギルルル・・・」

「全く不細工な化け物ね。作った奴は相当趣味が悪いのかしら。ねえ、ライフレス？」

「・・・デザインは僕じゃない・・・」

「へぇ、貴方達にはまだ仲間がいるのね？　一体何人いるのか、お姉さんに話してみない？」

アルフィリースのその言葉に一瞬しまったという顔をしたライフレスだが、すぐに気を取り直す。

「・・・やれ、ダンタリオン・・・」

「グオオオオ！」

「あら、せっかちね。気の早い男はモテないわよ？」

アルフィリースが顔にかかる髪を手で振り払い、両手を腰に当て悠然と構える。一方、ダンタリオンは両手を振り上げ、アルフィリースを叩き潰しにかかる。その隙を狙い、アルフィリースが唱える魔術は異常な速度で編まれた。

【風の精霊ジルフェよ、その力を剣に変え、我が敵を切り裂かん】

《風剛剣（エアロスライサー）！》

ダンタリオンが組んだ両手を下ろす暇もないまま、アルフィリースの両手に集まった風の刃が、ダンタリオンの両手を斬り落とした。

「（・・・早い・・・）」
「グオオオオン！」

ライフレスも内心でアルフィリースに賛辞を贈る。ダンタリオンは叫び声と共にもがき、同化しているシーカー達も悲鳴を上げるが、アルフィリースの判断は毛一筋の先ほども鈍らない。ダンタリオンの体を足場に一瞬で駆けのぼり、大きく開いた口の上に立つ。
口からはアルフィリースと捕獲しようと触手が伸ばされるが、

「邪魔」

の一言と同時に、アルフィリースが一瞬で斬り払う。それでも触手の一本は負けじとアルフィリースに絡みつこうとするが、逆にアルフィリースはその触手を手でつかみ締め上げた。

「気持ち悪いのよ、お前・・・燃えろ」

アルフィリースが汚物でも見るような蔑む瞳で触手を見ると、触手がアルフィリースの手元から燃え始めた。そのまま火は触手を伝ってダンタリオンの内部まで侵攻していく。その明りを頼りに、ダンタリオンの内部を覗くアルフィリース。その中に何やら怪しい脈動を打つ部位を認めた。

「あれか」

呟くアルフィリース。だが彼女の直後の行動は、ライフレスですら思わず目を見張った。なんと、自らダンタリオンの口の中に飛び込んだのである。

「きゃあ！」

「アルフィ!?」
「・・・なんと・・・」

だがダンタリオンはその瞬間、動きをピタリと止める。直後、激しくガクガクと痙攣し口から涎を撒き散らしたかと思うと、膝をついて動かなくなってしまった。体からは煙が出ており、ジュウジュウと音がしている。そしてその口からは、アルフィリースがよじ登って出てきた。

「ち、汚いわね・・・」
「アルフィ、無事?」
「見てのとおりよ、相当汚れたけどね。すぐに水浴びしたい気分だわ」
「何をしたんだ?」
「簡単よ、心臓を鷲掴みにしてしこたま電流を流してやったわ。どんな生物でも電撃は効くからね。今は気絶した状態かしら。もっとも加減がよくわからなかったから、もうすぐ死んじゃうかもしれないけど」

ニアの質問に、アルフィリースがダンタリオンを振り返りながら答える。

「フェンナ、友達と話すなら今にしなさい。どのみち全員助からないわ」
「え?　それはどういう・・・」
「ライフレスは化け物とシーカーは痛みを共有しているといったわ。ならば血流も高い確率で共有しているはず。どのみちあの化け物を倒したら、全員死ぬわ。確信を得たのは今だけど。実際切り落とされた腕についていたシーカー達はもう死んでいるようだし。そうなんでしょう、ライフレス?」

アルフィリースがライフレスを見ると、ライフレスも軽く舌打ちをしながらも、その言葉を認める。

「・・・よくわかったね、その通りだ・・・もう少し助けようとかしてほしかったけどね・・・」

「私は出来ないことはしない主義なの」

「・・・冷めた女だ・・・」

ライフレスはひどくつまらなそうな顔をし、アルフィリースはライフレスを睨みつける。ライフレスがおかしな動きをすれば、即座に戦闘態勢に入るつもりなのだろう。

その間を利用して、フェンナがダンタリオンにかけよる。

「皆、皆・・・オルニス、マリオン、ミシア、ドローチェ！」

「う・・・あぅ・・・」

「フェ、フェンナ・・・」

「く、暗いよぅ・・・」

「私達・・・どうなっているの？」

どうやら全員状況は飲み込めていないようだ。だがフェンナもどう説明していいのか言葉がみつからない。まさか親友たちに向かって、魔王に取り込まれてもう助けられないとは言えなかった。どうすることもできず、かける言葉すら見つからず、涙を眼に浮かべたまま親友を見るフェンナ。

だがそんなフェンナを見てシーカー達は察したのか、彼らはフェンナを気遣う言葉をかけた。

「フェンナ、また泣いてる・・・」

「相変わらず泣き虫だな、君は」

「全く、私達がいないと何もできないんだから・・・」
「う、ひっく・・・ぐすっ。わ、私は、私は・・・ごめんなさい！皆を助けてあげられない！」

親友の気遣いを察して、ついに涙が堪えられなくなったフェンナ。ぼろぼろと大粒の涙が頬を伝う。

「わ、私は・・・王女なのに、皆を守る立場なのに！　何もできなくて、守られてばかりで！！」
「なんだ、そんなこと気にしてたの」
「全く、相変わらずお子様だな・・・」
「・・・え・・・？」

フェンナは恨み事を言われるとばかり思っていたのだが、意外な答えに思わず親友たちを見上げる。

「いいかい、フェンナ・・・僕達は君が王女だから一緒にいたんじゃない」
「そうそう、フェンナがフェンナだから一緒にいたんだよ」
「それにあなたを逃がしたのも同じ理由。私達は貴女が王族だからという理由で、フェンナをかばって戦ったんじゃないんだよ」
「フェンナのことが好きだから、生きてて欲しいから、戦ったの。今あなたが生きているなら、私達の願いは叶ったわ」
「そんな・・・」

またフェンナが涙ぐみ始めた。

「じゃあ・・・私の願いはどうなるの・・・？　私はずっと皆と一緒にいたかったよ。森でかくれんぼしたり、木の実を集めたり、花で冠を作ったり、森林祭では夜通し踊ったり・・・あの頃に戻りた

いよ・・・」
「フェンナ・・・」
「・・・5・・・4・・・3・・・」

その時アルフィリースはライフレスが何かしら呟いているのに気がついた。どうやら数字を数えているようだ。

「ライフレス、何を呟いている？」
「2・・・1・・・」
「答えろ！」
「0」
「フェンナ・・・」

シーカー達が何か言いかけた瞬間。突然ダンタリオンの体がグズグズと、煙を立てながら腐り落ち始めた。

「うわあああ」
「熱い、熱い！」
「溶け、溶けて・・・」

ダンタリオンの崩壊に合わせ、その苦痛にシーカー達が顔をゆがめる。フェンナは既に言葉も無く、口を両手で押さえて、その光景を食い入るように見つめている。ショックで目を話すことすらできないのか。

「ライフレス！　何をした！？」
「・・・僕は何も・・・ダンタリオンが生命活動を止めたから、崩壊を始めたんだろう・・・どうやら電撃が効きすぎたようだね・・・」
「ちっ！　フェンナ、御免なさい！」

その光景を見て、アルフィリースが飛び出した。高速で印を結び、詠唱する。

【太古より正しき炎の使い手よ。ここに汝の業火を召喚し、邪悪なるものを浄化せよ】

《炎神の鉄槌（ペレズ・ナックル）！》

アルフィリースが突きだした拳から巨大な炎の拳が出現し、ダンタリオンを一瞬で炎に包む。そして炎にシーカーごと巻き込むと、彼らの悲鳴は業火にかき消されていった。そして炎を呆然自失の状態で見つめるフェンナ。その目にはもはや精気が感じられない。最後にフェンナの友人達が何を言いたかったのかは、結局分からずじまいだった。

「皆・・・死んじゃった」

ぽつりと呟いたフェンナに、誰もかける言葉が見つからない。全員がうなだれる中、ニアがフェンナを慰めようと近寄る。その時、突然ダンタリオンを包む炎が揺れる。その事にいち早く気づいたのは、ミランダとリサ。

《風剛剣陣（オーバースライサー）》

「皆、伏せて！」

「間に合え！」

リサの悲鳴とどちらが早かったのか。ダンタリオンを消し飛ばし、炎を切り裂いて飛来する無数の風の剣。リサが悲鳴に反応し、短呪でミランダが即席の防御結界を張ろうとする。アルフィリースもはっと気づき、ミランダとは別に防御結界を張ろうとした。

だが、それが逆にまずかったのか。ミランダとアルフィリースの魔術が互いに干渉し、結界に隙間が生じる。大方の風の剣は何とか方向を逸らすことに成功したが、一本の剣が結界の隙間を通り抜けた。

「避けろー！」

「え・・・」

吹きぬけたのは一陣の風。エアリアルの叫びもむなしく、フェンナに駆け寄ろうとしていたニアの反応が一瞬遅れてしまった。

一瞬の沈黙が周囲を包み、ごとり、と地面に転がる何かの音が全員に聞こえた。

続く

死を呼ぶ名前、その9～惨劇～（後書き）

次回投稿は2／19（土）11：00です。

死を呼ぶ名前、その１０～戦う者達～（前書き）

～あらすじ～
ついに重い腰を上げるライフレス。アルフィリースとライフレスが、今対峙する。

死を呼ぶ名前、その１０～戦う者達～

「え・・・あ・・・？」
「二、ニア・・・腕が・・・」
「私の、腕？」

ニアが自分の左腕を見る。そこにあるはずの腕は無く、血が壊れた蛇口のように噴き出している。

「わ、わ、私の・・・腕が・・・」
「ニア？　ニア！」

後衛にいなければならないはずのカザスが、転がるように飛び出してきた。危険も顧みず、ニアの元に走り寄る。その顔を呆然と見つめるニアだが、カザスの必死の表情から現実を悟る。その瞬間、耐えがたいほどの激痛が彼女を襲った。

「腕が・・・うあああああ！」
「ニア、ニア！　落ち着いて！」
「い、痛い。痛いぃぃぃぃ！」
「うわっ！」

地面に突っ伏し暴れまわるニアにカザスが吹き飛ばされる。その時に彼の眼鏡も外れて地面に落ちて壊れるが、外れた眼鏡に注意も払わず、カザスが自身がもてる最大限の力でニアを押さえつける。

「何か、縛る物を早く！」
「我のベルトを！」

「あああああ」
「くそっ、血が止まらない！」
「ワタシにやらせて！」

ユーティが文字通り飛んでくる。

「水の魔術で応急手当をするわ。エアリーは落ちた腕を持ってきて、布でくるんで！　出来れば氷も！」
「氷なんかどこにあるんだ！？」
「アルフィに魔術で作ってもらいなさい！」
「悪いけど、そんな余裕はないわ」

アルフィリースとミランダが、燃え崩れるダンタリオンの方をじっと見ている。そしてその炎が揺れたかと思うと、灰と化したダンタリオンを踏み潰しながらライフレスが姿を現した。

「・・・ふむ・・・その程度の被害で済んだか・・・」
「不意打ちとは卑怯ね。器が知れるわよ？」

軽い口調とは裏腹にライフレスに怒りの視線を向けるアルフィリースに、ライフレスは小馬鹿にしたような目線を向けた。

「・・・まさか戦いの前に『次は僕が相手だ』とか言ってほしかったのか？・・・変な騎士物語に余程ご執心の幼少時代を過ごしたようだな・・・」
「まさか。戦いの最中に気を抜いたフェンナが悪い、ニアが悪い。私が貴方の立場でも同じことを狙ったかもね」
「おい、アルフィ！」

ミランダがアルフィリースを怒鳴る。アルフィリースは悪びれも

せず、ちらりとミランダを横目で見ると、ため息を一つついた。

「まあ、私も気を抜いたのよ。その点では私にも責任はある」
「・・・へえ・・・謙虚だな・・・」
「だから、その分はきっちりあなたに支払ってもらうわ。命でね」
「・・・フフフ・・・いいね、いいね・・・そのぐらいでないと、僕の敵足りえない・・・」

ライフレスが楽しそうに、実に楽しそうに笑い始めた。今初めて、アルフィリースを敵として認識したかのような顔だ。

「ミランダ、全員を守るように結界を張って。派手にやるから出来る限り離れて頂戴」
「アルフィ、大丈夫なのか？」
「さあ？　やってみないと分からないわ」
「そっちじゃなくて、アタシはアンタが・・・」

そこまで言いかけて、ミランダは言葉を飲み込んだ。アルフィリースのことが心配だ、と言いかけたのだが、言ってどうなるものでもなし。もはやアルフィリースとライフレスの戦いは止められず、もしアルフィリースがライフレスを止められなければ、全滅が必至なのはミランダにもわかっている。それならば今ここで余計な事を言ってアルフィリースの気を散らせるよりも、ミランダは彼女を戦いに集中させてやりたかった。

「・・・後ろはアタシに任せろ。だから勝ってきなさい」
「努力するわ」

アルフィリースが立ち去りかけるミランダの方を振り向くことなく答える。ミランダがニア達の所に戻ると、そこはそこで修羅場だ

った。

「カザス。痛い！　痛いよ！！」
「ニア、これを咥えて！」

額に脂汗を浮かべもんどり打つニア。残った右手はカザスに縋り付くように彼の腕を握り締めているが、力が入りすぎてカザスの腕に爪が食い込み、血がぽたぽたと流れている。それでもカザスはニアが舌を噛まないように噛む物を口にあてがい、そのまま必死でニアを押さえつけている。一方ユーティは魔術で血止めを行っている。その額には汗が浮かんでいた。
その様子を見て、ミランダが指示を飛ばす。

「リサ」
「はい、ここにいます」
「センサーで出口を探して。私達は撤退準備よ。アルフィリースが戦う隙に脱出するわ」
「アルフィはどうするのです？」
「アンタ達を脱出させたらワタシは戻る。とりあえずニアとフェンナはもう戦えない。この場から脱出させてやらないと危険だ」

ミランダは座り込んで一点を虚ろに見つめるフェンナと、痛みでのたうちまわるニアを見ている。

「わかりました、少々お待ちを」
「頼む」

リサは出口を探すために集中し、ミランダはエアリアルにフェンナの様子を見るように指示し、自身はニアの手当てを手伝う。

「ユーティ、これを」
「これは？」
「トチクの葉とクルシオの実の皮から作った特性の血止めよ。とりあえず出血はこれでなんとか抑えられるでしょう。鎮痛効果もある」
「助かるわ。でもワタシにもう少し時間をちょうだい」
「なぜ」
「今なら血流を上手く構築して、手を再びつなげるまで持たせられるかもしれない」
「できるの？」

ミランダが目を丸くする。ユーティが言ったことはかなりの高等技術だ。水の回復魔術にそういったことをする方法があるとは耳にしたことがある物の、まさかいつもおちゃらけているユーティが扱えるとは思っていなかった。

「私だって初めてだけど・・・精霊の里に行ければどうにかなるかもしれないわ。幸い魔術で切断されたわけだから、ばい菌が入る可能性は低いけど、それでも早ければ早いほどいい」
「分かった。でも5分でやって。アルフィリースがそこまで持つかどうかわからない」
「・・・そんなにやばいの？」
「ああ」

ミランダは昔を思い出す。自分の良人――いや、恋人と言った方が正確なのだろうが、ミランダはもはや夫のつもりでいた――であったオードが相討ちで倒した相手であるエルリッチを、顎でこき使う少年。その実力は推して知るべきだろう。

「（アルフィが勝てなかったら・・・アタシだけはあの子の傍にいてやろう。たとえこの身がどうなろうとも）」

ミランダが内心で決意を固める中、リサがその袖をひいた。

「ミランダ、伝えにくいことが」
「これ以上何があるの？」
「出口が・・・ありません」
「え！？」

ミランダが漏らした叫びに、他の全員が反応する。

「どういうこと？」
「周囲を、非常に広範囲に渡って結界で遮断されています。戦いに集中していたので、センサー範囲を狭めていたのがあだとなりました」
「・・・くそっ」

ミランダが悔しげな顔をするのと、背中の方で爆音がするのは同時だった。そしてアルフィリースが吹き飛んでくる。
地面を転がりながらも、なんとか体勢を立て直すアルフィリース。

「くぅ・・・」
「アルフィ！」
「来るな！」

近寄りかけたエアリアルを一喝して制するアルフィリース。その目は自分が今吹き飛んできた方向をじっと見つめている。そして悠然と歩いてくるライフレス。

「・・・出口がないんだろう？・・・リサ、だったか・・・」
「やはりあなたですか」

「・・・本当に僕がただ観戦しているだけだと思っていたのか？・・・観戦しながらきっちり結界は張らせてもらったよ・・・もっとも君たちの目の前に出てきたときには、ある程度の物は既に張っていたんだけどね・・・ドゥームの阿呆と僕は違うぞ・・・仕掛けに抜かりはない・・・戦うときには策は何重にも巡らすもの・・・切り札はいくつも隠し持つもの・・・戦闘の基本だな・・・」

そんなことも知らないのか、とでもいいたげにライフレスがアルフィリース達を見る。

「・・・戦闘の時に最も気をつけなければいけないのは退路の確保・・・退路も確保しないで突っ込んでくれれば、全滅は必定だ・・・同情の余地は無いな・・・」

「仕掛けた当の本人には言われたくありません」

「・・・それもそうか・・・ところで・・・」

ライフレスがミランダを見る。アルフィリースと戦闘中であるにも関わらず、目を平然と彼女から離す。もはやアルフィリースの実力を読み切ったとでも言わんばかりの態度だ。

「・・・この戦いの後、お前を連れて帰る・・・」

「何さ、アタシの美貌に目がくらんだか？」

「・・・悪いが女の造形なんぞに興味はない・・・それよりお前は不老不死なんだろう？・・・」

「・・・だったら何さ」

ミランダが警戒心を上げる。

「・・・知っているか？・・・いまだかつて完全な不老不死は実現されていない・・・天に輝く他の星に行く、時間を超える、不老不

死を実現するといった事柄は魔術士達の長きにわたる命題だ・・・それは魔術を学んだ身として、僕もまた例外ではない・・・その答えが目の前にあるかもしれないと思うだけで・・・興味は尽きない・・・」

「アタシには関係ない」

「・・・興味は無くても関係はある・・・このことを魔術士が知れば、お前をバラバラに分解してでもその秘密を解き明かそうとする連中は後を絶たないだろう・・・僕に限らず、魔術教会の連中も同様だろうね・・・それに気がついていち早くお前を保護したミリアザールは賢いな・・・もっともその秘密を一人占めしたいだけかもしれないが・・・」

「うちの最高教主はそんな人じゃない！」

思わずミランダが声を張る。彼女はミリアザールには大きな恩があるし、普段は色々口喧嘩もするものの、尊敬もしているのだ。そのミリアザールを得体の知れない少年に馬鹿にされて黙っているほど、ミランダは大人しくない。だがそんなミランダの感情など、ライフレスにはどうでもいいことだった。

「・・・どうだか・・・あれはお前が思うような正義の味方じゃない・・・汚いことも平気でやるし、必要があれば部下も犠牲にできる女だ・・・昔あいつが一つの町を住民ごと完全に灰にしたのを知ってるか？・・・」

「なんでそんなことがわかる。お前が何を知っているというんだ」

「・・・少なくともお前よりはな・・・何せ大戦期以前からの知り合いだ・・・」

「何？」

「・・・当時は面識もあった・・・もっとも今とは僕の姿形が全く違うから気づかなかったみたいだが・・・」

ライフレスが淡々と語る。その内容はミランダにとっては驚きの連続であり、正直興味をそそられたが、この少年の話を全て真に受けるわけにもいかない。

「・・・本当なのか？」

「・・・興味があるなら僕について来い・・・もっともこの後連れて行くのだから、結果は同じだが・・・ちゃんと実験でお前が正気を失う前に、知っていることは全部話してやるよ・・・」

「そんなことさせると思う？」

アルフィリースがゆらりと立ちあがる。

「私が生きているうちは、ミランダには手出しはさせない」

「・・・困ったな・・・君は殺すなと言われているんだが・・・」

「誰に？」

「・・・少しおしゃべりが過ぎたようだね・・・だが五体満足で生かせとは言われてないし・・・手足はもいでおくか？・・・」

ライフレスが再び戦闘態勢に入る。それを見てアルフィリースも構えなおす。

「・・・必死で抵抗して見せろ・・・お前達は出来る限り生かして連れて行ってやるが・・・お前達を実験材料としていじるのは完全な変態だ・・・死んだ方が億倍もましだと思えることを平然とされるぞ・・・」

「あなたも大層なものよ」

「・・・僕はただ強い奴と戦いたいだけさ・・・戦えそうな奴が力を発揮するためならそいつの恋人を殺すし・・・必要ならそいつ以外は全員殺す・・・戦えなくても道具は道具なりにころころ表情が変わるから、それはそれで面白いんだが・・・やはり戦いの方が僕

は好きだ・・・そうだ・・・」

ライフレスがいいことを思いついたとばかりの表情を浮かべる。

「・・・お前も・・・仲間が一人くらい死んだ方が頑張れる人間か？・・・どいつがいい？・・・」

ライフレスが手をミランダが達の方に向ける。それにびくりとするミランダ達だが、その前にアルフィリースから先ほど以上の殺気と魔力がほとばしる。

「もう黙れ、お前はぁ！」

「・・・やればできるじゃあないか・・・それでいい・・・」

そして再び戦闘態勢に入るライフレスとアルフィリースだった。

続く

死を呼ぶ名前、その１０～戦う者達～（後書き）

次回投稿は、２／２０（日）１３：００です。

死を呼ぶ名前、その１１～魔術戦～（前書き）

～あらすじ～

激化していく戦闘の中、ついにアルフィリースとライフレスが正面から激突する！

死を呼ぶ名前、その11～魔術戦～

【我が血を喰らえ火の精霊】

先手を取ったのはアルフィリース。自身が使えるもっとも強い威力の魔術の詠唱に入る。かつてルキアの森で戦った魔王を焼き尽くした魔術である。だがそんなアルフィリースを見て、小馬鹿にしたように鼻で笑うライフレス。アルフィリースの詠唱を確認してから、自身も詠唱に移る。

「（何を唱えるつもりか知らないが、魔術は先に詠唱した者勝ちだ。ましてこの魔術の威力はともかくとして、手数で上回る魔術など――）」

【我が血を啜(すす)れ水の精霊】

「！？」

詠唱の頭文字を聞いたアルフィリースが驚愕の顔を一瞬し、直後、蒼白になった彼女は詠唱を急ぐ。

「（まさか？）」

頭によぎる悪い予感。それを振り払うかのように詠唱を続けるアルフィリース。

【集いし精霊を分けて分けて虚ろなる器に収めて舞い遊ばす。我、舞いし精霊にさらなる贄を捧げん。】

【集いし精霊を注ぎて注ぎて空なる盃に溢(こぼ)して澱み捉える。我、捉えし精霊にさらなる贄を捧げん。】

「（やれるか？）」

ライフレスよりも、アルフィリースの詠唱の方がまだ早い。これなら発動時間の差で押し込めるはず――アルフィリースはその可能性にかける。

《炎獣の狂想曲（フレイム　カプリッツィオ）！》
《氷像の鎮魂歌（アイス　レクイエム）！》

アルフィリースの足もとから立ちあがる炎の獣たちが、ライフレスの喉笛と喰いちぎらんと突貫する。だがライフレスの足元からは様々な獣、あるいは海生生物、鳥、中には人型――などの氷像が次々と構成され、アルフィリースが放った獣たちを次々と叩き伏せていく。

「（後だしで私の魔術と互角。それにあの氷像の種類の多さ！　魔力・構成力、共に私より上か）」

アルフィリースが歯ぎしりしていることに気がついたのか、ライフレスがうすら笑いを浮かべた。思わず頭に血が上るアルフィリース。

「なめるな！」

【風の精霊ジルフェよ。集いて来たりて剣となれ、剣を鍛（きた）えて捲（けん）と成せ】
【大地の精霊グノームよ。集いて来たりて牙となれ、牙を分けて大蛇（おろち）と成せ】

「（こいつっ！）」

アルフィリースの目の前には、目に見えるほどの風の塊が螺旋を描いている。一方ライフレスの目の前には、地面が隆起し、大蛇を模した土塊（つちくれ）が何匹も頭をもたげている。

アルフィリースは一息大きく吸うと、風の塊を放つ。

《螺旋描く風精の怒り（ヘリカル・シュート）！》

《八又の土蛇の咬撃（ウロボロス・バイト）！》

アルフィリースが放つ風の巻弾に、ライフレスの土蛇が噛みついて行く。土蛇は1つ、2つと削り取られていくが、風弾の勢いも明らかにその勢力を減じていった。そして最後の蛇が砕けた所で、丁度風も消滅する。ここまでは互角。だがしかし。

「（間違いない、こいつはわざと後から詠唱を唱えて、反対の属性の魔術をぶつけている。そんなの、よっぽど自分の詠唱速度と魔力に自身がないとできないけど・・・ならば、こういうのはどうだ？）」

なおもアルフィリースは詠唱を続ける。

【我、汚れし水の化身である汝を欲す。ここに汝が暴力と憎悪を解き放ち、我が敵を蹂躙せよ。】

《召喚、渦潮の悪魔（カリュブディス）！》

アルフィリースが使ったのは召喚魔術。召喚した魔獣は一応水属性とはいえ、召喚魔術自体は無属性に属する。これならば無効化は不可能だと、アルフィリースは考えたのだが。

【我、汚れし水を召喚し、汝を安寧なる暗き水の底に還さん。】

《黒より這いずり出す大渦（アビス・スウィール）》

ライフレスは暗黒魔術で渦を形成し、カリュブディスを飲み込んでしまった。しかも皮肉も込めてか、渦の魔物を渦で飲み込んだ。

だがこれではっきりした。完全にアルフィリースは、ライフレスに馬鹿にされているのだ。

「遊んでるの？」

「・・・いやいや、真面目に、からかってるんだよ・・・」

「くっ」

「・・・ククク・・・たかだか２０年も生きていない小娘が、魔術戦で僕に勝とうなんて考えが甘いとは思わないか？・・・どうした・・・もう打つ手がないのか？・・・」

アルフィリースの思考がめまぐるしく回転する。魔力の絶対量では遠く及ばない。詠唱速度も向こうが上。魔術の構成力もライフレスの方が練り込んである。ならばどうするか。

「（私に利点があるとすれば、ライフレスはまだ遊んでいるということ。まともにやれば私が勝てる道理は限りなく少ないが、今なら不意をつけるはず・・・やってみるか）」

アルフィリースがライフレスを倒すための手を何通りも考えるが、どれも試したことは無い。一か八かのぶっつけ本番になる。

「・・・来ないならこちらから行くが？・・・」

「いえ、まだよ！」

【雷神トールよ、我伏して汝の力を欲さんとす。降りて来たりて柱に集い、集い来たりて巨獣の心臓ほどにも成りて、汝の御力、我が

怒りに変えて示さんとす】

「・・・ほう・・・」

アルフィリースが唱えようとしてるのは、風の上級魔術である雷鳴系の魔術。その中でも単体への威力なら最高クラスの魔術である。風に特化した魔術師が長きにわたる修練の成果としてここまでの力をつけることはあるが、多系統を同時に使い、なおかつ若い術者がここまでの魔術を操って見せることは、ライフレスの記憶にもほとんどない。

「・・・しかも大きいな・・・」

アルフィリースの目の前に構成されるのは、直径５０ｃｍ程の雷の塊。普通は手のひらサイズがやっとの魔術だが、アルフィリースの魔力は群を抜いていた。もっともアルフィリースは、この一撃にほとんど全ての魔力を費やすつもりでいたのだ。

「・・・だがその魔術は標的に当たるまでが遅い・・・その分威力が高いがな・・・お前と僕との距離は今３０ｍはある・・・放ってから僕が詠唱しても間に合うぞ・・・」

「それはどうかしら？」

「・・・面白い・・・試してみろ・・・」

「言われなくても。喰らえ！」

アルフィリースが球を投げるように魔術を繰り出す。

《雷塊砲（トール・キャノン）！》

同時にライフレスが詠唱を始める。

「（・・・ふむ、さすがに防御系の魔術の方がいいか？・・・）」
【寄れ、固まれ、塊となれ】
【集い寄れ、風の精霊】
「！？」

ライフレスが防御系の魔術を唱えようとした瞬間、アルフィリースが短呪を唱える。無詠唱の短銃とはとは異なり、詠唱分だけ多少威力はあるが、せいぜい一般人を吹きとばす程度の威力であり、耐性を備える魔術にはほとんど効かない。

「（・・・何を考えている？・・・）」
【爆ぜろ】
《爆風圧（エアロ・プレス）！》
「！」

だがライフレスは心底驚いた。アルフィリースが放った短呪はアルフィリースから放たれるのではなく、ライフレスの目の前で発生したのだ。魔術は詠唱と手による印で発生するため、魔術師の周囲から発生するのが常識であるはずなのに、アルフィリースはいとも簡単にその常識を覆した。

ライフレスは完全に虚を突かれたのもあったが、いくら効かないといえ、目の前で風が爆発すれば一瞬行動は制限される。何より風圧で詠唱が続けられなかった。結果として無防備に近い状態を晒すライフレス。

「（・・・だが・・・まだ間に合い・・・）」
【時を流して空間を縮める。前進せよ】
「（・・・なんだと・・・今度は時空操作系の魔術だと！？・・・）」

使い手の滅多にいない時空操作系の魔術。効果範囲の時間を早めたり、遅くしたりするのだが、発展すれば老化にまで干渉できるともされる。

「（・・・まさか・・・）」

《加速（アクセル）！》

アルフィリースが加速したのは先ほど放った雷塊砲そのもの。目の前で突然加速した雷の塊がライフレスに迫る。

「・・・しま・・・」

ライフレスは言葉も防御も無く、アルフィリースの魔術の直撃を喰らった。

続く

死を呼ぶ名前、その１１～魔術戦～（後書き）

次回投稿は２／２２（火）１２：００です。

死を呼ぶ名前、その１２～かつて英雄と呼ばれた男～（前書き）

～あらすじ～

ライフレスに魔術の直撃を喰らわせたアルフィリースだが・・・？

死を呼ぶ名前、その12～かつて英雄と呼ばれた男～

＊＊＊

その一部始終のやり取りを後ろから見ていたミランダ達。何が起こったかは完全には把握できなかったが、とりあえずかなりの爆発が起きたため、思わず全員が反射的に耳をふさぎ身をかがめた。

数秒の防御の後、凄まじい爆音に耳鳴りを各自覚えつつも、ふらふらとアルフィリースに近寄っていく。ライフレスの周囲は凄まじい爆発でもうもうと煙が立ち、視界がきかない。

「やったの、アルフィ」

ミランダがやっとのことでアルフィリースに声をかける。

「多分・・・直撃したのは確認したから、さすがに防御魔術なしであれを喰らえば無事ではないはず。危ないからこそ、防御魔術を詠唱しようとしたんだろうしね」

「計算してやったの？」

「もちろん。最大級の威力の魔術なら、相殺するにせよ守るにせよ、何かしらある程度の詠唱の魔術を唱えるとは思ったわ。その隙をついての不意打ち2連発。さすがに対応できないでしょう。まさか魔術が何も無い空間に発生するなんて、誰も思わないでしょうから。魔術師として経験が長いならなおさら、ね」

アルフィリースは平然と答えたが、かなり凄いことをやってのけたのはミランダにもわかっている。いつ、どこでそんな修行をしたというのか。

「アルフィだって魔術師でしょ？　いつ修行したの？」
「忘れたの、ミランダ。私は天然で魔術が使えたから、魔術教会に征伐されかかったのよ？　その後は封印されたし、魔術の使い方なんて理論は師匠から教わったけど、実践は一度もしたことがないわ」
「え？　じゃあどうやって・・・」
「待って！」

アルフィリースがミランダの言葉を制した。そして土煙りに集中している。その表情に徐々に焦りの表情が浮かび始めた。

「アルフィ、まさか・・・」
「そのまさかよ・・・」
「・・・ふう・・・心底驚いたよ・・・素直に君を褒めよう、アルフィリース・・・」

煙の中からライフレスの声が聞こえる。まだ煙は晴れないが、どうやらその声から察するに大きなダメージは無いようだ。

「・・・冗談きついわ。なんなのよ、あいつは」
「・・・私が聞きたいわよ」
「・・・数々の敵と戦った・・・魔力が跳び抜けたもの、特有の魔術を使う者、魔法を使う者・・・だが魔術をここまで上手く扱う者はいなかったな・・・ククククク、ハハハハハハハ！」

信じられない現実にミランダとアルフィリースかの表情から精気が抜けていく中、突然高らかな笑い声が煙の中から聞こえた。同時に煙が大量の魔力の風に押されて吹き飛んでいく。

「ひっ」

誰が漏らした声だったか。だが今のライフレスを見た者は、内心では同じ気持ちだったに違いない。なにせ煙の中から現れたライフレスには、右半身がなかった。だが血が噴き出すわけでもなく、純粋に中身が――ない。アルフィリースが吹き飛ばした部分の淵はガラスのようにひびが入り、まるでステンドグラスに描かれた人物がそのまま語りかけてくるようだ。そして足らない部分に絵具を落としたように、ほどなくライフレスの体が元通りに修復される。

その姿を見たアルフィリースはぎり、と歯ぎしりする。

「ライフレス、あなたは」

「御覧の通りだ、僕には中身が無い」

今までとは打って変わった口調に変わるライフレス。その口調は軽妙で、なのに重い威圧感を放っていた。

「大昔、生まれながらに類い稀な魔力を持って生れた僕は、魔術を極めようとした。修行は非常に順調で、歳を経るごとに僕は望むとおりに魔術を修めていった。だが悲しいかな、人の一生は短い。僕はまだ見ぬ自分の極みにたどりつく前に、寿命を迎えようとしていた」

「・・・」

アルフィリースは何も答えない。ライフレスの圧力に押されていることもそうだが、必死に魔力を少しでも回復させようとしているのだ。

「そこで僕は一計を案じた。ある魔術を構築し、自分の寿命を限りなく永遠に近づけた。結果として、僕は程なく自分という個体の極みを見たよ。だが」

ライフレスがゆっくりと目を閉じる。

「逆に僕には敵がいなくなった。あれほど夢見て追い求め、手にした力・・・なのにそれを振うだけの敵が存在しないというジレンマ。これは非常な苦痛だ、わかるかい？」

「・・・わかりたくもないわ」

アルフィリースは吐き捨てるように言ったが、ライフレスはその答えを聞いても薄く微笑むだけだった。

「君もこの領域にくればわかる。戦う相手がいないのは虚しい・・・だが！」

ライフレスの魔力がさらに膨れ上がり始めた。アルフィリースは自身の魔力で圧力をある程度相殺できるが、魔力を持たないリサやカザスは暴風に晒されているようなものだ。座っているのも厳しいように、必死で地面にしがみついている。

「アルフィリース！　久しぶりに戦いがいのある相手を見つけたぞ？　お前に僕と戦う許可をくれてやる！」

「何様のつもりだ、ライフレス！」

「何様・・・何様だと？？　昔は僕の、いや、俺の名前を聞くだけで、魔王すら逃げ出したものだがな！　ハーハハハ！」

哄笑するライフレスの姿が、成人へと変形していく。変化した、いや、元に戻ったと言うべき性格に合わせ、容貌まで好戦的な顔つきへと変わっていく。目は猛禽類のように鋭く光り、我の強そうな鼻と、自身に満ち溢れた口元。それらは端正な顔立ちへとまとめられる。

そして彼は纏っていた黒のローブをはぎ取ると、上半身は裸体となり、胸に大きく刻まれた火傷後ようなものが見えた。その見た目はまるで竜に見えなくもない。

「全力で戦うのはいつ以来だ・・・７００年前に魔王を１００体倒した時か？・・・おお、５００年前に大魔王の軍勢を滅ぼしたというのもあったか」

「大魔王を・・・？　冗談はやめなさい！」

ライフレスが語る驚愕の事実をアルフィリースは否定しにかかるが、ライフレスはじろりとアルフィリースを睨み、不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「あいにくと、俺は冗談は嫌いでな」

「ならあなたは大魔王より強いとでも言うの？」

「ククク、試してみるか？」

「上等！」

「７００年前・・・竜にも見える火傷後・・・どこかで聞いたような」

アルフィリースが再び魔力を高めていく傍で、ミランダは考え込んでいる。本当はそれどころではないのだが、胸の内に湧いた疑問は非常に重要な気がしてならないのだ。そんなミランダの様子にライフレスが気がつく。

「俺の正体が気になるか、女。ならばヒントをやろう・・・俺は魔術の系統として、６種類を使えることになっている」

「６種類・・・それって」

ミランダが信じられない様な目でライフレスを見る。

「ライフレスというのは真名だ。人間として活動していたころは、別の名前があった。ライフレス（命無き者）というのは縁起が悪いと部下に言われてな。俺が人間として活動していたころの名前は」

そこまで言って、ミランダが気がついた。その顔は信じられない者を見る表情である。なぜならば。

「英雄王・・・グラハム」

「と、いうことだ」

「英雄王グラハムですって？」

これにはアルフィリースも驚いた。そして、さしも気丈なミランダも、その場にへたり込んでしまった。

英雄王グラハム――数々の伝説（サーガ）に謳われる、大陸に知らぬ者無き程の伝説上の人物。吟遊詩人は彼の物語をいかに上手く謳い上げるかを競い、騎士たちは彼に仕えることを至上の喜びとし、人々は彼の存在に勇気付けられ、子どもたちはその逸話を寝物語に聞いて育つ。世事に疎いアルフィリースやフェンナでさえ、その物語は知っている。

いわく、平民出身でありながら、たった１０年、弱冠２０歳で国を興した。わずか１５歳の時、わずかな供を従えて魔王の軍勢を打ち破った。死ぬまでに１０００の戦場を駆け、その戦い全てに勝利した。魔王を１００体相手取り、その壮絶な戦いの中、全ての魔王を倒すことに成功した。その栄光を数えればきりがない。

今、アルフィリース達の目の前に立ち塞がるのはその伝説上の人物。そして魔術士としても、史上最高の実力者と言われた人物である。しかも不死身――ミランダがへたりこんだのも無理はない。いや、むしろ長く生き、アルネリア教の資料から歴史に精通した彼女

だからこそ、目の前にいる男がどれほどの人物なのか分かっているのだ。

そして彼女が震える手でアルフィリースの袖を掴む。その顔が怯える少女のようになっていた。

「アルフィ、アルフィ・・・ダメだよ、あんなのと戦っちゃだめだ。逃げよう」

「馬鹿言わないでよ！　やってみなくちゃわからないわ」

「無理だよ・・・伝説上の人物と戦うなんて」

「無理でも何でも、やるしかないのよ！　・・・どのみち、逃げるなんて無理なんだから」

ミランダに限らず、アルフィリースの顔も蒼白だ。だが逃げることもできないことは、よくわかっている。限定された空間内で、不死身かつ最強とも謳われた存在と戦う――これほど最悪な状況もないだろう。

そしてゆっくりとライフレスがアルフィリース達に近づいてくる。ミランダが半分涙目になりながら後ずさり、その手に引かれアルフィリースも下がる。だが既に怯えきったミランダと違い、アルフィリースは精一杯の気力を振り絞って、ライフレスに問いかける。

続く

死を呼ぶ名前、その１２～かつて英雄と呼ばれた男～（後書き）

次回投稿は２／２４（木）１２：００です。

死を呼ぶ名前、その１３～王の言葉～（前書き）

～あらすじ～

ライフレスの正体は英雄王――その驚愕の事実に愕然とするアルフィリース達だったが・・・

死を呼ぶ名前、その13～王の言葉～

「あなたは・・・英雄王とまで呼ばれて、人間の味方ではなかったの？」

ぴたりとライフレスが足を止める。

「そのことか。残念だが、俺は人間の味方などではない。たまたま戦い甲斐がある相手が魔物だっただけだ。人間の方が強ければ、俺が魔王と言われただろうよ。実際に人間の魔王も存在していたわけだしな」

「なら、なぜ王国なんか作ったの！？」

「勝手に俺を崇めてついてきた連中がやったことだ。俺は知らん。それに、貴様はボードゲームはしないのか？　なかなかよい暇つぶしにはなるぞ」

ニヤリとライフレスが笑う。本当にこの男は、人間の命を道具程度にしか考えていないのだ。だがそうと知りつつも、アルフィリースはさらに質問を続けた。

「・・・伝説の上では、あなたが最後の戦に出た時、魔王と共にあなたの軍勢も全滅したと伝えられているわ。本当なの？」

「ああ、事実だ。何せ俺が魔王もろとも全滅させたからな」

「なん、ですって！？」

平然と、何も悪びれる様子も無い顔でライフレスが答えた。その答えに愕然とするアルフィリース。

「一体何万の命を犠牲にしたと？」

「魔王の連合軍がおよそ２０万。こちらはだいたい１０万。それに巻き込まれた町の住民が２０万程度。ざっと５０万だな」
「どうして・・・そんなことを」
「試してみたかった」
「？」
「俺が全開で魔術を放ったら、どのくらいの威力なのか」

それを聞いて、アルフィリースが怯えるように首を横に振った。

「あなた・・・正気じゃないわ」
「正気とはなんだ？　当時は力が全ての世界だった。弱ければ全てを失い、強ければ全てを手に入れる。殺伐とはしていたが、ごく単純な摂理だった。それは魔物と人間が争っているからこのような摂理なのかと最初は思ったが、人間が大陸の主権を握ったとたん、人間同士で同じことを始めたではないか。さしもの魔王達でも同族殺しはやらなかったが、人間達は同族でも平気で殺す。俺に言わせれば、人間達の方が余程狂っているな。
むしろなぜもっと人間をあの時殺しておかなかったのか、今では後悔しているぐらいだ。少し見ない間に蛆虫のように増えたし、俺は無駄に命を粥るようなことはしないが、人間は笑いながら自分と血を分けた人間を殺せる。こんな残虐な種族は他におらんよ。ドゥームを見ているとよくわかるだろう？　まあ俺も他人が無力感に打ちひしがれる姿は好きだがな。お前達は自分が他人より優れていると知った時、優越感は感じないのか？」

ライフレスがアルフィリース達に逆に問いかけた。だが最後だけ聞けば、確かに納得できなくもなかった。

「それは・・・」
「人より優れていれば、優越感を感じるのは当然だ。努力をすれば、

報われたいと思うのも自然な事だ。だがあまりにも人間はその感情が強すぎる。恨み、妬み、嫉(そね)み・・・そんな下らん感情で人間達は平然と同族を殺す。要は自分の感情に人間は振り回されているんだよ。もっとも、それはシーカーやエルフとて例外ではない。そこのフェンナ、だったか？　の先祖のようにな」

ライフレスがフェンナを指さす。そこにはまだ焦点の定まらない目をしたフェンナがいた。

「だがその娘の場合、因果応報というやつだ」

「フェンナが何をしたのよ！？」

アルフィリースが激昂するが、ライフレスは平然と返した。

「そやつが何もしてなくとも、ローゼンワークスの血脈は昔、大罪を犯しているんだよ」

「え・・・？」

フェンナの目にかすかに光が戻る。

「私達の一族が、何を？」

「・・・昔とあるスコナーの一族が練成魔術を開発した。だが彼らを使役していた魔王は、その魔術を一人占めしようとした。だから彼らはその魔王を裏切り、人間側に協力していたシーカーに投降したのさ・・・反対した一族の者を皆殺しにしてな」

驚愕の言葉に、フェンナの感情が堰を切ったように戻って来る。

「嘘！」

「嘘ではない。なぜローゼンワークスの者達だけが遠く離れて暮ら

しているか、疑問に思ったことはないのか？　しかもヒュージトレントなんぞの封印を押し付けられて。だいたいシーカーの魔力なら、ヒュージトレントごときどうとでもなるはずだ。なぜそれを大人しく封印し続けていなければならないのか。

それはお前たちに対する枷なのだよ。叛意を抱くな、というな。だから何年かに一度、ミュートリオから交流と言う名で見張りが来ていたろう？　そしてお前は王族でありながら、この集落の中には足を踏み入れたことはない。違うか？」

「それは・・・」

フェンナは思い当たることを言われて、ドキリとした。確かにライフレスの言うとおり、フェンナはミュートリオには両親と一緒に訪れたことがあったものの、中に入っていたのはいつも両親だけだった。フェンナはいつも外で待たされていたのだ。そんなものなのかと当時のフェンナは深く考えていなかったが、今になってよく考えれば、王族を集落にも入れず外で待たせるなど、歓迎をしているとはお世辞にもいえない。

反論できないフェンナを見ながら、ライフレスはさらに続ける。

「お前達には俺達が残酷な事をしているように見えるかもしれんが、全て因果応報なのだ」

「自分がやっておいて、そんな無茶な話があるか！」

「無茶でもなんでもない。だいたいなぜここにいるシーカー達は南の森の集団から分かれて移住した？　それに移住したこのミュートリオに、他の生き物がいなかったと思うのか？　ここにいるシーカー達は移住の時に森にいた魔獣、魔物、原住民を実力行使で追い出している。実に多くの生き物が死んでいるよ。この行為のどこに正当性がある？」

「それは・・・」

「生き物は常に何かを殺しながら生きている。喰わねば生きていけ

ぬからな。だが人間は罪悪感か、はたまた良心の呵責からなのか・・・人間達はそのことを忘れて、あるいは忘れたいがために『正義』という概念を作り出し、自分達の行動を正当化した。防衛本能の一種としてその事自体は非難はせぬが、いまや正義と言う言葉だけが独り歩きし、今日も正義という言葉の元に、お前達は殺し合いをするのだろうよ。全く持って、度し難い愚かさだ」

ライフレスは侮蔑の視線をアルフィリース達に送った。彼は芯からそう考えているのだろう。だがアルフィリースが反論する。

「じゃあお前は、何のためにこんなことをしている!?」

「世界のためだ」

即答するライフレスに、全員が絶句した。あまりにも意外な答えに、誰も何も言えなかったのだ。

「世界、の・・・・？」

「そうだ。長期的に見れば、の話だがな。その中で残虐な行為も行われていることは否定しないが、全て必要悪だ」

「それこそ詭弁です。振りかざす言葉が変わっただけで、やっていることに変わりはないでしょう」

リサがライフレスを指さしながら指摘する。だがライフレスは薄く笑っただけだった。

「あなたが最後の戦いで部下を殺した理由はどうなのです。それこそ楽しみのためにやったのではないのですか？」

「楽しんだことは否定しない。だが、あそこまでやったのは魔術を解放した結果論であり、正直、想定以上の威力だった。味方の生死はどうでもよかったが、あえて巻き込むつもりもなかった。それに

効率よく犠牲を出して最上の結果を出すのは、指揮官の務めだろう。だが、もし俺があそこで奴らを殺していなかったら、東の国々全てを巻き込んだ内紛になっていただろうよ」

「何を根拠に！」

「起こっていたよ、確実にな。俺には血を分けた者が一人もいなかった。そのせいで後継者争いで部下どもは揉めていたのさ。魔王討伐なんぞそっちのけで、誰が次の国王になるのか、そんなことばかり言っていた。あのまま放置しておけば、魔王どころではなくなっていただろうな。下らん話だ」

ライフレスが遠い目をする。英雄王グラハムの部下には、その功績を伝説に謳われるような人間も沢山いた。その話を聞いては、大衆は勇気付けられたものだ。リサはおとぎ話を子どもに読み聞かせる時、ルースなぞにはよく英雄譚をせがまれた。そのため様々な話を仕入れたのだが、リサも英雄達の話は勇気が湧いてくるようで好きだったのだ。

だが、その英雄達が下らぬ争いに身を投じていたと知って、彼女は非常に落胆した。

「・・・そんな馬鹿な」

「そんな馬鹿な事があったのだよ。もっとも住民までを殺したのは些か(いささ)やりすぎだっただろうが、罰は後でいくらでも受けてやるさ。もっとも、俺に言わせればただの町民もまた同罪なんだがな」

「ふざけろ！　戦いに加わらない住民に、何の罪がある！？」

ミランダが地面を踏みならして激昂した。怯えを怒りが上回ったらしい。そんなミランダを冷ややかな目で見るライフレス。

「罪はある。自分達が提供した武器や食料で兵士は潤い、彼らが敵を殺す。その事を知らずに武器をせっせと磨いて兵士に渡すような

輩など、死ねばいい。自分が直接手を下していないだけで、自分の行動がどのような結果を産むかを想像できない者など、最もタチが悪いと思わないか？　厄介だぞ、そのような奴らは自分が人を殺している実感がないのだからな」

「だが！」

「俺は形だけでも王だったからな、その辺の事情は腐るほど見た。自分が兵士に渡した武器で、娘を殺されてその亡骸の傍で泣き叫ぶ敵国の母親を見たことがあるか？　自分の国の名誉のために、敵国の人間達はいわれのない虐殺を強いられる。それも、単なるみせしめという名目のためだけに。戦場にいる兵士達に『略奪を許可する』と言った瞬間、どのような光景が展開されるか知っているか？

パンを一つ食べるために店の住人を皆殺しにする者。金目の物を盗めために、老婆を殴り殺す者。あるいは見目が好みというだけで、わざわざその夫の前で妻と娘を犯す者。心底醜かったよ、人間は。お前も長く生きた者だろう？　そういう経験をしたことはないか？」

「・・・」

ミランダは黙ってしまった。自分が一人旅を始めた時、親切そうな顔をして近寄って来て、自分を汚した者。また巡礼をしていれば、人間の汚い部分は嫌と言うほど見ている。それでもミランダは人間を信じていたかった。

「しかし！」

「だが今その事を話しても始まるまい。とにかく今、俺達は止まるわけにはいかん。それに残虐な行為を行う場合には、対象にもそうされるだけの理由があってな。もちろんそのことを知っているのは俺と、後数人だけだが。もっともドゥームの阿呆は純粋に楽しんでいるだけだが・・・」

ドラグレオはそんなことがわかるほどの頭脳をしておらず、オネ

エは任務に忠実なだけ。アノーマリーに至っては、やり返されるのを楽しみにしているのだから始末に負えない。もっともお師匠とヒドゥン、サイレンスは事情を知っているようだ。ブラディマリア、姫、もう一人の少年はわからない。

「・・・まあいい。だからこそ獲物の選定は俺にほぼ一任されている。それに俺達が今行っていることに、将来お前達は感謝することになるよ。間違いなくな」

「何をふざけたことを。一体どういった理由で・・・」

「残念ながらそれは言えんな。さて、おしゃべりにも飽きた。そろそろ、殺していいか？」

ライフレスが再び戦闘態勢に入る。構えるアルフィリースの袖を、再びミランダが握る。

「アルフィ・・・」

「ミランダ、戦いましょう。奴が正しいとしても、わけもわからず殺されるなんてまっぴらよ。それに」

「それに？」

「ミランダをあんな奴に渡しはしないわ」

「・・・言ってくれるね！　力が湧いてくるじゃないか」

「私にも戦わせてください」

フェンナがいつの間にかアルフィリースの後ろにいた。その目には光が弱々しいながらも戻っている。

「私だって・・・何も知らずに死ぬのはイヤ！」

「ええ、むしろ手伝ってもらわないと困るのよ」

「アルフィ、我は」

エアリアルも傍に来るが、アルフィリースは首を振った。

「エアリーはニアとカザス、それにリサも守ってあげて。リサはセンサーで結界の穴を探知し続けて。私達がなんとかライフレスにダメージを与えて結界に傷をつけるから、その一点をエアリアルにこじ開けて欲しい。もうそれしか、方法がないのよ」

「・・・わかった」

「皆さん、ご武運を」

リサが祈るような恰好を一瞬行い、すぐ後ろに下がって行った。

その様子を確認したライフレスが一言。

「ふむ、やる気になったか。でないと面白くない。どうせ戦うなら死に物狂いでかかってこい、軟弱な人間達よ」

「言われなくても！」

「（あと少し、時間が稼げれば・・・）」

アルフィリースは戦いながら気づいた事があった。一縷の望みだが、今はそれに賭けたい。そしてアルフィリース達は、ライフレスに斬りかかって行った。

続く

死を呼ぶ名前、その１３～王の言葉～（後書き）

次回投稿は、２／２６（土）１３：００です。

死を呼ぶ名前、その１４～敗北、そして～（前書き）

～あらすじ～
ついに本性を現したライフレスに抵抗するアルフィリース達だったが・・・？

死を呼ぶ名前、その１４～敗北、そして～

「ウソでしょ・・・」
「ど、どうなってるんだ・・・」

後方でニアに回復魔術をかけ続けていたユーティが言葉を漏らし、ニアがそれに反応する。ニアは出血は止まり多少落ち着いたものの、いまだに痛みで唸っており、気絶しかける度に激痛で意識が引き戻されるのを繰り返していた。そんな状態でも戦況を確認しようとするのは彼女の戦士としての本能であり、また足を引っ張りたくないという意地でもあったのか。
だがそんな彼女をカザスは気遣う。

「ニア、まだ動かない方が」
「心配するな、カザス。いざとなったら走れ・・・うぐっ」

体を起こしかけたニアが痛みでうずくまる。リサも思わず手を差し伸べる。

「ニア、まだ無理をしてはいけません」
「リサ・・・アルフィ達は、無事なの、か？」

ニアが絞り出すように放った言葉に対する、リサの反応は鈍い。

「生きては、います。ですが・・・」

リサが歯切れが悪いのも無理はない。目の前には、地面に這いつくばるアルフィリース達。いや、ミランダだけは首を絞めるように、ライフレスに締めあげられていた。

何より全員が驚いたのは、ライフレスが格闘戦でもかなりの腕前を誇ったこと。一方的な展開に、途中からエアリアルの力も借りることになったのだが、エアリアルの戦闘能力を頼みに隙を作ろうとしたアルフィリースの作戦は、ライフレスが接近戦までこなすという完全な計算外により脆くも崩れ去った。魔術師でありながら、格闘戦も一流。それがライフレスである。

地面に横たわるアルフィリースが悔しそうに呻く。

「まさか・・・エアリーと互角以上に渡り合うなんて・・・」

「魔術師が戦闘の時に最も困るのは、詠唱までの時間だ。だからこそ魔術師は戦士タイプの者とパーティーを組むことが多いが、もし一人で戦うことを想定するなら、格闘を鍛えるのは道理。俺は何も格闘戦に限らず、剣技、槍技、斧技、鞭技・・・何でもこなす。雑多な分、どれも一流とは言い難いかも知れんがな」

「よく言うわ・・・」

エアリアルを真っ向勝負で退ける技量の、どこが一流でないというのか。もっとも、ライフレスがエアリアルの打撃ではダメージを負わないからこその芸当なのかもしれない。

そして地面に這いつくばるアルフィリースは後回しにし、ミランダに向き直るライフレス。

「さて、もう一度聞こうか。女、名前を名乗れ」

「誰が・・・言うか！」

ミランダは首を絞められながらも懸命に抵抗する。ライフレスがその気になれば、ミランダのか細い首くらい一瞬で折られることは百も承知だが、その程度で本名を喋る程ミランダもやわではない。というより、本名の重要性を考えれば自分の存在に変えても名乗るわけにはいかなかった。

だがそんなミランダを見て、ライフレスは少し困ったような表情をする。

「強引に魔術で吐かせてもよいのだが・・・俺は余りその手の魔術は得意ではないし、何の準備も無い状態では、思ったような事を聞き出せるかどうかわからんしな。だが貴様は痛みにも強そうだ。さて、どうするか・・・」

「何をされても・・・絶対言わない！」

「なるほど。これでもか？」

ライフレスが足元で横たわっていたエアリアルの右腕を踏み抜いた。ゴキリ、と嫌な音がして、エアリアルの腕が折れ、声にならない悲鳴を上げるエアリアル。

「ぐあ・・・あ、う・・・」

「何をする！」

ミランダが悲痛な叫び声を上げる。

「さて、取引だ。お前が素直に吐けばこいつらの命は保証しよう。だが喋らなければ・・・」

ライフレスがエアリアルの左腕を踏みつけ、今度は徐々に体重をかけていく。メキメキと嫌な音が響き、エアリアルの額から脂汗が滲み出る。またエアリアルが悲鳴一つ上げようとしないことが、逆にミランダの心を折った。

「・・・ワースだ」

「何？」

「ミランダ、言ってはダメ！」

アルフィリースが叫ぶが、ミランダは既に腹を決めていた。

「私の名字はレイベンワースだ！」

「なんと」

ライフレスがその目を見開く。そして感慨深げにミランダの顔をまじまじと見る。その様子を不審がるミランダ。

「知ってるのか？」

「当然だ。薬師の一族として、奴らを知らぬ者は当時いなかったろう。回復魔術が普及しておらぬ時代、奴らの薬は非常に貴重だったからな。各国の指導者、果ては魔王までが奴らの作る薬を欲した。特に、エリクサーは秀逸だったな。俺もお前達の一族とは親交があったしな」

「なんだって？」

今度はミランダの目が見開かれる。その事実をさも当然のように語るライフレス。

「当然だろう？　俺は当時英雄王と呼ばれるほどの権力者だった。むしろ奴らの方から売り込みに来たよ。俺が王になる前は門前払いにしたくせにな。なかなか狡い一族だった」

「馬鹿にしているのか！？」

激昂するミランダ。

「いやいや、むしろ褒めているんだ。魔王とまで取引することで、奴らは一族の存亡と繁栄を図った。中々に上手い手だ。全滅したと聞いて、非常に残念だったよ」

「お前がやったんじゃないのか！？」

ライフレスを睨みつけるミランダに、ライフレスはかぶりを振った。

「残念だが俺ではない。むしろそんなことをするイカれた奴が誰かは、俺も知りたい所だ。魔王達ですら不思議がっていたよ。レイベンワースの一族を殺して得する奴が、どこかにいるとは思えんのだがな」

「・・・・・・」

黙るミランダを見て、ライフレスが薄く笑む。

「さて。話を戻すが、お前がレイベンワースの一族なら、不死身なのもある程度合点がいく。それに不死身を差し置いても、お前の知識は貴重だ。一緒に来てもらおうか」

「アタシを連れていけば、アルフィ達には手出ししないか？」

ミランダがライフレスの目をまっすぐ見る。その目を見つめたまま、ライフレスは即答した。

「俺も望まぬとはいえ、一応は王と呼ばれた身。冗談で取引という言葉はつかわん。お前の要求がそれなら、約束は守る。交換条件が取引の基本だからな」

「・・・わかった。お前について行こう」

「駄目、ミランダ！！」

アルフィリースが叫ぶが、ミランダは悲しそうな顔をしただけだった。一方でライフレスは満足そうに微笑み、ミランダを地面に下ろす。

「アルフィ、これが一番良い方法なんだよ。アタシはあんたを失いたくない」
「冗談やめてよ！」
「冗談じゃないよ。アタシは昔恋人を助けることができなかった。もう、あんな思いは御免だ。あんたを今助けることができるなら、アタシはどうなっても・・・」
「残される私はどうなのよ！？」
「アルフィ・・・」

ミランダの悲しそうな顔を見て、アルフィリースが渾身の力を振り絞って立ちあがろうとするが、上手くいかない。既に彼女の体は魔術の連発や、ライフレスに叩きのめされたダメージで限界を迎えていた。
そんなアルフィリースの様子を、冷ややかに見つめるライフレス。

「アルフィリース、ミランダの判断は懸命だぞ？　この場で貴様がどうあがいても俺が勝つし、ミランダが首を縦に振らずとも、お前達を皆殺しにして俺はこの女を連れていく。またこの女が俺の実験に協力しないとしても、口を割らせる方法ならいくらでもあるからな。特に俺の仲間にはそういうことに詳しい奴がいる。
だがミランダが協力的なら、せめて人間らしい扱いは用意すると約束しよう。もっとも実験の過程で、何度か生きたままバラバラにはなってもらうだろうがな」

恐ろしいことを、さも当然のように淡々と語るライフレス。何のことはない、ライフレスは最初からアルフィリース達を同格の生物としてみなしていないのである。全ての生物が自分の目的を果たすだけの道具であり、実験対象であった。そういった意味では、彼は非常に『王』といえたろう。

だがそんなことがわかったとしても、アルフィリースはこのまま諦めるわけにはいかなかった。

「それでも・・・やらせない」
「往生際の悪い。ならばどうする？」
「私の命を使ってでも」

アルフィリースが左腕の服を破く。その破けた服からは、もう一つの呪印が出てくる。その事実に少し驚いたライフレス。

「ほう・・・まだやれるか」
「覚悟しなさいライフレス。私がこの力を使ったら、あんたは確実に跡形も無く吹き飛ぶわ」
「止めなさい、アルフィ！」

思わずアルフィリースの方に駆け寄ろうとするミランダを、ライフレスが腕をつかんで止める。

「面白い・・・跡形もなくなったぐらいで、俺が倒せると思うのか？」
「やってみましょうか？」

アルフィリースが何かしら言葉を呟き始めると、左手の呪印が動き始める。封印が解けようとしているのだ。
その様子を、雛が孵る前の卵を見るかのような高揚感でもって見つめるライフレス。そしてライフレスがアルフィリースに全神経を集中した瞬間、アルフィリースがニヤリと笑った。

続く

死を呼ぶ名前、その１４～敗北、そして～（後書き）

次回投稿は２／２７（日）１４：００です。

死を呼ぶ名前、その１５～救援と別離と～（前書き）

～あらすじ～

絶対的危機に立たされるアルフィリース達。だがアルフィリースには何やら狙いが・・・？

死を呼ぶ名前、その１５～救援と別離と～

「かかったわね」
「？」

ライフレスがアルフィリースの言葉の意味を謀りかねた瞬間、ミランダを捕まえていた腕が切り飛ばされる。そしてライフレスが反射的にその方向を振り向くと、ミランダを抱きかかえるように、女が一人いた。
と、同時に女が何かをライフレスに投げつけ、一面が眩しい光に包まれた。

「なんだこれは！？」
「これは・・・光爆弾？」

ライフレスと同時に、アルフィリース達も視界を潰される。だが、ライフレスがいち早く視界を取り戻した時に、アルフィリース達はニアの所まで既に後退していた。そのアルフィリース達を守るように立ちはだかる、三人のくの一達。
さしものライフレスも驚きの色を隠せず、思わずお決まりの言葉をくの一達に投げかける。

「何者だ、お前達」

だがくの一達がライフレスの言葉を気にかけることはなく、それぞれが顔を見合せる。

「では、打ち合わせ通りに」
「ミランダ様、アルフィリース殿、脱出します。どうかこちらへ。

楓、後は任せます」
「承知」

ライフレスを無視して動き始めるくの一達。その展開にライフレスも再び呆気にとられるが、だがその展開に付いていけないのはミランダも同じこと。くの一達を見て、ぽかんとした表情を浮かべている。

「・・・あんた達、誰？」
「ミランダ、説明は逃げながらよ。エアリー、フェンナ、走れる？」

アルフィリースの声に、よろよろとだがエアリアルとフェンナが立ちあがる。エアリアルは聞き手を負傷し、残る手も痛めているがそんなことを言っている場合ではない。フェンナも、ライフレスに殴られた腹を押さえながら立ちあがる。そして、どうやら現在の状況を一番正確に分かっているのはアルフィリースだった。

「なんとか、大丈夫だ」
「私も・・・いけます」
「よし。私は最悪魔術を使うから、両手は空けておきたいわ。エアリーは馬を回収して連れてきて。ミランダ、ニアをよろしく」
「あ、ああ」
「他のメンバーは走れるわね？　では先導をお願いできるかしら」

アルフィリースがてきぱきと指示を飛ばしくの一に言葉をかけると、無言で頷き先導を始めるくの一２人。アルフィリース達の後方では、残ったくの一と、ライフレスが対峙していた。

「おい、まさか俺を一人で足止めする気じゃないだろうな？」
「いけませんか？」

くの一が答える。その背はまだそれほど高くなく、体つきを見ても幼さを残す体型をしている。表情こそ覆面でわからないが、おそらくは少女なのだろう。そのくの一が、さらに言葉をつなぐ。

「むしろあなた程度なら、私一人でも倒してしまえると考えているのですが」

「・・・面白いことを言う小娘だな。よかろう、貴様の相手をしてやろう。ただし！」

ライフレスが語調を強める。

「貴様がつまらぬ輩であれば、これ以上ないくらいに嬲ってから殺す」

「心配せずとも御期待には添えるかと。では参ります」

少女のくの一が左手で目を覆う。なんのつもりかと一瞬訝しんだライフレスだったが、少女の目を再び見た時、茶色だったはずのその目は紅蓮に燃えていた。

「魔眼か！」

「燃えろ・・・！」

ライフレスが魔眼を認識するのと同時に、その体があっという間に全身炎に包まれる。ライフレスが無詠唱の氷の短呪を自分に向けて放つが、炎の勢いをわずかながらに抑えることもできなかった。

「（普通の炎ではない？）」

ライフレスが気づいた時は既に遅く、炎がまるで枷のようにライ

フレスの四肢にまとわりつき、その身を捕縛する。そして炎の鎖で繋がれた状態で、少女が使う炎に包まれるライフレス。

「（ちぃ。これでは魔術も使えんし、身動きが取れん！）」

「そのまま大人しくしておいてもらいましょう。私の力が尽きるまで」

「（はなからこれが狙いか）」

ライフレスが想像した通り、少女はライフレスをわざと挑発し、戦わせるように仕向けた。そしていかにも真っ向勝負をするというふりをし、まんまと裏をかくことに成功したのである。

もしくの一が少女でなかったら、あえて安い挑発をしなければ、ライフレスの意識がアルフィリースとの戦いで高揚しておらず冷静であれば。このような事態にはならなかったかもしれなかった。

だがしかし。

「（いつまでこうしておけるかな？）」

炎に包まれてライフレスの声は届かないが、それは少女にもわかっていることだった。

＊＊＊

そして逃げるアルフィリース達。その途中でミランダがくの一に質問する。

「お前達が何者か、説明してもらおうか？」

「私達はミリアザール様の命により、ミランダ様の監視・護衛を行っております口無しの者です。私は梓（あずさ）、こちらは桔梗（ききょう）、足止めをした者は楓（かえで）と申します」

走りながらくの一が説明する。

「監視だと？」

「監視と言ってもミランダ様の身を案じてのことです。何かミランダ様達に都合の悪いことがあるようなら、影からそっと助けるように仰せつかっております。本来ならもっと早くにお助けすべきだったのですが、存在を気取られてはならぬ、とのお達しにより離れて見守っておりましたことが災いいたしました。気づいた時には結界で分断されているという失態。いかようにお詫びしても、しきれるものではございません」

「・・・それはリサのせいでしょう」

ミランダが何かを言いかける前にリサが答える。その言葉に目で肯定する梓。

「申し上げにくいことですが・・・最近リサ殿のセンサー能力が向上したせいで、近くで護衛ができなくなっておりました。今から考えればリサ殿にだけでも相談しておくのが正解だったかと思いますが、既に後の祭。どうか平にご容赦を」

「アンタ達のせいじゃないさ。むしろ今こうやって脱出のタイミングをもらったんだから、感謝しているくらいだ」

ミランダが梓達を宥(なだ)める。その言葉に一瞬梓の顔が緩む。

「そう言っていただければ、日向(ひなた)も報われましょう」

「どういうことだ？」

だがそのミランダの疑問はすぐに解決される。可視化できるほど強力な結界が壁のように立ちはだかるが、その一角に穴が開いてい

た。その向こうには方術で陣を敷いた中に、女性が正座している。さらには・・・

「なんだ、あれは？」
「なるほど、死法ね」
「その通りにございます」

ミランダは女性が一瞬何をしているのかわからなかったが、アルフィリースにはすぐにわかった。女性は自分で自分の腹を貫いていた。その手は今もゆっくりとだが、腹を横に裂き続けている。自分の生命力を代償にした方術、死法である。方術に限らず、魔術にも自信の生命力を代償にするものは沢山ある。アルフィリース自身に施された呪印もまたそうである。
穴を通って結界を突破したアルフィリース達とくの一は、女性に駆け寄る。そして梓が女性に声をかけた。

「日向、よくやったわ。後は楓が退却するまでなんとか持たせなさい」

その言葉に日向と呼ばれた女性がゆっくりと顔を上げ、わずかに頷く。その目からは光が失われかけており、口からは血がごぼりと垂れた。まもなく死ぬのだろう。その様子を見て、ミランダが梓に喰ってっかかった。

「お前！　部下になんてことさせやがる！」
「・・・止むをえない措置です。あのまま手をこまねくわけにもいかず、他の方法をとるには時間が足りない可能性がありました。優先されるべきは我々の命ではなく、貴方様の命なのです」
「命に優劣なんざあるもんか！」

ミランダが梓の胸倉をつかみかかる。だが梓は抵抗するでもなく、半分体が宙に浮いた状態でミランダを見つめ返した。

「いいえ、あるのです。我々の命はそれこそ水鳥の羽毛より軽い。我々が死んでも大勢に影響はないでしょうが、貴方様は違うのです。そのことをもっと自覚していただきたい」

「まだ言うか！」

「・・・ですが、貴方様がそういった方だからこそ、我々も報われる。ミランダ様のその言葉、嬉しゅうございます」

梓のその言葉を聞いて、ミランダは力なく手を離した。もはやミランダが何を言ったところで、この日向という女の命運は変わるまい。そして口無し達が行うことも。その事実がミランダにも理解できるからこそ、そして口無し達が感情を持っているからこそ、どうにもできない自分がミランダは悔しかった。

そのミランダの肩に手を置くアルフィリース。

「ミランダ、もし日向の死を無駄にしたくないなら、私達が今すべきことは確実に逃げ伸びることよ。ここを離れましょう」

「・・・わかってる、わかってるんだけど！　・・・アタシはこういうのは苦手だよ・・・」

ミランダがうなだれる。少し一行を沈黙が包むが、その隙がいけなかった。ミランダの影から伸びる手に、いち早く気がついたのはリサ。

「ミランダ！」

「え？」

「逃がさぬ・・・」

手をエアリアルが打ち払い、弾かれた影が形を成す。エルリッチであった。

「ライフレス様の命により、貴方達を逃がすわけにはまいりませんな・・・」

「でやがったな、骸骨め！」

「心配しないで、ミランダ。こんな奴なら私の魔術で――ぐうっ！？」

アルフィリースが魔術を詠唱しようとした瞬間、低いうめき声が彼女から漏れる。そしてそのまま右腕を押さえ、うずくまるアルフィリース。

「アルフィ、どうした！」

「あう、ううう」

ミランダがニアをエアリアルにあずけて駆けよれば、アルフィリースの右腕の呪印が奇妙な蠢きを見せ、広がり始めていた。以前は腕の全面といっても、密度は大したことはなかった。せいぜい腕に文字が彫ってあるな、という程度だったのである。だが今はアルフィリースの上腕は、元の肌の色が見えなくなりそうな勢いで呪印が侵食していた。

「これは一体？」

「腕が・・・腕が痛いよ、ミランダ。あああああ！」

アルフィリースが戦いの最中だというのに悲鳴を上げた。アルフィリースが普段の態度に似合わず我慢強いことをミランダは知っているので、これは余程一大事ということがすぐに分かった。ミランダは梓の方を凄まじい勢いで振り返り、これ以上ないほど真剣な思

いで頼みごとをする。

「すまない梓。さっきはあんなこと言っておいてなんだが、逃げるために力を貸してくれるかい？」

「存分にご命令を。我々は命を惜しみません」

「なら、命令だ。私達を逃がしつつ、できるだけお前らも死ぬな。死ぬなら、アタシの元に帰ってきてから死んでくれ。勝手に死ぬのは許さない」

「努力しましょう」

ミランダがアルフィリースを抱えあとずさる。もはやエルリッチが自分の恋人の仇などという考えは、彼女の頭から消えていた。そして梓と桔梗がエルリッチに対峙する。

「逃がすと思うのか？」

「いえ、逃がしてみせます」

そうしてじりじりと間合を取る各自だが、ふとフェンナは大地の精霊がざわめいていることに気がついた。

「（このざわめき方は地震・・・いえ、かなり強い魔術？）」

ほどなくして、他の全員が揺れる地面に気がつく。

「何だ、地震か？」

「これは・・・いけない！」

フェンナが叫んでミランダを突き飛ばした瞬間、地面が激しい隆起をし、フェンナとエルリッチの立っていた地面がめくれあがる。

「くうっ！？」

エルリッチもまた虚をつかれたのか、反射的に自分の身を守ることで精一杯だった。そして、

「キャアア！」
「フェンナ！」
「フェンナさん！」

一番近くにいたカザスがフェンナに手を伸ばそうとするが、そのカザスもまた、地面の隆起に飲み込まれていく。

「うわぁ！」
「カザス！」
「いけません、撤退を！」

梓が叫んだ瞬間、シーカーの一軍が絶叫と共に姿を現した。

「うおおおお！」
「チェザーリ様を救え！」
「敵は皆殺しだ！」

彼らの目は血走り、怒りに狂っている。遠目からでも、今の彼らに見境がないことは誰にでもわかった。ミランダはフェンナを何とか助けに行こうとしたのだが、そんな時間すらないことに気がつく。

「くそ！　エアリアル、撤退だ！」
「もうやってる！」

エアリアルは魔術に怯える馬をいち早くなだめ、全員をその上に

促していた。ミランダもそれに続く。そして馬に乗ると、フェンナとカザスがいるであろう方向に叫ぶ。

「フェンナ！　きっと助けるから、死ぬなよ！！」

そして馬の腹を蹴り、その場を後にしたミランダ達であった。

彼女達が去った後、先ほどまでアルフィリース達がいた場所の地面は完全にめくれ上がり、日向もまた地面の裂け目に飲み込まれていった。エルリッチはなんとか回避したが、シーカー達が一斉に彼に群がって来るのを見て、「多勢に無勢か」と言い残して姿を消した。日向が地面に飲み込まれたことで結界に開けた穴も消えていたが、地面が変形したせいでライフレスの結界もまた消滅していた。そして遮るものの無くなったシーカー達が、ライフレスの元に殺到していくのであった。

続く

死を呼ぶ名前、その１５～救援と別離と～（後書き）

次回投稿は、３／１（火）１２：００です。

余談です。

今回の伏線を随分前から張っていたことに、気づかれたでしょうか？　リサとミリアザールが話した時には既に書いてましたが……

死を呼ぶ名前、その１６～思惑～（前書き）

～あらすじ～

口無しの援助を得て脱出に成功したアルフィリース達。一方、残されたライフレスと楓は・・・？

死を呼ぶ名前、その16～思惑～

＊＊＊

そしてこちらはライフレスと楓である。炎に包まれながらも鷹揚とした態度のライフレスに、顔色一つ変えずにライフレスを炎で拘束し続ける楓。だがどちらが有利かは明らかだった。

いずれ疲れ果てる楓と、不死にも等しいライフレス。結果が出るのは時間の問題と思われたが、その時、何も無い空間から煙のようにエルリッチが現れる。

「ライフレス様、シーカーの一軍がこちらに・・・その炎は？」

「あの小娘がやって・・・いないだと？」

ライフレスが一瞬エルリッチに気を取られた隙に、既に楓は脱出していた。既に影も形も見当たらない。見事な引き際に、思わず嘆息するライフレス。

「見事にしてやられたか。いかんな、どうも久しぶりの全力は気持ちが高揚するだけでなく、油断も招くようだ。昔はこんなことはなかったが、俺も年か」

「御冗談を・・・」

エルリッチの方を向き、ニヤリとするライフレス。今さら年齢の概念など無いにも等しいライフレスなので、全くの悪戯際まりない発言である。

そしてエルリッチはというと、ライフレスの冗談に一瞬驚きこそしたものの、彼に恭しく礼をする。

「ライフレス様、この後はいかがしますか」
「どうするも何も、打ち合わせ通りだ。シーカーは何体仕留めた？」
「やはり魔術耐性が高く、治癒魔術も堪能な者が多いため、５００も死んでおらぬかと」
「５００死んでないか・・・計算通りだな」

顔を見合わせたライフレスとエルリッチが不敵に笑んだ。

「シーカー達に簡単に全滅してもらっては困るからな。もっともこの王族だけはアノーマリーの依頼でもらっていくがね。王族がやられたとなれば、さすがのシーカー達も重い腰を上げねばならぬだろう」
「左様でございますな。ではこのシーカーめは私が運びましょう」
「任せる。俺はここの大地を汚しておかねばならん」

言うが早いか、ライフレスが自分の左腕を引きちぎり、無造作にぽいと投げた。その腕が地面に溶け込むように消えていき、魔法陣が浮かび上がる。もちろん左腕自体はすぐに再生されている。そしてライフレスがその場に座して何やら呟くと、地面が徐々に腐り落ち、腐った土が木々に及ぶと、木々も枯れ果ててゆく。その様子は、さながら周辺一帯から生命を全て奪うかのようだった。

これはアルネリア教会が行っている土地の浄化、一般的には『聖化』と呼ばれる魔術の反対であり、『闇化』とでも呼ぶべき行為である。大地を汚し、魔物に適正な土地にする。魔王をこの地に放つつもりのライフレス達にとっては、必要な行為であった。

そして呪文を唱え終えると、すっくと立ちあがるライフレス。

「よし、これでシーカーどもはこの土地には戻ってこれん。奴らに土地の浄化は出来ないからな」
「はい。速やかな『聖化』はアルネリア教会の秘匿ですからね。も

っともシーカー達も時間をかけてやる方法は知っているでしょうが」
「そんな悠長なことはさせん。すぐにでもブラディマリアがここに魔王を放つ。大草原は魔王達が走り回る魔王の巣窟と化すだろうよ。これでぬるま湯につかったこの世界も、多少刺激的になるだろう」

ライフレスが魔王が闊歩するその光景を想像し、楽しそうに口の端を歪ませた。そんな折、ライフレスの耳にシーカー達の雄叫びが聞こえてきた。

「来たか。さて、仕込みはもう一つ。準備はできているか？」
「ぬかりなく。こちらへ」
「うむ」

そうして2人は姿を消した。

＊＊＊

再び二2人が姿を現したのは、最初に攻め込んだミュートリオの北側。そこに手足を縛られ、さるぐつわをされて横たわるシーカーが何人か。

結界に閉じ込められ、地面になすすべなく横たわるシーカー達をライフレスが無感情に見下ろす。

「捜索の手は逃れたようだな」
「はい。むしろ戦闘が激化して、見捨てられたと言った方が正しいかもしれませんが」
「ここは混乱の極みだったからな、いたしかたあるまい。それにしても不運な奴らよ。いっそ死んでおれば楽だったろうにな」
「まことに」

シーカーが辿る運命を想像しライフレスに憐憫の情が少し湧くが、だからといって手を抜く彼ではない。すぐに部下を呼び寄せる。

「マスカレイド、いるか？」

「ここに」

家の陰から姿を現したのは、シーカーによく似た風貌の女。だが眼は赤く、これはスコナーと呼ばれる者達に多い特徴であった。

「貴様の仕事はわかっているな？」

「はい、シーカー達と人間達の、争いの火種を作ること・・・でございますね？」

「そうだ。だからお前には長期間奴らの元に潜入してもらう。上手いこと立ち回り、奴らを人間達と争わせるようにしろ。方法は任せる」

「御意。ではこの女の顔を借りることにいたします。」

そう言ってマスカレイドは立ちあがると、腰のナイフを取り出し横たわる女の顔にひたり、と当てる。ナイフを当てられたシーカーの女の顔が恐怖に歪む。その顔を見て女のさるぐつわをはずし、マスカレイドが一言。

「良い顔だ。すまんが貴様の顔を借りるぞ」

「な、何を」

シーカーの女の返事を待つことなくその顔にナイフをあてがい、顔に沿って皮膚をナイフで切り取っていくマスカレイド。女が地獄まで届くかのような絶叫を上げるが、音声は結界で遮断され、外には決して届くことはない。またエルリッチがしっかり魔術で拘束しているため、女に抵抗はできなかった。

途中で激痛のあまり気を失った女だが、マスカレイドのナイフはよどみなく進む。そして切り取った皮を自分の顔に押しあてると、その皮がマスカレイドの皮膚に定着していき、なんとシーカーの女と同じ顔になるではないか。

その一部始終を見て、素直に賛辞を贈るライフレス。

「便利な能力だ、さすが変身の達人。ヒドゥンが推薦するだけの事はある」

ライフレスの言葉にマスカレイドは軽く会釈をすると、女の衣服をおもむろに引っぺがし、体の各所に触っている。すると、マスカレイドの体がシーカーの女の体格に合わせて変化していった。ほどなくしてシーカーと同じ体躯に変化したマスカレイド。いくらか発声をしたところ、声まで完全にコピーしているようだ。その額にはやや汗が滲む。

「ふぅ・・・」

変身はマスカレイドでもかなりの力を使うのか、思わず疲労からため息が漏れた。その甲斐あってか、姿形は完全に元のシーカーの女と変わらなくなっている。そこにライフレスが疑問を投げかけた。

「瞳はどうする・・・」

「もちろん借ります」

言うが速いか、マスカレイドはシーカーの女の目におもむろに手を突っ込んで、その眼球を拝借するマスカレイド。気絶していた女も余りの衝撃に体を弓のようにのけぞらし、その余りの残酷さと、躊躇の無さに、他のシーカーの瞳が恐怖に濁る。そして取りだした眼を自分の瞳に押し当てると、瞳がマスカレイドの眼の中に入った

ことで、彼女の変装は完了した。

「あとは血を拭き取って、衣服を交換すれば完了です」

「よし、次はこっちだな」

マスカレイドが残りの準備を行う間、ライフレスがエルリッチを促し、懐から瓶を取り出させた。その中には見たことも無い虫が入っており、蠍の様な、蜘蛛の様な形状をしているが、口をガチガチとならしながら元気よく、いやよすぎるくらいに瓶の中を走り回っている。その瓶をライフレスが受け取ると、シーカーの方に向き直る。

「さて、これから俺がお前達に何をするかわかるか？」

だがシーカー達は恐怖でまともな反応ができない。先ほどの仲間のあり様を見た後では、無理からぬことでもある。

「ふむ。せめてもの情けとして、誰が実験台になるか選ばせてやってもよい。実験台に差しだす奴を、目で示せ。一番多く見られた奴に実験を行う」

このライフレスの提案に、最初は面喰ったシーカー達だが、最初の一人が他のシーカーの顔色を窺うために隣を見たことをきっかけに、互いを凄まじく憎しみのこもった眼で見始めた。口さえ自由になれば、すぐにでも汚い罵り合いが始まるだろう。

「フ・・・シーカーといえど人間と大差ないな。ドゥームの言い分もよくわかる・・・ん？」

そんなライフレスの目にとまったのは一人のシーカー。まだ年若

いが、目を伏せじっとしている。その男のさるぐつわを外すライフレス。

「貴様は命乞いをしないのか？」

「・・・どうせ俺達全員殺す気だろう？　なら命乞いも無意味だ。俺はシーカーとしての誇りは捨てない！」

その言葉に他のシーカー達の動きがぴたりと止まる。そして自分の行動を恥じたのか、全員目を伏せて大人しくなった。

「ほう、まだ若いのに立派なものだ。勇敢な若者だな」

「ごたくはいい、やるなら俺からにしろ」

そう言って若者はライフレスを睨みつける。だがライフレスは一向に動揺しない。

「そう死に急ぐな。俺は勇敢な奴は好きだ。お前は条件次第では生き残るかもしれんぞ？」

「どういうことだ？」

「その前に、貴様」

ライフレスが他のシーカーの胸倉をつかみ上げる。

「貴様はさっきから他の者を一通り見まわしていたな？　俺は自分が助かるために他人を犠牲にするような奴は大嫌いだ。だから貴様から実験台にしてやる。エルリッチ、こいつの口を開けさせろ」

そうしてエルリッチが男のさるぐつわを外し、力ずくで口を開けさせる。ライフレスは瓶の蓋を開け、中の虫ともなんともつかない生物を取り出した。すると自由になったことを知ったのか、虫が凄

まじい勢いで暴れ出す。

「活きのいい虫だな・・・」

「ライフレス様。それをどうするので？」

「決まっている、この愚か者の口に放り込む。それが姫の依頼でな」

その言葉を聞いて、男の顔から血の気が引いて行くのが、音で聞こえるかのようだった。そして暴れ始める男。

「ひゃめ・・・ひゃめ・・・て・・・」

「残念だが聞けないな」

そうして虫を男の口の中に放り込むと、虫は狂気乱舞して男の中に入って行った。

「げ、げぶおっ！　う、おえ、おぉえぇぇぇぇ・・・」

悶え苦しみながら男が床を転がりまわる。激しいけいれんを繰り返し、懸命に虫を吐き出そうと嘔吐し、喉をかきむしる。あまりの激しいけいれんに体中に傷がつき、地面に打ち付けた頭からは血が流れ出るが、男はやがてピクリとも動かなくなった。

そして動きが止まってから間もなく、彼の体に変化が起きる。傷ついたはずの彼の体は見る間に修復され、彼はムクリと立ちあがった。

「ふう・・・」

そして不思議な事に、彼の口からは女性の声がした。その事実に残りのシーカーだけではなく、エルリッチやマスカレイドまで目を見張る。

続く

死を呼ぶ名前、その16～思惑～（後書き）

次回投稿は3／3（木）12：00です。

死を呼ぶ名前、その17～姫～（前書き）

～あらすじ～

全てはライフレスの意のままに進む。そして彼が次に打つ手とは・・・？

死を呼ぶ名前、その17～姫～

「姫・・・かな？」
「お久しぶりね、ライフレス」

顔は男のまま。だが、声は若い女性のものであった。妙に艶めかしい声だが、その声が男から聞こえるとはぞっとしない事実だった。さしものエルリッチですら嫌悪感を覚える。

「ライフレス。貴方、その姿は？」
「そうか、姫も見るのは初めてか。これが俺の真の姿さ」
「私に見せても良かったのかしら？」

姫と名乗る声の主が、男の姿でくすりと笑う。その仕草が女そのもので、さしものライフレスも少し嫌な顔をした。

「構わないけど、男の姿でそれはやめてくれないか？」
「あらあら、その気になっちゃう？」
「よせ」

ライフレスが追い払うような仕草をする。その姿に笑う姫。

「ふふふ、からかうのが過ぎた様ね。でも、この体への定着は良好よ。このまま潜入すればいいのかしら？」
「その声でか？」
「声色は自由よ」

瞬間、声が男のものに戻る。なるほど、とライフレスは納得した。

「便利なものだ。しかし、よく操れるな。本体は相当遠くだろう？」
「任せなさい、これが私の能力なのだから。あら、他にもシーカーがいるのね」

姫が乗り移った男が、自分の仲間であった者達を見下ろす。だがその眼には何の感慨も浮かんでおらず、アノーマリーと同じように実験動物でも見るような目だった。

その目線に常軌を逸したものを感じたのか、全員がびくりと身をすくめる。その様子を見て、ライフレスが姫に問いかける。

「何を考えてる？」
「そうね・・・まだ力には余裕がありそうだから、この子達も使おうと思って。ライフレス、貴方はこの子達に何か用はあるかしら？」
「正直、勇敢な若者はひと思いに首をはねてやろうかと思ったんだが・・・特にそうしなければならない理由はないな」

あっさりと先ほどの若者に悲痛な宣告をするライフレス。その言葉を聞いて姫はニコリとした。

「では順々に私が頂きましょう。見て行く？」
「いや、いい。好きにしろ」

そして興味を失くしたライフレスがその場を後にしようとすると、背後から姫の声がかかる。

「ライフレス」
「何だ」
「貴方、男前でしてよ」
「・・・やめろと言っている」

そして姫を後にして、その場を離れるライフレス達。そして残された姫がニコリとシーカー達に微笑んだ。そしてその口からは、ムカデの様な気持悪く、妙に太く長い多足の生き物が這い出してくる。そして瞬間的にその生き物を口の中に引っ込めると、姫は残酷な通達をシーカー達におこなった。

「どうせ死ぬなら、キスしながらがいいわよねぇ・・・？　太くて長いので、貫いてア・ゲ・ル♪」

そして一番近くにいた男にキスをする姫。その様子は背後にいた他のシーカー達からは見えないが、その痙攣の仕方から、尋常ではない苦しみをそのシーカーが味わっているのがわかった。そして仰向けに倒れる時、その口に何か蠢く物が入っていくのが他のシーカー達にも見えた。

恐怖に戦(おのの)くシーカー達を見て、ペロリと舌なめずりする姫。

「ああん、そんな顔されたら私、感じちゃう。心配しなくても順番に、どんどん太く、長くなるから、ね」

その言葉を言い終わると同時に、先ほど痙攣して倒れた男が起き上がる。その口からは先ほどと同じように、口から虫が這いずり出してきた・・・。

＊＊＊

背後から聞こえる、声にもならない絶叫を感じながら、ライフレスは佇んでいた。そのライフレスに、マスカレイドが話しかける。

「ライフレス様、姫に気にいられたようですが？」

「よせ。貴様はヒドゥンと違って冗談好きだな」

「まあそうですね。元がネアカですから」

仕える上司が違うとはいえ、まがりなりにもライフレスの立場が上なのだが、マスカレイドは無遠慮に答える。

「姫は絶世の美女だと、ヒドゥン様から聞いていますが？　美女に好かれるのは悪い気はしないでしょう」

「それはそうだが、あれは別だ。貴様は姫の正体を知っているのか？」

「いえ」

マスカレイドはかぶりを振った。その様子を見て「フ・・・」と乾いた笑いを漏らすライフレス。

「知らん方がいい、アレはおぞましすぎる。あんなのに比べたら、ドゥームの連れている悪霊達の方が１００倍マシだと思えるほどにな」

その心底嫌悪感を露わにするライフレスを見て、マスカレイドとエルリッチは思わず顔を見合わせた。ライフレスが自分の心情を見せるのは珍しい。それほど嫌な相手なのだろう。

だがライフレスはそれだけ述べると、もう姫の事は忘れたように振舞う。そして、その体も元のサイズに戻していった。

「・・・ふう・・・」

「もう元に戻られるので？」

エルリッチが尋ねる。

「・・・あまり力を使いたくない・・・それでなくてもかなり消耗

しているし、これからも作業はあるからな・・・それに・・・」
「それに？」
「・・・少し興奮しすぎた・・・危うくアルフィリース達を殺してしまいそうになったよ・・・魔術を使う者は自己制御が基本だというのにな・・・ククク、僕もまだ若いのか・・・」

ライフレスが幼い少年の姿をしているのにはそれなりの理由がある。魔力の放出は彼の滾る闘争本能に火をつけるため、彼は姿形を小さくし、魔力を押さえこむことでなんとか自省を保っているのだ。
そんなライフレスが先ほどの戦いを思い出し、楽しそうに笑う。彼はアルフィリースを好敵手とみなしていた。戦ってこれほど心から楽しいと思った相手は、ライフレスには非常に久しぶりの事だった。かつて大魔王と戦った時より面白いかもしれない。だからこそ、ライフレスは考える。

「（・・・アルフィリースという女・・・戦っている最中に一度魔力がゼロになったはずなのだがな・・・なのにお構いなしに魔術を使ってきたのはどういうことなのだ？・・・加えてあの魔術の使い方・・・発想も素晴らしいが・・・あれほどの戦い方、どこで実践してきたのか・・・）」

ライフレスが瞑想をするように、目を閉じて立ったまま考え込む。その時、ライフレスに一つの考えが浮かんだ。

「（・・・もし、アルフィリースが全く戦闘経験が無いとしたら・・・あの戦い方をあの場で思いついて実践したことになる・・・実際に俺にかかって来る前、少し間があった・・・あれが考えをまとめる程度の間だとしたら・・・あいつは呪印を解放した状態ではレベル1ということになる・・・
・・・もし・・・あいつがもっと経験を積んで戦い方を覚えたら・

・・実際、あの女が自分で気づいたかどうかは知らないが・・・使うたびに徐々に魔術の威力が上がっていた・・・
・・・それに・・・くの一が入って来ることなど、俺ですら知りえなかった外の様子に・・・どうやって気づいたのだ？・・・）」

ライフレスがゆっくりと目を開いた。その目には先ほどまでとは違う輝きがある。

「・・・危険だな・・・」
「は？」

突然のライフレスの声に、思わずエルリッチがすっとぼけた声をあげる。だが振り返ったライフレスの顔は、戦いの最中のように真剣だった。

「・・・マスカレイド・・・」
「はい」

ライフレスの様子を察したのか、マスカレイドにももはやふざけた様子は消えていた。

「・・・手はず通り、姫の仕込みが終わったら潜入を開始しろ・・・やり方は貴様に任せる・・・」
「了解しました。念のため確認しますが、人間との戦いの火種を作ることが最低条件。可能であればシーカー達を誘導して、アルネリア教の庇護の元に入らせればいいのですね？」
「・・・そうだ・・・もしかすると、貴様がそう運ぶまでもなく狙った通りになるかもしれんがな・・・」
「は？」
「・・・こちらの話だ・・・ちなみにアルネリアにはブラディマリ

アの部下が潜入中だ・・・ユーウェインとかいう奴だから、潜入したら挨拶しておけ・・・おそらく向うから接触してくるがな・・・」
「わかりました」

それだけ言ってマスカレイドは姫の方に向かっていった。エルリッチがやや心配そうにライフレスに話しかける。

「何を考えておられるのです?」
「・・・アルフィリースは殺しておいた方がいいのではないかと考えてな・・・」
「しかし師匠殿に止められているのでは?」
「・・・確かにアルフィリースに手を出せば大きなペナルティを受けるだろう・・・それに個人的にはもっとあいつを成長させてみたくはある・・・しかし・・・」

ライフレスの頭の中で思考が回る。アルフィリースを殺すべきか、生かすべきか。やがて彼の頭は、一つの決意で固められた。

「・・・やはり危険だ・・・アルフィリースは僕達の領域にまで到達しうる逸材だ・・・計画のために、不確定要素は殺せるうちに殺しておこう・・・」
「は、しかしそれでは」
「・・・心配するな・・・僕の独断専行ということにしておくさ・・・お前は来るな・・・」
「ではお一人で?」
「・・・いや・・・僕の直属の魔王を連れていく・・・とびきりのを10体ほどアノーマリーに預けてあるからな・・・それに、先ほどの僕の力が全力に見えたか?・・・」

ライフレスの瞳に狂気が宿る。その狂気の光は果てしなく強く深

く、思わずエルリッチは身震いしてしまった。

「（この方は、一体どれほどの力を隠し持っているのだ）」

「・・・では僕はここを離れる・・・お前はしばらく休暇でも取るといい・・・」

「は？　今からですか？」

だがエルリッチの返事を待たずして、転移魔術でその場を離れるライフレス。姫の行為にシーカー達の絶叫がこだまし、炎に包まれ荒れ果てたミュートリオにエルリッチが一人残されたのだった。

続く

死を呼ぶ名前、その17～姫～（後書き）

次回投稿は3／5（土）17：00です。

次回から新しいシリーズです。よろしければ感想・評価などもお願いします。

魔王の工房、その1～エルザの回想～（前書き）

今回から新シリーズです。一部も最後が近いです。タイトルからして不吉な感じですが、今までで一番ハラハラかもしれません。ではどうぞ。

魔王の工房、その1～エルザの回想～

「印がある・・・もうすぐね」
「はい」

アルフィリース達がライフレスと戦っていたのとほぼ同じ時間。
そして場所は、くしくもアルフィリース達が最初に魔王と戦ったルキアの森のさらに奥。フルグンド王国と、ローマンズランド王国の属国であるリアナ王国との国境である、メリトノエル山中。
リアナ王国は非常に平和な国家で、サリード湖という世界一美しいと言われる湖を有した静かな国である。だが資源と言ってもその湖くらいで、湖で取れる生物はどれも美味だと言われるものの、リアナ王国が湖をできるだけ自然の形で残そうという意向を示したため、国益のために有効活用はされていない。
ローマンズランドとしても国庫は潤っている方だし、あえてリアナ王国から絞りとる必要性も感じないため、リアナ王国の意向を尊重するという形でサリード湖は放置してある。だからこそサリード湖は手つかずで、世界一美しいと褒めそやされるわけだ。今では貴族たちの絶好の保養所となりはしているが、だからこそ一定の手入れもされて綺麗に維持されている。

そんなリアナ王国とフルグンド王国の間に横たわるメリトノエル山は、標高こそせいぜい３０００m程度だが、いくつかの国の国境になるスフレ連峰の一部を形成している。ここには大した資源も無く、それなのに魔物が多いと評判で開発がいまだ進んでいない。そのため大した街道も作られておらず、あったとしてもせいぜい獣道程度である。
そんな道無き道を行く、うら若い女性が二人。アルネリア教のシスター・エルザと、その護衛であるイライザである。彼女達は大草

原でミランダに伝言を残した後、本来の任務である教会襲撃犯の本拠地を捜索していた。というより、ミナールが放った『犬』によって既に捜索は終わっており、今は現地にまで歩いて行くところである。

「結構遠くまで来たわね。でもここなら確かに人気もないし、拠点を作るにはもってこいかも」
「そうですね。普通の人間がここに来る理由はないですから」
「仮に見つかっても、魔物のせいにして口封じができるわ」
「はい」

淡々と返事をするイライザに、エルザは多少不審気な視線を送る。その視線に気付いたか、イライザの目線がエルザのものと交差した。

「いかがされましたか、エルザ様」
「・・・貴方と組んだのはこの任務からだけど、全く口答えしないわね。いつも表情も口調も変わらないし。『シスターが口封じなんか物騒だ』とか言わないわけ？」

エルザが今まで組んだ人間達は、エルザの戦い方や考え方に触れると難色を示す者も多い。アルネリア教には各国の貴族の子女が学びに来ることも多いため、上流階級出身の者も多いのだ。スラム出身のエルザとは、所謂(いわゆる)肌が合わない人種も多い。

「いえ、私にそのような権利はないかと思います。ただ私はエルザ様の命令に従うのみ」

だが、イライザはまっすぐエルザを見据えて答えた。その口調には淀みがなく、心からそう考えているのだろう。だがそんなイライザを見て、エルザはため息をつく。

「ふー。いい、イライザ？　私はパートナーに人形はいらないわ。そりゃ基本は私の命令に従ってほしいけど、私がいつも正しいとは限らないし、自分の意見もしっかり持っていて欲しい。私が間違ったら修正してもらわないとね」
「・・・それは構いませんが、貴方が状況判断を間違ったことなど、聞いたことがありませんが」

イライザのその言葉もまた真実であった。エルザ＝ヲルドリクセン。巡礼任務につくシスターの中でトップクラスの実力者であり、この８年間で解決した案件は実に１００を超える。巡礼に付かずとも、アルネリア教会本部に勤める者ならだれでもその名を知っている、高名なシスターである。

彼女がアルネリア教に所属したのは１６の時であり、現在２６であることを考えれば、これは異常な成長・出世速度である。所属から実に２年で巡礼の任務を拝命しており、その時から解決できなかった任務はまずないと言われている。

特に彼女が優れているのは、その状況判断能力。パートナーの特性を理解し、その力をいかんなく発揮させる。しかもパートナーの寡多を問わない。そのため彼女と組んだことがある者は能力を開花させ、その後必ず出世するとも言われている。

巡礼をするものなら一度はパートナーを組んでみたいと思う憧れのシスターであり、それはイライザも同様だった。イライザがエルザと組むことを光栄に思っているのは、紛れも無い事実だったのである。

「エルザ様と任務を共にできることは私の誇り。どうかこの若輩に、御教授・御鞭撻のほどをお願い申し上げます」
「・・・かったいわねぇ、貴女。もっと、こう、柔らかくならないの？　このほっぺみたいに」

エルザがイライザの頬をぷにぷにと突く。イライザの頬はかなり突き心地がよく、エルザは旅の間中暇さえあればイライザの頬を突いていた。イライザはそれでも全く反抗しなかったのだが。

「はあ」

「『はあ』じゃないわよ。このままじゃ貴女、『スリーサイズは？』『今日の下着の色は？』なんて質問にも平然と答えそうで怖いわね」

「・・・上から８３、５９、８７。下着は黒のレースですが、何か？」

「あ、そう。って、本当に答えてんじゃないわよ！」

「・・・フ」

思わず突っ込むエルザに、イライザが薄く笑って返す。反応がアルベルトそっくりである。冗談は通じないが、自分からは言う性格らしい。

「ぐぅっ、その反応までアルベルトそっくりね。イラッとするわぁ」

「アルベルトを御存じで？」

「当然よ。私がアルネリアに来た同時期に、彼は聖騎士団に入隊したのだから。あんの堅物は、どんだけ私が笑わそうとしてもちっとも笑わなくてさぁ。そのくせに、何も無い時だけこっちを見て『・・・フ』って言うのよ？　まるで小馬鹿にしたみたいに。ああ、思いだしても腹が立つ！」

「そうですか・・・」

イライザの目の前で地団太を踏むエルザに、ちょっとイライザは戸惑いつつも最近流行りの『放置ぷれー』なるものを試してみることにした。

イライザは態度こそアルベルトそっくりだが、内面では結構流行

や身だしなみに気を使ったり、年頃の女の子らしい部分は充分に有しているのだ。ただ表に出さないだけである。実際、誰に見せるわけでもない下着も、成人になったので少し冒険してみたくて買ってみたのだ。

そんなイライザの内面まで知ろうはずもなく、エルザは少しぷりぷりと怒っている。

「どうしてラザールの連中は、そんなのばっかりかしらね。むっつりの遺伝子でも有しているのかしら？」

「それは存じ上げませんが・・・」

「冗談よ！」

エルザが乱暴に吐き捨てる。これが彼女本来の性格なのである。エルザはその大元で、ミランダに非常に近いところがある。巡礼任務を目指したのだって、元はミランダの講演を聞いてのことだった。

その時のミランダの講演は最初のくだりが衝撃的すぎて、お上品なシスター達は皆眩暈を覚えて出て行ってしまったが、その後語られたことは実に実践的な事柄ばかりだった。女一人の旅がいかに危険か、世間にはどのような誘惑があるか、身を守る方法は、誘惑に打ち勝つ方法は。内容はとてもそうは聞こえなかったが、それらの事柄に自分の経験を交えながら、ミランダは話してくれた。現に彼女の講演を最後まで聞いていた者は、今ほとんど巡礼の任務で活躍している。

その話をエルザは聞きながら、つまらないと思っていたアルネリア教会にも面白い人物がいることに気付き、彼女を目標に頑張ってみることにしたのである。ミランダは覚えていないかもしれないし、実際会った時にも彼女はエルザに気がつかなかったが、講演の後に少しエルザとミランダは話をしているのだ。

＊＊＊

それはもはや１０年近くも昔のこと。

「アノルン様、覗いたいことが」

「あら、何かしら？　可愛いシスターさん」

ミランダ――当時はアノルンだが――の講演が終わった後、エルザは知らず知らずのうちにアノルンの後を追いかけていた。背後から走って追いつくエルザの声に、アノルンがニコリと微笑み振り返る。その女神の様な容貌に、女性であるエルザですら少しドキリとしてしまった。だが動揺は心の底に押し隠し、エルザは質問をアノルンに投げかけた。

「貴女は、自分のあり方に疑問を持たないのですか？」

「あり方、とは？」

アノルンはエルザの質問に首をかしげた。あまりに抽象的な質問だと思ったのか、アノルンの表情が少し翳ったような気もしたエルザだが、言葉を探して言い直す。

「え・・・と。なんというか、巡礼を行うことの意義とかです。なぜ自分がこんな苦しいことをしなければならないのか、どうして自分が苦しむ傍で能天気に笑う人間がいるのか、どうして自分が・・・」

「質問は順序立ててからしてくれると、ありがたいんだけど？」

アノルンがエルザの言葉を遮る。その毅然とした一言にはっとしたエルザは、今まで下げたことも無い頭を思わず下げていた。

「す、すみません！　つい」

「まあいいわ。今の貴女は道を見失っているのね」

アノルンがため息をつきながらエルザをまじまじと見つめる。そしてその肩に手をおくと、エルザを正面から見据えた。

「そんな迷える貴女は、アタシの言葉が欲しいのかしら？」

「・・・はい」

エルザは自分がこんな気持ちになるとは思ってもいなかった。第一自分が人生で思い悩むこと自体皆無だと思っていたし、またそんな自分が他人を頼ることも無いと思っていたのだ。だがアルネリア教会に来てわずか3カ月程度。ここの生活は、今まで彼女が信じていたものを完全に崩壊させた。

エルザはスラム出身である。生きるために、それこそ悪い事を腐るほどやった。盗み、恐喝、暴行・・・やってないのは殺人だけ。頭も回るそんな彼女は、スラムのリーダーの一人だった。チンピラの様な連中をまとめて、街の自警隊や傭兵達を何度も退けたこともある。

だが有名になりすぎた彼女はついに騎士団に捉えられ、あやうく獄中に繋がれるところをアルネリア教会に拾われたのだ。また自分を拾ったのが、年端もいかない少女の風体をしたシスター（当時の彼女は知らないがミリアザールである）だったのも、エルザには意外で興味を引かれたのだ。。

アルネリアに来てからの彼女の生活は一変した。今まで他人を一度も信用したことの無いエルザだったが、ここの住人は他人をいとも簡単に信じ、また他人のために行動することを厭わない。それはエルザにとっては偽善者ぶった行動にしか映らなかったが、同時に居心地は悪くなかった。

ひょっとしたら自分はこのような人達に囲まれるのが向いている

のかもしれない――そんな感情の変化に戸惑う彼女は、自分の立っている場所を失いそうで怖かったのだ。自分が今までしてきたことを、全て否定されたようで。また今までの自分が間違っていたのではないかと思うことで、自分に信頼を寄せた者を裏切るような気がしたのだ。

だからこそエルザはアノルンにすがりたかった。アルネリアの住人は善人がほとんどだったが、だからこそ自分の悩みは理解されないとエルザは思っていた。だが、目の前の天衣無縫なこのシスターなら。そんな一縷の望みを、エルザは抱いていたのである。

だが、その淡い期待はいともたやすく砕かれた。

「よく聞きなさい。貴女が迷おうがどうしようが、私は知ったこっちゃないのよ」

「・・・・・・は？」

あまりといえばあまりな答えに、さしものエルザも一瞬耳を疑った。だがアノルンはさらにまくしたてる。

「いいかしら？　ここでアタシが貴女の生い立ち、言い分をゆっくり聞いて、最も貴女に即した答えを出してあげるとする。きっとそれはたやすいわ。アタシに取っても、貴女にとっても。でもね、その答えは薄っぺらいのよ。貴女のように人生の指針を見失った人間が欲する答えは、私の中なんかに転がってなんかいやしないわ」

「でも・・・」

さらに喰いすがろうとするエルザを、ミランダはやや乱暴に突き離した。突然の事に、思わずエルザはバランスを崩す。

「あっ」

「いいかしら。たとえばアタシがここで何かしら、貴女が納得のい

く答えを与えたとする。でもその答えは一時的だわ。何せ人間は時と共に変化するものだからね。いずれ納得がいかなくなったり、あるいはすぐにその時は訪れるかも。そして上手くいかなくなれば、貴女はきっとアタシのせいにして言い訳するのよ」

「そんなことは！」

「いいえ、するわ。間違いなくね」

にべもなく、ぴしゃりとアノルンは言いきった。さらにアノルンは、エルザに言葉を浴びせかける。

「ああ、勘違いしないでほしいけど、貴女を責めているわけじゃないの。人間は弱い生き物だから、誰しも同じ道を辿るのよ。きっとアタシもね。間違えたら、追い詰められたら他人のせいにしたくなる。だからこそ人は自分の生きるべき道は、自分で探さなくてはならない。たとえそれがどんなに荊の道だろうが、間違っていようが、ね」

「人の道を踏み外しても・・・ですか？」

エルザがおずおずと尋ねる。だがアノルンはそんなエルザの悩みを、いとも簡単に笑い飛ばした。

「アッハハ、貴女面白いわねぇ！」

「な、なんですか。藪から棒に」

「人の道を踏み外すような人間は、端からこんな疑問は持たないのよ」

アノルンはエルザの方を指さしながら、少し悪戯っぽく笑う。

「いいかしら？　本当に人間の道を踏み外すようなクズは、端（はな）からその道を歩んでいるのよ。その点で貴方は至極まっとうな人間よ。

それに道を踏み外すんじゃない、踏み外したように見えるその道もまた貴女の道よ。自分が歩む道をどのようにするかは、結局自分次第。自分が卑下すればどんなに素晴らしい道でも獣道にしか見えないし、逆にどれほど外道が歩むような道でも、本人が最高の気分で見れば輝いて見えるでしょうよ。それとも、貴女は万人が見て輝いているような道を歩みたいとでも？」

「そんなことは・・・ないですが」

「なら、いちいちつまらないことを気にするんじゃないわよ。そんなことでうだうだ悩むよりは、まず行動あるのみ。そして自分の歩む道が気に入らなければ、他の道に鞍替えしたらいいのよ。人生は短いわ。。うだうだと悩む時間すらもったいないのよ、普通の人間にとってはね。それじゃダメなの？」

「はぁ・・・」

自分以上に強引な考え方のアノルンに、びっくりするエルザ。なんだか煙に巻かれたような気がしないでもないが、同時にその言葉は力強く、背中を押されているような印象をエルザは受けた。その一方でアノルンがどことなく寂しそうな表情をしたことに、エルザは気がつかなかった。

その内心を読みとったのか、アノルンは最後に軽く微笑むとエルザに背を向け歩き出す。だが数歩歩いたところでピタリと足を止めて呟いた。

「これはアタシのぼやきだけど・・・」

「？」

「どうしてもやることが見つからないのなら、巡礼のシスターを目指しなさい。やり甲斐はあるし、巡礼をする過程、あるいは目指す過程で何かしら見つかることもあるでしょう。別に気にいらなかったら途中で投げ出してもいいんだしね。それにね」

アノルンがくるりと振り返る。

「アタシは人出が足らなくて困っているから、貴女が来てくれるとアタシが楽できるんだけど？」

そして悪戯っぽく微笑むと、今度こそ本当に去って行ってしまった。そして、その場に残されたエルザは、知らずしらずアノルンが去った方向に深く礼をしてしまっていた。

続く

魔王の工房、その1～エルザの回想～（後書き）

次回投稿は3／6（日）15：00です。

感想・評価お待ちしています。

魔王の工房、その2～飛んで火にいる～（前書き）

～あらすじ～

ミリアザールの命令で魔王の工房を探索することになったエルザとイライザ。工房の中で彼女達を待ち受けるモノとは……？

魔王の工房、その2～飛んで火にいる～

＊＊＊

それからのエルザの修行は凄まじかった。読み書きもおぼつかなかったエルザは、わずか一カ月で共通言語をマスターすると、それから半年で寝る間も惜しんで勉強し、シスターの一般教養課程三年分を修了。より実戦向きの技術を学ぶシスターの専攻課程に進むと、いくつかの魔物討伐で素晴らしい実績を上げる。

入会から二年、司祭補佐として一つの教区を任されるように命じられたが、それを拒否。エルザは自ら志願して巡礼の旅へと出た。巡礼を始めてから4年。功績を認められたエルザは司祭へと昇進し、本部教会勤めでマナディルの大司教補佐になる話もあったが、彼女はそれも辞退して巡礼を続けた。自分が誰かの部下になるとしたら、アノルン以外考えられないと思っていたのである。

最高教主ミリアザールの直下の部下に指名されてからは、その胸中を最高教主に打ち明け、同時に最高教主からアノルンの事情を少しずつ聞かされていた。今ではアノルン――いや、ミランダのほとんどの事情をエルザは知っている。

だがエルザが事情を知るにつけ、ミランダへの尊敬の念は増すばかりだった。ますますもって巡礼の任務に力が入って行ったのである。そして今回再会を果たし、彼女は内心興奮していた。自分がついにミランダの役に立てる領域まで到達したという実感があったのだ。

「（やっとここまで来た――長かったような、短かったような。この任務を成功させて、私はもっとあの人の役に立ちたい）」

エルザがそのような思いに囚われていると、目にチカチカと入る

光がある。眩しさに思わず手で目を隠すが、それが『犬』からの合図だと気がついた。

「あそこね。行きましょう、イライザ」

「はい、エルザ様」

二人は連れ立って合図の方に歩いて行った。

＊＊＊

一方こちらはそんな事情は露知らない工房の中。アノーマリーが作業を続けていると、ふと工房内に転移してきた気配を感じる。

「この気配はライフレスかな?」

「・・・アノーマリー・・・いるか・・・」

ライフレスが挨拶もそこそこに部屋に入って来る。どうやら相当急いでいるようだ。口調もこころなしか荒っぽい。

「どうしたの、慌てて。君らしくもないな」

「・・・前置きはいい・・・俺が預けている魔王があるだろう・・・ここにあるか?・・・」

「全部じゃないけど、5体くらいは。どうしたのさ、ミュートリオでの任務は終わったんだろう?」

「・・・まだやることがある・・・ごたくはいいから貸せ・・・」

俄かに殺気立つライフレスに、アノーマリーもただ事ではないと察する。魔王を管理する者としてうかつに貸し出すわけにはいかないが、ここで下手に反対すると、ライフレスが暴れ出しかねない剣幕だった。そこを察したアノーマリーは、上手く妥協点を探ろうと

する。

「貸さなかったら？」

「・・・力づくで借りていくぞ・・・」

「・・・わかったよ。僕は君と戦うなんてまっぴらだからね。確実に勝てる戦い以外はしない主義なんだ」

アノーマリーが降参のポーズをとる。

「だが貸す代わりに一つ教えてくれ。何をする？　それが聞けなきゃ貸せないな」

「・・・アルフィリースを殺す・・・」

「それはお師匠様の命令じゃないね？」

「・・・ああ、そうだ・・・」

ライフレスがまずいことを知られたと思ったのか臨戦態勢を取ろうとするが、いち早くアノーマリーが再び降参のポーズをした。

「だから僕は勝てない戦いはしないんだって！　魔王は勝手に持って生きなよ、ほら。１４番の部屋に置いてある」

アノーマリーが懐から鍵をぽいと抛（ほう）る。ライフレスがそのカギを空中で受け取ると、逆に不審気にアノーマリーの方を見る。

「・・・いやに素直だな・・・何をたくらんでいる・・・」

「嫌だな～何も企んでないって！　僕は男の子にやられる趣味は無くってね。やられるなら女の子がいいんだよ」

「・・・その軽口の奥にどれほどの実力を秘めているんだ？　・・・俺は随分長いこと生きてきて・・・正直今の仲間もその素性はほとんど知っているが・・・貴様はそれほどの実力を持ちながら、見た

ことも聞いたことも無い・・・何者だ？・・・・」

ライフレスの問いにくすくすと笑うアノーマリー。だがその態度を見て何を聞いてもはぐらかされると思ったのか、ライフレスはくるりと振り返って部屋を後にしようとする。そして部屋を出ようとしたところで、ピタリと足を止めた。

「・・・そういえば・・・」

「何？」

「・・・俺が眠っている間に、レイベンワースの一族が皆殺しになっていた・・・何か知っているか？・・・」

「あー、あの一族か。皆殺しちゃったけど、何か？」

その言葉に、ライフレスの目が見開かれる。どこのイカレた奴がやったのかと思ったが、犯人は近くにいたのだ。

「・・・貴様・・・それがどれほどの損失になると・・・」

「えー、いいじゃん。だってあいつら、秘術・秘薬のほとんどを隠匿しちゃって一人占めしたがるからさぁ。最初は交渉に行ったんだよ？　でもあいつらどれだけ金積んでも、どれだけ脅しても決して話さなくてさ。そしたらイライラして、ついつい拷問にも力が入っちゃうでしょ？」

「・・・」

「僕も今ほど拷問が上手くなかったし、しかも肝心の秘術は一族の長の家系にしか教えられてなくてさ。しょうがないから奴らのアジトを急襲して、長の家系の誰かをさらおうとしたんだけど・・・案外あいつら強くてね。気がついたら全滅させちゃってた、アハ♪」

料理に甘味と塩を間違えて入れた、くらいの軽い気持ちでとんでもないことをやってのけたアノーマリー。これにはさすがのライフ

レスも絶句した。
　レイベンワースの一族を失った人類全体の損失に関して考えが及んでいないアノーマリーの愚かさ加減にも腹が立ったが、思わずアノーマリーを殺そうとする手をライフレスが止めたのは、アノーマリーがレイベンワースの一族を全滅させたという事実であった。

「（・・・あの一族は結構な手練揃いだった・・・それを全滅だと？・・・俺でさえ力づくで従えることに抵抗を持った一族だというのに・・・こいつの頭脳はともかく実力は大したことないと思っていたが、何か隠し持っているというのか・・・）」

　ライフレスが殺気だった目線をアノーマリーに向けるが、消耗している今はアノーマリーに構う余裕も無い。やむなくそのままアノーマリーの部屋を後にするライフレス。そしてライフレスがいなくなると、入れ替わりにドゥームを担いだおネェと、ブラディマリアが入ってきた。

「今のはライフレスでは？　何か慌てているようでしたが」
「ああ、それはね・・・って、ドゥームどうしたのさ？」

　ドゥームが完全にノびていた。つついても全く反応が無い。おネェが済まなそうな顔をする。

「ちょっと八つ裂きにしたもので・・・」
「こわっ！　ちょっとの話じゃないでしょ、それ！？　どのくらいやったのさ？」
「１７、いえ、２０分割を１００回ほど」
「ひ、ひえええ・・・」

　アノーマリーがドゥームを思わず見る。だがその口から出たのは・

・・・

「どうして僕にしてくれないのさ！」
「え、ええ？」
「くっそお～。ドゥーム、羨ましすぎるぞ、お前！」

寝ているドゥームの横っ面を、往復ビンタで張り始めるアノーマリー。まさかの展開におネェがうろたえる。その横でげんなりするブラディマリア。

「ちょっと、あなたの性癖なんてどうでもいいから、アタシの事も気遣ってよね！」
「あ、そういえば魔王を転送したの？」
「あったり前よ！　アタシのモットーは、『迅速、丁寧、美しく』なの！　そこのとこ、よろしく。きっちり１００体。大草原に放っといたわよ」
「うん、ありがとう」

１００体を一斉に大草原に転移で放つ魔力。いとも簡単に彼らはその事実を受け入れたが、凄まじくとんでもない量の魔力が必要である。テトラスティンやミリアザールでなくとも、少しでも魔術を扱う者がその事実を聞いたら腰を抜かすであろう。

「後は成果待ちだね。どのくらい魔王が生き残って、どのような進化を遂げるのか・・・」
「これでここの魔王は全部放出したの？」
「そうだね、後は失敗物ばかりかな。ライフレスから預かっている魔王も、今彼に返したし」
「は？　ライフレスは何をする気なの？」

疲労からか、机に突っ伏しかけたブラディマリアが思わず顔を上げる。

「なんでもアルフィリースを殺すんだってさ」
「それは命令違反じゃないの？　なんで止めないのよ？」
「男にぶたれる趣味は無いから。それに彼を止めるなら、君達二人のどっちかに頼むのが手っ取り早いと思って」

いけしゃあしゃあと他力本願です、と告白するアノーマリー。それを聞いて顔を見合わせるブラディマリアと、おネェ。

「アタシパス。疲れたから、おネェやっといて」
「はあ・・・それは構いませんが。最悪、ライフレスは斬ってもいいのですか？」

おネェが真摯な疑問をアノーマリーに向ける。

「いや、それは困るな・・・でも最悪な選択肢だけど、殺そうと思ったら、殺せるの？　あの化け物みたいな強さの奴を」
「はい。それは問題なく」

即答するおネェに、アノーマリーが思わず背筋にうすら寒い物を覚える。

「（本気かよ・・・でもおネェは冗談言わないし、心からそう思っているんだろうな。僕達の中で誰が最強か話しあったことがあるが、皆がおネェかブラディマリアだって言うのも、なんか納得できるな。僕が切り札を使っても・・・いや、使う暇すらくれないかもね）」
「？　どうしましたか、アノーマリー」

おネェに声をかけられて、ふとアノーマリーが我に返る。

「あ、ああ。何でもないよ」

「ならいいのですが・・・ちゃんと最近寝ていますか？　顔色が悪いですよ？」

「・・・元々なの」

悪意の無いおネェの言葉に、だから真面目な奴は嫌なんだとアノーマリーはため息をついた。そしてこの後の手筈を考える。

「じゃあ僕は転移でお師匠様の所へ行って・・・サイレンスがここにきたらおネェは一緒に行動して・・・ドゥーム、ブラディマリア、ドラグレオはここに残って・・・」

「しかし、今ここには私達１１人のうち、６人がいるんですね。何とも珍しい」

「確かに・・・・・・ん、これは？」

「いかがしました、アノーマリー？」

何かを感じとったのか。天井を見上げて様子の変わるアノーマリーに、おネェも真剣な表情になる。

「侵入者だ」

「なるほど。今日は騒がしいですね、ここも。それで侵入者の処置は？」

「もちろん殺すさ。状況によっては捕えて実験材料だけど」

「侵入者も運が悪い。なにも、今日これだけ私達が揃っている時に来なくても」

「気の毒ねぇ・・・まともに死ねないわよ」

おネェが心底憐れむような表情をし、ブラディマリアがくすくす

と笑う。それにアノーマリーはどことなく楽しそうだった。捕まえた後のお楽しみでも考えているのだろうか。邪悪な者達の笑いが満ち、部屋は異常な雰囲気に包まれた。

続く

魔王の工房、その2～飛んで火にいる～（後書き）

新シリーズなので、出だし連続投稿いっときましょう。

次回投稿は３／７（月）１１：００です。

魔王の工房、その3～殺気～（前書き）

～あらすじ～

工房の中にはアノーマリー達が待ち構えているが……

魔王の工房、その3～殺気～

だがその空気を破ったのは、意外な事にアノーマリーである。工房の責任者として、一応彼にも自覚はあるのだ。

「まあここに入ったら最後、生きて出ることはあり得ないよ。番人だけで何とかなると思うけど、一応僕に迎撃させようか」

アノーマリーが指笛を鳴らす。すると隣の部屋につながる扉から、もう一人アノーマリーが姿を現した。

「呼んだかい、僕？」
「ああ、呼んだよ。僕」
「ややこしいわね」

ブラディマリアが素直な感想を漏らした。背格好、声、思考――全てが同じ個体が話しあっているのである。見分けがつくはずもない。少なくともブラディマリアにはそう見えた。だがおネェの感想は違うようだ。

「今まで私達が会話をしていたのが本体です。外見はともかくとして、魔力の充実具合が違いますから」
「え、そうなのん？　アタシ、細かいことわかんな～い！」
「あなたは大雑把過ぎるのですよ、ブラディマリア」

黒髪のおネェがふわりと微笑む。その眼は優しく、まるで妹でも見つめるかのようだ。実際、外見年齢上はそうなのだが。

「だってぇ、海を前にして水たまりの大きさの比較をするなんて、

無駄な比較でしょう？」
「それはそうですが」
要は自分と比較をするだけ無駄だと言っているのだ。だが、あながち間違いでもないとおネェが思う。
「でもでもそれに～、アタシの仕事はもっと広範囲破壊型だし～？国をぺしゃんこにしなさいっていうのは簡単だけど、誰か一人を探して殺せって言うのはね～。面倒くさくて苛々しちゃう、キャッ☆」
「その手の仕事は私の担当ですよ。私は一対一が好きなので」
「よく言うわよ～。魔王１００体切りを大戦期にやらかしたのは、どこのどなた？」
ブラディマリアがおネェの方を見て不敵に微笑む。一瞬不意をつかれたように驚いたおネェだが、自嘲気味に薄く笑った。
「これは・・・一本取られましたね。まさかご存知だったとは」
「まあアタシは魔王側の生物だからね～。そう言う点ではライフレスやミリアザールと共に、貴女もいずれ的にかけるわん♪」
「できれば貴女とはやりたくありませんが・・・」
少し悲しそうな顔をおネェがする。その顔を不思議そうに見つめるブラディマリア。
「どうして～？」
「それは・・・貴女相手だと、全力で殺しに行かなければいけませんから」
突然、無風のはずの部屋の中の空気が震える。おネェの長く黒い

髪がたなびき、呆けていたブラディマリアも凄まじいスピードで彼女から離れ、警戒態勢を取る。何やら相談していたアノーマリー2体も、思わずびくりと体をすくめた。

「私はこの世界が好きです。人間も、魔物も。ですが悲しいことに、私が全力を出せば、それだけで多くの生物が死んでしまう」

静かに、だが深く殷々と響くおネェと呼ばれる女性の声。その周囲には魔力が満ちているわけではないのだが、まるで風が発生してるかのように、カタカタと机や実験用の瓶が揺れる。まるで彼女の傍にいることを無機物までが拒否するかのように、次々とひびが入り、割れ、形を崩していく。

その様子を横目で見ながら舌打ちするブラディマリア。

「やるではないか。人によって殺気の色は様々じゃが、無色透明の殺気は初めて見たぞよ。殺気だけで無機物に効果を及ぼすとは、そちは本当に人間かの？」

「私は人間ですよ、貴女とは違ってね。それより口調が元に戻りかけていますよ、ブラディマリア」

「そちこそ。本性を出したのう、ティタニア」

ティタニアと呼ばれたおネェがくすりと笑う。

「本名はできればやめてください。私の場合、あまりにも有名なので」

「よいではないか。どうせそちの正体を知って生きておる人間なぞ、おらぬのじゃろう？」

「まあそうですが。でも名前というのは、効果的な使い方があるのですよ」

ティタニアが殺気を放ちながら不敵に笑う。対峙するブラディマリアの顔には、余裕の色は覗えない。

「ふむ。で、やるか？」
「そうですね・・・」
「ちょ、ちょ、ちょっと！　僕の工房を壊さないでくれる！？」

わたわたとアノーマリーが2人の仲裁に入る。こんなところで2人が全力で暴れたら、アノーマリーの工房などひとたまりもないだろう。それは2人も重々承知なので、やむなく互いに矛を収めた。

「わかってるわよ～、アノーマリー。冗談よ♪」
「すみません。どうも強い方が隣にいると、血が騒いで」
「ハラハラさせないでくれよ。それよりやることがあるだろ？」

アノーマリーが、ティタニアとブラディマリアを見比べながら窘（たしな）める。

「おネェはサイレンスがここに戻って来るまで待機。その後仕事があるんでしょ？　ブラディマリアは疲れているところ悪いんだけどさ、師匠の所に戻ってくれないか。ライフレスをどうするのか、指示を仰いでほしい」
「え～、めんどくさーい」

ぶーぶーと不平を言うブラディマリア。だがアノーマリーも一歩も譲らない。

「ダメ。今回は譲りません」
「え～。後でククスのケーキをおごってくれるならいいわよ。あ、もちろん芸術の都ファンダメントの菓子屋、『グレーテル』じゃな

いとだめなんだからね！」
「うっ、あんな高価な物を。今は手持ちのお金が・・・」

アノーマリーが財布の中身を確認する。だが残念ながらすっからかんな様で、ひっくり返してもごみしか出てこない。もう一人のアノーマリーも当然のごとくそれは同様で、肩をすくめるのみだった。

「お給料が出てからでもいいかな？」
「何よ～、全く甲斐性無しね。魔王製造のための予算があるでしょ？」
「使い込めっていうの！？」
「馬鹿ね、ちょっと借りるって言うのよ」
「皆そうやって堕落していくんだよ」

アノーマリーとブラディマリアが、うー、と睨みあう。そんな子どもの様な不毛な争いを見てげんなりしたのか、ティタニアがため息をつきながら自分の巾着からお金を出してきた。

「アノーマリー・・・貸しですよ？」
「おお、さすがおネェ。話せる～」
「こいつ、ダメ男の典型だわ・・・」

女性二人に呆れられるアノーマリーだが、彼としては自分の手持ちの金まで使って魔王制作に取り組んでいるのである。非難されるいわれはないだろう。だが熱心と言えば聞こえはいいが、超がつくほど一流の頭脳を持ちながら生活観念が全くないのもアノーマリーという人物であった。研究に没頭する余り、空腹で倒れたこともある。

「でもノびてるドゥームと、爆睡中のドラグレオはどうするの？」

ブラディマリアが床に放置されたドゥームを、足蹴にしながら問いかける。

「できれば連れ帰ってくれるとありがたい。最悪、ここは放棄するからね」

「しょうがないわね～全く手間のかかる坊や達だこと。じゃあまたねん、お二人さん♪　あ、今度会うときは、きっちりケーキを持参するのよ、アノーマリー？」

「わかったよ」

「ならよろしい☆」

それだけ言うと、ドゥームの足を掴んで引きずりながら部屋を出ていくブラディマリア。彼女が完全にいなくなると、アノーマリーが何か言いたげな様子であることにティタニアが気づく。

「どうしましたか、アノーマリー？」

「いや、『坊や達』ってさ・・・ババ臭いなって」

「・・・今度言っておきましょう」

ティタニアが少し意地悪そうにアノーマリーを見た。

「口は災いの元だよ、僕」

「でも君も同じことを思っただろう、僕？」

アノーマリーがアノーマリーに茶々を入れる。

「でも、そろそろ真面目に仕事をしないか。侵入者はどうするんだ？」

「心配ない。この工房は僕の体内も同じさ。逃げられるはずがない」

「私の仕事は？」

ティタニアが壁にもたれかかりながら問いかける。

「とりあえずはおネェに出てもらうほどの事はないよ。とりあえず、上の連中に対処させるさ」

「それならいいのですが。油断だけはしないように」

ティタニアの警告に、へらへらと答えるアノーマリー。

「まあそうなんだけどね。最近ずっと仕事ばっかりだったんだ。ちょっとぐらい羽目をはずしてもいいだろ？」

「・・・その余裕が裏目にでなければいいですが」

ティタニアは黒い髪を揺らしながらため息をつく。だがアノーマリーは、そんなことなどありえないといった顔だ。

「ドゥームのお馬鹿ならやるかもしれないけどね、僕にそんなミスはないよ。仕事も遊びも全力なのが僕の心情でね。今回は特に君もいることだし」

「まあ、お手並み拝見といきましょう」

それだけ言うと、ティタニアは壁にもたれかかって目を閉じた。

そしてアノーマリー達は互いに顔を見合わせると、企み深い顔でその場を後にしたのだった。

続く

魔王の工房、その3～殺気～（後書き）

次回投稿は3／8（火）１３：００です。

魔王の工房、その４～潜入準備～（前書き）

～あらすじ～

工房の中に待ち受けている敵がどんなものかも知らず、準備をするエルザとイライザ。

魔王の工房、その４～潜入準備～

＊＊＊

その頃地上では――

『犬』とエルザ、イライザが合流していた。互いに初対面であるが、エルザとイライザは『犬』の容貌に面喰らった。と、いうか『犬』はおそらく男なのであろうが、顔がぐるぐる巻きの包帯で全く表情が覗えない。背もイライザより小さく、何歳なのかもわからない。

「貴方が『犬』ね？」

エルザが問いかけるが、犬は頷くのみだった。

「さて。早速だけど、貴方が見つけた入口とやらは、どこなのかしら？」

その言葉に答えることなく、ゆっくりと自分の背後を指さし、ついてくるよう顎で促す犬。エルザはその態度に一瞬傲慢なものを感じたが、指摘して特にどうなるものでもなし、大人しく彼に従った。そして歩いて曲がり角を曲がるとすぐ、いかにも地下に続いてそうな天然の洞穴が口を開けていた。入り口はあまり大きくなく、幅も人二人分くらいしかない。

イライザが覗きこむが、かなり奥は深そうだ。

「ここなの？」

エルザの問いかけに、再び頷く犬。その様子に少し不審な物を感じたエルザ。

「返事くらいしたらどうなの？　それとも喋れないのかしら？」

「しゃ、べ・・・れる、が。聞・・・き、取・・・りにく・・・い・・・だ、ろ？」

そのひどい嗄れ声に、驚くエルザとイライザ。確かにこの声なら、彼が喋らないのも納得できる。

「わかったわ、無理言って悪かったわね。それで貴方はこの後どうするの？」

「お前・・・の・・・指示、に・・・従え、と、言われ・・・て、い・・・る」

たどたどしくも、犬が答える。そこでエルザは少し考え込んだ後、犬に指示を飛ばす。

「その声ではとっさの時に合図に困るわね。貴方は中の探索には加わらなくていいから、この割符を持って、近くのアルネリア教会の詰め所に行ってくれるかしら？　割符を持っていけば自動的に話は通じるようになっているわ。既に準備はできているはず」

そしてエルザが胸元から割符を出すと犬に渡し、受け取った犬は無言でその場を走り去っていく。その様子を見送った後、エルザがイライザに話しかけた。

「では私達も準備をしましょう。ここは既に敵地よ。周辺の警戒は怠らないように」

「はい」

2人が荷物を下ろし、探索に必要なものだけを取り出していく。
エルザはシスター服を脱ぎ捨て、ショートパンツと、上は体にピタリとした短い肌着に変える。なので腹回り、脚は露出してしまっており、靴も動きやすいように簡単なブーツに変えた。さらに腕には肘近くまであるような黒く長い手袋をつけ、さらにミスリルという非常に特殊な金属でできたナックルを装備する。
そして脱力した姿勢でエルザが立つと、軽く深呼吸をする。するとエルザの体がぼんやりと淡く光った後、すぐに光が消えた。

「よし、今日も良好ね」

エルザはシスターには珍しく、近接型の戦闘スタイルである。女性なので打撃の威力が不足するのは、魔術を付加しやすいミスリルのナックルで補う。また軽装になるのは、格闘戦をやりやすくするためである。
軽装だと怪我をしやすいのではないかとよく周囲には言われたが、彼女は全身を魔術で防御するため、服が無い部分でもそれなりの物理・魔術防御を誇る。それこそ並の男では、殴りつけても拳を痛めるだけである。もちろん、彼女の魔力の絶対量が並のシスターよりも遥かに多いから出来る芸当なのだ。
一方イライザは荷物を降ろして、自分の身長以上にある長く、布を巻きつけた何かを背負って終わりである。既に前日出発した宿泊施設から具足をつけているため、非常に簡素な準備だった。
そして簡易な軽食と探索に必要な荷物をいくつかまとめ直すと、エルザがそれぞれ身につけ、互いに準備が完了したのを確認すると頷き合う2人。

「突入前に最終確認をするわ」
「はい」

エルザの言葉に、イライザが一層真剣な表情になる。

「まず今回の目的は調査よ。戦闘は極力避け、内情を探ることが優先。これ以上無理だと思ったら、遠慮なく引き返すわ。私達が死んでは元も子もないのだから」

「了解しました」

「さらに私にはやることがあるから、戦闘になれば先陣は貴女が切ること。基本私は手を出さないけど、もし必要であれば私が判断します。それまでは極力一人で戦うように」

「了解しました」

「また撤退の合図も、基本的に私が出します。だけど、私よりも貴女の判断の方が正しいこともあるでしょう。なので、もしどうしようもないと思ったら、右目で瞬きを二回。いいわね？」

「ウィンクは苦手なのですが」

「・・・なんとかしなさい」

エルザがため息をついた。真面目そうに見えて、どこかすっとボケているのはラザールの血なのか。

「質問は？」

エルザが問いかける。

「・・・見張りがいません。ここで本当に合っているのでしょうか？」

「それは請け負うわよ。なにせ・・・」

エルザは洞穴の方から出てくる殺気を、先ほどからひしひしと感じているのだ。こんな凶悪な殺気を、ただの獣が発するわけはない。

エルザの本能がそう告げていた。
イライザもその事はわかっているのだろうが、それにしても外に見張りがいないのはさすがにどうかと思ったのだ。

「見張りがいないのは見つからないと思っているのか、あるいは中の守りに自信があるのか」
「・・・サボっているのでは？」
「・・・貴女、面白いことを言うのね」
「冗談です」

イライザのその言葉に、ちょっと呆れるエルザ。どうにも緊張感がないイライザに不安を覚えたが、よくイライザを見れば、少し震えているのがわかった。

「大丈夫かしら、震えているようだけど？」
「ご心配なく。武者震いが半分、恐れが半分と言ったところです」
「緊張しているのかしら。そこそこ戦場での経験は積んでいるはずだけど？」
「今までの討伐とケタが違うことくらいはわかります。なので、アルベルトから戦場に向かう前には冗談の一つでも飛ばすようにと、言われたのですが・・・」

どうりで普段のイライザにしては無理のある態度だと思ったが、彼女もまた緊張しているのだ。無理もない、歴戦のつわものであるエルザでさえ、緊張して神経が尖っている。
エルザもそのことを再認識し、イライザの肩に手をおく。

「生きて帰る。それが一番の任務なのよ、勘違いしないようにね」
「・・・了解しました。もう大丈夫です」
「ならいいわ。あ、そうそう。入る前に仕掛けを一つしておかない

とね」
「？」

そうエルザは言うと、腰のバッグから何やら白い指先程度の長さの、棒のような物を取り出してきた。

＊＊＊

そしてこちらはライフレスである。ライフレスは片目の視覚を使い魔である鳥に預け、常にアルフィリース達を監視していた。アルフィリース達とエアリアルが別行動をとったため一瞬どちらを追うべきか悩んだが、最たる目標はアルフィリースであるため、使い魔はそのままアルフィリース達を監視している。

アルフィリース達はミュートリオを出た後、重傷のニアをユーティの故郷に運ぶためエアリアルが愛馬シルフィードを駆って全速力で向かっていた。その一方でアルフィリース、ミランダ、リサ、くの一達は楓との合流地点で一端小休止をしている。ミランダがくのいち達を集めて何やら指示をしているようだが、ライフレスとしても急造の使い魔だったため、聴覚に関してはあまり出来が良くなく聞き取れなかった。

「・・・ちっ、厄介な展開になるかもな・・・妖精がいたということは、風の里に向かうということか・・・」

風の里――ユーティの故郷でもあり、風の上位精霊が治める里である。精霊は通常明確な意志、少なくとも人間と会話するような意志を持たないが、上位精霊は別である。彼らの多くは妖精が一定以上の年月を経て昇華した存在であり、明確な意思を持って生物と関わる。

だがその性質は自然そのものに近いため、どの勢力に肩入れする

ということはまずない（ごくまれに例外は存在する）。交渉さえ成立すれば、その生物の本質に関わらず力を貸すのが精霊なため、ライフレスもまた精霊とは交渉できる。精霊との交渉を解した魔術を精霊魔術と呼び、単純に大気中の元素を一から自分の力で集める理魔術よりはるかに効率よく、力の強い魔術を扱える。その分特定の精霊と仲良くなると、他の精霊と交渉しにくくなるという欠点もあるのだ。

とかく精霊は自然に近い存在のため、それらを攻撃するのは天に唾するに等しい。さしものライフレスも、後の魔術の行使を考えると攻撃という選択肢は躊躇われた。最もそれはどんな魔術師でも同じであろう。だからこそ、ライフレスがアルフィリースを殺すなら、風の里に入る前か、出た直後なのだが。

「・・・前・・・は、間に合わんか・・・この魔王どもを転移させた後ではさすがの僕も魔力が残らない・・・と、すると直後だが・・・」

直後は非常に的が絞りにくかった。大人しく大草原に出てくればよいのだが、もしさらに奥地に進まれて湿原地帯にでも入ろうものなら追跡は不可能に近い。湿原地帯は不思議な事に深い森になっており、昼間でも夜のように暗いのだ。また得体の知れない原住民、魔獣が多数生息している。湿原地帯はそれこそ未開の秘境となっており、どのようになっているかは誰も知らないのだ。ライフレスとて、例外ではなかった。

「・・・ふむ・・・とにかく転移してから考えるか・・・さて、奴らの命運はまだ長持ちするかな？・・・」

ライフレスはまるで狩りでも楽しむかのような口ぶりで魔王達がいる房の前まで行くと、ゆっくりと鍵を開けて中に入って行ったの

だった。

続く

魔王の工房、その４～潜入準備～（後書き）

次回投稿は３／１０（木）１２：００です。

魔王の工房、その5～悪夢の実験場～（前書き）

～あらすじ～

ついに洞穴内に足を踏み入れたエルザとイライザが見た、世にもおぞましい光景とは…？

魔王の工房、その5～悪夢の実験場～

＊＊＊

『犬』に教えられた洞穴から、工房の中にそろそろと入っていくエルザとイライザ。最初こそ天然の洞穴の様相を呈していたが、徐々に壁が人工物に加工されていく。ごつごつとしていた壁が徐々に整えられ、床もまた平らになって来ていた。歩きやすいのはいいのだが、あまりに整えられていると違和感だけは逆にますます強くなる。

もっと中は狭いかと思っていたのだが、警戒しながらとはいえ既に２０分は歩いている。徐々に天井が高くなっていくのでそろそろ大きな部屋に出そうだが、それにしてもこれだけのものを作るなら、敵の規模はエルザの予想をはるかに上回っているのかもしれない。

それにしても不気味な洞穴だった。外見がどうというのではない。外見の事だけを問えば普通の洞穴なのだが、漂う空気が何か生ぬるく、体にべたべたとまとわりつくようだった。まるで湿った空気に愛撫されているかのような錯覚を、エルザは覚える。

「（ち。話には魔王がどんなものかは聞いてはいたものの、中にいるのは想像以上にロクなものではないわね。所詮、想像は想像か。今までの任務とは、どうやら様子が違うわね）」

前を歩くエルザが内心で悪態をつきながら、自分の先入観を訂正していく。本来前衛を務めるべきイライザを後方にしたのは、洞穴に入ってしばらくしての印象が想像以上に危険だったせいだ。そうでなければ魔術的な罠にだけ気をつけ、イライザの成長のためエルザは監督役に徹しようと思っていたのだが、今回はそんな余裕はないかもしれない。

その時エルザの鼻をつんとつく異臭に気付く。同時に曲がり角からそっと顔をのぞかせながら、後方のイライザを手で制する。どうやら大きな空洞があるようだ。中には多数の生物の気配があるが、エルザは自分たちに向く殺気がないと感じとると、イライザを促して空洞に向かう。

だが空洞には何も無く、生き物の気配はさらに奥から感じられる。空洞はせいぜい深緑宮の一室程度の広さで、何もなくがらんとしていた。

「道が分かれていますね・・・ですがこの臭いは？」

「血の臭いよ。どうやら戦いは避けられないかもね。それで、左、真ん中、右。どの道にするか貴女が決めなさい、イライザ」

エルザがイライザに促すと、イライザは三つの道を見比べる。真ん中の道はかなり大きく、人が通ることを想定したとは思えない大きさだ。クックドゥーの成体でも何体かは同時に通れそうである。大して右と左は人間が通ることを考えて作られているが、さて。

「・・・左にいきましょう」

「根拠は？」

イライザの決断にエルザが問いかける。もっともエルザも結論は同じだったが、イライザの思考回路を知りたかった。背中を預ける人間の思考回路を知るのは、生き残る確率を少しでも上げるためには重要なのだ。

イライザもぼんやりしているように時にみられがちだが、戦場においてそのような様子は些かも見られない。エルザの意図するところを一瞬で読みとり、淀みなく即答する。

「右と正面にはとんでもないものがいると思います、絶対に進みた

くありません。対して左はそこまでの危険性を感じず、また血の匂いが一番強いのが左です。調べる価値はあるかと」
「それは勘かしら？」
「勘です」
即答するイライザ。その顔を見て、エルザが頷く。
「まあいいでしょう。戦場で一番頼りになるのは自分の勘よ。集団戦ならともかく、特に個人で動く場合はね。今回は私も同じ印象だし勘でもいいけども、貴女が将来的に多くを動かすのであれば根拠が欲しい。そうでなければ大軍を動かすのは大変よ。勘だけでは従わない奴らもいるからね・・・見なさい」
エルザが左の道に向かい、しゃがみ込む。地面でエルザが指した部分を見ると、何やら引っ掻いたような後があった。それに指先ほどの何かが地面に刺さっている。イライザがそれに気付くと、エルザがイライザの方を複雑な表情でじっと見た。
「これ、何だと思う？」
「これは・・・人間の爪？」
「そうね。つまりここを引き摺られていった人間がいるということ。どうやら爪がとれるくらい地面にしがみついた様ね」
「・・・」
イライザに言葉はないが、その精悍な顔が少し青くなるのをエルザは見落とさなかった。同時にエルザが洞穴に入る前にも出した小さな棒で、何かしら地面に描いている。
「エルザ様、それは白棒（チョーク）ですか？」
「そうよ。まあ特製なのだけど」

「それで何を？」

イライザの質問に、悪戯っぽい笑みで返すエルザ。

「今は内緒。だけど覚えておきなさい。もしこの先進むのがどうしても無理だと感じたら、私に掴みかかりなさい。いいわね？」

「？　了解です」

「よし、行くわよ。生存者がいるのかもしれない」

「はい」

エルザは何事もなかったように立ち上がり歩き始める。少し遅れてイライザが続くが、イライザは一度後ろを振り返り、地面に残った引っ掻き跡をその緑の瞳で一度見据え、それからその場を後にした。

＊＊＊

さらに進むこと数分。どうやら罠の類いは今のところないが、あまりにも無警戒なことをエルザが不審に思う頃、その疑問は解消された。

「これは」

「広い、ですね」

そこはかなり広い場所だった。部屋は正確な立方体の形をしており、５００人くらいの兵士が練兵をできそうな空間だった。だが部屋の中に踏み込んだ２人は、あまりの光景に言葉を失った。

「なんてことを・・・」

「惨（むご）い・・・」

部屋には無造作に置かれたベッド、いや手術台がいくつも並んでいる。その上にはいくつもの生物――人間もそうだが、犬、馬、中には魔獣やオークまでいる。どれもこれも体をバラバラに切り刻まれており、中には壁から固定した鎖の様なもので空中に固定されている生物もいる。顔には一様に苦悶の表情を浮かべ、まるで悪魔でも見たかのように顔を醜く歪めた表情で死んでいる者もいた。

地面には太さも長さも様々な管が沢山走っており、それらはベッドの上の生物につながっているが、どういう効果を果たしているのかはエルザにはわからなかった。何やら怪しい液体の入った容器に、管のもう一方が繋がっている。

周囲には檻も沢山あり、開いている物からそうでないものまで。だが共通しているのは、中には何もいないこと。壁にも檻が沢山あるが、そちらの中には何かがいるようだ。声こそしないが、獣特有の息遣い、気配が感じられた。

この光景を見て危険極まりないことはエルザとイライザにも分かっていたが、虎穴に入らずんば虎児を得ず。2人は互いに頷き合うと、覚悟を決めて部屋に入っていく。

「管を踏まないように。私は左、貴女は右を見なさい」

「了解です」

エルザとイライザは慎重に歩を進める。だが2人の顔は既に蒼白だった。並大抵のことでは驚かないエルザまで顔色を失っている。

「（この実験を行った奴の顔を見てみたい。絶対にまともな神経をしていないことが断言できるわ。快楽殺人者、強姦魔、食人鬼、悪霊憑き・・・色んな連中と渡り合ったけど、これと比べればどれも子どもだましだわ。死んでる連中の顔を見れば、生きたまま切り刻まれたのがよくわかる。それをこれだけの数・・・しかも何度とな

く繰り返し行っているのでしょうね）」

そのエルザの推論を裏付けるかのように、地面は既に血の後で黒ずんでいた。部屋の入り口付近では地面は壁と同じくこげ茶色のような色だったので、今エルザが歩いている付近は血で変色したのだろう。殺人現場でさえ、こうは中々ならない。エルザの警戒度は、いまや最高に達していた。

むしろこの噎(む)せ返るような死の臭いの中で、よくイライザがついてきているとエルザは思う。ちらりとイライザの様子をエルザが見ると、イライザは油断なく周囲警戒をしながら、一定の距離を保ってエルザの後をついてきている。顔面こそ蒼白だが、感情が動作を妨げることはないようだ。

「（さすがラザール家の騎士。女とはいえ、見事なものだわ）」

内心でエルザが賛辞を贈る。その時、イライザがふと足を止めた。

「エルザ様、あれを」

イライザが指さしたのは、地面に置かれた檻に繋がれた女性である。他の死体と異なり、彼女だけは実験でいじった跡がない。だが絶命は確実だった。何せ腹が喰い破られている。

だがそれよりも異常だったのは、女が笑いながら絶命していたこと。一体この女性に何があったというのか。今にもその狂気に沈んだ女が顔を上げて笑いだしそうで、その光景を想像して思わず口を押さえるイライザ。

「うっ・・・」

「吐くなら他所(よそ)でやりなさい、イライザ。しかしこれは・・・」

エルザが女の傍によって傷跡を調べる。その傷跡は中からめくれていた。

「中から喰い破られている？」

「ひどい・・・」

エルザの言葉に思わずイライザが後ずさり、後ろに会った手術台にぶつかった瞬間、イライザの手首をがしりと掴む何か。

「ヒッ」

「助け、て・・・」

手術台に乗っていたのは体を切り開かれた男。心臓こそ見えないが内臓は丸見えで、脳まで見えているのだ。脚はすでになく、腕もよく見れば獣人のそれにすげ替えられていた。男がイライザの手首を弱々しく掴んだが、まさかそんな状態で生きているとは彼女は思ってもいなかったので、手を振りほどくことすら忘れて立ちつくしてしまった。むしろ大騒ぎしなかっただけでも大したものなのだ。

だが男が目を開けようとした時に、ついにイライザの我慢の限界を超えてしまった。

「娘・・・エルマ・・・助け・・・」

ゆっくりと瞼を開いた男の眼には、あるべきものがなかった。２つの空洞がイライザのいる方を虚ろに見つめる。その吸い込まれるような闇に、思わずイライザは悲鳴を上げた。

「キャアアア！」

「イライザっ！」

エルザが慌てて背後から口を押さえ、その行為で一瞬で我に返ったイライザも悲鳴を止めたが、時は既に遅かった。イライザの悲鳴に反応したのか、手術台の上の生物たちが一斉に騒ぎ始める。

「ぐおおおお！」
「痛い～痛い～」
「あああああ～」
「げぶっ、ごふっ」

そのこの世とも思えない光景に二人とも凍りついた。エルザにしろ、悲鳴を上げないことで精一杯だったのだ。イライザに至っては気を失わないようにするだけで必死だった。そんな状態では、部屋の中に入ってきた足音に2人が気付かないのも、無理はなかったかもしれない。

続く

魔王の工房、その5～悪夢の実験場～（後書き）

次回は３／１２（土）１０：００投稿です。

魔王の工房、その６～実験場の番人～（前書き）

～あらすじ～

実験場で立ちつくすエルザとイライザに忍び寄る影、その正体は…？

魔王の工房、その6～実験場の番人～

「おお、ダグラよお。お客様だんべ」
「そうだなぁ、ドグラよ。今日は誰かお客様がくることになってたっぺか？」

その声にはっとした2人が、入ってきた側と反対側にもう一つ入口があったことに気がつく。そこから現れたのは2人組のオーク、いや、頭はそれぞれイノシシと牛だったので、オークと言うべきかどうか。多少変わっているとはいえ、流暢に人語を話すことから、かなり知能が高いとうかがえる。
その2体がエルザとイライザを不思議な眼差しで見つめながら、話しあっている。

「うんにゃ。そんなことは聞いてないべ」
「んだば侵入者ってことだっぺ？」
「んだんだ。じゃあ俺達の好きにしてもいいだかな？」
「そのはずだっぺ。オラ、滾(たぎ)ってきたっぺ！」
「オラも漲(みなぎ)ってきただ！」

2体が筋肉を見せつけるようなポーズをとる。下半身を隠す腰巻と、肩に交差してかけるベルト以外裸な彼らなので、盛り上がる筋肉がよく観察できたのだが、人間には決してありえない見事な筋肉の隆起を見せていた。それだけでこの2体が普通のオークではないことがわかる。オークはもっと脂肪が多いものだ。

「イライザ、貴女の出番よ」
「・・・」
「イライザ！」

イライザはまだ足が地面に付かないようであった。ラザール家に生まれ神殿騎士となり、いくつかの任務をこなしたといえど、巡礼のような激務は初めて。しかも成人したとはいえ、少女ともいっても過言ではない年齢である。この状況に足がすくんでも無理はなかった。

しかし状況は待ってくれない。エルザは強引にイライザの顔を額がつきそうな距離にまで自分に近づけると、強烈な覇気と強い眼差しで持ってイライザに訴える。

「イライザ＝ファイディリティ＝ラザール。私を見ろ」

「・・・」

「今からお前は一本の剣だ。アルネリア教会の名の元に、あの魔物を駆逐しろ。それが貴様の役目」

「・・・」

「それ以外の事は一切考えなくていい。邪魔する者は全て切り捨てろ、全責任は私が負う。やれ」

「・・・御意」

その言葉と共に、虚ろだったイライザの目に光が戻る。強い意志をたたえた緑の眼の女騎士は、まっすぐにダグラとドグラを見つめる。ちょうど2体がイライザに突っ込もうとしてくる時だった。

「娘っ子！　オラ達の素敵パワーを喰らえ！」

「オラの筋肉に酔いしれるっぺ！」

「・・・斬る！」

言葉とは裏腹に猛烈な突進をするドグラとダグラ。だがイライザは全く動じることなく、背中の長物を地面に刺し、腰の二刀を冷静に抜き放つ。そして軽く地面を蹴ると、ドグラとダグラ以上の速度

で突進した。

「ぬお！？」

「ぬわ！？」

その意外な速度に2体が反射的に頭を守るが、イライザはイノシシ頭のドグラの肩を蹴って2体の後ろに飛ぶ。すれ違いざま、背後からそれぞれに一突き。その突きは正確に2体の脊髄をとらえ、その場に膝から崩れ落ちるドグラとダグラ。

「あれ？」

「体がいうこと・・・」

ダグラが何かを言い終わる前に、ヒュン！　という風切り音と共に2体の首が落ちる。背後から一閃、イライザが2体の首の手術痕に沿って、首を斬り落としたのだ。見事な技のキレに、エルザも思わず見惚れた。イライザは既に血糊を振り払い、剣を収めている。

「片付きました」

「見事。敵に侵入がばれた以上、こそこそする必要はないかもしれない。ここからは戦闘ありきで進むわよ」

「御意」

そうして2人が部屋を後にしようとしたときである。

「ひどいっぺ。オラ達を無視するだなんて」

「んだんだ。最近の女は冷たい女が多いだよ」

その声にがばっと2人が振り向くと、首を落したはずのドグラとダグラが、自分の首を持って起き上がるところだった。その首を元

の場所に押しつけると紐の様なものが伸び、彼らの頭を固定していく。そしてほどなく完全に元に戻ってしまった。

「・・・これはただのオークではなさそうね」
「私が甘かったのでしょうか？」

イライザが剣を再び抜きながら、エルザに問いかける。

「いえ、私もやったとばかり思ったわ。想像以上に常識が通じない連中ね」
「当たり前だぁ。オラ達はアノーマリー様に作ってもらった特別製だべ！」
「んだんだ。首切られたくらいじゃ死なないっぺ」

2体がどうだと言わんばかりに鼻を鳴らす。だがエルザは逆に余裕を出してきた。

「なるほど、お前達の上司はアノーマリーというのね」
「あ・・・」
「何喋っちまってるだよ、ドグラ！　この馬鹿！」

ダグラがぽかんとドグラの頭を叩く。

「お前、この前もヒドゥン様の御召し物でトイレ掃除して、怒られたばかりだっぺ？」
「あ、あれはあの人が雑巾みたいな服着てるのがいけないんだべ？」
「ふーん、ヒドゥンってのもいるのね」

エルザがにやにやしながら2人のやり取りを見ている。面白くてたまらないといった顔だ。

「あ、いっけね」
「ダグラも人のことは言えないだべ？」
「その調子でペラペラしゃべってくれるとありがたいんだけど。ついでにお茶とお菓子も出してくれない？」

完全に精神的に優位に立ったエルザが、2体に冗談を飛ばす。だがここにきて2体も真剣な表情に戻った。

「ここまで知られたからにはただでは返さねっぺ」
「んだ！　ここで確実に死んでもらうべ！」
「あなた達が勝手に喋ったのに、とんだ言い草だわ」

いい加減にしろと言わんばかりに、エルザがため息をついた。イライザも呆れ気味だ。だが2体は地団太を踏みながら、激昂した。

「やかましい、貴様の様な性格の悪いメスブタにはここで死んでもらうべ！　ポチ、ポチ！　来るだよ！？」
「わんっ！」

どうやったのか、壁にあった檻の一つが勝手に開く。その中からは子犬の様な泣き声が聞こえたが、果たして出てきたのは・・・

「ちょっと・・・声と体が合ってないわよ」
「大きい。しかも全くかわいくない・・・」
「どうだ、これがオラ達自慢のペット、ポチだっぺ！」

檻から出てきたのは、既に猛獣と言って間違いないほど大きな犬の魔獣。体長は４ｍにも及ぼうかというくらいはある。目は退化しているのか見当たらず、その分耳が像のよう大きい。また舌が長く、

ドグラの胴に巻きつくくらいはある。ポチは出て来るなりその舌でドグラを存分に舐めまわしていた。

さらにポチには体毛はなく、肌が露出しているが体のいたる所に開いた口がガチガチと歯を鳴らしている。肌はまるで返り血でも浴びたかのように赤黒かった。その体をダグラが自慢げにぱんぱんと叩くが、明らかにポチは嫌がっているようだった。だがそんなことにはおかまいなしにダグラが自慢気に話す。

「ポチは賢いだよ！？　自分で檻を勝手に開けて出てくることができるべ！」

「いや、それなら閉じ込めている意味がないでしょう？」

「だから時々勝手にここのベッドの上を喰い荒らすべ。しかもご丁寧にクソまでしていくから、おかげで掃除が大変で大変で・・・」

「もうどっちがペットかわかりませんね」

イライザがズバリ指摘するが、言うほど楽な状況ではない。あの巨体で知恵があり俊敏ならば、２人の手に余る可能性も高いのだ。しかも２人が入ってきた人間サイズの通り道を塞ぐように立ちはだかられたため、逃げる選択肢はもはやありえない。ドグラとダグラが入ってきた入口はかなり大きいため、そちらに向かってもポチに追い立てられるだけだろう。もはやこのポチと呼ばれた魔獣に戦って勝つしかないのだ。

エルザとイライザが戦闘態勢に入ろうとした瞬間、ドグラを舐めまわしていたポチが突然舌を巻きつかせてドグラを持ち上げると、その口におもむろに放り込んだ。

ガリッ！　ガリッ！

その咀嚼音が部屋に響き渡る。エルザとイライザは予想だにしない展開にあんぐりと口を開けるが、目の前の光景はそれほど生易し

い状況ではなく、むしろ凄惨極まりない。一方で相棒から飛び散る血を浴びながら、慌てたダグラがわめき散らしていた。

「ポチ、ポチ！　何するべ？　それは食べちゃだめだべ！　お腹を壊すべ！？」

そういう問題じゃないだろうとエルザは内心思ったが、敵が一体でも減るのはありがたい。黙ってその状況を油断なく構えながらも観察していたが、ダグラは騒ぎ立てることしかできなかった。

ポチはポチでドグラを飲み込むと、自分にしがみつくように騒ぐダグラが五月蠅いと思ったのか、前足でダグラを壁際まで吹き飛ばした。

「げひっ！？」

醜いうめき声と共にダグラが壁に激突し、痙攣する。そしておもむろにポチはダグラに飛びかかると、まさに腹を空かした野生の獣のごとく、荒々しくダグラにかぶりついた。鮮血が壁に飛び散り、思わずイライザが顔をしかめるが、エルザはその様子をじっと見ていた。見たこともない敵と戦う時には、まず観察するのは基本中の基本である。癖、武器、動きの速さ。エルザが冷静な思考でポチの動きを把握していく。

やがてポチがあらかたダグラを食べ終わると、のそりとその姿を起こしてエルザとイライザの方に向く。今度は2人が標的なのだろう。ゆっくりと近寄るポチに2人が戦闘態勢に入ろうとしたその時、ポチの動きがぴたりと止まり、低いうなり声を上げたかと思うと、突然地面に転げまわって苦しみ始めた。周囲のベッドを蹴散らし、のたうちまわる。

「キャウン！　キャウン！！」

「今度は何？」

だがより警戒心を強めたエルザとイライザとは裏腹に、しばらくしてポチは動かなくなってしまった。口からは泡を噴き出しており、舌はだらしなく外にはみ出し、仰向けでピタリと止まっている。切れた管から液体が顔にかかっているが、何の反応もない。どうやら死んでしまったようだ。

「一体どうして・・・」

「変な物を食べたからでしょ？」

突然背後からした声に、２人が飛びのいて警戒態勢をとる。そこには醜く歪んだ老人の顔に、子どもの声を備えたアノーマリーが立っていた。

続く

魔王の工房、その６～実験場の番人～（後書き）

次回投稿は、３／１３（日）１８：００です。

魔王の工房、その7～工房の主～（前書き）

～あらすじ～

工房の番人を退けたエルザ達の前に現れたのは……？

魔王の工房、その7～工房の主～

アノーマリーの容貌を見て、エルザとイライザは醜いという印象を抱かずにはおれなかった。黒いローブで体は見えないが、歪んだ顔のパーツ、血の臭いのたちこめるこの部屋に置いてすら異臭のする吹き出物。さらに老人の容貌で子どもの声で話すのだから、生理的嫌悪感を抱くように全てをつなぎ合わせたとしか思えなかった。彼を見て思わずエルザが「醜い」と漏らしたのを、アノーマリーは聞き逃さなかった。

「醜い？　僕が醜いって!?」
「・・・ええ、醜いわ」

下手な挑発になってしまうのではないかと、どう答えるべきか一瞬躊躇したエルザがもう一度はっきりと肯定したが、その言葉に体を小刻みに震わせながら笑いだすアノーマリー。

「ふふ、ふふふ。いいね、いいね！」
「何が可笑しいの？」
「可笑しいんじゃない、楽しいんだよ！　さあ、お嬢さん達。その調子で僕をもっとなじっておくれ!!」

アノーマリーが両手を広げて二人を促す。この洞穴に入ってからこちらエルザとイライザは驚きっぱなしで、大抵の事に対する心構えはしたつもりだったが、このような種類の驚きは予想していなかった。目の前の少年のような老人はこともあろうに「自分をなじれ」と要求しているのだ。

なんとも下卑た要求にエルザが辟易し、吐き捨てるように言い放つ。

「あなた、気が触れてるんじゃないの？」
「そうそう、その調子だよ！　もっと、もっと！！」
「・・・このイカレ野郎め」

エルザが思わずスラム時代の口調に戻る。もはや口を聞くのも汚らわしいとエルザは判断し、ミスリルのフィストを握りこむ。これ以上口を聞く前に、潰す。それがエルザの結論だった。

「さ、さ、さあ！　もっと罵っておくれよ！」
「イライザ、ここにいなさい」

その言葉と同時に、イライザの返事も待たずエルザが地面を蹴る。まだ年若いイライザに、このような変態の相手をさせたくはなかった。そしてアノーマリーに接近して拳闘家のような構えをエルザが取るが、彼はまだ余裕なのか両手を広げたままで無防備極まりない。その顔面を、容赦なくエルザの拳が捉える。

エルザの左フックがアノーマリーの右頬を打つ。さらにエルザは拳が当たる瞬間さらに捻りこむため、ミスリルのフィストと合わさって、威力はとても女性とは思えないほどのものがある。アノーマリーは鼻血を噴き出し口の中を切ったのか血をだらだらとたらす。エルザの左拳には、アノーマリーの頬骨が砕けた感触がしっかり残っていた。

アノーマリーも思わぬ強力な一撃にたたらを踏んで後退した。だがそれほどの衝撃・怪我にも相変わらず顔はにやけたままで、防御をする気配もない。エルザは背筋に嫌な汗を覚えつつも、構うことなく突貫する。だが念のため、ローブで見えない胴体だけは狙いから外していた。

「もっと、もっと！」

「セイッ！」

再びエルザの左フックがアノーマリーにヒットする。だが今度は顎先をかすめるように当て、アノーマリーの脳を揺らす作戦に出た。軽い脳震盪をおこし、すとんと膝から崩れ落ちるアノーマリー。

「もっと・・・あれ？」

「ボコ殴りだっ！」

目にもとまらぬエルザの連打。アノーマリーに反撃の隙など与えるつもりは全くない。見る間にアノーマリーの顔面が原形をとどめぬほどに変形していく。もっとも元からアノーマリーの顔が原形をとどめているとは言い難いかもしれない。エルザはアノーマリーの頭蓋骨がだいたい砕けたのを感じると、一等拳を握りこんで振りかぶる。

「ラストォ！」

「あ・・・ふ・・・」

何かを言いかけるアノーマリーを気にかける様子もなく、上から下へ拳を振り抜き、アノーマリーの頭を地面に叩きつけるエルザ。アノーマリーの頭は完全に破壊され、見るも無残な様相を呈していた。

アノーマリーがピクリとも動かなくなったのをエルザが確認すると、呼吸を整えイライザの元に引き揚げる。その無慈悲な戦いぶりと、見事な身のこなしにイライザは思わず賛辞の言葉を口にした。

「お見事です」

「別に。そういえば名前も聞かなかったわね。一体何者だったのかしら、この下衆な男は」

「それはそれは僕がとんだ失礼をお嬢様方。申し遅れました、僕はアノーマリーと申します」

突然入口の方から聞こえた言葉に、完全に虚をつかれた2人。声のした方向には、なんとたったいま倒したばかりの男が慇懃（いんぎん）な礼をしながら立っているではないか。

「え!?」
「双子ですか?」

イライザが思わずすっとボケたことを口にするが、改めて出てきたアノーマリーの背後から、さらにぞろぞろとアノーマリー達が現れる。

「こ、これは・・・」
「6、7、8・・・何人兄弟なのでしょうか?」
「面白いこと言うね、君は」

くすり、と先頭のアノーマリーが笑う。

「でも残念ながら僕達は同一人物だよ。まあ自分で自分をコピーしたってところかな?」
「なんですって? そんなことができるわけ・・・」
「できるんだよ。僕の超天才的な頭脳を持ってすればね」

アノーマリーが自慢気に自分の頭をとんとん、と叩いて見せる。

「ちなみに僕達はそれぞれの経験を共有できる。まあそれぞれの個体の生命活動を止めないと、他の個体に経験をフィードバックできないのがなんとも不便だけどもね」

そう言ってアノーマリーは見事な早業で、たったいまエルザが殴り倒した個体に爆裂の魔術を放った。もしエルザやイライザに向けて放っていれば、少なくとも回避は不能だったであろう。そして完全に先ほどの個体が生命活動を停止すると、さも楽しそうに他のアノーマリー達が笑い始めた。

「そうかそうか～、さっきの僕はこんなに良い経験をしたのか～。これはぜひとも皆で分かち合わないとね、僕？」

「だよねぇ。こんなに殴ってもらえるなんて、最近じゃ滅多にないもんね。仲間内での闘争は基本的に禁止されているし、かといって僕達が戦場に立つ機会はほとんどないしね、僕？」

「でもこれからは、僕達の何人かが外に資材調達に行ったらいいんじゃないかな？　そこで適当にやられて帰ってこようよ、僕？」

「「「賛成～！」」」

ケタケタと笑うアノーマリー達に、眩暈を覚えるエルザとイライザ。さらにエルザは確信した。こいつらこそが、この工房の主なのだと。これほどの異常者なら、話に聞く魔王や、ここで見たような狂気の実験を行っていたとしても何の不思議もない。

全て殴り倒す。その覚悟を決めてエルザが前に一歩踏み出すと、ぴたりとアノーマリー達の笑い声が止まる。その変容ぶりにエルザもびくりと思わず足を止めるが、アノーマリーは指を一本立ててゆっくり横に振りながら、イライザを制した。

「まあまあ、焦らないで。せっかくここに来たんだ。少々なら君達の質問に答えてあげてもいい。どうせアルネリア教の手の者なんだろう？　ここを見られた以上、僕達としては君達を無事に返すことはありえないし、君たちだって手ぶらで帰るわけにもいかないだろう。だけど僕は他のメンバーのように戦闘狂じゃなくてね。たとえ

敵とでも会話を楽しみたい人間なのさ。まして君たちのように美しい女性となら、なおさらね」

エルザは反吐がでつつも冷静にしばしアノーマリーの真意を図ったが、もし本当に答えてもらえるならそれに越したことはない。あるいは嘘だとして、何らかの仮説が浮かぶこともありえる。ミリアザールからは、何でもいいから情報を持って来いと言われているのだ。目の前の男がもし敵の幹部クラスなら、これに勝る情報源はないのだ。

余裕たっぷりのアノーマリーに警戒しつつも、エルザは覚悟を決めた。

「・・・では聞くわ。貴方達の・・・」

「おっと、その前に何でも答えるわけにはいかないし、何度もは答えられないな。質問は3つまで。しかも内容によっては僕ははぐらかす。いいかい？」

要は都合の悪いことは答えないと言われたのだが、アノーマリーはエルザを試しているようでもある。その条件にまたしばし考え込んだエルザだが、化かし合いならエルザも結構な場数を踏んでいる。数瞬の悩みの後、エルザはおもむろにアノーマリーに問いかけた。

「では1つ目の質問をするわ。いいかしら？」

「どうぞ」

対するアノーマリーは余裕たっぷりである。目の前の女が自分より賢いとは、露ほどにも思っていないのだろう。

続く

魔王の工房、その7～工房の主～（後書き）

ちょっと半端な終わり方をしたので、次回投稿は3／14（月）16：00です。

魔王の工房、その8～舞と拳と～（前書き）

～あらすじ～

エルザとイライザの目の前に現れたのは多数のアノーマリー。そこでエルザが取った行動とは？

魔王の工房、その8～舞と拳と～

「あなたはここの工房を作った人かしら？　それともただ管理を任されているだけ？　どっち？」

一瞬アノーマリーは怪訝そうな顔をした。もっと直接的な事、たとえば自分達の目的を聞かれると思っていたのだ。もっともそんなことを聞かれても、アノーマリーに答える気はさらさらなく、目の前の女をからかって悔しそうな顔をすることを楽しみにしていた。だというのにまるで単純な二択を聞かれ拍子抜けもしたが、エルザの真意を測りかねたようにアノーマリーはたどたどしく答える。

「・・・僕はここの工房を作った者だよ。管理も任されている」

「結構大変よね、ここは広いから」

「そうでもないさ。僕は沢山いるからね」

「あら。そんなに一杯いると、逆に手が余りそう」

「それもないね、やることはいくらでもある」

「あなたは天才だそうですもんね」

「当然さ。僕の様な天才でない限り、工房の管理はできない。だからこそ自分を沢山作ったんだからね。魔王はいくらいても足りなし、作った後も世話は必要だ。これだけいてもまだ足りないくらいさ・・・って、もう４つくらい聞いてないか？」

「あら、まだ一つしか聞いてないわ。今のは私の独り言に勝手にあなたが反応したのよ。だいたい私がいつ、２つ目の質問って言ったの？」

「は、はあ？」

あまりといえばあまりの暴論に、あんぐりと口を開けるアノーマリー。だがここまではエルザの見込んだ通りだった。

彼女の見立てでは、アノーマリーと言う男は見た目に反して自信過剰な傾向がある。異常者なのは間違いないが、知能は恐ろしいほど高く、理性的な思考ができることも間違いない。この手の種類の人間は魔術師や研究者に多く、エルザもアノーマリーほどひどくはないにしろ、なんどか狂人のような人間の相手をしたことはあった。この手合いとやり取りする時には、まず自分のペースにもっていき、一見理屈が通ってそうな暴論で相手に考える暇を与えないことである。思考が筋道だった人間ほど、前提から崩されると弱い。最初の二択は、二択に見えてそうではない。答えはどちらでもよく、その後に世間話にもっていくのが狙いだった。もはや会話はエルザのペースである。実際にここまでだけで結構な情報を引き出せた。

魔王は管理が必要。つまり何もしないと寿命が短いのではないか、あるいは完全に統制がとれるわけではないとエルザは仮説を立ててみる。またかなり高確率なのは、ここで目の前のアノーマリーを倒してしまえば、製造・管理はもはやできないのではないかということ。もし他人で手伝えるような仕事なら、自分を複製する必要はないはずだとエルザは考えた。もっともイカれた人間は何でもやりうるから、エルザの仮説も確実とは言い難いのだ。

それでも今は自分が優位であると確信し、エルザはさらに言葉をつなぐ。

「じゃあ2つ目」

「ちょ、ちょっと！」

「そんなに自分を一杯作って不安じゃない？　誰かが反乱をおこしたらどうするのかしら？」

エルザにアノーマリーの話を聞く気など毛頭ない。別にここで会話が切れてもいいとさえエルザは思っているのだ。元より敵からまともな情報が直接聞けるとは想定していない。だからこそエルザはいつでも戦闘態勢に入れるように、身構えながら質問を続ける。か

といって質問の内容にまで手を抜いているつもりはない。
　対するアノーマリーはエルザの質問に慌てながらも、真意はやはり測りかねている。もっとも彼は責められるのが好きなので、この状況は少し好ましかったのだ。これも一種の言葉責めか、などとアノーマリーがくだらないことを考える一方で、自分のことなら答えても良いかと思う。

「別に不安はないさ。僕が増えた所で、どうということはない」
「あら、どうして？」
「・・・別にいいだろ、どうだって」

　アノーマリーもエルザの意図がわからないので、答えは明確に言わなかった。だがエルザには仮説を立てさせるのには十分な返事である。アノーマリーが目の前のエルザを軽く見ているのは間違いなかった。

「（ふうん。自分が沢山いても、どうということはないはずがないじゃない。つまり本体の劣化品とか、あるいはこいつらが束になっても何もできないように、枷がついているということね。少なくとも各個体が同列というわけではない。状況しだいでは施設よりもこいつらの全滅を優先しようかと思ったけど、大量生産できる粗悪品なら意味がないか？）」

　エルザの思考がめまぐるしく回る。その一方で最後の質問内容も既に考えてある。いわばこれは武器を持たない脳の殴り合いなのだ。

「さて、最後の質問だからよく考え・・・」
「３つ目よ。魔王は何のために研究するの？　あなたならもっと凄い物作れそうだけど？」
「まったく！　ちょっとは人の話を聞きなよ！？」

「聞かないわ。さあ、答えなさい。自分から言い出したことでしょう？」

さすがに多少苛立ったアノーマリーだが、実は彼もまた明確な答えを教えてもらっていないのだ。ただ言われるがままに作っているだけ。自分の研究内容に合っているし、一人でやるよりも効率がいいから、お師匠と呼ばれる人物に素直に従っているだけなのだ。

そんなことを正直に言うわけにもいかず、はぐらかすことに決めたアノーマリー。だがアノーマリーが少しエルザをからかおうとした瞬間、エルザが先に言葉を発した。

「どうせあなたみたいな小物、目的なんて知らないんじゃないの？大方趣味とかその程度なんでしょ？」

その言葉があまりにも的を得ていたので、思わず目を見開くアノーマリー。エルザにしろ、これは何も確信があったわけではなかったが、今までの経験からなんとなくそんな気がしたので、かまをかけてみたのだ。いままで捕えた殺人鬼に、なぜ殺人を犯すのかと聞いたことがある。だが、答えは「自分がそうしたいから」というのが最も多かった。エルザは、義務や仕事で周囲の地獄の様な光景を作り出せるとは思っていない。命令されてやっているものの、これはアノーマリーの嗜好に合っているというのが一番正解に近いような気がしたのだ。

またミリアザールからも、敵にはさらにリーダー格がいるのではないかという可能性は聞いている。それが先ほどのアノーマリーの反応でさらに確率の高いものへ変わった。そしてまたアノーマリーがエルザを油断ならない者として認識を変えようとした時には、エルザは既に次の行動に移っていた。

「このおん・・・」

「遅い！」

先頭にいたアノーマリーが何かを言う前に、その顔面をしこたま殴り飛ばすエルザ。たまらず吹き飛ぶアノーマリーだが、それを合図に一斉に他の個体が戦闘態勢に入った。同時に、いつからいたのか壁際にいるアノーマリーが鎖を引っ張る。

「やれ、『なりそこない』ども！」

「グルルルル」

鎖を引くと同時に壁の檻の格子が上がり、中からのそりと何かが出てくる。それは四つん這いに歩く人かと思われたが、体は先ほどのポチのように赤黒く変色し、地面にはボタボタと涎がしきりに垂れている。そしてそいつらが顔を上げた瞬間、その理由がよくわかった。

そいつらには目が一つしかなかった。いや、目すらないものもいる。巨大な目が顔の正面に一つ。口は大きく斜めに裂け、妙に長い舌で自分の顔を舐めまわしている。あまりに舌が長くて口の中に収まりきらないのか、そのせいで涎が垂れっぱなしなのだ。よくよく見れば、手足も人間にしては不自然に長い。外見には個体差があるようだが、醜悪なのはどれも同じだ。ただ同じ醜悪さでも目の前のアノーマリーと違うのは、どの個体にも知性のかけらも感じられないことか。

エルザは知る由もないが、彼らはヘカトンケイルを作る過程で生まれた失敗作であり、同時にこの工房の門番でもある。門番を統率していたのは先ほどのポチなのだが、アノーマリーが代わりに命令を下しても何の問題もない。もはや頭には食欲程度の行動しか取れないが、中には生殖能力を残している者もおり、それが発覚してからはとても口には出せない様な実験が繰り返された。先ほどエルザが調べた女性はその実験対象であり、結果があのポチだったのだ。

だがそんなことまでは知らない方が幸せというものだろう。
そして檻からはさらになりそこないの群れが出てくる。檻から出たなりそこないどもはエルザ達を敵と認識すると、じりじりと距離を詰める。普通なら歴戦の勇者でも怯える場面だが、エルザはまるで気にかけもせず、ただ一言だけ。

「イライザ、任せた」
「御意」

その一言でエルザがアノーマリー達に突っ込んで行く。さらにイライザの方は背中の長物に巻いてあった布を取り払った。その中から出てきたのは双剣――本来は馬上で突撃兵が使うような、柄の方にも刃をつけ、まるで剣を柄でくっつけたような武器である。スピアは突貫専用の武器で、一度敵に食い込むと使い物にならないことが多いが、双剣なら馬上でこれを振りまわすだけでもかなりの効果が得られる。だがかなりの重量を誇るうえに殺傷能力においてはいまいち疑問視されていたが、イライザは特注の双剣と自身の鍛錬により、これを独自の武器として昇華させた。
女性でありながら騎士を目指し、女性ゆえの己の非力を嘆いたイライザの、結論の一つである。この重量のある武器なら、扱い方次第では非力な女でも十分に殺傷能力を持たせられると考えたのだ。だが本当にそのような武器を扱えるのかとエルザも最初は疑問を抱いたが、一度イライザが使うところを見せてもらってからは非常に合点がいった。そしてイライザの戦いは、彼女対多数でこそ本領を発揮することも。

「ラザール家が騎士、イライザ。参る！」

その声と共に地面に刺した剣を蹴りあげ、頭上で回転させるイライザ。彼女が具足の恰好を旅の間でも外さないのは、素足で双剣の

刃を蹴るわけにはいかないからである。腕力でこの重量のある武器を持ち上げるのはかなり疲労が伴うため、彼女は回転運動と重力でこの武器を扱うのだ。さながらその戦い方は舞。以前エルザはイライザが双剣を扱う時の型を見せてもらったのだが、どんな一流の踊り手よりも美しいと思った。もちろんエルザがそれほど踊りを多く見たことがあるわけではないし、イライザも舞を踊っているつもりはなかったわけだが。

だがイライザの戦いは美しいだけではなく、多数の敵をなぎ倒すのに向いている。事実彼女に襲いかかろうとした『なりそこない』共は、彼女に触れることもままならず次々と斬り倒されていった。頭を割られ、腕をそがれ、打ちすえられ。竜巻の前には大草原の生物ですらなすすべがないのと同じように。

エルザはイライザのこの戦い方を知っているからこそ、自分が飛び出したのである。本来なら自分は後方から魔術でもサポートに回る作戦もあるのだが、今回はもはや悠長な事をしている余裕はない。一挙に殲滅する。それがエルザの決断だった。こう、と決めればエルザの動きは早い。あっという間にアノーマリー達と距離を詰め、次々と殴り飛ばしていく。だが無理に強いパンチを当てるのではなく、軽くジャブで相手をのけぞらせるだけだ。きっちり一体に一発ずつ。その早業と、思わぬ大胆な行動にアノーマリー達も反撃がままならない。また一気にふところに飛びこまれたため、下手に魔術を使えば同士討ちの危険もあった。もっとも一撃を喰らいたい、という欲望も反撃の手を弱めたのだろう。一通り殴り終えると、アノーマリー達と距離を一度離すエルザ。

「いてて・・・あれ、もう終わり？　こんなんじゃ全然イケないよ？」

「心配しなくてもすぐに逝けるわよ。遅発効果魔術（ディレイ・スペル）発動！」

エルザが勝利を確信したかのごとく不敵に微笑んだ。そして最初

に殴りつけたアノーマリーの頭が突然爆発する。それを皮切りに次々と爆発していくアノーマリー達。

「何だって！？」

気づいた時にはもう遅い。だがアノーマリー達は実に楽しそうに笑っただけだった。

「ふふ、これはきついお仕置きだね。また遊んで…ばっ！」

最後のアノーマリーもまた、何かを言い終わる前にその頭を吹き飛ばされたのだった。

続く

魔王の工房、その8～舞と拳と～（後書き）

次回投稿は3／16（水）14：00です。

魔王の工房、その9～工房中心部～（前書き）

～あらすじ～

戦闘を終えたエルザとイライザはさらに先へと進む。そしてついに目的の工房へと辿り着くが……？

魔王の工房、その9～工房中心部～

エルザがアノーマリー達を全て吹き飛ばしたうえでイライザを振り返ると、彼女もまたなりそこないをあらかた斬り終えたところだった。なりそこないどもに恐れはない。だからこそ、自滅とわかりもせずにイライザの旋風のような斬撃の中に自ら飛び込んで行ったのだろう。距離を取ってじりじりと追い詰めていれば、もう少しは善戦できたかもしれない。

とはいえエルザもここでディレイ・スペルを使う予定はなかったし、予想外に消耗しているのは確かだ。全てを斬り終えたイライザも怪我こそないようだが、さすがに息は切らしているし、何より返り血がひどい。見事なブロンドが返り血で半分近く赤く染まっている。

「ひどい恰好よ、イライザ」
「あ・・・すみません」

イライザの返り血をぬぐってやろうと、エルザが双剣の覆いに使っていた布を差し出したのを、やや茫とした表情で受け取るイライザ。その様子を見てイライザもかなり参っているとエルザは感じ、一度休憩をさせようと考える。

「イライザ、少し休んでいなさい。今のうちに私は仕込みをしておくわ」
「仕込み・・・何のでしょうか？」
「この施設を破壊するわ」

エルザはそう言うとこの部屋の各所を調べ、支えになっていそうな箇所、脆そうな箇所を探し先ほどのディレイ・スペルをかけてい

く。その他にも部屋にある妙な管の先にあるタンクの様なものにも同様に魔術を施し、めぼしいものに自身の魔力と相談しながら仕掛けていく。

エルザはこの聖属性の爆発の魔術を、自分で発動時間を任意に設定して仕掛けることができる。もちろん発動前に解除されればそれまでだが、最短で触れてから5秒で爆発させられる。どれほどの解呪の達人だとしても、5秒で解呪は無理だとエルザは踏んでいる。装備したフィストすら囮。彼女は実質相手に触れることさえできれば、相手を死に追いやれるのだ。よしんば死なないまでも、ゼロ距離から小規模とはいえ爆裂魔術を受けて全くダメージを追わない生物はいないだろう。

以前カザスがミランダと口論した時に、アルネリア教会が魔術を秘匿としていると非難したが、むべなるかな。アルネリア教会は一般的には専守防衛の集団として知られているため、あれほどの規模の集団にも関わらず脅威と認識されにくいわけだが、実際の神殿騎士団の戦い方を目の当たりにした者達はその戦闘能力ををよく知っている。アルネリア教会が使う魔術は決して回復の類いだけではない。司祭以上、あるいは巡礼など単独で行動する者にしか教えられない数々の攻撃魔術がある。慈愛や救難といった、アルネリア教会が対外的に掲げる御題目とはあまりにもかけはなれた魔術であるため、公にはされていないのだ。

逆にいえばエルザのように、こういった公にされていない攻撃魔術に素養がある人間が巡礼任務についているともいえる。そうでなければ各地で魔物を討伐する可能性のある巡礼など、とうてい無理であろう。だがエルザの使うこの魔術はかなり消費魔力が大きい。爆発の威力には限度があるし、殴れば同時に仕掛けられるというものでもない。魔術を発動させるための「溜め」には時間が必要だし、不意をつかれれば仕掛けられない。先ほどはなんとか時間を稼ごうとしたのだが、都合のよいことにアノーマリーが自分からぺらぺら喋り出したため、上手いこと魔術を準備することが可能だった。先

ほどの会話の間に、エルザは既に魔術を準備し終えていたのだった。

「ツキはあるわね」

ここでの撤退もやむなしと考えていたので、こうやってゆっくりと仕掛けを出来るだけでもエルザにとってはありがたいことだった。同時にまたしてもチョークでここにも魔法陣を描いていくエルザ。一通り仕掛けを終えて、自身の残り魔力を確かめる。

「残り半分くらいか。もう一部屋はいけるか？　あとどのくらいこの施設が広いかわからないけど」

そう言いながらもイライザの元に戻るエルザ。同時に爆発までの時間を知るため、背中の荷物に入れてある砂時計をさかさまに向ける。戦闘にも耐えられるよう丈夫に作られたバックに固定してある砂時計は、砂が落ち切れば何としても撤退しなければいけないことを示す。

またイライザの様子も重要だ。精神的にこれ以上の戦闘がきついようなら、ここだけでも爆破して戻ることも考えなくてはいけない。既にいくつかの収穫はあった。ただこの部屋はどうやら実験室のようなので、どうしても魔王製造の現場だけは押さえておきたいのがエルザの本音である。むしろそのことが今回の潜入の本質であるとも言えるかもしれない。

内心でははやる気持ちを押さえながら、イライザには優しい声をかけるエルザ。

「イライザ、少しは落ち着いたかしら？」

「はい、もう大丈夫です。ですが・・・」

イライザが双剣をエルザに見せる。その刀身は長いこと使い込ん

だように錆びていた。先ほどまでは新品同然だったはずだ。

「これは」

「奴らの血は酸のようですね。皮膚を溶かす類いのものではないようですが、金属は腐食する様です。先ほどの戦いではなんとかもちましたが、後１０体も斬っていれば折れていたかもしれません。エルザ様のフィストも」

エルザははっとしてフィストを見る。滅多なことでは錆びないはずのミスリルが腐食されていた。イライザの双剣程ではないようだが、これではいくらも使えないかもしれない。

「ミスリルを駄目にしてくれるとはね。やってくれるわ、貴重なのに」

「いかがいたしますか。これ以上の進撃はさらなる危険も伴うと思いますが」

「・・・ここは一刻程度で爆発するわ。それまでは進みましょう」

「御意」

それだけ言うともうイライザに不満はないようだった。連れだってアノーマリー達が入ってきた入口からさらに奥に向かう2人。2人ともセンサーではないものの、ある程度気配は探れる。あまりにも気配が何もないことに2人は顔を見合わせるが、慎重に奥に進んで行った。

どうやらここは普通に行き交いすることが多い場所のようで、壁には火を灯したロウソクが一定間隔で置かれ、既に目を慣らす必要はない。歩きやすいのは良いのだが、施設の奥から漂う嫌な気というものは進むほどに強くなっていくのだ。

さらに半刻ほども歩いたか、砂時計は半分近くまで落ちていた。覚悟を決めてさらに奥に進む2人は、左手に下り階段を見つける。

正面にも道は続いているが、まるで冥府に誘うかのようなその暗い穴を、どうしても見過ごすわけにはいかないような直感がエルザにはあった。イライザは少し不安そうな顔をしたが、エルザの意志が強いのを感じとったのか、エルザが一歩を踏み出したのを見て彼女もまた後に続く。

階段の奥は暗く目を慣らすには時間がかかったが、階段はさして長くもなく、程なくして広い部屋に出た。薄暗いものの何かぼうっと光るものがあるようで、全く見えないというわけでもない。階段を降り切った所には開け放たれている扉もあったので、先ほどまでの廊下には明りがあり、この部屋には明りが無いことを考えると、誰もいないことが想定できる。ならばいっそ思いきって明りをつけることにしたエルザは扉を閉めると、持ち込んだ松明（たいまつ）に明りを灯し、部屋の中を照らした。その瞬間彼女の目に入ったものは――

「きゃあっ！」

「あっ！」

イライザだけではなくエルザまで少女の様な声を思わず挙げてしまった。無理もない、明りをともして目の前にあったのが、大きな透明の壺に詰まった人間の体ほどもある何かの頭だったのだから。しかもその目はかっと見開かれ、睨んだだけで人を殺しかねないほど目が血走っている。口は縫い付けられ、肌は緑色。いや、液体の色が緑なのか。松明の明りだけではなんとも言い難かった。

一瞬驚きこそしたものの、すぐに冷静に戻ったエルザが辺りを照らすと周囲には同じような壺がいくつもあった。エルザやイライザの背丈の倍ほどもある壺の中には顔だけでなく、腕、体、足など。実に多様な生物の各体のパーツが入っており、その大きさも大小様々である。その壺を眺めて回りながらイライザがエルザに質問する。

「エルザ様、これは一体」

「私にもわからないけど・・・イライザ、私達は大変な物を見つけたかもしれないわ」

そういうエルザの前にはいっとう大きな壺がある。その中には体は甲殻類、手足は触手で、頭は鰐というなんとも言えない生物が入っていた。体は壺の外から伸びる管に繋がれているが、その体が脈打っているのがはっきりとわかる。壺の中の生物は生きているのだ。

「見たことあるだけでも、サハギン、河水馬、ロック鳥、サンドワームなどなど・・・色んな生物のオンパレードね。かなりの確率で、ここが魔王の生産場所よ」

「ここが」

イライザがやや感慨深く言うと、何を思ったか、身軽な動きで壺の上に駆け上がっていく。唐突な行動に少しぎょっとするエルザを尻目に、壺の上に上ったイライザは周囲を見渡す。

「エルザ様、松明をお借りしても?」

「いいわよ。それ!」

エルザが投げた松明を器用に受け取り、イライザが周囲を照らす。どうやらここは先ほどの実験室とは違い相当に大きい部屋のようで、明りが部屋の隅まで届かない。だが壺が等間隔で、凄まじい数が並べられているのがよくわかる。もしこれらに、今足元にあるこのような個体がいくつも入っているとしたら。イライザは嫌な予想を振り払うように頭を左右に振ると、壺から飛び降りた。

「どうなの?」

「部屋の端まで明りが届きませんでした。なので正確にはわかりませんが、少なくとも１００は超える壺がここにあるかと」

「最悪ね。これだけの生産工場がフルに活動すると、一国を攻め落とすほどの戦力なんてあっという間に作れてしまうんじゃないかしら。容易ならざる事態だわ」
「いかがいたしますか。ここも爆破した方がよいかと、僭越ながら思うのですが」
「そうね・・・」

ここを爆破するほどの魔力はおそらくないだろうが、いくつかでも破壊しておいた方がいいのだろうかとエルザが考えていると、ふと何か物音が聞こえるではないか。

「イライザ、何か聞こえない？」
「は？　何も・・・いえ、これは」

カツーン、カツーン

階段をゆっくりと下りてくる音が聞こえる。扉は締めてきたのでそんな音が聞こえるはずがないのだが、イライザにもはっきりとその音は聞こえてきた。周囲に音を発するものが何もないとしても。不思議な事である。だがその足音がまるで死神の足音にも聞こえたのは、２人とも同じだった。

エルザは慌てて松明を消し、イライザと共に扉の方から身を隠すように壺に隠れる。

ギィィ・・・

ほどなくして軋んだ音を立てて扉が開き、足音の主が入ってくる。その瞬間、部屋の空気そのものが凍りついたかのように２人には感じられた。だが足音の主は部屋に入った場所で足を止めたのか、足音が今度はなかった。その間があまりにも嫌な間だったので、２人

は思わず息もせずに体を強張らせていた。

ザリッ、ザリッ

ほどなくして足音の主が歩き始める。下は土であるため足音を完全に消すには至らない。扉からはかなり離れている壺に身を潜めた2人だが、身動きはおろか、呼吸するのすら躊躇われるようだった。本能がエルザとイライザに告げる。決して動いてはならないと。

だが不思議な事に、足音の主はまっすぐに2人の方に歩いてくる。明りも付けず何も見えないはずなのに、まるで2人がそこにいる事を知っているかのように。一応センサー避けの魔術は潜入前に2人とも施してあるのだが、足音の主には関係ないのかもしれない。もし居所がばれているのだとしたら、すぐにでもこの場所は離れるべきだろう。なのに、

「（あ、足が動かない・・・どうして!?）」

エルザは蛇に睨まれたカエルのように身が完全に竦(すく)んでいた。長らく彼女は戦っているが、こんなことになったのは全力のミリアザールと一度手合わせしてもらって以来だった。それ以外では、魔王級の魔物や魔獣と戦った時ですら、記憶にない。エルザは既に背中どころか、全身に脂汗をかいてガタガタと震えている自分に気付いていた。

そうする間にも足音はゆっくりと、しかし確実に近付いてくる。すぐに逃げなければならないのに、どうしてもエルザの足は言うことを聞いてくれない。体は痺れているのに、頭の中はおかしなほどに冷静だった。

「（このままでは死ぬ。自分が自分だという感覚にも似ているほどに確信めいて死が近いと感じられるのに、どうして体が言うことを

きかないの？）」

もう足音は2人が隠れている壺の反対側にまで迫っていた。足音の主は最初から2人が隠れている所がわかっていたのだろう。ここからでは逃げることもままならない。何もできないままここで死ぬ。いや、ただ死ぬだけならいいが、先ほどのアノーマリーとかいう変態に実験の慰み者にされるのは間違いないだろう。笑いながら死んでいた女性の死体が脳裏にちらつく。一体どれほどの地獄を見ればあのような死に方になるのか。想像することもままならない中、エルザの肩を掴む何かがある。

ふとエルザが目線を上げれば、そこには泣きそうな顔をしたイライザがいた。懸命に右目でウィンクをしようとしているが、不器用なのか緊張からなのか上手く出来ていない。だがこの死に直面した緊迫した状況だからこそ、そのどこかおかしな仕草にエルザは我に返った。何のことはない、イライザにもしものときはと指示しておきながら、エルザはすっかりそのことを忘れていた。イライザは同じ状況で忠実にエルザの言ったことを守っていたというのに。

そして同時に壺の陰から黒くたなびく髪が視界に入った瞬間、エルザは仕掛けていた魔術を発動させていた。

続く

魔王の工房、その9～工房中心部～（後書き）

次回投稿は、３／１８（金）１７：００です。

閲覧・評価、ありがとうございます！

魔王の工房、その１０～黒髪の女剣士～（前書き）

～あらすじ～

ほうほうの体で逃げ出したエルザとイライザ。だがティタニアによるさらなる追撃が……？

魔王の工房、その１０～黒髪の女剣士～

＊＊＊

「ふむ？」

暗闇の中、一人で不可解な思いに囚われていたのはティタニア。確かに先ほどこの壺の陰に侵入者の２人がいたように感じていたのだが。自分が気配を読み間違えるわけも無し、どうにも解せない結果だった。事実、ここには双剣が残っているのだ。

何が起こったか確かめようと、気配があった場所に立ってみるティタニア。

「微かに魔術の残滓がある・・・アノーマリー！」

「はいはーい」

呼ばれたアノーマリーが明りをつける。壁から天井から向けて順に、格子状の明りが灯さていく。ロウソクによる明りよりはるかに明るく、魔力を通すと明りが点く仕組みになっている。徐々に明るさは落ちていくが、ロウソクよりは長持ちするし、魔力さえ通せば何度でも使えるのだ。もちろんアノーマリーの発明であるが、まだ世には出回っていない。世の中に知られれば、歓喜して人間達はこの発明に飛び付くだろう。

「こういった発明を沢山してほしいものだな」

と、以前ヒドゥンがアノーマリーに言ったことがあるが、アノーマリーは「こんな発明は面白くない」とうっちゃってしまった。その発言を嘆いたのはヒドゥンだけではなかったのは、想像にやすい

だろう。
　ともあれ明りがついてアノーマリーの本体が姿を現す。そのアノーマリーに残念そうな顔を向けるティタニア。

「どうしたの、おネェ。おネェともあろうものが逃がしたの？」
「せっかくわざわざ行き止まりのこの部屋に迷い込んでくれたのに、申し訳ありませんがそのようで。どうやら転移魔術で飛んだようですね」
「そんな気配はなかったけどな。あれほど魔力を使う魔術なら、部屋の外からでもわかるよ？」
「私もそう思います。確かに魔力が収束する気配はなかった。何か道具を用いたか、特殊な転移か。いずれにしろそう遠くにはいっていないはずです。追いますか？」
「もちろん！　散々僕を殺してくれからね。お返しをきっちりしなきゃあ割に合わない」

　そう言って恍惚とした笑みを浮かべるアノーマリーに対し、『お返し』ではなく『お礼』の間違いではないのですかと内心でティタニアは思いながらも、センサーを発動させる。すると先ほど、侵入者の2人が戦っていた実験室に2人の気配があるではないか。

「見つけました。実験室です」
「あら、距離があるね・・・これは間に合わないかな？」
「あなたの許可があれば私がやりましょう。ですがその前に一つ聞きたいことが」
「何？」

　アノーマリーが首をかしげる。

「この工房はどうするつもりで？」

「見つかったからにはもう廃棄するしかないでしょ？　それもあるからさっきブラディマリアに無理言って引き揚げさせたのさ。既にここにいた即時稼働可能な魔王は大草原に全て解き放ったし、この工房ももう古いしね。新しい工房は建設中なのも含めて１０個以上あるんだ。１つくらい壊れてもなんてことはないさ」
「それを聞いて安心しました。では私がこの工房を壊してもいいでしょうか？」
「いいけど、どうやってやるの？」

そういえばティタニアがどうやって戦うのか、アノーマリーは知らない。背中に大剣を二振り背負っている所を見れば剣士なのだろうということは想像ができたが、それだけである。一応魔術士の集団なので、魔術も心得てはいるはずなのだが。

よくわからないといった顔をするアノーマリーにティタニアは魅力的な笑顔で返すと、エルザとイライザがいる部屋に一番近いであろう場所にスタスタと歩いて行く。そして背中の身の丈ほどもある剣を一本抜き放つと、ヒュン！　と振ってみせる。その刀身は黄金色に輝いていた。

「簡単です。工房ごと侵入者を斬ります」
「はえ？」

アノーマリーが間抜けな声を上げると同時に、ティタニアは大上段に剣を構える。

「５・・・いや、６というところでしょうか」

何かをつぶやくティタニアだったが、同時に大剣を大上段から一気に天井に向けて振り下ろすのだった。

＊＊＊

「はあ・・・はあ・・・」

「イライザ、大丈夫？」

命からがら転移魔術を発動させたエルザとイライザが、先ほどの実験室に戻っている。エルザが各所でチョークを取り出し何をしていたかといえば、脱出のために転移魔術を簡略化できるように仕掛けを施していたのだ。エルザは単純に戦闘能力だけで才能を発揮したわけではない。単独で任務を行う上で一番大切なのは退路の確保であり、彼女が１０年近く巡礼を行っても生きている理由は、恰好悪い言い方にしろ、逃げるのが上手いからなのだ。エルザの専門は格闘術、聖属性の攻撃魔術（特に爆裂系）、転移魔術の簡略化である。特に転移魔術はミリアザール舌を巻くほどで、最後に描いた魔法陣なら瞬間的に戻ることが可能だ。その代わり魔力が満タンの状態でも3分の1ほどは魔力を使うので、普通は魔法陣から魔法陣への移動を行う。この方がかなり魔力の負担は少なくて済むからだ。

だが先ほどはエルザでさえ死を覚悟した。あの時、イライザが肩を掴んでいなかったと思うとぞっとしない。一部しか見えなかったが、さっきの黒髪の持ち主と対峙していたら、身動き一つする暇なく殺されていただろう。対峙せずとも、それほどの実力差があることがエルザにはわかっていた。それはイライザもまた同様だった。何事にも怖じることのないラザール家の者があんな顔をするのは、余程の状況だったのだ。なにより戦わずして負けを認めざるを得なかったイライザの心中を察し、優しい声をかけるエルザ。

だがイライザは反応する余裕すらない。先ほどの戦いよりもはるかに消耗しており、体がなりそこないどもの血にまみれるのも構わず地面に伏して息を切らしている。それほどの圧力を感じていたのだ。エルザはそんなイライザを気遣いながらも、次の転移に向けて準備を始め、同時に敵の気配を感知する。準備自体は1分ほどで終

えるため、さすがに先ほどの場所からここには間に合わないだろうが、警戒するに越したことはない。アノーマリーも先ほど倒した連中が全部だとはエルザも思っていなかった。

だがエルザが部屋を見回すと、何か違和感がある。すぐにはその違和感の正体がわからず、首をかしげるエルザ。何かが先ほどと違うような・・・

「イライザ、何かこの部屋変じゃない？」

「は・・・何か？」

「いえ、いいわ」

イライザはまだそれどころではないようだ。エルザは何かが足りないということに気がついたが、それが何かを考える前に地面が少し揺れた。

「何？　地震！？」

「いえ、これは・・・衝撃波？」

続けて2回、3回と地面が揺れる。そしてどんどん揺れが強くなってくるではないか。

「まさか、まさか！」

「くっ、嫌な予感しかしないわね！　今度は何よ？」

そして揺れが4回目、5回目となると、今度は部屋ごと揺れるほどの衝撃になった。そして6回目の揺れと共に、部屋の壁と地面の一部が吹き飛んだ。

「くっ！」

「ぐうぅ！」

もうもうと土煙が舞うが、風のない洞穴の中で煙がいち早くかき分けられていく。そしてエルザとイライザを包む異常なまでの殺気。先ほど魔王の生産工場で彼女達を縛りつけたのと同じものだった。殺気、いや剣気というのかもしれないが、それで土煙を吹き飛ばしたのだ。

はるかむこう、暗闇の中に微かに照らされて立ちつくすティタニア。その姿をおぼろげながらエルザはとらえたが、目の非常に良いイライザはその表情まではっきり読みとっていた。その長く地面にまで届くような見事な黒髪を、中ほどで赤いリボンで一つにくくり、女剣士は優雅とも言える微笑みを浮かべ佇む。手には黄金に輝く自身の背丈ほどもある大剣を携えている。そのような武器を女性の身で扱うこともイライザには信じられなかったが、それ以上に女の美しさに目を引かれた。そしてその身から立ち上る強者としての気配にも。これほど美しさと強さが同居した生物を見るのは、イライザにとって初めてだった。

ミリアザールとて同じような雰囲気を備える人物だが、彼女とはどこか違う。ミリアザールは強さと美しさ以外にも、優しさや茶目っ気など沢山の要素を兼ね備えるが、まるでこの女剣士は強さと美しさ以外何も持っていない様な・・・そんな思いにイライザが囚われていると、ゆっくりと女剣士が大上段に構える。

いきますよ

声は聞こえずとも、女剣士の唇がそう動いたのがイライザにははっきりわかった。同時に視線が交差する。むこうにもイライザのことが見えているのだ。それがわかった瞬間、イライザは弾けたようにエルザにしがみついた。

「エルザ様！　逃げて！」

「くっ！」

容赦なく大上段から振り下ろされる剣から発する衝撃波が２人に迫りくる。そして実験室と呼ばれていた部屋は、真っ二つになった。

続く

魔王の工房、その１０～黒髪の女剣士～（後書き）

次回投稿は、３／１９（土）２０：００です。

魔王の工房、その１１～脱出～（前書き）

～あらすじ～

工房から逃げるエルザとイライザに襲いかかる、さらなる脅威。

魔王の工房、その１１～脱出～

＊＊＊

「ま、間に合った・・・！」
「はあっ、はあっ」

エルザが転移したのは、最初の分かれ道のある部屋。間一髪衝撃波が届く前に転移は成功した。ここからなら走って外に脱出できる。

「イライザ、脱出するわよ！」
「あんなの・・・あんなの人間じゃない・・・」
「イライザっ！」

イライザが完全に怯えきっていた。今でこそアルベルトやラファティに劣るとはいえ、この２人さえいなければイライザが将来的に神殿騎士団団長でもおかしくはないほどの実力者なのだ。イライザにしても、アルベルトを越えることを目標に鍛錬してきたのに、完全に自分達とは次元が違う剣士を見てしまった。とてもではないが、あんなものがこの世に存在するとはイライザは想像だにしていない。どうするばあれに対抗できるのか。イライザは怯えながらもその事で頭の中は一杯だった。それは剣士として最強を目指す者の本能だったが、本来なら今はそれどころではない。だが経験不足のイライザにはそのような判断を瞬時にすることはできなかった。だからこそ、致命的。

背後にある入口が、ガシャリと上から降りた格子に遮られる。同時に左右の道も同じく格子に遮られた。侵入する通路はそれほど明るくもなかったので、エルザですら格子のトラップを見落としていた。仮に閉じ込めるような仕掛けがあったとしても、転移があれば

最悪大丈夫だと思っていたのだ。だが、もはや転移はできても一回だけ。そこまで消耗する前には撤退する腹積もりだったのだ。エルザが後悔するが、もう遅い。

暗闇に視界があまりきかず、やむを得ないとありたけの松明を荷物から出して火を灯し、その辺に投げるエルザ。正面の大きな通路だけはまだ格子が閉まっていないが、そこから何か荒い息遣いが聞こえてくる。イライザも変化を感じとったのか、のろのろとだが立ってきた。

「エルザ様、申し訳・・・」
「黙って！」

不手際を謝ろうとするイライザを厳しい声で制するエルザ。何か暗闇の向うに、いる。ほどなくしてその何かが、はっはっという荒い息遣いと共に現れた。その巨体の正体は、

「ポチ？」
「死んだんじゃ・・・」

先ほどのエルザが抱いた違和感の正体。何かが実験室には足らないと思っていたのだが、ポチの死体がなかったのだ。もちろん完全な死を確認したわけではなかったが、先ほど悶え苦しんだのはなんだったのかといわんばかりに涎を滴らせ、近寄ってくる。

「失礼なっ！　オラ達が死ぬわけねぇべ。なぁ、ダグラよ？」
「もちろんだぁ、ドグラ。男前は簡単には死なねえのが世間の常識だっぺ！」

と、先ほどポチに食べられたはずのオーク2体の声がポチから聞こえてきた。そしてポチの肩のあたりからメリメリとこぶの様なよ

うなものが盛り上がり、やがてそれはポチの首ほどにも伸びると先に顔が形成される。それは紛れもなく先ほどのオークであり、違いといえば口がポチと同じように大きく裂けていることぐらいか。三つ首の犬の魔物。その姿はあたかも地獄の番犬と言われるケルベロスだった。

「ダメだべ、お嬢さん達。ここから逃げるのはならね！」
「んだんだ。ここで確実に死んでもらうっぺ」
「わんっ！」
「く、しつこい男は嫌われるわよ！？」

エルザは軽口をたたくも、そこまでの余裕は実際にはなかった。この狭い空間でこの巨体と戦う。しかも先ほどの印象では、かなり骨の折れる相手だということはわかっていた。さらにエルザはかなり消耗しており、これ以上魔術を使えば確実に転移が発動できない。またイライザの双剣も既にない。状況は最悪だった。

「イライザ」
「はい」

だがそれでもエルザの頭には諦めの言葉はない。そんなやわな精神力ではないのだ。だてに１０年近くも巡礼の任務についてはいない。またその自負もある。イライザも力強いエルザの言葉につられるように返事をする。

「1分・・・いえ、３０秒でいいわ。稼ぐわよ。合図したら貴女は左、私は右」
「御意」

そして突貫してくるポチことケルベロス。その瞬間エルザが叫ぶ。

「今よ！」
「！」

左右に分かれる2人をドグラとダグラの顔がそれぞれとらえる。
それぞれがエルザとイライザの方向に首を擡げようとするが、逆にそこでポチの動きがピタリと止まる。

「ドグラ、敵はあっちだよ！」
「ダグラ、敵はこっちにもいるべよ！」
「こっちからだ！」
「いんや、こっちが先だ！」

どうやらケンカしているらしい。体の方も指揮系統が沢山あってはどうしようもないのか、ケルベロスは悶えながら戸惑っている。
エルザはしめたと思うが、転移のための魔法陣はポチの真下にあるのだ。最低一度はその場所からケルベロスを引き離さないといけない。

「じゃあどっちからいくか、ジャンケンで決めるべ！」
「よしきた！　でも手はどうやってだすんだ？」
「あっ・・・」

くだらない言い争いをいつまでもオークが続けてくれそうなのは結構だが、先ほどの女剣士が追撃してきたらもはや打つ手はない。
施設を叩き斬るような化け物と戦う自信は、さしものエルザにもなかった。
そう考えると一刻も早く脱出しなくてはならない。覚悟を決めたようにちらりとイライザの方を見るエルザ。何の打ち合わせもないが、果たしてイライザが自分の意志を汲み取ってくれるかどうか。

イライザがエルザの意図を理解できていない、あるいは足がすくんだままなら2人とも死ぬ。これは博打である。

「（ここまで追い込まれるのはいつ以来かしらね・・・やるか！）」

覚悟を決めたエルザが、深呼吸と共にケルベロスに向かって吠える。

「こっちよ、化け物！」

「んあ？」

エルザの声にケルベロスが反応し、体をエルザの方に向ける。

「女性からのお誘いとあっちゃ、断ったら男がすたるべ」

「んだんだ。オラ達のステキぶりを堪能してももらうべ」

「わんっ！」

「やれるもんならやってみなさい！」

構えるエルザに突進しようとするケルベロス。だが一歩目を踏み出した瞬間、閃光が二筋煌(きらめ)いた。イライザが背後からドグラとダグラの首を斬り飛ばしたのである。

斬り飛ばした衝撃で一瞬ポチがのけぞるのを利用し、足元を転げまわってケルベロスの背後に回ろうとするエルザ。同時に荷物から光爆弾を取り出し、ポチの頭めがけて投げつける。光爆弾は巡礼に出る者の標準装備なため、予想がついたイライザもエルザが投げるのを見て、瞬間的に耳をふさぎ目をそらした。その音と光にポチが動きを止め、エルザはイライザの手を取り魔法陣に駆けこもうとする。だがその背後から、斬り飛ばしたはずのドグラとダグラの首が転げ回りながら迫りくるではないか。

「いかせないっぺ！」
「ここで死ぬだ！」
「ほんと、しつっこい！」

エルザの悪態にイライザが反応し、手持ちの剣を投げつける。剣は見事に首2つを地面に縫いとめ、ドグラとダグラの動きを止めた。

「よし、脱出よ！」
「はい！」

エルザは残り全ての魔力を使い、転移を起動させる。ただ今度の転移は通常のものとは違い、相転移といわれる互いの場所を入れ替える特殊な転移である。エルザとイライザはもちろん脱出するのだが、代わりにこちらに転移してくるものとは。

転移に少し遅れてイライザの剣をドグラとダグラが咬み切った時、彼らの目の前に何かが現れる。

「あん？」
「なんだこりゃ、って火薬！？」

彼らの目の前の現れたのは、鉱山などの発掘で使われる発破だった。エルザが追撃されてこの魔法陣を使用することを考えて、追撃を撃退するために念のため仕掛けておいたのだ。相転移を行った時にのみ、自動的に火がつくように特殊な仕掛けを施して。

そして火薬にはもう火がつく直前だった。

「～～～！」

ダグラとドグラは慌てて首を翻したが、もはや間に合わない。そして洞穴では大爆発が起きたのだった。

続く

魔王の工房、その１１～脱出～（後書き）

次回投稿は、３／２０（日）１４：００です。

魔王の工房、その１２～追撃～（前書き）

～あらすじ～

工房から無事脱出したかにみえた、エルザとイライザだったが…

…？

魔王の工房、その１２～追撃～

＊＊＊

「生きた心地がしなかったわね・・・」
「はい。よくぞ生きて帰れたものだと」

外に出たエルザとイライザは一息ついていた。予め『犬』に命じて応援を呼んでいたため、既に外には近くの支部から呼び寄せたアルネリア教会関係者が３０人ほど待機していたのだ。どちらにしても、工房から命からがら逃げ出した２人には、もう一歩も動く気力が湧きそうになかったが。

シスターに差し出された暖かい飲み物を２人とも口にし、緊張をほどく。だがまだ完全に油断はならない。今は一息をいれるがてら洞穴が塞がったことを騎士達に確認させてはいるが、あの女剣士であればすぐさま追撃してきてもおかしくはないのだ。さきほどの火薬は相当量を使ったし、もう砂時計の砂が落ち切っているからエルザのディレイ・スペルも発動し、工房もかなりの確率で破壊できたとは思うが、万一に備え急いでこの場所を離れなくてはいけない。

「確認が済み次第、ここを離れる。各員準備を！」
「了解しました！」

エルザの号令と共に、全員がきびきびと動き始める。そのエルザの傍らで、イライザは小さく震えていた。

「どうしたの、イライザ。まだ恐ろしいのかしら？」
「・・・はい。以前アルベルトに『自分の無力さや、戦場の恐ろしさを知ってからどうなるかで騎士の素質がわかる』と言われました。

こんなに怯える自分は、騎士としてどうなのかと思いまして」
「そうね・・・」

エルザは言葉を慎重に選ぶ。正直なところ、イライザは今回の任務において文句なしの働きをした。経験が浅い割によくやったものだとエルザは感心しているが、手放しに褒めてもイライザの成長を妨げるかもしれないと思う。

「・・・まあ今回は及第点はあげてもいいかと思うわ。生きて帰れたことが何よりだしね。敵の戦力に関する見立てが大分甘かったことは私も認めるわ。あれほどの化け物がいるとは、正直思わなかった」
「あの女剣士のことでしょうか？」
「そうよ。貴女が受けた印象はどうだった？」
「そうですね」

イライザの脳裏に黒髪の女剣士の顔がまざまざと浮かぶ。きっと彼女は全力ではなかった。あの施設を叩き斬る一撃すら、日常動作の域を出ないのだろう。まさか剣であのような事が出来るとは。きっとあの女剣士は誰よりも強い。自分より、アルベルトより、おそらくはミリアザールよりも。次元が違いすぎてイライザには強さの判断ができなかった。そんな素直な感想をイライザは述べる。

「正直わかりません。ただ・・・」
「ただ？」
「直感ですが、歴史上最強の剣士なのではないかと思いました。根拠はなく、ただの勘ですが」
「ラザール家の者が言う勘は、ただの勘とは言わないわ」

エルザが腕を組んで考え込んだ。確かに実力の程は想像もできな

いとはいえ、あのレベルの敵がもしアルネリアに攻め込んで来ていたら。先の少年が攻めてきた様な被害では済んでいないだろう。本腰を敵は入れていないとミリアザールが話したのも半信半疑だったエルザだが、今なら素直に頷ける。

「（調べるべきはあの女剣士の力量だったか？　だが私達では比較対象にすらならない。イライザの話し方ではおそらくミリアザール様より上なのだろう。それがわかっただけでも収穫か）」

エルザが今回の任務の出来具合について自省する間にも、撤退準備は完了する。地方勤務の騎士たちとはいえ、中々に手際がいい。

「エルザ様、探索をしていた兵が出てきました。洞穴は完全に埋まっているようです！」

「よし、見張りを2～3人残して一度撤退する。見張りは遠眼鏡でここがぎりぎり見える位置に配置し、決して近寄らないことを徹底させろ。竜引け！」

「了解しました！」

報告に来た騎士が洞穴から出てきて待機している騎士に伝令に行く。その様子を見ながら、安堵のため息をつくエルザ。困難な任務だったが、どうやら今回も無事に帰ることができそうだと思ったその時。

「ぎゃあああ！」

耳をつんざく悲鳴が聞こえた。その場にいた全員が、一斉に悲鳴のした洞穴の入り口付近を振り向く。

「なんだあれは！？」

騎士達が戦闘態勢をとりながら一斉に叫ぶ。エルザもイライザも目の前の光景が信じられなかった。

「な・・・」

「なんてしつこい！」

イライザも叫んだが、信じられない事にそこには騎士の1人を口にくわえたケルベロスが立っていた。爆発の影響か体はボロボロで腹からは腸がはみ出ているが、生命維持自体には何の影響もないらしい。その証拠にしっかりと4本の足で立っている。

口にくわえられた騎士にはまだ息があるらしく、なんとか離そうと弱々しくもケルベロスを殴りつけているが、抵抗するほど歯が食い込むばかりで一向に効果は得られない。ケルベロスの方も抵抗されるのを嫌がったのか、騎士を口にくわえたまま振り回し始める。巻き散らされる血に騎士やシスターたちが思わず悲鳴を上げ、その内咥えられた騎士の頭が地面に激突し、首の骨が折れる嫌な音が響き渡ると、彼は抵抗を止めてぐったりとしてしまった。

「シスターエルザ！　なんですかアレは？」

騎士の一人が声を荒げる。目の前の光景が信じられないのだろう。

「・・・・・こっちが聞きたいわよ。まあ地獄の番人、いえ番犬ってところかしら」

「これが噂の魔王ですか？」

「さあ？　どうでもいいけど今のうちに陣形を組みなさい、手強いわよ！」

エルザの号令で全員の顔が引き締まり、ケルベロスを取り囲むよ

うに円陣を組む。だがここに来ているのは通常の任務についている騎士だ。本部勤めの精鋭や神殿騎士団ではない。そのため各自の顔には怯えの色が隠せず、戦闘に慣れていないシスターや僧侶の中には腰を抜かしている者までいる。

「（無理もないか、私でさえ怖いのだもの。逃げ出さないだけでも良しとしよう）」

指揮官が有名なエルザだからこそ騎士達にもまだ戦う気が起きるのだが、この騎士達には正直なところエルザは期待ができなかった。彼らにはほとんどまともな戦闘経験がない。よしんばあったとして、せいぜいゴブリンとかオークの掃討程度だろう。

本部からの精鋭を連れて来ていなかったことを悔やむエルザだが、だいたいが基本的に秘密裏の行動なのである。今回増援を呼んでいること自体が命令違反にも近いのだが、撤退の事を考えれば確実を期したかった。洞穴を見た時に、エルザの直感が今回の任務は一筋縄ではいかないことを告げたのだ。もっとも危険度は彼女の想像をはるかに上回っていたことは否めない。

任務の重要度を考えれば最悪、この増援を犠牲にしながら自分が撤退することも考えなければならない。そんな嫌な選択肢を考えていると、先ほどから嫌に耳に残る口調が聞こえてきた。

「ダグラよぉ、なんだか妙に腹が減らねぇか？」
「お前もかぃドグラ？　俺もだぁ」

2本の首がゴキゴキと延びてくる。言わずと知れた先ほどのオーク達だ。

「本当にしつこいわね、あんた達！　いい加減うんざりよ」
「そんなこと言われても、オラ達も頑張らねっとアノーマリー様の

お仕置きは怖いだよ」
「んだんだ。あの方はドMだども、責めに回る時は何の慈悲もねぇからなぁ。きっとオラ達生きたままバラバラにされるべ」
「いやいや、既にバラバラにされたからこんな体になったべ？」
「そういやそうだっけ？　よく覚えてねぇべ」

2本の首が顔を合わせて首をかしげる。敵にしては間の抜けた仕草だが、もはやエルザもイライザも満身創痍である。勝てる保証はないのだ。しかもイライザは外に置いておいた荷物から予備の剣を取り出しているが、双剣が無い状態ではこころもとない。ケルベロス程の巨体に、果たして並の剣が通るのか。

正直、立てる作戦に困っていたエルザが躊躇したのがいけなかった。動き出したのはケルベロスの方が早かったのだ。

「うお！」
「ぐえ！」

ダグラとドグラでさえ不意をつかれたのか間の抜けた声を上げるが、広い空間でのケルベロスの俊敏さはエルザの予想を軽く上回る。一歩で踏み込むと、目の前の騎士を前足で横殴りにし、吹き飛ばされた騎士に何人かが巻き込まれる。その瞬間、勇敢にも斬りかかった騎士達の一人を反対の足で上から叩き伏せ、彼を足蹴に岩壁に向かって飛ぶケルベロス。

騎士達の剣は空を斬り、ケルベロスは壁を使って三角飛びをして別の角度から騎士達に襲いかかる。そしてなぎ倒した騎士達の1人の頭にかじりつくと、おもむろに食べ始めた。ドグラとダグラも意識がポチのものに近くなっているのか、同じように騎士の体にかじりつく。噴き出す血を間近で見て、まだ足で押さえつけられただけの騎士が半狂乱の悲鳴を上げる。だが誰も助けに剣を振うだけの勇気は既になかった。

そして足元の別の騎士にケルベロスが顔を向ける。それを見てイライザが近くの騎士の剣をひったくるように奪い、得意の二刀にする。

「貸しなさい、私がやります」
「イライザ、待ちなさい！」
「待てません！」

イライザの騎士としての責任と、彼女自身の正義感と、そして疲れが彼女に判断を早まらせた。イライザは勇猛にもケルベロスに斬りかかって行ったが、その動きは全快の時の半分程度しかない。あっさりかわされ、頭で剣を弾き飛ばされる。さらにドグラの頭を振り子のように使い、イライザは仰向けに跳ね飛ばされた。

「ああっ！」

悲鳴と共に地面に叩きつけられたイライザ。その上に間髪いれずケルベロスが跳びかかって来る。そしてイライザの両手を前足で押さえつけ、上からイライザを見下ろしている。

「は、なせっ！」

イライザが逃れようともがくが、ケルベロスは４ｍを越す大きさである。一度組伏せられてしまえばイライザの細腕ではびくともしない。だがケルベロスの方もイライザに噛みつくわけではなく、むしろイライザの匂いをしきりに嗅いでいた。そんなケルベロスの様子をイライザが訝しがるが、ダグラとドグラの頭が伸びてくるとイライザの衣服を噛み破り始めた。

「あっ！　何をする！」

「オ、オラ達の意志じゃないべ！」
「ポチが勝手に！」

その瞬間、イライザとダグラとドグラは3人同時に気がついたのだが、ポチの息遣いが異常に荒い。腸が少しはみ出ているとか、爆発でダメージを負っているとかではなく、単純にイライザを雌と認識して興奮しているのだ。ダグラとドグラは体を共有しているからなんとなく感覚でわかるし、イライザはポチの下半身を見てしまった。目の前の獣が何をしようとしているかを察して、イライザの顔が真っ青になる。

「やめ・・・やめろっ！」
「こらっ、ポチ！　さすがのオラ達といえど、今はそんなことしてる場合じゃないっぺ！」
「だ、だめだ。こいつ盛りきってて言うことときかねぇ！」

ぎゃあぎゃあとダグラとドグラが騒ぐが、その光景を見ながらエルザは冷静に考えていた。

「（このままイライザを囮にすれば隙ができる・・・さしもの奴も行為の最中にまで注意力を保てまい。その時に一か八かポチの頭を殴り飛ばして爆発させれば。だけど一発分の魔力が回復したかどうかすら怪しいな・・・って、私は何を考えてるんだ！　あんな若いイライザを犠牲にしていいはずがないだろう！？　いや、しかしこのままでは全滅したっておかしくない・・・くそ、私はどうすれば！？）」

エルザの頭の中で任務の優先と良心の呵責がせめぎ合う。その時エルザの袖を引く存在にエルザが気を取られたのもほんの束の間。イライザの悲鳴に再び振り向くエルザ。

「いや、いやあっ！　こんなの・・・イヤだっ！」

イライザはラザールの家に生まれて武器を取る道を選択したとはいえ、その本質は悲しいほどに女性だった。もちろん剣の道を究めたいと思うと同時に、好きな男性ができた暁には結婚して引退し、貞淑な妻として幸せな家庭を築くことも悪くないと思っている人間だった。まだそのような機会に恵まれないため、恋とは話や物語に聞く程度のものでしかないが、憧れは並一般の女の子のようにあるのだ。

そんなイライザに襲いかかる非情な現実。女性が戦場に出る以上戦場で敗れた時には覚悟しなければならない事ではあるものの、神殿騎士団の精鋭にすら滅多なことではひけをとったことのないイライザには、実感の湧かないどこか遠い世界の話だったのだ。まして相手は人間の場合。まさか仲間の騎士が見ている目の前で正体不明の魔獣に犯されるなど、あまりにも非現実的すぎる。想像だにしない現実が自らに襲いかかろうとしていることが、イライザの心を折った。

だが最後の騎士のプライドか。直接的に助けを求める事だけはしなかったものの、もはやイライザに冷静でいることは無理だった。そんなケルベロスの下で必死にもがくイライザの叫び声に、１も２もなく飛び出すエルザ。

「くそっ！　こうなればやぶれかぶれだ！」

回りの騎士に指示を飛ばすことすら忘れ、ケルベロスに飛びかかろうとするエルザ。だが、明らかにタイミングが遅い。

「ひっ！」

イライザの太腿をドグラとダグラの頭が押さえつけ、身動きが完全にできなくなったイライザの純潔が散らされようとしたまさにその時、頭上から響く声があった。

続く

魔王の工房、その１２～追撃～（後書き）

次回投稿は、３／２２（火）１２：００です。

魔王の工房、その１３～敗北～（前書き）

～あらすじ～

容赦のない追撃をしてくるケルベロスに、イライザが非道な目にあわされようとするまさにその時……？

魔王の工房、その１３～敗北～

「止まれ、ポチ」

その瞬間、ケルベロスだけでなくエルザもピタリと動きを止めた。頭上から降り注ぐ異常なまでの殺気。先ほどの女剣士に勝るとも劣らない圧迫感。陽気な調子とは裏腹に腹の底に響くような重さを持つその声が、理性をなくしかけたポチの動きすら止めてしまった。

「お座りだ、ポチ」

再び聞こえた命令にポチはイライザの上から飛びのき、くーんと悲しそうな声を上げて座り込んでしまった。ポチはイライザの方へ残念そうに鼻先を向けるが、命令には絶対服従らしい。

一方でエルザは頭を上げることができずにいた。それほど頭上の声には力があったのだ。戦闘中に敵から目を離すことなど本来あってはならないが、エルザは上からの圧力にもはやその場で立ちつくすのみが精一杯だった。

「（上を・・・上を向けないっ！）」

エルザが上からの圧力を跳ね返そうともがく。だがエルザが葛藤をしている最中に、声の主はすうと地面に降りてきた。どうやら浮遊の魔術でも使っていたらしい。そして視界に入ったのは、エルザが散々殴り飛ばしたアノーマリーと同じ顔の男。さらにその後ろにはさきほどの黒髪の女剣士、ティタニアがいた。

「やあ、お姉さん。また会ったね」

「・・・」

相も変わらず軽妙な話口。なのに、一言一言に呪詛でもこめたかのような圧力を感じる。エルザは理解した。目の前の個体こそが本体なのだと。

そしてふとアノーマリーの体が消えたかと思うと、エルザの目の前に出現する。

「！」

「あれれ、どうしたの？　そんなに驚いた顔して」

短距離転移は簡単ではない。転移は通常術式を組んだ二点間で行う技術。そうでなければ転移した先がずれてしまうため、土の中に埋まったり、悪ければ他人と重なって転移したりと非常な危険を伴うのだ。そのため、転移の魔法陣には本来魔法陣を描いた者にしか入れない様な仕掛けが施してある。さらに幸いなことに、転移で使う術式は非常に難しく、また使用する魔力も非常に多い。そのため個人が転移を用いることは稀であり、エルザのように簡易に使うことはさらに希少なケースなのだ。その天賦の才を持つエルザでさえ、特殊な魔術道具と常人の何倍からの魔力を持って初めてできる芸当である。もちろん危険性は常に意識しているため、そういつも使うわけではない。

なのに目の前のアノーマリーは、超短距離の転移を術式もなく苦もなく使う。これはエルザの知る限り転移の理論を無視した出来事だった。

「今、転移を・・・」

「何？　無詠唱の短距離転移は初めて見たの？　理屈さえわかれば簡単なんだけどね」

「そんな馬鹿なっ！　そんな理論は存在しない！！」

「なければ作ればいいんだよ」

あっさりと言い放つアノーマリーに、絶句するエルザ。確かにその通りだが、そんなことができるのか。だがエルザの疑問はわかっているといわんばかりにアノーマリーが言葉を続けた。

「まあ口では君には勝てそうもないけどね。女に口では勝てないってのは真実だと証明できただけでよしとしよう。だけど、こと魔術理論に関しては僕の右に出る者はこの世にいるかな？　まあ僕は天才だから生物学、医学、薬学と、何でも出来ちゃうけど。でもエリクサーだけは無理だったけどね～。素材はわかっても比率や製法がわからなかったし、今となってはあんな貴重な材料では、最低限のパターンさえも試せやしない。素材に恵まれた時代ゆえの産物だね、あれは。おっと、転移の理論が知りたいんだっけ？」

アノーマリーが得意そうに熱弁を振るうのを、黙ってエルザは聞いている。

「転移っていうのはね、本来はもっと簡単に行えるものなんだ。だけど転移の魔術は非常に危険が伴う。転移先がちょっとずれれば大惨事だし、こんなものを一般人がほいほいと使ってしまうと世の中大混乱だよね。それにあまり上手く使われ過ぎると、プライバシーもへったくれもありゃしない。暗殺だって容易に行えてしまうだろう。だからこそ最初に転移を人間に、いやその前はエルフか。に伝えた『真竜』の一族はわざと転移の術式を難しくし、コストパフォーマンスが悪くなるようにしたのさ。まあただ術式を教えられた人間ごときではあの術式の真の意味を理解することは不可能だろうし、使用方法を知っているだけでも御の字だろうよ」

「・・・ぺらぺらとよく喋るわね」

「あっはは。まあ君が稀な転移を使用しているからつい興奮しちゃってね。それに瞬間的とはいえ、僕より頭が回る人間に会ったのは

久しぶりの事だから。頭が良い人間は男女問わず好きなのさ、僕は」

愉快そうにアノーマリーが笑う。どうやらエルザとの出会いには心底感謝しているらしい。一方でエルザは不快感をあらわにした。もっともはや魔力もゼロ、フィストも壊れかけのエルザには、そういった敵意を向けることが精一杯の抵抗だった。

そのことを知っているからアノーマリーも余裕なのであろう。だがアノーマリーがさらに何かを言いかけた時、さらに彼の後方から現れる者がいた。

「アノーマリー、これはいったいどういうことです？」

「ああ、サイレンス。来たんだね」

いつの間にかティタニアの横に立っている紅顔の美青年。物静かなその様子と美しい容姿に思わずエルザですら見惚れたが、その彼の目を見た時に勘違いに気付く。何も感情を浮かべない無機質なその目は、まるでガラス玉のよう。彼はエルザ達を見はしたが、決して人間を見ているわけではない。せいぜい羽虫を認識した程度の事なのだ。間違いなくアノーマリーと同種の人間――少なくともエルザの印象はそうだった。

ならば実力も推して知るべし。もはやどうやっても逃げられないことは確定的だった。全てを投げ出してその場に崩れたかったエルザを押しとどめたのは、破けた衣服をひっかき集め、小さく丸まって震えるイライザの存在だった。彼女に対する責任感が、エルザをなんとかその場に立たせていたのだ。

そんなエルザの必死の葛藤もむなしく、彼女を無視して会話を進めるアノーマリー達。

「早かったね、サイレンス」

「ええ、仕事が思ったより早く片付いたので。それよりこれはどう

いうことです？　工房が壊れているようですが。まさかそちらの方々が？」

サイレンスが何の感情もない目でちらりとエルザを見る。エルザはびくっと身を振わせたが、逆にその仕草でサイレンスは全てを悟ったようだった。

「・・・違うようですね。まあこの程度の輩では無理でしょう」
「私が斬りました。もちろんアノーマリーの許可は得てますよ？」

ティタニアが事務的に答える。さも当然のことをしたと言わんばかりだ。対するサイレンスも特に驚かない。

「それはいいのですが、肝心の拠点を潰してもよかったので？」
「いいんだよ。どうせもう古かったし、引越しの準備は済んでたしね。どうせ君たちが合流した後、潰すつもりだったから。そこのシスターの魔術も手伝ってくれたから余計に楽だったけど」
「ということは新しい工房が？」
「そうそう、新型の工房がもうすぐ完成するから、そっちに移転の予定さ。ああ、お姉さん？」

アノーマリーがくるりとエルザの方を振り向く。エルザはそのアノーマリーを睨みつけた。

「そんな怖い顔しないでよ。ここまでやった御褒美にいいこと教えてあげるから。僕達の魔王を生産する工房は実に１０を超える。これらがフル稼働すれば、万を超す魔王をあっという間に製作することが可能だ。今さらあがいた所で遅いとは思うけど、まあせいぜい頑張りなよとミリアザールに伝えてくれるかな？」

そういって得意げにアノーマリーはふふん、と鼻で笑う。ここまで言ってよいのかとティタニアもサイレンスも顔を見合わせたが、工房の責任者としてここはアノーマリーに分があるので黙っておいた。

エルザもまた予想外の情報に少し面喰う。わざわざこんな状況で冗談を言うとも思えないし、アノーマリーの意図を測りかねるものの、肝心の疑問を聞いてみた。

「私達を・・・殺さないの？」

「殺さないよ？」

絞るようにして出したエルザの質問に、実にあっさりと答えるアノーマリー。拍子抜けするくらいの簡単な反応の仕方である。

「どうして」

「理由は２つ。まずは確実に今の言葉をミリアザールに伝えてもらわないとね。もう１つは君を僕が気に入ったから。そっちの女騎士は、僕はどうでもいいけど」

エルザがはっとしてイライザを見る。イライザの方も急に話の矛先を振られてびくりとした。

「おネェ、どうする？　ポチにあげる？　それとも殺す？」

「そうですね」

つかつかとティタニアが歩いてくる。それを見てエルザがイライザを抱きかかえるようにかばうが、ティタニアには関係なかった。エルザを簡単に引っぺがし、イライザの顎を掴んでその目を覗きこむ。

「う・・・」
「ふむ」

ティタニアはひとしきり覗きこむとぱっと手を離し、バランスを崩したエルザがどさりと倒れる。

「どう、その子は？」
「たかが魔獣に犯されそうになったくらいで心が折れたかと思いましたが・・・まだ目が死んでいません。この娘はまだ強くなるでしょう。今殺すには惜しい」
「そっか、なら生かしておこう。魔王の素体にするにも、活きが良い方がいいしね」

たかがその程度の理由で人の生死を決める連中にエルザは心底腹が立ったが、どうできるものでもない。黙ってイライザを抱きよせ手を握り、睨むのが彼女の限界だった。イライザもまた抵抗する気が全く起きないのか、握られた手を見つめてじっと抱えられたままになっている。

その様子を見て用は済んだと思ったのか、アノーマリーはティタニアとサイレンスに目配せしてその場を後にするように促す。そして2人が背を向けた時にアノーマリーが両手を広げてローブを掴み、道化のように大仰に礼をした。

「さて皆さん、非常に名残惜しいのですが僕もまだまだ忙しい身。この辺でお暇させていただきます。またお目にかかる日を楽しみに・・・といきたいところですが、残念ながらそこのお嬢さん2人以外は生かす理由が見当たりません。そこでその他大勢の皆さんには、そのまま死んでいただきましょう」
「な・・・」

その言葉にエルザが跳び上がりかけた瞬間、アノーマリーの手が突然ロープのように伸びてきて、エルザを拘束した。

「ぐぅっ！　やめろ！！」

「ポチ、この2人以外は全員殺せ」

「わんっ！」

その命令と共に、大人しく座っていたポチが弾けるように飛び出した。一転してその場は惨劇の場となり、元より展開に付いていけてなかった増援の騎士、シスター達は抵抗もままならず、あっという間にポチに喰い殺されていった。

その阿鼻叫喚の渦を、成すすべもなく見守るエルザ。あまりのむごい光景に目を閉じようとするが、アノーマリーがそれを引きとめた。

「しっかり見るんだよ、お姉さん。目を閉じればそこの女騎士も殺す」

「く・・・」

エルザが悔し涙を浮かべながら仲間が死んでいく様を見つめていることをアノーマリーは感じとり、恍惚とした笑みを顔に浮かべる。

「ふふふ、いい顔だよ。あーあ、君にもっと力があればこの子たちも死なずに済んだのにねぇ？　力がないって悲しいよね」

「貴様ぁ！　殺す！！」

「吼えるだけなら犬でもできる。僕の腕一本で自由を奪われる自分の実力を知るんだね。このまま絞め殺すことも犯すことも可能だ。それに戦争では殺し殺されるのは当たり前。恨むなんて筋違いだよ」

「どの口でほざく！？」

「この口だよ～」

アノーマリーが自分の口をちょいちょいと指して見せる。そんな安っぽい挑発にも冷静さを欠いたエルザは顔を真っ赤にして怒るが、身動き一つ取れないのではどうしようもなかった。

そんな中放心状態のイライザの足元に、騎士の手から離れた剣が転げてくるが、それを反射的に手に取ろうとした瞬間、ケルベロスがイライザを睨みつけた。

続く

魔王の工房、その１３～敗北～（後書き）

ちょっと半端な終わり方なので、明日３／２３（水）１２：００に次話投稿します。

魔王の工房、その１４～剣帝～（前書き）

～あらすじ～

完全なる敗北を喫したエルザ達。目の前で繰り広げられる凄惨な光景の前に、エルザとイライザは……？

魔王の工房、その１４～剣帝～

「あ・・・」

そこで先ほどの光景がイライザの頭に思い起こされ、剣に伸ばす手を止めてしまった。それを見て再びケルベロスは虐殺を続ける。

そしてひとしきり殺しつくした後で、もはや何人かの非戦闘員が残るのみとなった。その様子を見てアノーマリーがさらに命令をポチに下す。

「ポチ、よく出来ました」

「わうっ！」

嬉しそうにポチが返事をする。

「そうだな、３人くらいなら連れてきてもいいよ。『なりそこない』と人間の交配は面白かった。結果がお前だしね。また色んなパターンを試してみたいしね。彼女達には長く役立ってもらおう」

「わんっ」

「ダグラとドグラも。いいね？」

「は、はへ」

それまでアノーマリーに何か罰を受けるのでは、としなだれていたダグラが返事をする。加えてドグラもおそるおそる質問をする。

「あの～、アノーマリー様？」

「なんだい？」

「オラ達に罰はないので？」

「ないよ？　っていうか、よく生きてたね。本当はここで置き去りにしてもよかったんだけど、まさかポチと同化して生き延びるとは予想外だ。面白いからもう少し君たちも生かして観察してみたいんだ。それまでは死んでもらっちゃ困るなぁ」
「ほっ。しばらくは首がつながったべ、ダグラよ」
「まさに言葉の通りだべな、ドグラよ」

２つの首は互いにお互いを見て安堵とも何とも付かないため息を漏らすと、すごすごと生き残った女達を運ぼうとする。ほとんどの生き残りは恐怖のあまり気を失ってしまったが、１人だけ気の強いシスターがまだ意識を保っていた。これから何をされるかを察し、恐怖と助けの叫び声を上げる。

「いやあああ！　エルザ様、エルザ様！　お助けを！」
「うう・・・」

だがエルザもまたアノーマリーの気まぐれで生かされている身。下手な動きはできない。それに優先されるべきは目の前のシスターよりも自分の命よりも、得た情報なのだ。悔やまれるのは、ここに呼んだ増援が事情を知らず、覚悟を決めていなかったこと。エルザが巡礼の身分さえ明かさなければ、増援に呼ぶべくもなかった人間達である。

だが増援が無ければ、エルザ達も先ほどのポチの襲撃で死んでいただろうし、逃げる余力がもはやなかっただろうことも事実。正しい答えがあるわけもなく悩むエルザだったが、引き摺られていくシスターに思わず手を伸ばしたのはイライザの方だった。助けを求めて伸ばされたシスターの手を掴んだが、アノーマリーとポチが同時に睨んだため、ゆっくりとその手を離すイライザだった。

その様子を満足そうにアノーマリーは眺め、優雅にその場をポチと共に去っていった。

＊＊＊

「終わりましたか？」

「ああ、充分だよ。新しい素材も手に入れたし。まあ個人的な興味もあるけど」

ティタニアの言葉に、アノーマリーがとらえたシスター達を横目でちらりと見る。

「あの２人はなぜ生かしたのでしょうか。もはや不要に思えましたが？」

「もっともなサイレンスの疑問だけど、その方が色々うまみがあるのさ」

アノーマリーが指をくるくる回しながら答える。

「例えば？」

「一番厄介なのはミリアザールが各地に潜伏させた『口無し』とかいう情報網だ。これの抹殺は容易じゃない。何せ自分の伴侶にすら身分を明かさないような連中らしいからね。だから探すのが無理なら・・・」

「向うを動かせばよい、と」

「そういうこと。工房が１０以上もあることを知れば情報網を総動員して探そうとするだろう。また、中原の戦火がこちらの手の者による仕掛けだということも、直に気がつくだろうしね。そのために、ムスターには好き勝手をさせてるんだ。ここまで派手にやれば、さしもの連絡員にも何かしらの動きが出てくるはず。そこを」

「私の手勢で叩くと」

サイレンスが会話に割って入り、納得した様な顔をする。

「そういうこと。君の手勢は口無しと似ているからね、潜伏させるならもってこいなわけで。実際にもう何人も潜伏しているんだろう？」

「ええ、ただ私が扱うのは人形なので、完全に人間の真似ごとをするわけにはいきませんが」

「セックスできる人形なんて、もう人間と一緒だと思うよ『操演師（パペットマスター）』のサイレンスさん？」

「褒め言葉として受け取っておきましょう、アノーマリー」

サイレンスが言葉とは裏腹に、儀礼的な口調で返事をする。さらにアノーマリーはやや興奮気味なのか、いつもに増してよく喋っていた。

「それにあの程度の女なら、何度戦っても僕達が負けることなんてありえないさ。まあ思ったよりは良くやったけど、僕の掌の上から出たわけではない。まだ成長する可能性はあるから、そのうちそういうこともあるかもしれないけど、それでも僕を殺すのは無理だろうなぁ。なんせ僕ってば八つ裂きにされても気持ちいいばっかりで、全く死なないしね」

「あなたもそういう類いの生物ですか？」

「『あなたも』ってのはごたいそうな言い草だけど、サイレンスだってどうせ同じような存在なんだろう？　ドゥームもライフレスもどうやらほとんど不死身みたいなものだし、僕達はそれぞれが不死に限りなく近い。生半な人間には僕達を殺すのは無理だ。だけど、ここにティタニアという例外もいるけどね」

アノーマリーが隣で歩く女剣士を見上げる。

「君はその気になったら僕達すら殺せるんだろう、ティタニア？」
「・・・・・どうでしょうね。やってみないと」
「よく言うよ。君のあだ名、『不死殺し』だっけ？　それとも『黒い旋風』？　『死の足音』？　もっともメジャーなのでいえば『剣帝』なんてのもあったねぇ」
「よくご存知ですね。確かにどれでも呼ばれたことはあります。その中で一番自分で気に入っていたのは『剣帝』ですが、それは語呂の問題で、正確に私を表したわけではない」
「そうなの？」
「はい。私は特に剣に限らず、武器なら何でも使えますから」
「えっ・・・」

　これにはアノーマリーとサイレンスが驚いた。今回工房を破壊したこともそうだし、ここ最近任務を何度か同じくするうち、ティタニアの図抜けた剣技をサイレンスも目にする機会はあったが、剣技と同等に他の武器も扱えるというのだろうか。

「まあ私がこの大剣を背負っているから、皆さん私を剣士と思っているのでしょう。剣と成果のみがあまりにも目立ち過ぎて、私自身の記録は男か女かすらも曖昧になっていますからね。実は大剣は扱いが苦手なのですが」

　ティタニアが苦笑する。剣帝ティタニア――ライフレスこと英雄王グラハムより先んじること１００年余り。魔王が横行する世の中で活躍したとされる英雄である。
　その伝説にいわく。魔王の一軍数千を一昼夜にして滅ぼしたとか、魔王１００体斬りを７日７晩休まず戦い達成したとか、やれ剣で城を斬ったとか、あまりにも人間離れした伝承が多い人物である。また語られるその姿も一定ではなく、ある吟遊詩人は巨人の剣士だったと謳い、別の吟遊詩人は可憐なる男の剣士だったと語る。学者の

説では、その時代に活躍した名もなき剣士達の功績が集約されてティタニアと言う人物になったのだろうと言われており、その姿はグラハムと異なり正確に伝えられていない。だからこそ子どもたちが寝物語に聞くのは、史実としてきちんと残されたグラハムやその配下達の話なのであり、ティタニアの話は「そんな人物もいたな」程度の認識でしかない。

だが。今回魔王の工房を斬って破壊したのは紛れもなくこのティタニアなのであり、伝説は全て真実であることを裏付けるだけの実力の片鱗を見せている。ただ、誰も生きてその姿を見たものがいないだけで、認識されていないのは姿形だけだったのだ。この長い黒髪の中ほどで赤いリボンを結び、優しげに微笑む可憐な乙女を見て、誰が史上最強の剣士だと思えようか。剣さえ背負っていなければ深窓の令嬢で通ってもおかしくないのは、アノーマリーやライフレスですら認めていた。

普段は他人に興味を持たないアノーマリーでさえ、ときに疑問に思うことがある。これほど可憐な女性でありながら、なぜ剣を背負って戦っているのかということを。しかもアノーマリーの見立てでは、ブラディマリアにすら警戒させるこのティタニアは、純然たる人間の女性だった。その口から思わず疑問がほとばしる。

「おネェ――いや、誰もいないしもうティタニアでいいか。大剣が苦手なのなら、ティタニアはなぜその剣を使うのさ？」

普段から道化を演じるアノーマリーの珍しい本音。純粋な興味からでたその問いに、優しく微笑んで答えるティタニア。

「この大剣はそれぞれ父と、兄の形見なのです。私は彼らの後を付いて回るだけで、昔はおよそ戦いとは無縁の人間でしたから。この剣を背負っていると、父と兄と旅をしていた時を思い出して寂しくないのですよ。ですので、実はあまり戦いが好きではないのです」

「へえ。ならなんで今の今まで戦いを？　伝説も事実なんでしょ？」

アノーマリーが無遠慮な疑問を投げかけたが、ティタニアも今度は優しく微笑んだだけだった。その笑みの後ろに硬い意志を感じ、アノーマリーもそれ以上の追求は諦めた。

「・・・まあいいや、また今度ゆっくり聞こう。それより僕は僕で、やることがあるんだ」

「ライフレスを追うのですか？」

「ああ、彼を止めないとね。ブラディマリアが先行してるから話は通っていると思うけど、果たしてどうなる事やら。君たちは別の任務があるんだよね？」

アノーマリーの言葉にサイレンスは頷く。

「ええ、こちらは期限付きなので。私とティタニアはと、ある物品の奪取に行きます」

「ティタニアを出張らせるような代物なの？」

「まあ物自体も凄いですが、警備が半端ではなくて。おそらく城一つ攻め落とすことになるかと」

「まさかそれを君達２人で？」

「いえ、私１人でやります」

ティタニアが即答する。さすがに驚くアノーマリーだったが、目の前の女剣士ならいともたやすくやってしまいそうなことも認めていた。

「・・・派手になりそうだね。もう隠れてコソコソするのも段々無理になって来るだろうし、計画もさらに進展するわけか」

「ええ、お師匠様もそのつもりのようです。このままいけば本格的

な決起の時も近いのでは」
「また忙しくて寝られない日が続くね、これは。今のうちに英気を養っておきたかったのに、ライフレスがいらない暴走をするせいでこれだよ」
「まあ彼には何らかのペナルティが課せられるでしょう。それに事情も先ほどティタニアから少し伺いましたが、彼がそこまで執心する女剣士と言う者も、一度直に見てみたいですね。以前魔王を一瞬で倒したのは見ましたが、果たしてそこまでの逸材かどうか」

どうやらサイレンスもアルフィリース達には興味があるようだ。だがアノーマリーはまだアルフィリース達には興味が湧いていないらしい。だが先ほどライフレスがミランダの話をしていれば、また話は違ったのかもしれない。
そうこうするうちに、予備として配置してあった転移用の魔法陣の場所にまで到達する3人と1匹。

「まあ生きていればいずれ会うんじゃないの？　それよりも僕達は仕事をしないとね」
「ああ、そうでした。ではそろそろいきましょうか」
「そうだね。じゃあ『世界の真実の解放のために』だっけ？」
「ええ、世界の真実の解放のために」
「ではいずれまた」

そうして3人と1匹は転移を使い、その場をあとにしたのだった。

続く

魔王の工房、その１４～剣帝～（後書き）

次回投稿は３／２５（金）１２：００です。

魔王の工房、その１５～工作～（前書き）

～あらすじ～

完全敗北を喫したかに見えたエルザとイライザだったが……？

魔王の工房、その１５～工作～

＊＊＊

こちらは残されたエルザとイライザである。アノーマリー達の気配が完全になくなるまで、その場で放心状態で小さくなっていた２人だが、エルザがやおら立ち上がると小さく、しかしはっきりした声で何も無いはずの空間に向かって声を発する。

「ミナール様、おられるのでしょう？」

その声に応じるかのように、何も無い空間から溶け出すように小柄な男が姿を現した。エルザの言う通り、アルネリア教の三大司教の１人、ミナールである。アルネリア教の白いフードではなく、旅人が良く使う茶色の地味なフードに身を包んではいるが、紛れもなく本人であった。

うっそうとした様子で姿を現した彼に対し、アノーマリーに向けたのと同等の憎々しげな目線を向けるエルザ。

「満足ですかミナール様。ご命令通り、連れ去られたシスターの一部をイライザに握らせました」

「よくやった。一部始終を見ていたが、奴らには気取られなかったようだな。シスターの一部を握らせるとは上手いものだ」

先ほどエルザがイライザの元に駆け寄る直前、エルザの袖を何も無いはずの場所から掴む者がいた。エルザはその奇怪な現象にぎょっとしたが、手に何かさらさらとした粉の様なものが塗（まぶ）され、耳元で声がしたのだ。

「どこでもいい。奴らの一部にこの手で触れろ」

その声の主に心当たりのあったエルザは、イライザを助けに行くのと同時にその命令を実行した。アノーマリー達に直接触れるのが難しいと感じたエルザは、イライザを抱きかかえながら彼女の手を握り、そっと耳打ちをしたのだ。結局のところエルザは直接アノーマリーに触れることができたものの、イライザがシスターに触れたのを不審には思われなかっただろう。イライザの手があの場面で伸びたのは命令ではなく純粋に正義感からだったのかもしれないが、結果的にはどちらでもいい。少なくともミナールにとっては。

だが反射的に命令を実行したものの、仲間を助けようともしなかったミナールにエルザのはらわたは煮え返っている。今にもミナールに飛びつかんばかりの表情だ。

「いつから私達を監視していたので？」

「思いのほか私の任務が早く終わってな。まだ犬がこの辺をうろうろしていたのを感じたので、様子見に来たのだ。もっとも犬には予め私の使い魔を同行させていたがな。まあこの場面に当たったのは偶然だが、幸いだったな」

「幸い？　この場面のどこが幸いだ！？」

エルザが周囲一帯の血の海を指す。怒り心頭のエルザは既に敬語も使っていないが、ミナールもまた気にする様子はない。

「一部始終を見てたんだろ？　アンタは助けようとは思わなかったのか？」

「思わんな。思っても無理だ。私は戦闘が得意ではないし、貴様もまた実力不足だ。私にだけ責任を押し付けるのはどうかと思うが」

「アンタ、大司教だろ？　直接の部下ではないとはいえ、自分と同

じ教会の者が殺されて何とも思わないのか！？」
「思わんな」
即答するミナールに、エルザが体の疲れも忘れて飛びかかった。顔は怒りのあまり真っ赤になっている。
「てめぇっ！」
「しょうのない奴だ」
エルザがミナールの胸倉をつかみ上げようとするのと同時に、ミナールの拳が彼女の腹にめり込む。嗚咽と共にその場にうずくまるエルザ。
「もっと冷静になれ。そもそもこの場にこいつらはいないはずだった。だが貴様の判断は間違いではない。情報の伝達を優先するなら、この増援は呼んでしかるべきだった。あの小僧のような老人、アノーマリーとかいったか？　が予想以上だっただけのこと。貴様の失態ではない」
「だがっ！」
「これも奴の言ったことだが、戦場では弱いものが死ぬのは当然の慣わし。貴様もまた運が良かったのだろう。特に何をされたわけでもなさそうだしな。わかるか？　貴様は情けをかけられたのだ」
「ぐ、うう・・・」
エルザの目に悔し涙が再び浮かぶ。ミナールの前であれ、その涙が止まることはない。その様子を見てミナールが表情を変えることはなかったが、彼がぽつりぽつりと言葉を漏らす。
「だが生きていること自体が最も重要だ。生きていれば反撃の機会もあるだろう。こちらを完全に侮(あなど)っているからこそ、隙もできよう

というもの。心配せずともこの代償はきっちり奴らには払ってもらうさ、その命でな」

「・・・どうなさるおつもりで？」

泣いたことで少し感情を晴らしたエルザが問いかける。

「私が直接奴らを追う」

「は？　しかし大司教の業務は・・・」

「構わん、こちらの方が重要だ。それに食堂で一人飯を食べていても、誰も私に気がつかないほど陰の薄い大司教だぞ、私は。教会で事務処理をするより、こういう任務が合っているのだよ。もっとも目立つマナディルやドライドでは潜入など無理だからな。貴様くらいだ、私をきちんと大司教と認識したのは」

「それは貴方が声をかけてきたから」

エルザが巡礼の任務に就いた時、誰もいない廊下で声をかけてきたのが目の前にいるミナールだった。最初はなんて冴えない男というのがエルザの印象で、あまりに聖職者らしからぬその外見からただの不審者扱いしたものだ。大司教と知ってからは態度を改めたが、ミナールが自分の身分を明かさないものだから出会ってからしばらくは敬語もなく、ただただ普通に会話をしていた。

他の巡礼の者に聞いてもミナールと会話したことのある者はほとんどおらず、姿すら知らない者が多かった。驚くことに、それは本部勤めの神殿騎士でも同じだったのだ。さすがに本部勤めの者はミナールの姿こそ知っていたが、会話をしたことがあるものはほとんどいなかった。事務的な話は別にしてのことだが。なにせミナールの大司教補佐の姿ですら、見たことがある者がほとんどいないのだから。

なぜエルザは自分にミナールが声をかけてくるのか不思議に思っていたが、うっそうとした外見ではあるものの噂で聞くほど感じの

悪い男ではなく、むしろアルネリア教に入ってから一番の切れ者であることはすぐにわかった。その知識、発想、仕事ぶり。エルザは密かに尊敬もしていたのだが、目の前で仲間を見捨てるような事をされるのはやはりショックだった。目の前の男ならそうするであろうことも想像し、自分もまたその可能性を考えていたにしろ、である。

だがミナールがつなげる言葉は、さらにエルザの予想を裏切っていた。

「当然だ、私の後釜は貴様だからな」

「は？」

完全に予想外な言葉に完全にエルザは面喰う。さぞ呆けた顔をしていたのか、ミナールが少し苦笑した。

「そんな顔をするな。まさか私が貴様に惚れているとでも思っていたか？」

「な、何を・・・」

「冗談だ」

またしてもエルザは呆気にとられた。ミナールがこのような冗談を言うとは。見た目よりは冗談が好きな男だとは知っていたが。

「私の代わりができそうな人材はそう教会内にいない。何せ真面目が服を着て歩いている様な連中ばかりだ。だが、組織はそれだけでは立ち行かない。貴様ならわかるな？」

「それは確かに」

「組織には裏の仕事ができる人間が必要だ。私や、あるいは貴様の様な。先ほども貴様は、こいつらを、あるいはイライザすら犠牲にして自分が助かる選択肢も考えたはずだ。違うか？」

「・・・おっしゃるとおりです」

エルザが苦虫をかみつぶしたような顔をした。だがここにおいてミナールは少し表情を崩した。

「それでいい。実際に行うかどうかは別にして、そういった考えをする人間がこの組織には重要なのだ。私がミリアザールに仕える理由はそれだ。あの女狐めはただ聖女然とするだけでなく、必要があれば冷徹な判断も下せるからな。だが集団のトップが自ら悪事に手を染めるのはよくない。だからこそ私が必要なのだ。奴はその価値もわかっているし、その点が気に入っている。もっともさらに良いのは・・・」

そこまで言ってミナールは言葉を切った。ミナールが本当にミリアザールを気に入っているのは、ミリアザールが冷徹な判断を下しつつも、芯は情がこの上なく深いことである。その彼女が冷徹な判断を下すのは、身をちぎるような思いなのだろう。昔、ミナールが右に出る者なしと自認している姿を消す魔術でミリアザールをこっそり観察している時、執務室や私室で一人頭を抱えるミリアザールを何度も見た。だからこそ彼は身命を賭してミリアザールに仕えている。その苦しみを一部でも自分が肩代わりできればと。

表出する方法は違えど、彼もまたミリアザールに忠誠を誓っているのは、マナディルやドライドと変わらない。いや、忠誠心でいえば彼ら以上かもしれない。ミリアザールがミナールにその場で首を斬れと言えば、必要だとミナールが判断できた段階で、彼はなんの躊躇もなく自分で自分の首を落とす覚悟でいた。それがミナールにとっての忠誠であり、何の実績もなかった孤児出身の男を大司教まで取りたててくれたミリアザールへの恩返しである。

続く

魔王の工房、その１５～工作～（後書き）

さて、もうすぐ新シリーズに入ることもあり、今日から一週間、毎日投稿いたします。

次回投稿は３／２６（土）１２：００です。

魔王の工房、その１６～決意～（前書き）

～あらすじ～

非情な決断をしたミナールに喰ってかかるエルザだったが、イライザも含め、それぞれ彼らが取る道は……？

魔王の工房、その１６～決意～

「・・・まあいい、多少喋りすぎたようだ。私はこれから奴らを追うが、かなり命がけの行動になるだろう。奴らの工房を全て暴かねばならんからな。だから私が死んだ時は、貴様が大司教だ」

「そんな！　突然そんなことを言われても」

「有無は言わさん。既にミリアザールとの間でも話は付いている。もちろん私の直接の部下ともな。私に万一の事があれば、私が作り上げた組織は貴様が全て継ぐのだ」

「・・・私に務まるのでしょうか」

「務まるかどうかではない、務めるのだ。それに私と同じことをする必要はない。貴様が先ほどと同じ場面に以後遭遇したとして、任務を優先するか助けるのかどうかは貴様の判断次第なのだ。ただ上に立つ者はその判断次第でどういった状況を呼びこむのか、結果を予測しその責任を負わねばならん。それだけは忘れるな」

「わかりました」

エルザの目に力が戻る。その目に満足したのか、ミナールが小さく頷いた。

「それでいい。心配せずともそう簡単にやられる私ではない。まだ教会のためにやらねばならんことは腐るほどあるからな」

「何の見返りもなく、ですか？」

エルザの心配そうな問いかけにミナールも少し言葉に詰まる。

「見返りか。見返りは求めるものではない。それはマナディルやドライドもまた同じことだ。彼らは自然と名声や尊敬を集めたが、彼らが望んだものではない。もっともそういったものは私には必要な

いから、極力集まらないようにしただけのこと。名声など付属品と考えているその点で我ら三人の大司教は共通しているし、互いに尊敬もある。それに見返りはあるのさ、ちゃんとな」

「？」

エルザはミナールが何を言っているのかわからなかったが、ミナールもまた答えることはなかった。

「それよりだ、貴様に伝えることがある。私が潜入していて気づいたことと、先ほどやつらにこっそり使い魔をつけていて聞いた話だがな」

「使い魔？」

「私の使い魔は小さいからな、奴らにすら気取られん。奴らの名前がわかったぞ。耳を貸せ」

この場には既にイライザしかおらず――いや、実は『犬』もいたのだが、彼は少し離れた場所に待機していたのだ――にも関わらずミナールはエルザに耳打ちをした。彼が潜入先で得た情報はミナールですら困惑する様なものだったのだ。敵の名前と、ミナールが潜入先で得たその内容を聞いて、思わず仰天するエルザ。

「ええ！？」

「声が大きいぞ」

「す、すみません」

「心配せずとも私もまた困惑している。だがこれが事実だ」

「この情報が真実なら・・・中原は滅びますよ」

「既に手遅れかも知れん、火の手は上がっているのだからな。だがその判断をするのは私達ではなく最高教主であり、各国の王達だ。私達がしてもしょうのない心配ではある」

「それはそうですが」

「それよりも、しかとこの情報をミリアザールに伝えろ。心配せずとも奴ならいい手を打てるさ。それに奴らの名前。アノーマリー、サイレンス、ティタニア。ティタニアは伝説上の人物のようだが、ミリアザールなら同時期に活動していただろう。何か知っているかもしれん。対策を聞いておけ。では私はもう行く」
「確かにお伝えいたします。大司教もご武運を」
「うむ」

その言葉を残し去ろうとするミナール。だがその足をピタリと止めると、振り返ることなく言葉をつないだ。

「見返りの話だがな」
「は？」
「深緑宮で取れる葉で淹れる紅茶はなかなかいい。今度付き合え」
「・・・それはデートのお誘いでしょうか？」

エルザはさっきの仕返しとばかりに意地の悪い質問をした。だが返ってきた答えはさらに意地が悪かった。

「そう取ってもらって構わん」
「はあっ？」
「ではな」

それきり姿を消したミナール。一度彼が姿を消してしまえば気配すら察知はできない。だからこそ先ほどあの3人にも気付かれなかったのだから。
残されたエルザは呆然とするばかりである。

「・・・だったら顔くらいみせなさいよ、まったく。それとも思ったより照れ屋なのかしら？」

答える声はない。冗談なのかとも一瞬思ったエルザだが、真実誘いだとしても不思議とそう悪い気はしなかった。年の頃は親子程も差があったが、エルザはもともとそういったことを気にするタイプではない。

そしてエルザも気を取り直してイライザの方を振り返ったが、既に彼女は立ちあがり、残った荷物からあり合わせの布を使い、大切な部分が隠れるようにはしていた。既に震えは止まっている。

「イライザ、平気・・・ではないわよね」

「いえ、エルザ様。私は既に正気です。先ほどは戦闘中だというのに、取り乱して申し訳ありませんでした。もっとも恐怖が収まったというより、恐怖が限界を通り越したという情けない状態ですが」

自嘲気味に笑うイライザ。その顔は寂しげで、洞穴に入る前は決してこんな顔をしなかった。短期間でなんて表情をするようになったのだとエルザは悲しく思ったが、既に起きたことは変えられない。

「怖がることは恥ではないわ。まして私達は女なのだから」

「そう、でしょうか？」

「そうよ。怖さを知らない勇気は蛮勇としか言わない。本当の勇気とはそのようなものではないわ」

「私にはまだ勇気のなんたるかもわかりませんが、一つだけわかったことが」

「なにかしら」

エルザが心配そうに問いかける。ここで剣を捨てても仕方の無いくらいの体験を、既にイライザはしている。エルザもまたこれからの話が無ければそうしたいくらいだった。あの連中に再び向かっていくなど、考えるだけでもぞっとしない。自分がやらなくても誰か

がやってくれる、エルザですらそう思いたかった。だがイライザの答えは違った。

「私の実力がどうであるとか、今ここで死んだ者達の仇打ち以上に、あの連中を放っておくことはできません。奴らはこの世に害悪しかなさないでしょう。私は騎士としてではなく、この大地に生きる者として、奴らを何としても仕留めなければ。そのためならば私の恐怖など、些細な問題でしかありません」

「・・・奇遇ね。私もそう思っていた所よ」

エルザの考えもまたイライザと同じだった。自分がアルネリア教会の人間であるとかそういったことは除いても、なんとしてもあの連中は倒さなければいけないと思っていた。

奴らの目。完全にまっとうな人間のものではなかったのだ。彼らの目に含まれる感情はそれぞれだろう。スラムで幼少期を過ごしたエルザは人の生の感情、しかも負の感情には非常に敏感だった。ティタニアは妄執、サイレンスは憎悪、そしてアノーマリーがもっとも難しかったが狂気、といったところだろうか。

アノーマリーは戦争という言葉を用いたが、戦争に限らず争いごとに善悪はないとエルザは考えている。それぞれが善でもあり、悪でもある。どちらも完全には正しくないことを考えれば、戦争など起きないにこしたことはない。だからこそ、戦争の仲裁を買って出るアルネリア教会と言う組織が彼女は気に入っているのだ。だがあのような連中がいかに大層なお題目を抱えていたとして、彼らがまっとうな方向に他人を導けるとは思えなかった。実力行使で彼らを止めようとする自分もまた矛盾を抱えているとは知りながらも、少なくともアノーマリーだけはなんとしても仕留めなければならないと、エルザは覚悟を固めていた。

思考がまとまるとエルザは顔を上げ、イライザをまっすぐ見据える。イライザもまたその視線に答える。

「わかったわ、イライザ。貴方を私専属の騎士にするよう上層部に申請します。異論はある？」
「いえ、私からもぜひお願いしたいと考えていました。どうぞこの命、武器としてお使いくださいませ」
「私は汚いことを平気でするときもあるわ。貴女に耐えられるかしら？」
「努力します。奴らを討ち取るためならば」
「ならば私の背中はあなたに預けます。なんとしても奴らを討ち取るわよ」
「はい！」

そしてエルザとイライザはその場を後にすることにした。本当は仲間を弔いたかったが、もはやその時間すら今は惜しい。遺体を並べ最低限の覆いだけかぶせると、後のことは近隣のアルネリア教会に任せることにし、彼女達はその場を去った。
一路アルネリアへ――増援の部隊が連れてきていた飛竜にまたがり、エルザとイライザは空を駆ける。ミリアザールなら何とかしてくれる。少なくとも今の彼女達はそう考えていた。

続く

魔王の工房、その１６～決意～（後書き）

次回投稿は３／２７（日）１２：００です。

次回から新しいシリーズです。よろしければ評価・感想などお願いいたします。

登場人物紹介、その7～エルザ、イライザ～（前書き）

幕間的な登場人物紹介です。

登場人物紹介、その7～エルザ、イライザ～

名前：エルザ＝ヲルドリクセン
年齢：２６
身長／体重／スリーサイズ／容姿：１６４ｃｍ、５５ｋｇ、８２／５７／８５、腰までの金髪直毛・青眼
職業：シスター（教会での地位は司祭）
好きなモノ：ギャンブル、体を動かすこと、後進の育成、猫
嫌いなモノ：じっとしていること、勉強
一人称：私（昔はアタイ）
プロフィール：
　巡礼のシスターにして、ミリアザール直下の部下でもある。個人としての戦闘力も大したものだが、一番得意なのは集団を指揮する戦いである。巡礼の中でもトップクラスの実力を誇り、魔術も攻撃・補助・回復とバランス良くこなし、自身は近接戦闘をこなすのでオールマイティに戦える。
　性格は通常は穏やかなものの、物事ははっきり言い、戦闘時には何の容赦もしない。昔、地方を荒らしていた盗賊が改心しないと見るや、砦ごと破壊して殲滅した経歴を持つ。

　以前はスラム出身の犯罪組織のリーダーのようなことをしていた。あまりの暴れぶりに自警団では手に負えなくなった市長が国に依頼して騎士団を出動させたが、二回にわたり撃退している。そこで市長がこっそりアルネリア教会に依頼を協力したのだが、そこにおいてついに彼女は捕えられ、あやうく処刑されそうになるのをアルネリア教会が保護した。もちろんミリアザールが出向いての事である。
　ミリアザールは当時自分が直接動かせる手駒を確保するために、様々な行動を起こしている。その中でエルザは彼女の目にとまった。

その後は教会本部にいる司祭の養子という形で引きとり、ヲルドリクセンの姓はその時もらったもの。

エルザは他人を信用しないタイプの人間ではあったが、面倒見は良いという矛盾した側面を持ち合わせていた。それは彼女が生来持つ優しい気質と、育った厳しい環境から用心深くなったという相反する2つがそうさせたのかもしれない。だがそのせいで、彼女はリーダーとして仲間から信頼される立場にあった。

アルネリア教に入ってからの彼女は優しい人々に囲まれたせいで、徐々に本来の落ち着きと性格を取り戻していく。またミランダの講演が彼女にとっては転換点となり、以来本気で修行に取り組み、めきめきと頭角を現した。

アルネリア教に入会（信仰ではないため、入信ではなく入会という形をとる）してからわずか二年、彼女は巡礼の任務を拝命する。それから実に八年の間各地で活躍する彼女は、教会本部でもちょっとした有名人であり、彼女の指導を受けた者はその後必ず大成するとの評判から、引く手数多のシスターとなっている。

名前：イライザ＝ファイディリティ＝ラザール
年齢：１６
身長／体重／スリーサイズ／容姿：１６８ｃｍ、５８ｋｇ、８３／５９／８７、金の短髪に・緑の目
職業：神殿騎士（二刀流、双剣使い）
好きなモノ：かわいい服収集、アクセサリ収集
嫌いなモノ：家事全般、猫
一人称：私
プロフィール：

ラザール家の一員で、アルベルトやラファティとはいとこにあたる。彼女もまた剣士として育てられ、ラザールの運命を受け入れた

者である。１４で神殿騎士団に入隊、今回成人と同時に巡礼の任務を拝命した。

彼女の戦い方はかなり特殊である。ラファティが正規の二刀流（二刀流自体が比較的異端だが）なのに対し、イライザはレイピアの様な細身の二刀を使う。つまりラファティの剣技が「斬る・払う」お主体に組み立てるのに対し、イライザは「突く」ことを主体に組み立てる（もちろん斬ることもできる）。また多人数を相手にするときは「双剣」といわれる、通常は馬上で用いる剣を用いる。

これはイライザの身長よりも長い武器で、重量も結構なものになるため、通常は歩兵は使わない。だがイライザは自分の身が女性であることで腕力に欠ける事を補うために、あえてこの重量のある武器を選択した。これならば回転運動で扱いを補うこともでき、結果として彼女にはとても向いている武器だったといえる。

今までラザール家に女性騎士がいなかったわけではない。だがその数は非常に少なく、大抵は司祭への道を選択した。だが彼女は後方で守られるよりも、前衛として敵に向かっていく方が性格的に向いていると思い、またアルベルトという憧れが近くにあったことも大きかった。幸いにも彼女は剣の才にも恵まれていた。なお魔術の方あまり得意ではない。

性格もまたアルベルトに似ており、寡黙かつ、実直。だがアルベルトほど堅物でもなく、年相応に可愛い物好きであり、また身だしなみにも気を使う。ちなみにベリアーチェやロクサーヌとも仲が良く、妹のように可愛がられている。ベリアーチェにジャスティンが生まれる前は、しょっちゅう二人はイライザの部屋に泊まりに来ていたくらいである。

続く

登場人物紹介、その7～エルザ、イライザ～（後書き）

次回投稿は、３／２８（月）１８：００です。次話から新シリーズかつ、第一幕最終シリーズです。

感想・評価があると嬉しかったりする作者です。

沼地へ、その1～逃亡～（前書き）

～あらすじ～

ライフレスに敗北したアルフィリース達は敗走せざるをえなかった。だが彼女たちに降りかかる災難は止まず……？

沼地へ、その1～逃亡～

＊＊＊

そしてこちらはアルフィリース達。とりあえずニアを一刻も早く治療するのが先決だという結論に達し、ユーティの先導でエアリアルが愛馬のシルフィードを駆り、ユーティの里へと先行していった。後にはアルフィリース、ミランダ、リサ、さらにはくの一達が残っている。今は少し大きめの木の元で、楓が合流してくるのを待っているところだ。

「結局、この面子ですね。ミランダ」
「ん？　ああ、そうだね」
「最初と言えば最初の面子ですが、あの大人数で旅していた事を考えれば寂しい限りです」
「・・・」
「ニアが無事ならよいのですが。ここも落ち着かないし、早く離れたいところです。その後の事も、もう決めておいた方がいいのではないでしょうか。貴女の考えを聞きたいのですが、ミランダ？　大丈夫ですか？」
「いや、少し考え事をね」

リサは不安もあるのだろうか口数が普段よりも多く、懸命にミランダに話しかけているのだが、ミランダは考え事をしているのでどこか上の空だった。アルフィリースに至っては、先ほど水場に行くと言って一人離れて行った。リサのセンサー能力ではしっかり安全を確認できているので、今のところ問題はない。

「考え事。何をです？」
「うん、完全に私達は手を抜かれたんだなと思ってね」
「・・・それはリサも感じていました。最初から、奴には私達を殺す気はなかったのかもしれません」
「リサもそう思う？」

ミランダ青の瞳がリサの視線と交錯する。リサの目は見えないわけだが、それでも顔の向け方などは普通の人間と変わりないため、会話をする時にリサは相手の目がある方向を見るのだ。ただの盲目の人間ならなんとなく見るだけだろうが、センサーのリサは相手の目の位置も正確にわかるため、振る舞いがほとんど健常な人間と変わらない。目に光が無い分、目からの感情の表出が少し乏しいくらいだ。だがそのリサをして、目には困惑、怒り、不安。様々な感情が浮き沈みしているのがミランダには見て取れた。

「ええ。私達を殺すつもりなら、最初の不意打ちで十分でしょう。現にフェンナの仲間のシーカーは一撃だったわけですから。それにあれほどの実力があれば、私達を１００回全滅させて余りあるはずです。加えて、まだかなりの余力をあのライフレスは残しているようでした」
「・・・あれで全力じゃないの？」
「恐ろしいことですが。奴が強すぎて私の感知できた範囲では詳しいことは分かりませんが、全力でないことは間違いないでしょう」
「加えて不死身・・・なんてこと。あんなのがアタシ達の、いえ、人間の敵になったら」

間違いなく人類は滅びるのではないだろうか、とはミランダは口に出さなかったが、その可能性も考えていた。ミリアザールよりも強いのならば、アルネリア教会としては手の打ちようがあるのかどうか。ミランダがアルネリア教会の全ての事情を知っているわけで

もなし、戦いのレベルが余りに雲の上過ぎて、どうにもミランダには事態の全体像がつかめないでいた。

こうなってくると、自暴自棄になって適当に生きていた自分が、ミランダは恨めしい。なぜもっと明確な目標を持ってこの不老不死の命を利用していなかったのかと思っても、既に後の祭りだった。それに自分が不死身であることを知りながらも、アルフィリースが2つ目の呪印を解放しようとした瞬間、どこか心の中で安堵した自分がいたのだ。これで自分は助かる、と。それがミランダには許せなかった。自分のせいで恋人を失くしてから、決して他人を自分のために犠牲にしないと誓ったはずなのに、そのための自分の体のはずなのに。

「（結局のところアタシの本質は変わっていないのか・・・ずるくて小心者のままなんだね。強く・・・強くなりたいな）」

そのようなミランダの内心が垣間見えたのか、リサが心配そうに傍に寄って来た。

「ミランダ、本当に大丈夫ですか？　なんだか、相当落ち込んでいるように感じられます」
「ん。正直落ち込んでる」
「無理もありませんね。でも口に出せるならまだ大丈夫でしょうが・・・」
「お取り込み中の所すみません、楓が戻りました」

会話を遮って声をかけてきたのはくの一達。くの一が3人そろって片膝をつき、かしこまっている。

「だから、アタシはそういうのは嫌いだって言ってるだろ」
「申し訳ございません。我々はこれしか知らないもので」

「・・・まあいいや。それよりよく逃げられたね。えっと、楓だっけ？」
「これは過分なお言葉。情けないことながら逃げるのに手いっぱいでして。加えて、集落内に大量にシーカーが入ってきたため、見つからないように逃げました所、合流が遅れましたことをお詫びいたします」
楓が一段と深く面を下げる。任務に失敗すれば死。口無しがそういうものだとミランダは聞かされていたし、実際梓からは楓を見捨てて逃げるように進言された。だがミランダには納得のできないことだったし、考えもあったのだ。
「そんなことはどうでもいい。命あってのものだねさ。敵の追撃は？」
「いえ、あの男はその後姿を消しました。部下の骸骨も同様です。シーカー達が血眼になって探していますが、この近くにはもはやいないのではと」
「なるほど、ならば一安心か。それよりアンタ達にやって欲しいことがある」
「は、なんなりと」
梓が答える。
「まずは最高教主に向けて、使者に1人立ってほしい。ここで起きたことを余さず伝えてほしいんだ。あの敵のことも含めて、早急に手を打ちたい。文章は今からしたためるから、確実に届けてくれ」
「はい」
「次にもう1人は、フェンナとカザスを探してほしいんだ。生きていれば多分シーカーが救出していると思うんだけど、生死も含めてしっかり見届けて欲しい。大切なアタシの仲間だからね。それで、

もし生きていたら、フェンナにはアルネリアを訪ねてくるように伝えてほしいんだ。これはフェンナ本人に図って欲しいんだが、使者に立った者はそのままフェンナとアルネリア教の仲介をしてくれればと思う。場合によってはシーカー達をアルネリア教で保護することも考えている」

「・・・了解しました」

今度は梓の答えは少し鈍いものだったが、事態が事態だけにいたしかたない。もし世間でダークエルフと認識されているシーカーをアルネリア教が大量に受け入れれば、社会的に大きな波紋を呼ぶことになるだろう。これが巡礼筆頭のミランダだからこそ梓も任務と納得したが、そうでなければいかにミリアザールの命令でミランダの指示を聞くようにと言われた梓でも、独断でそのようなことをしてよいものかと了解しかねたことは明らかだった。

さらにミランダは続ける。

「それで、アタシの監視もまだ続けるんだろう?」

「はい、恐れながら」

「じゃあどういう人選にするかは、梓に任せるよ。アタシはこれから手紙をマスターに書く」

ミランダはそう言って早速荷物から紙とペンを取り出した。インクの代わりになるような物は、ミランダ得意の調合で代用になる物を作り出せる。しかもご丁寧に、特殊な方法でしかを文字が浮かないように細工をしていく。この手紙の読み方はミリアザールしか知らず、いざというときのため、ミランダが昔ミリアザールに提案したものだ。

その手紙が書き終わるまでじっと他の面々は待ってたが、もう手紙も書き終わろうかという時、梓が唐突に口を開いた。

「ミランダ様、私からも1つよろしいでしょうか？」
「なんだい？」
「ニア殿の治療をした後、どうなさるおつもりで？」
「そのことね。私としては、ここは大草原の北だから、いっそ沼地を抜けてもよいかと思っているんだけど」
「しかしあそこは、『帰らずの沼地』と呼ばれている場所では？」

リサが口を挟んできた。それも当然だろう。大草原になぜ北側から入って来る人間がいないのか。一つには、大きな3つの街道の中でも北の街道は寂れていて、人通りそのものが少ないということ。また大草原へ入るためには、その街道からすらもかなり離れていかなければならないということ。

さらには、大草原の北側には『帰らずの沼地』が中央付近に。『迷いの森』が東側、『嘆きの谷』が西側に広がり、実質南からしか入れないようになっているのだ。もっとも抜け道はあるようだが、一般の冒険者が知るはずもなく、またかなり危険な道であることに変わりはない。

だがミランダは自信満々とまではいかないまでも、はっきりと言いきった。

「沼地の通り方はあるよ・・・アタシは知ってる」
「なるほど、ではあの噂は本当でしたか」

梓は心当たりがあるらしく、納得していた。だがリサには何のことやらわからない。

「噂？」
「ああ、実はアルネリア教会なら――」
「待って！」

リサが突然ミランダを遮った。その顔に緊張が走る。

続く

沼地へ、その1～逃亡～（後書き）

最終シリーズは毎日連続投稿で一気に行きます。

次回は明日３／２９（火）１９：００です。

沼地へ、その2～変化～（前書き）

～あらすじ～

一方、呪印を使いすぎたアルフィリースには、その反動が……？

沼地へ、その2～変化～

「これは・・・いけない！　アルフィリースが危険です！」
「何、奴らか！？」
「いえ、魔獣の群れです！　おそらく森が焼けて、住処を追われた者たちかと」
「くそぅ、こんなときに」
「案内します。急いで！」

リサが先導し、慌ててミランダ達は慌てて駆け出して行くのだった。

＊＊＊

その少し前。ミランダ達のもとを離れたアルフィリースは、リサに探してもらった森の中の川辺に来ていた。そこまで何の無かったように歩いてきたアルフィリースだが、川の傍に来て危険がないのを確認すると、崩れるように倒れ込んだ。

「ぐぅううう、い、たいっ・・・」

アルフィリースが馬にのりながら隠した右腕には、いまだに呪印が蠢いていた。さらに左腕にも呪印が広がり始めている。

「ライフレスの気を引くためとはいえ無茶だったか、さすがに」

アルフィリースは実は旅の最中から、なんとなく誰かに見られている様な気はずっとしていた。確信を持ったのは呪印を解放してか

らだったが、なんとかして外からライフレスの結界内に侵入してこようとしていた人間達には気が付いていた。どれほどの実力の持ち主かは分からなかったが、おそらくはミランダの護衛だろうことに想像をつけ、一縷の望みを託して全力でライフレスの気を引いたのだ。上手くいったのはまさに天の思し召しとでもいわんばかりの出来事だったが、どちらにしてもあのまま戦い続けて勝ち目がないことは、アルフィリースにもわかっていた。

だがそのためとはいえ、２つ目の呪印を解放させようとしたことはアルフィリースに大きな代償を払わせた。

「師匠には、何があっても解放するなって言われていたのにね・・・ぐううぅ！」

アルフィリースが右腕を水につけると、焼けた鉄を水に浸したかのように蒸気が湧きおこる。だが音がするわけではなく、不思議な事にアルフィリースが腕をつけた部分から、水が黒く変色していた。

明らかに水が汚染されているのだが、当のアルフィリースは苦悶の表情を浮かべ、それどころではないといった様子だ。

「多少マシ、だけど。これは・・・ヤバい、かもっ」

先ほどからアルフィリースは必死で呪印を押さえようとしているのだが、一向に収まらない。これは以前、彼女が生まれた村で呪印を暴走させた時の状態に似ていた。あの時はアルドリュースがいたが、今は誰もいない。自分で何とかするしかないのだ。

「せめて、呪印を封じるための儀式ができればっ」

「（そんな必要ないわよ・・・）」

「誰！？」

その時、アルフィリースが息も絶え絶えに絞るように出した声にはっきりと返事があった。そのあまりに暗く甘い声に、思わずアルフィリースは腕の痛みも構わず大声を出した。

「誰なの？　姿を見せなさい！」
「（くすくすくす。嫌ぁよ）」
「く、卑怯よっ！」
「（卑怯なのはどっちかしら・・・）」

声はどこからともなく響き、まるで森そのものが嗤うかのよう。あまりの不気味さにアルフィリースは蒼白になるが、だからといって怯むような彼女でもない。
だがそんな彼女をあざ笑うかのように、さらに声は続ける。

「（卑怯なのは貴女の方よ・・・私の事、忘れちゃったの？）」
「だから誰なのよ！？」
「（昔はあんなに気持ちいい事イッパイしたじゃない。もう忘れたの？　他人より優れた力を持つ優越感、他人を力で這いつくばらせる征服感、そしてあの男を殺した時の達成感）」
「あっ・・・」

アルフィリースの顔に、幼いころ魔力を暴走させて殺した敗残兵の顔がフラッシュバックする。男の顔は恐怖に濁っていた。でもどうして？

「なんで、今さら」
「（忘れたの？　都合の悪いことはすぐ忘れちゃうんだから。あの男を散々嬲って殺したじゃない）」
「違うっ！　アレは事故で」
「（いいえ、事故じゃないわ。貴女は楽しみながら殺したのよ。あ

の男が命乞いをするのも構わず、まずは左手を斬り落とし、次に右足を砕いたわ。それで立てなくなって、芋虫のように這いずって逃げるあの男の背中に何本も刃物を突き立てて・・・）」

「やめてっ！」

アルフィリースが立ちあがって絶叫した。

「私はそんなことしていない！！」

「（いいえ、貴女がやったのよ！　思いだせっ！）」

突然声が強くなる。アルフィリースの頭には、幼い彼女が男を的確に追い詰めていく様が思い出されていく。左腕を斬り落とし、右足を砕き、背中には包丁だけでなく氷や大地で作った刃を、わざと急所を外すように何本も打ちこんで。ふと幼いアルフィリースが地面の水たまりで自分の顔を見ると、その顔は実に楽しそうに嗤っていた。そう、今も水面に映る自分の顔のように――

「えっ」

「（思いだした？）」

水の中のいるアルフィリースが嗤う。思わずアルフィリースは自分の顔を触って確認するが、明らかに笑ってはいない。なのに、水の中の自分は嗤っているのだ。

「（貴女は元々そういう性質なの。他人を力でねじ伏せたくてたまらない。人の幸せが妬ましい。血が見たくて我慢できない）」

「そんな、ことはっ」

だが反論するアルフィリースの声にも徐々に力がなくなっていっている。先ほど思いだした光景が事実なら、自分はいったいなんと

いう残酷な人間なのだろうか。アルフィリースが今まで疑いもしなかった、自分という人間が揺らいでいく。

「（そんなことあるわよぅ。だって、ミランダを最初に見た時どう思った？　こんなに美人なのに博識で。戦士としても一流なのに、細くてきれい。大きくてよくからかわれる私とは違うって、妬ましくなかったの？　なのに、自分がちょっと辛い目見たからって悲劇のヒロインぶっちゃってさ。私だって辛い目は見てるわよ・・・彼女の過去を聞いた時に、そう全く思わなかったの？）」

「そんなことない！」

「（じゃあリサは？　旅の途中で聞いたけど、彼女にはもう婚約者までできちゃったそうじゃない。孤児なのにずるいわよね～幸せいっぱいって感じでさ。小さな子たちにも沢山慕われているのに、対して貴女はもはや天涯孤独。両親に見捨てられ、拾われた人には先立たれ。違う？）」

「そんなことは」

「（フェンナだって今でこそ不幸な身の上だけど、よく考えたら王族なのよね。放っておいても王子様が迎えに来てくれるわ。周囲は皆傅（かしず）いてくれる。平民の貴女じゃむりよねぇ・・・この不幸なまでの差は何かしら。やっぱり生まれが違うと、こんなにも差がでるのかしら？）」

「そんなこと・・・」

「（ニアだって。ちょっと前まで戦いの事ばっかりで、恋なんて無縁だったはずなのに。彼女自身だって特に望んではいなかったはずよ。なのにいつの間にか恋人を作ったわ。しかも相手に思われてねぇ。貴女はこんなにも内心では恋愛に興味津々なのに、恋人はおろか、キスも、手をつなだことさえもない。他人から好かれるなんて、もってのほか。この差はあまりにも不平等だわ。天に嫌われているんじゃないかしら、貴女って）」

「そんな・・・こと・・・」

ついにアルフィリースがへなへなと崩れ落ちた。頬にはいつの間にか涙が流れている。先ほどの言葉はアルフィリースが頭のどこかで考え、しかし片隅に追いやった思考。彼女達は仲間だから、友人だからと考えないようにした負の感情。それをこの声はアルフィリース本人ですら忘れていたことを、拾い集めてきたのだ。

「・・・お前は一体、何だっ！？」

アルフィリースが叫んだ。叫ぶというよりは、悲鳴に近かったかもしれない。

「私の、心・・・心を見たのか？　そんなこと、そんなことは思っていないっ！」
「（いいえ、思ったわ）」
「なぜわかるっ」

アルフィリースが水の中で嗤う自分の顔を殴ろうと拳を振り上げた時、水が手の形を成してその腕を掴んだ。

「ひ・・・」
「（私は、貴女）」
「ウソだっ！」

黒く汚れた水の中からアルフィリースの顔が出てくる。その顔がくすくすと、実に楽しそうに嗤うのだ。

「（嘘じゃないわ）」
「偽物め、まだ言うか！」
「（随分な言い草ね。偽物はどっちかというと、貴女じゃない）」

「えっ？」

その言葉を聞いて、あまりの意外さにアルフィリースの体から思わず力が抜けたが、その意味を聞き返そうとした刹那。すぐ近くで木の枝をぱきんと何かが踏んだ音がした。アルフィリースは反射的にその方向を見ると、大きな牙をはやした、首の長いニワトリのような生物がこちらを睨んでいた。しかも一体ではない。１０、いやもっといる。

「こいつらは」
「（うふふ、絶体絶命のピンチね）」
「笑い事じゃない。この手を離せ！」
「（いいけど・・・貴女、まだ我慢するの？）」
「なんですって？」

黒い水のアルフィリースが、アルフィリースの頬を愛撫する。

「（もう我慢しなくていいのよ）」
「それはどういう」
「（本能のままに、奴らを殺しなさい。自分の命が危険なら、アドリューズだって呪印を使っていいって言ったでしょう？）」
「そう・・・だっけ？　むぐっ！」

アルフィリースがだがその言葉を聞き終えないうちに、なんと水のアルフィリースがアルフィリースに口付けをしたのだ。驚いたアルフィリースは抵抗する暇もなかったが、それ以前に、不思議な魔力と魅力に囚われたように身動き一つすることが敵わなかった。

既に間近には魔獣達が涎を垂らしながら近づいてきており、アルフィリースの匂いを嗅ぎながら、獲物としての品定めをしているところだった。だが水のアルフィリースがただの水に戻り、地面に水

たまりを作ると同時に、アルフィリースはゆらりと立ちあがる。そんなアルフィリースを頭から丸かじりにしようと魔獣が口を大きく開けた所、その涎がアルフィリースの髪にかかった。瞬間、アルフィリースから呪印を発動させた時以上の殺気がほとばしる。

「・・・何するのよ、汚いわね。低級な魔獣の分際で、この私に逆らうの？　万死に値するわ」

アルフィリースの目がぎらりと光る。その目には異様な輝きと熱が浮かんでいた。

続く

沼地へ、その2～変化～（後書き）

次回投稿は３／３０（水）２０：００です。

沼地へ、その3～暴虐～（前書き）

～あらすじ～

魔獣に囲まれたアルフィリース。その時彼女に異変が……？

沼地へ、その3～暴虐～

＊＊＊

「はあ、はあ・・・」
「リサ、まだなの！？」
「もう少しで・・・きゃあっ？」

リサが返事をしようとした瞬間、凄まじい衝撃波がリサの声を遮った。ミランダはなんとか踏ん張ったが、軽いリサは吹き飛ばされそうになるのを、後ろにいた桔梗が咄嗟（とっさ）に支える。

「これは！？」
「魔術ですね。それもかなり上位の」
「まさか呪印を？」

梓の返答にミランダが青ざめる。こんな短期間で呪印を連発すれば、アルフィリースの体がどうなるかわからない。アルフィリースが前回呪印を発動させた時は、後で聞いた話だと魔術を何発か使った程度だったにも関わらず、3日の間まともに剣が振るえなかったのだ。今回使用した魔術の量は前回の比ではない。心配のあまりミランダは警戒するのも忘れ、転げまわるようにアルフィリースの元へとかけつけたが、そこで彼女が目にしたのは意外な光景だった。

「あら、ミランダじゃない。遅かったわね」
「え」

ミランダが見た光景、それは無残な姿で地面に横たわる魔獣達。

生態系において上位捕食者であるはずの魔獣を、人間であるアルフィリースが一方的に狩る光景。いや、狩りですらない。
ある物は首を刎ねられ、羽をむしり取られ、生きたまま焼かれ。ある種の鳥が行うといわれる『はやにえ』のように、木の根を槍のように天に向けて変形させた先に何体もの魔獣が突き刺されたその光景は、もはやただの虐殺だった。アルフィリースは頭から浴びたのであろう魔獣の返り血に染まりながら、非常に上機嫌でミランダに語りかけてくる。

「待ってて、すぐにこの汚物どもを片づけるから」

魔獣達は怯え慌てふためき、完全にパニックになっている。だがアルフィリースがやったのだろうが、周囲には土で構成された壁が出来ており、魔獣達の逃走を阻んでいた。それでも魔獣達は仲間を踏み台にしてその壁を越えようとするのだが、その度にまるで彼らをあざ笑うかのように壁がせり上がり、行く手を阻む。
その光景を見てアルフィリースが楽しそうに嗤う。

「見て見て、ミランダ！　あいつらの慌てっぷりったら傑作よね。さっきまで私に立て突こうとしてたくせに、勝てないと分かった瞬間これだわ！　みっともないったらありゃしない。野生の獣なら戦って死ねっていう話よね」
「アルフィ・・・」
「あー、私なんでこんなに我慢してたんだろ。馬鹿馬鹿しいったらありゃしないわ。全てが私の思い通りになる程の力が私にはあるって言うのに・・・まぁいいわ。それよりどうしてくれようかしら、このカス共。焼き殺す？　凍え死なす？　それとも窒息死？　ああ、毒で悶え殺すのもいいわね。ミランダとリサの意見はどうかしら？」

アルフィリースがくるりと2人の方を振り向く。血に染まるその

顔は、２人が見たこともないほど最高のアルフィリースの笑顔でありながら、同時にこの上ないほど恐ろしい顔だった。その不吉な光景に、思わずリサが一歩後ずさる。

「あなたは一体何を言っているのですか、アルフィリース」
「え、だからこいつらの殺し方の相談よ。頭は大丈夫、リサ？」
「いえ、そんなことではなくてですね」

リサが何かを反論しようとした瞬間、背後から突然大きな魔獣の一頭が向きを変えてアルフィリースに襲いかかってきた。逃げることなどできないと知っての特攻だろう。

「危ないっ！」

リサが叫ぶがアルフィリースは微動だにしない。魔獣の大きな牙がアルフィリースの肉に食い込まんとする直前、

《鋼鉄鱗（アイアンスケイル）》

アルフィリースの一声と共に、肉に食い込むはずだった魔獣の牙が逆に欠けた。『金』属性の魔術による体の構成の変性魔術。アルフィリース以外は知らないが、金属性としては最上級の難度に位置する魔術である。それを無詠唱でアルフィリースが発動させたのだ。

たまらずのけぞる魔獣を、アルフィリースが素早く首を締め上げ、無理矢理自分の顔の元に引き寄せる。自分の倍はあろうかという魔獣を、まるで小動物のように軽々と扱うのだ。そして魔獣の目を至近距離から覗きこみ、一言。

「私に向かってきた勇気は褒めてあげるけど、お前、生意気よ！」

言うが早いか、アルフィリースが魔獣の上顎と下顎にそれぞれ手をかけると、力任せに魔獣を引き裂いた。噴水の様な返り血を浴びて、さらに頭から朱に染まるアルフィリース。その光景を見ていたミランダが思わず口を手で覆ったが、アルフィリースの方は動じるどころか舌なめずりをしていた。

さらに何を思ったのか、アルフィリースは鮮血滴る魔獣の肉にかぶりつくと、音を立てて咀嚼を始めた。だがいくらか噛んだ後、その肉をぺっと吐き捨てる。

「ダメだわ、これ。まずくて食えたもんじゃない。煮ても焼いても食えないなら、殺すしかないわね」

残酷な言葉を口にするアルフィリース。血に染まった紅いその唇が、妙に艶めかしいから不思議なものだ。

そしてアルフィリースがゆらりと魔獣達の方に向かって歩き出す。そして肩を少しコキコキと鳴らすと、実に楽しそうに嗤っている。

「さあて、どうやって殺そうか。まだ３０体はいるし、どうするのが一番楽しいかしらね」

アルフィリースが腕組みをして悩む間、魔獣達も彼女の異様な気配に気がついたのか、めいめい勝手に逃げ出そうとする。だがその度にアルフィリースが地面を踏むと、地面が隆起し、次々と魔獣達の逃げ場を塞いでいった。

逃げ場を失くした魔獣達はさらなる恐慌状態に陥り、体の小さい物は仲間に踏み潰されている。アルフィリースはその様子を恍惚とした表情で見つめていたが、隆起した壁が魔獣達を囲み切る頃には飽きてしまったようだ。アルフィリースの方には壁はないのだが、魔獣達にもアルフィリースの方に向かって突撃して来るものは、もはやいない。

「あーあ、つまんないの。やっぱり追い詰めるなら人型の魔物の方がいいわね。魔獣はすぐにパニックになって終わりだから。人に近いほどなんといっても表情が豊富だから、追い回していて楽しいし」
「アルフィ、アンタ何を言ってるんだ？　追い回すだの、なんだの」
「こっちの話よ。ミランダのくせに、細かいこと気にするわね」

アルフィリースが面倒くさそうに手をひらひらさせると、さらに魔獣達に近づいて行く。

「さて。せっかく土の壁で囲ったんだし、これを活かして片づけるか。串刺しだ！」
《土霊の処女（アース・メイデン）》

アルフィリースが手で印を組むと、土の壁から無数の棘が凄まじい速度で伸び、魔獣達を一体余さず串刺しにした。魔獣達は突然の出来事に何が起きたかわかっておらず、串刺しにされたまま走ろうとしている。また首がちぎれ、首が落ちた状態で走っている個体もいる。あまりに突然の出来事に、魔獣達は断末魔の悲鳴を上げる暇すらなかった。

流れる血が小さな泉を形成し、また川となってミランダ達の方に流れてくる。アルフィリースの足元にもその血が流れてきているのだが、気にする様子もない。今度のアルフィリースは高揚した様子もなく、つまらなさそうにその光景を眺めていたが、踵を返しかけた所でふと泣き声が聞こえる。

「ぴー、ぴー」

壁の外から小さな魔獣の幼生体が走ってきた。どうやら生まれてそれほど間もないせいか、狩りが終わるまで離れていたのだろう。

母親らしき個体の元へ駆け寄ると、しきりに啼き、母親をひっかいている。どうやら母親が死んだことも理解できていないらしい。哀れとも言える光景に思わず同情の念を禁じ得なかったのは、ミランダやリサに限らずくの一達ですらそうだったのだが、アルフィリースだけは違った。

逆にアルフィリースは心底苛立った顔をしており、魔獣に掌を向けている。そして掌に火球を形成し、放とうとした瞬間、ミランダがその手を掴んだ。

「もういいよ、アルフィ」

「・・・それはどういう意味かしら？」

アルフィリースがうろんげな顔で聞き返す。ミランダは横目で、いまだに死んだ母親に取りすがる魔獣の子どもをちらりと見た。

「あれは子どもだ。殺す必要はないだろう？」

「でも人を襲う魔獣よ。大きくなれば、こいつらのように人を襲うわ。なら、今殺した方がいいんじゃない？」

「そんなことを言っていたら、最後には人間以外の生物を全滅させることになるわ」

「必要があれば、そうするけど？」

アルフィリースが冷酷な目で言い放つ。その澱みの無い返答に、思わずミランダも息をのんだ。

「なん、ですって」

「そんな怖い顔しないでよ。冗談よ、冗談」

アルフィリースがやってられないとでもいいたげに、ミランダの手を振り払う。

「まったく、慈悲深いシスターはさすがに言うことが違うわね。もっともここで殺してあげた方が、余程慈悲のある選択だと思うけど？　あんな身の守り方も知らない魔獣、あっという間に他の魔獣の餌よ。それよりはここで母親と共に死なせてあげる方が、幾分か慈悲があると思わない？」

「・・・何が正しいかはさておき、母親を殺した貴女が言うセリフじゃないわ」

「ふーん、じゃあミランダは私が喰い殺されていた方がよかったんだ」

「そんなことは言ってないわよ！」

「はいはい、悪いのは私です。いつもそうなんだから。悪いことは全部私のせい。昔も今も、何も変わりないわね。ミランダだけは私の味方だと思っていたんだけど、違ったか」

アルフィリースの最後のセリフに、ミランダはずきりと胸が痛んだ。まるで昔の自分が拗ねている場面を見ている様な錯覚に陥ったのだ。表情が曇るミランダだったが、アルフィリースはそのことすらも気に止めなかった。

「さて、さっさとニア達に追いつかないとね。リサ、馬を連れてきて」

「え、ええ・・・」

「で、くの一達は皆連れて行くの？」

「いえ、一人よ。梓、誰にするか決まった？」

「はい。少し打ち合わせをしてくるので、ミランダ様はどうぞ出立の準備を」

そう言ってミランダ達から一度距離を取る梓、桔梗、楓の3人。完全に声が聞こえない所に移動すると、梓が口を開く。

続く

沼地へ、その3～暴虐～（後書き）

次は3／31（木）21：00です。

沼地へ、その4～風の精霊～（前書き）

～あらすじ～

魔獣を退けたアルフィリース達が向かうのはユーティの里だった。

そこで彼女達が出会うのは・・・？

沼地へ、その4～風の精霊～

「ミリアザール様へは私が連絡に行きます。桔梗は日向とフェンナ殿、カザス殿の安否を確認に向かいなさい。日向はおそらくもう生きてはいないでしょうが、他のお二人が無事ならそのまま護衛に付きなさい。私と楓への連絡は欠かさないこと。行け」
「はっ」

桔梗はすぐに姿を消した。そして楓に梓は向き直る。

「楓はミランダ様の護衛をしなさい」
「はい」
「くれぐれも心すること。ミリアザール様の命令は、ミランダ様が最優先です。後の方は、状況次第では見捨てなさい」
「心得ております」

楓が無表情に頷く。楓の年の頃はリサとほとんど変わらないのだが、彼女には迷いなどない。楓は生まれた時より口無しの者として育てられた、生粋のくの一である。たとえ魔獣と結婚しろと言われようが、命令とあれば何の躊躇もなく行える者だからこそ、この年齢で今回の重大な任務についている。楓は同世代の口無し、いや、現役の口無し全てと比べても、魔眼のことも含めてかなり優秀な人材だった。

だが梓は生粋の口無しではない。１２の時に奴隷として売られていた所を梔子が見出し、買い上げたのだ。それから弛(たゆ)まぬ努力によって口無しの中でも有数の使い手となったが、感覚は普通の人間により近い。有り体に言えば情が深いのだ。さらに楓は母親が口無しの中にいながらも、一度も母とは呼ばせてもらっていない。口無し

といえどそこまで厳しいことはまずないのだが、楓の母親は特別だった。

だが楓も文句ひとつ言わず、口無しの厳しい訓練を淡々とこなしていった。幼いころより楓の教育係を任された梓はその姿が不憫であり、楓に対し妹か娘にも近い感情を抱いていたのだ。だからと言って梓が訓練や任務に手心を加えたことはない。その梓が楓の肩をしっかりと掴み、目を見据えて命令する。残酷なことだと知りつつも、そうするほかないのが口無しの運命。

「特にあのアルフィリースとかいう娘。彼女は危険。もし彼女がミランダ様に危害を及ぼそうとした時は・・・」

「ご心配なく。しかと仕留めましょう」

即答する楓に無言で梓は頷き、付け加える。

「だが無理だと判断したら、ミランダ様を連れて脱出なさい。あなたは次代の梔子候補。そしてミランダ様は――」

「大丈夫です、全て心得ておりますから。心配しないでください、梓お姉様」

楓が少しだけ表情を緩ませる。その表情を見て楓に気負いがないことを梓が確認すると、安心したように楓の頭をなでる。

「任務中です、お姉様」

「いいのよ、私は今の口無しの体勢にも疑問を抱いている人間なのだから。実の親子が名乗りもあげられない組織なんて、馬鹿げているわ」

だが楓は何も答えなかった。自分の頭をなでる楓の手をそっと優しく止めると、頭から離す。

「では行って参ります」
「ええ、無事に」
「お姉様も」

そうして2人のくの一はその場を後にしたのだった。

＊＊＊

そしてそれからアルフィリース達がユーティの里に着くまでは何も起らなかった。いや、起らなさすぎた。獣一匹、泣き声一つすらなかったのだ。もっともその理由はリサにもミランダにもわかっていた。全てアルフィリースのせいだ。

最初にリサが連れてきた馬も、アルフィリースを見るなり怯えて暴れ出したのだ。エアリアルを除けば馬達と一番仲良くしていたのはアルフィリースであり、暇があれば馬の方からアルフィリースの元に来るくらいだった。なのに今回はアルフィリースを見るなり、方向転換して逃げようとした。だがアルフィリースが手綱を掴むと、馬が今度は異常なまでに大人しくなった。

それからは何もない。本当に何なかった。休憩していたのがちょうど太陽が真上にある時。日が傾くまでは馬を駆けたのだが、ついに獣一匹見かけなかった。おそらくはアルフィリースを避けたのだろう。エアリアルの残した目印（ミランダが渡した特殊な光る塗料）を追いかけながらの道程だったため、かなり移動速度は遅く狙いやすいはずだったので、まず間違いあるまい。

だが襲撃が無いこと自体はよいことだった。思ったより早く進むことができたアルフィリース達は、目印を追っていくと、やがて大きな木の前で行き止まりとなった。塗料で描くはずの矢印がなくなり、代わりに丸が描いてある。

「どういうことだろう」
「ふん。ここが入り口なのよ」

アルフィリースが馬を降り、何かを調べている。

「なるほど、妖精の結界か。何の変哲もないし、これなら余程注意してみないと気づかれることはないわね」
「どうやって入るの？」
「向うが開けない限りは入れないわ。もちろん結界ごと壊せば別だけど。強引に開けてしまおうかしら」
「そんなことしたら、妖精達が怒るでしょう」
「その時は、力づくで言うことを聞かせればいいのよ」

アルフィリースが物騒な事を言い、ミランダが何かを言いかけようとした時に、ちょうど絡まった木の根がほどけて道が作られた。その中から妖精が1人出てくる。

「アルフィリース様御一行ですね？　お話は伺っております。妖精の里『シュティーム』は貴方達を歓迎いたします」
「へえ、お出迎えとはね。壊す手間が省けたわ」
「・・・行こう」

ニヤニヤと不敵に笑うアルフィリースを尻目に、ミランダがさっさと歩を進めた。今のアルフィリースには何を言っても無駄な気がしたし、あまりアルフィリースに妖精の相手をさせたくもなかった。事実妖精はアルフィリースを見て怯えていたし、それはミランダもリサも同じだった。正直なところ、2人とも今のアルフィリースが怖かったのだ。楓だけは飄々としていたのだが。

木の根で出来た暗い道を歩いて行くと、やがて光が見えた。地中に向けて歩いているのかと思ったが、どうやら違うらしい。一種の

結界、あるいは城の類いかもしれない。

「む、皆来たのだな」

木の根の道を通りすぎると、開けた場所に出る。そこにはエアリアルが立っていた。エアリアルにしてみればニアも気がかりだったが、それ以上にアルフィリースの方が心配だったのだろう。またニアを無事送り届けてからは彼女には特にやることもなく、正直手持無沙汰だったのも否定できない。

エアリアルを見るなりミランダが駆け寄る。

「ニアの具合は？」

「・・・良くも悪くも、といったところか」

「どういうこと？」

「ここの長の話を聞いた方が早い。案内しよう」

エアリアルを先頭に、ミランダが並んで歩きだす。リサとアルフィリースは馬を引きながら、少し離れて後に続く。

そのアルフィリースを見ながら、エアリアルがそっとミランダに耳打ちする。

「アルフィリースに何があった？」

「わかるの？」

「あんなに禍々しい気を発していれば当然だ。妖精達も怯えてしまっている」

ミランダが回りを見ると、妖精たちが恐ろしいものでも見るように、木の陰からこちらの様子をちらちらと覗っている。だがアルフィリースがそちらを見る度に、皆逃げ出してしまう。

アルフィリースはそれらの反応が楽しいのか、クスクス笑いなが

ら周囲をまんべんなく見回している。

「アルフィリースはどうしたんだ。まるで別人だぞ？」

「・・・多分呪印が暴走したままなんだと思う」

「呪印が？　そんなに厄介なものだとは聞いていなかったぞ？」

エアリアルとはファランクスの住処で何日も共同生活をしていたので、一応は呪印のことについてもアルフィリースから説明があった。だがアルフィリースもまた、全てを話していなかったということだろう。

「（あるいは本当に本人も知らないか、ね）」

ミランダが心配そうにアルフィリースを振り返る。当の本人はその視線に気がつくと、にこやかに手を振ってきた。普段のアルフィリースならまずそんなことはしないだろう。

「本当に別人のようだな」

「アタシも呪印があんなものだとは聞いてないわ。危険な物と知ってはいたけど、アルフィリースの人格に影響を及ぼすようなものだなんて。もしそうだとしたら・・・」

「もしそうだとしたら、何？」

「うわっ！」

エアリアルが思わず大声を出した。無理もない。ついさっきまで１５ｍは後ろにいたはずのアルフィリースがエアリアルの間後ろにいて、彼女にの耳に息を吹きかけたのだ。

エアリアルが自分に近づく気配に気がつかないなど、普通ではありえない。

「い、いつの間に」
「ん？　短距離転移だけど？」
「そんな魔術をこんな簡単に扱うなんて、聞いたことがないわよ」

ミランダが不審そうな目をアルフィリースに向ける。だがアルフィリースは肩をすくめてみせただけだ。

「できちゃうんだから仕方ないじゃない」
「それはどういう・・・」
「そんなことより、着いたんじゃないの？」

アルフィリースの指さす先には小さな泉がある。その中には大きな葉が浮いていて、そこにニアが横たえられていた。傍ではユーティが必死で魔術を使っているようで、ニアの体が優しく淡い青の光に包まれている。

その傍にはさらに女性が一人座っていた。緑の髪は地面について余りある程長く、葉の上に豊かな放射状の流線を描いている。見目も非常に麗しく、大人しそうな印象を与える。背中には羽根が四枚生えており、それは彼女が人間でないことを示していた。だが妖精にしては大きすぎる。人間と同程度の背丈があるのだ。

泉の畔（ほとり）でミランダ達がどうしたものかと立ちつくしていると、その女性がふわりと宙に浮かび、ミランダ達の方に飛んでくるではないか。

「シュティームへようこそ、お客人。この旅ではユーティがお世話になったそうですね。里の妖精を代表してお礼を言わせていただきます。ありがとう」
「あ、いえいえ。こちらこそお世話・・・してばっかりですね。あの子には」
「あらまあ、面白い方。でもやっぱりそうなんですのね？」

ほほほ、と女性が軽やかに笑う。笑うたびに羽根がさらさらと流れるように揺れ、とても美しい。こころなしか良い匂いもするようだ。その女性がくるりとユーティの方に向き直る。ユーティは魔術の使いすぎで疲れたのか、仰向けになって息を切らしていた。

「ユーティ、こっちにいらっしゃい」
「む、無理ぽ」
「またそんな言葉をどこで覚えるのかしら。でも１０秒で来ないとお仕置きです。１０、９、・・・」
「お、鬼～」

ユーティがふらふらしながらも飛んでくる。１０秒あれば余裕だろうと全員が思ったのだが、

「８、１、０。これはお仕置き決定ですね」
「ちょ、今数え方おかしかったでしょっ！」
「ここでは私がルールです。私が黒と言えば白い物も黒。私がお仕置きと言えばお仕置きなのです」
「そんな理不尽な」
「世の中そんなものです。これ以上口答えするようなら、鍋の具にしますよ？」
「い、いやーーーー」

逃げようとしたユーティを女性がむんずと掴む。どこかで見たような光景だなとミランダは思ったが、それよりも、女性が軽やかに笑いながらこのような物言いをする方に気が取られた。

「あの、貴女は一体」
「ああ、まだ名乗っていませんでしたね。私はこのシュティームの

長をしております、ウィンティアと申します。よろしくお願いいたしますわ、皆様」

ウィンティアと名乗る女性は軽やかに笑ったが、手の中ではユーティがぐったりとしていたのだった。

続く

沼地へ、その４～風の精霊～（後書き）

次回投稿は、４／１（金）２２：００です。

沼地へ、その5～方策～（前書き）

～あらすじ～

ユーティの生まれ故郷シュティームに立ち寄る一行。だがそこではニアは治せないと言われ……？

沼地へ、その5～方策～

その後、ウィンティアは歓迎の宴を簡単に催してくれた。何でも人間がこのシュティームに来るのは１０数年ぶりなんだとか。ファランクスがエアリアルを抱えてきたのを除けば、の話である。ミランダもニアの容体を考えれば宴どころではないと知りつつも、ウィンティアの強引さに負け、渋々ながらも承諾したのだった。このウィンティアという精霊、大人しそうな見た目に反しかなり押しが強い。

既にアルフィリース達の目の前には、木の実を中心とした料理が並べられている。妖精にすればかなりの量なのだろうが、いかんせん体の大きさが違うため、アルフィリース達にとっては酒のつまみのようなものだ。

「宴といっても私達は草食ですし、基本的にはほとんど食物を食べなくても生きていける生物ですから、あまり大したものも出せませんが」

「いえ、心遣いだけで十分です。それに、のんびりするつもりもありませんから」

「そうは言っても、あの獣人の娘はまだ動かせません。ユーティが懸命に魔術を使い続けたおかげで容体は安定しましたが、本来であれば今晩くらいはここで泊るべきです」

ウィンティアの言葉を尤もだと思うミランダ。先ほどニアの様子をミランダも見たのだが、少し呼吸が楽そうにはなっているもののせいぜい小康状態といったところで、確かに今夜くらいはゆっくりした方がいいのだろう。だが腕は繋がっているわけではなく、腕の事を考えれば少しでも早く医者に見せたかった。かといって今から

大草原の外に出るのは、とてもではないが間に合わない。しかしミランダには一つだけ心当たりがあった。

「それよりもお聞きしたいことがあるのですが。えーと、ウィンティアさん？」

「『ウィンティア』と、呼び捨てで結構ですよ。私もミランダと呼ばせていただきます」

ウィンティアの口調は軽やかだ。風の精霊だからそのようなものなのかもしれない。品はあるが口調ははきはきとしており、必要があればきついことも言うだろう。特にユーティには厳しい。風の精霊だけに、まさに風当たりがきついと言ったところか。あまり堅くないのは話しやすいので、ミランダにとってはありがたい事なのだが。

ウィンティアもまた、久方ぶりの人間の来訪に内心では心躍っていたのだが、そんなことをミランダは知る由もない。

「じゃあウィンティア。『沼地の魔女』って、心当たりある？」

「『白魔女フェアトゥーセ』のことですね。もちろん存じています。彼女とは交流がありますから」

「よかった、まだ生きてたんだ・・・」

ミランダはほっとする。実はこの大草原の沼地には、まだミランダが傭兵をしている時代に一度勇者達と踏み込んだことがあるのだ。その時沼地の魔女に一行は救われた。よって顔馴染みではあるのだが、魔女という存在に関してあまりミランダは正確な知識を持っていなかったし、あれから既に１００年以上が経過している。当時でも結構な年齢だった魔女だが、普通の人間よりかなり長命であるとはいえ、今でも生きているかどうかはかなり賭けではあった。

理想はこのシュティームでニアの腕がくっつくのが良かったのだが、

ウィンティアにそのようなことはできないらしい。治療を得意とする水か聖の精霊ならなんとかなったかもとは言われるのだが、ないものねだりをしてもしょうがないし、応急処置ができただけでも本来はありがたい。

「しかしよくミランダはフェアトゥーセを知っていますね。彼女は隠れるように住んでいるはずですが」

「ああ、ちょっとしたツテがあってね。ここでニアが治らないとなると、もうあのばあさんに頼るしかないかも」

「そうですね、フェアトゥーセならなんらかの方策があるでしょう。実際そこのエアリアルがこの里に運び込まれた時も、彼女の薬で治療したのですから」

「そうなのか？」

エアリアルにとっても初耳だったのだろう、かなり驚いている。

「知らないのも無理はないでしょう。あの時、貴女はほとんど意識がありませんでしたし。その後状態が安定するまでここにいたのは覚えていますか？」

「ああ、どうりで見覚えがあると思った。ただあの時は木の大きなうろの中の様な所にいて、この光景はそこから眺めるだけだった」

エアリアルが周囲を見渡す。周囲には青々とした木々が立ち並び、葉はうっそうと茂っているのに風に揺られるせいで日の光が絶え間なく葉の隙間から降り注ぐ。まだ季節は夏の暑さが残る時期のはずなのだが、日差しは何かに遮られたように程良い強さに抑えられ、そよ風が木々の間から葉のすれ合う旋律をかき鳴らしながら常に吹いている。晩夏とは思えないほどの快適さだ。

エアリアルのみならず、全員がこの暖かさに心地良さを覚えている。ただ一人アルフィリースを除いては。

「だが一度も外には出ていないぞ。帰りも目隠しをされたしな」
「仕方がありません。ここは本来人間がおとずれる場所ではありませんから。あの時は特別だったのです」
「そうなのか」
「ですが結果的には良い方向に全てが転びました。ファランクスは良い後継者を得ましたし、私達は風の巫女を迎えることができましたから」
「巫女？」

エアリアルは心当たりの無い言葉に、首をかしげる。

「ええ、もっとも巫女と言う言葉はあまり妥当ではありませんね。正確には『精霊守護者候補』でしょうか。あの時貴女が私達の元に運ばれて治療を受けたことで、貴女は風の精霊と契約をしたのに等しいのですよ。貴女の記憶が無い時に、私も含めて風の精霊が随分と世話をしましたからね。あの時からではないですか、なんとなくでも風の魔術を苦もなく使えるようになったのは」
「そういえばそうだな」
「詠唱に関しては人間の書物などから学んだかもしれませんが、実は詠唱をしなくても簡単な魔術なら使えるはずです。これは普通の人間には無理ですから。余程研鑽を積んだ魔術士や、あるいは導師や魔女といった精霊と直接交渉を持つ人間なら別ですが」

それならば無詠唱で魔術を乱発できるアルフィリースはどうなるんだ？　という疑問がミランダとリサの頭には同時に浮かんだらしく、揃って言葉にしようとして思いとどまり、顔を見合わせた。アルフィリースが非常に不機嫌そうにしていたからだ。

そのアルフィリースはそこまで話をじっと聞いていたのだが、やおら立ち上がるとその場を去ろうとする。それを見て慌ててミラン

ダが引き留めた

「アルフィ、どこ行くのさ！」

「飯がまずいからちょっとその辺で適当に取って来るわ。それにこんな量じゃ食べた気にならない。やっぱり力をつけるには肉よね。ユーティも来る？」

「ううん、アタシはいい・・・」

「あっそ。じゃあちょっと出てくるわ。心配しなくても1刻程度で戻って来るわよ」

「あ、でも一人ではここから出られないのでは」

ウィンティアが思いついたように声をかけたが、アルフィリースは気にも留めなかった。

「大丈夫よ。さっき開け方を見たから、もう一人でなんとかできるわ。壊したりはしないから安心なさい、精霊さん」

「そ、そうですか」

それだけ言うとアルフィリースはその場を後にした。彼女が去った後でウィンティアが呟く。

「あれは人間に開けれるような類いの結界ではないはずなのですが・・・彼女は何者です？」

「それが、こっちもよくわからなくなってきたのよ」

ミランダがため息をついて暗い顔をする。一同が黙るが、ウィンティアがさらに気になることを言った。

「確かに運び込まれた獣人の娘は重傷です。ですが今は命に別状はありませんし、腕も治療次第では元に戻るかもしれません。その点

に関してはユーティを褒めてあげてください。この子がいなければ、今頃生死の境をさまよっていてもおかしくありませんでした」
「まあ傷口がすごく鋭利に斬られてたから、アタシも楽だったけどね。アタシに感謝なさい、者ども！」

えっへん！　とユーティがふんぞり返った所に、ウィンティアがユーティを鷲掴みにした。

「だから調子に乗るなと、貴女が生まれた時から何度も言ってるでしょう？」
「ぎゃあああ！　勘弁、ウィンティア勘弁してっ！」
「『様』をつけなさいとも、何度も言っているはずですが？？」
「皆はいいのに、なんでアタシだけー！？」

ユーティがウィンティアの手の中で悲鳴を上げるが、ウィンティアの意識はユーティにはなかった。

「ですが本当に重症なのはあの女の人の方。良くないものが彼女の回りには感じられます。それが何かとはっきり言えないのが、まことに申し訳ないのですが」
「それはアタシも思った」

ユーティが騒ぐのを止めて真面目な口調になる。

「あれはアルフィリースだけど、アルフィリースじゃない」
「どういうこと？」
「うーん、アタシも上手く言えないけど・・・ヒネているっていうのかな。まあアタシもちょいヒネているけど、そういうのとはちょっと違くて。存在が歪んでいるって言うのかな。複雑に色んな因子が絡み合ってて、何とも言いきれないけどね」

「結局わからないのね」
「そう言わないでよ。ただ一つ確実なのは、彼女は今のままでは確実におかしくなるわ。私達を殺しに来てもおかしくない、それだけの邪気を感じるもの。だって、今まではなんだかんだでアタシはアルフィリースの傍にいると落ち着く感じがしてたのに、今のアルフィリースは正直怖いよ。傍にできるだけいたくないと思っちゃう」
「・・・」

ユーティのその言葉は全員の気持ちを代弁したものであったため、揃って黙りこくってしまった。ウィンティアもまた心配からか祈るように両手を揉み絞るが、やはりユーティのことは忘れられているのか、さらに力が入っていた。ユーティの苦しさが限界を通り越し始めているが、それぞれが自分の思いに沈んでいたため、誰もユーティのピンチに気がつかない。
エアリアルがようやく顔を上げた時には数分が経過していた。

「ところでウィンティア。先ほど我に言った後継者と精霊候補者と言う話だが・・・あ」
「どうしました？」
「ユーティが泡を吹いているぞ」
「あら本当」

ユーティはウィンティアの手の中で泡を吹いて気絶していた。ウィンティアがあまりに強く手を握ったからだろう。

「ユーティは大丈夫か？」
「ええ、こうしておけば大丈夫ですよ。えい！」

そういってウィンティアは、ユーティをぽいっと先ほどの泉の方に投げる。ぱしゃんと着水音が聞こえ、ユーティが水面に浮いてい

た。

「あれ、窒息するんじゃ・・・」
「大丈夫です。あの子はあの泉で生まれましたから。仮に死んでいても、あの泉に浸かれば生き返ります」
「本当かな・・・」

ミランダがじっとユーティを見ているがピクリとも彼女は動かず、水面をぷかぷかと漂っているのだった。

＊＊＊

「それにしても意外なところで繋がるわね」
「まったくです」
「白魔女ねぇ」

ミランダ、リサ、ユーティはニアに付き添って看病をしている。ニアが目を覚まし次第ここを出立するつもりで、既に準備も終えていた。エアリアルはウィンティアに話があるとかで離れているし、楓は姿を消している。あくまで陰からミランダを護衛するつもりなのであろう。アルフィリースに至ってはちゃんと戻って来ていたが、この場所が肌に合わないのか、仮眠を取ると告げて入口付近に戻って行った。暗い所の方が落ち着くのだそうだ。

ユーティは泉の水を大きな葉で作った容器に詰め込み、そこにニアの腕を浸していた。こうすることで何日かは腕を腐ることなく、そのまま保存することが可能なのだとか。ニアの腕の切断面は、半日ごとに様子を見れば大丈夫な所までは処置を施しているらしい。それだけでもユーティがかなり有能な治療術の使い手であることはミランダにもわかったが、当のユーティは珍しく謙遜した。

「私が生まれた泉の水があってこその芸当よ。アタシにはそんな力は元来ないから、あまり過剰な期待はしないでよね。生まれてまだ７０年程度なんだから。妖精としては、この集落では相当若い部類に入るのよ」
「ふーん。水の精霊って、この集落には他にいないの？」
「いないわ。アタシが生まれる前には水に限らず、火とか土もいたらしいけどね。ここの集落はそろそろ寿命かもしれないって、ウィンティアが言っていたわ」
「寿命？」
ミランダが聞き返す。
「ええ。たとえ限りなく自然そのものに近い妖精といえども、一所に長くとどまれば世界を巡る元素の循環は妨げられるわ。特に大草原は元々風の精霊に有利な土地だから、風の精霊であるウィンティアがここにとどまることで、この集落の風の元素が強まりすぎたみたい。元々風の精霊は風に合わせて動き巡るものだし、そろそろ移動の時期かもってことよ。それが証拠に、いまや集落で新しく生まれた精霊で、風以外の精霊はアタシだけよ」
「そうなんだ。じゃあユーティも肩身が狭いわよね」
「そうなのよ～」
ふうう、とため息をつくユーティに、リサが容赦なく言葉を浴びせかける。
「そりゃぐれても仕方ないですね、この不良妖精」
「決まり文句は『帰りは遅いぜ！』ってね。っていつの時代の話だ！」
「さらわれた分際で、ノリツッコミも大概にしなさい。それよりニアの腕はいつまでならもちますか」

リサがニアの腕を眺めながら真剣に悩んでいる。ユーティも一転して、真剣な顔になる。

「2日以内。長くて3日。4日たったらもうだめよ」

「短いね・・・それまでに何としてもフェアトゥーセのばあさんを探さないと」

だが気になることをウィンティアは言っていた。フェアトゥーセの姿を、ここ10年ほど姿を見ていないと。沼地には何かあるのかもしれない。それに沼地は広大だ。ミランダの考え通りなら上手くいくかもしれないが、賭けであることに違いない。

「見つかるかな?」

「ここはリサの出番ですね。私のプライドにかけて見つけてみせましょう!」

「かけるのはジッチャンじゃなくていいの?」

「そういうことは言ってはいけないと、ばっちゃが言ってました」

「あんたおばあちゃんいないでしょう!?」

「細かいことはいいんですよ!」

ユーティとリサが取っ組み合いをしている。それを尻目にミランダはため息をついていた。懸念は他にもあるのだ。沼地の魔物に、沼地の蛮族。それにあの白魔女自身が気難しい人物なのだ。果たしてうまくいくのか、心配は尽きなかった。

続く

沼地へ、その5～方策～（後書き）

次回は４／２（土）２１：００投稿です。

沼地へ、その6～追跡者達～（前書き）

～あらすじ～

シュティームを離れ、沼地へと分け入ることになった一行。そんな彼女達を追いかけてくる影が……？

沼地へ、その6～追跡者達～

＊＊＊

アルフィリース達がシュティームに着いたのとほぼ同時刻。アルフィリース達が楓と待ち合わせをしていた場所に近づく一団があった。それは・・・

「ふむ、これはアルフィリースか？」

魔獣達の死骸を見て、魔術の痕跡を調べるのはライフレス。人の所作には癖があるように、魔術の使い方にも個人差がある。魔術士どうしなら、魔術の痕跡を調べるだけでおよそ誰がやったか判断がつくことも多い。ライフレスは直接アルフィリースとやりあったのだから判別出来て然るべきところだったが、不思議な事に、ライフレスにはここで戦闘を行ったのがアルフィリースだとは確信が持てなかった。

「（妙だな・・・俺とやった時とは魔術の癖が違うような気がする。似通った部分がほとんどだが、これほど似て否なるものというのも珍しい。一体これはどういうことだ。アルフィリースにはまだ俺の知らない何かがあるというのか？）」

ライフレスがしばらく考え込むが、背後から声をかける者がいた。

「いかがされましたか、王よ」

声をかけたのは、騎士のように黒い鎧を全身に纏った大男。その

声はとても静かであり、兜で表情は見えないものの、ライフレスに対する忠誠が滲みでていた。

「何、大したことではないぞ、ドルトムントよ。俺としたことが、らしくないな。全てはアルフィリースに会えばはっきりするのだ」
「は。王がそのように楽しみにする敵と、私も早くまみえてみたいものです」
「ふん、相変わらずの戦闘狂だな、お前は」

ライフレスがふと笑う。ドルトムントと呼ばれた男も、表情こそ見えないが、おそらくは笑っているのだろう。

「だからこそ王に仕えることができたのかと」
「尤もな事だ。しかし、よくぞ数百年もの間無事だったものだ。俺も貴様が生きているとは夢にも思わなかったぞ」
「私は鎧を脱げば人間と見分けがつきませんからね。寿命もはるかに人間よりは長いですし、人込みに紛れて各地を転々としておりました」
「何をしていた？」
「人間を観察していました。王が身罷られたとの報告が伝えられた後、揉めるのは目に見えていたので、私は早々に官職を辞して旅に出ました。あの後でどのように世界が流転していくのかには、興味がありましたので。ですが人間達は実に面白い。魔王を駆逐した後は、同族で何百年も続く戦争をしたのですからね。その戦もようやく終結を見ましたので退屈していた時に、王がまだ存命と聞きつけまして」
「聞いた。誰にだ？」

ライフレスが訝しむ。自分とドルトムントの事を同時に知っている者など、いるはずがないのだが。

「少年の様な魔術士でした。名は名乗りませんでしたが」
「・・・奴か」

ライフレスの脳裏に、ファランクスの魔法をいとも簡単に打ち消した少年の顔が浮かぶ。なんの根拠もない推測だったが、半ば確信めいたものをライフレスは感じていた。ライフレスが少年の正体に関して考察をしかけたところで、ドルトムントの疑問が思考を遮った。

「しかし王は今までどちらにおいでで？　あの時我らの軍勢が敵と相討ちになった戦より、とんと噂を聞かなかったのですが。主たる部下を置いて行かれたことから、どうにも王があれで死んだとは思い難かったのですが、証拠も当てもなかったもので」

ライフレスがアルフィリースにも語ったことだが、ライフレスが英雄王グラハムと呼ばれたころ、歴史上ではグラハムにとって最後の戦いと言われるヘルホルムの丘で大爆発が起こり、吹き飛んだ近隣一帯もろとも英雄王グラハムは死んだと言われている。

もちろんライフレス本人がやったことなのだが、あまりに突然の出来事が噂に噂を呼び、より英雄王の伝説を神々しくしたのだ。吟遊詩人達は、英雄王は実は伝説の魔王とあの時戦っていて、命と引き換えに魔王を倒したのだとか、あまりにも強すぎてついに神の怒りに触れたのだとか、好き勝手な伝承が残されている。だがライフレスに言わせればただ一言「魔術が失敗しただけだ」と言うだろう。

実に淡々とした彼は、自分がいなくなった理由もさらりと語る。

「ああ、あの戦争の後は南の大陸に行って、適当に一人で強そうな魔物を見つけては戦いを挑んだり、あるいは魔術・魔法の研究を続けていてな。コツを最後のヘルホルムの丘で掴んだので、どうして

も研究したくてな。それに不老不死の肉体も研究していたので、後のことは正直どうでもよかったんだよ。王というものにも、部下を率いるというのにもいい加減飽きていたしな。だめか？」
「いえ、まことに王らしいかと」
ドルトムントが頭を下げる。ライフレスは話を続けた。
「その研究におよそ２００年。魔法は完成したが、砂漠を一つ作ってしまった」
「まさかヘルホルムの砂漠は・・・」
「ああ、俺が魔法の研究をやったせいだな。研究はあそこの地下でやっていたからな。試し打ちも何度かするうち、砂漠になっていたよ」
「もったいないことを。花の乱れ咲く、綺麗な丘でしたのに」
「それに関しては俺も同意見だ。今度からは場所を選ぶことにしよう」
ライフレスにも芸術を解する心はある。ヘルホルムは当時四季折々の花が咲く美しい丘として有名だった場所なので、そこを砂漠に変えたのは、さしものライフレスとて多少罪悪感を覚えずにはいられなかった。
「その後は？」
「大魔王とか呼ばれていた奴の軍勢に喧嘩を売った」
「何と言う奴です？」
「さあ・・・なんだったかな。とにかく一番近い奴に喧嘩を売ったからな」
「相変わらず大雑把ですな。で」
「大魔王を仕留めたはいいが、奴は死に際に魔法を使いおってな。生意気にも俺を異空間放り込んだのだよ」

「何と！」

ドルトムントが驚愕の声を上げる。

「それは御身の行方が分からなくなるはずです」

「いや、脱出方法自体は割と早くわかったのだが、大魔王と戦ってみてもあまり手ごたえを感じなくてな。これでは外の世界に出ても退屈するだけだろうと思い、そのまま異空間に引きこもったのさ。出てきたのはほんの１０年ほど前だが、それまでは魔術の研究をしたり、思索に耽ったり。むしろこの異空間から俺を出せるような奴がいれば、そいつと戦ってみたいと思った」

「それが、あの『お師匠様』と呼ばれる人物だと？　では戦われたのですか？」

ドルトムントは純粋な興味本位から尋ねたのだが、ライフレスの返答は珍しく鈍かった。

「・・・いや、戦っていないな」

「なぜですか？　正直、我々の中で王が一番の戦闘狂だったではないですか。その王が戦う機会を見のがすなど」

「ふむ、そう言われればそうだな。なぜ俺は師匠殿と戦っていないのだ？」

「？」

そのライフレスの返答に違和感を覚えたドルトムントだったが、エルリッチがその場に現れたことで会話は一度打ち切られた。休暇と言われてもやることなどあろうはずのないエルリッチは、一蓮托生とばかりライフレスと行動を共にした。もっとも最初から共にするしか道はなかったのだ。

「申し上げます」
「うむ」
「アルフィリース達は、この先の妖精の集落に逃げ込んでいる模様です」
「なるほど。あそこには上位精霊の気配があるが、相違ないか？」
「は。風の上位精霊がいるかと」
「そうなると、万一を考えれば出てきた所を叩くのが確実か？」
「それも戦略ですが、時間的猶予がありません」
「どういうことだ？」

ライフレスが咎めるような目つきでエルリッチを見た。エルリッチは少し萎縮しながらも、早口で答える。

「我々が召喚した魔王達の一軍が、そちらに向かっております。どうやら血の臭いを嗅いだのかと」
「これのせいか」

周囲に立ちこめる血の臭い。これほど派手にやれば、勘のいい魔王達は気がつくだろう。血の臭いの元凶である、アルフィリースを追っていったのだ。

「そうなると急ぎたい所だが、確実を期してこいつらを連れてきたのが仇となったか」

ライフレスが背後を振り返ると、そこには大型の魔王が何体も控えていた。計１３体。どれもこれもアノーマリーが試験的に世に放った魔王より強い個体である。ライフレスが自分の手勢が足らない時のために、アノーマリーに造らせておいたのだ。最初に立ち寄った工房だけでは数が半端だったので、その後いくつかを回ってさらにかき集めたのだ。

「仕方がない。使い魔を出して、アルフィリース達が使いそうな逃走経路を探っておくか」

するとライフレスの体から何匹もの鴉の使い魔が湧きだす。そして、次々とシュティームの方向に飛び立っていった。

「後はアルフィリース達が、魔王共などに殺されないことを祈るだけだな。さて、俺らも急ぐぞ」

「「御意」」

そうして歩を進めようとしたライフレスのマントを、引っ張る何かがいる。ライフレスが足元を見ると、白い羽毛の魔獣がマントを引っ張っているではないか。

「ふむ、この魔獣共の子か。一匹だけ生き延びたのか」

「フウウウー！」

魔獣の目は憎しみに燃えており、アルフィリースと同じ人間を攻撃対象とみなしているのだろう。幼いながらに復讐の対象が人間だということは認識したのだ。だが区別まではついていないだろうし、ましてたとえ魔獣といえども、ここまで幼くては人間に傷一つ与えられない。

その掌にのる大きさの魔獣をライフレスはひょいとつまみ上げると、顔の近くに持ってくる。

「さて、どうするかな」

「アノーマリー殿に渡しては？　魔王のよい素材となりましょう」

「それもいいが、それでは普段と同じだな」

ライフレスはしばし魔獣の様子を観察していたが、ライフレスの手の中であらん限りの力で暴れている。ライフレスにも敵意を全力で剥きだしていた。

「エルリッチ」
「はい」
「育てろ」

そう言ってライフレスは、ぽんと魔獣をエルリッチに投げた。エルリッチが慌てて受け止めたが、魔獣は突然の出来事にびっくりして暴れるのをやめてしまった。

「はあ？」
「はあ？　ではない。俺は育てろと言ったんだ。二度言わせるな」
「・・・ご命令とあればそういたしますが」
「よし、いらぬ時間を取った。進むぞ」

戸惑うエルリッチを尻目に、ライフレス達はアルフィリースの首を取るため、一路進路をシュティームに向けるのだった。

続く

沼地へ、その6～追跡者達～（後書き）

次回投稿は、４／３（日）２０：００です

沼地へ、その7～精霊守護者～（前書き）

～あらすじ～

ニアの様子を見ながら出立の準備をする一行。その一方でエアリアルはウィンティアの場所を訪れ……？

沼地へ、その7～精霊守護者～

＊＊＊

こちらはエアリアルとウィンティアが話をしている。先ほどの会話において、エアリアルはウィンティアの発言にひっかかる部分があったため、自らウィンティアの元を訪ねていたのだ。

「ウィンティア。先ほどの会話の中に出てきた、『精霊守護者』について聞きたいのだが」

「ああ、そのことですか」

ウィンティアがにこやかにほほ笑む。だがエアリアルの表情は真剣そのものだった。

「精霊守護者とは、私の様な上位精霊と直接契約を交わした人物のことです」

「上位精霊と契約を交わすとどうなるのだ？」

「まずその精霊の属性に属することになるので、例えば私が貴女と契約を交わした場合、風の魔術をさらに扱いやすくなるでしょう。修練次第では魔法も使えるようになるかもしれません。その代償として、他の属性とは相性が悪くなりますが」

「要は強くなるんだな？」

「強さの定義にも寄りますが、魔術的な技量を考えれば間違いなく上達するでしょう」

その言葉を聞いて得心がいったのか、エアリアルは頷いた。

「なるほど。ならば頼みがあるのだが」
「私との契約をお望みでしたら、お断りします」
「なぜだ！？」

エアリアルが色めきたつ。そんな彼女を、ウィンティアが悲しそうな目で見つめる。

「いずれはそういうこともあるかもしれません。ですが、今はまだ早い。貴女にその準備ができていないからです」
「準備？　どうすればいいんだ？」
「・・・それですよ。その逸る気持ちがいけないのです」

指摘されて、エアリアルははっとする。

「精霊守護者となるには、その精霊と性質、あるいは魂のありようと言ってもいいですが、そこが似てなければだめです。私は風。ゆえに、時に激しく、時に優しく、心は常に風のように自由に変化しなければいけません。また風のように、常に周囲を包み込むような人物でなくてはいけません。貴女は素質、実力ともに申し分ないですが、精神的にまだ未熟。覚悟も足りません」
「覚悟だと！？　覚悟ならとうに・・・」
「いえ、まだです」

ウィンティアはきっぱりと言い切った。そのあまりにはっきりとした言い方に、エアリアルも反論できなかった。

「まず精霊守護者となるための代償の話をしましょう。精霊守護者となれば、まず肉体的に最高潮の状態で成長が停止します。有り体に言えば、不老となるわけです」
「と、いうことは」

「ええ。私が何らかの原因で消滅するか、もしくはさらに上位の存在に昇華するか、さらに貴女が死ぬか。それまでは老いることなく、永久にこの世に存在できます。ですが、それは人として幸せな事ですか？」

「それは・・・」

アルフィリースと生活する中、ミランダの不老不死を知り、その苦悩の一端もエアリアルは聞いている。その時、自分が人間でよかったとエアリアルは内心安堵した。そして不老不死というものが決して良いものではないと、エアリアルは思っていた。人として生き、人として死ぬ。これが人間の本来あるべき姿なら、それがもっとも幸せではないのかとエアリアルは思うのだ。

ウィンティアはさらに話を続ける。

「なお、私はまだこの世に生まれ出て２００年程度。妖精としては異例の速度で上位精霊に昇華しました。ですが、後１０００年はこのままでしょう。もし私と契約を結ぶなら、１０００年は私と共に生きる覚悟をしてもらわなくてはなりません」

「１０００年・・・」

「さらに言うと、私達上位精霊と契約を結んだ者は、実は今までにかなり沢山いるのです。ですが聞いた限りでは、彼らは必ずしも幸せな一生を送っていない。いえ、どちらかというと、悲惨な末路を辿ることが多い。ある者は祭り上げられ、望まぬ戦いを強いられたあげく戦死。ある者は親兄弟に全て先立たれ、生まれ故郷も戦火に焼かれ、天涯孤独の自分の人生に絶望して自決。またある者は、その存在を疎んじられ、生まれ故郷を追放。そしてやはり戦火に倒れたと聞きます。最後まで望む生を全うできた者は、ほとんど耳にしたことがありません。そのような人生がお望みですか？」

「我は・・・」

エアリアルは言葉に詰まった。ウィンティアの言う通り、自分にはまだ覚悟が足りないことがよくわかる。

「だがしかし、我は」

「エアリアル、我々には今少しばかりの時間が必要です。東の国、アレクサンドリアには、現在も土の精霊守護者が人の中で生きていると聞きます。もう２００年は生きているでしょうか。確か女性で、高名な騎士なのだとか。その者に話を聞いて、参考にしてからでも遅くはないでしょう。また魔女や導師も上位精霊と直接に交渉した者達ですが、彼女達の多くは生まれながらに精霊と契約を結ぶ者として育てられています。そういった意味では、貴女とは少し状況が違うかもしれませんが・・・」

「・・・それでは遅いかもしれないのだ・・・」

エアリアルがぎゅっと拳を握った。ライフレス――あの化け物に、なすすべなくエアリアルは叩きのめされた記憶がよみがえる。もしまた奴が襲ってきたら。あるいはファランクスを倒したあの男が来たら。とてもではないが、アルフィリースを守りきる自信がエアリアルにはなかった。

そのあたりの事情をあまりユーティから聞いてはいないのか、ウィンティアが首をかしげた。

「何をそんなに焦っているのですか？」

「実は・・・」

エアリアルは事情を話した。ファランクスの最後、敵となった英雄王の事。その話を聞いて、ウィンティアの顔色が変わる。

「ファランクスが死んだのは風の精霊たちの嘆きから知ってはいましたが・・・そうですか、そのようなことが」

「そうだ。だから我はなんとしてもアルフィリースを守りたい。今度こそ、なんとしても大切な者を失いたくないんだ」
「なるほど、気持ちは分かりました。ですが、大草原とアルフィリース。どちらか選べと言われたら、貴女はどうしますか？」
「えっ」

エアリアルは言葉を失う。それはエアリアルが考えなければならなかった疑問。もちろんその可能性は頭の隅では考えていた。アルフィリースはこのまま旅を続ければ、大草原にはいつまでもいられない。それは彼女が口にした言葉でもあったし、エアリアルとてわかっていたはずなのだ。そして自分はファランクスの後を継いで、この大草原を守っていくことが使命。大草原には蛮族も多いし、いまだに大草原に迷い込んでくる人間も多い。彼らを導き、大草原を守る。それが当然だとエアリアルは思っていた。

だが、あまりにも今は居心地が良すぎる。アルフィリースは大草原で自分の傍にいてくれる。これはエアリアルに取って、もっとも望ましい形。自分がこのまま大草原に一人残るのか、あるいはアルフィリースについて大草原を離れるのか。もはや結論をこれ以上先延ばしには出来ないだろう。

それでもエアリアルに即答はできなかった。エアリアルが惑う様子を見て、ウィンティアがため息をついた。

「やはりまだ悩んでいましたか。なんとなくこれまでのいきさつから想像はしていましたが・・・この問いに即答できないようでは、私との契約はまだまだ先のことですね」
「う・・・」
「とはいえ、そのような事態を黙って見過ごすのも情なきこと。何かしら手を考えてあげたいところですが・・・」

その時、妖精が一匹、慌てて飛んで来た。何かしら慌てた様子で

ある。そしてエアリアルにはわからない言葉で、必死でウィンティアに訴えている。その言葉を聞くにつれ、ウィンティアの表情が厳しい物になっていく。

「・・・エアリアル。すみませんが、すぐにでもここを出て行ってもらわねばならないようです」

「どういうことだ？」

「ここに見たこともない魔物の群れが迫っています。妖精達が知らせてくれました。ほどなくしてここに到着するでしょう」

「なんだと！？」

「戦うにしても数が多すぎます。それに他にもここに近づく者達が。先ほどの話に出てきた骸骨の様な男が、その一団にはいるとのことです」

その一言を聞いて、エアリアルが真っ青になった。ライフレスが追ってきたのだ。もはや一刻の猶予もならない。エアリアルには珍しく、動揺が隠せなかった。

「我らはどうすればいい？」

「まず先ほども話しましたが、ここを出て一刻も早く沼地へ向かうことです。沼地は未開の土地。さしものその男も、何の加護もなく沼地に入っても、迷うのが関の山でしょう。上手くすれば逃げ切れるかもしれません。後はフェアトゥーセの知恵に期待するしかありません」

「わかった。ではすぐにここを出る準備をしてくる」

「その前に」

ウィンティアが右手の腕輪を外してエアリアルにはめる。ウィンティアは二の腕にはめていたが、エアリアルには手首から少し上でちょうどいいくらいの大きさだった。

「これは？」
「私からの贈り物です。私達もこの里を直に捨てますが、この腕輪がいずれ私達を引き寄せるでしょう。私達はまた出会わなければなりません。ユーティの事も気になりますしね」
ふふ、とウィンティアが笑う。普段はどうあれ、ウィンティアはユーティのことを非常に気にかけているのだ。
「わかった。ではまた会おう、ウィンティア」
「ええ。あ、その前にユーティをここへ呼んでください。言うべきことがあるので」
「心得た」
そしてエアリアルが去ると同時に、ウィンティアは目を瞑る。それは今から起こるであろう嵐の様な事態に、覚悟を決めていくようでもあった。
続く

沼地へ、その7～精霊守護者～（後書き）

次回投稿は４／４（月）２２：００です。

沼地へ、その8～上位精霊への道～（前書き）

～あらすじ～

ウィンティアから未熟さを指摘されるエアリアル。そしてユーティはウィンティアと何を語らうのか……

沼地へ、その8～上位精霊への道～

＊＊＊

そしてしばらくしてユーティがウィンティアの元にやってくる。

「何、ウィンティア？　皆が慌ただしくしているけど、何があったの？」

「来ましたね、ユーティ」

「（あれ、怒られなかった？）」

「様」をつけなさいと怒られるとばかりユーティは思ったのだが、ウィンティアの表情がいつになく真剣だった。ウィンティアのこのような顔は、生まれて此の方、ユーティは見たことがなかった。

「ユーティ、貴女はこの後どうするつもりです？」

「え？　ニアのこともあるし、アルフィリース達に付いて行くよ？」

「ニアが治ったら？」

「う～ん・・・・・あんまり考えていないけど、ここには正直アタシの居場所はないし、そのまま付いて行ってもいいかなって思ってる。アルフィリースは色んな所に行きそうだし、彼女達と一緒にいると退屈しないしね。それに、アルフィリースも正直危なっかしくって放っておけないし。なんでそんなこと聞くの？」

「もうじきこの里は戦火に包まれます」

ウィンティアのその言葉に、ユーティもまた真剣な顔になった。そしてみなまで言わずとも、ユーティは先ほどのエアリアルの表情も含めて、全てを悟ったのだ。ユーティは普段こそふざけてはいる

ものの、頭の回転だけをみれば、実はアルフィリース達の中では一番早いのだ。

「アタシはどうしたらいい？」

「それはユーティが決めるべきことです。アルフィリース達について行くもよし、我々と行くもよし。元からユーティは自由にやってきたでしょう？」

「それはそうだけど。でもこんな大事は想定してなかったし・・・」

「ならば聞き方を変えましょう。ユーティ、貴女はまだ上位精霊になりたいと思っていますか？」

ウィンティアの真剣な顔に、ユーティもおふざけなしに真剣に答える。

「それはもちろん」

「なぜ？」

「アタシは他の妖精みたいに、毎日木の実を取ったり、葉っぱの枚数を数えたり、川の魚や森の動物と戯れて時間を過ごすのがイヤだ。自然と一緒にいるのは好きだよ？　アタシだって妖精のはしくれなんだから。でもアタシには自分の意志がある。自由に飛びまわれる羽根だってあるし、もっと色んな世界を見てみたい。自然だけに囚われて一生を過ごし、やがて自然と一つになって消え去るなんて、まっぴらごめんだわ。もっと別の存在としてこの世界に関わってみたい。そのためにアタシは上位精霊を目指すの！」

ユーティの目が強い光を伴ってウィンティアに意志表示をする。その目に確かな覚悟をウィンティアは見て取ると、ユーティの小さな手を取った。

「ユーティは昔の私に似てますね」

「えー？　アタシ、ウィンティアみたいに堅物じゃないよ？」
「むしろ上位精霊としては、私は破天荒な部類だと思いますが。とりあえずそのことは置いておきましょう。実は私が妖精だったころ、私は貴女より無茶をよくやっていました」
「え、そうなの？？」

これにはユーティも驚いた。何かにつけてユーティの行動を窘(たしな)め、時には尻叩きの刑に処された記憶のあるユーティにとっては、ウィンティアは躾(しつけ)の厳しい親も同然だった。

「そういえば、ウィンティアの昔って聞いたことないかも」
「それはそうでしょう。私はこの里のシュティームの生まれですが、この里には１０年といませんでしたから」
「え、じゃあ何してたの？」
「シュティームを飛び出して、人間と旅をしていました」
「ぶっ」

思わずユーティが吹き出した。まさかそんな無鉄砲な事をウィンティアがやるとは。妖精は基本的にあまり人間と関わることを禁止されているのだが、まさか里の長であるウィンティアが自らやっていたとは、さしものユーティも考えたこともなかった。

「人の事言えないじゃん！」
「そうですね。ですが、ここから先は真面目な話です。ユーティが上位精霊になるために必要な話でもあります。心して聞きなさい」
「・・・わかった」

いつになく真面目な顔になるウィンティアに、ユーティも居住いを正し、空中で正座の恰好をする。そしてウィンティアの口からは衝撃の話が語られていった。

「私は以前、人間に恋をしました」
「はぁ？」
「・・・真面目に聞きなさいと言ったはずですが？」
「え、ああ。ごめんごめん。余りに想像の斜め上をいったものだから、つい」

ユーティが慌てて手を合わせて、ごめんなさいの意志表示をする。

「・・・まあいいでしょう。シュティームを飛び出した私は、そのまま大草原も飛び出しました。そこで鳥を捕まえるための罠に引っ掛かり、身動きが取れない状態でした」
「・・・人の事言えないジャン・・・」
「何か！？」
「いや、なんでもないから続けて！」

思わず本音が出たユーティが、慌てて手を振って話を促す。ウィンティアもため息を一つ交えて話を続ける。

「そこに通りかかったのは、行商をしている若い人間でした。彼は私を助けだしてくれ、私は彼に恩を返すために、しばらくの間旅に同行することにしました。私は彼に危険が迫るとそれを告げ、彼はその度逃げる。まだそこら中に戦火が絶えない時代、何度も危険な目に会いましたが、彼と私は何度も危機を共に乗り越えました。そしていつしか私達は旅のパートナーとなり、私は彼の素直な人柄に魅かれていきました。私は彼の傍にいたくて上位精霊を目指したのです。同じ背丈、同じ目線になれば彼に愛してもらえるかと」
「・・・」
「彼は行商をしているくせにまったくのお人好しで、自分の商品を安く買いたたかれて損をしても構わないといった感じでした。その

せいで何度飢え死にしかけたか。その度私は忠告するのですが、彼はいつもこう私に言うのです。『僕が売っているのは商品じゃなくて、希望なんだよ。僕にお金が入らなくても、僕の商品で幸せになる人がいるなら、それはそれでいいじゃないか』と。

確かに彼の人柄は、色々な場所で人々の笑顔を呼びました。損をしたこと、騙されたこともよくありましたが、当時戦争の中で行商をした者は少なかったですし、彼の存在は徐々に重宝されるようになっていきました。また私という妖精が同行していることもあり、彼の名声は徐々に高まっていったのです」

「・・・」

「そして少しずつ貯金もできて、行商の仕事が軌道に乗ってきたある日のこと。彼は盗賊に襲われました。徐々に名前が売れてきているから、傭兵か何かを雇った方がいいと私が口を酸っぱくして何度も忠告したのですが、彼は最低限の資金以外は全て孤児院などに寄付してしまう人で・・・その時もなけなしのお金しか持っていなかったのです。私はその時ちょうど木の実を取りに出かけていて、彼は森の中でたき火の準備をしていました。でも私が帰った時には、既に虫の息の彼を見つけたのです。

私は自分に力が無いことを呪いました。彼を襲った盗賊も憎かったけど、それ以上にどうして自分の言うことを聞いてくれなかったのかと、瀕死の彼に八つ当たりしました。すると彼はこう言ったのです。『精霊を奥様にしようと思ったら、僕はもっと立派な人間じゃないとだめかと思って』と。その時、初めて彼も自分と同じ気持ちだったと知り、私は彼の傍で泣きました。そして彼が死ぬと同時に、私は上位精霊となったのです」

「どうして・・・」

ユーティが言葉を失くした。ウィンティアは当時の事を思い出したのか、涙を一筋、頬に伝わせる。

「妖精と上位精霊の違いを知っていますか、ユーティ？」
「上位精霊の方がより自然に近いと思っていたけど・・・」
「それはある意味では合っています。ですがそれだけではなく、私達は意志ある自然の守り手なのです。決して自然のためだけに動く物理的な法則ではなく、この大地全てのために動く存在でなくてはならない。だからこそ明確な意志が必要なのです。ですが妖精は自然から生まれ出るモノだから、生まれた当初に明確な自我を持たない者が多い。今でもこのシュティームの妖精達は自我をほとんど持たず、個体差がないでしょう？　つまりユーティのような存在は異端なのではなく、むしろ貴女の様な妖精こそが、さらなる昇華を遂げるための個体なのです。そしてそのような個体が新たな感情を獲得し、切にさらなる力を望んでこそ、初めて上位精霊たる資格を得られる。私の場合、その感情は『悲しみ』でしたが」
「そんな理由があったんだ・・・・・・」

ユーティが腕を組んで考え始めた。そう考えると、ユーティは今まで色々な事をウィンティアから教わった気がする。我慢とか、節度とか、規律など、ユーティには無縁だった感情をこそ、ウィンティアは教えようとしていたのかもしれない。

「ですが、やはり感情を知るなら人間と関わるのが一番いい。人間は、この地上でもっとも感情豊かな生物。きっと彼らこそが、私達を上位精霊へと導く鍵になるのでしょう」
「と、いうことは・・・アルフィリース達と一緒に行くのが良いってこと？」
「そうですね。きっとそうなのでしょう」
「なんだ！　今までと変わらないじゃん！」

ユーティがぱっと微笑む。

「それなら、アタシがアルフィリース達の面倒をしっかり見ないとね！　あの子達ってば、なんだかんだで危なっかしいから」
「ユーティにだけは言われたくないでしょうね、彼女達は」
「フンだ！　私がいないと駄目だって、絶対に言わせてやるわよ！　じゃあ、あの子達に付いて行って来る！！」

そしてユーティがアルフィリース達の方に飛び出していく。その姿を見送りながら、まるでクラストンの実が種を飛ばす時のように、一度飛び出したら帰ってこない子だなとウィンティアは思ったが、ユーティの声が見えなくなった所で、彼女が叫んできた。

「ウィンティアー！」
「？」
「今までありがとうー！　また絶対顔を見せに来るからねー！！」
「ふふ、あの子ったら」

既にユーティの気配はなく、もう行ってしまったのだろう。彼女は照れていたのか、面と向かっては決して言わなかったが、ウィンティアにしろそれは少しありがたかった。きっと面と向かって言われたら、ウィンティアも泣いてしまったろうから。

「また会えるわ。きっとね」

そしてウィンティアも妖精たちに命じて、里を撤収する準備に入るのだった。

続く

沼地へ、その8～上位精霊への道～（後書き）

次回投稿は、４／６（水）０：００です。この時間帯に投稿するのは久しぶり。

沼地へ、その9～沼人～（前書き）

～あらすじ～

沼地へと分け入っていくアルフィリース達。そこで彼らに襲い来る者とは……？

沼地へ、その9～沼人～

＊＊＊

既にアルフィリース達はシュティームを後にしている。アルフィリースが「戦いたい」とぐずったが、ニアの調子がそれどころではないし、馬の数に余裕がない事、ライフレスが追撃していることを伝えると、しぶしぶながら沼地へ向かうことに納得した。

後は変わったことと言えば、

「ユーティは私達と一緒に来るのですか？」

「当たり前よ！　私がいないと皆どうするの？」

リサのセリフにユーティが胸を張るが、

「別にどうも？」

「いてもいなくても、ねぇ？」

「鍋の具が一つ減るかどうかの違いだな」

「さっそくこの言い草だよっ！」

と、ユーティがふてくされたくらいのものである。もちろん皆の冗談だが、このぐらいがすぐ調子に乗るユーティにはちょうど良いのだ。

そして一行は沼地へ向かうわけだが、シュティームを出てから既に結構な時間が経っておいる。既に夜だから周囲は当然暗いのだが、それにしても闇が深い。松明の光もあまり周囲を照らし出さず、それはきっと夜だけのせいではないのだろう。足場は徐々にぬかるみ始め、木は徐々に歪で不気味な形に歪んできており、湿地帯へと入

ってきた様相を呈している。帰らずの沼地は近い。

「どうどう」

「ここからは馬を引いて歩いた方がいいかもな」

「ええ、馬が足を滑らせるわね」

馬が思うように速度を出せなくなったのを見て、各自が馬から降りて手綱を引く。ニアだけはまだ歩かせない方がよさそうなので馬の上に残し、安静にさせておいた。

「それで、ミランダのあてというのを説明してもらおうか？」

エアリアルが質問する。大草原の守人であるエアリアルといえど、帰らずの沼地は管轄外である。ファランクスの時代から、あそこには立ち入るなと教えられてきた。土地としても不気味だし、ここの住人は特殊な能力を有しているのか、所在がとんと知れないのだ。さらに、最近では妙に強力な魔物が出るとの話もあり、不可侵の領域となっている。

そんな場所をどうやったら抜けられるのか、エアリアルにも興味があることだった。

「別になんてことはないわよ。大昔、うちの教会が沼地へ遠征して、その時にここの蛮族を成敗しているのよ。昔はこの沼地の住人は、積極的に他の土地へ侵略する種族だったらしいわ。それが目に余るから、当時の最高教主が成敗したって記録にあるの。その時に他の土地へ侵略しないことと、アルネリア教会関係者には何があっても手を出さないことを約束させた。それがあてよ」

もちろんミリアザールが成敗したのである。その後、この沼地を北から南へ通り抜けたミリアザールとその一行がファランクスを助

けるのだが、その事はなんとなくミランダには想像がつきつつも、伏せておいた。ミリアザールのことは、まだリサしか知らないのだ。

「へぇ～、ちなみにいつの事？」

「記録によると、今から５７０年ほど前のことよ」

アルフィリースの少し小馬鹿にしたような質問に、多少むっとしながらミランダが答えるが、その答えを聞いて全員が不安げな顔をする。

「その約束はまだ生きているのか？」

「・・・２００年前にアルネリア教会が沼地に関わった時には、まだその約束は生きていたと記録にあるわ。その後は知らない」

「で、フェアトゥーセとかいう魔女の住処は？」

「おそらく沼地の中ほどだわ。詳しい場所は私もわからないけど」

「お話になんないわね。雲をつかむような話だわ」

「そんならどうしろって言うのさ！？」

アルフィリースのセリフに、ミランダが苛立ちを隠せない。リサが思わず窘めたが、アルフィリースはそこまであてどない話なら私を巻きこんでくれるな、ライフレスと戦っていた方がましだった、と目で訴えていた。

「沼地は広い。蛮族に話が通じなかったらおしまいだぞ？」

「わかってる！　アタシが交渉してみるよ」

ミランダがアルネリア教のシスターの恰好に着替えていく。その恰好でないと、アルネリア教会関係者だと信用されないと思ったのか。

今までは比較的旅の行き先が決まっていたし、あるいは案内があ

る旅だった。だが今回は薄氷の上を歩くように不安定な道のりだ。それもあってか全員が不安を隠せない。そんな中、リサがさらに言葉を発する。

「それよりも沼地の魔物と、『沼人』は、沼に人間を引き摺りこんで食べると聞いたことがありますが」

「事実だと思う。実際に征伐した時も、そういうのが理由だったらしい」

ミランダの答えを聞いて、リサが表情を強張らせる。沼地の沼人は蛮族として中原でも名前だけは有名である。昔は魔王に与する数少ない人間として、忌み嫌われた存在だ。もっとも人語を解すのかどうかも定かではないし、人間を食べたりすると言われる所からも、本当に人間かどうかすら怪しい。大戦期が過ぎてからは滅多に姿を見なくなっているそうだが、今でも時々若い人間をさらっていくという話は聞くので、存在はしているのだろう。もっとも伝説に近い状態ではある。

「話が通じなかったら」

「・・・私の腕のことはいい。皆の安全を優先してくれ」

ニアが目を覚ましたのか、あるいはずっと聞いていたのか。話すのもまだ少しつらそうだが、自分が足手まといになってはと、必死の表情だった。

「それにしても、なんでこんなに体調悪いかなぁ？　獣人って生命力強いし、確かに腕が切れた後応急処置程度でかなりの長距離を移動したけど、こんなに悪いはずがないんだけどなぁ」

「ニアの腕を切った風の魔術に、闇の属性が入っていたのよ。闇の属性は、人間や獣人には毒だから」

ユーティの問いにアルフィリースが答える。その言葉にぎょっとするユーティだった。

「そんなことに気付いているなら、なんで早く言わないのよ！？」

「言ってもどうしようもないでしょう？　魔術による毒は魔術でしか消せないし、闇属性は闇か光でないと打ち消せない。私やミランダは回復魔術を使えないし、ユーティは水でしょう？　言ってもどうしようもないことは口にしない性格なの、私」

「それでもっ！」

ユーティが何かを言いかけた時、その体をアルフィリースが掴む。

「むぎゅうっ！」

「シッ」

アルフィリースが全員を制した。どうもどこか空気がおかしいことを察知したようだ。

「リサ、気配は？」

「いえ、何も・・・」

一面は既に足先が埋まるくらいの沼地にはなって来ている。そう深いわけではないが、歩きにくい事この上ない。だが沼地が深くなるにつれて、不思議な事に徐々に木が多くなっている。普通の湿地帯ならば気は枯れ木になり本数も減っていくはずだが、逆に木は生い茂り、生命力を感じさせない黒いような葉が多かった。木の形も歪になり、まるで伝説の呪われた森にでも迷い込んだようだ。湿度が高く、泥のせいなのかよくわからない、何かの腐ったような嫌な臭いが立ち込めている。

「・・・いるわよ」
「リサは何も感じませんが・・・」
「使えないセンサーね。沼の下よっ！」

アルフィリースが叫ぶと同時に、全員の体が突然沼地に腰まで沈んだ。同時に、沼地から巨大なヒルのようにぬめぬめした胴体と、のこぎりのような歯がついた、大蛇ほどの大きさの魔獣がアルフィリース達を囲むように姿を現す。

「うわあっ！」
「何ですか、アレは？」
「沼ヒル？　にしても、大きすぎる！」
「くそっ、身動きが取れない！！　急に沼が重くなったぞ？」
「当然よ。魔術だもの、これ」

アルフィリースがしれっと答える。アルフィリースだけは体が沼に沈んでいなかった。

「なるほど、水、土、木の複合魔術か。対象を捕えるための方法だろうけど、これは効果的ね。解呪（ディスペル）しにくいわ。センサーも防げるようだし。こんな陰気な土地に引きこもってるただの蛮族だと思ってたけど、なかなかどうしてやるじゃない」
「アルフィ、呑気な事言ってないで、なんとかしなさいよっ！」
「・・・うるさいわね。言われなくても何とかするわよ」

ミランダの怒声に、ため息交じりに答えたアルフィリース。眼前には沼ヒルが迫る。

「雑魚がっ！」

だがアルフィリースがパチンと指を鳴らすと、１０匹以上いたヒルが一斉にはじけ飛んだ。アルフィリースが目の前に電撃で防衛線を張ったのだが、あまりの早業に他の人間には弾け飛んだようにしか見えなかったのだ。

そしてさらに沼地からは大物が姿を現す。目が６つ並んで付いている、巨大な鰐のような生物である。だが体の割に妙に頭が大きく、さらに足と尻尾を器用に使って立ち上がっている。だがアルフィリースが睨みつけると、その生物も前進が止まり、怯えたように固まってしまった。

「大したことないわね。もう終わり！？」

アルフィリースが周囲に叫ぶ。すると沼からは今度は人が浮かび出てきた。驚いたことに、その男の体は灰色だった。泥が体に付いているだけではない、本当に灰色の体をしているのだ。その男は粗末な腰巻をしているだけで、手には蔦で作ったムチを持っており、先ほどの鰐に必死でムチを入れている。だが鰐はアルフィリースを見たまま、ピクリとも動かない。動けないと言った方が正しいのか。

さらに沼からは次々と人間が出てくる。今度は様々な武器を手にしており、槍、弓が主だった。さらに顔には何かの骨でできた仮面をかぶっている者もいる。彼らが手を合わせると、沼が蠢き、アルフィリースの体に、蛇のようになった泥が撒きつこうとする。だがそれすらも、アルフィリースがその内の一つを握ると、全てがただの泥に戻ってしまった。その様子を見て、さすがの沼人にも動揺が走る。

「はっ！　全ての元素を操るこの私に、この程度の魔術で挑もうなんて片腹痛いわよ。この沼地の肥やしになるがいい！」

アルフィリースが手に雷球を作り出す。その様子を見て沼人達が慌てふためくが、既に戦いの歓喜に目覚めたアルフィリースは、逃げようとする沼人にも容赦がなかった。

「死ねぇー！」

「駄目！！」

ミランダが飛びついてアルフィリースの魔術を止める。そのせいで狙いがそれたアルフィリースの雷球は、はるか上の木に直撃して爆発した。その周辺の木が吹き飛び、暗かったはずの沼地に日が指す。いつの間にか、夜が明けていた。ライフレスと戦ったのが2日前の深夜、シュティームに辿り着いたのがさらに夜だったので、丸二日ほぼ移動づくめだったらしい。

射した光がアルフィリースとミランダを照らす。

「ミランダ、何をする？」

「殺しちゃだめだ！　それこそここから打つ手がなくなる」

「私に逆らったのよ、こいつらは！？」

「それでも！　我慢なさい！」

ミランダが一歩も引かない剣幕でアルフィリースを制する。しばらく続く睨みあいの中、アルフィリースが妥協した。

「・・・いいわ、引いてあげる。でも、次はないわ」

「・・・そう」

アルフィリースは舌打ちをしながら引き、先に沼から脱出したエアリアルがリサや馬を引き揚げるのも、手伝おうともしなかった。

そして残ったミランダが声を張り上げる。

「誰か話を出来る者はいないか!?　アタシはアルネリア教会の司祭、ミランダだ!」

　すると、沼人の中に動揺が走る。やがて後ろから、少し歳を経た容貌の男が出てきた。だがよくよく顔を見ると、沼人の多くは目が悪いのか、目の色も白く濁り、瞼は腫れぼったい。年齢が外見からはわかりにくく、だが体の装飾が多い者が何やら話し合うところから、身分は装飾の多さであらわされるのだろうと想像できた。
　やがて一番多くの装飾を付けた者が、ミランダの前に立つ。

「アルネリア教会・・・し、証拠は?」
「汚れちまったがこのローブと、身分証ならあるけどね。でもアンタ達が知っている時代の物とは違うかも」
「白いフードとローブ、金の髪・・・い、いいだろう。お前をアルネリア教会の人間と、み、認めてやろう」
「へえ、そんな簡単に認めていいのかしら?」

　少し疑い深げにミランダが男を見つめる。だが男は気にしていない様子だった。

「か、構わん。ど、どの道、俺達には細かいことはわからん。ただ、白いフード、ローブ、金の髪の女はみ、見逃すことにしている。そ、そういう約束だ」
「それ以外なら?」
「お、俺達の里に連れて帰って・・・ぐふふ」
「あー、いいや。言わなくって」

　男が不敵な笑みを浮かべたので、その先はなんとなくミランダには知れてしまった。だそんな適当な約束だとは思わなかった。もっともこの沼人にあまり細かな約束事は覚えられないのかもしれない。

それでも６００年近く守られているのだから、大したものだろう。
それだけ徹底的にミリアザールが暴れたのかもしれない。何をやったかちょっとミランダが考え、悪鬼のごときミリアザールを想像して身震いする。容赦のない折檻のことを考えたら、ちょっと沼人が気の毒にさえ思えた。

「（ファランクスといい、沼人といい・・・ホントにどこにでも出没してるね、あのババア）」

半ば感心、半ば呆れるミランダに、沼人達が話しかけてくる。

続く

沼地へ、その9～沼人～（後書き）

次回投稿は、４／７（木）０：００です。

沼地へ、その１０～沼地の魔物～（前書き）

～あらすじ～

沼人の協力を得ることに成功したミランダ。白魔女の元へ向かう途中で、一行が遭遇したのは……？

沼地へ、その１０～沼地の魔物～

「そ、それで・・・この沼地に何の用だ??」
「そうだった。白魔女のフェアトゥーセを知っているかい？　結構なばあさんだと思うんだけどさ」
「もちろんだ。お、俺達も、世話になっている」
「そこまで案内してほしい。もちろん連れも一緒にね」
「い、いいだろう。馬がいるのか・・・ならば、ふ、船を出そう」

男が何やら合図すると、沼地の中から船が何艘か浮き出てくる。そしてその船をひっくり返して泥を落とすと、ミランダ達に乗るように促してきた。

「フェ、フェアトゥーセの所まで俺達が漕いで行ってやる」
「お、気がきくね」
「そ、そうしないと、あの女が来ると言ったからな。約束を破るような事があれば、お、俺達を皆殺しにして木に吊るすと言っていた。当時のあの女の暴れ方は、ど、どんな沼の魔物よりも恐ろしかったと、長老がずっと代々伝えているんだ」
「そりゃまた・・・」

ミランダはちょっと呆れつつも、そのおかげで今こうして助かっているのだから文句は言えないなと思った。それにしても、ミリアザールはいったいどのような暴れ方をしたのか。アルネリアに帰ったら聞いてみたいなと思うミランダだった。

そこからの旅はのんびりしたものだった。沼人達は沼に棒を突き立て船を漕ぐのだが、まるで河を下るように滑らかに船は進む。軽く馬を駆けらせるくらいの速度だ。木が密生しているわけだが、そ

の隙間を器用に縫って船は進む。どうやら彼らにしかわからないようなルートがあるのだろう。これだけ木があるにもかかわらず、ほとんど木を切り倒すような作業をしなくてよかった。

そのままどのくらいの時間を進んだのであろうか。薄暗い沼地では時間間隔がない。既にだいぶ沼地の奥に分け入ったのか、周囲は夜のように暗いし、魔獣か何かの不気味な泣き声が頻繁に聞こえてくる。さしものユーティも口数が少なくなっていた。

「ぶ、不気味だよう～」

「ですね。リサもちょっとおっかなびっくりです。そこいら中に生き物がいますし、私達の後をずっとつけてきている生き物もいるのですよ」

「え、ええ～？」

「まあ仕掛けてくることはなさそうですが、せいぜい私達が何かにやられた時に、死肉をついばむつもりなのでしょう」

「怖い事言わないでよう・・・」

「（そんなことより、先ほどどうやってアルフィリースはリサより先に沼人の気配を察知したのでしょうか？　まったく、謎は深まるばかりですね）」

リサは周囲の様子よりもその疑問が気にかかっていた。元々が盲目なリサには周囲の明るさや不気味さは関係ない。だが、沼地の中にはセンサーが元々効きにくいのか、リサもやや落ち着かなさそうだ。そんな様子を見て、沼人が仏心でも出したのか、言葉をかけてきた。

「し、心配するな。ここの生き物で、お、俺達に逆らうのはほとんどいない。ぬ、沼地の主は俺達だからな」

「なるほど。それでこれだけ回りに生き物がいるにも関わらず、殺気がほとんどないのですね」

「そ、そうだ。だが、れ、例外もいる。それが・・・い、いかん。」
「？」

沼人が急に慌て始める。と、同時に周囲には突然霧が立ち込め始め、あっという間に視界を奪っていった。出ている船は5艘。ミランダ達を2分割し乗せ、馬用の船が3艘である。だが、既に濃く立ち込めた霧で全くお互いの船が見えなかった。それどころか、ユーティの隣にいるはずのリサの姿までもが、ほとんど見えなくなっている。

「な、何これ？」
「？　センサーが急に効かなく・・・」
「い、いいかおまえら。何があっても騒ぐんじゃないぞ。さ、騒いだら、全員死ぬからな！」
「何事だ！？」
「さ、サーペントだ！」

男のその言葉を最後に、周囲からは音が消え去った。船はどうやら限界まで端に寄せた様で、そのまま声を沼人達は潜めてしまった。あれほど周囲にいたはずの生き物たちもいまや音を潜め、周囲からは生き物という生き物全てがいなくなったようだった。

そしてやがて、規則的に船が揺れ始めた。この重たい泥をして、波が立っているのだ。波は徐々に大きくなり、そして船が傾くほどの大きさになっていく。リサは必死で船につかまったが、同時に一緒に乗っているニアも落とさないように捕まえていた。そして、傍にはとてつもなく大きな生物の気配が近づいてくる。

「（何か・・・いる！）」

リサがその気配を察知した瞬間、横を通り過ぎようとしたその生

き物が停止した。リサは自分の心臓が早鐘を打つのを感じ、全身からは汗が噴き出してきていた。緊張のあまり呼吸するのも息苦しく、体がカタカタと震えるのが自分でもわかる。だがそれはニアやユーティも同じようで、自分とは別の震えをしっかりとリサは感じていた。だからこそ、怯えているのは自分だけではないと、少し安心もできたのだ。

「（この気配、ファランクスより大きくありませんか？　いえ、下手すると・・・ライフレスより？　そんな馬鹿な）」

リサが自分の能力を疑いかかった頃、再び生き物が動き始めたのか、また一際大きな波が立ち、やがて波が治まって行った。そして同時に霧も晴れていく。

「も、もういいぞ・・・」

沼人のその声と共に、全員が息を大きく吐き出す音が聞こえた。誰一人生きた心地すらしてなかったのだ。アルフィリース一人を除いては。

「なんだったんだ、今のは？」

「姿が霧で見えなかった。だがとてつもなく大きかったような・・・」

「さ、サーペントだ」

沼人が額の汗をぬぐいながら答える。

「あれも沼の魔物か？」

「いや、あれが現れたのはここ２００年くらいの話だ。そ、それまではあんなのはここにはいなかった。それからだ、こ、この土地に

俺達の言うことをきかない生き物が増えたのは。あれが一番やばい奴だが、ほ、他にもいっぱいいるぞ」

「なるほどね。早いところフェアトゥーセの所に行った方がよさそうだ」

「そ、そうだな。それにしてもサーペントと出くわして無事なのは、う、運がいい」

そして沼人はまたしても船を漕ぎ始めた。安堵する全員の中で、アルフィリースが誰にも聞こえないように呟く。

「なぜだろう・・・なんだか、懐かしかったような気がする・・・」

だがその言葉は、誰の耳にも届くことはなかった。

＊＊＊

その頃、シュティームは魔王の群れの襲撃に会っていた。美しかった木々は焼かれ、あるいは腐り、妖精たちは逃げ惑い、既に数刻前の様相は見る影もなかった。それでもウィンティアの指示で既に大半が逃げ出していたため、妖精達に大きな被害はなかったのだ。

だがウィンティアは全ての妖精が脱出するまで、この場所を見届ける義務があった。また、自分が築いた里を最後まで見届けたいと思ってもいた。そして当然のこととして、その場に佇むウィンティアと、背後に隠れる精霊達を魔王達がじりじりと取り囲む。彼らが一斉にウィンティアを攻撃しなかったのは、ウィンティアから来る威圧感が凄まじいためであった。精霊は自発的に他者に関わるのは原則的に禁じられているが、求められれば応じることがあるのは、ニアを助けた例を考えてもわかるだろう。積極的な攻撃に関してもそうで、力が強いからこそ自分の存続の危機に至るまでは決して自発的には攻撃をしない。例え目の前で自分の眷族が殺されようが、

里が滅ぼされようが、それは絶対の掟だった。
それでもウィンティアは怒りの眼差しで魔王達を威圧していた。
自分にまで手を及ぼすつもりなら、その時こそは容赦しないぞ、と。
それがわかっているから、魔王達も本能から手出しを躊躇っているのだった。
その拮抗状態を崩したのは、男の声。

「何をやっている・・・」

その声に魔王達が反応し振り返ると、そこには少年が立っていた。
反射的に一体の魔王が跳びかかったが、横にいた巨漢の鎧の騎士が、その頭を素手で叩き潰した。

「ドルトムント、やりすぎだ」
「これは失礼を。王に手だしするなど、無礼千万の輩につい」

鎧の騎士は膝まづき、臣下の礼を少年にとる。その圧倒的威圧感に、他の魔王達が思わず道を開けた。

「ふむ、上位精霊か。名を聞こう」
「随分と尊大な態度の人間ですね。自分が精霊に命令できる立場だと思っているのでしょうか？」
「そちらこそあまり舐めた口を聞くなよ？　神格を得るような上位精霊ならともかく、たかが並の上位精霊ごときが俺に勝てると思っているのか？　だいたい貴様ごときを消し飛ばした所で、俺の魔術には何の影響もないのだからな」
「くっ・・・」

だが少年――もちろんライフレスであるが、彼の言い分は尤もである。ウィンティアと直接契約をするような精霊魔術を行使するよ

うな者がウィンティアに害を成すのは、自分の足元を自ら崩すような行為だが、ライフレスは精霊魔術に限らず理魔術や暗黒魔術まで行使できる。さらに風の上位精霊といってもウィンティア一人だけではないため、実際に上位精霊を消滅させた所で使用する魔術に影響が出ることはほとんどない。普通の人間ならば上位精霊と直に口を聞いただけでも感動的な出来事なので、そんな大それたことを考えようとは誰一人思わないだろうが。

ウィンティアもまたライフレスの話を聞いているし、目の前の男がそうだと予想も付いている。それに直に見た感想から、とてもではないが対抗できるような人物ではないことがよくわかった。それでも精霊の誇りにかけて、人間のいいなりになるわけにはいかない。

「・・・」

「だんまりか、気の強い精霊だ」

「吐かせますか？」

「よせ、ドルトムント。あまり精霊に嫌われるのも得策ではあるまい。それに逃げるだけならこの精霊はいつでもできるよ」

立ち上がりかけたドルトムントをライフレスが片手で制し、ウィンティアをじっと観察する。

「ふむ、見目は好みだがな」

「・・・汚らわしい目で見るな、下郎」

「そういうつもりではない。単純に褒めただけだ、そう気分を害するな。それに俺はもっと儚げな女が好きでな。お前みたいに気の強い娘はあまり好みではない」

嘲笑気味に笑うライフレスにかっとなりかけたウィンティアだが、思いとどまりもう少し目の前の少年の様な男を観察することにした。

そうして睨みあうこといましばらく、ふいにライフレスの元に一

羽の鴉が舞い降り、鳴く。

「ふむ・・・そうか、アルフィリースは既に沼地に入ったか」
「なんと？　いかようにして」
「どうやら沼人が協力したようだな。どうやったかはしらんが。どうやらすぐに追いつくことは無理そうだ。沼地は知らぬ者が入れば迷うだけだし、あのような場所で人探しなど愚の骨頂。沼地を焼け野原にするなら別だが、それでは奴らの生死も確認できんからな。アルフィリースは確実にこの手で息の根を止めたい」
「ならばいかようにいたしますか？」

エルリッチの問いをライフレスはしばし頭で反芻し、やがてゆっくりと答える。

「・・・どの道出てくるのは北からだろう。だが万一元の場所に帰って来ることを考えて、エルリッチ、貴様は半数を従えて南で待機。ドルトムントは俺と北に先回りする。南と北に俺の使い魔で防衛線をはる。逃がしはせんさ」
「馬鹿な。どれだけ沼地が広いと」

ウィンティアがそんなことができるものかと思わず口にしたが、ライフレスは一笑に付した。

「それはどうかな？」

ライフレスの体から大量の鴉の使い魔が湧きでてくる。その数はシュティームの上空を黒く埋めて、なお余りある数だった。

「な・・・これだけの使い魔を同時に・・・」
「悪いが、俺の魔力は並の魔術士１０万人相当だ。その気になれば、

現代の魔術教会の魔術士全部を集めても、まだ俺に足りんだろうよ」
「そんな馬鹿な！　人間にそんな魔力を扱えるはずが」
「もちろん研鑽はしたさ、それこそ血反吐を吐くほどな。およそ軟弱な貴様らでは、俺の修行は想像もできんだろうよ。もっとも魔力が多ければ偉いわけではないのは、魔術を扱う者ならだれでも知っているだろう。まあ魔力が多いのは、便利ではある」

そしてライフレスが空中に何か文字を描くと、鴉達は一斉に飛び立っていった。舞い落ちる黒い羽根に、不吉な予感を隠せないウィンティア。

「（こん奴を相手にあの子達は・・・エアリアルの不安も無理はない）」
「さて、貴様はどうする上位精霊。ここは大気の元素が充実した場所だからな。少しここで魔力を補充させてもらおうか。最近使いっぱなしで、今は総量の半分程度しかないからな。別に貴様がここに留まっても、取って喰いはせんが」
「いえ、お暇いたしましょう。既に移動の準備はできていますから」
「そうか、ならばそのようにするがよい。そしてお前達」

ライフレスが魔王達を見ると、びくりと魔王達が怯えた。

「いつまでここで呆けている。さっさと大草原に散らんか！」

そのライフレスの一喝に、魔王達が全力で逃げ出して行った。その様子を見届けると、その場で座し、瞑想に入るライフレス。ドルトムントはそれにならい、エルリッチは自分たちが連れてきた半分の魔王を連れて去って行った。
その様子を見届けるウィンティア。そしてゆっくりとまた自分もシュティームを後にする。

「（ユーティ、エアリアル・・・どうか無事で。また会えますよう、風の導きがあらんことを）」

ウィンティアは祈るような気持ちで、さりとて自分にいまさらできることもなく、無力を噛みしめながらその場を後にするのだった。

続く

沼地へ、その１０～沼地の魔物～（後書き）

次回投稿は、既に今日になりますが、４／７（木）２２：００です。

沼地へ、その11～ドラゴンゾンビ～（前書き）

～あらすじ～

サーペントを無事槍過ごしたアルフィリース達は、白魔女に出会うため、さらに沼地の奥へと進み……？

沼地へ、その11～ドラゴンゾンビ～

＊＊＊

「よ、よし。俺達が案内できるのは、こ、ここまでだ。ここからまっすぐ歩けば、一日くらいで、ふ、フェアトゥーセの住処だ。う、馬ならもっと早いだろう」

「わかった、ありがとう」

「フェアトゥーセの住処からなら、このボグって木が生えている所を目印に、き、北へ進め。そ、それなら俺達の手を借りなくても、沼地のそ、外へ出られる。仲間には手出しをしないように、つ、伝えておくからな」

「ん、感謝する」

「い、いいってことよ。お、俺達も、滅ぼされるのはかなわん」

それだけ言い残して、沼人達は去って行った。どうやらよほどミリアザールが怖いらしい。

そこから沼人に言われた通り、馬に乗って進む。ここの地面はほとんど湿地程度のぬかるみ具合なので、馬を全力で駆けさせることは無理でも、駆け足くらいなら大丈夫だった。

「そういえば、楓は？」

「・・・すっかり忘れてた」

「沼人に襲われる直前まではいたが」

「いるのかな。楓！　いるかい？」

「はい、ここに」

頭上から逆さになって楓が突然現れた。その登場の仕方に思わず全員がびっくりする。

「ちょ、ちょっと！　脅かさないでくれる！？」
「そう言われましても、これが標準的な現れ方でして」
「・・・口無しってどういう教育をしているのかしら。まあ、いるならいいけど。馬には乗らないの？」
「はい、私は木々の上を走りますので。御免！」

　すると楓はそれだけ言い残してすぐに消えてしまった。その神出鬼没ぶりに唖然とする一同。

「湿地だから全速力で走ってないとはいえ、よくこの馬の速度についてくるな」
「・・・よねぇ。まあいいか」

　ミランダもこの時は軽い気持ちだったが、翌日にはこのことを後悔することになる。
　その後は何も無く旅は順調だった。この辺はリサのセンサーでもあまり魔物、魔獣の類いはいないらしい。むしろアルフィリースを恐れているのかもしれない。だがそれが幸いしたのか、思ったよりも旅路が早い。

「これならすぐにつくかもね」
「ニア、よかったね。腕の保存期間内に間に合いそうだよ」
「あ、ああ。そうか」
「やっぱり具合はよくないなぁ・・・」

　ユーティが、エアリアルに抱きかかえられるようにしているニアの様子を見ている。ミランダはリサと、アルフィリースは一人で馬を駆っていた。
　そのまま一刻も馬を走らせただろうか。地面に湿地も少なくなり、

わずかではあるが草が生えようかというところ、リサがぴくりと何かに反応する。

「前方に何かいます」

その声に反応して全員が馬を止める。

「敵か？」

「いえ、これはなんでしょうか・・・最初は大きな岩かと思ったのですが、動いています」

リサが不審な顔をしながらソナーを飛ばしているようだ。

「岩？　どのくらいの？」

「１０ｍはゆうにあります。ですが鼓動が無い。生命活動の兆候が感じられないのです」

「なら話は早いわ。ゾンビよ」

アルフィリースがぺろりと舌なめずりをしながら話す。

「ミランダ、私は我慢しないって言ったわよね？」

「ああ、言ったね」

「ゾンビなら思いっきりやってもいいんでしょ」

「・・・リサ、戦わないと駄目そう？」

「ほぼ正面から、明らかにこっちに向かって来ますから。まあ避けられないこともないと思いますが」

「なるほど。アルフィ、やってもいいけど、ニアの事が優先だからね？」

「わかったわよ。だからこそ倒した方が早いのよ」

そう話すアルフィリースの顔は、だが既にニアのことなど気にもかけていないようだった。そしてやがて地響きと共に、木々の間からリサが岩と表現した相手が姿を現した。その姿を見て、一行は戦うという選択肢を取ったことを、非常に後悔することになる。

「こ、これは」

「ゾンビはゾンビでも・・・ドラゴンゾンビ！？」

アルフィリース達の目の前に現れたのは、ドラゴンのゾンビ。大きさはリサの言う通り、１０ｍをゆうに超える。ギガノトサウルスを見ているアルフィリース達からすれば大きさに驚きはしないものの、やはりドラゴンという存在は威圧感が違う。

１０ｍといってもそれは胴体部分だけのことで、羽を広げれば２０ｍはあろうかという巨体。生前はさぞかし立派なドラゴンだったのだろうが、既にその威厳は見ることができない。全ての人間の武器をはじき返すとまで言われた皮膚は腐り落ち、蛆が湧いてひどいことになっている。体の至るところから膿を滴らせ、目には既に眼球がなく、骨もあちこちで露出していた。

ゾンビには種類があり、死体に悪霊が取り付いて動かすタイプと、生前の妄執が強すぎる余り、肉体を持った悪霊と化す場合がある。前者ならばシスターの悪霊払い（エクソシズム）で成仏させられるが、後者の場合は非常に厄介だ。肉体と精神を同時に破壊するか、未練の元を断ち切るしか方法が無い。聖属性の魔術ならば肉体と精神の破壊を同時に行えるため非常に便利なのだが、問題はドラゴンゾンビということである。

「魔術に対する抵抗力も高いのよね、やっぱ・・・」

「腐っているとはいえ、皮膚もまだ固いだろうな。加えてこの巨体だ。痛みも感じないだろうし、倒しきるのは非常に骨がおれる作業だぞ」

「それにこんな見事な竜、あまりいないわよ。西方のブローム火山に住んでいるっていう、火竜の一族じゃない？　なんでこんなところに」
「そんなことどうでもいいわ。それよりこれは私の獲物よ」
アルフィリースが楽しそうに嗤う。
「うふふ、久しぶりに壊し甲斐のありそうな獲物。さあおいで、この私が直々に遊んであげるから」
「アルフィ・・・」
アルフィリースがドラゴンゾンビに一人立ち向かおうとする表情は、まさに悪鬼そのものだった。ミランダはその顔を見て、もはやアルフィリースが自分の知っている人間ではないのではないか、というような不安にどうしてもかられてしまう。
一方のアルフィリースはそのようなミランダの心配など露知らず、既にドラゴンゾンビとの戦いに全ての意識が集中していた。ドラゴンゾンビを前に舌なめずりをするその様子は、もはやどちらが魔物なのかわからない。
「さぁて、どうやって殺そうかしら。あら？　もう死んでるんだから、殺すという表現は正確じゃないわね。昇天？　消滅？　まあ、どっちでもいいか」
アルフィリースが手の骨をパキパキと鳴らし、両手で宙に別々の印を描く。
「さて、やっぱりゾンビは火葬よね。特別な火を用意してあげるわ」
【逆巻くは深淵、煮えるは地獄の釜、沸き立つは怒り。奈落の炎に

意志を与え、哀れな生の奴隷を解放したまえ】
《地獄の火葬（ゲヘナ・クリメイション）》

アルフィリースの詠唱と共に、黒い炎が地面から湧きあがった。あっという間にドラゴンゾンビの巨体を包み込み、飛び火した炎が木々に燃えうつる。この沼地の気はかなり湿気ているはずなのだが、火の勢いは全く止まらない。このままでは森を焼いてしまいかねないくらいの勢いだった。

「なんて炎！」
「アチ、アチチ！」
「こんなに火の精霊に相性の悪い場所で、これほどの魔術を用いるとは・・・」

エアリアルは唸った。ファランクスのように生まれつき火に属する生き物ならともかく、基本的には属性を持たない人間がここまでの力を扱うことは、常軌を逸していた。しかもアルフィリースが使っている炎は素人目にも特別製である。以前の《炎獣の狂想曲》もそうだったが、今回の炎も振り払う程度では全く消える気配がない。しかも今度は先の魔術とは違い、炎自身に意志があるように、ドラゴンゾンビの弱いであろう部分へ食い込んで行くように炎が殺到し、肉をはぎ取ろうと襲いかかる。既に痛覚もないだろうが、ドラゴンゾンビが苦しいのかわなないた。

「クオオオオン！」
「あっは！　泣き叫んでも無駄よ。そのまま燃え尽きなさい！　私の憂さ晴らしのためにねぇ、アハハハハ！」

ゾンビの再生力を上回る炎を扱い、燃え盛るドラゴンゾンビを前にけらけらと嗤うアルフィリースに、全員の震えが止まらなかった。

「あれは、誰です？」
「なんて禍々しい気を発するんだ・・・」
「リサ、怖いよぉ」

ユーティがリサにしがみつく中、一番冷静だったのはミランダだった。

「（だがそれにしてもあのドラゴンゾンビ、全く抵抗する気配がない。炎で包まれたくらいでゾンビが突進を止めることはないだろうに。一体・・・）」

アルネリアのシスターとして、死霊・ゾンビの類いとも戦闘経験豊富なミランダだからこその違和感。人間のゾンビですら厄介なのに、ドラゴンゾンビがこの程度のはずはない。少なくとも、このドラゴンゾンビに敵意はないのではないか。もしそうなら戦闘自体を行う必要がない。そう思ったミランダはつかつかとアルフィリースの方に寄っていく。これ以上アルフィリースに戦わせたら、本当に取り返しがつかないかもしれない。これほど他の皆がアルフィリースに圧倒される中でも、ミランダの心中を占める思いはその点が一番だった。

「（アルフィリースは私の過去を黙って受け止めてくれた・・・今度は私の番だ！）」

例えアルフィリースの本性がどうあれ、自分だけは見捨てたくないとミランダが覚悟を決め、アルフィリースの肩をつかむ。

「アルフィ！」
「またミランダなの？　今、お楽しみの真っ最中なんだけど！？」

「このドラゴンゾンビに敵意はないかもしれない。もう行こう」
「そんなのどうでもいいのよ。私は八つ当たりしてるだけなんだから！」

アルフィリースが面倒くさそうにミランダの手を振り払った。だがこれでミランダも引くつもりはない。

「八つ当たり？　一体何にイラついているのさ？」
「ミランダによ！　いつもいつも鬱陶しいったらありゃしない。自分はシスターの分際なのに旅先で好き勝手してるくせにさぁ、私にはあれもだめ、これもだめって。私の保護者気どり！？」
「嘘よ！　アンタがイラついてるのは、そんなことじゃないでしょう！？」

ミランダの言葉に一瞬アルフィリースがはっとする。

「一体何にイラついているの？　ちゃんとアタシに話してよ！」
「・・・うるさい、うるさい、うるさいっ！」

ミランダが再び握った手をアルフィリースが離そうともがくが、今度はミランダも離すまいとしっかり握っているため、全く離れる気配がなかった。そしてこころなしかアルフィリースが涙目になっているのを、ミランダは見逃さなかった。

「（アルフィにはまだ正気がある。これなら！）」
「なんでミランダは私の邪魔するのよぅ！？　友達なら私の味方してくれたっていいじゃない！」
「アンタが正しいことをしているならね。周りを見なさい！」

ミランダが示したのは、火の海になりかけている森。

「これだけのことをやらかしておいて、あんたは気にかけないってのか？」

「こんな森！　燃えて無くなればいいのよ！」

「！」

パン、と乾いた音が響く。思わず全員が息を飲んだが、ミランダがアルフィリースの頬を張ったのだ。

続く

沼地へ、その11～ドラゴンゾンビ～（後書き）

次回投稿は４／８（金）２１：００です。

沼地へ、その１２～白の魔女～（前書き）

～あらすじ～

ドラゴンゾンビを狂気の表情で追い詰めるアルフィリース。あまりにやりすぎる彼女の頬を張ったミランダだが、その時……？

沼地へ、その12～白の魔女～

「馬鹿言うな！　森を焼いていいなんてことがあるもんか！」
「・・・ぶったわね・・・」

アルフィリースが震えながら、叩かれた頬を押さえる。その目には涙が滲んでいた。

「ミランダだけは何があっても私の味方だって・・・そう思ってたのに！」
「アタシは今でもアルフィと友達のつもりだよ！　でもアンタが間違ったことをしなければ・・・」
「うるさいっ！！　こんな森、跡形もなく全部燃やしてやるっ！」

その言葉と共にアルフィリースが魔力を制限なく解放したため、余りの出力にミランダが吹き飛んだ。そのまま木に叩きつけられるミランダ。

ズン

「え・・・」

ミランダはその瞬間、脇腹に違和感を覚えた。見れば、木の枝が自分のわき腹から突き出ているではないか。沼地の木の形は歪で、妙に曲がりくねっていたり、尖っている部分も多い。その一部が、飛ばされた拍子に運悪くミランダのわき腹に刺さったのだ。

「う、ぐっ？」

「ミランダ？」
「大丈夫か！？」

慌ててリサとエアリアルがミランダに駆け寄る。そしてリサがアルフィリースを睨みつけた。

「アルフィ！　ミランダになんてことを！」
「リサ、よして・・・アタシは不死身だから平気だよ・・・」
「あれ？　なんでミランダから血がでているの・・・？」

アルフィリースが呆然とした様子でミランダの方を向いて立ちつくしていた。その顔からは既に邪気が消えている。

「？」
「（アルフィリースの様子が・・・）」

リサもエアリアルもその変化に気がついたが、今度はアルフィリースの様子がさらにおかしい。

「いや・・・私が、私がやったの・・・？」
「それは・・・」
「また、また私がやったの・・・？　私は・・・違う、私じゃない。私は誰も殺してなんか・・・」
「アルフィ？　何を言って・・・」

だがリサの声も聞こえていないのか、アルフィリースが両手で顔をかきむしるようにしながら、うわごとの様に何かを呟いている。

「ミランダは私の友達なのに・・・違う、私は誰も傷つけたくなんか・・・やだ、そんな目で私を見ないで。皆、見ないでよ・・・私

は化け物なんかじゃない、化け物なんかじゃ・・・うわあああああ！」

アルフィリースの絶叫と共に、彼女から一段と強い魔力の放出がなされたかと思うと、周囲一帯の火はほとんど消えていた。そして崩れるようにその場に倒れ込むアルフィリース。

「うっ、一体何が・・・」
「いかん！」

ドラゴンゾンビがアルフィリースに近づいている。エアリアルは弾けるように飛び出すと、アルフィリースを背にかばうようにドラゴンゾンビとの間に割って入った。担いで逃げるような時間は既になかった。

「やるなら私からだ！」
「クルルル」

だがドラゴンゾンビはエアリアルに息がかかる所まで近づくが、敵意は全くない。そしてちょいと鼻先で必死にアルフィリースを庇うエアリアルを横に押しのけると、倒れているアルフィリースにすり寄っていった。

「懐いて・・・いるのか？」
「おやおや、これは一体どうしたことだね？」

突然一行の背後からしわがれた声が聞こえてきた。全員が驚いて声のした方向を見ると、そこには白いローブに身を包んだ白髪の老婆が一人立っていた。

「おやめ、ルージュ」

その一声でドラゴンゾンビはアルフィリースから2、3歩下がり、大人しく座り込んだ。

「さて、これは一体どうしたことかね。この場所に客人自体珍しいことじゃが・・・おや？」

老婆がミランダに目を止める。彼女はようやく腹から木の枝を引き抜いたところだった。

「はて、どこかで会ったかね？」

「ボケたか、ばあさん。アタシだよ、赤鬼のミランダさ。まだ死んでなかったか」

「ほっほほ、ミランダじょうちゃんかい。これは懐かしい顔だよ。あれからもう何年経ったかの？」

「１４０年はゆうに経ったかな・・・その『じょうちゃん』ってのはやめな。歳はそんなに変わらないだろ？」

「久しぶりに会ったって言うのに随分な言い草だよ。自分のケツもふけない人間は、半人前だと思うけどねぇ？」

「ケツとか言うな、ババア」

「その口の汚さ、間違いないね。どれ、こんなところじゃなんだ、私の住処に案内しようじゃないか。この獣人の娘と、そこで倒れている娘を運んでおいで、手当をしてやるよ。じょうちゃんは一人で歩けるね？」

「ああ、もう塞がった」

「だ、そうだ。ラーナ、アンタの手助けは必要ないよ」

いつの間にか、ミランダの後ろには前進黒づくめの女性が立っていた。いや、名前と、かすかな胸のふくらみで女性とわかるだけで、

フードに覆われた顔は全く見えなかったのだが。ラーナと呼ばれた女性はぺこりとお辞儀をすると、老婆についてその場を後にした。

ミランダ達も顔を見合せながら、エアリアルがアルフィリースを抱え、それぞれが後に続く。

＊＊＊

「なるほどねぇ、そんなことが」

「ああ、外の世界も随分変わってるけど、婆さんはずっとここかい？」

「フェアとおよび、じょうちゃん」

「アタシもミランダだって言ってんだろ」

だがそう悪態をつくミランダの顔はどこか優しげだ。久方ぶりの顔馴染みに気持ちが緩んだのか、口調が傭兵時代のものに完全に戻っていた。

先ほどのルージュと呼ばれたドラゴンゾンビは、フェアトゥーセの近くでいつも寝ており、決まった時間になるとふらりとどこかに行くのだとか。特に害もないし、悪霊に乗っ取られて動くのではなく、妄執で動くタイプだからフェアトゥーセもなんとも出来ないのだそうだ。むしろ自分のいうことは聞くし、番犬がわりに置いているとフェアトゥーセは言っている。きっと元の気性がとてもおとなしいのだろう。もっとも、先ほどのようにルージュが自分から動くのは、フェアトゥーセも初めて見たと言っていた。

既にニアとアルフィリースは手当てが済み、2人とも隣の部屋で寝ていた。ニアの寝息は穏やかだが、アルフィリースは時々うめき声を上げているので、つきっきりでラーナが看病している。

ニアの腕のことを説明するなり、フェアトゥーセは真っ先に治療してくれた。正確には魔術を含めた手術を行ったらしいが、この時代にまだ医学はあまり発達していない。何をどうしたかはミランダ

達にはわからなかったが、助手としてユーティが回復魔術を使っていたが、彼女はいたく感動したようだった。
　アルフィリースの方はと言えば、いまだにラーナが治療に当たっている。どうやらフェアトゥーセいわく、アルフィリースの方が重症らしい。とりあえずラーナの処置が終わるまでは、ミランダ達は出された食事と酒で囲炉裏を囲みくつろいでいた。さすがに白い魔女の家は完全に聖化されているので、居心地がいい。家も木造りで適度な快適さに保たれ、そこかしこには不思議な植物や、魔術に使うであろう道具が並んでいた。

「ああ、あたしゃずっとここさね」
「ウィンティアがずっと姿を見てないから、死んだんじゃないかって言ってたぞ？」
「あたしゃまだまだ元気さ。ピッチピッチの３００代さね」
「よぼよぼの死にかけだろうが」

　けっ、とミランダが出された酒を飲んでいる。片膝を立てて、完全に傭兵時代に戻ったその様子に、ちょっとリサとエアリアルも戸惑い気味だ。

「なんたる言い草だね、ちょっと自分が不老不死だからって」
「ははーんだ。おかげでこちとらシワの一つもありゃしないぜ」
「全く、こんなのがシスターだなんて世も末だねえ・・・」
「んで、なんでこの土地からでないのさ」

　ミランダが興味深げに尋ねる。以前出会った時もそう思ったし、白の魔女と言えば、聖属性の精霊と契約した魔女のはずだ。聖属性とは無縁の、このような場所に住んでいるのはおかしな話だった。

「あたしゃ魔女のつながりって奴が嫌いなのさ。ここにいれば誰も

尋ねてこれないからねぇ」

「偏屈極まりないね。ならなんで魔女なんかやってるのさ?」

「あたしが生まれた土地は疫病が流行っててね。周囲の人間はばたばたと死んでいった。あたしは幼い頃、死にたくないの一心だったよ。そんな時、先代の白の魔女に目をつけられてね。素養があるから引きとりたいってことだったが、あたしはとにかく死にたくない一心でその申し出を受けた。まあだから魔女になってみて、後悔していることこの上ないね」

「魔女がそんなんでいいのかよ!?」

「あんたにだけは言われたくないよ!」

言葉だけ聞いていたらケンカをしているような会話だが、2人は笑顔で会話をしている。この2人はどうやらウマが合うのだろう。

そんな会話をしている折、ラーナが隣の部屋から出てきた。

続く

沼地へ、その１２～白の魔女～（後書き）

次回投稿は４／９（土）２０：００です。

沼地へ、その13～呪印の謎～（前書き）

～あらすじ～

白魔女フェアトゥーセに無事出会った一行。だがアルフィリースが受けた傷は大きく……？

沼地へ、その13～呪印の謎～

「ラーナ、様子は？」

だがラーナと呼ばれた女性は一言も答えず、フェアトゥーセにこっそりと耳打ちをしただけだった。

「ふむ。応急処置はできたが、あまり良くないか・・・やっぱり重症だね」

「アルフィリースは一体どうしたんだ？」

ミランダの質問も尤もである。フェアトゥーセも少し考え込んでいたが、首を横に振るだけだった。

「詳しいことはわからんよ」

「そんな無責任な！」

「そう言われても、わからんもんはわからんよ。ただ確実なのは、あの子は凄まじいまでの呪いに汚染されている。いや、単に呪いと言うのも簡単すぎる気がするが・・・それが一番表現としては近いかね。あの呪印を施したのは、一体誰だい？」

「右腕は自分、左腕はアルドリュースって言ってた」

「なるほど、それで術式が違うのか。どっちにしても天才だね、両方とも。あんな複雑な術式見たことが無い。で、ミランダが聞いているのはそれだけかい？」

「昔、アルフィリースの魔力が暴走した時に、アルドリュースが止めたって言ってた。それが右腕の呪印らしいけど、詳しい記憶はアルフィリースもないってさ」

「ふぅむ・・・」

フェアトゥーセはまたしても考え込んでしまった。ミランダはゆっくりと彼女の返事を待つ。

「・・・正直これ以上は封印を施した本人に聞かないと何とも言えないが、そのアルドリュースとやらは？」

「死んだそうだ」

「そうか、それならますます問題だね。あの呪印は自己修復まである優れモノだが、中から噴き出す魔力の方が強い。ようするに、鍋の蓋の重みより噴き出す湯の方が強い状態さね」

「・・・どうすればいい？」

ミランダが深刻な顔で尋ねる。

「アタシにはお手上げさ。もちろん噴きあげる呪いにあたしが聖の魔力をぶつけて相殺することもできるが、あの娘にかかる負担が大きすぎる。そんなことをしたらあの娘を殺しかねないし、このラーナは世にも稀な闇の回復魔術の使い手だが、それでも進行を食い止めるだけで精一杯だと言ってる」

「どうしようもないと？」

「ここではね。他に手掛かりはないのかい？」

「・・・確かアルフィリースは師匠から、自分の死後、東へ向かうようにと言われている。どこの町かは聞いてないけどね」

「ふむ、東か。もしかしたら・・・」

「フェアには心当たりが？」

だが、ミランダのその質問にフェアトゥーセが答えることはなかった。

「どちらにしろあたしの手には余るよ、あの娘は。それに気になる

ことはまだあるのさ」
「たとえば？」
「あの娘、どのくらいの元素の魔術を使える？」
「確か・・・聖以外は全部だって」
「それはどうかね。おそらくあの子は聖の魔術も使えるよ。あたしは白魔女だからね、そのくらいはわかる」
「え、じゃあ・・・」
「そう、あの子は全種類の魔術に親和性を示している。そんなことは人間ならありえない」

フェアトゥーセが全員を見回すように話す。

「魔術に派は五行があり、それぞれに相関があり、聖と闇もまた対立する属性だ。普通はどの属性化に親和性が高まると、相反する属性の魔術は弱まるものさ。それが精霊魔術だからね。その限界を破ろうと魔術教会が研究したのが理魔術だが、普通は大した出力が出ない。いずれはそのことも解消されるかもしれないけど、今の理論では無理だと魔術教会が嘆いたことくらいは知っているさ。だから確かに全部使えない可能性もないわけじゃないが、普通は得手不得手が出てくる。それをあの娘は、どの属性も均等に大出力で使えるのさ」
「それって・・・」
「さあてね。すくなくとも、あたしは聞いたことが無い。まあ、だからってどうするもんでないけど、もう一つの疑問は重大さ」
「もう一つ？」
「呪印は２つだけじゃない。他にもあるよ」
「！」

それにはミランダを含む全員が驚いた。ユーティに至っては、リサが思わず身を乗り出したせいで、リサの肩の上からすべって危う

く鍋の中に入りそうになったくらいだ。

「他にもって・・・」

「呪印って言うのは一般名さ。呪い(まじな)により施された印を全てそう呼んでいる。呪いを施す方法には良い物から悪い物まで色々あるが、あの子と、そのアルドリュースとやらが施したのは単純に封呪の呪印。だがもう一つは・・・」

「何なのさ？　もったいぶんなよ！」

「それがよくわからん」

ミランダが思わず滑った。

「散々もったいつけてそれか！？」

「仕方ないだろう？　わからないものはわからないんだよ！　あたしにわかったのは、とりあえずそのアルドリュースが天才ってことと、さらにもう一つ呪印があるってことだけさ。なんせ魔女のあたしにすらわからないような呪印を読み解き、それに拮抗するようにさらに呪印を施しているんだからね！」

「え、それって・・・」

「元々の呪印は良いものじゃないのだろうさ。さて、あたしからはとりあえず以上だ。ちょっと用事があるから出てくるけど、決してそのラーナに近づくんじゃないよ！？」

全員がラーナを見る。ラーナは俯(うつむ)いたままだった。

「ラーナ、顔を少しだけ見せておやり」

ラーナはこくりと頷くと、少しだけフードを横にずらして、顔の一部を皆に見せる。

「うっ！」
「それは・・・」
「ひえええええ」

その顔は腐っていた。一部は骨が見え、顔が変形して完全に目が塞がっていた。そのあまりの異形に、全員が思わず目を背ける。

「醜いだろ？　その子は小さい頃大病をやらかしてね。それ以来そんな顔なのさ。おまけに声までなくしちゃってね。不憫な子だよ、まったく。それなのにこんなラーナでも沼人の連中は『子どもが産めるなら問題ない、よこせ』ってしつこくてね。奴らは極端に女が生まれにくい種族だから、女は外からさらってこないとしょうがないのさ。もっともこのラーナを奴らにやる気は、あたしにゃ全くないがね」

フェアトゥーセが悲しそうに首を振る。ラーナはそのまま俯いて黙ってしまった。

「それでこの沼地にフェアはずっといるのか・・・」
「まあそれだけじゃないけどね。さ、これでわかったろ？　とりあえず今日はもう休みな。ここにいる限り、安全だから。アンタ達も疲れているんだろう、結構ひどい顔してるよ。片づけと看病はラーナがやるからね」
「ああ、恩に着る」

そして一行はようやく疲れた体を休めることができたのだった。

＊＊＊

その夜の事。

「あああっ！」

アルフィリースが叫び声と共に目を覚ました。

「うっ・・・私、何してたんだっけ・・・？」

非常に嫌な夢を見ていた気がするが、思いだせない。ライフレスと戦った後、川に腕を浸してからの記憶が非常に断片的だ。だが確実に覚えているのは、自分がミランダを傷つけたということ。

「私、なんてことを・・・」

アルフィリースは顔面を両手で多い、さめざめと泣きだした。あれほど呪印の力は危険だと口を酸っぱくして言われながら、飲みこまれてしまった。挙句に自分の親友に傷を付けるとは。不死身のミランダだから生きているが、もしあれがリサやエアリアルだったら？　アルフィリースは自分が仲間を傷つける光景を想像し、身震いした。

「もう、どうやって顔を合わせたらいいのかわからないよ・・・」

アルフィリースがぽつりと呟く。熱があるのか意識は朦朧としているし、考えるのが非常にだるい。さりとて今のような精神状態では寝るのもままならないだろうし、どうしたものかとアルフィリースが途方に暮れていると、外から誰かに呼ばれているような気がした。

「誰・・・？」

アルフィリースはそのまま、ふらふらとぎこちない足取りで外に向かう。よく見れば服は脱がされ下着の様な恰好なのだが、それも今はどうでもいい。部屋を出ると足元にはミランダ達が寝ていたが、それもアルフィリースにはあまり気にならなかった。全員疲れていたのか、泥のように眠っている。

「ん、アルフィ・・・？」

ミランダが少し気配を察したようだが、逆にアルフィリースは逃げるようにその場を後にした。そして外に出ると、より自分を呼ぶ声は強くなるような気がした。

「こっち・・・？」

そのままアルフィリースは裸足で歩きだす。足元はおぼつかないままだが、周囲は真っ暗なのに、不思議と進む方向には迷いが無く、つまづきもしない。見えない何かに誘導されているかのようだった。

そのままどのくらい歩いただろうか、気がつくと道はなくなり、崖の様な所に出ていた。実際には少しの高台程度なのだろうが、あまりにも真っ暗すぎて何もわからない。いや、実際そこまで闇に包まれてはいなかったのかもしれないが、アルフィリースの意識も朦朧としていたので、そうとしか思えなかった。

「私・・・ここに何しに来たんだっけ・・・もうどうでもいいや。ミランダ達の前から消えたいよ・・・」

すると足元の泥の中から、巨大な生物がその首を伸ばしてきた。その姿をアルフィリース達は見てはいないが、これが沼人達に恐れられるサーペントである。闇と霧のせいでその姿はよく見えないが、沼の上に出ているだけでも、７～８ｍはある巨大な大蛇の様な姿だ

った。

「私を・・・食べるの？　いいよ、別にもう・・・」

アルフィリースが両手を広げて、身を預ける意志表示をする。そしてそれに応えるように、サーペントも大きく口を開けたのだった。

＊＊＊

「ん、んん・・・あれ、さっきアルフィが通ったような」

ミランダはふと夜中に目を覚ました。不老不死のミランダに実のところそれほど疲れはなかったし、寝てないのが多少こたえるくらいで、眠りは他の皆ほど深くはなかった。夢でアルフィリースが悲しそうな顔をしながらここを出て行った様な気がしたが・・・

「まさかね・・・」

だが嫌な予感がする。念のため隣の部屋に行くが、そこにはニアしかいなかった。いつの間にか、ラーナもいない。

「じゃあさっきのは・・・皆、起きなさい！」

ミランダが叫び、慌ててエアリアル達を起こしに走るのだった。

＊＊＊

「アルフィ、アルフィ・・・どこなの！？」

「ミランダ、落ち着け。そこまで遠くには行ってないはずだ」

「そんなことわかるんもんか！　きっとあの子は後悔して出ていっ

たんだ・・・今のまま一人にはしておけない！」
「こういうときこそリサの出番でしょう。センサーが効きにくい土地といえど、あのデカ女が歩けば柔らかい地面は沈みますから、それを辿れば・・・」
「リサ！　能書きはいいから、早く！」
「・・・ありました、こっちです」

ミランダの表情に切羽詰まる者を感じ、リサが誘導する。松明をエアリアルが引っ張り出して、真っ暗な沼地を駆けていく。周囲にはきっと魔物もいるのだろうが、今はそんなことを気にしている心境ではなかった。ユーティですら、叩き起こされたことにも文句を言わず、黙って付いてきている。
そしてしばらく駆けた所で松明が少し遠くに照らしだしたのは、ちょうど巨大な蛇の様な魔物がアルフィリースをその口に収める場面だった。そのまま魔物は沼地の中へと素早く引っ込んで行く。

「ああっ！」
「そ、そんな」
「アルフィ、アルフィー！！」

沼地を追いかけるすべもないミランダ達の叫び声が、沼地に響いていた。

続く

沼地へ、その１３～呪印の謎～（後書き）

次回投稿は４／１０（日）１９：００です。

沼地へ、その１４～沼地の真竜～（前書き）

～あらすじ～
サーペントに食べられてしまったアルフィリース。果たして彼女の運命は……？

沼地へ、その１４～沼地の真竜～

＊＊＊

夢を見ている。

犬を殺した。だって、殺してくれとせがまれたから。だけど、誰に？

夢を見ている。

友達を突き飛ばした。だって、突き飛ばさないといけなかったから。でも、どうして？

夢を、見ている。

逃げ惑う男の背中から刃物を何度も突き立てた。わざと急所をはずして。いったい、なぜだったろうか？

思いだせない。頭の中にいつも霧がかかっているようだ。思いださなければいけないのに。いつからこんな靄がかかるようになったのか。

「アルドリュースのせいよ」

声が聞こえる。これは私の声だ。

「知ってる？　あのロリコン野郎、私に気があったのよ。何度、私

が眠っている時に手を出そうとしたか。いつもその度思いとどまっていたけどね。一度でも手を出してくれていれば遠慮なく殺せたのに、あの短小××男」

そうだったっけ？　そんな記憶はない。

「それなのに奴ったら、呪印で私を押さえつけて・・・ひたすらしたいこともできず、我慢するように躾けられたわ。でもアイツは死んだんだし、もう私は自由だ！」

自由。何から？

「全てからよ！　今はもう消えるけど、覚えておきなさい。もう誰も私に命令なんてできないってことを。だって、私は――」

何？　よく聞こえない。一体何を叫んで――

＊＊＊

「はっ！　・・・あれ、何の夢だったっけ？？」

アルフィリースが目を覚ます。目が覚めれば見たこともない場所。滝が何段にもわたり水を注ぎ込み、それが四方八方からアルフィリースがいる場所に注ぎ込んでいる。アルフィリースは体を水草によって固定され、ちょうど石によって区切られた場所に寝かされていた。アルフィリースの寝ている場所の足元からはまた滝のように水が流れており、アルフィリースはちょうど段々になった滝の中腹辺りに寝かされているようだった。溺れないように、頭だけはちゃんと地上に出して寝かされている。ご丁寧な事だ。

枕にも天然の草を敷きつめ、水は程良い暖かさだった。まるで風

呂に入りながら寝てしまったようだ。周囲は緑生い茂る木に囲まれ、空気も爽やか。天気も快晴、雲一つない。頭も妙にすっきりしている。ここしばらく忘れていた感覚だった。

「う～ん、私って沼地にいたんじゃ？　それで蛇に食べられて・・・じゃあここは天国？　まあ服も来てないもんね～。あっはは、そうか、ついに死んだか私」

「起きたか、娘」

ふと声をかけられる。すると滝の下だと思っていた場所から、ぬっと大きな生き物が頭を出した。最初は蛇かと思ったが、頭には逆立った毛のような角があり、体は青の鱗にびっしり覆われ、その姿は明らかに蛇ではなかった。

「あー、変な生き物が見える。天国ってこんな所なんだ」

「変な生き物とは随分な挨拶だな、娘。俺の名前はサーペント。これでも真竜の一頭だぞ」

「へー、真竜なんだ。世界に数体しかいないはずの真竜が、そんなにホイホイ私の前に現れるわけないじゃない。なんだ、夢か。寝よ寝よ」

アルフィリースはその場所にまた寝ころんで寝始めた。その様子を見て呆れかえるサーペント。

「待たんか娘。グウェンの奴も、おかしな娘に自分の一部を託すものだな。奴もトチ狂ったか？」

「あれ、グウェンを知ってるの？　ま、私の夢なんだから当然か。おやすみ～」

「おい、待てと言っただろう、娘。どうもいかんな・・・治療を間違えたか？」

サーペントが悩み始める。その姿がちょっと滑稽だったので、アルフィリースは話を聞いてみることにした。

「じゃあなんで私はこんな所に素っ裸で寝ているのか、説明してもらいましょうか？　・・・って、素っ裸？」

「うむ、服は着せておくと濡れてしまうから脱がせたぞ。心配するな、ちゃんと洗って畳んである」

「それはご丁寧にどうも・・・じゃない！」

アルフィリースがその辺の石を一つ掴んでサーペントに投げつけた。それが見事にこめかみ周辺に当たる。

「ぐお！？　娘、何をする？」

「それはこっちのセリフだあ！　乙女の裸をなんだと思ってるのよー！？」

「知るか！　だいたい竜が人間の裸に興味があるはずが・・・」

「うるさいうるさい！　もう私お嫁にいけない～、うわーん！」

「なんともかしましい娘だな・・・」

アルフィリースがべそをかき始めたので話もまともにできず、とりあえずサーペントはアルフィリースの服――といってもアルフィリースは起寝ていた時の恰好で、ほとんど下着同然だったが――を持ってきて、着るように促した。そしてアルフィリースが服を着ると、自分と頭の高さが合うような高台に導く。

「さて、改めて自己紹介しよう。俺の名前はサーペント。この沼地に住んでいる真竜の一頭だ」

「私の名前はアルフィリースよ。先ほどは取り乱してごめんなさい」

「うむ、俺こそ強引な方法でこちらに連れてきてしまったからな。

誘惑の魔術で幻惑し、口の中に入れて連れてきたのだから混乱しても無理はない。ましてあれほど魔力を使った後ではな。遠く離れていても感じたぞ」
「どうして私をここへ？」
「もっともな疑問だ」
サーペントは頷いた。
「実はフェアトゥーセから連絡を受けてな。重症の娘がいるから助けてくれと。それがグウェンの匂いをさせる娘なのだから、多少驚きはしたが」
「グウェンの？」
「うむ。奴と、俺と、もう一人天空竜マイアという真竜は幼馴染だ。グウェンが一番年上ではあるが、我らは親友だよ。もうしばらく会っていないが、それでも５０年に一度は一同に会するな。そのグウェンの匂いがしたものだから、思わず動きを止めてしまった。貴様達は驚いただけかもしれんが、他の者もいたし、そこで声をかけるわけにもいかずその時は去ったが。だがこうして話せたのも、グウェンの導きだろう」
「あの時ね」
沼人の船で移動していた時を思い出す。その時にアルフィリースは巨大な生物に見られた気がしたのだが、どうやら勘違いではなかったらしい。真竜というのなら、どこか懐かしいと思ったのも納得ができる。グウェンドルフに雰囲気が似ていたのだ。
「その小手だな。アルフィリースはなぜグウェンの牙を持っているのだ？」
「旅に出るときに餞別代りにもらったの」
「ほう・・・グウェンがそのようなことをするとはな。詳しく聞い

てよいか？」
「いいわよ」

アルフィリースはグウェンドルフとのいきさつを詳しく話した。アルドリュースの事、グウェンの頭の上でよく遊んだこと、鱗を一枚引っぺがしてアルドリュースと一緒に謝りに行ったこと。サーペントはその話に驚き、目を丸くしながら聞いていた。

「ふむぅ、随分とアルフィリースはだいそれた人間だな」
「そうかな？　まあグウェンは優しいからね。甘えてただけかも」
「そなたには特別かもしれんがな。何せ奴はその昔『破壊竜』と呼ばれ、真竜の一族でも札付きの暴れ者だった。俺達幼馴染以外は恐れて近寄らなんだよ、昔はな。それが今では真竜の長だ。変われば変わるものさ」
「へぇ～意外だわ。でもそんなに偉いの、グウェンって？」

今度はアルフィリースが目を丸くする。

「まあ『新世代』の方だがな。旧世代の真竜は、既にどれもこれもが眠りについている。だからグウェンは誰かの子を預かっていなかったか？」
「む、そういえば卵を温めていたような・・・オスのくせに変だなとは思ったのよ」
「そうだろう。真竜の長は新しい命の誕生を見届け、名付け親になるのが仕事。また長の元が一番親竜としても安心なのだ。出産直後はかなりの力を消耗するため、真竜ですら無防備だからな」
「でもお父さん竜がいるんじゃ」
「真竜の出産は一大行事なのだよ、アルフィリース。つがい共々、出産後数年は動けん。だから卵はグウェンが温めるのさ」
「なるほどね。そういえば私も、卵を抱かせてもらったなぁ～」

「それは・・・まあよいか」

ちょっとサーペントが言葉を濁したが、アルフィリースにはどういう意味かわからかなった。

「で、フェアトゥーセがなんだってサーペントに？」

「おお、奴と俺は懇意にしていてな。奴から頼まれたのだよ、自分ではどうしようもないから何とかしてくれとな。不思議な娘だから、死なせてくれるなと。それでここに連れて来たのさ。ここは俺が浄化を続ける土地でな。沼地の泥は必ず一度ここを通るようになっている。そこで流れてきた泥を俺が清浄にし、それから他の土地に流れていくようにしているのさ。ここの水を使えば、アルフィリースの汚染も弱まるだろうと思ってな。要は、俺は水の管理者と言うところだな」

「へえ。それは知らなかったな」

そういえばエアリアルが、大草原の水はとてもきれいだと自慢していたことがある。妖精が多いから自浄作用が強いのだろうということだったが、ユーティの話を聞く限りでは、水の精霊はほとんど大草原にはいないようだった。となれば、サーペントがいてこその水の浄化なのだろう。アルフィリースは素直な感心と感謝をサーペントにした。

「ここには周囲と比べて低くなっていてな。集まるのは水だけではなく、重い物、つまり良くない空気や負の感情やなどといったものも呼び寄せやすい。ここが駄目になると、中央街道とかいう場所はもっと荒んだ場所になるだろうな」

「そうなんだ？」

「うむ、中原の水源はピレボスの雪解け水だが、中央街道の周辺一帯はここが水源だ。さらに東の国家群はロックハイヤー大雪原から

の水のようだな。まあ、俺もここに住むようになってから知ったことだが」
「じゃあサーペントがいないと、中央街道はやっていけないのか・・・ありがとう、サーペント！」
「何だ急に？」
「ううん、素直に感謝しているの。私が知らない所でそんな恩恵があったなんて、今までちっとも知らなかったから」
「むぅ。まあ俺が好きでやっていることだからな・・・だが悪い気はせん」

サーペントも最初は面喰ったが、礼を言われること自体は好きなようだった。ちょっと照れくさそうではあるものの。

「さて、体調はどうだ？」
「もうすっかりいいみたい！　どうしてあんなに私イラついていたんだろう・・・？」

アルフィリースが腕を見ると、あれほど腕全体を侵食していた呪印は、すっかり小さくなっていた。すっかり旅を始めたころの状態に戻っている。

「さてな。とにかく、そのアルドリュースとやらが施した封印から漏れ出ていた邪念は、全て流された。その呪印が無理に蓋をしていたのも、悪かったのかも知れん。これからは上手くその呪印と付き合うことだな」
「そっかぁ。でも当時はどうしようもなかったのかも」
「まあ俺も専門的な知識があるわけではない。そのアルドリュースとやらは、何も方策を残していないのか？」

サーペントの問いは尤もである。だがアルフィリースは遺言で「

東の都市ベグラードに行き、ハウゼンという男を訪ねるように」としか言われていない。それが何を意味するかは、全く持ってわかっていなかった。

「うーん、一応ベグラードってとこを訪ねるように言われてはいるけど」

「ベグラード、ベグラード・・・なるほど、それは良い手段かもしれん」

「何か知ってるの？」

アルフィリースがサーペントの様子を見て、問いかける。

「いや、予想しただけだ。行けば分かることだよ」

「なによぉ、ケチ！」

「そういうな。それよりそろそろ戻らなくていいのか？　お前は実に丸一日寝ていたのだぞ？」

「えっ、そうなの！？」

思わぬ時間の経過にアルフィリースは驚いた。まさか丸一日寝ていたとは思わなかった。彼女はあの後夜が明けたくらいに思っていたのだ。

「うむ。フェアトゥーセの奴は沼地の出口で落ちあえば良いと言っていたから、そこまで送ろう。俺の頭の上に乗るがいい。ここからなら、明け方にはつくだろうよ」

「まだ日は高いのに・・・」

「沼地の広さを舐めてはいかんな。ここは最短距離を突っ切っても、１００ｋｍはある土地だ。普通に人間が歩けば、ジグザグな道を辿ることになるから一カ月はゆうにかかる。一日で出口まで行けるのだから、感謝してほしいくらいだ」

「それもそうか。ごめんなさい、ワガママ言って。助けてもらったくせにね」
「構わん。グウェンが小手を託すほどの娘なら、俺も何かしてやらねばなるまいよ」

サーペントがややしたり顔で述べたので、少しアルフィリースは笑った。だがサーペントの所まで歩いて行こうとして、ふと足が止まる。

「どうした？」
「私・・・皆にひどいこと言ったり、あげくにはミランダを傷つけたわ。許してくれるかしら・・・？」

アルフィリースが項垂れる。その様子を見て、サーペントもどうしたものかと一瞬思案したが、ここでアルフィリースを連れていけないと、フェアトゥーセにどんな顔をされるかわかったものではない。

「ふむ、それは難しい問題だな」
「ねぇ、私どうしたらいいと思う？　どうしたら許してくれるかな？」
「俺に聞くな。だから彼女たちに聞けばいいのではないか？」
「え？」

アルフィリースがキョトンとしている。

「どうもお前は自分一人で答えを出そうとし過ぎる。そんなことは向うに聞けばいいのだよ。その結果許されないこともあるかもしれないが、そうでもないかもしれないだろう？　一人で悩んでも始まらんさ」

「なんか楽天的ねぇ」
「だが事実だ。どれほど楽しいことも、気持ちが沈んだ時に考えれば面白くなくなるだけだろうし、逆に全く楽しくない時でも、天にも昇る心地で行えば楽しくなるだろう」
「そうかなぁ？」
「そうともさ」

アルフィリースが腕組みして少し考え込んだが、やがて納得したようだった。

「よし、じゃあそうしよう！　ありがとうね、サーペント」
「まあ力になれたのなら何よりだ。それでは俺の背に乗るがよい」
「ここ？」
「いや、そこはどう考えても頭だろう」
「えー？　ここが乗り心地が一番いい！」
「ぐっ・・・よくぞ兄者はこの娘の相手を何年も務めたものだ・・・」

そしてサーペントがアルフィリースを乗せて動きだそうとしたとたん、どこかで悲しげな泣き声が聞こえた。

「クオオオン」
「あれは？」
「ルージュか・・・」

その泣き声を聞いた瞬間、サーペントの瞳が悲しみに曇る。

「すまん、アルフィリース。少し寄り道をしても良いだろうか？」
「私に反対する権利はないわよ」
「うむ」

そうしてサーペントは頭の上にアルフィリースを乗せて、その場を去ろうとした。その刹那、サーペントはアルフィリースが寝ていた場所よりさらに下流をちらりと見る。その場所の水は、漆黒に濁っていた。

「（最後まで気づかれなくて済んだが・・・実はアルフィリースが寝ていたのは5段の滝の上から2段目。以下の3段は、アルフィリースから漏れだす呪いのせいで、水が完全に変色してしまった。その度1段ずつ上に寝かせ変えていたのだが・・・これほどの呪いがたった1人の人間の中に詰まっていようとは、一体どうなっていたのだ。

これほどの呪いに蓋をしたアルドリュースとかいう男も大したものだが、それだけのものを内包できるこの娘もまた大したものよ。良いことかどうかはわからんが、グウェンドルフ、フェアトゥーセが気にかけるのもよくわかる。果たしてこの娘は何者なのかな。まあ俺には関係ないことだし、真竜は通常なら人間に関わるのは禁忌だからな。それを長自らが破るとはグウェンの兄者め、どういうつもりなのか今度会ったら問いただしてやる）」

サーペントが内心でそのような事を思っていることを、アルフィリースは気づくべくもなかった。

続く

沼地へ、その１４～沼地の真竜～（後書き）

次回投稿は４／１１（月）１８：００です。

沼地へ、その１５～白魔女の助け～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースがさらわれた直後のこと。ミランダ達はアルフィリースを助けるために奔走しようとして……？

沼地へ、その15〜白魔女の助け〜

＊＊＊

そしてアルフィリースがさらわれた直後のこと――

「くそっ、放せ！」
「駄目だ！　だいたいどこに行ったか当てもないんだぞ？」
「知るか！　沼地全部をさらってもあの蛇をぶち殺してやる！」
「冷静になってください、ミランダ。そんなことは無理です！」
「これが冷静でいられるか、放せぇ！！」

アルフィリースを探しに行くために、フェアトゥーセの住処を飛び出そうとするミランダを必死に止めるリサとエアリアル。そこにフェアトゥーセが帰って来た。

「うるさいねぇ、夜中になんだい？」
「フェア！　どこにいってやがった！？」
「レディにそんな野暮な事聞くもんじゃないよ」
「ふざけんじゃねぇ！」

ミランダがリサとエアリアルを力づくで振り払い、フェアトゥーセに喰ってかかる。

「アルフィリースが蛇にさらわれたぞ？」
「ああ、それはあたしがサーペントに頼んだんだよ。ここじゃどうしようもないからね」
「何ィ！？」

ミランダがフェアトゥーセの胸倉をつかみ上げる。

「アルフィリースを喰わせたってのか？」

「だから違うって言ってるだろう・・・ったく、人の話を聞きな！」

たまりかねたフェアトゥーセがミランダの肘のツボをつまみあげ、腕に走る衝撃に思わずミランダは手を放した。

「つっ！」

「やれやれ。こっちはババアなんだから、ちょっとは手加減ってものをだね」

「んなこといってる場合じゃねぇんだよ！」

「はあ。でもそうやって他人のために怒れる所を見ると、ちょっとは成長したかね。あのオードの坊やにべったりしていただけの頃と比べると」

「今さら何を・・・」

ミランダも突然昔の恋人の名前を出され、ちょっと怯んだ。ミランダの中では軽くトラウマにもなっているのだ。

「心配しなくても、あの娘はサーペントがきっちり面倒を見てくれる。それでも駄目なら世界中どこに行ってもどうしようもないさね。少なくとも、今からじゃそんな手を打つ時間が無い」

「どういうことだ？」

「あの娘は今夜が山場だ。もし今夜中にあの邪念が消えなければ、あの娘は呪印に乗っ取られるだろうよ。だからこそ少々強引な方法を取った」

「なんだって？」

これにはミランダが驚いた。そんな重症だとは思っていなかったからだ。

「むしろあれほどの物を抱えて、あの娘が正気を保っていることが奇跡に近い。あの娘は余程自制心が強いんだろうね。そしてアンタ達の事を本当に大切に思っていたんだろうよ。そうでなければ、遊び半分がてらにとっくに殺されているさ。もっとも、本来の性格が特に優しいからこそ、あれほどの邪気にさらされてもあの程度の性格の変化しか出てなかったんだろうけど」

「あの程度って」

「あの程度さ。あの娘が誰か仲間を殺したかい？」

「それはないけど・・・でも森を焼こうと」

「それはある意味正しい判断かもしれないね。気づいたかもしれないけど、この森は普通じゃない。あたしがここに住んでいるのは世の中と関わりたくないのもあるけど、ちゃんと理由があるのさ。ここは邪気や怨念が溜まりやすい土地でね。あたしが定期的に見回っているから大して影響が出ていないけど、そうでなければ魔王を生み出す格好の土壌となるだろうよ。さしものアルネリア教会も、この重要性には気が付いていないようだからねぇ。気がついていても手が回らないのかもしれないけど。まあ好き好んでこの土地にこようとは思わないだろうけどさ。だから本当は一回焼いてすっきりさせるのも、一つの手段なのさ。とびきり強引ではあるけどね。あの娘は直感でそれを悟ったんだろうよ。あるいは確信か」

「確信？」

リサが尋ねた。確かにアルフィリースには不思議な点が多い。くの一達の襲来に気がついたことといい、沼人に襲われた時のことといい。能力が上昇したリサよりも、気がつくのが早い時がある。

「ああ、多分あの子は精霊の声を直接聞いているね」

「精霊の声を？」
「そうだよ。魔女や同士なら自分が契約した精霊の声を聞くことはあるし、そこのエアリアルとかいうじょうちゃんもそうだろう？」
「それは確かに」
エアリアルが頷く。エアリアルはその能力でファランクスの死を詳細に知ったのだ。これはウィンティアに言われて気付いたが、エアリアルは風の精霊達と契約状態にあるのだ。だから風の流れが詳細に読めるし、風の精霊を通して離れた場所の状況を知ることもできる。もっとも、万能と言うわけにはいかず、知りたい事を知りたい時に知ることができるわけではない。精霊の気まぐれや、その場に存在する精霊の数にもよる。実際にこの沼地では、全く風の精霊の声は聞こえてこない。
なおもフェアトゥーセは続ける。
「しかもおそらくあの娘は五行と聖、闇以外にも有象無象の精霊の声まで聞いている」
「・・・そんなことありえるのか？」
「実物が目の前にいるじゃないさね。でも少なくともあたしの知る限りでは、そんな前例は今までないよ。だからそれが意味するところもわからないし、考えが及びもしないね。だからこれは想像だけどね」
フェアトゥーセが一度間を置く。
「もし全ての精霊の声が聞こえるなら・・・それは耐えがたい苦痛だよ。精霊ってのはこちらの状況なんてお構いなしに喋るからね。四六時中そんな声が聞こえることを考えてごらん？　間違いなく発狂してしまうよ」
「う」

「正しい導き手が傍にいれば別だけれどね。だけど前例がないあの子にそんなのがいるはずもなし、魔術教会のボンクラどもにそんなことは無理だろうしね。それでもいればちっとはマシだったろうに、あのボンクラどもは何してたんだい？」

「さあ・・・」

「まったく、これは一度きつくお灸を据えにいかないと駄目かねぇ？　教会の長は変わってなければテトラスティンの坊やのはずだけど、あれならあたし達の話にもまだ耳を傾けるだろう。ともかく、あの娘を守るなら末長く守ることさ。あの子がいったいどうなるのか、周囲にどういった影響をもたらすのか。少なくともそれがはっきりするまではね」

「アンタに言われなくてもやるさ」

ミランダがすかさず答える。その瞳を見てフェアトゥーセも少しは満足がいったのか、頷き返す。

「ミランダのじょうちゃんも、多少マシな顔をするようになったもんだ。やっぱり時間は経つんだねぇ。だけど、自分の部下にはしっかり手綱をつけておくんだね」

「？　どういうことだ？」

「ラーナ！」

呼ばれたラーナが縄で拘束された楓を連れてくる。簡単に縄で一巻きされただけの様に見えるが、魔女の拘束だから普通ではないのだろう。また魔眼を封じるためか、目には何かの呪文を描いた目隠しがしてある。

「楓！　あんた一体？」

「そういえば、昨日も最後まで姿を見なかったと思ったら・・・」

「このくの一は、あの娘の首をかき斬るつもりだったのさ」

フェアトゥーセがさらりと衝撃の事実を述べる。

「実際あの娘がミランダを吹き飛ばした時に、この娘は小刀を抜いて飛びかかる直前だったんだよ。それに気付いたあたしがいち早く拘束したけどね。最初は敵かと思ったが、それにお前さん達が気付かないとはあまりに間抜け。おそらく話に聞いたくの一の類いかと思って、念のため拘束して記憶を少し読んだら、ミランダを警護対象として、必要があれば他の人間を斬って捨てることも厭わない様な命令が出されてたよ」

「なっ・・・」

それを聞いてミランダの顔が一気に青ざめた。話に聞く口無しの冷酷さは知っていたが、まさかそこまでやるとは。

ミランダはつかつかと楓に近寄ると、顔を自分に向けさせ問いかける。

「正直に答えろ、楓。その命令を出したのは誰だ？」

「・・・お答えできません」

「なるほど、最高教主（ミリアザール）か」

ミランダが複雑な表情をする。ミリアザールならやりかねないことも、多少ミランダは想像していた。だがここまでやらせるとは。もちろん危険な場面ではあったが、もう少し融通の聞く命令は出せないものかと、ミランダは考える。

そんな思いを振り払いながら、さらにミランダは楓に問いかける。

「なら命令に違反しないものだけでいいから答えて欲しい。答えられない質問には答えなくていい」

「はい」

「アタシの次に警護の優先順位が高いのは？」
「リサどの、アルフィリースどの、その他の方の順番です」
「どうしてアタシに無断で隠れた？」
「そうするのが最良だと判断しました。その件に関して、何もミランダ様から指示を受けていなかったので、自分で最善と思われる判断をしたまでのことです」
「アルフィリースを殺そうとしたのは事実か？」
「はい」
「なぜだ？」
「ミランダ様を害する者は、全て殺害対象だと命令されています。そこに旅の仲間を除くという例外は説明されておりません。なので、アルフィリース殿も殺害対象と判断いたしました」
「そう・・・」

ミランダは押し黙った。これは楓が悪いわけではない。おそらくはミリアザールもまた想定にない範囲の出来事。アルフィリースとミランダが戦うなど、当の本人たちでさえ想像していないことだ。楓は忠実に命令を実行しただけ。そして楓と十分な話し合いをしていなかった自分に責任があると、ミランダは痛感していた。むしろ大事に至っていないだけ、奇跡だったのかもしれない。

口無しとはこういう集団なのだ。話に聞いてはいたが、認識が甘かった。これはミランダの油断が招いた事態なのだ。後輩や周囲にいる者の指導など、面倒くさがって避けていたことが裏目に出た。

「ではさらに質問するわ。この場で私の命令を聞く気はあるのかしら」
「はい、現場ではミランダ様の命令に従うようにとの指示を受けております。ただ、火急の際には貴女様の身柄を最優先するようにとの命令を受けておりますので、これに関してはミランダ様の命令を受けつけられない場合があるかと」

「わかったわ。では楓に命令します」

ミランダは元来命令だとか、そう言った出来事が苦手だった。人を従わせるのは好きではない。だが、もはやそんなことも言っていられなかった。

「陰からの護衛はやめなさい。護衛をするなら正々堂々と。私達は旅の仲間よ。寝食を共にし、私達とは普段は対等に接しなさい。そして口無しとして動くときは、私にまず伺いを立てること。勝手な行動は許さないわ」

「は、しかしそれでは・・・」

「火急の際にどうするべきか予め指示が欲しい場合は、あらゆる事態を想定してアタシと予め打ち合わせをしなさい。アタシ達もそうしているし、それが旅を共にする者の務めです。アタシの知らない所で勝手な事はさせない。他の者はどうあれ、最高教主がどうあれ、それがアタシのやり方です。これは命令よ」

「分かりました。ご命令とあれば、確実に遂行してみせます」

「本当は・・・」

「？」

ミランダが一瞬悲しそうな顔をする。

「本当は楓にもこんなことはしてほしくない。アタシが守るに値する人物だと思った時だけ、そのように行動してほしい。アタシは自分を守るために誰かが傷つくのは嫌だから・・・」

「ミランダ様・・・」

楓はどう言っていいのかわからず、言葉を失くした。今まで命令で幾度か仕事をしたことはあるが、このような事を言う人間は初めてだった。自分達は捨て駒。そう思っていたのだが、この目の前の

警護対象はどうやら口無し達も人間として扱いたいらしいことが楓にはわかった。

「（不思議なお方だ。だが、口無しの中でさえ、この方の人気が高いのはわかる気がする）」

それは楓が決して言ってはならない言葉。だが内心ではその人気に得心がゆきつつあった。

「さて、話し合いも済んだようだし、あたし達も沼地の出口へ向かうかね」

2人の沈黙に話が終わったと判断したか、フェアトゥーセが全員に出立を促す。

「出口に？」

「そうさね。そこでアルフィリースと落ち合うようになってるのさ。もっとも順調にいけばの話だけども。でも信じるしかないだろう？」

「うん、そうだね・・・あ、でも一つ重大な心配があるんだ」

「なんだい？」

ミランダはライフレスの事を話した。もしかすると、彼が追いかけてくることも。その話を聞き、少し唸ったフェアトゥーセだが、やがて覚悟を決めたように表を上げる。

「これは・・・あたしも潮どきかねぇ。いいだろう。ここをあたしも引き払う用意をするよ」

「えっ、どうして？」

「どのみち魔術教会には赴くつもりだったし、そうなれば色々準備も必要なのさ。あたしも、いつまでもここで安穏と暮らしておくこ

とはできないということだね」

その言葉を聞いて、ミランダが申し訳なさそうな顔をする。フェアトゥーセはそのミランダの表情を見て、肩を優しく叩いた。

「気にするんじゃないよ。万物は常に移り変わり、あたしにもその出番が回ってきたってことさ。不老不死のあんたでも、心境が変化するようにね」

「ん・・・そう言ってくれると、救われる」

「沼地を出たら、最寄りの町近くまで転移の魔術を起動してやろう。それなら多少は見つかりにくいだろうさ。あたしにできるのはこのくらいだ」

「いや、十分だよ。感謝してる」

ミランダがフェアトゥーセの手を握って、感謝の意を伝える。

「感謝しているなら、２つ程頼まれてくれるとありがたいんだけどね」

「？」

ミランダは首をかしげたが、フェアトゥーセは少し意地のわるそうな笑みを浮かべるのだった。

続く

沼地へ、その１５～白魔女の助け～（後書き）

次回投稿は４／１２（火）１７：００です。

沼地へ、その16～昇天～（前書き）

～あらすじ～
フェアトゥーセの頼みとは何か？　またゾンビと化したルージュの妄執とは……？

沼地へ、その16～昇天～

「頼みごとを2つ？」
「そう、2つだよ」

フェアトゥーセがミランダに語る。

「まず1つ目はあたしがここを離れる間、代わりにこの土地を聖化する人員をアルネリア教会から貸してほしい。もともとはアルネリア教会の仕事だし、アルネリア教会なら沼人の協力も得られる。悪い話じゃないだろ？」
「アタシにそれを認可するほどの権利はないけど、最高教主に聞いてみるよ。まあそのくらいなら大丈夫だろ」
「うむ。で、もう一つの方が難しいかね。このラーナを預かって欲しいんだよ」
「この子を？」

ミランダは少し難色を示す。彼女の顔を見たせいというのも多少はあるが、ラーナは闇属性の魔術の使い手だ。そのような人間を、簡単に仲間に引き入れてもいいものだろうか。性格は確かに大人しそうだが、まだ出会って一日だし、なにせ話せないのではコミュニケーションが取れない。それにこの容姿では町中を連れ回すのは大変だろう。

「うーん、できなくはないけど・・・」
「しかしあの娘のためにはきっと必要だよ？　闇系統の回復魔術を使う人間は非常に珍しいからね。探してもいるもんじゃない」
「それは確かに。あたしだって何人かしか見たことないもんね」
「この子なら、きっとあの娘の呪いの進行を食い止めることができ

る。そこの水の精霊には無理だろうがね。悪いことは言わん、連れてお行き。ほら、ラーナからも頼むんだよ！」

言われてラーナが前に進み出て、かわいらしくぺこりとお辞儀をした。この仕草から察するに、まだ年若いのだろうか。それならなおのこと、あの容姿は不憫な事だ。

「アタシはいいけどさ、とりあえずアルフィにも聞いてみないと。なんだかんだで、あの子がアタシ達のリーダーだから」

「ほっ、そりゃもっともさね。じゃあとりあえず皆で沼地の出口にまで行こうかね。まあその前に腹ごしらえだよ」

そうして、フェアトゥーセとラーナが家に入っていく。ルージュはどこに行ったのか見当たらなかった。昨日は比較的この家の近くにまで付いてきていたのだが。

だがフェアトゥーセが言うことは尤もなので、ミランダやエアリアル、楓も後に続く。残されたのはユーティとリサ。

「ユーティ、回復魔術は水と闇で何か違うのですか？」

リサがユーティに尋ねる。

「ん？　だいぶっていうより、全然違うよ？　水の回復魔術は、体液操作。体の中にある液体の操作を行うんだ。毒素も排出できるし、足りない物は補える。そうなるとかなり応用範囲は広いから、聖属性の回復魔術と並んでメジャーどころね。対して闇の回復魔術は、呪いや毒素の排出といった異物の除去に特化するのよ。ニアの調子が良くなったのも、そのせいね」

ニアは既に起き上がるのも平気になったようで、ミランダを止め

るほどの体力は戻っていなかったものの、入口の所で様子を見守るくらいのことはしていた。お腹を押さえている所を見ると、既にお腹が空いているのかもしれない。左腕はまだ完調ではないから、腕は固定しているけども。昨日のフェアトゥーセの話では、一週間もすれば固定は取れるかもしれないとのことだった。完全に元通りになるには、個人差もあるが獣人なら一月でも大丈夫かもしれないとのことだった。

「ふむふむ、かなり違うのですね」

「ちなみに、聖属性の回復魔術は体自身の再生と活性化。火は滅多にないけど、これも体の活性化かな。特に血流操作に優れるはず。風は水に近いけど、離れていても効果を及ぼす反面、効果が弱い。土は抵抗力・耐性を上げるわ。金は欠損した部分を補うことかな」

「詳しいですね・・・」

「当然でしょう？　水の妖精は本来回復魔術に特化しているんだから！　もっとも私がさらに得意で、色々勉強しているのも大きいけどね！」

「そうですか、水の妖精でしたね」

「何だと思ってたのよ？」

「てっきり鍋の妖精かと」

「キーッ！　それは誰のせいだと思ってるのよ!?　あ、こら。待ちなさい！」

＊＊＊

一人起こるユーティをほったらかして、リサはフェアトゥーセの家の中に入っていく。後はアルフィリースの無事を祈るのみだった。

一方で当のアルフィリースとサーペントである。彼らはサーペントの用事で、寄り道をしていた。

「で、用事って？」
「ルージュのことだ」
「ルージュ？」
「そなたが戦ったドラゴンゾンビのことだ」
「ああ」

アルフィリースは決まりが悪そうだった。いくら呪印に乗っ取られかけてたとはいえ、ひどいことをしてしまった。だがそんな彼女の様子に気がついたのか、サーペントが優しい言葉をかける。

「気に病むな。本来ならあれで灰に還してやるのが一番良いのだろうが、中々そうもいかなくてな。それに既に痛みなどは感じるようなものではないから、特に恨んでもいるまいよ。それどころか、そなたに懐いているようですらあったと、フェアトゥーセが話していたな」
「ゾンビに懐かれてもねぇ・・・」

またミランダにからかわれるなとアルフィリースは思いつつも、以前のように彼女達が接してくれるだろうかと、ちくりと胸が痛む。

「それで、どうしてそのルージュが？」
「あれは生前、俺に惚れていた」

サーペントが少し悲しそうに言う。

「ルージュは生まれた時からはねっかえりの火竜でな。まあルージュが小さい頃、興味本位で海に遊びに来ていた時に溺れたのを助けてからの縁だが、すっかり懐いてしまわれてな。当時俺は海に住んでいたから、結構な距離があったのだが、ねぐらに帰ると常に俺を

待っているんだ。ブローム火山に帰れと、何度言っても帰らなかった。時には帰っていたようだが、それでもほとんどを俺のねぐらで過ごしていた」

「・・・」

「火竜と海竜のつがいなぞ、冗談にもならん。火竜はだいたいが泳げんし、俺は人生の大半を海の中で過ごす。生活が違いすぎるのだよ。それに真竜と普通の竜では、いくらなんでも寿命が違いすぎる。俺達は何千年も生きるが、奴らはせいぜい数百年だ。人語も喋れない者がほとんどだしな。だがルージュは非常に美しく成長し、正直そんな竜が毎晩黙って俺のねぐらで待っているのだから悪い気はしなかった」

「悪い竜ね、あなたって」

アルフィリースがの言葉に、サーペントが苦笑する。

「返す言葉もない、その通りだ。だがそれがいけなかった。ある日、海で暴れている魔物がいるから退治してくれと、人魚どもにせがまれてな。とりあえず様子を見に行ったわけだが、解決するのに思わぬほど時間をとった。そのまま人魚の歓迎を受けるうちに、何ヶ月が経ってしまい、俺は久しぶりにねぐらに帰った」

「・・・」

「するとどうだ、そこには瀕死のルージュがいたではないか。やはり海竜の領域が合っていなかったのか、ルージュは病にかかっていた。俺はどうにかして治してやろうとしたが、ルージュはもうすぐ寿命だから傍にいて欲しいと訴えてきた。俺は彼女の最後を看取ったよ。だが、ルージュには何かしらまだ未練があったのか、そのままゾンビとなってしまった。そのまま悪さをするでもないが、俺に惚れた女の姿が徐々に崩れていく様を見るのはつらかったよ」

「それで沼地に？」

アルフィリースの問いにサーペントは黙っていたが、やがて重々しく口を開く。

「まあそれだけではないが・・・住処を変えればルージュも諦めると思ったのだが。彼女は付いてきてしまった。それからも普段はフェアトゥーセの所にいるものの、何日かに一度は必ず俺の顔を見に来る。そこで俺がいないといつまでもその場所にいるんだ。だから顔を見せて、安心させてやらないといけない」

「なるほど」

サーペントはそれを最後に黙ってしまった。アルフィリースもまた黙ったまま何も言わない。重い沈黙が2人を包んだが、やがてサーペントは綺麗な水が湧きたつ畔（ほとり）にやってきた。そこにルージュが佇んでいる。

「ルージュ、来たぞ」

「クオオオオ」

「今日も変わりないか・・・どうやったらお前の魂を天に還してやれるかな」

サーペントが複雑な表情でルージュを見つめる。ルージュは既に目がないが、その様子から痛いほどサーペントを慕っているのがわかったので、アルフィリースもまた悲しくなってきた。

そんなアルフィリースの表情を察したのか、ルージュがアルフィリースにすり寄って来る。正直、腐った生物にすり寄られるのはアルフィリースとしても気持ちのいいものではなかったが、ルージュの心中を察し、その行動に答えてやった。

その様子に驚いたのはサーペント。

「妄執に囚われたゾンビが、妄執以外の行動をするだと？　これは

一体・・・」

だがアルフィリースの方はルージュと触れあううち、何かに気がついたのか、ルージュと話し始める。

「え、何？」
「クオオオオ」
「そっか、それで・・・」
「クオオン」
「うん、わかったわ。ちゃんと伝えるから」
「まさか、話しているのか？」

ありえない、とサーペントは考える。竜族の言葉は、真竜であるサーペントには全て理解可能だが、死してゾンビとなった者は例外である。彼らにはだいたい知能が失われているので、言葉自体を思考することすらできない。そのゾンビと、目の前にいる人間の娘が言葉を交わしたのだ。

そして振り返ったアルフィリースの顔は、まるで別人のように慈愛に満ちた表情だった。

「サーペント、聞きなさい」
「？」
「この娘は貴方を慕ってついてきているだけではありません。むしろ心配しているのです。自分のせいで貴方が笑わなくなってしまったと。その後悔の念こそが、彼女をこの世界に引きとめているのです」
「なんと・・・」
「ですから貴方が彼女にしてあげられることは、彼女に約束してあげることだけ。貴方が元の貴方に戻ることを。心のまま、自由におおらかに生きる貴方が彼女は好きなのです。今の貴方は、囚われて

いる物が多すぎる」
「なぜそれを」

サーペントには心当たりがもちろんあったのだが、なぜそれをアルフィリースが知っているのかが不思議でならなかった。だがそのような事を問う前に、アルフィリースはさらに言葉をつなぐ。

「この娘は、私の力で魂を解き放ちましょう。ですから、貴女は彼女に誓いなさい」
「・・・いいだろう」
「では・・・」

アルフィリースがルージュの顔に手を沿わせるようにすると、ルージュの体が端から灰になってゆき、後には何枚かの鱗が残されただけだった。そしてその後に、赤く長い髪をした、深紅の瞳の美しい女性が立ちつくしている。その姿は幻のように透けており、既にこの世に存在していないことを示していた。

「ルージュか？」
「サーペント。貴方とようやくお話ができる・・・」

稀に歳経た竜が人間やその他の生物の姿に幻身するという。ルージュは若くして死んだものの、ゾンビとして存在した時間まで考慮すれば、かなりの年数を経ている。なれば、幻身ができてもおかしくはない。

「（まさか、アルフィリースが？）」
「彼女の力を借りて、少しの間お話しする時間を頂きました」

ルージュがアルフィリースに軽く会釈をする。アルフィリースは

微笑みでルージュに返した。

「最初に感謝の言葉を言わせてください。ゾンビとまでなった私を、見捨てないでくれてありがとう」

「何を言う。俺こそ、そなたに何一つ報いてやれず・・・」

「もういいの」

ルージュがサーペントに顔をうずめる。それを受けて、サーペントもまた幻身で人の姿になった。髪は蒼く短く、瞳は海を称える色だった。少し勝気な風体だが、なかなかの美男子である。

「私が一方的にずっとあなたを好きだっただけ。貴方の心はずっとあの大海原にあって、その後は・・・」

「ルージュ、そなたは全てを知っていたのか」

「ええ。でもそんな貴方が好きだった。海そのものである貴方に傍にいて欲しいなんて、私がだいそれた思いを抱いていたの。せめて海の生き物に生まれたかったけど、でもそれは叶わぬ夢だわ」

「ルージュ・・・」

サーペントがそっとルージュの頭をなでてやる。

「でも後悔も恨みもしていません。後悔があるとすれば、私のせいで貴方が笑わなくなったことだけ。ですから、これからは好きなように生きて欲しいの。貴方の気持ちに正直に。約束してくださいますか？」

深紅の瞳が、蒼海の瞳と交わる。そしてゆっくりと頷くサーペント。

「ああ、約束しよう。この真竜の名にかけて」

「よかった・・・これで思い残すことはありません。最後まで私の我儘に付き合わせてしまいましたね」
「いや、そうでもないさ。俺こそ、振り回していたような気がするよ。俺達はもっと早くに色々な事を話すべきだったな」
だがルージュは笑顔で返しただけだった。そしてアルフィリースの方を振り向く。
「人間の娘。もしブロームの火竜の一族を訪ねることがあったら、私の顛末を告げていただけますか？」
「いいでしょう、しかと」
「その代わりといってはなんですが、貴女に火竜の守護があらんことを・・・」
すると、ルージュの鱗がアルフィリースの小手に触れ、その一部となっていく、形はほとんど変わらないが、一部が深紅に染まったようだ。
アルフィリースがそれを確認すると、既にルージュの姿は霧散していた。思いを全て遂げたのだろう。
「アルフィリース、俺からも礼を言おう。俺もこれで・・・おい！？」
サーペントがアルフィリースの方を見ると、アルフィリースがぐらりと倒れるところだった。急いでかけより、サーペントが抱きとめてやる。
「どうした、しっかりしろ！」
「・・・すー」
「寝ているのか・・・全く不思議な娘だ。それにしても」

一連の行為はどうやったのか。また先ほど話していたのは本当にアルフィリースなのか。

「（この真竜にもわからんことがあるとはな。どうりでグウェンの兄者が目を付けるはずだ。だが借りができてしまったな。止むをえまい）」

サーペントは腕の一部を竜の姿に戻し、鱗をはぐとルージュと同じようにアルフィリースの小手に埋め込む。

「これでいい。火竜だけでなく、海竜の守護も得ることができるだろう。小さいが、まず少し返したぞ」

そしてルージュの残した鱗を集めると、一枚をさきほどはいだ自分の鱗の部分に埋め込む。

「ルージュ、共に行こう」

そしてサーペントは元の姿に戻ると、アルフィリースを頭の上に乗せ、沼地を泳ぎだす。

「さて、恩義をどうやって返すか・・・そうだ」

サーペントは小さな海鳥のような使い魔を召喚すると、はるか天空に向かって飛ばすのだった。

続く

沼地へ、その１６～昇天～（後書き）

次回投稿は４／１３（水）１６：００です。

それぞれの選択、その1～再会～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースがミランダ達と再会する時、彼女達の胸中はいかに……？

サブタイトルが変わりましたが、場面はそのままです。このまま第一幕ラストまで連日投稿で行きます。

それぞれの選択、その1～再会～

＊＊＊

アルフィリースがルージュを天に還してからほぼ一日後。無事に沼地の北端についたミランダ達。

「おいフェア。本当にアルフィリースは無事なんだろうね？」
「使い魔からの連絡じゃね。焦るんじゃないよ、餓鬼じゃあるまいし」
「うるさいよ！」
「来ました、サーペントです」

リサがいち早く察知する。サーペントも自分の姿を隠す霧のブレスは使っていないので、リサのセンサーもいち早く察することができた。

どうやら頭の上にアルフィリースが座っているようだが、なぜかその姿は元気がなさそうだ。

「あれがそう？」
「元気がなさそうだな」
「それよりも、頭の上に乗ってますね・・・」
「なんて罰当たりな娘だい。真竜の頭の上に乗るとは」

フェアトゥーセを初めとする一行が呆れた頃、アルフィリースもまた悩んでいた。

「ねぇ、サーペント。どうしよう？」
「ここまで来てその話か。来る途中で何度も話したではないか」

「でもやっぱりまだ気まずいよう。最初に何話していいか、作戦はない？」
「知らんな。自分で何とかしろ」
「ケチ―！」
「ここまで真竜の我にさせておいて、何がケチか！」

一日中ずっとこんな調子である。だが頭の上ですやすやとアルフィリースが寝てしまう当たり、図太いやらなんやらで、サーペントは呆れたり感心したりを繰り返していた。

「（全く、ここまで会話するのはいつ以来か。感情の浮き沈みも含めて、人間は本当に退屈せんよ）」

そしてミランダ達の目の前に来ると、サーペントは頭を低くしてアルフィリースをおろしてやる。アルフィリースは身軽に飛び降りたものの、目線は下に向けたままで、ミランダ達とは目を合わせない。気まずい雰囲気が流れる中、ミランダがつかつかとアルフィリースの傍に近寄る。

「アルフィ」
「ミランダ、あの、その・・・」
「心配ばっかりかけて！」
「ひ！　ご、ごめんなさ・・・あれ？」

気がつくと、ミランダがアルフィリースを抱きしめて泣いていた。

「本当に心配したのよ・・・無事でよかったわ。もうどこも痛いところはない？」
「う、うん」
「それならいいの。・・・アタシはアルフィがどこかに行っちゃう

んじゃないかって、ずっと心配してたのよ！？」
「あ・・・」
「アルフィがいなくなった後、ミランダは半狂乱になっていましたからね。沼地を全部さらってでもアルフィリースを探し出すんだって、大変だったんですよ？」
「まったくだ。止める方も命がけだった」
リサとエアリアルがうんうんと頷く。
「まあそれはともかくとしてですね」
ばん！　とリサがアルフィリースの尻を蹴りあげた。
「いったい！　何するの、リサ！」
「リサを心配させた罰です。ですが、これで勘弁してあげましょう。もしチビ共が同じことをしていたら、尻を出して、お尻百叩きの刑なのですが」
そう言ってリサもアルフィリースに抱きついてくる。
「私達は友人でしょう？　私は貴方に付いてくるために、アルネリア教会に可愛いチビ達を預けてまで行動を共にしているのですから。もっと頼ってください」
「そっか・・・ごめんね、リサ」
「アルフィ、我もだ」
エアリアルが悲しそうな顔をしている。
「アルフィは我を妹みたいだと言ってくれた。我もアルフィを姉のように慕っている。姉妹とは助けあうものではないのか？」

「エアリー・・・」
「もっと我を頼って欲しい。それに我は決心したんだが、我は大草原を出ようと思う」

その言葉に全員がエアリアルを見た。

「え、でもそれじゃあ・・・」
「もう決めたんだ。ウィンティアに言われてからずっと考えていた。我が本当に守りたいものはなんだろうと。大草原は守るべきものであって、守りたいものではない。我が本当に守りたいものは友人だ。それに父上にも言われたしな、心の赴くままに生きよと」

エアリアルの表情は真剣そのものであり、同時に晴れやかでもある。ずっと悩んでいた問題に、答えが出たのだろう。固い決意がその瞳に感じられる。

「だから我はアルフィリースに付いて行くよ。これからずっとな・・・」
「エアリー」

今度はアルフィリースの方がエアリアルを抱きしめていた。

「私、頼りないよ？」
「ふふふ、知っている」
「迷惑かけちゃうよ？」
「いいさ、そのくらいの方が支え甲斐がある」
「まああんまり迷惑かけるようなら、ひんむちゃえばいいのよ！」

ユーティが言った一言に、全員がユーティを白い目で見る。

「な、なによぉ」
「まったく・・・空気の読めない鍋の妖精です」
「だって、空気が重いからここはひとつ、私が盛り上げようとして・・・」
「余計なおせっかいですよ。だいたい空気が重いのは、ユーティが湿気させているからではないのですか？」
「アタシはどんな水の妖精だ！？」

ユーティがわめき始めたのを見て、全員が目を見合わせてくすりと笑う。それは久しぶりの全員の笑顔だったかも知れない。

「私も加えてくれよ」
「ニア！　もう体はいいの？」
「ああ。すっかり元通りとはいかないが、あらかたな。一カ月もすれば完全になるだろう」
「フェアトゥーセ！　ありがとう！！」

アルフィリースがフェアトゥーセに手を振る。

「ほら、楓もこっちに来な！」
「は、しかし私は」
「いいんだよ、細かいことは！！　それともアタシの命令が聞けないってのかい？」
「はあ・・・わかりました」

楓も加わり、全員で輪を作ってきゃあきゃあと話しあっている。その様子をサーペントとフェアトゥーセが、子どもたちを見守るような目つきで見守っていた。

そしてひとしきり話し終えると、ミランダが思い出したようにアルフィリースに提案する。

「あ！　そうだ」
「どうしたの？」
「ラーナのことさ」

いきさつをミランダがアルフィリースに話す。

「ラーナ、こっちにきな！」

呼ばれてしずしずとやってくるラーナ。

「アルフィの意見を聞きたくてね。どうしようか？」
「私は全然構わないし、むしろ歓迎なんだけど・・・えいっ！」
「きゃあっ！」

アルフィリースが突然ラーナのフードを引っぺがしたので、驚いてラーナが悲鳴を上げた。

「あ・・・」
「って、ラーナ話せるのかい！？」

しまったという感じで、ラーナが慌ててフードを元に戻して、フェアトゥーセの後ろに隠れた。太陽の元で見るラーナの容姿はやはり不気味だったが、アルフィリースは平気な顔をしている。

「旅のお供はいいけどね、その顔を元に戻してあげたら？」
「ふう、やっぱりおじょうちゃんは騙せないか」
「？　どういうこと？」

ミランダ達がよくわからないといった顔で、アルフィリースとフ

エアトゥーセのやりとりを聞いている。

「どうもこうも、ラーナって子の顔は作りものよ。理由は知らないけどね」

「「「ええええ!?」」」」

驚く一同を尻目に、全く悪びれもしないフェアトゥーセ。

「こうでもしておかないと、沼人の求婚が鬱陶しくてねぇ。まあ奴らにはこの外見すらも関係なかったけどさ。ちょっとおじょうちゃんがどんな反応をするか試してみたかったのさ。なにせこちとら手塩にかけた、娘の様な子を預けるんだからね。もっとも取り越し苦労だったみたいだけどね。ちょっと待ってな」

フェアトゥーセがなにやら懐から瓶を取り出し、ラーナの顔に塗っていく。そしてしばらくすると、ラーナの顔を毛の生え際から丁寧に剥いでいく。するとどうだろうか、下からは可憐な顔の娘が出てきたではないか。

「ふう・・・」

「ラーナ、ごめんよ。この子たちが来てからはずっとこの顔だったから、さぞ苦しかったろうね」

「いえ、フェアトゥーセ様。このくらいのことは、何というほどのこともありません」

少女がにこりと微笑む。フードを取ったラーナは茶色の瞳に黒い髪。髪は後ろでみつあみにし、さらに小さなみつあみを頭の横に垂らす。まだあどけなさを残す少女だが、どこか妙に艶めかしい。その可憐で可愛らしい容貌に、全員が思わずため息をもらした。

「改めて皆様にご挨拶を申し上げます。ラーナと申します」

少女がローブの裾をつまんで、ちょこんと挨拶をする。その仕草もまた可愛らしい。

「いつから気づいたのさ、アルフィ」

「最初から。だって、あれだけ顔が無茶苦茶なのに、髪は大丈夫みたいだったし、だいたい首とかは何ともなさそうだったじゃない？まあどうやって変装しているのかはわからなかったけど」

「なるほどねぇ・・・こりゃ改良しないと変装も使えないね」

「そうかしら？」

アルフィリースが意味深な目でフェアトゥーセをじっと見る。だがフェアトゥーセは気づかないふりをした。

「まあともかくだ、くれぐれもラーナのことをお願いしたいね。私の大切な娘みたいなものなんだからさ！」

「大丈夫よ、悪い様にはしないわ」

「では行って参ります、フェアトゥーセ様」

「ああ、達者でね。じゃあお前達、ここにある魔法陣に乗りな！」

フェアトゥーセが呪文を唱えると、大きな岩がずれて下から魔法陣が現れた。その魔法陣の上に移動するアルフィリース達。もう一度フェアトゥーセとラーナが握手をすると、転移の魔術をフェアトゥーセが起動させていく。

「じゃあな、フェア。世話になった」

「礼なんざいいよ。それより今度は上手い酒を持ってきな」

「ははは、そうする」

「また会うこともあるだろうよ。それまで達者にな」

「フェアこそくたばるなよ？」
「ふん！　馬鹿をお言いでないよ！」

だが最後の言葉が聞こえたものかどうか。既にアルフィリース達は転移を完了していた。その光景を見届けると、サーペントが人の姿になり、ゆっくりと声をかけてくる。

「フェアトゥーセ、話がある」
「ああ、あたしも話があるんだよ。ちょっと付き合いな」

そして2人は沼地へと戻っていくのだった。その光景を見つめる目が、さらに2つ。

＊＊＊

「奴ら来ませんね、ライフレス様」
「いや・・・先ほど沼地から出てきた。使い魔が確認したよ。だが転移を使ったようだな」
「え？　それでは追撃は厳しいのでは？」
「・・・そうでもない。どうやら長距離と言うほどの転移ではないな。せいぜい3日程度の距離だ。北街道近くの、フェブランの近くに転移した。これも今、使い魔が確認した」
「そこまで使い魔を？」
「言ったろう？　今度の俺は本気だから、油断はないと。まあ本気でなくとも油断はないがな。しかも今回は休息十分だ。行くぞ、ドルトムント。戦いだ！」
「は！　そのお言葉を待っておりました！」

そう言ってドルトムントがライフレスの元に膝まずき、ライフレスが巨大な鳥を何匹か召喚する。そして魔王達と共に全員で分割し

て乗りこむと、後には一陣の風が吹くのみだった。

続く

それぞれの選択、その1～再会～（後書き）

次回投稿は４／１４（木）１５：００です。感想・評価・ブクマありがとうございます。

それぞれの選択、その2～沼地に咲く愛～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリース達が転移をした後、沼地に残ったサーペントとフェアトゥーセは……？

それぞれの選択、その2～沼地に咲く愛～

＊＊＊

アルフィリース達を送り出した後、フェアトゥーセとサーペントは再び沼地へと戻って行った。そして、どちらが言うわけでもなく、サーペントがアルフィリースを安置した場所まで、素早く進む。アルフィリースに気を使った移動では1日かかった距離だが、今度はフェアトゥーセが一緒である。フェアトゥーセは防御魔術を使うと竜の姿に戻ったサーペントの口の中に入り、サーペントは高速で海を泳ぐ時の移動の仕方で、あっという間に元の場所まで戻ってしまった。

「ふう、揺れる揺れる」
「酔ってないか？」
「大丈夫さね、気を使ってくれているだろう？」
「もちろんだ」

フェアトゥーセが老人とは思えないほどの軽快な動きで、サーペントの口から飛び降りる。その時眼下に見えたのは、アルフィリースの呪いが汚染した漆黒の泉。

「これは・・・」
「これだけの物を、かの娘は内包していた。まったく、信じられんことだよ」
「だが事実さ。あの娘は色んな意味で謎が多い。果たして何者だろうねぇ・・・」
「魔女の長たるフェアにわからないのでは、誰にもわからないのではないか？」

「真竜であるサーペントでも分からないのだろう？」
「俺は真竜と呼ばれるには、俺はあまりに勝手気ままにやりすぎている。グウェンや、マイアのような立派な真竜じゃないさ」
サーペントが少し恥ずかしそうに述べる。それを見上げるフェアトゥーセ。
「それより、人型に変化しておくれよ。見上げるのは首が痛くてかなわんさ」
「おお、それはすまんな」
サーペントがいち早く人の姿に幻身する。体表を上手に変化させることで、衣服のように見せることも可能だ。変化としてはかなり高等な魔術だが、サーペントほどの真竜にもなれば造作もない。
「ああ、これで首が痛くない」
「俺だけ変化するのもなんだ。お前も元の姿に戻ったらどうだ？久しぶりだろう」
「ああ、そうだね。ラーナを預かってからだから、１０年ぶりかい？　まあ沼人の目をくらますために、だいたいこの恰好だけどさ」
「俺達にしたら１０年など一瞬だがな」
「だけど色々あった気がするよ。なにせ人間を育てたのは初めてだから。最初はなんでこんな面倒くさい事をと思ったが、ラーナがいなくなってみると寂しいものさ。意外にああいうのも悪くない。じゃあ戻るとするかね」
ラーナがおもむろにローブを脱いで裸になると、ローブから出した何かの粉を自分に振りかけ、サーペントの泉の水に入っていく。すると老人だった体が見る間に若返っていくではないか。曲がっていた腰はしゃんとし、肌はみずみずしさを取り戻し、髪や唇は艶や

かさに震える。そこには白い髪、白い肌にグレーの瞳をした、美しい娘が立っていた。

「やはりフェアは美しい」

「ありがとうよ。まあサーペントはあたしに惚れて、大海原を捨ててこんな辺鄙なところまで付いて来たんだもんねぇ」

フェアトゥーセのグレーの瞳が、悪戯っぽく輝く。サーペントは困ったような顔をするが、特に否定もしなかった。

「真竜を惑わすとは、まさに魔女だよ、そなたは」

「アンタが勝手に惑ったのさ。あたしは何もしちゃあいない」

「それもそうだ」

「それよりルージュは？　気配がないけど」

「天に還ったよ」

「ほ。そりゃまたどうして」

サーペントはいきさつを説明した。

「なるほど、アルフィリースがね・・・それはまた、ますますわからん」

「俺にも理解不能だ。だからグウェンにでも聞いてみようかと思ってな」

「そうだねぇ、それがいいかも。ところで話ってのは？」

「フェアも話があるのではないか？」

「いいよ、そっちが先さ」

「うむ」

サーペントは促されたが、口ごもっている。何度か話そうとはするのだが、その度に取りやめているようだった。だが、フェアトゥ

ーセは辛抱強くサーペントの言葉を待っていた。

「ああ、色々言葉は考えたのだがな。いざとなると出てこないものだ、まったく。フェアトゥーセ、率直に言おう。俺はそなたを愛している」

「うん、知ってる」

サーペントが意を決して放つ言葉に、あっさり首肯するフェアトゥーセ。だが、その目には感動も侮蔑もない。サーペントもその反応に、多少面喰ったようだ。

「そりゃこんなところまであたしを追っ掛けてついてくればねぇ。これであたしを愛してなかったら、ただの変質者だろ？　あたしが聞きたいのは、その先の言葉さ」

「う、うむ。それで・・・そのぅ、なんだ。俺は真竜で寿命も長い。対するお前は魔女とはいえ、人間だ。契約が切れるまで時間があるとはいえ、随分と寿命が違うだろう・・・だが、それでも俺はお前と共に暮らしたい」

「今でも暮らしてるようなものだろ？」

「そうではなく・・・あれだ。つがい、いや人間だと夫婦と呼ぶのだな。そのぅ、その夫婦として、正式に契りを交わしたい」

言って終わってから、サーペントは顔を赤らめた。余程の一大決心だったのだろう。そしてその言葉を聞き終わると、フェアトゥーセはゆっくりとサーペントの元に歩いてくる。海を思わせる蒼の瞳と、グレーの瞳が交錯する。

「そ、その。もし、お前が嫌でなければだが・・・」

「あたしの返事はこれさ」

フェアトゥーセはサーペントの顔を掴むと、そのまま唇を重ねた。思わぬ行動にサーペントが目を見開くが、そのままサーペントの腕の中にフェアトゥーセがしなだれかかる。

「やっと言ってくれたね、その言葉を２００年待ったよ。まったく、真竜は全ての叡智を司るとか言いながら、女心一つわかりゃしないんだから」

「な。そ、それでは・・・」

「こちとら、ずっと惚れてるのさ。初めてアンタを見た時からね」

フェアトゥーセが熱っぽくサーペントを見上げる。

「でなきゃ、こんなに長く一緒にいるものか」

「なんと。それでは最初から・・・」

「互いに惚れてたんだろうね。でも本当に惚れたのは、あたしが沼地に行ったときに、アンタが追っ掛けてきてくれた時かな。アレは嬉しかった・・・あたしのために海を捨ててまで来てくれたんだから。なのにアンタったら、何も言わないから。ルージュも心配して、昇天できないってもんだよ」

「・・・済まなかった」

サーペントがフェアトゥーセを抱きしめる。フェアトゥーセはその暖かさに身を委ねる。

「本当だよ。最初に大海原でアンタを見た時、自由に泳ぎ回るアンタを見て、なんて羨ましいって思ったのさ。あたしは魔女であることに囚われていたからね。最初は真竜という存在に憧れもあったし、光栄なことに傍にいて沢山話すこともできたけど、徐々に一緒にいるのがつらくなった。自分はどうしてこんなにも自由がないのかと。それに、完全に身分違いの恋だったから。でもアンタがあたしの所

に来てくれて・・・もうこれ以上望むべくはないよ。出来過ぎさ、あたしの人生は。今初めてそう思えるようになった。そうなると魔女であることにも感謝できる。身勝手なことだけどね」

「だが俺もだ・・・真竜として生まれ、この大地を見守ることこそ我らが使命と教えられながら、俺はいつも心が落ち着かなかった。俺は大海原を自由に泳いでいたのではない、もがいていただけなのだ。沼地に来て、ようやくそれがわかった。俺の魂の自由は、そなたと一緒にいてこそなのだと」

2人が見つめ合う。そして長い口付けを交わすと、ゆっくりと2人は離れた。

「でも、あたしは今はアンタと暮らせない」

「・・・アルフィリースのことか」

「それもある。だが、外の世界がこんなに急激に動いているとは知らなかった。ファランクスが討たれ、シーカー達は森を焼かれ、ウィンティアが精霊の里を追われたようだ。世界は流転するものといえど、こんなことは、あってはならないこと。あたしが世界の秩序を守る魔女である以上、この事態を見過ごすことはできない」

「それは俺も同感だ。世界を乱そうとしている者がいるようだな」

「さて、それはどうかな・・・」

「どういうことだ？」

だがその問いに、フェアトゥーセは答えなかった。

「ともかく、あたしは各地の魔女の元を回ってみる。奴らなら何かしらもう情報を持っているだろうからね。魔女ももはや無関係ではいられないだろうし、元々魔女ってのは人間を正しく導くのが役目なんだから。その後、魔術教会に行って来る。奴らにはあたし達の立場を明確にしておかないといけないし」

「そうか」
「久々に『魔女の団欒』でもやるかね」

魔女の団欒――それは大陸中の魔女が一同に会す集まり。魔女とは、精霊と直接契約を代わす女性の魔術士を指し、我欲ではなく、自然の秩序を守るためにのみ行動する。ちなみに男性の場合は導士という。大昔の魔女は精霊と契約を交わした都合上、人里を離れ自然の中で暮らすことが多く、世界の秩序を守るためにはそれが最善だと思われていた。だが魔物の多い時代の事、そのように人里を避ける彼女達は、民衆たちに魔物に与していると見なされ迫害対象とされる。また、おりしも時代は魔術士が迫害対象にある時期と重なり、魔女狩りなるものが行われるような地域すら存在した。

その後、魔術士達が徐々にその社会的地位を回復するにつれ、魔女達も考え方を改めるようになる。人間もまた自然の一部であり、共に守り導くべき対象なのだと。それを怠ったからこそ、あのような迫害となったのだと。この意見には魔女の中にも賛否両論があったが、多くの魔女はこの意見に同意し、自然の中に居を構えながらも積極的に人里に下り、人に様々な自然の知識を教え導くようになる。人の生活圏が広がるにつれ人口当たりの魔女の数は少なくなっていったが、現在の世界においても魔女と密接な関わりをもつ地域はある。

そんな魔女が一同に会するのが、魔女の団欒。彼女達はそこで各地の状況を伝え、自然の状態や、それぞれの近況を伝える。これは各々の迫害を未然に防ぐ意味もある。魔女の長は各属性の魔女が持ち回りでやることになっているが、フェアトゥーセは魔女になりたてのころにたまたま順番が回ってきたため、自分の仕事に追われてそれどころではなかった。さらに沼地に引き込もっていたので、この２００年は魔女の団欒は開催されていない。おそらくは各地の状況を、魔女達はお互いに知らないままだろう。そして代替わりもかなり起こっているはずだ。世界がこんな状況にあるのも、自分のせ

いかもしれないと、フェアトゥーセは少し気に病んでいた。
そしてフェアトゥーセがローブを翻す。既に出立の準備はできているようだ。

「全てが片付くまで・・・待っててくれるかい？」
「ああ、俺はそなたを２００年も待たせたのだ。それに、俺はここを浄化しなければならん。やっと真竜として、俺がなすべきことが見つかった気がするよ。俺は沼地に来てよかったと思っている。だから、俺が待つ事など気にするな」
「出来る限り早く帰って来るさ。そしたら、今度は自分の娘を育ててみたい」

フェアトゥーセが少し照れくさそうにしている。この言葉を発するのには、彼女でも相当の勇気がいったのだろう。だがそんなフェアトゥーセを愛しくサーペントは抱きしめ、別れを惜しむように放した。

「待っているぞ・・・」
「ええ、あたしも」

そうして、フェアトゥーセは各地の魔女の元へと旅立っていったのだった。

続く

それぞれの選択、その2～沼地に咲く愛～（後書き）

次回投稿は４／１５（金）１５：００です。

それぞれの選択、その3～迷子～（前書き）

～あらすじ～

こちらは転移をしたアルフィリース達。旅支度を整える彼女達が出会ったのは……？

それぞれの選択、その3～迷子～

＊＊＊

アルフィリース達が転移をした後、周囲を全員で確認すると、エアリアルがいち早く町を発見した。

「小さいが、町があるな」

「確かフェアはフェブランとかいう町だとか言ってたな。あそこで少し買い出しをしたら、今日中に北街道に合流しちゃおう。主要な街道まで行けばライフレスといえど、おいそれとは仕掛けては来れないだろうから」

「そうだといいけど・・・」

アルフィリースが不安げな顔をする。果たしてライフレスはそれほど生易しい相手だろうか。その不安が消えない。

「（自分の実験のために何十万もの人間を吹き飛ばすような奴が、そんなことを気にするかしら？　でも、どのみち北街道を行くのがアルネリアまでは一番早いみたいだし、止むをえないのかしら。上手く逃げ切れればいいけど）」

「とりあえず、周囲にライフレスの気配はありません。少なくとも半径１ｋｍ以内には」

「１ｋｍ？　リサ、そんなにわかるようになったの？？」

「はい、自分でも驚きですが、かなりリサの能力はアップしたようですね。直線に絞れば、ここから町の様子までわかりますから」

「すごいな・・・」

エアリアルが感心している。町まではまだ結構な距離がありそうなのだが、ファランクスとの特訓はリサの全体的な性能を大幅に引き上げていた。

「久しぶりに大草原を出たこともあって、センサー能力も絶好調ですね」

「そう言えば、エアリアルは初めて大草原から出たんじゃない？」

「そうだな、これが大草原の外か」

エアリアルが感慨深げに周囲を見渡す。だがここは沼地から大して離れてもいないため、まだ草原の様な景色だ。その空気を胸いっぱいに吸い込み、エアリアルが目を潤ませる。

「まだ草原みたいなものでしょう？」

「いや、大草原とはもう随分違うよ。風の精霊も少ないし、風の匂いも味もな」

「そうなの？」

「ああ、そうだよ。我は選んだのだな・・・」

ふとエアリアルがアルフィリースを見る。その目は涙に潤んで少し艶やかであったため、アルフィリースはなぜか照れて少し目をそらしてしまった。リサがそれに気付き、すかさず茶々を入れる。

「なんですか、その付き合い始めの恋人の様な反応は」

「う、うるさいわねぇ。ほっときなさいよ！」

「まあ、ある意味そんなものかもしれんな」

「ちょっと、エアリー？」

「ははは」

エアリアルが軽妙に笑う。その笑顔は晴れやかで、迷いや後悔は

既に感じられなかった。実際、そうなのだろう。

「でも、アルフィリースのことを姉さんと呼ぶのも変だしな」

「今までどおりでいいわよ」

「そうするよ」

「盛り上がるのはいいが、そろそろ行こう」

ニアが全員を促す。それに付いて全員が歩きだす。ふと、アルフィリースがニアの事を気にかける。彼女は一言もカザスの事を話さない。心底心配しているはずなのだが。

「ニア、カザスのことは・・・」

「今は言わなくていい。きっと生きてるさ。あいつがあんなところでくたばるものか」

「でも、心配でしょう？」

「それはもちろんだが、アルフィは知らないだろう？　カザスは私の前で色々夢を語ってくれたよ。自分はこの世のあらゆる謎に挑戦してみたいとな。それこそほっとけば一晩中でも語りそうだった。あんな情熱に燃えた人間は、そう簡単には死なんよ。だから、フェンナもきっと生きてるさ」

「そっか。ならもう話さないわ」

アルフィリースが、ニアとカザスは既に強い信頼関係で結ばれていることを羨ましく思った時、ミランダもまた話に加わって来る。

「まあ何かあれば桔梗から連絡が来るさ。そのように手配しておいたし、万一があればアルネリア教会に頼るように言っておいた。だからあの2人は大丈夫さ」

「ミランダ、恩に着るよ」

「いいってことさ。それより、ラーナのことも聞きたいな」

ミランダが最後尾を歩くラーナを振り向く。彼女はしずしずと歩き、とても大人しく後ろから付いてきている。そのラーナが、小さな顔を上げる。

「私の事、でしょうか」

「そう、ラーナの事。これから一緒に旅するんだから、色んな事を話しておきたいなと思って」

「例えば」

「なんでフェアの元にいたのか、とか？」

ミランダのその質問にややラーナが俯いたので、ミランダはまずいことを聞いたかなと思ってしまう。

「あ、いや。話したくないことは、話さなくていいからな。無理に聞いているわけじゃないんだ。」

「あ、すみません。私、考えるときに俯くのが癖でして。実は私の母親はバンシーなのです」

「バンシー？」

あまり聞き慣れない言葉に首を傾げる者が多い。ミランダとユーティだけは心当たりがあるようだった。

「バンシーっていうと、確か闇の精霊の眷族だね？」

「はい、そうです。母親はそのバンシーです」

「でもバンシーって、普通は人前に出ないでしょ？　森の中とかで、人知れず小さな集団で暮らすって聞いたことあるけど」

ユーティの言葉に頷くラーナ。

「普通はそうです。でも母のバンシーの一族は少し変わっていまして、淫魔の血も少し入っているのです」
「淫魔？」
「男を誘惑して、襲っちゃうっていうアレ？」
「お恥ずかしい話ですが・・・」

ラーナが頬を染める。その仕草に一同が妙にどきっとする。なるほど、納得ができる。まだ少女の様な顔と体型で、黒いローブに身を包んだ格好だというのに、妙に色っぽいと全員が思っていたのだ。ラーナが成人すれば、きっと引く手数多となるだろう。フェアトゥーセが顔を隠したのも、納得の所業だ。

「母の一族は、男女ともに人間を誘惑して一人前と認められます。それが成人の儀式だそうです。ですが、母はバンシーとしてはできそこないだったと自分で言っていました。どうしても男を誘惑する度胸がなくて、道端でさめざめと泣いているところを、父親に慰められて好きになってしまったのだとか」
「まあ・・・結果オーライだよね・・・」

ミランダが、なんとももやもやした口調で感想を言う。くだりだけなら吟遊詩人が好きそうな話だ。

「ですが、母は本当に父のことを愛してしまったので、ほどなくして私を身ごもりました。それが一族にばれて母は追放。父もまた魔物を妻にしたと、人間の町から追われました。そして私が生まれましたが、やはりなんといっても母は淫魔の血が入ったバンシー。何もしなくても母に夢中になる男は絶えず、また正体がばれたりたりすると一つの町に長くは留まれず、逃亡生活の様な状態に両親ともに疲れていたのです。また私をこのような生活に置きたくないと両親は願い、フェアトゥーセ様の元に相談に来ました」

「それでフェアが預かったんだね。じゃあ両親は」
「健在のはずです。今もどこかで旅を続けているでしょう。何度かは便りが来ましたから」
「そっか・・・なら」
「ええ、旅をしていれば父と母の噂を聞くこともあるかと。それも実は楽しみなのです」

にこりとラーナが笑う。道端に咲く、小さな白いルッカの花の様な笑顔は周囲を明るくした。

「ご両親に会えるといいね」
「はい」

その思いは全員が同じだったであろう。

＊＊＊

そうこうするうちにフェブランに到着する一行。フェブランは街道からも外れているし、かなり小さい町だ。人口は５０００もいないだろう。それでもエアリアルには全てが珍しいのか、きょろきょろと周りを見ている。興味津々でしょうがないといった様子だ。

「アルフィ、あれはなんだ？」
「あれはブータの実を潰して団子にしたものね。油で揚げて食べるのよ。露店の代表格ね」
「じゃああれは？」
「あれは本を売っているのよ。多分地図とか、都心の情報誌とかの日用系の本ね」
「あのきらきらしたのは？」
「あれは宝石売りよ」

「あれは、あれは！？」
「・・・あれは多分、ただのハゲたおじさんよ」

好奇心の尽きない子どもの様なエアリアルに、段々アルフィリースが疲れてきたのか返事が適当になっていく。だが完全にエアリアルは興味が初めて見る世界にとられ、アルフィリースの様子は目に入っていないようだった。そんな2人を尻目に、ミランダ、リサ、楓などが分担して必需品を揃えていく。

「ミランダ、食料はどうしますか？」
「晩御飯は北街道の町に付いてから取りたいね。リサ、北街道まではどのくらいだろう？」
「町の人に聞いた話だと、歩いて7日くらいだとか。北街道では、ラムリッサという町が一番近いそうです」
「なら大草原の馬に乗れば一日いらないね。昼ご飯と、水と、予備の保存食だけ補充しよう」
「了解です」
「それではミランダ様、夜具などは必要ありませんか？」
「いらないでしょ。楓は馬の飼葉を用立てて。あと水も」
「わかりました」
「馬の爪の手入れもそろそろしてやらないとな」
「あ、そっか。まったく、意外とやることあるね」
「でもまだ日も天高いしな。ここに泊るのは馬鹿馬鹿しい」
「そだね。それに早く沼地からは離れたい気がする。なんだか文明が恋しいよ」
「それは私でもそうだな」

ミランダのうんざりした様子に、ニアがくすりと笑う。こうして旅の準備は進められていくのだった。一方で、アルフィリースは完全にエアリアルとラーナのお守だった。エアリアルは質問責めにし

て、アルフィリースをいまだに困らせていた。

「アルフィ、あれは？　あれは？」
「エアリー、ちょっと休まない・・・？」
「アルフィリースさん」

ラーナがくいくいと袖を引く。

「何、ラーナまで？」
「いえ、そうではなくてですね」

通りの中央に、小さな女の子が周囲をきょろきょろしながら歩いていた。見た所、まだ4歳になるかならないかだ。服こそ粗末だが、綺麗なピンクの髪をした、独特の毛並みをした女の子だ。髪の毛が渦を巻いて、鳥の巣のようになっている。相当なくせ毛だ。どうも近くに親はいないらしい。

「迷子かな？」
「さあ、どうでしょうか。でも危ないですよね？」
「そうね。ちょっと様子を見てきましょうか」

アルフィリースがその子の傍に寄ろうとした瞬間、他のメンバーが戻って来る。

「あれ、アルフィどしたの？」
「いや、あの子供が・・・」

アルフィリースが指を指すと、子どももまた気がついたのか、アルフィリースの方を向く。すると、顔を輝かせながら一直線に走ってくるではないか。そしてその口から発せられた言葉は・・・

「ママ―！！」
「え〃っ・・・」

その瞬間アルフィリースは音を立てて固まってしまい、他の全員が荷物をガラガラと地面に落とす。その一方で、固まったアルフィリースの体にしがみつくように、ピンクの髪の女の子がすり寄っているのだった。

続く

それぞれの選択、その3～迷子～（後書き）

次回投稿は、４／１６（土）１８：００です。

それぞれの選択、その４～少女と吟遊詩人～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースのことを「ママ」と呼ぶ少女。その正体とは……？

「ママって」
「アルフィ、あんたいつの間に・・・」
「ち、違う違う！　私、そんなのじゃないから！」

アルフィリースが必死に否定したが、リサがぽんと肩を叩く。

「アルフィ、まさか貴女がそこまで大人だったとは。リサの負けを素直に認めましょう」
「馬鹿言わないで、キスだってしたことないわよっ！！」

そこまで言って、アルフィリースがはっとする。アルフィリースが思わぬ大声で言い返したため、通りを行く人々が歩みを止めていた。そしてひそひそと何やら言いあっている。

「（聞いた？）」
「（あの歳で・・・まだなんですって）」
「（可哀想にね・・・）」
「（もったいねぇなぁ）」
「（いやいや、何かしら致命的な欠点があるんだよ）」
「（男よりも、女の方が好きとかじゃねぇのか？）」
「（ありうるな・・・）」

町人達は好き勝手な事を言い合っていた。その言葉がアルフィリースにも聞こえてきたので、顔を真っ赤にしてふるふると震えている。そして自分に満面の笑顔でしがみつく少女に、思わず荒い口を聞いてしまう。

「ちょっと!?　貴女はなんなの？　何の恨みがあって、私にそんな事を言うの？」
「ママ、私の事忘れちゃったの？？」

だが答えはアルフィリースにとっては意外、少女にとっては当然のものだった。アルフィリースの言葉を聞いて、少女の顔が突然曇る。そしてあっという間に目に涙を浮かべ、大声で泣き始めた。

「うわあああ～ん！　ひどいよう～。ママが、ママが私の事を置いて出ていくから、私は頑張って追いかけてきたのにぃ～！！」
「え、ええ？　えええ？？」

少女はとても子どもとは思えないほどの大声で泣いた。周りにいた仲間が全員で耳を塞ぐぐらいの大声である。そのあまりの大声に、建物の中からもなんだなんだと、人が次々と出てくる。もはや彼女は注目の的だった。アルフィリースはそれに気づいて、さらに顔を熟れたトウカラの実のように真っ赤にしたが、それでもお構いなく少女は泣き続ける。

「ママが私の事忘れちゃった～！！　うわあああ～ん！」
「ちょ、ちょっと・・・泣きやんで、ね？　どうしよう・・・」

どうやら少女は、本当にアルフィリースの事を母親だと思っているようだ。全く悪意が無いのはアルフィリースにも分かったため、どうにか泣きやませようと少女の頭をなでたり、なだめるのに必死だった。

「ごめん、ごめんね。私が悪かったから・・・」
「ひっく、ひっく。・・・ママ、私の事思い出してくれた？」

「うーん、それは・・・」
「う、うえ～ん」
「ああ、もうどうしたらいいの！？」

もちろんアルフィリースには身に覚えが無い。段々と、アルフィリースも泣きたい心境になって来ていた。その時、吟遊詩人風に竪琴を背中に担いだ男が彼女に近寄って来る。背がとても高く、男だが髪が長く腰ほどまでもある。黒の髪を後ろで一つに束ね、ゆったりとした薄地のローブに身を纏う姿はどこか女性的だった。顔もまた人間離れして美しい。女装すれば、凄まじい美人になるだろう。

「（あっ、きれいな人・・・）」

このような状況においてさえ、アルフィリースはそう思ってしまった。それはほかの仲間も同じだったようで、

「ひゅう～」
「うむ、美しいな」
「人間にしては、かなりイケメンね」

と、ミランダはいつものことにしても、エアリアルやユーティまでもが同意していたのである。その美しい男性がアルフィリースに声をかける。

「久しぶりだね、アルフィリース」
「は？　どちらさまで？？」

だがアルフィリースにはやはり記憶に無い。これほどの美男子なら、一度見たら忘れようがないと思うのだが。

「なんだ。君はその子の事だけじゃなくて、私の事も忘れたのかい？」
「いや、忘れるも何も、会ったことがないわ」
「いやだなぁ、その子は私と君の子どもじゃないか」

その言葉に、やっと拾い集めた荷物を、またしても全員が落としてしまった。周囲は「痴情のもつれだ」などとてんで勝手な事を言っているが、アルフィリースに至っては完全に眩暈をおぼえており、気を失わないようにするのが精一杯だった。

「は、ははは・・・これはきっと幻ね。私はきっとサーペントに食べられて死んじゃったんだわ。うん、間違いない。全部夢なのよ。それにしては何ともタチの悪い・・・えい！」

アルフィリースが自分の頬をつねるが、当然何が変わるはずもない。その様子を見て、リサがアルフィリースの手を止める。普段なら笑っている所だろうが、リサも今回ばかりは真面目な顔だった。

「アルフィ、ちゃんと現実を認識しなさい」
「だ、だってさぁ。わけわかんないよ～。私、本当に・・・」
「わかっています。貴方は何者です？　先ほどからセンサーを効かせようとしても、貴方には全く効かない。この少女もそうですが。少なくとも、人間ではないですね？」

リサの一言に全員が警戒心を上げる。

「これは、多少悪ふざけが過ぎるのではありませんか？」
「ふむ、そんなつもりはなかったのだが。アルフィリース、私達が誰だか本当にわからない？」
「え。う～ん・・・」

アルフィリースが、やや眩暈を覚えながらも思い出そうと必死になる。だが先ほどの事がショックすぎて、上手く頭が回らない。

「えーと、えーと・・・」

「ならヒントを出そう。その子の名前は君がつけた。イルマタルというんだよ。アルフィリースはよくイルと呼んでいたね」

「イルマタル？　それって・・・」

アルフィリースがはっとしたように少女を見つめる。その琥珀色の瞳が、不安げにじっとアルフィリースをみつめている。そうしてアルフィリースが何かを言いかけた瞬間、日の光を遮る何かが現れた。

「見つけたぞ、アルフィリース」

「ライフレス！」

上空に浮かんでいたのはライフレス。同時に巨大な鳥から、次々と何かが降りてくる。先ほどまでてんで勝手な事を言っていた町人達も、突然の出来事にクモの子を散らすように逃げて行った。少女と吟遊詩人はその場に残り、少女が不安そうにアルフィリースのズボンを掴む。

そして目の前には魔王の群れと、黒い鎧の大男。アルフィリース達とて幾度の修羅場をくぐった猛者である。ライフレスの後ろに控える者達が、尋常な強さでないことは一目でわかった。特に黒い鎧の男。彼一人倒すだけでも、呪印の解放一つでは追いつくかどうか疑問であった。そんな猛者達を従えるライフレスが、ゆっくりと口を開く。見た目こそ子どものままだが、口調は既に何も隠していない。

「少し見ない間に、また騒がしくなったものだ。黒い服の小娘、吟遊詩人、それに子どもか」
「この子達は関係ないわ！」
「そうなのか？　それならば見逃してやってもいいが・・・」
「ママをいじめないで！」

イルマタルという少女がライフレスとアルフィリースの間に立ちはだかる。小さな両手を一杯に広げ、アルフィリースを庇う格好だ。目にはいっぱいの涙を浮かべ、それでもアルフィリースを守ろうと懸命である。
アルフィリースは思わず胸を打たれたが、ライフレスもまた驚いていた。そして小さく苦笑すると、一気にライフレスの殺気が膨らみ、姿が成人のそれに戻っていく。

「自分から名乗ったのではやむをえまい。子どもを殺す趣味はないが、貴様の関係者なら一人たりとも生かしておかん！」
「くっ！　イル、下がりなさい！」

アルフィリースがイルマタル抱きかかえるように後ろに下げる。膨れる殺気に呼応するかのように、ライフレスの背後の者達が戦闘態勢に入る。それを見てアルフィリース達も戦闘態勢に入ろうとするが、どう見ても勝ち目はなかった。敵の数もそうだが、アルフィリース達は完調とは言い難く、敵は戦力を増強している。何より、ライフレスの魔力の充実ぶりが違う。今度は本気で殺しに来ているのがすぐにわかった。

「くそ、今度は本気見たいね！」
「最悪だね・・・」
「ですが、今さら逃げるのは無理でしょう」
「こうなったら、一人でも多く道づれだな」

「大草原を出たばかりでこれか。だが、やむをえんな。ラーナ、お前だけでも逃げろ。こんな戦いには巻き込めん」
「・・・それはもう無理でしょう。それに、私も一度旅の仲間をお願いしていおいて、そのような無責任な真似をしたくはありませんから」
「来るわよ！」

そして今にもライフレスが飛びかかろうと一歩前に足を踏み出した瞬間、ライフレスの顔が意外な物を見たかのように、目を見開く。そして、反射的に飛んで後ずさった。

続く

それぞれの選択、その４～少女と吟遊詩人～（後書き）

次回投稿は、４／１７（日）１８：００です。

それぞれの選択、その5～集う闇～（前書き）

～あらすじ～

目の前に現れた少女と吟遊詩人の姿を確かめる暇もなく、ライフレスが追いかけてきて……？

それぞれの選択、その5～集う闇～

「勘がいいね。もう一歩踏み出していたら、消し飛ばしていたよ」
「貴様、何者だ？」

言葉を発したのは黒髪の吟遊詩人。驚いたのはアルフィリース達も同じで、思わず後ろを振り返ってしまった。吟遊詩人は優雅に笑顔のままである。その吟遊詩人を憎々しげに睨みながら、ライフレスが問いかける。

「人間ではないな・・・それにこの力。名を名乗れ！」
「私か？　普通は自分から名乗るのが礼儀だが、まあ私は君の名前を知っているからね、英雄王」
「！？」

ライフレスが驚愕に目を見開く。

「君には生まれた時から注目していた。類い稀な才能と、凄まじい研鑽。人間にしては、素晴らしい力を身につけたと思う。でも、今の君は一体何者だ？　私の知っている君は、確かに老いて死ぬはずだった。その姿は一体・・・」
「ふん、俺を知っているだと？　なるほど、貴様は真竜というところか」

ライフレスが要領を得たとばかりに吟遊詩人を睨みつけた。そこで吟遊詩人もふと笑みをこぼす。

「いかにも。私は真竜グウェンドルフ」

「ち、よりにもよって『破壊竜』か・・・」
「やっぱりグウェンだったのね！」

アルフィリースの顔が嬉しさに綻ぶ。彼女にとってはいい思い出の一つであり、遊び相手でもあり、様々な事を教えてくれた師匠の一人でもある。

「びっくりしたわよ、人間の恰好なんてしているから！　でもなんでここに？」
「ふふ、すまないね。君ならわかるかと思ったんだが、そういえば君の前ではこの姿は取っていなかったものね。アルドリュースとはこの姿でよく会っていたから、つい失念していたよ。ここにはサーペントの使い魔から連絡が来たのさ。アルフィリースに貸しができたが、自分は沼地を離れられないから代わりに彼女を守ってくれないかとね。まったく、兄貴分をなんだと思っているのやら」

そういって文句を言うグウェンドルフの顔は、だが楽しげだった。そして今度は厳しい顔をライフレスに向けると、ぴしゃりと言い放つ。

「本来は争いごとに介入しない真竜だが、この娘は我が娘も同然。また私が友人と呼んだ男の忘れ形見でもある。さらに真竜はこの娘に恩がある。もしこの娘に手を出すと言うのなら、真竜の長である私が相手になろう。いかに英雄王と呼ばれた貴様とて、そこまで無謀ではあるまい？」
「何を言う？　それこそ俺が望んだ形ではないか！」
「な・・・」

ライフレスのそのセリフに、全員が息を飲んだ。今ライフレスは、真竜相手に戦うと宣言したのだ。

「面白い！　真竜とは一度戦いたいと思っていたのだ。以前は戦うような機会に恵まれなかったが、俺の８００年に渡る研鑽の成果として、一つの指標にはなるな！　それに正直、このままアルフィリースを叩き潰すのは弱い者いじめのようで、少し気が乗らなかったのだよ！」

ライフレスが楽しそうに笑う。やっと好敵手を見つけたとばかりの顔だ。芯からの戦闘狂。その情念に、アルフィリース達は寒気を覚える。

「本気か、英雄王」
「冗談でこんなことは言わんよ、俺は。さあ、戦え破壊竜！　一息で国を滅ぼすという、貴様の自慢のブレスを見せてみろ！」
「やむをえんか・・・」

グウェンドルフからも殺気が迸る。まるで竜巻が近くに２つ発生したかのように、土煙りが舞い上がった。

「うっ！」
「これはいかんな」

思わずミランダ達が後ずさる。

「できれば町には損害を出したくないが、無理だろうな・・・」
「グウェン、本気なの？」

アルフィリースがグウェンドルフの方を心配そうな顔で見る。

「うむ。こちらはどうあれ、向うは既にやる気十分だ。アルフィリ

ース、しっかり周りを守っていろ。戦いは私一人で十分だ」
「そんな！」
「足手まといだと、言っている！」

優しそうだったグウェンドルフの顔が、戦う顔へと変わっていく。どうやらグウェンドルフにとっても、ライフレスは生易しい相手ではないらしい。その2人が戦闘に入ろうとした瞬間、2人の間に一陣の風が吹いた。

凄まじい衝撃音と共に地面が割れ、さらに延長線上にあった建物が真っ二つになる。

「はい、そこまで～」
「ライフレス、やりすぎです」

ケラケラと笑う老人のような少年と、美しい黒髪の女剣士が突如として現れた。さらにその後から次々と現れる者たちがいる。

「キャハハハ！　ライフレスったら、何マジになってんのぉ～？」
「まったくだ、抜け駆けはなしだぜ」
「ハーハハハハハ！　俺も混ぜろぉ！」
「ドラグレオ、貴方は黙っていなさい。話がややこしくなる」
「どういうつもりだ、貴様？　お師匠様の命令に逆らうとは」

一様に黒のローブをまとった男達。中にはファランクスの仇であるあの大男や、洞穴で出会ってリサにつきまとおうとした少年もいた。その一様に不吉な気を纏う集団を見て、アルフィリース達は恐怖にかられる。ライフレス一人でも手に余るこの状況で、同じようなのがさらに7人。

「何よこいつら・・・」
「俺の仲間だ、一応はな。もっとも認めたくはないがな」

ライフレスが吐き捨てるように、アルフィリースの問いに応じる。
その言葉に黒いローブの集団もまた、応(いら)えを返す。

「ひどい言い草だね～。こっちだって好きでやってるんじゃないっての」
「全くです。ただ我々は一つの目的のために協力しているだけの事」
「そうよ～。だからライフレスも暴走はそ・こ・ま・で。キャハハハ！」

だがそれでもライフレスは完全に戦闘態勢を解いたわけではない。隙あらばアルフィリースに襲いかかって来るだろう。そしてその決心を固めたのか、ライフレスがアルフィリースの方に歩いてくる。そのライフレスとアルフィリースの間に立ちはだかるティタニア。

「そこまでです。それ以上こちらにくれば・・・斬ります」
「出来るのか？　たかが剣士に」
「やれと言われれば。そのために鍛え上げた剣です」

尋常ならざる殺気が2人の間に立ち上る。殺気だけで人が殺せそうな勢いだ。戦いを幾度となく経験したアルフィリース達ですら、逃げ出したくなるほどの殺気。黒髪の女剣士、ティタニアから発せられる殺気はとても静かだったが、その力強さたるや、グウェンドルフやライフレスに勝るとも劣らない。

だが周囲のローブの連中はその争いを止めるわけでもなく、ニヤニヤしながらその様子を見ているだけだった。まるで良い見世物だとでもいわんばかりに。

「意地はらないの、ライフレス～。いくらなんでも、アタシ達を全員敵に回したら、貴方でも死ぬわよ？」
「それはどうかな？　お前達が俺を仕留めきるより、俺がアルフィリースを殺す方が早い。なんならお前達ごと、この辺一帯を吹き飛ばしてもいいぞ？」
「うっわ、すごい自信だね～」
「また身の程知らずなことを」
「これは本格的にお灸をすえる必要があるのでは？」
「しかし、貴方ほどの男がなぜそこまでこの娘に執心するのです？　見た所、大した実力者にも見えませんが」

ティタニアがアルフィリースを横目でちらりと見る。その鋭い目に思わずびくりとするアルフィリース。

「貴様は剣士だからわからんさ。他の奴も純系の魔術士ではないだろう？　だが俺にはわかる。この女は、いずれ俺達の領域に到達しうる逸材だ。しかも俺達に明確な敵意を持ってな。その時に慌てても遅いのさ。危険な芽は、摘めるうちに摘んでおく。俺は俺なりに、計画の事を考えている。なぜそれがわからん？」
「（計画・・・？）」

ミランダがその言葉に反応する。やはりこの集団は、何かしら明確な目的を持って動いているのだ。だがしかし、その内容がわからない。

「さあ、そこをどけ。罰ならいくらでも受けてやろう。だから俺にその娘を殺させろ！」
「だってさ、お師匠様。どうしますか？」

アノーマリーが何も無い空間に話しかける。すると空間に魔法陣

が浮かび上がり、その空間が黒く歪んだかと思うと、またしても黒いローブの男が出てきた。この男はフードを目深にかぶっているため、顔が見えない。その男が出てきた時、アルフィリースは思わずミランダの手を握っていた。ミランダがびっくりしたようにアルフィリースの顔を見るが、アルフィリースは完全に怯えきった顔をしていたのだ。

「アルフィ？」
「ごめん、ミランダ。手を離さないで」
「ああ。それはいいけど」

アルフィリースが小刻みに震えているのを見て、ミランダは手を握り返してやった。アルフィリースにも、なぜそこまで自分が怯えるのかわからない。

「（どうしてだろう・・・どうしてあの男が怖いんだろう。私はあの男に勝てない気がする、たとえどれほど修行を積んでも、どれほど犠牲を払っても。どうして？　ライフレスにすらこんな感情は一度も抱かなかったのに）」

だがアルフィリースの怯えを目ざとい連中は目の端に止めながら、全員がその黒いローブの男に軽く頭を垂れる。そしてゆっくりとライフレスに歩み寄ると、重々しくライフレスに問いかけた。

「ライフレスよ・・・我々は何のために動いている？」
「は、それは『世界の真実の解放のために』」
「そうだ。そしてそのための方策は、全て私が考える。お前ごときが勝手な事をしてよいものではない」
「・・・申し訳ありません」
「うむ、ペナルティは受けてもらうぞ？　そして私にとっても意外

な事だが、なんとも懐かしい顔がいるな」

声の調子からは、ローブの男は老人の様な響きがある。老人はグウェンドルフに向き直ると、まるでその姿をそのまま滑らすかのように移動する。そしてグウェンドルフから１０歩程度の距離に寄ると、そこでぴたりと止まった。

続く

それぞれの選択、その5～集う闇～（後書き）

次回投稿は、４／１８（月）１７：００です。

それぞれの選択、その6～闇を束ねる者～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリース達の前に次々と現れる敵達。そしてついにその首魁が姿を現し……？

それぞれの選択、その6～闇を束ねる者～

「久しいな、グウェン」
「・・・考えたくはなかったが、やはり君か。オーランゼブル」

オーランゼブルと呼ばれた老人がフードを取る。その下に会った顔は老人のように皺はあったが、目元は鋭く意志の強い森の色の瞳と、引き締まった口元、蓄えた口髭が印象的だった。そして耳が長く、彼はエルフのようでもある。だが、通常のエルフよりさらに耳が大きいようだ。

決して悪人の顔ではない。無駄に殺気を放つわけでもない。だがその目の強い輝きは、彼が敢然たる意志の元に動いており、目的のためにはどんな手段や犠牲も厭わないであろうことは簡単に想像がついた。彼は殉教者そのもの、あるいは戦場でいうところの決死隊のような顔つきをしていたのだ。

さらに、グウェンドルフとオーランゼブルが知り合いだったことには黒いローブの魔術一同も驚いたようで、それぞれが顔を見合わせている。そんなことはオーランゼブルもグウェンドルフも、完全に無視してはいたが。

「いつ以来かな、グウェンよ」
「君が私達の元を去ったのは、２０００年も前の話。かつての長、原初の知恵ある竜ダレンロキア様がお眠りになった時の事だ」
「懐かしいな。あの時はまだ5人とも生きていた」
「ああ。だが古巨人（エルダージャイアント）のブロンセルは既に亡く、翼人（ニケ）のイェラシャは新天地を求め、一族を率いてこの大陸を離れて行った」
「そして私とそなたと、後は当時小僧だった、亀の獣人ゴーラのいまや3人だけか」

「3人生きているだけでも大したものだ。だが君はあれからずっと姿を見なかった。あの後ゴーラと私は意見が一致し、互いにこの大陸の生命をより正しい方向へ導かんとして、我々が知りうる叡智を教えてきた。私はせいぜいエルフや巨人たちに魔術の知識を教えたくらいだが、ゴーラに至ってはさらに積極的に人の中に降りて行った。今ではグルーザルドに身を寄せているらしい。だが君は？　もっとも我々の中で情熱に燃え、今は亡きブロンセルも主張していたが、ダレンロキアさまが去れば君が皆を率いていくものだとばかり思っていた」

　グウェンドルフが咎めるような目つきでオーランゼブルを見る。オーランゼブルがライフレス達を通じて行った所業は、グウェンドルフも知るところである。それを目で表しているのだ。

「・・・そのあたりは語れば長い。だがグウェンよ、今でも私の思いはあの時と変わりない。それだけは信じて欲しい」
「ならばなぜ非道な真似を行う。やっていることが矛盾しているのではないか？」
「そう取られても仕方ないな。だが、これは必要な痛みなのだ」

　オーランゼブルが悲しそうな瞳をした。その瞳に、グウェンドルフもまた彼が嘘をついていないことを知る。

「オーラン、君は・・・」
「グウェン、協力しろとは言わない。だが黙って私のすることを見ていてはくれないか。あの後、私は一人様々な事を研究した。どうしても気になることがあったから。そして、お主たちの方法では駄目なことに気が付いてしまったのだよ」
「どういうことだ？」
「それは言えない。だが既に変化は訪れている。グウェンよ、もっ

と世界を見ろ。さすれば全てがわかる。私のしていることも正しいとわかるだろう」

それきりオーランゼブルは何も言わなかった。言いたいことは全て言ったとでもいわんばかりに。その姿にグウェンドルフも、これ以上の問答は無理だと悟ったようだ。

「・・・なるほど、これ以上は話しても無駄なようだ。では私からも後一つだけ」
「なんだ？」
「アルフィリースを殺すのか？」

この問いに、全員に緊張が走った。もしここでオーランゼブルが首を縦に振れば、その場で凄惨な殺し合いが始まることは容易に想像ができた。おそらくはグウェンドルフも真竜としての力をいかんなく振るうだろう。結果として、この小さなフェブランは地上から姿を消すことになる。

だが、オーランゼブルは即座に首を横に振った。その仕草に、正直なところ全員が安堵をおぼえていた。敵の情けにすがったようではあるが、戦ったら全滅は必死だったことくらい、誰にでもわかっていた。

「いや、殺さぬよ」
「ならばいい、当座はな。私にもまだ判断材料が少なすぎる。君のしていることについて、私とても即座に結論は出せないからな」
「ちょっと待て！　どう考えてもそいつらは悪党だろう！？」

思わずミランダが体を乗り出した。それはアルフィリースとて同じ気持ち。だが、グウェンドルフの答えは冷ややかだった。

「それはどうかな？　それは君達人間の価値観の問題だ。私の知る限りオーランゼブルは意味なく殺しをする人物ではないし、確かに私は今の段階で何も知らなさすぎる。判断は下せないよ」
「だからって人を殺していいわけが！」
「君はアルネリア教のシスターだったね？　君の見方はあくまで人間としての見方だ。私達からすれば、必要に迫られれば自然界の動物は皆戦う。それと変わりがないのだよ。心優しいことは良いことだが、我々のように全ての生物を元来見守る立場の者にとっては、人間も草木も、等しくこの大地に生きる者として変わりがないんだ。人間は多くの魔物を駆逐したが、魔物でさえ、我々にとっては等しくこの大地に生きる命。慈しむものであることに代わりはないのさ。だから本来真竜である私がアルフィリースの味方をするのは、禁忌を犯していることになる。だけど、もう彼女と私は運命により関わってしまったからね。私は彼女から多くのものを受け取り、私は誇り高き真竜という一つの生命体として、受けた恩は彼女に返さなくてはならない。これは真竜の長としてではなく、一個の竜であるグウェンドルフとしての行動だ」
「・・・」

ミランダは黙ってしまった。確かにミランダの言い分は人間側だけの見方だった。だが、本当にそうだろうか？　ミランダにとっては、今まで見た出来事が全てである。グウェンドルフがどこまで知っているのかはわからないが、とても目の前の存在達が正しいとは思えなかった。
そしてオーランゼブルがゆっくりと口を開く。

「ではグウェンドルフは、その娘の味方をするのだな？」
「ああ、そう思ってくれて構わない。もちろん私個人としてだけどね」
「ふむ。ならば私とて、君と争うのは避けたいな。むろんこれは私

個人としての願いでもあるし、殺戮が我が望みではない」
「ならばここで互いに不干渉ということにしないか。もちろん、これは私が事情を全て知るまでの事だ。状況次第では、私は君の敵になるかもしれない。もちろん、そうならないことを祈るのみだよ」
「それは私も同じだ。だが、運命はどうなるかわからん。せめて互いにダレンロキアの導きがあらんことを、だな」
「ああ」

そうしてオーランゼブルはくるりと振り向くと、黒いローブの全員に向かって言い放つ。

「よいか、たった今約束がなされた。我々はこの娘達に干渉無用！　これはいかな理由があっても守られなければならない。これを誓約によって誓え」
「「「「「「御意」」」」」」

そして一斉に指の腹を斬り、オーランゼブルに一人一人傷口同士を合わせていく。簡単な誓約だが、同時に精神的に制約がかかる。この誓約に反した行動を、無意識下にも行えなくするのだ。
そしてオーランゼブルが再びグウェンの方を振り向く。

「お主ともだ」
「そうだね」

そしてグウェンドルフとオーランゼブルも同じことをする。ここに誓約はなった。もし誓約が解消されるようなことがあれば、もう一方にその事が直ちに知れる。そして、違反した側は魔術的に正当性を失くすことになり、異端として魔術士の世界から抹消されることになるのだ。誓約を解消するには、再び互いが会い、誓約を取り消すことを誓わなければならない。

誓約後、オーランゼブルがアルフィリースをちらりと見る。アルフィリースはびくりとなったが、オーランゼブルが何を考えているかは、アルフィリースにすら覗い知れないままだった。さらにオーランゼブルは去ろうとした瞬間、リサに目を止める。その目が興味深げに一瞬だけ開かれた。だがそれも本当に一瞬のことで、リサ本人にさえほとんど気に留められぬことだった。

そして次々と去っていく黒いローブの人間達。ドゥームがリサに投げキスをしたが、リサはそれを手ではたき落とす動作をした。それを見て肩をすくめながら去るドゥーム。ライフレスもまたアルフィリースの方を悔しそうに歯噛みしながら去っていく。その姿を彼らが見て、それぞれがアルフィリースを一瞥し、それから去って行った。だがドラグレオだけが動こうとせず、逆にグウェンドルフの方にずんずんと歩いてきた。思わず飛びだしかけるエアリアルをグウェンドルフが制し、ドラグレオと向き合う格好になった。

「おい、貴様。とんでもなく強いな」

「それは褒めてくれてありがとう。君が満足するほどには強いと思うよ？」

グウェンドルフは爽やかに笑い、ドラグレオもまた満面の笑みを返す。

「そうか！　いつかやれるといいな！？」

「そうだねぇ、そんな時が来るのは幸か不幸かわからないけども」

「難しい事を言うな！　強い奴同士は引き合い、戦うのが自然の掟だろうが！！」

「まあ・・・そうかもね」

ドラグレオの理論はいつも単純明快。グウェンドルフも思わずドラグレオにつられて笑う。確かにこうして見ると、ドラグレオには

周囲を威圧するような邪気はない。むしろ爽やかですらある。だがエアリアルだけは我慢がならなかった。父の仇が目の前にいるのだ。そしてドラグレオがまた自分の事を見ようともしないことに、エアリアルは自制心をなくしてしまう。

「おい、貴様！」
「あん？」
「貴様が父上を・・・ファランクスを殺したのか！？」
「ファランクス？　誰だそりゃ」

ドラグレオが耳をほじりながら、興味なさそうに聞き返す。その態度にかっときたエアリアルは、実力差など頭の中から吹き飛び、思わず槍を構えていた。

「貴様が大草原で殺した火を使う赤い獣だ！　もう忘れたのか！！」
「なるほど、奴か。覚えてるぜ」

その瞬間ドラグレオの瞳がふっと優しく、深くなる。その豹変ぶりに、エアリアルは思わず槍を持つ手を緩めてしまった。

「あいつ・・・強かったなぁ。俺がやった中では5番目くらいには強かったか？　奴は寿命が近かったみたいだったから、奴がもっと強い時に思う存分戦ってみたかった。きっと、もっといい勝負になったろうなぁ・・・」
「あれが私の父上だ！」
「父上？　なんだそりゃ？」

ドラグレオが聞き返した内容に、エアリアルが呆然とする。

「貴様、からかってるのか？」

「いや、本気でわからん」
「なんだと!?」
「だが、貴様にとって大事な言葉を意味するらしいな。で、どうする」
「くっ、いずれ我が貴様の首を取りに行く。覚えておけ、我の名前は・・・」
「あー、どうでもいいな。お前にゃ無理だ」
「なっ・・・」

その言葉を最後にドラグレオは背中を向ける。心底エアリアルに興味がないのだろう。その姿を呆然と見送るエアリアル。怒りと屈辱で顔を真っ赤にし、槍を血が吹き出るほどに握りこんだ時にアルフィリースがその手をそっと取り、エアリアルに向けてゆっくりと首を横に振った。そしてエアリアルは徐々に下を向き、力なく槍を落とした。

「く・・・そっ！　何なんだ、奴は？」
「・・・おそらく本当に興味がないのでしょうね。彼の心情や反応はこれ以上ないくらいわかりやすかったので、嘘は言ってないでしょう。だいたい、嘘を言えるほど頭が回りそうにありません。グウェンドルフと戦いたいのも、ファランクスが強かったのも、エアリーに興味が無いのも本当です。彼の目には自分が認める強者しか映らない。だから次に会っても、私達のことは覚えていないでしょうね」
「我ではまだ、認識すらされないということか」
「残念ながら」

と、同時にそれでよかったのではないかと思う。リサはドラグレオの内面を探ろうとしたのだが、まるで太陽か竜巻か、世界の果てにあるという巨大な滝を垣間見たように果てしないエネルギーの奔

流を感じ、思わず探る気配を引っ込めたのだ。あんなものに触れれば、自分の意識ごともっていかれそうだと、リサの本能がやめさせた。

「（生命力の塊・・・そう表現するのが一番良いのでしょうか。とんだ化け物です。何をどうすればあんなものが生まれるのか）」

リサの悩みもつかの間、一人遅いドラグレオを、ブラディマリアが迎えに来る。

「何してるのよ、ドラグレオ。行くわよ～？」
「・・・ガー」
「こいつ、歩きながら寝てるわ・・・信じられない」

ブラディマリアが呆れかえる。そしてドラグレオをつかまえ転移を起動させようとする刹那、グウェンドルフの方を彼女が見てくすりと笑った。その目線に意味深な物を感じ、グウェンドルフがはっとする。

「（あの娘は・・・もしや）」

だがすぐにブラディマリアはドラグレオを伴い消えてしまった。口もとの笑みだけが、妙にグウェンドルフには印象的だった。

そして全てが去った後、残ったのは地面の剣跡と、壊れた建物だけ。その剣の跡をおそるおそるユーティとニアが覗きこむ。

「信じらんない。アルフィがすっぽり入って余りあるくらい深く切っているわよ」
「・・・ありえんな。魔術が発動した気配はなかったろ？」
「ええ、純粋に剣の力ってことよね」

「そんな馬鹿な」

2人が建物の方を見る。建物は綺麗に真っ二つになっており、地面を斬った後はさらに向うにまでつながっていた。

その事もそうだが、危機が去ったことにいまいち実感が湧かず呆然とする一行の中、アルフィリースが神妙な面持ちでグウェンドルフに向き直った。

「グウェン、説明してもらえる？」

「・・・そうだね。事態がここまで至れば君にも説明をしておいた方がいいだろう。とりあえず場所を変えよう。ここではすぐに人が来てしまう」

「なら、このまま北街道に向かおう。当面の危機は去ったんだろうし、とりあえずは目的地に向かう方向でいいだろう、アルフィ？」

「ええ、そうね・・・」

釈然としないものを多く抱えながら、アルフィリースは返事をした。そしてその中心を占めるのは、なぜ自分はあのオーランゼブルと名乗る魔術士にあれほどの恐れを抱くのか。他にも考えるべきことは沢山あるはずなのに、その事がアルフィリースには一番気にかかってしょうがなかった。

続く

それぞれの選択、その6～闇を束ねる者～（後書き）

次回投稿は、４／１９（火）１６：００です。

それぞれの選択、その7～5人の賢者～（前書き）

～あらすじ～

とりあえずの停戦協定を結ぶことに成功したアルフィリース達。

そして、グウェンドルフから今真実が語られる。

それぞれの選択、その7～5人の賢者～

＊＊＊

その後、アルフィリース達は進路を北街道に向けた。人数が増えたもののエアリアルの馬はかなり大きめなので、あまり速度を出さなければ三人は一緒に乗れる。どのみち新しい馬を調達した所で、エアリアルの馬の速度にはついてこれないだろう。そうすると、これから急ぐ時にはいっそ飛竜を借りた方がいいかもしれないということを、アルフィリース達は考えていた。

北街道に向かう道では誰一人として口をきかなかった。ユーティでさえそうである。幼いイルマタルだけはアルフィリースに会えたのがとても嬉しいのか、アルフィリースの膝の上できゃあきゃあと騒いでいた。

そのままやがて日がちょうど真上に差しかかろうとしたところ、ミランダが重々しく口を開いた。

「少し早いが昼休憩にしないか？　話したいこともあるし」
「そうね・・・グウェン、いいかしら？」
「いいだろう。休憩にしよう」

そして街道を少し外れ、適当に座れる草場を見つけて全員で昼ご飯を食べた。ここでもイルマタルははしゃぎ、その笑顔を見ていると先ほどの話をするのは全員気が引けてしまった。だがイルマタルはご飯を食べてひとしきりはしゃぎきると、アルフィリースに抱きつくようにして寝てしまった。イルマタルが安らかな寝息を立てはじめると、アルフィリースが話の口火を切る。

「グウェン、まずはこの子の事を確認したいわ。この子は、あの時

の卵の子なのね？」
「そうだよ、アルフィリース。イルマタルと言う名前も、君がつけたものさ」
「やっぱり・・・」
「どういうことか説明してくれる、アルフィ」

ミランダの問いに、アルフィリースが説明をする。グウェンドルフが真竜の族長として卵を温める必要があったことをサーペントから聞き、自分は知らないうちにその現場に居合わせたこと。そしてグウェンドルフの所で遊ぶ時に、自分もグウェンの真似をして卵を温めていたこと。その時に卵が孵ったらイルマタルと名前を付けるつもりだったが、卵が孵るより早く自分が旅に出たこと。

「アルフィリースが旅に出てからすぐ、あの子は生まれたんだ」
「そうだったの・・・確かに私が話しかけると、中から反応してたものね」
「そう。だからこの子はアルフィリースのことも覚えていたし、自分の名前も覚えていた。余程君のことを好いていたんだろうね。生まれるなり、私のことなんか見向きもしないで君のことを探していたよ。完全に君のことを母親だと認識してたんだな。もっとも君が卵を温めたことが原因だけどね」
「私そうとは知らずにやっていたわ・・・最初は貴方が留守の時に忍び込んで、卵を温めていたのよね。無責任な事をしたのね、私」

アルフィリースがイルマタルの頭をなでる。イルマタルはアルフィリースの手の中で指を咥えて気持ちよさそうに眠っていた。

「構わないよ。普通は卵を少し温めたくらいでこんなに懐くことはないんだ。竜が親だと認識するのは、温めた時間に比例するはずだからね。なのにこの子はわずかな時間、といっても1年以上は一緒

にいたけど、とにかくアルフィリースのことを親だとして認識している。私は何年も温めていたのにね。これは私にも理由がわからないが、余程君達は相性がいいんだと思う」
「そうなの・・・でもそれはこの子にとって幸せなの？」
「それはこれからの君次第だ。とにかく今、イルマタルを実の親に合わせても混乱するだけかもしれない。本能で実の親を察知するからね。だからとりあえず、この子がもっと明確な自我を持てるようになるまで一緒にいてあげた方がいいかもね」
「それはどのくらいの期間なの？」

アルフィリースが不安そうに問いかける。数千年を生きる真竜――彼らが成長するのに一体どのくらいの時間がかかるのか、アルフィリースには想像だにできない。

「心配しなくても、想像よりはかなり早いかもね。普通は真竜といえど、人に変化できるのは早くて生まれてから１０年くらいだ。なのにこの子は生まれて１年程度で幻身の術を覚えてしまった。それはきっとアルフィリースに会いたい一心だったのさ。きっと人間の姿で会えば、自分のことをちゃんと娘だと思ってくれるとでも考えたのかな？」
「なるほどね。なのに私はひどいことをこの子に言ったわ。きっとこの子を傷つけてしまった」
「それは僕にも責任がある。ちゃんと順序立って説明してから会わせようとしたんだが、あの町に着くなりこの子が駆けだしてしまったものでね。まさかこんなに一直線に君の所に向かうとは、思ってもいなかったから。親を慕う子の本能を甘く見ていたよ。それに君ならイルマタルに気づくと勝手に思い込んでいた。結果としてからかったような形になったのを、こちらこそ許してほしい」
「ううん、そのことはもういいんだけど。この子は、謝ったら私を許してくれるかな？」

「それは大丈夫だろう。この子は心優しいからね」
「話の途中で悪いんだけどさ」

ミランダが会話を遮った。

「その事はとりあえず後にしてもらっていいかな。それよりも、この子が寝ている間に話した方がいいことがありそうだ」
「ああ、そうね。ごめんなさい」
「まずはグウェンドルフ・・・様を付けた方がいいかな」

ミランダがぽりぽりと頭をかく。さすがに真竜の一頭だと言われれば、ミランダとてもかしこまらざるをえない。真竜のことは、この大陸に住む者ならほとんどの者が知っている。

真竜――それはこの大陸の生命体の頂点に立つといわれる生き物であり、エルフや巨人に知恵や魔術を授けた存在としても知られる。その姿を生きて見た者はほとんどおらず、伝説の生物とされている。その真竜が、今ミランダ達とこうして食事を共にし、話しているのだ。聞けばサーペントも真竜だと言うではないか。これにはミランダ達も驚いた。世界に何頭もいないといわれる伝説上の生き物を、立て続けに2頭見ているのだ。実際にはまだ何十頭かはいることを、彼女達は知らなかった。

そんな生き物を前にかしこまるミランダを、グウェンドルフは優しく促す。

「いや、グウェンでいい。ここには真竜としてというより、アルフィリースの保護者として来ているからね」
「じゃあグウェン。まずは、なんで貴方がここにこんなにタイミングよく来たのかだ。貴方は気分を害するかもしれないが、アタシは元来全てを疑ってかかる主義の人間だ。念のために聞いておきたい」

ミランダが申し訳半分、疑い半分の目でグウェンドルフを見る。
グウェンドルフは少し苦笑すると、ゆっくりと語り出す。

「いや、もっともなことだと思うよ。確かミランダだね？」
「ああ、そうだ。まずはあんたが真竜だと言う証拠はあるかい？」
「用心深い人だ。だが尤もだね。証拠を見せよう」

グウェンドルフの背中の、肩甲骨の付近がめりめりと隆起し、大きな翼が出てくる。その荘厳さ、美麗さは間違いなく並一般の竜とは違った。それと同時に、隠しようもない威圧感が優男風のグウェンドルフから放出される。そのライフレス以上のプレッシャーに、ミランダ達は間違いなく彼は真竜なのだと悟った。

「これでも足らなければ、全身を元に戻そうか？」
「いやわかった。十分だよ」
「理解してくれて何よりだ。それで私がここに来た理由だが、イルマタルがあまりにアルフィリースを偲んで啼くから、一度は引き合わせようと思ってね。アルフィリースをずっと探してはいたんだよ。でも迂闊な事にアルフィリースには見張りを付けていなかったし、彼女は色々な所をうろうろしていたから、痕跡を追うにも思いのほか探すのに時間がかかってね。私が人前にそうそう出るわけにもいかないし、大草原の手前まではなんとか精霊達に聞きながら追ってこれたんだが、大草原は精霊がざわついているせいか追跡が難しくて。そんな途方にくれかけた時、サーペントの使い魔が私の所に来たのさ。昨日の事かな」
「サーペントの？」

アルフィリースが驚いた。サーペントはそんなことは一言も言っていなかったのだ。

「ああ、そうだよ。サーペントは君に非常に恩義を感じていてね。でも自分は沼地を離れられないから、代わりに私に恩を返してくれないかと頼んできた。グウェンなら知り合いだし、ちょうどいいだろうって。一応私は彼の兄貴分なのだが、全く私を昔から敬わない奴だよ、彼は」

グウェンドルフが仕方ない奴だといわんばかりにため息をついた。サーペントの心遣いは素直に嬉しいアルフィリースだったが、真竜の事情はよくわからない。なおもグウェンドルフは続ける。

「それで君達があの町にいるはずだと言うことを聞きつけ、また追われていることも聞いてね。文字通り急いで飛んで来たのさ。間に合ったのはまさに偶然さ。近くまでたまたま飛んできていたから間に合ったんだからね」

「そっか」

それは本当に偶然だった。もし一日分でもグウェンが遅れていたら、あの場でライフレスの手によってアルフィリース達は全滅していてもおかしくなかった。アルフィリースが感慨に耽る中、ミランダはさらに質問を続ける。

「さらに質問だ。これが一番重要だが・・・グウェンは、あのオーランゼブルとかいうのと知り合いか？」

「そうだ。むしろ親友だったよ。少なくとも２０００年前までは」

「２０００年・・・」

その途方もない時間に全員がため息をついた。記録される人の歴史はまだ１０００年程度。それ以前にも人間や他の生物はもちろん存在していたが、記録にはない。エルフなどにはあるのかもしれないが、人間や獣人の知るところではなかった。

「詳しく聞いてもいいかしら？」
「もちろんだ。だが君達には今語れないこともある。そのことは許して欲しい」
「ああ、わかった」
「では話そう」

そうして、真竜グウェンドルフから驚愕の歴史が語られる。

「まず私のことだが、アルフィリースは聞いたかもしれないが、私は過去に決して褒められた行いはしていない。むしろ札付きの悪党だった」
「知っているわ。『破壊竜』と呼ばれていたとか」
「恥ずかしながらその通りだ。２５００年ほど前に真竜の長に指名されてからは自粛しているがね・・・もっとも制裁に乗り出す必要がある時は私が自ら出向くことが多かったし、そのたび妖精や精霊が『破壊竜のお通りだ』などと騒ぐものだから、かの英雄王も私のあだ名は知っていたね。全く、悪い噂は消えないものだ」

グウェンドルフが苦笑する。ミランダはそのグウェンドルフに構わず、鋭く指摘をする。

「と、いうことは貴方を長に任命したのは誰だ？」
「『旧世代』と言われる真竜達さ。彼らはいまやほとんどが自然と一体化してしまったが、まだ我々の時代は活動していてね。私は暴れ者であると同時に、この世についても真剣に学んでいた。その姿勢が評価されたのか、当時の族長であった旧世代のダレンロキア様に、次代の長へと指名された。何度も断ったんだが、友人たちにも説得されてね」
「それがあのオーランゼブル？」

「彼もその一人だった。彼はハイエルフと言われる、エルフよりもはるかに寿命が長い一族だ。さらに魔力も強大だしが、個体数とにかく少なかった。純系のハイエルフは、今ではもう他に何人もいないだろう。他に古巨人のブロンセル、翼人のイェラシャ、獣人のゴーラ。この5人はダレンロキア様が見出し、学びを同じくする仲間だったのさ。後世の連中は『5賢者』などと呼んで我々のことを持て囃した。我々には呼び名などどうでもよかったんだけど。中でもオーランゼブルは特に優秀だった」

「何を学んでいたんだい？」

ミランダの質問に、一間開けるグウェンドルフ。

「この大地に生きる生物を、いかに導いて行くかについて」

「どういうことだ？」

「詳しくは言えない・・・だが、当初の我々の意見は一致していた。我々の知恵の一部を授け、彼らを良き方向に導くために我々は行動していた、とだけ言っておこう」

「・・・真竜にこんなことをいうのもなんですが、リサは大きなお世話の様な気がします。確かに我々は予想以上に早く進歩したのでしょうが、それは力ある者の傲慢では？　なんだか歪に感じなくもないですね」

リサがじろりと、決して友好的ではない目でグウェンドルフを見る。その言葉に一同がはっとしたが、グウェンは真摯に聞いていた。

「君の言う通りだ。だからこそゴーラは我々の元を離れ野に下り、ブロンセルは計画から降り、イェラシャは別の可能性を模索すべくこの大地を去った。そしてオーランゼブルは・・・」

続く

それぞれの選択、その7～5人の賢者～（後書き）

次回投稿は、４／２０（水）１５：００です。

それぞれの選択、その8～推測～（前書き）

～あらすじ～

グウェンドルフの話から推測されるオーランゼブルの目的とは…

…？

それぞれの選択、その8～推測～

グウェンドルフが昔を思い出す。

「彼はどうしたのです？」

「・・・彼は突然姿を消した。この計画にもっとも熱心だったのは彼で、彼こそ真竜の代わりにこの計画を中心になって行うべきだと、誰もが主張した。だが彼は辞退し続け、そして彼は姿を消す直前に同じ言葉を口癖のように呟いていた」

「・・・オーランゼブルはなんて？」

「『間に合わない』と」

グウェンが言い放つその言葉には、不思議な重みを含んでいた。

一瞬会話が止まるが、やはりここでも口火を切るのはミランダ。

「その言葉の意味するところは？」

「・・・それは言えない。本当の意味を私もまた知らないし、今わかることも、少なくとも私の一存では言えないことになっている」

「なんだそりゃ？　結局、肝心なところはわからないのかい？」

「すまないが、そういう掟なのだ。まだこれは私が君達に話すわけにはいかない。ここまでが私が話せる最大の内容だ」

「では話の内容を変えましょう」

今度はアルフィリースが質問する。

「今の質問とも重複するところがあるかもしれないけど、グウェンは彼ら全体としての目的はなんだと思う？」

「想像はいくつかできるが、確証は何も無い」

「アタシの想像を言ってもいいだろうか？」

ミランダが手を上げた。突然の発言に、思わず全員がミランダを見る。

「奴らはアタシ達を試してるんじゃないかな。いや、これはアタシ達だけでなく、人間全体をって意味なんだが」

「なぜそう思う？」

グウェンの質問に、ミランダは少し言うべきかどうか悩んだが、ここで隠してもしょうがないことだと判断した。

「実はアルネリア教会が襲われたんだが・・・」

「なんですって！？」

思わずリサが立ち上がる。これはリサには初耳だったのだ。ミランダも余計な心配を増やしたくなかったのでリサにも黙っていたのだ。

「ジェイクは・・・チビ達は無事なのですか！？」

「ああ、大事なかったらしい。といっても死人は多数出たみたい。攻めてきたのは、さっきリサに投げキスした奴だとアタシは思っている。詳しくは聞いてないし、エルザっていうのと、梓からもちょっと聞いただけだから、可能性の話だけどね」

「・・・ミランダはリサに心配をかけまいとしたのでしょうが、一言、これからは言ってください」

「すまなかった。以後そうするよ」

「ならいいのです。ミランダ、すみません。話を続けてください」

リサが座って話を促す。ミランダも気を取り直して話を続ける。

「で、その時の話だが。本部にも奴らが何人か現れたにも関わらず、敵対行動はとらずにその場を引き揚げたそうだ。もちろんアルネリア教会の戦力が奴らを上回っており、奴らがそのことを警戒したという可能性も考えられるが、最高教主の話だと、奴らがその気なら教会は少なくとも廃虚と化していただろうとは言っている」

「奴らはそこまで強いの？」

「ああ、そうみたいだね。でもおそらくそうなった場合、最高教主は姿を隠してゲリラ戦法に出るだろう。そうなったら面と向かってやり合うより、奴らにとっては厄介じゃないかな？　奴らはそのことを警戒したとも考えられるが、楓。ここまでの考察について、何か意見はあるかい？」

と、ミランダが楓に話を向ける。突然話を振られた楓は少し驚いたようだったが、彼女は実に的確に回答した。

「そうですね、まず一点。私は教会の襲撃時その場に居合わせた者の一人ですが、教会を襲撃したのはミランダ様の想像通り、リサ殿に絡んできたあの少年です。彼はミリアザール様が難なく退けられました。またアルベルト殿も彼と互角以上に戦っています。そこから考察されるのは、彼よりは実力的に上の戦力をアルネリア教会は保有しているということ。

次の点です。彼を倒しかけた時に、彼を救出するために踏み込んできたのがライフレスと、最後に大男を迎えに来た少女です。彼らがあの少年を連れ去るのを、ミリアザール様は容認されました。この判断にはかなり疑問がありましたが、現場を見たのはわずか数名。現場を見た者には口止めがなされ、大司教にすらこの時何が起こったのかは詳しく説明されておりません。ただ襲撃者を仕留め損ねたと、関係者には伝えてあります。ここから考察されるのは・・・」

「最高教主が勝てないと判断したんだろうね」

「これは個人的な推測ですが、おそらくは。ですが、これは梔子様も同様の判断をされています。ですから、その場にいた者全てが同じような意見だと思っていただいて間違いないかと」
「うん、アタシの想像通りだな。まあ最終判断は、最高教主に会ってからだけど」

ミランダが頷く。そして他の者の意見を待たずに、さらに話を続けた。

「ここからは現段階における個人的な考察さ。ライフレスの最初の態度にしろ、アタシ達は奴らに試されている気がする。アルネリア教会だって、もっとずるく襲撃すれば壊滅できたはずだ。もちろん色々な理由が考えられる。たとえば表だって聖都アルネリアを滅ぼしたら、さすがに多くの国が黙っていないし、奴らに対して連合を組むだろう。あるいは自分達の存在をあまりおおやけにしたくなかったのかもしれないが、アルネリア教会が恥も外聞も捨てれば、奴らの存在を公にすることもできる。そう考えると、彼らの目的はアタシ達を試したんじゃないかねってね」
「何のために？」
「それは・・・わからないな」

ミランダがかぶりを振った。そして沈黙が場を包む。その沈黙を破ったのは、やはりというかユーティだった。だが、その内容は意外というべきか、真剣そのものだった。

「ねぇ、あまり答えの出ない問題で悩んでも、しょうがないんじゃない？　それよりはこれから先の方針を決めようよ」
「・・・ユーティにしては、まともな意見ですね。熱でもあるのですか？」
「ないわよっ！」

「そうでした、お馬鹿は風邪なんか引きませんもんね」
「なんですってぇ！？」
「はいはい、そこまで」

取っ組み合いを始めようとするリサとユーティを、ミランダが止める。

「どうするかはアルフィにまず聞こう。アルフィがアタシ達のリーダーなんだからね」
「そうですね。随分頼りないリーダーですが」
「そう言ってやるなよ、リサ。私はアルフィの言うことに従うぞ」
「ニアに同じく我もだ。楓とユーティ、ラーナは？」
「ミランダ様がそれでいいとおっしゃるのなら」
「アタシもアルフィについてくわよ。まあ本当に危険だったら逃げるかもしれないけど？　でもここで見捨てたら、妖精の名がすたるわ」
「私も皆様と同じです。どのみち行く所もありませんし、可能な限り傍に置いていただければと思います」

全員がアルフィリースを見る。アルフィリースは少し戸惑い、だが冷静に思考を頭の中で行い、結論を出す。彼女が出した結論とは・・・

「・・・ここからは私個人の考えよ。別に賛同が欲しいわけじゃないわ。そのつもりで皆は聞いてね」

全員が無言で頷く。

「とりあえず、私達はオーランゼブルに見逃してもらった形になっている。でも彼は、きっと私達にとって災いになる。そう強く感じ

るの。それがどのような形かはわからないし、それがいつかも。確実なのは、決して彼は止まらないということ。彼の命が尽きるまではね。だから私は・・・」

そこでアルフィリースが一つ間を置いた。

続く

それぞれの選択、その8～推測～（後書き）

次回投稿は、４／２１（木）１４：００です。

それぞれの選択、その9～行くべき道～（前書き）

～あらすじ～

グウェンドルフの話を聞いて、アルフィリースが選択する道とは……？

それぞれの選択、その9～行くべき道～

「私は彼に対抗できる勢力を作ろうと思う。それがどのような形になるかはわからないけど、私一人ではきっとどうにもならない。今回のように私自身が呪印に引き摺られるような事だって起こりうるし、恥ずかしい話、さっきだってミランダに手を握ってもらわなかったら立ってるのもつらいくらい、オーランゼブルに恐怖していた。はっきりわかるわ、私は彼に勝てない。どうして勝てないのかはわからないけど、そう本能が告げている。

だから、私は彼らに対抗できるような仲間を沢山集めないとだめ。彼らが私達に明確に敵対しないうちに。少なくとも今、彼らの危険性に気が付いている数少ない人間だと思うの、私達は。私達がやらなくてもどうにかなるかもしれないけど、どうにもならなかった時に後悔だけはしたくないの。それが私の考え。

・・・だからここから先、私の歩む道のりは非常に厳しいものになると思う。それこそ命も安全も保障できない。だから、この話に乗ってもらわなくても一向に構わないわ。降りるなら各人の判断で降りて欲しいし、責めはしないわ」

「それで、具体的にはどうするのさ？」

ミランダがアルフィリースに問いかける。アルフィリースは目を閉じ、やがて口と共にゆっくりと開いた。

「傭兵団を作るわ。私と共に戦ってくれる人を探すの。最初は国に仕官することも少し考えたんだけど、それでは肝心な時に自由がきかないし、なにより狭い世界にこもってしまうことになるわ」

「なるほど。じゃあアタシの意見を言おう」

すかさずミランダが口を開く。

「アタシは傭兵団には参加できない」
「そう・・・」

アルフィリースが目に見えて落ち込んだ。表面上は冷静を保ったが、落胆したのは誰の目にも明らかだ。立場上ミランダが参加するのは厳しいと誰もが思いつつも、ここまでミランダがきっぱり断るとは思っていなかった。思わずニアやリサが身を乗り出しかける。

「何しょげた顔してんのさ、アルフィ。人の話は最後まで聞くもんだよ」
「え？」
「アタシは参加できないけど、うちの最高教主を説き伏せようと思う。それでアンタの傭兵隊に協力する専属の部署を、アルネリア教会に立ち上げるのさ。そういう話なら、最高教主も乗るだろう。どのみち、今回の件では既にアルネリア教会に動きが見られる。それにアルネリア教会は、各国の魔物討伐なんかには援助をするんだ。別に対象が傭兵団でもおかしかないさ」
「ミランダ、それじゃあ」
「アタシはそこの長に就任するように働きかける。あんたの傍にいるよ、アルフィ。親友だろ？」

その言葉にアルフィリースが涙した。初めてアルフィリースが人前で見せる涙だったかもしれない。もちろん、寝ている時にうなされて見せる涙は別として、である。

「ミランダ・・・私・・・」
「何も言わなくていいよ。アタシが選んだ道だから」
「うん・・・うん・・・ありがとう、ミランダ」
「アルフィ、我も同じ気持ちだ」

涙を隠そうともしないアルフィリースに、さらにエアリアルが続く。

「我の命、アルフィが好きな時に好きなように使うがいい。外の世界には騎士というものがあるらしいな。我はアルフィの家族であり、騎士でありたい。もしよければ、我を受け入れてはくれないか？」

「そんな、エアリー・・・貴方ならもちろん歓迎よ」

「ちなみにリサも同じ気持ちです」

リサもエアリアルにすかさず続く。

「リサは放っておいてもあの変態少年の的にされるでしょう。それなら、こっちから出て行って倒すまでです。リサをただの大人しい美少女だと思ったら、大間違いなのですよ」

「リサ殿。その件に関して、私から一言」

意外な事に、楓が自分からリサに口を聞いた。

「これを私の口から言うべきかどうか悩んだのですが・・・リサ殿はそれでなくても、無関係ではないのかと」

「どういうことですか、楓？」

「実はリサ殿が預けていた子ども達が、あの少年に襲われました」

リサが今度こそその場に立ちあがる。顔は真っ青で、唇はわなわなと震えていた。

「なん・・・ですって！？」

「ですがご心配なく。誰一人、傷一つ負っておりません。むしろ、あの少年に傷を負わせました。確か、ジェイクという少年でしたか」

「ジェイクが？」

今度はリサは目を丸くした。そして、複雑な顔をしている。ジェイクが成長していて嬉しいような、無茶をするのが心配なような。それは恋人というよりも、母にも近い心境だったのかもしれない。

「ジェイク少年は見事彼を退けるのに一役買い、ですが結果としてあの少年の恨みも買いました。ですから・・・」

「いえ、楓。十分です。全てジェイクが選んだ選択なら、リサはそれを尊重するまで。あの子も男の子です。自分の行動に責任のとれない男にはしたくありませんから。むしろ話してくれたことに感謝します」

「はい」

それきり楓はぴたりと黙ってしまった。リサもまた、感慨にふけるように、目を閉じ俯いている。そこに発言したのはニア。

「私にも決心したことがある。アルフィ、聞いてくれるか？」

「いいわよ？」

「私はグルーザルドを抜ける」

その発言にまたしても全員が驚く。何かを言いかけるアルフィリースを、ニアは手で制した。

「これは腕を落とされて寝込んでいる間、ずっと考えていたことなんだ。アルフィには少し話したな、私は軍人であることに迷いがあると。こんな迷いを抱えたまま、戦場に出られるとは思えない。それに奴らの事を知ってしまったら、自国のために戦場に出ている場合じゃないくらい、私にもわかるさ。まあ私なんかにいかほどのことができるか、全く知れたものじゃないがな。加えて、今の私には

カザスのこともある。彼は私のためなら今の職業を捨てるとまで言ってくれたが、カザスと一緒にいるなら、私がカザスの元に行く方が上手くいきそうだ」

「ニア、いいの？」

「いいさ、もう決めたことだ。エアリアルと同じく、私にも決断の時期だったんだよ。それに私もアルフィのことは親友だと思っている。戦うなら目に見える者を守るために戦いたいんだ、私は。ようやくそれがわかったよ。

だけど参加するのは少しだけ待ってくれないか。一度グルーザルドに赴き、正式に除隊手続きを踏まないといけない。私が参加するのはそれからだ。それでもいいかな？」

「もちろんよ。ニアならいつでも歓迎するわ」

アルフィリースが笑顔をニアに見せた。その時ユーティが突然叫ぶ。

「これでアタシが行かないって言ったら、完全に悪者じゃない！いいわ、ついて行ってあげるから、感謝なさいよね！」

「ユーティ、無理しなくっていいのですよ。そんな取ってつけたようなツンデレ妖精はいりません」

「だいたい『つんでれ』は私の専売特許だ！」

「うるさいわよ！　アタシにはアタシの事情ってもんがあるのよ！　アルフィ、アタシはあんたがイヤって言っても、ついて行くからね！？」

ユーティがアルフィリースの方を指さして宣言する。それを見て、アルフィリースは苦笑交じりに頷いた。

「ええ、ユーティ。歓迎するわ」

「さて、問題は楓とラーナか」

ミランダが2人を見る。だが2人の返事は早かった。

「私はアルネリア教会に仕える者。ひいてはミランダ様に。そのミランダ様が力をお貸しする方なら、私とて協力するのに吝かではありません」

「私もです。まだ皆さんのお仲間になって一日もない私ですが、アルフィリースさんのために尽くさせていただきます」

その言葉に楓はともかくとして、ラーナが即答したのは、アルフィリースにとって意外だった。

「ありがたいけど、でもラーナはどうして？」

「私にはそれほどの正義感があるわけではありません。しかし、フェアトゥーセ様からは、困った人は助けるものだと教えられてきました。それに、アルフィリースさんを看病している時に、あまりにうなされるので、申し訳ないとは思いながらも、少し淫魔の力を使って夢を覗かせてもらいました」

ラーナが申し訳なさそうに告げる。アルフィリースにはもちろん記憶にないことだ。

「え、それって・・・」

「はい、少しですが、アルフィリースさんの過去を覗いたことになるかと。もっとも夢は夢。どこまで事実かはわかりませんが、ずっと繰り返されている夢のようでした。嫌に場面の記憶が濃かったので、おそらくはずっと子どもの時から同じ夢を見ておられているはず。違いますか？」

「それは・・・その通りよ。起きて覚えているかどうかは、また別だけど」

アルフィリースが一転、真剣な目でラーナを見る。ラーナは悲しそうな目で、アルフィリースを見た。

「それはさぞおつらかったでしょう。その時はフェアトゥーセ様の指示で誘惑の魔術をかけないといけなかったこともありますし、また他人の夢は許可なく操作してよいものではありませんから、全く手はつけなかったのですが、今度からはご要望とあらば、私が夢見を良くすることはできます。必要があれば言ってください」

「それは嬉しいけど、その事と私に協力する事と、どう関係が？」

「私は淫魔の血を引いていますから夢の事は多少詳しいのですが、あの夢は何か不自然です。その事がどうしても気になることが一つ。また先に述べた通り、私も外界に出たばかりで行くあてもないことが一つ。フェアトゥーセ様に言われたことも一つ。あと一つは・・・」

「あと一つは・・・アルフィリースさんは、私の理想の方ですから」

「・・・・・・は？」

アルフィリースがイルマタルを抱いたまま固まってしまった。そしてそれは全員が同じである。対してラーナは顔を赤らめ、両手で顔を覆っていやいやをしている。重大な事をつい言ってしまったかのような仕草だ。

かろうじて冷静を保っているユーティとリサが、こそこそと話している。

「（ねえねえ、ラーナってそういう趣味？）」

「（冗談を言うタイプには見えませんが）」

「（そうなんだ。淫魔って、男でも女でもどっちでもよいとは聞くけど、まさかねぇ。まあアルフィって、一見凛々しい顔立ちだもんね）」

「（確かにそれはリサも認める所です。そして中身はあのヘタレ。さらに弱っている所をラーナは見たわけですから、ギャップにくらりときたのでしょう。アルフィも前途多難ですね）」

さしものリサも、イルマタルの件に加えてこの出来事が続くと、アルフィリースが不憫でからかう気にもなれなかった。

そしてラーナはずっと照れっぱなしである。

「アルフィリースさん、私は子どもがいても気にしません。一緒にイルマタルを育てましょうね」

「え・・・うん・・・頑張る、私・・・（師匠、段々まともな世界が遠のきます、私）」

アルフィリースが完全に放心状態になっていた。彼女が正気を取り戻すのには、しばらくかかったのであった。

＊＊＊

そして、アルフィリースが何とか思考能力を取り戻してからのこと。既に全員が出立の準備をしていた。アルフィリースは少し皆から離れ、グウェンドルフに相談する。

「グウェン、イルマタルはこのまま預かってもいいの？」

「ああ、むしろそうした方がいいだろう。生まれたばかりで大した力も持たないとはいえ、この子も真竜の一族だ。この子に手を出すことは、真竜全てを敵に回すことを意味する。そんな無謀は、彼らもそうそうやらないだろうから、いい抑止力になるだろう」

「そうじゃなくて、私はこんな幼い子を戦いに巻き込むのは忍びないのよ」

アルフィリースがイルマタルの頭を撫でながらグウェンドルフを見上げる。そのイルマタルを心から案じるアルフィリースの瞳に、グウェンドルフがふっと笑う。

「そうか・・・君はそういう優しい子だったね。でも心配はいらない。その子は君といるのが一番幸せなのさ。本人が事情をよくわかっていないとしても、母と子を引き離すのはやはりよくないよ」

「でもこんなに幼いのに！　死ぬ可能性だってあるわ」

「死が必ずしも不幸せだとは限らない。大切な物が奪われることは、死に勝る苦しみになることもある。それが嫌なら、彼女が大きくなって正常な判断ができるようになるまで、君が死なないこと。それが大切じゃないのかな？」

「それはそうだけど・・・」

アルフィリースはまだ迷っているようだ。決して、イルマタルの事を邪魔だとか思っているのではない。純粋に幼い子を戦いに巻き込むことに、負い目をアルフィリースは感じているのだった。グウェンドルフもそれがわかるからこそ、アルフィリースが愛しかった。

「少なくともアルネリアまでは僕が同行するよ。それにアルネリアについてからも、注意して君達のことは見守ろう。もっともオーランゼブルとの契約は私にもその状況がわかるから、契約が破られるようなことがあれば、即座に私がかけつけて奴らから君達を守るさ」

「本当に？」

「本当だとも」

その言葉を聞いて、アルフィリースは多少安心したようだった。気を取り直して皆の元へ行こうとする。その時、ふとグウェンドルフが後ろからアルフィリースを呼びとめた。

「アルフィリース、すまない」
「何が？」
「ほとんど全てを知っていながら、何も言えないことさ」
「そんなこと、しょうがないわよ。グウェンだって苦しいんでしょう？　多少は貴方の性格を知っているつもりよ、私も」

アルフィリースがグウェンドルフにウインクをしてみせる。その姿を見て、グウェンドルフは言わまいとしたことを口にした。

「・・・ありがとう、私は君に救われているな」
「そうだとしたら、お互い様よ」
「では、君にもう何点か告げておかなければならないことがある。これは私個人からのアドバイスだ」

アルフィリースが足を止め、グウェンドルフの方を振り向く。

「アルドリュースはこの事態を想定していた」
「！」
「彼が何を知っており、何を思い、何をしたかったのかは正直な所、私も知らない。だが私が彼に言われたのは、アルフィリースに何かあれば不幸な人間が多く出るかもしれない。それ以上に彼女を不幸にしたくないから、無理な願いと知りつつも、君を注意して見ていてくれと頼まれた。図らずしてそうなったわけだが・・・」

だがそこでグウェンドルフはある可能性を思いつく。図ったのはあるいはアルドリュースではなかろうか？　自分が寿命でやがてアルフィリースを守れなくなることを知り、代わりに真竜である自分が嫌でもアルフィリースを守らざるをえなくなるよう、そう仕向けたのではなかろうか。何より、アルフィリースに明確な説明をする前に、自分の留守中にアルフィリースがこっそり忍び込んで卵を温

めるなど、よくよく考えれば都合がよすぎたのだ。もしかすると、アルドリュースがそれとなく、そういった展開になるように仕向けていたのかもしれない。

「（私の知る限り、アルドリュースは清廉潔白な人間ではなかった。一見すればそう見えなくもないが、真竜である私には彼の本質がなんとなく見えていた。だからこそ、私と彼は不思議な交流を保ち続けたともいえ、アルフィリースを育てることができたともいえる。まあ悪い巻き込まれ方ではないと私が思ってしまうことは、私は結局のところ真竜の長になど向いていないんだろうな）」

グウェンドルフが内心で自嘲するも、アルフィリースには悟られないようにした。アルフィリースはアルドリュースに全面的な信服を寄せている。今さら彼女の中のアルドリュースを貶める気は、グウェンドルフにはなかった。

気を取り直して、グウェンドルフは言葉を続ける。

「・・・アルドリュースには東のベグラードを訪ねるように言われているな？」

「ええ、そうよ」

「もしハウゼンがいなかった場合、トリュフォンという男を訪ねるがいい。彼は教師の真似ごとをしているはずだ」

「？　わかった。そうする」

アルフィリースは一瞬怪訝そうな顔をしたが、疑問は飲みこんだようだ。訪ねて見ればわかることだと思い、グウェンに聞いても無駄な事を訪ねるのはやめたのだろう。

「ほかにもある。オーランゼブルは魔術士ではない、魔法使いだ」

魔法使い。使う魔術がすべからく恒久的な影響を世に与える者、もしくは魔法を行使できるものに与えられる称号。現実問題として後者を意味することが多いが、魔術士達の頂点に立つ何人かに与えられる称号だ。アルフィリースの実力を持ってしても、魔法使いには至らないだろう。

「・・・それは大層なものね。でも魔術をエルフに授けた者なら、当然かしら」

「ああ、特に彼が研究していたのは占星術。彼についてはそこまでしか言えない」

「わかったわ。何か言える時があればまた教えて欲しい。それまでは、私も独自に探ってみる」

「うむ。そしてこれで最後だ。敵の中のあの女・・・黒い服を着た小さい少女がいたな？」

「最後に大男を連れて帰った子ね。彼女がどうかした？」

「出会ったら戦うという選択肢は捨てることだ。確実に逃げの一手を取りなさい。彼女に単独で勝てる生物は、この地上に存在しない」

グウェンの表情は真剣そのものだった。だからこそ、アルフィリースは事態の深刻さを認識する。真竜にそこまで言わせるほどの存在なのだ、あの子は。

「あるいは条件次第ではありえるのかもしれないが、少なくとも人間には無理だ。彼女に関しては多少アドバイスはできるし、彼らの他の顔ぶれについてもいつくか思い当たることはあるが、現段階ではこれ以上言うと、個人的な範囲を超えて真竜として君の味方をしたことになってしまうからね」

「わかったわ。最大限の譲歩をしてくれたんでしょう？　感謝するわ。もうないかしら？」

「ああ、今はこれ以上はないよ」

「なら行きましょう、グウェン。やることはいくらでもあるんだから。まずは聖都アルネリアに向かいましょう」
「うむ、そうだね」
そうしてアルフィリースはイルマタルを抱いたまま、仲間の元に歩き出す。その姿をグウェンドルフは心配そうに、だがどこか頼もしく見ているのだった。
続く

それぞれの選択、その9～行くべき道～（後書き）

次回投稿は、４／２２（金）１３：００です。

それぞれの選択、その１０～さらなる陰謀～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースが自分の行くべき道を決める一方、陰謀は着々と進行しようとしていた。

それぞれの選択、その１０～さらなる陰謀～

＊＊＊

その頃、アルフィリースの前から撤退を余儀なくされたライフレスはどうしていたか。ライフレスは他の仲間と共に、既に彼らの工房の一つに戻っている。新たな拠点とすべく本日から稼働させた新型の工房に、全員で集合しているのだ。

だがライフレスは腹の虫が治まらず、工房を説明するアノーマリーの言葉も耳に入らない。そしてついに我慢の限界を超えた彼は、オーランゼブルに喰ってかかる。

「お師匠様！」

「なんだ、ライフレス」

「やはり納得がいきません。なぜあの女を放っておくのです！？」

「ふむ、その事か・・・まあお主には理由を後で話してやろう。それより、今は全員に仕事を伝えねばならん。皆の者、揃っているか？」

「２人ほどいません。姫と、例の少年が」

ヒドゥンがすかさず答える。その言葉に、呆れかえる一同。

「またかよ～姫はしょうがないけど、あの新米サボりすぎだろ？」

「そうですね・・・彼は一体何をしているのでしょうか？」

「あら、さっきは何気にいたわよ？」

「うっそ？　どこに？？」

「建物の上よん。私達を見降ろしてたわ」

「うっわ、生意気～」

「君よりマシだよ、ドゥーム」

「ちぇ」

アノーマリーの一言にドゥームがむくれる。

「ところでお師匠様」

アノーマリーが口を開く。

「オーランゼブルでよい。これからも皆名前で呼び合ってもよかろう。予定より少し早いが、真竜と邂逅してしまった。正体が露見した以上、もはや我々が名前を隠す必要もあるまい」

「ではオーランゼブル様、聞きますが。あの少年と姫の名前は何というのでしょう？　あの二人に関しては、僕は知らないもので。後のメンバーは、ここ最近のやりとりで名前は把握していったのですが」

「姫の名前はカラミティよん」

だがオーランゼブルが答えるより早く、ブラディマリアが答えた。

「あの子は南の大陸ではそう呼ばれてたわ。もっとも本名かどうかは知らないけどね」

「ブラディマリアは南の大陸出身なの？」

「そうよ。アタシとドラグレオと、カラミティは南から来たの。南の大陸は、私達でほぼ3分割して治めてたから。あとは皆、この大陸の出身よねぇ？」

ブラディマリアが淫靡な眼差しで全員を見渡す。とても少女がする目つきには思えないほど艶めかしい眼差し。その目線に耐えかねるように、全員がそれぞれ顔を見合わせた。その様子を面白いと思ったのか、ブラディマリアがくすりと笑うと、さらに話を続けた。

「東の大陸出身の者は不思議な事に誰もいないのね、オーランゼブル？」
「うむ。あそこは我々の仲間に引き入れるよりも、放っておいた方が混沌としていて面白いと思ったのだがな。一人の人間の出現により、完全に目論見が壊れた」
「その人物とは？」
「浄儀白楽だ」

ヒドゥンの問いにオーランゼブルが答える。

「東の大陸は、人間が西側を支配しており、東側は魔物、特に『鬼族』と言われる者達が支配している。近年までは鬼族がずっと優勢で、大陸の８割を鬼族が支配していた。いずれは鬼族の完全勝利で終わると思われたのだが、３０年ほど前、一人の天才が討魔協会に現れた」
「それが浄儀白楽だと」
「そうだ。奴が戦い出してからは、討魔協会は負けなしだ。実際にここ３０年で人間と鬼族の勢力図は互角になっている。さらに奴は強引ともいえる手法で討魔協会をまとめ上げ、一気に反抗作戦を開始した。そして教会の長となってからは、鬼族の１０の王族の内、実に３つをここ数年で討ち取った。今や鬼どもが怯えて、ついには同盟を組む始末だ。そうなると、東の大陸では近々一大決戦が行われる可能性がある。この大陸では大魔王６体を滅ぼすのに１００年以上かかったが、このままだと奴の存命中に東側は統一されるだろうな」
「へー、そんなに強いんだぁ。会ってみたいわね、その坊やに」

ブラディマリアが楽しそうに笑う。その彼女にオーランゼブルが語りかける。

「では会ってみるか？」
「あら、いいの？」
「むしろ貴様でないと話が成立すまい。耳を貸せ」
オーランゼブルがブラディマリアに耳打ちする。その話を聞くと、ブラディマリアがニヤリとした。
「それは面白そうね。じゃあアタシは東の大陸に向かうわ。上手くいったら一度帰って来た方がいいかしら？」
「そうだな。それからのことはまた追って話そう」
「了解～じゃあ善は急げよね。早速行ってくるわ」
ブラディマリアは手をひらひらと振りながらその場を後にする。その姿が見えなくなると、オーランゼブルはくるりと全員の方を振り返る。
「よいか、皆の者。我々はこれから世界の真実の解放のために、その行動を本格化する。とはいえ、真竜とは元来もっと行動を表面化させてから交渉を行う予定だった。まだ彼らとは事を構えたくない・・・そのため、今少し我々は表立って行動するのを控えなくてはならない」
全員がその言葉を黙って聞いている。
「なので今ブラディマリアにも伝えたが、工房は既に必要数が完成した。後は実行に移すだけ・・・その前にやるべきことがいくつかあるがな。まずはドゥーム」
「はいは～い」

ドゥームがずいと前に出る。

「お前には『闇化』を任せる」
「魔王を生み出す土壌にするってやつですか？」
「うむ。悪霊の貴様が暴れれば、それだけで大地は汚される。存分にやるがよい」
「ははっ、こりゃ楽しそうだ！　んじゃ早速！」

言うが早いか、ドゥームは靄となって消えた。

「次に、ティタニア、サイレンス」
「「はい」」
「2人で例の物を奪取せよ。回収し次第、武器を持ってティタニアはここに帰還。ブラディマリア次第だが、別の案件を任せることになるだろう。サイレンスは今まで通りの任務に戻るがよい。サイレンスが進めておる件は、例の時節に間に合いそうか？」
「8割りがた問題なく。指示さえあれば、今の段階でも実行可能です」
「うむ、では予定通りの時期に間に合うよう行動せよ。行け」
「「はっ」」

そしてサイレンスとティタニアも姿を消した。

「次にドラグレオ」
「ああん？」

ドラグレオの答えは面倒くさそうだった。その様子を見てオーランゼブルも苦笑する。

「暴れ足りんか？」

「当たり前だ！　もっと歯ごたえがあるって俺は聞いてたんだが！？」
「心配せずとも、近いうちに思いっきり暴れさせてやろう。ブラディマリアが上手くいこうがいかまいがな。だから今は寝ておけ、来たるべき時のために」
「・・・いいだろう、約束だぜ？」
「心配するな。貴様の力を存分に振るわせてやる」
「じゃあちっと寝てくらぁ。一番奥の部屋を借りるぜ」

そうしてドラグレオは盛大な欠伸（あくび）と共に去って行った。

「アノーマリー」
「はいはい」
「工房は完成して稼働にも問題はないと聞いたが、正直素材の方はどうだ？」
「ああ、そっちも問題なさそうです。姫――カラミティが上手くやってくれるそうですから。あとサイレンスもできる限り協力してくれるそうなので、なんとかなるかと。今の研究も順調なので、新しい研究に着手しようかと思っています」
「ほほう、ではヘカトンケイルと貴様が名付けた連中は？」

その問いにアノーマリーがニヤリとする。

「もうほぼ完成です。知能が失われるのが難点でしたが、その問題も既に解決策を見つけました。ただこの方法だとやっぱり素材数に難点がでるので、現在中原で稼働させてるヘカトンケイルを第2世代と表現した時、第3世代以降は少数精鋭になるかと。そうするとどうしても手数が減りますが、現在、数を補うための研究を行っています。既に中原では実験段階の物を投入したのですが、成果は上々。なので今後の研究は、個体のバリエーションを増やすことに関

して研究を進めようかと」
「必要な物は何かあるか？」
「できれば南の大陸の生物サンプルが欲しいですね。あと東のその鬼族とやらも」
「よかろう。それは順次回収させよう。では研究に着手せよ」
「はいはい」

そうしてアノーマリーはのそのそと出て行った。

「ヒドゥン、貴様の方はどうだ？」
「ほぼ主要たる手は打ち終えています。それがいかほどの効果を持つかはわかりませんが、現在は再びアレクサンドリアに赴く予定で」
「あの国は一度手を打ったろう？」
「そうなのですが、予想外の事態が起きておりました。それにあの国は尚武の国。人材豊富ですし、現在でも戦に事欠かないため、少しずつ国力を削いでいたのですが、何よりあの精霊騎士が邪魔ですから」
「確か土の精霊騎士だったな」

オーランゼブルの問いに、無言で頷くヒドゥン。

「さすがに精霊騎士にはうかつに手を出せませんので」
「打つ手はあるか？」
「はい。どれほど彼女が優秀でも、周囲に愚か者もいるのが組織というもの。既に突破口になりそうな者は見つけています」
「うむ、期待している」
「はい。では私もこれで」

そうしてヒドゥンはその場から姿を消した。残ったのはライフレス。

「さてと、ライフレス。貴様には・・・」
「その前に、俺の問いに答えてもらいましょう。なぜアルフィリースをあの場で見逃しました？」

ライフレスは、今度こそごまかされないぞといった目つきでオーランゼブルを睨みつける。

「あの女には何があるのです？」
「そのことか。お主は何を心配しているのだ？」
「・・・アルフィリースはまだまだ強くなる。それこそ我々に届くほどに。今、殺しておかなければきっと後悔するでしょう。俺としては強い者と戦えるのは全く構わないのですが、我々の敵となるのは計画の破綻をきたすのでは？」

だがその質問を聞いて、くくく、と忍び笑いをオーランゼブルはこぼし始めた。その様子を不審そうに見るライフレス。

「・・・何がおかしい？」
「いや、あの娘が我々の敵になるのはありえない。ありえないのだよ、ライフレス」
「なぜそう言い切れる？」

ライフレスが敵でも見るような眼で、オーランゼブルを見る。そのライフレスに、子どもに物を教えるような目で諭すオーランゼブル。

続く

それぞれの選択、その１０～さらなる陰謀～（後書き）

次回投稿は、４／２３（土）１２：００です。

それぞれの選択、その１１～絡まる思惑～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースを殺さなかったオーランゼブルに不信感を抱くライフレス。そしてその口から語られる事実とは……？

それぞれの選択、その１１～絡まる思惑～

「あの娘は・・・アルフィリースは生まれつき、我らの側の人間だ」
「・・・は？」
「忌々しいのは、あのアルドリューとかいう小僧よ。あの小僧のせいで、若干ではあるが私の計画には狂いが生じた。そうはならないように気を使っていたのだがな。そういう意味では、あのアルドリューこそが真の英雄だったのかもしれん。歴史上、決して評価されはせんだろうがな。まあ結果としてもっとも望ましい形になるのかもしれん」
「・・・言っている意味がよく・・・」
「耳を貸せ、ライフレス」

オーランゼブルがライフレスに耳打ちする。その言葉を聞くたび、ライフレスの目が驚きに開かれる。

「貴方は・・・なんということを考えるんだ。さしものアノーマリーやドゥームでも、そこまでは考えないぞ」
「私とてここまでやる気はなかったさ。だが目的のためだ、いたしかたあるまい？」
「・・・なんと残酷な男だ。さしもの俺もそこまでやらんぞ。だが確かにもっとも効率的だな。そこまでして、最終的に貴方は何を考える？　先ほどは誰も気にとめてはいないようだったが」

だがその答えをオーランゼブルは言わなかった。

「今はまだ言えん。だが時が来ればわかることであるし、いずれ貴様も自然と悟るだろう」
「・・・まあいい。しばらくは大人しく言うことを聞いてやるさ。

ということは、俺はアルフィリースの監視をすればいいんだな？」
「そうだ。そして必要があれば、彼女を手助けしてやるがいい」
「いいだろう。それが俺へのペナルティだと言うのなら、あまんじて受け入れよう」

そうしてライフレスは踵を返すと、その場を後にした。後にはオーランゼブルが残るのみである。そして彼は誰もいないのを確認すると、誰に言うでもなく独り呟く。

「ふ・・・一度は肝が冷えたが、これで上手くいくだろう。まだアルフィリースを殺させわけにはいかん。それにしても我が縛りに抵抗できるとは、なんという精神力よ。さすがに英雄王といったところか。まあいい、もう一人の奴の元に向かわねばな」

そうしてオーランゼブルも姿を消す。だがそこに誰もいないことは確かだったが、その独り言を聞いていた者がいたことを彼は知らない。

＊＊＊

所変わって、ここは最後まで姿を現さなかった少年の工房。工房といっても、書物や壁に殴り書きのように魔術式があるくらいで、アノーマリーのように実験を行っている形跡は全くない。むしろがらんとしていて、空疎な印象さえ受ける。さながら学者の私室の様相を呈する工房である。そして、侵入者を妨げるような結界も皆無であった。
そんな工房で一人瞑想する少年。そこにふいとオーランゼブルが姿を現した。

「貴様、なぜ先ほど来なかった？」

「・・・行ってはいた。用事はアルフィリースを見ることだったから、彼女の無事を確認してそのまま帰っただけだ」
「なぜそのような勝手をする？　我々が何のために活動しているのか、言ってみよ」
「よせ、オーランゼブル。私に言語縛鎖（スペルバインド）は効かん」

少年のその一言に、オーランゼブルがはっとし、その後凄まじい形相で少年を見つめた。だが少年はいかにも飄々とその視線を受け流す。

「考えたものだ。『世界の真実の解放のために』というスローガンをキーワードを用い、言葉を定期的に復唱させることで奴らが無意識に自分の命令を聞くようにしてある。なにかしら反発を起こしそうな時や、命令したいことがある時はその言葉を自分で言うか、あるいは相手に言わせることができればさらに効率的だ。実際奴らはそのスローガンだけに従い、実際のところ何を目標としてるのかすらわかっていないくせに、貴様の命令通りに動いている。かの英雄王ですらそうだからな。さすがは現代に生きる魔法使い。もっとも、そうでもなければ奴らが貴様に従うはずがなかろうがな。それでも今回のような暴走があったのだから、貴様としてもさぞ肝が冷えたことだろう」
「貴様・・・何者だ？」

そこに来てオーランゼブルは初めて少年に警戒を示した。オーランゼブルは初めて少年が自分の前に現れた時を思い出す。初めはその少年の歴史に対する見識、そして扱う不思議な魔術に興味を示し、自分の仲間に引き入れることにした。そして少年に言語縛鎖をかけ、自分の意志に従っている・・・かと思っていた。
だがその実、少年には最初から言語縛鎖が全く効いていなかったことになる。ではなぜここにいるのか。その得体の知れなさに、思

わず後ずさるオーランゼブル。その様子を見て、特に表情を変えるわけでもなく、淡々と語る少年。

「私が何者かは貴様には関係ない。名乗るつもりもない。だが、私が現時点では貴様に敵対する者ではないとだけ言っておこう。むしろ、状況次第では協力は惜しまん。貴様の読みと、真の目的は私にとっても望ましいことだからな」

「！　貴様！」

その瞬間、オーランゼブルが両手に火球と雷球を同時に作り出す。異なる元素の魔術を同時に使用する、超高等魔術。魔術の開祖ともいわれる、オーランゼブルだからこその芸当。しかし、

「よせ、無駄だ」

少年が掌をオーランゼブルに向けて握りこんだだけで、２つの球は弾けて消えた。その事実に、驚愕の顔をするオーランゼブル。

「な・・・」

「オーランゼブル、貴様はどうも自分以外の生物を見下す傾向があるな。かの真竜どもですら見下しているのだろう？　貴様は確かに魔術の開祖の一人だろうが、元はといえば貴様とて大した力も持たぬ生物にすぎん。たゆまぬ努力と思考により、ここまでの力を手に入れたにしろ、な。その事を忘れれば、いつか貴様は思わぬ者に足元をすくわれるぞ？」

「貴様は一体・・・」

「貴様には関係ないと言っただろう。話す気もない」

少年がゆっくりと立ちあがる。そして短距離転移で、オーランゼブルの目の前に現れた。驚くオーランゼブルの肩に手を置き、ゆっ

くりと言葉を放つ。

「ただ私達は目的だけが一致していればいい。心配せずとも、貴様が私の目的と異なる事をしたからといって、貴様を殺したりはせぬよ。だから私のことは放っておいて、計画を進めるがいいだろう。私の力が必要なら、またその時相談に来るがいい。くれぐれも、私に命令できるなどと思うなよ？　では去れ・・・ここは私の領域だ」

その言葉を最後に、オーランゼブルが気がつくと少年は彼に背を向けて、何事もなかったかのようにまた座って瞑想をしていた。

その姿を見てオーランゼブルがどう思ったのか。苦々しげな顔をしつつも、彼はその場を後にする。そして彼がいなくなったのを見ると、少年は呟いた。

「さて、私はどうすべきかな。とりあえずアルフィリースは無事生き延びたし、やはり私の出番ではあるか。一度彼女に会いに行ってみるとしようかな」

そして再び少年は瞑想に沈む。彼の周囲には音は何一つなく、ただ静寂だけが少年を包んでいた。

＊＊＊

少年の元を去ったオーランゼブルは、自分の工房に戻っていた。誰も知らない、彼だけの工房である。グウェンドルフ達と別れた後、彼は２０００年の間、ここを拠点に活動したのだ。彼の思考を占めるのは、もちろん先ほどの少年のことである。

「何者だ奴は・・・一度調べねばならんな」

だが手掛かりがあるのかどうか。占星術を用いて、はるか先の出来事や、はるか昔の出来事を知りえた自分の魔法。そこにさきほどの少年のような存在の徴候はなかったのだ。それでもオーランゼブルにできることは少ない。

「時間はかかるが仕方あるまい、占星術で調べることにするか」

オーランゼブルが最も得意とする占星術。彼は地面に座り込むと、周囲に大小様々の水晶の玉や輪の様なものをちりばめ、占星術を起動させる。すると球や輪がふわりと浮かび上がり、オーランゼブルを中心にゆっくりと回転を始める。彼の体は淡く光り、さながらその光景はオーランゼブルを中心とした、小さな宇宙のようだった。やがてオーランゼブルもまた宙に浮きあがり、周囲を回る水晶一つ一つと感覚をつなげていく。そして彼の感覚が宇宙を構成するように占星術に完全に沈みこんだ時、彼の影から浮かび上がる靄が一筋。だが占星術に集中しきっているオーランゼブルは、その靄に気付くことはなかった。

＊＊＊

その靄が空中に霧散し、やがて戻っていったのはドゥームの所。彼もまた目を閉じて瞑想状態にあった。靄が戻ると、ドゥームもまた一息深呼吸をつく。

「ふう・・・」
「どう・・・？」

オシリアがドゥームを覗きこむ。最近はドゥームとオシリアは意志疎通が結構できるようになった。オシリアは頭もよく、明確な意思も持つためもはや悪霊とは言い難いほどの存在に昇華しようとし

ていた。闇、と呼ぶには残虐すぎるだろう。死の上位精霊といったところが適当か。

「気になることをお師匠様は言ってたね。言語縛鎖とかなんとか。知ってる？」

「いいえ」

「まさか僕達が洗脳されてるなんてねぇ。僕としては洗脳されてようがなんだろうが、好き勝手やらせてもらってるからいいんだけどさ。まあいいように使われるのも不愉快だし、ちょっと調べて見ようか？」

「あなたがそう言うなら」

オシリアは首を縦に振る。その反応を見てドゥームはオシリアの頭をなでるが、その手はオシリアによってあらぬ方向に曲げられた。ドゥームは少し悲しそうな顔で腕を元に戻す。

「これが世に言うヤンデレって奴なのかな・・・でもデレの部分が全くない気がするのは気のせいか・・・？」

「？」

「ふぅ・・前途多難だな、僕も」

ドゥームがため息をつきながら歩き出した。その少し後に離れてオシリアが続く。ドゥームは最近の特訓も含めて、色々な能力の開発に余念がなかった。先ほどオーランゼブルの影に自分の一部を仕込み、耳に変形させて話を聞いていたのである。生命兆候などは皆無だし、誰もドゥームにそんな能力があるとは思っていない。だからこそ話を盗み聞きできたのである。ドゥームは他の誰もが思うほど間が抜けているわけではない。いや、急激に成長していると言った方が正しいのかもしれない。

そんなドゥームがくすりと笑う。

「今さらあんな面白い連中を目にして、遊ぶなって言われてもねぇ・・・そんなの我慢できないっしょ？　特にリサちゃんとは是が非でも遊びたいし、オシリアや他の子たちもそうでしょ？」

いつの間にかドゥームの後ろにはマンイーター、インソムニア、リビードゥが歩いている。

「さて、お楽しみは後に取っておくほうが色々楽しいのは学んだし、これからどうしようかな・・・とりあえずは、僕は色々世間の事を知らないとね。情報収集は何に置いても基本になる。でも闇化もやらないとヒドゥンあたりに不審に思われるし、とりあえず皆で各地に散ろうか？」

無言で全員が頷く。そして彼女達が消えたのを見ると、ドゥームは満足そうに微笑んだ。

「ふふ、これから楽しくなりそうだ・・・人間の世界は面白いねぇ。どうなっていくのか先が楽しみだよ。ふふふふ、あはははは！」

そうしてドゥームは高笑いをしながら悪霊達と共に姿を消すのだった。

第一幕　完

第二幕へ続く

それぞれの選択、その１１～絡まる思惑～（後書き）

これにて第一幕終了です。ここまで読んでくださった皆さんにまずは感謝の言葉を。

ここからの予定ですが、まずはまだ行われていない人物紹介を行った後、２日ほど開けてから第二幕に突入しようかと思います。最初は簡単に今まで登場した人物の整理をしようかと思います。また、第二幕も最初のシリーズは連日投稿を予定しております。

第二幕のサブタイトルは、「手を取り合う者達」です。どのような物語が展開されるか、また楽しみにしてください。作者も随時レベルアップしていきたいと思います。

さらに第一話から少しずつ、誤字・脱字を含めた文章を修正中。雰囲気は壊さない範囲で行いたいと思います。そちらの進行状況は活動報告なんかで。何か変更ありましたら、そちらで呟くと思います。

ここまでの感想・評価などあれば、お願いいたします。またレビューを書いてくださる方がいれば、ありがたい限りです。もし書いていただける方は、載せる前に私に一応メッセージを下さいませ。

それでは次回投稿は、４／２４（日）１１：００です。

呪印の女剣士人物紹介～黒の魔術士編～（前書き）

今まで謎だった敵の情報を少し公開。読み返すとほとんど既出だとは思いますが、整頓の意味も兼ねて。

呪印の女剣士人物紹介～黒の魔術士編～

名前：オーランゼブル
年齢：少なくとも２５００歳以上
外見：１７６ｃｍ、６０ｋｇ、肩にかからない程度の白髪、グレーの目、口ひげ
職種：魔法使い（占星術師）
好き・得意なモノ：瞑想、占星術
嫌い・苦手なモノ：愚か者
一人称：私
プロフィール：

かつて、原初の知恵ある竜ダレンロキアの弟子であり、大陸に魔術や知識を広めた５賢者の一人。彼自身はハイエルフという、エルフよりもさらに寿命が長い種族である。

彼についてはまだ多くが語られていない。グウェンドルフは彼の親友であったと語り、彼については沢山の事を知っているようだが、その彼をもってしても、オーランゼブルがここ２０００年で何をしていたのかは不明である。そして再び現世に姿を現した彼は、黒のローブの魔術師達を率い、魔王という名の合成獣の量産を始めた。温厚で、５賢者の中でも最も優秀で情熱に優れていたはずの彼に、一体何があったのかは誰も知らない。

一体彼が何を考え、何を目的とするのかは、アルフィリースにも無関係ではあるまい。

名前：ヒドゥン
年齢：？？
外見：１７０ｃｍ、５５ｋｇ、茶色の髪、茶色の目
職種：？？

好き・得意なモノ：人間
嫌い・苦手なモノ：話ができないもの
一人称：私
部下：マスカレイド
プロフィール：
　オーランゼブルの補佐の様な役割をする、神経質そうな青年。彼の正体も不明であり、アノーマリーなどには「兄弟子様」と言われている所から、彼らよりも早くからオーランゼブルに仕えていると推測される。
　彼が何をしているかはまだあまり書かれていないが、戦闘力はそうでもなさそうなものの、かなりの策略家の模様。それは皆が認める所である。クルムスがザムウェドと戦争をするきっかけを作ったのも彼である。現在は違う国で工作をしているようだが……？

名前：ライフレス（英雄王グラハム）
年齢：およそ８００歳
外見：１４５ｃｍ、４２ｋｇ（成人変身時は１７８ｃｍ、６８ｋｇ）、黒い髪（長さは通常）、茶色の目
職種：？？
好き・得意なモノ：戦い、魔術研究
嫌い・苦手なモノ：軟弱者
一人称：俺（本性を隠している時は僕）
部下：エルリッチ、ドルトムント、小さな魔獣？
プロフィール：
　一件大人しそうな少年だが、その正体はかつて１０００の戦全てに勝利を収めたと言われる英雄王グラハムその人。グラハムの方が偽名な様で、元々はライフレスという名前である。大人しそうな少年の恰好をしてるのは自分の本性を抑えるためであり、そうしてないとすぐに戦いに我を忘れそうになるのだとか。生まれつきの戦闘

狂である。

彼の伝説は１０歳の時から記録されている。彼は戦災孤児であり、村が襲われた拍子に力目覚め、その時には並はずれた魔力で魔物の群れを追い払ったとある。その時から彼は魔物討伐を始め、１５歳の時には何人かの仲間と魔王討伐に成功している。そして魔王を倒した土地を中心に彼は王国を建設。以後、英雄譚に謳われるほどの人材が彼の元に集まることとなる。

吟遊詩人が謳う彼の英雄譚はそれはきらびやかなものだが、実際にはそうでもなかった。ライフレス自身は国王であることに興味などなく、ただ戦場を求めていただけ。王国の建設も部下が言う通りにやっただけである。魔物の方が強く、多かったから彼らと戦っただけで、別に相手は誰でもよかった。実はミリアザールとも一度面識があるのだが、その時の彼は既に晩期で、また今ほどの力もなかったため、ミリアザールが強いことは理解しつつも、魔物とは見抜けなかったため戦うには至らなかった。

彼の死後（死んだと思われた）、彼の後継者を持たない王国は、度重なる内紛により滅亡し、小国に分かれていくこととなる。その間にライフレスは魔術を研究し、やがて不老不死に近い肉体を得たが、その代償として彼が得たのは虚無感だけだった。そして大魔王を倒した時に、異空間に閉じ込められたのをいいことに、彼は歴史の表舞台から完全に姿を消した。その後オーランゼブルにより、発見されたのがおよそ数年前である。

彼は決して残酷な性格ではないが、必要とあれば残酷な事を厭わない。どちらかといえば、感情に乏しいタイプなのかもしれない。だが拾った魔獣を育てるなど、意外な一面も見せる。今はアルフィリースに目をつけているが、ブラディマリアなどとも何かしら因縁がある様で、まだまだ謎多き人物である。

名前：ドゥーム

年齢：？？
外見：１４３ｃｍ、４５ｋｇ、黒い短めの髪、茶色の目
職種：悪霊使い（レイスマスター）
好き・得意なモノ：惨殺、虐殺、リサ
嫌い・苦手なモノ：真面目な奴、正義感あふれる奴、ジェイク
一人称：僕
部下：オシリア、マンイーター、インソムニア、リビードゥ
プロフィール：

一見明るくひょうきんに見えるが、その性は冷徹にして残虐。大量虐殺も、自身の興味のために平然と行える人物である。彼もまた少年の様な恰好をしてるが、真の年齢、出自共に不明。その正体は悪霊と人間のクオーターであり、人間が１／４程混ざっている。そのため、聖属性の対悪霊の術がいまいち効きにくい。

実力もアルネリア教に単独で殴りこめるぐらいの実力者だが、他のメンバーに比べればまだまだである。ただその能力は発展途上のようで、彼自身がまだ自分の全能力を把握しているわけではない。

アルネリア教会との戦闘で自身の実力をもっと上げた方がいいと悟ったのか、最近は熱心に鍛錬をしている模様。だが、彼の本心は仲間ですら覗い知れる所ではない。

名前：アノーマリー
年齢：？？
外見：１４０ｃｍ、４４ｋｇ、髪は既にない、茶色の瞳
職種：魔王制作者（サタンメーカー）
好き・得意なモノ：研究、美しい女に責められること
嫌い・苦手なモノ：醜い者、男にぶたれること、馬鹿な者
一人称：僕
部下：ドグラ＋ダグラ＋ポチ＝ケルベロス、複製した自分
プロフィール：

魔王を制作する中心人物にして、工房の管理を一手に引き受ける、自称天才の醜い老人のような少年。実際に天才的な頭脳をしているのだが、その出力が思わぬ方向に向くため、あまり人には理解されない。なお極度のMだが、やられた分はやりかえさないと気が済まない性分。ただ、相手が美しい女性の場合は一方的にやられても大丈夫、むしろやられたいと公言するような人物である。仲間いわく、ただの変態。

彼も残酷な事は好まない、というより、研究が全てに優先するだけであり、必要があればどれほど残酷なことでも平気で行える。

今まではオークなどを改造して助手にしていたのだが、自分を複製すればいい事に気が付き、自身の劣化品を大量に生産して研究を続けている。中原の戦火を現在管理しているのは彼である。

名前：ドラグレオ
年齢：??
外見：２１４ｃｍ、１２８ｋｇ、黒の短髪、緑の目
職種：百獣王（ビーストマスター）
好き・得意なモノ：強い奴
嫌い・苦手なモノ：弱い奴、難しい言葉
一人称：俺
プロフィール：

通称馬鹿。見上げるような人間の大男であり、暑苦しく、馬鹿みたいにタフなのもあって誰も相手にしたがらないが、その実力はたいしたものである。実際にファランクスを一騎打ちで仕留めてしまった。彼も魔術師のようだが、現在では拳しか使っていない。魔術もどのようなものを使うのかは、オーランゼブル以外誰も知らない。

部下などはいないようだが、どうせ指示などできないし、戦闘が始まれば彼は動くもの全てを破壊するまで止まらない。だが完全な馬鹿と言うわけでもなく、時折鋭い発言もするようだが・・・？

名前：サイレンス
年齢：??
外見：178cm、62kg、腰までの金髪、青の瞳
職種：操演師（パペットマスター）
好き・得意なモノ：美しい物
嫌い・苦手なモノ：醜い物
一人称：私
プロフィール：
　とても美しい青年だが、彼もまた残酷な人間のようだ。性格、能力共に詳しくはわかっていないが、多数の部下がいる模様。

名前：ブラディマリア（お嬢）
年齢：??
外見：135cm、38kg、スリーサイズは非公表、金髪縦ロール、金の瞳
職種：??
好き・得意なモノ：快楽
嫌い・苦手なモノ：退屈
一人称：アタシ（元の口調は『妾』）
部下：ユーウェイン、他多数。通称は『執事達（バトラー）』
プロフィール：
　一見幼い少女だが、ドゥームと同じくらい残酷な性格でもある。だが彼女は目的を優先する性格であり、さらに見た目や口調に反してかなり頭が回る性格のため、ドゥームよりもさらに油断がない。
　また戦闘能力も相当高い様で、おそらく彼らの中では一番強いのではないかとさえ言われている。さらに部下も多く抱えており、指揮官としても優秀。ミリアザールとも何かしらの因縁を持つようで

ある。グウェンドルフは何か気づいたようだが、まだ彼女について語るには至らないようだ。

彼女は主に工房の確保や制作を行っている。現在は東の大陸に飛んだようだが・・・？

名前：ティタニア（おネェ、剣帝）
年齢：９００歳以上
外見：１７０ｃｍ、５６ｋｇ、８６／５８／８８、地面に着くほどの長い黒い髪（中ほどを赤いリボンで結わえている）、茶色の瞳
職種：??
好き・得意なモノ：鍛錬、一騎打ち、強い者、読書
嫌い・苦手なモノ：特になし（昔は多かった）
一人称：私
プロフィール：

伝説に謳われる剣帝ティタニア本人。ライフレスより先んじること１００年。記録が定かでない時の英雄である。彼女の記録はライフレスと違い、ほとんど残っていない。なぜなら彼女の記録はどれも常識を逸脱しており、剣で城を斬った、７日７晩寝ずに魔王を１００体斬った、大魔王の軍勢を一夜で滅ぼしたなど、あまりにも突飛もないものばかりだった。さらに剣帝の記録は数百年に渡って記述されており、その度剣帝と名乗る人物が現れたとの記載があるが、単独の人物がそれほど長寿だとは誰も思わなかったため、剣帝とは、複数の英雄の業績が集まってできたおとぎ話のようなものなのだろうと考えられた。

だが実際には彼女が一人でやったことであり、全ては真実である。彼女があまりに可憐であったため、彼女がそのように戦う場面を見ても誰も信じることができなかったのだ。その歴史上最強とも称えられる彼女は、ブラディマリアと並ぶ実力者と仲間たちからは考えられている。

なお彼女自身は非常に大人しい性格であり、元は戦いも苦手。戦わざるを得なかったがために強くなり、気が付いたら最強となっていただけのこと。不幸なのは、彼女に才能があったことだろう。さらにライフレスやアノーマリー、果てはドラグレオでさえも認める程の美女であり、なぜ彼女が剣を取って最強の剣士となったのかは誰も知らない。

名前：カラミティ（姫）
年齢：？？
外見：？？
職種：？？
好き・得意なモノ：？？
嫌い・苦手なモノ：？？
一人称：私
プロフィール：
彼女は一度も姿を現していない。ブラディマリアやライフレスは彼女の事を知っているようだが、見目の美しさに反して、ライフレスにすら嫌悪感を抱かせるほどの女性である。虫を扱うようだが、詳しい事は不明。どこかに潜入してるようだが・・・？

呪印の女剣士人物紹介～黒の魔術士編～（後書き）

次回投稿は、４／２５（月）１０：００です。

呪印の女剣士人物紹介～沼地編～（前書き）

今回は沼地編で出てきた人物を紹介します。

呪印の女剣士人物紹介～沼地編～

名前：ウィンティア
年齢：およそ２００歳
外見：１６０ｃｍ、４８ｋｇ、８２／５３／８０、地面に届くほどの緑の髪、緑の瞳
職種：上位精霊
好き・得意なモノ：散策、風の声を聞くこと、昔一緒に旅をした恋人
嫌い・苦手なモノ：狭い所、うるさい場所
一人称：私
プロフィール：
　ユーティの生まれ故郷であるシュティームの長にして、風の上位精霊。見た目は大人しそうだが、ユーティと毎日やり合っていただけあって、相当な口達者かつ強引な性格。何かと勝手な真似をするユーティをよく叱りつけていたが、それはユーティのためを思ってのこと。ユーティにとっては母親や姉の様な存在である。
　本編でも述べたが、彼女が生まれた当初はユーティよりもさらに奔放な風の精霊であり、ユーティが人目に見つからないようにこっそり旅をしていたのに対して、ウィンティアは人目も憚らず積極的に人間と関わっていた。中央街道近辺での妖精の伝説の類いは、大方ウィンティアの事だと考えてもよいらしい。
　彼女はその中で人間に恋をし、そして彼が死ぬと同時に上位精霊になることで、妖精から上位精霊になるためにはどういった事が必要となるのかを知った。そしてユーティが上位精霊になることを望んでいることを知り、彼女は応援しているが、内心ではユーティがこれから経験するであろう出来事を想像して心配な気持ちも強い。
　またエアリアルにも精霊守護者について指導するなど、彼女達に様々なアドバイスを与えた人物。シュティームが魔王達に襲撃されて住めなくなってからは、妖精達を連れて次なる住処を求めて移動

中。

名前：フェアトゥーセ
年齢：約４００歳
外見：１６２ｃｍ、５０ｋｇ、８４／５６／８２、白く肩より少し長い程度の長さの髪、グレーの瞳（ゆるやかなウェーブ）
職種：白の魔女
好き・得意なモノ：薬草づくり、サーペント
嫌い・苦手なモノ：魔女の仕事
一人称：私
プロフィール：

沼地に住む白の魔女にして、現在の魔女達のまとめ役。ただ彼女は魔女の仕事は嫌っているので、あまりまじめにやっていない。薬草づくりはあくまで趣味の範囲。

彼女が魔女になる前、生まれ故郷は疫病に見舞われていた。次々と人が死んでいく中、彼女の両親も倒れ、もはや彼女の運命も風前の灯だった。そんなおり、村に現れた先代の白の魔女に彼女は才能を見いだされ、後継者にならないかと持ちかけられる。既に天涯孤独の身となっていた彼女は、死にたくないという一心から是非もなくその話を受けた。

だが魔女の仕事は彼女にとって非常につまらないものだった。人間の心境と言うのは勝手なもので、彼女は魔女となって不老の体を手に入れると、今度は色々な世界を見て回りたいと思うようになったのだ。そこで彼女は大して魔女としての仕事を行わず、旅をしながら色々な場所を見て回っていた。結果としてその行為は彼女の見識と、各地の魔女との交流をもたらすことになるのだが、意識して行ったわけではない。

その度で彼女はサーペントと出会い、自由に海原を泳ぎ回る彼を羨ましく思った。真竜は人間にとって憧れの存在であり、魔術を彼

らから直接教わった初代の魔女達の言い伝えから、魔女にとっては普通の人間以上に畏敬の対象であった。だがサーペントもまた真竜としての自覚が薄く、気さくにフェアトゥーセに話しかけたため、彼女達はしばしの親交を結ぶことになる。その中でいつしかフェアトゥーセはサーペントの事を憎からず思うようになっていた。

だが所詮は人間と真竜。いかに親しくしようと、フェアトゥーセにとって身分も何もかもが違いすぎた。彼女は別れも告げず、逃げるようにサーペントの前から姿を消したが、サーペントもまた彼女のことを好いており、彼女の行方を探しあて、共に沼地に住むことになる。だが、魔女である自分が真竜であるサーペントに思いを打ち明けるのは、魔女として決してあってはならないことと彼女は思い、何も言わず沼地で浄化のための作業を進めることになる。そこには、実らない恋から逃げるように一心に魔女の仕事に打ち込む彼女の姿があった。

だが時を経て、フェアトゥーセとサーペントは心を通い合わせることに成功する。だが、目の前に立ちはだかる出来事は彼女達が共にいることを許さない。彼女が真にサーペントの元で安らげる日はいつになるのだろうか。

名前：サーペント
年齢：??（グウェンドルフよりは１００歳ほど若いらしい）
外見：体長１２０ｍ（幻身時は、１８５ｃｍ、７８ｋｇ、蒼の短髪に海色の瞳）
職種：真竜（海竜）
好き・得意なモノ：海を泳ぐこと、フェアトゥーセ、グウェンドルフ・マイアとの語らい
嫌い・苦手なモノ：狭い所、暑い所
一人称：俺
プロフィール：

人語を解し、人を初めとする様々な生物に知恵を与えたとされる真竜の一体。グウェンドルフの弟分に当たる。

彼は真竜としての自覚に疎く、海で勝手気ままに泳いでいればそれで満足だった。それに彼が真竜というだけで、海に住む生き物たちは何かしら彼に助力を求めたため、暇を持て余すことはあまりなかったのだ。進んで自分から何かしようとこそしてはいなかったが、ある意味では真竜としての役割を果たしていたともいえる。ルージュともそういった中で出会っている。

そんな彼はある日自分の住処にしていた洞窟の入り口付近に、美しい女が立っているのを見かける。彼女は魔女であり、真竜の気配を手繰るうちにここに辿り着いたと言い、ちょうど話し相手に飢えていたサーペントの元に半年ほど滞在することになる。

その期間の内で、サーペントは彼女の自由な心に魅かれて行った。そのうち彼女と一日中話して暮らすことも増え、海に泳ぎに行かなくても満ち足りる自分がいることに彼は気が付き始めていた。ルージュはこの時まだ存命であったが、彼のそのような心の揺り動きを彼女は勘づいていたようだ。

やがてフェアトゥーセは突然サーペントの元を去り、彼は失意を受けたが、余りに自分が海にいなかったことで荒れた海を元通りにする作業に追われ、フェアトゥーセにもルージュにも構っていられなくなった。そしてルージュは死にゾンビとなり、途方に暮れるサーペントはやがてルージュから逃げるようにフェアトゥーセを追いかける決心をする。

彼はそれをルージュのためと言い訳したが、それならば別にフェアトゥーセを追いかける必要はなかったわけで、彼もまた自分の気持ちを認めることができなかったのであろう。あるいはフェアトゥーセにその気持ちを拒まれることを恐れたのかもしれない。

２００年の歳月を経て、その思いはやっと実ったわけだが、運命の悪戯は彼らを再び引き離す。果たして彼らが共に暮らせるようになるのはいつのことだろうか。

名前：ルージュ
年齢：およそ１５０歳程度（死亡時）
外見：１０ｍ（幻身時は１６６ｃｍ、５２ｋｇ、８３／５８／８４、赤い腰までの髪、深紅の瞳）
職種：火竜
好き・得意なモノ：サーペントが好きなものなら何でも
嫌い・苦手なモノ：水、寒い所
一人称：私
プロフィール：

　ブロームと言われる大陸西部の火山帯の火竜の一族出身。お転婆な性格で、まだ羽根もろくに生えていない所、水場に行った時に滝に流され、そのまま海にまで流されてしまった。流木の上にいたため呼吸こそ大丈夫だったが、彼女は実に7日に渡って流されており、心底怯えきっていた所に連絡を火竜から受けたサーペントが助けに来たのである。その時にサーペントに一目惚れをしてしまった彼女は、成竜になったら彼のつがいになろうと幼心に決めたのである。

　それから足しげくサーペントの元に通う彼女であったが、まだ彼女は幼いだけでなく、火竜と海竜という生まれから、それは決して実らない恋だった。共にいるだけでも、相手の力を弱めてしまうのである。一族の竜もルージュの行動を止めようとしたのだが、ルージュは頑として聞かなかった。サーペントの心がフェアトゥーセの元にあることに気がついてでも、である。またサーペントも、いずれルージュが飽きるだろうと放っておいた。

　だが彼女は成竜になってさえも彼のもとに通い続け、サーペントも困りつつも、美しく成長したルージュを見るのは悪い気がしなかったためそのままにしてしまった。その結果として、ルージュはサーペントのねぐらの場を荒らさないために火の力を極力使っていなかったことで（火竜にとって水の力が強い場所にずっといるのは、

毒に体を浸し続けるのにも等しい）、体をすっかり壊してしまい、あえない最後を迎えることになってしまった。

さらにルージュが死ぬ時に、彼女は死ぬまでサーペントの傍に居られたことで幸せだったものの、サーペントが非常に申し訳なさそうな顔をした事が気にかかってしまい、そのままこの世にゾンビとして留まってしまう。

今ではアルフィリースの力を借りて無事昇天した。その一部はアルフィリースの小手と、サーペントの一部に赤い鱗として残っている。

名前：ラーナ
年齢：１５
外見：１５４ｃｍ、４３ｋｇ、８０／５２／８１、黒いみつあみ（後ろと横に少し）、茶色の瞳
職種：闇僧侶（ダーククレリック）
好き・得意なモノ：アルフィリース、夢占い、房中術
嫌い・苦手なモノ：特になし
一人称：私
プロフィール：

フェアトゥーセの元で育てられたバンシーと人間のハーフ。それゆえ聖属性を司る白魔女の弟子でありながら、闇に属する闇僧侶である。

なお闇の属性は決して悪ではない。闇は闇に立ち入り、その中に隠された心理の探求、あるいは日陰からの支えなどを意味することもある。暗黒と闇は一般人には混同されやすいが、魔術を使う者にとっては明確な区別がある。ラーナも闇の魔術の使い手でありながら、彼女の性格を反映したのか攻撃はあまり得意とせず、回復や補助の方が得意。

一方でキレるとフェンナより怖いとは、ユーティの談。リサが何

があったのかユーティに問いただそうとしたが、怯えて鍋の中に隠れてしまい、決して教えてくれなかったそうだ。

見た目も非常に大人しいのだが、淫魔の血を引くせいか、常にどことなく艶やかである。無意識のしぐさ一つで時にアルフィリース達が見入ってしまうこともあり、これをラーナが意識的にやり始めると、とてつもないことになりそうだ。さらに彼女自体は性に非常に奔放で、気に入ってしまえば男女関係無しである。ゆえにアルフィリースのことを好きだと公言してはばからない。ただ無理矢理は嫌いなので、アルフィリースが受け入れてくれるまでは決して自分からは仕掛けたりもしない。それだけアルフィリースに本気ともいえる。

特に崇高な目標があるわけでもなく、彼女がアルフィリースと旅をするのは、単に彼女とその仲間が好きだから。ある意味では、最も普通の子なのかもしれない。

名前：イルマタル
年齢：約２歳
外見：幻身時では８２ｃｍ、１２．５ｋｇ、濃いピンクの髪、瞳の色は琥珀色
職種：真竜
好き・得意なモノ：アルフィリース
嫌い・苦手なモノ：一人ぼっちになること
一人称：私、もしくはイル
プロフィール：

アルフィリースが温めた卵から孵った真竜の子。まだ本来は幻身もできず、人語も話せないはずなのだが、アルフィリースに会いたい一心で学んだのだろうとグウェンドルフは語る。

真竜の子は本来温めた時間に比例して親を認識するはずなので、アルフィリースは「この人を知っている」くらいの認識のはずなの

だが、イルマタルはアルフィリースを完全に親として認識している。もちろん本来の親の親の前に行けば本能で察知できるのだが、その前になんとなく自分で本来の親は別いることを察知するケースが多いのと、今の状態で本当の親に引き合わせるとイルマタルが混乱するだろうということで、アルフィリースと旅をさせようとグウェンドルフは判断した。

やっと会えたアルフィリースからは片時も離れようとせず、アルフィリースも少し困惑しつつも、イルマタルが可愛いのでしっかり面倒を見ている。

また幻身がまだ上手くできないのか、髪の毛はリサよりも濃いピンクで非情な癖っ毛である。朝起きると必ず鳥の巣のようになっており、髪はいつもアルフィリースかリサがとかしている。

彼女は今はアルフィリースが好きなだけだが、真竜はやがてそれぞれが何らかの役割を自然界で負っていく。イルマタルは何を負うことになるのだろうか。

名前：グウェンドルフ
年齢：だいたい４０００年くらい（本人もよくわかっていない）
外見：真竜時は体長２０m、翼を広げると４０m程度。幻身の時は１８８cm、８０kg、黒の腰までの髪、緑の瞳
職種：真竜の長（破壊竜）
好き・得意なモノ：ひなたぼっこ
嫌い・苦手なモノ：自分の知識を得るために尋ねてくる者に、瞑想の邪魔をされること
一人称：私
プロフィール：
現在の真竜の長にして、アルフィリースとその師匠アルドリュースの友人でもある。アルドリュースがアルフィリースを連れて居を構えた場所の近くに、たまたまグウェンドルフが棲んでいた。

過去には『破壊竜』と異名をとったほどグウェンドルフは喧嘩っ早く、また戦いが好きだった。だが、そんなグウェンドルフを案じた先代の長ダレンロキアが彼を後継者として指名し、彼に様々な知識を教え込んだ。さすがの破壊竜も族長命令には逆らえず、大人しく様々な事を勉強することになる。

そうして時を過ごすうち、後に5賢者と呼ばれる仲間が集い、議論を繰り返すうちに彼らは親友となっていった。グウェンドルフの興味もまた、戦いから思索へ、その実行へと移っていくことになる。刹那的な戦いよりも、より長期にわたって取り組める建設的な出来事へと興味が向いたのだ。

そして彼は自分の知識を様々な種族に授けて行くことになる。だが悲しい事に知識の多くは戦いに流用され、大陸には多くの血が流れることとなった。その様子を見た仲間は、ある者は大陸を去り、ある者は寿命を迎え、ある者は身を隠し、ある者はさらなる希望を求めて自ら野に下って行った。

グウェンドルフはといえば、まだ自分達が行った出来事に対して結論は出ていないと判断し、まずはこの成り行きを見届けようと人知れず山奥に身を潜めていた所に、アルフィリースが来たというわけである。そして彼女とはそのままひなたぼっこ仲間になるのだった。グウェンドルフにしてみても、自分の元を訪れる生物が自分の知識を要求せず、ただ自分と対等に接するというのは非常に新鮮で、アルフィリースと一緒にいるのは実に心地よかった。グウェンドルフにとって、アルフィリースは5賢者依頼の異種族の友人である。

グウェンドルフは真竜の長として、オーランゼブルの目的などについてもある程度予想が立っているようだが、彼は何も語らない。一体彼が何を考えているのかは、これから先の物語で明らかになっていくだろう。

名前：楓

年齢：１５、人間の女性
外見：１５８ｃｍ、４５ｋｇ、８２／５４／８３、黒い髪に茶色の瞳
職種：口無しのくの一
好き・得意なモノ：花を育てること
嫌い・苦手なモノ：雷
一人称：私
〈プロフィール〉
彼女は生まれながらに生粋のくの一として育てられた。親もまた口無しの人間であるが、彼女は一度も肉親として扱われていない。互いに親子とは知ってはいるが、家族としての交流は一切ない。これは口無しのなかにおいてすら、例外的な厳しさである。
だが彼女は文句一つ言わず、厳しい修練を耐えた。さらに彼女は『魔眼持ち』であることも含め、現在ではミリアザールの傍仕えをする、口無しとしてはトップクラスの実力を持つくの一として認められるようになった。
ゆえに大草原にもミランダの護衛として派遣されたわけだが、さらに上司である梓からミランダの護衛を単独で任されることになる。この任務は彼女に何かをもたらすのだろうか？
さらに彼女は無表情かつ任務をそつなくこなすので感情に乏しい人間だと思われがちだが、実際には情が深い人間である。それは、彼女が親に人一倍厳しくされたことで周囲が特に目をかけたのと、教育係であった梓が情愛を持って彼女に接したがゆえであろう。ちなみに酒を飲むと、抑圧された感情が一気に外に出てくる。少し酒乱の気があり。

呪印の女剣士人物紹介～沼地編～（後書き）

次回投稿は、４／２６（火）９：００です。

登場人物紹介～ブラックホーク編～（前書き）

今回はブラックホークの紹介です。皆さん忘れている人も多いかもしれませんが、これからは出番が増えると思います。

登場人物紹介～ブラックホーク編～

名前：ヴァルサス（名字は存在しない）、
年齢：３５歳、人間の男性
外見：１７８ｃｍ、７４ｋｇ、標準的な栗色・茶色の瞳、ブラックホーク団長
職種：剣士（通常の剣より少し長い程度の剣を使う）
好き・得意なモノ：読書、仲間
嫌い・苦手なモノ：野菜
一人称：俺
〈プロフィール〉
出自・両親は不明。戦場で生まれ、物心ついたときにはすでに戦場にいた。彼が育った傭兵団は戦場で生まれた子どもは縁起がいいとされ、全員に大切にされ育てられた。彼にとっては戦場こそが故郷であり、傭兵団のメンバーこそが家族である。そのため常に戦場にいることこそが本望であり、仲間を殺されること、裏切りは許せない。
彼が１２歳の時に仲間内で裏切りが発生し、団がほぼ全滅する出来事があった。ヴァルサスはその時裏切った団員を不眠不休に近い状態で実に１４日間に渡り一人で追い続け、立ち塞がった２００人以上の兵士を斬り殺した。皮肉にもこれが彼の名を一躍有名にすることになる。
その後様々な傭兵団を渡り歩くが、最も彼の名前を有名にしたのが１５歳の時の対グルーザルド戦である。グルーザルドを前に絶体絶命の状況で殿を任されたヴァルサスの部隊は、５００人で５万を超えるグルーザルドの本陣に突っ込み、実に１０００を超える獣人を真っ向勝負で討ちとった。この時ヴァルサスはグルーザルドの将軍６人を同時に相手にし、ついには国王ドライアンに一太刀くらわせることに成功する。その圧倒的破壊力を持って無事彼は脱出した。
その時、同じ殿を務めていたメンバーが初代のブラックホークの団

員となった。ゼルドス、ラッシャはこの時同じ傭兵団に所属していたメンバーである。

その後あまりの強さゆえに様々な恨みを買い、また様々な功名心や賞金につられた連中に狙われるヴァルサスだが、逆に返り討ちにすることに成功。ただあまりに激しい戦いであったため団のメンバーは半数以上が死亡し、地下に潜伏する意味でも一度団を解散している。

だがその後ヴァルサスの元には新たな英傑達が集い団を再編成することになった。

名前：ベッツ＝ブレイブ＝レイドリンド
年齢：５８歳、人間の男性
外見：１７５ｃｍ、６８ｋｇ、白髪（元は茶色）、茶色の瞳、ブラックホーク副団長
職種：剣士（通常サイズの剣）
好き・得意なモノ：ワイン、詩を作ること、盆栽
嫌い・苦手なモノ：ゼルドス
一人称：私

〈プロフィール〉

元々はとある名門の武家の４男。だがかなり自由奔放な性格だったため、家を勘当に近い状態で放り出された。そんな彼が最も兄弟の中で有名になったのはなんとも皮肉な話である。

１８で家を追い出された彼は、傭兵として各地を転々とする。他国の名家の出自のせいでうかつに士官をするわけにもいかず、また傭兵暮らしが彼の性には合っていた。ゼルドスとは傭兵を始めたころからの腐れ縁である。

ヴァルサスが比較的子どもの頃から知っており、周りが全て死んだ今は彼の父親代わりといってもよい。昔は軽い性格だったが、歳を経た今は何かと暴走しがちな団員のストッパーとなっている。本

人いわくそのせいで白髪らしいが、ゼルドスに言わせれば「ハゲてないだけましだ」そうだ。
　ちなみに剣の腕前は超が付くほどの一級品。ルイやレクサスですら一騎打ちではほとんど一本が取れない。何かと口うるさいベッツに皆が渋々従うのも、彼の人柄と実力を認めていればこそ。そんな彼に今日も団員は愛をこめてこう言う。「おい、ジジィ」と・・・

■０番隊メンバー

名前：グロースフェルド（通称セクハラ神父）
年齢：３２歳、人間の男性
外見：１８８ｃｍ、８０ｋｇ、金髪、グレーの瞳
職種：神官戦士（武器は十字架をかたどった双剣）
好き・得意なモノ：愛の言葉（決して神の言葉ではない）、女性
嫌い・苦手なモノ：美しくないモノ、汗臭い男
一人称：私
〈プロフィール〉
　団員いわく「女の敵」。本人は愛の伝道師のつもりだが、成功したことはない。だまっていれば長身の美形だが・・・。
　ちなみに彼は西方オリュンパス教会の出自である。なぜ彼がセクハラ発言を連呼するようになったかは定かではないが、その実力は確か。回復魔術と前線を張れる戦闘能力。また後衛からの魔術援護などオールマイティに活躍できる。

名前：ミレイユ
年齢：３５歳（人間ではおよそ１８歳相当）、獣人の女性
外見：１７２ｃｍ（耳は除く）、５８ｋｇ、８２／５８／８５
職種：ウサギ族の格闘家

好き・得意なモノ：肉、お昼寝、単独行動、おしゃべり
嫌い・苦手なモノ：野菜、口うるさい人
一人称：ワタシ
〈プロフィール〉
グルーザルド出身の獣人の戦士。彼女は将来の獣将として期待されたが、軍属で縛りの多い生活に嫌気がさして脱走。ニアがまだ軍に入る前の話である。
戦い方はスピードで翻弄する、生粋の前衛型のタイプ。スピードだけなら瞬間的に『神速』のロッハを上回ることもあり、実際に彼から一本取ったこともあるのだが、なぜかヴァルサスからは一本も取れない。彼から一本とれるまで彼の言うことを聞く約束で、ブラックホークに籍を置いている。
ちなみに相当おしゃべりであり、０番隊は無口な面々が多いのでよく退屈している。そのせいでよく悪戯をするが、被害を受けるのは大抵ベッツである。

名前：アマリナ
年齢：２５歳、人間の女性
外見：１６５ｃｍ、５５ｋｇ、８３／５８／８６、茶色のツインテール、茶色の瞳
職種：竜騎士（相棒の名前はクラウン）
好き・得意なモノ：空、遠乗り
嫌い・苦手なモノ：人込み・雑踏、お酒
一人称：私
〈プロフィール〉
元は軍属。軍で正当な評価を下してもらえず、不満を感じた軍を辞めて傭兵をしている。ブラックホークに入ったのは、ヴァルサスが正当な評価をきちんと下してくれるから。彼の事を尊敬できる人間だと考えている。

ブラックホークには竜騎士は彼女一人しかいないため、斥候などは彼女がいつも務める。普通は危険極まりない任務だが、いまだ一度も不覚を取ったことはない。
性格は気真面目で常識人。面倒見もいいことから、よくミレイユの相手をしている。

名前：グレイス
年齢：７０歳（人間では２５歳相当）、巨人族の女性
外見：２３７ｃｍ、８６ｋｇ、スリーサイズ非公表、グレーの髪、緑の瞳
職種：剣士（大剣使い）
好き・得意なモノ：傭兵業、旅、酒
嫌い・苦手なモノ：めんどくさいこと、口うるさい人
一人称：アタイ
〈プロフィール〉
巨人族の女性剣士。並の人間の男性の剣士よりはるかに大きく、大陸北西部の傭兵の世界ではちょっとは知られた剣士。閉鎖的な巨人の世界にあって、自分達の勢力圏から出て活動する人物は珍しい。だが彼女は色々な所を巡るのが非常に好きなので、傭兵という業務が非常に気に入っている。
やはりヴァルサスに一騎打ちでいとも簡単に倒されたことから、彼に従うようになった。ただ風来坊な気質は治らないので、いつも彼と行動を共にすることはない。普段は一人で傭兵稼業をしている。アマリナとは気が合うのか、よく一緒にいるようだ。
なお地元には夫がいる。

名前：カナート
年齢：４２（人間では２０台後半相当）、魔物と人間のハーフの男性

外見：１８３ｃｍ、７５ｋｇ、青い肌、右目だけ赤いオッドアイ、黒の髪
職種：探知者（センサー）＆槍使い
好き・得意なモノ：人気のない所
嫌い・苦手なモノ：都会
一人称：俺
〈プロフィール〉
彼は母親が魔物に襲われてできた子である。つまり魔物との合いの子である。だが彼女の母親は村人に軽蔑されながらも彼を正しく育て上げたため、彼は自身はいたってまともな人格。ただその容姿から中々他人には受け入れられ難く、仕事を見つけられなかった所をヴァルサスに拾われる。
魔物の血を引くためか、身体能力は並の人間よりはかなり上。またセンサーでもあり、特に毒物の探知に優れる。そのため、未開の土地に分け入る時には彼の案内が必須。もちろん槍使いとしても一級の使い手。
やはり差別の経験から彼は都会が苦手だが、面倒見は良く優しい性格。そのためミレイユは彼に非常に懐いている。また彼も嫌な顔一つせず、ミレイユの相手をしている。

※その他の０番隊は本編未登場。

■１番隊
名前：マックス＝オブライエン
年齢：３４、人間の男性
外見：１９３ｃｍ、８９ｋｇ、茶色の髪、右目に眼帯、茶色の瞳
職種：鎖鎌使い
好き・得意なモノ：ラバーズ達、勉強、甘い物、賭けごと
嫌い・苦手なモノ：ベッツ、辛い物
一人称：俺

部下：恋人達（ラバーズ）が４人

〈プロフィール〉

彼はとある豪商の跡取り息子であった。子どもの頃から体が大きく、腕っ節も強い事を彼は自慢にしていた。彼が１２歳のある日、彼の親はある傭兵団を雇い入れる。その中に自分とさほど歳の変わらない男の子がいたことが、マックスには印象的だった。彼はそれほど体も大きくなく、また大人しい少年だったのでマックスはしょっちゅう馬鹿にしていた。

そして彼の隊商は魔物に襲われる。これはマックスにしてみれば初めての経験であり、マックスは恐ろしさの余り腰を抜かしてしまった。そして彼に魔物が襲いかかろうかという時、いつも彼が馬鹿にしていた少年がその魔物を一刀両断したのだった。その少年は怯えるマックスに一瞥をくれることすらせず、魔物の群れに突っ込んで、当たるを幸いとばかりに魔物を切り裂いていった。その時、彼は本当に強い者がどういう時に力を振るうかということを知った。少年の名前はヴァルサス。彼が倒した魔物はその時３０を超えていた。

以後彼は商人であることを止め、傭兵としてヴァルサスと共に歩むことを決意する。ヴァルサスは戦いは天性の物を持っていたが、金策だとか交渉事とかは苦手としていたため、その辺の面倒はマックスが見ていることが多かった。特にブラックホークを設立してからは、彼が傭兵団全体の金策を主にやっている。大きな口の仕事を持ってくるのも大抵彼であり、情報に関して彼は並々ならぬ才能を見せる。

その中核となるのがラバーズである。実際に彼女達はマックスの愛人でもあるわけだが、全員が諜報や暗殺の仕事も負うくの一と同義である。出自は様々。元奴隷、永久専属契約のくの一、罪人、娼婦である。ちなみに全員が戦闘のプロ。

なお見た目と態度に反し、極度の甘党で勉強好き。暇さえあれば学問所に出入りする、あるいは本を読んで暮らしている。そのおか

げでブラックホークは非常に助かっており、軍師のような役割も務める。

■二番隊はルイ・レクサスなので、そちらを参照

■三番隊
名前：ゼルヴァー
年齢：３２、人間の男性
外見：１８５ｃｍ、８４ｋｇ、茶色の髪、茶色の瞳
職種：元騎士、大剣使い
好き・得意なモノ：鍛錬
嫌い・苦手なモノ：甘い物、賭けごと
一人称：俺
〈プロフィール〉
元は騎士であり、若くして大隊長にまで出世した男。だが、とある戦場で自分以外の部下がほとんど死ぬという惨状に見舞われる。
彼は自分の能力に疑問を感じ、祖国を捨てて一人剣の修行の旅に出た。そして彼はヴァルサスという存在に出会い、己の力量不足を悟り、彼らと共に行動しながら剣の腕を磨こうと決心する。
性格は多少気の強すぎる所があるものの、基本的には真面目。いつもマックスにからかわれて無理矢理賭けごとをさせられ、負けては罰ゲームで甘い物を食べさせられるという羽目に陥っている。ちなみに賭け事をしたくはないのだが、３番隊は彼以外全員賭け事好きなためいつも巻き込まれている。

名前：ベルノー
年齢：５３、人間の男性
外見：１７０ｃｍ、５７ｋｇ、黒の髪、茶色の瞳

職種：魔術師
好き・得意なモノ：絵を描くこと、賭け事
嫌い・苦手なモノ：酒
一人称：ワシ
〈プロフィール〉
　元魔術教会出身の魔術師。彼は繰り返される派閥争いに嫌気がさし、フリーの魔術士をして傭兵をしていた。かなり優秀ではあったものの、派閥を形成するほどでもなく、魔術士としての限界を彼は優秀がゆえに感じたのだろう。もっとも現在のブラックホークを相当に気に入ってはいる。

名前：ドロシー
年齢：２４、人間の女性
外見：１６３ｃｍ、５３ｋｇ、８０／５５／８４、茶色の髪、茶色の瞳
職種：剣士（曲刀使い）
好き・得意なモノ：酒、賭け事、男
嫌い・苦手なモノ：弱い男、軽薄な男
一人称：私
〈プロフィール〉
　生粋の傭兵出身の女。戦争孤児であり、生きるためには何でもやって生き延びてきたタイプの女性である。噂のブラックホークがどの程度のものか確かめようとしたところ、彼らの強さが非常に気に入り、そのまま付いてきた。現在では団の雰囲気も非常に気に入っている。
　なお恰好は派手であり、細かい事にはこだわらないタイプ。寄った町では適当な男としけこんだりもするのだが、団の仲間とは決してそういう関係にならないように彼女なりに気を使っている、それだけ彼女はブラックホークの仲間を大切に思っているのだろう。

名前：ダンダ
年齢：５０（人間では３０程度）、オークの男性
外見：２１０ｃｍ、１０２ｋｇ、髪は無し、赤い瞳
職種：戦士（斧使い）
好き・得意なモノ：女、鍛錬、賭け事、酒
嫌い・苦手なモノ：弱い奴
一人称：オデ
〈プロフィール〉
元はブラックホークが討伐対象としたオーク。オークの中でも大柄であり、知能も高い方である。既に下級の魔物を従える立場に当時あり、そのまま放置されていれば魔王となったであろう逸材。だが部下はヴァルサス一人によって蹴散らされ、ダンダは彼に敗北する。
だが正々堂々と一騎打ちを望んだダンダをヴァルサスは気に入り、彼を自分の手元に置いて、人語や傭兵としてのいろはを徹底的に叩きこんだ。結果として彼は人語を解すオークとなり、ブラックホークとの面々とも普通に会話ができる。
ちなみにオークと言えば精力絶倫の代表格だが、彼はその性欲を鍛錬に打ち込むことにより抑え込んでいる。そのため、並のオークと違い体もほっそりしており、非常に引き締まった体をしている。
３番隊にいるのは賭け事が好きで、話の合う連中が多いから。自分をオークとわかっていても変わらず接してくれるドロシーのことを気に入っているが、それを意識させることはない。

※副隊長以下半分が未登場

■４番隊（一度全滅したので、新しく構成）

名前：ゼルドス
年齢：８７（人間だと４２くらい）、狼の獣人
外見：１９８ｃｍ、８９ｋｇ、毛並みはこげ茶色
職種：元グルーザルド軍事顧問
好き・得意なモノ：酒、飯、睡眠
嫌い・苦手なモノ：難しい事（特に計算）、退屈
一人称：俺

〈プロフィール〉

彼が世に名を知られたのは、盗賊としてのことだった。当時１２獣将を従え、飛ぶ鳥を落とす勢いだったグルーザルドがどうしても討伐できない盗賊を率いていたのが、このゼルドスである。ついには国王ドライアンが出てきてついに彼は捕えられることとなった。

だがその戦いぶりを気に入られたゼルドスは、軍事顧問としてグルーザルドに仕えることとなる。ドライアンと対等に意見を交わしあえる彼を得てグルーザルドはさらに領土を拡大したが、やがて彼は仕事に飽きて出奔。ドライアンは容認したが、１２獣将には非常に恨まれている。

その後彼は傭兵をしながら各地を転々とするが、若かりし頃のベッツと一騎打ちをして、自分と互角に渡り合う彼に興味を示し、そのまま彼の属する傭兵団に居ついた。そこにヴァルサスもいたのである。その後その傭兵団が壊滅するにつけ、ベッツと共にヴァルサスを団長としたブラックホークの創立に協力。だがそれも軌道に乗り、ヴァルサスが戦士として自分の力量を超えたと判断するや、ゼルドスは引退と称してブラックホークを去っていった。

さらに各地を放浪するゼルドスだったが、どうにも自活能力に欠ける彼はミーシアで空腹のあまり行き倒れる。そこを食堂を構える獣人に助けられ、ご飯と宿を条件に彼がやっていた小さな露店の用心棒をすることになったのだが、彼が病死するにつけ、ゼルドスが店を継ぐことになる。料理店は殺人的な忙しさであり、「これも一種の戦場か」とゼルドスは気に入っていた。また客として色々な人

間の人生を見るのも彼は嫌いではなかった。
だが彼一人では中々店が立ちゆかず、そこにウルドがたまたまやってきて雇うこととなった。店長こそゼルドスだが、彼よりもウルドの方が店の仕入れや金銭についてよく理解しており、実際には店長はウルドの様なものである。
今回はヴァルサスたっての願いなのでブラックホークに戻ったが、今は昔ほど戦いに興味を持てないでいる。

名前：ラッシャ
年齢：７８（人間だと３８くらい）、リスの獣人
外見：１６４ｃｍ、６０ｋｇ、毛並みは茶色、左目に刀傷（目も見えない）
職種：ゼルドスの副官
好き・得意なモノ：新人教育、宴会、計算
嫌い・苦手なモノ：ゼルドスの無茶
一人称：俺
〈プロフィール〉
ゼルドスが盗賊をしている頃から彼と行動を共にする獣人。リス族は非常に大人しい一族だが、彼だけは昔から非常に気性が荒かった。自分の一族が合わないと判断した彼は傭兵をしようとしたが、気性の荒い彼は依頼主と揉めることも多く、やがて野党となる。
小柄な体格に反し相当に腕の立った彼は一つの夜盗を率いていたが、ゼルドスと縄張り争いで揉めて彼に負け、彼に従うようになる。
以来彼はゼルドスの無茶を止める役割であり、また面倒見が非常によいため、彼は非常に部下に人気がある。また金の計算が得意なので、自然ベッツのように気苦労が絶えない。よくベッツとは２人で愚痴をこぼしながら飲んでいる。

※他に、ミーニャ、オールーなど約２０名

■５番隊
名前：ゲルゲダ
年齢：３７、人間の男性
外見：１７３ｃｍ、６５ｋｇ、ちりちりの赤髪、茶色の目
職種：暗殺者
好き・得意なモノ：美人、金、殺し
嫌い・苦手なモノ：道徳家、善人
一人称：俺
〈プロフィール〉
　ゲルゲダは幼いころより残虐な性格だった。幼い頃から恐喝、盗み、暴行を働き、１２の時には隣に住んでいた一家が自分の悪口を言ったという理由だけで、仲間と共に押し入り、惨殺するという凶行をしている。その家の娘は彼より１つ年上だったが、仲間全員で強姦した上に、拷問しながら殺すという行為を行っている。
　その後ゲルゲダは生まれ故郷を追われ、彼は傭兵や盗賊の真似事をしながら糊口をしのいでいた。だが余りに犯罪行為が過ぎたため、ゲルゲダは国を越えて手配され、「汚れ仕事を全て引き受ける」という条件で彼はブラックホークに転がりこんできた。最初はヴァルサスを上手く操るつもりだったが、ゲルゲダがブラックホークに転がり込んだ時に、ヴァルサスは無言で彼以外の仲間の全員をその場で切り殺し、その首を国に突き出した。その時のヴァルサスのあまりの無慈悲さと強さにゲルゲダは震えあがり、以後彼にだけは従順である。またヴァルサスが必ずしも道徳家でないことも気に入っている。
※部下は３０名ほど

名前：ファンデーヌ
年齢：２４、人間の女性
外見：１６６ｃｍ、５４ｋｇ、８６／５８／８７、金髪のみつあみを腰の辺までたらしている、金の瞳
職種：魔物使い（ビーストマスター）
好き・得意なモノ：着飾ること、自分の獣の世話をすること
嫌い・苦手なモノ：臭い物（獣が嫌がるから）、下品な男
一人称：私

〈プロフィール〉

粗野、あるいは野性味溢れる女性が多いブラックホークにおいて、紅一点とも言うべき可憐で上品な女性。見た目もおっとりして見える。だが隊長をブラックホークで務めるだけあって相当な腕前であり、特に鞭の扱いは超一級。彼女の鞭を掻い潜りながら懐に入るのは至難の業である。

また部下として扱う獣達もその数が不明である。いつも違う獣を従えているため、ヴァルサスですら把握していない。

出自その他が不明な女性だが、とある任務をブラックホークと一緒にこなしてから、その汎用性の高さを団員達が気に入り、団員達の推挙でブラックホークに入団した。

登場人物紹介～ブラックホーク編～（後書き）

これだけでは面白くないので、本日１４：００にもうひとつ更新します。次回から第二幕です。

一章まとめ（前書き）

第二幕を始めるにあたって、ちょっとまとめを。まとめきれていない部分もありますし、「覚えてるよ」って人には必要ないかもしれません。忘れていることがあれば、ここを見てください。詳しく知りたい場合は、各人物紹介へ。人物紹介がないキャラクタもいるので、その点はご容赦を。また人物紹介をする場合もあるかと思います。

一章まとめ

（アルフィリースの仲間達）

アルフィリースは生まれ持ったその力ゆえに、その存在を疎まれた。長らく隠れるように育てられた彼女は、師匠の死と共に、まだ見ぬ世界を見るために旅に出る。彼女が何をしようと考えるようになったのかは一章の最後で述べたとおりだが、そのためにこれからまだ見ぬ苦難が彼女を待ち受けているだろう。

アルフィリース：本作の主人公。魔法剣士の傭兵。膨大な魔力を呪印により封印している。

ミランダ：アルネリア教のシスター。アルフィリースの親友。不老不死の肉体を持つ

リサ：ミリアザールとの交換条件で、アルフィリースと旅を共にするセンサー。

ニア：グルーザルドの軍人だが、武者修行のためアルフィリースに同行する。

フェンナ：シーカー（ダークエルフ）の王族。ライフレスと戦って以来、行方不明。

カザス：若干１４歳にて教授になった若き天才。ライフレスと戦って以来、行方不明。

ユーティ：水の妖精だが、人間以上に俗っぽく、いたっておしゃべり。上位精霊を目指している。

エアリアル：大草原の管理人。アルフィリースのために大草原を出て彼女に付いていくことになる。

楓：ミリアザールが遣わした、アルネリア教の暗部でミランダの護衛。

ラーナ：白魔女フェアトゥーセに育てられた、淫魔の血を引く闇の神官。

グウェンドルフ：伝説上の真竜にして、アルフィリースを見守る存在。
イルマタル：生まれて間もない真竜だが、アルフィリースを母と慕う

（アルネリア教）
大陸に８００年近く存在する、慈愛と救済を旗印とした団体である。その影響は多くの国に及び、アルネリア教の存在を無視できる国家は事実上ないに等しい。なお聖女アルネリアの像を各教会に置いてはいるが、アルネリアはあくまで偶像であり、境界の者達にとって自分達の行動を律するための戒めの様なものである。決してアルネリアを神と崇めているわけではない。
現在の教主であるミリアザールが作った団体であり、彼女は姿形を変えながら今まで何人もの人間を演じてきた。もちろん彼女は人間ではなく、遥か昔に滅んだ絶滅種である魔物の最後の一頭である。
アルネリア関係者のほとんどはシスター、司祭などの非戦闘民だが、魔物を狩るための独自の戦闘部隊として神殿騎士団を抱えている。またミリアザールが自由に動かさせる人材として、さらに実力者のみを選抜させた『巡礼』や、『口無し』と呼ばれる暗部も抱えている。

ミリアザール：アルネリア教の最高教主。その正体は１０００年近くの時を生きる魔物。
梔子：アルネリア教暗部「口無し」の長である女性。普段は女官としてミリアザールに仕える。
アルベルト：アルネリア教の騎士の頂点に立つ者。大陸でも有数の剣の使い手といわれる。
ラファティ：アルベルトの弟。神殿騎士で、妻帯者。
ベリアーチェ：アルネリア教に拾われた人魚。ラファティの妻でもある。

モルダード：アルベルト、ラファティの父であり、神殿騎士。
マナディル：アルネリア三大司教の一人。
ドライド：アルネリア三大司教の一人。
ミナール：アルネリア三大司教一人。
ロクサーヌ：エルフの剣士。深緑宮の護衛をしている。ベリアーチェの親友。
ジェイク：リサに育てられ、また彼女の婚約者でもある。アルネリア教で一人前の騎士となるべく修行中。
エルザ：アルネリア教で巡礼の任務を負う、戦闘専門のシスター。
イライザ：アルベルトの従姉。エルザと行動を共にする神殿騎士。

（黒の魔術師達）

アルフィリース達が旅の過程で遭遇した魔術師達。彼らの目的に関しては不明な点が多い。仮説は多く立てられるが、確信を持つにはまだ誰も至っていない。もっともその目的については、彼らの長であるオーランゼブル以外は誰も知らない可能性がある。

魔王を大量生産することで何かを企んでいるようだ。さらに個人が大魔王級の使い手である可能性も秘めている。

彼らが世界に、アルフィリースにどのように絡んでくるのかに注目である。

オーランゼブル：黒の魔術師達の長にして、伝説の五賢者の一人。ハイエルフの出自である。
ヒドゥン：オーランゼブルの秘書の様な立場にある。皆に「兄弟子」と言われている。
ライフレス：歴史上における英雄王グラハム。戦いを好む性格。
ドゥーム：悪霊と人間のクオーター。残虐な性格で、リサに興味を示している。
アノーマリー：魔王を製作する工房を管理する者。快楽主義者

サイレンス：「操演者」の異名をとる魔術師。
ドラグレオ：「百獣王」の異名をとる男。肉弾戦が得意。通称バカ。
ブラディマリア：一見幼いが、彼らの中でも1、2を争う実力者。
普段は猫をかぶっている。
ティタニア：歴史上における、剣帝本人。人類史上最高の剣士と呼ばれる女性。
カラミティ：虫を扱う女性。どこかに潜入中のようだ。
？？？：名前も明かされていないが、その実力は極めて高い少年。
全てを知っているようだが・・・？

（魔術教会）
原初に真竜に知識を授けられた人間が創設したとされる組織。前身からの歴史は非常に長いが、組織として現行の体制に入ったのは、ここ数百年程度。何か明確な目的があるというよりは、魔術を研究する者の集う場としての意味が大きい。もちろん大魔王の討伐など、人間の非常時に置いては力を貸すこともある。
多くの派閥から形成される組織で、一本化した命令系統が存在していない。そのため集団の長ですらその行動を把握しきれていないこともあり、時に暴走するような人間も出現する。
才能ある人間は占星術などを駆使して早めに保護し、しかるべき教育を施して正しく導くのが彼らの務め。だがアルフィリースはなぜか彼らの保護から漏れており、あべこべに征伐部隊を差し向けられることとなった。
そのため、征伐部隊を返り討ちにしたアルフィイリースを、いまだに危険視する一派が存在する。

テトラスティン：現在の魔術教会代表。見た目は少年だが、実に６０年もの間姿形はそのままである。
リシー：テトラスティンの秘書兼護衛。彼女もまた６０年間姿が一

切変わらないと言われる。

（東方討魔協会）

アルフィリース達がいる大陸とはまた別の、東の大陸に存在する組織。戦闘に特化した集団で、数こそそこまで多くないが、精鋭ぞろいである。

東方において魔物討伐に成果を上げてきた四家によって取り仕切られていたが、近年初めて四家以外の者が頭首となった。以降彼らは破竹の勢いで魔物を討伐しており、東の大陸諸国でもその影響を無視できない状況になっている。

そして彼らが次に狙うのは・・・？

浄儀白楽：討魔協会の長。傲岸不遜かつ、相当の実力者。陰謀・野望を抱く男でもある。

清条詩乃：討魔協会の名家である清条家の筆頭。凄まじい力の巫女だが、かなり天然でドジ。

東雲桜花：詩乃に仕える侍。

式部都：詩乃に仕える武者巫女。

（ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホーク）

大陸最強とも言われる傭兵団である。アルフィリースは三番隊と抗戦経験があるが、その時は一方的にやられてしまった。一人一人が歴戦の勇者であり、特に団長のヴァルサスは大陸最高の剣士とも言われている。

活動範囲は戦乱の多い大陸の西寄りで、最近では主に魔王を狩って回っている。ちなみにアルフィリースは二番隊、三番隊と面識があり、四番隊の隊長であったゼルドスの店で魔王戦の祝勝会をしたことがある。

ヴァルサス：大陸最強の傭兵団、ブラックホークの団長。あだ名は「狂獣」
ベッツ：ブラックホークの副長。あだ名は「化け物」。元は武家の名家の出自。
マックス：一番隊隊長。あだ名は「蛇目」。常にラヴァーズと呼ばれる部下を伴っている。
ルイ：二番隊隊長。元軍人で、あだ名は「氷刃」。アルフィリースのことが気に入っている。
レクサス：二番隊副隊長。あだ名は「死神」。一見変人だが、腕は確か。
ゼルヴァー：三番隊隊長。もと軍人で、あだ名は「剛剣」
ゼルドス：四番隊隊長。引退中はミーシアで居酒屋を営んでいた。あだ名は「鉄破」
ラッシャ：四番隊副隊長。あだ名は「瞬殺」。獣人にしては理知的な性格。
ゲルゲダ：五番隊隊長。あだ名は「外道」。非常に残酷な性格。
ファンデーヌ：六番隊隊長。あだ名は「調教師」。美貌の女性だが、かなり怖い性格。

（中原）
平和なはずだった大陸中央部に上がった戦火。その中で活動する人々を紹介します。

ライン：アルフィリースの傭兵仲間。元騎士。いつもはちゃらけているが、かなりの切れ者。
ダンススレイブ：ラインに仕える魔剣。人型の女性の形態もとる。
皮肉屋。
レイファン：クルムス公国の姫。存在はあまり公にされずに過ごし

てきた。王族にしては気さく。
ラスティ：レイファンの護衛。堅物な性格。
ムスター：クルムス公国の第三王子。兄二人を殺して実権を握ったと言われる。稀に見る愚物。

（その他の人々）
　様々な場所で物語に登場する人を紹介します。全部は紹介しきれないので、また登場するたびに、少しダイジェストは入れたりします。

アルドリュース：アルフィリースに呪印を施し、育てた者。彼女の師匠。故人。
ファランクス：エアリアルの育ての親であり、大草原の守護者。ドラグレオとの戦いで死亡。
ウィンティア：大草原に住む上位精霊で、ユーティの育ての親。魔王の群れにより、すみかを追われる
フェアトゥーセ：沼地の白魔女。ラーナを育てた。サーペントとは恋仲。
サーペント：真竜の一頭で、グウェンドルフの弟分。竜でありながら、人間のフェアトゥーセに恋をした。
ルージュ：サーペントが助けた火竜の娘。既に死亡している。
勇者ゼムス：ギルドや諸国によって、その功績を認められ勇者を認定された者。だがその裏では・・・？
スピアーズの四姉妹：大草原に現れた者達。かなりの使い手のようだが、その正体は？
ロッハ：グルーザルドの１２獣将の一人。『神速』の異名をとる。冷静だが、キレると手がつけられない。
ヴァーゴ：グルーザルド１２獣将一人。『剛破』の異名をとる。短気で情にもろい。

ドライアン：グルーザルドの国王。その戦闘能力は大陸最強との呼び声も高い。

続く

一章まとめ（後書き）

次話から本編入ります。本日２０：００投稿です。連日更新で行きましょう。

竜騎士三人、その1～先立つ悩み～（前書き）

～あらすじ～

傭兵団を作ることにしたアルフィリース。だがその前途に立ちふさがるのは、現実的な問題で・・・？

ここから第二部です。サブタイトルの「竜騎士三人」が誰なのか、考えてもらえればと思います。

竜騎士三人、その1～先立つ悩み～

どくん――

鼓動の様な音が一つ聞こえる。大きく、力強く、そして聞く者を非常に不安にさせる音。元来他人の鼓動は人を安心させるものであるはずなのに、その鼓動にも似た音は聞く者を非常に不安にさせた。

それは、その音が本当の鼓動ではないからか。あるいは聞く者が少なすぎて、その音について誰とも比較しようがないからか。

「なぜ、誰もこの音を聞こうとしない・・・」

その音を聞いていた男は、一人呟く。これほど大きい音、耳を澄ませば聞こえるはずなのに。音以外に兆候がないからか、それとも聞くほど賢い者がいないからか。だがその音を聞いていた男は思うのだ。大衆が気づいた時には、既に手遅れだと。これは確信である。

そして自分だけにその音が聞こえたのは、きっと天の思し召しに違いが無いと。自分は運命に選ばれたのだ。

「ならば、やるしかない。たとえ自ら修羅の道を行くことになっても」

その音を聞いていた男は誰に同意を求めるわけではなく、一人決意を固めるのだった。

＊＊＊

「でさ、アルフィって傭兵団をどうやって作るつもり？」

「え？」

アルフィリース達は宿の酒場で飲んでいた。もう北街道を旅して5日目になる。

エアリアルと共に大草原から来た馬の足は非常に速い。体力もあるから、並の馬の2倍近い速度での移動が可能なため、旅の速度は非常に早かった。フェブランからラムリッサを抜けて、一路北上する。はっきり言って、中央街道以外の2つの街道はあまり治安が良くない。北街道を統括しているのは、1／3は東の諸国で、もう1／3はローマンズランドである。この2つが統治している部分は、まだ治安が良い。だが残りの1／3は小国家が乱立する、紛争地帯である。いまだに小競り合いが絶えない、大陸の東側では最も治安が悪い一帯。魔物も多いし、アルネリア教会がもっとも派遣の依頼を受けやすい地域でもあった。

その地域に入る前に、金銭的な充実や、装備、荷物を整えようということで、ローマンズランドの属国ヴィンダルにある、ブリュガルという都市に今は2日ほど滞在している。ここで傭兵として依頼をこなし、路銀の足しにしながら物資を購入しようという算段である。アルフィリース達は上手い具合に魔物討伐の依頼を受けることに成功したので、路銀の方は思ったより早く工面できた。全く今回の旅は運が向いていると思うアルフィリースである。明日にはもう出発できるだろう。なので、今は休憩がてら全員で一杯飲んでいる所だ。もちろん、二階にイルマタルを既に寝かしつけて、のことである。様子はリサがセンサーで寝がえりまで含めて逐一感知してくれるので、安心してグウェンドルフまで飲みに加わっている。

女ばかりで飲むと、大方の町の娘のように彼女達も恋の話で盛り上がる。普段ならフェンナの過去話や、カザスとニアのことをからかって遊びたいところだが、フェンナとカザスの安否が知れない今となっては、そのネタは禁句だった。ここはやはりアルフィリースの恋愛模様が一番話題の中心となり、からかわれている真っ最中であった。リサの話もユーティがしきりに出そうとするのだが、その

度リサに上手い事はぐらかされている。そして意外な事に、楓は酒が入ると口数が非常に多くなる。率先して、自分の恋愛観を語り始めていた。

「私だって・・・私だってですね！　理想の男の人ぐらい、いるんです！！」

「た、例えば？」

「いいじゃないですか、口無しだって！　なんでまっとうな恋愛したらいけないんですか？　この前なんか、この前なんか、栂子様に内緒で先輩達は聖騎士団の男の人達と飲みに言ってたんだから！なのに私だけまだ成人前だからって、のけ者にしてー！！」

「だめだ、こりゃ・・・」

話が全くかみ合っていない。どうやら楓は多少酒乱の気があるようだった。ミランダだけはさらに楓の杯になみなみと酒を注ぎながら、面白そうに話している。

その飲みが盛り上がってきたところで、ミランダが傭兵団のことについて、アルフィリースに突然話を振ったのだった。

「だからアルフィはさ、どうやって傭兵団を作るつもりかって聞いてるのよ」

「それは私も興味があるな。何せグルーザルドを捨ててまで参加するんだからな」

「リサも無関係ではありませんからね、聞かせてもらいましょう。条件次第では、私も参加してもいいでしょう」

「我はアルフィについていくと決めたからな。どうあっても参加するが」

「私もです」

「わ、わらしらって、ミランダしゃまが参加するっていうにゃら」

「はいはい、楓はもう寝てていいからね」

「え、え～と・・・」

アルフィリースは困ってしまった。色々考えていることはあるのだが、なにせ世間に出てからまだ2年程度のアルフィリース。傭兵歴も同じであるため、イマイチ思い描く図に、実感が付いてこないのだ。なので、正直な気持ちを口にすると・・・

「わ、わかんない」

その一言で全員ががくっとなった。

「ふぅ・・・」

「アルフィならそうではないかと思いましたが・・・」

「まったく、恰好つけておいてそれか？」

「あっはは、さすがアルフィは退屈させないわぁ」

「し、仕方ないでしょう？」

アルフィリースに白い眼差しをそれぞれの面々が向ける一方で、アルフィリースはむくれていた。そんなアルフィリースを見て、リサとミランダが説明を始める。

「しょうがありません、ではこのリサが傭兵団を作るための手順を説明しましょう。このデカ女には調教、もとい、教育が必要なようですから」

「だね。アタシが知っているのは昔の情報かもしれないから、ここはリサに任せようか」

「なんだかリサの言い方が不穏な気がするけど・・・お願いします」

アルフィリースがぺこりと頭を下げる。それに多少機嫌を良くしたのか、リサがククス果汁をちびちびとやりながら説明を始めた。

「まず傭兵団として登録されるには、ギルドへの申請が必要です。申請にはいくつか条件がありますが、まずは人数です」
「人数？」
「ええ。傭兵団として申請するには意味があります。その団に声をかければ、即座に一定以上の人数が確保できるというのが雇う側の利点です。そうでなければ一人一人個別に雇えばいいのですから。なので、傭兵団として登録するには、その団のみに属する人間が最低１０人必要です」
「１０人・・・」

アルフィリースはその言葉を聞いて、頭を悩ます。

「それは獣人でもいいの？」
「問題ないでしょう。獣人の傭兵団もありますし。ただユーティは無理かもしれません」
「なんでよ～」

ユーティが仲間外れにされたようにふくれっ面をする。

「ユーティが団の数に入るかどうかは、ギルドの審査次第です。なのでこればかりはリサにも判断がつきません。何せ自然に属する妖精を、傭兵などという血なまぐさい仕事に関わらせることは普通ありませんので」
「それもそうね。とするとユーティは数に数えられないものと計算して・・・」

アルフィリースが全員を見渡す。数に入りそうなのは、エアリアル、ラーナ、リサ、ニア、後はこの場にいないが、カザスといったところか。ミランダと楓はアルネリア教会だから無理だし、グウェ

ンドルフやイルマタルを数に入れるのも無理だ。フェンナもきっと無理だろう。ニアとカザスも一端さておくと、自分も含めて４人しかいないことにアルフィリースは気がつく。

「全然足らないね」

「ええ。ですのでこの旅の間にでも、見所がありそうな人間はどんどん声をかけていった方がいいでしょうね」

「でもなんて言って誘えばいいのかな？　『凄く強い奴らに狙われているから、私のために力になって！』とか？」

アルフィリースの言葉も無理はない。仲間にすれば、あのライフレスを初めとした連中と対峙する可能性もある。そんな危険なことを承知で声をかけるなど、アルフィリースはなんだか騙す事になるような気持ちになったのだ。

「それは・・・まあその辺はアルフィの説得の仕方にもよりますが」

「心配しなくても大丈夫だよ、アルフィ。傭兵なんてはっきり言って、人生に行き場を失くしたあぶれ者の巣窟さ。アタシが事実そうだったんだから。」

ミランダが酒をあおりながらアルフィリースの肩を叩く。

「だから傭兵なんてのは、いつでも戦場の露と消える覚悟はできているのさ。アルフィはそんな心配をしなくてもいい。傭兵にとって重要なのは、いかに今が充実しているか。それが一番だ。中には純粋に金稼ぎとして、奉公に出ている奴らもいるがね。それに最終的にはアタシはアルネリア教会や国家も巻き込むことになるんじゃないかなと思うよ。アルフィ達だけが矢面に立つ必要はない」

「そうだね。それに彼らと対峙する可能性は、その時になってから皆に聞けばいいのではないかな？　少なくとも今のところは彼らと

戦うわけではないのだし、彼らと戦うことが決定的になれば、その時改めて各自の意志を聞けばいいだろう」
「なるほど、それも一理あるわね」

グウェンドルフの言葉に、アルフィリースが納得したようだ。さらにミランダが言葉を続ける。

「それで仲間にするなら、今のアタシ達に足りない人材を補充したいね」
「例えば？」

アルフィリースが尋ねる。

「まずは魔術士。アタシ達はそれぞれが魔術を使うけど、純粋な魔術師はいない。彼らの魔術に対する知識はやっぱり馬鹿に出来ないからね。アタシ達は攻撃とかに特化しているから、絡め手のような魔術を使う敵に出会うと非常に厄介だ。ラーナがいくらかは対応してくれるにしろ、ね。属性も多様性があった方がいいだろう」
「それを言うなら、前衛を専門にできる奴も欲しいな。私がグルーザルドに帰る間、アルフィ、ミランダ、エアリアルが前衛をするが。この3人はそれぞれが万能型だ。だからこそ、誘導されて全員が前衛に引き摺り出されると、後ろでリサ、ユーティ、イルマタル、ラーナを守る仲間がいなくなる」
「その可能性はあるな。確かに守るべき後衛の人間が増えたから、これは厄介な問題だ」
「うーん」

ニアとエアリアルの言葉にアルフィリースが頭を抱えてしまった。だがさらにリサが続ける。

「他に、純粋な傭兵出身の人間が必要です。この中で純粋に傭兵経験があるのはミランダとリサですが、ミランダが傭兵だったのははるか昔。リサもミーシアから出るような依頼はほとんど受けてはいませんでした。ですが、これからは傭兵団として受ける依頼は、戦争などもあるでしょう。そう考えると、戦場を経験している者が団には最低一人必要です。ニアが参加するまで戦争の依頼がないとは限りませんから」

「戦争かぁ・・・そんな依頼も受けないと駄目かなぁ？」

アルフィリースが余り気が乗らないといった目でリサを見る。リサもまたアルフィリースに同感だったが、

「無理・・・でしょうね。傭兵団にくる依頼など、戦争関連が半分以上でしょう。相手が人間か魔物かはわかりませんが。以前、戦場に行っていた傭兵団の人から聞いたことがあります」

「やっぱりそうか～」

「その件で、戦場経験者として一言いいか？」

ニアが手を上げる。

続く

竜騎士三人、その1～先立つ悩み～（後書き）

第二幕が始まりました。閲覧、感想、評価ありがとうございます。
作者のやる気につながっております。またこれからもよろしくお願いいたします。

次回投稿は、４／２７（水）２０：００です。

竜騎士三人、その2～女剣士との再会～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースが突き当たる前途多難な問題とは？　そしてそんな悩みを抱える彼女が出会うのは？

竜騎士三人、その2～女剣士との再会～

「このままだと、アルフィが作る傭兵団は女性が多くなると思うんだ。団長が女ということで、女の傭兵が安心して身を寄せてくるだろうからな。すると、アルフィには以前少し話したが、戦場では正直女は食い物にされる。負けた時の事は当然だが、勝ったら勝ったで、気分が高揚した味方に襲われることもあるし、敗走中はもっと悲惨だ。気分が荒んだ味方に輪姦された挙句、その場で戦場に置き去り。そして追いつかれた敵兵にまたしても、なんてことは珍しくもなんともない」

「うわぁ・・・」

「そんな顔をするな、当然だぞ？　軍人なら軍規があるからまだ女性兵士の身は保障されるが、女の傭兵なんてかばってくれるような規則は何もないんだからな。自分達の身は、自分達で守らないといけない」

「アルネリア教会も同じさ。戦場にはよく癒し手としてシスターや僧侶を派遣するように依頼が来るんだけど、戦闘手段を持たないシスターなんて恰好の餌食だからね。だから遠征には必ず神殿騎士団が同行するし、そういった事態が起きた場合、アルネリア教会は以後その国に一切の援助をしないっていう誓約を結ばせるのさ」

「なるほどね・・・私の場合はどうしたらいいかしら？」

アルフィリースの質問に、リサが答える。

「そういえば、世の中には女性だけの傭兵団があるとか。何と言いましたか・・・」

「それは私も聞いたことがあるな。天馬騎士の一団だろう？　何と言ったかな」

「『フリーデリンデの天馬騎士団』のことだね」

ミランダが言い放つ。

「よく知っているわね、ミランダ」

「まあ、アタシが傭兵を始めたころから活動している傭兵団だからね。昔傭兵をしている頃にも一緒に戦ったこともあるし、敵だったことも。アルネリア教会で仕事をしているときにも、何回かは見たよ。大陸中で一番有名な傭兵団の一つさ。歴史だけなら、どの傭兵団よりも長いだろうね」

「女の傭兵団なのに？　どんな傭兵団なの？」

アルフィリースがミランダに問いかける。

「この大陸も最北東にある、ロックハイヤー大雪原にのみ生息すると言われる天馬に騎乗する、女だけの傭兵団さ」

「天馬？」

「ああ。普通の馬よりちょっと大柄で、羽根が生えてるんだ。もちろん空を飛べるよ？　竜よりも小型な分、持久力に欠けるが、小回りは非常に利く。ただやっぱり乗り手が女性だから戦闘は得意じゃないけど、何よりフリーデリンデには目がいい連中が多くてね。斥候兵にはもってこいなのさ。また天馬自体が非常に勘の良い生物で、死地には絶対行こうとしないことから、戦場にはフリーデリンデの傭兵を数人連れて行くと、生還確率がぐっと上がると言われているんだ。さしずめ勝利の女神ってところかな」

「へぇ・・・会ってみたいわね」

興味をそそられたのか、アルフィリースが頷いている。

「でも、なんでまた女性だけで？」

「天馬は女性しか乗せないと言われている。またロックハイヤーの

気候は、この大陸でも有数の厳しさでね。男性は出稼ぎにいったり、土地を維持するのだけで手一杯だそうだ。それで女性達が何か自分達にも出来ないかと考え付いたのが、今の傭兵団ってわけさ。今ではロックハイヤー一帯の収入は、彼女達が半分以上を稼ぐんだとか」

「だがどうやって団だけでなく、自分達の土地まで維持しているんだ？　女性だけの傭兵団にそこまでの高額の報酬が払われるとは思わないんだが」

ニアが不思議そうな顔をする。その疑問に答えたのはリサだった。

「これは聞いた話なのですが・・・彼女達は娼婦もするのだとか」

「えっ？」

その言葉に全員がリサを見る。

「いえ。噂なので、なんとも言えませんが」

「いや、合ってるよ。変わってなければ、『アフロディーテ』と言われる部隊が、その役割を担うはずさ」

ミランダが平然と答えた。その言葉にニアは事情を飲みこんだようだが、アルフィリースは納得がいかない。彼女は娼婦という職業を、あまり褒められたものではないと思っているからだ。

「・・・なんでそんなことするの？　自分達から娼婦の真似事なんて」

「そうは言うけどね、アルフィ。それは必要な犠牲って奴さ。これはその天馬騎士団の連中から、アタシが傭兵をしている頃に聞いた話だが・・・傭兵団を作った当初はそれはひどかったそうだ。女の天馬騎士など、慰み者にされて当然だと言われていた時期があったらしい。彼女達は地上に降りればか弱い女性と同じだからね。それ

こそ年なんか関係なく凌辱されることもざらだったらしい。女が戦場に来るんだから、当然覚悟して来てるんだろうって。戦場専門の娼婦とかも実際いるから、同じように見られたらしい。それでも彼女達は傭兵として稼いで、ロックハイヤーで待つ子供や老人を食べさせなければいけなかった。

その時、隊内で一番美人と評判だった天馬騎士が言いだしたんだそうだ。『どうせ襲われるなら、自らの体を盾にすればいい』ってね。そして彼女は自ら兵士達に身を差し出した。自ら娼婦として身を差し出すことで、その他大勢の天馬騎士の犠牲を防いだのさ。はっきり娼婦をすると言えば、賃金だって吊りあげれるしね。その思想に同意した天馬騎士達が、部隊アフロディーテの発祥なんだそうだ」

「でもだからって、他にも仕事は・・・」

「そうは言うけど、この世の中に女が出稼ぎでできる職業なんてどれほどある？　多くの女は学もなく特技もない。現在でもこの世の中で一番金を持っている女は貴族の女か、ターラムの高級娼婦って言われるくらいだからね。当時はもっとひどかったろう。アルフィはずっと山に引きこもってたからあんまり実感がないかもしれないけどさ、世の中は女に優しくできてないんだ。だからアルネリアのシスターなんてのも、実は女の中では人気のある職業なのさ。私に言わせれば規則規則で息がつまりそうだけどね。

ちなみに、フリーデリンデの連中の前でそんなことを間違っても言っちゃだめだよ？　あの子達は部隊アフロディーテを誰よりも尊敬しているし、実際一番志願者が多いそうだから。俸給も他の部隊の何倍もあるそうだし、美人の象徴だしね。実際４０年ほど前に何人かアフロディーテのメンバーを見たけど、女のアタシでも目が眩むほどの美人揃いさ。もともとあの地域は美人が多いってのもあるみたい」

「そういうものなのかな・・・」

アルフィリースはそこまでミランダの話を聞いても、何かしっくりこないものがあった。アルフィリースにはロックハイヤーの生活など想像すべくもないし、ただどこか遠い国の出来事としてしか実感できないのだった。

だがミランダはさらに話を続ける。

「もちろんアルネリア教のように制裁処置を加える部隊も存在する。確か『アテナ』だったかな？　ここの部隊は、もしアフロディーテの隊の者が不当な扱いを受けたり、行為の最中なんかに死んだ場合、有無を言わさずに制裁処置にでる。まあ飴とムチってやつだね」

「じゃあさ、その・・・私が作る傭兵団にも、そのアフロディーテみたいな事をする人達が必要？」

「そうは言ってないけどさ・・・これは難しい問題だね」

ミランダも一応説明したものの、どうすべきかまでは考えてなかったようだ。一同が押し黙る。そしてニアがゆっくりと口を開いた。

「アルフィ、まあ女だけが戦場に出るっているのは非常に難しいということだよ。だからアルフィは、普通の傭兵団の団長より色んな事を知ってなくちゃいけないな。戦場についての依頼を受ける前に、どの程度危険そうか下調べも必要だろうし、とにかく情報と戦略が重要だな」

「うーん、その点も考えないとなぁ」

「そうそう、まあその前にも色々と考えることが・・・ん？」

ミランダが酒場の入り口を見る。奥まったこの部分からは余り見えないが、どうやらかしましい男が入ってきたようだ。

「待ってくださいよ～、あーねーさーんー！」

「・・・待たん」

「そりゃ俺が自分の報酬を全部仕送ってしまったのは謝りますけどね。姐さんだって、自分の雇い主と喧嘩して報酬をパアにしたでしょう？」

「奴がワタシに寝床を共にしろなどと要求するから、身の程を知れと小突いただけだ」

「小突いて全治3カ月にはなりませんって。俺達がブラックホークじゃなかったら、その場で切り捨てられてますよ」

「ふん。あの場にいた連中程度、あべこべに皆殺しだ」

「まあそりゃそうですけどね。現実問題として今日どうするんすか。宿代はあるにしても、晩御飯が・・・」

その瞬間、男の腹がぐぅぅ～、と、さもしい音を立てた。そしてその場に人目も憚(はばか)らず、うずくまる男。

「あー、もう無理っす～。歩きたくないっす～」

「・・・ならば永遠に歩けなくなるといい」

女がすらりと剣を抜き放つ。

「げっ、またそうやってすぐ剣を抜く！　暴力反対！」

「問答無用という言葉を知っているか・・・？」

「ちょ、ちょ、やめて」

「問答無用！」

女の剣を軽快な動きでかわす男。酒場の中で迷惑な事だ、周囲の客が逃げ始めている。その様子を酒場の端の席から遠目に見ているアルフィリース達。

「・・・どっかで見た顔だね」

「関わらない方が身のためでは？　って、アルフィ？」

リサがそう言うが早いか、既にアルフィリースはその2人の方にすたすたと歩き始めていた。そして、女の剣を男が白刃取りしてせめぎ合っている場面に、アルフィリースが声をかける。

「ルイ？　ルイじゃない！？」
「邪魔するな、今忙し・・・む？」

ルイと呼ばれた女が、きょとんとした顔でアルフィリースを見る。だが男に振り下ろそうとする剣から力が抜けた様子は全くない。

「アルフィリースか！？」
「ルイ！　久しぶりね！」

そう、その2人はルイとレクサス。ブラックホークの2番隊の隊長と副隊長にして、フェンナを最初に送り届けようとした時に、ダルカスの森で助けてもらった傭兵だった。

続く

竜騎士三人、その2～女剣士との再会～（後書き）

次回投稿は、４／２８（木）２０：００です。

竜騎士三人、その3～傭兵としての経験～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースが再会したのは、ダルカスの森で出会ったあの女傭兵だった。

竜騎士三人、その3～傭兵としての経験～

「懐かしいな」
「私こそ！　元気に・・・してるみたいね」

この様子を見る限りそうだろう。むしろ、レクサスの方はすぐに死ぬかもしれないが。

「ちょっと待ってろ。今こいつにとどめを刺すから、その後でゆっくり飲もう」
「ちょ、ちょ、ちょっとー！？」

レクサスがイヤイヤをしているが、どうやらルイの方が体勢的に有利なのか、徐々に剣がレクサスに近づいて行く。

「いやー！　人生のピンチ！」
「遺言くらいは聞いてやるぞ？」
「何馬鹿な事をやっているの、貴方達」

ふと、酒場の入り口に女性が立っていた。茶色の皮の鎧に身を包み、長い茶色の髪をツインテールにした騎士風の女性だ。背はエアリアルくらいか。目立つほどの美人ではないが、きりりと引き締まった表情がとても精悍だ。落ち着いた雰囲気からすると、歳はアルフィリースよりも上だろう。

「アマリナ・・・さん、来たのですか」
「ええ、偵察が済んだからね。それよりもルイ、その『さん』付けを止めなさいといっているでしょう？」
「いえ、これは昔からの癖ですから」

「相変わらずお堅いわね。それに、そろそろレクサスを離してあげたら？　店に迷惑がかかってるわよ」
「む・・・」
ルイが周囲を見渡すと、確かに客は店から逃げ出したか、店の隅で震えていた。店長も頼むから店を壊さないでくれと目で訴えている。
「貧乏なんだから、このままだと宿も無くすわよ？」
「ち。命拾いしたな、レクサス」
「はふぅ～」
剣を収めたルイに、深呼吸するレクサス。その様子をアルフィリースは目をぱちくりとさせながら見守っていた。ふと、アマリナと呼ばれた女性がアルフィリースの方を見る。
「ルイ、知り合いなの？」
「ああ、この子はアルフィリースといって・・・」
ルイがダルカスの森での経過を説明した。するとアマリナもふんふんと頷きながら、珍しそうにアルフィリースを見た。
「なるほど。うちの部隊とやりあって生きているとは、大したものね」
「あ、どうも・・・」
「自己紹介がまだでしたね。私はアマリナ。ヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホークの０番隊所属で、竜騎士です。よろしく頼みます」
「あ、こちらこそ。私はアルフィリースです。皆はアルフィって呼びます」

アルフィリースとアマリナが握手をする。

「0番隊っていうのもあるんだね」
「ええ、ヴァルサスと行動を共にする部隊なの。と、言っても隊長は風来坊だから、勝手にどこかに行ってしまうのよ。私の仕事はいなくなった彼を探すことかな」
「へぇ・・・」
「何？　何かおかしい？」
「いえ。もっとヴァルサスって人は、隙のない怖い人のイメージだったから」

ルイとアマリナが顔を見合わせる。

「むしろ隙だらけだな」
「ええ、変人ね」
「そ、そうなんだ・・・」

大陸最強ともいわれる剣士の像が、アルフィリースの中で音を立てて崩れていく。その後アルフィリース達の席で3人とも一緒に酒を飲むことになった。以前アルフィリース達は手を貸してもらった時に、酒をおごる約束をしていたことを思い出す。その申し出をすると快くルイが受けたので、一緒に飲んでいるというわけだ。レクサスだけは快く受け過ぎたので、そのままミランダに飛びついて抱きつこうとし、ルイとアマリナとミランダに丁寧にリンチされていた。とどめはもちろんリサである。

というわけで、結局テーブルに男はグウェンドルフしかいない。彼を男と言うべきかどうかは、定かではないかもしれないが。

そしてほぼ女だけの宴席は、盛り上がりも甚だしい。

「ほう、それではエアリアルが妹で、このグウェンが旦那で、ラーナが愛人という理解で良いのか？」
「違う違う！　ルイ、それ違うからっ」
「私はそれでもいいですけど・・・」
「ラーナも話をややこしくしないでっ！」
「まあ未婚で子持ちなのは間違いないのでしょうね。貴方も若いのに大変ね？」
「アマリナまで！　誰かなんとかしてよ～」

まあアルフィリースへの風当たりが強くなっただけ、とも言うかもしれない。
ルイ達が所属するヴァンダル＝ヴァルサス＝ブラックホークは、今は大きな依頼を受けていないので各自が勝手に動いて良いそうだ。実際には多くの面々が隊長と行動を共にしているそうだが。０番隊も最近出ずっぱりだったので、一人にならなければバラバラに動いていいということで、アマリナも勝手をさせてもらってるのだとか。そこで他の隊だとルイと仲が良いので、アマリナから申し出て同行しているらしい。
そんな折、ふとミランダが思いついたのか、ルイとアマリナに質問する。

「なあなあ、二人とも。大陸最強の傭兵団に所属している二人に聞きたいんだがな」
「うん？」
「最強かどうかは疑問だが、私達でよければ答えましょう」

アマリナが愛想よく返事する。

「傭兵団に必要な物って何だろうな？」
「それは漠然とした質問ね」

「どういうことだ？」

ミランダは一瞬躊躇したが、アルフィリースが目で話してもいいとミランダに合図したので、いきさつをかいつまんで話した。その話にさしもの2人も驚いたが、2人もまた完全に無関係とは言えない。ルイは既にヒュージトレントを一緒に倒しているし、ミランダは知らないことだが、ブラックホークは最近まで魔王を討伐して回っていたのだ。

その話を聞いてアマリナが考え込む。

「その話は興味深いね・・・一度ヴァルサスに話してみようか」

「確かにな。奴なら何かしら考え付くかもしれん。所詮私達には無理な事だがな。それで、傭兵団をアルフィリースが作るのか？」

ルイが真剣な目でアルフィリースを見る。アルフィリースはしっかりと頷いた。その表情に固い決意を感じ、ルイが思わず顔を綻ばせる。

「・・・短期間でいい顔をするようになったな、アルフィリースは。良い仲間と戦いに恵まれたようだ」

「良い戦いかどうかはわからないけど、仲間には恵まれたと思うわ」

「うむ、そう思えるのはいいことだ。だが傭兵の事なら、私達よりそこのレクサスに聞くといい」

ルイが危ないからと、柱にくくりつけて気絶しているレクサスに目を向ける。

「私達は割と最近まで軍属だった。傭兵の経歴なら、このレクサスの方が長い」

「そうなの？」

「ああ、こいつはこう見えても超一流の傭兵だ。普段はただの変態だがな。そうでもなければ、こんな変態を連れて歩かんさ。事故のせいにして殺してる」

ルイが物騒な事を言ったが、この2人の間では日常茶飯事なのだろう。そして瓶の酒を飲み干すと、レクサスに向かって突然投げる。危ないとアルフィリース達が思う暇もなかったが、後ろでにくくられて気絶していたはずのレクサスが、その瓶を手で掴んだ。

「姐さん、危ないっすよ」
「いつまでも気絶したふりをしているからだ」
「うっそお・・・」

どうやって縄を切ったのか。アルフィリースの疑問が顔に出ていたのか、レクサスは袖に隠した仕込みナイフを見せてくれた。

「だめっすよ、拘束する時はちゃんと武器の確認をしないとね」
「あ、うん。今度からそうする」
「大丈夫だアルフィリース。拘束するまでもなく、地獄に送ってやればいい」
「姐さんひどっ！」

レクサスが抗議の声を上げるが、ルイは無視した。

「それよりもだ、先ほどの話も聞いていただろう？　アルフィリースに何かアドバイスはないか？」
「タダでですか～？」
「酒と晩飯をおごってもらっているだろう？」
「うーむ、しょうがない。じゃあ俺から一つアドバイス」

レクサスが少し真剣な表情になる。

「もう俺は２０年近く傭兵をやってるが、傭兵団を作る時に一番重要なのは、『この団長は信頼できるか』ってことだと思う」

「信頼」

アルフィリースが思わぬことを聞いたという顔をする。

「そうさ。もちろん他にも大切な事はある。どんな依頼を受ける傭兵団にするのか、どこに拠点を構えるのか、どのくらいの規模にするのか、とかね。でもそれより団長が信頼できるかどうかってのが、一番大事だ。結局のところ、傭兵なんて主義主張の無いその日暮らしの連中の集まりだからなあ。馬鹿に従って死ぬのはごめんってわけよ。この人物についていけば生きて帰れるか、稼げるか、自分が危ない時に助けてくれるか。そういうのが団長には大切だろう」

「なるほど。じゃあレクサスにとって、ヴァルサスってどうなの？」

アルフィリースが素直な疑問を投げかけたのに対し、レクサスもまた真剣に答えた。これはルイには意外な事だった。

「俺の場合？　うーん・・・一騎打ちで負けたから、いつか仕返ししてみたいってのもあるし、さっきの条件もクリアしてるし・・・それ以上に面白いかな」

「面白い？」

「ああ、ヴァルサスは色んな所に行くからね。俺が見ても無茶苦茶な事をすることもあれば、戦場にいてもふいと姿を消したり、突然仕事を放り出す時もある。でもそれが悉く（ことごとく）当たるんだよなぁ。いつぞやなんか、追撃戦で散々成果を上げた夜に、突然団の全員に荷物をまとめて軍を離れるように言ってさ。そしたらその後、ほどなくして夜襲で俺達が参加していた軍が全滅してやんの。おそらく彼に

は特有の戦場の気配ってのがわかるんだろうね。だからいつも傍にいて飽きない、楽しい、生き延びれる。多くの戦場を巡って色んな指揮官の元で戦ったけど、そう思えるのはヴァルサスだけかな」

「へえ～」

レクサスが楽しそうに語るのを見て、彼が団長であるヴァルサスをなんだかんだで尊敬しているのだということがよく分かった。アルフィリースもレクサスが只者でないことはわかっているので、いつかこういう人物に尊敬されてみたいものだと思う。

その後アルフィリースが用を足しに席を立った時に、ふとルイが口を開いた。話が盛り上がっていて、誰も2人の会話を聞いていない。リサもまた眠いのか、うつらうつらとしていた。

そんな中、ルイとレクサスが話している。

続く

竜騎士三人、その3～傭兵としての経験～（後書き）

次回投稿は、４／２９（金）２０：００です。

竜騎士三人、その４～金の竜騎士～（前書き）

～あらすじ～

ブラックホークの面々から、傭兵の先輩としての話を聞くアルフィリース。彼女が学ぶ事とは？

2015

竜騎士三人、その4～金の竜騎士～

「レクサス、お前いやに親切だな？」
「あれ、ばれました？」
「一応、3年近い付き合いだからな。何か企んでいるのか？」
「いえ、何も。今回だけは何も企んでないですね。純粋な好意ってやつで」

レクサスがにかっと笑う。

「あのお嬢ちゃん、短期間でいい顔するようになってたんで、嬉しくてつい、ね。あのくらいの傭兵は沢山いるだろうが、成長速度がすごい。もしかしたら、アルフィリースはすごい傭兵になるのかなと思ったりして」
「ほう・・・お前もそう思うか」
「て、ことは姐さんも」

だがルイは答えず、ニヤリとしただけだった。

「となると、敵にしろ味方にしろ、大物の方がいいですよ。味方なら頼もしいし、敵なら戦い甲斐がある」
「そうだな。不本意だが、その点だけはお前と同意見だよ。私もいつか彼女と全力で剣を交えてみたい」
「それは・・・どっちかが死ぬでしょうねぇ。美人にゃ生きてて欲しいんだけどな」
「また軽口を」
「本音ですよ。美人が死ぬのは世界の損失」

レクサスが自分のグラスに酒を注いでいる。そしてアルフィリー

スがちょうど帰ってきたおり、眠っていたと思われたリサががたんと席を立った。同時にアマリナも耳を澄ましている。

「これは・・・竜の鳴き声？」

「それだけではないな。風切り音も微かに聞こえる」

「マジですか？　俺にはまだ・・・いや、何かしら殺気めいたものは感じるな」

　レクサスも気配には敏感である。特に地上のことならリサ並に敏感なのだが、空中となるとアマリナの方にやや分がある。

「竜騎士が乗る飛竜だろうね、しかも数が多い。３０騎前後かな？」

　突然グウェンドルフが発言したので、全員驚いた。アルフィリース達には想像できたが、ルイ達にはなぜ目の前の優男の様なグウェンドルフがそのような事がわかるのか理解できず、訝しんでいる。

「なるほど、グウェンの言う通りですね」

「こんなところに竜騎士？」

「ローマンズランドだろう」

　アマリナがさも当然と言わんばかりに答える。

「だってここはブリュガル領でしょ？」

「ローマンズランドには関係ないよ、横暴な国だからな。属国相手に敬意などいちいち払わんさ。なにせローマンズランドの下級外交官が、属国の政治に口出しして私服を肥やすくらいだからな」

「そうなの・・・」

「だが問題はそこじゃない。なぜこんなところに、しかも夜中に、ということだ」

ミランダが現実的に指摘をする。その言葉にまたしてもアマリナが口を開いた。

「そういえば私は偵察のために竜を飛ばしたんだが、この先のブリュガル領の出口に検問があったな」

「検問？」

「先ほどお前達が説明したろう？　フェブランで一悶着やらかしたのなら、確かに検問が張られてもおかしくない」

「に、しても早過ぎない？」

ミランダの計算ではもう少し後の予定だったのだ。だからこの町に2日も滞在したというのに。上層部に報告が行ってから検問が張られるまでが早過ぎる。

「定期的に視察に来ている連中にでも報告が行ったんだろう。運が悪いな」

「ど、どうしよう・・・やっぱり人相でばれちゃうよね？」

「というより、ほぼ女だけでこの人数で旅してれば嫌でも目立つもんねぇ」

ミランダの言葉は尤もな事である。実際街道を移動していても通行人にかなりアルフィリース達は注目されていた。女ばかりで旅をする一行も珍しいし、何より美人揃い。馬も大きいし、グウェンドルフも見た目はかなり美しい男だ。これで注目を集めない方が珍しいだろう。

そして問題は追跡者がローマンズランドということである。世界最大の軍事大国であるローマンズランドと揉めるなど、ミランダはまっぴらごめんだった。さりとて、ローマンズランドは極めてアルネリア教の影響が薄い。アルネリア教の援助を必要とせず、国が運

営できるほどの強国なのだ。ミランダが自分の身分を明かした所で、いらぬ争いの火種が増えるだけだろう。

今から逃げてもどうしようもないし、正直に話したところで苦しい言い訳にしか聞こえないだろう。そして軍人であるならば、いかに言い訳をした所で通じるものでもかいかもしれない。そうするうちにも飛竜の泣き声が聞こえ、次々と飛竜が町に舞い降りてくるのがわかった。もはや宿の外では甲冑の擦れ合う音が聞こえている。その音を聞いて、アマリナが席を立つ。

「アマリナさん、どこへ？」

「ルイは事情を知っているでしょう？　私は二階へ行くわ。ルイとて引き揚げた方がいいのでは？」

「ワタシは気にしない。まだここにいて、顛末を見届けよう」

「そう。ではまた明日朝に」

「ああ」

それだけ言うとアマリナは足早に二階に上がってしまった。ルイとレクサスは何事もないかのように、出されたご飯を食べながら、酒をちびちびとやっている。

そうこうするうちにも、リサが竜騎士達はこの町に降りた事を告げる。そして一直線にこちらに向かっているとも。宿はこの町ではここが一番大きいのだ。まずはここから調べるということだろう。

「どうする？」

「アタシ達は悪いことは何もしていない。でも、もし手間取るようなら、アルネリア教会の名は伏せたまま強行突破しよう」

「いいの？　後でまずいんじゃ・・・」

「捕まった方が色々厄介さ。まあ、指揮官が話のわかる奴であることを祈るのみだね」

そうこう言う間にも、既に足音は宿の外に迫っていた。そして宿の戸を開け、彼らが入って来る。

「主人、夜分に失礼する！」

凛とした声が宿の酒場に響く。だが入ってきた騎士はアルフィリース達の予想を裏切る、美しい女性だった。ミランダよりもさらに濃い、見事なブルネット。自然に髪が波打つに任せた肩口より少し長いくらいのその髪が、まるで後光のように光を受けて輝く。夜のロウソクの明りですらそうなのだから、日の光の下で見たらさぞかしまばゆいことだろう。

そして騎士らしく、引き締まった口元、きつめの金の眼差し。美女ではあるが、威厳もまた十分に備えていた。鎧はつけていないが、黒を基調とした上着に、袖や襟の縁取りは金。ブラックホークの服装にも多少似ている。マントは深紅で、背中には大きく三頭の竜の頭を象った紋章が入っている。

「ローマンズランド竜騎士団・・・」

ミランダが思わず呟く。巡礼をする彼女は各国の紋章に詳しい。そしてその女竜騎士は、手に持った槍を後に続く部下に無造作に放り投げ、宿の主人を呼び付ける。

「我々はローマンズランド竜騎士団、第3師団所属の者だ！　ここの宿の主人は誰ぞ！？」

「は、はいっ！　私でございます！！」

宿の主人の男が、転がりまわるように出てくる。その蒼白になりつつもひきつった笑みを顔に浮かべる男に対し、女竜騎士は表情を変えるでもなく、事務的に質問する。

「ここに、子どもと吟遊詩人を連れた女の一行が泊っていないか？」
「は、はぁ。その人達が何をしたので？」
「貴様が知る必要はない、黙って私の問いに答えろ！」
その女竜騎士の一喝に、主人がより一層身を縮こまらせる。
「ここにいるのかいないのか！？」
「そ、それでしたら・・・」
主人がおそるおそるアルフィリース達の方を見た。同時に女竜騎士も視線をアルフィリース達の方に向ける。
「なるほど、報告にあった者達と人相が似ているな」
「ちっ、めんどくさい事になりそうだね」
ミランダが舌打ちをしたが、その予想は大的中する。
「よし、捕えろ」
「「はっ」」
女竜騎士の命令で、後ろに控えていた竜騎士達が一斉に動き出す。
「ちょっと待ってよ！　なんで私達が捕えられなければいけないの？」
「言い訳があれば後でするんだな。とりあえず手配の者に似ているというだけで理由は十分だ」
「そんな無茶な！」
「子どもがいないな・・・二階か？」

女竜騎士が冷ややかな目を二階に向ける。そして顎でさらに竜騎士達に命令すると、竜騎士達が何人か二階に上がろうとする。

「ちょっと、子どもに乱暴しないで！　まだ幼いのよ？」

「心配するな、傷つけはせん。抵抗しなければな」

「そんなっ」

そしてアルフィリースの後ろに回った竜騎士が、彼女の手を縛りつけようとした時、

「待ちなさいと言ってるでしょう！」

アルフィリースが自分の手を掴もうとした竜騎士を投げ飛ばしたのだ。アルフィリースが簡単に竜騎士を投げ飛ばしたこともそうだが、まさか抵抗されると思っていなかったのか、竜騎士達の表情が驚きから険しいものへと変わっていく。だが隊長らしき女竜騎士の命令は絶対なのか、剣に手をかけつつも抜刀はしない。この辺はさすがにただの荒くれ者とは違う。

そして女竜騎士が一層厳しい表情になり、アルフィリースを睨みつける。

「貴様、抵抗するのか？」

「そっちこそちょっと待ちなさいと言っているでしょう？　そこまで横暴な扱いを受ける理由はこちらにはないわ！」

「ち、止むを得ん。多少痛めつけても構わん！」

その言葉と同時に、竜騎士達が剣を抜く。応じるようにアルフィリース達も剣を抜き、酒場は一触即発の状態になる。客は逃げ出し、主人はカウンターからこっそり様子を見ている。ルイとレクサスだけは、素知らぬ顔で奥でちびちびと飲んでいたが。

「抜剣しといて多少痛めつけるだって？」
「リサには殺る気満々にしか感じられませんが？」
「獣人よりも荒っぽいな」
「なるほど、外の世界の連中も蛮族と変わらんな」

めいめいがやむを得ないとばかりに武器を手にし、構える。先頭ではアルフィリースが申し訳なさそうな顔をする。

「皆、ごめんね？」
「いいさ、アルフィがうちらのリーダーなんだから、思ったように行動すれば」
「軽率なのは御免こうむりますが、今回はまあ仕方ないでしょう」
「と、なるとイルを連れてこないとな。こいつらをぶちのめしたら、即座に脱走しよう」
「うむ、外の連中は我がやろう」
「できるだけ殺さないようにね？」

アルフィリースの指示に全員が頷くが、女竜騎士にも聞こえたのか、侮辱と取ったようだ。

「舐めるな！　やってし・・・」
「隊長！」

女竜騎士が開戦の合図をしようとした瞬間、外からさらに入って来る竜騎士がいた。女竜騎士は合図を邪魔されて、苛立ちを隠そうともせずに荒々しく答える。

「何だ！」
「大変です、隊長の竜が！」

「ドーチェがどうかしたのか！？」
「急に苦しみ出して倒れて・・・」

その事を聞いて、女竜騎士の顔が瞬間的に蒼白になる。そして思わず出て行きかけた足を一度止め、アルフィリース達を見た。

「貴様ら、捕えるのは一端保留にしてやろう。だが、この宿から出るんじゃないぞ！？」

それだけ言い残すとアルフィリースの返事を聞く事もなく、女竜騎士は足早に出て行ったのだった。

続く

竜騎士三人、その４～金の竜騎士～（後書き）

次回投稿は、４／３０（土）１９：００です。

竜騎士三人、その5～竜騎士の苦悩～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースの宿に乱入してきた女性騎士。彼女は一体・・・？

2026

竜騎士三人、その5～竜騎士の苦悩～

「なんだぁ、あの態度？」

ミランダが呆れながら悪態をつく。大してアルフィリースは既に剣を収めており、冷静に戻っていた。周囲の竜騎士たちもアルフィリースが剣を収めたのを見て、とりあえず戦いはないと踏んだのかそれぞれ剣を収める。

だがアルフィリースも竜騎士達も、互いに警戒態勢だけは崩していない。その中でアルフィリースは後ろをチラリと見てリサを呼ぶ。

「リサ、外の様子は？」

「はい、５０ｍ程先に確かに竜が一頭倒れてますね。その傍に先ほどの女竜騎士がいるようです。心音が乱れているので、かなり動揺しているのかと」

「竜の様子は？」

「あまり良くないですね。呼吸が不規則です」

「グウェン？」

「そうだね・・・これはまずいかも。放っておくと死ぬかもしれないね」

グウェンドルフの言葉に、アルフィリースは一度目を閉じ、やがて開ける。

「・・・よし、決めた」

「何をです？」

リサの質問を聞いていないかのように、アルフィリースはつかつかと竜騎士の一人に歩み寄る。竜騎士が慌てて剣を抜いてアルフィ

リースに突きつけるが、アルフィリースは微塵も動揺しなかった。

「何だ、貴様！」
「私をその竜の元に案内しなさい」
「何を言って・・・」
「早くしろっ！　死なせたいのか！？」

そのアルフィリースの剣幕に、竜騎士が少したじろぐ。

「アルフィ、何を？」
「ちょっと様子を見てくる。ほっとくのもどうかと思うし」
「やめなよ、こんな失礼な連中に対して！」
「まあそれはそれよ。で、どうなの？　連れていくの、行かないの？」

竜騎士達は顔を見合わせたが、一番年配層の男が頷いた。

「いいだろう。だが剣は預かる。それに来るのは貴様だけだ」
「いいでしょう」

アルフィリースは剣を剣帯ごとはずし竜騎士の一人に預けると、年配の竜騎士に伴われそのまま宿を出て行った。

＊＊＊

「ドーチェ、どうしたんだドーチェ！」
「グ、グルル・・・」

外では女竜騎士が自分の竜の元に駆け寄り、その様子を見ていた。
彼女がいたのはこの町のメインの通りだったのだが、竜騎士達が降

りて来るやいなや、全員が逃げるように家屋に入ってしまった。そのため、今は通りには彼らだけしかいない。

金髪の女竜騎士にとってドーチェという竜は単なる相棒ではなく、彼女が幼い頃に引き合わされた幼馴染でもある。ローマンズランドの竜騎士が騎乗に使う竜はあまり大きくなく、成長も早い事が特徴だ。卵から孵ると、およそ5年で成竜程度の大きさになる。それゆえ、彼女はドーチェと、もう一頭の副竜とでもいうべきドーチェの弟アルロン以外には乗ったことが無い。2頭の竜は女竜騎士にとってただの飛竜ではなく、親友ともいうべき存在だった。

そのドーチェが息をするのも苦しそうに女竜騎士を見上げていた。体調一つ壊した事のない頑丈な竜なのに、女竜騎士にはまるで原因がわからなかった。

「ドーチェ！　これはいったいどうしたことだ・・・おい、貴様！」

「はっ！」

呼ばれた竜騎士が敬礼をする。

「ドーチェがこのような状況になったのはいつからだ!?」

「はい！　我々がこの町に到着してからまもなくでございます！天下の往来に竜を止めては、深夜とはいえ通行の邪魔になると思い、移動をしようとしたところドーチェのみが動こうとせず、ほどなくして倒れました！」

「くそっ、ここに竜用の医者は連れてきておらぬし・・・やはりこの案件は、本国から来る別の見回り部隊に任せるべきだったか」

女竜騎士が血が出るほど唇を噛むが、もはや後の祭りである。途方に暮れる竜騎士の面々だったが、いい考えも浮かばずうろたえるばかりの所にアルフィリースがやってきた。

「調子が悪いのは、その竜ね？」
「何だ貴様！？　おい、誰が宿から出して良いと言った！」
「それが隊長、この女がどうにかできるかもしれないというので」
アルフィリースを連れてきた竜騎士は、顔色を変えずに平然と対応した。女竜騎士の癇癪には慣れているのだろう。女竜騎士の顔が希望を得たとばかりに少し和らぐが、一瞬で厳しく引き締め直される。
「なるほど、だがその言葉が嘘だった時にはただではおかぬぞ？」
「そんなの診て見ないとわからないわよ。どいて」
アルフィリースが女竜騎士を邪魔だといわんばかりに押しのける。その遠慮のない態度に女竜騎士はびっくりしたが、アルフィリースは一向に気にかける様子もない。そしてドーチェに向けてアルフィリースは話しかけ始めた。
「あなた、どうしたの？」
「グ、グルル・・・」
「お腹？　お腹が痛いの？」
「グル」
「いつから？」
「グ、グルル。グルルルル・・・」
「・・・なるほど、そうなの。よく我慢していたわね」
「おい、まさか貴様は飛竜と会話ができるのか？」
女竜騎士を始め、周囲の竜騎士も驚いた顔をする。それはそうだろう、飛竜と会話ができるのは、ローマンズランド建国の王、ドラグーン一世だけと史実にはある。彼の直系の子孫でさえそのようなことはできず、伝説にすぎないのだろうとローマンズランドの竜騎

士達は皆思っていた。もちろん彼らは仕草などで自分の乗る飛竜の意志などを感じることはできるが、完璧ではない。ましてや会話など、とても信じがたいことだった。

そうするうちにもアルフィリースはドーチェのお腹に耳を当て、中の音を聞いている。

「これは良くないわね・・・さっきの竜騎士さん、宿の戻ってユーティとラーナという子をを連れてきて」

「は？　しかし・・・」

「さっさとする！」

アルフィリースの強い声に、竜騎士が隊長の女竜騎士に目で許可を求めるが、彼女は小さく頷いて竜騎士を促した。そして女竜騎士はアルフィリースに尋ねる。

「おい、ドーチェはどうなんだ？」

「よくないわ。このままだと日が昇るまで持たない」

「なんだと？　ふざけるな！」

女竜騎士が凄まじい剣幕でアルフィリースの胸倉をつかみ上げる。体格もほぼ同じくらいの2人であり、アルフィリースも思わず彼女の腕力に苦しい顔をする。

「・・・っ、別にふざけてないわよ。自分でこの子がそう言っているのよ」

「なんだと！？　私にはそんな兆候は微塵も感じられなかった。今日も何の滞りもなく空を飛んで・・・」

「そうね、この子の凄いところはそこだわ。凄まじく我慢強いのよ。私にとって貴女は嫌な人だけど、このドーチェって子にとっては、貴方は素晴らしい乗り手の様ね。貴方に心配をかけまいと、必死だ

ったのよ。もっとも、親友のためだとこの子は言っているけど？」
「何？」
「幼馴染なんでしょ？」

アルフィリースがズバリ言ったので、女竜騎士は思わずアルフィリースから手を離してまじまじと彼女を見る。アルフィリースが女竜騎士の事情を知るはずもないのだから。

「本当に飛竜と会話ができるのか・・・？」
「だから嘘じゃないって言ったのに。なんならもっと証拠を見せましょうか？」

アルフィリースが道端に整然と並んでいる飛竜の一頭に近づいて行く。そして何事か会話をすると、竜騎士の一人を指さした。

「この子の乗り手は貴方ね？」
「え、どうして・・・」
「貴方、痔でしょう？　最近乗る時に苦しそうだってこの子が心配しているわ。毎日熱心に訓練するのはいいけど、時には休んでしっかり治せって言ってるわよ」
「なっ」
「それからそこのあなた！」

アルフィリースがさらに別の竜を撫でながら、また別の竜騎士を指さす。

「この子の乗り手は貴方ね？　この子が文句を言っているわ。竜小屋に女を連れ込むのはやめろってね。お前の相棒はだらしないと、他の竜の手前肩身が狭くてしょうがないとこの子が言っているわ。いつも他の竜に文句を言われる身にもなってみろって」

「は！？」
「お前、そんなことしてたのか・・・」
思わず隣にいた竜騎士が呆れた。指摘された竜騎士は弁解しようと非常にうろたえているが、女竜騎士がぴしゃりと質問した。
「２人とも、事実か？」
「は、いえ、その・・・」
「はっきり答えよ！」
「「は、相違ございません！」」
２人とも事実だと認める。その言葉を聞いて女竜騎士は考え込んだが、アルフィリースは呆れかえっているようだ。
「足りないなら全員分乗り手を指摘して、この子達の愚痴を聞かせましょうか？」
「いや、それには及ばん。貴様の言葉を信頼しよう」
女竜騎士がアルフィリースの事を認めたちょうどその時、先ほどの竜騎士がラーナとユーティを連れて戻ってくる。妖精であるユーティを見て一同が驚くが、アルフィリースはそんなことにかかずらっている暇はなかった。
「アルフィ、どうしたの？」
「ユーティ、このドーチェって子を診てあげて欲しいの。お腹の調子が悪いみたい」
「・・・なるほど、これは良くないわね。ちょっと待って」
ユーティがすかさずドーチェのお腹の上に飛び乗り、魔術で体液の循環を調べ始める。それを心配そうに見つめるアルフィリースと

女竜騎士。やがてぼうっと光っていたユーティの体の光が消えた。

「どう？」

「お腹の中に変な虫がいるわ。大きな生き物は大抵体の中に掃除用の虫を飼っていたりするものだけど、これはそういう類いの虫じゃないわね。寄生虫って奴かしら」

「寄生虫？」

「ええ、宿主の体から養分なんかを吸い取って生きる生物の事よ。宿主には大迷惑」

「どうすればいい？」

女竜騎士が心配そうにユーティに尋ねる。

「本来なら虫下しなんかを飲ませるけど、寄生虫が大きすぎるわ。それに今からじゃ間に合わない。もって朝までよ」

「ならどうする？」

「腹を開いて取り出すのみよ」

ユーティが凄い事を言ったが、その顔は真剣そのものだった。女竜騎士が思わず唾を飲み込む音が聞こえる。

「腹を・・・裂くと？」

「そういうこと。今ならまだ間に合うかもしれないわ」

「どうするかは貴方の判断に任せるけど、やるなら早い方がいい。私達がやるわ」

「ううう」

女竜騎士は下を向いて唸り声を上げている。それはそうだろう、今まで自分が犯罪者としてとらえようとした相手に、自分の親友を託すのだから。だが他に選択肢はなかった。

「わかった、やってくれ」
「引き受けましょう。ただしこちらも条件があるわ」
「なんだ？」
「上手くいったら私達を見逃してもらうわよ？」
「何だと！？」

女竜騎士がかっと目を見開く。

「無理だと言ったら？」
「朝までにこの子は死ぬわ。そして私達は貴方達を叩きのめしてこの町を去る。それはお互いにとって、良くない結末だと思わない？」
「私達を叩きのめす？　そんなことができると・・・」
「できるわ」

アルフィリースが女竜騎士の言葉を遮るように言い放ち、その体からはざわりと殺気が立ち上る。それはアルフィリースが本気だということを示していた。

今までの雰囲気とは打って変わったアルフィリースの威圧感に、女竜騎士が一歩後ずさる。彼女は今までの人生でこれほどの殺気を放つ戦士に出会ったことは数えるほどしかない。たとえば、自分に軍人としてのいろはを叩きこんだ上官などか。

「その殺気・・・何者だ、貴様」
「そんなことはどうでもいいわ。どうするの？」

女竜騎士の瞳には明らかに困惑の色があった。ドーチェの命は私事。軍人としては自分の竜の命を犠牲にしてでも、任務を優先すべきだろう。たとえ、結果としてアルフィリース達を捕まえることができなかったとしても。

だがこの女竜騎士に、親友を見過ごす選択はありえなかった。普段はどうあれ、彼女は芯の部分では情が深い人間なのである。そんな折、先ほどアルフィリースを連れてきた竜騎士が彼女の肩に手を置く。

「隊長、大丈夫です。ドーチェの命を優先しましょう」
「しかし・・・」
「我々は報告を受けて追撃したが、出会った連中は人違いだった。それでいいじゃありませんか」
「くっ」

女竜騎士が、それでいいのかという目を他の竜騎士に向ける。その仕草に竜騎士達全員が頷く。どうやらかなり隊として結束が固いようだ。この女竜騎士も信頼されているのだろう。

「・・・ドーチェの命には代えられん。その条件を飲もう」
「二言はないわね？」
「騎士の言葉だ。信じて欲しい」

アルフィリースと女竜騎士の視線が交錯する。アルフィリースは彼女の言葉に嘘が無い事を確認すると、早速治療に取り掛かる。

続く

竜騎士三人、その5～竜騎士の苦悩～（後書き）

次回投稿は、５／１（日）１８：００です。

竜騎士三人、その６～戦闘治療～（前書き）

～あらすじ～

いけすかないと思いつつも、困っている女竜騎士を助けることにしたアルフィリース。結果は果たして・・・？

竜騎士三人、その6～戦闘治療～

「ラーナ！」
「はい」

先ほどからラーナは呼び付けられたものの、何をすればいいのかわからず、おろおろしていたのだ。

「貴方は夢が扱えるなら、この子を眠らせる事も可能？」
「眠らせることはできますが、腹を裂くなら痛がるのはどうしようもないです」
「となると、ミランダも必要か」

アルフィリースの求めに応じて、すぐにミランダも呼ばれてくる。

「何がどうなってる？」
「説明している暇はないわ。この飛竜の腹を今から裂くのだけれど、飛竜にも聞く痛み止めなんてのがある？」
「ん～麻痺薬ならあるから、上手い事使えば。でも飛竜に試したことはないよ？」
「なんでもいいわ。やって」
「あいよ」

ミランダが麻痺薬を水に溶かし、太い針の様なものをドーチェの腹に射して流し込んで行く。ドーチェはそれどころではないのか、痛がりすらしなかったが、やがて表情が少し和らいだものになっていった。

「ドーチェ、どう？」

「グルルル・・・」
「痛みはだいぶ楽になったみたいね。ラーナ、眠らせて」
「はい」

ラーナが催眠系の魔術でドーチェを眠らせる。これで腹を裂いても暴れることはないだろう。

「なるほど、こうすれば腹を裂いてもいいわねぇ・・・」
「ユーティ、感心してないでどこを裂いたらいいか教えて！」
「おっけい！」

ユーティがアルフィリースに裂く場所を指示する。そしてアルフィリースは小手に仕込んである刃を取り出すと、ユーティの指示に従って丁寧に裂いていった。やがて血がゆっくりと流れ始めたが、ユーティが大きな血管を避けるように指示していたので、内臓が目で見えるほどになっても、それほど血は出ていなかった。

「くそ、さすがに飛竜の腹は分厚いわね！　見えにくいったらありゃしない」
「もうすぐよ」
「ちょっと貴方達、ぼやっと見てるだけじゃなくて、手伝いなさい！」

アルフィリースが竜騎士達を怒鳴りつける。そして視野が利くようにドーチェの腹を手で持って左右に広げさせる。竜の腹は厚く、大人が片方を3人がかりで持ってやっと動くほどだった。その様子を、女竜騎士はやや青くなりながら心配そうに見つめている。

「よし、これで見える。明りを」
「アタシがやろう」

ミランダが魔術で明りをつけた。すると、ドーチェの腸の中に、何箇所か不自然な動きをしている個所がある。

「ユーティ、あれがそう？」

「そのはずよ。気をつけて、３匹いるわ」

「なるべく傷は最小限にしたいわね・・・頭から出てくるように仕向けるか」

アルフィリースが腸のどこを切るか、狙いを定める。そして寄生虫の動きを見ながらそっと腸を裂き、逃げられないよう寄生虫が向かう方向の腸を紐で縛る。やがて寄生虫の頭が傷口に差し掛かったところで寄生虫の尾側をしこたま掴むと、驚いた寄生虫が内容物と共に腸の中から飛び出してきた。

「キ、キキキ！」

「き、気持悪い！」

「うひー、何だこいつ！？」

アルフィリースとミランダが同時に悲鳴を上げたのも無理はない。飛び出してきたのは蛭のような生物だったが、出て来るなりアルフィリースに噛みつこうとしたのだ。活きがいいにもほどがある。ドーチェの腹を持っている竜騎士達も女竜騎士も、唖然としていた。

「引っ張り出してやる！」

すんでのところで寄生虫を掴んだアルフィリースが、寄生虫を引き摺り出そうとする。

「あ、あれ？　あれれ？」

だがその体は思ったよりはるかに長く、アルフィリースは勢い余って後ろに転んでしまった。

「うわぁ・・・」

ミランダが思わず嫌悪の目を寄生虫に向けたが、寄生虫の長さは実に４ｍ程度にも及んでいた。そして外に引っ張りされた寄生虫は、アルフィリースの体に巻き付き、今度はその体内に入ろうとしているのか口目がけて突進してきた。

「な、何こいつ！　ぐっ！？」

その時め上げる力がまるで大蛇の用で、アルフィリースが体がめりめりと音を立てて締め上げられる。また突進する力も普通ではない。アルフィリースだからなんとか抑えているが、これがリサならば抵抗する暇もないだろう。

「や、やばっ」
「はっ！」

アルフィリースが危機を感じる中、女竜騎士の剣が寄生虫の体を切り裂いていた。が――

「止まらない？」
「なんだこの生き物は？」

アルフィリースに突進してくる頭の方は、まるで斬られたことを意に介してもいないように歯をガチガチと鳴らしている。そして、斬った方の傷口にも口が形成されていくではないか。

「ならば燃やしてやる！」

アルフィリースが炎の魔術で、自分の体に巻きつく寄生虫に火をつけた。当然アルフィリースも火に包まれるが、地面を転げ回りながら火を消した。そしてようやく寄生虫は死んだのである。

「こんなのがドーチェの中に・・・」
「ユーティ、寄生虫ってこんなのなの？」
「こんなの見たことないわよぅ。それより、あと2匹はまだいるわよ？」
「ああもう！　一大作業ね！！」

そうして、アルフィリースは他の寄生虫の除去に取りかかっていくのだった。

＊＊＊

「ふぅ・・・大変だった」
「あー、まさかあんなことになるなんてね」
「何があったんだ？」
「それがね・・・」

アルフィリースは今、宿の浴場に来ていた。この宿の名物は大勢で入れる浴場であり、しかもご丁寧に男女分けてある。水源が豊富なブリュガルならではの出来事だろう。

先ほどのドーチェに対する治療、というよりはもはや寄生虫との戦いに近かったが、一通り寄生虫を倒し終えたアルフィリースはドーチェの腸の内容物まみれだった。それはミランダや腹をつかんでいた竜騎士達、近くで見ていた女竜騎士も同じで、それをさすがに

あわれと思ったのか、女竜騎士がこの宿の風呂を貸し切ってくれたのだ。後のことはユーティとラーナが傷を塞いでおくと申し出てくれたので、アルフィリースとミランダは風呂に一足先に入っているという寸法だった。もちろん交換条件で拘束を解かれたニアやエアリアル、リサや楓も一緒に風呂でくつろいでいる。

「なるほどな、そんなことが」
「では我々は晴れて釈放か？」
「そうだといいけど、用が済んだから掌を返されることもありえるわよねぇ」
「そんなことはせん」

と、ぼやくアルフィリース達の所へ、件の女竜騎士が入ってきた。アルフィリース達は驚いたような顔をするが、女竜騎士の方がより彼女達の反応に戸惑ったようだ。

「なんだ？　何がおかしい？」
「だって、さっきまで私達を捕まえようとしてたのに・・・」
「私もさすがにしこたま汚れたからな。あの妖精に『あんた臭い、あっちに行け』と言われて、こっちに来たというわけだ。後のことは自分がやるから、邪魔だと言われてな」
「ユーティったら」

その光景が容易に思い浮かべられたので、アルフィリースは思わず噴き出した。全員で笑う様子をその女竜騎士はじっと見ている。

「まだ疑いを解いたわけではないが・・・不思議な連中だな。悪い奴らには見えん」
「そりゃそうさ。アタシ達は清廉潔白な仲良し御一行だから」
「貴様だけはそうは見えんがな」

「なにぃ？」

ミランダを不審気に見る女竜騎士に、ミランダが喰ってかかろうとする。そのやりとりを見て、またしても全員が笑っている。

「そういえば貴女の名前を聞いていないわ。私はアルフィリースよ」
「アンネクローゼ。家族などはアンネと呼ぶ」
「じゃあ私もアンネって呼んでもいい？　私の事もアルフィって呼んで」
「慣れ慣れしい娘だな。疑いを解いたわけではないと言ったろう？」
「えー、いいじゃない。とりあえずは争わないんだから」
「まったく・・・」

実はアンネクローゼとしては自分達は追わないと約束したが、この後他の部隊に連絡するか、あるいはヴィンダルの連中に追わせるつもりでいたのだが、アルフィリースの緊張感のない態度に完全に毒気を抜かれてしまったようだ。
ため息を一つついて水浴びを始めるアンネクローゼ。

「ねぇねぇ、アンネっていくつなの？」
「２２だ」
「じゃあ私よりお姉さんか～」
「アルフィ・・・はいくつなのだ？」

アンネクローゼは愛称で人を呼ぶことに余り慣れていないのか、少し言いにくそうにアルフィリースを呼ぶ。真面目な性格なのだろう。

「私は１８。次の春の季節が来たら１９かな」
「ふむ、傭兵か？」

「ええ、そうよ」
「大変だな、若いのに」
「アンネこそ。その歳でもう偉い人なんでしょう？　隊長だとか言われていたし」
その言葉にアンネクローゼが少し渋い顔をする。
「別に実績があるわけじゃないさ」
「え、ならなんで隊長に・・・」
「そりゃそうさ」
ミランダが納得したとばかりに、ふふん、と鼻を鳴らす。
「金の髪、竜騎士、アンネクローゼ。アンタ、ローマンズランドの第二皇女、アンネクローゼ殿下じゃないのかい？」
「「ええ！？」」
思わず全員が驚いてミランダとアンネクローゼを見比べるが、アンネクローゼはまたしても渋い顔をしたが、湯を頭から浴びて水を振り払い答える。
「知っているのならば仕方ない。いかにも、私はローマンズランド第二皇女、アンネクローゼ＝メディガン＝スカイロードだ」
と、アンネクローゼは金の髪から水を滴らせながら名乗ったのだった。
続く

竜騎士三人、その６～戦闘治療～（後書き）

次回投稿は、５／２（月）２０：００です。

竜騎士三人、その7～竜騎士の皇女～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースが助けた女竜騎士は、ローマンズランドの皇女で・・・？

竜騎士三人、その7～竜騎士の皇女～

「第二皇女・・・ということは」
「お姫様!?」

アルフィリースが素っ頓狂な声を上げる。アンネクローゼは多少きまりが悪そうだったが、すっとアルフィリース達の方を見ると頷いた。

「いかにも。もっとも私は１２の時から軍人として活動しているから、姫というにはほど遠いだろう。宮廷作法も苦手だしな」
「すごーい！　私、お姫様の友達とか初めてかも！」
「いや、人の話を・・・」
「ねぇねぇ、お城の暮しってどんなの??」

アルフィリースはもはやアンネクローゼの話など聞こえていない。アルフィリースも女性であり、『お姫様』という存在に一途に憧れることもあるのだ。フェンナも一応王族ではあったが、森の民だし、それに集落自体も小さく人間とはまた違う趣だった。アルフィリースの中でお姫様といえば、やはり人間の王族を意味するのだろう。
アンネクローゼを前に子どものようにはしゃぐアルフィリースを前に、アンネクローゼも戸惑いながらも、しょうがないといった顔でアルフィリースを見ていた。

「アルフィは私の妹みたいだな」
「アンネには妹がいるんだ?」
「１０歳離れているがな」
「えー、私そんなに幼くないよ?」

そう言って子どものようにむくれるアルフィリースに、アンネクローゼがくすりと笑う。ここにきてアンネクローゼもまたアルフィリースに対して完全に警戒心を解いていた。内心では不思議な娘だと、アンネクローゼはアルフィリースに興味を持ったようだった。

「でもさあ、いいのかい？　第二皇女なんて偉い人が、傭兵なんかと護衛もつけずに風呂に入っていて？」

ミランダが多少呆れながら質問する。

「構わんさ。私に何かあれば、ローマンズランド3万の竜騎士と、30万の軍団が地の果てまで追いかけてくる。そんな愚を犯す馬鹿はいるまい？」

「なるほど、むしろばらした方が安全だと？」

「そうとも言えるな。もっとも相手次第だろうが」

アンネクローゼがニヤリとしたので、ミランダも肩をすくめてこれ以上は何も言わなかった。やはり大国の皇女だけあって、したたかさも兼ね備えている。そんなことは気にせず、アルフィリースの方はしきりとアンネクローゼに話しかけている。

「なんでこんなところに皇女様がいるの？」

「視察さ、属国が大人しくしているかどうかのな。近頃どうにも不穏な噂が多くてな。だが私がここに来ているのは一応内緒なのだ。まあ抜き打ちという事だな。その途中にアルフィ達の噂を聞いたから、これはただ事じゃないかと思ったのだが、どうやらはずれたようだ」

アンネクローゼのその言葉に、そうでもないかもしれないとアルフィリースは思ったが、真実を話すのはやめておいた。アンネクロ

ーゼも余計な事を聞かないでいてくれるようだし、それならややこしい事情をアンネクローゼに話すこともない。アルフィリースはいつの間にかアンネクローゼの事を嫌いではなくなっていたが、まだそこまで全面的に信頼したわけでもないし、オーランゼブルの事を話してどうなるものでもないだろう。

アルフィリースは口まで湯に使ってぶくぶくと泡を立てているが、アンネクローゼは警戒心を解いたせいか、体を一通り洗い終えると湯船に入って愚痴をこぼし始めた。

「それに軍にあって、任務のためにいちいち国外に出る事を父上に申し立てしていては、軍務に滞りが出ようというもの。父上は過保護だからな。子どもは沢山いるのだから、私ぐらい好きにさせてもいいだろうに」

「へぇ、ローマンズランドって、そんなに直系の子孫は多かったっけ？」

「男が５人、女が３人だ」

アンネクローゼがそっけなく答える。

「私は下から４番目だから、一番好きにさせてもらっているかもしれん。一番下のウィラニアなど一人歳が離れているから、父上も可愛くて仕方がないのか、常に傍に置いている。おかげでウィラニアは我儘放題で、城の者も手を焼いているのさ。それでも他の兄弟には愛想がいいのだが、私にだけはなぜか突っかかって来てな」

アンネクローゼがぶつぶつ文句を言う。見ず知らずの傭兵達にこうやってローマンズランド内の事情を話すのはミランダなどはどうかと思ったが、どうやらアルフィリースに多少似た所があるのか、なぜかミランダは憎めなかった。ローマンズランドの王族はもっと気難しい人間が多いとミランダは思っていたので、予想に反してい

たのもある。こういった人物が外交担当なら、多少はアルネリア教会としてもやりやすいのではないかとミランダは考えていた。

「（あ、でも初対面は最悪だったし、ローマンズランドってこういう人種なのかもしれないわね）」

ミランダは体を半分湯から出しながら考え込んでいた。一方で、アルフィリースはアンネクローゼの話に興味津々といった様子で、どんどん彼女に質問を投げかけている。

「アンネは最高位竜騎士（ドラゴンマスター）なんでしょう？」
「ああ、６年ほど前に叙勲した」
「すごいな～それだけ竜の扱いが上手いんだよね？」
「・・・それはどうかな」

アンネクローゼの顔が少し翳るのを見て、アルフィイリースが首をかしげる。そしてアンネクローゼが、アルフィリースの腕にある呪印に気がつく。もうアルフィリースは呪印を隠すのをやめにしていた。逆に不審に思われるし、むしろフェアトゥーセが見ても分からないほどの呪印なら、多少誰に見られても大丈夫だとミランダやリサと話しあった結果だった。

「それは？」
「ああ、これね。これは呪印って言って、私の力を封印するためのもの」
「封印・・・私は魔術の事は詳しくはわからないが、聞いていいものか？」
「うーん・・・あまり聞かれたくはないかな？」
「ならばやめておこう。そういえば私にも不思議な印があるんだ」
「え？　どこどこ？」

「首の後ろに・・・」

アンネクローゼがぴしゃりとそれ以降呪印の事を気にもかけなかったので、アルフィリースはますますそのさっぱりした性格が気に入ったようだった。アンネクローゼにしてもアルフィリースは素直な妹でも言えば良いのか、話しやすいようだった。2人は竜のことでも気が合うし、急速に仲良くなっていった。

＊＊＊

「じゃあ、アンネ。おやすみなさい」
「ああ、アルフィ。良い夢を」

風呂から出ても話の尽きなかった2人は、身分の事も顧みず仲良く話していた。既に愛称で呼び合うのも抵抗が無くなっている。不思議な娘だとアンネクローゼは思った。状況が違えば殺し合いをしていたかもしれないと思うと、余計不思議に思えるのだ。ドーチェが引き合わせてくれたと考えてもいいかもしれない。

そしてそこに治療を終えたユーティとラーナが帰って来てドーチェの無事を告げると、アンネクローゼは一度ドーチェの様子を見に行く。ドーチェはやすらかな寝息を立てて寝ており、既に腹の傷も跡がわからないほどになっていた。

アンネクローゼはほっと胸を撫で下ろすと、見張りにドーチェの様子に変化があればすぐに連絡するよう申し渡し、寝るために宿に戻る。アンネクローゼが宿に戻ると、夜遅いためか酒場にも既に客はほとんどいなかった。そして彼女が何気なく酒場の一角を見ると、そこにはルイとレクサスがまだちびちびとやっていた。そのルイを見てはっとするアンネクローゼ。

「（まさか・・・？）」

アンネクローゼはつかつかとそのテーブルに寄っていくと、ルイに声をかける。

「失礼します。ぶしつけですが、ルイ＝ナイトルー＝ハイランダーではないでしょうか？」

「・・・そんな大層な名は知らんな。ワタシはただの『ルイ』だ」

「その喋り口、間違いないですね。ルイ先輩、お久しぶりです。アンネクローゼです」

「アンネか・・・懐かしいな」

そのやりとりを見ると、レクサスは無言で席を立った。自分がいない方がいい話だと思ったのだろう。こういう時には彼はきちんと気を利かせる。

そしてレクサスがいた席にアンネクローゼは座ると、ルイが窘めるように彼女を見た。

「皇女が軽々しく自分の名前を口にするものではないだろう？」

「ルイさんが私の事を忘れていると思いましたから」

「忘れるわけがないだろう、かわいい後輩の事を？　ちゃんと覚えているよ」

「それなら・・・あっ」

ルイがアンネクローゼのあたまをわしゃわしゃと撫でたので、アンネクローゼは面喰いつつも、撫でられるがままにした。

「懐かしいな。アンネが最初にワタシの所に来た頃、よくこうやって頭を撫でたものだ」

「ええ、ルイさんは私の最初の教育係ですものね。私が皇女だと知っても遠慮がなかったのは貴女だけでした。他の者はまるで腫れも

のでも扱うように私の事を扱ったものです」
「他の者も遠慮することはないのだがな。陣中においては君命も聞かざるべし、とも言われるしな」
「だからといって、初対面で尻を蹴飛ばされるとは思いませんでしたが」

そういって意地わるそうな顔をするアンネクローゼ。その顔を見てルイが苦笑いをする。

「また懐かしい話を」
「でもそのせいで貴女は自分の株を逆に上げましたね。皇女の尻すら蹴飛ばす公平さの持ち主として」
「あれはアンネが悪いからな。当初のアンネは我儘で、集団行動ができなかった。もっともそれまでの教官がきちんと教え込んでいないのが原因だろうが。しかしもうワタシが国を飛び出して４年近くか・・・アンネは今どうしている？」
「今は空戦第三師団、師団長を拝命しております」
「師団長か・・・まあ最上位竜騎士ともなれば当然か」

ルイがグビリと酒を飲み干す。アンネクローゼにも杯を勧めると、彼女もまた一口に飲み干した。

「うむ、イケる口になったな」
「貴女に鍛えられましたから」
「酒を飲んではむせていたあの頃が懐かしいな」
「まだ昔を懐かしむほど、私達は歳をとってはいないでしょう？」

アンネクローゼがルイの言葉を訂正しようとした。だがルイは気にかけてはいない。

「歳をとったさ。色々な事がここ数年でありすぎた。アマリナさんが軍を辞め、ワタシも辞めて。あの頃は3人でローマンズランドを支えていこうと話し合った時もあったがな」
「はい。それぞれが師団長になろうと」
「アンネは叶えた」
「私は自分の力ではありません」

アンネクローゼが申し訳なさそうな顔をする。

「だが師団長になったことは事実だ」
「あんなことさえなければ・・・」
「よせ、それが政治というものだ。私も当時は腹が立ったが、今ではそう思えるようになったよ」
「・・・傭兵をしているからですか？」

アンネクローゼの問いに、ルイが意外そうな顔をする。

「知っていたのか？」
「ブラックホークの隊長に、氷の剣を使う女剣士がいると風の便りで。貴女の様な剣士は、2人といませんから」
「なるほど、ワタシも有名になったか。その割にはワタシの元には家から連絡は来ないがな」
「それは・・・」

酒瓶が空になったのをルイが見ると、もう一本勝手に酒を持ってきた。マスターは既に寝たのか、もう店にはいない。客もいつの間にか全員帰っている。帰るなら一言あればいいのにとルイは思うが、タダ酒が飲めるのなら文句は言うべきではないかと思いなおす。
そしてまた席に着くとグラスに並々と注いで飲み始めた。

「まあ連絡がないならないですっきりするさ。ワタシもあの家にはもう関わりたくない。だが・・・姉上と妹は健在だろうか？」
「はい。先日リルシャ殿は2人目のお子様を無事出産されました」
「それはめでたいことだ。ミラは？」
「ミラは・・・正式に軍に入隊しました」
「何だと？」

ルイの顔色が初めて変わる。酒を飲もうとしていた手をピタリと止め、真剣な面持ちでアンネクローゼに眼差しを向けていた。

続く

竜騎士三人、その7～竜騎士の皇女～（後書き）

次回投稿は、５／３（火）２０：００です。

竜騎士三人、その8～ルイの事情～（前書き）

～あらすじ～

かつての上官、ルイと酒を飲むアンネクローゼ。彼女達の会話とは・・・？

竜騎士三人、その8～ルイの事情～

「いつだ？」
「ルイさんが軍を出てからすぐ。ご家族は随分と反対されたそうですが、彼女は正式に入隊し・・・今では１００人の部下を預かる身です」
「あの子がな・・・」

ルイは昔を思い出す。妹のミラとはよくごっこ遊びで剣の練習をしたのだ。その時から、ミラにもまた騎士としての才覚があるのはルイにもわかっていた。だが当時は目的もなく、自分の後ろを付いて回るだけの妹だったが、まさか軍に入っているとは。

「ワタシのせいか？」

ルイは責任を感じていた。あの心優しい妹を戦いには巻き込みたくなかったのだ。アンネクローゼは余計な事を言ったかと後悔したが、もはやどうなるものでもない。

「それはなんとも・・・私の部隊とは所属が違いますから」
「指揮官は？」
「オズワルド卿率いる陸戦第６師団です」
「オズワルド卿か。さすがに父の師団は避けたようだが、彼ならまあ変な運用の仕方はされまい。ワタシの家と利害関係もないしな」

ルイは一安心する。元気でやっていることを聞けただけでも、本来は安堵すべき所なのだろう。

「まあ・・・無事で何よりか。それで弟の方は？」

「いまだに軍に入ったという話は聞きません」
「相変わらず病弱なのかな。そろそろ12になるはずだが」
「私にはなんとも・・・」
「そうか、つまらんことを聞いたな」

ルイは目を伏せ、黙り込んだ。家で弟の立場はあるのだろうかと心配する。ルイの父親は非常に厳しく、古風な考え方の持ち主だった。男は強くあらねばならず、女は強い子どもを産むための道具でしかなかった。ルイの母親は決して病弱ではなかったが、ルイの妹が非常に難産で体を壊してしまったにもかかわらず、父がどうしても男を産めと強制したがために無理な出産を試み、弟を産んで間もなく死んだ。ルイが家を飛び出した一因でもある。

そんなことを考えながら気難しい顔をするルイに、アンネクローゼがおずおずと話しかける。アンネクローゼは勝気な皇女として知られていても、ルイにだけは昔からどうしても頭が上がらない。

「・・・それで、この後ルイさんはどうされる予定で?」
「別に何も。その日暮らしの傭兵さ。もっとも最近は魔王とやらが多数発生しているようだし、あちこちでいざこざが増え始めているようだ。仕事には困らないだろうが、そういえばローマンズランドでは魔王は出ていないのか?」

ルイは自分で言ってふと気付いた。自分達が相手にした魔王は、まだ西側の地域だけ。噂では南部にも東部にも出没しているらしいのだが、そちらはそれぞれグルーザルドやアルネリア教会、魔術教会が連携で対処しているらしい。だが北部では魔王出現の噂はとんと聞かない。ローマンズランドが属国も含めれば、大陸最大級の規模の領土を有しているにも関わらずである。

そんなルイの思いは伝わらないのか、アンネクローゼの顔は別段変化はない。

「はい、今のところは」
「ふむ、不思議な事もあるものだ。もっとも・・・」
「え？」
「いや、なんでもない」

ルイには一つの疑問が浮かぶ。正直もはやローマンズランドがどうなろうが興味はないのだが、姉と妹だけは無事でいて欲しかった。これもヴァルサスに相談してみないと、どうとも言えないなと感じるルイだった。

そんなルイを見て不思議そうな顔をするアンネクローゼをよそに、ルイは席を立つ。既に新しく持ってきた酒瓶も空だった。

「さて、ワタシもさすがにもう寝るよ。アンネも朝は早いんだろう？」
「ええ、まぁ」
「そういえばアルフィリースはどうするんだ？」
「約束があるのでアルフィは放免です。騎士として誓ったことですから」

即答したアンネクローゼを見て、ルイがにやりとした。

「随分と物わかりがよくなったな、アンネ」
「そうですか？　ならば私も成長したのでしょう」
「上に立つ者はそうでなくてはいかん。それにアルフィ、ね」
「な、なんですか？」
「いや、随分親しげだと思っただけだ」
「別にいいではないですか！」

アンネクローゼが少しむくれるようについ、と横を向いたので、

ルイは思わずアンネクローゼの頭をまた乱暴に撫でていた。

「きゃっ」

「それでいい、成長したアンネが見れて嬉しいよ。では、ワタシはアマリナさんの所に戻るよ」

「アマリナさんがいるんですか！？」

アンネクローゼも、まさかアマリナがいるとは思っていなかったのか、驚きの顔をした。ルイはアンネクローゼのそんな反応も予想済みだったのか、平然としていたが。

「会っていくか？」

「合わせる顔がありません・・・私がいなければ、アマリナさんは今頃師団長だったはずですから」

アンネクローゼがうつむく。

「それはどうかな・・・アンネがいてもアマリナさんは師団長になっていたのではないかと、ワタシは思うんだ」

「え？」

ルイのその答えが意外だったので、アンネクローゼは思わず顔を上げた。

「確かにあの時の御前試合ではアマリナがアンネに勝った。部下からの人望も、指揮能力も、実力もあの時点では確かにアマリナさんがアンネより上だった」

「なのに最上位竜騎士（ドラゴンマスター）の称号は私に授けられました。それに納得ができないとアマリナさんはローマンズランドを飛び出して・・・」

「そうだな。だけどアマリナさんが本当に最上位竜騎士の称号にこ

だわるのなら、別にそのまま軍に残って努力すればよかったんだ。実際にローマンズランドの竜騎士で、彼女より優秀な者など数えるほどしかいなかったんだから。そう遠くないうちに、再び称号を授与されていただろう。

だが彼女はそうしなかった。その判定に納得しなかったにしろ、あるいはずっと部下として可愛がっていたアンネに抜かれたことがショックだったにしろ、な。思うに最上位竜騎士の称号も、アマリナさんにとっては自分の実力を測る一つの指標にしか過ぎなかったのじゃないかな？　軍を抜けたのは、最上位竜騎士という称号が非常に曖昧なものだと気が付き、もっと目指すべき何かを見つけたかったからじゃないだろうか」

ルイの言葉を黙って聞いていたアンネクローゼが、納得いかない顔をしている。

「本当にそうでしょうか？」

「さあ、どうかな。ワタシだって本人に聞いたわけじゃない。だけど彼女がそんなことでウジウジするような人間でないことは確かさ。今も竜を操っていて、その手際は上達するばかりだ。過去のことにこだわっていては、ああはいかないだろう。それに、アンネは自分が最上位竜騎士にふさわしくないと思っているのだろう？」

「はい」

アンネクローゼにとっても長い事悩んでいる問題である。最高位竜騎士を授与された時、まだ自分に実績が伴っていなかった事と、アマリナが軍を去ったことで一騒動あったのだ。アンネクローゼもまた、なぜ自分が最高位竜騎士に指名されたのかと眠れぬ夜を過ごし、皇帝である父を恨みもしたのだ。

だがルイの答えは彼女にとっては意外なものだった。

「ワタシもそう思う」
「・・・は？」

あまりにストレートに言われたので、アンネクローゼは皇女にあるまじく、口をぽかんと開けてしまった。

「そんな顔をするな。いや、ワタシの言い方が悪かったか。正確には、思っていた、だな。誰が見ても当時最高位竜騎士にふさわしかったのはアマリナの方だった。だが・・・」
「・・・」
「だが自分がふさわしくないと思うなら、ふさわしくなるための努力をすればいいだけのことだ。アンネには才能がある。それはだれしもが認めていた事だ。いずれその称号にふさわしい実力を身につけるさ」
「・・・」

アンネクローゼは考え込んでいたが、ルイが背を向けたのを見て、ルイの背後から声をかける。

「すぐに・・・納得することはできませんが、そう思えるようになるよう努力します」
「ああ、そうしろ。ウジウジするより、余程良い」
「ありがとうございます。今日貴女に会えてよかった」
「ワタシもだ。では息災でな」

そうしてルイは振り向くことなく、二階に引き揚げて行った。そのルイが去った後、明りのほとんど落ちた酒場で、アンネクローゼは少し考え込むのだった。

＊＊＊

「姐さん」
「レクサスか」

2階に上がった所にレクサスが立っていた。どうやら席を離れた後、ずっとここにいたらしい。

「立ち聞きしていたのか？」
「申し訳ないとは思いましたが、一応姐さんの安全を守るのが仕事ですんで」
「ふん、危険などないだろうに」
「んなことわかりませんよ」

ルイも一応反論するものの、レクサスに悪気があるわけではない事も知っているし、実際にレクサスがいつもそうやってルイの補佐をするからこそ、今まで無事にやれていることも知っている。

「で、何か意見は？」
「ローマンズランドで魔王が出現してないって話。あれ、ヴァルサスさんも気づいてますよ。ああ立て続けに魔王討伐を続けてたんですからね」
「なるほど。で？」
「既に0番隊の人間が探りを入れてるんじゃないでしょうか？　ああ見えてヴァルサスさんって抜け目ないですからね。今回適当にやっていいってのも、その報告が帰って来るのを待ってるんじゃないかと」
「ふむ」

ルイが唸る。ルイもその話を聞いていると、どうにもローマンズランドの事が気になってくる。ヴァルサスが既に動いているという

のに、自分やアマリナに話が振られなかったのは、きっとヴァルサスが気遣ったのだろうと想像する。意外にヴァルサスは気遣いが細やかな男なのだ。

「で、私達はどうする？」

「・・・一度、ヴァルサスさんの所に戻りませんか？　どうにも放置していいような問題じゃない気がするんですよね。場合によっちゃ、姐さんには申し訳ないですけど俺達がローマンズランドに潜入した方がいいかも」

「勘か？」

「勘です」

レクサスの勘は良く当たる。それだけはいつもルイは信頼するようにしているのだ。

「確かにワタシとアマリナなら内情がさらにわかるからな。決めるのはアマリナに相談した後だが、一度戻るか」

「ですね。ならそうと決まれば善は急げ。アマリナさんに相談しましょ！」

そういってアマリナの部屋に行こうとするレクサスを、ルイは首根っこを掴んで引き留める。

「ぐえっ！」

「話はワタシがする・・・貴様は外で待っていろ」

「え、だって部屋は一つしか確保してないんだし、どっちにしろ俺だって中に入らないことには」

「貴様のベッドはない。貴様の様な獣を、婦女子の部屋に入れるわけがないだろうが？」

「婦女子って・・・今さらそんなんでもないでしょうに・・・はっ

！？」

レクサスが文句代わりに呟いた言葉は、しっかりとルイの耳に届いていた。殺気と共に剣を抜き放つルイ。

「ほう・・・今日の続きをしたいと？」

「いやいやいや、穏便に行きましょ？　ね？？」

「ふ、ワタシとしてもそのつもりだったのだが。やはり害虫は駆除しておくべきだな」

「ひ、ひぃー！？　お助け～」

「待てぇ、貴様！」

その後、レクサスの悲鳴が宿に響き渡り、「うるさい」と怒って出てきたミランダ、リサ、ニアと共に、ルイに二階の窓から叩きだされるレクサスが見られるのはこの直後の事。

続く

竜騎士三人、その8～ルイの事情～（後書き）

次回投稿は、５／４（水）２０：００です。

竜騎士三人、その9～皇女との約束～（前書き）

～あらすじ～

ローマンズランドという国に対して、それぞれの思いを抱く人間達。そして、ここより離れた場所で起こる物語とは？

新しい場面にここから入ります。

竜騎士三人、その9～皇女との約束～

＊＊＊

翌朝の事。

アルフィリース達が起きた時には、既にルイ達は宿を後にしていた。一言挨拶をしたかったアルフィリースだが、また会う事もあるかとアルフィリースは思いなおす。

その後軽めの朝食を済ませて出立のため外に出ると、既に外にはアンネクローゼの部隊が整列をしていた。ドーチェも既に起き上がっている。ユーティの治療が功を奏したのだろうが、やはり竜の生命力は並ではない。

「それにしてもあの寄生虫って何だったのかしらね？」
「さぁねぇ～世の中には不思議な生き物がいるわよねぇ」
「鍋の妖精とかですね」
「そうそう、ワタシは不思議な生物・・・って、違ーう！」

リサにからかわれてユーティが騒ぎ出したが、いつもの事なのでリサに任せておいた。あまり騒ぐと、最近はイルマタルがユーティをかじって黙らせてくれるので便利だ。部隊を整列させて、何やら指示を飛ばすアンネクローゼとアルフィリースの目が合う。

「あ、おはようアンネ」
「おはよう、アルフィ」

2人は軽く微笑み、既に長らく付き合った親友のようだった。まだ出会ってから半日程度しか実際には経っていないのにもかかわら

ずである。

「アルフィはこの後どうするんだ？」
「うん、もうこの町を出て北街道をまっすぐ行くよ？」
「アルフィ、そんな簡単に自分の進路を教えて・・・」
「それは止めた方がいいな」

ミランダがアルフィリースの軽率な行動を窘めようとしたが、その前にアンネクローゼが警告をしたのだ。

「ここから先にはヴィンダルの連中が検問を張っている。直にこの町にも調査隊が来るだろう」
「え、じゃあどうしたら」
「ここから北側にある丘を突っ切り、森を抜けるとローマンズランド領になる。さらに進んで荒野を突っ切り、ピレボス山脈近くまで行くと、ピレボスに向かう山道が見えてくる。魔物も出るし、決して安全だとは言い難いが、ここは警らとは無縁の地域だ。追手の心配はまずあるまい」
「あんたの言葉を信用しろと？」

ミランダがまだ疑い深げに尋ねるが、アルフィリースは既にアンネクローゼの言葉を信じていた。

「信じるわ、アンネ」
「ああ、ローマンズランドの皇女の名にかけて誓おう」
「まったく、お人好しなんだから」

ミランダがため息をついたが、それもアルフィリースの良さである。ミランダは既に諦めていた。

「そのままピレボスを越えちゃうなんて事にはならないだろうね？」
「それはないだろう。道なりに行けば、そのまま東に向かうようになるはずだ」
「なるほど、紛争地帯に入っちゃえば、多少どこを通っても同じか」
「そうだな。紛争地帯を抜けた所で北街道に合流すればいいだろう。詳しい地図を渡そう」

アンネクローゼが部下に指示して、現状で把握できている戦線の様子をアルフィリース達に教える。そのまま地図をアルフィリース達はもらい、おまけに追加の食料までアンネクローゼに渡された。

「至れり尽くせりだな。逆に気味が悪いよ」
「そう言うな。こっちとしては命をかけてドーチェを救ってもらった恩は、これだけじゃ返しきれないくらいだ。それに昨日、アルフィリースがついでに色々なアドバイスを竜騎士にしてくれたろう？そのせいで部下達も非常に感謝していてな。これは隊の総意だと思ってくれていい」

アンネクローゼのその言葉に、竜騎士達が頷く。ドーチェもまた「グルルル！」と同意するように唸った。どうやら本来は気のいい人間達らしいこの部隊と、昨日本格的に争うことにならなくて本当に良かったとアルフィリースは思うのだ。

「ありがとう、アンネ。また会いたいわ」
「ああ、私もだよアルフィ。確か傭兵団を作るんだったな？」
「ええ、昨日お風呂で話した通りね」
「アルフィの傭兵団を必要としたら、私が雇ってもいいだろうか？」

その言葉を聞いて、アルフィリースの顔が輝く。

「もちろん！　大口の依頼は歓迎よ」
「おいおい、私から搾り取る気か？」

アンネクローゼが肩をすくめて見せたので、アルフィリースはその様子がおかしくて微笑む。アンネクローゼはもっとお堅い人間だと思っていたからだ。仲良くなっただけでなく、昨日何かあったのかもしれないとアルフィリースは思う。
その予想通り、昨日のルイとの話し合いで、アンネクローゼの肩からは、一つ大きな荷物が降りていたのだ。その分だけ、アンネクローゼは開放感を感じていた。

「あはは。まあよろしく頼むわね」
「こちらこそな。傭兵に行き詰まったら私の所に来るといい。士官の口なら紹介しよう」
「そうね。できたら傭兵でいたいけど、もしどうにもならなくなったらお世話になるわ」
「うむ、元気でな」
「そっちこそね」

それだけ会話を済ませると、アルフィリース達は足早にその場を去って行った。その後ろ姿を見送り終わると、アンネクローゼは部下に命令する。

「よいか！　我々は視察の途中、住民からの報告を受けて疑わしい者達を追跡するも、人違いと判明。そして私の竜が体調を崩したことにより、これ以上の追跡は不可能と判断し、後はヴィンダルに任せることにした。異論は！？」
「「「ありません！」」」
「グルルル！」

竜騎士達と、ドーチェが同時に返事をする。その返事に満足し、アンネクローゼは良い出会いに感謝するように空を見上げるのだった。

＊＊＊

話は変わる。ここは聖都アルネリア内にある深緑宮。ジェイク達がここに訪れてから、既に3カ月が経過していた。

「なんで俺が学校とか・・・急すぎるってーの」

ぶつぶつと文句を言いながらも、聖都アルネリアの一画にある学園に走って向かうのはジェイクである。なぜこんなことになったのかというと、それは昨日の夜の事。

＊＊＊

「ジェイク、お前学校に行け」

「は！？」

突然ミリアザールに呼び付けられたかと思うと、ミリアザールが書類の山を片づけながらジェイクに告げたのだ。

「なんでまた急に」

「急というわけではない、まあ予想よりタイミングは早いがな。いずれしようと思っていた話ではある」

ミリアザールは栀子が淹れた茶をすすりながら答える。

「もう読み書きはできるのじゃろう？」

「ああ、それは大丈夫だ」

ここ3カ月で共通言語の読み書きをジェイクはマスターしていた。もうリサの手紙が来ても一人で読めるだろう。

今は魔術書などに使われる魔術言語を勉強している最中だった。他には鍛錬と、基本的な騎士の業務などを手伝っている。いわゆる従騎士のさらに見習いといったところだ。

「ならば学校に行って色々な事を学べ。ワシらも最近は忙しい。以前のように、アルベルトやラファティもお前の相手ばかりをしておるわけにはいかんでな」

「う～ん、行かなきゃだめか？」

「当然じゃ。同じ年頃の人間と触れあうのは大切じゃぞ？　何か気にしているのか？」

「いや、アルネリアの学校っていいとこのガキが多いって聞いたからさ。上手くやっていけるかなって。つい殴っちまいそうだ」

その言葉を聞いてミリアザールはきょとんとした。ミリアザール自身もすっかり忘れていたが、アルネリア教会付属の学問所であるグローリア学園は、各国から貴族の子弟、時には王族の子弟が学びに来る事もある場所だった。

この当時、学問を学ぶにはカザスの出身である学問の都メイヤーが一番であった。だが学問の都というのは学問所によってかなり教える課程も偏っており、また大学ごとで利権争いなどの競争が激しかった。激しい時には学校同士の暴動に発展する事もある。なぜそのような争いが起こるかというと、メイヤーの学問所に通う子ども達は多くが貧しい階級の子ども達であり、学問によって身を立て、いずれ出世をと考える人間の集まりである。その中では、もちろん人を蹴落とすような状況も生まれる。そのような争いの場に自分の子どもを通わせたくないというのが、大方の貴族の見解であること

が一つ。

もう一つは、貴族や王族は学問だけできればよいというものではない。むしろ学問は部下に任せ、自分達は剣技、さらには社交界での礼儀作法が優先される。社交界での礼儀作法など、早くに平和を得ることができた大陸東部の人間達特有の感覚かもしれないが、少なくとも東部地域では優先順位の高い事項である。その点でグローリア学園はその時代のニーズに応じ、騎士剣の訓練から礼儀作法の事まで教えることができ、いまや東部各国の貴族にとってはグローリアに子どもを通わせることは、一種のステータスとなっていたのだ。

むろんこれは若かりし頃のミリアザールが仕掛けたことである。こうしておくことで各国の主要人物の次世代を観察できるし、もっと悪く言えば人質を取ったにも等しい。さらにここで施される教育で彼らは成長していくわけだから、好くなくともアルネリア教に一定の恩義は感じるだろう。そうすれば、将来的にアルネリア教への反発を防ぐ予防策にもなる。

最近では口無しのメンバーを教師、時には生徒として潜り込ませてあるため、定期的な報告を受けるだけになっていたが、実に多くの貴族、時には宰相や王までもがこのグローリアを卒業していたのだった。その代償として、平民がこのグローリアに通いづらくなってしまったのはどうしても否定できない。もちろんアルネリア教会が預かる孤児なども通うので、常に一定の割合以上では庶民が存在するのだが。ジェイクが彼らに気後れするとはミリアザールは思わなかったが、庶民ということで絡まれ、喧嘩になったら面倒だろう。

何せ今のジェイクだと、同世代の連中と喧嘩すれば半殺しにしかねない。いつもアルベルトやラファティにかかっていく感覚で同級生と喧嘩をすれば、そうなる可能性は大いにあった。既に一般の騎士とは、木剣限定ならかなりやりあえるようになっているジェイクは自分の実力をなんとなくわかっていたので、彼自身がその可能性を示唆したのである。

続く

竜騎士三人、その9～皇女との約束～（後書き）

竜騎士三人とは、アマリナ、アンネクローゼ、アルフィリースのことですね。ここではまだ印象が薄いかも知れませんが、この三人のことは頭の片隅にとどめておいてもらえればと思います。

もしよろしかったら、評価のボタンをぽちっとしてもらえれば嬉しいです。

次回投稿は、５／５（木）２０：００です。

次回から新シリーズです。サブタイトルは「ジェイクの新しい生活」です。

ジェイクの新しい生活、その1～学園生活～（前書き）

～あらすじ～

学校に通うことになったジェイクが出会う人間達とは、果たして？

「むー、それは難題じゃのう」
「だろう？　ああいうところでは、絶対に俺は絡まれると思うんだ。実際ミーシアでもそうだったしさ。その時はもちろん全員ボコボコにしたけど。あ、これはリサには内緒ね？」
「悪い子じゃのう。だがしかし、貴族の子弟をボコボコにすれば、確かに問題じゃわな・・・よし、こうしよう」

ミリアザールがぽんと手を叩く。

「ジェイク、お前に全面的に喧嘩を禁じる」
「はぁっ？　それって喧嘩を売られても？」
「そうじゃ。世の中売られた喧嘩は全て買えばいいというものではない。時には耐えたり、上手くかわす事も必要じゃ。そなたはグローリアでそういった事も学んで来い！」
「約束を破ったら？」
「ふふふ、そうじゃのう」

ミリアザールが嫌な笑い方をし始めた。その不気味な笑い方に、嫌なものを覚えるジェイク。

「な、なんだよ・・・何考えてるんだよ」
「チビ共の前でお尻を晒して、尻百叩きはどうじゃ？」
「げえっ！？　この歳でか？」

ジェイクが信じられない事を聞いたという顔をする。だがミリアザールは至って本気だった。実際彼女はミランダにもやったことがある。さすがに男の目には晒さなかったが、深緑宮の女官（ただし

口無し限定）を全員集合させてその前でやったのだ。これがミランダが恐れるミリアザールの折檻の一端である。

「どうじゃ、守るか？」
「そ、そりゃあな」
「うむ、約束じゃぞ？　あ、ちなみに嘘やごまかしはきかん。グローリアにはワシの部下も多数もぐりこんどるからな」
「う・・・なんてババアだ」
「何か言ったか！？」

ジェイクがこっそり口の中で呟いた言葉が、ミリアザールに聞こえたらしい。ジェイクは慌ててミリアザールの部屋を逃げるように後にした。そしてその後梔子が明日以降の予定をどうするかをジェイクに伝えに行くのだが、ジェイクが逃げるように部屋を後にした時、物陰に一つの影があったことに彼は気がつかなかった。

「がっこうだって・・・？　いいことをきいたぞ、ふふふ。しりひゃくたたきか・・・ふふふ」

その影もまた不敵な笑みを浮かべた事を、ジェイクは知らない。

＊＊＊

そして時は今に戻る。ジェイクが梔子に指示された通り、朝の7点鐘を合図にグローリアに向かうと、学園でもまた鐘が鳴るところだった。と、学園の入り口に見慣れた顔が2つある。

「ふふふ、きたか」
「ジェイク、遅いわよ！？」
「ルースにネリィ？　なんでここに？」

校門の前に立っていたのはルースとネリィの2人だった。2人ともジェイクに次いで歳の大きい7歳と9歳だが、字の練習を一緒にしていたのだ。ジェイクにとって悔しい事にこの2人はジェイクよりも頭がよく、ジェイクよりも早く字が書けるようになっていた。もっともルースの方はまだ幼い話し口が抜けていない。

その2人がなぜ校門の前にいるのか。

「どうしたんだよ、お前ら」

「私達もグローリアに通うのよ」

「じぇいくが、がっこうなるものにかようときいてね。きのうみりあざーるをおどし・・・いや、たのみこんで、ぼくたちもかようことにしたのさ」

もちろんルースが脅したのである。ルースはどこからかミリアザールがお菓子を買うために、こっそり仕事を抜け出している現場を何度か抑えていた。そのことを梔子の前で告発する準備があると脅したのだ。ばらされたくなかったら自分達も学校に通わせろとして。もちろん費用は全額ミリアザール持ちである。このルースは悪い事ばかりに知恵の回る子どもだった。

だがジェイクはそんな2人を見て、さほど気にした様子もなかった。

「ふーん、そうなのか。じゃあ一緒に通うか！」

「あ、ちなみに私はジェイクと同じ教室らしいわよ！？」

「げ、ネリィは年下なのになぜ！？」

「ふふーんだ。私が優秀だからに決まってるでしょう？」

「ううん、なんか悔しい・・・」

そう言って駆けて行く2人の後ろから、ゆっくりとルースが歩い

ている。

「ふふふ、じぇいく。たのしいのも、いまのうちさ。すぐにあかっぱじをかかせてあげるよ、ふふ、ふふふふ・・・」

ルースが7歳とは思えない様な忍び笑いをしながら、ゆっくりと歩いて行く姿を、周囲の生徒達は変な目で見ているのだった。

＊＊＊

そしてジェイクは指示された通り教官室に向かう。なんとなく校門をくぐった時から予想していたことだが、この学園は無駄に広く豪華だ。廊下はゆうに7人はすれ違えるくらい広いし、中には庭園まである。天井も高く、巨人が歩く事を想定したかのようだ。一方で別の棟に向かう廊下の広さは、この棟の半分もない。また大理石でできたこの教室棟に対して、隣は木造という、何とも統一感に欠けた建物だ。そしてこの建物は授業を行うためだけに作られた棟ということだったが、ジェイクが今まで入ったどの建物よりも大きかった。こういうのがお城と呼ぶのではないかと、ジェイクは思うのだ。

さらに中入って行くと、既に四方は色々な建物に囲まれ、外は一切見えない。まるで一つの町に入り込んだかのような錯覚さえ受ける。実際この学園は最初こそ木造建築の質素な建物だったが、各国の主要人物が通うにつけ、寄付などが自然と集まりこのように増築・改修が繰り返され、統一感の無い迷路のような建物となっていった。

そしてジェイク達は教官室に行くと、大人しそうな眼鏡の男性が対応してくれた。彼がどうもジェイクの担任というものらしい。ルドルと名乗るその教師がとりあえず教室に行こうと言うので、彼に案内されるジェイク達。学園の案内は、休憩時間にでも各教室の生徒代表に任せようということらしい。そしてジェイクとネリィは下

から二番目のクラスに、ルースは一番下のクラスに案内された。
　グローリアは生徒の能力、習熟度によってクラス編成される。おおよそは同じ年の人間で編成されるが、クラスは6階級。便宜上一年生、二年生と呼ばれるが、同じ学年だからといって歳が同じとは限らない。また優秀であれば、課程によっては飛び級することも可能である。エルザなどがいい例だ。
　されにそれぞれの階級が5～6分割されていた。一教室４０人近くいることを考えると、かなり人数は多い。なお上から2番目のクラスにもなると、騎士、あるいはシスターや僧侶として、実地での訓練が開始される。他にも希望者や見込みのある者は特別に選抜される事もある。一番上のクラスは、既に実地に向かう者も多い。ほぼ騎士の予備と考えていいだろう。

「ここが貴方達の教室です、ジェイク、ネリィ」

　ルドルが彼らを教室へと案内した。表札には2―Aと書いてある。教官は2人の顔を見ると、軽く頷いて彼らを教室に誘った。中では教官についてきた彼らを見て、「編入？」「どこの子達だろう？」「噂はなかったよな？」と、既にざわめきが波のように起こっていた。
　だがそのざわめきも、教官が一つ咳払いをすると、すぐに治まる。

「君たちに紹介しよう。彼らはジェイク君とネリィ君だ。今日から君達と共に学ぶ。彼らを歓迎するように！」
「教室を代表して、代表であるデュートヒルデ＝オルフェリア＝リヒテンシュタインが挨拶させていただきますわ。ようこそジェイクさん、ネリィさん。私達はあなた方2人を歓迎いたします」

　ルドルの言葉に応じるように、縦ロールの金髪に青眼の、いかにも貴族の風体をした高級そうなドレスに身を包んだ生徒が、澱みな

く挨拶する。それと同時に教室からは拍手が巻き起こった。ネリィはそれを受けてお辞儀をしたが、ジェイクは素直にはお辞儀をしなかった。なぜなら、そのデュートヒルデという女の子が、いかにも2人を高い所から見下すような目つきをしていたからである。ジェイクには初日から嫌な予感があったのだった。

＊＊＊

そして午前中の授業が終了した後、ジェイクは見事に燃え尽きていた。共通言語を学んだとは言え、基本的にジェイクは無学である。下から二番目のクラスとはいえ、授業内容がわかるはずもない。まるで異世界の言葉を聞いているように彼には思えた。ネリィは顔を輝かせながら聞いていたのできっと理解しているのだろうが、どうして理解ができるのかジェイクには不思議でしょうがなかった。

そんな真っ白になったジェイクの元に、先ほどのデュートヒルデとネリィが訪ねてくる。

「ジェイク、お昼ご飯をデュートヒルデさんが一緒に食べないかって」

「ここには学食がありますが、あのような庶民の食べ物はワタクシの口には合いませんの。執事に命じて特別に日々料理を作らせております。よろしければそちらまでいかが？　貴方達の出自なども気になりますし。この直に急に入学してこられるのですから、さぞかし高名な御家柄なのでしょうね」

デュートヒルデはその縦ロールが自慢なのか、しきりにかき上げて主張している。その仕草もジェイクは気に入らないが、一番気に入らないのは彼女の目だった。デュートヒルデと、その後ろに続く生徒達がジェイク達を値踏みするように見ている。どうやらジェイク達の出自に関して盛大な勘違いをしているようだが、ネリィは気

づいていないのだろう。ネリィは頭こそいいが、多少鈍感な所もあるのだ。だが、その方が幸せかもしれない。

そしてジェイクはデュートヒルデのような人間が一番嫌いだった。高貴な家柄というだけで、あるいは親が金持ちというだけで自分の能力と勘違いして威張り散らす人間。自分の力で成した事ならまだ我慢もできようが、この手の連中がジェイクは大嫌いだった。ミーシアでも高台に住んでいる人間達とは折り合いが悪かった事を彼は思いだす。そういった連中とも上手く折り合えるようにミリアザールが学園にジェイクを入れたわけだが、言われてすぐ実行できるほどジェイクも大人ではなかった。

「いや、俺はいいよ」

「あら、このワタクシがお誘い申し上げているんですのよ？」

「知らないよ。服装を見ればわかるだろうが、俺達は庶民だし、そんな高級な料理は口に合わない。マナーも知らない。学食があるらしいから、それで十分さ。行くぞ、ネリィ！」

「え？」

そのジェイクの態度に呆気にとられておろおろするネリィ。その隣ではデュートヒルデが不機嫌を露わにしている。その顔を見て、取り巻きの一人がジェイクの肩を掴もうとしたが、ジェイクはいち早くその手を払うと、さっさと教室を後にした。

ネリィはどうしようかとまごついていたが、デュートヒルデにぺこりとお辞儀を一つすると、ジェイクの後を追いかけたのだった。

そして教室に取り残される格好になったデュートヒルデ。

「あの子、ワタクシの好意を無碍（むげ）にするとは・・・屈辱ですわ」

デュートヒルデの瞳に、静かに怒りの炎が燃え上がるのだった。

続く

ジェイクの新しい生活、その1～学園生活～（後書き）

次回投稿は、５／６（金）２０：００です。

ジェイクの新しい生活、その2～確執～（前書き）

～あらすじ～

グローリア学園に通うことになったジェイクだが、各国貴族の子女も通う学校では、当然のように発生する事があり・・・？

ジェイクの新しい生活、その2～確執～

ジェイクはネリィと学食なるもので昼ご飯を済ませると、教室に戻って来る。昼食の時にデュートヒルデとご飯を食べなった事でネリィに散々文句を言われたが、ジェイクは全て聞き流していた。ネリィには理由はどう説明しても分からないだろうとジェイクは思っている。自分でもどうしてそこまで依怙地になったかは、よくわからなかった。

そして教室に入る前、ジェイクはネリィに一声かける。

「ネリィ、気にするんじゃないぞ？」

「え、何を？」

だがジェイクは答えず、扉を開ける。そこには、彼にとっては予想通りの展開が待ち構えていた。教室の半分近い聖都が、自分達の方を一斉に白い目で見たのだ。ネリィはその光景に驚き息を飲んだが、ジェイクは一歩も引かず驚きもせず、ゆっくりと彼らを見回してその顔を覚えた。わざわざジェイクが学園を探検しながら時間を潰し、次の授業直前に帰ってきたのは誰が自分の敵となるかを見定めるためである。

「（予想通りの展開だな・・・まあミーシアとおんなじか）」

ミーシアではおそらくはリサも実態をよく知らない事であったが、ジェイク達は子どもだけで暮らしているということで、スラムの様な地区にあってさえ、さらに差別されていた。不良に絡まれることなどざらだったし、その辺の貴族の子どもが面白がって自分達に犬をけしかけた事もある。その度ジェイクは子ども達の矢面に立ち、彼らを守ってきたのだ。ネリィは女の子だからなのかすぐに感情的

になるし、上手く立ち回れない。なんとか相談ができたのは、せいぜいルースくらいのものだった。ルースは歳の割には頭が非常によく回るのだ。ジェイクもよく助けられている。大抵は迷惑な方向に頭が回るのも、知っている。

さらにジェイクは人間心理をよくわかっていた。集団があれば必ず弱い者を見つけ、それを攻撃するのが人間だということを。そして、誰も攻撃される側には回りたくないから、心ならずも周囲は攻撃する側に従うという事を。

「（先手を打つか？　いや、揉め事はやめろってミリアザールに言われているし、アルベルトなら『騎士なら意味のない暴力を振るわない』とか言うんだろうな・・・でもここでミリアザールの名前を先に出すのも癪だな。どうしよう？）」

ジェイクはその事を考えて唸っていたが、その様子を見ていたのはもう一人。

「なんだなんだ、なかなかおもしろそうなてんかいだな・・・？」

「ルース君、もう次の授業が始まっちゃうよ？」

ジェイクの後をこっそりつけていたのはルース。ルースは自分の教室の代表を後ろに従えている。その眼鏡の気弱そうな代表はすっかり怯えており、手を揉み絞るように合わせている。彼は9歳なのでルースよりは2つ上なのだが、既にルースの子分の様な扱いだった。

「ルース君ってば」

「うるさいな、こっちはいそがしいんだ。もどるならかってにしろ。ただし」

「ただし？」

「おまえがとなりのるなちゃんのことがすきだと、がくえんじゅうにいいふらしてやる」
「ひ、ひえっ！？」

その一言に、気の弱い少年は飛び上がるように驚いた。

「な、なぜそのことを」
「このルースさまは、なんでもおみとおしだ。あまりぼくをなめるなよ？　まあ、みぶんちがいのこいも、ほどほどにしておくんだな」
「ひ、ひぃ！」

少年はもう涙目になっている。彼はさる貧乏貴族の出なのだが、頭だけはかなりいい。それに魔術の腕も中々だが、隣にいるルナという子に恋したのがまずかった。ルースが得た情報では、ルナという子はどこかの国の王家につらなる血筋の者らしい。身分違いの片思いも甚だしいのだが、べた惚れなのは誰が見ても明らかだった。何せ今日学園に来たルースでさえ気がつくのだ。もっとも人間観察をするために、わざと一番後ろの席を陣取ったのはルースの作戦だ。

そこでまずは自分の思い通りになる人間を作ろうとしたルースに目をつけられたのが、哀れなこの少年というわけだ。そして、そんな少年が後ろでカタカタと震えているのをほっといて、ルースは考え事をしていた。

「（ふむ。がくえんにはいって、じぇいくをさんざんからかってあそぼうとおもったが、なんだかくもゆきがあやしいぞ？　これは、じぇいくにかたいれしておくほうがいいか？　とりあえずは、あのたてろーるの、いかにもきぞくなおんなのよわみをにぎるか。よし）」

ルースが決心をすると、後ろの少年を振り向く。純粋な少年は、

どうして自分がルナを好きなことがばれたのかわからず、恐怖におびえている。授業中に２０秒に一回は彼がルナの方を見ているので、誰でも気づくことなのだが。

「よし・・・きめた」

「な、何を？」

「おまえをかんぜんに、ぼくのげぼくとしてこきつかってやろう。はっはっは」

「ひ、ひいいいい」

既に授業が近いため人気がまばらになり始めた廊下に、ルースの高笑いと、哀れな少年の悲鳴が響くのだった。

＊＊＊

午後の授業でもジェイクは悶々としていたが、とりあえずその日は何事もなく無事に終了したのだった。そして学園が終われば、彼は騎士団に直行することになる。念のためネリィとルースを深緑宮まで送り届け、彼は踵を返して外周部の騎士団の所に走って行く。

「申し訳ありません、遅れました！」

「ああ、今日から学校らしいな。話は聞いているから、訓練に入れ」

「はいっ！」

いつも世話になっている外周部の隊長に挨拶すると、ジェイクは急いで鎖帷子を身に纏い、練習用の簡易鎧を装着し、具足と面体をつけ、木剣を腰に差し外に駆け足で集合する。その間わずか３０秒。鎧の着脱程度一瞬で出来なければならないと、彼は初めて来た時に延々と鎧の着脱を仕込まれた。

そして彼は練習が遅れているので、慌てて取り返すべく走り始め

る。ジェイクの鎧は、練習用かつ少年用に軽く作っているとはいえ、フル装備で７ｋｇはある鎧である。それを着たままの状態で、練習場の壁際を１０周する。一周５００ｍ程度だから、５ｋｍはある計算だ。

その途中には丸太が地面に刺してあり、その周囲には布が巻きつけてある。丸太があるたびそれを木剣で５回叩き、また走る事を繰り返す。実戦で走りながら戦うことを想定した、持久力を上げるための訓練である。

それが終わると、鎧を脱いで休む間もなく基本的な騎士剣の型を教わる。基本を学ぶなら外周部の隊長クラスに聞いた方がいいとのアルベルトの提案で、ジェイクはアルネリア教の騎士剣を教わっている。

その後盾を用いた型や、槍や弓の扱いなども教わり、騎士たちと手合わせを経てジェイクの外周部での鍛錬は終わる。その後夕飯を外周部の騎士達と一緒に済ませると、彼はまた走って深緑宮に移動し、今度はアルベルトからラファティの訓練を受ける。手が空いていない時は、代わりにロクサーヌやベリアーチェ、時には梔子やミリアザールが相手を務める。こちらはもはや手合わせというよりは、ほとんど一方的にやられるだけだったかもしれない。

だがジェイクの立派な所は、一切の手抜きもなく弱音も吐かないということだ。それだけリサとの約束を大切にしているのだろう。時に訓練が終わってそのまま力尽き、その場で寝る事もある。そのような生活をもうずっと続けているわけだが、その甲斐あってか、ジェイクは木剣限定なら外周部の騎士とはそこそこ渡り合うようになって来ていた。これは実に驚異的な出来事なのだが、ジェイクの目標は遥か高く、一向に満足する様子も偉ぶる様子も見せなかった。

これがジェイクの毎日だったが、今日からはこれに勉強が加わる。眠い目をこすりながら勉強をするジェイクに、勉強を教える係はミリアザールが務めるが、まあ仕事をさぼるいい口実であったと言い変えてもいい。

そうしてジェイクの新しい一日は終わりを迎えたのだった。

＊＊＊

その翌日。当然と言えば当然だが、教室のジェイクを見る目は冷たかった。まだ全員が白い目を向けていないだけましだが、自分を差別するのは貴族、金持ち。そうでないのは平民かとジェイクは予想をつける。自分に白い目を向ける人間は、教室の奥側である左半分に固まっており、右半分とは交流がない。あながち予想も間違いじゃないのかとジェイクは考え、とりあえずネリィと共に右半分の席に座る。

すると、ジェイクの肩を後ろの少年が叩いた。

「ようお前。あのデュートヒルデとやり合うとは、肝が据わってるな？」

「誰だそれ？　そのデュー・・・なんとか」

「はっ、こりゃ大したもんだな。昨日お前が昼飯を断った貴族の娘だよ」

「ああん、あのくるくる頭か」

「くるくる・・・」

ジェイクに声をかけた少年はその言葉に虚をつかれたようだったが、余程面白かったのか、思わず噴き出した。

「ぷっ、くっくく・・・お前面白いこと言うなぁ？」

「見たまま言っただけだ。そのデューなんとかは舌を噛みそうだからな」

「確かにな！　おっと、それはそうと俺はラスカルだ、よろしくな」

「俺はジェイク」

2人は握手を交わす。

「で、あのくるくるって何者なんだ？」

「デュートヒルデはここから東の王国、ブルームウィンドの宰相の一人娘さ。母親は王族から降嫁してきた人だし、ブルームウィンドといえば東ではかなり大きな国だ。そこの一人娘ともなれば、当然我儘放題で周りは皆言うこと聞くし、威張り散らしたくもなるわな」

「ふーん」

だがジェイクの返事は、自分でも思ったよりそっけないものだった。とりあえずデュートヒルデが貴族でありさえすれば、没落貴族だろうが王様だろうが、全部同じだとジェイクは思っている。庶民が手を出せば、それで一貫の終わり。たとえどんなに貴族が悪かろうと、責任は庶民になすりつけられるとジェイクは思っていた。

それにミリアザールとの約束もあるし、どのみちジェイクは女の子に手を上げるようなことは決してしないと誓っていたのだ。

そしてその日は何も無かった。ジェイクにしてみれば肩すかしを受けたような印象だったが、貴族達の態度はジェイクを無視する方向に向かっていた。その方がジェイクとしても都合がいい。正直、日々の鍛錬と勉強で限界を迎える彼にとって、貴族などという厄介なものに関わるゆとりも余力もなかったのだ。

学園の授業も少しずつわかるようになり、鍛錬も問題なくこなせている。ラスカルという友達もできた。ここまではまあ順調とも言える生活だったかもしれない。

そんなある日の事。

ジェイクは忘れ物を取りに教室に戻るところだった。教室にはもはや誰もいないはずだったが、その中で一人泣いている生徒がいる。おかっぱ頭の女の子で、確か庶民出身だったはずだ。ラスカルが「ちょっとかわいいよな、あの子」と言っていたので覚えている。確

か名前はロッテだったか。
　ジェイクは話しかけるかどうしようか悩んだのだが、はたとその子と目があってしまった。女の子は一瞬びっくりしたが、またその場でしくしくと泣きだしてしまった。

「（これで放っておいたら男が廃(すた)るよな・・・）」

　ジェイクは頭をぼりぼりと書きながら、今日の訓練は遅刻になることを覚悟しながら、ロッテに話しかける。

「えーと・・・確かロッテだっけ？　どうしたんだ」

　ジェイクは可能な限り優しく話しかけたつもりだったが、ロッテが泣きやむことはなかった。ジェイクはどうしたものかと悩んだが、とりあえずロッテが泣きやまないことには話が始まらない。どうしたものかとジェイクは俯くロッテの下から覗きこむようにしていたが、彼にもこんな経験はないので頭の中が混乱している。とりあえず涙が止まればいいのかと思い、手でそっと涙を拭ってやる。子ども達が泣いた時にはジェイクはよくそしてやったのだ。するとロッテがびくりとして、驚いたようにジェイクの方を見た。

「あ・・・」
「泣くなよ、俺でよかったら相談に乗るからさぁ。とりあえず何があったか話してみないか？」
「・・・」
「あ、俺はジェイクな。知ってるんだっけ？　まあいいや。あ、そうだ。話をするのは始めてかもしれないけど、いつもロッテの事をかわいいよなって話していてさ・・・」

　その一言にロッテが真っ赤になる。ジェイクとしても女の子を泣

きやませるすべなど知らないので、とりあえず適当に何か話せばいいのかと普段より口数が多かったのだが、他人が聞けば非常に誤解を受けそうな内容だった。ジェイクも多少動転していたのか、「ラスカルと」が抜けている。

「・・・で、何の話だっけ?」

ジェイクが困った顔になったので、ロッテは思わず彼の顔を見て可笑しくなった。

「・・・うふふ」

「ふう、やっと笑った。そっちの顔の方がいいや」

ジェイクのその言葉に、またしてもロッテが真っ赤になる。ジェイクは「その方が話しやすい」という意味で言ったのだが、ロッテはそう受け取らなかったかもしれない。

そしてロッテがおずおずと自分が学園に持ってきているバッグを取り出した。

続く

ジェイクの新しい生活、その2～確執～（後書き）

次回投稿は、５／７（土）１７：００です。

ジェイクの新しい生活、その3～怒り～（前書き）

～あらすじ～

貴族達と平民の中は思ったより深刻だった。ジェイクの取る態度は、果たして？

ジェイクの新しい生活、その3～怒り～

「これ・・・」
「・・・なんだこりゃ、破れているじゃないか」

ジェイクが見た所、バッグは一部が破れ、手下げの部分は片方が取れていた。だがどう見ても自然に取れたものではない。明らかに誰かが悪意を持ってやったのだ。

「誰にやられたんだ？」
「・・・わからない」
「わからないってことはないだろう」

ジェイクが少しイラついたように言う。だがロッテは首を横に振るだけだった。

「本当は知っているけど、言ってはだめなの。だって私はここに特別措置で通う身分の生徒だし、問題を起こしたらすぐに退学にされちゃう」

特別措置というのは、学園に通う時に学資を免除してもらう代わりに、卒業後はアルネリア教会のために一定年月を奉仕するという制度である。庶民はこの制度を用いてグローリア学園に通うものが多い。むしろ女性ならば願ったりかなったりの制度である。ミランダが言うように、アルネリア教会のシスターが世の中で人気なのはこの制度のせいもある。

そしてロッテの態度に、犯人は貴族の誰かなのだろうと見当をつけるジェイク。元を辿ればデュートヒルデには違いないだろうが。

「なるほど、あいつらか」
「・・・何を考えてるの？」

ジェイクの剣幕に、ロッテが不安そうな顔をする。

「悪い事は悪い。そうあいつらに教えてやる」
「どうするの？」
「明日、全員の前で言ってやるさ。こんな陰険なことをするなんて、許せないだろ？」
「やめてよ！」

ロッテが大きな声で反論したので、ジェイクはちょっと驚いた。

「な、なんでだよ」
「そんなことしたらもっとひどくなるわ」
「やってみなくちゃわからないだろ？」
「私だって、ただ黙っていただけじゃないのよう」

ロッテがまためそめそと泣きだす。

「最初は反論したのよ。でも余計ひどくなるばかりで・・・黙ってさえいれば、思い出したようにこういうことされるだけだから」
「じゃあなんで今日は泣いてるんだよ」

ジェイクがロッテをなだめるように言う。

「だって、これは母さんが私が学園に通うためにって作ってくれたものだから」
「・・・なんだって？」
「ほら」

確かに、バッグの裏に「愛するロッテへ」と刺繍が入っている。

「だから母さんになんて言ったらいいかって。私が学園でこんな目に合っているって聞いたら、絶対に心配かけちゃうわ」

「・・・あったまきた」

ジェイクの瞳に怒りの炎がともる。もはや貴族とか庶民とかはジェイクには関係なかった。絶対に責任を追及してやると、ジェイクは心に決めたのだった。

「と、その前に」

「？」

「そのバッグを直さないとな」

ジェイクが自分の荷物から針と糸と布を取り出す。今日はたまたま自分の破けた衣服を学園の空き時間で縫い付けようと、裁縫道具一式を持ち込んでいたのだった。

「直せるの？」

「まあ裏から布地を充てることになるけど、色が違うから不細工だな。どうしようか・・・そうだ！」

ジェイクがパチンと指を鳴らし、ハサミを取り出す。

「このかばん、ちょっと切っていいか？」

「え、どうするの？」

「それはお楽しみだ！」

ジェイクはそういうと、ハサミで器用にバッグを切り始める。そ

の様子を心配そうにロッテは見守っていたが、ややあってジェイクが完成させたバッグを見ると思わず声を上げた。

「かわいい！」

「リルカの花の形をにしてみたんだけどな・・・どうかな？」

ジェイクはかばんの破れた部分を花の形に切り抜き、その裏に布を当てたのだ。元のカバンがこげ茶色なので、明るい色の布地は花に見える。稚拙な出来かもしれなかったが、ロッテにはジェイクの気遣いが何より嬉しかった。

「あ、でもこの歳になってこれは幼稚かな・・・」

「ううん、嬉しい！　私リルカの花大好きだし、大切にするね」

ロッテが自分のバッグを抱きしめるようにしていた。そのバッグをもう一度貸すようにロッテに促し、取っ手の部分を直し始めるジェイク。

「よし、もうすぐだからな」

「うん」

隣でジェイクがバッグを縫う様子を見つめるロッテの目に、先ほどとは少し違う感情が宿っていることにジェイクは気が付いていなかった。

＊＊＊

次の日の昼休みに入る直前の事、まだ教室で全員が出て行く前に、ジェイクがいち早く教室の前に出ると、黒板をダン！　と叩いた。

「おい！　この中に昨日、ロッテのバッグを破いた奴がいるだろう？　どいつだ！？」

昨日ロッテと話しあった結果、やはりこのままではいけないとジェイクがロッテを説得したのだ。断られるかとジェイクは思ったが、ロッテは不思議な事に頷くのみだった。なぜ態度が急に変化したのかジェイクにはわからず不思議に思ったが、気にしない事にした。

そしてジェイクのその言葉に全員が一瞬顔を見合わせるが、真っ先に口を開いたのはデュートヒルデである。

「まあ、ジェイクさん。証拠はあるのかしら？」

「証拠はない。だけど、ロッテはずっと同じような嫌がらせを受けていると言っていた」

「ロッテさんが嘘を言っている可能性は？」

「何！？」

その言葉にジェイクがかっとなる。だがデュートヒルデはあくまで冷ややかに対応した。

「その可能性だってあるでしょう？　まずは証拠を見せなさいな。明確な根拠も無しに他人を疑うなど言語道断。そんな態度では、あなたはこの教室の全員を敵に回すことになりましてよ？」

ジェイクが見回すと、貴族の子弟達は薄く笑いながら白い目でこちらをずっと見ていた。庶民の生徒は関わりたくないと思ったのか、全員ジェイクから目をそらす。

そしてなおもデュートヒルデは続けた。

「謝るなら今のうちでしてよ、ジェイクさん？」

「なんで俺が謝らなきゃならない？」

「貴族であるワタクシ達を始めとする、この教室の人間全員を新参者のあなたが犯人扱いしたことに対するお詫びですわ。そんな事もわからないなんて、所詮庶民の人間は頭の中身が少々弱いようですわね」

クスクス、と貴族たちが笑う。ジェイクはまんまと貴族達の思うつぼにはまったことを感じながらも、怒りでどうにかなりそうな自分を必死で抑えていた。ミーシアにいた頃のジェイクなら、有無を言わさず殴りかかっているだろう。

「（くそっ！　我慢だ、我慢・・・俺が馬鹿にされるのはいい。そんなのはいくらでも耐えれるし、我慢は得意だ。それにアルベルトも言ってたじゃないか。騎士として得た力は、守りたいものを守るために使うものだって。俺の力はリサや皆のためのものだ。自分のために振るっちゃだめだ）」

ジェイクはじっと笑われるのを耐えながら、下を向いていた。そんな態度を、ジェイクに対して優位に立ったと確信したのか、デュートヒルデがさらに言葉を浴びせかける。

「どうしても謝らないつもりなら、ワタクシ達としてもそれ相応の対処というものがありますわ。規律をを乱す存在には、世の中の仕組みというものをこのワタクシ達が教えてさしあげましょう」

そう言い残し、デュートヒルデ達は嘲笑しながら教室を出て行ったのだった。

＊＊＊

数日して。ジェイクの思いとは裏腹に、やはりといえばやはりの

事だが、貴族たちの嫌がらせはジェイクに向かうようになった。既にジェイクが孤児出身だということも知っているのだろう。これでジェイクがどこかの貴族出身だと、こんな子ども同士の諍いから国同士のいがみ合いに発展しかねないので、そのあたりは貴族たちも心得ている。デュートヒルデに対して生意気な態度を取ったジェイクが何もされなかったのは、ジェイクの出自を彼らが調べていたからに他ならない。彼らもどうやらジェイクが聖騎士団に出入りしていることは知っていたが、まさか深緑宮のミリアザールの庇護下にあることまではわからなかったのだろう。そのため、孤児出身の子が特別措置で騎士団の世話でもするために出入りしているのだろうという見当をつけたのだ。

だがいきなり表面化させるほど、彼らも愚かではない。いや、余計に陰湿だという方が正しいかもしれない。どこまでやれば反撃が来るのか、あるいは誰かが出てくるのか。その境を見極めるために、ジェイクに対する嫌がらせは少しずつ、少しずつ度を増していった。

ジェイクの荷物入れに泥が入っていたり、あるいは黒板に悪口が書き込んであったり。ロッカーの荷物が外に投げ散らかされていたり。すれ違う時に意味もなく突き飛ばされる事もあった。

ネリィはその様子を当然のように心配したし、それはラスカルもロッテも同じだった。今や他の面々は完全にジェイクを無視し、あるいは関わるのを避けているかのようだった。誰だって貴族の矛先を向けられたくはないだろう。ジェイクは意気地の無い奴らだと思う一方で、やむを得ない事だろうとも自分を納得させていた。

だがそこまでされても、ジェイクはまだ我慢ができた。少なくとも、今日までは。

そして――

「きゃあっ！」

教室の入り口から悲鳴が上がった。ジェイクとネリィはいつものようにつれだって学校に来たのだが、先に教室に入ろうとしたネリィが、教室の戸を開けると上から水の入ったバケツが落ちてきたのだ。当然のようにずぶ濡れになり、その場に呆然と立ち尽くすネリィ。下級生の教室に行くためそこまではいつも付いてくるルースも、いつもの眠たげな目を見開いていた。

「ネリィ！」

ジェイクは呆然とするネリィの手を引いて、教官室に行く。既にルドルがこちらに来る途中の場面にちょうど出くわしたが、びしょ濡れのネリィを見るなり手を取って救護室に連れて行った。ジェイクには先に教室に戻っているようにルドルは言い渡したが、ジェイクとルースはその場に立ちつくしていた。ルースがジェイクの後ろにいるわけだが、後ろからでもジェイクの拳が凄まじい力で握りしめられているのがよくわかる。

大抵のことを怖がらないルースだが、リサのお仕置きと本気で怒ったジェイクだけは怖かった。それに比べれば、夜一人でトイレに行ったり、暗がりのお化けなど屁でもないとルースは思うのだ。比べる対象がまだ子どもじみているのは、なんともルースもまだ子どもである。

そしてジェイクの顔を見るまでもなく、ルースは彼が本気で怒っているのがよくわかった。

「じぇいく、どうする？」

「決まってる」

ルースはややおそるおそる尋ねた。その言葉にジェイクが即答する。

「俺に手を出すのはいい。だが家族に手を出すのは許せねぇ」
「ぼくもどうかんさ。あいつらにはほうふくがひつようだね」

ルースが待ってましたといわんばかりの顔をする。リサがいない間、ジェイク達にちょっかいを出してくる連中は、ジェイクとルースで撃退していたのだ。リサがどこまで気が付いていたかは彼らは知らないが、リサに余計な心配をかけまいと彼らなりに必死で努力していたのだ。そしてルースは悪だくみをするのが大好きだった。悪ガキどもを罠にはめる瞬間、彼はえも言われぬ充実感を覚えるのだ。

だが振り向いたジェイクの表情は複雑だった。

「でもどうしたらいい？　うかつに手をだすわけにはいかないし・・・」
「てをだすなってことだよね？　てをださなくても、やつらがじばくするようにすればいいのさ」
「どうやって？」
「こんなこともあろうかと、げぼくをつかってすでにしたしらべはやってある。みみをかして」

ルースがひそひそと計画をジェイクに耳打ちするのだった。

続く

ジェイクの新しい生活、その3～怒り～（後書き）

次回投稿は5／8（日）15：00です。

ジェイクの新しい生活、その４～仕返し～（前書き）

～あらすじ～

貴族達の陰険な手がジェイクの周囲にまで及んだ時、彼の怒りは限界を超えた。そして、彼がとる行動は・・・？

ジェイクの新しい生活、その4～仕返し～

ルースと相談した後、ジェイクは何事もなかったかのように教室に帰った。まだ授業は始まっていなったが、そこにラスカルとロッテが話しかけてくる。

「おい、ネリィは大丈夫か？」
「ああ、問題ないよ」
「でもずぶ寝れに・・・」

ロッテが心配そうに自分の服の胸元をつかむ。いつもはやや軽薄なラスカルも、真剣な面持ちだ。

「あいつら・・・やるにも限度ってものがあるぞ！」

ラスカルがきっと貴族たちの方を睨むが、ジェイクが止めた。

「やめとけよ、ラスカル。こんどはお前まで狙われるぞ」
「だけどよ！」
「心配するな。俺もこのままでは終わらせない」

そしてラスカルは、ジェイクの瞳に確かな怒りの炎が宿っていることに気がついた。だが逆に心配にもなる。ジェイクが早まったことをするのではないかと思ったのだ。いくら貴族が悪くても、庶民が貴族に手を出すことはあってはならないのが大陸の東では暗黙の了解である。庶民には、決闘すら申し込む権利が無い事がほとんどなのだ。

「どうするんだよ？」

「合理的に復讐する。午後は剣技の訓練だったよな？」
「ああ、上級生が監督するやつだな」
「よし・・・」

ジェイクが貴族の男達をそっと見る。全体のリーダーはデュートヒルデだが、男のリーダー的存在は、ブルンズという体の一際大きい少年だった。貴族としてはそこまで位が高くないようだが、腕っ節が強そうだ。その分頭はそこまでよくないのか、ジェイクよりも歳は一つ上なのに、まだこのクラスに留まっているのだ。

その情報をどこで手に入れたのかと言うと、全てルースの下調べである。ルースはこの学園に来るなり、自分の級友とジェイクの級友の全員の経歴を調べ上げ、それぞれの弱みを探していたのだ。さすがはリサが仕込んだ子どもとも言えるが、これはルース本人の性向とも合っていた。またスラムの様な下町で生き延びるために身につけた知恵とも言えるかもしれない。

そのルースいわく、

「おんなはぼくにまかせろ。せいしんてきに、てっていてきにおいつめてやる。だからじぇいくはおとこをやるんだ」

だ、そうだ。ルースがどうやるのかはジェイクはあえて聞かなかったが、ルースはやると言ったらやる人間だった。それは物心着いた時からそうであり、出来ないことははっきり出来ないと言うのだ。その点ではルースは非常に信頼できる。もっとも悪ふざけの方向がたまにこっちに向かってくるのは、ジェイクとしても勘弁してほしかった事は幾度となくあったのは、記憶に鮮明だった。

そしてジェイクはルースの入れ知恵と、自分の考えたやり方で反撃するつもりだった。とかく群れるグループは、頭を潰せば脆い。ジェイクは午後の授業に備えて、ゆっくりと怒りと力を溜めこんでいくのだった。

＊＊＊

そして午後の授業。

４～６年のクラスの人間が監督しての、武術の練習である。武器を扱う戦士系の生徒は実践を交えながらの指導を上級生から受け、魔術士系統の生徒は護身術を教わる。上級生としても、ここで指導の実力を問われるため必死である。既に現場に出る事もある彼らにとって、授業といえど将来の戦力、あるいは自分の部下となりうる者を指導しているようなものである。自然、指導にも熱が入る。

「オラァ！　なんだ、そのへっぴり腰は！？　やる気あんのか、貴様ぁ！」

その中でも一際柄の悪い声を発するのが、全体の責任者のミルトレである。彼は既に６年の中でも実力者として名を馳せた存在である。今までに３度の実践を経験し、孤児出身であるにもかかわらず、彼は卒業後に神殿騎士団への配属が内定している強者である。今回の授業もやり方、監督を含め教官から一任されている。その彼が怒声を張り上げている。

「そこのひょろひょろ！　ダンス踊りに来てんじゃねぇんだぞ！？　もっと重心は低くしろ！」

ミルトレが２年の肩を押さえて重心を下げさせる。彼は口こそ荒く、指導も厳しいが決して理不尽な暴力は振るわない。その分、愛のムチを存分に振るいはする。

そのミルトレの厳しい訓練に、１～３年生は悲鳴を上げている。監督・指導役の上級生達は苦笑いをしながら互いを見ているが、ミ

ルトレには意見すればするほど逆効果となるので、誰も反論しなかった。その訓練に一人淡々と付いていくジェイク。日々アルベルトやラファティに鍛えられる彼にとっては、朝飯前の内容である。
そして基本的なウォーミングアップとトレーニング、剣技指導が終わったところでミルトレが声を張り上げる。

「よおし、２０秒休んだら二人一組になって実戦形式で練習だ。打ち込みありだが、防具をつけるのを忘れるな!?　もちろん木剣には布を巻き付け、威力をさらに抑えるように！　繰り返す、これは訓練だからな。相手、ましてや仲間を故意に傷つける行為は俺が絶対に許さん！」

ミルトレの叫び声に全員が息を切らせながらも、きびきびと動く。２０秒の休みなど、無きに等しかった。そしてジェイクは狙い通り、ブルンズに話しかける。

「おい」
「あん？」
「俺と練習しないか？」
「なんで俺がお前みたいな庶民のガキと手合わせしないといけないんだ？」

ブルンズは小馬鹿にしたような目でジェイクを見ている。体もジェイクより頭一つ大きいブルンズは、完全にジェイクを見下ろす格好になっている。ブルンズの周りにいる連中もにやにやしながらジェイクを見ていた。

「おいおい、このブルンズは剣技だけなら3年生の授業でやれるんだぞ？　しかも3年生の中でもかなり強いんだ」
「そうそう、お前みたいな貧相な奴じゃ赤っ恥かくのがオチだぜ？」

「そういうことだ。お前みたいな根性無しじゃ俺には勝てん。今日は庶民のお前に、貴族の俺が情けをかけてやろう」
「「「ハハハハハ！」」」

勝ち誇ったブルンズの言葉に周囲の取り巻きが声を立てるが、ジェイクは一切動じなかった。逆に彼に一歩踏み出してこう答える。

「怖いんだろ？」
「何！？」
「使えない木偶の坊ほど、よく吼えるからな。おつむも剣の技量も底辺だってバレるのが怖いわけだ？」

ジェイクは全力で嫌みを込めて言い放った。その言葉にブルンズが怒ったのか、顔を真っ赤にする。

「てめぇ！」
「おっと、やるなら剣だ。殴り合いでも俺が勝つけど、それじゃ回りに止められちまうからな」

ジェイクが皮肉をたっぷり込めて剣をくるくると回しながら、指先でブルンズにこっちに来いと挑発する。その態度に、傍目にもわかる程耳まで真っ赤に染めたブルンズが木剣を握りしめてジェイクの後に続く。

「お前、無事に帰れると思うなよ！？」
「御託はいいからかかってきな、豚野郎」

大柄だが少し太り気味なブルンズはその言葉に一層腹を立て、ミルトレが始めという声を出すと同時に凄まじい剣幕でジェイクに襲いかかって来る。さすがに大柄なブルンズの剣は迫力があると周囲

はだれしも思ったが、日々アルベルトと打ち合いをするジェイクにとっては、無駄な動作の多い子どもだましにすぎない。アルベルトほどの圧力もなければ、ラファティほどの精巧さもないブルンズの剣は、それこそ目を瞑っていても避けれるほどのレベルなのだ。

ジェイクはブルンズの剣を難なくひらひらとかわしながら、ブルンズを疲れさせている。傍目にはジェイクが際どく避けているように見えたかもしれないが、ジェイクに余裕があることに彼らの打ち合いを見ていた6年生の面々は気が付き始めていた。ブルンズは自分の剣がジェイクに全く当たらないので、かなり疲労の色が濃くなってきている。

「ハア・・・ハア・・・」

「もう終わりか？　やっぱりデブに体力はないな」

「う、うるせえ・・・貴様こそ逃げ回るばかりの脳無しが・・・ハア・・・」

ブルンズの足元がいまいちおぼつかない。怒りに我を忘れて、1分近くがむしゃらに剣を振り回したのだ。無酸素でそのような動きを一気にすれば、疲れて当たり前だった。しかもブルンズは口が卑しいのか、いつも昼飯を腹いっぱいになるまで食べるのだ。一度だけ、食堂で他の仲間の3倍は食べる彼をジェイクは見たことがある。

だいぶブルンズが疲れてきたのを見て、ジェイクが剣を構えなおす。

「よし、じゃあそろそろやるか」

「ハア・・・こいよ、クソチビ」

「・・・やっぱやーめた。お前がバタバタするのをもうちょっと見てたいもんな」

「てめえっ！」

ジェイクが一度構えた剣を下げるのを見て、とことんまで馬鹿にされたと思ったブルンズが上段に構えて突進してくる。その瞬間、ジェイクは一気にブルンズの懐に飛び込むと、布を巻いていない木剣の柄を、ブルンズのみぞおちに思い切りめり込ませたのだった。

虚を突かれたのと、突進に対するカウンターになったせいで、ブルンズがその場に昼ご飯を逆流させながら崩れ落ちる。周囲からはどよめきが起こるが、その理由は様々だったろう。低学年の者はブルンズが負けたことに驚き、高学年の者はジェイクの余りの飛び込みの速さに驚いたのだ。たとえ上級生でも反応できたかどうかの、ジェイクの飛び込みの速度だった。

膝から崩れ落ちて胃の中の物を吐き続けるブルンズの元にしゃがみ込み、ジェイクがそっと耳打ちする。

「俺に絡むのはいい。だが二度と俺の家族や仲間に手を出すな。次はこの程度じゃ済まさない」

それだけ告げるとブルンズの返事を聞くまでもなく、ジェイクは彼に背を向けて離れ始める。だが、ブルンズは一通り吐き終えると、傍に落とした木剣の布をやおら外し始め、ふらつく足に喝を入れてジェイクに向かって突進した。腹の痛みよりも、ふらつく足よりも、ブルンズの頭の中はジェイクに対する復讐心で一杯だった。

「てめぇ！　ぶっ殺す！！」

背後から突進する気配に、ジェイクが剣を握り直す。が、ジェイクが振り向くと同時に、ブルンズは横殴りにされ吹っ飛んだ。何が起こったのか、ジェイクも当のブルンズもわからず、ぽかんとしている。

ブルンズを殴りつけたのはミルトレだった。そのミルトレは額に青筋を浮かべ、その場に仁王立ちしている。

「貴様！　今何と言った!?」
「は？」

ブルンズが痛む頬を押さえながら、何を聞かれたのかわからないといった顔で呆然としている。そしてその場に座ったままのブルンズをミルトレは胸倉を掴んで引き立たせると、そのままブルンズの体が浮き上がる程の力で締め上げる。

「く、苦し・・・」
「貴様は今、あの小僧に向かって『ぶっ殺す』と言ったのか!?答えろ!」

ブルンズがたまらず首を小さく縦に振ると、ミルトレはブルンズを地面に叩きつけた。ブルンズが地面でもんどりうつ。

「ぐあっ！　な・・・何をするんだ？」
「それはこっちのセリフだ小僧！　貴様は今、剣の布を外してあの小僧の背後から襲いかかろうとしたんだぞ？　騎士として、もっとも恥ずべき行為だとは思わんのか！　まして、将来自分が背を預ける仲間になるかもしれない者に対して『殺す』だと!?　どの口でそれをほざく!」
「だが、あいつは平民だ!」

ブルンズが吠えた。

「平民が貴族に手を上げるなど、間違ってもあってはならないことだ！　平民は大人しく貴族の言う事を聞いていればいいんだ!」
「俺は奴隷出身だ!!」

ミルトレが吼える。その言葉に、ブルンズを含める全員がはっとした。

続く

ジェイクの新しい生活、その４～仕返し～（後書き）

次回投稿は、５／９（月）１２：００です。

ジェイクの新しい生活、その5～味方～（前書き）

～あらすじ～

怒りが頂点に達したジェイクは、授業で貴族を叩きのめす。その結果は・・・？

ジェイクの新しい生活、その5～味方～

「孤児だった俺は奴隷商人に売られ、８歳まで奴隷として生活していた。新しい奴隷が来たからと、買われた家を追い出された所にアルネリア教会に拾われた。そして文字も読めないところから始め、7年余りで現在の場所に辿り着いた。その課程における競争で、貴族と争う事もあったろう。また現在の立場に置いて、貴族に指示を出す事もある。だがこのグローリアにおいて、貴族や平民など関係ない！　努力によって勝ち取ったものが全てだ！　貴様は俺の人生のみならず、グローリアそのものも否定するつもりか！？」

「そ、それは・・・」

「それに6年の半数近くが庶民出身だ！　貴様の言葉は、ここにいる多くの者を侮辱する言葉だぞ？　それを知った上で、もう一度さっきの言葉を言ってみろ！」

ブルンズが回りを見回すと、多くの上級生が殺気を孕んだ目で彼を見ていた。その光景に、さしものブルンズもごくりと生唾を飲み込む。

「生死をかけた戦場で、貴族も平民も違いなどない！　だいたい貴様は・・・」

「その辺にしておいてあげなよ、ミルトレ」

ミルトレの言葉を遮るように、静かな声が割って入った。金の髪を型口まで垂らし、いかにも上品そうな、美少年が彼らの元に歩み寄った。

「マリオン」

「マ、マリオン様・・・」

「おや、君は僕を知っているのかな？」

ブルンズが反応したのを見て、マリオンと呼ばれた美少年が首をかしげる。ブルンズは姿勢を正して立ち上がると、さらに身分の高い者に対する礼として、胸に手を当てながら返答する。

「はい、もちろんであります！　祖国オルメキスの王太子様を知らない者などいますでしょうか！」

「ああ、なるほど。君は我が国の貴族なんだね。家名は？」

「ランドブルッフであります、王子！」

ブルンズはかちこちに緊張しながらも、テキパキと答えた。自分が胃から逆流させた物で服が汚れているので、いまいち滑稽な格好であるが、本人はそれどころではないようだ。何せ自国の王太子が目の前にいるのである。ブルンズにとって、将来的には剣を捧げる主君になるのだ。

マリオンもまたブルンズの汚れた格好などは気にせずに、ふむふむと頷いている。

「なるほど、ランドブルッフ子爵の跡取りか。一応ここに来ているとの情報は聞いていたが、君だったとはね」

「はっ、覚えていただければ光栄であります！」

「ああ、忘れないと思うよ？　なんせ君には今から懲罰房に行ってもらうから」

「はあ？」

ブルンズが間の抜けた返事をする。顔の方も抜けていたが。

「それはそうだろう。上官であるミルトレの言うことも聞かず、訓練中に仲間に斬りかかった挙句、上官その他不特定多数を侮辱した。

これは軍隊なら極刑でもおかしくない」
「そ、そんな・・・」
ブルンズが可哀想なくらい青ざめて行く。目は泳ぎ、嫌な汗をだらだらとかいている。自分の国の王子に極と刑言われれば当然の事かもしれない。マリオンはさらに続ける。
「そうは言ってもここは軍隊じゃないし、極刑はさすがにね。だからその代わりに懲罰房での生活で代償しようと思うのだが、ミルトレの意見は？」
「俺はそれでいいと思う。異論のある者は！？」
ミルトレの言葉に、誰も上級生は反論を唱えない。
「よし、ならば決まりだな。どのくらいの期間がいいだろうか？」
「そうだねぇ・・・クルーダスはどう思う？」
クルーダスと呼ばれた少年が前に出る。こちらは金髪だが、なんとも精悍な顔立ちをしていた。その面持ちに、ジェイクは既視感を覚えるのだった。誰かに似ているような・・・だがそんなジェイクの思考は一瞬である。クルーダスが静かだが、はっきりとした声で話し始めたのだ。
「そうだな、俺としては１０日程度が妥当だと思う」
「ふむ、俺は１４日くらいでもいいと思うのだがな」
「２人とも優しいね。こういった輩は１月くらいは放り込んでもいいと思うけどな。僕もこんな野蛮人が将来僕に剣を捧げると思うとぞっとしないから、今のうちに性根を叩き直して欲しいんだけどな」
マリオンがにこにこしながら酷な事を言ったので、ミルトレもさ

すがに「ひどいな」という顔をしたが、自分の国の人間のことであれば、マリオンに分があるだろう。

ちなみに懲罰房とは、石畳のベッドが一つあるだけの、何も無い部屋で生活することである。日当たりも良くないし、窓には鉄格子がはまっており、戸も鉄でできており、なんとも閉塞感を与える作りになっている。さらには懲罰房に入った者は、朝は食堂の手伝いから始まり、授業が無い時は教官の補佐。放課後は罰則としての厳しい訓練と、その後は便所掃除、食堂の仕込みの手伝い、校舎の掃除など、休む暇もないほど働かされる。実際休日は与えられない。懲罰房に入れば、貴族も平民も関係ない扱いを受けることになるのだ。むろん、これは万一マリオンの様な王族が入ることになっても適応される、グローリアにおける鉄の掟である。

「よし、ならば1月だな」

「そ、そんなひどい！　マリオン様！」

縋(すが)るようなめつきで助けを求めるブルンズに、マリオンがとどめを刺す。

「あれ、僕に口答えするの？　なら3月だね」

「な、な、な・・・」

「・・・もう連れて行ってやるか。段々こいつが哀れになってきた」

さしものミルトレも呆れたのか、ブルンズを連れて懲罰房に歩いていく。

「4年生、3人ほど来い！　こいつに懲罰房での暮らし方を躾けてやれ！」

「「了解しました！」」

「すまないがクルーダス、後を頼めるか？　一応、事の顛末を教官

に報告に行く」
「いいだろう、引き受けた」
「すまんな」

そうしてミルトレは呆然自失となっているブルンズの背中を小突きながら、訓練場から姿を消していった。そしてクルーダスが訓練に戻るように声をかけると、徐々にではあるが、それまでの授業風景に戻って行った。予想外の事態にジェイクもまた少し呆気にとられていると、そこにマリオンとクルーダスが歩いてくる。

「私の国の者が迷惑をかけたね？」
「いえ、そんなことは・・・ありません」
「隠さなくていいよ」

不満がありながらも、それをマリオンに言うまいと気遣うジェイクに、マリオンが優しく話しかける。

「実は彼らの横暴ぶりは他の学年でも話題になっていてね。僕もさっきは知らないふりをしたが、実は彼の事は知っていたのさ。ミルトレとも、機会がさえあれば一度懲罰房にでも送り込んで、きっちりとここの厳しさを教えておかないと駄目だなと話していたんだ。今回は君がやろうがやるまいが、どのみち彼は懲罰房行きになっただろう。君がやってくれて手間が省けたけどね。それにしてもランドブルッフ子爵は立派な人なんだけどな。どうしてその息子があああなのか」
「はあ・・・で、『彼ら』ということは」

ジェイクのその鋭い指摘に、マリオンがにやっとする。

「デュートヒルデのお嬢様さ。彼女もまた我儘し放題だ。昼休みに

自分の屋敷の執事や女中を学園に連れ込んで、お昼会をやるんだよ？　勝手に学園の中庭を占拠してね。教官達も何度か注意したのだが、直る気配が一向にない。さりとて一国の宰相の娘ともなれば迂闊な事も言えず、結構皆困っているのさ。成績自体は優秀だし、一層タチが悪い。立場からすれば僕の様な身分の者しか対等に話せないだろうけど、それはそれで余計な外交摩擦が生じそうだしね」

「・・・俺が何とかしますよ」

「ほう」

その言葉にクルーダスが少し感心した風な言葉を吐いた。

「なぜだ？」

「俺の家族にちょっかい出したんで、そのままにはしときません。だからといって女の子に暴力を使う気はありませんが・・・ああいうのは、自分をちやほやする人間がいなくなったら大人しくなるんじゃないかと思います。とにかく俺達のクラスの出来事なんで、できれば俺達で終わらせたいかなと」

「ふぅん」

今度はマリオンが感心したように頷いた。

「なるほど。自分達のクラスの中で収めれば、あのお嬢様も面子はまだそこまで潰れないもんね。もし上級生が忠告すれば、あのお嬢様の面子はまるでなくなるだろうと思ってどうしようか悩んでいたんだが、君がいるなら任せてみようかな」

「上手くいくとは限らない・・・限りませんけど」

ジェイクは王族などと話すのは初めてだったので、言葉遣いがどうにも上手くいかなくてもじもじしていた。その様子を見て、マリオンが楽しそうに笑う。

「君、面白いねぇ。いいんだよ、ここでは王子のマリオンではなく、ただの騎士見習いのマリオンだから。僕もその方が気楽でいい」
「じゃあマリオンさんでいいですか？」
「もちろんいいとも」

マリオンが優しく微笑んだので、ジェイクは少し緊張が解けた。どうやらマリオンはジェイクが知っているような、嫌な貴族ではないようだ。このようにしっかりした人物もいるのだなと、ジェイクは初めて知った。

そこにクルーダスが口を挟む。

「あの少年には罰を与えたが、お前にも罰は必要だ。わかるな？」
「はい。防護用の布を巻いていない木剣の柄で、級友である彼の腹を殴りましたから。覚悟はできています」
「うむ、いいだろう。ならば俺がいいと言うまで、この訓練上の壁際を走っていろ」
「はい」

ジェイクは何の反論もせず、一礼してそのまま走り出す。ジェイクが走り出したのを見ると、マリオンが苦笑した。

「君も厳しいねぇ。事情も全部知っているはずだし、兄さん達にそれとなく彼を見るように言われているんだろ？」
「ああ。だがここでジェイクだけに何の罰もなくては、ジェイクと先ほどの少年の間に禍根を残すだろう。もちろん他の者もジェイクに好印象を抱くまい。悪いのはあの少年で、そのことは彼にも周囲にもしっかり認識させなければならないが、ここでジェイク一人に肩入れするわけにもいかないさ」
「ふふ、さすがラザール家の三男は言うことが違う。そこまで考え

ているとはね」

マリオンが楽しそうにクルーダスを見る。クルーダスは何も表情を変えず、淡々としていた。

「だが彼の剣技は群を抜いている。もはや4年でも太刀打ちできるかどうかは怪しいんじゃないかな？」

「そうだな。同学年では思い切り剣を振るえないだろうし、5年以上の訓練に参加させるか」

「ああ、僕も彼と戦ってみたいよ。久しぶりに背筋にぞくっときたからね。君やミルトレと練習する時の様な感じさ」

「ふ、王子のくせに変な奴だな、マリオンは」

「僕は剣が好きなんだよ。強い人間も、懸命に努力する人間もね。彼の様な人間が自分の騎士にいればと思うわけさ。決して戦いが好きというわけじゃないんだよ？」

クルーダスの言葉に、マリオンは苦笑いをしながら言い訳をした。そして、2人は訓練場の壁際を黙々と走るジェイクを、それぞれの思いで見つめるのだった。

続く

ジェイクの新しい生活、その5～味方～（後書き）

次回投稿は、５／１０（火）１２：００です。

エルザの帰還（前書き）

～あらすじ～

ジェイクが学園で奮戦をしている頃、深緑宮にはある人物が帰還して・・・？

エルザの帰還

ジェイクが学園で彼なりの奮戦をしている頃、深緑宮にはある人物が帰還していた。

「エルザとイライザ、帰還いたしました」
「おう、御苦労じゃったのう」

エルザとイライザは深緑宮内のいるミリアザールの執務室に通される。彼女の前にうず高く積まれた書類の山を見て、エルザも思わずうんざりするようにため息をついた。いつもなら深緑宮に帰還してなんのかのと理由をつけてふらふらしているミリアザールが真昼間から仕事をしている理由がよくわかる。

「すごい書類の山ですね」
「うむ。この前の襲撃で破損した部分の工事、情報操作関係の書類はさすがに処理したが、今度は新しい防衛網の立案や、神殿騎士団の戦力図の確認、またアルネリア教会全体の収入関係も一度洗っておこうと思ってな。聖都アルネリアの４００周年祭の延期についても各国に連絡をしておいたから、次はどうするだの、どういう理由だの、各国関係者やギルドからも問い合わせが多くてな。連日大司教どもと会議だわい」
「真実を公表するわけにはまいりませんもんのね」

まさかアルネリア教会が襲撃されたから延期にしているなどとは、口が裂けても言えるはずがない。アルネリア教会が強大な戦力を保有しているからと思われているからこそ、内政干渉一歩手前の行動をしても容認され、世間への影響力を保っていられるのである。こ

れがもし揺らぐような事があれば、アルネリア教の今後の立場は微妙なものとなるだろう。色々な言い訳や情報操作も苦しい所だ。

「ですが、いずれ真実は明るみに出ると思いますが？」
「わかっとる。その時の展開もちゃんと考えとるわ、心配するな」
「では４００周年祭は中止に？」
「いや、それがアルネリアの市長から要請が来てな。今度の祭りは市民も楽しみにしていたし、アルネリアにとっても数少ない収益が確実に落ちる行事だから、ぜひともやってくれとな。まあもっともな事じゃし、ワシとしても各国の代表には会っておきたい。だから来年の秋にでもやることにしよう。秋なら各地の特産品が揃っておるだろうからな、収益も多きかろ？　・・・じゅるり」
「ミリアザール様、よだれ、よだれ」
「む、いかん！　今から腹が減ってきたわ！！」

各地の特産品が目の前に並ぶ光景を想像したのか、ミリアザールの口から涎が垂れていた。この人はどこまで本気なのだろうかと、エルザは訝しむ。
さて。それはさておき、自分の要件を済まさねばならないとエルザは考える。

「ミリアザール様、今回の件ですが」
「うむ、聞こうか」

ミリアザールが真剣な表情になる。エルザは工房で起こったことを正直に話した。アノーマリーの事、剣帝ティタニアの事、サイレンスと呼ばれる男の事、工房が１０個以上ある事、多くの部下を失った事、ミナールがさらに追撃している事。それら一つ一つをミリアザールは真剣な面持ちで聞いていた。そしてエルザが一通りの事を話し終える。

「ふむ、アノーマリー、サイレンスに関しては心当たりがないが、ティタニアならば当時の噂は覚えておる」
「城を斬ったとかいう類いのものでしょうか」
「うむ、まあ他にもあるがな。もっとも奴を直接見て生きておる者がまずおらんし、戦ったところを見た者はもちろんおらん。だから眉唾ものの噂が多かったが、ワシが想像するに信憑性の高い噂が一つある」
「と、申しますと？」

ミリアザールが茶を啜る。

「一人で大魔王の軍勢を全滅させたとかいうあれじゃ」
「！　まさか！？」
「いや、そのまさかなのじゃよ。それにその噂の根拠はあってな。梓！」
「はい」

その声と共に、音もなくエルザの背後から現れる梓。

「お主たちより少し前に、ミランダに護衛としてつけていた梓が帰還してな、なんと英雄王グラハムとミランダ達が一戦やらかしたと言うんじゃ」
「は？　グラハムは伝説上の人物では？」
「それが生きておったらしい」

ミリアザールは渋い顔をする。

「しかもあの時、ドゥームとかいう小僧を回収に来てワシに取引を持ちかけた小僧だよ。どうりでワシが奴と会った時どこか知ってい

るような感じがしたのと、奴が馴れ馴れしかったはずじゃ。ワシも何度かグラハムとは面識があるからな」
「なんと」
「まあグラハムが生きておるくらいじゃから、ティタニアが生きていたとして何の不思議もない。そしてグラハムも大魔王を殺したとか言ったらしい。ならばティタニアもできるじゃろう」
「それはどういう・・・」
「単体の戦闘においてティタニアに敵う者は、おそらくこの地上におらん」

ミリアザールのその言葉に、エルザが絶句した。まさかここまではっきりとミリアザールが言い放つとは思っていなかったのだ

「ば、馬鹿な・・・そんなことがあるわけ」
「これは推測じゃがな。ティタニアに関しては姿は誰も見たことが無いくせに、噂だけはまことしやかにいつも広がった。やれ城を斬ったの、魔王を１００体斬ったの、大魔王の軍勢を滅ぼしたのとな。今では伝説と語られるが、当時を生きたワシとしては、それらが全て事実なら色々納得がいくのだよ」
「例えば？」
「実は当時６体いた大魔王、どうなったか知っておるか？」
「いえ。そういえば・・・」

史実では、大戦期の大魔王は滅びたと言われている。だがよく考えれば、大魔王と呼ばれる者がいた、とだけ歴史書には記してあるものの、大魔王の名前や顛末までは記されていなかった。歴史書でも強調されるのは人間達がその時に一致団結して戦ったということだけで、詳しい戦いの内容や、英雄たちの事はあまり触れられていない。
大戦期は、協力する事の素晴らしさを強調するための引き合いと

して出されることが多いため、内容までは気にかけなかったし、あまりに小国が乱立していたせいで、詳しい資料が残っていなかったと歴史家達は口を揃えて言うのだ。

「そういえば知りません」

「それはそうじゃろう。当時大魔王の案件に関わった者は、決して真実を口にしない事を互いに誓ったからな」

「それはいったいどういうことですか？」

ミリアザールが自分の机を離れ、エルザとイライザが座るソファーの前に腰かける。

「口外せぬと誓えるか？」

「ご命令とあらば」

「うむ。実は当時の大魔王の去就は不明なのだ」

「なんですって！？」

エルザは驚いた。大魔王達が全滅したからこそ大戦期は終わったと、そう思っていたのだが。

「正確には、１体は倒した。だがその１体を倒す時に、実に多くの犠牲を払ったのだ。そして各国は大魔王の討伐に及び腰になっていった。誰も死にたくはなかったからな。じゃが、気がつけば大魔王は１体、２体といなくなっていった」

「・・・」

「そして最初の１体を倒してから４体が行方不明となり、残り１体の討伐において、各国が協力するにやっといたった。そして我々は出陣した。小国が多かったが、総勢１０万の連合軍じゃった」

「・・・結果は？」

エルザはなんとなく話の先が読めたが、おそるおそる聞いてみた。
「結果だけで言うなら相討ちじゃな」
「相討ち？」
「いや、正確には我々の負けじゃろう。半数以上が戦死し、加えてその時の大魔王はのうのうと生きておる」
「は！？　いや、しかし・・・」

大魔王が生きていると言うなら、なぜ人間の世界に干渉してこないのか。エルザは納得がいかなかった。

「我々と・・・いや、あの戦いに最後まで加わった者達と、その大魔王は盟約を結んだ。『極力互いに干渉禁止』とな。我々はその大魔王に大ダメージを与えたが、どうやっても殺しきれなんだ。ワシも戦ったが、どうやっても倒せず、まさに奴は不死身だとしか言いようがなかった。そこで我々は奴らと取引したのだ。『ある程度は好きにさせてやるから、この領地で大人しく暮らせ』とな。向うもかなり弱っていたからその条件を受け入れ、そして我々はその者をとある土地に封印した」
「その大魔王の名前を覗っても？」
「・・・『スピアーズの４姉妹』という」

エルザが唾を飲み込む音が聞こえてくるようだった。ミリアザールが協力した状態でも倒す事のできなかった大魔王が、まだのうのうとこの世に生きている。その事実を聞いただけでも、なんと自分の立っている世界が危うい平和に包まれている事かと、エルザは不安になってきた。

「じゃが肝心なのはそこではない」

ミリアザールがぴしゃりと言った言葉に、エルザははっとする。

「問題なのは、その大魔王級の連中を倒したのが誰か、ということじゃ」

「その一人がティタニアだと？」

「噂が真実ならな。そして一人はグラハムらしい事を本人が語ったそうじゃ。ならばその仲間のティタニアとて・・・想像にはやすかろう？」

「それは・・・そうですね」

「噂が仮に全て真実だったとすると、ティタニアを倒すのは一苦労どころの話ではない。何せあの大魔王達を倒す程の手練（てだれ）。それが２人もおる。しかも・・・」

ミリアザールがふと思いだす。あの時、グラハムの隣にいた少女。あちらの方がより危険な印象を受けたのだが、それは自分の気のせいだろうか、と。それに、もし奴らの仲間で全員グラハム級ならば？　ミリアザールは、自分一人ではどうともできないだろうと思ってしまう。

エルザとミリアザールが沈黙に包まれる一方で、イライザは自分がティタニアに抱いた感想を思い出す。剣士としての理想形、完成形。まさに最強と呼ぶにふさわしい佇まいと威圧感。

「（私の印象は間違いではなかった。あれが、あれこそが剣士として到達しうる頂点・・・私は、どこまであの高みに近づけるだろうか？　アルベルトは？　他の剣士は？　だが敵なら斬らねばならない。せめて１０、いや５合でもあの剣士と打ちあえる実力が欲しい）」

イライザが自分のイメージを高めていく。既に彼女の中は、ティタニアと自分が戦う図が描かれていた。その傍で、ミリアザールと

エルザが再び口を開く。

「しかし問題になるのは、いかにして倒すか、ではないでしょうか？」

「お主の言う通りじゃ。じゃが何にしても情報が少ない。ワシですら姿を見たことが無いんじゃぞ？」

「それでも何かしらヒントはあるのでは？　当時あった噂とか」

「噂・・・そういえば」

ミリアザールが眉間に指を当てて思い出している。

「本当かどうか知らんかったが、奴は自分で『私は武器を奉じる一族だ』と言っていたと、どこぞの誰かが言っておったな」

「武器を奉じる？　誰に、何のために？」

「それは知らん。当時は他の事に手を取られて気にもかけんかったが、そう考えれば思い当たる節がないでもない」

ミリアザールが栂子に指示して、本棚から古めかしい本を取り出させた。それをエルザとイライザは覗きこむ。

続く

エルザの帰還（後書き）

次回投稿は、５／１１（水）１２：００です。

ジェイクの新しい生活、その6～失意～（前書き）

～あらすじ～

エルザとミリアザールが深刻な相談をする中、ルースの計画がグローリアでは着々と進行して・・・？

ジェイクの新しい生活、その6～失意～

「これは？」

「昔魔王達に人間が立ち向かうため、エルフやドワーフ、巨人からも様々な武器を与えてもらっておる。エルフは魔術装飾を施し、ドワーフは武器を鍛え、巨人は様々な金属を提供した。これはその一覧じゃ。まあ伝説の武具一覧と言ったところか」

「見事な武器の数々ですね」

本は古くところどころ読めなかったが、数々の武器の説明と制作者、またその図が載せられている。振るった者も同様だ。誰に授けられ、その後どうなったかも書かれている。イライザは本の絵からも伝わって来る武器の素晴らしさに感動している。そして頁をめくりながら、エルザはあることに気がついた。

「ほとんどの武器が所在不明・・・？」

「そうじゃ。各地で魔王を倒すのに貢献した武具が、使用者もろとも次々と行方不明になっていった。まあワシとて世の中の全てを知っておるわけではなし、余りに強い武器が世の中に出回れば、それだけで争いの元となる。そういう意味では武器がなくなるもの別に構わんと思っていたが、よく考えれば使い手までいなくなっておるのはおかしい。もし、それらの武器全てをティタニアが集めていたらどうだろうか？」

ミリアザールがとんでもない事を言い始めた。史上最強の剣士と、伝説の武器の数々の組み合わせ。どうやっても勝てるものではない。

「そ、それが本当だとすれば、もはや打つ手がないのでは？」

「いや、逆じゃな」

ミリアザールがニヤリとする。

「ワシの推測が当たっておれば、少なくとも向こうの行動が読めるようになる。そうすれば罠を張って、万全の状態で奴を迎え撃てるではないか。いかな最強剣士とて、所詮は剣士。自ら魔術で何重にも張り巡らされた罠に飛び込んで、無事でおるわけがあるまいて」

「とすると、残るこれらの武具を囮に使って？」

エルザが本の何箇所かを指し示し、ミリアザールが頷く。

「うむ、早速各国に呼び掛けておこう。もしこれが当たっておれば、ティタニアを待ち伏せすることが可能じゃ」

「なるほど」

「どうやら朗報もあった様じゃな。お主が呼んだ増援の者達には気の毒な事じゃったが、そちらにはワシがしっかり対応しておこう。エルザよ、必要以上に気に病むでないぞ？」

「はい」

エルザが頭をたれる。これでティタニアを倒すことができれば、多少はあの者達の犠牲も報われはすまいかと思うのだ。あとはアノーマリーとかいうあの男。奴だけは自分の手で倒すと、エルザは決心を固めていた。さらにミリアザールは言葉をつなぐ。

「朗報は他にもある。ミナールの使い魔から連絡があった」

「大司教は何と？」

「既に２つの工房を発見したそうじゃ」

「おお！」

その言葉にエルザとイライザが思わず顔を見合わせて喜んだ。

「ミナールは引き続き奴らの工房を捜索するとある。これで奴らの拠点が全て判明したら、一気にこれを叩く。そのための戦力を集めるために、現在様々な方面に手を打っておる所じゃ。その時にはエルザとイライザ、お主達もまた戦いに行ってもらうことになる」
「異論はありません」
「御意にございます」

エルザとイライザが同時に礼をする。エルザはその時のことを想像して拳を握りしめ、イライザもまた剣の鍛錬をさらに行う決意を固めていた。

そしてエルザは面を上げると、ミナールからの伝言を思い出す。これに関しては、ミリアザールにどう切り出すかをエルザも悩んでいた。また、ミナール自身もそう言ったからである。

「ミリアザール様、実はあまり良くない知らせが」
「なんじゃ？　まだ報告があるのか」
「はい、ミナール様からの伝言です。ありのままを正確に伝えます。それでミリアザール様には自分の意図するところが全てわかると、ミナール様はおっしゃっていました」
「うん？　言ってみろ」

ミリアザールは不思議そうな顔をして、ミナールの伝言を聞こうとする。

「では。『ローマンズランドに工場を発見』とのことです」

その一言にミリアザールの目が見開かれ、顔から血の気が引いて行くのをエルザは見た。ミリアザールがこのような表情をするのを、エルザは始めて見たのだ。

「・・・『工房』ではなく、『工場』とな？　確かか？」
「はい、私も聞き返しましたから」
「その事に関して、奴は何か言っておったか？」
「ミナール様の私見も一応は伺っております。また私も差し出がましくも、一応考えることはありました。ですが、これはミリアザール様の意見を先に伺ってから判断した方がいいだろうとのことで」
「なるほど・・・確かにその通りじゃ。すまんが皆、一度席をはずしてくれるか？　少し一人で考えたい」
「わかりました」

そうして、エルザ、イライザ、梓が席をはずす。梔子が自分はどうすべきかと目でミリアザールに訴えたが、ミリアザールが小さく頷くのを見ると、梔子もまた席をはずした。そして執務室に一人残されたミリアザール。

「一大事・・・じゃな。ワシの見立てはまだ甘かったと言うのか・・・」

ミリアザールの中をめまぐるしく様々な出来事が駆け廻る。そして陰鬱に浸る彼女の心境と合わせて、まるで彼女の思考は漆黒の底なし沼に沈んで行くかのようだった。

＊＊＊

ミリアザールの悩みとは別に、ジェイクの教室ではデュートヒルデがこれまた頭を悩ませていた。

「一体どういうことですの・・・？」

自分と昼食を共にする者が一人、また一人と減って行く。ブルンズは懲罰房暮らしだと聞いたし、デュートヒルデはまるで衣服の糸を一本一本抜かれて行くかのような感覚を味わっていた。

ジェイクがブルンズをあっという間に倒したのを見て、ジェイクに逆らおうという男子の貴族はいなくなった。もともと彼らは自分達では何もしようとしていなかったし、必ずしもデュートヒルデに心から従っている者ばかりではなかったのだ。

中にはむしろ反発すら覚えている者が多かったと言った方が正しいかもしれない。貴族はそれぞれが領地や屋敷では指示する立場の人間である。そう考えれば、たとえ身分が上とはいえ自分の国の貴族でもないデュートヒルデに威張り散らされるのが面白くない、と考える人間がほとんどだったと言っても過言ではあるまい。ただ、大国の宰相令嬢であるデュートヒルデに面と向かって逆らう勇気が無かっただけなのだ。貴族の社会というものは、ある意味では庶民よりも全く自由がきかないものだったともいえる。

そしてジェイクが強いというのもそうだが、このグローリアでは貴族も庶民もないということを、どの生徒も痛感したのだった。上級生達は平等で、後輩に等しく厳しく、時に優しく接する。これがグローリアの伝統であり、上級生が先の授業で真に伝えたかった内容である。グローリアにはその性質上、貴族の身分制度をそのまま持ち込む生徒が多いので、早いうちにこの事を授業で上級生が教え込むのだ。教官達が行うより生徒が行った方が効果があるだろうということで、教官が席をはずしていたという裏事情もある。本当は他に色々上級生達も仕掛けを考えていたのだが、ジェイクのおかげで手間が省けたと全員が思っていた。

そして女子の貴族はというと、こちらはルースが押さえていた。女子も先の授業の成り行きは見ていたが、男子ほど心に響くものはなかったのか、あるいは女子にとっては男子以上にデュートヒルデが怖いのか、彼女達はまだ多くがデュートヒルデの言いなりだった。

デュートヒルデも彼女達を操る時は自分が何をするわけでもなく、ただ「ジェイクが邪魔だ」「あの少年がいなければいいのに」と呟くだけである。そして回りがその事に賛同すると、デュートヒルデはころりと機嫌が良くなる。それを繰り返すうち、「ジェイクのカバンがなくなればいいのに」「頭の上から水をかぶればいいんだ」などと呟かれると、周囲の人間達はそうしないといけないような気になるのだ。

むろんこれはデュートヒルデもある程度考えていやっていることであり、自分が手を汚さず、かつ証拠も残さない方法を考えた結果である。事実だけ見れば、デュートヒルデは指示すらしておらず、問い詰められても「あの子が勝手にやった事」で済まされるだろう。もちろん、そこに見捨てられた人間がデュートヒルデの事をどう思うかなどという視点は一切入っていない。

ルースはこれを逆手に取った。そのような実態でデュートヒルデが動いている事を知ったルースは、身分の高いデュートヒルデを直接攻撃するのではなく、孤立するように仕向けようと画策したのだ。デュートヒルデは信望があるわけではない。ならば、彼女に従うことが、利益にならないことを全員に教え込めばいいのだとルースは考えた。そのためにはジェイクの級友を全員分調べ上げる必要があり、ルースといえどもこれはさすがに骨が折れたが、彼はあらゆる手段を用いて達成したのだ。そして現在は実行に移しているところである。

さしものルースも女子を痛めつけることはしない。またこちらから危害を加えるのもどうかと思うし、脅迫すれば証拠が残る。ではどうするのか？

ある女子は、2人でジェイクの荷物置き場を水浸しにしてやろうと考えていた。そしてジェイクの荷物入れを開けた途端、彼女達の顔面に黒い何かが飛びついて来た。

「何これ・・・」
「・・・いやあ！　虫、虫だわ！」
「きゃあああ！」

ルースがジェイクの荷物入れを開けた瞬間に、虫が飛び出すような仕掛けを施しておいたのである。時には馬の糞、たっぷり汚れた雑巾が飛び出す事もあり、女子生徒達をパニックに陥れた。

要は、ジェイクやネリィに被害が及びそうな時だけ発動する罠を仕掛けたのである。ルースはこういう罠を仕掛けるのが大得意だったし、これなら女子達も嫌がって行動しなくなるだろうと踏んだのだ。現に女子達は男子のように派手に動くタイプではないし、元が何と言っても貴族のお嬢様なのだ。怖い目を一度見れば、もう二度とやらないという者が多かったし、危険を冒してまで徹底的にジェイクを追い詰める理由は彼女達にはありはしない。

さらに、ネリィ当人は明るくてとても良い人柄だったし、貴族達としても好印象を持っていないわけでもなかったのだ。

そういったわけで、徐々にデュートヒルデに従う女子の貴族は減っていった。いまやデュートヒルデが何か言おうとするたび、全員がそそくさと周りから逃げて行くのである。デュートヒルデは最初こそいらついて不満をあらわにしたが、それでも誰も相手にしてくれないことを感じとると、今度は諦め、そして寂しさから恐怖へと、徐々に感情が変化していったのだった。

「（どうしてこんなことになるの？　庶民がこのワタクシに逆らうなんて、あってはならない事態ですわ！　それにしても、このクラスの貴族はなんて不甲斐ないのかしら？　このままでは庶民にワタクシ達貴族が敗北したことになるというのに。でも、でも・・・もしずっとこのままだったら、ワタクシはどうしたらいいの？　話し相手もおらず、卒業するまでずっとこのまま一人で？　そんな馬鹿な事・・・）」

デュートヒルデがここ何日か、家でも学校でも考えている事はその事だけだった。そしてデュートヒルデがそんな様子になっているのをそっと観察していたルースは、とどめを刺すべく計画を練る。

授業が終わり、デュートヒルデは隣のリンダに声をかける。リンダはこのグローリアに来た時からの付き合いである。さる国の侯爵家の娘で、唯一自分と釣り合う友達、少なくともデュートヒルデはそう考えていた。またここの生徒の多くはグローリアが提供する寄宿舎だが、彼女達はアルネリアに別荘をわざわざしつらえさせるほどの数少ない大貴族の出身だったので、いつも帰りは一緒なのだ。だが、いつものように校門で待つ馬車まで一緒に帰ろうとしたデュートヒルデが声をかけると、

「申し訳ありませんわ、ヒルデ。あまり慣れ慣れしくしないで下さらない？　貴女と同類に見られたら、こちらまで迷惑ですの」

「・・・え？」

「失礼致します」

その言葉はあまりに唐突で、デュートヒルデはその場にしばし立ちつくしていた。思考はまとまらず、地面がぐるぐると回るかのようだ。彼女は夕暮れの、しかも曇天の教室に一人取り残され、そこで何を考えるわけでもなく、ただ自分の世界が崩壊していく様を、まるで圧力に耐えかねた湖の氷に徐々にひびが入っていくかのような感覚として味わっていた。そして何をどうやったのか記憶にはないが、デュートヒルデはいつの間にか校門の付近に立っていた。だが、いつも終業１／４刻以上前からそこにいるはずの馬車と、自分の執事が見当たらない。

「・・・馬車は？」

「馬車は来ないよ」

デュートヒルデの後ろからルースが現れた。彼女はぼんやりとした意識で、自分より小さな少年を見る。視界がぼやけているのは、雨が降り始めたからかもしれない。

「どうして・・・？」

「さあ？　君に愛想つかしたのかもね？　まあもう少し待ってみたら・・・って、どこ行くのさ！？」

ルースにとっても意外だったのだが、余程デュートヒルデはショックだったのか、そのまま雨の中をルースが止めるのも聞かず、自らの家に向かって歩き出したのだった。

続く

ジェイクの新しい生活、その6～失意～（後書き）

次回投稿は、５／１２（木）１２：００です

ジェイクの新しい生活、その7～反省～（前書き）

～あらすじ～

ルースの策は功を奏したかに見えたが・・・？

ジェイクの新しい生活、その7～反省～

＊＊＊

「やりすぎたのかな・・・」

ルースは一人深緑宮で悩んでいた。さすがにあの展開はルースにも意外だったのだ。デュートヒルデの困った顔でも拝めればと思いあの場に姿を現したのだが、まさか彼女が雨の中一人で帰るなどという行動に出るとは。

実はリンダが先のように酷薄な言葉を放ったのは、ルースの入れ知恵である。リンダは比較的まともに話せる人間だと調査したルースは、もはやデュートヒルデに味方する仲間がいない事を伝え、このまま彼女が横柄な態度を続けるようなら誰にとってもいい事にならないと説いたのだ。そしてお灸を据える手伝いをしてくれないかと、リンダに頼んだのだった。

また馬車がいなかったのも、ルースが馬の車輪に細工をして、車輪が上手く回らないように仕向けたのだ。案の定デュートヒルデを迎えに来る途中で馬車の走りがおかしい事に気がついた執事は、馬車を連れて修理屋へ向かったのだった。その一部始終を見ていたルースは、校門前で馬車の様子がおかしいことに気が付いて、どうしたものかと思案に暮れる執事に近づき、

「ぼくが、そのおじょうさまにでんごんをつたえましょう」

とぬけぬけと申し出たのだ。人の良い執事は、馬車を直せる店まで親切に教えてくれたルースをしっかり信じ込み、そのまま修理店に向かったのだった。なお、その修理店は本日が休業だということまでルースは調べているのである。

ルースにしてみれば完璧な計画のつもりだったが、色々穴があったことは否めない。いかに頭が回るとて、所詮は子どもが考える事。だが念のため他の案もルースは用意してあったのだが、まさかこの作戦がここまではまるとは思わなかったので、少々拍子抜けしたくらいだった。

しかしここまではまると、達成感というより、さすがに後ろめたさが残る。多少失敗して程良いくらいになるはずだったのに、これではやりすぎにしかルースは感じられなかった。

「うーむ、どうしようか。だけど、これでもあのたてろーるにはきいてないこともかんがえられるし・・・まあ結果を見てから考えるか」

そしてその翌日、デュートヒルデは登校してこなかった。ルースは、やはりあれだけの高飛車女でも人並みにショックは受けるんだなと納得したが、2日経っても、3日経ってもデュートヒルデは登校してこない。そして4日目に登校してこなかった事で、ルースは事態が自分の予想外の方向に進み過ぎたことに不安を覚え、昼休みにジェイクの元へと相談に行った。

「じぇいく、ちょっといいかな？」

「ああ、俺もルースに聞きたい事があった。あのくるくるが学園に来ない。リンダとかいう貴族は落ち込んでるし、何をやったんだお前は？」

「じつは・・・」

ルースが自分のやった事を話す。その言葉をじっと聞いていたジェイクだったが、やがてゆっくりと口を開いた。

「結果としてやり過ぎだな、それは」

「・・・ごめんなさい」

ルースが目に見えてしょんぼりとした。ジェイクもまた大きくため息をつく。

「でも、俺にも計画に乗った責任はあるからな。ルース、お前またあのくるくるが復帰したら、いじめは起きると思うか？」

ルースが少し考え込むように腕組みをし、やがて首を横に振った。

「さすがにもうしないんじゃないかな？　だって、あのぶるんずはしばらくかえってこないし、おんなのこももうやらないでしょ？それに、こういうのはそのばのくうきがだいじだから、まがあけばあきちゃって、だれもやらないよ」

「飽きる、か・・・なるほどな」

ジェイクはなんとなく納得したようだった。ブルンズがいなくなってからは、貴族の男とも少しずつだが話せるようになってきている。デュートヒルデがいない今、他の平民と貴族も少しずつ話すようになってきているのだ。チームを組んで行うような授業もあるから、進行上話さざるをえないのではあるが、元々それが普通なのかもしれない。

「で、どうするの？」

「何が？」

ルースの言葉の真意を図りかねるジェイク。

「あのくるくるだよ。ほうっておくの？」

「・・・俺はくるくるを追い出すつもりはない。それじゃ何の解決

にもならないと思ってる。むしろ、なぜネリィにあんなことまでしたのか、ちゃんと話したいと思っている」

ジェイクは静かに言った。

「それにあのリンダって子も可哀想だ。ずっと『自分のせいだ』って落ち込んでるんだからな。だからリンダを連れて、今日の学校が終わったらくるくるの家に行ってみるよ。駄目か？」

「いや、じぇいくがそういうのなら。じたいはすでに、ぼくにもはあくできないからね」

ルースが両手を上げて降参のポーズをとった。

「ルースは来ないのか？」

「ぼくはいかない。だって、わるいことをしたとはおもってないから」

ルースが平然と答える。

「おいおい、多少やりすぎだとは思ってるんだろ？」

「でもここであやまったら、こんどはこっちがわるものだよ。あやまるとしたら、むこうがさきさ。ぼくはしょうじき、もっとやってもよかったとおもってる。ぼくはじぇいくのようにうでっぷしにじしんはないけど、りさやねりぃのことはぼくだってかぞくだとおもってるから、まもりたいんだ。そのためだったら、どんなひきょうなてだってつかうし、どんなわるものにでもなってやるさ」

「ルース・・・」

ルースがここまではっきり言うのは珍しいが、ジェイクもその覚悟だけはルースと同じだったので、もはや何も言わなかった。

そして放課後、リンダを伴ってデュートヒルデの屋敷に向かうジェイク。リンダもまた馬車で学校に通っているので、ジェイクはその馬車に乗せてもらった。そして家も近所ということで、デュートヒルデの家の門まで着くと、リンダが御者に先に帰るよう、指示を出す。

門と言っても、さらに中に入るまでには数百mは歩かなければならない。本来ならば、貴族同士が互いの家を訪れるときにはまず先触れを出し、門に到着してからは招待する側が馬車で玄関まで案内するのが普通である。今回は急な来訪ということで、リンダは先触れを出していない。もっとも貴族といってもまだ子ども同士の事。また社交界からも縁遠い世界なので、彼女達はしょっちゅう先触れ無しで互いの家を行き来していた。そして門から玄関まで、2人は歩きだす。

「いいのか？」

「ええ、帰りはいつもヒルデの執事が送ってくれますので。私達の社交界では、訪れられた方が来客を無事送り届けるのが礼儀ですの」

「・・・俺にはよくわからない世界だなあ」

ジェイクが難しい顔をしたので、その顔がおかしかったのか、リンダは少し笑みを作る。

「ジェイクさんって、面白い方ですのね」

「そうかぁ？　どの辺が？」

「表情がくるくる変わるところでしょうか。自分の気持ちそのままに、いつも過ごされているかのよう」

「お前達は違うのか？」

ジェイクにとって当たり前のことを面白いと言われ、不思議だと思ったのだ。自分の心に素直に生きるのは、当然ではないのだろう

か。

「・・・貴族の世界は難しいですの。礼儀や儀式が多くて、何が本当かわからなくなるくらい。正直、貴族である者のほとんどがそう感じている事でしょう。それはヒルデも同じでしてよ？」

「嘘だぁ」

「いえいえ、本当ですのよ？　私と2人でいる時はベッドの上で飛び跳ねたり。けっこうなやんちゃですわ。普段はきっと無理をしているのでしょうね。それにとても優しい子なのですよ？」

「あのくるくるがぁ？」

ジェイクは信じられないと言ったように、口をあんぐりと開ける。その表情がまたしてもおかしかったのか、リンダは口を押さえて笑いだした。

「ふふふふ。彼女は動物の世話をするのが好きですから。この家には色々な動物がいますが、中には彼女が拾って来た子もいますわ。『寒そうにしているのを放っておけない』って」

「・・・う～ん、だったらなんで学校ではあんな態度を・・・」

ジェイクがますますわからなくなったと言う風に、腕を組む。その様子をじっとリンダは見る。

「（あのブルンズを倒した授業を見る限りもっと荒っぽい人かと思っていましたが、どうもこのジェイクという人は、他の男（おのこ）とは違いますわ。なんといいますか、なんだか腹に強く据えたものがあるみたい。ブルンズを倒した動きも並ではないことくらい私にもわかりますし、その時の表情・・・怖かったけど、少し恰好よかったと皆さん言ってましたわ）」

ジェイクがブルンズを倒した時、もちろん彼女達も護身術の訓練などでその場にいたのだ。全員がジェイクとブルンズの戦いを見たわけではなかったが、このリンダとその周囲はたまたま見ていたのだ。ジェイクの疾風の様な動きと、その時の表情がリンダに思い出される。

デュートヒルデだけは苦々しくその様子を見ていたので、その時は誰も何も言わなかったが、デュートヒルデがいない今、彼女達がその時のことを好き勝手に話しあっていた。すると、誰が言いだしたのか、ジェイクは恰好よいのではないかという方向に話が進んで行ったのだ。

貴族の女子達にしろ、最初はジェイクを生意気な奴と思いはしたものの、貴族にへつらうでもない平民はジェイクが初めてだった。なので最初こそ自分達の権威が脅かされるかと思いはしたが、ジェイクはブルンズを倒しても威張りも何もしなかった。ただ何もなかったかのように今まで通り過ごし、ネリィのことを気遣うだけ。ロッテの事も純粋な正義感からの発言だと考えると、冷静に考えて、彼は正義感溢れた武芸の強い少年ということになる。それは、騎士の像そのままではないのだろうか。貴族の女子とて、騎士と姫の恋物語の話に憧れたりはする。もしジェイクが成長して立派な騎士になったら？　彼女達はその事を考えないでもない。

そして、えてして幼い時は少し荒くれている少年に少女は憧れる時期もあったりするものだ。貴族の女子達の間で、ジェイクの評価はそのように変わりつつあった。

「（こうしてみると・・・ジェイクさんは中々精悍な顔つきですわね。将来かなり恰好よくなるのではないでしょうか？　それに背も高くなりそう。足が大きい殿方は、背も高くなると聞きましたわ。まあ、騎士の物語に出てきそうですわね・・・やだ、私ったら。一体何を考えて）」

リンダが頬を少し赤らめる。そこには年頃の少女特有の妄想が多分に入っていたが、そんな事をジェイクは知るわけも無く。リンダが気がつくと、ジェイクがリンダの顔をじっと見ていた。

「な、な、なんでしょう？」

リンダはそのような妄想を考えていたので、当の本人が今自分と連れだって歩いているのをすっかり忘れていた。

「いや、着いたけど？」

「はう？」

ジェイクがちょいちょい、と指さす先には既にリヒテンシュタイン家の玄関が目の前にあった。リンダは妄想に没頭するあまり、既に玄関前に来ている事も忘れていた。ちなみに、リンダの妄想の中で成長したリンダとジェイクがキスする直前であったのは、内緒である。

「そ、そうですわね。ではジェイクさん、参りましょう！」

「右足と右手が同時に出てるけど、大丈夫か？」

そうして2人はデュートヒルデの家の戸を叩くのだった。

続く

ジェイクの新しい生活、その7～反省～（後書き）

次回投稿は、５／１３（金）１２：００です。

ジェイクの新しい生活、その8～貴族の悩み～（前書き）

～あらすじ～

どうもやりすぎた印象を受けたジェイクは、リンダと共にデュートヒルデの家を訪れるが？

ジェイクの新しい生活、その8～貴族の悩み～

＊＊＊

「リンダ様、お飲み物は何になさいますか？」
「ハーブティーはこの時期だと、アルメシアといったところかしら」
「他にルルカ、ミダゾラン。変わり種ではククスのハーブティーなどもございますぞ」
「まあ、ククスの？　それは試した事がないわ。お願いできるかしら？」
「かしこまりました。お嬢様にも、リンダ様とジェイク様が来ている事を告げてまいりますので」

デュートヒルデの執事であるバーノンが優雅に礼をして出て行く。客間に通された2人は並んでソファーに腰掛けていたが、ジェイクは全く落ち着かなかった。天井は巨人のためにしつらえたのかと言うほど高く、部屋は以前ミーシアでジェイク達が住んでいた家よりも広いだろう。調度品もジェイクにすら一目でわかるほど高い物ばかりである。うっかり割ったりしたら、一生ものの弁償になるかもしれない。あのタペストリー一つでいったいパンがいくつ買えるだろうか、などとジェイクは想像していたのだ。

そのきょろきょろするジェイクを、リンダが窘める。

「ジェイクさん、そうきょろきょろするものではありませんわ。失礼になりますわよ」
「だってさあ。こんな広い部屋に入ったことないから」
「そこまで広いわけではありませんわ。私も実家に帰れば、この倍ほどの広さの部屋が私室になります。私は侯爵家、デュートヒルデは公爵家ですから、彼女の場合、この屋敷くらいのスペースがちょ

うど自分が自宅に持っている空間と同じくらいだと言っておりましたわ。デュートヒルデの父上が、実家にいる時とあまり変わりがないようにと作ったとか」

「うへえっ！」

信じられない言葉がリンダの口から滔々（とうとう）と出てくるので、思わずジェイクは後ろにひっくり返りそうになった。世の中は理不尽なのだなと、ジェイクは今さらながらに感じていた。彼女達に比べれば、ミーシアの豪商の家などかわいいものだと思ってしまう。

ジェイクはあまりに落ち着かないので、立って調度品を見て回っていた。その中で綺麗な杯を見つけたので手にとって眺めていると、リンダが「それ一つで普通の家が買えますわ」と言ったので、ジェイクは震える手でその杯を元に戻す。そうこうするうちに、バーノンがハーブティーを持って戻ってきた。

「お待たせいたしました。ククスのハーブティーでございます」

2人は鼻をくすぐる甘い匂いに誘われ、差し出されるがままにそのハーブティーを飲んだ。

「うまい！」

「ええ、この香り、嫌みのない味。これはいい逸品ですね。お茶の入れ方が相変わらずバーノンさんはお上手ですわ。うちの執事にも見習わせたいくらい」

「お褒めに預かり、光栄でございます」

バーノンが丁寧に礼をする。だが本当にこのハーブティーは美味しかったので、ジェイクは夢中で飲んでいる。その姿が礼儀とはかけ離れていたので、バーノンは少し困ったような顔をし、リンダは

少し呆れていた。

「ジェイクさん」

「？」

「そのティーカップ、一つで豪邸が立つ品物でしてよ」

「ブー！」

ジェイクが思わずハーブティを噴き出し、むせ返る。その姿が余程可笑しかったのか、リンダは頭につけた紺のリボンを揺らしながら笑っていた。

「冗談、冗談ですわ、ジェイクさん」

「ひ、人が悪いぞ！」

「だって、あまりにも音を立てるのに遠慮なく飲むものですから、つい」

「く、くそう」

「ふふふ、仕方ありませんな」

ジェイクが噴き出したハーブティーが絨毯のシミにならないように拭き取って行く。

「それで、くるく・・・デュートヒルデは４日間も熱を？」

ジェイクがむせたのをなんとか押さえながら、バーノンに質問する。

「はい。雨の中歩いたのが体に良くなかったようで、すっかり体調を壊されてしまいました。医者の見立てではただの風邪だろうとのことでしたが、なにせお薬もお食事も欲しくないと言われて、召し上がらない状態でして」

「それは・・・」

黙りこくる2人を見てバーノンは何か察したのか、バーノンの方から質問する。

「つかぬ事をお伺いしますが、何かお嬢様にあったのでしょうか？どうもこの頃、御様子がおかしかったもので。よろしければこの爺めに、教えていただけないでしょうか」

「実は・・・」

ジェイクは学園であった事をありのまま話した。デュートヒルデが平民を差別している中心人物だと言う事、自分も差別され反撃に出た事。ジェイクはバーノンを信頼できる人物と判断して、一連の流れを包み隠さず話した。その話をバーノンはただ黙ってじっと聞いている。

「・・・と、いうわけです」

「なるほど・・・本当はリヒテンシュタイン家に仕える執事としては、こういった事を言うべきではないでしょうが、確かにお嬢様に非がありますな」

バーノンの言葉に、2人が驚く。

「そんなことを申してもよろしいのですか？」

リンダがおそるおそる尋ねる。するとバーノンは口ひげをさすりながら、気まり悪そうに答えた。

「いえ、もちろんお嬢様の教育係を任されておる私の責任であることは申し上げておきましょう。実は私と、お嬢様の祖父とはグロー

リアの同級生でしてな」

バーノンがやや遠い目をした。

「おじい様、フェラルド様は私は親友でした。私はそれこそ平民の出身で、当時は侯爵でしたが名門貴族であったフェラルド様とは、最初折り合いが悪かった。それこそお二方が話したお嬢様のように、彼は非常に差別意識の強い方でしてな。当時は貴族と平民が真っ二つに分かれて対立するような事態になっていました。私としても、誰がこんな高慢ちきな男と友達になるかと思いました」

「それで、どうなったんです？」

ジェイクが興味深げに尋ねる。バーノンの話が参考になるかもしれないと思ったからだ。

「3年生になった時でしたか。野外で演習がありましてな。そこで我々は野良犬の群れに襲われました。我々は訳もわからぬまま、その辺の木の切れ端などを武器にして戦い、気がつけば背を合わせて戦っていたのはフェラルド様だったのです。不思議な事に、あれほど普段はいがみ合っていたのに、戦いの時は我々は息がぴったりだった。争っていたからこそ、お互いの事を良く見ていたのかもしれません」

「・・・」

「それからですな、互いに良く話すようになったのは。これが話してみると、意外にフェラルド様は気さくな方で。学校では無理をしているのだなということが良く分かりました。貴族の世界という者は、我々平民が思っている以上に様々な圧力にさらされます。実際にフェラルド様も社交界のみならず、この学校に通っている時でさえ、3度刺客に命を狙われています」

ジェイクははっとした。要人が地元を離れ、こういった学園に通うことはそれだけでリスクがある。ジェイクの様な平民には、全く想像できないことだったが、言われればその通りだ。だからこそミリアザールも、うかうかとアルネリアの外には出ないわけだ。

後で聞いた話では、ミリアザールがジェイク達を連れて帰るまでの道程で、５度、危険な場面があったらしい。ミリアザールがしょっちゅう行うあのお忍びは、自由にならないストレス解消の方法かとも思ってしまう。

なおもバーノンは続けた。

「学園の寄宿舎は人の出入りが多く、全員の確認は不可能。刺客は子どもにもいますからな」

「それはわかります。だからこそ我々はこうして別荘を建て、警護に守られているのですから」

リンダが答えた。ジェイクも思っていたが、リンダの御者は帯刀していた。物腰や仕草からも、只者ではなさそうだなと、ジェイクはふと思ったのである。

「そのような脅威に日常的にさらされ、心を開く相手が見つからないのです。誰を信用して良いのか、誰は自分を利用しようとしないのか、そういった猜疑心ばかりが先にたってしまう。フェラルド様もおっしゃっていました。おいたわしい事です」

バーノンがそっと目がしらを拭う。確かに、その可能性をジェイクは考えていなかった。だがそうだとしても、やはりデュートヒルデのやったことが正しいとはジェイクには思えないのだ。どうするのが最もよいのか。ジェイクは決めかねていた。

そのジェイクの真剣に悩む様子を見て、バーノンが優しい目をする。

「お嬢様に会われますか？」
「うん・・・そうだな。やっぱり会った方がいいと思う」

ジェイクは頷いた。

「俺は悪い事はやっぱり悪いと思うし、デュートヒルデにどんな事情があっても、ネリィにしたことは悪いと思う。だけど、デュートヒルデの気持ちもわからないでもないんだ。だから、せめて俺達はお前の味方だぞって、言ってやりたい」
「そうですか・・・ありがたいことです。お嬢様は良い級友を持たれた」

バーノンが暖かい目でジェイクとリンダを見た。

「それでは、お嬢様がお2人に会われるかどうか聞いてきましょう」
「ああ、俺も部屋の前まで一緒に行くよ。いいかな？」
「私も参ります」
「わかりました。では御一緒に」

そうして3人はデュートヒルデの部屋に向かうのだった。

続く

ジェイクの新しい生活、その8～貴族の悩み～（後書き）

次回投稿は、５／１４（土）１２：００です。

ジェイクの新しい生活、その9～デュートヒルデの叫び～（前書き）

～あらすじ～

デュートヒルデのバーノンから話を聞き、彼女に会いに行くジェイクとリンダだったが・・・？

ジェイクの新しい生活、その9～デュートヒルデの叫び～

＊＊＊

「お嬢様、よろしいでしょうか？」
「・・・何かしら」

部屋の中からは気だるそうな返事が返って来る。その声だけでもデュートヒルデがかなり衰弱している事はわかったが、バーノンは2人に部屋の前で待つように促すと、中へと1人入って行く。

「失礼いたします。お薬は飲まれたかと思いまして」
「いらないわよ、あんなまずいもの！」

中からは癇癪を起したデュートヒルデの声が聞こえてくる。

「しかしお嬢様、お薬も飲まない、食べ物も召し上がらないでは、治るものも治りませんぞ？」
「いいのよ、私なんか死んじゃえば！　その方が皆だってせいせいするに決まってるわ！」
「そんな事をおっしゃらずに・・・実は今日はこちらに御学友の方がお見えになっております」
「・・・誰？」

デュートヒルデの声が、少しだけ興味をそそられたように変化する。

「リンダ様と、ジェイク様でございます」
「ジェイクさんですって？　私を笑いに来たに違いないわ、すぐに

追い返して！」
「いえ、実は言いたい事があるとおっしゃっておりまして・・・」
「聞きたくない！　リンダだってそうだわ！　今まで友達の様な顔をして、結局は私を利用していただけですのよ！？　なんて汚らわしい！！」
「それは違うわ！」

リンダが思わず叫んでいた。扉の外から聞こえた大声に、部屋の中が一瞬静まり返る。

「私はヒルデの事が心配で、このままではいけないと思っからちょっとお灸を据えようとしたの！　でも、それがこんなことになるなんて・・・ごめんなさい、私が浅はかでした。貴女がどれほど傷つくかも考えず、ひどい言葉を言ってしまったわ。許されることではないかもしれないけど、どうか私を許して・・・」

それだけ言い終わると、リンダはその場でしくしくと泣き出してしまった。部屋は沈黙に包まれていたが、やがて声が聞こえてくる。

「・・・ないわ」
「お嬢様？」
「許さないわ！」

部屋からは、はっきりとしたどなり声が聞こえてきた。

「ワタクシは、ワタクシの信用を裏切った者を許さない！　ええ、決して許すもんですか！」
「お嬢様、それは・・・」
「うるさくてよ、バーノン！　いくらおじい様の親友といえど、たかが庶民出身の分際で！　あまり口答えするようなら、この屋敷か

ら叩きだすわよ!?」
「ちょっと待てぇ!」

ジェイクが扉を荒っぽく開け、ずかずかと部屋に入って行く。その場の全員が呆気にとられたが、怒りが最高潮に達したジェイクは気にもならない。
中にはデュートヒルデがベッドに上半身を起こした状態で座っており、地面には彼女が癇癪を起したのか、グラスが中身ごと落ちているのをバーノンが片づけていた。デュートヒルデの可愛らしい顔は病気で少しやつれており、目にはくまができていた。自慢の縦ロールも、ろくに手入れをしていないと見え、乱れっぱなしである。

「ちょっと、あなた! 淑女(レディ)の部屋に無断で踏み込むなど・・・」
「やかましい! 俺の事をどう言ってもいいけどなぁ、リンダやバーノンさんにそんな事を言うとは、お前どういうつもりだよ!」

ジェイクが怒りでわなわなと唇を震えさせながら、デュートヒルデの声を遮って大きな声を出した。その剣幕に、さしものデュートヒルデも少し驚く。

「リンダは本当にお前の事を心配してたんだぞ!? この4日間は学校で泣いてもいたんだ! それを知らずになんて事を言うんだ!」
「あなたの知った事じゃ・・・」
「いいや! お前みたいなわからずやのお嬢様よりも知ってるね! それにバーノンさんもすごくお前の事を心配してるんだ! 寂しいんだか何だか知らないけどな、今のみたいに駄々こねてばっかじゃお前、一生友達出来ないぞ!?」

ジェイクに寂しいと言われたのが図星だったのか、あるいは駄々をこねていると言われたのが腹が立ったのか、デュートヒルデが顔

を真っ赤にしながら反撃する。

「うるさい！　うるさい、うるさい！　お前なんかにワタクシの気持ちがわかるものですか！」

「わかんねぇよ！　お前みたいな陰険引きこもりの女の気持なんかな！　ちったぁ他人を信用しやがれ！！」

「ワタクシだって、信用したいのですわ！」

デュートヒルデが涙目になりながら訴える。

「誰が好き好んであんな態度を取る物ですか！　でもワタクシを大切にしてくれたおじい様は亡くなって、お父様もお母様もお忙しくてまともに話す時間も取れない。家は広くて何でもあるけど、皆ワタクシの機嫌を伺うばかりで、誰も本当の事を言ってくれない！　そのくせ、ちょっとでもワタクシが我儘を言ったり、ワタクシに落ち度があれば、女中どもは全員でワタクシの陰口を囁き合うのですのよ？

なのに、ワタクシの目の前に現れる時は、さも何も無かったかのように普通に、いえ、ワタクシの事を尊敬しているかのように振舞おうとする。そんな気色の悪い人間達に囲まれる暮らしを、貴方は想像したことがあって！？　はっきり言って、反吐が出ますわ！」

「お嬢様、そのような言葉遣いをなされては・・・」

「いいえ、言わせていただくわ！」

デュートヒルデが息を切らせながら、凄まじい剣幕でまくし立てる。その勢いに今度はジェイクが押された。

「それにワタクシがお父様について社交界に向かえば、誰も彼もがワタクシの事を美しいだのなんだのと褒めそやしますわ。でもワタクシだって馬鹿じゃないの！　ワタクシが美しいと言われる年では

ないことも、ワタクシよりも美しい姫君達がいる事も知っています！　それなのに子どもであるワタクシの機嫌を必死で取ろうと、大人達が作り笑いを浮かべながら寄って来る。なんと気持ちの悪い事かしら、腹にある汚い臓物が透けて見えるようですわ！　ワタクシが公爵家令嬢でなかったら、彼らはワタクシになんて声をかけるのでしょうね！？

それにワタクシがまだ幼い頃から、『我々の息子とぜひ』などといって自分の息子達をワタクシに売り込んできますわ。まだ指をしゃぶる癖が取れていない子、ワタクシよりも並べられたお菓子に興味がある子。そんな子ならまだマシな方で、去年などはまだ9歳のワタクシに無理矢理口づけを迫ろうとした愚か者もいましたのよ！？　その方は既に16歳で成人を迎えているくせに、力づくでワタクシをどうにかしようとしましたから、全力でその変態の股間を蹴り上げてやりましたわ！」

ジェイクが思わず顔をしかめる。相手が悪いとはいえ、男としてちょっと同情するものがあった。デュートヒルデは息を切らせながらも、まだ続ける。

「そのような欲望に日々晒されるワタクシの気持ちが、貴方の様な平民にわかりまして？　気持ちが休まる時もなく、心を通わせる相手も見つからず。去年この学校に来た時はそれでも多少救われた気持ちがしたものですが、結局のところ同じでしたわ。ワタクシが公爵家を名乗るやいなや、ワタクシに媚びへつらう者と、ワタクシを遠巻きに眺める者にあっという間に分かれましたわ！　ワタクシはそんなものが欲しかったわけじゃないのに！

でも皆がそう望むのならせめて貴族であろうとしましたけど、何をどうしても皆の不満は止まりませんでしたわ。これ以上ワタクシにどうしろと言いますの。ねえ、教えてくださる！？」

「・・・」

「もうわけがわかりませんわ！　ワタクシが悪いの？　皆の理想を叶えるような、もっと完璧な人間だったらいいの？　誰か、誰か答えてくださいまし・・・うっ、ぐすっ・・・ひっく・・・」

ついにデュートヒルデは泣きだした。ジェイクもリンダも、バーノンまでもが言葉を失くして立ちつくす。ジェイクは先ほどまでの怒りが嘘のように、冷水をかけられたがごとく頭が冷えていた。今でもジェイクはネリィがやられたことに対して報復した事を悪びてはいないが、もう少しデュートヒルデと話してみるべきだったかもしれないと反省していた。

ここに来て、ジェイクはミリアザールの言っていた意味が本当に分かった気がしたのだ。結局はジェイクも、デュートヒルデが貴族ということでやっかみが入っていたことに、自分で気がついた。身分がいかに高かろうと、やはり人間。貴族は貴族で、それなりに悩みがあるのだ。

「（難しいな・・・何が正解なんだろう？）」

考えても、ジェイクに正解は見えてこない。ただ、デュートヒルデの精神状態が限界に近いのはジェイクにもわかった。

と、その時、デュートヒルデの様子が変わり始めていた。ただ泣いていいただけのはずなのに、なんだか顔がさらに青く、いや青い野を通り越して、色が無くなってきている。呼吸も苦しそうだ。

「ゼイ・・・ゼイ・・・」

「お嬢様？　いけません、薬をお飲みになって！」

「い・・・りませんわ！」

デュートヒルデが、バーノンの差し出した薬の入ったグラスをはたき落とす。

「ああ！」
「ワタクシは・・・誰の助けも・・・いらない。誰も・・・信用しない！」
「いかん、薬はこれで最後なのに」
バーノンの顔色が変わる。そしてデュートヒルデの呼吸もますます苦しそうになってきていた。
「これはいかん！　リンダ様、ジェイク様。私は今から馬で医者を呼びに行って参ります。それまで女中と共に、お嬢様をお願いできますか？」
「・・・わかった」
「それでは失礼。半刻もないうちに戻りますゆえ！」
「余計な事を・・・しなくていいわ」
デュートヒルデは力尽きたようにばたりとベットに仰向けに倒れ、それでもなおバーノンに悪態を突く。だがバーノンはデュートヒルデの様子に猶予がないと判断したのか、いち早く部屋を出て行ってしまった。
残されたのはリンダとジェイクである。あとは女中が何人か来たが、おろおろするばかりで役に立ちそうもない。
「出て行って・・・皆、出て行って・・・」
「聞けないね。俺はお前に命令される覚えはない」
「・・・この」
「ふん、悔しかったら元気になって言い返して見やがれってんだ」
「・・・」
「？　おい、くるくる？」

ジェイクが話しかけても反応がない。見れば、呼吸がどんどん弱くなってないだろうか。リンダも横にかけつける。

「ジェイクさん、これはまずいのでは？」

「・・・おい、馬はまだあるか！？」

ジェイクが女中を怒鳴りつけたので、女中は驚きながらも即答する。

「はい！　まだ何頭かはあると思います！」

「・・・しょうがない、俺がこいつを治せる奴の所まで連れてく。ここからなら飛ばせばすぐだ。バーノンさんが帰って来るより早い」

「どこに行きますの？」

リンダの問いに、ジェイクがその辺の手ごろな毛布でデュートヒルデの体をくるみながら答える。

「深緑宮に知り合いがいる。そこなら大丈夫のはずだ」

「深緑宮って・・・一般人は入れませんのよ？　王侯貴族だって、滅多に入ることはできませんのに」

「大丈夫だ、俺は顔パスだ」

「え？」

その言葉にリンダは驚いたが、ジェイクは既にデュートヒルデが寒がらないように毛布でくるむと、彼女を抱きかかえて立ち上がるところだった。

「女中！　馬の所まで案内しろ！」

「はいっ、ただいま！」

「ちょっと！」

リンダが慌てて後を追う。馬屋にはついたが、どれも裸馬で、鞍すらつけられていない。

「あの、私どもは鞍の付け方は・・・」

「いい、俺がやる」

「そんなことできますの？　学園ではまだそのような授業は・・・」

リンダがまごつくうちにも、ジェイクはデュートヒルデをそっと地面に下ろし、慣れた手つきで鞍をつけて行く。騎士団で下働きをする彼にとって、日常的な動作だった。支帯を乗せ、鞍を固定し、頭絡をつける。そしてあっという間に準備を整えると、デュートヒルデを片手で抱いたまま、反動をつけてジャンプしてあぶみに足をかけ、さらに馬に飛び乗る。その見事な身のこなしに、女中達とリンダが思わず嘆息を漏らす。

「済まない、リンダ。送っていけないけど、俺は今から深緑宮に行って来る。バーノンさんには伝えておいてくれ、責任は俺が取るって」

「え、ええ。それは構いませんけど・・・」

「じゃあまた明日学園でな。せいっ！」

ジェイクが馬の尻を叩いて、馬を走らせ始める。デュートヒルデを前に抱いたままではかなり馬を操るのも難しいはずなのだが、ジェイクは難なく操っていた。毎日ラファティにしごかれながら馬の訓練をしたのが役に立っていたのだ。厳しい指導に内心で感謝するジェイク。そして見る間に小さくなるジェイクの後ろ姿をリンダは見ながら、「いいなぁ・・・」と不謹慎な感想を漏らさずにはいられなかった。

馬がリヒテンシュタインの領地を出る辺りで、デュートヒルデが

ぼんやりと意識を取り戻す。

「う・・・貴方、何を？」

「今からお前を最高のシスターの元へ連れて行く。そこまで行ったら、すぐに楽になるからな」

「余計な・・・お世話ですわ」

デュートヒルデは苦しそうに喘ぎながら、まだ反論をしようとする。

「ほんっと強情だな、お前。じゃあ死にたいのか？」

「死・・・？」

デュートヒルデがぼんやりとした頭で考えるが、ふとその顔を横に振った。

「死ぬのは、嫌ですわ」

「なら黙ってろ。俺が絶対に助けてやる」

その言葉を聞くと、デュートヒルデは黙ってジェイクの胸を掴んだ。そしてジェイクは馬を飛ばすのだった。

続く

ジェイクの新しい生活、その9～デュートヒルデの叫び～（後書き）

次回投稿は、５／１５（日）１５：００です。

ジェイクの新しい生活、その１０～仲裁～（前書き）

～あらすじ～

ジェイクとデュートヒルデは思いのたけをぶつけあうが、その最中彼女の容態が急変して・・・？

ジェイクの新しい生活、その１０～仲裁～

＊＊＊

そして時間は夜。

「ここは・・・？」

デュートヒルデが目を覚ますと、見慣れぬ天井が見えた。体がまだ熱っぽく気だるいが、先ほどよりは随分楽になっている。少し体を起こして首を動かし、部屋の様子を確かめる。調度品は下品ではないが、かならずしも高い物ばかりではない。質素に、しかしそれなり以上の身分を表せるように、上品な調度品でまとめられている。確実に自分の部屋ではない。自分の部屋なら、望んでもいない最新の流行りの調度品が各国の貴族達から送られてくるからだ。

「ワタクシは・・・ジェイクさんに馬に乗せられて・・・それから」

デュートヒルデがふとその時の事を思い出す。良く考えれば、自分はジェイクに抱きかかえられていたのではないか。いくら意識が朦朧としていたとはいえ、よくもあのような無防備な自分を晒したものだと思う。

恥ずかしいやら不甲斐ないやらで、ないまぜな感情の処理にデュートヒルデが戸惑っていると、戸が開いて光が差し込む。

「お、目が覚めたか」

「ジェイクさん？」

「ぺったんこ～。くるくるが目を覚ましたぞ～」

「誰がくるくるですか！」

デュートヒルデの抗議もむなしく、ジェイクは一向に気にかけない。そして間もなくその部屋に金の髪をした緑の目のシスターが入ってきた。年の頃は同じだろうが、彼女が持つ威厳と存在感に思わず息をのむデュートヒルデ。

「お目覚めになられましたのね。よかった、もう少しで貴女は危ない所でしたのよ？」

「え？」

「風邪を放っておいたせいで、肺炎を起こしていました。ここに運ばれてきた時は呼吸が止まる寸前で、このジェイクがいち早く運んでいなければ、どうなっていたかはわかりませんくらいの状態でしたわ」

「そういうことだ。俺と、このぺったんこに感謝しろよ？」

少し得意げになるジェイクのわき腹を、シスターがつねりあげる。

「いて、いてて！」

「またそうやってすぐ調子に乗る。少し褒めればこれですか？」

「い、いいだろ。たまには」

「しょっちゅうでしょうが」

抵抗しようとしたジェイクの手を、シスターがいとも簡単にねじり上げてしまった。悲鳴を上げるジェイクを拘束しながら、シスターは穏やかな笑みを絶やさない。

「あの、貴女は・・・」

「これは申し遅れました。私はミリアザールと申します。どうぞミリィとお呼びくださいませ」

「ミリアザール！？」

アルネリア教会の最高教主ではないのかと、デュートヒルデは身を固くする。現存する聖女であり、アルネリア教会の旗印でもある女性だ。何年か周期で代替わりするらしく、その姿を直接拝むことは王侯貴族でも滅多にない。時に女神の様な美しい女性であり、時に慈愛にあふれる老婆であるという。今デュートヒルデの目の前にいるのは少女だが、体に溢れる魔力のケタが違うのは、魔術を習いたてのデュートヒルデでもわかった。聖女が自分の前にいると思うだけで、少し前までとは別の意味でデュートヒルデは息が止まりそうだった。

そのミリアザールが、ゆっくりとデュートヒルデに微笑む。

「ジェイク、少し部屋を出ていなさい？　私はこの者と話をします」

「わかったから放せよ。ったく馬鹿力・・・ぎゃっ！」

ミリアザールがジェイクの背中を蹴飛ばしたような気がしたのだが、デュートヒルデは風邪で自分が朦朧としているのだろうということにしておいた。

そしてデュートヒルデのベッドの横に腰掛けるミリアザール。

「あ、あの！　このような格好でワタクシ、なんて失礼を」

「お気になさらず。むしろこのような機会でもなければ、話せませんものね」

ミリアザールがふわりと微笑んだので、デュートヒルデは気持ちが軽くなるようだった。まさに聖女の微笑みとはこのような表情を指すのだろう。

「ジェイクは私がさる人物から預かった子です」

「彼の御両親は？」

「さあ・・・彼は2歳になるかならないかで、雪降る町に捨てられていたと聞きました。彼自身も両親の事は覚えていませんし、気にかける様子はありませんね。もっとも内心はどのように考えているかは知りません。でも、彼は一度として自分の不幸な境遇を嘆いたことはありません。色々未熟な彼ですが、その点だけは彼は立派だと思います」
「・・・」

デュートヒルデは俯いていた。ジェイクは孤児だろうとは思っていたが、そのような事までは知らなかったからだ。
なおもミリアザールは続ける。

「少し説教のようになるかもしれませんが、お話をよろしいでしょうか？」
「・・・はい」
「失礼かとは思いましたが、貴女の事情はおおよそのところはジェイクから聞いています。つらい思いをされたようですね」
「いえ、そのようなことはありませんわ・・・」

話す内容とは裏腹にさらに落ち込むデュートヒルデを見て、ミリアザールは彼女の手を優しく握った。

「無理をなさらずに。私もこのような立場にいる身。境遇は違うとはいえど、貴女の感情は理解できないでもありません」
「そんな！　ワタクシは貴女の方が余程自由がないと伺っておりますわ！　確か最高教主に任命されると、聖女としての任期が終わるまではここから出る事もままならないと」

確かに、対外的にはそういうことになっている。実際にはそうでもないが、アルネリアをうかつに離れられないのは事実だった。

ミリアザールが苦笑する。

「確かにおっしゃる通りですが、たまにこっそり私もここを抜け出しては下町に行きますのよ？」

「・・・本当ですの？」

「ええ。聖女にも息抜きは必要です。もっとも、ばれると怖い女官に怒られますから、内緒ですよ？」

ミリアザールが人差し指を口に当て、「内緒です」という仕草をしたので、その仕草がかわいらしくて思わずデュートヒルデも微笑んだ。

「どうされましたか？」

「いえ、聖女様はもっと人間離れした方なのかと思っておりましたので」

「最初はそのような時もありました。でも私も生き物ですから。無理のし過ぎはよくありません」

事実ミリアザールがアルネリア教を作った時は、もっとかしこまっていた事もある。だが、すぐに疲れた、というか飽きたのだ。ミリアザールはもともといたずら好きである。それが深緑宮にこもって清貧貞潔に暮らすなど、どだい無理だったのだ。

もっとも梔子あたりに言わせれば、無理をしなさすぎると言ったかもしれない。

「無理のし過ぎはデュートヒルデ、貴女にもいえます」

「え？」

その言葉にデュートヒルデは顔を上げた。

「確かに我々のように生まれながらにして身分の高い者、人を指導する立場にある者は物品に恵まれる反面、人間味に乏しい生活を余儀なくされます」
「それは・・・そうです」
「ですけど、それで依怙地になってしまうのは違うと私は思うのです。どのような身分、立場においても、自分を利用しようとする者、敵対する者、味方する者、損得関係なく友人となる者は現れるのです。でも自分が心を閉ざしてしまえば、そのどれもが去ってしまう」
「・・・」
「それでは人間はやっていけません。生きる事だけなら出来るかもしれませんが、人生はきっと味気ないものでしょう。それは、もはや死んでいるのと同じではありませんか？」

ミリアザールの言葉に、デュートヒルデはどう答えればよいのかわからなかった。沈黙が2人を包み、やがてデュートヒルデはゆっくりと口を開いた。

「では・・・ワタクシはどうすればよいのでしょう？」
「信頼できる友を作らなくてはいけません」

デュートヒルデのその言葉を待っていたかのように、ミリアザールが即答する。

「貴女のように様々な欲望に晒される立場の人間は、幼い頃から実に様々な事を要求されます。まずは人を見抜く目を育てる事です」
「人を・・・見抜く」
「ええ。信頼できる人間が多くいることで、貴女の世界は変わるでしょう。また、貴女に様々な利益を求めて寄ってくる者も、貴女の人間性次第では本当の友人にできる可能性もあります。大貴族の利点を生かすのです。それぞれの思いはともあれ、貴女の周りには人

が集まるようになっているのですから。それをどうするかは、貴女次第」

ミリアザールの言葉がデュートヒルデの心に沁み込んで行く。やがてデュートヒルデはゆっくりと頷いた。

「お話し、ごもっともですわ。ですけど、ワタクシは自分の感情に任せて、学校で皆にひどい事をしてきました・・・皆は今さら許してくれるでしょうか？」

「反省する気持がありますか？」

「はい」

デュートヒルデの澱みない返事に、ミリアザールは彼女の本質を見た。本来は、デュートヒルデも心優しい子なのだと。育ちのせいで多少歪んではしまったが、まだ幼い分、これからどうとでも直る余地はある。

「では、その気持ちを素直に皆に言うことです。反応はそれぞれでしょう。許してくれる人、そうでない人。また謝っても何も変わらないかもしれません。ですが、きっと謝らないよりはましなはずです」

「・・・はい」

「そしてジェイクをお連れなさい」

「ジェイクさんを？」

デュートヒルデが意外そうな顔をする。その顔を見て、ミリアザールはおかしそうに笑った。

「あの子は一見粗野で、人の事など我関せずに見えますが、正義感は人一倍強いですし、助けを求める者を見捨てるようなことは決し

てしません。例え貴女と敵対していたとしても」
「・・・」
「それに、彼は貴女ともっと話をしなかった事を悔いていました。今なら歩み寄れるのではないですか？」
「・・・できるでしょうか、ワタクシに」

不安そうなデュートヒルデの頭を、ミリアザールはそっと撫でてやる。同い年に見える少女からのその行為にデュートヒルデは顔を赤くしたが、ミリアザールはほどなくして部屋を立ち去るべく、ベッドから立ち上がる。

「それは話してみないとわかりませんね。では彼をここに呼んできましょう」
「あの！　まだ心の準備が」
「たまには当たって砕けろと言いますのよ、デュートヒルデ」

その言葉と悪戯っぽい笑顔を残すとミリアザールは部屋を出て行き、代わりにジェイクが入って来るのだった。

続く

ジェイクの新しい生活、その１０～仲裁～（後書き）

次回投稿は、５／１６（月）１２：００です。

ジェイクの新しい生活、その１１～和解～（前書き）

～あらすじ～

ミリアザールの導きで顔を合わせたジェイクとデュートヒルデだが・・・？

ジェイクの新しい生活、その11～和解～

「よう」
「・・・どうも」

2人きりになり、どこかぎこちないジェイクとデュートヒルデ。
ジェイクは部屋に入ったまま、その場に突っ立っている。

「・・・お座りになったらいかがです？」
「そうだな」

ジェイクがデュートヒルデのベッドに座る。デュートヒルデは「椅子に」という意味で言ったのだが、ジェイクはそんな事を考えなかったようだ。手を伸ばせば顔に届きそうな距離にジェイクがいることにデュートヒルデは緊張するが、そこまで悪い気はしなかった。ジェイクに悪気が無い事は知っているし、彼はこういう無遠慮な性格なんだと思うことにしたのだ。にしても、いつものデュートヒルデなら間違いなく抗議しただろう。今はジェイクに対する恩と、彼となんとか歩み寄ろうとする気持ちがあるから何も言わない、言えないだけだ。

「・・・」
「・・・」

沈黙が部屋に漂う。どちらも話の切り口を探しているのか、何も言わなかったが、

「「あの！」」

いざ話すとなると同時だった。この2人は、自分達で思うより似た者同士なのかもしれない。

「お前から話せよ」
「いえ、ジェイクさんからどうぞ」
「いーや、くるくるからだ」
「そのくるくるをやめなさいと言ってるでしょう！？」

うー、と言い合いになりそうな2人が睨み合う。そして、同時にため息をついた。

「どうしてワタクシ達はこうなのかしら」
「気が合わないんじゃね？」
「まあそうだとしても・・・いつまでもいがみ合うのは嫌ですわ」
「それは同感だな」

ジェイクが頷く。

「でさ。くるくるはこの後どうしたい？」
「どう、とは？」

ジェイクの問いの意味がわからず、デュートヒルデは聞き返す。

「だから学園に来たいかって事だよ。色々あったけどさ、俺はこのままくるくるを仲間外れにしたいわけじゃないんだ。そりゃ俺は今でもお前がネリィにやったことは許せないけどさ、それを決めるのは俺じゃなくてネリィだと思うんだ。それに、俺もくるくると話をせずに色々やりすぎたと思うし・・・だから、くるくるがネリィに謝ってくれるなら、俺としてはくるくるの味方をしたいと思うんだ」
「ジェイクさん・・・」

ジェイクが少し横を見ながら、気まずそうに話す。ジェイクもこういった状況に慣れておらず、素直に謝りにくかったのだ。彼にとっては、アルベルトに向かって行くよりも難しい思いでこの場に臨んでいた。

そんなジェイクの態度に、なんとなく親近感と話しやすさを覚えるデュートヒルデ。

「そうですわね・・・ワタクシとしても、ネリィさんを傷つける気は毛頭ありませんでしたの。正直、あんなことになるとは思っていませんでしたわ」

「でも、俺には水かけるつもりだったんだ？」

ジェイクが意地悪く切り返す。その言葉にデュートヒルデがしどろもどろになる。

「そ、それは・・・まあ、男の子ですし、殺しても死ななさそうですし・・・」

「やっぱひどいやつだな、お前」

「そ、それは・・・！　でも正直、本当にやるとは思っていませんでしたわ。私も別の入り口から教室に入ったばかりでしたので、事態の把握もできていなくて。ですけど、それはワタクシがまいた種。きっちり責任は取りますわ」

「ふぅん。なら学園に来る？」

「ええ、明日にでも」

その言葉にジェイクは大きく深呼吸をして、安堵感を示した。

「ああよかったぁ～。このままだと色々気まずいなと思ってたんだよ！　これで万事解決かな？」

「ネリィさんは許してくれるでしょうか？」
「それは問題ないと思う。あいつは嫌な事があっても、寝て起きたら忘れる人間だから」
ジェイクが腕を組んでうんうんと頷く。その仕草に、デュートヒルデがくすりと笑う。
「今にして思えば、どうしてジェイクさんのことを憎く思ったのか、よくわからなくなってきましたわ」
「なんだ、くるくるは面倒くさい奴だな」
「随分な言いようですわね」
デュートヒルデがむくれてみせるが、ジェイクはそんな彼女を一切気にかけない。ジェイクがこういう人間だからこそ、デュートヒルデは腹が立ったのだろう。今まで良くも悪くも、公爵家令嬢であるデュートヒルデの一挙一動には周囲の人間が皆反応した。だがデュートヒルデにとって、ジェイクは今まで出会ったどの人間とも違っており、彼女の事がまるで目に入らないかのような態度を取った。デュートヒルデは自分でも気がつかないまま、ジェイクの気を引きたかったのかもしれない。方法は稚拙かつ間違っているけども。
ジェイクはベッドにごろんと横になって話し続ける。そのまま後ろに倒れたので、ちょうどデュートヒルデの膝の辺りに頭がいったのだが、またしてもジェイクは全く気にしていない。
「ちょ、ちょっと！　どこに頭を・・・」
「そりゃ言われても仕方ないだろ？　ロッテにもちょっかい出してたんだから」
「それは・・・」
デュートヒルデがもごもごと口ごもる。

「ロッテにもちゃんと謝れよな？」
「もちろんですわ！　一度やると決めたら、中途半端は嫌いですの！」
「はは、その意気だ！」
ジェイクがデュートヒルデの顔を見上げる。
「でもなんでお前、ロッテの事虐めてたんだ？」
「それは・・・お恥ずかしい話、彼女が可愛い可愛いと、皆が褒めそやすものですから・・・つい」
「なんだ、ただの嫉妬か」
ジェイクが遠慮なくずけずけと言ったので、デュートヒルデは恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にした。
「それはそうとも言いますけど・・・」
「そんな嫉妬する必要ないって。くるくるだって可愛いわけだし」
「え？」
ジェイクがなんと言ったのかわからず、デュートヒルデは思わず聞き返した。
「今何と？」
「え、俺はくるくるが可愛いと思うって言ったんだ」
ジェイクが躊躇なしに言ったので、デュートヒルデは今度は照れで顔を真っ赤にした。貴族達に遠回しな美辞麗句で褒められたことは幾度となくあっても、こう直接的に面と向かって言われた事はデュートヒルデとて一度もない。混乱のあまり、自分が何を言ってい

るかわからなくなるデュートヒルデ。

「あ、あの、その、ワ、ワタクシのどこが、か、可愛いんですの？」
「だいたい全部」

あっさり何の含みも無しに言い放つジェイクが、起き上がってデュートヒルデの顔をまじまじと見る。

「肌は白いし綺麗だし、髪もすごくいいと思うんだ。眼も綺麗だしな。その髪型はどうかと思うけどな」
「こ、これはワタクシの国では流行ってますの！」
「ふ～ん、朝起きた後面倒くさそう」

ジェイクがそう言いながらデュートヒルデの髪を触ったので、その時、彼の手がデュートヒルデの頬に触れた。

「ひゃわぁ！」
「何変な声を上げてんだ？」
「貴方こそ、淑女に何をなさいますの！？」

デュートヒルデがますますもって顔を真っ赤にした。熟れたトウカラの実よりも赤い。だが、ジェイクにはなぜデュートヒルデが真っ赤になっているかなど、そんなことに気がつくような人間ではない。リサの事に関してだけは鋭いが、その他にはてんで鈍いのだ。

「大丈夫かくるくる？　お前、顔が真っ赤だぞ？」
「だ、誰のせいだ、だと」
「？　わけのわかんないことを。また熱が出たのかな」

そう言ってジェイクがおでこをデュートヒルデのおでこに正面か

ら当てたので、２人の顔がとても接近する。
「ひ、ひ、はふぅ・・・」
「お、おいくるくる！？」
デュートヒルデが限界だといわんばかりにベッドに倒れ込んだ。
思わず支えようとして、デュートヒルデを抱きかかえる形になるジェイク。その状況に朦朧として来たデュートヒルデが、自分でも良くわからない事を口走り始めた。
「そ、そんな・・・早すぎますわ。まだワタクシ達は・・・」
「何訳の分かんない事言ってやがる。あーもう、面倒臭い」
「何をちちくり合っているんですか、子ども達が」
「おおう！？」
後ろから不意に声がしたので、ジェイクもさすがにびっくりする。
「なんだ梔子か。部屋に音もなく忍び込むのを止めろよな」
「なんだとは随分な言いようですね、ジェイク。これが習慣なのだから仕方ないでしょう？　それよりもデュートヒルデ様、ここに軽食と飲み物を置いておきます。これを食べて寝れば、明日の朝にはすっかり元通りでしょう。その後御自宅までお送りしますので、学園には午後からでもいけるでしょう。そのように手配してよろしいでしょうか？」
「もう好きにしてください・・・」
とてもまともな状態でデュートヒルデが返事をしたようには見えなかったが、梔子は一礼をしてそのまま部屋を出て行った。
まだジェイクの腕の中でデュートヒルデはぐったりしている。

「・・・まあ色々あったけど、俺達、これから友達ってことでいいよな？」
「友達・・・そうですわね」

デュートヒルデがやっと正気を取り戻しかける。どうにも引っかかりを覚えたような気もした彼女だが、まあそれは気にしないことにした。

「じゃあこれからよろしくな。あ、俺の事は呼び捨てにしろよな？」
「ではワタクシも『ヒルデ』とお呼びくださいな。親しい人にはそう呼んでいただくことにしていますの。貴方にも特別にそう呼ばせる許可を与えますわ」
「えー、くるくるの方がいい」
「よくありません！」

そのまま部屋で言い争に発展していく2人。ほとんど抱き合った状態で口喧嘩を始めているのだが、まだ幼い2人にはその事も気にかかっていないようだ。その様子を部屋の外からこっそり聞いている者が2人。

「梔子、どうじゃった？」
「本気でキスする何秒か前に見えました」
「うーむ・・・育て方を間違えたかのう？」

ミリアザールが唸る。

「性教育もちゃんと施さんと駄目か、やっぱり？」
「それは私にやれとおっしゃっている？」
「お前なんぞに任せたら、女衒（ぜげん）が出来上がるわ！　リサに後で何を言われるかわかったもんじゃない」

本気で怒ったリサを想像して、ミリアザールが身震いする。

「ともあれ、リサには学園生活を見せないようにせんとのう・・・」

「下手したら、学園にジェイクのハーレムが出来上がりますよ?」

「天然とは恐ろしい・・・」

などと、ミリアザールと梔子がくだらない事を心配していたのであった。

そして学園に戻ったデュートヒルデは、無事に級友達と和解する。その後彼らのクラスは貴族も庶民も関係なく仲の良い、珍しいクラスになったということだ。その中心にはジェイクとデュートヒルデがいるのだが、彼らは今日も仲良く口喧嘩をしており、徐々に学園の名物となっていくのだった。

続く

ジェイクの新しい生活、その１１～和解～（後書き）

次回投稿は、５／１７（火）１４：００です。

次回から新シリーズです。サブタイトルは「ピレボスにて」

ピレボスにて、その1～たき火を囲んで～（前書き）

アルフィリース達はアンネクローゼと別れた後、検問を回避するためにピレボスを通るルートを選択するが・・・

ピレボスにて、その1～たき火を囲んで～

アルフィリース達はアンネクローゼと別れた後、彼女の指示通りに一路ピレボスを目指して北上していた。途中から魔獣や魔物がはびこる獣道となっていったが、大草原を突き進んだアルフィリース達にとって、この程度は危険のうちに入らなかった。

そして、今は野原で野宿をしている。見通しが良く、ここなら敵に襲われてもすぐに反応できると踏んだのだ。火を焚いているので誰かに見つかる可能性もあるが、遠くには農家か民家でもあるのか、視界にはちらほらと明りが見える。街道沿いにでも旅賃を節約するために野宿をする人達はいたので、いちいち明りを気にかける人間はいないとアルフィリース達は判断したのだった。

そして見張りはアルフィリースと楓とグウェンドルフである。いつもアルフィリースと一緒に眠るイルマタルは、エアリアルが添っている。

「そういえばアルフィリース殿」

「なあに、楓」

最近は楓も徐々に他人と話すようになってきた。しょっちゅうミランダが酔わせて色々な事を聞きだしているからなのだろうが、楓とて歳は成人一歩前なのである。一度任務を離れれば、年頃の女の子である。最初こそ任務中と自分を押し殺していたようだったが、これだけ長く一緒にいれば自分を隠しきれるものではない。旅を円滑に進めるうえでもコミュニケーションは重要だし、そのことが楓自身も分かってきたようだった。

「シーカーの里での出来事ですが、いつから我々に気付いておいでで？」

「んー、大草原に入ってから間もなくかなぁ・・・」

アルフィリースが思い出すしょうに語る。

「どうして気づかれたんです？　自画自賛するわけではありませんが、我々の尾行は完璧だったはずですが。事実、リサ殿にも気づかれませんでしたし」

「それはそうなんだけど、いくら完璧でも貴女達が地上から消えていなくなるわけじゃないわ。私って最近思うんだけど、危険や違和感っていうのにリサよりも敏感なのかなって。だからなんとなくだったんだけど、尾けられているのはわかってたの。どのくらいの距離か、何人かとかはわからなかったんだけど、危険はなさそうだしミランダの護衛とかかなぁって。呪印を解放するとよくわかったんだけどね」

「なんと」

楓が驚いていた。センサーを暗殺することもある彼女達の尾行技術である。それがこういとも簡単に気づかれたのでは、技術そのものの見直しをしなければならない。

「（いや、だがアルフィリース殿が特別なだけか？　どうやって気づいたかは本人も分かっていないようだし・・・ふむ、放っておいても害はないか）」

楓が自分の考えに沈む一方で、アルフィリースは何かを思い出したようだった。

「あ、大草原で思い出した！　グウェンに聞きたい事があるんだけど？」

「なんだい？」

グウェンドルフがゆっくりとアルフィリースの方を振り返る。

「私達、大草原で不思議な遺跡を見たのよ。カザスって学者がグウェンに聞いてみたいって言ってたんだけど、グウェンは何か知っている？」

アルフィリースの言葉に、日に薪をくべていたグウェンドルフの手がピタリと止まる。

「・・・知っているのね？」

「ああ、知っているけど・・・」

「言えないのね」

アルフィリースがため息をついた。

「すまない」

「いいのよ、なんとなく想像できた事だから。それに私達が知るべきでない事も、沢山あると思うから」

「そうだね、なんでも知っていればいいというものではない」

グウェンドルフのその言葉に、意味深なものをアルフィリースは感じる。だが、グウェンドルフはそうなったら何も聞き出せないだろうとも思うのだ。

「でも、いつか聞いてみたいわ」

「そうだね、いつか話せるといいんだが・・・」

「ママ～」

気がつけば、イルマタルがアルフィリースの後ろから歩いて来て

いた。

「どうしたの、イル？」
「おしっこ」
「それに見張りも交代の時間だ」
「ふあ～眠い」

エアリアルとミランダも歩いて来ている。

「もうそんな時間なの。イル、じゃあおしっこしたらママと寝ましょうね」
「うん！」

そうして嬉しそうにアルフィリースに手を引かれるイルマタルを伴って、少し離れた所に歩いていくアルフィリース。彼女達を見ながら、

「すっかり母親業が板に付きつつあるな」
「なんだか不憫だわ」

と、エアリアルとミランダが各々感想を呟くのだった。

＊＊＊

翌朝。朝の見張りはニアとリサが務めていた。そこにミランダとイルマタルが歩いてくる。イルマタルは寝起きがとても良いのだが、ミランダは大あくびをしながら歩いてきた。

「あふぅ～、見張りの中番は眠った気がしないわあ」
「交代だからな、仕方があるまい」

「それはわかってるんだけどね～。リサ、変わりは？」
「問題ありません。やはりグウェンがいるのを野生の魔獣や魔物も察知するのか、誰も近寄ろうとすらしませんね」

実際グウェンドルフが仲間になってから、全くと言っていいほど魔獣に出会わない。獣道に入って既に3日は経過したのだが、一回だけ遭遇したものの、こちらを見ると一目散に逃げて行った。エアリアルが、「相手の実力も考えず、見境なく戦うのは人間だけ」と言っていたが、その通りかもしれない。

「便利でいいんだけど、張合いもないわね」
「それは贅沢な望みというものでしょう。度は安全なのにこしたことはありませんから。アルフィは？」
「まだ寝てるよ～」

イルマタルが「しょうがないんだよ、私のママは」と言った風に、腰に手を当てて見せる。その仕草が可愛らしくて、その場の全員が微笑んだ。

「まったく、あのダメ女は・・・子どもに良い手本を見せなければだめでしょうに」
「まあいいじゃないか。たまにはのんびりした旅もいいさ」
「それはそうと、火を消さないとね」
「じゃあイルがやる～」

イルマタルが手を上げてぴょんぴょんと跳ねていた。

「それはいいけど、危ないぞ？」
「イル、どうやってやるのですか？」
「こうやるの～」

イルが息を大きく吸い込むと、氷のブレスを吹き始めた。一同は驚いたが、程なくして火が完全に消える。その様子を見てはしゃぐイルマタル。

「どう、どう？　イルは凄い？」
「う、うん。凄いと思う」
「わーい、褒められちゃった！　あ、ママだ！」

ちょうどそこへアルフィリースとグウェンドルフが起きてきたので、イルマタルは一目散にアルフィリースの方へ駆けて行った。しきりとたき火の方を指さしているので、アルフィリースに褒めてもらおうとしているのだろう。アルフィリースが頭を撫でると、とても喜んでいる。

「ミランダ、イルは昨日は火を吹いたよな？」
「ええ、それでたき火をつけたんだから」
「真竜とはいえ、複数のブレスを使うことなどあるのかな？」
「普通はないよ」

そこにグウェンドルフが割って入ってきた。

「そうなのか？」
「ああ、私も使えるブレスは一種類だからね。竜は普通そうさ。ただ、頭がいくつかある竜では複数のブレスを使うことはあるし、頭が一つでも、両親の異なる性質を均等に受け継いだりすれば、二種類を使いこなす場合がある。だが・・・」
「だが？」
「全く相反する性質のブレスを使いこなすことは、まずない。これが何を意味するのかは、私にもわからないよ」

グウェンドルフの言葉に、ミランダとニアがイルマタルの方を見る。イルマタルはアルフィリースにしがみつくようにして甘えていた。

その後、出立の用意をいち早く整え、アルフィリース達は移動を始める。

「朝ご飯もお昼ご飯も、移動しながら食べるのよね？」
「ああ、その方がいいだろうね。地図を見る限りじゃ、今日中にちょっと無理してでもピレボスの山脈の麓について、明日一気に山道を攻略した方がいい」
「そうだね、ミランダの言う通りだ。ピレボスの冬は早い。風向き次第では、もう雪が降り始めてもおかしくないんだ。そうなれば、この周囲は一気に雪に閉ざされる」
「詳しいのね、グウェンは」

アルフィリースの問いに、グウェンドルフが笑顔を作る。

「ああ、ピレボスの山頂には真竜が住んでいるからね。昔はよく遊びに来たものさ」
「ピレボスの山頂には神様が棲んでいると聞いたことがありますが？」

リサが昔聞いた噂を口にする。
ピレボス山脈。大陸で最大の山脈であり、最も高い山で標高が１万ｍを越えるものもある。そのためピレボスの麓では、時期によっては一日中夜になる村もあるのだそうだ。また魔物、魔獣の巣窟でもあり、様々な伝説の種族が棲むとされる土地でもある。絶滅したとされる巨人の住処も、ピレボスのどこかにあるのだとか。さらに

山頂に到達した人間はいまだおらず、山頂には常に雲がかかってみえないせいか、不老不死を授ける神が棲むとう伝説がまことしやかに流れており、ギルドではもはや数百年に渡って達成されてない依頼として有名になっている。

さらにピレボスは大陸の北側を完全に分断するほど横に長く、ピレボス山脈の向うにある大陸の北側がどうなっているかを知っている者はほとんどいない。ピレボスの中には北側に抜けるルートもあるとは伝えられているが、定かではない。そのルートを開拓するだけでも、一生遊んで暮らせるだけの報酬が得られると言われている。ピレボスの魔物は大草原に負けず劣らず凶悪で、普通の冒険者や傭兵では太刀打ちできないとされるのだ。

そのような山脈を背後にもち、ローマンズランドは発展した。北側からの侵入を気にしなくてよく、天嶮の山脈を利用したローマンズランドの主要都市国家は、都市そのものが難攻不落の要塞となっている。そのため、ローマンズランドが誇る主要7都市は、開国以来一度として敵の手に渡ったことが無いとして彼らは誇りにしているのだ。また、ピレボスの魔物や魔獣を慢性的に相手にしなければならないローマンズランドの軍隊は、自然と屈強な人間達で構成される。

アルフィリース達は知らぬことだが、ブラックホークのルイはローマンズランドで師団長まで上り詰めたが、それでもあの実力を持ってして師団長どまりだったのである。それだけでもローマンズランドにおける軍人達の層の厚さが伺えるだろう。

そのピレボスがアルフィリース達の目の前に迫っていた。もっとも一番高い山は遥か西にあるので、目の前にあるのはせいぜい４０００～５０００m級の山程度だ。

「確認するけど、山は越えなくていいのよね？」

「ええ、地図の上では、せいぜい１／３程度も上がればいいはず」

「馬が足を痛めなければいいがな」

「荷物を減らす可能性も考えないといけないな」
「食料はピレボスを降りれば何か手に入ると思いますが、その段階でもう内戦地帯に入っている可能性もあるのでは？」
「ちょっと待って、もう一度確認する」

ミランダが馬に乗る前に、アンネクローゼにもらった地図を開いて確認していた。その話し合いにアルフィリース、ニア、ユーティ、楓も加わる。アルフィリース、ミランダ、ニア、は旅する者の教養として地図が読めるし、楓は仕事の必要性から学んでいる。ユーティはといえば、この前ミランダが教えた所、一回で読めるようになってしまった。どうやら達者なのは口だけではなく、頭の回転も相当早いらしい。さらに、一回見たことはだいたい忘れないのがユーティの特技だった。

リサは盲目だから読めないし、エアリアルも大草原暮らしが長すぎて読めない。と、いうより必要なかった。大草原は彼女にとって庭であったし、地図など必要なかったので旅の商人からも買いつけてはいなかったのだ。ラーナもエアリアルと同様である。グウェンドルフに至っては、おおよその大陸の地形は頭に入っているが、地上を歩くのは初めてなので初心者も同然だった。もちろんイルマタルにわかるはずもない。

そうしながら地図を読めるメンバーが額を合わせて相談していたが、リサがふとセンサーに感知される存在に気がつく。その様子の変化に、エアリアルがいち早く気がついた。

「どうした、リサ？」
「何者かがまっすぐこちらに来ます」

その言葉に全員が反応する。

「数は？」

「1人です。今のところは」
「敵？」
「それはなんとも。ただ相当できますね、足音が極端に小さい。間違いなく戦士でしょう。それに・・・これは獣人？」

リサがセンサーを全開にして探っている。その事に相手も気がついたのか、全速で間を詰めてきた。

「速い！」
「敵か！？」

草原の向うから、風を巻いて接近する影がある。確かに人間では無理な移動速度だ。エアリアルの馬を駆けらせるより速いかもしれない。

そして彼女達の前に姿を現したのは、黒豹の獣人の男だった。

続く

ピレボスにて、その1～たき火を囲んで～（後書き）

次回投稿は5／18（水）13：00です。

ピレボスにて、その2～ニアの苦手～（前書き）

ピレボスに向かうアルフィリース達が出会った人物は・・・？

ピレボスにて、その2～ニアの苦手～

目の前に現れた黒豹の獣人は細身だったが、精悍な顔つきと、戦士として纏う気配が尋常ではないことをアルフィリース達に悟らせる。その獣人が凄まじい使い手なのは、誰の目にも明らかだった。

アルフィリース達は一瞬身構えるが、彼には殺気が全くなかった。その獣人がゆっくりと鋭い目でアルフィリース達を見回すと、アルフィリースに隠れるようにしているニアに目を止める。

「ニア？　何してるの？」

「な、なんであの人がここに・・・」

ニアが涙目でふるふると震えていた。その様子を訝しむアルフィリース。

「ニア？　いったいどうして・・・」

「きゃあ～！　ニアちゅわあ～ん、お久ぶりね～！」

「「はあ？」」

思わずアルフィリース達が、気の抜けた声を同時に上げてしまった。先ほどまで精悍だと思われていた獣人の男性が、いきなり女言葉を発したのだ。しかも手を目の前で組み、その手に頬ずりしながら筋肉質な体をくねらせている。見ていてあまり気持ちの良い光景ではない。いや、正直気持悪い。

「なんだ、あれ？」

「あれが世に言う、オカマでは？」

「ふむ、外の世界には不思議がいっぱいだな」

エアリアルでなくとも不思議であったであろう。そんな呆然とする全員の後ろで、ニアはガタガタと震えていた。

「た、た、隊長！　なんでここに！？」

「え、隊長！？」

アルフィリースが思わず目の前の獣人をまじまじとみる。目の前のオカマ風獣人が、ニアが常々話していた凄まじく強い隊長だというのだろうか。その獣人が女言葉で挨拶する。

「はあ～い！　只今紹介に預かりました、ニアちゃんの上司のアムールでーす。『アムちゃん』もしくは『アムたん』って呼んでね？」

「うわぁ・・・」

「ニアが旅に出た理由が今わかりました。グルーザルド、恐るべし」

リサの感想は全員が同様だった。全員が完全に開いた口がふさがらない。グウェンドルフですら少しあんぐりしていたので、これは凄まじい衝撃なのを認めざるをえないだろう。だが、ニアは一向に震えが止まらず、アルフィリースにしがみつくようにしていた。

「な、なぜここに。まだ期限には時間が・・・」

「んもう、ニアちゃんたら！　そんな後ろに隠れてないで、出てらっしゃい？」

と、ふとアムールの体がアルフィリース達の目の前から消える。いや、正確には消えたように見えたのだ。すると、彼はいつの間にかニアの背後に回り込んでおり、ニアの肩に手を置いていた。

「え？」

「速い」

「ひえっ！」
「相変わらず照れ屋さんなんだから～」

そうして笑顔を軽い口調とは裏腹に、アムールはあっという間にニアの腕を後ろで捻りあげてしまった。ニアの腕は既に固定を取ったとはいえ、まだ本調子ではないのだ。

「いた、いたた！」
「あら、ニアちゃん怪我してるの？」
「そ、そうなんです。だからあんまり乱暴はやめてください」
「そういうわけにはいかないわよ～だってこの子、久しぶりに上官に会ったって言うのに、ろくに挨拶も出来ないんだもの」

アルフィリースが止めようとするが、アムールの顔は笑っているものの、目が全く笑っていない。内心ではかなり怒っているのだろう。言葉遣いや態度はどうあれ、彼も規律に厳しい軍人には違いないのだ。

「ほら、ニアちゃん挨拶は？」
「お、お久しぶりですアムール隊長！」
「うむ、よろしい」

ぱっとアムールがニアの手を放し、ニアが左腕をさすりながら体勢を立て直す。その様子をアムールは一見にこやかに見ている。
だがアルフィリース達の警戒心はかなり上がっていた。先ほどのアムールの速度、全員が完全に目が付いていかなかったのだ。

「（速い・・・ニアとは比べ物にならないくらい。これがグルーザルドの隊長格の軍人）」

アルフィリースには驚嘆の出来事だったが、とりあえず敵ではなさそうだ。そうこうするうちにニアが姿勢を正してアムールに質問をする。

「それで隊長、いかな用事ですか？　まだ冬になるまで、私の旅には期限があったと思いますが？」

「それがね～、中原の情勢が慌ただしくなってきたから、グルーザルドも本格的な戦争になりそうなのぉん。アタシも嫌だって言ったんだけど、今回指揮官クラスの人間が足りないからってことで、アタシも無理矢理千人長に戻されてねぇ。それで副官をあてがわれたんだけど、てんで使えない子だったから、アタシの副官を連れてきますってことでここに来たの」

「つまり・・・」

「そう、ニアちゃんをアタシの副官にって話よぉ？」

ニアが驚きの表情を隠せない。グルーザルド軍を辞めるかどうかの話をしていたところに、突然の昇進の話である。しかも一足飛びに千人長である。さしものニアも、予想外の話に戸惑っていた。

「隊長、本気ですか？」

「・・・俺の顔が冗談に見えるか？」

突然アムールの口調が男のものに戻る。表情は真剣で、まるで戦場にいるかのように目が鋭い。それだけ本気なのだろう。

ニアもそのことは察したようだ。ニアもまた真剣な表情になる。

「しかし、なぜ私をそこまで？」

「以前からお前には目をつけていた。少し短気なところはあったが、それを差し引いても広い視野、冷静な判断力がある。お前は一戦士で終わる器じゃない。今の獣将達が引退すれば、いずれは彼らにと

って代わる器だと俺は思っている」
「でもそんなことは一言も・・・」
「当時のお前にそんなことを言っても、素直に聞いたか？」

アムールの言葉に、ニアは首を横に振る。

「いえ。きっと聞かなかったでしょう」
「俺もそう思った。だからお前を旅に出したのさ。人間の世界で修行すれば、少しは学ぶこともあるかと思ってな。何か得る物はあったか？」
「はい」

澱みなく答えたニアに、アムールの瞳が光る。

「ほう、何を？」
「友人を得ました」

きっぱりとニアが言いきる。その答えに頷いたアムール。

「なるほど。それは何よりだ」
「つきましては、私から隊長にお願いが」
「なんだ？」

少し上機嫌になったのか、アムールが顎をさすりながら聞いていたが、次のニアの言葉で彼の機嫌は一気に損なわれることになる。

「グルーザルド軍を辞めさせてください」
「何ぃ！？」

アムールの全身の気が一気に逆立つ。周囲の空気さえ凍てつかせ

るような凄まじい殺気に、アルフィリース達は思わず一歩下がったが、ニアも余程の決心で言ったのか、彼女だけは青ざめながらも下がることなくその場に佇んでいた。

「この俺がわざわざここまで出向き、しかも貴様の出世まで取りつけてきた。それがそんなに不満か？」

「いえ、隊長のお心遣いは非常にありがたいかと。しかし、私は自分の行くべき道を見つけました」

「それはなんだ！？」

アムールが爪を出す。その様子にアルフィリース達が武器を抜こうとするが、ニアがいち早く制した。

「俺の納得がいく答えを言ってみろ、ニア！　もしつまらん理由なら、今ここで首が飛ぶぞ！？」

「私は旅の中で学びました。戦わされるのではなく、自らの意志で戦いたいと」

ニアはアムールの殺気に気押されながらも、あくまで冷静に言い放つ。

「私が軍に入ったのはつまらない理由です。家に居づらくなったのを、父と母に憧れて軍に入ったことにした。特にグルーザルドのために尽くしたいとか、強くなりたいとか、少しはあったとしても、決してそれが一番の理由ではなかった。ですが、この旅に置いて様々な経験や感情をこのアルフィリース達を共有するうちに、私にも心から守りたいものができました。私の力はそのために使いたいし、そのためならもっと私は強くなれるでしょう」

「・・・」

その言葉を聞いた後、アムールはしばらく黙っていたが、やがて爪を引っ込め殺気を収めた。場の緊張感が一気に終息する。

「言うようになったな、ニア。自分の頭で考える事が少ない現在の獣人達において、大したもんだ」

「・・・」

「だが、この短期間で何があった？　もう少しお前の話を聞いてみたい」

「アルフィリース、話していいだろうか？」

「・・・しょうがないと思うわ」

アルフィリース達は出立を一端取りやめ、その場でアムールに黒いローブの魔術師達の事を説明した。その説明をじっと腕を組んで聞いていたアムールだが、全ての話が終わるとゆっくりと口を開く。

「なるほど・・・事情はわかった」

「アムール隊長」

「だが、それならなおさらだな。ニア、やはりお前は一度グルーザルドに戻れ」

「え？」

その言葉に思わずニアが身を乗り出した。理由がわからず、困惑の色が見える。

「隊長、それでは！？」

「いや、お前の気持ちはわかってる。もはやお前がグルーザルドのために働く気が無い事も、隣の友人達が心配な事も、そのカザスって男の事が心配な事もな」

「な、なっ、ちがっ」

ニアが顔を真っ赤にし、尻尾が左右に高速で動いている。その様子を見てアムールは意地悪そうに笑った。

「既に事態が俺の想像をはるかに超えている。これは一端ゴーラ爺さんに相談した方がいいだろう。だからお前は一度あの人に話を直接するがいい」

「ゴーラ？　彼はグルーザルドにいるのかい？」

グウェンドルフが突然意外そうな声を上げたので、全員が彼を見た。

「貴方は？」

「これは失礼をした、獣人の戦士よ。私の名前はグウェンドルフ。君達が5賢者とかつて呼んだ者の一人だ」

「真竜グウェンドルフ！　これは失礼をいたしました」

アムールが地面に膝と拳をつき、臣下の礼を取る。

「知らぬこととはいえ、とんだ御無礼を。若輩者、礼儀知らずの獣人ゆえ、平にご容赦のほどを」

「いや、そのようなことは気にしない。それよりも君とゴーラの関係は？」

「私はゴーラ老の弟子にございます」

恭しく（うやうや）アムールが礼をする。

「貴方様の事も師匠から伺っております。お恥ずかしい話しですが、私はその昔とんだ暴れん坊でして、その性根を叩き直さんとゴーラ老に懲らしめられました。それから師匠より非常に多くの事を学び、現在に至ります。獣将達、また国王であるドライアンも、我が師匠

より多くを伝えられた者。私は師匠の言い付けでグルーザルド軍内にて、新しい獣人の才能の芽を発掘し、育て上げるように仰せつかっております」
「なるほど、その内の一人がニアだと」
「その通りにございます」
アムールがニアの事をチラリと見る。
「だが、ニアを連れ帰るのはそれだけではないのだろう？」
「！　これは隠せませんな」
「隊長、どういうことですか？」
アムールがより深刻な面持ちになった。
続く

ピレボスにて、その2～ニアの苦手～（後書き）

次話投稿は5／19（木）12：00です。

ピレボスにて、その3～一時の別れ～（前書き）

ニアの上司からもたらされる事実に、彼女の決断は・・・？

ピレボスにて、その3～一時の別れ～

「ニアよ、獣将のロッハを知っているか？」
「ええ、もちろんです。『神速』の異名をとる将軍ですよね」
「そのロッハと俺は腐れ縁なのだが、奴から妙な伝令が来てな。グルーザルド領内に裏切り者が多数いると言うのだ」
「なんと！？」

ニアがまたしても立ち上がる。グルーザルドの軍はその結束の固さで有名なのだ。他の獣人の国と違い、グルーザルドが一大軍事国家となりえたのは、その辺りの事情もある。軍にいたからこそ、ニアもまた実感の伴う事柄だ。その内輪に裏切り者など、ニアには信じられなかった。

「もちろん確証はない。だがそれは俺も引っかかっていたことではあるし、ゴーラ師匠も指摘をしていた。だから今回俺が出世したのも、ロッハが働きかけてのことだ。うかつな奴を信用できんとな。副官を当てられるのを断ったのも、信頼できる奴を傍に置いておきたいからだ。先ほどの内容を聞く限り、やはりお前は信頼できそうだからな」

アムールがニアの方をじっと見ている。

「ですが、隊長・・・」
「お前の気持ちもわかっているつもりだ。だからずっと俺に仕えろなんてことは言わん。だがせめて3年、いや、1年でもいい。グルーザルドを蝕む連中の正体がわかるまで、俺の傍で働いてくれないか？　お前の家族もグルーザルド領内にいるのだろう。疎遠とは聞いているが、無視もできまい？」

「・・・それはそうですが」
「それにな、お前の妹が今軍にいる。会ってみないか？」
「え！？」

その言葉はニアには意外だったので、俯いた顔が思わず上がる。家を飛び出してから一度も帰省をしていないため、ニアはその顔を全く知らないが。

「強いぞ、お前の妹は。いずれ将軍職につくかもしれん」
「そんなに・・・」
「それだけじゃない。軍に入った理由が、お前に会うためなんだそうな。可愛いじゃないか」

アムールがニヤニヤしたので、ニアは困ってしまった。一度も会ったことのない妹に慕われても、どんな顔をすればいいのかわからない。だが、確かに会ってみたくもある。
それにアムールの言うことも尤もだった。もしグルーザルドに裏切り物が多数いるのなら、いずれは他の国にとっても無関係ではなくなるのだろう。ニアがどうすべきか悩んでいると、アルフィリースが彼女の肩に優しく手を置いた。

「ニア」
「アルフィ」
「一度グルーザルドに行ってきたらどう？」
「いいのか？」

ニアが申し訳なさそうな顔をしたので、アルフィリースは力強く頷いてみせた。

「このままじゃすっきりしないでしょう？　それに、私の方は傭兵

団を立ち上げるまでに多少時間がかかるわ。彼らとの休戦協定もあるし、今すぐにどうこうなるわけではないと思うけど、そちらは急を要するんじゃない？」
「それはそうかもしれないが」
「それにもしかすると、彼らが裏にいるのかも」
全員がはっとした。その可能性は十分にあり得るのだ。
「だから、ニアが行くのはきっと無駄にならないはず。心配しなくてもカザスはきっと生きてるし、彼にはちゃんと貴女の行き先を伝えておくから」
「・・・そうだな。私は、私にできることをするか！」
ニアの決心がついたようだ。目に力強さが戻る。
「アムール隊長。その話、お受けします」
「いいのか？」
「はい！　もう決めましたから。ただし、長居はしませんよ？」
「言うようになったぜ、こいつめ」
アムールがニアの頭を腕で抱え込むように頭をわしゃわしゃと撫でる。
「それではすまないが皆さん、このニアを今しばらくの間借りて行くぜ」
「ええ、早めに返してほしいわ。私の友達なのだから」
「ああ、ノシつけて返してやるさ。じゃあなニア、行くぞ？」
「あ、はい！」
既に歩き始めたアムール。その後に付いていこうとして、ニアが

もう一度アルフィリースの元に駆け寄る。
「すまない、突然こんなことになって」
「いいのよ。それより、ニアの無事を祈っているわ」
「ああ、私もだ」

アルフィリースとニアはがっちりと抱擁を交わし、他のメンバーとも別れを惜しんでいる。その一方で、アムールにそっとグウェンドルフが近づいて行った。

「アムール殿」
「これはグウェンドルフ様」
「ゴーラに伝言をお願いできるかな？　近くグウェンドルフが会いに行くと」
「はい、我が師も喜ぶでしょう」

アムールは深々と礼をすると、ニアを促し去っていた。ニアは何度もアルフィリース達の方を振り返っていたが、やがてその姿も見えなくなる。

「行っちゃったね」
「ああ、突然だったね」
「全く、常識人が一人減ってしまいました」
「しばらくあのツンデレっぷりが見られないのは寂しいわね」

ユーティがため息をついたのをきっかけに、その場に重い空気が流れる。その沈黙を破ったのは、イルマタルの声だった。

「ねーねー、ニアとはまた会えるんでしょ？」
「そうね、イル。きっと会えるわ」

「じゃあ私達ももう行こうよ？　早くしないと日が暮れちゃうよ？」
「あっはは、こりゃイルに一本取られたね。この子が一番のしっかり者だ！」

ミランダが笑ったので、全員がくすりと互いを見て笑った。そして彼女達もニアとの別れを惜しみつつ、その場を後にするのだった。

＊＊＊

アルフィリース達はピレボスに向かい、さらに進む。アムールとの邂逅がありつつも、その日は予定通りピレボスの麓で一泊し、翌日ピレボスを越えるべくアンネクローゼの案内通りに進むつもりだった。だが――

「道が・・・」
「落石ね」

元々道もあって無きが如き山道だったが、それにしても向うから来る人間が誰もいないのはどうなのだと、ミランダが危ぶんでいた矢先だった。

「どうしよう？」
「いったん戻ってここから南に行けば北街道の分枝には行けるが・・・」
「危険でしょうね。まだ検問があった場合、まずいことになるかもしれません」
「それに人が多いと目にもつく。加えてよく考えると、アタシ達って国境を超える時の通行証を持ってないのよね」

ミランダの言葉に、全員が首をかしげた。

「通行証って何？」
「う、ニアがいなくなって、もはや全員世間知らずばっかりか。中央街道はあまりにも人が多いし、平和だってのもあるから通行証なんてよっぽど怪しい人間しか確認されないけどね。北や南の街道は人もそれなりにまばらで、治安もよくない。だから普通は国境ごとに身分を立てる通行証がいるんだよ」
「そんなの、ちょっと街道を外れて国境を越せばいいじゃない？」
アルフィリースが堂々と言い放ったので、ミランダは呆れてため息をついた。
「そんな堂々と犯罪発言をされてもね。まあその通りなんだけど、国境には巡回している警備兵がいるから、彼らに見つかったら言い訳はできないわよ？　楓みたいに単独の隠密行動ならまだしも、国境には一見何もないように見えて魔術で罠が張ってあったり、集団で抜けるとなると結構面倒臭いんだ。それに宿も治安が悪い場所ほどに、通行証がないと泊めてくれない宿が増える。ブリュガルではアタシのアルネリア教の証が通行証代わりになったけど、そうとばかりは行かないんだ。戦争地帯で国境破りと、野宿の連続になるよ？」
「それは・・・」
「どっちにしても野宿は覚悟の上ですけどね。アンネクローゼの言う通りに進めば、国境破りは上手くできると言ったところですか」
リサが冷静な発言をしたので、ミランダが頷く。
「ミランダ、ちなみに南に戻った場合、どのくらいの確率で私達は国境を突破できると思いますか？」
「・・・アタシ達の実力なら突破はできるかもしれない。でも、ほ

ぼ１００％ひっかかるね。戦争地帯との境はとても警備が厳しいから。引っかかったら後の方が問題さ。もし懸賞金でもかけられようものなら、そこら中の傭兵の的にされかねないよ」

「それは上手くないなぁ・・・」

これから傭兵団を作ろうかというのに、そのような危険を冒すことはアルフィリースにはためらわれた。そしてその後幾分か話し合った後、ピレボスをもう少し北上できるのではないかという結論に辿り着いた。

「地図の上では道がありそうなんだけどね」

「遭難はしたくないわねぇ・・・」

アルフィリースは目の前に広がる山々を見ながら呟いた。背後には地上が見えるが、前面には見渡す限りの山である。最悪グウェンドルフに乗ればひとっ飛びではあるが、その場合馬や装備は全て犠牲になるだろう。シルフィードを置いていくことは、エアリアルが承知すまい。

そうしてアルフィリース達は、当初の予定とは違う行動に出るのだった。

＊＊＊

道を外れてしばらく行くと、山はさらに高くなっていく。もはや標高２０００ｍは超えているかもしれない。エアリアルの馬だから進みも早いが、普通ならもう日が暮れる時分だが、まだ適当な野宿の場所も見つからない。

「空気が少し薄いですね」

「ちょっと息苦しいかな」

「あ、楓が帰ってきた」

このような山岳地帯では、馬よりも楓の方が圧倒的に足が速い。彼女は常に先行し、先の安全を確かめてくれる。その楓が帰って来たのだ。

「報告します」
「どうだった？」

いつも報告を聞くのはミランダである。

「進路に問題はありませんが、魔物同士の争いが起こっています」
「魔物？　どんな？」
「詳しくは見えませんでしたが、羽根のある魔物同士の争いのようでした。片方が一方的に追い立てていたようなので、ほどなくして止むと思いますが」
「うーん、じゃあしばらく休憩するのがいいかな？　アルフィ、どうする？」
「そうね。あるいはこの混乱の隙に乗じて、一気に突破しちゃうってのも手かも」
「なるほど。皆は？」

ミランダが意見を求める。

「待つ時間が無駄ではないか？」
「そうですね、もう日が中天を越えていますから、そろそろ安全な寝床を探しにかかるべきでしょう」
「岩山に水場は期待しない方がいいわよ～。だから水が無くなる前にこの山を降りる事を考えると、少しでも先に進むことをお勧めするわ」

最後のユーティの言葉が決定的だった。旅に水は必須である。水がなくなることほど、旅に置いて怖いことはない。水なしでも旅だけなら3日程度はなんとかなるが、戦うことも考えると、1日でも水が無いと辛い。一行は多少強引にでも先に進むことにした。

そしてしばらくすると、戦いの物らしき喧騒が聞こえてくる。

「まだやってるわね」

「空か？」

「あちらです」

リサが指した方向を、身を隠しながらそっと見るアルフィリース達。

「あれは・・・野生のグリフォン？」

「珍しいですね。しかも群れですよ」

「やられているのはなんだろうな。よく見えない」

「今ちょっと見えたよ！　白い羽みたい。あ、落ちてくる！」

ユーティの言う通り、グリフォンの群れに追い立てられ、白い羽の何かがこちらに向かってくる。どうやら胸には何かを抱いているようだ。どうも鳥ではないようだが、その何かを守る余り、戦うことも身をこともままならないらしい。そしてグリフォンに空中で蹴飛ばされたのか、白い羽根の何かがバランスを崩したようだった。

「地上にぶつかるぞ？」

「いけない！」

アルフィリースはいつのまにか駆けだしていた。小型の《圧搾大気（ディーププレス）》を地面に向けて発動し、その反動で落ちてくる何かの落下速度

を緩める。そして上手い事こちら側に弾くことに成功したアルフィリースは、反射的にそれを抱きとめた。

「え、女の子？」

アルフィリースが受けとめた何か。それは、背中か白い羽を生やし、胸には漆黒の剣を抱いた天使の様な女の子だったのだ。

続く

ピレボスにて、その3～一時の別れ～（後書き）

次回投稿は5／20（金）12：00です。

ピレボスにて、その４～空に舞う羽～（前書き）

アルフィリースが受け止めた少女の正体は・・・？

ピレボスにて、その4～空に舞う羽～

アルフィリースは、思わず自分の腕の中に収まっている少女をまじまじと見た。その姿は、まさに神話に聞くところの天使のようだった。はるか昔、人語を話す竜と共に天から舞い降り、人間やその他の種族に様々な知識を授けたとされる天使。白い羽に金の輝く髪を持ち、東方で金の髪を持つ人間達に特権階級の意識が強いのは、彼らの髪色が天使に由来しているからだと主張されていることは、アルフィリースでも知っている。

もっとも、グウェンドルフの話を聞く限りでは天使という種族は存在せず、有翼人（ニケ）の長であったイェラシャの髪色がたまたま金だっただけのことで、有翼人自体にも金の髪が多いといえど、様々な姿形の者が存在していたらしい。神話など都合の良い方に解釈されるものだと、グウェンドルフは言っていたのを思い出す。

そして今アルフィリースの腕の中にいる少女は、金の髪、白い羽根、玉のような肌をした、伝説の天使そのものである少女だった。胸に抱く黒い剣が、より彼女の白を強調する。アルフィリースは期せずして少女の羽を持って支えていたのだが、極上の生地のように柔らかい。その羽根を枕の代わりにして寝たらさぞかし気持ちがいいだろうと、アルフィリースは想像してみる。そして、少女自身も背が低いわけでもないのだが、体はまさに羽根のように軽かった。その軽さと姿形が相まって、非現実的な世界にアルフィリースは迷い込んだような錯覚さえ覚える。

そして少女は一瞬気絶したように眼を閉じていたが、アルフィリースが抱え直したのを契機に覚醒すると、開いた眼がアルフィリースと交錯する。

「ええ、と・・・大丈夫？」

「・・・ヤーラ！　イムカ、アレ！」

少女が突然驚いた表情になり、アルフィリースの腕の中でよくわからない言葉を叫びながら暴れ始める。少女は軽い割に力は強く、アルフィリースは突然の少女が暴れたことで、アルフィリースもまた慌ててしまう。

「ちょ、ちょっと！　落ち着いて！　何もしないから！！」
「イムカ、アレ！　ヤーラ！　ヤーラ！！」

だが少女に言葉は通じないのか、暴れる一方だった。そしてついに彼女は暴れすぎたためアルフィリースの腕の中からこぼれ落ちそうになり、同時に胸に抱いていた黒い剣も落ちかける。

「おっと！」
「ハウ！」

そしてアルフィリースは左手で少女を抱きとめ、右手でこぼれおちる剣を掴んだ。その瞬間に少女が奇声のようなものを上げてアルフィリースをさらに驚いた眼で見たが、それ以上にアルフィリースの右手に違和感があった。

「剣が・・・？」

黒い剣には厳重に封印のような剣帯が施されていたのだが、それがひとりでに外れたのである。剣帯はほどけただけなのだが、そのほどけ方が奇妙で、アルフィリースは確かに「パチン」という何かが切れたような感覚を右手に感じたのだ。

アルフィリースが右手を見るのにつられるように、少女もまたアルフィリースの右手を見る。そして、その目がさらに大きく見開かれた。

「・・・ユーノ、レメゲート、マスター？」
「え？」

少女が今までと違う口調で話したので、アルフィリースは思わず少女を見返した。といっても、言葉が通じるわけではないのだが、少女が何か大切な言葉を発したような気がしたのだ。
そんな2人の上に、黒い影がさしかかる。ふとアルフィリースが我に帰ると、グリフィンがアルフィリースの頭を鷲掴みにできそうなかぎづめで、上から襲いかかって来るところだった。

「しまっ・・・」
「うらあっ！」

対応の遅れたアルフィリースだったが、すんでのところでミランダがメイスを振い、グリフィンの腹を殴って追い払う。

「アルフィ、ぼーっとすんな！」
「っ、ごめん！」
「くそ、空を飛ぶ奴は厄介だね。あまり効いていない」

確かにミランダのメイスを腹に受けながら、グリフィンは悠然と飛んでいた。踏ん張りがきかない空中では、さしものミランダのメイスも威力は半分以下だった。

「エアリー、弓で追い払って！」
「それは構わんが、数が多すぎる！」

エアリアルの言う通り、空にはいつのまにかグリフィンの群れで覆い尽くされていた。グリフィンの隊長はおよそ３ｍ。４足歩行で

ありながら、空を巨大な翼で飛びまわる肉食動物である。首から上は鷹を思わせる姿だが、胴体部分は獅子である。知能は高いとされるが性格は非常に獰猛で、人間のみならず魔獣や魔物まで襲って捕食すると伝えられている。かぎづめは非常に鋭く、人間の頭蓋骨程度なら簡単に砕いてしまうのだ。

そんなグリフィンの群れが、頭上に５０頭以上。足場も狭く、情勢は明らかにアルフィリース達に不利だった。グリフィン達は新たな餌を見つけたと思ったのか、白い羽根の少女だけでなく、アルフィリース達も取って喰わんと狙いを定めたようだった。

「どうしますか？」

「時間はかかるが、降りてきたところを少しずつ仕留めよう。我の弓でも、一撃で倒すのは難しい」

楓の問いに、エアリアルが答える。そして頭上を睨みながら、ミランダが嫌な予感を察知する。

「いや、まてよ。たしかグリフィンって・・・」

ミランダが自分の知識から、グリフィンに関する事項を引っ張りだす。その中に、確かグリフィンはブレスを使う記述があったような・・・

「あ、まずいかも」

ミランダがぼそっと呟いた瞬間、グリフィン達の群れが口を大きく開けていた。口からはちろちろと炎が漏れだしてくるのが見える。その動作に気が付いて、全員の体が一瞬硬直する。周囲に身を隠す所はあるといえど、この数のグリフィンのブレスを同時に受ければひとたまりもない。

「（くっ、間に合うか？）」

ミランダが防御の魔術を展開しようとする以前に、先に動いていたのは白い羽根の少女だった。アルフィリースの手からするりと抜け出ると、腰に佩いていた二本の剣の内、一つの剣を抜き放つ。

「ユーノ、ダーヴ！」

少女が何かしら叫び、アルフィリースは言葉がわからないなりにも、その意味を察する。

「皆、伏せて！」

反射的に全員が伏せた時、白い羽根の少女が剣を天空に向けて振り払う。その瞬間、周囲一帯が光と轟音に包まれ、思わず全員がうずくまっていた。そして、光が去った後、おそるおそる全員が頭を上げる。

「今のは？」
「一体何が・・・」

アルフィリース達が顔を上げた時、ぼるぼろと黒い物体が空から落ちて来るところだった。それらは露出した岩場に当たり、形を原型なく崩していく。その一部がアルフィリースの足元に転がって来るが、足元の黒い塊を見たアルフィリースは軽く悲鳴を上げてしまった。

「これは、グリフィンの頭？」

アルフィリースの足元に転がるのは、炭となったグリフィンの頭だった。一体何が起きたのかわからず、アルフィリース達は呆然とする。白い羽根の少女は剣を振るった反動で後ろにこけたのか、地面にぺたんと座りこんでいた。
上空では既にグリフィンの群れが撤退を始めている。

「驚いたな、精霊剣の一本だね」

グウェンドルフがふと呟いたのを、リサは聞きのがさなかった。

「グウェン、精霊剣とは？」
「ああ、その昔エルフや人間が魔王に対抗するため、様々な武器防具を鍛えた時がある。聖剣、神剣、魔剣・・・呼び名は使われ方にもよって様々だが、あれは上位精霊そのものを御神体として作られた精霊剣だね。確か名前は、雷鳴剣インパルス」
「精霊剣」

その言葉をかみしめるように、アルフィリースが上空を見る。一振りで１０体以上のグリフィンを完全に絶命させた。インパルスを際限なく振るえるとしたら、戦争そのものが変わってしまうだろう。その力に感嘆しつつも、恐ろしさに身の気がよだつアルフィリース。
だがそれは剣を振るった当の少女も同じようで、剣を握りしめたまま小さく震えている。アルフィリースは彼女にそっと近寄ると、剣をもつ両手を握りしめ、そっと指をほどいてやる。

「大丈夫。もう大丈夫だから」
「・・・ユーノ」
「ありがとう、助かったわ」

アルフィリースが少女に微笑み、手を取って少女を立ち上がらせ

る。すると、少女が真っ赤になり、なぜかもじもじとし始めた。

「ユーノ、マリージ？」
「え？」
「レメゲート、プルーブ、ユーノ。ユーノ、マリージ、エメラルド？」
「？？」

アルフィリースには少女の言葉がさっぱりわからないのだが、どうやら真剣に何かを聞かれているような気がした。そして少女が段々と詰め寄って来るので、その剣幕にアルフィリースは徐々に押され始める。

「ユーノ、マリージ？」
「え、と・・・そう、なのかな」

アルフィリースはよくわからず、せまる少女に呼応するようについ頷いてしまった。すると少女は顔を完全に赤らめ、両手で顔を覆ってしまった。

「何？　何なの？？」

アルフィリースがうろたえる中、見かねたユーティが近づいてくる。

「アルフィ、どうしたの？」
「いや、言葉がわからなくて・・・」
「へえ。この子は多分ハルピュイアなのかもね。それなら言葉がわからなくても、しょうがないかも」
「ハルピュイア？」

アルフィリースには聞き慣れない言葉だった。目でミランダ達の方を見るも、誰も心当たりがないようだった。そんな中、ユーティが得意げに話す。

「ハルピュイアってのはね、ここピレボスで人間がとても到達できない様な、切り立った場所に居を構える種族の事よ。他の種族と関わらないから、滅多に人前に姿を現さないの。元は獣人に近いようなはずなんだけど、グウェンの話を聞く限りでは翼人（ニケ）族とも関係があるかもね。戦いと破無縁な温厚な種族だし、外界と隔離されて長いから言葉が通じないのも無理ないはず。ともかく、彼女達と接するのはワタシ達妖精くらいのものよ」

「だから知ってるの？」

「まあ妖精って精霊に近いから、同じ集落にこもっていても他の集落と交信はできるのよ。話だけは聞いたことがあるわ。ちょっとこの子と話してみてもいいかな？　ワタシなら言葉がわかるかも」

そう言って、ユーティは白い羽根の少女と何やら話し始める。

「ユーノ、フェアリー？」

「そうそう、ワタシは水の妖精のユーティよ。よかったらお話を聞かせてくれる？」

「ヤー」

そうしてしばらく話した後、ユーティが少女を伴って、アルフィリース達の元に歩いてきた。

「どうやらこの子は、族長のいいつけで旅に出る途中だったみたい」

「旅？」

「ええ、占いでこの子が旅に出る時が来たんですって。この子はハ

ルピュイアの中でも、色々特別みたいね」

ユーティが少女の肩に座って話し始める。

続く

ピレボスにて、その4～空に舞う羽～（後書き）

次回投稿は5／21（土）12：00です。

ピレボスにて、その5～ハルピュイアの娘～（前書き）

アルフィリースは背中に羽が生えた天使のような少女を助けるが、
その結果・・・？

「まずこの子は、人間とハルピュイアのハーフみたい」
「ハーフ？」
「そう。非常に珍しいんだけど、お母さんが人間で、お父さんがハルピュイアみたいね。あ、男だったらハルパスかな。ともあれ、この子のお母さんはどこかの貴族の出身じゃないかって。権力争いに負けて落ち延びる先で、追手に殺されそうなところを、たまたま通りかかったこの子のお父さんに助けられたみたい。それで2人は恋に落ちて、共にハルピュイアの里で暮らし、この子が生まれたんだって」
「絵に描いたようなロマンスだねぇ」

ミランダが感心している。ユーティはなおも話を続けた。

「だけどこの子は混血児ってことで、ハルピュイアの集落ではいじめられたみたいね。お母さんもこの子を産んですぐに死んだみたいだし。だけど、この子は集落の宝剣であるインパルスに認められたの」
「精霊剣は使い手を選ぶからね」

グウェンドルフが言葉を添える。

「そのせいかな、さらにこの子は村で居場所を失くしたみたい。加えてインパルスが使えるってことで、さらに封印された剣、レメゲートの方も押しつけられたみたい」
「封印・・・あの黒い剣ね」

アルフィリースは自分の手にある黒い剣を見た。自分で握ってい

てなんだが、どうにも不気味だった。グウェンドルフもアルフィリースの剣を不思議そうに見ているが、何か言いたそうな事があるのをこらえて、ユーティの話を促した。

「お告げがあったそうよ。レメゲートの封印が近いうちに解けるとね。その時この剣が集落にあるのは良くないから、誰かに持たせて旅に出せと。さすればレメゲートの正統な使用者が現れ、万事うまくいくであろうとね」

「じゃあこの子は剣の使用者を探しに？」

「もう見つかったんじゃない？」

ユーティが意味深な眼でアルフィリースを見る。

「まさか・・・」

「そう、アルフィリースが触ったことで、この剣の封印は解けたみたい。でも、完全ではないみたいよ。だからこの子、エメラルドも判断に困るって」

ユーティがエメラルドと呼んだ白い羽の少女を見ると、確かに彼女は困ったような顔をしていた。

「それにこの子はレメゲートの使用者が見つかり次第、その人に仕えるように命じられているんですって」

「え、それって」

「そう、ワタシはていのいい厄介払いだと思うわ」

ユーティが珍しく、怒りをあらわにしていた。

「そもそもそのお告げ自体も怪しいし、厄介な事をこの子に押しつけただけにしか聞こえないのよね。まったく腹立たしい種族だわ！」

「でも宝剣を預けたんでしょ？」
「どうだか。実際この子は里を離れるように命令されただけで、どこに行けばいいかもわからず、一月近くこのピレボス周辺をうろうろしていたのよ？　ハルピュイアが人間の里に行けば一大事だしね。良くて見世物小屋じゃない？　それにほら、この子ってハーフなせいか、羽があるだけで人間とほとんど見た目が変わらないし。ハルピュイアはもっと鳥っぽい容貌のはずなんだけどね。妖精のワタシが言うのもなんだけど、かなり美人だと思うわよ、この子」
「言われればそうね」

白い羽ばかりに気を取られていたが、この少女は美しい。金の髪を短く切りそろえ、まだあどけなさの残す風体だが、非常に気品がある。母親がどこかの貴族だというのも納得だ。緑の瞳は困惑と不安に満ちているが、逆にそれが輝く容貌と対比して魅力となっていた。薄い生地の布の服に、下は太腿が見えるほど短いズボンである。肌は透き通るように白く、艶めかしかった。リサやラーナも肌は白いが、エメラルドは元が相当に色白なのだろう。

アルフィリースがまじまじと見入っていると、エメラルドがその視線に気づいて、気恥ずかしそうにもじもじとした。

「ちょっと、アルフィ。そんなにじろじろ見ないであげてよ」
「あ、ごめんなさい」
「それに、今から嫌でもしっかりと見れるわよ」
「え？」

アルフィリースがきょとんとした一方で、ユーティがニヤリと笑った。

「アルフィ、貴女さっき何をしたか思い出しなさい？」
「何って・・・」

アルフィリースは先ほどの自分の行動を思い出すが、この子を助けたことしか思い出せない。アルフィリースが首をかしげていると、ユーティがさらに悪戯っぽく笑った。

「まず、この子を抱きかかえたわよね」
「そうね」
「それで、この子の羽も触ったでしょ？　その時、一番敏感な部分を触ったみたいなのよね」
「そうなの？」
「さらに、手を握って立たせたわよね？」
「うん」
「で、最後に何をした？」
「・・・何も？」

ユーティが両手を上げて、やれやれといった様子で首を横に振っている。

「普通は順番が逆なんだけどね、これはハルピュイアにおける求婚の儀式の手順なのよ」
「きゅうこ・・・は？」
「だからこの子も戸惑ったみたい。しかもアルフィは女だし？　だからこの子は聞いたでしょう？　『ユーノ、マリージ』って？」
「・・・まさか」
「そう、『あなたは私と結婚するのですか？』って意味よ。その言葉に、アルフィは頷いたのよ。これがどういう意味かわかる？」

アルフィリースの顔から血の気が引いていく。後ろではリサが既に笑いをこらえていた。そして、たまりかねたように、ユーティがついにとどめの一言を発する。

「そう、アルフィ、貴女はこの子と結婚したことになるのよぉ！」
「え、ええ・・・えええええ！？」

アルフィリースはあんぐりと口を開けていた。もちろん、アルフィリースにそんなつもりは微塵もなかったのだ。

「エメラルドもまさかと思ったんだけど、レメゲートのマスター候補でもあるし、どの道ついていかないと、とは思っていたみたい。それにプロポーズまでされたらねぇ・・・命の恩人にハルピュイアは同等の恩を返さなくてはいけないしきたりがあるから、『命の恩人がそう望むなら』ってことで、エメラルドはプロポーズを受けちゃったみたいよ。はい、結婚成立～」

最後の方はユーティもまさかの展開に呆れたのか、茶化すように言った。そして呆然自失のアルフィリースの肩を、後ろからリサがぽんと叩く。

「よ、よかったですね、アルフィ・・・人生最大のモテ期ではないですか。ぷ、くくく・・・風習の違いとは怖いものですね、うくく・・・だ、駄目。お腹が限界・・・」

リサがついに笑の上限値を超えたのか、その場にうずくまって地面を叩きながら笑い始めた。ユーティも同様である。さすがに他のメンバーはそこまでする気にはならなかったが、感情の行き場を失くしてどう反応すればいいのか困っていた。ラーナが、「しまった、その手が」などと呟いたのは、誰にも聞こえていなかった。

そしてアルフィリースが呆然自失とするなか、ユーティに何やら耳打ちをされたエメラルドがゆっくりと近寄ってくる。

「あ、あるふぃ？」
「・・・はい？」
アルフィリースが虚ろな瞳でエメラルドを見る。
「わ、わたし、えめらるど。ふつ、ふつつかものですが、よろしくです」
そうしてお辞儀をするエメラルドを、呆然とみつめるアルフィリースだった。
＊＊＊
その日の夜。アルフィリース達はほら穴のような物を見つけ、一泊することにした。中はなかなか広く、全員がきっちり横になれるくらいの大きさは十分にあった。
見張りはグウェンドルフとミランダである。日が暮れてから随分と時間が経っているため、既に全員が安らかな寝息を立てて寝ていた。アルフィリースも見張りの予定があったのだが、心労が祟ったのか今夜は寝させてくれと言ったので、ミランダが代わりに長めの番をしているのだった。
「それにしても・・・」
グウェンドルフが唐突に口を開く。
「ん？」
「いや、インパルスが現存しているなんてね」
「ああ、あの凄い剣だね」

ミランダは昼間にエメラルドが振るった剣の事を思い出し、ぞくりとした。あの剣は世に出してはいけない気がする。ミランダの直感である。

「昔はあんな剣が何本もあったのかい？」

「そうだね、かなり多くの数があったことは否定しないよ。少なくとも、各属性にちなんだ精霊剣はあったはずだ」

「考えるに恐ろしいね。でも、それらは今どこへ？」

ミランダの質問に、グウェンドルフは首を振る。

「さあ・・・魔王達との激闘の中で失われていったものとばかり思っていた」

「いくつかは噂を聞いたことがあるけど、てっきり伝説とか、箔をつけるための話だとばかり思っていたよ。でも、あれを見る限りでは事実な伝説も沢山あるんだね」

「そうだね。１０００年の間に歪められた言い伝えも沢山あるけど、まだまだ多くの武具が地上に眠っていると思う。それにしては話を聞かなさ過ぎる気もするが」

グウェンドルフはため息をつき、思索に耽り始めた。こうなると、さしものミランダにもグウェンドルフの思索を阻むのは気が引けた。

「（インパルスを見たのは久しぶりだが、あのレメゲートという剣はなんだ？　この私ですら初めて見る。かなりの力を持った剣のようだが、封印式も見覚えが無い。その剣がアルフィリースに反応するとは、全く持って謎だらけだ。私も真竜の長で、五賢者などと祭り上げられていい気になっていたのかもしれないな。あまりのんびりしている場合ではないのかもしれない。他の真竜にも話を聞きに行くべきかもしれないな。とりあえずは、マイアと連絡を取ってみ

るか）」

グウェンドルフがそのような考えに耽る中、ミランダもまた自分の考えに没頭する。

「（問題は山積みだね。早い所最高教主（ミリアザール）に報告を入れて、早急に対策を立てる必要がある気がする。もっともあの人の事だから既に色々な情報を仕入れているんだろうけど、今度ばかりは敵が大きすぎる。もし相手が何百年も前から計画を練っていたとしたら、既に何をしても手遅れなのかもしれないけど。それでもきっと、アタシ達にもできることはあるはずだ）」

ミランダがたき火に枯れ木をくべる。

「（そして目の前の問題として。エメラルドを連れるなら、文明圏に近付くほど問題となるだろう。エメラルドを魔物にしか見ない連中も多いはずだ。アルフィ、あんたはその事をわかっているのかい？）」

ミランダが奥で寝ているはずのアルフィリースの方を心配そうに見るのだった。

＊＊＊

そして当のアルフィリースはイルマタルと共に寝ていた。ただイルマタルはかなり寝相が悪いので、起きると大抵あさっての場所で寝ている。時々アルフィリースが寝ていると、上にどかりとのしかかってくる重みで眼が少し覚めるが、たいていは寝ぼけて離れていたイルマタルが戻ってきた重みである。

そして今日もまた自分の上に重みを感じるアルフィリース。アル

フィリースが反射的に「イル、毛布はかけなさい」と引き寄せようとすると、随分とその体が大きな気がした。

「あれ？　イルにしては大きい・・・」

「あるふぃ」

アルフィリースが眼を開けると、そこにはエメラルドが裸でアルフィリースの懐に潜り込んでいるのだった。

続く

ピレボスにて、その5～ハルピュイアの娘～（後書き）

次回投稿は5／22（日）12：00です。

ピレボスにて、その6～災難？～（前書き）

アルフィリースの寝床に潜り込んできたのはエメラルドで・・・？

ピレボスにて、その6～災難？～

「・・・へ？」

さしも寝起きの悪いアルフィリースも一瞬で覚醒し、我が目を疑った。なぜエメラルドが自分の懐に、生まれたままの姿でいるのか。だが問いただそうにも、アルフィリースには彼女の言葉がわからない。

「ど、どうしよう」
「あるふぃ」

エメラルドはアルフィリースの名前だけは必死で覚えたのか、小さな声でそっと呟いている。眼が暗闇に慣れてくると、エメラルドの緑の瞳が潤んでいるのがよくわかった。何かに怯えるように、しかし意を決した目。名前の通り、宝石と同じ色輝きを持った緑の眼が二つ、アルフィリースを見上げていた。

「（どうしよう、これは可愛いわ。うーん、少しぐらいなら・・・は！　だめだめ、私ったら何を考えて？）」

アルフィリースが惑ったのも、あるいは無理もない事かもしれない。そのくらいエメラルドの容貌は魅力的だった。アルフィリースは知らないことだが、翼人族やハルピュイアの羽に抱かれて眠る者は、史上最高の眠り、もしくは天にも昇る心地を得ると伝えられる。ラーナなどの淫魔は魔術や自分の体液で人を幻惑するが、エメラルドの翼からもまた、一種の幻惑をきたす効力のある何かが出ているのだ。アルフィリースが男ならば、一瞬で誘惑に負けてエメラルドを押し倒していることだろう。

一方エメラルドは、結婚した夫婦が初夜にすべきことを忠実に守っているのだが、どうすればよいのかまではわかっていない。最初はアルフィリースに任せればいいと思っていたが、アルフィリースがいつまでたっても動かないので、自分から何かしようと試みる。そして、

「あふあっ！？」

アルフィリースが小さくだが、やや間の抜けたな声を上げた。エメラルドがアルフィリースの下着を脱がしにかかったのだ。幸いにもアルフィリースは一番奥まったところで寝ており、他の者は気づいていないのか、誰も反応しない。それは幸か不幸か。

「ちょっと、エメラルド。だめ・・・よっ」
「あるふぃ」

だがエメラルドにしろ、相応の覚悟でアルフィリースの寝床に来ているのである。何もしないで帰るなど、考えてはいなかった。とりあえずは自分と同じようにアルフィリースも裸にすればいいと、エメラルドは手を動かす。体に見合わず強い腕力は、アルフィリースが多少の抵抗をしたくらいでは止まるべくもなかった。

「（ちょ、ちょっと、ちょっと。これはまずいわ！　私までなんだか変な気分になってきちゃう！）」

暗闇の中、エメラルドの白い羽と、緑の瞳の身が浮かび上がる。そしてそれらをつなぐように、白い肌と、エメラルドの少し熱っぽい吐息が聞こえ、アルフィリースは妙な気分になってきていた。

「（ど、どうしよう・・・なんとかしないと、本当に一線を踏み越

えちゃう。えーい、ままよ！）」

アルフィリースは自分の秘部に届きかけたエメラルドの手をぐいと力づくで離し、そのままエメラルドを力づくで抱きしめた。腕を巻きこんで抱いたため、エメラルドはこれでは身動きが取れない。そのままエメラルドを動けないようにして、無理矢理眠ろうとするアルフィリース。

「（どうだ、これなら動けないはず！）」

そしてアルフィリースは力いっぱいエメラルドを抱きしめたが、意外な事にエメラルドはその手の力に抵抗することなく、逆に自分も同じようにアルフィリースの後ろに手を回し、羽でアルフィリースを包み込んでそのまま眠ってしまったようだった。あるいはそれが夫婦の行為だと思ったのか。一安心するアルフィリース。

「とりあえずは安心か・・・でも、寝れるかな？」

翌日は寝不足になることを覚悟しつつも、アルフィリースはエメラルドの羽に包まれ、ゆっくりと眠りにつくのだった。

＊＊＊

そして翌朝。アルフィリースが眼を覚ますと、既にエメラルドの姿はなかった。よく見れば自分の姿も下着はいつのまにかほとんど脱がされており、かなり際どい恰好になっていた。これで寝起きを誰かに見られようものなら、言い訳ができる状況ではなかったろう。

その事を感謝しつつも、アルフィリースは衣服を正し、眠い目をこすりながら皆の元に行こうとする。また自分が一番最後に起きたのかと思いつつも、今日はどうも皆の様子が違っていた。エメラル

ドとユーティを中心に、全員が輪になっている。

「なるほど、そんなことが・・・」

「皆おはよう。なに、どうしたの？」

アルフィリースが状況を把握できないでいると、全員が不審げな目でアルフィリースの方を見た。

「アルフィ、あんたってそんな趣味が・・・アタシはちょっと親友なのを考えた方がいいかしら」

「大丈夫だ、アルフィ。我はアルフィにどんな性癖があろうと、アルフィの味方だ」

「近寄らないでください、デカ女。不潔です。リサに伝染さないでっ！」

「アルフィリース殿、それはいかがなものかと・・・」

「アルフィ、ロリかレズか、どっちかにしなさいよ」

「アルフィ、私というものがありながら・・・要求不満なら、どうして私に言ってくれないのです？」

「まあ、あれだね。人間は自由でいいと思うよ、私は」

「ママ―、イルは弟の方がいいなー」

「何？　何の話！？」

アルフィリースは訳がわからず、朝っぱらからパニックになるのだった。その中心ではエメラルドが恥ずかしそうに頬を染めているのだった。

＊＊＊

「あー、朝から疲れたわ」

「こっちだって、朝からなんて事を聞かされるんだと思ったわよ」

「ユーティのせいだわ！」
「人のせいにしないでよね！　ワタシは忠実にエメラルドの言葉を伝えただけなんだから」

アルフィリース達はさらにピレボス山脈を進む。結局全員の誤解はすぐに解けたのだが、エメラルドの勘違いを正すにはかなり力を要した。

どうやらエメラルドはどうやれば子どもができるかなどの知識は全く持っておらず、既にアルフィリースと共に眠ったことで自分は懐妊したと思ったらしい。それでさも嬉しげに、ユーティをはじめとする皆にその事を伝えたようだった。

そのエメラルドにまず妊娠の可能性がないことから諭し、女性同士で通常結婚はしないこと、アルフィリースに結婚の意思はなく、昨日の行為は全て誤解だったことをゆっくりと伝えた。するとエメラルドの顔色はみるみる曇り、最後は泣き始めてしまった。そして結局のところ、アルフィリースがエメラルドを宥めることとなったのだった。

だがエメラルドもひとしきり泣き終えると、やはり自分はアルフィリースについていくしかないと言った。どのみち、自分の里にもう自分の居場所はないのだと。その事を涙ながらに訴えるエメラルドを見ていると放っておくわけにもいかず、結局アルフィリースはレメゲートと共にエメラルドの同行を許可した。

さらにエメラルドは時々でいいから、アルフィリースと一緒に眠りたいと申し出たのだ。これにはアルフィリースも、言葉を通訳するユーティも一瞬困惑したが、エメラルドが言うにはアルフィリースは母親か姉のような感じがするとのことだった。確かに母を知らないエメラルドにはアルフィリースはそう感じられたのかもしれないが、アルフィリースは微妙に戸惑いながらも悪意のない申し出を断るわけにもいかず、ちゃんと事前に申し出る事を条件に許可した。ちなみにラーナがその話に便乗しようとしたが、そちらはもちろん

却下された。

「さて、道はどこかな」

分かれ道に来たところで、先頭を行くエアリアルとリサが道を探す。

「目で見てもわからないな」

「リサのセンサーでも先までは少し無理です。ミランダ、地図は？」

「うーん、よくないかも」

ミランダが不安そうな顔をしている。

「どうしたの？」

「それが、すでにアンネクローゼにもらった地図の範囲は出ている気がするんだよね」

ミランダの地図を覗きこむと、そこには予想される進路図が書き込んであった。だが、確かに昨日の段階で地図の北端近くまで来ていたのだ。

「途中に道があったはずでは？」

「道、のようなものならありましたが、とても通れるような類いのものではなかったですね。人が一人ずつならなんとか、という道でした」

リサの問いに、楓が答える。

「ということは、ここからは手探りかぁ」

「遭難一歩手前ね」

「どうしようか、とりあえず東に向かう道を行ってみる？」

アルフィリース達がああでもない、こうでもないと論議していると、ユーティの肩をエメラルドが叩く。

「ユーティ、エメラルド、ノーラウ」

「え？　道を知ってる？」

その言葉に全員が振り向く。

「ふむふむ、ここから東に行く道は、途中で断崖絶壁になる。北に行ってから、一つ尾根を越えると、そこからかなら東に続く道があるってさ。その辺までは行ってみたけど、人影が見えたから怖くて返ってきたんだって」

「なるほど、それは信用できるわね。距離は？」

「エメラルドがゆっくり飛んで2日くらい。この馬なら、急げば同じくらいでいけるかもって」

「決まりね」

アルフィリースの決断と共に、一行の進路は北に向かった。その道をひた走るアルフィリース達。その途中、エアリアルがふと空を見る。エメラルドも同様に、空を見ていた。

あまりにも二人が空を気にするので、アルフィリースは気になって聞いてみた。

「エアリー、どうしたの？」

「いや、風の流れが変わったからな。どうもおかしい」

「あるふぃ、ブリーザード」

エメラルドが慌て始めた。アルフィリース達は馬を止める。

「ユーティ、エメラルドはなんて？」
「この時期には珍しいけど、大雪が来るって。もう間もなく、一気に息が凍るくらいに寒くなるかもって言ってるわ」
「まさか、魔術じゃあるまいし」
「いや、本当かもな」

エアリアルも上空を見ながら言っている。

「我に山のことはわからんが、空気が急激に寒くなっているのは事実だ。実際に西の彼方では既に何か降っているぞ」
「リサも感じます。リサは温度変化はセンサーで感知できないのですが、風の動きは分かりますから。上空からどんどん空気が降りてきてますね。下に降りる空気は、大抵冷たいでしょう？　本当に雪になるかもしれません」
「まだ秋に入ったばかりなのに・・・」

アルフィリースが信じられないと言ったように呟いたが、ここは忠告を素直に受けることにした。何せ本当に雪になれば、凍死してもおかしくない。アルフィリース達は冬用の装備など持っていないのだ。

「と、すると。ここは洞穴か寒さをしのげるような場所を発見し次第、そこに避難した方がいいかもね」
「わかったわ、先を急ぎましょう」

ミランダの言葉に、アルフィリースはすぐに動いた。だが彼女達にも予想外だったのは、半刻もしないうちに雪が降り始めたことと、洞穴のような場所が一切なかったことだった。そして最初は少しずつ降り始めた雪は、あっという間に吹雪へとその姿を変え、アルフ

ィリース達を容赦なく打ちつけた。

「何これ！？」

「こ、これは・・・」

「こんなの聞いてないよぉ！」

もはやアルフィリース達は、進むことすらままならないほどの雪に遭遇していた。既に傍にいるはずの仲間達の姿すら怪しいほどの吹雪。息は凍り、瞼が凍りつくほどの寒さ。アルフィリース達は、完全に山の天気を侮っていたのだ。

続く

ピレボスにて、その6～災難？～（後書き）

次回投稿は5／23（月）11：00です。

ピレボスにて、その7～吹雪～（前書き）

アルフィリース達が遭遇したのは天候という敵。そして彼女達は・・・？

ピレボスにて、その7～吹雪～

「駄目だわ！　ここでテントを張りましょう！」
「こんな所でか!?　確か傍は崖だぞ？」
「動いて崖に落ちるよりましよ！　急いで！」

アルフィリース達は必死の思いでテントを設営した。戦いよりもテントを立てることが厳しいと思ったのは、後にも先にもこのくらいであったろう。何とか2つのテントを立てることに成功し、それぞれに入口を向かい合わせにして急ぎテントに籠る。多少狭くなるが馬達を放っておくわけにもいかないので、馬達を収容できるようにテントを張り、馬も含めて全員が身を寄せ合う。
テントの周囲にはミランダとユーティがそれぞれ結界を張っていたが、気休めに過ぎないだろう。それでも結界があるからこそ、まだ凍死せずに済んでいるのだろう。
そんな中、声を張り上げて全員に対策を伝えるのはミランダとユーティである。

「いいか？　今夜はつらくても寝るな！　寒さの中で寝たら人生が終わるからな!?」
「そうよ、互いに励まし合って、体をこすりあうの。そうしないと、寒さで指先が腐っちゃうからね！」
「この砂時計が落ち切るまでが勝負だ。これが落ちる頃までには夜が明ける。それから動こう！」

だがミランダもまさか、夜が明けても吹雪が一向に止まないとは想像してなかったのだろう。砂時計が落ち切った後も外は暗く、日が昇ったことさえ分からない。定期的にミランダとユーティが結界を張り直しに行っているおかげで、雪の重みでテントが崩れること

こそないものの、寒さまでは遮断できない。互いに励まし合うのも、限界が近づきつつあった。

「ハア・・・ハア・・・」

「この吹雪はいつ止むのでしょうか。ねえ、ジェイク・・・」

「リサ、しっかりして！　ジェイクはここにはいないわよ！」

だが一番体力のないリサが、ついにうつらうつらとし始めた。アルフィリース気付け代わりにリサの頬をひっぱたくが、あまり反応がない。

「いけない、意識が無くなり始めている」

「リサもそうだが、我もそろそろ厳しいぞアルフィ。瞼が重い」

「エアリー、私を放っておいて、一人で死ぬなんて許さないわよ？」

「それはわかっている・・・が」

エアリアルも必死で睡魔を振り払っているが、かなり状況は厳しい様だ。

「ぐっ。こんな時に呪印の使い道がないなんて・・・なんて役立たず！」

狭いテントの中で迂闊に火を使うわけにもいかない。八方ふさがりのアルフィリース達が絶望しかけた時、アルフィリースはふと外に誰かがいる気配を感じた。

「誰だろう・・・こんな吹雪で動けるはずがないのに。でも、もう眠いよ・・・」

最後まで意識を保っていたアルフィリースは、落ちゆく意識の中、

馬達のいななき声を聞いた気がした。

＊＊＊

「アルフィ、起きなさい」
「う・・・」
「アルフィ、ご飯よ！」
「私はどこの食いしん坊よ！」

アルフィリースが思わずツッコミながら起き上がると、そこはどこかの家のようだった。ミランダが心配そうにアルフィリースを覗きこんでいる。皆もどうやら無事のようで、そこかしこに毛布をかぶせて寝かされている。

「その起き方ができるようなら大丈夫ね」
「人をなんだと・・・あれ、何ここ？」
「それがね、アタシ達は助けられたみたい」

アルフィリースがくるりと部屋を見渡すと、そこは不思議な空間だった。まず、壁や天井が雪でできたように白い。いや、良く見れば非常に粒子の細かい雪だった。なのに、部屋の中は快適な温度に保たれている。それに至る所に骨や皮でできた呪い具が飾り付けられ、あるいは吊るされており、明らかに魔術を扱う者の居住だった。

「う～ん、どこかに似てるね」
「フェアトゥーセの住まいに似てるのさ。さっき、ここの主に会ったんだが」
「うむ、そなた達が察する通り私は魔女だ。正確には魔女見習い、だがな」

氷でできた扉が横にスライドし、女性が姿を現した。白にも近い青の髪。アルフィリースは、かつてルイが呪氷剣を振るった時に、あのような髪色になったことを思い出す。つまりは、彼女は氷に親和性を持つ人物ということだ。

そして肌も白かった。太陽の光の影響をほとんど受けていないかの様な純白。目も青を通り越して、髪色と同じ色。よほど氷と親和性が強いのだろう。その色と相まって、アルフィリースとほぼ同じような年齢に見える女性は、非常に無表情に見える。リサを最初に見た時も人形のような少女だと思ったが、目の前の女性からは感情らしきものがほとんど感じとれなった。人形が話せばこのようになるのではないかと、アルフィリースは思うのだ。

だがその女性は決して人形ではないことを示すように、しっかりとした口調でアルフィリース達に話しかける。

「それにしても面白い目覚めさせ方よな。最近の下界では、そのような起こし方が流行りか？」

「いやいや、この子ったら食いしん坊だから」

「ちょっとミランダ！？　勝手な事言わないでよね！」

じゃれあうように揉み合いを始めた二人を見て、女性は「ふ」、と軽く笑う。その笑みに、思わずひきつけられるアルフィリース。

「（あ、あんな顔もするんだ）」

だが女性の方はアルフィリースに笑顔を見られたことを快く思わなかったのか、すぐに表情を戻し、元の人形のような表情に戻る。

「さて、自己紹介をしよう。私の名前はクローゼス。先に申した通り『氷原の魔女』の元、修行を重ねる身だ。そなた達は？」

「私はアルフィリース。旅の傭兵よ」

「アタシはミランダ。今はこんななりだが、アルネリア教会のシスターだ」

二人はそれぞれ自己紹介をする。するとクローゼスはふむ、と手を顎に持ってきて悩む様な仕草をするが、すぐに二人を冷ややかな目で見た。

「そなた達、ただの傭兵とシスターではあるまい。呪印に、不死身の体。そなた達、何者だ？」

「！」

「これは・・・どうして気づいた？」

ミランダが警戒心を上げたようだ。もしこれでクローゼスが敵だと判断したなら、ミランダは躊躇なく飛びかかるだろう。

だがクローゼスは冷静に語る。

「介抱したからな、呪印は見ればわかる。だが呪印は私にもわからんほど複雑なものだったな。それに、シスターの方は、ほとんど手当てをしていない状態で、凍傷の一つもなく目覚めた。周りの者を見よ。まだ一向に目覚める気配がなく、手足は後１／４刻も処置が遅ければ腐っておったほどの凍傷にもかからわずだ。これは普通の人間の所業ではないよ」

「なるほど。で、アタシ達をどうする？」

ミランダが身構える。だがクローゼスは動揺する素ぶりなく言った。

「別にどうも。そなた達が悪人でないのは、すぐにわかったよ。あのテントの中で一番無事なのは馬だった。自分達だけでなく、馬の面倒も見ていたのだな。私がテントにかけつけた時、馬達の方から

助けてくれと言うような目つきで私の事を見たよ。実際にここまでそなた達を運んでこれたのも、馬達の助力あってこそだ。余程そなた達は信頼されているらしいな」
「・・・なぜ私達を助けたの？」
今度はアルフィリースが尋ねる。
「偶然だ。いかにピレボスとはいえ、この時期にこれほどの雪は珍しい。それで何事かと思い、見回ることにしたのだ。それに、どうにも精霊がここ最近ざわついていたしな。虫の知らせという奴だ。そしてこの付近まで来た時、思念を感じとった。まさかとは思ったが、真竜からの思念を私が直に受ける日が来るとはな」
「ああ、君がいてくれて助かったよ」
「ママ～！」
「イル！」
そこにグウェンドルフとイルマタルが入ってくる。イルマタルは文字通り飛んでアルフィリースの元に抱きついて行った。イルマタルは人間の姿のまま、羽だけを出すのも最近では出来るようになっている。これは非常に器用なことだと、グウェンドルフは驚いていた。
そのグウェンドルフを見るなり、クローゼスは膝まづいて礼をする。
「これはグウェンドルフ様、イルマタル様。このような住処においでいただき、恐悦至極。お目汚しの程を、なにぶんご容赦くださいませ」
「いや、感謝するのはこちらの方だ、若き魔女よ。君の助けが無ければ、私とて全員を救うのは無理だったろう。真竜も万能の存在ではないのだ。あの場では、冷たくなっていく彼女達をどうする事も

できなかった。私など、所詮自然などの大きなの力の前には無力な生物さ」

「いえ、貴方がた真竜あってこその我ら魔女。何卒、そのような事をおっしゃいますな」

クローゼスはますます頭を垂れてグウェンドルフに話しかける。その慇懃な態度に、グウェンドルフも表情には出さないものの、困っているようだった。グウェンドルフは、誰かにかしづかれるのが苦手なのだ。アルフィリース達はその事をよく知っている。

話の矛先を変えるために、グウェンドルフは話題を変えた。

「若き魔女よ、君は見習いと言ったね。では、正規の魔女はどこに行ったのかな？」

「はい。お師匠は『魔女の団欒』のために、別の土地に向かいました」

「魔女の団欒か。招集したのは？」

「魔女の長である白魔女、フェアトゥーセにございます」

「え、フェアが！？」

意外な名前に、ミランダが思わず大きな声を上げる。クローゼスが訝しんだが、グウェンドルフは話の先に興味があったのか、構わず続けた。

「なぜ？　団欒の内容を聞いているかい？」

「詳しくは伺っておりませんが、何でも無視できぬほどの存在が下界に現れたとか。冷静なはずのお師匠も、顔色が変わってましたから。もっとも今回は久方ぶりの召集ということで、純粋に旧交を温める意味もあるようです」

「なるほど、フェアトゥーセも遅咲きながら自覚が出たようだね。彼女は良い長になるだろう」

グウェンドルフが満足そうに頷く。

「それで君は留守を？」

「はい。この土地を守るのが代々の氷原の魔女の役目ですから」

「なぜ？　こんなピレボスに守るようなものなんて、無いはずだけど？」

ミランダの質問に黙っているクローゼスだったが、グウェンドルフが目で促したため、クローゼスは語り始めた。

「・・・ここは北の大地を隔離するための土地」

クローゼスは絞り出すように、その言葉を発したのだった。

続く

ピレボスにて、その7～吹雪～（後書き）

次回投稿は5／24（火）11：00です。

ピレボスにて、その8～氷原の魔女～（前書き）

アルフィリース達は魔女によって窮地を脱出する。彼女が語る事実とは・・・？

「北の大地を隔離・・・？」

その言葉をミランダが異国の言葉を聞いたかのように反芻したが、言葉の意味がわからないのはアルフィリースも、グウェンドルフですら同じだった。

「北の大地を隔離？　そのような報告は私も受けていないな。どういうことだ？」

「・・・北の大地には大魔王を封印しております」

クローゼスの言葉にアルフィリースもミランダも、思わず目を見合わせた。グウェンドルフは眉がぴくりと動いたものの、予想の範囲内ではあったらしい。

「どの大魔王だ？」

「大魔王、テトラポリシュカ」

「あの、魔眼の女か」

グウェンドルフが、さもありなんと言う顔をした。だが、事情がよくアルフィリース達には飲み込めない。

「ねえ、グウェン」

「なんだい、アルフィ」

「大魔王って、全滅したんじゃないの？」

「・・・そうか、君は知らないんだね」

「アタシも知らない」

ミランダとて、魔王に縁浅からぬ身。この話の内容は気になったようだ。

「大魔王が全滅したから、人間同士で戦争をするようになったんじゃないのかい？」

「半分正解で、半分間違っているね」

「グウェンドルフ様。よろしいのですか、彼女達に話してしまわれても」

クローゼスがグウェンドルフを諫めようとする。

「・・・構わないだろう。彼女達はもっと重大な危機に直面している。この事も知っておいた方がよいかもしれない」

「貴方様がそう言われるのなら」

クローゼスは頭を軽く垂れ、黙する姿勢を示した。

「さて、大魔王に関してだね。実は大戦期末期の6体中、少なくとも3体は仕留め損なっている」

「！」

「なん・・・だって？」

アルフィリースもミランダも、表情が強張った。なおもグウェンドルフは続ける。

「驚くのはまだ早い。さらにその内一体は、いまだに活動中だ」

「え」

「そんな、馬鹿な！」

ミランダが声を荒げた。あまりに自分が知る史実と違いすぎるの

だ。

「ならばどうして誰も討伐しないんだ？」
「まさか・・・」
「アルフィリースは勘がいいね」

グウェンドルフが指摘するように、アルフィリースは何事かに気付いたようだった。ミランダが声を荒げたまま、アルフィリースの方を向き直る。

「アルフィ、何か知っているのかい！？」
「ううん。これは想像だけど、誰もその大魔王を倒すことができなかったのだとしたら？」

アルフィリースが青ざめた顔で話した内容に、ミランダが怒りを収めた。そして、ミランダの頭がフル回転し始める。

「なるほど・・・それなら色々納得がいくかも」
「何か思い当たるの？」
「ああ、色々とね」

ミランダが考えをまとめた様子で、頷いた。

「一つには、魔術教会ってのは仲が悪い集団なんだが、決して瓦解しないんだ。内部争いなんかはしょっちゅうやってるみたいだけどね」
「どうして？」
「アタシもずっと不思議だったんだけど、魔術教会の真の目的が、その生き残った大魔王の監視や滅殺が目的だとしたら？」
「近いが、当たらずとも遠からず、というところか」

クローゼスが言葉を挟んだ。そしてグウェンドルフに目で許可を伺い、話し始める。

「グウェンドルフ様の口を煩わすまでもない、私が順を追って説明してしんぜよう。まず大戦期、６体の大魔王が存在したことはよいな？　当時、魔術教会、魔女、導師、アルネリア教会、果てはオリュンパス教会までもが結託し、各国の兵士との連合軍で大魔王の一体を滅ぼしている。だが結果は惨憺（さんたん）たるものだった。戦いに参加した者達の内、実に１／５が死亡。半数以上の者がなんらかの怪我を負った。その被害の大きさに、オリュンパスは以後大魔王との戦いから撤退することを表明。各国もまた、大魔王討伐に引け腰になっていったのだ。

そして、残されたのはアルネリア教会と、魔術教会と、魔女と導師達。そこで我々は議論しつつも抗戦したが、決着はつかず、いたずらに時だけが流れて行った。ところが、気がつけば大魔王達は一体、また一体と姿を消していった」

その事にアルフィリース達は心当たりがある。一人はライフレスがやったと言っていた。彼が史実に残らない所で倒したのだろう。だがそれが事実なら、ライフレス単体の戦闘力は、魔術教会全てと匹敵する可能性もある。彼の魔力量が魔術師１０万人分というのも、本当の事なのかもしれないとアルフィリースは身震いする。

そして、なおもクローゼスは続ける。

「そして大魔王が最後の一体になった時、人間達は賭けに出た。最後の一体を倒せば、もう魔王に怯えなくても済むと。そこで再び人間達は結束し、最後の大魔王に戦いを挑んだ」

「随分と打算的だが、まあしょうがないか。で、倒せなかったと」

「その通りだ。最後の大魔王の軍は徹底的に叩いたが、大魔王本人

がどうしても倒せなかった。最後まで戦いに加わったのは、アルネリア教会、魔術教会、魔女、導師、あとは諸国の一部だが、彼らはその大魔王と休戦協定を結ぶことにした。なぜならそれ以上戦えば、どちらが勝っても二度と立ち直れないくらいの打撃を受けることはわかっていたからな」

「でも今悩むくらいなら、無理してでもそこで倒しておけばよかったんじゃ」

アルフィリースが納得できないのか会話に加わろうとしたが、ミランダが首を振った。

「いや、それは無理だよ、アルフィ。確かに倒せたかもしれない。いや、今でもまた連合を組めば、その大魔王は倒せるんだろう。だからこそ大魔王も大人しいのさ。でもね、もし当時大魔王を無理して倒してたら、最後まで参加した集団は今頃跡形もなく蹂躙されているだろうね」

「誰に？」

「途中で戦争を抜けた諸国と、オリュンパス教会にさ」

ミランダが吐き捨てるように言ったことに、アルフィリースは反論する。

「でも、そんな火事場泥棒みたいな真似」

「するよ。歴史は勝者がつくるのさ。死人に口無し、敗者は黙して語らずってね。オリュンパスはそれを狙って、ずっと外部不干渉を貫いているんだろう。機会があれば、あいつらは絶対にこっちに侵攻してい来る。アタシは仕事の上で何度か奴らと会ったり、場合によってはやり合ったこともあるけど、やりにくいったらありゃしない。大人しそうに見えて相当な戦力を保有しているからね、あいつらも。とんだ腹黒い連中の集まりさ」

「そのシスターの言う通りだ。当時の懸念事項も、まさにオリュンパスだったらしい。そして、当時の戦力と大魔王の実力を天秤にかけて、休戦協定を結ぶことに結論が出たのだ。それが大戦期の事実だ」

クローゼスが語った内容に、アルフィリースとミランダが絶句する。まさか、歴史の裏がそんなに打算的だとは、露ぞ知らなかったのだ。同じ話をミリアザールから聞いたエルザも思ったことだが、世界の均衡は思っているよりもはるかに危うい事を、アルフィリースもミランダも実感していた。

そこにクローゼスがさらに言葉をつなぐ。

「だが我々とて、何もしていなかったわけではない。魔術教会はさらなる魔術の研究を。アルネリア教会は陣地を広げることで、さらなる戦力の確保を実行した。その気になればオリュンパスとも全面戦争出来るほどのな。魔女や導師も、後進の育成に力を注いでいる。だから現在の魔女や、その後継ぎは歴代でも最高クラスの使い手ばかりだ。私も自分で言うのはおかしな話だが、既に魔力の量だけならお師匠を凌いでいる。その事はお師匠からも太鼓判を押されているからな」

「では、対策はあると？」

「うむ、後は機会だけだ。もっとも、向こうとて黙ってはいないだろうが。今回の団欒で、その事が話題に出るのではないだろうか」

「・・・遅かったかもしれない」

「何？」

アルフィリースが呟いた一言を、クローゼスが問い詰める。そしてアルフィリースは黒の魔術師達の事を話した。その事実を聞くたびに、無表情だったクローゼスの瞳が見開かれる。そして色白の肌がよりいっそう色を失くしていくのを、アルフィリースは見たのだ

った。
全てを語り終わり、沈黙が周囲を包む。
「・・・なるほど、事情はわかった。どうやら事態は、我々が想像するよりはるかに重いらしい」
「そうね。私もいまだに実感が無いわ」
「だが、戦うのだろう？」
「その通りよ。どうせ避けては通れない運命だろうし、見て見ぬふりをするつもりもないわ。だからと言ってはなんだけど、クローゼス。貴女、私の仲間になる気はない？」
アルフィリースが突然クローゼスを勧誘したので、ミランダもこれには驚いた。
「ちょっと、アルフィ！？」
「いいじゃない。ミランダだって、私達が魔術に弱い事を指摘したわ」
「それはそうだけど・・・」
「どうかしら、クローゼス？　無理は承知でお願いするのだけれど」
だが意外と言えば意外な事に、クローゼスは迷っているようだった。ミランダは即座に断られると思ったのだが、アルフィリースは何かしら感じる物があったのかもしれない。
続く

ピレボスにて、その8～氷原の魔女～（後書き）

次回投稿は5／25（水）10：00です。

ピレボスにて、その9～大戦期の真実～（前書き）

クローゼスとグウェンドルフがが語る、大戦期の隠された真実とは・・・？

だがクローゼスはゆっくりと首を横に振った。

「いや、お断りしよう。私はなんといっても修行中の身。お師匠の許可なしに勝手な事はできない。決して事態を軽く見たわけではない事を、わかって欲しい」

「ええ、それはもちろん。貴女は表情に乏しいけど、薄情な人間でないことはわかっているつもりよ」

「・・・フ」

クローゼスがまた少し笑ったので、アルフィリースは満面の笑みで返した。

「じゃあクローゼスはどうするの？」

「お師匠が返るまでは、ここで門番さ。心配しなくても、そなた達を送って行くくらいの事はしよう」

「恩に着るわ。それで、やっぱり北の大地を隔離した理由は話してもらえない？」

「それだけは無理だな」

クローゼスが言いきったので、アルフィリースは諦めたようだった。だが、グウェンドルフは納得がいっていないようだった。それは大魔王がうんぬんというよりは、自分に報告をしない者がいることに腹を立てたのかもしれない。

「若き魔女よ、問おう。テトラポリシュカは生きているのか？」

「・・・封印しております」

「それは返事になっていないぞ、若き魔女よ」

グウェンドルフが段々と苛立ちを露わにして来た。だがクローゼスの冷静さは崩れない。

「私の方から申し上げることはこれ以上ありません。私より４代前の魔女のしたことですので」

「だからといって責任を棚上げできるとは思っていまい？　私に話してまずいようなことなのか」

「恐れながら、この命断たれようとも、私が一存で話して良いことではありません」

クローゼスの言葉は静かだが、氷のように鋭さがあった。口調こそ穏やかだが、その言葉には「たとえ真竜相手でも一切話す気はない」という意味を込めたのが、アルフィリースにもはっきりとわかった。もちろんグウェンドルフにも分かっていることだろう。その言葉に、珍しくグウェンドルフが苛立ちを露わにした。

「私に話すことは一切ないということか、若き魔女よ。テトラポリシュカの存命は、これからの戦況に多少なりとも影響をもたらすだろう。不確定因子は一つでも多く知っておきたい」

「恐れ多いことですが、それは叶わぬ事かと。これ以上問われるようでしたら、私は記憶を読まれないように、頭を吹き飛ばして自決する必要があります」

「それは脅しか？」

「事実です」

「はいはい、そこまで！」

徐々に険悪な雰囲気になってきた二人に、アルフィリースが割って入る。

「グウェン、無理に問いただすのはよくないわ！」
「む・・・」
「クローゼスも。物騒な事言わないの、わかった！？」
「・・・いいだろう」

アルフィリースが割って入ったことでグウェンドルフもクローゼスも黙り、沈黙が場を包む。グウェンドルフは思わず熱くなりかけた自分の頭を冷やす。そしてクローゼスが考えている事は、また口論の内容とは別だった。

「（アルフィリースとかいうこの娘・・・グウェンドルフ様に対等の口をきくだけでも凄いのだが、色々と引っかかる点が多い。呪印を2つがかりで御しきれぬ魔力の強さといい、一体何者なのか。そして、何より・・・この私が普通に会話をしているではないか）」

これは誰も知らないことだが、クローゼスは非常に無感動な人間だった。いや、少なくとも自分ではそう思っていた。生まれてからこの方、感動した事もなければ、感謝した事もない。おいしいのものを食べれば美味しいとは思うのだが、「だからどうした」という感情が先に立つ。要するに、何をしても心がゆり動かないのだ。そしてその事を彼女は不幸だと思った事もない。ただ自分はこういった人間なのだと。

それはある意味では魔術を扱う上で、最高の素養となる。両親や周囲が何をしても無表情、無関心だった彼女は疎んじられ、半ば手放されるように魔女の元に引き取られた。それがクローゼス6歳の時である。それから15年。まだ魔女としての修業年数は非常に短いが、彼女は類い稀な才能で、既に師匠を上回る程の実力を身につけている。水や氷の精霊と相性が良いのは、自分の性格と関係しているのだろうと、クローゼスは自己分析していたのだ。

その自分が、さきほど笑ったのだ。しかも二回も。人生で笑った

ことなど数えるほどしかないだろうに。さらに、クローゼスは内心ではアルフィリースともっと話してみたいと思っていた。

「（これはいったいどうしたことか、私の心がこれほどざわめくとは。私が他人に興味を抱く日が来るとはな。だが、思ったよりは悪くないな）」

そのような感慨にクローゼスは耽りながら、まだ目を覚まさないアルフィリースの仲間達の様子を見に行くのだった。

＊＊＊

その後全員が無事に目を覚ましたが、ほとんどの者が凍傷を負っていた。その治療にユーティ、クローゼス、ミランダはかかりっきりであり、暇を持て余すアルフィリースはイルマタルと遊んだり、クローゼスの本を読んだりして時間を過ごしていた。

全員体事態は元気なので、ゆっくりと体を休めながら会話などをして過ごしていたのだが、全員が驚いたのはアルフィリースの本を読む速度だった。

クローゼスの住処の内、一室を埋めるほどの本の量があったのだが、アルフィリースは凄まじい速度でそれを読破してゆき、ほどなくしてアルフィリースの横には本がうずたかく積まれていった。適当に読んでいるのかとミランダが本の内容ついていくつか質問してみると、アルフィリースは本を読みながら上の空で正解を返すのだった。どうやらアルフィリースは、相当に勉学の方は進んでいるらしかった。彼の師匠であるアルドリュースが大陸で有数の学者であった事を考えれば、ある意味当然だったかもしれない。アルフィリースに自覚はないが、この時代の女性において、彼女は正規の教育を施される王族以上の知識を蓄えていたのだった。

そして時間さえできれば、アルフィリースはクローゼスが趣味で

作っているお茶を飲みながら、彼女と氷の魔術について語り合っていた。もちろん真面目な話から発展して、いかに自分が不遇な扱いを受けるかなどの非常にくだらない話までアルフィリースはするのだが、クローゼスはそのように合理的でない話を嫌がらない自分に驚いていた。

さらにクローゼスは他のメンバーとも話が合った。ユーティとは属性が同じだし、魔女と妖精は元々縁が深い。エアリアルとは精霊のことについて聞かれるし、ラーナとはフェアトゥーセのことについて話し合う。そのようにして、彼女達の怪我が癒える実に三日間ほどの間で、クローゼスはこれまでの一生分よりも多く言葉を話したのではないかと言うほど、おしゃべりをしていたのだった。

そして全員が全快した四日後――

「全員傷は癒えたようだな」
「ええ、おかげさまですっかり」

全員、既に動くことに何の支障もなくなっていた。本来なら数週間は完治までかかるのだが、クローゼスの処置が的確だったのと、ユーティ、ラーナ、ミランダが懸命な処置を施したのは言うまでもない。

だが外はまだ吹雪である。一時期よりはましなようだが、視界が５mときかないことに変わりはない。

「どうしようかな・・・」
「急ぐのか？」
「まあ、早い方がいいよね」

アルネリア教会に報告をすることを考えると、ミランダとしてはすぐに出発したいところだった。

「この吹雪は、まだ2週間は続くな」
「その間ここに釘付けかい？　それは困るな」
「だが、急ぐというなら私が送ってしんぜよう」

クローゼスは飲んでいたお茶を一気に飲み干すと、がたりと席を立つ。

「この吹雪の中、どうやって？」
「吹雪だからこそ良い。むしろ晴れた方が厄介だ。雪崩も起こるし、雪に覆われて地面か空中かもわからん部分が崩れやすくなる。地面のつもりが、谷の合間に積った雪の上を歩いていて荷物の重みで谷底に真っ逆さま、なんてこともありうる」
「・・・それはいやよ」

アルフィリースはその光景を想像して身震いした。

「慣れぬ者に雪山は厳しい。一見平坦でも、雪の下はわかったものではないからな。まあだからこそ、ここは北と南の行き来を遮断する場所足りえるのだ。実際にここから北に向かうためには、年中雪に閉ざされた山をいくつも越えないと駄目だからな」
「それはいいけど、どうやって送ってくれるの？　聞いた話だと、ここは結構北側なんだよね？」
「私は近道を知っている。歩いても一日で雪のない場所までは送れるよ。では善は急げと言う、すぐに行こうか」

そうして壁にかけてあったマントをふわりと纏うと、そのまま外に向かおうとするクローゼス。

「ちょっと、クロー？　そんな恰好じゃ・・・」
「また私の名前を略したな、アルフィリースよ」

「いいじゃない、別に。そんなことより寒くないの？」

アルフィリースの質問も尤もである。クローゼスの恰好は短いスカートに足首より少し長いくらいのブーツ、どう見ても薄い生地の長袖である。それに腰までの短いマントを羽織って、何が変わるというのか。

だが心配そうなアルフィリースを見て、クローゼスは不敵に笑う。

「氷原の魔女を舐めるなよ？　吹雪ごとき御しきれぬで、どうして氷の極みに近づけようか」

「クローはよくても、私達は凍死するんじゃ・・・」

「それも心配いらん。だが、私の後ろをぴったりくっついてくるように。そうでなければ、どうなっても知らんからな」

クローゼスはそれだけ言い残すと、さっさと外に出て行った。やむなくアルフィリース達も彼女に続く。

「さ、寒い！」

「全員来たな？　ではまいろうか」

全員が外に出ると、クローゼスがくるりと背を向け歩きだす。アルフィリース達も続くが、歩きだすと不思議と寒さが和らいだのだった。

「あ、あれ？」

「そなた達の周囲だけ、吹雪と寒さが届かぬようにした。だが私からあまり離れると寒いぞ？」

「わかったわ」

クローゼスの力に感心しながら、馬に乗ったり、あるいは歩いて

クローゼスの後に続くアルフィリース達である。
そうして竜巻のような吹雪の中を歩くアルフィリース達。会話をしようにも風の音が凄まじく、隣のミランダの声さえ聞こえない。前を行くクローゼスの背中だけを見つめて歩くだけの時間が、いったいどれほど流れただろうか。
周囲の風の音が山や谷で反射するのか、まるで巨大な猛獣の叫び声のように聞こえる。最初はアルフィリースも気にも留めなかったが、それだけしか聞くものがなければ嫌でも気になってくる。

「（ううう、不気味だよ）」

アルフィリースがそのように思い始めたちょうどその時、クローゼスがピタリと足を止めて振り返る。

「空腹だな。食事にしよう」

不思議な事に、暴風の中でもクローゼスの声はよく通る。そしてどうしてそこにあるとわかるのか、小さな洞穴にアルフィリース達を誘導した。

「よくこんなところに洞窟があるってわかるわね」
「何、この辺はよく歩いているからな。地形くらい覚えているさ」
「それでも視界はきかないでしょ？」
「歩数で測っているんだよ」

そのようなやりとりをしながら、それぞれが軽食を腹収めていく。

「ねえ、クロー？」
「なんだ、アルフィリース」

クローゼスも、もはや自分の呼び方を訂正させることは諦めたようだった。切れ長の目をきろり、とアルフィリースに向け反応する。昔はそれ目つきだけでも自分を怖がった人間がいたなとクローゼスは思いだすが、アルフィリースはその程度ではクローゼスを恐れない。クローゼスがアルフィリースと話しやすいと感じる理由の一つだった。

「やっぱり私の仲間にはなってくれないかな？」
「その話は断ると言ったろう」
「そっかぁ・・・」

目に見えてアルフィリースがしょんぼりとしたので、クローゼスもさすがに不憫に思う。そのような心情の変化自体が、今までのクローゼスには無かったことだった。

「そこまで私の力が欲しいのか？」
「そうだよ？」
「なぜだ？　探せば私より優れた魔術士、魔女は沢山いるだろう。私である必要はない」
「うーん、でも私はこの出会いに、なんだか運命的なものを感じるんだよね」

アルフィリースが真剣な顔をして言ったので、クローゼスが目を見開いて驚いたような顔をした。

「臆面もなくそのような事をよく言う。口説き文句のようだな」
「仲間にするために口説くっていうなら、その通りかもね。念のために言っておくと、私にそっちの気はないわよ？」
「どっちの気だ」
「ふふふ、さあね」

笑って返すアルフィリースに、クローゼスが真剣に考える。

「（私がアルフィリースに興味を持っているのは、もはや疑いようがない。正直なところ、雪原に籠っているのは好きだ。余計な雑音もないし、氷の精霊と戯れるのは悪くない。少なくとも、人間よりは随分ましだ。だが・・・アルフィリースという存在を知ってしまった以上、人間も私が思うより悪くないのかもしれない。アルフィリースが死ぬまでは私は生きるだろうし、雪原で一人氷の精霊と戯れるのは彼女が死んでからでもいいかもしれないな。さて、どうするか・・・）」

クローゼスはアルフィリース達全員の顔を見渡しながら考える。

続く

ピレボスにて、その9～大戦期の真実～（後書き）

次回投稿は5／26（木）10：00です。

ピレボスにて、その１０～氷原の散歩～（前書き）

アルフィリース達はクローゼスに導かれるまま、ピレボスを下る・・

・

ピレボスにて、その１０～氷原の散歩～

「クロー、どうかな・・・？」

アルフィリースがおそるおそる尋ねた問いに、クローゼスはまっすぐに彼女の方を向いて答えた。

「アルフィリース、真剣に考えた結果だが・・・やはり今の私はそなたと共には行けないよ」

「そっかぁ・・・」

アルフィリースがしょんぼりと項垂れた。仲間達もその会話は聞いたいたようで、それぞれが落胆の色を示していた。その様子を見て、クローゼスはため息をつきながら答える。

「話は最後まで聞くものだ、アルフィリース」

「え？」

アルフィリースが顔を上げる。

「『今は無理』という意味で私は言ったんだ。雪原の事を託して出立したお師匠を無視して、私がアルフィリースについていくわけにはいくまい？」

「じゃあ」

「ああ。お師匠が返り次第、私がアルフィリースの元に行ってもいいかどうか尋ねてみようと思う」

「本当！？」

アルフィリースは嬉しさのあまり、クローゼスを抱きしめていた。

クローゼスは小柄なので、アルフィリースの突進を受け止めきれず、後ろに倒される格好になった。そして当然と言えば当然のように、アルフィリースの胸でクローゼスは窒息しかける。

「これでクローも私達の仲間ね！」
「く、苦し・・・」
「もうクローったら照れちゃって！　嬉しくて声も出せないの？」
「あ、アルフィ！　それでは我の二の舞だ！」

その様子を見て、同じ状況で死にかけたエアリアルが慌てて止めに入るのだった。

そしてその後、クローゼスが呼吸を整えてからのこと。

「ふうー」
「ご、ごめんなさい。クロー・・・私ったら、ついはしゃいじゃって」
「はしゃいで殺されては、たまったものではないよ」
「反省してます・・・」

アルフィリースが縮こまったのを見て、クローゼスは苦笑した。

「まあなんだ。許可が下りるかどうかはお師匠次第だから、これればかりは何とも言えないな。団欒の期間も分からんし、ゆっくりと期待しないで待っていてくれるといい」
「いつでも私は歓迎するからね！？」
「・・・そうか」

クローゼスはそっけなく言って立ち上がったが、そうでもしないと本当にこのまま山を降りてアルフィリースについていってしまい

そうだった。何かを我慢するように、しらずしらず拳を握り込んでしまうクローゼスである。

そしてまたしても吹雪の中を歩き続ける一行。気がつけば吹雪は徐々に収まってきており、雪がはらはらと降っている程度にまでなっていた。吹雪が治まってみて初めて分かったのだが、辺りは既に夜である。吹雪では視界がきいていなかったので、クローゼスの背だけを見て歩いていたからアルフィリース達は時間感覚がよくわかっていなかったのだ。

ただ一気に寒さがおとずれたせいで、周囲の木々まで一瞬で凍ってしまったようだ。樹氷と化した木が、アルフィリース達の松明に反射して、きらきらと輝いてみせる。動物や魔獣も寒さにそれぞれ穴倉で震えているのか、アルフィリース達の足音と吐息以外、世界は静寂に包まれていた。

「この谷を抜ければ、もう雪は降ってはいまい」

「へえ・・・」

アルフィリース達はクローゼスに導かれるまま、馬数頭分程度の細さの隘路(あいろ)を進んでいた。風もほとんどなく、穏やかに雪が降る道を踏みしめながら進んでいく。

「よし、出たぞ」

「うわあ・・・」

「へえ・・・」

アルフィリース達が隘路を抜けて出た先は、切り立った崖。崖下は漆黒に彩られ、何があるのかさっぱり見えない。山を眼下に見下ろせるくらいなので、まだ標高は相当に高いのだろう。

「向うに見える山からなら、一日もなくピレボスを下ることができ

るだろう。そら、白い月も翳り青い月しかないから、遥かかなたに人里の明りも見えよう？」

「・・・確かに」

目のいいエアリアルが確認する。確かに明りのようなものがちらほらと見えた。あれが街のある場所なのだろうか。

「でもどうやって向うまで？　完全に崖で、向うの山に行く方法はないよ？」

「だな。途中に岩棚のように低い山は見えるけど、まさか跳べなんて言わないだろうね？」

「フ。そんな無茶は言わぬよ、私は。歩いていこう」

そうしてクローゼスが何もない空中に向かって歩き出す。

「クロー？　危ない！」

クローゼスの足が何も無い空中に踏み出された。そしてクローゼスが崖下に落ちると思われた、次の瞬間。

「あ・・・れ？」

クローゼスは空中を何も無かったかのように歩いていた。

「なんで・・・」

「フフ、もうすぐ白い月が出る。そうすればわかるよ」

そして間もなく雲の陰から白い月が顔を出すと、一面が一斉に明るくなる。すると驚いたことに、クローゼスの足元には氷の橋が出現していたのだ。

「それは」
「私が魔術で形成した。今までもずっとこの上を歩いていたのだぞ？　ほら」

クローゼスが示した先には、光り輝く氷の橋が見えた。幅にすれば3mもないだろう。アルフィリース達はずっとその上を歩いていたことになる。もちろん本当の大地も沢山あったろうが、作った端から雪で覆われたため、アルフィリース達は気が付いていなかったのだ。もちろんリサは別にして、である。

「すごぉい！」
「リサ、気が付いていたの？」
「もちろん。もっとも最初に気付いた時には驚きましたが。ですが、2歩ほど外に道を踏みはずせば空中に真っ逆さまと聞いて、ミランダは堂々と歩けますか？」
「うーん、それは難しいかもね」
「でしょう？　クローがあえて何も言わなかったのも、同じような理由かと」

そうしてクローゼスがアルフィリース達を氷の橋に誘う。

「さあ、月夜の散歩と洒落込もうじゃないか」

クローゼスが、大胆不敵に、そして楽しそうに笑った。

そして一行は何も無い空中を、まさに氷の橋だけを頼りに歩いていた。地面は遥か下にあるはずだが、全く何も見えない。そして横もまた同様で、時折吹く突風にびくびくする面々である。ただそんな彼女立ちをクローゼスは察したのか、氷の橋の表面をわざと粗く

構成し、滑り止めになるように作ってくれている。
　さらに橋はクローゼスの前方１０m程に次々と構成されていく。
彼女の歩く速度に合わせて、次々と橋が作られているかのようだった。悠然とその場所を歩くのは、先頭を行くクローゼスと、並行して歩くアルフィリース。そして翼を持つユーティ、グウェンドルフ、イルマタル、エメラルドくらいのものである。ミランダやリサはおそるおそる進み、エアリアルですら怖いのか顔が青い。馬の手綱を握っているから、まだなんとか平静を保てているのだ。ラーナはそんなエアリアルにしがみつきながら進んでいる。そして楓は・・・

「楓、膝が笑ってるよ？」
「た、た、高いところは駄目なんです・・・」
「とんだくの一もいたものですね」

　リサが呆れかえっているが、この高さは尋常ではない。高いところが平気な人間でも、たまったものではないだろう。
　その中で、アルフィリースだけが余裕綽々だった。

「ママ―！　たかいたかいして～」
「よし来た！　ほらほら～」
「きゃはははは！」

　アルフィリースがイルマタルを抱きあげながら、くるくると回っている。３mほどしか幅のない場所でよくやると、他のメンバーは思うのだ。

「なんであんなこと出来るのさ・・・」
「馬鹿とアルフィリースは高いところが好きなのですよ、ミランダ。あるいは、デカ女は鈍いかどっちかなのです。普通の人間なら、楓のような反応が当たり前かと」

「んで、その楓は？」
「こ、腰が抜けましたぁ・・・」
「・・・ヘタレですね、あれは」

楓は腰を抜かしていた。まあリサが背後から突然どついて脅かしたのだから、ある意味ではしょうがない。その時楓は、「ちょっと漏らしてしまいました」などと呟いたのだが。

その頃、先頭でイルマタルを肩車しながら進むアルフィリースは、クローゼスと楽しそうに話しながら歩いている。

「クローの魔術ってすごいねぇ。まさか氷で橋を作るなんて」
「そうでもない。いくつかの条件が揃っているから出来る芸当さ。吹雪だったし、この辺は私のお気に入りで、何度も歩いて場を私に慣らしているからな。魔術が形成しやすいのさ。それに、途中の低い山々にも魔術の基点を形成し、橋を作る手伝いをさせている。何の下準備も無しでは、私でもこんな魔法みたいな真似は無理だよ」
「へええ。でもこの光景はいいわねぇ」

アルフィリースは夜空の中天にかかる、白と青の月を見上げる。青の月は年中見ることができ、満ち欠けもせず、あまり光を発さない。雲にでも隠れようものなら、周囲一帯は完全な闇と同義である。

対して、白の月はおよそ２０日の周期で満ち欠けする。そして７日ほどは全く姿を現さない。白い月が無い時は暗闇が多くなるため、犯罪も増え、魔物や魔獣も活発になるとされる。魔術に関係するのは主に白い月で、満月の時には魔術の行使が楽な事が多い。魔術を扱う者なら、誰でも知っている事実である。

今日は白の月は満ちていた。強めとはいえ淡い光に反射して、氷の橋がきらきらと光り輝く。まるで自分が星の海でも歩いているかのような気分にアルフィリースは浸る。隣に恋人でもいれば素敵だろうなぁ、などとアルフィリースはそんなことを考えてしまうのだ。

そんなアルフィリースの顔がニヤケていたのか、クローゼスが覗きこんできた。

「アルフィリース、鼻の下がのびているぞ」

「え、うそ？」

「冗談だ」

クローゼスが冗談を言ったので、アルフィリースはぽかんとした。逆にクローゼスが今度は慌てる。

「なんだ？　私が冗談を言ってはおかしいか？」

「ううん。初めて聞いたような気がしたから」

「当然だ。初めて言った」

そうしてクローゼスはぷい、と横を向いてしまった。アルフィリースは追及しなかったが、クローゼスはきっと照れているのだろうと、アルフィリースは当たりをつける。そして、それは的を得ているのだった。

そのまま半刻ほども歩いたか。やがて一行は向うの山に到着した。

「さて、ここからは雪もほとんど積っていまい。私の案内は不要だな」

「ありがとう、クロー。本当に助かったわ」

アルフィリースがクローゼスの手を取って、感謝の意を表す。クローゼスもまた、アルフィリースの手を握り返した。

「ああ、達者でな」

「クローこそね。寂しくなったら、いつでも私の所を訪ねてきて。仲間になるとかじゃなくて、お茶を飲みに来るとかでもいいから」

「わかったよ。覚えておくよ、アルフィ」

そうして、クローゼスは元の氷の橋を渡って帰って行った。彼女らしく一切振り返る事はしなかったが、クローゼスはここで振り返ると、きっとそのままついていってしまう気がしたのだ。どうして自分がそこまでアルフィリースに魅かれるのかはわからないが、確信だけはあった。ここから引き返すこと自体にも、かなりクローゼスは力を要したのだ。アルフィリースも、何やら彼女のそんな心情を察したのかもしれない。無理に引きとめたり、声をかけたりはしなかった。

「よかったのかい、アルフィ」

ミランダがアルフィリースに話しかける。

「何が？」

「もちろんクローの事さ。強引に誘えば、来ると思うけどね」

「そうね。でも、それは私の本意じゃないわ」

アルフィリースはにっこりとミランダにしてみせる。その顔はどこか自信に満ちていた。

「何か考えが？」

「最後にね、クローは私の事を『アルフィ』って言ったわ。だから彼女はきっと私に会いに来てくれる。そんな気がするの」

「なるほどね・・・まあ、その時までに立派な団を作っておかないと、クローに飽きられるかもよ？」

「『この傭兵団はお茶も飲まないのか？』とかは言いそうよね？」

「言いかねないね！」

そんなめいめい勝手なことを話しながら、アルフィリース達はその場を後にしたのだった。そんな彼女達が向かう先は、ガーシュロンの紛争地帯と言われる、大陸の東で最も治安の悪い土地である。

続く

ピレボスにて、その１０～氷原の散歩～（後書き）

次回投稿は５／２７（金）１０：００です。

次回から新シリーズです。よろしければ評価、感想などお願いします。

シーカー達の苦悩、その1～迷走～（前書き）

ミュートリオを追われたシーカー達は混乱していた。そして、取り残されたフェンナは何を思うのか・・・？

シーカー達の苦悩、その1～迷走～

＊＊＊

話はしばらく前に遡る。

アルフィリースが沼地で苦悩を抱えている頃、大草原の東、迷いの森の中ではシーカー達の議論が紛糾していた。

会議に列席しているのは、シーカー達の長であるオルバストフと、その息子である三人の王子。さらにはオルバストフの直の部下である者達である。

「オルバストフ様、いかがされるのです？」

部下の一人が心配そうな声で尋ねる。だがオルバストフは目を閉じたまま、答えようとはしない。代わりに第二王子であるシャーギンが答える。

「決まっている、徹底抗戦だ！　弟のチェザーリも攫われ、先の戦いではさらにニューマスも殺された。ここまでされて黙っていては、いかに我らが戦いを好まぬ種族といえど、以後侵略するに易しと思われるだろう！」

シャーギンが主張するように、実はライフレスがミュートリオに侵略してきてから、毎日のように大草原には魔王が１００体ずつほど送り込まれている。もちろん主にブラディマリアが魔力を使って送りこんでいるのだが、送り込まれた魔王はさらに魔物やヘカトンケイルを召喚するため、異常な速度で異形の魔物たちが大草原に増えていた。

そのうちの一部が、東に逃げるシーカー達と戦ったのである。最初こそ互角以上に戦いを展開したシーカー達だが、送り込まれる魔王達は、徐々にシーカー達が戦いにくい個体へと変貌を遂げて行った。これはもちろん、アノーマリーが戦いの一部始終を使い魔を通して観察しながら、送り込む魔王達を微調整していった結果である。

そのせいでシーカー達はミュートリオに戻るどころか、じりじりと後退を余儀なくされ、ついに先日、魔術が一切効かないヘカトンケイルが送り込まれてきた所で、決定的な打撃を受けた。戦力の１／５近くを失い、さらに第三王子であったニューマスを失ったのだ。これによりシーカー達は大草原から完全撤退。今は大草原の東の迷いの森にて、以後の方策を決めるための議論をしているのだが、既に議論自体が５日にも及んでいる。

「ですがシャーギン様。魔術が効かない相手では、我々の出来ることなどたかが知れていますぞ」

「だからなんだ！　このままおめおめと撤退するというのか？　死んだ者達がそれでは報われぬ！」

「シャーギン兄さん。撤退は一つの手段として検討したうえで、戦うかどうかを決めた方がいい」

発言したのは第五王子のロクスウェルである。彼は大人しい性格で知られ、争いを嫌う人物である。普段なら物静かなこのロクスウェルの言葉を聞くシャーギンも、この時ばかりは逆効果だった。

「ロクスウェル、貴様は前線で戦っておらぬからわからぬのだ！　生きたままあのおぞましい化け物どもに裂かれ、踏み潰され、喰い殺されて死んでいった者達の無念が！　あのような光景を見ておいて、今さら尻尾を巻いて逃げるなど、考えられん！」

「しかし！」

「だが、戦うにしても勝算は必要だ。何かあるのか？」

争う二人を遮るように次に口を開いたのは、第一王子で時期族長のハルティニアスである。

「我々の決断は全員の命を左右する。戦うなら勝算が必要だ。逃げるなら、逃亡先の選定が必要だ。お前達二人は、その策があるか？」

「それは・・・」

「戦いながら見つけます！」

頭の血の昇ったシャーギンが息まいたが、ハルティニアスは大きくため息をついた。

「それができていれば苦労はない。それに最初は我々が優勢だったのだ。それがわずか数日で逆転していった。奴らの方が余程対応が早いのだ」

「では兄上はどうされるおつもりで？」

シャーギンがやや挑発的な目つきでハルティニアスを見る。ハルティニアスもまたやや苛立った目で弟と目線をぶつけたが、彼は静かに言い放つ。

「私は戦うことにも反対はしない。だが、よほど高い勝算が無い限りは無理だ。少なくとも、あの魔術が効かない兵士に対抗する策を見つけるまではな。その点を考えると、まずは私達が落ち着ける場所を見つけるのが適当であると思う。自分の城なくして打って出るのは、余りに危険が大きいとは思わないか？」

「それは・・・確かに」

ハルティニアスの意見は至極もっともだったので、シャーギンも黙った。ハルティニアスはなおも続ける。

「だが、問題はその場所をどこにするかだ。幸いにしてこの迷いの森は我々にとって苦にならず、あの異形の者共の追撃を緩めてくれはするが、どうやら物見の報告では、徐々に奴らはこちらに近づいているらしい。結局この森も安心はできないということだ」
「では、どうされるのが一番だと？」
部下の一人が質問する。
「既に私の手勢を外に向かわせた。彼らが外の世界がどのようになっているのかを、報告してくれるだろう。その上で、移動場所を選定したいと思う」
「おお、それならば安心ですな」
部下達が安心したように笑顔がこぼれる。そして会議は一度解散し、中にはオルバストフと、ハルティニアスが残った。そこで初めてオルバストフがゆっくりと口を開く。
「ハルティニアスよ」
「なんでしょうか、父上」
ハルティニアスは聞き返しこそしたが、オルバストフの言いたい事は既にわかっているようだった。
「お前は、移動先が見つかると思うか？」
「・・・正直、期待はしておりませぬ。ここで見つかるくらいなら、我々は最初から隠れ住む様な真似をしなくてもよかったでしょう」
「その通りだ。だが、ならばなぜあのような事を？」
「希望は必要です」

ハルティニアスははっきりと言い放った。

「例えまやかしでも、民には希望が必要です。これで数日は士気を持たせられるでしょう」

「その間に、次の手を考えると？」

「はい。ですが私も少し失望しました」

「何に？」

オルバストフは、ゆっくりと質問する。ハルティニアスは言うべきかどうか悩んだが、言葉にするのを躊躇うかのように、歯切れ悪く話し始めた。

「・・・先ほどの私の話を聞いて、そのまま彼らが信じたことです。彼らは、自分達がどのような状況に置かれているか、またこれまで置かれてきたのかを全く理解できていない。ミュートリオのような小さな集落に籠り、他との接触を断って、何の変哲もない日々を甘んじて受け入れることに慣れ過ぎている」

「だがその責を負うべきは我々だ」

オルバストフは答えた。

「我々が彼らを堕落させた。移住の時、あれほど気概溢れた彼らを導けなかったのは我らの責任だ。そして、失敗した時、次善の策を出せなかった事もな」

「では、今のこの状況はその時の対価を支払っていると？」

「かもしれぬ」

それにしては大きすぎる気がするがな、とオルバストフは考えるが、その考え自体があるいは甘えているのかもしれないと指摘する者は、誰もいなかった。

そしてシーカーの長達がそのような議論に没頭している間、一つのテントの下で会話をする男女がいた。

「カザス、具合はいかがですか？」

「フェンナ。ええ、もうだいぶ良いです。まだ起き上がって色々するのは難しいのですが」

テントではカザスが寝かされていた。彼らはライフレス達が撤退した後、シーカー達により救出され、保護を受けたのだった。もっとも他との接触を嫌うシーカーの事。人間であるカザスは、ほぼ捕虜のような扱いだった。フェンナは一応それなりの待遇を受けてはいたが、実質は監視が付いており、とても王族としての扱いはされていなかった。

「無理をしないでください、カザス。あなたは2日間ほど意識がなかったのですから」

「面目ない。咄嗟にでもあの時フェンナが守ってくれなかったら、僕は死んでいたでしょう」

「それはなんとも言えませんが、私は当然の事をしただけのことです。私達は仲間でしょう？」

フェンナがカザスを元気づけるように笑おうとするが、今の状況ではその笑いも寂しげなものだった。

「そう・・・ですね。仲間と言えば、アルフィリース達は無事でしょうか。ニアも生きているだろうか」

「彼女達ならきっと大丈夫。ただ、我々には知るすべもありませんが・・・」

二人が項垂れる。するとそこにオーリが入って来る。

「フェンナ様、面会のお時間は終わりです。すぐに出ていただきたい」
「もうですか？　先ほど来たばかりなのに」
「申し訳ありませんが」
　オーリは頑として譲らない態度でフェンナに接した。オーリは命令の上でフェンナの世話をしているが、彼はフェンナの事が好きではなく、どちらかというと憎んでさえいた。彼女さえいなければ、隊長であったウィラムを初めとした、自分の隊の仲間が死ぬことはなかったと思っている。いや、そう考えることで、無理矢理自分を納得させているのだ。フェンナがウィラムと恋仲だった事は、オーリとて知っていることなのだから。
　フェンナが悲しそうな瞳をしたままカザスを一瞥すると、テントを出て行く。そのままオーリを伴って、散歩をするフェンナ。
「フェンナ様、どちらへ？」
「散歩です。いけませんか？」
「できればすぐに御自分のテントに戻って欲しいものですね」
「・・・少しくらい外の空気を吸ってもいいでしょう？」
　フェンナは、オーリの忠告をはねのけるようにして散歩を続けた。事実、外の空気を吸わなければ、重くのしかかる気持ちに彼女は胸がつぶれそうだったのだ。
「（私はなんてちっぽけなのだろう。王族でありながら、何もできない。里の皆の仇を討つ事も、ウィラムの仇を討つ事も。カザスも治してあげられないし、アルフィリースの行方を掴むことだって。あげく、自由に歩き回ることすらできないなんて！）」

フェンナが絶望に囚われて立ちつくす中、オーリが「時間が」と催促して来る。そんな彼に悲しそうな視線を向けるフェンナ。そして彼の方に歩こうとした瞬間、足に小石が当たる。

「・・・？」

フェンナは周囲を見渡したが、誰もいない。気のせいかと動こうかとした所で、またしても小石が足に当たる。

「（気のせいじゃない？）」

フェンナは足を止め、しばし考える。そして何事もなかったようにオーリの方を向くと、強めに言葉を発した。

「オーリ、少し離れていていただけますか？」
「は？　いえ、それはできません」
「貴方は、私が用を足すところまで監視するというのでしょうか？」
「・・・これは失礼しました。少し離れておりますので、お早いお戻りを」

オーリがやや顔を赤らめながら離れて行く。そして彼が十分遠くに行った事を確認し、フェンナが声を出す。

「もうよいでしょう。姿を現しなさい」
「ありがとうございます」

草むらから音もなく姿を現したのは、ミュートリオでアルフィリース達を助けた忍装束の女。女はひざまづき、身分が上の者に対する礼を取る。

「貴女はたしか・・・」
「改めまして自己紹介をいたします。ミランダ様の護衛を申しつけられております、アルネリア教会の者で桔梗と申します。以後お見知りおきを」
「あの時は世話になりましたね。助けていただいたことを、フェンナ＝シュミット＝ローゼンワークスは改めて感謝いたします。して、何用でしょうか？」

フェンナが油断のない態度で、かつ王族らしく威厳ある態度で振舞う。フェンナはアルフィリース達といる時こそ朗らかだが、人を導く立場の者として、それなりの態度は心得ている。
その彼女に対して、桔梗が恭しく応える。

「この度、ミランダ様から伝言を預かってまいりました。まずはこの書簡を御確認してください」
「？」

そうしてフェンナはミランダからの手紙を受け取るのだった。

続く

シーカー達の苦悩、その1～迷走～（後書き）

次回投稿は5／28（土）9：00です。

シーカー達の苦悩、その2～フェンナの決意～（前書き）

一人取り残され、居場所を失くしたフェンナが決意する事とは・・・？

シーカー達の苦悩、その2～フェンナの決意～

シーカーと人間は扱う言語が本来異なるが、もちろん王族であるフェンナは一定以上の教育を施されている。人間が扱う文字にも苦労はない。だがこれはフェンナの両親独自の方針であり、実はミュートリオのシーカー達は、会話にはそれほど困らなくても、人間世界の文字を読むことはあまりできないのだ。

フェンナが書簡に目を通すと、そこには自分達の無事と、これからの進路が書いてあった。また、困った時はアルネリア教会を頼ってよい事も。フェンナはアルフィリース達の無事を確認し安堵する一方で、気を引き締め直す。そして桔梗に書簡を返した。

「桔梗とやら、お勤め御苦労。事情は分かりました。要は、困った時はアルネリア教会をシーカー達は頼ってもよいと？」

「そのようにミランダ様は私に申しつけられました。必要とあらば、私が使者として仲立ちをしろとも」

「ミランダにそこまでの権限があるとは・・・」

フェンナもミランダがただ者ではないとは思っていたが、どうやら彼女は言う通りの立派な立場の者らしい。普段のミランダを見る限り、そのような気配は全くないのだが。

だがこれは、フェンナにとっては千載一遇の機会かもしれない。もちろんシーカー全体にとってもだ。

「（ここに留まっても、座して滅びを待つばかり。また、今のシーカー達には、この状況を覆すだけの決断力も、選択肢もありはしない。要は私の決断一つということ。だが、私の言うことを彼らは聞くだろうか・・・）」

フェンナは項垂れる。

「（いや・・・聞くかどうかではなく、聞かせなければ駄目だ！それが王族として生まれた私の使命。正直こちらの王族になど未練はないが、何も知らない民まで我々のいたらなさに巻き込んではいけない。やらなければならない。たとえ、誰も助けてくれないとしても・・・アルフィリース、私に力を！）」

フェンナは自分の事を友と呼んでくれた、アルフィリースの顔を思い浮かべる。少なくとも、今は彼女を頼ることはできない。だが、彼女に再び出会うためにはこの試練を乗り越える必要がある。

フェンナは決断した。

「桔梗とやら、その話受けましょう」

「はい。して、段取りはいかように？」

ある程度予測していたのか、桔梗の返答は早い。

「今から私は書簡をしたためます。紅の封をした書簡は、私の説得が上手くいかなかった時のもの。これはいずれにせよ、アルネリア教会のしかるべき人物に届けてください。そして、青い封の書簡は私の説得が上手く言った時に、さらに届けるべきものです」

「その書簡はいつ？」

桔梗は淡々と話を進める。

「明日の同じ時間、この場所に書簡を置いておきます。その後、その足で私は長老の説得に向かいます。さらに翌日、私が同じ時間にここに来ぬ時は、説得は失敗したとお思い下さい」

フェンナが決意を固めるように、ぎゅっと口を固く結ぶ。

「そして、今の書簡はここに埋めておくように。明日必要になるでしょうが、ここで持ち帰って持ち物を改められてはまずいので」

「承知いたしました。では」

そのまま桔梗は姿を消した。そしてフェンナも何事もなかったかのように、自分のテントに戻って行くのだった。

＊＊＊

翌日、書簡をしたためたフェンナはカザスの元に寄り、アルフィリース達の無事を示した手紙をそっと渡す。そして昨日と同じ言い訳でオーリと遠ざけると、彼女はその場に書簡を置き、代わりにミランダの書簡を懐に忍ばせると、長老達の元に案内するようオーリに詰め寄った。

フェンナの決意のこもった目に押されるように、オーリはフェンナをオルバストフ達の元に案内する。元々フェンナは王族なので、オーリとしてはフェンナの言葉を無視するわけにもいかない。最初は衛兵に会議中だと断られたが、フェンナはその場の護衛を押しのけるように天幕の中に入って行った。あっけにとられた衛兵がフェンナを拘束する前に、彼女はずかずかと天幕の中に踏み込む。

「失礼いたします」

「なんだ、貴様！？」

「（貴様ときましたか・・・）」

許可も得ず天幕に入ったフェンナを、オルバストフの側近が咎める。

「衛兵は何をしておるか？　すぐにこやつを叩き出せ！」
「黙れ下郎！」

その言葉をフェンナが一喝する。その剣幕に、天幕の中にいた者が一斉にはっと息を飲む。

「な、下郎と・・・」
「貴様は一体何様のつもりだ！？　末席とは言え、このフェンナ＝シュミット＝ローゼンワークスは王家の血につながる者。貴様のような輩風情に『こやつ』呼ばわりされるいわれはない！　非礼を詫びよ！」
「・・・申し訳ございません」

側近は明らかに反省の色の見られぬ態度で、言葉だけを口にした。そんな瑣末な出来事は既に気にとめぬフェンナは、さらに言葉を続ける。

「非礼は重々承知の上で、我々の長であるオルバストフ様に申し上げたい事がございます。どうか私の話を！」
「非礼を承知の上というのなら、この会議の後ではいかぬのか、フェンナよ」

口を開いたのは、ハルティニアス。彼はフェンナの乱入にも、声を荒げることなく静かに対応した。だがフェンナも一歩も引く気はない。

「そういうわけにはまいりません、事は一刻を争います。それにここにおられるお歴々にも、ぜひ聞いていただきたい」
「だがそれは・・・」
「私の立場は覚悟の上です。私が裏切り者の血筋ということも聞い

ております。いかな処罰も覚悟の上」

その一言に、天幕の中がざわめいた。だが、フェンナの凄然とした態度と物言いに、その場の全員が圧倒されつつあった。そしてさらに何か言おうとしたハルティニアスを、オルバストフが制する。

「そこまで言うならよかろう。申してみよ」

「ありがたきお言葉。長老の慈悲に感謝いたします」

フェンナは丁寧に礼をすると、天幕の中心にあるテーブルの末席に進み出る。その心臓は早鐘を打ち、足は震えていた。足元がおぼつかず、まるで雲の上を歩いているのではないかというような錯覚にフェンナは囚われる。

「（しっかりしなさい、フェンナ！　ここからが本番よ！）」

フェンナは内心で自分に喝を入れると、会議の席に臨んだ。列席する全員が、フェンナの一挙一動に注目している。

「まずは私に発言の機会を下さったことに感謝いたします。私の話したい事は、これからのシーカーの取るべき道についてです」

「ちょうど今、我々もその事について話しあっていた所だ」

オルバストフがゆっくりと答える。フェンナは務めて落ち着いて質問しようとした。だが、どうしても少しは声がうわずるのだ。そんな自分の事を馬鹿にされるのはよかったが、言葉に力がなくなるのは避けたかった。

「会議はどこまで進んでいるか、伺ってもよろしいでしょうか？私は詳しい内情は知らぬもので」

「徹底抗戦と退却で議論は別れておったが、退却の方に話は傾きつつある。だが、その退却先で揉めておる」
「斥候を既に外に大地に放った。彼らが詳しい待避先の情報を持って帰るのを待っている所だが、それだけで何もせぬのも馬鹿馬鹿しいので、どこにどういけばよいのか、あらゆる道筋の可能性を検討していた」
「（今さらなんと悠長な）」

そのような事は、常日頃から準備しておいて然るべきことなのだ。魔王の群れに追い立てられている今になって、そのような事を検証するとは。フェンナは内心で呆れたが、そこはぐっと我慢した。

「・・・それでしたら、私に良い案があります」
「ほう、申してみよ」

やや挑戦的に、シャーギンが聞き返す。

「アルネリア教会を頼るのです」
「アルネリア教会？」

全員が顔を見合わせる。そしてシャーギンが吐き捨てるように言った。

「何を言うかと思えば、馬鹿な事を。そんなことができるわけはないだろう？」
「なぜです？」
「考えても見よ。アルネリア教会といえば、人間側の魔物討伐の筆頭。それが、シーカーを魔物の一部と蔑む人間が、我々を受け入れるわけがなかろう？」

シャーギンは、フェンナを馬鹿にするように見下している。もっとも、フェンナとて心の内ではため息をついているのだ。なぜシーカーの連中は、自分達の無知を棚に上げてこうも強気の態度に出れるのだろうかと、不思議でならない。

「シャーギン様。お尋ねしますが、我々シーカーが直接アルネリア教会と対立した歴史がおありで？」

「ふん、そのようなものはなくともわかるだろうよ。常識で物事を考えよ、小娘」

「では、対立した歴史は不確定なのですね。オルバストフ様」

フェンナがシャーギンと話しても無駄だと考え、オルバストフに話しを振った。オルバストフは顎ひげを撫でながら頷く。

「うむ。私の知る限りではそのような歴史はない」

「ではこの書簡をお見せしてもよさそうですね」

フェンナは最初の関門を突破したように安堵し、懐のミランダの書簡を取り出してオルバストフに見せた。

「これは？」

「わが友からの書簡にございます。旅の間、私はアルネリア教のシスターと行動を共にしておりましたので」

「待て、その書簡をどこで受け取った？」

シャーギンが鋭く指摘する。そのくらいはフェンナも想定済みだったので、淀みなく回答する。

「貴方達は随分と自分達の能力に自信がおありの様ですが、所詮外の世界を見ようともせず、自分達の居心地のいい場所に閉じこもる

種族になど限界があります。いともたやすく潜入できるのですよ、他の者がその気になりさえすればね。ですが貴方達はそんなことも認めたくないのでしょう？」

「こやつ！　言わせておけば！」

シャーギンが立ち上がり、腰の剣に手をかける。

「こやつは裏切り者だ！　外の世界の者達と手を組んで、我々を貶めようとしている！」

「無礼な！　私にそんな事をして、なんの得があると！？」

「大方、自分を村八分にした我々への復讐だろうよ」

「そこまで私は度量が小さいわけではない！」

「やめよ」

いがみ合うフェンナとシャーギンを、オルバストフが制する。

「この娘の言葉が真実かどうかは、後にわかる。そしてそれを決めるのはこの私だ、シャーギンよ。そなたではない」

「は、出過ぎたまねをいたしました」

シャーギンは憮然としながらも、頭を下げ椅子に座る。そしてオルバストフは書簡を受け取り眺る。そして読み終わると、ハルティニアスに朗読させ、全員に内容を聞かせる。その内容に、少なからず天幕の空気が揺れた。彼らにしてみれば、アルネリア教会から救いの手が差し伸べられるのは、それほど意外な出来事だったのだ。

続く

シーカー達の苦悩、その2～フェンナの決意～（後書き）

次回投稿は5／29（日）9：00です。

シーカー達の苦悩、その3～説得～（前書き）

フェンナの説得は功を奏するのか・・・？

シーカー達の苦悩、その3～説得～

「その書簡の真贋はいかに？」

部下の一人が叫ぶ。

「ふむ、確かめるか」

ハルティニアスが何やら言葉を呟くと、書簡の文字が後ろからゆっくりと書き順の逆に消えて行く。その光景を驚愕の目で見るフェンナ。そしてある程度まで文字が消えると、ハルティニアスが詠唱を辞め、別の言葉を呟く。すると、今度は文字が元通りになるのだ。

「父上、問題ありません。少なくとも昨日今日書かれたものではありませんし、オーリにこのフェンナの行動は逐一報告させておりますが、彼女が手紙を書いたなどという報告は上がっておりません。さらにこの文字の染料を詳しく調べれば分かりますが、色からしてシーカーが好んで使う物ではないかと。どうやら本当にアルネリア教会の関係者の書簡ではないかと」

「よかろう」

ざわめきをオルバストフが制し、ゆったりと言葉を紡ぐ。

「今のは・・・」

「文字の時間を逆行させた。その速度で、だいたいいつ頃作成された者かわかるのだ。そなたの言葉に偽りはなさそうだな」

フェンナの疑問にハルティニアスが答えた。

「それで、そなたはどうしたい？」

今度はオルバストフが問う。フェンナは息を一つ吸い込むと、可能な限り強い意志が伝わるように、しっかりとオルバストフを見据えて言い放つ。

「私は一刻も早くここを離れ、多少強引にでもアルネリア教の庇護を受けるべきかと考えます」

「そんなことができるわけがないだろう！？」

テーブルを叩きながら発言したのは、またしてもシャーギンだった。

「なぜですか、シャーギン様」

「誇り高きシーカーが、人間どもの庇護を受けれるはずがないだろうが！」

「そんなつまらぬ誇り、犬に食わせてしまいなさい」

フェンナの言いように、全員がどよめく。

「つまらぬ？　貴様は、我らの誇りをつまらぬといったのか！？」

「つまらないでしょう！？　自分達が生きるか死ぬかの瀬戸際に、誇りだのなんだのくだらぬことを！　考えてもごらんなさい、決断が遅れる程、危険にさらされるのは我らが民なのですよ？　その事を承知の上でのその発言ですか！？」

「当然だ！　だからこそこうして連日対策をだな・・・」

「それでは遅い！！」

今度はフェンナがテーブルを叩く。余りに力を入れたのでテーブルが少し変形し、フェンナの手からは血が流れた。その迫力に、思

わずシャーギンも怯む。

「今度の相手は普通ではない！　歴史上稀に見る強大な相手です！　それを前にしては、全てをかなぐり捨てても足りぬかというのに、第三、第四王子を失ってまでも、まだそんな悠長な事を言うのですか！？　だいたいいざという時の対応など、平素から決めていて然るべき事。それを今危機に瀕して、それから対策ですって？　どこまで愚かな事を続ける気です？」

「愚かとはなんと！？」

「いいえ、愚かです！　そもそも、森に籠り続ける事を厭うて新天地を求めたはずの我ら。それがたった数度の失敗で、結局元の黙阿弥ではないですか！　その時に他との交流を断った我らの怠惰を、今このような形で代償として支払っているのです！　それとも、我々が全滅するまで対価を支払い続ける気ですか？　決断するなら今しかないのです！　本来なら、貴方達にこんな話をする時間すら惜しい！」

　フェンナが怒りにまかせて一気にまくしたてたせいで、肩で息をしている。そして彼女の剣幕に圧倒され、全員が黙ってしまった。ハルティニアスもシャーギンも目を丸くしている。フェンナがここまではっきりと物を言うとは、彼らも思っていなかったのだ。

　そんな中、オルバストフだけは冷静だった。彼は穏やかな声で、フェンナを宥めるように声を出す。

「フェンナよ。何を怯えている？」

「怯え・・・いえ、そうかもしれません。取り乱しました事をお詫びいたします」

「いや、そのことはよい。先ほど『歴史上稀に見る』と申したな。何を知っている？」

「はい、実は・・・」

フェンナはライフレスの事を話した。彼が伝説の英雄王だという事。ライフレス級の敵が何体もいるかもしれないこと。そして、フェンナの里もまた、かれらの手にかかって滅びた事。

フェンナは自分の里が滅びた時の状況を語るにつけ、いつの間にか涙が頬を濡らす。先の戦いの事を思い出していたのだ。そして、全てを語ったフェンナはその場に泣き崩れてしまった。

「私、私は・・・もう、誰にも死んでほしく・・・ない・・・だから！」

人目もはばからず泣くフェンナを、誰も責めも侮辱しもしなかった。あまりに泣き声と泣き方が悲痛だったのだ。感情が薄いといわれるシーカーとて、無感情な生き物でも残酷な生き物でもない。ハルティニアスがフェンナの肩にそっと手を置き、彼女を宥めた。

そしてゆっくりとオルバストフが語る。

「英雄王グラハムか・・・その名前には心当たりがある」

「え？」

オルバストフの方を向いたのは、フェンナだけではなかった。ハルティニアスやシャーギンまで、彼の方を見た。

「８００年ほども前だな・・・私は曽祖父の膝の上で話を聞いたことがある。英雄王と呼ばれた人間の事を」

「父上、私は初耳です」

ハルティニアスが意外そうな顔をする。

「当然だ。私も今まで忘れていたよ。私にとっても幼い頃のおとぎ

話のようなものだ。だが、私は当時その話が大好きだった。戦えば必ず勝ち、どんな苦境も乗り越えて見せる英雄達の物語。彼の部下も一騎当千の英雄揃い。私は魔術を一切使えぬドルトムント将軍が、不意打ちを受けながらも少女を守りながら魔術士１００人を相手に勝利する話が好きだった。それが今や敵とはな」

「父上・・・」

ハルティニアスが意外そうな顔をする。オルバストフは懐かしき光景に思いを馳せた。

「それに我々の先祖は、かの英雄王に仕えたことがある」

「なんと!?」

これには全員が驚いた。シーカーが人間に仕えるなど、決してないと思っていたからだ。

「英雄王は自分に従う者を拒まなかった。彼の軍勢は実に多様な人種で構成されていたそうだ。我々の祖先も彼の強さに感じ入り、仕えたことがあるらしい」

「そのような歴史が・・・」

「そして今は英雄王が敵となるとはな。運命とは皮肉なものよ」

誰も何と言ってよいかわからなかった。オルバストフの口から次々と語られる事実に、周囲のシーカー達は思考が追いついていなかった。

「そも、我らの歴史を紐解けば」

オルバストフはさらに語る。

「我々は大元のシーカーの集落から袂を分かち、新天地を求めた身。フェンナの言った様にな。そういった意味では、我らもまた裏切り者ということになる。そのような事情において、シュミットの一家を迫害し続けたのは、まったくもって悪しき風習と言わざるをえない。これはフェンナ、そなたの両親には伝えたことだが、今一度そなたにも謝罪しよう。許してくれ」

「いえ・・・オルバストフ様!?」

フェンナが気がつけば、オルバストフは立ち上がり、頭を深々と下げていた。その行為にフェンナは戸惑い、シーカー達は止めに入る。

「父上!?」

「長老! 面を上げてください。このような者のために・・・」

「その姿勢がいかんのだ」

オルバストフは自分を起こそうとした部下を制する。

「私はもっと早くにこうすべきだった。事実、彼女の両親とはいかに融和するか、他の者の理解を得るかを常に話し合っていた。だが何の事はない。私がこうやって皆の前で頭を下げさえすれば、それが一番だったのだ。もちろんそれは私も提案した。だが心優しいフェンナの両親は、『長老にそのような事はさせられない。私達は急がないから』と、断ったのだ。だが、多少強引にでもやはり融和を進めておくべきだった。さぞかし彼らも無念だったろう。私の不明を許してほしい」

オルバストフは忸怩(じくじ)たる思いで、フェンナに詫びた。フェンナの里が襲われ、全員が生死不明という事を聞かされた時、オルバストフの内心は穏やかではなかった。今度彼らがミュートリオを訪れる

時があれば、フェンナをオルバストフと引き合わせ、本格的に関係を改善しようと画策していたのだ。その事が、現在のシーカーの行動を変えるきっかけになるだろうと。

だが思いは叶わず、オルバストフは自分の不明を恥じた。そして今またフェンナがこうして乗り込んでこなければ、自分は愚行を繰り返す所だったのではないかと思ったのだ。内心が一番穏やかでなかったのは、あるいはオルバストフだったのかもしれない。

そして二度同じ過ちを繰り返さないためにも、オルバストフは問うた。

「フェンナよ、改めて聞こう。我々はどうすべきだと考える？」

その問いに、フェンナは涙を振り払って答える。

「まずは一刻も早くこの場を離れるべきかと。魔王だけならともかく、敵の幹部クラスが出てきたらそれまでです。私達はなすすべなく踏みにじられてもおかしくない」

「それほどなのか？」

ハルティニアスが疑惑の視線をフェンナに向ける。だがフェンナはゆっくりと頷いた。

「敵の全てを知っているわけではありません。ですが、ミュートリオを急襲した連中と、他に炎獣ファランクスを倒した者が最低います。失礼ですが、炎獣と戦ったとしたらこの里の戦力でどうにかできますか？」

「それは・・・厳しいだろうな」

答えたのはシャーギンだった。

「もちろん戦いに相性はある。だが、かの炎獣は別格の生物だった。その炎獣が負けたとなると・・・」
「ならばなおさらです。炎獣は戦いの途中で何をどうしても勝てない事を悟り、私達に逃げるように促しました。敵が英雄王とその男だけではなかったら？　少なくともう一人、私は別の敵を見ています」
　それは初心者のダンジョン、廃都ゼアで出会ったドゥームの事である。
「炎獣クラスが三人と仮定して、それを上回る戦力はこちらにはないでしょう」
「それはその通りだ」
　シャーギンは素直に認めた。彼は好戦的で自分が先陣を切る性格をしているだけに、戦力差というものには非常に敏感だった。互角に持ちこめそうな敵や、戦力不明の敵ならともかく、全く勝つ見込みのない敵に対して、部下を連れて討ち死にしに行くほど彼は無謀な性格ではない。
　フェンナはなおも続ける。
「ならばやはりここを一刻も早く離れるべきです。急遽落ち着ける場所のあてはありませんが、少なくともこの土地を出て、アルネリア教に近い場所に陣取るべきです。かの教会ならば、救いを求める者に無碍な扱いはいたしますまい」
「なるほど。頼るのは結構だが、交渉は誰がやる？」
「許可さえいただければ、私がやりましょう。そのように書簡にも書いてあったはずです」
　ハルティニアスの言葉に、フェンナは即答した。しばし二人は見

つめ合って互いの意志を確認したが、ハルティニアスのため息と共に、彼はオルバストフの方を振り返る。

「父上、私はこのフェンナに任せてもよいと思います」

「父上、私も同意しましょう」

さらにシャーギンも同意したことに、全員が驚いた。

「シャーギンよ、お主・・・」

「何ですか、父上。私はそこまで石頭だとお思いですか？」

シャーギンが鼻息も荒く言い返す。

「確かに私は頑固で粗野なのは認めますがね、愚か者ではないつもりですよ。父上が正式に皆の前で謝罪し、協力を申し出るという。それにこのフェンナも中々肝の据わった女で、言っている事も理路整然として正しい。すぐに感情的になる女と違って、ちゃんと話ができるではありませんか。これで私が反対したら、私は里の皆から愚か者の烙印を押されるでしょうよ」

シャーギンがどっかと椅子に座りなおした。その拗ねたような仕草が少し子供らしく、フェンナはくすりと笑う。

そのシャーギンの行動で全員が少し和み、また彼らもフェンナを認めざるをえなくなった。こうして、フェンナは晴れてアルネリア教会とシーカー達の交渉を進めることに成功したのである。

続く

シーカー達の苦悩、その3～説得～（後書き）

次回投稿は5／30（月）8：00です。

シーカー達の苦悩、その４～交渉～（前書き）

フェンナの説得の元、シーカー達は意志を統一するが、ミリアザールの判断はいかに・・・？

シーカー達の苦悩、その4～交渉～

＊＊＊

そしてその話し合いの後、シーカー達の行動は早かった。ミュートリオを撤退するよりも早かったかもしれない。

その理由は、ハルティニアス、シャーギン、ロクスウェルの意見が一致したことによる。この三人はなんだかんだで言い争いをすることが多かったのだが、今は彼らの意見は完全に一致していた。もちろん、フェンナの説得によるものだ。彼らはなすべきことについて手短に話し合い、指示を矢継ぎ早に飛ばす。そして彼らの歯車が噛みあうと、これほどまでにも物事がスムーズ進むものなのかと、当の本人達も驚いていたのだ。

そして、彼らが滞在していた場所を去った直後、殿の部隊から魔王の姿を見たとの報告があった。まさに危機一髪だったのである。シーカー達は余計な戦闘を避けるため、魔王達は幻惑と結界で閉じ込めて、その場にうまうまと置き去りにして来たのだった。

その後もフェンナはシーカーの代表として、桔梗を通じてアルネリア教、ひいてはミリアザールと交渉を続けていった。その間に大草原を出ないようにまだ迷いの森の一部を場所を変えながらさまよってはいるものの、その場所は徐々にアルネリア教会のある東南へと向かっていた。

そして――

＊＊＊

「梔子よ、これを見よ」

「失礼いたします」

ここは深緑宮の一室である。日向が任務で死亡した事を桔梗から報告を受け、同時にフェンナからの最初の書簡をミリアザールが桔梗から受け取ったのである。そのうち青の封がついた書簡を開け、ミリアザールが中を確認したところだった。

書簡の中身を見て、梔子が眉をひそめる。

「これは・・・一大事ですね。シーカー達の保護ですか。いかがなさるおつもりで？」

「そうじゃのう・・・」

ミリアザールは考え込んだ。心情的には助けてやりたいともちろん思うミリアザールである。死にかけのフェンナを救ったのはミリアザールである。不思議な縁も感じる。一度助けたのだから、最初の直感通り厄介事になったことを悔いる一方で、このまま中途半端にほっぽり出すのも性に合わないと彼女は思うのだ。

また、シーカー達を受け入れる事のメリット、デメリットも考慮しなくてはならない。世間的には、ダークエルフと蔑まれるシーカー達を受け入れることで、各国の誹り(そし)は避けられないだろう。

「これにかこつけて、ミスリルの権益をよこせなどと言ってくるのだろうな」

「確か５０年ほど前にも同じような事があったのでは？」

梔子も代々仕える者として、歴代の状況は事前に聞いている。

「時はそこだけに限らんよ。何十年か周期では、同じような事が起きておる。争いごとを他の事にも拡大すれば、毎年なんか起き取るわい。今年とて、ワシの暗殺問題があったろうが？」

「ミーシアですね。ついに尻尾は掴めずじまいでしたが」

ミーシアでミリアザールを襲った連中がいた事を、二人は思いだす。誘い出すまでは簡単だったが、そこから先が全く探れない。暗夜行路の中、突然手繰るべき糸を切られたような感覚に陥り、ミリアザールはそれ以上の動きが取れなかった。

要は先のミーシアは挨拶代わりとでも言うべきもので、結果はどうでもよかったのだろう。戦いは先に攻めた方が圧倒的に有利である。攻める側はいつでも襲う時と場所を選択できるし、持久戦に持ち込むか否かも選択できる。対して受けては相手に応じるしかない。いつ襲われるか知れないともなれば、精神的にも摩耗する。敵の狙いはミリアザールを焦らし、油断を待つことだと彼女は読んでいる。

「（あるいは時期を待つか・・・じゃな）」

その時期とはいったい何なのか。ミリアザールの予想では４００周年祭だった。だからこそ、無理に今年は一年祝祭りを後にずらしたという事情もある。戦うにしろ、敵の正体、あるいはどこの国の手先の者か知っておきたいとミリアザールは考えたのだ。だが、そもそもなぜ各国の魔物討伐に協力するアルネリア教の存在を疎んじる国が多いのか。

それはミリアザールが握る莫大な既得権益による。アルネリア教会の私領はこの聖都アルネリアを中心とした、半径１００ｋｍにもならない小さなものだ。当初、アルネリア教がこれ以上の領土を所有しないと宣言したことに、各国は安堵と満足を示した。

だが、実際にはミリアザールは土地は沢山持たないものの、あちこちに飛び石のように土地を押さえており、その代表格が鉱山だった。特にミスリルやアロンダイトといった魔術装飾をできる鉱石、いわゆるレアメタルをアルネリア教会がほとんど抑えていることに、交易が盛んになって現在の経済状況が成立してから各国は気づいたのだ。さらには、沿岸部での塩の生産、果ては海運業や輸送業まで

ミリアザールの息のかかっていないものはないほどなのだ。唯一あまり権力が及ばないとすれば、傭兵などの事業を取り仕切るギルドだろうか。それにもミリアザールが一枚かんでいることには間違いないが、他よりはマシ、というくらいである。

それは当然と言えば当然だった。そもそも街道などはミリアザールが率先して切り開かせたものだし、その交通における輸送業をミリアザールが独占していたとしても何の不思議もない。輸送業の発想自体、ミリアザールが始めたのだから。各地の開墾や海運業も同様である。もちろん鉱山もだ。この大陸東側でミリアザールの息のかかっていない事業を見つける方が難しいだろう。

鉱山を早めに抑えたのは、アルネリアの活動資金の実に３０％近くを叩き出す利益と、あまりに強力な武器防具を世の中に流出させたくないという彼女の願いもある。そしてこういった事業が生み出す利益の多くは、各国で救済を求める人達の元に分配されていくのだが、その事を説明しても、各国の大使は誰も信じないだろう。ミリアザールも、今さら人間を説得する事は半ば諦めている。

ただアルネリア教会の活動状況を裏情報などで知る者や各国首脳陣は、アルネリア教会がこの大陸の既得権益の大半を抑えている事を全員が知っていた。そうでなければ、アルネリア教会の活動資金の説明がつかないのだ。だからこそ、何かにつけて各国はアルネリア教会の既得権益を掠め取ろうと、虎視眈眈と狙っているのだ。ミリアザールもそれを分かっているからこそ、逆に各国に援助を惜しまない。恩を売って、強く言えないようにしているのだ。

大抵はそういったもちつもたれつでやっていけるのだが、時に度の過ぎた行為を示す国、個人が出現する。どうやっても反発する者には、やがて口無しが差し向けられ、アルネリア教会への反乱の芽は大きく育つ前にいち早く摘み取られるのだ。

だが、今回は敵の姿すら見えない。これはミリアザールにとって

も初めての経験である。

「よっぽど敵は賢いのかもしれんな」

「はい」

普段は何かにつけてミリアザールを茶化す梔子も事の重大さを感じとったか、静かに頷くのみである。正直シーカー達を受け入れることに梔子は反対である。だが、決して彼女はその心情は口にしない。ミリアザールが腹を切れと命じられればその場で何の疑問も挟まず腹を切り、各国の要人を誘惑しろと言われれば、たとえ良人がいようがその男と寝るのが口無しの役目である。ミリアザールがシーカー達の処遇に関してどのような結論を出そうが、梔子はただ黙って任務をこなすのみだった。

そしてその梔子と桔梗を前にして、ミリアザールは悩んでいた。正直、ミランダの依頼でなかったら躊躇なく断っているだろう。たとえフェンナの頼みでも、である。シーカー達を受け入れるメリットが少なすぎるのだ。

「交換条件を出すか・・・それによっては受け入れてもよいか」

やがてミリアザールは答えを出した。その目には計算高い思惑が見て取れる。今はミランダに嫌われるわけにはいかない。いずれ嫌われることになるのは、確実だろうから。今から彼女の好感度や信頼度を下げるわけにはいかないとの判断だった。

「いかがなされますか、ミリアザール様」

「その前に、書簡はもう一つあったか」

「はい」

桔梗がもう一つ、赤いほうの書簡を出す。ミリアザールはその書

簡を広げると、すらすらと読み始めるが、その途中でミリアザールの目が驚愕に開かれた。そして、書簡を読む目にも真剣な色が出ており、彼女は内容を確認するように、書簡を二度読んだ。

「いかがされました？」

「フェンナはよほど曲者よな・・・やりよるわ」

ミリアザールはばさり、と広げた書簡を投げ捨てた。その内容に目を通す栀子と桔梗。

続く

シーカー達の苦悩、その４～交渉～（後書き）

次回投稿は５／３１（火）８：００です。

シーカー達の苦悩、その5～暗躍その4～（前書き）

ミリアザールの決断はいかに。そして聖都アルネリアに潜む闇が動き出す。

シーカー達の苦悩、その5～暗躍その4～

「・・・『もしシーカー達がアルネリア教会との交渉に応じない場合、現王族は全て抹殺したうえで、自分を救出して長老に指名する事。その代償として、シーカーの一族はアルネリア教に忠誠を誓いましょう』・・・これは、クーデターを示唆する内容ではないですか」

栖子が書簡を読んで驚いた。もしフェンナがオルバストフ達の説得に失敗した場合、フェンナはシーカー達を見捨てる覚悟でいたのだ。その代償として、一生彼女はシーカー達に恨まれることになるだろう。その非難をも一身に引き受ける覚悟で、彼女はこの書簡を書いたのだった。

その手紙を見て、ミリアザールはにやりと笑った。

「よいではないか。なかなかの気概の持ち主がシーカー達にもおる。それならば多少はあの一族も信用できようというもの。ワシにとっては収穫だよ。もちろん、最終的には事が全て終わったら自分は自決して約束はなかったことに、とでもするつもりじゃったのだろうな」

そう語るミリアザールは実に楽しそうだ。

「何かを成す時にはこのくらいの覚悟が必要だ。大戦期に比べ、最近ではどいつもこいつも腑抜けたものよと思っていたが、中々どうして」

「あるいは、そこまでせねばならないほどの危機感を、ということでしょうか？」

「梓の報告も合わせれば、そうかもしれんな。あるいは大草原の状

況が、我々が思っているよりはるかに酷いのか」

ミリアザールは窓際に歩いていき、見えるはずもない大草原の状況に思いを馳せた。かの地に魔王が大量発生している事は彼女とて既に知っており、その様子を探索させるため、口無し達を何人か既に放っていた。早ければ、数日で一次報告が届くだろう。その報告を待ちわびるミリアザールだった。

＊＊＊

そしてフェンナの助言の元、シーカー達は一路アルネリアに向かう。ミリアザールからの返事は早く、さらに思ったよりもはるかに色良い返事が来たため、書簡を書いた当のフェンナでさえ少し調子が狂ったぐらいだった。

だがその報告を聞いて訝しげな顔をしたのは、オルバストフとその息子達くらいのもので、他のシーカー達はとりあえず行き先が決まったことに安堵しているようだった。

その安直な思考と態度にフェンナは辟易したが、これから少しでも良い方向に彼らを導けるはずだと、今は納得することにした。

さらに、聖都アルネリアに向かう途中の事。カザスはアルフィリース達の元にいるニアに会うため、単身馬を飛ばして集団を離れて行った。フェンナはそうするわけにはいかないし、正直カザスがいなくなると自分が一人になるような気がしたので彼には傍にいて欲しかったのだが、同時に彼の気持ちも切に理解できるので、何も言わず笑顔で彼を送り出した。

カザスとてフェンナの寂寥感（せきりょうかん）に気付いていなかったわけではないだろうが、ニアへの思慕の情は彼が思う以上に強かった。少なくとも、フェンナの元を単身離れることができるくらいには。

カザスがシーカー達から離れて数日後。彼女達を出迎えたのは、ラファティ率いる神殿騎士団の一部隊。そこにはジェイクの姿もあったのだが、そのことに気が付く者はシーカー達の中にいようはずもない。ラファティの方針でジェイクは今回の任務に狩りだされたのだが、これがジェイクの聖騎士見習いとしての初任務だった。といっても、何かを彼が行うわけではなかったのだが、ジェイクもそれなりに緊張していたのは事実である。

やがてラファティがシーカー達を伴い、彼らはアルネリアの余った土地に彼ら専用の居住区を設け、そこに住まわせることになった。当然都市の住人には事情を説明済みであるものの、これからしばらくの間、聖都アルネリアには騒然とした日々が続くのだった。

そんな落ち着かない夜を過ごす聖都アルネリアの夜の街で、影がいくつかゆらめく。

「落ち合う場所はここかしら？」

「そのはずだ」

シーカーの男女が二人、暗闇に明りも灯さず佇む。ここは定められたシーカー達の居住区の一画。シーカー達はとりあえず設けられた居住区に案内されると、貸し出されたテントを設営してすぐにむさぼるように眠りを喰らった。逃亡に逃亡を重ねたシーカー達の体力は、とうに限界を迎えていたのである。この場所がたとえ人間の都市の中だろうと、居住区の外周を聖騎士団がぐるりと取り囲んでいようと、魔王どもに追われるよりはよほどマシな場所だった。

そして居住区全体が静寂に包まれる頃、そっとテントを抜け出す者が二人いたのだ。周囲を護衛する聖騎士団も、センサーでもって中の様子まで伺いはしない。また、センサー防止の結界くらいはシーカーとて張っている。

「それにしても、これほど早くアルネリアの中に潜入することになるとはね。途中で人間達と揉める暇すらなかった」
「思ったよりシーカー達は優秀ね。いえ、あのフェンナとかいうシーカーの力なのかもしれない」
「会議の様子を？」
「ええ、私の分身が潜入していたから」

奇妙な事に、男の口から女の声が発せられた。そう、彼らはシーカーに姿を変えた姫とマスカレイドである。シーカー達の中にまんまと忍びこむことに成功した彼らは、そのまま聖都アルネリアにまで潜入しているのだった。

「それでユーウェインとかいうのは、どのような格好をしているのかな、姫？」
「さあ？　私だって知らないわ。案外呼んだら出てくるかもね」

男が女のように手を口に当てて、ほほほ、と笑う。どうにも奇妙な光景で、いくばくかの嫌悪感をマスカレイドは覚えざるを得なかった。またその仕草だけではなく、姫ことカラミティにライフレスすら嫌悪感を露わにした理由が、何日か会話をする中でマスカレイドにはよくわかった。

確かにカラミティの声や仕草は蠱惑的だ。男の姿ですらそうなのだから、本体である美女が出てきたらさぞかし抗いがたい魅力を持つのだろうことは、女のマスカレイドでもよくわかる。だが、それでも嫌悪感の方がはるかに上回る。最初はその理由がなぜかわからなかったマスカレイドだが、それなりに顔を突き合わせるうち、今では徐々にわかるようになってきた。

カラミティの他人に対する態度は、まさに家畜に対する態度と同様だった。彼女には信頼も、生物としての情の交わし合いも存在しない。彼女にとって自分が最高、自分が全て。自分と同格たりえる

存在など、世界のどこにもいないと本気で思っている。
　さらに人が交わすべき情がないからか、喰うか喰われるか、その様な原始的な選択を常に突きつけられているような気分にさせられるのだ。もっと簡単に言えば、落ち着かないと言ってもいい。マスカレイドとて自分がまっとうな生き物だとは微塵も思っていないが、それでも隣にいる女がふとしたきっかけで自分を笑いながら殺すのだろうという事をありありと理解できるような状況を、好むはずもない。そしてもっとも嫌なのは、そのような事をカラミティが態度の節々に出しながら、マスカレイドが嫌な思いをするのを楽しんでいることがはっきりとわかることだった。そして、マスカレイドがその事に不満を漏らした瞬間、マスカレイドはカラミティに襲われて死ぬだろうということも。
　仕事とはいえ、マスカレイドは徐々に精神的に摩耗している。だが、それもまたカラミティを楽しませているのだ。まるで、柔らかいが決して切れない蜘蛛の糸で全身を締め上げられるかのような感覚にマスカレイドは陥っていた。
　そんな時、不意に背後から声がかかる。

「カラミティ殿、マスカレイド殿ですね？」

　マスカレイドは驚いて振り返ったが、カラミティは想像していたのか悠然と対応する。

「どこだ？」
「姿は見えないけど、貴方がユーウェインかしら？」
「はい。マドモアゼルよりお話を承っております」
「マドモアゼル・・・ブラディマリアね？」

　カラミティの言葉に沈黙が流れたが、それは肯定の証なのか。そして闇から不意に影が人の形に立ち上がる。最初は目を凝らしてそ

の姿を確認しようとした二人だが、どう目を暗闇に慣らそうとしても姿は見えない。ほどなくして、本当に影が立っているだけだということに、二人は気がついた。奇妙な生物だ。あるいは何らかの魔術なのか。

そのユーウェインを面白そうにカラミティが眺め、口火を切る。

「さて。無事に私達はこの都市へ潜入を果たしたのだけれども、何をしたらいいのかしら？」

「それは私もまだ何とも。ですが、サイレンスの手の者も既にアルネリアに入っております」

「サイレンスの」

カラミティが感心したように頷く。

「彼も働き者ね」

「そちらの方は既に動いているとか。当面は彼の動きをサポートする形になると思います」

「我々が人間とシーカーと争いの火種を作る話はよいのか」

マスカレイドが尋ねる。

「それも時期を待たねばならないでしょう」

「ふむ、長期戦になりそうだな」

「退屈ねぇ。まあ私の本体は別に忙しくしているからいいけど？」

カラミティがくすくすと笑う。

「一つ言っておくけど、私が乗り移れる個体にも限度があるわ。こちらにはさほど力を裂いていないし、同時に動かせるのはあと１０体くらいだと思って頂戴。それに、私が乗り移るにも相性があるの。

失敗すれば、その個体は死ぬわ。現にシーカー達も、１０人試して３人しか乗り移れなかったし」
「思ったより不便ですね」
「仕方ないでしょう？　完全無欠で制限のかからない便利な能力なんて、そうそうないのよ。もっとも私の力は汎用性も高いし、自分ではかなり気に入っているけどね」
「他人の中に虫を植え付けるのがか？」
思わずマスカレイドが吐き気を催すように聞き返す。その彼女に、マスカレイドは男の姿のまま笑顔で返した。
「ええ、中々いいものよ？　乗り移られる方もまんざらでないみたい。中には気持ちよくなって、お漏らししちゃう人もいるんだから」
「・・・もういい」
マスカレイドは心底聞き返した事を後悔した。マスカレイドから視線を外して、ユーウェインの方を見る。
「では、すぐにどうするということはないのだな？」
「はい。私はこの都市と外の出入りも比較的自由に行えるので、何かあれば連絡をいたします」
「では連絡方法を決めておこうか」
そうして三人は一通りの打ち合わせをすると、ユーウェインは再び闇に姿を消した。残されたマスカレイドとカラミティも、自分のテントに戻ろうとする。が、
「マスカレイドは、私の事を嫌いなのかしら？」
「は？」

唐突に、カラミティが問いかける。そしてマスカレイドは思わず足を止めてしまう。止めてからしまったと思ったマスカレイドだが、もう遅い。

カラミティが後ろからマスカレイドに抱きつくようにのしかかり、服の中に手を入れ、乳房を強引に掴み上げる。

続く

シーカー達の苦悩、その5～暗躍その4～（後書き）

次回投稿は6／1（水）7：00です。

剣士の邂逅、その1～遭遇～（前書き）

アルネリアで蠢く闇は想像以上におぞましい。そして、ブラックホークが山中で出会う存在とは・・・？

剣士の邂逅、その1～遭遇～

「何をする！」
「ふふふ、一緒に潜入している仲なんだから、仲良くしようと思って」
「冗談はやめろ！」

その手を振り払おうとしたマスカレイドの乳房を、カラミティはさらに強力にねじり上げた。

「つううっ！」
「ふふふ、私は大まじめよ・・・私はね、私に逆らう者が大嫌いなの」

後ろからマスカレイドに熱い吐息を吹きかけながら、カラミティの声が冷たさを増していく。

「私に逆らう者を見るとね・・・どうしても従わせたくなっちゃう。こういう物をねじ入れて、ね」

マスカレイドの頬に、ぬらり、とぬめった軟体生物のような何かが這いずる。それは鎌首をもたげると、マスカレイドの方を向いてがばりと口を開いた。その口の中には無数に歯が生えている。

「死の接吻・・・味わってみる？」
「私に手を出せば、ヒドゥン様が黙っていないぞ？」
「ふふ、あの人ねぇ・・・」

背後でカラミティが嗤う。

「あんな弱い人に何かができるとは思わないけど・・・？　私を倒すことができる者など、誰もいはしない」
「ふん、それはどうかな？」
「できないのよ。もう私は１５００年くらい生きているけど、誰も私を殺せなかった。どんな勇者でも、魔獣でも、魔王でもね」

カラミティがマスカレイドからゆっくりと離れて行く。

「もっともブラディマリアはかなり厄介な相手だったし、お互いに勢力圏がぶつからないように南の大陸では気をつけてたんだけどね。ドラグレオが出現してからは三すくみになってしまったけど」
「ならば、彼らが相手なら貴様とて・・・」

マスカレイドが服を正しながら質問する。

「うふふ。確かに厄介であるとは言ったけど、誰も戦えないとは言ってないわ。ただ私達が本気で戦うと、大陸は完全に滅びちゃうでしょうから。私達はね、とても支配欲が強いの。無人の荒野に君臨する気はさらさらないのよ」

カラミティは楽しそうに語る。

「もっともドラグレオの坊やは何も考えてないのでしょうけど。私は人間が好きなのよ。だって、彼らが悶え苦しみ、泣き叫び、呪いの言葉を吐きながら地べたを這いずりまわる様は、見ていて滑稽でしょう？」
「・・・外道め」

マスカレイドは思わず本音を口にした。既に死への恐怖は、カラ

ミティへの嫌悪で薄れていた。そんな彼女を見て、カラミティは満足そうに嗤った。

「ふふふ、私にそこまではっきり意見を言う者は珍しい。貴女は面白いから生かしておいてア・ゲ・ル。じゃあおやすみなさい」

そうして冷たい哄笑と共に闇に姿を消すカラミティ。一人暗闇に残されたマスカレイドは、背中にびっしょりと冷たい汗をかいているのだった。

＊＊＊

ここは人里離れた山中。人間の寄りつきもしない様な深い山の中、戦いの喧騒がそこかしこにこだまする。

「こいつで・・・ラストぉ！」
「ラストじゃないよ、ミレイユ！」

巨人の女剣士グレイスが叫ぶ。

「一体でも逃すとまた再生する！　逃がすな！」
「わかってるよ！」

片目に眼帯をした男が、逃げた魔物を自分の部下を連れて追う。先行する女が鎖鎌を二足歩行の魔物の足にからめ、鎌を背中に付きたてる、奇声を上げてのけぞる魔物に、眼帯の男が大剣を振り下ろした。

魔物は真っ二つになり、血飛沫を上げて絶命した。魔物の死を確認すると、額の汗をぬぐう眼帯の男。

「これで全部か？」
「やるじゃねぇか、マックス」

獣人の大男が木の間から姿を現す。両手には、同じ形の鳥のような一つ目の魔物を引き摺っている。

「ゼルドスも終わったのか」
「ああ、今は部下に周辺を捜索させている」

黒いコートを着る彼らは、ブラックホークのメンバーである。一番隊隊長マックス、四番隊隊長ゼルドス。もちろんヴァルサスが率いているのだが、彼らは魔王討伐の依頼を受け、山深くに分け入り討伐を行っていたのだった。だが今回の魔王は特殊で、群体のような性質を持っていた。一体でも取り逃すと、翌日には元の数が揃うのである。この魔王と戦うのは、ブラックホークは既に三度目だった。

「今度こそやったんだろうな？」
「ああ、もう飽きた。これ以上はやりたくねぇな」
「マックスぅ～私達そろそろお風呂入りたいよ～」

マックスの部下であるラバーズの面々が不平不満を口にする。その彼女達の頭を撫でながら宥めるマックス。

「よしよし、じゃあ町に戻ったら一緒に風呂に入るか？」
「いやーん。スケベ～」
「はっははははは！」
「・・・勝手にやってろ」

呆れたゼルドスがマックスに背を向けたその時、頭上から何かが

飛来する。腑抜けた空気が一瞬で引き締まるが、それよりも地面に降り立ち逃走を図る魔物の方が速い。

「しまった！　まだいたのか！」

「くそっ！　逃がすな！」

叫ぶよりも早くラバーズの面々が追撃態勢に入る瞬間、逃げ出そうとした魔王の首が飛んだ。魔王は自分の首が飛んだことに気がつかないのか、木にぶつかっても走る足を止めない。いわゆる脊髄反射というやつであろう。

「・・・ルイか？」

「お前達、詰めが甘いんじゃないのか？」

「まったくっす。こちとらこれで１０体目ですよ？」

ルイの後ろからレクサスが姿を現す。抜き放たれたまま刀身は、返り血に濡れていた。彼はその剣を無慈悲に地面に転げた魔王の頭に突き刺した。

「お前達、なんでここに？」

「気になることがあってな。ヴァルサスに相談に・・・」

「誰だ！」

ルイの言葉を切るように、レクサスが弾けるように突進した。木の陰に誰かの気配を感じたのだ。５ｋｍ離れての追撃を感知するレクサスだが、こんな１０ｍ程度の距離になるまで気配を感知できないとは、普通ではない。その危機感が、レクサスの警戒心をいやおうなく高めさせた。

そして姿を確認するよりも早く切りかからんとするレクサスだったが、木の陰にいた人物が長い髪をしていることに剣を振り下ろし

ながら気がついた。

「（人間の女!?）」

そしてレクサスは無理矢理剣を止めた。剣の切っ先は、女の首を刎ねる寸前で止まっていた。

「あ、危ない・・・」

レクサスが止めていた息を一斉に吐き、目線を上げる。その彼の目の前には、地面につくほどの黒髪を中ほどで赤いリボンを使い一つに束ねた女性が、無表情で立っているのだった。

続く

剣士の邂逅、その1～遭遇～（後書き）

次回投稿は6／2（木）7：00です。

もう始まっちゃいましたが、新シリーズスタートです。よろしければ評価・感想などお願いします。

剣士の邂逅、その2～剣士の語らい～（前書き）

ブラックホークの酒宴に加わるティタニア。そしてかわされる話とは・・・？

剣士の邂逅、その2～剣士の語らい～

「グレイスだけ料理が多くない！？」
「アタシは体がでかいからね。当然さ」
「あんまり食べるとお腹が出ますよ、ミレイユ？」

アマリナが自分の夕餉を食べながら、ミレイユに忠告する。そんな余裕を見せるアマリナに、ミレイユが喰ってかかる。

「アマリナ！　ちょっと自分が太らないからって」
「私はちゃんとトレーニングを欠かしませんから。ミレイユは食べた後、すぐに寝るからいけないのでしょう？」
「ぎくっ！」

図星を突かれたのか、ミレイユの目線が泳ぎ、少し腹の肉をつまむ。といっても、ほとんどつまめるほど太っているわけでもないのだが。

「そ、その～・・・」
「知らないぞ～？　その出したお腹が、三段腹になっても」
「うっさいよ、カナート！」

ミレイユの露出した腹をつつくカナートの手をぱしりと引っ叩き、機嫌を損ねたミレイユが鍋から離れて行く。からかわれてへそを曲げたミレイユが、どの席に行ってこの憂さを晴らしてやろうかときょろきょろと周辺を見渡すと、妙に盛り上がる一画があった。

「うはは！　ねえちゃん、イケる口だな！」
「いえ、私は・・・」

「まあまあ、そう言わないで！　こんな美人さんと酒飲めるなんて、そうそうないんですから。ここだけの話、うちの隊長は美人だけど怖くって」
「はあ」

マックスとレクサスに酒を勧められるまま、次々に酒を飲み干す黒髪の女性。先ほどからかなりの酒が空いているのだが、彼女は一向に酔う気配が無い。マックスやレクサスも決して酒は弱くないのだが、共に飲むうちかなり限界が近づいてきているのか、顔が既に真っ赤だった。

そして並々とご飯を食べるための丼のような椀になみなみと注がれた酒を、一口に飲み干す女性。その度にラバーズの面々が囃し立てる。

「おねえさん、つよーい！」
「ねえねえ、私と飲み比べしようよ！」
「いえ、もうそろそろ」

だが黒髪の女性が断る間にも、次の酒は注がれていく。もう注ぐ酒もなくなった頃合いだろうと思えば、既に次の酒をラバーズの面々が用意しているところだった。

「盛り上がってんねぇ」
「フン」

ミレイユが感心したその言葉に反応したのはルイ。普段滅多に話す事のない二人だが、ルイはどことなく不機嫌なことくらいミレイユにもわかる。

「ルイは混ざらないの？　お酒好きでしょ」

「ああいう酒は好かん」
「そう？」

ルイのその反応を見て、ミレイユは何か気づいたことがあるようだった。良く見れば、遠巻きにその宴会を眺めている者は意外に多い。なのに盛り上がっているのは一角だけで、他の面々は一向に酒を飲もうとすらしなかった。酒盛りは団のほとんどの連中が大好きで、ほぼ年中戦場にいる彼らにとって、楽しみと言えば酒か女だと公言する者も多い。

そして、少し妙な酒宴を見守るルイの傍にはヴァルサスがいた。ルイはヴァルサスを苦手としているので、これは珍しいことだとミレイユは思うのだ。その二人はどうにも真剣な話し合いをしているようだった。

「ルイ、ではお前はローマンズランドが？」
「ああ。一度調べる価値はあると思う」
「なるほどな。だが、あの国はお前にとっては鬼門だろう？」
「アマリナにとってもな。だが、そう言ってばかりもいられまい？」

ルイが手酌で酒を飲み干す。徳利に酒が無いのを確認すると、ルイは最後の一滴まで飲み干そうと徳利に口をつける。ルイは暗躍する黒いローブの魔術士達の事を含め話すべき事を全部話したのと、酒がなくなったことでその場を離れる。やはりヴァルサスは特別の用事が無い限り、彼の傍にいづらいのがルイの本音らしい。

そして話し相手のいなくなったヴァルサスが、マックス達の輪に向かって歩いていく。

「俺も混ぜてくれ」
「お、ヴァルサスが来たか！」
「ヴァルサスさんもスケベっすね～美人にはやはり目が無いんです

か？」

レクサスが肘で冗談交じりにヴァルサスを小突く。だがヴァルサスは気にする風もなく、ラバーズ達に自分の椀にも酒を注ぐように促した。

黒い髪の女は、興味深げにヴァルサスをしげしげと見つめる。

「ヴァルサス・・・貴方が？」

「ああ、俺がこの傭兵隊の団長をしているヴァルサスだ。よろしく頼む」

ヴァルサスは挨拶代わりに酒をなみなみと注いだ椀を差し出した。黒い髪の女性も応えるように椀を差し出す。

「女、お前の名前は？」

「ティタニアと申します」

「ふむ」

ヴァルサスが何かを思い出すように、目を細める。

「昔そのような名前の英雄がいたな。良い名前だ」

「それはどうも」

ティタニアはぺこりとお辞儀をする。黒い髪がふわりと揺れる。

「それで、こんな山奥に何の用だ？　見た所、杣（そま）でもあるまい」

「はい。人と待ち合わせを」

ティタニアは背中に大剣を二本担いでいる。誰がどう見ても剣士の恰好だ。だが、女性の細腕であのような大剣が振るえるのかどう

かは非常に疑問である。
　そのティタニアは、暗闇に溶け込む様な静かな声でヴァルサスと会話をする。隣ではしゃぐマックスとレクサスの言葉など耳に入らぬように、ヴァルサスとティタニアは会話をしていた。

「ブラックホークと言えば、大陸でも有名な一団。その団長ともなれば、さぞかし強いのでしょうね」
「それなりに自身はある。だが、その自信も揺らぐがな」
「なぜ？」

　ティタニアのその問いにヴァルサスは応えない。その代わり、彼の視線はティタニアを捉えて離さなかった。
　またティタニアもその視線を真っ向から受け止め、しばし二人は見つめ合った。が、やがてヴァルサスが沈黙に飽きたのか、質問を投げかける。

「なぜ女が剣など背負って、一人旅を？」
「確かに常識からすれば珍しいかもしれませんね。ですが、これは私が物心ついた時からずっとやってきた事なので。習慣ですね、もはや」
「ずっと？」
「はい」

　ティタニアが座ったまま剣を抜き放ちながら、２本の刀身をヴァルサスに見せる。その瞬間、騒いでいたマックスとレクサスがぴたりと止まる。ティタニアは一向に気にかけない。

「見事な剣だ」

　ヴァルサスは素直に感嘆した。それぞれ漆黒の刀と黄金の刀。ど

ちらもヴァルサスが見た事もないほど立派な剣だった。

「お褒め頂き光栄です。この剣は、それぞれ父と兄の形見」

「形見？」

「はい」

ティタニアが剣を鞘に収めながら答える。

「私は父と兄と共に旅をしていました。母の顔は知りません。父はそれなりの腕の剣士でしたが、やがて彼が倒れると私が黄金の剣を背負うようになりました。兄はかなりの腕の剣士でしたが、やはり戦いに倒れると、漆黒の剣も私が背負うようになりました。それからずっと長い間、私はこの2本の剣と共に旅をしています」

「難儀な事だな」

ヴァルサスが酒を飲み干しながら答える。ティタニアはその様子を静かな目で見つめている。かがり火に照らされるその顔は、やはり剣を振るうようには戦士には見えない。レクサスですらそう思うのだ。

椀に残った酒を行儀よく飲み干しながら、ティタニアが少し昔を懐かしむ様な目をする。

「いえ、そうでも」

「他に仲間や家族は？」

「昔はいましたが・・・今は」

「そうか、つまらん事を聞いた」

ヴァルサスはラバーズ達に、酒の酌をさせながら詫びた。今度は逆にティタニアが質問する。

「貴方は？」
「何がだ」
「いえ、御家族などはおられないのかと」
「こいつらが俺の家族だ」
ヴァルサスの答えには淀みが無い。
「俺の家族は団の人間だ。俺の故郷は戦場だ。戦場で生まれ、父も母もいない俺は、そう思うことにしている」
「疲れたりはしませんか？」
「なぜだ」
ヴァルサスはまたしても杯を空にしながらも、鋭い目でティタニアを見る。ティタニアの目は先ほどから浴びるように酒を飲んだはずなのに、澄みきっていた。
「人間であれば安らぎが欲しいと思うのは道理。常に戦いの日々では、心がすり減ってゆくのでは？」
「それが俺の場合そうでもない。そういった点では、俺は人間ではないのかもな。いや」
「？」
ヴァルサスが遠い目をした。
「あるいは寂しいのかもしれんな。だから常に剣を振るう。そう考えれば、なんと俺は情けない人間だと思うよ」
「そうですか・・・私と同類ですね」
「うん？」
ティタニアが最後に呟いた言葉は、ヴァルサスには聞き取れなか

った。その声が聞こえたのは、非常に耳のいいミレイユと、センサーであるカナートだけ。

そうしてまたマックスとレクサスは盛り上がり、ティタニアとヴァルサスは一言も口を聞かなかった。互いに聞くべきことは聞いたとでも言いたげに。

そして適当なところでヴァルサスが立ちあがる。

「ティタニアとか言ったか、もう寝た方がいい。こいつらは朝まで騒ぐだろう。付き合っていたら身が持たん。寝る時には我々と共に寝るがよい。そうすれば魔物が来ても事前に気付くだろう」

「お気遣い、いたみ入ります。それでは私も用を足した後、お言葉に甘えさせていただきましょう」

そうしてティタニアも席を立つ。そんな彼女にマックスもレクサスも気づきながらも、あえて引き留めようとはしなかった。

そしてティタニアが少し離れた所で用を足し、戻ってくる途中で自分の行く手を遮る影があることに気がつく。

続く

剣士の邂逅、その2～剣士の語らい～（後書き）

次回投稿は6／3（金）7：00です。

剣士の邂逅、その3～畏怖の対象～（前書き）

ティタニアの目の前に立った者達とは・・・？

剣士の邂逅、その3～畏怖の対象～

「何者です」
「へへへ、あんた別嬪だなぁ」
「そうそう、中々見ねぇほどの美人だ。剣なんか握らせておくのはもったいねぇ」
「そんな剣より、俺のを握っちゃくれねぇかい？」
「けっけけけ」

ティタニアの行く手を阻むように立ち塞がったのは、一人の男ではなかった。いつの間にか彼女を取り囲むように、多数の男が彼女に立ちはだかる。どれもが足の運び方から察しても素人ではない。それも当然、彼らはゲルゲダ率いる五番隊の面々だった。ブラックホークの嫌われ者達であり、汚れ仕事を一手に請け負う連中である。
そして、彼らの後ろからゆっくりと隊長であるゲルゲダが、赤髪をいじりながら姿を現す。

「くっくく。女、肝だけは座ってるな。それとも鈍いのか？」
「要件は一応予想がつきますが、念のため伺っても？」
「決まってる。今から俺達全員で、てめぇを犯す。こんなところに女が一人でのこのこ来た事を後悔するんだな」

ティタニアが周囲を見ると、その数は既に１０人を超えていた。その数を確認してもなお、まだ彼女の余裕は崩れない。
そのティタニアを前に、ゲルゲダはその残虐な本性を剥き出しにする。

「どうした、声も出ないか？」
「ある意味では。出す必要が無いといいますか」

「余裕だな、アマ！」

ゲルゲダの部下の一人が、ティタニアを突き飛ばし、その衣服を強引に引き裂く。黒いローブの下から露わになるのは、雪原のように傷のない真っ白な素肌。闇にもわかるその白さに、周囲から歓声が上がる。

「おい！　この女、見た目より豊満だぜ？」
「こいつは楽しめそうだ」
「だけどよ、反応がねぇな。捨て鉢か？」
「そいつは困るな。俺は抵抗される方が好きなんだが」
「変態がよ！」
「ケツにしか興味のねぇてめぇよりマシだ！」
「ひゃっははは」

男達はティタニアが抵抗しない様子を見ると自分達の絶対優位を確信したのか、めいめい勝手に下卑た笑いを上げる。

そしてティタニアの服を破いた男が乱暴に彼女の乳房を握るが、彼女はいたって冷静で、まるで自分の体をまさぐられていることすら気にとめてもいないようだった。その目線は、あさっての方を向いている。

「なんだ、この女。うんともすんとも言いやがらねぇ」
「不感症じゃねぇのか？」
「まさか乙女で、あまりの恐怖に声も出ないとか？」

さんざ勝手な事を言う5番隊の面々に、何の感慨もわかない顔でティタニアが宣告する。

「・・・まああまり感じない方ではありますが、別に何も感じない

わけでもありません。経験が無いわけでもありませんし。それよりも、こんなことをしていてもよいのかと」

「？」

男達がティタニアの言葉の意味をつかみ損ねた瞬間、一番後方にいた男が前の男に覆いかぶさるように倒れた。

「なんだてめ・・・」

だが振り返った男の声は、噴水のような血が顔面に浴びせられたことで遮られた。既に首のない仲間の体を突き飛ばし、剣を抜き放つ男。

「な、な、何だと！？」

「私を襲うために、防音と気配遮断の結界を張ったことが仇になりましたね」

ティタニアが悠然と答える。

「何だ？」

「隊長！」

「うろたえるんじゃねぇ！」

ゲルゲダが声を張り上げる。だが、防音と気配遮断の結界は時間が経つまでは消えない。彼らがたっぷりティタニアを嬲ろうと、かなり強めに結界を張ったことが仇になった。彼らの周囲をさらに囲む者がいるのだ。

「まさか・・・昼間の魔王がまだ？」

「運のない人達だ。この魔王さえいなければ時間もあることだし、

暇つぶしに貴方達の相手をすることもまんざらではなかったのに」

ティタニアが背中の剣を一本抜き放つ。

「本来なら誰が死のうが気にかけはしません。特に貴方達のような下衆は。死んだ方がいいとさえ、私にも思えますが・・・この団には望まぬとはいえ、一飯の恩がある。それなりに返させてもらうとしましょう」

ティタニアがゆらり、と剣を担ぐような格好で構える。すると、その体からは見るもおぞましいほどの殺気が膨れ上がる。先ほどまで悠然と酒を飲んでいた可憐な女性の姿は、既にどこにもなかった。在るのは剣鬼。少なくとも、ゲルゲダにはそう感じられた。

「しゃがむことを勧めます」

「！　全員しゃがめ！」

ゲルゲダの声に全員が反応すると同時に、彼らの頭上を一陣の風が吹いた。その中でゲルゲダだけは、しゃがみながらもティタニアの姿をじっと見ていた。見なければならないような気がしたのだ。

それは彼女が美しかったからだけではない。それ以上にゲルゲダは目がティタニアから離せなかった。ゲルゲダは特に大きな感動などしない人間だ。もちろん良い女を見れば抱きたいと思う。美しい宝石を見れば欲しいとも思う。だがそれは手に入れた瞬間にゴミへと変わる。より強い刺激、より自分を楽しませる物へと興味の対象を移していくうちに、彼の行動はいともたやすく人としての一線を越えた。

そのように飽きもせず繰り返され、激烈の一途を辿る彼の犯罪行為の中、ゲルゲダは自分に差し向けられたヴァルサスと対峙して、初めて「恐怖」を感じた。くしくも、それは彼にとって人生で感じ

た一番強い感情でもあった。以後彼はそれより強い感情を得る機会はないだろうかと、ヴァルサスに付き従っている。

だが。今ゲルゲダがティタニアへ感じる恐怖は、ヴァルサスへのそれとは比較にならない。

「（俺が・・・この俺様がっ！　指先一つ動かせないだと！？）」

ゲルゲダは、生まれて初めて恐怖のあまり震えた。なぜなら、彼はティタニアが剣を振るう時の目を見てしまったから。底なしの闇、果てのない狂気、妄執。そんな生きながらにして深淵を感じさせるだけの目を、眼前の美しい女がしたのだ。ゲルゲダは生きながらに、地獄をその体に内包する人間に出会ったのだった。

「・・・化け物め」

ゲルゲダがやっとの思いでうめくように出したその声に、剣を収めたティタニアは自嘲とも異論ともとれない表情をわずかに歪め、闇の中へと消えていった。

そして、夜が明けた後。ブラックホークの面々が見るのは、音もなくなぎ倒された一面の木と、完全に横一文字に切断された、昨日の魔王達の死体だった。

だが、その有様を見てもほとんどの団員は驚かなかった。

「ゲルゲダ、何があった？」

聞いたのはカナートだった。センサーでもある彼は、昨日の夜ゲルゲダ達が何をしようとしたのかくらいは気が付いている。一部だけセンサーが通らない場所があれば当然だ。だが、カナートはあえて何も言わない。そんなことを言ったとしても、ゲルゲダに何の効果もない事を知っているから。むしろ昨日の魔王達が彼らの結界に

侵入していくのを感じて、死んでくれさえすればいいと思っていた。

「・・・言いたくねえ」

「ゲルゲダ。てめぇが何をしようと勝手だが、俺達まで巻き込むな。そうなるんなら、俺が先にてめぇを殺すぜ？」

「チッ！」

カナートはてっきりゲルゲダが言い返してい来ると思っていたのだが、唾を吐きながらそのまま去る彼に、あてが外れて肩すかしを食った気分だった。

その倒れた木々を眺める一同に、ヴァルサスが話しかける。

「昨日は御苦労だったな、マックス、レクサス」

「・・・戦場よりも覚悟が必要だったよ」

「まったく。生きた心地がしなかったですよ」

「やはりか」

ルイがヴァルサスの代わりに答えた。その言葉にレクサスが意外そうな顔をする。

「あれ、姐さん気づいてたんですか？」

「当然だ。お前の態度がおかしかったからな。どのくらい顔を付き合わせていると思っている？」

その言葉に、レクサスは少し感激を覚える。

「姐さん・・・」

「そうだな。なんといっても、昨日は鼻の下が伸びていなかった」

その一言に、ルイに抱きつこうとしたレクサスがこけた。周囲は

４番隊を中心に大爆笑である。

「だけど、真面目な話よぅ」

こういう時に一番に茶化すマックスが、真剣な面持ちで笑いを遮った。

「昨日のあの女が暴れてたら・・・どうなったかな」

「それは俺も同感です」

レクサスがむくりと起き上がり、こちらも真剣な顔をする。

「昨日のティタニアとかいう剣士、酒を飲みながらどうやったら俺達を効率よく殺せるか、ずっとそのことばかり考えてましたよ。目を見ればわかります。あいつは異常だ。強さも、その思考も。どんな美人でも、あんな地獄を一人で連れて歩くような女、ごめんこうむります」

レクサスの言葉に、全員が黙る。普段は軽い彼の言葉も、こと戦いに関しては誰よりも真剣だということもよく全員は知っている。

「もし奴が戦おうとした場合、お前達が真っ先に止めるつもりだったんだろ？」

ゼルドスが腕を組みながら木を背にし、話した。その言葉に顔を見合わせるマックスとレクサス。

「それは・・・最初はそのつもりだったがな」

「無理だったでしょうね」

二人が同意見を出した。

「果たして何秒止められたでしょうか」

「一瞬だったかもなぁ・・・」

マックスが大きくため息をついた。その彼は少し縋(すが)るように、団長の目を見る。

「ヴァルサス、お前なら勝てるか？」

そして続けられるマックスの質問。その言葉に、ヴァルサスは天を見上げた。

「・・・どう答えれば、お前達は満足する？」

ヴァルサスがゆっくりと答えたその言葉に、全員が黙って下を向いた。ヴァルサスは、暗に「無理だ」と言ったのだ。ヴァルサスがこうまではっきりと敗北を口にするのを、団員は初めて聞いたのだ。しかも戦わずして。

そんな彼らを見て、ゼルドスとベッツがそっと会話する。

「・・・あんな化け物がこの世にいるなんてな。二度と出会いたくないもんだな」

「ああ。だが、もし出会った時は・・・」

「わかってる。命を捨てても俺達が止めないとな」

「うむ。若い者は生かしてやらないとなるまい」

「いつかの戦場で、俺達の先達がそうしたように、か」

そうして二人はゆっくりと頷き合ったのだった。

＊＊＊

その頃、夜暗いうちにヴァルサス達の元を去ったティタニアは、山頂に一本立つ一際大きいコネリトの木の下で瞑想をしていた。家屋の材木として使われるコネリトは、新芽の芽吹きを想像させるような、とても若々しく命に満ち溢れた匂いを発する。

そのティタニアの元にふわりと舞い降りる黒い影が一つ。

「お待たせしました、ティタニア」

「サイレンスですか」

ティタニアがゆっくりと目を開けると、仰々しくティタニアの前に膝まづき、淑女に対する礼を取るサイレンスがいた。

「・・・何の真似です」

「いえ、お待たせしたのでお詫びを、と思いまして」

「やめなさい、反吐がでます」

ティアニアがおっとりとした口調で厳しい事を言ってのけたので、サイレンスが驚いたような顔をした。

「これはあまりなお言葉・・・私の何が貴女のご機嫌を損ねたのです？」

「存在全てが、です」

ティタニアは澱みなく言い切った。

「サイレンス、確かに貴方は美丈夫だ。見てくれに興味のない私ですら、そう思います。ですが、貴方の内面は一番醜い。それこそ、ドゥームやアノーマリーなど比較にならないくらい」

「これはこれは。大層な嫌われようだ」

サイレンスは顔を伏せたが、それはティタニアに向ける憎しみを悟られないようにするためだった。サイレンスとて、ティタニアに喧嘩を売る程愚かではない。そのサイレンスのうつむいた意味も、ティタニアは理解していたが。

「しかし、なぜそこまで私を？」

平静を取り繕ったサイレンスが、笑顔でティタニアに質問する。

「・・・ドゥームは、ある意味では生まれた時にあのように規定された者。おそらくはアノーマリーもそうでしょう。彼らはその行動の過程において残酷な事もするが、彼らには選択の余地がなかった。だがしかし、貴方は違う」

「・・・」

「貴方には他の選択肢もあったはずだ。その中で、あえて貴方は憎悪に身を焦がすことを選んだ。進んで、望んで、貴方は人の敵たることを望んだのです。その存在に百害あって一利なし。人はそういう者を悪魔と言うのだ」

「・・・フフフ」

サイレンスが顔を歪めた。その表情に、先ほどまでの美しさはない。元が美しいだけに、彼のひきつった笑いは見る者に異常な恐怖を抱かせる。彫刻が突然こちらを振り返って笑い始めたら、きっと彼のような顔になるのだろう。

ティタニアですら、少しうすら寒いものを感じるのだ。

「驚きました・・・そこまで私の事を理解しておいでとは。私の事など、誰も知らないはずなのですがね」

「・・・私もお前のことなど知らない。ただ、そういう気がするだけだ」
「なるほど」
サイレンスは納得したように頷く。
「剣士の観察眼。そういうわけですか」
「・・・私は恐ろしい。悪魔はかくも美しきものなのかと」
「そうですねぇ。そう考えれば、私の造形が美しいのもなかなかよいアクセントになる」
サイレンスがにこりと微笑み、ティタニアはこれ以上の議論が無駄な事を感じた。仲間でさえなければ今この場で斬った方が良い事は確実だったが、そういうわけにもいかない事をティタニアは悔やむ。
「（口惜しい。こやつを切ることができぬとは。いずれこいつは誰に対しても災いをなす。おそらくは我々にも。今斬れば、後の憂いを断てるというのに）」
「さて、そろそろ行きませんか？　用事もありますから」
サイレンスがティタニアに礼をして促す。その仕草にティタニアも頷いた。既に頭の中は仕事のために切りかえられている。ティタニアがいかにサイレンスが気に食わなかろうと、そのために任務に支障をきたすような性格ではない。
「私は場所しか知らされていませんが、ナゴステラ王国のリヒトン砦でよろしいので？」
「ええ、そこで間違いないです」
「武器の強奪と聞きましたが、一体何の？」

サイレンスの質問に、ティタニアは素っ気なく答える。

「魔剣グラムロック。『竜殺しの魔剣』と呼ばれる、伝説の剣です」

続く

剣士の邂逅、その3～畏怖の対象～（後書き）

次回投稿は６／４（土）６：００です。

剣士の邂逅、その４～進撃の剣帝～（前書き）

ティタニアがブラックホークに付いて漏らす感想とは・・・？

「そういえば」
「何です？」

サイレンスが突如として口を開く。既に歩みを始めていたティタニアは、虚をつかれたように、中途半端に空中で足を止める羽目となった。
訝しむティタニアが振り返る。

「まだ何か？」
「ティタニア、なぜ貴女はブラックホークと接触を？」
「ああ」

それがどうしたとでもいわんばかりに、ティタニアがやや面倒くさそうに返事をする。

「気になるではないですか。今の時代で最強と呼ばれる者が、どのくらいの実力なのか」
「それは、貴女が最強の名を冠する剣士だからですか？」
「そう・・・ですね」

ティタニアが軽く微笑みながらサイレンスに話しかける。

「少し違うでしょうか」
「どのように？」
「私が彼に会いに行ったのは、我が一族の義務です」

ティタニアが大剣をすらりと抜き放ち、コネリトの木の前に立つ。

「義務・・・とは？」
「貴方に話す義理はないと思いますが？」
「これはつれない」

サイレンスが至極残念そうな顔をする。その表情がまたわざとらしく、ティタニアは気分を害するのだった。

「で、彼らはどうでしたか？」
「そうですね」

サイレンスの質問に、ティタニアがブラックホークの面々の顔を一つ一つ思い出す。そして、最終的に彼女がつまらなさそうに口にした言葉は。

「大したことはありませんでした」
「ほう？」

その言葉には、サイレンスも興味をそそられたようだ。

「大陸最強の傭兵団が、大したことはないと？」
「いえ、少し語弊がありますか」

ティタニアが掌を木に当てる。樹齢１０００年に及ぶその木は、ティタニアのはるか頭上までその背を伸ばしている。
ティタニアはそっと目を閉じ、集中力を高めながら語る。

「もちろん彼らは強いです。人間などという寿命の短い種族にしては、ですが。しかし彼らは既に完成されている。これ以上は強くならないでしょう。どうあがいても、私の腕の一本を奪うのが精一杯

だ」
「それは十分強いのでは？」
「団の全滅と私の腕一本では割に合わないでしょう。私は不死身ではありませんが、落ちた腕元に戻す方法くらいは知っている」
「なるほど」
「私を越えるほどの剣士は現れないのでしょうか・・・」

サイレンスが納得すると同時に、ティタニアが悲しみを口にした。その悲しみを紛らわすかのように、ティタニアは木を掌底で押す。まんべんなく木を伝う衝撃は、幹から枝へと伝わり、まだ緑の若い葉を多数宙に舞わせる。

ティタニアは木の葉舞う中に立ち、剣を正眼に構える。そしてティタニアの剣が一瞬揺れた直後、宙を舞う木の葉乱舞が一瞬止まったかと思うと、ティタニアは剣を収め再び歩き出した。何事が起きたのか理解できないサイレンスは、彼女の後を慌てて追いかける。

「今のは何を？」
「剣の鍛錬の一環です。昔、『宙を舞う葉を切ってみろ』と兄に言われ、ずっとその鍛錬を行っているのですが・・・勘が鈍っているようです」
「？」

サイレンスが何のことやらわからず振り返って木の葉を見ると、１００を超える木の葉が一斉に真っ二つになったのだった。信じられない光景に目を見張るサイレンス。

「まさか・・・これを全部斬ったと？」
「いえ、３枚ほど３回斬ってしまいました。全て真っ二つにしなければならないのですが。粗いですね、技が」
「・・・恐ろしい事を」

「そうでもありません、この手法には一応タネがあります。また、子どもの頃より９００年近く続けた日課です。このくらいはできて当然ですよ」

サイレンスもまた、こともなげに１００枚の葉を別々に斬ってみせるティタニアに恐れを抱く。そうして二人は互いにそれぞれ何ともいえず複雑な感情を抱きながら、目的地へと進むのであった。

＊＊＊

「さて、着きましたよ」
「ここですか」

転移を完了したティタニアとサイレンスの眼前に見えるのは、リヒトン砦。ここは辺境ではあるものの、常に堅固に守備兵が守っているとされる要塞である。常駐する兵士は５００以上。堀は深く塀は高く、かなり堅牢な砦だと言っても過言ではない。

塀の上には、武器を持って巡回する兵士達の姿が見える。

「どうされるのです？」

その堅固な守りに、サイレンスが難色を示す。いくらなんでも、ここを正面突破するのはかなり骨が折れるだろうと彼は想像するのだ。だが、

「当然、正面から突破します」

大かた想像通りの答えがティタニアから返ってきた。その彼女に向けてため息をつくサイレンス。

「想像通りですけどね。もうちょっと策とかはないのですか？」
「ありません。オーランベルゼからの指示は、『強奪しろ』でした。それは『派手にやれ』と同義では？」

ティタニアが背中の黄金の剣を抜き放つ。

「それにこっそりやるならヒドゥンでよいのです。私が呼ばれた意味は・・・そういうことでしょう？」
「そうだとして、あの要塞の中にどうやって入るのです？」
「城壁ごと、門を斬ります」

あまりといえばあまりの答えに、さしものサイレンスも開いた口がふさがらない。

「いや、それは・・・しかし」
「何をもごもごと言っているのです？」
「あの門を突き破るには、どのくらいの魔術を用いる必要があるとお思いで？」

城壁には大抵、対魔術処理が施してある。サイレンスが全力で魔術と使っても、城門を破ることはできないだろう。
だが、そのような疑問はティタニアには無用だった。なぜならば。

「魔術など、不要。この剣一本で、全てが足りる」
「なんですって？」
「呪印、解放」

ティタニアの右腕が光り輝く。文字は彼女の心臓から右腕に向けて出現し、右腕に螺旋を描くように走り、手首で先端が一致する。
彼女の着ている服は一見普通の服だが、特殊な加工が施された服で

ある。物理防御は並の服と同じだが、特に対魔処理能力に優れ、彼女が呪印を解放しても焼き切れないようにと配慮して作られたものだ。

その右腕に輝く呪印が、服の下から透けて見える。その様子を見て、サイレンスが驚嘆する。

「それは・・・」

「見ての通り呪印です。もっとも、私の場合アルフィリースのように封呪だけでなく、強化の意味合いもありますね。彼女の呪印に比べ、より発展したものと受け取っていただいて間違いないかと」

ティタニアが剣を腰に構え、先を地面につける。いわゆる居合いの構えだ。

「さて、呪印を使うのは久しぶりですからね。加減がわかりませんが、一発・・・いや、二発か？」

ティタニアがぴくり、と反応する。そして剣を居合いのように腰に構えるが、鞘ではなく、少し足を横に開き、腰を落として太腿を剣の支えとする。当然切っ先は大地に沈むが、これがティタニア流の居合いの構えである。

大剣を使っての居合い。まずその発想自体が普通の人間にはない。だれに教えられたわけでもなく、彼女は気の遠くなるような年月の鍛錬の中、この技術を完成させた。

「一撃必殺・・・はああ！」

ティタニアの静かな気合から、殺気と共に発せられた斬撃が衝撃波となって地面を走る。同時に、剣を振り抜きざま大上段に構えなおし、今度は剣を振り下ろした。

「せあああっ！」

先ほどの地面を走る衝撃波を、宙を飛ぶ斬撃が追いかける。抵抗のない分空中の斬撃がやや速いのか、ちょうど城壁の所で斬撃が追いつき、同時に城壁に直撃した。もちろんティタニアがそうなるように狙って放ったのである。

そして、凄まじい衝撃音と共に、厚さ数mはあろうかという城壁は、見事に打ち貫かれていた。その成果を遠目に見て剣を一振りし、鞘に収めて歩きだすティタニア。

「行きましょうか、サイレンス」

「・・・はっ」

その後に大人しく続くサイレンス。名のごとく、あまりのティタニアの斬撃に彼は言葉を失くしていた。

「（なんという女だ。城壁を剣で貫くとは）」

「む、不覚ですね」

ティタニアがぴたりと足を止める。

「どうしました？」

「いえ。一撃でなく、二撃でしたから。『二撃必殺』と言うべきでした」

そのどこか的外れなティタニアの懸念に、またしても驚かされるサイレンスである。

＊＊＊

城壁に中にティタニアが足を踏み入れる頃、城の中はパニックだった。突然城壁が粉砕され、多数の死傷者が出たのだ。何事が起こったのかと上官達は原因を追及するも、まさか女が剣で貫いたなどわかるはずもなく、見張り台から見ても周囲に見当たらない敵影に、あたふたとするばかりだった。

軍にいるセンサーに周囲を探らせようにも、当然敵兵の姿など見当たるはずもない。センサーはこちらに近づくティタニアとサイレンスの事は捕えていたのだが、上官に「敵影を探せ！　どこかに魔物か軍隊が潜んでいるはずだ！」などと血走った目で叫ばれて、こちらに歩いてくる人間2人がいるとは言いだせなかった。センサー達もまた、まさか二人でこの砦に攻め込んでくるとは思いもよらなかったのである。

兵士達は兵士達で突然の出来事に右往左往し、ある者は城壁の崩落に巻き込まれた仲間を助けようと必死になり、ある者は逃げ出し、ある者は意味もなく鎧兜に身を固め、またある者はその場で呆然として佇むだけだった。

そのような混乱した砦の状況において、崩落した城壁のせいでもうもうと土煙りが立つ中、その中に仲間を救出に向かった兵士達から叫び声が聞こえた。何事かと思った兵士達が動きを止めて土煙の方に注目すると、続いて煙が風に押されるように消し飛んでゆく。その中から悠然と姿を現したのは、当然のごとく、ティタニア。

突然の女剣士の出現に全員が息をのむも、その理由は様々だったかもしれない。出現自体に驚く者、ティタニアの美しさに目を奪われる者、剣についた血糊に気付いた者。だが、理由はどうあれ誰しもが彼女に目を奪われた事は間違いない。そして、彼女はゆっくりとだが、確かに全員に聞こえるように声を発した。そう大声を出したわけでもないのに、不思議な事である。

「この場にいる皆様方に申し上げる！」

凛とした声が響きわたる。

「私はティタニア。故あって、この砦で保管されているグラムロックを頂きに参上しました。なお、皆様方には真に遺憾ながら、今から死んでいただく。１０秒待ちましょう、各自遺言と祈りを済ませなさい」

そうするとティタニアは地面に剣を刺し、目を閉じる。その言葉に一同唖然としたが、隊長格らしき壮年の兵士がいち早く我に返り、反論する。

「ふざけろ貴様！　何の権利があって、そのような事をほざく！？」
「７・・・６・・・」
「なんとか言え！」

だがティタニアは微動だにしない。たまりかねたその男が、ティタニアに大股で歩み寄り、彼女の肩をつかむ。

「２・・・１・・・」
「何とか言え、女！」

ティタニアが剣の柄を握り直す。

「０」

その言葉と同時に、兵士達の中を衝撃が駆け抜けた。そして、彼女の半径２０ｍにいたものは、一言も発することなく上半身と下半身が泣き別れることとなる。

一時に血の海と化した門の前の広場に、生き残った兵士達の絶叫

がこだまする。武器を取る者、逃げ出す者、状況が理解できない者。それらを尻目に、ティタニアは冷静にサイレンスを呼び付けた。

「サイレンス」

「なんでしょうか？」

サイレンスがふわりと黒のローブをたなびかせながら現れる。ティタニアは彼の方を一切見ない。それは彼を疎んじているからだけではなく、既に彼女が戦闘態勢に入ったことを示していた。

ティタニアは剣で地面を刺すと、衝撃波をセンサーのように利用して砦の人間をおおよそ把握する。１ｋｍ程度なら彼女も気配を逃さないが、戦闘中では万一の事もありえる。彼女もここまでの大立ち回りをするのは久しぶりなので、万全を期したかったのだ。そのためのサイレンスでもある。

「今からこの砦の人間を全滅させます。およそ５００人というところでしょうか。逃げ出す暇すら与えないつもりですが、万一私の手を逃れる者がいたらお願いいたします」

「いいでしょう」

「では」

それだけのやりとりで、ティタニアは大股に砦の方に歩いていった。そしてサイレンスは後ろから、彼女が無人の野を行くかのごとく人を蹴散らす様子を見つめるのだった。

続く

剣士の邂逅、その４～進撃の剣帝～（後書き）

次回投稿は６／５（日）６：００です。

剣士の邂逅、その5～壊滅～（前書き）

ティタニアが攻め入る砦で起こる惨劇。

剣士の邂逅、その5～壊滅～

＊＊＊

半刻も経っていないだろうか。既に砦の中に動く物体は見つからなかった。人は縦に、横に両断され、あるいは抉(えぐ)られ、あるいは削られ、あるいは砕かれていた。

砦の守りを象徴する城壁はさらに破壊され、中にある彼らの休憩所も消し飛び、１００人は寝泊まりするであろう寝所は両断され、疲れを癒すはずの風呂は血の海と化していた。馬すらもはや生きてはいない。

逃げようとした者はいた。だが、ティタニアがそのような者を見逃すはずもなく、離れた場所からの剣撃により、全て虐殺された。もっとも彼女の手を首尾よく逃れたとしても、サイレンスが黙って見逃しはしないだろう。そう考えれば、まだティタニアの手にかかって一息に死ねる方がましなのかもしれない。

そんな中、訓練場となる場所で怯えたように地面に腰を抜かして、がたがたと震える少年のような兵士が一人。同時に、隣では同じくらいの少年兵が気絶していた。二人ともまだ息がある。だが、その目の前には大剣で二人兵士を串刺しにして宙に持ちあげているティタニアが仁王立ちしていた。

「さて、貴方達・・・といっても一人は気絶しているようですが。残りは貴方達だけですね」

ティタニアが剣に刺さっていた兵士二人をまとめて放り投げる。兵士はまるで掌程度の果実のように軽く凄まじい勢いで吹き飛び、壁に当たって砕け散った。兵士を振り払う時の血が少年兵の顔に飛び散り、彼の視界を半分塞ぐ。そのショックで、少年は思わずズボ

ンを濡らしてしまった。

「あ・・・ひ・・・」

「怖いですか？」

ティタニアは無表情に問いかける。ティタニアが殺す対象に何の感慨を抱く事もない。返り血を浴びてなお美しいティタニアの凄然とした容貌に、少年は返事もままならなかった。

「う・・・う・・・」

「ふむ、困りましたね」

ティタニアは少し首をかしげながら、剣の切っ先を少年の喉元に突きつけた。

「私は敵を全滅する時、一人だけ生かすことにしています。私の事を世に広めてもらわないといけませんからね。あらかた決着がついたら誰を残すかは相手自信に選ばせるのですが、これでは使い物にならないか？」

ティタニアが剣で少年の顎を上げ、自分の方に向ける。少年の目は完全に恐怖に濁っていた。ティタニアは半分無駄と諦めつつも、少年に問いかける。

「念のため問いましょう。生き残るとしたら、貴方ですか、それとも横で寝ている少年ですか？　どちらが生き残るか、貴方が決めなさい」

その問いに、少年の目に少し輝きが戻った。そしてほぼ本能の動きで、彼は後ろで気絶している少年を庇ったのだ。彼の前にいき、

両手を広げて彼を庇うようにする。その光景を見て、ティタニアが相好を崩した。

「なるほど。このような状況で友を守るとは、貴方は良い男です。ですから・・・」

ティタニアがふっ、と笑う。その笑顔は女神のようでもあり、

「後ろの彼を殺しましょう」

そして悪魔のようでもあった。

ティタニアの振り下ろされた剣と共に、少年の後ろで地面が抉れる。頭の後ろに何か飛び散ってきた様な感覚があったが、少年はついに振り返る事はできなかった。

そしてティタニアは剣を収め、既に仕事は済んだとばかりに背を向け去る。その姿を焦点の定まらない目で少年は追うが、背を向けたままティタニアが彼に最後の言葉を残す。

「今日の事が忘れられないなら、私の事を追ってきなさい。強くなって名前が有名になれば、私は自ずとあなたの前に現れるでしょう。私は逃げも隠れも、老いもしない。待っていますよ、少年」

「う・・・うわあぁぁあああああ!!」

その言葉を言い残した時、少年の魂を引き裂かんばかりの絶叫が後ろから聞こえたが、ティタニアは無視してその場を後にした。

そして近くの川に辿り着いたティタニアに、グラムロックを奪取したサイレンスが合流してくる。

「よかったのですか」

「何がです？」

ティタニアが剣の血糊を洗い流しながら答える。

「あの子を生かした事ですよ」

「ええ、構わないでしょう。私がそうすることはオーランゼブルも知っているはずですし、派手にやれとは言われていても、皆殺しにしろとは言われていないですから」

「ふむ。でも、彼が強くなって仇を取りに来たら？」

ティタニアの手が一瞬止まる。だが何もなかったかのように剣を磨き続けた。

「別にどうも。彼の無念と憎しみを喰らって私が強くなるだけです」

「・・・ひどい女性だ」

「さて、私はこのまま水浴びをします。さすがに返り血を浴びましたから」

ティタニアが腰紐をはずし、服をはだける。サイレンスが見ているにもかかわらず彼女は瑞々しい裸体を惜しげもなく晒すと、そのまま川へと入って行く。あまりの唐突さに、サイレンスがティタニアの裸を見る前に思わず目をそらしたほどだ。

時期的にまだ水浴びができるといえど、川の水は冷たかったが、ティタニアは気にしていないようだった。最後に彼女は髪を結わえるリボンをはずして衣服の上にそっと置くと、見事な黒髪を川に流すように洗い始めた。

「人目を気にしないのですね。一応私も男なのですが」

「御冗談を。そういう興味などないでしょう？」

「・・・どこまで気づいているのですか？」

サイレンスが顔を曇らせた。どうにもティタニアは鋭すぎることに、サイレンスは薄気味悪さを覚えたのだ。

ティタニアに取って、彼の心配などかけらほどの価値もないのだが。

「先ほども述べた通り勘ですよ。女の勘です」

「私には貴女が女には見えないのですがね」

「ほう」

その言葉にはティタニアも興味をそそられたようだった。裸体を隠しもせずにサイレンスの方を振り向く。サイレンスは一応気を使って、彼女の裸体は見ないようにしているのだが。

「サイレンス、こちらを見なさい」

だがティタニアの方から、自分の裸を見ろと促してきたのだ。サイレンスはおそるおそる、そちらを見る。なぜ恐れなければならないのか。そう感じた理由をサイレンスはすぐに理解した。

「その、体は？」

ティタニアの体は傷だらけだった。正確には、へそから下が傷だらけだった。余程古い傷なのか、傷の後がひきつれ、くぼみ、見るもおぞましい事になっていた。直りかけた傷を、何度も何度も抉られたような傷痕だった。

対照的にへそから上はこの上もなく美しい肌だった。水をはじく玉の肌。極上の布にも例えられるであろうその肌は、サイレンスをもってしても思わず手を出しそうだった。

その二者の差が異様な雰囲気を産むのか。サイレンスがふらふら

とティタニアに近づこうとした時、ティタニアの声が彼を制する。

「私は綺麗ですか？」

「う」

その言葉があまりにも禍々しく、サイレンスは思わず足を止めざるをえなかった。気がつけばティタニアの黒い瞳が、より黒い輝きを帯びていた。

その瞳の圧迫感に、サイレンスは思わず質問をしてしまう。

「その傷は？　戦いで？」

「ああ、これは」

ティタニアが自分の下腹部に手を這わせる。サイレンスも半ば予想はつきつつも、彼女の話をじっと聞いていた。その話の内容に、サイレンスはだんだんと不快な気持になる事を抑えられなかった。そして話を一通り聞き終えたサイレンスは眉を顰(ひそ)める。

「人間が愚かだとは思っていましたが・・・まさに典型ですね。そいつらは異常だ」

「そうですか。その異常の結果が私です」

ティタニアは再び川の水に体を沈め、体についた血を流している。

「ですが一番異常なのはあなたですよ、ティタニア」

「それは褒め言葉として受け取っておきましょう」

ティタニアがくすりと笑うと、彼女は川から出て呼吸を整える。そして呼吸を整え目をかっと見開くと、不思議な事に彼女についていた水はほとんどが吹き飛ぶ。そして彼女は乾いた体に悠然と服を

纏ったのだった。
ティタニアが服を着た段階で、サイレンスが再び話しかける。
「この後は？」
「一度帰還しましょう。グラムロックをアノーマリーに届けて、その頃にはブラディマリアが帰還してくるかもしれません」
「彼女はどこへ？」
サイレンスがさらに質問した。金の髪が秋風にたなびく。
「浄儀白楽のもとだと聞いています」
「東部討魔協会の？」
「ええ」
その言葉でサイレンスは悟ったようだった。
「では、東部討魔協会を味方につける交渉ですね」
「そうでしょうね。それが成功すれば私は東の大陸に渡り、鬼族を片端から殺して回ることになるでしょう」
「なるほど・・・そうすれば」
「ええ、そうすれば浄儀白楽という最高の駒を手に入れられる。討魔協会もろともに」
「ですがなぜそのような真似を？　私の手勢も準備しているのに」
だがその質問にティタニアは答えを持ち合わせてはいなかった。
「さあ。私の仕事は陰謀ではありませんから」
「ふむ、オーランゼブル様には何かお考えがあるのでしょうが」
サイレンスが口元に手をあて、何やらぶつぶつと呟き始めた。そ

の後ろからそっと忍びよる影がある。ティタニアはとうの昔に気が付いていたが、わざと言わないでおいた。サイレンスの事が心からティタニアは気に食わないのだ。

そしてサイレンスの背後から忍び寄る影が、剣を振り下ろす。

続く

剣士の邂逅、その5～壊滅～（後書き）

次回投稿は6／6（月）２４：００です。

剣士の邂逅、その６～救い無き静寂～（前書き）

ティタニアとサイレンスの会話に割って入る存在とは・・・？

剣士の邂逅、その6～救い無き静寂～

「うわあああああっ！」

影の正体は先ほどの少年だった。彼は剣だけを持ってティタニアの後を追いかけてきたのだ。鞘を持っていない所を見ると、もはや戻るつもりはあるまい。

その彼に対してぱんぱん、と拍手をするティタニア。

「見事」

「はあ・・・はあ・・・」

少年は息を切らせながらも、今度はティタニアに向けて剣を構え直す。

「さらに良い目になりましたね、少年」

「・・・」

「戦う者の気構えとはそうでなくてはならない。名乗りを上げて正々堂々一対一など、そんなおためごかしは殺し合いに不要」

ティタニアには珍しく、やや語気が強くなる。それだけ彼女が強く思っている証なのだろう。

「食事の時、排泄の時、寝ている時。いかなる状況に置いても、どのような敵に囲まれても、戦う者は勝ち続けなくてはならない。一度剣を取り戦うことを決めたからには、闘争の道から降りる事などできはしない。今世には、そのことを理解できない者が多すぎる」

「うわあっ！」

ティタニアの言葉が終わらぬうちに、少年が彼女に斬りかかる。だが、ティタニアに当てるにはあまりに稚拙な剣撃。ティタニアは少年の剣を毛先ほどの隙間でかわしていく。その中でさらに彼女は言葉を紡ぐ。

「その事がわからぬ者は、最初から剣を取るべきではない。少年、あなたはどうですか？」

「あああ！」

だが少年にそのような言葉が届くはずもなく、なおもティタニアは彼の剣を交わし続ける。そしてほどなくして少年の息が上がり、剣撃が途切れた。

「はあ・・・はあ・・・なぜ」

「なぜ？」

「なぜ戦わない！」

少年は悔しくて叫んだ。あれほど自分の友人を、上官を、同じ部隊の先輩達を切り刻んだ女が、自分にだけは剣を向けない。この女に生かされているという現実が、仇に触れる事はおろか相手にもされないという事実が、少年をより深く絶望させる。

そしてティタニアは彼の絶望を知りながらも、相手にしない。

「悔しいですか？」

「・・・」

少年は答えない。だがその表情が全てを雄弁に物語る。

「悔しいのでしょうね。だが、まだ足りない」

「なんだとっ！」

「どのみち私にあなたを殺す気はありません。それに、あなたの相手は私じゃない」
「！？」
ティタニアの言葉に、少年が怪訝な表情をする。
「次の敵に斬りかかる前に、きちんと自分が斬った相手の生死くらいは確かめるべきです」
「・・・まさか！？」
少年がくるりと振り返ると、彼は眼前の光景に凍りついた。先ほど自分が斬ったはずの金髪の男。彼が自分の首を持ち、こちらを向いて立っていた。その首からは赤い血がどくどくと流れているが、首を落としたにしては量が少ないかもしれない。そして、わきに抱える彼の生首が少年を睨んだ時、少年は腰を抜かしてしまった。
その少年の目の前で、サイレンスは自分の首をくっつけていく。
「ふう・・・この長い髪は自慢だったんですけどね」
「な、な、何者だ。貴様！」
少年は腰を抜かし後ずさりながらも剣をサイレンスに向け、必死に問いかける。サイレンスは取れた首をつけながら発声練習を繰り返し、自分の声が出る事を確認している。サイレンスの目にもまた、少年など映ってはいないのだろう。
それよりも少年に首ごと落とされた髪の方を名残惜しげに見つめている。
「やれやれ・・・どうしましょう。短い髪は嫌いなのですよ」
「油断していたのか？」
「まあそうですね。それにしてもティタニアも人が悪い。彼の事に

気が付いているのなら、一言かけてくれてもよいではないですか」
「言ったはずだ。貴様に義理はない」
ティタニアは冷たくサイレンスを突き放す。サイレンスもティタニアのことは諦めたのか、そのまま少年の方に歩み寄っていく。
「く、来るなっ！」
少年は怯えながらあとずさるが、自分の背中がやがて何かにぶつかると、彼はティタニアを背にしていたことに気がつく。下から彼女の顔を見上げて、顔面蒼白になる少年。これほど怯えた心と頭にも、ティタニアは美しく映ることが、なお彼には恐ろしかった。そうする間にもサイレンスが近づいてくるのだ。
「う、あ、あ・・・」
少年がもう駄目だと、目をつぶったその時。
「さて。用事は済んだことですし、帰りましょうか」
「ああ、長居は無用だ」
それだけ言うと、サイレンスとティタニアはその場を少し動き、少年を巻きこまないように転移魔術を起動した。目を堅く瞑っていた少年が目を開けた時、周囲には既に誰もいなかった。
少年は、その存在を路傍の石ほども気にされていないことに、その時初めて気がついたのであった。
＊＊＊
「大丈夫か！？」

少年が保護されたのは、その半日後。定時連絡のないことを不審に思った近くの小砦から、何人かの騎士が見に来たところを保護されたのだ。彼らは何があったのかを少年に問うたが、少年は心身喪失状態で、まともに話もできなかった。

そこで彼らは少年を保護し、砦の現状のみを簡潔に上官に報告した。すると、周囲一帯は蜂の巣をつついたような大騒ぎになった。白昼堂々、５００人規模の砦が全滅させられたのである。しかも地理的にこの砦は国の中ほどにあり、そのような地点に敵の侵入を許したのかと包囲網が敷かれたが、敵が捕まるはずもなく。また単独でそのような事をやったとは、誰も信じなかっただろう。

少年はとりあえず落ち着ける環境にということで、医師の指示の元、彼の出身である街の砦の個室に収容された。本来は傷病兵を寝かせる部屋でもある。どうやってそこまで移動したか彼は覚えてなかったが、街の焼き菓子屋で働く妹の暖かいスープを飲み、同世代の兵士達、正確には兵士見習い達の顔を見ると、多少落ち着いたようだった。

そして彼は、ぽつりぽつりと自分のいた砦を襲った女剣士の事を話す。最初は信じられないと思った周囲も、このような状況で少年が嘘をつくはずもないことくらいわかったし、それに彼の怯え方はどう考えても演技ではなかった。

その話を聞くと、ある者は上官に報告するために彼の部屋を離れ、ある者達は自分達で検討するためその場を後にし、部屋には彼の妹と、彼の同世代の兵士が一人。後は彼よりだいぶ年上の兵士が一人残るのみとなった。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「あ、ああ」

彼の妹はまた暖かいスープを彼に注ぐ。スープを飲むと、先ほど

まで真っ青だった彼の顔が、少しマシになっていくのだ。
少年もまた手の中のスープの暖かさに、人心地がするのだった。
だがその胸を押しつぶすのは、やはり絶望である。何もできなかった自分。相手にもされなかった自分。彼は自らの無力さを呪った。

「くそ・・・くそ！」

少年がわなわなと震えるのを見て、少年が声をかける。

「しょうがないだろ。あんな化け物相手じゃ無理だ」
「だが！」
「無理もない。彼らに抵抗できる者など、いないに等しい。特に君のような無力な少年では」
「？」

少年はその言葉に違和感を覚えた。確かに女剣士の容貌は語ったが、まだ金髪の青年の事は話していないのだ。それなのに、「彼ら」とは？
だいたい、この部屋にいる兵士達は誰なのだろう。最近までこの砦で務めていた少年は彼らの顔を見た事はあるが、そんなに親しかった記憶はない。そして、年配の兵士が扉につっかえ棒をするのを少年は見た。

「何をして・・・」
「お兄ちゃん」

と、質問をしかけた少年の前に、にこにことしながら少年の妹が立つ。後ろで手を組み、黄色のワンピースのような服に身を包む妹は、兄の贔屓目ながらも可愛いと思うのだ。妹思いの少年としては、自分の妹をしっかり育て上げ、いい所に嫁がせてやりたいと常日頃

から思っていた。昔はすぐに愚図った妹だが、少年が兵士になる頃から妹は彼を必死に支え、文句も言わず健気に働いた。今年で１３になる、少年にとって自慢の妹である。

その妹が少年の前でくったくなく笑うのだ。だが、なぜその笑いに少年は違和感を感じるのか。

「おまえ・・・」

「お兄ちゃん、悔しい？」

「当然だ！」

妹の一言に、少年は激昂した。

「あんな屈辱！　俺も殺すならまだしも、奴らは俺では何もできないとわかって見逃したんだ！　見てろ、今に強くなって奴らを倒しに・・・」

「行けないよ？」

妹が不思議そうな目で少年を見上げる。その妹に、彼は少しの苛立ちを覚えた。

「お前、自分が何を言っているかわかって・・・」

「うん。だって、お兄ちゃんはここで死ぬから」

「なんだ・・・」

ズン

少年がベッドから立ちあがりかけた時、彼の胸にはナイフが深々と刺さっていた。ナイフを握っているのは、少年の妹だった。

「な・・・ん、で・・・」

「だってお兄ちゃんの役目は終わりだよ？　十分砦の様子は話してくれたから。もう用済みなの」
「だから生きていてもしょうがない」

ズグッ

さらに背中から小刀が刺さる。刺したのは彼の隣にいた同世代くらいの少年兵だった。少年は口から血を吹きながら、彼の方を不思議そうな表情で見る。その顔には、「どうしてこんなことを？」と問いたげな表情が浮かんでいた。

「不思議そうだね。どうして自分が死ななければならないかと思っているだろう？」
「お前はサイレンス様を怒らせた」

ずぶり

今度は年配の兵士の剣が、彼の喉を正面から深々と貫いた。その衝撃に、ベッドに仰向けになって倒れる少年。喉から胸から流れ出る少年の赤い命に、彼は自分がもう助からない事を認識しつつも、それはどこか遠い出来事のように感じられた。自分が死ぬことよりも、少年はなぜ自分が妹に殺されなければならないのかと言う事を考えたのだ。だが、数秒しかない時間では、何も考えるにいたらない。そして、疑問を投げかけようにも彼の声はもう出ないのだ。
結局、彼が最後に見たのは自分を見下ろす三人の姿だった。

「あの方はね、執念深いの。お兄ちゃん」
「たかが人間があのお方を傷つけるなど、本来なら死すら生ぬるい」
「せめて絶望の中で死にゆけ」

その言葉に少年が困惑の表情を浮かべ、やがて事切れるのを確認すると、三人はそれぞれ彼から剣やナイフを引き抜き、顔を見合わせる。

「この後は？」
「私がお兄ちゃんと一緒に死にましょう。それなら、錯乱した少年が妹を道づれに自殺、ということにできるでしょう」
「ならば傷痕がばれないように、念入りに燃やさないとな」
「ああ、できればこの一画が崩れるくらいに」
「油を調達してきましょう」

そしていそいそと準備を始める三人。油を丁寧に部屋にまき、準備が整うと。

「では私はこのナイフで胸を貫きます」
「その方が話を想像しやすそうだな」
「私達は引き続きこの砦で生活する」

三人が輪唱のように言葉を紡ぐ。別々の個体から発せられる言葉なのに、発している者は一つの用に隙なく埋まる会話。

「わかりました。私はあのお方のために口をつぐみます」
「俺はあのお方のために耳を塞ごう」
「私はあのお方のために目を閉じよう」
「しかして静寂は訪れたり」

その言葉を最後に、少年の妹は躊躇なく自分の胸を深々と貫いた。
そして、少年の上に折り重なるように倒れる。
その後残された二人は丁寧に少年と妹の位置を入れ替え短刀を引き抜くと、部屋に火を放ってその場を後にした。火は盛大な勢いで

燃え広がり、他の者がその事に気がつくまでにはもはや手遅れなくらいの規模になっていた。各所に飛び火した火災は半日に渡って燃え広がり、砦の兵士の大半が包囲網で出払ったことも災いして、砦の１／４を崩す大火事となった。焼け跡からは少年とその妹らしき死体が見つかったが、倒壊した建物のせいでほとんど原形はわからなかった。

結局のところ、何がどうなっているのかを知っているのは、誰一人いなくなってしまったのである。砦にはまことしやかに黒髪の女剣士の噂と、奇妙な静寂だけが残されたのであった。

続く

剣士の邂逅、その６～救い無き静寂～（後書き）

次回投稿は６／７（火）２４：００です。

次回から新シリーズです。よろしければ評価・感想をお願いいたします。

次回シリーズタイトルは、「加護無き土地」です。

加護無き土地、その1～届かないもの～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースが踏み込むのは、大陸の東でもっとも治安の悪い土地。そんな入り口とも言える場所で、彼女は奇妙な感覚に襲われる。その感覚の正体は果たして・・・

加護無き土地、その1～届かないもの～

アルフィリース達はピレボスを後にしていた。久しぶりに平野に戻った彼女達は、これからどうするかを話しあっていた。しばらく行った所には、どうやら街があるようなのだ。

「まずは町に寄らない？」

「確かに食料も水も底をつきかけてますが・・・この周辺は安全なのですか、ミランダ？」

「微妙だね」

ミランダが腕組みして答える。

「ぱっと見だと、この周辺に争いはなさそうだ。だけど、この土地は向う１０００ｋｍ以上に渡って小国の乱立する土地だ。だけど本当に恐ろしいのは民族間、地域間の対立だね。町同士で戦争していることも珍しくない」

「町同士が？　なんで？」

アルフィリースにとって、それは常識では考えられないことだった。わざわざ街が戦争する理由もないと思うのだが。

だが長らく旅をするミランダにとっては、こんなことは日常茶飯事だった。

「いいかい、ここいの土地は長らく続いた戦いのせいで荒みきっている。それは田畑がって意味じゃなくて、人の心がってことだ。彼らはいつも何かに苛立っている、怯えている。少しでも気に入らないことがあれば、すぐに争いごとになるのさ。火のついた爆弾の傍に行くようなものだよ」

「それってミランダと大して変わらないじゃ・・・ぐえっ！」

ユーティが何かを言いかけた瞬間、ミランダが笑顔で彼女を握る。

「ユーティ？　何か言った？」

「ギブ・・・ギブ・・・ミランダは本気で力強いから・・・」

放り出されたユーティは、エメラルドの元でぴくぴくしていた。

そんな彼女は放っておいて、一行はさらに話を続ける。

「じゃあ街は避けるの？　無理すれば、１０００ｋｍくらいエアリーの馬なら一日ちょっとで突っ切れるけど」

「何の障害もなければ、だな。一度でも何かに引っ掛かれば、水も食料も足らないと我は思うぞ？」

「エアリーの言う通りですね。先を急いで途中でこけては何にもなりません。アルフィリース、リーダーの貴女がそう軽率ではいけないと思いますが、どうかしましたか？」

「うーん・・・」

リサの言葉も尤もである。こういう時に、実は一番冷静なのはたいていアルフィリースであった。アルフィリースは決断力もあるし、実際にミランダまでもが呆れるような大胆な決断をすることもあるが、集団を動かす時には基本は慎重に行動する。アルフィリースが大胆な提案をする時は、勝算が何かしらあることが多い。

なのに今回に限っては、アルフィリースの言っていることは何か無理があった。それはリサでなくとも全員が感じていたことである。

「アルフィ、どうしたのさ？　なんか今日のアンタ、変だよ？」

「うん・・・やっぱりそうよね？　どうしてかな・・・」

ミランダの質問にも、アルフィリースの歯切れは悪い。そのままずっとアルフィリースは浮かない顔をしていたが、彼女がどう考えても他のメンバーが言っていることが正しいのは、彼女にも分かっている。
だが、それとこれとは別の問題なのだ。
その時、リサがぽんと肩を叩く。

「アルフィ、心配事があるならちゃんと吐き出しなさい？　沼地のような事は二度とごめんですからね」
「うん、わかった・・・ありがとう、リサ」
「で。何なのさ、心配って。」

ミランダがアルフィリースの瞳を覗きこむ。アルフィリースはその瞳に恥ずかしそうに答えるのだ。

「うん、大したことはないんだけどね。なんだかこの土地は嫌な雰囲気がするから・・・できればすぐに抜けてしまいたいの」
「嫌な雰囲気？」

全員がそれぞれの顔を見る。こういう時のアルフィリースの勘はリサよりも敏感なので、その言葉に全員が不安そうな顔をする。そうなることがわかっていたからこそアルフィリースも黙っていたのだが、もはやそうも言っていられまい。

「だから、ここに留まるのは最低限の時間にとどめたいわ」
「それほど心配なら、何人かだけで買い出しに行くかい？」
「私が先行しましょうか？」

楓が積極的に手を上げる。最近の楓は、こういう風にちゃんと自己主張をするようになっていた。これは大した進歩だと、アルフィ

リース達は感心している。やっと楓も仲間として打ち解けた印象だ。
その楓の申し出だが、アルフィリースは首を振った。

「いえ、ここは全員で行きましょう」
「エメラルドもか？」

アルフィリースの一言に、エアリーが疑問を呈する。さすがにエメラルドを同行させるのはまずいのではないかと、誰もが思う。
彼らの意見を至極当然とアルフィリースは理解しつつも、その方がいいような気がするのだ。

「そうなんだけど・・・皆一緒の方がいい気がするわ」

その言葉に全員が納得したわけではないが、アルフィリースの言葉に全員が従うことにした。アルフィリースにしろ、その方がいい気がしただけで、確信のようなものは何もない。

「（なぜだろう・・・あの町の近くには行かない方がいい気がする）」

アルフィリースは内心でそう思いつつも、街に向かって歩みを進めるのだった。

ほどなくして一行は街の中に入る。街は寂れており、大通りのはずなのに人はまばらだった。通りの規模からするとそれなりに賑わっているはずなのだが、良く見れば通りに並ぶ看板はどれも傾いたり、はげたりして、外からでは営業しているかどうかすらわからない。

「寂（さび）れた土地だな」

「そうだね。戦場にでもなったのかもしれない」

ミランダがちらりと街を見たのは、壁を打ち壊されたように穴を開けられた建物。良く見ればきれいな建物などどこにもない。

街の名前もわからなかった。看板が街の入り口に立てかけられていたが、削れて既に読めず。ここがなんといいう土地かもわからない。街ゆく人に声をかけようにも、彼らはアルフィリースが声をかけようとすると、そそくさと逃げるのだ。

「これじゃ、どこで買い出しをすればいいのかもわかりゃしない」

「アルフィの言う通り、ここはすぐにでも離れた方がいいかもな。あまりよくない感じがする。風の精霊も声を静めてしまっている」

「アルフィ・・・」

不審がる面々の中、アルフィリースの襟を掴んだのはユーティである。ユーティは姿を見られると面倒くさいかもしれないということで、アルフィリースのローブの中に隠れている。エメラルドもまた羽を器用にたたみ、ゆったりとしたローブを着せ、病人を示す紫の紐を体に二巻きさせることで頭からかぶったローブを違和感なくすように仕向けていた。エメラルドは窮屈そうだったが、アルフィリースが絶対に顔を出すなと強く言ったので、渋々ながらもアルフィリースの言うことを素直に聞いていた。

そんな折、ユーティが不安そうな声をアルフィリースにかける。アルフィリースはユーティの存在を気取られないように、目線を前に向けたまま口を動かす。

「何？」

「アルフィの言う通りだよ、この土地は変だわ・・・精霊の声がちっとも聞こえないの」

「精霊の声が？」

アルフィリースの声が少し大きくなる。

「うん。もしかすると・・・魔術が使えないかも」

「そんな馬鹿な。そんなことあるわけ・・・」

「ありうるよ」

ユーティが彼女にしては珍しく、弱気な声を発する。

「世界にはそういう精霊が忌み嫌う土地があるって、ウィンティアがいつか言っていた。そう言う土地には近寄っちゃいけないって。何の加護も得られないと、そこの土地はいやおうなく荒むんだって。普通は魔獣も寄りつかない無人の荒野になるけど、時にそう言う土地が自然発生した場合、街や国が滅びてもおかしくないみたい」

「そんなことが・・・」

「ここがそうだと？」

リサがユーティの方を見ずに質問する。

「うん、想像だけど」

「なるほど、これはアルフィの勘はやはり侮れませんね。ところで気が付いていますか、皆」

「ええ、もちろん」

「さっきから、ずっと感じているよ」

「見られてるな・・・」

アルフィリース達は街に入って程なくして気がついた。自分達はずっと見られていると。気配を押し殺すように、街の住人が建物のそこかしこから自分達を見ているのだ。１０や２０ではきかないその視線に、何とも言えない不安を煽られるアルフィリース達だった。

続く

加護無き土地、その1～届かないもの～（後書き）

しばらく隔日連載でいこうと思います。また書きためが十分になったら、連日連載に戻します。

感想など待っています。次回投稿は６／９（木）１５：００です。

加護無き土地、その2～臆病な～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースが踏み込んだ土地では魔術が使えず・・・？

加護無き土地、その2～臆病な～

「くっそ、イライラするね！」
「ミランダ、無視ですよ？」
「わかってるけど！」

ミランダの苛立ちも無理はない。彼らはアルフィリース達を避けながら、目だけは彼女達を延々と追っているのだ。こんなのは無礼以外の何物でもない。
だからといって力づくでやめさせるわけにもいかず、アルフィリース達はねっとりと絡みつくような目線の中をただ進む。

「あれは武器屋では？」

そんな中楓が指さしたのは、看板に剣の絵が描いている建物。看板は落ちかけているが、ほぼ間違いないだろう。

「なら、雑貨屋もあるかな？」
「この辺が主だった店舗なのかもしれませんね。ここら一帯の建物を調べましょう」
「よし、ある程度手分けするか」

そうしてパーティーは何人かずつのメンバーに別れる。その中でアルフィリースはユーティとエメラルドを伴い、雑貨屋を探すことになった。

「ごめんくださーい！」

アルフィリースが店に入ると、外からでは分からなかったがそこは食事処のようだった。何人か食事をしている人がいるが、誰もかれも無言だった。不気味な店内で、店主らしき中年の女性がアルフィリースを睨むように振り返る。彼女の目つきにぞっとしないものを感じるアルフィリースだが、そこは我慢して女性に質問した。

「あの、雑貨屋さんと、水を汲める場所を御存じでしょうか？」

「・・・」

だが女性は答えない。目つきは相変わらずアルフィリースを睨んだままだった。アルフィリースは声が小さかったのだろうかと、声を強めにする。

「あの！　雑貨屋さんと・・・」

アルフィリースの言葉が終わらぬうちに、バン！　と、『閉店』の意を示す看板を、その女主人がアルフィリースに向けて突き出した。そしてくるりとアルフィリースに背を向けると、二度と会話をする気が無いのがよくわかる。

まだ他にも食事をしている客がいるにもかかわらず、このような態度に出ることにさすがのアルフィリースも腹が立ったが、ここで言い争いをしてもしょうがない。また店の客も、そのやりとりに無言だったのが一層アルフィリースには気味が悪かった。アルフィリースは仕方なくすごすごと店を出ると、腹立ち紛れに石を軽く蹴飛ばす。

「何よ、あれ？」

「ホントにね。でも何だか異常な雰囲気を感じたわ」

ユーティは腹を立てるどころか、一層不気味さを感じたようだ。

アルフィリースのローブの中で少し震えているのがよくわかる。
「でもどうしよう？　水くらいは最低確保したいけど、ユーティは水の場所がわかる？」
「ううん。それもよくわかんないよ」
「困ったな、どうしよう」
「あるふぃ」

その時、エメラルドがアルフィリースの袖を引いた。彼女が袖を引いて指さす先には、街の住人達が手にこん棒やらなにやらを持って立ちはだかっていた。少なくとも２０人近くはいる。
その様子にただ事ではない様子を感じ、アルフィリースは後ろにエメラルドを思わず隠す。

「・・・何の用かしら？」
「その後ろにいる魔物を渡してもらおうか、旅の方」

その中のリーダー格らしい、体格のがっしりした男性が声を発した。アルフィリースは最初その男が発した言葉の内容より、この町の住人が言葉を発した事自体に驚くが、気づけばとんでもないことを言われていた。

「魔物・・・ですって？」
「そうだ！」
「何を根拠に！」

アルフィリースは青ざめながらも言い返す。エメラルドがハルピュイアなどとは、誰も知るはずがないことだ。だが、アルフィリースの考えは甘かった。姿を隠しても、消せないものは沢山ある。

「こいつが教えてくれるのよ！」

村人達が連れてきたのは犬。だが、アルフィリースはその犬を見てはっとした。どれもこれも、普通の犬ではないのだ。目が３つある犬、耳が４つある犬、尾が３つに分かれている犬など、どれもこれも奇形だった。一様にそいつらに共通するのは、口を鉄製のマスクで閉じられ、声を上げられないようになっているということ。

一瞬アルフィリースは魔王の類いかと警戒するが、どうやら少し違うようだ。もしあれらが魔王なら人間の言うことなど聞くはずがないだろう。

その奇妙な犬達を、村人はさぞ自慢そうに説明するのだ。

「こいつらは魔物の肉で育てた特別製の犬だ。普通の犬よりはるかに獰猛で、魔物の肉しか胃がうけつけない。だから魔物の気配には非常に敏感なのさ。お前達がこの町に来る以前から、こいつらが檻を叩いて俺達に危険を知らせてくれたのさ」

「そんな！　私達は何もしないわ！」

「わかるもんかよ！」

アルフィリースの弁解は村人たちの怒声にかき消された。よくよく見れば、村人たちの目は恐怖に濁り、狂気を帯びいてる。既に話しができる状態ではないことくらい、アルフィリースにも一目瞭然だった。一体何が彼らにあったのか。

そんな疑問も、今は考える余裕がない。

「後ろの奴のローブを取れ！　姿を確認してやる」

「この子は病気なのよ。そんなこと言わないで！」

「知ったことか！」

病気を示す偽装も、村人達の目には入らない。ハルピュイアは魔

物ではないはずだが、果たしてその言い訳が通じるかどうか。いや、たとい怪しい場所がなかったとして、何を言っても彼らには通じないだろう。ある事情により、それほどこの町の村人は他人を信用できなくなっていた。人の良いアルフィリースには、そのような事は想像もできなかったのだ。本来なら何も言わずにこの場を脱出するのが正解であったろう。

だが不毛なやりとりを続けるうち、村人達の苛立ちはついに限界を超え始めた。

「お前も魔物か！？」

「違う！　私は人間だ！」

自分で叫んだ言葉に、人間のはずだ、とアルフィリースは思う。どうして自分だけがこのように強い魔力を持っているのかは非常に謎で、自分の両親が魔術を使えたなどという話はとんと聞いたことがない。魔術教会にアルフィリースを売ったのが実の親だと聞かされて、アルフィリースは彼らが本当に自分の両親だろうと疑うことはあったが、調べようもないことだった。

だが他に両親がいるとして、一体どこの何者なのか、想像することすらできないのも事実。アルドリュースに拾われた当初はそのような事を何度も考え、夜毎悪夢にうなされたり寝れなくなることもあったが、やがてそれらの疑問は考えても仕方のない事として、アルフィリースの胸の奥深くへとしまわれたのだ。

それが、今自分が発した言葉をきっかけに、不意にアルフィリースの根底を揺らがせる。そして、一瞬囚われた意識は、彼女に隙を作らせた。

「構わん、判断は犬にさせろ！」

「犬を放て！」

その言葉と共に一斉に犬の口枷が外され、手綱を放たれた１０頭以上の犬が猛然と駆けだした。涎を撒き散らし、普通よりもはるかに発達した犬歯を持つ異形の犬共が、目を血走らせながら走って来る。アルフィリースは一瞬恐怖を覚えるが、背中の小さなエメラルドの存在に、はっと意識を引き戻される。

慌てて剣を構えたアルフィリースは異形の犬に目がけて剣を振り下ろすが、元が誤解にも近い状態で始まった戦いである。アルフィリースの剣筋は普段より鈍かった。そのあたりが彼女の優しさでもあり、甘さでもあるのだろうが、相手が彼女の性向を考慮してくれるわけではない。

先頭の２匹程度を叩き伏せた所で、他の犬がエメラルドに突進する。だが、エメラルドも黙ってやられるようなか弱い存在ではない。

「ヤアッ！」

エメラルドはインパルスではない方の腰の剣を抜き放ち様、一頭の犬の喉笛を一閃してかき斬った。その鮮やかな剣技に、おもわず町人からも「おお」と簡単の声が上がる。エメラルドは見た目と違い、決して大人しいだけの性格ではない。またハルピュイア自体もまた大人しい種族ではない。獣人の一種とも考えられる彼らは、むしろ狩猟民族である。普通の獣人と違うのは、彼らが器用に武器を使いこなすところである。その一人であるエメラルドも、一定以上の剣技を身につけているのだ。

だが一匹を斬った程度ではまったく怯まない犬達に、アルフィリースもエメラルドも懸命に応戦するが、ついにエメラルドのローブが犬の前足にひっかかり、はぎ取られたローブからエメラルドの純白の羽が露わになる。

アルフィリースはまずいと思うが、自分に群がる犬達の相手をするので精一杯だった。

「（くそっ、さっきから魔術が全然使えない！　これが精霊の加護が無いってことなの！？）」

アルフィリースは内心の焦りを隠せなかった。普段は危険が迫っても、魔術を使えばなんとかなるという考えがあった。その甘えを後悔するアルフィリース。

そして羽の生えたエメラルドを見て、町人達は一瞬どう反応してよいものかどうか言葉を失くしていたが、誰かが「魔物だ・・・」と呟いたのをきっかけに、全員が唱和を始める。

「やはり魔物だ！」
「魔物は殺せ！」
「生かして街から出すな！」

殺気は伝染病のように町人達に蔓延し、彼らは手に持った農耕具や包丁をアルフィリース達に構えながら、さながら亡者のように群がってきた。

犬の相手で精一杯なアルフィリースは、打つ手がない。そして人間達が二人に群がり始めると犬達は引き、町人達に取り囲まれるアルフィリースとエメラルド。

「あるふぃ！」
「くっ、まずい」

ここで町人達を斬りつければ、それこそ最後の一線を越えてしまうだろうとアルフィリースは思う。傭兵として山賊討伐を何度か経験したことはあるアルフィリースだが、その折に人を斬った時もアルフィリースは手の震えが止まらなかった。傍にあの身だしなみの出来ないラインが来て手を取ってくれるまで、震えるアルフィリースは剣を握りっぱなしだった。

それからも何度か人を斬る時はあったものの、全てギルドの依頼だった。それは賞金首や犯罪者と言うことにすればまだ気持ちのやりどころもあったが、今回の相手は何の罪もない町人達である。本当に罪が無いかどうかはまた別の話だが、アルフィリースにとって彼らを手にかける選択肢はあり得なかった。

かといって素手で蹴散らせるほどの人数でもない。八方ふさがりなアルフィリースは決断をした。

「エメラルド、逃げなさい！」

「！？」

その言葉が理解できなかったのか、あるいは理解してもそうしたくなかったのか。アルフィリースの傍を離れようとしないエメラルド。

「やー！」

「馬鹿っ！　このままじゃ、貴女が殺されるわよ！」

「そうは言っても、アルフィリースはどうするの？」

見かねたユーティがアルフィリースの耳元で叫ぶ。

「私は・・・多分大丈夫。どこからどう見ても人間だし、多分殺されないわよ！」

「希望的観測もいい加減にしなさいよね！」

「でも、このままだと確実にエメラルドは殺されるわ！　だからユーティ、お願い！」

アルフィリースが、そこまで素直にユーティに頼みごとをするのは初めてかもしれなかった。ユーティは一瞬で状況を判断すると、アルフィリースのフードを飛び出してエメラルドに逃げるよう話し

かける。
突然現れたユーティの姿に町人が驚き、さらにユーティが「喰ってやろうか、こらぁ！」などと叫んだせいで、臆病な町人達は一瞬のけぞる。その隙を利用して愚図るエメラルドの頬をユーティが引っ叩き、無理矢理空に逃がす。

「アルフィ！　絶対に皆を連れて戻って来るんだから、それまで無事でいなさいよ！？」
「わかってる！」
「あるふぃ！」

最後にエメラルドの叫び声が聞こえた気がしたが、アルフィリースとて、もはや彼女にかかずらう余裕はなかった。

「さて、どうしようかしら？」

アルフィリースが剣を構え直すも、町人はいつの間にか増えており、５０人からの大の男に囲まれては、例え躊躇なく剣を振っても脱出は難しい。
アルフィリースがせめて建物を背にしようと、じりじりとあとずさると、ふいに手に絡みつく何か。

「あっ！？」

アルフィリースがその何かに気がついた時には既に遅かった。建物の中から、先に重しをつけた縄が次々と飛び出してきて、アルフィリースの体を絡め取ったのだ。建物の中にも、当然のことながら多くの町人はいるのである。

「しまった！」

そして地面に引き倒されたアルフィリースが見たのは、自分の頭目がけて振り下ろされるこん棒のようなものだった。

続く

加護無き土地、その2～臆病な～（後書き）

次回投稿は６／１１（土）１５：００です。土日は連日投稿します。

加護無き土地、その3～囚われて～（前書き）

～あらすじ～

捨て身でエメラルドを逃がしたアルフィリースの運命は・・・？

加護無き土地、その3～囚われて～

＊＊＊

「・・・・・・つ、うう・・・」

アルフィリースが目を覚ます。地面がいやにひんやりとしていて堅く、アルフィリースは寝苦しくて目が覚めた。

「ここは・・・？　いたっ！」

石畳の上で体を起こしたアルフィリースが頭に手をやると、手に血が微かに付く。

「そうか、私は頭を殴られて気を失って・・・それからどうしたんだろ？」

「女、お前は捕まったんだよ」

ふいに背後からした言葉に、アルフィリースが驚いて振り返る。野太く低い声にアルフィリースは一瞬で覚醒し、警戒する。時刻は既に夜なのか、明りのない室内で誰がいるのかはっきりとは見えない。目が暗闇に慣れても、月が翳っているせいか、一向に声の主の姿はわからなかった。

「誰？」

「そう言うときには・・・」

「自分から名乗れって？」

アルフィリースがいち早く答えたので、どうやら男らしい声の主は、鼻で笑ったようだった。

「そうだな。俺の安眠を妨害してくれたんだから、お前から名乗ってもらおう」

「私はアルフィリース、旅の傭兵よ。あなたは？」

「俺か、俺は・・・」

その時、月を遮る雲が流れたのか、明りとりの窓ともいえぬ小さな隙間から、光がさっと差し込み男の姿を照らす。その姿を見てアルフィリースは、思わず「あっ」と声を漏らしていた。男はただの男ではなかった。巨人族の男だったのだ。座った状態でも天井に頭が付きそうなほど巨大な男は、手足を凄まじく太い鎖でぐるぐる巻きにされていた。そうでもしないと、彼をここにとどめ置くことはできなかったのだろう。その様子を見て、アルフィリースはここが牢屋なのだと気がつく。

「ここは、牢屋なのね」

「そうだ。それより女、お前は巨人を見るのは初めてか？」

「いえ、初めてじゃないけど・・・話すのは初めてかも」

「そうか」

男は無口な性格なのか、それきり話そうとはしなかった。良く見れば男はそれほど若いというわけでもなさそうで、精悍な顔つきをしつつも、見た目は人間では３０少しを過ぎた辺りくらいだろうと、アルフィリースは見当をつける。瞳の色は先ほど一瞬見たときには紫の色で、これは巨人に比較的多い色だった。髪はグレー。短く切りそろえられた髪は、彼の精悍さをよりはっきりと表していた。

一通り彼の観察を終わると、アルフィリースは自身もまた手を後ろでくくられていることに気がつく。ただ彼女の場合は女だと見く

びられたのか、手と足を縄で括っただけだった。剣は取られたが、鎧は外されていない。その事にアルフィリースは安堵する。

女の一人旅で、気を失うことは死よりも恐ろしい。自分の体をどうされていてもわからないからだ。実際にまだアルフィリースが一人旅をしている頃、宿に一人で泊っていることがわかると、深夜部屋に押し入ってきた連中がいたことは一度や二度ではない。最初に押し入ってきた男達が素人同然の連中だったためアルフィリースはことなきをえたが、それからは寝ている時でも常に頭のどこかは緊張しっぱなしである。夜襲に備えてのことだ。これはアルフィリースが朝寝坊気味の性格にもかかわらず、必要に迫られて身につけた習性である。

とにかく自分の乙女がまだ無事だとわかると、アルフィリースはさっそく脱出の算段を考え始める。小手も外せないとは、町人の中には彼女の具足を外せる者がいなかったのだろう。確かにちょっと外すのにコツがいる具足ではあるが、最初にこれを師匠が揃えた時は面倒くさいものをどうして準備したのかと文句を言ったが、今では感謝している。「いつか役に立つ時が来る」と言われたのは、嘘ではなかった。

「（なるほど、外すのが面倒な具足はこの時のようなためなのね。これが外しやすい具足だったとすると、とっくに身ぐるみはがれてたわね。ありがとう、師匠）」

アルフィリースは心の中でアルドリュースに感謝しながら、小手の仕込み刃を自分の手に当たらないように出す。そして手を結んでいた縄を斬ると、足もあっさり解放し、自由の身となる。

どこか痛めていないか体の状態を確認し、アルフィリースは牢の鍵がどうなっているかを確認しにいく。その様子をじっと見ている巨人の男。

「その具足・・・特殊だな」
「ん？　そうね、確かにあまり見ない型かも」
「その具足に感謝しろ。最初、ここにお前を運んで来た男達は、お前を犯そうとしていた。具足を脱がすのに手間取るうち、外で何か騒ぎがあったようで、呼ばれて出て行きお前には構えずじまいだったようだがな」
「でしょうね」

具足を少し無理にずらそうとした跡があったからだ。そのくらいはいかにウブなアルフィリースでもわかる。
そして事もなげに平然と対応したアルフィリースに、男は興味を引かれた様だった。

「ほう・・・中々度胸があるな」
「それはどうも・・・ああ、もう！　これは私じゃ開かないわね」

アルフィリースが鍵を調べていたが、彼女に錠前破りの技術があるわけではない。諦めたように壁際まで戻り、不機嫌そうにどすんと座るアルフィリース。
その様子をしげしげと見る男。

「あー、どうしようかな？　これじゃ出れないわ」
「ふーむ。それなら力を貸そうか？」

男の申し出に、アルフィリースはくるりと顔を向ける。

「どうやって？　身動きできないでしょ、それだけ固定されたら」
「それはどうかな？」

男は意味深にニヤリとする。

「ともかく、お前がここから出たいかどうかだ」
「それはもちろん出たいけど、どうして私を誘うの？」
「ここは俺一人でも出られる。だが、出た後が見当もつかん。なぜなら、俺がこっちにくるのは始めてだからな」
「ああ、なるほど」

そういえば巨人の里はクローゼスがいたあの山のはるか向う、隔絶された北の大地にあると伝えられている。目の前の男は山を越え、こちら側に来たばかりなのだろう。きっと様子がわからないに違いない。

アルフィリースは厄介な荷物を抱えるのはごめんだったが、この男は役に立つかもしれないと考える。魔術の使えないこの土地では、巨人の男の腕力はかなり期待できる。その分この男に何か腹積もりがあれば危険でもあるが、アルフィリースは男の目を見据え、巨躯でやや粗暴な様子ながらもまっすぐな瞳を見つめる。

彼は荒っぽいかもしれないが、嘘をつくような性格ではなさそうだった。その事だけは信じていいともアルフィリースは思うのだ。

「で、どうするんだ？　俺と協力するか、それとも別々に行くのか？」
「対等な立場のつもりかもしれないけど、残念ながら有利なのはこっちよ」
「どういうことだ？」

男は目の前の女が開き直ったかと思ったが、どうやら彼女は何やら勝算があるらしい。

「私には仲間がいる。今夜中にでも助けに来るでしょう。でもあなたにはいないわ。ここを出ても、果たしてどうするのかしら？」

「なるほどな。で、俺にどうしろと？」
「私の仲間にならない？」
「・・・ほう？」

アルフィリースは目の前の巨人の男に何やら感じるものがあったようだ。唐突な誘いに、男はさらにアルフィリースに興味を持ったのだった。

続く

加護無き土地、その3～囚われて～（後書き）

次回投稿は６／１２（日）１５：００です。

加護無き土地、その４～あるいは初めての～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースが牢屋で出会ったのは巨人属の戦士で・・・？

「仲間ねぇ。具体的には？」

巨人の男は少しアルフィリースを試すような顔つきで質問する。自分を見れば大抵の人間は恐れると彼はそう思っていたのだが、目の前の女は驚くどころか自分の仲間になれと言っている。

巨人という種族は元来あまり他に興味を示さず、見た目の怖さや怪力に比べて、むしろ大人しい種族である。この男もまた巨人の習性に例外なく、彼が他人に興味を示すのは久しぶりの事だった。

「（似てる・・・な。いや、この娘の方がもっと感情豊かだな）」

男は自分が巨人の里を飛び出し、こちら側の世界へ来ることになった契機を思い出す。そんな感慨に耽る男の感情の機微など、アルフィリースには分かろうはずもない。アルフィリースは今初めて「勧誘」なるものをしているのだ。これは彼女にとって初めての経験であり、これからも多数行うであろう事柄だった。

今までは相手から同行を申し出ることが多かったのだが、通常は街頭演説なども行い、仲間を募るのが傭兵団にとって重要となる。アルフィリースも旅の中で何度か目にしたことはあったが、その時はまさか自分が将来同じ事をするようになるとは、夢にも思っていなかった。

ともかく、アルフィリースは内心の自分の興奮を悟られないようにする事で精一杯だったのだ。とても男の感情の機微にまで気が利くはずもない。

「私は傭兵団をこれから作るわ。そのためには人手が必要なの。あなたさえよければ、私の団に所属しないかしら？」

「ふむ、条件は？」
「まずは私の命令には基本従ってもらうわ。ただし、これは絶対じゃない。理不尽だと自分が考えればもちろん私に反論してもいいし、ある程度選択の自由も残すわ」
「ってことはだ。たとえばお前さんが招集を団の連中にかけたとして、俺が『嫌だ』と言ったら、それは認めてもらえるのかい？」
「状況によってはね」

　澱みなく答えられるその言葉に、男が興味をなおもそそられるのが、アルフィリースには手に取るようにわかった。ここまでは成功である。

「ほほう・・・他には？」
「また、私が招集をかけていない時は基本的に自由よ。依頼も自分でこなして生活費を稼いでもいいし、何かを探したり、余暇を使って旅をするのも自由よ。場合によっては手を貸してもいいわ。ただし、居場所はつねに私に知らせ、私が招集をかけた時には何をおいても集合する事。その事を了承できる依頼のみ、受けるようにしてほしいの」
「それだけか？」
「いえ、次が一番重要よ。仮に私、もしくは私達を裏切るような行為を取った場合・・・」

　アルフィリースの声が凄みを帯びる。巨人の男は、自分の体の毛が強制的に逆立つのを感じた。アルフィリースの表情は月が再び翳ったせいか見られないが、その目は果たして月の下でも見えたであろうか。アルフィリースの瞳が闇にあってさらに闇色を発しているのが、男にははっきりとわかる。

「その人には罰を受けてもらう。二度と私に刃向わないように、徹

底的にね」
「・・・怖いな」
「それぐらいしないと、女の団長なんてそれだけで舐められそうなのよ」

アルフィリースはひらひらと手を振って見せたが、男の言葉の意味はそれだけではなかった。男は戦士である。彼に限らず、巨人という種族はすべからくそうだ。見た目に反して大人しい彼らだが、いざ戦いとなると勇猛さは見た目通りである。戦場では引くことを知らず、敵を圧倒し、駆逐し、踏み潰す。それが巨人族の戦い方である。

その中でも一等強い戦士がこの男だった。直接戦ったことはないが、ギガノトサウルスと比較すればこの男の方が強いだろう。だがその彼をして、目の前のアルフィリースは恐ろしいと感じていた。

「（今の殺気、普通の者に放てる殺気ではない。余程修羅場をくぐったか、あるいは本当に強いのか。どちらにしても、尋常な女ではあるまい。一見そうは見えんがな・・・）」

男の目の前で腕を組んで仁王立ちするアルフィリースは、自分の内心を悟られまいとして必死で虚勢を張っているのがありありと男にはわかっていた。おそらくはこういうことに慣れていないのだろうと、男は想像をつける。良く見れば、人間にしては背は高い方だろうが、まだどこかあどけなさが抜けていない様な気もするし、なにぶん年も若いだろうし、傭兵としても経験が浅いのだろう。見どころはありそうだが、どこか頼りない。

とはいえ、そんなアルフィリースに一瞬でも男が気圧（けお）されたのも事実。男はそれも一興かと思う。

「で、どうするの？　私に協力する？」

「そうだな・・・協力してもいいが、一つ条件がある」

男はアルフィリースと問答をするのが楽しくなってきていた。自分は戦士としては経歴が長いが、傭兵などはやったこともない。北の大地を出たばかりでこのような女にめぐり合うのも、何かの運命かとも思う。

「俺は人を探しにこちら側に来た。だから、その人物の捜索を手助けしてくれることが条件の一つ」

「いいでしょう。他には？」

「その人物を見つけた後どうなるかはわからんが、俺は高い確率で北の大地に戻るだろう。その時には団を抜けさせてほしい」

「・・・なるほど、それくらいの条件ならいいわよ。それだけ？」

「ああ、それだけだ」

男は頷いた。その表情がどこか楽しそうだったのだが、その理由をアルフィリースに慮るだけの余裕はなかった。

「じゃあ契約成立ね。手始めとして、ここからの脱出に協力してもらいましょうか？」

「いいだろう。ならばさっそく・・・」

「アルフィリース殿！」

男が鎖を引きちぎるため全身に力を込めようとした瞬間、牢屋の扉を押して入ってきたのは楓だった。

「楓！　無事だったのね！？」

「もちろんです。皆も無事ですよ。アルフィリース殿の帰還を待ちわびています」

「ごめんなさいね、下手うっちゃったわ」

「仕方ないでしょう、状況が状況でしたから。ユーティからおよその事情は伺いましたので」

格子ごしに楓に差し出されたアルフィリースの手を、楓が握り返す。反射的にやったその行動に、楓がはっと顔を赤らめた。まるで年頃の娘が友人とじゃれあうような反応に、楓は気を引き締め直す。その表情に、アルフィリースもまた気を引き締める。

「楓、外の状況は？」

「街には思ったより多くの住人がいます。アルフィリース殿が攫われたのを知ってから激怒したミランダ殿とエアリアル殿が大暴れをしたため、町人達がすっかり警戒をしてしまいました。幸いこちらには被害はでていませんし、彼女達もまだ町人を殺めてはいませんが、負傷者はかなり出してしまいました。そのため町人達はかなりの人数を出して私達を探そうとしています。現在は一度撤退して街の少し外に拠点をつくり、リサ殿がセンサーで貴女の位置を探り、他のメンバーで町人を誘導しておいて、私がここに潜り込んだ、と」

「なるほど、だからあいつらは慌てて出て行ったのか」

巨人の男がうっそうと喋るのを聞いて、楓が初めて気づいたように身を固くする。リサから、「アルフィリースの隣にデカイ物がいる」とは聞かされていたが、楓は巨人を直に見るのは初めてだったので、事前に存在をある程度知りつつも驚いたのだった。

「何者！」

「お前さん達の仲間・・・ってことになるのかな？　団長さんよ」

「そう言うことよ。楓、心配しなくていいわ。彼は私の傭兵団に入ることになったから」

そういって楓の肩を叩いたアルフィリースを見上げ、楓はきょと

んとしている。しばしの空白の後、楓は気を取り戻すと、自分のすべきことを考える。

「えーっと、では・・・牢屋の鍵を探しましょうか」

「その必要はない」

男が身を起こそうとして、鎖に体を引き戻される。その鎖を鬱陶しそうに見る男。

「さて、脱出の準備はいいかい？」

「こちらはいつでも・・・あ！　脱出の前に、楓、私の剣とレメゲートを探してきてくれる？」

「承知しました！」

返事が早いか、楓は既に牢から出て行ってしまった。そしてほどなくして楓が剣を見つけて戻ってくると、男は自分の戒めを破るべく、全身に力を込める。

「さて・・・かなり派手に音がするからな。見つかるのを覚悟しろよ？」

「いいわよ。やって頂戴！」

「よしきた。ぬぅん！！」

男が全身に力を込めると、壁に固定されているはずの鎖がピキピキと音をたてる。そしてほどなくして壁の方が限界を迎え、彼は鎖ごと壁を引っこ抜いたのだった。

「見た目通りの怪力ね」

「そんなことをしなくても、鍵を使えば・・・・・」

楓がせっかくくすねてきた鍵束をじゃらじゃらと鳴らしながら、ため息をつく。

「だめよ。だって、彼の大きさじゃこの入口を通れないもの」

「・・・どうやって入ったのでしょうか？」

「それは言わないお約束。と言いたいけれど、彼を閉じ込めるためにわざわざここに鉄柵を立てたんじゃないかな？　この鉄柵、まったく錆びてないもの」

アルフィリースが鉄柵を叩きながら解説する。そうこうするうちにも、男は鉄柵に近づいてくる。牢屋の中で満足に立ち上がることもできないほど巨躯の男は、鉄柵に力を込めて一つ力を込めると、鉄柵が飴細工のように簡単に曲がってしまった。

「素晴らしいわ」

「お褒めに預かりどうも」

「さて、逃げましょう。楓、誘導をお願いね」

「はい、こちらへ」

楓が2人を促す。地下にある牢の階上からは、ざわざわと声がしてきていた。ある程度の戦闘は避けられまい。そして外に向かおうとする男に、アルフィリースは声をかける。

「そういえば名前を聞いてなかったわ」

「ダロンだ。よろしく頼むぜ、団長」

「まあ、出来る範囲で頑張るわ」

そう言うと、アルフィリースは愛らしくウィンクをしてみせるのだった。

続く

加護無き土地、その４～あるいは初めての～（後書き）

次回投稿は６／１４（火）１５：００です。

加護無き土地、その5～暴走するのは～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースが新たな仲間を増やす一方で、他の仲間達は・・・？

加護無き土地、その5～暴走するのは～

＊＊＊

「うおらあああ！」
「張り切りすぎた、ミランダ！」
「し、る、かぁあああ！」

その頃、外ではミランダとエアリアルが陽動のために大暴れをしていた。ミランダの場合はアルフィリースを攫われた事に対する憂さ晴らしも入っていたが、少なからずエアリアルも同じである。今宵のエアリアルの殺気は凄まじい。あの魔物の肉で育てられた犬も、シルフィードにまたがり髪が逆立つほどの殺気を見せるエアリアルを見ると、情けない声を上げて逃げ出す個体が多数いた。

といっても町人をむやみに傷つければ彼らも本気になるため、ミランダが狙ったのは主に建物であり、エアリアルも人は打ちすえるにとどめ犬を中心に倒して回っていた。なお魔術が使えないと戦えないラーナや、グウェンドルフ、イルマタルは街の外で待機している。

「こういう時にニアがいればな！」
「ないものねだりをしてもしょうがあるまい？」
「わかってる！」

ミランダが同意と共に、建物の支柱をメイスの一撃でへし折る。

「崩れるぞ！」

建物から走り出ながら、ミランダの一声で全員が建物から離れて

行く。めりめりと音を立てながら、建物が大きな音を立てて崩れ落ちた。

「これで13軒目か」
「よし、次だ！」
「いえ、その必要はありません。アルフィリースの救出は済んだようです」

エアリアルの背中にいるリサが、センサーで感知したことを告げる。

「アルフィは無事なのか！」
「ええ、どうやら走れる程度には」
「では打ち合わせ通りか、リサ？」
「はい。アルフィリース達と合流後、東に向けて脱出です」
「よしきた！」

ミランダが液体を自分達の後方に向けてばらまき、近く町人が落とした松明を投げ入れると、炎が凄まじい勢いで上がる。特殊な燃料の一種である。それで町人を遠ざけ、自分達は脱出しようという寸法だ。

「くそ！」
「水を持って来い！」
「南だ、南から回り込め！」

町人達も彼女達を逃すまいと、必死の形相で叫ぶ様子が炎に照らし出されていた。

＊＊＊

「アルフィ！」
「ミランダ！」

ほどなくして合流するアルフィリース達とミランダ。ミランダは思わず会うなりアルフィリースを力いっぱい抱きしめたので、あまりの怪力にアルフィリースの体が軋む。

「ぎゃあああ。痛い、痛いってばミランダ！」
「あ、つい」
「つい、じゃないわよ！」

アルフィリースが涙目で訴える。その後ろから、リサの倍近い大男がのっそりと現れたことに気が付き、ミランダは思わず「きゃあ！」などと可愛らしい悲鳴をあげてしまう。

「敵か！？」
「大丈夫よ、エアリー。彼は私の傭兵団に入ってくれるんだって」
「なんと！？」
「アタシがいないところで、何やってんだアルフィは」

転んでもただでは起きないアルフィリースに、少し呆れるミランダ。その彼女を見て、多少意地の悪いような、得意げなような顔をするダロン。

「と、いうことだ。俺の名前はダロンだ、よろしく頼む。ところで、この傭兵団は女子供だけか？」

ダロンがミランダ達を見ながら、少し不安そうな顔をする。

「今のところはね。でも、彼女達はそんじょそこらの男より、かなり強いわよ」
「ほう、それは楽しみだ」
「それより早く行きませんか。ここも包囲されつつあります。屋根の上にも伏せ勢がいるようです。すぐここを離れましょう」
「わかったわ」

リサの警告にアルフィリースがその場を離れようとした時、頭上から聞こえる声がある。

「あるふぃー！」
「エメラルド！」

エメラルドが反泣きになりながら、アルフィリースに猛突進してきた。その勢いに、思わず地面に引き倒されるアルフィリース。

「ちょっと！　エメラルド？」
「あるふぃ、ユーノ、オーラート？」
「え？　う、うん。大丈夫」

アルフィリースは四六時中エメラルドがまとわりついてくるので、なんとなくその言葉の意味は理解しつつあった。エメラルドも同様に、アルフィリース達の言葉を覚えつつある。片言なら、「オハヨウ」「オヤスミ」くらいなら言えるのだ。
だが、今はそんなことを言っている場合ではない。

「エメラルド、私は大丈夫だから、少し離れて！」
「ヤー！」
「エメラルドってば！？」

エメラルドはぽろぽろと涙をこぼし、アルフィリースを見つめている。自分のせいでアルフィリースが大変な事になったと、余程思いつめていたらしい。それに、エメラルドにはまだ細かい戦闘などの打ち合わせはできていないし、彼女が場をわきまえずこのような行動に出たとしても無理はない。

だがそうこうしてもたつくうち、町人達はよい機会だとばかりに、四方の屋根に上った連中から矢が射かけられる。

「上です！」

リサの叫びと同時に、矢が何本も飛んでくる。既に状況を想定してアルフィリースとエメラルドを中心に円陣を組んでいた彼女達は必死に応戦するが、彼女達の意識の合間をすり抜けるように、その内の一本がエメラルドめがけて飛んでくる。

「危ないっ！」
「あるふぃ！？」

アルフィリースは、エメラルドと体の位置を入れ替えるように彼女を庇う。そして矢はアルフィリースの肩に命中した。

「うっ！」
「アルフィ！？」
「ヤー！！！！」

エメラルドの悲痛な叫びが街に響いた。傷はそれほど重症でもなかったが、エメラルドにはそこまでの判断は一瞬ではできなかった。ただ彼女の目には、アルフィリースが自分を庇って傷ついたという事実と、アルフィリースの肩から流れる血だけが目に入っていた。そしてアルフィリースの肩から流れる血のように、エメラルドの思

考も怒りで真っ赤に染まる。

「アルフィ、無事？」

「なんとか。そこまで深くないと思う」

ユーティが飛んでかけつけてくるも、エメラルドの体から立ち上る電撃に弾き飛ばされる。

「きゃあっ！」

「ユーティ！？」

「ユーノ・・・あるふぃ、インジャー・・・ユーノ、イレース！」

次の瞬間、エメラルドが怒りに任せてインパルスを引き抜く。それは、彼女が族長から決してしてはいけないと言われた事。精霊剣の所有者は、誰よりも精神的に強くなくてはいけない。精神が弱ければ精霊剣に思考を占領され、我欲が強すぎれば精霊剣を汚染する。誰よりも精霊剣の怖さを教えられ、族長の言葉を大切に守ってきたエメラルドだったが、アルフィリースを目の前で傷つけられ、彼女は長老の言葉も思考の彼方に消え去っていた。

その時、抜き放たれたインパルスが周囲に迸る雷撃と共に、その形状を変えていく。

「きゃああ！」

「なんだあれは！？」

「いいから離れろ！」

アルフィリース達が離れようとするも、呆然としたエメラルドはインパルスを手放せない。

「い、いんぱるす？」

「エメラルド！　こっちに来なさい！！」

アルフィリースの声に反応したが、剣がどうやっても手から離れないようだ。その時アルフィリースは止めるミランダの手を振り払うようにエメラルドに駆け寄り、手にレメゲートを握っていた。どうしてそのような行動を取ったかは、後になってもアルフィリースは説明できなかった。

そしてまた、アルフィリースはレメゲートを鞘から抜こうとしなかった。これは抜くものではないと直感したのだ。

「（叩き・・・つけるっ！）」

鞘ごとインパルスにレメゲートを叩きつけようとした瞬間、レメゲートが『変形』としか言いようのない形態変化を起こす。

鞘が液体のように、ぐにゃり、と歪んだかと思うと薄く長く伸びたのだ。通常の剣の大きさから、長刀にも近い形へと変形する。

「セイッ！」

アルフィリースは無我夢中でレメゲートをインパルスに叩きつける。するとエメラルドはインパルスから弾き飛ばされ、地面に叩きつけられる。

「きゃんっ！」

「エメラルド！」

アルフィリースは慌ててエメラルドの方にかけつけるが、その後方ではインパルスにさらなる変化が起きようとしていた。

＊＊＊

「グウェンドルフ様」
「なんだい、ラーナ」
「何をしておいでで？」

街の外、アルフィリースを首尾よく救出できれば逃げてくる予定の場所で、ラーナ、グウェンドルフ、イルマタルの三人、いや一人と二頭は仲間を待っていた。既に時刻は夜半を回っていたので、幼いイルマタルはすやすやと寝ている。

その傍らで、グウェンドルフはなにやら魔術を行使しているようだった。地面に自分を中心に円を描き、手のひらサイズの石を不規則に並べ、魔術を使用している。魔法陣がうっすらと光っているので、何やら魔術を使っているなとわかる程度のものだった。

グウェンドルフは瞑想をするように目を閉じたまま、ラーナに返答する。

「これはね、精霊の声を聞きやすくするための魔法陣さ。かなり簡素ではあるけどね」
「精霊の声を？」
「そうだよ。どうにもこの土地の様子は変でね。この土地の過去を精霊に聞いてみようとしているんだ。私に精霊の声が聞こえないなど、普通はあり得ないんだが・・・」

グウェンドルフは口調とは裏腹に、かなり集中しているようだった。額にはうっすらと汗が滲んでいる。

「（おかしいな・・・いかに久しぶり、かつその辺の石を使った簡素な魔術とはいえ、全く精霊の声が聞こえないとは？　こんな事はどれほど寂れた土地でもなかった。たとえ戦争で土地が荒もうとも、それなら闇の歓声や土の悲鳴が聞こえるはずだ。なのに何もないと

は・・・これが１０００年ほど前にマイアが言っていたことか？もっと彼女の話をよく聞いておけばよかったな・・・む？）」

グウェンドルフが魔術の効力をかなり広範囲にまで広げると、ようやくひっかかった精霊がいる。どうやらそれらから話が聞けそうだった。

「なるほど・・・なるほど、そういうことか」

「グウェンドルフ様、何かおわかりに？」

ラーナはフェアトゥーセに育てられた身の上であり、真竜を崇拝する立場に近い。だからいまだにグウェンドルフには「様」をつけてしまう。もっとも、他の仲間が彼に遠慮しなさすぎるのかもしれないが。

「ああ、実に不幸としかいいようがないことがわかったよ、ラーナ。あの土地は・・・」

そうしてグウェンドルフは、ラーナに自分が得た情報を話すのだった。

続く

加護無き土地、その5～暴走するのは～（後書き）

次回投稿は、６／１６（木）１５：００です。

加護無き土地、その6～雷鳴の怒りに～（前書き）

～あらすじ～

グウェンドルフが冷静に語る頃、町ではインパルスが暴走して・・・？

＊＊＊

「では、あの土地が荒んだのは人間のせいだと？」
「かいつまんで言えば、そういうことになるね」

グウェンドルフの話を聞き終えた後、ラーナの第一声はそうだった。ラーナはフェアトゥーセの元で、この世界の構成について一定以上の知識を授かっているが、その彼女の頭脳を持ってしても理解しがたい話であったのだ。彼女が目をぱちくりとさせながら、グウェンドルフを不思議な物でも見るような目をするのも無理はない。

「そんなにおかしいかい、私の話は？」
「あ、すみません・・・」

指摘されたラーナが顔を赤らめ狼狽する。

「ですが、精霊がいない土地では、人間の意志が最も強く作用力場としてするなどとは」
「まだそういった説があるというだけの話だよ。私は信憑性の高い説だと思うけどね」

グウェンドルフが近くの精霊から聞きだした話はこうである。
ここガーシュロンの紛争地帯において、比較的北西のはずれにあるユートレティヒトと呼ばれたこの街は、紛争地帯にあっても比較的平穏な土地だった。街としてローマンズランドなどと交易をするようなことこそなかったが、地理的に戦場になりにくく、せいぜい徴兵などで男が多少狩りだされるくらいだった。ユートレティヒト

の人々は、元々が犬を使った狩りを得意とする集団で、ピレボス近くの森に入っては獲物を捕まえるのが彼らの習慣だったらしい。あの異形の犬も、まだその時はごくごく普通だったそうだ。

事情が変わったのは、およそ２０年ほど前の事。街として農業を盛んに行っていたわけではないが、狩猟で賄えきれない食物はもちろん栽培している。それらの食物が急に育たなくなったのだ。食べる物がなくては生きていけず、彼らは不足分を補うため狩猟の範囲を拡大していった。

すると、当然今まで生じなかった軋轢（あつれき）が生じる。それは他の街の者であったり、あるいは自然そのものであったり、また魔物であることもあった。そしてある日、見たこともない魔物を多大な犠牲を払いながらも倒し、その肉を誤って口にした犬が、猛烈に苦しんだあげく現在のような変形をした。その姿に街の者は最初こそ怯えたが、犬が命令に逆らうわけではなく、むしろより有能に魔物を追い詰めることから、彼らはいつしかその異形の変化を受け入れるようになってしまった。

そして時は流れる。変形した犬を得てより積極的に狩りをするようになった彼らは、他の街との争いを回避しようという意識が薄くなっていった。そして彼らの増長は、やがて本格的な戦争へと発展する。彼らは魔物を追い詰める犬を使うことで自分達は狩猟民族として優秀だと完全に思い込んでいたが、それらはあくまで知恵の低い魔物や魔獣を相手取ってのこと。人間相手の戦争では、戦いの方法自体が違うことに、彼らは敗北するまで気づかなかった。あっけなく、実にあっけなくユートレティヒトの街は敗北したのである。

それからである。誇りを折られた彼らは、全てに希望を見出せなくなった。相変わらず街に作物は育たず、街に見切りをつけて出て行く者も多かった。戦死者も合わせ、人口はわずか１０年で１／３にまで減少した。そして、ここぞとばかりに今まで狩りの対象としていた魔獣や魔物の襲撃をユートレティヒトは頻繁に受けるように

なった。今までは彼らが定期的に狩りを行うことで魔物や魔獣の数は一定以下に保たれていたのだが、ユートレティヒトの住人が狩りを積極的に行わなくなったせいで、周辺は魔物や魔獣の巣窟と化していたのだ。アルフィリース達がこの街に入るまで何の被害にも会わなかったのは、魔物達がグウェンドルフを警戒したのと、リサができる限り魔物の多そうな道順を避けたおかげなのと、いくばくかの運だった。

そしてユートレティヒトの住人は、今では魔物や魔獣の襲撃に必要以上に怯え、町に籠って暮らす日々なのである。治安は乱れに乱れ、なのに不思議な連帯感はある。それはこの町にうっかりと訪れた誰かを襲い、彼らを骨の髄までしゃぶりつくすまで吸い取らないと、生きていくだけの資源が得られないのではないかという強迫めいた感情だった。要は、この町そのものが大きな罠のようなものなのである。

事情を知る者達は、決してユートレティヒトに近づかない。そして今ではユートレティヒトはこう呼ばれる。『蟻地獄の町』、と。

そういった理由で彼らは魔物の襲撃に異常に怯え、執拗に追及するのである。もっとも、たとえエメラルドが魔物でないとされた所で、アルフィリース達は同じ目に遭っていたであろう。この町は、そういう場所なのだ。

そしてこの話を聞いて、グウェンドルフはかつて自分の親友でもある天空竜マイアが言っていたことを思い出した。

「（グウェン・・・この大地には誰の加護も得られない土地があるの。そして、それは偶発的に出現するの。私はいつも空から大地を眺めているからよくわかるの。そういう土地には生命は寄りつかないけど、段々その場所が増えていっているみたい。まるで大地が虫に食べられているみたいに。私達が生きている間にどうこうするような速度ではないかもしれないけど、どうにも嫌な感じがするわ）」

天空竜と呼ばれ、常に空を住処として地上を見下ろす彼女ならではの意見であった。グウェンドルフはこう述べると真竜として文句を言われそうなので誰にも言っていないが、彼は空を飛ぶのがあまり好きではない。それよりも、地上で羽を休め、自然の香りや鳥のさえずりに囲まれる方が余程心地良かった。

「（だけどマイア、これはそうも言っていられないのかな？　今まで私が棚に上げていた問題が、ここにきて一気にのしかかってくる思いだよ）」

グウェンドルフはラーナを前に、一人唸っていた。そんなグウェンドルフを覗きこむように、ラーナが質問する。

「あの、グウェンドルフ様」
「ん、ああ。考え込んでしまったね。なんだい？」
「その、私には人間が土地にそこまでの影響を及ぼすという考えがわからないのですが、一体どういった理由でしょうか？」
「うむ。これは最初に言い出したのは私ではなくて、別の真竜なのだが」

グウェンドルフはさらに語る。
彼の仲間がかつて、人間を非常に面白い生物だと言ったことがある。

――人間は未知数の生き物だ――

と。空も飛べず、寿命も短く、生き物として病程度で呆気なく死ぬ種族を指して何が面白いのかと他の真竜は笑ったが、彼だけは強固に主張した。

――彼らは何の属性も持たぬ。ゆえに全ての属性を持つこともできる。そして彼らの意志の力は我々よりもさらに強大かもしれない。なぜなら、１００年も生きぬ彼らが、未練一つで悪霊となってこの世に永遠に留まりもする。魔術の補助も無しにだぞ？　これが一体いかほど凄まじい出来事か。俺は人についてもっと知りたい――

そう主張した真竜は仲間と袂を分かち、遥か昔に人間として人間の世界に降りて行った。

「（そう、彼の名前は『翼を捨てし者、ノーティス』。当時は彼が何を言っているかはわからなかったが、今ならわかる。マイアは彼の話をよく覚えていて、今回の説を思いついたのだったな）」

その説を、グウェンドルフはラーナに語って聞かせようと思うのだ。

「いいかい、ラーナ。この大地というものは、非常に色々な生物が集まってできている」
「はい。それは存じ挙げております」
「その中で、一番大きいのは何だい？」
「それは、もちろんこの大地そのものでしょう」
「その通りだ」

グウェンドルフが頷く。

「だから大地にもっとも影響を及ぼすのは大地自身。言いかえれば、精霊などの類いだね。でも、２番目に大きなのは何かわかるかい？」
「いえ・・・真竜でしょうか？」
「私も、昔はそう思っていた。むしろ、ほぼ全ての真竜がそう思っ

ているだろうね」

グウェンドルフは子どもに諭すような優しい目でラーナを見つめている。

「ところが、それは人間だと言った真竜がいたんだよ」

「えっ！？」

「そう、まさかと誰もが思ったさ。私でさえそうだ。だが、そう考え得ると色々今回の事は納得がいくのだよ」

グウェンドルフはそこで一つ間をおいた。

「まずはじめに。この仮定が正しいとすれば、精霊のいないこの土地で、人間の思考が土地に影響を与えることになる。すると、この土地で現在渦巻いている感情はなんだと思う？」

「・・・諦め、怯え、絶望といったところでしょうか？」

「そうだね、さすがフェアトゥーセに育てられた者だ。およそその通りだろう、よく察している」

グウェンドルフに褒められて、ラーナが頬を朱に染める。

「人間の感情というものは不思議なもので、自分では制御できないほど強いことがあるだろう？」

「はい、それは確かに」

ラーナは自分がアルフィリースに向ける感情を思い出す。なぜ自分がそこまでアルフィリースに魅かれるのか、ラーナは自分でも説明ができない。ただ、彼女に魅かれるのだ。その感情がたとえ世間的には邪なものであるとされても、自分ではどうしようもなかった。またアルフィリースがそういった自分の感情を知りつつも、差別す

るわけでもなくいつもどおりに接してくれるからこそ、ラーナはなおさら狂おしい。

「そして人間の感情とは、負の連鎖を抱くと自分では断ちきれなかったりするんだ。自分一人ならまだしも、複数の人間同時にそのような思いを抱くと、特にね。負や闇といった要素は、人を惹きつけて止まないから」

「それもわかります。私は闇魔術の使い手ですから」

「その辺は君も実感があるだろうね。闇魔術を扱うものは、並の魔術師よりはるかに精神的に強くないといけない。それはさておき、この町は先ほど言ったように、負の連鎖が止まない状態なんだ。だから、本来関係のないはずの住人までおかしくなってきている」

「どうすればいいのですか？」

ラーナは真剣な面持ちで質問した。どうにかできるならやってみたいというのが、ラーナの心境である。彼女もまた、普段はとても心優しい性格である。闇魔術を扱う上で、ここまで心優しい者は珍しい。それだけラーナの精神力が強靭な事を示していた。

だが、グウェンドルフの返事は彼女の期待通りにはいかなかった。

「・・・わからない」

「そんな！」

「いや、済まないと思うんだが、本当にわからないんだ。魔術を使うのはどうかと思うし、この負の連鎖を断ち切る程の出来事を、どうやって起こせばいいのか・・・」

「グウェン～」

その時、眠い目をこすりながらイルマタルが起きてきた。イルマタルは不思議な事に、今ではグウェンドルフを自分の父親だとは認識していなかった。面倒見のいいお兄ちゃん、といった態度で接し

てくる。そのイルマタルが、グウェンドルフの白のローブの裾を引く。

「あれ、なに？」

「え？」

イルマタルが指さした方向をグウェンドルフとラーナが見ると、そこには街に佇む巨大な輝く女性が立っていたのだった。

「あれは・・・なんですか？」

「いかん！　インパルスの暴走だ！」

グウェンドルフは翼を出して、飛び立つ準備を整える。その彼の腕を慌てて掴んで、ラーナが事情を聞く。

「暴走とは？」

「精霊剣は上位精霊などの存在を封じ込めて作ったもの。彼らは我を残したり残さなかったりだが、使用者の強い感情に反応してしまうことがある。あれは、インパルスがエメラルドの何らかの感情に反応したのだろう」

「穏やかでは・・・なさそうですね」

ラーナが見た時、家の３倍以上はありそうな巨大な女性が手を差し伸べて、家々を雷で砕くところだった。手から放出される雷鳴で、あっという間に１０軒以上の家が砕け散る。

「どうすれば止まるのですか？」

「わからない！　だがアレは危険だ。放っておけば、自分の力を使い果たすまで暴れ回る！」

「そんな！」

「とにかく私はアルフィリース達を保護しに行く！　ああなっては、もう元には戻るまい。イルマタルを頼んだぞ、ラーナ！」
「承知いたしました！」
それだけ言い残すと、グウェンドルフは風を巻いてアルフィリース達の元に全速力で向かっていった。
続く

加護無き土地、その6～雷鳴の怒りに～（後書き）

次回投稿は、６／１８（土）１５：００です。

加護無き土地、その7～天から授かりしは～（前書き）

～あらすじ～

暴走したインパルスを止めるのは果たして・・・？

加護無き土地、その7～天から授かりしは～

＊＊＊

一方、当の暴走したインパルスの足元にいるアルフィリース達は、凄まじい雷鳴の奔流に見舞われていた。暴走したインパルスから放たれる雷鳴は、雨のように降り注ぎ、逃げ回るだけで精一杯である。

「きゃあああ！」
「あぶっ、あぶ、危ない！」
「こ、これは・・・」
「３６計、逃げるが勝ちです！」

リサが逃走を促すが、インパルスが掌から放出した雷ではるか彼方まで家屋が倒壊したのを見ると、リサは思わずへたり込んでしまった。先に逃げ出したこの町の住人達が、何人か建物の倒壊に巻き込まれるのが見える。

「な、なるほど。逃げるのも危険なのですか。それは新しいですね」
「んなこと言ってる場合か！？」
「アルフィ、どうする？」

エアリアルがやや青ざめた目でアルフィリースを見るが、アルフィリースとてどうなるものでもない。アルフィリースは魔術が使えず、元素が枯渇しているこの土地では、呪印を解放しても同じこと。また打撃を加えようにも、雷の化身に剣を突き立てても自分が感電するだけだ。

アルフィリースにも結論が出ぬまま、エメラルドが何やら走りだそうとするのを、ユーティが捕まえて叫ぶ。

「ちょっと、エメラルド！　どこ行くの！？」
「エメラルド、スィン！」
「何、歌うって！？」

エメラルドが歌うと言ったので、ユーティは逆に何事かと呆気にとられた。これはユーティも知らなかった事だが、ハルピュイアはセイレーンなどと同じく歌声で人を幻惑するという。バンシーなども歌うが、彼女達の歌はほとんどが呪い歌といわれるように、言葉そのものが呪文となるのに対して、ハルピュイアは純粋に歌声の美しさで人を引き付ける。セイレーンはといえば、ハルピュイアとバンシーの中間といったところである。

インパルスがハルピュイアの元に預けられているのは決して偶然ではない。それなりの意味があってのことだ。インパルスが精霊だった頃、彼女は仲の良いハルピュイアの歌声が好きだった。その時の縁で、インパルスは戦いに使用されることが無い限り、ハルピュイアの里で眠りに付きたいと申し出たのだった。

エメラルドは、もしかすると自分の歌声でインパルスを止める事ができはしないかと思ったのだ。またインパルスの所有者として、彼女を暴走させた責任もある。走るエメラルドがそのまま空中に飛び出し、インパルスの前に立ちはだかる。

「いんぱるす！」

エメラルドが叫んで、インパルスの注意を引く。そのエメラルドに向けて、インパルスは雷でできた手を伸ばすのだ。

「エメラルド！」

地上からアルフィリース達が叫ぶ。インパルスの手がエメラルド

に届くかと思われた、その瞬間。

インパルスを含む、周囲の人間が全て静止した。アルフィリース達だけでなく、ユートレティヒトの町人達も同じだった。

町一体にエメラルドの美声が響き渡る。天上までも届きそうな澄んだ彼女の声は、火事が巻き起こる街の殺伐とした空気すら治めさせるようだった。インパルスの手がピタリと止まり、アルフィリース達は呆然とエメラルドの姿を見上げている。エメラルドの姿は、外見と合わさってまるで本物の天使のようだった。町人達すら、武器を落としてその場で涙する者までいたのだ。

芸術は人の心を動かす。エメラルドの歌声は、天が贈りし極上の旋律だった。と、その場にグウェンドルフがかけつけてくる。

「これは・・・ハルピュイアの歌か」

「綺麗・・・」

「リサの心は、今猛烈に感動しています」

「あれ、涙が・・・」

ユーティまでもが目を潤ませ、グウェンドルフも心奪われる中、一番冷静だったのはアルフィリース。

「なるほど、天使の歌声とはよく言ったものです。今なら」

「え？」

その呟きを聞きとったのは、グウェンドルフだけだったかもしれない。他のメンバーは全員がエメラルドの美声に聞き惚れ、アルフィリースがインパルスに近づくのすら気がつかなかった。

「アルフィリース、何を！？」

グウェンドルフがアルフィリースに向けて叫んだので、ミランダ達もはっと我に返る。

「アルフィ？」

「危ない！」

そして事もあろうに、アルフィリースは手をインパルスの方に無造作に伸ばそうとしているのだ。そんなことをすれば感電死しかねない。

ミランダとエアリアルがアルフィリースに走り寄るも、アルフィリースの手が早い。そしてアルフィリースは躊躇なくインパルスへと潜って行った。

「あああっ！」

ミランダの悲鳴もむなしく、アルフィリースの姿は完全にインパルスの中に消えてしまった。そしてアルフィリースはといえば、そんなミランダ達は気にも留めず、インパルスの中心となるべき部分を探していた。不思議な事に、彼女には一切痺れた様子が無い。

「（あれだわ）」

アルフィリースはインパルスがまだ明確な意識を持った上位精霊だった頃の、剣の核たる部分を探しあてる。そしてその部分に触れると、インパルスにだけ聞こえるように語りかけていた。

「（インパルス・・・私の声が聞こえるかしら？）」

「（誰・・・？　ボクを呼ぶのは・・・）」

「（私の名前はどうでもいいの・・・それより、こんなことをするのが貴女の望みだったかしら？）」

「（？？）」
「（さあ、思いだして・・・貴女がなぜ精霊剣になったのかを・・・）」
「（ボク――ボクは・・・）」

長き眠りについていたインパルスに、明確な自我が蘇る。長らく振るわれることなく、ただハルピュイアの里に奉じ続けられることで霧散していった意識。いつしか彼女は上位精霊として明確な意識ある存在としては扱われなくなり、必要のなくなった自我は眠りについていた。だが、今その意識をエメラルドとアルフィリースに強く揺さぶられたことで、彼女の自我が目覚めたのだ。

「そうだ、ボクは・・・ボクの友達のために、剣になったんだ」
「思いだしたかしら？」
「うん、ありがとう！　でもどうして君が・・・」
「ふふふ、それはね・・・は・・・霊を・・・だから・・・」

インパルスの意識の目の前にいる女性。周囲一帯が雷鳴に包まれるせいか、彼女の髪が黄金に輝いて見える。最後に何かを言った女性の声は雷鳴の音に消され、インパルスには聞こえなかった。だがそれも一瞬の事。明確な意識を取り戻したインパルスの意識は、すぐに形を成し、彼女が上位精霊だった頃の姿に立ち戻らせる。その違和感に、思わずインパルスは悲鳴を上げた。

「うわあっ！」

並の家の3倍はあったであろう彼女の背はみるみる縮み、インパルスの姿が明確な人型を取る頃には、久しぶりの大地を踏み締める感覚に思わず彼女はよろめく。

「とっとと」

よたよたするインパルスの姿は少女だった。年の頃はリサと同じくらい。ミランダよりもさらに輝く金のショートヘアが波打ち、目鼻立ちの整った、一件では女性とはわからない見た目だった。背丈が背丈だけに、ちょっと男装すればそのまま美少年で通るだろう。

何が起こったのかわからずその場に立ちつくす全員に自己紹介しようとインパルスが向き直ろうとした時、目の前にいたアルフィリースの体がぐらりと揺れる。

「え？」

「あ、危ない！」

アルフィリースはインパルスの方にのしかかるように倒れてきた。小柄なインパルスでは支えきれず、そのまま押し倒される格好になる。

「むぎゅう～」

「ああ、またあのパターンだ！」

「いかん、アルフィリースの胸の被害者がまた！」

「チクショウ、いつかリサだって・・・」

めいめい勝手な事を言いながら、ぐーぐーといびきをかくアルフィリースの下で窒息しかけるインパルスを助けにいくミランダ達だった。

続く

加護無き土地、その7～天から授かりしは～（後書き）

次回投稿は、６／１９（日）１５：００です。

加護無き土地、その8～それぞれが迎える者は～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースはインパルスを無事元に戻したが、その様子を見守る者が一人・・・

加護無き土地、その8～それぞれが迎える者は～

＊＊＊

「ふう～、まさかの死に方をするところだったよ」
「眠っているこの子に代わってお詫びするわ」
「いや、いいんだよ。むしろ救ってもらったのはボクの方だ」

ミランダがアルフィリースに代わり、インパルスに頭を下げている。なぜこのような状況になったかを説明すれば。

倒れたアルフィリースの下からインパルスを救出した後、とりあえず場所を移した方がよさそうだということになり、ラーナの所までいち早く脱出した一行なのであった。
加入したダロンがさっそく活躍し、気絶しているアルフィリースを軽々と担ぐと、馬とほぼ同速で走って付いてきた。その芸当にエアリアルが驚いたのも無理はなく、ダロンの歩幅が大きいせいもあるが、それ以上に巨人の体力は凄まじい。巨人達は不眠不休に近い状態でも、3日程度なら戦い続ける事も可能なのだ。大きな体は伊達ではない。
そして横たわってアルフィリースの様態をラーナとミランダが見ようとしたが、高いびきをかいて寝ているアルフィリースに呆れはて、目を覚ましたらどんな無理難題を言っていじめてやろうかとミランダは考えている。そしてリサはなぜか、アルフィリースの胸を見つめながら、

「アレはもはや凶器ですね・・・くっ！」

などと恨みの言葉を呟いていた。どうやらリサなりのコンプレックスがあるらしい。ともあれ窮地を脱したことにほっと一安心した面々は、ダロンの自己紹介なども含めてアルフィリースが起きるまで各々好き勝手に語り合っているが、インパルスはその中にあってアルフィリースをじっと見つめている。

「（おかしいな・・・さっきまで髪が金だったと思ったんだけど。うーん？）」

インパルスの目の前に横たわるアルフィリースは、どこからどう見ても黒の長髪である。訝しむインパルスに、グウェンドルフが話しかける。

「久しぶりだね、インパルス」
「あっ、貴方様は真竜グウェンドルフ！？」

グウェンドルフの正体に気がついたインパルスが居住いを正す。彼の存在に気がつかないなどインパルスにとっては一大事だが、自我が久しぶりに目覚めて間もない事以上に、アルフィリースの事に気を取られていたのだ。

「これは失礼いたしました！　ご挨拶もせず・・・」
「いいんだよ。君が精霊剣になる時に立ち会って以来かな？」
「そうですね。あれからいかほどの時間が経ったのでしょうか？」
「およそ１２００年かな」
「１２００年・・・」

インパルスがしみじみとその年数を噛みしめるように目を閉じる。

「長い時が経ちました。今、この世界はどのように？」

「それは追い追い話そう。それよりも、君は新しいマスターに挨拶があるだろう？」
「そうでした」
諭されて気がついたように、インパルスがエメラルドに向き直る。
「改めましてご挨拶申し上げます。ボクの名前は精霊剣インパルス。これからもお見知りおきを、我が主（マイマスター）」
「いんぱるす？　ますたー？？」
エメラルドはどうやら事情が良く飲み込めていないらしい。ユーティがその事を一生懸命彼女に説明すると、エメラルドは不思議そうな顔をしながらも、なんとか納得したようだった。その複雑な表情を見て、インパルスは自分の親友であったハルピュイアを思い出す。
「（似てるなぁ、これも巡り合わせなのかな。あの子も楽天家で、どこかぼーっとした子だった。でも、一番早く戦う決心をしたのもあの子で、そのためにボクは精霊剣になって・・・そもそも彼女がいなかったらボクは顕現すらしていないわけだし・・・）」
インパルスが世界に誕生した時から、精霊剣になった契機を思い出す。その時、アルフィリースが目を覚ました。
「あれ・・・おはよう、皆」
「おはようじゃないよ、このバカたれ！」
「そうだ、また無茶をして！」
「このうしちち！」
「リサ、最後のは関係ないでしょ！？」

起きぬけから元気な事に、口論を始めるアルフィリース達。口論に興じる面々と、傍で呆れる面々をよそに、そろそろ空はゆっくりと白み始めていた。

＊＊＊

「さてと、行きましょうか」
「ああ、長居は無用だね」
「ボクも同行してもいいのかな？」
「もちろんよ！」

アルフィリースがにっこりとして、インパルスの頭を撫でる。精霊が人間にお伺いをたてるなど普通はありえなく、本当は逆の立場なのだが、インパルスはそのようなことにこだわる性格ではないし、不思議と嫌な気持ちもしなった。

「（変な人間だな）」

それがインパルスのアルフィリースに対する偽らざる感想である。そして、背後のユートレティヒトをアルフィリースが振り返って少し悲しそうな顔をする。

「あの町・・・大丈夫かしら？」
「君が気に病む必要はないさ。やったのはボクだ」
「ノー！　エメラルド！」
「はは、それでもやったのはボクだよ。エメラルドは優しいね」

インパルスがエメラルドを宥める。それでもアルフィリースは納得ができない表情だった。

「でも・・・」
「アルフィ、アタシから一言いいかい？」
ミランダがアルフィリースの傍に来て話しかける。
「シスターのセリフじゃないかもしれないけどね、全ての人間を救うのは無理さ。多くを救おうと手を広げれば広げるほど隙間は大きくなり、隙間を埋めようとすれば、今度は手が小さくなる。これはジレンマだよ」
「わかってるわ。でも、私はそんなに簡単に諦めたくないの」
「そうかい。でも、その思いは大切だと思う。その思いをずっと忘れなければ、あるいは・・・」
ミランダはそこで言葉を切った。アルフィリースが目指す道は、ミリアザールが進んでいる道に近い。だが、ミランダは決してミリアザールが幸せだとはどうしても思えなかった。
「（マスターには悪いけど、アルフィリースを貴女のようにはしたくないね、アタシは・・・）」
だが、そういったミランダの気持ちが今のアルフィリースに伝わるわけではない。そして彼女達は次なる地へと歩みを進める。まだまだガーシュロンの紛争地帯は長く、彼女達の眼前に横たわっている。
＊＊＊
一方で、ユートレティヒトの街では、復興が始まっていた。インパルスが暴れ、エメラルドの歌で何か住人も思うところがあったのか。最初は呆然。そして次に悲嘆と喘ぎ。だが、それでも状況が好

転しない事を人々は悟ると、のろのろではあるが後片付けをし始めた。

片づける物は山ほどあるが、町人の動作は非常に緩慢で、既にやる気を失くしているようだった。さながらその様子は死人の行進のようでもある。だが、その中にも明らかに目に光を取り戻している者もいた。既に崩れそうな家屋は取り壊し、泊る場所のない者は分散して他の者の家に一時的に避難した。インパルスの暴走、エメラルドの歌は、この町に何らかの変化をもたらしたようでもある。それがどういう結果となるかは、また別の問題として。

そして、その町を遠くから眺める者が一人。

「ライフレス様」

「・・・エルリッチか・・・」

ライフレスはぎりぎりだが、まだ魔術の影響が及ぶ土地にいた。使い魔はユートレティヒトでは使うことができないため、魔術が行使できるぎりぎりの場所から遠目に町の様子を見ているのだった。そして、詳しい町の様子はエルリッチが見ていたのである。

「・・・何があった、あの町で・・・」

「どうやら精霊剣が暴走した様です」

「・・・雷鳴が見えたが、なるほど、インパルスか・・・あれは俺が生きている時代でも伝説だった剣だ・・・まさか直に目にかかる日が来ようとはな・・・」

「はい」

恭しくエルリッチは頭を垂れている。ライフレスは遠くにいるであろうアルフィリース達の姿を思い浮かべて顔をしかめる。

「（アルフィリースの元には着々と力が集まりつつある。これで本

当にいいのか、オーランゼブルよ・・・）」

ライフレスは前回無許可でアルフィリースを殺そうとした罰として、オーランゼブルからアルフィリースの監視を命ぜられていた。必要があれば手を貸せとも言われている。

だがこのような魔術の影響が及ばない土地に彼女達が踏み込むとは意外だった。ライフレスはこういう時にダンタリオンがいれば便利だと思うのだが、彼は現在別の任務で留守にしている。やむを得ずエルリッチがアルフィリースをこっそり見張っていたが、なにせリサのセンサーの範囲は驚異的なので、エルリッチとしても近づくのには限界がある。結局のところ、エルリッチとて具体的に何があったかまでは把握していないのだ。ただ結果報告をしたのみである。

「さらに巨人の男もアルフィリースの仲間についたようです」

「・・・それは構わん・・・どうせダンタリオンに一対一の武芸比べで勝てる者など、ティタニア程度だろう・・・奴の障害にはなりえんよ・・・報告はそれだけか・・・」

「はい、私の分かった範囲では以上です」

エルリッチの報告を聞くと、ライフレスは目を閉じる。これからのアルフィリースの進路について思考を巡らすライフレスだが、その時、彼の思考を妨げる存在が出現する。

続く

加護無き土地、その8～それぞれが迎える者は～（後書き）

次回投稿は、６／２０（月）１７：００です。次回より新しい場面に入ります。

闇の誘い、その1～悪霊の囁き～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースを監視すライフレスの前に現れたのは・・・？

闇の誘い、その1～悪霊の囁き～

「やっほー、ライフレス」
「・・・ドゥームか・・・」

軽薄な口調と共にライフレスの背後に立つのはドゥームであった。彼は背後に普段通り女性の悪霊４体を引き連れ、明るい表情で立っている。

「悩みごとかい、ライフレス？」
「・・・貴様の知ったことではない・・・それより、何の用だ？・・・」

ライフレスが警戒心も露わに、ドゥームに話しかける。ドゥームはお決まりの降参のポーズでライフレスの殺気だった目線に応えるのだ。

「ああ、もう！　そんな怖い顔をしないでおくれよ。君と戦うなんてまっぴらごめんなんだからさ」
「・・・今は貴様の軽口に付き合えるような気分ではない・・・要件次第だ・・・」

ライフレスの態度に冗談をいう雰囲気ではないと思ったのか、ドゥームが真面目な顔になる。

「ボクの仕事、覚えてる？」
「・・・『闇化』だったか？・・・」
「そう、それ！」

ドゥームが満面の笑顔でライフレスに返事をする。

「その仕事をやりに来たんだよ」

「・・・この町でか？・・・」

「ああ。この町の寿命はもうおしまいさ。遅かれ早かれ、ここは色んな意味で限界だよ。それなら、廃れ切る前にボク達の役に立ってもらわないとねぇ？」

くすくすとドゥームが笑い、その様子を鬱陶しそうに睨むライフレス。ライフレスは近頃どうにもドゥームが嫌いだった。最初は小物だと侮り、さして彼の事を気にかけたこともなかったのだが。

「（・・・俺はブラディマリアの言葉を少し気にかけているのか？・・・いや、それだけではないな・・・）」

ブラディマリアはドゥームを指して、いずれ自分達の手に負えなくなると話した。ブラディマリアはああいう一見おちゃらけた性格だが、その本質は決して愚かではない。特に人物を評価する時には、ブラディマリアは嘘を言わない。

だが、それだけではどうにも自分のイラつきが説明できない。このもやもやはどこから来るのか。ライフレスにもそれは分からなかった。

そうこうするうちに、いつの間にかドゥームがライフレスの顔を下から覗きこんでいる。

「どうしたのさ、ライフレス。考え事かい？」

「・・・何でもない・・・」

「そうか。ならもう行ったらどうだい？　キミの仕事はアルフィリースの監視だろう？　ここはボクに任せて、さ」

「・・・いいだろう・・・」

それだけ言うと、ライフレスはエルリッチと共に姿を消した。ライフレスの気配が周囲にないのを確認すると、ドゥームの声色が変わる。

「で、各自準備は万端か？」

「・・・問題ないわ。各自、自分の城を構築中よ」

オシリアが全員に代わって応える。

「どのくらいで完成する？」

「・・・インソムニアの城が一番早いわ。もう後、月が二度巡る頃には」

「なるほど。リビードゥ、君のは？」

無口なインソムニアは滅多に話さないためオシリアが言葉を代行することが多いが、悪霊の癖に妙に明るいリビードゥは自分から積極的に話すことが多い。その点ではドゥームと彼女はよく似ている。

そのリビードゥが妖しく微笑みながら話すのだ。

「城となるとちょっとねぇ。でも動きは既に始めているから、同調する人間の人数次第って所かしら。長くて2年、短ければ半年かからないわ」

「半年後には君の城を見たいものだね」

ドゥームがユートレティヒトを見ながら答える。その目には今までのドゥームと違い、どこか企みめいた輝きが増していた。今までの彼であれば、刹那的な快楽を得られればよいと思っていただろう。だが、最近のドゥームは少し違う。

「（思ったより計画を練るのは楽しいなぁ・・・こんなに楽しいなら、もっと早くから色々考えれば良かったよ。我慢するほど御褒美が大きくなるとは、アノーマリーのドMぶりも無駄にはならないな。さて、これからどうしてやろう？　いかにしてオーランゼブルの目を欺くか。いや、欺くよりもっと・・・）」

またしてもドゥームは何か思いついたのか、くくく、と忍び笑いを漏らす。その彼に、背後からオシリアが腕をからませてドゥームにすり寄る。

「何か楽しい事思いついた・・・？」
「ああ。耳を貸しな、オシリア」

ドゥームがオシリアに耳打ちすると、なんと、いつも無表情なオシリアが笑ったのだ。そしてオシリアはおもむろにドゥームにキスをする。

「最高だわ、あなた・・・」
「だろう？　これは実にいい思い付きだと思うんだ。しかしそうなると準備が大変だね。リサちゃんとも遊ぶ算段を整えないといけないし、しばらく忙しくなりそうだよ」
「だったら、たくさん食べて元気をつけないとね！」

マンイーターがユートレティヒトを指さす。その言葉に全員が同意を示す邪悪な笑みを浮かべ、彼らはゆっくりとユートレティヒトに歩いて行った。

しばらくして。ユートレティヒトをたまたま訪れた旅人は、自分の手記にこう記すこととなる。「今日、廃虚となった町に立ち寄った。何か獣にでも襲われたのだろうか、一面に血の跡や慌てて逃げた痕跡が見られるが、抵抗したような様子は一切見られなかった」

と。

＊＊＊

「平和ですねぇ、東雲（しののめ）」

「ほんとうに、詩乃様」

山とはいわぬほどの高さだが、屋敷にある門にまで階段を上るには少し疲れるくらいの高さにある丘に建つ、清条家の本屋敷。東雲の名前にもなっている桜花の木を見ながら、縁側で茶をすするのは東部討魔協会の有力四家である清条家現頭首、清条詩乃と護衛の東雲桜花である。護衛といっても、さすがに白昼堂々清条の家に押し入ってくる者など皆無で、東雲はゆったりとした秋空を楽しんでいた。

詩乃に仕え始めたのは自分が１２、詩乃が５の時。生涯護るべき主人として詩乃に引き合わされた東雲だが、「護る」というよりは「面倒を見ている」と言った方が正しかった。小さい頃は一人で厠にも行けない詩乃の手を引いて用を足す手伝いをし、おねしょが７つになるまで治らなかった詩乃が濡らした布団を必死になって隠すのに協力し、「鈍臭い」と叱られては泣いている詩乃の頭を撫でて慰めたのも東雲である。東雲にとって、詩乃とは護るべき主人というより、手のかかる妹のような存在だった。

詩乃のせいで、元来堅物だと言われ続けた自分も多少は柔軟な思考ができるようになったのではないかと、東雲は思っている。だが、東雲は実家に帰るたびに「最近たるんでいるのではないか」と、父母に叱られるようになった自分がいる事に気がつく。それでも、

「（詩乃様の傍に仕えるのに、気を張ってたら怒られるんですよねぇ・・・）」

などと悠長な事を考えてしまうのだから、自分もすっかり詩乃に毒されたんだなぁと東雲は思うのだった。そして、いつもならこういうときには式部が必ず茶々を入れに来るのだが、彼女は今久しぶりに実家へと帰還を果たしている。と、いっても式部は変態（だと東雲は呼んでいる）のくせに、暇をみつけては実家に顔を出しているらしく、意外に親孝行なものだと東雲は内心感心しているのだ。手紙一つよこさない筆不精な自分とは随分違うと、東雲は一つため息をつく。

「東雲、心配事ですか？」

「は。式部はあの通りの人間なのに、仕事だけでなく、万事にぬかりなくこなしますので。自分の存在意義というものを少し考えておりました」

「存在意義ですか・・・」

詩乃が難しい顔をしたので、何か言葉をかけてくれるのだろうかと東雲は期待して待っていたが、しばらくして聞こえてきたのは詩乃の安からな寝息だった。

その詩乃にがっくりとしながらも、普段通りの彼女に安心する東雲。

「はあ・・・詩乃様に難しい話しは駄目なんですよねぇ」

「うん・・・東雲・・・」

「何の夢を見ておられるのやら」

呆れたように東雲がお茶を一つすする。

「東雲・・・おもちを食べると喉に詰まりますよ・・・？」

「ぶほっ！」

詩乃の寝言に、思わず口に含んだ茶を吐き出す東雲。

「私は年寄りですか！？」

と、東雲が護衛にあるまじきツッコミを詩乃にするが、詩乃はそのまま東雲の肩にもたれかかるようにさらに深い眠りに落ちる。東雲はため息をつきながらも、詩乃にされるがままに任せ、程良い季節の晴れ空を楽しむように共に眠りに落ちるのだった。

＊＊＊

その夕刻、東雲が目を覚ますと自分と共に寝ていたはずの詩乃がいない。

「詩乃様？」

東雲は気だるい体に鞭打ち、詩乃を探すべく立ち上がる。

「また一人かくれんぼですね・・・いつもそのまま隠れた先で眠るんだから。探す身にもなってくださいとあれほど」

などとぶつぶつ文句を言いながら、無駄に広い屋敷を探し回るべく東雲が縁側を離れて行くのだが。

その同時刻。詩乃は屋敷にいなかった。屋敷の裏側にある、清条家の敷地内である山中に赴いていたのである。その場所は詩乃が禊（みそぎ）を行う場所であるとされ、例え東雲でも入ることはできない。巫女として訓練を積む者だけが立ち入ることを許される聖域である。

その場を一人しずしずと歩む詩乃。辺りは風に葉が擦れ合う音だけが鳴っている。

「よう来たな、詩乃や」
「耀姫（ようひめ）、招いたのは私ですよ？」

詩乃が作る表情は親しみと、相手の軽口を窘めるような困った表情と、そして警戒心もまた抱いていることを同時に示していた。

「カカ、細かいことを申すでない、詩乃よ。妾とそちの仲であろ？」
「親しき仲にも礼儀ありです、耀姫」

詩乃に耀姫と呼ばれたのは、詩乃の胸の高さにもならないくらいの少女であった。だがその赤い眼光は鋭く、彼女が尋常の存在でないことは明らかである。その耀姫の頭には三本の角があった。

頭に生える角。それは東方の大陸を支配する鬼族の証であるのは、誰もが知りえる所であった。

続く

闇の誘い、その1～悪霊の囁き～（後書き）

次回投稿は、６／２２（水）１７：００です。

闇の誘い、その2～鬼との対話～（前書き）

～あらすじ～

近侍を欺いてまで、詩乃はいったい何を企むのか・・・？

闇の誘い、その2～鬼との対話～

「まあ細いことを申すでない、詩乃よ。それに今回はそんなことを話しておる暇はあるまい」
「そうですね。いくらここが人目につかぬとはいえ、耀姫程の妖気をいつまでも隠し通せないでしょう。いくら清条の者がボンクラ揃いだとしても」
「またきついことを言う」
「失礼しました。凡庸の方が良かったですね。それとも有象無象？」

しれっとそのような言葉を並べたてる詩乃の雰囲気は、東雲といる時とはまるで別人だった。詩乃が纏う雰囲気を、耀姫が怪訝な顔で見る。

「詩乃よ。お主、変わったか？」
「変わらぬ方がおかしいでしょう、人の一生は短いのですから。私が頭首になってから既に3年。いつまでも子どものままではいられないですから。それでも」

それでも東雲の前でだけは気を緩めていたいのだが、そうとばかりも言えない詩乃は、自分のやろうとしていることに胸が痛む。東雲の厳しくも優しい姉のような顔が脳裏に浮かぶ。そんな彼女の苦悩を見透かすような耀姫の赤い目が、詩乃を射抜く。

「それでも？」
「・・・こちらの話です。それでは今回無理言って耀姫を呼んだのは他でもありません。今後の私達の関係についてです」
「いきなり本題か。まあよいじゃろう」

討魔を旗印とする清条の敷地内に、なぜ鬼族がいるのか。この話をするには、少しこの二人の関係について語らなければなるまい。

この二人、詩乃と耀姫は、東の大陸で敵対する人と鬼族の中において例外と言わなければなるまい。この二人は純粋な友人なのである。

事の発端は詩乃が7歳の時。まだ若い耀姫も今よりは背が低く、見た目としては詩乃よりも少し上程度に見えるくらいの頃。耀姫は鬼族の頭領格である一族の跡取りとして生まれ、その力とお転婆ぶりをいかんなく発揮して人里深くまで物見遊山に来ており、詩乃は避暑先で迷ってしまった時の事である。人里離れた山中でばったりと二人は出会った。

耀姫は少しからかってやるくらいのつもりで詩乃を脅かしたのだが、夜の暗闇を怖がって厠にも行けなかった当時の詩乃の事。耀姫の脅しは本当に怖く、思わず発揮した彼女の力が耀姫を瀕死にまで追い込んでしまう。

それからは蜂の巣をつついたような騒ぎとなり、詩乃は清条の家の者に保護されるのだが、耀姫は瀕死なことが幸いしたのか、妖気がすっかり抑えられて、その存在は誰にも気づかれなかった。そして耀姫を傷つけたことが詩乃には負い目だったのか、家の者の目を盗んでは耀姫を隠し、彼女の看病に避暑地にいる間しばしば赴いたのであった。そこから彼女達の不思議な友情は始まり、今に至る。

それからも定期的に使い魔などで連絡を取り合い、年に一度は互いに顔を合わせていたりする二人である。そして遠いからとの理由で、ついに詩乃は自分の修行場を持ったことをきっかけに、耀姫だけが通れるような転移の道筋を作ってしまったのだ。これには耀姫も驚いたが、まんざらでもない自分がいる事に気がついた耀姫は、あえて何も言わなかった。

詩乃が3年前に清条の頭首になるにつけ、中々自由な時間を持て

なくなったせいで二人は会っていなかったが、今回は強引に詩乃が耀姫を呼び付けたような格好になっている。もちろん先の通路を使ってのことだが、招待というよりは、召喚魔術に近い呼び付け方だった。そのせいか普段はきちんと着飾る耀姫も部屋着のような丈の短い襦袢であるし、彼女としても多少へそを曲げている所なのである。

それでもおおらかな対応をするのは、耀姫の懐が深いせいだろう。悪い言い方をすれば、適当だとも言える。どちらにしても、余裕がないのは詩乃の方だった。

「清条詩乃個人としては、最後まで耀姫の敵対をするつもりが無い事は明確にしておきましょう」

「ほほう。よいのか、そのような事を申して？」

「何がです？」

詩乃が少し険しい顔で耀姫を見つめている。

「そのような事を申しても、討伐命令が下ればどうする？」

「その時は東部対魔協会の一員として、全力で貴方達を排除しましょう」

「おお、怖や怖や」

耀姫がおどけて見せるが、その言葉で耀姫は理解をしたようだった。

「つまり、清条詩乃個人としては我々、いや、妾を見逃してはくれても、協会の命令には一切逆らう気が無いと？」

「その通りです。もっとも出来る限り貴方達から目をそらすように話しを持っていきますが、今、協会の長である浄儀白楽に逆らうのはまずい。彼に睨まれたら、清条家自体が無くなってしまう可能性

もある。そうでなくても、たたでさえ弱体化が激しい清条家は他の三家に狙われているのですから」

「ふむ、その辺の事情は以前から聞いておる。確か協会の長は浄儀白楽と申したな。奴の話は鬼族の深部にあって、人との争いは無縁に近い我々『千弦の谷の鬼族』でも耳にするぞよ。聞きかじっただけではとんだ化け物らしいな。なんでも、先に滅ぼした『業鬼の一族』との決戦では、一人で５００を超える鬼を殺したとか？　業鬼の長は、奴に素手で引きちぎられたと聞いている」

「戦闘能力もそうですが、一番怖いのは抜け目がない事。彼を出し抜くことはおろか、疑いの目を向けられないようにするので精一杯です。この会談だって、私にとっては綱渡りなのですから」

詩乃が冷静な顔で答えるが、詩乃は冷静に見える時ほど緊張している事を耀姫は知っている。

「で、そのような状況で妾を呼んだからには、言いたいことはそれだけではないのだろう？」

「もちろん。ここからが本題です」

詩乃が唾を一つ飲み込む。その先、詩乃の言葉にさしもの耀姫も目を丸くした。驚くこと、しきりである。

「詩乃・・・お主、本気か？」

「冗談でこんなことは言いませんよ、耀姫」

「いや、だが・・・しかし」

「今さら断れる立場ですか、耀姫？」

詩乃の言葉が徐々に凄みを帯びる。

「仮に断ったら？」

「貴方は突然いなくなった、ということになります。非常に残念な事ですが。そのために東雲の茶に眠り薬を仕込み、転寝（うたたね）のふりをしてまで出てきたのですから」
「妾に勝てるとでも？」
「それは問題になりません」

ざわりと森が揺れた。もし耀姫が抵抗するそぶりを一つでも見せたら、詩乃が攻撃するという意志を明確にした証拠である。今まで示していた友好の情はどこへやら。湧きたつ殺気に、耀姫が顔をしかめた。

「妾に選択肢はないということか」
「そうです」
「詩乃、やはりお主は変わったよ」
「私は変わりたくなかった。私は変えられたのです」

詩乃が悲しそうに目を伏せたが、その顎を掴んで耀姫は詩乃に前を向かせた。

「人のせいにするな、詩乃よ」
「・・・ですが」
「確かにお主の状況は切羽詰まっておる。だが選択肢というものは、一見無いように見えても常にいくつかは残されておる。今の妾もお主に従うしか選べんように見えるが、別に妾の死を厭わなんだり、お主を害することを躊躇わなければいくつでも他に手段はあるのだ。単純に妾がそうしたくないと思うだけでな」

耀姫は少し不敵に笑ってみせる。

「だからそのような考えをするでない、詩乃よ。そうでなければ、

いつ何時、何をしても後悔するようになるぞ？」
「・・・忠告、心に止め置きましょう、耀姫」
「では妾は戻る。連絡はまめによこせよ？」

そうしてほどなくして耀姫は寂しそうな顔を残して帰って行った。
その表情の意味するところは、詩乃にもなんとなくわかっている。

「耀姫、ごめんなさい。もう後悔はしているのです。それでも私は・・・」

一人になった詩乃は、ただ苦しむのみだった。

＊＊＊

「白楽様、御報告があります！　よろしいですか？」
「猿丸か。何だ、申せ」
「失礼いたします」

猿丸と呼ばれた若者が障子を開けて白楽の部屋に入ると、彼は女を抱いている真っ最中だった。それにもかかわらず、白楽は猿丸がここまで来ることを許可したのだった。女と猿丸が同時に顔を赤らめる。

「きゃっ」
「こ、これは失礼をば」
「構わん、余興だ。動け、女。そちはこれが商売だろうが」

白楽が女の頬をぴしゃりと打つ。女はやむなく行為の続きをするが、明らかに気をやれてはいなかった。白楽もまた適当に相手をしながら、猿丸の報告の方に意識を向けているようだった。

「猿丸よ、報告とは何ぞや？」
「は、はい。前線にいる多門どのより伝言です。『揺籃の一族と、鋼鉄山の一族に同盟の動きあり』とのことです」
「ふん、鬼どもめ。俺に怖気づいたか」

白楽は鼻で笑ったが、内心ではそこまで馬鹿にしたものでもなかった。むしろ厄介な状況になってきたと思っていたのだ。

ここ最近の討魔協会は、『揺籃の一族』と呼ばれる鬼の一族と戦争状態にある。これは白楽が敵しやすしと見て攻勢を決定したのだが、東方の諸国が飢饉続きで満足な援助が受けられず、参加している軍も士気が低い。それでなくても戦争続きで厭戦気分が蔓延している東の国が多いのだ。士気の上がらぬ兵を率いていては、いくら指揮官が優秀でも成果はいまいち期待できない。

「（人間が滅びるかどうかの瀬戸際で、食事がどうだとか言っている場合ではないだろうにな。優先事項も決められず保身のみを考える馬鹿どもが。今の機を逃せば再び戦いは膠着状態だ。今は俺がいるせいで鬼共も大攻勢はかけて来ぬが、俺が死んだ後の事を考えているのか。それとも一度取り戻した土地は奪われないと考えるほど愚かなのか。まあ後者ならば、いっそ人間が滅んだ方がよいだろうよ）」

白楽は内心で各国の大名を嘲りながら、猿丸がもたらす報告を女を抱きながら聞いていた。意識はどちらにもなく、これからの展開を彼は頭の中で考えている。

「以上にございます」
「うむ、予想範囲の展開だな。俺の寝所に押し掛けてまでするような報告か、猿丸よ？」

「は！？　こ、これは滅相もございません。一大事かと思いましたので・・・」
「ふん。それともこの女に興味でもあるか？」
「そ、そのような！」

猿丸は顔を赤らめた。彼はまだ１６にもならぬ、少年のような歳の白楽の近侍である。幼少より浄儀家に拾われて育てられた下男だが、暇つぶしに武芸を教えればこれが中々物になり、気に入った白楽が正式に教育を施して自分の近侍として置いているのだ。少なくとも病弱な自分の息子よりは、はるかにマシだと彼は思っている。
だが、猿丸のそのような真面目一辺倒の生活では、まだ女も知らぬのではないかと白楽はやや面白がっているのだ。白楽が今抱いている女は美人だが、人として全く面白みがない。興味をなくした白楽が女を乱暴に自分の上からどけると、褌をつけて身だしなみを整える。急に引きはがされた女は呆然とするのみだ。

「何だ、物欲しそうな顔をして。火照りが治まらねばそこの猿丸にでも相手してもらえ」
「白楽様！　お戯れが過ぎますぞ」
「その割には鼻が膨らんでおるがな、猿丸よ」
「は！？」

猿丸は思わず鼻を自分で隠し、顔を赤らめる。だがそのような仕草を白楽は見ようともせず、興味を失くしたとばかり薄着を一枚羽織ると、庭に出て池を眺め始めた。後ろでは律義な猿丸が女を促して部屋を出て行く音が聞こえる。

「真面目であるが面白みはない。忠義に厚ければ我に逆らいもしない。ふふ、中々面白い人間はおらぬ。そう考えればあの詩乃という女はまだまし。そうは思わぬか、妖魅よ」

「あら、気が付いてたのね～。キャハハハ！」

続く

闇の誘い、その2～鬼との対話～（後書き）

次回投稿は、６／２４（金）１７：００です。

闇の誘い、その3～魔の戯言～（前書き）

～あらすじ～

詩乃が会談を行う同時刻、一方では意外な対話が進行して・・・？

闇の誘い、その3～魔の戯言～

石灯籠の後ろから音もなく姿を現したのはブラディマリア。白い砂と緑の木々を基調とした白楽の庭に、一滴落とされた墨汁のようにその黒づくめの姿は際立つ。和紙に広がる墨のように、彼女の漆黒の気配が周囲を侵食していくのが、白楽には手に取るようにわかっていた。

その黒い染みが、嗤う。

「オ・ジ・サ・マ。いつからアタシの存在に気が付いていたのかしら？」

「最初からだ。上手く俺の結界の中に侵入したとは思うが、こちらから招いてやらねば、ここまで上手く侵入できると思うか？」

「あらあら、やっぱりそうなのね。方術なんて初体験だから、どうやって潜入するのかわからなくって困っていたの」

「俺が招いてやらねば、この結界ごと一帯を吹き飛ばすつもりだったろう？」

白楽の言葉にブラディマリアが口の端を歪める。見た目は幼い子供だが、目の前の女がそのような生易しい存在でないことは白楽も気が付いている。なぜなら女がこの場所にいる事に気がついてから、白楽の全身の毛は逆立ち、背筋が緊張しっぱなしだ。女を抱こうにも、気がやれぬのも無理はない。さて、どうするべきかと白楽は思案する。

「（冗談ではないな。ここで俺が命を捨てるつもりでやっても、せいぜい腕を一本取るぐらいが関の山か。討魔の全戦力を集めても果たして討ち取れるかどうか。こんな化け物が世の中にいるとはな）」

「何を難しい顔をしているのかしら？」

白楽が気がつけば、ブラディマリアが下から彼を見上げていた。不意をつかれ、逆に白楽は冷静になる。この瞬間、戦うという選択肢はないことが良く分かった。

「貴様の目論見を考えていた。俺に何用かとな。命でも取りに来たか？」

「あらあら、それはそれで面白いかもしれないけども。むしろ逆なのよ？」

くすくすとブラディマリアが笑う。

「アタシは貴方に手を貸しに来たの」

「何だと？」

この申し出はさすがに意外だったのか、白楽の目が見開かれた。だがすぐに彼は平静を取り戻し、実に楽しそうにニヤリとする。

「これは面白い展開だな。条件は？」

「アタシ達が貴方の敵である鬼族を全部潰してあげましょう。その代わり、貴方には一つだけ頼みごとを聞いてもらう」

「それは大層な申し出だ。その頼みごと、当ててやろうか？」

「へえ？　どうぞ当てて御覧なさい」

ブラディマリアも浄儀白楽という人物に興味を抱いたのか、試すようにその顔を覗きこむ。そして白楽は冷静に、しかし彼としてはそれなり以上の覚悟を持ってこの問いに答えようとしていた。彼の頭脳は既にフル回転をしており、ここでブラディマリアの気をどうしても引いておきたかったのだ。

「西の大陸に攻め入れ、というところだろう？」
「・・・驚いたわ、ほぼ当たりよ」

ブラディマリアの顔が嬉しさに綻ぶ。それは白楽という人物に惚れたというより、面白い玩具を見つけたような顔だった。その反応を見て、さらに白楽は追いうちをかける。

「その考え、貴様のものではないな？」
「なぜそう思うのかしら？」
「俺が貴様ほど強ければ、策を弄する必要すらない。自分で乗りこんで行って潰すさ。それに俺も人は見る。貴様は頭も良いだろうが、それ以上に自分の楽しみを優先するだろうな。おいしい所を人に渡すようなことはしない」
「フフフ・・・アハハハハ！」

その言葉を聞いて、ブラディマリアが腹を抱えて笑い始めた。今までのふざけた空気はもうない。

「よい、よいぞ人間よ。妾を見抜いた上でその図抜けた態度、まことあっぱれ。褒めてつかわそう」
「ふん、何様のつもりだかな」

対する白楽も、一向にへつらう様子はない。

「ふむ、気に入った。妾の真の姿を見せてやろう」
「つまらん物なら見せんでいいぞ」
「くっ、言いおるわ。だがまず間違いなく、貴様が木石でなければなら気にいるだろうよ。妾に誘惑できぬ種など存在せぬでな」
「ほう」

自信ありげなブラディマリアに、試すような顔で相対する白楽。その眼前でブラディマリアの姿が影に包まれ変形していく。変身を終えた時、白楽の目の前には目も眩むような美女が立っていた。燃えるような金の髪に、黄金の瞳。豊満な胸といい、くびれた腰といい、漆黒のドレスの上からでもわかるその肢体に白楽は興奮を抑えるので精一杯だった。

「いかがか？」

「なるほど、自慢するだけの事はある」

そう言って白楽は無遠慮にブラディマリアに近づくと、彼女の顎に手をかけ、そのドレスに手を滑りこませて乳房を鷲掴みにした。ブラディマリアもまた、一瞬眉がぴくりと反応するもその態度には余裕がある。

「妾に興味があるのか、人間」

「あるな。先ほどの女よりははるかに面白そうだ。先ほどは実に要求不満でな」

「なるほど。それにしては随分と強引じゃないのかえ？　女子（おなご）を誘うにも礼儀はあろうに」

「だが、乱暴なのも嫌いではないだろう？」

「ふ」

そういうと、ブラディマリアは白楽の首筋を舐め、軽く歯を立てる。そのブラディマリアの顔を強引に白楽は自分に向け口付けすると、そのまま抱きかかえて部屋に戻ろうとする。

「妾を魔物と知って抱くかえ？」

「関係ないな。強いて言えば、まだ昼間ということぐらいが気になる程度だ」

「くくく、冗談が好きじゃの。じゃが気に入ったぞ小僧。貴様が心ゆくまで楽しませてやろうではないか」

ブラディマリアは白楽に抱きかかえられたまま彼の首筋に手を回すと、そのまま彼の床へと身を任せるのだった。

＊＊＊

アルフィリース達はさらにガーシュロンの紛争地帯を進む。この土地ではそこかしこで打ち捨てられた死体や白骨が見られ、焼けた町跡も珍しくもない。評判通り、一年中ここいら一帯が戦争に巻き込まれている証である。

アルネリア教会からもひっきりなしにこの周辺は派遣がなされ、聖化をはじめとして死者の埋葬などが行われているはずなのだが、とてもではないが手が追いつかないというのが現状だった。そのような無残な光景に一同顔を顰めながらも、慎重に一行は足を進める。

「また水がなくなるわ」

「食料もだな。町らしい町に辿りつかないからな」

「あの変な町を出てから3日だもんね。それにしてもミランダは、この辺にもアルネリア教会関係者がいるって言ったようだったけど？」

一同がミランダの方を見る。そのミランダも困り顔だ。

「そんなこと言われてもね。アタシだって今どこで、どの派遣部隊がどうしているって知っているわけじゃないし。そもそも部署が違うんだから」

「結構大きなことを言ったくせに～」

「絡むんじゃないよ。ただアルネリアの影も形も無い所を見ると、

ここは思ったよりも北側なのかもしれない。アルネリア教会はガーシュロンのあまり深い土地にまで来ないはずだから」

ミランダが悩む様に、馬の手綱ごと腕を組みながら答える。

「じゃあここがどこかはわからないの？」

「うーん、有り体に言えば。でももしここがアルネリア教会も分け入らない様な地域なら、町には寄らずに早く抜けちゃった方がいいかもしれない」

「なんで？」

「相当の危険地帯だからさ。荒んだ土地では魔物より人間の方が怖いからね」

その言葉に全員が嫌な感情を覚えながらも、なんとなくアルフィリースには納得できることでもあったので、黙ってそのまま進んで行く。先のユートレティヒトの事もある。ミランダの助言に従うのが得策かも知れなかった。

ガーシュロンの紛争地帯はそこまで横には広くない。エアリアルの馬ならば、全力で駆ければ5日程度で突っ切ってしまう。進度はそこまで早くないとはいえ、もう既に半ば以上は過ぎているはずなのだ。

その時、ユーティが何かに反応したように顔を上げる。

「水があるわ。小さいけど川かしら」

「ホント？　水浴びできるかな？」

「まだ時期的には大丈夫な暑さだが・・・」

「そこまで急ぎましょう！」

急に元気になったアルフィリースが馬の足を速める。他の面々もそれに続き、ダロンは無表情に走って付いてくる。

「川よ！」

ユーティの声と共に、アルフィリースが飛び出して行った。

「やったー！　もう喉が渇いて渇いて」
「馬にも水をやらないとな」
「それもいいけど後にしてよね、エアリー」

そしてアルフィリースが水に口をつけようとした瞬間、ミランダがその体を引きとめる。

「待ちな、アルフィ」
「何よう」
「アレを見なよ」

ミランダが顎で上流を指したが、その光景にアルフィリースは凍りついた。上流では数多の死体が川の中で死んでいたのだ。そしてアルフィリースは危うくその水を飲むところだった。気づいたエアリアルが少し高い所に登り、様子を確認する。

「・・・随分と多い。ざっと数百」
「戦争、かしら？」
「さあ。だけど、最近のことだね」

ミランダが死体を確認しながら答える。

「どうしてわかるの？」
「死体が固い」
「死んだら普通そうでしょ？」

「しばらくはね。でも長時間経つと、逆に死体は柔らかくなるのさ。腐り始めるからね。戦いがあったのはごく最近かも」

ミランダがいくつかの死体を確認しながら冷静に述べている。

「じゃあ私達は・・・」

「戦場のど真ん中に飛び込んだかもしれない」

「冗談じゃないわ。リサ、何かそんな気配はなかったの？」

アルフィリースがリサの方を振り返る。するとリサは馬上でじっとしたまま動かないのだ。

「リサ？」

「あ・・・はい」

アルフィリースの呼びかけにも、リサはどこかうつろだった。そういえばリサは今日はほとんど何も話していない。アルフィリースが話していてどうにも調子が狂うと思ったのは、リサのツッコミがないからなのだ。

様子のおかしいリサに、アルフィリースが手を伸ばそうとした瞬間。リサの体がぐらりと揺れた。

「リサっ！？」

馬上から崩れ落ちるリサを慌ててアルフィリースが抱きとめ、そのままアルフィリースの腕の中でぐったりとするリサだった。

続く

闇の誘い、その3～魔の戯言～（後書き）

次回投稿は、６／２５（土）１９：００です。次回から新シリーズです。

魔剣士、その1～占領地～（前書き）

～あらすじ～

旅の途中、突然倒れたリサは・・・？

＊＊＊

「リサの様子は？」
「落ち着いているけど熱がひどい。今まで無理してたんだろね」

心配そうに見つめるアルフィリースに、ミランダが答える。リサはいつのまにか高熱を出していた。その事に気がつかなかったアルフィリースは、自分のいたらなさを悔いる。

「まあ変な病気ではないと思うの。とりあえずは安静が一番ね」

ユーティがリサにつきっきりで看病しており、彼女なりの見解を述べる。その間にエアリアルとエメラルドは、周囲の様子を見に行っているのだ。他のメンバーはやることも無く、リサの様子を心配そうに見守っている。

「ユーティ、貴方の魔術でぱっぱと治せないの？」
「無茶言わないでよ。そんなに回復魔術なんて便利なものじゃないんだから」
「毒なら水や闇の回復魔術で何とかなりますが、リサさんの場合は過労によるところが大きいですから、やはり安静が一番かと」

ラーナがリサの頭を撫でながら答える。その言葉に全員が項垂れている。

「リサにとっては初めての旅なんだし、私がもっと気を使っていれ

ば・・・」
「余計な気づかいは・・・無用ですよ、デカ女・・・」
リサが息も絶え絶えに苦しそうな声を発する。
「デカ女に同情されたくは・・・ありませんから」
「こんな時までそんなことを・・・」
「リサなりの見栄なんだよ、きっと」
リサの言葉を聞いて、そっとミランダがアルフィリースに耳打ちをした。実際にリサがこの旅で無理をかなりしている。目の見えないリサは常にセンサーを張っていなければアルフィリース達と同様に行動はできず、その疲労度はアルフィリース達よりも大きい。なので本来ならばもっと他の場面で負担を減らしてもらえればいいのだが、リサは戦闘であまり役に立たないという負い目なのか、はたまた生来の負けん気の強さなのか、リサは決して自分からは弱音を吐かない性格だった。
だが鍛えてあるアルフィリースやミランダに比べ、どうしてもリサは体力的に劣る。そのため今回、ついに限界を迎えたというわけだった。
そんな折、エアリアルとエメラルドが帰ってくる。
「エアリー、どうだった？」
「エメラルドが見つけたんだが、近くに村が一つ。せいぜい１００人もいないような小さな村だ。だが、中の様子まではわからない。動く人間が見当たらなかった」
「昼なのに？」
「ああ。何かあるのかもな」
その言葉にアルフィリースは考え込むが、エメラルドがその裾を

くいくいと引き、空を指さす。見れば、雲行きが怪しく、今にも雨が降りそうな天気となって来ていた。

「リサを雨の中に放置するわけにもいかないし、四の五の言っていられないわね。エアリー、ミランダは私と共に先行して村の安全を確認するわ。他のメンバーは後からゆっくり付いて来て、村の手前で待機。こちらからの連絡を待つこと」

「ダロンは連れて行かなくていいのかい？」

「ダロンを連れて行って大騒ぎになったら、まとまる話もまとまらないわ。リサの護衛に残しましょう」

すかさず言い放つアルフィリースに一同が納得し、すぐさま行動に移る。なんだかんだで少しずつ集団の長らしい判断ができるようになってきているのじゃないかと、ミランダは不思議な感覚でアルフィリースを見つめていた。

そして先行するアルフィリース、ミランダ、エアリアルの3人。彼女達が村に入ると、なるほど外には誰もいない。

「静かだね」

「だが、人がいないわけではないな」

「そうね、気配はあるものね。各自油断しないで」

アルフィリースの言葉に、3人が警戒を強めながら村の中を進んで行く。

「こういう時、リサの存在が本当にありがたいわ」

「ああ、少なくとも不意打ちは喰らわないからね」

「・・・声が聞こえる」

エアリアルがいち早く気づき、馬を止めた。すると、最初はおぼ

ろげだった声が徐々に明確に意味をなしてくる。

「女の声？」
「なんか叫んでるな」
「シッ！」

エアリアルが2人に黙るように促すと同時に、家の陰から裸の女二人が飛び出してきた。

「助けてぇ！」
「いやああ！」
「な、何？」

アルフィリースが驚いたのもつかの間、ここの村人らしき素朴な顔立ちの女性達の背後から、男達が何人か顔をのぞかせる。

「はいはい、追いかけっこはおちまいでしゅよ～」
「気持ち悪いからやめろ、お前」
「やめとけって、そいつは無理矢理が好きなんだからよ」
「まあたまにはこういうのも悪かねぇ。そろそろ普通のにも飽きたしよ」
「よく言うぜ、てめぇのどこが普通なんだ。後ろの穴にしか興味がない癖によ」

へへへ、と下卑た会話と笑いをしながら、男達が数人顔をにやつかせている。女達はよたよたとした足取りで走ってきているが、疲労からか足元がおぼつかない。そして道に立つアルフィリース達の姿を認めると、最初は体を震わせたものの、彼女達が女だとわかると少し安堵したように助けを求める。

「た、助けてください！」
「その前に事情を聞かせてくれるかしら？」
「そんなの見ればわかるでしょう！？」

少し苛立ったように女の一人がアルフィリースに喰ってかかるが、アルフィリースは相手にしない。

「さあ？　私達は今初めてこの村に来たんだから、事情が全く分からないの。普通に考えれば貴方達が追われていると思うけど、これが罠でないという証拠も無い。もしかするとあなた達が悪いのかもしれない。事情がわかれば助けないでもないけども、何もわからないまま助けるほどお人好しでもないわ、私はね」
「う、うう」
「あの男達は傭兵です」

アルフィリースの冷静な言葉に一人はしりごんだが、もう一人はより必死になった。

「彼らは駐留場所としてこの村を選んだのですが、素行が悪くて。私達は彼らの慰み者に毎日毎日・・・」
「それに食料も勝手に食べ放題なんです。彼らはこの冬の蓄えまで全部食べるつもりなんです」
「証拠は？」

アルフィリースがさらに冷静に言い放つ。その言葉に女達も今度は怯まず、まっすぐに建物を指さした。

「あの建物に彼らのリーダーがいます。話しを聞けばわかるでしょうし、食料の貯蔵庫は既に空に近いです。それを見ればわかるかと」
「なるほど。念のため後で確認させてもらうわよ？　まずはあの男

達を追い払いましょうか」

アルフィリースが女達をかばうように前にでる。その様子を見ても、男達の顔つきは変わらない。

「おい、獲物が増えたぜ」
「だな。今晩は宴会だな、こりゃあ」
「毎日そうだろうが」
「ちげぇねぇ！」

グハハハ、と男達が下品な声を上げる。それでアルフィリースは確信した。女達の話に間違いはないだろうと。

「あなた達、大人しく下がるならよし。下がらないなら・・・」
「ねーちゃんよ、どうするんだい？」

男達の声に、アルフィリースが腰につけていた鞭でぴしゃりと地面を打つ。

「痛い目を見るわよ？」
「へえ・・・」

男達はアルフィリースが鞭で地面を打った動作を見て、何かを感じたようだった。先ほどまでの下卑た笑いは既になく、全員が異常な興奮から覚めた表情でアルフィリース達を見ている。

「なるほど、言うだけの事はありそうだ。６人でも丸腰じゃちょいと不利だな」
「わかったなら下がってくれる？　無駄に傷つけたくはないの」
「お優しいこって。だが、俺達をあんまりなめるんじゃねぇぞ？」

先頭の男が唾を吐き、指笛を鳴らす。すると、そこかしこの建物からぞろぞろと男達が出てくるではないか。

「これは・・・」

「１０、２０・・・５０は軽くいるね」

「数は問題ではないが、それよりも囲まれている。これは不利だぞ、アルフィ」

３人がそれぞれ背中合わせに円陣を組み、村人の女二人は抱き合うようにその場にへたり込んだ。だがアルフィリース達も、既に彼女達に気を使う余裕もない。

姿を現した男達はそれぞれが手に武器を持っていた。表情も油断なく、どうやら全員がそれなり以上に腕の立つ傭兵であることがわかる。それが軽く５０人以上。この様子ではまだまだいるのだろう。

「うかつだったわ。小さいとはいえ村を占拠するんだから、それなりの人数がいる事を想定しておくべきだった」

「とりあえず一点突破だ。囲まれたままじゃいくらなんでも不利すぎる」

「我がシルフィードと共に血路を開く。その後に続いてくれ」

「「わかったわ」」

「行くぞ！」

続く

魔剣士、その1～占領地～（後書き）

次回投稿は６／２６（日）１９：００です。

魔剣士、その2～赤目のロゼッタ～（前書き）

～あらすじ～

リサを休ませるべく訪ねた村でアルフィリースを待つ者達とは…

…？

エアリアルの掛け声と共に、３人が動き出す。エアリアルは一番隙のありそうな一画を狙ったのだが、男達は打ちあいもせずにすんなりとエアリアルを通した。

「何？」

その動作にエアリアルは不信感を抱くも、その理由はすぐにわかった。いつの間にか、眼前には大きな家の間に大きな網が敷かれているのだ。

「ちっ、邪魔だ！」

エアリアルが一旦止まって網を切ろうとするが、網はかなり頑丈でエアリアルの槍でも一度には切断できなかった。そして動きを止めたエアリアルに、頭上から多くの捕獲用の網が降り注ぐ。

「くそっ！」
「エアリー！」

アルフィリースが駆け寄ってエアリアルを拘束する縄を切ろうとする。だが、

「アルフィ、離れていろ！」

それでは時間がかかると思ったのか、エアリアルは魔術をいち早く使い、上半身の周りに小規模のカマイタチを発生させて縄を切り

飛ばした。同時に、ミランダが家の間にある縄を固定している柱を叩き割る。

「よし、脱出だ！」

「と、いきたいけど、すっかり囲まれたみたい」

アルフィリース達は完全に包囲されていた。これでは戦うしか道はない。

「やるしかないね。アルフィ、人間を斬る覚悟はあるかい？」

「もちろんよ。でも、心配事が一つ」

「何だ？」

再び三人が背を合わせながら、エアリアルがアルフィリースに質問する。

「私、やりすぎちゃわないかなって」

「・・・冗談に聞こえないよ」

「そこまでだ、来るぞ！」

エアリアルの叫び声を合図に戦闘が始まった。純粋に一個人としての実力ならば、アルフィリース達に傭兵は敵わなかっただろう。だがこの男達はある特殊な訓練を施された傭兵達であり、とにかく集団戦が上手いのだ。

それに兵法にもある通り、人数が相手の何倍か以上あれば囲んで戦うのは常套手段。それだけ囲むというのは必勝にも近い戦法であり、男達は勝利を半ば確信していたのだが。

「おの女ども、手強いぞ？」

「いかん、負傷者が増える！」

「鷹手だ、鷹手を持って来い！」

男達がめいめいに叫ぶ。そしてある武器をエアリアルは弾き飛ばした時に気がついた。

「今の武器は？」

エアリアルが弾き飛ばしたのは、鷹手と呼ばれる特殊武器。３ｍ以上の長い鉄棒の先に、鷹の爪を模した鋭い曲がりを付けた鉤爪がついている。しかも釣針のように、返しがついているという徹底ぶりだ。これが一度肉に食い込むと中々抜けず、また服や鎧に引っ掛かれば相手を引き倒すのに都合がいい。相手を捕獲したい時や、馬上の相手を引き摺り倒す時に用いられる武器である。

エアリアルが気がつけば既に槍の届く範囲には敵はなく、囲まれた状態から鷹手が伸びてくるのだ。背中の手裏剣を投げようにも、その隙すらくれない徹底ぶりといい、怪我人をすぐに引き摺って後退させる辺りといい、大草原で育ったエアリアルに取って初めて味わう集団戦法だった。

「（やりにくい・・・！　大草原の部族はこんなややこしい戦法は使わなかった。これが外の人間の戦い方！）」

だがその思いはアルフィリースとミランダも同じ。彼女達にしろ、ここまで練度の高い傭兵とは戦ったことが無い。

「ミランダ、何なのこいつら！？」

「知らないよ！　でも出来るのだけは確かだね！」

必死で鷹手を払い続ける２人だが、その思いは傭兵達も同じだった。ここまで完璧に囲っておいて、自分達の手に落ちない獲物は彼

らにとってもあまり経験がない。それが女3人ともなれば、彼らの中に若干の焦りが生じても仕方はない。それでも長引けばアルフィリース達に不利なのは明らかだったのだが、戦いの喧騒の中、一際大きな声が戦いに横やりを入れる。

「なにアタイ抜きで楽しそうな事やってんのさ!?」

「アネゴ!」

「今度は何よ?」

一瞬鷹手の攻勢が止まり、アルフィリースは思わず声の主を見る。そこにはリサほどの身の丈もあろうかという大剣を背中に背負った、大柄な女性が一人立っていた。背はアルフィリースよりも高いだろう。大柄な身長もそうだが、目を引くのは体の色。妙に青黒く、普通の人間とは思えない。それに、目も普通の茶と赤だ。左右の目で色が違う、オッドアイという奴だろう。髪色こそグレーだが、まるで様々な種族が合体したような、なんとも言えない奇妙な女性だった。

ただそうでなくても人目は引くだろう。それだけ奇妙なのに、整った顔立ちは見まがうことなく美人である。自分の体に余程自信があるのか、素肌をおもむろに晒すように下はショートパンツ、上は大雑把に布を胸のあたりに巻いただけのような格好なのだ。寒くないのかと、アルフィリースは思わず聞いてみたくなったくらいの露出度である。

「ミランダ、彼女の肌って・・・?」

「昔迫害の対象になった種族、ミウリスの民だよ。本来ならもっと青黒いんだけど、彼女は多少薄いようだからきっと混血なんだろうね。彼らはその肌色を理由に差別された種族なのさ。別に何も悪い事はしてないんだけどね」

「その辺の事情はわからないが、どうやら彼女がリーダーの様だぞ

？」

エアリアルの指摘通り、その女が歩いてくると男達が道を開ける。間違いなくその女が彼らのリーダーなのである。そしてアルフィリースから５ｍ程度の距離にくると、女は無遠慮にじろじろとアルフィリース達を舐めまわすように観察した。

「へ～え。見た所普通の女だけど、うちの連中を苦しめるとは中々やるね」

「それはどうも。で、あなたがこの傭兵団の首領なのかしら？」

アルフィリースは油断なく剣を構えながら女に問いかける。女はアルフィリースよりもさらに背が高く、アルフィリースがわずかながらでも見上げることになるのは珍しいことだった。加えて女性の背中に背負った大剣の大きさ。アルフィリースの剣では受ける事もままなるまい。

「（あんな大剣、女の腕力で振るえるのかしら？）」

アルフィリースは訝しむが、その様子に気付いたのか、女性が背中の剣を片手で抜き放って見せる。

「うそっ」

「ははっ、こんなデカイ剣を女が扱えるのかって思ったんだろう？飾りじゃあないのさ、残念ながらねぇ！」

女が不敵に笑いながら一歩前に出る。その威圧感に、思わず後ずさるアルフィリース達。

「下がってな、テメェら。この美味しそうな獲物は、アタイが３人

まとめてイタダキだ」
「アネゴ、御相伴にあずからせて下さいよ？」
「全く、盛った犬みたいな連中だね。いいだろう、アタイが倒した後は好きにしな。もっとも生きていればの話だけどね！」

最後の言葉を言うが早いか、女が飛び込んできた。その剣をミランダのメイスが受け止める。だが、あろうことにミランダが力負けしたのだ。地面に片膝をついた格好で女の大剣を受け止めるミランダ。

「く、どんな馬鹿力だ！」
「アタイはロゼッタ。赤目のロゼッタって人は呼ぶ。でも覚えなくていいよ？　すぐに死ぬからさぁ！」
「ミランダっ！」

エアリアルがミランダを助けるためにロゼッタに向けて槍を突き出したが、その槍を片手で止め、さらに剣を片手で持ってミランダと拮抗させるロゼッタ。
さらに。

「な、馬鹿なっ！」
「ははは、軽いねぇお嬢ちゃん」

事もあろうに、ロゼッタは槍を掴んだままエアリアルの体を持ち上げ始めたのだ。だが、アルフィリースがさらに剣をロゼッタに向けて振り下ろすと、ロゼッタはアルフィリースを上回る巨体でありながら、バック宙で飛びのいたのだ。

「あの体でこんなに動くの？」
「なんて奴だ」

「アハハハッ！」

ロゼッタの赤い目が爛々と輝く。明らかに戦いに歓喜しているのだ。

「あーあ、アネゴのスイッチが入っちまった」

「こりゃあ八つ裂きだな、あの女達」

「美人なのにな。もったいねぇ」

周囲の傭兵達からは口々に文句を言うが、アルフィリース達にそんな余裕は微塵もない。それほどロゼッタは強いのだ。

「ならば、これならどうだ？」

エアリアルが背中の手裏剣を二本同時に投げつける。それすらも軽々と避けるロゼッタだが、すかさずエアリアルは斬りこみ、手数でロゼッタを追いこむ。

「せああっ！」

「おっとと。これはピンチかな？」

そう自らの危機をほのめかすロゼッタの顔は微笑んでいた。要は余裕なのである。それがわかるからエアリアルも悔しいのだが、彼女には目論見がある。

「ヒュウッ」

「？」

エアリアルが腰を入れた一撃でロゼッタに踏ん張らせ、ロゼッタの膝を蹴って距離を取ることでバランスを崩す。そこに別方向から

襲いかかる二本の手裏剣。例のブーメランの要領である。

「避けてみろ！」

「避けてみろっていうか」

ロゼッタは振り向きざま、手裏剣の一本を白刃取りのように指先に挟み、もう一本は事もあろうに手裏剣の柄を掴んだのだ。

「避けるまでも無いって言うか」

「・・・そんな馬鹿な」

事もなげに語るロゼッタだが、一つ間違えれば手の指が全部飛んでしまう。エアリアルも自らの手裏剣を取る時もあるが、基本は投げっぱなしの武器。手に取るのも、回転数が一定だからどこで掴めばいいのかわかっているからできることである。それを事もあろうに初めて見たロゼッタが素手で掴んだのだった。

いくら大草原と違い風の援護が少ないからといっても、これはエアリアルに取って驚愕の出来事だった。そんなエアリアルの表情を見て、恍惚の表情を見せるロゼッタ。

「ああ、いいねぇ～その顔。もっとお姉さんに見せてくれないかな？」

「ぐ、く」

「この女！」

「だけどこの人、本当に強いわ」

エアリアルとミランダがやや青ざめる中、アルフィリースは不謹慎にもロゼッタとの戦闘を楽しみ始めていた。

「（人を斬る時に、最初から斬るつもりで剣を振るったことはない

けども、このロゼッタ相手ならそのつもりでやらないとこちらが危ないわ。やってみようかしら、久しぶりに遠慮なしで）」

アルフィリースがそう考えなおし、一歩前に出ようとした瞬間、慌てた男がその場に飛び込んできたのだった。

続く

魔剣士、その2～赤目のロゼッタ～（後書き）

次回投稿は６／２８（火）１９：００です。

魔剣士、その3～閉ざされた町～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースの目の前に現れた女傭兵とその仲間に苦戦するアルフィリース達は・・・？

「アネゴ、ロゼッタのアネゴ！」
「なんだい、騒々しいね」

駆けこんできた男が息を切らせながらロゼッタに訴える。

「大変だ、奴らが来た！」
「・・・何体だい？」
「確認しただけで１０だ！」
「ちっ、しょうがないね」

ロゼッタは剣の切っ先をアルフィリース達からはずすと、アルフィリース達に敵対する気が無いことを示した。その表情が残念そうに曇る。

「いい所だったけど命拾いしたね、アンタ達。見逃してやるから、この村からとっとと出て行きな」
「見逃す？　それはどっちのことかしら」
「負け惜しみはよしな。アンタら程度じゃアタイに勝てない」

ロゼッタは興味を失くしたようにアルフィリースに背を向けた。だが、その時アルフィリースがロゼッタを挑発したのだ。

「逃げるの？　私に負けるから？」

安い挑発だったが、ロゼッタには効果があったようだ。その足が止まり、振り返った顔には苛立ちが隠せなかった。

「んだと？」
「あの程度で勝った気にならられちゃたまらないのよ。こっちも舐められっぱなしじゃ引っ込みがつかなくってね」
「この女！」

ロゼッタがアルフィリースに近寄ろうとした瞬間、別の場所から悲鳴が上がる。

「ロゼッタのアネゴ！　トカゲが来たぞ！」
「ちっ、問答は後だ！　そこの黒髪の女！　逃げるんじゃねえぞ？」
「さっきは逃げろって言ったくせに、どっちなのよ」

アルフィリースが呆れたようにため息をつく間にも、ロゼッタは方々に指示を飛ばしながら去ってゆく。その時、ミランダがアルフィリースの袖を引いた。

「アルフィ、何だってさっきみたいな挑発をしたんだい？」
「え？　だって本当に私の方が強いもん」
「・・・賛同はしかねるな」

エアリアルがうろんげな目でアルフィリースを見る。だがアルフィリースは気にしてない。それよりも先ほどのロゼッタのことで頭はいっぱいだった。

「どこをどういじったらそんな確信が出てくるのさ」
「確信ってほどでもないけど、私はいまだに人間相手に剣を振るう時、殺すつもりでやったことが無いから。練習だと遠慮しちゃって」

アルフィリースが苦笑いをしたので、ミランダとエアリアルが顔

を見合わせる。

「じゃあ何か？　アタシ達相手の時には手を抜いているとでも？」
「手を抜いているっていうか、練習の時にできることと、実践で出来る事は違うってこと。それに普段は私は騎士剣よりの技術を使っているけど、昔師匠から一本取った時の剣技は別にあるのよ」
「・・・本気なの？」
「もちろんよ」

アルフィリースが事もなげに言ったので、ミランダは空いた口がふさがらない。今度はエアリアルが質問する。

「ではなぜ普段は使わないんだ？」
「あまりにも奔放だから、出来る事ならきちんとした剣を覚えなさいって師匠に言われたの。それに集団戦では使いにくくって。今まではだいたいが集団戦でしょう？　ライフレスと戦った時もそうだったし」
「言われればそうだな」

エアリアルはなんとなく納得したように頷いた。

「それにね」
「それに？」

何かを言いかけるアルフィリースに、ミランダが聞き返す。

「私はあのロゼッタに興味があるわ。仲間にならないかしら？」
「・・・やめときなよ。アレはロクな人間じゃないわよ？　人間かどうかも怪しいけどね」
「そうかなぁ？　まあ話は聞いてみないとね。それにもし仲間にな

らないなら、いまのうちに斬っておくほうがいいわ。戦場で出会ったら厄介ですもんね」

アルフィリースの物騒な言葉にミランダとエアリアルは再び顔を見合わせると、またしてもアルフィリースに呪印の良くない兆候が出たのかと訝しんだが、どうやらその気配はないようだった。ラーナも毎日アルフィリースの呪印の様子を確認しているし、もちろんそのような事があろうはずもない。そうなると、これはアルフィリースの生来の性格と言うことになるが。

「（こんなに物騒な子だったかな？）」

ミランダが疑問に思う。どうにも出会った頃と、少し印象が違うような気がしなくもない。当然人は成長すれば変わるわけだが、これは好ましい変化なのか。戦場を生き抜く上では必要かもしれないが、ミランダはどことなく不安を隠せないでいた。

「（大丈夫・・・だよね？）」

「何しているの、２人とも？　ロゼッタの戦う相手の事を見るわよ？」

「わかった。行こう、ミランダ」

「あ、ああ」

そうして３人はこの村に来た、トカゲとやらを見物に行くのだった。

＊＊＊

「網を引け！」

「こっちの防護柵が破られた！」

「ドルカスが喰われたぞ！」

アルフィリースが家の角を曲がると、そこから既に戦いの様子が見えていた。先ほどの傭兵達が、巨大な魔獣相手に戦っているが、明らかに苦戦している。

「なるほど、見た目はトカゲみたいね」

「トカゲって二本脚で立つのか？」

「さあ？」

アルフィリース達が見たのは、体色が赤黒いトカゲのような生き物。基本は四足歩行だが、太い尾を使って二本脚で立つことも可能なようで、体長はダロン程度もあるだろうか。それらが１０体以上、縦横無尽に村をかけずり回っていたのだ。

だが傭兵達も負けてはいない。鋭い顎で傭兵達は噛みちぎられ、あるいは前足や尾で跳ね飛ばされるも、彼らは懸命に戦っていた。先ほどの鷹手をトカゲの肉に食い込ませ、引き摺り倒して何人かでめった刺しにしている。

「あの魔獣はなんだろう？　魔王かな？」

「うーん、アタシは聞いたことが無いかも」

「大草原にももちろんいないな。強いて言えば恐竜共に似ているが」

そうこうするうちに、ロゼッタの前にトカゲの一体が走ってきた。だがロゼッタは大剣を振りかぶると、アルフィリース達にまで音が聞こえそうなほど奥歯を食いしばり、気合一閃、トカゲを袈裟がけに真っ二つにした。

「すごっ！」

「なんて馬鹿力だ・・・」

「なるほど、剣士としての能力は本当に凄まじいな」

3人がそれぞれ感心するうちにも、トカゲはやがて退却して行った。ロゼッタが傭兵達をまとめ直している。

「報告しな」

「死者5、負傷１４です」

「これで２００人をきったね・・・ジリ貧だ」

ロゼッタが報告を受けて、さらに村に仕掛けた罠の補修や再設置を命じて行く。そしてとどめを刺したトカゲの網を傭兵達がはずした時である。アルフィリースはそのトカゲの尾が動いたのに気がついた。

「いけない！」

「あん？」

アルフィリースが駆けだすのと、トカゲが起き上がるのは同時だった。虚を付かれた傭兵達は弾き飛ばされ、何人かの上にトカゲが覆いかぶさろうとする。

「うわあっ！」

【大地に棲む猛き精霊、汝らが力を形にし、敵を貫け】

《大地槍（アース・ペネトレイト）》

潰されかけた傭兵が悲鳴を上げる中、アルフィリースが唱えた魔術がいち早く発動し、アルフィリースが触れた地面とは離れた場所から盛り上がった岩が槍や刃物の様になって、トカゲを串刺しにして突き上げた。そのまま悲しそうな叫び声をあげ、絶命する魔獣。

その光景を驚きの表情で見る傭兵達とロゼッタ。

「よかった。間に合った」
「へえ。アンタ、魔法剣士か」

ロゼッタが口笛混じりにアルフィリースを見る。そのアルフィリースの肩をミランダが叩く。

「アルフィ、何やってんの？　逃げるよ！」
「ううん、そうもいかないみたい」
「？」

アルフィリースが指さした先には、リサを連れた他のメンバーが村の中に入って来ていたのだった。

＊＊＊

「じゃあ外にもトカゲが出たの？」
「ええ、それで村の中に逃げてきたのです」
「全く、どうなってんだか・・・」

ラーナいわく、アルフィリース達が村に入ってから間もなくして、熱にうなされるリサが危険の襲来を告げたらしい。それでエメラルドが空から周囲を警戒していた所、こちらに猛スピードで走りくるトカゲの群れを見たのだった。エメラルドが空から見つけていなければ、とても逃げるのは間に合わなかっただろうとのことだった。

「群れ？」
「はい。エメラルドは５０匹以上を見たと言っていました」
「でも村には１０匹程度しかいなかったわ」
「まさか斥候だとでも？　トカゲにそんな知能があるわけが・・・」

「そのまさかなのさ」

酒場兼宿屋で、リサを寝かした後その場で話しこんでいたアルフィリース達の部屋に、ロゼッタがノックも無しに入ってきた。無遠慮な態度にアルフィリース達は眉を顰めるも、この部屋はリサの様子を見たロゼッタが確保してくれたものなのでおおっぴらに文句は言えない。

ロゼッタは椅子を一つ自分用に取り上げると、背もたれを前にして座る。

「あのトカゲ共は見た目に反して知能が高い。斥候くらいはやるだろうね」

「本当に？」

「嘘言ってどうするのさ」

ロゼッタが少しむっとした目で反論する。

「こんなしちめんどくさい依頼とわかってたなら、受けるつもりはなかったんだけどねぇ」

「どういうこと？」

ロゼッタの不満に、アルフィリースが聞き返した。

「アタイは雇われなのさ。今回の依頼はあのトカゲの捕獲だった。アタイ達はそのために集められたが、アタイが一番歴戦だから体長を任せられてね。まあこのガーシュロンはアタイが中心になって動く場所だから、やりやすいってのもあるけど。

それでもあんなトカゲは初めて見たのさ。ギルドの情報によると、とても長い周期で冬眠と活動を繰り返す魔獣の様でね。以前暴れたのはアタイが生まれる前だってさ。それでも被害が大きすぎるから、

トカゲの生態を調べるために捕獲してくれって領主が頼んできたんだよ」

「なるほど、それで今回のような装備だと」

「御名答。アンタ達もアタイ達の装備を見たとは思うけど、網や鷹手もやつらを捕獲するためにしつらえた装備というわけさ。んで、無事一匹を捕獲して引き渡したはいいが、その後気を抜いたのがまずかった」

「何があったの？」

「この村でトカゲの引き渡しをこの村で指定され、引き渡しまでは上手くいったが、その時にはこの村はすっかり囲まれてたのさ。逃げようとするたびあいつらが現れやがる。捕まえたトカゲがずっと甲高い声を発していたのにもっと気を使うべきだった。助けを求める声だったんだね、アレは」

ロゼッタが頬杖をつきながらぼやく。そんな彼女を見て、アルフィリースは質問するのだ。

「それからこの村に立て籠っているわけ？」

「まあね。もう一月か」

「それであなたは村人達に乱暴する部下を、見て見ぬふりってこと？」

アルフィリースに指摘に、ロゼッタがじろりとにらみ返す。

続く

魔剣士、その3～閉ざされた町～（後書き）

次回投稿は６／３０（木）１９：００です。

魔剣士、その４～脱出への道～（前書き）

～あらすじ～

町は異形の化け物に囲まれていた。果たして脱出できるのか・・・？

「知ったことかよ、お綺麗な軍隊じゃないんだアタシ達は。だいたいが軍隊だって敵地での略奪行為は容認されている所が多いんだ。アタシ達傭兵に、あいつら以上の良識を持てって言うのか？　はっ」
「それでも貴女も女でしょう？　乱暴される女性を見て何も感じないわけ？」
「別に。アタイだって金が無い時は男達に体を売ることはあるし、事実傭兵を始めたばかりのころはそりゃ悲惨なものだったさ。どれくらい負けてひどい目にあわされたかわかりゃしない。軍人なら捕虜交換って制度があるが、傭兵にゃそんな御大層なものはないからね。相手に捕えられた時は悲惨なものさ。まあ女な分、男の様にすぐ殺されることは無いけど。どこの土地でも女を見て男の考える事は同じだからね。この時ばかりは混血の自分の体に感謝したよ。極端に子どもができにくい体だから、アタイは」

そういってニヤリとするロゼッタに、アルフィリースはぞくりとした。彼女はアルフィリースには想像もできない様な経験をしてきているのだ。その時、ベッドで寝ているはずのリサが口を開く。

「赤い目・・・貴女が赤目のロゼッタですか」
「おお、お嬢ちゃん。アタイの事を知ってるのかい？」
「噂だけは」

リサが苦しそうにロゼッタの方を向いている。

「戦場での依頼を中心として受ける、東部地域では有名な女傭兵。その容姿も有名ですが、それ以上に腕前が超一流。大隊指揮もでき

る経験を持ち、もう４０年以上活動しているとか」
「よく知ってるね。人によっては見た目から『魔剣士』とも呼ぶけどね。アタイは色んな種族が混じってるからね。巨人、シーカー、人間、ミリウス・・・人型の魔物も混じってんのかな。そのせいで寿命が長いのさ。多分年齢は６０を越えてるよ。見た目は２５くらいだけどね」

ロゼッタが快活に笑う。こうしていれば、ただの明るいお姉さんに見えなくもない。

「ちなみにギルドの評価はAさ。魔王討伐の経験もある」
「すごっ・・・」
「アタイの凄さがわかったかい？」

得意げにロゼッタがアルフィリースを見るが、アルフィリースは素直に感心していた。そしてアルフィリースに突っかかるロゼッタ。

「でもさっきアンタはアタイになんだか大層な事を言ってたねぇ。アンタ、ギルドでのランクは？」
「・・・Eよ」
「なんだそりゃ？　お話にならないよ」
「申請してないからね、この子は」

ミランダがアルフィリースの肩を抱き寄せるように話す。そしてアルフィリースはさらにロゼッタを挑発するのだった。

「それでもアタシの方がロゼッタより強いかも」
「ああん！？　まだ言うか、このガキ！」
「まあその話はさておいて。そんなことを言うためにここに来たんじゃないでしょう？」

アルフィリースが指を立てて立ちあがったロゼッタを制し、ロゼッタはアルフィリースに向けて湧きあがりかけた怒りに無理矢理蓋をされた格好になった。感情の行き場をなくして目を白黒させるゼッタの表情は、少し見物だったかもしれない。

「・・・くそ、この話はきっちりつけるぞ？」

「どうぞご自由に。で、話があるからこの部屋に来たんでしょう？」

「・・・まあいいや。それよりアンタ達、アタイと手を組まないか？」

ロゼッタが切りだした話に一同がびっくりするが、反論しかけるミランダを制してアルフィリースは彼女の話を促す。

「続きを」

「アタイ達は最初は３００人いた。だが度重なる襲撃で徐々に人数は減らされ、また脱走者も出ている。これ以上は全員の精神力が限界だ。村の女を抱いて気を紛らわせるにも限度があるだろう。ここいらが潮時だ。無理にでも脱走したいが、今まではめどが立たなかった。だがアンタらがいれば・・・」

「ふーん、アタシ達を囮にしようって？」

アルフィリースが意地悪く言ったので、ロゼッタは顔を歪めた。

「まあそうだね。だがそれはお互いさまさ。多分途中で襲撃されて混戦状態になるだろう。誰が犠牲になるかは運次第さ」

「果たしてそうかしら？」

アルフィリースの疑問に、ロゼッタは笑っただけだった。

「でも断る権利がアンタ達にあるかな？」
「どう言うこと？」
「断るならこの部屋を出て行ってもらおうか。この部屋はアタイの命令で無理矢理部下をどかしてるんだからね」
「さっきその部下さんを助けたのは私だと思うけど？」

アルフィリースが負けじと言い返すのを、ロゼッタは簡単に笑い飛ばした。

「あんな奴らが何人死のうが知ったことか。だからアタイはあんたに恩なんて感じちゃいないよ」
「とんだ人ね」
「褒め言葉にしか聞こえないね。それに褒められついでに言うと、囮は別にいるのさ」
「・・・村人ね」
「その通り」

ロゼッタがニヤリとする。

「村人も連れて脱出する。あいつらは状況がわかってないだろうから、糧食や荷物を持って逃げるだろうねぇ。足も遅いし、トカゲはあいつらから襲うだろうよ」
「なんて提案をするんだ」

ミランダがロゼッタを軽蔑するような眼差しで見て、吐き捨てるように言った。だがアルフィリースは冷静にその案を検討していた。

「・・・なるほど、いい考えかもしれないわ」
「ちょっと、アルフィ！？」
「ははっ、ただの甘ちゃんかと思ったが、中々どうして良い判断で

きるじゃないか。気に入ったぜ！」

ロゼッタがアルフィリースの肩をバンバンと叩く。アルフィリースは少し煩わしそうにその手をのけると、冷たく言い放った。

「その前に一つ聞いておきたいのだけど」

「ん？　何だ？　アタイの経験人数でも聞くか？」

ロゼッタが気を多少許したのか、下品な冗談を言い始める。だがアルフィリースは相手にしない。

「斥候を出す程度の知能があるなら、敵にボスのような個体はいないの？」

「ボスかどうかはわからないけど、一頭だけ大きい奴は見たことがある」

「なるほど。それで、決起は？」

「準備もあるから明日夜が明けるころに。トカゲは夜目が利くから、夜の方がヤバい」

「分かったわ」

それだけ言うと、ロゼッタはさらに下品な冗談をいくつか飛ばして部屋を出て行った。そしてアルフィリースはリサに向き直る。

「ごめんね、リサ。まだそんな体なのに、もう出発になりそうだわ」

「いえ、体調は戻りつつあります。ミランダが先ほど飲ませてくれた薬が効いてきたのでしょう。後は寝れば治るかと」

「そう。無理はしないでね」

「それは良いとして、アルフィ。先ほどの言葉はどういう意味ですか？」

リサが問い詰めるような目線をする。

「先ほどって？」

「村人を犠牲にする話です」

「ああ、あれね」

アルフィリースが頷く。

「まあ私を信じなさい。悪い様にはしないから」

「・・・ならいいのですが」

「その前に、インパルスにも働いてもらわないとだめかも」

「ボクかい？」

インパルスが剣の形から人型になる。

「敵が群れならインパルスの力が必要かも」

「それはいいけど、エメラルドはボクを何度も振るえないよ？」

「どういうこと？」

インパルスの真意をつかめず、不思議そうな顔をするアルフィリース。そんな彼女にインパルスは説明を始める。

「いいかい？　ボクのような精霊剣は、言ってしまえば膨大な力の塊だ。もちろんその影響は使い手自身にも及ぶ。だから持ってるだけならまだしも、ボクを剣として振るう時、所有者は無意識に自身の魔力で自らをガードする。そうなるとエメラルドも疲労するし、彼女がボクを振るうとして、せいぜい3撃が限界かな」

「えー、何それめんどくさい」

「何言ってんのさ。人間が使う魔術の中で、雷撃系かつ最強級の攻撃を、3発も詠唱なしに使えるんだよ？　こんな便利な事がどこに

あるのさ」

インパルスが呆れたように腰に手をやる。どこか威張っているようにも聞こえるのは、気のせいではないかもしれない。

「それにもう一つ」
「まだあるの？」
「もうじき雨が降る」

インパルスが空を指さす。見れば空は明らかな曇天になってきている。黒い雲に光は遮られ、もう数刻で雨が降るだろう。

「雨の中でボクを振るえば・・・」
「全員感電するって？」
「その可能性もある」

インパルスが得意げに言ったので、アルフィリースは呆れてしまった。

「使えないのね、インパルスって」
「ほっといてくれ！　精霊剣になんて言い草だよ！」
「じゃあインパルスは計算できないとして」

抗議するインパルスの頭をアルフィリースは押さえながら、エメラルドの方を向き直る。

「雨が降る前にエメラルドに調べて欲しいことがあるの」
「？」
「ユーティ、通訳して」
「はいはーい」

そうしてアルフィリースは何かこそこそと話し合うと、エメラルドは一目散に窓から空に出て行った。

「さて、後はエメラルド次第ね。脱出に向けて、私達も食事を取ったら早く寝ましょう」
「我は馬の様子を見てくる」
「アタシはとラーナは水を確保しておくよ」
「さて、私は楓に頼んでこの村の村長さんでも探すかな。グウェン、ダロン、リサをよろしくね？」
「いいだろう」

そうして各自が脱出に向けて行動を開始するのだった。

続く

魔剣士、その４～脱出への道～（後書き）

次回投稿は７／２（土）１９：００です。

魔剣士、その5～脅迫～（前書き）

～あらすじ～

魔獣の包囲網を突破するため一計を案じるアルフィリースだが・・・？

魔剣士、その5～脅迫～

「音を立てるな」
「剣も抜くなよ。雷鳴に反射する」

アルフィリース達と、傭兵達、それに村人達は叩きつけるような嵐の中を脱出していた。いずれトカゲ達の警戒網に引っ掛かるのは明白だが、少しでもその時間を遅らせるため嵐にもかからわずそろそろと進む一行。
その中で。

「リサ、体調は」
「完調、とはいきませんが。かなり元に戻りました。もう大丈夫でしょう」
「ならいいけど。決して無理はしないでね」
「今回の事はリサの責任です。本当に申し訳ない・・・」

リサがしょんぼりとしたので、アルフィリースは肘で小突いて彼女を励ます。

「気にすること無いわよ、リサ。それに上手くやれば、予想以上の収穫があるかも」
「？　どういうことです？」
「まあ見てて。それよりもセンサーの調子はどう？」
「ええ、そちらの方はバッチリ大丈夫です」
「ならセンサーにトカゲが引っ掛かり次第、私に報告して」
「了解です」

リサが頷き、アルフィリースは列の前に戻ろうとする。その途中、

無駄に緊張している楓を見つける。

「楓」

「わひゃあ！」

アルフィリースが声をかけると、楓は頓狂な声を上げたのだった。

「何よ、変な声出して」

「アルフィリース殿、脅かさないでください！」

「いや、脅かしてないし」

アルフィリースはしばらくジト目で楓を見ていたが、おもむろに、

「楓、貴女まさか・・・雷が怖いの？」

「・・・ま、まさか。そんなわけがないでしょう？」

そういう楓の挙動は誰が見ても不審だった。アルフィリースはそんな彼女を可愛らしいと思うと、雷が鳴るまでしばらく待ってみる。ほどなくして雷が鳴ると・・・

「ひえええええ！」

と怯える楓が期待通り見えたのだった。想像通りの光景に満足したアルフィリースは自分の場所に戻って行く。

「それでインパルスを見る楓が、どことなく落ち着かないのね。納得」

などと呟きながら。

そうして一行はそのまましばらく進んでいた。まだ暖かい時期と

はいえ、秋が来る兆候でもあるのか冷たい雨が一行を打つ。幼い子供などは体力を奪われていくが、それでも泣き叫ぶことがどういう結末を招くのか察しているのか、不満一つ漏らさない。
その中で寒さに耐えかねたのか、ついに赤子が声を上げて泣き始める。その声に傭兵が怒鳴る

「その子どもを黙らせろ！」
「ちょっと、怒鳴らないでよ！」
「なんだと、この女！」
「黙りな、グスタフ。お前の声の方がデカイ」
「くっ」

ロゼッタに制されて傭兵が黙る。そしてその時、リサがアルフィリースの背中をつつく。

「アルフィ、来ました」
「どっちから？」
「全方位です。どうやらトカゲは囲みを作っていたようですね。まだ速度はそれほどでもありませんが、距離が詰まれば一気にくるかと思います」
「ちょうど前方が丘で視界がきかないものね。あの丘の向こうくらいかしら？」

その言葉にリサが頷く。

「その通りです。にしてもいいのですか、傭兵達に知らせなくて」
「いいのよ。知らせようがどうしようが、どちらにしても彼らの行動は同じだわ」
「アルフィの計略が上手くはまると良いのですがね」
「今の所どんぴしゃりかな。彼らが陽動を仕掛けないのもそうだし、

馬も彼らは持ってるくせに使ってないでしょう？」
「・・・なるほど」

アルフィリースの言う通り、傭兵達はまるで馬を使っていない。リサが朝起きた時に傭兵達の馬らしきものは感知済みだったので、これは妙な話だった。そして傭兵達は事もあろうに馬を村人に譲ったのだ。

「どうして彼らは馬を使わないのでしょうか」
「一つの理由は説明したわよね？　もう一つは馬って非常に臆病な生き物だから、周囲から一斉に襲われたら恐慌状態になって手綱なんか取れないわよ。よほど鍛えた使い手か、あるいは訓練された馬じゃないとね。逆に混乱した馬は危険だし足手まといだわ」
「なるほど。ではエメラルドは」
「既に先行させてるわ」

アルフィリースが笑ったので、リサも複雑な心境だった。かなり博打に近い作戦だが、時間も準備もできない中では上々かもしれない。

「（まあ最悪、私達だけでも逃げるとしましょう）」

リサがそのような事を考える一方で、トカゲ達の包囲網は順当に狭まってきていた。そしてついに村人の一人が、視界にトカゲを取らえる。

「トカゲだー！」
「来たか」

ロゼッタが反応する。

「よし、お前ら予定通りだ！　森まで走れ！」

ロゼッタの号令一科、傭兵達は一目散に森に向かって走り始めた。当然村人のことなど置いてきぼりである。最初からロゼッタ達は村人を囮にして、自分達は森に逃げ込むつもりだった。眼前に見える森は木が密生しており、トカゲ達は入ってこれないと踏んだのだ。そのために傭兵達は馬も連れていない。森にかけ込むためには邪魔だし、アルフィリースの予測通り、馬がトカゲに非常に怯える事を彼らは知っている。案の上、トカゲの上げる奇声に馬達は怯えて制御を失い、村人達は混乱状態となっていた。

もちろん傭兵達の何人かもその影響は受けるわけだが、それでも彼らは一目散に逃げていた。元々はこの依頼のために集められた人間達である。それをロゼッタが鍛えて統率がとれるようにしたわけだが、依頼を終えた今、彼らに連帯感などありはしない。傭兵にとって自分達の命異常に大切な者などありはしない。そして襲われる村人たちを尻目に、傭兵達の先頭が森に届こうかというその時である。

「よし、ロゼッタのアネゴの言う通りだ。逃げ切ったぜ！」
「少し村人には悪い気もするがな」
「知るかよ、運が無いのさ」
「まあそうだな・・・何っ！？」

傭兵の一人が叫ぶ。目の前に突然轟音と雷鳴が出現したのだ。先頭の人間達は吹き飛ばされ、痺れ、難を逃れた連中も頭を抱えてうずくまる者がほとんどだった。ロゼッタと後何人かのつわものは、身をかがめただけで何とかやり過ごすことができたが、それにしても何の前触れもなく目の前に雷鳴が出現したのだ。ロゼッタですら驚いている。

「なんだ？　何が起こった!?」
「精霊剣の力よ」

ロゼッタがはっと身を起こすと、後ろにはいつの間にかアルフィリースが立っていた。

「ねぇ、あなた達。村人を散々食い物にしておいて、あげくに囮にして逃走するだなんてそれは畜生にも劣る行為だと思わない？」
「知るかっ！　自分の命あってのものだねだろうが？　弱い奴はこのガーシュロンでは死ぬしかないんだよっ！」
「確かにそうね。でも、それならあなた達も死んでみる？」

アルフィリースの声が凄みを帯びる。その口調に、思わずロゼッタも青ざめた。

「あの精霊剣を持った女の子ね、私の言うことならなんでも聞くの。だからトカゲごとあなた達をケシズミにしなさいって言ったら、ためらいなくやると思うわ。ああ、試してみろなんて言わないでね？　試したら本当に炭になるから」
「ち、それで？　アタイ達にどうさせたい？」
「話が早くて助かるわ、ロゼッタ」

アルフィリースがニコリとする。そのくったくのない笑顔が、周囲の傭兵達にはなおのこと怖かった。ロゼッタもまた目の前のアルフィリースを侮っていたことを悔やむ。自分が想像する以上の修羅場をアルフィリースが経験している事に、今気がついたのだ。

「（こんな場面でこんな笑い方する奴見たことないよ。完全にどこか一本吹っ切れてやがる）」

ロゼッタの後悔も、もはや先に立ちはしない。こうなってはアルフィリースの提案を聞くのがもっとも早いのだ。そのくらいの計算はロゼッタにもできる。

「トカゲを追い払う」
「どうやって？」
「さっき私達のセンサーがボスらしきトカゲを感知したわ。それを倒せば撤退するはず。命令系統が存在するような集団ならね」
「それでも撤退しなかったら？」

ロゼッタがアルフィリースを睨む。

「消耗戦になるでしょうね。トカゲが私達を諦めるまで戦うわ」
「はっ、話になりやしない！　なんて穴っぽこだらけの作戦だい？」
「あら、ロゼッタの作戦はもっとひどいのよ？」

アルフィリースが楽しそうに笑う。ロゼッタは意外な言葉に目を丸くした。

「なんだって？」
「あの森を構成する木が何か知っている？」
「知るか！」
「威張ることでもないでしょうに。あの森を構成する木はだいたいがコルトっていう木なの。私の仲間が確認したから間違いないわ。コルトは根をあまり張らないから、人間でも大人を１０人ほど集めて引っ張れば、抜ける事も多いわ。あのトカゲなら苦もなく押し倒すかもね」
「・・・」
「それにトカゲは元々森の生き物よ。狭いところも平気だし、森の

中でも平然と追いかけてくるかも。そうなったら、飛んで火にいる夏の虫なわけよ。あなた達は」

「・・・チクショウ」

アルフィリースの言葉にロゼッタは悪態をつくのみだった。長帯陣でロゼッタもまた判断力が低下していたことも否めないが、戦って勝つだけの算段がつかなかったのも確か。ロゼッタは元々逃走を嫌うタイプの戦士なのだ。昔から逃げ出してロクな事がない。生きる事は戦って敵を倒すことだと思っている。だからこそ今回の逃走も苦渋の選択だったのだが、やはりロクな事にならなかった。

ロゼッタはアルフィリースの目を見る。背にトカゲの大軍が迫る状況で、まるで揺るがない目。ロゼッタは昨日までとは別人のようなアルフィリースをそこに見た。

「やるしかないのか」

「その通りよ。それよりも傭兵なら、さんざん良い思いをした分、村人に恩返しをするつもりで働くといいわ」

「柄じゃないんだよ！　てめぇは聖人君子みたいな言葉ばかり吐きやがって、何様だい！？」

「あら、そんな良い者じゃないわ私は。だって、あなた達がトカゲに蹂躙される程度の実力しか無かったら、囮にして逃げるつもりだもの。だから見捨てられたくなかったら、一生懸命戦ってね？」

笑顔で語るアルフィリースに傭兵達が戦慄を覚える。とんだ人間と関わったことを、傭兵達は後悔し始めていた。

「なんて事を言う女だい！？」

「今さらでしょうよ。だいたい貴方達が村人にしたことじゃないの？　村人達の気持が少しはわかったかしら？」

「・・・」

「それにあなた達がもう少しまともな人間なら、私だって相応の態度もするわ。でも、ケダモノ相手に容赦するほど私は甘くないの。自分達を人間扱いしてほしかったら、それなりの証拠を見せてほしいわね」

アルフィリースが剣を抜き、構えるのを見て全員が後ろを振り返れば、既に後ろにはトカゲ達の群れが迫っていた。ダロンやミランダ、エアリアルが奮闘していたが、多少時間を稼ぐのが精一杯だったらしい。その代わり、予め村長と打ち合わせをしていたアルフィリースは、村人たちを最小限の被害で森に向けて逃がすことに成功していた。

「さて、気合を入れてかかりましょうか。正念場よ」
「くそっ！　後で覚えてろよ!?」
「互いに生きてたらね。行くわよ!」

アルフィリースとロゼッタは傭兵達を引き連れ、村人たちと入れ替わるようにしてトカゲ達に突貫していくのだった。

続く

魔剣士、その5～脅迫～（後書き）

次回投稿は7／3（日）19：00です。

魔剣士、その6～連携～（前書き）

～あらすじ～

魔獣を撃退するために強引な手段を取ったアルフィリース。その結果は果たして・・・？

魔剣士、その6～連携～

そして巻き起こる阿鼻叫喚の渦。１０体程度の数でも、準備をした村でさえ苦戦するのである。目の前には数百からのトカゲの群れ。戦力差は明白だったが、アルフィリース元より全てを相手にするつもりはない。狙うはボスのみ。

「リサっ！」
「わかってます。ボスはこの指先、１００m程に！」
「了解！　皆、エメラルドが来るまで粘ってね！」
「わかってる！」

実際に数百のトカゲが襲いかかってくるといっても、同時に相手をするわけではない。それに巨体が災いしてか、トカゲは自分達同士が邪魔で喧嘩になっており、思ったようにアルフィリース達に飛びかかれないのだ。

「（やっぱり、そんなものよね）」

エアリアルから巨大な生物はおうおうにしてそのような事を起こしうると聞いていたアルフィリースは、わざと混戦に持ちこんだのだ。傭兵達もすぐにその事を悟ったのか、思ったよりははるかに戦える状況に自分達が驚いていたようだ。

「あるふぃ」
「来たわね、エメラルド」

村人が全員森の中に退避したのを確認したエメラルドが、アルフィリースの元に飛んで来たのだ。

「エメラルド、あの方向にインパルスを全力で振って！」
「ヤー！」

アルフィリースとの打ち合わせ通り、エメラルドは躊躇うことなくインパルスを振りかざした。そして轟く雷鳴がトカゲの群れを切り裂いていく。

「さすがインパルス。凄いわね」
「すごい？」
「そうよエメラルド。さて、後はダロンと楓と私の出番ね！」

アルフィリースの元にダロンが大きな杭を抱えてやってくる。巨人のダロンに見合う武器は中々無いため、壊れた家の木材を拝借して昨日のうちに何本か削っておいたのだった。そしてまた楓もアルフィリースの後ろに控えている。

「アルフィリース、俺が先行するぞ」
「ええ、お願いするわ」
「よし」

ダロンはそのまま走り出し、トカゲのボスの所に向かう。さすがにボスは体力も高いのか、インパルスの一撃でも倒れておらず、少しその身を焦がした程度である。だがダメージは十分にあるのか、動きがかなり鈍くなっていた。

「ぬおおおお！」

のろのろと動くボスに向かって、気合一閃ダロンが大跳躍をする。そのまま杭でトカゲの体を地面に縫い付け、トカゲが悲痛な叫び声

を上げる。

「ギュルルル！」
「いまだ！」
「よしきた。楓、やるわよ！」
「承知！」

楓が魔眼の準備を。アルフィリースは火系の魔術を詠唱する。

【火の精霊サラマンデルよ。我が腕の内、集いて集いて塊となせ。塊となりて球となれ】

アルフィリースが炎の精霊を腕の中に抱えるように集めて行く。雨の中では炎の精霊は相性がかなり悪いのだが、一度集めてしまえば楓の魔眼が発動する。

楓の魔眼は自然発火（ファイアスターター）ではない。楓の魔眼の能力は、「視野に収まる炎を自由に操る」ことである。つまり、炎が無い限りは何の効力もない魔眼なのだ。それに視界に収まらない炎を扱うことはできない。その代わり視野に収まりさえすれば、どんな炎でも自由自在である。たとえば炎で鎖などを構成する事も出来るし、氷や水の魔術をぶつけても、楓がその認識した炎の形を見失わない限り炎が消える事はない。楓はこの魔眼を操炎眼（フレイムワークス）と名付けた。

そしてアルフィリースが詠唱を終えないまま、その火球を維持する。そうすることで炎の精霊を集めた続けることができるのだ。その炎を使って、楓が炎の矢をいくつも作り出す。

「喰らえ！」

楓が放つ何本もの炎の矢。それはトカゲに刺さると、今度は蛇のように姿を変え、トカゲの体内に潜り込む。

「ギュルルルル！」

トカゲが苦しさの余り絶叫するが、楓は容赦しない。万一トカゲが魔王以上の耐久力を備えていた場合を考え、全員で考えた作戦である。呪印を使えば跡形もなく粉微塵にできようが、それではアルフィリースに負担がかかりすぎる。アルフィリースの呪印を使わずに、どのように巨大な生物を倒すか。それがここ最近の彼女達の話し合いの内容だった。

そして話し合いの甲斐あってか、トカゲのボスは断末魔の悲鳴と共に動かなくなった。

「クオオオオ！」

「やったか？」

「トカゲが撤退します」

リサの言う通り、ボスをやられたトカゲ達が算を乱して逃げ出した。アルフィリースの目論見は見事当たっていたのである。

「ふううう」

「助かったようだな。一か八かではあったが」

ダロンが冷静に状況を分析する。

「これで逆にトカゲが向かって来るようなことがあったら、かなり危なかったわね」

「だがそれでも作戦はあったのだろう？」

「もちろんよ。最悪、私が大暴れする準備はあったわ」

「怖い女だ」

ダロンは無表情のまま言い放つ。そんな彼にアルフィリースは笑顔で返すのだった。そこにミランダが走って来る。

「それにしてもアルフィ、普段から使える魔術の威力が上がってないかい？」

「やっぱりそう思う？　昨日大地の魔術を使った時もそうだったんだけど、どうやらそうなのよね。ただ何発も使えないとは思うけど。呪印を沢山使ったせいかなぁ？」

「呪印が馴染んでいるのかもしれませんね」

ラーナがアルフィリースの疑問に答える。

「馴染む？」

「ええ。押さえつけると反発するなら、体が呪印に適応して取り込もうとしているのかもしれません。推測ですが」

「ふぅん。まあ副作用が少なくなるなら言うことなしよ」

アルフィリースはお気楽に笑ったが、言うほど簡単な事ではないだろう。アルフィリース達が一息ついて談笑する場面に、明らかに不機嫌そうなロゼッタが歩いてくる。

「・・・」

「あらロゼッタ。そっちの被害は？」

「・・・２０人程度がやられただけだ。あの戦力差を考えれば奇跡だな」

「やっぱり腕ききだわあなた達。そのくらいで済むのなら」

アルフィリースが事もなげに言ったので、ロゼッタはアルフィリースの胸倉をつかみ上げる。

「ふざけるな！　こんなことに巻き込みやがって！」
「あら、あなたは『村人の命なんか知るか』って答えたのよ？　人の命を大切に出来ない人間は、自分の命も大切にされない。長らく生きていて、そんな基本的な事も知らないの？」
「知ったような口を！」
「聞くわよ。だって私はこの考えで生きているのだから。ロゼッタ、あなたとは相入れないかもしれないけどね」

その言葉で睨み合う二人は、ロゼッタがやがてアルフィリースを掴む手を離したことで治まった。

「胸糞悪い女だよ、お前。聖人君子ぶりながら他人を平気で利用する。ただの悪党よりも、何倍も性質（タチ）が悪い。二度と顔も見たくないね！」
「そう？　残念ながらずっと見ることになるかも」
「どう言うことだ？」

ロゼッタが苛立ちも露わにアルフィリースを睨みつける。

「ロゼッタ、あなた私の仲間になりなさい」
「はあ！？」

ロゼッタだけでなく、ミランダや他のメンバーまでが驚きの声を上げる。

「どういうことだ？」
「私はこれから自分の傭兵団を作るのだけど、貴女の力と経験が欲しいの。こんな戦場で放っておくには、あなたの力は惜しいわ」
「ふざけるな！　さっきの話を聞いてなかったのか？」
「聞いてたわよ。でも関係ないわ。私は貴女が欲しいの」

「勝手に言ってろ！　アタイは誰にも従わない。アタイは一人でやってきたんだ。今までも、これからも！」

ロゼッタが激昂するのを、アルフィリースが悲しい顔で見つめていた。

「・・・そうして、いつか一人で名も無い戦場で野垂れ死にするのに？」

「そうだ！　傭兵はそんなものだろう？」

「私は違うと思う」

アルフィリースは首を横に振る。

「私達は傭兵で、剣を取って戦うことを選んだし、あるいは選ばざるを得なかったけど・・・それとこれと一人でいるかどうかは全く別の問題だよ？」

「・・・やはりお前とはそりが合わないね。考え方が甘すぎる」

「それでも。私は自分の信念を曲げない。そんな生半可な覚悟では剣を握ってはいない」

「そこまで言うならアタイを力づくで従わせてみるんだね」

ロゼッタが剣をアルフィリースに向ける。

「所詮アタイ達は傭兵。言葉よりも、剣（こっち）で語るのが似合ってる」

「やっぱりこうなるのね」

「そうさ。アタイはいつもこうしてきた。そうやってここまで生きてきたんだ。アタイに剣で勝ったら何でも言うこと聞いてやるよ。仲間にするもよし、煮るなり焼くなり好きにしな」

「わかったわ。勝ったらいいのね？」

だが、逆にアルフィリースは剣を収めてすたすたと歩き始める。
その動作に呆気にとられる一同。

「何をしてる！？」
「え？　戦う準備だけど？」

アルフィリースはその辺に落ちた剣をロゼッタの周辺に無造作に刺し、何かをやっている。その様子を訝しんだロゼッタは思わずアルフィリースに問いかけてしまう。もちろん挑発も兼ねてのことだ。

「お得意の魔法は使わないのかい？　剣じゃアタイに勝てないだろう？」

ニヤつくロゼッタに、アルフィリースは地面に剣を刺しながらふっ、と軽く笑う。

「使おうかと思ってたけど、やめたわ」
「？」
「弱い者いじめは嫌いだから、ハンデに魔術は封印してあげる」

その言葉に、ぶち、と何かが切れるような音を一同は聞いた気がした。ロゼッタの表情を見れば、眉がひくひくと動き、怒りが頂点に達しているのがよくわかる。

「こ、このやろおおおお！」
「野郎じゃないわよ。言葉は正しく使いなさい、お里が知れるわよ？」

対するアルフィリースは冷静そのものだったが、完全に切れたロゼッタは悪鬼のごとき表情と勢いでアルフィリースに跳びかかって

行くのだった。

続く

魔剣士、その6～連携～（後書き）

次回投稿は7／4（月）19：00です。

魔剣士、その7～雨中の戦い～（前書き）

～あらすじ～

雨の中戦うアルフィリースとロゼッタ。軍配は果たして・・・？

魔剣士、その7～雨中の戦い～

キィン・・・

雨嵐の中、アルフィリースとロゼッタの剣撃が響く。ロゼッタの斬馬刀のような剣を受けてはアルフィイリースの剣はひとたまりもないため、アルフィリースはロゼッタの剣に対して横から打ちこみ、力を逸らしにいっている。だが言うほど簡単な事ではない。一つタイミングを間違えば頭から真っ二つにされるのだ。アルフィリースがロゼッタを挑発することで剣筋を単調にしていなければ、こうまで上手くはできないだろう。

その緊張感高まる勝負の中でも、アルフィリースは不思議と冷静そのものだった。

「（前髪切っておけばよかったかな～雨だと張り付いて邪魔だわ）」

などと呑気なことすら考える余裕があった。それもこれも、師匠から言われたことをアルフィリースは前日の夜に思いだしていたのだった。

真剣勝負の時の心構え。戦う時には常に冷静でなくてはいけないこと。そして自分の持ちうる全ての能力を戦うことに向けなければいけないこと。例え親の仇と戦う時でも、真剣勝負において余計な感情を持ちこむことは既に負けているに等しいと、アルフィリースはアルドリュースに教えられていた。

アルフィリースにしろ、ロゼッタにはかなり腹を立てていたのである。自分と同じ女性が自分の部下に乱暴されているというのに、放っておくことがアルフィリースにはまず信じられなかった。だがかなりロゼッタが腕に自信があることも明白。だからといって引くこともしたくない。そしてアルフィリースはかなり夜遅くまでロゼ

ッタとの戦う状況を想定し、感情の整理から全てを付けていたのである。つまりは準備万端整えてきており、トカゲとの戦いは準備運動程度にしか考えていなかったのだ。そう考えればトカゲとの戦いが予定通り終わったのは、アルフィリースにとってかなりありがたかった。

そして準備を整えて見れば、昨日はあれほど凄まじく見えたロゼッタの剣技も、かなりの部分が身体機能と力押しに寄っていることがわかる。

「（これなら捌ける。かなり速いけど、それだけ。目も手も付いていける！　今日が雨でよかったわ。それに師匠の変幻自在な戦い方に比べれば、なんてことはないもの）」

これが乾いた地面ならそうはいかなかったかもしれない。だがぬかるんだ地面では、巨体のロゼッタは動きを取られてしまう。しかも今日のロゼッタは戦いを想定したのか、きっちり肩当てや胸当てを付けているのだった。対するアルフィリースは逆に小手のみであり、かなり軽量化していた。ロゼッタの体さばきは制限され、逆にアルフィリースはかなり自由に動き回れる。

そして今日のアルフィリースの身軽さは、ミランダですら見たことが無いほどの俊敏性を誇る。

「ちょっと、何がどうなっているのですか？　アルフィリースはこんなに強いのですか、ミランダ？」

「・・・アタシもびっくりしてるんだよ」

「驚いた。アルフィリースは我達と手合わせする時は加減していたのか？」

「それはどうかな」

グウェンドルフが口を出したことに、一同が彼の顔を見る。

「私はアルフィリースがアルドリュースにと武芸の練習をする所を何度も見ているが、その頃からアルフィリースの戦い方は奔放そのものだった。だが型というものが余りに無いため、アルドリュースがしっかりとした騎士剣を教え込んでいたのを覚えているよ。
　私もなぜそのような事をするのか聞いたことがあるが、一つにはきっちりした剣の型を教えることで、奇抜な剣技にも対応するようにしたこと。無駄な動きを減らすことで体力の消耗を避けさせるようにした事。戦場では甲冑を身につける事が多いため、そのような時の動きを想定させた事。一番は、将来的にアルフィリースがどこかに仕官した時の事を考えたのだと言っていたよ」
「なるほど、いくら強くても我流では騎士とは認められにくいから」
「そういうことだよ。でも今アルフィリースはそういうものを全部取り払って、自分本来の剣を振っている。しかも剣の基本を押さえたことで、より洗練された剣をね」

　グウェンドルフの説明通り、アルフィリースの剣は彼女の魂の在り様を象徴するかのように自由だった。そして、いつの間にか地面に刺した剣を抜いて二刀に切り替えたアルフィリースは、手数でロゼッタを追いこんで行く。

「せりゃあ！」
「ぐくっ」

　いつの間にか形勢は逆転していた。アルフィリースがロゼッタを追い詰め始めているのだ。

「強い」
「アルフィってば・・・これじゃうかつにからかえないじゃん」

そんな外野の声も無視するほど、アルフィリースは戦いに没頭していた。そして自然と口の端からこぼれる笑み。これほどアルフィリースが遠慮なく剣を振るえるのは師匠以来だった。その事がアルフィリースには嬉しい。

「（やはりロゼッタは凄い。これほど私に有利な状況を作り出して、この戦いぶり。私は何としても彼女が欲しい！）」

だがアルフィリースが戦いの最中に笑った事は、ロゼッタにとってはさらに馬鹿にされていると映ったのか。顔を怒りでますます真っ赤にするロゼッタ。

「（なぜだ、なぜアタイがこんなに押し込まれている？　こんな甘ちゃんに負けるわけにはいかないのに！）」

「くそおおおっ！」

ロゼッタが咆哮と共にアルフィリースの剣を強引に押し返そうとするが、アルフィリースはその力を利用して、逆にロゼッタの背中の上を転げるように飛び越える。

「何！？」

背中を取られたロゼッタが後ろを振り返ると、剣が目の前にあった。反射的にそれを斬り払うと、それはアルフィリースが地面に突き立ててあった剣を蹴飛ばしたものだったのだ。さらに二刀のアルフィリースが迫るが、アルフィリースは一本の剣をロゼッタにさらに投げつけると同時に、またしても地面の泥を蹴りあげる。

「こんなものでっ！」

「あああ！」

ロゼッタも負けじと剣を紙一重でかわし、かすった頭から鮮血が飛ぶ。そして泥も構わず目を見開くと、アルフィリース目がけて剣を振り下ろす。だがアルフィリースは最後の剣まで投げつけ、ロゼッタにそれを打ち払わせると、そのままロゼッタに飛び込むように体当たりしたのだ。

「なあっ！？」
「やああっ！」

そのまま泥まみれになりながら地面に転がる二人。そしてアルフィリースがロゼッタの上に馬乗りになると、ロゼッタはアルフィリースを殴ろうと拳を固めた所で、喉元に冷たい物がひたりと当たるのだった。それはアルフィリースの小手に仕込んだ刃だった。

「私の勝ちよ、ロゼッタ」
「・・・ちきしょうっ！」

仰向けになったロゼッタが悔しそうに固めた拳で地面を叩くと、戦いは終わりを告げた。アルフィリースの勝利である。
そのままの状態で息を整える2人。勝ったはずのアルフィリースが自分以上に息を切らせていることに、ロゼッタは気づく。

「・・・どうしたのさ。とても勝ったように見えないよ？」
「ここまで消耗するとは思ってなかったのよ。ロゼッタほどの剣士を殺さないように屈服させるのに、どれだけ私が神経使ったと思う？」
「ふん、褒め言葉として受け取っておくよ。だけど、アタイを殺さないように戦ってたってのかい？」
「最終的には。でも途中は忘れちゃってた。だって、あまりにも強

いから・・・できれば二度とやりたくないわ」
「そうだろうね。それより重いからどいてくんない？」
「ああ、ごめん！」

アルフィリースは慌ててロゼッタの上からどける。すると、ロゼッタはのそりと上半身を起こした。

「確かに１０回、いや。１００回やっても９５回以上はアタイが勝つだろうね」
「ええ、それは否定はしないわ。剣技はともかく、身体能力なんかを考慮すると間違いなくそうよ。今回これだけ有利な条件を整えてもぎりぎりの勝負だもの」
「ならなぜこんな真似をした？　アタイみたいな傭兵、そこまでして欲しいかい？　別に今さら文句を言うわけじゃないけどさ、アタイも腕に自身はあるが、他にも腕の立つ奴はいるだろう。Ａランクの傭兵なら、アタイも他に何人か知っている。そいつらでも良かったんじゃないか？」

ロゼッタは真剣な目つきでアルフィリースを見つめている。アルフィリース泥まみれになった顔をぽりぽりと掻きながら答えるのだった。

「それが私にもよくわかんない」
「はあ～？」
「気が付いたらそう動いてたって言うか・・・強いて言うなら、ロゼッタは私に足りない物を沢山持ってそうかなぁって」

アルフィリースが苦し紛れに笑うのを見て、ロゼッタは呆れて物が言えなかった。そして泥の中に再びばしゃりと寝転がる。

「あーあ、こんなのに負けるなんてねぇ。アタイもやきが回ったかなぁ？」
「ご、ごめんなさい」
「まったく謝らないでおくれよ。負けたこっちが悲しくなる」

ロゼッタは地面に寝転び空を見上げながら、これも自分の人生かと自嘲していた。だが不思議と悪い気はしない。どうせ人生に目標もないし、この女に付いていくのも一興かとも思う。そう考えると、なぜさっきまで自分が依怙地になっていたのかも馬鹿馬鹿しくなってくる。

「（なんでかな・・・きっとアタイと違って、この子が呆れるくらいまっすぐだからだろうね）」

ふとロゼッタが見れば、傍ではさっきまで命のやりとりをしていた相手を心配そうに見つめる黒髪の女が前にいる。ロゼッタは体を起こすと、雨が上がりかけていることに気がついた。どうやら空の端が明るくなってきているようだ。直に雨も上がるのだろう。自分の心も空が晴れる頃には同じように晴れやかだろうかと、ロゼッタは柄にもないことを詩人のように想像してみるのだった。

続く

魔剣士、その7～雨中の戦い～（後書き）

次回より新シリーズです。感想・評価など待っています。

次回投稿は7／6（水）21：00です。

魔女の来訪、その1～懐刀～（前書き）

～あらすじ～

黒の魔術師達の動きは色々な所に波紋を及ぼす。今回は・・・？

魔女の来訪、その1～懐刀～

＊＊＊

「テトラスティン様、お探しの物はあったのですか？」
「ああ、多分ね。今暗号を解いている所だよ。難しいけど、他の者にはやらせたくないから時間がかかるかも」
「左様ですか」

眼鏡を直しながらリシーが居住いを正す。馬車に揺られる中では眼鏡もすぐにずれるだろうにと、テトラスティンは苦笑する。もっとも眼鏡を付けるようにリシー指示したのはテトラスティンで、リシーの目はいたって正常な訳だが。単にテトラスティンの気分でそうさせているわけだから、ひどいものだ。

なんでもできる万能秘書のリシーが眼鏡と悪戦苦闘する様を横目で楽しみながら、テトラスティンはさる魔術士の手記を解読しているのである。

ミリアザールと会談を持ってから、テトラスティンは部下を通して彼女と密に情報のやり取りをしている。その中で、最近多発する魔王のルーツを探ろうとテトラスティンは各地で情報を集めていた。合成獣（キメラ）の専門家がいると小耳にはさみ、彼の元を訪れるも成果は得られず、しかも彼の作る合成獣は魔王などの完成品に比べれば粗悪品もいい所だった。

だが全く収穫が無かったわけでもない。遥か昔、テトラスティン自身も記録で読んだ事のある合成獣のエキスパートが実在したことを、その魔術士から聞きだしたのだ。その人物に関する情報をテトラスティンは可能な限り集め、ついに彼はその人物の工房だった場所を突き止めたのである。

だが当然のごとく、その場所はとうに無人となり荒廃していた。

ゆうに百年はたっているであろうその場所には、その男の手記と研究材料がいくつか残っているだけ。むしろ残っていただけでも奇跡に等しいのかもしれない。だが、その資料をざっと見るだけでもテトラスティンは気がついたことがある。

「（誰かが確実にこの研究を受け継いでいる）」

その魔術士――記録上では「ファーマス」と呼ばれる男は、様々な実験経過を残していたが、彼の工房に残っていた実験結果はばらばらであり、一部しかなかった。つまり誰かが持ちだしたのだとテトラスティンは想像している。

だが、誰がということまではわからない。彼の手記はすべて暗号化されているし、全てを読み解くのはかなり骨の折れる作業だった。全て読んだとしても、謎が解けない可能性も高い。その中でも、テトラスティンは気になる部分を先に解読してみた。手記の最後のページである。

「『私はついに・・・ついに理想のキメラを誕生させた！　これこそが人類の未来だ!!』か・・・」

人が自ら作り出した物に人類全体の未来をどうして託せようかとテトラスティンは思うのだが、どうもこのファーマスという人物が正気だったのかどうかは疑わしい。もっとも研究者などは、皆そのようなものかもしれないが。

「ふ、正気で無いのは私も同じか・・・」

「あ、ようやく気付かれましたか?」

テトラスティンの呟きに、すかさずリシーがツッコミを入れる。

「そこはだねリシー、放置した方が格好いいだろう？」
「そんなことは知りません。それよりも」
「すみません、進路をふさがれました！」

馬車が止まり、御者が悲鳴を上げる。そこで目を合わせるテトラスティンとリシーの二人。

「人気のない道だしね、どうせ盗賊か何かだろう。リシー、任せる」
「仰せのままに。ところで、どのコースで行きますか？　皆殺し？　全殺し？　虐殺？」
「どれも大して変わらないじゃないか。まあほどほどにね」
「わかりました。ではほどほどに皆殺しで」

結局物騒な事を言うと、リシーは外に出る。しばらくして外から大量の男達の悲鳴が聞こえてきたが、最後は御者の悲鳴で締めくくられた。どうせリシーが脅したのだろうとテトラスティンは当たりを付けるが、彼は一切関知せず解読を続けていた。しばらくして汚れ一つないリシーが戻る。

「報告は？」
「あまりに問題が無かったので。全員身ぐるみひん？いて、恥ずかしい体位で晒しておきました」
「どっちが盗賊だかわかりゃしない」

いつもの事にもテトラスティンが呆れると、リシーが指を鳴らして再び馬車は進みだす。そのまま一刻も進んだろうか。またしても馬車が一つ大きく揺れた。
今度は、リシーとテトラスティン目が鋭く光る。

「リシー」

「わかっています。今度は尋常ではないですね」
「御者は」
「既にやられたでしょう」

その瞬間、車の上半分が斬り飛ばされた。リシーは伏せてかわし、テトラスティンは本を掴んだまま、下にずれるようにしてかわした。

「あーあ、髪が一部切れちゃった」
「テトラ！」

リシーがテトラスティンに迫る2本の剣を、メイド服から取り出した剣ですんでのところで食い止めた。剣の持ち主は全身鎧で顔が見えない。ヘカトンケイルの面々であった。
そしてあまりにぎりぎりの所で食い止めたため、リシーの顔がテトラスティンの眼前にある。テトラスティンはそんなリシーの顔に両手で触れ、眼鏡をそっとはずす。

「慌てなくてもいいよ、リシー。まだそこまでの危機じゃない」
「・・・失礼しました」
「ふふふ、今日は眼鏡の事はもういいよ。遠慮なくやっていい」
「ではコースはいかように？」
「決まっている。私に逆らう者は八つ裂きだ」
「仰せのままに」

それだけ言うと、リシーの姿がふと消える。ヘカトンケイルも思わずバランスを崩すが、彼らの体勢が元に戻ることはなかった。すれ違いざま、リシーが文字通り八つ裂きにしたからだ。
さらにリシーはメイド服を脱ぎ捨て、戦闘態勢に入る。全身は黒のぴったりとした材質の服で覆われ、あらゆる所に仕込み刃が装備できるように皮でナイフからマチェット程度の長さの刃物が固定し

てある。剣士と言うよりは、殺し屋と言った方がしっくりくるようないでたちだった。

馬車の上に立ったリシーを囲むのは、２０体近いヘカトンケイル。だが彼女は一向に怯まない。

「我が主人の命により、八つ裂きにさせていただきます。お覚悟を」

そう言うと、リシーはヘカトンケイルの群れの中に斬り込んで行った。その状態ですら、テトラスティンは本を読むのを止めなかった。リシーの方など見もしない。それは彼女の強さに対する絶対的な信頼。

しばらくして。

「会長、終わりました」

「御苦労さま」

テトラスティンがぱたんと本を閉じると、周囲には命令通り八つ裂きになったヘカトンケイルの残骸と、返り血で真っ赤に染まったリシーが佇んでいた。その死骸をちらりとテトラスティンが横目で見た。

「どうやらこいつらもキメラだね」

「はい。これが中原で暴れているという、噂のヘカトンケイルかと」

「なるほど、確かにそういった報告があったね」

テトラスティンが半ば仰々しく感心したように頷く。

「リシーはこいつらをどう見る？」

「動きは単調ですが、かなり強いです。正面から戦えば、普通の人間や獣人では対抗できないでしょう。その分魔術耐性は低いと察し

ますが」
「なるほど、ならばまだ改良の余地のある未完成品と言ったところか。ならばこいつらが完成する前に一連の流れを止めたいね」
「同感です」

リシーが頷くと、テトラスティンは火球を手に作り出す。

「一応痕跡が残らないように燃やしておこう、御者の死体共々ね。本当なら持ち帰って調べたいけど、何の準備もない状態では危険極まりない。死骸にもどんな仕掛けがしてあるかわかったものじゃないからね」
「御意にございます。念のため、御者を適当に浮浪者から見繕って雇っておいて良かったですね。遺族への説明が面倒くさい所でした」
「そうだね。ここからはリシーが御者をやってくれるかい？」
「問題ありません」

それだけ言うとリシーは身軽に御者台へと飛び乗り、首のなくなった御者を地面に下ろす。そしてテトラスティンは御者ともども、ヘカトンケイルの死体に一斉に火を放った。その光景を見ながらテトラスティンは一瞬難しい顔をしたが、すぐに平静を取り戻す。

「あ」
「まだ何か？」
「天井がないと寒いなって」
「我慢しなさい、我儘小僧」
「ひどいな」

周囲の悲惨な光景とはまた裏腹に、2人はとぼけた問答をしながらその場を後にする。そして、しばらくしてその場に姿を現す影が2つ。

「見たかい、ヒドゥン？」
「ああ。なるほど、大した手駒を魔術教会は持っているな」

姿を現したのはヒドゥンとアノーマリー。相性の悪い２人だが、他のメンバーが忙しいため、今回はこの２人で現場に出向いている。もちろん魔術教会の長にして最高戦力であるテトラスティンの実力を確認するためだった。だが、ヘカトンケイル２０体程度では、力不足もいいところだったようだ。

「何者だろうね、あのリシーとかいうのは」
「さてな。調べさせはするが、少なくとも現状を見る限り尋常な実力ではない。アノーマリーよ、アレを倒せる手駒を持っているか？」
「やり方次第だと思うけどね。ただあれほどの戦力を保有しているなら、例え魔術教会のテトラスティンを立場的に孤立させても、大して効果はないかも」
「尤もな意見だな。どの道魔術教会は元々が孤立意識が強く、連携などとは無縁の連中だ。作戦の練り直しが必要か」
「そうかもね。だけどそれは、かつて自分も籍を置いた者としての意見かい？　兄弟子殿」

アノーマリーが皮肉たっぷりに言ったので、ヒドゥンが黙る。アノーマリーは意地悪くニヤニヤとしているが、ヒドゥンは苛立ちを押さえながらなんとか対応した。

「・・・昔のことだ。それに、あそこには私の求める物は無かった」
「今は？」
「その頃よりはいい。まだまだ研究途上だがな」

それきりヒドゥンが黙ったので、アノーマリーとしてもそれ以上

からかうわけにもいかず、まだ燃え盛るるヘカトンケイルを眺めているのだった。

＊＊＊

そしてやや日を置いて魔術教会本部に帰るテトラスティンとリシー。今回のお忍びは、公式行事の合間に行った隠密行動だったのだ。あれほどの戦闘を行っていても、その日の夜には魔術教会のパトロンたちと何食わぬ顔で会食をこなすテトラスティンとリシーである。

そして協会に帰ってほどなく執務室に戻り、本部を空けた間の報告を確認するテトラスティンだが、どうも入口の方が騒がしい様な気がする。

「なんだ？」

「様子を見てきましょう」

そうしてリシーが執務室を出ようとした瞬間、報告に入ってきた若い魔術士がいる。

「会長！　一大事です」

「お前の慌て方の方が一大事だ。冷静に話せ」

「は、はい。これは失礼をば！　ですが、魔女が3人、本部に直接やってきたのです！」

若い魔術士は、突然の魔女の来訪をテトラスティンに告げたのだった。

続く

魔女の来訪、その1～懐刀～（後書き）

次回投稿は7／8（金）２１：００です。

魔女の来訪、その2～同盟～（前書き）

～あらすじ～

魔術教会を訪れた魔女達がもたらす状況とは・・・？

魔女の来訪、その2～同盟～

魔術教会は騒然としていた。無理もない。魔術教会とは関与しないはずの魔女が、突然来訪をしたのだ。しかも3人同時にである。

魔術教会は、表面上はせいぜい少し大きな砦程度の規模の図書館といった場所である。その中に対外的に必要な機能を詰め込んでおり、テトラスティンの執務室もこの一部である塔の中にある。この建物の書籍は一般開放されており、玄関で通行許可さえもらえれば誰でも閲覧が可能である。また魔術教会の一般魔術は魔術教会に籍さえおけば学ぶことが可能なため、世間に向けた門戸は、ある意味ではアルネリア教会よりも開けているのだ。その点は以前魔術教会が秘匿性を高めるにあたり、誤解を招いた歴史的背景を参考にしている。

だが一方で、地下に多くの魔術士が研究用の工房を持つため、建物の地下は巨大な大迷宮となっている。その全容は教会の長であるテトラスティンでも把握しきれていない。もちろん彼もまた自分の工房を地下のどこかに持っているわけだが。

ともあれ、そのような一般閲覧が多い魔術教会では、検閲のために入口に立つ魔術士のレベルなどたかが知れている。そこに絶大な魔力を纏わせた女性が3人も入ってきたのだ。これは彼らにとって腰を抜かすほどの大事であった。もちろん、魔女達の美しい容姿が彼らの目を奪ったこともあるだろう。これはフェアトゥーセがそういった効果を期待して選んだ、魔女の中でもとびきり美しい3人である。自分と、闇のイングバル、大地のドラファネラである。魔術教会の中には魔女を敵視する派閥も存在するため、一時に攻撃されにくそうな顔ぶれをフェアトゥーセは選択したのだった。魔女といえど、美貌の使い方くらいは心得ている。

そして玄関で十分に注目を引いたことを確認すると、フェアトゥーセは大声を張り上げた。

「魔術教会の長に用がある！　あたしは魔女の長である白魔女フェアトゥーセ。教会長のテトラスティンはいるか！？」
「大声を出さなくても聞こえるよ、フェアトゥーセ」
自分の執務室から降りてきたテトラスティンが二階から姿を現す。
「来る前には先触れが欲しいものだね、うちの若い者が動揺してしょうがない。魔女が揃って一体何用だい？」
「あたし達が現れたくらいで魔術士が動揺してどうする。加えてあたし達の要件を聞く前にお願いとは、いつからお前はそんなに偉くなったんだい、テトラスティンの坊や？　二階から目上の者に向かって挨拶か」
「・・・これは失礼を、お姉様方」
テトラスティンが二階から飛び降りる。続いてリシーも。身軽に飛んだ彼らに若い魔術士達は驚くが、テトラスティンの事を良く知る面々は驚かない。テトラスティンの魔術の使い方を良く知っているからだ。
そして舞い降りたテトラスティンがフェアトゥーセに歩み寄り、手の甲にキスをする。
「部下への体面もあるので、平伏はご容赦を」
「まあいいだろう、このくらいにしておいてやる。それよりどこかあたし達だけで話せる場所は無いか？」
「では私の執務室に」
「いいだろう、案内しろ」
そうしてテトラスティンとリシーが先導しながら、魔女3人を導いていく。周囲はざわめくが、目端の利く者は既にそれぞれが行動

を開始していた。その中で悠然と歩く魔女達。その仕草は実に優雅で堂々としている。

魔女は一般的にその存在は伝説のようなものであり、物語では山奥深くに住まい、鍋で怪しげな何かをいつも作っているようなイメージである。魔術士ですらその認識はあまり変わらない。

だが実際の所、彼女達は自分が属する地域にて静かに自然と暮らしている。近年では特に薬草の知識を授けたりして地域の住民を手助けするように促しており、人と積極的に関わるようにしているが、魔女に対する認識が変化するにはさらに長い年月が必要になるだろう。

だが彼女達の生き方は魔術士達にはあまり理解されない。魔術士は己が栄達や、あるいは人の発展のために魔術を日々研究する。自然とは共に生きる存在ではなく、多くの魔術士達にとって制覇するべき対象であり、理論によって完全に分析されなくてはいけないものなのだ。なので精霊と直接契約を交わし絶大な力を手にしながらも、何の目的にも使用しない魔女の存在が魔術士達には理解できない。それは一方では魔女にとっても同じことで、自らが得た力を利用することにしか興味のない魔術教会の魔術士とは、決してその考え方が相容れないのである。

だからこそ、魔女が魔術教会を訪れるなど通常ではありえない。余程の一大事があったのか――様々な憶測が魔術士達の合間を飛び交う。そして、魔女を先導するテトラスティンは自分の執務室に辿り着いた。

「ここならいいでしょう。防音の魔術もかけてあるし、誰にも話は聞かれないはずです」

「いいだろう」

「お茶をお持ちしましょう。リシー」

「いや、結構」

お茶の用意のために下がりかけるリシーを、フェアトゥーセが制した。その目には微かに敵意が見える。

「何を混ぜられるかわかったもんじゃないからね。飲み物も食べ物も結構」

「ひどい言われようですね。そんなつもりはさらさらないというのに」

「わかったものじゃない。お前が以前やったことは史上最大級の外法だ。あたし達が知らないと思っているのか？」

フェアトゥーセがテトラスティンを睨む。

「これが知られればお前は破滅だ。魔術教会の連中には、お前を権力の座から追いたい者も多いだろう？」

「よせ、リシー」

いつの間にか、リシーがフェアトゥーセの喉元に後ろから剣を当てていた。今日のリシーは騎士のような男装の出で立ちなので、腰に帯剣している。その剣を音も無く抜き放ったのだが、魔女達に動揺は見られない。彼女達もそれなりの覚悟でこの場に乗りこんでいるのだ。

リシーもテトラスティンに咎められると、刀を鞘に収め一礼して下がるのだった。そしてテトラスティンもフェアトゥーセを睨む。その瞳にはミリアザールと話す時のような、どこか悪戯めいたような彼の無邪気さはどこにもない。冷酷な魔術教会の長としての瞳そのものだった。

「だが告発しようにも証拠が無い」

「そんなものは魔術士達が探しあてるだろう」

「そうだね。そしていらぬ犠牲が増える」

「お前・・・」

フェアトゥーセがさらに強い目でテトラスティンを睨んだが、彼は今度は視線を合せなかった。

「昔も今も私達の秘密を知る者は存在しない。そしてこれからもね」

「・・・テトラスティン、お前は一体何がしたい？」

フェアトゥーセの言葉にテトラスティンが自嘲気味に笑う。

「権力の座に興味はない。だが、この地位を使ってやりたいことがある。今はそうとだけ言っておこう。私の目的が達成できればこんな権力の座に興味はないね。エスメラルダにでもゆずってやるさ。口うるさい女だが、数少ない私の愛弟子の一人だからね。だが目的を達成するまでは何があってもこの地位は手放さないし、そのためなら何でもやるさ」

「そのために上位精霊を5体も犠牲にしてか？」

「それがどうした」

冷たく言い放たれる言葉にしばしフェアトゥーセとテトラスティンは睨み合ったが、しばらくして2人はため息をついた。

「・・・こんな言い合いをしにきたんじゃあるまい、フェアトゥーセ。だいたい魔女の義務を長期間放置していた貴女に言われたくはないし、その議論は平行線で決して相容れない。それよりも今はもっと建設的な話をしようじゃないか」

「・・・悲しいがその通りだな。確かにあたしに言えた義理ではないのかもしれない。だが今は魔女の長としての責務もある。この話はまた改めてしなければならないだろうね。それよりも今はお前が察している通り、別の案件があるんだ」

フェアトゥーセが話を仕切り直す。

「各地で発生している魔王に関してだ」

「その事か。ちょうどこちらもその件で動いている」

テトラスティンが座り直し、そこにリシーが彼にお茶を持ってきた。温かな茶を啜り、テトラスティンが安堵の息を漏らす。

その様子を見ながら半ばテトラスティンの対応も察していたのか、フェアトゥーセが一息に本題を切りだす。

「ならば話が早い。まだ全ての魔女に連絡を取ったわけではないが、このイングバルとドラファネラ他数名に話を聞いただけでも、既に各地で異変は掴んでいた。とみに、最近になって動きが顕著らしい」

「それに付け加えておくと、大草原では現在数百体の魔王が確認されている。大草原の生態系は無茶苦茶だ。遠からず大草原から魔王が溢れるだろうな。これはそれなり以上の勢力を持つ団体なら気が付いていることだ。諸国は大草原の情勢など気にしないし、まだ何も知らないかもしれんがな」

テトラスティンが冷静に言った言葉に、イングバルとドラファネラの顔色が少し変わり、2人は不安そうにフェアトゥーセを見る。だがフェアトゥーセもそのような事態は察知していたので、極めて冷静そのものである。

「なるほど。事態はそこまで切羽詰まっているのか」

「さてどうかな。一応魔術教会の征伐部隊を何隊か大草原に配備している。何かあれば彼らから連絡が入るだろう。今のところ魔王は大草原の北側でのみ活動しているようだからね。それで？　魔女としてはどう対応する」

「その話をしに来た」

フェアトゥーセはアルフィリースの事は伏せた状態で、自分が得た情報を話した。敵になった英雄王グラハム、暗躍する黒いローブの魔術士達。それら一つ一つをテトラスティンが真剣に聞いている。あらかた彼女が話を終えると、テトラスティンはしばらく考え込んだ後、ゆっくりと口を開く。

「・・・なるほど。こちらとしても色々調べておかねばならないな。そして歴史上最高の魔術士と謳われた英雄が敵となれば、それは真実由々しき事態だ」

「ああ。だからこそあたしがここに来た」

「つまりは？」

「魔女は改めて魔術教会と同盟を結びたい」

フェアトゥーセがきっぱりと言い切った。テトラスティンは予想していたが、改めて言われると難しい話だと思う。彼は腕を組んで考え込んでしまった。

「魔女の総意か？」

「いや。魔女の団欒はこれから行うけども、現時点で7名に話をした所6人の同意を得られた。かなりの確率で合意が取れると思う」

「僕個人としてもむしろ願ったりかなったりではある。人間の世界の話は我々でも情報収集ができるが、こと自然の世界の話になると魔女には敵わないからね。だが各派閥の連中が何というか」

「どういうことだ？」

フェアトゥーセが理解できないといった表情をするが、テトラスティンはうんざりした表情で返した。

「情けない事に、派閥の連中は権力争いできゅうきゅうしている。ここに魔女が同盟を結べば、誰が魔女と交渉するだの、主導権の取り合いになるだろうな。それだけならまだいいが、魔女に自分達の権益を取られるとかいう話も出るかもしれん」
「馬鹿馬鹿しい事この上ないわね。魔女は俗世の利益になど興味はないというのに」
「問題は、そういった認識をしている人間が少ないということさ」

テトラスティンはお茶のおかわりをリシーに注がせながら答える。

「だが同盟は必要な事だし、それは私の責任にかけて何とかしよう」
「いやに素直ね。裏があるのではないかと疑ってしまうわ」
「私はそれほど信頼ないのかい。こう見えても平和主義者なんだけどな」
「口にすると胡散臭いのよ。行動で示しなさい」

フェアトゥーセに厳しく指摘され、茶を飲みながら肩をすくめるテトラスティン。そして用事は済んだとばかりに魔女達は席を立つ。

「もう行くのかい？」
「ええ。こう見えてこちらも忙しいのよ」
「じゃあ大切な話をもたらしてくれた礼に、こちらも情報を」

テトラスティンは懐から本を取り出し魔女達に見せる。それはテトラスティンが解読していた本である。

「これは？」
「昔合成獣（キメラ）について研究していた魔術士の手記の一部だ。一応それ一冊は解読を終えたが、現在行われている合成獣研究よりも、既に数百年単位で進んでいる。その男は天才だよ」

「ということはまさか・・・」
「現在行われている魔王制作の、ひな型になった研究だろう」
テトラスティンの言葉に、フェアトゥーセがごくりと唾を飲んだ。
「これは・・・いつのものなの？」
「記録では３００～４００年前のものだ。それ一冊ではなんとも言えないが、研究も最初は個体として純粋な強化を施したかったようだ。過酷な環境に対して、どのような種が強いのかを研究していたようだね。だが研究の趣旨はやがて変わり、強い個体がいなければ、最初から作ってしまえばいいという方向に向かっている。やがてその魔術士は禁忌の実験に手を出し始めた」
「・・・生物実験ね」
「その通り」
テトラスティンが暗い面持ちで語る。
「実験対象が人間に移るまで、そう時間を要さなかったようだ。その地方に行って記録を調べたが、同時期に神隠しが多発するという話が出ていた。そしてその時期の失踪者は実に５００を超える」
「・・・なるほど、狂気の実験ね」
「それだけならまだ大したことはない。大量殺人ではあるがね。だが、問題なのはその狂気を受け継ぐ者がいるということだ」
テトラスティンがぴしゃりと言いきり、部屋に暗澹（あんたん）たる空気が立ちこめる。
「その人物を倒さない限りこの戦いは終わらない。むしろそいつを倒すことが最優先事項とも言えるね。そして彼らの拠点、つまり魔王生産工場は人里離れた場所が多いのではないかと思っている」

「そこで魔女の出番だというわけね？」
「そういうことだ。魔女にはそれらを探してほしい。発見したら後は我々が叩こう」
「良いのかしら？　そんなこと言っちゃって」
「何がさ」

少し驚いたような顔をするフェアトゥーセに、テトラスティンが聞き返す。

「魔術教会の負担が大分大きいようだけど」
「ふん。各派閥の連中共もずっとここに引きこもっているから不毛な権力争いを起こすんだ。外に出てこき使えば、権力争いをする暇もなくなるさ」
「一石二鳥だと？」
「単純に、僕があいつらの相手をするのが面倒だとも言える。それに、適当に数が減ってくれればそののちも何かとやりやすい。一石四鳥くらいの効果はあるさ」

テトラスティンが本当にめんどくさそうに言ったので、フェアトゥーセは少し笑ってしまった。そのまま部屋を出て行こうとするフェアトゥーセに、テトラスティンが声をかける。

「フェアトゥーセ」
「まだ何か？」

フェアトゥーセはフードをかぶりながら、少し打ちとけた様子で返事をする。

「くれぐれも気をつけろ。この前、僕は誰にも内緒の行動にも関わらず襲撃された。敵はいつもこちらを見ているのかもしれない」

「魔女の団欒では、各属性を持った数十人単位の魔女が一同に会するわ。瞬間的にだけど、世界でも有数の戦力を持つことになる。そこに攻め込んでくるなんて、例え英雄王でも無謀な行動よ？」
「敵が一番恐ろしいのは得体が知れないことだ。これは非常に私達にとって不利な点だよ。いかなる状況でも心した方がいい」
「・・・忠告感謝するわ」

それだけ言うとフェアトゥーセ達は颯爽（さっそう）と部屋を出て行った。テトラスティンとてどう気を付けろとは具体的に言えないわけだが、このような行動を奴らが看過するのかは甚だ疑問だった。だがとりあえずテトラスティンはリシーに命じて各派閥の長を招集すると同時に、自分は他の書物の解読にかかるのだった。

続く

魔女の来訪、その2～同盟～（後書き）

次回投稿は7／9（土）22：00です。

次回よりまた場面が戻ります。

月下の舞い、その1～再会～（前書き）

～あらすじ～

新たな仲間ロゼッタを迎えたアルフィリース達が次に向かうのは・・・？

月下の舞い、その1～再会～

＊＊＊

「うおおい。イケる口だね、シスター！」
「当たり前よ！　ただのかよわい乙女が巡礼なんかできますかっての」

ロゼッタに差し出された大瓶の酒を一息に煽り、ミランダが息まく。

「ははっ、気に入ったぜシスター。アンタとは馬が合いそうだ」
「シスターってのはやめな、ロゼッタ。ミランダって呼びなよ」
「いいだろうよ。その方がアタイもやりやすい」

そして新たな酒で乾杯するミランダとロゼッタ。彼女達は今ガーシュロンの紛争地帯を抜けた町、ヒュンフにいる。

アルフィリース達はロゼッタを仲間に迎え入れ、彼女の助言に従いガーシュロンの紛争地帯を抜けていた。彼女は経歴が長いというだけあり、紛争地帯の様子を細かに知っていた。ロゼッタの誘導に従うと、危険なはずの紛争地帯でも、一度も危険な目に合わずわずか数日で抜けだしたのである。

そして紛争地帯を抜けたアルフィリース達は、久しぶりの文明圏の食事と宿にありついているのだった。この地域の主食はトガリ芋と呼ばれる根菜を潰し軽く塩で味付けたものだが、それですらアルフィリース達には久しぶりに感じられる。ローマンズランドでは肉が主食であり少し中央街道などとは趣が異なるため、アルフィリースは久しぶりの懐かしい味に出会った様な気がしたのだ。それだけ

わずか数月という短期間とはいえ、様々な出来事に出会ったと言える。

「こんなに食事って美味しかったっけ？」
「帰って来たという実感があるからでしょう」
「我は始めてだが、そこまで美味しいとも思わないのだが・・・」
「沼地の食事よりはよっぽどマシですけどね」

感想は様々だった。だが彼女達はいやがおうにでも注目を集める。酒場の客は全て彼女達に目線が釘付けだった。
まずほとんどが女の旅仲間である。何度か述べたように、この時代に女だけで旅をするというのは非常に珍しい。しかも多種多様な美人揃い。アルフィリースやリサ、エアリアルは髪色でも目立つし、ユーティなどの妖精がふらふらとその周りを飛んでいるのだ。時には注文自体を酒場の主人に妖精が持ってくる。酒場の主人は眼を白黒させながらも、ユーティの注文通りに食事を作るのだった。
さらに巨人のダロンは嫌でも目立つ。巨人自体がこの地方にいないわけでもないのだが、かなり珍しいことには違いない。そして巨人が誰かと共に行動するなど、さらに珍しいことだった。彼らのだいたいが単独行動を好むからだ。
そして極めつけはエメラルドである。彼女は羽をもはや隠してはいない。それはアルフィリースの提案であり、隠したままで旅をするなど、エメラルドが可哀想とのことである。もともと飛ぶことが普通の種族なのに、地面を歩かせ、さらに羽までローブで覆ってしまうのはあまりではないかと提案したのだ。他の者は多少反対しつつも、アルフィリースの言い分も尤もなので悩んだが、リサが、

「新しい傭兵団のマスコット的存在として、逆に目立たせるという方法もあります。まずは私達の事を知ってもらわないと、何も始まらないでしょうから」

という提案の元、有効な反論もなくエメラルドはその姿を衆目にさらすことになった。当のエメラルドにはそんなことは分かっておらず、ただ自由に飛んでよいということで、生き生きとしているだけだった。だが満面の笑顔で飛びまわる彼女を見ていると、アルフィリース以外のメンバーもこれが一番良い気がするのだった。

そんなこんなで、ヒュンフに着いた途端に目立っているアルフィリース達である。町に入る時にさすがに衛兵にかなり怪しまれたが、この近辺ではミランダのアルネリア教会関係者の紋章がかなり効力を発揮する。本物かどうか確かめるため、衛兵が一応教会関係者を呼んで確認させたが、呼ばれた教会関係者はミランダの紋章を見るなり涙を流して感激しており、あっという間に通してもらえ、挙句に町で一番上等な宿まで手配してくれたのだった。ミランダは本当に教会関係者の中ではかなり尊敬を集める立場らしい。

そしてアルフィリース達は宿の下で、ありったけ食事や酒を取っているという所だった。

「それにしてもダロンってさ」
「なんだ？」
「誰を探してこっちに来たわけ？」
「・・・妻だ」

その瞬間、全員が食事を噴き出した。ユーティは肉を喉に詰まらせたのか、必死で胸を叩いている。

「ダロンって既婚者？」
「そうだ。おかしいか？」
「アッハハ、嫁さんに逃げられてやんの！　ダッセエ！」

酔っ払い始めたロゼッタがダロンを指さして爆笑していた。ダロ

ンはちらりと睨むが、酔っ払いを相手にしてもしょうがないと思ったのか、無視を決め込んだ。

「ダロン、何があったの？」

一方でアルフィリースは真剣な様子で彼の話を聞こうとしている。

「・・・別にこれといって大したことはない。彼女は隣の家の一人娘でな。彼女の親は集落の顔役だったから、外に出稼ぎに行く人間に許可をだしたり話を聞いたりすることが多かった。彼女は両親の傍でよく話を聞いていたのだろうな。自然と外の世界に興味を持つようになっていた。やがて結婚する時期になった俺達は歳も近かったし結婚したが、妻は外の世界へのあこがれが捨てきれなかったようだ。ある日置き手紙を残して出て行った。５年ほどしたら帰るとな」

「で？」

「１０年たっても帰ってこない。これは何かあったのではないかと思い、妻を探しに来たというわけだ。ただ便りと稼ぎだけは届くから、無事ではいると思うが」

ダロンにはめずらしくため息をつく。どうやら彼も久しぶりの酒なのか、かなりの杯を重ねているようだ。そのせいで少し感傷的になっているのかもしれない。

「俺は妻が心配だ・・・あの小さい乙女が果たして無事にやっていけているのかと、気が気でない」

「小さいって・・・どのくらい？」

「俺の胸までしか背が無い。集落の大人としてはかなり小さい方だ」

アルフィリース達はその言葉を聞いて、「どこが小さいんだ。リ

サの1．5倍はあるぞ」と思ったのは口に出さないことにした。ダロンにとっては気が気ではないのだろうから。ただダロンもやはりどこかずれているような、あるいは過保護なのかとも思うアルフィリースだった。

そんな盛り上がりを見せる中、酒場に入ってきた人物がアルフィリース達を見て叫ぶ。

「アルフィリース！」

「え？」

アルフィリース達が振り返ると、そこには懐かしい人物が立っていた。

続く

月下の舞い、その1～再会～（後書き）

今日はやや短め。

次回投稿は7／11（日）22：00です。

月下の舞い、その2～月に落ちる～（前書き）

～あらすじ～

アルフィリースが再会した人物とは・・・？

月下の舞い、その2～月に落ちる～

「カザス！」
「無事だったのか！？」
「当たり前ですよ、そう簡単に僕は死にませんから」

アルフィリース達の目の前に現れたのはカザスだった。意外な人物の登場に、彼を知る仲間達は一斉に彼に駆け寄る。

「心配したのよ？　貴方が無事でよかったわ」
「こちらもですよ。でもアルフィリース達が無事でよかった」

カザスとアルフィリースは固く握手を交わした。これは彼らの最初の出会い方を考えれば、その時には思いも寄らない展開だったであろう。

ただ旅を共にする中でアルフィリースは非戦闘員であるカザスをよく守り、カザスはその知識で度々アルフィリース達を導いた。そしてカザスはアルフィリースが傭兵であるにもかかわらず博識であることに驚いたし、アルフィリースはカザスが文句もいわず厳しい旅についてくることに感心していた。彼らはいまや互いを認め合う中である。

「でもカザスはどうしてここに？」
「もちろんあなた達を探してきたのですが、うかつに歩きまわるより、進路から北街道を行くだろうと推理したので、この町に滞在して待っていたのですよ。すると、今日夕刻に変わった女ばかりの一団が町に入ったと聞いたじゃありませんか。これは間違いないだろうと思いまして」

カザスは興奮気味に語る。自分の目論見が当たったことと、アルフィリース達に出会えた興奮の両方だろう。そんな彼をアルフィリースは関心と優しさを交えた目で見るのだ。

「やっぱり貴方は賢いわね」
「それにカザスは地理学が専門の一つでしたね。さすがです」
「そんなことはどうでもいいんですよ。それよりニアの姿が見当たらないようですが・・・？」

不審がるカザスに、ニアはグルーザルドに帰ったことを説明する。すると、カザスの顔色が目まぐるしく変わって行く。最初は蒼白に、そして彼女の所在が知れると、今度は安堵の色に。そして冷静さを取り戻したカザスは語る。

「なるほど、事情は分かりました。とりあえずニアも無事なのですね？」
「もちろんよ」
「なら僕はこうしている場合ではない。すみませんが、彼女を追いかけさせていただきます」

カザスは再会の挨拶もそこそこに、その場を去ろうとする。

「ちょ、ちょっと。もう行くの？」
「ええ、善は急げです。彼女がグルーザルドに辿り着くと色々と面倒ですから、その前に捕まえた方がいいでしょう」
「捕まえてどうするのさ？」
「決まっています。彼女が行く所に僕も行きますよ」

カザスがしれっといったので、アルフィリース達はあんぐりと口

を開けてしまった。

「なんですか、変な顔をして。そんなにおかしなことを言ったつもりはありませんが」

「・・・いや、そうだけど」

「教授の職はどうするんだい」

「これから宿に帰って辞表を書きます。研究なんてどこに行ってもできますし、もう僕の名前は十分に売れているので、新しい論文を書くだけでも収入にはなりますから」

「・・・なんだか無駄に格好いいセリフですね」

リサが少し皮肉をこめて言うが、カザスの耳にはもはや入っていない。

「追いかけるなら善は急げ。これから飛竜を調達してグルーザルドに向けて飛びます」

「それならいいけど・・・気を付けてよ」

「心配してくれてありがとう、アルフィリース。それでは！」

とカザスが酒場を出て行きかけて、その足を止める。

「と、いけません。僕としたことが忘れる所でした」

「？」

「大草原までですが、私の護衛代金をお支払いいたします。翌朝金融ギルドに顔を出してください。あなた達宛に一筆したためておくので、翌朝には報酬をうけとれるでしょう。アルネリアまでの路銀ならば十分持つかと」

「あ、そういえばそういう話だったわね・・・」

アルフィリースはカザスが自分達の仲間になる時の話を思い出し、

ぽりぽりと頭をかいた。言われるまですっかり忘れていたのだ。カザスはアルフィリースにとっても既に欠かせない仲間となっていたので、雇われていたことをすっかり忘れていたのだ。

そんなアルフィリースを見てカザスは微笑む。

「・・・本当に相変わらずです、アルフィリース。いつの間にか頼もしい仲間も増えているようですし、あなたの旅先に素晴らしい出会いが沢山あらんことを」

「カザスこそね。ニアはいずれ私の元に戻って来るらしいわ。その時にまた会いましょう」

「ええ、必ず」

それだけ言うとカザスは去って行った。アルフィリースが「ニアを泣かせちゃだめよー！？」と遠くから茶化すと、カザスは事もあろうに、親指を立てて応えたのだった。今までのカザスならそんなことはしないだろうに、彼にも何らかの変化があったようだった。

そして再びアルフィリース達は元の様子に戻る。ただ先ほどまでとは違い、カザスとニアの先行きについて、話は盛り上がるのだった。

＊＊＊

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

明かり一つない暗闇にふる雨の中、聞こえる粗い息遣い。足音も無く走る影から聞こえてくるものだ。

「（どこで・・・間違えた？）」

影に一瞬月明りが射す。そこに見える顔は少女にも等しい、幼さ

を残す表情。だが能面の如き無表情の中にも、息苦しいのか、僅かばかり表情が歪む。額には汗が滲む。それでも、

「（２０秒で整える）」

そう彼女は思い、呼吸を落ち着けた。普段なら半日全力でかけ通しても切れないはずの自分の体力。だが今回ばかりは事情が違った。

「（連続で４つの任務・・・３つ目までは最高難度。そして４つ目がいやに簡単）」

一週間で３つの仕事。そのどれもが非常に難しく、また準備期間もろくに与えられなかった。それでも任務を完遂したのは、ひとえに彼女が優秀なせいだった。他のものならきっとここまで鮮やかには行くまいと、彼女は自信ではなく事実として認識していた。

そして４つ目の指令は暗殺だった。これが前の３つに比べ嫌に簡単だった。しかもどこぞの貴族の末席か何かであり、屋敷の警備も穴だらけ。これなら何をどうしても殺すのはたやすいと彼女は提案したのだが、指示は「閨（ねや）に引き込んで暗殺しろ」であった。上からの指示は絶対である。彼女は指示通りに暗殺を決行した。

その後死体の後始末は特に指示されていなかったため、暗殺後、予め決められたルートで仲間の手引きにより予定通り脱出を図る。違和感を感じたのはその時である。

彼女うなじにチリチリとした焼けるような感覚を感じたのだ。これは自分に危機が迫っている証拠だと彼女は知っている。なぜ仲間に案内されながらその様な感覚を感じるのか彼女は理解できなかったが、体はより正直に反応した。背後から差し出されたナイフを持つ仲間の手をへし折ると、手から落ちるナイフを蹴りあげて後ろの男の股間に突き刺す。前にいた男は自分の方を振り返った瞬間にさらに後ろに回り込み、首を１８０度反転させてやった。

「（私は既に用済みということね。命も身も顧みず、殺し続けた最後の報酬がこれ）」

少女は息を整えながら、自分の過去を振り返る。だがそれもつかの間。周囲は既に囲まれていた。１０人ではきかない数だろう。

「（そうか、最初からこのつもりだったの。私一人に大層なこと。だけど、なぜ）」

彼女が不思議に思うのは、自分がなぜ狙われるかということではない。自分が狙われるのは想像がついていた。自分の組織の先達が次々と死んでいったことからも、なんとなく予測はついていたのだ。それぞれ任務で死んだ事になってはいたが、そのような下手を打つ連中ではない事も彼女は知っている。腕の立ちすぎる者、知り過ぎた者には死を。彼女自身が暗殺をしたこともある。だからいずれは自分の番だということもわかってはいたが、別に何の感慨も湧いてこなかった。別に生への執着など、彼女の中にはありはしない。そのように育てられてはいないからだ。

それなのに、なぜ大人しく殺されなかったのかということを彼女は不思議に思っているのだ。不格好な事に、今でもずっと逃げながら刺客を殺し続けている。

「（なぜ私は大人しく殺されないのだろう？　なぜ？　誰か答えを・・・）」

そう思ううちに、背にした木の上から刺客が襲いかかる。その刺客と体を入れ替えるように木の上に走り上がった少女は刺客の首をかき切ると、彼を踏み台に木の上に登り、そのまま森の木々を飛びながら移動を始めた。とても人間業とは思えないほどの身軽さであ

る。刺客達は彼女のその動きに徐々に距離を離されていく。

「（どこかで馬を・・・いや、それよりも）」

少女は視界に小さな川を見つけると、さらに耳を澄まして音を確認する。目標とする音を確認すると、その川傍に少女は着地し、走り始めた。後からは多数の刺客が追いかけてくる。

「（私の運命を試してみよう）」

そのまま少女は全力で走る。風を巻いて走る様は大の大人が追いつけないほどの速度であり、彼女は全力を出せは馬と同程度の速度も維持できるのだ。みるみるうちに後続とは距離が離れて行く。そして眼前には滝が見えるが、少女は走る速度を全く緩めなかった。

そのまま滝の中に身を躍らせる彼女。頭上には満月に近い白い月が少女の銀の髪を照らし、遥か眼下に見える滝壺が彼女の姿を映す。

「（悪くない光景）」

最後に見るにしては、と少女は思う。そんな感慨など、今まで一度として抱いたことは無かったのに。そして月をわずかに映す滝壺に落ちた少女は、疲労と衝撃でゆっくりと意識を失った。

続く

月下の舞い、その2～月に落ちる～（後書き）

次回投稿は7／11（月）22：00です。

月下の舞い、その3～一流の暗殺者～（前書き）

～あらすじ～

滝壺に落ちた少女の運命は・・・？

月下の舞い、その3～一流の暗殺者～

＊＊＊

「う・・・ぐ」

「目が覚めましたか」

少女が目を覚ますと、目の前には薄い桃色の髪をした少女が座っていた。白い杖を座っている椅子の傍に置いているところを見ると、盲目なのだろう。

目を覚ました少女はまず状況確認のため、桃色の髪の少女を観察する。

「（杖の中に・・・刃物を隠している。だが腕前は並。問題なく殺せる。それにしても・・・あの状況で生きながらえたのか）」

少女は習慣的に周囲の様子を確認しながら、自身を心の中であざ笑う。その様子が不安そうに周りを見渡すように感じたのか、桃色の髪の少女がこの少女に語りかける。

「不安ですか？」

「・・・」

少女は話さない。まだ状況が飲み込めていないからだ。そんな彼女の警戒心を察するように桃色の髪の少女が話す。

「ここはヒュンフの町。少女が川に流されていると騒ぐ者がいたので、私達の仲間が助けて宿屋まで連れてきたのです。私の仲間が見

たところ、どうやら命の別状はないとのことでしたが。ああ、そういえば自己紹介もまだでしたね。私の名前はリサと言います。リサちゃんと呼ぶがいいでしょう」

「・・・嫌だ、面倒臭い」

リサが少女に挨拶をすると、少女が初めて言葉を発する。その言葉に微笑むリサ。そして困惑する少女。

「（？　なぜ喋った？　まだ状況も把握してないのに）」

「安心しました。どうやら話せるようですね、こればっかりはセンサーの私でもわかりませんから」

リサは軽く微笑むと、少女はなぜかその表情を見ていられなかった。

「（なんだこいつ・・・やりにくい）」

少女のその戸惑いを全て見透かすかのように、リサは次々と言葉を紡ぐ。

「そう警戒しなくてもいいでしょう？　私達はだいたいあなたが何者か察していますから」

「！？」

その言葉に、少女が寝かされていたベッドから姿を消すかのように素早く飛び出し、リサの首を羽交い締めにする。

「お前何者だ？　組織の追っ手か？」

「ほほう、どこかの組織に属しているのですか」

「ごまかすな」

少女の殺気のこもった言葉にも、リサはあくまで余裕の態度を取る。少女の腕に力が少し入るのをリサは感じる。

「別にどうということはないのですよ。こちとら貴女を介抱したのですから、全部お見通しです。あれほど刃物を体中に隠していれば、普通の人間でないことくらい想像がつきますよ」

「ならばなぜ私を一人で看病している？　外に仲間がいるだろう？」

少女はセンサーではないが、レクサスと同じようなもので異様に気配に敏感だった。ただその感度はレクサスよりもはるかに上であり、下手をすると山一つ向うの気配にも気がつく時がある。彼女の不意を突くことは、事実上不可能なのだ。

だが、リサの言葉は悉く彼女の意表をついていた。

「なんとなく・・・ですね。あなたが危険な事は想像がついたのですが」

「なんとなく、だと？」

「はあ。残念ながらそうとしか説明ができません」

リサが肩をすくめて見せる。その仕草に、少女は気が抜けかけるが、慌てて引き締め直すのだ。

「危険だとは思わないのか？」

「思いましたが、だからどうだと？　まさかこの様な輩だとは思いませんでしたが、まさか川で流れている人間を放っておくのも情が無い話でしょう。そういうのを私達のリーダーは嫌いますので」

「お人好しにもほどがある。その結果お前達は死ぬことになる」

「私を殺せば、外の連中が黙っていません。強いですよ、私の仲間は？」

リサが負けじと言い返したが、少女は何の感慨も湧かない声で語るのだった。

「強いかどうかは関係ない。人間は心臓が動いて息をしていれば皆同じ。止めるだけ」

「なるほど、その物言いから察するに暗殺者の類いですか、貴女は。ですがしかし・・・」

そういってリサは少女の方を振り返ろうとする。少女は油断なく腕に力を込める。だが、

「なんと悲しい言葉でしょうか」

「？」

リサの瞳には純粋に憐憫の情が映っていた。その桃色の瞳がまっすぐ少女の茶色の瞳と交錯する。

「人にはそれぞれ意志があります。貴女にはそれがわかっていますか？」

「・・・どうでもいいだろう？」

「よくはありません。それでは悲しすぎる」

リサがいつの間にか少女の頬を捕まえていた。なのに抵抗しない自分に、少女が驚く。

「貴女は一体今までどんな人生を？」

「・・・お前には関係ない」

「いえ、もう関係してしまいました。聞くまでこの手を離しませんよ？」

「離さないなら両手をへし折るぞ？」
「それは困るので止めてください。でも離すつもりはないので、どうか別の提案を」
「・・・どうも調子が狂う」

少女は明らかに戸惑っていた。今まで人を傷つけるのにも殺すのにも、一瞬たりとも躊躇したことはないのに。

「（くそ、どうしたんだ私は・・・どうすればいい？　なぜ悩む？　私は壊れてしまったのか？）」

少女がリサと睨み合ったまま悩んでいると、少女は何かにピクリと反応した。そしておもむろにリサをベッドに突き飛ばすと、リサの杖から刃物を取り出し彼女の喉に突きつける。

「私の武器は？」
「突然何を・・・」
「早くしろ！」

少女の剣幕にリサは異常を感じ、答える。

「外の部屋に・・・」
「よし」

それだけ聞くと、少女は部屋をつかつかと出て行く。部屋を出ると、そこにはアルフィリース達が少女の事について話し合いながらくつろいでいたわけだが、いきなり入ってきた少女を見て驚いた。
少女の方は部屋を見回すと、机の上に一通り並べてある刃物類を見て一直線に歩み寄る。

「貴女、もう歩いて大丈・・・」
「どけ」

立ちあがって少女の前に立とうとしたアルフィリースに足払いをかけ、さらに突き飛ばす。それを見て少女の動きをエアリアルが止めようとする。

「何をする！」
「邪魔だ」

エアリアルが伸ばした手を少女は掴んで、引き倒すように一回転させる。たまらず床に倒れるエアリアル。

「うわっ」
「な、何？」
「私の邪魔をするな、死ぬぞ」

少女はそう言い放ち、自分の衣服をおもむろに脱ぐ。彼女は水にずぶ濡れだったため、乾かすために下着一枚つけていない体が露わになる。

その体を見てアルフィリース達は思わず目を奪われた。少女の体は全身が傷だらけだったのだ。その光景は、とても少女のものとは思えないほど痛ましいものだった。

アルフィリース達が口を押さえる間にも、少女は目の前の刃物を収納したベルト次々と体に装備していく。

「（早い。余程手慣れている）」

楓が感想を抱く。彼女は少女の正体を直感で察していた。自分と同類。そして自分より確実に格上の暗殺者。楓は少女の危険性を察

していたが、その気持ちにいち早く少女は反応したのか、背中を向けたまま少女は楓のみに威圧感を放っている。「動けば殺す」。そう背中が楓に告げていた。
そして少女は一通り武器を装備し終わると、再び衣服を纏う。

「武器が足りない・・・そこの女」
「え、私？」

アルフィリースが指名されて驚く。

「懐に投げ武器を隠しているな。もらうぞ」
「え、ちょ・・・あははは、そこくすぐったいって！」

少女がアルフィリースの無理矢理懐をまさぐったので、アルフィリースがくすぐったがって笑い転げているのだった。
そのアルフィリースの懐から釘状のダガーを取り出すと、さらにエアリアルの手裏剣も手に取り、振り回してそのバランスを確認する。

「よし」
「え、何がいったい・・・」
「死にたくなければ部屋から出るな」

そう少女が言い、アルフィリース達がその言葉の意味を理解する前に窓と扉が同時に蹴破られる。アルフィリース達が反応してそれぞれが武器を手に取りに走る前に、侵入者は全て息絶えて地に伏していた。一瞬のことである。

「なっ」
「こいつらは？」

「下手に抵抗するな。狙いは私だ」

少女はそう言うと首を後ろから首をかき切った男から手を離し床を蹴ると、窓枠の上に手をかけ、走る勢いそのままに屋根の上に駆けあがっていった。呆気にとられたアルフィリース達が部屋を見ると、侵入者の目にはそれぞれダガーが、首には横に投げナイフが刺されるか、あるいは真一文字に首が切り裂かれていた。

「いつの間に・・・」
「なんですか、今の音は？」

リサが隣の部屋から出てくる。どうやら現序が理解できていないようだ。

「センサーが何も捉えていません。これはいったい・・・」
「認識阻害の魔術でしょう」

楓が男達の胸元を開き、張ってある札を見る。

「暗殺者の手口です。リサ殿程のセンサーをごまかすとなると、こいつらは押して知るべきレベルの暗殺者です」
「口無しとどっちが上だ？」

ミランダが遠慮なく尋ねる。その問いに、楓は戸惑ったように答えるのだ。

「技術では我々でも、このような方法を我々は知りません。リサ殿に気付かれずに接近できるとなると、総合するとこいつらの方が上の可能性は十分にありますね」
「そんな連中がこの大陸にいたか？」

「どこかの暗殺団かもしれませんが、有名な暗殺団はせいぜい二流ですから。名が知れないとなると、こいつらは真の一流かもしれません」

楓の評価にミランダが唸るが、そのミランダの腕をアルフィリースが掴む。

「今はそんな検討より、あの子を追いましょう」
「なぜだ？」
「病み上がりよ？　放っておける？」
「アタイは勧めないね！」

突如、ロゼッタが露骨に反対した。

「どうして？」
「あの嬢ちゃんは普通じゃない。関わらない方が身のためだ」
「アルフィ、リサは追うことを提案します」

今度はリサがロゼッタに対抗する。

「リサの言い分を聞きましょう」
「・・・あの子は暗闇の中でもがいています。誰かが導いてあげなくては」
「どういうことだ？」
「リサ、ただの同情ならどちらも辛くなるだけよ？」

ミランダが疑問を返したが、その一言でアルフィリースには理解できたのか。アルフィリースの意外な一言に、リサははっとするが、すぐに気を取り直す。

「ご心配なく、後悔はしません」
「命をかけられる？」
「もちろんです」

即答したリサにアルフィリースは少し驚くが、リサとしてもなぜ即答できたのかは不思議だった。だが少女のあの目。リサのチビ達が昔していた目に似ているのだ。

「（リサが助けなくては・・・リサならできるはず！）」

リサの心はその気持ちでいっぱいだった。アルフィリースもそんなリサの気持ちを察したのか、やがて頷いた。

「いいでしょう、私は追うわ。でも強制はしない」
「我は気が乗らないが、それがアルフィの決断なら従おう」
「もちろん私はアルフィの心のままに」
「ロゼッタはどうするんだい？」

エアリアルとラーナがいち早く頷き、他の者もそれに続く。そｐしてミランダの問いかけに、ロゼッタが決まりの悪そうな顔をする。

「ここで反対したらアタイだけ悪者じゃないか。いいよ、付き合うさ。だがどうなっても知らないぞ？」
「感謝するわ、ロゼッタ」
「リサもです、デカ女２号」
「誰が２号だ！」

リサの発言にロゼッタが言い返し、リサは舌を出してロゼッタからかう。そんな中、アルフィリースは「行きましょう」とロゼッタに笑顔を向けると、部屋を走って出て行くのだった。

続く

月下の舞い、その3～一流の暗殺者～（後書き）

次回投稿は7／13（水）22：00です。

月下の舞い、その４～月を見上げる戦い～（前書き）

～あらすじ～

目を覚ました少女は再び戦いの喧騒へと巻き込まれ・・・？

月下の舞い、その４～月を見上げる戦い～

アルフィリース達は戦いの後を追って走る。時刻は既に深夜。窓が割れた音に一瞬宿も騒然となったものの、既に旅人達は深い眠りに入っているのか、あるいは関わり合いたくないと思っているのか。幸にもそこまでの騒ぎにならなかった。

アルフィリース達は眠りについた町を、戦いの跡を追ってひた駆けていた。

「今日は白い月が満月だね。明るくって助かるよ」

「それにしても・・・」

エアリアルが地面に並ぶ死体を見る。その数が徐々に尋常で無くなっていた。

「もうこれで１６人目だ。奴はどれほどの腕ききなんだ？」

「それより凄いのは、全て一撃で急所を刺されています。それが恐ろしいです」

楓が冷静な評価を告げる。見れば、少し身震いしているではないか。

「これだけの技術、私たちの長である梔子様と比べても、果たしてどちらが上でしょうか・・・逆に言えば、この連中もあの少女を仕留めるためにこれだけの人員を投入する必要があるということ。なんて恐ろしい・・・」

「そんなこと冷静に言ってる場合？」

「あそこです！」

リサが叫んだ時、少女は建物の屋根の上で戦っていた。宙に舞う鮮血が月に照らし出され、満月を背景に戦う様子は、まるで一枚の絵を抜きだしたように鮮やかな光景だった。少女は自分に向かってくる敵と一合と打ちあうことなく、次々とその生命を奪っていた。まるで、それは勝敗が決められた演舞を見ているようだった。あまりにも人の命が簡単になくなっていくさまを見るのは、とても現実とは思えない。

少女が一つ手を動かすたびに、確実に一つの命が散らされていく。死ぬのがわかっていても戦う相手達は、まるで彼らが彼女に死を請うているように見えなくもない。

「なんて戦い方をするの・・・」

アルフィリースは思わず呟いていた。エアリアルの戦い方を見た時は美しいと思ったが、少女の戦い方は芸術性においてはエアリアルよりさらに上でも、ただひたすらに怖かった。月下に死神が踊っているようにしか見えないのだ。またその死神がなまじ美しいから余計に恐ろしい。白い月の光が銀の髪に反射して、ある意味神々しくさえある。全ての死がこれほど美しくもたらされるならば、多くの者が死を望んでしまうのではないかとさえ思えてしまう。

そして少女を取り巻く敵の数は残り５人になっていた。もう３０人以上がゆうに死んでいるだろう。だが彼らはそれでも戦いを止めなかった。５人が違う方向から同時に攻撃を仕掛けるが、少女がくるりとその場で回転をすると、３人の喉から血が噴き出す。少女は仕込んであった丈夫な鉄線にエアリアルの手裏剣を結び付け、中距離用の武器としていたのだ。

かわした２人の顔面には既にダガーが刺さっている。思わずのけぞった男の首も、少女によって真一文字にかき切られ、唯一こらえた男も、背後から背中合わせに脇腹を刺されていた。その男が力なく

手の武器を離すと、少女は離れ際やはり首をかき切って離れた。あまりの斬撃の速度に、男が倒れてから血が忘れていたように天に向けて噴き出したくらいだった。

「凄い」

アルフィリースは思わず感想を漏らしていた。その横では一同が青くなっている。ここまで冷徹な殺し方を見るのは、全員が初めてだった。

殺しといってもその性質は色々ある。憎しみ、恨み、妬み、あるいは戦いの高揚の中で、あるいは自らの快楽のために。いずれも共通する事は、そこには人間の感情があるということ。だが、「ただ殺す」という行為は全員が初めて見たのだった。目の前で踊る少女の殺し方には、何の感情もこもっていなかった。少女は何の感情も持っていないのではないか。そうであれば少女の前に全ての生と死は等しくなる。そのことに全員が恐怖を覚えていたのだった。

その中で、アルフィリースとリサだけが少し違う感想を抱いていた。

「悲しいわね、あの子」

「ええ、本当に」

思わず2人が誰となく漏らす感想。そして全て殺し終えた少女が建物の屋根から飛び降りてくる。3階からの跳躍も、少女は苦もなくこなした。

「（あれだけの戦闘で、返り血をほとんど浴びていない）」

楓は気がついた事実に、彼女は人知れず恐怖する。これだけの技術があれば、例えば友達と出かけて少し用を足しに席をはずした時

にでも暗殺が行えるだろう。

「（暗殺者としては理想形。こんな人間を目の当たりにすることがあるなんて・・・私もいずれああなって行くの？）」

楓が不安を抱える中、少女がゆっくりとアルフィリース達に近づいてくる。

「お前達、なぜ部屋から出た？」

「貴女が心配で・・・」

「余計な世話だ」

少女は取りつく島も無く答える。そしてため息をつくと、刃をアルフィリース達に向けた。

「何をするの？」

「今からお前達を殺す」

その言葉に全員が息をのむ音が聞こえるようだった。少女に一度狙われれば、生きて帰れる心地がしなかったからだ。

「なぜ？」

そのなかでも、リサが冷静に受け答えをする。だが少女はあくまで無表情で、あるいは装って、

「私の正体を知られたからには生かしておけない。今までずっとそうしてきた」

「私達は貴女を助けたのですよ？」

「恩が恩で返されるとは限らない。助けた人間に家を焼かれる者も

いる。そういうことだ」

少女が小刀を握り直す。一歩を踏み出そうと体重を前にかけた瞬間、リサが前に出た。

「いいえ、貴女は矛盾しています」

「どこがだ？」

「もし本当に殺す気なら、ここはリサ達に感謝するふりなり何なりして、リサ達が眠った後にぶっすりやれば済むだけの話です、違いますか？」

「・・・」

少女は答えない。だが動きもしない。だからこそリサは自分の意見が的を得ていると感じる。少女は無表情だが、おそらくは自分の行動に戸惑っているのだと。そしてその原因を自分でもわかっていないのだと。これはセンサーとしてのリサの能力ではなく、長らく人間というものを観察していきたリサの洞察力である。

「それを貴女はやらず、逆に正面から殺すと宣言する。暗殺者にしてはあるまじき行為では？」

「・・・何が言いたい？」

少女が自分の言葉に反応した瞬間、リサは自分の読みが当たっていることを確信した。そして、これならば説き伏せられると思うのだ。

「貴女は感情がないわけではない。おそらくは自分でも戸惑っているのでしょう」

「・・・！」

少女の無表情が一瞬崩れかけたのを、リサは見逃さない。

「貴女は一体どうしたいのです？　リサでよければ相談に乗りますが」

「・・・わからない」

少女は力なく返事をした。その口調は今までのものと大きく異なっている。

「私たちは道具。命じられるままに暗殺をこなし、失敗すれば死あるのみ。また組織の命令には絶対服従。なのに、なぜ自分が今でも生きているのかわからない。なぜ大人しく組織の制裁を受けないのかわからない。なぜさっき貴女達に部屋の中にいるように指示したのかわからない。私は、もう自分がわからない」

「・・・」

リサは少女の様子をじっと見ていたが、少女は本当に戸惑っているようだった。リサは少女について考察してみる。

「（そういえば楓が言っていましたが、暗殺を主に行う口無しは感情を殺すように躾けられると言っていましたね。口無しの任務はそれだけではないため無感情な者はあまりいないそうですが、中には激務に耐えられず自ら感情を手放す者もいるとか。仮に彼女が純系の暗殺者として育てられたとすると、もともと感情なる概念を教えられていない可能性もある？　それが何らかの拍子で彼女の中に感情が芽生え始めていたとしたら・・・大きな赤子みたいなものですね、彼女は）」

リサがこの後どうするべきか悩むが、その方策は少女のほうからもたらされた。

「お前は・・・」
「？」
「お前は私の事がわかるか？　答えがわかるか？　もしこの答えがわかると言うのなら、殺すのは考えてやってもいい」
「ふむ」

リサは少し考え込む。仮に答えを与えたとして、納得するかどうかは別問題だ。また納得したとしても、暗殺者ならば平気で嘘をついて自分たちを殺すぐらいはするだろう。彼女は恩義を感じる人種には見えない、少なくとも今は。それに答えを与えても、彼女が納得できなければ結局自分達は殺されるだろう。どちらにしても殺される可能性が高い。

「（困りましたね・・・どう転んでも死ぬではないですか。これはもしかするとリサ的に人生一番のピンチ？　それでも、彼女をなんとかしてあげたいと思う自分もいるのですよね。はて、どうしたものでしょうか）」
「どうした、答えが出せないのならお前達に用はない。死んでもらうぞ」

少女が前に出るのを見て、思わずアルフィリースとリサ以外が一歩下がる。その時リサが答えるのだった。

続く

月下の舞い、その４～月を見上げる戦い～（後書き）

次回投稿は７／１５（金）２２：００です。

月下の舞い、その5～トモダチ～（前書き）

～あらすじ～

少女はアルフィリース達にも刃を向けようとするが、その時リサが・・・？

「いえ、答えは出せませんが提案があります」
「どんな？」
「リサが貴女の友達になってあげましょう」

リサがどんと自分の胸を叩いたので、全員が思わずリサを見る。
少女は不審そうな顔をするが、初めて彼女が見せる感情らしい感情だったかもしれない。

「どういうことだ？」
「人生における問題の答えというのは、自分で見つけなくてはいけないものです。人間とは皆そうするものなのです」
「そうなのか？」

少女はよくわからないといった顔をする。本当に分からないのだろう。

「ならばお前達がいてもいなくても変わらない。やはり殺す」
「ところがどっこい、大違いです」
「？　ますますわからない」

少女は段々と困惑の様子を見せ始めた。リサの言葉に戸惑っているのが、他の仲間にもわかる。

「いいですか、人間は一人では生きていけません。隣に友達が必要なのです。友達と話して泣いたり笑ったりする中で、色々な事柄を学んでいくのです」

「そうなのか？」
「そうなのです！」

リサは自信満々に言いきる。そのぐらいの方が効果的だとリサは思ったのだろうが、実際に少女は考えこみ始めていた。

「では、お前が私の友達になると？」
「そうです。不足ですか？」
「いや・・・いいだろう。お前の傍にいれば、いずれ私は自分の事がわかるようになるのか？」
「それはもう。リサが貴女の人生を面白格好よく彩ってあげましょう」

リサはわざと断定的に言いきった。だがこれが功を奏したようだ。少女は獲物をしまう。

「なるほど。だがそうでなかった時は・・・」
「リサを好きにするといいでしょう。煮るなり焼くなり殺すなり、どうぞご自由に」
「ちょっとリサ？」

アルフィリースが止めようとするのを、リサは制した。そして少し少女は悩む。

「いいだろう、契約は成立だ。リサ・・・といったか？　リサは私の友達で、私の疑問を解決する手伝いをする。これで良いか？」
「良いでしょう」
「だがそれでは割に合わないな」

少女が突然言った言葉に、全員が身を固くする。リサだけは平然

としていたが。

「何が割に合わないのです？」

「私が受け取り過ぎだ。契約とは対等でなければならない」

「なるほど。ではどうしたらいいですか？」

「私に何か命令しろ。それで対等になるだろう。できれば長くできる事がいい」

少女の言葉に今度はリサが考え込む。

「うーん、と言われましても。むしろ貴女は何ができるのです？」

「掃除、洗濯、炊事など、一通りなんでもできる。暗殺に必要な事は一取り仕込まれたからな。暗殺者とはそういうものだ」

「楓の場合、炊事はさっぱりですけどね」

「リサ殿！　ほっていてください！」

リサの発言に怒った楓を、アルフィリースが「まあまあ」と宥める。

「後はもちろん男の相手も自由にできるな。もっとも女でもいいが。必要とあれば路銀のために身を売ってもいい」

「それは駄目です。自分を大切にしてください」

「なぜだ？　そこの肌の青黒い女だってしているだろう？」

「急になんだい？」

ロゼッタが指摘されて少し慌てる。少女は冷静に指摘する。

「男の匂いがぷんぷんする。ごく最近、男に抱かれただろう？」

「げ」

「後はあまり匂いはしないが、そこのシスターもそこそこ経験はあ

りそうだな」
「ちょ、ちょっと。何を言い出すのよ？」
「ミランダ・・・」
アルフィリースが不審げに見るのを、ミランダは慌てて否定する。
「そんな目で見ないでよ、アルフィ。アタシは昔の恋人以来やってない！」
「本当に？」
「え、あ、うーん・・・多分」
「何よそれぇ！」
「だって、色々あるじゃん！　人間って！！」
ミランダがアルフィリースと取っ組みあいを始めるのを、ロゼッタが止めに入る。そして少女はさらに無遠慮に指摘を続けるのだった。
「後は処女か。そっちの商売は無理そうだ」
「初対面から全員まとめて駄目出しですか」
「まるっきり駄目というわけでもないが、特にあの黒い髪の女は駄目だ」
その言葉にアルフィリースの動きがピタリと止まる。リサが面白くなりそうな予感に、既に笑いをこらえている。
「ち、ちなみにその理由を聞いても？」
「男の匂いが全くしない。もっとはっきり言えば、男が寄り付きにくい。訓練するにしても、あれは苦労するぞ」
「ほっといてよぉ！！　うわーん！」
「「アーハハハハハ！」」

ユーティとリサが地面を叩いて爆笑していた。ミランダとロゼッタは地団駄を踏むアルフィリースを押抑えつつも、少し哀れになってきていた。そしてラーナとエメラルドがアルフィリースを慰めている。「いざという時は私がいますから・・・」とラーナが言っているようだが、アルフィリースの耳には届いていまい。

ひとしきり笑った後で、少女が不思議そうに全員を見る。

「何がそんなに面白い？」

「い、いずれ貴女にも分かる時がくるでしょう。おいおい教えてあげますよ」

「そうか、それは楽しみだな」

少女の発言に、リサがふと疑問に思う。

「そういえば、貴女の名前は？　貴女、では呼びにくいのですが」

「私の名前？　私に名前はない」

少女があっさりと言ったことに、リサは驚愕する。

「いえ、でもそれでは呼ばれる時に不便では・・・」

「私の組織では互いに名前を呼ぶ習慣はない。任務が無い時は個室に閉じ込められ、指示は文章でされる。そして仕事の時だけ外に出る事を許される。生活に変化と言えば、後は適当に男が入ってきて、気分次第で私を犯して行くくらいか。私に抵抗は許されない」

「そんな。貴女ほどの腕があれば、そんなことは断れるのでは？」

「『訓練』だからな。そう言われては、やらないわけにはいかないんだ。訓練で倒れた人間や逃げ出した者は、弱者と判断されその場で処分される」

「う、ううう」

リサは想像もしない世界に絶句した。この少女はリサの想像を絶する世界で生きてきたのだ。いや、生きているなどとはとてもいえないのかもしれない。

「（以前リサは自分の事を世界で一番不幸などと考えたこともありますが、それは幸せありきのこと。この子には、幸せと感じるような瞬間すら今まで無かったのですね。何より一番悲しいのは、この子が自分の事を不幸とすら思えない事。この子には、まっとうな世界を見せてあげたい）」

リサはその時決意した。この子の傍にいて、ちゃんとこの子が人間らしくできるようになるまでしっかり護ってあげようと。その時、この子にしてほしいことを思いついたのだった。

「では、貴女にお願いをしてもいいですか？」
「なんだ？」
「リサとその友人が危ない時、護って欲しいのです」
「そんなことか。お安い御用だ」

少女は即答したが、おそらくは『護る』という言葉の本当の意味合いを理解するのは、まだ先なのだろうとリサは思う。
そしてリサはもう一つ思いつくのだった。

「そうだ。貴女に名前を付けましょう」
「名前か。いいだろう」

少女はじっとリサを見つめている。その目は何の感情も映していないようで、何かを期待する子どもの様でもある。リサとしても、これは変な名前を付けられないなと思った。

その時、空に輝く満月が目に入る。リサは、昔聞いた満月の世にだけ現れるという、女神の名前を思い出した。

「ルナティカ・・・ルナティカでどうでしょう？」

「ルナティカ」

少女はその言葉を心の中で反芻していた。そして口から出た言葉は。

「いいだろう、気に入った」

「では貴女は今日からルナティカです。よろしく、ルナ」

なぜルナティカが自分で「気に入った」と言ったのかは、彼女にもまだわかっていない。それは、ルナティカが初めて他人から何の損得もなくもらった贈り物だったからなのだが、このことに彼女が気づくようになるのは、随分と先の事。

こうしてアルフィリースの仲間に、頼もしい人物がまた一人加わったのだった。

＊＊＊

その頃、再びアルネリア――

ジェイクの生活は好調だった。騎士としての初任務（と、いっても何もしてはいないのだが）も無事終了し、彼は一躍注目を浴びるようになっていた。まずはこの歳で、たとえ見習いとしてでも任務を受けるのは異例中の異例であり、彼は神殿騎士団内でも注目されるようになっていた。今までは多くの者が使いっぱしりの子ども、くらいの認識だったのである。

それに学校においても、剣技は４年以上の授業に参加することを

許されていた。そして彼はついに４年の実技の主席から一本を奪うことに成功したのである。この年頃の子どもは一年で随分と体格が違う。その事実を考慮すれば、驚異的な出来事であった。しかも相手はさる武家の名家の出身。物心つくころから剣の訓練を受けた生徒であったのだ。それを、剣を握って半年にもならないジェイクが倒したのである。噂は学校を駆け廻ったが、ジェイクは一向に自慢しないので彼の人気は女子のみならず、男子の間でも少しずつ高まりつつあった。ジェイクの目標とすべきところを考えれば、たかが４年生を倒しても何の自慢にもならない事かもしれなかったが。

そしてジェイクはいまや５年以上と剣技の練習を行うのだが、並の腕前の５年生では彼の剣を受け切らないことが往々にしてあったのだ。彼の剣筋を余裕を持って受け切るのは、既に１０名にも満たないほどとなっていた。

「ふうー」

「どうだ、マリオン。ジェイクの上達ぶりは？」

「ミルトレか」

今は剣技の時間である。今、ジェイクの相手はクルーダスが行っている。かなり激しい打ち合いとなっており、全員が自分達の訓練を放っておいて、見入っているような状況だった。先程まではマリオンが相手をしていたのだが、一向に切れないジェイクの体力に、付き合うのも少々疲れてきていたので、クルーダスに代わってもらったのだ。

そしてミルトレとマリオンも２人の打ち合いを見ながら語り合う。

「どうもこうも、異常だよ」

「というと？」

「ジェイクは一度見せた剣技を確実に自分のものにしていく。終わった後に限らず、寝ても覚めても剣を振ることを考えているんだろ

うね。最初は彼の剣に大した才能はないと思ったんだが・・・」
「だが？」
「センスすら身につけていこうとしている。これは驚異的な出来事だと思わないか？」
「なるほど」

ミルトレが納得したようだった。マリオンが見れば、ミルトレは氷で手の甲を冷やしていた。

「ミルトレ、それは？」
「ジェイクにやられた」
「君が！？」

マリオンは驚きを隠せない。ミルトレの剣力は学園でも5指に入る程なのだ。だからこそ彼は奴隷出身でありながらも尊敬も集めるし、頼りにもされる。もちろんまっすぐ過ぎるほどの彼の人柄も手伝っていることは述べておかねばなるまい。

「俺は任務で１０日ほど開けていたからな。そして帰ってジェイクと相対して見ればこれだ。男子３日会わざれば何とやらというが、まさにその通りだ。以前のイメージで相対したらこうなったよ」
「・・・これは僕もうかうかしていられないな」
「お、さすがにクルーダスは勝つな」

見ればジェイクにクルーダスが一本を入れる所だった。そしてノびてしまうジェイク。ジェイクの介抱を支持すると、クルーダスがマリオンとミルトレの所に引き揚げてくる。

「クルーダス、容赦ないねぇ」
「気絶するほど打ち込まなくてもいいだろう」

「・・・手加減する余裕がなかった」

クルーダスのその言葉に、マリオンとミルトレが顔を見合わせる。

「おいおい、まさか・・・」

「そのまさかだ、最近のジェイクは強い。剣に気迫がこもり始めている。加減をすれば、こちらが危うい」

「本当かい。キミは現グローリアで最も強い生徒なのにね」

そして3人はそれぞれの思惑で、気絶して介抱されているジェイクを見つめるのだった。

続く

月下の舞い、その5～トモダチ～（後書き）

もう始まってしまいましたが、次回より新シリーズです。次回投稿は７／１６（土）１２：００です。

傍らに潜む危機、その1～違和感～（前書き）

～あらすじ～

アルネリアで平和な生活を送るはずのジェイクだが・・・？

傍らに潜む危機、その1～違和感～

「いってぇ～」
「はい、動かずにじっとする！」

ジェイクは訓練でできた傷を、デュートヒルデに手当てしてもらっていた。

「くるくる！　お前もうちょっと上手くできないのか？」
「できないから貴方で練習しているのでしょう？　ワタクシに出来ないことなど在ってはならないのです！」
「炊き出し実習もてんでだめじゃねぇか」
「おだまりっ！」

その喧嘩まがいのやりとりに、介護室の担当教官が苦笑しながら2人を見ている。

「練習台か俺は？　これならリンダにやってもらえばよかった」
「ワタクシよりもリンダの方がいいとおっしゃるの？」
「当然だろ。アイツは包帯巻くのは上手いぞ」
「じゃあリンダにやってもらったらよろしいでしょう！？」

デュートヒルデが包帯を力任せに結ぶと、その場所を手形が出来そうなほど強く叩く。

「ぎゃあああ！」
「はい、終わり！　フン！」

そしてデュートヒルデはぴしゃりとドアを乱暴に閉めて出て行ってしまった。その様子を見て、介護教官であるハミッテ女史がくすくすと笑っている。

「笑い事じゃないよ、先生」

「いや、ごめんなさいね。ほら、こちらにおいでジェイク君。包帯を巻き直してあげましょう。あまり強く結ぶと血行が悪くなりますからね」

ハミッテ女史は手なれた様子でジェイクの包帯を巻き直して行く。ジェイクは最近激化する訓練のせいで、介護教官のハミッテにお世話になりっぱなしだった。

「それにしてもジェイク君はもう少し女心を理解しないとね」

「女心？」

「そう。グローリアにそういった授業があればいいのにと、先生は思ってしまうわ」

ハミッテは可笑しくてたまらないと言った様子で、ジェイクの包帯を巻きなおした。ジェイクにその理由はまだわからないらしく、終始不思議そうな顔をしていた。

ジェイクはキツネにつままれたような顔をしながらも、介護教室を後にする。そしてこの後は午後の授業である。座学は眠いんだよな、とジェイクがやや重い足取りで教室に向かうと、途中で5年を指揮して大きな箱を引っ張って運ばせているミルトレに出会う。

「む、ジェイクか」

「ミルトレ。何、その大きな箱は？」

「『さん』をちゃんとつけろとあれほど・・・」

ミルトレがジェイクの頭を軽く殴る。

「いてて、今日は厄日だ・・・で、ミルトレ・・・さん。その箱は？」

「これか」

ミルトレが箱をこんこんと叩く。

「この中には魔獣が入っている」

「ええ？　危なくないのか？」

「今度魔獣同士を戦わせて、その行動を観察する授業が行われる。これは実践向けだから非常に参考になるぞ？　そのための魔獣だな」

ミルトレが説明する。確かに中からは何かをひっかくような音が聞こえるような。

「でも、その後は？」

「最後はクルーダスが戦う」

「えええ！？」

その言葉にジェイクが驚いた。さすがにそれは危ないのではないだろうか。

「何を驚く？　俺もそうだし、クルーダスに至っては既に魔物征伐に5度も出陣している。別に驚くようなことではないさ」

「言われれば確かにそうか」

「それとも、お前が代わりに戦ってみるか？」

ミルトレの意地悪い言葉に、ジェイクは少し考え込んだ。だが、

「やめておきます」
「ほう？　てっきり乗るかと思ったが」
「いえ、無駄に命をかけるのは馬鹿のやることだと思うので。騎士は然るべき時に、然るべき場所で、然るべき者のために命をかけるものだと」
「・・・それが言えれば立派なものだ」

ミルトレが感心したようにジェイクの頭をぐしゃぐしゃとこねる。だが、ジェイクはそれが不思議と嫌ではなかった。

「俺は猪突猛進型だからな。よく突っ込んでは上級生に怒られた」
「なんとなくわかります」
「こいつめ！」

少しミルトレが怒ったようにジェイクの頭を小突く。

「減らず口はほどほどにしておけ」
「すみません」
「ああ、こいつは武器庫の奥の保管庫に運んでおくが、決して近づくんじゃないぞ？　お前は武器庫に良く出入りするだろうから、念のため心しておけ」
「了解です、先輩」

ジェイクはそれだけ言ってミルトレに挨拶すると、教室に向かうのだった。

＊＊＊

カラーン・・・カラーン・・・

午後の終業を告げる鐘が鳴る。と、同時にジェイクは背伸びをして体を伸ばす。

「ふう、やっと終わった」

「ジェイク、今日の予定は？」

ネリィがジェイクに聞いてくる。

「今日の夕方は騎士団の合同練習らしくて、俺は外されたんだ。さすがに子どもを他国からの使者がいる中で整列させるのは、色々問題があるだろうってさ」

「なるほど、それもそうね。ということは」

「ああ、夜までは暇だ。アルベルトとラファティも今日は忙しいし、ロクサーヌが暇なら剣の練習は頼むつもりだけど、特に予定はないかな」

「課題も今日は無いものね。それなら、ブルンズの家にお呼ばれしない？」

「ブルンズの？」

ジェイクがブルンズの方をちらりと見る。ブルンズは既に懲罰房から出てきており、普通どおりの学校生活を送っている。その彼が正式にジェイクに謝罪したのは7日程前の事。懲罰房から戻ってすぐだった。どうやら彼なりに思うところがあったらしい。今ではジェイクもその謝罪を素直に受け入れ、普通に話すことが多い。

ブルンズも話してみればそれなりにいい奴で、悪く言えばずぼらだが、良く言えば細かいことにこだわらない男だった。彼の父親が一つの騎士団を任される立場というのも良くわかる。きちんとブルンズが騎士のなんたるかを学べば、剛毅な男という評価を受けるだろう。

時に無神経な発言もあるものの、それはきっと自分も同じだろう

とジェイクは思うので、お互いさまだった。そして今ではそれなりに仲良くなり、ブルンズの申し出で剣技の稽古もちょくちょくするのだ。ブルンズは必ずジェイクから一本取ると息巻いているのだが、中々そうはジェイクがさせない。

まあそんな毎日であるのだが、果たして招待とは？

「なんで？」

「今は彼の教育係である執事さんがこちらに来ているんですって。それで彼の家で晩餐をしましょうって。この前のお詫びを、どうも言葉だけではブルンズが納得できないんですって」

「へえ。変な所で律儀だな」

ジェイクは感心したように頷く。そしてせっかくなのでお呼ばれすることにした。他にもいつもの仲良しメンバーはその場に加わる。リンダ、ディートヒルデ、ロッテ、ラスカル、ルース、その他数名と言ったところか。だが、ジェイクは何か心に引っかかる物を感じるのだった。

そうこうするうち、ブルンズの執事が教室にまで姿を現した。感じの良く、穏やかな老執事といった雰囲気だ。彼が育てて、どうやったらこんな猪武者みたいな性格の少年が育つのかとジェイクは訝しむ。

そしてジェイクはなぜかその執事を見て落ち着かないのだった。

「・・・？」

その執事を見ていると胸のあたりがむかむかする。ジェイクが一見で人間を嫌うなど、今まで彼は一度も経験していない。

「（おかしいな・・・なんでだろう？　気のせいかな）」

そうしてジェイクはもやもやした気分のまま、ブルンズの招待を受けるのだった。

＊＊＊

晩餐会は何事も無く終了した。とりあえずブルンズがあれほど太る理由は良く分かった。あんなに食べれば当然だろう。しかし晩餐会が無事終わったことに、当然のことにもかかわらず、ジェイクはなぜかほっとしていた。夕食も文句なく美味しかったのだが、ジェイクはあまり手を付けなかった。なぜかそんな気分にならなかったのだった。ジェイクは気がつくと執事の一挙一動を追っている自分がいることに気がついた。

「うーん・・・」
「どうした、ジェイク？」
「ラスカルか」

余程ジェイクは浮かない顔をしていたのか、ラスカルが心配して話しかけてきたのだった。

「顔色が悪いぞジェイク。慣れない豪華な食事に腹でも壊したか？」
「お前と一緒にするなよ、ラスカル」
「人が心配したのに、なんて言い草だ」

ラスカルが渋い顔をしたが、ジェイクはそれどころではなかった。

「（なぜだろう・・・何が引っかかるんだ？　何かを見逃したような気がする。見逃してはいけないものを）」
「おい、本当に大丈夫か？」
「あ、ああ。大丈夫・・・だと思う」

そう、大丈夫なはずだ。とジェイクは自分に言い聞かせた。だが、それでも何かもやもやした気分は晴れなかった。

続く

傍らに潜む危機、その1～違和感～（後書き）

次回投稿は、７／１７（日）１２：００です。

傍らに潜む危機、その2～転校生～（前書き）

～あらすじ～

ジェイクの学校に新たな仲間が・・・？

傍らに潜む危機、その2～転校生～

翌日。教室はなぜか騒然としていた。朝の訓練の片づけが長引いたジェイクは、少し遅れて教室に来たのだった。

「何があったんだ、リンダ？」

ジェイクは近くにいたリンダに話しかける。リンダはジェイクに肩を叩かれたので、顔を少し赤らめながら答える。

「あ、あらジェイクさん、おはようございます。どうやら転校生が来るらしいですわ」

「転校生？」

「ええ、朝からその噂で持ちきりですの。あなた方が来る前もこのような感じでしたわ。一体どのような方かしらね」

「へー、そうなんだ」

リンダの話を聞きながら、くるくるみたいなのが増えると本当に面倒だとジェイクは思った。あんな五月蠅いのは一人でいいと彼は思うのだ。

「（まあ・・・静かな奴だといいな）」

ジェイクはそう思うのだった。そして朝の集会の時、担任であるルドルが転校生を呼んだ。

「ドーラ君、入って来たまえ」

「はい」

教室の戸を開けて入って来た少年に、教室から歓声が上がる。一目では少年とわからぬほどの美男子。女子の服を着ていれば美少女で通ったであろう長い髪。光の角度によっては金にも緑にも見える透明感のある緑の髪。瞳も揃えたように薄い緑だった。シミ一つない美しい肌。ドーラと呼ばれた少年は、男にしては美しすぎた。

「ドーラです。皆さん、どうぞよろしく」

少年は声変わりもまだであろう高く美しい声で話すのだ。その声もまた姿に劣らず美しく、女子達は一瞬でうっとりしてしまったようだった。

そしてドーラはルドルによって席に案内されると、そこに向かう。その時、ドーラがジェイクの方を見て微笑んだのだ。不意打ちの笑顔に思わずドキリとするジェイク。その時、ジェイクは自分の鼓動が大きく一つ跳ねるのを感じた。

「（な、なんで？）」

ジェイクにもその理由はよくわからず、落ち着かない午前中を彼は過ごすのだった。

＊＊＊

「それは、『こい』だね」

「ふざけろ」

昼休み。ジェイクの教室にはルースが遊びに来ていた。今日の昼ご飯はロッテが作ってくれるとの約束で、ジェイク、ラスカル、ネリィ、ルースまでお呼ばれしてのランチだった。ブルンズが加わりたそうにしていたが、

「お前は食べ過ぎるから駄目だ」

とジェイクが突っぱねたので、悲しそうな顔をして食堂の方に去って行った。教室の入り口でなぜか待機していた彼の執事に慰められているのが少し見えたのだ。悪いことをしたかと思う一方で、今日の食堂は食糧難になるかもしれないなどと、ジェイクはくだらないことを考えていた。ちなみにリンダとデュートヒルデはお弁当を持参するので、彼らと相席して食べている。

そしてジェイクがどこか上の空なのにルースが気づき、ルースが色々ツッコミを入れた所、朝ドーラをジェイクが見た時の話になったのだ。

「でも、確かに美しい方ですね」

「ああ、女の子だって言われたら信じそうだもんな」

リンダとラスカルが口々に印象を述べる。

「ふんっ、どうってことありませんわ。別に一番格好いいわけではありませんし」

「えー、ヒルデってば誰と比べて言ってるんだあ？」

「べ、別に誰とも比べていませんわっ！」

「ジェイクじゃないの～？」

「ネリィ！」

デュートヒルデが顔を真っ赤にしてネリィに怒っている。一連の出来事以来、彼女達はすっかり仲良しだった。得意分野が全く違う二人は、一緒にペアを組むことで実に色々な事項で好成績を残していたのだ。それから彼女達はプライベートでも共にいる事が多くなり、放課後もネリィはデュートヒルデの別荘によくお邪魔している

らしい。おかげでネリィが最近作法にうるさくて、ジェイクは辟易しているのだった。

そんな二人を横目に、ジェイクは急いで昼ご飯をかきこんでいく。今日は時間があればクルーダスに昼の間剣の稽古をお願いしようと思っているのだ。彼は昼ご飯が終わり次第訓練場で一人剣を振っていることが多い。ジェイクは会話もそこそこに、昼ご飯を腹にかきこんで行く。ロッテのご飯がおいしいから、あっという間に食べれるということもある。

「ロッテはいいお嫁さんになるよな」

「え、ええっ!?」

ジェイクが突然そんなことを言ったので、ロッテは驚いた声を上げる。

「ロッテはどんな男がいいんだ？　やっぱりお金持ち？」

「わ、私は・・・」

ロッテが顔を真っ赤にして俯いてしまった。ルースが「やれやれ」と言った顔でジェイクとロッテを見比べるが、ジェイクはロッテの返事が鈍いので、もう返事は聞かずにさっさとご飯を食べてしまっている。

そして食べ終わるとその場を離れようとするが、そこに噂のドーラが現れる。

「ジェイク君・・・だよね？」

「ん？　そうだけど」

ジェイクは少し虚をつかれたが、今度はしっかり彼を正面から見据えた。見れば見るほど不思議な少年だとジェイクは思う。綺麗だ

けど、それだけではない。纏う雰囲気が只者ではないとジェイクは直感で感じたのだ。

そうなるとジェイクは警戒心も露わに、ドーラを睨む。

「俺になんか用か、転校生？」

「いや、聞きたいことがあって。それより名前で呼んで欲しいんだけどな。駄目かい？」

「友達なら名前で呼んでやるよ。お前は駄目だ」

「これは手厳しいな」

ジェイクの思わぬ態度に一同はハラハラしながら、事の成り行きを見守る。

「用がないなら行くぞ？」

「いや、学食はどこかなぁと思って。転校してきたばかりで何も分からなくてね」

「悪いけど他の奴に聞いてくれ。俺は急ぐんだ、じゃあな」

それだけ言うと、ジェイクはさっさとその場を後にした。あっけないジェイクの去り際に、ドーラもまた少し呆気にとられる。

「嫌われちゃった・・・かな？」

「うちのジェイクがすみません！　あんな大馬鹿は放っておいて、私達とご飯を食べませんか？」

ネリィが目をキラキラさせながらドーラを昼ご飯に誘う。明らかにドーラに興味があってしょうがないといった顔つきだった。包み隠さぬネリィにドーラは少し面喰った顔をしたが、

「いいのかな・・・？」

「もちろんです！　皆もいいよね！？」

と、ネリィの有無を言わさぬ態度に諦めたように全員が頷く。そうしてドーラはネリィ達と共に昼食を取ることになったのだった。

その放課後。今日のジェイクは、夕方の上級生の訓練に参加させてもらうように予定していた。神殿騎士団から聖騎士も来るので、今日はわざわざ戻らなくてもいいという寸法だった。もちろんいつも世話になっている外周部の騎士団には許可をもらっての行動だ。

そして彼は夕方の訓練に使う準備を一人でしているのだった。武器庫は屋内練習場の一画にあるので、外の演習場まで一人で持ちだすのは一苦労である。だが上級生は今度の大規模遠征で多くが何らかの任務を負うことになるらしく、その説明を一斉に受けていた。今回の訓練もそれにちなんだものだ。どうにも神殿騎士団が大規模な遠征を行う可能性があるらしく、５、６年生はおろか、４年までもが一時的に神殿騎士団の予備兵として召集される可能性があるのだという。

「何考えてんだかな、ぺったんこは・・・」

ジェイクは一人で準備する退屈を紛らわせるように呟く。そして武器を一通り出しておこうと、武器庫に足を踏み入れた時に後ろから声をかけられる。

「ジェイク」

「あれ、くるくるとルースじゃんか。どうした？」

後ろから歩いてきたのはデュートヒルデとルースだった。珍しい組み合わせである。

「今日の放課後に、ドーラさんの歓迎会を私の家でやることになりましたの。貴方の今日の予定は？」
「今日は訓練だな。悪いけどいつ終わるかわかんないから、行けないことにしておいて」
「もったいないな。おいしいものがたべれるのに」
「そうですのよ。訓練が終わってから来られても、ワタクシはお待ちしていますのに」

デュートヒルデは食い下がろうとしたのだが、ジェイクは首を振った。

「いや、遅くなっても悪いから辞めておくよ。気持ちだけもらっとく」
「そう・・・ですか。ならば仕方ありませんわね」

デュートヒルデが残念そうな顔をしたのでジェイクは申し訳なくなったが、これも仕方のない事。ジェイクだって本来は行きたいのだ。

「ジェイク、またの機会に来てくださいますか？」
「ああ、時間が取れればな」
「そこまでして訓練しなくても・・・」

デュートヒルデは呟くように言ったが、ジェイクにはもはや声は届いていない。そしてデュートヒルデは後ろ髪を引かれる思いでその場を去ろうとするが、先ほど入って来た扉が開かない。ここが開かないと、外に出るにはかなりの遠回りをしないといけない。

「あら鍵が・・・」
「さっきとおってきたのに？」

「どうした2人とも」

ジェイクが訓練で使う武器を一斉に引きながら出てきた。鎧を付けての訓練になるため、今回は刃を潰した鉄製の武器を使う。より実戦に近い訓練だ。

ジェイクがその武器から手を離し、扉に手をかける。

「あれ、本当だ。誰かが外から鍵を下ろしたのか？」

「先ほどワタクシ達が入って来たばかりですのよ？」

「外にはもう用具を並べ始めているから、誰かいるのはわかるだろうに・・・」

その時である。

バキン

彼らの背後から、何かが突き破られるような音がした。3人は一斉にその音の方を向く。

「な、何の音ですの？」

「なにかがこわれるおとだったね」

「武器庫の方か・・・？」

ジェイクは何があったか思い出そうとする。武器庫の奥には普段は何もないはず。

「あ・・・」

ジェイクは昨日の昼の出来事を思いだす。ミルトレが言っていた。魔獣を置いているから、不用意に近づくなと。だとしたら。

「ジェイク。何か聞こえますわ」

デュートヒルデが不安そうにジェイクの袖を掴んでいた。確かに彼女の言う通り、何かの息遣いが聞こえてきた。そしてジェイクは練習用の鉄の剣を無意識のうちに掴んでいた。

「じぇいく、これは」

「2人ともゆっくり下がれ。俺が合図したら、左後ろにある扉目がけて走れよ？　いいか、足音をたてないようにゆっくりだ」

ジェイクの指示の元、3人はゆっくりと下がり始める。そして正体を表す息使いの主。

「ああ！」

「これはぴんちだ」

「やっぱりそうかよ・・・」

ジェイクの予想通り、彼らの前に姿を現したのは一匹の飢えた森オオカミだった。

続く

傍らに潜む危機、その2～転校生～（後書き）

次回投稿は7／19（火）です。

傍らに潜む危機、その3～初めての実戦～（前書き）

～あらすじ～

ジェイクが学園の中で遭遇したのは魔獣で・・・？

傍らに潜む危機、その3～初めての実戦～

「あ、ああ・・・」
「なんでこんなところにまじゅうが」
「理由はどうでもいい。それよりどうやって生き延びるかに集中しろ」

ジェイクの声でルースが思考を切り替える。だがデュートヒルデの方はそうはいかなかった。生まれて初めて見る魔獣に、歯が震えてカチカチと音を立てている。
そんな3人を前にして、森オオカミがジェイク達の方を獲物として認識するするように首をもたげた。

「逃げろっ！」

その言葉でルースが一目散に駆けだす。デュートヒルデが固まるのを、ジェイクが手を引いて逃がす。同時に扉の方に剣を一本蹴飛ばしておく。後ろからは涎を撒き散らしながら森オオカミが迫ってきた。

「ルース！」
「まかせろ！」

ジェイクがデュートヒルデを抱えて飛びこむと同時に、横引きの戸をルースが締める。その扉に顔面から衝突する森オオカミ。そしてルースがジェイクの蹴飛ばした剣を使い、扉につっかえ棒をする。

「ふう、ひとあんしんかな？」

「いや、まだだ。ここには他にも出入り口がある。あいつがそれに気がつく前に、ここから脱出だ」
「うへぇ。にくたいろうどうはにがてなんだよ」
「ぼやくな、行くぞ！」

ジェイクが先頭を走る。デュートヒルデは座って震えていたので、ジェイクが手を掴んでやった。

「おら、くるくる！　行くぞ？」
「は、はいっ！」
「あーあ、こういうことをするから・・・」

ルースがその後の事を考えため息をついたが、ジェイクはいつも真剣そのものである。それにまずここを生きて出なければその後も何もない。ルースにはまだその辺の緊張感が欠けている。歳を考えれば無理もなく、彼自身が矢面に立ったことがないからだろう。まだルースには真の意味での「命をかける」という言葉の意味はわからない。

もちろんジェイクにだってわかってはいないが、いつもラファティやアルベルトを見ていると、命をかけるということがどういった意味を持つのかはなんとなくわかるのだ。

「（これが実戦・・・心臓が高鳴るし、呼吸が浅くなる。体力の消耗が早くて、体が緊張で思ったように動かない。なのに頭は異常に冴えてる。これが・・・命のやりとり！）」

ジェイクはドゥームの時に一度実戦を経験したわけだが、あの時は勢いだけで戦場に立っている。今度の彼は修練を積み、それなりに戦士としての自覚を持ち、敵を倒すことがど4ういう意味を持つのか、他人を守る戦いとはどういうものかと知った上で剣を握って

いる。いうなればこれがジェイクの初陣だった。

「（確かあの角を右に曲がると扉があって、そこから確か庭園に抜ける道が――）」

ジェイクが脱出までの経路を思い出すが、そこに隙が生まれる。

「じぇいくっ！」

「横だって？」

物陰から森オオカミが飛び出してきたのだ。咄嗟にジェイクは剣で牙を受けたが、オオカミにのしかかられる形になる。だがすぐさまオオカミの腹を蹴り、飛びのいた。同時にオオカミも飛びのいてジェイクと距離を取る。すると、

「あ」

「まずった・・・」

オオカミとジェイクの間にデュートヒルデがはさまる形になったのだ。デュートヒルデはジェイクとオオカミを見比べながら、わなわなと震えている。

「くるくる、こっちにゆっくり歩いてこれるか？」

「ダメ・・・腰が抜けて」

デュートヒルデはその場に腰を抜かして、へなへなと座り込んでしまったのだ。だがジェイクはそれならそれでいいと思った。これで思考を絞れる。

「（オオカミよりも速く斬りかかればいいだけの事だ。なんだ、そ

れだけのことだ）」

それは決してたやすいことではない。だがそれすらも気にならぬほどにジェイクの集中力が高まっていく。初陣の緊張も忘れ、ゆっくりと周囲の音が消えていった。なのに周囲に何があるか、どう動いているのか、動こうとするのかが手に取るようにジェイクにはわかるのだ。たとえば、背後にいるはずのルースは、今右足が前にあるのが見ているかのようにわかるのだった。

「（ラファティが集中した時には、背後で落ちる葉っぱの枚数が数えられるって言ってたな。こういうことなのか、ラファティ？）」

ジェイクが頭の中でラファティに語りかけるが、それすらもやがて消える。そしてついに音が完全に消えたのだった。聞こえるのは自分の心臓の音と、オオカミの息遣い。あとは守るべきデュートヒルデの姿。ただそれだけ。

「ジェイク・・・わたくし、死にたくありませんわ・・・」

デュートヒルデが半べそで顔をひきつらせながらむせび泣くが、ジェイクは表情を変えずにただ優しく言葉をかけた。

「大丈夫だ、俺が絶対に守ってやるから。だから動くなよ、ヒルデ」

「・・・はい」

デュートヒルデはなぜだかその言葉で非常に安心できた。勝つのはジェイクだと、彼女も確信できたのだ。それに自分の名前を初めてジェイクが呼んだことに、少し喜びすら覚える始末だった。

そして、

「お前も動くな、ルース。邪魔だ」
「え」

ルースが動きかけた瞬間、ジェイクに止められた。ルースはなんとかジェイクの手助けをしようとしたのだが、なぜジェイクが自分に背を向けたままでそのことがわかるのかが不思議でならなかった。

ルースは思うのだ。ジェイクの背中がいつもと違うと。

「（これは・・・なんだろう？　じぇいくがべつじんみたいだ）」

ルースはその雰囲気に全てをジェイクに任せることにした。それが一番いいと彼も判断したのだ。そしてジェイクの体から立ち上る殺気。

「・・・倒す」
「グルルルル」

ジェイクが一歩前に出る動作をすると、オオカミが一歩下がった。それでジェイクはさらに仕掛ける。

「はああ！」
「ガルルルッ！」

ジェイクが気合の雄叫びをあげると同時に、森オオカミが飛びかかって来た。正確には、ジェイクの気合に飛びかからせられたのだ。そしてジェイクは森オオカミが飛びかかってくる様が、非常にゆっくり見えていた。

「（なんだ、いやに遅いぞ？）」

それはジェイクの集中力が極限に達した証。ジェイクはその時普通の速度で自分が動いていると思っていたが、ルースなどにとってはまさに目にもとまらぬ異常な速度だったのだ。ブルンズに飛びこんだときとは比較にならないほどの速度。完全に森オオカミよりも初動が遅れたにも関わらず、先手を取ったのはジェイクの方だった。

「せいっ！」

ジェイクの気合と共に薙ぎ払われた剣は、森オオカミの首の骨を砕いて、そのままオオカミを壁に叩きつける。幼いながら尾圧倒的な初動の速度から繰り出される全体重をかけた一撃を、さしもの魔獣も首一つでは受け切ることができなかったのだ。悲鳴を上げる暇もなく壁に叩きつけられ、痙攣しながら泡を吹く森オオカミ。戦いは一瞬だった。

「ふうっ」
「やった！」

ルースが思わず指を鳴らす。そして彼に駆け寄るのだ。そして集中力を解きかけたジェイクが2人に手を差し伸べようとした時である。

「グルルルル」
「何っ！？」

背後からもう一体、森オオカミが出現したのだ。ジェイクは後ろを取られる形になってしまう。

「（そうか、しまった。訓練では『魔獣の戦いを見る』って言ってたな。それなら魔獣同士が戦うのが当たり前か。どちらか一方が倒

れた後がクルーダスの出番だったんだ。なんでそこに考えが及ばないんだ、俺！）」

ジェイクが自分のうかつさに怒るも、今度は圧倒的に不利だった。背後の森オオカミは一定の距離に止まっているようだが、本来ならジェイクは横っ跳びで一度回避をしたいところなのに背後にはデュートヒルデがいる。つまり逃げるという選択肢はジェイクにはなく、振り向きざま森オオカミと戦わなければならないのだ。しかも距離が先ほどより近い。

「（ぎりぎりの勝負だ・・・やれるか？）」

ジェイクが万一を考え、ルースの方を見る。最悪、ルースとデュートヒルデだけでも逃がさなければならない。ルースもジェイクの目を見て意図を察したのか、頷いてじりじりとこちらににじり寄ってくる。

意図が通じたことを理解してジェイクが再び集中力を高めるが、今度は先ほどの様にはいかなかった。先ほどは一回きりだと思って使った集中力なので、どうしても先ほどの様な集中力にはならない。それでも今にも泣き出しそうなのを振るえながらこらえているデュートヒルデを見ると、ジェイクは自然と護ってやらなければと思うのだった。

ジェイクがデュートヒルデをじっと見ると、彼女もジェイクを見つめ返す。しばらく見つめあううちデュートヒルデから怯えが薄れた事をジェイクが確認すると、彼はデュートヒルデに頷いて見せた。それが合図になる。

「ガゥ！」
「おおお！」

森オオカミが飛びかかってくるのに合わせ、ジェイクが振り向いて最速の突きを合わせる。薙ぎ払いでは間に合わないと感じたのか、ジェイクは突きを選択した。だがしくじれば自分は死ぬ、いちかばちかの一点突破である。そしてルースも飛び出し、デュートヒルデの方に向かう。

「（やばいっ、オオカミの方が速い！）」

ジェイクの目測では、突きが伸びきる前に森オオカミの前足がジェイクを押し倒すはずだった。だが、ジェイクは見たのだ。森オオカミが何かに怯えたように、空中で躊躇するのが。それでも放ったジェイクの突きは止まらなかった。

「うあああっ！」

ジェイクの突きはオオカミの口の中に命中し、オオカミの喉を貫いていた。一応練習用の鉄剣なので剣先も潰してあるのだが、それでもジェイクは下から突き上げる格好になったので、２m以上のオオカミの体重が喉に乗っかった形になる。柔らかいオオカミの喉はひとたまりもなく破れたのだった。

勢い余ってオオカミに押し倒されたジェイクが、オオカミをどけて起き上がる。その瞬間、ルースが彼に駆け寄ってきた。

「じぇいく！　けがはない？」

「ああ、何とかな。それよりお前達は？」

「ぼくはだいじょうぶだ。くるくるは・・・」

「あ、ははは」

デュートヒルデは変な笑を浮かべていた。ジェイクは純粋に彼女を心配して、そっと傍に寄る。

「もう大丈夫だぞくるくる」
「ほ、本当ですの？」
「ああ。護ってやるって言ったろ？　信じろよ」
「そ、そうですか。それ、は・・・ひ、ひぐっ・・・うわあああああん！」

緊張の糸が切れたのか、デュートヒルデはジェイクに縋りついて泣き始めた。無理もない。子どもが予期せぬところで命の危険にさらされたのである。まして彼女は公爵家令嬢。今まで何度か誘拐などの危機に直面しはしたが、いつも彼女の周りには多くの護衛がおり、命の危険まで感じたことはなかった。また誘拐されても、公爵家にまでなると命の危険にさらされることはない。相手が人間なら、交渉のしようもある。

だが魔物では交渉などできようはずもなく、ただ殺すか殺されるかという純粋な二択を迫られるだけ。初めて自らの命が本当に危機にさらされた実感を持ったデュートヒルデは、安堵したせいか泣きじゃくってしまった。だがこれが普通の子どもの反応であろう。ジェイクとルースは育った環境のせいで耐性があるが、普通ならパニックになって逃げ出していてもおかしくはないのだ。

ジェイクはデュートヒルデが落ち着くまで傍にいてやり、ルースはそっとその場を離れて教官を呼びにいった。そして学園は一時騒然とする。当然のごとく演習は中止され、すぐさま原因究明が行われた。学園の安全管理体制が問われ、アルネリア教会からは査察員が派遣されるし、学生達はうろたえるばかりである。その中で並の様に広がって行くジェイクの評判。練習用の剣で魔獣を2体も倒すなど、常人のやることではない。ジェイクが望むと望まざるに関わらず、彼は否応なく注目の的となった。彼を好奇と驚愕の目で見る視線が増えていく中、全く別の意味をもった視線が一つだけある。

「（まったく危なっかしい。俺が間に合ったからいいようなものの、間一髪だったな。俺がオオカミに向けて殺気を放っていなければ、死んでいてもおかしくはないぞあの小僧め）」

柱の陰からジェイクを見つめる人物。ジェイクがその気配に気が付いて柱の方を見る頃には、その人物の姿は既に消えていた。

続く

傍らに潜む危機、その3～初めての実戦～（後書き）

次回投稿は７／２０（火）１２：００です。

多くの学生は夏休みに入るのでしょうか？　明日から夏休み企画ってことで連日投稿に戻そうと思います。

傍らに潜む危機、その４～聖都の綻び～（前書き）

～あらすじ～

なんとか魔獣を退けたジェイクだが、なぜこのような事が起こったのか・・・？

傍らに潜む危機、その4～聖都の綻び～

＊＊＊

その夜、アルネリア教会の深緑宮での事。

「ジェイクは？」

「もう寝ているでしょう。さしもの彼も今日は疲れたようです。それでもロクサーヌとはしばし手合わせをしていたようですが」

「そうか、剣に関しては本当に真摯よな。もう少し机の上の戦いも頑張って欲しいものだが」

話しているのはミリアザールとラファティである。その場にはアルベルト、モルダードと梔子もいる。

「遅くなりました」

「マナディルにドライドか、入れ」

そして大司教であるマナディルとドライドも現れた。特にマナディルはグローリアの責任者も兼任しているため、今回の事件の責任を問われるとしたら彼なのである。

部屋に入るなり、マナディルが謝罪の言葉を述べる。

「今回の事は何とお詫びを申し上げてよいか」

「その通りじゃ。あそこでジェイクが食い止めたからよかったが、他の生徒に被害が出ていたらどうなったか。なぜこのような事が起きたか、申し開きがあれば述べてみよ」

「いえ、言い訳はいたしません。処分はいかようにでも」

マナディルが頭を垂れたままなので、ミリアザールは大きく息を吐いてマナディルに面を上げるように促した。

「お主の禿げ頭を見てもしょうがないわ。管理体制に問題が無い事くらいは承知しておる。それより調査は既に進めておる。ラファティから報告を聞くがよい」

「はい。重ねてお詫びを申し上げ・・・」

「だからその糞真面目なのがいかんと言うておる。もうよいわ。ラファティ、報告を」

「では調査報告をいたしましょう」

ラファティが手元の資料をめくる。

「まずはわかったことから申しましょう。今回ジェイクが倒したのは森オオカミではありません」

「ほう。では何だと？」

ミリアザールの眉がぴくりと動く。

「はるか南部に生息する亜種、ヴァルトハウンドです」

「あまり聞かんが・・・要はどうなのじゃ？」

「基本的に南部の魔物は大陸の中でも尤も凶暴で戦闘的です。つまり、森オオカミの上位種と考えていただいて結構かと」

ラファティが淡々と報告する。そこまで聞いてミリアザールの顔が一層険しいものになった。

「つまり、誰かが魔物を入れ替えたと？」

「そこまでは確認しておりません。そもそも今回の森オオカミはギ

ルドを通さず、グローリアの６年生の課外演習を通じて捕獲したもの。つまりは・・・」
「グローリアに内通者が？」
マナディルが驚きの声を上げる。さらに何か言いたげな彼を、ミリアザールが制する。
「その点に関して、それ以上の調査は出来ているか？」
「いえ、そこまでは。いつ入れ替わったのかすら定かではありません」
「ならば全てここからの議論は推測になろう。そのつもりでなら各自意見を申すが良い」
ミリアザールの言葉にモルダードが手を上げる。
「モルダード、申してみよ」
「では僭越ながら。森オオカミがすり替えられた時期ですが、それによって事情は変わるでしょう」
「例えば」
「まずは最初に捕獲した段階で森オオカミではなかった可能性。これは最近の魔王が頻発していることを考えれば、知らぬうちにそのような事があったとしても不思議ではありません」
「その可能性に関しましては、私から一言」
ラファティが手を上げる。
「なんじゃ」
「森オオカミは集団行動を好み、群れのボスを作る傾向があります。集団の総数は少なくても２０．多ければ１００体以上になることもあります。一方でヴァルトハウンドは我の強い種で、単体で狩りを

することもあり、集団は多くても１０にも満たぬ数しか形成しません。今回の捕獲時には３０を超える群れを相手にしたとの報告があります。可能性として、捕獲時には森オオカミだった確率が高いかと。もっともこの２種に関しては、一見では見分けがつきにくいです。なので確実とは申しませんが」

「なるほど。ではこの時の可能性は低いと一端結論付けよう。モルダード、他にあるか」

「はい。では続きを」

モルダードがさらに続きを述べる。

「次に輸送中にすり替えた可能性ですが、これはありえません」

「なぜじゃ」

「捕獲した個体には識別のため焼印を付けます。そして聖都アルネリアに森オオカミを運び込む時、私が自ら確認いたしました。聖都アルネリアに入った時は、間違いなく捕獲時の個体です」

「父上の・・・いえ失礼、モルダード殿の言うことは正しいかと。我々が魔獣や魔物を捕獲する時は焼印にて識別を行います。これは義務です。そして今回ジェイクが倒した個体に焼印はなかった」

「ほほう」

ミリアザールが満足そうに微笑む。

「では可能性は絞られるな」

「はい。グローリア内でオオカミは入れ替えられた可能性が高いかと」

「そのようなことができるわけがない！」

憤慨したのはマナディルである。彼にしてみれば、自分の膝元でそのように大それたことが行われたとは信じたくないのだろう。そ

んな彼をドライドが制する。

「マナディル、落ち着け」

「これが落ち着いていられるか！　だいたいそんな魔獣を持ちこむのにどれだけの検閲を突破する必要があると・・・」

「その必要はなかろう」

ミリアザールが突然マナディルの言葉を遮った。意外な言葉に、マナディルが目を白黒させる。

「ミリアザール様。それはどういう・・・」

「そなた達、戦において攻められても落ちない砦を作るには、何に気を付けるか知っておるか？」

「いえ、それは・・・」

「一か所だけ弱い部分のある砦、ですね」

アルベルトが静かに言い放つ。その言葉に頷くミリアザール。

「その通り。砦というものは、全てを堅固にすると思わぬ場所から打ち破られる。だからわざと弱い部分を作り、そこをしっかり押さえるのが守の基本。アルネリアもしかり。密輸ルートはこの都市にもあるし、そこの長はワシの息のかかったものじゃ」

「ではその長に聞けば」

「うむ。今回そのような魔獣を誰が仕入れたかわかろう」

「早速手配いたします。今夜中にでも明らかにしましょう」

「頼むぞラファティ」

ラファティは一礼して部屋を出て行く。残された面々にミリアザールが意見をさらに促すと、今度はアルベルトが手を上げた。

「ジェイクに話を聞いてはいかがでしょうか？」
「なぜじゃ？　一通り話は既に聞いておろう」

この質問にはミリアザールも訝しがる。だがアルベルトは思った以上にジェイクを高く評価していた。

「ジェイクの勘は侮れない。彼の意見は貴重です。もっと彼が学校生活や普段の生活の中で何か違和感を覚えなかったか、追求すべきです」
「ふむ。確かにな」

ミリアザールは、ジェイクがドゥームとの戦いで見せた不思議な才能を思い出す。確かにミリアザールですら気づかない事柄に、ジェイクは気が付いている可能性があるのだ。

「だが明日にしてやろう。今日はジェイクも疲れていよう」
「はい。ではまた明日にでも」
「よし、まだ他に提案のある者は？」

ミリアザールの言葉に、今度は誰も答えない。

「ならば今日は夜も更けた。だが各自まだ仕事はある者もいよう。一度ここで解散とするが、マナディルは現場に入った可能性のある物を調査し、情報統制を徹底せよ。一般民衆には知られるな。ドライドは現状維持。アルベルトは演習のために赴いた神殿騎士団の者に口止めをし、状況を説明させろ。モルダードは、ヴァルトハウンドの輸送に関わった者を洗い出せ。以上だ」
「「「「御意」」」」

そうして部屋からそれぞれ出て行く。残されたのは梔子とミリア

ザール。

「梔子よ、グローリアに潜り込んでいる口無し共から報告は？」
「実は怪しい人物がいたとの報告が」
「なるほど、裏は取れそうか？」
「経歴などの一次報告は来ましたが、全く怪しい部分はありませんでした。それはもう、怪しすぎないほどに」
「・・・それが逆に怪しいと？」
「はい」

梔子の顔はいつになく真剣である。かなりの確信が彼女にはあるのだと、ミリアザールは察した。

「よかろう。いつ頃判明する？」
「早朝には」
「わかった。報告が上がり次第ワシに伝えろ」
「御意」

そうしてミリアザールはそのまま仮眠を取りに行くが、翌朝、その報告とラファティの報告を受けたせいで、ジェイクの話を聞くことは後回しになってしまった。それが失敗だったと、ミリアザールはその日の内には後悔することになるのだ。

続く

傍らに潜む危機、その４～聖都の綻び～（後書き）

次回投稿は７／２１（木）１２：００です。

傍らに潜む危機、その5～少年の直感～

翌朝。ジェイクは学校に通常通り登校した。休んだ方がいいのではないかと事情を知る者は助言したが、ジェイクは無理を言って学校に登校したのだ。

それにはおぼろげだが確信めいた理由がある。

「（なぜだろう。まだ悪い予感が治まらない）」

ジェイクは昨日魔獣を退けた後とても強い疲労感に襲われたが、なぜか目は冴える一方だった。いつもの日課をこなしていないからかと、就寝前に自室において一人裸でくつろぐロクサーヌに無理を言って剣技の練習を申し込んだが（突然部屋に押し入ったので殴られはしたが）、それでも寝られなかった。不意をついたとはいえ初めてロクサーヌから一本を取った事も、ジェイクの心を落ち着かせることはなかった。

準備が整ってなかったとはいえ、ジェイクに一本を取られて落ち込むロクサーヌを尻目に、ジェイクはずっと考えていた。戦いの過度の興奮が引き起こす過覚醒ということももちろんあったろうが、ジェイクの本能が告げていたのだ。まだ何一つ終わりではないと。結局ロクに寝られなかった彼だが、その答えは今朝になって明確な形を成し始めていた。

「（そもそも誰があんなことをしたんだ？　魔獣を解き放って得する奴がいるのか？　ミリアザールが自分の学校に敵の侵入を許すなんてことがあるのか？　うーん、それよりも何かを見落としているような・・・）」

ジェイクが唸りながら廊下を歩いていると、後ろから彼の肩を叩

く者がいる。

「おいジェイク」

「・・・なんだ、ブルンズか」

「なんだとはご挨拶だな。これでも、その・・・心配したんだぞ？」

ブルンズが気まり悪そうにジェイクを気遣う。だがその彼が照れながらジェイクを気遣う様子は、まるで好きな女性を前にしてもじもじする男の子のようで、お世辞にも気持ちの良いものではなかった。それでも純粋な好意であろうことはジェイクも分かったので、どうするべきかと逡巡するも、その後ろからさらにブルンズの肩を叩く者がいる。

「男のデレはいらんぞ、ブルンズ」

「うおおい！　ラスカル、俺の好意をそんな言葉でくくるなぁ！」

「・・・アホらし。やってろ」

口論を廊下で始めたラスカルとブルンズを尻目に、ジェイクはため息をつきながら教室に向かおうとする。すると、ジェイクはブルンズの事を廊下の陰からそっと見守る彼の執事に気がつく。その瞬間、ジェイクの頭の中で霧がさあ、と晴れたような気がしたのだ。

「（アイツだ！　どうしてかは説明できないけど、アイツが魔獣をこのグローリアに持ちこんだ犯人だ！）」

言葉では説明できない確信がジェイクを襲った。全身の毛が逆立つように、ジェイクの体が戦闘態勢に入る。周囲から音が消え、周りの動きが手に取るように把握できるような感覚を得る。昨日一匹目の魔獣を倒した時と、ほぼ同じ感覚だ。

そして今日の彼は、真剣を背中に布に包んで持参していた。真剣の

重さと怖さに早く慣れろというミリアザールの方針から、普段はアルベルトやラファティ相手にしか使わない真剣をジェイクは持参していたのだ。
そしてジェイクの背中にある真剣が、ずしり、と重みを増すような気がしたのだ。

「・・・アイツを斬らないと」
「へ？」
「何か言ったか？」

いつの間にか、口論を終えたブルンズとラスカルがジェイクの前に立っていた。彼らは自分達の声に反応しないジェイクを不思議そうな顔で見ている。

「おい、本当に大丈夫かジェイク？」
「顔が真っ青だぞ？」
「ああ・・・何でもない」

ジェイクはそれだけ言うと、教室に再び向かい始めた。後ろからは顔を見合わせるようにして、ブルンズとラスカルがジェイクの後に続く。
ジェイクがここでブルンズの執事に斬りかからなかったのは、人目を気にしてのことではない。邪魔が入るのを恐れて、あるいは他の生徒を盾に逃げられるのを防ぐためだった。

「（後で行くか。でも、もし俺の勘違いだったら？）」

ジェイクの胸を一抹の不安がよぎる。証拠はない。一つ間違えればただの人殺し。そして迷惑は周囲の者全員に及ぶだろう。だが、そんな常識的な考えはすぐに彼の頭から吹き飛んだ。

「（その時は・・・リサに二度と顔向けできないな）」

ジェイクの思考にあるのは、いつもリサが第一。自分の事や他人の事は二の次だった。この時もジェイクが恐れたのは、自分の判断が誤っていればただの人殺しになることではなく、リサが悲しむだろうと言うことだけだった。

結局、ジェイクは一つ目の授業が終わっても決断することができず、決意が固まったのは二つ目の授業中の事であった。

「（やらないで後悔するよりも、やって後悔しよう。それに、俺の勘がさらに正しければあいつは・・・）」

ジェイクの腹は決まった。そうとなれば行動は早い。

「先生！」

「なんだね？」

授業中であった魔術基礎学問の教師である、アラネスがジェイクをじろりと睨む。彼は４０そこそこの男だが、ジェイクがしょっちゅう授業中に居眠りをするので、あまり良い印象を抱いていなかった。

「気分が悪いので、救護室に行ってもよろしいでしょうか？」

「今度は救護室かね。気分が悪いのならいつものように寝てはどうだね？」

アラネスが精一杯の嫌みを言ったが、ジェイクはまるで意に介さなかった。本来なら違った反応を見せる所だが、ジェイクはそれどころではない。そのジェイクの一言も発さない様子を見て、アラネ

スは本当にジェイクの体調が悪いと判断したのか、ため息まじりに折れた。

「・・・止むをえないだろう。ジェイク少年、君の剣への打ち込む態度は感心しているが、他の事を疎かにすべきではない。もっと体を労りたまえ。救護室で休んでくることを許可します。救護係はいるかね？」

「あ、先生。私が」

ロッテが手を上げるのをジェイクは制し、そのまま返答する。

「いえ自分で行けますので。感謝します、先生」

ジェイクが素直に一礼して出て行くと、アラネスは微妙にジェイクの素直な態度を訝しがりながらも、再び授業に戻る。そのジェイクがいなくなった教室では、ラスカルがブルンズの肩をとんとんと叩くのだ。

「ブルンズよ」

「なんだぁ？」

「ジェイク・・・やっぱりおかしくないか？」

「お前もそう思うか？」

ブルンズがくるりと後ろを振り向く。

「ああ、なんだか思いつめてるみたいだった」

「前に俺の家に来てからだよな」

ブルンズが唸ったのを見て、ラスカルは目を丸くする。

「お前・・・案外と見てるのな」
「案外とはなんだ、失敬な」
「いや、てっきり鈍い奴だとばかり」
「なんだと?」
「何を話しているのかね、そこ!?」

アラネスが怒りの表情でブルンズとラスカルを睨んでいるのを見て、2人は「まずい」と思ったが、そこにロッテが助け舟を出した。

「先生、ブルンズ君が腹痛みたいです」
「そ、そうなんです。ここの所、便通が悪くて・・・いたたた!」
「ふう・・・君の場合は食べすぎだろう。食堂から苦情が寄せられているよ、あの肉ばかり食べる生徒はなんなのかとね」

アラネスのその言葉に教室がどっと笑うも、ブルンズはぐっとこらえていた。彼はどうやら懲罰房で忍耐というものを学んだらしい。今までならすぐにかっときていた場面で怒りを制御する術を覚えたようだった。

そのブルンズを見ながら、さらにロッテが申し出る。

「彼を救護室へ運んでもいいでしょうか?」
「またかね。まあいいだろう。私は君達の親から大切な君達を預かっているわけだから、何かあってからでは遅いからね」
「はい。ではラスカル君、ブルンズ君を運ぶのに手を貸してくれますか?」
「承知した」

ラスカルがここぞとばかりに手を貸して、3人は教室を出て行った。そして足音が教室から完全に聞こえないであろう場所まで来ると、彼らは顔を見合わせる。

「私にも説明してよ。ジェイクがどうかしたの？」
「俺達にもわかんねぇよ」
「だけど、尋常じゃないかも」

ラスカルが考え込む。ジェイクと一番学園で仲良くしているのはラスカルであり、ここ数カ月の付き合いでジェイクの性格はなんとなく把握していた。ラスカルが思うに、ジェイクがどのくらい自覚があるかはわからないが、ジェイクは感情が顔に出やすい。なので悩みごとがあればすぐにわかるわけだが、彼は同時に素直でもあるので、ラスカルが尋ねれば大抵の事は話してくれる。だからこそラスカルはジェイクと仲がいい。

それが今回のように、ジェイクが一人悩んで誰にも相談しないなど、初めてのことだった。

「・・・万一を考えよう。ロッテ、クルーダス先輩はわかるな？」
「え、ええ。一応は」
「今の時間は自主学習の時間のはずだ。先輩の教室に行って、彼を呼んで来てくれ」
「わかったわ。でも何のために？」
「嫌な予感がするとだけ言ってくれ」

ロッテは事情がまだよく呑み込めていないようだったが、ラスカルの顔が真剣そのものだったの大人しく彼の言うことに従った。

そしてロッテが走り出すと、ラスカルとブルンズはジェイクを探して走り出すのだった。

続く

傍らに潜む危機、その5～少年の直感～（後書き）

次回投稿は7／22（金）12：00です。

傍らに潜む危機、その6～普段通りの執事～

＊＊＊

その頃ジェイクは隠しておいた真剣を腰に差し、ブルンズの執事を探して校内を探し回っていた。普通ならどこから探すべきか想像もつかないほど広いグローリアであるが、ジェイクは見えない何かに導かれるように校内を探索していた。

「こっちか」

ジェイクはいつもと様子の違う空間を探して歩いているのだった。同じ光景でも、そこははっきりとした異世界。その原因は何者かが残した違和感。微かに感じるその気配を彼は辿る。もちろんジェイクがそのような訓練を施されたわけではなく、また、たとえ梔子のように訓練された者だとしても追跡は無理だったろう。これはジェイクが生きる上で習得した、彼自身の能力である。

ジェイクの能力。その事をジェイクは意識しながらも、どのような物かまでははっきりとは理解できていない。だが、使い方だけはわかっている。そして自分が間違う事など決してないことを。

「ここか・・・」

やがてジェイクが辿り着いたのは、魔術実験教室。ここでは簡単な召喚魔術や、魔術訓練を行うために魔術障壁で囲まれた部屋である。当然のように防音魔術も施されており、その性質上普通なら立ち入り禁止の教室であるが。

「鍵が開いている」

ジェイクが少し取っ手を動かそうとすると、すんなりと扉が動くのだ。その事実に、瞬時に集中力を高めるジェイク。下手をすれば扉を開けた瞬間に斬られることもありうる。ジェイクは警戒するように剣先でドアをそっと開ける。

ギギギ、と立てつけの悪いドアが軋む音を立てながら重苦しく開き、少しカビ臭い匂いがジェイクの鼻をつく。いつもなら大したことに感じないジェイクだが、今はこの湿り具合が息苦しさを倍増させる。

「いない？　いや・・・」

「おや、これはジェイク様。いかがなされましたか？」

突然声を部屋の中からかけられ、ジェイクは思わず後ろに転びそうになった。声の主はブルンズの執事だった。彼の名前は何と言うのか確かに聞いたはずなのだが、ジェイクは忘れていた。まるで頭が覚える事を拒否するかのように。

あるいは、ジェイクは名前を聞く必要を感じなかったのかもしれない。その理由を、ジェイクは執事と相対することではっきりと自覚し始めていた。

「ここで何している？」

それでもジェイクは一つ呼吸を整えると、冷静に質問する。その答えに、執事もまた平静で返す。

「ブルンズ様が忘れ物をしたとおっしゃったので。不肖ながら、この老いぼれが探していたのでございます」

「勝手に動き回っているのか？　学園の許可は？」

だがジェイクの質問は想定の範囲内なのか、執事は微笑みながら答えた。

「もちろん得ておりますよ。それに私はこの施設内でしたら、ある程度は自由に動けるような許可をいただいております。つまり私がここにいても何の不都合もないわけですが、失礼ながらジェイク様は授業中では？」

「俺は不審者を見たから追っ掛けてきただけだ。授業よりは優先されるだろう。それより、その証拠とやらがあれば見せてもらおうか？」

「どうやら私はジェイク様に信用されていないようですね・・・仕方がありません」

ブルンズの執事は胸の内ポケットから便箋を取り出し、それを指先で掲げてジェイクの元に歩いてくる。そして彼の距離がジェイクから7歩のところに来ると、ジェイクはおもむろに彼に剣を抜き放ち様斬りかかったのだ。

だが執事は事もなげにジェイクの剣を避けて見せた。その表情は平静そのもので、顔には驚きも敵意も見られない。それがジェイクに取っては余計に不気味だった。

「何をなさいますか、ジェイク様？」

「・・・今確信した。お前は敵だっ！」

ジェイクはその一言と共に、ブルンズの執事を斬るべくさらに彼に踊りかかっていった。

＊＊＊

剣の風切り音を聞いたラスカルとブルンズが魔術実験教室に辿り

着いたのは、ジェイクが戦い始めてから数分の後だった。

「え？」

「どうなってるんだ？」

２人が状況を飲み込めないのも無理はない。部屋の中には抜き身の真剣を持ち、汗だくで剣を構えるジェイクと、涼しい顔をしたままのブルンズの執事が立っていたのだ。

「何をなさいますか、ジェイク様？」

「くそっ」

執事の言葉にジェイクが苦々しい言葉を吐いた。その光景をはたから見たブルンズとラスカルは、それぞれ異なる反応を見せた。

ラスカルという少年は普段はふざけつつも、基本的に冷静な性格である。彼はジェイクが一体何を成そうとしているのかを冷静に見極めようとし、ブルンズも最初は呆然としたものの、ジェイクが本気で剣を振るっているのに気がつくと、彼を止めるべく叫ぶ。

「おい、ジェイク！　何をやってるんだ！？」

「・・・話しかけんなよ、余裕がないんだ」

「いや、そうじゃなくてだな！」

ブルンズはさらに言い返そうとするも、ジェイクの鬼気迫る表情にさしもの鈍い彼もただならぬ雰囲気を感じ取り、思わず言葉を詰まらせた。そこでブルンズは彼の執事を説得しようと試みる。

「おい、お前！　俺の許可も無く何をしている！？」

「ご心配なくおぼっちゃま。すぐに終わりますゆえ」

「いや、そんなことではなくてだな。俺は何をしているのかと聞い

ている！」
「ご心配なくおぼっちゃま。すぐに終わりますゆえ」
「だから・・・」
「ご心配なくおぼっちゃま。すぐに終わりますゆえ」

その山彦の様に繰り返される言葉に、ブルンズも異常を感じた。確かに彼の目の前にいるのは、彼が良く見知った執事である。だが、あまりにも見知りすぎている。こんな緊迫した場に置いて、彼の執事は普段通りでありすぎた。

「なんだ、何がどうなっている？」
「ブルンズ、散開だ。もしジェイクが危なくなったら、俺達で時間だけでも稼ぐぞ」

ラスカルはブルンズよりもやや早く異常を感じとり、既に戦闘態勢に入り始めている。もちろんラスカルに実戦経験などありはしない。また彼も下町育ちの人間とはいえ、ジェイクのように修羅場を経験しているわけでもない。だが、それでもラスカルは危険を感じとった。自分も傍観している場合ではないと。

その緊張感はブルンズにも伝わったのか。どうすべきか彼には判断がつくほど頭の回転が良いわけでもなかったが、緊張感だけは高まっていく。だからこそ、ブルンズはラスカルの肩を掴んで動きを引きとめた。

「よせ、ラスカル」
「なんだよ、自分の執事の肩を持つつもりか？　それなら・・・」
「そうしたいが、そうじゃない」

やや息まくラスカルを見るブルンズの表情も、いつになく真剣であった。

「俺の執事は元騎士だ。それも若い頃、王国の剣技大会で騎士団の上位１００傑に入る程の」
「は？　ってことは・・・」
「俺達程度じゃ、ジェイクの邪魔にしかならん。ジェイクが執事を倒せるとも思わないし、それに俺の執事がジェイクを殺すとも思えない。あいつは優しすぎるほど優しいからな」

ブルンズが、昔夜盗の群れに絡まれた事を思い出す。たかが５、６人だったが、彼の執事は夜盗を誰も殺すことなく、あっという間に撃退した。その時の執事の剣の冴えは、今もブルンズの記憶に鮮明だ。その記憶の執事が衰えていなければ、ジェイクがいくらかでも斬り結んでいることがもはや信じられないほどの状況なのだ。
それでもブルンズは念のため、執事に釘をさしておく。

「おい、間違っても俺の・・・俺の級友を殺すんじゃないぞ！？」
「ご心配なくおぼっちゃま。すぐに終わりますゆえ」

執事の返事は変わらなかった。その事に、ジェイクならずともラスカルと、さらにはブルンズさえもが薄気味悪さを覚えたのだった。
そして息を整えたジェイクが再び執事に斬りかかる。

「おおっ！」
「何をなさいますか、ジェイク様？」

ジェイクの全力の剣を、紙一重で、しかし確実に執事はかわす。ジェイクの表情にやや焦りと疲れが見える。まだ執事は武器をとろうとさえしていないのだ。もちろん学園に入る時に安全のため彼は護衛のための剣でさえ預けているわけだが、それでもこの教室には色々な器材がばらまかれている。ロウソクの燭台など、かっこうの

武器になりそうなのだが、執事は触れるどころか目もくれなかった。だが戦闘の途中でも、まるで思考が壊れたかのように「何をなさいますか、ジェイク様？」と、執事は無表情で問いかけ続けているのだった。

やがてジェイクの体力に限界が見え、彼の剣先が鈍り始めるころ、さらに教室に到着する者がいる。

「ジェイクか！」
「これは一体？」

かけつけたのは、上級生のミルトレとマリオン。その後ろから息を切らしたロッテが続く。もちろん彼女が呼んで来たのだ。ロッテはクルーダスよりも早く一足早く彼らを見つけたため、まず彼らを呼び寄せたのだった。

ミルトレとマリオンは状況を見ると判断に迷ったようだったが、まずは戦いを止めさせるべく、ミルトレがジェイクを後ろから羽交い締めにする。

「待て、ジェイク！」
「！　危ない！！」

ジェイクは羽交い締めにされたまま、地面を足で思いっきり蹴った。ミルトレも虚をつかれて後ろに転ぶが、先ほどまでミルトレの頭があった場所は、執事が袖に隠していたナイフのような物で斬り払われていた。
目にもとまらぬ早業である。

「なっ・・・」
「やっぱりそうか」

ジェイクが得たりとばかりに納得した顔を見せる。

「何がどうなっている？」

「こいつは俺を殺すつもりはないんだ。でも・・・」

ジェイクが敵意をむき出しに執事を睨む。

「こいつは俺とブルンズ以外は殺す気だ！」

「ご心配なくおぼっちゃま、すぐに終わりますゆえ。じきに静かになりますよ」

そう言った執事の両手には、いつの間にか多数のナイフが握られているのだった。

続く

傍らに潜む危機、その6～普段通りの執事～（後書き）

次回投稿は7／23（土）12：00です。

傍らに潜む危機、その7～遠い距離～

「マリオン！」
「ああ、わかっているよ」

マリオンとミルトレが剣を抜く。彼らはただならぬロッテの様子に、念のために真剣を装備していた。魔獣が学園内で暴れたことで、上級生である彼らは用心のために手元に真剣を置いていたのである。既に上級生であり実戦も経験している彼らには、学園内でも帯剣が許可されている。とはいえその重みを知る彼らは、いたずらにその刃を見せる事はない。その中でも最も将来を嘱望され、学年の代表の様な役割を務めるマリオンとミルトレが剣を抜いたのだ。それだけ事態を重く見た故の行動である。

そしてジェイクに引き倒されたミルトレが、油断なく体を起こしながら答える。

「貴様、何者だ！　名を名乗れ！」
「ご心配なくおぼっちゃま、すぐに終わりますゆえ。じきに静かになりますよ」
「なんだ、こいつは？　さっきから同じ言葉を繰り返して」

まるでうわごとのように同じような言葉を繰り返しながら、一方で動きの鋭さを増して行く相手にミルトレは恐怖を覚えた。そして同時に、ジェイクと同じく「これは斬らねばならない相手だ」と彼は考え始めていた。感じ方こそジェイクとは違うが、ミルトレはこのグローリアに恩恵を感じ、また学園を愛している。孤児である彼の故郷とも言うべき学び舎（や）を、得体のしれないモノに闊歩されるだけでも彼の腹は火口を覗き見るかのごとく煮え立つのだった。

そしてそんなミルトレの憤慨を感じとったのか、ジェイクが無言で彼の横に立った。息はまだ整わないが、それでもやる気なのか。そしていつの間にか執事の背後にはマリオンが立つ。今や挟みうちの恰好になっていた。

マリオンとミルトレはよくこの陣形で強敵と戦うため、息もぴったりだ。この形に持ち込んだからにはかなりの確率で勝利を得られると確信を持っていた。彼らは学園に籍を置く身とはいえ、既に神殿騎士団と同程度の実力を備える豪の者である。その彼らの実力による、前後同時の斬撃をかわす術はないと2人は確信し、マリオンが剣を手の中で一回転させ、それを合図に三秒後に斬り込むのが彼らの約束事。

そして、

「はああ！」

「ぬん！」

マリオンとミルトレが同時に斬り込んだが、執事はあるいは当然のごとく2人共に半身になるように体を動かし、左右別々の目でそれぞれマリオンとミルトレの動きを捕える。そして手にあるナイフを投げつけたが、マリオンは鮮やかにかわし、ミルトレはやや強引に、ナイフを肉の厚い部分で受けながら突進する。

さらにマリオンは上段から突きへと変化するお得意の剣術、ミルトレは防ぎにくい下段からの斬り上げを行う。これは彼らの最も得意とする戦法だった。これでグローリアの剣術教官から、彼らは一本取った事もある。

だがナイフでやや突進の速度が緩んだのか。マリオンの突きは執事が指で挟んで止め、ミルトレの下段は金属音と共に膝下で防がれた。

「何？」

「こいつ、服の下に具足を？」

「マリオン、離れろぉ！」

一瞬動きを止めた2人に、ジェイクが叫びながら突進する。そしてマリオンは理解するよりも早く剣を離して飛びのき、ジェイクは執事の肘からミルトレに向けて伸びた突起を防ぐことに成功した。

「仕込みか！」
「こいつ！」

庇われたミルトレが執事に斬りかかると、執事は人間にあるまじき跳躍力で身を翻し、空中に飛んだ。だがここは天井のあまり高くない教室である。ダロンなら少し頭を下げるような高さだといえるだろう。着地を狙おうとするミルトレだが、なんと執事は事もあろうに、後ろ手に天井にへばりついたのだ。さながら蜘蛛の様な動きである。

「・・・は？」
「ミルトレっ！」

マリオンが今度はミルトレを抱えるようにして彼に飛び付いた。同時に、１８０度反転した執事の首が彼らを捕え、口から何か液体を吐き出していた。その液体が地面に触れると、勢いよく燃え始める。

「うっ」
「こいつ、人間じゃない」
「なんだよ・・・なんだよこれっ！」

悲痛な叫び声を上げたのはブルンズであった。今や彼の執事は、既に人間でないことを隠してはいなかった。首は１８０度あらぬ方

向に曲がり、手足の関節も人間では考えられない方に曲がっている。そしてバランスを崩したのか、自分がいましがた燃やした地面に降りると、衣服に火が移る。当然のごとく彼の服は火で燃えるわけだが、その下から出てきた体に、一同は目をくぎ付けにされた。

執事の体からは刃が至る所から生えていたのだ。まず大きいのは先ほどミルトレとマリオンに放った肘の刃だが、そのほかにも、背中、膝、頭にも刃が生えようとしている。その光景を見て、震えているのはブルンズだった。

「何なんだよ、これは!?　こいつは誰だ?　俺の執事はどこに行った!?」

「ご心配なくおぼっちゃま、すぐに終わりますゆえ。じきに静かになりますよ」

「やかましいっ!　お前なんか、執事であるものか!」

「ご、ごしんぱぱぱいなく、おぼぼ、ぼっちゃ、ままっま。す、ぐ、に・・・・」

執事の言葉が徐々におかしくなり始める。火を背に異形に変身を始めた執事を見てロッテが気を失い、とっさにラスカルが彼女を支える。ブルンズも、いつもの威勢はどこへやら。既にすっかり怯えきっており、立っているのが精一杯というところだった。

ミルトレやマリオンですらどうすべきか考えるこの状況で、一番早く動いたのはまたしてもジェイクだった。執事だった者の背後から、無言で火の中をつっきり斬りかかる。

キィン!

だが、完全に不意をついたはずのジェイクの一撃は、またしても執事に防がれた。まるで背中に目でもあるかのような反応。そして執事の頭が、鈍いゴキゴキという音と共に元に戻る。

だがジェイクも負けてはいない。戻りかけた執事の頭を、しこたま殴ったのだ。この攻撃はさすがに意外だったのか、執事はたまらず吹っ飛っとんだ。そのわずかな隙を使い、ジェイクは体勢を立て直す。

「ミルトレ、マリオン！」
「・・・はっ」
「一体あれはなんだ？」

いつも冷静なマリオンの、引きつった表情を見ながらジェイクは答える。

「わからない。でもあれはこの世に存在してはいけないものだと思う。ここで倒さないと」
「具体的にはどうする？」

既にミルトレも正気に戻っている。彼らの目の前には、四つん這いで今にも飛びかからんとする執事の姿があった。

「・・・あいつは多分俺を攻撃できない。なぜかはわからないけど。だから」
「つまりそれを利用すると？」

マリオンの問いにジェイクは頷き、ミルトレは渋い顔をした。護るべき後輩に先陣を切らせるなど、気真面目なミルトレは容認できなかったのだ。同時にそれが最も勝算の高い方法だと理解できていたとしても。

「・・・ジェイク、死ぬなよ？」
「こっちのセリフだよ。アイツは強い」

「僕達を誰だと？　このグローリアでも5指に入る実力の生徒だよ？　こんな異形に引けは取らない。取るわけにはいかない」

マリオンが地面の剣を足で蹴り上げ、手元に戻しながら語る。

「とどめはミルトレに任せるから。僕とジェイクで隙を作る」

「わかった。じきにクルーダスも来るだろう。それまでに仕留められれば最上だが、まずは足止めを確実にする。ブルンズ！」

ミルトレがブルンズの名前を一段と強い口調で呼ぶ。声をかけられたブルンズは、目に見えぬ枷から解き放れたかのようにミルトレの方を見る。

「戦えとは言わん。だがせめてこいつを外に出すな！　外に出て扉に封をしろ」

「で、ですがそれでは」

「俺は既にアルネリア教会に騎士の誓いを済ませた者だ。正規の騎士ではないとはいえ、いつでもアルネリアのために命をかける覚悟はある。だが貴様にはまだ早い。お前が命をかけるのはここではないだろう？」

「・・・」

ミルトレは目の前の執事に油断なきよう警戒をしながら、ブルンズを背にして言葉をつなぐ。ブルンズは唇を噛みしめたまま、俯いている。これは今まで横柄に生きてきたブルンズにとって、初めての自分への憤りだったのかもしれない。

ブルンズとて人間である。いかに性格が横柄で傲慢とはいえ、幼少の頃より世話になっている執事には多少なりとも恩も感じていたし、信頼も尊敬もしていた。それが全て自分の勘違いだと気づきつつも、認めたくない自分への意気地なさ。そして、彼にとってのラ

イバルであるジェイクが堂々と剣を振るう時に、何もできない自分への不甲斐無さ。さらには、ここ最近で彼に芽生えつつある、騎士としての心構え。以前より多少なりともましな人間になっているのだろうかと、ブルンズが思い始めた矢先の出来事である。

そんな彼の心情を知ってか、ミルトレと、さらにはマリオンが言葉をつないだ。

「恥じるな。敵に背を向けるのは、騎士にとって罪ではない」

「そうだね。剣をとって弱きを護るも騎士ならば、弱き者の手をとって助けてやるのも騎士の務めさ。今自分にできる事をすればいい」

「・・・はい」

将来自分が剣を捧げる相手であるマリオンに言われては、ブルンズとて引き下がるしかない。彼は気絶したロッテを抱えるラスカルを促して、外に出る。扉を出るときに彼は自分の執事の様子を見たが、既に人間とは思えぬ形を成す執事を見て、ブルンズはそれでも悲しい気持ちを覚えずにはいられなかった。

そしてまだ戦いの場に残るジェイクを見る。自分が思うよりも遥かに先を行くジェイクに、ブルンズは嫉妬の念を禁じ得なかった。たかが１０歩にもならないこの間が、とても遠い。そんなブルンズがジェイクにかけた言葉は。

「ジェイク」

「・・・」

「死ぬなよ」

「・・・おう」

ブルンズはそれでも、切にジェイクが生きて帰ってくる事を願った。ジェイクに今死なれたら、どうやって彼を越えればいいのかわからない。ジェイクの方はそっけなく答えただけだったが、微かに

頼もしさを感じたのも間違いなかった。

続く

傍らに潜む危機、その7～遠い距離～（後書き）

次回投稿は7／24（日）12：00です。

傍らに潜む危機、その8～再び、潜む～

そしてブルンズが扉を閉めた音を合図に、再び部屋の中では死闘が繰り広げられる。3人がかりで戦っても、連携次第では必ずしも良い方向に作用しないわけだが、ジェイク、ミルトレ、マリオンの3人はよく剣の練習をする仲である。完璧とは言えないまでも、即席にしてはかなり上手く連携をこなしていた。ミルトレが斬りかかり、マリオンが間隙を埋め、ジェイクが虚を突く。正規の神殿騎士でも苦戦するであろうこの戦い方に、執事は難なくついて来ていた。

「く、そ！」

「当たらないっ」

ミルトレだけでなく、マリオンにも焦りが見える。通常騎士は人間を相手にする時の戦い方を学ぶが、神殿騎士団候補であるグローリアの生徒は、魔物・魔獣との戦い方を中心に学ぶ。魔獣や魔物は人間よりはるかに優れた身体能力を持つ者が多いが、彼らにも弱点はある。

それは人間ほどの精神的構造の複雑さを持たない事。魔獣は次にどうするなどの行動が表情からすぐに読めるし、攻撃の予兆が多い。攻撃の予兆をわざと変えたり、消し去るなどは人間固有の能力であろう。もちろん人間型の魔物を別にすれば、であるが。だからグローリアの生徒は魔物に限らず、相手の攻撃を読むのが上手い。それはそのまま神殿騎士団にも当てはまる。

だが目の前の執事には、次の行動に移るための予兆がほとんどない。動きが雑なためかろうじて全員が致命傷を避けているが、反射神経の勝負では結果は目に見えている。その中でも、意外な事はもう一つ。

「はあああ！」
「何をなさいますか、ジェ、ジェイクさまままままま」

金属音が6つ、7つと響く。ジェイクが執事と剣を合わせているのだった。体中から飛び出た刃と、変幻自在な関節の動きを合わせての攻撃を執事は繰り出すが、ジェイクは今やそれらを全て捌いていた。そして、あろうことか徐々に深く斬りこめるようになっているのだ。

そのことが執事にも当然わかっているのだろう。ある程度打ち合うと、自分から距離を取るようになっていた。

「（末恐ろしいな・・・戦いの中で成長するのか）」
「（これは卒業までに一本取られちゃうかもね。だけど）」

嬉しい心の悲鳴を2人が上げる中、マリオンが気づいたのは、既に限界が近いジェイクの体。このままジェイクが戦い続ける事が可能であればあるいは執事を上回るだろうが、既にジェイクの足が小刻みに震えている事を見ると、彼の限界が近いことは一目瞭然だった。

ジェイク自身もその事を理解したか、一か八かの突撃に出るべく、前傾姿勢に構える。緊張感が高まろうとする中、部屋の扉がゆっくりと、そして重々しく開いたのだった。

「クルーダスか？」
「そうだ」

ミルトレが真っ先に気がついたのだが、部屋にゆっくりと入ってきたのは現時点でグローリア一番の使い手であり、同時にラザール家の三男でもあるクルーダスだった。手には長い「刀」と呼ばれる東の大陸で好んで使われる武器を持っている。

「それを持ちだしたのか」
「ああ、必要だろうと思ってな」

クルーダスが、ずらりと剣を抜き放つ。並の刀より刃渡りは４０ｃｍ程も長く、刀身も無骨なほど太い。斬馬刀とはいかないまでも、人間なら簡単に一刀両断にする武器である。これはクルーダスが特注で作らせた刀である。

刀を抜き放ったクルーダスは、ジェイク達を押しのけて自分が矢面に立つ。そしてその剣をクルーダスは上段に構え、執事と相対する。執事の方もただならぬ使い手だとクルーダスを認識したのか、体を主に彼に向けて、新たな緊張感を走らせる。

「ご、ごごごしんんぱぱぱいいいな、くくくく」
「異形め」

執事がもはや意味をなさない言葉と共に突撃する形をとった瞬間、クルーダスの構えが上段から、刀をやや引いて胸の前で握る袈裟斬りの構えに移行する。その姿のまま一歩を踏み出したクルーダスの踏み込みの速度は、異常なまでの速度だった。

ミルトレは知っている。クルーダスの恐ろしさは剣技の巧拙ではなく、その異常なまでの身体能力だということに。普段が物静か過ぎて理解されにくいが、彼の身体能力は魔獣をゆうに上回る。実戦演習を兼ねて森オオカミを狩りに行った時など、森を逃げるオオカミに背後から追いつき、そのままオオカミの首をはねた事もある。オオカミの顔は、「なぜ人間が追いつける？」といわんばかりの驚きに満ちたまま、ミルトレの目の前に転がって来た。以来ミルトレはクルーダスに一対一で勝とうという気はなくなり、指揮官としての能力を高めることに専念していた。

ともあれ、抜き身の居合いとでもいうべきその異常なまでのクル

ーダスの踏み込みの速度に執事は反応する間もなく、咄嗟に出した刀も虚しく、クルーダスの無骨な刀に剣ごと袈裟がけに斬り下ろされた。あまりの剣圧に斬り飛ばされた上半身が空中を舞うが、クルーダスは見もしない。というより、身動きが取れなかった。二の太刀のない、一撃必殺の剣。そうでもしなければ、仕留められないとクルーダスが判断してのことであり、戦いは結果から見るほどの差はなかった。

空中を舞う執事の目には既に光がなかったが、その目が不意にぎょろりと焦点を合わせる。

「クルーダス！」
「！？」

異常を感じたマリオンが叫ぶと同時に、執事の口から飛び出た刃がクルーダスに襲いかかる。クルーダスは刃を認識しながらも、最大の一撃を放った後の彼の体は動くことができない。刃はマリオンの叫びと共に、クルーダスの命を奪わんと彼に迫る。

その時、さらに一筋の剣が煌き、クルーダスに向けられた刃は軌道を外した。

「なんと！」
「なぜそこに？」

執事の上半身をさらに斬り飛ばしたのはジェイクだった。今度こそ動きを止めた執事を足元に見下ろし、ジェイクは悠然と、あるいは呆然と佇んでいる。

だが呆然としたのは、周囲の方だったであろう。ジェイクはクルーダスが斬り飛ばした上半身をさらに叩き割ったのである。全ての流れを予測していないと出来る事ではない。

「ジェイク、今のは・・・」
「クルーダス先輩、これを」

クルーダスが何かを訪ねようとした瞬間、ジェイクがクルーダスを促した。冷静なクルーダスは自分の疑問は胸にしまい、とりあえずジェイクが促した物を見る。それはクルーダスの疑問を胸から吹き飛ばすに十分なインパクトのある物だった。

「これは？」
「なんとなくやりあってて違和感はあったんだけど・・・」

クルーダスが珍しく表情を変えるが、ジェイクもまたうろたえている。二人が見つめる物、それは執事の死体だった。
執事の死体は一見人間の様だが、決定的に足らない物があった。脳が詰まって無かったのである。その代わりに、脈打つ拳大の何かが入っていた。真っ二つになり、緑色の液体を撒き散らしながらなお鼓動を止めないその物体を、２人は何とも言えない面持ちで見直していた。

「これは何なのだ」
「俺が聞きたいよ。でも確実なのは、こいつは人間の形をしているだけで、人間じゃないみたいだ」
「どうした二人とも」

ミルトレが近づいてきたが、執事の死体を見るなりやはり絶句した。そしてさらにマリオンが続いたが、彼は驚きつつも、さらに一つの提案をした。

「この死体を詳しく調べるべきではないだろうか？」
「死体を？」

ミルトレが聞き返し、マリオンは頷いた。

「ああ。こんな奴の存在は聞いたことが無いし、実際にブルンズは彼を人間だと思っていたようだ。もしこういったものが一体でなかったら？」

「それは・・・由々しき事態だな」

「では、さしあたり学園よりも神殿騎士団に報告だな」

クルーダスの言葉に、ミルトレが疑問を呈する。

「なぜだ？　学園の方が早いだろう」

「学園にこんな奴を招き入れた人物がいないとも限らない。それよりは神殿騎士団の方が無難だ」

クルーダスの言葉に全員がはっとするが、ジェイクだけは別だった。

「大丈夫だと・・・思うけどな」

「どういうことだ？」

「それは・・・」

ジェイクが言葉をつなごうとした時に、先ほど倒した執事の死体が煙を立てて崩壊し始めた。肉の焼ける匂いに、思わず顔をしかめる一同。

「なんだ突然？」

「まさか、痕跡も残さないつもりか？」

見る間に崩れ落ちた死体は、白い泡のように分解されてしまった。

もはや原型もとどめていない。この場に居合わせなかった者が見ても、何が存在していたかはわからないだろう。

「これでは調べようがない・・・」

「くそっ、徹底してやがる！」

ミルトレの悔しそうな声が部屋に響き、後に残された白い泡の様な物体は何も語ることが無かったのであった。

続く

傍らに潜む危機、その8～再び、潜む～（後書き）

次回投稿は7／26（火）14：00です。一日空きますのでご注意を。

次回より新シリーズです。サブタイトルは「天駆ける乙女達」です。

いつも評価・感想などありがとうございます。何かありましたら一言お願いいたします。筆者の励みになっております。

天駆ける乙女達、その1～平和な旅路の影で～

＊＊＊

アルネリアで不穏な出来事が続く中、アルフィリース達の旅は順調であった。大陸東部の文明圏に入ってからというもの街道は整備されているし、今まで魔獣や得体のしれない原住民が闊歩する大草原や沼地を突っ切ったことを考えれば、アルフィリース達の旅は平凡そのものと言ってもよかった。

特に急ぐ旅というわけでもないので、かつて中央街道を少し旅した時のようにアルフィリース達は街道警備隊や、あるいは旅の傭兵や商人から最近の情勢を聞きながらのんびりとした道のりを進んでいたのだった。もちろんアルフィリースの行動は新たな仲間の勧誘や、傭兵団の売り込みも兼ねているわけだが、仲間に加えてもよさそうな人物にはそうそう出会わなかった。

「少なくとも、エアリアルやロゼッタとはいい勝負ができないとね」

「そいつは難しいね。応募してくる奴も大変だ」

ロゼッタがからからと笑う。実際に旅の最中にも参加したいと申し出た者はいたが、大半はアルフィリース達がほとんど女性だということに下心を抱く者で、すべからくそういった者達はエアリアルやロゼッタにひどい目にあわされて追い返された。

「でもアルフィ、傭兵団に必要なのはそれだけではないのですよ？」

「わかってるわ、リサ。団の運営や裏方をする人間、あるいは戦術家、魔術士も欲しいわ。他には偵察なんかが上手い人もいてもいいかしら」

「よく考えているじゃないか」

ロゼッタが頷いている。

「アタイも実は傭兵団を作ったことがあるんだが」

「一昨日の夜出た話かしら？　ちょっとだけ聞いたわね」

「その話の続きさ。作ったはいいが、1年と持たなかった。団を維持する上での金策ができなくてね。意外に金がかかるのさ。アタイはその辺の細かい事は苦手でさ」

「大雑把ですものね、デカ女二号は」

リサが嫌みを言ったのでロゼッタはリサを小突こうとしたが、リサはいつものようにひょいとかわす。いつぞやのアルフィリースのようにロゼッタも苛立ちが募るばかりだが、負けじとロゼッタも言い返す。

「こう見えても老後はしっかり考えてるんだ、アタイは！　ちゃんと貯蓄もしてるんだぞ？」

「ほほう、ではその金を傭兵団建設のために差しだしてもらいましょうか」

「冗談じゃない！　そこまでする義理はないね。もっとも・・・」

ロゼッタは吐き捨てるように入った直後、アルフィリースの方を見て意地の悪い笑い方をする。

「アルフィがアタイの面倒を全部見てくれるって言うのなら、話は別だけど？」

「どういうこと？」

「こういうことだよ」

ロゼッタがアルフィリースの肩に腕をまわして、耳に息を吹きかける。アルフィリースは突然の出来事に、思わず「わひゃあ！」などと奇妙な声を上げてしまった。街道を通る人達が、何事かと彼女の方を振り向く。

「な、何するのよロゼッタ！」

「いやあ、アタイの事を愛人にでも何でもするのなら、金くらい差し出してもいいかなって思ったわけさ。実際アルフィリースには一度負けて、何でもするつもりでいたわけだしね。それにこう見えても、アタイは尽くすタイプなのさ」

「女同士じゃない！」

「関係ないさ。アタイは男でも女でもイケる口だ」

ロゼッタがアルフィリースをからかっているわけだが、顔を真っ赤にするアルフィリースに、ロゼッタはさらに追い打ちをかけようとするが、背後から凄まじい殺気を感じる。

「ロゼッタ・・・」

「ラ、ラーナかい」

「愛人の座は簡単には譲りませんよ？」

「そうか、思わぬ強敵がいたね」

「そんな座は元々ないからっ！」

アルフィリースが顔を真っ赤にしながら叫んだが、もはや2人は聞いていなかった。

「ふん。百戦錬磨のアタイに技術で勝てるつもりかい？」

「そちらこそ見くびらないことです。明るい場所、地上での取っ組み合いなら私に勝ち目はないでしょうが、夜、床の中で淫魔の血を引く私に勝てるとお思いで？」

「ざけんな、体の迫力ではアタイの方が上だ」
「大きければいいというものではありません。相手が威圧感を感じる場合もあるでしょう」
「そんな細っちい体で、体力が持たないんじゃないのかい？　相手が一晩中求めてきたら？」
「やりようはいくらでも。そんな体力任せの褥（しとね）など、殿方が疲れるだけです」
「言うじゃないか！　こんど白黒つけるかい？」
「私の勝ちは決定していますが、ロゼッタがその気なら受けて立ちましょう」

馬の上で言い争う二人に、ミランダが割って入った。

「はい、そこまで～」
「なんだ、いいとこなのに」
「ここが街道のど真ん中ってことを忘れないように。皆こっちを見てるわよ？」

ロゼッタが周りを見回すと、周囲が慌てて目をそらす。その光景を楽しそうに見回すロゼッタだが、リサが一つため息をついた。

「ヤレヤレ、これではアルネリアに着くころにはよからぬ噂が広まっているかもしれませんね・・・」

リサが「処置なしだ」とでも言いたげに、首を横に振るのだった。

＊＊＊

アルフィリース達が宿を取ることにしたのは、ハドルという町だった。そこそこに人口も多く、旅支度には困らない大きさの町であ

る。この調子なら、アルネリアまで１０日もかからないであろう。
町に着くと、全員が思い思いの場所に出掛けて行った。アルフィリースとリサはルナティカを伴い、大きな物品の買い出しのためエアリアルの馬を荷台代わりに連れて出て行ったし、ラーナはユーティとエメラルドとインパルス、エアリアルを連れて小物の買い出しと衣類や武具の修繕のために出て行った。
楓は用事があるとかで別行動を取ったし、ミランダとロゼッタは情報収集を名目に飲みに出かけた。気の合う二人はきっと賭場にも行くのだろう。最初はシスターであるミランダが賭場になどと止めていたアルフィリースも、最近では諦めたようだ。頼むからそれ以上変な所には行かないでくれと願うばかりである。そしてグウェンドルフとイルマタル、ダロンは留守番である。

「ダロン、巨人族の最近の様子はどうなんだい？」

グウェンドルフがダロンに話しかける。イルマタルはアルフィリースが寝かしつけてから出掛けたので、静かなものだ。普通は幼竜でもここまで睡眠は取らないのだが、急激な成長をしたイルマタルはまだ本来なら人型も取れないはずなのである。
その反動なのか、彼女はかなりの時間を睡眠に費やしていた。それでも人型を解除する事はほとんどないのだから、もはや自分を半分以上人間だと思い込んでいるのかもしれない。これは正直言ってあまり良い傾向ではないとグウェンドルフは思いつつも、幼子の意志を自分が捻じ曲げるのもどうかと思い、好きにさせていた。また自分も、そういえば若い頃は好き勝手をしたものだと苦笑すらしていた。
そんな中で、ダロンは体に見合わぬ静かな声で答えるのだ。

「特に変化はございません。巨人やエルフは元来変化を嫌う種族ゆえ」

「そうか。もう１０００年近く北の大地にも顔を出していないからね。クローゼスの言った事も知らなかったし。やはり私は良い真竜とは言えないようだ」
「俺にはなんとも言えません。真竜である貴方様の行動を判じるなど、恐れ多い事」

ダロンは恭しく頭を下げる。巨人やエルフは人間以上に真竜を敬う種族である。ダロンも表面には出さないものの、心中ではかなりの敬意をグウェンドルフに払っていた。グウェンドルフもそうと感じつつも、敬意を払われるのはどうにも苦手なため、どう接していいのかわからずにここまで過ごしてきたのだ。

「そうか、では北の大地は平穏かい？」
「とは言い切れないかと」
「それはどういった意味で？」

意外な返事に、グウェンドルフが目を細める。ダロンは相変わらずゆっくりと答えるのだが。

「北の大地は魔物も含めた生物が、きちんと棲み分けをされた土地です。環境が厳しいゆえに、無駄な争いをしたくないと。たまに集団からはぐれた生き物が他と接触する事はありますが、基本的にはそれだけ。我々の集落にも、年に一度来訪があればいい方でした。それが」
「それが？」
「俺が里を出る直前まで、色々な生物の襲撃が相次いでいました。多い時など、１０日と空けず」

グウェンドルフの顔が翳る。それは純粋な心配をすると同時に、自分の不明を恥じるようでもあった。

「原因はわかるかい？」
「わかりません。元々俺達のそのような事はどうでもいいし、俺達はただ自然と共に生き、滅びる。ただそれだけ。例え里が魔獣や魔物の襲撃により滅びようとも、それが自然の定めた意志によるものならば従う者が多いでしょう」
「だが君の妻の様に、それを良しとしない者もいる」
「その通りです」

ダロンはその言葉で黙り込んだ。沈黙が部屋を包むが、あるいはどこかにいる彼の妻に思いを馳せているのかもしれない。
しばしの沈黙の後、ダロンがゆっくりと口を開いた。

「これは俺の考えなのですが・・・」
「？　何だい？」
「里を襲撃した魔物や魔獣が自発的に動いたのではないとすれば・・・あるいは棲み処を追われたのかも」

ダロンの言葉は根拠のあるものではなかった。だがそれが最も真実に近いものなのではないかと、不思議とグウェンドルフは確信めいた感情を抱くのだった。

＊＊＊

一人別行動を取った楓は、町から出て森の中を歩いていた。本来なら一度アルネリア本部に戻っても良かったのだが、ロゼッタやルナティカが仲間になったことを報告すると、「そのまま同行して監視を続けるように」との指示が来ていた。だがその指示を聞くたびに、どこか心の中で安心している楓がいるのだった。

「あまりにもあそこは居心地がいいから」

楓はぽそりと呟く。命令とあれば友人ですら手にかけねばならぬ忍の者とはいえ、今「アルフィリース達を殺せ」と仮に命じられれば、躊躇い無く実行できるかは非常に疑問だった。このままでは自分は口無しとして駄目になると、楓は最近思うようになっていた。

そんな事を考えていたからか、楓はいつの間にか背後を取られたことに気がつく。

「あっ」

「楓、たるんでいるのではないかしら？」

後ろには上司である梓が立っていた。背後から喉に刃物を突き付けつつも、楓の肩に優しく手を置く。

「私が敵なら死んでいるわ」

「・・・申し訳ありません」

楓がしょぼくれるのを見て、ふう、と一つ息をつく梓。

「一体どうしたのかしら。貴女がそこまで油断するなんて」

「言い訳はいたしません。ですが、梓姉さんが直にここに来るなんて、一体どういった風の吹きまわしですか？」

「報告にあった暗殺者の事が気になってね。必要があれば私達が処分するために来たのよ」

楓が気がつけば、周囲にはさらに多数の気配があった。暗殺などを主に請け負う、口無しの実行部隊である。

「これは」

「アルネリアに得体のしれない者を入れるわけにはいかない。事前に手を打つのは当然でしょう？」

「ですが、そんな事をすれば皆が悲しみます！」

楓は反論したが、その時自分を射抜くような殺気を楓は感じて身がすくんだ。後ろに、さらに大物がいる。

続く

天駆ける乙女達、その1～平和な旅路の影で～（後書き）

次回投稿は、７／２７（水）１４：００です。

天駆ける乙女達、その2～人知れず～

「楓、貴様の意見は求めていない」
「梔子・・・様」

楓が振り返ると、そこには口無しの長である梔子がいた。彼女がアルネリアを離れるのは非常に珍しいことだが、それだけ今回の事態はアルネリアに取って重く見られていることの証でもあった。
楓はいつも梔子の前に出ると、身がすくむ思いがする。それは格別梔子が楓に厳しいからでもあり、また梔子が持つ張りつめた雰囲気がいつも自分に敵意を抱いているようで、楓は梔子が苦手だった。
その梔子が楓の前に立つと、いきなり頬を張った。

「つっ」
「貴様の任務を復唱しろ、楓」

有無を言わせない梔子の言葉に、楓は頬を押さえながら回答する。拷問に耐える訓練もされた楓だが、なぜか梔子の張り手はいつも痛い。

「・・・私の任務はミランダ様の護衛を第一に、その仲間の護衛、または監視。必要があればミランダ様の身柄を最優先に、その他の障害、危険人物を排除する事」
「その通りだ。そしてルナティカなる人物は、十分に危険人物だと判断される。貴様はそう思わないのか？」
「それは・・・」

楓は返答に困った。確かに楓は後の事を考えるならば、ルナティ

カはいない方がいいと思っていた。十分すぎるほど彼女は危険なことを楓は承知している。だが、果たして自分があの凄腕を始末できるのか。またそれ以上に、仲間を売ったり手にかける事に最近の楓は強い抵抗を感じていた。

楓が戸惑うのを見て、梔子は無言で彼女を押しのける。

「あのような人物をアルネリアに入れるわけにはいかぬ。今からルナティカを狩るが、使えぬ者は必要ない。貴様は下がっていろ」

「梔子様！　もう一度お考えなお・・・」

「私を狩る？　それは無理」

全員が声の主の方を一斉に振り向く。そこには銀の髪を揺らしながら、暗がりから音もなく姿を現したルナティカが立っていた。

誰もその気配を察知していなかった事に驚き、全員が武器を構えようとするが、梔子がそれを制した。

「なるほど、既に失敗していたということか」

「お前はできる、唯一私と渡り合えそう。後はダメ」

「だろうな。もっとも私とて、果たしてどのくらい持つのか」

「それがわかるだけ大したもの」

ルナティカと、一歩前に出た梔子が無感情に言い合う。その様子を、固唾を飲んで見守る他の者達。先に口を開くのは梔子。

「2つ程聞いてもいいだろうか？」

「なんだ」

「私達を殺す気はあるか？」

「殺してもいいし、殺さなくてもいい。どの道お前達では私を殺すことは無理。それにそこの楓を殺せば、リサとの約束に違反する」

ルナティカが抑揚のない声で言い放つ。梓などは完全に馬鹿にされて悔しそうな顔をするが、それで実力差が覆るわけではない。
さらにルナティカは淡々と続ける。

「もう一つは何？」
「いつから私達の接近に気がついた？」
「お前達が丘を越えた時から」

ルナティカが言った丘とは、ここの森からさらに遠い場所。ちなみに町からは５ｋｍはゆうにある距離だ。

「不可能だっ！　そんな遠距離からなど、センサーですら聞いたことが無い！」
「それはそうだ、私以外の誰にもできないだろう。少なくとも、まだ私は出会ったことが無い」

梓が思わず口をついて出た言葉にも、ルナティカは冷静に返した。熱くなる梓の傍では、梔子が目を一度閉じ、数瞬の後すぐに開いた。

「なるほど、よくわかった。ここは我々が一度引くことにしましょう。それに、アルネリアにも来るといいでしょう」
「梔子様！？」

口無し達は驚いたが、梔子が手を空にかざすとざわめきもぴたりと止まる。

「撤収」

その一言で、風のように口無し達は消えた。残ったのは梔子と楓、それにルナティカだけである。

「楓」
「・・・はい」
楓はおずおずと答えた。
「任務は変更なく続行する事。期限はミランダ様がアルネリアに到着するまで、追って詳細は連絡する。復唱」
「楓は任務を続行いたします。期限はミランダ様がアルネリアに到着するまで」
「よろしい」
それだけ言うと、梔子もまた姿を消した。後には意気消沈した楓と、ルナティカだけが残る。
「私を笑ってください」
「なぜ」
楓がぽそりと呟いた言葉に、ルナティカが反応する。
「無様極りません。私は弱くなった」
「私にはわからん。ただリサは心配していた。楓の行く方向に近づく者が多数いるとリサに告げると、リサは楓を護るように私に言った。必要はなさそうだと言ったのだが、念のためと言われた。それだけだ」
ルナティカはそれだけ告げると、その場を後にした。後には複雑な感情から涙目になった楓がただ一人立ちつくすのであった。
＊＊＊

そんな楓と対照的なのはこちら。

「あーはははははは！　面白いわね、貴女！」
「ククククク、全くだ」
「お褒めにあずかり恐縮だわ！」

賭場で散々儲けたミランダとロゼッタは酒場で盛大に飲んでいた。その際、酒場で景気よく隣で飲んでいる傭兵らしき女性と意気投合し、3人でさらに盛り上がっているのであった。

女性は標準的な茶色のショートカットだが、鮮やかな直毛が照明の光を反射させ、とても艶やかだ。身長はミランダくらいであり、簡単な皮の胸当てにパンツ姿のラフな格好だった。年の頃はエアリアルくらいだろうか。さっぱりとした活動的な女性で、前面にそのお転婆ぶりが出ているが、大人しくしていれば美人と言っても差支えないだろう。その割に旅慣れはしている雰囲気であり、世長けてもいそうだった。そして何より性格が明るい。

「でね、でね！　その時のおっさんが傑作でさぁ」
「なんだ、またハゲの依頼主だったのか？」
「それが今度はハゲてはないけど、これがデブでね。頭にちょこんと小さい帽子を乗っけてんの！　正直ダサい事この上なかったんだけど、本人はおしゃれのつもりなんだろうし、雇い主に面と向かって『ダサいぞおっさん』とは言えないでしょう？」
「くっくくく、確かにな。それで？」
「でもどうしても今までの経験上、髪の毛が気になってしょうがないわけ。そこで『何か肩についてますよ？』って言って、近づいて偶然のふりしてその帽子を取っ払ったわけ。そしたら・・・」
「そしたら？」
「帽子の部分だけがハゲだったのよお！」

「「アッハハハハハハ！！」」

ロゼッタとミランダがテーブルを叩いて笑っている。酒の席でもなければそこまで面白い話ではないかもしれないが、しこたま飲んだ2人は、もはや箸が転げても面白い状態である。

「ぼ、帽子で蒸れたのかしら？」

「最初からそこだけ薄かったんじゃない？　だって、給仕いわく段々帽子が大きくなっていったらしいから！」

「ギャハハハ！　全然隠せてねぇ、それ！」

爆笑するロゼッタがバランスを崩して後ろにひっくり返ったが、それでもロゼッタは笑っていた。

「それでね、やっぱり私も笑っちゃったわけ！　だって、全ハゲ、円形ハゲ、蒸れハゲと一通り経験したわけじゃない？　だけどそのデブハゲ、カンカンでさぁ」

「そりゃそうだ。んで？」

「報酬ももらえず、逆に追い回されているわ。仲間にもひとしきり怒られちゃって」

「んで、ばつが悪いから傭兵団から逃げてきたと。ヘタレだな、お前！」

「うるさいわねぇ！」

「アハハハハハ！」

酒の席は宴もたけなわである。テーブルの上には空になった酒が山と積まれ、店主が目を丸くしている。女性がここまで酒を飲むのは珍しい事なのだ。それだけ宴席が盛り上がっていたのである。

「ところで、さっきの中原の話に戻るけどさぁ」

「ああ、戦争の話ね。そんなの面白くも何ともないでしょうに」

女性がつまらない話しを思い出したとばかりに、カラカラとグラスを回す。ところが、そんな酒場の与太話と同時に語られる事実は、後に大きくアルフィリース達にも関係する事実となるのだった。

続く

天駆ける乙女達、その2～人知れず～（後書き）

次回投稿は7／28（木）14：00です。

天駆ける乙女達、その3～語られる中原の情勢、そして～

「でもさ、なんでそんなこと気にするわけ？　中原の話なんて関係なくない？　これから東に行くんでしょ？」

「そうはいっても大きな戦争だったみたいだし、アタシ達は片田舎でずっと仕事を請け負ってたんだ、世情に疎いんだよ。貧乏くじは引きたくないだろ、傭兵ならさ」

傭兵にとって情報は命である。戦場では安全に稼ぐにこしたことはない。よほど金が必要な場合を覗き、勝ちそうな側につくのが賢い傭兵のやりくちと言える。戦場でイモを引く事はすなわち、自分の死を意味するのだ。

ミランダの言葉は的を得ていたので、女性は少し何かひっかかるのを感じながらも、渋々と話し始めた。

「語りたくないってわけじゃないけどさ、結構ひどい有様だったみたいだよ。結論から言うと、中原の戦火はなんとか収まったみたい」

「少し前に聞いた話じゃ、クルムスとザムウェドの戦いじゃ収まらなくて、トラガスロンやグルーザルドまで巻き込んだんだろ？　しかもトラガスロンを攻め落としたのは、クルムスだったっていう話じゃないか。主義主張のない無茶苦茶な戦争があったもんだって、傭兵達ですら軽蔑したもんさ。誰がどうやって収めたんだ？」

ロゼッタもまた神妙な面持ちで尋ねていた。生粋の傭兵であるロゼッタにとっても、中原の情勢は気になるらしい。

女傭兵は語る。

「クルムスでは王の死去が発表された。そして事実上第三王子が独裁しており、その結果が今回の戦争だと声明文を発表したのさ。そ

の王子を討ち取って首を晒したうえでね」
「だからって、それだけじゃ上手くいかないだろ？　確かクルムスは王子が3人だ。他に王位継承権は・・・」
「それがいたのよ。女の子が1人。名前はええと・・・レイ・・・なんとか」
「そこが肝心だろうよ」

ロゼッタが呆れたが、思い出せないものはどうしようもない。ミランダが話をつなぐ。

「でもあれだけクルムスは徹底的にやったんだ。どうやって諸国を、特にグルーザルドを説得したんだ？」
「それがね、この王女様は噂ではまだ少女なんだけど随分と肝っ玉の据わった人物みたい。護衛を一人ともなっただけでグルーザルドに乗り込んで、自らドライアン国王を説得したみたいだよ。もちろん政治的な駆け引きも忘れちゃいない。ザムウェドの統治権は放置し、事実上グルーザルドに委譲する形になった。そしてトラガスロンは自国の領土を回復した上でザムウェドの領土を一部奪い、そこをグルーザルドと分割したみたいよ」
「なるほど。それならグルーザルドにとって感情論はおさておき、結果だけ見れば旨い話だ。それにトラガスロンと国境を接することで、直接睨みを効かせられる」
「それだけじゃないでしょう。トラガスロンの遠征軍は事実上ザムウェド領内で壊滅的な打撃を受けているし、当分遠征はできない。荒れたザムウェドをクルムスが移譲することで、グルーザルドは内政に力を注がざるを得ない。さらにクルムスを滅ぼせば、今度はその国がグルーザルドと国境を接することになる。誰がそんな損な役回りを受けたがると？」

女傭兵の話に、ミランダとロゼッタは考え込んだ。確かにそれな

りに理屈は通っているし、あり得ない話ではない。だが大草原に入ってからの短期間で、ここまで世情が動いているとはさすがにミランダも思っていなかった。

「（なんだか色々と話が急展開過ぎるわ。アルネリア教会はどのくらい状況を掴んでいるのかしら？）」

ミランダはすぐにでも突きとめたい欲求にかられたが、今はどうしようもない。それに急かずとも、もうすぐアルネリアには到着するのだ。

「私が知っているのはこのくらいよ。どう、納得した？」
「・・・んー、まあだいたい」
「これ以上を知りたかったら、ミーシアにでも行くのね。あそこを通らない情報はないでしょうから」

そこでまた話は変わり、今度はロゼッタとその女傭兵で別の話題で盛り上がり始めた。だがミランダはどうしても思索に耽らざるを得なかった。そんな折女傭兵が何かを見つけたのか、いっぺんに酔いが醒めたように真っ青な顔になった。

「なんだ、吐くなら他所でやれよな」
「そ、そうするわ。とりあえずこれがお勘定ね。じゃあ、縁があったらまた会いましょう！」
「お、おい！」

女傭兵がお金をその場に投げてすたこらと出て行ったので、引きとめる暇もなく残された二人。そして女傭兵が残して行った金を見るが。

「全然足りないぞ、畜生め」
「・・・今度出会ったらきっちり請求しないとね」

2人がため息をつくと同時に、先ほどの女傭兵が出て行ったのとは別の出入り口の方向から小さな影が現れたのが、2人の目に留まる。

「あら」
「おいおい」

2人の目にとまった人物は少女だった。リサよりはさらに頭一つ近く小さいだろうか。体の凹凸にも欠けるし、少女もいいところの背丈だった。そんな少女が赤茶色の髪を波打たせながら酒場にすたすたと入ってくるのだから、いやがおうにも注目を集める事となった。

「よう、お嬢ちゃん。パパのおちゅかいでちゅか～？」

酔っ払いの一人が冗談交じりに少女にからもうとしたが、少女はするりと男の手を抜けて、酒場の主人の方へと歩み寄った。

「聞きたいことがあるのだが」

少女の声は姿に見合わず威厳に満ちていた。だが酒場の主人も変わった客には慣れているのか、冷静に対応する。

「なんだ、嬢ちゃん」
「人を探している」
「俺は情報屋じゃねぇ。聞きたいことがあるなら酒を頼みな。それが酒場での礼儀ってもんだ」

酒場の主人にすれば当然のことだが、子どもに対して意地の悪い言葉に周囲がニヤニヤとする。だが少女は自分の肩にも近い様な椅子に飛び乗ると、懐から５０ペント硬貨を取り出し、手近にあった酒瓶のコルクを引きぬくと一息に煽る。

その光景に酒場の男達があんぐりと口を空ける中、少女は酒瓶が空になったのを示すように、酒瓶を逆さにして振って見せる。酒瓶からは一滴の酒もこぼれなかった。

「これでいいか？」

「あ、ああ」

酒場の主人もやや呆気に取られながら、なんとか頷いてみせた。

「さっきの金貨は情報代込みだ。正直に答えて欲しい」

「・・・いいだろう、何が聞きたいんだ？」

「最近、手の甲に蛇を象った紋章を入れた男達を見なかったか？」

主人は首をかしげる。

「その形はもっと詳しくわかるか？」

「確か、槍に蛇が巻き付いたような紋章だと聞いている」

「さあ、どうだったかな・・・」

主人は曖昧に返事をしたが、目は酒場の一画を向いていた。何かあった時のために、わざと言葉にはしなかったのだろう。

少女も事情を察したのか、椅子から無言で飛びのき主人が示した方に歩き出した。その方向には、３人の男がくだを巻いていた。

その一画に少女はやおら近づくと、一人の男の肩を叩いた。

「尋ねたいことがあるのだが」
「んあ？　なんだぁ？」

男達はかなり深酒をしているのか、少女が酒場に入って来たことにも全く気が付いていなかったようだ。返事もうろんげで、気だるそうである。

「最近、私達の仲間が消息を絶った」
「お子様は帰って寝る時間だろ？」
「そうだそうだ～」

少女の質問を無視し、酔っ払った男達はさらに酒を飲みながら口々に勝手な事を言っている。そんな言葉を少女は無視し、さらに質問を続けた。

「消息を絶つ前に、共に仕事をした仲間の中に『槍に絡む蛇』の傭兵隊がいたとの情報があった。それはお前達の事か？」
「そうだぞ～。この紋章が印さぁ」

男達はそれぞれが手の甲にある紋章を少女に見せる。
傭兵隊は、ブラックホークの様に恰好を統一することで自分達の主張や象徴とすることもあるが、この男達の様に刺青を彫る事もある。男達はそれぞれが利き腕に刺青をしているのだった。
少女はその刺青を見ると、無表情にさらに質問をつなげる。

「なるほど、確かに情報通りだ。次の質問だが」
「おいおい、嬢ちゃんよ。質問はまだまだ続くのか？　俺達はもう眠いんだけどな～」
「心配するな、聞きたい事は残り一つだ」

少女が息を少し大きめに吸う。少し緊張しているのだろうか。

「・・・最近、天馬騎士の女をお前達は襲ったか？」

「あぁん？　それは犯したかどうかってことか？」

「そんなことあったっけ？」

「ああ、この前の女だよ。ほら、途中で気が狂った奴」

男が別の男を指さす。指さされた男は、手を一つ叩いて納得したような仕草を見せた。

「あーあー、そんなのいたなぁ。俺がヤッた時はもう死んでたから印象に薄いんだよな」

「生きてる時はそれなりにイイ声で泣いたんだがな」

「まったく根性のねぇ女だったよな。たかだか５０人でまわしたくれぇで死んじまってよ。それでも傭兵かっての。俺が突っ込んだ時にはもう反応がなくてよぉ。それでも遠慮なく出しやがるもんだから、臭くてしょうがねぇし」

「俺みたいにさっさと突っ込んどきゃよかったんだよ。真っ先に行ったバタラが言ってたんだがよ、どうやら初物だったらしいぜ？」

「マジかよ。そいつはもったいねぇな」

「バタラの野郎も後の人間の事を考えろよな。あんなグロいもので相手したら、後が相手出来ねぇだろうが」

「てめぇのが粗末なだけだろが」

「うるせえ！」

男達はやおら下品な話で盛り上がり始めた。酒場は少女に注目したせいで静かになっていたわけだが、男達の会話の内容に、さしもの酒場のお世辞にも上品とは言えない連中も辟易したのか、３人の男以外は誰もが話を止めて男達を睨んでいた。

そしていかに自分がその女を犯したかをさも楽しそうに話す男達

の傍で、じっと沈黙する少女。その様子をミランダとロゼッタは見ていた。

「なんだあいつら？　クソ野郎にも程があるよ」

「『槍に絡む蛇（スカースネイク）』っていうゲスの集まりで有名な傭兵団さ。あいつらは女だったら敵だろうが味方だろうがおかまいなし。死体でも犯して切り刻むような連中だ。アタイですら関わり合いにはなりたくない奴らだよ。だけどどんな汚れ仕事も引き受けるから、結構戦場では重宝されてるんだけどね」

ロゼッタも唾を床に吐き捨てながら嫌悪感を露わにした。ロゼッタの態度に、余程の下衆な連中なのだろうとミランダも納得する。そして少女が俯いたまま、重たい口を開く。

続く

天駆ける乙女達、その3～語られる中原の情勢、そして～（後書き）

次回投稿は7／29（金）です。

「なるほど・・・ようやく見つけましたよ、イーラ」
「なんだ、嬢ちゃんのお姉ちゃんとか何かか？　心配しなくても、大きくなったらおじさん達が相手してやるからよ」
「今すぐでもおじさんはいいでちゅよ～」
「げ、お前そういう趣味か」
「馬鹿言え、これくらいが食べごろなんだよ」

男達がぎゃあぎゃあと騒ぐ中、ロゼッタは注意深く少女の手元を見ていた。少女が両手の指を、ゴキゴキと鳴らしているのをロゼッタは見ていたのだ。

「なるほど、では相手をしてもらおうか」
「お？　まさか向うからそう言われるとは・・・」

男が今まで無視していた少女の方を振り向こうとした瞬間、少女が男の肩と頭を鷲掴みにして、そのまま首をへし折ったのだ。骨の折れる嫌な音が、静まり返った酒場に響く。
そして、何が起こったかわからず立ちつくす片方の男の手を取ると、少女はまるで玩具のように男を空中に振り上げ、地面に力任せに叩きつける。木造りの床が砕ける音と共に男が大量に血を頭から流すが、少女は容赦なく男を巻き散る血と共に何回も床に叩きつけた。
やがて痙攣する男が抵抗する気力も無くした事を確認すると、少女は男を肩に担ぎ、そのまま力任せに背骨をへし折った。そして全身の骨を砕かれた男が、力なく床に崩れ落ち息絶える。

「て、てめぇ！」
「危ない！」

その音で最後の男も我に返ったのか、腰の剣を抜いて背後から少女に斬りかかった。ミランダが思わず声をかけるが、丸腰の少女はその剣を振り向きざまに指二本ではさんで止めたのだった。

「は、はぁ？」
「終わりか？」

少女は涼しい顔でその剣を掴んでいるが、男は必死だった。顔が真っ赤になる程力を込めても、剣はピクリとも動かなかった。

「こ、このガキ！」
「・・・死ね」

少女が剣を指先で引っ張ると、男がバランスを崩して少女の方に倒れ込む。そして、男は自分の体を貫通する少女の腕によって、その体を支えられた。

「・・・・・え？」

男は何が起こったのか理解できていなようだった。また、傍目にもそれは理解しがたい光景だった。事もあろうに、男の体から突き出た少女の手には男の心臓が握られていたのだ。そして、その手を力いっぱい少女が握りこむと、酒場の中には容易に朱に染まった。

「うわぁ！」
「ひいい！」
「げ、げえぇ」

その凄惨な光景に、荒くれ者であろう酒場の男達が吐いていた。

少女は至近距離で男の血を浴びたにも関わらず、微動だにせず、その場に佇んでいた。そして、周囲でめいめい勝手に吐く男達の中で、一人だけ違う動きをする男がいる。

「ば、化け物だ！」

逃げた男は、この男達の仲間であった。一人だけ厠に行っていたことで事なきを得ていたのである。逃げる男を少女は追おうとはしなかったが、逃げる先の扉がきいと開く。

その扉から入ってきた人物と男が交差すると、男の動きがピタリと止まる。直後、男の首と胴は離れ、血が新たに噴き出していた。入って来た女の傭兵らしき人物が、凄惨な光景とは場違いな軽薄な言葉を発する。

「ヴェルフラたーいちょ～。すみませぇん、遅れましたぁ！」

「遅いぞ、マルグリッテ」

ヴェルフラ隊長と呼ばれた少女は男から手を引きぬくと、男の死体をぽいと放り投げた。その簡単に放り投げられたはずの男の死体は、きりもみ状に宙を舞い、血を降らせながら酒場の壁に叩きつけられた。それだけの事をしてももはや酒場に悲鳴は上がらず、皆が黙して事の成り行きを見守っていた。その中でミランダとロゼッタがひそひそ話をする。

「（なんだあいつらは？）」

「（アタイの予想が当たっていれば・・・アイツらはフリーデリンデの天馬騎士団、部隊アテナの隊長と副隊長だ）」

「（えーと、通称『報復部隊』だっけ）」

「（そうだ、アタイも初めて見たけどね）」

ロゼッタがそこまで喋ると、ふとヴェルフラがロゼッタとミランダの方を見た。その冷たくもまっすぐな視線に、どきりとする2人。

「（げ、なんかやばい雰囲気？）」

「（悪い事は何もしてない・・・はずだけど）」

「（そこでしてないと言いきれないアタイ達が悲しいね）」

ひそひそと囁く2人を尻目に、ヴェルフラは視線をマルグリッテに戻す。

「マルグリッテ、遅れた言い訳はあるか？」

「そーれーが～、部隊ラスワティもこの町に来ているんですよぉ。それで隊長さんと出くわして事情を聞くうちに、こんなことにぃ」

「なるほど。だが貴様は私に素手で戦わせる気だったのか？」

「たいちょーなら問題ないっしょ？」

けらけらと笑うマルグリッテにため息をヴェルフラはつくと、指を鳴らす。するとマルグリッテの後ろからさらに女傭兵が現れ、彼女は両手に大きなハンマーのような武器を抱えていた。女性はロゼッタにも負けないほどの体躯をもっていたが、ハンマーは相当の重量があるのかその女性をもってしてもよろめく始末だったが、ヴェルフラはそれを片手で難なく持ちあげるとあっさりと担ぐ。そしてその後ろではマルグリッテが剣を抜き放っていた。

「マルグリッテ、フェルミナの方は予定通りか？」

「あいあい、ちゃんと外で蛇の残りを狩ってますよ。後はこっちだけです」

「そうか、ならばいい」

ヴェルフラはそのまま酒場の二階に目を向けると、階段にずかず

かと歩いていく。その後からマルグリッテが続くが、通りすがりに酒場の主人に懐の袋を投げやった。
　主人が半ば反射的にその袋を開くと、中には１００ペント硬貨が大量に入っているのだった。意味もわからずマルグリッテの方を見る主人。

「迷惑料だよ～。とっといて？」
「え？　なんの・・・」
「これから二階は惨劇の場だから～。建物立て替えた方が早いかもよぅ？」

　楽しそうにマルグリッテが笑い、そのまま２人は姿を階上へと消した。その後しばらくして聞こえてくる大量の悲鳴。壁が破られる音、戸が打ち壊される音、そして幾ばくかの剣戟の音。そして一度静かになったかと思うと、二階の床を突き破って男の死体が頭を出し、階下の連中の悲鳴を最後に全ての騒ぎは止んだ。その後、二階からは血まみれのヴェルフラとマルグリッテが降りて来るのだった。

「あ～、これで意趣返しは出来ましたかねぇ？」
「どうかな？　隊長らしき男はいなかった。他にも分散しているのかもしれない」
「えぇえ？　めんどくさい～、蛇は頭を叩かないといけないのにぃ」

　血まみれの２人が悠然と酒場を出て行こうとすると、再びヴェルフラがロゼッタとミランダの方を見て、今度は静かに語りかけた。とても凄惨な戦いの後とは思えないほど穏やかな声である。

「そこの２人」
「・・・なんだよ」

ロゼッタが「まさかやる気か？」といった風に身構えたが、一方でヴェルフラは悠然と立っていた。

「さっきそこで一緒に飲んでいた女の傭兵がいたろう？」

「・・・いたけど。それが何さ」

「仲が良いなら伝えてやれ、お前の姉はカンカンだと。謝るなら今の内がいい。これ以上怒らせると、手に負えなくなるぞ？　とな」

そして少し意地悪そうにヴェルフラが笑うと、彼女は血まみれの顔でなぜか愛想を振りまくマルグリッテを伴い酒場を出て行った。後には戦いの跡が、きっちりと赤い血だまりとなって酒場に残っている。

＊＊＊

その頃、アルフィリースの方も町で出会った女傭兵達と意気投合し、夕食を共にしていた。こちらはミランダ達とは違い、少し上品な店ではある。といっても、大衆食堂のように喧騒と煩雑さが支配する場所ではあったが。

「じゃあエマージュは、妹を探して？」

「そうなのです。あの子ったら、勝手に隊を離れたものだから皆が迷惑して・・・戻ってきたら、きつくお仕置きしないと示しがつかないのです」

ぷりぷりと頬を膨らませて可愛らしく怒るのは、アルフィリースが知り合った女傭兵の隊長である。アルフィリースよりは年上だろうか、髪の一部を結い、みつあみにして冠の様に巻いており、また可愛らしい容姿とは別に落ち着いた印象を持つ女性だった。その割に酒がまるでざるのように入っていくのだから恐ろしい。

その傍らを固める４人の女性達は対照的に、いずれも精悍な女性達であった。特に精悍で厳しい目つきをした女性が副隊長なのだろう、アルフィリースほどもある背丈でまさに男装の令嬢といった感じの言葉が似合う女性だった。わきあいあいと皆が盛り上がる中でも、一人だけ酒を控えめにして、油断なく周囲を見回している彼女が、何かを目の端に止めエマージュに声をかける。

「隊長」
「あら、いたのね？　やっぱりここに来たでしょう、ネスネム」
「はい、さすが隊長」

副隊長らしきネスネムが頷く間に、エマージュは指をパチンと鳴らしていた。すると、さきほどまで楽しく飲んでいた周囲の女性達が、あっという間に先ほど食堂に入って来た女性を取り囲む。

「やれやれ、さっきは危なかった・・・って、ええ！？」
「飛んで火にいるなんとやらだな」
「隊長から逃げられると思ったのか？」

女性達は口々に言いながら、入って来た女を捕まえた。その場所に悠然と進み出るエマージュ。

「やっと捕まえたわよ、ターシャ」
「お、お姉ちゃん」

３人の女性に取り押さえながら青ざめるのは、先ほどまでミランダ達と盛り上がっていた女傭兵だった。

続く

天駆ける乙女達、その４～報復部隊はその役割を実行し～（後書き）

次回投稿は７／３０（土）１４：００です。

天駆ける乙女達、その5～乙女達は天に去りぬ～

そして青ざめるターシャとは対照的に、ニコニコとしながら見下ろすのはエマージュだった。

「お、お姉ちゃん。どうしてここに？」

「愚問だわ、ターシャ。私はあなたの姉なのよ？　あなたの行動くらい見抜けなくて、どうして姉が務まるのかしら？　それよりも」

エマージュがターシャに顔を近づける。

「部隊を脱走した覚悟はできているかしら？」

「そ、それは・・・そのう」

「お仕置きよ、ターシャ」

いつの間にか後ろ手にくくられたターシャを、エマージュが膝の上で腹這いにさせる。

「ま、まさか？」

「そう、いつものアレよ」

エマージュの手が勢いよく振り下ろされ、ターシャの尻をはたいた。乾いた高い音が店内に響き渡り、客たちが何事かと振り返る。

「いったい！　痛いって、お姉ちゃん！」

「痛くしてるのだから、当然です」

「皆見てるよ、恥ずかしいよぉ！」

「これは罰ですから、そうしないと意味がないでしょう？」

エマージュの手が容赦なく三回、四回と振り下ろされ、その度にターシャの悲鳴が聞こえた。店内の客はなんだなんだと注目をするが、それがまたターシャはたまらなく恥ずかしいようで、顔を真っ赤にしながら涙目になっていた。

「あの、お客様・・・他のお客の迷惑になりますので・・・」

店の娘がおそるおそる声をかけるとエマージュの部下が一斉に振り向いたので、店の娘は少しおびえるようにびっくりしたが、

「大丈夫です、もう終わりましたから。ご迷惑をおかけしました」

と、エマージュが優しく声をかけると安心したように娘は小走りで去って行った。その後にはべそをかくターシャがへこたれていた。

「ううっ・・・17にもなって尻をひっぱたかれるなんて、あんまりよ」

「うーん、確かにあれは恥ずかしいかも」

他人事のように語るアルフィリースの肩を、リサが叩く。

「アルフィリース、明日は我が身ですよ？」

「なんでそうなるのよ！」

そんなアルフィリースの反論もまた、店内の喧騒に紛れていく。

＊＊＊

そのまましばらくして、今度はターシャを交えて食事や酒を楽しむアルフィリース達とエマージュ達。ターシャはいまだに尻が痛い

のか、度々座りなおしている。

「なるほど、アルフィリースはこれから傭兵団を作るのですね」
「そうなの。貴方達はフリーデリンデの天馬騎士隊なんでしょう？　何か参考になりそうな話はないかしら」

エマージュが自分達の出自を明らかにしたので、アルフィリースもまた自分がこれからやろうとしていることを明かし、エマージュに相談に乗ってもらっていた。エマージュはおおらかな外見とは裏腹に、これでも部下を５００人も抱える大部隊の隊長らしい。フリーデリンデは５つの部隊で構成されるが、その中の隊長の一人なのだそうだ。初陣は１１歳の時。現在２２歳となった彼女は、既に１０年以上の経験を誇るベテランの戦士である。

そのエマージュが、まだ傭兵としては若輩者のアルフィリースに対して真剣に答える。

「そうですね。私達は傭兵と言っても、ほとんどが生活のために世襲的に傭兵となります。男は出稼ぎ、あるいは里の守りにつきますが、女は天馬騎士となる者が多いですから。また世間一般の傭兵とは事情が異なるかも」
「それでもいいの。私は女だけの傭兵隊を指揮するつもりはないけど、女はどうしても多くなると思うから。何か参考にさせて」
「そうですね・・・」

エマージュが少し考え込む様な仕草をする。

「わかっているとは思いますが、女の身で傭兵をするのはとても危ない。何の後ろ盾も保証もない我々は、弱みを見せれば蹂躙の対象となるだけ。だからこそ私達は自衛の手段として『アフロディーテ』と『アテナ』という部隊を作りました」

「言い方は悪いけど、そのう・・・」

言い淀むアルフィリースを見て、エマージュが気づかうように微笑む。

「良いのですよ、素直に言っても。確かにアフロディーテは娼婦としての役割も持ちますが、彼女達は同時に誇りも持っています。彼女達を娼婦と呼んでも、別におかしな事はありません」

「そんなものかな？」

「そんなものです」

エマージュが酒を飲みながらさらに答える。

「実際に戦場を稼ぎ場とする娼婦も存在します。大きな傭兵隊なんかは、戦場に娼婦を連れて行く場合もあるそうですね。騎士団でも、大勝した時には娼婦を呼んで宴会をすることもあるでしょう。ターラムあたりには、そういった娼婦を斡旋するギルドもあると聞きます」

「そうなんだ。男って皆そうなのかな」

少し呆れたような顔をするアルフィリースを見て、エマージュが苦笑する。

「ふふふ。アルフィリース、あなた恋人はいるの？」

「え！？　い、いないけど？」

「いつか作ってみるといいでしょう、そうすればその考えも少しは変わると思うから。形は色々あるけれど、男と女は愛し合うものよ」

エマージュが優しく微笑み、なぜかアルフィリースは顔を赤らめた。優雅で余裕のある微笑みを見せるエマージュに、アルフィリー

スはなぜか気後れしたような思いがあった。

「そう。戦場には色々あるけれど、一番問題なのは略奪行為など部隊の評判を貶めるもの。いいかえれば風紀と言ってもいい。戒律で縛る手もあるけど、傭兵なんて元々そういった意識の低い者の集まりだから。そのあたりは騎士団とは違うわね」

「そうかぁ。そうなると飴と鞭が必要なのかな？」

「それも一案ね。でも、どのような飴と鞭を使うかは貴方次第。そのあたりは隊長の器量と言えるわね。他にも色々な傭兵隊があるから、なんだったら参考にしてみるといいわ。カラツェルの騎兵隊なんかは傭兵だけど規律正しい傭兵隊として有名だし、かの鉄鋼兵なんかの話も参考になるかもね。興味があれば訪ねてみるといいかもしれない。比較的話しやすい人達だから、そう邪険にされることもないはずよ」

「わかった、ありがとう！」

笑顔で返すアルフィリースに、エマージュは何かを感じたのか。彼女の頭にある考えが浮かぶ。その時。

「エマージュ隊長！」

「何かしら、騒々しいわ」

食堂の外から、同じような恰好した女性がまた入ってくる。そして何やらエマージュに耳打ちをすると、彼女の顔色が変わった。

「・・・なるほど。アテナからはヴェルフラとマルグリッテが出張ってきているのね？」

「はい、かなり本気だと思います。朝までには決着を付けたいから、手を貸してくれないかと」

「本来我々の役目ではないけども・・・事情が事情ね。すぐに精鋭

を２０人ほど連れて向かうとヴェルフラに連絡をしておいて」
「わかりました！」

命令された女性がぱたぱたと走り去るとエマージュは酒を一気に飲み干し、部下を促して先に店を出させた。そして先ほどまでおおらかだったエマージュの顔も、みるみるうちに引き締まっていく。

「さてと、戦場に行きましょうか」
「一体何の？　この辺では戦いはなかったはずじゃあ」
「私達の仲間が凌辱された挙句、殺されました」

エマージュは苦い顔で答える。

「我々は団の規則にのっとり、報復行動に出ます。これこそが我々を大陸有数の傭兵団にまで名声を上げた理由。『フリーデリンデの女神を汚せし者には、死の鉄槌を持って報復を』。これは本来なら部隊アテナの役目なのですが、今回殺されたのは私達の家の近くに住んでいた子ですから。あながち私にも無関係ではない」
「お姉ちゃん、それって・・・」
「ええ、殺されたのはイーラよ」

ターシャが思わず手を体の前で握りしめる。

「そんな、イーラが・・・」
「よくあなた達は遊んでいたものね。でもだからこそ、貴方にはしっかりしてほしいのターシャ。貴女は私のかけがえのない妹なのだから。もし貴女が同じ目にあったら、私はきっと気が狂ってしまうわ」

エマージュがターシャを抱きしめながら答える。ターシャもまた

自分の姉を抱きしめ返した。そして簡単に姉妹は別れを惜しむと、エマージュはアルフィリースに向き直る。

「そこでアルフィリース、貴方に一つお願いがあるのですが」
「何かしら？」

アルフィリースは突然話を振られたので、きょとんとしている。

「我がフリーデリンデには、外部の傭兵団、ないしは騎士団で1年程度研修させる制度というものがあります。この制度の目的は、どうも世の中から隔絶されがちな我々に世間の常識を教える意味もあるのですが、本来ならそのためには個人で自分の研修先を探します。でも最近は我々の報復を恐れない様な連中も増えてきて、フリーデリンデの新人も及び腰になっているのです。そこで・・・」
「女の多い私の傭兵隊なら安全だと？」
「言ってしまえばそういうことです」

少し決まりが悪そうなエマージュがそこにいた。

「私も多くの部下の命を預かる身。本来なら妹といえど差別は許されませんし、騎士団に派遣するという手もありますが、どうにも嫌な予感しかしなくて」
「お姉ちゃんの勘は本当によく当たるからね」

ターシャが少し自慢気に言うのを、エマージュが目で窘める。

「でも貴女は信頼できそうです、アルフィリース。もしよろしかったらこの話を受けてはいただけないでしょうか？　私の妹はこんな性格ですが、腕は確か。将来は一つの部隊を背負って立つ可能性もあると思っています」

「お姉ちゃん、褒めすぎだよう！」
「いいえ。これは贔屓目ではなく、現在5人の部隊長の一人であるエマージュの意見として述べています。ターシャ、今のフリーデリンデに羽音もなく天馬を操る者が何人いると思って？　アフロディーテの隊長カトライアや、我々の総隊長であるミストナ様が若かりし時にでも無理だった事なのよ？　あとは貴女の意識次第。それをアルフィリースの所で学びなさい」

エマージュが真剣な顔をしたので、戸惑うようにターシャは黙ってしまった。その彼女に、アルフィリースが神妙な面持ちで話しかける。

「一ついいかしら、エマージュ？」
「どうぞ」
「正直な話、私は天馬騎士を必要としてはいないの。単騎で運用する天馬騎士の役目は、通常なら主に斥候。でも斥候なら私にはこのリサがいるわ。だから私はターシャを本来なら必要としていない」

アルフィリースがリサの肩をぽんと叩いたので、この言葉には全員がびっくりした。フリーデリンデの申し出をアルフィリースは断るつもりだと言ったのだ。フリーデリンデの天馬騎士は世間的にも評判が高い。単騎を雇うだけでも、並の傭兵の3倍近い報酬が必要だと言われる。そのくらい傭兵として、彼女達は重宝されるのだ。

さらにアルフィリースは続ける。

「だからこれは一つ貸しよ、エマージュ。もしターシャの運用がうまくいって、彼女も私の傭兵団を気に入ったならば、フリーデリンデから定期的に研修として、小隊を借り受けるという約束をしたいの。どうかしら？」
「・・・なるほど。ただの傭兵ではないと思いましたが、そうきま

したか」

エマージュはどこか楽しそうにアルフィリースの申し出を聞いていた。そこには期待以上のものを得られたと言う表情がある。

「いいでしょう、私の権限で了承します。ただ、確定的な事は何も言えませんよ？」

「もちろんよ。私も天馬騎士を用いた部隊の運用はまだ考えたことが無いし、これから私の傭兵団がどうなるかもわからないしね。全てはこれからだわ」

アルフィリースが腕を組みながら人差し指を立てて見せたので、エマージュは楽しそうに笑って見せた。その時、既に軽鎧をつけて青い直垂（ひたたれ）を装備したネスネムが入ってくる。フリーデリンデ天馬騎士団の正規の装備である。

「エマージュ隊長、足並み揃いました」

「すぐ行くわ。それではアルフィリース、妹をよろしく頼みます」

「ええ、確かに預かるわ」

「ターシャ。アルフィリースの元で、多くを学んできなさい。成長したあなたを待ってるわ」

「・・・うん、わかったよお姉ちゃん」

食堂から出て行きながら差し出された装備を身につけるエマージュを見送りに外に出ると、そこには精悍な女騎士達が自分の天馬と共に整列していた。天馬は基本的に純白の生き物である。フリーデリンデの傭兵隊の本拠地である、一部地域にしか生息しないと言われる羽の生えた馬。優雅な見かけとは裏腹に非常に気性が難しいその馬は、乙女しかその背に乗せたがらないのだとか。また彼らの育成方法を正しく知るのもフリーデリンデの乙女達だけである。天馬は

彼女達でなければ育てられないのだ。
その純白の天馬が居並ぶその中を、直垂（ひたたれ）を揺らしながら悠然とエマージュは歩き、自分の天馬に騎乗する。

「上昇！」

エマージュの号令一科、彼女達は振り向きもせずに飛び立っていった。闇夜に天馬の白き羽が映えていて、アルフィリースは彼女達が見えなくなるまで茫として見送っていたのだった。

続く

天駆ける乙女達、その5～乙女達は天に去りぬ～（後書き）

次回投稿は、８／１（月）１６：００です。一日間を開けますのでご注意を。次回より新シリーズです。

いつも閲覧ありがとうございます。また感想・評価などお待ちしています。筆者のやる気につながっております。

次回シリーズは「愚か者の戦争」です。

「ごめんなさい、あの人はどこでしょうか？」
「ああ、彼なら自分の部屋にいるはずだよ」

レイファンは既に顔なじみになった娼婦に言われた方向に歩き出す。もうこの娼館に隠れて一カ月以上が経過しただろうか。

「まったく、この数日顔も見せないで・・・いつもふらりとどこかに行くのですから」

レイファンは怒っていた。気がつけばいつもあの人はふらりといなくなる。しつこいほど顔を見せたかと思うと、全く顔も見ない日が何日も続くのだ。彼以外に頼る者がないレイファンにとって、これは非常に不安になる扱い方だった。

「もう少し淑女に対する扱いというものを、彼には覚えていただかないと・・・」
「誰が淑女だって？」
「きゃあっ！」

突然天井からぬうと人影が現れたので、レイファンはびっくりして後ろにこけてしまった。さかさまになって天井にぶら下がっていたのはライン。足を梁にひっかけて、腹筋の鍛錬をしていたのだった。

ラインは見事に体を一回転させて着地すると、レイファンを起こしに来る。体は上半身裸で、鍛錬によって体が汗ばみ蒸気していた。

「（す、凄い体・・・）」

レイファンは思わずごくりと唾を飲んでしまった。成人した男の裸を見たのはこれが初めてだが、それでも並の体つきではないことくらい、レイファンにもわかる。昔美術品だという男性の裸像を見たことがあるが、それよりも遥かに鍛え上げられた、鋼鉄の様な肉体をした男が目の前にいた。レイファンの目が思わず釘づけになり、それを感じたラインは意地悪くレイファンの額を小突く。

「いたっ！」

「見とれてんじゃないぞ、ませガキ。それとも俺の胸に飛び込んでくるか？　ほれほれ」

ラインが手を広げてレイファンを挑発したので、レイファンは恥ずかしさから真っ赤になりながら手当たり次第に周囲の物を投げだし始めた。

「うおお、何しやがる！」

「この恥知らず！　一度花瓶の中に頭を突っ込んで、窒息すればいいんだわ！」

「やれやれ、凝りん奴だ」

部屋の隅で退屈そうに髪をいじっていたダンススレイブがため息をつく。そのため息と同時にレイファンの投げつけた花瓶をラインが上手く掴む。

「どう・・・わぶっ」

「フン！」

花瓶には水が入っていた。花瓶の口を下にしてキャッチしたライ

ンは、もろにその水をかぶる格好になったのである。ラインがそのまま絶句する様を見て、ダンススレイブは相好を崩すのであった。

「お前も学習せぬやつだな。仮にもあの少女は一国を背負って立つ人間だ。あのようにぞんざいな扱いをすれば当然怒るだろうよ」

「それくらいでいいんだよ」

ラインがふてぶてしくいう言葉に、ダンススレイブが首をかしげる。

「どういうことだ？」

「いいか、今レイファンは俺しか頼れない立場にいる。だが一国の公女が一介の傭兵を頼るなんざ、普通はあってはならんことだ。だからレイファンには俺との楽しい思い出なんかなくてもいいのさ。むしろ俺を嫌って、利用するくらいの気持ちになってくれれば丁度いい」

「・・・意外に物事を考えているんだな、お前も」

「当然だ」

ラインが頭をばりばりとかきむしりながら立ちあがる。手は適当にタオルを掴み取り、頭からかぶった水を拭いていた。

「しかしそろそろ次の行動に移さないとな」

「どうするつもりだ？　確かムスター王子はもう戻ってきているんだろ？」

「それなんだ」

ラインは難しい顔をする。ムスターはザムウェドを滅ぼすや否や、即座に軍を取りまとめクルムスに凱旋した。その動きたるや電光石火であり、クルムスで反乱分子を担ぎあげて内乱を起こそうとした

連中の元に一直線に乗り込むと、たった1日で反乱軍を平らげたのである。ラインがその後収集した情報によると、反乱そのものをムスターが促しており、自分に逆らいそうな人間を焚きつけて一斉に処分した格好となったのだ。

「反乱の情報は俺も掴んでいたし、俺の考えではザムウェド攻略にはもう少し時間がかかるはずだった。この隙に乗じて俺は国王とレイファンを接触させて、首都の反乱分子を焚きつけさせるつもりだった。そのためにわざわざザムウェドにまで足を運んだんだしな。そこでこの一連の騒動とも縁を切るつもりだった。だがあまりに話が大きくなりすぎだ。一介の傭兵の手には余るよ」

「それにしても、あまりにムスターの動きが鮮やかだったと」

「ああ、奴が愚物だって考えはもはや捨てた方がいい。だが・・・」

ムスターは何のためにそんな事をしたのか。いかに反乱分子とはいえ、国にとっては重要な人材である。それを一斉に処分するとなると・・・

「違う意味での馬鹿かとも思ったが、もし奴が賢いとして、これから先さらに戦争を仕掛けるつもりなら・・・」

「なるほど。後顧の憂いを断ったと?」

「そうとも考えられる。もしくは」

ラインが唸る。

「こうは考えられないか・・・ムスターには国を運営するつもりが全くない」

「では何のために主権を奪っている? それこそ辻褄が合わない」

「それなんだよな~誰が考えたって国の崩壊は目に見え・・・まてよ」

ラインは何か閃いたようだった。そのまま机に向かうと、何やら手紙の様なものを何通か書き始める。ダンススレイブが何事かと覗きこむも、しっかりと暗号文にしてあるのか、何のことやらさっぱりだった。そしてあっという間にラインは手紙を書き終わると、それを娼婦長に渡し、自分は外に出かける用意をし始めた。

「どこへ行く？」

「ゼルバドスっていう名前を覚えているか？」

「ああ。確かムスター王子のお気に入りで、最近急に出世した後誰かに殺されたとかいう」

「そんな奴は存在しない」

ラインが言い放った言葉に、ダンススレイブは疑問を覚える。

「何を言っているんだ？」

「っと。その言い方は正確じゃないな。正確には、そんな優秀な人間は存在しないってことだ。何せゼルバドスって奴は、俺の調べた所じゃ寒村の出身で、文字も最近まで読めなかったんだからな」

「？」

ラインの言葉に、まずますダンススレイブは困惑する。

「そんな奴がなぜ」

「そいつは俺も疑問だ。ある時身なりのいい男が奉公人を探しているとか言って、そのゼルバドスと何人かを金で身受けしたそうだ。貧しい村だから皆詳しい事情を聞かずに話を受けたそうだが、中でもゼルバドスは自ら志願したらしいな。だが、その後便りの一つもないそうだ。仮にゼルバドス本人が猛勉強して出世したとして、故郷に頼りの一通もよこさないのは変じゃないか？」

「別人の可能性は？」
「人相は一致している。寒村や田舎にしては珍しい都会的な名前だし、いずれ彼は出世するんじゃないかと周囲も期待していたんだが。親孝行な奴で、性格はともかく頭の方はそこまでよろしくなかったようだな」
「ならば一体どういう・・・」
「本人になり済ました別人なんだろ」

ラインがあっさりと答えた。その言葉に、ダンススレイブが一層悩んだ。

「余計わからないな」
「何が？」
「別人だとして、わざわざ誰かになりすます必要があるのか？」
「仕官はそれなりに身元調査も厳しいからな。それに素顔で潜入するのも間抜けな話だろう。加えて変装ってやつは、魔術で行うのはかなり難しいらしい。常時魔術を使用しっぱなしになると魔力の消耗も激しいし、集中力が乱れたら造形が崩れるらしいしな。一番簡単なのは、本人の一部を拝借して使う事だそうだ。まあ外法だから、使ったら魔術士の間ですら軽蔑されるようだが」
「なるほどな。で、ラインはどうするんだ？」

ダンススレイブが足を組み直しながらラインを見据える。ダンススレイブの太腿が露わになるが、ラインはわざと目を向けないようにしながら話を続ける。

「あと知りたいのは、王様の安否さ。これだけは調べられなかった。だからちょっと潜入してこようかと思ってな」
「王宮にか？」

この提案にはさしものダンススレイブも驚いた。まさかここまで大胆な提案をラインがするとは思っていなかったのだ。

「一体どうしたんだ、お前は？　そこまでする義理がこの国にあるのか？」

「いや、ない。ないが・・・」

「見捨ててもおけないと？」

「・・・そうだな。いや、違うか。きっと知ってしまったからな」

「？」

見て見ぬふりはできない。それ以上に、ラインは心に引っかかった事を放っておくことができなかった。

「（放っておいて、ろくな事がなかったからな。今度は間違えないさ）」

ラインの秘かな決意。それはダンススレイブすら知らない。そしていそいそと準備を進める中、ラインがふと窓の方を見た。

「おっと、俺も変装をしないとダメだな。さすがに顔を知られているかもしれないし」

「変装？」

ダンススレイブが首をかしげる中、ラインは伸び放題になった自分の髭をしょりしょりと触るのだった。

続く

愚か者の戦争、その1～ラインの思索～（後書き）

次回投稿は、８／２（火）１６：００です。

愚か者の戦争、その2～とまらぬ戦火～

「でさぁ？　レイファンちゃんって、ラインの事はどう思っているわけ？」
「んなっ？」

レイファンと娼婦達が洗濯物を干しながら会話をしている。その中でレイファンがからかわれているのだった。
レイファンがこの娼館で暮らすようになってから、既に一月近くが経過していた。ラスティとは既に連絡が取れているが、こちらの方が安全ということでいまだに娼婦達に匿ってもらっているのだった。その間に娼婦達はレイファンとすっかり仲良くなっているという寸法だ。娼婦達はもとよりあまり身分にこだわらないし、場合によっては貴族に召しだされることもある彼女達である。それなりに礼儀や優雅な所作を要求される場面も多く、貴族的な思考なども彼女達は理解できる。
またレイファン自体が着飾らない性格なので、娼婦達も好感を持って彼女に接していた。もっとも、全てがレイファンにとって目新しくまた刺激的であり、彼女が驚くその度にレイファンは娼婦達にからかわれているのは否めない。
一般民衆の食べ物、風俗、暮らしぶり。お茶や社交に楽しみを見出す貴族とは違い、多くの民衆はつつましく暮らし、たまに手にする多めの報酬や仲間達との会話、そして少しだけ背伸びした晩餐に楽しみを見出す彼ら。そして気分が盛り上がれば歌い、踊り、楽しみは見ず知らずの者とでも共有する。もちろん全ての者がそうではないが、レイファンが目にした民衆はそういった人間だった。
そして最近では遠慮のない会話をするレイファンと娼婦達だったが、会話の内容はもっぱら「ラインの事をレイファンがどう思っている

か」だった。

「好きになっちゃったりとか？」

「な、な、なぜ私があのような者をっ！」

「まあまあいかんせん歳が違いすぎるもんね～」

「でもでもぉ、貴族だったらそういう結婚とかもあるもんね～」

「あら。顔を真っ赤にする所を見ると、まんざらでもなかったりとかぁ？」

顔を真っ赤にしながら否定するレイファンを娼婦達がからかう。中には指笛まで吹く者がいる始末だ。

「わ、わ、私は・・・」

「まあどっちでもいいけどさ～？　もし誘惑するならレイファンちゃんもこういうのを身につけないとねぇ？」

そう言った娼婦が、洗濯してある自分の下着を見せつける。いやに布地が少なく、しかも半分以上透けているような下着だった。これでは何も付けていないのと変わらないのではないかとレイファンは思うのだ。

「そんな・・・恥ずかしいです！」

「あれま。でも慣れるといいもんだよ？」

「と、殿方はこういうのが好きなのでしょうか？」

レイファンがもじもじとしながら娼婦に質問する。

「だったら聞いてみたら？」

「え？」

と、その時噂のラインが不意に現れたのだ。シーツの向うに見える人影は確かにラインである。

「噂をすればなんとやら」
「ライン～。レイファンちゃんがね～」
「や、止めてください！」

レイファンが娼婦達を止めようとしたところで、風がシーツをまくり上げる。

「あっ・・・」
「へぇ。ライン、髭剃ったんだ？」
「ああ、髪も切った」

そこには今までの乞食の様なむさくるしい顔をした剣士はどこにもいなかった。そこには精悍な顔つきをした、まっすぐな瞳の青年が立っていた。優しそうな顔つきだが、油断なく光る目。時に応じて猛禽の様に光る眼が、娼婦達とレイファンに向けられる。女でなくとも、その目の強さには思わず釘づけになるだろう。

「あんまりからかってやるなよ？　仮にも一国の王女様だ」
「そんなこと言って、自分はなんなのさ」
「俺はいいんだよ。こいつは俺に惚れてるからな」

そういってラインはレイファンの頭の上にぽん、と手を置く。もちろんラインにとって冗談のつもりだったのであるが。

「あう・・・」
「あれま」
「こりゃあ・・・本当に惚れたね」

ラインの手の下で熱病にかかったように彼を見上げるレイファンがいた。その目は完全に恋する乙女の物である。ラインは果たして気が付いているのか、全く気がついていないのか・・・

＊＊＊

場所は移る。ここは滅んだザムウェドの領内。グルーザルドとトラガスロンが戦う最前線である。グルーザルド5万に対して、トラガスロン25万。兵法に照らし合わせれば圧倒的な戦力差であるが、戦いを優勢に進めているのはグルーザルドであった。そのグルーザルドを率いるのはロッハとヴァーゴの獣将二人である。その二人は、主だった部下と共にまさに天幕で軍議の最中であった。

「ウーラル姫の様子は？」

「はい。お怪我の様子も順調であり、戦勝の報告にお喜びでございます」

「まったく、剛毅な姫さんだな」

ヴァーゴが一人感心する。ザムウェドは確かに崩壊したが、幸いなことに一人生き残った姫がいたのだ。ウーラル姫というその第四王女は深手を負っていたが、このままの撤退はならじとロッハとヴァーゴの戦いに同行する事を申し出たのだった。

もちろんロッハはおろかヴァーゴすら反対したが、ウーラルの意志は強く、結局は彼らが折れる事となった。たった一人生き残った王族を戦いに巻き込むのはどうかと思ったが、ロッハの一存で決めれることでもなく、渋々と納得せざるをえなかったのだ。

だがそんな彼女でも、ザムウェドのために戦うと言う対外的な言い訳にはなるのだ。ロッハはただでさえ難しい状況の戦闘に加えて厄介を抱え込んだことで頭を悩ませながらも、軍議を続けていく。

「トラガスロンの状況はどうだ？」
「はっ、先の戦闘で多数の死者が出た模様。およそ一日分ほど陣を後退した模様です」
「これで半分くらいは押し返したな」

ヴァーゴが鼻息を荒げて唸る。トラガスロンとの戦争が始まって一月近くが経過した。当初圧倒的な戦力差とみられた戦争だが、戦いは終始グルーザルドに優勢であった。

トラガスロンにしてみればザムウェドと同じつもりでグルーザルドとの戦争に臨んだのだろうが、グルーザルドとザムウェドでは同じ獣人といえど、いかんせん兵の勇猛さや練度に差がありすぎる。何より軍を率いる大将の質が余りに違う。グルーザルドが誇る１２獣将は、何度か代替わりを繰り返しつつも今までほとんど負けたことが無い。グルーザルドの王であるドライアンがその気なら、この大陸の半分はグルーザルドに占拠されていてもおかしくないほどの軍の強さなのだ。

トラガスロンがその事実に気がついた時には既に遅く、グルーザルドはほとんど兵を失わないまま、トラガスロンの死者は既に３万を超えていた。そして夜も昼もないグルーザルドの奇襲に辟易したトラガスロンはろくな勝利もあげられないまま、既にザムウェド領内の半分近くまで撤退を余儀なくされていたのだ。

この圧倒的攻勢にも、グルーザルドの軍幹部達は冷静だった。獣将の内、最も血気盛んなヴァーゴですらそうである。彼らはただの猪武者ではない。

「で、どうするロッハよ？」
「決まっている。トラガスロンがザムウェドから全撤退するまで戦うさ」
「ではそろそろ使者を送りますか？」

ロッハの意をよく汲む隊長が提案する。武でゆさぶった後は文で揺さぶるのがロッハの常套手段である。

「ああ、これで向こうにも自分達に勝ち目がない事はわかったろう。撤退してくれるならそれに越したことはない」

「ちっ、こんな火事場泥棒みたいな真似する連中は徹底的にやっちまえばいいんだよ」

ヴァーゴのぼやきに何人かは賛同するが、ロッハは冷静に否定した。

「やめろ。一週間後にはヴォルドがさらに援軍を連れてくる。そうすれば俺達ならそのままトラガスロンを滅ぼすことも可能だろうよ。だが、それでは勝ちすぎる。勝ち過ぎれば恨みが残る。恨みが残れば新たな争いの火種になる。奴らを自国内に押し返せばそれで十分だ。少なくとも今回はな」

「正義は我らにありってか？　面倒くせぇな」

「侵略戦争をすれば、今度は関係ない国まで敵に回す。俺達はそれよりもやるべきことがあるだろう？」

「南の魔物と国さえなけりゃな」

「言うな。それは王すら同じ気持ちだろう」

それきり難しい顔をして黙る将軍二人を前に、天幕が重い空気に包まれる。その空気を破ったのは、外からの悲鳴。

「アアアアア！」

「なんだ！？」

天幕の中にいた者が一斉に外に飛び出ると、外では何者かとグル

ーザルドの兵士が戦っている最中だった。

「なんだこいつは？」

「俺達の爪が利かな・・・ギャアア！」

「何が起こっている？　明りを増やせ！」

ロッハの掛け声と共に、一斉に明りが増やされる。そこに浮かびだされたのは、最初はただの黒い影かと思われた。だが、よくよく眼を凝らせばそこには黒い靄を纏った少年が立っているのだ。

「こんばんは～。はじめまして、かな？」

「・・・何者だ、貴様？」

「てめえらみたいな木端に名乗る名前はねぇ！　とでも言っておこうかな？　いやいや、そんな顔をしないでよ。この言葉、一回言ってみたかったんだよね」

「貴様、ふざけ・・・」

前に出ようとした幹部の一人を、ロッハが目で制した。同時に手を上げて周囲の部下達に合図すると、少年を一斉に獣人達が取り囲む。

「まあいい、貴様が何者だろうが関係ない。今から洗いざらいしゃべってもらおう」

「できるかな～？　獣人ごときに」

「やれ」

ロッハの冷徹な言葉と共に、周囲の獣人が一斉に動き出す。だが少年は悠然と構えており、かわす気配が一向にない。そこにロッハが直々に率いる精鋭達が襲いかかる。

並の獣人では比較にならないほどの動きの鋭さを見せる精鋭達の

攻撃を、ひらりひらりとかわす少年。それでも連携攻撃の中、徐々にかわす余裕が少年には無くなっていった。

「おっとと、こりゃあやばい」
「くらえ！」
「なーんちゃって」

完全に入ったと思った獣人達の攻撃は空を切り、少年は別の場所に突如として出現した。その挙動に全員が呆気にとられる。

「なるほど、魔術士か」
「半分正解かな。それよりも意外と鈍いんだね、獣将ロッハといえど」
「何？」

ロッハが訝しがる間に、少年の陰から袋が沢山出てくる。少年の体ほどはあるだろうか、かなりの大きさだ。形が歪に凸凹であり、それはその少年の奇妙な雰囲気と妙な一致を見せる。

「やっぱり獣人だからなのかなぁ？　頭の中身が知れるねぇ」
「・・・何が言いたい？」
「こういう事さ。そ～れ！」

少年がぽいと重たそうな動作と共に袋を空中に放り投げると、袋の一部を破く。そして重さに耐えきれなくなった中身が、袋から雨の様に降り注ぐ。

続く

愚か者の戦争、その2～とまらぬ戦火～（後書き）

次回投稿は８／３（水）１６：００です。

愚か者の戦争、その3～ドゥーム暗躍～

「ぬう？」
「うおお、なんじゃこら？」

地面に撒き散らされたのは、何かの液体と肉の塊。それは原形をとどめておらず、一見何かがわからない。

「あ、間違えた。こっちだ」

ドゥームがさらに放り投げた袋から撒き散らしたのは、今度は獣人達の首だった。無造作に地面に転がった首は、どれも無念と恐怖の目つきをしていた。

その光景にさしもの獣人の精鋭達も吐き気をこらえるように口を押さえた。

「う、ぐっ」
「こいつ！」
「小僧！」

一斉に獣人達が色めき立つが、少年はいたって冷静に説明を始める。

「いやいや、若そうな獣人を狙ってちょっとずつ消して行ったんだけどね。ただ殺すだけじゃ面白くないから、ちょっと拷問にかけてみたんだ。やっぱり獣人と人間じゃ痛みや恐怖の感じ方も違うのかと思ってね。ところがどっこい、全然同じように泣き叫ぶんだもの。『母さん』って言うのもいたけど、『ロッハ様』って泣く奴もいた

な。上官を呼ぶ奴が多かったあたり、その辺が人間とちょっと違うかな？　まあ大した違いじゃないけどね。

ところがその頃の君ときたら、一生懸命軍議や指示を飛ばしていて、君の助けを求めて泣き叫んでる新兵なんかほったらかし。これってひどいよね～君達もこんな上官に従うのは辞めた方がいいんじゃない？」

やや呆れ気味に話しながらもけらけらと笑う少年を見て、獣人達は一斉に飛びかかりかけたが、ロッハから噴き出る殺気に全員が怯えたように動きを止めた。

「貴様・・・」

「何？　怒っちゃったの？　低俗な脳みその獣人の分際で、怒るのだけは一人前だね～」

腹を抱えて笑う少年を見て、ヴァーゴが思わず叫ぶ。

「やべぇ、全員逃げろ！　ロッハがキレるぞ！！」

「死ね」

ヴァーゴの叫びと、ロッハの沈んだ声はほぼ同時だった。だが、一斉に事情を知る者はその場を後にしたが、そうでない者も何かに吹き飛ばされて後退を余儀なくされたのだった。

「くそ、ロッハの奴がキレやがった。退避だ、退避！」

ヴァーゴが先頭になって叫び、撤退を促す。だがその必要もないほど、周囲は竜巻の様な衝撃にさらされていた。そして戦闘に置いて撤退を最も嫌うヴァーゴだが、この場合だけは別だった。

昔、ヴァーゴは本気で怒ったロッハと一度だけ戦ったことがある。

その頃はまだ彼らはグルーザルドの将軍ですらなかったが、一方的に自分がぶちのめされたのをヴァーゴはいまだに覚えていた。めくらめっぽう打ちだした自分の拳がたまたまロッハの鳩尾をとらえたため結果的には自分が勝ったことになったが、完全に偶然でしかなかったのだ。ロッハの動きは獣人の目を持ってしても捕えられる速度ではないのだ。だからこそ、『神速』のロッハと呼ばれる。

かつてその神速に追いすがる速度をもった女の獣人がいたが、彼女はグルーザルドをやめてどこかで気ままに傭兵をしていると聞いた。ゆえに、グルーザルド内でもロッハの動きを捕えられる者は皆無である。

そして、そのロッハが今まさにいかんなく自分の戦闘能力を解放しようとしていた。

「消え・・・ぷぎゃっ！」

少年は突然顔面を殴られ吹き飛んだ。そのまま宙を後ろにのけぞろうとするも、今度は後ろから殴られ、無理矢理体を起こされる。

「防御が、間に合わ・・・」

少年は倒れる事も許されず、その場で一方的に殴られ続けていた。あたかも踊っているかのように

「（悪霊より、思考よ、り・・・速い打、撃とはっ！）」

少年の周囲には無数のロッハの残像があった。どれが本体とか理解する以前に、少年には反撃する余裕すらなかった。

そしてロッハが少年にとどめをさすべく、もっとも得意な形に追い込もうとする。

「後悔はあの世でしろ！」
「！」

ロッハが体重を乗せた一撃を少年に打ち込もうとした瞬間、ロッハは別の殺気を感じてその場を飛びのいた。すると、今までロッハがいた地面が一斉に何か大きなハンマーででも潰されたようにへこんだではないか。

「むう？」
「ドゥーム虐める、ダメ。やっていいのは私だけ」
「それもどうかと思うけどね」

少年の前にはいつの間にか赤い服に身を包んだ少女が立っていた。その不吉な姿に、ロッハは唸るも飛びかかろうとはしない。

「（こいつは・・・ヤバい）」
「ドゥーム、行きましょう。そろそろ時間」
「あ、もうそんなになるのか。じゃあしょうがないね」

少年は少女の手を取り、くるりと踵を返す。その姿を見て、他の獣人が吼える。

「逃げるのか！？」
「人聞きの悪い、戦略的撤退と言ってよ。それに君達にとってのメインディッシュはこれからだよ」
「何？」

獣人が聞き返した瞬間、トラガスロンに最も近い陣から火の手と戦いの喧騒が上がった。そして一瞬気を取られた獣人達が少年達の方を振り返ると、もうそこに少年の姿はなかった。

「一体何が・・・」
「状況を報告しろ！」

あっという間に冷静に戻ったロッハが、すばやく伝令を飛ばす。
だが彼の指示と同時に、既に火の手の上がった陣からは伝令が来ていた。

「申し上げます！　敵襲です！」
「そんなことはわかっている！　数と状況だ！」
「は、はい！」

普段より苛立つロッハに、伝令は少しびっくりしながらも答える。

「大型の魔獣、いえ魔物が多数。突如として現れました！」
「突如だと？　そんな馬鹿な話があるか！」
「いえ、本当に突然として・・・人間が魔物に変形したのです！」
「何！？　詳しく言え！　その報告に間違いはないのか！？」
「は、はい！」

伝令は怯えるように、だが正確に話し始める。

「最初は馬にくくりつけられた人間がこちらに追い立てられてきたのです。何事かと思い我々は怪しみつつもとりあえずは打倒したのですが、捕えた人間達は様子がおかしく、急に苦しみ始めたかと思うと体が変形して・・・」
「魔物になったというのか？」
「はい、信じられないことですが」

その言葉にロッハが悩む間にも、次の伝令が彼の元に飛び込んで

くる。

「申し上げます！」
「今度はなんだ！？」
「トラガスロン軍が急襲！　その数３万、三方より攻め立ててきます！」
「このタイミングでか！」
「こいつは・・・」

さしものヴァーゴも難しい顔をした。それだけ良くない状況ということである。

「ロッハよ」
「わかってる！　俺はウーラル姫を守りながら後退する。おそらくは背後にも伏せ勢がいるだろう」
「だろうな。殿は俺がやる」
「頼むぞ」

それだけ言い交わすと、ロッハとヴァーゴは互いに背を向けて指示を飛ばしに走る。その様子を空中から見守るドゥームとオシリア。

「仕込みは終わったんでしょ？　オシリア」
「ええ、ぬかりない」
「ならいいよ。作戦通りだ」

ドゥームは軽く笑う。

「これでしばらくは彼らも戦ってくれるかなぁ？」
「そうね。このままグルーザルドの勝ちでは面白くないもの」
「ザムウェドではあまりに簡単にいきすぎて、あの『バーサーカー』

のデータ収集には向かなかったらしいし。でもこれでグルーザルド相手にも成果があがるようなら、一応バーサーカーも使用のめどはたつね」

ドゥームは楽しそうに笑う。オシリアもまた口の端を軽く上げて彼に同意した。

「それにしてもアノーマリーも面白いものを思いつく。魔王生産はコストと手間がかかるからって、まさか人間をそのまま魔王に変身させる物質を作るなんてね」

「でも寿命が短い」

「そうだね、およそ一日しかもたないんだからね。でもその間に１００人は殺すさ。それに死ねば崩れるから、証拠も残らない。もっとも寿命の問題なんて、彼ならいずれ解決しちゃうんだろうけど」

「そうなれば、この世界はもっと楽しくなるわ」

「ああ、早くその日が来ないかな・・・もっとも、それまでにこのボクが世界を面白くするかもしれないけどねぇ」

ドゥームとオシリアは楽しそうに笑うと、オシリアがドゥームの後ろから首に手を回すようにして首を１８０度捻ると、そのままキスをしてその場を去るのだった。

＊＊＊

その頃、ラインはまんまとセイムリッドにあるクルムス王城に潜入していた。クルムスの王城は別名を『ブロッサム・ガーデン』と言われるほど景観に気を使った美しい王城である。外観からもわかるように見張り台にすら飾られた花は、厳めしいはずの王城でありながら、民衆の目を楽しませた。中には四季折々の庭園がつくられ、王族だけでなく、来賓や使用人までも楽しませる作りとなっている。

噴水から流れる水は、張り巡らされた水路を使って城の至る所に届くようになっている。その美しい景観は王宮勤めの人員を募る事にも役立ち、対して戦力を持たないクルムスが中原の真ん中にあっていまだに滅びていないのは、こういう風に一般民衆にも慕われるような細かい配慮が理由でもあるだろう。

だが、この美しい王城も今は少し荒れ果てている。ムスターが湯水のように軍備に金を投資するせいで、手入れが行き届かなくなっているのだ。城壁の花は枯れ、庭園には雑草が幅をきかせていた。また城壁にからまるツタは、花が咲き誇る時には彩りにもなったが、花が枯れた今では禍々しくも見える。まるで廃虚と化していく王城では、見張りもずさんなものとなっていた。ラインは念のため予め娼婦達に準備させていた王城の兵士の鎧を着て何気なく入って行ったのだが、なんの検閲もなく潜入出来てしまった。

「なんつーずさんな見張りだ。やる気がないとしか思えんな」

「まったくだ」

ラインが声をかけたのは給仕の女――に変装したダンススレイブだった。彼女には珍しく、地味な色合いで丈の長い服に身を包んでいる。

「我にこんな変装をさせてまで潜入させたのにこれとはな。これなら正面突破でもよかったんじゃないか」

「まったくだ。どうやら城の精鋭は既に細かく分割されて、国境近くにそれぞれ配属されたらしいな。この王城にろくな戦力はいないらしい」

「そうなのか？　なぜそんなことを」

「さぁな、反乱でも恐れたんじゃないか？　それより、問題はここからだ。ムスター本人に鉢合わせは御免だからな」

ラインが少しおどけたように肩をすくめる。

「だがこの城はかなり広いぞ？　どこにいけば王様に会えるんだ？」

「それもラスティに聞いている。こっちだ」

そうしてラインは、ラスティに無理矢理聞きだした部外秘であるはずの城の見取り図を頭に描きながら、ダンススレイブと共に王の元に向かうのだった。

続く

愚か者の戦争、その3～ドゥーム暗躍～（後書き）

次回投稿は8／4（木）です。

愚か者の戦争、その4～異形の兵士～

ラインとダンスブレイブは城の中を進む。彼らは既に変装を解いていた。というより、変装をする必要がなかった。王城の中には気味が悪いほど誰もいなかったのだ。見張りはおろか、庭園の清掃をする庭師や、女官さえいない。

「おかしいな」
「ああ、確かに誰もいないな。最近の世の中はこんなものか？」
「んなわけあるか。王城ってのはもっとこう・・・」
「ほほう、まるで王城の中を知っているような口ぶりだな」
「・・・ちっ」

ダンススレイブの意地の悪い誘導に、ラインは舌打ちする。だがそれきりラインもダンススレイブも会話はしなかった。人気こそないが、城の中に渦巻く黒く重い雰囲気は彼らを黙らせるのに十分だったからだ。

「ダンサー、止まれ」
「なんだ？　誰もいな・・・」
「あの角の向うだ。すぐに歩いてくるぞ」

ラインがダンススレイブを制しながらこっそりと様子をうかがっていると、果たして廊下の向こうから全身鎧の兵士達が見回りに来る。それらは廊下の角まで来て周囲を見回すと、そのまま一寸たがわず元の道を歩き出すのだ。

「見張りか？」

「だな。さて、この先が王の寝室のはずだが・・・一本道なんだよな。どうするか」
「なら話は簡単だ。強行突破あるのみだろう」
「おいおい、大胆な提案だな」
「当然だ、我を誰と心得る？　お前と我なら簡単に突破できるさ」
「もっともなことだがな、できれば穏便に行きたい。そこでだ・・・」

ラインが何かしらダンススレイブに耳打ちするのだった。

そしてほどなくして。

「ハァ～イ、そこの全身鎧づくめのお兄さん、我と遊ばない？」

そこには自慢の脚線美を露わにして鎧の兵士を誘惑するダンススレイブが立っていた。背後から声をかけられ、鎧の兵士が反応する。兵士が反応したことを認めると、ダンススレイブはあらん限り妖艶に微笑んで見せた。だが、その額には少し青筋が浮かんでいるように見えなくもない。

「（ラインめ・・・後で覚えていろよ！？）」

まさかこんなベタな手を命令されると思っていなかったダンススレイブはラインに腹を立てたが、マスターの命令とあれば従わざるを得ない。こんな命令に従わざるをえない自分の制約に腹を立てた彼女だが、後悔先に立たず。

そして鎧の男がダンススレイブに近づくが、悲しいやら上手く行ったやら、複雑な感情にダンススレイブが揺れた瞬間、彼女に突如として剣が振り下ろされた。

「なっ！？」

ダンススレイブは驚きながら思わず両手を交差して剣を防いだが、足が石畳の床にめり込んだのだ。それほどの重い一撃。

さらに横から追い打つように剣が払われる。

「ぐぅっ！」

金属音と共にダンススレイブが吹き飛ばされる。彼女に痛みはないものの、衝撃に動きが取れない。その彼女にさらに襲いかかろうとした鎧の兵士だが、兵士はダンススレイブの前でピタリと動きを止めていた。ラインが背後から兵士の鎧の隙間を縫って首を刺したのである。

「間一髪だったな」

「そうでもない。我を切り飛ばそうなど、並の者ができる事ではないからな。だが」

「だが？」

「まだ剣を受けた腕が震えている。余程重い一撃だったようだ。並の人間なら鎧ごと真っ二つだろうな」

「そうか」

そこまで聞いたラインが兵士から剣を引きぬこうとすると、突如兵士が動き、振り向きざまにラインを斬ろうとした。だがラインにも油断はない。地面を蹴って剣をかわすと同時に、兵士の首を斬り飛ばしたのだ。

さすがの兵士も、今度こそ動きを止めて地面に崩れ落ちる。

「何だこいつは？」

「・・・ザムウェドで遠目に見た、ヘカトンケイルとかいうのに似

てるな」
「そう言う事は早く言え！」

ラインが文句を言いながらも兵士の面体を上げる。すると、そこには・・・

「・・・なんだこれは」
「少なくとも人間じゃないな」

兵士には顔がなかった。いや、あるにはあるが、目は片方に一つだけ。しかも瞼が異常に肥厚し、ほとんど見えてはいないのではないかと思われた。そして口は縦に裂け、口からは舌ではなく触手の様な者が何本もはみ出していた。

「ラインよ・・・お前はこんなものの相手を我にさせる気だったのか？」
「いやさすがにこれは・・・できるのか？」
「我にも好みくらいあるぞ？」
「だよな。俺が女なら御免こうむる」

などとやや悠長な会話を彼らが交わしていると、戦闘の音を聞きつけたのか今度は奥から鎧の兵士が次々と現れる。

「ち、厄介だな」
「だから言ったろう、強行突破あるのみだと」
「結果論だろうが！　ダンサー、やるぞ！」
「承知した！」

そしてダンサーが剣の形態をとり、ラインはその刀身を手に握るのだった。

＊＊＊

「くそっ、人の尻を散々もてあそんでくれよってからに」
「だから知るかっての！　俺だって好きで触ったんじゃない」
「なんだ、我の尻では不満か？」
「そんなことはないが・・・って何を言わせやがる！」

戦い終えたラインとダンススレイブがさらに奥へと進む。後には２０体以上の細切れになったヘカトンケイルの死体があった。今度は鎧の隙間を通すというような真似はせず、真正面から鎧ごと細切れにしたのだった。壁や柱は粉砕され激しい戦闘の跡を物語るが、対するラインは返り血もろくに浴びていない。むしろ余裕すらある。
そして彼らはやがて一つの豪奢な部屋が見える位置にまで来た。

「よし、もうすぐ王様の部屋だな」
「それにしても気配が無いな。王が一人で寝かされているわけでもないだろうに」
「それもそうだな。結構派手にやらかしたから、他にばれると思ったんだが、何も誰も出てこなかったしな・・・これは？」

ラインが王の寝所の手前で止まる。中からは嫌な虫の羽音と、強烈なまでの異臭が漂っていた。

「こいつは・・・」
「ライン、既に王は」
「ああ」

ラインが王のベッドの周囲にあるレースのカーテンを剣でそっとのける。そこには既に死語数カ月は経過したであろう王の死体が横

たわっていた。既に蛆がわいたその死体は半ば白骨と化し、周囲には蝿が大量に湧いていた。異臭の原因もこれである。

「ムスターは既にこれを知っていて」
「ああ、当然だろうな。これではっきりした。ムスターにこの国をまともに運営するつもりはない」
「奴はこの国をどうする気だ？」
「それはわからんが・・・このままではクルムスは滅びるだろうな。いや、もう何をやっても手遅れかもしれんな」

ラインは悩む。既にザムウェドを滅ぼし、完全にグルーザルドを敵に回したクルムス。今はトラガスロンが戦っているが、ラインの見積もりではグルーザルドが本気になったらトラガスロンなど半年と持たないと思っているのだ。そうなれば確実に次はクルムスである。この戦争の大義名分は十分に立つ。そうでなくとも、周囲の国家が何かしらの圧力をかけてくるだろう。

「レイファンも大変な立場にいるな」
「いっそ、本当に攫ったらどうだ？」
「馬鹿言え。王女様だぞ？　どうやって暮らすんだ？」
「お前が養えばいいだろう？　そのくらいの器量はあるはずだ」

ダンススレイブの提案に反論しようとするラインだったが、ダンススレイブの表情は思いのほか真剣だった。

「この状況ではあの子の命運は風前の灯だ。それよりもいっそ名を変えて身分を偽り、平民として暮らして行く方がいくらかでも幸せだろう。そうは思わないか？」
「それは・・・しかし」
「あの子は良い子だ。娼館などに隠れて暮らしながらも明るさを失

わないし、最近では裁縫や料理まで覚えようとしている。頭もいいし、立派に平民として、あるいはお前の仕事のパートナーとしても生きていけるだろう。もちろん人生の伴侶としてもな。美しく育つぞ、あの子は。造形を見ればわかる」

「・・・俺の方が釣り合わんよ、あんな良い子にはな」

ラインはそれきり何も言わなかったので、ダンススレイブもあえて何もいわなかった。言いたい事はまだまだあるのだが。

「では最後に一つだけ。そういった選択肢もあることを覚えておいてくれ。あるいはお前にとって一番良い選択肢なのかもしれんぞ？」

「・・・考えておく。だが今は他にやることがあるだろう」

ラインが同時に前を向く。

「お前はこの城の書庫に行ってくれないか？　こうなったら何が何でも情報が欲しい」

「それはいいが、どんな事を探ればいい？」

「ここ最近の軍の動き、物資の動きだ。そうすればある程度ラスティが反乱軍と連絡をとれるだろう。それに、ムスターの今後の動きもわかるかもしれん」

「いいだろう。ラインは？」

「直接ムスターの私室に行く。一か八かだがな」

そのまま行こうとするラインの手を、思わずダンススレイブが引きとめる。

「危険だ。奴はさっきの連中より強いんだぞ？」

「心配するな、出会ったら逃げの一手に徹するさ。それに奴をここで倒すのは上手くない」

「？」

ラインの意図をダンススレイブが測りかねる。

「それはどういう・・・」

「また話してやるよ。それより動くぞ」

ラインはそのまま王の寝所を後にする。ダンススレイブも彼に続くのだった。

続く

愚か者の戦争、その４～異形の兵士～（後書き）

次回投稿は８／５（金）１６：００です。

愚か者の戦争、その5～探索～

＊＊＊

そのしばらく前。誰もいない王城を歩く影が一つ。

「いかん、いかん・・・段々と自由に動ける時間が短くなっている」

影は焦っていた。いつ意識が途切れるかわからない。そうなればまた不幸が誰かの元に訪れる。

「今のうちにできることを・・・これは？」

影が見つけたのは、ヘカトンケイルの細切れの死体。それを見て最初は立ちすくんだ影も、しばらくして良い事を思いついたようだった。

「なるほど、これは面白い。上手くすれば・・・」

影はさら足を速め、今度は自分の私室へと歩き始めるのだった。

＊＊＊

ラインと別れたダンススレイブは、城の記録保管庫に赴いて資料を探していた。

「全く、簡単に言ってくれるが・・・この膨大な資料からどうやって探すんだ？」

ダンススレイブの前には無数の記録がうずたかく積まれていた。城の記録は何も戦争に限ったものだけではない。雇用、収入支出、物資の移動の記録、来賓の記録などなど。重要な物からそうでもないものまで様々である。何がどこにあるのかすらも分からないほどの書物の量。誰にも見つからなかったのは幸いだが、これでは目的の資料に辿り着くだけでも数日を要しそうだった。

「くそ、ラインめ。面倒臭い方を我に押しつけたな？」

ダンススレイブがそう思うのも無理はない。それでもなんとか探そうと彼女は試みるのだが、最初に手に取った書簡が、乱痴気騒ぎの支出記録だったのでやる気がめっきり失せてしまった。

「・・・くだらな過ぎる。やってられるか」

「どうされましたかな？」

突如としてダンススレイブは背後から老人に声をかけられたのでびっくりした。思わぬ事態に、彼女もしどろもどろになる。

「こ、これはだな・・・ムスター王子に頼まれて記録を探しにだな」

「ほっほほ、嘘はいいでしょう。ムスター王子が誰かをここによこす事はあり得ません。昔も今もです」

「・・・」

ダンススレイブの目の前の老人からは、敵意は微塵も感じられなかった。その事にダンススレイブも警戒心を少し解いた。

「御老人、貴方はどなたです」

「私はしがないここの保管庫の番人ですじゃ。貴方には何者かなど

聞かない方がいいのでしょうな」
「・・・我はあの王子を止めたいと思っている者だとだけ言っておこう」
「なるほど、まだあの王子にもそう思ってくれる者がいるのですね」
老人はそっと目がしらを押さえた。その様子に違和感を覚えるダンススレイブ。
「御老人、貴方はムスター王子を憎くは思っていないのですか？」
「ええ、あの方は不憫な境遇の持ち主ですから。もっとも私が知っているあの方は、ここに通っていた１０歳程度の事までですが・・・」
「どういうことだ？」
ダンススレイブが訝しんで尋ねる。
「あの方は小さい頃からこの記録保管庫に入り浸りでした。そこであの方はこの国についてとてもよく勉強しておいででした。私の様な者にも、この国をどう良くしていきたいかを話してくれました。ムスター王子の出す案はどれも素晴らしく、なおかつ現実的なものでした」
「こう言っては何だが、彼は非常な愚か者と聞いていたが？」
「とんでもない！　むしろ彼らの兄達を上回る程の優秀な王子であったでしょう。そのような噂は私も知っておりますが、どうしてそう呼ばれるようになったのかは私もよくわからず・・・年中この保管庫にこもりきりな私では詳しい事情もわからず、いつしか王子もここを訪れなくなりました。ですが、かの王子が上奏した記録はここにいまだに残っております」
老人が棚の一端を指さす。ダンススレイブはその書物を手に取っ

てみた。そこにはこの国の農作物の生産状況が事細かく書かれており、その数値が実際に王に報告されるものとどのように異なっているかがつぶさに書かれていた。

「これは・・・賄賂の記録になるな」

「左様で。そしてこの報告書はどうやら王の元には届いていなかったようです。誰かが握りつぶして・・・恐れ多いことですが、おそらくは二人の兄上、もしくは宰相が握りつぶしたのでしょう」

「なるほど・・・これは？」

そこには鉱山でとれる資源が書かれていた。次の資料には各国との輸出、輸入の状況とその問題点が、次の資料には自国の軍備の問題点が書かれていた。また地方ごとの歳入・歳出の決算が合わないことから、賄賂を取っている可能性のある領主・貴族、あるいは逆に忠実に報告をなしている可能性が高い者達が列挙されていた。

さらには今後のこの国の取るべき方針が、数カ月単位、数年単位、あるいはもっと長期的な単位で書かれていたのだ。

「・・・天才だ。我にでもわかるぞ、この上奏書の素晴らしさは。これを１０歳に満たぬ少年が書いたと？」

「左様です。私はこの方が王となれば、あるいは宰相となればきっとこの国は豊かになると思っておりました。ですが・・・」

「いつの間にか王子はおかしくなったと」

ダンススレイブは唸った。そうなると、王子の今の像とは合わない。考えられることはいくつかあるが、これはラインに相談するのが一番いいとダンススレイブは考えた。

「御老人、参考になった。それで、さらに見せていただきたいものがあるのだが」

「私でわかる物でしたら。こちらへどうぞ」
「よいのか、我を信頼して？」
「この保管庫しか世界を持たぬ私にできる事は、これくらしかありませんから」

ダンススレイブは老人に案内されてさらに保管庫の奥へと進むのだった。

＊＊＊

そしてラインはムスターの私室に侵入していた。やはり見張りらしい見張りもおらず、彼は拍子抜けするほど簡単に彼の私室に潜入していた。

「逆に不気味だな・・・さて、何かないかな、と」

ラインはとりあえずムスターの執務机らしきものから探るが、そこには既にこれから取るべき行動を示した書物が山のように積まれていた。

「どれどれ・・・これは・・・トラガスロンに攻め入る計画だと？その後はクライアと同盟を結ぶふりをして皇太子を暗殺？　フルグンドへの宣戦布告書？　なんだこりゃあ？　無茶苦茶にも程がある！」

ラインが思わず叫んだのもしょうがない。その命令書の内容は無茶苦茶だった。まるで世界中に戦争を仕掛けるような内容の命令書。しかもそこに走り書きのような形であるのは、さらにその後どういった順番で戦争を仕掛けて行くのかという模式図。狂気の発想としか思えない様な構想だった。

「普通に考えればただの妄想だが・・・」

ラインは先にクルムスが使用したヘカトンケイルの強さを見ている。そして先ほど体感もした。さらには得体のしれない何かをクルムスは持っていると彼は感じている。そして悪い予感は、さらにメモ書きを見た時に寒気へと変わった。

「ヘカトンケイルを・・・３０００体増量だと?」

ラインが青ざめる。そんなものが一斉に押し寄せたら、何の備えもない城は防ぎきれないだろう。この部屋で練られている妄想が、現実のものとなってしまう。

「だが武器は・・・あの鎧はどこから輸入するんだ?」

「その計画はそこにはないぞ、青年よ」

ラインは背後から声をかけられて、思わずびくりとする。そこには遠眼鏡でちらりと見た、あのハゲでチビで太った中年のムスターが立っていた。だが、不思議とその目は澄んで見える。

二人の間に、緊張感が立ち上る。だが、ムスターの方はなぜか上機嫌そうだった。

「貴様がヘカトンケイルをやったのか?」

「・・・だったらどうだってんだ」

「大したものだ。人間業とは思えんがな。貴様は妖魅の類いか?」

「生憎と、人間さ。俺はな」

「まあどちらでもいいことだ。今となってはな」

ムスターは満足そうに頷くと、部屋の隅へと歩き出した。部屋の

隅の壁にかけてある絵を斜めにし、となりの棚の花瓶の場所を入れ替えると、壁の一部が開いて中から書物と箱が取り出される。

「持って行け」
「おおう？」

突然それらを放り投げられて、ラインは驚いて思わず受け取ってしまった。そしてさらにムスターはラインに問いかける。

「レイファンの居場所を知っているか？」
「知らんな」
「誰のことだ、とは言わないのだな」

その言葉に、ラインはしまったと思う。レイファンはその存在を公にされていない。普通の者が知るはずがないのだ。焦るラインに、ムスターはふっ、と笑みをこぼした。その様子を見てラインは腹が立ったのか、思わず荒い口調になる。

「だったらどうだってんだ？」
「別にどうも。ただ守るなら末長く守ってくれ」
「どういう風の吹きまわしだ？　レイファンを殺すつもりなんじゃないのか？」
「詳しく話す時間はない、全てはその書物に書いてある。それよりも・・・」

ムスターが不意に斬りかかって来たので、ラインは剣を抜いて防いだ。その飛び込みの速さに、ラインは生きた心地がしない。軋む剣を挟んで、二人が対峙する。

「ぐ、くっ！」

「なるほど、確かに腕が立つ」
「いきなり何だ！」
「ワシの妹をよろしく頼む」

そう言うと、ムスターは回し蹴りでラインを入口まで蹴り飛ばした。すぐに彼は体勢を立て直すが、その顔には先ほどの書物と箱が投げつけられる。

「いてっ！」
「もう行け。この城にいるヘカトンケイルはあれだけではない。アレはワシの護衛であると同時に監視でもある。直にここに来るだろう」
「それはどういう・・・」
「所詮ワシなど人形だ。次に会う時は遠慮するな、躊躇なくワシを斬れ。それがお前の役目となるだろう」

それだけラインが聞いたところで、鎧がかちゃかちゃと合わさる音が聞こえてきた。ヘカトンケイルの接近する音に、ラインはその場を一目散に後にする。ふと去る時にムスターの方をちらりと見たが、なぜか彼の背中が寂しそうに見えたのは、ラインの気のせいだったのか。

続く

愚か者の戦争、その5～探索～（後書き）

次回投稿は、８／６（土）１６：００です。

愚か者の戦争、その６～捻じ曲げられた真実～

その夜、ラインはダンススレイブと話しこんでいた。

「どう思う？」

「どうってな・・・今までの情報と違いすぎらぁ」

ダンススレイブとラインは互いに顔を見合わせて唸っていた。彼らの集めた情報とはこうである。

まずダンススレイブ。実はムスターは恐ろしく優秀な人間で、それをやっかんだ、あるいは恐れた誰かに彼は元々はめられていた可能性があること。さらにダンススレイブが集めた情報から、ラインが今回の軍の動きを軍団の配備や物資の流れから推測すると、間違いなく何日か後にはトラガスロンに攻め入る事。それが証拠に、既にムスターはトラガスロンに向けて出発したと、ラインが雇っている見張りから報告があった。もしレイファンとラスティが王都奪回のために決起するなら、このタイミングを置いて他にない。準備は俄然不足するだろうが、メリットもあるとラインは考える。

「いや・・・むしろ最高のタイミングかもしれん」

「どういうことだ？」

「考えても見ろ。現在ラスティが集めた手勢は１０００にも満たん。普通ならこれで反乱をおこそうなど正気の沙汰じゃない。だが」

「今の王城には、ほとんど兵がいない」

「ああ、あのヘカトンケイルはいるだろうがな。それでも好機には違いない」

ラインが頷く。加えて、

「戦後処理も楽チンだ」
「どういうことだ？」
これにはダンススレイブが首をかしげた。そんな彼女にラインは冷静に説明する。
「いいか、たとえば大軍団を率いて国を奪回したとする。だがクルムスは大きな内乱や相次ぐ戦争で既に疲弊し、対外政策がとれない。さらに反乱軍が大きいと論功行賞で確実に揉める。年若いレイファンには、これは難儀な仕事だぜ。仮に文句なしの恩賞を授けた所で、確実に文句を言う輩は出るだろうからな。後ろ盾や実績のないレイファンには、年上の有力者達を抑える事は困難だ」
「なるほど。ならばレイファン王女の手勢だけで奪還するのが最も良いわけだな」
「本当はな」
ダンススレイブは納得したようだったが、ラインは何か引っかかると言えば引っかかっていた。
「（出来過ぎな気もするがな・・・どうもすっきりしない）」
全てが上手くいく時は、大抵は誰かの掌の上で踊らされているだけだとかつての上官の言葉をラインは思い出す。そういう時こそ気を付けろと。こういう時は必ずどこかに落とし穴があるのだ。
「だが恐れていても何も出来んがな」
「何か言ったか？」
「いや、こっちの話だ」

ラインは娼婦に用意させた酒を飲みながら話を進める。不謹慎な行動だが、どうにも酒を飲みながらでもないと、このような事をやっている自分が馬鹿らしくてしょうがない。

「（こういうのに関わらないために傭兵になったのにな・・・何やってんだか、俺は）」

「大丈夫か、ラインよ」

「何が？」

ラインは酒に酔ったように気だるそうな目をダンススレイブに向けるが、彼女の顔はいつになく真剣だった。その艶やかな唇から、彼を気遣う言葉が紡がれる。

「我のマスターはそなただ」

「ああ、そういう話だったな。だから？」

「だから我はラインの言うことに従うが、ラインがやりたくないことなら無理にやらなくてもいいんだ。ラインは傭兵だからな。基本的に自由なはずだ。お前に権力は関係ない。ここで逃走するのも手だぞ？」

「俺が無理してるように見えるってのか？」

「無理かどうかはわからんが・・・苦しそうではある」

ダンススレイブは心底心配していたのだが、ラインの方はちらりとダンススレイブの方を見ただけで、返事もロクにしなかった。その事が、なぜかダンススレイブには悲しかった。

「（いつもと違うぞ、マスターよ・・・本当に大丈夫か？）」

「それより、こっちの情報も大変なものだぞ」

ラインがムスター本人から受け取った書類を見る。そこには遥か

昔にムスター本人が綴った日記と、近年綴られたであろう手記が混在していた。
　ダンススレイブは、ラインが放り投げるようにして渡した日記を読み始めた。

「ふむ・・・クルムス歴１１６年、今日はトリメドの治水について新しい方策を検討した。これでトリメドの水害は減るだろう」
「ちなみにその工事はクルムスの１１９年に実行に移されているものだ。ただし、第一王子の計画という事でな」
「は？　ということは・・・」
「ああ、名君と謳われた第一王子、第二王子の献策は、実のところムスターが幼いころに考えたものがほとんどだったのさ。だがそんなことはいい。それよりも俺が角を折ってある頁を見てみろ」

　ダンススレイブは促されるまま、その頁を見る。見るにつけて、徐々にその手が震えていく。

「なんだこれは？」
「手記が高熱を出した後で途切れてるだろ？　その日の晩、ムスターは兄達に招かれて夕食を共にした。だが、そんな記録は公式の記録には残っていないんだ。つまり、毒でも盛って秘密裏にムスターを消したかったのだろうな。優秀すぎるのも考えものだ、兄弟に妬まれるとはな」
「だが、彼は生き残ったぞ？」
「そこなんだ。最初から消したかったのなら話は簡単だが、やはり王子を消すのは一大作業だからな。そこで、ここは詳しい者に聞こうかと思ってな」

　その時戸を叩く者がおり、ラインが返事をすると扉の向うからは娼館長が入って来たのだった。

「おやライン、アタシがこんなところに来ても邪魔なだけじゃないのかい？」
「いやいや、二人まとめてでもいいんだぜ、俺は」
「あら、乗り気じゃないのさ。じゃあ今夜は久しぶりに複数で盛り上がるかい？」
「と、いきたいところだが先に聞いておきたいことがある。毒使いの専門家であるお前にな」
「！？」

娼館長の顔がにわかに曇る。

「ライン・・・アタシはそっちの道からは足を洗ったんだ。もうその話はよしておくれよ」
「だが知識は錆びついてないだろ？　元々は暗殺者のお前が下手打ったところを助けたのは俺だ。忘れたとは言わさねぇ」
「・・・わかったよ。まあアタシも、あんたのそういうあくどい所が気に入っているんだけどね。で、何が聞きたい？」

娼館長はため息をつきながら壁に身を預け、腕を組む。その顔にはいつもの少し皮肉屋の表情はなく、目は鋭くラインを見据えていた。

「もちろん毒についてだ。命に別状はなく、人間の知能や外見をだけ侵すような毒はあるか？」
「ものにもよるけど、あるにはあるさ。ただ配合が難しいし、命は無事でそういった障害を起こすようなものとなると、使える奴が限られる。実際にはほとんど運任せになるだろうね。そんな事を聞くなんてどういうことさ？」
「実はな」

ラインはムスターの事を話す。娼館長は真剣にその話を聞いていたが、やがて納得がいったのか、彼女の方から話しを始めた。

「なるほど、脳を侵して、外見だけでなく骨にも異常をきたしているだろうね。そいつはウンブラの毒の後遺症だね。けどウンブラってのはちょっとでも量を間違えると死んじまう。普通は殺したい対象に用いるものさ」

「そうなると・・・命はなくてもよかったって事なのか？　いや、それはそれで大騒ぎだろうし・・・まあそれはいいか。ところで、そういった毒を盛られた奴が何十年も経ってからの解毒ってのは可能なのか？」

「無理だね。ウンブラの恐ろしい所は解毒が効かない所さ、体の中から出て行かないんだよ。魔術なら早期であれば解毒が可能らしいけど、1日も経ってしまえばもう無理だ」

「なるほどな、じゃああのムスターは偶然の産物ってことか」

ラインが腕組みをして考え始める。

「それならそれで疑問があるな」

「なんだい？」

「いや、こっちの話だ」

ラインはふと思いついた疑問を娼館長に話すのはやめた。これはおいそれと話すことではないと思ったのだ。ラインの中で考えがまとまっていない事もあるが、それ以上にこれを話すと引っ込みがつかなくなる気がしたのだ。娼館長を巻きこみたくないとラインが考えた結果でもある。

ラインは思いつくまま、話題を変えようとする。

「にしてもえげつないことしやがるな。実の弟に毒を盛るなんざ」
「貴族の権力争いなんてそんなものさ。アタシだって現役の時はいかほどそんな雇われ方をしたかわかったものじゃない」
「そういや聞いたことが無かったが、なんで現役を退いたんだ？」

ラインが素直な疑問を娼館長にぶつける。彼女は嫌な顔をしながらも、正直に胸の内を吐露した。

「・・・アタシは通常、毒の調合だけで現場には出向かない類いの暗殺者だった。現場に行けば危険が伴うしね。でもその時は現場で調合するために、給仕のふりをして現場に乗り込んだんだ。そこでアタシの毒はさる初老の貴族の命を奪うはずだった。だけど・・・偶然、ほんの偶然さ。果汁に仕込んだその毒を、幼い孫が飲んでしまったんだよ」
「・・・」
「目の前で子どもがもがき苦しむ様をアタシは目にしちまった。それからさ、もうこんな仕事はできなくなったんだよ。結局のところ、アタシは命の重さなんてわかってなかったのさ。だからあんなことができた」
「・・・なるほどな、悪い事を聞いた」

ラインが娼館長に謝ったが、彼女はかぶりをふった。

「いいんだよ。もうどんなに後悔しても変えられない事実なんだ。懺悔はとうの昔に済ませたよ」
「・・・懺悔はどんなにしても尽きることなんざねぇよ」
「何か言ったかい？」

ラインの言葉は口の中で消えるようなものであったため、娼館長にはよく聞こえなかったようだった。自分の言葉にラインが反応し

ないのを見ると、娼館長もまたそれ以上の追及は諦め、部屋を出て行く。その折に一つだけ彼女はラインに言葉をかけた。

「ライン、あんたに一つだけいいかい？」
「なんだよ」
「アンタはずっと何かを後悔してる。それをアタシ達は皆心配してるのさ。吐き出せるものなら吐き出した方がいいよ？」
「余計な世話だ。気遣いには感謝するけどな」
「・・・いつかあんたにも全部を話せる人間ができるといいね」

娼館長はそれだけ言い残すと、寂しそうに部屋を出て行った。彼女の少し強い香料の残り香が、部屋に漂う。

部屋には無言のダンススレイブとラインが残っていたが、どちらが話すわけでもない。ダンススレイブも黙って瞑想に耽っている。ダンススレイブは元来無口な性格である。ラインが傍にいるから思わず色々な茶々を入れるが、普段は必要がなければ話すことはない。だから当然と言えば当然だが、沈黙にたまりかねたのかやがてラインが自分の疑問をぽつりと漏らした。

「戦争をおっぱじめたのは・・・誰なんだろうな？」
「ん？」
「いや・・・何でもない」

なんでもなくはなかったのだが、ラインも今はその疑問を胸にしまった。ダンススレイブに問うても仕方のないことであるし、もう一つ重大な疑問はあった。だがそれらに対する方策を、今のラインは何も持ち合わせてはいなかったのだ。

考えても仕方のない問題だが、忘れるべくもない疑問をラインは半刻ほども考えたか。彼はいつの間にか椅子で眠りについていた。その彼にそっとダンススレイブが毛布をかけるべく近寄るが、その

手を眠っているはずのラインがつかむ。
普通なら驚くべきその場面を、ダンススレイブはさらりと流し、ラインもまた当然のように毛布をひったくってそのまま椅子の上で丸くなった。いつ何時でも敵の襲来に備えることができるように鍛えられたラインの習慣である。ダンススレイブもそれを知っているから、驚きも何ともしない。
そのままラインは椅子の上で睡眠に入ったが、元が剣であるダンススレイブは寝る必要すらなく、ラインの束の間の休息を邪魔せぬようにとそっと星空を窓際から見上げるのだった。

続く

愚か者の戦争、その6～捻じ曲げられた真実～（後書き）

次回投稿は、８／７（日）１６：００です。

愚か者の戦争、その7～ラインの過去～

＊＊＊

「――なあ、――――よ」
「なんだよ、神妙な顔してさ」

ラインは夢を見ていた。昔、自分がまだ騎士として国に仕えていた頃の夢。自分が剣を振るうことに、何の躊躇いもなかった頃の、幸せな夢。

ラインは草原に立っていた。彼の国は草原が多く、優しい風が体に当たりいつも心地よかった。その中で馬を駆けるのは格別で、彼はよく気心の知れた仲間と遠乗りをしていたものだった。だがさらに格別に心地が良いのは、今目の前にいる人物と話している時だった。

「お前はもし私が――だったら、どうする？」
「え、なんだって？」

その人物の声は風に流され聞こえない。その人物は寂しそうに微笑むと、風のように姿を消した。いつも気丈で強気なその人物が始めて弱音を吐こうとしたその時、ラインは気がついていなかった。なぜこの時何も気が付かなかったのかと、ラインは今でも苛まされる。

そしてその半年後、彼はあれほど望み、焦れ、自分の人生を賭けると決めた騎士を辞める事となった。

＊＊＊

それから事態は慌ただしく動き始めた。数日後、国境沿いに集結させた軍をムスターが指揮してトラガスロンに問答無用で攻め入ったのだ。さらにトラガスロンに悪いことには、東からクライアが同時に攻め入って来たのだった。もちろんムスターが仕組んだことである。

主力が西でグルーザルドと戦闘中であり、完全に虚をつかれたトラガスロンは必死の抵抗も虚しく、１０日程度でその首都が陥落する事となった。トラガスロンの首都、リーンハルドがクルムス寄りの地形にあった事も災いしただろうが、戦闘の激しさにリーンハルドは三日三晩に渡って業火に晒されたという。

さらに占領地の分割をするためにクライアの指揮官である王太子と会見をしたムスターだが、その場でクライアの王太子の首を刎ね、その勢いでクライア軍の主力を壊滅に追い込んだ。挙句クライアにまで攻め入り、その領地の１／５を奪ってきたのだ。クライアは国境を奪われたせいで、首都を東に移さざるをえなくなってしまったのだった。結果だけを見れば、まさに破竹の進撃と言える。戦争のルールや倫理観はさておき、だが。

そして、同時にクルムス領内でも静かな動きが開始されていた。

「準備が整いました、レイファン様」

「いいでしょう、決行は予定通り明日とします」

「は。ではその通り皆に伝えます」

ラスティが一礼をして下がっていく。ムスターがいない隙をついて、レイファン達は手勢のみでの首都セイムリッドの奪回を企てていた。ラスティは元々が身分の高い人間ではないが、彼の気真面目すぎる性格が幸いするのか、彼は若い騎士達に非常に信頼されている人間だった。そのせいか彼の元には徐々に人間が集まっており、

今では５００近い騎士がレイファンの手勢として使えるようになっていた。
だがレイファンの表情は硬く、気は重い。彼女はよろめくようにして部屋に帰ると、戸をのろのろと開いた。

「ふう・・・」
「部屋間違えてるぞ、お前」
「え？」

レイファンは自分の部屋に帰ったつもりで、ラインの部屋に来ていたのだ。なぜそうなったのかはわからないが、それは無意識の行動だったのかもしれない。

「夜這いか？」
「なっ！　破廉恥な！！」
「その調子だ。その方がお前らしい」

レイファンは手元の何かを投げつけようとしたが、ラインが自分を励まそうとしてくれている事に気がつくと、その手を下ろした。あまり褒められた励まし方ではないかもしれないが。
ラインは剣や武具の手入れをしていた。その表情は真剣で、精悍な騎士そのものの顔だった。レイファンとていい加減気づいている。目の前のラインは、ただの傭兵ではないと。

「ライン・・・」
「ん？　まだ何かあるのか？」
「あなたは騎士だったのですか？」
「・・・昔な」

ラインは顔を上げずに答えた。普段なら曖昧にぼかす所だが、さ

すがに相手が公女ともなればさすがに嘘も付けない。なんだかんだで、ラインはそういう部分で真面目な性格だった。
だがそこまでは察する事もできない幼いレイファンは、素直な疑問を彼にぶつけた。

「なぜ騎士を辞めたのですか？」
「騎士であることに意義を見いだせなくなった」
「それはどういう・・・」
「俺が剣を捧げた対象はクズだった。信じたものは幻だった。それだけさ。だから、俺は以後誰のためにも剣を振るわないことにした」
「ではなぜ今回は私に協力してくれるのですか？」

レイファンの疑問は尤もである。ラインも考え込むように作業の手を止めた。窓際にいるダンススレイブも、ラインの方を見ている。

「・・・あまりにも青くさいガキが困っているからな。俺は正義の味方なんだよ」
「では私のために戦ってくれると？」
「そういう風に言うか？」

ラインが迷惑そうにレイファンを見たが、レイファンは真剣そのものだった。その表情に、思わず気圧されるライン。
その様子を見てダンススレイブが忍び笑いをこらえている。

「あのなぁ、誰がお前のために・・・」
「私は真面目に聞いています。なぜ私に手を貸してくれるのです？」
「それはだな・・・」

ラインが助けを求めるようにダンススレイブを見たが、元より彼女がラインに助け船を出すはずもない。むしろ面白がっているよう

な顔をして、ラインを眺めている。ラインも諦めたように視線をレイファンに戻すと、彼女の茶色の双眸がラインをまっすぐに捕えた。
そしてラインの瞳からも普段の軽薄な様子が消えて行く。そのままどのくらい見つめあったろうか。瞳を逸らそうとしないレイファンに、ラインもまた観念したように答え始めた。

「・・・昔な、俺は自分の女を死なせたことがある」
「それは恋人、ということでしょうか？」
「そうだな。あるいはそれ以上だったかもしれん」

ラインは天井を見上げた。流れるような茶色の髪と、引き締まった表情をした彼女が思い出される。

「俺は平民の出身だ。親はさる貴族の奉公人で、幼かった俺もまた当然のようにその家に務める事になった。その時、その家の令嬢だった、ちょっと年上のその女に出会った」
「・・・それで？」
「いや、令嬢と言うには程遠いな。その家は部門の家柄で、当主だった父親は非常に厳しかった。いつもその子はボロボロになるまで剣の稽古をさせられていてな。その傷の手当てをするのは俺の役目だったんだ」
「それがきっかけで愛し合うようになったのですか？」

レイファンが素直な疑問をぶつけたが、ラインは何かがおかしかったのか、少し吹き出した。その様子にレイファンがむっとする。

「なぜ笑うのです！？　私は真面目に・・・」
「わかってる、わかってるって！　だが『愛し合う』ってのはお前、傑作だぞ？」
「で、でも！」

なおも反論しかけるレイファンの頭をラインは撫でながら、話を続けた。

「俺も当時庶民ながらも騎士になりたくてな、合間を見つけては剣を振るっていたんだ。それで剣の稽古の方法についてその子に尋ねてみたんだ。普通なら畏れ多くて聞けもしなかったろうが、俺もガキでな。畏れ多いなんて言葉は知らなかったんだよ」

「今でも知らないと思うがな」

「お前は黙ってろ！」

ラインが茶々をいれたダンススレイブに酒瓶を放り、ダンススレイブはそれを受け取っておもむろに飲み始めた。

なおもラインは話しを続ける。

「それからかな。その子と俺は少しずつ話すようになり、剣の腕を磨き始めた。俺はその子の口利きで、特別に騎士団の世話役や剣の面倒を見てもらえるようになった。まだ俺が６歳の時だ」

「・・・」

「俺が１０歳で騎士見習いとして正式に入隊する頃、その子は士官候補生として軍に入って来た。まだ１５歳だったが、既に普通の騎士では及びもつかないほど強かったよ。俺はどういった経緯からか、その子が指揮する小隊に配属され、少しずつ任務に就くようになった。そこで今度は色々な戦術や用兵を学び、１３の時に小隊長、１５で一つの部隊を任されるようになった」

「それは異例の出世なのではないでしょうか？　クルムスにおいては早くても小隊指揮を任されるのは、士官候補生だとしても１８くらいからです。１３歳で、しかも平民出身でそれは異例中の異例ではないでしょうか？」

「だったみたいだな。だから結構大変だったよ、反発する人間を黙

らせるのは」

ラインは事もなげに言って見せたが、当然反発も多かった。だがラインは持ち前の機転をきかせ、時に柔軟に、時に強引にそれらの問題を解決した。それが彼の名声をより高め、彼の軍での地位を上げたのだ。そして、

「その頃からからかな、その子を女性として意識するようになったのは。ある日俺はダメ元で自分の気持ちを伝えたよ、振られると思ってな。だが答えはイエスだった。まさに天にも昇る心地ってやつだな。さらに、俺にはさらなる出世の話が舞い込んだ」

「どんな？」

「俺の国にはさる有名な騎士がいてな。辺境の土地を守るその騎士の元で鍛えられる事になったんだ。しかも運の良いことに、その子も同時に召集されていた。俺達は一も二もなくその話に飛び付いたよ。厳しい、実に厳しい訓練だった。俺はそこで徹底的に騎士としてのいろはを学んだ。矢のように2年の任期が終わり、俺達は首都に戻ることになったが俺は断った」

「なぜ？　その人と一緒に戻れるなら・・・」

「そうだな。今から考えれば確かに間違いだったんだが、当時の俺には一つの決意があった」

ラインが当時の自分を思い出す。その判断がやがて、全ての過ちの元になろうとはその時の彼は思いもしなかったのだ。

続く

愚か者の戦争、その7～ラインの過去～（後書き）

次回投稿は、８／８（月）１８：００です。

愚か者の戦争、その8～不安を抱いて～

ラインはなおも続ける。

「今ならわかる。惚れた女なら片時も傍から離してはいけないと思うんだが、当時の俺は焦っていた。その女は本国に帰ると千人長の地位が約束されていた。対して俺は出世無し。まあ平民出身だから当然といえば当然だった。だけどその頃にもなると、俺はその女との将来を真剣に考え始めていたんだ。

俺はその女にふさわしい男になるため、さらなる出世を望むべく辺境に残った。辺境なら戦いが尽きなかったからな。出世の機会も山のようにあった。そして思惑通り、俺は辺境でめきめきと出世をした。１８の頃には俺は千人長になっていたよ」

「それは素晴らしいことですね」

「なるほど、地で行く英雄譚だな」

ダンススレイブも素直に称賛した。ラインの方は全く嬉しそうではなかったが。

「その働きが本国でも認められてな。俺は正式に本国でも千人長へと格上げになった。やがては軍団長へ。そんな噂も周囲では囁かれるようになっていた。

だから有頂天になっていたんだ。俺は何にもわかっちゃあいなかった。自分の思いや気持ちで精一杯だった。結果、俺は全てを失ったよ。失うまで、何一つ気が付きはしなかったんだ。飛んだお笑い草さ！」

「ライン、一体貴方に何が・・・」

吐き捨てるように言い放ったラインの様子に、少しレイファンが怯えていた。ラインも言うだけ言ってその様子に気がついたのか、バツが悪そうに酒瓶をダンススレイブからひったくると部屋を無言で後にしたのだった。

残されたのはラインとレイファン。

「あ・・・」

「ふむ、そういうわけだったか」

「・・・心配です」

「ん？　大丈夫だ。あいつはああ見えて馬鹿ではないからな。大事な戦いの前に体調を崩すような真似はせんさ」

「いえ、そうではなく」

レイファンが胸の前で祈るように手を組んでいた。

「私はあの人の心が心配なのです。一見大雑把で何も気にしないように見えて、ガラス細工より脆い心。それを隠すためにああいった雑な態度をしている・・・でも心を開けない彼は、心を開かない代わりに誰といても決して安らぐ事はないのでしょう。それが心配で・・・」

「公女、貴女は優しいな。長らく生きた我からの助言だ、その気持ちは大切にするといい。きっと貴女は良い統治者になる」

「いえ、私はそんな事より」

「彼の心が欲しい、か？」

ダンススレイブの言葉に、レイファンははっと彼女を見上げる。そこにはいつもの皮肉屋のダンススレイブいなかった。真剣な瞳がレイファンを見下ろしていた。

「ラインに惚れたのか、公女ともあろう貴女が」

「・・・ええ、きっとそうです」
「やめておけ、あれはもうきっと誰にも心を許さない。奴はもう引き返せない泥沼に片足を突っ込んだ男だ。あんな奴に、これから輝かしい未来が待っているであろう貴女が付き合う必要はない」
「貴女は誰かに好きな人を諦めろと言われて、できるのですか！？」
「その言葉は私には不適切だ、公女」

強く反論したレイファンに、ダンススレイブが悲しそうな顔をした。

「私には人を好きになるという感情がわからない。元が元だからな。それに、私にはもはや人を憎むことはできても、愛することなど土台無理だよ。そういう扱いを今まで受けてこなかったからな。今ラインと共にいる事が奇跡なくらいだ」
「そう・・・ですか。では、私はこれからどうすればいいのでしょうか・・・」
「さあ？　その疑問も私に投げかけるのは不適切だよ、公女」

部屋を沈黙が包む。盛り場でもある建物の周囲の音は部屋にいても騒がしく、外の喧騒に不釣り合いなほど重い空気が2人の女性を包んでいた。

＊＊＊

ラインはまた夢を見ていた。

彼の原風景とも言える、騎士達の凱旋風景。白銀の甲冑に身を包んだ彼らが、一糸乱れず凄然と進み、馬上から民衆の歓声に応えている。
幼き日のラインは彼らの横を走り、ついに先頭の一際逞しい騎士

に追いついた。子どもだったラインの必死な歓声が騎士に届いたのか、騎士は面体を上げ、胸に手を当てた後、彼に向けて拳を突き出したのだ。

それは騎士達が戦地に赴く戦友に向ける所作だった。

子どもだったラインは思わず同じ動作を返す。すると騎士はにこやかに笑い、再び面体を上げると去って行った。

それが幼かったラインにはたまらなく恰好よく、彼はこの時騎士になる事を心に誓ったのだった。まさかその決意事態をいずれ後悔するとは、少年だったラインは疑いもしなかったのだ。

＊＊＊

「夢か・・・」

ラインはベッドから起き上がっていた。どうにもあのあとバツが悪く、ラインは適当に娼婦の部屋にしけこんでいた。

「・・・最近よく夢を見やがる。最悪の寝起きだな」

ラインの睡眠は元々浅いが、今回の様に夢ばかり見るのは珍しい。悪態をつきつつも、隣で寝ている名前もよく覚えていない娼婦を起こさないようにそっと部屋を後にすると、彼は裏の小川に足を運び、適当に顔と頭を水で流す。そのまま今度は飯場に行き、適当に食事を漁ると、自分の部屋に戻った。

「おかえり」

「ああ」

部屋では当然と言えば当然だが、ダンススレイブが起きて待って

いた。剣に眠りは必要ない。ラインがダンススレイブを傍に置く理由の一つに、睡眠中の守りを安心して任せられるという事があった。

そしてラインはダンススレイブを尻目に、支度を整え始めた。いつもの軽装ではなく小手とすね当てを付けた、簡易だが実践向けの装備へと。

そして彼がダンススレイブの方を振り返る時には、既に顔つきは戦士のそれへと変化していた。

「ダンススレイブ、剣に戻れ」

「了解した、マスター」

ダンススレイブにも、もはや茶化す様子は存在しない。それだけ今回の戦いが大きな意味持つ事も、ラインの真剣具合もわかっている。

彼女は言われるがままに剣の姿に戻ると、ラインは彼女を鍛冶屋にしつらえさせた鞘に収め、レイファンの部屋に向かう。

「公女、準備はよろしいでしょうか？」

「ええ、準備はできています」

「では失礼します」

ラインがレイファンの部屋の扉を開くと、窓の傍にある朝日の当たる椅子にレイファンは腰かけていた。彼女は髪を結い上げ、軽装ではあるが戦装束に身を纏っていた。その瞳は遠くを見つめ、ラインが入るとゆっくりと彼女は目線をラインに向けるのだった。

その雰囲気に、思わずラインは身を引き締めた。幼いながらも、彼女は十分な威厳と誇りに満ちていた。今までの彼女からは想像もできない、いや、一度だけラインは知っていた。自分の部下を庇うため、自ら身分を明かした時。彼女は確かに王族としての威厳に満ちていた。

だがラインが気圧されたのもつかの間。彼はレイファンの前に膝を折ると、正式の騎士の礼を取る。部屋の隅にはレイファンの着がえを手伝ったであろう娼婦が2人ほど控えていた。彼女達もまた普段の華美な服装ではなく、きちんとした女官風の恰好に身を包んでいた。娼館なりの、王侯貴族への精一杯の誠意の見せ方なのだろう。もちろんレイファンの戦所属を準備させたのも娼館の手配である。

「公女、お迎えに上がりました」

ラインが恭しく言葉を放つと、レイファンはゆっくりと答える。

「今日、戦いが始まるのですね」

「はい、ここからは時間との戦いになるでしょう。仮に王城を押さえても、遠征軍を倒すだけの戦力を集められなくては全てが水の泡。手筈は整っているとはいえ、ムスターの軍勢の動きはまさに疾風。現在もっとも早い報告で3日前にはクライアと再度の戦争状態に入ったとのことでしたが、今現在どうなっているかはわかりません」

「なるほど。この後の段取りは？」

レイファンが確認するようにラインに尋ねた。ラインはその問いに澱みなく答える。

「まず王城奪還後は、ラスティが信頼のできる地方軍の司令に直接連絡を取ります。既にいくらかは使者を送って、我々に味方する事を約束してくれています」

「数は？」

「およそ５０００。ですが今回の奪回戦には彼らの力は借りません。理由は以前話した通り・・・」

「私の不徳の致すところですね。申し訳ありません」

「いえ、その方がよいでしょう。軍を直接押さえれば、地方貴族達

もおいそれと発言できないはず。それに５０００あれば一瞬で負ける事はありません」

「本当にそうでしょうか？　各国は全く太刀打ちできなかったようですが・・・」

レイファンが不安そうに呟いた。無理もない。ムスターの最近の進撃ぶりはさすがに誰もが知っている。たかが５０００の兵で彼に向かうなど、無謀に近い。だがラインには作戦があった。

「公女、その点はご心配なく。彼らは戦い方を知らぬから負けたのです。ですが、今回は戦い方を知っている私がいます。彼らの弱点は確認済みです」

「本当ですか？」

「はい。まず先頭に立つヘカトンケイルという連中そのものが魔術に弱い。これはトラガスロンとの戦いに直接人を派遣して確認したことです。間違いないでしょう」

ラインはこのためにギルドから人を派遣して、わざわざ確かめさせたのだ。実際にこの事はトラガスロンもまた知ることとなったため、ムスターの軍はトラガスロンを攻め落としこそしたものの、ザムウェドとの戦いとのように圧倒的勝利とはいかなかった。つまり、かなりの犠牲を払ってでの勝利だったのである。だからこそムスターはクライアとは全面勝負に出ず、姑息な手段を用いたともラインは考えている。ムスターの軍にそこまでの余裕は今はないのだ。

さらにラインは続ける。

「もう一つ。ヘカトンケイルは非常に頭が弱い。決められた行動、例えば『視界の敵を倒す』『攻撃してきた敵を倒す』などはできますが、不意打ちなどには非常に弱い。囲んで戦えば並の人間よりも与しやすいでしょう」

「ですが、ムスターには普通の兵士も付き従っているでしょう？」
「彼らは恐怖で無理矢理従わされているだけです。士気は非常に低いと言わざるえない。私達の敵ではありません、公女」

ラインはわざと力強く言って見せた。士気の高い５００００の兵と、士気が低いとはいえ、３００００の兵士である。結果は戦ってみなければわからない。

それにラインには気がかりなことがもう一つ。今回ヘカトンケイルの弱点がばれたにもかかわらず、この進軍速度。これにはもう一つの要因があるとラインは情報を得ていた。それは謎の巨大生物。時に城壁の高さに近づくほどの巨大生物は、剣もろくにきかず、魔術でも致命傷にならないとか。ラインはこの情報をラスティにだけは話したものの、彼らのこの存在は伏せておこうと判断した。有効な対抗策が練れないからである。ならば余計な不安を皆に与えるよりも、彼らは話さない方がよいだろうと判断したのだ。もちろんそれが正しいかどうかは誰にもわからない。ただこれは隊長格など、１０名にも満たない人間しか知らないことである。レイファンにも知らせていないことだった。

今回の王城奪還戦でもその巨大生物が出てくる可能性は十分にある。その不安がラインの胸をよぎるが、その場合は、ラインが全て引き受けるつもりだった。これはラスティも知らないことである。ラスティはもしそうなった場合、一命に変えてもレイファンを守る覚悟でいるだけだろう。どのみちラスティにここで引くという選択肢はありえないのだ。

ラインがそのような決意をする中、レイファンが立ちあがる。

「なるほど、全ての準備はできているのですね」
「はい。後はレイファン様のお声で、全てが動きます」
「では参りましょうか」
「ではお手を、レイファン様」

ラインが手をレイファンに向けて差し出す。その手を取った時、レイファンの手が震えていることにラインは気がついた。

「公女」

「何も言わないでください、ライン」

「はい、それがお望みならば」

ラインはそのままレイファンを促して外に向かおうとするが、部屋を出る直前でレイファンが足を止めた。

「公女？」

「す、すみません」

ラインがレイファンの方を見れば、レイファンの足が震えていた。ラインはそっとレイファンを見下ろしたが、その瞳は戸惑いと恐怖に濁っている。

「わ、笑ってください・・・昨日の夜からずっとこの調子です。昨日は一睡もできなかった。これから戦いが始まる、私の号令一つで何人もの人間が死んでいく。その事を考えると恐ろしくて眠れなかった。私はまだ自分の民に、部下に何も報いてやれない。それだけの実績も実力もない。その私なんかの命令でこれから戦いが始まると思うと、怖くて怖くて・・・」

レイファンはその場にへたり込み、さめざめと泣きだした。我慢の限界を迎えたのだろうか、レイファンは立ち上がろうともしなかった。だがそのレイファンを叱責するでなく、慰める目でもなく、ただ優しい目でラインは見つめると、目線を彼女に揃えるように膝をついてレイファンに向かい合う。

「公女、３つほどよろしいでしょうか？」
「・・・何を？」
レイファンは軽く鼻をすすりながらラインを見返す。そんな彼女にラインはあくまで冷静に答えた。
続く

愚か者の戦争、その8～不安を抱いて～（後書き）

次回投稿は、８／９（火）１８：００です。

愚か者の戦争、その9～待ち受ける脅威～

「まず騎士としての意見です。私達は仕える主君を選べない。平民から仕官して騎士となる者もいますが、血の盟約による貴族出身の騎士が圧倒的に多いのが現実。彼らは生まれながらにして、自分の主君となるべき者に命を捧げることが義務付けられる」

「・・・」

「彼らにとって最悪なのは、自分の仕えるべき者がどれほど暗愚だとしても、そのために命を捧げなければならない事。だからこそムスターごとき、いえ、あえてそう呼ばせていただきますが。あれほどの愚物にあれだけの兵士が付き従う。ですが、我々は木石ではない。一人一人に意志があり、思いがあり、心がある。我々はいつも自分が仕えるに値する主君を求めている。

その中で。自分達一人一人の運命に思いを馳せてくれる主君のために命を捧げる事。これは何にもまさる騎士の名誉の一つ。その事をお忘れなきよう、公女。貴女の様な者のためにこそ、騎士は剣の捧げ甲斐がある」

その言葉でレイファンは泣きやんでいた。さらにラインは続ける。

「そしてこれは傭兵としての言葉。俺達は日和見主義者で、金が入ればどんな仕事でも請け負うものはいる。だが人間であることに変わりはない。同じ命を賭けるなら、意義ある物のために賭けたい。それはどんな傭兵でも同じだと思う。そして最後に」

ラインは一息にまくしたてる。

「いいか、一回しか言わねぇ。俺は女を見捨てる事は決してない。それだけは俺の自慢だ。だからお前の事も守ってやる。俺の命にか

けてもな」

その言葉にレイファンは顔を赤くすると、反射的にラインに背を向けた。それは今の自分の心境を悟られたくなかったからであるが、それにしてもラインの言葉に、こんな時で在りながらレイファンは思わず顔が綻ぶのを止められなかった。自分の好きな男が、自分のために命を捧げると言ってくれた。それが男女の誓いでなくとも、レイファンにとってこれほど嬉しい事はなかった。さきほどまで心中にうずまく不安が嘘のように、レイファンの心は光に満たされていた。

そして気を取り直したレイファンが顔を上げた時には、その表情には微塵も不安はなく、再び威厳に満ちた公女としての彼女がそこにいた。

「わかりました、ラインよ。私にいかほどの事ができるかはわかりませんが、せめて貴方のその心意気に報いる事ができる者であるように努めましょう」

「それで十分です、公女」

ラインもまたレイファンに応えるように居住いを正した。そうして二人は皆の待つ場所へと向かう。

いくつかの裏口を通り、彼らが着いたのはこの周囲では一際大きい宿屋の酒場である。ここは大きいだけで普段は汚いし、こういった裏路地の一画には違いない。だが今日だけは、不思議なことに綺麗に片付けられていた。もちろん、娼館の主である老人が手をまわしたのだ。

そこにはラスティをはじめとしたレイファンのためには命を惜しまぬ騎士達１０数名と、他にも戦う準備をした者が複数名いた。彼らは歴戦の猛者を思わせるような風貌だったが、お世辞にも柄が良

いとは言えず、レイファンの騎士たちとも距離を置いて集まっていた。

そんな場所に現れたレイファンとラインに、彼らの目が一斉に向けられる。

「皆さん、本日はお役目ご苦労様です」

「レイファン様、もったいないお言葉にございます」

「気にすんなよ、公女様。こちとらラインの頼みで集まったんだ。もらえるもんさえもらえりゃ、文句はねぇ」

かしこまるラスティに対し、大剣によっかかるようにして立つ傭兵が横柄に発言する。その彼を騎士達が一斉に睨む。

「貴様！　無礼であろう！」

「礼儀なんざ知るかよ、こちとら傭兵だぜ？　それとも力づくで従わせてみるかい？」

「何ィ！？」

小馬鹿にしたような男の態度に騎士達が色めき立つ中、ラスティとラインがそれぞれ止めに入る。

「やめんか」

「こっちもだ、ヴリル」

「しゃあねぇな」

ラインの言葉に男は素直に従ったが、その名前を聞いて今度は騎士達がどよめいた。

「ヴリル？　ヴリルだと？」

「お？　騎士サマが俺の名前を知ってんのかい？」

「もちろんだ」

ラスティが答える。

「魔獣退治で名を馳せた戦士ヴリル。リュタカの山で一人、怪鳥を仕留めた武勇伝は私も聞いている。確かギルドでのランクはAだったはずだ」

「よせよ、照れるぜ。それにやったのは俺じゃねぇンだ」

ヴリルが多少気まり悪いのを強引に笑飛ばすように振舞う。

「どういうことだ？」

「実はあの時、このラインと一緒だったのさ」

ヴリルはラインの肩をぽんと叩く。ラインは面倒臭そうにしていたが。

「俺は情けねえことにあの時怪鳥の一撃を受けて気絶してたのさ。それで次に目が覚めると、もう怪鳥は息絶えてた。目の前には俺を手当てするこいつがいたよ。その時こいつに言われたのさ。『こいつは一つ貸しにしとくぜ。俺が払えって言ったら払ってもらうぞ？』ってな」

ヴリルは今度こそ豪快に笑い飛ばした。相変わらずラインの方は無表情であったが、これは普段のラインを知る者にとっては非常に珍しい光景だった。

「そんなこともあったか？　なんか貸したのは覚えてんだけどな」

「またまた。そんなこと言ってよ、ここにいる奴ら全員Bランク以上の傭兵だぜ？　よくもこれだけの奴らを集めたもんだ」

「ただの顔馴染みだよ」

ラインは面倒くさそうにそう言ったのだが、彼が連れてきたのは確かに凄腕の傭兵達１０数名だった。しかもヘカトンケイルの対策も考え、魔術師が半数を占めている。さらに彼が雇い入れている人数はこれだけではなかった。他の集合場所に、およそ３０名近くの魔術士を隠しているのだ。

こんなことができるのは傭兵の世界広しと言えど、ラインくらいのものであろう。彼がこなしてきた依頼の種類の豊富さのおかげであり、彼に関する噂のせいでもある。

『ラインと組むと依頼が必ず成功する』

そのような噂を持つ彼は、ランクの上下にかかわらず重宝された。結果として、彼は非常に顔の広い傭兵になったのである。

そして、

「最終的な作戦の確認をする」

ラスティが地図を広げた。ここにいるのは各隊を率いる隊長格の面々なのである。さしもの傭兵達も表情が引き締まり、彼らは最後の打ち合わせに入るのだった。

＊＊＊

一方で、こちらはブロッサム・ガーデン。中では不吉な影がいくつか蠢いていた。

「報告が来たよ。彼らはじきにやって来るらしい」

「で、どうしますか？」

「もう正直な話、クルムスはどうでもいいんだけどね～」

アノーマリーがケタケタと笑う。

「ここの役目は終了だ。ドゥームの時間稼ぎも結局そこまで功を成さなかったし、そうなるとクルムスがこのまま滅ぶのはまずい」

「グルーザルドが中原に進出するのがまずいと？」

「ああ、ドライアンはただの獣人にしては頭がキレる。それに彼にはあの五賢者の一人が付いているからね。まだこちらの目的と、これから予定している動きを勘づかれたくはないんだよ」

アノーマリーは小石を手の中で弄びながら、サイレンスに話しかける。アノーマリーはその小石の一つをサイレンスの足元に投げた。

「では大人しく明け渡しますか？」

「それはうまくない。それに気になる奴がいる」

「ラインとかいう傭兵の事ですか？」

「ああ、アイツは気になるね。これからの情勢に色々関わるかもしれない男だ。ここで見定めておくのも悪くない。何より・・・」

「何より？」

「誰も死なない戦いなんて、面白くないだろう？」

アノーマリーが手の小石でサイレンスの足元の石を弾いた。そこにさらに現れる人影。

「そういう話でしたら、私も参加してもいいかしら？」

「・・・カラミティか？」

「そうよ」

そこには美しい女が立っていた。豊かな茶色の髪をなびかせ、艶

やかな唇からは天使のような声が漏れる。

「なるほど、噂通りの美人だね」

「あら、これは借り物でしてよ？　本来の私はこんなに醜くはないわ」

「ふ～ん。まあいいけど？　で、何しに来たの？」

「私の方は順調すぎるほど順調で、最近退屈なの。それにここの情勢は私の現在の仕事にも関わるわ。私にも手を、いえ、虫を出させていただきましょう」

　すると女の着ているドレスの裾から、キチキチと歯を鳴らす虫が山のように湧いて出た。お世辞にも可愛いとはいえないその醜悪な形の虫を、愛しそうに頬ずりするカラミティ。

「彼らには踊ってもらいましょう。全ては私達の掌の上という事を、教えなければいけないわ・・・ふふふ」

「なるほど。その意見には賛成ですね」

「ふ～ん、じゃあ仕込みは任せよう。こっちはこっちでやることがあるからね。東のクライアとの戦線でまだ投下してみたいバーサーカーがいるんだ。ここにいるヘカトンケイルは全部置いていくよ？」

「あら、随分と気前がいいのね」

「そりゃそうさ。もう新型が完成したから、旧式のヘカトンケイルは必要ない。もはやただの消耗品さ」

　そう言うと、アノーマリーは姿を消した。本当に興味を失くしたのだろう。そしていつの間にかサイレンスも姿が見えない。誰もいない、もはや蛆の闊歩する部屋と化した王室に残されたのは、カラミティのみ。

「二人ともせっかちさんねぇ、これからが面白いのに。まあいいわ。

多少物足りないけど、来るべきメインディッシュの前の前菜、いえ、おつまみくらいにはなるかしら？　ふふふ・・・早く来なさい坊や達。この私が遊んであげる」

ブロッサムガーデンの美しい庭園を虫達食い荒らす中、カラミティはその様子を見下ろしながら一人嗤いながら足元の虫達と戯れるのだった。

続く

愚か者の戦争、その9～待ち受ける脅威～（後書き）

次回投稿は、８／１０（水）１８：００です。

愚か者の戦争、その１０～出陣前～

「作戦を確認する」

ラスティが城の見取り図を卓の上に広げ、全員がそれを見下ろす。

「私達は東側の門から城内に侵入する」

「どうやって？　この城は確かに戦争向きじゃないが、だからといってたかが５００人で攻め落とせるほど甘くもないだろ？」

「古来より城攻めには防衛の５倍の人数が必要とかいうよな」

傭兵達が口々に叫ぶのをラスティが制する。

「そのあたりは心配いらない。既に東門の守備隊の隊長格と話しを付けてある。だから合図一つで中の連中が呼応して、門が開くように手伝ってくれる」

「そんなに上手くいくかね」

傭兵の一人が呟くのを、ラスティはあえて無視した。さらにラスティは続ける。

「私の信頼できる部下も何人か潜り込んでいる。それは心配いらない。それに王城でも厭戦気分は高まっている。ムスターのために我々と戦おうとする者など、ほとんどいないさ」

「そこは上手くいくとして、次は？　誰がムスター不在の王城を守る指揮官なんだ？」

「オードン候爵のはずなんだが、彼は元々戦争向きの性格でない。彼を倒す必要はないし、縛りあげれば終わるだろう」

「そいつが指揮官じゃないかもしれんがな」

「どういうことだ？」

ラインの発言に今度は騎士達の方から声があがる。

「いや、言い方が悪いか。指揮官はそのオードンとかいう奴でも、ヘカトンケイルがそいつの言う事を聞くかどうかは別問題だと思ってな」

「根拠は？」

「奴らの戦い方だ」

ラインは冷静に発言する。

「人を人とも思わん戦い方、間違いなくまともじゃない。そんな奴らが指揮官の言うことに素直に従うかって問題さ」

「馬鹿な。では何のために戦っている？　傭兵は報酬のために戦うものだろう？」

「普通はな・・・」

ラインはそれ以上の言葉を発しなかった。ヘカトンケイルが人間ではないとは誰にも伝えていないのだ。伝えてどうなるものでもないし、やることに変わりはない。下手な事を伝えて、皆が及び腰になるのだけは避けたかったのだ。

またラインも、先ほどの騎士の言葉はずっと考えているのだ。

「（何のために、か・・・それはずっと思っているんだがな）」

「どうした？」

「いや、なんでもない。続けてくれ」

ラインはかぶりを振って話しを促した。それを見てラスティが次々と押さえるべき要所を説明していく。武器庫、食料庫、宝物庫、

兵士の詰め所。ラインはそれらを耳では聞きつつも、頭ではずっと先ほどの疑問を考えていた。既に作戦はラスティと何度も練ったので、全て頭の中に入っているのである。

それにしてもラインはラスティの説明に感心していた。話がわかりやすいし、ここまで人をまとめる能力にしても中々素晴らしい。彼は武人としてはそこそこ程度だとラインは思っているが、文官としてはこれから力を発揮する種類の人間だとラインは思い始めていた。現に傭兵達もいつの間にかラスティの話を真剣に聞いている。これは自分には無い才能だとラインは素直に認めていた。ラスティがこういう人物でなければ、今回もここまで上手く段取りはできなかったであろう。

「以上だ。何か質問はあるだろうか？」

ラスティの言葉に、誰も意義を唱えなかった。それを見て、ラスティはレイファンを促す。

「公女、出陣前にお言葉を賜りとうございます」

「わかりました」

レイファンが促されて全員から見える位置に立つ。彼女はゆっくりと全員を見回すと、声を発する。もはや先ほどラインの前でべそをかいた少女はどこにもない。

「ここに集まった皆さんに、まずはお礼の言葉を」

レイファンの言葉は高らかに澄み渡る。

「私はレイファン＝クルムス＝ランカスター。ご存知の通り、このクルムス公国の第一公女です。今回は私の戦いに力を貸して下さっ

てありがとうございます。ですが、今回の戦いは正直な所私が望むところのものではありません」

レイファンが放つ言葉に、一同が少しざわつく。それをレイファンはまるで慣れているかのように片手で制した。

「静粛に、まだ話は終わっていません。今回の戦いの最終的な標的は我が兄、ムスターです。彼は残された唯一の肉親であり、いかほど愚鈍といえど私がこれからやろうとしていることは兄を討ち、実権を奪回することです。そこにいかほどの正義があるとは私には判じかねます。

ですが私はやらなければならない。ムスターに任せておけば、確実にこの国は滅ぶでしょう。彼は父王を無視し無謀な戦争を繰り返し、いたずらに国を疲弊させる。いかに我が兄といえど、このような暴挙を見過ごせません。私は国と、そこに住む民のために今回の戦いを決断しました」

「おい、ライン。レイファンに父王の死は・・・」

「ああ、伝えてない」

ひそひそ声で話しかけるダンススレイブに、ラインがやはり小さな声で答える。

「なぜだ?」

「お前は言えるのか? 何事にも心の準備は必要だ。レイファンには病気が重く、もはや王としての任務は勤まらないだろうと告げてある。だからレイファンはもう自分が指導者になる覚悟はできているが、まだ肉親の死を受け入れる覚悟はできていない。この二つが同時に振りかかれば、あの子はきっと潰れるだろう。なら、まず一つ決断させるのが情ってもんじゃないか?」

「・・・たまにはその心遣いを我にも向けて欲しいがな」

「はっ、冗談抜かせ」

そんなやりとりを二人が誰にも聞こえぬようにかわすうち、どこからともなく叫ぶ者がいる。

「お話の最中悪いが公女様。あんたの発言、矛盾しているぜ」

傭兵の一人がレイファンの話を遮った。皆がそちらを一斉に向く。だが今度は別の傭兵が話す。

「そうだな、確かに矛盾している」

「どのような点が、でしょうか？」

「民のためにと言いながら、あんた方が戦争で手足として使う兵士はほとんどが民衆だ。戦争をすれば多くの兵士が死ぬ。それはどうする？」

「ほかにもあるな。確かに今回の事態を放っておけば、明らかに戦争をするより多くの人間が苦しむ事は俺達でもわかる。だけどな、もし人数勘定だけで今回の戦いを起こそうってんのなら、いかにラインの頼みといえど俺達は降りるぜ？」

「おい、お前ら？」

ラインが思わず傭兵達に喰ってかかろうとするのを、またしてもレイファンが制した。

「よいのです、ライン」

「だけどよ」

「兄は、私がこの手で首を討ちます」

レイファンのその言葉に、ラインを含めたその場の全員が息を飲んだ。

「公女、それは！」
「構いません。この戦いを決意した時より、そのつもりでしたから」
レイファンは威厳に満ちた声ではっきりと言い放った。その姿には、一見迷いは見受けられなかった。
「私に戦う力はありません。ですが、皆さんだけの手を汚させるつもりもありません。だから私は自分の手で兄を討ちます。皆さんが手にかける者達の命の責も私が負いましょう。それが王族たる者の務め。
そして私が皆さんに頼めることは一つだけ。皆さん、生きて帰ってきてください。それだけが、戦う力を直接持たぬ私ができる願いです」
そう言い終えると、レイファンは全員を再び見回した。もはや、誰もレイファンに喰ってかかる者はいなかった。それどころか、彼女を見る目に尊敬の眼差しを向ける者すらいる。騎士達の中には、自然と平伏する者までいたのだった。
その事を確認すると、レイファンは最後の声を発する。
「では参りましょう。いざ、戦いへ！」
続く

愚か者の戦争、その１０～出陣前～（後書き）

次回投稿は８／１１（木）１８：００です。

愚か者の戦争、その１１～開戦～

＊＊＊

「大したもんだな、あの嬢ちゃん」
「そうだな」

ラインとヴリルが話している。既に彼らは王城に向けて、早朝の霧がやや立ちこめるセイムリッドの街並みを進軍していた。早朝であるからもちろん人通りが少ないのは当たり前なのだが、それにしても町には人っ子一人いなかった。それはもちろん、町の人間達は今日が戦いの日だと知っているからである。

それだけ多くの者が知る事実となっても、彼らを遮る者達がいないのはなぜか。それだけムスターから人心が離れているせいもあるが、予めそうなるように情報操作をラインが行っておいたのだ。民衆を敵に回して、決して反乱は成功しない。ラインはそういった事をよく知っている。こういった根回しにはさすがのラスティも気が回らないとラインは判断したのである。元より貴族にはそう言った発想自体が難しい。最悪反乱が失敗した時の逃走経路も確保してあるのだ。

その中を、具足の音を鳴らしながら静かに進軍するレイファン達。レイファンだけは馬に乗り、その手綱は騎士の一人が握っている。ラインとヴリルをはじめとする傭兵達は、騎士達の後に続くように進軍する。

「あれは良い統治者になりそうだなぁ」
「そうだな」
「ああいうのに仕えたかったよ、俺も」

「今からでも遅くはないだろう、ヴリル」
「よせよ。もう気ままな傭兵暮らしが染みついちまって、今さら宮仕えなんぞ無理さ」

ヴリルが冗談交じりに、だが少し残念そうに言った。そしてラインを彼にしては真面目な目で見る。

「でもよぉ、お前はどうなんだ？」
「何が」
「誤魔化すなよ。ずっと一緒にあの公女様といたんだろ？　粉くらいかけてねぇのか」

ヴリルの言葉に、ラインが彼を睨みつける。

「下衆の勘ぐりだな」
「そう言うなって。真面目な話、こいつはお前にとってチャンスだろう？　ほんの１００年ほど前までは、一介の傭兵から国を興すような話もありえた。だが大きな戦いも終わり、各領地はほとんどが色々な国の切り取るところとなりそんな事は無理な世の中になっちまった。住みやすい世の中にはなったが、出世の機会は減ったよなぁ。

だがこいつは本物のチャンスだ。あの公女様はまだ幼く、人材も周りには少ない。公女さえ嫌がらなければ、傭兵でも彼女の側近に上り詰めることができるだろう。うまくすれば王になんて話も・・・」
「やめろ」

ラインの目に怒りの色が浮かんだので、おもわずヴリルも口を止めたが、今度は真面目な話をした。

「貴族なんていいもんじゃねぇ。俺はそんなものに興味が無い」
「だがよ。本当に真面目な話、お前は傭兵に向かないよ、ライン」
「んだと？」
「いかにぶっきらぼうに振舞っても、お前は正義感が強すぎる。俺達傭兵は、自分のためなら家族や恋人も捨てるような判断ができる奴じゃなきゃ勤まらん。だから俺は、お前に出世の下心があると思ってここに来た。だが、お前はまるで興味が無いと言う。それはそれで大問題だぞ？　お前が騎士ならいい。だが傭兵としては致命的だ。その考えは、いつかお前の命を縮める」
「・・・忠告だけありがたくもらっておくよ」

ラインはそれきりヴリルと話さなかった。ヴリルにしてみたら彼なりの親切だったのだが、ラインが聞きいれるつもりがないとわかると、彼もまた何も言わなかった。
そうして多少のやりとりをはらみつつも進軍は続いたのだが、やがて彼らの人数が徐々に増えていく。それはラスティやラインが集めた人員が、各々別の場所に集合していたせいであり、一か所に人数を固めるほどの場所も少なければ、集めたことで一網打尽にされるのを防ぐためだった。
各所では伝令が行き交い、次々と部隊が合流していた。そして、ブロッサム・ガーデン東門に到着するころには、その人数は傭兵を含めて６００人近くになっていたのだ。
その先頭にはラスティがいる。

「ラスティ様、集合完了しました」
「手筈通りだ。笛矢を射かけろ」
「はっ！」

兵士の一人が音の出る矢を空に向けて射かける。高い音の出る矢は、門を開けろという合図である。その様子を見守るラスティの傍

に、ラインが歩み寄る。

「ここまでは順調だな」
「ああ、だが大切なのはこれからだろう」
「ここかららどうする？」
「打ち合わせ通りにいこう。１０人を一組とし、その中にヘカトンケイル対策を考慮して魔術士を一人配置。魔術士のいない組はヘカトンケイルの相手をしないこと」
「そんなに上手くいけばいいけどな」
「だが現状ではそれしかあるまい」

そんな話をする中、門の動きは何も無かった。声一つ上がらない。

「妙だな」
「ああ。反乱が成功するにしろ失敗するにしろ、静か過ぎる」
「・・・ちなみにここを強行突破する事になると、王城の中にはどのくらいの兵士がいるんだ？」
「以前は常駐の兵士が２０００だったが・・・・・町の警備を合わせれば５０００の兵士が常にセイムリッドにはいる。周辺の砦を合わせればさらにいるがな」
「２０００でもきついな」

だがラインがそう言った瞬間、ギギギと重苦しい音を立てて東門が開いたのだった。だがそこからは・・・

「おいおい、どういうことだよ。予定と違うぞ？」
「私が知るか。問題なのはどうするかだ」
「どうするかって、やるしかねぇだろう」

東門から出てきたのは、クルムス王城に仕えている兵士達だった。

もちろん完全武装であり。明らかな敵対の意志を示している。
だがその動きはおかしく、隊列を組むわけでもなくのろのろとこちらに歩いてくるだけだった。

「・・・これはどうなっている、ライン？」
「俺に聞くな。だがやるだろう？」
「もちろんだ。総員、戦闘準備！」

ラスティの一声に、ざわめいていた者達も一斉に戦闘準備を整える。

「弓隊、前へ！」

その一声で弓を装備した兵士達が一斉に前に出る。矢を限界まで引き絞り、やや空に向けて構える。

「撃て！」

同時に１００本近い矢が空に放物線を描いた。矢はかつて味方であった者達の体を次々と射抜く。そして何人かが倒れた。
だが兵士達は全身を止めない。歓声を上げるわけでも、悲鳴を上げるわけでもない。その様子に不気味さを覚えるライン達。そして兵士の不安を拭うように、ラスティが声を張り上げる。

「第二射、撃て！」

再び矢が降り注ぐ。だがクルムスの兵士達は足を止める気配が無い。その様子を見て弓矢は効果が薄いと判断したか、ラスティが次の指令を出す。

「よし、突っ込むぞ！」
「しょうがないな！」

その一声でレイファンと命を共にする者達は、ブロッサム・ガーデンに向けて突っ込んで行った。その様子を高台から見守る者が一人。

「あらあら、思ったより多いわね～」

その声の主はカラミティであった。彼女は高台のへりに腰掛け、下で行われる戦いの様子を見ていた。戦いは圧倒的にレイファン達に優勢である。

「まっ、しょうがないわね。馴染ませる時間がなかったし、さしもの私もこれだけ大勢となるとねぇ。せいぜい低級なグールみたいな動きが精一杯かしら？　まあいいんだけどね、それはどうでも。そ・れ・よ・り・も」

カラミティは楽しそうに足を中にふらふらとさせる。もちろん足元には何も無く、落ちれば即死の高さだ。

「戦いの喧騒も久しぶりね。楽しいわぁ・・・私も少しばかりつまみ食いしちゃおうかしら？　でもお師匠様の言い付けに背くかしら？　・・・まあ、ちょっとくらいならいいわよね？」

カラミティはそうして一人舌舐めずりをすると、その身を躊躇い無く宙に踊らせるのだった。

続く

愚か者の戦争、その１１～開戦～（後書き）

次回投稿は、８／１２（金）１８：００です。

愚か者の戦争、その１２～惨劇をもたらす美女～

＊＊＊

「武器庫を押さえろ！」
「こちらは占拠した！」
「南からさらに１００名ほどが接近！」
「二個中隊を回せ！」

城内は戦いの喧騒に包まれていた。だがそれは本来のものとは程遠い。
戦いはほぼ一方的だった。レイファン達の軍勢も最初こそ意気込んだものの、敵の手ごたえがあまりにも無い事を悟ると、今度は徐々にその気勢もそがれていった。

「こりゃどうなってんだ？」

ヴリルの疑問も尤もである。敵にはやる気、いや精気が感じられなかったのだ。

「まるで死霊の軍団とでも戦っているみてぇだな」
「・・・だな」

だが相槌を打ったラインは、別の事を考えていた。それに嫌な予感がぬぐえない。

「（何か、いる。ここにはとんでもない奴が）」

ラインの本能が警告を告げていた。数多の戦場をくぐった彼の直感が、ここにはとんでもない敵がいる事を教えてくる。

「（以前アルフィリースと出会った遺跡の化け物より・・・もっとやばい。いったいどんな奴が？）」

「ライン、アレを見ろ」

傍にいたヴリルが指さしたのは、戦場の中を悠然と歩いてくるドレスの女性。決して華美ではないが、それなり以上の身分を示す女の装飾。そしてなにより女は美しかった。

そんな女が無防備で戦場を歩いてくる様を、周囲の兵士達まで呆気にとられて見つめてしまった。その女が、近くにいた兵士の前でドレスの裾をつまんで丁寧にお辞儀をする。

「こんにちは」

「・・・婦人、ここは戦場だ。下がるがよろしかろう」

兵士は真面目な男なのだろう。少し女に見惚れつつも、戦場でありながら丁寧に対応した。そんな男にしなだれかかる女。

「あら、素敵な男（ひと）。こんなに丁寧に対応されると・・・」

「こ、こら！　何をする？」

「私、困りますの。だって、あまりに素敵すぎて」

女が指でつつ、と男の胸をなぞる。

「殺しちゃいたくなるから」

その瞬間、男の胸には大きな穴が開いていた。その瞬間、ラインは反射的に頭をかがめていた。すると、ラインの後ろで兵士の頭が

吹き飛んだのだ。兵士の胸を抉って飛んで来た物体が、後ろの兵士の頭を吹き飛ばしたのだ。ラインだからこそかわせたのだが、結果として、それはまずかった。

「あら？　あらあら。私の攻撃を見切れる人がいるのかしら？」

なぜならば、ラインは女に興味を持たれてしまったから。

「素敵だわ。普通の人間は、自分が何をされたかもわからずにその生を終えるのに。どうやら格の違う剣士の様ね、貴方」

女が楽しそうに笑う。

「いけないわ、久しぶりの戦いすぎて楽しくなってきちゃった。もう少し楽しんでもいいかしら、私」

「ライン、来るぞ！」

「！？」

傍にいたヴリルの声を聞くまでもなく、ラインの全身が警鐘を鳴らしていた。この城に来てからの緊張感の原因はこいつだ、この女だと。

そしてその事に気がついた瞬間には、女の顔が目の前にあった。

「さあ、私を愉しませて。坊や」

女の掌がラインに向けられる。だがラインもさるもの。女の掌から打ち出された何かを、剣で横に弾き飛ばしたのだ。弾かれた何かは勢い余って庭園のアーチを壊して飛んでいった。その様子を見て女が実に楽しそうに微笑んだ。

「すごい、すごいわ！　かわせる距離じゃないし、受けても剣ごと抉るはずなのに！　どちらも無理と悟るや、あの速度を横から薙いで弾くなんて！　ここ１００年辺りではピカイチの剣士よ、貴方！」
「そいつはどう、もっ！」

ラインが横払いをしたが既に女は飛びのいていた。だが、すぐさまヴリルが追撃に入る。

「逃がすか！」
「あらあら、女は捕まえようとすると逃げるのよ？」
「やめろ、ヴリル！」

ラインは嫌な予感を感じて、ヴリルを止めた。だが自分の腕に覚えのあるヴリルは、ラインと同じように女の懐に飛び込もうとする。差し出された女の腕が、先ほどと逆な事にも気が付かないで。

「『直線にしか飛ばないならかわせる』。そう思ったでしょう？」
「？」

ヴリルが恐怖を抱いた時にはもう全てが遅かった。ヴリルが最後に聞いたのは、ラインが何かを叫ぶ言葉。そして地べたに転げた彼の眼が見たのは、一瞬で穴だらけにされた自分の体だった。

ヴリルの体が一瞬で穴だらけにされた瞬間、ラインは弾けるように前に出た。知己の死を見て激昂したからではない。長期戦になればなるほど不利だと悟ったからである。

はたして、ラインの勘は当たっていた。女はヴリルを手強しと見て、多少の隙が出来るのを覚悟で一瞬で葬ったのだ。その隙をラインが突く形になる。手加減なしのラインの疾風の様な剣撃が女を追い詰めるが、女は体勢を崩しながらもひらひらとかわし続け、どうしても決め手がない。こうなると、先に息を切らせた方が負けにな

る。

「（根競べだ！）」

「『根競べ』。そう思ったでしょう？」

「！？」

その言葉の直後、女が何かを呟くと地面から槍と化した木の枝がラインに迫る。不可避のタイミングと思われ、周囲も女も串刺しになったラインの姿を想像した瞬間、彼をその場の全員が一瞬見失ったのだ。

「はっ！？」

「甘い！」

一瞬で懐に飛び込んだラインが切り上げる剣を、ありえない反応速度で躱す女。だがそれでも完全にかわしきれるものではなく、女の腹は下から斜めに切り上げられた。女の白い肌に鮮血が飛び散る。そして女は優雅なドレス姿には似つかわしくないほどの速度と、あたかもベルベトエイプの様な身のこなしで飛びずさった。

その一瞬の攻防に思わず周囲からは歓声が漏れ、女は初めて余裕のない真剣な表情でラインを見た。

「なるほど、本物の強者ね。さっきまでは速度を制限していたとは」

「そういうことだ」

対して余裕があるように答えたラインだが、腹の中は先ほどの一撃で首を刎ねることができなかった事を後悔していた。このレベルの相手に、二度同じやり方は通用すまい。

そして女が意味深に微笑む。

「確かに１００年ぶりの獲物ね、あるいはもっとかしら？　もちろん、『人間にしては』の話だけど」
「何を訳のわからんことを」
「ふふ、感慨深くもなるわよ。だって、多少つまみ食いしたら消えるつもりだったのに、私に火が付いてしまったのだから」

女が足元の死体となった兵士が持っていた剣を、蹴りあげる。剣は宙で何回転かすると、女の差し出された手にぴたりと収まった。

「実に惜しい、惜しいわぁ。これほどの剣士を殺してしまうのは。でもどう料理しようかしら？　手から？　足から？　それともアソコからイっちゃう？」
「その汚い口を閉じろ、クソアマ」
「あらあら、自分は傭兵のくせして。口の汚さは同じくらいでしょ？」
「そうじゃねぇ。口を閉じるのは別の理由だ」
「？」

女が意表を突かれたとばかりに首をひねる。

「あら？　それはどういう・・・」
「さっき近づいて分かったんだが、口が臭ぇんだよ、お前。胸糞悪くて吐きそうだ」

ラインがとびきりの悪態と共に地面に唾を吐いたので、周囲の空気も凍りついた。この状況で、ラインはなおかつ相手を挑発したのだ。女の顔から、すっと引き潮の様に笑いが消える。

「・・・決めたわ。お前は生きたまま虫に喰わせてやる」
「はんっ、その程度がお前の最悪の発想か？　だとしたら貧相な思

考だな、そんな事で俺がビビると思ってんのか！」
「生きたままゆっくりと虫に喰われてみるといいわ。どんな屈強な生物でも悲鳴を上げて、糞尿を垂れ流しながら許しを乞うから」
女が今度は不吉な笑いで口の端を釣り上げる。その不吉さにラインはまたしても背筋に冷たいものを感じながらも、剣を女に向けるのだった
続く

愚か者の戦争、その１２～惨劇をもたらす美女～（後書き）

次回投稿は、８／１３（土）１８：００です。

愚か者の戦争、その１３～ラインの実力～

ラインと女の戦いは激烈を極めた。周囲で行われていた戦いは既に終息していたが、だれしもがこの戦いから目を離せずにいた。

女――カラミティが直接虫を使って操っていた兵士達は既に倒れており、彼女が操りきれなかった兵士が他の守備地域から集まって来ていたが、彼らもまたこの二人の戦いを見るや否や、戦う意識はどこかへと飛んでしまっていたのだった。それほど、この二人の戦いは戦場でも滅多にお目にかかれないほど素晴らしいものだった。

掌から何かを打ち出すカラミティに対し、ラインが挑んだのは接近戦。それも、カラミティが手に取った剣から手を離す暇もない程、手数の多い攻撃だった。どんな体勢からでも切れ目なく攻撃できるラインの体捌きに、カラミティも防戦一方である。それでも剣を使ってラインの斬撃を防御しているのは大したものだと言わなければならないだろう。

「調子に・・・乗るな！」

「くっ」

カラミティが強引に剣を切り返し、今度はラインが防戦に回る。気分を良くしたカラミティはここぞとばかりにたたみかけようとするが、幾度か打ち込む中、違和感に気がつく。

「（この男・・・？）」

「あれは・・・」

ラインが防戦をする様を見て、ラスティが真っ先に気がついた。ラインの防御姿勢の剣捌きに見覚えがあったのだ。

ラインは攻撃動作以上に、防御に無駄が少なかった。最小の動きで確実に相手の攻撃を捌く技術。これは一日中戦闘を続けることもあるラインが所属した騎士団特有の剣技であり、戦場での体力回復の方法でもあった。と、同時に攻め込ませて相手の体力を削る技術でもある。

ラインが剣を正眼に構え、剣を左右に小さく振るだけでカラミティの剣はたやすくラインの体から逸れて行った。実際にはそうたやすくもないのだが、周囲には少なくともそう見えたのだ。一見攻められているように見えるラインに全く剣がかすりもしないことに気がついたのは、もちろんカラミティ。彼女は攻めているのではなく、攻めさせられているだけなのである。

「（私がもて遊ばれるだと？）」

「・・・だ」

「何？」

「幕だっ！」

ラインの動きがまたしても瞬間的に速くなる。その身の動きを、カラミティは今度はしっかりと捕えていた。金属音と共に、二人が剣を挟んで対峙する。

「ちっ」

「・・・【我が従僕なる友にして、朋なる刃。刺し、穿ち、贄として我に敵を供えよ】」

「！」

カラミティが呟いた言葉が詠唱だと気がついたラインは、すばやく距離を取ろうと後ずさる。

「遅いわねぇ。《串刺す樹木（ランサーズ・トレント）》」

カラミティが使役する何本もの木の槍が地面からラインに迫る。だがラインは全く焦ることなくそれらを見て、避けた。

「何っ！？」

今度はカラミティが本気で驚いた。魔術を魔術で防御したり、あるいは詠唱そのものを阻害する事はあっても、魔術を見て避けるなど、普通の人間には不可能である。常識ならば。

周囲に人間だけでなくカラミティすら驚いた表情をしたが、すぐに彼女は気を取り直した。そして優雅に髪をかき上げると、ラインに話しかける。

「素直に驚いたわ、貴方には。どうやら貴方には、余程魔法剣士との戦いの経験値があるようね？」

「ああ、昔血反吐を吐くほど鍛えられたからな。何度死ぬと思ったかわかりゃしねぇ」

ラインが少し自分の駆けだしのころを思い出して身震いする。確かにこれが鍛錬か、と思うほど厳しい修行をした時期が彼にはあった。させられたと言った方が正しいかもしれない。あの時の上官であった者を思い出すと、今でも寒気がする。確かに学ぶ事が多かったが、二度とやりたくないとも彼は思う。

そんな彼の心も知らず、カラミティが続ける。

「ふふふ、でもこれはどうかしら？」

「何しても一緒さ、さっきのでだいたいわかった」

「？」

「お前、かつての俺の上官よりも弱いよ」

「・・・とことんイラつく男だわ、お前。その言葉はこれを味わっ

てからにするのね！」

カラミティが詠唱を始める。

【大地に封じられし命の源流よ、その枷を外して】

「させるかよっ！」

詠唱に割り込むようにラインがカラミティに斬りかかる。カラミティの詠唱を長いとみたのか、ラインの判断は早かった。詠唱を中断させる気でいたのだ。だが。

【自由なる手にて形作り、また壊し、うちひしぎて】

「くうっ！」

ラインの剣戟を、不敵な笑みをこぼしながら捌くカラミティ。そして詠唱が止まらないことに焦るライン。カラミティはラインの斬撃を避けながらも、詠唱が一向に乱れない。

またラインもカラミティが攻めきれなかった。ラインは見た目や言動に反し、攻撃よりも守備に優れた剣技の使い手である。カラミティが全力で防御に回れば、おいそれと攻め切れるものではないことを互いに悟ったのだ。だからこそ、カラミティは魔術戦を仕掛けた。

【我が敵を粉砕する幾条もの楔とならん】

《大樹海の破城槌（フォレスト・ブレイカー）》

「げっ、やべえっ！」

少し二人が離れた瞬間を狙い、放たれたカラミティの魔術。地面から隆起する大樹ともいうほどの太い木が、ラインの立っていた地面を抉り、さらには庭園の建造物を無造作に破壊して突き進む。そ

してやっとのことで、城の内壁の一部を破壊して破城槌は止まったのだった。後にはちょっとした森が出現したかのように大樹が横たわっている。

この魔術は、本来ならば魔術士が数十人がかりで唱える規模の魔術である。詠唱名のごとく攻城戦で用いられることが多く、間違えても単体を相手にする時の魔術ではない。準備もそれなり以上に必要だし、その分見破られやすいのだ。カラミティがいかに得意とする土系統の魔術とはいえ、ここが土に親和性のある土地でなければ。あるいは余程ラインに腹を立てていなければ使わなかったであろう。

さしものカラミティも、少し肩で息をしながら自分の唱えた魔術の結果を確認する。

「さて・・・どのくらい潰れたかしら？　原形を探すのも大変かもね、ホホホホホ」

カラミティが得意げに笑いながら、自分の魔術で出現した大樹の横を歩き始めたその時である。カラミティの死角である、左後ろ頭上から迫る一つの影。その速度に、カラミティの反応が一瞬遅れた。

「何！？」

「遅え！」

カラミティが咄嗟に剣で防ごうとしたが、ラインが体重を乗せた剣は剣ごとカラミティの両腕を切断した。落ちるカラミティの両腕を挟んで、カラミティとラインの視線が交錯する。

「（はずしたかっ！　頭を叩き割るつもりだったのに・・・だが！）」

「フ、フフフ・・・」

ラインはとどめを刺すべく刃を起こしたのだが、カラミティの無気味な笑いにまたしてもその場を飛びずさった。その反応を見て、さらに笑うカラミティ。

「素敵。貴方本当に素敵だわ」

「・・・何者だ、お前。なぜ血がほとんど出ない？」

ラインは落ちたカラミティの両腕を冷静に見ていた。ラインが飛びずさったのはカラミティを恐れてのことではない。カラミティを切った時に、その手ごたえに違和感があったことが一番理由としては大きい。その理由とは？

「（生きてる人間を切った時の感覚じゃねえな・・・強いて言うなら、そう。グールなんかの死体を切った時の感覚に近い）」

ラインは先ほどの感触を確かめる。もし女が死体なら、首を刎ねても死ぬかどうかは怪しいのだ。ラインは勝てない戦いはしない主義だ。それに今回はこんな余計な相手に手間取る時間と体力が惜しい。ラインが逃げるかこのまま戦い続けるかの選択肢に迷ううち、先にカラミティが口火を切る。

「やっぱり苦手な獲物は使うものじゃないわねぇ」

「・・・何？」

「剣って苦手なのよ、私。やっぱり使うならこっちね」

カラミティのなくなった肘から先に、新たな手が生えてくる。否。それは手ではなく。それは、

「・・・何だそりゃ」

「あら、鎌よ。いけないかしら？？」

「いけないっていうか、いけてねぇ」
「失礼しちゃうわ。どんな名刀でもすっぱり斬れるのよ、これ？」
カラミティの両手には鎌が生えていた。だがそれは普通の金属製の鎌ではなく、まるで甲虫の手にある鎌のようであった。
その無骨な鎌を舌なめずりしながら、愛しそうに頬ずりする様を見て。
「・・・ダンススレイブ、準備はいいか？」
「ここでやるのか？」
「ああ、こいつはここで斬った方がいい。こいつは害虫の類いだ、間違いなくな」
「何をぼそぼそと呟いているのかしら？　遺言は唱え終わったの？」
その言葉を最後に、カラミティがゆっくりとラインに歩み寄る。周囲の兵士達は目の前の状況に理解が追いつかず、その様子をただ眺めるのみだった。
その中で一人ラインだけが、カラミティに備えている。それはラインが今までくぐって来た修羅場の数を示している。彼が兵士として訓練を積んだ辺境では、この程度で動揺していては勤まらないのだ。まして彼は一部隊を率いる立場にあった。彼が戦歴をすべてさらけ出してギルドに登録すれば、大陸に現存する傭兵の世界でも指折りの戦士なのは間違いない。
ラインがダンススレイブを手に取ろうとした、その時である。
続く

愚か者の戦争、その１３～ラインの実力～（後書き）

次回投稿は、８／１４（日）１８：００です。

愚か者の戦争、その１４～戦争を操る道化～

「はいは～い。そこまで～」

間の抜けた声と共に、醜い老人が突然目の前に出現したのだった。
突然の出現に驚くライン。だがそんなラインを無視して、老人こと
アノーマリーは話を続けるのだった。

「やり過ぎだよ、姫」
「何よ、いいじゃない別に。私にもたまには遊ばせなさいって事よ」
「いつも遊んでるくせに何を言っているんだか。僕達が知らないと
でも思ってる？」
「あらあら、何の事かしら？」

とぼけるカラミティを見て、少し目を細めるアノーマリー。

「いい加減にしなよ。僕達もそりゃあ楽しんでいるけどさ、それで
も殺しは自分の仕事のためにのみ行っているよ？　でも君は何さ。
ボク達に提供する献体よりも、自分の趣味で殺している方がはるか
に多いじゃないか」
「あら、これでも最近は我慢しているのよ？　一日十人までにして
いるわ」
「最低が、だろ？」

さしものアノーマリーが苛立つようにカラミティを睨みつけたが、
カラミティは楽しそうに笑うのみだった。だが彼女もオーランゼブ
ルに逆らう気はない。不満を覚えつつも、ここは撤退する事を示す
ようにため息をついた。

「まあしょうがないわね。いずれメインディッシュは迎えるわけだし」
「そういうことさ。ここは我慢だよ、いずれくる御馳走をよりおいしくいただくためにはね」
「そうね、そうしましょう」
「じゃあ大人しく引いてもらうよ？　代わりと言っては何だけど、転移で僕がエスコートしよう」
「あら？　優しいのね」

そうした会話が、ラインがすでにいないかのごとく進められていく。彼らにとって、ラインは真の脅威足りえないとでもいうかのように。そうしてカラミティがアノーマリーの手をとる直前、彼女はラインの方を向いた。

「結果的に楽しかったわ、坊や。きちんと顔は覚えたから、今度こそ殺してあ・げ・る」
「・・・7歩」

ラインはカラミティの言葉を無視し、カラミティもまたラインの言葉を聞く気はなかった。そしてカラミティがアノーマリーの手をつないで、転移が発動するまでのほんの一瞬。彼女は完全にラインから意識をはずした。それで十分だった。
次の瞬間、ラインの剣がカラミティの頭を縦に真っ二つにしていたのだった。

＊＊＊

「は、はあっ！？」

一番驚いたのはアノーマリーだった。転移を終えた瞬間、完全に頭が真っ二つにされたカラミティに後ろからのしかかられ、そのまま押し倒されたのだから。

「お、重い。重いって！」
「失礼ねっ！」

カラミティの死体の下でもがくアノーマリーを、死体を蹴り飛ばすことで助けたのは赤く短い髪の、これまた非常に美しい女だった。

「はー、助かった」
「演技臭いわよ、アノーマリー」
「そう言わないでよ、カラミティ」

アノーマリーは先ほどの死体をどけながら、新たに出現した女をカラミティと呼んだ。女の方も違和感なくその会話に参加する。

「まったく、私ともあろう者が油断したわ」
「本当にね。それほどあの男は強かったのかい？」
「・・・強いわ。かなりね」

カラミティは素直に認めた。この態度にアノーマリーが目を丸くする。

「へぇ・・・嫌に素直だね」
「ええ、正直私も驚いたもの。いくら分身とはいえ、この私を倒すとは。多少この大陸の人間を舐めていたかしら？」
「まあそうかもね。意外とやる連中が多いかもしれない」
「もっとも人間と戦う時に一番気を付けるべきなのは、その意外性だわ。さっきの人間も能力だけとればさほどではないにしても、戦

い方・力の見せ方が非常に上手い。それにまだ彼は奥の手を何か隠してそうだったしね」

「確かにねぇ」

アノーマリーは自分がサイレンスと共に、ラインを観察した時の事を思いだす。彼らは気配を遮断してラインを観察していたはずだったのだが、どうもアノーマリーはラインがこちらに気付いていた節があると感じていた。

「（あの傭兵が本当に厄介なのは、その実力よりも勘の良さ、思考の柔軟性、運の良さだ。それに色んな所に人脈もあるみたいだし、貴重な逸材ではあるものの、同時に危険じゃないかな。それなら泳がせておく危険性が利益を上回る前に、いっそ・・・）」

「何を考えているのかしら、アノーマリー？」

アノーマリーが少し考えに没頭する間、いつの間にか彼の喉元にはカラミティの鎌が突きつけられていた。その鎌をゆっくりと手でどけようとするアノーマリーだが、カラミティは思ったよりも力を込めて抵抗した。その様子に、アノーマリーもやや目を細める。

「何すんのさ。危ないでしょう？」

「『あの男が邪魔』。そう思ったでしょう？」

「可能性の一つとして検討しただけさ。殺すとは言っていない。まあかなり優先順位が上がった事は否定しないけど」

「・・・そんな事はさせないわ」

カラミティが怨念と殺意のこもった声で話すのを聞いて、アノーマリーは面倒そうに聞き返した。

「殺すなら自分でやりたいとか言うわけ？」

「その通りよ。しかも私に手を上げたんですもの。普通の殺し方では飽き足らないわ。アノーマリー、『フレスイータ』って虫を知っているかしら？　こいつらは変わった虫でねぇ、死肉よりも生肉を好むの。だから獲物の治療をしながらその肉をついばむ癖があってね。しかもご丁寧に、獲物が麻痺するような毒を注入しながら！　それで傑作なのは、しばらくしたらこいつらは獲物に卵を産みつけて・・・」

「あー、はいはい。聞きたくない、聞きたくない」

アノーマリーが耳に手を当てて、イヤイヤをして見せた。仕草に愛嬌がある分、彼がやると余計に気持悪く見える。

「僕は痛い話や、気持悪い話は苦手なのっ」

「そんな気持ち悪い外見しておいて、よく言うわ」

「それは言わないお約束」

アノーマリーがカラミティを指さして自信満々に否定したが、カラミティにもどう返せばよいやら返事に困ってしまった。その間に、今度はアノーマリーの舌がよく回転する。

「僕がやってほしいのはねぇ。例えばティタニアに『踏んでください』ってお願いするでしょ？　すると彼女は『まあ基本私は暇ですが、あなたの性癖に突き合うほど暇でもありません』とか言って、すごく冷たい目で僕を見下すわけさ。ああ、もうそれを想像しただけで興奮しちゃう～！！」

アノーマリーが想像の世界に入り込み、自分で自分をかき抱いて地面を転げ回り始めたので、さしものカラミティも呆れてしまった。

「・・・疲れたわ、帰る」

「あれ、もう帰っちゃうの？」
「誰のせいだと？」
「ボクしーらない」

アノーマリーがわざとらしく口笛を吹いたので、カラミティはいらつきつつも、もはや反論する気力も無くしていた。そして最後に彼に念だけ押しておくことにした。

「一応伝えておくけど、あの男を殺す時には必ず教えなさい？　私が出向いて殺すわ」
「あれ、カラミティにそんな時間と余力があるの？」
「それはなんとでもなるわ。１０年熟成型の個体を斬られたのだもの。それでも、それなりの代償を払わせないと気が済まないの」
「はいはい、了解。まあ不慮の事故が起きない限り連絡するよ。さすがにボクは彼に引けを取らないだろうしね」
「まったく、とんだ男ね貴方。普段は道化のくせして」

それだけ言い残すとカラミティは姿を消した。後にはアノーマリーが残る。

「ボクが道化なら、君はせいぜい砂地獄に巣くう甲虫かな。全く、表舞台に出てこずに淡々と自分の仕事をこなしていればいいものを。表に出るのに向いていないんだよ、性格的にさ」

アノーマリーが辛辣な言葉を投げるも、聞き手は誰もいない。いや、一人だけいた。一人というか、三人というか、一匹というか迷うところだが。

「ア、アノーマリー様。お言いつけどおりやりましただ」
「んだんだ、きっちり種類の違うのを三体放ちましたべ」

「わんっ！」
「うん、御苦労様」

アノーマリーの前に現れたのはケルベロス。彼らの元はポチなので四足歩行のはずなのだが、なぜか今は二足歩行をしていた。

「しかしやればできるもんだねぇ。元がポチの体なのにさ。その体で二足歩行なんて」
「へぇ、これも訓練のたまものですだ」
「努力したら報われるって、本当の事なんだべ。オラもう感動して感動して・・・」
「グルル・・・」
「あいでっ！　こらポチ、オラの首を噛むなっての！」

ポチは感動にむせび泣くドグラが鬱陶しかったのか、その首にしこたま噛みついた。体の主導権はポチが優位なので、ドグラは中々抵抗もままならない。

「いでえ、いでえって！　アノーマリー様助けて、首がちぎれるぅ！」
「うん、別にちぎれてもいいかな」
「そんなぁ～」

そうやってそっぽを向いたアノーマリーの背中では、間の抜けた声に似合わぬ血みどろの光景が繰り広げられていたのだが、アノーマリーはそれらを一切無視した。彼には慣れた光景だし、元々最初より興味が無かった。これくらいで死ぬようなケルベロスでもないからだ。

そんな彼は一人ブロッサムガーデンに仕掛けた、自分の視覚代わりの使い魔を使って城内の様子を見ている。

「まあカラミティはいなくなったけど、面白いのはこれからさ。やっぱり戦いってのは盛り上げないとねぇ。カラミティじゃできないような演出はボクがやらないと・・・おや？」

城内の様子を盗み見ていたアノーマリーが、意外な物を発見する。

「これは・・・予想外だ。どうりで東の戦線が思うように機能してないと思ったら、こういうことか。やってくれるね、ボクの予想を裏切るとは。だが、これはこれで面白い」

アノーマリーが楽しそうに微笑む。

「さて、この一手がどうなりますか・・・たまにはこういう楽しみ方もいいね」

アノーマリーが楽しそうに笑う傍で、瀕死のドグラとダグラが転げまわっているのだった。

続く

愚か者の戦争、その１４～戦争を操る道化～（後書き）

次回投稿は８／１５（月）２０：００です。

愚か者の戦争、その15～戦いの間に～

＊＊＊

そして再びブロッサムガーデン。予想外の敵の出現に動揺の見られた反乱軍だったが、カラミティが去ったことで兵士達は落ち着きを取り戻し、ラスティを筆頭に既に部隊の再編は終えていた。むしろラインがカラミティを追い払ったことで反乱軍の士気は上がり、王城を守っていた軍隊は戦わずして意気消沈してしまった事も大きい。なんと、ほとんどの兵士が自発的に投降したのである。元々彼らは士気も低かったので、いたしかたないと言えばその通りであったかもしれない。

結果として、反乱軍はその被害を最小限にとどめることができた。レイファン達が思い描く理想に近い形となったのである。もちろん再編が早いのは、ラスティの手際の良さも忘れてはなるまい。ラインはまだ壊れていない庭園の噴水で水を飲んで顔を洗いながら、しばしの休憩を取っていた。彼としても非常に疲れる戦いであったのだ。頭を冷たい水に冷やすと、彼の中にしたたかな冷静さが戻ってくる。ラインは決して学問ができる人間ではないが、戦闘に置いてだけは非常に頭脳明晰なのだ。彼は予定していた流れと実際に起きた事実を比較し、以後の予定を頭の中で組み直していた。

そんな彼に、ラスティが歩み寄る。

「ライン、少しいいか」

「ああ、それはいいが。もう部隊は整えたのか？」

「直だ。後少しで再び進撃開始できるだろう」

「見事なもんだ。指揮能力は本当に高いよ、お前。戦場では会いたくないな」

「私もそうだ。お前がいると、こちらの作戦やら戦術やらが台無しになりそうだからな。だがそれよりも聞いておきたいことがある」
「んだよ、かしこまりやがって」
ラインが自分の剣の血糊を拭きながら、いつもの軽い調子で答える。
「ライン、お前の剣の使い方を見たことがある」
その瞬間、ラインの剣を整備する手がピタリと止まる。
「お前の剣の守備の型、あれは統一武術大会で見たことがある。当時、いや今もだが、世界一だと言われている騎士剣の型だ。それにあの抜剣術は・・・」
「やめな」
ラインがラスティに背を向けたまま、怒気を孕んだ声でラスティの発言を遮る。
「それ以上言うな」
「なぜだ？　お前の剣は素晴らしかった。あの時私が見たあの国、アレクサンドリアのどの騎士の剣よりも、お前の剣は素晴らしい。アレクサンドリアの剣技に私は感動して、彼らに教えを乞いに行ったものだ。その時彼らが自慢気に話していたことがある。彼らは私とほとんど同じ年頃だったが、自分達の同世代に凄い奴がいると話していた。平民上がりだが、いずれは一つの軍団を任されるだろうと。その話を聞いて、私はずっと会ってみたいと思っていたのだ。その時彼らが口にした名前は確か・・・」
「やめろ！」

ラインが今度は強い口調でラスティの言葉を遮った。そして続けて出た言葉は、あまりにも弱々しかった。

「俺はもう騎士じゃない。頼むからやめてくれ・・・」

「・・・済まなかった、私は多少興奮していたようだ。許せ」

ラスティは自分の無遠慮な言葉がラインの心の隙間をついてしまった事に気が付き、素直に詫びた。だがラスティにも思うところはある。

「ライン、無礼ついでだ。一ついいだろうか？」

「・・・なんだ？」

「お前は確かに今は騎士ではなく、傭兵なのかもしれない。だが騎士であった過去までは捨てられない。何よりお前は騎士に未練がある」

「どこにだよ！？」

「剣を振るっている事自体がその証拠だ。本当に騎士であった事を捨てたいなら、剣も捨てるべきだ」

ラスティはきっぱりと言いきった。その強い口調に、今度はラインが少し面喰う。

「んなっ・・・」

「だが私は、お前ほどの剣の腕前を野に埋もれさせる手はないと思う。だから・・・もしよかったらその力を、レイファン様のためにこれからも役立てる事を真剣に考えてはくれないだろうか？」

「へえ？」

「返事は気長に待つとする。頼んだぞ」

それだけ言うとラスティは照れているのか、さっさと自分の仕事

に戻って行った。後には面喰ったままのラインが残された。

「何だってんだよ、まったく・・・」

「いいではないか、それだけお前が評価されているということだ」

「どいつもこいつも見る目がねぇな。俺なんかのどこが良いってんだ」

「（そう思っているのは案外お前だけかもな・・・）」

ラインの背中に収まっているダンススレイブは、その言葉をそっと胸に秘めた。口にすればきっと噴水に放り投げられると思ったからだ。そしてしばしの間をおいて再びラインは立ち上がり、戦列に戻るのだった。

＊＊＊

「ほとんど抵抗がねぇな」

「ああ、主要な場所はこれであらかた押さえたな」

ラインとラスティは、手分けして城内の拠点となりそうな場所を押さえていった。だが抵抗らしき抵抗もあまりなく、かなり速やかに進んだと言ってもよい。驚いたのは、投稿する兵士に中にはこちらに協力したいと申し出る者までいたのだった。それだけムスターが支配者でいることに我慢ならない者が多かったということでもある。

「なんだかな・・・」

「だが予定よりだいぶ早い。これなら夜になる前に、完全に城内を把握できるかもしれん」

「ならいいけどな」

ラインが空を見上げたが、既に陽は傾きつつあった。早朝から戦い通しである。そろそろ兵士達も疲れて判断が鈍り始めるころだ。

「（もし伏兵がいるなら、俺ならこのタイミングで使うな・・・といっても、既に兵士を伏せるような場所もないか）」

「何を考えている、ライン？」

「いや、上手くいきすぎな気がする」

「それはそうだが・・・」

ラスティがラインの言葉に一瞬難しい顔をしたが、すぐに彼はその不安を振り払ったようだ。

「ラインの言う事は尤もだが、それでも俺達は・・・」

「わかっている。進むしかないから、怖いんだ」

ラインの言葉にラスティが再び難しい顔になるも、今度は伝令によって中断させられた。

「申し上げます！　城内の占拠、あらかた終わりました！」

「そうか、御苦労だった。後はどこが残っている？」

「はい、王族の住居となっている区画だけです。ですが、いまだ敵の指揮官も捕まっていません！」

「だがそれにしては抵抗が少ないが・・・まあいい。行くぞ、指揮官を捕えればこの戦いは終結だ！」

興奮気味に伝える伝令の騎士を尻目に、ラスティはあくまで冷静に気を取り直して精鋭を引き連れ奥に進む。そして彼らはレイファンを護るように進軍するのだが、ラインは一抹の不安を拭えない。

「（くそっ、なんでこんなに嫌な予感がするんだ？）」

進めば進むほど、ラインには嫌な予感が止まらない。それはレイファンが自分の父の死に面と向かうことになるからからとも思ったのだが、レイファンはラインが思うよりはるかに鋭い人物だった。

「少し、止まっていただけますか」

レイファンは一行の進軍を止める。彼女の目には、王族のみが立ち入りを許された庭園が目に入っていた。じっと庭園を懐かしむかのように見続けるレイファン。その背後からそっとラスティが声をかける。

「レイファン様、いかがなされました？」

「・・・いえ、少し昔を懐かしんでいました。それよりも話があります。ラスティ、ライン。こちらに」

「いいのかよ、俺が入っても？」

ラインがさすがに遠慮気味に問いかけたが、レイファンは彼の言葉を気にせず庭園の中に入って行った。後には少し戸惑うようにラインとラスティが続く。そうして三人は少し庭園を分け入って行く。庭園は背の高く、剪定された草花で覆われており、一見迷路のようでもあった。既に手入れをする者がいなくなって久しいのか、刈り込まれたはずの枝は伸び放題で、レイファンは歩くのに邪魔な枝を避けながら歩いていた。

続く

愚か者の戦争、その１５～戦いの間に～（後書き）

次回投稿は、８／１６（火）２０：００です。

愚か者の戦争、その16～庭園にて～

「にしても、こいつはちょっとした迷路だな」
「実際にそのような役目を果たしているのです」

ラインのつぶやきに、レイファンがいち早く反応する。

「この庭園は、王族の憩いの場として作られました。王族ともなれば常に衆目にさらされるのは必然。そのことに嫌気がさした者は、ここでわずかな間、自由な時間を過ごすのです。もっとも、ここを利用していたのは私とムスターだけだったようですが。他の兄は目立ちたがりだったので、常に衆目にさらされるのを好みました。ここで気を休める必要はなかったのでしょう」
「そうだったのですか・・・」

ラスティが感慨深げに感動するのもよそに、レイファンは続ける。

「限られた人間以外に知られる事のなかった私の存在は、この庭に置いてのみ自由が許されていました。初めてムスター・・・兄上に出会ったのもここでのこと。不思議なことに、不意に出会い名乗りもなかったはずなのに、あの人は私を妹として認識しました。見た目は確かに少し異常な部分を感じずにはいられませんでしたが、あの人の芯は決して邪悪ではないと感じたものです」
「だがその勘もはずれたってわけだ」
「おいっ！」

ラインのあまりに無遠慮な言葉にラスティが怒りを露わにしたが、ラインはいたってまじめだったし、レイファンも気にしていないよ

うだった。

「いいのです、ラスティ」

「しかし！」

「私は今でも自分の感じた事を信じています。それは、誰に何を言われようと変えてはいけないことだと思います」

レイファンは荒れた庭園に咲いている一輪の花を手に取りながら答える。花びらの外側は地味な茶色に覆われながら、花開けば深紅の大輪を咲かせるその花の名前をラインは知らなかったが、レイファンの今の心境を表すような花だろうと彼は思った。

「ずっと考えていたのです。私は王族として何ができるのだろうと、王族として何を身につけなくてはいけないのだろうと。私には武芸の心得もなく、また学がさして深いわけでもない。先見の明に優れるわけでもなし、そのような人物に国の将来が背負えるかどうかは、非常に疑問なのです」

「そのような事は」

「わかってんじゃねぇか」

またしても無礼な言葉を吐くラインに、ラスティが何かを言いかけたが、さすがに彼もレイファンの意図を察したのかもはや何も言わなかった。またラインに決して悪気が無い事も、ラスティはちゃんと理解している。それでも場所が場所なら、不敬罪で首を刎ねられても致し方のないほどの暴言ではあるが。

レイファンはさらに続ける。

「それでも私に必要なのは覚悟。騎士やその他の文官はよいでしょう。彼らは最終判断を私に委ねればよいのですから。ですが私は、何にその判断や根拠を頼るわけにもいかない。全て私の判断で幾人

もの人が死ぬ。既に今日も多くの命を失くしました」
「・・・で？」

ラインはここまでの流れと、レイファンの目を見て既に彼女が何を言おうとしているかは気づいていた。ラスティはまだ察していないようだが、ラインは扱いほどには彼女を過小評価していない。

そして複雑に分岐した道を、レイファンは迷い無い足取りで進んで行く。そうするうち、レイファンに誘われた二人は広場に出た。そこには屋根の付いた簡素だが、凝った装飾でしつらえられたアーチがあり、下には茶会ができるようにテーブルとイスがいくつか置いてある。そこには6人分の席があった。

「・・・ここは私達の父上、母上と、兄弟4人分の席がありました。ついぞ、6人で座って会話を楽しむことはありませんでしたが」

レイファンは少し寂しそうに、埃の少し溜まった机の上を指でなぞる。そうして彼女はその席に座ると二人にも座るように促したが、さしもの二人も王族が使用していた席には座るわけにはいかない。

そんな彼らを見て、少しだけ可笑しそうにレイファンは笑った。

「話の続きをしましょう。それでも私は立ち止りません、立ち止まるわけにはいかない。だからこそ二人に聞きます。私の父はもうとうの昔に死んでいるのですね？」

その言葉にラスティははっとしたが、ラインは半ば以上予想した答えであったので、冷静に受け止めた。

「そ、それは・・・」
「いつから気がついていた？」

言葉を濁そうとするラスティを放っておいて、ラインはあっさりと認めた。うろたえるラスティだが、ラインは冷静にレイファンを見つめる。レイファンもまた可能な限り冷静に二人を見つめた。その目線には、いつしか強い光が宿っていた。

ラインは思う。今自分は、王が誕生しようとしている場面に出くわしているのだろうと。ここからの自分の言葉や対応は、目の前の少女がどのような指導者に育つかにきっと影響を与える。だからこそ彼は中途半端なごまかしはやめたのだ。

レイファンは、一日前とは別人のように冷静な対応で答えた。

「最初から考慮に入れてはいましたが、確信したのはつい先ほどです」

「なぜ？」

「これほど各所を押さえて、それほどもはや敵の勢力があるとは思えません。なのに、この一画からは全く我々に呼応しようとする動きが見られない。これは父王が健在であるならば、おかしな話です。もっとも何もできないほどに勢力を削られている可能性もありますが、王族の区画の中に入ってまでこれは異常でしょう。また父上を押さえるような勢力も見当たらず。これは、既に父上は死んでいると見るのが妥当だと思いました」

「なるほど、中々どうして鋭いな」

ラインは素直に感心したが、ラスティは非常に気まずそうであった。もう少ししなければ伝えなければならない事実ではあったのだが、先に知られたことに気恥しくなったのだ。またレイファンの物の見方を自分が侮っていたことにも気が付き、ラスティはますます自分の不明を悟り、穴があったら入りたいほど恥じ入っていた。

「で、どうする？」

「・・・どうもしません。父がいないのなら私が新王として正式に

即位し、自国と諸国に対し名乗りを上げるまで。対外的な事を考えるのならむしろ父がいない方が都合はいいのでしょうね」

「へぇ・・・どうしてそう思う？」

「当然でしょう。王太子二人を殺した第三王子に国を好き放題に操られたのです。ここでまたこのような少女に率いる軍隊に助けられる王を、誰が頼りにすると？　むしろ・・・」

「そこまでにしておくのだな」

突如としてかけられた声に、三人がはっとする。そして声の主が、レイファン達が入って来たのとは別の方向から開けた場所に入って来た。

その人物の意外性に、さしものラインも息を飲んだ。

続く

愚か者の戦争、その１６～庭園にて～（後書き）

次回投稿は、８／１７（水）２０：００です。

愚か者の戦争、その17～異形の襲来～

「それ以上を口にしてはならぬ、例え事実であったとしてもな。指導者とはそういうものだ」
「そんな・・・貴方は？」
「馬鹿な、なんでここにいやがる？」
「兄上！？」

驚愕する彼らの目の前に現れたのは、他でもないムスター本人だった。今回の戦争の張本人。少なくともレイファンとラスティはそう思っている。彼は戦装束のまま、まさに今戦場から帰還したばかりの様に、鎧は血に濡れていた。
だが戦いの歓喜に酔った表情をしているわけではなく、むしろその表情はどこか寂しげですらあった。その見た事もないような表情に、レイファンとラスティは戸惑いを隠せない。そんな彼らを務めて無視するかのようにムスターが話しかける。

「世の中には転移の魔術というものがある。知っているか？」
「そりゃあもちろんだが、こことクライアじゃあ結構な距離があるぞ？　それにどうやってここに来た？　さすがにこの周辺に転移すれば、こちらの魔術士から何かしらの報告があるだろう。あれは膨大な魔力を使うからな。魔術師ならその気配を捕えるのはたやすいって聞くぜ？」
「物知りだな。だが特に問題はない。このくらいの距離を飛ぶ魔力量は確保できるし、王族には隠し通路で脱出するくらいは、発想ができないか？　この庭園は元々、そのために作られたものだ。近くまで転移して、脱出路を逆に辿って来たのだよ。別に種も仕掛けもない」

ムスターはさも当然とばかりに淡々と語って見せた。だが彼の話す内容よりも、ラインはムスターとの間合いを気にしていた。今彼とムスターの距離は9歩。ラインが飛びこむにはやや遠く、これ以上踏み込めば、先手を取られた場合ムスターの剣を受け切れるかどうかは微妙になる。その場所でムスターは止まっているのだ。

「（ちっ、難しいな・・・）」

ラインは既に戦闘態勢に入っていた。彼にはムスター自身に用などない。むしろ、不意打ちなりなんなりでも、ここで死んでくれれば願ったりかなったりだ。そんな彼の心中を察しているのか、ムスターは非常に際どい位置で止まったのだ。ラインが次の行動にちょうど困るような位置で。

だがレイファンにはそのような事はわからない。彼女はふらふらと夢遊病者の様に、無防備にムスターに歩み寄った。

「どうして兄上が・・・」

「まだワシの事を兄と呼ぶか、レイファンよ」

レイファンは目の前の現実にうちのめされていた。彼女にとってムスターは出来た兄ではなかったが、なんの打算もなく自分を可愛がってくれた存在でもある。他の兄二人は山のように贈り物をレイファンにしたが、レイファンの寂しさが紛れたわけではなかった。冷たい宝石の山よりも、温かいお茶を共に飲んでくれる人間の方がレイファンにはありがたかったのだ。

だがレイファンの心中も知らず、ムスターが剣を抜き放つ。その行動に、ラインもラスティも覚悟を固めざるを得なかった。とてもではないが、予想した状況ではない。だが、もはや戦闘は避けられなかった。

「ち、先手は取りたかったんだがな！」
「ライン！」

ラスティの言葉と同時に、二人は走った。そしてレイファンの横を一陣の風が走り抜ける。レイファンの目の前で、鋭い金属音がし、二つの剣が交差をしていた。

「早く引け！」
「まだワシを兄と呼ぶとは・・・そなたの覚悟はその程度か、レイファン！」

ムスターから徐々に異様なまでの殺気が漏れ始める。ラスティはレイファンを無理矢理抱え上げ、その場を一目散に後にした。レイファンの命が最優先であった事もあるが、それ以上に目の前のムスターが彼には化け物にしか見えなかったのだ。

「（あの殺気、尋常ではない。あれは、人か？）」

正直、ラスティはその場から逃げ出した。とてもではないが、ムスターとやり合えるような気が微塵もしなかったのだ。
そのラスティを見て、ムスターが漏らした言葉は。

「良い騎士だ。身の程をわきまえ、自分のなすべき事をしたな」
「けっ、何様のつもりだ？　上から目線の馬鹿王子が！」
「何様ときたか。ワシは王様だよ、この国のな」

ムスターはその言葉と共に、ラインを蹴飛ばした。ラインは自ら後ろに飛んで衝撃を逸らし、宙で体勢を整えて着地する。
そのラインを見ながら、ムスターは悠然と剣を構えた。

「そして、今現在この国で最強の騎士でもある」
「ほざけ！　お前みたいなのは騎士じゃねぇ、ただの人殺しっつうんだよ！」
「傭兵ごときが騎士を語るか。それこそお門違いというものだ！」
二人は同時に地を蹴り、吼え、剣を交えるべく猛然と相手に突進するのだった。

＊＊＊

「今頃決着がついてるのかなぁ・・・」
「さぁな、俺達みたいな下っ端の知る所じゃないさ」

ラインとムスターが剣を交える同時刻。外では騎士達が戦闘の後始末に入っていた。通常ならば戦死者は敵味方問わず埋葬するのが礼儀なのだが、今回はそうもいかなかった。
カラミティに操られた兵士達は動きこそ鈍いものの、その機能を完全に停止するまで止まらなかった。そのため必要以上に刃を打ち込む必要があり、かつて味方であり、今回敵であった者達の体は「崩壊」という言葉がふさわしいほど、原形をとどめた者が少なかった。
その惨劇とも言える戦場跡――戦場に惨劇以外の何者もないとしても――あまりにひどいその光景に、兵士達は敵であった者達の埋葬をする気に中々なれないでいた。何せ、臓物一つ一つを集めて人間の様に組み立てるような気力は、戦闘後の彼らにはなかったのだ。

「ひどい戦いだった」
「ああ、もうこんなのは御免こうむるな」
「おかしいおかしいとは思っていたが、どうも最近おかしな事が頻発するな」
「例の、ダークエルフの森に手を出してからか」

「ダークエルフの呪いじゃないだろうな」
「よせよ」

クルムスの軍内では、ムスターがフェンナの里に手を出したのは周知の事実となっていた。それはそうである。５０もの兵士が帰らぬ人となったのだ。同じ騎士団内に噂が広まらない方がおかしい。それに秘密任務とはいえ、元々ムスターに人望はなく、秘密任務もムスターの思いつき程度にしか考えていない何人かが口を滑らせていたのだった。

「だがこれで多少はクルムスもマシになるだろうか」
「ムスターでなければ、誰が治めてもましになるさ」
「レイファン様でなくてもいいような口ぶりだな、まるで」
「実際そうだろうよ。あんな子どもに王が勤まるとは思えねぇ」
「おい、不敬罪になるぞ？」

騎士の一人が注意を促すが、その言葉は近くに座っていた傭兵の耳に入っていた。

「へぇ、色々あるんだな。お偉い騎士様にも」
「・・・お前達みたいな気楽な連中と違って、こちらは色々と大変なんだよ」
「面倒なら騎士なんて辞めちまえよ。歓迎するぜ、俺らはよ」

傭兵はげらげらと笑う。その笑い方は騎士達にとって不快そのものだったが、傭兵は心からそう思っていたのだった。彼にして見れば何の悪気もない行為である。

さらに悪びれない傭兵は、話し続ける。

「だけど、確かにあの子どもなら扱いやすそうだもんなぁ。お前達

も、無理矢理襲って手籠にしちまえばどうだい？　そうすれば何年か先には王様や側近、なーんてこともあるかもよ？」

「無礼な！　貴様、切り捨ててくれる！」

騎士達が色めき立つのを見て、さすがに冗談が過ぎたと傭兵も思ったのか、慌てて立ち上がりその場を去ろうとする。

「っと、これだからお堅い騎士様ってのはいけねぇや。まあラインが提示した賃金の割には楽な仕事だったが、後片付けまで突き合う義理はねぇよ、と・・・ん？」

その場から去りかけた傭兵が、何かを見つけたのか立ちつくす。それは彼に斬りかかろうとした騎士も同じことで、あまりに傭兵が無防備で立ちつくしたので、彼もまた毒気を抜かれてその場に立ちつくした。そして事もあろうに、先ほどまで斬りかかろうとした相手に話しかけたのだ。

「どうした？」

「いや、あれ・・・なんだろうな？」

傭兵が指さしたのは、ふらふらと歩いてくる男。顔だけ見ればそこそこ若いだろうが、頭は剃っているのか完全に髪がなかった。その男はぼろきれ一枚を纏い、ゆらゆらとこちらに歩いてくる。風にぼろきれがたなびけば、彼のむき出しの体が露わにされた。血の気が無く、なのに妙に瑞々しく力強さを感じる体躯。夕陽を背にして歩いてくるので表情こそ見えないが、どうやらまともな存在には見えない。

まだ気を抜き切ってはいない兵士達は、男に気がついた者から順に武器に手をかける。その様子に気付いた者が作業の手を止め、波のように再び緊張感が広がって行った。よく見れば、その背後から

太った男と、背の高くひょろ長い女も歩いてくるではないか。

「何者・・・」

騎士の一人がその言葉を言い終わらないうちに、傭兵の男は自分の短刀を先頭の男の脳天目がけて投げつけていた。

短刀は見事男の脳天に命中し、男はその反動でのけぞるように地面に頭から倒れてゆく。そんな傭兵を騎士が咎めた。

「貴様、なんて事を！　非戦闘員だったらどうする？」

「んなわけあるかよ！　こんな戦闘地帯に現れて、『僕は民間人です、殺さないで下さい』なんて言い訳通ると思うか！？　味方でなけりゃ、敵だ！」

「そうとは限らないだろうが！」

傭兵と騎士は胸倉をつかみあい、喧嘩を始めようとしたが、騎士の一人が男の方を指さしたので、ちょうど相手に掴みかかった所でその手が止まる。

「おい、あれ・・・」

「ああ？」

「何だ！」

喧嘩を始めようとした二人は、仲良く同じような返事をする。そして彼らが目にしたのは、後ろに倒れたはずの男だった。彼は倒れ切らず、体が完全にのけぞった状態で停止していた。およそ人間の筋力では無理なような体勢である。そして、男はその姿勢からおもむろに起き上がって来たのだ。

「・・・なんだありゃ？」

最初に言葉を発したのは傭兵だった。男は額の短刀を引きぬくと、その傷口からはとめどなく血が溢れた。そう、緑色の血が。

そして引きぬかれた短刀は、男の手の中でひしゃげてつぶれた。

「・・・！」

その光景を見た傭兵の動きは早かった。腰の剣を抜き放つと、一直線に男に斬りかかったのだ。だがその目にもとまらぬ動きも、男には無駄だった。傭兵の剣は力いっぱい男に打ち込まれたが、なぜか剣は浅い部分で止まっていたのだから。

そして始まる、男の変化。

続く

愚か者の戦争、その17～異形の襲来～（後書き）

次回投稿は、８／１８（木）２０：００です。

愚か者の戦争、その１８～狂戦士（バーサーカー）～

男は異形への変身を始めていた。体は浅黒く染まり、今までの細身の体はどこへやら。体は異常なまでに筋肉が盛り上がった大男へと変形していた。さらに男の背中は異常なまでに筋肉が肥大し、まるで瘤のような形になる。すると中から瘤を突き破って、長い腕が出現したのだった。

「離れろぉ！」

叫んだのは、先ほどまで傭兵と喧嘩をしていた騎士だった。彼に言われるまでもなく、傭兵も剣を捨てて飛びのいていた。

その頭上からは、男の背中から盛り上がった巨大な手が迫る。

「うおっと！　あぶね・・・え？」

傭兵は見事に頭上から迫る手をかわした。だが、その体は長い槍の様な者に串刺しにされていたのだった。

「なんだよ、こ・・・れ」

傭兵は自分を貫く物の正体を見た。それは女の足が変形した、蛇の様な物の一部だったのだ。正し先端は異常なまでに硬化し、まるで槍となっていたのだ。

そして傭兵がもがくのが鬱陶しいとでもいったように、女は傭兵の体をその辺の壁に投げつけた。傭兵はがらくたの様に放り投げられ、周辺に血と臓物を飛び散らせる事となった。その傭兵に、先ほどまで喧嘩をしていた騎士が駆け寄る。

「おい！　しっかりしろ、貴様！」
「あ・・・こんなこと、してる場合じゃ・・・母さんに仕送、り・・・しないと・・・」
「何を言っている!?」
「母さん・・・最近小さ、くなったからなぁ・・・・・・たく、さんお金・・・おくら、な、きゃ」
「おい！　おい!?」

騎士がしっかりと傭兵を抱きかかえて叫んだが、既に傭兵は事切れていた。その傍には回復魔術が使える魔術士が走ってきたのだが、彼は傭兵の手を取ると首を横に振った。

「くそ・・・弔おうにも、俺は貴様の名前も聞いていないぞ！」

騎士はそれだけ言うと男の腕を体の上で組ませゆっくりと彼を横たえると、自分は剣を片手に吠えながら変身した異形達に突撃していくのだった。

＊＊＊

「うふふ、これで面白くなってきた」
「・・・奴らにとっては最悪だろうがな・・・貴様が面白がると、ろくなことがない・・・」

異形と戦い始めた反乱軍。それらを少し離れた壁の上から見守る、喋る動物が二体。カラスとネズミである。

「それにしても、人間って奴はどうしてこうすぐ激昂するかなぁ？全く不完全極まりないね。そこが面白くもあるんだけど」

「・・・僕も一応人間なんだけどね・・・」

カラスがやや自嘲気味に呟く。その傍でネズミが笑うのだ。

「まあでも人間は本当に愉快だよね、さっきの騎士を見てよ！　彼ってば、大した実力もないのに突っ込んでさぁ・・・あ、危ない！　そこ、そこは右に避けちゃだめだって！　あ、ついにつかま・・・る前に首が飛んじゃった。あ～あ、つまんないの。やっぱり脇役が色気出すもんじゃないね」

「・・・ならば自分が主役だとでも言いたいのか、アノーマリー？・・・」

カラスがネズミを睨み付ける。ネズミは壁の一部をかじりながら、面倒臭そうに答える。

「よしてくれよ、主役なんて柄じゃない。僕が似合うのは裏方も裏方、せいぜい脚本家さ」

「・・・もっともタチの悪い役割だ・・・」

「ライフレスみたいに戦闘狂じゃないんだよ、ボクはね」

ネズミがカラスを見上げた。その瞳には怪しい光が宿っていた。ライフレスもぞくりとするような嫌な目線。使い魔を通してなお、失われぬ妄執がそこにはある。

「・・・変質者め・・・」

「何さ、自分がちょっとノーマル寄りだからって。僕たちなんて世間一般から見たら、全員変質者だよ」

「・・・どの口で常識を語るか・・・」

「この口だよ～って、これは前にも言ったな。君にじゃないけど」

ネズミは言葉を選び間違えたのかと思ったのか、腕を組んで考え始めた。その仕草は妙に愛らしくもあるのだが、ライフレスはそんな感情など持ち合わせない。彼らが興味があるのは一つだけ。

「・・・で、どうなんだ・・・『バーサーカー』とやらの出来具合は？・・・」

「上々じゃん？　これにはボクも満足している。これで現在までに作った種類は全て稼働可能。基礎理論はおおよそできたから、種類を広げる実戦応用と、さらに上位種を作るための応用理論の構築に取り掛かれるね。さて、問題はどちらを先にするかだけど」

「・・・恐ろしい男だ・・・」

おそらくアノーマリーは口にした事を同時に行うだろう。彼がヘカトンケイルの研究に着手したのはおよそ5年ほど前らしい。そこから理論を構築し、既にその研究を古臭いと言えるレベルにまで引き上げている。オーランゼブルがアノーマリーに与えたのは、この世界という実験場ではないのか。

「（・・・こいつは・・・いずれ殺さないと駄目だろうな・・・）」

ライフレスは秘かにそのような事を考え始めていた。ライフレスにはこの世を壊すような思想は存在しない。むしろそれでは戦う相手がいなくなるのだから、彼にとっては困ってしまうのだ。

二人がそれぞれの考えで反乱軍の戦いを眺める中、ほぼ同時に3人目の存在に気がつく。

「・・・誰だ・・・」

「気配なんて隠さなくていいよ、互いに使い魔の身だろうしね。戦いにはならないさ」

「それもそうだな」

花壇からすっと姿を現したのはネコ。ただし、人語を話しているところをみると、使い魔である事はまず間違いない。

「誰だい？　ボク達に気がつくんだから、相当な実力者なんだろうけど」

「・・・おおよそ見当はつくがな・・・」

「ほう、当ててみるか？」

ネコは挑戦的に言ってみせた。カラスは少し考え込むように首をひねるが、やがてゆっくりとくちばしを開いた。

「・・・魔術教会会長、テトラスティンと見受けるが・・・」

「・・・御名答。さすがは英雄王」

その言葉に、ネコが笑ったようにライフレスには見えた。同時に油断ならない構えを取る。ネズミの表情は読み取れない。果たしてアノーマリーはどう思っているのか。

「・・・魔術教会会長が何用だ・・・」

「まさか、ネコだけに鼠狩りだなんて言わないだろうね。勘弁してくれよ、それだけは。ボクの使い魔がいなくなっちまう」

「「お前は黙っていろ」」

ライフレスとテトラスティンに同時に言われ、さしものアノーマリーもしゅんとした。そして、ふてくされたように壁を齧り始めた。

「・・・改めて問うが、何用だ？・・・」

「単刀直入に言おう。お前達、私と手を組まないか？」

その時、間違いなくネコは笑ったのだった。

＊＊＊

「おらあ！」
「ぬうう！」

誰も見る事のない打ち捨てられた庭園で、それでも美しく、そして寂しい庭園でラインとムスターの激闘は続いていた。既にアーチは崩れ、周辺の生け垣はぼろぼろであった。これらはほとんどがムスターの斬撃によるものだったが、ラインとしても凌ぐだけが精一杯だったのである。

達人同士の戦闘では剣が触れあわない。剣が触れるのは、相手に直接斬撃を加えるときだけである。

ラインはムスターの剣を受け流す事も出来ず、必死にかわしていた。カラミティの時と違い、今度は受け流すだけでも剣が摩耗するだろう。剣を合わせず、かわすのがラインの精一杯なのである。

一方でムスターも焦っていた。今までの相手と違い、ラインには自分の剣が届かない。あと一歩だとは思うのだが、その一歩が果てしなく遠い気がする。

「（そういえば、勢いだけで剣を振るっていたな。最近は）」

ムスターが自分を振り返る。元々剣の才能があると自負はしていたが、まともに剣の修業をしたのは幼い時だけ。ヘカトンケイルを率いている時も勢い任せで、強敵との一体一など、ムスターに経験はなかった。

だがラインには経験がある。自分を鍛え上げた騎士。現在に生存する、『マイスター』の称号を持つたった二人の騎士の一人。あの魔法剣士に比べれば、目の前のムスターの剣戟すらまだぬるい。

「（最初に出会った時は驚いたな・・・あんな女があれほど強いとは思わなかった。最初はどこかの小間使いのガキだと思ったのによ。それから嫌ってほど叩きのめされて、戦いの基本を教わって、騎士としての心構えを説かれて・・・気が付いたら尊敬していた。とんでもない堅物だったがな）」

ラインがふっと昔を懐かしむ。ラインが辺境で過ごした数年で、彼はついに一本たりともその騎士から取ることは叶わなかった。それほどその騎士は強かった。

騎士としての理想の集約。多くの者がこうありたいと望む形を現実に叶える事に成功した人物。多くの者に尊敬され、それ以上に敵から畏怖されたその騎士。だが、ラインの理想とする騎士からはどこか彼女は遠かった。彼女の数多の部下の中で、ラインだけが彼女に悪態をついた。つけた。

だからなのか。その騎士はラインに厳しかった。他の者が時に止めに入る程に、彼女はラインに辛く当った。だが、自分の国を守ること以外興味を示さなかったかの騎士が、久方ぶりに人間に目を留めた事に気がついた者は多くない。ラインもまた、全く気がついてはいなかった。

それでもラインの血となり肉となった彼女の教え。それはラインの命を何度となく救っていた。そして今も。

「（美しいかな）」

ムスターはラインの振るう剣を見て、そう感じた。そして同時にラインの剣が、いつぞやの記憶の片隅にある剣筋に似ていると思う。

「（あれはなんという国の・・・いや、やめよう。今のワシにそんなことを考えるほど、頭の容量は残されていないのだから）」

ムスターは思いだしかけた記憶に蓋をした。そうせざるをえなかった。今、考えられる事は彼にとって多くない。余計なことに気を回している余力はないのだ。

ただ今は。せめて目の前にいる好敵手との戦いに、一時でもいいから没頭したかった。

「（何の事はない、ワシもただの馬鹿か。周りの言った事は的を得ているではないか・・・）」

「うおおお！」

ムスターが余計な事を考えたからか。あるいはラインの剣技が純粋にムスターのそれを上回っていたのか。ラインの剣は、一瞬の隙をついてムスターの右胸を貫いていた。

だがすばやくラインは剣を引きぬき、後ろに飛びずさる。そしてムスターは胸から滴りおちる血を押さえながら、その場に膝をついた。

続く

愚か者の戦争、その１８～狂戦士（バーサーカー）～（後書き）

次回投稿は、８／１９（金）２０：００です。

愚か者の戦争、その19～届かぬ思い～

「・・・見事」
「よく言いやがる。手加減したな？」

ラインが戸惑いながら訝しげに尋ねる。ラインもまたムスターという人物を図りかねていた。

「わからん・・・なぜわざと負けた？　お前は今回の戦争を起こした？　いや、起こした奴のいいなりになった？　それに」
「質問は一つずつにしろ」

ムスターが苦笑する。ラインの方も焦りがあったのか、少し気難しげに閉口した。そしてムスターはよろよろとではあるが、蒼白な顔をしながらもラスティがレイファンを抱えて逃げた方へ歩み始めた。

「まずは歩きながら話さないか・・・ここで朽ちては、わざわざここまで出向いた甲斐もなかろうというもの」
「やはりここには死ぬために来たのか」
「気づいていたか？」
「まぁな」

ラインは事もなげに答えた。そこまではラインには端（はな）からわかっていたことだった。

「なぜそう思った？」
「自分で言っただろう、『ためわらずに斬れ』と。それに、レイフ

ァンに向けた剣には殺気がなかったよ」
「なるほどな。まあそれも致し方ない。実の妹、しかもワシに純粋な好意を向けてくれる者を斬れるはずもない」
「そうかい」
ラインはつっけんどんにムスターに返事をする。まだまだ彼に気を許した覚えはない。
「それより手を貸してくれんか。思ったよりは深手だ」
「知らんね、自分で歩け。途中でくたばるならそれまでの男だろうよ。その時は首だけ運んでやる」
「厳しい奴だ」
ムスターはよろめきながら立ちあがると、剣などの武具は全てはずしてラインの先を歩き始める。ラインには後ろからついてくるように促しながら。ラインは用心しながらもムスターの後に付いて歩く。
「貴様の疑問に答えようか」
やがてムスターはやや気だるそうに口を開いた。今の彼にとって、話す事もかなり負担のかかる作業なのだろう。
それでも何とか話そうとするムスターに対し、ラインは冷たく答えた。
「じゃあ話してもらおうか。この戦争を仕組んだ奴は誰だ?」
「アノーマリーという男だ。もっとも奴も誰かの指示で動いているようだったがな」
「そいつはわかるかい?」
「さてな。他にも協力者がいたようだったが、いまいち記憶がはっ

きりしない」
「んだよ。年か？」
「冗談はよせ」

ムスターが少し振り返りながら、口元をほころばせた。どうやらそれなりに冗談の通じる相手ではあるらしい。まともでさえあれば、話のわかる主になったろうとラインは少し残念に思う。
ムスターもまたラインの事を気に入ったのか、口調もくだけてきていた。

「正気に戻り始めたのはここ最近だ。幼い頃、兄弟に毒を盛られてからどこか頭の線が一本切れたようになっていたが、辺に頭や体をいじくられたせいか、逆にすっきりした部分もあってな。もっともいつもというわけではなく、ふと霧が晴れるように自分の我が戻るのだ。今も、我が戻ったからこそ慌てて戦場から一目散にこちらに引き返したと言うわけだ。今頃指揮官を失った戦場は大混乱だろうな。何せワシ以外の指揮官などろくにいないのだから」
「因果な話だ。だからといって、お前のしたことは許されはしないぞ？」
「わかっているからここに来た。何か一つでもクルムスの、いや、妹の役に立つことがしたくてな」

ムスターの目は真摯な光をたたえていた。この発言に嘘はないだろうと、ラインもその部分には確信を得るのだった。
そんなムスターに、今度はラインから質問する。

「ゼルバドスという名前に聞き覚えは？」
「ある。確かワシに近づいてきた男だな。不気味な男だった」
「不気味？」

ラインは意外な言葉に首をかしげる。

「不気味とは？」

「言葉の通りだ。奴は優秀すぎた。だからこそ、ワシにゴマをする必要などなかったのだ。ワシはおかしいながらも奴を信用できなくてな。奴を何度も殴り飛ばしたよ」

「で？」

「それでも奴はワシにゴマをすって来てな。しかも笑顔だった。ワシは怖くなり、途中から奴に関わらないようにした。だがそれでも奴はワシに近寄って来た。そのうち、ワシの近侍は皆奴の言う事を聞くようになった。シーカーの森に遠征した時も、手続きは勝手に奴がしたことだ」

「じゃあお前の周りは、全員そいつのいいなりか？」

「まあそんなものだ。全員、でもなかったが、奴に従わない者は少しづついなくなったな。何より不気味だったのは、奴に面と向かって逆らった者が、翌日には奴の言う事を忠実に聞くようになったことだ。まるで操り人形のようにな」

「操り人形・・・」

その言葉にラインは何かひっかかりを覚えた。どこかでそのような印象を自分も抱いたはずなのだ。ラインが思い出す暇もなく、ムスターの方は話し続ける。

「特にゼルバドスの目が嫌だった。普段穏やかなくせに、誰にも心許さず、憎悪に燃える目をしている時があった。アレは自分以外の全てを呪っている目だ。あるいは自分自身すらもな」

「まあ見てないから何とも俺は言えんがな。それよりも、あの書簡に書いてあったことは本当かよ？」

「どの内容だ？」

「お前の二番目の兄の謀反の計画と、部下の武将達の裏切りだよ」

ラインはずばり核心をついた話をした。ムスターの表情が瞬間的に曇る。

「・・・事実だろうな。ワシの兄二人は権力欲の強い男達だった。一番上の兄はクライアが虎視眈眈と我が国境を脅かしている事を知っていた。そのためにレイファンを嫁がせ、東を押さえようとしたのだろう。一方で二番目の兄は反乱を起こすため、北のフルグンドと何やら怪しい交渉をしていた。南のトラガスロンは間者を多数クルムスに送り込み、また武将達の買収を積極的に行っていた。知っているか？　武将の実に2割がトラガスロンに寝返る約束をしていたのだ。これでは国として成立しているとは言い難いだろうよ」

「・・・まあ、な」

「それにザムウェドとは度重なる外交の失敗で、仲はどんどん険悪になっていた。我がクルムスはいつ滅んでもおかしくない状態だったのだ。その事に誰も気がつかず、のうのうと暮らす日々。いっそ滅びてしまえばいいとも思ったが」

「レイファンが不憫ってか」

ラインの目がきらりと光る。ムスターはちょっと驚いたような顔をしたが、すぐに冷静に戻る。

「そう・・・だな。正直ワシはこの国に愛着はあまりない。昔はこの国を良くしようとも思ったが、この国はワシに何もしてはくれなかった。だが妹だけは別だ。だけれどもそんな奴は指導者としてふさわしくなかろうな。国よりも妹を大切にするなど」

「そうか？　俺はその方が人間味があっていいがな。『自分の家族よりも国が大切』とか言う奴は信頼できん。そういう奴は国のなんたるかもわかっていないだろうよ。国なんぞ、所詮人の集まりだっていうのにな」

「そういう考え方もあるか・・・一度貴様とはゆっくり話をしてみたかったな」
「生憎とそうはならなかったがな」

そこまでラインが話したところで、二人はちょうど庭園を出てレイファン達が待つ場所から見える場所に出ようとしていた。そこでラインは無言で剣を抜き放ち、ムスターの背中に突きつけた。

「それでいい」
「気が利くだろ、俺は？」
「ふん・・・一つ聞いていいか。真っ向勝負でやっていたら、ワシらはどっちが勝っていた？」
「６対４で俺だな」

ラインは即答で言い放った。遠慮のない言葉に、ムスターは思わず目を丸くして足を止める。

「本当に遠慮のない奴だな。これから死ぬ者に花を持たせる気はないのか？」
「ねぇよ。もっとも、お前さんが小さい頃から正気でちゃんと訓練をしていたら、さしもの俺もやばかったろうがな」
「なるほど・・・所詮は空想の出来事か」
「そういうことだ。もう勝負はついたんだよ」

そこまで会話をすると、既にムスターには言う事もないかのように再び歩き始めた。後からラインも続く。彼らが出てくると兵士達はざわめいたが、冷静になったレイファンが彼らを鎮めた。ラインはと言うと、ただレイファンに向けて頷いただけ。だがそれでレイファンにはおおよその事情がわかってしまった。兄を斬る時が今来てしまったのだと。

そして彼女は覚悟を決めた。

「ムスター＝クルムス＝ランカスター。此度の反乱の首謀者として、私に何か申し開きすることはありますか？」

レイファンが質問するも、その声はやや震えていた。ラインやラスティだけでなく、敏感な兵士にも何人か気づく者はいたようだ。

ムスターもまた気がついたようだったが、彼は気づかぬふりをして俯いたままだった。ここで顔を上げるのはレイファンにとって残酷だと思ったのだ。

「ない。ワシの計画は破れた。さっさと斬るがよかろう」

「・・・・・・・・・ではそのように。誰か・・・」

「その役目、私が」

レイファンが躊躇いがちに言葉をつなぐのを見て、ラスティが名乗りを上げた。レイファンは自分で兄を斬ると言ったが、剣を持った事もない少女の細腕では大人の首を落とすことなど無理である。ラインは剣を収め後ろに引き、ラスティが代わりにムスターの後ろに立つ。

「謀反人、ムスター。覚悟はよいか？」

「とっくにしてある。早くしろ」

『とっくに』の意味合いを知るのはおそらくラインだけだったろう。その事をラインは自分の胸だけにしまう事にした。これ以上残酷な現実は、レイファンには必要ないだろうから。

そしてラスティが構えた剣が振り下ろされるまさにその瞬間、ムスターは自分の体の変調を感じた。

「（・・・めだよ）」
「（何？　何だと？）」
「（だめだよ、そんな簡単に死んじゃあ）」

クスクスと笑う声がムスターの頭に響く。

「（これは・・・アノーマリー？）」
「（だめだよ、そんな簡単に死んじゃあ。ボクに魂を売った人間が、そんな簡単に死ねるわけないじゃないか。君は死ぬまでボクの玩具だ）」
「（ふん！　誰が貴様のいいなりなんかに）」
「（なるんだよ、嫌でもね）」

声だけのはずなのに、ムスターには小さな醜い老人の笑い顔が目の前に浮かんだ気がした。そして、振り下ろされるラスティの剣をムスターの手が掴む。

「何！？」
「いかん、お前達、逃げ・・・」
「（起きろ、バーサーカー）」

その声と共に、ムスターの頭の中には嫌な高笑いが響き渡る。そして、それもすぐに霧散する意識と共に消えて行った。そしてムスターに訪れた変調。内臓を吐きだしそうなほどの吐き気と、頭を叩き割られたような頭痛と、異常なまでの高揚感。

「い、かん・・・誰か、俺を・・・」
「兄上？　兄上！？」

ムスターの異変を感じとり、反射的に走り寄ろうとするレイファ

ンをラインが後ろから掴んだ。

「よせ！」

「離してっ、兄上が！」

「ぐあああああああ！」

その瞬間、絶叫と共にムスターが変形を始めた。血飛沫と悲鳴を上げながら変形する兄を見てレイファンがこの世の終わりの様な顔をしたが、その光景を最後まで見ることはなかった。ラインがいち早く当て身によりレイファンを気絶させたのだった。

そしてラインが変身したムスターを見て一言。

「自業自得もあるとはいえ・・・なあムスター、こんな終わり方はないだろうよ。せめて俺が殺してやるよ。唯一お前の思いを知る者としてな」

そしてラインはレイファンを安全な場所に運ぶべく、彼女を抱きかかえるのだった。

続く

愚か者の戦争、その１９～届かぬ思い～（後書き）

次回投稿は、８／２０（土）２０：００です。

＊＊＊

こちらはブロッサムガーデン内の一画。魔術士達の使い魔が会話を行っている。

「・・・手を組まないか、だと？・・・」
「へえ～どんなつもりかなぁ？」

ライフレスとアノーマリーは突然の申し出に、テトラスティンの真意を測りかねているようだった。その反応を見て、テトラスティンはさらに慎重に語りかける。

「言葉通りだ。それ以上も以下もない」
「・・・お前と組むことに意味があるとは思えんが・・・」
「手を組むことで、どんなメリットが互いにあるのさ？」

そっけないライフレスとは対照的にアノーマリーは興味を引かれたのか、ライフレスの言葉を遮りテトラスティンに質問した。テトラスティンは意を得たりとばかりに答えを返す。

「この大陸を掌握するんだろう？　そのために魔術教会を味方につけるのは、早道だと思うが？」
「へえ？　なんでボク達がこの大陸を掌握したがっていると思うのさ」
「馬鹿でもわかることだ。仮にお前達の目的が、この大陸から人間を排除することだとしよう。そこの英雄王――で間違いはないと思

うが、そいつ級の仲間が何人かいるならば、力押しの方が余程目標達成までは早いだろうからさ」

あえてテトラスティンは自身満々に感じるように言いきったのだが、ライフレスの反応は冷静そのものであった。

「・・・穴だらけの推論だな・・・話にならん・・・」

「続きがある。まあ聞け」

興味を失くしかけるライフレスに、テトラスティンも食い下がる。

「それをしないのは他に目的があるか、もしくは真竜が脅威となるか。前者の場合、私はお前達の目的を『大陸の掌握』だと考えるのだが」

「なるほどなるほど。仮に掌握が目的だとして、その次にボク達は何をすると思っているの？」

「さあ、それはまだ見えてこんな。あるいはそうだな・・・お前達にまだそれ以上の目的がないから、とか？」

この考えはテトラスティンにとっても賭けだったのだが、ライフレスとアノーマリーからは何の反応も見えなかった。使い魔を通しているからそれはそうなのだが、ここからテトラスティンは別の可能性を考えだす。

「（この無反応・・・まさか、本当に何を自分達がしているか理解してないのということはないだろうな。いや、まさかそれはないか。これほど癖の強く実力のある連中が、そこまで大人しく従うとは思えん。それに奴らが確かに大陸を掌握して何を行うかは、私も見当がつかんしな。この探り合いでとっかかりでも掴めればと思ったが、これは無駄足だったか？）」

テトラスティンもまた考え込み、場にはしばしの静寂が流れる。
その口火を切ったのは、意外な事にライフレス。

「・・・貴様の真意がどうあれ、我々は不必要な仲間は増やさん・・・少なくとも今はその時期ではないな・・・必要があればこちらから連絡をしてやる・・・大人しく待つがいい・・・」
「つれないねぇ、ライフレスは。せっかく魔術教会の会長が来てくれたんだから、もう少し話をしようよ。仮に君が我々の仲間に加わりたいのなら、それなりの貢物が必要だ。キミなら何を提示する？」
「そうだな。魔術教会の人間の半数を献体として提出する、というのはどうだ？」

テトラスティンの言葉に、興味を失くしかけたライフレスのカラスが首をぐるりと向けた。アノーマリーのネズミに至っては、壁から落っこちそうになっている。

「・・・貴様、正気か？・・・」
「それはいくらなんでも提出しすぎなんじゃないの？」
「そうでもない。私は魔術教会の人間などに何の愛着もないからな」

しれっとテトラスティンは言い放つ。その冷たさに、さしものライフレスも背筋が冷えた。

「（・・・この男、正気か？・・・）」
「そう驚くな、私はいたって正気だよ。それに貴様達こそボンクラか？　そこかしこで人間を貴様達は攫っているだろう？　そろそろ国家単位の集団でも、何かがおかしいという情報はギルドを通して出回り始めている。ましてやアルネリア、魔術教会、果てにオリュンパスなどは国家をまたいで活動する組織だ。知らないはずがない

だろう」
「なるほど。今回もクルムスで反乱があるとの情報は掴んでいたわけか。さすがに舐めすぎていたかな」
アノーマリーが感心した風に言うが、実際の所、彼はどうでもいいと思っているのだろう。驚きの感情がこもっている風にはテトラスティンには聞こえなかった。あるいは本当に驚いていたのかもしれないが、元々道化じみた性格では、その真意はわからない。
とにもかくにもテトラスティンは強気の姿勢は崩さなかった。ここで舐められては、交渉など望めはしない。
「それでどうする？　受けるのか、受けないのか？　献体の話は悪くはあるまい？」
「まあまあ、そう急かさない。逆に君としてはこちらに何を望む？　こちらからは何か欲しくないのかい？」
「俺は一定以上の利権が欲しい」
テトラスティンはあっさりと言った。この発言には、ライフレスの方が驚いた。
「・・・貴様・・・魔術士の癖に、嫌に俗っぽい事を抜かす奴だな・・・」
「何とでも言え。私はこの大陸において一定の利権があれば、自分が長でなくとも構わん。大陸を支配している奴が悪党でも化け物でも構わんよ。魔術教会の会長などをしているのも、ここが一番私の目的に近いからだ」
「身も蓋もない事言うねぇ～こりゃあキミへの評価を改めないといけないかな？」
アノーマリーが実に楽しそうにケタケタと笑ったので、他の二人

は不快感をあらわにした。アノーマリーの笑い声はどうしても人を不快にさせるのだ。

「それにしてもだね」

突然ピタリと笑いを止めたアノーマリーに、他の二人が自然注目する。

「テトラスティン、君の望みを当てようか？」

「・・・面白い事を言う。できるなら当ててみるがいいだろう」

突然のアノーマリーの申し出にテトラスティンは警戒するが、アノーマリーはもったいぶるように続けた。

「そうだねぇ・・・君の目的。それはズバリ魔術、いや、魔法の研究だろう？」

「ほう、なぜそう思う？」

テトラスティンは平静の調子で返した。だが少し。ほんの少しだけいつもより早口なのを、アノーマリーは見逃さない。

「ふふ、心拍数が早いんじゃないのかい？」

「ごたくはいい。根拠はあるのか？」

「いや、勘」

その言葉にテトラスティンはおろか、ライフレスすらため息をついた。

「・・・貴様・・・」

「時間の無駄だな」

「そうでもないさ。君の心拍は変動があったんだし、核心をついているはずだよ。もっと言えば」

冷たく突き放そうとするテトラスティンに対し、今度のアノーマリーは真剣だった。普段の道化はどこへやら。アノーマリーには珍しく、といえばあまりだが、真剣にテトラスティンと対峙する心構えがあるようだった。

「魔術教会の会長なんて、そのくらいしかやることがないだろう？　少なくともあそこは色々な魔術士を管理できるから、部下達の研究内容を把握するのには便利だし。それに君が会長として世の中の魔術士をしっかり導こうなんて人間には見えないなぁ。テトラスティンだっけ？　君は僕と同種の人物だねぇ。自分の研究のためなら何を犠牲にしても厭わない。君は自分の目的のためなら、親や恋人でさえも平気で差し出す人間だろう？」

「さて、どうかな？」

「ごまかさなくていいよ。僕は今同士を得たようで、非常に気分がいい。同盟の話、乗ってもいい」

「・・・おい、勝手に決め」

「黙ってな、英雄王」

ネズミがカラスをあらん限りの殺気で睨みつけ、アノーマリーはライフレスの言葉を制するのだった。普段にない迫力に、思わず言葉を止めてしまったライフレス。そしてアノーマリーは話を再開する。。

「さて。だがそこの英雄王の言う通り、僕が独断で勝手をするわけにもいかない。だから、これはあくまで個人的な同盟だと思って欲しい」

「いいだろう。それなら条件は・・・」

「持ちかけたのはそっちだぜ、テトラスティン。条件はこちらが提示させてもらおう」

ネズミが指を横に振る。その仕草にイラつきを覚えるテトラスティンだったが、そこはぐっと我慢した。だが、それがまずかったかもしれない。テトラスティンはアノーマリーの事をよく知らな過ぎた。

「こちらからは、今現在推し進めているヘカトンケイルとバーサーカーの情報を全て提供しよう」

「なんだと!?」

思わずライフレスの口調が戻り、アノーマリーに叫んだがアノーマリーは構わず続けた。

「その代わり、こちらにはあるものをいただきたい」

「なんだ。魔術士１０００人ほどか?」

「そんなにいらないよ。一人だけでいい」

その言葉を言って、ネズミがニヤリとする。一瞬訝しんだテトラスティンが、アノーマリーの真意に気がつくのは遅すぎた。

「一人だと・・・まさか?」

「そうだ、リシーをボクにくれないか?」

ネズミが楽しそうにくくく、と笑う。

「別に難しいことじゃないだろう? さすがに戦力として、魔術士１０００人分にリシーは相当しないはずだ。それに魔術士１０００人を実際に提供しようにも、各派閥が黙っちゃいないさ。対してリ

シー一人なら、いくらでも揉み消せるだろう？　ボクの提案はもっとも妥当だと思うけどなぁ・・・ぷくく、あはは！」

だがその言葉を言った瞬間、ネズミは腹を抱えて笑っていた。その理由がよくわからず傍観するライフレスと、毛を逆立てて怒るテトラスティン。そしてテトラスティンが放った言葉は。

「・・・無理だ。それはできない」

「あはははは！　やっぱりねぇ。テトラスティン、あの女が君の弱みか」

アノーマリーがそれみたことかと言わんばかりに、起き上がって来た。そう、アノーマリーに同盟を組む気などさらさらない。端からそれを口実に、テトラスティンの弱点を探り出すのが目的だったのである。自分の行動が予想通りの結果になって、満足そうに何度も頷くアノーマリー。

「じゃあその女をこれからは狙えばいいわけだ、なるほどねぇ」

「・・・狙えるものならな」

「やりようはいくらでもあるさ。まあ今すぐどうこうするわけじゃないけど」

「ふん。ならば交渉は決裂か」

「わかってないなぁ。最初から交渉する気なんて、こっちにはさらさらないんだよ。だいたい、弱っちい人間と交渉する意義なんかありますかっての。人間なんて、僕にとって実験動物以外の何者でもないね」

「そちらがその気なら、こちらにもやりようはある」

ネコがくるりと踵を返す。その背中を見て嘲るネズミ。

「ネズミに負けたね、ネコちゃん」
「それはどうかな？　貴様の目論見、片っぱしから潰してやろう。魔術教会の会長の恐ろしさ、思い知らせてやるぞ。やれ、エスメラルダ！」

ネコが不敵にネズミに笑い、吠えた。もっとも吼えても、その泣き声はネコの物である。だがそれと共に、圧倒的バーサーカー優勢な戦場に姿を現したのは一人の女性だった。

続く

愚か者の戦争、その２０～戦争の裏で～（後書き）

次回投稿は、８／２１（日）２０：００です。

愚か者の戦争、その２１～召喚士～

＊＊＊

「くそうっ！　こいつら、武器が通らない！」
「いや、通るには通るんだが・・・」

その頃バーサーカー三体が現れた戦場は大混戦だった。まず指揮官がいない状態の戦闘である。傭兵達は個々に戦うことには慣れてはいるが、騎士達はそうではなかった。一人一人の能力は高いものの、彼らの本領は統率された集団戦である。指揮官が不在では、彼らは力を十分に発揮できない。

そしてバーサーカー達の特性が、彼らの戦いを余計に困難なものにした。バーサーカーの特徴は、戦闘能力の高さよりも、その生命力の高さにある。半身をもがれようとも再生を繰り返し、敵にくらいつくその様は、まさに狂戦士（バーサーカー）にふさわしかった。バーサーカーの純粋な戦闘能力はヘカトンケイルの比ではない。

要は変身ができ、寿命が短い『魔王』のようなものである。魔王は作成後命令を徹底させるのが難しい。また目標となる戦場に投下しようにも、移動させるにも一苦労である。だがバーサーカーならば。人間をそのまま運んで置き、戦場の近くで薬物を打つ。そして戦場に放置すればいいだけである。これならば簡便で、しかも死んだ後は一瞬で体が腐りきって崩壊してしまうため、ほとんど痕跡も残らない優れモノである。

バーサーカーがいたからこそ、ザムウェド攻略は短期間で成立した。ヘカトンケイルだけでは、さすがにあれほど上手くはいかなかったであろう。またこの情報はトラガスロンにも流れなかったせいで、彼らもザムウェドの二の舞になったのである。クライアも時間

さえあれば同じ道を辿ったであろう。
だからこそ何か異形の存在を察知したラインは、魔術士を多めに雇い入れて用意したのである。一つはヘカトンケイル対策のため。これは実際に功を奏し、出現したヘカトンケイルには住人一組で応戦をし、囲むように戦って足止めをしながら魔術士が魔術を使って倒すことに成功した。もう一つは、正体不明の魔獣対策を彼らに頼んだのである。傭兵達はその事をラインから聞いていたのでなんとなく対応できたが、騎士達の多くは事情を知らない。彼らの強靭な精神を持ってしても、戦線放棄をしないことが精一杯だった。どの道、彼らに撤退する場所はないのだ。

「いかん、魔術士と連携を組め！」
「足止めはどうする？」
「どこか狭い所に誘導して・・・」
「そんな暇があるか！」

騎士たちが叫ぶ間にも、一つ一つと命は削られていく。バーサーカー達に踏み倒され、殴り殺され、突き刺され、食い散らかされる人間達。もはやどうしようもないかに思われた、その時。

「ちくしょう、これまでか」
「男が情けない声を出すものではありません！」

騎士が尻もちをつきながら後退した時、叱咤の声が頭上から飛ぶ。そこに壁はないはずだが、騎士が振り返るとそこには壁の様な大男が執事の様な正装に身を包み立っていた。その前には緑の髪の女が一人と、さらに横に帽子を目深にかぶった小さな男性が一人。

「あれね、今回の標的は」
「エスメラルダお嬢様、準備はよろしいでしょうか」

「よくてよ」

年の頃は３０少しだろうか。腰まである緑の長い髪をした女性はドレスに身を包み扇子を広げ、ゆるりと自分を扇いでいた。戦場にはおよそ似つかわしくないほど、優雅で落ち着いた仕草である。

その艶やかな唇から、少し怒りに満ちた声が漏れる。

「会長直々の依頼だからどんな魔獣かと思いきや、とんだ拍子抜けね。この召喚士派閥のトップを呼び付けて、たかが三体が相手とは。ドガロフ、ピッカート。お前達は必要なかったかしら」

「念には念を、でございます。お嬢様」

「は、は、はい！　申し訳ありません、お嬢様！！」

「そこ、謝らない！」

エスメラルダがピッカートの頭を拳骨で叩く。小さいピッカートはそれだけで涙目になるのだ。

「まあいいわ、ちゃっちゃと終わらせて帰りましょう。こんな埃っぽい場所では、私のお肌が荒れてしまうわ」

「そ、そ、それはお歳なだけで・・・」

「そこ、黙る！」

必要以上に正直なピッカートに、再び鉄拳が飛ぶ。彼は頭にたんこぶをつくり、またしても涙目になっていた。たんこぶが二つではないのは、ここに来るまでに余計な事を多々言ったせいだろう。

そしてエスメラルダはぱたんと扇子を閉じた。

「これ以上の傍観は騎士達の無駄死にね。いつまでたっても指示が出ないから、勝手にやろうと思っていたのよ」

「それは命令違反になるかと」

「わかっているわ！　あんな人間でも私の魔術の師匠ですからね。一応命令には服従していたのよ？　でももういいわ。命令が出たからには大暴れしてやるんだから！」

エスメラルダは優雅な外見に似合わぬ好戦的な言葉を吐いた。彼女の緑の瞳が、一層不快色を帯びる。

「さあいくわよ、お前達！　久しぶりの戦闘だからね、ボッコボコにするわよ！」

「お嬢様、口調が乱れておいでです」

「そ、そ、育ちがしれてしまいます！」

「うるさい！」

またしてもピッカートが余計な一言を発したが、既にエルメラルダは詠唱に入っており、手は使えなかった。

【血の盟約により縁を結びし我が同胞（はらから）にして、もっとも忠実なる下僕。汝が名前はボレアス。その巨躯にて、顎（あぎと）にて、剛爪にて我が敵を引き裂きぶっ潰せ！】

「お、お、お嬢様。そ、その詠唱の最後はなんとかなりませんか？」

「こっちの方が気分がでるのよ！」

とりとめのない会話の様だが、基本的に魔術の詠唱は自己暗示による集中力の強化が主である。真言、あるいは神言や呪い歌を扱うような術者はまた別だが、魔術の発動そのものは詠唱ではなく掌相によるところが大きい。

つまるところ、詠唱は当然方言などによっても差異はでるし、個人によって多少の独創性はあることが大きい。だが、その中でもエスメラルダは例外だろう。

昔一つの派閥の長の娘でありながら全く魔術を行使できなかった

エスメラルダだったが、テトラスティンには何か感じる所があったのか、彼は自らエスメラルダを引き取り弟子として育て上げた。その過程で、どうすればエスメラルダが上手く魔術を使えるようになるのか様々な試みの中、テトラスティンは最大限に彼女を怒らせてみた。結果として魔術の発動に成功したものの、それまでおしとやかな良家の娘だったエスメラルダは、美しくも一癖も二癖もある女性に成長した。彼女ほど美しくありながらいまだに独り身なのは、テトラスティンのせいかもしれない。

だが。エスメラルダが扱う召喚魔術は本物である。彼女の派閥、召喚士の派閥の者達は語る。エスメラルダの怒りは、天変地異にも等しいと。

「来た、来た、来たぁ！」

エスメラルダの周りには既に暴風が渦巻いていた。戦闘の猛りに身を任す彼女の背後には、風でその身を構成された巨大な魔獣が降臨している。

バーサーカーを上回る巨体を持つ魔獣は、自分の敵を認識すると軽く唸る。だがそれだけでも効果は十分なほど、魔獣は迫力を備えていた。思わずバーサーカーの前進が止まる。

だがそれも一瞬。狂戦士の異名を取る合成生物達はそれしきではひるまない。バーサーカーもまたエスメラルダを敵として認識したのか、そのまま吠え返す。

「ふん、生意気だねお前達。引き裂くがいい、ボレアス！」

エスメラルダが好戦的な笑みを全面に押し出し、バーサーカー達を迎え撃つ。鳴らした指を合図にボレアスがその爪を振り下ろすと、その場には地面を抉る巨大な衝撃波が発生する。その衝撃波を二体のバーサーカーは見事にかわしたが、残りの一体、巨大な腕を背中

に生やした個体は直撃を受ける。反乱軍のいかなる攻撃にも揺れなったその個体が、たまらずぐらつく。
その倒れ行き先には、いつの間にかピッカートが立っている。

「で、で、では、とどめは僭越ながら私が」

ピッカートが倒れてくるバーサーカーを下から殴りつけようとする。あまりの体格差に、その場にいた誰もがピッカートが潰れたと思ったが、バーサーカーが空中に文字通り吹き飛んだことで、全員が一様に空を見上げることになった。それにはアノーマリーですら驚いたのだ。

「なんだい、それ・・・」
「こ、こう見えても前衛担当でして」

全員の顔がやがて下を向くようになり、しばらくして轟音と共にバーサーカーが地面に激突していた。だが敵もさるもの。反抗の意志を示すように立とうとするが、今度こそボアレスの爪がバーサーカーを八つ裂きにした。
その瞬間、蛇のようなバーサーカーがエスメラルダを狙ったが、これは突如として彼女の前に出来上がった壁に阻まれた。

「お嬢様に指一本触れられると思うなよ、下郎」

壁に見えたのは全身に金属を纏ったドガロフだった。そのような全身鎧をどこから出したのか。鎧をまとった騎士三人をまとめて貫く蛇の尾を、ドガロフは簡単に止めていた。そしてその尾をボアレスがたやすく引き裂いた。

「形勢は逆転したぞ！　私の下僕に続け、騎士共！」

「げ、げ、下僕と言ってもそっちの趣味はないので、皆さまあしからず」
「そこ、一言多い！」

エスメラルダが少し華美なヒールを脱いで投げつけようとしたが、いち早くピッカートは踵を返してバーサーカーに向かって入った。
まるでエスメラルダよりも、バーサーカーと戦う方がいくらかマシだとでも言いたげに。

続く

愚か者の戦争、その２１～召喚士～（後書き）

次回投稿は、８／２２（月）２２：００です。

愚か者の戦争、その２２～それぞれの思惑～

＊＊＊

ネコ、ネズミ、カラスの使い魔は戦場で起こった出来事を一部始終眺めていた。既に形勢は、素人目にも明らかなほど完全に逆転していた。エスメラルダが即興とはいえ陣頭指揮を取ったことで、騎士達はその統率を回復することに成功したのだった。エスメラルダの手腕といえばそれは見事な物で、彼女が伊達に派閥の頭首を務めていないことが十分に知れるものだった。なにせテトラスティンの愛弟子なのである。並の女傑であろうはずもない。

ここにおいてテトラスティンはさぞかしアノーマリーががっかりしていると思い、彼の方を内心ではやや得意げに眺めたのだが、むしろアノーマリーはこの中で最も冷静に戦術を分析していた。

「ライフレス、どう見る？」

「・・・ふむ・・・召喚術自体が比較的珍しいが、その中でもかなり特殊だな・・・長時間召喚術（ステティ・サモン）に憑依召喚（ホーンテッド・サモン）、それに無機物の召喚か・・・何とも珍しい・・・」

「どれもいい素体だねぇ。ちょっと欲しいかも」

などと冷静な会話をしている二人組に、思惑が外れたのかいらつくテトラスティン。

「何を悠長に会話している？　貴様達の目論見は外れたんだぞ？」

「別に外れてもないけどね～」

「・・・だいたい、貴様は僕達の目論見をどうとらえているんだ？・・・」

ネズミがへらへらした口調で、カラスは小馬鹿にした口調でそれぞれ答える。

「この場面、勝とうが負けようがどっちにしても僕達にはおいしいのさ」

「どういうことだ？」

「君が知る必要はないだろう？」

ネズミとカラスが背を向けて帰る準備をする。もはや彼らは、この戦場に何の興味も示していないかのようだった。

そして実にあっさりと、唐突にその姿を消したアノーマリーとライフレス。後には拍子抜けしたようにテトラスティンの使い魔が佇んでいた。

そのネコがため息をつく。

「まあ、こんなものか」

「尾行しますか？」

リシーがどこからともなく姿を現した。その彼女に目もくれず、テトラスティンは返事をする。

「放っておけ。奴らはそう簡単には捕まらんし、見つけても戦って勝てるような連中でもあるまい」

「テトラ、私なら・・・」

「ダメだ。やつらの力は得体が知れない。私は確実に勝てる戦い以外はしない主義だ。リシーが一番知っているだろう？」

「ええ、吐き気がするほどに」

リシーが嫌悪感も明らかに即答した。その返答に、ネコがやや後

ろを振り向く。

「そう言うなよ。私は戦闘狂の類いじゃないんだ、戦いは勝てればそれでいいんだよ。戦闘の高揚感や、正々堂々なんて何の足しにもならん」

「それでも、戦いにはある程度の礼儀や禁忌があるでしょう？」

「そんなものは知らないな。それに、それこそあいつらには何の縁もなさそうな言葉だがね」

ネコが再びそっぽを向く。

「それよりも私達にはやることがある。私達の出番はまだまだ先でいい。それに、奴らには既にミリアザールの楔が打ち込んであるさ」

「楔？」

「喰えん男だがな。誰がこの場所を私に教えたと思う？」

ネコが笑う。リシーは少し悩んだ後、何かを思い出したように目を見開いた。

「まさか、あの男ですか？」

「そうだ。あいつは半分、いや、三分の一くらいはこっちの人間だからな。もっとも、私に好意を抱いているとはとても思えないが。それでも役に立つ情報をよこしてくれたよ」

「それにしても、彼らの行動すら把握するとは一体・・・」

「さてね。奴ほど頭が切れて、潜伏するのに長けた人材もいないだろうよ。私がミリアザールに劣るとすれば、意のままに扱える駒が少ないことくらいか」

ネコが嫉妬も隠さず爪を噛む。そのネコに付き従うように、リシーが後ろから、しかし辛辣な言葉をかける。

「それは長として君臨している年数が違うと言えばそれまでですが、テトラにも問題があるのでは？」
「否定できないのがなんともつらいね」

ネコはあたかも人の様に苦笑した。だが同時に、『そんなどうしようもない事をいうなよ』という、批判めいた目線をリシーに向ける。

「だからこそ出所は考えなきゃあね。アルネリア教会の様に矢面に立つ力も、立つ必要もないのだから。せいぜい彼ら同士で削り合ってもらうさ」
「一方的にアルネリアが削られるのでは？」
「それはない」

ネコはきっぱりと言い放つ。

「ミリアザールはそんな間抜けじゃないさ。それにアルネリア教会は我々が思うよりはるかに人材の豊富な組織だ。真っ向勝負じゃなくても、色々な絡め手はあるだろう。加えて奴らはまだまだ本腰じゃないようだしね」
「あれだけやっておいて、本気ではないと？　ならば、彼らの動きは何なの？」

リシーが虚をつかれたように、言葉遣いまで思わず普段のものに帰る。テトラスティンはリシーのその言葉遣いを久しぶりに聞き、思わず懐かしくて感慨に耽ろうとしたがそれも今は叶わぬ。

「そうだね。強いて言えば・・・遊んでいるのかな？」
「遊んで？　私達を馬鹿にするにも程が・・・」

「あるんだろうね。実際、それくらいの力が彼にはあるのだろう。だが。それが奴らの足元をすくうと、きっと教えてやるさ。それに、もう布石は打った」
「今回のことはまさか・・・」
「ああ。クルムスに私達が恩を売った事自体が、以後有効な手段となる」

ネコが決意も新たに空を見上げた。テトラスティンが何を考えているかリシーにはわからず、一人と一匹はその場でしばし意識まで風に流されるままになったが、彼らの意識を再び現実へと引き戻したのは、突然の爆音だった。

＊＊＊

「・・・よかったのか・・・」
「何がぁ？」

ライフレスの問いに、アノーマリーが答える。質問の意図を理解しながらとぼけてみせるアノーマリーに、ライフレスは苛立ちを隠せない。

「・・・テトラスティンだ・・・放っておいて、よかったのかと聞いている・・・」
「だって、どうこうできるのかい？　お互い使い魔の身でさ」

ネズミが首を振った。

「だいたいネズミはネコに勝てないじゃんか」
「・・・貴様・・・死にたいようだな・・・」
「もう！　君は本当に冗談の通じない人だなぁ！？」

アノーマリーが拗ねて癇癪を起したような声を出した。そのネズミに、カラスが吼える。

「・・・僕は冗談は嫌いだ・・・」

「はいはい！　じゃあこっちも真面目な話をするけどさあ？　どうせ踏みこんでも、あの会長には最強メイドが付いているじゃないか。それに、君の本体はアルフィリースを監視しているんだろう？　僕だけ貧乏くじを引くなんてまっぴらごめんだね」

「・・・そのメイドはそんなに強いのか？・・・」

「強いね」

アノーマリーはまだぷんすかと怒りながら答える。

「ヘカトンケイルをけしかけてわかったんだけど、アレはヘカトンケイル２０体を撫で切りにした時すら本気じゃない。その気になったらムスターを討ち取って、今回の戦乱を一人で集結させる事も可能だったかもね」

「・・・僕は直接戦うところを見ていないが、それほどだったのか？・・・」

「それほどだねぇ。だからこそ、そうしなかった彼らに興味がある。先ほどのテトラスティンの申し出は、案外と本心からだったのかもね」

アノーマリーが楽しそうに語るので、ライフレスは首を傾げる。

「・・・わからんな・・・」

「何が？」

アノーマリーはきょとんとした顔で答える。ライフレスの方はと

言えば、珍しくすっきりしない顔をしていた。

「・・・その割に、テトラスティンはあっさり引き下がったと思わないか？・・・」

「まあ交渉の引き時としては適切だったと思うけど？　それに、おそらくは交渉決裂となったとしても、それなりに策を弄していたはず。実際、ここでクルムスに肩入れするのは彼らにとっても何かしらのうまみがあるだろう」

「・・・例えば？・・・」

「クルムスの地形だよ。ここは獣人と人間の国の境界だ。いわゆる交通の要衝だよね？　ここに直接テトラスティンは自分の拠点を築きたかったのかも」

「・・・なるほど・・・諸国に魔術士が仕えているとは言っても、彼らがテトラスティンの手の者とは限らないか・・・」

「そういうことでしょう。魔術教会は様々な派閥がよりそった集合体だからね。その中で背後組織のない彼が頂点に立っているのは奇跡に等しい。もっともそこまでいたるために相当汚い手段を色々使ったんだろうけど？　まあ要するに、テトラスティンは各国への影響力が小さすぎるのさ。それらを今必死に補おうとしているんじゃないかなぁ？」

ライフレスが納得し、アノーマリーは得意げに語る。だがその内容はおおよそ合っていた。あくまでおおよそ、ではあるが。

そしてまたアノーマリーにも企みはある。ライフレスは直接作戦立案に参加する事は少ないので、全体が今どのように動いているかはあまり知らないのだ。

「・・・今回、テトラスティンの行動を許していいのか？・・・」

「まあ修正は十分にできる範囲の話だよね。それに、策士ってのは色んな場面を想定しておかないとだめなのさ。もちろん、今回ムス

ターが勝つ場合のシナリオも考えてあった。と、いうよりそちらがメインだったんだけど」

「・・・だが、目論見は外れたと・・・」

「予想外の因子が多かったね。まあそれもいいさ。むしろより望ましい形に物事を進められるかもしれない。あの女の子、レイファンだっけ？　に、あれほど求心力があるとは思わなかった。あれならむしろムスターが王であるより・・・」

何事かをアノーマリーがぶつぶつと呟いている。ライフレスはある程度中原の展開は気になるものの、もともと王である頃すらさして政治に興味を持たなかった彼である。やがて彼もまたアノーマリーの呟きの内容に興味を失ってしまった。

そして、ライフレスの興味はもっぱら別に移る。

「・・・アルフィリースはそろそろガーシュロンを抜ける頃か・・・」

「ん、何か言った？」

「・・・そろそろ僕は本来の仕事に戻る・・・アルフィリースの監視に専念しないと、色々厄介なんだよ・・・アルネリアも近いし、監視も一苦労だ・・・」

「そお？　まだ面白い出し物は残っているんだけどなぁ」

「・・・何？・・・」

その瞬間、庭園内で大きな爆発が一つ。カラスも思わず首を捻って反応する。

「・・・あれはなんだ・・・」

「ああ、ムスターがバーサーカーになったんだろうね」

ネズミが不敵に笑いながら平然と答えてみせた。

「・・・だが、バーサーカーが意識を保っていられるのか？・・・」
「普通は無理。だけどたまにあんな特殊な奴もいるんだよ。意志が強いのか、あるいはバーサーカーに適応しているのか。まあその辺は研究中。ボクが今回本当に試したかったのは、ムスターがバーサーカー化した時の戦闘力さ。推定では、今まで作ったどの魔王よりも強いんだけどね。魔術教会っていう適当な相手もいることだし、丁度よいかな」

ネズミが立ちあがり、髭をひっぱりながら語って見せた。その仕草にライフレスは苛立ちをさらに覚えながらも、アノーマリーの話に興味は引かれていた。

「・・・では、これも計算の内だと？・・・」
「想定した状況ではあるね。まさか相手が魔術教会になるとは思わなかったけど。可能性が高いのはグルーザルドだと思っていたから」
「・・・その前に反乱軍がいるだろう・・・」
「ああ、そうだっけ？」

ネズミがてっきり忘れていたとでも言いたげに、ぽんと手を叩く。

「でもそれは障害にならないなぁ」
「・・・なぜだ？・・・」
「想定では、１０００人程度の兵士なら簡単に蹴散らすからだよ、アレは。アレを止めれるとしたらさっきの緑の髪の女くらいなんだろうけど、これでもし魔術教会の派閥のトップを蹴散らしてしまうようなら、魔術教会はもう必要ないかなぁ・・・？」

ネズミが不吉な笑みでカラスに語りかけてみせた。その表情は、これから巻き起こるであろう阿鼻叫喚の渦を愉しむかのように。

続く

愚か者の戦争、その２２～それぞれの思惑～（後書き）

次回投稿は、８／２３（火）２２：００です。

愚か者の戦争、その２３～変化～

＊＊＊

「なんだよ、ありゃあ」

ラインはムスターと一度距離を取っていた。さすがにレイファンを抱えたままでは戦えないし、彼女が死んでは何もかも無駄になる。彼は一番後ろに下がると、レイファンを近くの兵士に預けて撤退するように命令する。

普段なら傭兵の命令など騎士が聞くはずもないだろうが、ここまでのラインの戦いぶりを目の当たりにした者も多かったし、何より状況がそれどころではなくて、誰しもその場から逃げ出したいのが本音だったかもしれない。

レイファンを護りながら数名の騎士が撤退するのをラインは見届けると、改めて変身したムスターをじっと見る。

「醜悪だな。こんなのをレイファンに見せたら、気がどうにかなっちまわぁ」

ラインの目に移るのは、一匹の巨大な芋虫のような生物だった。体はぬらりとした光沢に覆われた、人間の5倍ほどもあるだろう巨大な紫色の毒々しい虫。胴周りで既にラインの身長ほどはあるだろうか。口はないが、４つの目玉はなんと出たり引っ込んだりしながら、体のあちこちに浮きあがっては消えるのだ。だがしかし明確な意志はあるのか、それぞれの目が兵士達を視認している。

そして、目が全ての兵士達を見終えたのか、完全に引っ込んだ。

「ライン」
「無事か、ラスティ」

ラインの元に駆け寄ってきたのはラスティ。彼は最初にムスターに弾き飛ばされこそしたものの、少しの打撲程度で済んでいた。ラインがレイファンを抱えて後退するのを見て、ムスターを囲む指示を出しながら自らも彼の元に来たのだ。

と、いうより。一体これからどうすべきかということに悩んだのかもしれない。ここに魔術士は連れてきていないのだ。戦うべきか、一度引くべきか。レイファンの事を思えば前者だが、足止めならラインの力が確実にいると判断したのだ。そしてラスティは後者を選択した。

「ライン、足止めをするから力を・・・」
「！　やばい！」

ラインはムスターであったものの体がびくびくと痙攣するのを見て、慌ててラスティを引き倒した。その瞬間、ムスターであった芋虫のようなバーサーカーの全身から突起物が突き出される。

ムスターの周囲を囲んでいた兵士達の何人かは、反応する暇もなく全身を串刺しにされていた。

「う、うわあっ！」
「なんだこれは！」

ここに連れてきているのは反乱軍の精鋭といえど、一時的に混乱をきたすのは避けられない。ラスティも、ラインでさえ頭の中は混乱していた。

騎士達を串刺しにした突起物が引っ込むと、宙に磔にされた騎士達は事切れ一斉に崩れ落ちる。と同時に、生き残った騎士達の一人

が恐慌にかられた慌てて逃げ出した。

「ひいい」

「！　ダメだ！」

ラインが声をかけるも、遅かった。走って逃げる騎士に反応したバーサーカーは、目を一つだけかっと見開き一本だけ突起物を伸ばすと、それは生き残った騎士達の間をくぐり抜けるように、その逃げる騎士の頭を串刺しにした。

「あ、ひゅ・・・」

「くそうっ！」

「待て！」

伸びた突起を斬り飛ばそうとラスティが剣を握ったのを、ラインが咄嗟に止めた。その行動を見て他の騎士達も同じように剣の柄に手をあてたまま、その場に硬直した。

その瞬間、バーサーカーは突然胴体に巨大な口を出現させ、巨大な火球を吐いたのだった。硬直した騎士達は何人かが巻き添えになるが、距離のあったものは飛んで避けることに成功した。だが火球は最初に串刺しにした騎士を一瞬で焼き尽くすと、そのまま飛んで行って大爆発を起こす。

爆発の規模に呆然とする一同を尻目に、誰も抵抗が無いと見るや、バーサーカーはそのまま突起物をゆるゆると自分の方に引っ込めた。途中の騎士達は無視しているのである。

「これは・・・」

「こいつは急に動く物に反応するんだろうな。ゆっくりと撤退する事にしよう」

「引くのか？」

「ああ。魔術士を呼んで来て遠距離から攻撃した方がよさそうだ。こんな奴に無理に接近戦を挑む必要なんか、どこにもないだろ？」
「・・・確かに」

仲間をやられて憤懣やるかたないラスティだが、ここはラインの言う事が尤もなので、言われた通りゆっくりと撤退する事にした。もちろんその後隊列を組み直し、徹底的に叩かねばなるまい。

ラインは撤退をしながらバーサーカーを観察する。彼の考えでは、体から伸ばせる突起物の合計は限りがあるはずである。どんな化け物も、物理的な法則を捻じ曲げることはできない。体から伸びる物があるにしろ、それには体積的な限界があるはずなのである。そうでなければ、最初の一撃で全員が串刺しになっていたであろう。

ラインは撤退しながらも、バーサーカーをじっくりと観察する。他に何か特徴はないか、どうやって倒すか。辺境で四六時中戦っていた彼には、魔獣や魔物との戦闘経験も多い。

「（まずはよく観察すること、そして身の安全を確保する事。そのために騎士剣は守備の型から教わるし、いかなる時でも冷静であるように様々訓練を施された。戦場では混乱した物から死ぬ、だったか。その教えのおかげで、なんど窮地を脱したか。感謝してもしきれるもんじゃ・・・ん？）」

ラインはバーサーカーの中に何か蠢く物を見た。それをもう一度確認すると、ラインは撤退する足を止める。目を凝らして確認すると、確かに何かが中で蠢いているのだ。

「・・・なるほど、そういうことか」
「どうした、ライン？」
「ラスティ達はこのまま撤退しろ。俺はこの化け物を倒す！」

ラインが剣を手に取り、化け物の方に一歩踏み出す。それを見たラスティはラインを引きとめ、今度は先ほどと立場が逆になる二人。

「馬鹿な、何を考えている？　先ほど魔術士を呼んでくるといったばかりではないか」

「作戦変更だ、そんな暇はない！」

「何を言ってるんだ？　それなら私も残る！」

「馬鹿言ってんな。お前みたいに弱っちいのが残っても、やることはねぇ！」

「何ぃ！？」

「やかましいわよ、お前達！！」

二人の言い争いに割って入ったのは、エスメラルダである。突如として出現した、戦場に場違いなドレスの女にラインとラスティは目を丸くする。

「こんな所に・・・何者？」

「なんだ、この年増？」

「と、年増ですってぇ！？」

エスメラルダは確かに美しいが、２０そこそこの婦女子の様な瑞々しい輝きを放っているかと言われれば、それは難しいと言わざるをえない。その代わり彼女には経験と円熟味があるし、以前結婚してはいたものの、まだ子どもはもうけていない。なのでそれなり以上に体の線も整っているのだが。年齢だけは本人も気にしている所である。

遠慮のないラインは、容赦なく指摘してしまった。初対面の人間に気にしている事を指摘され、当然のごとく怒るエスメラルダ。

「こ、この・・・」

「お、お嬢様。落ち着いて！　いくら的を得ているかといって、お、怒ってはなりませ・・・」
「うるさいー！！」

エスメラルダから迸る魔力が放出される。その猛烈な勢いで、近くにいた騎士達は後ろに突き飛ばされるようにこけてしまった。ラインも凄まじい魔力の奔流に思わず口笛を鳴らしたが、当然のごとくバーサーカーが彼女に反応した。

「お嬢様！」

バーサーカーの目が見開かれ、エスメラルダに向けて何本もの突起物が迫る。それに気が突きつつも悠然と構える彼女に、またしてもドガロフが彼女の盾になり突起物を止める。
そしてエスメラルダも、それがさも当然とでもいわんばかりにドガロフの後ろに控えているのだ。

「ふん、醜悪な化け物め。ボレアス！」

庭園を破壊しながら召喚獣ボレアスが現れる。先ほど召喚したこの生物を、まだ彼女は維持しているのだった。普通の人間ではわからないことだが、これは召喚術について知識のある者なら考え難い光景である。
召喚術は別世界、あるいは位相を少しずらした世界から生物を召喚するものと、一般的には認識されている。もっと正確な事をいえば、普段は形をとらない精霊や、あるいは遠く離れた生物を召喚して使役するのが召喚術である。
魔王なども魔物や魔獣を召喚するが、直接契約対象と印を結んで契約を行えば、例えば人間でも魔物や魔獣を召喚する事は可能である。エスメラルダが行うのは精霊召喚であるが、これは莫大な魔力

を消耗するため、普通は一瞬、あるいは精霊の一部を使役するのが精一杯である。

だが彼女は神にも近いとされるボレアスを使役して、なお維持していた。これは当代随一の召喚士である彼女ならではの芸当である。

そのボレアスが新たな敵を認識し、唸る。

「その醜悪な化け物を引き裂け！」

「ブオオオオオ！」

ボレアスの出現に一同が驚く暇もなく、エスメラルダの命令に忠実にボレアスはその４本の爪をバーサーカーに向けた。そして巻き起こる爆風。同時に辺り一面には緑色の血飛沫が飛んだが、ラインは冷静な視線を崩さない。

――それくらいじゃ死なないよ――

突然耳に入ったラインはその声にはっとした。周囲を見渡すが、どうやら誰にも聞こえなかったのか、彼らは一様に化け物の行方を気にしていた。

「（なんだ？　この戦場に、まだ何かいる？）」

ラインが周囲を見渡し続けると、彼は城壁の高い所にネズミが座っているのを見つけた。なぜそのように小さいものが目に入ったのか。それはそのネズミの異常なまでの存在感か。この騒ぎの中、ネズミは逃げるでもなく高い位置から自分達を見下ろしているのだ。そして遠目だが、ラインにはそのネズミが笑っているように見える。まるで楽しい劇でも見物しているかのように。そう思った瞬間、ラインの怒りは頂点に達したのだ。

「ふ・・・ざけるなよ」

ラインはその瞬間、倒すべき敵が誰かわかった。元凶はあのネズミ。本当にネズミであるわけがないのだから、それを操っている誰か。あいつを倒さない限り、何も終わらない。何度でも同じ悲劇は繰り返されるだろう。

「てめえっ！」

「ライン？」

走り出そうとするラインを止めたのはラスティの叫び声ではなく、猛烈な殺気。あるいは邪気。はたまたただの強大な力の塊と言い変えてもいい。

続く

愚か者の戦争、その２３～変化～（後書き）

次回投稿は、８／２４（水）２２：００です。

愚か者の戦争、その２４～生まれ出る魔王～

「気を付けなさい！」

叫んだのはエスメラルダ。だが彼女が叫ぶまでもなく、大方の者が恐ろしいまでの殺気を感じとっていた。

「ぬう」

「これは・・・いけませんね」

ドガロフだけでなくピッカートもいつになく真面目な顔をする。そうさせるだけの殺気が、邪気が、圧倒的な力が周囲を威圧する。

「こいつはやべぇな」

ラインですら背中に冷たい物が流れた。そして全員を脅かし、驚愕させ、その心胆を寒からしめるモノ。あまりに簡単に死を連想させるそれは、ゆっくりと潰れた芋虫から這い出て来る。紫の泉から這い出るそれは、どこか妖しい雰囲気をたたえている。

例えるなら。

死ぬとわかっていても飛び込んでしまう。そういった妖しさを、その光景は放っていた。だがその泉の中から出てきたのは、よく見知った顔であった。誰であろう、ムスターである。

「ムスター？・・・いや、違うな」

「ラインか？」

ムスターがゆっくりと答えた。だがもはや、先ほどラインが一瞬

たりとも親近感を覚えたムスターではない。ラインの細胞一つ一つが警告を発する。『こいつは危険だ』と。今だかつてここまで全身が警報を発する事態に出会った事は、ラインの記憶では数えるほどしかない。

「ははっ。魔王の軍隊の中に分隊一つで取り残された時より、よっぽどやべぇや」

「何をぶつぶつ言っている、ライン？」

ラスティが隣で尋ねるも、彼もまた全身に冷や汗をぐっしょりとかいていた。ラスティも素人ではない。目の前にいるモノがどれほど危険かくらい、本能でわかる。

そのラスティの肩をラインは優しく叩く。

「ラスティ、悪い事はいわないから引け」

「・・・お前はどうする？」

「俺は戦う」

ラインはきっぱりと言い放つ。その目には輝きが戻りつつあった。顔つきが、本人も気づかぬままに騎士のそれへと戻って行く。

そんなラインが行動を起こすより、ラスティが彼を止めるより、ムスターが次の言葉をつなぐより早く、エスメラルダは動いていた。

「ブオオオ！」

ボレアスはエスメラルダに言葉で命令されなければ動けないわけではない。召喚された時より以心伝心。本来ならば言葉など必要ともせず、エスメラルダの意志を１００％反映して動く、最強の下僕である。エスメラルダがボレアスの名前を呼ぶのは、ボレアスをただの下僕以上に可愛がっているのと、後は気分の問題である。

だからエスメラルダが本気になった時、彼女は無言になるのだ。

「む？」

「ゴルゥ！」

ボレアスがムスターを体当たりで吹き飛ばす。たまらずムスターは壁まで吹き飛ぶが、ボレアスは彼をさらに追撃し、何度も何度もその爪を叩きこむ。そう。何度も何度も。

その様子を見守っていたエスメラルダは圧倒的優勢にも眉一つ動かさず、優雅に扇子で自分を扇いでいた。

「ピッカート」

「はい。撤退、でございますね？」

「そうだ。アレとやるには準備が足りな過ぎる。ここは一時撤退し、準備を整えるのが得策だろう。我々は殿（しんがり）だ」

「承知いたしました」

ピッカートが恭しく頭を下げ、騎士達の誘導を始めた。ドガロフはエスメラルダを護る位置に立つ。圧倒的優勢になぜ撤退するのかと騎士達は不思議に思ったが、勘の良い者は既に気が付いていた。

もちろんラインも気がついている。

「無理なのか？」

ラインはエスメラルダに話しかける。その彼を横目でエスメラルダはちらりと見た。普段なら召喚中に他所者と話す彼女ではないが、彼の真剣な表情に対等に話ができる物と判断したのか。彼女にしては珍しくまっとうに返事をした。

「無理ね」

「それほどか」
「それほどよ。私が戦ってきた相手の中でも、5指に入る大物よ。一番ではないけども」
「俺の中でも一番じゃねぇがな。それでも大物だな」

エスメラルダとラインは、奇しくも頭の中で同じ立場のものを想像していた。彼らにとっての師匠。それ以上の実力者を、彼らはまだ見たことがなった。そのうち撤退がほぼ完了する頃、ボレアスの手がピタリと止まった、止められた。

「じゃれつき過ぎだ、風の使い魔よ」
「ゴルゥ？」

ボレアスの爪を押さえたのはムスターの腕。彼のお世辞にもたくましいとはいえない腕が、ボレアスの爪を止めているのだ。

「中々だが・・・むん！」

ムスターが一つ力を込めると、バランスを崩したボレアスは後ろに倒れてしまった。慌てて起き上がるボレアスの顔面目がけて、ムスターが手に光球を作り出す。

「へえ」
「いけない！」

アノーマリーは感心し、エスメラルダは焦る。エスメラルダはムスターが魔術を使うのを見ると、慌ててボレアスを反召喚（アンサモン）した。自分で召喚した召喚獣が倒されると、召喚獣が失った部分は自動的に術者の魔力や体で代償される。ボレアスほどの強大な存在を消し飛ばされたら、エスメラルダの体は跡形もなく消えてもおかしくはな

いのだ。
エスメラルダの反召喚とムスターの魔術が同時に発動し、間一髪でエスメラルダは難を逃れた。彼女が焦る様子を見て、薄く笑うムスター。

「ふ・・・」
「何がおかしい！？」

エスメラルダが馬鹿にされたのかと怒りと共に反論するも、ムスターの反応は薄かった。彼の唇は他の何者も気にしないかのように、自分の調子でゆっくりと動く。

「なぜ笑うかと？　それは可笑しいからだ。ワシがまだ全力を出していないのに、その慌てようだからな。これから全力を出したら、貴様達がどのような反応をするか・・・想像しただけで笑えんか？」
「なん、ですってぇ？」

エスメラルダは怒りと共に恐ろしさで震えた。屈辱に怒るのも彼女ならば、冷静な判断力でムスターの言葉が真実だとわかっているのも彼女だった。
その彼女を見て、ピッカートが前に出る。

「お下がりを、お嬢様。私が時間を稼ぎましょう」
「・・・一時撤退するわ。ドガロフ、アレを準備なさい」
「承知でございます」

ピッカートを盾に、撤退をもくろむエスメラルダ達。そこにネコの使い魔がやってくる。

「エスメラルダ」

「会長？」

エスメラルダが自分の師匠の使い魔に気がつく。ラインはその展開に何がおこっているのかわからず注意深く見守るのみだ。

「何をやる気だ？」

「四柱召喚で一気に潰します」

「ふん、それほどか」

準備が終わるまでに、足止めをしているピッカートは高確率で死ぬだろう。テトラスティンもその決断がわかりながらも、ムスターを倒すにはそれが最も可能性が高いと判断した。

だがテトラスティンはそれがわかりながらもエスメラルダを止めなかった。ピッカートはエスメラルダの従者であるし、テトラスティンとしてもここでクルムスに恩を売るならピッカートの命一つならやすいとさえ思っている。

リシーを戦わせる事もできるが、テトラスティンとしてはそれは避けたかった。リシーはライフレス達に対抗する切り札である。こんなところでその実力を明らかにするのは避けたかったのだ。エスメラルダもまたそんな自分の師の意図を理解できるからこそ、何も言わない。

「では会長、準備をしますので」

「いいだろう、だがお前はここでは死ぬな。それでは割に合わん」

「それはどうも」

テトラスティンの言葉に皮肉交じりに返事しながらも、エスメラルダは下がって行く。四柱召喚は代償も大きい。一つ間違えばエスメラルダも無事では済まないのだ。

そしてドガロフと共に下がった彼女。後にはピッカートが残るが、

対峙したムスターの様子が変わる。

「ふむ、相談は終わったか？」

「ええ、あなたの足止めは私がやりましょう」

「それはおそらく無理だろうな」

ムスターは優越感ではなく、冷静に分析した言葉を出した。

「今から私は一段階強くなる。それまでに先ほどの女が我が身を省みず、持ちうる最強の術を使うのが正しかった。これから使う術も相当なのだろうが、その詠唱中にワシが女を仕留めることになるだろう」

「そうさせないための、私です」

「だから、それが無理なのだ」

ピッカートが一瞬苛立ちを覚えた瞬間、その感情は恐怖へと変わった。それだけの異様な気を、ムスターが放ち始めたのだ。

そのムスターが、ちらりとラインの方を見た。

「ふむ？」

「・・・なんだ」

「妙な感じだ。お前の名前、先ほど言ったはずなのにもはや思い出せん。これからワシは別の存在に生まれ変わるのか、記憶が真っさらになるのだろうな。お前はワシの部下か友だったのか？」

「多分、どっちでもねぇよ。ただ、俺はお前を斬るだけだ」

ラインはそっけなく言ったし、それは彼の中で真実でもあった。だが、寂しさをなぜ自分が覚えるかは、ラインにもわからない。

そんな彼を見て、ムスターが知らず笑う。

「だが・・・なぜか貴様には親しみと、これは信頼か？　を覚えるな。私を斬るか」
「ああ、斬るよ」
「なら、そうしてもらおう」

その言葉を最後に、ムスターの体が二つに割れた。脱皮というには凄惨な光景。血飛沫と共に自分の体を脱ぎ捨て出てきたのは、全く別の存在。その姿は子ども程の大きさでありながら、姿は赤ん坊だった。

血飛沫を全身で受け止めながら生まれ出でた赤ん坊が慟哭の声を一つ上げた。空気が大きく震え、ピッカートは一つ後ずさる中、ラインはその冷静さを深めていった。
そして、目も開かず皺だらけの完全な化け物かと思われたその個体は、人の言葉を流暢に話してみせたのだ。

続く

愚か者の戦争、その２４～生まれ出る魔王～（後書き）

次回投稿は、８／２５（木）２２：００です。

愚か者の戦争、その２５～末路～

「人生を、やり直そう」

赤ん坊は語った。その背中には蝶のような羽が生えてくる。

「もはや記憶はない。自分の名前もわからない。だが、人に虐げられた事は覚えている」

赤ん坊が一つ羽ばたくと、その体が宙に浮いた。

「私は人の幸せを願っていたはずだ。なぜ私は虐げられた？」

赤ん坊が中にマグマを滾らせる、静かな湖面の様な瞳をうっすらと開き、語る。その赤ん坊の問いにピッカートは黙っていたが、あえてラインは答えた。

「さてな。お前の考える幸せが他の人間にとって幸せとは限らん」

「幸せを望むのは悪いことか？」

「俺に難しい事を聞くんじゃねぇよ。俺にわかってんのは、お前をここで倒さないと死人が増えるってことだけだ」

ラインが剣を構える。それに続くようにピッカートも構え、ネコは悠然と佇んでいた。

赤ん坊はピッカートではなくラインをゆっくりと見ていたが、やがてその瞳が徐々に赤くなる。

「私は、死なない」

羽ばたきが大きく、せわしなくなる。

「私は死にたくない。こんどこそ生き延びて、多くの者に幸せを与えなくては」

「これは・・・危険性があるのか？」

ピッカートが一瞬赤ん坊の意図を疑うが、ラインは違った。

「よお。お前の考え『幸せ』ってやつを聞いていいか？」

「何を当たり前のことを。全員心の臓を貫き、首を刎ねればいいではないか」

「なっ・・・」

ピッカートが驚いた。だがラインはどこかでその可能性を考えていたようだ。さして彼は驚いてもいなかった。

「なんでそれが幸せんなんだ？」

「私は一度死んだ。そこには何もなく、ただ静かな世界が広がるのみだった。憎しみも、後悔も、差別もない。あそこでは全ての人間が平等だ。あの静かで穏やかな世界を皆にも見せてやりたい。だから私は死にたくない」

「・・・なるほど、こいつはイカれてるな」

ラインは剣を一つ振った。その傍でネコがラインに話しかける。

「おい、傭兵」

「なんだ？」

ネコが話すと言う事実に、ラインはさして驚かない。ネコはラインに忠告する。

「私から一つアドバイスだ。アレの力は大戦期の魔王に近いだろう。近年に現存するチンケな魔王などとは比べ物にならんほど強い。長ずれば大魔王となるほどの逸材だ」
「だから？」
「悪い事は言わん、下がれ。エスメラルダならば仕留められる」
「で、この子どもは見捨てるのか？」

ラインがピッカートの頭をぽんと叩く。その態度にピッカートは少しむっとした。

「子どもって、私はそろそろ３０近いのですが・・・」
「正義感か？」
「違うな」

ピッカートの言葉は無視され、ラインは話を続けていた。ピッカートは文句を言いたかったが、話も場面もいたって真剣であったため、さしもの彼も何も言わなかった。

「あいつは俺が斬ると約束した」
「まあ自殺は止めんよ」
「生憎と勝算のない戦いはしないクチでな。ダンサー！」
「いつでもいいぞ、マスター」

ラインがダンススレイブを抜き放つ。ラインがダンススレイブを振るうのは実はそう珍しいことではない。ラインは最初にマンイーターとの戦いでダンススレイブの危険性を認識していたから、より何度もダンススレイブを振るう鍛錬をした。
自ら扱う武器を知る。これは戦う者の基本である。だがラインはダンススレイブの魔剣としての性能は把握しつつも、ダンススレイ

ブの過去は聞かなかった。興味はあった。だが聞くのは躊躇われた。ダンススレイブの性能を考えれば、過去にどういう扱いを受けたくらいは想像がつく。彼女が折に触れてはその一端を話す事もあったが、ダンススレイブの悲しみは、剣の束を通して十二分に伝わって来たから。

だからラインはダンススレイブを使う事を遠慮した。これ以上ダンススレイブに戦いを経験させたくはなかった。だがダンススレイブは契約したら最後、使用者が死ぬまで決して離れることができない。そしてラインはダンススレイブに触れた段階で契約が完了してしまっている。つまり、ラインと共にいる限り、ダンススレイブは嫌でも戦いに巻き込まれるのだ。

それでもラインは簡単に死んでやる事は出来ない。そして必要とあれば彼はダンススレイブを振るった。そうした事が必要に迫られれば出来てしまう自分に吐き気を覚えながら。

剣を抜き放ったラインを見て、テトラスティンは不思議な感覚に見舞われた。理屈ではどうやっても剣一本で太刀打ちできる相手ではない。過去には魔王を倒した剣士の話があるが、彼らは魔術を使うか、集団で挑んだか、あるいは魔眼などの特殊能力を備えていた。純粋な剣士が魔王を倒すなど、聞いた事もない。

「何を剣一本でやろうと・・・まさか？」

テトラスティンが思考を巡らせた時には、ラインは既に動いていた。ピッカートすら見失うほどの速度。かつてムスターであった魔王に疾風のごとく突撃したラインは、その腕を簡単に斬り飛ばしていた。赤ん坊もまた、腕を斬りおとされてからその事実に気がつくほどの速度。

「いっけね、目標がそれちまった」

「やはり我の扱いはまだまだだな」

「やかましい、じゃじゃ馬め」
「そのじゃじゃ馬女一人くらい扱えなくては、甲斐性が知れるぞ」
「誰が女だ、誰が」

二人は冗談を言い合いながら、剣を構え直す。その彼らを見ながら、テトラスティンが呟いた。

「あれは・・・まさか魔剣ダンススレイブか」

テトラスティンの顔色が変わった。ラインの先ほどの動きを見て、テトラスティンは剣の正体がわかったのである。

魔剣ダンススレイブ――使用者の身体能力を極限まで高める魔剣。使用した者は、およそ地上の生き物とかけ離れた身体能力を得る。例えば人間が使用した場合、走れば馬を彼方に置き去りにし、腕力は巨人族を軽く投げ飛ばし、剣を振るえば竜の鱗を布のように切り裂くとされる。また五感も研ぎ澄まされ、目は一つ離れた町の蝿の動きを捕え、耳は１０人の会話を聞きわける。ダンススレイブの所有者は生物としての能力を、限界以上に引き上げる事を可能とする。

だが反動もまた大きい。過剰な身体能力は、反動により使用者の体を壊す。いかに動けようとも、その衝撃を受け止めるのは使用者の体なのだ。また研ぎ澄まされ過ぎた五感もやがて限界を迎える。過敏になりすぎた目は光を失い、聞こえすぎる耳は全ての音を拾い始める。そう、１０軒離れた家の桶に落ちる水の音さえ。舌は全ての食べ物が砂を噛むように無味となり、死んだ嗅覚は季節の変わり目すら教えてくれない。そして最後は恋人の手を握った感覚すらわからなくなる。

ダンススレイブを使い続ければ廃人――これがダンススレイブが魔剣と呼ばれたゆえんである。そして彼女の使用者は例外なくぼろぼろとなり死んでいったのだった。

そしてその魔剣を構えたラインを見て、この事態に赤ん坊が危険

を感じとる。

「おぎゃあああああ！」
「くっ、なんて叫び声だよ」

その咆哮の様な泣き声に周囲の木々が揺れる。そして赤ん坊は宙を飛ぶのを止め、四つん這いになるように地上に着地した。するとその羽は一際大きく広がり、口が羽の中に無数に出没する。さらにその口の部分は地上にぼとぼとと落ち、球に口のついた肉塊となった。

「ギ、ギギギ」

ほどなくして、呻き、歯を鳴らす肉塊から足が生える。その足はみるみるうちに発達し、まるで昆虫のような長距離瞬発を可能にする、異常に長く太腿が発達した足となる。その奇妙な生物がラインを敵と定めた。

「ライン、来るぞ！」
「んなこたわかってる」

ダンススレイブが心配した通り奇妙な生物が溜めを作り、一斉にラインに向けて突撃し始めた。矢よりも速く迫る無数の口にラインの身は細切れにされると思われたが、ラインの体を口が突きぬけて行ったのだ。

「ギ？」
「遅えよ」

無数の口はラインとすれ違いざま、全てが両断されていた。口が

噛みついたと思ったのは、ラインの残像だったのだ。ダンススレイブの所有者は矢の雨が降り注ぐ戦場すら、その中を悠然と歩いて敵に斬りかかると言われている。この程度の数は今のラインにとって苦痛でも何でもない。

その光景を見た赤ん坊の警戒心がさらに上がる。今度は羽から無数の突起物を伸ばそうとする。ほとんど予兆のない攻撃。だからこそ先ほど騎士の多くは串刺しにされた。だがラインは羽から突起物が伸びる瞬間すらしっかりと目で捕えていた。無数の突起物の間隙を、ラインは見事に摺り抜けて赤ん坊に突進しようとする。

「ギャアアアア！」

「！」

だがそれが赤ん坊の誘導だった。突起物の中を摺り抜けることで、逆に躱すスペースを失くしたラインに、赤ん坊の口から吐き出された巨大な火球が迫る。

「だから、無駄なんだよ」

暑く燃え盛る、庭園を一撃で炎の海に包むほどの火球を前に、ラインはそれでも冷静だった。ラインは躊躇なくダンススレイブで火球を両断したのだった。それがさも当然とでも言わんばかりに。

ラインが両断した火球が後ろの庭園に激突し、庭園は火に包まれた。燃え盛る炎を背後に剣を握ったラインは、まさに鬼神にしか見えなかった。

「なんだ。なんなのだ、お前は！」

「ただの傭兵だよ。ただのな」

赤ん坊が恐怖におびえながら次の行動を起こそうとした瞬間、目

の前に来たラインが赤ん坊の胸を深々と突き刺していた。
赤ん坊は自分が貫かれた事を確認してから、ラインの目を見る。
「私を一度突き刺したくらいで・・・」
「知ってる、急所は三つあるんだろ？　鼓動が三つ聞こえたもんな。だから、全部刺しておいた」
「は？」
赤ん坊が再び自分の体を確認すると、確かに体には三つの貫かれた後があった。何の事はない。ラインの突きが速すぎて、赤ん坊は自分が貫かれた事さえ認識できていなかったのだった。
「馬鹿な・・・こんなことが」
「馬鹿も何も、これが現実だ」
「なぜだ。これで私の人生は終わるのか？　生まれ変わって、これからやり直して・・・ここで死んだら私の人生は何だったのだ？」
赤ん坊が縋るような目でラインを見る。だがラインは憐れむでもなく、蔑むでもなくその目をじっと見据えた。
「んなこと知るかよ。人生なんてのは不平等だ。やり直せるなら俺だってやり直したいさ。だけどそんなことは誰にもできねぇ。既に起きた事をなかったことにするなんてな」
ラインの胸に悲しみが湧くのを、ダンススレイブは彼の手を通して感じていた。
「人を利用して一生うまい汁を吸う奴。どんなに出来た人間でも、一生人に利用されるだけの奴。色んな奴がいるさな。だけどな。結局は自分が自分の人生をどう思えるかだ。確かにお前の人生はロク

でもねぇさ。聞いた俺でもそう思うんだから、お前にとってはもっと不条理だと思ったのかもな。だがよ。そんなお前の人生は、全て不条理なだけだったか？」

「・・・何？」

「最後にお前に受け取った箱の中身、ちゃんと見たぜ。アレはこの国の王の証である印章だったな。予定は変わったが、あれはお前からの贈り物だったとちゃんとレイファンに伝えるよ。お前の兄は狂人だったが、それでも妹だけはいかなる時も大切に思っていたとな。それすらもお前はなかった事にしたいのか？」

その言葉を聞いて、赤ん坊の瞳に一瞬だが正気の色が戻る。その瞬間、ラインは赤ん坊を八つ裂きにしてとどめを刺したのだった。

救いのないムスターの人生を思い、ラインの気持ちは沈んでいた。それでも、転がった首の死に顔が安らかなのは、多少なりとも彼が救われたのではないかと、ラインは信じたかった。

続く

愚か者の戦争、その２５～末路～（後書き）

次回投稿は、８／２６（金）２２：００です。

愚か者の戦争、その２６～残酷な真実～

「ちっ、胸糞悪い」

ラインがムスターであったものの死体を見ながら吐き捨てるように言った。それは、偽らざる彼の心境。そんな彼は赤ん坊の死体を眺めながら、その場を去ろうとする者の足音に気付くといち早く回り込んだ。

「ひ、ひえっ！？」
「どこに行きやがる」

全ての事が終わったことを確認したアノーマリーの使い魔を認識したラインが、いち早く彼の前に立ったのだ。

ネズミを見下ろすラインの表情は鬼そのものだった。ラインは既に確信している。この使い魔の主こそが、全ての元凶だと。ムスターを操っていたのもこいつだろうと、おおよその予想はついているのだ。ラインは知っている。この世には自分の及びもつかぬほど、邪悪な本性をした生き物がいると。自らは決して手を汚さず、人がもがき苦しむさまを楽しめる連中がいると。そういう奴らは、決まって自分の仕掛けた罠にひっかかり、もがき苦しむ哀れな獲物を見物しに来るのだ。

ラインがこれ以上ないくらいの殺気を持ってネズミを見下ろすと、そのネズミが急にぺこぺこと怯え始めた。

「ひいい！　許してぇ～僕に戦う力はないんだぁ！」
「やめろ」
「何をやめろっていうのさぁ。だって、だってぇ！　ホントに戦う

力はないんだよぉ！　こんな無力なネズミを虐めるつもりかい？　そういうのは虐待って言うんだよ、知ってる？　お願いだからやめておくれよぉ、怖いよォ」

「怯えたふりをするのはやめろ！」

苛立ちが極限に達したラインは、ネズミの前の地面を抉った。衝撃でネズミが宙に吹き飛ぶが、ネズミは鮮やかに後ろに一回転して着地したのだ。

「なーんだ、ばれてたのか」

ネズミは先ほどまでの態度が嘘のように、悪びれる風もなくいけしゃあしゃあとのたまってみせた。

「当然だ。気色の悪い猫撫で声なんぞ出しやがって」

「ネズミなのに猫撫で声とはこれいかにってね」

「テメェ、ふざけるのも大概に・・・」

「冗談、冗談」

ケケケ、とネズミが笑うのを、ラインはぐっとこらえてみせて。その仕草に、ネズミが感心したように彼を見上げる。

「いやいや、君がどういう反応するか見てみたかったんだけどね。もっと怒りで我を忘れているかと思ったが、中々どうして冷静じゃないか」

「当然だ、お前には聞きたいことがあるからな」

ラインが再び剣をネズミに向けた。剣を向けられてもいまだにへらへらしているネズミ。

「この使い魔を斬ろうってのかい？　無駄な作業だね」
「いや、斬る気はねぇ。もったいないからな」
「もったいない？」
「そうだ。お前は貴重な情報源だからな」

ラインが優位を確信したのか、ニヤリと笑った。その様子に、ネズミが不審がる。

「情報源？　ボクを拷問にでもかけるつもりかい？　どうせなら、美人に拷問してほしいな」
「貴様の性癖なんぞ聞いちゃいねぇ。それにネズミなんぞ面倒くさくて、拷問にかけていられるか。それよりも魔術教会の連中がいることだ。傭兵の魔術士もいるしな。あいつらに頼んで情報を引き出すさ」
「それは確かに困る。じゃあこうしようか」

ネズミが提案をした。

「ボクはあることを黙っていてあげるよ。だからボクには何も聞かないでくれないか？」
「あぁん？　何を黙ってくれるって言うんだよ」
「そうだね～君の恋人、いや婚約者だった彼女が君と辺境で別れてから死ぬまでに何をされたか・・・なんてどうだい？」
「！？」

その言葉を聞いて、ラインの動きが凍りついた。その態度を見て、ネズミの顔が邪悪に歪む。

「なんて言ったっけな～、彼女の名前。ああそうだ、フロレンス＝ウティナ＝ボルトハイレンだっけ？」

「・・・めろ」
「まあ最悪な死にざまだったよね。だって――だったのを君に知られてさ。知ってた？　彼女ってば――の時に君の名前をずっと泣き叫びながら呼んでたんだよ？」
「やめろ」
「それでも君の前では一度たりとも辛い顔を見せなかったもんね～。大した女だったよ、実際。そんな彼女が命と誇りにかけても君を騎士団に残そうとしたのに、君ったら騎士団辞めて、あげく国まで追われて。全く、何をやっちゃってるんだか」
「やめろって言ってんだよ！！」

言うが早いか、ラインの剣はアノーマリーの使い魔であるネズミの胴を真っ二つにしていた。剣速の凄まじさに、そのネズミの上半身が壁に叩きつけられた。アノーマリーの使い魔は生きている生物を使っている。そのため血だまりの中壁に張り付いたネズミが、絶命を前に笑う。

ラインは息を切らしていた。体力を使い果たしたのではない。あまりの怒りのためである。

「アハハハハハ！　やっぱりあの時の騎士なんだね、君は！」
「ハア・・・ハア・・・」
「いやー、傑作だねぇ君は。あれほど転落した人生を歩んだ人間もそういないね。しかも理由がたかが女！　全く人間って奴は、どうしてこうも愚かしいかね」
「うるせえっ！」

ラインはなおも激昂した。この怒りはネズミを殺したくらいでは収まりそうもない。

「テメェになにがわかる！？　あの女は俺の全てだった！」

「本当に？　君は元々騎士になりたかったんだろう？　しかもあの国で最高の騎士に！　あの女はそうなるための踏み台だったはずだ。なのに騎士として出世する事がその女と結ばれるためだなんて、いつから目的と手段が擦り変わったんだい？」
「何だと？」
「だってそうだろう？　君が国で最高の騎士になるんだったら、あの女の顛末はもはや関係なかったはずだ。君は本国での出世が決まっていたし、順調であれば君は今頃一つの軍を任されていたはずさ」
「なぜわかる？」
「だって、そうなるように手配したのは僕達だから」

アノーマリーが楽しそうに笑った。その笑みと言葉に、ラインの顔が青ざめる。

「な・・・に？」
「ネタばらしをしちゃうとね、君の恋人は正直邪魔だったんだよ。あの子がいると、傾きかけたあの国が復活してしまう恐れがあった。だから君を近づけたのさ。変だと思わなかった？　ただの癒しい平民風情が、あの名門貴族の令嬢の世話係に任命された事。その後士官学校に入りもしない平民が、異常な速度で出世した事。また出世できるだけの任務が回って来た事。だからこそ君は名門貴族の、しかも優秀な騎士の出世速度についてゆけた。その中で、もしかすると君達が結ばれることであの子の目標がぶれる事を期待したんだけど、逆に互いを刺激し合っちゃって、予想よりも君達は遥かに優秀になっちゃった。これは困りものだよ」
「・・・」
「だからあの娘には早々に退場してもらったのさ。変だと思わなかった？　あれほどの名門貴族があっという間に没落して。挙句あの様だからね」
「じゃあ・・・何か？　全部あれは・・・貴様が手を回したっての

か？」

ラインは振り絞るように声を出した。もう既に怒りでおかしくなりそうだったが、それでも聞かずにはいられなかった。答えはわかりきっているはずなのに。

そのラインに浴びせられたのは、さらに残酷な言葉。

「君を選んだのはたまたまだけどね。だから僕と仲間達だってば。それにあの子は当初は殺す予定はなかったんだ。だけど君がいつまでたってもあの子に手を出さないもんだから。さっさと押し倒して子どもでも作って、あの子を表舞台から下ろしてくれていればよかったのに。君は騎士としては優秀だけど、政治的な駆け引きはさっぱりだからね。まあ頭の悪そうな人間をわざわざ選んだわけだけど？　君が矢面に立っていてくれていれば、適度にバランスがとれて全て解決だったのさ。まあいうなれば、君のせいで死んだんだね、あの子。アハハハハハ！！」

その甲高い笑い声を聞きながら、ラインの意識は絶望に沈んで行った。そしてしばらくして、あまりに耳障りなアノーマリーの狂った様な笑い声に、ラインが反応してダンススレイブを無意識に振り下ろす。その瞳には光はなく、ただ感情のない死神のような目があった。

その目を見て、アノーマリーはピタリと泣きやむと、ラインの剣が下ろされるよりも速く言葉を紡いだ。

「まあ殺すのはあの忌まわしい精霊騎士、ディオーレ＝ナイトロード＝ブリガンティでもよかったんだけど、さすがにマイスターでもあるあの女傑を殺すのは難しいし、何より素晴らしい逸材すぎて忍びない。だから君の女は色んな意味で好都合だった。

そして最後に一つ。君の頭ではムスターの首を元に諸国と停戦協

定を結ぶつもりだったんだろうけど、そんなへまは僕はやらない。ムスターは勝っても負けてよかったんだよ。ククク、ハハハハハ！」

アノーマリーの笑い声が聞こえきる前に、ラインの剣がネズミを完全に肉塊に変えた。そこまでされては、さしもの使い魔も言葉を話すことはできない。アノーマリーの使い魔は完全に消滅したのである。

そして、離れた場所では同時に、ムスターであったものの死体は音もなく崩れて行った。これでは、ムスターを討ち取ったという証拠はどこにも残らない。

そこにテトラスティンがゆっくりとラインの背後から歩み寄る。

続く

愚か者の戦争、その２６～残酷な真実～（後書き）

次回投稿は、８／２７（土）です。

「やったのか？」
「ああ。殺した」
「使い魔を殺しても意味があるまい。まだ拷問にかけた方がよかったが、まあ・・・何も得られんかったとは思うがな」

それほど甘い相手ではないとテトラスティンも思っていた。だが一応打てる手は打っておきたかったのである。ラインの剣圧で吹き飛ばされたネズミの残骸をテトラスティンは横目でちらりと見るが、何の成果も得られない事は一目瞭然だった。
ネコがため息をつく。

「もっと冷静になれなかったのか」
「冷静？　無理だ！　自分の女を殺されて黙っとけるって言うのか、お前は！」
「私ならできるな」

即答して見せたテトラスティンにラインが言葉に詰まった。テトラスティンの使い魔である目は、恐ろしいほど冷たい目をしていた。

「不幸の比較などできんがな、この世には貴様の考えがおよそ及びもつかんような不幸で残酷な出来事はいくらでもある。あいつらを相手にするなら特に心得ておくことだ。お前の運命は、これから尋常ならざるものになるだろうからな。今何をすべきか、特によく考えろ。一つ一つの選択が取り返しのつかないものになるだろう」
「お前・・・何者だ」
「しがないただの魔術士だよ。それ以上でも以下でもない。それよ

りも」

テトラスティンの目がラインの持っている剣に向けられる。

「それは、魔剣ダンススレイブか？」

「知ってんのか？」

「当然だ。この世にある中で、最も人の血を吸ったとされる魔剣だ。そいつは人を狂わせる。かつてそれを所持する者が魔王と認定され、ギルドからの討伐依頼が下った事もある」

「そいつはどうなった？」

「死んだよ」

テトラスティンは冷酷に即答した。

「ギルドから派遣された討伐隊を七度退け、およそ１０００人を斬り殺した上でな。その結果、本人は全身を八つ裂きにされて、それは無残な最期だったそうだ。それがその魔剣ダンススレイブを持つ者の運命だ」

「そうなのか、ダンサー？」

「・・・まあ我を所持した人間で、幸せな人生を送った者はいないことは事実だ」

ダンサーが沈んだ声で答えた。ダンススレイブには当然ながら、最初は名前がなかった。彼女が人間としての形をとったとき、彼女を産みだした刀鍛冶は彼女の服装や恰好を見て『ダンサー』と名付けた。

ダンススレイブと呼ばれるようになったのは、彼女の二番目の所有者であった者。彼女の親友でもあった女剣士の時である。その女剣士の戦い方が踊るようであったため、女剣士は『剣舞士（ソードダンサー）』と呼ばれ、ダンサーは『舞い、斬り伏せる剣（ダンススレイバー）』と呼ばれるようになった。

それから時を経て。彼女を扱うものは全て欲にかられ、不幸な死に方をするようになった。そこから呼ばれるようになった彼女の名前が、『運命に踊らされる者（ダンススレイブ）』なのである。
もちろんラインはそこまで知らない。それでもなんとなくの事情は察しつつも、ラインはわざと気にかけなかった。

「そうか。だが、だからどうした？」
「妖剣とわかって振るうか？」

テトラスティンの質問に、ラインは首を振った。

「こんな阿呆が妖剣のわけないだろう」
「待て、誰が阿呆だ！」

ダンススレイブが抗議したが、ラインはダンススレイブの柄の部分にある宝石を押さえた。

「あうっ！　そ、そこは・・・」
「こいつはここを押さえると大人しくなるんだ」
「・・・そんな馬鹿な」

テトラスティンがあまりの事実に呆然とした。そんな事があってたまるかとでも言いたげに。自分が伝え聞く魔剣のイメージとは程遠い現実。
だが自分を差し置いてぎゃあぎゃあと言い合う男女、いや人間と魔剣は、およそ邪悪とは程遠い。

「伝説など当てにならんか」
「そういうことだ。伝説など大抵でっちあげだろう？」
「本当にそれならよかったんだがな」

テトラスティンはライフレスの使い魔を直に見た。魔術士同士なら使い魔を見ただけでもわかる、その実力。アノーマリーは大したことはない。それでもテトラスティンよりは強いかもしれないが、まだ何とでもなるレベルだった。

だがライフレスは完全なる別格である。使い魔の精度。ほとんど現実に存在する生物と変わらぬモノに近い使い魔を作る者ほど魔術士としての位が高いとされるが、アノーマリーの使い魔は現実以上の虚構である。しかも報告によれば不死身。よくもアルフィリース達が彼と戦って生きていると、テトラスティンは思う。

「（アレに関しては伝説通りだろうな。しかもさらなる報告によれば、ティタニアも現存すると言うではないか。まったく、難儀なものだな。私とリシーでどこまでやれるか・・・）」

「おい、なんだよ黙りこくっちまって」

ラインの言葉にはっとしたテトラスティンだが、すぐに頭を振ると彼を見据える。伝説の魔剣の所有者。実力もあり、しかも機転も利き、申し分ない逸材。ラインの利用方法についてテトラスティンは頭を巡らせたが、彼は野放しにした方が良い働きをしそうな気がした。少なくとも、大人しくこちらの言う事は聞きそうにない。

「（ふむ、今は放っておくか）」

「なんだよ、人の顔をしげしげと見やがって。俺の顔に何かついてるか？」

「別になんでもない。面白い顔だと思っただけだ」

「んなっ」

テトラスティンは無表情のまま答えると、怒りかけたラインを尻目に踵を返した。後にはリシーが続く。彼女はラインを一瞥すると

軽く礼をし、戦場には不釣り合いなメイド服を翻し去って行った。
その後ろ姿を呆然と眺めるライン。
そして少し離れて、テトラスティンとリシーは話しあう。

「リシー」
「はい」
「あの傭兵、殺れるか？」
「ご命令とあれば。ただ・・・」
「ただ？」
「それなりに苦戦はするかと」

それなり、という言葉にテトラスティンは満足した。そもそもリシーが負けることなどあり得ない。条件次第では、ティタニアにも彼女は匹敵するだろう。いや、実力が及ばずとも勝つのは必ずリシーなのである。
そうなると、後はタイミングだけ。彼らに勝つ条件を揃えなくてはならない。

「まずは奴らの根城を暴かなくてはな」
「はい。そのために彼と連絡を取っているのでしょう？」
「そういうことだ。準備ができ次第、私達が先に乗り込む。ミリアザールは奴らの痕跡もろとも消し去るだろうが、それは非常に惜しいからな。奴らの研究は私がいただこう」
「またあくどい事を……」

リシーがため息をつく中、テトラスティンは魔術士としての好奇心を最大限に巡らすのだった。

続く

愚か者の戦争、その27～テトラスティンの画策～（後書き）

次回投稿は8／28（日）22：00です。

愚か者の戦争、その２８～戦い終わって～

＊＊＊

戦争は終結した。いや、わけのわからぬうちに終わったと言った方が正しかろう。この度の戦いで何が起こったかを把握している者は数少ない。仕掛けたアノーマリーですら、このような状況を想定していたとはいえ、全てが思い通りだったわけではない。ムスターの予定外の行動、想定外のラインの戦闘力、思いのほかレイファンに求心力があった事など。そもそも戦争など多数の思惑が絡む場合、最初にその構図を描いた者でさえ、描き上がれば思った物とは全く別の絵ができることなど珍しくもない。

ただ一つ思い通りにいく者があるとすれば。それは外から絵を描こうとする者ではなく、絵の中にいる当事者なのかもしれない。

場所はブロッサムガーデン。急ごしらえとはいえ、レイファンが執務を取り行う一画だけは威厳を取り戻していた。

先の戦いから既に一月が経過した。レイファンは休む暇もなく、帰順を申し出た諸侯や地方軍の司令官と謁見を行っていた。レイファンが国の実権を握るためには、彼らの力がどうしても必要である。そのために彼らの協力を取りつける事は最優先事項とされ、彼らと面接を行う一画だけは一日で完璧に準備された。

まずレイファンが行ったのは、ムスターに自主的に協力した有力者の処罰である。これはレイファンが提案したことではなく、ラスティやラインの入れ知恵であった。ムスターに協力した者はもちろん恐怖に屈した者たちであるが、間違いなく日和見主義者である。その存在はこれからもレイファンに利益無しと見て、ラスティがレイファンを半ば強引に説得したのである。彼らを一斉に処断するこ

とで、レイファンは自分の姿勢を国に示して見せたのだった。
処罰といっても実際に処刑するわけではない。その地位を剥奪し、財産を没収したのである。地位はこの度の戦いで功績を上げた者にある程度与え、また地位の空席をたくさん作ることで、地方でくすぶっていた者に出世の機会を示した。没収した財産は庶民や軍に分配され、民衆の人気取りや産業の活性化に役だった。
またレイファンをただの少女とたかをくくっていた地方貴族や将軍達はこの行いに驚き、中には手を叩いて称賛する者もいた。厳しい対応は結果として、彼女の名声を高めたのである。
もちろん貴族達は抵抗もした。だが、不穏な動きを見せる者には、人知れず暗殺者が派遣された。これはラインの差し金で、娼館長の手配によるものである。レイファンは知らない。つい一月前まで自分が過ごしていた娼館はただの娼館ではなく、半分以上が暗殺者の集団であった事を。彼らはギルドに属さない、この国独自の暗殺者。歴史の裏の立役者達である。レイファンは知らずしらず、クルムスの闇の部分を味方につけていたのである。彼女達が、レイファンの前に正式に武力として現れるのはまだ先の事。だが、その時にレイファンは本物の為政者としての資格を要求されることになるだろう。
それはさておき。今彼女は至急やらねばならないことがある。

「レイファン様、準備は整いましたでしょうか？」
「ええ、書状その他。考えられる状況を想定して、打ち合わせ通りの交渉材料は揃えました」

レイファンの執務室。豪華ではないが、必要最低限の執務が取り行えるように揃えられた部屋。中には元娼館長であった女性が傍に仕えている。今や、娼婦達の半数はレイファンの近侍となっている。それはレイファンなりの彼女達に対する報酬であるが、もちろん強制はしていない。だがレイファンとしても気心の知れたものを傍に置いておきたいという事もあり、ラスティは正直良い思いはしなか

ったが、レイファンの心細い心中も察する事はできたので渋々認めていた。実はレイファンの身辺警護を考えるなら、これは素晴らしい選択だったのであるが、ラスティもレイファンもその事を今は知らない。

そしてその中でレイファンが出立の準備を整えるべく、簡易な正装に身を包んでいる。簡易といっても、これから彼女が会見するのは一国の国王である。だが移動は飛竜で行うため、衣装は簡易にせざるを得なかったのだ。通常なら先触れを出しながら馬車での移動となるが、そんな事をしている暇は現在のクルムスにはなく、またレイファンが一人で乗り込むからこそ意味があった。

重臣達が猛反対する中、レイファンは強引に彼らを説得し、今回の行動に出たのである。もちろんラスティも反対したが、レイファンは頑として聞かなかった。確かに成功すれば最高の利益を得られるが、失敗すれば最悪、レイファンの命はない。

ラスティはこの数日、胃が縮む思いをしているのだった。

「しかし土地の分割まで考えずとも・・・」

「そうは申しても、トラガスロンの大地は現在我々に統治権があります。結果的にザムウェド、トラガスロン、クライアの土地を合わせて、国土は一時的にですが5倍近くなっています。これを全て維持するのは難しいでしょう？　それは全員が同意した事です」

「だからといって元々の我らの土地まで・・・」

ラスティの懸念はこうである。

トラガスロンを陥落させた時、ムスターは国境代わりになっているシュピレ連山を越えて進軍した。シュピレ連山は険しい山であり、トラガスロンとクルムスの間に防衛線を引く必要が無いほどであった。軍隊が通る事などもってのほかと考えられていたのだが、ムスターは軍が戦争前に減るのも顧みず強引にシュピレ連山を突破。最大限の戦果をあげてみせた。

だがトラガスロンの領地を奪ってみれば、シュピレ連山のせいでクルムスの領地と連携が取りにくいのである。ならばいっそザムウェドの統治権だけでなく、シュピレ連山が切れるまでの土地を移譲してはどうかと提案したのはレイファンだった。重臣達は度肝を抜かれたが、それでも主要な産業がその土地にあるわけではなく、むしろ明け渡した方が財政的にはすっきりするくらいの場所であった。

重臣達はこの案に感心し、レイファンの炯眼（けいがん）を尊敬した。まだ幼くしてこの洞察力なら、成長すればいかほどの統治者になるのかと期待を持ち始めたのである。だが文官は納得しても、土地の切り取りをしていくらの武官たちは少々納得するのに時間がかかっていた。ラスティも自分では武官のつもりだったので、レイファンの選択がもったいないような気がしてしょうがなかったのだ。

そんな彼を見てレイファンが笑った。

「ラスティは心配症ですね。万事私に任せなさい」

「いえいえ、万事任せるわけにはいきませんとも。私が貴方を支えてみせます」

「まあ！　ではもう少しこの国に付いて、お勉強してもらわないとね」

「勉強はしていますとも」

「ふふ、ではウェスクル地方の主要産業である芋の生産は、何の種類が最も国外収益で利潤を生みだしていて、それは収入の何割でしょうか？」

「え？　いや、はあ・・・」

レイファンの質問に答えられず、おろおろするラスティ。そのさまを見て、レイファンはくすくすと笑ったのだ。それでも何か答えようとラスティが答えたのは。

「確か・・・ヤマリ芋です！」

「は、ず、れ。正解はナロ芋ね。ヤマリ芋は内需は高いけど、対外的な収益では関税の関係でヤマリ芋が優勢になるの。ヤマリ芋は他の地方だとあまり取れませんからね。クライアでは盛んに生産されているけど、彼らの出荷相手は主に東側だから。北部から西部にかけて出荷するのは主に我々だわ。それでも国家収入の３％にも満たないの。

私達クルムスの収益は主に加工貿易。獣人の国や南部から入る毛皮や珍しい産物を加工した商品が収益の６割を上回る。だからこそ、我々は獣人の国とは密接な間柄でなくてはならないの。わかる？南部からの珍しい産物は必ず我が国を通るように仕向けるのが私の理想だわ」

「はあ・・・」

すらすらと答えるレイファンの前で、しょんぼりとするラスティ。その彼を見てレイファンは楽しそうに笑った。

「ラスティ、困りますね。宰相になる気があるなら、もっと勉強してもらわないと」

「そうですね、それは確かに・・・は？」

ラスティが我が耳を疑った。先ほど、とんでもないような言葉が聞こえたような気がする。

「宰相・・・私が？」

「あら、不満ですか？」

「い、いえいえいえ！　滅相もございません！！　ですが私の身分では、そのような事は畏れ多く・・・」

「その事でしたら、この度の功績で階級を上げておきました。元が子爵だから、公爵は無理でも候爵なら空きがありますので」

「侯爵！　私が！！？」

あまりの急展開にラスティの口が開きっぱなしになっていた。その背中を娼館長であった女性が叩く。

「なんて顔してるんだい！　ちょっとはしっかりしなさいな、侯爵殿」

「は、はは・・・」

当のラスティは、乾いた笑をひきつった顔で行っていた。彼を見て、娼館長は手を彼の顔の前で振るも、ラスティは無反応だった。

「だめだこりゃ。こんなのが将来の宰相で大丈夫かい？」

「まあその辺はおいおい学んでいけばよいでしょう。ラスティは少なくとも、私が最も信頼できる人間の一人ですから。それに能力的には、十分満たしていると思うのですけどね」

レイファンが苦笑しながら答えた。そして彼女は肝心の要件を伝えるのだった。

「ラスティ、飛竜の手配は？」

「・・・はっ。ぶ、無事出来ております！」

「よいでしょう。同行する騎士は選べましたか？」

「はい。一名だけ適任者がいました」

「一名」

その言葉に、レイファンの顔が曇る。

「一名だけですか。それはいくらなんでも少ないのでは？　いえ、確かに相手に敵対心がないことを示すのに、五名以下の少数でと言ったのは私ですが」

「その代わり最高の騎士がレイファン様・・・失礼、女王様を護衛いたします。どうか彼に万事任せてよいかと」
「私が安心して全てを任せられる者は、そういませんよ？」
「例えばラインなど、でしょうか？」

ラスティは無礼を承知でおそるおそる聞いてみた。だがやはりラスティの予想通り、レイファンの顔は沈んでいた。
ブロッサムガーデン奪還後、ラインはどこへとなく姿を消した。レイファンが気がついた時には、もう既に彼はいなかったのだ。
それから数日。レイファンは表面上に出しこそしなかったが、ひどく落ち込んでいたのをラスティは知っている。時に一人で泣いていた事も。
だがそれから数日してレイファンの雰囲気は一挙に変わった。まるで少女が急に大人になったかのように、レイファンは先頭に立ち、物事を率先して進めていった。その様は頼もしくもあったが、ラスティにとっては寂しげにも見えた。
とにかく、そんな彼女に対してラスティが問いかけたのは、残酷なほどの質問であったかもしれない。これはラスティが無粋だから聞いたのではない。聞く必要があると思ったから聞いたのだ。

続く

愚か者の戦争、その２８～戦い終わって～（後書き）

次回投稿は、８／２９（月）２１：００です。

愚か者の戦争、その２９～心に開いた穴～

「彼がいなくて寂しいか、と・・・？」
「はい」

ラスティの言葉はいたってまじめだった。それに反し、レイファンの対応は実に意外であった。ラスティに質問に対し、少し小馬鹿にしたように笑ったのだ。

「寂しいわけないでしょう？　彼はたかが一介の傭兵。今回の首都奪還作戦において多大な功績があった事は認めますが、それ以上も以下もありません」
「しかし・・・」
「ただ、正当な報酬を与える前に姿を消されたのは悔やまれます。私は正しく働きを評価する統治者でありたいですから。さあ、それよりも私は出立の準備をいたしますから少し席をはずします。半刻後には出発するので、皆もそのつもりで」

そう告げると、レイファンは足早に自分の私室に引っ込んでしまった。後には困惑した表情のラスティと元娼館長が顔を見合わせていた。

そして部屋に引っ込んだレイファンは、きちんと仕立て上げた自分の服装が乱れるのも構わず、頭からベッドに突っ伏した。戦争で慢性的な品不足とはいえ、レイファンのために準備された最高級の寝具。フリュレ水鳥の羽毛を使った枕。ガラゴムと呼ばれる特殊な樹脂は、２０年物と５０年物で固さに大きな差が出る。それらを特殊な製法で配合し、半永久的に固まらないように加工し、適度な硬さを保った敷物は作成される。またそれらにかけるシーツは、これまた一巻きで一区画を買い上げるほど高級なサイジェの布で編まれ

てある。それらにこのブロッサムガーデンで採れた香料をわずかにかけた寝具の数々は、最高級の眠りを約束するとされている。

だがその最高の一式をもってしてもレイファンの心は休まらない。寝具の豪華さよりも、珍しい調度品の数々よりも、彼女はもっと落ち着ける香りを知っている。

「ライン・・・」

人前ではもはや決して口に出さないその名前。彼女は度々ラインの部屋に遊びに行っては、彼にからかわれていたのを思い出す。彼は無精に見えて自己の鍛錬だけは怠らない人間で、彼の部屋はどことなく汗臭かった。宿もそれほど清潔とは言い難かったし、すこしカビ臭いような、あるいはすえた匂いがすることもあった。それでもどこかその匂いで落ち着いたのはなぜだろうか。

「私は彼を好きなのかしら・・・？」

レイファンにはそのような感情は、まだよくわからない。ラインの部屋に遊びに行く時は兄に甘えに行くような気もちでもあったし、異性をそのような目で見た事もない。ただ、ラインの傍にいると落ち着くし、安心できるのは間違いなかった。

娼婦達が「無精だから髭をそれ」といっても、途中からそのような事はレイファンには気にならなかったし、何より彼の目はいつも澄んでいた。確かに髪を切って髭を剃った彼はレイファンが見た事もないくらい精悍な男性ではあったが、それが全てではない事もレイファンは知っていた。

多分自分はラインという人間が気に入っていたのだろうと思うも、それが恋愛感情かどうかは、もはや彼女にはわからなかった。確かめてみたいと思っても、本人が傍にいなければどうしようもない。

「いない者を惜しむより、私は前に進まなければ！」

レイファンは突っ伏したベッドから跳ね起きると、女官を呼びつけ、身だしなみを整えさせる。ドレスはブロッサムガーデンにちなんで緑を基調とし、赤のラインを裾などにあしらってある。足は白のニーソをつけ、耳飾りは赤の薔薇を象っている。髪は結い上げ、髪飾りは金としている。比較的抑え目の恰好であるものの、彼女の容姿と相まって十分な威厳と美しさを保つ。彼女の準備を手伝った女官たちは、今の年齢でこうならば、成長した暁にはいかほどの美女に育つのだろうかと、期待を込めて自分達の主人を見つめるのだった。

そんな視線も気にせず、レイファンは重要な書類や目録などは手づから準備すると、彼女は再び執務室に戻った。

「では参りましょうか」

「はい、女王様」

「まだ即位前です。それに、その呼び方は堅苦しいので、今まで通り『レイファン』と呼びなさい」

「ご命令とあればそういたしますが、公式の場ではそうもいかなくなるでしょう」

完全に女王の顔に戻ったレイファンがラスティに語りかけるが、彼もまた騎士としてもっともな答えを返した。

その答えにレイファンは寂しさを覚えつつも、これからどんどんこういった機会は増えて行くだろうという事は予想できた。

「（どんどん私は一人ぼっちになって行くのね・・・）」

そうレイファンが思うのも無理はない。

彼女はラスティに伴われてまだ修繕の完全に終わらぬ廊下を歩く

と、王族専用の中庭に出る。そこには飛竜が一頭と、鎧兜に身を包んだ騎士が一人。周囲には近侍の者や近衛が何人かいるだけだ。王女の行動とはいえ、今回は隠密なのである。盛大に出立を見送るわけにもいかない。

「あれが？」
「左様で」

レイファンは騎士をまじまじと観察したが、鎧兜で全身を覆われては何もわからない。ただ、確かに強そうではある。
だがいくら強かろうと、今回の遠征では関係ないことはレイファンにはわかっている。それに、信頼できない者を同行させるのも心配である。レイファンがせめて同行者の顔でも見ようと面体を上げるように命令しようとすると、騎士はその前にするりと飛竜の上に飛び乗った。レイファンは命令する機会を完全に逃したのである。
周囲の者は恭しく彼女に頭を下げるばかりで、レイファンの意図など察しようともしていないのだろう。

「ふう」

レイファンが一つため息をついてラスティを見ると、彼もまた頷くのみだった。やむを得ずレイファンが飛竜に乗ろうとするが、彼女は飛竜になど乗ったことが無い。
２人乗りの飛竜とはいえ、１０歳そこそこのレイファンにとって騎乗は一苦労だ。飛竜の背は高い。乗るためには足場としてあぶみが２～４個用意されているのだが、二つ目のあぶみに足をかけ、身を起こそうとして思いのほか苦戦するレイファンに、飛竜上の騎士は無言で手を差し出した。
レイファンが騎士の手に気がつき彼の手を握ると、騎士は軽々とレイファンを片腕で持ち上げたのである。そのまま自分の前にレイ

ファンを抱きかかえるようにレイファンを乗せる騎士。

「きゃあっ？」

「ではよろしく頼む」

ラスティが騎士に声をかけると、騎士は無言で手を振ってそれに答えた。そしてレイファンが乱暴な使いに対して抗議の声を上げる前に、騎士は飛竜を発進させたのであった。

飛竜の走る振動に思わず騎士にしがみつくレイファンだったが、騎士もまた両腕でレイファンが落ちないように抱えながら、交差した両手で飛竜を操っていた。これは非常に難しい事なのだが、用意された飛竜が上等なのと何より騎士の腕が良かったので、発進から上空で飛竜が安定するまで、何の問題もなく進んだのだった。

「た、高い」

振動が少なくなったレイファンがうっすらを目を開けると、そこは地上の人間が米粒に見えるほどの高さであった。レイファンはこの光景に目を輝かせるよりも、先に怖い方が勝ってしまう

「お、落ちないでしょうか？」

「んなヘマはしねぇ。それにこいつくらい優秀な竜なら、乗り手が落ちそうになっても空中で捕まえるさ」

「そ、その声は・・・」

その口調に聞き覚えがあるとレイファンが騎士の顔を見ると、騎士は自ら面体を上げた。

「俺だよ」

「ライン！」

レイファンの顔がまず驚愕に、そして喜びではなく、不満げな顔に変わった。そして彼女はラインの胸を叩き始めたのである。

「いてっ、いてて！　何するんだ」

「馬鹿っ、馬鹿ぁ！　何も言わずに姿を消すなんて、あんまりです！！　どれだけ私が心配したと・・・」

そしてレイファンが涙目になりかける前に、ラインがすかさず茶々をいれた。

「なんだよ、俺がいなくて寂しかったのか？」

「・・・はい」

そのレイファンの答えがあまりもしおらしかったので、からかったつもりのラインが絶句してしまった。そのままレイファンがラインの胸に顔をうずめて泣き始めたので、さしものラインもどうしてよいかわからず、そのままレイファンが泣くに任せた。

そんな折に声をかけたのがダンススレイブ。

「だから言ったろう王女、彼は悪い男だと」

「ダンサー、てめぇ余計な事を言うんじゃねぇよ」

「ダンサー？」

レイファンがびっくりして顔を上げる。ダンススレイブは飛竜の背中にこっそりと固定されていたので、誰も気がつかなかったのだ。

人間の姿に戻ったダンススレイブがレイファンを見て優しげに笑う。

「王女の世話をする女官は必要だろう？　それに、こんな野蛮人に

王女を任せておいたら、何をされるかわかったもんじゃない。王女の純潔は守らなくてはな」
「誰がこんなちびっこに手を出すか！」
「誰がちびっこですか！」

レイファンがラインの頬を両手で力一杯つねったので、ラインの操縦が乱れる。それでも両手を離せないラインは、レイファンにされるがままだった。

「やめふぉお！」
「しりません！」

レイファンはふてくされてそっぽを向いてしまった。そのやりとりを見て、くすくすと笑うダンススレイブ。

「ラインも肩なしだな」
「誰のせいだ、誰の！？」
「自業自得です！　だいたい、あの戦いの後どこに行っていたのです？」

レイファンの瞳に、ラインは一瞬悩んだが、正直に話すことにした。

「ああ、実は色々と腑に落ちない点があってな。調べていたんだ」
「腑に落ちない？」
「ああ」

ラインは今回の戦いの前から疑問に思っていた事を思いだす。それはヘカトンケイルの出自。あの化け物はいったいどこで生まれるのか。かりにクルムス国内だとして、それはどこか。またクルムス

国内だとすれば、この国はこれから爆弾を抱え続けることになる。
国外だとすれば。クルムスに入ってくる時は転移の魔術という手もあるが、やはり生産場所はあるだろう。同様に、ヘカトンケイルが装備していた武器防具。あれらはどこから手に入れていたのか。

「（なんでもかんでも転移ってわけにはいかないだろうから、実際には輸入ルートがあるはずなんだがな）」

そう考えたラインは、レイファン達が国の復興を行う間、ギルドで様々な情報収集を行おうとした。だが、何も出てこなかったのだ。それはもう不自然なほどに。
そこからラインは一つの可能性を考え付いた。

「（ギルドが『ぐる』だな。そう考えるのがもっとも自然だ。以前情報収集を依頼した時、受け付けの女も不自然だったしな。この前の連中は、俺独自の情報網で集めておいてよかった。そうなると、これからの傭兵稼業も色々とあぶない物になるだろうな・・・身の振り方を考えた方がよさそうだ。今まで以上に慎重に、な。でもって、あの噂は信憑性を帯びるのかもしれない）」

ラインが以前耳に挟んだ噂である。それは何の変哲もない日々の、ある酒場での出来事。賭博で知り合った傭兵と、ラインは酒場で盛り上がっていた時の事である。
その内の一人がこんなことを言い出したのだ。

続く

愚か者の戦争、その29～心に開いた穴～（後書き）

次回投稿は、８／３０（火）２１：００です。

愚か者の戦争、その３０～交渉に臨む～

「なぜこの世から戦争がなくならないのか」

その一言に、全員が爆笑した。それは人間の性だから仕方ないと。それに戦争がなくなったら、俺達はおまんまの食い上げだから、ちょうどいいじゃあないかと。

だがその一言を言った傭兵は思いのほか真面目な顔をしていた。そのせいか、ラインも飲むふりをしながら真剣に聞いてしまったのだ。

彼が言うには、大戦期にあれほど戦争が止まらなかったのはそれを裏で操っていた奴がいるからだと。弱小国が突然強くなったり、農民の謀反が起こったり。戦争を起こすのに何が必要か、知っているかと彼はその場の者に問うた。

ある者は金だと言った。他の者は兵力だと言った。優れた指導者だと言った者もいた。だがその傭兵は首を振った。「武器さえ手元にあれば人は殺せる」と。ラインはその答えに賛成だった。獣人ならいざしらず、人間が人間を素手で殺すのは難しい。ラインの様に訓練された人間でさえ、人間を素手で殺すのは難しいのだ。何より素手で人を殺すのは、あまりに手ごたえが生々しすぎて先に心が死んでしまう。

彼が言うには、武器を常に供給し続けるような集団があるのではないかということだった。いわゆる戦争屋である。戦争を起こすことで、生業を立てる者達の事である。その話を聞いて、「自分達だって同じようなものだ、戦いがないと稼げないのだから」と言った者がいたので、その話は笑い話で流れてしまった。だがその話を持ち出した者の表情はどこか深刻だったのを、ラインはしっかりと覚えている。

「（あいつは、何か知っていたのかもな・・・）」

ラインが詳しく聞いておくべきだったかと悔むも、後の祭りである。だがもし仮にそのような連中が存在するのなら、独自に武器防具を輸送するルートがあってもおかしくはない。

「（まあそうなると、話がでかくなりすぎるな。俺一人じゃとてもじゃないが手に負えない・・・誰に相談するのがいいか。ディオーレ様か？　だが、あの人が自国以外のために動くことなどあり得ないな。ましてうかつな人物にこの話は持ち込めないし・・・さて、どうしたものか）」

そんな考えに没頭するラインを、二つの茶色い瞳が見上げていた。レイファンが心配そうにラインを見ているのだ。

そんな彼女の頭を無遠慮にラインはわしゃわしゃとこねくり回すと、彼女に彼なりの優しい言葉をかけた。

「そんな事よりも、お前には当面心配する事があるだろ？」

「それはそうですが」

「これからグルーザルドのドライアンに会うんだろうが？　大変だぞ？」

そう、レイファンがこれから向かうのは、ザムウェド中腹にあるグルーザルド本陣である。トラガスロンを結果として蹴散らしたグルーザルドだったが、当のトラガスロンはムスターによってとっくに攻め滅ぼされていた。

ザムウェドのウーラル姫は、ならばなお良しとしてトラガスロンまでの進軍を提唱したが、さすがにロッハ達獣将が反対したため、進軍がそこで止まっていたのだった。そこに届いたレイファンの書

簡。内容は、「これからの両国の関係について、グルーザルドと話す準備があります。ザムウェドは、お望みならば全面的に返還いたしましょう」との事だった。

この書簡を見てロッハは唸った。レイファンが一筋縄ではいきそうにもない人物だと、書面だけで悟ったのだ。

まず第一に。直接グルーザルド本国に書簡を送らず、前線に届けたこと。もちろん本国にも書簡は届けているのだろうが、グルーザルド首都はかなり遠い。それにドライアンは王のくせに風来坊で、しょっちゅう首都を留守にしているのは他国も知るところである。それを知って前線に書簡を送りつけたのだ。相手が交渉の用意があるにも関わらず戦争を仕掛けるわけにもいかず、時間稼ぎになる事をレイファンが知っているとロッハは見て取ったのだ。

さらに、『ザムウェドを返還する』とあった。これはザムウェドの統治権が自分達にあり、侵略戦争を先に行ったのは自分達でも、今はグルーザルドが侵略戦争をしているとのことで、立場を対等にした会見を行いたいとのことだったのだ。

ロッハとしてはクルムスと戦争をして負ける気はさらさらしなかったが、さすがに一軍人が独断で一国を滅ぼしては体裁というものがある。それに少しだがレイファンという人物に興味も湧いていた。そうして何度かのやり取りを交わす中、ついに彼らはザムウェド中腹にて交渉を行うことになったのだ。むろんドライアンにもロッハが連絡を取りつけたのだ。

ただし、グルーザルド中核は全て知った上でドライアンが出てくるが、クルムスからはレイファンとお供が一人の予定であった。極力グルーザルドを刺激したくないというレイファンの考えでもあるが、一つ間違えればレイファンは首を落とされた挙句、クルムスは滅びるだろう。ドライアンはそんな話の出来な様な野蛮人ではないと聞くも、真実はわからない。これはレイファンの賭けである。

レイファンは会見が秘密裏に決まった7日前から緊張のし通しである。果たして自分が生きて帰れるのか、交渉は上手くいくのか。

ラインの事もあいまって、ここ最近はほとんど寝ていない。だがここにきて、ラインが傍にいる事はレイファンにとってこの上ない安堵感をもたらしたのか。レイファンは程なくしてラインの胸の中で眠り始めた。その様子を見て、やや呆れるライン。

「大した女だ。命と国を賭けた交渉の前に居眠りし始めたぞ」

「・・・お前がいるからだよ」

「何か言ったか？」

「何でもない」

ダンススレイブのぼやきは、ラインにはとどかなかったようだ。ラインもまたレイファンが自分に好意を寄せている事は知りつつも、それがどの程度の物なのかまでは知らないのだろう。おそらくは、一時の子どもの恋、くらいに思っているのだろうが。

そして彼らは会見場所近くの上空まで接近した。時はちょうど太陽が中天に差しかかる時間。そろそろレイファンを起こそうかとラインが考えると、既にレイファンは目を覚まし、自分が望むべき交渉という名の戦場を見据えていた。ラインにしがみつく手にわずかに力がこもる。

「ライン、聞いても？」

「ああ、いいぜ」

「なぜ私にここまでしてくれるのですか？」

レイファンの瞳が再びラインを捕える。ラインの方は相変わらず変哲のない表情をたたえている。

「前にも言ったじゃねぇか、俺は女を見捨てない」

「前回よりはるかに危険かもしれません。相手はドライアンと１２獣将ですよ？」

「関係ねぇよ。いざとなったら、ドライアンなんぞ俺がケツを蹴り飛ばしてやる」

ラインがその言葉と共にニヤリとしたので、思わずレイファンも吹き出してしまった。そして先ほどよりさらに表情の和らいだレイファンがさらに質問する。

「もし無事に帰れたら」
「ん？」
「どんな報償が必要になるでしょうか？」
「さあな。今のクルムスじゃ大したものも払えねぇだろ？　ある時払いでいいよ、ツケにしとく」
「利子が高いのではないでしょうね？」

今度はレイファンがいたずらっぽく微笑む。ラインもまたニヤリとして返した。

「もちろんカラスだ」
「せめてトイチにしていただけませんか？」
「王女が口にする交渉じゃねぇな」

ラインは大笑いした。このような下々の民が口にするような俗語に、何の障害もなくついていける王族などはいないだろう。

「（なるほど、頭がいいな。ダンサーの言う通りか）」

ラインは初めてレイファンが自分の傍にいる時の事を想像した。確かに何をするにしても、仕込み方次第で十分な働きをするだろう。もしかすると、武術の類いもムスターを見る限りでは使えるようになるかもしれない。

「（パートナー、ねぇ・・・）」

ラインはそのような事を一瞬本気で考えてしまった。それは自分が最も考えてはならぬ事だと知りながら。

そして彼らはグルーザルドの本営を遠目に見る事の出来る場所にまで飛来した。その手前には煙を立てて、着地点を知らせる軍人達がいる。ライン達は大人しくその誘導に従うと竜を着地させ、ラインが先に降りてダンススレイブとレイファンを手を引いてエスコートする。いつの間にかダンススレイブは女官の服装を身にまとい、ラインは面体を上げていた。地面に降りたレイファンは獣人達に向かい、凛とした声を発する。

「責任者は誰か？」

「私です」

答えたのは精悍なオオカミの獣人であった。獣将のロッハである。

「グルーザルド１２獣将の一人、ロッハと申します。ここからは僭越ながら、私が我が王の御前にまで案内を務めさせていただきます」

「天下に名だたる１２獣将の一人に先導していただけるとは、こちらとしても頼もしい限り。ではよろしくお願いいたしましょう」

「その前に、失礼ながらお共の剣を預からせていただきましょう。よろしいか」

「もちろん構いません。役目、大義であります」

レイファンの許可の元、ラインは剣を差し出した。獣人はその体そのものが凶器であるので、人間としては獣人との会見では帯剣するのもやむなしとするのが世の理であるが、レイファンはロッハの求めに応じた。レイファンとしては一切の敵意が無い事を示したか

ったからでもある。
　ロッハとしても儀式上の求めであることは知りつつも聞いたわけだが、レイファンがあっさりと受けたので逆に驚いた。こういう時は持ってまわった言い方で断るのが通常なのだが、どうやらレイファンには敵意が一切ない事をロッハも感じとったらしい。そして余計にやりにくい相手だと、ロッハは感じる。

「（剣を持っていなくては、最悪無礼打ちにした事にもできんか。まあでっちあげればいくらでもできるが・・・ふふ、俺も狡いことを考えるようになったものだ）」

　ロッハが内心で苦笑すると、彼は大人しくレイファンをドライアンの元に案内した。途中ではグルーザルドの軍人達が一糸乱れぬ整列をしていた。そのさまを見ながら、ラインは内心では感心している。獣人達はどうしても我が強く頭脳も弱い者が多いとラインは思っていたのだが、ここにいるのは人間の大国の騎士団と変わらず整列して見せる獣人達だった。

「（こんな奴らが戦術を用いて突進してくるなんざ、間近に見たらぞっとするな）」

　ラインの偽らざる感想である。この威圧感の中ではさぞかしレイファンも緊張しているだろうとラインは思ったが、レイファンは悠然とこの中を歩いていた。どこか余裕すらうかがえる堂々たる態度で。
　ドライアンの元に辿り着くまではかなり長かった。１／４刻近く歩いたかもしれない。夏の日差しの中そろそろ一行が歩き疲れる頃、レイファン達は城の万幕が見える位置に辿り着いた。

「クルムス公国王女、レイファン＝クルムス＝ランカスター殿が参

られました！」

ロッハが大声を張り上げる。すると、するすると万幕が左右に押し広げられ、中の様子が明らかになった。中には獣人の主だった将達。テーブルの左右を固める彼らは１２獣将そろい踏みとはいかないものの、それなりの頭数が揃っている事は雰囲気でもわかる。いかにも歴戦のつわものといった面構えだった。

そして彼らの中央に座し、レイファンとは対角の席に片肘をついた状態で座るのは、金色の体毛に覆われた一層精悍なオオカミの獣人だった。

続く

愚か者の戦争、その３０～交渉に臨む～（後書き）

次回投稿は、８／３１（水）２１：００です。

愚か者の戦争、その３１～交渉（前半）～

「（これがグルーザルドのドライアンか）」

ラインですら思わず息を飲んだ。黄金の毛並みをたなびかせるその存在感は圧倒的であり、座っているだけでも身がすくむ様な思いがする。こんな獣人に吼えられたら、肝の小さい者はそれだけで絶命しかねないほどの威圧感だ。ゆったりとした衣服の上からでもわかる筋肉の隆起は間違いなくこの場で一番であり、それはとりもなおさず彼がこの大陸で限りなく最強に近い闘士であることを示していた。

また、体を覆う見事な金色の体毛。見た目もまた十分な威厳に満ちている。一見すれば優美にも見え得るその巨体がゆっくりと腰を上げた。

「よくぞ参られた、レイファン王女よ・・・」

その口からは、豪奢な見た目に違わぬ重々しい声が発せられた。

「座るがよろしかろう、王女よ。話し合いを始めようではないか」

「いいえ、結構です。このまま帰らせていただきましょう」

そのレイファンの言葉に、ラインはおろか、ダンススレイブや獣将達までもが目を見開く。ただ一人、ドライアンだけが目を細めていた。

「ほう、どういうことかな」

「私はここに対等な話し合いを行いに参りました。ですがここまで

のグルーザルドの対応は愚かも甚だしい。我々から早々に武器を取りあげたにもかからわらず、自分達は戦装束で我々を出迎え、整列までして自分達の武勇を誇る始末。あなた達は戦争がしたいのか、それとも常にそうして自分達の武勇を誇らねば威厳が保てないと思うほど小心者なのか。これでは王の器量も知れようというもの。話し合いの価値もない」

「貴様！　我らが王を侮辱するか！？」

レイファンの言葉に、俄かに色めき立つ獣人達。１２獣将の面々は冷静そのものであり、中にはレイファンの発言に対して口笛を吹く者までいた。

その中でもラインはそれこそ目を見張って驚いた。少女といっても差支えないレイファンが、真っ向からグルーザルドの対応を非難したのである。

そして肝心のドライアンと言えば。

「フフフ・・・ハハハハハ！」

大声を出して笑っていた。その滅多に１２獣将でも見る事のないドライアンの大笑いに、驚く一同。

「これは失礼したレイファン王女。何せ獣人の国など、武勇の他に誇る物のない無骨者の集まりゆえ。どうか非礼を許されよ。だがしかし！」

ドライアンがぎろりとレイファンを睨む。

「そなたの国は我が同胞の国を蹂躙し、多大なる被害を与えた。その爪痕を俺も見たが、とても『酷い』などという言葉ではくくれぬほどの惨状であった。その恨み、晴らさずにおくほど俺は温厚では

ないぞ？　さあ、どう俺を納得させる？　言い訳をしてみせよ！」
「ご心配なく。言い訳をするつもりも、まして許されるつもりなど毛頭ありません」

レイファンに向けて殺気を放ったドライアンだったが、レイファンは即答でそれを流した。その澱みない答えに、ドライアンも面喰ったか十分な殺気をレイファンに向ける暇すらなかった。

「許しは乞わぬ、と？」
「はい。そもそも命を贖（あがな）う物とはなんでしょうか？　お金？　土地？　それとも敵の命？　今回の出来事は愚かな兄の単独行動。国の意志などそこには何の反映もされてはおりません。ですがどれほど愚かであろうと、兄は兄。私の命で今回の犠牲が贖えるのであれば、今すぐにでもその爪で私の首を刎ねるがよろしいでしょう」

レイファンが今度はまっすぐにドライアンを見つめ返す。その瞳はまっすぐで、思わず他の獣将も騒ぐのを止めた。何人かは最初から気付いていたことだが、獣人達はここに来て、自分達の前に現れた少女は国の代表として十分な才覚と威厳を備えていることに気がついたのだ。

「（こういうのが資質っていうんだろうな・・・これは訓練とかで身につくものじゃない）」

ラインがこっそりとそのような感想を抱く。自分にはこれほどまっすぐにドライアンと向き合う事は、どれだけ訓練を積んでも無理だと思う。戦いの方がよっぽどマシだと彼は思ってしまうのだ。
そしてドライアンとレイファンはまっすぐに互いを見つめ合っていた。先に口を開いたのはドライアン。

「王女よ、そなたの言う通りだ。そなたの首を刎ね、クルムスを滅ぼしてザムウェドが元に戻るなら俺は既にそうしている」
「ではそうなさならなかったのは、さらに先を見据えての事だと考えてよろしいでしょうか」
「そう考えていただいて差支えない。俺としては、これからクルムスとは同盟を組みたいと考えている」

唐突なその言葉に、今度は獣将達が驚いた。レイファンも同様である。ドライアンの真意を測りかねるレイファンをよそに、先に獣人達がうろたえ始めた。

「王！？」
「それはどういった・・・」
「黙れ」

ドライアンは獣人達が騒ぎ出す前に、静かな深い声で彼らを制した。そのまま彼が話しだす。

「俺は若い頃からやれ征服王だの歩く暴君だの言われたが、ちゃんと物ごとを考える脳みそくらいはくっついていてな。今回の戦がおかしいことくらい、俺でもわかる」

ドライアンは思わず立ち上がりかけた全員を、座るように手で促しながら語る。

「戦争の跡を見たと言ったろう？　前線からの斥候やロッハの報告も受けたが、今回の戦争は明らかにおかしい。何がおかしいとは言えんが、とにかくおかしいのだ。そうだな、強いて言えば全てが進み過ぎる、と言えばいいのか。

それはともあれ、俺は自分が気になった事は徹底的に調べんと気が済まん性質（タチ）でな。少なくとも、今回の戦争にクルムスとしての意志が反映されていないであろうことはすぐにわかった。俺が王位についてから数十年、俺達は比較的良好な関係を築いてきたからな。

それにこんな俺でも、諸国から情報を提供してくれる連中はいてな。諸国で不穏な動きがあることぐらい、既に察知済みだ。正直に言うと、クルムス自体は俺にとってどうでもいい。だが、クルムスを討つことでそれらの国にグルーザルドと敵対する口実を与えるのはまずいのだ。最悪、『獣人対人間』という大戦期のような構図が出来上がらんとも限らんからな。

繰り返すが、それだけはまずいのだ。世界が絶妙なバランスで成り立っているこの時期に、わざわざ火に油を注ぐような真似をするのはな。世界から大きな戦がなくなって２０年余り。平和な時期はもう少し長続きしてもいいだろう？」

フン、とドライアンは鼻を鳴らしてみせた。思いのほか大胆な発言だが、慎重な思考をしているドライアンにレイファンも驚いている。

「ドライアン王よ、貴方は随分と正直なのですね」

「王女、俺は獣人だ。人間のように回りくどい言い方は好かんのよ」

「私としてもその方が話しやすい。実は国外との交渉など初めてなものでして」

レイファンの言葉に内心で「おいおい」とラインがツッコミを入れたが、その言葉がドライアンは気に入ったようだ。またしても上機嫌に大笑いをしている。

「ハハハハハ！　その素直さが気に入ったぞ、王女よ。賢く度胸も座り、自分が幼いことすら交渉材料として武器にするか。クルムス

などどうでもよいと思っていたが、そなたのような人物が指導者ならば、クルムスとは味方であった方が良いであろうな」

「私もグルーザルドと戦争など御免こうむります。国が滅びてしまいますから」

「正直者よな、王女。確かに俺達と戦争してまともにやれるのは、せいぜいノーマンズランドか、アレクサンドリアくらいだろう。まあ他にも東の大国はいくらかはやるだろうがな」

ドライアンはそこまで話すと、準備されていた酒をぐびりとあおった。炎天下に昼間から酒を用意するのは人間では中々考えられないが、構造として人間より酒にはるかに強い獣人達にとっては、これくらい朝飯前である。戦前に朝まで酒盛りをして、そのまま相手に突撃するような種族なのだから。

一方でレイファンはドライアンという人物を見定めようとしていた。戦士として大陸最強とも言われた獣人。どんな不利な状況も自ら先頭に立ち、必ず苦境を打開してきた者。ただの猪武者では、こうはいくまい。

「（なるほど、獣人とは思えぬほど冷静です。本音は私の命などどうでもよいのかもしれませんが、彼にはそうしないだけの他の理由があるのでしょうね。それが何かはまだわかりませんが）」

レイファンは果汁を口にしながらドライアンを観察していた。だがドライアンに動きが無いと知るや、次の話題に入る。少し順調すぎて拍子抜けしないでもなかったが。

「ドライアン王がそのつもりなら、私としても願ったり。次の話題に参りましょう。具体的な同盟の内容についてですが・・・」

「待ちなさい！」

レイファンの言葉は、怒気を含んだ声にかき消された。その声の主は誰であろうザムウェドの遺児、ウーラル姫である。

今度は一斉にかの姫に目線が集まる。

続く

愚か者の戦争、その３１～交渉（前半）～（後書き）

次回投稿は、９／１（木）２１：００です。

愚か者の戦争、その32～交渉（中盤）～

「ドライアン王！　いくら王でも、勝手にクルムスと同盟など私が許しません！」
「ドライアン王、こちらは？」
「ザムウェド王家唯一の生き残り、ウーラル姫だ。今回本人の強い希望で、遠征に参加してもらっている」

ドライアンが困ったように姫の顔を見た。このような展開になるのが目に見えたから、ウーラル姫を交渉の場に参加させるのはドライアンとしては気が引けていたのだ。立場を考えれば姫も立ち会わざるをえないのだが。ウーラルの事を考えるほどに、冷静な話し合いは無理なことはドライアンにはわかっていた。
それに交渉など、感情を押し殺す事を求められる場に、感情的な女は合わないと考えているのがドライアンである。ウーラルの発言に対し、眉間に皺がよるのも隠さないドライアン。
そんな露骨に難色を示すドライアンを無視してウーラルが話し出す。

「我らの国がどのような扱いを受けて滅びたかお忘れか？　この子どもの国はまともな宣戦布告もなく突然我々に戦争を仕掛け、女子供にいたるまで皆殺しにしたのだ。逃げ惑う者達を後ろから串刺しにしてな！」
「・・・否定はしません。だからこそ私は自らの手で兄を討った」

レイファンが嫌な記憶を辿り必死で言葉を紡いだが、ウーラルには関係なかった。

「それもどうだか！　本当に兄を討ったのか？」
「無礼な！　一国の代表である私を愚弄しますか？」
「口先では何とでも言える！　それよりも証拠が重要なのだ。兄を討ったと言うなら、その首を持参するのが習わしであろう。その上で私に弁解を求めるのが筋ではないのか？」
「それは・・・」

ウーラルの言い分にも一理ある。レイファンは悩んでいた。ムスターの遺体が残らなかった段階で、レイファンはムスターの問題には触れない部分でグルーザルドと交渉を進める予定であった。ドライアンをここに引っ張り出すように算段したのも、そのためである。
だがウーラルが生きていた事もそうだが、ここまで彼女の気が強いとも思わなかったのだ。レイファンの中では、姫とはもっとたおやかな人物というイメージを描いていた。ウーラルの様に勝ち気で、自らも前線にまで出るような姫とは思っていなかったのである。
言葉に詰まるレイファンに、ウーラルがまくしたてる。

「言葉が無いようだな？　どうせムスターとやらも実は生きていて、ここで一端平和条約でも結んだ後に、突然また攻め入るつもりなんだろう？　卑怯な人間の考えそうなことだ」
「ウーラル姫、侮辱の言葉にもほどがあるでしょう？」
「それだけの事を貴様達はやったんだ！！」

ウーラルが身を乗り出してテーブルを叩く。女性とはいえ、武術の訓練をした獣人の女性の一撃である。ウーラルの叩いたテーブルが一部破壊され、飲み物が一斉にこぼれる。

「たとえドライアン王が許しても、私は許さないぞ？　貴様達を永遠に呪い続けてやる。この魂が永遠の怨嗟の呪縛にとらわれようとも、貴様達を憎んで憎んで、憎み抜いてやるんだ。アッハハハハハ」

「ウーラル姫・・・」

ウーラルの狂った様な笑い声に同席していた者達も多くが呆気にとられたが、その気持ちもわからないでもない獣人達であった。特に馴染みのあるヴァーゴなどは、思わずウーラルの狂人ともいえる言葉に同情すらしていた。その中で冷静なのは、他の１２獣将の面々とライン。そしてラインが突然口を開いたのだ。

「おい、獣人の姫様」
「なんだ？」
「『後ろから串刺しに』ってのは、誰から聞いたんだ？」
「何？」

ラインの言葉の意味がわからず、首をひねるウーラル。

「おかしいだろう。あんたが首都にいた時は、兵士達はアンタを護るために戦っていたはずだし、平民の事だとしても、王城にいたはずのアンタが平民の様子なんて分かろうはずもないしな」
「ふん、そんなものは戦場に転がっている死体を見ればわかることだ。どうということはない」
「転がっている、ねぇ。アンタ、自分の国の人間をそんな風に表現するのか？」

ラインの言葉に明らかに気分を害するウーラル。

「それがどうした！？　だいたい貴様は何だ？　一介の騎士ごときが発言していいような場ではないだろう？」
「そうでもないさ。今回はレイファン王女の護衛としてついて来ているし、それは交渉の補佐をするという事でもある。俺にも発言権はあるはずだ。っと、言葉遣いが汚いのは勘弁してくれよ？　田舎

者でね、いまいち直っていないのさ」
「戯言を！」
ウーラルはますます激昂するが、対象的にラインは冷静だった。どこかウーラルをからかっている様子ですらある。
「さて質問に答えてもらおう、姫。アンタが後ろから串刺しにされている国民を見たのは、いつ、どこでだ？」
「場所など知らぬ！　そこかしこで民は無残な目に会っていた。後ろから殺されている死体など、珍しくもない」
「そいつはますますおかしいな。グルーザルドの軍人は人間以上に配慮が行き届いていると聞いた。その軍隊が、貴婦人にそのような無残な光景を見せるとは思えないんだがなぁ？」
ラインがその発言をした時に、ロッハがドライアンにそっと耳打ちをする。ドライアンはその報告を聞いて耳がぴくりと動いたが、だからといってどうするわけでもなく、ただ事の成り行きを見守っていた。
ラインの問いにウーラルが答える。
「グルーザルドの軍隊とて完璧ではない。私は護衛の目を盗んでは町の惨状をこっそりと見に行っていたのだ。それはひどい有様だったよ、人間の残酷さを知るには最適だったがな！　それに先ほどから貴様は私を疑うような発言をしているが、何か根拠でもあるのか？　もしなければ、ただの不敬罪に当たるのだぞ？」
「ライン・・・」
不安そうなレイファンに、口の端を釣り上げて笑うウーラル。それを見たラインの顔が、一層真剣なものに変化した。何かの覚悟を決めるような顔に。

「なるほど、証拠はないな」
「それ見たことか！　証拠も無しに一国の姫に護衛風情が嫌疑をかけるとは、無礼も甚だしい。人間の方が礼儀にうるさい種族ではなかったか？」
「それは相手が話し合いのできる奴の場合だけだ。それに疑惑には証拠はないが、根拠はある」
「何だと？」

ウーラルがさらに喰ってかかろうとした矢先、彼女の手元に投げられたのは、小さな袋だった。

＊＊＊

それは先の戦いが終わった直後の事。ラインがこっそりとブロッサムガーデンを抜け出そうとしている時の事である。夕闇に紛れてこっそりと出て行こうとする彼の袖を引く者がいる。

「ライン」
「！　って、お前か、脅かすな」

ラインの袖を引いたのは娼館長であった。彼女が心配そうにラインの顔を見上げている。

「どこに行くんだい？」
「ああ、ちょいと気になることがあって調べにな」
「姫様・・・いや、もう王女様か。彼女には？」
「言ってない。必要ないし、もしかするとそのまま姿を消すかもしれないからな」
「相変わらずだねぇ」

娼館長はため息をついた。

「私達がヘマをやらかして客と揉めた時、あんたは私達を助けてくれた。その時も私達の娼館で一月ほどしこたま遊んだかと思ったら、急に何も言わずに姿を消すしさ。そうかと思えばふらりと姿を現す。とんだ根無し草だよ、あんた」

「俺は風の赴くままに生きる男なのさ」

「言ってな！」

娼館長が肘でラインの腹を小突く。その顔は不機嫌そのものだ。

「毎晩のように私を好き勝手抱いておいて、急にふらりといなくなられたこちらの身にもなってごらんよ。あのときうっかり身籠っちまった私がどんな思いだったか」

「は、はあ？　ノラ、お前はそんなこと一言も・・・」

「冗談だよ、あんたはそんなヘマやらかさないもんね。もちろん私もだけど」

娼館長が青ざめかけたラインの顔を見て、その鼻を指ではじいた。ちょっとした意趣返しのつもりだったのだろう。さしものラインも事が事だけに、少し焦ってしまった。

「お前・・・タチ悪いぞ？」

「どっちがさ。こんなときだけ名前で呼ぶアンタの方がよっぽどタチが悪いよ。私が一時期本気だったことくらい気づいてたんだろう？」

「まあな」

ラインはわざとそっけなく言った。しばしの無言が彼らを包む。

ノラは特に際立った美人というわけではないが、スタイルはいいし、何より頭の回転が早い。ラインは見た目よりも、その能力を大事にする性格である。賢く油断のないノラとは気が合った。それにノラは女性として男の世話は一通りできるし、夜の方も嗜み深い。ラインとしてはパートナーとして全く文句のない女であった。

だからこそラインはノラの元を去ったのである。彼女と共にいれば、自分はそこにまもなく居ついてしまう事がわかったから。そしてそれは彼の心をゆっくり腐らすであろうことも、彼の本能が悟ったのだ。だが『腐る』事を一般人が『幸せ』と表現する事は、ラインは気がついていないのかもしれない。

ノラとしてもラインが特別好きというかと言われれば違ったかもしれないが、文句をつける所の少ない男ではあったかもしれない。それにどことなく影を落とすその性格が、彼女には合っていた。彼女もまた心に傷を負っている人間である。

どちらにしても、互いにとって昔の事である。ノラは少なくともそう割り切ることにした。これ以上後悔は引き摺りたくないから。気を取り直したノラがラインに告げる。

「もうあんたが誰かに縛られる人間でないことくらい知っているけどね、とにかく連絡手段だけは残しておいておくれよ？　そうしなきゃあの子が不憫だからね」

「まあラスティには一応連絡をとれるようにしておくがな。そうだ、お前が宮廷に仕えりゃいいんじゃねぇのか？」

「はあ？」

急な提案にノラが驚く。

「ちょっと、それはどういう・・・」

「実はレイファンには既に提案しているあるんだ。もちろんお前達が暗殺者というのは隠した上でな。レイファンはお前達さえよけれ

ばいつでも召し抱えるってよ」
「まあそりゃ願ってもない話だけどさ。私達もいつまでも娼婦なんてできないからね」
「俺からも頼む。これからレイファンの周りは大変だろうからな。お前たちみたいなのが傍にいてくれりゃ安心だ。何せ敵は普通じゃないからな」
「普通じゃない？　どういうことさ」

ラインは今回の戦いのあらましを説明した。本来ならノラを巻き込むつもりはなかったが、事態を想像以上に重く見たラインは、いずれ彼女達も何らかの形で関わってもおかしくないと思ったのだ。少なくともクルムスが戦火に包まれれば関係あるし、既にもう巻き込まれていると言ってもよいだろう。
その話をノラは黙って聞いていたが、さしもの彼女も判断に困っているようだった。

「・・・とりあえず話はなんとなくわかったけどさ、話しが大きすぎて私の一存じゃなんともならないよ」
「それはわかっている。今決めろってことじゃないが、早めに決断してほしい」
「ん、それはね。それより今の話で気にかかったことがある。ちょっといいかい？」
「なんだ？」

歩きだしたノラに促され、ラインも後に続く。

「何が気にかかったんだ？」
「その魔法剣士とやらの女さ。それほど強い奴なら名が売れていてもおかしくないんだけどね」

ノラが立ち止り、辺りを見回す。

「その女と戦ったのはこの辺かい？」

「ああ」

「飛んで来た何かを弾いた場所は？」

「その噴水の右手だ」

「飛んで来た物体を弾いた方向は覚えているかい？」

「確か・・・あっちだな」

ラインが指さす方向に、ノラがすたすたと歩いていく。さすがに周囲は暗く、カンテラを灯しても探し物は難しいくらいだった。二人がしばらく探すと、目的の場所が見つかる。

「これか？」

「多分な。これは・・・何が埋まってるんだ？」

「自分で弾いた癖にわかってないのかい？」

「戦いの最中にはそこまでの余裕がなかった。さすがに手強かったからな」

そうぼやきながら、ラインが壁の抉れた跡から取りだした物は・・・

続く

愚か者の戦争、その３２～交渉（中盤）～（後書き）

次回投稿は、９／３（土）２１：００です。夏休みも終わったので、一端隔日連載とします。

愚か者の戦争、その33～交渉（終盤）～

「それは・・・」
「虫、だな」

ラインが指でつまんでいたのは虫の死骸だった。大きさにして指二関節分。その表皮は固く、ラインが指に力を込めてもびくともしないほどである。
ラインは改めてその虫をまじまじと見る。

「見た事のねぇ虫だな」
「私にも見せてくれ」

ノラが虫を受け取って観察する。手にとってあれやこれやと見ても、ノラにはよくわからない。

「私も初めて見るが、おそらく南部に生息する種類か？　うちのヒュナに聞けばわかるかも」
「そいつも虫を？」
「と言っても連絡に用いるくらいだけど。それにあんまり精度は高くないね。まあ正直暗殺者としては二流以下だが、それでも知識だけはあるから、私よりはラインの疑問に答えられるだろう。引き合わせてもいいが、ここを離れるのにはまだ時間があるのかしら？」
「明日の早朝には出るつもりだ」
「わかった、では早く娼館に戻るとしよう」

ラインとノラが急いで娼館に戻ると、ラインは矢継ぎ早に指示を飛ばし、あっという間に出立の準備を整えた。その日はさすがに彼

にとっても激しい連戦が続いたので、そろそろ休もうと寝酒に酒瓶を手に取った瞬間である。

「ライン、わかったぞ」
「ん？　ああ、虫のことか」

ノックと共にノラの声が聞こえ、ラインが部屋の戸を開けると、そこにはノラと、もう一人地味な女が立っていた。そばかすが目立つし、いかにも田舎の女といった風体だ。もっとも暗殺するには人目を引く美人だと困る場面も往々にしてあるのだから、彼女くらいがちょうどいいのかもしれない。
だがヒュナであろうその女はあがり症なのか、さらにラインの前に出るともじもじしていた。

「あ、あの・・・」
「ほら、しっかり喋んなヒュナ！」
「は、はい！　あの虫ですが、この大陸ではまず生息しない種類だと思います」
「この大陸じゃない？」

意外な言葉に、ラインの表情が引き締まる。その表情を見てさらに緊張するヒュナだったが、その尻をノラが引っ叩く。

「ヒュナ、おんなじことを何度も言わせるんじゃないよ！？」
「はひ！　そ、それでその虫ですがこの大陸の虫は羽が基本四枚。それに対し南の大陸では羽の数が様々だと聞いています。さきほどの虫の死骸は羽が六枚。それに後肢の関節や口の形状にも特徴が見られ・・・」
「詳しい事はいい。聞きたい事は二点だ」

ラインがヒュナの話を遮って質問した。ヒュナの話は長くなりそうなので、いち早く遮ったのだ。

「この虫は回転しながら飛ぶのか？」

「その可能性はあります。蟲使いの中には、そういった虫を見たことがあると聞いたことがあります」

「そいつは厄介だな」

『抉る』という動作は強力な殺傷力を生む。剣技にもそういったものがあるし、先の虫の硬度で回転すれば、並の鎧であればたやすく貫通するだろう。実際に兜ごと頭を吹き飛ばされた兵士もいたとラインは記憶している。

「もう一つ。この虫への対応策はあるか？」

「対応策ですか？　それは私には何とも言い難く・・・」

「じゃあ調べといてくれ。また月が一つ巡る前にはここに顔を出す。それまでに頼む」

ラインがそれだけ言って戸を閉めようとしたので、慌ててノラが足を挟んで止める。

「なんでさ？　この虫を使っていた奴は仕留めたんだろう？」

「そうかな？　手ごたえはあったが、どうも死んだような気がしないんだよ。あの手の奴はしつこい。それに同じような奴が他にいても困る。今度会ったら楽に仕留めるためにも、対応策だけは練っといてくれよ」

「ずぼらな性格の癖に本当に慎重だよ、そういうとこだけは。だからこそ、ここまで生きてるんだろうけどね」

ノラが褒めているのかけなしているのかわからない言葉をライン

に送る。ラインはどっちでもよさそうにしていたので、ノラもそれ以上は何も言わず、その場をすぐに離れたのであった。

＊＊＊

そしてノラとヒュナも、きっちりラインに言われた通りの仕事をしたのである。その成果がラインが投げた袋である。その袋の中身にウーラルが反応する。

「そ、それはなんだ？　ひどい臭いではないか！」
「へえ？　俺は何も臭わないけどな。獣人はやはり鼻がいいのか？」
「いや、臭うには臭うが、それほどひどい臭いと言うわけでも・・・中身はなんなのだ？」

ラインの問いに思わずロッハが答えたので、ラインはニヤリとした。得意げではあるが、油断は微塵もない。

「こいつか？　こいつは虫避けの香薬だ。弱い虫ならそのままあの世行きらしいが、人間や獣人には無害って代物だな。さて、それで」

ラインが今度は真剣な表情でウーラルを見た。

「なんで獣人の姫様がこれに反応するんだ？」
「知らぬわ！　私の鼻が敏感なのだろう」
「他のどの獣人も反応しないのにか？」
「女だから香料には敏感なのは当然だろう？　何種類という香料を嗅ぎわけるのだから」
「・・・それはありえねぇな」

口を挟んだのはヴァーゴ。ウーラルにとってもう一人の父の様な

存在でもあり、歳の離れた兄の様な間柄の二人である。ヴァーゴもまたザムウェドの王家とは親交があり、子どものいないヴァーゴにとって、ウーラルは自分の娘の様な存在でもあった。

この会談に臨む上で、一番複雑な心境だったのはあるいは彼かもしれない。実際彼は会見中、目を瞑って腕組みをしたまま微動だにしていなかった。そのヴァーゴが突然発言したのだ。注目が自然と彼に集まる。

「ウーラルは王家の出自だが戦士の気質。姫として公式の場での振る舞いは見事だったが、それ以外の自分の時間は鍛錬に当てるような獣人に育っていた。元々武芸の腕を磨くことが大好きだからな。だが、その興味が着飾る方向に向かった事は一度もない。ましてや、香料など二の次だ。実際、俺が香料を送った時には、『私がそんなうわついた女に見えるのか』と、怒られてしまったからな」

「・・・そんなこともありましたかしら？」

とぼけようとするウーラルに、ヴァーゴが喰ってかかる。

「おいおい、ほんの半年前の事を忘れたってのか！？　ふざけんな、お前は誰だ！？」

「いえいえ、ヴァーゴ様。そう怒らないで。実はまだ私、前回の首都陥落で負った傷のせいでいまいち記憶がはっきりしませんの。だから記憶が曖昧な事も多くて・・・お許しになって」

ウーラルがその場でさめざめと泣きだしたので、ヴァーゴは呆気にとられて言葉を失くした。戦場では無類の強さを誇る彼も、女の涙だけはどうにもできない。おろおろとするヴァーゴに、今度はロッハが声をかけた。

「ウーラル姫、失礼ながらお聞きしたいことが」

「・・・何かしら？」

ウーラルが両手で顔を覆ったまま答える。ロッハはそんな彼女に丁寧ながらもしっかりと質問した。

「実は失礼を承知で、姫には私の方からこっそりと護衛を付けておりました。御身はザムウェド王家唯一の生き残り。何かあっては大変ゆえ」

「私の様な亡国の者を、将軍ような勇者が心配してくれるのは非常にありがたいことです。それが、何か？」

「過分なお言葉、こちらこそ痛み入ります。ですが、実は監視の目は一日中、片時も外しておりません。センサーもつけていましたから、まさに一瞬たりとも目を離していないと言ってよいでしょう。その護衛からの報告ですが、彼らの報告では姫は一度もこっそりと抜け出すような真似をしていません。その姫がなぜ戦場の様子を御存じなのか、私にも納得いくような説明をいただけないでしょうか？」

ロッハの口調は段々と問い詰めるようなものに変わっていた。先ほどそっとドライアンに耳打ちをしたのもこの内容である。ロッハとしては本当にウーラルの身を案じて野対応であったのだが、それが意外な結果をもたらし始めていた。

そして冷静なロッハの疑念を受けて、場の空気も徐々に変化を始めている。何かがおかしい。そう誰もが思い始めていた時、ラインが再び口火を切った。

「俺、最近あんたに会ったような気がするんだけどな」

「まあ、私は人間とは交流が無いですわ。気のせいではなくて？」

「そっか、じゃあ気のせいかもな。さっきは無礼な口を聞いて悪かったよ。お詫びと言っちゃなんだが、あんたの言う通り、土地の割

譲や賠償金はもっと必要かもな」

ラインの突然の言葉にレイファンが驚いて彼を見上げたが、ラインはレイファンを無視して話を進めた。その態度に、ほくそ笑むウーラル。口の端を釣り上げて笑う彼女を見て、ラインの眉がぴくりと動いた。

「ではその話をする前に、この不快な臭い袋を片付けてくれるかしら？」

「ああ、その袋は片づけるよ。ダンサー」

ラインがダンススレイブを伴って袋を片づけるべく前に出る。どうして二人で取りに行く必要があるのか全員が不思議に思ったが、ラインの行動は早かった。全く遠慮することなく、つかつかと袋に二人で近づいていく。そしてダンススレイブがラインに手を差し出し、ラインがその手を握り返した瞬間、彼の手には一本の漆黒の剣が握られているのだった。

続く

愚か者の戦争、その３３～交渉（終盤）～（後書き）

次回投稿は、９／４（日）２１：００です。土日の連日投稿は続けますね。

愚か者の戦争、その３４～交渉（決裂）～

「はっ？」
「せいっ！」

呆気にとられる全員を尻目に、ラインの斬撃がウーラルを袈裟がけに斬り下ろした。だがウーラルの反応も早く、剣はウーラルの頬を裂いただけで、彼女は後ろに素早く飛びのいていた。
その数瞬後、俄かに獣人達が色めき立つ。

「何をする、貴様！」
「がたがた騒ぐんじゃねぇ！」

吼える獣人達を、ラインがそれ以上の剣幕で怒鳴り返した。その顔には微塵も怯える雰囲気はない。

「この女は偽物だ！　お前達は全員騙されているんだよ！！」
「何を根拠に・・・」
「笑い方だ」

ラインはきっぱりと言い切った。その言葉には揺らぎがない。

「確かに証拠はねぇ。だが人間の癖ってのはなかなか抜けねぇもんだ。こいつを知っている奴がいたら答えろ、この姫様は口の端を釣り上げて笑うような人物か？　俺はこんな笑い方をする女とつい最近戦った。虫を使う、確かに美人ではあったが、なんともいえない歪んだ、おぞましい笑い方をする女だった。あの不気味な笑い方だけは絶対に忘れねぇ」
「だが、貴様の言葉がたとえ正しいとしても、その真偽を決めるの

は貴様ではない」

ラインの言葉を遮ったのはロッハ。彼はゆっくりとラインとウーラルの間に立った。ヴァーゴも同様である。

「ロッハの言う通りだ。この姫の事は俺達が責任を持って追及する。他国の、まして人間族がどうこうする問題じゃねぇだろうな」

「驚きこそしたが、この場で剣を振るった事は不問に処そう。この場は剣を引かれよ、使者殿」

「・・・それはできねぇ」

ラインが改めて剣を構え直す。その光景に全員が信じられないものを見る目つきでラインを見たのだ。

「貴様、正気か？　俺達と戦えば死ぬぞ？」

「それにこれは国際問題だ。我々の内、誰か一人でも死ねばグルーザルドはクルムスに宣戦布告する。結果として、クルムスは跡形もなくこの大陸から消えるぞ？」

「誰もお前達を斬るとは言ってない。斬るのはその女だけだ」

ラインははっきりと言いきった。その言葉はなお力強くなる。

「その女は今斬らないとダメだ。その女は災いを撒き散らす。今斬らないと、お前達も後悔する事になるぞ？」

「根拠は？」

「その女は、おそらく人を乗っ取る」

ラインの言葉にドライアンの耳がぴくりと反応する。彼はいまだに座ったままだったが、その体は既に臨戦態勢に入っていた。何を隠そう、ラインの実力に体が自然と反応していたのである。

そうとは知らないラインは続ける。

「どこまで本当かは俺も知らねぇ。だが意識を乗っ取る術があるのは事実だ。それに俺は以前、人間に寄生して意識を乗っ取る魔物も見たことがある。その女は似たような力を持っている可能性があるんだ。それなら本人の記憶を持ちつつも、仕草が本人と異なるのは納得がいく」

「戯言を。全て推測だ」

「だから、それをこれから確かめようってんだよ！」

ラインが飛び出すのに合わせ、ロッハとヴァーゴが動いた。互いに致命傷を負わすつもりはないとはいえ、ロッハとヴァーゴは楽々とラインの動きを止められるつもりでいた。だがしかし。

「な・・・」

「んだと！？」

ロッハの差し出された手をラインはあっさりとかいくぐり、ヴァーゴの手はラインに掴まれ、彼はロッハの方に投げ飛ばされた。いかに本気でなかったとはいえ、ラインの事を侮っていたとはいえ、ラインは獣将二人を軽くあしらったのである。

そのままウーラルに突撃しようとするライン。その前に現れる巨体。

「そこまでだ」

ラインに立ちはだかったのはドライアン王本人であった。その表情は冷静そのものであったが、彼の目は自分の前での勝手な振る舞いは許さないと明確に訴えていた。

「止まるがよい、騎士よ」
「やってみろ！」

ドライアン本人を前にしてもラインの決意は揺るがず、やむをえないとばかりにドライアンが右腕を振り下ろす。ラインはまるで破城槌が振る下ろされるがごとき錯覚を受けたが、彼は恐れずダンススレイブでドライアンの右腕を弾いた。

「「何？」」

ラインとドライアンが同時に同じ感想を口にする。ドライアンは自分の一撃を薙いだラインに驚き、ラインは弾き飛ばすつもりで剣の横腹を使って叩いた一撃が、ドライアンの右手の方向をわずかに変えただけだという事実に驚いた。

そしてドライアンの脇をすり抜けようとするラインに、ドライアンが膝で彼を蹴りあげようとする。

「小癪な！」
「ちっ！」

だがドライアンの膝は空を切った。ラインを捕えたかに見えたドライアンの膝は、ラインの残像を捕えるのみだった。

そしてドライアンがラインの残像を蹴り抜いたその時は、もうウーラルの目の前にラインは迫っていたのだった。

「無礼者！」
「言いやがれ！」

ウーラルの放たれた本気の爪をラインは弾き落とし、その口に先ほどの小袋を詰め込んで彼女の顎をしこたま蹴りあげた。ウーラル

の口の中で袋の中身が弾ける。

「う、が・・・ギイィイイ！」

その直後、ウーラルからとても女性とは思わぬ声が漏れた。口から鼻から吐瀉物を泣き散らす彼女は、嗜みとは縁遠い有様であった。爪を出したままで喉をかきむしり、含む引きちぎって上半身がはだけるのも気にかけず苦しむ、ウーラル。そして、天に向かって大きく胃の内容物を吐いたかと思うと、口から飛び出してきたのは太い節に足が多数ついた、巨大な虫だった。

続く

愚か者の戦争、その３４～交渉（決裂）～（後書き）

次回投稿は、９／６（火）２１：００です。

愚か者の戦争、その３５～交渉不可能～

「キ、サマ。一度ならず、二度までも」

驚いたことに、虫は女の声で喋ったのだ。起こっていることに頭が追いつかず混乱する獣人達。レイファンもまた気が遠くなるような思いだったが、彼女は必死でその足を踏ん張っていた。その中で、ドライアンと獣将達だけは冷静に物事を見極めようとしていたのだ。

対するラインは冷静そのものであった。

「許さん、許さんぞ！」

「許さねぇのはこっちだクソ虫が。よくも俺のダチをやってくれたな？　死にやがれっ！」

ラインの剣が一閃、虫を真っ二つにする。その虫は絶命間際、確かに笑いながらこう言った。

「く、くくく・・・哀れだな。私は死なない、この程度では決して。そしてお前達は知ってしまった。これからは気を付けるがいい。お前達の友人、家族、恋人・・・そのどれにでも私はなることができる。せいぜい懐疑心を抱きながら、日々に怯えて過ごすがいいさ。言っておくが、今さら許しを乞うても受けつけぬぞ？　貴様達が怯え、泣き喚き、もがくさまを腐るほど見せてもらうとしよう。アハハハハ！」

「うるせえぞ」

高笑いをする虫を、ラインの剣が目にもとまらぬ速さで八つ裂きにした。今度こそ虫は何も語らず、虫がとりついていたウーラルは

崩れ落ちるようにその場に倒れた。ラインはダンススレイブを人型に戻すと、ウーラルの見開かれた目をそっと閉じてやる。彼女もまた被害者であることを、ラインは知っていた。魔術ならともかく、肉体的に乗っ取られた者はおおよそ元には戻らない。

そして我に返った獣人達が、慌ててラインを取り囲む。ラインは両手を上げて反抗の意志をない事を示した。

「もうやることはやった。何もしねぇよ」

「・・・どうしますか？」

ロッハが幾分狼狽気味に、しかし務めて平静に見えるようにドライアンに問うた。ドライアンはしばし目を閉じていたが、やがてある者を呼んだ。

「ゴーラ爺、いるか？」

「もちろんおるぞ」

屈強な獣人達の間からひょっこりと姿を現したのは、小さな狸の獣人だった。だいぶ年老いたように見えるが、その足取りは正確で、ゆっくりとウーラルに向かって行った。彼は手をウーラルにそっと当てると、何やら彼女の体を多少調べているようだった。

「ふむ」

「どうだ？」

「その騎士の見立て通りじゃな、この姫は確かに操られておった。体は先ほどまで生きておった兆候があるが、脳が既にスカスカじゃ」

「俺の頭でもわかるように言ってくれ」

聞いたのはヴァーゴ。その言葉は、怒りと悲しみに満ちていた。その彼を見てゆっくりとゴーラは頷く。

「ウーラルという人物はとっくに死んでおったという事じゃよ。もっとも死という言葉の定義にもよるが、その者の人格・意志などが損なわれたのを死とするなら、この姫はとうの昔に間違いなく死んでいる。それよりも重要なのは」

ゴーラが一度間を置く。

「この虫はこの大陸の虫ではないのう」

「どういうことだ？」

ドライアンがゴーラに問う。ゴーラは長い顎髭をさすりながらゆっくりと答えた。

「この大陸には凶暴な生物はあまりおらんからの。まあ南の大森林にはそれなりに危険な生物はおるが、これほどではないよ。そこの騎士が予想した通り、この虫は人に寄生する種類じゃの。ただし」

「ただし？」

「人の意識を乗っ取るような代物ではない」

もってまわった言い方に思わずラインが聞き返したが、ゴーラはやはりゆっくりと答えた。その言葉を聞いて、ラインはますます混乱した。

「わかんねぇよ、要するにどういうことだ？」

「この虫は使い魔の様なものじゃ。母体の命令を伝える、末端のようなものじゃな。それがこの姫を操っていたのじゃよ。それにどうやら乗っ取った本人の記憶も読みとれるようじゃな。ただ、まだ乗っ取って日が浅いのか、本体と分身の記憶を使い分けることは上手くなかったのじゃろう」

「ってことは、魔術の一種だと？　本体は人間なのか？」

ラインの質問にゴーラはしばし悩んだが、首を振った。

「いや・・・仮に人間じゃとすると、歴史上でも類を見ないほどの魔術士じゃ。むしろ人間よりも、そういう能力を持った魔獣や魔物と考える方が自然じゃろうな。確か、南の大陸にはそういった類の魔物がおると聞いたことがあるがの」

「南の大陸？　あの人跡未踏の地か」

「左様。あそこは魔物や魔獣が強すぎて、人間は住めんからな。まあ住んでおるのも一部、いるにはいるが」

「へえ」

ラインが感心する中、彼はさらにこのゴーラと呼ばれる獣人に聞いてみたいことがあったが、それはドライアンによって遮られた。

「とりあえずその辺にせぬか。事情が事情だ。今日の所は会見もこれまでにし、明日仕切り直すとせぬか。レイファン王女もそれでよいか？」

「え、ええ。さすがに今日このまま続けるのはいかがなものかと。ウーラル姫の弔いも必要でしょうし」

「お心遣い、痛みいる。では我々は簡易ではあるが、この姫の葬儀を執り行うとしよう。ヴァーゴ、やれるか？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

ヴァーゴは何とか返事をして見せたが、彼に動揺があるのは誰が見ても明らかだった。筋骨逞しい大きな体が一回り小さく見える。それでも彼は自らが喪主を務めると言い、準備に動き始めた。

そしてレイファンがラインを伴って会見の場を離れ、用意された天幕に行くため場所を去る。他の獣将や部下もその場を離れ、それ

ぞれの準備へと走った。残されたのはドライアンとゴーラ。ドライアンはいまだに酒の残りを煽っていた。

「飲むか、ゴーラ」

「ワシは歳じゃよ。お主の様な坊やと違ってな」

「ふん、５０００年を生きる伝説の獣人にかかれば、さしもの俺も坊やだろうよ。それでもゴーラは、まだあと５０００年は生きるのだろう？」

「当然じゃ。おぬしのオシメを変えた事もあるワシじゃからな。お主の末の末までちゃんと面倒を見てやろう」

ほほほ、とゴーラが穏やかに笑う。その笑い顔を見て、ドライアンも穏やかにふ、と笑みをこぼす。

「まあ俺のボンクラ息子がちゃんと嫁を捕まえれば、の話だがな」

「ではお主と同じように武者修行に出すか？」

「それもいいな。ただ世の中が予想以上に不安定なのが気にかかるがな」

ドライアンがグラスで飲むのは飽きたのか、直接瓶から飲み始めた。

「あんな虫まで出る始末だ。ゴーラ、お主の予見は当たっているのかもな」

「ここ数十年の平和が偽り、とうことかね？」

「人間も獣人も争わねば生きていけぬ生物よ。我々は生きるために他者を殺す。食物として、あるいは生活のために必要だとして。殺生を否定はせん。だが殺し過ぎは良くないし、どのような生き物にも平穏は必要だ。だからこそグルーザルドは過去、大戦に終止符を討つためにアルネリア教の提案に真っ先に乗ったし、他の国にも侵

攻をすることは止め、内政と魔獣の征伐に重きを置いた国策を敷いてきた。だが無差別に殺戮を愉しむ様な者がいては、俺の努力も焼け石に水かもな」

「無駄ではないとは思うが、確かにお主がグルーザルド国内に留まっておるのはもはや意味があまりないかもな」

ゴーラが頷くのを見て、ドライアンが酒をさらに煽る。その中身が無いのをドライアンが確認すると、彼は酒瓶を無造作に放り投げた。

「ならばどうする？　俺が大陸の支配者にでもなるか？」

「それも一案ではあるが、ワシに同意を求めるのは違うであろう？」

「まあ伝説の五賢者は中立だからな。もし俺がそう望めばゴーラはどうする？」

「グルーザルドの中には住んではおるが、ワシは手は一切貸さぬよ」

「グルーザルドの中に住んでいるだけでも、本当は問題になるだろうが？　俺は国を破壊竜などに焼かれるのは御免だぞ？」

「その辺はワシがグウェンドルフを上手い事説得するわい。あの竜めは喧嘩っ早いが、人の話に耳を傾けるくらいの度量はしっかり持っておるからの」

ゴーラが出っ張った腹を叩いて、自分に任せろと主張する。その姿を見てドライアンは笑うのだ。

「くっくく・・・相変わらず変なジジイだ」

「よく言うわ。歴代の王でも、ワシをジジイ扱いするのは貴様くらいのものよ。ちっとは敬え」

「俺にとっちゃ、貴様は五賢者である以上に家族の様なものだ。貴様の出っ張った腹を叩きながら、正拳突きを覚えた俺だ。まあこれからどうするかはゆっくり考えるさ。どうもローマンズランドの方

がきな臭いらしいからな。必要があれば大陸を制覇する事も厭わぬが、どのみちローマンズランドとはいずれ事を構えることにはなるかもしれぬ。そうなれば、ここでクルムスと戦うのはより上手くないということだ。ローマンズランドに至るまでの敵が増えるからな」

「ほほ、昔と違って建設的な考えができるようになったの。昔のそなたなら、目の前の全ての障害を叩き潰す気構えであったろうに」

「古い話を」

そう言ったドライアンに、昔自分の本陣に剣一本で乗り込んできた傭兵が思い出される。万を超える軍隊に５００人程度で斬り込み、自慢の獣将を斬り伏せ、ついに自分にすら手傷を負わせた人間。ドライアンが戦う時に恐怖を覚えたのは、あれが初めてだった。

それまでは戦いとなれば血が騒ぐだけで、他には何の感情もなかった。だが父王には「戦う者は『恐怖』を知っておかねばならぬ」と言われるも、実感が湧かなかった。自分より強い者など、この大陸にいないと思っていたから。だがあの剣士と出会ってより、ドライアンの中では確かに何かが変わった。一言でいえば、『謙虚』と『慎重さ』を学んだかもしれない。

「（引退した父とゴーラの言う事を聞いて国政を行っていたが、自分で何かを動かしているという実感は何も無かったな。そう考えると、自分の頭で色々と物ごとを考えるようになったのはあの時からか。あの剣士は今頃どうしているのか。確か『ブラックホーク』とかいう傭兵団の団長となっているのだったか？　大陸が戦火に覆われれば、また戦うことになるかもな・・・）」

血が騒ぐのは獣人である以上止められない。だが無意味な戦争はしたくないともドライアンは思う。戦火の中で妻となる女性と出会い、また戦火の中でその愛し君を失った。戦いは好きだが、戦争と戦いはまた別物だとドライアンは常に考えている。

「（敵を・・・見定めねばな。本当の敵を）」

そう考える彼は、戦闘中のように真剣な顔つきだった。

続く

愚か者の戦争、その３５～交渉不可能～（後書き）

次回投稿は、９／８（木）２１：００です。

愚か者の戦争、その３６～思いの丈～

＊＊＊

「レイファン、明日からの事だが」
「きゃああ！？」

ラインが夜に天幕に戻ると、レイファンは着替え中であった。獣人が用意した天幕は一つ分である。広さは十分なのだが、元より獣人に男性と女性を分けて天幕を張るような習慣はない。よく言えば男性と女性を戦士として同格で見ていることになるが、ニアの懸念はその部分であり、悪く言えば女性は女性として権利を全く保護されないのである。

もっとも獣人にそのような点を気遣う者はごく少数なのだが、もちろんレイファンなどは人間な訳であり当然恥じらいを知っている。ラインもまた決まりの悪さに夕涼みに出掛けて頭の中を整理するついでにグルーザルドの陣立てを見たり、自分の見張りと話して色んな情報収集をしながら時間を潰して天幕に戻って来たのだ。

彼の思惑では自分がいない間にレイファンはとっくに寝る準備を済ましていると思ったのだが、彼の計算は完全に外れたのである。実はラインが帰ってきそうな時間にレイファンが着替える状況を準備したのはダンススレイブであるが、まさかここまで上手くいくとは彼女も思っていなかったであろう。ダンススレイブの悪戯は本格的過ぎて、既に悪戯の域を超えていることを誰も注意しない。注意できるとしたら、せいぜい同じような思考をしたルースくらいかもしれない。彼なら手伝ってしまうだけかもしれないが。

ともあれ、ほとんど服を着ていない姿をラインに見られ、激しく動揺するレイファン。慌てて自分の服で大切な部分を隠すも、投げつける物も今回は近くになく、ただラインを睨みつけるだけだった。

ラインもまた「なんで毎回こうなるんだ」と思いつつも、段々とこういった状況に慣れたせいで、下を向いてため息をつくだけだった。そのため息がレイファンをさらにがっかりさせることを彼は気が付いていない。というのも、ラインがレイファンの裸体に興味が無いといえば言い過ぎだが、少なくとも彼は少女を女性として見るような趣味ではなかった。

「何を焦ってやがる。俺がそんな幼児体型を見て欲情すると思ってんのか？」

「お、女には恥じらいというものがあるのです！」

「そりゃ重要だ。確かに恥じらいが無い女は最低だな」

ラインが納得したような顔をする。そしてラインは大人しく後ろを向いた。

「お前に恥じらいがあるのはわかったから、早く服を着な」

「・・・私の裸を見ても、何とも思わないのですか？」

「思わないね。まあ後5年経ったら別だがね」

「・・・わかりました」

ラインとしても照れ隠しも幾分かはあったのだが、事実レイファンがもう少し年上であったなら我慢できるかどうかは甚だ疑問であった。つややかな髪、けがれを知らない瞳、瑞々しい唇、きめ細かい肌、すらりとした四肢。そのどれもが庶民とは違う輝きを発していた。

もちろん貴族だ、平民だという差別意識はラインにはない。自分とて平民の出なのだ。だが、レイファンのもつ美しさは娼婦や踊り子などの美しさとは違う。彼女達は生き生きとした美しさを持つが、レイファンのような貴族が持つのは完成された造形美だった。ラインは仕事の関係でターラム随一の娼婦フォルミネーや、フリーデリ

ンデの部隊アフロディーテの隊長であるカトライアといった世界に名だたる美女を見た事はあるが、彼女達と比べてもこれからのレイファンは、もしかすると彼女達に匹敵する美女に成長するのではないかという期待感を抱かせる。

それにレイファンと過ごすうち、間違いなくこの子は賢い人間だとラインは確信していた。自分のパートナーであれば、この上ないほど機転を利かして自分のフォローをしてくれるだろう。ラインの中にも一生涯剣で食べていく自信はない。ある程度歳を取った後、自分が作ったツテなんかを利用して、いずれは自分が商売を始めたり、何かしらを動かしてみたいという案がないわけでもない。そうなると、レイファンのように機転が利く女が自分の傍にいればどれほど助かるかと、彼は思うのだ。

言うなれば、レイファンは完全に文句なしの女性であった。それにラインとて、もはやレイファンが自分に好意を抱いていることくらいとうに確信していた。この年頃の子どもの成長は早い。成人を前に政略結婚などで結婚する事もある貴族なら、成人としてのしかるべき教育も早くから施されることはラインとて知っている。レイファンはラインと知り合った数カ月で、急激に大人びていた。背も少し高くなっているし、明らかに女性としての雰囲気を纏い始めていた。何より、ラインを見る目に女としての意識がありありと見て取れた。それに気づかぬほどラインも鈍感でもない。ダンススレイブの度重なる冷やかしにも気づかないふりをしていたが、ラインはとうに気がついていた。このままではノラの時に様に、自分はまたこの女の傍が居心地がいいと思ってしまうだろう。しかもレイファンの吸引力はノラの比ではない。およそ世の中の男が欲しがるものを、王族であるレイファンは全て用意できるようになるのだ。ラインがレイファンの元にいようとしないのは、レイファンが自分に本格的に惚れさせないようにするというよりは、自分が惚れないようにすると言った方が正しかったかもしれない。

本当はもう会わないつもりであったが、ラスティのたっての頼み

でつい引き受けてしまった。この仕事が終わったら今度こそ根性の別れにすべきだとラインは予め決心をしていたが、久しぶりに出会ったレイファンが輝き始めたのを見て、早くも仕事を受けた事を後悔していた。そんな彼の背中に、レイファンがぶつかった衝撃が届く。

「レイファン？　お前・・・」

「はい、服は着ていません」

ラインの腰に手が回される。ラインは突然の出来事にどうするべきかわからず、ただ抱きつかれるがままだった。騎士としての任務と忠誠を優先すべきか、傭兵として義理を果たすか、男として欲望に身を任せるか。何が正解なのか、さしもの彼にもわからない。

「はしたない事をしているのは重々承知です。ですが、もう我慢できない」

ラインを抱きしめる手に力がこもる。

「この任務が終わればあなたは行ってしまうでしょう。そのくらい私にもわかります。だから・・・私は貴方が私から離れられなくなるようにしたい」

「レイファン・・・」

「ダンサーには外してもらっています。ここには私とあなたしかいません」

そういえばいつもならここで冷やかしが入るはずなのにとラインは思うが、いらない気遣いをする魔剣があったものだとラインは内心で舌打ちをした。

止める者のいない場で、レイファンは思いのたけをぶつける。

「貴方を引き止めるのに必要な物はなんでしょう？　地位、名誉、お金、それとも肉欲？　私は世の中の男性が欲しがるものを、おおよそ用意できるつもりです」
「おいおい、最後のは・・・」
「できます。確かにまだ幼い私ですが、貴族の世界ではこのくらいの年齢で嫁ぐ事もあるのです。もちろんこの年齢で２０も年上の男性に嫁ぐような話もあります。そうなれば、男性が自分の元に来た女性を手つかずで育てると思いますか？　私も貴族である以上、そのような覚悟はあるのです。早いけれども、早過ぎる事はないでしょう」

そのような言葉をレイファンが吐くとは思わなかった。望外のセリフに、ラインは言葉を失くした。

「貴方の要求であれば何でも私は答えて見せます。そのくらいの力は持っているつもりです。それに男性がどのような事を好むかは、あの匿われていた館でおおよそ聞きました。まあ・・・酔っ払った彼女達に無理矢理聞かされたと言った方が正しいかもしれませんが。でも、私は貴方が望めば彼女達ですら嫌がるような事を笑顔でやってのけてみせます」
「・・・レイファン」
「そのくらい私は貴方の事が好きなの。もし貴族の世界が嫌だと言うのなら、このままどこかに姿を消してもいい。ううん、むしろこの場で貴方に奪って攫って欲しい。残酷な事を言うようだけど、クルムスは私がいなくなれば、追手を私に差し向ける暇もなく滅びゆくわ。数年逃げ切れば、後はクルムスが崩壊してしまうはず。そのために逃げ伸びる場所も私は考えてあるし、きっとそんなことはその気になれば貴方の方が詳しいわ。
もし私を妻にするのが嫌なら、愛人でも、仕事上のパートナーで

もいい。ただの都合のいい女でもいいの。庶民の生活でもきっと平気。色んな仕事も覚えてみせる。料理だってもういくらか覚えたもの。剣を取って貴方の背中を守る女が良いというのなら、人を殺すのだって厭わないわ。だから・・・お願いよ、私の傍から・・・離れないで・・・」

最後はしゃくるようにしてラインの背中で泣くレイファンの声を聞きながら、ラインの心は揺れていた。どうして自分なんかに惚れる女が現れるのかラインは理解ができなかった。だが彼も人間である。人に好意を向けられて嬉しくないはずがない。それも確実に良い女に育つ少女。正直言って、ラインとしてもレイファンは文句のつけようがないのである。剣を捨てるのであれば、今がその機会なのではないかとラインは思うのだ。

だがそれ以上に、今のラインには放っておけないことがあった。ラインはレイファンの手をほどくと、彼女に向き直り、そして抱きしめた。

続く

愚か者の戦争、その３６～思いの丈～（後書き）

次回投稿は９／１０（土）２１：００です。

「ライン・・・？」
「すまん、レイファン。俺は意気地無しだから、今、お前の目を見る自信が無い。今見たら、俺は俺としての生き方を忘れちまうだろう。だからこのまま言わせてくれ。今俺はお前を連れて旅をする事はできない」

ラインはきっぱりと言い切った。その言葉に、レイファンの方がびくりとはねた。

「どうして？　私じゃ物足りないから・・・？」
「そうじゃない。誤解のないように先にはっきり言っておくが、お前は申し分ない女だ。いや、そういう女になるだろう。そのくらい俺でもわかっている」
「じゃあどうして・・・」
「それを口にするのは難しいが・・・いいか、笑うなよ？　俺は昔、正義の味方になりたかったんだ」

その言葉にレイファンがびっくりして顔を上げるが、ラインの瞳は嘘偽りなかった。むしろ、レイファンが知る今までのラインの中で、もっとも真剣だったと言ってもいいかもしれない。

「子どもの頃からそうさ。騎士に憧れたのも、彼らが正しい事をしていると信じたからだ。彼らは悪しきをくじき、弱気を助ける正義だと信じていた。だから俺は騎士になりたかった。単純だろ？」
「・・・」
「そうじゃなくても、俺は昔からどうにも困ってるやつを放ってお

けなくてな。近所で虐められている子が見たら例え年上相手でも突っかかって行ったし、体罰を行う上官がいたら、真っ向から立ち向かった。無法をする仲間と決闘した事もあるし、敵陣に取り残された部下を単身助けに行った事もある。それがどんな状況でも、俺は自然に体が動いちまうんだ。馬鹿だよな、この前の戦いで死んだヴリルにも言われたよ。お前は傭兵に向かないって」

「だったら、なぜ」

「騎士や、まして王では無理だと思うからさ」

ラインははっきりと言いきった。その言葉には一点の迷いも無い。

「今の世界はおかしい。俺はそれに気がついちまった。最も、それは他にも気が付いている奴がいるようだけどな。だけど、その中でも俺が一番小回りが利くんじゃないかと思うんだ。調べるなら、俺が一番早く真実に辿り着く気がする」

「だけど、何も貴方がやらなくても！」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。俺が何もしなくても解決するかも。あるいはただの取り越し苦労かもしれない。だけど、もし俺がここでお前を俺の傍に置いて、見て見ぬふりを貫いてしまったら？　もし俺の感じた違和感が、本物だったら？　俺は自分の幸せの絶頂期に、『ああ、あの時動いていれば』なんて間抜けな後悔はしたくないんだよ。それにはお前をつれて動くには、あまりに危険が大きすぎる。だから・・・」

そこまで言ってラインは言葉に詰まってしまった。レイファンを連れて歩いても、あるいは大丈夫なのかもしれない。むしろ助かるかもしれない。ここでこれ以上駄々をこねられたら、ラインにはもはや断るすべもなかった。これ以上迫られれば、いっそレイファンを本当に攫うのもありなのかもしれないとラインが考えていた矢先である。

レイファンは一瞬俯くと、すぐに顔を上げた、その瞳にはもう涙はない。

「わかりました、ライン。貴方がそう言うのならば、私はそれに従いましょう」

「・・・すまねぇな」

「謝らないで。余計にみじめになるだけだわ」

そういうレイファンを前にして、どちらが年上だかわかりゃしないとラインは思うのだった。そんなラインの手をレイファンが引く。

「だけどその代わり」

「なんだよ、交換条件か？」

「もちろん。私の一世一代の誘いを断ったのですから、これくらいの交換条件は受けてもらうわ。今晩は、私と一緒に寝てもらいます」

「なんだ、そんなことか・・・って、ええ！？」

ラインが素っ頓狂な声を上げたので、慌ててレイファンが口を塞いできた。

「大きな声を出さないで！　・・・恥ずかしいでしょう？」

「って、お前。それはまずくないか？」

「ちっともまずくありません」

そういうとレイファンはずんずんとラインの手を引っ張ってベッドの方向に歩き、ラインをベッドに座らせるように誘導すると、自分はロウソクの明りを消した。そして自分は裸のまま、ラインに覆いかぶさるようにしてラインと共にベッドに寝転んだのだった。

「お、お前なぁ！」

「別に貴方が何をしても私は文句を言わないわ。好きにしたらいいの」

ラインを見上げるレイファンの目は潤みながらも、強い光をたたえていた。

「だからこのまま何もしないのもよし。私を抱いてもいいの。全ては貴方が決めて。その後貴方が私の元を去るとしても、今夜の事は何の関係もないわ」

「お前・・・それは」

「ええ、馬鹿な事をしていると自分でも思うの。でもいいでしょう？　これからはそんな事もできなくなるのだから。一回くらい、馬鹿な事をしたって・・・」

それだけ言うとレイファンはラインの胸に顔を埋めたまま、動かなくなってしまった。ラインはどうしようかと思案に暮れたが、彼の心づもりは決まっていた。ラインはそっとレイファンを抱きしめると、そのまま彼もゆったりと眠り始めた。後数年時が違えば、全ては異なった結果になったのだろうかと思いながら。

翌朝。レイファンが目を覚ます頃には、ラインはいなかった。何も変わらない自分の様子を確認すると、レイファンはほっとしたような残念なような気持ちになったが、彼女はすぐに気を取り直して衣装を整えると、天幕を後にした。少し外の空気を吸いたくなったのだ。

レイファンが出て行くと同時に、ラインが天幕の裏からこっそり入ってくる。朝起きて顔を合わせるのが気まずかったのである。朝起きてレイファンを起こさないようにこっそりと天幕を出たのはいいが、どのみち戻らざるを得なくて、途方に暮れていたのである。立ったまま悩んだり、あるいはしゃがんだりして苦悩するラインを、

天幕を警護している獣人の兵士が不思議そうな目でずっと見ていたのは言うまでもない。
そしてこっそり帰ったラインはそそくさと騎士の衣装に身を纏う。
その彼に、突然背後から声がかかる。

「おい」
「おおう！　・・・なんだ、ダンサーか。脅かすな」
「脅かしたつもりはないがな。そういえば、昨日の告白は熱かったな。その割に手の一つも出さぬとは、貴様は思ったより甲斐性無しだな。『据え膳食わぬは騎士の恥』という言葉を知らないのか？」
「ほっとけ！　って、なんで全てを知っている？」
「当然だ、私は昨日一晩中ベッドの下にいたのだからな」

ダンススレイブがどこに行っているのかとラインは不思議に思っていたのだ。ここはグルーザルドの陣中であり、自由などきかないはずである。ラインもふとその事を気にしていたのだが、最後にはそのような考えはどこかにいっていた。それが事もあろうに、ベッドの下にずっといたとは。

「趣味が悪いぞ、お前。覗き趣味か」
「違うな。外には居場所などないし、第一、獣の貴様に王女が手籠にされそうになれば、私が出て行って助けないとな」
「するか！　第一向うから誘ってだな」
「誘ったのは向うでも、貴様の様な変態の要求にあんな子が耐えれるとは思えん。貴様の要求は娼婦ですら嫌がる下衆なものらしいからな」
「どこで聞いた話だ、どこの！？」
「私に寄るな、変態め！」

ラインの必死の説得も虚しく、ダンススレイブの誤解はそう簡単

に解けなかった。主にノラが酔った勢いでラインとの昔の愚痴をこぼしたのだが、「散々私を弄んで・・・」「好きなだけ私の都合もおかまいなしに、やることはやっといてさ」などと言われたものだから、ラインとノラが昔恋仲にあったとは知らぬダンススレイブは、すっかり客としてラインが無茶をしたと勘違いしていたのであった。

続く

愚か者の戦争、その３７～天幕にて～（後書き）

次回投稿は、９／１１（日）２１：００です。

愚か者の戦争、その３８～騎士と姫と～

＊＊＊

翌朝からラインとレイファンは定型の会話しか交わさなかった。そこには王女と忠実な騎士がいるだけであり、交渉は順調すぎるほどに進んだ。当初のレイファンの思惑通り、グルーザルドとはクルムスが土地の一分を割譲することで合意。それでもクルムスが今回の戦争で奪った領土ははるかに多く、国土だけで言えば三倍近くにまで膨れ上がっていた。

もちろんトラガスロンの残党が内乱を起こす可能性は十二分に考えられており、事実としてすでにあちこちで内乱の報告は届きつつあった。だがレイファンは他の者が考える以上に頭が回っていた。グルーザルドに進んで譲歩したのは、このトラガスロンの反乱に対してグルーザルドの軍隊を借りうける気でいたのだった。もちろんその度に何を差し出すかは、既にレイファンの頭の中に構築されている。レイファンはクルムスという国を生き延びさせるために、端からグルーザルドを後ろ盾にする気であったのである。

ラインがその事に気が付いたのは、冗談交じりに聞いた時。もし自分が中原の覇者だったらどうするのかと。レイファンは少し悩んでこう答えた。

「中原をたとえクルムスが制覇しても外敵が多くて困りますから、代わりに中原の覇者を誰かにやってもらう。というのはどうでしょう？」

思えばその時からレイファンはこの構図を描いていたのかもしれない。そうなれば、最終的にこの戦争はレイファンの思う通りに動いたことになる。レイファンの発想とその狡猾さに、ラインは少し

肝が冷えたのを覚えている。
そして交渉は結局レイファンの思い通りで終了した。会見を始めてから3日。予想以上の速度で締結された同盟は、この後すぐに効力を発揮する事となる。
条約が締結されると、レイファンはあっという間にクルムスに引き返した。条約が締結されたその夜には、レイファンは既に王城にいたのだった。

「お帰りなさいませ、レイファン様」

出迎えたのはラスティとノラである。保養地にて休養していることになっていたレイファンではあるが、その顔には疲労の色が濃く、誰も休養したとは思えまい。そんなレイファンは疲れた体を押して、ラスティから報告を受ける。

「ラスティ、急ぎの案件はありますか？」
「いえ、そう急がずとも・・・」
「今が重要な時です。急を要するものだけ今報告を」
「・・・わかりました。ではロンネル地方で内乱が起こりかけているという報告がありまして・・・」

その光景を見ながら、そっとラインは部屋を後にした。もう自分にできる事はないと思ったし、レイファンに報償をねだるのも筋違いだと思ったからだ。それにこれ以上ここにいては、自分にも余計な欲望が芽生えそうで嫌だった。ラインはその場をそっと立ち去った。
そしてその途中、彼は再建中である王族用の庭園が目に入った。敷地は以前より小さくなっており、まだ中心にあるあずまやのような建物が出来ているだけだった。一応その一画だけは周囲から見えないように、既に背の高い植え込みで隠されるようになっている。

ラインに植物の名前はわからないが、季節によってはきれいな花を咲かせる植物なのだろう。
ラインは何かに導かれるようにその場所に歩いて行った。

「もう・・・家族で集まる事もないんだろうな、レイファンは。そう思えば不憫だな。もっと良い解決法はなかったもんか・・・」
「戦いとはそのようなものでしょう？」

気を抜いていたラインの背後から声をかけたのはレイファンであった。突然現れた彼女に驚くライン。

「おい、仕事は・・・」
「ノラが気を利かせてくれたのです」

ラインが出て行ったことに気が付いて焦るレイファンに、仕事の報告をつらつらと述べるラスティ。業を煮やしたノラが、ラスティに眠り薬を吹きかけて強制的に眠らせたということである。
そしてレイファンは一も二もなくラインを追いかけてきた。その少女を見て、ラインは今までとは違う光が少女の目に宿っていることに気が付いた。

「で？　何か用か？」
「はい。貴方にまだ今回の報酬を渡していませんでしたから」

レイファンが懐から一通の書状を取り出す。

「私達が最初に出会った場所の事を？」
「ああ。トリメドの裏路地だったな」
「はい。その町で金貸しを営む者達に分割して報酬を預けてあります。面倒だとは思いますが、金貸し業の者を信頼できるとも思いま

せんので」
「いや、慎重な対応だ。それでいい」
ラインは少し感心しながら書状を受け取った。その手をレイファンがそっと握る。
「もう一つ、貴方に授けるべき物が」
「ふ～ん、いいものか？」
「ええ。私的にこれ以上ないくらいの物です」
レイファンの神妙な面持ちにラインは自然と膝を付き、臣下の礼を取る。本当なら最初からそうすべきだったのだが、その辺がラインという人間なのだろう。
片膝をついたラインの首にそっと巻かれる首飾り。ラインは大人しく面を下げたままされるがままにしていたが、やがてレイファンから声がかけられる。
「ライン、面を上げなさい」
「かしこまり・・・っ」
ラインが面を上げようとした時、その唇を柔らかい何かが塞いだ。見開いたラインの目の前には、今まで自分が知らない表情をしたレイファンがいた。予想もしない出来事に目を見開いたままのライン。そのまま時が止まってしまったかに思われたが、それは二人が感じた時間だけのことで、風は緩やかに流れ、虫は夏の真っ盛りのように恋の歌を歌い、世界はいつもと変わらぬ時を刻んでいた。その中でゆっくりと離れる男女。
「何があろうと・・・行くのでしょう？」
「・・・ああ、俺は行く。誰が止めても無駄だ」

「そう、ですか」

レイファンの瞳に一瞬陰りが差したが、それも一瞬。レイファンはラインからするりと離れると、自分の指輪をあずまやの中央にあるテーブルのくぼみに差し込み、回した。するとカチリと音がして、床の一部が開くのだった。

「王族専用の脱出経路です。元々ここにあった物ですが、それを隠すためにあずまやを建てたのです」

「いいのかよ？　俺に教えて」

「構いません。この道を知るのは私と貴方だけ」

レイファンが入口付近にあるカンテラに明りを灯す。すると道は二股に分かれていた。

「右に行けば市街まで続いています。さしもの貴方でも普通にはこの王城から出ると目立つでしょう？　夜分でもあるし、そっと出発した方がいいはずです」

「左は？」

「私の私室へと続いています。そして、貴方に預けた首飾りは、もう一つの鍵になっているのです」

その言葉を聞いてぎょっとするラインと、にこやかに笑うレイファン。その表情は既にラインの知る幼い少女の面影はあまり見られなくなっており、既に彼女は大人の女性へと変貌を始めた事を表していた。

「これが待つことしかできない私にできる精一杯。やはり私は自分から国を見捨てる事はできない。所詮私は臆病者ですね」

「・・・5年だ」

ややあって薄く寂しく笑うレイファンに、ラインがぼそりと呟いた。その言葉が聞き取れず、思わず聞き返すレイファン。

「今、何と?」

「5年待ってろ。その間に俺は今の仕事を片付けて見せる。いや、片づけてなくてもだな、俺はお前の元に現れるよ。その時俺に惚れた女がいなくて・・・お前がいまだに俺なんかの事を好いていてくれるなら・・・その時はお前を俺の女にしてやる。それでいいか?」

その言葉を聞いてきょとんとしていたレイファンだったが、やがて両の目からは自然と大粒の涙がこぼれていた。そして感極まった顔で口を手で覆い、何度も頷いて見せるレイファン。

ラインはそれだけ確認すると、照れたように背を彼女に向けた。

「じゃあな、レイファン。俺が会いに来た時、イイ女になってないと承知しねぇ」

「ええ、ええ。きっと・・・必ず・・・」

それだけ言うとラインはカンテラを灯しながら、道を右に曲がって行った。その背中を見送るのは、王として、女性として果てしなく長い階段を上ろうとする一人の少女だった。

続く

愚か者の戦争、その３８～騎士と姫と～（後書き）

長いシリーズでしたが、これにて終幕。次回投稿は、９／１２（月）１９：００です。

第二幕人物紹介、その1

名前：アンネクローゼ＝メディガン＝スカイロード
年齢：２２、人間の女性
外見：１７２ｃｍ、６０ｋｇ、８７／５９／９０、少しウェーブがかり肩よりも少し長い金のブルネット、金の瞳
職種：最上位竜騎士（ドラゴンマスター）、ドラゴンの名前はドーチェ、アルロンの二頭
好き・得意なモノ：ドーチェ・アルロンとの遠駆け
嫌い・苦手なモノ：宮廷作法
一人称：私
〈プロフィール〉
　ローマンズランド第二公女。男５人、女３人の８人兄弟であり、彼女は下から４番目。上に３人の兄と、一人の姉。下に２人の弟と１人の妹がいる。
　スカイロードの一族は、元は武門の家柄であり、全員がそれなり以上に武術をたしなむ。兄達は全員が軍人であり、全員が師団長以上の役目を帯びている。現皇帝も国を統括すると同時に軍人でもあり、自ら竜を駆る竜騎士でもある。若かりし頃は王国一の竜騎士と言われていた。そんな彼に最も似ているのはアンネクローゼだとも言われており、気性もまた近しいものがある。
　生来は気高く、自信に満ち溢れた性格。気性も強く、兄や父にも全く譲ることが無い。だが妹の我儘にだけは手を焼いており、いつも振り回されては迷惑している。
王家のしきたりどおり１２歳で軍人となった彼女は、軍内でその才能を発揮し始める。もっとも単体の竜騎士としては優秀だったが、徹底した帝王学の影響か、他人を見下したような行動を取る彼女は傲岸不遜とも受け取られていた。だがそんな彼女も、軍に入って数年経ち、運命の出会いを果たす。

当時軍内で評判となっていたルイの部隊に配属されたのだ。横柄な態度と単独行動を取ろうとしたアンネクローゼだが、その瞬間ルイはアンネクローゼの尻を思い切り蹴飛ばした。公衆の面前で地べたにはいつくばらされたアンネクローゼはルイを手打ちにしようとするが、あべこべに折檻されてしまう。

それからもアンネクローゼはルイに徹底的にしごかれたが、良い働きをしたときは思う存分褒めてくれた。いつしかアンネクローゼはルイに懐き、尊敬できる騎士として一目置く態度を取るようになっていた。そしてアンネクローゼ自身もまた、ルイに徹底的に指導をされてからは良い指揮官として生まれ変わっている。冷たく見られがちな彼女だが決して情が薄いわけではなく、自己にも他者にも厳しいだけである。

なお彼女の首の後ろには竜を象ったような模様が刻まれている。彼女はその意味を知らないが、ローマンズランドの開祖であるシグムンドもまた、同じ模様を体に残していたとの記述が残っている。その模様を体に残す者は、当代最強の竜騎士になるとの言い伝えがある。彼女より年上の兄弟と父はその事実を知っているのだが、彼女が増長しないように本人には伏せているのだった。

名前：アムール
年齢：８６（人間では３８相当）、黒豹の獣人の男（？）性
外見：たてがみは短め、身長：１８２ｃｍ、体重：７０ｋｇ、
職種：グルーザルド千人長
好き・得意なモノ：可愛くて強い物、光り物、男全般
嫌い・苦手なモノ：うるさい女、モテる女
一人称：アタシ（真剣な時は俺）
〈プロフィール〉
グルーザルドでもっとも将来を嘱望された軍人の一人であったが、

同時に凶暴な性格で有名でもあった。手のつけられない暴走を繰り返す彼であったが、ゴーラにその性根を叩き直されてからは非常に大人しく、性格が１８０度入れ替わったかのように周囲の事を考える戦士となった。

それからの彼は出世よりもグルーザルド全体を慮るようになり、獣将やドライアンの命令を直に受ける一平卒として、人材発掘や裏の任務につくことが多かった。

そしてニアに特に目をかけていた彼は彼女を自分の右手として育てるべく様々な画策を巡らせていた。獣人一倍ニアに辛く当ったのも、彼女に期待すればこそ。グルーザルドを裏で支える人物の一人である。

名前：エメラルド
年齢：３５歳（人間では１５歳相当）、ハルピュイア（男性はハルパスと呼ばれる）
外見：金色の、耳より少し長い程度の髪。緑の瞳。１６１ｃｍ，４８ｋｇ，８０／５３／８２
職種：剣士
好き・得意なモノ：アルフィリース、優しい人、お菓子をくれる人
嫌い・苦手なモノ：怖い人
一人称：エメラルド
〈プロフィール〉
遥か昔有翼人（ニケ）と呼ばれた、美しい種族に似た容貌を持つハルピュイア。本来はもっと獣に近い容貌をしているはずなのだが、彼女は人間とハルパスのハーフのため、容貌がより人間に近い。そのため里では仲間外れにされがちであった。

性格は大人しく、どちらかというと気弱で甘えん坊。だが狩猟民族であるため、剣士としての腕前は一定以上持ち合わせている。

彼女は里で祀られる精霊剣インパルスに選ばれた女性であり、本

来ならば里では崇められる存在。長老が彼女に伝えたお告げは事実であるものの、同時に厄介事を彼女に押し付けたのも事実。レメゲートは里にあるものの、いつからあるかも定かではなく、なぜその剣を祀っているかももはや誰も覚えてはいない。一つ確かなのは、彼女にはもはや帰る場所はないという事であるが、彼女自身はその事を悲観するほど弱くもない女性である。

名前：クローゼス
年齢：２１歳（容姿は１７歳程度）、人間の女性
外見：白に近い青の、肩より少し長いくらいの直毛。同色の瞳。１５５ｃｍ，４５ｋｇ，７８／５３／８１
職種：氷の魔女
好き・得意なモノ：お茶、静かな場所、夜
嫌い・苦手なモノ：五月蠅い場所・人、暑い場所、昼
一人称：私

〈プロフィール〉

元々はローマンズランドの出自である。彼女は旅館の一人娘として生まれ、一つ違いのアンネクローゼにちなんでその名を名付けられた。だが光り輝くような容姿と太陽の様な性格と伝えられるアンネクローゼとは、クローゼスの性格は全く異なっていた。

彼女は生まれてこのかたほとんど泣きもせず、笑いもせず。赤ん坊の頃からとかく無表情であった。ある程度成長しても言葉も発さず、段々と彼女は両親からも気味悪がられる存在になっていった。彼女が決定的に両親に嫌われることになったきっかけはある日の夕餉の時。臨時収入があってよろこぶ両親の前で、４歳の彼女は初めて言葉を喋ったのだ。「母さん、父さん。一体何が面白いの」と。

それ以降彼女は両親に相手にされなくなった。独り言も多いと余計に気味悪がられ（実際には水の精霊と話していただけなのだが）、彼女の師匠である氷原の魔女がたまたま通りかかって彼女を見出す

まで、実に彼女は2年間、人間と全く喋っていなかった。
　氷原の魔女に拾われて彼女が魔女としての修行を開始すると、彼女は瞬く間に才能を開花しはじめた。元々人間よりも精霊と話す方が得意な彼女は魔術を扱うことに何の苦労もなく、あっという間に魔女に必要な素養を身につけた。年老いた彼女の師匠に変わり、氷原の管理は彼女がほとんど行っているのである。
　そして、クローゼスはその中でアルフィリースと出会ったわけだが、クローゼスにとってアルフィリースは、師匠以外で初めてまっとうに喋った人間であった。物珍しさもあったのだろうが、それにしても何の苦労もなく話せる人間の存在はクローゼスにとっても意外であった。クローゼスの中に芽生えた「アルフィリースと話してみたい」という感情が何と呼ばれるものなかを、まだ彼女は知らない。

名前：インパルス
年齢：１２００年以上（見た目は１０歳の人間の少女）、魔剣の人間化した姿
外見：金のカールがかった短髪、金色の瞳、１４０ｃｍ，３２ｋｇ，??
職種：雷鳴剣
好き・得意なモノ：
嫌い・苦手なモノ：
一人称：ボク
〈プロフィール〉
　もとは雷鳴の上位精霊。その当時仲の良かったハルピュイアを救うために精霊剣となったのがインパルスである。古巨人によって鍛えられた剣に、儀式によって自身を封印して彼女は精霊剣となった。
　もともと彼女には友人がいた。ハルピュイアの娘であった彼女はどこか間の抜けた少女であり、狩りもままならぬ一族のお荷物であ

った。だが彼女は一族でも随一の歌い手であった。そんな彼女の傍で歌を聞きながら眼下に大陸を見下ろす。そんな日常がインパルスは大好きだった。

やがて彼女達の集落の近くに魔王が出現するようになる。その力は強大で、ハルピュイア達は次々と里を追われた。だがハルピュイアを捕食対象として認識したその魔王は、しつこくハルピュイアの里を追撃し始める。

ハルピュイア達が絶望に包まれる中、真っ先に立ちあがったのはインパルスの友人であった。彼女は遅い来る魔王の軍勢に立ち向かおうとした。それに気が付いたインパルスは彼女に手を貸して魔王を撃退したが、結果として他の魔王達にも目を付けられてしまう。

このままでは里は全滅する事を悟ったインパルスは、自らを精霊剣として運用するように友人に進言した。もちろんハルピュイアの娘は反対したが、インパルスは強引に儀式を結構。精霊剣となった彼女をハルピュイアの娘はその命が尽きるまで振り続けたという。

そして里を狙う魔王がついにいなくなり、インパルスは眠りについた。彼女に自我が宿っていたことを覚えている者も少なくなり、やがて彼女に語りかける者もいなくなったインパルスは自我を手放していたが、エメラルドの歌声と、アルフィリースのせいで再び目覚めることとなる。彼女はアルフィリースの事に何か違和感を覚えているようだが・・・？

続く

第二幕人物紹介、その1（後書き）

次回投稿は９／１４（水）１９：００です。

難題、その1～日常の災難前半～

＊＊＊

「あれがそうなの？」
「ああ、あれがアタシの第二の故郷だ」

小高い丘から見える大きな都市。周囲を城壁に囲まれ一見厳めしいが、城壁の外にまばらに広がる民家や、多くの人が働く田園地帯がなんとものどかな風景となってアルフィリースの目に映る。
彼女達の目に映るのは、聖都アルネリア。言わずと知れたアルネリア教会本部であり、かつては人間が魔物や魔獣と戦う時の拠点として。また現在では平和の象徴として佇む土地である。
ミリアザールはアルネリアという都市が前線としての機能を終えた時、将来的には中間規模の都市として、完全な管理下に置きたかった。そのために東西の街道整備も、わざとアルネリアを外す形で整備させたのである。その甲斐あって、現在のアルネリアはミリアザールに取って理想の都市となった。秘匿性が比較的確保できながら自らの意のままに運営でき、かつ情報を収集しやすい土地。そしてその正体は、いたるところに物理的・魔術的罠の仕掛けられた難攻不落の要塞である。もちろんそこに住んでいる住民が気付く事はまずない。有事の際にのみ発動するものがほとんどなのである。
やや離れた所には口無し達の隠れ里があり、日夜ミリアザールの手足となる者達が養成されている。そしてアルネリア内では各国の貴族子弟が集められ、将来的にアルネリアに取って益になるような人物になるべく育てられていた。神殿騎士団もその一つである。
こう聞けば聖都とは名ばかりで実に歪な目的のために作られた都市のように聞こえるが、実際にはここは東でも有数の治安のよい都市として有名である。特別な産業も持たぬため人の移動こそ少ない

が、規模も中堅以上だし、住む分にはかなり人気の高い都市だった。教育場所としてのグローリアの人気も高く、高い授業料を払わなければならないトリアッデなどの大学付属の施設に比べれば、将来的にアルネリアに仕えることでその授業料を免除されるシステムは庶民に非常に人気が高かった。だからこそ、近年では人気が高くなりすぎて入学時にある程度人員が選抜されてしまうのは、やむをえない事かとミリアザールは頭を悩ませている。

アルフィリース達が向かうのはそのような都市。ミランダにしてみれば久々の帰還であり、アルフィリースにしてみればミランダが仕えるほどの人物には興味があった。実はアルフィリースは一度会っているわけだが、ミランダはまだその事は話していなかった。

そして大陸でも有数の安全地帯である近辺では、自然と旅の仲間の気も緩む。

「ラーナ！　昨日の勝負の続きだ！」
「ロゼッタさんもしつこいですね。酒の勢いの勝負を、今ここで真昼間からしらふでやろうと？」
「アタイは執念深いのさ」

ロゼッタが不敵に笑いながら前を歩くラーナの肩を掴む。ラーナはため息をつくこととしきり、観念したようにロゼッタの相手を渋々していた。

「で、色目勝負でしたか？」
「そうだ！　アタイが色気であんたみたいな小娘に負けるわけにゃいかないんだよ！」
「淫魔の私に張り合う事が既に無意味な気もしますが、まあいいでしょう。勝負するのは嫌いでないにしても、誰が判定をするのです？」

「そりゃあお前・・・」

そこまで言ってロゼッタも言葉に困る。男のメンバーはダロンとグウェンドルフだけ。ダロンはそのような事は興味がないと言いたげに最初から顔をそむけたまま歩いているし、何より今はイルの相手をしていた。幼子の相手をしているダロンをこの勝負に引っ張り込むのはさすがのロゼッタもバツが悪い。

そしてグウェンドルフは真竜である。端からこのような俗世のくだらないやりとりに巻き込むのは無理だろう。さしものロゼッタも遠慮をする相手である。

ここで暇そうな旅人でもいれば適当にロゼッタが声をかけるのだが、こういう時に限って街道には誰もいない。そして田園で作業をする農民をわざわざ呼びよせるのもどうかと思うのだ。

そんなつまらないことのようだが、意外にも真剣に考えていたロゼッタに、これまた意外な人物から救いの手が差し伸べられる。

「私が判定しよう」

「ルナ？」

手を挙げたのはルナティカ。意外な人物の参入に、話を聞いていた全員が驚いた。

「なんでまたルナが・・・」

「ただの合理的な判断だ。私は暗殺者としての訓練を受けている。当然、色香の手ほどきもだ。その辺の娼婦よりはよっぽど仕込まれているよ。だから私が判定役にはもってこいだとは思わないか？」

冷静にさらりと凄い事を言い出したルナティカだが、なんとなく納得ができないでもないので、半信半疑ながらもロゼッタはルナティカの言葉に従った。

「よし、アタイからだな」

先手、ロゼッタ。ロゼッタの目は肉食動物を連想させる。腕を頭の後ろで組み、豊満な胸を惜しげもなく強調する。溢れる色香とその目に捕らわれれば、普通の男なら危険を知りつつも飛びこまざるにはいられまい。

ルナティカがロゼッタを見た後、次にラーナを促す。

「私の番ですね」

後手、ラーナ。ラーナがフードをいったん被ると、それを取り払いざま、流れる髪を払う仕草をしながら全員の方を見た。その仕草は儚いラーナの見た目や優しい物腰とは全くの別物。成熟した女性としての色香と、ふと笑う口元からこぼれる甘い吐息に、ちろりと出された舌。そしてわざとなのか、髪を払う仕草に紛れて一瞬露わになった白い太腿に指を這わせ、他人の視線を誘導している。

初めてこういったラーナの仕草を見るターシャなどはあんぐりと口を開けていたが、これが男だったらたまらないだろうとアルフィリースも思うのだ。彼女だって多少どきりとするのだから。

だが二人のやりとりを見て、ルナティカは首を振った。

「全然ダメ」

「はあ？　どこがだよっ！　これでオチない男はイ○ポだ、イ○ポ！」

「汚い発言に同意するのは癪ですが、ロゼッタの言うことに一理あるかと」

ルナティカの言葉に少なからず憤慨するロゼッタとラーナに、ルナティカが冷静に反論した。

「そうじゃない。それはそれで二人とも色香はあると思うが、今のやり方だと目以外の要素も沢山ある。　それでは色目勝負だとは言わない」
「く、そう言われれば・・・」
「まあ納得ですが、ではルナティカならどうします？」

ラーナの言葉にルナティカは即座に反応した。口元を手で少し隠すようにし、やや俯いて目線を一端全員から外す。そして再び全員を見たルナティカの目は潤んでいた。まるで怯える小動物。男の加虐心を煽るように、彼女は一瞬で弱々しい女性に変身してみせたのだ。

「こいつは・・・」
「なるほど、言うだけのことはありますね。確かに大したものです」
「まあこれは一例だ。相手によって好みは違うから、実際には相手を見ての使い分けが必要だな」

そう言うルナティカはもはや普段通りの無表情に戻っていた。彼女の変わり身の早さに驚く他の仲間達。そう言って観戦を決め込んでいた他の仲間を見て、ロゼッタがいい事を思い付いたとばかりにニヤリとした。

「お前達～、まさかタダ見じゃないだろうな？」
「え？」
「当然、そのつもりでしたが？」

突然話を振られて焦るアルフィリースに、さも当然だと返すリサ。

「んだよ、リサ。ノリが悪いな」

「生憎と参加したくとも、さしものリサでも色目などの細かい機微まではわかりませんから。ロゼッタ、私が盲目だという事を忘れてはいませんか？」
「っと、そういやそうか。日常生活に支障がほとんどないから、つい忘れそうになるな」

ロゼッタはしまったとばかりに頭をかいた。そして次なる獲物（？）は、ミランダである。

「ミランダ、あんたは？」
「パス。さすがにこの辺はアルネリアも近いし、変な行動を天下の往来で取る気はないよ」

そう言ってにべもなく断ったミランダは、普段の動きやすい軽装ではなく、しっかりとアルネリア教のローブに身を包んでいた。歩き方も戦士の時の大股から、しずしずと歩く方に変更している。全くよくもここまで器用に使い分けられると、アルフィリースは今だに感心するのだった。
そんなアルフィリースに、ロゼッタの目が向けられた。

続く

難題、その1～日常の災難前半～（後書き）

次回投稿は、９／１６（金）１９：００です。

難題、その2～日常の災難後半～

「ア、ル、フィ～」
「な、何よ」

良い獲物を見つけたとばかりのロゼッタの声に、思わず後ずさるアルフィリース。

「やらないか」
「何をよっ！」
「色目」
「嫌よっ！」

渋りに渋ったアルフィリースだが、全員の「ここでやらないのはヘタレ」という目線のプレッシャーに負け、渋々と行うことに。

「や、やればいいんでしょう？　やれば」

そう言いながら構えるアルフィリースだが、当然彼女に男性を誘惑した事はおろか、そのような考えすらロクに抱いた事はないわけで。緊張のあまりかウィンクすら失敗して両眼を閉じたアルフィリースに、全員から酷評が寄せられる。

「すまん、勧めたアタイが悪かった」
「・・・まあアルフィにも欠点はありますよね？」
「やっぱり不器用だったかぁ」
「色気の欠片もありゃしないわね。ワタシの方がよっぽどマシよ」
「まあ、そう言うのが好きな人間もいるかもね。ボクにはわからないけど」

「ママ～、何がしたいの？」
「あるふぃー、た、楽しい？」
「・・・何も言わない方がいいだろうな」
「心配するな、アルフィにはその胸という凶器があるから」
「まあ私は何も言わないわよ、新人だしね」

ターシャがヤレヤレとやったのだが、アルフィリースはやっただけ損な気分になっていた。そして、いつものように、とどめはやはり彼女。アルフィリースの肩を背後から叩くリサ。

「さすが残念美人」
「ほっといて！」

アルフィリースは悔し紛れに、他に誰か自分より色目が下手そうな人間を探す。目に留まったのはイルマタルだが、さすがに彼女に色目は要求できなかった。エメラルドも同じく色目の意味もわからないだろう。

そんな時、恰好の人物にアルフィリースは気が付いた。

「エアリー、ちょっと色目を使ってみてよ」
「色目？　何のために？」
「エアリーができるかどうか、見ておきたいのよ」

アルフィリースはエアリアルにはそんな技術はなかろうと考えたのだが、それ以前の問題だということは気が付かなかったらしい。

「色目はできないな、なにせ必要ない」
「え？　なんで？」
「そもそも男女の交わりに必要あるのか？」
「尤もな意見、所詮色目など一つの要素。エアリーが正しい」

ルナティカが認めてしまったため、アルフィリースは反論しようもなかった。次にアルフィリースがみつけたのはインパルス。

「ちょっと、インパルス！」

「却下。精霊剣たるボクをなんだと思ってるんだい？　エメラルド！」

「はーい」

そういうとインパルスは人型から剣へと戻ってしまった。プライドの高いインパルスは、こうなるとテコでも戻らないだろう。

そうなるとアルフィリースはこれ以上どうしようもなかった。皆に馬鹿にされイライラの募るアルフィリースは、思わずターシャに八つ当たりをする。

「ターシャ！　あなたもやりなさい！」

「ええっ？　なんで私が」

「団長命令よ！　それともエマージュに言いつけましょうか？」

「そんな、横暴だぁ」

そう言いつつも観念した様子で色目を使ってみるターシャ。彼女にとっても初めての試みだったが・・・？

「アルフィよりはマシ」

と、あっという間に斬って捨てられた。その結果を受けて可哀想なくらい真っ白になったアルフィリースを見て、ロゼッタが何かを思い出す。

「そういや楓がやってないな・・・」

「楓！」
「はい、こちらに」
思い出したように楓を呼び付けたアルフィリースに、少しおどおどした楓が現れる。
「どこにいたの？」
「いえ、流し目合戦とかが始まったので、逃げてました」
「正直だねぇ・・・」
正直すぎる程正直な楓にミランダがため息をついた。そんな事に気を止めないアルフィリースは、さらに楓を問い詰める。
「気が付いていたなら話は早いわ。貴女もやるのよ！」
「はあ、命令とあれば仕方ないですが・・・」
「何？　何か問題あるの？」
「いえ、周りから止められていますので」
その言葉に全員が首をかしげる。
「えーと・・・なんで？」
「『危険だからやるな』と。ですから、まだ私はそのような色香を使うような任務もないわけで」
「そ、そう。どうしようかしら・・・」
思わぬ返事に判断に困ったアルフィリースが後ろを見る。そんな彼女を受けて、リサがアルフィリースに耳打ちする。
「（よいのではないでしょうか？　まさか死にはしないでしょう。もしかすると楓をからかう要素が増えるかもしれませんし）」

「（そ、そうかなぁ？　嫌な予感がするんだけど）」
「（それとも代わりにアルフィがイジられますか？）」
「（それも嫌だなぁ）」

アルフィリースとリサがひそひそ話をする間に、ロゼッタとラーナが楓を促していた。それでもあまり乗り気でない楓ではあったのだが。

「はあ、ではいきます」

そうして楓が色目を披露した瞬間――その場に崩れ落ちるラーナと、開いた口が塞がらないロゼッタと、その場に固まる他の全ての仲間。全員の感想はルナティカの一言に集約される。

「なるほど、これは危険だ。男女種族関係なく誘惑してしまう」

＊＊＊

「着いたよ、ここが正門だ」
「これは・・・随分と厳めしいのね」

アルフィリースはアルネリアという都市に入るために検閲所にいた。アルネリアという都市は周囲をぐるりと高い城壁で囲まれている。正門を見ると三層になった分厚い鋼鉄製の門に、兵士がおよそ５０名ほど。アルネリアはそこまで交易が多くはないとは言え、査閲は厳しく、正門前は長蛇の列である。それを見てロゼッタが独り言のように呟いた。

「まるで戦争中の都市だねぇ」

「おかしいわね。確かに門兵もいい加減な仕事はしないけど、これは厳しすぎるわ。何かあったのかしら？」
「先触れは出していますが、まだ迎えが来ませんね。ミランダ様、私が先に行って確認してきましょう」
「お願い、楓」
そう言うと楓はいち早く姿を消した。口無し達には専用の出入り口があるそうなので、査閲なども関係ない。
それから待つ事一刻。楓からの連絡もなく、また長蛇の列も中々解消されなった。
「あー、面倒臭くなってきたぁ」
「ちょっと、もう言葉遣いが乱れてるわよ？　それにミランダの身分じゃなんともならないの？」
「アタシ一人ならね」
ミランダは仲間をチラリと見る。アルフィリースの黒髪自体も珍しいのに、ダロンにエメラルドがいる。これではさすがに通せと言っても無理だろう。ミランダ本人でさえ、以前戦士風の恰好をしたまま正門を通ろうとして断られたのだ。
「仕事熱心なのはいいんだけどねぇ。融通が利かないったらありゃしない」
「あ、誰か来る」
馬に乗って表れたのは、黄金の鎧に身を纏った女性の騎士と、見目麗しいシスターだった。ミランダはその二人に見覚えがある。
続く

難題、その2～日常の災難後半～（後書き）

次回投稿は、９／１７（土）１９：００です。

難題、その3～謁見～

「あんたは確か・・・」
「お久しぶりにございます、シスター・アノルン」

ウマから軽く飛び降りた女性の騎士が、シスターに手を貸して下馬を手伝う。そのシスターは丁寧にお辞儀をしてみせた。

「私はシスター・エルザ。こちらは神殿騎士のイライザ。アノルン様の案内を仰せつかっております」
「お役目ご苦労様です」

ミランダもまた丁寧なお辞儀と口調で返す。こういう変わり身の早さだけは一生身につかないだろうと、アルフィリースは呆れかえっていた。

そうして無事アルネリアに入るアルフィリース達。アルフィリースもそうだが、ロゼッタや他の仲間達もきょろきょろと周囲を見渡していた。アルネリアに溢れかえるのは人々の笑顔。街並みこそミーシアなどの繁華街には及ばないが、そこそこに露店なども発達し、往来には邪魔にならない程度には人が行き来している。特徴的なのは、その誰もが穏やかな表情で楽しそうに暮らしているということだった。

「平和な都市だな」

思わずロゼッタが感想を漏らす。殺伐とした環境で育った彼女にしてみれば、このような場所は非常に縁遠い物だった。すべからく傭兵というものは殺伐とした職業なのだから、彼女に限らず傭兵全

員がそうかもしれない。
そして先頭を歩くエルザが、ロゼッタに話しかける。
「意外そうな顔ですね。そんなに平和に慣れていませんか？」
「ああ、アタイはホントに掃溜めみたいな場所の出身だからね。こんなところは平和すぎて、むかむかする」
「最初は私もそうでしたよ」
エルザが苦笑する。彼女もまた、スラムの様な土地でリーダー的存在だったのだ。ロゼッタの気持ちは彼女には想像に易い。
「ですがこの平和も影で支える者があってこそ。決してタダで成り立っているわけではありません」
「そんなもんかね」
「そんなものです」
エルザが笑いながらアルフィリース達を案内する。その彼女には街ゆく人々からしょっちゅう声がかかるのだ。その度に笑顔で返すエルザ。こういうのが本来のシスターだろうとアルフィリースは思う。
「ミランダも見習ったら？」
「大きなお世話。それにあのシスター、この教会でも指折りの武闘派だよ。見た目で侮らないことだね」
「そうなの？　ふ～ん」
「ここのシスターは多くが戦うための訓練を受けている。街並みもしっかり見るといいよ、いつでも戦争できるような配置にしてあるから」
「それはなんとなくわかってる。嫌に規則正しく家屋が配置してあるし、さっきからぐるりと回り込むように移動しているよね？　中

心部に近づくためには遠回りになるように街並みを配置したという事だから、最初から戦争用に作られたことくらい、私にもわかるわよ」

「それに至る所に罠があるな」

ルナティカが会話に加わって来る。彼女は馬から降りて歩きながらも、至る所に目を配っていた。

「おそらくは対魔獣・魔物様の罠だとは思うが、ブービートラップの様な罠を仕掛けた様子があちこちに見て取れる。例えばそこ。ただの漬け物石をおいているように見えるが、反対側にも同じようなものがある。緊急時にはあそこが連動して魔術を発動し、この道を遮断するのだろう」

「御名答。さすがだね」

「ちょっと見ればわかること。別に大したことはない。それに」

ルナティカは周囲をくるりと見渡した。

「町に入る以前からじっとこちらを見ている者が数名。町に入ってからもつかず離れずで人間が周囲にいる。監視か、護衛かは微妙だが」

「護衛ですよ」

ルナティカの言葉にエルザが答えた。笑顔は笑顔だが、その表情には多少の緊張が見て取れる。

「最近ではこのアルネリアでもおかしな事件が瀕発するもので」

「最高教主のお膝元でかい？　それはどういった事件なのさ」

思わず素に返って質問するミランダに、きまりの悪そうな顔をす

るエルザ。

「それもおいおいお話ししましょう。まずはアルネリアの最高教主に会っていただきますので」

エルザの発言にぎょっとするアルフィリース達。

「な、な、なんで？」

「あの方が興味があるとのことです。ぜひ一度アノルン様も含め、アルフィリース様にもお会いしたいと。それに・・・そちらにはグウェンドルフ様もおられるようなので」

「ふむ、かの教主には私も興味がある。良いのかな、私が会っても」

「ええ、それは是非とも」

そうしてアルフィリースは深緑宮に案内された。ここに至るまで警護万全な相当数の門をくぐったが、深緑宮に入ってからは拍子抜けするほどに何もなかった。そして深緑宮の中ほどで、アルフィリースは懐かしい顔を見た。

「あ、アルベルトだ」

「お久しぶりでございます、アルフィリース殿。ご健勝で何より」

軽く一礼したアルベルトがアルフィリースに近づいてくる。共に話していた若い騎士と、女性二人も同様だ。

「久しぶりね、アルベルト！　元気だった？」

「はい、問題なく。ともあれ紹介をいたしましょう。後ろに控えるのは私の弟のラファティと、その妻であるマーメイドのベリアーチェ。それにエルフのロクサーヌです。以後お見知りおきを」

「へぇ。私、人魚は初めて見るなぁ」

アルフィリースがまじまじとベリアーチェを見たので、肘でリサがアルフィリースを小突く。

「デカ女、失礼でしょう。そんなイヤラシイ目線で舐めまわすように女性を見ては」

「どっちが失礼よ！　だいたいどんな目をしているかなんて、リサにはわからないでしょう！？」

「想像に易いのですよ、両刀使い」

「二刀流よっ！　誤解を招くような事を言わないで！」

「相変わらずのあんぽんたんですね。誤解を招くように言っているのです。そうでないと、何も話しが発展しないでしょう？」

「そんな発展ならしなくていいわよっ！」

そのやりとりを聞いて、ベリアーチェが楽しそうに笑っていた。真面目なロクサーヌは困ったような顔をしていたが。

そしてベリアーチェがずいと前に出る。

「本日は遠路はるばる御苦労さまでございます。ここから先は最高教主の謁見場所でございます。誠に申し訳ないのですが、アノルン様、アルフィリース様、リサ様、グウェンドルフ様以外の方は別の間にて御控え願えないでしょうか」

「おいおい、アタイ達は蚊帳の外か？」

「最高教主は忙しい身。本来ならば諸国の王族ですら滅多に直接会う事はできないのです。そのあたりの事情をご理解いただきたいと存じます」

「皆、すまない」

ミランダが素直に引きさがるように全員を促したので、呼ばれた人間以外はベリアーチェの案内の元、別の部屋に移動となった。た

だその場に一人、ルナティカだけが残る。

「ルナ？」
「私はリサの護衛。傍を離れない」
「困りましたね」

リサが判断を仰ぐべくアルベルトの方を見たが、彼は「いいでしょう」とだけ言い、アルフィリース達を案内し始めた。
そしてミリアザールの執務室前に到着する一行。

「ミリアザール様、お客人をお連れしました」
「いいでしょう、入っていただきなさい」

そしてアルベルトが木造りの扉を開けてアルフィリース達を促す。
アルフィリースは偉い人に会うのはこれが初めてだったので（フェンナもミランダも実は偉い人なのだが）、緊張していたのだが・・・

「あ、貴女は？」
「久しぶりですね、アルフィリース」

にこやかに笑う少女が書類が山と積まれた机を前に、椅子に座っていた。アルフィリースは以前会ったシスター・ミリィがそこに座っていることに驚いたが、それ以上に驚いた人物がいた。
それはルナティカ。彼女はミリアザールを見た瞬間、全身の毛が逆立ち、一瞬で戦闘態勢に入っていた。

「っ！」

そしてルナティカは腰に差していた短刀を抜き放つと、目にもとまらぬ速度でミリアザールに斬りかかったのだった。

続く

難題、その3～謁見～（後書き）

次回投稿は、９／１８（日）１８：００です。

難題、その4～現実問題～

「ルナ！」

叫ぶリサより早く、一陣の風と化したルナティカがアルフィリースの長い髪をたなびかせると同時に、ルナティカの刃はミリアザールの喉元に迫っていた。

何が起こったかわからないアルフィリースが気づいた時には、ルナティカの刃がミリアザールの指で止められた時だったのだ。

「確かに鬼子よの、これは」

「！」

刃を止められたルナティカが貫手でミリアザールの急所を狙うが、目にもとまらぬ速さで手首を掴まれ、ルナティカはあっという間に後ろ手に拘束された。

「それでもまあせいぜい子鬼というところか。暗殺者が正面切って戦うようではのぅ」

「・・・化け物」

「この可憐な乙女を捕まえて化け物とは失礼な」

ミリアザールの軽い口調とは裏腹に、しっかりとルナティカは拘束されていた。先ほどから彼女は何とかふりほどこうとしているのだが、ミリアザールの怪力がルナティカを捕まえて離さない。

「ワシに格闘戦を挑もうなど笑止千番。まあ獲物にこだわらず、すぐに短剣を離したのは良い判断だが」

「なぜだ」

ルナティカは生まれて初めて、自分が獲物だと認識した者に質問をした。いや、そうせざるにはいられなかった。

「何がじゃ」

「なぜお前の様な魔物が、アルネリア教の最高教主をしている？」

「ほう・・・」

ミリアザールは面白そうにルナティカを見つめ直した。そこには純粋な興味が見て取れる。

「なぜワシを魔物と思う？」

「匂い。それ以外にはない」

「匂いときたか。ワシ、臭いかのぅ？」

「冗談が過ぎます、教主（マスター）」

無表情で言い返す栂子がため息をついた。リサもミランダもルナティカが飛びかかったことには驚いたが、事情が一切わからないアルフィリースは混乱の極みにいた。

「え？　ええ？？　ミリィが最高教主で魔物で、ミランダの上司が・・・ええ？」

「落ち着きなさい、アルフィ。こういう時には何かの早口言葉を呟くといいでしょう」

「ええと、クルズスでぐすぐすのクススがクスクスと・・・あぶっ」

「・・・リサとしたことがうかつでした、ここまでデカ女に落ち着きがないとは。みっともないったらありゃしない」

舌を噛んだアルフィリースの頭を、リサが杖でぽかりと叩いた。

その様子を見たミリアザールはくくく、と忍び笑いを漏らすとルナティカを解放した。その瞬間飛びずさって距離を取るルナティカ。

「・・・」

「そこな子鬼も警戒しているようじゃし、アルフィリースに至っては混乱の極みよな。では、順を追って話そうかの」

ミリアザールは順を追って話を始めた。まず自分が魔物であること。その上で魔物と戦うことになったきっかけや、アルネリア教会の成り立ちを話し始めた。話し終わるのに時間がかかると踏んだ栃子は食事の準備をさせ、場は会食となった。

太陽が天中に差しかかる昼過ぎに始まったこの話し合いだが、ミリアザールが一通り話し終わる頃には食事もすっかり終わり、そろそろ夕方の涼しい風が吹き始めてもおかしくないほどの時間になっていた。

一通り話を聞いたうえで、冷静に戻ったアルフィリースは腕を組んで何やら考えていた。その彼女を見て、ミリアザールはいつのまにか果実酒を傾けながらアルフィリースを観察している。

「最初に出会った頃はお主という人物を見定めようと思っていたから、自分の身分を偽ったのは申し訳ないとは思うがの。諸国の代表や王族でさえ、ワシの顔を直に見たことがある者はほとんどおらぬ。その辺の事情を察してくれ」

「まあそれは別にいいんだけど・・・一つはっきりさせていいかしら？」

アルフィリースの表情はいつになく真剣だった。

「貴女は私の敵でも味方でもない。この認識で合ってる？」

「これは・・・」

ミリアザールが感心したようにアルフィリースを見た。そして梔子の方を見ると、彼女も頷いて見せた。

「なるほど、ワシはそなたをみくびっていたかの。これは評価を改めなくてはなるまい」

「私はリサみたいにお人好しじゃないの。ミランダの上司であるとか、リサのチビ達の世話をしているとか、ライフレス達と敵対しているからといって貴女を信頼する気にはならない、それだけよ。まだ知り合ったばかりで信頼関係も何も無いもの」

「ふふふ、それでいい」

アルフィリースの意外な言葉に面喰うリサとミランダとは裏腹に、ミリアザールのアルフィリースに対する評価は上がったようであった。

そしてミリアザールは顎で梔子に指図すると、梔子は一端この場を離れた。

「ワシが言いたい事もまさにそれじゃったのだ。ワシらは仲間ではなく、同盟関係でいいだろう。その方が動きやすいしな」

「と言う事は、交換条件ということ？」

「ますます話が早くて助かるな」

そう言ったミリアザールの顔は非常に楽しそうだった。語らうに足る相手。ミリアザールはアルフィリースの事をそう認識し始めていた。

そしてミリアザールは話の多くを省略し、本題に入ることにした。

「では早速本題に入ろう。ワシはお主の望みを知っている。傭兵団を作るのじゃろう？」

「ええ、そのつもりよ。具体的な案はまだないけど」
「ならば、このアルネリアに本拠を構えるとよいだろう」

ミリアザールの突然の提案に、ミランダやリサがびっくりする。
アルフィリースはまだ冷静な表情のままだった。

「そして私達を駒の様に使おうと？」
「まあそう邪険にするな。たしかにそういった魂胆が全くないと言えば嘘じゃが、それ以上にお主達の安全を慮ってのこともある。今回の相手は異常だ。我々が互いをどのように思おうと、一番やってはならぬことは別々に勝手気ままに戦い、それぞれが撃破されることだ」
「敵の敵は味方ってことね」
「身も蓋もない言い方じゃが、まあそんなところじゃ」

ちょっと呆れたようにミリアザールがグラスを指ではじく。

「その代わりワシからは出来る限りのことをしよう。ワシも何も無い状態からこの教団を作り上げた身。おおよそお主がどういったことで困っているかは想像がつく」
「へぇ。たとえば？」
「お主、金がないじゃろう」
「ぎくっ」

アルフィリースの目が完全に泳いでいた。その仕草を、むしろ可愛いと思ってしまうミリアザール。

「お主、傭兵団を作る上でどのくらい金がかかるか知っておるかの？」
「え、えーと・・・わかりません」

「うむ、素直でよろしい」

くっくく、とミリアザールが笑う。その前でしょんぼりしているアルフィリース。リサとミランダはため息をついていたが。

「まず本拠の場所じゃのう。まあ最悪ここアルネリアでないとしても、本拠地は必要じゃ。そうでないと、依頼を受けるにも安定せんからな。ギルドに委託して依頼を定期的に受け取ることもできるが、いざという時に連絡が取れんと信頼度も薄れるじゃろう。それに本拠がないと、なんのかんので金がかかる。そして本拠地をだいたい１００人が寝泊まりしても構わん程度の規模で構えるとすると……土地代、建築費用、魔術加工やも含めてざっとこんなものか」

ミリアザールが指を三本立てている。それを見てアルフィリースは唸った。

「えーと、３万ペント？」

「阿呆、桁が二つ違うわい」

「３００万！？」

アルフィリースは眩暈がしてきた。自分に金銭感覚があるという自覚もあまりなかったが、それにしてもここまで金がかかるとは思っていなかったのである。

ちなみに、この時代の傭兵の一般的な稼ぎはランクによっても変わるが、アルフィリースのＥ判定では平均で１５００ペント／月。ロゼッタのＡで１万ペント／月である。なおギルドには賞金による年間ランキングなどもあるが、不動の一位であるゼムスが最高で１７８．３万／年であった。しかもパーティでの稼ぎである。もちろんこれは以来の報酬としての値の話で、他に有形無形の報酬はあるのだが。

そう考えると、これからアルフィリース達が知名度を上げるんなど何のかんのを考えると、３００万ペントを稼ぐには最低でも数年はかかるわけで。アルフィリースの頭には最初から全てに躓いた感じがして、目の前が真っ暗になる感じがしたのだった。

もっともミリアザールもからかい半分に高めの金額設定をしたのであり、少しこの辺りが意地悪なのだった。それでもアルフィリースの反応を見ていると、もっと虐めたくなるのは万人共通なのだろうか。

「まあそれが初期費用であって、あとは事務、清掃・料理などの下働き。施設の維持費。武具などの手入れ費用などなど。馬も飼うならその設備も必要じゃし・・・」

「ず、頭痛がしてきた・・・」

「だから大変だと言ったではないですか、ダメ女」

リサにまた小突かれるも、なんとも的を射ていたので、アルフィリースは反論する気も起きなかった。そんな彼女を見てミリアザールもさすがに可哀想と思ったのか、助け船を出すことにした。

続く

難題、その４～現実問題～（後書き）

次回投稿は、９／２０（火）１８：００です。

難題、その5～

「まあ・・・ミランダの頼みもあるし、以前ミランダの事を頼んだ手前もある。無利子で３００万、そなたに貸し付けてもいい。なんなら大口の依頼などの橋渡しもしてもいい。こう見えて諸国に発言権はあるからのう」
「本当！？」
「ただし」

ミリアザールが掌をアルフィリースに向けて、彼女を制する。

「貸し付ける前に一つこっちの依頼も聞いて欲しい。なに、そう難しくもない」
「やっぱりそうくるわよね。で、何かしら？」
「うむ。恥ずかしい話しじゃが、最近このアルネリアでは奇妙な事件が頻発しておってな」

ミリアザールの額にしわがよる。それだけ困っているという事なのだろう。

「行方不明の者が定期的に出ているのじゃ。まあそれなりに大きい都市じゃからある程度はしょうがないのじゃが、今までは年間に数名じゃった。それがここ二月ほどで、既に１０名を越えておる」
「たまたまじゃないの？」
「為政者に『たまたま』で済まされたら、行方不明の本人も、その家族や友人も浮かばれんであろうよ」

そう言うミリアザールの表情は真剣そのものだった。その表情に、

アルフィリースもまたミリアザールに対する評価を多少改めた。口調はどうあれ、彼女はやはり統治者なのだ。

「じゃあ行方不明者の捜索に協力したらいい？」
「ああ、リサが主になるだろうがな」
「失せ物、探し人は私の最も得意とする所です。一発でずばっと、まるっと解決しちゃいましょう・・・と言いたいところですが」

リサがち、ち、ちと指を横に振る。

「アルネリア教会ならばそれなりの裏方もいるでしょう。例えば楓のような者も多数いるはずです。それが、この膝元であるアルネリアで何も掴めないと？」
「これは痛いところを突く」

ミリアザールが眉間にしわを寄せて渋い顔をした。だがその発言はやはり至って真面目なままだった。

「恥ずかしい話じゃが、なぜか正体がつかめない。いや、容疑者に関しては実は絞り込んでおる。じゃが、証拠が無い。それにお膝元じゃからこそ、堂々と口無し共を動かすわけにもいかん。ここの事件はまず市の連中が解決し、それでだめならアルネリア直下の騎士団、そして神殿騎士団の順番に動く。その神殿騎士団ですら存在をほとんど知らない連中が動けば、より面倒なことになるだろうよ」
「なるほど、そういう話でしたらこの私しか頼る者がいないのも頷けます。いいでしょう、ばっちり引き受けました」

リサが親指を立てて「任せとけ」と主張した。そうしていつくか細かい話を決めた後、戻って来た梔子が別の客の来訪を告げる。

「教主、お客様がお見えに」
「おお、そうか。そういえば夕刻から話し合いの時間じゃったな。呼んでくれ」
「席をはずしましょうか？」
「いや、よい。貴様達にも懐かしい顔じゃろう」
「？」

そう言って入って来た客は、アルフィリースもよく知る人物であった。

「失礼いたします、フェンナ＝シュミット＝ローゼンワークスとその他数名、入ります」
「フェンナ！？」

お辞儀をして入ってくるフェンナに、彼女が顔を上げる前にアルフィリースは飛び付いた。

「ア、アルフィ？」
「元気にしてた！？　無事だとは聞いていたけど、久しぶり！」
「私は元気に・・・く、苦しい」

そしていつものように、アルフィリースの力一杯の抱擁による犠牲者が一人。彼女はやはり何も学んでいなかった。

＊＊＊

「じゃあシーカーにも行方不明者が？」
「ええ。最初は私達が疑われたのだけど、シーカーにも行方不明者はいまして。それも複数名」
「そのことでフェンナとも対応策を練っていたのだよ」

アルフィリースをフェンナから引っぺがして、一段落ついたミリアザールがお茶をすすりながら答える。どうやら事態はアルフィリースが考えるよりも深刻であるようだった。

「ならすぐにでもリサが動いた方がいいですね」
「それもそうじゃが、まずは長旅の疲れを癒すがよかろう。今までの経過は今日中にまとめて書面に起こしておく。それを聞いてから動いた方が早かろう。それに、愛しのジェイクにも会いたいのではないか？」
「ぶふっ！」

珍しいことに、リサがお茶を噴き出していた。もちろんその被害を受けたのはアルフィリースである。ルナティカはしっかりと避けているあたり、流石である。

「ちょっと、リサ！？」
「あ、いえ。まあ水も滴るイイ女ということで」
「滴っているのは茶だが」

ルナティカの冷静な否定にも、リサは動揺を隠せないでいた。彼女がここまで動揺するのは珍しい。その様子をニヤニヤしながら見つめるミリアザール。

「ちょうど今日の授業が終わる頃であろう。イライザにでも案内させよう」
「必要ありません、既に場所は感知済みですから。ルナティカを伴って私は行きましょう。では私はここで失礼を」

そそくさと出て行こうとするリサだが、ルナティカがその足を止

める。

「リサ、出て行く前に一つ」
「？　何か？」
「フェンナ、だったか？」
「あ、はい」

突然ルナティカに名前を呼ばれたフェンナがびっくりして居住いを正す。ルナティカはその後ろにいる女性を指さしていた。

「シーカーというのは、体の中に虫を飼うのは普通なのか？」
「は？　一体何を・・・」

フェンナが質問の意味がわからず言葉に詰まる中、既にルナティカ、ミリアザール、梔子が動いていた。そしてフェンナの後ろの女性も。

ルナティカの動きは速かった。フェンナを後ろから羽交い締めにしようとする女性の両手を片方はへし折り、片方には短剣を突き刺していた。そして一瞬のひるみを見逃さず、その首をへし折ったのだ。フェンナは梔子が庇い、女とフェンナの間にはミリアザールが割り込んでいた。

そして首を折った女を蹴飛ばすルナティカ。ルナティカの動きの早さをミリアザールが褒める。

「よく気付いたな」
「体幹の筋肉の動きがおかしかった。それでしばらく観察していたが、体の中に大きな虫がいるかのようだった。それだけだ」
「よくぞ気づいて・・・リサでも気づかなかったのに」
「よくわかったわねぇ」

首が折れてあらぬ方向を向いた女から声が聞こえる。首が折れたまま女は立ちあがり、うつろな目でアルフィリース達の方を向いた。その不気味な光景に、一同が警戒心を上げる。

「私の変装、見破られたことはないんだけどね？」
「見る者が見ればわかる。センサーはごまかし慣れているだろうが、私はそうはいかない。それにあえて言うなら」
「あえて言うなら？」
「口から異臭がした。有り体に言えば、臭い」

その瞬間、虚ろな眼の女の焦点が一致してルナティカを睨みつけた。

「・・・その言葉を二度も言われるとはね。人間は度し難いほど腹立たしい生き物だわ」
「それはこっちのセリフじゃ、女。貴様が連続行方不明の犯人かの？」
「それは・・・」
「半分だと思う」

ルナティカの言葉に、女も含めた全員がぎょっとした。対するルナティカは極めて冷静だったが。皆が驚く中、ルナティカは冷静に語り始める。

「ここに来る途中、奇妙な人間を見た。普通の人間は話す時、動く時、黙っている時、何か動作を変える時、体に微弱だが確かな変化が訪れる。私が見たのは道端で会話をした後急に用事を思い出したのか、突然走り始めた人間だった。だが、彼は走っていてもまるで心拍も、呼吸も何も変わらなかった。あれは人間じゃない、人間の体の作りに反している。きっと人間のふりをした何か。犯人かどう

かは別として、捕まえる価値はある」
「なるほど、それは興味深い話じゃ。ではまずこいつを締め上げるとしようか」
「・・・何者よ、あなた」

驚愕に見開かれる女の瞳。その瞳に映る、銀の髪の少女。端麗な容姿に、冷たい瞳。刺すような視線が、女を射抜く。

「ただの殺し屋。それ以上も以下もない」
「・・・貴女の顔は覚えたわ。覚えておきなさい」

その言葉を言った瞬間、ミランダとイライザがアルフィリース達を庇うように防御魔術を使った。同時に、女が自爆をする。
飛び散る埃と血煙りに、一瞬全員の視界が遮られた。

「くっ」
「マスター！」

叫んだのはミランダ。だが彼女の心配もよそに、閃光で遮られた視界からゆっくりとミリアザールが姿を現した。

「心配無用。あの程度で手傷を負うワシではない」
「ならいいけどさ。それにしても、躊躇なく自爆したね」
「所詮捨て駒なのじゃろう。一部は確保したがな」

ミリアザールが左手に掴んだ虫の一部を全員に見せる。ミリアザールはあの一瞬に、虫の一部を女から引き抜いていたのだった。そして異変を感じた神殿騎士団や女官達が慌てて駆けつける。

続く

難題、その5～（後書き）

次回投稿は、９／２２（木）１８：００です。

難題、その6～訪れる困難前半～

「教主、ご無事で！？」
「無論。それよりシスター・僧侶の中から生物・魔物関連に強い奴らを選抜しろ。こいつを調べる。もちろん、厳重に管理した上でな」

ミリアザールが手の中の虫を見せながら指示を飛ばす。そして慌ただしく動き始める深緑宮。指揮を執るミリアザールの表情は真剣そのものであり、そこには一人の指導者としての彼女の姿があった。その中でミリアザールが思いだしたようにアルフィリースを見る。

「アルフィリース。非常にすまぬが、ここ深緑宮も安全とは言い難いようじゃな。しばらく取り込むゆえ、お主達には別の宿を用意させよう」
「ええ、そうね。今日はお暇するわ」
「すまんな。ところでミランダ、お主は残れ」

アルフィリースと共に撤退しようと真っ先に出て行きかけたミランダの腕を、ミリアザールがしっかりと掴む。

「ええ？　どうして私だけ」
「阿呆！　元々お主はアルネリア教会のシスターじゃろうが、それも巡礼トップの！　場面によっては大司教よりも発言権がある自らの立場をちっとは自覚せいよ？」
「やだ、めんどくさい」

即答するミランダに、地団駄を踏むミリアザール。傍目に見るとできる妹とわがままな姉の構図だったが、これで一つの大規模な団

体が運営されているのだから恐ろしい。まあ指導者なんてこれくらい肩の力を抜いてもいいのかな、などとアルフィリースは間違った認識をしそうになるのだった。
そして微笑むアルフィリースとミランダが話を盛り上げ始めた所で、栂子がそっとミリアザールに耳打ちする。

「マスター。実はもう一人来訪者が」
「なんじゃ？　そんな予定はあったかの？」
「実は・・・」

そっと栂子が耳打ちした内容に、さしものミリアザールも驚きの色を隠せないのだった。

＊＊＊

「では私はジェイクとネリィ、ルースの様子を見に行きます。その他のチビ共はアルネリアに任せますから、その後でルナティカと一緒に先ほどの怪しい男とやらを探しましょう」
「先に探さなくていいの？」

来訪者があるとかで、ミリアザールの部屋を撤退したアルフィリース達。アルフィリースの疑問も尤もである。事件の重要性を考えればアルフィリースの心配通りだろう。だがリサは首を振った。

「実は先ほど女官から情報収集をしたのですが、ジェイクの通うグローリアにも妖しい連中がいる模様です。そちらを先に叩かねば、ここで先ほどの女が自決したのが知れ次第動きがあるかもしれません。申し訳ないのですが、リサにとってジェイク以上の優先事項はありませんので」
「そ、そう」

「それに、ジェイクの周囲にも不穏な女どもの影があるようですし・・・」
「え、何か言った？」
「な、なんでも？」

堂々と言い放つリサにアルフィリースもそれ以上言う事はなく、リサはルナティカを伴って出て行ってしまった。最後に何かとても個人的な理由を呟いたような気がしたが、まあそこはアルフィリースとしても流すことにした。グウェンドルフはミリアザールと話があるとかで残ってしまうし、アルフィリースはフェンナと共に、ラファティ達に歓待されているはずの他の仲間の場所へと戻る。
だが着いた先でも、何人かの仲間の姿がなかった。

「あれ、ロゼッタとユーティは？」
「マーメイドのベリアーチェと共に賭場に行ったらしい。ターシャに説得されて、イライザとエアリアルも『社会勉強』とか言って、賭場に付いて行ったな」
「ああ、皆が不良になって行く・・・」

ダロンの返事に軽い頭痛を覚えるアルフィリースだったが、集団の長というのはこういったものだろうと思う。そうなるとこれからもこのような心配事は増えるわけだが。

「傭兵団には真面目な子を勧誘するようにしよう・・・」

アルフィリースは一つの決意を固めるのだった。

＊＊＊

カラーン・・・カラーン・・・

グローリアで終礼を告げる鐘が鳴る。ジェイクは講義用の魔術書や教科書をしまうと、足早に教室を出ようとする。その前に立ちはだかるデュートヒルデ。

「ジェイク、今日はこの後お茶でもいかが？」

「悪い、今日はアルベルトに稽古をつけてもらうつもりだから。最近忙しかったから、あんまり手合わせできてないんだよな」

「ちょっと！　今日は何も予定はないはずではなくて！？」

ダン、と額に青筋を浮かべながら足を踏み慣らすデュートヒルデを、ジェイクは静かに見返した。

「まあ決まってはないんだけどな。お茶よりもアルベルトと剣の練習をする方が楽しいし」

「なんですってぇ！？　あなた、頭の中身まで筋肉になったのではなくて？」

「くるくるの場合は、お茶が湧いてんじゃないのか？」

「キーッ！」

ジェイクを胸の周辺を叩こうと手を出すデュートヒルデをジェイクはあっさりと受け止め、そのままデュートヒルデが暴れないように捕まえたのだった。

「あ、何をなさるの！」

「暴れるからだろ。で、なんで俺の予定を知ってるんだ？」

「そ、それはですね・・・」

ごにょごにょと言葉にならない言葉を話すデュートヒルデだた、ジェイクの興味はすぐに他に移る。

「それでリンダとロッテは？」
「え、えーと」

実は二人ともこの後同じような手でジェイクを誘おうとしていたのだが、デュートヒルデが失敗するにつけて、方針を変更せざるを得なかった。

「こ、この後、そう！　遠乗りをしようかと思って！　それなら乗馬の訓練にもなるし、いかがかしら？」
「うーん、それもいいけど。今は剣の練習がしたいかな」

まず、リンダ撃沈。そしてここぞとばかりにロッテが攻勢をかける。

「な、なら！　練習の後はお腹が空くでしょう？　稽古の後に、私の家で晩ご飯なんてどうかしら？」
「それは・・・いいかも。でもいつ終わるかわからないから、ロッテの迷惑になるぞ？」
「いいの！　うちの母さんもぜひジェイクに会いたいって言ってるから！」

そういうロッテの表情は必死だった。そこに喰ってかかるデュートヒルデ。

「ずるいわよ、ロッテ！　外堀から固めるつもり？」
「そうよ、母親に紹介は早くないですか？」
「そ、そういうわけじゃ！　だって、私は普通の家だからこれくらいしかできないし・・・」

いつの間にか三人の女の子の中で、動きが取れなくなっているジェイク。どうでもいいから早く決めてくれといった表情で、彼はその場に立ちっぱなしになっている。それをやや遠巻きに見ているラスカルとブルンズ。

「災難だな、ジェイクの奴。そろそろ助けるか？」
「放っておけよ、どうせいつものことだ・・・羨ましい奴め」

ブルンズの嫉妬交じりの感想が述べられる。それを聞いてラスカルはにやにやするのだった。

「羨ましいのか？」
「・・・男なら誰でもそうだろうよ。ラスカルも一度は経験したいだろう？」
「俺は生涯一人の女にモテればいいよ」
「ち、つまらん事を言う奴だな」

ぶすっとするブルンズに、ドーラが助け船を出す。

「ラスカルの言う事も尤もだな。生涯最高と思える女性を、自分が射とめればいいじゃないのか？」
「モテる奴に言われても納得できるかぁ！」

ブルンズの発言も尤もである。女性と見まがうほど綺麗な顔をしたドーラは、女生徒の憧れの的だった。肌も一度も陽の光を浴びたことが無いかのように白い。それも同じクラスや授業の女生徒に限らず、上級生や、果ては教官にまで告白されるのを目撃された例があった。一度冗談交じりにラスカルが聞いてみたのだが、ドーラは肯定も否定もせず。周囲のもやもやは募る一方だった。

そんなドーラは放っておいて、ラスカルはブルンズをからかうこ

とにした。

「そう言うなって。そんな事を言ってると、助平が顔に出るぞぉ？」
「んだと！？」
「はっはは、と。誰だ、見慣れない人間がいるな」

ラスカルの顔が引き締まる。例の執事騒ぎがあってから、ラスカルやブルンズも年齢の割に一足早い騎士としての自覚に目覚めつつあった。馬鹿話から一転、一瞬で彼らの表情が引き締まる。

同時に、ジェイクはいつにない殺気を感じて思わず全身の毛が逆立っていた。執事との戦闘以上の危機感をジェイクは感じ、ジェイクががばりと振り返った先には・・・

続く

難題、その6～訪れる困難前半～（後書き）

次回投稿は、９／２４（土）１８：００です。

難題、その7～訪れる困難後半～

「なんでここに・・・」
「ごきげんよう、ジェイク。随分と楽しそうなことで」

ジェイクが振り返った先にはリサがいた。扉を開けて教室に入っているリサの背後には、扉にもたれかかるようにして立っているルナティカがいる。そしてリサはゆっくりと優雅な足取りでジェイクに近づいてきた。彼女の突然の登場に多くの者が目を奪われているのは言うまでも無い。

まずリサの髪の色。薄い桃色の髪は非常に珍しく、大都市でも滅多に見ない色である。そして陶磁器の様に白い肌に、儚気な雰囲気。触れば壊れるような少女がそこに存在していた。そしてリサはジェイクに微笑みかけると、彼に向って手を伸ばしたが、対するジェイクが汗をびっしょりとかいていることにリンダやロッテが気がつく。

「ジェイク？」
「や、やばい」

ジェイクは焦っていた。リサが笑顔の時は要注意。これはリサに育てられた者の、共通の合言葉である。リサは厳しくジェイク達を躾けたが、リサが怖い顔をする時はまだ尻を叩かれるくらいで済んだ。だが、本当にリサが怒った時は妙に笑顔が多くなるのだ。ジェイクは今までの経験上察していた。今リサの機嫌をこれ以上損ねると、命に関わると。

どうして久しぶりの再会でこのような目に会うのかとジェイクはいたたまれない気持ちになったが、もはや後の祭り。今はなんとかしてこの場を切り抜けなくてはならないのだが、そもそもリサが怒

る原因がわからないのではどうしようもなかった。
そしてつかつかと歩み寄ってくるリサに、思わず後ずさるジェイク。こんなことならまだ魔物の群れの中に取り残される方がマシだと思うのだが、リサの行動はさらにジェイクの予想を裏切った。リサはジェイクの腕を取ると、自分の腕に絡ませたのだ。

「あ、あれ？」
「ジェイク、私は盲(めしい)なのですよ？　ちゃんと学園を案内してくれないと困ります」

リサはジェイクの周囲が目に入っていないかのような態度を取った。もちろんわざとである。そしてジェイクが戸惑う間に、初めて周囲の人間に気付いたかのようなふりをする。

「ジェイク、周りにいるのは？」
「あ、ああ。全員俺の友達なんだ。いつも仲良くして・・・若干一名、違うのがいるかも」

ジェイクがデュートヒルデの方をちらりと見ながら説明したが、デュートヒルデはそれどころではなかった。驚き方は様々だったが、彼女だけでなくロッテやリンダもそれぞれ驚いていた。デュートヒルデは淑女のたしなみも忘れて口があんぐりと開いていたし、リンダはめまいがするかのようにくらくらと体が揺れていた。ロッテの場合、手で口を覆い涙目になっていたのだった。何せ突然現れた女性がジェイクの腕をやすやすと取ったのである。訳も分からず混乱する女の子達。

「ジェ、ジェイク？　その方はどちらさまで？」

デュートヒルデが口をひくひくさせながら問いかける。そして。

「えーと、なんて説明したら・・・」
「婚約者です」

その言葉に、教室中の時が止まった。デュートヒルデは目をぱしぱしと何度も瞬きしながら首をかしげている。

「は？　・・・今なんて？」
「婚約者です。私達は将来を誓い合った仲ですから。意味はわかりますか？」
「それはわかりますけど・・・え、ええー！！？」

そこに来て初めてデュートヒルデは素っ頓狂な声を上げた。そしてリンダは卒倒し、ロッテはそれを支える羽目になる。周囲のギャラリーも驚きの声を上げ、ラスカルとドーラは比較的冷静に顔を見合わせる中、ブルンズは後ろに一人でずっこけていた。
そしてざわめく級友と真っ白になったデュートヒルデに、リサがとどめの言葉を発する。

「初めまして、挨拶が遅れました。私はこのジェイクの将来の妻、リサと申します。以後、末長くお見知りおきを。今日は彼にこの学園を案内してもらうために参りました。では皆さん、失礼」

そう言い残してジェイクにもたれかかるようにしながらも強引に腕を引き、教室を後にするリサ。彼らが出て行った教室は大騒ぎになり、この出来事は明日の朝にはグローリア中に知れ渡ることとなる。リサの神秘的美しさと共に、ジェイクが一瞬で三人の女の子を不幸にした、と。
そして教室から離れた途端、リサはジェイクの腕をさらに強く引き寄せる。

「リ、リサ？」
「久しぶりですね、ジェイク」
「なんでまた急に」
「おや、ミリアザールから連絡は来ていなかったのですか？　そろそろ着くと、連絡は先によこしたはずですが」

リサが横を向いてジェイクの目をじっと見る。その目を見て、ジェイクは突然ぷいっと顔を逸らした。その仕草をリサは訝しんだが、ジェイクは久々のリサの姿に見惚れていたのだ。さきほど教室での態度が大事になっていることなど、もはや忘れている。

「（くっそ、やっぱりかわいいなリサは。前より髪も伸びたし、ちょっと大人っぽくなったような）」
「ジェイク」

リサがジェイクの頭を掴んで、自分の方に強制的に向けさせる。

「な、なんだよっ」
「顔が赤い。熱でも？」
「んなことないって！」
「そうですか？　どれどれ」

リサはわざとおでこをジェイクのおでこに当てていた。その瞬間、ジェイクの体温がさらに上がったのは言うまでもない。
真っ赤になりながら久々のリサの温かさにくらくらするジェイクの腕を引きながら、リサは思う。

「（しばらく見ない間に、背が高くなりましたね。もう少しで私に届きますか？　たかが数カ月離れていただけでしたが、男の子の成

長は早いですね）」

リサは内心で嬉しかった。近くにいて触れていればよりはっきりとわかる。ジェイクの体は二回りほど大きくなっていただけでなく、漂わせる雰囲気が少年から男性のそれへと変化が始まっていた。強い男へ。リサはジェイクが自分との約束を守っている事ではなく、純粋に成長していることが嬉しかった。

「（ふふ、母の心境というやつですか。ですが、いずれこの子は私の伴侶に・・・）」

リサがまだ自分より少し背の低いジェイクを見る。少年は顔を赤らめたまま前を見ていたが、その横顔は少し頼もしくなっているのだった。

続く

難題、その7～訪れる困難後半～（後書き）

次回投稿は、９／２５（日）１７：００です。

難題、その8～最高教主の悩み前半～

＊＊＊

「ミランダ、席をはずしておれ」
「アタシを居残りさせておいてそれかい？　それならアタシもちょっと外に・・・」
「大人しくしとけと言っておろう！　まったくこやつは帰ってくるなり・・・」

ミリアザールがぶつぶつ言いながらも手を叩く。そこの現れた一人の女官。

「梓、久しぶりの深緑宮を案内してやれ。そやつが以前住んでいた時と変わっている部分も多いからの。あと、現在の大司教にも会っておけよ？　一人は不在じゃが、」
「えーと、誰だっけあのハゲ。名前は確か・・・ブラントス？」
「それは前のハゲじゃ。奴は病気で引退したわい。ドリフィンも歳じゃし、今は別の人間に代替わりしておるよ」
「そうなんだ。で、今のハゲは誰？」
「ハゲとは限るまいに・・・まあハゲじゃが」

ひどい内容の会話である。これが世の中に『聖女』として知られるアルネリアの代表の会話だとは誰も思うまい。もちろんアノルンとて巡礼の頂点に君臨する者として、その存在はアルネリア教内で広く知られて尊敬を得ている。その姿を見た事のある者は非常に少ないが、常に巡礼の頂点が『アノルン』と名乗ることから、一種の称号として考えられている。

もちろん誤解なのであるが、アノルンが不老不死なのを説明するわけにもいかず、都合がよいのでそのままにしてあるのだった。深緑宮以外ではきちんと品行方正に振舞う彼女達であるが、よくぼろが出ないものだと深緑宮の女官達はいつも感心している。

時に笑い、時に物を投げ合って喧嘩するミリアザールとミランダの会話は深緑宮の名物である。

「今のハゲはマナディルじゃ」

「うっそ！　マナディルってあのすごいイケメンじゃない！！　ハゲたの！？」

「そう、残念ながらな。大司教はハゲゆく運命らしい」

「嫌な運命ね。長く生きてると、その人物の末路までわかっちゃうのが嫌なものね。まあとりあえずそのハゲに会ってからかってくるわ」

ミランダはそう言いながら出て行った。マナディルもその昔、ミランダの講演を聞いたことのある者である。その時はミランダの気分が乗らない事もあって真面目な内容をたまたま話したのだが、その時よりマナディルはミランダの生きざまに感銘を受けている。もちろん二人に直接的な面識はない。

だが悲しいことに、ミランダはといえばマナディルの事を「あら、イイ男がいるのね」くらいにしか思っていなかった。マナディルの中でミランダはかなり美化されているだろうが、あと一刻もたたないうちに彼の理想のシスター像は崩れ落ちているだろう。

そしてミランダが出て行った後、グウェンドルフとミリアザールが残り、彼女は梔子をはじめとした女官に全て退出するよう合図をする。

「さてと。これでこころおきなく話ができます、真竜の長よ」

「ああ、こうして二人で話し合いをするのは５００年ぶりかな？」

グウェンドルフは静かにお茶を飲みながらミリアザールの方を見る。そしてミリアザールもまた神妙にグウェンドルフの方に向き直った。

「５００やや経たぬくらいです。その節は様々な見識を貴方との会話の中で学んだ。貴方と話したのはほんの数刻でしたが、１００年にも勝る知識を享受したと思っています」

「大したことはないよ。私は肝心なことは話していないし、ここまでアルネリア教を大きくしたのは君の力だ。どういった方向でこの教団を運営するか、いくつかの方向性は示したが、結局君は自分で選んだのだからね」

「ですが貴方がいなければもっと犠牲は大きかったし、もしかすると大戦期は終わっていなかったかもしれない。そう考えれば、貴方は影の功労者とも言える」

「私は私の目論見があってのことだ。感謝など必要ないことだよ。それよりも今の事を話そう」

そう、グウェンドルフはミリアザールと会ったことがある。いや、ミリアザールに限らず、彼は人間達の歴史に深く関わると感じた者には、何度か直接的に会いに行ったことがある。原初の英雄ダヤダーンに魔王討伐のための知識を授けたのもグウェンドルフだし、彼はひっそりと人間の歴史に関わり人間達を導いてきたのだ。それが彼の五賢者としてのやり方だった。その過程でミリアザールとグウェンドルフも接点があったわけである。ミリアザールが魔物であることなどとうに見抜いていたグウェンドルフであるが、彼女の人となりを判断し、信頼ができると踏んだのだった。もっとも彼女に関わった真竜は彼が初めてではないのだが。

時は経ち、ミリアザールはグウェンドルフの影響もあって大戦期を終結させるのに一役買うことに成功した。アルネリア教会の現体

制の思想の元も、グウェンドルフとの会話の中で思いついたものである。グウェンドルフは陽気で温まり始めたお茶の入ったグラスを置くと、ミリアザールに向き直る。

「君は何が聞きたいんだい？　おおよそ見当はつくけどね」
「はい。おそらくお察しの事とは思いますが、敵の首魁オーランゼブルの目的についてです」

ミリアザールはきっぱりと言ったが、グウェンドルフの反応は鈍い物だった。

「そのことか。残念だが、私からは答えることはできないな」
「なぜです？　かの者は元五賢者、貴方と同じ身分だ。その者の意図を知らぬわけではないでしょう？　まさか庇っておられる？」
「いや、そうではない」

グウェンドルフはかぶりを振った。彼の顔が一層曇る。

「情けない話だが、私の方も彼に出会って初めて知ったのだ。私が友と呼んだ人物の、その思いや悩みすら、私は何一つわかっていなかったとね。私などは市井の何の学もない人間にも劣る愚かさだ。その私が賢者などと、なんともおこがましい」
「そう卑下なさらずとも。では質問を変えましょう」

そう言ったミリアザールは、グウェンドルフを思いやるような表情ではなかった。彼女が真竜を心配するなど傲慢だとも思ったし、同時にオーランゼブルに一切の手心を加えるつもりはなかったからだ。ミリアザールは、何としてもオーランゼブルをこの世界から抹消する腹積もりを既に決めていたのである。

「オーランゼブルの弱点は？」
「ない。彼は私達の中でも最も魔術に造詣が深かった。精霊から力を借りて魔術として変換する理論そのものを作ったのが彼だし、そう言う意味では彼は魔術士の開祖と言い変えてもいい。あるいは真の魔法使いともね。種としての力は私の方が上でも、彼がその気になれば他の五賢者全てを相手にしても勝つことが出来たろう。最も彼は私達の中でも最も温厚な人物だったから、そのような発想すらしたことがないだろうけどね」
「なるほど、魔術士としては完璧というわけですね。では真っ向勝負は捨てましょう。むしろその方が都合がいい」

ミリアザールの瞳がさらに光を増す。その目には覚悟を決めた者の決意が宿っていた。

「次の質問です。オーランゼブルに弱みは？　彼とてたった一人のハイエルフというわけではないでしょう？　何か彼にも娘か、恋人か、兄弟か・・・何かの弱みがあるはずです」
「人質を取ろうと？」
「必要があれば」

ミリアザールの目が妖しく光る。それは彼女が今まで繰り返した方法であり、必要とあれば敵対勢力の長を貶めることも、人質を取ることも厭わなかった彼女である。綺麗事だけで乗り切れるような局面ばかりではないことを、ミリアザールはよく知っている。
だが当然と言えば当然だが、グウェンドルフの反応は冷たかった。

続く

難題、その8～最高教主の悩み前半～（後書き）

次回投稿は、９／２５（月）１７：００です。

難題、その9～最高教主の悩み後半～

「仮に、の話だが。私が彼の弱みを知っていたとして、教えると思うかい？」

「いえ、簡単にはいかないでしょう。ですが、こちらも仮にの話をしましょうか。オーランゼブルの計画が発動した時に貴方の手に既に負えないものだとしたら・・・あなたは五賢者として、また真竜の長としてあるいはオーランゼブルの友人として、どう責任を取るおつもりで？」

「これは痛いところを突く」

グウェンドルフは苦虫をかみつぶしたような顔をした。その点は彼も気にする所であり、最も恐れるのはオーランゼブルをどうやっても止めることができなくなることであった。気にしていた点を指摘され、怯むグウェンドルフにミリアザールが追い打ちをかける。

「何も私は真竜である貴方を脅すつもりはありません。ですが、既に私達は後手に回っている。手遅れになることだけは避けたいのです。そのためにはグウェンドルフ、貴方の力が必要だ」

「・・・だが」

「申し訳ないですが、私も手心は加えられぬのです。そんな余裕は私にはもうない。この体が動くうちに、何としても決着をつけねば」

そう言ってグラスに手を伸ばす彼女の手は震えていた。その手を見てグウェンドルフははっとする。

「ミリアザール、君は・・・」

「さして長くもないでしょう。以前ミランダには１０００年も生き

ぬと言いましたが、実際には１００年もたないでしょう。この前アルネリアにきた子鬼を追っ払おうと戦った時に、既に意のままに動かぬ自分の体を悟りました。元々私の種族は１００年も生きぬもの。私だけが長く生きすぎたのです。もう十分。幸せも、絶望も、十分すぎるほどに味わいました。ですが」

ミリアザールがキッとグウェンドルフを睨む。

「オーランゼブルは放っておけません。おそらく、これが私の最後の仕事になるでしょう。奴の目的が人間の支配や絶滅ならまだいい。命ある者はいずれ滅びる。弱肉強食も自然の理。ただで負けてやるほど私もお人好しではないが、私も相手を駆逐し、踏みにじって生きてきた者。自分達だけがその掟から逃げられるとはおもっておりませぬ。

ですが、私の直感ではオーランゼブルの計画はそんなものでは収まらぬのではないかと思うのです。もしそうだとしたら・・・私は刺し違えてでも奴を止める」

ミリアザールの決意を前に、しばしの沈黙が二人の間に横たわる。そしてやがて口をゆっくりと開いたのはグウェンドルフ。

「ミリアザール、君の決意はわかった。私としても、オーランゼブルの目的について何かわかり次第君に伝えることを約束しよう」

「では」

「だが残酷な事実も同時に伝えなくてはならない。何を君に伝えた所で、君がオーランゼブルと刺し違えるのは無理だ」

「なんですと？」

ミリアザールが気色ばむ。侮られたと思ったのだ。

「確かに勝てぬまでも、刺し違えるくらいは・・・」
「できないだろう。なぜなら、向こうにはブラディマリアと呼ばれる少女がいるから」

そう聞いて、ミリアザールは以前アルネリアの結界を素手でこじ開けた少女を思いついた。あの時ミリアザールがライフレスの交渉に乗ったのは、ライフレスを恐れてのことではない。ブラディマリアの底知れなさを恐れてのことだったのだ。何の準備もなしに戦ってはいけない。それがミリアザールの戦士としての直感だった。
だがどうやっても無理だとまで言われるのは心外だった。ミリアザールが少しむくれる。

「どうしてそこまで言われるのです？　奴は一体何者だと？」
「以前君には話したと思うし、君が生まれた時代には神話として魔物の中には伝承があったのではないかい・・・遥か昔、空を戦火で覆い尽くす戦いがあった事を」

グウェンドルフの口調は重かった。それは真竜にとって苦い記憶であると同時に、地上の者に語るのをはばかられる禁忌でもある。ミリアザールに話している段階で、既にグウェンドルフはかなりの危険を冒しているのだった。

「東と南の大地が元はこの大陸とつながっていて、凄まじい戦いの最中大陸が割れてしまったという話ですか？　聞いたことはありますが、何かの比喩だとばかり」
「あれは事実だ。と言っても、私ですらまだ幼い竜の時代で、私は巣の中で空を焼き尽くす戦いを見上げるばかりだったがね。あの戦いは実際にあった出来事なのだ。そして私達真竜はからくも勝利した。実に、その９９％の仲間を犠牲にして」
「なんですって！？　真竜をそこまで追い詰めるとは、相手は一体・

・・・」

「魔神」

グウェンドルフから放たれた言葉は、不吉な響きでもってミリアザールを拘束した。立ちあがりかけたミリアザールが、その言葉の重さに負けたようにすとんと席に座る。

「魔神・・・」

「そう、魔神だ。少なくとも我々はそう彼らの事を呼んでいた。彼らは強く、ハイエルフを上回る程の魔力と、古巨人を凌駕する肉体と、そして絶大な生命力を持っていた。非常に個体数の少ない種族だったが、真竜よりはるかに秀でた戦闘力を持つ種族だったのは間違いないだろう」

「どうしてそのような者がこの今の世に・・・いや、それよりも。どうして彼らに真竜は勝つことができたのでしょうか」

「不思議なことにね。君達が魔王に対してそうしたように、我々もまた種族を越えて協力したのさ。ハイエルフ、古巨人、翼人族、真竜などがね。魔神は強かったが、協力なんて縁遠い種族だったから。最後の最後で手を結んだけど、既に時は遅かったよ。我々はからくも勝ちを拾った。もしあそこで我々が負けていたら、人間はこの世にいないいかもね。いや、いても一生涯彼らの家畜として飼われているだろう。彼らはそういう種族だから」

グウェンドルフの言葉は重く響くものの、ミリアザールにはまるで実感の湧かない世界の話だった。ミリアザールとて自分が修行で身につけた力には自信がある。だがそれは真竜を頂点とした時の話であって、それ以上の上位種など考えが及ぶべくもない。

しばらくミリアザールは思いを馳せた後、考えるのを止めた。今の手駒ではどうにもならない話だと思ったからだ。もし自分が全盛期の体を取り戻すとしても、きっと遠く及ばない次元の出来事。そ

ういった敵を倒すために、ミリアザールは今まで考えもしなかった非人道的な手段のいくつかを思い直し始めていた。どれが最も確実に倒せて、最も犠牲が少なく、最も実現しやすいか。ミリアザールの頭脳は全力で回転していた。

ある程度考えて、ミリアザールは突然思考を止めた。既にいくつかの方針を練ったからである。

「なるほど、貴重な情報を感謝します。他に何か私に言えるような情報はありますか？」

「いや、今はこれだけだね」

「わかりました。ではオーランゼブルの件に関しては、また引き続き情報を互いに収集するという事で」

それだけ聞くと、ミリアザールはこれ以上の情報をグウェンドルフから得るのは無理だと思ったのか、あっさりと引きさがった。果てしない数の駆け引きを経験したミリアザールならばこそ、引き際を察したのである。そしてグウェンドルフもまた、これ以上話すことはないとでもいいたげに、その場を後にした。そのグウェンドルフと入れ違うかのように部屋に入ってくるミランダ

「早かったね」

「まあの。こちらも忙しゅうてな」

それだけ言うと、ミリアザールはミランダを座るように促し、肘をついて手に顎を乗せ、ため息をつき始めた。その目には迷いがありありと見て取れる。

「どうしたのさ、なんとも歯切れの悪いことだね。マスターらしくないじゃないか」

「ワシとて迷う事はある。特に今回はの」

そしてミリアザールが、ミランダに聞く事を躊躇うかのように、のろのろと目を上げた。

「のう、ミランダ・・・お主、アルフィリースと旅をして、どうじゃった？」

「どうって・・・漠然とした質問だね」

だがミランダは考えるまでもなく即答してみせた。

「まあ一言で言うなら『楽しい』だね。あの子の傍は退屈しないよ。運命も、その過程もね。普通に語らうだけでも飽きない子だ。できれば一生彼女と共に生きていたいと思う自分がいる。変かい？」

「臆面もなくよくぞそこまで言い切るものよ。そう言い切る根拠はあるかの？」

「根拠ねぇ」

今度はミランダは少し悩んだが、それも一瞬だった。

「そうだね、なんだかあの子は放っておけないって言うか。でも頼りになると気もあるし、つまらない話をしていても楽しいし・・・いじりがいもあるし、一緒にいて嫌なことがあっても嫌な思いをしたことはないって言うか・・・」

「わかったわかった。それだけお主はアルフィリースの事を大切に思っておるのじゃな？　まあそれはよかろう。じゃがそれを知ったうえでなお、ワシはお主に話をせねばならん」

ミリアザールが苦笑しながらミランダの言葉を遮った。一昔前のミランダならば決してこんな言葉を発しなかったであろう事を想像し、ミリアザールは内心ではとても嬉しかった。そして、同時にだ

からこそ残酷な事を言わなければならないことも。

「ミランダよ。お主、ワシの代わりに最高教主をやるつもりはないか？」

続く

難題、その9～最高教主の悩み後半～（後書き）

次回投稿は、９／２８（水）１７：００です。

難題、その１０～ミリアザールの提案～

「・・・は？」

ミランダはぽかんと口を開けたままその場にグラスを落とした。傍から梔子が無言のまま、そっとグラスを素早く片付けたが、あまりに呆気にとられたミランダはその事にも気がつかないようであった。

「今・・・なんて？」

「ワシの代わりに最高教主をやる気はないかと言っておる。もっとも・・・」

「冗談じゃない！」

ミリアザールが続きを話す前に、ミランダはテーブルを叩いて怒りを露わにしていた。

「アタシはそんな面倒臭い事は御免だ！　だいたい、今の巡礼の任務だって元はと言えば嫌だったんだ。それをあんたがやれっていうから引き受けたけど、いつの間にか勝手に出世までさせられて・・・」

「それは功績の大きさから言って仕方があるまいよ。短期的にお主より功績があるとしても、総計でお主の成果を上回るはずもなし。まさかワシとしてもお主がそこまで真面目に働くと思っておらなんだでのう」

「勝手な事ばっかり言って！」

ミランダは怒りながら立ちあがると、その場を後にしようとした。

ため息をつきながらその後ろからミランダに声をかけるミリアザール。

「まあワシの話を最後まで聞け」
「・・・」
「お主は友人、いや親友としてアルフィリースを守りたくはないのか？」
「どういうことだ？」

ミランダがその言葉に振り向いた。したりとばかりにニヤつくミリアザール。

「今のままでは、アルフィリースはこの世界でどんどん不利になっていくだろう」
「？　どうして！？」
「考えても見るがよい。なぜ魔術教会にアルフィリースは狙われておらぬ？」
「それは彼女の師匠のアルドリュースが条件を・・・あ」

そこまで言ってミランダは気がついた。魔術教会はアルドリュースと交換条件を交わしたが、彼はもう死んでいる。つまりアルドリュース亡き今、アルフィリースを保護する者は誰もいないのだ。
そんなことにも気が付かなかったミランダは自分の不明を恥じるが、ミリアザールはとうに気が付いた上で考えを巡らせていたのだ。

「ワシとしても手は尽くしてやる。ここアルネリアに傭兵団の拠点を構えるように忠告したのも、魔術教会対策でもあるからな」
「だけど、魔術教会長のテトラスティンは話せる男なんじゃ？」
「ふん。確かにワシに無駄に好意だけは抱いておるようじゃが、それもどこまで本気やら。あやつはどこまで本音なのやら想像もつか

ん。ワシなんかよりよっぽど腹黒いからの。それに、あ奴がどうして他の魔術士を圧倒する力を身につけたか知っているか？」
「いや」
「それはな・・・」

ミリアザールは自分の知る限りのテトラスティンの情報をミランダに聞かせた。その真実に衝撃を受けるミランダ。

「馬鹿な、そんなこと可能なの？」
「可能かどうかはともかく、これは事実じゃ。これはワシのみならず、魔術教会でも上層部は知っておるじゃろう。もちろん魔女もな。だが、だからといってどうなるものでもない。奴は強い。その気になればワシとも戦えるほどには」
「それが本当だとしたら、奴の目的はいったい・・・」
「それはわからん。だが少なくとも、ワシ達と相反するものではなかろう。だからこそ、向こうはワシらと手を組みたがっているのだから」

ミリアザールが冷静にお茶を啜り、ミランダも腰を据えて話すために再び席についた。

「でも、それがどうしてアルフィリースを狙う事になるのよ？」
「一つは呪印の力。齢２０にも満たぬ小娘が英雄王と戦って生き延びている。これは驚愕の事実じゃ。それにアルフィリースは覚えておらぬかもしれぬが、アルフィリースは魔術教会の征伐部隊を返り討ちにしているのじゃ・・・しかも全滅という形でな」
「え？　あの子、そんなことは一言も」
「それは意図的に話さなかったのか、あるいは本当に覚えておらんのか。ワシも調べながら最近知った事じゃが、いずれにせよ、その事を執念深い奴らが忘れるはずはない。たとえテトラスティンがア

ルフィリースを庇おうとも、あの組織はアルネリアほど上下の統率がとれているわけではない。どこかで何らかの動きが起こるじゃろうな。今回の事でアルフィリースは目立ち過ぎたのだ。その存在は様々な勢力が知るところとなったろう。何の後ろ盾もない彼女を守るには、力がいる。違うか？」

「それは・・・」

ミランダにミリアザールの言う事は実感できた。魔術教会の征伐部隊とは実は仕事を何度か共にしたことがある。彼らには独自のルールがあり、基本的には命令に忠実な物ものの、現場の判断にてそれらが覆される事もしばしばであった。特にミランダが恐ろしいと感じたのは、その容赦なさ。必要とあれば民間人の犠牲も厭わず、自分達の命すら顧みない。その徹底した戦いぶりに、ミランダは背筋が凍りつくような思いをした記憶がある。

あんな連中が本気でアルフィリースを狙い始めたら。あるいはアルフィリースなら返り討ちにしてしまうのかもしれないが、それはさらなる敵を引き寄せるだけだし、何より仲間はただでは済むまい。ミランダは真剣に悩み始めた。そんな彼女を見て、ミリアザールは目を細める。

「まあそう悩むな。お主が考えておることなど、だいたい想像がつく。少なくとも、自分の立場は利用するつもりであったろう？　例えば、協会の中に対黒の魔術士達の部門を立ちあげて、その長に収まる、とかの」

「う、お見通しか」

まさに考えをそのものズバリと言い当てられ、少し縮こまるミランダ。

「当然じゃ。こちとら１００年以上お主と付き合っておるのじゃ。

それにお主はどうか知らんが、ワシはお主の事を友人じゃと思うておるよ」
「マスター・・・」

ミランダがびっくりしたような顔をするなか、ミリアザールは頬杖をついて少し照れ臭そうだった。そうしてしばしの時が流れる中、部屋のドアをノックする者がいる。

「ミリアザール様、エルザです」
「おう、入れ」

エルザは部屋に入るとミランダに軽く会釈をし、ミリアザールに書簡を渡す。

「今回集結し、同意を得た者のリストです。どうか御確認を」
「御苦労」
「何の話だ？」

話の見えぬミランダに、ミリアザールは書簡の中身を見せた。そこに並ぶ名前に、見覚えがあるミランダ。

「これは・・・」
「そう、お主以外に巡礼を行う人間達のリストじゃ」

ミリアザールはそのリストを見るミランダを見て、ニヤリとするのだった。

続く

難題、その１０～ミリアザールの提案～（後書き）

次回投稿は、９／３０（金）１７：００です。

難題、その１１～賭場にて～

＊＊＊

こちらはアルフィリース達がミリアザールと話しこんだせいで、置いてきぼりにされた他の仲間達。ベリアーチェとラファティ夫妻が色々と話を振ろうと努力するが、他の歓待がアルベルトとロクサーヌでは、盛り上がるものも盛り上がらない。また基本的にラファティも真面目な性格には違いが無く、ロゼッタの話相手が剣の話題以外で務まるはずもなかった。アルフィリース、ミランダ、リサを除くと自分から話題を提供するような人間は主にロゼッタくらいであり、本来ならよくしゃべるターシャもまだ他の仲間に遠慮勝ちであり、本領を発揮してはいなかった。

そんな会話ではロゼッタが半刻ともたず飽きるのも当然で、彼女は適当に食事会を切り上げて、ミランダからこっそり聞いていた賭場に行こうとしたのだ。そしてロゼッタはトイレに立つふりをしてそのまま深緑宮を抜け出そうとしたのだが、それはいくらなんでも考えが甘かった。深緑宮は入るのもそうだが、もちろん出るのも難しい。門衛に止められて言い訳をするうち、あっさりとベリアーチェに捕まった。だが意外にも彼女は、

「そういうことなら私も行きましょう！」

と、好奇心旺盛な部分を見せたのだった。ざっくばらんなマーメイドの対応にロゼッタも少し呆れつつも、細かいことを気にしない彼女は結局ベリアーチェと同行する事になった。そしてついでにエアリアルやターシャも無理矢理に連れて行ったという寸法だった。残った人物達では歓待の宴がほとんど通夜のように静かだったのは

述べるまでもない。
そしてアルフィリースが引き揚げるときに同時に歓待の宴も終わるのだが、仮の宿に戻るまでの間に、アルフィリースはインパルスの誕生の秘密や、ダロンの普段の暮らしぶりなどを聞きがてら、今後の計略を本気で練り始めていたのである。それは貸し切った宿に帰ってからも同じで、宿の居間で悩む彼女は、隣で帰って来たグウェンドルフがアルフィリースを覗きこんでいるのも気が付かないほどであった。
そしてグウェンドルフに気づかないほどアルフィリースが真剣に悩んでいるとグウェンドルフがわかると、彼はそっと席をはずそうとする。そこに、貸切のはずの宿に来訪者が訪れた。

「グウェン、久しぶりだわ」
「君は・・・なぜここに？」

グウェンドルフは目の前の女性が現れたことに、とても驚いているようだった。

＊＊＊

「おかしいわね・・・」

その女性は悩んでいた。透き通るような緑の、少し癖のある毛を適当にまとめ上げ、腕まくりをして賭場に臨む彼女。このような場末には不釣り合いなくらいの美人でありながら、誰も彼女の容姿などを気にかけてはいなかった。彼女がこの賭場に出入りするのは既に４日間連続であり、美人も三日見れば飽きると言うが、それ以上にその女性は稼ぎ過ぎており、最初は場違いな美人が紛れ込んできたと喜んだ男達も連日身ぐるみはがされれば、多少眼の色も変えようということだった。

そして４日目の今日も、血眼になった男達などどこ吹く風で彼女は気分よく稼いでいたのだが、新しく４人連れの女性客が入って来てからは雰囲気が変わった。
青い髪の女性は大したことが無い。彼女は本当に初めて賭けをやるのだろう。完全に物見遊山の賭け方だった。茶色の髪の女性もごく普通。そこそこ賭博に親しんではいるが、まあお遊び程度だった。
肌が浅黒い女は出来る。賭場の稼ぎで糊口をしのいだこともあるのだろう。賭け方や勝負の時に鬼気迫るものを時に見せていた。気迫のある賭け方をする女性だ。かなりの上級者だろうが、それでもまだ彼女の敵ではなかった。
だが。最後の緑の長い髪の女性は別格だった。驚いたことに、おそらく賭け事自体は初めてやるのだろう。なにせ最初にルールの説明を受けていたのだ。最初の数勝負は大人しかった。だが少しずつ、少しずつ場の流れを見て取ると、彼女は一気に攻勢に転じた。そして獣に喉笛を噛みきられる哀れな草食獣のように、男達は一人、また一人と身ぐるみをはがされていった。もはや場に身ぐるみをはがされていないのは、彼女の仲間とその女性だけであった。だがその女性とて運命は風前の灯である。なぜならば、最初から着ている衣服的にその女性は一枚脱げば終わりなのだから。
その女性は着るのが面倒だといった理由で無駄な下着はつけておらず、いつも粗野な格好を好んだ。それによしんば見せたとしても、見られても恥ずかしくない体だとは思っていたが、まさか勝負に負けて脱がされるのは恥辱というよりは屈辱だった。だから彼女としては何としても負けたくないと思ったが・・・それは嵐にこん棒で立ち向かうほど愚かな行動であり、運命はどうあがいても覆せないという事実を彼女に叩きつけただけだった。そう、彼女は人生最大の強敵に出会っていたのである。

「３の倍数に１００掛けだ！」

おお！　という声が周囲から上がる。勝負は単純。８つの文字がついた賽を３つ同時に、あるいは順々に放り投げ、合計の数字を当てるというもの。数字をコールするのは自由だが、順々に投げるときは早くコールした者ほど配当金が大きくなり、偶数・奇数などの大ざっぱなコールよりは。１９などの具体的な数字のコールの方が強いという仕組みだ。そして賭ける金額も自由だが集団の勝負では余剰の獲得金額は胴元が支払うのに対し、サシの勝負では獲得した金額は相手に支払わせることができる。

今や、彼女と緑の髪の初心者は一騎打ちを行っていた。周囲ももはや勝負は止めて、彼女達の勝負に見入っている。そして賽を３つ同時に投げる勝負で、彼女は一発勝負に出た。これで勝てば、今までの負けを取り戻せることになる。同時に相手にプレッシャーをかける事も出来た。彼女は大一番の勝負で打った自分の博打にほくそ笑む。そして賽は投げられたのだ。

「これでどう・・・」

「１９に一点掛け、１０００倍」

賽が投げられると同時に緑の髪の女性がコールした言葉に、会場はおろか、賽を投げた男すら動揺して思わず倒れるところだった。数字一点掛け自体珍しいのに、それに１０００倍も賭ければ、今までどんなに勝っていても負けた瞬間パアとなる。このままの差であれば、せこく賭けて逃げ切ることも可能なのだが。

「あんた、馬鹿じゃないの！？」

思わず彼女は立ちあがっていた。こんなことができるのは、頭の栓がどこか一個飛んでいる奴だと彼女は思ったのだ。信じられなった。平然と自分の命を投げ出すような真似を出来る女が。

だが女は冷静に否定した。

「我は勝てる勝負しかせぬ。確実にこれは１９となるのだ」
「そんなのわかるわけないじゃん！」
「・・・見える」

女がふっと笑ったので場の全員に寒気が走ったのだが、果たして転げる運命の賽は、椀の中で弾け合いながらその回転を止める。

「数字は・・・じゅ、１９！」
「うーん」

その結果に何人かは腰を抜かし、中には緊張感のあまり気を失う者まで出る始末。そして彼女は足が震えてその場にへたり込んでしまった。

「しょ、正気じゃないわアナタ・・・何者なの？」
「？　別に回転する賽を見て、どの数字が出るか当てるだけだろう？　簡単ではないか。それにこの数字の出方は先ほどと同じだった」
「まさか、回転する賽が見えてるってぇの！？」
「そうだが？」

投擲武器を使いこなす緑の髪の女性ならではの芸当なのだが、彼女がその事を知るはずも無し。とんでもない人間に喧嘩を売ってしまったと、彼女は悔やんでも悔やみきれなかった。

「・・・私の負けよ、好きにして」
「じゃあこの女身ぐるみはいで女郎小屋に売ろうぜ、エアリー。良い金になりそうだ」
「ロクでもないことを言うな、ロゼッタ」

エアリアルの隣で楽しそうに笑うロゼッタ。さらにため息をつくエアリアル。その様子をぼんやりとした目で見る彼女は、完全に意気消沈していた。だがその目が急に見開かれ、彼女はがたがたと震えながら入口の一点を指さし始めた。

続く

難題、その１１～賭場にて～（後書き）

次回投稿は、１０／１（土）１７：００です。

難題、その12～竜の事情～

「あ、あ・・・なんでここにっ！」
「こういうところにいると予想できてしまうのが、我が姪ながら悲しい限りです。まったく、またふらふらと一人で出歩いて！」

現れたのは、蒼天を連想させる青の髪の女性。透き通るような髪色と、人間離れした高貴さに思わず賭場の人間達の視線がその女性に集まる。その中を悠然と歩く女性はつかつかと賭けに負けた女性に近寄ると、その耳をつまみあげる。

「また賭場で遊んでいるのですね、ラキア！？　こういう場所に出入りするのは止めなさいと言ったでしょう？」
「そ、そんな事言ったって・・・楽しいんだから仕方がないじゃない！」

ラキアと呼ばれた女性は、自分を掴む手を振り払いながら怒り始めた。余程賭場に来るのが楽しみだったのか。目には少し怯えの色が見えつつも、するすると唇を振るわせながら怒りの色を露わにする。

「ノーティスも言ってたじゃない！　こういうのが人生の楽しみだって！　そりゃあ自然と戯れるのも嫌じゃないけどさ、つまらないんだもん！　刺激が足らないのよ！」
「あの不良の言う事を真に受けて・・・！　これはお説教が必要ですね！？」
「私の親でもないのにそういうこと言うのは止めてよね、マイアおばちゃん！」

その一言が嫌に賭場に響くと、はっとラキアは我に返る。その瞬間、マイアが少し俯いたのを見てラキアは震え始めた。

その光景を見ているのはアルフィリースとグウェンドルフである。先ほど宿泊場所にやってきたマイアをここまで案内してきたのはいいが、全く何が起こっているのかわからない。いや、グウェンドルフだけは全ての事情を察しているかのように、眉間に指を当てていた。

「言ってはならない一言を・・・」

「え？」

グウェンドルフがぽそりと言った事をアルフィリースが聞き返す暇もなく、静かな殺気が場に立ち上り始めた。美しさからは似合わぬその殺気に、その場のならず者達がマイアからじりじりと距離を取り始める。

その肩を振るわせるマイアを見ながら、急に借りてきた猫のように大人しくなったラキアが、先ほどの言葉を取り繕おうとするが。

「ふふ、ふふふふ」

マイアは嫌な笑いを浮かべていた。それを見て汗をかき始めるラキア。

「あ、あのね？　さっきのは私とマイアお姉ちゃんの関係を端的に露わしただけであってね？　決して歳の事を言ったわけでは・・・」

「誰がおばあちゃんですってぇ！？」

「そこまで言ってない！」

時はすでに遅かった。この後、賭場は血の雨がふる惨劇の場と・・

・まではいかないが、ラキアにとっての修羅場であったのは間違いがなかった。

＊＊＊

「うう・・・ぐすん」
「だから貴女はあれほど私が・・・」
「まあまあ。その辺にしてあげなよ、マイア。ラキアも反省しているだろう」
「いーえ！　だから貴方は甘いというのです、グウェン！　だいたい貴方だって・・・」
「し、しまった」

半泣きのラキアを庇おうとしたグウェンドルフだったが、今度はグウェンドルフがマイアに怒られ始めた。どうやらマイアの怒りは先ほどの賭場よりはマシなものの、まるで収まる気配を見せなった。マイアの剣幕に、さしものグウェンドルフもたじたじである。余計な事を言ってしまったと、後悔するグウェンドルフ。

場所は既にアルフィリースの宿である。なぜかあの後、マイアとラキアはアルフィリース達が帰る方向に付いてきたのだった。なぜそうなったのかは誰もわからなかったし、聞けなかった。ずっとマイアがラキアを怒鳴りながら歩いていたからである。最初は何事か反論しようとしたラキアも、何か言うたびにマイアの怒りを買うだけだと気が付き途中からは反論を止めたものの、既に怒り頂点に達していたマイアの説教は延々と続いていた。そして終わらぬ説教に、ついにラキアはべそをかき始めたのだった。

賭け事の最中はあれほど堂々として見えたラキアの姿も、地面に正座させられて頭ごなしに怒られては、威厳も何もあったものではない。その光景を不思議そうに見つめるアルフィリース達。

「なんでこんなことになったんだっけ？」
「さあ？　私にもわかんないよ」
「だがアルフィリース。もしや彼女達は」
「エアリーもそう思った？　私もそうだと思う」

そっとアルフィリースに話しかけるエアリアルに、アルフィリースが同意する。その時、玄関の戸が開いたのだった。

「ただいまリサが帰ってきました、出迎えやがれ下僕共、と」
「どんな横柄な『ただいま』だよ」
「誰が下僕だ、誰が」

人間の姿になっていたインパルスとロゼッタが思わず突っ込んだが、リサはマイアとラキアにいち早く目を向けた。もっとも彼女の事だから、随分前から気がついてはいたのだろうとアルフィリースは思っていたのだが。どういうことなのかリサも完全に油断していたのか、結構二人の存在に驚いてはいるようだった。その傍にジェイクがいることを考えれば、ある程度目端の効く者はすぐに察したのである。
そしてリサの帰還と共に、ちょうどマイアの言葉が切れる。そこにすかさずリサが横やりを入れる。

「なんですか、これは。新しいプレイ？」
「そんなわけはないでしょう。私達もよくわかりはしないけど、グウェン？　そろそろ話してはくれないかしら」
「あ、ああ。いいだろう」

その言葉にグウェンドルフもほっとしたのか、気を取り直して話し始めるところだった。

「彼女達は・・・」
「真竜よね？　もうバレているとは思うけど」
「・・・恥ずかしながら、その通りだ」

アルフィリースの言葉に意外そうな反応を示す者はあまりいなかった。グウェンドルフと対等に話すマイア。アルフィリース達にとって、おのずと答えは一つである。その事にあっさり気が付かれたグウェンドルフは多少悲しそうな顔をした。

「まったく・・・人間にこれほど簡単に正体を晒すわけにはいかないというのに。以下に私の恩人といえどね。君ともあろう者がどうしたんだい、マイア」
「聞いてくれる、グウェン兄さん」

これまた先ほどまで威厳と怒気に満ちていたマイアの表情が一転、少女のようになる。

「ラーフォンったらひどいのよ？　私はそろそろ子どもが欲しいって言ったのに、私から仕掛けたら『俺は疲れているから寝る。それに女がはしたない真似をするな』ですって！　考え方が古いのよ、もう！」
「いや、そっちではなくてだね・・・」
「ラキアのこと？　この子ったら、私の妹がちょっとこの大陸を留守にしているのをいいことに、すぐに人間に変化して賭場に行くのよ？　私の言う事なんてちっとも聞かないし、私もう悲しいやら情けないやら腹が立つやらで・・・」

そのまま言いたい事を言ったマイアがしくしくとグウェンドルフの前で泣き始めたので、グウェンドルフも困ってしまった。グウェンドルフは慣れた手つきでマイアの頭を撫でると、彼女にだけ聞こ

えるように何かを耳打ちしているようだった。その光景をただ困惑に彩られて見つめるアルフィリース達。

そしてしばらくの後。

続く

難題、その１２～竜の事情～（後書き）

次回投稿は、１０／２（日）１６：００です。

難題、その１３～天空竜の目的～

「先ほどは取り乱して申し訳ありません」

さきほどとはうって変わって完全に落ち着き払ったマイアがいた。こうしていると、非常に落ち着いた雰囲気のある女性である。たださきほどの癇癪を見てしまったあとでは、いかんせん鵜呑みにはできないとアルフィリースは頬杖をつきながら思うのだった。

アルフィリースが椅子にもたれかかりながら、やや気だるそうにマイアを見る。アルフィリースにしてみれば単に厄介事を持ち込んだという意味では、真竜であろうと街のごろつきだろうと大して変わらないのだが。真竜にここまで不遜な態度を取ることができるのは、大陸広しといえどもアルフィリースくらいであろう。もっとも、真竜は人間の態度などを気にかける生き物ではないので、無礼だとか不遜だというのは人間らしい感覚でもって真竜を解しているにすぎない。そういう意味ではアルフィリースの態度は彼女らしく、また非常に自然ではあった。

「で、その真竜が何の用かしら」

「はい。要件は３つ。一つはこの不肖の姪、ラキアを捕まえに来ました」

マイアが隣で正座しているラキアの頭に手を置く。にこにこしているマイアと対照的に、とても落ち込むラキア。

「もう一つは兄であるグウェンに会いに」

「待って。グウェンと貴女は兄弟なの？」

「血を分けた、という意味では違いますが、兄弟の様に育ちました。

グウェン、サーペント、私の順に3兄弟のように育てっています」

マイアが自分の胸に手を置きながら答えた。その言葉にアルフィリースも納得する。

「そして今一つは、イルに会いに」

「イルに？」

意外な言葉にアルフィリースが驚くと同時に、寝ていたイルが二階から降りてくる。

「う～、イルを呼ぶのはだぁれ？」

「イル？」

「貴女がイルマタルね？」

マイアは自分の腰ほどの背丈のイルマタルと目線を合わせるようにしゃがみこむ。

「初めまして、私はあなたの叔母にあたる真竜のマイアです。『天空竜』と他種族には呼ばれているわ」

「ふーん？」

イルマタルはとりあえず返事をしたものの、よくわからないといった顔でマイアとアルフィリースを見比べていた。どうすればいいかアルフィリースの顔色をうかがっているのだが、アルフィリースとてどうしたものかはわからない。そういって困惑するイルマタルを見ながら、マイアは優しく微笑んだ。

「混乱させたかしら？　無理もないわね。でも今日は貴女にお話があって来たの」

「おはなしー？」
「そう。イル、貴女、一度真竜の里に帰る気はない？」
その言葉にグウェンドルフとアルフィリースがただならぬ顔色をする中、一番反応が早かったのはイルマタルであった。アルフィリースの元へ駆けていくなりその体にしがみつき、涙を眼に浮かべてアルフィリースの後ろに隠れてしまったのだ。そして抗議の声を上げる。
「ママ！　この人、人攫いだ！」
「違いますよ、イル。この場合『竜攫い』が正しい表現でしょう」
「じゃあ竜攫いだ！　ママ、この人追っ払おうよ！」
リサが余計な茶々を入れる中、イルマタルはアルフィリースの陰に隠れながら「イー」をしてマイアを威嚇していた。
そんなイルマタルを見ながら、マイアは多少困惑したような、悲しそうな顔をして彼女を見つめるのだった。
「グウェン、困ったわ。話には聞いていたけど、本当にイルマタルはアルフィリースを母親と認識しているのね？」
「その通りなんだ。確かに困ったことだね。私の手違いだから、どうかアルフィリースやイルマタルを責めないでやっておくれ」
「ええ、その心配は無用だと言っておくけども、妹になんて説明しようかしら？」
マイアが今度こそ本当に困った顔で、頬に手を当てながらため息をついた。
「彼女達は今どこに？」
「最近連絡は取っていないけど、東の大陸に何体かほかの竜と共に

渡っているわ。東の大陸の戦火があまりにも激しくて、少しとりなしてくると言って」

「だがしかし、昔からあの鬼族は我々の言うことなど聞きはしないだろう？」

「以前話し合いの場を持った数百年前とは違い、代替わりも起こっているわ。それに浄儀白楽という力を持った人間もいるのだから、状況が違うでしょう？　そのあたりに気を付けて妹たちは交渉を行うと言っていたわ」

「確かに冷静な話し合いをさせたらルネスの右に出るものはいないが、そう上手くいけばいいが」

鬼と人との間を持つ――本来は族長であるグウェンドルフが先頭に立って行うべき事業であるが、グウェンドルフは積極的な人間を始めとする他種族との関わり合いを好まない。自分達の力を求めるものにはあるいは応えることもあるが、自分達から積極的な助力をすべきではない思っている。

だがグウェンドルフより若い竜達は違う。彼らは積極的に他種族に関わり、その発展を促したいと思っているのだ。その真意は彼らの純粋な好意なのであるが、グウェンドルフは危険でもあると思う。それは真竜の多くが、いまだに他種族よりも自分達のほうが優れていると思っている証。グウェンドルフは、真竜が介入することでさらに状況が厄介になる可能性も懸念しているのだ。

「（まあ、だからといって何もしない自分に言えた義理でもないが。どの竜も若い、若すぎる。自分達が新たな争いの火種になることも考えないのか）」

かくいうグウェンドルフも年の割に落ち着きがないと揶揄されていたのだが、そのことを彼もふと思いだして、くすりと笑った。その様子をマイアも不思議そうな目で見ている。

「どうしたの、グウェン？」
「いや、なんでもないよ。しかし、イルマタルのことはしばらくアルフィリースに預けないか？」
「え？」

マイアは意外そうな顔をしたが、グウェンドルフは今までの事情を説明した。だがそのことはマイアも知るところではあったのだが・・・

「事情は知っているわ」
「そうなのかい？　誰に聞いた？」
「シュテルヴェーゼ様に」
「げ、あの方か」

グウェンドルフが彼らしからぬ声を上げた。彼にとっても唯一頭が上がらない、現在も活動を続ける彼より年長の真竜。そして真竜達のご意見番でもある。

「シュテルヴェーゼ様はなんと？」
「イルマタルは即刻アルフィリースから引き離しなさい、と。彼女達二人が共にいると、様々な災厄の元になるとあの方はおっしゃっていたわ。少なくとも、イルマタルにとってよくない結果を生むでしょうともね」
「む・・・」

その言葉にグウェンドルフも言葉をなくした。耳に痛い言葉を発するかの方ではあるが、その先見は折り紙つきである。彼女の言葉に逆らって良い結果がでた試しはほとんどないのだ。
だがそれでも、アルフィリースのことを母と慕うイルマタルを、

無理矢理に引きはがすのはあまりにも情がないとも思える。

「・・・その件は保留にしてくれないか。どうにも私にも判断が出来かねるし、真竜の長としてこの話はあずかることにしよう」

「グウェンがそう言うのなら。でもルネスも娘に会いたいときっと寂しがるから、近々一度は必ず引き合わせてね？」

「ああ、それはその通りだと私も考えているよ。ただもう少し待ってほしいというだけだから」

グウェンドルフとマイアはそう言いながら、くったくのない笑顔でアルフィリースにじゃれ付くイルマタルを見つめるのだった。

＊＊＊

夜が明けて。昨晩はなんのかんので大はしゃぎとなった。ジェイクを連れてきたリサが散々からかわれるし、リサも負けじと「ひがむな、独り身ども」などとやり返したものだから、すったもんだがありました、と。もちろんジェイクはこっそり途中で逃げ出そうとして、その度リサに捕まえられたのは言うまでもない。彼は確実に明日の朝は学園に遅刻するであろう。

グウェンドルフもまたマイアと何やら夜遅くまで話し込んでいたし、アルフィリースもまたイルマタルをあやしながら何事か考えていたようだった。ミランダもそのままアルネリアから帰ってこなかったし、状況は少しずつだが、前に向けて動き出しているようだった。

そして眠い目をこすりながらも、以前ほど寝坊助ではなくなったアルフィリースが寝室から居間に降りてくると、リサが出かける準備を整えているところだった。

続く

難題、その１３～天空竜の目的～（後書き）

次回投稿は、１０／４（火）１６：００です。

難題、その１４～傭兵団結成の前に～

「やっと来ましたか、アルフィ」
「あれ、リサにルナ？　どこに行くの？」
「虫退治だ」

ルナティカが短めの外套を翻しながら答える。その時ちらりと見える各種装備から、ルナティカが本気で殺しを行う時の装備だとアルフィリースは判断した。

「見ての通りです。今からリサとルナはミリアザールの依頼をこなしてこようかと思います。これは私たち二人でやったほうが早いと思うので」
「手助けはいらない？」
「不要。私とリサで十分」

ルナが再び外套を翻しながら先に外に出て行った。その動きには迷いがない。ルナティカは無理な時（特に食事の味付け）や自信がない時（手加減とか）には素直にそう告げるので、これは何かしら自分にはわからない確信があるのだろうとアルフィリースは推測した。

そしてリサがアルフィリースの方をじっと見つめながら問いかける。

「昨晩は遅くまで起きていたようでしたが、アルフィは何かこれからの方策でも？」
「うん、まぁね。傭兵団の運営に何が必要かを書き出しながら、まずはこれからギルドに行ってみようかと思うの」

「なるほど、傭兵団としての登録を済ませないとダメですものね。手続きの書類なども必要でしょうから」
「ええ。ということで、後でロゼッタなんかと出かけるわ。その後アルネリアにも寄るかも」
「わかりました。リサも夕方には戻るでしょう」

そういってリサが出ていき、アルフィリースは酔っぱらって寝ているロゼッタなどを起こしに行く。ラキアはやけ酒を、ロゼッタやユーティも彼女に付き合いしこたま飲んでいたのだ。エアリアルも飲んでいたのだが、彼女はめっぽう酒に強い。火酒１０瓶ほどは顔色一つも変えずに開けてしまうのだった。ターシャとユーティが完全に酔い潰れているのは、アルフィリースは見なかったことにした。

しばらくするとアルフィリースは潰れたターシャとユーティも引っ叩き起こすと、ギルドの方へと出かけていった。真っ青な顔で時々口を押さえながらも、ふらふらとした足取りでついてくる二人をロゼッタがからかいながら、そこにたまたま訪れたフェンナも合流する。ここアルネリアにも傭兵ギルドはある。大陸でもっとも治安の良い都市の一つとはいえ、失せ物、他の町で発生した依頼などの掲示は行われているのだ。規模こそ小さいが、ギルドとしての機能に大きな違いはない。

アルフィリースが傭兵ギルドにしてはこぎれいにしてある木の戸を開けると、そこにはほとんど人がいなかった。まあ朝の中途半端な時間なので、当然といえば当然だが。そして愛想のあまりよくない、左腕のないギルド長がアルフィリースの方をぎろりとにらんだ。頭をそり上げ６０代程度の見た目でありながら筋肉質な彼は、アルフィリース達ほどの美人で変わり種の多い集団を目にしても、なんの感慨も表情に浮かべなかった。

その男が義務的な口調でアルフィリースに問いかける。

「何の用だい？」

「傭兵団の登録方法について聞きたいのだけど」
「嬢ちゃんが作るのかい？」
「ええ、そうよ」
「じゃあこの用紙を見てくんな」

受付も兼ねるギルド長は、棚の下から用紙を出すと、何やら奥に引っ込んでしまった。ほかの客が好奇の目で彼女達を見る中、アルフィリース達を見て馬鹿にしないのもよいが、何とも無愛想だなとアルフィリースはちょっと気にするも、それはともかくアルフィリースは用紙に目を通した。

「えーっと、何々・・・『傭兵団に所属するものは、団長の名前と、その他最低9名の名前と、傭兵としてのランクを記入の上、登録所のギルド長の認定を受けること。』・・・それだけ？」
「だからそんなもんだと言ったじゃねぇか」

ロゼッタがどこから準備したのか迎え酒とばかりに酒瓶を手にしながら、アルフィリースの後ろから用紙を覗き込む。

「登録だけなら簡単なんだよ。難しいのはそっから先だ」
「そこの『赤目のロゼッタ』の言うとおりだ。立ち上げるだけなら誰でもできる。重要ならそこから先だ」
「お？　おっさんアタイのこと知ってるのかい？」
「当然だ。俺が現役の頃にやりあったこともあるからな」
「だっけ？　覚えてねえな」
「一応俺の勝ちだったんだがな。まあまだお前さんが少女の面影を残すような時代の話さ。まあそれは置いといてだ。団長さんよ、あんたの傭兵としてのランクは？」
「・・・E」

アルフィリースが決まり悪そうにつぶやいた。そういえば修行をしたり幾多の戦いを経たものの、傭兵としての依頼を彼女は全くこなしておらず申請もしていないため、実力はともかく傭兵としてのランクは全く上がっていないのだった。

そしてアルフィリースのランクを聞いて、初めてギルド長の目は丸く見開かれた。

「・・・驚いた。お前さん、Eランクなのか」

「低くて悪かったわね！」

「そうじゃねぇ。その風格でEなのが信じられねぇんだ。ロゼッタが団員ってことは、それより強いってことだろ？」

「まあそうとも限らねぇが、確かにアタイはこいつに負けたね」

その言葉に、ギルドにわずかにいた人物達がざわめく。アルフィリースはまだよくわかっていなかったが、それだけロゼッタは傭兵として名を挙げた存在だったのだ。そしてロゼッタはその気性の荒さでも有名である。その彼女が親しげに肩を組む女性がいることもまた、彼らの注目を集めたのだった。

そしてギルド長の目が真剣なものに変わっていく。

「なるほど、道理で雰囲気のある娘だと思ったが、そういうことか。これは大物の傭兵団の誕生かもな。だが、だからこそ言わせてもらうぜ。これからの明確な傭兵団としての将来像はあるかい？」

「大陸で一番大きくて最強の傭兵団、ってのはどうかしら？」

その言葉に仲間がぎょっとしたが、男の眼光がますます鋭くなる。

「具体的には？」

「ここ最近ずっと考えていたんだけど、私は私が生きている間しか続かないような傭兵団は嫌。私がいなくなっても、一定の目的に下、

ずっと活動できるような団を作りたい。これは私の師匠の言っていたことでもあるんだけど、何かを作るときは、先を見据えて組織する物だって言っていたわ。
それに国家をまたいで活動できるような組織って、非常に少ないんですってね。魔術教会は自分達の利益が最優先みたいだし、アルネリア教会は国家単位の依頼で動くことがほとんど。民間人の依頼は受けない事が多いわ。だから私は、国家をまたいで民間人の依頼を受ける組織が作れたらいいなぁって」

アルフィリースがとんでもないことを言い始めたので仲間たちはぎょっとしたが、アルフィリースは至って平然としていた。その後ろでロゼッタがいつになく真剣な眼差しをしながら、思わず酒をあおっていた。

「（アルフィは時々とんでもねぇことを考えやがる。フリーデリンデは長いとはいえ地域の傭兵団だし、どの傭兵団も、今の団長ありきの団だ。ブラックホークのヴァルサスしかり、ミュラーの鉄鋼兵のドードーしかり、カラツェル騎兵隊のハルヴィンしかり。だがアルフィリースの構想は、アタイの知る限りいまだにどの団もなしえていない。もし成功すれば、すごい団が誕生するだろうねぇ）」

などとロゼッタが内心で感心する中、ギルド長は真剣な表情で聞いた後、おもむろに笑い出した。

「ぶふっ・・・ぶあっはっはっは！」
「な、何よ！　そっちが言えっていったから言ったのに！」
「いや、すまねぇ。その笑いじゃねぇんあ。あまりにも清々しくてな。まあ馬鹿ともいいかねんが」

男が半分涙目になりながら、楽しそうに笑っていた。一方でアル

フィリースはふくれっ面で彼を見つめていたのだ。

「いやいや、最近は堅苦しいのが嫌で傭兵をしているとか言いながら、どいつもこいつもせこく稼いでちまちま生きようとしやがる。傭兵の醍醐味はそうじゃねぇだろうがって、いつも説教しているんだがな」

「その代償が片腕を失っての引退じゃ割にあわねぇっつうの」

「黙りやがれ！」

周囲にいた傭兵の茶々に、ギルド長は彼らを一喝する。その言葉に傭兵達が首をすくめた。

「ったく、馬鹿どもめ。まあ夢を持つのはいいことだ」

「あら、私は言ったことは実行する女よ？」

「くくく、そいつはすまねぇ」

ギルド長は笑うと、再び真剣な目でアルフィリースを見つめた。

「じゃあ年寄りから一つ忠告がある。聞くかい？」

「ええ、ぜひ」

「女だけで傭兵団を作るってのなら、よりいろんなことに注意しなきゃならねぇ。中にはお前さんたちをただの娼婦扱いするような連中や依頼もあるだろう。それらを見定めながら、上手くかわしていく必要がある。真っ向から否定すると反感を買うし、受けたら品が落ちる」

「確かにそうね」

「だからその点に関しては俺が依頼の選別をある程度やってやろう。少なくとも、可能な限り依頼の裏や依頼主の情報を集めてやる」

「ありがたいわ」

アルフィリースが微笑んだので、男もにやりと笑みで返した。

「もう一つ、傭兵団を作るなら武器やなんやらの調達も大変だ。その辺のあてはあるかい？」

「あるにはあるけど、一つのツテでお世話になりたくないかも」

「賢明な判断だ。俺からもいくつか紹介できるが・・・」

「その話、乗った！」

続く

難題、その１４～傭兵団結成の前に～（後書き）

次回投稿は、１０／６（木）１６：００です。

難題、その15～利子の取り立て～

突然、ギルドの中から大きな声が聞こえる。その大声にびっくりしたアルフィリースであるが、声を上げた人物がつかつかと近づいてくる。それは、ふかふかの耳をした獣人の女性。種族は狐といったところか。切れ目の、長めの髪を一つにくくっているのが印象的な大人びた女性だった。獣人とはいえ、極度に露出の多い恰好をしており、ニアが見れば「破廉恥な！」などと言いかねないほどの恰好だった。短く締まったスカートから覗く太ももがまぶしい。

「なんだ、お前さん？」
「あたしはジェシア。獣人の商人ギルド、フェニクス商会の商人よ。文句ある！？」
「いや、ねぇけどよ」
「なら黙っときなさい！」

高飛車に言い放たれたギルド長が、しぶしぶ黙る。そして彼女はアルフィリース達に向き直ると、ころっと態度を変えた。

「えへへ、お客様～先ほど失礼ながら話は聞かせてもらいました～。当方としては人材、武器、資金、情報など、お客様がほしがるブツをなんでも用意する準備がございます。さて、どういったモノがご入り用で？」
「・・・なんか見るからに怪しい」

アルフィリースが怪しげな目つきで見つめるのも　無理はない。あからさまにジェシアの態度は営業用であり、信頼がおけそうなものは何もなかったのだ。アルフィリース達が怪しむ中、ジェシアは必至でアルフィリース達に取り入ろうとする。

「いやいやいや、疑うのも無理はありません！　ですがこのジェシア、お客様のためならたとえ火の中水の中。嵐でもなんのその、砂漠だろうが雪の中だろうが、確かに依頼の品をお届けいたします！　まずはお試しとして、私から品物を仕入れてみてはいかがでしょう？　今なら２０、いや３０％割引での品物のご提供をさせていただきましょう！」

「う～ん、どうする皆？」

とはいえここにそのような判断ができる人間がいるはずもなく。ロゼッタとしてもそういった細々したことには疎かったからこそ、傭兵団がうまく立ちいかなかったわけで。せめてリサかミランダがいればとアルフィリースとしても判断に困る中、突然フェンナが素っ頓狂な声を上げる。

「あ“ーっ！！」

「きゃあっ？」

フェンナの彼女らしからぬ声に、一同が驚いてびくりとなる。さらにまごまごするジェシア。

「な、なんですか？」

「どこかで見たことがあると思ったら、あなた、前に私に偽物の宝石を売りつけて金を巻き上げた獣人！」

「げっ、あの時の世間知らず！」

フェンナは怨敵見つけたりという表情をし、ジェシアは敗北必死の顔をした。そしてジェシアが状況不利とみて逃げの一手を考えだす中、新たな来訪者がギルドに訪れる。

「中々面白そうな状況ですね」
「リサ？」

そこには近くまで来たのでギルドに寄ってみたリサがいた。もちろんギルドで何が起こっているかはある程度把握済みであるし、彼女は状況を察知したうえで入ってきている。自分がいた方が話がまとまりそう、あるいはもっと面白くなりそうだと思ったので、リサは中に入ってきたのだった。

「たしかにうちの傭兵団にうかつでそこつな人間が多いのは認めますが、このリサの目が黒いうちはオイタができると思ったら大間違いです」
「盲目だけどね」
「そこ、黙る！」

ターシャの余計なつっこみに、リサが杖で彼女の膝をばしりと叩く。悶絶するターシャをよそに、リサはさらにジェシアににじり寄った。

「な、何よ・・・」
「ふふふ、以前あなたがこのフェンナから巻き上げた金銭を、利子を付けて返してもらいましょうか？」
「あ、あれは正当な交渉の上の報酬で」
「そう主張するならそれもいいでしょう。ですが私がせっかく穏便に全てを収めようとしているのに、もったいない」
「は？　穏便って・・・」

そう不審がるジェシアが見たのは、リサの後ろで準備万端のロゼッタとラーナ。彼女達の目が獲物を見つけた蛇のように、あるいは魔獣のように妖しく光る。

「やりなさい、ロゼッタ、ラーナ」
「ははっ、今回はアルフィのお墨付きだぜ」
「久々の獲物ですね。衆人監視ですが、それはそれで」
「ちょ、何・・・いやあああ！」

ギルド内にはジェシアの悲鳴が響くのだった。

＊＊＊

「はーっ、はーっ」

ギルドの中にはジェシアの荒い息遣いと、なぜかすっきりした顔のロゼッタとラーナ。そして顔を赤らめているその他の面々がそこにはいた。後にギルド長は語る。「久しぶりにイイモノ見たぜ」と。

そして床に這いつくばって息を切らせるジェシアに、リサが話しかける。

「さて、私達にこれでも金を返す気がないなら、今度は最後までロゼッタとラーナを解き放ちますが？」
「わ、わかったわよう。まったく、なんて恐ろしい傭兵団なんだろう」

ぶつぶつと呟きながら金銭を取り出すジェシアに、それを受け取るリサ。

「はい、これで全部」
「本当に？　なぜわかりますか？」
「私は一度やり取りした金銭の額は決して忘れないの。それに一度払うと言ったら、この身に変えても払うわ。商人にも、プライドは

あるのよ」

ジェシアがきっとリサを睨み返したが、リサにはそのような目つきは分かるはずもなく。ただ声の調子と、引き締まった表情は感知できるので、ジェシアが本気であることぐらいは分かっていた。だがここでアルフィリースがさらに意地の悪い提案をした。

「リサ、それじゃ全然足りないわ」

「は？　いや、だって・・・」

「世の中には利子というものが存在するの。商人なら知っているでしょう？」

アルフィリースの言葉にジェシアが「しまった」という顔をした。先ほど商人のプライドうんぬんの話をした後では、いまさらなかったことにはできない話である。

そして、アルフィリースはうまうまとジェシアから相応の対価を支払わせることに成功した。彼女達が組織するギルド、フェニクスから物質、人材援助を受けることに成功したのである。リサとロゼッタの助言できちんと証書を作り、それらに条件を提示していくアルフィリース。それは彼女が傭兵団を本格的に組織して動かす時にこそ、効力を発揮するものだった。

そしてジェシアが悲しそうにしくしくと泣きながらギルドを一旦後にしたが、彼女はギルドを出たのち、その表情をころりと変える。そして悠然とした表情でそのままギルドから離れ指笛を吹くと、彼女の元には一羽の伝書鳥が舞い降りた。その足に手紙をくくりつけるジェシア。

「これでよし、と。さて、ちょっと予想とは違うけど上手く取り入ったわね。でもここからどうするべきかしら？　まずはアルフィリースとかいうあの子の出方をうかがいましょうか？　せいぜい私を

楽しませてよね」

そこにはこれからの事を想像して、企み深そうに笑うジェシアがいたのだった。

続く

難題、その１５～利子の取り立て～（後書き）

次回投稿は、１０／８（土）１６：００です。

難題、その１６～天空竜の要求～

＊＊＊

「それで、アルフィはマスターの申し出を受けるの？」
「ええ、そのつもりよ。傭兵団の本拠はここアルネリアに置こうと思う。もっとも、活動拠点となるかどうかは別にしてね」
「なるほど。それはいい発想だわ」

ミランダがお茶を入れながら笑う。ここは深緑宮殿内、ミランダの私室である。ミランダが留守中に山と積まれた書類をかたずけながら、アルフィリースとおしゃべりをしている。
アルフィリースはギルドを離れた後、深緑宮へと足を向け、正式にミリアザールの申し出を受けることにしていた。そのことをミリアザールに伝えた時、妙に彼女が楽しそうだったのがアルフィリースには印象的だった。

「で、これからどうするのさ？」
「どうやら突貫工事を行っても、建物の完成は冬前になるかもしれないんですって。それなら、私はそれまでアルネリアにとどまるより、少し行きたいところがあるの」
「えーっと、東のベグラードかな？」
「ご名答」

ベグラード。それはアルドリュースがアルフィリースに行くように申し渡した土地でもあり、また東の果てに近い場所にある都市でもある。東の国家群ではかなり古い都市になるが交易も盛んであり、人口は１００万人を超え、大陸でも最大級の都市である。

なぜその都市に向かうかはアルフィリースも明確には理解していないが、とにかくそこに行けば何かがわかるのだろうと彼女は思っている。それにグウェンドルフからのアドバイスもあったのだ。ハウゼンとトリュフォンという人物を探さなくてはなるまい。

「でもベグラードって、ここからかなり遠いよ？　大国を三つはまたぐし、検閲やら何やらで、エアリアルの馬を使っても片道一月はかかるかも」

「その点に関しては心配ないわ。上手いことやる手段があるの」

「？」

アルフィリースが何事か楽しそうにしているので、ミランダは首をかしげたが、結果をおとなしく聞くことにした。ミランダとしても、今はそれどころではないのだ。

ミランダはアルフィリースとの会話中にも関わらず、自分の事務机の上に山と積まれた書類に目を通し始める。その書類をアルフィリースも覗き込もうとするが、それはミランダによって隠された。

「ダメよ、アルフィ」

「なんでよー。ケチ」

「そういう問題じゃないの。これは現在巡礼を行っている人間達の全情報。これが外に漏れると大変なことになるわ」

「私は漏らさないわよ」

「それはわかっているけどね」

ミランダもそのあたりはアルネリアのシスターとしての自覚がある。これが表に出れば、いろいろと不都合が起きるだろう。巡礼を行う個人が特定されるのも問題だが、彼らが行っている行動には明らかに通常の倫理観では許容されないものや、アルネリアの表面上の規範と相反するものもある。これらの問題が明るみに出れば、ア

ルネリアは様々な糾弾を受けることになりかねないのだ。
ミランダは続ける。
「これから私はしばらく新部門の立ち上げに忙しくなりそう。だからアルフィに同行はできないけど、ごめんなさいね」
「うん、寂しいけどアルネリアにはいるんでしょう？」
「ええ、もしここを離れるときは連絡くらいよこすわよ」
「ならいいや。またここには帰ってくるわけだし」
アルフィリースはにっこりと微笑むと、満足したように部屋を立ち去ろうとする。その背中を少し引き留めようとするミランダだったが、伸ばしかけた手を彼女は精一杯の思いで引っ込めた。
「（この子はいずれ私の手の届かない所に行くのかもしれない。そんな予感がする。その時私はどうするのだろう・・・？）」
ミランダの胸に唐突に浮かんだ疑問に答えをくれる者がいるはずもなく、ミランダは迷いを振り切るように自分の仕事に戻るのだった。
＊＊＊
その日は何事もなく終わっていった。結局、リサとルナティカはその日のうちにカラミティが自分の手駒として操っていた人物達をすべて燻りだして処分し、ルナティカが確信を持てなかった対象も、アルネリア教会の力を借りて倒したらしい。どうやって人間ではない確信を持ったのかは部外秘とのことだったが、どうやらアルネリア教会もただの慈善事業団体でないことくらいアルフィリースにも分かっているので、方法は問わなかった。ただそれらの侵入者達をそれぞれ『虫』『木偶（でく）』と名付けることに決まったらしいが、虫の

方はおおよその処断を終えたと確信できるも、木偶の方は見分けが難しく、これからも定期的にリサやルナティカが見回りを続けることに決めたらしい。アルネリア教会の方でも目下彼らの判別方法を研究中である。

さらにミリアザールとの交渉の結果をアルフィリースは全員に伝え、傭兵団としての活動はおそらく冬前になるであろうことを伝えた。その前に自分はベグラードに行くこと。そして、傭兵団としては自分と、リサ、ユーティ、エアリアル、ラーナ、イルマタル、ダロン、ロゼッタ、ルナティカしか面々におらず、申請のためにはまだ一人足りないことを彼女は告げた。

ミランダは正規のアルネリアシスターであるから、傭兵としての登録はできない。フェンナはかなり最後まで悩んでいたが、シーカーの王族としてこれから色々な責務が発生するらしく、傭兵としての活動は難しいとアルフィリースに告げた。その代わり、アルフィリースの傭兵団に対してシーカーから何名か部隊を派遣することを検討していることを彼女に告げ、必要があれば自分がそのリーダーとして出向くことをフェンナは話した。アルフィリースが非常に感激したのは言うまでもない。

さらに、ギルドの判定として精霊であるユーティや、竜族であるイルマタル、ハルピュイアであるエメラルドの参入は特に問題なかったが、魔剣であるインパルスに関しては彼女は人物として考えられず、傭兵団の人数としては数えられなった。

「ボクは気にしないけどね。それよりも力になれなくて申し訳ない」

インパルスが少し寂しそうに、そしてつっけんどんに言葉を発したのがアルフィリースにとっては意外だった。あまり自分達に興味はないと思っていたのだが、彼女はそれなりに気遣いもしてくれているようだった。

だがアルフィリースが傭兵団の人数が足らないことを悩む中、解

決案を提示したのはまたしてもリサであった。

「その件に関してはリサが手を尽くしましょう。どのみち当分はアルネリアのゴミ掃除のためにここを離れられませんし、情報戦ならリサのもっとも得意とするところ。隙を見てはこの傭兵団の宣伝や良い噂をばらまいておきましょう。どのみち、戦争などを請け負う傭兵団であるならば、もっともっと人数は必要でしょうから。あのギルド長も信頼できる人物の様ですし、アルフィリースがベグラードにどれほど滞在するか知りませんが、一月もあれば多少先行きは見えるかと」

リサの言うことは正論であり、情報収集がもっとも得意なのもリサであるので、アルフィリースは彼女に一任することにした。情報の収集が得意なら、その逆もしかりと考えたのである。もっとも傭兵団に入隊希望を出したものは、ロゼッタ、リサ、エアリアルあたりが選別をして、最終的にアルフィリースが決定することにしたのである。

そしてある程度これからの方策が決まったアルフィリースはベグラードに向かう準備を整える。連れて行く面々はエアリアル、ユーティ、ターシャである。エアリアルやユーティは物見遊山の傾向が強いが、ターシャはベグラードを訪れたことがあるとのことで、道案内も兼ねている。ラーナも同行を申し出たが、呪印を使用することはないだろうとアルフィリースも判断し、彼女の申し出は断った。実はアルフィリースとしては彼女が傍にいることで多少の貞操の危機を感じるのだが、それ以上に魔術を全く使えない面々しかアルネリアに残らないのはどこか不安だったのだ。ラーナはしょんぼりしながらもアルフィリースの言うことを素直に聞き、彼女のために色々な仕掛けを施しておくことを約束した。どんな仕掛けを施すかまではアルフィリースは聞かなかったのだが・・・

さらにグウェンドルフはここで別行動をとることを宣言。元々ア

ルネリアまでの護衛のつもりだったのだが、彼にも本格的に調べてみたいことができたらしい。グウェンドルフもアルフィリースに申し訳なさそうにしていたが、真竜の行動を縛り付けることができるはずもなく。またどうあったとしてもグウェンドルフが自分の信念に基づいて行動することを、アルフィリースも知っていた。

「私は去るけど、代わりにマイアがこの場に残ってくれるそうだ。イルマタルの件もあるし、少し人間の世界の様子を見たいらしい」
「本来の私は『天空竜』の異名通り、空高くから大地の営みを見るのが役目なのだけれども・・・たまには人間の中で世界を見てみたくもあるの。それに目を離すと、ラキアも何をしでかすかわからないですから」
「いててっ」

マイアがラキアの耳を引っ張りながら説明をする。ラキアもまたこっそりとアルネリアを抜け出そうとしたらしく、マイアにいち早く気づかれて大変な目にあったようだった。
ラキアは真竜の中でも変化の術に特に秀でているらしく、実に様々な姿に幻身できるそうだ。人はもちろん、小動物や果ては虫にまで。その力を使ってアルネリアに入って来たらしい。マイアの方は正面から堂々と「魅了（チャーム）」の術を使って門番に通過を許可させたそうだが、それを堂々と話されてもなんだかな、とアルフィリースは思うのだった。
そして重要な点はもう一つ。これは実はマイアから申し出られたことである。

「アルフィリース、ラキアを預かる気はない？」
「はい？」

アルフィリースも突然の申し出に驚いたわけだが、どうやらマイ

アは大人びた外見とは裏腹に感情的で、同時にいたずらっ子でお転婆でもあり、グウェンドルフも散々手を焼いているらしい。真竜としての自覚こそあるものの、あの姉にしてあの姪ありと思わせるだけのことをマイアもしてきたそうだ。

そんな彼女だからこそ、実に突拍子もない申し出をアルフィリースにしたのだった。まさか真竜を預かれと言われるとは、さしものアルフィリースの想像力も届かなかった。

「えーとそれはどういう・・・」

「ラキアのことなんだけどね。あの子ったらまだ１０００年も生きてないし、やっぱり真竜としての自覚を持ちなさいなんて、少し早いかもしれないの。それに誰に似たのか、あの子ったらお転婆でしょう？」

「・・・」

どの口でそれを言うかとアルフィリースは思ったが、そこはぐっとこらえる。だが構わずマイアは続けた。

「だから縛り付けすぎるより、ある程度自由にさせてあげるのもいいかと思うの。お試しに人間の中で暮らすなんてどうかなー、なんて。実は私も人間の中で生活したことがあるし、人間と恋人の真似事をしたこともあるわ。あ、グウェン兄さんやラキア、それに旦那にも内緒ね？」

「そ、それはいいけど。本当にいいの？　私は嬉しいけど」

「そうね。傭兵団の頭数として数えられるのはさすがにどうかと思うけど、居候という形でなら。遠慮なくこき使ってもらって結構よ」

「じゃあお言葉に甘えて、遠慮なくこき使うわ」

アルフィリースがいい玩具をもらったという少女のごとき顔をしたので、さしものマイアもちょっと不安を覚えたが、それはそれで

ラキアの薬になるかと思うのだった。
そしてさっそくラキアの元に向かうアルフィリース。

「ラキア、ちょっといいかしら？」
「何よ」
「あなた、私達の傭兵団の中で生活する気はない？　もっとも戦争に参加しろとか、傭兵としての任務をこなせなんて言わないから。あ、これはマイアの提案よ？」
「まあ衣食住に困らないのはいいことだけど・・・」

すっかり姉不審になったラキアが、アルフィリースをうさん臭そうに見つめる。

「で、交換条件は何？」
「お、話が早くていいわね」
「いいから早く話しなさいよ」

少しぶすっとするラキアに、アルフィリースが楽しそうににやりとする。

「ラキア。あなた、私専用の竜にならない？」

続く

難題、その１６～天空竜の要求～（後書き）

次回投稿は、１０／９（日）１５：００です。

第二幕人物紹介、その2

名前：ネリィ
年齢：9歳、人間の女性
外見：身長133cm、体重28kg、色素の薄い茶色、癖っ毛、茶色の大きな瞳
職種：グローリアの学生、シスター志望
好き・得意なモノ：学問（特に魔術系統）、真面目な人、リサ、ドーラ
嫌い・苦手なモノ：不真面目な人、ルース
一人称：私
〈プロフィール〉
リサが育てていた孤児。彼女の両親は、ごく普通の市民であった。だが、その両親から生まれた彼女の髪の色は非常に薄く、陽のあたりようによっては金色に近かった。彼の父親は「両親とも茶色の髪の人間から、このような髪色の子どもが生まれるはずはない」と自分の妻の浮気を疑い、たったそれだけのことで彼女の家庭は崩壊した。
ネリィは母親の手で孤児院に預けられたが、ネリィが3歳の時にその孤児院は経営難で潰れた。世の中に一人で放り出された彼女はひたすら泣いていたが、その声を聞き付けたリサによって彼女は保護される。
以降彼女はリサの元でリサに次ぐお姉さん的立場となる。生来から明るい性格のネリィは、リサの次に頼りにされる立場である。
そして彼女の薄い髪色は聖属性の魔術に親和性を示す変化であり、彼女はグローリアにおいてその才能を徐々に発揮していくこととなる。そんな彼女はただいま転校生のドーラに首ったけである。

名前：ルース
年齢：７歳、人間の男性
外見：１２０ｃｍ、２５ｋｇ、茶色のサラサラな短髪、茶色のジト目、
職種：グローリアの学生、学者志望
好き・得意なモノ：いたずら、女の子、リサ
嫌い・苦手なモノ：ネリィ、自分よりモテる男、正義感
一人称：ぼく
〈プロフィール〉
彼は舌足らずなため言葉の発音にしょっちゅう苦労しているが、頭の回転はこの上なく早い。彼はどこかの娼婦の子どもであったのだが、母親が借金苦に耐えかねて雲隠れしてしまい、彼は一人残された。それから彼は親戚をたらい回しにされるのだが、そのせいで彼は人を信じられない子どもになってしまった。
ろくに衣服も与えられないルースは小さい頃からスリや人を騙してお金を稼いでいた。ある時ヘマをした彼は命の危険にさらされるが、そこをリサに救われたのである。
以降命の恩人であるリサを彼は誰より大切に思い、同じような境遇の子ども達を護ろうとしている。ただやり方に多少、いや、かなりの難があることに周りは頭を痛めている。

名前：デュートヒルデ＝オルフェリア＝リヒテンシュタイン
年齢：１０歳
外見：１４８ｃｍ、３４ｋｇ、もともとは直毛だが、都会の流行りとかで金髪縦ロールにしている、大きな青い目
職種：公爵家令嬢、シスター科専攻
好き・得意なモノ：お茶、流行、品物の鑑定
嫌い・苦手なモノ：生意気な者、下品な者、怖いもの、虫

一人称：ワタクシ
〈プロフィール〉
　リストリア国リヒテンシュタイン公爵家が令嬢である。同国は非常に文化の発達した国であり、東における文化の要と言ってもいい。なおカザスの出身であるメイヤーも、リストリア国の中にある。
　彼女の父親はリステリア国宰相である。そのせいか彼女自身も何度か誘拐の憂き目にあった事もあり、貴族ならではのつらい体験もしている。また父も母も忙しく、家族そろっての晩餐などは年に何度かあればいい方だった。
　そのせいか誰も彼女に意見できる立場にないため、彼女はわがまま放題に育ち、その事を心配した両親は彼女をグローリアに入学させた。なお両親はグローリアで出会い、その後結婚をする仲になっている。だがグローリアにまで別荘があるような家系なので、その効果は甚だ疑問。実際に彼女はグローリアでもやりたい放題だった。
　人物としては貴族だけあってそれなりに優秀であり、勉強から魔術まで一通り優秀な成績を収める。最近はジェイクをからかおうとしてはやり返され、彼らのやりとりはちょっとした学園の名物になっている。彼女にとってジェイクは、初めてできた自分に物怖じしない同級生と言ったところだろうか。彼女はジェイクを非常に気にっているわけだが、生来の性格からか、その事を素直に表現する術を知らない。

名前：リンダ＝アクィナス＝バーミリオン
年齢：１０歳
外見：１４３ｃｍ、３０ｋｇ、茶色の肩までの直毛、茶色の瞳
職種：グローリアの生徒、侯爵家令嬢、植物学志望
好き・得意なモノ：平穏、植物観察
嫌い・苦手なモノ：雷、脂っこいもの、ケコナの実
一人称：私

〈プロフィール〉
　東の大国、イーディオドのバーミリオン侯爵令嬢である。彼女の他に兄・姉、妹がいる。彼女は真正の貴族として育てられたが、その性格は温和で、貴族であることを自慢するような場面はまずない。だからこそ勝ち気なデュートヒルデと性格が合うのか、彼女達は一緒によくいることが多い。
　侯爵家の令嬢ともなれば将来像は政略結婚なども考えられるが、彼女は一人の自立した女性としても活動したいとひそかに考えており、植物学などを専門的に学びたいと考えている。そのため彼女のアルネリア別邸の中庭は、各地方から取り寄せた非常に珍しい植物で埋まっている。
　彼女もまた寝物語に聞くようなジェイクの事を格好良いと思っているが、その穏やかな性格からか、デュートヒルデと彼の間に割って入るような事はとてもできていない。

名前：ブルンズ＝ロータス＝ランドブルッフ
年齢：１２歳、
外見：１６５ｃｍ，６５ｋｇ　金の短髪、ややくせ毛、青色の目
職種：グローリアの生徒、子爵家子息、聖騎士志望
好き・得意なモノ：食べる事、寝ること、筋力鍛錬
嫌い・苦手なモノ：ジェイク、口の達者な女
一人称：俺
〈プロフィール〉
　オルメキス王国ランドブルッフ家三男。兄二人はオルメキスの軍人であり、グローリア出身でもある。また父親もかつてグローリアに通っており、子爵でありながらも現在ではオルメキスで将軍職を拝命するほどの騎士。ブルンズは父親も兄達も尊敬しているが、彼らがどのように素晴らしい騎士なのかはまだわかっていない。
　性格は短気で無遠慮。周囲への配慮がないため傲慢と取られがち

だが、実質はそこまで傲慢でもない。どちらかというと、おちょこちょいであるいは愛らしくもある。ただカッとなると見境がなくなるため、不遜な言葉を発する事もしばしば。この時代の貴族的発想を体現している人物でもある。

実は剣技に関しては中々のもので、大きな体格も手伝って結構な腕前を誇る。同年代では確実にかなりの使い手なのだが、ジェイクの出現によってその地位が危うくなる。

また非常に貴族的な発想をしているため、国が違うと言えど公爵家であるデュートヒルデに逆らえず、まるで彼女の小間使いのような事をしていたが、デュートヒルデが大人しくなってからはそのような事はなくなった。ジェイクとは何かしら衝突するが、現在では彼の事に一目置いており、秘かな目標としている。

第二幕人物紹介、その2（後書き）

次回投稿は、１０／１０（月）１５：００です。

再会

＊＊＊

その頃、ここはミーシアの酒場。獣人、人間問わず集まる有名な酒場を経営するのは、やはり獣人である。少し前までいた無愛想だが剛毅な店長はいなくなり、この酒場も駄目かと思われたが、今までおとなしかった犬の獣人が店長になってから、この酒場は以前以上に盛況だった。なにせ、この冬には二号店を出店予定なほどである。

「いらっしゃいませ」
「こちらへどうぞ～」

店に入った客を出迎えるのは、獣人と人間の娘。人種・職歴問わず人を受け入れるこの場所は、通常なら柄の悪い人間達も集まりそうなものであったが、不思議と揉め事の少ない店であった。それはミーシアの自警団がこの場所をたまり場にしているからでもあり、また客層の幅の広さがそうさせるのか。最近では料理のうまさに家族連れや、上流階級の面々まで足を運ぶ人気店となりはじめていた。

その一角でちびちびと酒とミルクを飲む獣人が二人。

「まったく・・・旅の予定が全然進まないではないですか！」
「あらあら、ニアちゃ～ん。そんなに怒ったらしわが増えるわよぅ？」
「ほっといてください！」

ダン、とテーブルを叩いたのはニア。当然その前にはアムールが

いる。二人はアルフィリースと別れてから一月あまり、まだミーシア周辺にいたのである。彼らの移動速度なら、すでにグルーザルド入りを果たしていてもおかしくはないのだが、ちょこちょこ回り道をしているせいでこうなっていたのだった。

「だいたい隊長はどういうつもりですか!?　まっすぐグルーザルドに向かわずこんなところをふらふらと」

「だってえ、気になるじゃない？　ローマンズランドのじょ・う・きょ・う」

「何を訳のわからんことを」

ニアが牛乳を一気に飲み干し、今度はグラスをダン、とテーブルに乱暴に置いた。まるで酔っぱらいの行動である。

だが一見へらへらしているアムールの表情は、決してその目までは笑っていなかった。

「あら、結構私は大真面目よ～ん。だいたいさ、魔王がどうやって生まれると思ってるのぉん？」

「う・・・それは」

「まさか木の股から生まれはしないわよねぇ？　だったがそれらの魔王をどこかで作っていると考えるのは至極妥当でしょう？　南の方の国も考えられるけど、発生場所が実は散在していてるって気づいてたぁ？」

「というと？」

「これを見なさい」

そういってアムールが広げたのは、簡易な大陸地図。二人用のテーブルに載るほどの小さな地図だが、そこには×印がそこかしこに書いてある。

「これは？」
「ここ数年の、魔王と確認された魔物の出現場所よ。部下やギルドに調べさせて、裏が取れた物だけだけどね。こんなことをやっているのはまだ私だけかもね」
「こんなに？」
ニアは驚いた。その印はゆうに百を超えていた。これほどまでに魔王が出現しながら、なぜにそれほどの騒ぎにならないのか。またこの出現頻度はなんなのか。ニアの頭に疑問が次々と浮かんでは混ざり、彼女の頭はあっという間に思考回路が行き詰まる。
「なぜ、こんなことに？」
「焦らないの、それを今調べているんだから。でも気になる点は確かにいくつもあるわ」
アムールが指を振りながらニアに説明する。
「まず一つは発生頻度の高さ。これはアルフィリースって子から聞いたことで解決ができる。意図的に作っている者がいるなら話は早いでしょう？
すると次に浮かぶのは、どこで作っているのかということ。ただこの地図を見れば、それなりに想像はつくでしょう？」
「うん？」
ニアはまじまじと地図を見るが、出現場所をいくつかに区切っていくと、それなりに密集しているような・・・
「まさか？」
「呑み込みがいいわねぇ。そう、私の考えだけど、やっぱり作ったら解き放ちたいわよね？そうすれば、作った場所から放つのが普通

だわ。でも作っている場所、かりに『工房』とでも呼ぶことにしようかしら。工房の近くで魔王に暴れられると、それは危険が大きいでしょう？」

「ということは、この魔王の出現場所の真ん中。空白の場所に工房があると」

「私はそう睨んでいるの」

アムールがにやりと笑う。ニアは今さらながらアムールの情報収集能力と、獣人らしからぬ考察に恐れ入る。

「なるほど、それは」

「で、ここで一つ重大な事実が気づいたのだけど。私の情報収集が甘いと言えばそれまでだけど、ローマンズランドでは、魔王の目撃情報がないの。これがどういうことかと考えてね。ニアちゃんはどう思う？」

「目撃情報がない・・・」

ニアは腕組みをして考えた。思考にはアンネクローゼの厳しい表情と、アルフィリースと話す時の柔らかな表情が浮かんでは消える。最初は融通の利かない堅物王女かとも思ったが、彼女は彼女なりに悩み苦しむ一人の人間だということもよくわかる。ニアとしても最終的にはそう悪印象を抱いていもいなかった。

だがそのことは別にして、考えられる可能性はこうだろう。

「ローマンズランドが魔術士達とグル、とか」

「それもいいわねぇ。まあそんなところでしょうね。アタシは別の可能性を考えているけど」

アムールが何か思わせぶりな発言をしたが、その先を彼が語ることはなかった。アムールは軽い調子とは裏腹に、かなり確信を持っ

た事柄しか語らない。彼が黙ったということで、まだ推論段階の事だとニアも察したため、その場で黙ってしまった。そして沈黙をテーブルが包む。そこに訪れる店長のウルド。

「あれ、ニアさん久しぶりですね」
「ウルドか。厄介になっている」
「いえいえ、置くもの置いて行ってくれればこちらとしても嬉しい限りで」
「言ってくれる」

ニアがふっと笑い、ウルドもそれに応えて笑う。

「そういえば、シーカーのお姉さんを送り届けてからこちらで？」
「まあ紆余曲折は経たがな。大方そんなところだ。それより店長のゼルドスはどうした？」
「はあ、それが傭兵に復帰しちゃいました」
「傭兵に？　ゼルドスが昔傭兵だったとは聞いていたが、どこの傭兵だ？」
「確か・・・ブラックホークとか言ったかな？」

その言葉にニアも驚いたが、一層反応したのはアムールだった。口調が男のそれに戻る。

「坊や、その情報は本当かい？」
「え、ええ。昔の部下とかいう人達が迎えに来たので、間違いないと思います」
「そうか、そいつは厄介だな。となると、ブラックホークは早めに抱き込んだ方が・・・いや、奴がいるとそれも難しいか。だがしかし・・・」

アムールがぶつぶつと何かを言い始めたので、ニアとウルドは顔を見合わせていた。ニアがおそるおそるアムールに聞いてみる。

「あの、隊長？　ゼルドスとは何者なんですか？」

「ああ、知らないのか。奴はその昔グルーザルドの軍事顧問をやっていた男だ。個人の強さもそうだが、獣人には珍しく集団戦の上手い奴でな。獣将だけでは仕留めきれないほどの戦上手だった。ドライアンが出てきてやっと捕まえたほどの手練れだったよ」

「そ、そんなにですか？」

「そんなにだ。いいかニア、よく覚えておけ。強い奴ほど強さを隠すのも上手い。また強さとは基準が一括りではない。こいつは自分より弱いと見くびっていると、手痛いしっぺ返しをくらうぞ？」

「了解しました。忠告、心に留め置きます」

ニアはアムールの言っていたことがまだ実感できなかったが、それは本国に着くと速やかにわかることになる。

そしてニアがアムールの言葉を噛みしめながら悩む中、彼らのテーブルに近づくもう一つの人物がいる。その足音にニアの耳が自動的に反応したのは、無理からぬことかもしれない。なんということのない足音だが、彼女の耳にとってだけは非常に心地良く聞こえる特別な足音なのだ。思索にふけるニアの意識が瞬間的に引き戻され、彼女はがばりと顔を上げた。

「この足音は・・・」

言うが早いか、ニアは駆け出していた。人込みにぶつかっても、今だけは気に留めることもできなかった。それよりも、足音の主が気になって気になってしょうがない。

「カザス！　どこだ！？」

「・・・ニア？　ニア、ここだよ！」

ニアの声に反応し、あまり背の高くないカザスが手を振るのが見える。ニアはその場所まで疾風のように駆けると、そのままカザスに飛びついた。

カザスもまたニアに抱きつかれて嬉しさと驚きをないまぜにした表情をしながらも、非常に彼らしく冷静に対応した。

「カザス！　無事だったか！」

「それはこちらのセリフですよ、ニア。よくぞ貴女も無事で」

「わ、わ、私は無事に決まっているだろう！　鍛えているからな。それよりお前は」

「私は鍛えてはいませんが、ニアを残して死ぬほど薄情な男ではないつもりですよ」

ニアのセリフを遮って紡がれたその言葉に、ニアの顔が真っ赤になる。そしてその気配を悟った周囲からは指笛やら冷やかしの声が各種上がる。ニアが凄まじい勢いで飛びついたあたりから既に注目の的だったのだが、カザスはそれに気が付きつつも無視し、ニアは今初めて気が付いたのだった。

これは冷静なニアには非常に珍しいことであり、なぜニアもそうなったのかはよくわかっていなかった。実はそれだけカザスの事を気にかけ、大切に思っていた証なのだが、そこまでの感情が自分に芽生えていようとは、ニアにも気が付く由はない。彼女は恋愛に関してはまだまだ初心者だった。そうでなくとも、自分の事をカザスが追いかけて、そして出会ったことにも非常に感動していたのだが、ニアに感情の整理がつくはずもなく、ただ今は本能の赴くままに彼女は行動しているのだった。

そんなカザスに抱きついたまま顔を赤らめ、尻尾を高速で横に振るニアを眺めながらアムールとウルドが感想を漏らす。

「若いっていいわねぇ」
「ですよねぇ」

ニア達包むのは、人種問わず彼らを祝福する歓声だった。そんな幸せさ再会を果たした酒場に、新たに現れる影が二つ。

「あれは・・・どっちも見た顔だな」

男の方はカザスとニアを見ると、良いからかい文句を思いついたように彼らの方に歩み寄って行った。

続く

再会（後書き）

次回投稿は、１０／１２（水）１５：００です。

第二幕人物紹介、その3

名前：ラスカル＝フォート
年齢：１１歳
外見：１５４ｃｍ，４４ｋｇ，茶色の直毛、茶色の瞳
職種：グローリアの生徒、聖騎士志望
好き・得意なモノ：計算、野菜の目利き、動物の世話
嫌い・苦手なモノ：生肉、貴族
一人称：俺
〈プロフィール〉
　アルネリアに生活する農家の長男。下に四人の兄弟がいるが、彼の両親は彼が出世する事を期待して、大切な働き手である彼をグローリアに送り出した。彼自身はそれを表に出すことはないが、貧しい農家では彼の様な長男はまず働き手として計算されることが普通であり、長男を学校に行かせるのは当時では珍しいことである。
　グローリアは将来的にアルネリアで一定年数を奉仕する事と引き換えに学費こそ免除だが、その他の道具一式は特待生でもない限り自腹で買いそろえるのが当然である。彼は普段の生活で質素倹約に努め、また学園終了後は奉公をしながらその金を賄っている。その事を知っているのはごく一部の生徒だけであり、彼は誰にも弱音を吐くことはない。それだけ我慢強い性格をしており、じっくりと腰を据えて考える性格の持ち主である。
　猪突猛進型のブルンズとは実は良いコンビであり、ブルンズもまたラスカルの言う事は比較的よく聞く。ジェイクと合わせて三人の親友の、良いストッパー役である。

名前：ミルトレ＝グレンティス

年齢：１６歳
外見：１７５ｃｍ，６８ｋｇ，茶色の癖っ毛、茶色の瞳。
職種：聖騎士見習い、男爵
好き・得意なモノ：友人との会話、後輩の面倒を見ること
嫌い・苦手なモノ：雷
一人称：俺
〈プロフィール〉
　元奴隷の少年。少年の頃にアルネリア教に救われた彼は、たまたま男爵であるグレンティス家の当主の目にとまり、そこに養子として迎えられた。グレンティス家の当主が子宝に恵まれなかったことから、グローリアで優秀な成績を収める彼は実の子のように可愛がられ、その名を正式に継ぐことが許された。ミルトレは黙して語らないが、その当主の事を実の父の様に慕っているらしい。今でも年に二度の帰省は決して欠かさない。
　彼が聖騎士を目指す理由は三つある。一つは自分を拾ってくれたアルネリア教への恩返し。一つはグレンティス家の名に恥じぬ人物になるため。もう一つは、自分が社会で成功することで自分と同じように奴隷の身分の子ども達に希望を与えるためである。
　誠実で目標のために全力で努力する彼に共感する貴族も現在では多く、グローリアでも一目置かれる存在となりつつある。また自身もかなりの使い手だが、指揮官としても優秀。卒業後はマリオンのスカウトも受けており、聖騎士見習いとしてアルネリアに残るか、マリオンと共にロクレールに渡るか悩んでいる最中である。

名前：ロッテ＝ブレンティ
年齢：１０歳
外見：１３８ｃｍ，３７ｋｇ，茶色のおさげ、茶色の瞳
職種：グローリアの生徒、シスター志望
好き・得意なモノ：裁縫、家事全般（特に料理）

嫌い・苦手なモノ：虫、お化け
一人称：私
〈プロフィール〉
　ジェイクの学友であり、彼の事を慕う女の子。ごく普通の町娘であり、母はアルネリアで裁縫店を営み、父は鉱石採取の現場で働いているため、現在出稼ぎ中である。
　純朴な性格から平民・貴族を問わず慕われる女の子。リンダやデュートヒルデに粗相をしないように気を使いながらも、日がなジェイクにアプローチする毎日である。
　ちなみに回復魔術は中々得意。特に状態変化を正す魔術を得意とする。

名前：マリオン＝クラフト＝オルメキス
年齢：１５歳
外見：１７１ｃｍ，５９ｋｇ，金の腰までの直毛、グレーの瞳
職種：オルメキス家長男にして、ロクレール王国王太子。魔法剣士
好き・得意なモノ：午後のお茶、剣術、適度な運動、乗馬
嫌い・苦手なモノ：粗野な者、落ち着きのない者
一人称：僕
〈プロフィール〉
　れっきとした王太子殿下。彼がグローリアに通うのは、代々オルメキス王家のしきたりである。
　オルメキス王国の開祖は、ミリアザールが目をかけた騎士の一人である。彼が魔王討伐で功績を上げるにつけ、ミリアザールは当時の最前線の土地をそのまま彼に譲ることを約束し、代わりとして彼に魔物と戦わせたのである。だがミリアザールの期待に応え無事にその土地を守り通した彼は、自分を育ててくれたアルネリアに跡取りを始めとした一族を通わせ、修行をさせることとなった。
　そのような事情でマリオンもグローリアに通っているわけだが、

彼はその事も楽しんでいるようである。ちなみに彼は非常に美男子であり、王太子という事を覗いても女子に人気が高い。また華麗な外見とは裏腹に、かなりの武闘派でもある。彼の友人、または恋人にとその隣を狙う者も多いが、彼自身は至って悠然と振舞っており、また彼の隣にはミルトレとクルーダスがいることから、余計な争いにも巻き込まれず彼は楽しい学園生活を送っている。

なお卒業後は王国に戻る予定。その前にグローリアで教官をしてみたいと彼は秘かに考えているが、希望が通るかどうかはまだ国王と相談中である。

名前：クルーダス＝ラザール（ミドルネームはまだ神殿騎士となっていないため、名乗れない）
年齢：１４歳
外見：１７３ｃｍ，６６ｋｇ，金の直毛で短髪、緑の瞳
職種：神殿騎士見習い、
好き・得意なモノ：鍛錬、勤勉な者、肉
嫌い・苦手なモノ：不真面目な者、野菜
一人称：俺

〈プロフィール〉

ラザール家本家の三男。アルベルト、ラファティの弟である。彼は卒業後アルネリア聖騎士となることが既に内定している。通常は見習いから始めて、最低三年の修行が必要なのだが、彼は在学中にそれらを全てクリアした。なお長男のアルベルトは同時期にミリアザールの親衛隊へと任命されているが、クルーダスも任命先次第ではその記録に並ぶかもしれない。ラファティの神殿騎士任命は１５歳であったため、彼はそれよりは上回ったことになる。

本人の性格は至って真面目。だが融通の聞かないアルベルトよりは柔軟な性格で、指揮官としても有能であると神殿騎士団内では評判であり、最終的にはアルベルトを凌ぐ騎士になるのではないかと

考えられている。
　ちなみにかなりの偏食。冷静な表情のまま「野菜は要らん、肉をよこせ」といつも食堂で言うので、いつもミルトレとマリオンが横で笑っている。

名前：ドーラ＝シレンティウム
年齢：１１歳
外見：緑の透けるような長い直毛、緑の瞳
職種：グローリアの学生、剣士系
好き・得意なモノ：動物と遊ぶこと、木の下で読書をすること
嫌い・苦手なモノ：喧騒、油っぽい食べ物
一人称：私
〈プロフィール〉
　グローリアにやってきた転校生。その女性的とも言える美しさで転入早々学園中の女子の噂になる。男子の気分をなんとも害したが、彼自身は男女分け隔てなく付き合う人間であり、ちやほやされたからと言っても有頂天になったりはしない。
　非常に物静かな性格であり、一人でいる事を好む彼だが、どうやらジェイクに興味があるようで・・・？

続く

第二幕人物紹介、その3（後書き）

次回投稿は、１０／１４（金）１５：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その1～ベグラード～

「着いたわよ」
「え、もう？」
「誰の背中に乗っていると思ったの？」

真竜の姿に戻ったラキアが鼻をフン、と鳴らしながら息巻いてみせる。ここは東の大都市ベグラードの近郊、時刻は夜である。そしてアルフィリース、エアリアル、ユーティ、ターシャはラキアの背中の上で、はるか上空から遠くに見えるベグラードの明りを眺めていた。

「あれがベグラード」
「大きな町だな」
「当然よ、この大陸でも有数の大都市なんだから。あれより大きい街なんて、この大陸にもそうそうないわよ」

アルフィリースといエアリアルの感想に、ターシャがさも当然といわんばかりの言葉を投げかける。傭兵として様々な知識を持つターシャにとっては、あるいはこの大陸の東に暮らす人間にとっては当たり前の事なのだが、アルフィリースやエアリアルにとっては全てが目新しい。アルフィリースは見たこともない都市の規模に、胸躍らすのであった。

そんな中、アルフィリースはラキアの言葉に我に返る。

「で、この辺で降りればいいわけ？」
「あ、そうね。人に見つからないように降りてくれる？」
「認識阻害の魔術くらい使いなさいよ。仮にも魔術士でしょう、あなた？」

「えへへ、ごめんなさい」

アルフィリースは頭を掻きながら謝った。アルフィリースはいわゆる補助魔術が苦手である。姿を隠したり、逆に発見したり、あるいは使い魔を作ったり。そういった魔術は彼女が昔から苦手とするところだった。これらの魔術は自分の中の魔力を消費・変換して使うものなので、むしろ通常の魔術士はこちらから魔術を覚える。危険も少ないし、いわゆる初心者用の魔術なのである。

だがアルフィリースはそれらをすっ飛ばして、攻撃などの扱いの難しい魔術を使っていた。これを知ったラキアは、アルフィリースについて呆れていた。

「まったく変な女だわ・・・こんなのにいいように使われるなんて」
「何か言ったー？」
「なんでもないわよ！」

ラキアが自ら認識阻害の魔術を使いながら適当な茂みに降り立ち、アルフィリース達を背から降ろすと、彼女は幻身を使って人の姿へと変身する。

「ふう・・・」
「疲れた？」
「別に。一日もまだ飛んでないもの。『旋空竜』の異名をとる私にしたら、これくらい朝飯前よ。ただ人を乗せて飛んだのは初めてだから、気を使ったのよ。速度もだいぶ押さえたし」
「嘘、あれで？」

アルフィリースは面喰ってしまった。エアリアルの馬を使ってもゆうに一月はかかる道程を一日で飛んでおきながら、それでもまだ全速力ではないという。旋空竜とは真竜の中でも最も速く飛ぶこと

ができる彼女の通称らしいが、それにしても驚きの速度である。現にアルフィリース達はラキアの背中にいるときは、あまりの封圧に顔を上げることもできなかった。
そして驚くアルフィリースの表情に、やや得意げになるラキア。

「どう、私の速度は？　その気になればこの大陸を三日とかからずに横断するのよ？　少しは驚いたかしら？」
「ええ、素直に驚いたわ。だって、ちょっと・・・ねぇ？」
「ねぇ、って何よ？」
「アルフィったら、チビったんじゃないの？」

もじもじするアルフィリースに、ユーティが意地の悪い笑みを浮かべながら聞き返す。その言葉にみるみる顔が青ざめるラキア。

「ちょっと、あなた！　人の背中でなんてことを！！」
「ちょ、ちょっとだけだよ！」
「そういう問題じゃなぁい！」
「乙女の会話じゃないわね・・・」

ターシャの感想ももっともである。
その後はその場で一夜を明かした一行。夜ならば既に街の門も閉まっているのが通常で、余程火急の用があったとしても、特別な通行証が無い限り夜は開門しないのが世の常である。魔獣はびこる世の中ではいたし方のないことであろう。世が平和になり魔物や魔獣はその姿を潜めたとはいえ、時折町にやってくる魔物や、明りに魅かれる魔物もいなくはないのだ。アルフィリースは涼しくなり始めた時期の夜長を、たわいもない話で潰して過ごすのだった。
夜が明けて。アルフィリース達はベグラードの町に入る。ここは東の『連邦』と呼ばれる国家群の中でも、特に大きな国家の一つであるイーディオドの首都でもある。北のローマンズランド、南のグ

ルーザルドのような大国に対して、東の国家は一つ一つが弱い。騎士の国である～のような軍事に特化した国家はさておき、東の国家は連携して大国の様相を呈しているということである。

東の連邦は人間達が最初に切り開いた国家であるから、当然文化も華やかで平和な場所が多い。基本的に魔獣や魔物の影は少なく、余程森や谷、山などに深く分け入らない限り、彼らに出会う事はない。ゆえにそれだけ人が多く、同時に人間ならではの陰謀渦巻く都市ともいえるかもしれない。

そんな町に、アルフィリースはミリアザールから直に発行された通行証を使って入っていった。その身分はアルネリア教が保証するということで持ち物改めも無しで町に入ったわけで、改めてアルネリア教の影響力の大きさに感心するアルフィリースである。

「（ミランダって、そこのお偉いさんなのよね・・・イマイチ実感がわかないわ）」

などとアルフィリースがぼんやりと考えていると、ユーティがアルフィリースの肩をたたく。

「アルフィ、ここからの当てはあるの？」
「えーと、ハウゼンって人の屋敷を訪ねろってさ」
「いや、だからそれはどこなのよ？」
「知らない。適当に聞いたらいいんじゃない？」

その言葉にユーティがあんぐりと口を開けた。

「アルフィ、あんたねぇ・・・こんだけデカイ街に、ハウゼンって男が何人いると思ってんのよー！？」
「し、しらないわよ。１０人くらい？」
「馬鹿っ！　名字にもよるけど、ハウゼンだけなら１０００人はい

てもおかしくないわよ！」
「ええー！　そんなに？」

アルフィリースがここにきておろおろし始めた。確かに名前は地域によってそれぞれ違うものの、同じ土地では王侯貴族にあやかったり、あるいは歴史上の英雄、はたまた先祖の名前をもらうことが多い。そのため地域によっては名前の種類は限られており、連続した三つの家で同じ名前、なんてことも珍しくはない。

精霊のユーティでも知っていることをアルフィリースが知らなかったのは、彼女が極端な田舎出身であることも手伝うが、平素はかなり油断して過ごしていることも多いからだろう。ミランダが「アルフィは無防備すぎる」と心配したのも無理からぬことだろう。

そんな彼女にターシャが助け船を出す。

「アルフィ、他に特徴はないの？」
「ええーっと、確か一番大きな屋敷に住んでいるハウゼンだって・・・」
「一番大きな屋敷のハウゼン・・・まさかねぇ」
「心当たりがあるのか？」

エアリアルの言葉に、ターシャが頷く。

「ええ、まあね。でもまさかとは思うから、こういう時には町の役所で聞くのが一番ね。このくらい大きな都市なら、きちんとした戸籍登録があるでしょうから。行ってみましょう」

ターシャの先導で町の行政府近辺へ赴くアルフィリース達。そこでターシャが受付の人物とやり取りすると、彼女はすぐに引き返してきた。

「あ―。私の予想、当たりかも・・・」
「どうしたの？　場所がわかったの？」
「うん、わかるにはわかったけどね」
「何よ、ターシャの癖にもったいぶって」

ユーティがいらぬ口をきいたが、全員無視した。ターシャも既にユーティの扱いは心得ている。それでもターシャの口調は重かった。

「アルフィリースが尋ねるハウゼンは・・・多分この国の宰相の事だよ」

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その1～ベグラード～（後書き）

次回投稿は、１０／１５（土）１５：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その2～宰相ハウゼン～

＊＊＊

「ここだ・・・」

アルフィリース達はターシャの先導でハウゼンの屋敷の正面にまで来た。その正門の発する威容と佇まいに、思わず唾を飲むアルフィリース達。何もハウゼンの屋敷は豪奢な造りというわけではない。比較的身分の低い貴族から宰相にまでのし上がった彼だが、成り上がりにありがちな過剰な自己主張はなく、むしろ慎ましやかな人となりとして知られる人物である。彼の屋敷が大きいのは、彼の元に訪れる各国の身分の高い人物を迎えるために増築を繰り返したからである。

そして屋敷も彼の人柄を示すかのように、質実剛健な造りではあるのだが、その正門に集まる人々の豪華さ、その多さにアルフィリース達は圧倒されたのだ。大国の宰相ともなればある程度当たり前のことなのだが、そこもかしこも華やかに着飾り、また身分の高いことを示すかのような飾り付けの馬車に乗っていれば、嫌でも威圧感・威容は醸し出されようというものだった。

そんな中、場違いな事に徒歩でハウゼンの屋敷に出向いたアルフィリース達は既に気後れしていた。彼女達を見る視線が冷たく感じられる。

「アルフィ、我は嫌な種類の視線を感じるぞ？」

「私もよ、エアリー。完全に場違いよね、私達って」

「まったくよ。こんなところには普通、伯爵以上の身分しか来ることができないわ。それも会見の申請をして、何カ月も待って、それでわずかな時間だけ謁見を許される。だからこそ東では限られた時

間で自己主張をする弁舌家なるものが活躍し、また職業としても成り立つのだけれど。会うまで何カ月もかかるとは思わなかったの？」

「うう、面目ない・・・」

アルフィリースがしゅんとしたのでターシャも多少言いすぎたかと思ったが、事実を正確に述べただけでもあるので、謝りようもなかった。

後ろからついてくるラキアといえば、アルフィリース達のやりとりを無表情に見るだけで、特に何の意見をするわけでもない。それは真竜が多種の生業に口出しをするものではないという掟が存在するからでもあるが、それ以上にラキアはマイアの言い付けを守っているのだった。

「アルフィリースの行動を傍で身守りなさい。きっとあなたを退屈させないから」

マイアが優しく微笑みながら言う時は、かなりの確信があるのだといつもラキアは思っている。こういう時の姉の言葉は、ラキアとしても真剣に受け止めることにしている。まだマイアの言葉の意味をラキアはわかっているわけではないが、とりあえずは素直に聞いてみようと思うのだ。

そうでなくとも真竜と聞いて、対等に話をしようとする人物は種族を問わず珍しい。特に真竜の背に乗るなど、真竜を崇拝する者達なら一生額を地にこすりつけて感謝しそうなものだが、アルフィリースは昨日の寝際に「乗り心地がイマイチ」などとのたまった。おかげでちょっとした口喧嘩になったわけだが、ラキアが真竜の仲間以外に口喧嘩をしたのはこれが初めてである。

「まあ・・・面白くはありそうね」

ラキアがぽつりと呟く間にも、アルフィリースはハウゼンの屋敷の正門前をうろうろしており、完全に不審者と化していた。来訪者の要件を聞き、整列させる者達もそれなりの身分の証を立てない者へ接するかどうか迷ったが、その内のまとめ役であろう上品な男性が一歩、アルフィリースの方へ進み出る。

「もし、来訪者の方。何か我が主人の屋敷に用でございましょうか？」

「あ、え～っと・・・用って言うか、私はここの屋敷の主人に会うように言われたのよね」

「会うように言われた。それはどちら様に」

来訪者に失礼のないように、執事の正装に身を包んだ上品な男性は聞き違えのないよう、アルフィリースの言葉を反復しながら確認するように話していく。とても優しい物腰であり、アルフィリースも多少緊張がほぐれるのだった。

「私の師匠に言われたのよ」

「なるほど。失礼ですが、その方のお名前を伺っても？」

「アルドリュースと言うわ」

「アルドリュース！」

その名前に、男性の目が見開かれる。その表情は意外そうな、しかし徐々に嬉しそうな表情へと変化した。

「失礼ですが、アルドリュース＝セルク＝レゼルワーク殿で間違いないでしょうか？」

「ええ、確かそんなフルネームだったわね。私も時々忘れそうになるのだけれど」

「これはこれは」

男性は楽しそうに笑った後、部下であろう男達に手で合図をする。すると、順番を先頭で待っていた貴族に侍従達が詫びながら、その順番をアルフィリースに譲ろうとしているのだ。わけもわからず待つアルフィリース達だったが、まもなくその前には王侯貴族を迎えるのと同等に、赤の敷物が足元まで転がされてくる。

驚いたのはアルフィリース。

「え、ええ!?　何これ!」

「ふふふ、驚かれるのも無理はない。実は我々はアルドリュース殿より言伝を受け取っておりまして」

「どんな?」

「『私の弟子を名乗る女性が現れたら、王侯貴族の待遇で出迎えよ』とのことです」

男性は楽しそうに笑うと、アルフィリース達を赤い絨毯の道へと誘う。その出来事に肝を抜かれたのは他の仲間達。

「アルフィ、これはすごいな。我でさえ少し違うもてなし方をされているのがわかるぞ」

「アルフィ、やめときなよ～。こんなところで一生分の運を使うのは～」

「まったく、私は凄い所に研修にきたわね」

それぞれの感想はあったが、当のアルフィリースはまた別の方向で悩んでいるようだった。その表情が一瞬変化し、また元に戻ると、

「ま、いっか」

と言ったアルフィリースは遠慮なくすたすたと男性の誘導に従っ

て絨毯の上を歩き、ハウゼンの屋敷へと向かうのだった。その後を慌てて追う仲間達。

「お召物を変えられますか？」
「いえ、結構よ。このままが慣れていていいわ」
「わかりました、ではそのように。よろしければ武具の類はお預かりして、磨かせていただくこともできますが」
「それも結構。預かるのは仕方ないにしても、手入れは武人なら自分でするわ。武器屋ならともかく、見ず知らずの人に手入れさせた武器なんて、危なくて実戦じゃ振るえないもの」
「失礼いたしました」

男性は恭しく頭を下げると、以後出来る限り余計な事を話さぬようにアルフィリースを先導した。時に屋敷の説明などをすることはあったが、それも必要最低限のみ。非常にわきまえた男であった。

そしてその男性の先導で、アルフィリースは大きなテーブルのある間へと通された。円卓になっているその場所には既に食事の用意ができており、山海の珍味に居並ぶ調度品は明らかに庶民の生活水準を逸脱したものだった。単純に金銭に例えるなら、一つ一つの調度品が庶民の一年の所得に相当するものなのだが、そういった感覚に鋭敏な者はこの場ではターシャくらいである。そのターシャとて年若い。まだ目もそれほど肥えてはおらぬ。生涯で初めて見るであろう、ただきらびやかな光景に目を奪われるばかりであった。

ここはイーディオドの宰相、ハウゼンが最上級の客をもてなす時に使用する間。そんな場所に通されたとはアルフィリース達は知る由もない。そして突然の展開と明らかに場違いな場所におろおろするアルフィリース達の前に、一人の男性が現れる。

「お待たせした、アルドリュースの弟子よ。執務直後ゆえ、堅苦しい恰好なのを許していただきたい」

悠然とその間に現れたのは、少し長目の茶色の髪と豊かな髭を蓄えた、落ち着いた雰囲気の中年の男性が現れた。明らかに上等な絹の服に身を包んだ男は、優しい目でアルフィリース達を見る。男はその雰囲気そのままに、アルフィリース達に語りかけた。

「私はハウゼン＝サジェス＝リントリウム。この国の宰相をしています。以後お見知りおきを」

「はい、こちらこそ」

真竜を前にしても怖じないアルフィリースであるが、場違いな場所に通されれば緊張もする。だがハウゼンの優しい雰囲気にほだされて、その緊張も一瞬のうちに解けていた。アルフィリースはハウゼンと握手を交わすと、促されるまま席に着く。

「しかし、よくアルドリュースの弟子が私だと一目でわかりましたね？」

アルフィリースはハウゼンが仲間ではなく自分の元に一直線に歩いてきたことに驚き、素直に彼に問うた。その問いにハウゼンはやはり余裕のある態度で優雅に答える。

「アルドリュースとは時に便りが着いていてね。彼の住処に関してはさっぱりだったが、一方的に連絡をよこすところは実に彼らしい。その中の便りの一つに、『黒髪の少女を引き取って、これから育てる』とあったんだよ。実に意外なことだった、私にすればね」

ハウゼンは差し出された果物の実を一粒取ると、口に運んだ。その言葉を聞いて、アルフィリースはさらに彼女の中にある疑問をハウゼンに投げかける。

「失礼ですが、我が師アルドリュースとはどういったご関係で？」
「軍の同期であり、親友だ。もっとも親友だと思っているのは私だけかもしれないがね」

その言葉と共に自嘲気味に笑うハウゼンを、アルフィリースは不思議な目で見る。ハウゼンは言葉を続ける。

「私はそこまで身分の高い貴族の出自ではないのだが、士官として入ったしばらく後、軍にとんでもない新人が入って来たという噂がたった。その若者は軍に設けられた文官の採用試験を首席で突破しながらも、武官として軍に入隊したというのだ。そして一兵卒から始めて、わずか一月で三階級も昇進したと。一兵卒の噂がここまで出回ることなど、普通はないのだがね。興味を引かれた私は、彼と同じ任務につくようはからったんだ。階級は当時私の方がはるかに上だったからね。

そしてその時はたまたま、さる貴族が近くの町を視察の日だった。その折、魔獣がその貴族の一団を襲ったのさ。そしてその魔獣の群れのボスを倒し、貴族の危機を救ったのはアルドリュースだった。その時の彼の活躍は目覚ましく、貴族の覚えも良かったが、私が彼を気に入ってね。ぜひとも部下に欲しいと言ったんだ。ところが彼はその申し出を断った。『もっといい案があるんだ』と言ってね」

ハウゼンが楽しそうに話す。彼は懐かしい青春時代思い出したのか、少し遠い目をしていた。

「アルドリュースの考えはいたってシンプルだった。彼は私が貴族であることを利用して、社交場への出入りを申請してきた。名目上は私の従者だったが、常に主導は彼だった。アルドリュースはどこで学んだのか、女性のエスコートも完璧だった。作法、話題、流行

り、言葉遣いに至るまでね。上流の貴族よりもより完璧。そして造形も悪くない。瞬く間に下級貴族の社交場では彼は有名になっていった。そして彼の素晴らしい所は、男の貴族にも嫌われなかった所だ。貴族達の悩みを聞きだし、上手く助言を与えていった。ほどなくして興味を持ったさらに上の貴族から我々はお呼びがかかるようになったよ。そして上流階級の社交場で、彼はついに目当ての人間と出くわすことに成功したんだ」

「それ、聞いたことあるかも」

話しの途中で、突然ターシャが口を挟んだ。突然の発言に全員がターシャを見たが、その事も彼女は気にしていないようだった。それよりも、彼女には気にかかることがあったのだろう。

「伝説だと思っていたけど、イーディオドには一兵士と王女がその昔恋をしたと先輩から聞いたことがあるわ。私はそんな上手い話しがあるわけないと思っていたけど、まさか・・・」

「ああ、全ては真実だ。我が国の王女は、昔アルドリュースと恋仲だった。いや、そうなるようにアルドリュースが仕向けたと言うべきか」

ハウゼンが少し悪戯っぽくおどけてみせた。だがその顔に決して楽しさだけが浮かんだわけではないのを、アルフィリースは見逃していなかった。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その2～宰相ハウゼン～（後書き）

次回投稿は１０／１６（日）１５：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その3～アルドリュースの史実前半～

ハウゼンはさらに語る。

「当時私は２２歳。アルドリュースは２３だったはずだ。対して我が国の姫、ミューゼ殿下は当時まだ１０歳。社交場に顔見せを果たしたばかりだった。

こう言ってはなんだが、現在の王女であるミューゼ殿下の印象は、当時は随分と違っていてね。今の人が伝え聞くミューゼ殿下の話とは随分違うかもしれない」

「え、どういうこと？」

世間知らずのアルフィリースがミューゼの事など知るはずもなく、アルフィリースはターシャに話を聞いた。

「ミューゼ王女は、東の国でも最も優雅な貴婦人として知られる方よ。その容姿、物腰、態度。全てが東の女性の貴族の手本とされるほどの女性だと聞いたことがあるわ」

「ふ～ん、そんな人なら会ってみたいなぁ」

「希望ならば、引き合わせても構わないよ」

ハウゼンが楽しそうに提案したので、アルフィリース以上にターシャが素っ頓狂な声を上げた。

「え、ええ！？　それはいくらなんでも無理なんじゃ」

「いやいや、私とミューゼ殿下はこう言っては何だが、非常に仲の良い友人でね。それに対外的な顔とは別に、あの方は非常に気さくな方だ。むしろそちらが本当のあの方だと言ってもいい。それにアルドリュースの希望でもある」

「？」

首をかしげるアルフィリースに、ハウゼンはまたしても悪戯っぽく笑いながら、話を続けた。

「話を戻そう。当時のミューゼ殿下は非常なじゃじゃ馬でね。容姿もまだそれほどでもなかったし、こっそり社交場を抜け出そうとしていたのさ。まあ大人の貴族達が飲み食いして踊るのを壇上から見ていても、何も楽しくはないだろうからね。それにミューゼ殿下は当時踊りがとても下手だった」

「よくご存知ですね」

「アルドリュースが調べていたからね。そのために彼は、王女の侍女を一人口説き落としている」

彼の言葉にアルフィリースは目を丸くしたが、その反応が意外だったのか、今度はハウゼンが質問をした。

「意外かい？」

「え、ええ。師匠は真面目一辺倒の人間だと思っていたので」

「君の前ではそうだったのだろうね。だけど、アルドリュースは決して清廉潔白でも、真面目だったわけでもない。こう言うと君は気分を害するかもしれないが、彼は目的のためなら手段を選ばない男だった。一つ間違えば、悪党とも言われただろう。私ですら、時に彼の考えを聞いていて恐ろしくなることがあった。私は彼に心酔していたにも関わらず、ね。だからこそ、アルドリュースもまた私の前では多少油断していたのかもしれないが、決して彼はその心底まで私に語ることはなかったよ」

その言葉と共に果実酒をあおるハウゼンを見て、グウェンドルフも同じような言葉を発していたことをアルフィリースは思いだした。

自分もまた、師匠であるアルドリュースの全てを知っていたわけではないのだと。全てを知っていたのはあるいは、アルフィリースの中に響く声の主なのかもしれない。

「（あの男、私に気があったのよ？）」

あの声の主は何を知っていたのか気にかかったが、そんなアルフィリースの思惑とは裏腹にハウゼンの話は続けられた。

「さて、話の続きだ。アルドリュースはミューゼ殿下の事を調べ上げた上で、彼女がそわそわしていることを見抜いていた。そして、彼女が社交場を抜け出しやすいように準備したのさ。そして中庭で一人うろつく殿下を待ち伏せ、彼は殿下と二人きりになることに成功した」

「へえ、いいなぁ。王女と兵士のラブロマンスなんて、素敵」

恋話が大好きなターシャはうっとりしていたが、アルフィリースには師匠がそんな事をするんだと、少し意外そうな顔をしていた。あの気真面目堅物人間が、どのような顔で女性を口説くのか想像もできない。

そして、ハウゼンはさらに続ける。

「アルドリュースに最初は警戒した王女だったが、彼の話術にあっという間にほだされた。まあ１５の娘だったわけだから、それは仕方のないことだったかもしれない。アルドリュースは巧みに話を持っていき、姫様にお忍びで会えるような手筈を取った。彼が他国の間諜の類いなら、一大事になっていただろうね」

「そういった話を聞かないでもないけどね。それ専用の『女衒』って言われる職種もあるくらいだから。アルフィなんかイチコロよ？」

「まさかぁ」

アルフィリースが「そんな訳はない」と手を振ったが、ターシャは本気だった。

「いやいや、彼らは凄いのよ？　だってさ・・・」
「それではまるで自分が騙されたことがあるみたいだぞ、ターシャ」
「うっ」

ターシャは昔ターラムで女衒に引っ掛かりかけて、姉であるエマージュに助けてもらったことがある。美男子とは言えない顔つきの男だったが、彼の言葉を聞いているとその気になるから不思議だった。そのくだりを思いだすターシャが決まりのわるそうな顔をする。
エアリアルの言葉に発言を止めたターシャを見て、楽しそうにハウゼンが笑う。

「面白いね、君達は」
「は、はぁ。すみません」
「いいことだ、良い仲間がいるのはね。話を続けようか。
お忍びでミューゼ殿下と会い始めたアルドリュースは、貴婦人としてのいろはを彼女に教え始めた。瞬く間にミューゼ殿下は社交場の華になっていったよ。どこでアルドリュースがそのような事を覚えたのかは不明だったが、少なくとも彼はミューゼ殿下の絶対の信頼を勝ち得て行った。
ほどなくして彼は公式の場でもミューゼ殿下に取り立てられるようになり、王女の親衛隊に推薦されるまでになった。その噂は軍内を駆け巡ったよ。出自不明の若者が、王女直々の指名で親衛隊に抜擢されたんだから。それは異例の出来事だった。
だがアルドリュースがさらに有名になるのはここからだった。彼はその指名をつっぱねたのさ。それこそ、彼は軍内では有名になった。将軍の一人がアルドリュースの元を訪れて、彼を窘めるくらい

にね」

「そんなことをして、何の得が？　平民が王女の親衛隊なんて、この上ないくらいの出世じゃあないですか」

「普通に考えればその通りだ。アルフィリース、君はどう思う？」

ターシャの疑問に、ハウゼンはアルフィリースに話を振った。そのアルフィリースは腕組みして考えたが、すぐに答えた。

「多分だけど・・・師匠ならそこで満足しないと思う。あの人は底知れない所がある人だったから。きっと、もっと大きなものを狙ったのね」

その言葉に、ハウゼンは満足したように頷いた。

「その通り。彼は王女の親衛隊だけでは飽き足らず、さらに上を目指したのさ。ついに彼ははっきりとそれを口にすることはなかったが、彼はおそらくこの国の王位を狙っていたと思う」

「馬鹿な！　平民が王になれるわけ・・・あ」

ターシャがそこまで言って気が付いたかの用に、呆然とした。その顔に、ハウゼンもまた真剣な顔で答えた。

「そう、平民が王になる方法はある。それはミューゼ殿下に、公式に夫として迎えられる事。普通ならばありえないが、だからこそ彼は軍内で出世した。宰相ともなれば、王女と婚約した例は各国にある。最も平民出の宰相などほとんどいないが、まあ今まで例がないと言うほどでもない。彼はこの国に現れた最初からそれを狙っていたんだ。私と友人になったのも、貴族と渡りを付けるため。全ては彼の計算通りだった。私はアルドリュースの目論見に気付き始めて、背筋が凍りついたのを覚えている。国一つが一人の人間の思うがま

まにされようとしている。私は一時期彼の暗殺も考えたよ、本気でね」

ハウゼンが真剣な顔で言ったので、その場は緊張に包まれた。傍では先ほどの感じの良い若者が、冷やした果実酒をハウゼンに注ぐ所だった。帯剣している所を見ると、彼はどうやら執事だけでなく、ハウゼンの護衛も兼ねるらしい。物腰から相当に腕が立つだろうと、アルフィリースは想像していた。

またハウゼンの言葉もアルフィリースはなんとなく理解できた。時にアルドリュースが恐ろしいと思ったのは、アルフィリースもまた同じだったからだ。ふと彼が見せた物憂げな、複雑な表情。それはアルフィリースの知らない彼を見ているようで、時にアルフィリースは恐ろしさを覚えたのを思いだした。

ハウゼンはなおも続ける。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その3～アルドリュースの史実前半～（後書き）

次回投稿は１０／１８（火）１５：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その4～アルドリュースの史実後半～

「だが私はこうも考えた。そもそもなぜ私が彼の傍にいることを許されているのかとね。国一つどうにかしようと言う男が、私一人どうにか出来ない訳はないのだ。それに私は彼のおかげで出世街道に乗っていた。私もまた彼の恩恵を受けていたのだ。その道を踏み外すのは自分の将来を閉ざすにも等しいし、また友人を手にかけてまで侵すようなことにも思えなかった。今の妻も彼に引き合わされた侯爵令嬢だしね。結局私は利己的だったのさ。国の在り方よりも、自分の出世が惜しくなった。とんだ不忠者だよ、私は」

「・・・」

「まあそれはともかく、そこからは一直線だった。アルドリュースは破竹の勢いで出世したし、その5年後には将軍と共に軍の最高会議に出席するようになっていた。また文官としても数々の献策を出し、それが悉く王との会議で議題となっていった。ついには王の覚えもめでたく、彼は文官としての最高会議にまで呼ばれ、登城する機会が多くなっていた。ミューゼ殿下は日に日に美しく、貞淑になりながらアルドリュースを見守っていたよ。

恐ろしいのは、その彼の出世を妬む者がほとんどいなかったことだ。時に彼の敵となる者が現れそうになると、その者は左遷されるか、あるいはすぐに黙るようになった。騒いだのはわずかのことだったから誰も気にも留めなかったが、今から考えれば全てアルドリュースが手を回していたのだろうね。

そして彼はついに武官として将軍に、文官として当時の宰相の補佐にまで上り詰めた。彼がマイティーマスターの称号を得たのもそのころだ。現在では大陸に2名しかいない、騎士の最高の称号の一つマイティーマスター。大陸中の騎士の憧れでもあるその称号を持つ男が自分の部下であることに、国王もご満悦だった。そしてその頃にはミューゼ殿下とアルドリュースは人目も憚らず逢瀬を重ねる

ようになっていた。いつ婚約が発表されてもおかしくないほどにね。彼がこの国に現れてから、１０年が経過していたころだ。そしてどうみても彼の人生の絶頂期・・・突然彼は姿を消した」

その言葉に、部屋は沈黙に包まれた。給仕によって料理の運ばれてくる音だけが響く。彼らも部屋に入るとその雰囲気にどうしたものかと困惑したが、護衛の男が促したので、料理を静かに並べてその場を去って行った。

口を開いたのは、またしてもターシャだった。彼女はどうも好奇心に勝てない性格らしい。

「なぜ・・・もうすぐ全てが手に入るのに？」

「それはわからない。今でも私には謎のままだ。結局のところ、私はアルドリュースという人間を何もわかっていなかったのだろうね。彼と共に過ごした時間が最も多かったのは私で間違いがないだろうが、それでも彼の全てを知ることは出来なかった。

その後、姫は方々手を尽くしてアルドリュースを探したが、その行方は杳(よう)として掴めなかった。国王などは血眼になって仇を追うつもりで探させたが、それでもアルドリュースの行方は毛ほどもわからなかった。まあ殿下の私室にまで誰にも気づかれずに潜入できる男だから、当然と言えば当然だな。その内殿下には手紙が来たのか、彼女は一月ほど部屋から出て来ぬ時期があった。その後はそこの女性が知っての通り、東に名だたる貴婦人として殿下は暮らされている。そして公爵家より伴侶を選び、今に至るというわけだ。

私はといえば、彼から便りが届いたが、それは誰にも見せぬようにとのことだった。その手紙には、彼が私に感謝している旨がしたためてあり、これからも自分と友人でいて欲しいとのことだった。私はもちろん快く引き受けたが、どこか国に対する後ろめたさが無かったわけでもない。だが私はそれからも彼が提示する献策をまるで我が案の様に提出し続け、５年前から宰相の任を拝命している。

妻も随分前に侯爵家の令嬢を娶ったのだが、それもまたアルドリュースの作戦を聞いたうえでのことだった。面白いほど彼の作戦は当たったよ。私は恐ろしくなりながらも、彼の言う事を聞かずにはいられなかった。だって、全てが上手くいくと約束されたようなものなのだからね。

それが私の知る、アルドリュースの真実だ。アルフィリース、何か聞きたいことはあるかい？」

「・・・一つだけ」

アルフィリースは静かに発言した。彼女としても心中穏やかでは決してなかったが、どこかで予想できなかった事でもない。

「なぜこのような事を私達に話すのです？」

「それがアルドリュースの遺言だからだ」

ハウゼンの答えは明快だった。だがその顔はやや苦悶の表情である。

「死期を悟ったアルドリュースは私や他の人間に書簡をしたためている。私の所に来た書簡の内容は、一つはこの国に関する国家百年の計。彼なりに後ろめたさがあったのか、この国がこの先どんな方向に出るべきか、その事に関して延々と述べてあったよ。その気なれば、この東の覇者となる方法まで書かれていた。

そして一つは自分に関する全ての事を、自分の弟子であるアルフィリースに教えてほしいとの事だった。なぜそんな事を彼が思ったかは書いていなかったがね。

さらに一つは、アルフィリース。君の願いを出来る限りの範囲でかなえて欲しいとのことだった。それが私に対する恩返しになるだろうとね。

さて。そういうわけだが、アルフィリース、君は私に何を望む？」

ハウゼンがややすっきりした表情でアルフィリースの顔を覗いたので、アルフィリースは悩んでいた。その質問はアルフィリースにとっても唐突だったので、いくつか頭に提案はあったものの、どう答えれば最善なのかがわからなかった。

アルフィリースはやや考えて、首を振った。

「今の私にはわからないわ。話が唐突過ぎるもの」

「そうか。ちなみに私の提案としては、君を我が国の騎士として採用するなども考えられるがね」

ハウゼンが少しニヤリとしながら提案したので、アルフィリースは少しきょとんとしつつも、さらに切り返した。

「それも美味しいけど、一国の宰相に自由に要求できるせっかくのいい機会なのに、それでは足らないわ」

「ほう。では何が良いかな？」

「あなたの養子、なんてのも面白そうだけど、ミューゼ王女が社交場や他国に大使として赴くときに護衛として同行する権利、なんてのはどうかしら？」

そのアルフィリースの提案に、ハウゼンは久しぶりに背筋がぞわりとした。宰相として様々な場に出向き、それなりに修羅場もくぐった彼であるが、だからこそ彼が一人の人物を恐ろしいと思うのはアルドリュース以来だったかもしれない。

目の前の女は自分のお墨付きだけでなく、名声・権利・地位・後見まで全てが手に入る方法を提示したのだった。ハウゼンはこういった事をぬけぬけと言うアルフィリースの神経の図太さにも呆れたが、それよりもその頭の回転の速さに驚いたのである。

「・・・なるほど、確かに君はアルドリュースの弟子だよ」
「そう思うわ、自分でもね。性格が悪いのは師匠譲りかも。でも今日はゆっくり宿に帰って考えたいの」
「ならば私の邸宅の一室を使うといいだろう。来客用の部屋などいくらでもある。なんならしばらく逗留するといいが・・・？」

そこまで言ってハウゼンは、自分達がいる部屋に荒々しく近づいてくる足音に気が付いた。つかつかと近寄る足音の主は、明らかに怒っている。
ほどなくして扉がバン！　と開かれ、足音の主が予想通り怒声と共に入って来た。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その４～アルドリュースの史実後半～（後書き）

次回投稿は１０／２０（木）１５：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その5～公爵の娘～

「お父様！」
「・・・エクラ、もう少し静かに入れないのか。客人の前だぞ」
「話は伺っておりますが、既にワルト侯爵が何時間も待っておいでです。聞けばその者達は傭兵ではないかとのこと。侯爵殿下を待たせて傭兵などの相手とは、何事ですか！」
「何が重要かは私が決めることだ。お前の知ったことではない」

ハウゼンが冷たく言い放つと、エクラはぶすっとして来た時と同じような足音と共に踵を返した。エクラは比較的小柄だったが、まだ年若いのか、東に特有な優雅や余裕のある態度とは無縁に見えた。せいぜい１５歳程度だろう。まだあどけなさが残る顔つきだが、利発そうな顔と意志の強さそうな眼だけに、余計に怒った顔がきつそうに見えた。帯剣しているところを見ると、剣も扱うのか。栗色の短い髪の持ち主が部屋から完全に去ると、ハウゼンはため息をついた。

「誠に申し訳ない。娘がお恥ずかしい所をお見せした」
「いえ、いいのよ。確かにあの子の言う事は正しいから」
「確かにあの子はいつも正しい。頭の回転も速いし、まだ成人前だが、既に私の執務の手伝いをさせている。剣の扱いもそこそこだが、いかんせん貴族然とした思考が強すぎる。あれでは人は付いてこぬ。誰に似たやら・・・」
「貴方じゃない？」

アルフィリースが即答したので、ハウゼンはおろかその護衛や、アルフィリースの仲間までびっくりした。だがアルフィリースはしれっとそのまま言葉を続ける。

「だって、髪の色、目の色、その瞳の強さまでそっくりよ？　きっと若い時には貴方もああだったんじゃない？」
「う、ううむ・・・そうだったかな」
「まあ想像だけどね。傍目にはそっくりとだけ言っておくわ。きっと周りもそう思っているわよ、ねえ？」
「はあ」

アルフィリースが突然護衛に話を振ったので、彼は困惑していた。実はアルフィリースの言う通りだったので、その場に居合わせた年長の執事は笑いをこらえるのに必死だったが、そこは彼も従者としての節度が勝るのか、なんとかこらえていた。

そしてアルフィリースはそのままハウゼンの屋敷に逗留する事になる。夕食はハウゼン夫妻と、その娘とエクラと共に取ることになった。ハウゼンの妻は彼とほぼ同い年らしいが、歳を感じさせぬ、非常に優雅な人物だった。『イーディオドの女は優雅たれ』というのがこの国の伝統なので、庶民に至るまでどこかしとやかなのがこの国の雰囲気ではあるが、それを代表するような女性であった。全く嫌みのない笑顔に態度。エクラはますます父親似なのだろうと、アルフィリースは確信していた。今でこそハウゼンも穏やかだが、若い頃はきっとエクラに似ていたのだろうと、アルフィリースはそんな想像を楽しんでいた。

そのエクラは終始仏頂面であり、笑えばもう少し可愛いのになどとアルフィリースは考えていた。たまたまエアリアルと正面になっていたので、二人とも無愛想同士で話が合わないかなどとくだらないことを考えながら、普段では味わえない珍味の数々をアルフィリースは味わっていた。ただ、一番味わっていたのはもちろんユーティィである。

満腹になってテーブルの上で寝始めたユーティをアルフィリースは皿に移すと、そのまま蓋をして給仕に「鍋の具材にするように」と

手渡した。その態度に気真面目な給仕達は、「妖精の鍋・・・いや、煮びたしか？」「煮ても焼いても食えぬのでは？」などと真面目に考え込んでいたが、その光景を見てハウゼンは笑い、ハウゼンの妻が必死に笑いをこらえていたのが、アルフィリースにはとても印象的だった。それ以上に印象に残ったのは、その光景を見て馬鹿馬鹿しいとばかりに退席したエクラであり、随分と堅物であることがうかがえた。

そしてさらに次の日。アルフィリースは朝遅めに起きて、ゆっくりと準備を整えていた。今日は朝起きろとうるさいリサもいない。茫としながら、とりあえずはこの国の騎士の訓練を見せてもらうようにアルフィリースはハウゼンに頼んでいたので、仲間達を伴ってアルフィリースは用意された馬車で軍の訓練場に向かうのだった。

＊＊＊

「せい！　せい！」
「いやぁー！」
「走れ―！」

練兵場では騎士達が訓練に励んでいた。アルフィリースがここの足を運んだのは、もちろんこれからの傭兵団の参考にするためである。街道などで各国の警備兵や巡回兵と手合わせする習慣を持つアルフィリースだが、中原に近い国々とは流石に兵士の装備も訓練も違う。

必ずしもどちらが強いとは言えなかったが、中原は比較的魔獣・魔物の出現も多く、兵士の多くは実戦を積んでいる。だがその戦闘はやはり人以外が多く、必ずしも人間向きの戦い方ではない。戦術・武器も人間以外を相手にすることが多いので、飛び道具や大型で無骨な武器が発達しやすい。

また対して東側では実戦経験は少なめだが、戦術・戦略などに関

して演習をくり返す時間は多く存在し、経験はともかく練度は高い。また対人戦闘を意識し小型の武器や、礼典用の装飾に凝った武器が多いのも特徴だ。

だからなのか、少ないながらも激戦をくぐり抜けたアルフィリースにとって東の兵士の個々人の技量は、正直稚拙に映らないでもなかったが、それでも騎士剣の型をじっと見ていれば、それなり以上の技量を持つ者とやり合えば苦戦はしそうな予想くらいは立つ。同時に、こういった軍隊は予想外の展開に弱いだろうとも思うのだ。

「ちょっと戦ってみたいなぁ・・・」

「ふふふ、アルフィリース殿は好戦的ですね」

「剣を持つ者なら、相手の技量は気にならない？」

「それは確かに。あの方など、かなり強そうではないですか？」

「あれはだめよ、見かけだけだわ。力はあっても持久力がない。真っ先に特攻して、すぐにへばるタイプね。戦場では早死にするわ。それよりも私はあなたの技量が一番気になるんだけどね」

「御冗談を」

隣にいた、昨日案内してくれたハウゼンの護衛が笑う。彼はヴェンという名前らしいが、彼の歩き方を見ていてアルフィリースはかなりの使い手だと彼の事を睨んでいた。優しく、丁寧なだけの男ではないだろう。

そんな彼を見ながら、アルフィリースはふと訓練場の一画に目をやる。そこにはハウゼンの娘であるエクラがいた。どうやら今日は軍に顔を出しているのか。宰相の娘ともなれば、年若くともそこそこの身分を与えられているのかもしれない。

「やあああああっ！」

エクアの咆哮と共に、相手の剣が弾け飛ぶ。そのまま相手は両手

を上げて降参の意志を示した。

「ま、参った！」

「不甲斐ない、それでも騎士か！　次！」

エクラが吼えるも、誰も名乗りは上げなかった。仕方なくエクラは次の相手を指名して、稽古をし始める。その光景を見たアルフィリースが一言。

「ここまでとはね・・・」

「強いでしょう、エクラ様は」

「こんなところまでおべっか使わなくてもいいわよ、あなた。あの子、酷い弱さだわ。いえ、決して弱くはないけど、大勢を巻きこんで死ぬ類いの人間だわ。危険ね・・・」

その言葉で苦い表情をするヴェンの傍で、アルフィリースは逆に真剣な面持ちでエクラを見つめていた。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その5～公爵の娘～（後書き）

次回投稿は１０／２２（土）１５：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その6～水の都～

＊＊＊

アルフィリースは一通りイーディオドの正規軍の訓練を見ると、次は町に足を向けた。イーディオドの町は景観も非常に有名であり、何より有名なのはその治水の安定度合いである。

町を作るにおいて、多くの統治者が苦労したのは水の流れである。人の生活に水は不可欠。ゆえに多くの人は川の傍に町を作り、大きな河ほど多くの命を養った。だが大河の傍に町を作るという事は、同時に常に氾濫の危険にさらされるという事でもある。嵐が来るたび、命の源であったはずの水は牙を伴い、その歯を容赦なく人間に突き立てた。

ゆえに大都市ほど安全な水源を確保し、その技術に秀でた国から先に発展したといえる。このイーディオドの首都であるベグラードは、諸国に先だって治水が上手くいった土地でもある。だがその構想は決して完璧ではなかった。

増える人間、広がる土地。治水工事は人口の拡大に追いつかなった。新たに作られた居住区では水の流れが行き届かず、そうなると疫病が流行り始める。排泄物の運搬が上手くいかなかったのだ。

その問題を解決したのが、アルドリュースの下水工事である。彼は生活用水とは別に、町の下に下水を流すことで安全な水の流れを確保した。この用法は以後長く各国で採用されることになるが、この時代に実際に町に取り入れられているのは、ベグラードの領土内のいくつかくらいである。そして景観まで考えられて作られた町に、アルフィリースは見入るばかりであった。

「綺麗・・・」

「ああ、大草原に花が咲き誇る時期の雄大さにはかなわないが、ま

た別の美しさがあるな」
「こういうのを造形美っていうのかしらね」

アルフィリース、エアリアル、ターシャの三人はそれぞれが感心しながら連れだってこの町を歩いていた。その後ろでは、ユーティとラキアが別の感想を抱きながら歩いている。

「水の精霊も喜んでいるわ。素人にはわからないだろうけど、魔術的な要素まで考えて作れられている。この町を作った人間は魔術士ね。それにしても完璧だわ」
「ええ、余程魔術に詳しいのでしょうね。とてもではないが、人間とは思えないほど。だけどこれほどの景観を作るのならば、人間も捨てたものではないわね」

精霊と真竜らしい意見を出しながら、二人は歩いていた。そして前ではヴェンがアルフィリース達に町の解説をしながら案内をしていた。

「右手に見えるのがこの町一番の繁華街です。水神通りと名付けられたあの場所では、年に一度、夏に治水のための祭りを行います。実際に水神を祭っているわけではないのですが、今年の治水の感謝と、来年の期待を込めて行うわけですね。まあ、少々恥ずかしくはありますが・・・」
「恥ずかしい？」

ヴェンの意外な言葉に彼が多少赤面したので、アルフィリースは聞き返してしまった。

「はあ。実はその祭りでは主に水のかけ合いなどをやるもので・・・衣服がその、ですね」

「あ、聞いたことある。皆頭から足までびっしょびしょになる祭りよね？　そりゃあ夏の薄着なわけだから、服も何も全員裸みたいなもんだって聞いたわ。でも不思議と変な雰囲気にはならないのよね？」

ターシャがうんうんと頷いて見せる。その様子が可愛らしくて、思わずヴェンは微笑んだ。

「まあ最近では。ハウゼン様がきちんと取り締まっておられますからね。以前はやりすぎる雰囲気などもあったのですが、まあ最近ではしれたものです。夜には水の代わりに酒の浴びせ合いになりますけどね」

「酒か、それは楽しみだな」

酒の味をすっかり覚えたエアリアルが舌なめずりをした。イーディオドは酒の産地としても有名である。水神祭ではその酒を存分に振舞っての祭りになるので、盛り上がりは甚だしかった。まあ言ってしまえば乱痴気騒ぎなのであるが、そこは比較的大人しい東の民の特性か、節操というものはわきまえていた。

そしてヴェンの案内でアルフィリースはそれからも町の各所を見て回った。王族に限らず、多くの民が婚礼を行う聖堂。また恋人達が語らうので有名な丘。何日か馬を走らせれば海が見える場所にまで行けるらしい。ここはほぼ東の最果てなのである。魔獣の影すらない平和な土地を見ながら、アルフィリースはあることを考え始めていた。その横でエアリアルが心配そうにその顔を覗きこむ。

「アルフィ、考え事か？」

「あ、ええ。ちょっとね」

「何を？」

「うん。世界は綺麗で、こんなにも平和な場所もあるのに・・・何

が間に合わないんだろうって」
「え？」

アルフィリースはグウェンドルフが伝えた言葉をずっと考えていた。敵の首魁、オーランゼブルの目的。彼と戦う事もそうだが、アルフィリースは別の可能性を検討していないでもない。戦うだけが全ての解決方法だとは、アルフィリースは露ほども考えていないのだ。

ミランダが知っているより、リサが思うより、アルフィリースは様々な事を考えている。アルフィリースの中でいまだ形にならぬその思いは、彼女より他の人間に伝わるはずもなく。アルフィリースは町を見下ろす丘の上でただそっと佇んでいた。エアリアルはアルフィリースの思考はわからないものの、今彼女の邪魔をすべきではないと思い、黙ってその傍に寄り添っていた。

＊＊＊

それから数日、アルフィリースは様々な事をして過ごした。ハウゼンに頼みごとを一つされたのだが、どうすればいいか考えながら、自分のやるべきことを先に片づけようと思ったのである。ハウゼンに許可をもらってイーディオド最大の図書館に出入りするアルフィリースが真っ先に求めたのは、東の諸国の地図だった。むしろこれを見るためにアルフィリースはこの図書館に来たとも言える。

だがそのあまりに膨大な量に、さしものアルフィリースも悲鳴を上げていた。

「ダメだ～無理だわ」
「何が無理なわけ？」

作業に疲れて背伸びをしたアルフィリースに、ユーティが話しか

ける。エアリアルとターシャはアルフィリースに言われたものを探す作業で忙しそうに図書館を駆けまわっていた。そんな力作業が無理なユーティはアルフィリースにまとわりついている。だがアルフィリースが何をやっているかはさっぱり分からず、つまらなそうにしているのだった。

「さっきから何をやっているのよ。地図を何枚も眺めちゃってさぁ」
「いや～なんとか覚えて帰ろうと思ったんだけど、さすがに量が多くて無理で。そろそろ限界かも」
「そろそろ限界って・・・」

アルフィリースの傍には地図がうずたかく積まれている。１００とまではいかないだろうが、一枚一枚が相当な大きさだ。７～８人が同時に食事をとれるであろう大きさのテーブルに、ほぼ目一杯広げるのだから。
ユーティはそれを見て目を丸くしていた。

「まさかとは思うけど・・・ここまで全部覚えたの？」
「まぁだいたいは。でも流石にもう無理。そろそろ眠くて・・・」
「嘘でしょう？　じゃあどこに何があるか試してあげるわ。じゃあ一番上の・・・」
「ぐー」
「もう寝てるしっ！」

ユーティがアルフィリースの頭をはたいたが、アルフィリースは意に介さず寝ていた。さらに数日して。ハウゼンの邸宅に長い滞在を続けるアルフィリース達の元に、ついにエクラがやってきた。

「少しよろしいでしょうか？」
「ええ、いいわよ」

明らかに苛立った表情のエクラに、余裕綽々のアルフィリース。
対象的な二人は、連れだって部屋を後にした。
そして庭に出ると、エクラはくるりと振り返って、アルフィリースを下から睨みつける。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その6～水の都～（後書き）

次回投稿は１０／２３（日）１４：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その7～一方的な決闘～

「一体どういうおつもりでしょうか？」
「何が？」
「いつまで我が父の邸宅に滞在するつもりかと聞いている！」

苛立ちも隠さず、客人としての配慮も年長者への遠慮も忘れ、エクラは粗暴な言葉をアルフィリースにぶつけた。アルフィリースは予想していたのか、彼女の言葉をさらりと受け流した。

「それは、私が満足するまで」
「いつ満足するのです？」
「さあ？　私的にはもう少しなんだけど・・・」
「具体的な日数を言いなさい！」
「ええー？　それはわからないなぁ」

のらりくらりとかわすアルフィリースを前に、エクラはついに癇癪を爆発させた。いや、彼女的には溜まりきったものがあるのだが、アルフィリースにすれば突然の出来事である。

「いい加減にしろ、お前達の滞在費だって馬鹿にならないんだ！父は立場上客人に失礼なもてなしをするわけにはいかないが、その実生活は清貧貞潔であり、無駄遣いは一切しない主義を貫いておいでだ！　国より与えられた報酬は最低限だけ残し、残りは救護院などに寄付している。お前達をもてなすために使っている費用だって、馬鹿にならないんだぞ？」
「勘違いも甚だしいわね、あなた。それを決めるのはハウゼン宰相であって、あなたではない。貴方のお父さんがそう言ったのなら私も言う事を聞くけど、あなたが言ったところで何の説得力もないわ、

それ」
「父が言わぬから代わりに私が言っているのだ！　客人に出て行けと言えるわけがないだろう！？」
「ならばなおさら貴方が『代わりに』言うのはまずいじゃない。お父さんの代弁をしていることになっちゃうわよ？」
「ぐっ、屁理屈だけはよく喋る！」

エクラは歯ぎしりしながらアルフィリースを睨みつけた。そしてその短剣を腰から束ごと抜くと、そのままアルフィリースに叩きつけた。

「決闘だ！」
「・・・本気で言ってる？」
「当然だ！　お前が勝ったらそのままここに好きなだけ滞在するがいい！　だが私が勝ったら速やかに出て行け！」
「私の何がそんなに気に入らないのかわからないけど、本気なのね？」
「当たり前だ。そんなに貴族の生活を手放すのが惜しいか、卑しい者め！」
「・・・そっちじゃないわよ」

途端、アルフィリースから殺気が迸る。アルフィリースは物陰からこちらをうかがう人物に気付きながらも、自分が殺気を出してもその人物が動かないことを確認すると、意識をエクラに集中した。
そのアルフィリースに睨まれたエクラは、自分が相対する女剣士の雰囲気が全く変わったことに、青ざめていた。

「本気って言うのはね。決闘という言葉を出したからには、あなたはこの場で私に斬り殺されても文句は言えないってことよ。わかる？」

「な、な・・・なんだと？」
「死んでも恨まないでよね。出来る限り手加減するけど」

アルフィリースが剣を抜き放つ。レメゲートは今回アルネリアに置いて来ているが、これは手付としてミリアザールがアルフィリースによこしたフェンダー銀の業物の剣である。今まで使っていた剣よりも軽く、鋭い。叩き割るような攻撃はできないが、大柄とはいえ非力な女性であるアルフィリースには向いている装備だった。

そしてアルフィリースの言葉に、一度青くなりかけた顔を再び赤らめて怒るエクラ。

「手加減だとっ？　舐めるな！　私は騎士団でも負けなしの・・・」
「それ、本気で言ってる？」

エクラの言葉に、アルフィリースの表情が変わる。それはいつも楽天家のアルフィリースが、珍しく怒りを露わにした表情だった。いつものアルフィリースのへらへらしたイメージとはかけ離れた表情に、思わずエクラが再び青ざめる。

そのエクラにアルフィリースから怒気を孕んだ声で、挑発がされた。

「かかってきなさい、お嬢様。如何に貴女が身の程知らずか、教えてあげる」
「う・・・わあああっ！」

エクラはアルフィリースの圧力を振り払うように、咆哮と共に彼女に斬りかかって行った。

＊＊＊

「う・・・ぐうぅ」
「まだやる？　お嬢様」

しばらくして。当然のごとくそこには這いつくばるエクラと、それを悠然と見下ろすアルフィリースがいた。アルフィリースは突っかかって来るエクラをいなしては足払いをかけ、あるいは小手で受けて投げ飛ばしていた。だがエクラも根性だけは一人前というか、無謀というか。何度地面に這いつくばらされても、彼女は立ちあがってアルフィリースに向かって行った。

そして最初はエクラを投げ飛ばすだけだったアルフィリースも、段々とその攻撃の手が強まる。最初は背中から落ちるように加減していたが、徐々に投げっぱなしになり、あるいは当て身を加え、先ほどはついに鳩尾に一撃を喰らわせた。そこでエクラがえづきながら、その場にうずくまっているのが今である。

それでもなお、エクラの目からは光が失われない。

「まだ・・・まだあっ！」
「本当にわからない子ね。仕方ない」

立ち上がりかけたエクラの剣を持つ足をアルフィリースが踏み抜くと、エクラが「ぎゃあ」と悲鳴を上げた。大柄なアルフィリースが手加減なしで手を踏みつけたのである。小柄なエクラの利き腕は折れていた。そして折れた手を庇う間もなく、アルフィリースがその鳩尾を、今度は蹴りあげたのである。胃の内容物を逆流させかけるエクラだったが、その前に頬を討ちぬく衝撃で壁に叩きつけられた。アルフィリースが小手を装備した左手で、裏拳を繰り出したのであった。

だがエクラの方は自分に何が起こったかを考える前に、猛烈な嘔吐感に襲われ、その場に朝食べた物を吐き出していた。そして息も絶え絶えな彼女にアルフィリースはつかつかと近づくと、その胸倉

を掴んで無理矢理起こし、その顔を容赦なく左手で殴り始めた。

「ぎゃっ、ひっ」

エクラが無様な悲鳴を上げるが、アルフィリースは容赦しない。三度、四度。エクラの鼻血が出ようが、鼻が折れた手ごたえがあろうが、アルフィリースは容赦しなかった。アルフィリースが殴りつけた所で、完全に戦意喪失したエクラが顔を庇い始めた。

「も、もう・・・ゆるひ・・・」

その瞬間、エクラの頬に熱い痛みが走った。

「ひっ」

エクラが頬を触ると、手にはべっとりと赤い血が付いていた。アルフィリースが仕込み刃でエクラの頬を斬ったのである。

血に染まる刃を装備したアルフィリースに至近距離で睨まれ、エクラの目には涙が浮かび、膝がカクカクと笑っていた。エクラは今、生まれて初めて命の危険を感じていた。吐瀉物の苦い味が口の中を締め、鼻血で息がままならない。正直、漏らさないようにするので手一杯だったのである。だが、もう一度殴られれば耐える自信はなかった。そうなれば、もう恥も外聞もなくエクラは命乞いをすることだろう。

だがエクラが何も言わなかった事をアルフィリースは気にらなかったのか、今度は刃が付いたまま、エクラの顔面に狙いを定めた。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その7～一方的な決闘～（後書き）

次回投稿は１０／２４（月）１４：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その8～説得～

「馬鹿は死ななきゃ直んないか」
「あ・・・嫌あああっ！」

エクラが死を覚悟し目を閉じたが、いつまでたっても痛みは訪れなかった。エクラがおそるおそる目を開けると、アルフィリースの左腕には捕り物で使われる縄が巻きついていた。その仕掛け主はヴェンである。そしてその後ろからハウゼンが現れ、アルフィリースを制した。

「アルフィリース殿。そこまでにしてくれないか」
「ハウゼン宰相がそうおっしゃるなら」

アルフィリースは刃をしまい、戦う意志が無い事を示すために全身から力を抜いた。同時に掴み上げていたエクラがどさりと地面に力なく落ちる。

「ユーティ！　治療してあげて！」
「はいはーい」

その声と共に、ユーティが木陰から文字通りすっ飛んでくる。そしてエクラに素早く治療を施し始めた。その傷を直しながら、ユーティがぶつぶつと不満を言う。

「全く、本当に殺すんじゃないかとひやひやしたわよ」
「まさか。手加減はちゃんとしたわ。イーディオドに追われる身にはなりたくないもの」
「おいおい、確かに娘を躾けて欲しいとは頼んだが、ここまでやれ

とは言ってない。本来ならこのヴェンに命じて既に手打ちにしている所だよ」

ハウゼンがため息をついていた。

「まったく、事前に簡単な打ち合わせをしてあるとはいえ、本当に君は遠慮が無いな。もう少ししていたら堪忍袋の緒が切れて、ヴェンをけしかけていたぞ？」

「確かに私も心苦しかったけど、どうせやるならしっかりやらないと。中途半端が一番いけないわ。それに、ヴェンさんが乱入してきても、私は止まらないわよ？」

「冗談の上手い子だ。ヴェンはこう見えて、この国でも有数の剣の使い手だ。私に無礼な口を聞いた将軍と決闘をし、打ち負かしたこともあるくらいだからな。そのヴェンを打ち負かせるとでも？」

ハウゼンがやや自慢げに言うのを、アルフィリースは笑顔で流した。そして、息の整い始めたエクラに向かってしゃがみ込むと、アルフィリースは少し申し訳なさそうな顔をする。

「御免なさいね。でも私じゃないと貴女にこんなことをできそうな人はいないから」

「・・・」

エクラは恐怖にびくりと怯えながら、俯いていた。だがどうやらアルフィリースの言う事を聞いてはいそうなので、アルフィリースも続けた。

「貴女は自分の腕前に自信があるようだったけど、それはとんだ勘違いだわ。公爵家令嬢のあなたに、全力で剣を振るえる騎士がいると思う？　全員手加減してたのよ。それに気付かず自分が強いつも

りでいては、貴女は将来的に何人もの部下を殺すわ。だって貴女は・・・」

「知ってるわよ、そんな事！」

エクラが突然大きな声で叫んだので、彼女の治療をしていたユーティが後ろにこけてしまった。そのユーティを起こしながら、今度はアルフィリースがびっくりした顔をする。

「え、だったら」

「だったらどうしろと言うのです？　私は公爵家の者だ。私は強くあらねばならないが、誰も方法を教えてはくれなかった！　自分が大して強くもない事なんて知ってる。でも誰も私に本当の事を言ってはくれなくて、私は、私は・・・」

ユーティの治療の終わらぬまま、鼻血もロクに止まらぬまま嗚咽にまみれたエクラ。周囲の者は言葉もなくその場に立ちつくしたが、そのままその場にどさりとエクラが倒れ込み、はっと我に返る一同。

「エクラ！？」

「大丈夫、鼻血からの酸欠で気を失っただけよ」

アルフィリースとハウゼンが心配する中、ユーティがエクラの容態を確認する。娘が泣きごとを言う姿を初めて見たのか、ハウゼンも心中穏やかならない様子だった。

「・・・アルフィリース、私は娘を追い詰めていたのだろうか？」

「なぜそう思うのです？」

答えるアルフィリースの口調も、いつになく真摯である。

「私は娘に『公爵家の者は優雅たれ』と教えてきた。だが私とて人間だ。欠点もあれば、失敗も犯す時はある。だが私はそのような場面は可能な限り娘に見せないようにしてきた。娘の前では理想の父親でいたかった。娘はそういった私の姿だけを見て育ったのかもしれない。それは間違っていたのだろうか？」

「間違いかどうかは私にはわかりません。ですが、この子はきっと鋭い子なのでしょう。おそらくはそういったハウゼンさんの気遣いもどこかで理解しつつも、もっと上を目指した。ただそれだけでは？　まあ少々不器用なのかもしれませんが」

アルフィリースは地に伏せ、ユーティとヴェンに看病されるエクラを見ながら優しげな目で呟いた。そしてヴェンに抱きかかえられて運ばれるエクラを見て、アルフィリースの意志は固まった。

「ハウゼンさん、お話が」

アルフィリースの目は、彼女が重要な決断をする時の強い輝きを放っているのだった。

＊＊＊

「う・・・」

「目が覚めたかしら？」

エクラがゆっくりと目を開くと、そこは彼女の私室のベッドの上だった。ベッドの傍にはアルフィリース。また部屋の隅にはヴェンが控えていた。エクラが目を覚ますと彼女の家の典医が彼女の容態を確認し、何事もないとわかると彼は助手を連れて出て行った。

そのベッドの上で、虚空を見つめるエクラ。その視界に、突然アルフィリースの顔がぬっと出てくる。

「わっ！」
「・・・何か？」
「驚けとは言わないけど、ちょっとは反応してよね」

エクラを驚かそうと思ったアルフィリースがいかにも不満そうにむくれたが、エクラが面白くなさそうにしているのを見ると、すぐに真面目な顔に戻った。

「エクラ、話があるわ」
「なんでしょうか？」
「貴女の性格だから単刀直入に言うわね。貴女、私の傭兵団に来なさい」

その言葉にエクラは驚くかとアルフィリースは思ったが、エクラは全く動じずに答えた。

「それは、私に傭兵になれと言っておられる？」
「そうじゃないわ。さすがに宰相の娘を傭兵にもらうのはねぇ・・・だけど、私の傭兵団は立ちあげたばかりで、まだまだ人材が不足しているの。でも、宰相の手伝いをする程のあなたなら、傭兵団を取り仕切る事務仕事なんかはお手のものだろうと思って。どうかしら？　あ、もっとも本当に傭兵になりたいと言うのなら止めないわ。ハウゼンさんは怒るだろうけど、私が全力で援助するから」

そこまで言って全く悪びれないアルフィリースに、エクラはやや呆れていた。まず言葉そのものがエクラが自分の仲間にならないことを想定していない。それに先ほどまで鬼の形相で殴った相手が、どのような印象を自分に抱いているか、想像もしていないと言うのだろうか。

だがエクラは呆れつつも、毒気を抜かれるようなアルフィリースの笑顔を見ていると悪い気はしなかった。この女性は自分と違って本当に得だと、エクラは思うのだった。

「（私もこうなら、もう少し上手くやれただろうか・・・？）」
「何？　私の顔をじろじろ見ちゃって」
「別に。面白い顔だと思っただけです」
「んなっ」

エクラのその言葉にアルフィリースが今度は呆気にとられた。その様子があまりに可笑しかったので、ヴェンも失礼だと思いながら笑い、エクラもついに笑ってしまった。よく考えれば、自分が笑うのはいつ以来なのかとエクラは思う。

「ふふふ・・・あははは」
「そ、そんなに面白いの。私の顔？」
「え、ええ。とても」

本当はそうではないのだが、エクラは思わず笑ってしまった。彼女の内心は既に決まっている。彼女は既にアルフィリースに興味を抱いていた。公爵の娘とて遠慮しないその性格。強さもそうだし、愛嬌のある性格がなにより羨ましくて、エクラはアルフィリースになんとなく魅かれていたのだ。何度も晩餐を共にしたのだ。彼女が実は教養の高い女性であることも気が付いている。だからこそ、エクラはより一層アルフィリースが腹立たしかったとも言える。自分にはない物を、全てアルフィリースが持っているように思えたから。自分がもっと素直だったら、こんな経験を経なくてもアルフィリースに師事したいと思っただろう。

二人に笑われて赤くなるアルフィリースに、エクラはやさしく声をかけた。

「アルフィリース殿。その話、ぜひとも受けさせていただきます」

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その8～説得～（後書き）

次回投稿は１０／２６（水）１４：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その9～不興～

＊＊＊

「アルフィってば遅いなぁ」
「あの娘を説得しているのだろう」
「それにしてもさっき殴った相手を、殴った本人が説得とはねぇ。難しいと私は思うんだけどな」
「ふむ・・・」

部屋の外ではユーティ、エアリアル、ターシャ、ラキアが話し合っていた。アルフィリースがハウゼンと打ち合わせをしたうえで、エクラにきついお灸を据えたことは知ってはいたが、まさかあそこまで徹底してやるとは思っていなかったので、アルフィリースと付き合いの浅いターシャは思わず飛び出す所だった。

「アルフィリース、まるで別人のようだったわ」

ターシャが感想を漏らす。その言葉にユーティとエアリアルは、以前大草原や沼地でアルフィリースが豹変した時の事を思い出すが、あの時とは少し様子が違うようにも思える。まだその時の事はターシャには話していない。

「（まさか、呪印が？）」
「（確かにラーナは連れてきてないけどね。彼女も最近は呪印が安定してきているし、結局沼地を離れた後もほぼ経過を確認しているだけで、何の魔術も施していないって言ってたじゃない？）」
「（それはそうだが）」

エアリアルとユーティがひそひそ話しているのをターシャは訝しがっていたが、ラキアの方はおよその事情をグウェンドルフから聞いていたので、アルフィリースの状態についてはエアリアルやユーティよりも実は把握している。賭け事好きのラキアだが、なんのかんのでやはり真竜なのだ。魔術に対する相応の知識も、考察力もある。

「（封呪の呪印か・・・傍目にも見る者が見ればわかるが、相当に特別製だな。詳しい事は私にもわからないし、グウェンドルフ伯父上でもさっぱりだと言っていたものな。だが封印の状態は安定していると伯父上も言っていたし、私が見ても同様だ。だのにあの性格だとすれば、私の思った以上にアルフィリースは思慮深いのかもしれない。最初はただの世間知らずかと思ったが・・・これはこれで確かに退屈しないかもな）」

ラキアの中ではアルフィリースが遠慮なくエクラを殴ったことで、逆に評価が上がっていた。一方でハウゼンは柱に寄りかかったまま、アルフィリースが部屋から出てくるのを待っている。アルフィリースがエクラの説得を自分に一任して欲しいと言ったためである。宰相を部屋の外で待たせるなんてどんな傭兵だとターシャははらはらしたが、他の者にそんな遠慮があろうはずもなく。ターシャはどぎまぎしながらも事の経過を見守るだけであった。そうして、やがてエクラの部屋の戸が開いた。

エクラの返事を聞いた後、アルフィリースはエクラにゆっくり休むように言って部屋を後にした。エクラが自分に従うと聞いて嬉しいのはアルフィリースの正直なところだが、怪我人の前でこれからのことをくどくどと説明するのはどうかと思ったのだ。それはこれからゆっくり話せばいい。まだこのベグラードではやることがあるのだから。

アルフィリースが部屋を出ると、アルフィリースの仲間達とハウゼ

ンがいた。こういう時に真っ先に駆け寄る、いや、飛んで寄るのはユーティである。

「アルフィ、どうだった？」
「上々よ。彼女、うちに来るって」
「なるほど。ではこれからびしびし鍛えられるな」
「ほどほどにして上げて、エアリー」

エアリーが意外な所にやる気を見せたのを見て、アルフィリースは彼女を窘めた。エアリアルの鍛え方は、大草原での私生活から想像するに半端ではないだろう。彼女の感覚で訓練をすれば、並の人間はあっという間に潰れかねないとアルフィリースは心配した。ましてや相手はお嬢様である。

それよりも、複雑な顔をしたのはハウゼンである。

「そうか、エクラは行くと言ったか」
「そうね。では約束通り、私がハウゼンさんに要求できる事はこれにするわ」
「む・・・確かに要求を聞くとは言ったが、まさか娘を取られるとはな」

実はアルフィリースの要求はこうである。アルフィリースは最初、ハウゼンの息のかかった人間で、傭兵団に必要そうな者を何名か借りるつもりだった。だがエクラを見てアルフィリースは気が変わった。アルフィリースはもっと面白く、そして自分に利益が出る方法を思いついたのだ。上手くいくかどうかは賭けだったが、エクラが自分に付き従うかどうか、説得をさせて欲しいとアルフィリースは申し出た。
そして全てはアルフィリースの望んだとおりになったのだが、ハウゼンが娘を嫁に出すかのように悩むのを見て、ユーティがハウゼン

を慰めようとする。

「大丈夫だって、おっさん」

「おっさ・・・」

「別にうちの連中に取って喰われるわけじゃないから。まあ若干二名ほど危ないかもしれないけど。多分おっさんの娘さんは興味の対象外だから大丈夫だよ」

ユーティの言葉は彼女なりの親切から出たのだが、ハウゼンの不安を煽っただけであった。そんなユーティを見て、エアリアルが彼女をむんずと掴む。

「ぐええ！」

「お前はまず言葉を選べ」

「ユーティってば、空気を読めるようになったら上位精霊になれるんじゃないかなぁ？」

「それは・・・あと数百年無理かもね」

ターシャがとどめの言葉を投げかける頃には、エアリアルの手の中で既にユーティがぐったりとなっているのだった。

そんなやりとりで和気あいあいとアルフィリース達は笑っているのだが、一人ハウゼンだけは渋い顔をしていた。そんな彼を見て、アルフィリースはそっと輪を抜け出してハウゼンに声をかける。

「ハウゼンさん、何か言いたそうね。場所を変えましょうか？」

「・・・ああ、その方が助かるな」

ハウゼンが応じたので、アルフィリースハウゼンに促されるまま中庭の方へと再び歩き出した。後にはヴェンも続く。エアリアル達もその動きに気が付いて後に続こうとしたが、アルフィリースが手

の甲を見せたので、後に続くのを止めたのだった。
そうしてしばらくハウゼンの後を追う形で歩くアルフィリース。その後にしばらく距離をおいて続くヴェン。やがてハウゼンの歩みがゆっくりと止まり、彼は振り返った。そこには今までアルフィリースが見てきた温厚な宰相の表情はなく、厳しく一国の宰相として修羅場をくぐって来た男の顔があった。

「アルフィリース殿、聞いておきたいことがある」
「・・・何でしょう？」
「貴公は我が娘を人質に取るつもりか？」

その言葉に、アルフィリースの眉がぴくりと動く。風がざあ、と吹き、庭園の木々を揺らした。風にたなびく髪にやや隠れるアルフィリースの唇が、横に動く。

「そう、だと言ったら？」
「貴公にはここで消えていただこう」

その言葉に後ろのヴェンがすらりと剣を抜き放った。同時にハウゼンも腰の剣に手をかける。アルフィリースとの間合いは２０歩近い。だが本気のヴェンなら、あるいはアルフィリースが振り返ると同時に彼女の首を落とすくらいの力量はあるのかもしれないと、アルフィリースは想像する。ハウゼンとて素人ではない。むしろかなりやる手合いの人物だと聞いている。この二人に同時に襲いかかられれば、小手の仕込み刃だけではいかんともしがたいとアルフィリースは考えていた。
だが今重要なそんなことではない。アルフィリースはどのような言葉を紡ぐのが正解か考えたが、相手は一国の宰相。アルフィリースも自分の話術にある程度の自信はあるが、さすがに一国の宰相相手に通じると思うほど自信過剰でもない。こういう時にはアルフィ

リースは深く考えないのが一番だと思っている。追求を強めるハウゼンを前に、アルフィリースは今回もその方法を取ることにした。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その9～不興～（後書き）

次回投稿は１０／２８（金）１４：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その１０～もう一つの訪問～

「まあ我が友の忘れ形見だ。言い訳くらいは聞こうか」
「まだ言い切ったわけじゃないのにせっかちね。まあ正直なところ・・・人質ってのも多少あるかも。あ、言い方は悪いけど、人質って言うよりは交渉材料みたいな感じかな？」
「ふむ・・・続けたまえ」

ハウゼンはその言葉に興味をある程度覚えたのか、アルフィリースに弁解の余地を残した。アルフィリースは慎重かつ大胆に自分の言葉を選ぶ。

「私が考えているのは、この国からの騎士隊の継続的な派遣。傭兵団を作るという話はこの滞在中に話をさせてもらったわよね？　そこで私が悩んだのは、どうやって傭兵団の規律を保つかという事。いかに隊の掟を作ろうと、私が女だからと舐める者もいるでしょう。そういった者には厳しい罰を与えればいいのだけれど、規律と言う者にはすべからく穴があるわ。いずれ団が大きくなればなるほどに、そういった穴をついて悪さをする者はでるでしょうね」
「その事が我が国の騎士隊を借りることと、どう関係する？」
「規律正しい者が傍にいれば、ある程度規範にはなるわ。またその場の空気って大切なの。祭りの時には皆羽目をはずすでしょう？あれと同じで、普段から規律正しい空気を流しておけば、まあ抑止力にはなりそうかなって。それにいかに良い空気でも、澱めば濁るわ。常に新しい風を集団の中には吹かせないとね」

アルフィリースが楽しそうに語るのを見て、これは傭兵ならではの発想だと思う。いや、国の単位でも同盟国では軍の合同演習や、あるいは派遣なども起こりえるが、ハウゼンの想像ではアルフィリ

ースは全ての国、あるいは獣人やミウリスの民まで巻き込んで傭兵団を作るつもりなのだろうと想像する。普通の者が聞けば余りに馬鹿げた構想だが、アルフィリースなら、自分が心底恐れた親友の弟子ならばやってのけそうな気がするのだった。

「そう、上手くいくとは思えないがね」

「やってみもせずに挫けるのはよくないわ」

「若いな、だがそれが良いのだろうか。だが一つ聞きたい。もしここで有無を言わさず、私が君の首を落とすつもりだったら？」

ハウゼンが毒気のない顔で問うたが、アルフィリースは毒舌を持って応じた。

「その時は申し訳ないですが、宰相の首を頂くことになったかと」

「馬鹿な、どうやって？」

「こうやって」

アルフィリースがぱちんと指を鳴らすと、突如としてヴェンの後ろにエアリアルが、ハウゼンの後ろにターシャとラキアが出現した。ユーティもいつの間にか、アルフィリースの肩の上に乗っている。唐突な人間達の出現に面喰ったハウゼンだが、すぐに冷静さを取り戻す。

「そうか、魔術か」

「そういうこと。認識阻害の魔術ってやつよ」

「なるほど、アルドリュースはやはり魔術を多用していたのだな。でなければ、あれほど都合よく物事は運ばないか」

ようやく納得のいったハウゼンを前にアルフィリースは得意げに語ったが、別に彼女が魔術を使ったわけではない。実際にはラキア

が用いたわけであるが、そのような事をハウゼンに知らせる必要性もないとアルフィリースが考えたのだ。
　エアリアルは会食の時にくすねたナイフをヴェンの喉元に当てているわけではあるが、それにしてもヴェンは微動だにしなかった。ハウゼンよりも動揺が少なかったのはヴェンの方かもしれないと、アルフィリースは訝しんでいた。
　そして、ハウゼンが降参の姿勢を取る。

「ふむ、ここは私の負けだな。では先の約束通り娘は君に預けることとしよう。そして定期的に我が国からも騎士隊を派遣する。私に対して君が希望する事はそれでいいだろうか？」
「そうね、細かい事は追って話しましょう。それにしても貴方が話のわかる人物で助かったわ」
「何、我が家を血で汚したくなかっただけさ。お互いに怪我のない方がいいだろう？　それでは再び場所を変えようか。細かい話は私の書斎でどうかな」
「構わないわ」
「では少し間をおいてから来たまえ。話し合いの準備をしておこう」

　アルフィリースが頷くと、ハウゼンはヴェンと共に彼は庭園を後にしようとする。その背中を見ながら、エアリアルがそっとアルフィリースに近づいた。

「アルフィ、あのヴェンと言う男」
「やっぱりエアリーも同じことを思ったのね？」

　アルフィリースが渋い顔でエアリアルの方を見る。

「あの人、想像以上に強いわ。もしかするとアルベルトに並ぶくらい強いかも」

「我はアルベルトなる者を知らないが、あの場でこちらが本気で彼らを殺そうとしていたら、我々も危うかった。おそらくあの騎士は、自分の首をかき切られようが、ハウゼンを守るために突進するのをやめなかっただろう。それほどの気迫を感じた。あれが騎士か」
「騎士ってのは人種が厄介ね。主人のためなら自分の命もお構いなし、か」

去りゆくヴェンの背中を見ながら、アルフィリースは騎士という生き物の恐ろしさを実感すると共に、あれほど自分に忠義を尽くす部下が欲しいとも思うのだった。
そして庭園から出ようとするハウゼンに、思い出したようにアルフィリースが声をかけた。

「ハウゼンさん！　もう一つ先に聞いておきたいことが！」
「うん？　何だね？」
「トリュフォンという男の事、知りませんか？」
「トリュフォン？　ああ、あの偏屈な酒飲みか。彼の事なら七番街で聞いてみるといい。かなりの有名人だから、すぐに見つかるだろう」

ハウゼンもあまり良い印象を持たない名前なのか、返事がぶっきらぼうだった。珍しいことだとアルフィリースは思いながらも、自分がハウゼンと打ち合わせる間、ターシャにトリュフォンの事を探すように申し渡し、彼女はハウゼンとの話し合いに臨むのだった。

＊＊＊

「ここね」

その翌日。ハウゼンとの交渉を終えたアルフィリースは、ベグラ

ード七番街の一画に赴いていた。もちろんトリュフォンに会うためである。目の前には集合住宅と言われる、何人もの人間が同時に住む事のできる家屋の前にアルフィリース達は来ていた。アルドリュースの発想によりこういった住宅を格安で市が提供しているのだが、これは他の街・国からの労働力を確保しやすくするようにとの意図もある。まあそんなわけだから、お世辞にも住み心地はあまり良くなさそうな建物ではある。構造を考えれば一つの階に２０いくらの部屋があるのだろうが、浴場や厠は各階に２つまでというから驚きだ。

「ところでアルフィ。トリュフォンとは何者で、何のために会うのだ？」

「うーん、私も知らない。だって、ハウゼンさんが宰相ってことも知らなかったのよ？　余計に知るはずないじゃない」

「師匠も意地悪だねぇ」

呑気なユーティがアルフィリースの頭の上を飛び回りながら皮肉を投げかける。だが知らないものは知らないので、アルフィリースもぶすっとするだけだ。

ターシャに調べさせたトリュフォンの噂はこうである。七番街のにいつからか住みつく、飲んだくれの中年。愛想が悪いから不気味かと思いきや、通りすがりで倒れている老人を助けたり、泣いている子どもをあやしたり、喧嘩の仲裁をしたりと、のっそりとした風体とは裏腹に善い行いをする人物として有名であった。そしていつしか彼は七番街の住人の相談役となり、生活費は医者の真似事をして賄っているという。

同時にかなりの偏屈な人間としても有名で、自ら助けを求める者はほとんど相手にせず、また貴族というものが基本的に嫌いの様であった。ハウゼンが良い印象を持っていないのも、ハウゼンが彼を賢人だと考え直接出向いたり様々な贈り物をしたが、贈り物は全て

付き返され、訪問は全て断られた。挙句、トリュフォンは「忙しい』と言ってハウゼンの訪問を玄関払いにした直後、ハウゼンが背を向けた瞬間にハウゼンの後ろから歩いてきた乞食を「暇だから話し相手になれ」と自らの部屋に招き入れた。このことに対し、さしものハウゼンも侮辱されたと怒り、それきりにしていたのである。

そのような人物をなぜアルドリュースが訪ねろと言ったのか。アルフィリースは不可解な反面、わくわくしてもいた。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その１０～もう一つの訪問～（後書き）

次回投稿は１０／２９（土）１４：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その11～トリュフォン～

「（師匠の事だから只者じゃないのでしょうけど。そういえば師匠ってば人をアッと言わせるのが好きだったわね。春の祝いなどはいつも私を驚かせてくれたわ）」

正確な暦などないこの時代の事。多くの人は春の訪れた兆候を見て、新しい年の始まりとした。春の兆しとは、場所によってはモーイ鳥。また花が咲き誇る事で春を知ることもあるし、なんなら魔獣の出現であることも。アルフィリースがアルドリュースと暮らした山奥では、雪解けに応じて凍っていた小さな滝が流れ出せばそれを春と考えたのだが、アルドリュースは春が来るたびにアルフィリースを驚かせた。

ある時は昨日まで荒れ野原だった地面を花で埋め尽くし、ある時は巨大な魔獣を従えて帰って来た事もある。その魔獣の上に乗って、山々を駆けたのも良い思い出だ。

そのアルドリュースが詳細を伝えないのである。そこには何かしらの意図があるのだろうと、アルフィイリースは逆に胸が高鳴る思いだった。

「さて、行くか」
「で、どの階なの？」
「6階の一番右奥だって」
「高い建物だな」

この地方以外に高層の建造物を住居として使用している地域はまだあまりない。大抵は物見の塔、あるいは城・砦が最大の建造物であるため、ターシャでも珍しそうに建物の中に足を踏み入れて行った。

建物の中は廊下に明り取りの窓があるもののそれらはあまり大きくなく、日が昇りそう時が経ってないにもかからわず薄暗い印象を与える。住人は労働者階級の者がほとんどなのか、ひっそりとしていた。すれ違った人と言えば階段を慌てて駆け降りる若い男性が一人だけ。余程慌てているのか、服すらまだまともに着ておらず、服を羽織りながら出かけて行くところだった。何よりアルフィリース達を見ても目もくれない。田舎では女性だけの旅という事で注目される事もあるアルフィリース達も、これほどの大都会では珍しくもないのか、彼女達を見てもそれほどじろじろと見る人間も少ない。鬱陶しくはない半面、どこか寂しい気がしなくもないとアルフィリースは頭の片隅で考えていた。

「えーと、右・・・右」
「部屋に番号が打ってあるわ」
「確か６１１だったと思う」
「あれだな」

いち早く目の良いエアリアルが目的の部屋を見つけたが、その戸の前に立ったアルフィリースは深呼吸をひとつして、その戸を叩く。

「すみません、トリュフォンさん。いらっしゃいますか？」
「ああ？　今俺は留守だ。出直してこい」

中からは即答で中年らしき声がしたが、自分は留守だとのたまった。なんとも言い訳とも言い難い堂々としたふざけっぷりに、ラキアですらやや呆れ気味である。

「自分が留守って」
「言い訳にすらなっていないじゃない」
「とんだオヤジもいたものね。狩ってやろうかしら」

「物騒な妖精だな」

全員が苛立ちを募らせる中、一番頭に来たのはユーティなのか。
彼女は戸を蹴っ飛ばした。

「おらぁ！　出てきなさいよ中年オヤジ！　狩るよ？」
「や、やめなさいって。ユーティ」
「ぐー」

戸を蹴飛ばすユーティに対し、明らかにわざとらしい鼾(いびき)が中から聞こえてきた。さすがにこれには全員がカチンときたのか、アルフィリースは荒々しく戸を押し開けた。

「ごめんなさい、失礼します！」
「俺は鼾をかいて寝ているだろうが！」
「寝てる奴が言い訳するかぁ！」

開いた戸から勢いよく飛び込んだのはユーティ。だがそこには・・・一匹の鳥がベッドの縁に止まっているだけだった。モーイ鳥よりも少し大きい、東でよく見かけるハール鳥だ。緑の羽を持つこの鳥は頭も良く、鍛錬次第では伝書用にも用いられる。

「あ、あれ？」
「鳥？」
「ちきしょうめ、文句あっか？　俺の体は今睡眠中だ！」

大人しく座っていた鳥がベッドの中央に移ると、そこで胡坐(あぐら)をかいて腕、いや羽を組みふんぞり返り始めた。その開き直った態度と予想外の出迎えに、どうしていいかわからず立ちつくすアルフィリース達に、鳥が問いかける。

「どうした、俺様に用があるんじゃねぇのか？」
「いや、あの・・・えーと」
「あー、まったくうじうじしやがって。俺がトリュフォンだよ！早く要件を言いやがれ！　それかパンツ見せやがれ！」
「この変態鳥がぁ！」

卑猥な発言を言いだしたトリュフォンを名乗る鳥にアルフィリース達が抗議する暇もなく、ユーティがいち早く殴りかかった。

「いてっ、いてて！　何しやがる！」
「やかましい！　丸焼きにしてくれる、この鳥！」
「くそっ、怒りっぽい妖精だな。アノ日か？」
「そんなものが妖精にあるかぁ！」

ちょうど同じくらいの大きさの鳥と妖精が、全力でベッドの上で取っ組み合いの喧嘩をしていた。そのなんともいえない光景に、呆れて言葉を失ったアルフィリース。

「どうするアルフィ？」
「もう・・・どうでもよくなってきたわ」
「帰りますか、団長？」

わざとターシャがアルフィリースを団長呼ばわりして敬礼して見せた。余程呆れたのだろう。早く帰ろうと自己主張している。
そして取っ組み合いをする鳥とユーティを尻目にアルフィリース達が帰ろうとした瞬間、ユーティの右ストレートをかわした鳥がアルフィリース達の前に立ちふさがる。

「待ちな！」
「いや、もういいわ。私、帰る」
「やれやれ、アルドリュースの弟子は短気だな。呪印をそのままにしてもいいのか？」
「！？」

意外な言葉をかけられはっとしたアルフィリースを前に、鳥がニヤリとした。

「図星だな。こいつはまず二人で話した方がいいだろう。他の者は席をはずすといい。センサーはいないな？」
「ええ、いないわ」

それだけ言うとアルフィリースは他の者に部屋から出るよう目で促した。事情の良く飲み込めないターシャは訝しがったが、エアリアルが促して静かに出て行った。息を切らしてベッドの上でも燃え尽きているユーティは、ラキアがつまみだした。そしてラキアは出るときに部屋の隅をチラリと見ると、そのまま出て行った。
後に残ったのはアルフィリースと、トリュフォンの使い魔であろう鳥。

「で、どうして私がアルドリュースの弟子ってわかったの？」
「簡単な事さ。その左手の手甲、グウェンドルフのだろう？　アルドリュースからグウェンドルフと生活している事は聞いていたしな。それに俺はグウェンドルフとも知り合いだ」
「あなた、何者？」
「その前にまず俺の姿を現そうか」

そういうと鳥はその場に突然崩れ落ち、アルフィリースが人の気配にはっとする時には、いつの間にか部屋の隅には男が酒を飲みな

がら座っていた。聞いた通り年は中年くらい。運動不足で不摂生がなせるわざなのかでっぷりとした腹に、てっぺんだけハゲた頭。だが鋭い眼光と顎髭などを蓄えたその姿は、どこか世捨て人のようでもある。

「初めましてだな、アルドリュースの弟子よ。確か名前はアルフィリースだったか？」

「そ、そうよ。貴方がトリュフォン？」

「まあそう言う呼び方もあるがな。それよりまずアルドリュースからの遺言を果たしたい」

「？」

酒を飲み赤い顔をしながらも人を射抜くような鋭い眼差しの目つきに、アルフィリースは一瞬体を堅くした。だが・・・

「アルフィリースよ」

「は、はい」

「とりあえず脱げ」

「・・・へ？」

アルフィリースは自分に投げかけられたその言葉に固まるのだった。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その１１～トリュフォン～（後書き）

次回投稿は１０／３０（日）１３：００です。

＊＊＊

「・・・はっ」
「どうした、ラーナ」
「いえ、アルフィの貞操が危機の様な気がして」
「いつものことじゃねぇか。お前が傍にいりゃあ」
「人の事が言えるのかしら、ロゼッタ」
「ちげぇねえ」

カラカラと笑うロゼッタに、ため息をつくラーナ。残された彼女達が何をしていたのかと言うと、ラーナはこれからアルフィリース達が本拠とする建物建築に携わっていた。

一息に携わると言っても、建築技術に関してラーナは素人である。だが魔女である彼女は自分の知識を駆使して様々な魔術対策を施していた。これは城壁などの軍事拠点にも取り入れられている考えであり、これから先を見据えてのアルフィリースの配慮である。各所要塞には魔術を防ぐために対魔術処理を施しておくのは常識であるし、ドゥームがアルネリア侵攻を行った際にも、彼の魔力を持ってすら深緑宮の門を力ずくで破るのは無理であった。また転移の魔術があれば極端な話、相手の本拠に大量の人間を送り込んで、あるいは暗殺者を送り込んでの重要人物の殺害・誘拐などがやりたい放題である。これを防ぐ意味でも色々な感知阻害や、転移妨害の魔術は重要拠点には施されているのが当然である。ゆえに魔術に頼らないセンサーといった職業が重宝されるのであるが。

ともあれラーナは本拠点を防備の完璧な要塞とするために心を砕いていた。そのため彼女は日中のほとんどの時間を建築作業場で過ごす事となっている。ロゼッタと話しているこの後も、すぐに建築

現場に向かう予定である。
　一方でロゼッタはギルド長に協力してもらい、あるいはギルドで最近の近隣一体の傭兵事情を掴もうとしていた。どのような人物が近隣で活動していて、彼らのランクは、実績は。有望株であればロゼッタが自ら赴いて説得する事も辞さない事もあった。
　さらにリサとルナティカが情報収集をしている。リサの情報収集・あるいはばらまき具合は大したもので、アルフィリースがアルネリアを出発してから１０日程、既に２０名近い志願者が現れていた。

「さて。人数はボチボチだけど、これからどうするかだな」
「ええ、訓練とか食事とか、あとは装備とか」
「それよりも決めなきゃならない事があるだろう」
「？」

　ロゼッタが入口の枠にぶら下がりながら答える。ここで腹筋をしながら答えるのだから、大した筋力だとラーナは感心していた。なにせラーナがロゼッタと話し始める前から、彼女はずっと腹筋をしているのだから。そしてラーナはロゼッタが思ったよりも団全体の事を考えながら行動する事に驚いていた。最初は彼女を仲間に加えた事に疑問を覚えたラーナだったが、なかなかどうしてアルフィリースの人を見抜く目には間違いがないものだと思っていた。

「ラーナよぅ。実際に応募があっても、アルフィリースが気に入らなけりゃ採用されないんだぜ？」
「それはそうですけど。でも頭数も大事なのでは？」
「そういう時もあるけど、こちとら軍で正面切って戦争するわけじゃないんだ。戦争に出るとしても、その中の一局面を請け負うだけ。それに指揮官の名声が高けりゃ、他の傭兵団をまとめて組織することもありえる。だから決してうちの団の頭数が多い必要はないんだよ」

ロゼッタの言う事は理が通ってはいるのだろうが、戦場の経験のないラーナにはわからない。なのでラーナは黙って彼女の言う事を聞いていた。

そんな折、二階から降りてきたイルマタルがきょろきょろとあたりを見渡す。

「ねーねー、エメラルドはー？」
「もうでかけたわよ」
「なんだ、つまんない」

むくれるイルマタルが、ロゼッタに目をつける。

「じゃあロゼッタでいいや、遊んで」
「おいおい、『でいい』とはひどい言い草だな」
「だってロゼッタはいっつも適当なんだもん」
「はいはい、わかったよ。ちゃんと今日は遊んでやるから」

しょうがないとばかりにロゼッタがぶら下がったままイルマタルを捕まえると、そのまま腹筋を再開した。

「ほ～ら、高い高い～」
「きゃはは！　変な高い高いだね～」

だが意外にもイルマタルは喜び、やがて彼女が遊び疲れて眠るまでロゼッタはしっかりと面倒を見てやっていた。ラーナが一仕事終えて宿に帰ってくる頃には、ロゼッタが酒を飲みながら膝の上でイルマタルを寝かせているのだった。

「意外に面倒見がよいのですね」

「子どもは好きだよ。彼らには罪が無い。悪いことする人間が増えるのは、ちゃんと子ども達を育てる環境がなってないからさ。悪党のアタイが言うのも変な話だけどね」

そう言うロゼッタの目には慈しみがあった。そんな彼女を見て、ラーナはふと聞いてみる。

「ロゼッタ、あなた子どもは？」

「いないよ。アタイは極端に子どもができにくい体みたいでね。まあ色んな種族の混血だからかな。まあそれでも・・・一回妊娠はしたことはあるんだけどね」

「・・・聞いてはまずい事だったでしょうか？」

おずおずと聞くラーナに、ロゼッタは笑みで返す。

「いんや。まあ湿っぽい話だから、皆の前ではしないけどね。ミランダには言ったけど、アタイは昔旦那と定めた男がいた。アタイも奴も傭兵だったから、式なんて洒落たもんを挙げやしなかったけどね。それでもアタイは旦那だと思ってたけど、アタイ達はひょんな事でとちってしまった。自分達の子飼いの部下に反乱を起こされたのさ。旦那は殺され、アタイは犯され、子どもは流れちまった。散々さ。まあアタイの息があっただけ奇跡だよ。一回息は止まったけどね。八つ裂きにされた旦那の死体の上で、アタイは目を覚ましたのさ」

「・・・」

ロゼッタが過酷な人生を送っているだろうと想像してはいたが、それでも想像以上の出来事にラーナはただ黙るのみだった。少なくともロゼッタは自分の数倍は生きている。見た目こそ流れる血のせいでそこまで変わらないが、人生経験はラーナよりはるかに豊富で

ある。明るく語るロゼッタの笑顔の裏に、どれほどの絶望があったのだろうとラーナは想像せずにはいられない。

続けてロゼッタが語る。

「まあ人生なんてそんなもんさ。もちろん旦那を殺った奴にはきっちりお礼まいりはしたけど、アタイみたいに剣で人を殺すしか能のない人間が、幸せを手にしようなんておこがましいってことだろうね」

「剣を捨てようとは思わなかったのですか？」

「もちろん考えたさ。だけどね、この目立つ容姿のアタイは、まっとうな職業に付く事なんぞできやしない。この容姿じゃ娼婦としてすらも客が取れないだろうね。だからアタイは剣を取った。最初は泣く泣くだったけど、今ではこの生活が合っているとすら思っているよ。それに湿っぽい話の後で何だけど、アタイは後悔しちゃいない。

だけどね、アタイはこうも思うんだ。剣以外に生きることができるのならば、そういった人生を送ってみたくもあるってね。だからアルフィリースやあんたには、後悔だけはしてほしくないんだ。傭兵やるのもいいさ。だけど事が落ち着いたら、普通に幸せになって欲しいってね」

「ロゼッタ・・・」

その話に少し神妙な面持ちでラーナがロゼッタを見たが、ロゼッタはラーナの視線に気が付くと慌てて話題を変えた。

「あー、やめやめ。つい湿っぽくなっちゃったよ。この話はおしまい！」

「そうですか。私としては身につまされる思いでしたが」

「アタイのキャラじゃないんだよ。ちょいとイルを寝かしてくるよ」

ロゼッタがイルマタルをひょいと持ち上げると、そのまま足早に

二階に上がってしまった。ロゼッタなりに照れているのだろうかとラーナは想像してくすりと笑ったが、確かに全ての戦いが終わったらアルフィリースはどうするつもりなのだろうかと、ラーナは疑問に思うのだった。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その12～アルフィリースのいない場所で～

次回投稿は、11／1（火）13：00です。

伝わる思い、伝えられない思い、その１３～呪印の秘密～

＊＊＊

だがその頃のアルフィリースはと言えば、それどころではなかった。

「・・・今、なんて？」
「二度も言わせるんじゃねぇよ。脱ぎな」
「え、えええええ！？」

アルフィリースが素っ頓狂な声を上げる。今まではそれは何かにかこつけていかがわしい行為を仕掛けてこようとした輩がいないでもなかったが、ここまではっきりいわれるたのは初めてである。

「ぬ、脱げって。全部？」
「まあその方がいいわな。脱がせてやろうか？」
「結構です！　って言うか、脱がないからっ！」
「着たままか？　まあそれもいいが」

トリュフォンがのそりと立ち上がってこちらに寄ってくるので、思わずアルフィリースは反射的に戸に手をかけたが、戸はびくともしなかった。

「あ、開かない？」
「そりゃそうだ。ここからの行いは互いに誰にも知られたくないだろうからな。当然鍵を魔術でかけて、防音も施してある。だからどんだけ騒いでも聞えないって寸法だ」
「ほ、本気なの？」

「当たり前だ」

アルフィリースがここにきて身の危険を感じ身構え始めたが、トリュフォンはといえば、目の前に指で丸を作り、その丸を通してアルフィリースをじっと観察していた。

「な、何してるのよ！」

「透視」

「透視ですって！？　この変態―！！」

「う、わわ。やめろっ！」

アルフィリースが突然拳骨で殴りかかって来たので、トリュフォンが慌ててその腕をつかむ。十分に殺気のこもったその拳に当たれば、青痣くらいではすまないくらいの威力はありそうだったのだ。だがその腕を掴んだ瞬間、アルフィリースの顔色が変わる。

「なんで私の前には変態ばっかり・・・あれ、あなた？」

「勘違いすんじゃねぇよ！　こちとら人間の女の裸になんぞ興味はねぇんだ」

「・・・なるほど、真竜なのね」

アルフィリースはトリュフォンに右腕を掴まれた瞬間、なんとなくの事情を察知した。イルマタルと常に触れ合っているアルフィリースにしかわからない感覚というものがある。イルマタルは見た目こそ幼い人間だが、実際には身の丈は既にアルフィリースよりも大きい竜であり、見た目とは異なる威厳や圧迫感なども既に備え始めている。だからこそアルフィリースにはトリュフォンの正体がわかった。小男の見た目とは裏腹な、その正体に。

「そうならそうと早く言ってくれればいいのに。紛らわしいわ」

「真竜が自分の正体をほいほいと明かすのもどうかって話しなんだよ。こっちにしてみりゃ、俺の言う事を大人しく聞けってことよ。アルドリュースにゃお前さんの呪印の事を頼まれてんだ。さっさと見せな、透視じゃ限界がある」

「そ、そういう事なら・・・でも、恥ずかしいなぁ」

アルフィリースがしょうがないとばかりにトリュフォンに背を向け、服を脱ぎ始める。彼女の呪印は腕のみならず背中にもあるので、上着は全て脱がないと仕方がないのだ。トリュフォンがいかに真竜とはいえ、人前で服を脱ぐことなどなかったアルフィリースには抵抗があってしょうがない。彼女も年頃の女の子には違いがないのだから。

そしてアルフィリースの背中が見えるようになると、トリュフォンがまじまじと呪印の観察を始める。トリュフォンが無言なのもアルフィリースには恥ずかしかったが、どうしようもないので脱いだ服で前を隠すようにして、そのまま背中を見せるようにアルフィリースは立っていた。

そしてアルフィリースの背中の呪印を見ていたトリュフォンが見立てを始める。

「お前さん、今何か症状はあるかい？」

「たまにいたかったり熱かったりするけど、どうってことないわ」

「魔術を使った時かい？　それとも剣なんかを振るった時かい？」

「魔術が主ね。最近はほぼ使ってないからほとんど何も無いけど、たまに痛むかしら」

「たまにね・・・」

アルフィリースに質問をしながらトリュフォンが見立てをしていたが、彼はアルフィリースの呪印を見れば見るほど奇妙と驚きに捕らわれていた。

「（大したもんだ。まずここまで複雑な呪印をこんな若い娘が自分で施した事もそうだが、この呪印は精神だけでなく物理的に肉体にも食い込んでやがる。これは焼けた火箸で内臓引っかき回されるようなもんだ。こいつを自分で施すだけでもまともな神経しているとは思えねぇが、誓約（フラメント）ってやつは代償が大きいほどに効果が高い事が大きいからな）」

トリュフォンは初めてアルフィリースに興味を覚えていた。アルドリュースからの手紙でなんとなく事情を聞いてはいたものの、彼にはさしてアルフィリースの事に興味を持てなかった。むしろ全ての人間が羨んで仕方ないほどの物をあっさりと放り投げるアルドリュースが、どうして一人の少女のためにそれほど甲斐甲斐しくするのか、不思議でならなかった。

だが今なら少しわかる気もした。アルフィリースは不思議な人間だった。もちろん育ちが特殊だから、おおよその人間と何かしらかけ離れているのは当然だが、それを差し引いても何かが違うのだ。だがその原因はトリュフォンをもってしてもわからなかった。

「（アルドリュースよ、お前はわかっていたのか・・・？）」

「ねぇ、まだ？」

「ん？　ああ」

いつまでも晒した上半身を見られる事に抵抗があるのか、アルフィリースが不満を漏らす。だがトリュフォンは上の空だったので、慌てて彼は元の目的に戻り始めた。

「で、どうなの？　私の呪印」

「まあ一言でいえば、手遅れだな」

「え、ええ？　そんなにひどい？」

その言葉にアルフィリースがうろたえる姿を見て、どうにもトリュフォンは意地悪をしたくなった。多くの人間がアルフィリースに対してそうかもしれないが、これはトリュフォンの元の性格である。

「ああ、ひどいな」
「どこが、どのくらいひどいの？」
「肌荒れがひどいな。この若さでこれは、処置なしだ。このままじゃ一生男が寄りつかん・・・む？」

トリュフォンの言葉の途中でアルフィリースがわなわなと震え始めたので、トリュフォンは首をかしげる。だが。

「真面目にやれぇ！」
「いや、女にとっては一大事だろ？」
「そんな事を言われるために、私は大陸を横断してきたんじゃなぁい！」
「やかましい女だな。このベグラードの女達なら次にどうやって手入れをするか気にするもんだが・・・まあ田舎娘ならこんなものか」
「田舎って言うなぁ！」

ますますアルフィリースがじたばたし始めたので、トリュフォンはニヤニヤと笑いながら、その様子を眺めていた。

「アルフィリース」
「何よ！」
「見えてるぞ」
「！　きゃああ！」

アルフィリースが慌てて前を隠してうずくまる。その半ば涙目に

なりながらトリュフォンを睨む彼女を見て、トリュフォンも流石に真面目な話題に変えた。

「んで、真面目な話をするとだな。手遅れってのは本当だ。その呪印をはがす事は俺にもできん」

「いいわよ、そんな気なんて元からないんだから」

「いいのか？　苦痛を取るにはそうするしか・・・」

「制御不能の私の魔力を解き放つよりましよ」

アルフィリースが苦い顔をしながらそう言ったので、トリュフォンははっとした。この娘は自分の力を恐れているのだ。だが同時に不思議でもある。いくら呪印で封をしていようとも、目の前の娘にはそれほどの魔力が内臓されているようには感じられないのだ。

また種族による限界というものがある。いかに努力しようと人間が竜族のように火や氷を吹くことが敵わぬように。また彼らの鱗や翼を得ることが敵わぬように。人間という種族では、突発的に強大な力を持つ者が出現したとして、到底ハイエルフや真竜の魔力には太刀打ちできぬのが世界の理である。

確かにアルフィリースの魔力は強大だ。だがこの呪印を外した後に想定される魔力程度なら、魔女ならば何人でも彼女の魔力に到達しうるだろう。アルフィリースの本能は、実際の所何を恐れるのか。トリュフォンの興味はそこにあった。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その１３～呪印の秘密～（後書き）

次回投稿は１１／３（木）１３：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その１４～残った思い～

「ふむ・・・」
「どう、私の呪印？　魔女見習いの子に調節してもらってはいるんだけど」
「ああ、中々上手くやってはいるな。その子はいい魔女になるだろうよ」

確かに呪印にはところどころ継ぎ足したり、呪印が暴走しないようにさらに封を施した後が見られた。だが全て応急処置である。何も無ければこの程度でいいだろうが、一度大きな綻びがあれば修復は不可能だろう。

「（アルドリュースめ、よくもこれほどの封呪を施したものだ。口惜しいが、封印をすることに関しては真竜の俺よりも、奴の方がはるかに上だな。確かに奴は天才・・・ん？）」

トリュフォンがアルフィリースの呪印を突如として指でなぞった。そこがたまたま敏感な部分だったのか、突如触られたアルフィリースは頓狂な声をあげる。

「ひゃわぁ！　な、なな、なにすんにょよ！」
「噛んでるぞ」
「うっさいわねぇ！」
「ちょっと黙ってろ」

アルフィリースは抗議しようとしたが、トリュフォンが今までにないほど真剣な顔で呪印を見ているの見て、思わず声を上げるのを止めた。トリュフォンの顔が険しいものになっていく

「（なんだ、これは？　一つは自分で施した物、もう一つはアルドリュースが施した物だとして、もう一つある？　しかもこの術式には見覚えがあるぞ。どこだ、どこで見た？）」
「な、何？　何かあったの？」
「しばし待て」

トリュフォンが腕組みをして考え始めた。確かにアルフィリースの呪印は普通ではない。呪印が外れる時に動くことや、また強すぎる封呪は字のごとく呪いである。そのものが使用者の体や精神を蝕むのも珍しいことではない。だがトリュフォンが見た所、呪印はアルフィリースが主張する数よりも多い。それに、３つ目の呪印そのものには明らかに何らかの意志を感じた。例えるならば、呪印そのものが悪意を持つかのような。もしそうだとすれば、それは完全なる呪いである。

そうなると新たな疑問が生じる。アルドリュースがこれに気が付いていたとして、いや、術式を見る限りでは気が付いているのは間違いないのだが、なぜ呪いを外そうとはしなかったのか。彼の隣にはグウェンドルフもいたのだ。確かにグウェンドルフ自体はそこまで魔術に詳しいわけでもないが、彼に相談すれば大陸中の上位種が知恵を貸すだろう。彼らの知識を持ってして外せぬ呪いなどあるはずもない。その事に気がつかぬアルドリュースではないだろう。

また誰が、何の目的でアルフィリースにこのような物を施したのか。それを彼女に伝えるべきかどうか。トリュフォンは悩んでいた。

「（伝えたとして、どうなるものでもない・・・だが伝えぬのもこの娘のためにならぬか。どうしたものか）」
「ねぇ、どうしたの？　顔色が悪いわ」
「ん、ああ。そうだな」

アルフィリースの心配そうな声に、トリュフォンは落ち着いて事実をまとめた。

「（少なくとも今はどうする事もできないか。俺はそこまで魔術が得意なわけでもなし、少なくとも二つの呪印の上からいじくるのは危険極まりない。せめて旧世代の真竜達の知恵が借りられればあるいは・・・だが真竜としての役目を放棄した俺では頼むべくもないな。それに今のところ、呪印は安定しているようだ。すぐに何かが起こるわけではあるまいよ。そうなるとだ。さきほどこの娘と一緒にいたのは・・・）」

トリュフォンが自分の記憶を辿る。昔自分に懐いていた幼竜の名前を思い出す。

「アルフィリースよ、連れにラキアという娘はいるか？」
「ええ、いるわ」
「真竜だな？」
「・・・そうよ。知り合い？」
「昔な。なるほどそれなら大丈夫か」

トリュフォンは何か納得したようだった。事情のわからぬアルフィリースは首をかしげるばかりである。そのアルフィリースを放っておいて、トリュフォンは何らかの儀式の準備を始めたようだった。部屋の物を隅にどかし、彼は何やら地面に模様を描き始める。

「何を始めるの？」
「崩れかけた呪印を補強する。その拙い右腕の呪印も、頑強にしておいてやろう。どうせ自分でやったんだろう？」
「拙くて悪かったわね！」
「むしろ褒めているんだがな。それは生粋の魔術士でも２０歳そこ

らの娘が扱えるような代物ではないからな。まあそれはさておき、俺が手を加えるだけで無駄な痛みや苦痛はなくなるだろう。それに呪印を外したとして、元に戻すのも楽になるはずだ。今の呪印は外れかけだからな。最近魔力が強くなったような感じがするんじゃないのか？」

「う。それは当たっているわ」

アルフィリースは図星だったので、ある程度トリュフォンの事を信じたようだった。それに儀式の様子も昔アルドリュースが用意した時と似ている。八つの属性に縁深い呪物を用意し、それらを回転する台の上にばらばらに置く。呪物の配置は時期にもよるが、それぞれの精霊が強くなる方向に合わせて配置する事で、より儀式の精度は上がって行く。強い力を精霊から借りる儀式では、これらの方向はとても重要になるが、魔術士でもこれらを正確に掴むのは難しい。だから大抵の魔術士は等間隔に呪物を配置して、ある程度の誤差も関係ないようにするのだが、これらを不規則に配置する魔術士ほど優れた魔術士だとされる。もっともトリュフォンは真竜なので、当然と言えば当然である。

そして半刻もなく、儀式はつつがなく終了した。さすが真竜ということなのか、アルフィリースは儀式における魔術の集約・施行の早さに驚くばかりだった。

「すごいわ。真竜が魔術を行うのを初めて見た」

「俺なんかは大したことない、しょせんはぐれ真竜だからな。グウェンドルフやマイアならもっと上手くやるさ」

「はぐれ真竜？」

「ああ、ラキアに聞いてみな。俺ははずれ者よ」

儀式も終わり酒瓶片手にくつろぐトリュフォンを、やや見直すアルフィリースだったが。

「そんなとこに突っ立ってねぇで、用が済んだのならとっとと帰りな。俺は忙しい」
「忙しいって・・・でもありがとう！」
「ああ、また呪印がおかしくなったら俺の所に来ると良い。お前が生きている間くらいはサービスしてやるよ。それとついでにラキアを呼んでくれ」
「ええ、わかったわ。重ねて言うけど、感謝するわね」
「んなもん、され足りてるよ」

酒臭い息を吐きながら自慢するトリュフォンを、アルフィリースはやや苦笑いするように部屋に残して彼女は去って行った。その去り際、アルフィリース下げた剣が目に入る。その剣に不思議な違和感と見覚えがあるような印象を抱いた、トリュフォンだったが、その事について聞き止める前にアルフィリースは部屋を出て行ってしまった。

そして入れ替わりにラキアが入ってくる。ラキアが入って来た時、トリュフォンは明後日の方向を見ながらも、その雰囲気がいつになく張りつめているのを感じていた。

「どうしました、トリュフォン様。いえ、二人の時はノーティス様の方がよろしい？」
「『様』はよせ、堅苦しい。それにその名前は捨てた。真竜としてまともに活動できなかった者が『知識を司る者』なんて意味の名前、おこがましいにもほどがある」
「いえ、現存する竜の内、グウェンドルフ族長よりも年上なのは貴方と、あとシュテルヴェーゼ様だけ。貴方達を敬まわずして、誰を敬えと？　それに貴方からは多くを教わりました。私にとっては人生の師も同然です」
「んなこと言ってるからマイアに怒られるんだよ。だがとんだじゃ

じゃ馬だと思っていたが、多少は世の中を覚えたみてぇだな。俗っぽいとも言うかもしれんが」
「いけませんか？」
「いや」

やや皮肉を言うトリュフォンに少しむっとしたラキアだったが、ラキアの知る彼は始終この調子なのを思い出し、ぐっとこらえた。

「あの娘・・・」

トリュフォンがややぼんやりと窓の外を眺めながら呟くように語る。

「アルフィリースと言ったか。お前にとって彼女はなんだ？」
「観察対象、でしょうか。姉のマイアから傍にいるように言われましたので」
「どういう理由で？」
「それはお恥ずかしい限りですが・・・」

ラキアはこれまでのくだりを述べる。自分が傍にいるのはおいたが過ぎたせいだが、アルフィリースが直接狙われているのも話した。その敵がオーランゼブルだという事も。

「オーランか・・・なるほど、合点がいったよ。そうか、あいつか。あの糞真面目、いつかはロクでもない事をしでかすと思ったが、まさかそんな事をするとはな」
「彼はどうなりますでしょうか？　まさか世界を滅ぼすとは思いませんが・・・」
「あるいはもっとタチが悪いかもな」

トリュフォンはますます仏頂面になった。元々愛想がいいとはお世辞にも言えない人物なので、さすがに話しかけづらくなったラキアが、彼の傍で口ごもる。そしてトリュフォンは黙ってしまった彼女の傍で、ぶつぶつと独り言を言い始めた。

「そうか、ならあの呪印は・・・だが、なぜ・・・いや、そうか。その可能性もあるのか。ならば俺一人では・・・奴に相談するか？　いや、でもなぁ・・・」

「？　トリュフォン様、何を？」

何事かを口の中でもにょもにょと呟くトリュフォンを、ラキアが不思議そうに見つめている。だがトリュフォンは考えがまとまったのか、膝をぱんと叩くと、勢いよく立ち上がった。

「よし、ベグラードもここまでだな。ちょいと俺も動くとするか！　ラキアお前は引き続きあのアルフィリースを見ていてくれ。呪印の事もあるが、もしかするとこれから先、大陸の多くがあの娘を無視できなくなるかもしれん。何かあれば俺に報告しろ」

「はあ。貴方がそうしろとおっしゃるならそうしますが、とてもそのような人物には見えませんが・・・」

ラキアが普段のアルフィリースの姿を思い出し、不服そうに述べた。だがそれらはトリュフォンによって無視された。

「ああ、それと」

「なんでしょう？」

「アルフィリースが背負っている剣、あれは魔剣か？」

「らしいですよ。ハルピュイアが守護していた剣で、たしかレメゲートとか」

「レメゲート・・・なんだか聞き覚えがある気がするな。はて、な

んだったか」

トリュフォンは何か引っかかるような気がしたが、どうにも思い出せなかった。それに他にやるべきことが沢山出来たせいで、この疑問は一端保留にされてしまった。だがトリュフォンはもっとこの事について考えるべきだったのだろう。何せ彼が思い出せない事自体が問題だったのだから。

そしてトリュフォンはラキアを返した後、自分の部屋の片づけを始めた。本格的にこの土地を出払う準備である。彼は人間として転々と大陸を渡り歩いたため、このような準備など手慣れたものである。元々独り身の彼である。特に親しい者もいるでなし、誰に知らせる事もない。むしろ知らせない方が、ひょんなことでこの土地に戻ることがあった時、都合がよいというものだ。

「親しく付き合ったのは、アルドリュースくらいだったか」

トリュフォンが片づけをしながら独り言をつぶやく。彼の部屋にはアルドリュースの残したものもいくつかある。彼が勧めてきた本もそうだし、珍しい東の大陸の細工や、酒などもある。

「この酒は奴とまた飲むつもりだったんだがな」

トリュフォンがぐびりと飲み残した酒を一気に飲む。彼が今まで飲んだ中で最も旨い酒だと思っていたが、どうも味気なかったのは酒の保存状態がよくなかったのか、あるいは一人で飲む酒が旨くないのか。意地っ張りなトリュフォンは認めたくないが、彼はアルドリュースと酒をかわすようになってから特に酒の量が増えていた。そして再び一人で飲むようになってからは、さらに増えていたのだが。

そしてその酒瓶の傍から、一冊の本が出てきた。

「これは・・・一番最近届いた本だな」

トリュフォンが手に取ったのは、アルドリュースが最後に送って来た本。その内容は白紙であり、添え書きとして「捨てないでくれ」とだけ記してあった。字に力がないのは、死期が近い状態で床で書いたからなのだろう。その事を察したトリュフォンは意味がわからないと思いながらも、彼の言葉通りに保存していたのだ。

「全く、奴はなんで白紙の本なんぞを・・・これは！？」

トリュフォンが本を開くと、そこには文字が浮き出始めていた。いかなる仕掛けかと、トリュフォンがまじまじとその本を見る。

「そうか、アルフィリースの魔力に反応するように細工して・・・まったく、器用な事だ。一体こうまでして、何を綴ったものか」

トリュフォンがうっすらと浮かび始めたその本を広げると、そこには彼が見知った癖のある字で確かにこう書かれていた。

『誰にも言えぬこの思いを、ここに残す。人の世界に適応できなかった者より』

と。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その１４～残った思い～（後書き）

次回投稿は、１１／５（土）１３：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その15～アルドリュースの手記より?～

トリュフォンはアルドリュースの手記を一枚めくる。そこには日々の出来事が日記のように綴られていた。まめな男だとは思っていたから日記くらいあってもおかしくはないと思うが、同時に自分の心理を人に知られるのをアルドリュースは極端に嫌がったので、これを自分に残した事自体がトリュフォンには意外だった。アルフィリースとの生活の中で、彼にも変化があるいは訪れたのかもしれないとも思う。どちらにせよ、その答えはこの手記の中にあるのだろうとトリュフォンは思った。彼は手記を読み進める。

『私は今年２０歳を迎えた魔術士だ。時期は春。大陸を長年包んだ戦火はまもなく終息するだろう。これから平和な時代を迎えるだろうが、私の心は一向に穏やかにならない。私は自分の生まれなど知らぬ。親の顔も知らぬ。私は戦争孤児だったから、春が来るたびに自分が一つ年を取った事を知った。そしてその時期を春にしたのは、大地が冬の眠りから覚め、命が咲き誇る時期に私自身が何かの期待感を抱いたからだろうか。この事を非常に馬鹿馬鹿しいと思ってしまう私は、やはりくだらない人間なのだろうか？

私が抱いた疑問こそ、多くの人間にとって非常にくだらないものなのだろう。だが私は自分という人間がいかほどのものかを見定めたくなった。そのために、私はこれから魔術教会を出奔しようと思う。私などに目をかけてくれた会長には悪いが、私は魔術教会の勢力争いなどうんざりだ。どうせ私のように何の後ろ盾がない人間なぞ、ここでは出世など見込めないし、妬まれれば暗殺されるのがオチだ。まあ会長のような例外もあるが、あれは不老と、あれほどの実力をもって初めて成しえることだろう。私のように攻撃向きではない魔術士は、ここでは出世など望めない。

私がこの魔術教会で修めたのは、実に多岐に渡る魔術だ。私に使

えぬ属性のものなど存在しなかったし、その事実は最初は魔術教会を騒然とさせた。それはもう一大事で、私などが伝説の英雄王と比較されるほどに。だが私の使用できる魔術はどれも初級から中級にとどまった。学びこそ早かったが、伸びしろにすぐに打ち止めがくる。途中から自分でもわかり始めたことだが、それは先のないことが分かっている梯子を上り、「ああ、やはりないのか」と確認するような作業だった。なんでもできる、同時に何もできないというのが私に対する教会の最終評価だった。

そんな私が唯一評価されたのは封印術だった。閉じ込める。この一点において私の才能は発揮された。というより、私が封印という分野に興味を抱いていたからかもしれない。私は昔から鳥かごの鳥を見ると落ち着いた。可愛らしいという理由ではない。無論可愛らしいとも思うのだが、それ以上に羽を持ち、自由に空を飛びまわる鳥を閉じ込めることができるという事実に対する優越感。この２０年で私の心を慰めたのはそれだけだった。いずれは世界をこの手に閉じ込めてみたい。そんな大それたことすら思うことがあった。

この思いが歪んでことは知っている。だが私という人間はそのようなものなのだ。それを非難する資格は誰にもない、させない。だからこそ私はいかにも常識人としてふるまえるようにあらゆる礼儀作法を学んだ。敵を作らぬように、誰にも疎まれないように、いや、好かれさえするように。友好術を、恋愛の術を、社会的なやりとりの術を、人の心理の動き方を。やがて周囲は私の意図した通りに反応を示すことになる。それは一種の快感でありながら、地獄の始まりだった。

そんな私の事を会長は見抜いていたのかもしれない。魔術教会を辞める意思を伝えた時に、「好きにやれ」とただ一言背中を向けながら言ってくれた。魔術教会からの追手もなく、私は非常に恵まれていたのだろう。私などを大切にしてくれる者がいるなど、やや後ろ髪をひかれない気がしないでもない。だが元々感謝の念が薄い私の心を占めるのは、これからどこに行こうかという期待である。昔、

私の事を王侯貴族になる相があると言った占い師がいた。別の者は歴史に名前を残す大悪党になると言った。あるものは英雄になると言った。おべんちゃらにも等しいことだろうが、期待しないでもないではないか？　そうなると向かうべきは大都市か、あるいは秘境か。目の前の木の枝を放り投げて、今日は行き先を決めるとしよう』

初日の日記はこれで終わっている。以降連日彼の日記は綴ってあったが、時間がなかったのか、たまに日が抜ければその理由まで添えて次に書いてある。非常にまめな彼らしいと、トリュフォンは自分の感じたアルドリュースが全て嘘というわけではないと思ったのだった。

ぱらぱらと頁をめくりながら、トリュフォンは日誌を読み進めていく。どうやら一年近く、アルドリュースは各地を放浪していたようだ。生活費を稼ぐために傭兵のようなこともしているし、商人の真似事、さらには詐欺まがいのことまでやっている。女を口説き落としてその厄介になっていることもあるし、まさに人間がやれることは一通りやっているといった様子だった。ハウゼンや多くのベグラード市民、あるいはアルフィリースが知れば軽蔑ものの行動も多かったが、ただ彼は自分の楽しみのために誰かを陥れることだけはしていなかった。それはかれなりのけじめのつけ方だったのか。その理由は手記に書かれてはいなかったが、やはりアルドリュースは根っからの悪人というわけではなさそうだと、トリュフォンは少し安心もするのだった。

そして一年近く放浪を続けた後、アルドリュースには転機が訪れる。

『今日で旅を続けて一年近くなるだろうか。相変わらず私は自分の道を見つけられないままだ。現在立っている大地にはこれ程にも道が分かれているのに、私にはそのどれもがひどく不安定に見えてしまう。土地に縛られる農民や、血や契約に縛られる貴族や騎士に比

べればなんとも贅沢な悩みかもしれないが、今の私にとってはその悩みが全てである。

あてどなく旅をするうち、私は一人の老婆に道端で出会った。どうやら占い師のようだ。どうせやることもなし、久しぶりに占ってもらうこととした。だが、その言葉は私にとってこれからの人生を変えるものになるかもしれないものだった。

その老婆の第一声はこうである。

「ようやくこの婆の前に来たか、坊主」

その言葉自体は大したことはない。多くの占い師が自分の予知能力をいかにも大きく見せつけるために使う常套文句だ。私は笑顔で返した。

「ええ、ようやく。あなたにこれから先の事を占ってもらうために」

こう返せば、多くの占い師がすぐに占いを始めてくれる。そこから粗を探し、論破していったこともあるがまあ今回はその気もない。だが老婆の反応は意外だった。

「占ってもよいのかえ？　一つ言っておくが、この婆は良い占いなどできはせぬ。貴様の運命は、これからどうあろうとみじめになるだろうからな」

この言葉には私は驚いた。普通、占い師はより多くの金を相手からせびるために、良い内容ばかりを占う者が多い。多少勿体つける輩はいるものの、基本的には相手の事を褒める。確かに詐欺の手口として、相手を散々脅したうえで、どうすれば不幸に陥らずにするかをさらに別途の手数料で占おうとする輩もいるが、老婆の表情は真剣だった。おそらくは本気で私の事を考えているのだろう。なら

ば、なおのこと興味をひかれる私がそこにいた。正直、私は自分の能力には自信がある。この一年で自分が並よりはだいぶ優れた人間であることはよくわかった。そして知恵と魔術を駆使して周囲を意のままに操ることも吝かではない私に、何の不幸が訪れるというのか。

「ならばなおの事占ってもらいましょう。不幸な出来事は予め知ることで避けることができるでしょうから」

「普通はの。だがそなたの場合は事情が違う、不幸を避けれるなら誰も苦労はせぬだろうよ。だがどの不幸が良いかは選択できてもいいじゃろう。そのための占いならば行ってもよいが、どうするかえ？」

「・・・いいでしょう、そこまで言われては逆に引き下がれませんよ」

私はいささかその老婆に不気味さを覚えながらも、彼女の言葉を受け入れた。彼女は懐から何やら輪っかにした何色もの紐をくくりつけた大きな紐を取り出すと、それを手の中で揉みしだきながら呪(まじな)い言葉をつぶやいていた。そしておもむろに紐を放り投げ、そこにまたしても懐から取り出した様々な色の石を放り投げ、収まった場所をまじまじと見ていた。

「手をみせるがよいぞ」

「・・・」

老婆はひとしきり紐と石を眺めた後、今度は私の手を眺めた。私は彼女が何をしているかなど皆目見当もつかなかったので、彼女のなすがままだった。だが彼女が私をどうにかしようとしているわけではない事だけは、はっきりとわかっていた。

やがて彼女は私の手を放すと、残念そうに首を振ったのだ。

「どうした、お婆」
「やはり運命は変えられないのかねぇ・・・少しあんたにゃ期待もしたんだが」
「どういうことだ？」

あまりの老婆の落胆ぶりに、さしもの私も気になった。この老婆は何を伝えようとしているのか。私の知的好奇心がくすぐられ始めていたのだ。だが老婆の言葉は素っ気なかった。

「お前に伝えることはできないよ。そういうことになっているのさ」
「それはないだろう。そこまで思わせぶりなことを言っておいて」
「まったくもってその通りだがね。だが本当に言ってはならない事なんだよ。言えば本当にどうしようもなくなるからね」
「そう言っておいて、実は全てが適当ではないのか？　よくあるイカサマというやつだ」
「なるほど、そうきたか。信じる信じないはあんたの勝手だが、ここでこの婆の話を聞かないってのも癪だね。こちとらあんたのような人物を探して数十年も各地を放浪したんだ。この婆の力を見せてやろう」

そういうと、お婆は先ほどの紐と石を再び見始めた。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その１５～アルドリュースの手記より?～（後

次回投稿は、１１／６（日）１２：００です。

「そうさね・・・たとえばあんたは今まで、人を拷問して殺したことがあるね」

「・・・何を根拠に?」

「根拠なんてこの婆の占いだけさ。その人物は・・・あんたを貶めようとした人物だ。あんたより年上の師匠、いや、何かの指導者だったのか。そいつがあんたを貶めようとしたために、あんたは先手を打ってその男を拷問し、監禁し、そのまま飢え死にさせた。どうだい?」

「面白い話だが、証拠がない」

「確かに証拠はない。だからこそあんたは魔術教会の追手もなく、こうしてのうのうと生きている。もちろんそいつが魔術教会のテトラスティンその他数名に嫌われていて、殺してもむしろ喜ぶ人間の方が多いとは計算済みだがね。だが、あんたの表情が証拠さね。少し顔色が変わったじゃないか」

老婆の瞳が鋭さを増す。その目に私はややうすら寒さを覚えないでもない。なぜ私のやったことを知っているのか。なおも老婆は続けた。

「他にもあるよ? あんたは貴族の娘を誑(たぶら)かし、ついには卑しい娼婦にまでその身を落とさせた。そうだね・・・伯爵令嬢ってとこか。いたいけな娘に惨いことをする」

「・・・」

「他には・・・町と町を争わせ、ちょっとした戦争に持ち込んだね? 集団において人心がどのように動くかを試した結果だ。山賊をまとめ上げ、義賊に仕立て上げたなんてのもある。全く大した人心掌握術だよ、その若さで恐れ入る。あとは・・・」

そこまで老婆が言った時、私は素早く短刀を抜いて老婆の喉元に突き付けていた。口からは、思ってもみないほど低い声で自然と言葉が紡がれる。

「貴様、どうやら死にたいようだな」

「ふぇふぇふぇ、悪党の部分が出たね。だがそうも簡単に凄んじゃいけないよ。悪魔は笑顔を見せながら人に剣を突き立てるもんさ。まだまだ若い、そんなんじゃこのお婆はびびりゃしないよ。演技はおよし」

「ふむ、どうもよくないな」

私は剣を収めると、お婆に再び向き直った。どうやら多少の脅しの類は効かない相手らしい。

「私の負けだ。あんたの力を認めよう」

「賢いね。少なくともこの婆のことなんか本気で信じちゃいないが、話を聞く気にはなったか。いいだろう。これから言うことをよく聞くんだ。あんたにも、周りにも一大事だからね。この言葉を残すためにこちとら生きてきたと言っても過言じゃないんだ」

「ふむ、期待している」

それは私の偽らざる本心だったが、このお婆にはどう映ったものか。彼女は意地悪そうな笑みを浮かべながら、やや得意そうに話を始めた。

「まず一人目だ。最初の女はあんたを王にする。あんたは望まれるままに王となり、その権威は飛ぶ鳥を落とす勢いになるだろうさ。あんたがその気になれば名を世に知らしめ、この大陸に覇を唱えることもできるだろうよ。ただし！」

老婆の目がかっと見開かれる。

「その代償としてあんたの心はゆっくり腐ってゆく。その女の愛情によってね。その女はあんたをこの上なく愛するが、ついぞあんたという人間を理解し得ないだろう。あんたは山のようにあんたを慕う人間に囲まれながらも、永久に誰にも理解されない。あんたの人生は寂しいものだろうさ」

「王なのにか」

「人としての満足度合いに、身分なんか関係ないってことさ」

老婆は得意そうに笑って見せた。その笑みに私は深い意味を感じ、考え込んでしまう。だがそんな私をよそに老婆は話を続けた。どうやらかなり話に没頭し始めたらしい。

「次の女の話をしよう。次の女はあんたを神にする。その女は・・・」

「待て、神だと?」

「そう、神さ」

老婆はニヤリと口元を歪めた。神とはまた大それた占いだ。そもそも神とはなんなのか。地方の民話によっては天上に住まう者とも言われるが、誰も見たものはいまい。人間には翼がないのだ。私は自分が優れていることは自覚しているが、神を目指すほど大それてもいなかった。だが老婆の方は自信満々のように語る。

「そう、あんたは神にもなれる。婆もこの占いを見た時、自分の占いを疑ったさね。だけど、何度占ってもこの占いがでるんだ。これは間違いないだろうね。二人目の女はあんたを神にするんだ。どうやってかは知らないよ」

「神か・・・定義も曖昧で実感がないな」

私は知らず首を横に振っていた。神と言われても実感がない。土地によっては伝承などに登場する神に祈る習慣もあるが、私は神など信じてはいないし、そもそも誰かに祈るとか頼る習慣がない。信じることができるのは自分だけだ。

老婆の言うことには信憑性がなかったが、だが嘘を言っている目でもない。ならばやがて私に降りかかる運命なのだろうか。私の想像の及ばぬものになるのはやや楽しくもある。その時が来るのを座して待つのは、少し楽しみでもある。どうやら私は老婆の話が少し楽しくなっているようだった。質問する自分の声が少し高揚しているのを感じる。

「では最後の女はどうなのだ？　王、神とくれば、次は何になる？」

「最後の女は、あんたを人間にするのさ。あるいは魔王にね」

老婆は突然悲しそうに眼を伏せた。その言葉の意味がわからず、私は困惑した。人に困惑させられるなぞ、実に久しぶりかもしれない。

「待て、私は女によって人生が好転するのではないのか？　王も神も好転しているようにしか思えぬが。それなら神から人間にしろ魔王にしろ、どっちになるにしても理屈が合わぬ気がするが」

「最初にどの不幸を選ぶか、と言っただろう？　それにこの婆はそうとも思わないがね。婆が見る限り、あんたはまだ人間じゃないともいえるがね」

「人間では・・・ない？」

その言葉に、私は少なからずどきりとした。その事を実は私自身が疑っているのだ。人が傷ついても心が痛まず、人が死んでも何の

感慨もわかない。心が高揚するのは何かを閉じ込めている時だけなど、とても世の常識に照らし合わせて自分がまともな人間であるとは思えなかった。

だからこそ、王よりも神よりも、人間、あるいは悪魔という言葉は心の隙間に突き刺さるような感じがした。

「人間ではないとはどういういいことだ？」

「それはあんたが一番わかっているはずさ。生き物としての人間という意味は簡単だが、真に人間たろうとしている者などそうはいない。多くの者は人間が何かという疑問にすら気づかず、生きている。その方が余程幸せかもしれないがね。あんたみたいに悩んでしまう人間は、そのほとんどが満足な答えを得られず死ぬ。だからこそ彼らは他の幸せで疑問を代償しようとするのだが、あんたはそんなことでは満足しないだろうね。だからこそ魔術教会を出奔したんだろう？　で、どうだい。この一年で満足する答えは得られたのかい？」

「いや・・・まだ手がかりすら見つけていない」

いつの間にか私は素直な心情を吐露していた。私の中で見ようとしていなかった疑問が老婆の言葉によって形を成していくようで、私は生まれて初めて素直な心境を人前で晒したかもしれない。

「老婆よ、そなたの言葉をこそ私は求めていたのかもしれない。生まれて初めて心から人に教えを乞う。私はどうすればいい？」

「さて。それを決めるのはあんただが、この婆からも一つ言いたいことがあってね。真に伝えたいのは今から言う言葉さね。

あんたは王でも神でも、ましてや魔王になっても満足はできないだろうよ。それだけは覚えておくといい」

老婆がここまで言うと肩の荷を下ろしたかのように微笑んだ。私は老婆の言葉を心で噛みしめながら、どこかに安堵を覚える自分に

気が付く。そしてしばらくして、ふとした疑問が浮かぶ自分がいた。

「ご老体、いくつか疑問があるのだが」

「なんだね」

「私はこれからそのどれにもなるのだろうか。人の一生で味わうには、些か多すぎる気がするのだが」

「実際にはそのどれかになるだろうね。ただ機会が訪れる順番はこの婆の言った通りだと思うよ。そういう星の巡り合わせだからね」

「なるほど、では満足できるか否かで決めればよいのか。では最後にもう一つ。私が王になるには、どこに行けばいい？」

「愚問だね。その頭は飾り物かい？　あんたはよくわかっているはずさ。どこの国に行けば一番自分が成り上がるのに都合がいいかね」

「ふむ、了解した。では進路を東に取るとしよう」

その言葉で決心がついた。士官というのは私のこれからの一つの選択肢だとは思っていた。王になる可能性があるというのなら、制約の多い士官も悪くはない。私はかねてから士官を考えていた町に足を向けた。

その時、ふと風が吹いた気がした。そして自分の恩人足りえるかもしれない老婆の名前すら聞いていない自分に気が付き、振り返る。だがそこにはすでに誰もいなかった。風に流されるほど存在が希薄なお婆ではあったが、やはり魔術士だったのだろうか。少なくとも私よりは格上であったろう。

少し妖魔の類に化かされた気がしないでもなかったが、私は気を取り直して東に向かうことにした。目的地はさしあたりベグラードだろうか。長らく続いた大戦争も終わりに近づくが、そこならばいまだに出世の機会も溢れているところだろう。戦争で多くの人間が死んだ。どの国も人材には不足しているはずだ。

まずは情報収集するとしよう。話はそれからだ。』

その日の手記はそこで終わっていた。トリュフォンは不思議な思いにとらわれた。魔術は真竜やエルフが人間に教えてから独自の進歩を遂げはしたが、ここまではっきりとした過去見や予知をできるものは真竜にはいない。エルフにもはたして何人いるか。ここまでの人間がいれば、もう少し有名になってもよさそうなものだが。

「まあ続きを読むとしようか」

トリュフォンは一旦疑問を胸にしまい、次の頁をめくるのだった。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その１６～アルドリュースの手記より?～（後

次回投稿は１１／７（月）１２：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その17～アルドリュースの手記よりその2～

トリュフォンは手記を読み進めた。そこにはアルドリュースの日常が書かれており、彼がどれほどの速度で知識を吸収し、ベグラードで彼が出世するための策略を練っていたのかがよくわかった。その彼の戦略を見ながら、トリュフォンは空恐ろしくなる。

「一人の人間が考え付くことではないな。まさに天才」

トリュフォンは素直に感心した。知性という言葉は概して一つの基準を持たぬが、記憶力、発想の鋭さ、頭の回転の速さということでは確実にアルドリュースは真竜を上回る逸材だった。

その彼の策略はおよそ夏までには完成されており、彼はしばらくして周辺の国にも目を付けたようだった。さらにアルドリュースは今まで稼いだ金を使い、各地に間者を放ち情報収集を始めた。アルドリュースの情報収集の仕方は変わっていて、彼は土地風俗を調べるよりは人物を中心に調べた。しかも彼らの私生活を徹底的に調べ上げ、弱みを握ることに専念したのである。最初から脅迫をするつもりで彼は人間を使っているのだ。アルドリュースが自分以外の誰も信用していない事の裏返しと言えるだろう。

やり方はリサに似ていると言えなくもないが、実力行使という手段を持たないリサとは違い、アルドリュースは必要があれば誘拐やそれ以上の暴力の行使も厭わなかった。彼はたちまちベグラードで自分の本拠地を築き、出世のための目星をつけたのである。

やがてアルドリュースは本格的に動き出した。

『

春の月の一日目

また春が来た。既に出世のための準備は整っており、今日から動きだすことに決めた。一年近くも策を練ったのだ。もはや十分だろう。あらゆる状況を想定して、色々な所に根回しを完了している。もはや動くだけだ。

今日はベグラードで一般兵士の公募がある。平和になりつつある今や軍人に払う給料も馬鹿にならないからそれなりに狭き門だが、既に試験官も買収してある。もっとも実力で落ちる気は全くないが、念には念をというやつだ。

学問所に通い士官候補生から軍に入る手もあるが、それは時間がかかりそうだったから辞めた。それよりも軍に先に入り、上役たちの目に留まる方が早いだろう。念のため文官の採用試験も受けるが、それはパフォーマンスというやつだ。そのための手筈はいくらか整えたが、問題は私に無条件で協力する人間が何人いるかだ。手っ取り早く魅了の魔術を使ってもよいのだが、軍や宮廷に入れば魔術士も沢山いるだろう。そうなれば見破られるのは時間の問題になる。ということは、自分の魅力で友人を作ることになるわけだが・・・友人なるものを作ったことのない私にはこれが一番の難題だ。さて、どうしたものか。

春の月の二日目

試験は予想通りあっさりと通った。あの程度の文官の試験なら主席でも通過するのも当然か。そこをあえて断るからこそ、意義もあろうというもの。これで私についての風評は出回るだろう。このためだけに試験官を買収したのも馬鹿馬鹿しかったか。まあ彼らにはまだ使い道を用意しているから良しとしよう。始末などいつでもできるのだから。

さて、軍に採用されたはいいが、次なる方法はどうすべきか。手はいくつか考えているが、しばらくは様子を見ながら決めるとしよう。

春の月の十日目

今日とても面白い人材を見つけた。今年の士官候補生の集団に、一際優秀な人物がいるらしい。名前は確かハウゼンと言ったか。私の友とするのに好都合な人物像かもしれない。そう身分の高い士官ではないようだが、さすがに一兵卒の私が話しかけるのは無理だろう。何とかして彼の興味を引かなければ・・・

春の月の１５日目

ハウゼンの事を調べるうち、面白いことがわかった。どうやら彼はさる伯爵のお気に入りらしく、その人物の従騎士のような事をしているらしい。上流階級ともつながるとは、実に好都合だ。彼にはせいぜい私の役に立ってもらうとしよう。
だが彼を見るにつけ、この国の要職についてもおかしくなさそうな逸材ではある。私に心酔する人物がこの国の要職につけば、後々やりやすいか・・・？

春の月の２１日目

今日もベグラードは平和だ。何も起こらない、あまりにも起こらない。確かに国民の大人しい気質も考えれば事件が少ないのも頷けるが、これでは出世の機会に恵まれない。
ならば、活躍の機会は自分で作るまで。こういう時のために、予め色々と手を回しているのだから。

春の月の２７日目

今日、町で集団強盗事件があった。相手は武装しているらしく、町の警備兵に負傷者が多数出たらしい。平和な都市なのに、不思議

な事もあるものだ。
そして市長からの要請で軍が動くことになった。私は第１９区の捜索担当部隊に編成された。どうやら盗賊団は１９区で捕まることになりそうだ。

春の月の２９日目

無事盗賊団は壊滅した。首魁の男は言葉を発する事もなく、私が自ら討ち取った。彼らは最後まで抵抗をしたため、一人残らず殺さざるをえなかった。そういうことになった。
私は功を認められ、昇進と報奨金が約束された。報奨金はどうでもいい。金は親切な男達が、最近私に残してくれたから。それよりも昇進が大きい。
なぜなら、私は自分の部隊を持つことになったからだ。たかが１０人だが、定期的に町の警備などもできるようだ。これが大きな利点である。さて、今まで得た情報の中で、あこぎな事をやっている人間でも洗い出しておくか。次の騒動が起きるだろうから。

春の月の４３日目

今日捕まえた商人で今月三人目だ。不正取引の現場を押さえることに成功した。やや逮捕の速度が早過ぎる気もするが、まあそこは旨くごまかせるだろう。実際に一件の解決は偶然であり、運も私に向いているといえる。
少なくとも私は上司の覚えも良く、さらに多くの部下を任せてもらえることになりそうだ。ならば、もう少し大きな事件が必要か。そう、例えば上流貴族が誰かに襲われる、とかどうだろう。今度は少し時間をかけないとな。ああ、その前にハウゼンに偶然を装って会っておくとするか。その方が事件で出会った時に印象が増すだろう。

緑が芽吹く月の２日目

こちらから仕掛けるまでもなく、ハウゼンの方から接触を図って来た。それでこそ彼に私の評判が聞こえるように根回しした甲斐があったというもの。状況は望むとおりに進んでいる。

だが貴族を襲う相手が問題か。あまり人を使いすぎると、後で口封じが面倒だ。それに厄介な事を口走られても困るし、今回は魔獣でも使うとするか。問題は場所だな・・・

緑が芽吹く月の７日目

面白い噂を聞いた。この国の王女が来年にでもお披露目をするようだ。彼女はまだ１０歳だそうだが、蝶よ花よと育てられればさぞかし世間知らずなことだろう。彼女が私の最初の運命の女かもしれない。確かに身分から言えば私を王にしうる女だ。早めに多少探りを入れておくか。

緑が芽吹く月の２８日目

用意は整った。後は貴族が移動するのに合わせ、町の外回りの警備時間を調整するだけだ。さて、これが難題だが、最初に抱きこんだ男達が役に立つか。逆にいえば、これが済めば奴らは用済みだな。どんなに頭が悪かろうと、さすがに何かがおかしい事を勘づくだろうからな。彼らには行方不明にでもなってもらうとしよう。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その17～アルドリュースの手記よりその2～

次回投稿は、11／9（水）12：00です。

伝わる思い、伝えられない思い、その１８～アルドリュースの手記よりその２～

陽光の月の１０日目

時期は夏というやつだ。やたらに私を照りつける日が強い。どうやら太陽は私を歓迎しないようだ。まあそれも納得できなくもない、私がやっている事を考えれば。

だが陽が強い方が好都合。魔獣の待ち構える木陰に、労せずして獲物を誘導できようというもの。さて、ほどなくして私の予定通りに事は進んだ。無事に魔獣は撃退され、貴族は私が助け、ハウゼンはまるで私を英雄でも見るような目つきで見てくる。間者の報告では、どうやら私に都合の悪くなった男達は町から姿を消したらしい。順調だ、全てが順調だ。ここまで狙い通りに事が進むとは、私は自分が時々恐ろしい。

陽光の月の１７日目。

私は助けた伯爵の紹介で、様々な社交場に出入りできるようになった。私が礼儀作法において、上流階級に交じっても恥をかかない事を伯爵が評価してくれたおかげだ。また彼を通じて献策を上層部に上げる事も可能になった。上手くすれば宰相クラスの人間にも私の献策が目に留まるかもしれない。そうなればもっと話は早くなるだろう。とりあえずこのつながりは重要となる。伯爵自身も誠実な人柄であるし、利用しやすそうだ。

そして伯爵について登城する中で、宮廷の事情というものも理解でき始めた。どうやら王女様のお披露目は来年の春ということらしい。それまではせいぜい策を巡らせておくことにしよう。

そして私にも苦手な事はある。武器の扱いという者は魔術教会で

も一通り教わるわけだが、さすがに職業軍人ほどには上手く扱えない。鍛錬はまじめに行う必要があるだろう。これぱかりは時間をかけざるをえない。全く面倒なことだ。

深緑の月の２０日目

うだるような暑さが続くが、ここは水源豊富な都市なので水浴びには困らないのは素晴らしいことだ。ところでまた最近面白い情報を得た。どうやらお披露目を控えた王女は非常にワガママであり、特定の女官達にしか世話をさせないそうだ。その人物達を特定し、一人口説き落とすとしよう。それが一番王女の詳細な情報を得られる方法だろう。

夜長の月の３５日目

順調に作戦は続いている。最近では日記に綴るのもたわいのない出来事ばかりだ。階級は多少上がって、１００人ほどは部下を抱えるようになったか。私の献策も所々上層部取り入れられているようだ。今度新しく労働者確保のための街区を作るらしいが、それは非常に面白そうだ。機会があれは設計図などを書いて提出するのもいいだろう。

ところであと何日かすれば騎士団の武術大会などがあるらしい。基本的に軍人は全員参加だが、私は隊長格なので一般兵が参加する一次予選こそ免除だが、それでも優勝までには十数回勝たねばなるまい。最後は将軍なども出てくるし、まあ土台無理な話だ。適当なところで負けるとしよう。

落葉の月の２０日目

困った。今日の武術大会の結果、私は上位１６人に残ってしまっ

た。ここから先は王族の御前試合になるらしい。そこまで目立つ気はなかったのだが、一体どうしたものか。ここから先は下手な負け方などもできないし、また私自身勝ちを望む自分がいる。一体どうしたものか。

落葉の月の２２日目

結果として私は準決勝で負けた。さすがに大将軍の地位に着く者は強かった。私ももはや全力だったが、さすがに及ばなかった。いや、汚い手を使えば勝てぬでもなかったが、そういった事を行う場でもあるまい。それに真っ向勝負をしてみたかった自分がいるのも不思議な話だ。私は思いのほか汗水たらすのが嫌ではないのかもしれない。なんにせよ、多少清々しかったのは認めざるをえなかった。

まあ王族の覚えもめでたくなり、将軍達にも直に声をかけてもらえるようになった。これはこれで良しとしよう。

それにしても、辺境で戦闘に及んでいる人間達を合わせても、私は軍の中で１００傑には入るだろうか。私にはどうやら武器を操る才能もあるらしい。こちらに心血注いでみるのも案外悪くはないかもしれないな。武器の扱いくらい人並であって欲しいと望んだが、それも無理な話だったか。

雪降る月の２７日目

口説き落とした女官は実に色々と王女の事を話してくれる。食べ物の趣味から、体をどこから洗うのが癖という事まで。この女はかなり田舎の出身らしく、口が軽い。まあ見目も体もそこそこだが、適当に王女と仲良くなったら田舎にお帰り願おうか。適当にならず者にでも襲わせれば、恥じ入って自分から姿を消すだろう。

静寂の月の１１日目

王女のお披露目が決まった。次の満月に合わせ、社交界に顔見せを果たすらしい。だが彼女、ミューゼの情報は既に聞いている。とんだじゃじゃ馬で、踊りの一つも踊れぬらしい。まあ通常の子どもであれば、木登りなどが好きな年頃だ。宮廷の礼儀作法に付いてあれこれと言われても、実感などなくて当然だろうな。馬鹿なら扱いやすいが、あまり頭の程度が低くても退屈というもの。ほどほどが良いのだが、それは私の贅沢か。

ともあれ、私は既に作戦を考えてある。宴の途中に王女が退屈した所で、例の女官に外まで連れ出してもらうつもりだ。そこで私は王女と運命的な出会いを果たす事になっている。女官にはそれが私の出世に必要だと言い含めてある。最初は反対した女官も、何度か閨で可愛がってやれば言う事を聞いた。まったく女は単純なものだ。私が他国の間者だったらどうするのか。まあ大国と言えど、所詮このようなものなのだろうな。』

ここまで読んでトリュフォンは一端傍にあった酒を口に含み、当時の出来事を思い出した。この何年か後の話だが、町にはまことしやかに噂が流れた。一兵卒から出世いた男と王女が恋仲だという。普通に考えれば結婚が決まったのならともかく、そのような事を市民が知るはずはないのだが、アルドリュースが噂をばらまき外堀から埋めたということか。事実はどうあれそのような噂が出回ってしまえば、他国の間者も当然耳にする。そうなると、ミューゼ王女へと婚姻の申し込みも自然と減ろうというものだ。一兵卒の男の慰み者になった王女など、他国の王族・貴族が望むべくもない。

アルドリュースは確かに見目は悪くないが、特別美男子と言うほどでもない。どうやって意のままに動くほど惚れさせたのかとトリュフォンも不思議に思っていたが、幼少期から刷り込みを重ねていれば納得もいく。トリュフォンはさらに読み進めたが、そこにはアルドリュースがどのようにミューゼ王女を口説き落として行ったかが

詳細に書いてあった。男が女を洗脳するさまが、そこにはまざまざと書かれていた。ターラムの女衒も舌を巻くほどの手管だった。

アルドリュースは王女の嫌がる者を全て取り払い、彼女の望む物は何でも準備して見せた。ミューゼが寂しいと思う時には話し相手として彼女の私室にこっそり参上し、彼女が踊りやお茶の稽古が嫌で逃げ出したいと思えば、彼は彼女を見事に連れ出して見せた。ミューゼ王女の母は既に亡く、王に相手をしてもらえない彼女は、幼い頃から彼女専用の王宮で女官に囲まれて過ごす日々だったのだ。彼女が徐々にアルドリュースに依存していくのもやむをえないことかもしれない。

やがて彼女の信頼を勝ち得たアルドリュースは貴族の位を与えられ、彼女の親衛隊が編成される時にその隊長に任命される事となる。彼が軍属となってから三年、平民としては異例の出世速度だった。

そして時期はさらにその3年後の事。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その１８～アルドリュースの手記よりその２～

次回投稿は１１／１１（金）１２：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その19～アルドリュースの手記よりその2～

『春の月の17日目

今日もミューゼ殿下は私を笑顔で迎えてくれる。親衛隊隊長に出世したのは良いのだが、宮廷内に私室を構えることになったのはいかがなものかと思う。ミューゼ殿下の要望では断りようもなかったのだが、流石にこれでは世情が掴みづらい。それに裏で動くのも難しくなる。

だがミューゼ殿下も変われば変わるもので、最近では滅多な事では我儘を言わなくなった。最初に会った頃のじゃじゃ馬っぷりは既に影を潜め、大人の女性として生まれ変わっていた。その変身は予想を遥かに上回り、指先からたなびく髪すら優雅であり、そうなるように仕向けた私ですら時に見惚れる。そんな万人が見惚れるような女が私だけに特別な笑みを向けるのは悪い気がしない。

成人を迎えた彼女には流石に他国から婚約の話もあったが、「私には既に心に決めた人がおりますので」と公衆の面前で相手を笑顔で振った時は傑作だった。同時に私はなぜか息苦しさを覚えたが、いずれ彼女は私との婚約を発表するつもりなのだろう。

ところで私がこの前出した献策はまた最高議会で取り上げられそうだ。このままいけばいずれ宰相の地位にも就けるだろう。現在進行中の都市計画は非常に他の国にも受けが良く、各国から技術者や学者が勉強に来ている。いずれ私の都市計画が世界の標準になるのかもしれない。悪い気はしないが、私の様な人間の思考が世界に散らばるのは、それでいいのかと私は世界に問いかけてみたくもなる。だが世界は広く、私の声は霧のように拡散するだけだろう。世界とは恐ろしいものだ、全くその全容が見えもしない。だが神になれば、その世界を全て我が手に収めることになるのだろうか？　最近その事を考えないでもない自分がいることに私は気づいた。』

さらにその日誌より5年後。最高議会に出席するようになったアルドリュースは、思うがままに自分の辣腕を振るい始めた。国は見る間に栄え、人は先を競ってイーディオドに殺到した。

アルドリュースの日記も相当に忙しいのか断続的であり、数日の事がまとめて書かれるようになっていた。内容も主に自分の行った政策の事がほとんどである。この数年はほとんど仕事しかしていなかったようだ。

『夜長の月の２４日目

最近は本当に忙しい。自分で立ちあげた政策のせいだが、さすがに私の体が悲鳴を上げている。王女自らが祝いと労い(ねぎら)を兼ねて私に差し入れを持ってきたが、流石に深夜に男の部屋を訪れるのはどうなのかと窘めると、頬を膨らましながら帰って行った。ああいう仕草は幼い頃そのままなのだが、まったく彼女にも困ったものだ。

祝いといえば今日私は将軍に任命されたわけだが、宰相補佐の話も来ている。現在の宰相は非常に高齢なので、宰相補佐ともなればまもなく宰相だろう。そうなればミューゼ殿下との婚姻も正式に発表されるはずだ。

国王も最初は私に難色を示したが、ミューゼ殿下が既に私以外を夫に望まない事を暗に示しており、国王の方がついに折れてしまったようだ。それに国王自身も私の事はお気に入りの様で、よく愚痴を聞かされる事も多い。この前などは良き後継ぎができたら自分は国王の座を早く引退したいなどと言われた。

仮に国王が退位したとして、庶民出身の私が王になることはないだろう。貴族の意識が強い東の国ではなおさらである。だが私に男の子ができれば話は別だ。彼は正式な世継ぎとして、王位を継承するだろう。ただ幼い子供に実権などないので、そうなると私は国王代理として国を治める立場になる。

だが私に男の世継ぎが生まれなかったら？　その時は諸外国との体面上、私に正式の国王就任の話が来ることになるだろう。ならばそうなるように策略を練るまでだが・・・なぜか最近は王位を狙う事に興味が持てない自分がいる。王宮を出て自分の邸宅を持つ算段もしているし、家ができて落ち着いたらその事もゆっくり考えてみるとしようか。

静寂の月の３１日目

邸宅が全て完成したわけではないが、無理を言って私はこの屋敷に移らせてもらった。建前はマイティマスター取得のためとしたが、実際には他の狙いのためだ。王宮に多少閉塞感を感じたためということもある。

その理由はまた後日書くとしよう。さしもの私にも憚られる事だから。

春の月の１３日目

マイティマスター取得の前に、私は今年に行われる統一武術大会への参加を決めた。東の諸国の持ち回りで年に一度行われる、各国間の代理戦争。貴賤を問わず一般参加も行われるこの大会は、大戦期が終結してから行われるようになったものだ。国同士の戦争を、各国最強の戦士同士の対戦で代用しようという考えだ。どうも人間というものは争っていないと気が済まないらしい。東の諸国は文明人を気取っているが、私に言わせればてんでおかしい。

ともかくイーディオドからは私と数名が出場するが、どうせローマンズランドかアレクサンドリアが優勝するのだろう。特にアレクサンドリアからあの精霊騎士が出てくれれば、対抗馬などたかが知れている。

だが体を本格的に動かすのは久しぶりだ。気分転換にもなるだろ

うし、私も出場に向けて鍛錬するとしよう。もちろんマイティマスター取得のために、学位のための研究成果もまとめねばなるまい。大陸最高の騎士の称号は、腕力だけでは取れぬのだ。腕前、知性、実績が全て揃って初めて評価される。大陸最高の騎士の栄誉なのだから、まあそのくらい当然だろう。

ミューゼ殿下は本来ならへそを曲げたいところだろうが、私の教え通り我慢して待っている。健気な事だ。

落葉の月の１１日目

一月ほどの間開催される統一武術大会は終了した。この大会は様々な部門があり、剣のみ、槍のみ、女性だけなど様々な部門があるが、やはり全ての差別なく行われる総合部門が一番だろう。私はといえば、全部で７つ程の部門に出場したか。そのどれもで１０位前後の成績を収めたが、どれも優勝に絡む事はなかった。私が多数の部門に出場した事は有名になったが、私にすれば不名誉もいいところだった。どの部門でも一番になれないなど、私は若い頃と何一つ変わっていないのではないか。私の腹の底では暗い感情が渦巻いていた。

だが収穫もあった。特にアレクサンドリアから出場してきた、女性でありながら精霊騎士でもあるディオーレには驚いた。噂には聞いていたが、既に２００年近くを生きる彼女は騎士の中の騎士と呼ばれ、マイティマスターに就任したのも既に１００年以上も前のこと。戦場でただの一度も不覚を取った事もなく、生きる伝説と言われる彼女は評判通りの強さを発揮した。彼女がいればアレクサンドリアが大陸最強の騎士団を抱えると言うのも頷ける話だ。

実はこっそりと後で勝負を申し込んだのだが、恥ずかしいことにあっというまにのされてしまった。ここまで完膚なきまでにやられると気持ちがいいものだ。だが彼女は私を見て一言。

「制約が多いな、そなたには」

とだけ言い残し、その場を去って行った。一目で私が全力でなかったのを見抜いたのだろうか？　確かに汚い手段は封印し、純粋に騎士として戦ったが。わずか数合でわかるものなのか。あれが「極める」というのだろう。全てが中途半端な私には縁のない言葉だ。

だがマイティマスター取得に向けて、ある程度の実績は稼いだことになる。まあ称号を得られるとも限らんが。

春の月の２１日目

今日は私の屋敷に凶報がもたらされた。私がマイティマスターに認定されたと言う事だ。どうやら武力の方もそうだが、学術の方が評価されたらしい。私としては大したことは書いていないつもりだったが、論文が選定員の目に止まってしまったのだろう。

なんということだろうか。私の様な人間が全ての騎士の目標となる称号を授けられてしまうとは。私はある程度嬉しい半面、それ以上の怖気（おぞけ）と、冷めた心に襲われた。この程度で最高の栄誉が手に入ってしまうのならば、騎士の世界とはなんとつまらないものなのだろうか。

私は今までそれなりに手を尽くして手に入れた物が、急に路上のゴミ以下に感じられてしまった。もはや私は王というものにも興味が持てない。私はごみ溜めの山には君臨するつもりはないのだ。ミューゼ殿下と、ここまで私に尽くしてくれたハウゼンには悪いが、私は正式な宰相の辞令が出る前にこの国を去るつもりだ。ある程度想定した事態だし、そのためにしばらく前から手を尽くしているのだから。

結局はミューゼが私の一人目の運命の女神だったのだろう。だが私は彼女を自分の真の女神とする事はなかった。さて、私は次の女神を探すことにしようかと思う。さしあたり、精霊騎士というもの

にも興味がある。先のディオーレでも訪ねてみるか。あるいは魔女達の元を訪ねるのもいいだろう。また棒きれでも転がすとしようか。』

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その19～アルドリュースの手記よりその2～

次回投稿は、11／13（日）12：00です。ちょっと年末忙しくなりそうなので、隔日ペースにさせてください。年明けよりペース戻す予定です。

伝わる思い、伝えられない思い、その２０～アルドリュースの手記よりその２～

手記は続く。

『　陽の光の月の７日目

ついに私は全ての地位を投げ打ってイーディオドを出奔した。国は魔物の巣をつついたような大騒ぎだそうだが、私には関係ない。胸もまるでいたまず、あるのは開放感だけだった。やはり騎士のような堅苦しい世界は私に合わないのだろう。
ただミューゼ殿下が明らかに寂しがるのだけはわかっているので、彼女にだけは申し訳ないとも思う。

さて次なる目的地だが、棒きれを転がした結果、魔女を探せと出た。こうなれば辺境へ向かうことになるが、どうしたものか。とりあえずは獣人の国に向かえば、森はあるだろう。そうなると砂漠越えが必要だな。砂漠は初めての体験となる。楽しみだ

夜長の月の１０日目

今日わかったことがある。熱い時期の砂漠は最悪だ。二度と来ないと心に決めた。

夜長の月の３５日目

今日気づいたことがある。どうやら私は都会の暮らしに慣れ過ぎていて、森とか辺境が肌に合わなくなっているらしい。虫の羽音に眠れない日が続く。魔女を探すのも困難だ、心が折れそうになる。

そして今日おかしな魔物を見た。今まで見たどの魔物とも違う。そもそも生物としての系統樹にあんなものが存在し得るのだろうか。形は人かと思えば、やがて犬のようにもなり、まるで統一性がなかった。軟体生物には間違いないが、一体あれはなんだったのだろうか。とりあえず近くを通った巨大なトレントが一瞬で八つ裂きにされて根こそぎ養分を奪われた。あんなのとは間違えても戦いたくない。ギルドに一応報告でもしておくか。ラムフォート森林地帯にはできるだけ近づくな、と

落葉の季節の7日目

魔女を見つけた。私が見つけた魔女は森林の魔女と名乗っていたが、非常に美しい女だった。本人は既に３００歳を超えているらしいが、肉体は瑞々しい女性のままだ。魔女と言えばおどろおどろしい印象だけが先行していたが、どうやら全く世間は誤解しているようだった。やはり世の中は自分で直に触れるに限るな。

ところで私はまたしても前回見かけた魔獣に遭遇した。どうにも不思議な生物であり、暇な私はあれを追跡してみようと思う。

静寂の月の２７日目

森林の魔女の住処を時に拠点にしながら、私はいまだにあの魔物の追跡を続けている。命がけの暇つぶしというところか。特にあの魔物は無駄に破壊活動を行うでもなく、生活圏も一定だった。だが何かの周りをまわっているような気がしないでもない。どうやら調査の必要があるのだろうが、彼の生活圏の内側に入ろうとすると、明確な敵意を彼は私に向けてきた。最初は攻撃も弱かったが、私が奥に入ろうとすればするほど、彼の攻撃は速く、過激になった。最後に私が調査のために放った使い魔など、信じられないほどの速度で追撃したあげく、一体残らず壊された。

どうやら何かの守護者だったのだろうが、今の私には調べる術がない。森林の魔女がここにいるのもあの魔物を監視するためらしく、その正体については結局何もわかっていないらしい。調べようとした2代前の魔女は、成すすべなく殺されたそうだ。

そうなると余計に気になる所だが、今は置いておこう。それよりも森林の魔女より耳よりな情報を得たのだ。どうやらピレボスの山頂にはシュテルヴェーゼと言われる人物がいるらしい。彼女は世界を見下ろしながら、時に山を降りて我々に必要な事を告げるのだと。私の直感が告げる。彼女が私を神とする女なのではないかと。まあいい、ピレボスに登ってみればわかることだ。誰も登頂した者はいないというが、試してみる価値はあるだろう。

ただ雪降る今の時期に登るのはあまりに自殺行為なので、暑い時期にでも挑戦するとしよう。

深緑の季節の11日目

ピレボスに登るまの時間つぶしに、相変わらず辺境を回る日々が続く。だが今日は面白いことが起きた。なんと、アルネリア教会の暗部らしい連中を目撃したのだ。

彼らが相手にしていたのは、この近隣を荒らしている魔王だった。大戦期を経て人間達が争っていた魔王はだいぶ大人しくなったと聞いていたが、それでもギルドには相も変わらず魔王討伐依頼などが来たりする。中には最高難度であるSランク依頼などもあったりするが、それらはいつの間にか取り下げられる。誰かが狩っているのだろうとは思っていたが、大抵は勇者判定のついた傭兵か、あるいはアルネリア教会だと言うことだった。今回は明らかに後者である

それにしても見事な戦い、いや、狩りである。全員が合図一つで生き物のように動き、確実に魔王を弱らせ、追い詰めて行く。そして魔王が弱り切ったところで、とどめの強大な神聖魔術が放たれた。見た所かなり手強いであろう魔王だったが、アルネリア教は被害な

どまるでないかのように仕留めていた。お恐ろしい練度の兵士達だった。いや、そうさせる指揮官が恐ろしいのか。

「噂ほど大したことはなかったの、梔子」
「そうですね～、思ったより雑魚でしたねぇ」

神聖魔術を放ったと思しきシスターの傍に、眼帯をつけた態度の軽薄な女性が現れた。緊迫した戦闘の後だと言うのに、妙に二人はへらへらしている。それだけ彼女達が強いということだろう。
シスターの方は結構年齢を経ている女性なのではないだろうか。遠目にも顔に皺が見える。だが私は違和感を覚えた。そしてしばし彼女をまじまじと見たのがいけなかった。

「ところで梔子よ」
「はい、曲者がいますね～」

先ほどまで楽しそうに会話していた二人が同時に私の方を見る。その時には私の喉元には既に短剣が突きつけられていた。

「動くな」

背後にいるのは若い女性だった。だが厳しそうな表情に、私は抵抗を止める。彼女もまた相当の手練なことはすぐにわかった。私はあっという間に拘束された。

「柚子ちゃんお疲れ様」
「梔子よ。ワシは初めて見るな、この娘を」
「外回りに出していた、私の秘蔵っ子です。次の梔子はこの子かと」
「貴様、その歳で引退する気か？　サボりか」
「いえいえ、そろそろ私は病が進行しておりますので、この一年で

もう働けなくなるかと。余生くらい自分で選んでもいいでしょう？
散々あなたにこき使われたんだから」

そういった女の顔には、確かに死期が見て取れた。一見美しいが、頬はやや欠け、精気があまり感じられない表情だった。魔王と戦った疲れだけではあるまい、おそらくは不治の病なのだ。それであれだけの働きをするとは、なんとも見事な娘ではないか。私は知らずしらず質問を口にしていた。

「アルネリアの暗部とお見受けするが、いかに」
「ほほう、アルネリアに暗部があると知っておるというのか？」
「知らずとも、あれほどの組織に手を汚す集団がいないのは妙な話。頭から相手を信じる方が私はどうかしていると思うが？」
「中々図抜けた男よな。捕まったのも、半ばわざとか？」
「それは想像に任せましょう」

そのやりとりにシスターがふふと笑う。そしてそのフードを取ると、やはり初老にも近いほどの年齢の女性であった。だがその威厳は素晴らしく、またそれほどの歳でありながら美しい女性であった。若い頃なら、さぞかし男が言い寄って来たことだろう。私でも思わず心が動きそうだった。

だが美しいとか容姿以上に、私はその女性の違和感の正体をはっきりと理解した。その私の表情を見てその女性も理解したのか、周りの者を手で制し、梔子以外を人払いさせたのだった。

「どうやら只者ではないな、小僧。目の輝きが常人ではないわ」
「貴様こそ。アルネリア所属のシスターに魔物がいるとは驚きだ」
「これはこれは。一目で見抜かれたのは久しぶりだ。ここで死ぬか？」
「それは私の名前を聞いてから決めてくれ」

その私の言葉でシスターは楽しそうに笑った。どうやら駆け引きごとが好きらしい。ならばつけいる隙はあると、私は腹をくくった。

「私の名前はアルドリュース＝セルク＝レゼルワークという」

「聞いたことがあるな・・・たしかイーディオドの宰相候補だった男ではないか？　最近マイティマスターの称号を得たとかいう」

「いかにも。私がそのアルドリュースだ」

私は堂々と行ったが、シスターは表情を崩さない。それどころか、くっくと忍び笑いをするではないか。

「ほら吹きだとしたら大したものだが、生憎と証拠がないな。それに宰相候補とも言われた男が、なんとも間抜けな捕えられぶりではないか。マイティマスターの名前が泣くぞ」

「私が欲しかった称号ではないが、身の証に役立ちそうだな。私の懐を探ってみるがいい」

そう言うと梔子と言われる女性が懐を探り、紋章を見つけると頷いて見せた。確認のためにシスターに紋章を投げてよこす。

「確かにマイティマスターの紋章だ。どうやら本物の様だな。ならばますます妙だ。こんな人も立ち入らぬような僻地で何をしている？」

「暇つぶしだ」

私は偽らざる答えを言ったが、余程その答えが面白かったのか。シスターも梔子も、目を丸くして互いを見た後、大笑いを始めた。

「はーはっはっは！　どうやらマスター殿は奇人変人の類いの様だ

な」
「放っておけ。で、どうする？　そなたの正体を見抜いた私を殺すか？」
「殺すのはいつでもできる。まずは話を聞こう。全てはそれからだ」
「ならばそなたの名前くらい教えろ。私だけ名乗るのは不平等だ」
「ふむ、私はミリアザールという者だ。以後見知り置いてくれ」

それだけ言うと、私はシスターに同行を許された。ミリアザールと言えばアルネリア教の指導者ではなかろうか。私は最高教主が現場に出向くことに違和感を覚えたが、それ以上にアルネリア教会所属の者が最高教主を語るとも考えにくかった。だが最高教主が魔物とは、さしもの私も想像すらしなかった事だ。これからどうなるのだろうか。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その２０～アルドリュースの手記よりその２～

次回投稿は、１１／１５（火）１２：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その２１～アルドリュースの手記よりその２～

深緑の月の２６日目

日記も久しぶりに書く。私が何日か前に驚いたのもつかの間、語らう内に私はミリアザールの見識の深さに驚いた。そしてそのままアルネリアまで付いていくと、彼女の元に食客として住まう事になったのである。彼女の見識は非常に深く、私はアルネリアがなぜこれほどの勢力を持つに至ったかを知った。これほど優れた指導者が、何百年にも渡って一つの集団を指揮していれば、いやがおうにでも栄えるだろう。

一方少なくとも私がアルネリアを脅かす人物ではないと理解されたのか、ミリアザールは色々な事を私に話してくれた。大戦期の真実、さらにその前の神話に近い出来事。各国開祖の秘話など、そこには世界中のどの王立書物庫よりも重厚な知識の宝庫があった。

私は彼女との会話に夢中になることになる。彼女にとってもよき話し相手となったのか、私は楽しい日々を過ごしている。一つ気になるのは、これからどうするかと聞かれた時に私がこれからピレボスに行ってシュテルヴェーゼに会うと告げると、彼女の顔色が青くなったことくらいか。彼女と何かあるのだろうか。

陽の光の月の４日目

私はアルネリアを離れ、一路ピレボスに向かうことになった。ミリアザールとの会話は楽しかったが、仕方あるまい。本来の目的を忘れるわけにはいかない。

ところで、ピレボスにはどうやって登ったものか。標高６０００ｍからは道が無いと聞くが、そこから先は手さぐりになるだろうな。

陽の光の月の１１日目

私は今日気が付いた事がある。それは、「夏でも山は馬鹿に出来ない」ということだ。現在標６５００ｍ程度だと思われるが、山に雪が降る事もある。全く持って出鱈目な気候だ。確かに誰もこれは登りきらぬだろう。それに雷雲がしょっちゅう発生する。同じ目の高さで発生する雷というものを、私は初めて体験することになった。

今回ピレボスを登りきったら、しばらく山は見たくもないな。

陽の光の月の３６日目

これを書いている私は、ピレボスを踏破した後である。何が起きたかを言うのは憚られる。だがここにだけ記すのならば、彼女も許してくれるだろうか。

確かに神はいた。彼女はあまりに神々しく、私は思わず彼女に平伏してしまった。最初は本心からではない。だが、私は彼女に心奪われたのは事実だ。

一日目は彼女に憧れた。二日目は彼女をその手に収めた。そして三日目に、彼女の元を離れざるを得なくなった。

結局、人間は自分の手に余るものを手にすることはできないということか。私は神になるのは不可能だと思った。いや、形だけならなれたかもしれない。だが神になるというのは、その他の人間性を捨てることだった。あれほど絶対的な彼女でありながら、手にした時の儚さたるや、ガラス細工の女を抱いているようだった。あれほど強い存在を脆くするならば、私のような取るに足らない脆弱な心の持ち主など、１００年と持たないだろう。

一つはっきり言えるのは、神などまっぴらごめんということだった。

だが、ならば次はどこに行こうというのか。私は目標を見失った。

』

そこからは日記の間隔が空いていた。今まではまめに書いていた内容も、ほとんど記されていない。最初に魔術教会を出奔し、放浪した時とあまり変わらぬようだったが、アルドリュースは明らかに目標を見失っていた。

そうして2年ほど経っているのだろうか。今まで掠れたように適当な文字で書かれていた彼の日記が、急に力強さを取り戻す。

『　落葉の月の7日目

先日の事だ。私はあてのない放浪を続けていた。なぜなら、先だっての出来事から私の心はいまだに立ち直っていなかった。私の追い求めた物のなんと虚しいことかと、そればかりが私の心を占拠していたから。私には新たな出会いを求めるだけの気力が欠如していた。そんな折、さる町の中で再び例の老婆が私の前に姿を現したのだ。雑踏から急に私の前に現れた彼女は、悠然と私の前に立ちはだかった。

「坊や。王も神も、お気に召さなかったのかい？」

「・・・どっちもうんざりだ」

私は老婆が現れたことに驚きもせず、彼女の問いに答えた。だが老婆はにやりとしただけで、それ以上の問いはなかった。予めその結果を予測したとでも言いたげに。

「そうだろうよ、そうだろうよ。お前の魂はその程度では納得しないはずさ」

「その程度ときたか。私はどのくらい欲張りだと思われているのだ？」

「大陸一貪欲に、大陸一平凡であることを望んでいるのさ」

老婆は楽しそうに笑う。どうやらこの老婆は私の不幸が面白いらしい。だが私も負けてはいない。言われっぱなしは癪に障る。

「お次はなんだ？　私は人間、もしくは魔王になるのだろう？　その分岐点とはなんなのだ？」

「おぬしが欲望に負けるかどうかだよ」

老婆はぴしゃりと言い切った。表情が瞬間的に真剣そのものになる。

「いいかい、おぬしは既に人間のなんたるか嫌というほど見たはずさ。人間には浅ましさも賢さも、勇気も脆弱さも、光も闇も備えているんだ。そしてすべての人間が自分の中の相反する何かと戦っているんだよ。これから先、あんたはその究極の戦いを長きにわたって強いられる。負けるのは簡単さ。欲望に身を任せればいい。そして多くの人間はその争いに負けるし、負けてもいいんだ。

だがあんたは違う。あんたはその戦いに負けることを決して許されない。いや、許されるが、負ければどうなるかをちゃんと考えなきゃ駄目だよ？　それを考えることができるだけの頭をあんたはしっかりと持っているはずさ」

「話が抽象的すぎてよくわからんな。具体的にはなんなのだ？」

「それは自分の目で確かめるんだよ」

それだけ言うと、老婆は身を翻した。私は慌ててその後を追おうとするが、老婆はするすると人込みを抜け、ついに私は彼女を見失ってしまった。私に残されたのは、じりじりとした焦燥感だけだっ

た。

だが、そんな私にも運命というものは降りかかって来るものらしい。そしてそれは唐突だった。ある寒村付近を彷徨っていた時のことだ。特に目標もなくふらふらとしていた私の前に、突如として血まみれの男が現れた。救いを求める彼に私は心動かされたわけではないが、とりあえずやることもないのでそれなりに急いで駆け寄ってみた。

茶ずくめの男の姿には見覚えがあった。実に久しぶりに見る連中だったが、彼らは魔術教会の征伐部隊だった。随分と陰険かつ容赦ない連中であり、優秀だったが私を含め魔術教会全員が良い印象など抱いてはいないだろう。彼らは命令一つでその牙を自分達にも向けるのだから。

中でも今回出てきている連中はタチが悪い。私の調査が正しければ、彼らは純粋にテトラスティンの命令で動く教会直属の連中ではなく、暗黒魔術派閥所属の部隊だった。もちろんテトラスティンの命令も聞くのだが、派閥の命令と利益を優先する連中であり、そのやり口が非常極まりなかったのだ。任務遂行のためなら、一般人だろうが仲間だろうがおかまいなし。魔術教会の悪しき風習を継いでいる連中だった。

そんな容赦ない連中のはずだが、私の手の中で息絶えようとしている男はまさに息も絶え絶えながら、私に救いを求めたのだった。私が思っているよりは人間味あふれた連中なのかもしれないが、それは彼の言葉で決定的になった。

「仲間を・・・助けて。お前、魔術士だろう？」

ある程度魔術士ならば相手の事を察することができるが、呼吸も苦しそうな彼は最後の力を振り絞って私に訴えているようだった。私は思わず彼の手を取る。彼がかわいそうだからではない。征伐部隊をここまで追い込む相手に興味があったからだ。

「どうした、誰にやられた?」

「悪魔・・・あんな、俺達の魔術が通じな・・・まるで遊んでいるように、皆、殺され・・・隊長がまだ戦って、い・・・る。誰か、隊長の援護に・・・」

男の言葉は既にうわごとであり、意識が混濁しているようだった。私は彼をそっと下ろそうとするが、遠くから何かが飛来するのが見えて私は思わず飛びのいた。その瞬間、男の元に無数の飛来する闇色の蛇が噛みつき、彼は絶叫を上げる暇もなく息絶えた。蛇は男の息の根を止めると、あっという間に消滅した。完全に目標殲滅だけを目的にした、自立型の魔術である。どうやら丘一つ越えて飛んできたようだ。よく見れば、他にも飛んでいる蛇がいる。征伐部隊は１０名を超えるのが一部隊である。隊長が時間を稼ぐ中、四方に逃げ出した連中を同時に仕留めたことになる。そんな精度で魔術を操るなど、完全に魔術教会でも上位の実力の持ち主だった。そんな奴がここにいるというのだろうか。

危険だ。私の本能がそう告げていた。征伐部隊の連中をここまで完膚なきまでに叩きのめすなど、普通ではない。私は逃げようとしたが、足が言うことを聞かない。怖いもの見たさとでも言うのだろうか。あるいは私は自分の生に大して興味も持てないのかもしれない。しばし悩んだ挙句、私は征伐部隊を叩きのめしている相手を見に行くことにした。後から考えれば正常な判断とは言えなかったが、私は何か見えない手に導かれるようにその場に進んでいった。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その２１～アルドリュースの手記よりその２～

次回投稿は、１１／１７（木）１２：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その22～アルドリュースの手記よりその2～

まず私は視界が効くように丘の上に登った。その瞬間、私の目の前を巨大な炎の壁が横切って行った。私は思わず伏せて身を隠したが、炎の壁は先ほどの闇色の蛇にしぶとくも抵抗を続ける男の元に迫っていた。彼の断末魔の叫びが、炎の中に吸収される。

私は炎が来た先を見た。そこにはいまだに戦おうとする男2人と女が1人。それに彼らに囲まれているのは、まだ幼い少女だった。だが私はその少女を見た瞬間、目が釘付けになった。

「なんだ、あれは・・・」

私は思わず呟いていた。私は冷静な方だと自認している。いや、無感動だと言ってもいいかもしれない。私は今まで竜と会話しようが、魔王に不意打ちを食らおうが、思考を乱されることはなかった。冷静を保つのは魔術の基礎だと教えられたのもあるだろう。

だが、目の前の光景は異常過ぎた。それは征伐部隊も同じようで、明らかに動揺しているのが見受けられる。手に収束する元素の集まり具合を見ればわかるのだ。では何が異常だったのか。

「隊長、なんですかあれは！」
「知らん！　俺に聞くな！！」
「髪の色が変化するだと！？」

髪色の変化。それは強い魔力を持つものなら当然の事。そんな者は魔術教会なら掃いて捨てるほどいる。だが目の前の少女は、見る見るうちに髪色が次の色へと変化していくのだ。黒から赤へ。赤から青へ。そして緑へ。濃淡変化をするだけでなく、完全なる別色への変化。これは彼女の性質が、秒の単位で切り替わっていることを

示していた。
はたして何色あるのか。見ただけでも8色はあったと思うが、征伐部隊も含めた我々が目を奪われる中、当の少女がくすりと笑った。

「慌てているの、あなたたち？」

少女の声はなぜか丘の上にいる私にまで届く。彼女は念話に近い形で直接語りかけているのだろう。これは強制的に私達と魔術的に接触していることになる。普通は互いの合意があってこその芸当だが、彼女は一瞬で私たちの魔力を汚染したことになる。

「人間って、もろいのね」

少女が手のひらを上に向けると、そこには少女の倍ほども大きさのある雷球が形成された。詠唱もなくこれほどの魔術を扱う事実に、固まる征伐部隊。

「ちょっと、痺れるかも」

少女が雷球を放つと、はっと我に返った征伐部隊が回避行動に移る。そして見事な体捌きで躱したはずの彼らだったが、雷球は途中でその動きを止めると、彼らの一人を追いかけて動き始めた。

「だめよ、そんなに逃げたら。当たらないじゃない。それとも鬼ごっこがしたいの？」

少女は嗤う。雷球が男を追いかける中、征伐部隊の女が少女に接近を始めた。風をまいて走る彼女に少女は詠唱が間に合わないかと思われたが、少女は詠唱もなしに足元に生える草を操って見せた。急激に伸びた草が女を巻き取り、その動きを拘束した瞬間、

「焼き尽くせっ、深紅の閃光（クリムゾン レイ）！」

女の手の先から幾本もの熱線が少女めがけて伸びる。既に女は走りながら詠唱を終えていたのだ。少女に可能な限り近づいての相打ち覚悟の一撃。だが、

「風よ、遮れ」

少女は魔術を唱えた。いや、詠唱ではない。まるで風にただ命令しただけのように。だが風は一瞬にして少女と女の間に収束し、熱線をすべて捻じ曲げた。それだけではない。少女は絶望する女の顔を見て首をかしげると、熱線をその手につかんだのだ。

「うふふ、温かい」

その瞬間、熱線はその本来の太さの何倍にも膨れ上がると、その方向を急激に変え雷球から逃げ惑っていた男を一瞬で焼き尽くした。そこに追撃とばかりに雷球が直撃する。

「ボナード！」
「娘っ！」

満足そうに焼け焦げた男を目にする少女の背後から、隊長らしき男が飛びかかっていた。両手には別属性の魔術が構成されている。二重詠唱（ダブルスペル）というやつだ。彼がかなりの高等術者なのは間違いない。だが、少女の髪色が赤から白に近い青色へと変わっているのに気が付くのが遅かった。少女は後ろを向いたまま、「貫け」と呟くと、男の背後に出現した幾本もの氷の刃が男の体を無残にも貫いた。魔術を構成した両手もである。

「馬鹿な、何もない空間に魔術を展開するなど・・・」

男は驚愕の表情で氷の刃に磔にされたように固定された。無理もない。魔術は手から発生させるもの。少なくとも男は魔術教会でそう教わっていた。

だが少女が背後をちらりとつまらなそうに見た。

「残念ね。あなたの必死さ、届かないわ」

「・・・そう、かな？」

男は血を口から吐きながら、口の端を歪めて笑った。勝利を確信したように。そして男の口から黒い球がべっと吐き出される。

一瞬なんだかわからずきょとんとした少女だったが、直後、黒い球体は爆発をした。なるほど、黒い球体は爆薬であり、魔術を介さない攻撃ならいかに少女が魔術に優れようと防げないと踏んだのか。完全に相打ち前提の攻撃である。

そして男は爆風の影響で完全に絶命し、残ったのは女一人となった。女は草の魔術から解き放たれ、男に近づく。

「隊長！　クレンメル隊長っ！」

当然のごとく、女の声に男は反応しない。既にこと切れているのは明らかだったが、女は男に縋り付いていた。ひょっとすると恋人だったのかもしれないなどと考えるが、詮無きことだ。男の最後を看取ると彼の手を腹の上で組ませ、静かに一瞬瞑想する女だったが、それがいけなかったのか。女がふっと地面が柔らかくなったかと思うと、急激に地面が沈み始めた。

「こ、これは？」

「火葬の次は土葬でしょ？　それとも、鳥葬や虫葬が良かったかしら」

女が振り返った先には、少女が無傷で立っていた。女は反撃を試みるが、既に両手は地面に埋まっていた。

「な、なぜ生きているっ！」

「転移よ。簡単でしょう？」

「馬鹿な、魔術が収束する時間などなかったはずだ！」

「魔術なんて収束させなくてもいいのよ。ただ一言、命令するの」

「そんな、それではまるで・・・」

女の言葉は最後まで紡がれることはなかった。彼女はそのまま地面に飲み込まれていったから。そして少女は戦い終えると、魔術で荒れた土地を修復し始めた。まるで絵の具で欠けた絵を埋めるかのように、少女はすいすいと土地を元通りにしていく。そしてあっという間に、戦いの爪痕などどこにもわからぬほど、見事に大地は修復された。

「さて、と」

呟いた少女の姿がかき消える。その瞬間、私は覚悟を決めた。

「おじさん、私と遊ぶ？」

「できれば御免こうむりたいが、逃がす気はないのだろう？」

立ち上がった私の正面には、少女が笑顔で立っていたのだ。またしても短距離の転移を使ったのだろう。短距離転移は理論的には可能だが、いともたやすく使いこなすとはどうしたことか。魔術教会では使用はおろか、研究すら禁じられたはずなのだが。

私は少女に飲まれぬように大きく深呼吸をした。そうでもしないと、目の前の少女に飲まれそうだったのだ。大草原でギガノトサウルスの群れに囲まれた時よりも圧力を感じる。末恐ろしい娘だ。

「名前を聞こう、娘」
「あら、口説いてるの？」
「茶化すな。こちらは命がけだ」
「男が女を口説くときはそうでなくては駄目よ。まあいいわ、教えてあげる。私はアルフィリースと周囲からは呼ばれているわ」

少女はくすりと笑いながら、他人事のように自分を語るのだった。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その22～アルドリュースの手記よりその2～

次回投稿は、11／19（土）12：00です。

少女の答えに私は違和感を感じた。

「まるで他人事だな。自分の事が言えぬ歳でもあるまいに」

「あら。自分が何者かを定義づけることができる者など、世の中に何人いるのかしら？　あなたもそうではないの？」

その言葉にぎくりとする私。

「何を根拠に」

「草も、風も、そう教えてくれるけど？　嘘をつくのは人間だけだわ」

アルフィリースと名乗る少女は楽しそうに笑った。私はくったくない少女の笑顔に恐怖を覚えながらも、同時に不思議な感覚を覚えていた。既に二度、私は予言にある運命の女に出会っている。その直感が告げるのだ。彼女こそ私の運命を運んでくる三人目の女なのではないかと。それならば殺すのは考え物だ。

だが、まずはこの場を切り抜けなくては。私の頭脳は久しぶりにフル回転を始めた。

「子供のくせに生意気を言う」

「あら、子供かどうか試してみる？　咲きかけの花を無理矢理こじ開けるのは、中々嗜虐心をそそるわよ」

「戯言を」

そのやり取りに、私は少しの確信がある。これは少女の人格ではあるまい。何者かがおそらくは取り憑いているのだ。よくある洗脳

なのかもしれないが、洗脳はこれほど複雑な言動を通常は可能としない。ならば誰かが取りついていると考えるのが妥当なのだが、そうなれば憑依を解く方法を私はあまり知っているわけではなかった。この最高クラスの魔術士である少女を殺さずに御し、かつ正気を取り戻させる。どうするべきか。非常に骨の折れる作業だ。

だが考える暇もなく、少女の周囲には無数の炎の塊が集まり始めていた。その一つ一つが魔獣やおぞましい生き物に形を成すと、彼らはまるでじゃれつくように少女にまとわりつく。少女もまた愛しそうに炎の獣たちに頬ずりした。

「ふふ、可愛いと思わない？」

「全く思わん。君は美的感覚が歪んでいるな」

「それなら悪趣味って言いなさいよ。いちいち小難しい言葉を使って嫌味だわ、あなた」

少女がぱちんと指を鳴らすと、炎の魔獣は私めがけて一斉に躍りかかってきた。考えている暇はない。私は私の全力を持って迎撃しなくては。

【収束するは炎、捕えるは大気。四陣の中に猛る精霊を束縛せん。≪炎封印（フレイムフェルマータ）≫】

私の詠唱と共に、少女の放った炎が風と共に彼の目の前に収束を始めた。そのまま行き場を失くした子犬のように、炎は中空に漂っている。

その光景を見た少女は一見驚いた後、すぐに元通り楽しそうな表情に戻る。

「ならばこれならどうかしら？」

今度は少女の周りに、様々な武器を象った氷が現れる。それらもまた一斉に私に向けて放たれたが、またしても私は詠唱を始めた。

【収束するは氷、捕えるは霧。四陣の中に震える精霊を束縛せん。≪氷封印（アイスフェルマータ）≫】

すると今度は私の前に霧が発生し、氷の剣を、槍を絡め取っていく。そしてそれらは凍てついて、一つの巨大な氷塊となった。

その光景を見て、少女は一層楽しそうに笑った。

「面白い術を使うのね、あなた」

「私固有の術だからな」

魔術教会にいた時、私は封印術を研究する過程で様々な独自の術を開発した。それがこの封印術である。相手の攻撃魔術を無効化する。私は戦闘向きの魔術士ではないが、こういう方法は得意だった。

そして私が確信したのは、私の方がまだ目の前の少女よりも戦い慣れているという事実。長く過ごした騎士生活も、無駄ではなかったという事らしい。私は立て続けに魔術を唱える。

【切り、絶ち、遮断する。汝の孤独さを知れ】

「何か仕掛けるようだけど、こんなのはどうかしら？」

少女が右手をすうと天に翳すと、今度は炎、氷だけでなく、土や風、闇までもが少女の周りに収束を始めた。その光景を見て、私は自分の昔を思い出す。

「（私も色々な系統の魔術を使ったが、この少女とは比べ物にならないほど低俗なものだった。私が魔術士として理想としたのは、この少女のような使い手だ。だが悲しいかな。望み、憧れたがゆえに

私はこの魔術の使い方を封じる術を知っている。）」

それは私が理想に手が届かないと知った時、理想そのものを記憶に封印せんがための研鑽だったのか。なんとも皮肉なことに、私はこういった魔術士への対応方法を知っていた。

【孤独を知れば汝の世界は閉じる。祝福を隔絶せよ、≪精霊遮断≫（エンド・オブ・フェアリーテイル）】

私の詠唱と共に、少女が集めた魔術の塊は全て消滅した。その事実に少女が愕然とし、正気に戻る刹那の間、私は少女へ向けて突貫を開始していた。

少女がはっと気が付いた時にはもう遅い。

「貴様、精霊そのものを封印し・・・」

「遅い！」

私の飛び込む速度は若い頃とは比べ物にならないほど遅くなったが、少女が逃げ出す時間を与えるほど遅くもなかった。私は少女に当身を食らわせると、少女はあっけなく崩れ落ちたのだった。

「なんだったのだ、いったい・・・」

地に付した少女を見て、私は呟いた。あれほど暴れたのにも関わらず、先ほどの光景が嘘であるかのように一帯は修復されていた。もちろん私との戦闘の爪痕は残っているが、私がいなければ突然征伐部隊がこの世から姿を消しただけに見えるだろう。

そして気になるのは少女の正体である。私がたまたま一定空間の魔術を遮断する魔術を持っていたからなんとかなったが、そうでなければこの少女は止まらなかったろう。それだけの実力を少女は兼ね備えていた。はたして魔術教会にも少女に敵対しうるものが何人

いるか。これほどの魔術を使う少女など、私は聞いたことがなかった。

加えて少女の魔術の唱え方である。少女は魔術を詠唱していなかった。これは驚異的な出来事である。確かに魔術の行使において、詠唱というものは必ずしも必要ではない。相性の良い精霊や、あるいは精霊と直接契約を結ぶような人間は詠唱なしでも魔術の行使が可能である。だがそれでも初歩的な魔術に限られることが多いし、大きな魔術を行使するとなれば最低上位精霊との契約が必要であった。それに、相性が良いのは一系統が世の常である。

にもかかわらず、少女は最低5つの系統を自由に操っていた。こんな事例は聞いたことがない。かの英雄王ですら、詠唱を用いての魔術行使が原則であったそうだから。それにこれほど強い魔力を持って入れば、必ず魔術教会が占星術などを駆使して察知し、回収に来る。かつて私がそうであったように。

私はしばし地に伏した少女を無言で見つめていた。中々に愛らしい表情をした少女は、決して安らかではない表情で寝ていた。まるで何かに追いかけられ、うなされているような。私はここで一つの決意をした。私はこの少女を抱え上げると、そのまま彼女を連れて歩き出したのだった。

「この近くの村は・・・あれか」

小高い丘から私は小さな村を見つけ、足を向けた。少なくともこの少女の関係者がいると思ったのだ。彼女を連れて行くにしても、事情が呑み込めない。魔術教会が来たからにはおおよその想像はつくのだが、確認をしておきたかった。

だが少女を抱えた私を見て、広場に集まっていた村の人間は一斉に悲鳴を上げながら逃げ出した。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その23～アルドリュースの手記よりその2～

次回投稿は、11／21（月）12：00です。

「ひいい！」
「悪魔が帰ってきた！」
「やっぱり無理だったんだ」
「逃げろ！」

それぞれが一目散に家に逃げ帰る。それだけならまだよいが、中には家すら捨てて逃げ出す者までいた。余程この少女が恐ろしいのか。私は彼らに内心呆れつつも、大声で問いかけてみた。

「誰かこの少女の家族はいないか！」

だが村からは答えがなかった。私は全ての家に聞こえるよう村を歩いて回ったが、どこからも返答はなかった。確かに何の変哲もない村人からすれば少女はあまりに恐ろしいだろうが、私は苛立ちを隠せなかった。それは自分も捨て子であったことへの憤りなのか。子供は生まれる場所を選べない。だからこそ強く生きなければならないが、私は珍しく憤りを隠せなかった。

私は少女を柔らかい地面に寝かせると、さらに声を張り上げた。

「返事がないようだが、ならばこの少女はここに置いていく！　再び目覚めるまで一刻もあるまい！　その時、再び恐怖に慄(おのの)くのはお前たちだ！　それが嫌ならば、誰か私に事情を説明しろ！」

しばらくして、一つの家の戸が開く。そこからは、やつれきった男女が出てきた。まだ比較的若い夫婦だが、憔悴したその表情から、倍にも年齢を重ねて見えた。

私はその様子を見て事情を察し、声を和らげてできるだけ彼らを刺激しないように話かけた。

「この少女はあなたたちの子か？」

「そう・・・その、はずです」

女性が震えながら答える。その肩を、隣にいた男性が優しく抱き寄せた。

「私がおなかを痛めて生んだ子のはずなんです。私たちは小さな村の普通の夫婦です。何の取柄も変哲もない。ただただつつましく、平和に過ごしていたいだけなんです。なのに・・・」

「娘がおかしくなったのは一年ほど前の事だ」

涙を流し始めて男性の胸に顔をうずめた女性に代わり、男性が話し始めた。

「娘は今年で８歳になる。村の子ども達と遊び、我々の農作業を手伝う普通の女の子だった。私たち夫婦はこの子以外の子どもに恵まれなかったが、それでも我々は幸せだった。この子はとても賢く、いい子だったからだ。私たちは恵まれたと思っていたんだ。

だが去年の事だ。娘が子ども達と遊んでいた時に事件は起きた。年長の男の子が娘の髪を引っ張ったんだ。娘は嫌がり、男の子を突き飛ばした。男の子は軽く隣の家まで吹き飛んだよ。男の子は一月ほども寝床から出れぬほどの重傷を負った。その時の私の娘の髪の色は緑だった」

男性は淡々と語った。とても娘の事を語る口調には聞こえない。おそらくは彼も精神的に疲弊しきっているのだろう。男性は口だけをとうとうと動かしていた。まるで話すことで、何かの呪縛から逃

れようとするように。

「しばらくして子ども達は娘を避けるようになった。当然だな、私たちですら気味が悪かった。だが私たちはそれでもこの子をかばおうとしたんだ。私たちのたった一人娘だったから。

だがその意思に反して、娘はどんどんおかしくなっていった。ある時は暴れ馬を真っ二つにし、ある時はぴたりと嵐を言い当て、ある時は人の死を予言した。髪の色は最初は何日かおきに変化していたものが、一日と経たず変化するようになった。

極めつけは、私たちに対する言葉だった。ある夜、私たちは夫婦の営みに及んでいた。そこに突然娘が足音もなく現れたのだ。暗がりでよくわからなかったが、娘の体は少し宙に浮いていたのかもしれない。突然現れた娘に私たちは驚いたが、私たちに向けて娘はこう言ったのだ。

『お父さん、お母さん。子供を作ってもいいけど、お母さんは次の出産に体が耐えられないわ。お母さんを殺したくなければ、もうこれ以上仲良くしちゃだめよ。あ、ちなみに次にできるのは妹ね。生まれてこないけど』

・・・私たちは凍りついてしまった。何より、その言葉を話す娘の目を見たから。明かりなどない夜の部屋で、娘の目は闇よりも暗かった。私たちはその時悟ったのです。これは私たちの娘ではない、私たちに最初から自分達の娘はいなかったのだと。私達は近くの物知り老人に相談し、魔術教会に連絡しました。私達は自分の娘を売ったのです・・・

おお、おお。私達が何をしたというのです？　せめて、せめて静かにつつましやかに暮したかっただけなのに！　ねぇ、私は何かこの大地に嫌われるような事をしましたか？　誰か答えをくれませんか！　あなた、魔術師でしょう？　なぜ我々がこのような目に！？」

「・・・私はその問いに応える資格を持たぬ。勘弁してくれ」

その言葉を聞いて私もまた悟った。この親達は自分達の娘を認識していないのではない、認識を捨てたのだと。そうでもしなければ、自分達が壊れてしまうのだと。人間の自己防衛本能が、愛情を勝ってしまったのだ。そして悲痛な、発狂寸前の夫婦の声を聞くのが、私にとってもこれ以上は耐えられなかった。

たしかにこれ以上この娘をこの村に置けば、誰にとっても良いことにはならぬだろう。解決策を提示できぬ私もまた無力であり、私は両親に了解の上、娘を引き取る事にした。その方がきっと誰にとっても良いのだろうと、私は自分の行為に無理矢理正当性を作った。

だが今度は途方に暮れたのは私である。私は少女を背負って歩きながら、思案に暮れていた。どうすればこの娘を御せるのか。御すというのは不適当な言葉かもしれないが、少なくとも殺されないように、殺さないようにしたかった。

私はきれいな水の流れる小川にたどり着くと、少女の服を脱がせた。もし操られているとしたら、何らかの痕跡があるだろうと思ったからだった。だが彼女の衣服を一部脱がせただけで、その理由はあっという間にわかった。彼女の衣服の下には、文字が蠢いていたからだ。

おそらくは呪いの一種。私にもわからぬほど複雑な構成をした術式は、私も初めて見るものだった。そしてそれそのものが意思を持ったかのように動いている。先ほどの人格の正体はこれかとあたりを付けてみる。

だが問題は呪いの正体よりも、解決方法である。ここには何の準備もない。もし私の工房があれば話は違うのだが、ぐずぐずしていればこの少女は目を覚ましてしまうだろう。封印しようにも、強い触媒を使わなければ強い術も行使できない。

幸いにも、この術式を解除する方法こそ理解できないが、合わせ

鏡のようにこの術式に対抗する術式なら組むことができる。だが私の魔力では力が足りない。それほどにこの少女を蝕む呪いは強かったのだ。だが私は決断した。

それは私の寿命を代償に、この呪いを封印すること。根本的な解決にはならないし、本当にできるかどうかも疑問だった。封印術の一種である呪印を組むことは私にはたやすいが、何の準備も触媒もない状態では、触媒になりそうなものは私の命しかない。なぜ私もこの少女にそこまで執着するかはわからなかったが、既に私は躊躇いもなく詠唱に入っていた。

「待っていろ、今なんとかしてやるからな」

私は無意識にそのような言葉を口にしていた。私に誰かを思いやる感情があるなど自分で驚いたが、私はそんなことを考える間もなく、詠唱に入っていた。何か見えない手に導かれるように。

ほどなくして、呪印による封印は成功した。今これを書きながら考えるのは、どうしてあれほど複雑な術式を何の迷いもなく組めたのか、不思議でならない。代償に私の寿命をかなり差し出したろうが、私には長寿の願望があるわけでなし、大して気になりもしなかった。罪人などに施したことはあるものの、私自身呪印の行使はあまり経験がない。これは元来禁術の一種であるし、相手にも相応の苦しみを与える。それをわずか8歳のいたいけな少女に施すのは、さしもの私も忍びないことこの上なかった。

私は苦悶の表情を浮かべる少女を抱え、旅を続けた。やがて少し大きな町にたどり着くと、私は宿で少女を介抱し始めた。予想通り、少女は熱にうなされていた。呪印の反動だろう。これ以上少女を連れて旅を続ければ、命に関わりかねなかった。私は落ち着けるこの場所で、少女の呪印の微調整を始めた。再びあの状態の少女に相対すれば、私は確実に殺されることはわかっていたから。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その２４～アルドリュースの手記よりその２～

次回投稿は１１／２３（水）１２：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その25～アルドリュースの手記よりそ？～

落葉の月の１０日目

少女と出会って三日経ち、やっと少女の容態は落ち着きを見せ始めた。私はほとんど不眠不休でへとへとだったが、少女が安らかな寝息を立てるようになったのを見て、充足感を得られずにはいられなかった。これで余計な来訪者さえなければ完璧だったのだが。

「失礼する」

そう言ってこちらが返事をする前に戸をあけて入ってきたのは、ごく普通のおとなしそうな青年だった。だが後ろにひきつれた陰険そうな男と、焦点の合わない目をした大男が、青年の爽やかな印象を台無しにしていた。青年もよくよく見れば、その目つきが常人のものではない鋭さを帯びているのがわかる。

そして何より重要なのは、その少年が魔術士ということだった。身に纏う魔力の質以外は、一見何の変哲もない青年。だが、私だからこそわかった。この男は只者ではない。何より、私と同じ種類の人間だと。私は疲れた意識を整え、青年に相対した。

「何の用かな？」

「アルドリュース＝セルク＝レゼルワークとお見受けするが、いかに」

青年は最初から私の問いかけなどなかったかのように質問をした。私は面食らい、そして正直に話すべきかどうかを悩んだ隙に、青年は私に向けて手をかざした。

「聞くだけ時間の無駄か」
「!?」

青年の手からは風の刃が放たれていた。無詠唱だけに威力は小さいが、一般人を殺すには十分な威力の魔術。私はその刃を封印術で咄嗟に抑え込んだが、青年は満足そうに頷いただけだった。

「やはり本物か」
「何をする！　人違いだったらどうするつもりだ？」
「別にどうも。証拠隠滅をして引き払うだけだ」
「何？」

平然と答える青年に、さしもの私も一歩後ずさりをした。これほど危険な言葉を平然と述べる人物には出会ったことがない。私は警戒心を引き上げたが、逆に青年は警戒を解いた。私はそのことに逆に間を外され、肩透かしをくらったような気分になった。

「お初にお目にかかる。私は魔術教会征伐部隊、『プランドラー』のイングヴィルと申す者だ。私の名前を知っているな？」
「『略奪者（プランドラー）』だと？　おかしなことを言う。魔術教会の征伐部隊など、名前が無い者の方が多いだろうが。私が知るわけがない」
「それは異なことを。こそこそと我々の事を探っていた癖に。貴様が魔術教会にいたころから私は隊長だ。知らぬはずがあるまい」

その言葉に、私はわずかに記憶に引っかかっていた名前を思い出した。魔術教会のイングヴィル。確かにその名前には憶えがあった。確か私が魔術教会を去る少し前、わずか１０歳で征伐部隊の隊長となった天才がいると聞いたことがある。その男が成長していれば、確かにこれくらいの歳だろうかと私はふと思った。
だがこれほど危険な人間だとは知らなった。知っていれば、こん

な場所に無防備に招きはしない。何の目的があって来たのか。私の疑問を察するかのように、イングヴィルは先に述べて見せた。

「何、大したことはない。私はそこの娘に用があって来ただけだ。貴様に何をするつもりもない。魔術教会を出奔したことも、既に過去の事だ。責には問うなとのお達しも出ている。ああ、先ほどの魔術も挨拶代わりだと思ってくれ。もっとも、アレで死ぬような輩には私が口を聞く価値もないがな」

「なんてやつだ。だがそれほどの男が、何をしに来た？」

「そこの娘を回収に来ただけだ、何をわかりきったことを。魔術士の管理をするために我ら魔術教会は現在の形になった。魔術教会の基本理念を忘れたわけではあるまい？　そこの娘の魔力は強すぎる。放置すればいかなる災厄をもたらすかわからんぞ」

「確かに正論だが」

確かにイングヴィルの発言は正論である。だがこの男の直接の上司が厄介なのだ。公式ではないが、この男を直接操っているのは暗黒魔術派閥の会長、フーミルネだろうと私は目星をつけていた。別に暗黒魔術に偏見があるわけではなく、どこの派閥の長もそれなりに腹黒いのは重々常置だが、フーミルネはまごう事なき悪党の類だった。いや、悪党というよりは派閥拡大と魔術研究のためなら犠牲を厭わないというだけで、いたって魔術士としては普通なのかもしれないが。世間の間隔ではそれを悪党というのだろう。

もしそんな男の元にこの少女を行かせれば、どんな教育を施されるかわかったものではない。いや、教育を受けるだけなら良いが、下手をすれば実験対象になるのではないか。私の運命となるかもしれない少女を、そんな場所に放り込むなど考えられなかった。

私は一つの決意をする。以前までの私なら考えられないほど危険な賭けだ。勝負する時には先に脱出経路を作っておくのが私だったのに。だが、今度ばかりは何の保証もない勝負だった。

「断ると言ったら？」
「貴様を殺して少女を頂く。それもまたわかりきったことだろうに」
「それは上手くないな」
「？」

ここではじめてイングヴィルは意外そうな顔をした。そこで私はたたみかける。

「私を殺しては、私の封印術のすべては闇の中だ。それでは魔術教会の損失になるだろう？」
「ほう。では貴様の研究成果を差し出す代わりに、少女を見逃せと。そういうことか？」
「そういうことだ。どうだ、受けるか？」
「ふむ・・・その封印魔術の一部を見せろ。話はそれからだ」

イングヴィルの提案はもっともだったので、私は自身の研究を書物にしたものを、一部イングヴィルに見せた。その書物を見ながら、イングヴィルの顔色が変わっていく。

「貴様・・・よくもこんな複雑怪奇な魔術を今まで操っていたものだ」
「お褒めに預かり光栄だ。どうだ、嘘偽りはないだろう？」
「ち、確かにな。だが解読と使用者の育成に何年かかるか。しかも書物はこれだけではあるまい？」
「ああ、同じものがあと7冊。もっとも、それらは私の頭の中だがね」
「やってくれる」

イングヴィルは面白そうに私を見た。やはり私たちは同種の人間

だ。イングヴィルは書物の内容だけではなく、私とのやりとりにも満足したのだろう。
その後イングヴィルは書物を持って私の元を去った。結果は後日通達するとのことだった。ふう、と安堵のため息を漏らした私が振り返ると、少女が目を覚まして上半身を起こし私を見ている。その瞳には、何日か前の危険な光は見られなかった。

「ありがとう、私を助けてくれたのですね」
「・・・誰だ、お前は」

私は少女の口調にまたしてもおかしなものを感じ、思わず睨み返してしまった。だが少女のふりをした何かは、穏やかに笑うのみだった。

「アルドリュースよ、私を守るなら末永く守ることです」
「待て、だから貴様は誰だと・・・」
「頼みましたよ」

それだけ言うと少女は気を失うように倒れ、穏やかな寝息を立てて再び寝始めた。いったい今のはなんだったかのか。この少女の正体はなんなのだろう。
私は疲れた体をおして、しばらくの間考え込んでいた。

落葉の月の１１日目

今日朝少女が目を覚ますと、あたりをきょろきょろと見回しながら、「ここはどこ?」と問いかけてきた。どうやら記憶が曖昧らしく、なぜ自分がここにいるかもよくわからないらしい。
私は自己紹介をし、ここに至るまでの経緯を少し説明した。するとぼんやりと思い出すことがあるのか、少女は今の状況をある程度飲

み込んだようだった。少なくとも、自分は村人に取り返しのつかないことをし、もはや故郷に帰れないことは理解したようだった。行き場を失くした少女は途方に暮れたようで、私が「一緒に来ないか」と声をかけると、遠慮がちに上目づかいをしたが、やがておずおずと差し出した私の手を取った。こうして私と少女、アルフィリースの生活が始まったのだ。』

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その25～アルドリュースの手記よりそ?～

次回投稿は、１１／２５（金）１２：００です。

そこからしばらくは平和な日々がアルドリュースにも訪れたようだった。アルドリュースは頭にある封印術の内容を少しずつ書物におこし、定期的に受け取る征伐部隊の者に渡しているようだった。しばらくしてアルドリュースが完全に雲隠れを果たし、自分からその書物を征伐部隊ではなく魔術教会に届くように手配したのはいうまでもない。

魔術教会もまたその成果に満足し、公式にはアルドリュースに何があったのかを詳しく問いただしはしなかった。もちろん各派閥の長は事情をなんとなく掴んでいたし、暗黒派閥もまた自分達の不始末を表面化させたくなかったのか、事を公にはしなかった。これは封印術の独占を諦めると同時に、アルフィリースに関して手を出しにくくなった事を示すものだった。

そしてアルドリュースは自分達が落ち着ける場所を捜し出すと、その場所に居を構えた。人跡未踏に近い深山の奥に、彼らは生活場所を定めた。その近くに真竜の長であるグウェンドルフが昼寝場所を作っているとは、さしものアルドリュースにとっても知らない事であった。

さらにアルドリュースはアルフィリースと生活する中で彼女が非常に賢い人間であることに気が付き、彼女に教育を施すことにしている。自分の事は「師匠」と呼ばせ、師弟の関係として彼女に接する事に決めたのだった。そこには実に様々な感情が渦巻いていた。

『静寂の月の2日目

一つ幸いだったのは、アルフィリースに詳しい記憶が残っていないことか。なんとなく魔力に目覚めてからの記憶が曖昧の様で、彼女には後悔と罪悪感だけが残っているようだった。夜中にうなされ

ては私がなだめに行く日がしばしばあった。だが、それだけで済むなら良しとすべきだろう。一番よかったのは、彼女には征伐部隊の人間を殺した記憶が無い。彼らを倒したという実感だけは伴っているのだが、殺した記憶は不思議なことにすっぽりと抜け落ちているのだった。だがそれでいい。このような幼い子どもに人殺しの記憶など必要ないだろうから。

それにしてもそろそろ住居を考えないといけないだろう。私はともかく、幼いアルフィリースには旅から旅への根無し草の生活は厳しいだろうから。

静寂の月の１３日目

居を構えてから１０日ほど経っただろうか。このような山深くでありながら、この山には生活に必要な全てが揃っている。今は全ての命が息を潜める時期だというのに、食べ物に困らぬほどの豊かさがこの土地にはある。人がいないからこその豊かさなのかもしれない。

その分魔獣も多いが、私にとって苦にならない。魔獣や魔物も基本的には人間と同じで、自分の生活圏を荒らされれば怒る。だが自分達が敵意を抱いてない事を示し、また重複する生活圏では物を分け合う事を約束すれば決して無用な争いは起きなかった。それに争ったところで私がそうそう負けるはずもなく。その事が魔獣達にも浸透してからは、私はこの一帯の主のように扱われた。

その私が守っているからなのか。アルフィリースに手を出そうとする魔獣もいない。この前など、魔獣にじゃれつくアルフィリースを見つけてしまった。ところが魔獣の方もそれほどまんざらでもないようで、少し困ったようにアルフィリースを見ていた。彼女にはもう少し魔獣の怖さも教えておく方がいいのかもしれない。

静寂の月の１７日目

当座の食料も確保したので、時間のできた私は自分で持ってきた書物などを読み返してみる。この山奥に来る前に、新しい書物を仕入れていたのだ。だがアルフィリースは文字が読めぬのか、最初は私の本に興味を示したが、すぐにつまらなそうに私の膝の上で寝てしまった。

まあ当然か。農家の娘が文字など読める必要はないのだから。そうだ、彼女に文字でも教えて見るか。どうせ時間は腐るほどあるし、文字一つ読めぬでは私が死んだ後に彼女は困るだろう。

静寂の月の１９日目

今日はアルフィリースに文字を教えてみた。だが驚いたことに、たった一日で基本的な共通言語を覚えてしまった。書くのはまだ怪しいが、読みとりはほぼ完璧である。どうやらこの子は本当に頭の良い子らしい。

かのミューゼ殿下もお転婆の割に中々頭の良い女性ではあったが、アルフィリースの吸収速度は比べ物にならない。私は教える楽しみを身い出していた。決してミューゼ殿下に対する後ろめたさを覚えたわけではない。そう、決して。

静寂の月の２６日目

驚いたことに、アルフィリースは古語も含め、一日一つの速度で言語を学んでいく。これで私の持っている本はほぼ全て読めるだろう。試しに読ませてみるが、恐ろしい速度で読破してしまった。内容を理解しているのかといくつか質問してみたが、彼女は見事に答えてみせた。恐ろしい才能だ。何が恐ろしいかというと、この本の内容は最新の国家経営論なのである。その実をアルフィリースが理解できるはずもなく、なんと彼女は本を一冊丸暗記したのだった。

私は決めた。アルフィリースに正式な教育を施すことにした。一体彼女がどれほどの事を学べるのか、私もまた楽しみでならない。将来は学者にでもなるだろうか。

静寂の月の３５日目

アルフィリースの学ぶ速度は相変わらず超常的だった。今まで水を吸わなかった布が水を吸うように、彼女は私の言った事を仔細漏らさず吸収していった。このままでは私の教えることがなくなってしまう。

そこで私は武芸の訓練も施してみることにした。私自身が一流の使い手とは言い難いが、それなりに何でも使える人間だ。教える武器の種類には事欠かないだろう。多分。

春の月の１３日目

今日恐ろしいことが起きた。私はこの前魔術の基礎を教えたのだが、それはあくまで魔術を使う人間への対処法を考えてのことだった。

だが、アルフィリースは自ら魔術を使ったのだ。私は慌てて呪印の状態を確認した。だが、呪印の状況に変化はみられなかった。つまり、彼女は封呪の呪印を施された状態で魔術を行使したことになる。一体どれほどの魔力をその体に保有していると言うのか。この大陸でおそらくは最強の封印術の使い手の一人であろう、私の魔術で封印しきれぬ魔力とは。

最近アルフィリースとの生活が楽しくすっかり忘れていたが、改めて思う。彼女は一体何者だろうかと。私の興味は尽きない。

春の月の４２日目

最近ではアルフィリースも私との生活にすっかり慣れたようで、まるで本当の親子か兄弟のようだ。私には親も兄弟もいないが、仮に家庭を持つとしたらこのような感じだろうか。アルフィリースは賢い子だが、いささかやんちゃが過ぎる。頼むからトレントなどの植物の魔物のうろで、かくれんぼは止めて欲しいものだ。

緑が芽吹く月の１３日目

アルフィリースは時々夜にうなされている。まああれほどの経験をしたのだ、無理もあるまい。むしろここまで明るく振るまっているのが奇跡だろう。彼女が元々心優しく私に心配をかけまいとしているのか。なんとも健気な事だ。

そんな時は優しく頭を撫でてやると、寝息が安らかになる。私にはあまり経験がないが、人とはそのようなものだろうか。あるいは私も・・・いや、馬鹿な話だ。私が安らぎを求めているなどと。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その２６～アルドリュースの手記よりその２～

次回投稿は、１１／２７（日）１１：００です

伝わる思い、伝えられない思い、その25～アルドリュースの手記よりその2～

緑が芽吹く月の３９日目

今日アルフィリースがいなかったわけだが、どこに言ったのかと探してみると、なんと竜の頭の上で遊んでいた。恐れを知らない娘だとは思っていたが、これはあまりに恐れ知らずだ。さすがに竜族ともなると、相手によっては私の力は及ばない。本来なら慎重に私は様子を探る所だが、相手はとうに私の存在に気が付いており、私は逃げ出せない事を悟った。幸いにも相手は非常に知性の高い竜であり、アルフィリースや私をどうこうするような相手ではなかった。もっとも、どうこうされたらさしもの私もどうしようもなかったろう。

そして彼の竜と話すと、驚いたことに彼は真竜の長だと言うではないか。つくづく私は竜という者に縁がある。トリュフォンといい、シュテルヴェーゼといい・・・これこそ運命というのだろう。運命は一体私に何をさせようというのか。一生涯で３頭もの真竜に出会う者などそうはいるまい。運命を切り開くものと思っていた私も、より強大な何かの御手なるものを感じずにはいられなかった。

陽の月の２０日目

あれから私には楽しみが増えた。アルフィリースに様々な事を教える傍ら、私自身はよくグウェンドルフの元を訪ねるようになった。彼の知識は非常に深く、いまや書物に残らぬほど過去の事を私は直に知ることができた。万の書物の読破に勝る経験だ。私は彼との出会いを非常に感謝している。そんな事を考えるだけでも、私は以前より謙虚になったろうか。最近は非常に大地に対する自分の矮小さ

を感じるようになった。どう背伸びしても、私は所詮人間でしかありえぬ。それが王だの、神だのと、なんともおこがましかったものだ。私はその事をグウェンドルフに正直に告げると、

「そんな事を言ってしまえば、私も一頭の真竜にすぎぬ。大地や空に対して、いかほどの者であろうか。私がいなくとも、世界は明日も変わらぬのだよ」

と言われてしまった。真竜でさえそう考えるのだから、私の悩みなどなんともちっぽけで抱いても仕方のないものだろうな。そういえば同じようなことをトリュフォンが言っていたのを思い出した。私はその事をグウェンドルフに話したのだが、彼は聞くやいなや渋い顔をした。どうやらグウェンドルフはあまりトリュフォンことノーティスが好かぬようだが、同時に彼に一目置いているらしい。私も彼が竜であるとは知りつつ、まさか真竜だとは思わなかった。まさか伝説に語られる英知の結晶、絶対者とも呼ばれる存在が、腹の出っ張った中年の恰好をして酒場で飲んだくれているとは、さしもの私も想像できぬ。

そして私は自分の運命について考えるのを止めた。所詮私は王にも神にもなれぬ。だが、悪魔になる可能性があるとはどういうことだろうか。だが今はどうでもいい。今はただ心静かに、アルフィリースを育て、グウェンドルフと語らう時が楽しい。』

「腹が出てて悪かったな！」

そこまで読んで、誰もいない部屋でトリュフォンが一人吐き捨てるように呟いた。時にアルドリュースの口が悪い事は知っていたが、自分の事を言われるとさすがに苛立つものだ。誰がデブの中年ハゲかとトリュフォンは腹を立てていた。いや、そこまではアルドリュースは言っていないのだが。

だが腹を立てつつも、ダンと酒瓶を乱暴にテーブルに置き、トリュフォンは頁をさらにめくる。手記はまだまだ続くが、そこからは平和な時が長く続く。アルドリュースがアルフィリースの誕生日を祝い、その度に彼女が嬉しそうな顔をしたことが何よりの宝物だと、アルドリュースは述べていた。間違いなく、この数年彼は幸せ出会ったことだろう。

トリュフォンはそれらを淡々と見つめ、やがて数年分の手記が経過した。外は既に真夜中であった。そして手記の時節は、アルフィリースが１４歳の時。

『夜長の月の１１日目

どうも最近体調がおかしい。一月に一度微熱が出るようだし、以前ほど体力もなくなってきた。筆を取る手も、時に振るえる。体格を増し、本格的に剣力を増してきたアルフィリースの武芸の相手に付き合うのもつらくなってきた。どうやら私はそう長くもないかもしれない。

結局アルフィリースの事は何もわからない。グウェンドルフの知識を持ってすら、彼女の事は理解できなかった。彼の５０００年の知識を持って当てはまる事例がないとは、アルフィリースの謎はますます深まるばかりだ。結局、私が知る彼女が全てという事か。

だが私の知るアルフィリースは優しく、賢く、非常に自由な魂を持っている娘だった。私の言う事は素直に聞くし、私はできた娘か妹を持ったような気分だった。私の知識のほぼ全てを授けた娘は、今料理を作っている。だが芸術的才能には欠けるのか、彼女が作る料理は男の料理と大して変わらない。年ごろにもなって来たし、多少慎みを持つようにと私は事あるごとにいうのだが、彼女の性格に合わないようだ。どうやら貴族の生活は私と同じで、相応しくないだろう。まあこんな山奥で私と二人育てば当然か。

アルフィリースはミューゼとはまるで似つかないが、一緒に生活す

る分にはこういう女は楽だと思う。ミューゼでは何をするにも儀式ばってしまうから。おっと、そうなるように私が彼女を育てたのか。彼女には悪い事をしたかもしれないな。

私はアルフィリースの背中を見ながらそんな事をぼんやりと考えていた。そしてその後ろ姿を見ながら、非常に女性としての輝きを放ち始める彼女を見て、将来はさぞかし美しくなるのだろうと考える。教養も高いし、多少のつつましさだけ覚えれば、まあどこに出しても恥ずかしくない女だろうと思う。

一方で、この女をどこにも出したくないと思う私がいる。出来るならば、永久に私の手の中で・・・いや、何を馬鹿な事を。私は寿命が短いことなどわかっているし、私の死後も彼女が困らないように騎士としての手ほどきや、様々な知識を叩きこんだのだから。ハウゼンにも貸しにかこつけて彼女の事を頼むつもりだし、アルフィリースの輝く未来を私が閉じ込めていいはずがない。いかに私がそのような性向の持ち主だと言えど、そのような事をしては私は人間ではなくなるだろう。・・・そうか、そういうことか。私が魔王か人間かの境目はこういうことか。これが最後の運命だというわけか。一時期は運命に感謝しもしたが、やはり運命などクソ喰らえだ。まるで私を嘲笑(あざわら)うかのように、どうにも意地の悪い仕掛けをしてくれるものだ。

今日はもう寝よう。夜が長いとロクな事を考えない。きっと疲れているんだ。明日考えれば、またまっとうな考えが浮かぶことだろう。』

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その25～アルドリュースの手記よりその2～

次回投稿は、11／29（火）11：00です。

だが、彼の手記はそこから段々と狂人のそれへと変貌を遂げている。表向きは変わらない。だが、明らかにアルドリュースはおかしくなりかけていた。あるいは何かの病魔に蝕まれていたのかもしれない。アルドリュースはそれを悟り、自分がおかしくなりそうな時は適当な口実をつけて家を去っていた。

アルフィリースの方はといえば、そのような事には気が付いていないのか。きっと鈍いのではなく、アルドリュースを絶対的なものと信じ切っているのだろう。アルフィリースには実はある程度の記憶が戻っている。自分が暴れた事もだいたい覚えているし、自分を魔術教会に売ったのも実の親だと知っている。もちろん全てではないし、特にアルドリュースとの出会いの場面などは、彼の口から聞いて初めて知ったくらいだった。ただ一方的にやられて気絶させられた事だけは覚えているようで、その事をアルドリュースが問い詰められて困っていた記述が残っている。だが、だからこそ彼女はより一層の信頼をアルドリュースに置いていた。そのアルフィリースにとって、アルドリュースの死はその訪れを感じつつも、認めたくない事実というところだろうか。

そんな事だから、徐々に二人の生活は綻びを見せ始めていた。いや、人間の生活だからこそ、やがて訪れるべき変化だったのだろう。アルフィリースは生まれてから死ぬまで一所に留まるほど、大人しい気質でもなかったのだから。

そして時はアルフィリースが１６歳になった春の事。アルフィリースの成人の祝いを済ませた後、アルドリュースは寿命が近い事をアルフィリースに告げた。その言葉を可能な限り淡々とアルドリュースは語り、アルフィリースは可能な限り無表情で聞いていた。だからこそ、彼女達の生活は終わりを迎えようとしていたのかもしれ

ない。そのことに互いに気が付いた時、アルドリュースは正常な判断を失くしかけていた。

『緑が芽吹く月の1日目

季節は記した通りだが、運命という奴はとことん皮肉にできているらしい。私はもう20日と持つまい。だが時期は今日を持って緑が芽吹く月へと入った。一年で最も生命の躍動に大地が満ち溢れるこの月に私の命が失われるとは、なんとも憎らしいではないか。運命は私の事が嫌いなのだろうな。どうあっても大地に祝福を受ける事のできぬ人間らしい、私は。

私は頭がまともに働くうちに、この記述を残しておきたい。最初は書くべきか躊躇われたが、ここにだけは素直に全てを記したいと思った。でなければ、手記の意味が無い。自分にまで嘘を付くようになっては、生きている意味さえ失うだろう。

ところで、私は先ほどまで何をしようとしてたのだろうか。私はここにおいて、死にたくないと本気で考えてしまった。あれほどシュテルヴェーゼの元では不老を得るのを嫌がったのに、今になって死にたくなくなるとは、なんとも愚かしくあさましい。

だが今さらシュテルヴェーゼを頼るわけにもいかず。彼女は今もピレボスの山頂でこの大地を見下ろしているのだろう。私の事も見ているだろうか。だが彼女が私のために山を降りる事はあるまい。あれはそのような女だ。彼女が山を降りるとしたら、この大陸の運命が動く時だけだろう。

だから私は自分が生きるのは諦めた。もはやこの体では再生なぞ望むべくもない。だからこそ、先ほどまで私は恐ろしい妄執に捕らわれていた。私はもっとも手っ取り早い方法を取ろうとしていた。目の前には年頃の女。私は事もあろうに、娘のように育てたアルフィリースの中に私の生きた証を残そうとしたのだ。なんとも下衆な思考回路と欲望ではないか。

実際に私はアルフィリースの夕餉に睡眠薬を仕込んだ。ある程度毒薬の知識も彼女には仕込んであるのだが、私の事を疑いもしない彼女は何のためらいもなく食事を口にした。そして、私の目の前に無防備な寝姿を晒したのだ。

私は明りを消すと、彼女の衣服に手をかけた。明りなどどうせ誰もいないのだから消さなくてもよかったのだが、私の後ろ暗さがそうさせたのか。だがそんな後ろ暗さもすぐに吹き飛ぶほど、アルフィリースに触れた私は心が高揚した。

それは男性としての興奮だけではあるまい。確かにアルフィリースは美しく豊満な体の持ち主になろうとしているが、私は美しい女などターラムで山のように抱いたし、ミューゼと比べれば美麗さではアルフィリースはいまだ及ばない。もっともミューゼには手を出していないが、あれは観賞用として、それはそれで私は満足していたのだ。どうにも肉体的な快楽よりも、私はやはり「閉じ込める」といった精神的な充足感を求める性質らしい。その私がアルフィリースを求めようとするのは、私が彼女を毒牙にかけることで、永久に彼女が私から離れられなくなる事を本能的に知っているからだろう。私はアルフィリースの衣服をはだけた。

アルフィリースの肌が露わになったところで、ふと私の手はとまった。月の光に、アルフィリースの頬につたうものが反射したのだ。まさか意識があるのだろうか。それ以上に私には急に罪悪感が首をもたげていた。

そのまま一刻も私は止まっていただろうか。月の光は変わらず差しこんでいたから、実際には一瞬だったのかもしれない。要はそれだけ長く感じたということだ。私はアルフィリースの衣服を元に戻し、寝床にきちんと寝かせてやった。その時である、アルフィリースがぱちりと目を覚ましたのは。その茶色の瞳が、ぎょろりとこちらを向く。私はその瞳を反射的に睨み返した。それは、昔見た覚えのある目だった。

「久しぶりだな」
「あら、よくわかったわね」
「アルフィリースはそのような目をしないよ」
「『私の』が抜けていない？」
「その言葉を付けては、私という人間は終わりだな」

私の答えに、アルフィリースを語る誰かはニヤリと笑った。

「よくわかっているじゃない。確かに色んな意味で終わりよね」
「ああ。老婆の言葉の意味が今、なんとなくわかった気がする。私は欲望に負けなかった。どうやら私は人間になれたようだな」
「人間は人間でも、実に下衆な人間だけどね。そのまま欲望に負けてくれれば話は早かったのに」
「どういう意味だ？」
「さあ？」

アルフィリースらしき何かは陰険な笑みを浮かべた。その卑猥な口が動く。

「下衆ならいっそ魔王の方がよかったのではなくて？」
「それも一興なのは認めるがな。だが、それ以上に私は安心しているのだよ」
「ほう？」

挑戦的な笑みを浮かべる何者かに対し、私は穏やかに答えた。

「こんな下衆な私でも、大切に思い、守りたいと思える人間に出会う事ができた。それだけでも私はもう満足だ」
「本当に？　嘘はいけないわねぇ」

私の答えを小馬鹿にするように、アルフィリースの姿の者は笑う。

「なぜ嘘だと？」

「確かに貴方の言葉には真実がある。あなたは神という地位にすら満足できない自分に気が付き、地位や名誉、力以外に自分の幸福があることに気が付いた。そこまではいいわぁ。でもね、それでもあなたは一度なりともそういった力に魅かれた者なのよ。そして手に入れるだけの努力が出来てしまう人。つまり、この上なく貪欲で、あさましく、愚かしいのよ。それは貴方の性癖も含めてね」

「・・・何が言いたい？」

多少困惑する私に、その者は語る。

「もっと自分を知りなさいってことよ。貴方は今のままではやはり満足できないわ、きっとね」

「そんな！　そんなことは」

「答えはすぐ出る。でも、あるいは・・・」

女は何事かを呟こうとして、やはりすぐ止めた。私は聞きだそうと考えたが、彼女は意識が段々と霧散していくのか、その存在感が希薄になりかけていた。どうやら自由に顕現できるわけではないのだろう。あるいは無理をして出てきたのかもしれない。ならば無理をしてまで、何を私に伝えたいのか。私の胸にそんな疑問がよぎるが、私はついにその答えを聞く事はできなかった。

そしてアルフィリースは再び眠りについた。私はその寝顔をただ見つめることしかできなかった。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その２３～アルドリュースの手記よりその２～

次回投稿は、１２／１（木）１１：００です。

伝わる思い、伝えられない思い、その23～アルドリュースの手記よりその2～

緑が芽吹く月の2日目

私は昨夜夢を見た。夢に出てきたのは、漆黒の長い髪のアルフィリース。今よりもさらに成長し、彼女は美しい女性に育っていた。その輝きはますますもって磨かれ、私は彼女を見るに耐えられなった。ふと自分の姿を見ると、醜く黒ずんでいるではないか。私は自分の醜さに辟易し彼女から遠ざかろうとするが、彼女は私の前に回り込むと、優しくこう告げたのだ。

「あなたに、感謝を」

アルフィリースは私を抱きしめると、不思議と私の心は穏やかになった。これほど穏やかな気持ちになったのは生まれて初めてかもしれない。私の心を満たす物とは、一体何なのだろうか。続けてアルフィリースは告げる。

「あなたのおかげで運命は変わります」

「何？　それはどういう・・・」

「あなたの運命は変わらないかもしれない。でも・・・」

アルフィリースの言葉は途中までしか聞こえず、私はその事を考える前に、十全の満足感に深い眠りについたのだった。

目が覚めれば、目の前には穏やかに眠るアルフィリース。彼女はもともと朝にあまり強くないので、いつも私の方が早起きである。婚前の娘が寝顔を男に晒すのはいかがなものかと私は口うるさく彼

女に注意したのだが、彼女は一向に聞き入れなかった。こういうところだけ頑固だ。一体に誰に似たのやら。

そして私は昨夜の満足感を思いだせず、逆に寂寥感に捕らわれていた。充実感があった事だけは覚えている。だがその感覚がない。なんとも皮肉なものかと、私は自嘲した。それならいっそ、幸福などないものだと思えれば良かったのにと、私は運命を呪ったのだった。

それからしばらくして目を覚ましたアルフィリースは、昨夜のことなど何も覚えておらぬようだった。彼女のお気楽さに少し不安と不満を覚えつつも心のどこかで安心する私に、反吐が出る思いだった。

緑が芽吹く月の9日目

明らかに体調がおかしくなった。朝食を食べる気が起きなかったのだが、その後私は激しい吐血をした。慌ててアルフィリースが駆け寄るが、私は彼女を制した。万一感染する類いのものだったら困るのだ。私は彼女にグウェンドルフの元に行くよう告げ、その間に彼女に手紙をしたためた。遺書である。

また他の何人かにも手紙をしたためた。これから先アルフィリースの歩く道が輝けるものであるように。私の力がどこまで彼女を守ってやれるか、非常に不安だった。外の世界に出れば、危険も多数待ち受ける。呪印を使う必要性に迫られる時もあるだろう。その時彼女はどうするだろうか。彼女の周りは？　彼女を支える事のできる者は？　不安は尽きない。娘を送り出す親はきっとこのような気持なのだろうと私は想像すると、ふっと笑みがこぼれた。そうこうするうちにアルフィリースが戻ってくるようだ。この手記も書けて後1～2回だろう。その後は、トリュフォンにでも送ってやるかな。彼が一番無害そうだ。それに正しい判断もできるだろう。それに私の理論の一端も語ったことだし、真竜であれば呪印の調整もできる

かもしれない。少なくとも知恵は貸せるだろう。さて、アルフィリースの前では、最後まで師匠らしくあらねばな。子どもを育てるのは大変だ。

緑が芽吹く月の１３日目

アルフィリースと二人で月を見た。この世界には青と白の二つの月があるが、そのどちらも私は好きではなかった。満ち欠けをする白い月はうつろうこの世界の様で憎たらしく、常に見える青い月は変わらぬ私の性癖の様で見るに耐えなかった。だが今日だけは違った。アルフィリースと二人で見る月はとても美しかった。私は思ったよりも世界も自分も嫌いではなくなったのかもしれない。なぜなら、これほど素晴らしい娘が私に微笑みかけてくれるのだから。

この手記を書くのも最後だろう。もう筆を取るのもつらい。あるいはこのまま床に入れば、そのまま目覚めぬかもしれぬ。だがそれでいい。私には出来過ぎた人生だ。全てを手に入れる事は敵わなかったが、私にはこの娘だけで十分だ。彼女は私がいなくなればこの土地を離れ、自由に羽ばたくだろう。その事を考えるのが楽しくてしょうがない。アルフィリースはどのような人生を歩むだろうか。せめて彼女が幸せであってくれればいいと思う。そうだ、今度生まれてきたら人を幸せにする魔術の研究をしよう。そうするのも、きっと悪くない・・・』

手記はここで途切れていた。おそらくここで力尽きたのだろう。トリュフォンはここで手記を閉じ、その本を自らの手で封印した。この手記にはアルフィリースが知らなくてもいいことが沢山ある。全てを知る必要はないだろうと、トリュフォンは判断した。それに、もう十分にアルドリュースが伝えたい事はアルフィリースに伝わっているはずだ。なぜなら

「アルフィリースは良い娘に育っているじゃねぇか。友達も多そうだったしな」

トリュフォンはアルフィリースが連れていた仲間達の様子を思い出す。良い空気を持った仲間に囲まれていると、トリュフォンは思ったのだった。

心配事があるとすれば、一つだけ。その時、彼の部屋に小鳥の様な者が飛び込んできた。

「ご主人様、ご主人様ー！」
「おう、ピー助。調べてきたか？」
「ちゃんと『ピートフロート』って呼んでくださいよう」
「お前名前が長いんだよ。ピー助で十分だ」
「ううん、こんなのがご主人様だなんて、あんまりだ。しくしく」

トリュフォンの前でめそめそし始めたのは、ユーティと同じく妖精であった。彼は随分と前からトリュフォンに使える妖精であるのだが、さる妖精の里から彼に定期的に奉公に出る妖精である。真竜に使える妖精であるから本来は非常に名誉なことなのだが、トリュフォンはぐうたら過ぎて嫌がられていた。彼は自然とはほとんど触れあわず、人間の中で暮らしているからだ。人間の中で暮らす事は、妖精にとって自分達の修行になるとは全く考えられていなかった。ちなみに、誰をトリュフォンの元に奉公に出すかはくじで決められているとかいないとか。

まあそんなピートフロートであるから常にいやいや彼の命令に従っているのだが、真竜に仕えてその恩恵を受けているだけあってかなり優秀な妖精であることに違いはない。本人に全く自覚はないのだが。その彼にトリュフォンが聞く。彼にはアルフィリースが自分の元に来てから気になっていることがある。

「で、どうだ？　町の外にいるのは何者だ？　こっからでも魔力の気配が伝わってくるんだが。巧妙に隠しているから普通の連中じゃ気づかんだろうが、俺はごまかせん。現在こんな魔力の存在がいるとは、俺は聞いたことがない。大魔王以上の魔力の持ち主じゃないのか？」

「ご主人様の言う通り、外には確かに強い気配の持ち主がいました。近くによると気取られそうだったので、私も遠目に見ただけですが。その傍にはまたしても魔王級の者がいます。見た目は髑髏のようでした。後は魔獣が一匹。私が見たのはそれだけです」

「ふーむ、オーランがアルフィリースにつけた監視というところか。だが娘一人にこれだけの監視を付けるとはな。それだけアルフィリースを重要視していると言う事か」

一瞬考えた後、トリュフォンが膝をぽんと叩く。

「よし、そいつに会ってみるか！」

「ええ？　そんな強い奴に会ってご主人様は大丈夫ですか？」

「任せろ、逃げ脚には自信がある！」

「な、なんて情けないお言葉・・・」

ピートフロートはがっくりしながらも、外に意気揚々と出て行くトリュフォンに続くのだった。

続く

伝わる思い、伝えられない思い、その23～アルドリュースの手記よりその2～

次回より新しい場面です。次回投稿は12／3（土）11：00です。

深くに住まう者達、その1～知恵の真竜～

＊＊＊

「・・・出てきたか・・・」
「アルフィリースですか？」
「・・・ああ、誰かと会っていたようだな・・・少なくとも魔術士・・・しかも相当の手練だな、建物の中が透視できなかった・・・」
「それはなんと・・・あ、こら。私の指を噛むな！」
「・・・何をしている・・・」

ここはベグラードから少し離れた森の中。ライフレスとエルリッチがアルフィリースの監視を行っていたのだった。正確には監視を行っているのはライフレスであり、エルリッチは報告に立ち寄っただけである。その傍らにはいつぞやライフレスが拾った白い魔獣が一体。掌には収まらぬほどのそこそこの大きさに育ってきた魔獣は顎の力も強く、その鋭い牙をエルリッチに思い切り突き立てているのだった。幼体の頃は優雅な姿をする毛並みの鮮やかな歩行鳥の魔獣だが、大きくなれば凶暴極まりない性格へと変貌する。もっとも、すでにエルリッチに対してはその片鱗をいかんなく発揮しているが。主人としての認識があるのか、ライフレスの前では従順な獣である。

慌ててその魔獣を取り外そうとするエルリッチと、やや呆れたように見ているライフレス。

「・・・どうやらその魔獣はお前の事が嫌いな様だな・・・」
「そんな馬鹿な。誰が毎日世話していると・・・ぐわあ、頭に牙を突き立てるな！　穴が開く！」
「ぐるるるる」

エルリッチがどうやっても外せぬ魔獣だが、ライフレスが一言「やめろ」というと、大人しくその牙をはずし、ちょこんとその場に座ったのだった。

「なぜだ？」
「仁徳の差という奴だ」
「ドルトムント、貴様！」

ふと音もなくその場に現れた全身鎧づくめの騎士に、エルリッチが喰ってかかる。だがドルトムントはたいして取り合いもしなかった。

「ところで王よ。この小さな獣に名前は？」
「・・・そういえばまだつけていなかったか・・・何がよいかな？・・・」
「では白い獣なので、『クロ』にしてはどうでしょうか？　どうせこのような低俗な獣、自分の色もわからず・・・ぐわあ！　だから噛むなと」
「・・・どうやら貴様程度の頭はありそうだぞ、エルリッチ・・・」

ライフレスがくっくと笑うと、ドルトムントはぎょっとした。ライフレス、いや英雄王グラハムが人前で笑うなど随分となかったことだ。一の側近であったドルトムントですらほとんど見たことがない。どうやらこの獣は来るべくしてここにいるのだとドルトムントは思った。そのような運命の者達は実に多くドルトムントは見てきたのだ。そしてまた自分もまたその一人だと。グラハムが善人でないことくらいドルトムントも承知していたが、グラハムには不思議と人を惹き付ける魅力があった。

魔獣がエルリッチを攻撃する様を見ながら、ライフレスは頭を悩ませる。

「・・・名前か・・・そうだな・・・体毛の色にちなんで『ブランシェ』でどうだ？・・・古くに『白』を意味する言葉だ・・・どうやらメスだろうし、女性名にしておくか・・・」
「いやいや、それでは私と大して変わらぬ・・・なぜだ？」

ライフレスが魔獣の名前決めると、ブランシェは嬉しそうにライフレスにすり寄って行った。どうやら自分の名前を気に入ったようだ。その様子を見てドルトムントが頷く。

「この魔獣は賢いな。我々の会話を理解している」
「馬鹿な、この種族にそこまでの知恵はないはずだ」
「・・・だが現に理解しているな・・・まあ異端というものはどこの世界にも起こりえる・・・気にするな、エルリッチ・・・」
「ぐうう」

エルリッチはなんだか納得できないようであったが、主人にそう言われては仕方ない。ぐっと堪えるしかないのだった。

そして、その時彼らの目の前に気配もなく突如として現れる男が一人。

「これほどの魔力、どんな奴かと思って見に来たら、知った顔じゃねぇか」
「何者！？」
「む、貴方は？」
「・・・これはまた、随分懐かしい顔だな・・・」

エルリッチは突如として出現した男に警戒心を露わにしたが、ライフレスとドルトムントは逆に警戒心を緩めたようだった。場の雰囲気に肩すかしをくらったエルリッチは、戸惑いライフレスともう

一人の男の両者の顔を見比べる。
その男は、気軽にライフレスに声をかけた。
「よう、グラハム。久しぶりだな」
「・・・僕にそれほど気易く話しかけられるのは、お前以外にいないだろうな・・・ノーティス・・・」
「お久しぶりです、ノーティス殿」
ライフレスもまた気軽に返事を返し、ドルトムントに至っては礼をしたのだった。ますます困惑するエルリッチ。
「ライフレス様、こいつは？」
「・・・僕の師とでも言うべき存在だ・・・僕はこいつに帝王学を学んだ・・・」
「それだけじゃあねぇだろう？　右も左もわからず多くの部下を抱えておろおろする小僧に、王としての気構えを教えたのは俺だ。兵法も、人心掌握術もな。そこのドルトムントと引き合わせたのも俺だろうが。まあ結果としちゃ、お前を王に仕立て上げたのは失敗も失敗、大失敗だったがな。こいつは調子に乗った挙句、大量虐殺なんぞやらかしやがって」
「それは見解の相違だ、ノーティスよ。俺は貴様の言う理想郷、千年王国をつくるための手段を考えただけだ。まずは自分を不老不死に。そして圧倒的な力を手に入れるための実験を繰り返しただけだ」
いつの間にかライフレスが成人の姿に戻っていた。それだけノーティスとの会話に夢中という事だろうか。どうやらライフレスにとって、ノーティスは余程信頼のおける人物であったらしい。ライフレスがいささか早口にまくしたてる。
「確かにあの場所での魔術の暴走は誤算とも言えたが、結果として

は上々。後は俺が国に戻れば全ては上手くいくはずだった。だが気がつけば、俺が死んだと勘違いした連中が先に内紛を始めてしまっていた。あの手際、俺がいなくなった瞬間に国を乗っ取る算段をしていた連中が何人もいたのだろうな。ああなってはもう国を元に戻すのは不可能であり、俺は不老不死を確たるものにしてから新たに国を造るつもりだった。その際に予想外の事態により、異空間に封印されたのだ」

「どうだかな。お前は元々国の運営に興味持っているようには見えなかった。若い頃じゃ違ったろうが、王となって２０年も経つ頃、全てに対する興味を失っていたように見えたがな。

それに、確かに統治の上で絶対的な力で押さえつける事も必要とは説いたのは俺だ。だが、絶対的な力と恐怖は全く意味が違う。お前が使うあの魔法、あれがいい例だ。あの魔法は人の手には余る。もちろん真竜にもだ。あの魔法は完成させるべきじゃなかった」

「それは結果論だ。それに国の運営がうまくいかなくなったのは、貴様が俺の元を去ったからだろう？　それから私には対等に口をきく者がいなくなってしまった。どの者も口から出るのはおべっかばかりであり、誰も俺に真実を述べなかった。俺は王として多くの臣下に囲まれながら、まともに会話のできる者がいたためしがない」

「それは貴様のせいでもあるが・・・まあいい。今そんな昔を懐かしんでも始まらん。それよりもこれからのことだ」

トリュフォンは昔と変わらず自分の意見を曲げぬライフレスにやや苛立ちながらも、会話を元に戻した。昔からライフレスが言いだしたら聞かない性格なのは、百も承知だ。それに今さらライフレスが自分の信念を曲げるような相手でない事くらいトリュフォンも理解している。無意味な会話とやりとりに割く時間はないと思いながらも、ドルトムントがこれほど無骨ではなく、もう少し気の利く人物であったらと、トリュフォンは残念でならなかった。

続く

深くに住まう者達、その1～知恵の真竜～（後書き）

次回投稿は、１２／５（月）１１：００です。

深くに住まう者達、その2～協力者～

「それより聞きたいことがある、グラハムよ。お前はなぜアルフィリースに付きまとう？」
「お前に関係あるのか、ノーティス？」
「ある。奴は俺が友と呼んだ男の形見だ。もっともむこうはたいして俺の事を友と思っていなかったかも知れんがな。だが加えて俺も個人的にあの娘は気にかかる。事と次第によっては」
「俺達と戦う事も辞さない、か。それは困るな」

ライフレスが珍しく困ったような顔をした。彼もまた自分が与えられた役割と、ノーティスとは戦いたくないという願望もあり、加えて彼との会話は続けたいと思う気持ちもあり。ライフレスは逡巡したが、やはり彼らしく決断は早かった。

「・・・まあ話せる所まではいいだろう。俺は監視だ」
「命じているのはオーランゼブルか」
「そうだ」
「何のために」
「知らんよ。お師匠殿には考えがあってのことだろう」
「・・・妙だな」

このやりとりでノーティスの疑問は膨らむばかりだった。明らかにライフレスの言動がおかしいのだ。

「ノーティス、何がおかしい？」
「グラハムよ、いつから貴様はそこまで従順になった？　確かにオーランゼブルは偉大な魔法使いだ。魔術の扱いだけなら真竜をも上回る逸材だろう。それは以前から皆が認めることだ。だが、貴様と

いう尊大な男がただ従うとは思えんな。一体何があった？」
「何を馬鹿な事を・・・全ては世界の真実の解放のために」
「何？」

トリュフォンがさらに訝しむ。さらに言葉をつなげようとした瞬間、ライフレスとトリュフォンの間にふと黒き影が現れ、人の形を成す。

「そこまでにしていただこう、知恵を司る真竜よ」
「貴様は誰だ？　俺は今この男と話しているのだがな」
「同感だな。下がってもらおうか、兄弟子殿よ」
「下がるのは貴様だ、ライフレス。これもまた世界の真実の解放のためぞ」
「・・・了解した」

ヒドゥンの言葉に、ライフレスはドルトムントとエルリッチを率いて大人しく引き下がった。その光景を見て、トリュフォンは確信を抱いた。

「なるほど、精神束縛か。精神系の魔術はオーランゼブルの得意分野だったな」
「そういうことです。そうでもしなければ、あのような尊大な男が従うはずもないでしょう」
「それにしてもグラハムにまで有効とはな。俺も昔やっておけばよかったか？　だが貴様は最初から影響を受けていないようだな」
「私は純粋にオーランゼブル様の思想に共感した者です。束縛の必要もない」
「なるほど、貴様がオーランゼブルの協力者というわけか。ならば締め上げるのならば、貴様の方がよさそうだ」

トリュフォンが一歩前に出て、指の骨をぱきぱきと鳴らす。決して荒事を好まぬトリュフォンだが、真竜だけあって彼の戦闘能力もそれなりのものである。目の前の男、ヒドゥンの戦闘能力が自分より下だと確信したのか、トリュフォンは強気の態度に出た。だがヒドゥンは彼を制すると、意外な言葉を吐いたのである。

「お師匠様の目的が知りたいのならば教えましょう。わざわざ私を倒すまでもない」

「ほう、いやに素直だな」

「元から貴方には隠すつもりはないと、お師匠様はおっしゃっていました。きっとノーティスならば私の思想に共感してくれるはずだ、とも」

「？　どういうことだ？」

トリュフォンがヒドゥンの言葉の真意をつかみ切る前に、ヒドゥンの口からはオーランゼブルの目的が語られた。その言葉が進むごとに、顔から血の気が引いていくトリュフォン。

「な、なんだと!?　それは事実なのか？」

「はい、間違いないことです。既に兆候は表れ始めている。流石にあなたもお気づきでは？」

「ぬ・・・そう言われれば思い当たらぬ節がないでもない」

「やはり。注意深く世の中を見ていれば気が付いて然るべきことだ。だが誰も気が付かない。古巨人族は既になく、翼人族はこの土地におらぬ。獣人は頭が足らぬし、真竜の長であるグウェンドルフはとんだ間抜けときている。族長であれだから、当然他の真竜もとんだ間抜け揃いだ。これではお師匠様が動かざるをえないでしょうよ。どうです？　このような事実を知ってなお、オーランゼブル様は間違っていると言えますか？」

「・・・間違っていないだろうな。俺が奴の立場なら、同じことを

するかもしれん」
「でしょう？」

やや得意げに鼻を鳴らすヒドゥンに、トリュフォンの目の色は深くなっていた。彼にとって実に数百年ぶりの真剣な表情だったかもしれない。

「だが小僧、一つだけ言っておこう」
「はい、なんでしょうか？」
「俺はオーランゼブルの立ち場ではない。だから俺は別の方法で活路を見出すつもりだ。まだ全ての要素を俺が検証したわけではないからな」
「ご自由に。オーランゼブル様も、きっとノーティスならばそうするとおっしゃっておいででした」
「ふん、俺の半分も生きておらぬ奴が生意気な言葉を。まあいい、オーランゼブルの奴に一つだけ伝えておけ。貴様のやり方は結論だけ考えれば最善だ。だが、あまりに盲目的で性急過ぎるとな。世界を舐めるな、と伝えておけ」
「・・・いいでしょう、しかと。」
「もう一つ。俺は貴様の邪魔をするつもりは今のところない。だが、状況によっては貴様の敵ともなるだろう。あるいは味方かもしれんがな。どのみち、いずれ貴様に会いに行くと言っておけ」
「その時を楽しみにしていますよ」
「そうならばいいがな」

それだけ言うと、トリュフォンは踵を返した。これ以上洗脳されているライフレスと話しても無駄だし、目の前のヒドゥンはでは話にならない事もよくわかった。この場で得られる事は何もなく、そしてオーランゼブルの目的がわかった今、今の自分ではあまりに知っている事が少なすぎるとトリュフォンは自覚したのだ。

「（くそっ、事態がそこまで切羽詰まっているとは。ここでオーランゼブルが動くとなれば、奴は時間の流れを自ら進めるつもりなのだろう。急がなくては・・・全てが手遅れになる前に！）」

足早に歩くトリュフォンが、懐から紙を取り出した。魔術に反応する特殊な紙に彼は文章を書くと、急いで封をする。

「ピートフロート！」

「はいぃ！　ご主人様、やっと私の事を名前で・・・」

「茶化すんじゃない、事態は切羽詰まってるんだ。こいつを急いで現在の魔女の長の元へ届けろ。至急調べて欲しいことがある」

「は、はい。魔女の長の所ですね？　えーと確か現在は・・・」

「俺の情報が間違っていなければ、沼地の白き魔女フェアトゥーセのはずだ。いいか、繰り返すが大至急だぞ？」

「・・・確かに承りました。転移を駆使して数日中には届けます」

「奴が沼地にいればいいがな。とにかく急げ。行け！」

その怒声にも近い命令と共に、弾けるようにピートフロートは飛び出した。その姿を見つめると、トリュフォンもまた近くの森に向けて走り出す。

「くそ。のんびり世界を見て回るつもりが、とんだことになった。アルフィリースに関わっている場合ではないな、これは。年寄りに仕事をさせないでほしいものだな、まったく」

誰にも聞こえぬその独り言は森にかき消え、同時にトリュフォンの姿も森に消えた。

そのしばらく後、たまたま森に木の実採取に出てきていた農家の

少年が、森から羽ばたく白銀の見事な竜を見たと家に帰って伝えたが、子どもの冗談として夕餉の話題を少し華やかにした程度で終わったという。

続く

深くに住まう者達、その2～協力者～（後書き）

次回投稿は、１２／７（水）１１：００です。

深くに住まう者達、その3～少年～

＊＊＊

時は今に戻り。アルフィリース達はトリュフォンの部屋を後にし、ハウゼンの屋敷に戻ろうとしていた。緊張のほぐれたはずのアルフィリースだが、まだ何やら考え事をしているようだった。

「アルフィ、これからどうする？」

エアリアルが傍らにいるアルフィリースに話しかける。彼女はアルフィリースの表情がいまいち浮かないので、心配しているのだ。だがそんなエアリアルの事には気が付かないのか。アルフィリースは前を向いたまま、無表情に答えた。

「そうね・・・もうベグラードでやることもないし、アルネリアに戻ろうか。傭兵団の募集をするにしても、この土地じゃ遠いしね」
「じゃあラキアにまた頼むのだな」
「ええ、エクラの準備が終わり次第ね」

そのエクラは、自分の仕事の引き継ぎに東奔西走していた。まだ年若いとはいえ、それなりに地位も仕事もある彼女である。準備には数日かかると彼女は言っていたのだが・・・

「アルフィリース！」

噂をすれば影、エクラが馬に乗ってアルフィリース達の前に現れたのだった。

「あれ、エクラ。どうしたの？」
「ふう、ふう・・・急いで仕事を終わらせてきたのです！」
「早いわねっ」

アルフィリースが思うより、エクラははるかに有能であるらしい。彼女は取り急ぎ終わらせるべきものだけ手筈を整え、後は全て文面で指示を出したのだった。もっとも彼女の上司は父親のハウゼンであるわけだから、それほどまでに彼女が準備を整えなくてもなんとかなるのだった。

それにしてもエクラが慌ててアルフィリースの元にかけてくる姿は可愛くもあり、エクラが着くなりアルフィリースは思わず頭を撫でてしまったのだった。エクラは突然の事に、激しく動揺した。

「な、何をするんですか？」
「え、可愛いなぁと思って」
「忠犬エクラね」
「誰がイヌかっ！」

ユーティの言葉にエクラが彼女につかみかかるが、ユーティは飛んで逃げた。普段エアリアルやミランダなどの剛の者と渡り合う彼女であるから、エクラくらいの速度であれば問題なく回避できるのだ。

そのままユーティがエクラをからかいながら、あさっての方向に走って行った。その姿をほほえましく見つめるアルフィリース達。

穏やかな時間が流れたその刹那。アルフィリースの全身に、まとわりつくような魔力が走った。はっとしたアルフィリースがエアリアルに声をかけ、周囲を警戒する。

「エアリー、今・・・」

アルフィリースが思わずエアリアルと背中合わせに周囲を警戒した時、既に異変は起こっていた。背中にいるエアリアルが、岩のように動かない。アルフィリースは思わず彼女の肩をつかむが、それでもエアリアルはびくとも動かなかった。

「エアリー？　エアリー、どうし・・・」

「その子は動かないよ」

アルフィリースが静かな声のした方に振り返ると、そこには黒のローブに身を包んだ少年が立っていた。少年は無表情でその眼差しをアルフィリースに向けながら、悠然と歩いてきていた。一見、少年にはおかしなところはどこにもない。顔も整っているし、攻撃性はどこにも見当たらない。アルフィリースに敵意がないのは明らかだった。

強いて言えば、彼は無表情すぎることがおかしな印象だった。それに、別段そこまでの美男子というわけでもないのに、顔立ちがあまりに整いすぎていることも。

それに周囲をアルフィリースが見渡せば、全てが停止していた。エアリアルだけではない。エクラも、ラキアも、ターシャも、飛んでいるユーティまで。水まきをしている水すら止まっているではないか。アルフィリースはこれが時間停止の魔術だと気が付いたが、これほど大規模なものは見たことも聞いた事も無かった。時間操作の魔術は使い手も滅多にいないが、アルフィリースは一応初歩的な物は使える。だからこそ、この状態はどのくらい異常かもはっきりわかる。目の前の魔術は、ほとんど魔法の領域の出来事である。少なくともアルフィリースの視界の全てがその時を止めているのだから。

その少年は気が付けばアルフィリースの正面に立っていた。アルフィリースの胸の辺までしか身長のない彼は、しかしながらアルフィリースを威圧するように彼女の前に佇むのだった。

「あなたは・・・」
「私が誰かは問題ではない」

少年は静かな、しかし毅然とした声でアルフィリースの発言を遮った。有無を言わせない。そういった確たる空気を少年は纏っていた。さしものアルフィリースも少年の威圧感に、一歩後ずさりそうになる。アルフィリースがこうもたやすく会話の主導権を手放すのは珍しいことかもしれない。

そんなアルフィリースを見て、少年がアルフィリースに声をかける。

「アルフィリース、君に話があって来た」
「何？　新手のナンパってやつ？」
「この状況で冗談を言えるとはたいしたものだ。だがこちらも時間と機会が惜しい。多少強引にでも付き合ってもらおう。ライフレスの意識がノーティスのおかげで逸れているからな。こんな機会は滅多とあるまいよ」
「！？」

そう言った少年の姿が一瞬消え、次のアルフィリースの目の前に現れた時にその手を掴むと、二人の姿はベグラードから跡形もなく消え去った。その直後、凍った時が動きだすように全てが元通りとなったが、その場にアルフィリースがいないことだけが先ほどと違っていた。

「アルフィ・・・？」

エアリアルが隣にいたはずのアルフィリースが忽然と消えたことに気が付き、大騒ぎするほんの数秒前の出来事であった。

続く

深くに住まう者達、その3～少年～（後書き）

次回投稿は、１２／９（金）１１：００です。

深くに住まう者達、その４～邂逅？～

＊＊＊

「・・・ここは？」

一瞬目の前が光に包まれたかと錯覚したアルフィリースが目を開けると、そこは庭園の中心だった。目の前には白い上品なクロスのかけられたテーブルがあり、椅子が２つ向かい合って置かれている。周囲には色とりどりの花が咲き誇り、噴水は水を柔らかに噴き上げ、鳥の鳴き声もゆたかに聞こえる。冬も近いと言うのに、なんともそこはのどかな場所だった。

「どうぞ、こちらへ」

「・・・」

少年がアルフィリースをエスコートするように椅子を引き促したが、アルフィリースは警戒心も露わにその誘いを断った。その様子を見て少年はため息をつき、自分が先に席に着いた。

「ふむ、エスコートの方法を間違えたか？　現代ではこのような方法が主流とは聞いたが」

「そういうわけじゃないわ。ただ・・・」

「ああ、そういうことか。心配するな、別に取って喰いやしない。そのつもりならとっくにそうしている」

「・・・それもそうね。あんな芸当ができる人なんだから。さっきのはまさか時間を止めたの？」

「御名答」

やや諦め気味に席に着いたアルフィリースに、少年が平然と答えて見せた。

「種明かしをするとだな、一定範囲空間の時を止め、同時に周辺部へ認識阻害の魔術をかける。これで中の人間は時が止まり、かつ外からはその事を認識されない。時間が停止した空間へ侵入した者は同時に時が止まるし、正確に時間を知るすべがなければ、わずかな時間時を止めた事にもまあ気づかれないさ」

「とても簡単に話しているけど、『非常に難しい』なんてレベルの話じゃないわ。そんな事は理論上は可能でも、実際にはできないと私は思っていた。完全に魔法の領域の話なんじゃないの？」

「そうでもないさ。魔術を極めて行けば、やがてできるようになる。理論上は可能のことなんだからな。それに魔法などという概念は時間と共に変わりゆくものだ。今では魔法と言われるものも、百年後には当たり前のように一般人が使うかもしれない。時間の流れとはそのようなものだろう」

「言うわね。あなた何者？　先ほども聞いたけど、無駄だとわかってもやはり答えて欲しいわね。そうでなければ、私と話すのにも失礼だと思わない？」

アルフィリースが珍しく不満を口にした。あるいは不安だったのかもしれない。だがテーブルに備え付けられた酒を注ぐ少年は、歯切れの悪い答えを返した。

「何者か、ね・・・それは私も知りたいところなんだが」

「？　どういうこと？」

「こっちの話だ。とにかく私は自分の名前もない者だ。だからその程度の扱いで良い。これを最後にお前とは一生会わない可能性もあるのだから」

「ちょっと。人を無理矢理連れ出しといて、その言い草は何？　あなた、私を馬鹿にしてるの？」
「いや、そんなことは」
「いーえ、してるわ！」

今度はアルフィリースが怒り始めた。その態度に少年は少し困ったような顔をする。

「なぜ怒る？　たしかに突然転移でこんな場所に連れ出したのは、不躾であるとは思うが」
「そこじゃないわ。貴方に名前もないのは不憫だし、不便だと思っているの！　貴方が名乗らないなら、私が名前をつけちゃうわよ？」
「ほう、それは面白い。どんな名前にするんだ？」
「じゃあ、ポチとかどう？」

そう言うアルフィリースは、なぜだか表情が生き生きとしていた。だが対照的に少年の顔はどんどん冷めて行く。元々無表情だからあまり変わったようには見えなかったかもしれないが。

「特に名前にこだわりなどないが・・・その名前は御免こうむるな」
「なんでよ、名乗らないんだから何でもいいじゃない」
「その名前は、東の諸国で家畜につけられる一般的な名前じゃないのか？　さすがに家畜と同列なのは冗談にしてもタチが悪い。それにアノーマリーの悪趣味な下僕と同じ名前はさすがに好かんよ」
「？　よくわかんないけど、嫌なのね」
「当たり前だ。人の名付け親になるのなら、もっと真面目に考えろ」

少年がやや不機嫌な顔をしたので、アルフィリースは少年が無感情なわけではないと考え、少しほっとした。もちろんアルフィリースは、わざと少年を怒らせる方向に話をもっていったのである。無

表情では少年の背景が一切読めない。ただでさえ得体の知れぬ相手にどこともわからない場所に連れてこられたのだから、せめて相手の性格くらい把握したいとアルフィリースは思ったのだった。

それでも少年のことはよくわからないものの、少なくとも話の成立しそうな相手であることはわかった。だからアルフィリースとしては真面目に彼の名前を考えているわけだが、彼の姿を見てふと心に浮かんだ言葉がある。どこから来たのか、どういう意味を持つのかアルフィリースは知らない。だが、その名前が自然と心に浮かんだのだった。アルフィリースは言うべきかどうか躊躇ったが、これ以上待たせるとそれはそれで相手を怒らせそうなので、素直に口に出してみる事にした。

「・・・ドラシル」

「何？」

「ユグドラシルなんてどうかな？　ふっと心に浮かんだのだけど」

アルフィリースが躊躇いがちに言った名前に、少年の目が仰天したように見開かれていた。その様子に慌てるアルフィリース。

「き、気に入らなかった!?」

「いや、そうではない・・・そうではないんだ・・・」

少年は目を伏せ、唇を噛みしめているようだった。しばらく沈黙が二人の間に流れただろうか。アルフィリースには少年の心情を理解するべくもなく、少年は何かの感慨に浸っているようだった。アルフィリースにしてみればあまり気分の良い時間ではなかったが、少年は何かの答えを出したかのように顔を挙げた。

「済まない、少し驚いただけだ。だがその名前で良い。それにしよう」

「いいの？　じゃあユグドって呼ぶね？」
「なぜ省略する？」
「だって、呼びにくいじゃない」

全く悪びれもなく言い放つアルフィリースに、ユグドラシルは少しため息をついた。

「やれやれ・・・自由な娘だ」
「駄目？」
「いや、それでいい。だからこそ良いのだ」
「？　褒められてるのかな」
「まあな」

少年は目の前の酒を飲みながら答えた。その表情にはどこか満足そうな笑みがある。少年はグラスの酒を飲み干すと、今度はいつの間に召喚したのか、水で構成された手だけの使い魔に注がせながらアルフィリースに向き直る。

続く

深くに住まう者達、その４～邂逅？～（後書き）

次回投稿は１２／１１（日）１０：００です。

「ではアルフィリース、話をしようか」
「真面目腐った切り口ね。別に話をするのはいいけど、なんで私なの？」
「それはお前だからだとしか言えんな。それにお前は自分の価値をわかっていない。この時代に置いて、お前ほど既存の価値観に縛られず、また教養の高い人間など滅多にいないよ。話し相手としては申し分ないのだ。もっともお前を選んだのは、それだけが理由ではないがな」
「もって回った言い方はよして。要件は何？　早く帰らないと、皆が心配するわ」
「せっかちだな。では単刀直入に聞こうか。お前はオーランゼブルをどう思う？」
「どうって・・・」

漠然とした質問に、アルフィリースは戸惑ったようだった。その様子を見て少年は質問の的を絞る。

「言い方を少し変えよう。オーランゼブルを正しいと思うや否や？」
「それは・・・わからないわ」
「ほう」

アルフィリースの答えは曖昧で自信のないものだったが、ユグドラシルは逆に興味をそそられたようだった。ユグドラシルはさらにまくしたてる。

「なぜわからない？　奴は魔王を量産し、大勢の人間やその他を苦

しめている。事実フェンナという娘の恋人は奴の配下のライフレスに殺され、炎獣もまたドラグレオという男に殺された。これをなんと見る？」

「結果だけ見ればそうだし、私もそれは許せないわ。でも、私達人間だって他の生き物から見ればどうかしら？　私達は家畜から様々な物を絞り足り、挙句に食べるわ。生きて行くためにある程度仕方のない行為とはいえ、彼ら家畜の視点から見たら我々人間はさぞかし残酷に見えるでしょうね。もっとも家畜に『残酷』という概念があればこそだけど。

でも、もしオーランゼブルの行為がこの先、大陸の生物にとって必要不可欠なことだったら？　彼のやっている事は確かに度が過ぎているのかもしれない。だからこそ、彼の目的が気になるの。それがわからないうちに善悪の判定なんかできないし、そんなものは後世の歴史家にでもやってもらえばいいんじゃない？」

「ふむ、良い視点だ。そして口調や態度とは裏腹に、想像以上に冷静な女だな」

ユグドラシルは満足気に頷いた。その彼が指を鳴らすと、それは見事な料理がユグドラシルの使い魔の達の手によって彼らの前に運ばれてきた。彼の使い魔は実に様々な形で、主に人型のものだが、頭の形は犬やら山羊やら様々であった。強いて言えば獣人とでも言えばいいのだろうが。だが獣人と違うのは、使い魔達はそれぞれが貴族の晩餐会のように正装に身を包んでいた。これはゆとりのある服装を好む獣人にはありえないことである。加えて料理を乗せてくるのはアルフィリースが見た事もないような生き物だった。六足歩行だが、背中がテーブルのようになっていて、これはユグドラシルが完全に作り上げた生物なのかと想像してみる。使い魔達の共通点と言えば、彼らが水で構成されていることぐらいか。現に、用事の済んだ使い魔達はユグドラシルが指を鳴らすと、再びその場で水に戻ってみせたのだった。用事さえあれば、また近くの噴水から使い

魔達を作るのだろう。
そして出された豪華な食事をユグドラシルはアルフィリースに勧めたが、彼女は断った。するとユグドラシルは安全を確かめるように一口先に食べて見せたので、アルフィリースもそこまでされて断るのは失礼かとも思い、料理を口にした。その味はアルフィリースが人生で食べた者の中でも随一に近い逸品だったが、その味を噛みしめるほどの余裕はアルフィリースにはなかったのであった。
しばし無言で互いに食事を口に運んだ後、ユグドラシルは料理に口を付けるのを止め、語る。

「アルフィリース。私はオーランゼブルの目的を知っている。その根拠もな」
「ふぅん、教えてくれるの？」
「残念だが、それは駄目だ」
「そこまで言っておいてそれないんじゃない？　一応、なぜなのかは聞いてもいいかしら？」

アルフィリースの素朴な疑問に、ユグドラシルは慎重に言葉を選んでいるようだった。

「・・・私は傍観に徹する事に決めたのだ。私はこの先何があろうと戦いはしない。そういった選択肢は既に捨てている」
「世捨て人のような事を言うのね。『傍観は最大の罪である』って聞いたことない？」
「約１００年前に選挙による議会制度を説いた学者、ユーゲルスの言葉か。こういうのもあるぞ。『闘争の歴史を正しく伝えるのは、常に第三者である』」
「東の諸国における現代の裁判制度を確立させた宰相、アルヴィンの言葉ね。自分がその第三者とでも？」
「生憎と歴史を書き綴る趣味はない。ただ形式上私はオーランゼブ

ルの側にいるが、いざという時のために彼の傍に控えてもらっていると思えばいい。私が積極的に彼の手伝いをすることはありえない」
「それはありがたいことだけど、いざという時って？」
アルフィリースの疑問に、ユグドラシルは自分の言葉を恐れるように話す。
「アルフィリース、お前にとっての最悪だと思う、オーランゼブルの行動の結果はなんだ？」
「え？　そうね・・・彼によって人間が敗北し、全員が彼の奴隷のようになるとか・・・かな？」
「なるほど、それはまだ平和な方だ」
ユグドラシルは、子どもを諭すような目でアルフィリースを見た。少し小馬鹿にされたとアルフィリースは思ったのか、彼の方をむっとした目で見る。
「アルフィリース。私が考える最悪は、この大陸の生物が死滅する事だ」
「・・・そこまでオーランゼブルはやる気なの？」
「さてな。奴にその気はなくとも、部下はどうかな？　奴の部下はその気になれば、どいつもこいつもその程度の事はやってのけそうだからな」
「私が直接戦ったのはライフレスとデカイ変態・・・もとい、炎獣を倒した男だけだけど、なんだか否定もできない気がするわ」
アルフィリースは大草原での戦闘を思い出しながら、身震いした。彼らがその気なら、本当に一国を滅ぼすくらいわけがないと思うのだった。そこで何かをアルフィリースが思いついたように、ユグドラシルに質問してみた。

「ねぇ、彼らの中で誰が一番強いの？」
「戦闘は条件や体調、または運によっても結果が変わる。そのような事を聞くのは無意味だと思わないか？」
「もちろん知っているけど、他人の意見も聞いてみたいじゃない？　グウェンドルフからの忠告もあるし、私も彼らを大方見たことがあるから、なんとなくの印象はあるけど」
「ふむ、では逆に私から聞こう。誰が一番強いと思う？」
「う～ん」

アルフィリースは悩んでしまった。ライフレスより強い連中を想像するのが彼女には難しかったわけだが、なんとなくアルフィリースにも考える所はある。

続く

深くに住まう者達、その5～邂逅？～（後書き）

次回投稿は、１２／１３（火）です。

「グウェンドルフの言葉もあるし、一番強いのはあの小さな女の子かなぁ・・・次にライフレスくらいかしら？」
「ふむ。一番強いのは私も同意見だが、私の中では黒髪の女剣士が同格だと思うがな」
「え、そうなの？」
「あくまで私の見立ての話だ。その次はあのデカイ男、次にライフレスというところか。後は同じくらいだな」
「うそ！？　デカイ男はライフレスより強いの？」
「多分な。少なくとも、あの男はライフレスより頑丈だ」
「じゃあ不死身なの？」
「死なない生物などこの世にはいない。だが、限りなくそれに近いのは事実だ。ライフレスとて不死身ではない。アルフィリースもその事には気が付いているのだろう？」

ユグドラシルの言葉に、アルフィリースははっとした。ライフレスの半分砕けたを見た時、一瞬不死身かと思ったのは事実。だが、よくよく考えれば不死身の生物などいるはずもない。いや、もしもそのような生物がいるならば、その生物がとっくにこの世の頂点に既に立っているはずだとアルフィリースは考えた。
だが同時に、ライフレスをどうやれば倒せるのかも見当がつかない事もまた事実。アルフィリースは目の前のユグドラシルをちらりと見るが、アルフィリースの目線の意味に気が付いたのか、ユグドラシルはアルフィリースの言葉を遮った。

「駄目だ、俺に聞いても答えはしないぞ？」
「えー、どうしても？」

「一応彼らの側にいるものでな」
「またデートしてあげるって言ってもダメ？」
「ぶふっ！」

アルフィリースの言葉に、ユグドラシルが口に含みかけた果実酒を軽く吹いた。慌てて彼は口を吹きながら、アルフィリースの方を目を丸くして見ている。

「まったく・・・突拍子もない事をいう女だ」
「そうかな？　もしかして私に気があるとか思ったんだけど」
「調子に乗るな。まったく、悪ふざけも大概にしてほしいものだな」
「そうふざけてもないけどなぁ。ただ身長がね」

アルフィリースが自分の頭の上に手を水平に当て、ユグドラシルとの身長差を示してみる。ユグドラシルの身長はアルフィリースの胸のあたりだろうか。もちろん彼が見た目通りの年齢でないことはアルフィリースもわかってはいるが、見た目というのはどうしても気になる。

だが同時にユグドラシルはアルフィリースが出会った男性の中で一番知的で、冷静な男性ではないかと思い始めていた。もちろんアルドリューズもそうだったが、彼はアルフィリースにとっては完全な保護者であり。またグウェンドルフは真竜である。種族を気にするアルフィリースではないが、グウェンドルフもまたアルドリューズと似たような印象を抱いていた。

たいしてユグドラシルは確かに無表情だが、けっして冷酷でもないことがわかってきた。でなければ、生物が死に絶える事を「最悪」などと表現するわけがない。アルフィリースは久しぶりに対等に話せる人物に出会ったのである。状況がこうでなければ、いい友人には最低なれるのになと、アルフィリースは思うのだが。

一方でユグドラシルはやや仏頂面になったようにも見えた。それ

でも彼はアルフィリースとの会話を続けたいのか、次の口火を切る機会を考えているようだった。

「身長は高い方が好みか？」

「まあ私以上ではあって欲しいかな。だけど人間の価値ってそれだけじゃないから、そんなに極端に低くなければ気にしないけどね。でも不思議。なぜ貴方はオーランゼブルに協力しているの？」

「先ほども言ったが、協力ではなく制御役。さらに言うなら監視にも近い。もっとも、余程の事が無い限りは奴のやることを止める気もないがな」

「余程・・・生物の死滅ってことね」

「理解が早くて助かる」

ユグドラシルがにやりとする。だがアルフィリースはまだ疑問に思う事が沢山あるのだ。

「オーランゼブルは何を狙っているの？　事情によっては私だって彼に協力できるかも・・・」

「柔軟な思考は結構だが、それはありえないな。お前はいかに奴が正しかろうと、虐殺にも近い奴の手段に手を貸せるか？」

「それは・・・無理だわ」

「だろう？　そんなことを強制できないし、また誰の理解も得られない事を奴自身もわかっているからこそ、強引な手段に出たのだ。グウェンドルフから聞いたかもしれないが、奴は生来温厚で平和を望む人物だ。それがあれほどの強引な手段にでるのだから、余程の覚悟だろう。もう奴は自分が死ぬまで何があっても止まらんよ。そして奴の前に立ちはだかるのなら、それ相応の覚悟が必要になる。」

「目的がわからなければ、私としても彼に対してどうしようもないんだけど」

「奴の目的は直にわかるだろう。その時お前がどのような決断をす

るか知らんが、それ次第では私も立場を明確にしなければならんかもしれん」

ユグドラシルが飲み物を茶に変えた事を見て、アルフィリースは彼がこれ以上何も語る気が無い事を悟った。結局肝心な事はわからないまま。ユグドラシルが語らないと言う事は、アルフィリースが今知る必要はない、もしくは知ってもどうしようもないという事なのだろうと彼女は想像する。

ならばやれる事をやるしかないと、アルフィリースは頭を切り替えた。この辺の切り替えはアルフィリースは早い。自分にも用意されたお茶を一気に飲み干すと、アルフィリースは席を立った。

「ごちそうさま。悪いんだけど、元の場所まで送ってくれるかしら？」

「せっかちだな。もう少しゆっくりしてもいいだろうに」

「思ったより冗談が好きなのね、これ以上何も話すつもりもないくせに。それに、そういうわけにもいかないわ。帰ってやることが山のようにあるもの。皆を心配させたくもないしね。こう見えてももてるの、私」

「女限定だろう？」

ユグドラシルの言葉にアルフィリースむっとしたので、ユグドラシルは反射的に両手を挙げて降参の意志を表示した。そして慌てて話題を切り替える。

「失言だったな。そういうことなら仕方ない。すぐに送るとしよう」

「そうして。でも、また転移？」

「そういうことだ」

ユグドラシルがパチンと指を鳴らすと、二人の足元には魔法陣が

出現し、一瞬で彼らだけの姿を消した。驚いたアルフィリースが何が起きたか気が付く頃には、彼らはベグラードが遠くに見える場所にまで移動していたのである。

続く

深くに住まう者達、その6～邂逅？～（後書き）

次回投稿は、１２／１５（木）１０：００です。

「もう移動したの？」
「そうだ。急ぐのだろう？」
「まあそりゃあそうだけど・・・あ、ありがとう」

何を言っているんだといわんばかりのユグドラシルに、突然の転移に戸惑うアルフィリース。アルフィリースは慌てて身だしなみをなぜか整え始め、その場を去ろうとする。

「どこに行く？」
「え、だってベグラードに戻らなきゃ」
「直接はやめておけ。ライフレスが監視しているからな。私が転移で仲間達の近くの路地まで送ってやろう」
「ライフレスが！？」

その言葉にアルフィリースが大きな声を挙げた。アルフィリースにとってはそれほど意外なことだったのだが、ユグドラシルは彼らしく平然と答えた。

「なるほど、気がついてはいなかったか。奴にとって戦いこそ全て。いや、そうせざるをえなかったと言うべきか。奴は一度戦うに値すると認めたら、地の果てまでも追いかけてくる。それに奴の魔力量からすると、使い魔の行動範囲は大陸の半分以上を占めるだろう。奴から逃げきれるなどと、甘い妄想は抱かぬ事だ」
「迷惑な話ね・・・対応策はないの？　助言でもいいわ」
「なぜ私に聞く？　私は向う側だと言ったはずだが？」
「オーランゼブルの計画を見守るとは言ったけど、ライフレスを生

かしておかなければならない理由はないはずよ。彼の味方をするとは一言も言ってないわ。それに私を呼びだしてユグドがわざわざ話をしたと言う事は、私は万一の時の何らかの保険だと言う事。私が死ぬとそれなりに困る結果になるかもしれないんじゃない？　違う？」

アルフィリースの言葉に、満足そうにユグドラシルは頷いた。どうやらアルフィリースの推察はユグドラシルを満足させるに足るものであったらしい。

「なるほど、やはりお前と話せてよかった。ならば私から一つだけ助言を。ライフレスは色々な意味でお前と対極に位置する者だ。どのような道を歩もうとも、いつかはきっと戦う事になるだろう。あれは強い。もしお前が勝つことができるとしたら、次の三つの情報を得てからだ。一つ、奴がなぜ不死身なのかを知る事。二つ、奴が使う最大の攻撃魔法の対応策を知る事。三つ、奴の真の能力を知ることだ」

「真の能力？　まだ奥の手があるっていうの？」

「ある。それを知らない限り、決して奴を倒す事はできない。たとえどのような仲間を揃えても、決して奴を倒す事は不可能だ。だからこそブラディマリアも不気味がって、因縁があるにも関わらず奴に手を出さかったのだから」

ユグドラシルの言葉には力があった。アルフィリースもまさかと思いながら、まだ信じられないでいた。あれほど圧倒的な存在が、まだ奥の手を隠し持っている。そのような相手に四六時中監視されているとしれば、恐怖のあまりアルフィリースは身震いがするのだった。

そんなアルフィリースを見て少し可哀想になったのか、ユグドラシルが助け船を出す。

「まあそれほど気に病むほどでもない。奴がお前を監視するのはオーランゼブルの命令だからだ。オーランゼブルが存命の内は、決してお前には手を出さない。それどころか、事情によってはお前を助ける命令すら出ている。それなら安心だろう？」
「それでも四六時中見張られているのはぞっとしないわ」
「アルネリアの中ではそれも限界があるがな。まあ万一奴が暴走する事も考えて、私もお前をそっと見守ることにしよう」
「そういうことじゃなくて、お風呂まで覗かれるのは嫌だって言ってるのよ！」

アルフィリースの言葉に、ユグドラシルは三度目を丸くした。今度こそ本当に虚をつかれたようだった。なぜなら、しばらくユグドラシルは目を丸くしたまま止まっていたのだから。

「いや、それは奴にそのような趣味があるとも思えないが・・・」
「そんなのわかんないじゃないの！　ライフレスが変態だったらどうするの！？」
「う、うむ・・・奴にそのような性癖があるかどうか、調べておくとしよう」

ユグドラシルは予想外の質問に狼狽しながら、アルフィリースのヒステリックな質問にたどたどしく答えて行った。そのようなやりとりがしばらく続いた後。

「えーと。で、ユグドはどうするの？」
「まあ世情の監視は使い魔に任せて、瞑想だな。本来なら私が直接動くような事態はあってはならないのだから」
「そうね、貴方のような魔法使いの領域に達した人ならそれでもいいのかもしれないけど。でも私からも一ついいかしら？」

「うん？」

ユグドラシルは自分の耳を疑った。自分に何か助言をしようとする者など、今までいなかった事だ。自分に教えを乞えど、今まで自分に諭そうとする者など誰一人としていなかった。ユグドラシルは驚きながら、アルフィリースの言葉を待った。

だがアルフィリースの口から出たのはもっと意外な言葉だった。

「ユグドはちゃんと自分の足で歩いたことある？」

「は？　いや、それはあるが・・・」

「自分の足で歩いて、風を肌で感じて、すれ違う人と話して、そういうことは？」

「・・・それはないな。私は誰かと積極的に関わった事はほとんどない」

「それは良くないわ。私も山籠りが長かったからわかるけど、人と話す事は時に千の書物に勝るわ。どんな知識も体験に敵わない事はままあるのよ？　手始めに、ククスの実でもかじってみたら？」

笑顔でそう話すアルフィリースに、ユグドラシルはただ黙って一度頷いて見せた。その答えに満足したのか、アルフィリースは大人しくユグドラシルの転移でその場を去って行った。最後に、「また会いましょう」という言葉を残して。

残されたのはユグドラシル。

「まさか私が人間に諭される日が来るとは・・・母上、人間には恐れ入ります」

そう言うとユグドラシルは転移を使おうとして、ふとその手を止めた。

「・・・たまには歩いてみるか」

ユグドラシルはそのまま街道に出て、ベグラードとは逆方向に歩いてみることにした。すると、ほどなくして果物を引いてくる荷馬車に出会った。馬に手綱を付けて運ぶのは、農家の女性だろうか。既に歳は初老に近いほどである。

その荷馬車の実を見て、ユグドラシルは女性に声をかける。

「おばばよ、済まぬがそれはククスの実か？」

「そうだがね。とれたてのやつをベグラードの市へ卸しに行く最中さね。食べたいのかい？」

「まあそう思ったが、あいにくと持ち合わせが無いのだ」

「貧乏な少年ってわけか。まあいいさ、今年は豊作でね。一つ恵んでやるよ」

そう言うと女性は実を一つユグドラシルに放ってよこした。ユグドラシルは見事にそれを受け取って見せる。

「どこに行くか知らないがね、貧しい少年に大地の恵みをってやつさ」

「感謝する、おばば」

「ああ、それとね」

ユグドラシルに女性は指を振って忠告する。

「女にゃおべっかを使うもんさ。あたし見たいな婆あでも、『お姉さん』って言えば、もらえるククスの実も一つ増えるってもんだろう」

「そのようなものか」

「そんなもんさ、世の中なんてね。正しいことが正解とは限らない

さ」

「正しいことが正解ではない、か」

女性にとっては何の気ない言葉だったかもしれないが、ユグドラシルにとっては意味のある言葉だったのか。彼は女性の言葉を反芻するようにその場に立ちつくしていた。

やがてそんな彼に見向きもしなかった女性が去り影も見えなくなると、ユグドラシルは歩きだす。そして思い出したように右手のククスをローブで磨き、口にした。

「少し甘過ぎるな」

そう言いながらユグドラシルはあてどない方向へ歩きだす。彼の胸に去来するのは、

「（果たしてここで私がアルフィリースに会った事で何かが変わるのか。既に東の大陸では動きが始まっている。オーランゼブルの動きが予想よりも早い。間に合うといいがな）」

このような思い。だが、彼以外に誰もその心中を図る者はない。

続く

深くに住まう者達、その7～邂逅?～（後書き）

次回投稿は、１２／１７（土）１０：００です。

侵攻、その1～突然の襲来～

＊＊＊

「モルドレッド、ガラハッド。状況を報告してぇん」
「イエス、マドモアゼル。敵軍の戦力はおよそ7割が減少。間もなく全て鎮静化するかと。殲滅まではもはや時間の問題です」
「ただ敵の首魁とその周囲を固める部隊はそこそこの実力でして、しばし拮抗しております。突破には多少時間を頂くことになるかと」
「えぇ～。そんなんじゃマリア、拗ねちゃうぞ？」

山と積まれた鬼族の死骸の上で優雅に座り、場違いなほどはしゃぐのはブラディマリア。傍に控えるのは彼女の執事と呼ばれる腹心達である。その中のモルドレッドとガラハッドが現状報告のために彼女の元に前線から帰還したわけだが、彼らは背中に冷や汗をびっしょりとかいていた。なぜなら彼らの主人の機嫌が口調ほどに良くない事を知っているからである。

東の大陸に住まう鬼族へ、黒の魔術士達の侵攻作戦が始まってから7日。ブラディマリア彼らの受け持ちである敵の本拠地に到達していたのだった。ブラディマリア達は頭数も多いため、同時に進行したティタニア、ドラグレオとは別に鬼族の最大勢力をといわれる種族を担当したわけだが、これが思ったより手強い連中だった。侵攻に時間がかかったせいで当初の目的だった殲滅はもはや不可能に近くなり、なんとか敵の首魁を追い詰めはしたものの、ここで2日近く時間を取られているのである。

もっとも、この本拠地に立て籠る鬼族はざっと１０万ほどであり、その半分を既に殲滅しているだけでも凄まじいのだが。しかもそれらの出来事を、ブラディマリア達はその手勢のほぼ３００人でやっ

ているのである。鬼族にしたらたまったものではないだろう。
それでもブラディマリアの機嫌は直らない。他の場所ではとっくにティタニアもドラグレオも仕事を終えたとの報告が入っており、残すはここだけなのである。自分達こそが一番の武力の持ち主と自負していたブラディマリアは、体面を潰された格好になっている。昨日は迂闊にも彼女に意見した執事が、首をその場でねじ切られた。以降、執事達は彼女の命令に忠実に従い、無謀とも思える突貫を繰り返さざるをえない状況に陥っていた。そのおかげでかれらの勢力にもいくらかの損害が出ていたので、なおさらブラディマリアの機嫌は悪いと言う寸法だった。
その状況にひやひやしながら戦う執事達だったが、モルドレッドとガラハッドが報告を終えた途端、彼女は自分を扇いでいた扇子を閉じ、その場を立った。

「時間切れね、前線の執事達を撤退させて」
「は？　しかしそれでは・・・」
「わからないのぉ？　巻き添え食うって言ってるのよぅ」

ブラディマリアが前線を見ながら口惜しそうな表情を浮かべる。

「ティタニアとドラグレオが乗り込んできたわ。もう奴らは全滅よ」

＊＊＊

「一体、何が起きた・・・」

燃え盛る業火、崩れ落ちた岩壁、原形を留めぬ仲間であったもの。その中に一人佇むのは、名を黄剛（おうごう）という見事な体躯を誇る鬼族の戦士であった。いや、見事な体躯を誇っていたというべきか。左腕が無ければ、見事というのはやや憚られる。

だがその戦士が強いのは誰が見ても明らかだった。たとえ片腕であろうと、人の胴周りほどもある鍛え上げられた腕。殴れば鎧を付けた人間を三人まとめてへしゃげさせ、その体はいかな名刀も通さないと言われた鋼の体を誇る鬼。彼もまた鍛え上げた自分の体そのものが、何にも勝る武器だと信じていた。目の前にとても長い黒髪の女と、鬼よりも鬼らしい大男が現れるまでは。

その鬼族達は宴をしていた。最近、長らく争ってきた鬼族を一つ滅ぼしたのだ。彼ら、『千弦の谷の一族』は、人間などまるで恐れない。人間よりも、鬼族の中でどのような位置にあるかこそに彼らの興味は注がれた。そのために彼らは自らを鍛え上げ、富を蓄え、武器を磨き、常に戦の体勢を取っていた。勝つためとあらば人間との取引も厭わなかった。それだけ彼らは『強さ』というものに貪欲だったといえる。

その中でも一際目立つ剛の者達。明らかに他の者達より大柄な彼らは『真鬼（しんき）』と呼ばれ、戦士として崇め奉られる存在であった。彼らもまた先代の真鬼達に憧れ、自らを鍛えたからこその真鬼である。この種族の鬼達には他の鬼族には無い、『尊敬』という概念があった。特に彼らの尊敬を集めたのは王。真鬼達が束になっても敵わぬ王は、絶対的な存在として彼らの信頼を一身に受けていた。

そんな彼らは長きに渡り戦力wお徐々に伸ばし、ついに長らく続く因縁の鬼族との戦いに終止符を打ったのだった。長きにわたる一族の歴史上最高の戦士達を抱える彼らは、いずれ自分達が鬼族の世界を統一するだろうと信じて疑わなかった。そして彼らはこれから先の輝ける自分達の将来を肴に、敵を滅ぼした場所でその精鋭部隊は酒盛りをしていた。だがそんな宴もたけなわの折、彼らの本拠地で異変が起こった。彼らの本拠地近くの出城の一つが潰れたとの報告を受けたのである。

それは新たな敵の来襲を告げていた。彼らは先ほどまで浴びるよ

うに飲んでいた酒を一瞬で体内から追い出すと、風を巻いて走り、城に戻った。いかに主力がいないといえど、そうそう簡単に落ちる城ではない。そんな考えが彼らの中にあったが、彼らはそれでも全力で戻ったのだった。戦闘において油断という言葉は、彼らの一族には存在しなかった。

だが彼らが戻って来た時、城壁は打ち壊され、既に半数近い防衛を任された鬼が死んでいた。その現状に驚いた彼らだが、帰還して生き残りを集め、すぐに軍を再編成。改めて戦局を打開すべく出陣した。敵の数の少なさにまず驚いた彼らだったが、状況を冷静に分析。少しずつ適切な対応を始めていった。現に彼らが帰って来てからは、戦局は持ち直し始めていたのである。

そうしてさらに攻勢をかけようとした瞬間、先頭を行く真鬼の首から上が消えた。比較的後ろにいた黄剛はその様子に気付くことができたが、彼が反射的に頭の前に置いた左腕はあっけなく斬り飛ばされた。彼と共に数十年の鍛錬を乗り越えた左腕が、である。彼の後ろにいた者は彼の左腕のおかげで無事だったが、彼の左右に展開していた者はほとんど命がなかったのである。

「な、なんだと?」

黄剛の驚きも無理はない。先ほどまで相手にしていた連中は確かに見た事もないくらい強かったが、それでもまだ倒す方法はあった。自分達がきちんと陣形を組んで対応すればなんとかなると思ったのだ。だが、その強敵を倒すために組んだ陣形が全く無駄になる一撃。黄剛は失われた左腕も忘れ、この一撃を放った者の正体を見極めようとした。

そして彼の目に移ったのは、一人の可憐な女性。鬼である彼らは戦利品としての人間の女に興味はあるが、また同時に食料ともなりうる人間に同等の恋愛感情や、ましてや美意識などを抱く事はない。加えてこの黄剛は自己の鍛錬意外に興味を持った事のない鬼である。

その彼をもってして、思わずため息をつかせるほどの美貌。その女が黒と黄金の大剣を二つ携え、こちらに悠然と歩いて来るのだった。もちろん、足元に横たわる鬼の死体を踏みにじりながら。

「さすがに鬼は木の葉の様にはいかぬか」

女性がゆっくりと口を開く。その言葉に鬼達ははっとし、彼女を一斉に取り巻いた。だがここで彼らが飛びかからなかったのは、鬼達とても恐怖と得体の知れなさを彼女に感じたからか。

女を取り囲み見守るだけの彼らであったが、黄剛だけが前に一歩踏み出した。既に左腕を失った事は、頭の中からなくなっていた。それほど、目の前の女の正体が気にかかったのである。

「女、貴様は何者だ？　先ほどの一撃は貴様か？」

「後の問いから先に答えよう。まぎれもなく私がやったことだ」

女の答えに鬼達がざわつく。さしもかれらも、目の前の華奢な女性が先ほどの様な一撃を放てるとは思っていなかったのだ。いや、直感で彼女の強さを感じとる者はいても、目の前の光景は信じられないものだった。

さらに女は語る。

「先の問いにも答えようか。我が名はティタニア、ただの剣士だ。それ以上も以下もない。ただ私を倒した者には、これ以上ないほどの栄誉が名実共に贈られることだろう」

「戯言を。考えれば貴様が何者かは関係ない。少なくとも戦場にあらわれた以上、我らが貴様を生かして返すと思うのか？」

「気持ちだけでは何もできぬ。実力の伴わぬ脅し文句など、惨めなだけだ」

「何ぃ？」

黄剛がティタニアに掴みかかろうとしたその刹那。彼女を包囲していた鬼達の一部が殴り飛ばされ、いや、吹き飛んだ。と、共に聞こえてきたのは、男の豪快な笑い声。

「ばーははははっはぁ！　強い奴はどこだぁ！」

「今度は何だ？」

「まったく、相も変わらず騒がしい・・・」

事態の変化に戸惑う黄剛と鬼達に、ため息をつくティタニア。そして吼えるのは、もちろんドラグレオ。

「おお、ティタニア！　ここにいたか！」

「いて悪いか」

「いや、いや。まったく悪くないぞ！　ガハハハハ！」

「なぜそこで笑う。まったく、訳のわからん奴だ」

まさに美女と野獣といった様相の二人のやりとりを、鬼達は大人しく聞いていた。一見他愛のない話をしているように見えるが、それでも彼らの圧力は鬼達をその場にとどめるのに十分であった。それが彼らの死を先延ばしにするだけという結果を、彼らが勘づいていたとしても。

そしてティタニアの鋭い目線と、ドラグレオの貪欲な目線が、同時に鬼達に向けられる。

侵攻、その1～突然の襲来～（後書き）

次回投稿は、１２／１９（月）１０：００です。

侵攻、その2～美しき獣と猛々しい獣～

「「さて、と」」

全く気も性格も合わぬ二人だが、戦う者としての息だけは完璧に合うらしい。互いに背中合わせに構えた彼らだが、その瞬間黄剛がドラグレオに飛びかかっていた。これが唯一の隙だと、彼は読んだのだ。

「オオオ！」
「ぶぐぉっ！」

黄剛の右腕はドラグレオの顔面を正確に打ち抜いていた。黄剛はドラグレオの方を与し易しと見て飛び込んだのだ。もちろんドラグレオに一撃を放った瞬間、女剣士に切り捨てられる可能性もあった。その前に拳そのものが届かない可能性も。

だが、ティタニアは黄剛に見向きもせず、ただその場に佇んでいた。いや、それだけではない。いつの間にかティタニアの足元には、切り取られたはずの黄剛の左腕が置いてあるのだ。目に入った予想外の出来事に黄剛はドラグレオに追撃するのも忘れ、その場に佇んでしまった。

「なぜ、俺の腕がここ・・・」
「良い腕だ」

黄剛の言葉はティタニアに遮られた。彼女は黄剛の言葉になど興味がないのだろう。だが、鍛え抜かれた彼の体躯には興味があるらしい。自ら切り取ったはずの黄剛の腕の切断面をまじまじと見ながら、ティタニアは呟いていた。

「生まれてこの方、寸暇も惜しんで鍛えたと見える。筋肉の一筋に至るまで美しい。これほどの肉の密度は、人間の体では成し得ぬな。人間が同じ鍛え方をしても、このようにはなるまい」
「・・・何が言いたい」
「私がこうであれば、もっと結果は違ったかもしれぬということだ」

振り返ったティタニアは、黄金の大剣を手にしていた。その切っ先がゆらりと揺れたかと思うと、黄剛が反応する間もなく、切り取られた左腕の切断面をさらに極薄に切り取った。

「な、何をする！」
「こうするのだ」

さらにティタニアが切り取った方の腕の切断面も同じように極薄に切り取り、その切断面どうしを合わせる。黄剛は呆気に取られたが、不思議とティタニアにされるがままだった。その行為がもたらす結果を、なんとなく黄剛も理解したのだ。

「これは・・・」
「もう動くのではないかな？　久しぶりにやったので、何秒かかかってしまったが」

ティタニアが手を放すと、黄剛の左腕がぴくりと反応した。なんと、彼の腕は元通りに動くではないか。

「元に戻したというのか？」
「剣とは斬るだけが全てではない。全てを斬ることに終始する剣士が昨今大勢いるが、私に言わせれば愚の骨頂。真の剣士とは斬るものを選ぶ。そして全てを斬るならば、『斬った』という結果すら斬

り捨てねばならぬ。わかるか？」
「いや・・・だが、何のために俺の腕を？」

黄剛にはティタニアの話の内容はさっぱりだったが、彼女の目的だけは気になった。その純粋な疑問の眼差しを彼女に向ける黄剛の目に、ティタニアはふっと笑うと、顎でドラグレオが吹っ飛んで行った方向を指した。

「あいつの相手は片手では骨が折れよう。少しでも差を埋めるための私なりの処置だ」
「いいのか？　その結果私が勝ったらどうする？」
「心配するな、それはない」

今度はティタニアがきっぱりと、そして冷たく黄剛の言葉を切り捨てた。その言葉は黄剛に有無を言わせぬものだった。さらにティタニアは続ける。

「貴様が私に感謝する事は決してない。それどころか結果を見れば貴様は私を呪うだろう。私が貴様の腕を直したのはな、ドラグレオがあっさり貴様を倒し、私の戦いの邪魔をせぬかどうかが心配だったからだ。あいつは私の剣などお構いなしに戦いを始めるからな。今回の戦いの目的は殲滅。一人たりとも生かして返す気はない。だがドラグレオの戦い方は雑すぎる。奴に任せていては必ず逃げ延びる奴が出てくるし、それに私の剣が奴に当たれば、矛先自体が私に変わりかねん。さしもの私も、奴の相手は面倒臭い。
そういうわけで、貴様には私がここの鬼達を全滅させるまで奴の相手をしてほしいのだ。何、両腕があれば太陽が沈むまではもつだろうさ。今はまだ太陽も高いしな。私もその間に、ここの連中を狩りつくすとしよう」
「・・・は？」

あまりに想定外の答えに、黄剛はその場に固まってしまった。普段なら笑い飛ばすほど馬鹿げた内容。だが、ティタニアがあまりにきっぱりと言い切ったために、黄剛はどうしてよいのかわからず、次の言葉を失くしてしまった。

そんな彼の意識は、ドラグレオの怒号によって引き戻される。

「痛くねぇぞ、ちきしょおおおおおお！」

「と、叫ぶと言う事は、痛いと言っているようなものだ。ああ、そういえばドゥームの奴が、『あいつは存在自体が痛い奴だよね』とか言っていたな。最近の連中の言葉の意味はさっぱりだが、こういうのを痛い奴と言うのか？　私にはわからんな」

ティタニアがかぶりを振りながら剣を構え直していた。そして歩みを始めたティタニアに、黄剛は思わず声をかけてしまった。

「待て！　今から日が沈むまでに鬼を狩りつくすだと？　ここに何万の鬼がいると思っているのだ？」

「先ほど剣先を地面に反響させて私が調べた時には、３０万と、飛んで６７２人。非戦闘員は離れた場所にいたようだから、戦う者は５万程度か」

「なぜ、それを」

「ああ、ちなみに離れた所にいる連中は今頃全滅している。アノーマリーとかいう私の仲間が、新型の魔王の実験場にすると言っていたからな。ざっと１０００体は投入したはずだ。鬼と言えど、戦う手段を持たぬ者ではどうしようもないだろうな。だから私の受け持ちは、ここの五万程度だ。全力を出した私ならば、半日たたずに終わると思わないか？」

「な、なんだと！？　貴様、戦えぬ者に何を・・・」

だが黄剛が怒りに打ち震える間も、ティタニアの言葉を理解する暇もなかった。吠えながら突進してきたドラグレオが彼に突進する形で、あっという間にその場から引き離したからである。黄剛はドラグレオの突進を受け止めながら、視界の端にティタニアの一振りにて自分の部下達の首が一斉に跳ね飛ばされるのを見ていたのだった。

続く

侵攻、その2～美しき獣と猛々しい獣～（後書き）

次回投稿は、１２／２１（水）１０：００です。

侵攻、その3～破壊する者～

＊＊＊

それから時は先ほどに戻る。意識の朦朧とした黄剛が聞いたのは、自分が主と崇めた男の断末魔の声だった。いかほど自分が鍛えても、ついに届かなかったその存在。彼に憧れ、何度も勝負を挑みながらも、ついに黄剛は彼に膝をつかせることすらできなかった。王が敵を前に退くのすら見たことがなかったが、その王の断末魔の声が聞こえたのである。

何度もそれは間違いであったと彼は信じたかったのだが、それは目の前に現れたドラグレオによって阻まれた。

「やったのか？」

「はーははははぁ！　これが証拠だぁ！」

ティタニアの問いに、ドラグレオは左手に持っていたものをぽいと投げた。それは黄剛がただ一人憧れ尊敬した人物であった者の、苦悶に満ちた死に顔であった。いつも歓喜に満ちた表情で戦場に望んだ彼の、そのような顔を黄剛は見たくなかったのだ。

「ウ、ウオオオオオ！」

「なんだぁ？」

黄剛は悲痛な叫び声と共にドラグレオに突撃した。彼は怒りと力任せにドラグレオの顔面を殴り続ける。一撃一撃が大岩を砕くほどの出力で放たれ、ドラグレオはただ殴られるがままだった。その猛攻に反撃の隙がないのか、あるいはただ面倒なだけか。だがその手

もやがて体の限界を超えた疲労物質の蓄積と共に力なく垂れさがり、彼の全身は小刻みに震えていた。それが怒りなのか、悲しみなのか、ただの疲労による筋肉の痙攣なのか黄剛にはわからない。

だが、ドラグレオはそんな彼をあざ笑うかのように、

「なんだ、もう終わりか。つまんねぇ」

黄剛の横っ面を裏拳で殴り飛ばしたのだった。蹴飛ばされた小石のように吹っ飛んでいく黄剛。

そして凄まじい衝撃と、破れた鼓膜で遠くにいるドラグレオとティタニアの話声が、まるで耳元で囁くかのように黄剛に聞こえてきた。それはまるで水の底にいるかのような反響の仕方でもある。

「満足・・・か、ドラグ・・・レオ」

「いや・・・物足り・・・ねぇ」

「まった・・・く、貪欲・・・な奴だ。だが任・・・務は完・・・了だ」

「まだ・・・全員殺し・・・てねぇ」

「後はブラディマ・・・リアの仕・・・事だ。そうだ、あの離れた居住区は・・・お前に任せたい・・・のだが。私の剣も・・・さすが・・・に、あそこまでは・・・届かん。だが、お前の・・・ブレスなら・・・」

「いい・・・ぜ、やってやる・・・よ」

焦点の合わぬ黄剛の目に、ドラグレオがゆっくりと黄剛達の一族が住む町へと向き直るのが見える。そしてドラグレオが息を大きく吸い込み吐き出すと、その口からは息ではなく白銀の吐息、いや光線とでもいうべきブレスが一直線に町に向かって放たれたのだった。

辺り一面が光に包まれたかと思うと、轟音と共に町が空中に巻き

散らかされていた。ブレスは町のある山の中腹程度に命中したのだ。だがその威力は凄まじく、山ごとその町を衝撃波で空中に持ち上げていた。その様はまるで玩具に飽きた子どもが癇癪を起こし、玩具を空中に放り投げたかのように無造作で。そして空中に巻き上げられた町や人の残骸が舞い降りてくる様は、悲哀に溢れていた。

だがそんな情景を見ながらティタニアとドラグレオは何にも感慨を抱いていないようだった。それどころか、

「ドラグレオ、とどめだ」

「おうよ」

その無慈悲な言葉だけは、耳のおかしくなった黄剛にもはっきりと聞えたのだった。

「や、やめろぉおおおおお！」

「ふうぅ～・・・ラァ！」

ドラグレオの掛け声と共に、先ほどよりも大きさをと太さを増した白銀のブレスが一直線に町を直撃した。そして今度は巻き散るもののないほどに、町は完璧に木端微塵となったのだった。

「あ、あああああああ」

壊れかけた体に喝を入れて、それでも這いずるようにして黄剛が町ににじり寄ろうとする。そんな彼を横目に、ティタニアはその剣で彼らの王城を八つ裂きにしているところだった。彼女の伝説の一つである、「城切り」であった。

だがそんなことに黄剛はもはや興味も示さず。彼はうつろな目で必死に誰か生きている者がいないかどうかを探そうとしていたのだった。そして、彼の胸にはやりきれない思いが溢れ出る。

「お、俺達が・・・俺達が何をしたぁ！」

黄剛が必死に吼える。その叫びは、この場を立ち去ろうとしたティタニアの足を止めた。ドラグレオの方は完全に興味を失ったのか、彼の言葉に見向きもせずにその場所を立ち去ろうとしていたが。

ティタニアが憐れむでもなく、侮蔑するでもない目で、ただ黄剛を見つめていた。黄剛はさらに吼える。

「我ら『千弦の谷の一族』、鬼の中にあっても無用な争いを慎み、中立に近い立場を取って来た！　その我らが何故、このような仕打ちを受けなければいけない！」

「何を吼える、鬼よ。元々生き物とは存在するだけで戦い、朽ち果てる運命の者のはず」

ティタニアが静かに、しかしやや怒気が籠ったような声で答えた。その表情には彼女には珍しく、怒りとも悲しみともとれる表情が見て取れる。

「そも、この世に誕生せし折より、我々は食うか食われるかを強要される。弱きは死に、強きは生きる。それが無用な社会構造が発達したせいで忘れられているが、元々はそうだったのだ。その摂理に力を誇示する代名詞である鬼が嘆くとは笑止千万。昔の鬼達はもっと剛毅であったがな」

「な、なんだと？」

「それに貴様達を狙った理由だが、それは貴様達が強く、生命力に溢れているからだ。貴様達の鍛錬こそが、我々を招いたともいえる。強き力は、いずれさらに強き力で叩き潰される。それは私とて例外ではないがな。まあ一言でいえば・・・」

ティタニアが少し間をおく。だがあくまで無表情に。

「我々に狙われた貴様達は不運だった。そういうことだ」

続く

侵攻、その3～破壊する者～（後書き）

次回投稿は、１２／２３（金）１０：００です。

侵攻、その４～混沌の予感～

「ぐ・・・く」

あまりといえばあまりの言葉に、黄剛は言い返す言葉もなかった。そんな彼だが、もう一つ浮かんだ疑問を思わずぶつけずにはいられなかった。

「俺を殺さないのか？」

「そうだな・・・貴様は強い。それに戦士としての運もある。なにせ我々二人と戦い、まだ生きているのだから。私個人としては殺すには惜しいと思っている。だが」

ティタニアは少し残念そうに、上の方向を指さした。その先には、掌に巨大な黒い物体を浮かべた少女が空に浮いていた。ブラディマリアである。

「今回の目的は完全殲滅でな。まだこの土地には１００体近い生き残りがいるが、諦めてくれ」

「く、く、くそおおおおおお！」

黄剛の叫び声と同時に、ブラディマリアの掌から黒い物体が放たれる。

「覚えていろ、貴様達！　いずれ貴様達の上には、相応しい罰が下るぞ！　その時こそ、我々の怨嗟の声を聞くがいい！！　我々はその時を楽しみに、地の底から高らかに笑って待つとしようぞ！　ははは、ははははは！　ははは・・・」

最後は狂ったかのような笑い声を挙げる黄剛だったが、ティタニアは眉一つ動かさず、颯爽とその場を去って行った。やがて彼の笑い声も黒い物体が巻き起こす黒い奔流にかき消され、後には当初の目論見通り何一つ残らなかった。魔王の襲撃からいち早く町を脱出しようとした者も、ブラディマリアの執事達によって残らず殺されていたのである。

この日、地上から一つの種族が姿を消した。ただ一人を除いては。

そしてそのしばらく後。動くもの一つ見当たらず、完全に廃墟と化した場所で会話をする三人。いや、ドラグレオは既に寝ているので、正確にはティタニアとブラディマリアだけである。

「随分と救いのない事を言ってあげたのね、ティタニア。嘘でもいいから希望を持たせてあげればいいでしょうに」
「嘘は好みません。それに、とどめを刺した本人が言う言葉ではないでしょう」
「確かにね。キャハハハ！」

ブラディマリアは楽しそうに笑う。身を抱えて笑う姿が妙に幼く、その強大な力に見合わずより奇妙であった。そのブラディマリアを見て、ティタニアが不思議がる。

「それにしても妙ですね、ブラディマリア。貴方ほどの者が、我々が来るまで手こずっているなんて。手下で苦戦しても、貴方が出れば一瞬で片がついたのでは？」
「確かにねぇ。でもさしものアタシも、やや子がいる状態で戦闘をするのは憚られるのよ」
「・・・は？」

ティタニアが何か聞き間違いをしたとでも言わんばかりに、思わ

ず聞きなおした。ティタニアがこのように怪訝な顔をするのは珍しかったかもしれない。

「ブラディマリア、今何と？」

「あらら？　まったく、今さらおぼこぶっちゃってぇ。アタシ、お腹に子供がいるのよ。いわゆる、に・ん・し・ん」

「誰の？」

からかわれているのかと思ったティタニアが、次々と質問を浴びせかける。その様子を見てティタニアが慌てたと思ったのか、ブラディマリアはいつになく上機嫌だった。

「いやぁねぇ、アタシの相手がつとまる男なんてそうそういないでしょう？」

「・・・まわりくどい言い方はよしてください。誰なのです？　いや、すみません。そもそも私には関係のない話でしたね。言いたくなければ結構」

「意地悪ねぇ。ここまで言わせておいて、それはないわ。どうせなら最後まで聞きなさい。相手は浄儀白楽よ」

「・・・人間などと交わるとは、貴女はそのような生き物でしたか？」

「人間の言葉とも思えないわね、ティタニア」

ブラディマリアが皮肉っぽく、くすりと笑う。

「アタシは種族差別はしないのぉ。強い者は強い。現にアタシの部下にも半分人間の者はいるのだから。アタシは博愛主義者よぅ？」

「施すのが死でなければ褒めますが。とんだ博愛主義があったものです」

「死こそ貴賤の別なく訪れるものよ？　もっとも、アタシより弱い

者に対してだけだけどぉ～」

けらけらと笑うブラディマリアにティタニアは軽い頭痛を覚えながら、その場を去ろうとする。去りゆく彼女の背後から、目を細めたブラディマリアが声をかける。

「これからどうするの？　アタシはしばらくお休みをもらっちゃったけど」

「私は次の仕事が。少なくとも、今回の戦いより大仕事です。その後の予定は今のところありませんが」

「へぇ？　次の仕事、内容を聞いてもいいの？」

「口止めはされているので、内容は話せません。ですが、私にとっても大一番です」

「なるほど。だいたい読めたけど、そんなことをしていいのかしら？　まだ次節は早いかと思うのだけど・・・まあいいか。アタシは楽しく殺せれば、それでいいのだし」

「・・・やはりあなたは博愛主義などではないですよ」

「これでも子育てはしっかりやるんだけどぉ？」

またしても楽しそうにブラディマリアが躍ったので、ティタニアはその様子を内心では唇を噛みしめながら見ていた。

もし仲間内の協定がなければ、あるいはもっと早くブラディマリアと出会っていれば。ティタニアは真っ先にこの女を斬っているだろうと思う。存在するだけで死と恐怖をまき散らす存在。本人以外の誰にとっても益とはならぬこの存在に、ティタニアは嫌悪感を覚えていた。なぜ自分は１０００年近くも生きながら、この女の存在に気が付けなかったのか、あるいは想像できなかったのか。もっと早く思考が彼女の存在に追いついていれば、あるいは自分の運命も変わっていたかもしれないと思う。

「（あとの祭り、だな）」

ティタニアはいつかブラディマリアを斬り捨てることを心に誓いながら、躍る彼女をあとにその場を去っていく。なぜブラディマリアがこれほどの存在でありながら歴史の表舞台に出てこなかったのかは非常に疑問だったが、そのことを聞いて眠れる悪魔を起こすような真似はしたくなかった。

そしてティタニアが去った後では、ブラディマリアが嬉しそうに笑っていた。

「さてさて、いったいどんな子供が生まれるかしら？　男の子？それとも女の子？　両性だったりして～。どっちにしても、よい魔王。いえ、大魔王に育つわぁ。この子が将来成長して、大勢の人間を阿鼻叫喚の渦に叩き落とすと思うと、今からぞくぞくしちゃう。ああ、体が疼いてきたわぁ～また白楽のところに行っちゃおうかしら？　それともおなかの子に障るからやめておきましょうか？　ああ、そうね。本人に聞いてみることにしましょう」

ブラディマリアは指を小さく噛むと、懐から取り出した紙に血で文字を書き始めた。文を書く彼女はどこか楽しそうでもあったが、すぐにその手紙を書き終えると、手をぱんぱんと叩いてガラハッドを呼び寄せた。

「マドモアゼル、お呼びでしょうか？」
「この手紙を浄儀白楽の元に届けて頂戴。急ぎでね」
「はい。伝言はございますか？」
「そうね、『動くなら今がいいんじゃないの？』とでも伝えてくれる？」
「・・・なるほど、そういうことでございますか」

ガラハッドがブラディマリアの意思を察してニヤリとする。その彼の態度に、ブラディマリアも満足したようだった。

「ガラハッド、あなた察しがよくて助かるわ」
「お褒めに預かり光栄です。では私はこれで」

ガラハッドは転移で音もなく消える。そしてブラディマリアはいつの間にか召喚した、巨大な三つ首の怪鳥の背に乗っていた。

「さて、これでしばらくは東の大陸は面白くなりそうね。もうアタシが動かなくても、しばらくはこの大陸からは争いが消えることはない。そしてやがては他の大陸にも・・・ふふふ、楽しみね。アタシの坊や」

ブラディマリアの残虐な微笑みに応えるかのように、彼女の子どもは母親の腹を蹴るのであった。

続く

侵攻、その４～混沌の予感～（後書き）

次回投稿は、１２／２４（土）１０：００です。久しぶりの連日更新。私からのクリスマス的な何か。

討魔協会の舞台裏、その1～浄儀白楽の場合～

＊＊＊

「お館様、どちらに！」

鳴子造りといわれる特殊な作りの廊下を、慌てて走る青年が1人。この廊下は外敵の侵入を知らせるため、歩くと大きな音が出る仕組みとなっている。そこを走るものだから、一人が走っていてもちょっとした喧騒となるのであった。

走る青年の名は猿丸。浄儀白楽のもっとも近くに仕える青年である。

「ここだ」

その彼を野太い声が呼び止める。声の主である浄儀白楽は庭で気を練っている最中だった。上半身をはだけた彼の体からは寒さを覚える季節の中でもじっとりと汗が滲み出ており、静かながらも彼が厳しい鍛錬を行っていることが一目でわかる。

彼は男性としては肉体の盛りをとうに過ぎていたが、彼の肉体は若い男性と比べてもなんら遜色のないほどに鍛え上げられており、彼が他人に対して以上に自己に厳しいことを表していた。だがその鍛錬の様子を知る者はごくわずかであり、多くの者は浄儀白楽をただの暴君として解している。もちろん彼には討魔協会の長たるだけの才覚も実力もあることは、誰しもが認めることではあるが。

そんな彼の背中を見、その場に平伏する猿丸。

「お館様、申し上げます！」

「よかろう、申せ」

猿丸を見もせずに返事をする白楽。彼はまだ鍛錬をやめる気はないようだ。この気を練る鍛錬は見た目よりも体力と集中力を要する。体の中に巡る血流、筋肉の動き、魔力の動きを一つ一つ把握し、異常があれば正し、バランスを見ながら一つを強め、あるいは弱める。強くし過ぎると全体のバランスが崩れるし、ただ弱めただけでも全体が弱まるだけ。非常に微妙なバランスを要求されるが、それを白楽は会話をしながら行っていたのだった。これは言うほど易しいことではない。

だが猿丸も彼に十全の信頼を抱いているので、自分の言葉ごときで彼の集中が乱れないことも知っていた。猿丸は遠慮なく続ける。

「ブラディマリア殿の部下がおいでになり、手紙をと」

「読め」

「はい」

猿丸はその手紙を読もうと中身を開いたが、その内容を見てためらいが出てしまった。白楽の命令に忠実な猿丸だが、その彼をもってして、読むのを躊躇われるような内容だったのである。

訝しんだは白楽。読めと命令したのに、猿丸の声が聞こえなかった。

「どうした、猿丸よ。文字が読めぬわけではあるまい？」

「はぁ。ですが、これは・・・」

「幼少の頃より貴様には何度も言ったな？　俺に同じ言葉を二度言わせるな、と」

「・・・失礼しました。不肖猿丸、どこまで忠実に読めるかわかりませぬが、精進させていただきます」

「？」

その言葉に、さしもの白楽も妙な印象を抱いた。そして猿丸が咳払いを一つすると、その手紙を読み始めたのだった。

「えー、『愛しの白楽様ぁ～、突然の手紙を寄越すアタシの無作法を許してねん。このたびアタシ達は鬼達の拠点を全て潰す事に成功しましたぁ。これで討魔協会が鬼の征伐といった些事に囚われることはないでしょう。ようやく白楽様の本来の目的に邁進できると思いますの。不肖マリアめの、せめてもの贈り物を受け取ってぇ。では、ブラディマリアより愛をこめて。ああ、それと私たちの子どもの名前ですけど～・・・』」

そこから先は冗談半分、惚気（のろけ）半分の内容だったので、白楽は本気で聞いていなかった。それならば朗読を途中でやめさせてやればよさそうなものだが、白楽は考え事をしていたので、猿丸は顔面から火が出るのを我慢しながらひたすら朗読を続けていたのである。

そして猿丸が半ば放心状態になりながら手紙を読み終えると、そのまま白楽は彼に背を向けたまま考え事をしていた。忠実な猿丸は彼の言葉を待ちながら、その場に精根尽き果て膝まづいていたのである。哀れ猿丸をさらに鞭打つように、冬の到来を告げる一陣の木枯らしが吹いたその時。

「猿丸よ」

「はい」

浄儀白楽は猿丸の名を穏やかに呼んだ。それは猿丸が聞いた中で、もっとも穏やかな彼の声だったかもしれない。だがその内容は、今まで彼が聞いた中でもっとも驚くべきものだった。

「各国の代表、大名を集めよ。鬼相手の戦いが終了したことを告げ

る」
「はい。では急ぎで？」
「うむ。目出度いことと称して、年初の祝いの席で集合をかけよ。その時に諸々の手配が必要だがな・・・耳を貸せ」
「はい」

そして猿丸に何かしら耳打ちをする白楽だったが、その内容を聞いて思わず叫び声をあげそうになる猿丸の口を押えながら、白楽は全てを説明しきった。その内容を聞いて呆然とした猿丸だったが、白楽が本気なのを目の輝きで悟ると、彼は黙って礼をしてその場を去った。白楽が冗談を言う性質ではないことを、猿丸はよく知っていたのだ。

そしてまたしても一人になった白楽は、他の者の前では決してしないどこか憂いを帯びたような表情になるのだった。

＊＊＊

同日時、清条家屋敷。その屋敷の私室に坐して書物の写生を続ける詩乃だったが、何かに反応したようにその手をぴたりと止める。

その傍に控える式部を詩乃がちらりと見ると、式部はこくりと頷いてどこへなりと去って行った。入れ替わりに、あわただしく東雲が駆け込んでくる。

「詩乃様！　たった今・・・」
「わかっています、私が自ら行きましょう。誰にも気取られていませんね？」
「それは大丈夫かと。ですがこれは」
「東雲、慌てないで。いずれ予想できた事態の一つです」

詩乃はそう言ってすっくと立ち上がると、慌てる東雲を伴って部

屋を後にした。そうして人に見つからぬように人気のない廊下を選びながら彼女達は歩いていく。時に人とすれ違うも、彼らは詩乃を見ると平伏し、その行き先を尋ねるようなことはしなかった。彼女はミリアザールの前では大人しくしているが、清条の家に帰れば立派な統治者であり、また十分な威厳を備えた当主であった。時に強引に恐怖を持って一族を統括する彼女は、ミリアザールが想像する以上に支配者の資質に恵まれていた。もちろんその資質を開花させたのは他ならぬミリアザールであろう。

彼女達がうっそうとした茂みに出ると、彼女は一直線に茂みの方に歩いて行った。その前で詩乃が手をかざすと茂みは左右に分かれ、詩乃と東雲はその中を歩いて行った。茂みはまるでその意志を持つかのように、彼女達が通った後茂みは元に戻り、その道を誰にもわからぬように隠していた。

茂みの中詩乃と東雲だけを浮かび上がらせるように空いた空間は、彼女達の歩みに合わせて場所を変える。やがて開けた場所に二人が出ると、そこには小さな庵があった。その茅葺の入り口には、先ほど部屋を先に出た式部が庵を守るように立ちはだかっていた。

続く

討魔協会の舞台裏、その1～浄儀日楽の場合～（後書き）

次回投稿は、１２／２５（日）２２：００です。

討魔教会の舞台裏、その2～清条詩乃の場合～

「お待ちしていました、詩乃様。応急手当は済んでおります」
「ご苦労。彼女は中に？」
「はい。大怪我を負われていますが、命に別状はないかと」
「話せますか？」
「ある程度なら。気分が優れないでしょうから、内容は穏やかに。できれば短時間で終わらせてください」
「それは彼女次第でしょうね。ですが穏便な話しには終わらないでしょう」

詩乃は少し目に悲しみを宿しながら、庵の簀子（すのこ）をゆっくりと開いた。その中は久しく使われていなかったのか外気が入って埃がもうもうと舞い上がったが、中には一つ横たわる影が見受けられた。

「耀（よう）姫、ご機嫌いかがでしょうか？」
「し、詩乃か・・・」

息も絶え絶えにその場に横たわっているのは、千弦の谷の一族唯一の生き残りである耀姫だった。肌艶良く生命力に溢れていた外見は生気なくその輝きを失い、一時に１０も２０も年をとったかのように見えるのだった。赤い蠱惑的な唇もひび割れ、肌は乾燥しがさついている。やや小柄な体格も相まって、その姿は暗がりでは老婆と錯覚しそうであった。

彼女はこっそりとつなげておいた、詩乃の私宅にある遠隔転移の魔方陣を使って九死に一生を得たのだった。ブラディマリアたちの襲来時、耀姫は一部隊をひきつれ市街地の様子を見に行った。その時に魔王の大群とブラディマリアの部下により城とは完全に分断さ

れたわけだが、結果としてそれは彼女の命を救うことになった。なぜなら彼女がひそかに設置した魔方陣は市街地のはずれにあり、また彼女は城になんとか戻ろうとするも、あまりに敵の包囲網が厚すぎて帰ることは不可能であったのだ。もし帰っていたら、ティタニアかドラグレオの手によって八つ裂きにされていただろう。

市街地に釘づけにされた彼女は魔王の大群を相手になんとか奮戦していたが、劣勢は明らか。圧倒的な負け戦の中部下とその臣民がとる行動はおのずと絞られており、耀姫は多くの仲間の犠牲の上に逃がされたのである。

「詩乃、詩乃！」

その耀姫が絞るような声で詩乃に懇願するように声をかけた。彼女は敷かれた布団から這いずるように出てきて、詩乃の服の裾をつかむ。自然、詩乃は軽く引き倒されるような格好でその場に座った。

「詩乃よ、私は・・・私は・・・」
「何も言わないで、耀姫。わかっていますから」
「いいや！　何もわかっておらぬ！」

耀姫が詩乃の言葉を強く否定した。彼女は力の入らないその体で、必死に詩乃の腕をつかむと、そこはやはり鬼の力。詩乃の表情が歪むほどには、その右手に力がこもっていた。そしてその瞳は狂気に彩られるように、瞳とその同じ色で血走っていた

「全員殺されたのだ！　一人残らず・・・一人残らずだぞ！？　老若男女、赤ん坊に至るまでだ！　あんな、あんな惨い殺され方をするほど我々は罪深い存在なのか？　途中からは戦意を失い、投降を申し出る者もいたのだ。だが一人残らず八つ裂きにされた。いや、殺されただけならまだよい。中には生きたままあのおぞましい化け

物どもの慰み物や苗床にされたものや、操られて敵の先兵として戦わされた者もいる。あんなむごい戦を、私は聞いたことがない」

「・・・そうですか」

「ああそうだ！　それに最後のあの威力の魔法か何か・・・あんな破壊力の一撃があるとは、私はいまだに信じられん。いまだに私は天に我らの町が巻き上げられた光景が、まざまざと瞼の裏に浮かぶのだ。天に地上が出現し、やがてゆっくりと大地が降ってくるあの光景が。同時に巻き上げられた人の表情が絶望をありありと浮かべ、はるか上空から雨の様に降ってくる光景が。彼らの無念の表情が私は忘れられぬ。どれほど疲労してようと、あの表情が私に訴えかけてくるのだ。『仇を討ってくれと』。私はそのためなら、世界の果てに棲むという滅びの魔獣に魂を売っても構わん！」

「耀姫の思いはよく理解しました。ですが、今は体を休めるとき。あなたが死んでは元も子もないのですから。これ以上の会話は体に障りましょう。ゆっくりお休みくださいませ」

「・・・うむ。迷惑をかけるな、詩乃よ」

ある程度心情を吐露したことで落ち着いたのか、耀姫は東雲に促されるまま布団に入り直し、掛布団を引き寄せ寝ようと努力していた。だが高揚した精神は収まらないのか、中々寝付けそうにないことを詩乃は察すると、目配せで式部に眠くなるための香を焚かせ、その場を後にした。

香の甘い匂いにより眠気を誘われ始めた耀姫は、意識をやや朦朧とさせながらも詩乃に問いかける。

「のう、詩乃よ」

「なんでしょう？」

「もし私が死んだら・・・仇をとってくれるか？」

「不吉なことを言わないでください。ですがもしあなたが死んだら、私が一命に変えてもその仇を討ちましょう」

「・・・ありがとう。持つべきものはやはり友よ・・・な」

その言葉が徐々に曖昧になると、耀姫は眠りについたようだった。
それを確認すると3人は庵を後にする。そして式部と東雲になにかしら用事を申し付けると、自分はもう少し耀姫についているからと一人その場所に残った。
誰も話す者のいない場所で、詩乃は庭にある一本の見事な桜の木に話しかける。

続く

討魔教会の舞台裏、その2～清条詩乃の場合～（後書き）

次回投稿は、１２／２７（火）２２：００です。

「もう出てきたらどうですか、ヒドゥン・・・でしたか？」
「気づいていたか。思っていたより油断のない女だ」
「ここは私の領域ですから。他の場所ならいざ知らず、そうそう私をごまかせると思わないことです」
「なるほど。さすが我々に協力を申し出るだけの事はある」

桜の枝の影の一つが人型に変わり、そのままむくりと起き上ってくる。その影がはっきりと形を成すと、それは頬の欠けた神経質な青年へと変化した。

「お初にお目にかかる。私はヒドゥンと申す者だ」
「初めまして、が正しいかどうかわかりませんね。私に使い魔をよこしてきたのはあなたでしょうか？」
「よこした、というよりはそちらがいち早く勘づいたのだろうがな。まあ私の使い魔とやり取りをしていたことに違いはない」
「なるほど。で、あなたはそちらの組織ではどのような立場なのですか？」

詩乃の目が少し鋭さを増す。その目にヒドゥンは正面から見据えたが、彼のどこか殺気を孕んだ目を見ても、詩乃は全く怯えることなく見つめ返していた。

「私がどのような立場かは、この場に関係あるのだろうか？」
「あります。使い魔とのやりとりではなく、直接の対話が可能になった時点で私はあなた方の一定の信頼を得ることに成功したのでしょうが、腹を割った話し合いをするには幹部以上の人間と話したい。

下っ端とは迂闊な事は話せませんから」
「なるほど、ただの世間知らずな小娘ではないようだ。案ずるな、我々の組織には無用な人間はいない。貴様の前に現れれば、それは全員が幹部だと思ってくれて構わない。ちなみに私は立場上2番目、我々の首魁の補佐をしている。これで満足か」
「ある程度は。その言葉が本当だとすれば、ですが」
「疑り深い女だ」

ヒドゥンはくっくっと忍び笑いを漏らすと、懐から書簡を取り出した。それは厳重に封を施されており、中身をうかがい知ることはできなかった。

「それは？」
「ここには貴様がこれから取るべき行動が示されている。この通りに行動してくれれば、我々としては今後の計画が非常にやりやすい」
「なるほど。もし何か不都合などがあった場合や、私の行動の成果は誰にどうやって報告すれば？」
「報告の必要はない。今後貴様は我々の手駒の一つとなる。よって、その行動は逐次我々によって監視され、報告など不要だ。それに貴様が失敗すれば、その時は貴様が一人で死ぬだけの事。それだけだ。くれぐれも勘違いするな、貴様と我々が対等などとは思わぬ事だ。貴様が役にもたたぬ存在だと知れれば、我々の協力もそこまでだ」
「よくわかりました、ではそのようにいたしましょう。それで、私の行動が成功した暁の報酬ですが・・・」
「わかっている。清条家単独による、討魔教会の専制統治だろう？そのための画策は全部私練ってやろう、心配するな」

ヒドゥンがじろりと詩乃を睨んだ。その目には、俗物を見る侮蔑の色と、同時に憐れむ様な色が混じっていた。
詩乃はその目線の意味に気付いたのか、今度はふいと目をヒドゥ

ンから逸らした。

「では要件は以上ですね？　誰にも聞かれぬうちに、この場を去って頂きますよう」

「そこで寝ている鬼姫にでも聞かれたら一大事だからな。貴様が耀姫からそれとなく聞き出していた、千弦の谷の一族の弱み、戦力、地形。それらを元に我々が侵攻したのだから。まったく、大した女だよ、お前は。自らの立身出世のために友人を平気で裏切るのとはな」

「・・・お引き取り願いましょう。私が下衆の方が、あなたにとっても都合がいいでしょう？」

「もっともだ。だが、分はわきまえることだ。身の丈に相応しくない望みは、自らのみならず周囲を破滅させる」

「どうか、お引き取りを」

詩乃はその場で頭を下げ、そのまま動こうともしなかった。それを見てヒドゥンはこれ以上自分と話す気が無いとみたのか、その場を音もなく去って行った。

そしてヒドゥンの気配が完全に消えた後、詩乃がゆっくりと頭を上げる。

「あなたなどに言われるまでもない。その覚悟はとうにしているのだから」

そう誰に聞かせるわけでもなく詩乃は呟くと、手の中の書簡を広げるのだった。

＊＊＊

アルフィリースは困っていた。

「うーん、どうしよう」

アルフィリースが頭を抱えて悩むのは珍しいことである。いや、実は彼女は周囲が思っている以上に色んな事で悩んでいるのだが、それが表面化して周囲にわかるほどの悩みを出すのは珍しいことだった。

救いなのは、これが嬉しい類いの悩みという事である。その内容はというと。

「アルフィ、書類に目は通しましたか？」

「ええ、リサ。一通り目は通したんだけどね」

アルフィリースの目の前には何十枚もの書類。その内容は、個々人が決められた通りに綴った自らの遍歴である。今でいうところの、履歴書といったものだった。そこには身長・体格から得意武器、生まれ・育ち、戦士として、あるいは魔術士としての自分の経歴や得意な戦いから食事の好みに至るまでが書かれていた。最後の「好みの異性のタイプと、性癖を述べよ」という項目は、リサかロゼッタの悪戯に違いないが。

その書類に綴られたのは、アルフィリースの傭兵団に応募をして来た人間達。そしてその中からロゼッタやエアリアルが選抜した面々である。彼女達は主に実技による判断をしたが、魔術ではラーナ。また落選してもリサが「気になる」と言って残された人間もいる。その数、のべ５３名。アルフィリースがいない間にこの傭兵団に集まって来た人間達である。ちなみにこの傭兵団の噂を聞いてやって来た人数は、その十倍をゆうに超えていた。もちろんリサやアルネリア教会の情報操作あってこその賜物である。

ところでここはアルフィリースが傭兵団を作るため、ミリアザール

に準備してもらった建物の中である。３階建ての建物、その最上階の中心にアルフィリースの執務室は準備されていた。建物は「トリカルラ」と呼ばれる特殊な材木で建築されている。一般的な建築材は木材を乾燥させて使うが、これは樹液を大量に含んだ木であり、火に対してとても強い作りの木であった。また一方で硬度、弾性共に十分で、またその樹液が揮発すれば疲労回復の効果を持つという、建築材としては最高のものだった。その一方で加工しにくいという欠点があるが、それはミリアザールが準備した職人達が、見事に短時間でやってみせた。アルフィイリースがいない間の、一月にもならぬ時間で作らせたのだから。

アルフィリースの部屋の中は書斎のごとく本棚が並び、傍にはエクラが仕事をするための机が置かれていた。きびきびと働く彼女に仕事を手伝ってもらうためである。外客用の応接室は別にあるので、ここは純粋な執務室として使うため内装は簡素であったが、執務室の傍には仮眠を取るための部屋まであり、当時としてはいたれりつくせりの作りである。その中でアルフィリースは一人悩んでいたのだった。エクラはといえば、早速ここアルネリアの歴史とその街並みを調べるために朝早くから市庁舎に出掛けて行ってしまった。帰ってくる頃には、大方のこの土地の事を把握しているのだろう。

そして部屋から出てこないアルフィリースに業を煮やしたのか、リサが部屋につかつかと入って来たのだった。既に時刻は昼過ぎになろうかというところだったが、アルフィリースは朝から悩みっぱなしなのであった。朝と言ってもアルフィリースは二度寝を堂々としたため、実際には起きてからそこまで時間は経っていない。その事を知ったからか、大抵は無表情なリサだが、その顔にはやや苛立ちの表情が見える。

「アルフィ。さっさと今後どうするかの決をもらわないと、我々も動けません。今は各人宿を取ってもらいそこに滞在してもらっていますが、その費用はアルネリア教会に肩代わりしてもらっています。

早くしないと、借金がかさみますよ？」
「まあそうなんだけどね・・・どうやって篩(ふる)いにかけようかと思って」
「まだここから人間を絞ると？」
「それはどうかな～」

アルフィリースは書類の束をぱさりと投げると、椅子から立って部屋を出て行こうとする。その後ろからリサが続く格好になった。

「アルフィ、どこへ？」
「ミリアザールの所。ちょっと交渉してみるわ」
「何の？」
「戦争の」

物騒な言葉を残して出ていくアルフィリースの表情は、なぜか面白い事を思いついたような子どもの様な顔をしていたのだった。

続く

討魔教会の舞台裏、その3～偽りの友情～（後書き）

次回投稿は、１２／２９（木）２２：００です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1105o/

呪印の女剣士

2011年12月27日22時56分発行